

「女子高生総理・芹沢鮎美の苦悩」

日夏孝朗

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

もしも、裁判員制度ではなく無作為に抽出した国民を参議院議員とする政治改変がなされていたら。そして、その最低年齢が18歳だけだったら。

日本に、よく似た世界の、そんなお話です。40話から少し残酷な描写があります。

目次

5月	通知	1
5月	勧誘	6
5月	制度	15
5月	出頭	20
6月	直樹	25
6月	許婚	33
6月	面談	41
6月	強引	55
6月	鐘留	64
6月	応援	74
6月	三島	86
6月	恋文	100
6月	投票	110
6月	夏休み 同室	120
夏休み	野球拳	143
夏休み	夜尿	161
9月	知事選	177
9月	目隠し	207
9月	陽湖	230
9月	信仰	250
9月	呉越同舟	264
10月	マルチ商法	278
10月	畑母神	297
10月	解散	314

1月27日	介式	992
1月27日	取調	958
1月25日	強制わいせつ	924
1月24日	第177回国会	880
1月23日	朝槍	857
1月21日	セクハラ	814
1月17日	性同一性障碍	795
1月15日	詩織	771
1月11日	発達障害	742
1月10日	成人の日	706
1月8日	登山	670
1月7日	チョコレートパーティー	641
1月6日	号泣議員	613
1月6日	音羽	598
1月5日	拉致問題	576
1月4日	記者会見	561
1月3日	二十歳	547
12月31日	S M	517
12月29日	風邪	499
12月	小笠原	456
12月	西村	433
12月	着想	413
12月	善悪	395
12月	夏子	370
11月	告白	344

1月28日	朝ナマ
1月29日	地元の反応
1月30日	I M F
1月31日	会議会議
2月1日	アユミ・シヨック
2月4日	第218条
2月6日	都知事選
2月8日	エステ
2月12日	チョコ
2月16日	提訴
2月20日	お願い
2月22日	ニュージーランド
2月27日	オムツと暗殺
3月1日	同性婚
3月4日	行旅死亡人
3月7日	呪い
3月9日	イスラエル
3月11日	心を折る
2011年3月11日14時46分	
2011年3月11日	夏子 石永 畑母神
2011年3月11日	翔子 桧田川 三島
2011年3月11日	久野 美恋 詩織
3月12日	領空侵犯
3月12日	物価統制
3月13日	原発

1693166816361605159215791555146714421385135013251291126512321212119611771141111211001084105510431018

3月14日	復和
3月15日	G8+2
3月16日	イニシエーション
3月17日	競争
3月18日	公布施行
3月19日	御前会議
3月20日	根本博陸軍中将
3月22日	核ミサイル
3月23日	総理大臣
3月24日	難民
3月25日	核報復
3月26日	草と虫
3月27日	欲の衝動
3月28日	里華の初陣
3月29日	死刑執行
3月30日	ロシア
3月31日	新婚

23822332227922182183214521082065201219861955191718771848182217851752

5月 通知

その通知書が芹沢鮎美（せりざわあゆみ）の手元に届いたのは、18歳の誕生日から一ヶ月が経ったゴールデンウィーク明けだった。鮎美が高校から帰宅してキッチンに入ると、夕食の支度をしていた母親に声をかけられる。

「鮎美、市役所から何か届いてたわよ」

「は〜い〜」

麦茶を飲みながらテーブルにあった封書を手にする。

「何やろ」

「選挙関係のことでしょ。選挙管理委員会からってあるから」

「へええ…まあ、うちも18歳やし…」

あまり気乗りしない顔で鮎美は、さらりとした長い黒髪の一部を耳にかけた。黙っていれば美人とクラスメートに言われる鮎美は整った顔立ちをしているけれど、薄いソバカスがある。それを気にしているのは本人だけで、強めの関西弁であることの方が転校して二ヶ月目、周囲に彼女を印象づけている。黙っていれば、鮎よりもリスやウサギを思わせるような可愛らしい顔立ちをしているので男子から人気を得たかもしれないのに、口を開くと遠慮無く何でも言い出す大阪育ちの氣質が、田舎では目立っている。

「鮎美、もう学校には慣れた？」

「まあ、五月病にはならん程度に。学校よりも家のまわりの方が問題な気はするよ。コンビニ一つないし」

そう答えながら鮎美は市役所からの封書を開けて読む。

告

平成22年4月30日

参議院議長 竹村正義

衆議院議長 久野統一朗

芹沢鮎美殿、貴殿を参議院議員候補予定者として決定いたしました。

つきましては六角市選挙管理委員会まで、この通知を知った日から14日以内に受任されるか、辞退されるかの意志を出頭して表明してください。

鮎美は口に残っていた麦茶を少し垂らしてしまいながら、そんなことには気がつかず何枚もあった書類を読み進めていく。

「マジもんなん？ ……エープリルフルは一ヶ月前やろ。 ……だいたいクジ引きで国会議員を決めるとか、 ……ありえんわ ……いくら参議院が衆議院のオマケでも ……」

耳かけていた黒髪がハラリと落ちている。

「 ……どないしよ ……今年、受験やのに ……と、とにかく落ち着かんと ……」

困惑しつつも全ての書類を読み通した。その内容には辞退も可能、ただし、疾病や進学、事業の存続にかかわる重要な仕事上の支障、宗教上もしくは思想信条上の重大かつ強固な理由、65歳以上であること等の辞退理由が必要だった。任期は6年、年収は660万円、その他に経費の支給もあったし、不逮捕特権の説明も書かれていた。

「鮎美、ご飯よ」

着実に夕食を作っていた母が呼んでくれる。通知には驚かされたけれど、食欲は旺盛にあるので返事する。

「はい。父さんは？」

「お父さんは今夜も市内に泊まるから、島には戻ってこないそうよ。まったく、あの人が島で暮らそうって言い出したくせに ……」

引越してきて、まだ生活環境に慣れていない母は不満そうに、鮎美へ味噌汁を渡してくれる。鮎美は引き替えに書類を差し出した。

「母さん、さっきの手紙、こんなんやった。どないしよ？」

鮎美が書類を見せると、母は食事も忘れて何度も読み返し、すぐに父親へ電話をかけている。その間に鮎美は食事を終え、後片付けをして、まだ電話で話し込んでいる母が持っている書類のことについては、二階の自室で考えることにした。

「 ……今夜 ……寝られるかな ……」

とても寝付けそうにない気分です。ベッドに寝転がった。まだ、制服を脱いでいなかった。横になったまま制服を脱いで下着姿になった。

「うちが……国会議員って……まだ高校生なのに……ありえんわあ……けど、報酬660万円って……バイトでは絶対無理やん……、しかも6年……3600万以上……約4000万ってか……宝くじみたいや……」

色々と考えているうちに、入浴も忘れて眠ってしまった。

朝、急いでシャワーを浴びて制服に着替えた鮎美は家を出ると、100メートル先にある港まで走った。船着き場では通学のために小型連絡船が待っていてくれるけれど、毎日いっしょに乗っている同級生の宮本鷹姫（みやもとたかき）は冷たい表情で手首の腕時計を見つけている。ちょうど出発の予定時刻で、鮎美が走って来るのが見えているのに鷹姫は船頭へ「定刻です。出発してください」と告げているのが遠目にわかる。

「あいつは……ハア……ハア！ 待ってや！ ちよつと待ったって！」

鮎美が叫ぶと、80歳を超えている船頭が小さく頷いてくれた。中学の頃には剣道で鍛えていた鮎美は棧橋から小舟へ飛び込んだ。連絡船とは名ばかりの小舟は長さ5メートル、幅も1.5メートルほどしかない。走ってきた鮎美が飛び乗ると、かなり揺れ、鷹姫が顔をしかめ、叱ってくる。

「静かに乗りなさい！ この馬鹿者！」

「ごめんごめん。そんな怒った顔したら、せつかくの美人が台無しやで」

「あなたは、いつもそうやって話を誤魔化そうとする」

「あ！ もっと大事な話があんねん！ これ見て！」

鮎美は携帯電話のカメラ機能で取ってきた昨夜の書類を鷹姫へ見せた。舟が出発したので、細かい字を揺れる中で読むのに苦労した鷹姫は、鮎美が期待したほどには驚いてくれなかった。むしろ、冷静に言うてくる。

「前科者や公務員を除いた有権者の中から、無作為に選出するのです

から、芹沢が選ばれることもあるでしょう」

鷹姫は生まれつき少しだけ赤みがかった髪をしている。その髪をポニーテールへ結び上げているので、しゃんと伸ばした背筋や凛とした雰囲気、そして剣道の全国大会で個人戦連続優勝という実績が、女子であっても彼女を武士のように、ポニーテールは鬘のように印象づけている。

「なんや、もっと驚いてくれてもええやん。すごいやろ？　うち」

「すごいのは芹沢の実力ではなく、クジ運にすぎません」

「運も実力のうちよ」

「……………」

「うらやましい？」

「いえ」

「即答かい！」

「……………」。芹沢、浮かれているのなら忠告しておきます。この当選は、あなたにとって幸福なこととは限りませんよ。落ち着いて考えないと後悔することになりかねません」

「ぐっ……………」

鮎美は一欠片の羨望もなく、代わりに真面目に心配してくれた鷹姫に返す言葉が無い。

「あんたは、しれっと核心を突く……………剣先で喉元を突くみたい……………」

「慎重にお考えなさい」

「……………キレイな顔して、言うことが年寄りみたいやで。それが無ければ、男にモテたやろに」

鷹姫は色白で微笑めば、その名の通り姫にも見える整った顔立ちなのに、舌鋒も視線も、そして竹刀を握ったときの剣先も鷹のように鋭いので、入学時から高校で浮いている。けれど、同じく浮いている鮎美は、もう慣れているので鷹姫の気遣いを嬉しく感じていた。

「ま、あんたの言うことは、もっともやけど……………どないしょ……………もし、あんた、やったら受ける？　辞退する？」

「引き受けます」

「……………慎重に考えた？」

「どんな苦難があるにせよ、与えられた役割、全力で取り組みたいからです」

「……………当選、あんたやったら良かったね」

二人が話しているうちに、舟は島を離れて本土に向かっていた。舟はエンジンと舵が一体になっている船外機で動くほど小型ではあつたけれど、航行しているのは海のように大きく見えても淡水の湖なので波は小さい。風のない日には鏡のように凜々することもある琵琶湖を進み、六角市の古い街並みに伸びる水路を通つて、鮎美と鷹姫が通つている私立高校の前で停泊した。二人が老船頭に礼を言う。

「ありがとうございます」

「いつも、おおきに」

「おう。帰りは何時や？」

「いつもと同じだと思えます。あ、いえ、芹沢の件で少し遅くなるかもしれない。そのときは連絡いたします」

「アユミちゃん、どうかしたんか？」

女子高生の会話に興味をもつていなかった老人が問うと、鷹姫は数瞬考えて誤魔化すことを選んだ。

「ええ、ちよつと」

「ほうか。ほなら、もんでくるときは連絡くれたつて」

「はい」

鷹姫と鮎美は静かに登校して、何も打ち合わせしたわけではなかったけれど、当選のことはクラスメートたちに言わなかった。おかげで昼休みまでは平穏な、いつも通りの学校生活を送ることができた。

5月 勧誘

鮎美と鷹姫は女子更衣室で体育のために着替えていた。

「お腹空いたわあ」

「まだ二時間目が終わったばかりでしょう」

「成長期やからね!」

やや自慢げに鮎美は胸を張って乳房を鷹姫へ向けた。平均的な女子より大きめの乳房を向けられても、ごく平均的な大きさをしている鷹姫は気づきもせずに着替えを終える。

「くっ……無視しておって」

「? 何がですか? 早く着替えなさい、遅れますよ」

「へいへい。今日の体育はなんやの? 先週までソフトボールやったけど」

「剣道です」

「……剣道か……」

いつも快活で単純な顔をしているのに、やや複雑な表情をした鮎美は体操服に首を通した。体育館に隣接した武道場へ2クラスの女子が集まり、女性の体育教師が授業を始める。

「今日からは剣道になります。この中に経験のある人はいますか?」

「はい」

鷹姫が挙手したけれど、全国大会に出ている彼女に経験があることは全員が知っているのです、とくに反応は無い。

「一人だけですか。他には?」

あまり女子が参加する競技ではないので誰も手を挙げない。それでも教師は模範演技をさせるのに二名以上の経験者がいてくれると便利なので重ねて問う。

「少しの経験でもある人はいませんか?」

「……………」

鮎美が、わずかに手を挙げて言う。

「……………中学で少しだけ……………」

「あなたも剣道をしていたのですか」

意外そうに鷹姫が問うと、鮎美は無表情に答える。

「…ちよつとだけや…」

「転校してきた芹沢さんでしたね。では、宮本さんと前へ出てくださ
い」

二人が前に出ると教師はソフトビニール製の剣を渡してくれる。

「まだ今日は竹刀や防具は着けず、このスポーツチャンバラ用の剣で
型を紹介します。二人は向かい合つて構えてみてください」

「……はい」

鷹姫は軟らかい剣を少し不満そうに、鮎美も剣の軟らかさを撫でて
確かめながら構える。

「さすがに宮本さんは、さまになっていますね」

「当然です」

「……そ…そうですね…」

「あなたは謙遜という概念を知らんのか？」

鮎美も構えながら、一步、鷹姫へ踏み込んでみて、すぐにさがった。

「……あかん……正面からでは、とても……」

鮎美は構えを解いてダラリと立つ。やる気の無さそうな様子を見
て教師は構えたままの鷹姫をモデルに決めた。

「はい、まずは宮本さんの足元を見てください」

基本の説明が始まり、鮎美は聴いているフリをしながら鷹姫の背後
に回ると、後頭部を狙つて剣を振った。

「せいや!!」

スパァン!!

次の瞬間、強烈な一刀が鮎美の額を撃っていた。先に打ちかかつて
いたはずの鮎美の剣は鷹姫の頭に当たることなく避けられ、避けると
同時に鷹姫が放った一刀で強かに顔面を打たれている。ソフトビ
ニール製の剣でも目から星が出て、鮎美はフラフラと立ちくらむ。

「ううっ…痛うう…」

「卑怯者」

鷹姫が冷たく言い放つと、鮎美は頭に血が上って打たれた以上に赤くなった。

「くっ！・よくも!!」

懲りずに再び打ちかかるけれど、実力差が大きくて易々と剣先で払われ、また額を打たれる。

スパアン!

痛そうな音が武道場に響く。

「くうッ！ 痛アッ、もう許さん!!」

「「「「.....」」」」

クラスメートたちも教師も、許すも許さないも先に不意打ちしようとしたのが鮎美であることは見ているので不思議に感じたけれど、とうの鮎美は怒り心頭で打ちかかっていく。その鮎美の動きは三年のブランクがあつたけれど、かなりの実力があつたことを感じさせるものだった。

「でやあー」

「愚かな」

それでも鷹姫にかなうはずもなく、また額を打たれて鮎美は涙を滲ませると防御を無視して突撃する。剣で打たれてもソフトビニール製なので覚悟していれば倒れることはない。鮎美は剣を捨て、そのまま鷹姫に掴みかかって押し倒そうとする。

バツ!

掴みかかられた鷹姫も剣を捨て、鮎美の襟元を両手で捕まえると、右足を鮎美の下腹部にあてながら後方へ倒れ込むように回転して、相手を勢いのままに投げ飛ばした。

ドンッ!

巴投げされた鮎美は受け身を取れず背中を打ったけれど、それでもフラフラと立ち上がり、また鷹姫へ挑もうとするので、ようやく教師が止めに入る。

「芹沢さん、やめなさいー」

「くっ、離しなさいー」

鮎美は教師に押さえられても、なおも挑もうとしている。さすがに鷹姫も不思議に感じて問う。

「あなたは私に何か恨みでもあるのですか？」

「あるわい!! 忘れもせえへん! 三年前の準々決勝!」

「三年前……」

そう言われても鷹姫は思い出すことができなかった。それが、ますます許せないというように鮎美が吠える。

「よくも忘れおって! 再会したのに! 思い出しません!!」

「……………」

やっぱり鷹姫は思い出すことができない。

「よくも、よくも! キレイさっぱり忘れおって! あんたに負けて、うちは剣道を辞めたし! ずっと、ずっと、あんたのことは覚えておったのに!」

「そう言われても……」

かなりの執念を向けられて鷹姫も困っている。鮎美が転校してきてから二ヶ月、たまたま登下校がいつしよなことと、もともと鷹姫もクラスで浮いていたこともあって行動をとにもすることが多かったのに、鮎美が心の中で何か抱えていたようで鷹姫は美しい顔を困惑で曇らせている。

「三年前……そのとき、私は何か卑怯な勝ち方でもしたのですか?」

「そんなことやない! 試合のあと、うちは、あんたへ挨拶に行つて、優勝まで応援するよつて! ほんで、あんた優勝したんや!」

「……………」

「やのに、すっかり忘れて! 少しも覚えてへんなんて! ひどいやん!」

「……………それは逆恨みというか……何というか……」

「……………」

もうクラスメートたちも、覚えていて欲しかったのに忘れられていた悲しきで怒っているだけという鮎美に気づいている。鮎美は乱暴に涙を払って鷹姫を睨んだ。

「ホンマに、うちのこと少しも覚えてへんの?!」

「……はい、覚えていません」

「くっ……平然と肯定しおつて!! あんたの、そういう真っ直ぐなところが……ところが、……腹立つわ!!」

一応、鷹姫は記憶を遡ってみる。けれど、やっぱり覚えていなかった。芹沢鮎美という名を認識するようになったのは、転校してきてからで、それ以前に覚えはない。

「やはり覚えていません」

「くっ……うう……」

これ以上の授業妨害をされたくないので教師は鮎美に指導する。

「芹沢さん、保健室へ行つて頭を冷やしてきなさい! 保健委員の人は送つてあげてください」

鮎美は保健室に送られる。しばらくして落ち着いたけれど、すぐに次の事態が起こった。なんとなく教室へ戻りにくくて、保健室で昼休みをむかえると、校内放送で呼ばれた。

「3年生の芹沢鮎美さん、校長室まで来てください。繰り返します、3年の芹沢鮎美さん、校長室まで来てください」

「なんやろ……生徒指導室なら、ともかく、校長室に、呼ばれるほどの乱闘やったかな……」

乱闘を挑んだ認識はある鮎美は不安そうに校長室へ出向いたけれど、そこで待っていたのは見知らぬ大人たちだった。

「民主党の細野太志です」

「自民党の石永隆也です」

「共産党の西沢光一です」

「は……はあ……芹沢ですけど……うちに何か?」

「「ぜひ、芹沢さんとお話をしたいのですが……」」

異口同音され、そして大人たちの微笑みから勧誘の匂いが立ちこめていたので、鮎美も社会経験はなかったけれど、なんとなく用件はわかった。そして、校長まで微笑んでいる。

「芹沢さん、ご当選、おめでとう! 我が校から、日本初の高校生国会

議員が誕生すること、私も嬉しく思いますよ」

「は……はあ……」

「ぜひ、芹沢さんには民主党へ入っていただきたいのです！　どうか、お話を聴いてください！」

「まずは自民党の堅実さについて、どうか知って欲しい！」

「新しい世代には新しい思考が必要です。どうか、共産党へ！」

「そ……そんな、いっぺんに言われても……。校長先生、うちは、この人らの話を聴かなあかんの？」

「それぞれの党には候補者に対して面接を求める権利があります。ただし、他党の議員が立ち会うもとのみ、自らの党への勧誘が許されます。三年生なら習ったでしょう？」

「ちよつとは……けど、受験には出にくい範囲やから……。うちは日本史で受験するつもりやったし現代社会は、軽くしか……」

困惑する鮎美を三党の政治家が口々に勧誘してくるので、見かねた校長が一党につき30分ずつ話すということで面談し、その長い90分が終わって、やっと解放されると思ったのに、鮎美が聴いたこともないような党名の政党まで終わるのを待っていて、面接を求めて来ていた。

「芹沢さん、次は我が党について説明させてください！」

「うちは……お昼ご飯も、まだなんやけど……」

そう言って、やっと弁当を食べることができたけれど、食べ終わると、また各党について熱心に説明され、とても疲れた。下校時刻まで次々と勧誘を受け、重い疲労感と明日も会いに来るといふ煩わしい予定を背負って鮎美が校門を出ると、鷹姫が待っていてくれた。

「……あんな……待っててくれたん……？」

「あなたを待たなければ船頭さんが二度手間になるでしょう」

鷹姫は待ち時間に読んでいた本を閉じ、公衆電話で島へ連絡を取った。すぐに老船頭が迎えに来てくれるはずで、それを二人で待つ。

「……………」

「……………」

体育の授業中であつたことを思い出して鮎美は気まずそうに黙り、

鷹姫も黙っている。沈黙に耐えかねたのは鮎美だった。

「政党って知ってる？」

「……………その前に、あなたは私に謝るべきことがあるでしょう」

「うっ……………うちが悪いの？」

「……………」

沈黙で肯定され、鮎美が負ける。

「ごめん……………ついカツとなって……………せやけど、まったく覚えてへんなんて……………ひどいやん。うちは、あんたとの試合で実力の差ちゅーものを思い知って……………高校に入ってから剣道せんかったんよ」

「……………」

「……………。応援してあげたのに……………あんたかて、ありがとう、って笑顔で言ってくれたのに」

「……………」

「大阪で高校に入ってから、あんたが優勝してるの何度も聴いたし、心の中で応援してたし。まわりの友達にも、あんたと勝負したこと自慢してたのに」

「つまりは私が、あなたを忘れていたことを怒っていたのですね」

「……………そうや！ ちよつとくらい覚えていてくれてもええやん！ うちが父さんの都合で転校が決まって、それが、あんたのいる学校やって思ったら、すごい嬉しかったのに！ 引っ越してみたら、あんたと同じ島やったから超嬉しかったのに！ あんた再会しても少しも思い出してくれへんやん！」

「……………芹沢、一つ、あなたに問います」

「な、なんよ？」

「あなたは私と準々決勝で対戦したと言いましたが、では、その前の試合で対戦した者の名を覚えていますか？」

「え……………そんなん、覚えてるわけないやん」

「ということ。人は勝った試合など覚えていないのです」

「うっ……………」

言われてみれば、鮎美も直前の試合相手など覚えていなかった。負けたからこそ、強く記憶していたのだ、と言われてしまうと反論が

無い。

「……………くっ……………また一本取られた……………」

悔しいからなのか、恥ずかしいからなのか、鮎美の顔が赤く染まる。それに配慮したのか、鷹姫は話題を変える。

「それで政党が、どうしたというのです?」

「……………さつきまで、ずっと勧誘されたんよ。うち、もしも議員になるんやったら、どこかの政党に入った方がええのかな?」

「たしか、無所属の議員もいたでしょう」

「そうなん?」

「ええ、3年前に選出された新制度において第一期となった参議院議員は半数が3年任期、もう半数が6年任期でしたが後者でも30%が、いまだに無所属のはずです」

「そうなんや……………ほな、うっとおしいし入らんちゅー手もあるんや」

「急いで決めることでもないでしょうが、入らなければ入らないでデメリットもあるでしょう」

「どんな?」

「自分で方向性を決めなければならず、また情報も限られ、迷うことも多く、付和雷同しやすいでしょう」

「ほな、入った方がええんや」

「入れば、入ったで情報は偏り、方向性は自分だけで決められるものでもなくなるでしょう」

「……………どっちも、どっちなんや……………」

「急いで決めず、ゆっくり考えなさい」

「そうやね……………なんとなく、民主党か、自民党かって気はするんやけど」

「そうですね。その二つが二大政党ですから」

「あ、お迎えが来てくれはった」

話しているうちに二人を迎えに来た小舟が船着き場に泊まってくれる。

「おおきに!」

「ありがとうございます。遅くなって、すみません」

「ええよ、ええよ」

ニコニコと微笑んで老船頭は二人を乗せてくれ、狭い水路でUターンして島へ向かう。人口は千人に満たない小さな島は大きな湖に浮かび、漁業と観光で生計を立てている。鮎美と鷹姫は、どの政党に、どんな特徴があるか、話し合いながら揺られていたけれど、島へ近づくと、もう選択の余地が無いことを思い知った。

「「当選おめでとう!!」」

「「芹沢先生万歳!!」」

小さな港に島の大人全員が出ているのかと思うほど、人が立っている。そして鮎美を祝う横断幕と旗が並び、もう当選辞退などありえないと理解できたし、さらに自民党の議員だけが多数上陸していて、鷹姫は思い出した。

「私たちのような小さな島は伝統的に自民党支持でした……他の選択肢は無いでしょう」

「……そうなんや……世の中、いろいろ……人生いろいろ、とか言うた人も自民やったかな……ははは……」

力なく鮎美は笑い、これからの大変さを予感していた。

5月 制度

鮎美と鷹姫を乗せた小舟が港に入ると、島民たちが万歳三唱を始めたので鮎美は怖くなった。

「……そんな……みんなで……うちを……」

「「当選万歳!!」」

皆が諸手を挙げて島民から参議院議員が選出されそうなことを喜んでいいる。その気迫が怖くて鮎美が一步さがると舟の重心が少し変わり、わずかに傾く。鮎美が倒れないように鷹姫が腰を支えてくれると、その手を握った。

「うち……怖いわ。あんたら島の人ら、みんな顔見知りで家族同然かもしれないけど、うちらは四月に越してきたばかりなんよ」

「そうでしたね。いささか大袈裟すぎて私も驚いていますから」

小舟が棧橋に着くと、島の自治会長以下、役員たちとお昼に高校で出会った自民党議員もいて、他にも県会議員や六角市の市会議員たちがいて、みな自民党だった。鮎美の両親もいて、二人は鮎美と同じく困惑した顔をしている。

「母さん……父さん……」

「アユちゃん、おめでどう」

「おめでどう、鮎美」

「うん……おおきに……」

親子は困惑したまま言葉を交わし、すぐに初老の自治会長と中年の自民党議員が鮎美に握手を求めてくる。

「おめでどう、芹沢さん」

「ど、どうも……」

「自民党は芹沢さんを全面的にバックアップしていきますよ」

「そ……そんな……決まった風に言われても……」

鮎美が引くと、少女相手に強引だったことに気づいた議員はわきまえて抑制してくる。

「そうですね、つい急ぎすぎた。ゆっくり考えてください」

「ワシらの島は、ずっと自民党さんを応援しておるから、それを忘れん

ように」

自治会長は少しも抑制せずに鮎美へ言い放ってくる。鮎美は思春期後半らしく反発を覚えたけれど、島民全体の期待が圧力になって襲ってくるので口を開くことができなかつた。このまま宴会になると誘われて、また困惑していると鷹姫が助けてくれる。

「急な話で、まだ芹沢は混乱しています。そも18歳では被選挙権はあっても20歳まで飲酒はできません。何より心を落ち着ける時間を与えてやっていただけませんか。急いでは事をし損じるといいでしょう」

鷹姫の口上で大人たちは引いてくれた。それでも、このまま鮎美の家に帰ると、押しかけられそうで二人で鷹姫の家へ避難した。鷹姫の家は島内に大小二つある山の小さい方の中ほどにあり、自宅と剣道道場が一体化した造りになっている。いつもなら誰彼と無く稽古している大人や子供がいるはずなのに、今夜は港に集まっていたからか、誰もいない。おかげで静かになった。

「ハア……まるで、お祭り騒ぎやん……」

「まつりごととは、よく言ったものですね」

「は？」

「政治の政は、まつりごとと読むでしょう」

「あく、そういえば、そうやね」

鮎美は道場の端に座った。鷹姫は竹刀を持つと素振りを始めたので鮎美が言う。

「こんなときでも稽古すんのかい」

「日課ですから」

「鬼ヶ島とは、よく言うたもんやね」

「鬼ヶ島です」

「鬼ばかりと書いてオキシマか、ホンマにみんな剣道の鬼やもんな。こんなところで育ったヤツに、そら勝てんわ」

漁業で生計を立てていても、もともとは武士だったららしい祖先をもつ島民は、みな武術に熱心で鷹姫の家は道場になっている。いつもより時刻が遅いからか、それとも他の道場生がいないからか、鷹姫は制

服のまま竹刀を振るっているので、動く度にスカート裾が舞っている。ぼんやりと、それを見ていた鮎美を鷹姫が誘う。

「あなたも、いっしょにやりませんか？」

「……うちは……やめとく……もう剣道は、やめたんや……」

「そうですか。いつでも気が変わったら参加なさい」

「素っ気なくせに、その方面だけは押しが強いなあ……」

座っていた鮎美は膝を抱いて丸くなった。

「うちは、これから、どうなるんやろ……辞退なんてできんよね……」

「本気で辞退したいのであれば、そうなさい。たしか、進学も辞退理由に入っていたでしょう」

「よお知ってるね」

「あなたを待っている間に一通り復習しましたから」

「さすが……。けど、辞退なんかしたら、島の人みんなに、めっちゃ怒られそうや」

「残念には思っても、それほど怒りはしないでしよう。まだ18歳なのです、重責に耐えられそうになく辞退するというのであれば、途中で投げ出すより、よほど良いですから」

「うちが辞退すると、どうなるん？」

「また、この選挙区内の有権者の中から無作為に選出されます。さすがに確率的に再び島民が当たることはないでしょうから、そのあたりは大人たちは残念に思うでしょうが……一人の参議院議員が出ることで、それほど島に影響があるものなのでしょうか……」

「大有りだよ」

不意に道場の外から若い男性の声がした。二人が見ると、青年が立っていた。さきほど港にいたような気もするけれど、明らかに島民ではないと鷹姫が判断して睨む。

「何者ですか？」

「はじめまして。ボクは雄琴直樹、聞いたことないかい？」

「……………」

鮎美も鷹姫も、どこかで聴いたことがあるような気がしたけれど、

すぐに出てこない。そんな二人の様子に直樹は微笑して肩をすくめた。

「そうか……やっぱりクジ引きで選ばれると印象が薄いね。ボクは第一期の参議院議員だよ。芹沢さんと同じ選挙区の」

「うちと同じ……ってことは先代さん?」

「いや、半数改選されるからね。ボクの任期は残り3年だから、君が受任するなら同僚みたいなものになるかな。もしくは先輩か」

「その雄琴が何用ですか?」

まだ鷹姫は睨んでいる。

「もちろん、ご挨拶に来たのさ。当選、おめでとう」

「ど……どうも……。雄琴はん、若う見えるけど、いくつなん?」

「忌憚ない質問だね。27歳だよ」

「ってことは当選したときは24歳なんや?」

「そうだね。あのときの最年少は21歳で、ボクは二番目の若さだった」

「今回って、うちが最年少?」

「そうなるだろうね。というか、18歳が下限だから」

「………ちなみに最高齢は?」

「たしか97歳で受任したお爺さんがいたね。ただ、2年で亡くなられて、今は補欠選挙で埋められてるはずだよ」

「18歳に当てるのも無茶やけど97歳も無茶やで確実に寿命が縮まったんちゃう?」

「どうだろうね。本人は張り切っていたけれど、身体がついてこなかったのは確かだろう」

「女性の議員さんって、どんくらいいいはるの?」

「ほぼ半数。無作為だからね。そうなるさ」

「半数か……」

「もともと、この制度の狙いは性別の不均衡や年齢の偏りを無くし、広く国民から選出することだからね。あの2000年にあった加藤の改革からスタートして2004年に制度準備が具体化し、2007年末に旧来の参議院議員は、すべて衆議院議員へ編入されて議員総数が

大幅に増えたことで、選挙区割りを見なおしできて、一票の格差は島根県と東京都でも1・25倍まで押さえられた」

「……………」

二人とも現代社会で習ったことを思い出した。

「そして、第二期にして、とうとう制度上の最年少18歳、女子高生の参議院議員が誕生するかもしれない、ってわけだよ」

「……………で、それを言いには、来てくれはったわけなん?」

「そうだよ」

「それだけなん?」

「いや、君だつてボクに色々訊きたいことがあるだろうし、そしてボクは自民党所属を選んでる。そういうことさ」

「また勧誘か……………」

「この島は、すごいね。民主党や共産党の議員を上陸させなかった。なんというか……………治外法権というか……………現代において、こんな場所があるんだつて気分だよ」

「うちの島の悪口、ここに在る間に言うのはやめた方がええよ」

「一応、ボクとしては誉めたのかもしれないよ。自分たちに都合のいい事態だったから。けど、他党の議員や秘書たちは憤慨しているだろうね」

「……………まあ、ええわ。先輩に訊きたいことがあるんは確かやし」

そう言った鮎美は色々と質問して考える材料をもらった。

5月 出頭

通知をもらってから10日目、鮎美は両親と六角市の市役所へ来ていた。自民党議員の秘書が案内と送り迎えをしてくれると言ってきたけれど、それは断っている。鮎美は父親の車から降りると市役所の建物を見上げた。

「ふーん……これが、ここの市役所なんや、ボロいなあ」

「そうね、大阪の区役所に比べると、ずいぶんと……」

母親が続きを飲み込んだのは市長とおぼしき男性が近づいてきたからだった。

「ようこそ、芹沢さん。お父さん、お母さんも。はじめまして。六角市の市長をつとめております。田井中重雄です」

「ど……どうも……」

鮎美は名刺をもらったけれど、女子高生なので返すべき名刺はもっていない。代わりに父親が礼儀上、名刺を出した。

「どうも、父です」

「お父さんは建築家だそうですね。しかも、鬼々島への移住事業にご参加いただいて、まことにありがとうございます」

「いえいえ、ああいう島に暮らしてみたかったですよ」

「それは、それは、どうですか、住み心地は？」

「いいですね。風雅というか、エキゾチックというか、何より島内に1台も車が無いのが、またいい！ 建物の建て方も、刺激的で最高です！」

「不便やちゅーねん。コンビニも無いし」

鮎美の文句は大人たちに聞こえなかったことにされて選挙管理委員会がある3階まで案内された。

「当選証書授与！ 芹沢鮎美殿！ 貴君が第二回参議院議員候補予定者として決定したことを、ここに証します」

「……どうも……おおきに」

鮎美は頭を下げ、証書を受け取った。

「……」

大人たちが待っているのです、期待された答えを口にします。

「謹んで、お受けします」

「おお！ おめでとうございます！」

絶対に辞退してほしくなかった大人たちが喜んでいますが、両親は少し心配そうにしている。

「アユちゃん、頑張ってるね」

「鮎美、これからは下手なことはするな」

「我が市からの参議院議員誕生！ しかも最年少とは、喜ばしいですね！」

「まだ、正式には議員やないんですよ？」

鮎美の質問に市長が答えてくれる。

「ええ、任期は来年の1月1日からです。それまでは、あくまで候補予定者」

「高3の三学期だけ重なる感じなんや……」

女子高生議員といっても、実質的には3ヶ月程度になりそうだったので、受任している。学校の出席日数にしても、もともと受験シーズンなので出席しなくても卒業できるし、議員となることが進路となるので進学も就職も当面はしない予定だった。今日は証書を受け取り、受任の意思を表示するだけのつもりだったけれど、市長が声をかけてくる。

「これから、いっしょに昼食など、いかがですか？」

「……それ、二人つきりやないよね？」

「はっはは！ もちろん、ご両親も、いっしょに。今後のことなど知っておいていただきたいですからね」

そう言われると断りにくく、鮎美と両親は市長室の隣にある貴賓室で昼食に、鰻重を出された。もともと昼食に誘うことを予定していたようで、タイミング良く運ばれてくる。鮎美は箸を持つ前に、市長に訊いた。

「あの…、これって饗応とか、接待にならないのですか？ それともワリカンなん？」

「よく勉強されていますね。素晴らしい！ 大丈夫ですよ、一食50

00円未満であれば問題になりません」

「ほんで、これは4980円やったり？」

「はははは！ 4500円です。もちろん、私の個人的な接待であり、市の予算から出しているわけではないですから、安心して、お召し上がりください」

「…………。ほな、いただきます」

美味しそうな鰻重だったけれど、あまり美味しく感じなかったし、市長と父親の会話は弾み、いろいろな方向へ進んだものの、結局は最終的に鮎美を自身が所属する民主党へ誘うのが目的だったので、鮎美は鰻重でなくコンビニで食べれば良かったと後悔した。それでも、気を取り直して市長に問う。

「民主党と自民党の違いって何なんですか？」

「いい質問ですね」

そう前置きして語り出した市長の話は長かったけれど、鮎美は真剣に聴いた。会談は長引き、4時頃になって、さすがにお互い疲労したので終わった。

「しんど…………一日仕事やった…………」

「そうね…………疲れたわ…………」

娘と母が、ぐったりとしているので、父が車を回した。

「どうする？ もう島に帰るか？ それとも予定通り、ショッピングしていくか？」

「…………」

コンビニはおろか商店らしい商店のない島に住んでいるので、鮎美と母は駅前のショッピングセンターを回り、夕食もファミレスで食べた。

「あく美味し。お昼は、なんか落ち着いて食べられなかったわ」

「そうね。ああいう食事は慣れないわね」

4500円の鰻重より1260円のチキンステーキセットの方が美味しかった。父が時計を見て言う。

「もう戻ろう。最後の舟が出る」

「はーい。もう帰らなあかんのやね…………早いなあ…大阪やったら、ま

だまだこれからやのに」

「あなたが不便なところに移住させるから」

「すまん、すまん。けれど、いいところだろう？」

「……………」

母は不満そうに黙り、鮎美は紅茶を飲み干して答える。

「いいところも多いけど、不便なことは確かやん」

鮎美の言葉通り、駅前のショッピングセンターから車で20分かけて港まで移動し、そこに自家用車を駐車して、連絡船の最終便に乗ると、10分ほど船に揺られて島に着く。島の栈橋からは徒歩5分で自宅だった。鮎美たちが当選証書を受け取って帰宅するのを今か今かと待っていた島民たちは宴会を始めて、鮎美にまで飲酒を勧めてくるので断固として拒否する。

「あかんで！ こういうのバレたら不信任されるちゅーねん！」

「この島に、んなことバラす奴はおらん！」

「そーゆー問題やない！ うちの、もう寝る！ 勝手にせい！」

啖呵を切つて鮎美は自室に引き籠もった。

「なんや、あの態度は！ ワシらが祝いに来てやったのに！」

「ちよつと凶にのつとるんちやうか」

鮎美に酒を勧めていた中年の男性二人が怒っているのを見かねた鷹姫が口を開いた。

「今のは、お二人が悪いのではないですか。芹沢は、まだ二十歳ではないのですから」

「なんやと子供のくせに！」

「その子供にお酒を勧めたのは誰ですか」

「ござかしいこと言うと、許さんど！」

「……………」

鷹姫が古風な言い方で決着をつけるなら試合で、と言い返した。島内での喧嘩沙汰は剣道試合で決着をつける風習があり、鷹姫は大人を含めて島内屈指の実力者なので怒っていた男性は舌打ちした。

「ちっ…」

「如何？」

「もうええ！」

口論で終わり、お開きになった。

6月 直樹

梅雨の日曜日、鮎美は憂鬱そうに自宅にいた。もともと孤立した島なのに、雨が降ると、より孤立感が増す。連絡船は台風でもない限り定時運行するけれど、観光客も減るし、島民もあえて島を出ようとしなくなる。自家用の漁船がある島民なら、雨に濡れるのを覚悟すれば、わずか10分で本土へ渡れるけれど、移住者である鮎美たち一家には自家用漁船は無い。それでも、頼めば引き受けてくれる島民もいるかもしれないものの、よほどの用事でない限り、それをする意味を感じない。結局、雨の日曜日は外出できないことになる。

「家も狭苦しいし」

格安の家賃で借りている自宅は三人暮らしにしては、部屋数は多いけれど、建築の規格そのものが小さくて狭く感じる。鮎美の部屋は二階の六畳間だったけれど、一畳そのものが小さい。窓を開けても隣家が間近で声さえ聞こえそうだった。島には平地が少なく、その少ない平地に民家が密集して建っている。一件一件の間は狭いと人が一人通るのが精一杯ということもあり、道路らしい道路はない。自転車も要らないくらい狭い島だったし、自動車は1台も無く、自転車も20台くらいだった。

「こつちの方向だけは開放感あるけど……開放的すぎるというか……」

別の窓からは大きな湖が見える。

「ホンマ、アホみたいデカいなあ……雨やと霞んで対岸が見えへんし」

借家は港から徒歩5分だったけれど、六角市側ではなく、より遠くまで対岸が見えない側なので湖は海かと思うほど大きく見える。雨で風もあるので波も大きかった。

「……淋しい島やなあ……」

せめて鷹姫に会いたいけれど、しっかりと剣道の稽古中なので会いに行っても邪魔をするだけだった。

「アユちゃん、お客さんよー」

一階から母親の声がした。

「……どうせ、どっかの政党やろ……っていうか、島やし、自民党かな……」

「アユちゃん！ いるんでしょ？」

「はいはい！ おりませー！」

仕方なく鮎美が狭くて急な階段を降りると、玄関に直樹がいた。

「やあ」

「……ようこんな雨の日に来るわ」

「やっぱり風情のある島だね。雨だと、また雰囲気が変わる」

「そう思うのは住んでないからやよ。退屈なだけや。そういえば、雄琴はん、どこに住んでるの？」

「井伊市だよ」

「ふーん……どのへん？」

「県の北部。有名な井伊城があるだろ。知らないのかい？」

「大阪城なら知ってるで」

「ははは。大阪城には、かなわないな。でも、参議院議員を務めるんだから県内の地名くらい把握してないと、6年後、確実に落ちるよ」

「たしか、最高裁判所の裁判官と同じように×を半数以上もらうと2期目は無しやったっけ？」

「そう。そして2期12年で終わり、現状では、それ以上の延長は無く、政治家を続けたいなら衆議院に鞍替えして立候補するしかない」

「まあ、立ち話もなんやし、あがりいや。母さん、お茶を」

もう直樹が訪ねてくることに慣れていた鮎美は居間へ迎えた。直樹は手土産として有名店のケーキを持ってきてくれてるし、それは鮎美も母も楽しみにしている。

「うちも餌づけされてきたなあ」

ケーキを食べながら、つぶやくと直樹が笑った。

「はははは。自分を客観視するのは、いいことだね」

「このケーキ代って経費で落ちるの？」

「どこかの政党に所属していればね。無所属だと、ちよつと難しいか

な。いや、ギリギリで活動費に入れられるかもしれない。れつきとした面談だからね。常識的な範囲内の茶菓子代は落ちるだろう。アルコールはダメだけど」

「面談いうても、だらだら喋ってるだけやのに？」

「大阪城を落とすには時間がかかったらしいからね」

「うちは城かいな。やとしたら、外堀を渡るだけで船で10分やから手間やね。便数も少ないし」

「今日は本題もあるんだ。芹沢さんに、会ってもらいたい人がいる」

「どうせ、自民党の議員さんやろ？」

「ご名答」

「誰と、どこで？」

「久野統一朗、衆議院議長と京都で」

「衆議院……議長……えらい、大物を……うちなんか……民主党の方も、うちに……」

「民主党からも、何かアポイントが？」

「……まあ……」

「どんな？」

「……隠しても、しゃーないから言うけど、竹村正義さんと六角市の料亭で」

「参議院議長……奇跡の竹村か……」

「奇跡の？」

「知らないのかい？」

「フン、どうせ女子高生やからね！ 知らんことばかりや！」

「ごめん、ごめん。ほら、少し前に国民年金を議員が納めていないって問題になったろ？」

「あ……そんな話もあったかな」

「あれで自民党からも民主党からも数人が辞任したけれど、竹村さんも潔く辞めたんだ。けど、奇跡的に復活した。なんと参議院議員として」

「クジ運で？」

「そう。それで、まあ国会議員としての経験もあるわけだから、その実

績から議長に選ばれた。ある意味、まったくの素人が議長になるより良かったけど、確率的には、ほぼ奇跡だから」

「たしかに女子高生は全国に何万人といえるけど、辞職した議員は、そんなにおらんやろし」

「民主党は彼を芹沢さんに会わせるのか……本気だなあ……こつちも、うかうかしてられない」

「……ちよつと訊きたいんやけど」

「いいよ、どうぞ」

「うちなんか相手に、そんな大物のスケジュールをあける意味あるの？ 候補予定者なら、他にも全国におけるやろ。そこへも自分の党に所属してくれって、言いに行かんのか？」

「行ってるさ。もともとの支持政党があつた人は別として、たいていの人は、どこかの党員ではないし、党員だったとしても、なんとなく入っていた、いつのまにか名簿に入れられてた、くらいの感覚だから候補予定者の名簿が公表されて、すぐ各党が争うように勧誘してる。ボクだつて芹沢さんと選挙区が同じで歳が近いから専属担当にされた」

「27歳と歳が近いんや……」

「全体で言えばね。あと、この地区で歳が近いのは衆議院議員の石永先生が39歳だけだ」

「うちより21歳も上やん。あの人とは学校でも会つたわ」

「政治の世界の主な年齢階層は50歳から70歳の男性だから」

「せやね。それだけに、うちなんかを大物が相手にしても、しゃーないやん。まして議長て」

「君は特別だよ」

「………最年少やから？」

「そう。君が、どの党に所属するのはニュースになる。必ずね」

「うちはパンダか」

「そんなところだね」

「はあああ……」

鮎美は大袈裟にタメ息をついて話を続ける。

「雄琴はんも、うちと同じにクジ引きで選ばれたんやろ？ ある日、突然」

「3年前にね」

「前から自民党やったん？」

「いや、3年前に入党したよ」

「なんで自民にしたん？」

「政権与党だったからさ」

「なるほど……長いものには巻かれる的な？」

「それもあるけれど目標もあるからね」

「どんな？」

「実現したい法案がある」

「どんな法案なん？」

「……」

直樹は鮎美がケーキを食べ終わっているのを確認してから口を開く。

「お茶の間にふさわしい話題ではないし、食欲を無くすかもしれないけれど、凶悪な性犯罪者に、犯した罪に相当する残虐な目に遭ってから死んでもらう死刑制度の創設だよ」

「……残虐な……死刑……」

鮎美が戸惑っていると、直樹は付け加えてくる。そこには今までの勧誘を目的とした抑制された雰囲気は無く、静かだけれど強い信念を感じさせる気配があった。

「幼い女の子を何人も殺したようなヤツを、ただの絞首刑で終わらせていいと思うかい？」

「……そういうこと……考えたこと……ないし……」

「今までは、それでいいさ。けれど、ボクは国政議員だし、君もそうなる。ボクら一人一人が賛否することで法案がつくられていく」

「……けど……たしか、憲法で拷問と残虐な刑罰って禁止されてなかった？」

「憲法第36条、公務員による拷問及び残虐な刑罰は、絶対にこれを禁ずる」

「そう、それ」

もう鮎美も、どうせ大学受験しないので日本史の学習よりも現代社会を復習していて、憲法も読み直していた。直樹が真顔で言ってくる。

「この国は憲法に対する解釈の余地が大きい。9条で武力を永久に放棄し、戦力を保持しないと明言しても、自衛のためなら持つていいらしい。36条を、よく読めば、公務員による、と書いてあるよね。つてことは、被害者の家族が刑の執行人となることは十分に可能だと解釈できる。絶対に、なんて書いてあるけれど、本当に完全な絶対なら条文は、何人も、で始まるはずだ」

「……………」

鮎美は湿度の高い空気を吸って、少し息苦しく感じながら問う。

「そんな具体的に……………考えるつて……………雄琴はんは……………なにか、そういう……………被害に……………近しい人が遭った……………とか?」

「ボクの妹は10歳で殺された。他に被害者が2人。犯人は捕まった。井伊市連続誘拐殺人事件でネットをみれば、詳しくわかるよ」

感情を抑えた声だったので、これ以上は冷静に話せないということが伝わってきて鮎美も自重する。

「……………話を变えさせてもらってもええ?」

「どうぞ」

「うちの前、第一期で3年任期やった人は、なんで続投せんかったん?」

それとも×を半分以上くらったん?」

「当選したとき67歳だったからね。そして胃ガンも見つかって、もう6年というのは、つらいということでも自主的に辞められたんだ」

「そっか……………ちなみに、どのくらい続投してはるの?」

「およそ8割の議員が続投を志望したけれど、国民審査で3割に×が過半数ついた」

「3割も……………たしか、似たような審査方法の最高裁判所の裁判官には一度も罷免がなかったことはないよね?」

「無かったと思うよ。まあ、司法試験に合格して出世していった人や長年にわたって他省庁で実績ある勤務をつんだ人たちと、たまたまク

ジ引きで選ばれた人は違うからね。そこは国民の目が光るってことだろう。さつきの憲法解釈の話でも、ギリギリの制度だからね。選挙について憲法は普通選挙を求めている。この普通選挙の反対は制限選挙、いわゆる身分や門地、納税額に依じて権利を与えたり与えなかつたりすることを厳に禁じている」

「ある意味、クジ引きは最高に平等やね」

「ある意味はね。けど、もう一つの秘密選挙であること、という要件を満たす必要があつた。秘密選挙が何かは知ってるね？」

「誰が誰に投票したかを秘密にする選挙や」

「そう。つまり憲法は議員たる者への投票を求めていた。そこで一度目はクジ引き、その任期後に続投を望むなら国民審査を受けよ、となるわけさ。これで普通選挙と秘密選挙という要件を満たしてクジ引き議員が誕生するわけさ」

「解釈か……普通に考えて9条あつたら、自衛隊は無理やろ」
「だね」

「……憲法を変えたらええのに。侵略のための戦力はダメ、自衛のためならアリって」

「9条の話も、クジ引き議員が国民の感覚を持ち込めば、次第に変わるかもね。そうなるなら、それは、いいことだし」

「やね」

「ちなみに芹沢さんは6年後、続投を望むのかい？」

「そんな先の話……まあ、でも、せっかくやし望むんちゃうかな8割の人らみたいに」

「だとしたら、やっぱり所属政党はあつた方がいいよ」

「そつちに話が進むんやね。……うくん……まあ、どこかには入ろうと思ってるし……でもって、島の大人らが自民ガチ押しやから、逆らいくにくいし……けど、他の政党の話も聴いておきたいんよ。いつまでに決めなあかんとかある？」

「無いよ。今日でもいいし、任期がスタートしてからでもいい、けれど、勉強することも多いわけだから早い方がいい。あと、決めてしまえば勧誘活動は止まるだろうね」

「なるほど……」

「さて、そろそろ、帰らせてもらおうよ。船の出る時間だ。これを逃すと次は2時間待ちだからね」

直樹が腰を上げると、鮎美も立った。

「せめて棧橋まで見送るわ」

「ありがとう。けど、雨が激しいから、ここでいいよ」

「ええんよ。このままやと一日、一步も家から出んことになるし」

「それは不健康だね」

話ながら二人で港まで出る。別々の傘をさして棧橋に立つと、連絡船が出港の準備をしている。朝夕に鮎美と鷹姫を送ってくれる小舟と違い、ダイヤの決まった連絡船は最大で50名が乗れる船だったし、屋根もある。

「じゃあ、京都で久野先生と会ってくれるね？」

「念押ししても会わせていただきます」

軽く手を振って直樹を見送った。

6月 許婚

雨の中、直樹を乗せた連絡船が小さくなっていく。

「……軽い感じの男やと思っただけど……抱えたものがあつたんや……」

鮎美はポケットから買い換えてもらったばかりのスマートフォンを出すと、井伊市連続誘拐殺人事件と入力して検索した。

「……10歳と……9歳、7歳か……」

犠牲になった少女たちのことを知ることができたし、殺害方法や犯人についてもわかった。小児性愛者による快樂殺人で計画的に誘拐し、性的暴行の後にバラバラにして山中に捨てていた。

「たしかに、ただの死刑ではあきたらん……こんなヤツ……」

胸が悪くなるような事件で、それ以上は調べたくなかった。雨が降り続けている。小さな島は360度が淡水の湖に囲まれ、雨まで降っていると鮎美は真水の惑星にいるような錯覚さえ感じた。海と違い、潮の香りがしないし、波も小さい。高波の心配もないので民家と岸が接してさえいる。家によっては玄関の前に専用の栈橋を手作りして、すぐに船へ乗れるようにしているところもある。

「……世界で、ここと、あと一つだけらしいね……湖の島に住んでるのは……」

淋しくて独り言を言った。

「……鷹姫は……稽古……まだしてるんか……ようも飽きんと……」

ずっと港に立っていても仕方ないので鮎美は家と家の間を進み、山の中腹にある道場へ通じる階段を登り、他の門下生が帰っても、まだ鷹姫が一人で何かしている気配なのを感じると、一旦は階段を降りて港近くの自動販売機で清涼飲料のペットボトルを買い、再び階段を登り、道場へ入った。

「たのもー」

「あなたですか」

一人で素振りしていた鷹姫が竹刀を止めた。高温多湿の中、汗だくになっている。鮎美は清涼飲料を差し出した。

「さしいれや。経費で落としておくわ」

「くだらないことを言うのはやめなさい」

「ま、自動販売機は領収書をくれんけどね」

「……………」

「いらんこと言うて、ごめん。うちのお小遣いから、おごるから飲むで。半分ずつしよ」

「…………… いただきます」

礼を言つて鷹姫はペットボトルに口をつけた。美味しそうに飲む喉元に汗が流れている。道着も汗で濡れていた。二人で道場の隅に並んで座った。

「えらい頑張るね」

鮎美も同じペットボトルから少し飲むと、また鷹姫に差し出す。

「あなたは、もう剣道はしないのですか？」

「また誘ってくれるんや」

「…………… この島にいて退屈しませんか？」

「そうやね。議員の話がなかったら、退屈極まりなかったやろね」

「たしかに、そちらで忙しくなるでしょうから無理かもしれませぬ。けれど、運動をするのは良いことですよ」

「そういうえば、体育のとき、うちをキレイに投げたよね。あれって柔道？」

「はい」

「あんた柔道までしてるん？」

「この島で育つ者は剣道、柔道、弓道を必ず習得します」

「まさに鬼々島やな。いや武士の島か」

そう言つて鮎美は鷹姫の襟を握った。

「うちも柔道なら体育で少しだけやったよ」

「そうですか」

「もう一回、あのキレイな投げ方、やってみてよ」

「そんな服なの？」

鮎美が着ているのはブラウスとスカートなので動くのにも、強く引つ張られるのにも不向きだった。

「ほな、寝技してみるのほ？」

「私がかまいませんが、やっぱり、あなたの服が…」

「気にせんでええよ。えい！」

鮎美が座っている鷹姫を組み敷こうと体重をかけて押し倒そうとすると、ごく簡単に転がされ、すぐに鷹姫が上、鮎美が下になっていた。鷹姫は型通りに袈裟固めをかけるため、鮎美の首の後ろへ腕を回し、反対の腕で鮎美の袖をつかむと、身体を斜めに交差させて押さえつける。完全に技が決まり、抜け出すことができない状態になった。

「お見事」

「あなたは本気を出していないでしょう」

「そう言われても柔道は少ししか知らんし。ちよつと教えてよ、ここから反撃する方法とか」

「ここまで決まると抵抗は難しいですが……たとえば、私の手を振り切ったとして」

鷹姫が袖をつかんでいた手を離れた。

「あなたは逃げるために背筋をそらして、右側へ私を押しつけようとしてみなさい」

「こっつー」

鮎美は大きく背筋をそらして鷹姫の身体を持ち上げた。

「そうそう。それで私が逃がすまいと左へ重心を移したとき、一気に左側へ私を投げるように転がしてみなさい」

「ううっ！ うりゃあー！」

言われたとおりに背筋と腕力で鷹姫の身体を横へ投げるように押しつけた。

「そう、そのまま今度は素早く私の上のりなさい」

指示をくれるので従い、鮎美が上になって鷹姫へ覆い被さる。

「…ハア…ハア…ハア…」

「……。何ですか、これは？」

鷹姫は真つ直ぐに上から押さえられ問うた。寝技というよりベッドの上で男女がするような身体の正面と正面を合わせる形になっていて不思議に思っている。

「と……とりあえず、押さえればいいかなって」

鮎美は両手で鷹姫の両肩を押さえている。お腹に体重をかけて鷹姫のお腹も押さえていた。

「まったく基本を知らないようですね。このような状態では……ほら」

鷹姫は両脚を大きく開くと、鮎美の腰へ左右から巻きつけた。

「これで押さえ込みは解けたとみなされます」

「そ、そうなんや……なんか、余計に……」

「余計に？」

「む……無防備やない？　うちが男やったら、こんなポーズ、危険でしやーない気がするけど」

「……………」。反撃します」

鷹姫は右肩を押さえてきている鮎美の左手首を左手で握ると、大きく左側へ引きつつ、右手で鮎美の腰を持ち、右側へ引く。それで鮎美はバランスを崩され、右側へ転げた。その転がりに合わせて、すぐに鷹姫が上になる。

「ほら、これで逆転です」

「ハア……ハア……あつという間もなく……やね……」

「さっきのような押さえ方をするなら、せめて脚をからめられないようにしなければなりませんよ。こんな風に」

鷹姫はお尻を鮎美の腹部へ押しあて馬乗りになって体重をかけている。そして、両手で鮎美の両肩を押さえてみせる。

「一応は相手の背中をつけさせ、脚もからめられていませんから押さえ込みの要件は満たすでしょう」

「……ハア……ハア……ほな、抵抗するから、押さええてみてよ」

「いいでしょう、やってみなさい」

「ううっ！　ううくっっ！」

どんなに鮎美が逃げようとしても、しっかりと腹部と両肩を押さえ

られているので、ろくに動けない。

「ハア：ハア：…」

息が上がってきた鮎美は抵抗を諦め、鷹姫を見上げた。

「ハア：…」

「もう降参ですか？」

「ハア：ハア：息が：ちよつと待つて：…」

「この程度で息があがるとは運動不足な証拠ですよ」

そう言う鷹姫は息を乱していけないけれど、汗はかいている。その汗が額から顎先まで流れ落ち、滴になつて鮎美の頬に落ちた。

「ハア：もう一回しよ」

再び鮎美が動こうとしたときだった。誰かが道場内に入ってきた。

「鷹さん、何やってるんですか？」

男子の声だったので鮎美は慌てて乱れていたスカートを直そうとするけれど、鷹姫が邪魔で遅れてしまう。そんな慌てた様子を見て鷹姫も身体をあげて、スカートの裾を直すのを手伝った。二人から目をそらしていた男子が鍋を差し出してくる。

「母ちゃんがエビマメを炊いたから、鷹さんちに持つていきつて」

「そうですか、ありがとうございます。健一郎さん」

礼を言つて鷹姫は鍋を受け取った。鍋には湖で獲れた小さなエビと六角市の畑で取れた豆がいっしょに炊かれていて、甘い香りがあった。

「鷹さん、あの人と何をしてたんですか？」

「柔道です」

「あんな服で？」

「戯れに始めて、つい熱くなつてしまいました。お見苦しいところをお見せしました。どうか忘れてください」

「……」

健一郎さんと呼ばれた男子は中学生くらいで、つい鮎美の丸見えになつていた太腿と下着を思い出してしまい、赤面して黙った。鷹姫は落ち着いて健一郎を誘う。

「せっかくですから、ご夕食をいっしょにいかがですか」

「い、いえ。オレは、いいつす。もう帰るつすから」

そう言つて、すぐに帰つてしまった。鮎美が引越してきてから、ずっと不思議に感じていたことを問う。

「あんたつて誰にでも素っ気ない感じやのに、あの子にだけ、ちよつと優しいよね。なんでなん?」

「私の許嫁ですから」

「……。い……許嫁?! 許嫁つて何?!」

弾かれたように鮎美が迫つて問うけれど、鷹姫は平静に答える。

「知らないのですか、許嫁とは親の合意で結婚の約束をした男女のことです」

「いや知つてるし! そういうことやなくて! 許嫁つて何よ?!」

「……あなた日本語はわかりにくいですね。何を問いたいのですか?」

「せやから! なんで許嫁なんかいるの?!」

「十年ほど前に双方の両親が決めました」

「なつ……そんなことでええの?!」

「とくに問題は感じません」

「いやいやいや! 結婚やで?! 生涯の伴侶やで?! そんなサラつとして、ええの?! だいたい、あの子は、いくつよ?! 何年なん?!」

中坊やる?!」

「中学2年生です」

「四つも年下やん!」

「私が24になつたら20ですよ」

「そらそうかもしれないけど! 何より二人の気持ちは?!」

「私は、とくにかまいません。彼は……どうなのでしょう……健一郎さんにお気持ちを訊いたことではないですし、まだ中学生ですから」

「とくにかまいませんつて……好きなん? あいつのこと? えつと、名前は岡……」

「岡崎健一郎さんです」

「岡崎姓も、この島に多いよな。もしかして島の風習で許嫁やつたり

するの?」

「風習とまではいかないでしょうが、3割くらいは、それとなく許嫁が決まっていたりします。でなければ、今まで島の人口を維持できなかったでしょう」

「3割も……それでええの? 好きなん、あいつのこと?」

「嫌いではありません」

「……好きでもないの?」

「……まだ、私には恋というものの経験がありませんし、嫌いではないけれど大丈夫でしょう」

「え……ほな、もし他の人を好きになったら、どうするの?」

「諦めるか、恋が冷めるのを待つか……」

「諦められんかったら? 相手も鷹姫を好きやって言ってくれたら?」

「それは……大変失礼な話ですが、平身低頭で岡崎家へ謝りに行って許嫁を御破算にしていたでかでしょうか」

「キャンセル可なんや?」

「はい」

「なんや……ビビったアア……」

鮎美は座り込み、それから、まだ言う。

「にしてもや、平然と受け入れてる、あんたもあんたやで」

「……。そう言う、あなたには好きな男性はいるのですか?」

「え……いや……別に、おらんけど」

「許嫁も?」

「おらんよ! 普通おらんし!」

「あなたの普通と私の普通は、ずいぶん違うようですね」

「……そうやね……疲れたわ……岡崎くんは島の中学校?」

「はい、鬼々中です」

「剣道もしてはるの?」

「当然」

「強いのか?」

「……。今少し努力が必要でしょう」

「なるほど、満足してないんや。ま、あんたの水準やと、相当かもしれんけど」

鮎美がそう言っているうちに、鷹姫のお腹が鳴った。ずっと稽古していた身体が煮物の匂いを嗅いでしまい、胃が鳴っている。少し赤面した鷹姫が誘う。

「あなたも、食べていきますか？　鬼々島のエビマメ、もう食べましたか？」

「おおきに。引っ越し初日から、いただいております」

ケーキを間食した鮎美の空腹は強くなかったけれど、鷹姫の誘いに甘えた。

6月 面談

次の日曜日、鮎美は六角市にある高名な料亭に来ていた。

「招福亭って……ここかな……。わかりにくいなあ……。ここで、ええんかな……」

遅刻はまずいと思ったので連絡船の都合もあり、40分も前に着いていたけれど、料亭の入口がわからず駅前の街路を歩き来している。不意に背後から声をかけられた。

「芹沢鮎美さんですか？」

「え、は、はい！ そうです」

振り返ると、そこに参議院議長の竹村正義がいた。壮年の男性で上品なスーツを着ている。一人ではなく少し離れたところに体格のいい男性が2名いた。目つきが鋭く、竹村が微笑んでいるのに比べて、まったく表情がない。片方の耳にだけ無線機のイヤフォンを入れてある。その体格は屈強で、すぐに鮎美はボディガードなのだと察した。

「強そうな人らや……」

つい剣道をしていた経験で、そちらに目がいき、つぶやいていると竹村に笑われた。

「中学で剣道をされていたそうですね」

「え……あ、…はい……」

なんで知ってるねん、怖いわあ、と鮎美が個人情報把握された女子高生らしい表情をすると、竹村が謝ってくる。

「これは失礼。お嬢さん相手に、こういう物言いは逆効果ですね。ついつい、会談前にお相手のことを知っておくものですから」

「そうですか……どうも」

どう答えていいかわからない鮎美へ竹村が右手を差し出してきた。握手を求められる機会が急激に増えている鮎美も反射的に手を出した。

「……」

温かい手やな、と鮎美は竹村に好感を覚えた。少しだけする香水の

匂いも、きつちりと整えられた髪も、好印象を与えてくる。父親より年上で、祖父よりは若い竹村へ、鮎美は吸い込まれそうな錯覚を感じた。

「……」

「少し早いです、お店に入りましょうか」

「は……はい……」

竹村は迷うことなく料亭の入口へ入っていく。鮎美が個人宅の庭かと思っていた石造りの回廊が入口だった。まだ予約した時間まで30分もあつたのに料亭の女将が玄関前で待っていた。

「いらっしやいませ。竹村様、芹沢様」

「お久しぶりですね。井口さん」

竹村は女将の名も覚えていたようだった。鮎美は立派な玄関から赤絨毯の敷かれた廊下を案内され、庭に面した広い和室へ通された。正座するのは嫌だな、と制服で来たことを後悔していたものの、和室には椅子があつてスカートの裾を気にしなくて済みそうだった。椅子に座り、一口お茶をいただく、と竹村が言ってくる。

「いろいろ大変でしょう、芹沢さん」

「は……はい……大変です、ホンマに」

「もし、本当につらいなら今からでも辞退されるのも、一つの選択肢ですよ」

「………。そう言ってくれはる人がいるとは……思いませんでした……」

鮎美は感動して泣きそうになってしまい、両手で口元を押さえた。正直なところ投げ出したいという気持ちがある。ごく普通の女子高生だったはずなのに、この1ヶ月ですべてが変わってしまった気がする。鮎美は冷たいオシボリで目を拭いた。

「……」

「………。つらいですか?」

「………。平気ではありませんけれど、頑張ろうと思ってます」

「強い人だ。こんな若者がいてくれることは、とても嬉しいものです」

「…………どうも…」

やはり答え方がわからない鮎美が頭を下げていると、料理が運ばれてくる。

「お飲み物は、いかがなさいますか？」

鮎美がウーロン茶を頼むと、竹村も同じにした。第一印象から好感を覚えていた鮎美は会食が進むにつれ、ますます竹村へ惹かれた。一度として具体的な勧誘の言葉はなかったけれど、何度も鮎美は喉元まで、民主党に入ります、と言いつうになつたし、言いたいという衝動を覚えていた。それを言えば、目の前の紳士が喜んでくれる、そう思うと言いたい、この紳士の歓心を買いたい、そんな風に感情を動かされていた。それでもデザートの前にトイレへ行きたくなり、席を立つて女子トイレの鏡を見たとき、気づいた。

「…………うち…………思いつきり、のまれてるやん…………」

鏡を見て、剣道の構えを取る。

「…………竹村正義…………すごい人や…………鷹姫とは、また別の凄味が…………」

竹刀を持つて鷹姫と相対すると、絶対に勝てないと感じる。それと同じように、あまりに器の大きい政治家がもつカリスマ性のようなものは、こちらを圧倒してくるのだと、気づいた。

「間合いに入ったら、何しても勝てん…………鷹姫は後ろからでも、あかんかった…………気迫というか、オーラというか…………政治でも剣道でも一流の人は、ちやうわ…………うちは凡人やなあ…………」

便座に座つてタメ息をついた。用を済ませて顔を洗うと、席に戻つた。

「芹沢さん、あなた自身の人生が輝くように祈っていますよ」

それが竹村と別れるときの最期の言葉で、ついに具体的に勧誘されることはなかった。鮎美は頭を下げて会談を終えた。

「……………なんか…………フタマタかけてる女みたいで気が引けるわ…………」

竹村との会談を終えた鮎美は、そのまま駅から電車を乗り継いで京都に出た。京都駅では直樹が待っていてくれた。いつも鮎美と会う

ときは、ごく普通の27歳の青年が着ていそうな私服を着ているのに、今日はスーツ姿だった。けれど、駅を行き交う会社員たちのような着古した感じはなくて、むしろモデルが撮影のために着ているような雰囲気があった。

「やあ」

「約束どおり来たで」

あえて鮎美はタメ口で軽い態度をつくった。これから会う衆議院議長の久野統一朗が、どんな人物であれ、お昼のように圧倒されたくないという警戒が働いている。

「また料亭とかなん？」

「どうだろう。久野先生の秘書からは何も聴いていないから」

「うち、お腹いっぱいなんやけど」

「それとなく秘書へ、そう伝えてみるよ」

「秘書か……うちの任期が始まったら、うちにも秘書が？」

「任期前でも政党へ所属すれば公費で雇うことになるし、任期が始まれば、ほぼ必ず必要になるよ。頑固に一人で頑張っている人も一部にはいるけれどね。一人でできることは結局、たいしたことないよ」

「ふーん……」

鮎美はスマートフォンで秘書制度について調べ始めた。まだ久野は姿を見せない。

「待たせて、ごめん。おそらく前の会談が長引いてるんだと思う」

「ええよ。うちの他にも誰か勧誘してはるの？」

「いや、たぶん京都府知事と何か話があるみたいだ。兵庫県知事も顔を出しているらしいから、きっと阪神淡路大震災被災者への最終的な対策についての会談だろう」

「……そんな大事な話の後って……どうぞ、ごゆっくり伝えておいて」

「すまない。そういうえば、君は大阪出身だったね。震災の記憶は？」

「うちが3歳くらいの話やで。なんも覚えておらんよ。けど、中学生くらいの頃に伯母ちゃんが思い出して言ってた言葉が印象に残ってるかな」

「伯母さんは、なんて?」

「震災の日、その初めての夜、大阪は電気の明かりがあった。けど、大阪湾の向こう、神戸の方は真っ暗で、それを見て、あそこが地獄なんやと思っただって。あそこで苦しんでる人が、いっぱいいても、こっちは平穏無事、その現実が現実には思えんかったって」

「…そうか…現実が…現実には思えないか。ごめん、不用意に質問して」

「ええって。うちが覚えてるのは、それだけやもん」

「あ、今、秘書からメールがあった。リカロイヤルホテルの喫茶店で待っていてほしいそうだよ。すぐそこだ。歩いていこう」

「はい」

二人で京都駅を出ると、ビルとビルの間を歩いて、大きな道路を歩道橋で渡る。

「広い道やな。御堂筋にはおよばんけど。っていうか、御堂筋には鬼々島が何個入るやろ」

「さて、何個だろうね。あ、共産党の西沢さんだ」

直樹がホテルの前にはいた青年に挨拶する。

「やあ、西沢さんが立ち会いで?」

「ええ。ボクにも時間をいただけそうだから」

そう答えた西沢は三十年代前半の青年でスラリとした知的な雰囲気のある人物だった。着ているスーツは量販店で買ったような普及品で、そこへ衆議院議員のバッジを着けているのでスーツがバッジに負けているけれど、年配の議員たちが着ているような触れるのも怖いくらい高そうなスーツより、鮎美は親近感を覚えている。もう鮎美も何度か西沢に会っているの、軽く挨拶する。

「わざわざ京都まで、ご苦労さんです」

「芹沢さんに会うためなら火の中の水の中ですよ」

「水の中にある島には上陸させてもらえんしね」

「たしかに」

三人でホテルの喫茶店へ入り、雑談していると久野が側近やボーディーガードとともに現れた。直樹と西沢が椅子を立てて挨拶する

ので、鮎美も礼儀の上で立ち上がった。

「はじめまして。久野統一朗です。遅くなって申し訳ない」

やはり久野は立場にふさわしい高級なスーツを着ていて、鮎美には価格の想像もつかない。秀でた額とレンズの大きな眼鏡が、いかにも仕事のできる男という印象を与えてくるし、そして竹村と同じようなカリスマ性も感じる。鮎美の祖父と変わらない年齢のはずなのに、気が充実しているからなのか、若くもみえた。鮎美は圧倒されないように失礼を承知で遅刻した男に対して女が取るような態度で腰に手をやり、厭味の一つでも言おうとしたけれど、口をついて出たのは謙虚な言葉と質問で腰へやった手も、すぐにおろしていた。

「いえ、大事なお話やと聴いておりますから。……まだ、阪神淡路大震災への対策つて必要なんですか？　もう15年も経つのに」

「ええ、主に住居対策です。ご高齢の方がとくにお困りですから」

「そうですか。すみません。いきなり質問して」

「いえ、お気になさらず。月日がたっても関心を持ち続けていただくことが、なにより大切ですから」

久野が仕草で三人へ座るよう示したので鮎美たちが座り、久野と四人でテーブルを囲んだ。久野が西沢へ挨拶する。

「西沢くんも、ご足労ありがとうございます」

「いえ、こちらこそ」

「さて」

久野が鮎美を見て言う。

「新制度の参議院議員候補予定者を政党へ勧誘するにあたっては、他党の関係者も立ち会うことになっていきます。実際には形骸化しつつあり、最初のコンタクト以降は、あまり守られていないけれど、この制度を創設した者としては規則は遵守していききたいので西沢くんに来ていただいたわけです」

久野が一呼吸おいて、鮎美へ問う。

「率直にお訊きしたい。いざ、ご自分が当選されて、芹沢さんは、この制度をどう感じておられますか？」

「……。率直に、と言われると……。いくらなんでもクジ引きは……。無

いかな、と。うちみたいな普通の女子高生が、いくら衆議院が参議院に優越するからって、国政議員やなんて。あと90歳とかの人でも無理あるかなって思います」

「では、ごく普通のおじさん、おばさんが当選するのは？」

「それは……本人がええなら、ええかな、と」

「すると、おじさんと、おばさんばかりで国の方針を決めることになるけれど、それでもいい、と？」

「うっ……うん……今までは、ずっと、おじさんばかりで決めてたし……若いもんも少しは……」

「少し切り口を変えましょう。二世議員を、どう思いますか？ たまたま、親が議員だったから、家業を継ぐように、本人も議員になる。本人が望む場合もあれば、望まない場合もありつつも周りに推され、世襲されてしまう。これを、どう思います？」

「世襲は、あまり良くないと思います。それでは江戸幕府の將軍と、あんまり変わらんし」

「私は二世議員です」

「そ……そうなんですか……。久野先生ほど、しっかりした感じの人なら、いいかな、と思いますよ」

「お世辞をありがとう」

「いえ……」

鮎美は緊張して口が渴いたので、コップから水を飲んだ。喉はカラカラなのに、腋の下からは噴き出すように汗が出て、その滴がすーっと腕をつたって流れ落ち、肘までできてしまい、半袖の制服なので見られると恥ずかしいので、さりげなく手で拭いた。久野が静かに語る。

「たまたま、という偶然性において、二世議員もクジ引き議員も、あまり変わりはしないのです。あまりに、ひどい人物であれば再選されないし途中での罷免もあるでしょう」

「それは……そうですね……」

「私も父が、たまたま議員だったので、ここにいます。あなたも、たまたまクジが当たったので、ここにいます。起点の偶然性において両者は同

質でありながら、前者は国民全体に対して実に不平等で、後者は実に平等です。前者の不平等さは議員の選挙において憲法が強く戒める門地、社会的身分、教育、財産による差別という意味合いを考えれば違憲性さえ感じさせるほどに」

「……………自分を……………否定されるんですか？」

「ええ、私は政治家に向いていないし、政治家でいることが苦痛でさえある。けれど、周りの期待に応えているうちに、こうなってしまった。とはいえ、二つ大きな仕事もできた。一つは震災への対応、自己満足と言われるかもしれないが、やれることをやりました。そして、もう一つが芹沢さんの人生を大きく変えようとしている平等な偶然による議員の誕生です」

「……………。自分と同じ目に遭おてみい、と？」

「はっはは、率直すぎる表現ですね。ですが、そういう面も否定しきれないのかもしれない。逆に、西沢くんは自ら志望し、三度の挑戦をへて当選されていましたね？」

久野に話を振られ、西沢が頷いた。

「ええ、県議選を含めれば五度ですが」

「五回も議員になってはるんや」

「……………。いいえ、五回の落選をへて、ようやくの初当選です」

「そ…そうですか…。どっちにしても、よう頑張りはりますね」

鮎美が作り笑いし、久野が話を戻す。

「芹沢さんは、彼のように強く志望し、なりたい者だけが議員になることを、どう思いますか？」

「それは……………それで、ええんちやうかと……………」

「一見そう思うのは当然です。けれど、それでは大きな偏りが議会に生まれる。強い政治的信念をもち、何らかの固定した方向性を目指す者のみが集まり、討論し、政治を行うことになる。これもまた国民全体からみれば、はたして健全な運営といえるのか、そんな不安もある」

「……………たしかに……………そう言われると……………そうかも……………」

「なりたい者も、なりたくなかった者も、考えてもみなかった者も、み

な参加し、国民の感覚で政治を執り行う。これが制度の本旨です。芹沢さんにも、ぜひ参加していただきたい。もちろん、私たちの自民党で」

さつと久野が握手を求めてくると、思わず鮎美は手を握った。とつさに手を握ってしまうほど、鮎美は久野へも好感を覚えていた。けれど、まだ自民党に入ると決めたわけではない、その気持ち握力を途中で弱め、それに久野も気づいたけれど、笑顔で告げる。

「ゆっくり考えてください。そして、あと一つ。18歳での当選など若すぎる、とお考えになるのも一理あるでしょう。けれど、一期目が終わるとき、あなたは24歳だ。もしも二期目があるなら30歳。これは、もつとも人間が物事を学びやすい時期に重なる。あながち若すぎて話にならないとは思えない。むしろ、まったく政治と関係ない分野で仕事をしてきた50歳のおじさんや、まったく普通の60歳のおばさんの方が心配は多いかもしれないし、記憶力はいうにおよばずですから」

「……はい……」

どう返答していいか、またわからず、はい、とだけ答えて握手を終えた。久野が席を立つ。

「遅刻の上に中座して申し訳ないが、別の候補予定者にも会わなくてはいけなくて、失礼いたします。芹沢さん、お会いできて良かった。ありがとうございます」

「ご、ごちそうさ、おおきに」

「では」

久野が礼儀正しく去り、見えなくなると西沢が口を開いた。

「芹沢さん、さきほど連絡があつて、なんとか破志本先生の予定があきました。雄琴くんといっしょに来てくれますか？」

「みんな、うちを口説くのに大物ばつかり当ててきはるんやね……こうなったら、最期まで付き合いますわ。で、どこに？」

「京都支部まで、ご足労願います」

直樹と西沢が双方を立会人にする申し合わせていたので鮎美も従い、京都市にある党支部へ出向いた。駅から少し歩いた場所にある

マンションの一階テナント部分に、党のポスターが何枚も貼ってあり、党支部との看板もあった。

「こういうところ入るの初めてやわ。お邪魔します」

「ボクも共産党の支部は初めてだよ」

鮎美と雄琴が中に入ると、複数の党員たちが歓迎してくれる。

「ようこそ！ 芹沢さん！」

「いらっしやい！ 来ていただいて、嬉しいです！」

西沢が若いので同じくらいの世代が集まっているのかと鮎美は思っていたけれど、多くの党員が60歳を超えているように感じられた。けれど、年齢に比して元氣そうで、まだまだ頑張ってるやろう、という気概を感じた。支部内は長机とパイプ椅子が並び、いろいろな印刷物が置いてある。どことなく生徒会室に通じる雰囲気があった。

「…ど…どうも…芹沢です…」

「芹沢さん、握手させていただいて、よろしいですか！」

女性党員の一人が右手を出してきたので、鮎美は応じる。

「…どうも…」

「キヤー、嬉しい！ 芹沢さんと握手できたわ！」

「…はは…」

うちはパンダか、と鮎美は疲労感を覚えたし、次々と握手を求められて、疲労は深くなった。結局、支部内にいた全員と握手し終えた頃、党代表が駆けつけてきた。

「破志本です。ようこそ、芹沢さん」

「どうも、芹沢です」

また握手をしてから、パイプ椅子に座った。

「……………」

鮎美は破志本の顔を見て、ときどきテレビの討論番組で見かける顔だったので、その記憶との照合に時間を要していた。

「どうかされましたか？ 芹沢さん」

「あ、いえ……………やっぱり、テレビで見かけるのと、同じお顔してはるなあ、と」

「ははは。実は影武者かもしれませんよ」

破志本は冗談を言っただけをなごませてから本題に入る。

「今まで日本の政治は、ごく一部の人が、平たく言えば、お金持ちと言われる人たちに、ほぼ独占されていた」

「……そうなんですか？ 選挙で、投票は、みんな平等なのに」

「投票はね。けれど、実際に当選し権力を握るのは、しつかりとした資金力のある党がバックアップする者たちだけです。しかも、彼らは二世議員、三世議員と世襲していく」

「はい、それは問題ですよ」

「参議院議員をクジ引きで選ぼう、という一見無茶な政策が生まれたのは経緯があります。もともとはアメリカの陪審員制度を見習って、日本の刑事裁判に国民から無作為に選ばれた者を裁判員として判決に関わらせよう、という政策があったのです」

「へえ……」

「けれど、司法関係者からの反対が強かった。場合によっては人の生き死に、死刑の判断にも関わるかもしれないのに、無作為に選んだ者でいいのか、と。そうこうしているうちに、司法は議会へ、一票の格差が大きいことを、とうとう違憲だと明示してきた。けれど、自民党は自分たちの地盤が強い九州四国中国地方の議員数を減らすことに抵抗しました」

「そのへんは藩閥政治、薩長土肥の残りって感じがしますよね」

「おおー。よく勉強されていますね。そうです、自民党というのは結局は明治政府の頃から本質は変わっていない。専横を続けようとする。けれど、彼らの側から、いつそ議員数を一挙に増やして一票の格差を無くそう、議員の激増について国民に理解をえるため、参議院をクジ引きで選ぼう、そして選挙資金のいらぬクジ引き議員の報酬は労働者平均賃金の2倍程度としよう、と。我々は当初は馬鹿げた提案だと反対した。けれど、むしろチャンスではないか、これを奇貨として一部の金持ちから、我々国民の手に政治を取り戻そう、そう考え賛成に転じたのです」

「……なるほど……」

「そうして芹沢さんのような若くて真つ白な人が選出される時代になった。これは日本を変えるチャンスなのです。このチャンスを私たち共産党と、いっしょに活かして行ってほしい。芹沢さん、私たちと、いっしょに歩んで行きましょう」

破志本が見つめてくる。その目は輝いていた。やはり一党の代表というのは人としての気配からして違う、鮎美は破志本にも好感を覚えた。けれど、まだ決めるつもりはない。もともと支持政党が無く、まだ迷うつもりでいる若者の目を見て、破志本は微笑みをつくった。

「まだ考える時間が要りそうですね」

「すみません。せっかく、お誘いいただいたのに……もう少し考えさせたくください」

鮎美は申し訳なくて頭を下げた。どこの党にも誘われると入ってあげたいと一瞬は思ってしまう自分が節操なしな気さえしてくる。党支部を立ち去るときも、黨員たちから口々に、待っているよ、ぜひ来てね、と声をかけられ、笑顔をつくって返すのがつらかった。ようやく京都駅に戻りホームで列車を待つ。同じ県に住んでいる直樹と西沢も、いっしょだった。

「はああ……疲れた」

「お疲れ様です」

直樹と西沢が異口同音してくれた。

「まもなく新快速列車がまいります。黄色い線の内側にさがって、お待ちください」

駅のアナウンスが遠く感じる。

「……………はああ……………」

本当に疲れていて、鮎美は立ったまま寝そうになった。ふらりと鮎美の身体がホームから線路の方へ、落ちそうになる。

「って?! おいっ!」

直樹が反射神経を發揮して鮎美の身体を抱き留めてくれた。

「あ……………れ?!」

「明日の一面トップを飾る気かよ?!」

「うち……落ちそうに……おおきに……」

「芹沢さん、危ないところだったよ。雄琴くんのアインプレーが無かったら、本当に新聞に載っていたかも」

「はは……おおきに、雄琴はん」

鮎美は直樹から離れて礼を言った。

「けど、うちが死んだくらいで一面はないやろ？ 地方欄の隅っこがせいぜいやで」

「君は、まだ自分の立場がわかってな……」

そこまで異口同音して直樹と西沢は恥ずかしくなって黙った。代わりに鮎美が声をあげる。

「あああ?! しもた!!」

「ど、どうしたの?」

「船の最終便のこと忘れてた! この時間に京都つて、やばい!!」

そう言いながら、轆かれたかもしれない列車に乗ってスマートフォンで時刻を確認している。

「あかん、六角駅からタクシーに乗っても、間に合わん!」

「すまない」

「申し訳ない」

直樹と西沢が謝ってくれる。

「何か方法はないのかい? 無ければ六角駅前のビジネスホテルでも取るよ。会談の後だから経費で問題ないし」

「こちらでも支払いますよ。遅くなったのは、こちらのせいだから」

「お金の問題でもないちゅうか……」

「一人で泊まるのが問題なら、ボクも六角で降りてもいい。もちろん、別々の部屋を取るから」

「ボクも付き合いますよ」

「うう……外泊つて……とりあえず、父さんに電話してみるわ」

二人以上で泊まるにせよ、一人で泊まるにせよ、どちらも気乗りしない鮎美が父親に電話すると、近所に頼んで漁船を出してもらえるところになり、往復の燃料代は直樹と西沢が経費で折半することになった。

6月 強引

日曜の夜、鮎美は直樹と六角駅で降りてタクシーで港に着いた。

「やっぱり、送ってよかった。夜になると、ここは淋しいね」

「うん、おおきに」

最初は遠慮したけれど、鮎美も送ってもらってよかったと思うほど、夜の港は淋しかった。人気はない、波も無いので音もない。港といても連絡船が着く桟橋と漁船のための船着き場が少しあり、あとは島の住民が利用する自家用車を駐めておくための駐車場があるくらいで、道路も港が終点なので車の行き来さえない。そして、ちょうど港は低い山に囲まれるような地形になっているので周りからさえ見えない隔絶された場所だった。直樹はタクシーを待たせて、鮎美と湖面を見た。暗く風いている。

「もう来てくれはったわ」

「みたいだね」

小さな漁船が、こちらへ向かってきているのが、信号灯でわかる。鮎美はスマートフォンで液晶を光らせると、漁船に向けて大きく振った。

「見えてるやろか？」

「どうだろうね。液晶の光量はしれているから」

すぐに漁船は鮎美のスマートフォンではなく港にあった小さな灯台を目当てに到着してくれた。近所の漁師と父親が乗っていた。

「遅うなって、ごめんさい」

「娘さんを遅くまで連れ回して、すみません」

まだ夜の9時だったけれど、二人が謝ると漁師と父親は笑ってくれる。

「かまわんよ。鮎美ちゃん、ご苦労さんやな。衆議院の議長さんと会

おたって?」

「はい」

「鮎美、だいぶ疲れた顔をしているな。ほら、乗って」

父親が手を出してくれるので握った。他人と握手するのと違って、一切の気を遣わなくていい父親との接触が心地よかった。すぐに漁船が島へ向かい、直樹へは手を振って別れた。

「はああ……疲れた……」

「鮎美……」

父親が心配そうにしてくれるので笑顔をつくった。漁船は真っ直ぐに島へ向かう。けれど、島の方から三隻の船が、こちらへ向かってくるのが信号灯でわかった。このままでは衝突するコースなので漁師は減速して様子を見る。向かってきた三隻も島の漁船だった。その三隻が鮎美たちの行く手を塞ぐように前と左右に接舷してくる。そして、挨拶も無しに鮎美へ詰問してきたのは壮年の自治会役員だった。

「昼に民主の竹村と会っていたというのはホンマか?!」

「……」

大人に怒鳴るように言われて鮎美は恐怖心を覚えた。父親が鮎美の前に立つ。

「いきなり何ですか?」

「駅前で、見たもんがおる!」

「共産の西沢とも、いっしょやったと京都に出ておったカカアが言うた!」

別の役員も言ってくる。

「いつまで自民の先生らを待たせる気か?!」

「……」

父と娘が黙り込むと、また最初に詰問してきた役員が怒鳴る。

「まさか、他のところへ入るとは言わんな?! そんなことでワシらが島におれると思うなよ!」

「……」

「もう決めよ! 今ここで!」

「……」

「でなければ島に戻さん!」

「……そう言われるのであれば、私は娘と市街に戻ります」

背後にかばう鮎美が震えているので父親は穏やかに言ったけれど、ますます役員は激昂してくる。

「無事に戻れると思うなっ！ 二人して沈めちやるぞ！」
「っ……」

鮎美は怯えて涙を流した。今日一日、とても疲れていてヘトヘトだった。両院の議長と野党の党首、その三人との会談だけでも限界を超えて疲労しているのに、まるで水上戦のように船で囲まれ脅されると、もう感情が高ぶって涙ばかり流れた。直樹も久野も紳士的にしか勧誘しないのに、どうして役員たちは脅迫まがいのことをするのか、それとも表裏一体なのか、鮎美は思考がまとまらず声も出せずに泣いている。娘の涙でシャツの背中が濡れるのを感じて父親が穏便に済ませようとする社会人の顔から、大阪で育ってきた人間の表情に変わった。

「やれるもんなら、やってみろや?！」

「な……なんやと!」

「大阪湾ならともかく、こんな閉鎖された水域で二つも土左衛門つくってポリにパクられんわけがないやろ! 脅しなんぞきくか!」

「くっ……移住者のくせに、逆らう気かっ!」

「ワシの道楽で住みに来てやっただけじゃ! 娘つぶされるくらいなら明日にでも出て行くわい!!」

ずっと移住してから丁寧語で島民に接していた父親がドスのきいた関西弁で吠えると、役員たちは戸惑った。その戸惑いと、もう夜中近いということもあり、鮎美たちの漁船を操作していた島民がタメ息をついた。

「はああ……副会長さん、ワシも帰りた。もう終わってくれるか?」

「……………」

沈黙だったけれど、反論はなく、四隻は島に戻った。それぞれの船は船着き場が離れているので、もう声をかけられることもなく鮎美と父親は家に入った。戸を閉めてから父親が言ってくる。

「鮎美、つらいならお前が一番楽になれる方法をとるよ。六角市街に

住んでもいいし、大阪に戻ってもいい。今から辞退でもいい」

「父さん……うん……おおきに…」

もう疲れていたので早めに眠った。早く眠ったせいなのか、それとも気が高ぶっていたからなのか、鮎美は早朝に目が覚めた。

「……霧か……五里霧中やな…」

窓を開けると濃い霧が出ていて何も見えないくらいだった。階下で人の気配がするので降りてみると、父親も起きていた。

「父さん、おはようさん」

「ああ、おはよう。……少し散歩に出ないか？」

すでに父親は玄関で靴を履いていて、ちょうど散歩に出るつもりらしかった。鮎美は数秒迷ってから頷いた。

「うん、ええよ」

月曜の朝なので制服に着替えて散歩に出る。家と家の間を歩いて港へ向かった。途中の自動販売機でミルクティーを買ってもらい、突堤の先まで歩いた。だんだん霧が晴れてくると、多くの漁船が漁に出ているのが見えるようになる。

「………」

「……鮎美、ああやって漁に出ているけれど、淡水魚を売って、どれくらい生計が立てられると思う？」

「そういわれても……、あんまり儲からんのちゃう？」

「私も、そう思う。では、この港を整備するのに、いくらかかると思う？」

「え………」

言われて鮎美は港の設備を見回した。外側の突堤は百数十メートルほど伸び、幅は20メートルほどのコンクリート製で灯台は高さ5メートルほど、内側には木製の栈橋や船着き場があり、一番大きな建物は高さ3階建て、幅15メートル奥行き10メートルほどの鉄骨製で漁協の作業場と、連絡船で来る観光客の受け入れ場を兼ねている。他には小さな倉庫が長屋のように立ち並び、それぞれの漁師にあてがわれている様子だった。

「ぜんぜん、わからんけど……何億とか？」

「30億円は超えるだろうね。しかも、ここにはクレーン車も無い。建設時には、すべて持ち込まなければいけなかったろうし、作業船も瀬戸内海のような競合他社の多い水域ではないから、割高だったろう。でなければ、その業者も経営がもたないからね」

「……そんな額……見当も……」

「他にも、わずか千人に満たないこの島に小中学校、保育園を整備し、維持する教員の人件費、鮎美たちを高校へ送る船頭への手当と燃料代、それらすべて税金からの支出だけれど、それを島民の人口で割ると、明らかに納税額より多くなる。逆に、東京や大阪なんかの都市部では納税額と行政サービスを享受する額は、こういう田舎へ投下される分、見合わなくなる」

「……都会のもんが損してること？」

「ところが、必ずしも、そうは言い切れない。数値化しやすい金額だけを見れば、そうなるけれど、田舎の自然が人の手で維持されること、たとえ販売額は安くても水産加工品が市場に供給されること、これらの役割は、とても大きい。第一次産業がなければ、第三次産業など、やっていられないからね。都市部で大きくお金を動かしている証券、金融、不動産、広告業などは実質的には何も生産していないのに、大きな顔をして田舎から供給される食品を口にかけている」

「……」

「都市部が経済的強者であるなら、田舎は政治的強者として生き残りをはかる。選挙のたびに、どの党へ投票するかわからない浮動票より、ずっと支持し続けてくれる固定票のある地域へ、政治家だって色々な優遇をするだろうさ。それは人口に見合わないインフラ設備であったり、学校の設置であったり、不漁時の補助金であったり、とね。うちが格安で借りている借家だって、半分以上は補助金があるから、そうなっている」

「……せやから、この島は自民を？」

「どこでも田舎は似たようなものだよ。田舎になるほど、その傾向が強くなるかな。けれど、この県は少し様子が違う」

「……そうなん？」

「ここは四国や東北のような完全な田舎ではなくて、京都と名古屋に挟まれ、大阪と東京も遠くない、それどころか、それらを結ぶ地点にある。高速道路の整備も早かったし、新幹線も一番に通った。おかげで大手企業の製造拠点は多い。ゆえに県民所得も低くなく、また給与所得者が多いので労働組合の関係もあり市街地では民主党も強い地域なんだ」

「……………ややこしい地域なんや……………」

「それだけに、どちらも必死になるんだよ」

「……………この島にとって、うちの選択は死活問題に……………なるの？」

「……………」

父親は鮎美を見つめて答える。

「なる。夕べの様子を見ればわかるだろう。大人げない、というか、あれが大人の一面だ」

「……………大人の一面……………」

「それでも鮎美の選択は自由だ。けれど、その選択によつては、ここに住めなくなる。彼らにしても住ませておけなくなる、と言った方が正確かもしれない。鮎美が自民を選ぶなら、彼らにとつて鮎美は最高の御輿になるけれど、そうでないのなら、このうえない疫病神になってしまう。そう、せざるをえないだろう」

「……………父さん、この島、好きなんやろ？」

「憧れてはいた。けど、鮎美と比べれば、どうだっがいい」

「……………」

「鮎美の選択は自由だよ。けれど、あまりゆつくり考えてもいられないかもしれない。やきもきしているのは私たち以上だと、夕べ、わかったからね。いつそ、今日を最期に、ここから去ってもいいよ」

「父さん……………おおきに、ありがとうな」

「そんな暗い顔をして礼を言われてもな。本当に気にするな。道楽で、ここに住みはじめたんだ。いつそ母さんと鮎美は便利な市街地に住ませて、オレだけ、ここに残ってもいい」

「そ…そんなことしたら、父さんが危ないやん！」

「殺しはしないだろう。一度、体験してみたかったんだ。村八分にされる気分つてのを。いよいよ嫌になったら出て行くから、それまで、ちよつと村八分にしてもらつて、その様子をブログにでも書いてみるとかさ」

「…………道楽もんが…………アホたれ…」

暗い気持ちだが、かなり軽くなつて、そろそろ登校の時間なので親子での散歩を終え、いつも通りに小舟で送ってもらうために棧橋へ出た。少し早く来たので、鷹姫と同時だった。

「あ、おはようさん」

「おはよう。…………芹沢、大丈夫ですか？　かなり疲れた顔をしていますよ」

鷹姫は目に濃いクマのある鮎美が心配になった。帰宅が遅く、気が高ぶつていて熟睡できずに早朝に起きたので明らかに睡眠不足だった。

「そうなん？」

「ええ、…………何かあつたのですか？」

そう問いながら二人で小舟に乗った。すぐに老船頭が高校へ向かつてくれる。連絡船は島から最寄りの港を往復しているけれど、二人が乗る小舟は中世に築かれた水路を通つて、高校の間近まで送つてくれる。おかげで歩くのは数百メートルですんでいる。

「うん、タベ、…………ちよつと、いろいろ…………島の人ら…………必死なんやなつて…………」

「やはり政治のことですか？」

「うん…………」

「芹沢、私に何ができるとも思えません、手伝えることがあつたら、言つてください」

「あんたが…………そんな風に言つてくれるなんてね…………うれしいわ」
そう応えると、鮎美が涙を流したので、さらに鷹姫は心配になった。

「島の大人たちと、揉めたのですか？」

「…………うん…………もう、結論を出さんと、あかんにやるね…………」

鮎美は小さくなっていく島を振り返った。

「……………あんなに小さな島……………あそこで……………」

不意に母親のことを思い出した。父は毎日、市街地の建築事務所へ仕事に出る。自分も平日は学校へ行く。けれど、母親は、ずっと島にいます。そのことに思い至って鮎美は決めた。スカートのポケットからスマートフォンを出すと、直樹へ電話をかける。

「もしもし、うちです」

「おはよう。どうしたの?」

「もう決めました」

鮎美が一気に言う。

「自民党で頑張ります。頑張りますから、島の自治会の人らに、これからも仲良うしてほしいと、うちが言ってたと雄琴はんから、伝えてもらえませんか」

「ああ、わかった。……………何か、あつたのかい?」

「まあ、いろいろ」

「そうか……………申し訳ない」

「ええんです。その一言で雄琴はんが関わってないこと、わかったから」

「芹沢さん……………、何かあつたら、すぐ相談して協力するから」

「はい、ありがとうございます。じゃあ」

電話を終えた鮎美は船底に座り込んだ。

「はあああ……………決めてしもた」

「芹沢……………」

鷹姫が心配そうに見てくれる。それで甘えなくなった。

「なあ、鷹姫」

「何ですか?」

「さつき、手伝ってくれるって言ったよね」

「はい、言いました」

「うちの秘書になってくれん?」

「……………秘書、…に?」

「政党に所属したら任期前でも秘書に給料がでる。うちも勉強会なん

かに参加すると日当がでる。ちょっと調べたんやけど、秘書に年齢制限はなかった。っていうか、議員が18なんや、秘書が18で、あかんわけがない」

「……………」

鷹姫が戸惑っている。

「お願いや、うちを手伝って！」

「……………」

鷹姫が迷っている。

「進学する予定やった？」

「いいえ、進学しません」

「就職は？ 高卒後、どうするつもりやったん？」

「父を手伝って道場を続け、いずれ婿を迎えて跡継ぎとなってもらおうつもりでした」

「あの岡崎くんを？」

「そうです」

「…………。うちの秘書を、しばらくやってくれん？」

「……………」

「お願いします。あんたとなら、頑張れる気がするのん」

「…………わかりました」

鷹姫が息を吐いてから微笑んだ。

「お受けします」

「おおきに！ ありがとうな！」

鮎美が喜んで鷹姫へ抱きついたので、小舟が大きく揺れた。

6月 鐘留

寝不足だった鮎美が抱きついたまま寝てしまったので鷹姫は船頭に頭を下げて、到着してからも、しばらく泊まっただけで、見知ったクラスメートに声をかけられて鮎美が起きてしまったので、少し睨んだ。

「おはよー、アユミン、タカちゃん」

「んーっ……おはようさん。あんたは元気そうやな」

「ちっちゃ。アタシのことは可愛らしくカネちゃんと呼んでくれたまえよ、アユミン」

緑野鐘留（みどりのかねる）は意図して可愛らしく立てた人指し指を振りながら微笑んだ。ショートカットが似合っている鐘留は学校からの制服改造への指導がゆるいのをいいことにスカート丈を極端に短くしているだけでなく、ブラウスマで改造して袖を切り落としてノースリーブにして丈も短くしてしまい臍が見えているので、白い肌がまぶしいくらいだった。

「うちがアユミンなのはええけど、タカちゃんは気に入らんみたいやで」

「……」

鷹姫は黙って不快そうな顔をしているけれど、鐘留は気にしていない。

「舟に揺られて、のんびり膝枕で、うたた寝しながら登校なんて最高だね」

「そうやね。おおきに、鷹姫」

「……別に……」

素っ気なく言って鷹姫が船を下りる。鮎美も船頭へ礼を言って続いた。すぐそこに学校は見えている。三人で通学路を歩いていると、後輩女子が何人か駆け寄ってきた。

「芹沢先輩！ サインくださいー！」

「私も！ お願いしますー！」

鮎美の当選は学校でも、じわじわと話題になっていてサインを求められることもあった。鮎美は笑顔をつくって応じる。

「ええよ、うちのサインなんかでよければね」

「ありがとうございますー！」

サインをもらって喜ぶ後輩たちは次の要求をしてくる。

「いつしよに写ってもらって、いいですか？」

「ええよ」

携帯電話やスマートフォンでの撮影もこころよく受けた。それらが終わって後輩たちが去ると、鐘留は肩をすくめて言う。

「調子いいよね、アユミンが議員になるってわかったら近づいてきてや」

「あなたが、それを言うのですか」

鷹姫が呆れている。

「芹沢の当選がわかってから急に接近してきた緑野が、それを言うとは滑稽ですよ」

「アタシは純粹にアユミンとタカちゃんの友達になりたかったの。クラスの女子とは、もう疎遠だし」

「それは、あなたの服装や言動に問題があるからです」

「ちよつと可愛く生まれたから、それを鼻にかけただけだよ？ アタシって学校で一番かわいいでしょ」

「……………」

「もう辞めたけどモデルだったし」

「あんたが可愛いのは否定せんけど…」

「ちつちち、カネちゃんだよ、アユミン」

「……。カネちゃんの見目がええのは認めるけど」

鮎美が足元から頭まで鐘留を眺める。ほっそりとした脚、形のいい腕、くびれたウエスト、憎らしいほど突き出た胸、そして目鼻立ちのあざやかさ、どれもモデルだったということが嘘でないと思えるほど魅力的ではあった。そして制服の改造は、それを際立たせるためだと言目瞭然なのでクラスの女子たちは辟易としている。

「その制服も、これでもかって露出したら、そら、みんな引くわ」

「まあ、同性の反応なんて、どうでもいいよ、って思っていたのに、かわいそうなアタシは彼氏にフタマタかけられた挙げ句、捨てられたんだよ。二つ下の子に彼氏盗られた。なのにクラスで友達もいないし、浮きまくりだから同じ浮いてるアユミンとタカちゃんたちと上層同士、友達になろうって思ってたわけ。アユミンの当選を聴いたのは、その後だから、アタシは純粋だよ」

「はいはい。浮いてるもん同士は否定せんけど、それで上層とか思えるカネちゃんの脳は痛いわ」

「痛いの痛いの飛んでいけ〜♪」

鐘留が自分の頭に手をあててから鮎美の頭に触ってきたので、その手を払う。

「やかましわ！ 頭痛が来るからやめい！」

「きやははは。ナイスつつこみ！ ギャグ入りつつこみなのが本場だよねー！」

「つつく…」

おかげで遅刻ギリギリになって登校したのに、すぐに鮎美は校長室へ呼ばれた。校長室には直樹が申し訳なさそうな顔で待っていた。

「ごめん、早速で悪いけど党員になってくれる書類を書いてほしいんだ。ごめん」

「……雄琴はん……上から言われて仕方なくって顔やね……」

「すまない。その通りだよ、ごめん。君の気が変わらないうちに、すぐ書いてもらえってさ。ホントごめん」

いつも調子の軽い直樹が本気で申し訳ないと思っっているようで両手を合わせて頭を下げてくるので鮎美は笑顔でペンを握った。

「ええよ、ええよ。もう決めたことやし。あ、でも、一つ条件があるねん」

「島の自治会なら、もう連絡したよ」

「仕事早いなあ……けど、それじゃなくて秘書についてやねん」

「秘書について？」

「うちの友達を秘書にしたい。本人もOKしてくれたから」

「友達かあ……いくつ?」

「18」

「……まあ、そうだろうね……それを若すぎるとは言えないか……。素行調査はあると思うよ」

「品行方正威風堂々やから心配ないって」

鮎美は書類を書き終えると、すぐに教室へ戻れると思っていただけで午前中いっぱい直樹からの基本事項や注意事項の説明を受けることになった。ようやく昼休みになって解放され、フラフラと教室に戻った。

「あ、アユミン、おかえりーっ」

「おかえりなさい。また疲れた顔に……」

鐘留と鷹姫が迎えてくれた。

「ただいま……はああ……」

タメ息をつきながら、ぐったりと机に突っ伏した。鐘留が頭を撫でてくる。

「よしよし、お疲れさんだね。何があつたの?」

「んく……入会……、もとい入党の書類を書いた後、いろいろ注意講習やった」

「どんな?」

「怪しい人とツーショット写真を撮ったり握手するのは、あとで利用されるから危ないとか、ネットで、つぶやくのも危ないとか、彼氏がいないなら、このままいない方がいいとか、まだ運転免許は取るとか、親にも派手な車を買わせるとか、何から何まで、ごちゃごちゃと……はああ……ダルいわ……ようするに普通にせいちゅーことやけど、制約が多すぎんねん」

「あー、わかる、わかるよ、その気持ち」

「……ホンマにか?」

鮎美が伏せていた顔を少しあげて片目だけで鐘留を睨んだ。

「アタシがモデルやったときも、似たようなもんだったよ。つぶやき禁止、自撮りアップ禁止、日焼け禁止、髪の毛を切るのさえ事務所に要相談、はては彼氏とは穩便に別れる、デート禁止、いちやいや

禁止、キス禁止、外泊禁止、エッチ禁止、そのくせ社長はアタシの身体にベタベタ触ってくるし、超キレたよ」

「……………モデルも大変なんや……………」

「だから辞めたよ、キレイさっぱり、社長の目の前で髪の毛を切り落としてやったよ。で、ほら」

鐘留は短いスカートをめくって少しだけ下着をずらして見せた。鐘留の下腹部あたりにタトウが彫ってあり、金色の鐘が見える。鮎美と鷹姫にだけ瞬間的に見せたので、教室にいる他のクラスメートたちは気づいていない。

「あんた……………高校生やのに……………そんなところに……………」

「これで、もう水着撮影はNG、下着広告も無理、はい、さようなら」

「そんなこととして違約金とか大丈夫なん？ 聞いた話やけど、賠償請求されたりするんちゃう？」

「アタシが、アタシの身体に何しようとする自由だね。取れるもんなら取ってみなつて、現在は裁判中だよ。一審はアタシの勝ち。セクハラで反訴もしてる」

「ちゃらそうなわりに、やること、すごいなあ」

「けど、せっかくフリーになつたのに彼氏にはフタマタかけられてた……………ぐすんっ……………」

鐘留が悲しそうな顔を見ると、鮎美は迷う。

「あんた、それ泣き真似なん？ マジなん？」

「カネちゃんだつてば」

「はいはい、カネちゃんに訊きたいことがあんなん」

鮎美が真面目な声で言ったのに、鐘留は両手を後頭部で組み、胸を強調するようなポーズをとってふざける。

「スリーサイズなら秘密だよ」

「誰が訊くかつ!!」

「きやははは、で？ なーにいい？」

「フタマタかけられて捨てられる側つて、どんな気分になるもんなん？」

「えーえーっ……………」

鐘留が軽い声を少しずつ落とすように低くし、後頭部で組んでいた両手を胸の前で腕組みして真顔になった。

「そーゆーこと訊くの？　なんで？」

「…………ちよつと興味あつて……」

「興味ねえ…………思いつきり心の傷をえぐるところ、興味で訊いてくるわけなんだ。まだ、アタシたち、そんな親しくないのに」

「うっ…………そう言われると、そうやけど…………ごめん」

「さて、訊かれたことだし親友としては答えなくちゃね」

鐘留は腕組みを解いて右手の親指を少し舐めた。

「どんな気分かと言いますとねえ。悲しみかな、怒りかな、うーん…………まあ、今までの人生で経験したことのないような、喪失感かな。ああ、そうなんだ、無くしたんだ、失敗したんだ、どこで失敗したのかな、もう少しまくやれば、アタシの勝ちだったのかな、ここで泣くと余計にミジメになるから、笑って別れてやろう…………うん！　こんな感じ！」

「…………そうなんや…………おおきに……」

「あ、あと、もう一つ！」

「もう一つ？」

「アタシの時間を返せ！　って思った」

「そう…………そうやろな、やっぱり…………」

鮎美が思い込むと、鐘留は腕を回して鮎美の首を捕まえてきた。

「さてさて、アタシは話したんだから、アユミンも話なよ、いったい何の参考にするつもりで、アタシの傷をえぐったの？」

「……………」

鮎美が答えないと、首に巻きつけている腕の力を強めてくる。

「言わないとアタシみたいなショートカットにしてやろうかな」

「言う言う！　言うから！　暑苦しいし離してよ！」

鮎美が顔を赤くして鐘留から離れた。

「びっ……」

「参考にちゅーか……恋愛沙汰やないけど、うちもフタママ、サンマタかけたようなもんなんか、って」

鮎美が視線を落とした。脳裏に民主党の竹村や共産党の西沢の笑顔が浮かぶ。

「うち、所属政党を決めるまでに、いろんな政党の人に会って話を聴いて、みんな心安い人らで……うち、どの党にも入ってあげたくなかったねん」

「絵に描いたような優柔不断だね。超八方美人」

「……」

鮎美が暗い顔で黙ると、ずっと黙って聴いていた鷹姫が猛禽類のような鋭い目つき鐘留を睨んだ。

「うわっ……怖い♪ 殺気を感じたよ」

「口を慎まなければ、手痛い思いをすると覚悟なさい」

「はいはい。で?」

「で、結局は自民党を選んだんやけど……せつかく誘ってくれた民主とか共産の人らに……何か言っておくべきか……それとも謝罪の手紙でも書こうかなって。カネちゃんは彼氏から謝罪の手紙もらったら、どう感じる?」

「読まずに捨てる」

「……」

「今さら、って感じ」

「……そうやんな……」

沈み込む鮎美へ、鷹姫が言う。

「政治と恋愛は別でしょう。そもそもフタママをかけていたわけではありません。決断までに迷いがあるのは当然のことですし、相手もそれは承知しているでしょう。ですから、あなたが手紙が無駄ということもなく、後日の親交に生きるかもしれません。書いておいて損はないと考えます」

「うん……そうやね……書いてみるわ」

そう言って鮎美は午後からの授業中にノートへ手紙の下書きをして過ごした。放課後になり、昼休みに鷹姫へ伝えるのを忘れていた秘

書の件を話して、いつしよに校門を出たところで直樹が待っていた。

「雄琴はん……あんたストーリーカーみたいやで」

「すまない。今週の日曜日も、また予定を開けてもらえないかな？」

それと、これからほぼ毎日、放課後の時間も」

「……。まあ……それが国民への義務やろね……何も知らん女子高生が、あと半年で国会議員やもん、そら叩き込めるだけ叩き込んでやる、ちゅーのが当然やろね。で、日曜は何があるの？」

「六角市の市議会議員選挙が始まる。その応援演説に立ってほしい」

「市議会……って、市のことを決める機関やんな？　なんで国会へ行く、うちが？」

「そういうものなんだよ。ボクらは選挙を経験していないけれど、政党に所属する以上は、市議会、県議会、首長選挙、どれも応援に駆けつける。まして、芹沢さんは……」

直樹の言葉を遮って鮎美が続ける。

「客寄せパンダに最高やもんね」

「……否定はしないよ。けれど、君だって、いつまでもパンダでなく自分の道を見つけられるかもしれない。そうして、行きたい道ができれば、お互いの協力も大切だって、わかるさ」

直樹が真面目に言うので鮎美も理解した。

「それも仕事、いや勉強のうちかな」

「放課後に勉強へ来てもらうのも日当が出るからアルバイトだと思えるし、応援演説は直接ではないけれど5万円がもらえるから」

「5万……。直接やないって、どういうこと？」

「ボクらクジ引き議員は選挙で相互援助する動機が働きにくいから、党から特別勉強会への参加という名目で支給される」

「そうなんや……ってか、なんで名目を変えんとあかんの、応援代でええんちゃう？」

「すべての選挙には選挙資金の上限額が定まってる。六角市の市議選なら200万円。ここには選挙カーやらポスターやら、いろいろ含み

だから、応援弁士への手当なんか計上したら、どの党もオーバーしてしまう。だから、暗黙の了解で特別勉強会への手当で合法化してるのさ。一応、形だけ資料なんかも配られるから」

「……………そういう誤魔化しのない政治になるよう、うちらクジ引き議員が動けたらええのに……………いちいち自衛隊は合憲です、みたいな、誤魔化しを……………解釈やなくてルールを変えたらええのに……………」

「いずれ、そうできる日が来るとしても、一朝一夕には難しいんだよ」「そういうことも勉強していけと……………」

鮎美がタメ息を飲み込んでいると直樹は5センチ程ある分厚い本を鷹姫へ差し出した。

「秘書になるって、君だよな?」

「はい」

「高校での内申点もいいし、素行も問題ないらしいね。島での評判も上々だった」

「……………。この本は何ですか?」

「とりあえず公職選挙法についての冊子だよ、必ず読んでおいて。一週間以内に」

「わかりました」

かなり分厚い本だったけれど、鷹姫は顔色を変えずに受け取ってカバンに入れた。

「あと、これから君も来るかい? 芹沢さんと同じことを学んでおいてもらうのも大切だし、バイト代も出るよ」

「アタシも行こうかな」

鐘留が言うと、直樹は改造された制服を見て、首を横に振った。

「高校生秘書は一人までにしておいて。上限3人まで公費でまかなえるから、宮本さんだっけ? 君の他は党が用意するプロの秘書を東京と地元で一人ずつ置かせてもらうよ」

「うちが決められることは、わずかなもんなんやね……………」

「だんだん慣れるさ。ボクも慣れた」

そう言っただけで励ましてくれる直樹に導かれ、鮎美と鷹姫はタクシーで

自民党六角支部へ連れて行かれ、みっちりと国会制度や行政法、社会常識、政治家同士の常識などを教え込まれ、とつくに連絡船の最終便が出た後になって港へ送ってもらった。港では連絡船が特別便として二人を待っていて、もう帰島時刻を気にする必要がない代わりに、遅くなるのが当たり前になったのだと悟った。

6月 応援

日曜日の朝、鮎美と鷹姫は知らないオジサンを応援するために、六角市内にあるコンビニ跡地に来ていた。知らないオジサンの名は、鈴木義則という平凡な名で、本当に知らなかったけれど、そういえば道路に立っている看板には、たまに同じ名が書かれていたような気がする。いずれにしても全国に何人かいそうな名前で、立派な人もいれば平凡な人もいて、中には前科者もいるかもしれないけれど、ここにいる鈴木は自民党会派の市議を3期務めているものの、今回の選挙は危ぶまれていた。

「あのオっちゃん、なんで選挙が危ういんやっただけ？」

鮎美が小声で鷹姫の耳元へ問う。二人は短期賃貸されている元コンビニ建物の奥の奥へ隠されるように椅子を用意してもらい、出番を待っていた。

「たしか、割の良い地域商品券を奥さんと、その友人らが入手しやすいよう便宜をはかった疑いをもたれていると……誰かが話しているのを聴きました」

「せーい疑惑やなあ……」

鮎美は余計な雑念は忘れることとして手にしている原稿を何度も読み直すことに専念する。原稿は党が選んだ女性秘書が準備したもので、女子高生なら鈴木を、どう応援するかを考えて書かれたものだった。

「うちの言葉は一つもないのに……うちの口で言うわけか……」

「少しならアレンジしてもいいのよ」

声をかけてきたのは秘書の石永静江だった。六角市を含めた県内の衆議院議員選挙区第9区から選出されている石永隆也の妹で35歳、英語と料理を得意とする才媛で人当たりもよく、最年少参議院議員となる予定の鮎美を補佐するにたる人物と目されていた。議員秘書らしくグレーのパンツスーツを着ているし、化粧も派手すぎず地味すぎない。

「そう言われても、うちには何も……この文章で完璧やと思います」

「頑張つてね。これが芹沢鮎美の初陣でもあるんだから」

「初陣……」

鮎美と鷹姫が、また少し緊張した。定刻が近づいてくると、どんだん人が外に集まっているのを気配で感じる。元コンビニの駐車場は車と人でいっぱいの様子だった。静江が様子を見てから戻ってくる。

「鈴木先生の出陣式に来たというより、鮎美ちゃん…芹沢先生を見に来たって人が多いわね。やっぱり」

「芹沢と市議選には直接の関係は無いはずではないのですか？」

鷹姫の問いに静江は注意から入る。

「呼び捨てにする癖、直しなさいね。二人っきりのときは、いいとしても公の場では芹沢先生、最低でも芹沢さんに」

「はい、すみません。芹沢先生と市議選には関係が無いはずでは？」

先生をつけられて鮎美が恥ずかしくなる。

「鷹姫に、そう呼ばれるのは……っていうか、そもそも女子高生に先生をつけるのは、おかしゅーないですか？　うちは、普通の呼ばれ方がええですわ」

「そうね、クジ引き議員の一部は、同じようなことを言っただけで先生をつけられるのを避けてるけれど、党としては選出された以上、自覚を持って勉強し、先生と呼ばれて気後れしないほど国民の代表たる意識をもって。という意味で原則、先生をつけるよう指導しているわ」

「……………」

そう言われると二人の女子高生に反論はなかった。

「で、鈴木先生の市議選と芹沢先生には直接の関係は無いけど、公の場に芹沢鮎美が顔を出すのは、これが初めてになるの。鈴木先生の人望だと今回はせいぜい100人も来ないから初陣には、ちょうどいいかと設定したのだけれど、やっぱり珍しいからかな、300人くらい集まってる。報道陣も多いし。報道関係は明らかに芹沢鮎美が狙いね」

「報道……」

「クジ引き議員は、その任期が始まるまで原則として取材を自粛する

ことになっているけれど、選挙活動は公の場だから。でも、何か質問されても答えなくていいわよ。あと、出番が終わったら、即退場して移動だから、それも打ち合わせ通りに」

「はい」

秘書というより教育係兼世話係をしてきている静江に緊張した返事をしていると、外で鈴木 of 演説が始まった。

「皆様方には早朝よりお集まりいただき、この鈴木……」

マイクで話している声なので建物内まで響いてくる。予定では最初に鈴木が挨拶し、さらに県議と商工会議所の役員、鈴木が住んでいる地域の自治会長が話し、そして鮎美の番となり、その次は農協の役員が話して応援演説は終わり、最期に再び鈴木がマイクを握って感謝と抱負を述べ、そのまま選挙カーに移乗して選挙運動に出発する、という流れになっている。

「県議会議員の……」

外では県議が挨拶と演説をはじめ、そろそろ鮎美の出番が近いので静江が促す。

「芹沢先生、そろそろ定位置に」

「……っ……………」

鮎美は立とうとしたけれど、膝が震えて椅子から立てなかった。

「……あ……あかん……脚に力が……」

「芹沢先生、深呼吸して。大丈夫、原稿を読むだけ。周りなんて気にしなくていいの」

静江は優しく鮎美の背中を撫でる。その背中は汗で濡れてブラジャーが透けそうなほどだった。時間が迫ってくるけれど、静江は慌てない。

「大丈夫、大丈夫、カチコチに緊張してたって、みんな最初は同じなんだから。鈴木先生だって12年前の出陣式はかみまくりだったし、今回もかんでるし。私のお兄ちゃんだって初演説のときは農協と農業の発音がぐちゃぐちゃになったり、北朝鮮を知多挑戦とか言ってたもん。知多半島はミサイル撃たないって、みんなクスクス笑ってたよ。それでも、みんな拍手して、とりあえず出発すれば、それでいいのよ」

「…………でも…………」

完全に鮎美は怖じ気づいてしまい、椅子に座ったまま腰が抜けている様子だったので静江は抱きしめてみる。

「私を支えていてあげるから、ゆっくり立ってみて」

「…っ…………無理…………うち、もう無理…………」

「鮎美ちゃん…………」

もう時間がない、さすがに静江が困ってしまった。代わって鷹姫が鮎美の前に立つ。

「石永さん、どいてください」

「宮本さん、どうするの?」

静江の問いには、鷹姫の手刀が答えた。

ベシッ!

鮎美は脳天を打ち据えられた。

「しっかりなさい! ……ここまで来て泣き言を漏らして、どうなります!」

「うう…………痛い…………めっちゃ痛い…………」

「痛いようにしたのです。目が覚めましたか?」

頭蓋骨と手の衝突だったので鷹姫も痛かったけれど、それは顔に出さない。

「立ちなさい!」

バン!

今度は鮎美の背中を叩き、それでヨロヨロと鮎美が立ち上がると、お尻も叩いた。

「腰が引けています! ……もっと堂々と!!」

「…………鬼や…………」

ようやく鮎美は自分の脚で真っ直ぐに立った。

「歩いてみなさい」

「…………」

もう震えは止まり、鮎美は普通に歩けた。静江が落ちていた原稿を渡してくれる。

「読むだけですよ、頑張って」

「はい…」

「行きましょう、芹沢先生」

静江と鷹姫が左右に立ち、鮎美を守るようにしてコンビニ建物を出た。ちようど地域の自治会長が応援演説をしているところだったけれど、そもそも運悪く偶然に選挙の年に自治会長に当たってしまっただけの初老の元サラリーマンは用意してきた原稿を棒読みしていたので、聴衆も飽きてきていて一斉に鮎美へ注目してくる。その視線を静江は遮るように歩いて鮎美へ囁く。

「周りは見なくていいですよ。順番が来たら原稿を読むだけ。読んだら一礼して、あとは車で移動。それだけ、それだけです」
「……」

鮎美は小さく頷いて、予行演習のときに決められていた立ち位置まで歩き、立ち止まると聴衆は見ずに少し上を向いて視線を固定した。静江と鷹姫は左右に立つ。

「制服が初々しいのう」

誰かが囁いている。鮎美と鷹姫は学校の制服姿だった。聴衆たちは多くが平服で、演説した関係者などはスーツ姿、選挙の運動員たちはおそろいのオレンジ色の上着を羽織っている。もともと誰も聴いていなかった自治会長の演説は続いているものの、私語が飛び交う。

「あれが参議院のか」

「誰がやっても同じかもしれないけど、あれは…」

「大阪の子らしいで」

「あの制服は、どこの高校や？」

「ほれ、あれ、あの、私立の…えつと…」

「琵琶湖姉妹学園やろ。元シスター系で共学になった」

「そうそう、それ」

「役には立たんでも、自民のアイドルには使えるかもな」

「可愛い顔してはるし」

「アイドルに使えるなら、中年のおばはんはんにクジが当たるより良いか

もな」

「たしかに。この地区も有名になるし」

「有名になってから、おかしなことしよると困りもんやぞ」

口々に鮎美を見た感想を漏らしているけれど、鮎美は脳内で原稿を繰り返して聴かないことにする。

「次は参議院議員候補予定者の芹沢鮎美さんが鈴木先生のために駆けつけてくださいました。どうぞ、お願いします」

順番が来て、まだ少し脳天が痛かった鮎美は緊張すること無く一礼してマイクを受け取った。

「はじめまして。ご紹介にあずかりました芹沢鮎美です」

第一声から、うまく滑り出してくれたので静江は安堵したし、鷹姫も無表情のまま内心で微笑んだ。

「私が初めて鈴木先生にお会いしたのは忘れもしない。私の当選を祝って、わざわざ鬼々島まで駆けつけてくださったときのことです」

忘れるどころか、知らんちゅーねん、と鮎美は何度原稿を読んでも思ったことを反芻した。たしかに、あの日、多数の自民党関係者が島に上陸していたので、その中に鈴木が居たのかもしれないけれど、まったく覚えていない。嘘はつきたくないのに、と思いつつも原稿を読み進める。

「鈴木先生の穏やかな人柄と揺るぎない信念を感じ…」

鈴木はんはともかく久野先生と竹村先生は初対面でもオーラ感じたかも、と一介の市議と両院議長の違いを思い返しつつ、鮎美は原稿を読み終える。

「鈴木先生のご健闘を心より祈念いたします。……」

最期まで一言一句変えずに読み切った鮎美は物足りなさを感じて続けた。

「今日は用意された原稿を読むのが精一杯でしたけれど、いずれ自分の言葉で皆様に話したいと思います。そして、せっかく応援したんやから鈴木先生には、ぜひ当選してほしいですから！ 皆さん清き一票をお願いします！ うちも初めての投票を鈴木先生にさせてもらい

ます！」

少なくとも鮎美自身の言葉が入った演説に対して、拍手が起こつた。聴衆も慣れない演説を女子高生がやりきったことに心から拍手を送ったし、党関係者も安堵とともに大きな拍手をしている。鮎美は一礼してさがった。さがると、すぐに静江が手を引いて鮎美を車へ乗せる。

「芹沢さん、一言……」

狙っていた報道関係者がマイクを向けてくるけれど、静江が強引に手を引くのでレポーターにぶつかってしまい、謝る。

「うっ、す、すんません。急ぎますんで」

「一言だけ今のお気持ち……」

まだ向けられてくるマイクを鷹姫が間合いに踏み込んで背中であつた。鮎美と鷹姫が乗用車の後部席に乗り、静江が運転席へ急いで回る。静江にまで報道陣がカメラとマイクを向けているけれど、現職代議士の妹として慣れた対応で答える。

「すいません。次の会場へ急いでおりますので失礼します」

出陣式の間時間帯は本当に予定が押しているので静江は車を出す。少し走ってから、やっと安心のタメ息を漏らした。

「はああ……初陣、無事終了ね。お疲れ様、鮎美ちゃん」

「あれで、よかつたんやろか……」

「上出来よ。リップサービスも良かったし、堂々としていたわ」

「そっか……へへ……」

鮎美も成功を実感して気の抜けた声で笑った。

「この調子なら立派な女子高生議員になりそうよ。弁も立ちそう」

「うちは口から生まれてきたと、よう言われますから」

「調子に乗りやすいのね。一時は、どうなることかと思っただけけれど、宮本さんの存在も精神安定剤になってくれて、よかつたわ」

「あれは痛かつたわ……めっちゃ思いっきり叩いたやん」

「腑抜けていたからです」

鷹姫が言い、ちようど信号で停車したので静江もハンドルを離して、物真似をして鮎美の先刻の様子を思い出させる。

「…あ……あかん……脚に力が……で……でも……つ……つ……つ……無理……うち、もう無理……」

「ちよっ、静江はんっ！ やめてや！」

鮎美が真っ赤になり、ずっと無表情だった鷹姫が失笑する。

「…くすっ…クスクス…フフ」

「う〜！ 笑わんといてよ！ 鷹姫のアホ！」

「失礼いたしました。芹沢先生、クス…」

「く〜っ…」

鮎美が呻りながら鷹姫の腕をつかんで揺すっている。もう信号が青に変わったので静江はバックミラー越しに二人を見て言った。

「その様子なら次は平気そうね。原稿はある？」

「あります！ あと、さっきのは忘れてくださいよ！ もう物真似やめてや！」

「フフ。それは無理かな。お兄ちゃんの知多挑戦も、私の持ちネタだから」

「う〜ツ……」

恥ずかしくて呻っている鮎美を乗せて静江は5キロほど走り、鬼々島に近い地域の市街地にある会場で駐まった。そこでも市議選立候補者の出陣式が行われていて、また閉店したコンビニ跡だったけれど、建設会社の資材置き場も隣接していて、そこも駐車場として利用されており、今度は千人を超える人が集まっている。そのうちの半数は鬼々島の島民が舟で渡ってきているようだった。鮎美も知っている顔が多いし、鷹姫は生まれた時から島民なので、ほぼ全員の顔を知っている。三人が乗った車が近づくと拍手と文句で迎えられた。

「やっど、おでましか」

「なんで鈴木のことフタマタがけなんじゃ」

「鈴木が危ないで使われたんやろ」

「ワシらの芹沢を勝手に回しおって」

「鮎美ちゃん、がんばってね！」

「コラコラ、芹沢先生って言わな」

「急げよ、茶谷先生が出発できんじやろが」

口々に色々と言われている中、鮎美は用意されているマイクの前まで急いだ。すぐに原稿を取り出して読み上げる。鈴木の時と同じく静江が用意したものだっただけで、鬼々島に近い地区の立候補者は元島民で三男だったので市街地に家を買った茶谷弘幸という男で52歳で2期務め、3期目を目指しており、原稿の内容もそれにそくしたものに変わっている。それを読み上げた鮎美は最期に一瞬だけ迷ったけれど、今回は自分の言葉を一切付け加えずに一礼して終わった。

「ま、無難に終えよったな」

「上等上等、あんなもんじやろ」

「宮本の娘を秘書にしたらしいな」

「お友達内閣じやな。ははは」

「あの子ならボディガードには役立つかもしれないが、愛想のない子じゃからな」

「どうせクジが当たるなら大阪から来た子より、島の子に当たりやよかったに」

また色々なことを言われているけれど、鮎美は茶谷と握手しているので気づいていない。鷹姫は聴こえていたけれど、愛想のない子と言われるのには慣れきっているので何とも思わず、無表情で拍手している。司会進行役がマイクを握った。

「茶谷先生が出発されます！ 皆さん、お見送りのほど、よろしくお願いします！」

鮎美との握手を終えた茶谷が選挙カーの助手席に乗り込むと、ウグイス嬢が連呼を始める。

「茶谷弘幸でございます。茶谷弘幸、これから出発いたします。みなさま方の温かい声援をいただき、茶谷弘幸はこれからの選挙戦を戦い抜きます。茶谷弘幸、茶谷弘幸でございます」

ゆっくりと選挙カーが動き出し、茶谷は助手席の窓から身を乗り出して会場にいる支持者たちへ手を振り去っていった。次の瞬間には、ここにも待ち伏せていた多数の報道陣が鮎美を囲んでくる。

「芹沢さん、高校生で議員となられること、どう思われますか?」

「今の気持ちを一言お願いします!」

「なぜ、所属政党に自民党を選ばれたのですか?」

矢継ぎ早の質問攻めに鮎美は打ち合わせ通り、別の原稿を出して答える。

「私、芹沢鮎美はこの度、参議院議員候補予定者に選出されました。このことに最初は大きく戸惑い、どうすべきか深く考え、思い悩みました。あまりに若すぎるのではないか、これは皆さんもご心配される通りです。けれど、与えられた機会に背を向け、逃げ出すことも最善とは思えず、どこまで国民全体のため役立つことができるかはわかりませんが全力で務めていきたいと考え、お受けいたしております。これから学ぶことは山積しており軽々ご質問などには答えられませんこと、お詫び申し上げます」

鮎美が一礼すると、静江と鷹姫が守るように左右から報道陣との間に入る。その鷹姫にもマイクが向けられた。

「秘書に指名された芹沢さんのご友人ですか?」

「……………」

何も答えなくていいと静江から指導されている鷹姫は剣道試合で相手を見据えるように構えた。その隙のない、そして動じない態度で鷹姫の経歴を思い出した別のレポーターが横から質問してくる。

「剣道の全国大会で優勝された宮本鷹姫さんですよね?」

「……………」

また鷹姫が相手を見据えているけれど、急いで静江が対応する。

「彼女もまだ勉強中ですから。これから他の候補者の事務所へも回りますので。もう失礼いたします」

取材を打ち切って再び車に乗った。移動する車内で、やっと鮎美も鷹姫も安心して息をつく。

「はああ…」

「ふー…」

「お疲れ様。まあ、あの人たちも今日のところは、あれで記事が書けるでしょう」

「疲れたわあ」

ぐつたりと鮎美が隣にいる鷹姫へ身をもたれさせる。鷹姫も鮎美の方へ重心をよせて答える。

「…ええ……疲れました……私は何もしていないのに」

「宮本さんは役立ってるよ。いい感じに」

「……そうですか……」

「二人ともお疲れみたいだから、ちよつと休憩しましょう。どうせ、今のタイミングだと、どの事務所に顔を出しても候補者は出払っているから、お昼前後に回ることにして」

「あと7件か……自民党の候補は、全部回らないと、あかんのや……」

「お兄ちゃんや雄琴先生は無所属の候補のところへも顔を出してるよ」

「……………」

「とりあえず、鮎美ちゃんは自民だけでいいから頑張って」

そう言った静江はドライブスルーのあるコーヒー店で三人分の飲み物を買ひ、シヨツピングセンターの立体駐車場で人目と日差しを避けて休憩させてくれた。

「そういえば、鮎美ちゃん、二回目は原稿通りで、ぜんぜんアレンジしなかったね。どうして?」

静江がアイスコーヒーをストローで吸いながら訊いてきた。鮎美はアイスマイルクティーを味わってから答える。

「なんとなく……っっていうか、とっさに鈴木はんのときと同じことを言いそうになったんやけど、うちは鈴木はんに投票するって言うてしもたから、同じことは言えんと思て」

「あ……なるほどお……」

冷たい物を飲んだせいか、静江は少し頭を押さえてから鮎美に言うておく。

「鮎美ちゃんが誰に投票するのかは、もう言わない方がいいよ」

「そうなんや?」

「うん、一応ね、票割りでは鬼々島の住民は全員が茶谷先生に投票する

ことになってるから」

「……………」

「宮本さんも、まだ聞いてなかったみたいね」

「はい……………」

「静江はん、投票って自由なんちゃうの？」

「自由だよ。だから、たぶん鬼々島の人も1割くらいは革新系に入ってるんじゃないかな。でも9割は自民。だから自民も鬼々島の地域振興には本気でかかる」

「……………もちつ、もたれつなんや……………」

「ともかく鮎美ちゃん茶谷先生に入れるような顔しておいて。鈴木先生に会うことがあったら鈴木先生に入れるような顔もして」

「……………またフタマタ……………はああ……………自民同士やん」

「六角市は市長が民主党で自民もつらいからピリピリしてるの。いろいろ言動には気をつけてね」

「……………はい……………」

重い返事をして鮎美は目を閉じた。お昼時になって他の自民党候補者へ挨拶と激励をすべく選挙事務所を回り、本日のノルマを果たすと、ぐったりと疲れた。

6月 三島

翌日の月曜日、鮎美の父親は新聞の地方欄に市議選が始まった記事といっしょに芹沢鮎美が自民党所属として活動を始めたことが書かれ、出陣式で応援演説をしている娘の写真まで載っていることに気づいた。

「……………」

しばらく娘に伝えるべきか、黙っておくべきか迷い、知らずに登校するよりは知っておいた方がいいと判断して、疲れた顔で朝食を摂っている娘に言う。

「鮎美、お前、新聞に載ってるぞ」

「んー……あ、ホンマや……」

疲れているからか、反応は薄かった。朝食を終えた鮎美は登校のために船着き場まで歩き、鷹姫に出会った。

「おはようさん」

「おはよう」

挨拶を返しつつ、鷹姫は額の汗をハンカチで拭いた。拭いても、すぐに汗が噴き出してきている。

「どないしたん？ 汗びっしょりで」

「昨日、稽古ができなかった分、朝稽古を長くやりすぎてしまい、バタバタとしたものですから」

「……………あんだ、えらいなあ……………」

心から誉めつつ、鮎美はポケットからハンカチを出して鷹姫の首筋を拭いた。ポニーテールにしている鷹姫のうなじが夏の日差しを汗で反射させて光っている。

「急ぎましょう。もう定刻です」

「そうやね」

二人で小舟に乗ると、湖上の風が最高に心地よく汗を気化させてくれた。古い堀を小舟で抜けて、高校の近くで降りると、最近は毎日のように現れる鐘留が堀の直上にある自宅から出てきた。

「おはようー、アユミン、タカちゃん」

「おはようさん、カネちゃんの家って館みたいに立派やな」

「今さら？ あ、もしかして、アユミンってアタシの家が何屋さんか、知らない？」

「知らんよ。民宿とか？」

見えている家が通常の戸建て住宅の五倍くらいある大きさで、古い日本建築だったので鮎美は民宿か旅館かと考えたけれど、鐘留は首を振る。

「違うよ。A、ケーキ屋さん。B、お肉屋さん。C、ロープウェイ屋さん。さて、正解は、どれでしょう？」

「うくん……Cで！」

鮎美は近くにロープウェイが見えているので決めた。近くに山があり、その山頂には高名な古刹があるのでロープウェイが建設されている。鮎美たちが通学に使っている中世の堀と合わせて観光名所になっていた。けれど、また鐘留は首を振る。

「外れ♪ っていうか、三分の一だけ正解」

「三分の一……？ ほな、答えは、三つとも？」

「そうだよ。かねや、って聞いたことない？」

「あるある！ ああ、あの！ ケーキ屋の！」

何度も直樹が手土産として持参してくれたケーキの出所だった。

「かねやって肉も売ってんの？ あと、ロープウェイも？」

「まあね。多角経営ってヤツだよ。もともとは初代の鐘吉さんが和牛を秀吉に納めたのが始まりだけど、明治期にケーキも始めたし、戦後からロープウェイもやってるよ。無料券ほしい？ あげるよ」

「タダより高いもんはないちゅーし、うちは公職につくから他人様からタダで何かしてもらうのは、グレーゾーンに入りやすいねん。遠慮しとくわ」

「へえ、さすがは議員予定者だけあって、アタシんちがお金持ちって聞いても顔色が変わらないね」

「…あんだ……」

「カネちゃんだよ。かねやのカネちゃん」

「……。カネちゃんがクラスで浮いてる理由がよーわかるわ。見た目が可愛いのと、家が金持ちなんを遠慮無く自慢してたんやろ？」

「自分に自信をもつのはいいことだよ」

「誇ってええのは、鷹姫みたいに努力して得たもんだけや」

「アタシが美人なのも、お金持ちの子なのも、先祖代々の努力のたまものだよ」

「財産の相続はともかく美人は、たまたまやろ」

「ちつちち。美人だつて遺伝するから、お母さんも可愛いし、きつと初代の鐘吉さんだつて、お金がある分、キレイなお嫁さんをもらつて、それを代々繰り返してるから、どんどん洗練されていくよね。クジャクの尾羽がより美しく、ウグイスの声がより華麗になるみたいだね」

「……。人徳の洗練をはかった方がええよ」

「きやははは、琵琶商人の通つた後には草も生えないつていうもんね」

「琵琶商人つて何や？」

「あ、これも知らないの。やばいよ、議員になるのに。琵琶商人つていうのはね、このあたりで中世から活躍してた商人のこと。遠く江戸や北陸なんかにも進出してる。今でこそ大きな顔してる松阪牛も神戸牛も、もとはといえは琵琶牛を蒲生氏郷が育てたのが始まりだし」

「和牛の本家なんや？」

「そうそう」

「けど、松阪牛の方が一番つて感じがするで」

「それはねえ、琵琶牛の売り方が琵琶商人らしくてね。よその県から持ってきた牛まで、たった一晚だけ飼育して琵琶牛として売り出したりしたからだよ」

「……ブランドつてもんを……」

鮎美が呆れ、鷹姫が付け加える。

「羊頭かけて狗肉を売るとは、よく言ったものです。恥を知りなさい」

「恥ねえ……。そういえばタカちゃんつて、いつも汗臭いけど今朝は余計に匂うね。女子として恥ずかしくない？」

「別に」

「女の子なんだから、ちゃんとしないと。せつかく顔がキレイなのにさ。総合女子力でランキングさがるよ。タカちゃんが気合い入れてメイクしたら、アタシに匹敵するかもよ」

「あなたに一言いっておきます。二度と私のことをタカちゃんなどと呼ばないでください」

「タカちゃんはタカちゃんだねえ」

「……。目障りですから失せなさい」

「タカちゃんが消えれば？ 臭いし」

「あなたは存在が不快です」

「臭いのも不快だよ」

「……………」

「……………」

鷹姫と鐘留が睨み合って、今にも暴力沙汰になりそうなので鮎美が間に入る。

「待ち待ち！ 朝からケンカせんぞと！」

「別にケンカなどしていません」

「タカちゃんが、そういうなら、そうかもね」

「その呼び方をやめなさい！」

「フン」

「せやから、やめいて！」

鮎美が鐘留へ注意する。

「本人が嫌がつてるんやから、やめいや！」

「えく……………」

鐘留が残念そうにする。

「でないと、あんたのこと、うちはネルネルって呼ぶで！」

「うわあ……………嫌な呼び名。鐘留だからネルネルって。かねやの御菓子は、どんなに練っても味は変わらないよ？」

「嫌やる。せやから、タカちゃんもやめたりい！」

「んく……………鷹姫、タカキ……………姫だから、ヒメちゃん！」

「プツ…クスッ」

鮎美が失笑しそうになりつつ振り返ると、鷹姫が冷たく睨んでくるので笑うのをやめる。

「あかん、ヒメちゃんも無しや!」

「じゃあ、カキちゃん」

「養殖されるみたいやん!」

「きやはははは、しよーがない、宮ちゃんにしてあげるよ」

「しよーがないやないやろ」

「芹沢、時間の無駄です。もう行きましょう」

鷹姫が校門へ向かって歩き出したので、鮎美と鐘留が続く。鮎美が校舎に入ると、他の生徒たちからの視線を強く感じた。新聞に載ったせいで、じわじわと拡がっていた噂が一気に拡がっている様子で注目されている。

「芹沢先輩! サインください!」

「いっしよに写真を撮らせてください!」

「ええよ」

サインも撮影もごころよく受けた。静江からは怪しげな業者との撮影は避けるよう言われているけれど、高校生同士のツーショットなら悪用しようもないと考えている。けれど、教室に入って机の中にラブレターが2通もあったのには、少し驚いた。

「……………」

「アユミン、モテるね。きやはは、それ1通は女子からじゃん」

「そうみたいやね」

男子からと女子から1通ずつラブレターをもらってしまった。

「どうする? どっちと付き合う?」

「どっちも断るよ。党からも交際は控えるよう言われてるし」

あとで返事を書くことにしてカバンに入れた。一日の授業を受けて放課後になり、校門へ向かうと、今日も静江が待っていた。直樹が専属担当として勧誘の役目を果たしたのでバトンタッチして静江が待っていることが多いし、党としても男女という組み合わせはさけないので、いずれ用意される東京での鮎美の秘書も女性であることを条件に検討されている。

「お疲れ様です、芹沢先生、宮本さん」

「静江はんも、ご苦労さんです。…………あの人は…」

鮎美は見知らぬ集団がいたので違和感を覚えた。待ちかまえるように校門付近にいた集団は7名で、うち2名が車イスに乗った障害者のようだった。その集団が鮎美に近づいてくる。

「芹沢殿ですかっ?」

集団のリーダーらしき人物が鮎美へ問うてくる。

「は…:はい、そうですけど?」

「ぜひ、お話をさせていたきたい! 私はNPO法人ライフイージス、命の盾の会、代表の三島由紀子と申します!」

強い勢いで言ってきた女性は30代半ばくらいで、喪服のような黒いスーツを着ているし、黒のハチマキまで頭に巻いている。その頭は女性なのにスポーツ刈りで化粧もしていない。異様な雰囲気を感じさせる人物だったので、鷹姫がいつでも踏み込めるように腰を落とし姿勢を取り、静江は秘書らしく対応する。

「陳情でしたら党の方に…」

「いいえ! 芹沢殿に直接お会いして話したく! 彼らも待っていたのです!」

三島の背後には車イスの障害者が二人いる。生まれつきの障害なのか、顔立ちが健常者とは異なっているので年齢がわかりにくいけれど、身体の大きさからして青年期くらいかと感じられた。夏の日差しの中、ずっと鮎美たちが校門を出てくるのを待っていたようで汗を流している。

「ぜひ! お願いする! 芹沢殿!」

「うちは…………まだ正式には議員やないんですよ…」

「少しでも早く理解しておいてほしいのです! 命が危うい窮状を!」

「……………」

「秘書の石永です」

静江が事務的に名刺を出した。

「あらゆる陳情は党で受けます。芹沢先生の任期は始まっています」

ん」

もう静江は三島が何を言おうと無視して追い返す対応に入っているけれど、三島も静江を無視して鮎美に迫る。

「芹沢殿！　どうか、お時間をください！　一時間！　いいや30分！」

「……それくらいなら……」

鮎美が勢いに押された。そして鐘留が好奇心を刺激されて言うてくる。

「立ち話も何だしさ。アタシんちの喫茶店、貸してあげようか？　平日だし、二階を貸し切れるかもよ」

「おお、ありがたい！　ありがとう、お嬢さん」

鐘留が電話をかけて場所を用意してしまい、仕方なく静江も承諾する。すぐ近くにある鐘留の家が経営する喫茶店の二階に全員で入った。着席して、すぐに静江が三島に問う。

「それで、三島さんのお話というのは？」

「芹沢殿は出生前診断という言葉聞いたことがおありか？」

「……しゅっせいせん……いえ、知りませんけど」

「妊娠中に母体の血液や羊水を検査し、胎児の障碍の有無を調べる検査です」

「そんなんあるんや……」

「この命の選別につながる検査を全面的に禁止していただくべく我々は活動しておるのです」

「そ……そうですか……」

「芹沢殿にも、ぜひ我々に賛同していただきたい」

「……。……党と相談して……」

「芹沢殿ご自身の認識も深めていただきたい！」

強い気迫を発してくる三島に対して、鮎美は興味をもったことのない問題だったので、答える材料がなかった。代わりにように鐘留が口を開いた。

「女の実権つてもものもあるよね。産む産まないは女の自由。どんな理由でもさ。っていうか、アタシは自分が産む子供が障害児だったら

嫌だな」

齒に衣着せぬ性格の鐘留がスカートから露出している脚よりも忌憚なく意見を吐くと、三島は鋭く鐘留を睨んだ。

「よくも、この二人を前に、そんなことが言えるものだ」

「言論の自由だよ」

「そんな自由はない！」

「黙秘権を行使されちった。きやははは」

わざと舌足らずに可愛い声で発音した鐘留が笑っているけれど、静江は深刻な声で告げる。

「芹沢先生と、この生徒はクラスメートという以外は何の関係もありませんし、今の発言は彼女独自の思想にすぎません」

「うわっ、アタシ切り捨てられたよ。せつかく、みんなにおごってあげたのに」

「うちらは、おごってもらうのはアカンねん。言うたやろ」

「じゃあ20万円ね」

「どんなぼったくりやねん?! アイスティー一杯やんけ！」

「部屋の貸し切り代が込み」

鐘留が両手をあげて空間の空気を掻き混ぜると、彼女が肘の内側に着けている上等な香水の香りがした。鮎美は鐘留の可愛らしい腕から肩、大胸筋の張りと腋のラインに視線を向けつつも呻る。

「くっ……琵琶商人の通った後には草も生えんって、ホンマやな。堺の商人でも、そこまでやらんで。可愛い顔して悪魔やな」

「きやはは、だから、おごってあげるよ?」

「こちらのお店には私が適正な支払いをいたします」

静江が冷たい声で言い、三島が怒鳴る。

「我々は芹沢殿の認識を問いたい! いかにも、お考えか?!」

「そ…、そんなん急に言われても…」

「たとえ胎児でも人権はある! 生まれつき障碍があるからといって命を奪われていい道理はない!」

「…そ…、そうかもしれませぬ…」

鮎美が困っているので鷹姫が口を開いた。

「人権という概念は、中世の神と同じに人間が想定したものにすぎず、必ずしもその存在が立証されたものでないことは、台風や地震、疫病に向かつて私たちには人権があるので侵害するな、と言うことが無駄であることから明らかではないでしょうか。本当に無条件に人々が幸せになれるのであれば、そもそも障害をもって生まれるという事象そのものが生じないはずですよ」

「貴殿は障碍児が産まれてくるのが間違いと言いたいのか?!」

「いえ、生物学的な自然現象として一定数の個体に欠陥が生じるのは、ありえることですし、そういった個体は自然界においては淘汰されているでしょう。弱きは敗れ、生きる力の無い者は死する、それだけのことです」

「弱者に生きる資格無しと?!」

「違います。弱者あつての強者、強者あつての弱者です。ゆえに己を磨き精進するのです」

「そうそう♪ ブスあつての可愛いアタシ、可愛いアタシあつてのブス。ゆえに自分を磨き、もつと可愛くなるんだよ」

「あんたら、意外と似たところが……」

「芹沢殿は、いかにお考えか?!」

「うちは……、出生前診断でしたっけ。知ったばかりの言葉なんで、いいも、悪いも、わかりません。そりゃ、気の毒な境遇にある人たちも、いるんやな、とは知りましたけど……」

「障碍をもって産まれることは不幸ではない。この子たちは、こんなにも可愛い」

「……………」

「どこが可愛いのか？ ただのできそこないじゃん。どう見ても不幸。アタシだったら死にたくなるよ」

「心の醜い人だ」

「顔は可愛いでしょ？ 身体も」

「人は見た目が、すべてではない」

「うん、うん。見た目と匂いだね。たいていの生き物は、見た目と匂いでエッチする相手を選ぶよ。それが純粋な恋。でも人間は不純だから」

ら相手の年収なんかを見る。どっちにしても不幸だね、可愛くないのは、とつても不幸」

「性根の腐った友人をお持ちのようだ。芹沢殿は！」

「きやはは、アユミンは差別しないからね。心が醜くて性根が腐ったアタシでも友達にしてくれるよ。ユキちゃんは心がキレイで性根に防腐剤がかかってないと人と友達になれないみたいだね、かわいそう」

「……」

もう三島は鐘留を無視することに決めたようで、黙って鮎美を見据える。鮎美は責めるような視線を受けて、たじろぎつつも答える。

「NPO法人、ライフイージスでしたね。今後、勉強させてもらいますから、資料などいただけますか？」

「ええ、送らせていただく。そして、またお会いしたい。次は歪みきつたご友人は抜きで」

「きやははは、気に入らないものを切り捨てるなら、中絶するのと似たようなものだね。せめて次は同情と脅迫の道具に何も理解してない子たちを連れてくるのは抜きにしてあげなよ、アユミンがかわいそう」

「……失礼する！」

「待ちなよ、あと一つユキちゃんに訊きたい」

「……」

三島は黙って鐘留を睨んだ。鐘留は動じずに問う。

「ユキちゃんってさ、顔けっこう美人だよ。なのに、なんで頭はスポーツ刈りでメイクもしてないの？ もったいないよ」

「……」

少し迷ってから三島は質問した鐘留にではなく鮎美に言う。

「我が身は、女に生まれているが、性自認は男である。つまりは性同一性障碍だが、我は同性愛の指向をもっているゆえ、男性と結婚し子になした」

「その子も障害児だった？」

訊きにくいことを鐘留は平然と訊き、三島は鮎美へ答える。

「性同一性障碍ではなく21番トリソミー、ダウン症児である。芹沢殿におかれては、多様性を受容しうる社会を築く議員として活躍していただきたい」

三島の視線を受けて、鮎美は身じろぐ。

「……性同一性障碍……同性愛……その二つって同時に一人に起こるんや……起こるんですか？」

「極めて稀に」

「……………そうですか……………と、ともかく勉強しておきます」

「宜しく頼む。では、失礼する」

三島たちが立ち去り、静江は頭痛がする頭を抱えた。

「静江はん、大丈夫？」

「……………かねやのお嬢さんはともかく、宮本さん」

「はい？」

「秘書は意見なんか述べなくていいのよ」

静江の顔は微笑なのに、とても怒っていて怖かった。

「……はい……………」

「アタシは、なにか間違ったこと言った？」

「言いまくったやろ。意図的に」

「きやははは、だって、あいつらムカつくし」

「……………ある意味で性根とか、人徳、性格なんかも、もって生まれた障碍なんちゃうかと、カネちゃんを見てると思うわ」

「そう？　じゃあ、昔話を一つ」

「ろくな話やなさそうやな」

「あるお金持ちの家に一人娘が生まれました。可愛くて可愛くて超可愛い娘さんです」

「へえ……………」

「けれど、両親は男の子がほしかった。なので、また産みます。けれど、あらあら大変。ちよっと欠陥品みたいです」

「……物扱いせんとき……」

「仕方がないので、そつと、うつ伏せに寝かせました。これで息が止まります」

「……………」

「さあ、再チャレンジ、また産みました」

「……………」

「またまた欠陥品です」

「……………」

「もう一度、神さまにお返し。チェンジです。けれど、バチが当たったのでしょうか、お母さんは子宮の病気になり、一人娘は一人娘のままになりました。そして、なんと怖い怖い両親のヒソヒソ話を一人娘は9歳のころに聴いていたのです」

「……マジか……」

「おかげで一人娘はオネシヨをするようになります。夜が怖い。夜は怖い怖い夢を見てガクガクブルブル。なんと高校生になってもオネシヨが治りません。ついでに心も、とつても歪みまましたとき。おしまい」

「……………カネちゃん……」

「この物語はフィクションであり、実在の人物、団体とは一切関係ありません」

そう言った鐘留は鼻歌を歌いながらストローでアイステイーを飲み干して付け加える。

「寝る前の水分を控え目にしてナプキンあてて寝ると、布団までは濡らさないよ」

「……………」

鮎美と鷹姫、静江が返答に困り黙る。

「誰かに言ったら友達やめるね。それまではアタシたちマブダチ♪」

「はいはい。ウソかホンマか、わからん話、誰にも言わんよ。ほな、静

江はん、そろそろ支部に」

「そうね」

やや遅くなったものの、今日も党支部で学ぶべきことを教え込まれ、市議選の選挙事務所も数カ所回り、日が暮れてから島に戻った。港に降り立って、それぞれの自宅へ別れる前に鷹姫が問う。

「一つ、訊きたいことがあります」

「なんよ?」

「私は不快なほど汗臭いですか?」

「鷹姫……」

今朝の鐘留からの言葉を気にしているのだと想い、鮎美は鷹姫の手を握って、目を見つめた。

「気にせんでええよ」

「別に気にしていません」

「……………ホンマに気にしてない顔やな……」

「気にはしていませんが、他人に迷惑なほどであれば気にするべきなのかと思うのですが、どうでしょう?」

「うん……」

鮎美が考えつつ、鷹姫の襟元に顔を近づける。二人には5センチほど身長差があるので近づくと鮎美の鼻先が、鷹姫のうなじの高さになる。

「……………ちよつと、鷹姫の匂いを嗅いでみてもええ?」

「はい、お願いします」

「……………」

鮎美は両手で鷹姫の胸のボタンを一つ外して顔を近づける。朝稽古をしてから一日過ぎた鷹姫の胸元は汗の匂いがして、それは微妙ではなくて、はつきりと匂うけれど、鮎美は不快には感じず、むしろ嗅ぎつづけたい匂いだった。

「……………」

「どうですか?」

「……………もう少し……」

「……………」

鷹姫は息がくすぐったいけれど、耐える。鮎美が、もう一つボタンを外してきた。

「……………」

さらに鮎美が三つ目のボタンを外してくる。

「……………抵抗せんのか?」

四つ目に手をかけた鮎美が問うと、鷹姫は首を傾げた。

「何の抵抗をするのですか？」

「……………うちがアホでした……………」

鮎美が真っ赤になって顔を背けた。

「そんなに臭いですか？ 顔を背けるほど……………すみません。今まで気づかず」

「ちやう！ ちやうよ！ ええ匂い…、っ、ちや、ちやう…、と、とにかく、あんたは大丈夫！ あんたは大丈夫やから気にせんととき！」

「そうですか。では、気にしません」

そう言った鷹姫はボタンを留めてから帰っていった。

「……………あんたは大丈夫や……………けど、……………うちは病気かも……………」

鮎美は暗くなつた道を歩き、疲れた心と身体で自宅に帰った。

6月 恋文

鮎美は帰宅して遅めの夕食を両親と食べ、入浴してから自室のベッドに寝転がった。

「はああ……疲れたあ……」

心身の疲労が強いし、どちらかといえば心が疲れている。

「……まだ始まってないのに……こんなんで、うち、やっていけんにやろか……」

枕に顔を埋めると、シャンプーの香料と自分の髪の毛の匂いがした。

「……………鷹姫……………」

思い出すつもりはなかったのに、鷹姫の匂いを思い出した。

「……………」

フラリと立ち上がった鮎美は制服のスカートからハンカチを出して、その匂いを嗅いだ。

「……………」

洗濯洗剤の香りがする。今朝、鷹姫のうなじを拭いたハンカチからは望んだような匂いはしなかった。

「……………病気や……………また、この病気に……………前の学校でも失敗したのに……………」

高校2年から3年にあがるとき、父から引越されると言われて、あまり反対しなかった。むしろ、内心でほっとしていた。

「……………結局、あの子は彼氏つくって……………」

大阪の学校で、後輩女子から求められて交際していた。けれど、手をつないで校舎や街を歩くことはあっても、それ以上のことは求められなくて、逆に自宅に招いた時、ベッドに押し倒したら、はじめは照れて微笑んでいたのに鮎美が本気で求めると、青ざめて逃げてしまった。その日以降、避けられたし、すぐに彼女は男子と交際を始めてしまった。

「……………この子も、どうせ……………」

鮎美はカバンから2通のラブレターを出した。女子からももらった方を読む。

「……憧れ……憧れと現実はややうし……」

文面を読めば、だいたいの気持ちにはわかった。

「やっぱり、この子も、お試しの告白ごっこをしてるだけや……女子同士なら安全やって思ってる……」

鮎美はラブレターに書いてあった連絡先へスマートフォンで丁寧な断りの返事を送った。

「これで失恋ごっこもできるやろ」

鮎美はスマートフォンを置いて、もう一通を手にとった。

「ごっちは、どうしょ……」

男子からもらったラブレターを読んでみる。

「二つ年下か……日時指定の呼び出し……男って勝手やな。連絡先くらい、書いとけちゅーねん。そもそも日曜日は市議選の応援があるし。そのくらい、わからんか？ まあ、わからんわな。うちも、そんなんあると思わなかったもん」

文面は好意を抱いていることと、次の日曜日にデートを申し込んできていたけれど、日曜日は朝から夜まで予定が詰まっている。

「朝9時に六角駅か……鈴木先生の事務所から、すぐやな……自分で断るか……静江はんか、鷹姫に……私用に秘書を使うのは、あかんかな……けど、日曜が予定いっぱいなのは公務のせい……」

公私の区別がわからなくなってくる。

「……この男子にしても、来年は投票できるし……邪険にするのも……って、うちも、せこいな……どうせ、うちが国民審査を受けるのは6年後やのに。……清き一票か……わざわざ清きを付けるあたり、汚れた一票もあるんやろうなあ……」

鮎美はラブレターを放り出して、またハンカチの匂いを嗅いだ。

「……鷹姫……あかん、忘れよ！ 鷹姫のことは考えない！ 忘れる！」

頭の中から彼女のことを追い出して別のことを考え、鐘留のことが頭に浮かんだ。

「カネちゃん、夜が怖いとか……」

もう夜が更けている。鮎美はスマートフォンで鐘留が起きてるか、

メッセージを送ってみた。

「起きてる?」

「まあね。何?」

即返信があった。鮎美も女子高生らしく即返信する。

「どうしてるかなっと思っ」

「心配してくれたの? アユミン超優しい!」

「元気そうやね」

「ううん、超淋しい! 夜は怖い。今すぐ会いに来て!」

「うちの間には太平洋より大きな大海があるねん」

相手がふざけているので鮎美も軽い返事を送る。

「泳いできて!」

「死ぬちゅーねん」

「夏だし、片道30分」

「夜中に遠泳せいか?」

「愛があれば平気」

「ないから」

とりとめのない女子高生同士の短文送受信をしているうちに、眠くなってきた。

「もう、寝るわ」

「うん、おやすみ」

「オネショせんときや」

何気なく送ったメッセージの直後に鐘留から電話がかかってきた。

「もしもし? どないしたん?」

「超ムカつく!」

怒った低い声は震えていて感情が滲んでいた。

「オネショのことバカにして!」

「そ…そんなつもりやないよ。うちは心配して…」

「ウソ! 超からかってる! 心の中で笑ってる!!」

いつも余裕ぶつた人を食ったような話し方をする鐘留が今は神経質な金切り声で言ってくるので鮎美は動揺して謝る。

「…ごめん…カネちゃん……ごめんな、怒らせるつもりやなくて…」
「もともと話すつもりなんかなかったのに！ あんな変な団体が来るから!! アユミンのせいだ!」

「うん、ごめん、ごめんなさい」

ともかく謝罪一辺倒で応えていると、だんだん鐘留も落ち着いてくる。それでも震えた声で言ってくる。

「文字記録が残るメッセージなんかでオネシヨのこと送らないで。誰かに見られるかもしれないじゃん」

「そうやね、ごめん。うちの配慮が足りんかったよ、ごめん」

「電話おわったら、すぐ消してよ。絶対」

「うん、必ず。ごめんな、カネちゃんが、そんな気にしてるって思わんかってん。ごめん、ホンマごめん」

心から鮎美が謝ると、やっと鐘留の機嫌も直った。

「今回だけ許してあげる。アユミンは友達だし」

「うん、ありがとうな」

「…………。ごめん、アタシもヒス起こした…………ごめんね」

「ええよ、誰かて気にしてることや触れられとうないことあるもんね。うちが悪かったんよ、ごめんな」

「ありがとう、アユミン。アユミンがいてくれるなら修学旅行も安心だよ」

「修学旅行…………って、いつ？ 3年生やのにあるの?」

「あ、これも知らないの? 転校してきたんだもんね。受験が終わった三月だよ。ほぼ卒業旅行みたいな感じであるよ」

「三月かあ…………なんで、三月なんかに、もう大学に入る寸前やん」

「詳しく知らないけど、なんか宗教的理由だよ。うちの学校ってキリスト教系じゃん。元シスター系とかなんとかで普通のキリスト教と違って、神のことエホバって呼ぶし」

「うち、転校してから気になってたんやけど、みんな信仰心、どのくらいなん?」

「ぜんぜん♪ 少なくともアタシは。たぶん95%の生徒は、何も信じてないよ、普通に家の仏教とかじゃない。その仏教も信じてないか

もね」

「ほな、先生らは？」

「先生たちは半々らしいよ。半分が信仰してて、もう半分は共産党系だって」

「日教組かあ……」

もう鮎美も自民党の大人たちから色々な話を聴いているので学校教師に共産主義者が多いことは知っていた。

「とにかく修学旅行は三月って創立の頃から初代の帆場理事長が決めたらしいよ。で、修学旅行から帰ってきた翌日に卒業式」

「それ卒業生を泣かしたろー狙いを感じるわ」

「きやははは、そうかもね」

「それに三月やと、うちは通常国会中やから行かれへんかも」

「えーっ?! 行こうよ! 淋しいよ! アユミンと友達になった真の目的は修学旅行でハミらないためなんだよ!」

「……」

「ね、行こう♪」

「はいはい、考えとくわ。けど、国会やからなあ……。うわ、もう2時やん。寝るわ」

「うん、おやすみ」

「おやすみ」

やっと鐘留とのコミュニケーションを終えると、すぐに睡魔が襲ってきて眠る。そして一瞬で朝になったように感じた。

「もう朝か……もつと寝てたいわ……」

仕方なく起きて学校へ向かう。船着き場で鷹姫に出会った。

「おはようさん」

「おはよう」

「……。今朝も朝稽古したん?」

「ええ。……匂いますか?」

「どうか」

鮎美は顔を鷹姫の首筋へ近づける。昨日と違って、時間的余裕をもって行動していたようで鷹姫は流すほど汗をかいていないけれど、

夏の朝ということもあつて汗ばんでいる。

「……………」

「……………」

「どうですか？」

「襟の方は大丈夫やけど……腕、あげてみ」

「こうですか？」

素直に鷹姫は左腕をあげた。その袖口から鮎美が匂いを嗅ぐ。早朝から稽古していた鷹姫の腋から、タンポポの根を抜いたときのような香りがして、鮎美は嗅ぎ続ける。

「……………」

「……………」そんなに長く嗅がなければ、わかりませんか？」

「あ、いや……まあ……っっていうか……」

鮎美は一瞬だけ見えた鷹姫の腋が気になったので、ブラウスの袖口を指先で引っばった。

「ちよつと腋を見せてみ」

「……………」

黙つて鷹姫は腕をあげつつづける。鮎美は指先で袖口を引いて、奥を覗いた。

「鷹姫……毛を剃ってないの？ 夏やのに。忘れてるで」

鷹姫の腋には毛が伸びていて、毛量は少ないけれど、一度も剃ったことがないような長さに伸びていた。

「剃っていません」

「……………」そんな堂々と答えられても……半袖なんやし、剃った方がええよ。剃ると肌荒れする方？」

「どうでしょう。剃ったことが無いのでわかりません」

「なっ……マジで？」

「何か問題でもありますか？」

「……………」それは、カネちゃんやないけど、女の子として、どうかな……と思うけど……あんたって、どこか無頓着というか、剣道以外は、どうでもいいみたいなどこあるから心配やわ」

「もう、腕をおろしていいですか」

「あ、うん、ごめん」

「船頭さんが待っています、急ぎましょう」

鷹姫が歩き出したので鮎美も続き、すぐに小舟で学校へ渡る。今朝も鐘留が元気そうに現れた。

「おはよー、アユミン、宮ちゃん」

「おはようさん」

「おはよう」

「カネちゃんの露出も、あいかわらずやな」

鮎美は短すぎるスカートと袖も無く丈も短い鐘留のブラウスを見て言った。鐘留がクスクスと笑う。

「アユミンってさ、ちよつとエロい目でアタシを見るよね？ 男子みたいに」

「っ、ア、アホなこと言わんといて！」

「だって今もモロに胸を見てたじゃん」

「ちや、ちやうよ！ いつ見ても腋の処理が完璧やなって！ 毎日剃ると荒れん？」

「アタシは元モデルだよ、そんな原始人みたいな方法やるわけないじゃん」

鐘留が微笑みながら両肘を肩の高さにあげた。真っ白い腋の肌が見えるようになり、毛穴一つ無い。

「えらいキレイやけど、どうやったん？」

「レーザー」

「さすが元モデル」

「そういうアユミンは？」

鐘留が素早く鮎美の手首を握って腕をあげてくるので、慌てて逃げた。

「こ、このところ忙しかったから！」

逃げた鮎美は両腕で自分を抱くようにして腋を守る。

「フフ、その様子だと自信ない？」

「ずっと忙しいから疲れてるし！ お風呂に入るときには、もうヘトヘトなんやもん！」

「真つ赤になっちゃって、アユミン可愛いなあ」

二人が騒いでいると、鷹姫は腕時計を見て歩き出した。

「急ぎなさい。遅刻しますよ」

「はーい」

古堀から道路へ出ると、まるで待ちかまえていたかのように選挙カーが通りかかった。

「茶谷です！ 茶谷弘幸です！ おはようございます！ 茶谷弘幸です！」

ウグイス嬢の声が大音量で町中に響き、助手席に乗っている茶谷が窓から手を振っている。選挙カーは速度を落とし停車すると、茶谷が飛び出すように降りてきて鮎美に握手を求めてくる。

「おはよう、芹沢さん！」

「あ、は、はい。おはようございます、茶谷先生」

鮎美は勢いに押されつつも握手に応じる。二人が握手すると、ウグイス嬢が叫ぶような声で告げる。

「茶谷先生を次期参議院議員候補予定者の芹沢鮎美さんも応援してくださいって！ 茶谷弘幸です！ 茶谷を芹沢さんも応援されています!! 茶谷、茶谷！」

「ありがとうございます、芹沢さん」

「は、はい：が、頑張ってください」

「芹沢さん、写真を撮るから、あちらを向いて」

いつの間にか、選挙カーから降りた運動員が二人へカメラを向けている。鮎美と茶谷は握手したまま、レンズへ笑顔をつくって向けた。

パシャ

「もう一枚いきます！」

二枚目を撮るときに茶谷が鮎美の肩に触れてきたので、露骨に嫌な顔をしてしまった。撮影していた運動員が、それに気づいて撮り直す。

「もう一枚！」

鮎美は笑顔をつくる努力をして、肩に触れている茶谷の手から感じ

る暑苦しさは忘れることにする。握手と撮影を終えた茶谷たちは、また連呼しながら選挙カーで去っていった。

「はああ……」

鮎美がタメ息をついた瞬間、また次の選挙カーが近づいてくる。

「鈴木です！ 鈴木義則でございます！」

やはり目的は茶谷と同じで、鮎美と握手し、そのことを大音量で響かせ、また撮影もしていく。静江から怪しい業者との撮影は避けるように言われているけれど、自民党候補者は怪しい業者ではないので鮎美は笑顔をつくる努力をつづけた。やっと鈴木が去り、少し歩いて学校に近づくと、西沢が交差点で旗を持って立っていた。他にも何人か、同じ色の旗を持っている運動員がいて、共産党の候補者がマイクで演説していた。

「大塚です！ おはようございます！」

「……」

鮎美は、どんな顔をすべきか迷いながら学校へ行くために交差点を通り過ぎようとするけれど、西沢が鮎美に声をかけてくる。

「おはよう、芹沢さん！」

「お……おはようさんです」

「お手紙、ありがとうございます！」

西沢へ鮎美は共産党へ入れなかったことの詫びを手紙で伝えていたので、その返礼を言われ、再び表情に困る。どんな顔をすべきか、わからない。なのに、西沢は握手を求めてくるし、人から握手を求められて拒絶したことがない鮎美は迷いながらも応じた。西沢との握手が終わると、共産党の市議選候補者まで鮎美と握手を求めてくる。また、鮎美は流れに逆らえず握手に応じた。

「ありがとうございます！ 芹沢さん！」

「ど……どうも……」

「若い力をいただきました！」

「は……はい……」

手を離してくれないので鮎美が困り切っていると、鷹姫が動く。

「もう遅刻しますから急ぎませしよう！」

「あ、そ、そやね。ほな、頑張ってください」

なんとか振り切つて、やつと学校に入った。ちょうど西沢たちは学校から100メートル離れた交差点で演説していて、公選法上の病院や学校付近での静謐を守るといふ条件を満たしているのだと、振り返りながら思ったけれど、とにかく今日も朝から疲れた。

6月 投票

六角市の市議選投票日、朝から鮎美は迷っていた。

「……鈴木はんか、茶谷はん、どっちにしたもんなあ……」

まだ早朝なので投票は始まっていないけれど、ここ数日ずっと迷ってきた。鬼々島を含む地区が票割りされているのは茶谷で島をあげて応援している。

「うち……鈴木はんに入れるって断言したし……」

けれど、鮎美は最初の応援演説で鈴木へ投票すると言ってしまった。いた。

「けど、茶谷はんは票割りされてる地区の人口が……」

茶谷の地区は島を含めた農村部で人口が少ない。ゆえに、票の数も限られてくる。

「夕べは、あんなに盛り上がったし……」

昨夜は最後の選挙活動ということで鮎美も茶谷の選挙事務所に呼ばれ、盛り上がる意味があるのか、ないのか、わからなかったけれど、雰囲気的な高揚感も演出され、公選法上の問題にならないギリギリの食事なども提供されていた。

「……茶谷はんも悪い人やないんやけど……うちにベタベタ触ってくるし……」

セクハラとは言いにくいギリギリの接触などもされるのは閉口しているけれど、それとなく静江が注意してくれたので忘れようと思っていた。

「おはようございますー!」

島内の電柱に設置されているスピーカーから放送が響いてくる。

「今日は六角市、市議会議員選挙の日です! 皆さん、投票に行きましよう!」

「……………」

いよいよ投票が始まったようなので鮎美は無言で立ち上がった。

階段を降りると居間に両親がいた。

「ちよつと行ってきます」

「いってらっしゃい」

自宅を出て、家と家の間を歩く。いつも人通りが少ないのに、今日は投票へ向かう人たちが出てきていて、まるで何かの行事のように投票所へ近づくとつれ行列になった。

「婆さん、茶谷やぞ、書くのは茶谷！」

「わかっつーよ、わかっつー」

鮎美の前を歩いているのは自治会の役員で老婆を連れている。しばらく歩いて老婆が問う。

「で、誰に入れると？」

「茶谷じゃ！ 茶谷！ 小次郎さんよこの息子！」

「あくあ、あのヒロちゃんなあ。もう、そんな歳に」

「最近は一八の娘つこでも議員先生じゃからな」

役員がチラリと鮎美を見た。鮎美は軽く会釈する。

「おはようさんです」

「おう、おはよう。芹沢先生もご苦労さん。一人かいな？ ご両親は？」

「父と母は、混むのを避けて昼過ぎに投票するんやと思います」

「まあ、それも手じゃな。けど、早う行かんと、カツコがつかんぞ。まして娘が本職になるんじゃから」

「は、はい……そういうもんですか？」

「そういうもんじゃ」

投票所になっっている公民館が見えてくる。また老婆が問う。

「で、誰に投票しときやええんじゃった？」

「茶谷じゃ！ もう、ワシが入ってから言うけ、それまで書くの待っつけ！」

「大変ですね……」

鮎美の一言に返事はなく投票所についた。高齢者が多いので同じようなやり取りをしている家族も多い。

「茶谷やぞ」

「入れるのは茶谷な」

「……………」

あかんやん、こんな投票所の目の前で連呼行為まがいに投票を促してたら、と鮎美は公職選挙法を読み切った知識から、違法行為だと感じたけれど、指摘する気にはなれず投票所に入って整理券を係員に出した。さすがに係員は島民ではなく市役所から派遣されてきている公務員のようで鮎美の名が入った整理券を見ても、事務的に対応するだけだった。

「こちらの用紙に候補者の氏名を書いて投票してください」

「はい。おおきに」

鮎美は白紙を受け取って、初めての投票をする。まだ、誰に入れるか、決めていなかった。

「……………」

「茶谷って書け。下は弘幸な」

「これじゃね。茶谷弘幸と、弘幸って小次郎さんとのヒロちゃんけ？」

「言うたじやろ。もうええ、それ突っ込んで帰るぞ」

役員と老婆がアルミ製の机から離れたので鮎美の番が来る。

「……………」

机に向かうと、目前には市議選の候補者27名の氏名があつた。うち9名は自民党会派なので鮎美は握手をして応援もしている。

「……………」

どないしよ、けど、もう迷う時間も、つていうか迷ってたら変に思われるわ、と鮎美は鉛筆を握り、この場で決めた名を書く。机と机の間には大きな衝立があるので隣から見られることはないけれど、それでも茶谷以外の名を書くのに汗が浮いた。

「……………」

やっぱりウソはつきとうないもん、と素早く鮎美は鈴木義則と書いてから二つ折りにすると、投票箱に向かった。投票箱の付近には立会人が複数いて見守っているけれど、見張られているように感じた。さつと鮎美は投票箱に二つ折りにした票を入れ、タメ息をついた。

「はあ……」

それから立会人たちに会釈する。

「ご苦労さんです」

「ご苦労様」

本日の最初の予定が終わり、船着き場に向かう。

「……秘密選挙って、めっちゃ重要やな……今まで、別に隠さんでもええ思ってたけど、絶対必要やわ」

地域が推している候補ではない鈴木に入れた鮎美は憲法の大切さを噛みしめつつ、投票を済ませた鷹姫と合流して連絡船に乗った。対岸に渡ると、すでに静江が待っていてくれて、彼女の運転で朝から事務所回りをする。投票日なので、たいていの候補者は事務所におり、国会議員をはじめ県議や首長たちも陣中見舞いのために訪れている。直樹や静江の兄の石永と出会うこともあったし、少し会話してお互い別の事務所へ移動するという行動パターンを続け、鮎美が訪れた5件目の事務所は鈴木のところだった。

「鈴木先生のご当選、心より祈念いたしております」

もう何度も似たようなことを言った鮎美が握手しながら鈴木に言う、日焼けした顔で笑ってくれる。

「ありがとう！ 芹沢さんのおかげもあって追い風を感じていますよ」

鈴木は握手をするだけで鮎美の肩や腕に触れてきたりしないので鮎美も素直に笑み返す。

「……」

うちが鈴木はんに入れたんわ、セクハラまがいのことせんからかも、うちが初めて入れた人やし当選してほしいなあ、と鮎美は握手をしながら思った。握手が終わって鈴木が付け加える。

「こう言っただけですが、お若いのに短期間で板に付いてきましたな」

「そんな、うちなんか、まだまだ勉強中です」

「いやいや才能があるのかもしれない。初めての演説も堂々としたものだった」

「もう言わんといってください、思い出すと恥ずかしいですさかい」

本当に恥ずかしい思い出なので鮎美は少し赤面した。挨拶と握手が終わっても、あまりに早く立ち去るのは非礼にあたるので、しばらく鮎美たちは事務所に滞在する。事務所といっても、もともとはコンビニだった建物で今は商品棚もなく、がらんとしている。そこに折りたたみ式の長テーブルとパイプ椅子が並び、鈴木的支持者とヒマ人が談笑している。壁には必勝と大きく書かれた紙が何十枚も並び、それぞれに国会議員の名や市長の名が書いてあり、送った覚えが無いのに鮎美の名もあった。

「……静江はん、ちよつと気になるんやけど、ええ？」

鮎美が小声で問う。

「何かしら？」

「六角市の市長はんって民主党やんな。やのに、なんで、ここに必勝の習字を送ってはるの？ あと、うちの名前が入ってるのは、いつ作ったん？」

「民主党と自民党の関係は、共産党との関係ほど隔絶してないから、首長選挙で相乗り推薦を出すこともあるの。だから、逆に市議選の候補にも送ってくれるわ。まあ、本気で応援して回るのは当然、民主党の候補なんだけど、こつちにも義理というか社交辞令で送ってくれるのよ。その後の市政運営もあるから、お互い無視するより、そこそこ顔をつないでおくってところかな。あと、芹沢先生のは、こちらで作って送っておきました。習字に自信があるのなら、次回から自署する？」

「やめときます」

「そろそろ、次の事務所に……」

静江が移動しようかと思っていたら県知事が訪ねてきたので移動を思い止まる。県知事の方も鮎美の存在に気づきつつも、まずは現在の応援対象である鈴木に近づき、挨拶と握手を交わし、激励してから、こちらに向かってくる。

「芹沢鮎美さんですね」

「はい、こんにちは……」

鮎美は県知事の顔を知らなかった。教えておかなかったことを静江は後悔したけれど、新しい参議院議員候補予定者が県外出身であることを知っている県知事は微笑して自己紹介する。

「県知事の御蘇松善行です。これから宜しく願います」

「こちらこそ、よろしく願います。若輩者にて知らないことばかりですが、何卒ご指導ご鞭撻のほどお願いいたします」

もう持ち前の関西弁さえ入らないほど定型化している挨拶をして握手をする。

「本当にお若いですね」

「それだけです」

「大変でしょうが頑張ってください」

「おおきに、ありがとうございます」

具体的な話は何もなく、お互いの顔つなぎは終わった。忙しい県知事が立ち去るのを見送ってから鮎美たちも別の選挙事務所を回る。そして、最後に茶谷の事務所に到着して、そこに腰を据える。投票時間が終わり、いよいよ開票となった。

「これから開票です。ここまでの皆様の応援、この茶谷、どれだけ感謝しても感謝しきれぬほど、ありがたく思っております。今少し、今少しだけ皆様、どうか、お付き合いください」

茶谷がマイクで挨拶している。しばらく待っていると最初の当確が出る。茶谷ではなく民主党の候補者だった。鬼々島の住民がローカル放送を見ながら、つぶやく。

「近頃、民主党が伸びよるな」

「ほうじゃな。お、次は自民じゃ！」

自民党の候補者にも当確が出る。さらに共産党にも出た。定数の半分に当確が出ると、なかなか進まなくなってきた夜遅くなり、あくびをする者も増えてくる。鮎美も眠いのを我慢していると、とうとう茶谷に当確が出た。

「お！ 出たど！」

「茶谷先生に出た！」

「万歳じゃ！」

「万歳！・万歳！」

「ありがとうございます!! 皆様のおかげです!!」

事務所内は大いに盛り上がるけれど、鮎美は複雑な気分だった。自分は茶谷には入れなかった、けれど、ここで茶谷の当選を祝っている。なんとなく裏切っているような気がするし、いまだ鈴木には当確が出ていない。

「……鈴木はんは、どうなるやろ……」

鮎美のつぶやきは静江には聞こえた。

「きわどい得票数だと、明日の朝まで当確が定まらないことも……あ、出たわ。鈴木先生も当選よ」

「よかったわ」

「けど、この分だと自民と民主、議席数で拮抗ね。次の知事選、どうなるかしら」

「また、すぐに選挙あるんですか?」

「9月に知事選があるわ」

「ほな、お昼に会おた御蘇松はんが?」

「御蘇松先生は現職の自民だから最有力候補なんだけど、民主が推してる女性候補も手強そうなの」

「女性なんや。どんな人なんですか?」

「加賀田夏子、39歳で大学教授、数理経済学の専門家ね。その知識を活かして県が計画してるダム建設と、新幹線の新駅建設に反対してるの」

「ダム……ダムは要らんでしょ、アホみたいデカイ湖があるのに」

「貯水というより水害対策よ。50年前から計画されて、もう村民の移転も終わってるの。今さら中止はできないわ」

「そういうもんなんや。新幹線の駅って、えっと、今は井伊市にありましたよね?」

「ええ、その井伊駅に加えて県南部の三上市に建設する予定なの」

「ふーん……必要なんですか?」

「井伊駅と京都駅の間は全国の新幹線で、もつとも距離があるの。ま、この話は他にも、いろいろ条件があるから、また後日、勉強してね」

「……はい……」

そろそろ事務所内が酒宴に移行してきたので鮎美たちは事務所を出ると、もう島に戻れる時間でもないので六角駅近くのビジネスホテルに入った。静江がシングル、鮎美と鷹姫がツインの部屋へ別れる。別れる前に静江が銀行通帳を二人へ渡してくる。

「はい、これ。宮本さんのお給料と、鮎美ちゃんの勉強会参加費とかね。どっちも会計処理と申告は、こちらで済ませるから自由に使っていていいよ。派手なことはいらないでね」

「……」

鷹姫と鮎美はもらった通帳を開いてみる。鷹姫が金額を見て驚く。

「つ……30万円……こんなに……」

記帳された党から振り込まれた額は32万1525円だった。静江が微笑んで説明する。

「出勤、ほぼ毎日だったからね。私は50万円ちよもらってるけど、宮本さんが学校に行ってる間も、いろいろしてるから差があるのは、わかってね。宮本さんが卒業して専業秘書になったら、だいたい月額50万円だと思っておいて」

「は……はい……」

「鷹姫が30万で、うちが20万か……」

鮎美が通帳を鷹姫に見せる。党から振り込まれた金額の頭の桁は2で始まっていた。鷹姫が困惑する。

「私の方が多いのは、おかしいのでは……」

「ええよ、ええよ、20万でも高校生のバイトやったら、絶対無理やから。党にも何か給料とか手当の基準があんにやろ。うちは任期が始まったら年収660万らしいし、今は20万でも十分やよ」

「鮎美ちゃん、よく数を数えてみて。それ20万じゃないよ」
「え……」

鮎美は通帳を見なおし、金額を確かめる。

「いち……じゅう……ひやく、せん、まん……じゅうまん……ひやくま……200万?! ちよつ?! これ200万なん?!」

「そうよ」

鮎美の通帳には201万5000円が振り込まれていた。

「こ……こんなに?! なんで?! ワイロちゃうやろな?!」

「賄賂は銀行振込しないから」

静江が夜中のホテルのロビーなので人指し指を唇にあててから説明する。

「勉強会の参加費だけだと、ここまで多くないけど、今回は市議選の応援に来てくれたでしょ。言ったと思うけど、クジ引き議員は同じ党でも、やっぱり相互に選挙を応援する動機が働きにくい。正直、かなり面倒じゃなかった? 応援演説も、挨拶回りも」

「ま……まあ……正直、意味あんのか、って……」

「だから、党が後援するのよ」

「な……なるほど……」

「やっぱり、人間、報酬あつてこそ、頑張れるでしょ? 私もタダだったら女子高生の子守りすると思う?」

「……………」

「いくら、お兄ちゃんに頼まれても、タダは無いですよ。だいたい秘書って朝から晩まで、土日無しってこともあるし」

「たしかに、静江はん、朝から、この時間まで……日曜なのに。うちらも……鷹姫も、ずいぶん振り回して……ごめんな、うちのために」

「いえ……報酬は、いただきましたから、……石永さん、これ、本当に、いただいてもいいんですか?」

「ええ、どうぞ」

「ありがとうございます、助かります」

「……………」

静江は事前の調査で鷹姫の家が豊かではないことを知っていたし、鮎美も薄々感じてはいた。住んでいる家は道場と隣接した住宅で、それほど大きくはないし、父親は剣道の指導を仕事としているけれど、門下生は島内に限られる上、きちんと月額が決まった月謝を集めているわけではなく、より貧しい家からは集金していない。月謝が農作物や漁獲物で代わりとされることさえあった。静江が時刻を見て言う。

「もう休みましょう」

「はい」

返事をして鮎美と鷹姫は同じ客室へ向かった。

6月〜夏休み 同室

静江は三人でビジネスホテルに予約を入れるとき、ごく常識的に歳の離れた自分をシングルに、秘書と議員予定者といっても、もともとは友人関係で、いまだ高校生である鷹姫と鮎美をツインの部屋にし、それを鷹姫も普通のことだと感じていて、何一つ特別なことは感じなかったけれど、鮎美だけは市議選の結果以上に気にしていた。静江の部屋は6階だったのでエレベーターで別れ、鷹姫と鮎美は7階で降りて廊下を進む。

「703、ここです」

鷹姫が静江から受け取った鍵で客室の扉を開けた。

「どうぞ、芹沢先生」

「……もう、二人つきりなんやから、先生はいらんよ」

「そうですね、では早く入りなさい。芹沢」

「う……いきなり目線が上下するんやね」

選挙戦の間に他人がいるところでは秘書として振る舞うことが板に付いてきた鷹姫が、ただの友人として呼び捨てにしてくると、鮎美は緊張しながら前から言いたかったことを言ってみる。

「二人の時は鮎美って呼んでくれへん？」

拒否されたら悲しいし、なんとか、そう呼んでもらうための理屈もいくつか考えていたけれど、鮎美に続いて客室に入った鷹姫は頷いた。

「わかりました」

「……あっさり承知するんやね」

「何か意味のあることなのですか？ 鮎美と芹沢に、どんな違いが？」

「え、えつと……それは……」

そう呼んでほしいから、とは答えにくいので鮎美は現在の立場を利用する。

「それはな、うっかり二人つきりやないときに、芹沢って秘書が呼び捨てにしてたら周りが変に思うやん？ けど、鮎美やったら周りも、あ

あ二人は友達やったね、と思うだけで終わるから」

「そうですか、わかりました。そういうことなら、そうします」

鷹姫が素直に納得しているので、鮎美は荷物を置く前に問う。

「窓際と奥のベッド、どっちがええ？」

「どちらでも、かまいません」

「ほな、このまま」

入室した順番による立ち位置で鮎美が窓際のベッドに座り、鷹姫は奥のベッドになる。

「あく疲れたわあ」

「ええ、本当に疲れました」

「お、お風呂、どうする？ どっちが先に入る？ そ、それとも、いっしょに入る？」

「お先に、どうぞ」

「う……うん……おおきに」

うっかり口走ってしまったことを後悔しつつ鮎美はバスルームに入った。シャワーを出しながら一人言を漏らす。

「変に想われたかな……つい言ってもた。……こんな狭いビジネスホテルの風呂に、いっしょになって……ありえへんのに……」

制服を脱ぐのも苦労するほど狭い空間で裸になり、バスに入るとシャワーを浴びる。もう遅い時間なので髪と身体を急いで洗ったけれど、しつかりと入念に汗と垢を流した。歯を磨いて備え付けの浴衣を着て、額の汗を拭きつつ客室に戻った。

「お先です」

鮎美の声には返事が無くて、鷹姫の寝息だけが聞こえた。見ると、制服を着たままベッドに突っ伏して寝ている。

「そろそろやな、朝一から、この時間までやもん」

鮎美は髪を拭きつつ、ベッドに座り鷹姫の寝顔を見つめる。もう熟睡に入っているようで全身から力が抜けていた。鮎美が髪を乾かし終わっても、まだ眠っている。このまま朝まで眠ってしまいそうな様子だったので鮎美が迷う。

「お風呂に入らんと気持ち悪いやろ……どないしょ、起こすのも、かわ

いそうやけど、このままも、かわいいそうや」

もう日付が変わり月曜日になっている。朝になれば静江が高校まで送ってくれる予定で、その朝に余裕があるとも限らない。

「せめて靴くらい脱ぎいや」

鷹姫は少し休憩するつもりで横になった直後に眠ってしまったよ
うで、靴も履いたままだったので、そつと静かに鮎美は靴を脱がせて
やった。

「……………」

学校指定の紺色の靴下が汗で湿っているのに、つい触れてしまうと
鷹姫は少し足を引つ込めた。

「ごめん、くすぐったかった？ ……………靴下も脱がしてあげよか？」

その問いに返事はなかったけれど、このまま寝てしまっても入
浴するにしても脱がせておこうと想い、鮎美は両手で鷹姫の靴下をさ
げる。

「……………」

剣道の達人らしく鷹姫の足の裏は硬そうだけれど、指の一本一本は
キレイな形をしていて、鮎美は口の中に唾液が湧いた。この足の指を
吸ってみたいという衝動が脳髓の奥から湧いてきて、鮎美を突き動か
そうとするけれど、かろうじて踏みとどまった。

「…………うち、何を考えてるねん…………変態やん…………」

脱がせた靴下をそろえて置いてから、鷹姫の足に触れていた自分の
手先を唇に触れさせた。かすかに鷹姫の匂いがして、それを感じると
脳が蕩けた。

「……………。なあ、制服を着たまま寝るのは苦しいやろ？ 脱がせよ
か？」

「……………」

返事なのか、寝言なのか、肯定なのか、否定なのか、どうとでも取
れる声を鷹姫が漏らしたので、鮎美は自分の疲労感は、まったく忘れ
てしまい、鷹姫の胸のボタンを外していく。一つ、二つ、三つ、され
るがまま鷹姫は眠っている。胸元から立ち上ってくる鷹姫の匂いを

嗅ぐと、鮎美は自分の頭と下腹部が異常に熱くなるのを感じた。

「ほら、袖を通し」

「……」

鷹姫はブラウスを脱がされても目を閉じている。鮎美はブラジャーへも手を伸ばした。

「ブラも脱がせるよ」

返事は寝息だったけれど、鷹姫を上半身裸にした。薄暗いホテルの照明の下で、鷹姫の乳首を見た鮎美は前後の見境を無くした。もう理性は消し飛び、乳首を啜って吸った。吸いながらスカートまで脱がせていく。

「ハア…ハア…」

乳首だけでなく鎖骨へも、うなじへも舌を這わせて舐め回した。塩味がしたけれど、とても甘美に感じて舐め続ける。

「ハア…ハア…」

「…んっ…」

鷹姫が目を開けた。

「っ…」

鮎美はドキリとして固まる。夢中で舐めていて、何も考えていなかった。けれど、鷹姫と目が合うと冷水を浴びせられたように固まり、そして怖くなる。

「…」

「…」

怒鳴られるか、泣き出されるか、罵られ軽蔑されるか、それとも一言の罵倒もなく絶縁され二度と口をきいてもらえないかもしれない、悪い想像ばかり湧いてくる。

「…」

「…」

すぐに拒絶されると怯えたのに、鷹姫が何も言わないでいると逆に希望的観測に惹かれる。鷹姫が微笑んで抱きしめてくれるかもしれない、実は鷹姫も前から想っていてくれたのかもしれない、そんな都合のいい期待もしたけれど、鷹姫の反応は鮎美の予想外だった。

「…」

鷹姫は邪魔そうに鮎美の顔を手で押しつけると、ポンポンと頭を叩いて、一人で寝ていなさい、とばかりに鮎美へ背中を向けて寝返りして、また眠った。

「……………」

鷹姫の寝息が聞こえる。そして、鷹姫の裸の背中が見える。

「……………」

その愛しい背中を見ていると、寄り添いたくなり鮎美は浴衣を脱いで身体をくつつけた。

「……………」

こうしてるだけで最高に幸せやから、と満足しようと考えたのに、すぐに飽き足らなくなり後ろから鷹姫のうなじや耳の匂いを嗅ぎ、さらに唇をあてる。唇をあてると、舐めたくなって、舐めた。

「……………」

鷹姫が、また寝返りして逃げる。それを追って手首を捕まえ、腕をあげさせると腋も舐めた。強い塩味がして鮎美は恍惚とする。

「…ハア…ハア…」

「ん…すぐすぐつたい…いい加減にしなさい…」

また鷹姫が邪魔そうに鮎美の顔を押しつける。

「……………」

押しつけられて様子を見ると、鷹姫は起きたわけではなくて眠りが浅くなっただけだった。鮎美は少しでも自重して、また鷹姫の眠りが深くなったのを感じると、唇と舌で鷹姫に触れる。何度か鷹姫は押しつけたり逃げたりしたけれど、そのうち諦めたように抵抗しなくなつたので鮎美は窓の外が明るくなるまで衝動のままに過ごした。

ピピピ！　ピピピ！

鮎美のスマートフォンが鳴って欲しくなかったのにセットしていた時刻通りに無粋な音を立て、鷹姫の眠りが浅くなる。

「ん………………」

つらそうに鷹姫は目を開け、そばにいた鮎美を見る。二人とも裸だった。

「…………なぜ、あなたは裸なのですか？ ……………私も…………」

「あ…………えつと…………うちは風呂揚がりで、そのまま寝てしても。鷹姫は、うちが脱がせてあげたんよ。お風呂に入りいつて。やのに、あんたも寝てしまおうし。もう時間無いし、シャワー浴びてきい」

「…………そうですか…………はい…………そうします」

まだ眠そうに鷹姫はフラフラと立ち、バスルームへ向かう。狭いバスルームに入ると、自分の身体の匂いを認識した。

「…うつ…臭い…夕べ、そのまま寝たとはいえ…これでは緑野が茶化すのも、わからなくもない…周りの人も不快かも…。それにしても…………眠い」

いつもなら朝稽古のために、すつきりと起きられるのに鷹姫は寝惚けた頭でシャワーを浴び、制服に着替えてから朝食のためにホテル二階のレストランへ鮎美と降りた。決めていた時間通りだったので、すぐに静江と合流してテーブルに着く。よくあるビジネスホテルの食べ放題の朝食を摂りながら、鷹姫がアクビを噛み殺しているのに静江が気づいた。

「お疲れみたいね。寝不足？」

「はい、夕べ、よく眠れなかったというか、変な夢を見てしまい、どうにも眠った気がしないのです」

「選挙の夢でも見たの？」

「いえ、もっと変な夢でした」

「そ、そうなんや。どんな夢を見たん？」

鮎美もハウレン草を喉につまらせそうになりつつ飲み込み、問うた。鷹姫は記憶を手繰り寄せつつ答える。

「はつきりとは覚えていないのですが…………人ほどもある大きな黒い犬のような生き物…………サラサラとした毛をした耳の長い犬のような…………それが、私に覆い被さってきてペロペロと舐めてくるので、人なつつこいのはいいのですが夢の中の私も眠くて眠くて仕方ないので、しつこく舐めてくるものですから、何度も押しつけたのです。それでも、何度も舐めてくるので、しまいには眠さが勝ってしまい、もうさせるがままにしておいたのですが、どうにも眠りが浅かったという

か、寝た気がしないのです」

「人間ほどある犬に、覆い被さられ舐められるねえ。フフ」

静江が意味ありげに微笑んで問う。

「宮本さん、欲求不満なんじゃないの？」

「そうかもしれない。かなり身体がうずきますから」

「……………」

「このところ満足な稽古もできず運動不足ですから」

「そつちね……………」

「そつちなんや……………」

「他に何かあるのですか？」

「ううん、何でもない。これ以上は高校生には言えないわ」

朝食を終えて静江は二人の高校生を学校まで車で送った。

「着いたわよ。…………爆睡ね」

後部シートで鷹姫も鮎美も、ぐっすりと眠っていたので起こすのが可哀想だった。

夏休みに入り、鮎美と鷹姫は朝から自民党支部で勉強していた。鮎美がタメ息をつく。

「はああ…………勉強勉強の日々かいな……………」

「座学ばかりでは身体がなまります。鮎美も朝稽古に参加しては、どうですか？」

「あんな激しい練習の後に、しっかりと勉強できる、あんたはえらいわ」

鮎美は一切の興味が湧かない六角市道路整備計画の冊子をパラパラとめくった。大まかにでも頭に入れておけ、と言われているけれど、そもそも自動車を運転した経験がないのでピンとこない。

「まあ、学校のみんなも興味のない科目でも頑張って受験勉強してるんやから、うちも頑張らなあかんのはわかるけど」

そう言っただけ鮎美は興味をもっているNPO法人ライフィーズが送ってきた冊子を読む。遺伝子診断や社会の多様性について書かれている。

「……生まれつきの障碍も難しいなあ……性同一性障碍の保険適応も……健保って、いわば公金やし……」

「芹沢先生、その分野の問題は不用意な発言は絶対にしないでくださいね」

静江が資料を整理しつつ念押ししてくる。今は他の党員も出入りする支部にいたので、呼び方は鮎美ちゃんではなかった。

「はいはい。……けど、自民党としては多様な結婚って、どう考えてはるん？」

「なお慎重な議論を要する、よ」

「先送りかあ……」

もう言葉の言い回しの真意がわかるようになってきた鮎美がタバコの煙で汚れた天井を見上げていると、直樹が冷たいミルクティーのペットボトルを額に置いてきた。

「クールダウンに、どうぞ。芹沢先生」

「おおきに。雄琴先生」

「何を読んでいたんだい？ 同性愛者の結婚？ また、変わった分野のことを……」

「雄琴先生は、どう思う？」

「ふむ、どうでもいい」

「……。国民の代表やろ、任期中、現役の」

「したい人たちは勝手にすればいいさ。ボクには理解できないね」

「少数者の権利ってのもあるやん？」

「そういうときは憲法に立ち戻ると。結婚については、えっと、何条だったかな……」

直樹が思い出せずにいると、鷹姫が六法全書が必要なページを開いてから渡してくれる。

「雄琴先生、どうぞ」

「ありがとう。君は優秀だね。あ、これこれ、第24条、家族生活における個人の尊厳と両性の平等、1婚姻は、両性の合意のみに基づいて成立し、夫婦が同等の権利を有することを基本として、相互の協力により、維持されなければならない。2配偶者の選択、財産権、相続、住

居の選定、離婚並びに婚姻及び家族に関するその他の事項に関しては、法律は、個人の尊厳と両性の本質的平等に立脚して、制定されなければならぬ。さて、この条文を素直に読めば、両性、すなわち男と女を想定しているよね、次に夫婦ともある」

「……。そういえば憲法にあるんやっただ……」

「そんなに残念そうな顔をするなら……そうだね、また解釈次第で、なんとか余地は作れるかもしれない。たとえば、性同一性障害があつて性転換した後なら、以前は同性であつても問題なく結婚できるだろうね。生物学的、医学的にはともかく憲法上は両性だろう」

「ほな同性愛者は？」

「9条と同じく強引に解釈して、第二項の配偶者の選択に関して個人の尊厳と両性の本質的平等を謳っているところから、二人の個々人の尊厳によつて選択することは自由で、どうせ本質的に平等なんだから異性だろうと同性だろうと、いいんじゃないか？　って風に考える手もあるかな」

「なるほど……」

鮎美が感心していると静江が怒る。

「雄琴先生、9条解釈を強引とか言わないでください。あと、解釈次第で憲法なんか、どうとでもなるって思考を勉強中の芹沢先生に吹き込まないでください」

「ごめんごめん」

直樹は笑顔で謝り、両手をあげて降参というポーズをとつたけれど、笑顔から真顔になると断言する。

「どのみちボクに言わせれば、異常性愛者なんて、すべて滅すべきだね」

「……………」

その発言で鮎美と静江は彼の妹が小児性愛者に惨殺されたことを思い出したけれど、鷹姫は知らず、話題に興味が無さそうに与えられた資料をめくっている。県北部のダム建設についての資料で、こちらへも興味はもっていないものの与えられた課題なので理解に努めている様子だった。直樹は話を続けている。

「小児性愛だろうと、同性愛だろうと、そんな気持ちの悪い連中はジェノサイドしてやりたいね」

「雄琴先生、言葉は選びましょう」

「ああ、そうだね。人権ってことを考えるなら、せめて治療として、そういう頭のいかれた連中の脳の、その部分だけ重粒子線で焼いてやればいい。癌治療みたいだね。いつそ保険適応してやれば、そういう犯罪者を捜査し収監し処罰する経費も浮くし、被害者も出ない。最高じゃないか」

「……。せやけど、ロリコンと同性愛は別の問題やないですか?」

鮎美が恐る恐る問うと、直樹は微笑してから室内の照明をすべて消した。おかげで窓から入ってくる外の日差しだけになり、室内の雰囲気が変わり怪談話でもするような気配で直樹は中央に座った。

「これはアメリカで起こった同性愛者による犯罪の話だよ」

「……………」

静江と鮎美が聞きたいような、聞きたくないような顔で黙って傾聴し、鷹姫も暗くて資料が読めなくなつたので諦めて直樹を見る。

「飽食のロバートと逮捕後に呼ばれるようになったロバート・エリクソンは主にネバネバダ州で殺人を繰り返した。手口は、こうだ。海外派兵されていた海兵隊員の帰還時期を狙って基地の近くを車で通りかかる。何度か通れば必ずといっていいほど、帰宅の足を求めてヒッチハイクする男性隊員がいる。治安がいいとはいいいくアメリカであつても、女性は用心するものの、男性はヒッチハイクをするのに、さほど用心しない。まして、海兵隊員だ。それなりの屈強さはあるし武器の扱いにも慣れてる上、近接格闘術だって習ってる。ヒッチハイク狙いの強盗だって、わざわざ狩りにくい獲物は狙わないだろうし、国家に貢献した帰還後だからね、親切にしてもらうことを期待したとしても、そう彼を責められはしないさ。むしろ、哀れな被害者になる」

「……………」

「ロバートは拾った男性を助手席に座らせて車を走らせながら、こう勧める。後部シートにマーケットで買ったビールがある好きだけ

呑んでくれ、と。たいていの被害者は、なんて親切な紳士なんだと喜んでビールを口にした。中には、どうして、そこまで親切にしてくれるんだ？ と慎重な質問をした男もいた。そういう男にロバートは言った。私の甥はベトナムから帰ってビールを呑むことができなかった。アーリントンの墓石にビールをかけるより、お前さんに呑んでもらう方が、よっぽど嬉しいさ、と。ここまで言われると99%の被害者候補はビールを口にした。わずかに被害をまぬがれ、無事に目的地でおろしてもらった者は、たった3人。宗教的理由で、どうにも飲酒ができない者と体質的にアルコールを受け付けない者だけだった」

「……ビールに何か入ってたん？」

鮎美が焦れて話の先を促した。

「よく効く睡眠薬がね。こうした犯罪に使われるので最近では手に入りにくいけれど、当時は簡単に処方されていた。本国に帰還した兵士だ、戦地と違い安心していき。ビールを呑んで眠くなっても、それは疲れただと思つたろう。けれど、目が覚めたときは手錠と鎖で自由を奪われた状態で車は森の中だ。そして、ロバートは自らの歪んだ性欲を満たした」

「……………」

鮎美と静江は、ここまで聞いたので最後まで聞いておきたくて黙り、鷹姫は暗さに目が慣れてきたのでダム建設の資料をめくった。

「飽食のロバートは同性愛者であり食人鬼だった。カニバリズムと言った方がわかりやすいかな。彼の脳内では食欲と性欲の区別が曖昧だったのか、混同されているのか、哀れな被害者は動けぬまま、その肉を食いちぎられ、失血死するまで苦しんだそうだよ、そのときのことをロバートは自供するとき喜々として語ったそうだよ。屈強な隊員が泣き叫んで母さん、母さんと助けを求める瞬間が最高だとね」

「……………」

鮎美と静江は気分が悪くなり、鷹姫は県北部にダムは要らないような気がしたけれど、それは個人の見解として言わないことにして、次に新幹線新駅の資料を開いている。

「実に三百人以上の被害者を生んだ連続殺人事件の発覚が、あまりにも遅れたのはロバートが肉をすべて食べてしまい、骨を焼いていたこともあるけれど、帰還したはずの海兵隊員が帰宅しなくても誘拐されたとは考えず、戦地での体験から精神的に病み、次の勤務を恐れて逃げたのではないか、と考えられたためで、まさか性犯罪の犠牲になっているとは家族も捜査当局も考えなかったからだ」

「そろそろ…」

静江が夏休みの怪談話の雰囲気から本来の業務に戻ろうとしたけれど、直樹は続ける。

「この話には、まだ続きがあつてね。当然、ロバートは極刑に処されることになった。薬物による安楽死という手ぬるい方法で。けど、問題なのは、そこじゃない。ネバネバダ州には死刑囚へ最期の晩餐を選ぶ権利が与えられていた。何でも好きな物を最期に喰わせてやろうというフザけた法律があつてね。普通、それらは巨大なハンバーガーだったり、ワインとステーキだったり、山盛りのフライドチキンだったり、ピザやポテトだったりしたさ。好物を頼むわけだ。そして、ロバートが頼んだのも、彼の好物だった。当局が、どうやって、それを用意したのかは謎だけれど、やはり彼にも、その法律が適応され、望む肉を与えられてから、安楽死したそうだよ。享年54歳。奪った人命の数は三百余、だいたい20代の筋肉質な男性だった」

直樹が話を終え、照明をつけた。

「さて、少数者の権利だか何だか知らないけど、多数の被害者を生む異常性愛者に、どんな権利があるつていうのか、まったくボクにはわからないね。ヤツらは駆除すべき害虫だよ」

「……………」

「とくに許し難いのはヤツらは人の善意につけ込むところさ。このロバートは甥の話を作つて帰還兵の同情と油断を誘った。うちの妹だって車イスの娘が入れるトイレを探しているから近くにあれば案内してほしいと言われて、わざわざ等身大の子供のリアルな人形と車イスまで後部シートに載せていれば信じてしまうさ。そうやって他人の善意を踏みにじって自分の欲望を満たす、もはや人の皮をかぶつ

た悪魔だよ」

「……………」

鮎美が青ざめて視線を彷徨わせると、静江は意図して話を変える。

「雄琴先生、そろそろ勉強に戻らせてもらいますね」

「あ……ああ、すまない。……つい長話を」

やや我を忘れていた直樹は短く謝った。静江が鮎美の前にダム建設についての資料を置き、簡単に概要を説明する。それで鮎美も気を取り直し、内容を把握すると率直につぶやいた。

「……このダム、やっぱり要らんのちゃう？」

「芹沢先生」

静江が怖い顔で微笑しているので、鮎美は意見を変える。

「はい。どうぞ建設してください。めっちゃ役に立つと思います」

「ははは、すっかり教育されてるね。けど、議論を深めておかないと、ただのイエスマンでは困ることもあるよ。正直、ボクも、このダムの必要性は疑問視している」

「雄琴先生、また、そうやって……」

「たしかに水害対策は必要だろうけど、もっとも危険なのは下流の低地に住んでいる500世帯だろう。その500世帯二千数百人のために、260億円のダムが建設される。1世帯あたり5200万円も投下されるなら、いっそ移住させるべきだよ、ダムが建設される山村を移住させるよりね」

「もう山村の移住は終わっていますから」

「今さら止められない、ってやつだね。たしか、新幹線の新駅も用地買収は終わってたっけ？」

「はい、すべての地主から土地を買い上げています」

「これも今さら、やめられないだろうね。井伊市の方では、党の一部まで反対を公言してるけど」

「え？ 自民党やのに、反対してはるんですか？ おおっぴらに？」

「井伊市には東海道新幹線開業の頃から駅があるのは知ってるよね」

「はい、一応」

「その井伊駅から40キロ京都よりに新駅を造れば、当然に井伊駅の乗降客は少し減る。六角市から東京へ行く人は今まで通り井伊駅を使ってくれるだろうけど、新駅ができる三上市の人は当然として県南部の何割かは井伊駅ではなく新駅を使うだろう。これは井伊市にとってには損失だ。だから、自民党議員が反対したとしても党員も市民も領いてくれる。党本部も仕方ないな、って顔して黙認さ」

「え〜……ほな、県全体の発展とかは？」

「市議は市の発展を考えるけれど、県議や衆議院議員には県内で分轄された選挙区があつて一番に考えるのは選挙区の利益になるんだよ。だから井伊市を選挙区にもつ議員は新駅建設に積極的でないし、三上市を選挙区にもつ議員は血眼になつて建設しようとする。結果、自民党議員であつても井伊市に基盤がある人は新駅反対だし、逆に民主党議員であつても三上市に基盤がある人は新駅賛成したりする。一本気な共産党だけは三上市から立候補していても新駅反対だったりするけど、当選しなかつたりする」

「……。県全体として必要か、不要かを考えんの？」

「実は、それを考えるのにもっとも適した選挙区をもっているのは県知事とボクら参議院議員さ。知事もボクらも県全体を一つの選挙区としている」

「選挙区かあ……まあ民意の反映ちやー反映なんかなあ……」

「それでもボクは井伊市民だからね。ちよつと北部よりになる。六角市は、だいたい中央だから芹沢鮎美の見解は下手をしたら県政の分水嶺になるかもしれないね」

「うっ……プレッシャーを……」

「実際、ボクのところにも知事選に向けて反対派からのアプローチが多い。民主党も含めてね」

「そうなんや？ 会わはるん？ そういう人らと」

「ボクは任期中だからね、面談を求められれば党や意見の異なる人たちとも時間の許す限り会わないと」

「うちにも、いろいろ陳情くるし……任期が始まったら、もっと容赦な

いんか……」

「そうだよ、おかげで、たまに、いろいろな問題が、どうでもよくなることがある」

「雄琴はん……それを言ったら、おしまいやん」

「ああ、だから気をつけてるよ。ちなみに井伊市民として新駅の欠点を教えておくならば、まず井伊駅と違い新駅は在来ローカル線に接続しない。新駅と在来駅は500メートルも離れていて歩くには、きつい。おまけに京都より以西へ行くなら、京都か新大阪で乗り換えることになるから、今まで通りの在来線で行っても、たいして時間は変わらない。なのに、建設費は330億円と同規模の平均的な新幹線駅の2・6倍を計上してる。おまけに請願駅だからJRは一円も出さないし、JRとしては採算性を疑問視しているのかもしれない。さて、それでも造るのか、しかも県全体の借金で、となる」

「つまり、反対なんやね。県の北部は」

「けど、北部は北部でダムを造ってもらおう予定だ」

「………お金の引っぱり合いやん。しかも一部の利益のための」

「政治の本質は予算の引っぱり合いだよ」

「………やばい……うちも、いろいろな問題が、どうでもよくなつて……」

「雄琴先生！ 芹沢先生のやる気を奪うならポスター貼りでもしてきてくださいー！」

静江が直樹を追い出して、しばらく勉強させて昼過ぎになると車で市内の料理店に移動した。

「今日は、お兄ちゃんがおごつてくれるって」

「合法的な範囲で？」

「鮎美ちゃん、発言は軽いのに、そこは気にするのね」

「お金の問題って一番失敗しそうですやん」

「いい心がけね。金と女、これが一番失敗するから、まあ鮎美ちゃんが女で失敗することはないとして、変な男と付き合うのはやめてね」

「…はい…」

「石永さん、私まで連れてこられても……」

鷹姫は料理店が市内の有名店で高そうだったので戸惑っている。

「あ、今回は気にしないで。普通、議員同士が会食するとき、秘書は同席しないけど、私とお兄ちゃんの関係もあるし、宮本さんは鮎美ちゃんとも友達だから、こういう店の雰囲気も知っておいて。これも勉強」

「はい」

三人が話していると、静江の兄も入店してきた。若い衆議院議員らしく青みがかったスーツを着ていて逞しい体格と日焼けした顔をしている兄の石永は2期目の二世議員で父は大臣まで務めている。

「やあ、芹沢さん。久しぶりに、お会いできて嬉しいよ」

「こちらこそ、本日はお招きに預かり光栄です。石永先生におかれては、ますますご盛栄のこととお慶び申し上げます」

鮎美が挨拶し、鷹姫も頭を下げると、石永は気さくに笑った。

「ちゃんとした挨拶も大事だけど、そうかしこまらないで気楽にしてくれていいよ」

「そう言うてくれはるんでしたら、そうさせてもらいます」

もう何度も会っている仲なので鮎美も緊張せず、予約していた個室に入って会食する。琵琶牛のランチコースを食べながら、石永が言う。

「芹沢さんは危機管理については、どこまで考えたことがあるかな？」

「危機管理ですか……」

あまり知識のない分野だった。静江が兄に言うておく。

「男って、すぐ自分が得意な話にもっていかうとする。お兄ちゃん、地元市民への報告会でも防衛と危機管理の話ばかりで、もつと市民生活にそくした話をしなさいって御蘇松知事にも怒られてたでしょ」

「お前は黙ってる」

石永が妹にヘッドロックをかけた。

「……」

鮎美と鷹姫が驚いていると、静江はヘッドロックから抜けるために

肘打ちを兄のわき腹に入れた。

「ぐふっ……く！ やるな。飯時に腹を狙うとは」

「フッフ、先に仕掛けたのは、そっちよ」

静江と石永がプロレスの構えを取ったので、ますます鮎美と鷹姫が驚く。それに気づいて静江が構えを解いた。

「お兄ちゃんのバカ。二人があきれてるでしょ」

「すまない。つい……」

「ごめんね、お兄ちゃんプロレスバカだから」

「お前もだろ」

どういふ兄妹関係なのか、だいたいわかったので鮎美は気楽に座り直した。そして話題を戻す。

「えっと、危機管理の話でしたよね。石永先生」

「ああ」

「付き合わなくていいわよ。知多半島はミサイル撃たないし」

「お前、家に帰ったら絞めるからな」

「フフン。できるかしらね」

「仲のええ兄妹で、よろしいですね」

「……美味しい……」

話の流れとは、まったく別に鷹姫は一口食べた琵琶牛のしぐれ煮が美味しすぎて思わずつぶやいていた。それで静江が冷静になる。

「ごめん、ごめん、まあ、今日の目的はお兄ちゃんと鮎美ちゃんの親善だから気楽でいいんだけど、あんまりハメを外しすぎるのもよくないね。どうぞ、お兄ちゃんの政治的見解ってやつを披露してくださいな」

「まったく、お前は……。まあ、けど、芹沢さんの評判もいいし、うまく教育役をしてくれてるみたいだな。ありがとう、静江」

石永も気を取り直して語る。

「国において、もっとも大切なことの一つは危機管理なんだ。日本を取り巻く環境の中で、懸念すべきことは何だと思う？」

「えっと……北朝鮮問題なんかですか」

「そう。他には？」

「他……と、言われても……」

「君たち高校生は、あまり知らされていないけれど、中国やロシアも十分に脅威だよ」

「そうなんですか……」

「宮本さんは剣道が強いんだって？」

「はい」

「せやから、謙遜とか覚えて！」

「ははは。面白いね。つつこみのタイミングが、さすが大阪出身」

「そんなんで誉められても嬉しいいいいです。鷹姫の剣道は本物やけど」

「では、宮本さんは戦いの観点から、現在の日米、ロシア、中国、韓国、北朝鮮、台湾、東南アジアの関係を、どう感じる？」

「……………」

鷹姫が黙って考え込み、答える。

「攻め入るべき大義名分のない疎み状態です」

「ほお、さすが」

石永の目が鮎美より鷹姫に興味をもった。

「では、現状の打開策は？」

「……………」。打開のために動くより、静を保ち現状を維持しつつ、兵と刀を鍛えるべき時期です」

「うむ、いいね。宮本さん、いいよ」

「宮本さん、それお兄ちゃんの前ではいいけど、よそで言わないでね。自衛隊は兵じゃないからね」

静江は抑えるけれど、兄は言ってみたいことを言った。

「自民党の中でも極端な意見にはなるけれど、個人的には日本も核武装すべきではないかと考えているんだ」

「……………」

「核って……………」

「お二人は、どう思う？」

「……………」

鷹姫が考え込む間に鮎美が答える。

「それは、ありえんでしょ」

「なぜ？」

「なんでって……無茶というか、無理っちゅーか……9条もあるし」

「もし、9条がなければ？」

「うー……それでも……広島長崎のこともあるし……」

「むしろ、その二度の体験こそが、二度と撃たれたくないという核武装への動機にならないかな？ 今だって日本を、東京を、狙っているミサイルはある」

「……それは、……」

「単純な話だよ。向こうが真剣を持っているのに、こちらが竹刀では勝負にならない」

「せやからって……」

鮎美の反応が、ごく普通の女子高生の範囲で予想内だったので石永は鷹姫に期待した。

「宮本さんは、どう考える？」

「いくつもの条件がありますが、日本も核を持つべきでしょう」

「おお……」

「えー……」

石永が嬉しそうに、鮎美と静江が嫌そうに声をあげた。石永が先を促す。

「その条件とは？」

「あくまで核は最期の最期、進退窮まったときの最終手段として秘密裏に用意しておくべきであり、それを国際社会に公言すべきではありません」

「だが、公言しなければ核の抑止力は期待できないが？」

「不甲斐ない話ですがアメリカの核の傘を期待しておけば良いでしょう。ただし、この期待が裏切られた場合の備えとして持つておくのです。ゆえに、秘密裏に持つべきであって、公言しては国際社会から蒙る批難と圧力によって、かえって国を損ねるでしょう。また、世界が求める潮流として核不拡散の方針がありますが、唯一の被爆国である日本が核をもつことは核不拡散の道を完全に閉ざします。他の小国

「私たちは、被爆国の日本でさえ持ったのだから我々も、と続いてしまおうでしょう。これは世界全体の利益を損ね、危険性を高めます」

「うむ……………たしかに……………」

「ゆえに核武装は秘密裏に、そして同時に兵を鍛え、覚悟を高め、いざ危難のとき我らは核が無くとも、その武威にいささかの衰えもなく、いかなる脅しにも怯みはしないと見せつけておくことが抑止力になります。なまくらな真剣より、気の籠もった竹刀。そして隠し持った脇差し、その二段構えです」

「……………素晴らしい！ 女性とは思えないほど……………よく考えて……………」

石永が感動して言い募る。

「宮本さん、私の秘書にならないか？ 君は素晴らしいよ。ぜひ、私のところに来てほしい！」

「え……………」

「なっ?! ちよっ！ あかん！ あきませんよ！」

鮎美が鷹姫を両腕で抱きしめて言う。

「鷹姫は、うちの秘書です！ 絶対あきません！」

「お兄ちゃん……………何を言い出してるのよ……………冗談はやめて」

「本気で言ってる。宮本さんの見識、これは希有だ。実に貴重だ。旧軍士官の心意気……………いや、武士の魂を感じた！ ぜひ、私のところで秘書をやってほしい。今の二倍、いや三倍の給料を出そう」

「三倍……………」

「っ！ イヤや！ 鷹姫、行かんといて！ うちの秘書でおってよ！」

鮎美が涙を流して懇願するので静江が怒った。

「お兄ちゃん！ いい加減にしなさい！」

「静江、お前……………」

「鮎美ちゃんが泣いてるでしょ！ バカっ!!」

「……………すまない……………つい興奮して……………」

「本当にバカなんだから」

「いや……………けど、今の高校生で……………ここまで考えてる子は、なかなか……………惜しいな……………。私はいつでも歓迎だから、気が変わったら来て……………」

ほし〜」

「お兄ちゃん！」

「ああ、わかった、わかった。すまなかつた。ごめん、芹沢さん。秘書を盗ったりしないから、もう泣かないでくれよ」

「…ぐすつ…」

鮎美は濡れた目で石永を睨みつつ、まだ鷹姫を抱いたまま離さない。

「危機管理に話を戻そう」

「……………」

「戦後、日本は危機管理について考えてこなかつた。国家に危難あるとき、どう対応するか、そのマニュアルさえない。もし東京へ核ミサイルが飛んできたら、どうなると思う？」

「……………」

「こういったことを平時から、ちゃんと考えておきたいわけだ」

「……………うちは、秘書を盗られんように考えておきます。ぐすつ…」

「嫌われたわね」

「すまなかつた。静江、あとフォロー頼む」

もう居心地が悪くなつたのと、次の予定があるので石永は退席し、女三人だけでデザートを食べてから店を出た。まだ鮎美は鷹姫に腕をからめて抱いていた。

「芹沢先生、そろそろ離してください。外に出ると暑苦しいです」

「盗られたら、イヤやもん！」

「芹沢先生……………」

「芹沢先生、もうお兄ちゃんも行ったから。あと人目もありますから」

「…ぐすつ…」

鼻を嚙りながら鮎美は抱いていた腕を離れたけれど、右手で鷹姫の手を握った。その様子を見て静江は午後からの勉強を諦めた。

「今日は、もう島に戻る？」

「……………」

無言だつたけれど、ほぼ肯定だつた。

「じゃ、送るわ」

「ありがとうございます」

「…おおきに…」

港まで送ってもらう間に鮎美も落ち着いた。夕方前なので定時の連絡船を待ち、1時間以上も手をつないでいた鷹姫が汗ばんだ手を離して欲しく言う。

「そろそろ、いいですか。鮎美」

二人きりなので、そう呼んだ。

「…ごめん…おおきに…」

それでも名残惜しく手を離れた。鷹姫がつぶやく。

「…あんなに泣くなんて…」

「…ずっと、うちの秘書でおってよ」

「……………」

「鷹姫……………」

不安そうに呼ばれると、鷹姫は微笑した。

「わかりました。そこまで言われるのも秘書冥利に尽きることでしよう」

そう言つて武士が主君に忠誠を誓うように鮎美の前に膝を着いて見上げた。

「二君にまみえることなく、お仕えしましょう。我が忠誠は、すべて、あなたに」

「……………」

あまりに嬉しくて鮎美は抱きついた。

「鷹姫！ 鷹姫！ 大好きやよ！」

「お気持ちわかりました」

鷹姫も抱き返して、島に戻ってから二人で過ごすために、島の大山に登つて語り合つた。とりとめもないことを話して、その最期に鮎美は勇気を出して問うた。

「鷹姫は同性愛つて、どう思う？」

「……………」。なお慎重な議論を要する、です」

「うっ…いや、そういう党としての見解やなくて。鷹姫、個人の。個人

的な見解として、どう思うかなって聞きたいの」

「私の………」

少し考え、すぐに答える。

「人の道に外れた愚かな行為です」

「っ……」

訊かなければ良かったと、強く後悔した。

夏休み 野球拳

早朝、鷹姫は道場で目を覚ますと眠っていた布団を片付け、朝稽古の準備をする。準備の途中で門下生たちも現れ、いつも通りに稽古を始めた。その稽古が終わりかけになり、鷹姫は対戦していた健一郎と、わずかの差で先に小手を打たれ、面を打ち込んでいた。

「今のは健一郎さんの勝ちです。とても、よかった」

「ハア…ハア…あざす！」

「そのように、ありがとうございますを省略する癖はやめなさい」

「は…はい。…ハア…」

健一郎は一礼して稽古を終える。鷹姫も防具を外しながら、つぶやいた。

「健一郎さんが上達したのか…私、なまったのか…あるいは、その両方…」

「両方だな」

父の宮本衛が言った。短い髪と鋭い目つきの衛は長女の目を見て続ける。

「人間、二つのことを成すには今まで以上の精進が要る。同時に休息も」

「はい、心得ておきます」

「朝食にしよう」

「はい」

着替える前に、少しは気にするようになったので濡れタオルで身体の汗を拭いてから制服を着て、自宅の食卓へ向かった。自宅は狭くて小さい。もともと小山の中腹にあった平地に道場が大きく築かれ、それに付属するように家が建てられているので、島にある他の家々が小さめである以上に狭かった。

「お父さん、お姉ちゃん、おかえりなさい」

5歳と3歳の腹違いの妹が元気そうに言ってくれる。

「ただいま」

父が居間の上座に座り、鷹姫は朝食の準備をしている継母に声をかける。

「お手伝いします」

「ありがとう。ギルが焼けてる頃だからお皿にもってちょうだい」

「はい」

焼き魚を皿にもって食卓に運んだ。家族5人で朝食を捕ると8年前から継母となっている郁子が現金で2万円を差し出してくる。

「鷹姫さん、お給料をそのまま渡してくれたでしょう。少しは手元に持っていないと街で行動するのに困りますよ」

「はい。大切に使います」

「こちらこそ、とても助かりました。この子たちも、よく食べるようになったから」

「鷹姫、すまないな。もし仕事がつらいなら、いつでも辞めていいんだぞ」

「いえ、慣れないことばかりで疲れますが、つらいということはありません。ご心配なく。ごちそうさまです」

食べ終えた鷹姫は食器を片付けて玄関で靴を履く。その靴は高校入学時に近所で同じ高校を卒業した親戚からもらった物を3年使っているので古くなってきているけれど、通学時の歩行距離が短いので靴底は残っている。制服もおさがりを3年使ってきたので、こちらは限界に近いものの、夏服は9月末までで用済みとなるので、静江から遠回しに買い換えるように言われたけれど、このまま使うつもりだった。

「いってきます」

「お姉ちゃん、いってらっしゃい」

「姫花、姫湖、あなたたちも準備なさい」

継母の声を背後に聞きつつ鷹姫は港に向かった。夏休みなので学校は無いけれど、今日も自民党支部で静江から教えを受けなければいけない。通学ではないので老船頭の手を煩わせることはさげ、連絡船を待っていたけれど、鮎美が定刻になっても現れない。船長が問うてくる。

「芹沢先生は、どうしたんじやいな？」

「……。わかりません。見てきます」

「じゃったら、待つてるわ」

「いえ、定時運行してください。向こうでも迷惑になりますから」

「けれど、議員先生を置いて出発するのは……」

「芹沢先生は特別扱いされることを避けておられます。どうか、定時運行をお願いします」

「そうか……。まあ、定時じゃしな……」

通学で乗せてもらう小舟と違い、他の客もいるので一人のために待たせることを鷹姫も固辞したし、船長も鮎美の自宅方向を眺めてから、誰も来ないので出発することにした。鷹姫は港から鮎美の家まで歩く。その途中で健一郎と彼の母親に出会った。

「あら、鷹姫さん。ちようどいいわ」

「はい？」

「今週の日曜日、名古屋へ出かけようと思っているの。いっしょに、いかが？」

そう言いながら母親は健一郎を肘でついて促した。健一郎が恥ずかしそうに許嫁である鷹姫へパンフレットを見せて言ってくる。

「…6月に、はやぶさが小惑星から持ち帰った欠片が…名古屋科学館で展示されてるから…鷹さんも、……どうつすか？」

「はやぶさ……」

そういえば、そんな話が自民党支部でも世間話になった気がするけれど、あまり興味はないし、だいたいの日曜日には党関連の予定が入る。夏休み、ほぼ毎日のように出勤しなくてはいけないけれど、それで月給30万円なら不服は無かった。

「せっかくのお誘いですが、日曜日にも予定があります。申し訳ありません」

「そ、そうつすか…」

「残念ね。忙しいみたいだけど頑張つてね」

「はい。では、急ぎますので、これで」

鷹姫は頭を下げて、すぐに鮎美の家に急いだ。

「おはようございます。芹沢先生は、ご在宅でしょうか？」

玄関前で鷹姫が挨拶すると、鮎美の母親が答えてくれる。

「いるわよ……けど、起こしても起きないの、ごめんなさい」

「ご体調を崩されたのですか？」

「そんな感じでもないけれど……宮本さんは、すっかりアユちゃんに敬語を使うのね。私も先生って呼んだ方がいいのかしら？」

「……それは、……どうでしょう……わかりません……」

「ちよつと様子を見てきてくれる？ あんまり疲れてるなら、私も心配だから行かせたくないし」

「はい、あがらせていただきます」

鷹姫は靴を脱いで階段を登り、鮎美の部屋に入った。

「芹沢先生、どうかされましたか？」

「……」

鮎美の姿は見えないけれど、布団が盛り上がっているの、そこにいるのだと一目瞭然だった。

「芹沢先生、どうされました？」

「……二人つきりのときは……鮎美って……」

「鮎美、どうしたのです？」

「……何でも、あつさり……」

「もう時間ですよ。体調が悪いのですか？」

「……気分が……」

鮎美の声には元気がないけれど、風邪を引いているような枯れた声ではなかった。

「そうですか。では、石永さんに連絡して……」

鷹姫は党から支給された古い携帯電話をカバンから出したけれど、ちよつと静江から着信が入る。

「もしもし、芹沢鮎美の秘書、宮本です」

「教えた通りに応答するのは、えらいけど、私からの着信だつて画面に出るでしょ。いちいち私にまで秘書って名のらなくていいから」

「はい、以後気をつけます」

「……。ま、それは、そうと。船に乗ってなかったけど、どうしたの？」

「乗り遅れた？」

静江は対岸で到着を待っていて二人が現れないので電話してきたのだった。

「芹沢先生がご気分がすぐれないようです」

「風邪？」

「どうでしょう……」

「過労かもね」

「そうかもしれません」

「わかったわ。回復したら、連絡しようだい」

「はい」

静江との電話を終え、鮎美の様子を見る。枕元に正座して呼びかけた。

「芹沢先生」

「……二人やし……」

「鮎美、顔くらい見せてください」

「…………」

鮎美が潜っていた布団から少しだけ顔を出した。長時間泣いていたような顔だった。

「何かあったのですか？」

「…………」

昨日の夕刻に鷹姫から、人の道に外れた愚かな行為、と断言されてから鮎美の気分は下降する一途で夜中ずっと泣いていた。今は涙も枯れて、気力も尽きて、起きることさえ億劫だった。

「このまま寝ていきますか？」

「…………」

「そうした方が良さそうですね」

鷹姫は立ち上がろうとしたけれど、鮎美が手を伸ばしてきてスカート裾をつかんだ。

「鮎美、どうしたのです？..」

「………ここにおってよ」

「わかりました」

「……………」

鮎美は横になったまま、正座している鷹姫の膝を見つめる。鷹姫はスカート丈を変更して見えないけれど、正座すると両膝は見えるし、その膝と膝の間も少しだけ見える。ゆつくりと鮎美は虫が這うように、鷹姫の膝へ顔を近づけた。

「何をしていますのですか？ 鮎美」

「……膝枕して」

「膝枕……」

「お願い。そうしてくれたら、元気出るかも」

「そんなことで……。それなら、どうぞ」

素直に鷹姫が膝枕してくれるので鮎美は嬉しかった。後頭部に感じる鷹姫の腿が愛しくて仕方ない。そつと両手を伸ばしてスカートの上から腿を撫でた。

「……………」

「……………」

ずつと腿を撫でていても何も言わないので鮎美はスカートの中へ手を入れたくなる。拒絶されないように、拒絶させないように、ゆつくり指先からスカートの中へ手を入れた。しっとりとした肌の感触が指先から伝わってきて、鮎美は衝動に支配される。

「寝返りしてええ？」

「どうぞ」

言質を取ってから鮎美は寝返りして後頭部ではなく顔を鷹姫の腿へ埋めた。呼吸すると鷹姫の匂いが胸いっぱいに入ってくる。再びスカートの中へ手を入れて肌を撫でた。

「鮎美、くすぐりたいです」

「……ちよつとだけ……我慢して……。鷹姫の元気を分けて……」

「こんなことで元気になるのですか？」

「うん……。充電中なんよ」

「鮎美の顔、とても熱いですよ。熱があるのかも」

「平気やから……。このまま……ジツとしてて」

そう言った鮎美は少しずつ少しずつ鷹姫のスカートをめくって

き、顔で直接に腿へ触れた。

「…鷹姫の腿…、冷たくて…気持ちええよ」

「そうですか。い、息がくすぐったいです」

鷹姫は内腿の間を通る鮎美の呼吸がくすぐったくて逃げようとしたけれど、逃がすまいとして鮎美の両手がお尻を押さえてくる。鮎美の両手がスカートの中で臀部を捕まえて離さない。

「……………」

これ以上は、あかん、あかんのに、もう止められへん、と鮎美は少しの葛藤をしたけれど衝動に飲み込まれて、指先を鷹姫の下着の中へ入れていくと同時に内腿を舐め始めた。

「くっ、くすぐりたい！ やめてください！」

「ハア…ごめん、もう少しだけ…ハア…」

いよいよ鮎美の両手が下着をさげる。

ズルツ…

どうしても脱がせたかったし、間違ったことだと理屈ではわかっていても、鷹姫の股間に至りたかった。けれど、あと少しというところで鷹姫が怒った。

「やめなさいと言っているでしょう！ いい加減にしなさい！」

一瞬、鷹姫は股間を開いた。その次の瞬間に鮎美の後頭部を膝頭で押さえつけ、鷹姫の股間にキスしようとしていた鮎美の唇は畳へ不本意なキスをさせられる。さらにお尻を掴んでいる鮎美の右手首を握ると、大きく肩を捻ってあげる。

「痛い痛い?!」

「言つてきかないからです！ ふざけるのもたいがいになさい！」

肩を捻られた鮎美は仰向けになって肩関節を脱臼させられるのから逃れたけれど、間髪無く鷹姫が両内腿で鮎美の肘を挟み込むと、後ろへ倒れ込む。鮎美の顔と胸は鷹姫の脚で押さえつけられ、鷹姫の胸の柔らかさを鮎美は腕先で一瞬だけ感じたけれど、次の瞬間には鷹姫が背筋をそらせ、鮎美の肘関節を反対に曲げてくる。

「痛いいいいい！ ギブ！ ギブ！ まいった！ まいった！ 参りました！ ううう！」

「たつぷり反省なさい！」

「折れる折れる?! いいいたあああ！」

鮎美が降参しても、すぐに鷹姫は力を抜かず、怪我をしないギリギリのところまで痛めつけてから、解放した。

「ハア…ハア…折れるかと思もた…ハア…ハア…」

「いつまでも、ふざけるからです。人の身体を舐め回して、あなたは犬ですか」

「ハア…ハア…怒ってる？」

「当たり前です！」

「ごめんなあ……」

「まったく！ 十分に元気ではないですか。悪ふざけもたいがいになさい」

「へへへ……ごめん、ごめん……」

怒っているとんでも、下手をすれば強制わいせつになりかねない行為を悪ふざけという認識で済ませてくれそうなので、鮎美は肘の痛みを忘れることにした。

「静江はん、どう言うてた？」

「回復したら連絡するよう言付かっています」

怒っていても秘書としての応答はしてくれる。もう、それほど怒っている顔ではないので鮎美は微笑ませたくて言ってみる。

「ふざけたお詫びに、かねやのシュークリームおごってあげるよ」

「……」

怒っていた顔が甘味に期待する顔になったので鮎美は安心した。そして卑怯だと自覚しつつも、意図的に話題を変えながら、また鷹姫の肩に触れる。

「民主党が言い出してる高速道路の無料化って、どう思う？」

「無料化の社会実験をしているようですが、その結果次第……ただ、私は車の存在しない、この島で育ったので高速道路を体験したのは修学旅行の…、あの、鮎美、暑苦しいですからベタベタと触ってきたり抱きついたりするのはやめてください」

肩に触れるだけでは足りず、すぐに鮎美は抱きついていった。

「うちの秘書が盗まれんように確保してるんやもん」

甘えた声で言うと、タメ息をついて諦めてくれる。

「はあ……十分に元気ですね。次の便で支部に向かいましょう」

「え……ここで鷹姫と二人で勉強したいなあ。島でええやん」

鮎美も人前では抱きつけないことをわかっている。この部屋にいれば、またチャンスがあるかもしれない、と企んでいると鷹姫が言う。

「シユークリーム、かねやは島にはありません」

「そうやったね。ごめん、ごめん。着替えるわ」

鮎美はパジャマを脱ぐ。下着も脱いで裸になったけれど、鷹姫は静江へメールを打っていて鮎美を見たりしない。見てくれないので鮎美は裸のまま布団に座った。

「なあ、うちのおっぱい大きいと思わん？」

「……。そうですね」

メールを送信した鷹姫が認めた。

「でも、鷹姫のおっぱいは形がいいよね」

「そうなのですか。あまり考えたことがないので、わかりません」

「ちよっと比べっこしよ。脱いで見せて」

「支部に向かう予定を忘れていませんか？」

「どうせ、連絡船は1時間後やん」

「それは、そうですね……」

「なあ、おっぱい見せて」

「……イヤです」

「シユークリームに抹茶パフェもつけるから」

「……………」

少し迷った鷹姫がブラウスのボタンを外し始めた。ブラジャーも脱いでくれる。

「ええ形してるわ。最高に」

「大きい方が男性は喜ぶと聞いたことがあります」

「男なんて、どうでもええやん」

鮎美の手が鷹姫の胸に触れる。

「この柔らかさといい、形といい、鷹姫の身体はホンマにキレイやね」

「……あまりベタベタ触らないでください」

「腋の毛も剃ってないのが自然な感じで、むしろカッコいいし」

「そろそろ服を着てもいいですか」

「あと少し。なあ、スカートも脱いで見せて」

「どんな意味が？」

「うちも裸なんよ。比べっこしよ」

「……」

「妹さんらにも、お土産のシークリーム買ってあげるよ」

「……」

血は半分しかつながつていないけれど、あの子たちの笑顔は見たかった。鷹姫がスカートの留め金を外してチャックをおろした。

パサツ：

スカートが畳へ落ちる。鮎美は当然という手つきで鷹姫の下着をさげる。

「……」

「……」

二人とも裸になった。

「手つないでいい？」

「……」

鷹姫が手を出してくれるので優しく握った。手を握りながら身を寄せると胸と胸が接する。鮎美は今すぐ抱きついてキスをしたくなかったけれど、もう失敗したくないので慎重に攻める。

「ホンマに鷹姫の身体はキレイやね」

「……そう誉められても……」

戸惑っている鷹姫の首筋へキスをした。

「う、何度も言いますが暑苦しいです」

「ちよっとだけ抱っこさせて」

「……」

拒否されなかったので鮎美は両腕で鷹姫へ抱きついた。ぴったり

と身体をよせ、一つになる。

「…ああ…」

声を出すつもりはなかったのに感情が高ぶって、どうにも切なく喘いでしまった。身体が熱くて、すぐにも理性を失いそうで、自分が怖い。明らかに鷹姫は何もわかっていないのに、うまく誘導して裸にまでしてしまった。けれど、これ以上は口実が思いつかない。ただ、一つだけ悪辣な方法は脳の片隅にある。有名店のシュークリームとパフェは2000円くらいするけれど、鮎美の手元には200万円がある。もしかしたら、鷹姫はそれで身体を許してくれるかもしれない、そんな邪悪な期待をしてしまう。許嫁だからと、あまり頓着せずに結婚しようとしている鷹姫なら、愚かと言った行為でも頓着せずに受け入れてくれるかもしれない。

「……………」

「……………」

けれど、そんな援助交際のような汚いことはしたくないし、させたくない。でも、させたくないけれど、いつそ手に入らぬなら、どんな手段を使っても手にしたい。鮎美は感情と衝動が高ぶって泣きそうになり、そして喉元まで悪魔の提案がせり上がってきた。

「もし、うちに…」

それを止めさせたのは、階段を登ってくる母親の足音だった。もう服を着ている時間はない。鮎美は鷹姫から離れると、堂々と立った。母親が紅茶を二人分もって部屋に入ってくる。

「お茶を……。アユちゃん、裸で何やってるの？ 宮本さんまで」

「ちよつと野球拳をしてん！ 大阪の女子高生にとって野球拳は必須やから鷹姫に教えたる思て！」

「……………」 大阪の女子高生全員に謝りなさい。あなた前の学校でも似たようなことをして問題を起こしたでしょ。後輩を無理矢理に脱がせて…」

「わあー！ わああ！ その話はカットで頼みます！」

「これからは議員になるんだから、しっかりしてちょうだい。変なこと週刊紙に載らないですよ」

母親は小言を言いながら紅茶を置いていった。鷹姫が黙って服を着るので、鮎美も着てから紅茶を飲む。そして言い訳のように加える。

「かねやで紅茶もおごるから」

「……………。母親を悲しませるのは、とても悪いことです」

「っ…、そ、そうやね、氣いつけるわ」

受け流したけれど、鷹姫の一言は昨日と同じほど胸に刺さった。外に出て真夏の港で連絡船を待ち、二度も静江に出てきてもらうのは悪いので、また便数の少ないバスを待ち、支部に出向いたのは昼前だった。遅くなった分を取り戻して勉強し、昼休憩も遅い時間になった。それぞれに持参の弁当を食べながら、静江はテレビをつけた。

「CMの後はアナログ放送終了とデジタル放送への移行について特集を…」

「このテレビも買い換えないとダメなのかしら」

静江がブラウン管のテレビを見て言っている。

「意外と古いテレビを使っていますね。自民党っていうたら、なんかお金いっぱいありそうやのに」

「物は使えるうちは使うのよ。お金持ちはお金を使わないから、お金持ちなの」

「あく、なるほど…：…それ、ケインズ経済論的には、一番やめてくれや、ってヤツちゃいます？　もっと景気よーつかえ！　みたいな」

「資本そのものに蓄積する傾向と、そもそも富みの増大こそが目的ですから、呼吸するなど注文をつけるのと同じでしょう」

鮎美と鷹姫の受け答えを聴いて静江は満足そうに頷いた。

「だんだん教育効果は出てきたわね。自然にケインズがでるあたり。実際、大学の基礎過程でやることを速攻で無理矢理つめこみながら、平行して社会常識と議員常識、地域のこと、行政組織や法令のことまでつめこんでるのに、よく二人ともついてきてくれてるわ」

「思い返すと、高校までの勉強ってホンマ社会で役に立ちませんやん。なんか意図的に無知にされてる氣いするわ」

「センター試験までの学習は、与えられたマニュアルと法則を理解し

応用する能力と、丸暗記する記憶力の程度で人を篩い分けするためのものだから。実社会で役立つ知識を与えないのは、余計な知恵をつけて理屈をこねる新社会人になってほしくないからよ」

「身も蓋もない話やなあ……」

鮎美が弁当を食べ終わると、テレビが別のニュースを流している。

「東京足立区で発見された111歳になるミイラ化した男性の遺体が見つかった事件で警視庁は、この男性の娘で年金を引き出していた女性に事情聴取するとともに、全国でも所在不明の超高齢者が多数存在していると見込み、年金の不正受給に……」

「えげつない話やな」

「この国は社会保障費の増大で沈むのではないでしょうか。切り捨てるべきは切り捨てなければ、幹そのものが倒れてしまうように感じます」

「宮本さん、さつき予算の勉強をしてくれて理解力も記憶力も確かだってわかるけれど、よそで言うてはいけないことは、より確かに覚えてね。他の先生方も内心で思ってるけど、絶対に言わないことつて、いっぱいあるから」

「はい」

鷹姫も食事を終え、すぐに勉強を再開すると静江に頼んで5時には、かねやの喫茶店まで送ってもらった。来店することを鐘留にメールで知らせていたので、出迎えてくれた。

「ハイ♪ お久しぶり。アユミン、宮ちゃん」

「おひさ」

「お久しぶりです」

「夏休みになって、ぜんぜん会えないから淋しいよ」

「せやから来たやん」

「アタシより、このサービス券が目的なくせに」

鐘留は店の会計が3割引になる券を見せて言う。

「ってか、アタシといっしょならタダなのに」

「おごってもらうのは、あかんねんて」

「なのにサービス券はいいんだ？」

「他のお客さんにも特別な便宜無しに提供されているサービスなら問題ないねん」

「せこいね、細かいね」

「やかましわ」

「きやははは、静かな方がいいしき。二階の奥に案内するよ」

「その前にシュークリーム、売り切れてない？」

「たぶんね。お持ち帰り？　いくつ？」

「5つほど頼むわ」

「あの子たちは二人ですよ」

「土産にすんのに、家族の人数分ないのはカツコつかんやん」

「そういうものなのですか……」

話ながら二階へあがって三人で着席した。鷹姫は抹茶パフェとシュークリーム、鮎美はストロベリーパフェを頼み、鐘留はモンブランを食べる。

「カネちゃんの露出、休み中は、より激しいなあ」

「そう？」

鐘留は丈の短いキャミソールと短パンを着ていて、すらりと美しい手足は丸出しだった。鮎美は見えないようにしようと思っけていても、ついつい露出された鐘留の内腿や腋、胸元を見ってしまう。ミユールから見える足の指も可愛らしくて、爪には凝った金魚のネイルアートまでされているので触りたくなってしまう。

「ジロジロ見ちゃってさ。アユミンの視線って、ホントエロいよね」

「ちや、ちやうよ。金魚のデザインが可愛いなって」

「あ、これ。ウッフ、いいでしょ」

久しぶりに会えて鐘留は機嫌が良さそうだった。よく見えるように鮎美の方へ足を向けてあげてくる。

「キレイやね。ちゃんと金魚に目えまである」

鮎美は足の指に触れてネイルアートを見つめた。涼しげで自由そうな金魚が鐘留に、よく似合っている。手にとって足を見つめている鮎美を見下ろしていると、鐘留は悪ふざけを思いついた。

「アタシの足にキスしてくれたら、党員になってあげよつか？」
「え……？」

「この前、テレビでやってたよ。自民党の国会議員って党員確保のノルマが課せられるんだってね。なんか民主に押されてきて、次の総選挙が危ないらしいね。政権交代かもしれないって」

「よー知ってるな」

「アユミンに関係するしき。で、ノルマ、どうなの？」

「まあ、こちらは衆議院やないからノルマってほど、強くは言われてないけど、増やしてくれるにこしたことはない程度には言われるよ」

「へえ、もう誰か勧誘した？」

「鷹姫が入ってくれた」

「秘書じゃん。他は？」

「他は、まだや」

「アタシも入ってあげてもいいかもよ」

「……。ホンマに入る気いあって言うてくれる？」

「あるよ。ほら、アタシの足にキスしてごらん。党員になってあげる」

「……………」

やや迷った鮎美が口づけする。

「え…、ちよ……マジで…」

鐘留は冗談だったのに、本当に足へキスをされて戸惑った。

「…アユミン……………」

「したよ。これで約束通り、党員になってや」

「……うん……ごめん……」

鐘留は罪悪感を覚えて、涙を滲ませた。

「ごめん……アユミンがノルマとか、そこまで気にしていると……思わなかった。言ってくれば、こんなこと……してくれなくても……入ったのに……ごめん」

鐘留が指先で涙を拭きながら言い募ると、鮎美も非常識な行動をしたことに気づいた。普通なら、いくら党員になってほしくても友人の足へキスをしたりはしない。ふざけた冗談だと一蹴して、勧誘だけは

進めればよかったものを、それほど強要されたわけでもないのに、あつさりと実行してしまった。そこには根本的には鐘留の足に惹かれていたという動機があつてこそその行動で、鷹姫以外には口づけしたくないという想いは、党員確保のためという言い訳で自己欺瞞され、あとに残った欲望だけが鐘留の足に吸いついていた。

「……本当に……ごめん……ごめんなさい……アタシは……アユミンとは対等な友達でいたいよ。ごめん……」

けれど、キスをされた鐘留には、そんなことはわからない。なのでノルマのために、なりふりかまわずになつて友人のプライドを踏みつけにしたと感じて泣けてくる。

「ごめんなさい……変なこと、させて……」

「うん……もう、ええつて。泣かんですよ。冗談で言うから、冗談で返しただけよ。大阪人はノリにもボケにも身体はるねん」

「ぐすつ……身体はりすぎだよ」

「平気、平気♪」

「……アタシはアユミンたちと会う前にシャワー浴びたから……足も、そんなに汚れてないはずだよ……そんなの言い訳にならないけど……」

「せやから、平気やつて。冗談やつてんろ」

「……うん……ごめん……」

謝る鐘留の頭を、鮎美は立ち上がって抱きしめた。抱きしめると、こんなときでも欲望を感じる自分が嫌になる。あまり長居すると連絡船に乗れなくなるので、かねやを出てバスに乗って港まで移動した。

「お土産のドライアイス、保ちそうなん？」

「はい、大丈夫だと思います。たくさん、ありがとうございます、芹沢先生」

今は他人も多いので、その呼び方で頷いた。

「うん、ええよ。あの子らも喜ぶとええね」

「きつと喜びます」

「けど、かなり歳の離れた妹さんやね。いくつやったっけ？」

「5歳と3歳です」

「つてことは、鷹姫が中学生くらいで……あのお母さん、若く見えるけど、鷹姫を産まはったとき、いくつなん？」

「あ……それは勘違いです。というか、私が言っていないませんでした。すいません。今の母は父が再婚した人です。私の母は、私が幼い頃に事故で亡くなったそうです」

「そつ……そうなんや、ごめん」

「いえ」

「……………うちは鷹姫のこと……どれだけ知ってるんやろな……」

「……………私も、芹沢先生のこと、よく知りません。今日は、驚きました」

「……………ごめん……………変なこととして……」

「いえ、立派だと思います」

「……………どこが？」

「党員確保のため、仕事のために、自分を抑えて無礼な人にも接する姿が本当に立派でした」

「あ……………あれは……」

どう答えようか考えているうちに連絡船が入港してきた。

「おーっ！ 芹沢先生え！ 秘書さん！ おかえりやすー！」

船長が叫んでくれる。手を振って答え、停船してから乗り込んだ。いつも通り10分で島に到着し、鷹姫は土産をもって自宅にいる妹たちを喜ばせると、すぐに剣道の稽古を始めた。それが終わって夕食を食べて入浴すると、寝間着で道場へ向かう。外にある厠から出てきた郁子とすれ違った。

「おやすみなさい」

「おやすみなさい。鷹姫さん、いつも道場なんかで寝かせて、ごめんなさいね」

「いえ、広いですし、落ち着きますから」

自宅は本当に狭くて五人の家族が寝る場所はなかった。妹が二人になってから、ずっと鷹姫は道場で眠っていた。

「でも、ごめんなさい」

「どうかお気になさらず」

継母と別れると、鷹姫は道場に布団を敷いて一人で眠った。

夏休み 夜尿

午前10時過ぎ、鐘留は夏休み中の高校生らしく遅い時間に自室のベッドで目を覚ました。

「……」

大きなベッドで小柄な身体を起こすと、悪夢の余韻に眉をしかめ、それから夜尿で濡らしてしまった下着の中のナプキンの感触を自嘲する。

「高校生にもなつて……バカみたい」

つぶやいただけでは感情を処理しきれず、ベッドサイドにあった飲み残しのジャスミンティーをグラスごと投げた。

ガチャン！ ビチャ：

ガラスの割れる音が響いて、すぐに静かになる。いつまでも濡れたナプキンを肌につけていたくないので取り去って丸めると、ゴミ箱へは入れずにカバンに隠した。室内のゴミ箱もトイレの汚物入れも家政婦が掃除するので捨てると思わずバレル。中学3年の頃には、月経以外のタイミングで汚物を増やすと家政婦が不審に思つて調べて母親にまで報告するとは考え至らず、治つたと思わせていた夜尿が続いていることを知られて殺意が湧くほど恥ずかしい思いをしたので、ずっと外出したとき捨てることにしている。鐘留はシャワーを浴びると、いつもは露出過多な私服を着ているのに、今日は落ち着いた柄のブラウスと長めスカートを選び、カバンを持って玄関を出る。庭で母親に出会つた。

「おはよう、カネちゃん」

「…おはよう」

「どこか出かけるの？」

「……………」

無視すると、それ以上は追求されない。庭にいた母親が2本の楠に祈っていたのが、気に入らない。障碍をもつて生まれた二人の弟が事件にならない死に方をした後、植えられた木だった。

「カネちゃん、その服、よく似合ってるわ」

「…そ」

「いつも、そういう服を着てくれると、母さんも安心よ」

「ちっ」

鐘留は舌打ちして庭を出ようとしたけれど、手土産を確保する必要があるので母親を振り返った。

「どこに持っていっても恥ずかしくない常識的なお茶菓子を、そこそこ多めにちょうだい」

「多めって、どのくらい?」

家が菓子店と精肉店とロープウェイを運営しているので、茶菓子は売るほどあった。

「…う〜……………」

問われて鐘留が悩む。そして黙って行くより、やはり説明して行くことにした。

「アタシ、友達の関係で自民党員になるから。その支部に持っていくの。ああいうところに持っていく常識的な御菓子で、あんまり高すぎで接待とか賄賂とか言われて断られない程度の御菓子をちょうだい」

「もしかして芹沢さん? ニュースにもなってた」

「まあ、そうだよ」

「いいお友達ができたのね」

「ちっ」

「すぐに用意させるわ」

隣接している店舗から母親は大きめの折り詰めを2箱、袋に入れて持ってきた。

「この季節、水菓子もいいけれど、カネちゃんが持つていくのに重いから一番人気の糸切りクッキーにしておいたわ」

「…。ありがと。じゃ」

受け取った鐘留は道路に出てタクシーを呼び、自民党支部を訪れる前にネットカフェへ入った。カウンターで自分名義ではない偽名の会員カードを出して入店し、パソコンの前に座るとIPアドレスを誤魔化す操作をしてからクラウド化してあるプログラムデータを使う。

「燃え上がれ♪ ライフイージス。その薄っぺらい盾、紙みたいにメラメラと」

気に入らない団体がネット上で他者から批難されるように仕向け、その様子をしばらく眺めて、トイレに行きたくなかったのでカバンを持って個室に入る。用を済ませてから、カバンから丸めたナプキンを出すと、汚物入れに捨てた。これで、おしっこしか染み込んでいない生理用ナプキンが誰の物かはライフイージスへの悪戯同様、わからないくなる。

「できそこないの命なんて、もともと受精しなきゃいいのにね。自分で殺しておいて樹なんか植えるなよ、バカ」

溜まった感情も水洗トイレに流していく。

「けど、さすがアタシの親、ちゃんと始末してくれて良かったよ。変な弟なんか生きてたらアタシの人生が楽しくないし。その判断は正しかったよ、パパとママは間違ってたない。間違ってたないよ」

自己暗示のようにつぶやいてトイレを出る。時刻を見ると、ランチタイムだったので退店した。

「お昼時に行くのは迷惑かな」

鐘留は近くのパスタ店へ入り、一人で昼食を済ませてから、再びタクシーで今度こそ自民党支部を訪れた。それほど大きくないビルの一階テナントにあり、美容室ほどの広さの支部でガラス壁にはテレビで見かける総理大臣のポスターや石永と直樹のポスターも貼っている。鐘留はドアを開けて入ってみる。

「ハーイ♪ 入会希望者です」

軽い調子で訪問したけれど、落ち着いた服装と手土産のおかげで、受付にいた職員は年齢が近い鮎美の関係者ではないかと感じてくれ、すぐに鮎美と鷹姫に会うことができた。間仕切り一つ奥に二人と静江もいて、何かの資料を読んだりして勉強していた。

「入会しに来たよ」

「おおきに」

「で、これワイロ。今後とも、よしなに。お代官様」

鐘留が土産の菓子の折り詰めを、いかにも怪しげに差し出しながら、いやらしい微笑をする。

「当家に伝わる黄金色の菓子にございます」

足にキスをしなさい、という冗談を言った鐘留が今回はどういう冗談を言っているのかわかるので鮎美も大阪育ちらしくノる。

「鐘屋、そちも悪よのオ。クツクク」

「お代官様ほどではありませんよ。ヒヒヒ」

「言いおるわ。はーははっははー!」

「ヒツヒツヒツ」

「……………」

鷹姫が会話のノリが理解できずに不思議そうに見ていると、静江がタメ息をついた。昔の悪代官と悪徳商人のチープな演技を自民党支部内でやらないでほしいという残念な思いと、ときどき本当に残念なことに議員と業者の癒着はあったりもするので、冗談が冗談で終わらないこともあり、18歳の二人の悪のりは目障りだった。

「はああ…芹沢先生の友達って、宮本さんみたいな、まともな人ばかりでもないのね」

「アタシは個性的なの。障害は個性っていうけど、逆に個性が障害ってことで、よろしく」

「カネちゃんはおもろいな。ま、このへんにして。静江はん、とりあえず入党の書類、あります?」

「はいはい。ともかく歓迎するわ。かねやのお嬢さん」

家柄は調査するまでもなく、そして鮎美の友人でもあるので、すぐに手続きは進み、鐘留は党员になった。静江がお茶を淹れて、もらった茶菓子を並べながら言う。

「できれば形だけでなく、いろいろと活動にも参加してくださいね。すぐに知事選もあるから、いい勉強になるわよ」

「ヒマで気が向けばね」

「たっぷり期待してお待ちしますよ」

軽口を叩きながら、しばらく鐘留は滞在したけれど、明らかに鮎美と鷹姫は勉強することが山積みという様子だったので、そろそろ帰る

うかと腰を上げかけたとき、また来客があった。

「ライフイージスの三島だ！ 芹沢殿にお会いしたい！」

入口から奥まで響いてくる三島の声がした。三島の雰囲気から受付の職員がアポイントのない訪問を拒否している様子だったけれど、鮎美は呼んだ。

「お会いします！ どうぞ！」

「ありがたい。お邪魔する」

三島が奥に入ってくる。今日は一人でハチマキはしていないけれど、黒のスーツは着ている。それがよく似合ってもいるものの、男物のスーツを女性の身体で着ているので、かえって胸が目立つしブラジャーも着けていないのが、わかる。

「送った資料は読んでいただけただけだろうか？」

「はい。どうぞ、座ってください」

鮎美が議員の卵として振る舞っているので静江は静観することにしたし、鐘留も興味のない顔をして、お茶を啜った。鷹姫は秘書らしく鮎美の近くに立って、もしも三島が危害を加えるようなことをしてくるなら、すぐに対処できるよう油断しない。三島は着席を促されても立ったまま、問うてくる。

「単刀直入に訊く。芹沢殿は我々に賛同していただけるだろうか？」

「ずいぶん性急ですね」

「命の危機だ、こうもなろう」

「せっかちな男は色よい返事をもらえまへんよ」

「……」

男と言われて、三島の険しい気配は少しやわらいだ。

「どうぞ、座ってください。三島はんとは、ゆっくりお話ししたいですから」

「わかった」

三島が着席した。

「資料は読ませてくださいました。うちの知らなかったことばかりで、まだ理解が深まったとは言えませんが、あなた方が主張したいこ

とは、わかったつもりです」

「では、賛同いただけるか？」

「逆に問います。とくに三島はん、あなた個人に」
「何だ？」

「あなたは性同一性障碍と同性愛を併発していると言われましたが、同性愛というのは病気でしょうか？」

「資料を読んだならば、知っているだろう」

「ええ、同性愛は指向だそうですね」

「わかっていて、なぜ問う？」

「本当に同性愛は病気ではないのでしょうか？」

「今さら何を。病気では無い。指向だ」

「けれど、性同一性障碍は病気なのですよね？」

「そうだ。脳と身体の性別が一致しない病気だ」

「そして、三島はんは自分を男やと感じているけれど、身体は女、せやけど同性と認識する男を好きになる、そういう状態ですよ」

「そうだ。だから何だ？」

「小児性愛者のことは、どう思いはりますか？ あれは病気ですか、指向だと思いますか？」

「むっ……………」

三島の勢いが止まり、考え込む。

「……………我の知識では、あれは病気だ」

「ええ、うちが勉強した結果でも、小児性愛はペドフィリア、精神医学上は病気と分類されます。けれど、あれが指向でない論拠はない」

「だから何だ？」

「あなた方は指向であっても、病気であっても、ひっくるめて社会の多様性を認めていくべきだ、という主張ですよ？」

「そうだ」

「ほな、小児性愛者も存在を是とするんですか？」

「……………。是とする。その者が違法なことをせぬ限り」

「では、日本では13歳以下との性交は同意の有無に関係なく……」

鮎美の発言の途中で静江が声をあげる。

「芹沢先生、ご予定、忘れてませんよね？」

そのセリフはあらかじめ決めていた暗号で、冷静になれ、という意味だったし、さらに静江は視線で、議員は陳情者と議論してはいけない、と伝えてくる。その意図を察して鮎美は語る。

「三島はんは先送りや検討する、って答えでは結局、納得されませんよね。他の議員予定者へも談判に行ってはる噂は聴いてます。だいたいの予定者は勉強中で即答できんちゅうーことでお茶を濁してるらしいですけど、うちはこの人とは、とことん理解を深めておきたいんです。結果、どう転ぶとしても」

「芹沢先生……」

「良い覚悟だ。若いのに肝の据わった女だな」

「話を戻します。日本では13歳以下との性交は同意の有無に関係なく罰せられます。売春も同じく。けれど、小児性愛者が海外の、それらの法が整備されていない国で、おのれの欲望を満たすことも、あなた方は是としますか？」

「……いや、道徳に反する。是としない」

「つまりは結局、小児性愛者の存在を認めないのと、同じですよ、それでは」

「………。他者に危害をおよぼすことなく、代償行為によって欲求を満たせばよい」

「同じことを同性愛者に言えますか？」

「当然だ。同意あつての関係だ」

「道徳とおっしゃいましたし、また他者に危害を、とも。では、同性愛は道徳に反しないのですか？ 人の道に外れた愚かな行為ではありませんか？ そして、他者という存在をパートナーだけでなく、より広く自分たちの両親、家族というところまで含めたとき、同性愛は他者を傷つけることになりませんか？」

「………。芹沢殿は、もしや……」

そこまで言いかけて三島は黙った。そして自重していた鐘留が自重に飽きた。

「ユキちゃんたちの団体が言いたいのはさ、メイン出生前診断の方だ

よ。外れクジを引かないように、あらかじめ間引いておくのはダメって話。だよな？」

「……。言い様は低劣だが、そうである。だが、その前に言っておく。我のもつ道徳において同性愛は不徳ではない。また、多様性を認める道徳においては両親をふくめ、周りが傷つくことはない」

「それは自分の道徳を他者に押しつけることに他なりませんよ。信仰の自由というものがありますが、宗教の中には同性愛を厳に禁じる宗教もある。そして、道徳と宗教は峻別しにくい。自らの信条を他者に強制することは不徳かつ不当ではないですか？」

「強制ではなく啓蒙であれば是だ」

「……。……。それで、あなたの両親は納得されましたか？」

「幸いにして、我は同性愛であつても身体は女であつたからな。男と結婚しているゆえ」

「っ……。そんなんズルいわ」

「……。……。出生前診断の話をさせていただく」

「……。どうぞ」

「あらゆる命の可能性を認めるべきだと、我々は考えている」

「……。……。その子の一生が苦痛に満ちたものだとしても？」

「それを感じる機会も与えぬのは、人の挑戦と可能性を否定するのと同義だ」

「生まれてこなければ、よかつた……。そう考える機会を与えよ、と？」

「そうだ」

「そして両親も苦しむのには？」

「必ずしも苦しみではない」

「……。……。障碍児をもつた両親、同性愛者の親、その何割が苦しみを味わっていると考えますか？」

「思想と精神の虚弱さが苦しみだと知覚させるのだ」

「……。……。思想と精神の虚弱さもまた生まれもつた障碍かもしれないよ、誰しものが強い心をもっているわけではない」

「あのさ、アユミン、関西弁が引つ込むくらいガチで討論してるとこ割

り込んで悪いけど、同性愛者と障害児の話って、別々じゃない？

エッチする相手が、ちよつと変わった趣味なだけで他は健康な人と、何の役にも立たない迷惑でしかない、できそこないは別でしょ？」

「カネちゃん……………近い未来に同性愛者は出生前診断で割り出されると、うちは予想するよ。せやから、この二つはリンクするねん」

「え？ 同性愛って検査でわかるの？」

「今は無理でも、二卵性双生児の片方が同性愛者であった場合と、一卵性双生児の片方が同性愛者であった場合では、もう一方が同性愛者である確率は倍ほどこちやうねん」

「うくん……………遺伝子が関与してること？」

「そうや。指帰って言葉で修飾してるけど、結局は遺伝性の疾患と科学的には同じかもしれないねん。それどころか、小児性愛も殺人嗜好も親による躰けは関係ないってデータもある。ダウン症と同じく、もって生まれた障碍かもしれん。厳密には染色体トリソミーと一部の塩基配列が生み出す不都合な個体の性質は別もんかもしれないけど、本人に責任なく、そうなるって意味合いにおいては同じやねん。そして、もしそうなら、いずれは遺伝子検査によって判明するんよ。その胎児が将来、どういう子になるか、だいたいわかってしまうかもしれないよ」

「ふくん……………じゃあ、近い将来に生まれなくなるから、いいんじゃない。全部、検査して中絶すればいいよ」

「……………そうやね……………そう考える人もおるやろね……………たくさん……………」

「ほら、たしか最小不幸社会とか、誰か言ってたじゃん。自民党のえらい人が」

「それ民主党の鳩山直人やし、あと意味も大きくちやうし」

鮎美が疲れたように机に肘をついて手を額にあてた。目を閉じて肩を落としている。その様子を見て三島が頭を下げた。起立した。

「本日は時間をいただき、芹沢殿には深く感謝する」

「……………いえ……………」

「我が18歳であった頃、この胸を刀で切り落とし、腹を裁いて死する

願望を何度も抱いた。だが、今は生きていて良かったと考えている。新しい社会を築くために、この命、賭する覚悟であるゆえ」

「……………」

「貴君の壮健なるを祈る」

そう言い放ち、三島は去った。鐘留が拍子抜けする。

「なに、あれ？ まだ話の途中じゃん。お腹でも痛くなったのかな」

「……………」

鮎美は黙り、鷹姫が言う。

「おそらく芹沢先生がお疲れなのを察したのでしょうか。思想はともかく士道ある男…男なのでしよう」

「鷹姫……………鷹姫って武士道が好き？」

「はい。正確には鬼々島の武士道、鬼々士道を範として生きています」

「どんな武士道なんそれ？」

「一人は島のために、島は国のために、表に立たずとも確かに支えよ、です」

「……………剣道を男より強くなってるのも、そのへんの心がけで？」

「はい」

「……………もしかして鷹姫って男に生まれたかったって思ってる？」

「父は、そう望んだようです。ですから私の名は発音だけでは男に聞こえませんか？」

「たしかに……………」

「高きを目指せ、鷹のように。けれど、母がかわいそうだからと、姫の字をつけるよう願ってくれたそうです」

「ええお母さんやね」

「はい」

「それで鷹姫自身は男に生まれたかった？ 女でいるのは苦痛？」

「いえ、別に苦痛ではありませんし、男に生まれたかったとも思いません」

「女の子でいたいんやね？」

「別に、そちらにも、とくに拘りはありません。正直、どちらでも良いです。なぜ、みなさんは男か、女かに、そんなに拘っているのですか？ 人は人ではないですか」

「……………」

「こういう人もいるんだね。きやははは」

笑った鐘留が話を続ける。

「男と男でエッチとか、すごいよね。穴あるから成立するんだろうけど、キモいし汚い」

「…………」。カネちゃん、男性同性愛者の中にもアナルセックスをよしとしない人もいるよ」

「ふーん…………じゃあ、どうするの？」

「それは…………うちらにも手も口もあるやん」

「ああ、なるほど。ってことは棒が無い女と女のエッチもそんな感じ？」

「やと思うよ…………たぶん」

「おっぱいくっつけ合って喜ぶのかな。きやははは、バカみたい」

「……………」

「あ、そういえばアユミン、女子からラブレターもらってたよね。どうしたの？」

「断ったよ、ほら」

即答した鮎美はスマートフォンを出して、ラブレターを送ってきた女子とのメッセージ履歴まで見せて鐘留に確認させた。

「無難に断ったんだね」

「かわいそうやったけど、本人のためでもあるから」

「また、次のお姉様を捜すのかな？」

「どうやるね。この子の感じやと、告白のお試しっただけでガチやないと思うよ。次あたり男子に興味をもちやると一番ええんやけどね」

「男子といえは、男子からもらったラブレターは、どうしたの？」

「…………あああ?!」

鮎美が大声をあげて立ち上がった。

「しもたあああ!!」

「どうしたの?!」

「どうしたのですか、芹沢先生?!」

鐘留と静江、鷹姫まで大声をあげる鮎美に驚いている。

「すっかり忘れてた!! 市議選の日! 朝9時にデートやったのに!」

「行く気だったんだ」

「ちやうよ! 断るつもりやった! けど、自分で行くか秘書に頼むか迷ってるうちに、忘れてしもて! あの日も忙しかったから!!」

「あくあく、何時間、待ったんだらうね。ってか、せめて連絡くらいしてあげなよ」

「連絡先なかってん! 女子の方は、ちゃんとあったのに。あったらメッセージで断れたのに」

「じゃ、仕方ないね。どうせ1時間も待たずに帰ったんじゃない?」

「う〜……………悪いことしたわ……………今から謝っても、今さらかな?」

「そろそろ失恋の傷が癒え始める頃だから、そつとしておいてあげなよ」

「……………そうやね……………そうするわ……………」

鮎美が椅子に座った。

「アユミンに振られたショックで男同士に目覚めてたりして……………」

「ま、何にしてもキモい連中には、二丁目とか養護学校に入ってほしいよね。宮ちゃんは、どう? 宮ちゃんも女子にモテそうなタイプだよね。女の子に告白とかされたら、どうする?」

「お断りします」

「っ……………」

鮎美が息を飲んで硬直したのには、誰も気づかず鐘留が続ける。

「すつごく可愛い子でもっ……………」

「同じことです。そも、緑野であれば、どうするのです? とても可愛らしければ交際するのですか?」

「う〜ん……………う〜ん……………いや〜あ、無理かなあ……………チューまでならい……………」

いけど、その先はキモい。ってか、やっぱりチューもキモい♪ 舌とか入れられたら、ぞっとするよ。シズちゃんは、どう?」

「年上に向かって、そういう呼び方、あまり好ましくないわよ」

年上らしく小言を言ってから静江は答える。

「この歳になると、いろいろ経験も増えるのよ」

「ってことは、したの?」

「大学院にいた頃、そういう趣味の子がいて告白されたわ」

「うわあ……で?」

「思い返すだけでも気持ち悪い。告白されてから、やっと気づいたの。それまで私の洗濯物を引き受けてくれたり、お弁当を多めに作って分けてくれたり、いろいろな親切にしてくれるから、私の父が議員だから就職先でもお願いしてくる気かな、って普通によくある下心かと思ってたのに。まさか、そういう気持ちで私に接してたなんて」

静江が嫌悪感を振り払うように前髪を払った。

「わかってしまうと、思い当たることがいっぱい出てきて、サークルの旅行で温泉にいっしょに入ったときも変だったし、着替えのときの視線とか、やたら触ってきたこととか、私が着なくなった服をあげたら喜んでたこととか、そういうの全部が気持ち悪くなってきたの。だって、それって大きな裏切りでしょ? 今の今まで同性だと思ってたから平気で着替えたり、洗濯物を預けたりしてたのに、そんな下心があったなんてことは男よりタチが悪い。泊めてあげたことも、男だったら用心したのに。あのとき思ったわ、ああいう人たちは結婚指輪をつけるみたいになにかマークをつけてるべきよ」

「う…、うち…、ちよつとトイレ!」

お腹ではなく顔を押しえた鮎美はトイレに駆け込む。駆け込むまです間に合わなくて、涙が溢れてきて顔と手が濡れた。

「っ、うーっ…うーっ…」

声をあげて泣くとトイレの扉が薄いので静江たちがいる部屋まで響いてしまう。鮎美は声をあげないように必死で口を両手で押さえながら泣いた。

「きやははは、シズちゃんの体験って、なんかリアルだね」

「鮎美ちゃんにラブレター送った人は正直でいいわよ。最初から、そうですって言うてから近づいてるんだから」

まだ続いている会話が扉の薄さのせいで聞こえてくる。溢れて止まらない涙が手から流れ落ちて手首をつたい、肘まで滴ってトイレの床へ降っている。

「……うーっ……ひーう……」

「そうだねえ、見てわかる障害と違って、ああいうのは黙っていると、わかんないね」

「いつそ小指に指輪をするとか、なにか、人類共通のマークでもあるといいのにな。ううん、指輪だと外せるから、見えるところにタトウーでもさせるかね」

「だいたい恨んでるね?」

「当たり前でしょ、男の前だったら平気で着替えなのに、油断させて。盗撮とかも、その気になったら、いくらでもできるし」

「あー、それは怖いかも」

「ああいう人たちは女子トイレと女子更衣室も入ってほしくない。障碍者トイレを使ってよ、って思うわ。わりと真剣に。こっちの人権侵害だと思わない?」

「人権なんて幻想だよ。赤信号と同じくらい」

「……うーっ……うう……」

聴きたくないけれど、口を押さえていないといけないので鮎美は耳を押さえられず、便座に座ったまま丸くなる。泣きやむことができなくて、ずっと泣いていると、鷹姫が扉の前に近づいてくる気配がした。

「芹沢先生、具合が悪いのですか?」

「……う……うん……ちよつと……」

涙声にならないように努力したけれど無駄だった。

「お声が……それほどに、痛みますか?」

痛いのは、お腹でなくて胸だった。胸が張り裂けそうに痛くて、痛みが涙に変わって溢れてくる。

「医者へ行きますか?」

「ううん……心配せんとして……そのうち、戻るから……そこに、おらんといてよ。恥ずかしいわ」

「はい、失礼しました」

鷹姫が離れていき、やっと鮎美は口を押さえていなくても嗚咽しなくて済みそうになった。それでも涙が止まるまでには、まだ時間がかかり、静江が近づいてくる。

「鮎美ちゃん、大丈夫？」

「へ……平気です……ちよつと、冷たいもん飲みすぎたかも」

「そう。体調管理も仕事のうちよ」

「はい……すみません……」

「あんまり痛かったら遠慮しないで言いなさい。病院へ連れて行ってあげるから」

そう言つて静江が離れていく。鮎美は苦勞して気持ちを落ち着け、顔を洗つてから戻つた。

「アユミン、大丈夫？」

「うん、もう大丈夫やと思うよ」

取り繕うのにも慣れてきている鮎美は平静を装つた。

「そ。じゃ、そろそろ長居したし帰るよ」

鐘留は立ち上がつて、ふざけて敬礼する。

「同志諸君、また会おう！」

「はいはい」

鮎美が脱力気味に流し、静江が付け加える。

「お父さん、お母さんにも、よろしくお伝えくださいね」

「忘れなければね」

そう言つて鐘留は支部を出ると、またネットカフェに入りパソコンで遊んで時間を潰すと、日が暮れて気温が下がる頃に退店して駅前を目的なく歩き回つた。

「ちつ……さつささと帰れば良かった」

歩き回ったおかげで、数ヶ月前まで交際していた男子が一つ下の恋人とデートしているのを見かけてしまい、舌打ちしてからタクシーを拾つた。乗り込むと、エアコンの涼しさと運転手の声が迎えてくれ

る。

「ご利用ありがとうございます。どちらまで、いかれますか？」

「かねや本店」

「…。かねや本店ですね。承りました」

横柄な客に慣れている運転手は、ぶっきらぼうな若い女性を目的地まで運んだ。鐘留は親からもらったカードで支払い、家に帰る。部屋に戻ると、投げて割ったグラスは家政婦が片付けており何事も無かったように整っている。

「……………ヒマだなあ……………アユミンたち忙しそうだし……………」

受験勉強する気はない。どうせ、婿養子を迎えて、その男が事業を引き継ぐのだと思うと、努力する気になれない。時間もお金もあるけれど、やりたいことが無かった。生まれもった美貌と親のコネでモデルになってみたけれど、制約も多くて面倒になり辞めてしまうと、少々パソコンを勉強したくらいで、すべてに飽きている。面白そうなのはクジが当たって議員になるという鮎美の今後くらいだった。

「……………やばい……………寝そう……………」

眠たくなってきた鐘留は、とても面倒で自分でも認めたくないけれど、シーツを濡らしてしまうと家政婦に知られるので、寝てしまう前にナプキンをあてがってから、横になった。

「……………悪い夢……………見ませんように……………」

願ってから、目を閉じた。

9月 知事選

9月の日曜日早朝、鮎美は始発の新幹線で剣道全国大会へ向かう鷹姫を見送るためにホームにいた。

「ごめんなっ！ 応援しに行くって約束したのに、ごめんな！」

「もう謝らないでください。去年も一人でしたから」

武道の盛んな鬼々島に比べて、鮎美たちが通学する高校はキリスト教系の一派であることもあって、人が争う競技をよしとしていないのでサッカーやバスケ、バレー、野球などの球技系の部活はあっても、剣道、柔道、弓道などの直接的な争いに近い競技の部活は無く、毎年鷹姫は個人登録で出場していた。そして、この高校を選んだのは信仰ではなく、単に交通費が島嶼助成金による援助で無料になり、他の高校を選ぶと時間の都合から下宿になってしまうことが理由だった。実際、鮎美と鷹姫以外の島に籍を置く高校生は3年間、井伊市や三上市などに住んでいたりするけれど、それも費用がかかり、鷹姫はもつとも安価で済む方法を選んでいる。そんな事情を知った鮎美は東京まで応援に行くと約束したけれど、運悪く県知事選スタートの日に重なってしまった。

「ごめんな、ホンマごめん」

それでも鮎美は東京へ行く約束を守ろうとした。静江に説得されても反論したし、直樹に言い含められても一蹴した。さらに石永に諭されても言い返した。けれど、民主党の代表選挙が行われ、やや自民よりだった小沢六郎が敗れて、鳩山直人が選出されたことで自党内の緊張感も変わり、いよいよ県知事選が近づくと鮎美のスマートフォンに衆議院議長の久野から電話が入り、とうとう折れていた。

「鮎美、そんなに泣くようなことでもないでしょう」

「せやけど……鷹姫との約束やったのに……」

「私は気にしていませんから」

新幹線がホームに停車したので鷹姫は竹刀と防具を持って乗り込む。去年もらったトロフィーを鮎美が手渡す。

「鷹姫……荷物も多いのに、ごめんな……鷹姫……無事だな……」

「そんな今生の別れみたいな顔をしないでください。ただの日帰りですよ」

始発で行って試合は9時から、個人戦は一日で終わるので夜には戻ってくる。

「では、行ってきます」

「うん、いってらっしゃい」

「……………」

ドアが閉まり、新幹線が動き出すと、すぐに鮎美が見えなくなり、井伊駅も遠くなる。

「あとは征くのみ」

しばらくは鮎美のことも政治のことも置いて、剣道だけに集中すると決めると、鷹姫は大きな開放感に包まれた。

「去年は重圧を感じたのに……今年も、心が安らいでいる」

一年生で初優勝してしまい、二年生のときは周囲からの期待と注目によって重圧を感じていたのに、今は自分でも驚くほど開放感を覚えていた。

「高校最期、勝ってみせます」

決意して井伊市を出た。鷹姫を乗せた新幹線が見えなくなると、鮎美は涙を拭いた。

「鷹姫、頑張つてや。うちも頑張るし」

なぜ自分が最愛の鷹姫ではなく、知らないオジサンにすぎない御蘇松を応援しなくてはならないのかについては、もう考えない。決めたことなので精一杯やると決意してホームから出ると、駅のロータリーで車を駐めて待っていてくれた静江と三上市へ向かう。

「たしかに、三上市に新駅があったら、車で行かんでも速攻やな」

「それ庶民の感覚からずれてるよ。任期が始まれば新幹線がタダになる国政議員と違って、普通の庶民は、そんな短距離を新幹線に乗らなから。あと、県民の足はメインが車よ」

「そうなんや。うちには自動車を運転する感覚もイマイチわからんよ」

「うくん、それは問題かもしれないけど、かといって万が一にでも交通

事故を起こされると面倒だから、やっぱり任期中は運転させない方がいいかな。都市部の先生方だと、まったく一切運転しない人、珍しくないし。運転って中間層がやることなのよね。下層は車を所有できないし、上層は所有して運転もさせるから。あ、高速に入るから後ろもシートベルトして」

静江は急いで三上市へ向かうために高速道路を使う。前を見ながら鮎美に告げる。

「座席の背にあるファイル」

「これは……三島はんの」

鮎美はファイルを開いて、三島由紀子の経歴を見た。

「へえ、あの人って元は自衛隊員やったんや。二佐って、えらいの?」

「出世としては早い方ね。しかも、女性自衛官」

「あ、そうなるわけか……不意なんかな……途中で辞めて……」

「二つもトラブルを起こせばね」

「……クーデターって、今どき……やることなん……」

「そっちは計画が露見してる。隠し事のできないタイプなのかもね」

「あとの一つは? ファイルに無いけど……」

「男ばかりの自衛隊に女の身体で入った彼女、もとい彼が交際関係でトラブルを起こすのは時間の問題だと思わない?」

「……………」

「ま、とりあえず、どんな人か、党も調べたから結果は知っておいて。さ、それは忘れて今日の仕事。ファイルの最後にあっただでしょ?」

「うちの演説の原稿やね」

これから三上市で行われる御蘇松の出陣式でのスピーチが用意されていた。高速道路を走る車の中で、鮎美は原稿に目を通してから問う。

「えらい抽象的な内容ですよん。もっと新駅とか、ダムの実必要性について言わんの?」

「三上市民と市議選があつた六角市以外の県民にとっては鮎美ちゃん

は初登場のパンダなのよ。この意味、わかるよね?」

「はいはい、可愛く元気に、やね?」

「そうそう。あと出陣式に来るのは支持してくれてる人とマスコミだけだから、必要性とか理屈とか要らないのよ。雰囲気と勢いが大切な」

「ほな、チアダンスでもしよか」

「ダンスが終わってから、たっぷりセクハラされてもいいならね」

「うっ……、やめときます」

「それが賢明ね。っていうか、女を武器にするのは微妙に難しいよ。票の半分は女性なんだから」

「女性有権者って、やっぱり女性に入れるん? ……って、なんかエロい言い方になったけど」

「考えすぎ。で、意外と女性は女性に入れたいよ。もし、そうなら全国の知事の半分は女性になっても不思議はないでしょ?」

「あ〜……なるほど……。立候補も男性に多いけど……。票も……」

「結局、政治とか立候補って男性の脳に向けた活動なんじゃないかな。ま、これから参議院は半数が女性になるから、それで社会が、どうなるか見物ではあるけど」

「高速道路無料化より壮大な実験やな」

「あの無料化実験も、実質、ほとんど通行量の無い路線ばかりで実験というより地方への飴玉って感じね。わかってる人間が見れば、ただのガス抜きだって一目瞭然。最大のガス抜きと言ってもいい参議院を国民全体から公平にクジ引きで選り出す政策も一時しのぎにしかならなかったのかな……。民主党の勢い、止まらない感じ……。県知事選やばいかも……」

「民主党が政権を取ったらホンマに全国、高速を無料にするんやろか?」

「否定的だった小沢さんが代表選に落ちて、鳩山さんが来たからね。沖縄の基地は動かさなくても、通行料くらい実行しないと財政うんぬん以前にカツコがつかないでしょ」

「カツコと財政やったら、カツコなんや……」

「民主党にしてみれば、さんざん自民党が国債残高を増やした後だから今さらってのもあるかもね」

「このままのペースで国債が増えて人口減が続いたら日本は、どうなるんやろ……」

「対外債務が少ないから平気っていう学者と、ひどいインフレになるって説があるけど、逆にデフレになるって説もあるから、ようするに、みんなわからないのよ」

「日本は資源もないのに……」

「強みは物づくりだったんだけどねえ」

「その製造業も正規と非正規雇用に分断されて……民主の支持基盤になってる連合は、どっちの味方なんやろ？」

「もちろん、正規雇用の団体だけど、そこに非正規をどこまで含めるか、彼らも悩んでるんじゃないかな。含めちゃうとコスト増だし、含めないと労働者の味方って看板がウソ臭くなるし。どっちにしても自分たちの維持と拡大が目的。みんな、そう。結局は欲望の調整が政治なのよ」

「……欲望の調整……」

「鮎美ちゃんだってカッコいい彼氏つくって幸せな結婚して、お金に不自由しない生活がいいでしょ？」

「……どうかな……」

鮎美は目をそらして車窓を眺めた。

「秘書の立場としては彼氏つくるなって言ったけど、25歳から30歳くらいで、ちゃんと結婚しないと男って女が30過ぎると、結婚してくれ、から、結婚してやる、に変わるよ」

「……静江はんって、うちや雄琴はんには口を慎めいうくせに、けっこうズバズバものを言いはりますよね」

「私は場所と相手を選んでるもの。それに議員じゃないし」
「……………」

「でね、女が議員って立場だと男との関係も難しいの。けど、鮎美ちゃん、ちようど二期目が始まるとき24歳で適齢期だし、今の調子なら国民審査で落ちることは無さそうだし、やっかみを受けないよう一

期目での結婚は控えて、二期目スタート時期なら、産休をとっても後半で活動して盛り返せば、衆議院への鞍替えも可能なんじゃないかな」

「……………」

「私もお兄ちゃんの手伝いが面白くて、この歳まで結婚しなかったけど、やっぱり後悔する部分もあるのよね。適齢期に結婚しておくべきだったって。女の幸せってタイミングが大事なんだって、つくづく思うわ。だから鮎美ちゃんも一期目後半くらいで手頃な男性を見つけておくのが最善かな」

「……………」

鮎美は黙って静江を強く睨んだ。けれど、前を見て運転している静江は気づかない。

「ちなみに鮎美ちゃんって今まで彼氏いたことあるの?」

「…やかましいねん…」

鮎美の放った声は、呻るような低い声だったけれど、つぶやきだったので運転中の静江には聞こえていない。

「え? 何て? ま、いいけどさ。とにかく計画的に結婚しないと、あつという間に30過ぎるよ。気をつけなさい」

「車、止めたって」

「え?」

「トイレ!」

「選挙事務所まで我慢して。時間がおしてるの」

「漏れるし、すぐ止まって」

「どおーして駅で済ませておかないのよお。もオ」

静江は加速してサービスエリアへ急ぐと停車させた。

「早く済ませてきてよ。もお、本当に子守りみたい」

「……………さいなら」

鮎美はドアを開けて降りると、トイレではなくサービスエリアの施設外へ通じる歩行者出入口へと歩いていく。

「ちよっ?! どこ行くの?!」

静江が嫌な予感を覚えて車を降りて追いかける。

「どうしたの？ トイレは、あっちよ？」

「……………もう行かんし……………」

「じゃあ、車に戻って。出陣式まで時間がないの！」

「……………せやから、それに、もう行かん」

「何言ってるのよ……………あ、また、寸前になって怖じ気づいたのね」

静江は市議選のスタート時に鮎美が立てなくなったことを思い出した。そして、鷹姫を真似て気合いを入れてみる。

「しっかりとしなさい！」

パシッ！

鮎美の脳天を狙った静江の手刀は、あっさりと鮎美の手で払われた。もともとは大阪代表で出場して準々決勝まで残った鮎美、静江の手を払うのは容易なことだった。剣道経験のある鮎美の鋭い払いで静江は痛みを覚える。

「痛つ……………」

「さいなら」

鮎美はサーブエリアから出て一般道を歩き出した。

「どこ行くのよ?! どうするのよ?!」

「ほつといてや！」

「そんなわけにいかないでしょ?!」

「もううんざりやねん!!」

鮎美が叫んだ。

「うちの人生を何やと思ってるねん!!」

「何を怒って…」

「彼氏どうのこうの言うたり!! 結婚せい言うたり!! なんやねん?!」

「そ……………それは……………ごめん。まだ18だから、そういうの怒らない歳だと思つて……………ほ、ほら、私みたいに30過ぎちやうと、やばい話題でも、鮎美ちゃんなら、まだまだ未来があつて、いい彼氏つくるチャンスいっぱいあるって」

「余計なお世話なんよ!!」

「ごめんなさい、私が悪かったから機嫌を直して」

静江は思春期後半の女子高生に余計なことを言ってしまったと後悔し、謝ったけれど、鮎美の激昂は治まらない。ズンズンと歩いてサーブスエリアから離れようとする。

「お願い、待って！」

「……………」

無言で歩いていく。静江は慌てて追う。

「とにかく出陣式だけは出て！」

「……………」

「鮎美ちゃ……」

パシッ！

引き止めようとする静江の手を、また鋭く払った。

「もう、うんざりや。自民党も辞める」

「辞めて、どうするのよ?!」

「民主でも共産でも、無所属でもえええ！」

「っ……、ちよ……ちよつと、待って……」

静江はゾクリと背筋が凍るのを感じた。今このタイミングで鮎美を失うのは、きわめて危険だった。一人の参議院議員を失うだけでも大事なのに、最年少という注目が集まりやすい存在で、しかも今回の知事選は民主が推している女性候補と拮抗しそうで、接戦になる予想だった。下手をすると鮎美を失ったことで負けるかもしれない。そして、それが自分の発言で機嫌を損ねたのが直接要因となってしまう。青ざめた静江は鮎美の前に回り込んで頭を下げる。

「ごめんなさい！ 私が悪かったから！」

「……………どいて」

「本当に、ごめんなさい！ この通り！ どうか、許してください！」

さらに深く頭を下げて謝る。

「…………どけ言うてるやん。蹴るで」

「私が悪かったです！ すみません！ さっきのは失言でした！ どうか、どうか、許してください！ 本当に、すみません！ 申し訳ありません！ ごめんなさい！」

とうとう謝っているうちに静江が土下座を始めたので、鮎美は冷静に戻った。足元で静江は何度も何度も謝りながら、両手をアスファルトについて、額まで擦りつけて謝っている。そんな姿を見ていると、沸騰していた鮎美の怒りは冷めていった。

「……あんたら……ホンマに…選挙のためやったら……何でもすんなあ……」

「どうか、どうか、もう時間が無いんです！　お願いします、戻ってくださいー！」

「わかったよ、もうええよ。戻るわ」

「ありがとうございます！　芹沢先生！　ありがとうございます！」

「もうええて」

二人で車に戻り、もう会話はなく出陣式へと急いだ。鮎美もできれば原稿を暗記に近い状態にしておきたいので何度も読み、気がつけば御蘇松の出陣式が行われる選挙事務所前の会場に着いていた。

「すごい規模やな……市議選と、ぜんぜんちやう」

会場は広くて変形するトラックを使ったステージまで用意されていて、音響設備も準備されているので、ちよつとしたコンサートでもあるかのような状態になっている。静江が運転する車が近づくと、一般来場者とは違う奥の駐車場へと案内され、市議選と同様に匿われるように建物へ入った。建物は閉店したレストラン跡だった。中に入ると大勢のスタッフが色々と準備をしているし、外でも駐車場の案内をしていた。静江が恐る恐る言ってくる。

「芹沢先生、ストッキングが破れていて恥ずかしいので、少しだけ離れてトイレに行かせてもらってよろしいですか？」

静江は土下座したときにストッキングが破れて、少し血が滲んでいた。

「あ、うん。ええよ。うちも大人げなかった。ごめんな」

「いえ、私こそ、すみません。どうか、どこにも行かないでください」

「わかってるって。この段階で逃げんから」

静江がトイレへ行き、再び鮎美は原稿へ視線を落としたけれど、誰かに肩を撫でられて顔をあげた。

「あ、茶谷先生」

「ご苦労さま」

「茶谷先生も御蘇松先生の応援に？」

「ううん、肩を触んなや、と鮎美は笑顔で苛ついた。

「ははは、市議程度では知事の応援演説はさせてもらえないものだよ」

「そういうもんですか？」

「そうだね。市長選で多選の市議なら対象になるけれど。何よりワシは六角市の人間、ただの頭数で来ている。知事の応援は市長や県議、石永先生がされるよ」

いつまでも茶谷が肩に触れているので、鮎美は身を引いて逃げた。

「すみません、原稿に集中したいんで」

「おお、そうだね。ごめん、ごめん」

「……………」

別に丸暗記する必要は無かったけれど、鮎美は原稿を見ることで茶谷との会話を終わらせた。なのに、すぐ他の市議や見知った顔が現れるので挨拶せねばならず忙しかった。静江がトイレから戻ってきてからは、睨みをきかせてくれるので肩に触れたりすることは無くなり、直樹も現れてくれた。

「雄琴先生も応援演説に？」

「ボクは井伊市の市民だからね。参議院議員としては候補予定者だけど芹沢先生が最良の人選なんだ」

「いろいろあるんですね。市議選のときは、誰かの応援演説を？」

「一応呼ばれたね。まあ、六角市の市議選だから、誰の応援をしたか、もう忘れたけど」

「ええ加減なもんやね」

「県内に、いくつ市町村があると思う？ その度に呼ばれて、全部覚えられるかい？」

「うつ……たしかに……」

やはり直樹と話すのは年配の議員と話すより気楽だった。そこへ、現職知事で今回の候補者でもある御蘇松が挨拶に来る。

「芹沢さん、今日はご足労いただき、ありがとうございます」

「いえ、こちらこそ大役に緊張しております」

もう慣れてきたので鮎美は挨拶と握手を自然に終え、御蘇松は挨拶回りに忙しいので、それほど会話することもなく去っていく。

「そろそろお時間です！ 来賓の先生方はステージへお願いします！」

スタッフが叫び、鮎美は建物を出てステージに向かった。静江と直樹が励ましをくれる。

「頑張ってください、芹沢先生」

「気楽にやればいいよ。ミスっても、たいしたことない」

「おおきに。ほな」

鮎美は緊張しすぎないように首を回して、試合前のように胸の中央を軽く叩いた。

「鷹姫がいなくても頑張るから」

東京で鷹姫も頑張っているのだからと想い、ステージにあがった。ステージにはパイプ椅子が置いてあり、それぞれに紙が貼ってあり、誰が座るのか、わかりやすいようになっている。三上市長や県議、衆議院議員の石永、三上市に大きな工場を構えている自動車会社の役員、農協の役員、それらに混じって参議院議員候補予定者芹沢鮎美の名もあつた。

「君が芹沢さん？ 若いねえ」

「はい、どうも」

農協の役員に声をかけられた。もう何百回も言われたセリフなので笑顔で流してパイプ椅子に座る。

「……………」

制服のスカートでステージ上はかなんなあ、と鮎美は不安を覚える。鐘留ほどではないけれど少しは丈を短くしているスカートで椅子に座ると、ステージの高さと聴衆の視線の高さの都合で、ぴったり

と膝を閉じていないと下着を見られてしまいそうだった。しかも、多くの聴衆は鮎美ばかり見てくる。見るだけでなく撮影もされているので絶対に膝を開くわけにはいかないと思い知った。

「……はぁぁ……」

内腿の筋肉がくたびれそうやな、と鮎美は万が一のためにスカートの裾を膝の間へ少し挟んでおき、原稿を膝の上に置いた。そんなことをしているうちに市長の応援演説が始まり、鮎美はキョロキョロしないように注意しつつも聴衆を見渡した。

「……」

ざっと千人以上はいるし、報道のカメラも多い、その半分が自分へ向いている気がした。

「……」

剣道の全国大会やと観戦者は、もつと多かつたかなあ、けどマスコミは出陣式の方が明らかに多いな、と鮎美は緊張すること無く、並んでいるカメラを眺めた。

「……」

また明日の新聞にも載るんやろか、テレビにも、うちの演説が流れ……それはないか、特定候補への応援演説を流すと、報道機関の選挙への公平性が崩れるから、と鮎美は増えた知識でいろいろと思いつつ、とうとう自分の番を迎えた。

「芹沢さん、お願いします」

「みなさん、おはようございます。芹沢鮎美です」

順調に滑り出し、鮎美は原稿を読まずに自分の言葉で話す。

「今日は御蘇松知事の応援をさせていただくということで内心でホッとしております。どうしてか？ この前は六角市の市議選で自民の先生方みなさんを応援したんですけど、うちの票は1票しかありません。自分の口で何人も応援しておいて、入れられるのは1票だけ。なんや申し訳ないというか、ウソついてる気になってしもて。けど！今回は迷うことなく御蘇松知事に自分の1票を入れられる。単純明快さっぱりスッキリで気持ち良う応援できます！ さて、あんまりアドリブで話すと慣れんことで余計なことまで言いそうですさかい、そ

ろそろおとなしい原稿を読ませてもらいますことをお許しください」

そこまで言って鮎美は予定通りの原稿を読み、一礼した。大きな拍手が湧き起こり、鮎美は再び頭を下げる。そして、ホッと安心して大役を終えた実感とともにパイプ椅子に座った。後に続いた石永が演説の中で鮎美のことを、いじってくる。

「みなさん、さきほどの芹沢さんのスピーチ、なかなか素晴らしかったですよね。自分が芹沢さんの後になっているのは、もし彼女が失敗したときのフォローで、こういう順番になっていたわけですが、もう、そんな心配がまったく要らない、彼女は堅実で確かな方です。今日、この出陣式、みなさんも見慣れた知事より18で議員になる彼女を見に来た感もあるかもしれませんが、彼女がどうして我々の自民党を選んできたのか、最初から彼女は自民だったわけではありません。共産党の話も聴き、民主党の竹村先生とも会っていたそうです。それでも、いや、その上で我々のところへ来てくれた。正直で堅実な彼女が堅実に県の発展を考えてきた自民に、そして堅実な県政を8年続けて、いよいよ新駅の実現も目の前としてくださった御蘇松知事を応援している。もちろん、私もです」

石永は二世議員らしく原稿無しに手慣れた弁舌で話をまとめいき、出陣式の最後として全員でのガンバロー三唱に入る。みなが起立して右手を拳にして大きく突き上げつつ叫ぶ。

「二」ガンバロー！ ガンバロー！！ ガンバロー!!!「三」

まるで部活やな、と鮎美は思いながらも、こういうノリは嫌いではないので元気に拳を突き上げた。無事に出陣式が終わり、御蘇松が選挙カーに乗って出発すると解散となり、マスコミが鮎美へインタビューしようとしてくる。静江と石永が事前に調整していたので数分間だけ応答する予定だった。

「芹沢さん、18歳で議員とされること、どのように感じておられますか？」

「はい、とても責任の重いことだと痛感しています。勉強することも多くて。正直、まだ戸惑いの方が大きいですけど、しっかりと頑張っ

「はい、こうと思っています」

「芹沢さんが自民党に所属されたきっかけは？」

「雄琴先生に誘っていただき、石永先生や久野先生にお会いするうちに、長く日本を支えてきた自民党が未熟な私が勉強させていただくにも最良ではないかと思いい、選んでいます」

「鬼々島にお住まいですが、以前は大阪ですよ。なぜ、鬼々島に？」

「父が道楽……いえ、父が鬼々島の雰囲気をとても気に入っていて、ぜひにと。私も気に入っています」

三つの質問に答えたところで静江が止めに来る。

「そろそろ終わらせていただきます」

「あと一つだけ……」

「芹沢先生、こちらへ」

静江が背中を押してくれるので、マイクとフラッシュの集中砲火から退散して車に乗った。静江の運転で、すぐに会場を離れる。もう撮られていないと確信すると、鮎美は伸ばしていた背筋をもたげ、だらしと手足も弛緩させた。

「はああ……疲れた」

「お茶をどうぞ」

静江が冷たいペットボトルをカップホルダーに入れておいてくれた。

「おおきに。けど、ホンマに市議選とちごうて応援も一件だけやし楽やね。人の多さは、すごかったけど」

「あれだけの人の前で堂々されているところは、尊敬します」

「そんな風に静江はんに誉められると恥ずかしいわ」

「……。この後のご予定、覚えておられますか？」

「たしか、石永先生の仲介で、どこぞの団体の陳情を聴くんやなかったっけ？」

「はい。……ただ、その陳情内容で、もしかしたら芹沢先生が不快な気持ちになられるかもしれません」

「ふくん……っというか、二人きりやのに、えらいかしこまって話し

ますやん。なんで？」

「さきほどお怒りを買いましたので……本当に、すみませんでした」

「ああ、あれ……まあ、もうええよ。いつまでも怒ってもしやーないし」

「すみません。……そして、これから会う団体も……ご気分を害する可能性があつて……」

「どんな団体なん？ 関西弁撲滅の会とか？」

「いえ……女性にとっては不快な団体かもしれませぬ」

「ずばり言うとう？」

「……売春を合法化させようという団体です」

「売春……売春かア……」

「芹沢先生には今日以降も知事選の応援に立っていたいただきたい場面も出てくると思います。兄の仲介ではありますが、ご不快でしたらキャンセルいたします」

「……………」

鮎美がお茶を飲みながら少し考え、結論する。

「会う約束はしたわけやし、うちに売春せい言うわけでもないし、話くらいは聴くわ」

「ありがとうございます。では、予定通り三上市の商工会議所へ向かいます」

静江は早めの昼食を最寄りの喫茶店で済ませてから、商工会議所の駐車場へ車を駐めた。二人で降りて、ビルの三階にある小さな会議室に入った。約束の時間だった午後1時の10分前だったけれど、会議室では、すでに男が二人、女が一人、待っていて鮎美と静江を見ると、代表らしき男が挨拶してくる。

「お会いしていただき、ありがとうございます。春の会、代表の石川芳樹です」

ベージュ色のスーツを着て、整えた髭をたくわえている石川の次に女性が挨拶してくる。

「副代表の牧田詩織です」

「書記の吉野時夫です」

詩織は艶やかな美人で、吉野は丸いサングラスをかけた細身の男だった。それぞれと鮎美は握手して、向かい合って椅子に座った。

「やはり、お若いですね。芹沢先生、先生とお呼びした方がよいでしょうな」

「どちらでも。私の若さは本題ではないですよ。どうぞ、お話に入ってください」

他の団体からの陳情を聴くときより、やや鮎美は硬い態度になってしまっていたけれど、それは石川も女性相手に自分たちの団体が主張していることからくる当然の反応として受け止めて、本題に入る。

「私たち、春の会は現在は違法なこととされながらも全国で行われている売春を合法化してほしいと考え、活動しています」

「そうですか……、それで？」

「女性の、しかも、お若い芹沢先生を前にして言い出しにくいことではありませんが、あなたと同じ年齢、いや、もっと若い子たちが不当かつ不法に搾取されている実体は、ご存じですか？」

「……いえ……なんとなく、……そういう世界もある……というくらいにしか」

「でしような。性的な風俗産業というのは、パチンコは賭け事ではない、というのと同じく法的な方便によって誤魔化されています。本番行為がないことを前提にファッションヘルスやデリバリーヘルス、古くはソープランドなど形と名称を変え、続いてきているのです」

「……本番行為？」

鮎美が首を傾げると、石川は微笑して詩織の方へ視線をやり、話すことを促した。詩織は年齢のわかりにくい美人と言っている女性で、明るい色の髪を腰まで伸ばしていて栗色のジャケットとスカートを着ている。姿勢の良さは鷹姫に通じる凛としたところがあるのに、女性らしい艶めかしさも強く、肌の露出は控え目なのに男を誘うオーラのようなものをまとっている。その艶っぽい唇が鮎美の知らない言葉を語ってくれる。

「本番行為というのは性行為のことです。男性性器を女性性器へ挿入し、射精することを言いますが、射精まで至らなくても挿入すれば該

当しますし、コンドームなどの避妊具の使用の有無は関係ありません」

「……………」

鮎美は不快な顔をしないように努力したけれど、結局は表情筋が感情を表してしまい、顔に出た。それでも陳情を聴く議員という態度は崩さない。

「わかりました。続きをお願いします」

石川が続ける。

「本番行為が無いと称しつつも、実際には行われていたり、また客も、それを期待して来店し、それらを警察は黙認したり摘発したりするというハンパな対応を取るために、風俗産業そのものがグレーゾーンの仕事として位置づけられ、社会から無視されています。これが大きな問題です」

「……………どのような問題が？」

「社会から無視されるということは、そこで働く女性たちの権利は守られず、健康保険や労災保険、年金などの基礎的な労働者としての社会保障制度からも外れ、また運営そのものが反社会的団体、いわゆるヤクザによって直接、間接に行われるため、何らかの被害にあっても女性たちは声をあげられず、ただ使い捨てにされるのです」

石川は何枚かの写真を見せた。それは病気になって捨てられた女性や反抗して暴行された女性の写真や、その死体の写真で鮎美は背筋が寒くなった。

「こんなに……………ひどい状態なんや……………」

「これを解決するためには、まず売春そのものを合法化し、正当なサービス産業として位置づけ、まともな株式会社なり社会福祉法人なりが運営するものに転換していく必要があるのです」

「……………そのために…売春を認めよ……………そういうことですか……………、サービス産業……………」

「石永先生には、ご理解いただいております。そうですね、秘書の石永さん」

石川が追認を求めてくると、静江は嫌そうに返事する。

「ええ…」

「そうなんや……」

静江と鮎美が女性として賛同しにくい空気をもっていると、詩織が語る。

「お二人は女性として、売春を悪いことだと感じますか？」

「ええ、感じます」

静江は即答した。

「芹沢先生は？」

「……まあ、……無い方が……ええかな……つて……」

「私は、そうは思いません。売春は素晴らしい行為です」

「……………」

「少し観点を変えてみてください。たとえば、一生女性に縁が無さそうなモテない男性や、不幸にして妻に先立たれた男性、好きな女性に告白したけれど手酷くフラれた男性、彼らに一夜でも幸福感を与えることは、悪ですか？」

「……………」

「もつと掘り下げましょう。一生女性に縁が無さそうな男性、これをもつと具体的に不幸に考えます。事故や病気、生まれもった障害によつて、どう見ても女性に相手にされない、見るだけでも気持ち悪い外見の男性というのも存在します。彼らに奉仕することは、悪ですか？」

「……………」

「実は、そのような不幸な男性へ奉仕する看護婦の団体があります。とくに脳性マヒなどの疾患によつて自分の手さえ、うまく動かせない男性。彼らが、どれだけ不幸かわかりますよね？ 自分の手さえ、うまく動かせない、ということとは自分で自分を慰めることさえできないのです」

「……………」

「けれど、彼らにだって性欲はあります。そして男性の性欲というのは私たち女性が想像する以上に強烈なものです。どうにも抑えきれない衝動です。よく痴漢で逮捕される公務員が報道されますよね。

彼らは、そんなにバカだったのででしょうか？ もともとは公務員になれるくらいには優秀な人だったはずですし、努力もしたはずですし、日々の業務もこなしていたでしょう。けれど、ひとたび逮捕されれば、それらの努力が一瞬にして水泡に帰すとわかっていながら、それでもなお、衝動に負けてしまう。性欲とは、それほど強い衝動です」

「……………」

「お二人は今までの人生でセクハラを受けことがありますか？」

「ええ」

静江は忌々しく頷いたし、鮎美も正直に答える。

「……………まあ……」

鮎美は茶谷の顔と手の感触を思い出して、肩の皮膚が気持ち悪くなった。

「そのセクハラをした人は愚劣でバカで、どうしようもないクズのよ
うな、何一つ長所のないゴミ以下の人物でしたか？」

「……………そこまでは……………」

「……………長所も、あるとは……………思うけど……」

静江も政治の世界で生きてきたので、軽く肩を撫でられたり、腰に手を添えられたりと微妙に拒否できないセクハラを何度も経験してきたけれど、それを行ったのは多少なりと権力のある男性で、その権力に至るまでに努力もしているし実力もあつたりする。鮎美も茶谷が市議として鬼々島の振興に尽くしてくれていることは知りつつあるし、いちいち肩に触ってくることさえなければ尊敬してもいい人物だと感じていた。

「お二人は地位のある男性に接する機会が多いでしょうね。そんな社会の上流にいるはずの男性でさえ、ちよつと私たちの身体に触りたい、撫でたい、そんな欲求に負けて、自分の地位が大いに危うくなるかもしれないのに、ついつい手を出してしまう。それほどに性欲という衝動は強く。また、彼らは、あわれで、かわいそうです」

「……………」

「肩やお尻を少しくらい撫でたところで私たちは妊娠させられませんし、彼らも大きな満足がえられるわけでもない。なのに、やってしま

う。実に、あわれです」

「そうかもしれないけど、それで牧田さんは何が言いたいのでしょうか？」

話題が女性として関わりの強いことなので、つい静江が秘書としての立場を忘れて質問してしまう。詩織は話を結論へ近づける。

「つまりは、立派な男性でさえ性欲に負けるほど、その衝動は強いし、また障害者などの弱者である男性もまた強い性欲をもっているということです。そして、立派な男性の方は、それなりに満たされる方法を自分で確保するでしょうが、弱者は、ずっと満たされない。ずっと苦しむのです。これほど、あわれなことがあるのでしょうか？」

「……否定はしないけど……」

「気の毒やな……」

「さきほど話した彼らへ奉仕する看護婦の団体ですが、どのような奉仕をされるか、想像してみてください」

「……………」

静江と鮎美が、それぞれに想像した。心優しいナースたちが、あわれな男性へ奉仕する光景を、ぼんやりと考えた。

「お二人の想像ほど、素晴らしい奉仕ではありませんよ。まず利用者とのトラブルを避けるために、あまり若い看護婦は所属していません。主に50歳以上のベテラン看護婦です。そして奉仕の内容ですが、ゴム手袋を着けて男性の性器を摩擦し、射精に至らせるもので、その間、利用者は看護婦の身体へ触れたりしてはいけません。キスさえ、ありません。ただ、ゴム手袋を介して刺激し、射精させるだけです」

「……………」

「こんなものが人間的な性行為ですか？」

「……………」

「私たち女性で喻えれば、どうにも身体がうずいて淋しいときに、50歳以上の手慣れた男性が来て、事務的に下着をおろして電マをあててイったら、終わり。そんなの性行為ですか？」

「……………」

「……………電マって……何ですやろ？」

鮎美は知らない言葉を訊いた。詩織が親切に教えてくれる。

「電気マッサージ器の略です。このような形をした物が家電屋に売っているのは知りませんか？」

詩織が両手の指先で、こけしのような形を宙に描いた。それで鮎美は思い出す。

「ああ、あの、肩にあてるやつ」

「あれの本当の使い方は私たちの股間にあてます。一度やってみてください、とても気持ちよくなりますから」

「……………」お話の続きを、どうぞ」

「人間的な性行為を、あわれな男性にも体験させる売春という行為を、お二人は悪だと思えますか？」

「……………」

「悪ですか？」

「……………」良い側面もあるのかもしれないけれど……………」

「ええ面もあれば、悪い面も……………」あるやん」

「悪い面とは、売春に従事する女性が不幸になることですか？」

「そうよ」

「そうやね」

「その不幸を無くすため、きちんと労働者としての権利が守られ、搾取されずに正当な報酬を得て身を立てることができれば、それは不幸ではなく幸福な労働になりませんか？」

「……………」

「私たちは売春を合法化することで、あわれな男性に素晴らしい性の喜びを与え、搾取されている女性たちを救いたいと考えています。どうか、賛同してください。芹沢さん」

「うちは……………」

鮎美が頭を抱えて悩む。

「……………」

茶谷だけでなく、自分も鷹姫が迷惑そうにしても、つつい抱きついたり頬擦りしたり匂いを嗅いだり舐めたりしてしまっている。実は茶谷より自分の方が罪深い気さえするし、それだけ性欲という衝動

が強いことは実感として理解できる。そして売春が両者納得の上で搾取無く社会保障も充実して行われるなら、いつそ有りではないかとも思えてくる。とくに女から見向きもされないような男性が、どれだけ不幸か、どれほど苦しいか、わからなくもない。どんなに想っても相手にされないという不幸は、自分が生まれてきたことさえ呪わしくなるほどで、それが一時でも満たされるなら施すべき善行とさえ思える。けれど、売春する側の女性はどうか、現状より改善され労働者としての権利が守られるようになって、本当に不幸ではないのだろうか、搾取されない援助交際のような関係にしても、お金に困っていたり、お金が欲しいから実行するのであって、金銭のために身体を切り売りするという行為を肯定するのには、大きな躊躇いがある。そんな鮎美の悩みを見越したのか、ずっと黙っていた吉野が口を開く。

「私の職業はマッサージ師なのですが、患者さんの身体を揉んだり押ししたりして、気持ちよくなってもらい。肩や腰の痛みをなくしたりできる。他人様に喜んでいただけるとても素晴らしい仕事だと思っております」

「……………」

「この両手で他人様に触れ、それなりの対価をいただき、気持ちよくなつてもらおう、という点で、妊娠しないように避妊して、他人様の身体に女性が女性として触れ、気持ちよくなつてもらい、対価をえる行為と、何が違うのか。法律で売春を禁止している意味がわからない。むしろ、禁止するからこそ、アンダーグラウンド化し、従事者を不幸にする」

吉野は丸いサングラスを外した。そこに目はなく傷跡だけがある。

「私は、この通り若い頃にヤクザ同士のくだらぬ縄張り争いで両目を潰されましたね。障害者として国の補助でマッサージ師の資格をいただき、細々と生きております。ヤクザで前科者、その上に障害者では、女性は相手にしてくれない。けれど、いくらかの金銭があれば、こんな私でも楽しめる。不幸中の幸いというか、目が見えませんが」

な、顔の善し悪しで女性を差別したりしない。だいたい、いつもＣランクの子を選んでいますが、目が見えない分、あの子たちの心を感じられる。いい子ばかりですよ。それだけに、彼女たちが社会から無視されているのは我慢ならない」

「……………」

鮎美は何も言えず、相槌さえ打てないでいる。そんな気配を吉野は察して、薄く微笑して付け加える。

「また、せっかく議員先生に会えたついでに言ってしまうえば、私たちマッサージ師という仕事も、最近は国家資格を持たないアンダーグラウンドな整体師やら、〇〇式マッサージなどという看板が目立ち、不当に圧迫される有様でしてね。それでいて、整体師や偽マッサージ師などに従事する人たちはスーパー銭湯などの大資本に搾取されている。こんな状況も、法律をつくれる先生方には、ぜひともなんとかしていただきたい。芹沢先生にも、覚えておいてほしいもんですな」

「……………」本当に、社会には私の知らない、いろいろな問題があることを実感します」

鮎美が三人を見て答える。

「本日のお話もまた、より理解を深めるべき問題であると感じます。今すぐ賛同することはできませんが、よく勉強して、あなた方の想いに応えられるよう前向きに検討させていただきます」

「「よろしくお願いします」」

再び鮎美は三人と握手したし、最初の握手より気持ちはこもっていた。その握手をする姿を今度は写真に撮りたいと言われて了承したし、鮎美は吉野との握手が終わった後に訊いてみる。

「吉野さん、ぶしつけで無神経な質問かもしれませんが、一ついいですか？」

「なんなりと、どうぞ」

「目が見えない状態で、…………女のひと、…せ、性行為するのって、どんな感じなんですか？」

「クスツ…面白いところに興味をもたれますね」

「…す…すいません…」

鮎美は顔が赤くなるのを感じた。吉野は説明してくれる。

「目が見えていた頃より、肌の知覚や、相手の息づかいが感じられて、いいものです。似たような体験がしたければ、目隠しでもして食事をされてみられるといい。新鮮な体験になると思いますよ」

「目隠しで……ご飯……ですか……」

「あと、晴眼者でも結局は暗い部屋でセックスしますからな。視覚とというのはセックスにとっては入口に過ぎないのかもしれない」

「そ……そうですか……おおきに」

会談が終わり、会議室を出た鮎美はトイレへ行きたくなったので静江と別れる。

「うち、トイレ行くわ。ちょっと待ってて。静江はん」

「はい、どうぞ」

もう急ぐ予定はないので静江は頷いた。鮎美は商工会議所のトイレに入って、用を済ませると手を洗う。その背後に詩織が通りかかった。

「あ……」

二人とも、鏡越しに目が合い、お互いに気づいた。

「さっきは、どうも」

「いえ、こちらこそ」

お互い生理現象のおかげで偶然に再会した。詩織は立ち止まって背後から鮎美の姿を見つめる。手を洗っている鮎美の足元から膝の裏、腰の丸み、くびれたウエスト、そして首筋へ視線をやり、それから囁いてくる。

「あなたはビアンですね？」

「っ……」

ビクリと驚いた鮎美が啞えていたハンカチを落としてしまうのを予想していたように詩織は途中の空中でキャッチしてくれたけれど、そのまま鮎美の胸に触れてくる。

「同じ種類の人間というのは、わかるものです」

「……………。さ、触らんといってください」

鮎美はハンカチを受け取ってから、まだ胸を触っている詩織の手を

払った。

「もつとも、私はバイですけれど」

「……………」

「電マも知らなかった可愛い議員先生はカミングアウトしないつもりですか？」

「……………つ……………つ……………」

鮎美は混乱と困惑で身震いし、詩織は気の毒そうに微笑んだ。

「隠しているのもつらいですけど、認めてしまうのも大変ですよね」

「……………」

鮎美は何も言えず、否定もできず、狼狽している。もう否定できないほど、うろたえてしまっているし、詩織は確信的だった。

「安心してください。誰かに言ったりしませんし」

「……………」

その一言で鮎美は泣き出しそうなほど安堵した。もし世間に知れたとき、どうなるのか、考えるだけで怖い。黙っていてくれるという詩織は初対面に過ぎないけれど、三島と同じように少数者にしかわからない苦痛を味わってきたなら、その言葉は信じたい。詩織がまた胸に触ってきた。

「あなた、経験も無いでしょう。吉野に、あんなことも訊いて。目が見えない状態でなんて、どちらかが目隠しするプレイで簡単に楽しめるのに。電マも目隠しも知らなかったけれど、興味津々なのですわね」

詩織が反対の手を鮎美の股間に近づけてくる。触ったりはせず股間の近くで、人指し指と中指だけを立てると、クネクネと動かしてみせた。

「ノーマルに恋をしても、苦しいだけですよ。あの人たちは私たちとは違う人間なのですから」

「……………」

「……………つ……………つ……………」

「……………」

不本意に胸を触られているのに、鮎美は不快感と快感を半分ずつに

感じた。そして、クネクネと動く詩織の指が、どこに挿入されたときの動きなのか、見ているだけでわかった。

「う……うちは…」

飲み込まれそうな魅力と逆らいがたい誘惑を詩織から感じて、鮎美は足が竦んだ。けれど、似たような体験をしてきた経験から、再び詩織の手を払って胸を守る。圧倒的な力の差を感じたのは、竹刀をもつて鷹姫と対戦したとき、そして久野や竹村と面談したときで、それが剣道なのか、政治的カリスマ性なのか、そして性的な魅力なのか、という違いはあっても、こちらを飲み込んでくるという意味では同じだった。鷹姫へは何百回打ちかかろうと勝てないし、久野や竹村の支持者や秘書として働けるなら、それは喜びだったし、そして詩織にベッドの上へ誘い込まれたら、恋も想いも関係なく、ただ肉体的な快感で翻弄されつくすのだと、わかった。わかったから、負ける前に鮎美は逃げた。

「し、失礼しますー！」

やつと、それだけ言うことができず鮎美はトイレから逃げ出した。

「ハア…ハア…」

「どうかされましたか、芹沢先生？」

「な…なんでも…ないです。この後の予定は？」

鮎美は平静を装って静江と接した。静江は申し訳なさそうに言うてくる。

「予定は無かったです、今さきほど御蘇松知事の選挙参謀から連絡が入り、六角市内を選挙カーで回るとき、芹沢先生にもご同乗願いたいそうです」

「選挙カーに？」

「三上市を出発されてから県南部の阪本市などを回っておられたそうですが、風というか、空気感からくる手応えが悪いようです」

「そんなん、わかるんや……」

「なんとなくに過ぎないでしょうけれど、道行く人の反応などで感じるものです。それで、ご同乗願えませんか？」

「うちは、何したらええの？」

「窓から手を振って笑顔で挨拶するだけですよ」

「ほな、やらしてもらいましょか。5万も日当もろたんやし。朝の演説だけでは悪いわ」

「市議選と違って応援する候補者は一人きりですから、お小遣い稼ぎたいなら日数で頑張ってください。あ、ご要望でした井伊市の料理旅館タカ井は予約が取れましたよ。選挙カーでの地区回りが終わったら、ゆっくり骨休めしてください」

「ヤツタつ！ おおきにー！」

静江の運転で六角市まで戻り、電話で決めた合流地点で御蘇松の選挙カーと邂逅した。市議選の選挙カーより、スピーカーも大きいし、後続車もあつて2台の普通車が続いていた。鮎美が近づくと御蘇松が礼を言ってくる。

「芹沢さん、ありがとうございます。こちらに乗ってください」

「はい」

鮎美は御蘇松が乗っている助手席の真後ろの席へ導かれて座り、ブルーのハチマキを渡される。今朝も同じハチマキを運動員や聴衆の一部がしていたのを見ていたので、この色が選挙戦においての御蘇松のシンボルカラーなのだと思美も知っている。渡されたハチマキを額に巻きつける。

「相手候補の加賀田はんの色は緑でしたっけ」

鮎美が後頭部でハチマキを結ぶために両腕をあげていると、隣にいた男性運動員の視線が胸にくるのを、なんとなく感じたけれど表情には出さずに結び終える。

「芹沢先生、これが予備のマイクになります」

運転席の真後ろに乗っているウグイス嬢が男性運動員を介して鮎美へ有線マイクを渡してくれる。

「芹沢先生も元気に挨拶してくださいね」

「はい。……模範のセリフとか、ありますか？」

「そうですね。こんにちは、御蘇松です。どうか、御蘇松への応援をよろしく願います。もしも、こちらへ手を振ってくださいる方がおら

れば、ご声援ありがとうございます。勇気をいただきました、ありがとうございます。と。といったところですよ」

「わかりました」

選挙カーが走り出し、六角市を回る。たいていはウグイス嬢が本職なのでマイクを握って声をあげ、ときおり御蘇松自身も声をあげる。鮎美は窓から外へ手を振りながら、ときおり知らない市民が自分を見て反応してくれるのを、面はゆく感じたけれど、笑顔を返していく。

「あ、あれ、鮎美じゃね？」

「お、芹沢も乗つとるぞ」

「鮎美ちゃんだあー！」

と好意的に手を振ってくれる市民もいるし、ごく稀に不快そうに睨んでくる市民もいる。知らない人に睨まれるのは精神的にダメージだったけれど、しばらくすると慣れたし、反対する人間がいてこそ民主主義かもしれないと考える余裕もできた。

「腕がダルいわあ」

ただ、振りっぱなしの腕はダルかった。

「揉んであげるよ」

隣にいた男性運動員に言われたけれど、鮎美は断る。

「いえ、けっこうですから」

何度か鮎美は身体を触られたので、もう彼に対して不快感しかもっていない。とくに鮎美も知っている市民や同じ学校の生徒、島民などを歩道に見かけたときは、車窓から大きく身を乗り出して手を振ったりしたけれど、そのとき支えるように腰をもってくれたのはよしとしても、だんだんとお尻の方まで触られるようになったので、今にも嫌悪感が爆発しそうだった。そして、爆発した。

「触らんといてくださいよー！」

お尻の真ん中を撫でられて鮎美は怒鳴った。

「……あ……ああ……ごめん、……うっかり手が当たって……」

「うっかりが7回もあるかい!!」

言い訳が余計に怒りへ油を注ぎ、鮎美の怒声が車内に響く。ウグイ

ス嬢は、すぐにマイクの主電源を切った。御蘇松が驚いて振り返ってくる。

「どうかしましたか、芹沢さん？」

「この男が何度も、うちに触ってくるから嫌なんです!!」

「うっかり手が当たっただけっすよ!」

「……………」

御蘇松とウグイス嬢は鮎美の言葉を信じたけれど、鮎美を説得してくる。

「申し訳ないね、芹沢さん、狭い車内で」

「芹沢先生も、よく頑張つて挨拶してくださいっすわ」

「今は挨拶とか関係ないんちゃいますか!　　うちは触んな言うてるんですよ!!」

「気がつかなくて申し訳ない。君、もういいから、後続車に乗って」

御蘇松は男性運動員を選挙カーから後続車へ移した。

「これでいいかな？」

「……………はい……………騒いで、すんません」

なんで、うちが謝ってるねん、と思いつつも鮎美は謝っていた。御蘇松が言ってくる。

「すまないけれど、井伊市を回るのにも乗ってきてくれるかな?　　芹

沢さんがいてくれると、ぐっと反応が良くなるし」

「……………わかりました……………」

もうやめたかったけれど、そうも言えず、井伊市へも同乗する。その途上で田んぼしかない道路を走っているとき、ウグイス嬢が連呼をやめて、そつと言ってくれる。

「芹沢先生のおかげで、さっぱりしましたよ。あの人、私の膝も触ってきていて、うっとおしかつたですから」

「そうやったんや……………」

それなら、もっと早く言っただけよかったわ、と鮎美は怒鳴ったときに言っただけよかったと口惜しく思った。それから井伊市を回ると、市民の反応の悪さを実感した。もともとの新幹線駅がある井伊市にとって御蘇松の新駅構想は評判が悪く、誰もが反対という雰囲気を選

挙カーが通つても、うるさそうにされたり、ひどいと露骨に中指を立てたジェスチャーを送ってきたり、鮎美が乗っているとわかると、さらに性的に下品と思われる鮎美が知らないジェスチャーを送ってきたりされた。こちらへ好意的に手を振ってくれたのは、ごく少数の御蘇松を支持する市民と、わずかに鮎美と同じ学校へ通っている高校生数人だけだった。井伊市内は六角市ほど長く回ることはなく選挙カーは次の目的地だった県最北部の浅井市を回る。ダム建設が予定され、対立候補はダムにも反対している浅井市では御蘇松への支持はあつて雰囲気は良かった。そこから、さらに、人口の少ない県北西部の朽木市を回ったのは日が暮れる頃だった。夜になると拡声器による連呼はできなくなるので選挙カーは三上市の事務所へ戻った。静江たちが出迎えてくれる。

「お疲れ様です、芹沢先生」

「…うん…おおきに…」

ずっと声を出していた鮎美は喉が痛いので静江への返事は必要最低限だったけれど、静江はわかっているので笑顔で喉に優しい麦茶と龍角散の飴をくれた。

「予定通り井伊市で宿泊されますよね？」

「…うん…」

疲れていた鮎美が疲れを忘れる。どのみち、もう島には戻れない時間で、わざわざ船を出してもらうよりもビジネスホテルに泊まるのが普通の選択だったけれど、鮎美の要望で露天風呂付き料理旅館へ予約を入れていた。東京で試合を終えた鷹姫も新幹線で帰ってくるので井伊駅で合流するつもりだったし、静江には自宅へ帰ってもらうので二人きりなるつもりだった。

9月 日隠し

三上市にある御蘇松の選挙事務所から鮎美は井伊駅へ、静江の運転で送ってもらっていた。

「ごめんな、静江はん。うちの都合で振り回して」

「それが秘書ですから」

静江は朝も始発に鷹姫を乗せるために早朝から動いていたし、今は夜遅い。明日の朝は月曜日になるので鮎美と鷹姫は井伊駅から在来線で六角駅へ行き、もっとも多くの生徒たちが通学に利用しているのと同じ路線バスで登校する予定だった。

「鷹姫は、あと40分で井伊駅に着くみたいやけど、うちらは？」

「30分くらいでしょう」

「よかった。おおきにな」

「いえ……」

「長い一日やったなあ」

「……そうですね」

鷹姫を見送ってから静江の発言で気分を害し、出陣式に行かないと言い出したので静江が土下座して、その場を納め、それから大勢の前で演説した後は売春を合法化したいという団体の陳情を聴き、さらに予定外だったけれど御蘇松の選挙カーに乗って県内を回った。

「もう朝のことが、ずいぶん前のことに感じるわ」

「…はい……あの…」

静江が何か言いにくそうにしているので鮎美は、なんとなく予感した。

「また、何か、うちに仕事が？」

「明日も選挙カーに乗ってほしいと依頼されています」

「明日は学校やで？」

「学校を休んでいただくとは評判にかかわるので午後3時から、すぐにと。その時間に学園前へ到着するようなルートで走るの、校門前からお願いしたいとのことですよ」

「……………こき使うなあ……………」

「申し訳ありません。……………でも、日当は出ますよ」

「……………。一つ条件あるわ」

「伝えてみます。どのような条件ですか？」

「御蘇松先生と運転手以外は、同乗するのは女の人だけにして。今日も身体を触られたりして、めちやムカついてん。なんで真剣な選挙活動中に、あんなことするヤツおんねん！ ホンマ腹立つわ！」

「申し訳ありません」

「いや、静江はんが悪いわけやないし」

「運動員の中には臨時雇いのアルバイトなどもいて規範意識が低いこともあるのです。そのアルバイトの応募も、市議や県議の子息などで二トや引きこもりというか、失業中の者を紹介であてていることもありまして…………。仕事としては投票日までの、ごく短期なので人材の確保が難しいのです。本当に、申し訳ありません」

「バイトやったんか……………まあ、うちもバイトみたいなもんやけど……………それなら、それで真剣にやらんかいや……………ああ、疲れた」

「短い時間ですが、車中で仮眠されては？ 休むのも議員の仕事ですから」

「うん、おおきに」

鮎美は目を閉じて井伊駅までの時間を少しだけ眠った。目を開けたときには井伊駅のロータリーに停車していて、新幹線が到着する3分前だった。

「おおきにな。あとはタクシー呼ぶわ」

「いえ、先生をお一人にするのは時刻的にも立場的にもできません」

「……………そっか……………窮屈な身分になったなあ……………」

「夜の駅前に18歳の女子高生が一人、他の生徒でも避けた方がいいことですよ」

「たしかに……………」

「宮本さんと合流したら、旅館まで送ります」

「ごめんな、静江はん」

「お気になさらず」

「…………あと、土下座させてから、すごい他人行儀になってしもたけど……ごめんな」

「……………」

「もう、前の静江はんには戻ってくれへんの？」

鮎美が悲しそうに問うと、静江は以前のように微笑んで言う。

「戻ってもいいんだけどね。戻ると、つい年下相手に色々言いたくなって、また怒らせると怖いから。とりあえず選挙中は下手に出ておくわ」

「…………ホンマに選挙第一なんやねえ……」

「この知事選の他、いくつかの首長選挙が秋の総選挙へ響いてきますから」

「そういうもんなんや。あ、もう時間やし改札に行くわ」

鮎美は車を降りて改札に向かった。ちょうど新幹線が到着したタイミングで続々と人が出てくる。日曜なので観光客とビジネス客が半々くらいで、鮎美は自分が注目されるのではないかと思っただけど、みんな自分の帰宅や荷物のことを気にしていて、鮎美に気づいたのは、ほんの数人だったし、気づいても何も言わずに通り過ぎていく。ただ一人、鷹姫だけは立ち止まって言ってくる。

「ただいま、戻りました」

「おかえりなさい。優勝やったんやね」

一目見て、結果はわかった。今朝、渡したトロフィーをまた持って帰ってきている。あまり笑顔を見せない鷹姫が誇らしげに微笑んだ。

「はい、勝ちました」

「おめでとう」

「ありがとう」

「…………よかったあ…」

鮎美が嬉しくて涙を滲ませるので、鷹姫は防具の入ったカバンを置いて、鮎美の頭を撫でた。

「鮎美が泣かなくても」

「嬉し涙は女の愛敬や」

そう言つて鮎美は大きくて重い防具の入ったカバンを持ってやり、車に戻つた。静江も優勝を察して祝つてくれる。

「おめでとう、宮本さん。常勝不敗ね」

「ありがとうございます」

すぐに静江は車を走らせて駅から5分ほどにある料理旅館の前に車を駐めた。一日5組限定の格式ある料理旅館タカ井は井伊市でも昔から有名で、その店構えも藩屋敷のようで、ここへ宿泊すると聞いて鷹姫は戸惑つた。予約を入れた静江が手続きをして戻つてくると問う。

「あの、石永さん。経費で出るのは一泊1万円までではないのですか？ それに、私は今日は党の仕事をしていませんから、経費支給の対象にならないと思います」

「ああ、それは大丈夫よ。差額は芹沢先生がもつてくれるそうよ。あと、今から芹沢先生に付き添つてくれるのが、宮本さんの仕事つて考えれば、支給対象で通るわ」

「そうなのですか……」

「私は家が近いから帰るし、あとはよろしくね。それと、遅い時間だから本来なら厨房も閉まつて松花堂弁当くらいになるところだったんだけど、宿泊者の名前に芹沢鮎美があつたから特別に遅くまで待つてくれていて、ちゃんとした会席料理を出してくれるそうだから、そのお礼は二人で礼儀正しく言つておいてね。もしかしたら、写真撮影を依頼されるかもしれないから、そこまではOKしてあげて。サインはアイドルじゃないからつて、お断りして」

「はい……」

「じゃあね」

静江は車で帰り、鷹姫と鮎美は女将が案内してくれる。

「こちらへ、どうぞ」

「おおきに。遅い時間に、ごめんな」

「お仕事、お疲れ様です。3時頃、前の通りを選挙カーで通られましたよね。元気なお声が響いてきましたよ」

「……そう言われると……なんや恥ずかしいですわ……」

鮎美と鷹姫が案内された部屋は12畳の広い和室で奥には専用の露天風呂もあり、一泊一人5万円だった。テーブルには料理の一部が用意されていて、前菜や食前酒代わりの煎茶が並んでいる。女将が部屋の説明の後に訊いてくる。

「お食事になさいますか？ 先にお風呂になさいますか？」

「鷹姫、お腹空いてるやんね？ 汗もかいたけど、あんまり厨房に待つてもらうのも悪いし、ご飯が先でもええ？」

「はい……あの…、芹沢先生、ここの差額は、いくらに……」

「気にせんでええよ」

「ですが……」

「ま、応援に行けんかった、お詫びというか、優勝のお祝いというか、そんな感じやから気にせんというて。な？」

「………はい………ありがとうございます」

二人が着席すると、食べるペースに合わせて料理が運ばれてくる。前菜からして凝った和食でウニの仙台味噌和えや、カラスミと紀州梅の巻物、刺身になると大トロや手長エビが見たこともないような切り方と飾り方で出てくる。

「めっちゃ美味しいわ」

「は……はい……」

「やつぱ、ご飯って、親しい人と、ゆっくり食べるもんやね。何回も高い店で会食したけど、半分政治の話しながらやと美味しさも半減やもんな」

「………そうかもしれません……」

天ぷらは揚げたての物が二度に分けて配膳され、肉は琵琶牛のヒレステーキだったし、さらに、香ばしいハモとウナギの白焼きまで出てくる。戸惑っていた鷹姫も若さゆえの食欲と、あまりに美味しい食事に感動して食べ続けた。

「うち、これは苦手やわ」

鮎美がフナを米で漬け込んだ伝統的な熟鮓が出てきて困った顔をしている。鷹姫は美味しそうに食べてから問う。

「鮎鮓は島でも造っていますか、お食べにならないのですか？」

「父さんは喜んで食べてるけど、うちと母さんは苦手やねん」

「……自家製のものは材料費と手間だけで済みますが、市場に出回っているものは、とても高価ですよ。食べないと、もったいない」

「もったいない……もったいないかア、今は嫌なフレーズに聞こえるなあ」

「県知事選の相手候補のキャッチフレーズですね。ダムと新駅で数百億の投資になるのが、もったいない、と言っていました」

「自民党のオッチャんらは、もったいないババアとか、悪口を言うてるけど、たしかに費用対効果を考えると、わからんでもないねん。とはいえ、数十年前から動かしてきた計画を、にわかには思いつきで中止するのも、どうかな、とも思うし。東海道新幹線かつて建設時は無用の長物って言う反対派もおったけど、おかげで東京日帰りできて今ではJRのドル箱路線やし、ダムかつて50年100年に一度の水害とか、アホみたいにデカイ琵琶湖やけど、20年前には日照りで、すごい渇水になったらしいし」

「あときは島から本土まで歩いて渡れるようになるのではないかと言われるほどだったそうです」

「琵琶湖から始まる淀川水系のおかげで大阪府民も潤ってるし、全国的に見ても渇水の心配が少ないのは、めっちゃありがたいことやしな。それに、うちは大阪で育て、鷹姫は琵琶湖の鬼々島で育て、別々なようやけど、ずっと淀川の水でつながっておったんやね。和歌みたいにロマンティックやと思わん？ ……」

鮎美が嬉しそうに、そして少し頬を赤らめて言ったけれど、鷹姫はよく味わった鮎美を飲み込んだだけだった。

「美味しい……島とは少し漬け方が違うのでしょうか……風味が違う……」

「どつちが好みなん？」

「難しいです。食べ慣れた島のものも美味しいですし、こちらのお店のも味わい深いです」

「ふーん……」

鮎美はお皿ごと持ち上げて少し匂いを嗅いだけれど、食べたく無さ

そうに皿を置いた。

「もつたいないの一言で公共投資を削るのもなあ……そら、福祉予算や教育へ回すのも悪くないけど、公共投資かって、そこで働く建設業従事者から、材料屋さんまで二重三重に潤うわけやし」

「難しいですね」

「あかん！ 忘れよ！ 明日の朝までは忘れるねん！ 鷹姫、これ食べてくれる？」

「はい、喜んでいただきます」

鮎鮎を鷹姫に食べてもらい、シメにご飯と郷里の漬け物が出てきて、最後にデザートの宮崎県産カボスのシャーベットを運んできたのは仲居ではなく板長と女将だった。

「芹沢先生のお口に合いましたでしょうか？」

「これ以上ないほど美味しかったですわ」

「そう言っていたら、幸いです」

「遅い時間に、ごめんな」

「いえ。あの……よろしければ記念撮影をさせていただいても、よろしいでしょうか？」

「はい、喜んで」

美味しい物を食べた余韻で鮎美はこころよく記念撮影に応じた。並んで撮影すると板長の衣服からは魚の匂いがしたけれど、それは嫌な匂いではなくて新鮮な食材の香りだったので鮎美は、いつも以上の笑顔で写真を撮られた。

「お疲れでしょうから、すぐに布団を用意します。お風呂は用意できておりますから、どうぞ」

「おおきに、ありがとうございます」

「遅い時間にお食事をご用意いただき、ありがとうございました。ごちそうさまです」

鮎美と鷹姫が礼を言い、すぐに布団が2組敷かれると、二人きりになった。

「……」

鮎美が何を言うべきか迷い、黙ってしまおうと鷹姫が言ってくる。

「お風呂、お先に、どうぞ」

「せ…、せっかくやし、二人で入ろ！ な！ 十分、広いやん！」

和室に隣接した露天風呂は2人以上で入っても十分に余裕があり、むしろ複数人で入ることを想定した設計だった。そして、この部屋専用なので鮎美と鷹姫だけで入れる。

「……」

鷹姫が広さを確かめるように外の露天風呂を見ていると、鮎美は焦って言い募る。

「い、いろいろ鷹姫には話もしたいし！ きよ、今日の選挙戦のこともそうやし、面談した団体とか、いろいろ！ 秘書として伝えておきたいこともあるんよ！」

業務にかこつけると、鷹姫が秘書として問うてくる。

「出陣式は無事に終えられたそうですが、面談は、どうでしたか？」

「あ、うん。えつと…」

やや話しにくい陳情内容なので鮎美は話を少しぼやかす。

「視覚障碍者の人とか来てはつてな。目が見えないと、いろいろ苦労するみたいな、そんな話とか」

「視覚障碍者ですか、たしかに東京駅でも見かけましたが、苦労しておられる様子でした。助けてあげたいと思ったのですが、私も乗り換えで時間が無くて、おそらく通り過ぎる誰も彼もが、同じでしょう。みな忙しそうでした」

「そうなんや…あ、そや、ええこと思いついた」

今夜のチャンス逃したくない鮎美は策を弄した。備え付けの浴衣の帯を手にすると、鷹姫に言う。

「視覚障碍者の苦労を体験してみて、どんな感じか、うちに言うてみてよ。そのために鷹姫に目隠しして、お風呂に入ってもらうんよ。もちろん、うちが手助けするから」

「目隠しして、お風呂ですか……」

「お願いやから、やってみて」

「そう言われるのでしたら」

鷹姫は帯を受け取って、立ったまま目隠しするようにキュツと後頭

部で結んだ。剣道の防具を着け慣れているので結ぶ動作も様になっているけれど、やはり視界がゼロになると何もできずに困る。

「どうなん？ 何か見える？」

「いえ、何も」

「ほな、この状態で…ぬ…脱がせるよ」

「脱ぐくらいは自分でできそうです」

「うっかり転んだら、危ないやん！ うちが脱がせてあげるよ！」

「そうですか、ありがとうございます」

「ほな、脱がせるしな」

鮎美は鷹姫へ近寄る。目隠しで何も見えない鷹姫を脱がせるために胸元のボタンを外す作業は、とっさに言い出したことだったけれど、想像以上に鮎美を興奮させた。いつもは遠慮して見つめることを控えている鷹姫の唇や頬、鼻梁を、どれだけ見つめても視線に勘づかれることがないので、見ただけ見られるし、ボタンを外していくと鷹姫の匂いが拡がってくる。始発で東京まで日帰りの大会出場をしてきた鷹姫の身体は、いつもより匂いが強くて鮎美は見えていないのいいことに、顔を近づけて嗅いだ。鷹姫の身体からはトマトと肉を煮込んだような匂いがして、鮎美は満腹なのに口の中に唾液が湧いた。

「……………息がくすぐったいです……………どうして、そんなに近づくのですか」

「ごめん、ごめん。ハア…ちよつとボタンが爪の先に、引っかかって」

すべてのボタンを外してブラウスを脱がせる。そうやって鷹姫を上半身ブラジャーだけの姿にすると、鮎美は全身の血が騒いで叫びそうなほど興奮した。

「ぶ…ブラも、外すよ…ハア…」

「はい……………」

ブラジャーも外すと、鷹姫の乳首に吸いつきたくて鮎美は口を手で押さえて我慢した。そして、吸ったり舐めたりする代わりに鷹姫の腋の匂いを嗅ぐ。さつきより強い匂いで、煮込まれたトマトと肉へタン

ポポの汁とヒメジオンの茎の香りを足したような濃い匂いがした。

「…ハア…ハア…」

「くすぐりたいです。匂いを嗅ぐのは、やめてください」

見えていなくても心配で十分に伝わっているようで鷹姫が一步さがった。その動きでプルンと乳房が揺れて、もう鮎美は理性が消し飛びそうになったけれど、かろうじて踏み留まった。

「スカートを脱がせるしな」

「…はい…、いえ、やはり自分で脱ぎます。そのくらいできそうですから」

鷹姫が自分の手でスカートのチャックをおろそうとすると、鮎美は手首を握って止めた。

「あかんで、自分の手も満足に動かせん障碍者の気分を知ってほしいねん。せやから、手も縛るしな」

「手まで……」

鷹姫は手首を握られたまま腕をあげさせられ、後頭部へ回されると目隠ししても余っている帯で頭部に固定されるように結ばれた。さらに反対の手首も同じように頭部に結びつけられて、両手の自由を完全に奪われた。鷹姫の両腋がよく見えるようになって、生えそろうった毛が鮎美には美しく見えたし、汗の匂いが拡がって、わざわざ嗅がなくても十分に感じられる。

「どうなん？ 目も見えず、手も動かせん気分は？ ハア…」

「……とても不自由で不安です」

声を出すと鷹姫の乳首が揺れる。それを摘みたくて吸いたくて、けれど、その前にスカートを脱がせることにした。チャックをおろし、ホックを外して、ゆっくり丁寧に足元までさげる。すらりと美しく、それでいて大腿四頭筋が力強そうな鷹姫の脚がすべて見えるようになった。鮎美は内腿を舐め回したくなったけれど、それも今は我慢する。

「シヨーツも脱がせるよ」

「……………」

鷹姫は返事をしなかったけれど、拒否もしなかった。

「…ハア…」

「……………」

鷹姫はショーツをおろされ裸にされた。あとは靴下だけになる。

「…ハア…」

「……………」

「…ハア…靴下、脱がせるから、バランス取れるように抱きしめるよ」

鮎美が口実をつくって鷹姫の腰回りを片手で抱いた。鮎美はしゃがんで鷹姫の靴下へ手を伸ばしつつ、下腹部へ頬をあてるようにしている。

「こっちの足をあげて」

「…………やはりバランスが取りにくいです。このように抱かれるより、座らせてもらえませんか？」

鷹姫は視界が無く、しかも両腕を大きく挙げさせられたまま固定されているので、どうにもバランスが悪くて不安定だった。

「そうやね、ほな、ゆっくり座らせてあげる」

鮎美は裸にした鷹姫のお尻をつかんで布団の上に座らせた。

「座ってるのも、腕あげたままやと、しんどいやろ。寝てしまい」

「…………はい…」

「寝かせるな」

裸の背中を抱いて、ゆっくりと布団に寝かせた。

「楽になった？」

「…………はい……………」

「ほな、靴下を脱がせるよ」

今度こそ、靴下を脱がせる。とうとう帯とポニーテールにしている髪ゴム以外は、すべて裸にした。それで、もう我慢できなくなって鮎美は舌を鷹姫の肌に近づけながら言う。

「くすぐったいけど、我慢してな」

「っ…」

鷹姫はお臍を舐められて身をよじる。

「な…何をするのでですか？」

「ちよつと舐めたかつてん、ごめん」

「ふぎけないでください。いつも、犬みたいに私を舐めて」

ついつい勉強中や休憩中に静江などがいないとき、そつと鷹姫のうなじや耳を舐めたことが何度かある、その度に迷惑そうにされたけれど、やめられずにいる。今回もやめられそうになかったし、今回は鷹姫が抵抗できない。何も見えないし、手も動かせず、布団に寝ていることしかできない。

「本当に視覚障碍者の体験なのですか？ ふぎけているだけではないですか？」

「……えつと……、視覚障碍者が、人なつつこい犬に、なつかれたときの対応を考える訓練つてことで、よろしく」

そう言つて、もう鮎美は遠慮無く鷹姫を舐め始める。頬を舐めて、うなじを舐めて、乳首を吸つて、腋を舐めた。

「…く…くすぐつたいですから…やめてください…コラ、やめなさい。…犬に言つても…犬なら…お座り！」

「……。ワン♪」

鷹姫が思いつきで命令し、鮎美は従いたくなつたので、その場にお座りした。

「よし、いい子ですね」

「……ハア……ハア……」

「……。もう飼い主のところへ帰りなさい」

「キュくん……」

悲しそうに鳴いて、また鷹姫を舐める。より犬のように頬をペロペロと舐めて、唇まで舐めて、どさくさ紛れにキスもした。

「コ、コラ、もう！ お座り！」

「ワン♪」

素直に従うけれど、お座りするのは5秒だけで、すぐに鷹姫を舐めにかかる。もう我慢のない犬程度にしか思考力がない風に振る舞っている。

「ああ、もう……」

とうとう鷹姫の方が諦めてくれたので思う存分に舐めた。

「……そんなに舐めて……鮎美……お腹を壊しますよ……」

「ワン♪ ワン♪」

「……いつまで犬なのですか……」

「ワン♪」

「……そろそろお風呂に入りたいです。……それに、トイレも」

入浴前に裸にされて鷹姫は生理現象を覚えてきていた。

「もう犬はやめて、そろそろ帯を解いてください。トイレへ行きたいです」

「……。うちが介護してあげるよ」

「そ……それは嫌です！」

「ええから、ええから」

「よくないです！ 嫌です！」

「障碍者やったら、他人の世話にならんとトイレも行けんやろ。そういう体験やねん」

「……」

鮎美は犬でいるのをやめて鷹姫を客室のトイレに導いた。いつも顔を赤くしたりすることの少ない鷹姫が頬を染めて恥じらっている姿は鮎美の脳裏に強く残った。トイレから出て鷹姫が疲れた声で願う。

「もう腕がつかいんです。どうか、両手を解いてください。手は使いませんから」

「そうやね」

ずつと腕をあげていたので血行が悪くなってきている。鮎美は手首を縛っていた帯を解いた。

「はああ……」

鷹姫が弱気なタメ息をついている姿も珍しかった。実直に手は使わずダラリと下げて、そのまま畳へ座り込んでいる。

「そろそろ、お風呂に入れてあげよか」

「……はい……お願いします…」

「うちも裸になる」

鮎美は制服と下着、靴下を脱いで鷹姫の分も片付けると、入浴の準備をしてから、もう少し犬になりたくなつた。浴衣の帯は、もう一本あるので、それを首輪のように自分の首へ巻いてから、反対の端を鷹姫の手首へ巻きながら言う。

「うちは盲導犬な。うちが引っぱる方に歩いて」

「…はい……色々なことを思いつきますね……」

もう鷹姫は疲れ切つた声で答えたけれど、素直に従つてくれる。鮎美は四つん這いになって、ゆっくりと部屋の中を歩き回る。鷹姫は何も見えないので引かれるまま、そろそろと歩いている。いつも凜として背筋を伸ばしている鷹姫が今は腰が引けて一歩一歩恐る恐る歩いているので、それが可愛らしくて鮎美は引くのをやめて、鷹姫の足元に伏せると、足の甲を舐めた。

「ワン♪」

「……どういう意味のある行為ですか？」

「舐めたかっただけ」

「………盲導犬、失格ですよ。そんなところに顔をやって危ないです。蹴つてしまうかもしれませんよ」

「ワン♪」

「………まだ、お風呂に着かないのですか？」

「あと3周したらワン」

「………はああ……視覚障碍者にとっての100メートルというのは、とてつもなく長いのですね……」

鮎美は12畳ある和室を3周してから露天風呂へ通じる戸の前に四つん這いで立った。

「ワン♪ ワン♪」

「ここを開けろ、と？」

「ワン♪」

犬語で心が通じて嬉しかった。鷹姫が手探りで戸を開けた。そのまま露天風呂に出る。

「……うっ…膝が痛いわ…」

四つん這いで石畳の上を歩くと、膝が痛かった。

「もう犬はやめては、どうですか？」

「……そうやね。このままやと帯も濡れてしまうし」

鮎美は立ち上がって首輪にしていた帯を解き、鷹姫の目隠しにしている帯も解きながら言う。

「まだ目は開けたらあかんよ。手も使えん障碍者のままな。うちが手で手を引いてあげるから安心して歩き」

「……はい…」

鮎美は向かい合って鷹姫の両手を持ち、後ろ歩きで洗い場に近づく。洗い場には高齢者が利用することも想定したように背もたれのある浴場椅子が置いてあり、ちょうどよいので使うことにした。

「背もたれのある椅子があるから、そこに座らせてあげるな」

「はい…」

「ゆっくり、お尻をおろすんよ」

鷹姫の裸のお尻を両手で包みながら、ゆっくりと座面の方へさげていく。

「そう、そこそこ。背もたれもあるから楽にしてみ」

「はい……はああ…」

無事に座れたというだけで大きく安心する。

「ほな、身体を洗ってあげるな」

「……はい……お願いします」

まだ目を閉じているし、両手も使えないつもりでいるので鷹姫は素直に全身を手洗いされた。鮎美自身も手早く身体を洗うと、シャワーで流した。

「髪は、あとで洗うわ。湯船に入る。立たせるし、うちの手を握って」

「はい」

両手を握ってもらい誘導される。畳だけの和室内と違い、どういう物があるか、まったく知らない露天風呂を移動するのは、かなりお互いに神経を使った。

「そこ、大きな石が階段になってるから、30センチほど足をあげて大きく一歩」

「は、はい……」

「そうそう。あと、もう一段あるんよ」

「はい」

「ええよ。次はお湯の中になるけど、深さ20センチくらいで石段があるから、そこへ一歩」

「はい……こう、ですか？」

「うん、いいよ。次の一歩は深いけど、それで湯船の底やから」

「はい………はああ……」

やっと湯船に浸かって足のやり場に神経を使わなくて済むとなると、深いタメ息が漏れた。鮎美も誘導が思ったより大変だったので息をつく。

「はあ………けっこう介護役も大変やね」

「………疲れました………まだ、目を開けてはいけませんか？」

「うん、布団に戻るまで頑張つて」

「………はい……」

「ゆっくり身体を、こっちに預けて。楽な姿勢で支えてあげるし。うちらだけの湯船やから髪を浸けてもええやろ」

鷹姫の背後に回って頭を抱くようにして身体を湯に浮かせる。

「どんな感じ？ 目が見えんで、お風呂に浸かっているのは」

「………気持ちいいような………不安なような………」

「この体勢つて不安？」

「いえ………湯船の広さも不明ですし、五里霧中………いったい、どんなところに自分があるのか、和室からチラッと見ただけですから、………けれど、本当の視覚障碍者は、まったく何も予備知識なく、チラッと見るなんてこともできずに駅や入浴施設に行くのですから、本当に大変ですね。………胸を揉むの、やめてください」

「ごめんごめん、つい柔らかさそうで」

「………はああ………」

また鷹姫が弱気なタメ息をついている。そろそろ二人とも熱く

なってきたので鮎美が誘導する。

「髪の毛、洗ってあげるわ」

「…はい………お願いします…」

「ごっちに、おいで」

また手を引いて浴場椅子まで案内する。座らせるときに今度はお尻ではなくて股間に触れたまま導いた。

「あの………あまり身体に触らないでください」

「触らんかったら誘導できんやん？ 痛かった？」

「………痛くはありませんけれど……」

「ほな、髪の毛、洗ってあげるな。ジツとしててな」

「…はい……」

鮎美はポニーテールにしている髪ゴムを丁寧に抜き取ると無くさないように自分の手首に巻いて、鷹姫の髪を自分の髪を洗う何倍も気を遣って優しく洗う。

「キレイな髪やね………って言ってあげたいけど、めっちゃ枝毛あるやん。剣道ばつかりで、ぜんぜん気を遣ってないんちゃう？ リンスしてる？」

「…いいえ………、洗う………だけです……」

「やっぱりか。ま、それが鷹姫らしくて、カッコいいかもしれんけど。美容室も行かんと自分で切ってるんやもんなあ………ワイルドやわあ」

「………」

「ごめん、痛かった？」

鮎美は鷹姫が表情を曇らせたので、髪を痛く引いてしまったのかと思っただけで、鷹姫は否定する。

「…いえ……」

「痛かったら、言うてな」

より慎重に鮎美は髪を洗っていく。優しく頭皮も指先で撫でて洗う。

「………」

「ごめん、痛い？」

「…いえ…っ…っ…っ…っ…」

「鷹姫……………」

「痛くないです…………っ…っ…っ…っ…」

痛くないと言うけれど、鷹姫は目を閉じたままの瞼から次々と涙を零している。その涙は止まる気配が無くて、もう肩を震わせ、顔を歪めて号泣のような泣き方をしている。声だけは押し殺しているのが余計に痛々しかった。

「…………鷹姫…………ごめん…」

鮎美は深く自省した。調子に乗りすぎたし、鷹姫の気持ちを考えていなかった。この露天風呂付きの客室なら、誰にも邪魔されることもなく好きなだけ好きなように鷹姫と過ごせると思っただけで予約した。けれど、鷹姫に何か同意をえたわけではない。あまり細かいことを気にせず無頓着な鷹姫なら、なし崩し的に身体を擦り寄せても受け入れてくれるかもしれないという淡い期待で、ここまで振る舞ったけれど、鷹姫の立場で考えてみれば、これはセクハラだったしパワハラだった。

「…っ…………っ…………っ…」

「鷹姫…………ごめん…………もう、せんから…」

対等な友人だったのは少し前までのことで、今は議員と秘書という主従関係に近いような労働契約があり、鷹姫の家は貧しくて月給30万円、卒業すれば50万円というのは願ってもないことだったし、鷹姫が家計へ給料を入れたおかげで、おさがりばかり着ていた妹たちは初めて新品の衣服や靴を市街地へ出て買ってもらい、とても喜んでいった。

「…っ…………っ…………っ…………っ…………っ…」

「そんなに泣かんでよ…………うちが悪かったから…」

絶対に辞めたくない仕事、その上司からの理不尽な要求、少し考えればわかることだったのに、鮎美は自身の悪行から目をそらして考えないようにはしていた。このくらいなら受け入れてくれる、このくらいなら大丈夫、という考え方で人倫の彼岸を渡っていた。けれど、鷹姫の涙を見て、どれだけ自分がひどいセクハラをしたのか、自覚してい

く。もし、同じように逆らえない関係で助けも呼べない密室に自分が連れ込まれ、意味不明な理屈で目隠しされたり両手を縛られたりして、身体を誰かに舐め回されたら、泣くほど嫌だと、すぐにわかる。

「……うーっ……うーっ……」

まだ鷹姫は指示された通り、目を閉じて、両手も使わず、泣いている。丸くなって肩を震わせて、閉じた瞼から大粒の涙を次々と零して泣いている。鷹姫の喉が震えていて、嗚咽を抑え込んでいるのが、よくわかった。

「鷹姫……。……ごめん……泡だけ、流すよ」

シャンプーの泡がついたまま泣いているのも、あわれなのでシャワーで髪を流した。

「……っ……っ……」

「鷹姫、……もう目を開けてもええよ。手も使ってくれてええから。うちがホンマに悪かった。二度とせんから、許して」

「……っ……っ……」

鷹姫が手を使って涙を拭いた。それでも、まだ涙が溢れてくる。少し目を開けて、鮎美に背中を向けて泣き出した。

「……うっ……くっ……こっちを見ないでください……」

「うん……ごめん……」

鮎美も自省と自己嫌悪と淋しきで胸が痛くなって泣きそうになる。結局、受け入れてくれない、それが当たり前、もし自分が男だったら、男で議員で鷹姫が秘書だったら、今夜は想い出に残る夜になったかもしれない、許嫁がいても絶対ではないし中学生にすぎない、けれど、現実には二人とも女だった。身を切られるほど切ない。わかっていたことなのに、なぜか、何度も希望を抱いてしまう。鷹姫が離れていかなければ秘書として働こうという意志があるからで、けっして性的なパートナーにはなりえないのに、そばにいてくれるから、つい期待している。

「……鷹姫……ずっと、そうしていると身体が冷えるよ。お湯に入る」

「……はい……ぐすっ……取り乱して、すみませんでした」

「鷹姫、そんな謝らんでよ。……悪いのは、うちやから」

再び二人で露天風呂に浸かった。もう鷹姫は自分で足元を見ているので、かなり離れて湯に浸かる。

「……っ……っ……」

「……鷹姫……」

「……っ……」

まだ泣いている背中が痛々しくて、抱きしめたいけれど、それが一番悪いことなのだと思ふを戒めると、いつそ死にたくなってくる。もし鷹姫が泣かなかつたら、布団に戻った後、何をするつもりでいたか、ほのかに想っていて具体的には考えないようにしていたけれど、押し倒して抱きしめてキスをして舐め回して指を挿入したかもしれない、きつと、そうした。鷹姫が嫌がったら卑怯にも金銭や立場を道具に使ったかもしれない。どうしても欲しかったし、手に入れたかった。

「……うちは……最低やね……。議員どころか……生きてる資格もないわ……」

「……っ……うっ……」

「どんなに謝っても許されへんと思うけど、ホンマに、ごめん。この上は、どうしてくれてもええよ。鷹姫の気の済むようにして」

「……ぐすっ……泣いたりして、申し訳ありませんでした。どうか、忘れてください」

こちらを向いた鷹姫が申し訳なさそうに頭を下げたので鮎美は驚く。

「っ、そんなっ、鷹姫！ 謝るのは、うちの方やから！」

「もう大丈夫です。続きをなさってください」

そう言った鷹姫は伏せていた目を、また完全に閉じた。

「……鷹姫……」

「どうぞ」

「……」

鮎美の腹中に自省したはずなのに邪悪な欲望が湧いてくる。ここまで覚悟しているなら、もう据え膳同様に食べてしまいたくなる。蹂躪して、うまくすれば快楽を覚えてくれるかもしれない。そんな歪ん

だ想いにかられた。

「……あかん。……ちやうやろ。……そんなん、あかん……」

それでも、さっきの鷹姫の涙を想い出すと、もう欲望のままに振る舞うことはできなかつた。

「もう、やめよ。もう、ええんよ。ごめんな、ホンマに、ごめん。そんなに無理して受け入れてくれんでええんよ。な、鷹姫」

「……」

「鷹姫が泣くほど嫌なこと、うちはできんから。もうせえへんから安心して。ごめんな、鷹姫」

「……鮎美……本当に、そんなに謝らないでください。突然に泣き出したりした私が悪いのです。ご心配をかけて、すみません」

「…鷹姫……謝るのは、うちの方やって。いっそ、殴つてくれても、竹刀でシバキ倒してくれてもええから」

「鮎美……、どうして……そこまで……。……聴いてください。私は、みなが言う空気を読むといったことが、とても苦手です。ノリというのも、よくわかりません。今の場合、ただ髪を洗ってもらっただけなのに、泣き出した私に変なだけではないですか？」

「……鷹姫？」

「言いたくはなかつたのですが、やはり聴いてください。私が泣いたのは、つい母のことを想い出してしまったからです」

「……お母さんの？……って、亡くならはった？」

「はい、母が事故で亡くなる前の晩、まだ幼かった私の髪をお風呂で洗ってくれていたのです。母は妊娠していて、すぐに妹ができるはずでしたから、明日からはタカちゃんが一番一人で洗いなさいね、と行って。それが母について覚えている最期のことです。翌日、急に陣痛が来た母は小さな舟で本土へ渡って病院へ行こうとしたのですが、無謀な運転をしていた水上バイクに衝突され、それがもとで母も妹も喪いました。鮎美に髪を洗ってもらっていて、そのことを想い出してしまい、どうにも泣けてきて……すみません。ですから、誤解されているようですけれど、私が泣いたのは視覚障害者や肢体不自由者の真似をするのが嫌だからではありません」

「……鷹姫……」

「もう大丈夫です。髪を洗われる以外は……。ですから、続けてください」

「そうやったんや……。お母さんの……。気の毒に……。その水上バイク、ひどいわ……」

「母の死は無駄ではありません。それ以後、鬼々島の周辺での水上バイク、ジェットスキーの航行は全面的に禁止されましたから。私は母を誇りに思っています。他の島民も、漁網を荒らす彼らに迷惑していましたから、母と妹の存在は無駄ではないのです」

「……そうやね……。島の役に立って……」

それでも生きていて欲しかったんやろ、せやから泣いたんやろ、と鮎美は同情の涙を浮かべて、瞬きで払った。

「鷹姫、もう十分に勉強になったから、目を開けてくれてええよ。ホンマに、もう十分やから」

「はい、では」

目を開けた鷹姫は気丈に顔を引き締めている。悲しくても本当に母親を誇りに想っている顔だった。

「ええお母さんやったんやね」

「はい、だから私は母が見守ってくれていると想い、それに恥じない生き方をしたいのです。剣道で成績を残すこともそうですし、都会から来た鮎美には、おかしく感じられて変に思うかもしれませんが、許嫁を受け入れることもまた母がしたように子をなし、順調に次の世代につなげていくという、人としての基本的な役割を果たしたいからです」

「っ……り……立派な心がけやね……」

鮎美は平静をよそおって答えたけれど、すぐに胸が締めつけられ、頭をハンマーで叩かれ続けているような苦痛を覚えて、涙が出てきた。さっきまでの鷹姫と同じように涙が止まらなくなって、どんなに手で拭いても溢れてくる。

「鮎美……そんなに泣かないでください。もう昔のことですから」

「うっ……うっ……うちは……。……うちは、こういう話に弱いねん。」

……ごめん、先に揚がって。こっちを見んといて」

「はい、失礼します」

鷹姫が揚がるまでに、声をあげて泣いてしまいそうで鮎美は湯の中に潜った。お湯の中で大泣きして、その涙が止まるまで、かなりの時間がかかった。

9月 陽湖

金曜日のお昼前、鮎美は授業中の教室で机へ突っ伏して眠っていた。授業は地学だったけれど、あまり聴いている生徒はいない。

「これらプレートの移動によって大陸も移動しており…」

多くの生徒は地学以外の教科書や参考書を広げて、自分が大学受験で必要な科目を学習していたり、鮎美のように寝ていたりするけれど、教師は寛容で注意したりせず淡々と授業を続けている。鷹姫は地学の教科書を広げて講義を聴いてはいるけれど、うとうとと背筋を伸ばしたまま眠ってしまうことが多いほど疲れていた。連日、放課後から日が暮れるまで選挙カーに乗ったり街頭演説をしたりし、拡声器が使えない時間になると文化ホールや市民会館での個別演説会へ弁士として参加させられ、その後に選挙戦略についての会議ということになるので日付が変わってからビジネスホテルに泊まり、そこから登校するという生活を送っていた。お昼休みになって学生食堂で鮎美と鷹姫は昼食を済ませると、校庭の木陰で午睡する。二人で木の幹へ背中を預けて、しばらく眠っているとチャイムが鳴る5分前に誰かに声をかけられた。

「貴重なお昼寝の邪魔をして、ごめんなさい」

「う〜……………」

鮎美は少し目を開け、鷹姫も起きた。

「はじめまして。月谷陽湖(つきたにようこ)といいます。シスター鮎美」

「はア?」

先生と呼ばれることには慣れてきたけれど、慣れない呼び方をされた鮎美は首を傾げた。鷹姫が説明してくれる。

「幸福のエホバの信者なのでしよう。彼らは名にシスター、ブラザーをつけて呼び合っています」

「ふ〜ん……………うちは信者やないけど」

やや心外そうに鮎美が言うと、陽湖は微笑をつくった。陽湖は生ま

れつき少しだけ茶色い黒髪を白いカチューシャで飾り、制服は一切の改造をせずに着ていて、厚手の白いストッキングをはいている。肌も色白で透き通るような目をしていた。

「この学園に在籍しているうちは、みなエホバの導きを受けることになる」と入学時に説明がありましたか？」

「あく……そういうや転入する手続きのときに、そんなこと言われたけど、しつこい勧誘はせんという話やったから気にせんと入学したんやけど、ほんで何？」

「あなたと友達になりました。シスター鮎美、私と友達になつてください」

「……………露骨に宗教勧誘やな」

鮎美は相手が握手のために手を出してきたので、ほぼ反射的に握り合っただけで、やや後悔して歯に衣を着せずに言った。それで陽湖が笑う。

「クスッ、お噂の通り、正直な性格をされているのですね」

「それを聴いてるんやったら、都合がええわ。うち、宗教嫌いやし」

「あら、どうしてですか？」

「非科学的やからや」

「芹沢先生、ご予定、忘れてませんよね？」

鷹姫が、冷静になれ、という暗号を放ったので、鮎美もつい陽湖が同じ高校生なので議員という立場を忘れて話していたことに気づいて改める。

「覚えてるよ。鷹姫、おおきに。えっと、ほんで月谷はんやっただけ。うちは、あんまり宗教は、ちよつと。話くらいなら聴いてもええけど、今は選挙の応援で忙しいし。あんた18歳？」

「はい、先月から18歳です」

「そら、成人おめでとう」

「ありがとう、シスター鮎美」

「……………で、よかったら、県知事選、御蘇松善行さんへ投票したってな。ええ人やで」

誰がシスター鮎美やねん、キモい呼び方すんなやボケ、可愛い顔し

て頭は腐りかけてんなあ、けどキレイな目してるわ、スカートの長さが逆に楚々として女っぽいし、このスカートめくつたら赤くなってるやろな、って、やっぱり、うちの方が頭腐ってるわ、と思いながら鮎美は完璧な笑顔で投票を頼んだ。

「はい、シスター鮎美のご依頼なら、そうさせていただきます」

「おおきに。信じてるわ」

「私、ウソは申しませんよ」

微笑んでいる陽湖を見ていて、鷹姫は思い出した。

「あなたは、たしか生徒会長でしたね？」

「はい。正確には、生徒信仰告白総括会長ですけど」

「……………」

「他の学校でいう生徒会長のような仕事もしていますよ」

予鈴が鳴ったので鮎美と鷹姫は立ち上がり校舎へ向かう。いっしょに陽湖も話ながらついてくる。ただの芹沢鮎美でいたなら、すぐに追い払ったところだったけれど、今は議員になる予定で、しかも選挙応援中なので邪険にするのは一票のために控える。

「そら、ご苦労さんやね。ちなみ、この学校って生徒会長は、どうやって決めてるん？ 投票？ 先生からの推薦？」

「生徒の中で、エホバへの確かな信仰を持つ者が先生方から選ばれ、選ばれた数名が体育館で行われる告白演説会で全校生徒へ、いかにエホバの導きが素晴らしいかを説き、その後には生徒からの投票で選ばれます」

「ふーん……制限選挙か。あるんやなあ……。クジ引きよりマシか。いや……公平性が……。まあ、宗教学校やしなあ……。そんなもんか。ほんでも、聴いた話では95%の生徒が信仰してないってことらしいけど、そうなん？」

「まだエホバの導きに気づいておられないだけです」

「……………」

「シスター鮎美はエホバを感じておられますか？」

「……………」

「こういうヤツと喋ると疲れるわ、と鮎美がタメ息をつきそうになっ

っていると鷹姫が言ってくれる。

「芹沢先生は、お疲れなのです。陳情や面談は党へアポイントを取ってください」

「宮本さんも、いい秘書をされているのね」

「ほな、またね。御蘇松善行への一票、よろしく頼むよ」

もう教室に到着したので鮎美は最後のお願いをしてから陽湖と別れるつもりだったけれど、彼女は教室まで入ってきた。

「月谷はん、このクラスちやうやんね?」

「いえ、すぐ紹介されると思います」

陽湖が笑顔で答えていると、次の授業の教師といっしょに担任と校長が教室へ入ってきた。

「よし、校長先生から話がある。静かに聴け」

「特別な措置をして、みなは驚くだろうが、校則にもあるよう我が学園は神の導きを生徒たちに示すことを第一にしている。そこで国民の代表ともなる芹沢くんと生徒の代表である月谷くんを同じクラスとし、卒業まで隣席とすることにした」

「なっ?!」

鮎美は驚いているけれど、クラスの生徒たちは大きな関心はあらわしていない。転校してきた鮎美と違い、たまにある宗教的理由による学校運営を経験してきたようで、騒いだりする様子はなかった。

「では、山田くん、月谷さんへ席を譲って。列の全体も一つずつ、さがってくれ」

「はい」

鮎美の隣席だった男子も素直に立ち上がった。

「ちよっ?! そんな、めちな?!」

慣れていない鮎美だけが驚いていると、鷹姫が言ってくる。

「芹沢先生、ご予定、忘れてませんよね?」

「…け…けど、今の場合は…」

「よろしくね、シスター鮎美」

陽湖は微笑んで鮎美の隣りへ座った。

「うっ、うくん……あ、そや。先生、提案します!」

鮎美が良案を思いつき挙手した。

「何ですか？ 芹沢さん」

「いきなり、うちの隣席だけズレるのも、みんなの公平性に微妙な感じですよ。いっそ、全体も席替えしません？ ほんで、うちの隣りだけは固定で月谷はんと秘書の鷹姫つてことで、あとはクジ引き。うちの席は今後、公務での遅刻早退もあるかもしれないし、みんなの気をちらさんよう後方出入口付近でお願いします」

どうせ拒否できない流れのようなので、いっそ鮎美は鷹姫も隣席で固定できるように言ってみた。

「うむ……そうだな、そうしようか。すぐ授業だから、急いでクジを引け」

担任が席替え用に置いているクジの入った缶を生徒たちへ回し、鮎美と鷹姫と陽湖は引かず、鐘留は祈ってから引く。

「どうか、アユミンたちの近くになりますように。神さま、エホバさま、大明神さま、そして初代の鐘吉さま、頼むよお〜」

「緑野！ 時間が無いから早く引け！ ホームルームじゃないぞ！」

「はいはい♪ 23番。やったね。宮ちゃんの前だよ」

席替えが終わり鮎美たちは教室後方出入口付近にかたまることになった。担任と校長が出て行く。校長は出かけに鮎美へ言った。

「月谷さんと仲良くしてください」

「……ま、それなりに」

校長たちが去ると、本来この時間を担当する教師が授業をはじめ

る。
「では、みなさん、聖書のマタイ5章を開いてください」

科目は聖書研究で、文科省が定めた学習指導要領から外れた私立学校独特の科目だった。鮎美は放課後に備えて寝るつもりで、転入時に買わされた聖書を枕にして机に倒れる。それを見て鷹姫と陽湖が同時に注意してくる。

「この授業は起きていてください」

「……なんでよっ〜」

「やっぱり知らないのね。シスター鷹姫から説明してあげて」
「……」

鷹姫もシスター付きで呼ばれるのは慣れない様子だったけれど、大切なことなので説明する。

「他の授業は受験勉強をしたりしても叱られません、この科目だけは、まじめに聴講しないと、あとで、やつかいな宿題を出されますよ」

「どんな宿題なん？」

「聖書の一章を丸写しです」

「うっ…写経か…般若心経ならともかく、こんなクソ長い本を…」

鮎美がペラペラと聖書をめくっている。章によって長さは違うけれど、丸写しとなると、かなりの苦行に感じられた。陽湖が言ってくる。

「私たちの学園で一番大切な授業ですから、みなさんも聴いてくださいね。毎年、幾人かは聖書研究の授業でエホバへ近づきたいと、目覚めてくださるのですから」

「うちは目覚めんと寝てたいわ」

鮎美の声は教師には届かず、白髪の教師は講義を進める。

「前回、あやまった行為の数々を紹介しました。ごく単純に盗むな、殺すな、姦淫するな、といった教えは、信仰をもっていない人にも、ご理解いただけるでしょう」

「……………」

ま、刑法の基本やね、聖書がローマの立法に影響を与えて、それがドイツ法フランス法に発展しつつ、イギリスでも発展して欧米法に、その両方が日本に入ってきてるけど、成文法やった独仏の影響が強いから、あながち無駄な時間でもないかな、と鮎美は睡眠を取れないことは諦めて授業を聴く。

「では、マタイ5章27から。誰か読んでください」

「はいー！」

陽湖と男子の一人が小学校一年生のような素直さで挙手している。もう他のクラスメートたちは二人が信者であることはわかりきって

いて、いつもの光景なので何も反応しない。

「では…そうだね、いつもブラザー博史が読んでくれているから、今日はシスター陽湖をあてましょう。シスター陽湖、お願いします」

「はい。あなたは姦淫を犯してはならない、と言われたのをあなた方は聞きました。しかし、わたしはあなた方に言いますが、女を見つづけてこれに情欲を抱く者はみな、すでに心の中でその女と姦淫を犯したのです」

「ありがとう、シスター陽湖。さて、みなさんは、この教えを、どう感じますか」

「はい！」

また陽湖と信者男子が挙手しているけれど、教師は微笑んで応じる。

「二人の感じたことも大切ですが、いまはエホバの声が届いていない生徒たちに訊いてみましょう。どうですか、みなさん？」

「……………」

見ただけで犯したちゅーんやったら、うちは鷹姫を一日に10回は姦淫してるちゅーねん、と鮎美は苛立ちと身体の熱さを感じた。鷹姫が亡き母のためにも、許嫁を受け入れて順調に次の世代へつなげるよう子をなしたい、と真剣に想っていることを知って以来、鮎美は強く自制して、鷹姫を裸にしたりするようなことは控えている。選挙活動のおかげで毎晩のように経費で鷹姫とビジネスホテルに泊まれるけれど、鷹姫と身体を重ねることは我慢している。ただ、疲れていて眠ってしまった鷹姫の寝顔を見て、その寝顔を見つめたまま、隣のベッドの上で自分で自分を慰めていた。おかげで授業中は、ひどく眠い。

「はい、はい」

鐘留が挙手している。

「緑野さん、どうぞ」

教師は信者でない生徒にはシスターブラザーを付けずに呼んでいた。あてられて鐘留は笑いながら答える。

「アタシって、たぶんさ。この学校の男子みんなに姦淫されたかも。

きやは♪ あと、モデルだったころの水着とかの写真も、けっこう使ってる男子いるんじゃないかな？ って思いました」

「……。それを緑野さんは、嬉しいと感じているのですか？」

「まーね」

鐘留は極端に短いスカートで足を組み直した。教師が悲しげに言う。

「緑野さんが、そう感じているのは、それはサタンの仕業で、あなた本来は、もっと自分を大切にされる素晴らしい少女だったはずなのですよ」

「出たね、サタン」

「シスター鐘留、あなたのスカートは短すぎて、見苦しくて目障りですよ。いくら学園が生徒の自由な判断を尊重しているからといって、なぜ自由なのかと言えば、それぞれにサタンに対抗してほしいからなのです」

陽湖が言った。

「見ちゃヤダ♪ 恥ずかしい」

鐘留が恥ずかしがる演技をして脚を閉じて、股間と胸を両手で守る真似をした。それを見ていて不覚にも鮎美は発情した。もともと可愛らしい鐘留がしおらしい仕草を見ると、鮎美は抱きしめたい衝動を覚えたりする。けれど、鮎美は視線を鐘留から、その後方にいる隣席の鷹姫へ移す。鷹姫は興味なさそうに行儀良く聖書を開いている。その指、その耳、どこを見てもキスをしたくなってしまう。鷹姫が鮎美の視線に気づいて、首を傾げた。

「……」

「……」

何ですか、何でもないわ、というアイコンタクトは成立した。陽湖が穏やかに鐘留へ注意している。

「恥ずかしいなら、もう少しスカートを長くしては、どうですか」

「じゃあ恥ずかしくない。みんなが見てくれて嬉しい。先生、みんなに喜びを与えるのは、いいことじゃないの？」

「それは喜びではなく、あやまった誘惑です。啓示17章の2節から

8節までを、誰か読んでくれますか?」

「はい!」

「ブラザー博史、お願いします」

今度は男子があてられた。

「地の王たちは彼女と淫行を犯し、地に住む者たちは彼女の淫行のぶどう酒に酔わされた。そして彼は、霊の力のうちにわたしを荒野に運んで行った。そこでわたしは、冒瀆的な名で満ちた、七つの頭と十本の角を持つ緋色の野獣の上に、ひとりの女が座っているのを目にした。また、その女は紫と緋で装い、金と宝石と真珠で身を飾り、手には、嫌悪すべきものと彼女の淫行の汚れたものとで満ちた黄金の杯を持っていた。そして、額にはひとつの名が書いてあった。それは秘儀であつて、大いなるバビロン、娼婦たちと地の嫌悪すべきものとの母、というものであつた。またわたしは、その女が聖なる者たちの血とイエスの証人たちの血に酔っているのを見た。さて、彼女を目にした時、わたしは非常に不思議に思った。すると、み使いがわたしに言った。なぜ不思議に思ったのか。わたしは、女と、その女を運んでいる、七つの頭と十本の角を持つ野獣の秘儀をあなたに告げよう。あなたの見た野獣はかつていたが、今はいない。しかし底知れぬ深みからまさに上ろうとしており、そして去つて滅びに至ることになつていたが、今はおらず、後に現われるようになるのを見る時、地に住む者たちは驚いて感心するであろう。しかし彼らの名は世の基が置かれて以来命の巻き物に書かれていない」

長い聖句を聴いていて鮎美は思ったことを、つぶやく。

「聖書って便利やな」

「どこが?」

「カネちゃん今、遠回しに娼婦つて言われたやん。とくに最悪なことは、嫌悪すべきものと彼女の淫行の汚れたものとで満ちた黄金の杯、つてリアルに想像するとエグいわあ。これ、学校教師が女子生徒に言うたんやったら、大問題やで。それを聖書の朗読つて形で終わらせるなんて、なんちゅー便利なアイテムやねん」

「シスター鮎美、聖書をそのように言われると私は悲しみを覚えます」

「ほな、どこか慰めてくれそうなところを読めばええやん」

「聖書は便利な道具ではないのですよ」

「ほな、何や？」

「エホバと私たちをつなぐ貴重な書です。ここに真理があり、すべてがあるのです」

「……………ま、そう思うんなら、そうなんちゃう。いい感じに慰めてくれそうやし」

「シスター鮎美……………」

黙っていた鷹姫が付け加える。

「日本人から見れば、聖書は侵略の道具です。秀吉、家康が禁教とし徹底して排除したのは、武士として正しい判断です。おかげで南北アメリカ大陸、オセアニア、東南アジアの一部地域、アフリカのように、もともと持っていた文化を破壊され、人々が蹂躪されることはありませんでした。大戦に敗れてなお、キリスト教徒は国内に1%に過ぎません」

「シスター鷹姫はキリスト教が嫌いですか？」

「好き嫌いの問題ではなく、敵だと思っています」

「……………それで、どうして、この学校に来たの？ 他の公立校にすればいいのに？」

「我が家が貧しく交通費と低所得家庭への私学助成金を考えると、ここが最適だったからに過ぎません」

「そう、それは、お気の毒なことです。もし、足りないものがあつたら言ってくください。私たち幸福のエホバの信徒は、助け合って生きることも喜びとしていますから」

「……………」

鷹姫と鮎美、鐘留は生きていく上での立脚する場所が、まったく違う陽湖に対して言うべき言葉を無くした。聖書研究の授業が終わり、次の漢文は寝て過ごし、放課後になったので鮎美は選挙カーに乗った。

「御蘇松です！ 六角市のみなさん、御蘇松善行に清き一票をお願いします」

します！」

校門から選挙カーで出発する鮎美のことは評判になり、わざわざ撮りに来る人もいるほどで、そして市内での評判も良く、選挙カーから感じる風は悪くない。そのまま六角駅まで移動すると、ロータリーに駐めて、御蘇松と選挙カーの天井部分へ上る。選挙カーの天井はステージにもなるけれど、ハシゴで登る必要があるので制服のスカートでは下着が見えてしまう危険があり、静江と鷹姫が幟やポスターで隠してくれる。天井に上った御蘇松と鮎美は息のあった演説をして、聴衆から笑いと拍手をもらった。

「静江はん、次は、どこなん？」

「三上市、それから、阪本市よ。移動中、休憩して。選挙カーはウグイス嬢にしてもらうから」

ずつと声を出していられるものでもないのに鮎美は休息のために静江が運転する車の後席に乗った。うたた寝している顔を外から見られるのも良くないので、静江の指示で鷹姫の膝枕へ伏せるという時間は何より楽しみだった。

「お疲れ様です。芹沢先生」

「……うん……」

演説と連呼以外では喉が痛いので発声を控え目に行っている。鷹姫へも最低限の返事だけして、膝を貸してもらって目を閉じる。鷹姫が腕を揉んでくれた。毎日ずっと振っている手も筋肉痛で肩から背中にかけて痛む。鷹姫の腿の感触と、揉んでくれる手の心地よさを感じる幸せな時間を過ごして、三上市にある新駅建設予定地に到着した。すでに県議と石永が前座の演説をしていて、御蘇松と鮎美にバトンタッチした。

「どうか、みなさん、この御蘇松にお力添えください。ここまで計画は進んでいる。あとは着工を待つばかりです。とくに地権者のみなさん、ご先祖伝来の地を譲ってください……」

地元でもあり新駅推進の起点でもある三上市での演説は反応も良く、鮎美も演説慣れしてきたので笑いをとったりした後に、しっかりと投票のお願いをしている。演説が終わると石永が誉めてくれた。

「いいね。芹沢さん、いや、もう芹沢先生だな。すっかり様になつてるよ。雄琴先生もしつかりした人だし、うちのクジ引き議員は当たりに来てもらえたな」

「クジ引き議員に外れて、あるんですか？」

「ああ、聴いた話では自民党でも他党でも、まったく役に立たない人もいたり、人の話を聞かないタイプの人もいたり、お金ばかり追いかけたりという人もいたりで大変な地区もあるみたいだ。ま、悪評には6年後、必ず審判がくだるさ」

「芹沢先生、お兄ちゃ…じゃなくて石永先生、それぞれ車に戻ってください」

まだまだ予定があるので静江にせかさされ、移動する。阪本市にある阪本駅前に来ると、鮎美は空気感の悪さをはつきりと感じた。

「……………」

あかんやん、雄琴先生が頑張ってるけど、みんな素通りやん、と鮎美は直樹が登壇して話していても、聴いているのは動員をかけた自民党員と関係者だけで一般人は誰も足を止めていないのに気づいた。しかも、これから女子高生で議員になるという話題性あるはずの鮎美が来ることを告知してもいたのに、人は集まっていない。御蘇松は選挙カーで三上市と阪本市をいろいろと回ってから、ここへ来るはずなので、あと30分ばかり鮎美がつかなくなるとはいけない。静江と鷹姫が心配そうに鮎美を見てくれる。

「芹沢先生……………」

「嘆いてもしやらない。やろか」

鷹姫が持つていたペットボトルから一口だけお茶を飲み、鮎美は戦線に加わる。鮎美が登壇すると、直樹は来援に喜ぶ顔をした。

「皆さん、お待ちかねの。芹沢先生の登場です！」

「こんにちは！　うちが芹沢鮎美です！」

第一声も悪くなかった。けれど、人は集まらない。わずかに下校中の高校生たちが物珍しきで写真を撮っていたりするけれど、三上市とは空気感が、まったく違い。とても冷たかった。なんとか直樹と同じクジ引き議員同士で話をつなぎ、御蘇松の県政8年の堅実さなども

アピールして時間を乗り切り、御蘇松が来るまでには300人ほどは集めておいた。

「御蘇松です。阪本市のみなさん、この8年…」

けれど、御蘇松の演説が始まると、高校生たちは興味を無くして去ってしまい、年配の聴衆もじわじわと減り、演説が終わる頃には動員した者しか残っていなかった。鮎美が直樹と小声で話す。

「なんで、阪本市って、ここまで雰囲気が悪いん？ 反自民なん？」

「阪本駅から京都駅までは二駅しかないんだ。新幹線新駅が三上市にできるメリットは何一つない。そして、県最南部なのに明治維新後、ずっと県庁が阪本にあるけれど、これを城下町の井伊市か、県中央にある三上市や六角市に移そうって話も何度も出ては消えてる。もし、新駅ができると、より県庁移転論に火がつくからさ」

「ようするに自分とかが、さびれるのが嫌なんや？」

「そういうことや」

「……………みんな全体より、自分なんや……………」

疲れた様子の鮎美へ鷹姫がスポーツドリンクとチョコレートを渡してくれる。

「…おおきに……………次は？」

「朽木市です」

「…うん…」

最小限の返事をして車に乗った。県知事選の選挙応援は移動時間との戦いという面もあり、各地での演説は候補者が到着するまでは応援弁士が受け持ち、その応援弁士もまた次々と移動しなくてはいけない。鮎美の演説力が当初の想定より早く成長してきているので、選挙カーに乗せてウグイス嬢のように使うより、一人前の弁士として使う方が効果的だということに選挙戦術が変化してきている。放課後から六角市、三上市、阪本市、朽木市で屋外の演説をこなした後は浅井市と井伊市の市民ホールで弁舌を振るい、最後の会場では帰宅する市民を玄関ホールで見送りつつ、握手も交わし、投票を呼びかけた。

「終わったあ……………あと、会議あんの？ 明日は土曜やし、朝一から、うちを使う気いやんね……………学校やったら寝られたのに…」

「……」

静江と鷹姫は鮎美の顔色を見て選挙参謀へ連絡を入れ、とても疲れ
ているので会議参加は無理だと伝えた。会議の結果だけが知らされ
ることになり、静江は最寄りだった井伊市と六角市の間地点にある
湖岸の温泉旅館へ予約を入れた。そこへ三人で宿泊する。

「石永さん、この差額は？」

ビジネスホテルではなかったので鷹姫が心配していると、静江はコ
ンビニ弁当の入った袋を掲げる。

「素泊まりだから経費内で落ちるよ。朝食は期待して」

「うち……ご飯より……お風呂……ベタベタで気持ち悪い……」

残暑厳しい9月の中、何時間も屋外演説し、さらに蒸し暑い市民
ホールでも愛想を振りまき、汗をかいている。移動中に静江が用意し
ておいてくれた濡れタオルで身体を拭いたり、制汗スプレーと日焼け
止めを追加で何度も使ったり、軽くメイクもしたりと細かい対策はし
てきたけれど、今はお風呂に飛び込みたかった。疲れすぎていて空腹
は覚えないし、汗対策と同時にスポーツドリンクや高栄養のゼリーや
菓子を口に入れられている。もう今は身体を洗って寝たいだけだっ
た。

「芹沢先生、しっかりしてください」

ふらついていると鷹姫が肩を貸してくれた。鷹姫の髪と、鮎美の髪
が混じり合う。

「あ……幸せやわ……」

そう言つて目を閉じて、もう寝かけている。

「仕方ないわね。鮎美ちゃん、お風呂いくんでしょ」

静江も反対から支え、女湯へ鮎美を運んだ。脱衣所で静江は脱がせ
た鮎美のスカートを拾うと、その匂いを嗅いだ。鮎美のスカートは生
地に汗が染み込んで塩になっている部分さえあった。

「うくん……今夜中にドライクリーニングするとしても、やっぱり、も
う一着、買ってもらった方がいいかな。少し匂うし」

「……………」

鮎美は目を開けて半分寝ているので何も聴いていない。鷹姫も鮎

美のスカートの匂いを嗅いだ。

「不快なほどではないですよ。もう一着というのは学校の制服を、ですか？」

「そうよ。私みたいなパンツスーツにすればパンチラ対策しなくてすむけど、何より現役女子高生ってことが売りなんだから、制服は候補者のタスキなみに外せないわ」

「ですが、夏服は来月には不要になります」

「そっか。じゃ、冬服は多めに買って置いてもらおうかな」

「……すぐに卒業いたしますよ。それに芹沢先生は転入生ですから冬服も新品をお持ちです」

「それにしたって、うっかり汚したりすることもあるから、予備は絶対いるよ。匂いも不快になってからでは遅いの。香水も女子高生としてはイメージ良くないし」

「そういうものですか」

言いながら鷹姫は鮎美のブラジャーを外してショーツを引き下げたけれど、とくに興奮することはなかった。裸にした鮎美をおんぶして洗い場へ入る。もう寝てしまった鮎美の身体を二人で洗ってやり、温泉の湯船に浮かべた。

「芹沢先生……これほど、お疲れに……」

「温泉に入った記憶が残らなくて、かわいそうだけど、さっぱりはするでしょ」

二人で協力して鮎美を客室の布団に寝かせると、テーブルにコンビ二弁当を広げた。静江は食べながらノートパソコンを操作し、送られてくる会議の結果に目を通してしている。

「明日も朝から、ずっと鮎美ちゃんを使う気ね」

「……。体力的に心配です」

「そうね。弁舌が思ったより立つからって、お兄ちゃんたち期待しすぎ。これじゃ土日ずっと出っぱなし」

「少しでも減らせませんか？」

「時間調整で他の弁士に長く話してもらおうくらいで、出番そのものは減らせないかな。鮎美ちゃんが来るってことで告知したり動員かけ

てるから」

「……………」

「さ、そんな顔してないで、さっさと食べて。私たちも寝ましょう」
「はい」

二人は秘書として明日の準備をしてから眠った。

翌朝、鮎美は客室で温泉旅館の朝食を食べながら、温泉に入った記憶は無かったけれど、鷹姫と静江の二人に身体を洗ってもらっていたと聞いて赤面していた。

「そっ…そうなんや…おおきに…」

「重くて大変だったのよ。まあ、宮本さんがおんぶしてくれたりしたから助かったけど」

「おんぶ…鷹姫が、うちを…」

ますます顔を赤くしているけれど、鷹姫は別のことを思い出した。

「石永さんは、幸福のエホバという宗教をご存じですか？」

「ご存じも何も二人が通ってる学校の宗教でしょ」

「はい、そうです」

「それがどうしたの？」

「実は…」

鷹姫は急に同じクラスへ陽湖が編入されてきた一件を話した。

「なるほどねえ」

「何らかの策謀ではないかと警戒すべきでしょうか」

「うくん…宮本さんって秘書というより戦国時代の近衛みたいな考え方するわね。たぶん大丈夫よ、幸福のエホバはおとなしい宗教だし。せっかく在籍生徒の一人が議員に選出されたんだから、なんとか教化できないかって考えで、同い年の生徒会長さんをあててきた。やってることは雄琴先生を自民党が芹沢先生の専属担当にして勧誘したのと似たようなものよ」

「では芹沢先生の思想に影響を与えようというわけですか」

「まあ、そうなるわね」

「……………」

「鷹姫、そんな心配そうな顔せんでも、うちが、あんなアホバたら、アホバカたらいう、わけのわからん宗教に影響されるわけないやん。この世に神なんぞ、おらん」

「芹沢先生が、そうおっしゃられるなら安心です」

「鮎美ちゃんって無神論者？ あ、芹沢先生は特定の宗教を信じておられますか？」

「わざわざ言い直さんでも」

「大変に微妙な問題ですから、またお怒りを買わないように」

「はいはい。うちは何も信じてないよ。神社に行ったら、御守りくらい買うけど」

「そうですか。実は政治の世界で宗教の問題は非常に微妙です。特定の宗教を悪く言うことはさけてください」

「そうなんや」

「彼らは敵にするより味方しておくべきです」

「…………え……………あいつらを……………」

「彼らも、こちらを利用してきます。現に兄のところへは陳情もありますし、寄付もあります」

「宗教団体が政治家に寄付すんにや？ 何の狙いで？」

「宗教によつては神殿や聖地を建設したいと計画する場合などで、行政への許認可などで議員を味方につけておくことは大きいですし、その見返りという明示はせずとも寄付があります」

「思いつきワイロやん」

「政治資金収支報告書に記載し、手続きを踏めば合法的な寄付です」

「大人の汚いところやなあ……………結局、お金か」

「金銭だけではありません。友好関係を築いておけば、選挙において票になりえます。しかも、風向きで変わる票ではなく固定した安定票です」

「持ちつ持たれつか、ここでも」

鮎美は食べ終わって時刻を見る。少しだけ余裕があった。

「温泉、入ってきてええ？」

「15分だけなら、どうぞ」

「やった。鷹姫も来ん？」

「私は準備がありますので。申し訳ありません」

「そっか……ほな、急いで入ってくるわ」

鮎美は一人で旅館の温泉に入った。時計を気にしながら、少しでも湯船に浸かる。

「はああ……うちの身体……鷹姫が洗ってくれたんや……」

余計なことを想像したので顔が温泉の効果以上に赤くなる。

「……鷹姫……でも、鷹姫は、まつとうに生きたいんやもんな
……うちみたいな腐ったもんが……」

そこまで言って鮎美は湯に潜り、しばらくして飛び出ると冷水を浴びてから脱衣所へ向かった。浴衣を着て客室に戻ると、もう二人の秘書が準備をしてくれている。鮎美は日焼け止めを塗ってもらい、軽いメイクもしてもらうと、無香料の制汗スプレーを多めにかけてから制服に袖を通した。

「戦闘準備完了や！」

「はい、いざ参りましょう」

「……。芹沢先生と宮本さん、いいコンビかもね」

「うちらだけでは足りんよ。静江はんが常識を教える役をやってもらわんと」

「はいはい、じゃあ車を回してくるから、宮本さんはお会計しておいてね」

「はい」

三人で本日最初の演説会場になる六角市男女共同参画センターで向かう。主要な国道を静江の運転で走っている時だった。

「加賀田夏子です！ 加賀田、加賀田夏子です！」

「あ、とうとう」

静江が前方を走っている対立候補の選挙カーに気づいた。鮎美も視認する。

「ようやく出会たね」

「市議選と違って広い県内に一台きりの選挙カーだから、出会わずに

選挙が終わることもあるかと思ってたけど、とうとうね」

「向こうは、こつちに気づくやろか」

「それは無いと思うわ。私の車は、ごく普通だから」

静江はそう言ったけれど、夏子の選挙カーは右折するために右折レーンへ入り、静江たちは直進だったので進もうとしたけれど、信号が赤になり、並んで停車することになった。

「……この人が……」

鮎美は後席から夏子の選挙カーを見る。夏子は助手席に乗っていて、窓を全開していた。

「っ……」

「あっ……」

お互いの目が合い、鮎美は動揺したけれど、夏子は屈託無く微笑んだ。そしてマイクを握って言うてくる。

「おはよう。もしかして、芹沢鮎美ちゃん？」

「っ……んなデカイ声で……」

「やっぱり、鮎美ちゃんね。会えて嬉しい」

夏子は紫がかった黒髪を肩まで伸ばしていて、白いスーツを着ている。白のスーツは、くつきりとした黒のラインで装飾されていて、よく目立った。ややタレ目の夏子が微笑むと、かなり年上のはずなのに鮎美は可愛いと感じてしまった。

「……」

「鮎美ちゃんとは、今回は対立陣営だけど、次はいつしよだといいいね」

「……………」

信号が青になり、静江はアクセルを踏んだ。すぐに夏子の選挙カーは見えなくなった。

「……ビビったあ……なんちゅー女やマイク使こて声かけてきよつた……」

「しかも勝った気でいたわ」

静江が忌々しそうに言い、鷹姫は黙って頷いた。鮎美が額に浮いた汗を手の甲で拭いた。

「せやけど、ポスターで見るより可愛い感じの人やったなあ」

「……………」

「うちらも負けてられんね」

鮎美は闘志を再燃させて気合を入れた。

9月 信仰

土曜日の丸一日を街頭演説と個別演説会に費やした鮎美はビジネスホテルへ向かう車中で自分の右手を見つめて、つぶやいた。

「……今日、いったい何人の人と、うちは握手をしたんやろ……」

「千人は超えるでしょうね。お疲れ様です、本当に」

静江が運転席から言ってくれたし、鷹姫が隣から肩を揉もうとしてくれるので、甘えて膝枕してもらおう。

「どうぞ、お休みください」

「おおきに……ホテルに着いたら、起こしてな」

そう言っただけ目を閉じると、唖に何百人という聴衆の顔が少しだけ浮かんでいただけ、すぐに眠りに落ちた。

「起きてください、芹沢先生。着きましたよ」

「う……」

昨日と違って起きる気だったので、なんとか目を開けた。ビジネスホテルの駐車場から客室まで鷹姫に支えてもらって歩いた。今夜は静江はシングルへ入り、鮎美と鷹姫は二人部屋という割り振り、鮎美の要望でビジネスホテルとしては浴室の広いところを選んでいた。部屋に入るとベッドに倒れ込みたい欲求にかられたけれど、それを我慢してベッドに座り、フラフラと眠らずにいる。

「すぐにお風呂の用意をします」

「……うん……」

期待が眠気と疲労感を駆逐していくけれど、鮎美は眠そうに返事をした。

「お風呂が貯まりました。どうぞ」

「……」

座ったまま寝たふりをすると、鷹姫が優しく肩を揺すってくれる。

「起きてください。お風呂の用意ができましたよ」

「……んっ………。……脱がせて」

思い切って求めてみた。

「わかりました」

あつさりと受諾してくれる。もう二度と鷹姫と身体を重ねようとしたりしないと誓ったはずだけれど、鷹姫から触れてくれるのは別という自己欺瞞で眠気も疲労も消し飛んでいるのに眠そうに薄目をあけていると、鷹姫の指が胸元のボタンを外してくる。それだけでドキドキとして舞い上がる心地だった。

「…ハア…」

「本当にぐっ苦勞様です」

鷹姫は躊躇いなくボタンをすべて外すとブラウスを脱がせ、ブラジャーも外してスカートを弛めると鮎美を立たせる。

「立ってください」

「…うん……」

鷹姫が抱き上げるように立たせてくれるとスカートが脱げる。さらに何の躊躇も感情もなく鷹姫の手が下着をさげけると、鮎美は春の会との面談中に詩織が言っていたことを思い出した。

「……………」

うちがお願いしたら鷹姫は事務的に下着をおろして電マをあててくれるのかな、電マって、どんな感じかな、と鮎美は自分の要望に素直に従って、その意味も考えない鷹姫が無表情に下着をぬがせて電気マッサージ器をあててくれるところを想像して、より興奮した。

「…ハア……」

「座って。少し足をあげてください」

鷹姫が靴下も脱がせてくれた。これで全裸になり、鮎美はこのままベッドに押し倒して抱きしめて欲しかったけれど、鷹姫は淡々と衣類を片付けてくれている。

「……………」

「脱がせましたよ、お風呂に入ってください」

「……………」

「起きてますか？」

「……………うん……………いっしょに入って……………か、……………か、身体、洗って」

顔が熱くて汗が滲むほど恥ずかしかったけれど、言ってみた。昨夜、まったく記憶に残っていないけれど、静江と二人で身体を洗ってくれたというので今夜も期待しているし、そのために浴室の広いビジネスホテルを要望していた。

「わかりました」

また、あっさりと受諾してくれる。秘書としてなのか、友達としてなのか、鷹姫は自分のブラウスを脱ぎ、ハンガーにかけてから、スカートも脱いでいる。鮎美は顔を伏せ気味にして表情を見られないようにしつつ、前髪の間から鷹姫の脚を見つめた。目の前で鷹姫が裸になっていくのは何度見ても心臓を刺激してくる。

「行きますよ」

「はい」

思わず、いい返事をしてしまった。鷹姫に手を引かれて浴室へ向かうのは、それだけで心が躍る。浴室に入ると、期待通りにトイレとは別の広い洗い場もあるバスルームで湯船も二人で入れそうだった。

「洗いますから座ってください」

「うん……」

恥ずかしくて顔をあげられないのと、表情を見られないために鮎美は下を向いたまま湯椅子に座った。鷹姫が背中を流してくれて、両手で身体を洗ってくれる。背中、首、胸、腋、腕と順に鷹姫の手が背後から伸びてきて身体を撫で回してくれる。

「…ハア…」

「まだ眠らないでください」

「うん…大丈夫…ハア…起きてるよ…ハア…」

とても眠るような心理状態ではなく、鷹姫の手が下腹部も洗ってくれると興奮で身もだえしそうだった。お尻を撫でてくれる手の温かさで、とうとう喘いだ。

「あんっ…」

「どうかしましたか？」

「う、ううん……何でも……」

「脚を洗います」

鷹姫が前に回って脚を洗ってくれる。もう少し股間やお尻を洗って欲しかったけれど、それは言い出せなかった。身体を流してくれた後、鷹姫が髪へシャンプーをつけてくれたので心配になった。

「鷹姫、髪を洗ってくれるのは、大丈夫なん？ お母さんのこと……」

「洗う方は平気です。たまに妹たちの頭も洗いますから。……洗われたのは、この前が初めてだったので……ご心配をかけて、すみませんでした」

「鷹姫……そういうとき、謝らんといてよ」

「……。では、どうするべきですか？」

「うっ……うくん……それは……うちら、友達なんやし。黙って抱きついてくれる、とか？」

「抱きつく……ですか……」

鷹姫は淡々と鮎美の髪を洗い、ほのかに期待した鮎美は抱きついてもらえず、淋しく湯船に浸かった。

「……」

鷹姫が身体と髪を洗っている姿を気づかれないように盗み見ると、また興奮してきた。鷹姫は女らしい仕草も無く、かといって男っぽくもないのに行儀は良いので独特の色香があって鮎美を惑わせる。洗い終わった様子なので鮎美は自然な風に誘う。

「いっしょに浸かろう。おいだよ」

「はい。けれど、お湯が流れて……」

「どうせ、うちらで最後になる一度きりのお湯やん」

「そうでした。贅沢な使い方ですね」

鷹姫が湯船に入ってくる。向かい合って浸かると、大人の男女でも入れる湯船は女と女の身体なので十分に余裕があった。

「……」

「……」

話題が途切れた。鮎美は鷹姫の胸に触れたい、お尻を撫でたい、キ

スをしたい、股間をまさぐりたい、という衝動と戦うあまり黙り込み、鷹姫は単に何も考えていない。ただ純粹にお湯の心地よさを味わい、つぶやいた。

「ああ…気持ちがいい…」

「っ…」

鮎美は欲望が滾るのを感じた。けれど、全身全霊で我慢する。

「っ…ハア…ハア…」

「大丈夫ですか？ 鮎美、のぼせているのではないですか、顔が真っ赤ですよ」

「…そうかも…うち、そろそろ揚がるわ。おおきに、ありがとうな、洗ってくれて」

これ以上、同じ湯船に入っていると、抱きついてキスをしそうなので鮎美は名残惜しかったけれど、バスルームを出た。

「…ハア…はああ…」

熱い吐息を漏らして、身体も拭かずにベッドに倒れ込む。少しして鷹姫が揚がってくると背中と髪を拭いてくれた。

「浴衣を着ないのでですか？」

「…うん…うち、裸で寝ようかな…その方が健康的、とか言うやん」

「では、少し冷房を弱めます」

「…鷹姫も裸で寝ん？」

そんなことをされたら興奮して眠れなくなりそうだったけれど、ついつい言ってしまった。

「いえ、いざというとき困るでしょうから」

「…鷹姫って家では枕元に竹刀か木刀でも置いて寝てそうやね」

「はい、置いています」

「マジでか…」

「眠っているのが道場ですから、いくらでもありますし」

「ど…道場で寝てんの?! なんで?!」

鮎美はベッドから勢いよく起き上がって問うた。おかげで乳房が

大きく弾んだけれど、鷹姫は浴衣の帯を形良く締めている。

「家が狭いですから、部屋を妹たちに譲りました」

「そ、それで鷹姫は道場なん?！」

「はい」

「そんなん、ひどいやん!」

「……別に、ひどくはありません。道場は広いですし」

「せやけど! あそこ冷房も暖房も無いやん!」

「どうにも寒い夜は電気毛布を使いますし、冷房は家にもありませんよ。夏は蚊帳を吊れば十分に過ごせます」

「…………たしかに、夏は琵琶湖の水温のおかげで……風もあって……島のみんなも、そうしてる家もあるけど……けど……、再婚前の子供を家から追い出すやなんて……」

「誤解しないでください。私は追い出されたわけではありませんよ」

「……………けど……」

鮎美は鷹姫の家の構造を考えてみる。夕食に招かれたときも狭かった。考えてみると就寝は親子四人で限界だと思われる。それに比べて道場は広い。しっかりと剣道が行えるように十分な広さがあつて造りも立派だった。追い出されたわけではないという言い分もわからなくもないけれど、やっぱり不憫に感じる。それゆえ鮎美は思いついた。

「なあ、うちの任期が始まったたら二人で部屋を借りよ。六角駅のそばくらいに」

「島を出て行くのですか?」

「そうやなくて、今週かて選挙応援のおかげで、ぜんぜん家に帰れてないやん。夜中に舟を呼ぶのも悪いし。朝かて集合場所に間に合わせよ思たら一時間は早く起きんならんから、こうやってビジネスホテル暮らしになつてるけど、落ち着かんし。任期が始まったたら東京との往復らしいやん。平日は国会、週末は地元って話で。新幹線で帰ってきりて六角駅前までなら帰れても島までは無理あるし、東京に向かう日から島から出発はきついやん。せやから、二人で部屋を借りて、無理な

く島に帰れる日は島で暮らして、忙しいときは駅前の部屋で寝たらええやん。もちろん、家賃は、うちが出すし」

「いえ、半分は出します」

「ええんよ。どうせ、半分は事務所費で落ちるやろし」

「それは問題があるのでは…」

「大丈夫らしいよ、静江はんに訊いてみたことあるもん。な、そうしよ。二人で暮らそう」

「……………」

「も、もちろん、帰れる日は島に帰って、な？ た、単に利便性の問題やん。今週かって島から着替えやら教科書やら、いろいろ親に持ってきてもらったりあったやん。それが駅前の一つ拠点があったら、受け渡しも便利やし、やっぱり事務所はいるかもしれんし、資料とか、いろいろ置く場所もあるし。事務作業するデスクかって、いつもいつも党の支部ちゅーわけにもいかんやん」

「…………それは…………そうですが…………それなら、純粋な事務所として借りた方が良いのでは？」

「………………。た、たまに二人で泊まれるようにしておくど便利やん。島に戻れんときとか」

「それは、たしかに…………」

「と、とにかく考えておいてな。うちは、その方向で部屋を探してみるし」

「…………はい、わかりました。もう休みましょう。明日も早いですから」

そう言つて鷹姫はベッドに入って目を閉じたけれど、鮎美は色々と考えてしまい、すぐには眠れなかった。

「……………」

今は選挙応援中という状況のおかげで鷹姫と外泊を繰り返しているけれど、それも投票日には終わってしまう。そもそも、もう鷹姫へ身体を重ねようとしたりしない、と誓ったはずなのに、それでも諦めきれず秘書と議員という関係性の中で最大限に甘えてしまっている。

「……鷹姫……」

小さな小さな声でのつぶやきに鷹姫は反応せずに、もう眠っている。その寝顔を見ていると、キスをしたくなる。もう眠っているなら、また身体を重ねて、キスをして、舐めたりしても、夢かうつつか認識せずにくれるかもしれない。けれど、それが悪行だともわかる。

「……」

せめて、と鮎美は安らかに眠っている鷹姫の顔を見つめながら、自分を慰めた。

火曜日の午前中、教室の机に伏して眠っていた鮎美は次の授業が聖書研究なので隣席の陽湖に起こされて、不機嫌そうに目を開けた。

「おはよう、シスター鮎美」

「……」。おはようさん、エホバの陽湖」

「あら？ その呼び方は何なのかな？」

「あんたも、うちに好きなアダ名をつけたやん。せやから、うちも好きないように、あんたを呼ぶんよ。エホバの陽湖。エホコにしよか」

「きやははっは！ それウケる！」

そばにいた鐘留が爆笑している。鷹姫は静かに数学の教科書を片付け、聖書を机の上に置いた。鮎美も仕方なく聖書を出すけれど、陽湖が真面目な顔で言ってくる。

「エホコはやめてください。神の名を、みだりに扱わないでください」

「怒ったん？」

「アタシがつけられそうになったネルネルよりマシだって」

「怒ってはいません。けれど、畏れ多いことです。神は喜ばれません。そのような扱いを繰り返せば、シスター鮎美は呪われるでしょう。どうか、やめてください」

「……感じ悪いことを真顔で言いおって……」

「きやはは、シスター陽湖は本気の本気の本気で神さまを信じてるの？」

「はい、エホバは常に私たちとともにおられます」

「……………」

「これをシスター鮎美に読んでいただきたくてもつてきました」

陽湖は薄い冊子を鮎美に差し出した。とりあえず鮎美は受け取る。

「こういうの、うちのポストにも入ってたわ。大阪でも、こつちでもよくも鬼々島まで渡ってくるなあ……」

「私たちはエホバの教えを全世界に知っていただくことを喜びであり義務であると感じていますから」

「…はああ……」

鮎美がタメ息をつき、鐘留が言う。

「あれだよ、自分がハマってる漫画とかを押しつけてくるヤツに近いよね」

「中二病と、いっしょにしたらカネちゃんも呪われるで」

「アタシは神に祝福されてるよ。とっても、すっごく神さまに愛されてる」

「シスター鐘留は、エホバを感じておられるのですね？」

「うん、ばっちり」

「ウソつけ」

「だって、アタシは、こんなに可愛くて、しかも、お金持ちの家に生まれたんだよ？ この世に神がいるとしたら、超アタシを祝福してるよ」

「幸せな考え方やね。どうよ、シスター陽湖はん」

「どのようなキツカケであってもエホバを感じることに繋がるのであれば、それは祝福ですよ。けれど、驕慢はサタンの仕業です」

「暑苦しい考え方やね。暑苦しいといえば、あんたのカッコも暑苦しいなあ。スカート丈が、そのまんまなんはともかくストッキングといい、インナーといい、見るだけで暑苦しいわ。露出してるの、手えと顔だけやん。それも教義なん？」

「ごめんなさい。これは別の事情があつて、教えとは関係ありませんよ」

今日も陽湖は厚手の白いストッキングを履いていたし、上半身もブ

ラウスの下にハイネックのインナーを着ていて、袖丈は手首までであった。どちらも白なので清楚な雰囲気はあるけれど、気温から考えると不自然な姿でもあった。

「宗教以外に何の事情があんの？」

「単にアトピー性皮膚炎なのです。とくに脚はひどくて。今朝は肘と首にも薬を塗ったので紫外線から守っています」

「そっか……そら気の毒に、ごめんな、いらんこと訊いて」

「いえ」

「アタシと違って神さまの祝福が足りないんじゃない？ きやははは」

「……」

「カネちゃん、女の子が気にしてるって、エグるのやめよか？」

鮎美が鐘留を覗む。

「信仰は好きでやっと思って、アトピーは好きでなったわけやないやろ」

「怖っ…アユミン、大阪仕込みだから超怖いよ、ごめんごめん。きつと、そのうち治るよ。神さまの祝福にもサンタクロースのプレゼントにも遅配はあるのかもね」

「……」

「ごいつの言うことは気にせんときな、陽湖ちゃん、顔には出んで、よかったね。可愛い顔してんにやから身体も早う治るといいね」

そう言っつて鮎美は陽湖の頬に触れた。少し乾燥肌だったけれど、色白で可愛らしい顔をしているので、もつと触れていたくなるけれど変に想われる前にやめる。陽湖が嬉しそうに微笑んだ。

「シスター鮎美は優しい人なんですね。好きになりました」

「っ……」

「はじめてシスター鮎美の心を感じました」

「……別に、うちは一般論として言うただけや」

鮎美は照れて顔を背けた。陽湖は気にせず、別の気になることを言っつておく。

「ところでサンタクロースは聖書とは何の関係もない習俗であること

を知って…」

「知ってるから」

うんざりしたように鐘留が答える。

「それ一年生のときの聖書研究で習ったから。あ、でも、アユミンは知らないか」

「何を、うちが知らんて？」

「サンタクロースとキリスト教って関係ないんだって」

「……マジで?!」

「マジらしいよ。ま、詳しい説明は、そのシスターさんに頼もうか」

鐘留に指名されて陽湖が説明しようとしていると、聖書研究を担当する教師が教室に入ってきた。陽湖が教師に提案する。

「先生、シスター鮎美が、まだサンタクロース伝説とキリスト教に関係が無いことを知らずにいます。知る機会を与えてあげてください」

「そうか。彼女は転入生だったね。よろしい。今日の授業は、その話にしよう」

「……………」

授業内容を変えさせるやなんて、けっこう陽湖ちゃん権力あんなあ、と鮎美は感じたし、ナザレのイエスの誕生日が聖書の記述によれば12月ではないと推測されることと、サンタクロースそのものはローマの豊穰の神に由来することを教えられたけれど、鮎美にとっては実に、どうでもよかった。

選挙戦の最終日、鮎美は御蘇松と新駅建設予定地で最後の演説をしていた。御蘇松が声を張り上げて言う。

「どうか、どうか、みなさま、この御蘇松にお力添えくださいますようお願い申し上げます！」

集まっている聴衆は基本的に御蘇松を支持している層ばかりなので拍手と声援が起こる。これまでに弁士を務めてきた石永などの衆議院議員たちや直樹や県議たちもいて、声の限りに最後をお願いをし、鮎美も枯れた声で叫ぶ。

「お願いします！ ホンマに、どうか、お願いします！」

毎日毎日応援してきた御蘇松の手を鮎美は思わず握りしめると、高く掲げた。

「御蘇松さんは立派な人です！ うちもお父さんとも、お爺ちゃんとも思うほど！ だから、どうか！ どうか、頼みます!!」

男性の手を、こんなにも想いを込めて握ったのは初めてだったし、感情が高ぶったせいかわ、涙まで流した。最高潮に盛り上がった演説は拡声器の使用ができなくなる時刻をもって終了し、その後は聴衆へ握手をして回る。いったい何人と握手をしたのか、出陣式の3倍ほど集まっていた聴衆との握手を繰り返しているうちに、鮎美は胸やお尻に何度か触られたけれど、顔に出さず、文句も言わず、笑顔で乗り切った。

「本当に、お疲れ様でした芹沢先生」

「芹沢先生、大丈夫ですか」

静江と鷹姫が寄り添ってくれる。もう声が出ないので鮎美は黙って頷いた。そのままビジネスホテルへ向かうために車へ乗り込もうとしたとき、御蘇松が声をかけてきた。

「芹沢さん、本当に、ありがとう」

「御蘇松先生」

お互い声が枯れていたし、疲れ切っていたけれど、笑顔で握手を交わした後に自然と抱き合っていた。本当に心から御蘇松に当選して欲しいと思っているし、当初は不要だと思っていたダムや新駅も何度も自分で説明するうちに、明らかに必要だと考えるようになっていく。

「また明日、頼みます」

「はい、御蘇松先生に入れてから、うかがいます」

明日の投票日に選挙事務所で再会することを確かめ合ってから別れた。鮎美は静江の車に乗せてもらおうと、続いて乗ってきた鷹姫の膝へ倒れ込む。

「……」

「お疲れ様です。どうぞ、休んでください」

「……」

声を出すだけで喉が痛いので黙って頷いた。ビジネスホテルに着くまでの時間、ずっと鷹姫は鮎美の肩や背中を揉んでくれたし、撫でてくれた。それが幸せで、ずっと感じていたかったけれど、眠くて眠くて目を閉じてしまう。到着してからも鷹姫が優しく運んでくれて客室に入ると、制服を脱がせてくれた。

「お風呂の用意ができました」

「……」

ぼんやりと目を開けていた鮎美は自力で立ち上がりつつも、頼るように鷹姫の手を引いた。それで鷹姫も察してくれる。

「お背中流します」

「……」

声が出せない代わりに握っている鷹姫の手を反対の手で撫でた。バスルームに二人で入ると、鷹姫が下着を脱がせてくれる。

「……」

ブラジャーを外してくれるし、ショーツをおろしてくれる。鮎美は顔が赤くならないよう努力したけれど、やっぱり赤くなる。それに鷹姫は気づかずに手早く自分も全裸になると、鮎美の身体へシャワーをかけてくれる。肩や背中を撫で洗いしてくれて、胸の下や腋の下の汗も流してくれる。股間も流してくれてから、鷹姫はシャワーヘッドを戻して両手にボディソープをつけると、鮎美の首から洗ってくれる。首、胸、腋、背中、それから両腕を指先まで丁寧に撫で洗いしてくれて、お腹もお尻も洗ってくれる。

「…ハア…」

鮎美は股間を洗ってもらい、興奮する自分を認識していた。ものすごく疲れているのに気分が高揚していて、いけないと想いつつも要求してしまう。

「…もう少し…奥まで…洗って…」

枯れた声で求めると、鷹姫の指が股間の奥まで入ってくる。

「…ハア…」

「……」

黙って丁寧に鷹姫は洗った。

「…ハア…」

その指、もつと奥に入れてよ、舐めてよ、キスしたいよ、鷹姫、鷹姫、と鮎美は心の中で鷹姫の名を連呼したけれど、声に出すことは耐えきった。

「…おおきに…毎晩…ありがとうな…今夜で…終わりにやね…」

「選挙戦も長いようで終わると、あっという間でした」

「……………」

やっぱり声を出すと喉が痛いので、黙って頷いた。二人で湯に浸かってからベッドに横になると、もう興奮よりも疲労が勝り、鮎美は深い眠りに落ちた。

「もうお休みですか？」

鷹姫の問いに答えは無かった。

「髪が濡れたままでは風邪を引きますよ。喉も荒れているのに」

起こさないよう静かに鮎美の髪を乾かしてから、掛け布団をかけてやり、鷹姫は鮎美の寝顔を見つめた。

「……立派な政治家になってください。国を支える、一つ柱に」

そう囁いて、鷹姫も明日のために眠った。

9月 呉越同舟

朝、泥のような眠りから鮎美は鷹姫に起こされてビジネスホテルの朝食を摂り、静江に港まで送ってもらおうと朝一番の連絡船で鬼々島へ渡り、投票する。

「御蘇松善行、と」

今回は声に出して氏名を書き、投票箱に入れた。続いて鷹姫も入れる。

「よっしゃ。ほな、御蘇松先生の事務所に行こか。島の皆さんも、よろしゅう頼みますよ。ま、投票所の中で連呼はできんけど、誰に入れるか、わかってますよね？」

「おう、任せとけや。寝たきりのジジババも全部、連れてきちやるわ！」

すっかり良好な関係になった自治会の役員とも握手をして、鮎美と鷹姫は再び連絡船で本土へ戻り、御蘇松の選挙事務所へ駆けつける。もう表立っての選挙活動はできないので事務所は世間話をする支持者や応援者たちで賑わっていた。先に着いていた石永が声をかけてくる。

「芹沢さん、静江、宮本さん、ご苦労様」

「おおきに、ありがとうございます。石永先生も、ご苦労さんです」

「お兄ちゃん、焼けたね。日焼け止め、何度か忘れたでしよ」

「ありがとうございます。石永先生も、ご苦労様です」

「公の場でお兄ちゃんはやめろって」

「ごめん、ごめん、ついね」

もう予定に追われる忙しさから解放されて、なごやかな時間が過ぎていく。鬼々島からも数人の自治会役員などが駆けつけ、茶谷や鈴木も顔を見せている。昼食に提供されたオニギリを食べながら、どこかの自治会から来た役員が言った。

「ここ数年、せっかく来ても、質素な飯ばかりになったのお」

「酒も出んしなあ」

誰かが相槌を打っている。

「……」

アホちやうか、そもそも豪華な食事も酒も公選法違反やちゅーこと、ええ歳して知らんのか、こいつら、と鮎美が睨みそうになると静江が耳打ちしてくる。

「芹沢先生、ご予定、忘れてませんよね？」

「……まあ覚えてる……」

ここで注意しても何の利益にもならないことはわかっているのだから我慢した。ぼやいている男たちには鈴木と茶谷が声をかけ、機嫌取りをしていたけれど、鮎美にも声がかかる。

「酒じゃのうても、ええわい。可愛い子に茶でも注いでもらおか」

「うちで良かったら、いくらでも。けど、お尻に触ったら蹴り入れませ」

「おお怖っ、芹沢先生、言うことピシャっとしてはるなあ」

ほどよく機嫌を取っている鮎美を見て、静江がつぶやく。

「切り替え早いわね……けっこう大物になるのかも。そういえば、こういうとき宮本さんは……」

鮎美と同じくセクハラのターゲットになりやすそうな鷹姫を心配して見ると、お茶を注いで回りながらも、ときどき彼女に触ろうとしてくる男たちの手を絶妙な間合いと速度でかわしていて、まるで背中に目でもついているのかと思うほどだった。

「さすが、剣道全国1位」

感心している静江の肩から背中にかけてを茶谷が撫でた。

「静江ちゃんも芹沢先生を、立派な先生に教育してくれてはるな」

「はい、まあ」

と答えつつ軽い肘打ちで茶谷のわき腹を突いた。何度も似たようなことがあったので茶谷は笑いながら去っていく。

「懲りないヤツら……男って、もお……」

「すまないな、静江」

「お兄ちゃん、そろそろ私の車を買換えて。飽きてきちゃった」

「うっ……大きく出たな……あんまり目立たない車にしろよ」
「ヤツタ」

しっかりと見返りを確保した静江は接待を続け、夕方になる。さらに、ダラダラとした時間が過ぎて、夜になり開票時刻となった。事務所内にある雛壇中央に御蘇松が座り、そばには応援弁士を務めた鮎美たちが座る。御蘇松がマイクで挨拶をはじめた。

「泣いても笑つても、もはや開票時刻となりました。今少し、みなさま、この御蘇松にお付き合ってください。みなさまの今日までのご支援、ご指導の数々、次の4年間に活かして行きたいと思っております。本当に、ありがとうございます」

儀礼的な拍手が起こり、さきほどまでとは違い、緊張した時間が始まる。マスコミのカメラも何台も入ってきて、御蘇松たちを囲む。鮎美も緊張して姿勢正しく待った。

「……まだ出ないか……」

直樹が小さな声でつぶやいた。鮎美も小さな声で問う。

「当確って、県知事選は、どのくらいで出るんですか?」

「大差なら、すぐだよ。接戦だと遅くなる」

一分が三分に感じるような時間が一時半も流れ、つけっぱなしだったテレビから不穏なニュースが流れってくる。

「加賀田氏に当確、加賀田夏子氏に当確が出ました。ただ今、県知事選の当確が……」

「……ウソやろ……」

鮎美のつぶやきは、その場にいた全員の気持ちを代表したものであった。

「……雄琴はん、当確って絶対なん?」

「いや……ごくごく稀に覆ることもあるらしいけれど……」

ほのかな期待をする直樹の気持ちも、その場にいた何人もが抱いたものだったけれど、いつまで経っても覆ることはなく、テレビの向こうで夏子が支持者たちと万歳三唱をしてインタビューを受けている。

「加賀田さん、勝因は何だったと思われませんか?」

「もったいない、この単純な一言につきます。県民のみなさんが賢明な判断をされたということです。何百億円もの県の借金を増やす政

策にノーを突きつけたのは、県民のみなさんです」

夏子が笑顔で言っている。花束が贈呈され、また万歳もして華やかなムードが流れるテレビの向こうと違い、こちらは沈痛な沈黙が支配していた。いまだ当確は覆らず、完全に絶望的となった頃合いにマスコミが御蘇松にインタビュを開始した。

「御蘇松さん、今のお気持ちをお願いします」

「……………。ひとえに、私の力不足です。……………支持してくださった皆様には、大変に申し訳ない……………」

「今後については、どのようにお考えですか？」

「これまでの事業を新しい知事に引き継ぎ、滞りのない県政を託していきたいと思っております」

一通りのインタビュが終わると、また重い沈黙が事務所を覆う。何人かは黙って帰宅し、他にも御蘇松に会釈してから帰っていく者もいるし、また頑張つてや、と声をかけて立ち去る者もいる。事務所内の人数が半分以下になった頃、ぽつりと誰かが言った。

「相手が女じゃからって、小娘なんぞ使いすぎるでじゃ」

大きな声ではなかったけれど、静かだったので鮎美たちの耳にも入った。鷹姫は心配そうに鮎美を見た。鮎美は下を向いて、泣いているように見えた。事務所内で泣いているのは鮎美だけで、声はあげていないけれど、涙が手の甲に落ちていく。

「……………」

「芹沢先生、そろそろ……………」

鷹姫と静江が異口同音に退出を促した。そつと立たせて事務所を去る。去る前に何か御蘇松と挨拶を交わさせようかとも秘書として考えたけれど、二人とも気力が無いようなので遠慮した。駐車場に行くくと、島の役員たちがいた。

「ワシらの舟に乗せちやろ」

「ありがとうございます」

鷹姫が泣いている鮎美に代わって答えた。静江の車で役員たちの軽トラを追いかける。当選だったなら酒宴という流れだったけれど、落選では早々に帰宅するしかない役員たちも意気消沈している様子

で、どこか軽トラのテールランプも悲しそうに見える。運転しながら静江が明るい声をつくつて言った。

「鮎美ちゃんは、よくやってくれたよ。みんな、それはわかっているから」

「……っ……」

「芹沢先生は立派でした」

「……っ……うちは悔しいわ……なんで……なんでやねん……今の段階で新駅を止めて、どないすんねん。たしかにダムは要らんかもしれない。けど、新幹線の駅やで？ 他県やったら喉から手が出るほど欲しがるもんやで？ いまだに新幹線の走ってない県かつてあるのに！」

「……………」

「ちよつと借金が増えるくらいなんやねん！ どんだけケチくさい県民や！ 経済効果かって20年先くらいしか考えてないやん！ 井伊市に駅があつて30年、50年、めっちゃめっちゃ役に立ったやろに！

もつと長いスパンで、もつと広い視野で考えられんの?! 阪本市も！ 井伊市の連中も！ 自分らが直接に潤わんかったら県全体の発展は無視かつ?! しかも動き出した計画を止めたら、これまでの投資がパーや！ それどころか違約金やらなんやら！ JRとの信頼関係もメタメタになるやろ?! これは北陸新幹線の湖西ルート案にも響いてくるで！ 遠回りの京都北部案にもつていかれるかもしれない！ 日本海側は、うちの島みたいに結束しよるもん！ クソっ！ 畜生!! アホどもが！」

鮎美は自分の膝を打って悔しがっている。鷹姫も静江もかける言葉を思いつけなかったけれど、港に到着して降りる前に静江が言った。

「芹沢先生は、もう議員先生です。さきほどの言い様、女子高生が言うようなことではないですから。けれど、県民や有権者を悪く言うのは秘書の前だけにしてください」

「……………。ご忠告、おおきに。静江はんもお疲れさんです。ゆっくり休んでください」

「ありがとうございます」

静江と別れ、鮎美と鷹姫は久しぶりに島へ向かう舟に乗った。湖上に波は無く、月を反射している。舟が動き出すと、心地よい風が鮎美の涙を気化させた。

「……けど、これが民主主義の結果か……受け止めるべきなんか……」

「衆愚という言葉が生まれた由縁でもあるかもしれませんが。日本にシンガポールのようなハブ空港が建設されず中程度の空港ばかり乱立したのも衆愚の結果でしょう。ゼネコンの技術力を考えれば世界一の空港があってもおかしくないのに、どこもドングリの背比べ、悪しき平等です。ドングリをいくつ集めても栗にも柿にもなりはしない」

「フフ……鷹姫、あんたも知識がついて、女子高生らしい無いこと言うね。いんや、あんたは最初から女子高生らしい無かったかな」

「……誉めてくれたのですか？」

「もちろん」

舟が島に近づくと、役員が警笛を大きく鳴らした。鮎美は何も思わなかったけれど、鷹姫は長年の経験から鳴らす必要が無いのに鳴らしたように思え、振り返って操舵席を見た。

「…」

「…」

役員の中年男性と目が合い、なんとなく意図がわかった。前を見ていた鮎美が声をあげる。

「うわあ……キレイや……」

真つ暗だった島が警笛に反応して照明をつけ始め、一気に明るく輝いていく。家々の明かりや漁船のライトも灯り、これほど明るくなるのかと感嘆するほど光り輝き、また湖上に反射して倍にもなった。鷹姫が言ってくる。

「選挙の敗戦で芹沢先生が意気消沈しているのを知った島の人たちのささいな計らいです。どうか、元気を出してほしい、一度の敗戦で心折れないでほしい、と」

「うん……うん……おおきに……ありがとうな……」

鮎美が感動の涙を拭った。

「あんたらの島、最高やな」

「私たちの島は、もともと源平の合戦での敗者の集まりですから」

「そんな話らしいね、源氏やったん？ 平氏やったん？」

「両方です」

「両方？」

「平安末期、平氏に追われた源氏が島へ隠れ潜み反撃の機会を狙っていました。けれど、頼朝の拳兵についての報が島ゆえに届かなかつたか、報を罫とみなしたのか、動かずにいた。もしかしたら、田畑のわずか島ですから日々の生活に追われ、動けなかつたのかもしれない。そのうちに今度は源氏に追われた平氏が島へ逃げ込んできたのです」

「……………両方ってことは、殺さんかつたんや？」

「はい、敗者を鞭打つに忍びなかつたのでしよう。自らが辛酸を舐めたがゆえ、温情をもって迎えたと口伝えられています。以後は双方武士として精進し、いざというときに備え続けようと、それが私たちの祖先です」

「鬼々島っていうても、優しい鬼なんやね」

舟が港に着くと、百人以上の島民が出迎えてくれた。鮎美も元気に手を振って応え、桟橋で両親たちとも会い、それから見知ってはいるけれど、ここにいないはずの人物に出会って驚いた。

「あんたは………なんで、ここに……」

「先週から引越していました。お二人がぜんぜん島に帰ってこないのです、あえて黙っていましたけど」

陽湖が微笑み、握手を求めてくる。また、ほぼ条件反射で鮎美は握手に応じた。

「まさか、うちを勧誘するただけに？」

「お友達になりに。私とエホバ、両方と友達になってほしくて来ました」

「……………ま、……………ええわ。多様性の受容こそ、民主主義の光りかもしれ

んしね……」

やや疲労感を覚えた鮎美だったけれど、また大きく手を振って島民たちに応えた。

翌日、月曜の朝なので学校へ向かうけれど、家を出る前に鮎美は父親に頼む。

「父さん、新聞、もって行っていい?」

「ああ」

父親は読んでいた新聞を折りたたんで鮎美にくれた。

「おおきに。いつてきます」

家を出て3件隣りまで進むと、陽湖が待っていた。

「おはよう、シスター鮎美」

「おはようさん、陽湖ちゃん。あんたの家、ここ?」

鮎美は空き家だった小さな家を指した。家と小屋の中間くらいの建物で外壁はトタン板だったし平屋で15坪ほどしかない。室外機があるのでエアコンはありそうだった。

「はい、ここをお借りしました」

「……。率直に訊いてええ?」

「どうぞ」

「陽湖ちゃんの家って、貧しいというか、お金に困ってる?」

「いえ、普通だと思えます。ここは、お家賃が3000円だったので借りてみました。あと、シスター鮎美の家に近いですから。両親は市街地に住んだままですし、一人暮らしとしては十分に広いですよ。キッチンとシャワーもありますし」

「お風呂は無いんや?」

「湯船は無いですね」

「たまにやったら、うちにおいで、お風呂借りられるよう、母さんに言うておくわ」

「ありがとうございます。……シスター鮎美って、こう言うては何ですけれど変わった人ですね」

「どこが?」

「私が幸福のエホバの信徒であると知って、しかもシスター鮎美に教えを説きたいと、はつきり言ったのに、少しも避けるとか、差別するという風がなくて驚きます。嬉しいといえれば、嬉しいのですが、こういう人もいるのかと不思議な想いです」

「少しは避けてるで。あんたが信徒やなかったら、今頃、もつと仲良かったんちゃう」

「クスっ…フフ、本当に面白い人」

可笑しそうに笑う陽湖の笑顔を可愛いと想ってしまう鮎美は船着き場に向かつて歩き出す。

「一人暮らしかあ、夜は、かなり淋しいんちゃう?」

「いえ、いつもエホバがいてくださいますから。それに、島の人も親切です。ただ、若い男性の方に、よく声をかけられるのは困ります」

「男より女が好きなん?」

「また面白いことを言いますね。私が結婚できるのは同じ信徒か、信徒になってくださる方だけです。あと、同性愛は罪深いことですよ」

「そ、そうなんや。けど、最近はキリスト教徒でも同性愛をカミングアウトする人、多うない?」

「大変に残念なことですが、聖書の教えを間違つて解釈されています。はつきりと聖書には間違つた行いが書かれているにも関わらず、歪めて理解されているのです」

「あゝ…ガチで原理主義の方なんやね。アメリカでも同性婚に反対してデモとかも起こってるもんなあ」

「お詳しいですね」

「い、…いや! し、新聞とか読むし! 議員として一般教養を高めてるから!」

鮎美が中年男性のように小脇に挟んでいた新聞を強調した。それから話を変える。

「この島は古い地域やから、あんまり布教とか、せん方がええよ。うちには差別せんけど、人によつては、どう反応しはるか、わからんし」

「ありがとうございます。ですが、神の教えを説くのに憚ることはあ

りません」

「そう言うような気はした」

二人は船着き場にあるゴミ集積所の横を通り過ぎる。島から出る生活ゴミは舟で市街地にある焼却所へ運ばれており、ここには島中のゴミが集まっている。そのゴミ袋の中に、明らかに陽湖が各戸のポストへ投函したと思われる幸福のエホバについてのパンフレットが多数見られた。

「……………」

「き、気にせんとき！ みんな興味ないってだけやから！ っていうか、うちらが配布した選挙のチラシやらも、あつという間にゴミになってるし、ほら」

陽湖が配ったパンフレットだけでなく公選法の範囲と公費で撒かれた文書の類もゴミ袋の中に入っていて、御蘇松や夏子の顔写真が捨てられようとしている。そして、本来は業者が回収するはずの掲示板まで勝手に解体されて、使える板や木材は日曜大工などに流用されつつあり、鮎美は島民の公選法に対する順法精神が心配になった。

「シスター鮎美は本当に優しい人ですね。こういうのには慣れていまずよ。子供の頃から」

「そ…そうなんや。…子供の頃から信徒なん？」

「はい、13歳で洗礼を受けました」

「洗礼か…独特の響きのある言葉やなあ…。…ってことはご両親も信徒なん？」

「はい、祝福された永遠の夫婦です」

「永遠の夫婦か…その夫婦の中には、やっぱり同性婚はありえんの？」

「ありません」

「…………ふーん…………ってことは、あんたら信徒には同性愛者は悪魔の手先か、サタンの化身に見えるんやろね。できれば抹殺したいような」

「いいえ、私たちは同性愛者を憎みません。シスター鮎美、あなたはタバコが嫌いだからといってタバコを吸う人を抹殺したいと思いません

んよね？ 極端に行動してもタバコを世界から消し去るだけで済みませんか？」

「……………」
「私たちは悪い行いから遠ざかってほしいと願うだけで、誰かを抹殺したりしたいとは決して考えません」

「……………」
鮎美が黙って歩いていくうちに乗るべき舟に着いた。すでに鷹姫が乗っていて老船頭も待っていてくれる。

「これに乗せてもらうの、久しぶりやな。この人数、乗れんの？」
「三人とも、めんこいで大丈夫じゃ。ワシも骨と皮じゃしの」

小舟に鮎美と陽湖も乗り込んだ。沈むことはなく喫水線に余裕はあり島を離れて学校へ向かう。乗り込むとき、乗船に不慣れな陽湖のスカートがめくられて白いストッキングの股間が見えたのと、出発してからも座席らしい座席がなくて船底にある救命具に座っている陽湖のスカートの中が見えそうで見えないのが鮎美の視覚を刺激していく。とうの陽湖は老船頭には背中を向けているので、同性相手にスカートの裾を強くは意識していないように舟が揺れると、鮎美の位置からは股間が見えた。

「……………」
我ながら病気というか、サタンというか、陽湖ちゃんの顔と手しか露出してへんのはカネちゃんの露出しまくりと違って、むしろ脱がせてみたくなるわ、さっきお風呂に誘った人も無意識に狙ってたんかなあ、うちは鷹姫が好きやのに、他に目移りして情けない女やな、けど、鷹姫には手を出さんで決めたし、いつそ教義でタブー視してる陽湖ちゃんを襲ったら、どんな顔するんかな、無理矢理脱がせて……………つて、まさに、うちがサタンやな、悪魔中の悪魔や、ご両親にエクソシストされるかも、と鮎美は余計なことを考えていたけれど、黙って見つめる鮎美の視線に陽湖が気づいた。

「シスター鮎美、私の靴に何かありますか？」

「あ、…いや……………靴やなくて…」

靴ではなく股間を見ていたとは言えないので鮎美は誤魔化す。

「救命具に座るのは……いざというとき使うもんやし。けど、他に座る場所ないし、船底は汚れてるから……」

鮎美と鷹姫は舟の骨格が座席のようにもなる横板に座っているけれど、他に座れそうな場所はない。今まで二人しか乗せなかったので問題はなかったけれど、三人だと落ち着く場所が無かった。

「鷹姫、もうちよい端っこまで行つて」

「はい」

鷹姫が舷のギリギリまでつめ、鮎美は中央に移ると、少しだけ余裕ができたスペースに陽湖を誘う。

「陽湖ちゃん、こつち座り。ちよつと狭いけど」

「ありがとう、シスター鮎美」

揺れる舟の中で陽湖が転ばないよう鮎美は手を差し出し隣りへ導いた。女子3人がかろうじて並んで座れる。

「芹沢先生、やはり狭いので私が船底に座ります」

鷹姫が腰を浮かしかけたので鮎美は腕を回して止めた。

「スカートが汚れるかもしれんやん」

「それは、そうですが、少々、暑苦しいですし」

腰を抱かれては鷹姫も立てず、お尻を横板へ戻した。

「ええやん、ちよつと幸せな感じせん？ この平和な海、小さい舟、なんとなく今が幸せって感じが」

「はい、ガリラヤの湖を思い出しますよ、私は」

「私は呉越同舟という故事を思い出します」

「敵がおるの？」

「異教徒がいますから」

「……異教徒って……そうかもしれんけど」

うちは両手に花つて気持ちなんやけど黙つとこ、と鮎美は中央で二人の体温を感じながら古堀の船着き場まで過ぎた。少し到着が遅かったので鐘留が退屈そうに小石を堀へ投げ込んでいる。

「あ、おはよう、アユミン、宮ちゃん、シスターエホバ」

「カネちゃん、きつと、それも陽湖ちゃんは嫌がるから、やめてやりい」

「じゃ、月ちゃんにしよう」

「シスター鐘留も面白い人ですね」

「面白くて可愛くてお金持ち、最高でしょ？　っていうか窮屈そうだね。でも、楽しそうアタシも島に引っ越そうかなあ」

「家賃は格安やで」

四人で学校へ歩くと、道路に県知事選の掲示板が残っていた。鮎美が無念そうに御蘇松のポスターを撫でた。

「御蘇松先生、今頃どうしてはるやろ。新駅、どうなるやろ」

「放課後、その件についての会議の結果を聴くことになりそうですが、まだ昨日の今日ですから新しい情報は無いかもしれません」

「そうやね……」

「せっかくアユミンが頑張って応援してあげたのに、このオジサン負けちゃったねえ。やっぱり美人には勝てないのかなあ」

「選挙民も、そこまでアホではない………と思いたいね。けど、顔で選んだ人も、少しはいるやろな。加賀田はん、なかなか可愛いし。……うちも、自民やなくて、議員予定者でもなくて、ただの18歳になったばかりの女子高生やったら、顔で選んで加賀田はんに入れたかも」

「アタシもアユミンに頼まれなかったら夏子ちゃんだったかもねえ」

「私もシスター鮎美から依頼がなければ、どちらかといえば加賀田さんに入れたと思います」

「そっか……そら負けるわな。一夜明けて冷静になると負け戦やった気がするわ。応援してるうちに、どんどん勝てる気になってたんやけど、それは当事者だけやったんやね」

「芹沢先生は善戦されました誇りに思います」

「おおきに、鷹姫も、よう支えてくれて、ありがとうな」

ずっと鮎美は右手を出して鷹姫を見つめた。心から握手したいと想っている相手と、あまりしていなかった。鷹姫も微笑んで手を握る。

「次も頑張りましたよ」

「うん、そうやね」

二人で気持ちの切り替えを終え、学校に向かった。

10月 マルチ商法

10月の日曜日、たまには丸一日の休日をとということで、静江が予定を入れずにいてくれて、鮎美も鷹姫も朝から鬼々島にいた。

「久しぶりの休暇やけど……逆に淋しいわ……」

お気に入りの青いワンピースを着て鷹姫の家を訪ねると、当然のように剣道の稽古をしていて邪魔するのも悪いと思い、引き返して陽湖の家の様子をうかがったけれど、外出中のようで気配は無かった。

「連絡船で市街地にでも遊びに行こかな……けど、うちの顔、だいぶ売れてきたし、けっこう声かけられるんよなあ。アイドルちゃうのに」

県知事選と市議選を経て、鮎美の顔は六角市内では知っている人が多くなり、声をかけられたりサインや記念撮影を求められるので、正直なところ出かけるのが億劫になりつつある。島でも全員が鮎美の顔を覚えているけれど、総人口が少ないのと、もともと議員予定者でなくても顔を覚えられていたし、もうサインや記念撮影は、だいたい済ませたので新規に求められることはなくなり、島の方が寛げた。自動販売機でミルクティーを買い、あてもなく港の方へ歩くと、父親が釣りをしていた。

「父さん、ヒマそうやね」

「鮎美が、ゆつくりしているは久しぶりだな。大丈夫か？ いろいろと」

「うん、まあ、選挙が終わると放課後の勉強が多いだけで、それは他の受験生もいっしょやしね」

「そうか。無理するなよ」

「…………無理かあ…………うちが議員になったら24歳までが一期やん。その後に二期目があったら30歳で、もしかしたら結婚せんうちに30歳過ぎるかもしれんやん」

「そうだな、その可能性もあるなあ」

「うちは、なんで一人娘なん？ もう一人くらい兄弟姉妹がおったら、

うちが結婚せんでも芹沢家は続いたのに」

「そんなことを、まだ18なのに考え出しているのか……お前も大人になったなあ」

父親が釣り針にエサをつけ直して、また釣り糸を垂れる。

「お前が一人娘なのは、父さんと母さんが無理をしなかったからだ。今は少し余裕があるけれど、若い頃は金銭的にもギリギリだった」

「そうなんや……苦労してたん？ ……けど、デイズニーランドとか、USJとか連れて行ってもらった記憶あるのに」

「ああ、そうやって、ちよこちよこ遊びに行きつつ、それでいて飲み屋にも行ったりしたかったし、車も買ったし、こうやって田舎に移住する資金も貯めたかったし、そういう色々を考えると、子供は一人が限界だったんだ」

「……やっぱり道楽もんや……」

「ま、だから、鮎美もやりたいことを、やればいい。人生、一度きりだ。うちの芹沢家が滅びたところで、オレには兄さんもいて、あそこは三人兄弟を産んだし、なんか遠い親戚とかがテキトーに続けるだろ」

「……お気楽やなあ……」

「たとえば芹沢家が滅びても、日本人が滅びるわけでも人類がいなくなるわけでもないさ」

「……………そっか、そうやね……おおきに、気が楽になったわ」

「あんまり先のことを考えると白髪が出てくるぞ」
「っ、このっ！」

父親の背中に蹴りを入れてから歩き出すと、連絡船が定刻通りに港へ入ってきた。それに制服姿の陽湖が乗っていて降りてきたのが意外で声をかける。

「あれ？ 陽湖ちゃん、タベも島にいたのに、なんで戻りの連絡船に乗ってるん？」

「日曜礼拝に行った帰りです」

「あく……なるほどお……って、結局、土曜日以外は島から出るんやね。礼拝って学校でやってるん？」

「はい、礼拝堂に六角市周辺の信徒のみなさんも集まって行います」

「そんな建物も学園内にあつたなあ……一回も、うちは入ってへんけど。ちなみに何人くらい集まるん?」

「300人くらいです」

「多いのか、少ないのか微妙な数やなあ」

「琵琶湖姉妹学園は日本で唯一の幸福のエホバが建てた学校ですから、わざわざ引越してくる人も多くて教会区としての規模は大きい方です」

「ふくん……」

「一度、シスター鮎美も日曜礼拝に参加してみませんか?」

「気が向いたらね」

もう陽湖からの勧誘に慣れてきた鮎美は軽く流して、また質問する。

「学校が唯一って、ほな、日本中の信徒が六角市に集まってくる感じなん?」

「いいえ、引越したいと願う方は多いのですが、それぞれに親の仕事など事情もありますから、大半の子は地元の公立校などに通っていますよ」

「ふくん……」

鮎美が軽く流すと、陽湖は物足りなくて言うておく。

「けっこう大変なんです。私たちエホバの教えに従う者が普通の学校へ通うのは」

「そうなんや? 何が大変なん?」

「節分や七夕など、その由来に宗教的な意味合いのある色々な行事への参加が禁忌となることもありますし、体育も種目によっては参加を控えます。一学期にあつた剣道も一部の生徒は見学していたのを覚えていませんか?」

「そうなんや。普通に、女の子の日かと思って、いちいち気にせんかつたけど。けど、せっかく唯一の学校なんやったら、やらんかったらええやん。剣道。鷹姫は残念がるかもしれんけど、そもそも強いヤツおらんし」

「法律と学習指導要領で学校に武道を強要したのは、人間の政府です」

陽湖が不満そうな顔をしたので、少し気の毒になる。

「そ…そやね…日本政府やね。立ち話も何やし、うちの家に来る？
お茶くらい出すで」

「はい、ありがとうございます」

不満そうだった顔が嬉しがって微笑んでくれると、鮎美は誘って良かったと感じる。港と家は、ほとんど離れていないので、すぐに鮎美の家に着いた。鮎美がポストを覗いて、うんざりする。

「うわ…また、いっぱい送ってきおって」

ポストの中には化粧品を試供品や健康食品のサンプルや健康器具の案内、画期的な治療器具と称する変な機械類のパンフレットやダイエツト関連のサンプルや案内、その他いろいろな通販やリゾート会員などの勧誘が入っていて、すべて両親ではなく鮎美宛だった。

「すごい量……」

陽湖が驚いている。鮎美は手早く要不要を見分けて、ほぼ不要だったのでゴミ箱へ移していく。ポストも一家で一つでは足りないのでも両親とは別に大きな物を一つ設置したし、だいたいがゴミになるのでゴミ箱も近くに置いている。うっかり陽湖が入れてくれた日曜礼拝の案内まで本人の前で捨ててしまったので、謝りつつ拾う。

「ごめんな、つい勢いで」

「いえ、それは今朝の礼拝の案内ですから、もう不要ですよ。また来週
の案内も入れておきますね」

「うちだけやなくて島中のポストに入れてるんやろ？」

「私が引越したこと、この島が私の担当区になりましたから」

「区割りされてるんや」

「はい」

「勧誘活動も大変やね。この健康食品とかも、しつこいくらい送ってくるわ」

「やはりシスター鮎美が議員予定者だからですか？」

「やろうね。たまにマルチ商法のもあるから気をつけいと静江はんに
言われてるし」

「マルチ商法？」

「あ、知らん？ ま、普通の女子高生は知らんか。あんたは普通の女子高生やなくて宗教女子やけど。まあ、あがって」

「お邪魔いたします」

「母さんは市街に買い物へ行つたし、お茶を用意するし、先に二階へあがっておいて。階段の右側が、うちの部屋やし」

「はい」

陽湖が急な階段をあがっていくのを下から見上げてから、鮎美は紅茶を淹れて二階へあがった。

「どうぞ」

「ありがとう、シスター鮎美」

畳の上に二人で向かい合って座った。

「陽湖ちゃんは純粋そうやから、マルチ商法なんかは、どっぷりハマると可哀想やし教えておいてあげよ」

「はい、お願いします」

「マルチ商法ちゅーのは、簡単に言えば、お友達を紹介していく。ピラミッド組織をつくって、その紹介された人が健康食品とか何かの機械とかを買ってくれると、そこから数パーセントのキャッシュバックがあるちゅー商法のことなんよ。アムスキンとか、ニューウェイ、ミキ社、高陽商事って聞いたことない？」

「あるような……ないような……」

「ま、そのへんがメジャーどころで、あんまり違法なことはせんけど、マルチ商法の世界も宗教に似てるところがあつて、ピンクリヤ。そこそこ普通の会社もあれば、がつつり悪徳商法なところもある。陽湖ちゃんも宗教みたいに慈善活動する組織もあれば、サリンを撒くヤツらもおるのと同じやね。いっしょにせんといて、と思うかもしれんけど、外から見ると見分けにくいもんなんよ」

「違法な商法ではないのですか？」

「違法やないねん。強引に勧誘したら違法やけど、それは押し売りといっしょやん。一応は連鎖販売取引って法律で分類されてる。まあ、口コミ商法や。普通に化粧品とか、売ってる分には、別に害ないし。」

けど、宗教でもハマりすぎると生活に支障が出るやん。そんな感じで、やりすぎて失敗する人もいるし、やらせすぎる組織もあるねん」
「そういった会社が、なぜ、シスター鮎美に案内を送ってくるのですか？」

「うちが議員になるから、もし商品を愛用してくれたら、ええ宣伝材料になるからや。芸能人とかも、たまに使われる。現に、どこかの議員が和牛の投資系商品かなんかに宣伝に使われて困っておったし。ようするに議員が使ったり参加したりしてるちゅーだけで、ええ宣伝にも権威付けにもなるから。そのへん、陽湖ちゃんの組織が、うちを狙えって指示したのと、いっしょやん」

「……………。ごめんなさい。けれど、神の導きは…」

「ええって。あんたに悪意も商魂もないのは、わかるから」

「ありがとう、シスター鮎美」

「ま、そういう商法もあるよって話や。実際的に、この手の知識は実社会で重要やのに高校では教えんから。いっそ学習指導要領に組み込んだ方がええと思うわ。鎌倉仏教の宗派を記憶させるよりマルチ商法の会社と特徴を暗記させる方が、よっぽど役立つのに。うちが文部科学大臣やったら、絶対そうするわ。ま、そういうことやから勧誘されたときは慎重にな」

「わかりました。気をつけます。そう言えば戸別訪問をしていて、逆に試供品やサンプルをいただいたことがあります。そういうことだったのですね」

「宗教勧誘に対してマルチ勧誘したんか……………世の中、すごいなあ……………」

鮎美は冷める前に紅茶を飲み、向かい合って座っているのも疲れるので壁にもたれて座り、陽湖にも隣りに来るよう勧めた。素直に陽湖もそばに来て座った。陽湖が脚を伸ばすと白いストッキングに包まれた脚線美が露わになり、鮎美は自然な仕草で陽湖の膝を撫でた。

「陽湖ちゃんも勧誘もええけど、頑張りすぎんときや」

「お気遣い、ありがとうございます」

陽湖の膝に手をおいたまま鮎美は話題を変える。

「ぎつきの話の続きやけど、自分ら自前の宗教学校でも体育とか不由するんやったら、普通の学校やと、かなり大変なん？」

「はい、私たちは争うような競技は避けますし、クリスマスも祝いません。そういった行事に参加することもできませんから、周囲の理解をえるのは大変です。私も小学校までは孤立したりして。けれど、中学から学園に入って生徒の中では信仰をもっているのは、まだまだ少数派ですけど、先生方は過半数が信徒ですから、とても居心地が良いです」

「少数派か……」

鮎美は膝を撫でていた手をあげて陽湖の髪に触れながら話す。

「公立学校にいるうちはテキトーに周りに合わせといたら、ええやん。信仰は信仰、学校は学校で」

「シスター鮎美、それでは信仰の意味がないのです。してはならないことは、してはならない。これを守ってこそ信仰です」

「……………大変やね。そういうえば、前に同性愛の話をしたやん？ 覚えてる？」

「はっ」

「あのとき、あんたはタバコと同性愛を、いっしょに語ったけど、タバコと同性愛はちやうやろ。タバコは嗜好品で趣味嗜好で吸うもんや。薬物としての依存性の話において、本人の自由で選んで吸うもんやん。けど、同性愛者は別に同性愛者になろう思てなったわけやないで。たまたま、そう生まれついたもんで選択の余地はないんや。趣味でも嗜好でもなく、あれは指向なんよ」

ずっと心の奥に引っ掛かっていた話題を鮎美が蒸し返すと、陽湖は考えてから答える。

「生まれつき備わっていることでも、他に抑えるべきことは多くあります。食欲も度を超せば飽食という罪になりますし、金銭欲も家族に必要なものを与える程度を超えてむさばれば罪です」

「けど、こちらは三食ちゃんと食べるし、小遣いもほしいやん。異性愛者が二人で仲良くするみたいに、同性愛者かって心安らぐ時間がほしいやろに。あんたの神は、それも、あかんと言うんや？」

「友愛は罪ではありませんが、淫行は罪です。夫婦以外の性交が罪であるように、同性愛は罪です。その点、平等です」

「けど、同性婚も認めんにやろ?」

「結婚は男女が行う神への誓いです」

「……………」

鮎美は髪に触れるのをやめて紅茶を啜り、陽湖はなんとなく感じた。

「あの……もしかして、シスター鮎美は同性愛の経験があったりするのですか?」

「別に」

予想していたので詩織に見抜かれたときのよう鮎美は動揺したりはしなかった。陽湖が言い募ってくる。

「思春期の一時期に、そういった迷いが生じることは、とくに女子に多いと聞いたことがあります。けれど、それは一時的な感情で、しだいに落ち着くらしいです」

「そういうのと、本当の同性愛者は、まったくちやうよ」

「……………」

「気の迷いとか、そんな程度やなくて、必ず同性にしか性的興味を覚えんし、異性を好きになることは無い。異性を尊敬したり大事にするとはあっても、性的な対象には絶対にならんから、同性愛者っていうんよ」

「……………」

「あんたらの神からしたら、生まれつき間違った存在や。いつそサタンの手下とする方がええかもね」

「いいえ、違います。人間は自由意志によって正しい行動を選択できます」

「っ!」

鮎美は強い苛立ちを覚え、一息に陽湖を押し倒した。

「きゃっ?!」

「人間の意志では、どうにもならんことは多いよ」

そのまま押さえつけると、陽湖は暴れたりしなかつたけれど、はっ

きりと言ってくる。

「やめてくださいー！」

「ちよつと、ふざけてるだけよ」

陽湖を見つめて、その頬にキスをした。陽湖の体格は、とても華奢で肩の筋肉など鷹姫の半分も無い、格闘技の経験もないので、いとも簡単に押さえつけていられる。そんな女の子らしい陽湖を押し倒している、鮎美は欲望が滾るのを感じる。

「うっ…やめて…」

「キスくらいええやん」

今度は唇を狙ってキスしようとする、陽湖は顔を背けて逃げた。

「シスター鮎美、ふざけるのはやめてくださいー！」

「もう少しふざけよかな。キスさせてくれたら、来週の日曜礼拝、付き合っただけてもええよ。午前中なら予定つきやすいから」

そう囁いてから陽湖の耳を啜えた。

「うっ…」

「陽湖ちゃんが可愛すぎるのが罪やねん」

陽湖の耳の穴に舌を入れて、髪の毛の匂いを嗅ぐ。陽湖の髪からは甘い皮脂の香りがして鮎美の欲望を刺激してくる。

「陽湖ちゃん、ええ匂いするね」

そう言っただけは首筋を嗅ぐけれど、ハイネックのインナーのせいで洗濯洗剤の匂いしか感じられない。満足できなかった鮎美は頬で胸の膨らみを感じながら移動して陽湖の腋を嗅いだ。また制服とインナーのために判然としないので、身を守るように閉じている腕をあげさせるため手首を掴んで強引に腋を開かせた。そこに顔を埋めて嗅ぐと、潰れかけるほど熟れた桃と蜜柑を混ぜたような香りがして鮎美は服の上からでも舐めたくなるほど惹かれた。

「まだ午前中なのに、この匂い、夕べはシャワーしてないの？」

「っ…、い、忙しかったんです。ポスティングして…、一人暮らして色々あつて疲れて寝ちゃって…」

陽湖が顔を真っ赤にして言うのが可愛くて仕方ない。

「そら島中の家にパンフレットを入れて回ったら土曜日一日かかるわな。なんぼ人口が少ないいうても一件残らずとなると、けっこうな重労働やわ」

「もうやめてください、匂いを嗅がないで」

「ごつちの腋は、どうなん？」

反対の腋まで腕を広げさせて嗅いだ。同じ匂いだったけれど、まず鮎美は興奮したし、陽湖は恥じらって身震いした。

「……イヤっ……」

「……ま、ふざけるのは、ここまでにしよかな」

陽湖の目尻に涙が浮かんできたので、鮎美は押し倒していた状態から、背中を支えて起き上がらせて謝る。

「ごめん、ごめん、つい、ふざけすぎたわ」

「……」

「怒った？」

「……いえ……」

拗ねた顔になりそうなのを取り繕って無表情にしているのが、余計に可愛らしくて鮎美は再び押し倒したくなかったけれど、それは我慢する。また並んで壁際に座った。

「神さまは助けてくれなかったね」

「……神は、すべてを見ておいでです」

「ってことは見て見ぬふりなんや？　うちやから良かったものの、陽湖ちゃんがホンマに襲われても、きつと見て見ぬふりやで」

「……」

「それどころか、日本は平和やけど、今も世界のどこかでは、いっぱい人が殺されてるやん。それも見て見ぬふりやし、西暦が始まってから、いったい何回、戦争があった？　全部見て見ぬふりやん。何も悪いことしてないのに、生まれつき病気の人もいる。同性愛禁止ちゅーても、生まれつき同性愛にしておいて禁止とは意地悪な話やね」

「……」

「それとも神さんは、うちらを試してるんかな。試練を与えて成長せい、みたいな？」

「神は人を試したりされません。試しておられるのは、あなたです」

陽湖が真っ直ぐに見つめてくるので鮎美も見返した。お互いの顔が間近で視線が合うと、鮎美はキスをした。衝動に襲われたけれど、今は議論を優先した。

「うちが何を試してるのん？」

「私の信仰と私たちの教義をです」

「……そうかもね。ほな、訊くわ。なんで世界に不幸があんの？ 戦争、病気はもちろんのこと、恋愛でさえ失恋って不幸がある。永遠の夫婦？ そんなん決めるんやったら、産まれたときに決めといてくれたらええやん。なんで恋愛なんてさすの？」

「今の地上世界に苦しみがたえないのは、神の意志ではありません。人の犯した罪によるものです」

「罪って？」

「食べてはならないと神がおっしゃった実をサタンがイブをそそのかし、そしてアダムも手を出してしまった。すべての不幸と呪いが、ここから始まっています。これを贖ってくださいなのがイエスです。そして、人には救いの道が用意されています。正しい行いを続ければ、人は楽園へ復活できるのです」

「……………」

真っ直ぐ見つめ合っていた鮎美は白目を見せて、座っている状態から力を抜いてズルズルと畳の上に寝転がった。陽湖から離れる方向に倒れたので、きつとスカートがめくられて彼女には下着が見られてしまうようになっているけれど、お尻には視線を感じないし、たまたま偶然に今日は新品のショーツをおろしていて、ライトブルーに少しだけ白のレースが入ったデザインは気に入っているの、このまま見せていてもいいかと思っていた。それでも、そつと陽湖がスカートの裾を直してくれたので、その優しさが嬉しかった。

「正しい行いとは神が憎むものを退けることです。殺人、暴力、性の不道德、心霊術、偶像礼拝、盗み、ウソ、戦争、貪欲。同性愛も性の不道德に含まれます。けれど、考えてもみてください。人には自由意志があります。これは神がくださった最高の贈り物です。人間は激し

く怒ったときも、怒りに身を任せず、その衝動を抑えることもできません。神は人に期待しておられます。怒りも生まれつきの衝動ですが、これを抑えるように同性愛者も淫行の衝動を遠ざけ、正しく生きれば楽園へ行けるのです」

「……………その楽園では、男を好きになるんやろかね」

寝転がったまま言う鮎美へ、陽湖は真剣に答える。

「きつと、そうです」

「……………よくも、まあ、断言するわ。その根拠は？」

「啓示、神は彼らの目から、すべての涙をぬぐい去ってください、もはや死はなく、嘆きも叫びも苦痛もはやない。イザヤ、足のなえた者は雄鹿のように登って行く。盲人の目は開かれる。わたしは病気だ。と言う居住者はいない」

「……………」

「すべての不幸が取り除かれるのです」

「……………不幸か……………障害者の中には、生まれつきの障害は不幸やないと、言い張る人らもおるで？ 聖書の価値観だけがすべてでもないやろ」

「……………」

起き上がった鮎美が低い声で続け、だんだんと声に怒りを滲ませる。

「さらに聖書は男性同性愛者の肛門性交については禁止を明示するものの、女性同性愛者については、ほとんど記述がない。せやからキリスト教お盛んな中世イギリスでも女性同性愛について法で禁じる案は議決されなかった。そもそも世界で同性愛を強く禁止しよるのはアブラハムの宗教に影響された地域ばかりや」

「……………どうして、そんなに詳しく知って……………。もしかして、やっぱりシスター鮎美は同性愛者……………」

「こういう話をすると、すぐ疑うけど、そやったら障害者の話に詳しくかったら、うちは障害者なん？」

「……………」

陽湖は睨まれて息がつまりそうに感じた。年配の聴衆を相手に何

度も演説の場数を踏んできた鮎美が目にも力を込めて語ってくると、その言葉に縛られるような錯覚がする。

「単に少数者の事情を知ってるというだけやん。そういう団体からの陳情も多いしね。あんたら信徒も学園内では別として、一步世間に出たら少数者やろ。小学校でも差別を受けたんやろ？　どんな気持ちやった？　そやのに同性愛を否定する。否定された者の気持ちを考えたことがあんの？　神の教義がどうであつても、人として心は痛まんの？　少数者の気持ち、わかるはずやろ？」

「……………」

「存在そのものを否定されるのと、いっしょやねんで。同性愛をやめい、と言われるのを信仰をやめいに置き換えて考えてみいや！　言われたことあるやろ、日本人なんやし普通の仏教と神社にしとけと！　無神経に！　そんなとき、どんな気持ちやった？　みんなと自分がちやう、自分だけ違うっていうのは、どんな気持ちや？　そこへさらに正義面して忠告されてみいや、どうや？」

「……………」

言葉につまった陽湖が涙を零したので、鮎美は自己嫌悪を覚えた。つい強い口調で言いすぎた。叱りつけるような言い方をしてしまった。

「…………ごめん、陽湖ちゃん、言い過ぎた」

「いえ、私が間違つて…………いえ、違う…………私は間違つてないはず…………正しいんです…私は正しいはずなんです…っ…うっ…うっ…」

陽湖がポロポロと涙を零すので、鮎美も心が痛んだ。陽湖の信仰を世間一般とは違うと感じること自体も、また返す刀で自分に降りかかってくるとわかるので切ない。

「ごめんな、責めるような言い方して、ごめん」

鮎美が手を伸ばして抱きしめると、陽湖も抱きついてきた。しばらく抱き合っていて陽湖の涙が止まると、鮎美は陽湖の頬を撫でながら言った。

「うちも一回くらい日曜礼拝に行ってみるわ」

「え……………本当に？」

「来週も予定を開けられるよう、秘書の静江はんに頼んでみるから」
「ありがとう、シスター鮎美！ ぜび、来てください！」

笑顔になった陽湖を可愛いと想いながら約束し、それから勧める。

「うちのお風呂に入っついていかへん？ 陽湖ちゃんちシャワーだけなんやろ。やっぱり、お湯に浸かるとホツとするよ。うちも疲れてるし、今日は予定もない休暇日やから昼風呂なんて、ええかな、と思うから」

「…………。お誘いは嬉しいのですが…………なんとなく身の危険を感じるんですけど…………さつきみたいこと、もうしませんか？」

「ごめん、ごめん、もうせんから」

「…………では、お言葉に甘えて……」

「ほな、お湯入れてくるね」

鮎美は風呂の準備をして、陽湖を風呂場に案内した。

「立派なお風呂ですね」

「家は全体に規格が小さいけど、お風呂だけはリホームしていうのは、うちと母さんが引越するとき父さんに出した条件やからね。リホームせんかったら、下から火を焚いて沸かす風呂やってんで」

「それは…………また…………風情はあつたかもしれませんが……」

「めっちゃ面倒やん。リホーム前に何回か使ってみたけど、やってられるかって感じやったよ。さ、いっしょに入る」

「いっしょに…………ですか……」

「使い方も教えてあげるし、十分に広いから」

鮎美は迷っている陽湖を脱がせていき、自分も裸になった。陽湖の裸体は服の上から予想した通り、華奢で女の子らしい。けれど、下半身は肌がガサついていて、ひどく荒れていた。お尻と膝の裏は荒れが、とくに強くてかわいそうだった。

「脚はあんまり見ないでください。アトピーがひどくて……」

「かわいそうに。治るとええね」

「この島に来てから、けっこう調子がいいんです。自動車の排気ガスがないからなのか、お水との相性なのか」

「そら良かったね。ここは自動車の通る道からは何キロも離れてるもんな。空気の清々しさが、まったくちやうよね。大阪と比べたら別天地やで」

鮎美は陽湖の背中を押してバスルームに入った。リホームしたので現代的な風呂場になっていて、クリーム色の楕円形のバスト、広めの洗い場があり、シャワーも大口径だった。

「これが温度調節な、こっちが水量」

鮎美は使い方を説明しつつ陽湖の背中をお湯で流してやり、手にボディーソープをつけると身体を洗ってやろうとしたけれど、陽湖が慌てて止める。

「ちよ、ちよつと、待ってください」

「遠慮せんでええよ、洗ってあげるさかい」

「い、いえ、自分で洗いますし、その……大変失礼なのですが……肌に合う洗剤かどうか試させてください」

「あ、そうやね。ごめん、ごめん、気がつかんで」

「少し泡をいただきますね」

陽湖は鮎美の手からボディーソープの泡を少量とると肘の内側に塗った。

「……大丈夫かな……」

さらに、膝の裏側にも塗りつけて、しばらく様子を見てると微笑んだ。

「……ピリピリしない……。大丈夫みたいです」

「そら、よかった」

と言いつつ鮎美が身体を洗ってやろうとすると、それは辞退する。

「自分で洗いますから」

「背中だけでも、洗ってあげるって」

鮎美は泡を背中に塗りつける。

「どうなん？ 背中も大丈夫そう？」

「はい、背中は比較的」

「お尻は痛そうやね……」

荒れている臀部へも少しずつ触れていってみる。

「お尻は、どう？」

「ピリピリしないのですが……お尻は自分で洗いますから」

やや赤面している陽湖が可愛らしくて鮎美は名残惜しかったけれど、これ以上の強引さは遠慮して、陽湖が自分で身体を洗う姿を見つめる。

「シャンプーは、これやしね」

「シャンプーが一番、合う合わないが……」

陽湖が不安そうにシャンプーも少量だけ肌へ塗ってみてから、また微笑んだ。

「ぜんぜんピリピリしない」

「よかったね」

「はい」

陽湖が髪を洗い始めたので、鮎美は見つめていて陽湖の腋も鷹姫のように毛が伸びていることに気づいた。

「新品のカミソリあるけど、使う？ 腋、けっこう伸びてるよ」

「っ……」

陽湖が恥ずかしそうに背中を向けた。

「あんまり見ないでください。剃ると腋も、ひどく荒れるんです」

「そうなんや、かわいそうに」

「おかげでプールの授業も、ずっと嫌だった……」

「気の毒にな……短く刈ったりしたら？」

「刈っても毛先がチクチクと肌を刺激して荒れるんです。それで、そのままにするしか、なくて」

「そっか。まあ、他にも無頓着に伸ばしてる女子もおるさかい、あんまり気にせんとき」

鮎美も自分の身体を洗い始め、二人で向かい合ってバスに浸かった。

「はああ……」

「素敵なお風呂ですね」

やっと落ち着いて陽湖も、うっとり目を閉じている。その唇にキ

スをしたたい衝動を覚えるし、湯船の中に揺らめいて見える裸体には、もっと強い衝動をかき立てられるけれど、ぐっと我慢して陽湖の膝を撫でるだけにした。

「アトピー、治るとええね。痛い痛い、飛んでいけしてあげるよ」

「優しいんですね」

陽湖が目を開けて、洗い場にあるシャンプーボトルを見上げた。

「シャンプーも少しもピリピリしなくて、これ、どこで売ってるんですか？」

「……うくん……」

「今、使っているものは少しピリピリするので髪を洗うのを4日に一回くらいにしています……毎日洗いたいのには……。でも、もしかしたら、これなら……」

「……」

「これ、どこで売ってました？」

「……」

「……教えてもらえると、とても嬉しいのですけれど……。これ、見たことないラベル……」

「これは……店には売ってないんよ」

「では、どうやって？」

「……」

「……すみません、ぶしつけなことを訊いて」

「いや……その……かわいそうやし言うけど、……これ、さつき話してたマルチ商法の商品やねん」

「え……」

「うちの母さんが大阪にいた頃、勧誘されて会員になって以来、ずっと、これやねん」

「……悪い会社なんですか？」

「別に悪い会社やないよ。物はええし。うちも気に入ってる。……」

「……勧誘がしつこいとか？ ノルマがあつたり？」

「別に入会したら、あとは通販と同じで買う買わんは自由らしいよ。いっぱい買うとポイントつくのも、そこらの店といっしょや。普通の店と違うのは誰かを紹介すると、そこからポイントがついて、そのポイントは現金化されるちゅーくらいで。それも、ほんの数%らしいけど」

「そうですか……………」

陽湖が後ろ髪を引かれるような顔でシャンプーボトルを見上げている。

「陽湖ちゃんが、どうしても欲しいなら母さんに言うてみるけど……………宗教的には大丈夫なん?」

「それは問題ないと思います。あの…、よっぽど私たちを変な団体だと思つてませんか?」

「……………はは……………ごめん……………」

鮎美は笑つて誤魔化してからタメ息をつく。

「はああ……………世の中、ホンマ色々やね」

「はい……………そうですね」

「紹介はするけど、うちの家が、この会社の会員で商品を愛用してること、他では言わんといてな。議員的に問題はないけど、議員的に騒がれても利用されても嫌やねん」

「はい、誓つて」

「ほな、誓いのキスを」

「……………」

「冗談やつて」

また笑つて誤魔化して鮎美はお昼の入浴を終え、陽湖も家に帰ったので一人になる。自室で一人、畳の上に寝転がつて、つぶやいた。

「……………欲求不満を陽湖ちゃんに、ぶつけてしても……………うちは、つくづく最低やな……………」

自己嫌悪の海に沈みながら、一人ずつと部屋にいと、鮎美は欲求不満を強く感じて、押し入れの布団の中に隠してある電気マツサージ器を出してきた。

「……………」

家の中に誰もいないことを聴覚で確認してから、電気マッサージ器を使う。

「…んっ…」

通販で買った電気マッサージ器を使うのは、これで5度目なので、すぐに快感が高まってくる。

「…ハア…鷹姫…ハア…」

妄想の中で、無頓着な鷹姫が電気マッサージ器を自分にあててくることや、その逆を想像したり、清楚な陽湖へ電気マッサージ器の快感を教え込んで乱れさせる様子を思い浮かべたりして、父親が釣りから帰ってくるまで一人で遊んだ。

10月 畑母神

翌週の日曜日に、鮎美と鷹姫、陽湖は朝一番の連絡船で本土へ渡り、路線バスで学園前に着くと、鐘留の制服姿を見て鮎美が驚いた。

「カネちゃん、まともな制服もつてたんや?!」

「冬服はね」

鐘留は冬服を着ていたけれど、まったく改造されていなくてスカート丈も袖も購入時のままだった。制服の移行期間である10月は夏冬どちらで登校しても良かったけれど、鮎美にとっては鐘留と知り合ってから初見になるので驚いている。

「あの露出狂みみたいなカネちゃんが……なんで？」

「だって、いつもの夏服だと礼拝堂には入れないって月ちゃんが連絡してきたし。そろそろ季節的にもね」

鮎美が日曜礼拝に参加すると聴いて鷹姫はもちろんのこと、鐘留も興味をもって参加すると言い出し、陽湖はそれを歓迎しているので学園前に集合したのだった。鮎美が鐘留の制服姿を見つめながら言う。

「スカート丈もそのままとか……もしかして、礼拝堂に入るために再購入したん？」

「まさか。そこまで好奇心を覚えるような建物でもないしね。冬服は、ずっと三年間このままだったよ」

「……なんでなん？ スカートくらい、ちよっと切るとか折るとかせんの？」

「冬に着るんだよ。そんなことしたら寒いじゃん」

「……………それだけの理由なん？」

「なんでアタシが寒いのが我慢してまで男子諸君にサービスしないといけないの？ 暑いときは脱ぐ、寒いときは着る、人類の知恵だよ。知恵の実、美味しかったのかな？ アダムもレビューくらい残せばよかったのに」

「参加する前からケンカ売るようなこと言わんとき」

「きゃはっ♪」

「シスター鐘留の周りだけは一年中、冬だと良いですね」

「来週から気温さがるみたいだし、アタシの夏服姿も男子には気の毒だけど見納めだったかもね」

「そうなんや……」

鮎美は少し残念に想ったけれど、どちらかといえば露出しすぎの夏服姿より、今の方が好みだった。鐘留が長めのスカートをつまんで腿を見せて言う。

「女子高生としてのアタシの夏も終わったんだねえ。立てば勃たせて、座ればパンチラ、歩く姿はチラリズムと言われたのに」

「ははは……。けど、改造なしのカネちゃんも逆に新鮮で可愛らしいよ」

「ありがとう、アユミン。でも、真冬には期待しないでね」

「真冬になると、どうなるん？」

「ロシア人♪」

「は？」

「芹沢先生、緑野は単に我慢がないだけです」

「シスター鷹姫の言う通りですね。真冬になるとモスクワのロシア人みたいなカツコで登校してきますよ。スキーウェアのような上下に、分厚いコートと手袋、毛皮の帽子。雪の日なんてゴーグルと防寒マスクまでして。六角市は北極でも南極でもないのに」

「一切の露出がないカネちゃんか……極端やなあ」

「自宅の部屋だと、裸に近いカツコだよ。パーツと脱いで大解放」

「光熱費とか地球温暖化とか無視やなあ……」

「シスター鮎美、そろそろ中に入ってください。皆さんも」

陽湖に促されて鮎美たちは入学して始めて礼拝堂に向かった。学園敷地のやや奥にあり、そばにあるグラウンドには自家用車が百台以上も駐まっているので参列者だと思われる。鮎美は礼拝堂の建物を見上げた。

「意外と平凡というか普通の建物やね。言われんかったら、わからんわ」

「過度の装飾は偶像崇拜と同じです」

「ポリシーやねえ」

鮎美は着ている制服に着乱れがないか、さつと触って確認した。鷹姫も剣道場に入るときのように身なりを整える。鐘留は手鏡で制服と顔を見て頷いた。

「じゃあ行こう♪ 学園の伏魔殿へ」

「……………」

「ん？ 違った？ ちょっと前に自民党の大臣が外務省をそんな風に言っただけだった？」

「言っただけだけど、今の場合はちやうやろ。つまみ出されるで」

「きやははは。ラスボスいるかもよ？」

「あの……シスター鐘留、お願いですから礼拝堂の中では、絶対にふざけたりしないでください。お願いします。本当に」

陽湖が切実に頭を下げ、頼んでくるので鐘留も頷いた。

「ごめん、ごめん、そんな泣きそうな顔しないで、もうふざけないから」

「本当に、お願いします」

「鷹姫、カネちゃんがいらんことしたら対応Cで」

「はい」

「アユミン、対応Cって何？」

「取り押さえて警察に通報」

「うくん……アタシも、そこまで悪いことしないよ？」

「いやいや、さつきの発言だけでも、刑法ギリギリちゅーか、アウトっぽい。えつと刑法の180条……くらいやったかな……」

「芹沢先生、188条では？」

「うん、そのくらいやったかも。それに、なんかあったよな。神社とか、お寺とか、礼拝堂とか、他人さんが真面目に信仰しとるものに公然と失礼な行為をしたら懲役か、罰金やったで。説教とか礼拝を妨害したら、もつと重い刑罰やった」

「へえ……アユミンと宮ちゃん、よく勉強してるね」

「一応これでも立法府に所属する予定だから。ってことでカネちゃん、気をつけいよ」

「はい」

話ながら鮎美たちが礼拝堂に近づくと、スーツ姿の長身の男性が立っていた。風格のある男性は鋭角のデザインがされた眼鏡をかけていて理知的な雰囲気と、陽湖と通じる潔癖さを感じられた。

「ラスボス登場♪」

「カネちゃん」

「はいはい」

男性が鮎美を見て、微笑みをつくった。

「ようこそ、シスターたち」

「どうも、おはようございます」

相手が握手を求めるように手を出してきたので鮎美も慣れた動作で握手する。いつもの握手と違ったのは鮎美だけでなく、そばにいた鷹姫や鐘留へも握手を求められたことで二人はぎこちなく応じた。最後に陽湖と握手して微笑み合い、ここへ鮎美を連れてきた労を誉めるように背中を撫でている。撫でられた陽湖の嬉しそうな表情で鮎美は、彼女の想いに気づいて、少し淋しかった。

「はじめまして。と言っても何度か、学園の全体行事に私も顔を見せられています、この礼拝堂を総括する屋城愛也です」

「芹沢鮎美です」

「今日は日曜礼拝にようこそ。どうぞ、中へ」

「はい…、どうも…」

促されて鮎美たちは礼拝堂内部に入った。

「なんや…：…以外と、普通やね…」

「つまらないね」

内部は座席が並び、中央に少し高い壇がある程度で、他は文化ホールか、市民コミュニケーションセンターと似たような造りだった。外観に装飾が無かったように内部にも装飾がない。

「何にも無いね。月ちゃん、これで終わり？ 地下から巨大な神の像とか、出てくる？ それとも天井から降りてくるとか」

「…：…シスター鐘留…：…一年生から学園において偶像礼拝のことを学びませんでしたか？」

「マリア像くらい、あつたっていいじゃん」
「……………」

「これで、ええんちゃうか。どこぞのサリン撒いたヤツらは発泡スチロールで像を造ったらしいけど、銅で造って金メッキしようが、木に彫ろうが、コンクリートで造ろうが、所詮は物や。神さんやない。いっそ、何も無いほうが清々しいわ」

「はい、シスター鮎美の言われる通りです」
「皆様、どうぞご着席ください」

さきほどの屋城がマイクで全体に声を響かせている。もう定刻だったので鮎美たちも近くの座席に座ると、礼拝が始まり、聖書の朗読と説教、賛美歌の合唱が何度か繰り返され、そして終わった。また、鐘留が拍子抜けして言う。

「こんだけ？ 学校での聖書研究の授業と似たようなもんじゃん」
「そうやね……………」

鮎美も拍子抜けではあった。学校と違うことといえば、参加している教師は多いけれど、誰一人として先生とは呼ばず呼ばれず、みなシスターブラザーで呼び合っていることと、鮎美たち初参加のメンバーに気づくと笑顔で握手を求めていることくらいだった。

「アタシ、先生たちと握手するとか、卒業式くらいだと思ってた」
「うちも……………」

「どうでしたか、シスターたち」
屋城が壇上から降りて問うてくる。

「はは……………どうも……………こうも……………普通やな、と」
「祈りは日常です。日常であり非日常でもあるのです」
「……………禅問答みたいなことを……………」

禅は武士の文化なので、なんとなく期待して鮎美は鷹姫を振り返ったけれど、実に興味なさそうに立っているだけだった。

「これからも、どうか再び参加してください。次第に理解していただけるでしょう」
「……………」

鮎美は迷い、それから屋城を見据えた。

「……………」

「……………」

さすが大勢の信徒さんらのリーダーや、そんだけのオーラと風格はある、けど、うちもヒマやないねん、単刀直入に行こか、と鮎美は気圧されずに問う。

「うちが議員になるちゅーことで陽湖ちゃんを使つて勧誘してくれはりましたけど、真の狙いは何ですか？」

「神の教えを知っていたかどうかです」

「それは最終目標として。もつと直近、もつと世間的な目的もあるんじゃないですか？」

「……………」

ええ」

屋城が頷いた。

「それは何ですか？」

「聞いてしまえば、きっと、これも普通のことですよ」「で？」

「この学園には大学がない。その設置には色々としなくてはいけないことも多い。シスター鮎美、あなたが議員に選出されたことは、私たちにとつて福音です」

「大学の設置……………なるほど……………」

「任期が始まれば、お願いしたいことも多くなるでしょう。ご協力ください」

「……………」

「……………」

意図的に沈黙した鮎美に対して、屋城も黙つて、まっすぐに視線を合わせた。そこに、やましさは一欠片も無くて熱意だけを感じるの、鮎美が微笑んで言う。

「ま、うちにとつても母校になるわけやし、文科省とのパイプ役くらい、やりますわ。信仰をもつか、どうかは、別の話として」

すつきりとした鮎美は屋城と握手をしてから礼拝堂を出た。鷹姫と鐘留もついてくる。

「アユミン、もう終わり？」

「好奇心は満たされんかった？」

「ぜんぜん」

「ごめんな。うちも拍子抜けやったわ」

「芹沢先生、そろそろ党支部へ向かう時刻です。石永さんのお迎えが来るかと」

「そうやね」

鮎美と鷹姫が校門へ向かおうとすると、陽湖が走ってくる。

「ハアっ、ハアっ…きよ、今日はありがとう！」

「うん」

「…ま…ま…また…」

「また、明日、学校で。っていうか、ご近所さんやし、また島でね。あと、母さんがシャンプー到着したって、さっきメールくれたわ」

「ありがとう、シスター鮎美」

「ほな、またね」

「失礼します」

鮎美が手を振り、鷹姫は会釈した。

「アタシは？ 置いていく気？」

「カネちゃんが党支部に来てもしゃーないやん」

「党员だよ、一応」

「せやったね。いっしょに勉強する？」

「うくん……とりあえず、ついていく」

予定外に鐘留が加わり、静江の車で党支部に着く。鐘留の姿が今までの露出しすぎの夏服から、規定通りの冬服に変わったことは礼拝堂の信徒だけでなく、支部内の党员にも好印象を与え、家柄もあって歓迎され、鮎美の友人として遇される。そして、いつも通りの勉強の後、石永が難しい顔をして週刊紙の表紙を睨んでいたので鮎美が問う。

「どないしはったんですか、石永先生？」

「ああ、いや……ちよっと女子高生に、これは…」

石永は週刊紙を片付けようとしたけれど思い直して見せることにした。

「不快かもしれないが、知っておかないと情報に遅れていることになるから……一応、知っておいてくれ」

「はい。……ふーん……SMクラブで、ご乱交……E議員の隠された性癖……女性を犬扱い……」

鮎美は週刊紙の記事を読み、また問う。

「E議員って自民なんですか？」

「でなければ、こんな顔はしていない」

「……総選挙、近いんですよね？」

「だから、こういう顔なんだ」

「お兄ちゃん、白髪が増えるよ」

「うるさい」

「うちは、これを知って、どうするべきなんですか？」

「知るだけでいい。コメントを求められても無視でいい。ただ、知らずにいると驚くかもしれないから教えたただだよ。すまない、不快だったろう」

「いえ。わかりました」

鮎美は神妙に答えたけれど、鐘留は記事を読んで笑う。

「きやはっはは、お座り一回一万円、三回まわってワンで3万円だってプライドの無い女。電柱にオシッコするとか、もう人として終わってるじゃん」

「緑野さん、これから来客があるから静かにしていてね」

静江が注意すると、鐘留は礼儀正しく石永に週刊紙を返した。

「静江はん、その来客って、また陳情系ですか？」

「ええ。今回は、お兄ちゃ……いえ、石永先生と、芹沢先生の二人に」

「わかりました」

「やれやれ」

石永は陳情の内容を知っているようで疲れた顔をしていたけれど、アポイントを取っていた団体が訪問してくると、議員らしく誠実な顔で出迎えた。訪れた団体は女性3人で40歳前後と思われた。鮎美も石永と同じように団体を出迎え、テーブルを囲んで面談する。

「石永議員と芹沢議員が春の会に賛同されているというのは本当ですか？」

開口一番に団体代表の女性が問い、鮎美と詩織たち春の会の幹部が握手している写真を見せてきた。

「これ…あのときの…どこで、これを…」

「春の会のホームページに掲載していました。芹沢議員と会談し、理解をえたと」

「…会談はしましたし…理解は…。あと、うちは、まだ正式には議員やないですよ」

団体の女性たちに責めるような雰囲気があるので鮎美が戸惑っていると、石永は肩を叩いて頷く。

「芹沢さんは、まだ議員ではないから、あまり積極的に発言しなくてもいいよ。私に対応するから」

「は…はい…おおきに、ありがとうございます」

鮎美は肩に触れられたけれど、茶谷のときのような嫌な感じは受けなかった。その石永に対応を任せて聴いていると、団体が求めているのは売春の禁止と風営法の罰則強化で、女性の人権を踏みにじる売買春を無くすよう訴えに来たのだと、わかった。とくに春の会の活動は敵対視しており、女子高生の鮎美が彼らのホームページに載っていたのは、まことに遺憾だと何度も言い、鮎美は曖昧に頷いて、その場をしのいだ。長い面談が終わり団体が帰ると、鮎美はテーブルに伏したし、石永も疲れた様子でタメ息をついた。

「はああ…やっとな帰ってくれたか」

「石永先生、春の会に賛同議員として参加してはったんですね」

鮎美が言うと、石永は咳払いした。

「言っておくが、そういう店に行ったことは無いよ」

「ふーん…」

鮎美は今まで気づかなかったけれど、石永が左手の薬指にリングをしているのに目をやった。

「石永先生は結婚してはるんですか？」

「ああ」

「お兄ちゃんは彩先輩と中学からラブラブだから」

「静江、余計なことは言わなくていい」

「余計な賛同なんかしてるから、フェミニスト団体に叱られるんだよ」

「わかってる。だが、売春を合法化し、反社会的勢力の資金源を断つことも重要なんだ。春の会の言い分にも理はある」

「はいはい、あ、その件で畑母神先生が、これから来るって。まだ京都だから時間かかるかもしれないけど、芹沢先生にも会っておきたいらしいよ」

「畑母神先生が。そうか、わかった。芹沢さん、遅くなって申し訳ないが待っていてくれないか」

「はい。畑母神先生って……聞いたことあるような……けど、自民党やないんちやいます？ たしか、少数政党の……」

「日本一心党の代表よ」

「立派な人だから芹沢さんも会っておいた方がいい」

「はい。……党代表……」

「お兄ちゃんは畑母神先生が大好きよね。同じ核武装論者だし」

「日本に核って、また……」

鮎美は秘書としての鷹姫を盗られそうになったことを思い出して、そばで資料を読んでいる鷹姫の手を握った。

「はい？」

「何でもないよ、こうしたかっただけ」

「そうですか」

「アユミンって、よく宮ちゃんに甘えるよね」

「ええやん、別に。それで、その畑母神先生って、どんな人なんですか？」

「海上自衛隊のトップから衆議院議員になられた人だよ。自民党とは少数ながら共同歩調を取ってくれている。いずれ防衛大臣、いや、総理になっても、おかしくない人だ」

「総理ですか……」

「年齢的に無理でしょ、お兄ちゃんの方が可能性あるよ、あと5期くら

いい当選して、いい歳になれば時運によつては巡ってくるかもね。にしても、さっきのフェミニスト団体が来てる間、緑野さんが不規則発言するんじゃないかって心配だったけど、よく黙つててくれて助かったわ」

「あの人たち、人の話なんて聴いてないよ。自分が言いたいこと言つて帰っただけじゃん」

「それは、その通りね。ちなみに緑野さんは売春つて、どう思つてるの？」

「アタシに無関係なことを、アタシが考えてもしようがないよね。どうでもいいことだよ」

「なるほど。宮本さんは？」

「……………」

問われて鷹姫が考え込む。

「た、鷹姫は、そういう話、苦手やもんな」

「はい。よくわかりませんが、暴力団の資金源となるのは、好ましくないのでしよう。是非はおいて金の流れを断つか、把握するか努めた方が良いと考えます」

「君は、やっぱり優秀だな」

石永が感心すると、鮎美は守るように鷹姫を抱いた。

「譲りませんから！」

「わかつてるよ、すまなかつた」

「緑野さんからいただいた御菓子があるから、コーヒーを淹れますね」

静江と鷹姫がコーヒーの準備をして、飲み終わる頃に畑母神が秘書と現れた。挨拶と握手を型通りに進め、熱心な国防論者である畑母神と石永の話は危機管理について弾み、鮎美にとって興味のある分野ではなかつたけれど、重要な話であることは理解できるので真剣に聴いて2時間あまりが経過した。不意に畑母神が話を春の会のことに移してくる。

「石永くんは春の会に賛同議員として名を連ねているそうだね。芹沢さんを紹介もしたとか」

「はい。それが何か？」

「売春など合法化しては、いかんよ」

「……。清廉な畑母神先生なら、そうお考えになるかもしれませんが、反社会的団体の資金に……」

「そういう問題ではない」

「では、何が？」

「国家百年の計と言うだろう。今現在のことだけでなく百年後の日本を考えてもみなさい」

「百年後ですか……」

石永も鮎美も百年後を考えてみるけれど、あまり想像できない。売春が合法化されることで生じるリスクは感染症の増大と、利用者の増加だったけれど、前者は合法化時の衛生強化で対応可能と考えているし、後者は実際のところ繰り返し買春を行う愛用者は全男性の4%程度で、パチンコなどの依存症に比べて問題は軽微だと考えていた。

「畑母神先生、我が不明にて計りかねます。どうか、ご教授ください」

石永の方が国会議員としての年季は長いけれど、海自のトップを務めて定年退官した畑母神に対しては年齢差もあってへりくだっている。畑母神も自然と教え諭すような語り口になっていた。

「売春を合法化するということは、国家が売春に対して不作為でなくなり、作為的に、これを認めたことになる。当初は良いかもしれない。暴力団への資金は激減し、衛生状態も改善、労働問題や搾取も減るかもしれない。だが、数十年後、若い頃に売春を生業としていた者は多くの場合、中年以後は金に困るだろう。そうなると、何を考えるか。人権団体や弁護士にそそのかさされ、やはり売春は人権の蹂躪だったと言いつつ、合法化した国家に責任があると言いつつ損害賠償を求め訴訟を起こすだろう。我々は従軍慰安婦問題で、この構図を、すでに経験したはずだ。歴史に学ばなくてはいかんよ」

「な……なるほど……先生の、おっしゃる通りだ」

「百年後の日本に負債を残さんようにな。あまり春の会へは、深入りせんように」

「はい、わかりました」

「え……」

そんな、あつさり立ち位置を変えるのん、なんぼ尊敬する先生の言うことでも、詩織はんらの味方して、女子高生のうちまで紹介したはずやのに5分と経たずに旗色を変えるのん、と鮎美は驚いたけれど、何も言えなかった。畑母神が時刻を見て腰を上げた。

「遅くにすまないね。芹沢さんに会えて、よかった」

「い、いえ！ こちらこそ！」

鮎美も慌てて立ち、握手を交わした。畑母神は鷹姫とも握手をする。

「宮本さんは覚えていないかもしれないけれど、君を見るのは、これで三度目になるよ」

「え……、申し訳ありません。……いつのことでしょうか？」

「今年の9月と、去年の9月、君が個人戦で優勝するところを来賓席から見せてもらった。ますます腕をあげたね。今年は余分な緊張もなく実に堂々としていて剣の切れが冴えていた」

「それは失礼いたしました」

「いやいや来賓席にいるオジサンたちの顔を覚えていないのは仕方ない。それより、石永くんから聴いた宮本さんの考え方、本当に素晴らしい。君は、いつまでも秘書におさまるような人物ではないよ」

「……」

「いっそ、我が党から公認候補で衆議院選に出てみないか？ まだ準備も間に合うだろう」

「……」

「……た……鷹姫は、うちの……」

鮎美が困っていると、石永が言ってくれる。

「畑母神先生、まだ彼女たちは二人で一人前というくらい不可分ですから。何より、引き抜きは、ご遠慮ください」

「そうだな、いや、失礼した」

畑母神が支部を去り、鮎美は気になっていることを石永に問う。

「あの……石永先生、春の会は、どうしはるんですか？」

「そうだな……いきなり脱退はしないまでも、それとなく距離を置か。脱退してしまうと、彼らからの票を失うし。もともと売春の合法化は難題でもあった、すぐに進捗しなくとも文句は言わないだろう。芹沢さんは女性だから、迷っている、と答え続ければいい」

「それって応援だけさせて、こっちは応援せんちゅーことですか?」

「露骨な言い方だね。そういう物言いは今後は避けた方がいい」

「……………はい」

「芹沢先生、宮本さん、緑野さん、そろそろ送るわ」

かなり遅くなったので静江の車で、まずは鐘留を自宅前に降ろし、次に港へ向かう。その車中で静江は運転しながら言う。

「少し前、タカ井に泊まった夜に、鮎美ちゃんと宮本さん、盲導犬の真似事したって?」

「っ?!」

疲れた頭で詩織のことを考えていた鮎美が目を見開いて驚く。

「な……なんで、それを?!」

「宮本さんから聞いたわ」

「っ……鷹姫……」

絶望的な顔で鮎美は鷹姫を見たけれど、同じように疲れている鷹姫は、ぼんやりとしたまま答える。

「はい…、言いました…県知事選の後半でしたか…」

「なんで?!」

「鮎美ちゃんが演説してるとき、ちよつとした話題の流れで裏で宮本さんから聞いたわ」

「話題の流れって…」

「宮本さんが視覚障害者からの陳情内容について訊くから、そんな団体じゃないよ、って話から、けど一人は視覚障害者だったからとか、そんな話の流れよ。思い出すと恥ずかしいことしたって自覚はあるのね?」

「っ……………」

鮎美が顔を伏せて震える。静江は前を見たまま続けた。

「二人が視覚障害者の体験をしようと思ったのは、えらいかもしれな

いけど、そのとき裸だったんでしょ。旅館の部屋とはいえ、仲居か誰かに見られたら、どんな誤解を受けるか考えて行動してください」

「はい、すみませんでした」

黙っている鮎美に代わって鷹姫が謝っている。静江は港の駐車場に車を駐めながら言う。

「スクープされた週刊紙の記事と似たような誤解を受けるわよ、最悪の場合。鮎美ちゃんが帯で首輪してて犬歩き。それを連れてる宮本さんが目隠しして、どんなプレイって思われるかもしれないから。実際、プレイとしては、どっちがMか、わかんない状態ね。ご主人様不在のMカップルとかスクープされたら超痛いわね。あ、カップルじゃないか」

「……………」

「Mというのは何ですか？」

「う……………うくん……………宮本さん、それ知らないんだ……………」

「はい、知りません。すみません」

「うくん……………まあ、そのうち教えるわ」

「はい、お願いします」

「つてことだから、知らずに変な誤解を受けないよう二人とも気をつけてね」

「はい」

「……………はい……………」

ぐつしよりと背中全体に汗をかいた鮎美も返事はした。車から降りるときも、足が震えていて、うまく立てずにフラつくほど、まだ動揺している。

「……………」

なんで静江はんに言うんよ、鷹姫つ、なんで……………、あのときのこと……………他人に言うやなんて……………二人だけの時間……………ちやう、……………鷹姫はホンマに視覚障碍者と盲導犬やって思い込んで……………けど、それでも……………、と鮎美は脳内で大パニックになっている。額と腋からも噴き出すように汗が流れて、顎や肘に滴っている。

「芹沢先生、迎いの舟が来ましたよ」

「う……うん……」

「大丈夫ですか？ 足元がおぼつかないようですが」

「あんたは……」

泣きそうな顔で鮎美は鷹姫を見たけれど、港が暗いので、鷹姫からは見えない。

「はい？」

「ううん……何でもない……。あの盲導犬ごつこの話、金輪際、誰にも言わんといてな」

「はい、わかりました。そんな足取りでは乗船時に湖へ落ちますからお手を」

鷹姫が手を握って腰を支えてくれる。その優しさは嬉しいけれど、あの夜のことを口止めしなかったからといって他人に言う神経は理解できない、鮎美は漁船に乗ると座り込んで丸くなった。

「……………」

頭の中が、いろいろな出来事と人物、問題でグルグルと回る。犬、目隠し、鷹姫の裸、国防、危機管理、売春、フェミニスト、鐘留の冬服姿、礼拝、宗教、聖書、楽園、大学の設置、陽湖の白ストッキング、マルチ商法、電マ、詩織の指、畑母神、石永、裏切り、静江の土下座、御蘇松の落選、新幹線とダム、自民党、茶谷、セクハラ、週刊紙、総選挙、民主党、共産党、社会保障、障碍者、出生前診断、三島、性同一性障碍、同性愛、鷹姫の身体、鷹姫の気持ち。鮎美は頭痛を覚えて呻く。

「うう……」

「芹沢先生、どうかされましたか？ どこか痛むのですか？」

「……うん……うちは、もう疲れた……いろんなことで頭が、いっばいや……」

鷹姫にすがりついた。

「……芹沢先生……」

「もう日本も世界も、どうでもようになってくる……鷹姫……二人で、どっか遠いところ行きたいわ」

「……………。今はお休みください」
そう言った鷹姫は目を閉じさせるように鮎美の頬を撫で、身体を支えた。

10月～11月 解散

翌朝、鮎美は悪夢に魘されて涙を流していた。

「っ……ハア……ハア……夢……」

目を覚ますと、すぐに悪夢の内容は薄れていくけれど、まだ覚えている部分だけでもお腹の底が凍りつくような心地だった。たしか鷹姫を裸にしたり、目隠ししたり、舐めたりしたことが、すべて世間に露見して、議員の鮎美が同性愛者であると週刊紙に報じられ、誰からも蔑まれる夢で、鐘留に嗤われ、陽湖に避けられ、とうの鷹姫からは嫌悪され、両親に見放され、なのに鮎美自身は裸で犬のように外を歩いていて、その首輪を石永と静江がもっていて、もう用済みだと言われて捨てられ、行くあてもなく彷徨っていると、衆議院議員になった鷹姫が通りかかって、冷たく見下してくる、そこで目が覚めた。

「…ハア………ハア………うう………」

寝汗と涙で、枕が濡れている。

「……うちは………なんで………」

同性愛者なんかに生まれたんよ、と鮎美は考えないようにしてきたことを、はつきりと意識してしまい、呪わしくて枕を叩いた。それから自殺の方法を考える。今までにも何回も考えたことがある。首吊りは怖いし苦しいかもしれないし、いかにも自殺なので両親が悲しむ。

「………」

両親の悲しみを軽くするなら、交通事故がいい、赤信号ギリギリで飛ばしてくる車や歩行者を邪魔そうに走るトラック、あれに轢かれてみたら、いいかもしれない。けれど、即死でなければ、とても痛くて苦しそうだった。

「………」

自分の苦痛から逃げるために苦痛を味わうのがバカらしいなら、苦しくない自殺方法も知ってはいる。練炭、超高層階からの転落、凍死、でも、もっと楽な死に方がいい、拳銃でもあればいいのに、と考える

と三島からもらった資料にアメリカでの思春期の自殺における13%が性的な悩みによるものだったという数字を思い出した。

「……………」

「そろそろ起きなさい！」

階下から母親の声が出た。

「……………はい！」

自殺を考えていたはずなのに、ごく普通の声色で母親へ返事ができた。今までと同じく本気で死のうと思っただけではないのかもしれない。鮎美は制服に着替えて朝食を両親と食べると、外に出た。5メートルも歩くと、陽湖に出会った。

「おはようございます、シスター鮎美」

「おはようさん」

「昨日は、ありがとうございました」

日曜礼拝に参加して、大学の設置に協力すると約束したことも大きかったようで、陽湖は明るい笑顔をしている。その笑顔が急に憎らしくなると鮎美は陽湖の襟首をつかむと、壁まで追い込んだ。

「っ?! な、なにを…」

「うちを利用してきて満足なん?」

「何を言ってる…」

「屋城はんにも誉めてもらえたやろ?」

ずいぶんと年上ではあるけれどハンサムな屋城に向ける陽湖の眼差しで確かめなくてもわかってる。当たり前のように異性愛者である陽湖が憎くて鮎美は腕に力を込めた。

「ううっ…く、苦しいです、や、やめてくだ…」

華奢な陽湖は壁に押しあてられて泣きそうな顔をしている。このまま首を絞めて殺してやりたいというバカな衝動まで覚えているから、鮎美は手を離れた。

「ごほっ…ハア…ごほっ…」

「……………」

「ハア…ハア…どうして? 私が何か悪いことをしましたか? 何を怒っていらっしやるのですか?」

「……。うちを利用したやん。自分らの計画のために」

「利用だなんて……。そんな……。私は友達としてお願いして……」

「友達？　うちが議員になるってわかってから、わざわざクラスまで変えて、引越してまで近づいてきて、しつこうされたら、うちかて応じなしゃーないやん。そこまで、しておいて友達？」

「っ……」

「うちが議員になるってことで、いろんな人らが、うちを利用しに来る。あいつも、こいつも、みんな、うちを利用することばかり考えおつて！　そんな中でも、あんたが一番タチが悪いんよ!!　友達面して接近して!!　頼みたいことがあるんやったら、友達とか言わんと陳情です言えや!!」

苛立ちをぶつけるように鮎美は陽湖を蹴りつけようとした。

「っ……」

蹴られると感じて怯えた陽湖の顔を見ると、鮎美は暴力を思い止まったけれど、暴言は続ける。

「友達いうんは宗教勧誘したり！　頼み事を陳情するもんやない！　うちと、あんたが友達?!　あんた、うちの何を知ってるんよ?!　勝手に寄ってきて！　利用するだけ利用して！　どうせ、用が済んだら屋城はんはに誉めてもらって、終わりやろ?!　ざけんな！　ちよつとでも友達できたって期待した、うちがアホやったわ！」

「わ……。私は……。そんなつもりは……」

陽湖が何か言う前に、さすがに近所の老人が騒ぎに気づいて顔を出してきた。

「どうしたの？　女の子が大声出して」

「……。何でもないです。騒いで、すみません。さ、学校いこう」

鮎美は誤魔化して陽湖の手を引いた。老人から離れてから、鮎美が手を離すと陽湖が背後から、すがつてきた。

「ごめんなさい！　どうか許してください！」

「……………」

「おっしやる通り利用したと言われれば否定できません。狙って近づいたのも事実です。でも、シスター鮎美と友達でいたいのは私の本心

なんです！ だから、どうか！」

「……………」

鮎美は背後から抱きつくように陽湖からすがられて、それを快感に想ってしまおう自分に心底嫌気がさした。別に本気で怒っていたわけでも、陽湖を嫌ったわけでもない、むしろ逆だった。だから、陽湖を少しでも喜ばせようと日曜礼拝にも参加してみたり、面倒かもしれないけれど大学の設置にも協力すると言ってみた。なのに、結局のところ陽湖は屋城が好きなのだと感じると、強い苛立ちを覚えたし、それが嫉妬なのだと今わかった。

「どうか、許してください！ 私と友達でいてください！」

「…………陽湖ちゃん…………ごめん、うちも言い過ぎたわ」

「シスター鮎美…………」

「この頃、色々あつて…………うち自身も悩みもあつて…………思いつきり、八つ当たりやったね。うちの方こそ、ごめん」

「いえ、私の勝手な願いを忙しい中、本当に、ごめんなさい。…………何を、お悩みなのですか？ 私で協力できることがあれば、いくらでもしますから」

「…………それは……………」

「どうか言ってく下さい」

「……………」

言えるわけがない、という思いと、言ってしまいたい、という思いが心の中で拮抗し、鮎美は質問する。

「…………誰にも言わんって約束してくれる？ 絶対に、誰にも」

「はい、誓って」

「……………」

鮎美は陽湖の誓いを信じたくなった。少なくとも、神に仕える、と志している陽湖なら約束を破って言いふらしたりはしない気がする。鷹姫にも屋城にも黙っていてくれるだろうと期待できる。

「……………放課後、うちに付き合ってくれる？」

「はい」

もう遅刻してしまうので、そこまで決めて船着き場へ向かった。鷹

姫と老船頭が待っていてくれて、小舟に三人並んで乗った。

「芹沢先生、遅かったようですが、やはりお疲れですか？」

「うん……まあ……。あ、鷹姫、今日の放課後な、支部に行くの休みたいわ。静江はんに連絡してみてる？」

「わかりました」

すぐに鷹姫がメールを打っていてくれる。今は選挙もなくアポイントも無かったので休みは簡単にもらえた。小舟が古堀に着くと、鐘留が冬服姿で待っていた。

「おはよう、アユミン、宮ちゃん、月ちゃん」

「カネちゃん、おはようさん」

「おはよう」

「おはようございます、シスター鐘留」

「アユミン、なんか疲れた顔してるね。大丈夫？」

「……………」

陽湖と鷹姫が、やっぱりという顔で心配してくれる。

「おおきに。いろいろ勉強も仕事もあつて、ちよつと疲れ気味やけど大丈夫よ」

「ならいいんだけど、お肌に疲労が出るレベルになると、ソバカスが増えるよ」

「っ…」

鮎美が気にしていることを鐘留が言い、それが表情に出たので女友達として陽湖が怒る。

「シスター鐘留！ 今のはひどいです！」

「ごめん、ごめん。アユミン、気にしてたんだね。気にしないでいいよ、それは、それで可愛いし」

「……………別に……………今さら……………」

とくに欠点というほどではないけれど、小学校の頃から気にしていることだったので鮎美は歩く速度を速めて校舎に向かった。

「アユミン、ごめんってば」

「もうええから！」

自分でも、どうして、こんなに気分が落ち着かず、苛立つのか、だ

いたいわかつていいる。鷹姫を好きでいても、陽湖を好きになっても、鐘留を好きになっても、どの道、その先に待っているのは袋小路でハッピーエンドは存在しない。それがわかっているのと、議員となるための勉強の多さ、陳情の煩わしき、正義や仁義が何なのか、わからなくなる世間の複雑さ、それも嫌で、結局、すべてが嫌だったし、嫌気がさしている根源は自分の同性愛指向だった。

「……くっ……うちなんか、生まれてこんかったら、よかったんや……」
つぶやきは追ってきていた鐘留には聞こえた。

「アユミン……ごめん、そこまで気にしてると思わなくて……」
「もうええ言うてるやん！ それ関係ないから！」

つい怒鳴ってしまうことにも自己嫌悪するのに止められない。ずっと苛立ったまま午前中を過ごし、お昼になって鐘留とは和解決けれど、疲労感は強かった。そして授業中も、ずっと迷っていた。相談にのるといふ陽湖に本当に話してしまうのか、話していいのか、話して大丈夫なのか。陽湖は信頼に足るような人物に感じるけれど、反面で同性愛を、はつきりと否定している。他の友達なら、引くことはあっても個人の自由という結論に至りやすい問題だけれど、陽湖の判断基準は神であり、その神は容赦なく否定している。

「……………」
「芹沢先生、早く帰ってお休みになってください」

いつの間にか、放課後になっていた。鷹姫が帰宅を促してくれるけれど、鮎美は横に首を振った。

「うち、ちよつと陽湖ちゃんと寄り道してから帰るわ。鷹姫は先に帰って稽古でもしていよ。いつも、うちのせいで練習不足やろ」

「はい。……………」
鷹姫が陽湖を見る。

「お二人で大丈夫ですか？ この者は異教徒です」

「……………」鷹姫、この学園内やと、こちらは多数派ながら学校の運営方針から見れば、不信心者どもやで？ 何より、そういう言い方、やめてやりい。うちらから島に住んでるからって田舎もん扱いされたら嫌やん？ 陽湖ちゃんは陽湖ちゃんであって、うちはうち、鷹姫は鷹姫、

異教徒とか島育ちとか、大阪育ちとか、そんなん、たまたまやん。人として、どうなんか、それが肝心ちやうの?」

「はい、おっしやる通りです」

鷹姫が久しぶりに一人で島へ帰り、鐘留とも別れて鮎美と陽湖は路線バスで駅前に出た。

「シスター鮎美、どこかへ入りますか?」

「うん、そうやね……静かに話できるところが、ええかな」

「喫茶店かミックにでも入りますか?」

「ミックかあ……ファーストフードって気分でも無いし……喫茶店も、ちよつと……」

人目があるところは嫌だった。それでなくても最年少議員候補予定者として顔が売れているので駅前に出ると、視線を感じる。鮎美はスマートフォンで検索して行き先を決めた。

「ここにしよう。カラオケルームのあるネットカフェやし、外に声が漏れへんやん」

「はい、この店なら、あつちですね」

土地勘のある陽湖が案内してくれてネットカフェのカラオケルームに二人で入った。カラオケをするための部屋なのでテーブルとマイクが中央にあり、派手な色のクッションが並び、靴を脱いであがるタイプの個室だった。防犯カメラと扉に透明なガラス窓があるので人目が無いわけではないけれど、声は漏れないはずだった。

「けっこう広い部屋ですね」

「めっちゃ広い部屋やん。大阪やと、この三分の一がせいぜいやで」

「それだと二人でも狭くないですか?」

「路線価からの相場やろなあ」

「言うことが女子高生じゃないですね」

「……………」

「ごめんなさい」

「ええよ、別に。オジサンがするような勉強ばかりさせられたせいやし」

「私、何か飲み物を取ってきますね。シスター鮎美は何がいいですか

？」

「二人で行こ。自分で見て選ぶわ」

カバンを置いてドリンクコーナーで鮎美はアツサムティーを、陽湖はアイスコーヒーを選んだ。部屋に戻って一口飲むと、静かになる。

「……………」

「……………」

カラオケをしに来たわけではないのでマイクも端末機も使わないし、分厚い曲リストを開くこともない。

「……………」

「……………」

鮎美は話そうと思ってても口が重くて、何から話していいか、わからないし、陽湖は静かに待っている。わざわざカラオケルームまで借りるあたり、喫茶店ではできない話なのだと察していた。

「……………」

「……………」

「……………」

「…………シスター鮎美、話にくいことなのですか？」

「……うん……」

「私は絶対に誓いは守ります」

「……………おおきに……」

礼を言った鮎美は語りだそうとしたけれど、唇を震わせただけで話せなかった。三回呼吸をしてからアツサムティーを飲む。

「……………」

どうしよ、ホンマに言うの、言うてええの、言うてどうなるの、どうなるもんでもないやん、けど誰かに聴いて欲しかったから、ここまで来たんちゃうの、と鮎美は悩み、両手で唇と頬を覆った。

「……………」

「……………」

明らかに何か深い悩みを持っていて、それを言えずにいる様子なので陽湖は自分から話すことにした。

「私も人に言いにくいことがあるんです。先に私の話をしてもいいですか？」

「え……うん、ええよ、どうぞ」
「ありがとう。……」

いざ言い出すとなると陽湖も少し覚悟が要ったけれど、意を決して口を開いた。

「わ……私のお尻のアトピー、ひどいと思いませんか？」

「……そうやね……一番、お尻がひどいかもね……気にしてるのん？」

「ひどくなったのは……、よく……叩かれたからです」

「っ……誰に？」

「両親です」

「虐待やん！」

「いえ、指導です」

「指導って……」

「私が神の教えに従えるよう、両親が指導してくれたのです。子供の頃というのはサタンの影響を受けやすいですから」

「……」

「わかっていますよ、世間一般の人たちからは、少し奇異に見えてしまうことも」

「わかってんにやったら……」

「それでも、私たちは、それが正しいと信じています」

「……せやからって、アトピーで荒れやすい肌を……あんなに、なるまで……」

「そうですね。……つらかった……。木の棒……。イチジクの樹から取った枝で叩くんですよ。すごく痛くて……。庭にある樹……。今でも見るのがつらいです。島に暮らしてるおかげで、見かけなくて済むから、うれしいくらい……」

「陽湖ちゃん……」

鮎美は言葉が無くて、せめて優しく陽湖の背中からお尻にかけてを撫でた。

「虐待ではないと今でも思っていますよ。でも、私に子供ができたら……間違ったことをしてしまっても、ちゃんと言い聞かせて反省させて、そうやって悔い改めさせてあげたい」

「……」

鮎美は今朝、苛立ちにまかせて陽湖を蹴ろうとしたときの、彼女の表情を思い出した。恐怖して怯えきった顔だった。自分や鷹姫なら竹刀で打たれても負けずに戦う気持ちがあるけれど、格闘技そのものを習わない陽湖には戦う意志も技術もない、それで一方的に叩かれると、そこには恐怖と服従しかない。それゆえ、ああいう表情になるのだと心の痛みとともに知った。

「なんぼ神の教えでも……一歩間違ったら警察沙汰やん……」

「少々極端な指導方法だとして、ブラザー愛也が赴任してきてからは無くなりました」

「屋城はんか……常識ありそうな人やったもんな……」

「先に話してしまつて、ごめんなさい。誰にも言わないでください。このことを知っているのは両親の他は、ブラザー愛也とシスター鮎美だけですから」

「うん、もちろん。……」

「……」

「……」

「シスター鮎美の、お話というのは？」

「うん……うち……うちは……」

促されて鮎美はカミングアウトしようとしたけれど、喉と舌が動いてくれない。胸の奥から吐き出したいのに、喉につかえて言葉が出こない。鮎美は左手で胸を押さえて喘いだ。

「……ハア……ハア……」

「シスター鮎美……」

陽湖が優しく背中を撫でてくれる。それで言えるようになってもよさそうなものなのに、どうにも言葉にできない。声にして自分の性的指向を告白することができない。防音措置が施されたカラオケルームは黙つてしまうと、痛いくらいに静かで鮎美はエアコンが効い

ているのに額へ汗を滲ませた。気の毒に思った陽湖がグラスのアイスコーヒーを飲み干して言う。

「お代わりをもらってきますね。何か、もらってきましようか？」

「おおきに……うちは、まだ、ええよ」

陽湖が出て行き、鮎美は一人になると頭を抱えて呻った。

「うう……」

「……」

陽湖は廊下から振り返ってルーム内をガラス窓から見ると丸くなつて震えている鮎美が見えて、相当に悩みが深いことが感じられ、言いたいのに言えず苦しんでいるのも、わかった。

「……シスター鮎美……」

あえて陽湖は時間をかけて飲み物を選び、迷ったわりに結局はアイスコーヒーを注ぎ、鮎美と食べるためにチョコレートクッキーの小袋を買った。

「遅くなりました。これ、いっしょに食べませんか？」

「うん、おおきに」

鮎美は潤んだ目で返事した。ハンカチを握っていたので泣いていたのがわかる。陽湖は袋を開けて鮎美に向けた。

「おおきに」

鮎美は一つだけクッキーを食べて、アツサムティーを飲んだ。陽湖も食べて感想を言う。

「あんまり美味しくないですね」

「こういう店のやもん。カネちゃんができる、かねやのクッキーに比べ……ごめん。うちの口も、いつのまにか贅沢になつて、せつかく陽湖ちゃんが気を利かせてくれたのに、ごめんな」

「いえ、美味しくない物は美味しくないですから。けれど、贅沢な話ではありますね。世界には飢えて苦しむ人も多いのに」

「そうやね、日本では食品の半分が破棄されてるって数字もあるくらいやから」

「半分ですか……」

「けど、食糧自給率も50%弱やねん。うち、考えるんやけど、破棄分

を考えたたらギリギリカロリーベースで食糧自給率100%になるんちやうかな。贅沢せんと、国内で獲れるもんを米粒一つ、小魚一匹まで食べたら」

「さすが議員予定者、言うことが違いますね」

「はは……………」

鮎美は力なく笑って黙り込んだ。こんな話をするために、ここにいないのではないと、わかっている。わかっているのに、切り出せない。陽湖がクツキーを摘み、カラオケの端末を見る。

「何か歌いますか？」

「……………うん……………」

「実は私、カラオケ苦手なんですよ」

「そうなん？　なんで？」

「小さい頃から、ずっと賛美歌ばかりで、普通の女子高生が知ってるような曲を知らなくて」

「そっか……………ガチで信徒な一家なんやね……………」

「シスター鮎美の、ご家庭は？　ご両親と何度かお話させていただきましたけれど、ごく普通の人という感じでしたが」

「そうやね。普通よりは父さんの考え方が、お気楽というか、スチャラカというか、道楽もんなとこあるけど、母さんは普通やし。まづまづ普通の家庭やと思うよ。……………」

「うちが同性愛者であったこと以外は、と鮎美は心の中だけで言った。

「……………」

「……………シスター鮎美、そんなに話難いことですか？」

「……………うん……………ごめん……………待たせて……………」

「いえ、……………おトイレに行つてきます。何度も席を立て、ごめんなさい」

陽湖は女子トイレに入り、白ストッキングとショーツをおろすと便座に腰をおろす前にお尻を撫でた。

「……………」

最後にお尻をイチジクの枝で叩かれたのは小学6年生の頃で、級友

が貸してくれたCDプレーヤーで流行の曲を聴いていたのが両親にバレた日だった。身体を押しさえつけたりはされなかった。お願いします、と自分で言い両手を椅子についてお尻を叩かれる度に、ありがとうございます、と大きな声で叫んだ。世俗の曲を聴きたいという気持ちが生せるまで、完全に悔い改めたと自分が確信するまで、お願いして叩かれるうちに、このまま死ぬのではないかと思うほど痛かったけれど、両親はやめずに叩き続けてきた。

「……私を愛していたから……叩いてくれた……はず……」

結局、痛みで失神するまで叩かれた。悔い改めました、の一言を改悛児が言えるまで叩くという慣習通りに叩き続けられ、どこかで両親が自主的にやめてくれるのではないかと期待していたのに、言わなければ血が出て、傷になっても、失神するまで叩かれて、失神から目覚めたときも、叩かれていて、このままでは殺されると恐怖して、言った。

「……………」

あれから六年、両親との関係は悪くないつもりなのに、鮎美へ接近するために島で一人暮らしをするようになってから、気持ちが大きく解放されていた。それだけに、鮎美のためになることを、何かしてあげたかった。

「……シスター鮎美……同性愛者だと告白することは、そんなに苦しいのですか……」

もう鮎美の性癖には気づいていた。いつも鷹姫を見つめているし、その目が語っている。視線だけでなく、かなり迷惑そうにされているのに抱きついたり頬擦りしたり、お尻や胸に触れているときもある。鮎美自身は我慢し、隠しているつもりでも、隣席から観察していると、よくわかった。陽湖や鐘留にさえ、男子が女子を見るような目を向けてくるし、スキンシップも多くて困惑するほどだった。それらの行動と以前の議論で確信している。

「……………」でも、告白してもらって……私は何とすべき……」

教義に従えば、そのような衝動は我慢し続け、男性との結婚を目指すべきだったけれど、それを教諭したとき鮎美が、どう反応するか

は悪い想像しかできない。

「……我慢し続けるべき……もし、私だったら……」

同性を好きになるという感覚は、まったく理解できないし共感もできないけれど、それを食欲に置き換えてみると少しはわかるかもしれない。まわりの人間は普通に食べているのに、自分だけは我慢しなくてはいけない、それも一生涯、一口も食べず、どんなに食べたくても我慢させられ、ずっと点滴か何かで生かされているとしたら、それは一種の地獄かもしれない。お前が食べるのは間違ったことだ、お前たちは食べてはいけない、と制約される者の気持ちを考えると、盗むな、殺すな、といった教義とは別のことに思えてくる。

「……シスター鮎美……あなたを苦しみから救ってあげたい……でも、どうしたら……」

いい方法など知らなかったし、せめて話を聴こうにも、言うだけでも鮎美は苦しんでいる。

「あんなに言いづらそうに……」

陽湖はトイレを済ませると、鏡を見つめた。陽湖の顔立ちは鮎美と似ていて、女の子らしい細かい顎をしている。似ていないのは胸の大きさや筋肉で、今は帰宅部でも中学では鍛えていた鮎美とは比べものにならない。鮎美がその気になれば簡単に押し倒されるし、そうされたこともある。

「けれど、あなたは我慢されました」

本気で陽湖が嫌がることまではされなかった。鷹姫に対しても一線は越えないようにしているのは感じる。

「そろそろ……」

あまり長くトイレに立っているのも変なので陽湖はカラオケルームに戻った。

「遅くなりました」

「うちもトイレに行くわ。荷物、見ておいてくれる」

「はい」

入れ替わりに鮎美が席を立ち、また陽湖は一人で考える。けれど、考えたところで答えの出るものではなかった。すぐに鮎美は戻って

きて、また同じように二人並んで座った。

「……………」

「……………」

再び沈黙が続き、鮎美の涙がスカートへ落ちる音がして、陽湖は心が痛んだ。

「無理に話そうとしなくてもいいんですよ。やっぱり、他人に言えないことなら黙っているのも大切なことですから」

「っ……うっ……ごめん……ごめん……うちは……うちは……っ……」

もう一度、言おうとしたけれど、やはり言えない。喉から声を吐き出せない。それが情けなくて鮎美は顔を両手で覆い泣き出した。

「ううっ……ううっ……ごめん……陽湖ちゃんが……せっかく……ううっ……陽湖ちゃんは話してくれたのに……ううっ……うちは卑怯や……ううっ……うちは……うちは……ハアっ……ハアっ……う、うちは……」

また告白しようとして苦しくなり、過呼吸でも起こしそうな様子なので陽湖は手を握って見つめた。

「シスター鮎美、言わなくていいです。言わなくていいんですよ」

泣いている背中を撫で、そっと抱きしめた。鮎美は号泣した後、枯れかけた声でつぶやいた。

「うちは……世界が……呪わしい……、この世界は、なんで、こうなんやろう……間違った存在なんか……世界なんか……人なんか……どっちも、なんか……こんな世界、壊れてしまえって何度も思った……世界が壊れんにやったら……うちが壊れ……もともと壊れてるんかな……うちは壊れた……欠陥品なんかも……」

「……………」
いくつもの人と世界についての聖書の一節が陽湖の脳裏に浮かんだけれど、それを言っても慰めにならないと、わかっているので黙って過ごした。

「シスター鮎美、そろそろ帰らないと連絡船が無くなります」

陽湖が時刻を見て告げると、泣き止んだ目で鮎美も腰を上げた。

「ごめんな、陽湖ちゃん、今日は付き合ってくれたのに」

鮎美は伝票を持つと会計に向かった。陽湖は半分出すと言っただけ
れど、あまり豊かではない生活をしていることは知っているし、自分
の都合で入店したので鮎美は全額を支払った。路線バスで港まで行
き、連絡船の終便に乗る。

「……………」

ぼんやりと鮎美は船の窓から湖面を見ていて、つぶやいた。

「キリスト教も……………この世界、壊れてしまえ、もう一回、神さんが造り
直す、って考えなんやね?」

「そういう表現が正しいとは言いませんが、黙示録には、そうあり
ますし、地上に樂園が訪れる前に、大破壊があることは預言されてい
ます」

「……………神さんに祈るって、どんな気分なん? それで救われんの?」

「はい。……………一度、いっしょに祈っていませんか?」

「……………」

鮎美は否定も肯定もしなかった。代わりに身近なことに気づいて
誘う。

「こんなに遅くなって夕飯の用意も大変やろ。うちの母さんに言う
て、いっしょに食べられるよう頼んでみるわ」

「いえ、それは…」

「遠慮しないでええよ。帰って一人で何か食べるもんあるの?」

「……………すみません。今日は買い出ししてから帰るつもりだったので

……………実は冷蔵庫も空っぽで……………お米だけはあるのですが…」

「誘って良かったわ」

鮎美は母親に電話をかけて夕食の人数分に都合をつけてもらった。
港から家まで歩き、二人で玄関に入った瞬間、鮎美は陽湖の眼を両手
で塞いだ。

「父さん! 友達を連れて来てるから!」

「おお、すまん、すまん」

風呂上がりで全裸だった父親が急いでパジャマを着ている。玄関
から居間が丸見えの構造なので隠れる場所もない。目隠しされた陽

湖は赤面しつつ待った。

「もういいぞ」

「ったく」

鮎美が目隠しをやめる。

「いらっしやい。月谷さん。まあ、座って」

「はい、お邪魔します」

もう夕食の準備は、ほぼ終わっていて鬼々島で獲れた魚の天ぷらとタコ焼きだった。陽湖は大阪人の食生活に軽いカルチャーショックを受けたけれど、それは顔に出さないようにした。

「いただきます」

鮎美は食べ始めるけれど、陽湖は食前の祈りを捧げる。目を閉じて頭を下げ祈っている。それは昼休みでも見慣れた光景だったので鮎美は何とも思わなかったけれど、父親は興味深そうに陽湖の顔を見つめている。

「ほお、本当に祈るんだね」

「静かにしたりい。まじめに祈ってはんにやから」

鮎美はタコ焼きを箸で半分に分けると、オカズとして食べ、白米も口にする。祈り終わった陽湖が目を開けた。

「いただきます」

「どうぞ」

穏やかに食事が始まり、ビールを呑みながら父親が陽湖に問う。

「月谷さんは、いつから信仰を？」

「生まれた頃からです。両親が信仰していましたから」

「それを素直に受け入れたわけか……」

「父さん、あんまり信仰のこと言うたらんとき」

「わかったよ」

父親が遠慮すると、母親が言ってくる。

「あのシャンプーは合ってるの？ お肌の調子は？」

「はい、とてもいいです。少しずつ良くなってきて。ありがとうございます
ございます」

その質問には嬉しそうに陽湖が微笑んだ。食事が終わると、陽湖は

片付けるのを手伝い、帰宅しようとする。

「ごちそうさまでした」

「月谷さん、お風呂にも入っていく?」

「いえ、そこまでは…」

「ええやん。陽湖ちゃん、いつしよに入ろう」

「……」

陽湖が困った顔をしていると、母親が察した。

「アユちゃんは後になさい。あなたは友達とお風呂に入ると、いつもふざけすぎるから」

「うく……そうやね。つい、はしやぎすぎるから。陽湖ちゃん、一人で入ってき」

鮎美に背中を押してもらって陽湖は風呂もいただいた。陽湖が揚がるタイミングで鮎美が脱衣所に入ってきて、新品のショーツと鮎美のパジャマを渡してくれる。

「いっそ泊まっていきよ」

「そんな、いきなり来て、それは…」

「もう、あと寝るだけやん。うちの部屋に客用の布団を敷いたし」

言いながら鮎美が裸になる。受け取ったパジャマを着るべきか迷っている陽湖は見るとはなしに、風呂場へ入っていく鮎美の背中とお尻を見た。鮎美の背中もお尻も肌荒れ一つ無く羨ましいほど可愛らしかったけれど、触りたいとは思わない。

「……………」

いつまでも迷っているのは裸のままなので陽湖はパジャマを借りた。

「ドライヤー、お借りします」

「どうぞ。月谷さん、この化粧水も使ってみる?」

鮎美の母親が化粧水も勧めてくれたので試してみた。

「どう?」

「はい、いい感じかもしれません」

肌に馴染む感じで良かった。髪を乾かしているうちに鮎美も揚がってきて、二人で鮎美の部屋に泊まることになった。鮎美も女の子

らしく化粧水やクリームを使って肌と髪を整えている。

「これも使ってみい」

「ありがとう」

クリームも、ごく少量を塗ってみて試してから肌に広げた。

「シスター鮎美のご両親は、いい人ですね」

「うくん、まあ、父さんも道楽もんなだけで悪人ではない…、あ、玄関に入ったとき、見てしもた？」

「っ…」

見てしまっていた陽湖は赤面して顔を伏せた。

「ごめんな、いらんもん見せて」

「…いえ…」

「あんなもん、ゴリラかゾウやと思って忘れておいて。うちも、そうしてるし」

「…いつも、ああなのですか？」

「まあ見慣れると注意する気にもならんし。子供の頃から、ああやっ
たし。こつち来ても変わらんなあ……。ま、島の爺さん婆さんでも、
ふんどしで歩いてたり、おっぱい丸出しやったりするやん。とくに夏
場」

「………開放的な島で、驚きます」

「陽湖ちゃんのお父さんは裸で歩いたりしはる？」

「いえ、しません」

「そうなんや。やっぱ、それが普通よな」

鮎美は布団へ入って横になり、ふと気づいた。

「けど、アダムとイブって最初は裸やってるろ。つてことは、神さんも
実は裸を奨励してはるん？ いずれ来る樂園でも、みんな全裸なん
？」

「う………いえ………そ………そんなことは………無いはず………す、す
みません。勉強不足な部分です。ブラザー愛也に訊いて…っ、い、い
え、そういう質問は、ちよつと………」

「陽湖ちゃん、あの人のこと好きなん？」

「っ………」

わかりやすく陽湖の顔が赤くなる。

「そうなんやね、やっぱり」

「……………」

陽湖が背中を向けて布団に入った。

「ごめん、ごめん、わかりきってるのに確かめて」

「……………」

「あの人、結婚してはるの？」

「いえ」

「よかったやん」

「……………」

「信徒同士やし、可能性はあんにやろ？」

「……………はい……………」

「……………。男の人を好きになるって、どんな感じ？」

「どんな感じと言われても……………自然と、そうなったというか……………」

「自然と……………か……………」

「……………」

「うち……………男の人を……………好きになったこと……………無いねん」

ぼろりと言えたので鮎美は続ける。

「好きになるのは……………女……………やったり……………。い……………今も

……………た……………鷹姫が……………好きなんよ」

「……………」

背中を向けていた陽湖が寝返って鮎美を見つめた。鮎美は目をそらしているけれど、顔は真剣かつ深刻だった。そして本来、好きな人について友達に語った時は、顔を赤くしているものなのに、鮎美の顔は湯上がりなのに青ざめ、唇と手は恐怖で震えていた。

「……………」

「……………」

目をそらしていた鮎美が陽湖の目を見る。

「今の話……………誰にも言わんといいな」

「は……………」

陽湖は震えている鮎美の手を握った。

「誓って」

「おおきに。……もう寝よ。おやすみ」

鮎美が照明を消し、静かに二人で眠った。

翌朝、鮎美が目を覚ますと隣で眠っていた陽湖は窓辺で祈りを捧げていた。

「……………」

「……………」

キレイな子やなあ、素直で可愛らしいし、鷹姫に会う前に陽湖ちゃんに会ってたら好きになってたかも、と鮎美は静かに想った。陽湖が祈りを終え、目を開けたので思わず言ってみた。

「もし、うちに好きよって告白されたら、どうする?」

「……………」神に祈って黙想します。よりよい答えが見つかるように」

「……………」おおきに、即拒否でないだけ、嬉しいわ」

身支度をして陽湖は台所を手伝い、鮎美は父親と新聞を読む。

「父さん、この事件、どう思う?」

「ん、ああ、これか」

障害者団体向けの割引郵便制度の悪用事件で無罪判決を受けた厚労省局長の木村温子に関わる証拠品として押収したフロッピーディスクの内容を捜査に有利なように改竄したとして証拠隠滅の疑いで大阪地検特捜部の主任検事が逮捕された事件で、改竄の事実を知りながら隠したとして当時の上司だった前特捜部部长と副部长が犯人隠避の疑いで逮捕されたことについて鮎美が問うと、父親は少し考えて言った。

「いまだにフロッピーディスクとか使ってるのか、って思うぞ」

「え〜……………そこなん……………っていうか、フロッピーって、どんなものなん?」

「ほらな、鮎美の世代だと知らなかったりするだろ。MDって知ってるか?」

「そんな音楽を録音する伝説のアイテムがあったことは聞いたことあるよ」

「あんな感じの形で一回り大きくて、記録できる容量は、せいぜい2メガだ」

「2ギガやなくて？ それ、写真一枚、入らんのちゃう？」

「そんな骨董品と言ってもいいような物を、官公庁や病院なんかは、いまだに事務処理で使っていたりする」

「へえ……非効率やなあ」

「いい面もあってな、サーバーに入れておくより外からの攻撃に強かったりする。なにしろ、現場にいつて棚からディスクを出してPCに入れない限り、読み取れないし、書き込めないから」

「つてことは、この事件も、逆に言い逃れできんのや？ 特捜部の部長まで有罪になったら検察庁は大変やん」

「たぶん、主任検事を切り捨てるだけで終わるだろうな。世の中、そんなもんだ」

「トカゲの尻尾切り？」

「そういうことだ。鮎美も気をつけろよ。大きな組織は末端を切り捨てて本体を守るからな。この事件でも直接的な指示や隠匿の認識が部長にあつたかの有無が焦点になるだろうけど、そんなもの否定してしまえば物証はない。けれど、フロッピー改竄の事実は動かない。となると末端を切って終わりだ。鮎美も自民党の末端といえれば末端なんだから気をつけろよ。基本、違法なことは自分の手でするな。指示もメールや文書で出すなよ、できれば電話もさけて口頭で。その口頭の指示さえ、曖昧な方がいい。そうすれば、あとは秘書が勝手にやったことにして切り捨てられるからな」

「……うちは鷹姫を切り捨てるくらいやったら、自分が死ぬわ」

「そうか、宮本さんは友達だからな。だったら、切り捨てる用の秘書を用意してもらっておけばいい」

「ひどいなあ……」

「まあ、鮎美にそんな汚れ仕事を回してはこないだろうけど、何年かすれば、そんなこともあるかもしれないぞ」

「朝から娘に変なことを吹き込まないの」

母親が怒りながら、ご飯茶碗を並べ、陽湖は焼いたハスを並べてく

れる。夕食と同じように四人で卓袱台を囲んだ。

「朝食まで、ごちそうになって、すみません」

「いいのよ、三人分も四人分も手間は変わらないから」

「いっそ、月谷さんも、鮎美の隣の部屋で住むか？」

「え……」

鮎美と陽湖が驚いたけれど、父親はわりと本気だった。

「どうせ、部屋は余っているし、高校卒業まで、あと半年も無い」

「ええやん、それ！ 陽湖ちゃん、いっしょに暮らそう！」

「そんな……ご迷惑ですし……」

一番迷惑がかかりそうなのは家事と担当する母親だったけれど、意味ありげに微笑んでくれる。

「いいわね、それ。毎日、月谷さんが帰ってきてくれるなら、あなたもパジャマを着てくれるでしょうし」

「うっ……ぐっ……しまった……」

「まさか、よその娘さんの前で裸にならないわよね？」

「……ま、まあ、どうせ、半年だ。いいだろう、たまにはパジャマを着てやろう。これから冬だし。この家は寒そうだからな」

「月谷さん、ずっと、ここにいていいわよ。お嫁に行くまで」

「迷うんやったら、しばらく、あっちの部屋も借りたままにしといたらええやん。いっしょに暮らしてみて、やっぱり戻るなら、戻ればええし」

「シスター鮎美………お父さん、お母さん、お申し出は、とても嬉しいのですが……あの……私が世間一般とは、少し違う宗教を……信仰していることは、ご存じですよね？」

「戒律違反になるのかい？」

「いえ、恋人との同棲は禁止されていますが、今の場合は下宿のようなものですから、その問題はありません。むしろ、芹沢さんのご家庭にとつてこそ、私の存在は問題になりませんか？ 私は、ことあるごとに神の教えを口にしますし、島の全戸にリーフレットを配布したりしています。とくにシスター鮎美には神の教えに気づいてほしいと学校でも論じますし、もし同居すれば、いつでも娘さんに影響を与

えることになってしまいました」

「……………」

鮎美と母親が黙り、父親は笑った。

「どのみち鮎美は、そういうのは信じないだろう。もし、信じたとすれば、それは、それで新しい道が見つかって良いことかもしれないし」

「……………」

「個人的には宗教は好きだよ。とくに若い頃は、いろいろと勧誘を受けて集会や礼拝にも行っただし」

「あなたは昔からバカだから」

「うむ。キリスト教系だと、統合教会も覗いたし、造価学会の説教に付き合ったこともある。空理教も建物が立派で見物だったな。人類史を振り返れば建築と宗教は不可分だし。何より月谷さん、客観的に見た宗教の素晴らしさは何かわかるかな？」

「…………客観的に…………ですか…」

主観的には神の教えは絶対で、それに従うことは至福であり使命であつたけれど、客観的には変に思われたり差別されたことしか思い出がない。客観的な素晴らしさと言われると、陽湖は即答できなかった。

「…よく…………わかりません…………救われることですか？」

「では、信仰を持っていない人々にとっての幸福とは何だと思う？」

「……………信仰がなければ…………お金、ですか？」

「三分の一だけ正解。答えは、お金、健康、人の愛だ」

「お金…………健康…………人の愛…………」

「神の愛は、もちろん関係ないからね。信仰のない人間にとっての幸福には、お金が要る。だいたい属する社会の平均所得の1.5倍から2.5倍あたりで感じる幸福度はピークを迎え、それ以上の金持ちになると上がりにくく下がりがやすい。次に健康。ま、説明は要らないだろう、健康だから仕事もできるし遊びにも行ける。そして人の愛、孤独はつらいからね。家族でも友人でもいい、何人かは親しい人が欲しいじゃないか。さて、この三つが満たされれば、だいたい幸せだと思わないかい？」

「……はい……そう思います」

「ところがだ、この三つを満たせる人間は、けっこう少ない。全人口の10%前後だろう。何かしら人間は問題を抱えたりするからね。そこで宗教の出番となるわけだよ。宗教の客観的素晴らしさは、人に幸福感をもたらすのに予算を必要としない。資源も要らない。医薬品も友人も伴侶も無くて大丈夫。神がいる、救いがあると信じさえすれば、幸せになれる。実に人類にとって不可欠な発明品であり、宗教の便利さは電気やガソリンを超えているんだよ」

「……………」

「陽湖ちゃん、遅刻するし、もう行こう」

「今夜も、いらっしやい。カレーにするわ」

母親が、もつとも人数分の調節がしやすいメニューを言つて、来てもいいし、来なくてもいいと暗示してくれた。もう時間が無いので短く札を言つて鮎美の家を二人で出ると、陽湖の家に寄つた。カバンに入れてある教科書を手早く今日の時間割に合わせて詰め替える。

「お待たせしました」

「ほな、行こか」

二人で船着き場へ向かい、鷹姫と合流して小舟に乗った。

「つてことで、もしかしたら、陽湖ちゃんは、うちに住まはるかもしれんねん」

「そうですか」

それを聞いても鷹姫は関心を示さなかった。

「……いっそ、鷹姫も、うちに住まへん？ もう一部屋、空いてるし。道場で寝るよりええやん？」

「いえ、稽古の時間が取りやすいですし、さすがにご両親に迷惑でしよう」

「朝起きて、即稽古やもんなあ……あんたは剣に、陽湖ちゃんは神に、対象は違つても、似たような生活してるなあ……」

「……………」

「うちも議員として頑張らんとなあ……」

「シスター鮎美のお父さんは、とてもユニークな方ですね。あのよう

に神を表現されたのは初めてです。否定される方や、個人の自由で片付ける方が多いのに」

「もとが建築家やからかな。どう役立つてるかとか、どういう機能があるかとか、そういう方面から考えるんやろ。根本は道楽もんやけど」

「シスター鷹姫のご両親は、どんな方ですか？」

「父は道場主に相応しい剣士です。母は亡くなりましたが、良い母だったようです」

「……それは……ごめんなさい……」

「いえ」

平然と答える鷹姫が、それでも母を恋しく想っていることを知っている鮎美はそつと陽湖からは見えない角度で鷹姫の腰を撫でた。いつもなら放って置かれる手に鷹姫が応じるように手を重ねてくれた。小舟が古堀に着き、鐘留が大きな家から出てきた。

「さて、残り少ない高校生活、今日は、どうして過ごしましょうかねえ」

「カネちゃんも、うちの秘書にならへん？」

「秘書かあ……面倒そう。どうしてアタシ？ 月ちゃんの方がこまめに役立ちそうだよ」

「なんか事件があったとき、切り捨てる用の秘書が欲しいねん」

「きやははっは！」

冗談だったとわかった鐘留が笑っている。陽湖がタメ息をつき、鷹姫は真面目に言う。

「いざというときは私を切り捨ててください」

「鷹姫……あんたには、ずっと、そばにおってほしいのよ」

「ラブラブだねえ。主従愛でホットケーキが焼けそう」

「シスター鷹姫、あなたは冗談がわかっていないときがありますよ。シスター鮎美は間違っても秘書を切り捨てるような人ではありません。さきほど、お父さんの前でも同じ話題になり、そんなことをするくらいなら自分が死ぬと、おっしやいましたから」

「芹沢先生が……」

「きゃははは、戦国時代じゃないんだから、切り捨てるとか死ぬとか、無いって」

鐘留が笑いながら校門へ向かっていった。

11月、鮎美は授業中に医療費の増加傾向に関する資料を読んでいたけれど、他の生徒も授業とは関係ない受験勉強をしたりしている。それでも静かな古典の授業が続いていたが、鮎美の机上にあったスマートフォンが速報ニュースを表示した。

「……解散……とうとう……」

隣席にいる鷹姫に教えようかと思っていると、スマートフォンに着信があり静江からの電話だった。鮎美は立ち上がって教師へ一礼すると鷹姫の肩を叩いて廊下に出る。

「もしもし、うちです。解散しましたね」

「ニュースを見たのね」

「タイトルだけ」

「これから、めちやくちや忙しくなるから」

「また応援回りですね」

「ええ、また頑張ってるね。これから支部に来れる？　すぐに予定が、たくさん入ると思うから、いっしょに調整したいの」

「わかりました。タクシーで行きますわ」

「助かるわ」

「ほな、あとで」

電話を終え、学園前にタクシーを呼んで鮎美と鷹姫は早退した。支部に入ると静江が忙しそうに電話を受けていた。衆議院の解散によって、すぐに総選挙が行われるし、その日程は発表前でも、これまでの経験から投票日までのスケジュールは組まれていく。鮎美へも、いくつもの応援依頼が舞い込み、その調整に夜までかかった。

「出陣式は、お兄ちゃんのところをお願いね。住所的に、これはガチだから」

「了解です」

「石永さん、同じ自民党でも応援依頼のある先生方と、無い先生方に

は、どういう違いがあるのでしょうか？」

「そうね……」

鷹姫に問われ、静江も気になっていたことを考えてみる。県内に15区ある衆議院選挙区のうち9区9人の自民党候補から依頼があり、残り6区6人からは連絡が無い。

「……県知事選の影響かしら……」

「たしかに阪本市、井伊市など県知事選で得票率の悪かった地区からの依頼が無い傾向にあります」

「井伊市は現役の雄琴先生がいるからフタマタがけないだけかもしれないけど、たしか、井伊市の衆議院議員で4期目になる応野先生と、雄琴先生は仲が悪かったはずだから、むしろ鮎美ちゃんにお願いしてきてもよさそうなものだけど……ちよつと電話してみるわ」

静江は直樹に電話をかけた。

「出てくれない。忙しいのかな」

「応野先生と雄琴はんは、なんで仲が悪いんですか？」

「まだ雄琴先生が一年目か、二年目だった頃にね。雄琴先生が一番願ってる法案があるでしょ？」

「あの性犯罪者に厳罰を、ってやつですか？」

「そうそれ。それを応野先生が鼻で笑って無理だつて。まあ、憲法を強引に解釈しての法案だから無理そうなのは、わかるけど。今でこそ丸くなった雄琴先生だつて駆け出しの時期だし、妹さんのこともあるわけだから、ものすごく怒っちゃつて。対して応野先生は市議から県議、県議から衆議院つて地道に国政まで下積みしてきた古い人だから、クジ引きで当たったなんて議員が根本で気に入らないわけで。パーティー会場で乱闘寸前つて感じよ」

「そんなことがあったんや」

「だから、本来は住所的に協力し合うはずの二人が犬猿の仲つてわけ。演説会とかパーティーとかでも、できるだけ会わせないように別々にしたり、同じ会場でも遠い席にしたりつて工夫が要るのよ。だから、今回の選挙でも応野先生の出陣式に雄琴先生が呼ばれるとは思えないし、呼ばれても行くとは思えないの。応野先生の事務所に電話して

みるわ。こつちから電話すると、応援を売り込むみたいだけど、待てるよりスッキリするし」

静江は応野の秘書と電話で長く話し込むと、戸惑った顔で電話を終えた。

「どないしはったんですか？」

「顔色がすぐれませんよ」

鮎美と鷹姫が心配するほど、静江は狼狽していた。

「……え……ええ……ちよつとトラブルというか……予想外……謀反……」

「謀反って……」

「何者かが裏切ったのですか？」

「……落ち着いて……聴いてね……」

「はい」

静江が話そうとする前に、石永が東京から戻ってきて支部に入ってきた。

「静江、その顔色は雄琴のことを知っているな？」

「お兄ちゃん、本当なの?! 雄琴先生が裏切ったって!」

「まだ事実確認の段階だが、おそらく本当だろう。電話をかけても雄琴は出ない。それが何よりの証拠だ」

「雄琴はんが裏切ったって、何をどう?! どうなってるんですか?」

「確認できている情報では、雄琴は応野先生の出陣式には出ない。逆に対立候補である民主党の細野太志を応援するようだ」

「細野……」

鮎美は校長室で会った民主党の議員を思い出した。鮎美が自民党に所属してからは接点が無くなっていたけれど、それまでには竹村との会談をつないだりしてくれたし、最近では女性キャスターと不倫していたことが週刊紙で報じられていたので忘れずにいる。

「あの路上チューの?」

「そうだ」

「そんな応援しても、応野先生の方が余裕で勝つんじゃないですか?」

「それが、そうでもないのよ。世論調査での自民党と民主党の支持率と、あと応野先生も25年前に不倫していたことがあるから」

「25年前って……めっちゃ時効ですよん」

「月日は経っても覚えている人はいるし、女として腹が立つ話でもあるでしょ?」

「……………」

鮎美と鷹姫には、あまりわからない感覚だった。静江も二人が彼氏がいたこともないような女子高生であることを思い出して補足する。

「とにかく、先月の不倫と25年前の不倫で、どっちが悪いつてことも無いし、民主党としては、どっちもどっちに持っていきたいから、噂を広げまくってるわけ」

「そこにきて雄琴はんの裏切りか……。けど、そんなこととして党からの処分は無いんですか? 子供のケンカちゃうでしょ」

「当然そうなる……はずよね、お兄ちゃん?」

「ああ。だが、時期が時期だ。雄琴が応野先生への個人的な気持ちだけで動いているのか、それとも本気で民主党へ行くのか、そのあたりで処分は変わるし、そもそも、今のタイミングでは処分を決めにくい。すべては選挙が終わってからになるだろう。……あのバカめ!」

これまで二世議員らしく感情を表に出さなかつた石永が苦々しく吐き捨てたので、それだけ深刻な事態なのだと言った鮎美と鷹姫にも伝わった。

11月 告白

総選挙開始の日、少し肌寒い11月の風を受けながら新品の冬服を着た鮎美は石永の出陣式で壇上に立ち、演説していた。

「二世議員に対する批判は理解できます。けれど、二世議員の長所は世間に十分伝わっていません！ クジ引き議員の私が言うから確かです！ 二世三世の議員さんというのは、子供の頃からお父さんの背中を見て育ちます！」

今回は演説の原稿をおこす段階から鮎美が考え、静江に推敲してもらい、石永が承諾し、そして暗記して原稿を読まずにマイク一本を持って話していた。

「道場三代という言葉があります。剣道でも柔道でも、その世界で一番になるような選手はたいてい道場の子です。二代目は子供の頃から修業し、三代目は生まれる前から道が決まっています！ それで、やっと一番です！ あそこに立ってる私の秘書、宮本鷹姫が良い例ですわ」

鮎美が壇上から会場の隅にスタッフたちと立っている鷹姫を指すと、そこに注目が集まる。

「…」

原稿の内容を知っている鷹姫は多くの視線を受けても動じず、軽い会釈をただけで、そこに恥じらいや照れは無かった。むしろ選挙期間だけのアルバイトで来ている鐘留と陽湖の方が衆目を浴びて動じている。

「鷹姫が連続優勝してるんは地方ニュースで皆さんもご存じかと思いますが、代々続く道場の子です。それこそ生まれる前から道場を継ぐ、そんな道に立っておった者です。そういう者と、にわかには始めた者では大きな差がある！ うちも実は中学までは剣道をやっており、これでも大阪代表でした。ところが準々決勝まで行ったところで鷹姫と対戦して実力の差というものを思い知ったわけです。どうにも敵わん、あと何年修業しようと思えらん差というものを肌で感じた。

同じことが政治の世界にも言えます。石永先生は子供の頃からお父さんの背中を見て育った。陳情に来る方々への対応、東京との往復生活、選挙、それらすべてを見て育った人材というのは日本にとって貴重な宝です。この地域の子宝を再び国会へ押し上げ！ いずれは総理を私たちの町から、県から、押し出していきましよう！」

鮎美の演説には、これまで以上の拍手が集まり、出陣式は無事に終わった。取材も無難に終え、次の応援先に行く前に事務所へ入って休憩する。静江がお茶のペットボトルをくれた。

「どうぞ」

「おおきに。それで…」

鮎美は自分の演説の成否より気になっていることを小声で静江に問う。

「雄琴はんは結局、向こうの？」

「はい、偵察に出てもらった井伊市の人によると、雄琴先生が細野候補の応援演説を務めたそうです」

「……………うちを自民に誘った人が……………なんで今さら裏切るんよ……………」

「芹沢先生、それは今考えても仕方のないことです。今できることをいたしましょう」

演説のネタにされた鷹姫はそのことが無かったように平然と正論を言ってくる。

「そうやね。次の応援先は、どこ？」

「三上市の新駅予定地です」

「新駅か……………県知事が凍結した以上、難しいやろに……………。自民候補は苦しい戦いになるやろね。うちは新駅についてはノーコメントでいいわ。そんでええやろ？」 静江はん」

「はい、それが無難かと思われます。芹沢先生、そろそろお車へ」

鮎美は車に乗る前に、アルバイトとして働いている陽湖と鐘留に近づき、パイプ椅子を片付けている二人のお尻をポンポンと叩いた。

「おおきに。頑張つてな」

「時給950円でアタシを使えるなんてラッキーだね」

「はいはい。陽湖ちゃん、お尻、ずいぶん治ってきたんちゃう?」

鮎美は制服の上から触れた感触で言ってみた。

「はい、おかげさまで調子がいいです」

「良かったね。ほな、うちは別のところに移動するけど、頑張っとな。あとセクハラされたら言うてよ。やめさせるし」

鮎美は後半の言葉をまわりに聞こえるように大きめの声で言ったけれど、陽湖は拗ねた目で鮎美を見つめる。

「今、されています。いつまでもお尻を撫でないでください」

鮎美が同性愛者だと唯一知っている陽湖は、これはセクハラだと抗議している。

「ごめんごめん」

「アユミンってエロいよね。そんなにアタシのお尻が好き?」

鐘留は触られても気にしていない。

「可愛らしいから、つい触りとうなるねん」

「芹沢先生! もうお時間です!」

静江が時計を見ながら急かしてくるので車に乗った。出発して、すぐに鮎美は鷹姫の膝枕に甘えて囁く。

「今夜から、またしばらくホテル暮らしやね」

「はい。必要な物は、すべて用意してあります」

もう慣れてきたので着替えなどは、すでに静江の車に載せてあったし、手頃なビジネスホテルを投票日まで連泊で予約もしていた。静江は安全運転を心がけて前を見ている。

「鷹姫」

「はい?」

「呼んでみただけ」

「……」

黙った鷹姫の膝を撫でる。膝を撫でながらスカートを少しめくって、膝にキスをした。

「……」

「……」

抗議されないので、さらにキスを繰り返して膝から内腿へ登る。内

腿の半ばまで登ると、キスだけで飽き足りなくて舌先で舐めた。

「くすぐりたいです。仮眠されないのですか？」

「うくん……」

血が騒いで眠るどころではなかった。昨夜は今朝に備えて、よく眠ったし今は演説を一回こなしたただけなので疲労も軽い。何より自分でも不思議なほど興奮していて、鷹姫と一線は越えないという想いさえ消えてしまいそうなほど強い衝動を覚えて鷹姫のスカートを完全にめくりあげて、その股間に顔を埋めた。

「うつ……くすぐりたいです」

「ええから、ジツとして」

「……」

鷹姫が言われたとおり動かずにいると、ますます衝動が滾り、鮎美は立場も状況も忘れて鷹姫のショーツをおろそうと両手を伸ばしてサイド部分を掴み、ズルズルと引き下げていく。

「芹沢先生……何をするのでですか……」

車内で下着を脱がされかけて鷹姫は困惑している。もう鮎美は自分を止められなかったけれど、静江が目的地に到着して車を駐めた。

「着きました。……何してるんですか？」

「あ……いや……これは……」

やっと自分の立場と状況を思い出した鮎美は言い訳を考えた。

「ちよつとした……実験というか、体験というか……ほ、ほら！ 障碍

者の着替えを手伝うみたいなの？」

「……………」

「し、しかも、本人が言うことを聞かない心神喪失状態の障碍者を着替えさせよときの練習というか、体験みたいな、大変さを知ろうとか！」

「……………」

鷹姫は膝まで下着をおろされて、きわどい姿にされている。静江がタメ息をついた。

「はああ……介護というより、普通に襲われてるようにしか見えませんから。どこかの府知事じゃあるまいし選挙中に変なことしないで

ください」

「すみません。ごめんな、鷹姫」

「いえ……。たとえば目的が正しくとも、このような行為は芹沢先生の名誉にかかわるかもしれない。なされるなら人目のないところでされる方が良いでしょう」

「……………」

「もう出番が近い時刻です。降りましょう」

下着を直した鷹姫は車を降りる。幸いにして誰にも見られていなかったけれど、鮎美は自分の行為と衝動が空恐ろしくなって身震いした。

「あかん……鷹姫と泊まったら……絶対やる……」

人目のない室内なら、うまく言いくるめれば鷹姫は身体を許してくれそうだった。でっち上げた意味不明な理由で目隠しして手足も縛って、あとは衝動のままに蹂躪できそうだった。それどころか、同性愛者の体験をしようと提案すれば、それさえ実直に受け入れてくれるような気もする。

「…………ハア…………ハア…………」

愛し合う同性愛者が、どんな行為をするのか、体験してみよう、と言うだけでキスはおろか、最後までさせてくれるかもしれない。今夜、同じ部屋に泊まって、あとは鮎美の思うままにできるかもしれない。

「芹沢先生、時間が迫っています」

「……………」

あかん！ あかんよ！ 鷹姫には許嫁がいて、ちゃんと普通に結婚したいって願ってるのに、うちが傷物にしたらあかん、けど、女同士での行為で傷物になるんやろか、妊娠は絶対にせんし、何をしても傷物ってことにはカウントされんのちゃうやろか、処女は処女のままやろ、鮎美は汗を浮かべ、生唾を飲み込んだ。そんな様子を見て静江は鷹姫へ視線を送り、鷹姫も頷いた。

ベシッ！

鋭い手刀が鮎美の脳天に決まった。

「うぐつ?! うう……痛い……」

「しつかりしてください。さきほど見事な演説をされたではないですか」

「そうよ。すごく良かった。もう大丈夫って思ったから、今度も緊張しないでやってください。新駅のごことは芹沢先生一人で、どうこうなるものではありませんから」

「痛い……」

叩かれて、ようやく鮎美は応援演説をしなければならないことを思い出した。すぐに選挙カーの天井へ登り、マイクを受け取った。

「二度の県知事選で新駅構想を捨てるのが民主主義でしょうか?! 否! 断じて否! ここまで造ったものを全部捨ててしまってもりですか?! 自民党が日本を造ってきた! 新幹線も! 高速道路も! ダムも!」

ここに至るまでの過程も民意であり、民主主義でした! ならば今一度、この選挙で自民党が大勝し! 県内全区で勝ったとあれば、いかな県知事といえど、その民意は無視できません! どうか、自民党に力添えください! お願いします!」

原稿はあったのに、マイクを握ると立て板に水で言葉が出てきて鮎美は演説を成功させた。

「ご立派です」

「安心したわ。次も頼みますね」

鷹姫と静江も誉めてくれる。再び車に戻ったけれど、鮎美は膝枕に甘えることはしなかった。甘えると、もう一度、同じ失敗をしそうな気がする。鮎美はシートにもたれて休憩し、五力所での演説を終えると石永の選挙事務所に戻って、遅めの昼食を鐘留たちと合流して食べた。

「お兄ちゃん、雄琴先生の追加情報ってあるの?」

「いや。だから、お兄ちゃんはやめろ。とくに選挙中は」

「ごめんなさい。で、無いの?」

「うむ、出陣式のあとは、お互い選挙カーで動くからな。つかみにくい。だが、わずかながら自民候補で仲の良かった青木先生のところには顔を出したそうだ」

「フタマタかける男は信用できないよ。さつさと捨てた方がいい。これアタシの経験」

鐘留が言った。

「カネちゃん、あんまり食べてへんやん。食欲ないん？」

「アタシ、他人が握ったオニギリ嫌いだから。あと安っぽい御菓子も」

「そういうこと大声で言わんとき」

あえて鮎美は美味しそうにオニギリを食べながら、奥で調理を担当している運動員に頭を下げておく。運動員も、たいていは選挙区内に住所があるので一票を入れてくれる可能性があるし、今回は総選挙なので、どこに住所があらうと有権者であることにはかわりがない。

「カネちゃんは顔が可愛いのに、口が悪いから気をつけいよ」

「もつと誉めて♪」

「誉めてない！ 口が悪い言うたんや」

「性格も悪いよ。育ちはいいけど」

「その口、塞いだろか」

「きやはは、どうやって？」

「チューで」

「フフン、やってみなよ」

鐘留が挑発的に唇を舐めると、鮎美も立ち上がって対峙する。

「したるか、マジで」

「さ、どうぞ」

「ホンマにするしな」

「いいよ、どうぞ」

鐘留は引っ込みがつかないと、単にしてもいい気分だったので挑発している。鮎美も引っ込みがつかないと、実はしてみたいので鐘留の肩をつかんでキスの体勢に入る。いよいよキスされそうになっても鐘留は逃げないし、鮎美も引かない。

「……」

「……」

「くぐぐ」

「まだなの？」

鐘留の挑発で、もう鮎美は進むことにしたけれど、静江が二人の唇の間にオニギリを突っ込んで止めた。

「やめてください。写真でも撮られてバラ撒かれたら事後処理が大変なんだから」

「すみません。つい…」

鮎美はオニギリを食べながら謝る。鐘留は食べないので一人で食べきり、鐘留と間接キスになることは考えたけれど、顔には出さない。静江の説教が続いた。

「世の中には望遠カメラつてもものもあつてビックリするぐらい遠くから撮られるんですからね。あの路上チューだつて暗い夜道で、かなりの遠くから撮つてるらしいですよ。芹沢先生は、誰とキスしたつて不倫にはなりませんけど、話題性たっぷりなんですから、やめてください」

「はい」

「はああ……あれが民主で良かったわ。でも、男つて困つた生き物ね。どうして議員なのに不倫したり、選挙カーの中でセクハラしたりするのかな」

「…はは………なんで、でしょうね…」

「静江ちゃん、大人なのに、そんなことも知らないの？」

「大人にチャン付けはやめましょうね、緑野さん」

「教えてほしい？」

「……一応、聴いてあげるわ」

「血中テストステロンの影響だよ」

「ホルモンの？」

「そのくらいは知ってるんだね」

「院卒よ、私」

思わず学歴をひけらかすようなことを言ってしまった静江の袖を鮎美が軽く引いた。それで鐘留の挑発の巧さが怖くなり自重する。

「で、カネちゃん、続きは？」

「でね、集団の中でリーダーになるような猿とかヒトは、やっぱりテストステロン分泌が多いわけ。議員もリーダーの一種だから調べれば、きつと平均のヒトより多いよ。ヒトの行動においてリーダーシップに影響するテストステロンは性欲にも影響する。ボス猿のことを考えれば、すぐわかるよね。お嫁さんが一人では足りない。やりまくる。ヒトと猿は、ほとんど遺伝子が変わらないのに、ヒトは気取って性道徳とか意味不明なことを言い出してるから路上でチューしたくらいで大騒ぎ。アホな種に進化してきましたね。というわけで頑張るリーダーほど性欲は強いし、戦場で勇敢な兵士がベッドでも果敢に行動するように、きつと選挙中も血が騒ぐんだよ」

「カネちゃん………………。遺伝子関係の話も好きやね?」

「ヒトなんて塩基配列が決めたプログラムだよ」

「その考え方は間違っています! 人は自由意志によつて、より良い選択ができる神が造られた最愛の被造物です」

「塵は塵に、人はゴミに。カネル第一の1章39節にあるよ」

「つ、聖書を侮辱する気ですか?!」

いつもは怒らない陽湖が顔を赤くしている。単に挑発の矛先が鮎美から静江、静江から陽湖へ移っただけだったけれど、信仰にかかわることだったので聞き捨てならなかった。

「ううん、でも塵だって書いてあるよね。どっかに」

「人の肉体は塵から造られていても霊は霊です! 神はすべてを把握しておられ、塵となった人も記念の墓より蘇るのです!」

「うん、もう言ってること意味わかんないから、チョコでも食べなよ」

「カネちゃん、陽湖ちゃん、バイト中やってこと忘れんといてな」

鮎美と石永が腰をあげた。そろそろ石永は選挙カーへ、鮎美も別の応援先へ行かなければならない。静江の車に戻った鮎美はつぶやいた。

「血中テストステロンか…………」

同性愛者の性欲って、どういう仕組みなんやろ、うちは性自認は女で、女の子が好き、けど、相手を妊娠させられるわけやない、それは

男性同性愛者かて同じやん、男同士で妊娠するわけない、生物学で考えたら性欲の目的は当然、妊娠させることやん、いや違う、もうこのことについては考えんことにしたはずやん、今考えようとしたのは、うちの性欲にも波があるかもしれんってことや、さっきとんでもなく鷹姫に迫ったし、その前も陽湖ちゃんがモロに嫌がつてるのにお尻撫で回したし、あれ男やったら事件もんや、うちはズルいな、陽湖ちゃんが我慢するの見越してセクハラするんやもん、結局はオジサンらがやってるセクハラといっしょやん、相手が本気で怒る手前までやる、実に卑怯や、それがわかつて、またやってしまう気いするわ、つくづく愚かやな、人間は、いつそテストステロンでも抜いてもらえたらええかも、と鮎美は総選挙と無関係なことを考えながら仮眠し次の会場でも演説を成功させ、夜になって屋内での個人演説会でも安定してきた弁舌で女子高生にして議員たる期待に応える姿を見せた。そして、宿泊するビジネスホテルに着いたとき静江と鷹姫に言う。

「うち、今夜は一人で寝たいわ。静江はんと鷹姫が同室でもええ？」

「ええ、いいわよ」

「はい、かまいません」

「……うん………おおきに………急に、ごめんな」

二人は何とも思っていない。むしろ、残念でならないのは鮎美だったけれど、鷹姫と二人で密室になると、もう自分を制御する自信が無かった。客室に入り、一人でシャワーを浴びて、ベッドに寝転がる。

「……鷹姫………あんたを、うちのものに………したいわ………」

欲しいのに手を出せない苦しさで鮎美はすぐに眠れず、キャリアバックの中から電気マッサージ器を出してきた。陽湖と同居するようになってから、モーター音が出るために使える機会が減っていた電気マッサージ器で自慰を繰り返してから眠った。

投票日の夜、鮎美たちは石永の選挙事務所が開票速報を見ていたけれど、その雰囲気は重苦しかった。選挙戦の中盤では鐘留と陽湖も加わったことでJK軍団と言われて、もてはやされたりもしたものの、

票に繋がったかは不明であり、そして全国的な自民党の大敗傾向が明らかになりつつあった。テレビでキャスターが興奮気味に語っている。

「これで民主党は100議席を超えました。まだ伸びそうです。自民は、いまだ伸び悩んでいます。これは政権交代ということでしょうか？」

「明らかに、そうなるでしょうね。あ、また当確が出たようです。共産党からですか」

字幕で当確が表示され、西沢光一だったので事務所内の空気が凍りつく。その凍りついた空気とは無関係にテレビは解説を続けている。

「前は比例で復活だった西沢氏が今回は小選挙区であがってきましてね。ひよっとすると共産党と民主党の連立政権という可能性もあるのでしょうか？」

「そうですね。民主党が単独で過半数に至らなかった場合、どこかと組むことになるでしょうから、その可能性もあるでしょう」

石永と西沢、それに民主党の新人だった奥田が出ていた小選挙区は1人区なので、これで石永の小選挙区での当選は無くなり、あとは比例代表による復活当選しかなくなる。重苦しい空気に、鐘留でさえ余計なことを言わずに黙っていると、石永がマイクを握った。

「すべて自分の至らぬ点が招いた結果です。ですが、一度の敗戦に心折れることはありません。一から出直す気持ちで頑張りますので今後とも応援のほど宜しくお願いします」

模範的な敗戦の弁に、それなりの拍手が起こり、またテレビが民主党候補の当確を告げている。テレビ画面には東京にある民主党の本部が映し出され、党代表の鳩山直人が満面の笑みでバラの造花を選挙区が描かれた大きな日本地図に貼りつけていた。

「……あの人が……総理になるんやろか……」

鮎美の疑問を誰も否定しなかった。静江は兄の比例復活を祈るように目を閉じている。石永自身も落ち着いた態度を保って待っていたけれど、深夜になっても当確は出なかった。そして、民主党の単独

での過半数獲得が決定的となり総選挙は終わった。

「芹沢さん、応援ありがとう。また、頼むよ」

「はい、石永先生も、お疲れ様でした」

苦い笑顔で二人は握手して、お互いを労った。もう午前2時となり、事務所内に残っている支持者は少ない。鐘留と陽湖は帰りそびれて残っていた。

「静江、四人を送ってやりなさい」

「…はい…」

立ち上がった静江の顔色が悪くてフラついているので鮎美は遠慮する。

「いえ、タクシーで帰ります。あと一時間もしたら漁に出る船もありますさかい。それに連絡つけて送ってもらいますから」

「そうか。すまないな。静江、お前は車を置いて、オレの方の車に乗れ。かなり疲れた顔をしているぞ。すまなかったな、そんな顔をしないでくれ、次は勝つさ」

「…うん……お兄ちゃんなら、きつと勝つよ」

兄妹が抱き合っているのに背中を向けて鮎美たちはタクシーで帰る。選挙事務所は駅前に近かったので、すぐにタクシーが来た。

「かねや本店までお願いします。その後、港の方に」

「はい、承りました。…あ、もしかして、議員の芹沢さんですか？」

タクシーの運転手がありふれた反応をしてくれた。

「はい、そうですよ。どうも、こんにちわ、いえ、こんばんわ。もう、おはようかもしれませんね」

鮎美は疲れていたけれど笑顔で対応する。タクシーの運転手は車を発進させながら、言ってくる。

「今回は残念だったね。芹沢さん、自民党ですよね？」

「ええ。ありがとうございます」

「次、民主党政権になるんですかね？」

「おそらくは、そうなるでしょう」

「なら、いつそ民主党に移られては、どうですか？ たしか、雄琴とかいう若いのも、移ったとか、そんな話も噂で聞きましたよ」

「はは……お耳が早いですね」

「いろんな人を乗せますから」

「アユミンも民主党に行ったりするの?」

「さてね」

鮎美は曖昧に流そうとしたけれど、鐘留が食いついてくる。

「行けばいいじゃん。別に自民じゃなきゃいけない理由ってあるの?」

「カネちゃん……」

身内だけの会話ならいいけれど、今はタクシーの運転手が聴いていて、明らかに拡がる可能性が大きいので鮎美は慎重に答える。

「うちはコロコロ変わるの嫌かな。けど、民意が民主党を選んだことは、考えんといかんね」

「県内で自民、全敗だったじゃん。比例復活もゼロでさ」

「カネちゃん、ほら、もう家に着くよ」

鐘留の自宅前に駐まってもらい、深夜なので鮎美も降りた。

「遅うなったし、ご両親に挨拶しとくわ。鷹姫、陽湖ちゃんは待ってて」

「はい」

「別に、いいのに」

「うちの評判にかかわるやろ」

「議員って大変だね」

家に入ると、まだ両親は起きていて、事情もわかっているので一言挨拶を交わして鮎美はタクシーに戻った。

「次、港をお願いします」

「鬼々島へ渡る連絡船の港ですよね?」

「はい」

タクシーは10分ほど走り、鮎美たちを港に降ろそうとしたけれど、まったく人気がないので運転手が戸惑う。

「若い女の子ばかりで、ここで大丈夫ですか?」

「はい。すぐに漁も始まりますし、うちは、そこらの男やったら一人二人いても負けませんし、そっちの鷹姫は5人いても勝ちますさかい」

「芹沢先生、これで50人いても勝ちます」

先にタクシーを降りていた鷹姫は港の待合室にある竹刀を取り出していた。

「前から気になってたんやけど、なんで待合室に、そんなもんあるねん！」

「誰かが置いたのでしょうか。待ち時間が長いですから退屈しないように」

「ホンマに武士の島やな……ま、鬼に金棒で安心やけど。つてことやし、心配せんと行ってください、運転手さん、おおきに」

タクシーが去り、鷹姫が漁協に電話をかけるタイミングを計る。あと30分ほどで漁が始まるので迷惑にならないように、その5分前にかけるつもりだった。

ビュッ!

鷹姫が竹刀で素振りを始めた。選挙期間中の練習不足を取り戻すためなのはわかるので鮎美と陽湖は放っておく。二人は待合室のベンチに座った。

「負けてしまいましたね……」

「そうやね……ごめんな、せつかく手伝ってくれたのに」

「いえ、シスター鮎美が謝ることではないですよ」

そう言ってくれる陽湖が可愛いので鮎美は肩を抱いた。

「セクハラはやめてください」

「ちよつと慰めただけやん。しかも肩だけやん」

「黙ってる、すぐお尻まで触るから」

「ごめん、ごめん。けど、ホンマに負けてしもて、ごめんな。うちが議員になっても野党議員ってことやから、大学の設置も、どのくらい力になれるのか、そもそも与党議員やつても一年生に何ができるのか、わからんかったけど、野党やと余計に難しいと思うわ」

「シスター鮎美、ありがとうございます。そこまでお気にかけてくださり十分です。ブラザー愛也や学園の理事方も、そう簡単に進むとは思っていませんから、どうぞお気に病まないでください」

ビュッ!

いつもより鷹姫の素振りに力が入っている気がした鮎美は問うてみる。

「鷹姫！　いつもより荒れてん？」

「…」

ビュッ!

鷹姫が振り返った。

「負けて気が立つのは仕方ないでしょう。三方原を思い出します」

「……えくつと……徳川家康が、武田信玄に負けたときの？」

もう鷹姫との付き合いも長くなってきたので、だいたい言いたいことはわかった。

「はい。負けたときこそ、おのれの姿と対峙すべきです」

「……そうやね……石永先生、立派やったね」

ビュッ!

「鷹姫は…」

問いかけて鮎美は周囲に誰もいないか、確認してから再び問う。

「鷹姫は、うちが民主党に移るって言うたら、どう思う？」

「………。それが、ご判断であれば従います」

「今、めっちゃ残念そうな顔したやん」

「……………」

「鷹姫の本心では、どう思うの？」

「お給料が二倍だからといって、すぐに所属を変える秘書を芹沢先生は、どう思いますか？」

「うっ……愚問やったね、ごめん」

「でも、シスター鷹姫、今の場合は民意の大半が民主党を選び、そしてシスター鮎美は自民党支持者によって選出された議員ではなくて公平なクジ引きで選ばれているのですから、民意を反映するのも一つの役割ではないですか？」

「……………」

ビュッ!

「鷹姫は、その理屈より人としての、あり方に重きを置いてるんやろ、

たぶん。もうちよい単純に考えると、武士道っぽくないみたいな。たとえば、陽湖ちゃんかて別の神さまが来て、私を信じなさい、つて言うてきたらホイホイ信仰を変える?」

「変えません。そもそも神は唯一絶対です」

「そのはずやったのに、空から別の神さまが降りてきて、海を割ったり、死んだ人を蘇らせたりして、ほら、信じろ、奇跡おこしたぞ、つて言うてきたら?」

「人知を超える事象があっても、それこそサタンの仕業です」

「つまりは信仰は変えん?」

「はい」

「そういうのと同じようなことちゃうん?」

「……………同じか、どうかは……………でも、お気持ちはわかります」

「うちも正直なところ、数の論理とか、民意っていうよりは、気持ちの問題やわ。関ヶ原で負けました、ほな、すぐ家康に仕えますか、そんな感じ。大阪城を舐めんや、最後の最後まで抵抗したるわ」

鮎美がベンチから立ち上がって、傘立てに入っていた竹刀を握った。

「今度こそ負けたままでいるもんか!」

鮎美が夜明けの空に竹刀を向けた。

「えいえい、オーっ!!」

「……………」

「えいえい、オーっ!!」

「応っ!!」

「……………」

鷹姫が掛け声に応じ、陽湖は驚いている。それでも夜中に大声をあげても問題ないほど港のまわりは人がおらず、山で眠っているカワウが迷惑している程度だと思われた。

「えいえい、オーっ!!」

「応っ!!」

「神よ、シスター鮎美の進む道に、どうぞ祝福をください」

陽湖は祈ることで、掛け声に応じた。

翌日、学校を欠席して昼過ぎに起きた鮎美がシャワーを浴びて脱衣所に出ると、陽湖も顔を洗っていた。

「おはようさん」

「おはようございます」

「陽湖ちゃんもシャワー浴びる？」

「そうさせていただけようかな、ご迷惑でなければ」

「遠慮せんでええよ。身体、洗ってあげよか？」

「それは遠慮します」

なんとなく鮎美の前で裸になるのも抵抗があるけれど、陽湖もパジャマを脱いでシャワーを浴びた。鮎美は髪を乾かしてから新聞を眺めるものの、新聞が発行された時刻の問題で当確が出ている議席数については深夜のテレビ放送と違いは少ない。どのみち、これから支部に行くつもりなので朝食兼昼食を優先した。

「うちは、これから支部に行くわ」

「そうですか……私も行ってもいいですか？」

「ええよ。どうせ今から学校に行っても、すぐ放課後やもんな。選挙結果を気にしてくれてるんやね、おおきに」

鮎美は鷹姫へもメールを送り、いっしょに乗る連絡船の便を決めた。

「カネちゃんも起きてるかな」

メールを送ると、今起きた、と返事が来た。鮎美たちが支部に行く と伝えると、気が向いたら行くという返事も来る。学校には行かないけれど、鮎美も陽湖も制服を着て港に出た。鷹姫も制服で現れた。

「鷹姫、ちゃんと寝れた？」

「はい」

「そら良かった」

「芹沢先生は？」

「気がついたら昼やったわ」

「私もです」

三人が話していると、漁を終えた自治会の役員が声をかけてくる。

「自民が負けて、これから、どうなるんじや?」

「それを、これから支部で話し合いに行きます」

「うちが訊きたいくらいやわ、と鮎美は煩わしく感じたけれど、それは顔に出さない。今回の選挙でも鬼々島は自民を応援してくれたし、多くの島民が石永に入れてくれたはずだった。けれど、市街地の有権者の多くが共産党と民主党に入れたことで負けている。結局は人口の差がものを言った形だった。」

「ワシら島のものうちにも、民主が勝ったんやったら、民主にシツポ振ろう言うもんでもおるで、なんとか自民さんには頑張ってほしいんじや。そこんとこ、よう伝えて来てくれや、芹沢先生」

「はい、わかりました。頑張ります」

「頑張ってくれても結果につながらんと意味ないでの」

「はい、それも頑張ります」

「言っている自分でも変な日本語だと思いつつも、石永たちも言っていたので真似をして役員を納得させ、連絡船に乗った。連絡船の船長も似たようなことを訊いてきたので、同じような応答をして路線バスに乗った。路線バスにいた乗客まで同じこと訊いてきたけれど、鮎美は丁寧に応答して納得してもらった。」

「……はああ……次からタクシーにしよ……うざいわ」

バスを降りた後、鷹姫と陽湖にしか聞こえない声で鮎美は愚痴った。支部に入ると、いつもいてくれる静江がいないので違和感を覚えた。

「静江はんは?」

鮎美の問いに職員の一人在、静江は過労で熱を出したので休んでいると教えてくれた。

「そっか、静江はんもお疲れやったもんな」

「芹沢先生、確定議席の資料です」

代わりに鷹姫が党本部から送られてきた資料を見せてくれる。

「……1200議席中、民主が782議席……過半数どころか、あと18議席で3分の2やから、少数政党と連立したら参議院を無視してや

れる……自民は213議席、共産が181つて、自民と共産が並ぶくらいやん……。どんだけボロ負けやねん。畑母神先生の日本一心党は0つて……核武装するとか、従軍慰安婦問題で不穏当なことばかり言うから……民主党を離脱した小沢六郎の活力党が20議席も……これで連立したら3分の2や。あとは無所属が4議席か……」

「自民党が議席を確保したのは、やはり九州、四国、中国地方です。ほぼ明治政府の元勳輩出県ばかり」

鷹姫の分析に鮎美も頷く。

「薩長土肥か。同じ地方でも東北は小沢先生が強いなあ。自民の流れから微妙に外れるのは会津戦争の影響なんかなあ」

「新潟や岩手は結束が強いですし、やはり奥羽越列藩同盟の気運も残っているでしょう。田中元総理の娘も無所属で当選されています」

「田中角美かあ……伏魔殿いうた人やね」

「シスター鮎美、明治時代は100年も昔のことですよ。戊辰戦争なんて150年くらい前のことなのに関係あるのですか？」

「傾向としては影響を感じるわ。もちろん、人口の多い福岡なんかは民主が増えたけど、島津の鹿児島なんか、ばっちり自民やん」

「島津氏は関ヶ原の雪辱を250年かけて晴らしました。今でも島津の剣士は手強いです」

「……なんだか……シスター鷹姫の話だと、選挙ではなく戦争で決着をつけそうで怖いですよ」

「……」

「鷹姫は、ちよつと極端やけど、選挙は戦争の代替手段やからね。そういう側面もあるよ」

「それにしても150年前のことは、もういいのではないのでしょうか？」

「イスラエルあたりは2000年以上前のことで頑張ってはるやん」

「うっ……」

陽湖は痛いところをつかれたけれど、それでも考える。

「そういった過去のしがらみや因縁にとらわれず、新しい政治を目指すのが良いのではないですか？ 民主党が伸びてきたのは、そういう新しい思いの結果ではないですか？」

「……………」

今度は鮎美と鷹姫が痛いところをつかれた。そのタイミングで鐘留と詩織が同時に支部に入ってきた。

「来たよ」

「お久しぶりです。アポイントもなく来てしまつて、すみません」

詩織は菓子折をもっていたけれど、かねやの糸切りクッキーだったので鐘留が礼を言う。

「お買い上げ、ありがとうございます」

「え？」

「それ、アタシんちの商品だもん」

「そうだったのですか。私、このクッキー大好きですよ」

「ありがとうございます。これからも買ってください」

鐘留と詩織は初対面だったけれど、鐘留が鮎美たちと同じ制服を着ているので友人だろうことは詩織にも簡単にわかる。詩織は菓子折を渡すと、鮎美と握手をした。

「こういってはなんですけど、少し前と比べて、とても成長されましたね。同じ身体なのに大きく見えますよ」

「おおきに。素直に喜んでおきますわ」

鮎美は微笑みただけれど、詩織が握手をしながら小指を小指にからめてきたので手を引いた。

「そ、それで、ご用件はなんですか？」

「はい、フタママをかけることになりました」

「っ…、だ、…誰に?!」

「フフ、そんなに慌てなくても」

詩織は怪しく微笑みただけれど、すぐに真面目な顔に戻った。

「私たち春の会は、ずっと自民党に陳情いたしておりましたが、今回の選挙を受けて民主党にもアプローチしていきます。それを言いに来

ました」

「そ…そうですか…」

なんと答えていいか、わからない鮎美に詩織は優しく微笑んだ。

「普通、わざわざ正直に言いに来ないものですよ。ですが、私は黙って進めるのが嫌いな性格なのです。黙っていてバレるくらいなら、先に言ってしまう方がスッキリしますし」

「……………」

「そんな淋しそうな顔をしないでください。きっと同じようなことは、これから多くありますよ。しかも黙って進めるところが、ほとんどでしょう」

「……………そうですね。……………むしろ、言うてもらってる方が、うちもスッキリしますし。わざわざ、どうも」

「もう一つ用件があります。どちらかといえば、こちらが本題なのですが、もう少しお時間よろしいですか?」

「はい、どうぞ」

「芹沢鮎美さん、あなたのことが好きです。私と交際してください」
「なっ…」

「え? この人、女の人だよね?」

鐘留が確かめるように詩織を足元から頭まで見ている。どう見ても完全に女性で女装している男性には見えなかったし、そもそも女装して告白する意味がない。

「鮎美さんは気づいてくれませんでした。これでも選挙中、あなたと2回も握手したのですよ。やや追っかけ気味に演説会を見に行ったりして」

「…そ……………それは……………すみません…」

選挙中の聴衆との握手はアイドルとファンの握手よりせわしなく、きちんと場所や時間が区切られているわけではないので相手の顔も認識せずに握手していることが多かった。そして、石永と鮎美が並んで握手を求めると、だいたいの男性は鮎美の方に来るし、女性の有権者でも最年少という珍しさもあって鮎美へ来るので相手の顔を認識する間もなく次々と握手していた。それは石永だけでなく他の自民

党候補の応援をしていたときも同じなので、申し訳ないと思いつつも一人一人の顔を見ている時間は無かったし、見たとしても脳に認識しておくことができなかつた。

「歳の差が気になりますか？」

「……………そ……………そういうわけ……………では……………」

「歳の差っていうかき、女と女だよ？　もしかして、そっち系の人？」

鐘留の遠慮無い問いに詩織は穏やかに答える。

「ええ、私はバイです。でも、フタママはかけませんよ。彼氏とは別れましたし」

「……………」

「バイなんだ。へえ……………いるんだ、そういう人……………ふーん……………」

また鐘留が遠慮無く足元から頭まで観察すると、詩織も鐘留を足元から頭まで見つめる。

「可愛い子ですね」

「ありがとうございます」

「……………性格には問題がありそうですね」

「うん、あるよ」

「それはおいて、鮎美さん、どうでしょう？　私と交際してくれませんか？」

「……………う……………うちは……………」

「歳はいくつなの？」

「秘密です」

「うくん……………見た目で歳がわかりにくい……………ちよつと外人っぽくない？」

「母がドイツ人とのハーフでしたから、私はクォーターです」

「言われてみると、そんな感じだね。髪とか」

「鮎美さん、ダメですか？」

「……………うちには他に……………」

「好きな人がいても、その人が振り返ってくれるまで付き合ってくださいませんか？」

どうせ永遠に振り返ってはくれませんよ、と詩織の表情が語っている気がして鮎美は悔しかった。その悔しさと切なさ、詩織に対して反発と親愛を同時に等量、覚えさせてくるので、ますます困惑する。受け入れて抱きつきたい衝動と、バカにするなど叫んで追い出したい怒気、同じだけ覚えている。

「面白いかもよ、アユミンって前から思ってたけど、その気がありそうだし。実はアユミンもバイなんじゃない？」

「っ……」

「やたらとアタシの身体に触るしき。あれセクハラ一歩手前だよ」

十分にセクハラです、と陽湖は言いたかったけれど、ここは鮎美に助け船を出すことにした。

「シスター鮎美、党から交際を禁止されていませんでしたか？ 男女問わず」

「あ…そ、そやった。党から交際は控えるよう言われていますから」
「控えるようにですか……」

詩織は陽湖を足元から頭まで観察し、さらに鷹姫も観察すると、つぶやいた。

「可愛い子ばかり集めて」

「も…もう用件は終わりですよんね？」

「あと一つ」

「何ですか？」

「交際がダメなら私を秘書にしてくれませんか？ 英語は日常会話レベル、ドイツ語はビジネス実用レベルです」

「秘書に……」

「体力もあります。ドイツ警察に2年、勤務していました」
「……」

「考えておいてくださいね。また来ます」

詩織は欧州貴婦人のように優雅に礼をすると、立ち去った。

「……はああ……」

鮎美がタメ息をつきながら椅子の背に身体をもたれさせる。鐘留が可笑しそうにクスクスと笑った。

「アユミン、かなりビビってたね。きやははは」

「……あ……当たり前やん、あんなこと……いきなり……しかも、党支部で……」

「少し非常識な人ですね。春の会って何ですか？」

陽湖の問いに、仕方なく答える。

「売春を合法化させたい団体やよ」

「っ……ありません!! なんて人なの?! 女性なのに!!」

「そういう反応する団体が怒りに来たこともあったわ……あの人ら、石永先生が落選して、どんなこと言うてるやろ……」

鮎美は疲れを感じて目を閉じた。明け方から昼まで眠ったけれど、まだ疲れが残っている。その疲労感を悪化させるような着信が鮎美のスマートフォンに入った。

「……雄琴はん……今さら……」

直樹からの電話だった。

「アユミン、出ないの？」

「…………。無視すんのも、癪やな。出たろやないか」

鮎美は受話した。

「うちや」

「怖い声だね」

「今さら何や？ 裏切りもんが」

「一度、会って話したいんだ」

「うちは暴行罪で捕まりとうない。まだ不逮捕特権もないことやし」

「特権があつても現行犯は捕まるよ。まあ、落ち着いて。ゆっくり話をしたいんだ」

「断る」

「……わかったよ、もう少し君が頭を冷やしてから話すことにする。じゃあ、また」

直樹が電話を切った。

「……顔も見えないわ……ボケが……」

「アユミンって前は民主党に入っても良さそうなこと言ってたなかつた

? 共産党もアリかなあ、みたいなの。すっかり自民に洗脳されてる？」

「っ！ 仁義つてもんがあるやん！」

鮎美が怒鳴ったので鐘留は驚いて引く。

「ごめん、そんな怒ると思わなかった。軽いジョークだよ、ジョーク」

「…………。うちも怒鳴って、ごめん。苛ついてるねん、いろいろ」

「そっか。でも、仁義ってヤクザじゃないんだからさ」

「カネちゃん、ちよつと黙っててくれへん？」

「はい」

鐘留は黙ると、詩織が持ってきた菓子折を開封し、党の職員たちにも配ってから自分たちの前に広げた。その間に鷹姫が紅茶を淹れている。

「…………はああ…………」

鮎美が深いタメ息をついた。

「……………」

鷹姫と陽湖、鐘留は静かに紅茶を飲む。

「鷹姫、石永先生は？」

「はい、今日は主要な支持者のところへ敗戦のお詫びに回るとのことです」

「えらいな…………うちは、どうしよ…………。静江はんが来てくれんと、やることさえ、わからんとは、情けない」

「まだ、ご自分が一人前でないことを悔やむ時期ではないと考えます。何かあるに備え、お休みになることも重要です」

「そうやね、おおきに、鷹姫」

そう言った鮎美は愛おしそうに鷹姫のポニーテールを撫でた。再び会話が無くなると、支部にある固定電話が鳴り、職員が応対している声が聞こえてきた。

「はい、はい…………。いえ、石永先生はお詫び回りに出ておられます…………。国会議員では、芹沢先生が来ておられます…………。はい、すぐに」

職員が子機を持って、鮎美のところへ来た。

「谷柿幹事長から、お電話です。支部にいる国会議員は、と問われましたので」

「谷柿…幹事長……」

その役職と名前は聴いてはいたけれど、面識はない。それでも党内で高い地位にある人だとはわかるので鮎美は緊張して電話を受ける。

「はい、芹沢鮎美です」

「はじめまして。谷柿弘文です」

「はい、はじめまして、芹沢鮎美です」

緊張して鮎美は二度名乗ったけれど、谷柿は笑わなかった。

「そう緊張しなくてもいいですよ。今回の選挙も一生懸命に応援してくれましたそうですね。ありがとうございます、芹沢先生」

「い、いえ……うちらなんか何の役にも立ってません」

礼を言われて鮎美は目を潤ませた。電話で話しているだけなのに、相手の懐の深さを感じる。

「昨日の今日で支部につめていてくれる芹沢先生の存在に、私も勇気づけられます。これから困難な時期を迎えますが、いっしょに頑張っていきましょう」

「はい！」

「それを伝えたくて電話しました。芹沢先生に会える日を楽しみにしていますよ」

「はい！」

谷柿との短い電話が終わり、鮎美は潤んでいた目を拭いた。「クヨクヨ迷ってもしゃーない！ 勉強の続きでもしとこー！」

鮎美は選挙前までしていた民法と民法改正案についての勉強を再開して一日を終えた。

12月 夏子

総選挙から二週間が過ぎた12月の上旬、鮎美と石永、畑母神の三人は和食系ファミリールレストランの個室で会談していた。一人当たりの客単価は1500円程度の庶民的な価格でありつつも個室があるので人気があり、会談にも使いやすかった。石永が申し訳なさそうに言う。

「畑母神先生を迎えて、このような店で申し訳ありません」

「石永くん、そんなことは気にしないようになさい。お互い、下野した身。君は二世議員だったから、在野の生活は初めてかな？」

「恥ずかしながら、庶民感覚を持つように心がけていますが、ボンボンと言われれば否定できません」

「君の年齢なら、いい経験になるさ。芹沢さんのご家庭は？ ぶしつけない質問で非礼だが、君の家は貧富でいえば、どちらになる？」

「中間やと思います。別に貧しくもないし、金持ちでもないし、せやから、今まで何回か料亭やらで会談してましたけど、ちよつと敷居が高いというか、正直、こういうお店が気楽でええです」

「うん、私もそうだ。何より子供の頃、私の家は貧しくてね。米はあったが魚は自前で捕まえていたものだ」

「どこかの島の出身なんですか？」

「いやいや、福島県の山奥だよ。平凡だが豊かではない農家の三男でね、喰うために自衛隊に入ったのだよ」

「福島県……東北でしたよね。そういえば、一昨日ニュースで、とうとう東北新幹線が全通したって聴きましたわ」

「うむ、八戸新青森間だね。東北にとっては待望の新幹線全通だよ」

「東北の人らから見たら、うちの県は、どう見えますやろ？ 新幹線の新駅を要らなくて言うて現職知事を落とすような県民」

「率直に言わせてもらおうと、変わった県民性をしているな、と感じるよ。ケチも度を越せば変人であるように。建設費をもつたいたないと行って用地買収まで済んだ新駅計画を蹴るといのは、なかなか変わった行動だよ」

「ケチちゅーか、自分とかが直接に儲からんのやったら、よその商売邪魔したれ、みたいな根性を感じますわ。ま、大阪人にも、そういうところあるけど、琵琶商人の通った後には草も生えんて言葉が生まれた理由、なんとなくわかります」

鮎美の肩を石永が軽く叩いた。茶谷の触れ方と違い、セクハラ的な嫌な感じは受けないので鮎美は舌鋒を止めた。

「芹沢さん、それ誰かが聴いているところで言わないでくれよ」

「はい、すみません。つい」

「そういえば、この県には空港も無かったかな？」

「はい」

鮎美と石永が異口同音し、事情に詳しい石永が答える。

「四半世紀前に計画が頓挫しています。父が関わっていたので覚えていたのですが、やはり経済的な損得勘定が大きかったようです」

「なるほど、たしかに当時、多く造られた地方空港の大半は赤字だ」

「よその県は新幹線を待ちきれんで造らはった感じがしますわ」

「そう、県が自前で土地を用意すれば、線である新幹線と違い、点である空港は造れる。ついつい、おらが田舎にも空港を、となったのだろう。それを損得勘定優先で自制する県民性は慧眼にも感じるけれど、大きなものを見落としてもいる」

「……」

すぐに答えを見つけられなかった二人に畑母神が解答してくれる。

「非常事態、戦争とまでは言わないまでも、きわめて大きな災害が起こったとき、線である新幹線や高速道路は、きわめて脆い。どこか一方所でも損傷すれば、大きく迂回せねばならなくなったりして、その機能は一気に低下する。けれどね、空港は、もともと点であるために寸断されることがない。かりに損傷したとしても応急処置で滑走路さえ整備すれば、すぐに使える。これは空母の飛行甲板にも言えることだがね。そして、点と点をいくつも結べば面として機能する。近視眼的には地方の赤字空港は悪口を言われるかもしれないが、いざというとき食料、燃料、医薬品、技術者、機械、車両、医師、要人、あら

ゆるものを運べるわけだ」

「そつか……無駄に見えても無駄やないんや」

「まあ、いささか建設費と用地買収が高くつきすぎているのが日本らしい欠点という気はするがね。実際、滑走路さえ整備すればよいのだから、土地が無料に近い価格で手に入り、ターミナルビルなど造らず、頑丈なアスファルトだけ敷設していたなら、多くの地方空港は今頃黒字だったろう。この点、自民党政治とゼネコン、そして個人の権利意識の濫用による土地収用の難しさが招いた弊害と言えなくもないね」

畑母神が過去の自民党政治を軽く批判すると、石永は受け入れた。

「おっしゃる通りです。ゼネコンの技術力は素晴らしいが、いささか高くつきすぎる」

「きっちり党も寄付金もらうからですよ。表と裏で二重に」

「……………」

やや沈黙した畑母神は失笑し、石永は苦笑いする。

「ははは。言いたいことを言うね、君は」

「芹沢さん、正直が常に美德ではないと、知ってほしいな」

「はい、気いつけます」

新幹線と空港の話が終わると、三人は会談の目的だった総選挙についての反省や、今後の自民党と日本一心党のあり方などを話し合い、再会を約束して別れた。静江が車で鷹姫と迎えに来てくれたけれど、今までの車と違い、軽自動車だったので鮎美は違和感を覚えた。

「静江はん、いつもの車は？」

「……。売ったわ」

やや不機嫌そうに静江が答えた。県知事選の後に兄へねだって買ってもらった目立たないもののフランス製だった普通車を売り、どこにでもあるような軽自動車が今の静江のマイカーになっていた。

「気に入っってはったのに？」

「お金が無くなるからよ。政党交付金が何億円減らされるか、知らな

「いわけじゃないでしょう」

「あ……はい……」

総選挙で議席数が激減したことにより自民党の会計は見通しが悪くなっている。すぐに枯渇するほどではないけれど、谷柿幹事長からの引き締めもあり、各支部に配分される予算も大きく削減され、党の経費で大半をまかなっていた静江の車も経費削減の対象になっていったし、畑母神との会談場所が招福亭やタカ井などの一流店でなく、ただのファミリーレストランになっていったのも同じ理由だった。鮎美は車に乗り込み、再び違和感を覚えた。

「鷹姫？」

鷹姫の表情が、いつもと変わらないように見えるものの、どこことなく硬く暗いようにも感じる。

「どないかしたん？」

「いえ、何もありません」

「そやったら、ええけど……」

「会談の自身は、どうになりましたか？」

「あ、うん」

鮎美は会談の内容を要約して二人に話した。その話が終わると、静江が運転したまま切り出してくる。

「一応、鮎美ちゃんにも言うておくけど、宮本さんのお給料、10万円にするから」

「10万円って、何のお給料ですか？」

「秘書の給料に決まってるでしょ」

「え……、いや、あれ30万ちやいますの？」

「だから、それを30万円から10万円にするの。来年四月からフルタイムで出勤してくるまでは学校終わって放課後だけなんだから10万円でも多い方でしょ」

「そ……それは……そうかも、しれんけど……土日とかは丸一日……選挙するときなんか24時間拘束して……」

「本人は納得してくれたから」

「鷹姫が……」

「そうよね？ 宮本さん」

「はい」

「鷹姫……け、けど、鷹姫の家の家計もあるし、そんな急に三分の一なんて……」

「大丈夫です、芹沢先生」

珍しく鷹姫から鮎美の肩に手をおいて頷いてみせている。

「もともと予期せず入ったお金ですから、妹たちに衣服を買ったりした以外は残しておりますし、10万円になっても大丈夫です、本当に」

「鷹姫……」

もともと鷹姫の家は車も所持していないし、マイホームローンなども無い。テレビも置いていないのでNHK料金も発生せず、固定電話さえ設置していないし、鷹姫が所持するようになった携帯電話も党からの貸与で必要なのは食費と剣道具くらいで、その食費も最近でこそ継母が本土のスーパーへ出かけて肉類や海の魚を買ってくるけれど、以前は琵琶湖で獲れる魚のうちで売り物にならないものを漁師から分けてもらっていた。その生活に戻せば剣道場の収入でまかなえ、10万円でも余るくらいだった。

「……けど……ちゃんと毎月もらえたら、家を建て直すとか……妹さんらに、それぞれの部屋を造ってあげるとか……何より鷹姫が道場で寝てるのに……」

「どうぞ、お気になさらず」

「あんた、ちゃんと結婚したいんやろ？ 花嫁衣装とか、ドレスとか、先立つもんがないと、どうにもならんことも多いんよっ」

「着飾る必要などありませんから」

「……女の子やのに……。許嫁の岡崎くんの家は金持ちなん？」

「いえ、普通の漁師の家庭です」

「漁師って、ぜんぜん儲からんやん」

「……。お金目当てで結婚するわけではありませんから。大丈夫です、どうぞ、ご心配なく」

「……鷹姫……あんたは、何でもホイホイ受け入れて……30万やつ

た給料が10万にされるって、どんだけ、ひどいことか……。静江は
ん！　うちは自分の秘書の給料も自分で決められんのか?！」

「……。いえ……。それは……」

静江が運転しながら視線を彷徨わせる。それが嘘をつこうとして
いる人間独特の様子だったので鮎美は追求する。

「政党交付金って議席数で国から配分されるやんな？　うちはカウン
トされるはずやん」

「……。任期前の来年1月までは、半額なんですよ……」

「秘書の給料は党から出るって話やったやん！」

「……。その党が苦しくて……」

「そもそも変更前に、うちが関われんのが、おかしいやん！」

「……それは……。ですから、今、ご承諾をいただきたいと……。相談
いたしております」

「芹沢先生、私がかまいませんから」

「鷹姫は黙っておき！　お金の問題は大事なんや！　武士だけで国は
治まらん！　堺の商人あつての戦国やったやろ?!」

「……はい……」

「静江はん、鷹姫の給料を減らすって誰が決めたんよ?!」

「……わ……。私からの……。提案です」

「あんたの……」

「党支部の会計も私が管理して、事後にお兄ちゃんの承諾を得ていま
すから」

「……」

「本当に会計が苦しくなるんです。どうか、ご理解ください」

「……。それで静江はんの給料は、どうなるん？　あんたも減給なん
?」

「い……。いえ……。わ、私はフルタイムで働いていますから……。現状
のままの予定です……」

「ちよっ……。それは、ひどすぎん？　鷹姫だけ20万も減らして、自分

そのままって、えげついやん」

「い……。いろいろと……。事情がありました……」

運転している静江の額に玉のような汗が浮かび、上着の腋の下も汗で濡れていく。鮎美は同性の体臭を不快に感じることは少なかったけれど、今は不快だった。

「どんな事情やねん！ 支部の会計いうても秘書の給与は基準があるやろ?! 50万は党から、もらえるはずちゃうん?!」

「は……はい……」

「ほな、なんで鷹姫の分が減るんよ?!」

もう鮎美も色々と勉強してきたので細かな仕組みも記憶しつつあった。その鮎美に追求されて静江は白状する。

「じ……事情がございまして……宮本さんに支給された一部は、党支部への……寄付ということで処理させて……いただいて……おりまして……。これは……今までも多少は、あったことなのです、どの支部でも……」

「一部を寄付って……50万もろて40万を寄付させる気いやったん?」

「……お……お忘れかもしれませんが……も、もしくは言い忘れたかもしれませんが……今まで30万円だったのも、実は20万円は寄付ということで……納得していただいたと……思っておりますし……他の支部でも、同様ですし、うちの支部の他の議員の秘書でも勤続年数などによつて、一部を寄付していたりするのが慣例ですから……。宮本さんにも最初に説明しましたよね? ね?」

「……いえ、……記憶にございません」

「最初の頃は、いろいろ覚えることが多くて忘れたのかもしれませんが……」

「鷹姫は記憶力ええ方やし! うちも聴いたこと無いわ!」

「い、いずれ、言おうと……そ、それに高校生には30万円でも十分ですよね? 残りをフルタイムになるまでは寄付ということにしても、不服はないかと……」

「本人が知らんとそうされるのと、知ってそうされるのは、ぜんぜん違うやろ! 何より10万円に下げといて40万も寄付さすって、どやねん?!」

「す……すみません……言葉足らずな部分があり……」

運転しながら話している静江は信号が赤から青に変わったのに発進せずにいたので後ろからクラクションを鳴らされ、慌ててアクセルを踏んだ。急加速の不快感が鮎美と鷹姫に訪れるけれど、話の内容はより不快だった。

「しかも自分は50万もらうんやろ?! どんな神経してるねん!」

「い……いえ……私の給料も、もらうのは、もらうけど、お兄ちゃんを援助しなきゃいけないから」

「石永先生を?」

「はい、そのために、支部じゃなくて、お兄ちゃんの後援会に寄付するから」

「……………いくら?」

「できるだけ……たくさん」

「えらい抽象的やん……」

「これから、どれだけ大変になるか、わからなくて……………とにかく、お金が要るんです。衆議院議員の歳費は知ってますよね? あれがゼロになったんですよ」

「いろいろ合わせて三千万は超えて…、わっ?! ちょ! 危ないから車を止めい!」

鮎美はフラフラと運転する静江がサイドミラーを電柱に擦ったので驚いて停車させた。

「ビビったあ」

「ハア…ハア…す、すみません」

「衆議院議員の歳費が多いのは選挙があるから、うちらと違って必要なのはわかるけど……」

「それがゼロになったんです。他にも支持者や企業、団体からの献金も、きつと激減するから。なのに4年後の選挙に備えて、要るものは前より多くなるから」

もう静江は半泣きの顔で言い募っている。だんだん鮎美は気の毒になってきたし、鷹姫には最初から責めるつもりはなかった。

「お願いします、どうか理解してください」

「……………」

「いつそ宮本さんの勤務を二日に一度、いえ、三分の一だから三日に一度でもいいです。それなら拘束時間との比率は今のままで。宮本さんは剣道の稽古がたくさんできますよね？」

「鷹姫を三日に一度に……………」

それは淋しかった。

「今までのままで大丈夫です。いえ、むしろ学ぶことが多いのですから減らされると困ります。芹沢先生、石永さん、私は10万円がかまいません。いつそ、しばらく無給でも大丈夫です」

「鷹姫……………」

「宮本さん……………」

「お家の危機とあれば、致し方ないでしょう。できる限り協力します」

「……………ごめんなさい……………ありがとう……………」

「鷹姫、そうは言うても……………、親は大臣まで務めはった家やで。うちの家とは比べもんにならないん豪邸やったやん」

今までに何度か招かれたことがあって鮎美も鷹姫も石永の家を知っていた。

「カネちゃんの家の2倍くらいある屋敷に住んで、それを売り払うでもなく、道場で寝てる鷹姫から40万も取るんやで？ 不条理やと思わん？」

「……………」

「あの実家は見た目は立派だけど、土地は安い田舎なのよ。田んぼを潰して建てたから広くても値打ちは無いの。かねやさんの屋敷の方が市街地にあつて何倍もするくらい。そ、それに、私もマンションを引き払って、少し遠くなるけど実家で暮らして節約するつもりなの」

「芹沢先生、今の私の奉公では10万円でも過分かと思えます。もう、よいではないですか」

「鷹姫……………あんたが、そう言うんやったら……………。ほな、うちも毎日の勉強に出てる手当とか、支部に寄付するわ。鷹姫と同じだけ」

「それは難しいの。議員予定者による寄付行為は原則禁止だから」
「あ、そやった……ほな、もともとの支給額を減額したら？」

「それで潤うのは党の本部だけで支部には関係なくなるから。むしろ、ちゃんと受け取っていただいて……それで裏金として宮本さんに手渡したりするのなら、いい、というか、よくないけど、絶対にバレないように手渡しで、しかもATMからおろした日に手渡しして、宮本さんが同じ日にATMに入れたりすると、記録が残って面倒だから、ちゃんと日もずらすとか、自宅の金庫に入れるとか、そういう方法で動かすならいいです」

「……………」

二人とも、そんなやり取りはしたくなかった。

「……………鷹姫……………ごめんな……………」

「いえ、芹沢先生が謝ることではありません」

「私と宮本さんは、まだ幸運な方です。お兄ちゃんの秘書は全員、国からの支給が無くなるから、どうしようか困っていて……。芹沢先生の東京での秘書にしていただけると、ありがたいのですが……男性秘書って嫌ですよ？」

「男性か……どうしてもというなら……気の毒やし……受け入れても……ええかなあ……………」

鮎美が嫌そうに、それでも受け入れの意向を口にしたけれど、静江は思い止まる。

「やっぱり危ないので、やめておきます。東京でホテルや車内で二人つきりという状況も多々発生しますし。中年男性と18歳の芹沢先生……あまりに危険です」

「そういえば、他の女性議員も秘書は、やっぱり女性なん？」

「男性であることもありますよ。芹沢先生の若さが例外的なだけで、お互い既婚者なら危険は少なくなりますし、あとは田中角美先生のような女性議員だと、まあ……ほら……なんというか……年齢とか、いろいろ……………」

「あ……なるほど、言いたいことは、わかるわ」

「元総理の娘さんは相当に強いのですか？」

「鷹姫………」

「芹沢先生も弱くないと思います」

「うん、おおきに。けど、鷹姫ほど強くないし、うちは柔道の技量なんて、ほとんど無いから、きつとベッドに押し倒されたら、自分より大きな男には勝てんよ。静江はん、もう落ち着いたなら、車を出して」

「はい、さきほどは失礼しました」

静江は車を発進させ、気分転換と情報収集のためにラジオをつけた。ちようどニュースの時刻で男性キャスターの声が響いてくる。

「12月6日のニュースをお伝えします。昨日行われました亜久音市の解職請求・リコールを問う住民投票で、賛成が有効投票の過半数を上回り、市議会を開会せず専決処分を繰り返すなどした武原真一市長が即日失職となりました」

「地方自治も荒れてるなあ………」

疲れてきた鮎美が目を閉じると、鷹姫のお腹が空腹で鳴った。

キユウウ…

若い胃が食欲を訴えて鳴いている。

「鷹姫、何も食べてへんの？」

「……何でもありません」

鷹姫が恥ずかしそうに赤面して顔を背けた。こういう表情は珍しいので鮎美は抱きついてキスをしたくなったものの、それは自重した。

「うちらが会談してる間、静江はんら、どこかで食べてなかったん？」

「そういう経費が一番、削減しやすいんですよ」

「そやからって………」

鮎美は自分だけ満腹で二人の秘書がお腹を空かせていることが、人として恥ずかしくなった。

「気がつかんで、ごめんな。静江はん、うちが自分の秘書に夕ご飯をおごるのは問題ある？」

「秘書も有権者ではありませんが、問題になった例を聴いたことがない

です♪」

静江の声が嬉しそうだだったので鮎美は肩をすくめた。

「鷹姫、お寿司と焼肉、どっちがええ？」

「……………」

赤面していた鷹姫は恥じらいながら、後者を選んだ。

翌々日の放課後、鮎美は昇降口の下駄箱付近で、直樹が待っていたので可愛らしい眉を不快そうに歪めた。そして不審者から要人を守るように鷹姫が前に出る。

「おいおい、そんな斬りかかってきそうな顔をしないでくれよ。どうしても、芹沢さんに会ってほしい人がいてさ」

「…………… 鷹姫、そんなヤツは放っておき」

鮎美は無視して靴を履き替え、昇降口を出ようとしたけれど、直樹は言うてくる。

「県知事の加賀田夏子さんが君に会いたいって言うてるんだ。頼むよ」

「…………… 加賀田…………… 夏子……………」

鮎美が足を止めて振り返った。県知事選で苦杯をなめさせられた女性知事に興味はあった。

「条件は？」

「会って話すだけさ。それ以上でも、それ以下でもなく」

「話の内容は？」

「それは会っての、お楽しみ」

「……………。ええやろ、会うわ」

鮎美は会うことにして直樹の車に乗った。学園の駐車場から直樹の車が出ると、すぐに迎えに来た静江の軽自動車とすれちがった。

「鷹姫、静江はんに加賀田知事に会うってメールして」

「はい。雄琴直樹の紹介であることを伝えますか？」

「まあ、伝えんと脈絡が不明やろし、伝えといて」

「わかりました」

鷹姫がメールを打ち、直樹は高速道路に入ると六角市から阪本市ま

で移動し、県庁まで鮎美を連れてきた。エレベーターで5階にある知事室前まで三人で訪れると、知事室の室長が案内してくれる。

「こちらへ、どうぞ」

「おおきに」

鮎美と直樹、鷹姫が知事室に入った。

「ようこそ」

待っていた夏子が椅子から立ち上がり、鮎美へ握手を求めてくる。鮎美は落ち着いて握手に応じ、夏子の目を見て問う。

「うちに話つていうのは？」

「できれば二人きりで話したいのですが、よろしいですか？」

「……………ええ、鷹姫、ちよつと待っておつて」

「はい」

鷹姫と直樹が退室し、室長が扉を閉めると二人きりになった。その瞬間、夏子が鮎美へ抱きついてくる。

「わーっ♪ 本物だあ、本物の鮎美ちゃんだあ！」

「なっ?!」

抱きつかれて鮎美が驚く。

「何するんですか?!」

「ごめん、ごめん、思わずね」

「県知事ともあろう人が…」

「二人きりなんだし、気楽にしてよ。高校生にして議員なんて大変だと思うけど、今は素の鮎美ちゃんが見たいな。ね、お願い」

「……………あんだ、ビアンなん？」

「クスっ…、面白い疑問を持つね」

抱きついていた夏子が離れる。

「私は未婚だけどノーマルだよ。いい男がいなくてさ。紹介してくれろ。」

「雄琴直樹とかは？」

「うくん……………年下かあ……………」

「御蘇松善行さんは？」

「年上すぎ！ しかも既婚！」

「いやいや、路上チユーしたら全国ニュースになって、おもしろいで」
「言うねえ。知事に向かつて平然と」

「あんたが気楽に言うたやん」

「そうだったね」

「ほんで、話っていろいろのは？」

「私と協力して日本と、この県を人々が住みやすい最高の場所にしようよ」

「……………各論には是々非々であたりますから」

「つまんない！ そんな政治家っぽい答えやダ！」

「あんた……………」

やや鮎美が怒りかけると、夏子は軽い雰囲気から理知的な表情に変わった。

「あなたは今までの戦後政治を、どう感じてる？」

「現状、あの敗戦からなら、考え得る限り最高の結果ちやいますか。焼け跡からの経済成長、今世紀に入って、やや失速しているものの、この豊かさ。少子高齢化も、他の先進国でも見られる現象や。世界で日本ほど、ええ国は少ない、そう思いますけど」

「そして、それを築いてきたのが自民党って言いたい？」

「……………ええ」

「けどさ、経済学的な分析をすると、総力戦によって国民の中で富の偏在が減少し、平準化しつつあったところへ、さらにGHQによる強制的な財閥の解体、税制の平等化、小作農の解放、経済の自由化がもたらされ、この好条件によって経済は成長。経済の成長が与党支持を続けさせ、今世紀に入つての低迷が古い与党を捨てさせ、新たな与党を求めさせただけで、どこの政党が与党であれ、たいして経済成長は変わらず、これからも、そうだとしたら？」

「……………政治が経済に与える影響が限定的なら、それは、それ、諦めて、治安の維持、国防、社会保障の充実を行っていくしかないんちやいますか」

「うん、鮎美ちゃん、よく勉強してるね。勉強させられた、のかな？」

「与えられた役割を、果たしたいと思うだけです」

「なら私たちは協力し合うべきだよね？」

「是々非々で」

「また、戻っちゃったね。頭の硬い人たちから、しっかり勉強させられて。もう硬くなってる？」

「本題は？」

「せっかちだね」

「せっかちやし、帰るわ」

鮎美は背中を向けたけれど、夏子は穏やかに言ってくる。

「お茶くらい飲もうよ」

「……」

来年から参議院議員として県政についても間接的には関わるはずの夏子と党が違ってても敵対姿勢のままにいることが損だとはわかりし、総選挙の前後で与野党が逆転している。本来、下手に出るべきは自分なのだともわかるのに、夏子は鮎美の感情を計るような言動をしてくる。

「私流の美味しいミルクティーの淹れ方を見て欲しいな。まあ、座つてよ」

「……」

鮎美は深呼吸して感情を落ち着けた。

「ほな、ごちそうになるかな。会談の前に、相手のことを調べて知る。竹村先生が言っってはったなあ……」

鮎美が紅茶、とくにミルクティーが好きなことを夏子は知っていた様子だった。

「うん、竹村先生ほどの人はなかなかいないね。会談前に相手のことを調べるのは基本だけど、その基本を実行し続けられる人は少ない」

夏子は珍しい手順で紅茶を淹れている。知事室に用意していた茶器とIHヒーターで基本の手順通りに淹れた紅茶と、インド流にミルクで煮立てたミルクティーを混ぜるといふ手法だった。

「どうぞ」

「いただきます」

鮎美は飲んでみて、微笑んだ。

「美味しいですわ。初めてみた淹れ方やったし」

「カレーと同じだね、インド式と英国式を混ぜてみたの。これが日本式、というか、私流よ」

「面白い人ですね。女で知事選に勝つだけのことはある」

「鮎美ちゃんが自民の御蘇松さんを応援してくれたせいで、私もヒヤヒヤしたよ。もっと楽勝だったはずなのに、もし落ちてたら今頃は私、破産してたかも」

「借金してまで出馬してはったんですか？」

「まあね。あのときは憎らしい顔だったのに、今見ると可愛いね」

夏子に見つめられて鮎美は視線をそらした。人としての魅力がある夏子に見つめられると、鮎美は性欲を刺激されそうで困る。

「……。選挙中と、終わってからでは感情が変わるのは理解できますけど……」

「総選挙も民主の勝ちで終わったね」

「……………」

「この民意、どう思う？」

「……。自民にも反省すべき点が多いということやと思います。とくに、金銭の面で」

「それもあるけど、結局は経済に引っぱられたただだよ」

「経済に……………」

「同じことは89年にバブル経済が崩壊した後にも起こった。経済の失速によって55年体制は崩れ、竹村先生の魁け男子党と村山智一の人民社会党が自民と連立して、社会党の首相が誕生した。鮎美ちゃんが赤ちゃんだった頃の話だけど、知ってる？」

「最近になって勉強しましたよ。学校では、教えんあたりやし」

「長く続いた自民党政治に対して有権者は変革を求めた。けれど、ヨチヨチ歩きだった村山政権に、きつい災難が襲いかかる。それは経済の変化ではなくて、大地震だった」

「阪神淡路大震災ですか」

「そう。これが95年の1月17日。さらに、きつい危機も襲ってくる、3月のサリンも知ってる?」

「はい。宗教テロの事件ですやんね」

「それが3月20日、さらに社会党として国防に対する姿勢が難しく大地震でも自衛隊派遣を悩んだ首相に、沖縄での米海兵隊員による女子小学生暴行事件まで発生。新しい風で政治の変革を行うどころか、ヨチヨチ歩きの内閣に地震毒ガス幼女強姦、もう一気にヨボヨボ歩きに。そして翌年1月、首相は突如退陣を表明、内閣総辞職」

「……どれも連立政権の責任とはちゃうのに……タイミング悪い、気の毒な話や……」

「せっかくの新風は三連コンボでメタメタだったの。せめて地震だけでも数年ズレていてくれれば、竹村先生も頑張れたかもしれないのに。宗教テロなんて自民の復活を狙う警視庁の陰謀かと穿ちたくなくなるくらいのタイミング」

「……………」

「逆に自民党の立場から見れば、地震は神風だったのかもね。って、こんなこと言うと久野先生に怒られそうだけど、新風を神風が吹き飛ばしたのは、確かよ」

「地震……天災は、人には、どうにも……」

「人の行う政治なんて経済失速も動かせない。せいぜい、経済を自由に生かしてあげるくらい。むしろ、経済の波で与党も浮沈する。さて、15年前の新風への苦難を私はリアルタイムで女子高生として見ていた。そして今、女子高生の鮎美ちゃんが目の前にいる。さらに、さらに、今ここに再び新風が吹いてきた。しかも今回は民主党での単独政権」

「……………」

「さあ、私といっしょに日本を変えよう」

「……………」

「今度こそ新しい風で」

「……………うちに、どうせいと?」

「協力して」

「…………… 具体的には？」

「自民党を離党して民主党に入って」

予想していた要求だったので鮎美は即答する。

「お断りします」

「お願い」

「……………断ります」

「お願いします」

今度は夏子が頭を下げた願ってくる。鮎美は戸惑いながらも断る。

「な…なんべん言われても断りますって」

「どうか、お願い。なにとぞお願い」

夏子が手を握って見つめてくる。女性に懇願されると鮎美は照れて困った。その反応を夏子は男性のようで珍しいと感じたけれど、今は鮎美を勧誘する方が重要なので続ける。

「本当にお願ひ。鮎美ちゃんの協力がほしいの」

「……………」

「喉から手が出るほど、手から触手が出るほど」

そう言って夏子が背中に手を回して抱いてくる。胸と胸があたり鮎美は心拍数が高まるのを自覚した。鮎美の手が抱き返したいと訴えてくるし、鮎美の唇が無防備な夏子の唇へ吸いつきたいと熱望してくる。けれど、あくまで夏子は同性として勧誘しているだけだ、ともわかっていた。鮎美は手で夏子の肩を撫でてから押し離れた。

「自民を裏切る気はありませんから。……………雄琴はんにも、こんなことして口説いたんですか？」

「まさか。ねえ、お願い、こっちに来てよ、鮎美ちゃん」

「まだ言いますか……………うち一人くらい最年少っただけで、そこまで価値ないでしょ」

「民主党は単独で過半数ではあっても三分の二は無い。この意味、当然わかるよね？」

「……………わかりますけど……………」

「そしてクジ引きで選ばれてる参議院は無所属が多い。採決の度に、

どう転ぶかわからない」

「……………」

「あと20人、私たち民主についてくれれば安定した政策を実施できる。逆に足りないと、小沢先生の活力党と組むか、共産党にお願いするか、どっちにしても不安定になる」

「……………」

「どうして、そんなに自民に拘るの？ 雄琴先生は自分の法案を真剣に検討してくれるなら、ときどきの与党に所属する方が合理的だつて。選挙前に民主党の支持率を見て動いてくれた。同じような判断をしてくれた参議院議員も多い。無所属のまままで協力を約束してくれた人もいる。だから、あと20人で衆参両院で過半数となるの。鮎美ちゃんが自民でいる理由は何？」

「仁義の問題です」

「……………仁義？」

夏子が首を傾げた。

「うちには形勢不利やからって昨日までの仲間を裏切ることとはできません。それが人としての仁義やと思ってますから」

「……………理由は、それだけ？」

「……………いろいろ教えてもらって恩義もありますし」

「それは、どこの党に入っても教育はするわよ。仁義、それだけの話なの？」

「……………はい、そうです」

「……………」

夏子はタメ息をつきかけて、それを飲み込み、鮎美を真っ直ぐに見て、叱るような口調で言ってくる。

「そんな子供っぽい感情は捨てなさい」

「つ……………」

「仁義より民意。総選挙で国民が選んだのは民主党」

「……………やとしても、うちは自民を選んで応援演説もしました。自民への投票もあった。うちはクジ引きで選ばれてても、もう自民を応援する立場で動きました」

「最初に自民を選んだ理由は何？」

「え……………」

鮎美は思い出してみる。自民、民主、共産、その他少数政党から自民を選んだのは最終的には住居地だった鬼々島が長年与党の自民一色だったからで、両親のことを考えて選んだ。別に政治的信念でも政策でも無い。もし、住居地が都市部だったら今でも無所属でいたかもしれない。

「あなたが自民を選んだ理由は？」

「……………」

「与党だったから？ 安定していたから？ 民意が自民にあると思っただから？」

「……………そんなところ……………です…」

実は自治会の役員に脅しまで受けたとは言いにくい。あのようなことがなければ、自分でも民主にしたか自民にしたか、わからない。やはり無所属でいたかもしれない。多くのクジ引き議員が、そうであるように無所属が中立的な気もする。

「もう今は民主党が与党で、民意も民主党にあるのよ」

「……………やとしても、今さら……………」

「そんな手芸部に入ったから、興味があっても今さら吹奏楽部には入れませんみたいな次元で政治を考えないで」

「うっ……………」

「あなた一人の一議席で、どれだけのことが動くか、考えてみて」

「……………」

「あなたの議席は、あなたのものじゃない、国民みんなのものよ」

「……………」

「このままでは最悪、衆参でねじれが生じるかもしれない。それを防ぐために連立すれば、それも、また不協和音の始まりになるかもしれない。今さら裏切れない？ 仁義？ 日本の将来は仲間ごっこのレベルで語っていいものじゃない。どうあるべきが国民全体の利益か、よく考えなさい」

「……………」

「お願い、こつちに来て」

「……………」

「即答できないなら、密約でもいい」

「密約？」

「いざ参院で採決が危ういときだけ、こちらに協力してくれる。その後、もし自民から追い出されたら、民主で必ず拾う。相当の地位と立場で」

「……………それこそ、もつとも仁義に反しますやん！」

「仁義は忘れて。大局を見て」

「うちは小早川秀秋やない！ 堺の商人みたいにも振る舞えん！」

「いっそ薩摩隼人でありたいわー！」

「あ……………あなた、どれだけ頭が古いの……………」

「古うて、けっこう！ 神風は博多と知覧の専売特許や!! 次の選挙では必ず勝つ!! 今に見ておれ!!」

「……………あなたとは、また冷静にお話がしたいわ」

夏子が会談の目的を達し得ないことに気づき、残念そうに微笑んだ。

「鮎美ちゃん、今日は来てくれて、ありがとう」

「……………」

鮎美も高ぶっていた感情が静まってくる。自分でも鷹姫の影響で武士道精神に感化されつつあるのが、古臭いとはわかっていけるけれど、もう好きになっている。鷹姫が好きなのは好きになりたい。鷹姫に嫌われるような裏切りは絶対にしたくない。けれど夏子が言ったことが正論だともわかる。

「……………」

「また会ってね」

「……………失礼します」

鮎美は一礼して知事室を出た。出たところにある控え室で直樹と鷹姫だけでなく静江もいて、さらに4人の自民党県議と3人の民主党県議が睨み合うように対峙していて、鮎美は驚いた。全員の氏名までは覚えていないけれど、とくに自民党県議とは応援演説などで出会う

こともあるので彼らが県議であることくらいは知っている。

「なにをして…」

「芹沢先生!!」

鮎美が問う前に、静江が這い蹲るように駆け寄ってきて、そして這って土下座してくる。

「どうか残ってください！ すみませんでした！ 私が間違っていました！ 許してください！」

「何を言うて……」

「芹沢先生、石永さんも駆けつけて…」

鷹姫が報告しようとしたけれど、自民党の県議4人が鮎美に詰め寄ってきて問うてくる。

「君は裏切らないだろう?！」

「知事に何を言われたんだ?！」

「こちらは、それ以上の条件を出そう！」

「とにかく会派室へ!!」

鮎美は両肩をつかまれて知事室と同じ階にある自民党会派の部屋へ連れ込まれる。途中で直樹と民主党県議たちが何か言っていたけれど、聞き取るどころではなかった。監禁されるように会派室へ入れられると、詰問される。

「どうなんだ?！」

「知事に、どう答えた?！」

「自民を捨てる気か?！」

「加賀田に何を言われた?！」

今日まで、どの県議も落ち着いた壮年の男性だと感じていたのに、今は激しく動揺していて額に脂汗を滲ませている。足元では静江が、また土下座をしていて鷹姫の給料を減らしたことを涙ながらに謝っていた。そんな騒ぎを見て鮎美は自分が離党することが、どれだけ一大事なのか、わかった。総選挙で全敗し比例復活も無かった県内では、参議院の直樹も党を離れたことで自民党の国会議員となるのは鮎美だけという状態で、その鮎美が民主党へ流れると、まったく県内に国会議員が存在しないことになる。それが県議たちを焦らせ、静江に

恥も外聞もなく土下座させているのだと実感した。

「落ち着いてください！　うちは雄琴はんとは違う！　今さら自民を裏切るようなことはしません！」

「本当だろうな?!」

「何か密約を交わしたのか?!」

「金を積まれたか?!　その倍、いや三倍！　どうにか党にかけあう！」

「いくらだ?!」

「っ…」

鮎美は強い怒りを覚えた。少なくとも夏子は金銭で鮎美の心を釣ろうとはしなかった。短い時間に友情を築こうと画策していたのは伝わってきたけれど、それは不快なものではなかった。なのに今は不快で苛立たしい。

「やかましいわ!!　うちは金で人を裏切ったりせん!!　仁義は通す!!

密約もないし、加賀田はんには是々非々であたる言うただけや！」

「「……………」」

女子高生が大まじめに仁義と言い、その目に偽りは感じられなかったので県議たちは落ち着き、そして年齢的にも性格的にも純粹で単純そんな鮎美に金銭の話をしたのは間違いだったと気づき、向けられている嫌悪感を拭おうと謝る。

「それならいい。いや、すまなかった」

「芹沢さんを疑ったわけではないんだよ」

「そうそう。芹沢先生は我々の星だ」

「けれど、これからは知事や民主の者と密談をするのは控えてほしいな」

「密談って……………うちは加賀田はんから話があるって雄琴はんが言うから会っただけや」

「それを密談というのだよ。今回は静江さんが報告してくれたから、たまたま県庁に我々もいて駆けつけたが、これからは控えてほしい。いや、雄琴が君を呼び出した時点で、罨だと思っただけだった」

「……………そういうもんですか……………」

「そういうものだ。あ、静江さんといえば、さつきから秘書の給料が、どうか、どういうことなのかな?」

県議たちに問われ、静江は慣例的に存在していた秘書給与の一部を支部会計に入れることを大幅に引き上げ、鷹姫の給料を8割まで寄付させていることを恐る恐る白状した。

「バカもん!!」

「宮本さんは芹沢先生のご友人だろう?!」

「2割3割なら、まだしも!!」

「なぜ、そんなことをした?!」

「…六角市の…………支部会計が…苦しくて…」

「そんなことが理由になるか!!」

「今は、どこの支部も同じだ!!」

「やるにも程がある!!」

「兄の石永先生の意向か?!」

「いえ…………私の独断で…………み…宮本さんには納得してもらって…」

「うちらを騙そうとしたやんね。鷹姫は減給には納得したけど、知らんうちに寄付されてるとは思ってたんよ」

「すみませんでした!! 申し訳ありません!!」

また静江が土下座をする。

「いや、もう土下座はええですから。寄付の話も済んだ件やし。高校生のバイトとしては10万でも多いし、それはそれ、もう、ええです」

「芹沢先生が寛大な方でよかった」

「まったくだ!」

「厚遇すべきところを冷遇してどうする?!」

「これで加賀田の口説きに乘らなかつた芹沢先生は、本当に立派だ!」

「うちは仁義を守っただけですから」

「そこが素晴らしい」

「やはり県の支部長は我々県議からでなく芹沢先生にしよう」

「うむ、それがいい」

「それで党本部に上申しますよ」

「え……いや、でも、……うち、女子高生ですよ？ 県の支部長は他にも適任が……」

「それがいなくて困っているんだ」

「落選中の先生方というのみな……」

「さりとて県議の我々からというのみな……」

「たしかに若すぎるが、慣例では国会議員にあてるものだし」

「うちは、まだ勉強することも多いし……支部長の業務までは……」

「大丈夫、業務というよりは飾りだから」

「副幹事長なんかと同じシンボリックな地位だよ」

「とはいえ報酬も出る」

「それほど六角市の支部が苦しいなら、県支部長の権限で多少の融通もできる」

「……。静江はん、どう思う？」

「ぜひお願いします！」

「……。静江はんって、お金を積まれたら民主に行きそうやね……」

「私はお兄ちゃんを裏切ったりしないから！」

「石永先生は……プライドありそうやもんな……」

「ともかく芹沢先生、くれぐれも自民で頼みますよ」

「はい、誓って」

つい陽湖ちゃんみたいに答えただけで、うちは何に誓うんやろ、神やないのは確かやし、仁義に誓う？ いや、ちやうな、鷹姫からの信頼に誓うんかな、うん、そうやね、と鮎美は気持ちを整理して微笑んだ。

12月 善悪

いよいよ寒くなってきた12月中旬の朝、風も強く湖面に波が立っていたので小舟では危険ということで連絡船と路線バスで通学してきた鮎美と鷹姫、陽湖はバスの窓から、かねやのクリスマスセールの飾り付けを見上げていた。

「カネちゃんの家、派手に飾ってるなあ」

「……………」

鷹姫と陽湖は無関心そうにしている。バスが学園前に到着して降りると、鐘留も登校してきた。冬服の上にコートを着込み、手袋をしてマフラーを巻き、毛皮の帽子をかぶっている。

「おはようさん、カネちゃん。お店、すごい飾り付けやな」

「クリスマスは激忙しいから、アタシまで手伝わされるんだよ」

「ええことやん。カネちゃん、進学も就職もせんにやる?」

「家事手伝い♪」

「家政婦さんがおるのにか」

「どうせ、そのうち親が婿を探してくるよ。かねやを継ぐに相応しい、おとなしくて従順で扱いやすい男を。読めないのは銀行員系か、菓子職人系か、どっちかなあ、って」

「カネちゃん、可愛いんやから自分で恋愛したらええやん」

「恋なんか一回で十分だよ、もう要らない」

「……………」

まだフタマタかけられたこと引き摺ってんにやね、かわいいそうにと鮎美は想ったので、あえて話題を変える。

「クリスマスやのに、この学園は、まったく飾り付けせんね」

「シスター鮎美、その理由をお忘れですか?」

「いや、覚えてるよ。サンタクローズ伝説とキリスト教って、ぜんぜん関係ないらしいね。そやけど、ここまで徹頭徹尾無視するとは。いつそ天皇誕生日でも祝つとく?」

「天皇も神ではありませんよ」

「知ってるし。っていうか、ガチに唯一神を信仰してる人から見ると、八百万の神とか、半神半人の天皇陛下って、どう見えるの？」

「……。率直に言えば、間違った信仰をもち、迷っておられる気の毒な方々です」

「なるほど。それにしても……」

鮎美は陽湖の頬から首筋を撫でた。

「陽湖ちゃんのアトピー、ほとんど治ったね」

「はい。おかげさまで！」

陽湖は嬉しそうに微笑んだけど、お尻も撫でられて困る。

「だからって、お尻まで撫でないでください」

陽湖はお尻を撫でてくる鮎美の手から逃げた。

「ごめん、ごめん、つい」

「アユミンって、やっぱり、その気があるんじゃない？」

「うくん……どやろねえ」

鮎美は受け流そうとしたけれど、今回は鐘留が追求してくる。

「男と女、どっちが好き？」

「うくん……どうかなあ」

「彼氏いたことある？」

「それは無いかな」

「初恋は？」

「……秘密」

初恋と言われると、小学2年生の頃に好きになった近所の同級生だった女の子と、中学3年で対戦した鷹姫の顔を思い出してしまう。どちらが初恋だったのか、自分でもわからない。小学生の頃の想いは、かなり曖昧だった気がするし、中学で鷹姫と接したのは、ごくごくわずかな時間だった。昇降口で靴を履き替えている時、陽湖が耳元へ囁いてきた。

「そのうちバレますよ」

「……」

「次、セクハラしたら言ってやろうかな」

「陽湖ちゃん、それは勘弁して」

「男の人だったら、とつくに逮捕されるようなこと何回もして」
ヒソヒソと話していると鐘留が問うてくる。

「何を話してるの?」

「シスター鐘留には関係ないことです」

「ふん…」

やや鐘留は機嫌を損ねた顔をして、その復讐を聖書研究の授業中にしてきた。聖書朗読の後にイエスについての議論となり、鐘留は挑戦的に言う。

「イエスってさ、天皇と同じで神だけど人なんだよね?」

その問いに聖書研究の教師は穏やかに頷くと、教室の全員に問う。

「シスター鐘留の問いに、答えられる者は?」

「はい!」

いつも通り、クラス内で確かな信仰を持っている男子と陽湖だけが挙手した。

「では、シスター陽湖、お願いします」

「はい。まったく別物です。あまりに違いすぎて、何から説明すればよいか迷いますが日本の天皇は、ただの人です」

「あ、非国民がいる。きやは♪ GHQに通報しなきゃ」

「カネちゃん、それ言うんやったら、特高や」

「シスター鐘留、シスター鮎美、まずはシスター陽湖の話をお聞きませんか?」

「はい」

教師に注意されて素直に黙り、また陽湖が続ける。

「イエスは神がつかわされた天のお方であり、人の肉体をもった人です」

「結局、人なの? 神なの?」

「人であり天のお方です」

「神じゃないんだ?」

「神に等しいお方ですが、神とイエス、精霊は別々の存在です。一年生で習うことですよ? シスター鐘留」

「興味のないことって記憶できないよね。でも、イエスは人でもあるんだよね？」

「はい」

「人としてのイエスって相当なドMだよ」

「……………。神とイエスへの侮辱は場合によつては退学処分になりますよ」

「久しぶりに生徒会長って顔したね」

「……………」

「別にアタシは侮辱してないよ。誉めたの。だって、えらいじゃん。みんなの罪を背負って磔になったんでしょ。えらい、えらい。なかなか普通の人ができることじゃないよ。ってことはイエスは普通の人じゃないことは確かだよ」

「……………何が言いたいのですか？」

「イエスがSか、Mかって言えば、絶対ドMだよ」

「……………。私は低俗な言葉を退けます」

「キリスト教って、すごいよね。マザー・テレサ、ジャンヌ・ダルク、ナイチンゲール。男だとアルベルト・シュヴァイツァー、小西行長。こういう人たちに共通する生物学的な特徴ってわかるかな、月ちゃん？」

「それは……………確かな信仰です。若干、カトリックの教えは神の真意からそれてはいますが、聖書研究の途上にあつて彼らは偉大なシスターでありブラザーです」

「不正解。アタシの質問は生物学的な特徴って言ったよ？ 問題文は、ちゃんと考えようね」

「……………では、シスター鐘留は、どう考えているのですか？」

「自己保存っていう生命にとつて基本的な個性が極端に弱くて、自己犠牲っていう個性が、やたら強い。そして善行に対して、その自己犠牲を働かせる人たち。かりに極悪人っていう言葉に対義語を作るなら、極善人と言つていい人たち」

「極善人……………」

「テレサもナイチンも豊かな家庭に生まれたのに、その立場を捨てて

善行に尽くしたよね。こういう人たちを極善人と呼んでもいいと思わない？ ちよつとした普通の善人、たとえば電車でお婆さんに席を譲ってあげたり、拾った財布を届けたり、迷子を交番に連れて行ったり、ほとんど自己犠牲は無いけど、そこそこ善行を心がけるのが普通の善人だとしたら、そんなレベルを超えて常人では考えられない、ま
ずやらない、善行をするのが極善人。どう？」

「それは……そう言われれば、言葉の定義として……そうですね。カトリックなどでは聖人と呼びますが……」

「じゃあ、極善人に対して極悪人のことも考えてみよう。極悪人って
いうのも、また自己犠牲の精神に富んでるよ」

「……………」

陽湖が意味がわからないという顔をして首を傾げる。その反応は
予想内だったので鐘留は説明を加える。

「悪人にも、普通の悪人と、極悪人がいてさ。超悪を極めてる人たちは
自分を犠牲にしても悪を行う。たまにいるよね、人を殺してみた
かった、っていう常人には理解できない理由で殺人をする人。むしろ
くしやしたから手当たり次第に斬りつけた、とは違うよ？ だって、
そいつはむしろくしやしなければ、そんなことしなかったはず。ただ
純粹に人を殺してみたかった、むしろくしやもしてないし、けっこう
裕福な家庭に生まれてたり、頭が良くて医師だったり、そこそこの社
長だったりするのに、ただ殺したいから人を殺す。結果として、いつ
か逮捕されるかもしれないのに、自分の立場まで犠牲になるかもしれ
ないのに、悪を行う、それが極悪人」

「…………それは自己犠牲でしょうか？」

「犠牲になるじゃん。悪のために自分も犠牲になる。善のために犠牲
になるときだけ、犠牲って言葉を使わなくてもいいじゃん。少なくとも
も自己保存っていう基本が弱いって意味ではナイチンやテレサと、
いっしょ」

「…………いっしょにするのですか…………」

「極端な個性って意味でも、いっしょ」

「善か悪か、プラスかマイナスかで大違いですが…………」

「極悪人に比べると、普通の悪人は、わからなくもない動機で罪を犯すよね。たとえば、家が貧乏だから御菓子を万引きしたとか、パチンコにハマって生徒の修学旅行費を使い込んだとか、ビールを呑んだけど運転したとか、混んでる電車の中で女の子が目の前にいたのでお尻を触ってみたとか、親からもらったお金だから、親の愛つてことで贈与税申告しなかったとか」

「鳩山やんー」

一昨日発覚したニュースに思わず鮎美はつつこみを入れた。敵失で喜ぶのは情けないと思うものの、自民党という立場からすれば新総理の醜聞は奇貨だった。発足したばかりの民主党政権の新総理が親から多額の財産を贈与されながら申告していなかったというのは自民党の金権政治を批判する舌鋒が、そのままブーメランとなって突き刺さる形になっている。鐘留は片目を閉じて可愛らしい表情を見せてから、話を続ける。

「こういう普通の悪人と極悪人は違うよね。普通の悪人は自己保存の欲求を失ってない。むしろ、自己保存が犯行の動機だったりもする。御菓子が欲しかった、パチンコで遊びたかった、タクシー代節約したかった、お尻触りたかった、贈与税払いたくない。みんな結果は残念だったけど、うまくいけば自己保存と言えなくもない」

「シスター鐘留は、何が言いたいのですか？」

「もう少しでわかるよ。さて、極悪人は自己保存が、ぜんぜん無かったり、すごく弱かったりする。そして常人には理解できない悪を行う。殺したいから人を殺した。そこに金銭的な目的とか無い。極善人が見返りを求めず、人を救うのと同じに、ただ純粹に人を殺したいという衝動に身を任せた。自分も犠牲になるかもしれないのに、悪に尽くした。そして、たいいてい一人殺しただけでは満足できず、殺し続ける、逮捕されなきや、次々と人を殺す。こういう極悪人、たまにいるよね。自己保存より、やりたいこと優先、どこか頭が壊れてる欠陥品」

「……………」

「ところで、人の個性つてき、だいたい正規分布することが多いんだよ。知能指数なんか典型的な例だけど、身長とか、鼻の高さとか、足

の速さとかもさ。中央値や平均値には多くの個体があてはまる。でも、高すぎる身長 of 個体は、ごくわずか。逆に低身長も、ごく少数」

鐘留は指先で宙に山のような曲線を描いた。だいたい of クラスメートたちは、それが正規分布曲線だと受験生なので理解できる。

「さて、人の善性と悪性、道徳性と言ってもいいかな。この個性も正規分布するかもしれないよ。普通の人は中央にいる。人を殺したいとは思わない。けど、妹を殺されたら犯人を殺してやりたいと思う。万引きはしたくない、だって逮捕されるかもだし、お店に迷惑だし、でもでも、ママがお小遣いくれないの、お腹が空いたの、一つだけならいいよね」

「あかんで」

思わず鮎美がつっこんでくると鐘留は嬉しくて声のテンションをあげる。

「パチンコに行きたい！ けど、お金がない。そういえば机の中に修学旅行費が。いや！ いかん！ これは生徒たちの親が一生懸命働いたお金なんだ！ けど、来週は給料日だ、それで戻しておけば大丈夫かも」

「あかんで」

「テレビを見てたら震災孤児の特集が。とつても可哀想！ 思わず千円寄付しました、アタシって、いい人♪ でも、アフリカで毎年100万人死んでるけど、まあ、それはいいや、考えないでおこう。っていうか100万人、どうやって助けるんだよ」

「……………」

「小さな子供が川で溺れてる。よし、助けよう！」

「ええんちゃう？」

「小さな子供が川で溺れてる。動画を撮ってネットにアップしよう！」

「あかんやん！」

「小さな子供が川で溺れてる。でも、オレは泳げないんだ。しかも台風で増水してる。オレまで死ぬかも。あ、見えなくなった、もう無理だ、かわいそうに。神よ、テキストになんとかしておいてくれ」

「それは仕方ないやろ。後半、いちいち陽湖ちゃんを刺激すんのは、やめとき。ほんで何が言いたいねん？」

「普通の人にはさ、普通の道徳性だよ。溺れてる子は助けたい。けど、自分の危険は考える。そのあたりが普通。他にも、理由無く人を殴ったりしない。でも、殴られたら殴り返したくなる。殴られて反対の頬を差し出すヤツは珍しい。ドMの変態かどうかはおいて、ごく少数派だし、通常でないという意味で異常、通常者でないという文脈で異常者と言えるよね？」

「まあ……そうかもしれんね」

「お尻を触られて反対のお尻を差し出す子も、あんまりいない。いたら、単に撫でてる人を好きなのかもね。それは、もう道徳性の話じゃなくて、ただの生殖行為。遺伝子が求める大切な行為になる」

「……………」

「さてさて、人の個性は遺伝子由来で正規分布すると仮定すると、ナイチンやテレサたちは、きつと中央から遠いところにいる。そして極悪人もね。両者に共通するのは自己犠牲の精神。彼らは自分を犠牲にしても、やりたいことをやった。人を救いたかった、人を殺してみたかった、方向性が真逆だっただけで、自分の人生を賭けて、やりたいうことをやったという個性は同じ」

「……………」

「彼らは極端に自己保存が弱く、極端な欲求を実現した。ジャンヌ・ダルクなんかはね、もう少し別の説明もできるよ。フランス人という群れを守るために1体の個体が闘争本能に目覚めて、すごく頑張った。それだけのことかもしれない。男の中に戦いのセンスが優れた人がいるように、たまたま女の中に、その個性が有っても不思議じゃないから。そして、自分が属する集団を守るのは、ありふれた行為だよ。たとえばえ自己犠牲するとしても特攻隊も頑張ってくれたし、まあ状況が求める普通の行為といえ、そうだよ。けど、テレサやシユヴァイツァーは違う。インドやアフリカ、自分が属しないところを助けにいった。でも、それも説明がつく。だって同じ種だもん。ただ、極端なのは自己犠牲が多だったところ。そしてテレサもナイチンも親

不孝者という側面はあった。親は娘に、そんな自己犠牲は望んでなかった。普通に結婚して普通に子供を産んで家名を存続してほしかった。世界的に有名になられても、嬉しいような、ちょっと困るような、もう少し普通の子に育ってほしかったのに、どうして、あの子は、あんな風に。普通に育てたつもりだったのに」

「カネちゃんの話、長いな、まだ続くん？」

「いよいよ本題、イエス様。さて、人だった彼も極端な個性の持ち主だよな。殴られたら反対の頬を差し出し、あげくに磔になれば全人類が救われると思いついた。かなりイミフな妄想だし、ものすごい自己犠牲。でも、やりたかった、そうしたかった、ママが悲しくてもボクはやるよ、やりたいことをやるんだ。だって、頭の中の神様が言うんだ、人を救いなさいって」

「……………」

「イエス君もかい。ボクも頭の中で声がするんだ、人を殺しなさいって、頭の中の悪魔が言うんだ。ジャック、女たちを切り裂くんのだ。やりたいことを、やろう、よし今夜も出かけるぜ。たとえば、この身が犠牲になろうとも、切り裂いて回るぜ」

「……………」

「という風にね、極端な個体であるという意味で彼らは同じ。そして自己保存についてのプログラムが弱かったんだよ。きっと彼らの塩基配列には、どこかしら共通コードがあるよ」

「…………シスター鐘留…………どうして、そこまでイエスを侮辱するのですか…………」

「侮辱はしてないよ。生物学的に分析しただけ。もう少し分析するのなら、マリアは絶対に嘘ついてるよね？」

「マリアが嘘を？　なぜですか？」

「処女受胎、生物学的には考えられないよね。絶対、どこかで婚約者以外の男とやったんだよ。それで妊娠、で、やばい！　このままでは捨てられる、なんとか言い逃れしないと！　って焦って考えた嘘が、神様にやられました、それで妊娠したの、だから処女よ、問題ないわ！」

「……………」

「しかも優しい婚約者は、その嘘にのってくれた。アホだったのか、マリアにベタ惚れだったのか、そうだね、君は処女だよ、これは神の子だよ、みんなに自慢しよう」

「……………」

「まさかマリアも二千年先まで信じてる人がいるとは思わなかっただろうね。夫と子供は信じて。子供なんか教祖気取りでオレは神の子、救い主って、ママの嘘に人生を捧げたし。キリスト教はね、誰が天才的かって、マリアだよ。彼女の言語能力は、すごかったんだろうね」

「カネちゃん……たしかに科学的に考えると処女は妊娠せんし、カネちゃんの分析にも一理あるかもしれないけど……ここはキリスト教の学園やで、もう少し慎んでやりよ」

「人の行動なんて、だいたい遺伝子で決まってるんだよ。アタシもイエスも人間、やりたいことをやって、言いたいことを言う。そういう個性に生まれてきた。どう？」

「……………ほな、一つ訊きたいわ」

「なに？」

「自己犠牲という個性は、同性愛みたいな個性と同じで、子孫に受け継がれにくいやん」

「あく……うん、そうだね」

「やのに、なぜ無くならんの？　うちに尻尾はない。体毛も、かなり減った。それは進化論的に不要だったり、受け継がれなかったからやろ。そういう考え方でいくと、自己犠牲なんて受け継ぎにくいし、同性愛なんて受け継がれるわけないのに、いまだに一定数は存在するやん。なんでなん？」

「うっ……うっ……遺伝性の疾患じゃないしね……。でも、高すぎる身長なんかは巨人症って病気に分類されるし、ホルモン分泌の異常……にしても淘汰されて消えればいいのに、けっこう同性愛者って数が多いらしいし……」

鐘留が考え込む。そして閃いた。

「個体に注目するから受け継がれないことが説明できなくなるけど、

種集団としては、なにか利用価値があるのかもよ」

「価値が？」

「自己犠牲や人を殺したいって衝動にさえ、利用価値はあるよ」

「どんな価値があんねん？」

「戦場では勇敢に戦ってくれたかもね。今みたいな兵器のある戦闘じゃなくて、ほんの4百年くらい前のチャンバラだったらさ。立派な英雄として利用価値はあるよ、巢を守る戦士としてのハチやアリみたいなね」

「……………自己犠牲は、そうやとしても、ほな、同性愛は？」

「同性愛にだって種集団にとっては利用価値があるかもしれない。たとえば、すべての個体が夫婦になって子供をつくってしまおうと、子育てにエネルギーを注ぐから他のことができなくなるよね。分業って意味合いでさ。他のことをしてくれる個体も一定数ほしい。なにも子供をつくるだけが能じゃない。役割分担ってことで、どんなにエッチしても妊娠しない層を用意してるのかもよ」

「……………役割……………分担…か…」

今度は鮎美が考え込み、陽湖が問う。

「シスター鐘留は人間の自由意志と教育、躰けのことを忘れています。人は自ら善を行うべきか、悪に染まるか、神に与えられた自由意志によつて選択できますし、無垢な子供には親が何が善で、何が悪であるか、教育し、間違ったことをしないよう躰けることができます」

「忘れてないよ。けどね、教育とか躰けで、いい方向に行くのは、せいぜい普通の人、中央値の人たちだよ。だから、環境と教育が悪いと、普通の悪人になるし、良好な環境で十分な教育を受けられれば、普通の善人になる。でもさ、テレサのパパとママは、あんなビツクマザーになるよう狙って教育したと思う？ ナイチンの両親は看護婦になることに反対したんだよ。宮崎勤って覚えてる？ 幼女連続殺人の、あの男の両親は息子があなるように狙って育てたと思う？ それどころか事件後、お父さんは自宅を売り払って被害者遺族に賠償してから自殺したんだよ。まあ、宮崎勤がロリってことは確かだけど、極悪人か、どうかは論を待つよね。彼は手に障害があったから、それが無

ければ、あそこまで反社会的な行動は取らなかつたかもしれない。でも、ロリはロリ。ねえ、ロリってさ、躰けの問題？ 親は息子がロリにならないよう教育できると思う？ できるなら、みんなやるよね。逆に、物好きな親が息子をロリにしようと思えば教育できると思う？ 大きなおっぱいは邪道、ちっぱいこそ正義、18歳なんてババア、女の子は7歳までが匂って」

「……………」

「もつと言えばさ。同性愛者は、どうよ？ 普通の親は子供を同性愛者にしたくないよね。でも勝手になっちゃう。月ちゃんみたいな宗教やってる家は余計にそうだよ。個人の自由より教義だし。普通のご家庭だって、基本、子供を同性愛者になんかしたくない。もしも酔狂で子供を同性愛者に育てたいと思つたら、それは可能かな？ 女子校ばつかに入れたら一部はそうなるかもしれないけど、もともと、そうだったのかもしれないし。刑務所だとホモ化するヤツいるらしいけど、シヤバに出たら、まず女を買うしき。教育や躰けとかでなんとかするのは普通の範囲だけだよ。極善人も極悪人もホモもロリも、みんな先天的で、どうにもならない。ダウン症といっしょ。親が頑張つて修正できるもんじゃない。捨てるか、殺すか、それしかない」

「っ！ シスター鐘留っ!!」

陽湖が声を荒げて怒鳴ると、教師が諫めてくる。

「シスター陽湖、落ち着きなさい。赫怒してはなりません」

「っ……………はい…」

陽湖が自戒して頭を下げて神に祈っている。鮎美は陽湖が教義で怒りを避けているのに、こんなにも怒ってくれた理由を察したので胸が痛くなった。

「陽湖ちゃん……………」

「アタシの勝ち♪ 論破つてこといい？」

「……………」

陽湖と鮎美が黙っていると、教師が穏やかに鐘留へ告げる。

「シスター鐘留、あなたは善と悪、道徳ということについて深く思索をめぐらせているんですね。それは素晴らしいことです」

「……………誉められても……………困るかな。アタシは、先生と同じ神は信じてないし」

「そう正直に言い、そして自分について考えることも、また大切なことです」

「……………」

鐘留が困ったように耳たぶを指先で摘んで唇を尖らせた。そこで鮎美のスマートフォンが時刻セット通りに振動した。鮎美が挙手して立ち上がる。

「すみません、先生！　うちと鷹姫は早退します！　仕事で東京に行かんとあかんのぞ！」

鷹姫も黙って立ち上がり、教師へ一礼している。

「ほな、またね。カネちゃん、陽湖ちゃん、ケンカせんといてな」

「はいはい」

「はい、わかっています。お氣をつけて」

「……………」

鮎美と鷹姫は教室を出ると、校門へ急いだ。予定通りに静江が軽自動車で待っていてくれるので乗り込み、すぐに高速道路で井伊駅へ向かい、三人で新幹線に乗った。東京までの数時間を仮眠して過ごしたかったけれど、年末だからなのか、他の国会議員なども多く乗車していて、挨拶を交わすこともしなければならず、ほとんど眠れなかった。そして東京に着くと自民党の本部に足を運ぶ。

「でかいビルやな……………どれも、これも……………東京か……………やっぱり大阪より発展してんなあ」

「……………」

鷹姫も黙って高層ビルを見上げている。歩道から見上げると、かなり首をそらさないと天辺が見えないほど、どのビルも高い。静江が恥ずかしそうに言ってくる。

「やめてください。二人とも。田舎者丸出しだから」

「そんなん気にせんときよ。田舎でけっこう。な、鷹姫？」

「はい」

「うちらから見たら、むしろ江戸なんぞ、にわか都やん。京都に大阪、

六角市には安土城もあった」

「田舎自慢もやめてください」

「はいはい。ほな、行こか」

三人で自民党の本部ビルに入ると、新たな自民党総裁となった谷柿の秘書が待っていて、すぐに案内してくれる。

「総裁は面談中ですので、ここでお待ちください」

控え室で待っていると数分で呼ばれた。

「芹沢先生、お入りください。秘書の方も、ごいっしよに」

「はい」

三人で総裁の部屋に入った。立って迎えてくれた谷柿は小柄な男性で、鮎美より少し大きいくらいだった。人を圧倒するようなオーラを持っているわけではないけれど、会った瞬間に親しみを覚えるような魅力を三人とも感じた。

「電話では何度か話しましたが、会うのは初めてですね、芹沢先生」

「はい。はじめまして」

鮎美と谷柿が握手し、さらに谷柿は静江とも握手する。

「石永静江さんも、よくやってくれているそうですね」

「そ、そんな…私なんか足を引っぱっているくらいで…」

「頑張ってくれていると、お兄さんから聴いていますよ。そして、お父さんには私もお世話になったものです」

静江の次には鷹姫へも握手を求めてくる。鷹姫も秘書として握手を求められる場合があることに慣れてきたので、剣道試合後に握手を交わすような堂々とした態度で谷柿と握手を交わした。

「あなたが宮本鷹姫さんですね？」

「はい、宮本です」

「芹沢先生と、いっしよに頑張ってください」

「はい、頑張ります」

「なるほど、二人とも女子高生とは思えない、頼もしきですね」

谷柿が仕草でソファを勧めてくれたので全員で座り、ゆっくりとした話し合いの雰囲気になる。

「今の情勢は語るまでもないですね。この状況下で自民にいてくれる

芹沢先生を、正直ね、かなりあてにしていますよ」

「うちなんか……、けど、裏切ることはしません。そこは信じてください」

「ありがとうございます。信じますよ。情けないことですが、まだまだお若い芹沢先生を本当に、あてにしています。それくらい自民がおかれている窮状は厳しい。まさに崖っぷちです」

「そんなに……厳しいんですか?」

「ええ。私が総裁に選ばれたのも、この窮状でのリーダーを引き受ける役が、なかなか見つからなくてね。派閥の数で言えば少なかった私に調整役としての期待が回ってきて選ばれたくらいですからね」

「……総裁は与党に戻ったら総理大臣ですよね?」

「ええ。4年も保てば。そして総選挙に勝てれば、の話でね」

次々と面談者がある忙しい谷柿との面談はコーヒー一杯を飲む間で終わりがけとなり、そのタイミングで谷柿の秘書が札束の入った封筒を静江に差し出しているのので鮎美は表情を曇らせた。

「谷柿先生、あの封筒は?」

「餅代です」

「……。うちは、そういうのは……」

すでに振込でなく現金で渡される金銭というのは、おおよけにしにくい金銭なのだとかわりつつある。そんな鮎美の表情を見て、谷柿が穏やかに微笑んだ。

「聴いていた通りの人ですね、芹沢先生は。いや、女子高生に渡すものとしては怪しい限りかもしれませんが問題のない金額です」

「……見た感じ100万ありそうなんですけど?」

「ええ、一昔前の餅代といえど300万ということもありましたが、今は贈与税の問題もあることは、ご存じですね?」

「はい。……鳩山総理も叩かれてるところですし……」

「それもあって100万になっています。クジ引きで選ばれたゆえ、選挙資金は要らないと考えるかもしれませんが、新年となれば各種の新年会に呼ばれることは多数あります。それこそ一日に何件も、ほんの5分、10分で掛け持ちして回るようになるでしょう。そして、そ

の度に会費を払って行かれることになる」

「え？ 心付けとか寄付は禁止なんじゃないですか？」

「寄付は禁止です。けれど、他の参加者も払っている会費を払うのは適法です」

「あ、そっか…」

「それも、秘書さんの分まで払う場合もあります。そうする方が、相手が潤いますし、違法ではありません。会費は1万、2万ですが、秘書さんと合わせれば3万、6万となり、次々と新年会に顔を出せば100万も消えるでしょう。実質、ビール1杯、いえ、芹沢先生は、まだ飲酒できる年齢ではないのでウーロン茶1杯のために、1万2万と払っていくことになり、それを自分の報酬から払うのは、さすがにバカらしいでしょう」

「…はい…それは、たしかに…」

「そういうお金なのです。右から左に交際費で消えますし、領収書を発行していただいて収支につける先生もいます。そうされるとスッキリしますし、そうされずポケットに入れていただいても問題のない金額です。なので、受け取っていただき、煩わしいとは思いますが、各種の新年会に出席して、地元の方々と交流しておいてください。これも議員の仕事です」

「…：…わかりました。そういうことなら。静江はん、管理と領収書の方、お願いします」

「はい」

静江は大切そうにハンドバックへ封筒を入れると、鮎美が書けと言うことを予想していたので芹沢鮎美名義の用意していた領収書を谷柿の秘書に渡した。それで面談は終わりとなり、鮎美たちは次に久野を訪ねた。衆議院議長だった久野は、すでに先の総選挙に出馬せず引退を表明していたけれど、選挙が大敗に終わったことに責任を感じ若手の育成に力を入れていた。鮎美と会うのも、その一環で応接室で再会した。

「お久しぶりです、久野先生」

「久しぶりだね。もう、すっかり芹沢先生という貫禄になってるね」

「いえ、まだまだです」

再会の握手を交わし、これからのこと話し合い、その途中で久野は封筒を出した。また現金をもらうのかと鮎美は気が重くなったけれど、封筒は薄かった。

「芹沢先生は、春の会という団体を覚えているかな？」

「春の会……はい、覚えています」

「その団体が自民を支援し続けてくれる者と、民主へつく者に別れてしまつてね。副代表をしていた牧田詩織という人は覚えているかな？」

「は……はい、覚えています」

他の男性二人の顔は忘れつつあったけれど、詩織の顔は鮮明に覚えている。

「その牧田さんが自民を支援してくれる派の代表になったのだけれど、ちよつとした頼み事を受けていてね。それを見てもらえるかな」

「はい」

鮎美が受け取った封筒を開ける。中身は現金ではなくて詩織の履歴書だった。

「……愛知県立知多東高校……ミュンヘン大学……ドイツ連邦警察

……日本貿易振興会 J E T R O ……退職後、3年前から春の会副代表……現、春風会代表」

「代表といつても、まとめている会員は少数で実質、今は無職と言つていい状態だそうだ。その彼女が芹沢先生の秘書になりたいと志望してきていて、私から推薦してくれないかと頼まれたわけだよ」

「……久野先生の推薦……ですか……」

鮎美が複雑な表情をしたので久野は察した。

「優秀な人だとは聴いているけれど、無理にとは言わない。ただ、牧田さんの実家は、私の地元でもあつてね。私が引退した後に地盤を引き継いでくれた小林くんは落選してしまい、来月の県議選に再び挑戦するのだけれど、牧田家の協力は不可欠なんだ。かといって、芹沢先生の秘書は芹沢先生が決めるべきものだから私から押しつけるもので

もない。そこは当然なのだけれど、私の立場も考えていただいて、断るにしても丁寧にしていただきたいのと、彼女は秘書業務に就くことを望んでいるが、いつそ形だけの秘書、名目だけの秘書という手もある。かくいう私も政界に入る前はサラリーマンをしていて、いきなり父の後を継いで出馬というわけにもいかないから、竹上先生の秘書を名目だけ務めていたことがある。実質、何もしない、名前だけの秘書というのも政界によくあることで、そんな秘書にしてお茶を濁していただけると、推薦した私の顔も立つわけなんだ。すまない。迷惑かもしれないが、考えてほしい」

久野に頭を下げられると、鮎美に選択肢は無かった。

「わかりました。考えさせていただきます」

「よろしく頼む」

久野との面談が終わると、鮎美たちの東京での予定は終わった。

12月 着想

東京での義務的な予定が終わり、日が暮れかけている。静江が時刻を見て言った。

「今なら新幹線で帰って帰れなくはない時刻ですけど、慌てて帰るのも疲れますね」

学校を早退して東京に出て、さらに日帰りというのは新幹線のおかげで可能ではあるものの疲れることは確かだった。

「静江はん、明日の予定は？」

「とくにありませんでした。芹沢先生と宮本さんの学校があるだけです」

「鷹姫、うちの出席日数って、もう足りてたやんね？」

「はい、問題なく卒業できるはずですよ」

「ほな、今日明日は東京で、ゆっくりしよか」

「はい！」

静江は嬉しそうに返事をしたし、鷹姫にも異存はなかった。自由時間ができたので鮎美が問う。

「どっか行きたいところある？」

「デイズニーランドなんて、どうですか？」

静江の提案に鮎美は悩む。

「うーん……うちは国会議員になるやん？　ここまでの交通費も経費で落とすし、東京でも、うちの顔を知ってる人いるみたいで、ときどき視線を感じるんやわ。……さすがにTDLは、まずい気がするわ」

「そうですね、すみません。つい、お兄ちゃんとか東京に来たときも、いつも、そういう理由で行けないから……。では、芹沢先生は、どこに行かれましたか？」

「うちは……国会議事堂と、霞ヶ関を見ておきたいかな」

「それって任期が来たら、飽きるほど行きますよ」

「たしかに……そうかも」

「この時間だと通常業務も終わってますし。外観だけになります」

「静江はんは何度も来たって感じやね」

「そういう家で育ったので」

「それも大変そうやね。そうになると、あとは美味しいもんでも食べに行くかくらいかな。鷹姫は、どこか行きたいところある？ 名所とか」

「……………あえて言えば、靖国神社へお参りしたいです」

「靖国かあ……………それなら、明日の朝やね」

「前から思っていたんですけど、宮本さんって見た目が女子高生なだけで中身は、お婆さんだったりしない？」

静江の問いに、鷹姫は気を悪くした風も無い。

「静江はんは見た目は大人やけど、中身はせいぜい女子大生って感じやね」

「うっ……………」

「もう、この時間やし、ホテルを予約して美味しいもん食べて今日は終わりちゃう？ 明日は靖国へ行つて国会議事堂を眺めて帰るか」

「そうですね」

「鷹姫、なにか食べたいもんある？」

「……………東京のことは、よくわかりません。私は何でも良いです」

「静江はんは？」

「いっぱいあるんですけど、その中から芹沢先生が選ぶっていうのは、どうですか？」

「ほな、そうしよか」

「では、有名どころだと……………ここと、こことか」

静江は自分のスマートフォンでグルメサイトを開き、都内の有名店を鮎美へ見せてみるけれど、どの店も予約が必要だったり、すでに当日は売り切れたりしていて、ランキング上位の店は諦めた。三人で予約したホテルに近い場所にあるという理由で洋菓子店の喫茶コーナーに入ってケーキを食べる。

「東京って、ほんまに人が多いな」

「そうですね」

静江はチョコレートケーキを食べている。鷹姫はイチゴのミルフィーユで、鮎美は同じくイチゴのムースにして二人で分け合っている。

「ほら、鷹姫、あーんして」
「…」

少し恥ずかしそうな表情で鷹姫が素直に口を開けてくれるのが嬉しい。鷹姫の口の中に入れたスプーンをそのまま鮎美は口に入れる。温かい金属の感触がした。

「美味しいけど、これやったら、カネちゃんの店で食べてても、かわらんね」

「緑野の店も、とても美味しいですから」

「かねやは全国的にも有名なレベルよ。ランキング上位の店と同じくらい」

「料亭でも、あの招福亭がトップクラスに入ってたし、わざわざ東京に来んでも、だいたい県内で済みそうやね」

「その発想、私たちの悪いところなのよ」

「そうなん？」

「外に出なくても県内で済む、わざわざ行くほどじゃない。前にバスガイドさんが言ってたんだけど、私たちの県の人が一番、どこの観光地に行っても感動しなくて、反応が薄いんだって」

「そうなんや。うちは少し前まで大阪人やけど」

「大阪人は、どうか知らないけど。大阪とも京都とも近いし、名古屋とも近くて、東京も新幹線で日帰りできるせいなのか、他のどこの観光地に行っても、まあこんなものか、っていう薄い反応になる県民性らしいよ」

「ふーん……」

「だから、新幹線の新駅も無くていい。わざわざ県が借金してまで造らなくていい、って発想につながるのよ」

「なるほど、井の中の蛙、大海を知る気もない、やね」

「無理に水の合わない大海へ出る必要もないって発想も私もわかるといえば、わかるけど。あ、話を変えますけど、久野先生に推薦された

秘書の件、どうされますか？」

「うーん……」

鮎美が詩織の顔を想い出しながら悩む。この前、あえて自民と民主へフタママがけすると、わざわざ言いに来てくれたとき、秘書になりたいと志望してきたのは本気だったのだと実感する。

「あの人、まじめそうな人なのか、気まぐれそうな人なんか、わからんなあ。わざわざ、フタママかけるの言いに来てくれたり、その後、自民だけの派閥に別れてるあたり、一本気で誠実そうな感じはするけど。たしか、陳情してくる団体でも最初からフタママもサンママもかけてくる団体もあったよね？ この前の学童保育所の職員待遇改善の件も、そんな感じやったし」

「その方が多数派です。学童保育のような政治色の薄い陳情であれば、自民、民主、共産など、すべての政党に働きかけていることも珍しくありません。逆に政治色の強い、たとえば靖国神社うんぬんといった団体や、在日外国人参政権を求める団体などは、一つの政党に絞って働きかけています」

「在日外国人か……うちは差別はせんけど、国籍無いのに参政権ってのは、どうかと思うわ。それを認め始めたら、ある国の人口の51%が在留外国人になったとき、民主主義的に国を乗っ取れるやん」

「それに似た危機はサリンを撒いた宗教団体が山村へ大量に流入したとき発生し、村役場は住民票の転入届の受理を拒否したそうです」

「けっこう現場レベルで頑張るなあ。人権無視とか言われそうやのに」

「村長が教祖になるのは避けたいでしょうから」

「そらそうやわ。数の論理も考えもんやね。外国人といえば、あの詩織はんもクォーターとか言ってたね」

「はい、履歴書にも書かれています。最近の履歴書は出自を書く欄が意図的になくされているのに、きちんと祖父母まで」

「なんで出自の欄が無くなったん？」

「差別につながるからです。とはいえ雇用側は人物を評価するのに本音では出自を知りたいので軋轢が生じますが」

「別に隠さんでも両親のことくらい書いたらええやん」

「もし、あの教祖がお父さんでも書きますか？」

「うっ……なるほど、親は選べんからなあ……」

「牧田さんの両親は、とくに問題はないようですね。自民支持ですし、本人の経歴も立派です。私が英語ができるから、彼女がドイツ語を担当するなら、かなり幅は拡がります。とはいっても、芹沢先生の年齢と性別を考えると国際的なことに関わるのは儀礼的なことくらいだと思いますけど」

「世界的にパンダなわけやね」

「世界全体で見れば三十代で首相に選ばれたり、十代で王位を継承ということもありますし、たしかイギリスの女王も、かなり若い時期に王位継承されたはずですよ」

「ほな、世界的には有名にならんで済むかな」

「おそらく小さなニュースとして流れ、あまり人々の記憶には残らないと思います。過去には衆議院議員で25歳で当選した人もいますから。それで、牧田さんの件、どういう方向にされますか？」

「悪い人やないと思うけど……」

鮎美は身の危険を覚えるので、そばにいてもらって大丈夫なのか不安だった。その反面で好奇心もある。

「うちの東京での秘書って人選は進んでんの？」

「実は女性秘書というのは、もともと数が多くなく社会経験の少ない新卒者であれば、いくらでも集まるのですが、それでは不安ですし芹沢先生のそばにあつて情報漏洩などの裏切りがないことを考えると、牧田さんの話は悪くないとは思いますが。勤務地も東京でも地元でもかまわないとのことですよ」

「そっか……」

「あと、これは私からのお願いなのですが、芹沢先生のそばで働く秘書は私と宮本さん、あと一人として。もう三人、名目上の政策秘書を雇っていたきたいのです。中年の男性ですが」

「石永先生の秘書とかを？」

「はい。すみません。議員で無くなったために秘書給与が出ないので

す。どうか、お願いします」

「それは経費の処理として問題ないん？」

「実質的には六角市の支部で働くので、お兄ちゃんの秘書のように動いたり、芹沢先生の秘書のように動いたりもします。挨拶回りやポスターの貼り直しなどでも、たいてい両方の名刺とポスターを持って回りますから」

「まあ、問題ないんやったら、そうしてもええよ」

「ありがとうございます！」

「それは決まりでええとして……詩織はんは、どうしよかなあ……
鷹姫は、どう思う？」

「芹沢先生を慕って自ら志望してくる者ですから、一度は受け入れてみるのが度量かと考えます」

「……そうやね、鷹姫が、そう言ってくれるんやったら、東京勤務つてことで。静江はんは支部の管理もあるから地元メインになるとして、鷹姫はなるべく、うちといっしょに行動してくれる？ 地元でも東京でも」

「はい」

「おおきに、嬉しいわ！」

そう言つて鮎美は最後のムースを鷹姫の口にスプーンで入れた。その後は歩いてホテルへ移動した。空き室の都合で今夜は3人1室となる。交替でシャワーを浴びた後に、また服を着てホテル高層階のレストランへ入った。静江が予約してしてくれたので夜景の見える個室だった。東京の夜景を見下ろしながらディナーコースを食べていると静江が言う。

「こういうところには、女三人で来るより彼氏と来たいですね」

「……………」

鮎美と鷹姫が相槌を打たずにいると、静江は余計なことを言ったかもしれないと思い、慌てて話題を変える。

「それにしても芹沢先生のおかげで、本当に助かります。今、こうしていられるのも芹沢先生のおかげですから」

「そうなん？ うちは何もしてへんけど？」

「芹沢先生がいなかったら県内の国会議員はゼロ。完全な民主党王国になってしまい、党本部からの予算も大幅に削減されたかもしれないし」

「うちのクジ運は役に立ったね」

「クジ運だけではありませんよ。芹沢先生の応援演説の様子なども本部で評価されています。まじめに勉強してくれていることも」

「引き受けるからには、アホな女子高生がクジ運だけで議員になったとか言われとうないもん」

鮎美は鴨の胸肉コースを切り分けると、フォークで鷹姫の口に運ぶ。

「あの……芹沢先生、自分で食べますから。それは芹沢先生の方です」

「少し手伝ってよ。鷹姫はちゃんと稽古してカロリー使うからええけど、うちは貯まるもん。はい、あーんして♪」

楽しそうに鷹姫へ食べさせているのを見て、静江は心配になって自分のウエストを摘んだ。

「……」

まだ大丈夫、くびれてる、と静江は体形を確認しつつ、脂身は残すことにした。鮎美が夜景を見ながら言う。

「しかし贅沢なもんやね。この豊かき、日本ってホンマすごい国やわ」

高層階から見下ろす東京の街は光り輝いている。ネオンとビルの明かり、そして首都高を流れるライト、どれも六角市とは比較にならないほど溢れている。

「世界では飢えも紛争もあんのに……うちら日本人だけが……先進国だけが豊かなんちゃう？ ええのかな、これで」

「……………」

静江も鷹姫も即答できない問いだった。

「うちな、勉強してて思ったんよ。先進国の中でも貧富の格差が拡大してるやん？」

「はっ」

「それを是正せいとヨーロッパではベーシックインカムって発想が出てきてるやん。あれも悪くないとは思うけど、財源の問題と勤労意欲の問題があるし、すべての人に支給するんやなくて障碍者やとか、すごい困ってる人らに手厚く支給したら、どやろ?」

「良いお考えかと思いますが、財源の問題はどうされるのですか?」

静江の問いを予想していたので鮎美が答える。

「通貨を多めに発行するねん」

「……………。それはインフレの原因になるというのは……………わかりますよね?」

「そんな心配そんな顔せんでも、うちもアホちやうよ」

「では、何か対策が?」

「そこそこの経済力のある国々、だいたいOECD加盟国レベルの国々で協同步調を取って通貨発行を増やして、その分を自国内の困窮者への対策にあてるねん。これでインフレは起こっても為替相場で見るときには通貨安は起こりにくいはずやろ?」

「たしかに、円安やドル安にもならず……………。ですが、回りくどいことをせず単なる増税と社会保障の充実というセットとの違いはあるのですか?」

「どんなに国が増税しようとしてもタックスヘブンのせいで本当の大金持ちからは税が取れんやろ? ずる賢い大金持ちはOECDとは関係ない非課税の小国へ資産を移してる。けど、それはドル建てやったりユーロ、スイスフランなんかの手堅い通貨や。その通貨の値打ちそのものを半分にしてやったら、大資産家に50%の課税を漏らさずしたのと同じになる。脱税のしようもない。と同時に働く人、ちゃんと労働できる人が報われるように最低賃金も引き上げる。中小企業で引き上げ分に対応できんときは一時的に一部を国が通貨発行増で生み出した分を回して対応する。どうやろ? これで超富裕層には実質的な課税、障碍者なんかの困窮者には人並みの生活、労働者にも相応の報酬、そして途上国と先進国の格差も縮められる」

「……………」

静江と鷹姫は言われたことを頭で検証してみる。鷹姫が疑問を覚

えて問うてみる。

「その政策に参加した国と参加しなかった国で為替相場が大きく変動するものではありませんか？」

「そうや。それで経済力のある国の通貨価値が下がる。相対的に経済力が無くて技術も無くて原材料の輸出に頼る国の通貨価値が上がる。おまけに経済力のある国からの借款も実質的に目減りする」

「たしかに……」

「ですが、それほど大きな政策を加盟各国が共同歩調で実行できうるものでしょうか？」

静江の問いに鮎美は頷いた。

「そうやね、この政策の最大の懸念は、そこやろね。各国の主権が邪魔する。せやから、EUより強くてソビエト連邦よりは弱い程度の主権を超える権限が要るやろね。けど、参加する国が民主主義国なら富裕層は少数、大多数は得をするわけやから世論は味方してくれるはずや。共同歩調の舵取りが難しい分、強い権限が必要なんよ」

「……………」

「芹沢先生のお考えは素晴らしいと思います」

鷹姫が誉めてくれたので鮎美はとても嬉しかった。夕食を終えて三人で部屋に戻り、しばらく眠るまでの時間を過ごしていると、静江が落ち着かない様子でテレビを見たりスマートフォンをいじったりした後、立ち上がった。

「あの……芹沢先生、少しホテルのバーでお酒を呑んできていいですか？」

「あ、うん、ええよ」

「失礼します」

夕食の時も鮎美と鷹姫が飲酒可能年齢でないので静江は遠慮していたけれど、寝付くために呑みたくなかったので許可をもらって部屋を出た。静江がいなくなると、鮎美と鷹姫の二人きりになる。

「……………」

鮎美は二人きりになったことを意識したけれど、鷹姫は気にもせず鮎美を見つめた。

「な……なんよ？ そんな目で……うちを見て……どうしたん？」

また衝動のままに鷹姫を押し倒したりしたくないので、ずっと鮎美は密室で二人きりになることを避けていたのに、今は鷹姫から近づいてくる。

「さきほどのお考え感服いたしました」

「……あ……あんなん、……ちよつと思いついただけよ。実現性低いし」

「EUもソ連も最初は思いつきに過ぎなかったでしょう。何度も修正して実現に至っているはずです」

「……ソ連は失敗したやん」

「それで人類が学んだことも多いはずです。次の大きな舞台は、より洗練されるでしょう。もしかしたら、芹沢先生は今世紀の救世主、いえ歴史の父になるのかもしれない」

「……父って……うちは女やし……」

「些細なことです」

「……」

最大の問題やわ、そんな目で見つめんといてよ、うちが男やったら許嫁がおろうが、この状況なんやで押し倒して、うちの女にしてやるのに、と鮎美は目をそらした。

「凡百の政治家であれば首脳であつても、おのが一国のみの安寧に拘泥するところを、すでに全世界の行く末を考えておられる。芹沢先生が世の役に立つ道を行かれるとき、私もこの身を捧げてお仕えします」

「っ……」

「そのことを改めて、ここに誓います」

鷹姫が膝をついて頭を下げてくると、鮎美は頭を引き裂かれるような心地だった。鷹姫の期待に伝えて良い政治家を目指したいという志向と、今すぐ鷹姫を裸にして抱きしめたいという衝動で、心が割れる。

「っ……鷹姫……」

「今夜は遅くなりました。どうぞ、お休みください」

「……………そうやね…」

わかってはいたけれど、あくまで鷹姫は政治家となろうとする鮎美に協力してくれているのであって、性的なパートナーとしての可能性は欠片もない。すぐごと鮎美はベッドに潜り込む。

「……………」

「おやすみなさい」

「うん……………おやすみ」

鷹姫と別々のベッドで目を閉じた。

翌朝、ホテルから靖国神社へと移動した鮎美と鷹姫、静江の3人は畑母神と合流していた。以前に靖国神社へ来ることがあったら伝えてくれれば案内しよう、と言われていたので連絡をしたのだったけれど、昨日の今日で来てくれている。

「畑母神先生、急に連絡したのに、ホンマに来てくれはって、すんません」

「気にしなくていい。下野して、すっかり時間に余裕があるからね」

「けど、都知事選に出られるかもしれないのでしょ？」

「ははは、それについてはノーコメントとおこう。さ、行こうか」

畑母神を加えて4人で靖国神社を参拝する。参拝の後に大戦時の遺品や兵器が展示されている施設に入り、畑母神は説明をしてくれながら鮎美たちに訊いてくる。

「毎年、閣僚の参拝があるか、ないか、報道される問題は知っているね？」

「「はっ」」

「このことを第三国に売り込んで問題を大きくしたのは朝日新聞なのだが、問題の根幹はキリスト教にある」

「え？ 文句を言うてるの、中国韓国ちやいますの？」

「表面的には支那と朝鮮だが、キリスト教という邪教が世界に不幸をまき散らしているのだよ。これについて歴史を振り返って知っておいてほっし」

「は…はい」

陽湖ちゃん連れてこんでよかった、と鮎美は思いつつ畑母神の話に傾聴する。

「戦国期にポルトガルの宣教師たちが来日し布教を始めるも、後に禁教となったのは学校でも教えるが、歴史の見方として、鎌倉幕府では頼朝の子孫ではなく北条家が台頭し、元寇の影響もあるが短期に幕府が終わり、次にできた室町幕府も南北朝に別れ、なかなか安定せず、結果として戦国期に突入している。これを、ようやく家康の代で平定し天下太平となったわけだが、この時期において、まっとうな日本人なら内乱など起こしはしない。ところが、島原の乱が起こった。これは一種の侵略行為なのだよ」

「そう言われると…：そういう見方も…：戊辰戦争でも、フランスが慶喜に味方して内乱を長引かせようとしたって話もあるし」

「うむ、その通りだ！ 侵略の常套手段として被侵略国の内部を分裂させるというものがある。このとき実利で釣る場合もあれば、信仰という便利な道具で人の心を釣る場合もある。ことにキリスト教は拡大を意図した邪教であるから、自らの侵略を正義としか感じていない」

「…：はい…」

ホンマに陽湖ちゃんがおらんで良かったわ、と鮎美は今でも毎週リーフレットを島内全戸に配布している陽湖のことを想った。彼女のような熱心な信者が長く島にいれば、いずれ信者が増え、もしかしたら島原の乱のような決起をするのかもしれない、という可能性を考え、畑母神の話にも頷けるものを感じた。とくに中世の領主であった大名にとって領民の一部が神道仏教から改宗し、欧州の教皇下にある唯一絶対の神を信じてしまうようになると、天皇から征夷大將軍という名目を受けて支配している体制にはころびが生じることになる。徹底した弾圧が行われたのも、自衛といえれば自衛に感じた。

「幕末に開国で欧米が求めてきたのも、布教の自由と自由貿易であるが、自由という名目だが、実質的には精神の破壊と、経済の破壊にすぎない」

「精神と経済の……破壊……」

「国民精神と国家経済を破壊しておけば、後に武力制圧が容易くなるのだよ。もつとも一部のバカものを除いて明治の元勳方はキリスト教になぞ染まなかつた。廃仏毀釈には少々やり過ぎの感もあるが、それだけ焦っていたということだ。その時期でも欧米が圧力をかけて求めてくる布教の自由を認めざるをえず、神道を保護して遇しながら仏教を冷遇しつつ、キリスト教布教を認めるという矛盾した政策をとらざるをえなかつた」

「はい」

そのあたりは高校の日本史でも習うので鮎美たちも、よく知っていた。

「江戸期の庶民教育の高度化と、厚い神道への信仰もあつて現在でも国民に占めるキリスト教徒の割合は1%にすぎないが、逆に言えば100人に1人、国内に侵略者の手先がいるとも言える」

「…そうですね…」

「では靖国の問題に戻るが、靖国に英霊が祀られていると信じているのは、科学的事実でも歴史的事実でもなく信仰だ。これに本来は第三者が文句を言うのは信仰の自由に抵触する問題のはずだと思わないかね？」

「っ、たしかに！」

「信仰の自由を憲法で押しつけたのは400年前からの侵略の流れにすぎないし、欧米人は公の場でも聖書へ宣誓するのに、我々には政教分離を押しつけている。支那人朝鮮人が我々の信仰を弾圧しても、素知らぬフリだ。まあ、支那人朝鮮人たちも滑稽ではあるがね。我々が信じている英霊を、彼らもまた、そこにいると信じて妨害してくるのだから、無宗教を是とする中国政府などは神道など野蛮な盲信と蔑視し黙視すればよいのに黙っていられないし、韓国などは、かなりキリスト教に犯されている。ひるがえって我々は、いまだ2600年の信仰を守っているわけだよ」

「なるほど……勉強になりました。ありがとうございます」

「二ありがとうございます」

靖国神社を去ると、畑母神もいつしよに国会議事堂の食堂へ移動した。そこで昼食をとりながら鮎美が言う。

「案外、普通にカレーとか、うどんがあるんですね。もっと高級なものばっかりかと思ってましたわ」

「ははは。国会議員というのは、ある意味では日本の頂点かもしれないけれど、経済的には金持ちばかりでもないよ。私も給料取りだったから資産らしい資産は退職金と年金だけだ」

場所が場所なので他にも国会議員が多く、畑母神を見知っている人は多く、また鮎美や静江の顔も覚えられていたけれど、お互い食事なので遠慮して声をかけてくる者はいない。カツカレーを食べている鷹姫が言った。

「芹沢先生、これで十分に豊かな食事だと思います」

「鷹姫……」

「うむ、そうだったな」

山菜ソバを食べていた畑母神が感心したように頷く。

「この豊かさになれていると、つい忘れてしまうが十分に贅沢な食事だ。君たちの世代では知らないだろうが、北朝鮮が地上の楽園だと宣伝されていた頃、かの地の指導者が国民に約束したのは、白米と肉のスープだという話だ」

「お米とスープで……」

「それが最高の贅沢に聞こえる生活だったのだろう」

「結局、それもミサイルが変わって、お米とスープは出んかったんかな。やったら、最初からミサイルを約束したら、ええやろに」

「うくん……ミサイルも約束していたんじゃないかな。その公約は守られたといえ、守られたろう。朝鮮戦争後、瀬戸際外交を繰り返しつつも、彼らの立場で見れば国民の安全は守られた」

「うちの国も平和やったし」

「芹沢さん、平和ではないよ、一部の人にとっては」

「……そうなんですか？」

「拉致家族のことを忘れずにいてほしい」

「あ……はい」

鮎美が頭を下げたとき、トレーを持った男性が通りかかり声をかけてきた。トレーには鷹姫と同じカツカレーを載せている男は若かった。

「お久しぶりですね。芹沢さん」

「あ、西沢はん」

やや懐かしいという感情さえ覚えた鮎美は、共産党の衆議院議員二期目となった西沢に挨拶して微笑む。

「お久しぶりです。その節は、どうも」

「君は、まだ自民党に？」

「まだちゅー言い方は無いですやろ。ソ連崩壊したのに、まだ共産党やってるやん」

「これは失礼。ごいっしょしてもいいですか？」

「えっと…」

鮎美は年長者である畑母神へ視線を送る。畑母神は鷹揚に頷いた。

「共産党の議員先生とテーブルをとにもする機会は、めったとない。さ、どうぞ」

「ありがとうございます」

西沢が座ってカツカレーを食べ始めると、静江と鮎美は彼が左手の薬指に指輪をしていることに気づいた。おそらく以前は無かった気がする。静江が好奇心で訊いてみる。

「西沢先生、ご結婚されたんですか？」

「ええ」

「いつ頃？」

「総選挙の後に」

「それは、おめでとうございます」

「静江はん、笑顔やのに、なんか怖い顔になってるで」

鮎美が余計なことを言うと、静江が睨んでくるので目をそらして西沢を祝う。

「そうやったんですか、おめでとうさんです」

「うん、ありがとう」

「電撃結婚やったん？ ぜんぜん報道された気配ないけど」

「一議員が普通に結婚したくらいでは報道されませんよ。電撃か、どうかは……三年くらい前から付き合っていたんですけど、妊娠しているのがわかって、それで入籍だけして。今は忙しいので来年の通常国会が終わってから挙式しよう」と

「ふーん……妊娠か……なんや、うちには縁遠い世界に思えるわ」

「そんなことないですよ、芹沢さんのような可愛らしい人なら、いくらでも……あ、いえ、こういうことを言うとき最近ハハラになりますね、失礼」

「男も大変やね、最近は窮屈そうで」

「ははは……」

西沢と畑母神が軽く異口同音して笑った。お互い公人男性として発言には気をつけなければならない身分というのは実際に窮屈だったので自嘲した笑いだった。

「芹沢さんは今日は何をしに国会へ？」

「もう来月から任期が始まるし、見学に」

「それは良いですね」

「そういえば、共産党と民主党って連立政権したりするん？」

「……ははは……」

笑って間をとる西沢を、畑母神が可笑しそうに本当に何々と笑った。

「ははは！ 若さゆえの率直さ、見ていて愉快だよ！」

「え……うち、なんか、あかんこと訊いてます？」

わかっていない鮎美に静江が言ってくれる。

「今、その問題は国会で一番微妙で慎重で難しい問題なんです。訊いても西沢先生も答えられないし、まだ答えも決まっていなくてもいいんですよ。何の前置きも無しに訊くのは、失礼ですよ」

「そうなんや……それは、すんません」

「いえ、お気になさらず。そういう率直さは、これからの政治に必要なものかもしれない。密室で決めていた時代から、よりオープンな時代に」

「ほな前から訊いてみたかったんやけど、もし共産党が単独で3分の2以上あつたら、やっぱり日本を共産主義化するん？ 私有財産は憲法で保障されてるやん、そのあたりは、どうなんの？ 自衛隊も解散させるん？」

「もし、単独で3分の2という結果になるなら、その直前の総選挙で、どういう公約をあげていたかによると思いますよ。半世紀前の日本共産党と、今の我々では、やはり考え方も少しずつ変わってきていますし、それは自民も同じです。また、さらに半世紀後は、より考え方も変わっているでしょう」

「ふーん……変化はするんや……ほな、今のところは？」

「今現在で言えば、やはり企業の横暴が目につきますね。経団連が推す自民が零落して、連合が推す民主があがってきたのは、そういう民意のあらわれでしょう。我々も躍進しました」

「たしかに……」

「……否定はできないな」

畑母神も右派で保守的な方向性をもっているものの、もともとは自衛隊員というサラリーマンであったので西沢の言い分もわかる。

「大企業の横暴は、ひどい。とくに企業の内部留保が増加しているのに労働者の賃金が下がっているのは、搾取以外のなにものでもない」

「そやけど、もし自分が大企業の経営者やったとして、政府が内部留保に課税してくるとか、強引に内部留保を吐き出させるみたいな政策をとつたら、それはそれで何か対抗策をこうじるんちやうやろか。お抱えの税理士やら弁護士を使つて。国際的に資金を飛ばしたりしよらん？ しかも、飛ばした先が必ず信用できるとは限らん、その企業が外国業者に騙されて、金だけ取られても主権がおよばんかったりするから司法的に解決することもできんかったりするやん。徴税権がおよばんちゆうーことは、そういうリスクがあるちゆうーことやし、泣き寝入りすることになるわな。表にできん金なんやから、訴え出ることも難しいもん。そういう怪しげなところに日本の金持ちの金が流れるのは、国民全体としても損ちやいます？」

「……………芹沢さん……………もう完全に女子高生ではなくなってますね」

「誉められた思とくわ。ほんで実効性ある内部留保の吐き出させ方、あるん？　そもそも、それは正義なん？」

「正義ではあると考えます。もともと、さきほど言ったとおり労働者の賃金は買い叩かれて低下しています。にもかかわらず企業は過去最高益をあげている。これは正当な分配がなされていない証拠です。これを是正してこそ正義です」

「……………そやね……………たしかに正義や。買う方は買い叩きたいし。労働者には労働しか売るもんがないから叩かれる」

「資本主義は本質的に労働者への搾取を行う性質があるのです」

「せやから修正資本主義として社会保障を充実させてるのが現状やん。ところが、財源である課税が法人は税理士つこてチヨロチヨロ逃げよる。源泉徴収される給料取りは逃げようもない。うちも経費を使うってことを少しは実感として勉強したけど、ここに来る交通費が経費なんは国民感情としても納得できるやろけど、わざわざベンツやらの高級車を社長連中が経費にしよるのは納得いかんやろ」

「そう！　そうなんですよ！」

西沢が我が意を得たりと拳を握る。

「課税がね、まったく不平等なんですよ！　ちゃんと金持ちから取るべきなのに今は中流以下の人たちから徴収してばかりだ！　こんなことではいけない！　とくに消費税はひどい！　あれは累進課税の逆をいっているー！」

「せやね、社会保障を維持しようとしたら、結局は累進課税を保たんと、どうにもならん。金持ちは、ますます金持ちになるし、貧乏人は、どんどんジリ貧や。自助努力いうても最低賃金では、どうもならん」

「うん、うん、やっぱり芹沢さんは、わかってくれてるなあ。あなたは自民ににいるような人じゃないですよ。今からでも共産党に来てくれませんか？　大歓迎です」

「お誘いは、おおきに。けど、うちはコロコロと寝返るような生き方は嫌なんよ」

「そうですね……けど、芹沢さんと国会で会うのは楽しみですよ」

西沢が握手を求めてきたので鮎美も応じた。食後には閉会中の議事堂内を見て回る。静江が説明してくれた。

「まず正面から向かって左側が衆議院です」

「……………」

鮎美と鷹姫は、その目で初めて衆議院の議事堂内を見た。テレビや教科書などで見たことはあるので、とくに感想もない。少し前まで衆議院議員だった畑母神が言ってくれる。

「議長席から見て右側から与党が座り、以降は政党の議席数順に左へと座っていくから、私たちは、いつも最左翼を守っていたよ」

「最右翼政党やのにですか」

「ははは！ さすが、大阪出身だね」

「すみません、つい反射的に」

「では、次に参議院をご覧ください。こちらへどうぞ」

静江が反対側へと誘導してくれる。中へ入ると、鮎美が衆参の違いに驚いた。

「えらいガランとしてますやん。衆議院の方は所狭しって感じやったのに」

「はい。もともと衆参ともに最大議席数635で設計されたのですが、参議院をクジ引きで選ぶことになり衆議院を1200議席としたので、机や通路も狭小化して無理矢理に改築しましたから衆議院は、とても密集して座ります。逆に参議院は、人口最少県を1議席とし、その最少県の1.5倍の人口がある県から2議席で半数改選があり、3議席の県となるには3倍の人口を要しますから私たちの県も140万人で2議席県、芹沢先生と雄琴先生の2名のみです。そして人口の多い東京などは1300万人を最少県の59万人で割りますから22議席があります。それでも2位の神奈川県は15、大阪も15、愛知県も12で、総計すると現在は203議席しかありませんから、以前の参議院に比べると、とても空席が目立ちます」

参議院の内装は改築されておらず635席可能なところ203席しか利用されていない様子で寂寥感さえあった。

「勉強してはいたけど、こうやって見ると参議院はオマケにすぎんってモロに出てるなあ……実感するわあ」

「たしかに二院制を廃して一院制にする布石とも言われていますが、逆に1200分の1という存在と203分の1という存在は6倍からして重みが変わってしまいます。それは参議院を無視して強行採決するには3分の2を要するということを考えたとしても、参議院議員1人の重みは大きいのです。とくに今回の半数改選で101人のうち81人が続投を希望しながら国民審査を通ったのは56人、不信任となったのが25人で他に20人が続投を希望せず、合計45人しか新たに選出されなかったうちの一人が芹沢先生です」

「そうやったね。うちの前任者は胃ガンで辞退やったかな」

「はい。さらに、改選組のうち5人が自民から民主へ、そして6年任期だった雄琴先生を含む9人もが総選挙前後に自民から民主へ流れてしまい、新たな参議院の議席数は自民59、民主90、共産18、活力3、無所属33という状態になっています」

「かろうじて民主の単独での過半数は無しやけど、共産と組めば過半数かあ」

「このさい民主から分裂した活力が加わっても過半数でないということが救いですが、無所属が、どう動くかで本当にわからないのです」

「せやね」

「なにより新たに選出された45人のうち自民に入ってくださいったのは芹沢先生を含めて11人だけ。どれだけ芹沢先生が貴重か、わかってくださいいね?」

「わかってるって。……まあ、そう言われると、うちみたいな小娘に谷柿先生や久野先生が会ってくれはる重みも感じるわ」

鮎美は大変な時期に自民党の議員になるという実感をあらたにしつつ、国会議事堂の見学を終えて新幹線で帰った。

12月 西村

本格的な寒さが到来した12月20日、鮎美は求められて病院へ見舞いに来ていた。

「胃ガンやてね……どのくらい悪いんやろ？」

「どうでしょう……」

問われた鷹姫も困った顔をしている。静江がインフルエンザで寝込んでいたので二人で面会に来たのは西村広松という70歳の男性で、鮎美の前に参議院議員となったものの闘病のために3年の任期を終えると続投を希望せず引退していた。その西村から会いたいと言われて鮎美は、かねやの菓子と花を持って見舞いに来ている。

「4階のE11やね」

「はい」

鷹姫と二人で病院のエレベーターに乗り、廊下を進む。

「……………お年寄りばかりやね……」

「そうですね……………」

廊下には車イスに座った高齢者が何人もいて、ぼんやりとしている。鮎美たちが通っても、とくに反応することもなく、ただ座っている。

「……………」

鮎美と鷹姫は病気で入院している高齢者たちの前を静かに通り過ぎ、目的の病室に辿り着いた。そこは個室でネームプレートに西村広松とあったので間違いなかった。鮎美がノックをして入室してみる。

「こんにちは、芹沢です」

「やあやあ、よくぞ来てくれやったね」

病室のベッドに寝ていた西村は声を絞り出して歓迎してくれたけれど、一目見て鮎美にも鷹姫にも病状は思わしくなく、二人とも医学的な知識はなかったけれど、この老人が近いうちに他界するだろうことを感じた。それほど西村は痩せていたし、もともとは農業に従事していたのか、日焼けした褐色の肌をしているのに、それが血色の悪さで

ドス黒く見える。声も必死に絞り出しているという、しやがれた声だった。

「すまんね、年寄りのワガママで呼び出して」

「いえ…、お身体、大事にしてください」

鮎美がもつてきた花を渡そうと思うものの、西村はベッドから起き上がる力も無いようなので迷っていると、西村は微笑みをつくつてテーブルに置いてくれるよう頼んだので、鷹姫も菓子をおいた。

「どうぞ…」

「ありがとう」

そう言つて咳き込んだ西村は話す体力も少ないことを悟つていて、すぐに本題に入る。

「いきなり頼み事をして、すまんけど、話を聞いてくれるかい？」

「はい」

「ワシが議員となつて手がけておつた町内の風景保存会のことだな」

「風景保存会ですか…」

「……」

鮎美は聞いたことが無かつたし、鷹姫は後のために無言でメモを取る。

「阪本に阪本城があつたのは、知っておるかい？」

「……いえ」

「はい、知っております」

県民となつて一年と経たない鮎美は知らなかつたけれど、鷹姫が肯定した。

「あの城の遺構を保存しての、観光資源として人の集まるようなキレイな場所にしておるところなんじゃ。けど、ワシがおらんようになつたら行政が振り向いてくれんかもしれん。頼むわ、どうか、風景保存会のことを覚えておつて、予算をつけちゃつてほしいんじゃ。阪本の城下町を人々が訪れるようなええとこにしたい。琵琶湖の中にまで続く石垣の痕跡も利用してな。六角市に古い堀があつて琵琶湖から市街地まで水路が続いておるのは、知つてくれるかい？」

「はい」

その水路は登下校に利用しているので毎日のように見ている。

「ああいう風情あるところにしてな、京都まで通じる疎水を観光舟で行き来できるようにしたいんじゃない。頼むわ」

「わかりました。覚えておきます」

「すまん、ワシは無所属やったから、あとを頼めるもんが、たまたま後任になる芹沢さんしか思いつかなかった。3年やてきて経験から思うたが、無所属でやれることは、ほとんどない。芹沢さんは自民じやったね」

「はい」

「煩わしいことも多いじゃろし、屏風と商人は直ぐでは立たぬというようなこともあるじゃろけど、短気は損気やと思うて頑張ってくださいや」

「はい、ありがとうございます」

そこまで話した西村の咳き込みが止まらなくなったので看護師を呼び、容態が悪化した様子だったので心配だったけれど、駆けつけた看護師に病室から出るように言われたので廊下で待つ。

「……………」

「……………」

鮎美と鷹姫が静かに立っているそばを看護師たちは慌ただしく出入りしている。二人が帰るべきか、待つべきか、決断できずに時間を過ごしていると、看護師から連絡を受けた西村の息子が会社から直行してきた。少しばかり挨拶を交わすと、あとは家族に任せることにして鮎美と鷹姫は病院を出る。

「……………寒いわ…」

「そうですね」

外は寒かった。

「贅沢やけど帰りもタクシー使う？」

「芹沢先生が風邪をめされると困りますから、そうしましょう」

病院から駅までは遠いし、港までは歩ける距離ではない。二人はタクシーで港へ向かった。その途中で鷹姫の携帯電話に連絡が入った。

「はい、もしもし。芹沢鮎美の秘書、宮本です」

少し話した後、鷹姫は携帯電話を鮎美に向けた。

「東京で新たに秘書となる牧田さんから、ご挨拶したいと連絡が入っています」

「あの人か…」

詩織を秘書とする方向で話が進んでいたので鮎美は驚かなかつたものの、少し戸惑いつつ鷹姫の携帯電話を耳にあてた。

「もしもし、うちです」

「牧田詩織です。この度は私を秘書にしてください、ありがとうございます」

「……久野先生に推薦されたら断れんよ」

思わず本音が出た。

「東京での業務はお任せください。まずは着任のご挨拶をさせていただきますたいと連絡をさしあげたのですが、芹沢先生の方から秘書業務にあたって注意すべき点や心構えなどありましたら、ご教授願いたく存じます」

「注意すべき点か………やっぱり、お金の管理かな。とくに変な団体から献金とかもらわんように。あと、経費の使い方も恣意的にならないように」

「はい。変な団体の基準ですが、春の会や春風会は変な団体に入りますか？」

「うっ……微妙に、あれがギリギリのラインやと思うて」

「はい」

「ほな、あとは東京で、よろしゅうお願いしますわ」

「はい、こちらこそ、よろしく願います。芹沢、鮎美先生」

詩織は姓と名の間に、わずかな間を置いて呼んだ後、電話を切った。

「はあ……」

鮎美がタメ息をついていると、タクシーが港に止まったので連絡船で島に戻る。

「これから島の忘年会やったね」

「はい」

「……お酒も入るし……わずらわしいわあ……西村先生が無所属やつたん、わかるわ」

「飲酒を禁じましょうか?」

「それは不評を買うからやめておこ」

「はい。……飲酒とは、それほど大切なことなのででしょうか……理性を失い、愚行に走るだけのように見えますが……」

「うちも吞める年齢やないから、わからんけど、まあ吞みたい人にとつては、そのための忘年会みたいなもんやろ」

連絡船が島の港につくと、すでに棧橋で顔を赤くした役員たちが待っていた。

「おー! おかえり! もう始めておるで!」

「もう呑んでるんかい」

騒がしい酔っぱらった役員たちと公民館に入り、鮎美は挨拶をさせられる。マイクを渡され、上座に立った。

「こういうときは長い挨拶もいらんでしようから、一つだけ。たまたま、ご縁があつて、うちは、この島に來ましたし、さらに、たまたま議員に選ばれてしまいました。けど、どっちの、ご縁も大切にしたいと思ひます。ほな、乾杯!」

見知つた人ばかりなので短めの挨拶にした鮎美がウーロン茶のグラスを掲げると、拍手と乾杯が始まり、もともと騒がしかった公民館がさらに賑やかになる。茶谷も来ていて鮎美のグラスにウーロン茶を足してくれた。

「あ、おおきに。茶谷先生も、どうぞ」

女子高生にして、すでに宴席での基本的な立ち振る舞いを静江から教えてもらつている鮎美は瓶ビールを茶谷のグラスに注いだ。

「いよいよ新年から任期が始まるね。頑張ってくださいよ、芹沢先生」

「はい、せめて欠席だけはせんように体調には気をつけます」

「そういえば静江さんは、まだインフルエンザが?」

「そろそろ熱は引いたみたいですけど、まだ出てくると逆に周囲に感
染させますよさかい」

「たしかに、それは危ないな」

「お話中、すみません」

急に鷹姫が深刻そうな顔で割って入ってきた。

「鷹姫、どないしたん？」

「緊急でお伝えしたいことがあります」

「緊急……。茶谷先生、すみません、また今度」

「お忙しいようで。ご苦労さん」

茶谷と離れると鷹姫が耳打ちしてくる。いつも鷹姫の耳へ口をよ
せるのは鮎美なのに今は、その逆なのがくすぐったいけれど、嬉しい。
そんな甘い喜びは報告内容で吹き飛んだ。

「西村先生が……」

「はい、さきほど息を引き取られたとのことですよ」

「……………」

さつき見舞いに行つたばかりの人間が死んだということが鮎美の
気持ちを複雑にさせる。深い悲しみを覚えるような人間関係ではな
いけれど、それでも一人の死は重い。

「70歳……。胃ガンか……」

「西村先生が亡くなったことで緊急に支部へ戻ってほしいとのことよ
す。喪服……いえ、制服も用意して」

「そう……。黒っぽいコートも要るね」

鮎美たちは盛り上がり上がっている忘年会に水を差さないように公民館
を出ると、自宅で葬儀に参列する用意をしてから、また港に出た。も
う連絡船の無い時間なので鷹姫が頼んだ下戸で飲酒していない漁師
の漁船に乗せてもらい、本土に渡った。

「若いのに、大変だね。風邪ひかんな」

「ありがとうございます」

舟を出してくれた礼を言い、タクシーで党支部に行った。支部内には
石永と名目上は鮎美の秘書であり実質的には石永の秘書である3
人の中年男性がいて、いろいろと資料や法律の条文を読んでいる。石

永たちが鮎美と鷹姫が入ってきたのに気づいた。

「二人とも、遅くにござ苦労様」

「いえ。お通夜は、明日ですか？」

「あ、ああ…そういう話より、もつと困ったことが…いや、困ったことではないが、前例のないことに直面しなければ、ならない」

「前例のない？」

「まあ、どのみち数日ではあるが、芹沢先生は、すでに議員予定者ではなく議員として擬制される。と言えば、わかるかな？」

「あ…任期前就任ですか？」

「そうだ。本来は来年1月からの任期だけれど、西村先生が亡くなったことで参議院に空席ができる。衆議院であれば補欠選挙を行うところだし、現在の参議院制度でも任期が6ヶ月以上残っていれば、再選挙のクジ引きがされるわけだが、すでに6ヶ月どころか、あと11日だ。このような場合、次の参議院議員をもって任期を繰り上げ、その任にあてるという規定になっている」

「はい…そうでした…一回だけは読みましたけど…まさか…自分が…すんません。不勉強で詳しくは覚えておりません…」

「いや、我々も今、確認しているところだし、どういう手続きになるか前例もないので選挙管理委員会と相談しながら進めることになる」

「そうですか…」

「呼び出すだけ呼び出して本当に、すまないが今すぐ何かということは無さそうで二人には向かいのホテルを取ったから、そこで待機していてくれ」

石永は支部の向かいにあるビジネスホテルを指した。

「はい」

いざ緊急というとき鬼々島については市街に出てくるだけでも一時間近くかかることもあり、とりあえず呼び出されたというのは理解できる。

「それと、もう芹沢先生は議員となっているから、つい私も年下の女性ということでも口の利き方を間違ってしまうが、今後は気をつけていく。君たちも注意するよう」

「はい」

鷹姫と3人の男性秘書が返事をした。

「芹沢先生も、えらぶる必要はないが、地位に相応しい振る舞いをしてください」

「うっ……難しいことを……えらそうでなく、立派そうつて……」

「これまでも、うまくやっていますよ。これからも、少しずつ気をつけてください」

「努力します」

鮎美と鷹姫は資料をもらって向かいにあるビジネスホテルに入った。ビジネスホテルと言っても実体はビジネス旅館といった方が適切なくらいの粗末な建物で一泊3980円、連泊すれば2980円にまでさがるタイプの宿で、これまでも選挙活動で一部のスタッフは使っていたけれど、議員たる鮎美や石永、そして女性である鷹姫や静江が泊まるには少し抵抗のあるところだった。それだけ今は緊急事態なのだろうと感じたし、石永たちは支部で雑魚寝するのかもしれない。そのための毛布などもあるけれど、さすがに若い異性である鮎美と鷹姫には宿を確保してくれたのだと思った。

「とりあえず、休憩しながら資料を読もか」

「はい、そうしましょう」

鮎美と鷹姫は畳の上で資料を読んだ。

「そっか、参議院は半数を維持してんと、あかんのや」

「衆議院が解散された場合の緊急集会に応じる必要がありますから」

「国に緊急の必要があるときは……か。大災害か戦争つてどこかな」

「石永先生が、この憲法54条の参議院の緊急集会だけしか緊急事態条項がないのは憲法の不備だと言っておられました。私も同意見です」

「うーん……」

鮎美が畳の上を寝転がる。戸がノックされて宿の女将が言うてる。

「お布団を敷かせていただきます」

「あ、はい。お願いします」

寝転がっていた鮎美は鷹姫と同じように正座して女将を迎える。女将は慣れた手つきで布団を敷きながら教えてくれる。

「大浴場は12時に閉鎖します。部屋にはシャワーしかありませんので、ご了承ください」

「はい」

「では、ごゆっくりお休みください」

女将が出て行き、鷹姫は資料を置いた。

「あと30分でお風呂が閉まります。いっしょに入りましょう」

「え……あ……、うん、そ、そやね」

言われるまで鮎美は今夜、鷹姫と二人きりで泊まることを意識していなかった。いつもなら内心で葛藤しているはずなのに、今は西村の死があったからなのか、その死が重責を繰り上げてきたからなのか、性欲が無い。

「そういえば、うちら夕ご飯も食べてへんかったね」

「……すみません、私は少しいただいております」

島の忘年会で鮎美は挨拶をしたり酌をしたりと忙しかったけれど、鷹姫は婦人部の方に呼ばれ手巻き寿司や揚げ物を食べている時間があった。他の忘年会やパーティーなら常に鮎美のそばにいるけれど、島に戻ると安心もあってバラバラに行動していた。

「クスっ、そんな申し訳なさそうな顔せんでええよ。秘書も体力が大
事や」

「何か買ってきます」

「ええよ、食欲ないし。お風呂に入って寝よ」

浴衣とタオルをもって二人で大浴場へ行く。大浴場といっても湯船は一つ、その湯船も一般家庭の4倍くらいの広さで、温泉でもなかった。鷹姫が衣服を脱いで裸になっていく背中を見ると、さすがに鮎美は心臓が反応するのを自覚して目をそらして、自分も裸になる。

「……」

人が亡くなった、こんな時まで、うちは何を考えてるねん、と鮎美が自戒すると性欲もおさまった。二人バラバラに身体と髪を洗い、湯船に浸かる。

「……………70歳まで生きたんやったら長生きかな」

「男性の平均寿命にはおよびませんが、長生きと言つてよいかと思いません」

「うちらなんか、まだ18や……………あと52年……………半世紀もある。2060年頃つて日本は、どないなつてるやろ」

「……………わかりません」

「そやね、統計の数値も予想にすぎんし……………逆に半世紀前は戦争やった。西村先生は戦争を体験したんやろか」

「お見舞いに行く前に読んだ資料で、西村先生の戦争体験が書かれていて、4歳の頃、飛来した米軍戦闘機の機銃掃射に遭い、わき腹にカスリ傷を受けたそうです。田んぼに逃げ込み助かったそうですが、危なかったと」

「4歳つて……………あの時期やと、戦闘機つてプロペラやんな」

「はい、おそらく」

「低空飛行やつたら4歳児やつて、わかるやろに、それでも撃つたんか……………鬼畜やな」

「はい、まさに鬼畜の所業です」

鷹姫が頷いたとき、鮎美のスマートフォンが鳴った。防水仕様なので風呂場に持ち込んでいたのを手に取り、相手が予想通り石永だったので受話する。

「はい、もしもし」

「すまない、もう寝ていたかな？」

「いえ、大丈夫です」

見られているはずはないけれど、鮎美は片手で胸を隠しながら石永との会話を続ける。

「明日、東京へ行つてもらおうことになりそうだ」

「はい。東京で何を？」

「議員バッチを受け取つてほしい。本来、初登庁のさいに国会事務局

から受け取るものだが、もしも万が一、緊急集会が開かれるような事態が生じたとき、議員バッチが無いと議員であつても議場に入れない。混乱している状態でバッチが手に入らず出席できないとなれば問題だから、くだらないとは思うが、形式も必要だから受け取っておいてほしい。ちなみに衆議院議員のバッチより一回り大きく金張りだよ。雄琴は、あまり着けなかつたが議場以外でも、なるべく着けているべきだと私は考えている。それが議員としての自覚をもたらずものでもあるから」

「はい、わかりました。明日の朝一番で東京へ向かいます」

「そして、忙しくて悪いが、トンボ帰りして西村先生のお通夜と翌日の告別式に顔を出してほしい」

「わかりました」

電話を終えると鮎美は鷹姫に同じことを話した。それから、もう12時の5分前で誰もお湯を使うことがないと思つたので湯船に潜つた。

「……………」

お湯に身を任せて、しばらく漂う。

「ぶはっ！」

息苦しくなつて飛び出した。

「ハア…………ハア…………」

「芹沢先生、子供のようなおやめください。どうか、議員としての自覚をもってください」

「ごめん、ごめん。…………つていうか、二人っきりのときは鮎美って呼んで言うたやん」

「……………」

鷹姫が迷つた顔をしている。そして鷹姫の唇が、それはもうやめませんか、と言いつ出す前に鮎美は頼む。

「うちは議員やけど、一人の人間よ。気の休まるときがほしい。鷹姫と二人っきりのときくらい、そうさせて？　な？　二人のときは上下関係なしに接してよ」

「……………はい」

返事をした鷹姫は厳しく睨んできた。

「な……なによ？ 鷹姫……」

「お湯に潜るのはやめなさい！ このバカもの！」

「ううつ……容赦ないなあ……」

「行儀の悪いことをするからです！」

「はい……」

結局は叱られた鮎美は鷹姫と休み、早朝にタクシーで井伊駅へ向かい、新幹線で東京駅に着いた。ホームに降り立つと詩織が待っていた。

「おはようございます、芹沢先生」

「おはようさん」

「おはようございます、牧田さん。これから、よろしくお願いします」

「はい、こちらこそ、よろしくお願いしますね」

詩織と鷹姫が握手しているのを、鮎美は複雑な気持ちで見えてしまい、すぐに目をそらした。

「牧田はん、話は伝わってるやんね？」

「はい。すぐに国会事務局へ向かいますよ」

「東京のこと、わかるん？」

「ジエトロに勤めていたとき、霞ヶ関がらみの仕事もありましたから」

「そうなんや……ふーん……」

「芹沢先生、今夜はお泊まりですか？ まだ議員宿舎は間に合いませんから夜景がキレイなホテルを予約しますよ？」

そう言った詩織が荷物を持っていく鮎美の手を握ってきた。

「う、うちらは日帰りなんよ！ お葬式があるさかい！」

「そうですか、それは残念」

詩織は荷物を受け取って、三人で東京駅から国会へと移動し、鷹姫が石永たちが用意してくれた書類を提出すると、係官から鮎美へ議員バッチが渡された。

「これが議員バッチなんや……」

鮎美はバッチを冬制服の胸に着けてみる。

「……………」

それほど重くないのに、ずいぶん重く感じたし、やたら大きくも感じる。

「……………」

「よくお似合いですよ、芹沢先生」

詩織が誉めてくれた。

「おおきに。鷹姫、どう？ どう見える？」

「はい……………普通だと思います」

「……………」

「あ……………すいません……………よく、わかりません。他の議員先生方と同じバッチですから、普通にそれでよいと思いますが……………」

「ええよ、ええよ、鷹姫のそういうところ好きやし」

そう言った鮎美が地元へとトンボ返りするために国会の敷地を出ると、マスコミのカメラに囲まれた。しまった、油断した、と鮎美が思っているうちに鷹姫が前へと回り込んでくれるし、詩織もガードに入ってくれる。

「取材をさせてくださいー！」

「もう議員ですよね?!」

今までは議員予定者ということで、よほどの事件を起こすか、選挙活動などの公の場に顔を出さない限りは取材を自粛するということになっていたけれど、前任者の西村が亡くなったことで議員擬制された鮎美は取材可能対象になるようだった。カメラとマイク、フラッシュに囲まれ、鮎美は数秒ほど混乱したけれど、守ってくれている鷹姫の肩に手をおいて平静を取り戻した。

「取材をお受けします。ですが、地元で西村先生のお通夜がありますので10分だけ」

鮎美が答えると、鷹姫と詩織は秘書らしく左右に立った。女性レポーターが質問してくる。

「今のお気持ちを一言お願いします」

「……………。覚悟はしていましたが、思ったより議員バッチを重く感じま

す。そして、これを受け取るのが早まった原因を考えると、……西村先生の想いというものも……少しはわかるつもりです」

「西村議員と親交があったのですか？」

「親交と言えるほどのものは、正直、昨日、会ったばかりです。最期の時間に、私へ、これまでの活動のことを頼むと言われて」

「どのような活動ですか？」

「県南部にあった阪本城を含めた風景の保存についてです」

「18歳で議員となられたこと、どう思われますか？」

レポーターたちは田舎の城跡など、まったく興味が無い様子だった。鮎美は追悼の想いを踏みにじられた気がしたけれど、平静を保って答える。

「重い責任を感じます。まさかとは思いますが、緊急事態があるときは参議院が緊急集会を開くわけですから。そのとき参議院が半数であれば、およそ百人で日本のことを決める、その責任の重さを考えると怖いくらいです」

「緊急集会は衆議院の解散時に緊急の必要があるときですが、次の解散はいつだと思われますか？」

「……。4年以内にあると思いますから、私の任期中に一度は来ると思います」

ややズレた質問にも丁寧に答えていると、約束した10分が過ぎたことを詩織が告げてくれる。

「10分が過ぎました。芹沢先生は葬儀のため地元へ戻られます。道をあけてください」

「道をあけてください！」

詩織と鷹姫が協力して歩道をあけてくれ、鮎美は東京駅へ移動できた。

「はああ……ビビったわ」

「すみません、予想すべきでした」

詩織と鷹姫が謝ってくれるけれど、鮎美は微笑む。

「ええよ、うちも失念してた。きつと石永先生らも慌ててたから思い至って忠告してくれることもできんかったんやろ。にしても、マスク

ミつてすごいな」

「ええ、まったく。けれど、いきなりの取材攻勢だったのに芹沢先生の落ち着いた対応は立派で、私は惚れ直しましたよ」

「っ、…」

「お通夜に私も同伴してもいいですか？ 石永さんは、まだ病み上がりですよね」

「鷹姫だけで大丈夫やし、新幹線がタダなのは、うちだけやから牧田さんは東京におつて。これから東京事務所の準備もあるやろ？」

「はい。ですが、石永先生の東京事務所をそのまま流用するので、やることは少ないのです」

「そやったね」

「ご許可いただければ、少しは女性議員らしい内装に変えるよう指示いたしますが、どうされます？ 実際、落選された石永先生の経費負担を軽くするのに貢献しているのですから、少しは芹沢先生の色を出しても文句は出ないはずですよ」

「……うん……ほな、石永先生の元秘書らと相談しながら進めてみたって」

話ながら東京駅に戻り、また新幹線に乗った。クリスマス前だったので自由席は混雑していて、通常の指定席もいっぱいだったのでグリーン車を初めて利用する。もともと男性でもゆつたりと座れるシートなので鮎美の身体だと、持て余すくらいだった。

「……………」

「……………」

もともと鉄道に興味をもっている方ではないので鮎美も鷹姫もグリーン車に少しも感動せず黙って座っていると、通路の向こう側に座っていた男性が声をかけてきた。

「芹沢鮎美先生ですか？」

「え、はい、そうですけど……あなたは……うわっ、路上チューの……」

「……。あははっ、そういうアダ名で呼ばれると痛いなあ……ははは……」

「す、すみません、つい……えつと……細い……太い……」

鮎美が相手の名前を思い出せずにいると、鷹姫が耳打ちしてくれる。

「民主党の細野太志先生です」

「あ、そやった。失礼しました。細野先生」

「いえ、こちらこそ急に声をかけて」

細野の視線が鮎美の胸に落ちてくる。それが乳房ではなくて胸にある議員バッチを見ているとわかるので睨みつけたりはしない。

「芹沢先生、少し早く任期が始まったそうですね」

「もう聞いてはりますか」

「永田町は情報が勝負ですから」

「……」

情報勝負やのに不倫とか路上チューとか痛いやらなあ、あかん、この人の顔を見てると路上チューのことしか思い出せん、この人かつて衆議院議員なんや、うちみたいなクジ運と違って、立派なところもあって人物で選ばれて当選してるやろに、イメージが不倫しか無い、どんな人やったつけ、っていうか、うちに話しかけた目的は何やろ、と鮎美が不倫報道のことばかり考えていると細野も悟った。

「そんな顔をしないでください。自分も反省しています」

「そ……そうですか……」

だいたい男って、どういう風に女を好きでいるんやろ、うちが鷹姫を好きなんと同じ感覚なんかな、おっぱい揉みたいとか、キスしたいって思うんかな、それとも子作りしたいって感じなんかな、男は女と性交できるわけやし、それがメインなんかな、と鮎美は政治家同士で話しているのに、政治のことに思考がいかない。不倫という行動をした男を間近に見て、男が女を、どう想っているのか、そればかりに気がいってしまう。

「やはり自分は嫌われていますかね」

「いえ……そういうわけでは……うちは男に興味ないし」

思わず言ってしまったけれど、細野は浅い意味にしかとらなかつた。まだ女子高生でしかない鮎美が男性に興味が無いというのはあ

りえることで、そこを深く詮索する気はなかった。むしろ、単に一人の与党政治家として参議院の一席を占める鮎美と少しでも近づいておきたいという政治的に純粋な動機が働いているだけだった。

「芹沢先生の通っておられる学園に、自分も中学の頃は通っていましたよ」

「そ…そうなんですか…ええ？　つてことは、信仰も？」

「いえ、それは。ただ近所の私立中学というだけで選び、高校は井伊東に行っています」

「井伊東？　……」

そこつて賢いかな、アホなんかな、どっちやろ、と鮎美は悩む。鮎美たちが在籍している学園は中学高校がエスカレーター式の中高一貫教育で、学園中学に在籍していると、ほぼ無試験で高校に入れるものの、あまりに成績の悪い生徒は高校へあがれないし、かなり成績の良い生徒は公立の高校を受験したりするので、学園外の高校へ行ったということは成績が中程度ではなかったことを示している。ただ鮎美は大阪出身なので県内の高校を名前だけでレベルを判断することができなかった。そつと鷹姫に訊いてみる。

「井伊東つて、どんな学校なん？」

「県北部で一番の進学校です。剣道部もそこに強い、文武両道の優良校です」

「へえ…」

「たいしたことは無いですよ」

ありきたりな謙遜をした細野は確認するように訊いてくる。

「芹沢先生は、あの学園の信仰をもつていらつしやる？」

「いえ。あれは、ちよつと……。普通に神社とお寺です」

「そうですか。せつかく隣席になった偶然へ感謝して、もう少しお話しさせていただいてもよろしいですか？」

「ええ、どうぞ」

地元へ戻ってからの仕事は、お通夜への出席だけなので鮎美は細野へ頷いた。

「加賀田知事のお誘いを蹴られたそうですね。民主党のどのあたりが

お気に召しませんでしたか？」

「気に入らないということではなく、自民党で頑張ると決めたので初志貫徹ということと、自民党の人たちに恩義もありますから、それを守りたかったという仁義です」

「なるほど、そう言われると説得の糸口が無い」

「どうせ、うちを口説く気で話しかけてきたんやろ？　…あ、失礼、つい本音を、すんません」

鮎美が思わず本音で突っ込み、それを恥じて赤面した。

「ははは、面白い人だ」

「……すんません。年上相手に失礼でした」

「いいですよ。本当のことではありますから。あなたの存在は喉から手が出るほど欲しい」

「……」

鮎美は夏子が、触手が出るほど、と言っていたことを思い出した。夏子に言われると少しは心が揺らぐけれど、男性である細野に言われても何とも思わない。嫌悪感も無い。男という生き物が女を口説くということも、よくわからないし、男に口説かれるというのも、よくわからない、その先にイエスが無いので、まったく無意味な行動に思える。鮎美は、また政治のことではなく色恋のことを考えていたので頭を振って雑念を追い出そうとする。それを見て細野が言ってくる。

「芹沢先生は、お疲れですか？」

「いえ、大丈夫です。……細野先生が、うちと隣席になった偶然を感謝してくれはるんやったら、このさい、うちも細野先生に訊いてみたいことがあります」

「どうぞ、なんなりと」

細野は余裕をもって頷いた。その胸には議員バッチがあり、スーツも決まっている。与党政治家の幹部議員としての貫禄があった。

「……………」

鮎美は前後の座席を見回した。グリーン車なので他の政治家が乗っている可能性は高いけれど、近くには見えない。そして細野が

座っている席の奥は空席だった。

「そつちに座ってええですか？」

「…、どうぞ」

瞬時に細野は密談だと悟った。鮎美が秘書の鷹姫にも聴かせたくない話をするのだと期待して奥の席へ移動する。鮎美は細野が座っていたシートに移った。これで小声で話せば誰にも聴かれずにすむ。

「……」

鮎美が切り出し方を迷っている目を見ると、細野は待ちかねて促した。

「お話というのは？」

「……とても失礼な質問ですが……」

「かまいませんよ」

「……不倫されるというのは、どういう気持ちでされるのですか？」

「つ……は……は……」

細野は癖になっっている笑って誤魔化す笑顔になったけれど、鮎美は真剣に訊いてみたかった。

「好きになっただけ結婚した奥さんがいて、それでも不倫するって、どういう気持ちでしはるんですか？」

「……うっ……うーん……」

笑って誤魔化すのでは鮎美が納得してくれない目をしているので細野は困る。鮎美は重ねて問う。

「議員という立場も危うくなるやないですか。総選挙でも民主党への風が無かったら危うかったと……大変失礼ですが思います」

「……」

苦笑する細野の頬が少し震える。

「そこまでして、どうして不倫しはったんですか？」

「………本当のところを訊かせると？」

「はい、お願いします」

「それを訊いたところで自民党に有利に働くことは何もないよ。あの

件は完全に利用され尽くした。それでも自民は負けた。今さら何も出てこないぞ」

「うちは、ただ男の人が、どういう風に女を好きになって、それで結婚までしたのに、また他の女を抱くっていうことの動機が知りたいんです。動機というか、気持ちというか、結婚した女性のことがかって好きでいるわけでしょ？　せやから離婚もしてない。ほな、なんで不倫されたんです？　どういう心で？」

「……………」

「教えてもらえませんか？　政治抜きに」

「……………わかったよ……………君は、まだ女子高生なんだね、純粋な……………。男と付き合ったことは？」

「ありません」

「だろうね」

「それと関係が？」

「あるよ。男っていろいろのはき。……………これ、ホントに政治抜きでオフレコで語るからね。そこ守ってよ。ここだけの話で頼むよ。どうせ、どこの男も同じような話をするけど、よそで細野が言ってたとか、漏らさないでくれよ？」

「はい、誓って」

つい鮎美は陽湖のように真剣に頷いた。そういう雰囲気には細野も中学の頃には接したことがあるので信じることにした。

「男っていろいろのはき、好きになった女性以外にも欲望を覚えるんだよ。つつい、よそに目移りする。だからって、好きになった女性は、そのまま好きでいるし、そりや離婚する男もいるけど、離婚したくなくても、まだ奥さんを好きでいて、これからも奥さんと人生のパートナーでありたいと想っているくせに、つつい、ちよつと若いキレイな子に惹かれたりするんだよ。それは、もう本能というか、どうしようもない衝動というか、それは抑えるべきなんだけど、つつい！　つつい！　気がついたら手を出してしまっているんだ！　ものすごく後悔するくせに！　そのときは欲望に突き動かされて止まらない！　ただ……………ただ、それだけだよ……………」

「……………」

「なんや、それやったら、うちと同じやん、うちは鷹姫を好きやのに、つい陽湖ちゃんのお尻に触るし、カネちゃんにもスキンシップしてしまう、あかんとは想うのに、ついつい、やってまう、うちも男も同じなんや、と鮎美は拍子抜けしつつも納得した。

「そうですか……ありがとうございます。変な質問して、すみません」
「いや……いいよ……別に……………」

細野は話を戻して鮎美を民主党へ勧誘する流れを作りたかったけれど、鷹姫が突然に立ち上がると、通路を歩いてきた男性の前に立ちはだかり詰問する。

「芹沢先生へ何か用ですか?!」

「っ…いい、いや…何も! 何でもない!」

男は慌てて否定したけれど、鷹姫が続ける。

「さきほども芹沢先生へ何か向けていましたね! 見せなさい!」

「何でもないって言ってるだろ! やめろよ! ぐっ、うわっ?!」

男は抵抗しようとしたけれど、鷹姫が柔道技で組み伏せると、ポケットから小型のカメラが出てきた。

「盗撮……、痴漢、鉄道警察に連絡します!」

「ち、違う! 違うぞ! オレは取材してただけだ!」

組み伏せられながらも男が自分の財布から名刺と身分証明書を出した。それを細野と鮎美に見せつける。

「オレは記者だ! 痴漢じゃない! 取材の自由を制限すると許さないぞ!」

「……………」

細野と鮎美は名刺を見た。よくある週刊紙の名があった。鷹姫が迷う。

「芹沢先生……どのよう処置するのが良いでしょうか?」

「うっ……うくん……取材の自由と、列車内での盗撮って、どっちの法理が優先され……。というか、うちを撮ってたん?」

「ああ! お前、もう公人だろ!」

「……………失礼な、ヤツやな…」

「もう上から目線か！」

「なんやて！」

「芹沢先生」

細野が興奮しかけている鮎美の肩に手をおいた。

「こういう連中を相手に怒っても仕方ないよ。失礼も非礼もない。こういう生き物なんだ」

「細野先生……………」

「不倫野郎が何を気取ってやがる」

「だとしても、総選挙で私は国民から信託をいただいた。この期待に全力で応えることをもって禊ぎとする」

「ちつ……………くそ！ 離せよ！ 暴力だぞ！」

舌打ちした記者は自分を組み伏せている鷹姫を睨んだ。

「……………」

鷹姫は迷っているけれど、手の力は抜かない。細野が決めた。

「秘書さん、もう離してやりなさい」

「……………。芹沢先生、どうされますか？」

「うくん……………細野先生が、そう言わはるんやったら、それでええんちゃうかな」

「わかりました」

鷹姫が手を離れた。

「くそつ、覚えてろよ！」

凡庸な悪態をつきながら記者はグリーン車を出て行った。

「芹沢先生の秘書さんは見かけによらず強いなあ」

「鷹姫は剣道日本一ですよ。きつと柔道でも、かなり強いはずですよ」

「いいボディガードだ。それにしても……………」

細野が言葉の途中で考え込むと、鮎美は言葉を引き継いだ。

「それにしても、覚えてろよ、ってリアルに言う人間がいるとは思わなかったわ」

「ははは……………そこじゃなくてさ。秘書さんは、さきほども何か向けていた、と言ったよね。そのときもカメラだった？」

「おそらくは、そうだと思います。不審な動きをされていて、さらに、再び通りかかったので不審者と断定しましたが、記者だったとは……」

「そうか。撮られていたか……。けど、お互い、やましいことはない。芹沢先生と隣り合って座っていたのは、話があつたからで、話の内容は民主党への勧誘だったと、もし何かあれば正直に答えてほしい。それで、お互い問題ないはずだから」

「わかりました」

「オフレコの方は言わないでよ」

「はい、わかってますって」

鮎美は元の指定席に戻って座り、その後は国政や県政について、細野の見解を聴いて時間を過ごしたし、年齢差が大きいので、だんだんと教師と生徒のような会話になり、民主党が目指している新しい政治について鮎美は多少なりと好感をもった。井伊駅で細野は降りたけれど、鮎美と鷹姫は県南部の阪本市で行われる通夜に出席するので京都駅まで新幹線に乗り、在来線で少し戻って阪本駅で降りた。

12月 小笠原

通夜へ出席するため、鮎美と鷹姫は坂本駅からタクシーで西村の自宅へ向かう。その途中で鷹姫が気づいた。

「芹沢先生、香典と数珠が要るのではないのでしょうか？」

「あー！ そやー！ 運転手さん、コンビニに寄って！ 鷹姫、香典の公職選挙法での扱い、もう一回、調べて」

「はい」

コンビニで準備をしてから鮎美と鷹姫は西村家を訪ねた。ごく普通の戸建てで、やや狭いくらいの家だった。そこに葬儀業者が提灯を設置し、西村の親族が受付をしている。

「……………」

鮎美も鷹姫も葬儀の経験はあったけれど、それは親に連れられて行くような形でしかなかったため、やや気後れする。

「こんなとき社会経験のある静江はんが居てくれたら…」

「そうですね……………」

とくに鮎美は真新しい議員バッチを胸に着けている。金で装飾されたバッチを着けたまま葬儀に参列して良いのか、それとも今だけは外しておくべきか、迷う。

「このバッチ……………どうしようかな……………隠した方がええかな？」

「……………すみません……………わかりません……………。ですが、そのバッチは見せびらかすものではなく議員である自覚を持つものだと、石永先生とも言われていましたから……………西村先生を引き継ぐという意味では着けている方が良いのではないのでしょうか？」

「……………うん……………そやね。ほな、そうするわ。あとは作法と手順やけど……………」

「あそこで香典を渡し、記帳するようです……………おそらく」

少し遠くから観察していると、近所の人々が受付をして香典を渡し、帳簿に名前を書いてから中へ入っていく。それを鮎美と鷹姫も見習って同じようにしてみる。

「この度は、ご愁傷様でした」

鮎美が記帳すると、受付をしていた西村の息子が確かめるように顔を見てくる。

「オヤジの後に議員になる芹沢さん？ あ、失礼、父の後に議員に当たった芹沢さんですか？」

「はい。……この度はご愁傷様です」

「わざわざ来ていただき、ありがとうございます。病院でもお会いしましたね。父も最期に芹沢さんに会えて喜んでいたと思います」

「……」

どう返答していいか、わからず、鮎美は困った笑顔で会釈する。鷹姫は付き添いなので記帳せず、香典を静かに差し出した。二人で狭い一戸建ての中に入ると、無理矢理に家具をどかせて場所がつくってあり、20人ばかりの弔問客が正座している。その奥には棺と祭壇があり、すでに遺影もできていた。その写真は癌になる前の元気だった頃の写真で参議院議員になったばかりの頃に写真屋で撮ったものでしたので立派だったし、胸には議員バッチが光っている。

「……」

鮎美は同じバッチをしている人が死んだということ、どう受け止めていいか、わからず目を閉じて頭を下げた。

「……」

周囲から、かなり視線を感じる。それは鮎美の顔とバッチに集中している。いつまでも立っているわけにもいかないので鮎美と鷹姫はできるだけ詰めて正座した。座ってからでも視線は感じたけれど、しばらくして僧侶が入ってくると読経が始まり、順々に焼香する。鮎美も焼香して遺影へ手を合わせた。

「……」

西村先生……、鮎美は会ったばかりの人が死に、その最期に少しは関わったことを想い、目を閉じて冥福を祈った。それから、遺族の方にも頭を下げると、元の場所に正座した。鷹姫も同じように焼香すると手を合わせ、戻ってくる時には泣きそうな目をしていたので、鷹姫の母親が早世したことを鮎美は意識した。想い出したのかもし

れない、と考えたけれど私語は慎み、戻ってきた鷹姫の手を握った。

「……」

「……」

焼香が終わり、僧侶の読経も終わると、故人に縁遠い者から退席していくので鮎美たちも外に出る。

「……………」

静かに表通りへ歩き出すと、誰かが声をかけてきた。

「新しい議員の芹沢さんですか？」

「はい、そうですけど…」

ふり返ると、近所の人らしい中年の女性が嬉しそうな顔でサインと記念撮影を求めてきた。

「……………」 わかりました。けれど、少し西村さんの家から離れてからサインだけ。撮影は、こんなときですから、すみません」

うんざりした顔をしないように注意しながら鮎美はサインに応じた。他にも5人がサインを求めてきたので静かに応じて、鷹姫が拾ってきてくれたタクシーに乗った。ドアが閉まり、タクシーが動き出すと運転手には聞こえない程度の声で言う。

「こんなときにサインとか、どんな神経してるねん……………アホちゃうか……………」

「人は他人の死に無頓着なものです」

いつも口数の少ない鷹姫が言った。

「鷹姫……………」

「私たちだって、知らない人の死には無頓着です。今日、日本のどこかで誰かが交通事故で亡くなっても、気にもしない。それが他国であればなおのこと、百人が虐殺されていても話題にさえならない」

「……………」

「……………すみません、余計なことを言いました」

「ううん。鷹姫が考えること、何をどう思うのか、知りたいから、いつでも好きなように言っつてな。あんたは無口すぎるわ」

「……………」

「ほら」

「……………困らせないでください」

「ごめん、ごめん」

「これからの予定ですが、もう島に戻るのには難しい時刻です。明日も正午までには西村家へ告別式のために駆けつけなければなりませんから、阪本市内のホテルに泊まりますか？」

「え……………あ、そっか……」

鮎美は時刻と場所を考える。すでに夜9時近い。今から六角市に戻っても10時を過ぎるし、明日の朝には阪本市に戻ってこなければならぬことを考えると、経費で宿泊しても問題ないし、その方が疲労も軽くすむ。

「そやね、どこか予約してみて。うちも、探すわ」

「はい」

二人でホテルを探し、鮎美が琵琶湖岸にあるシティホテルを予約した。

「ちよつと高いけど、県内の観光資源も確かめておかんとね」

高層階から琵琶湖を眺望できる人気のホテルに二人でチェックインした。客室に入ると気が抜けたように、ダラリと歩く。

「疲れたわああ……………」

「夕食は、どうされますか？」

「なんか食欲ないし、ええわ」

性欲もないし、と鮎美はベッドに寝転がりながら鷹姫を見上げた。愛しいけれど、今は欲望も疲労のせいなのか、蠢かない。

「朝昼も駅弁でしたから、ちゃんと食べてください。健康管理も仕事のうちです！」

「……………うくん……………もう、ここから出とうない」

人目を意識して議員として振る舞うのも疲れるし、週刊紙などのマスコミまでいると思うと、外を歩くのが億劫だった。鮎美は議員バツチの着いた上着を脱いで、スカートも脱ぐ。ブラウスとショーツ姿になって外出を拒否しているので鷹姫が困る。

「今ならホテル内のレストランは開いていますが、すぐにラストオー

ダーです。私がコンビニで何か……いえ、もう少し健康的なものを……」

「議員って贅沢してるかと思っただけど、駅弁にコンビニ弁当、選挙のときはオニギリって意外と貧相な生活やなあ……安い牛丼屋でも近くにないかなあ」

鮎美はブラウスまで脱いでから、ベッドサイドのテーブルにある冊子を開いた。そこには部屋の説明やルームサービスが記されていた。

「ルームサービスにしよう」

経費でいけるかな、あかんかな、飲食は厳しいし、けど、ここに泊まったのは葬儀っていう交際費の対象になる行為やし、ええかな、けど、こういうところから活動費って感覚がゆるくなるんかな、どうしよ……、と鮎美は考え込み、静江ならともかく鷹姫に領収書を取ってもらうことになるので控えることにした。

「うちが奢ってあげるし、鷹姫も何でも好きなもん、頼み」

「芹沢先生……」

「その呼び方、いやよ」

「鮎美……、たしかにコンビニのお弁当よりは健康的かと思えますが……ハンバーグとライスが3600円もします。……この頃、私は金銭感覚がおかしくなってきた気がします。さっきのタクシー代も5000円を超え、このホテルも3万円……。そもそも東京まで、小さなバッチを受け取るだけに使った交通費も考えると……：食事はともかく交通費と宿泊費は税金なのに……」

「……。うちも金銭感覚が、かなり庶民とズレてきた気はするわ。……」

鮎美はベッドの枕に顔を埋めた。そうしていると疲労感が襲ってきて、すぐに眠ってしまった。

「鮎美……眠ったのですか……」

早朝からの東京往復やバッチの受け取り、取材攻勢、他党政治家との会話、そして通夜、それらを考えると疲労困憊して当然だった。鷹姫は静かに鮎美の身体にシーツをかけると自分も制服を脱ぐ。空腹

を覚えていたけれど、朝になれば宿泊費とセットの朝食があるので我慢することにした。

12月22日の午前2時19分、鮎美のスマートフォンと鷹姫の携帯電話がけたたましい警告音を発した。

「……」

「……」

二人とも強い疲労で深く眠っていたのに、激しい警告音で叩き起こされる。

「母さん、もうちよつと寝かせて……、……やなくて……ここは？ あ、そっか、ホテル」

「この音は……いったい……」

強い眠気のために頭が働かないけれど、ホテルに宿泊したことを思い出し、そして鳴っている情報端末を手にする则表示された内容を見て、目が覚める。

「地震?!」

「小笠原……マグニチュード7超?!」

「お、小笠原って、どこやった?」

「離島です!」

「人は住んでるん?!」

「そのはずです」

「テレビつけて!」

「はい!」

テレビとスマートフォンで情報を得ると、父島近海を震源地とした地震が発生し、小笠原諸島に津波警報が、高知県などに津波注意報が出されている。

「日本列島から、だいぶ離れてるなあ……」

「はい、東京から南南東に1200キロです」

「一応は東京都なんや」

「そのようです」

「死傷者は、まだ情報がないけど……。この久野先生がつくらせはっ

た国会議員向けのアプリ、優秀やな」

「阪神淡路大震災で初動が遅れたことの戒めと言っておられましたから」

「国会議員向けと言いつつ誰でもダウンロードできるしな。で、うちらは、どうしよう..」

「.....」

「ここにおつてええんやろか?」

「.....わかりません」

「かといって、今すぐ国会に行ってもしやーないよな。内閣は動くかもしれないけど、衆議院の解散中でもないから緊急集会も関係ないし、うちは役職もなにもない一年生議員やし」

「小笠原へは自衛隊が派遣されるかもしれませんが.....」

「そやね.....うちらが行っても、やれることないし」

「ともかくは連絡を待ち、どのような状況にも対応できるように準備しておくことくらいだと思います」

夜中に起きたものの、行動すべきことは見あたらず、鮎美と鷹姫は情報を待った。しばらくしてテレビが津波が観測されたことを伝えてくれた。

「最大で22センチの津波かあ.....」

「マグニチュードは7.4と出ています」

「たしか、マグニチュードは地震の規模やんね。震度は揺れの強さ.....関東大震災でM7.9やったんやから、7.4って相当やん。やのに、津波は22センチなんや.....膝までも無いやん」

「今のところ小笠原でも死傷者は報告されていないようです」

「震源の真上が神戸やった前回と違って、何も無い海やもんな」

鮎美は掌に浮いていた汗を腿で拭いた。それで身体がベタついていることに気づく。

「お風呂に入らんと寝てしもた.....今のところ問題なさそうやし、うち、お風呂に入ってくるわ。鷹姫、悪いけどテレビを見てて。スマホは持って入るし」

「はい」

鮎美は浴室に入って全裸になると、お湯を入れながら湯船に入る。大口径の蛇口なので、そんな入り方でも、すぐに湯が貯まる。ときおり鮎美はスマートフォンで情報をチェックしていたけれど、さほど大きな情報は無かった。

「問題なしかな」

つぶやいていると鷹姫が浴室のドアをノックしてきた。

「鮎美、入ってもいいですか?」

「っ……え……」

落ち着きつつあった気持ちに激しく揺れた。安いビジネスホテルではないのでトイレとバスは別になっている。あえて鷹姫が入ってくる理由は無いはずなのに、許可を求められて鮎美は頬が赤くなるのを自覚した。

「ど、どないしたん?」

「お見せしたいものがあるのです」

「そ、そうなんや。うん、ええよ。入って」

鷹姫は、いつでも外出できるように、きつちりと冬制服を着た姿で手に新聞をもってバスルームに入ってきた。

「これを見せてください」

高価なホテルに宿泊すると、すべての客室に新聞が投函されることは珍しくない。鷹姫が持ってきた新聞を両手が濡れている鮎美に見えるよう広げて向けてくれると、驚いた。

「うちが載ってるやん! しかも一面トップに!」

「はい。昨日の取材内容が、そのまま載っています」

全国紙の一面には国会前で取材を受ける鮎美の写真が載っていて、史上最年少議員が誕生という見出しがついている。インタビュー内容や西村の死去によって任期開始が早まったことなどが書かれていた。

「うわあ………せやけど、地震の方が大ニュースやと……」

「地震は午前2時過ぎです。昨日のニュースとしては芹沢先生のごことが大きかったですでしょう」

「そっか………それにしても、まさか一面トップに……」

怖いような、恥ずかしいような、少し誇らしいような、鮎美は議員バッチを着けたばかりの自分が堂々と前を向いて質問に答えている姿を顔を赤くしながら見ている。自分が全裸で鷹姫は完全に服を着ているという状態も赤面に拍車をかけてくる。

「……………」

「おそらく他の新聞でも扱いは小さくないかと思えます」

「うん…………そやね…………これから、ますます注目されるかも…………」

読み終わった鮎美は礼を言って鷹姫に新聞を閉じてもらった。鷹姫が出ていき一人になると髪と身体を洗ってから、裸のまま客室に戻った。鷹姫はテレビと携帯電話を交互に見ていたものの、とくに目新しい情報はない様子で、全裸で揚がってきた鮎美を見て一言つける。

「風邪を引きますよ」

「……………」

鮎美は裸のまま鷹姫に近づくと、彼女の髪の毛の匂いを嗅いだ。

「夕べ、お風呂に入った？」

「いえ」

「…………い、いつしよに入る？」

「遠い小笠原諸島とはいえ、非常時ですから二人とも入浴してしまうのは問題でしょう」

「…………そやね」

「服を着てください。風邪を引きますよ。それに窓から盗撮される危険もゼロではないでしょう」

客室の窓は、窓というより琵琶湖に面した壁面の一つが全面ガラス張り。夜明けの不思議な色合いが空と湖面を染めている。外からはマジックミラーになっていて鮎美が裸でいることは見えないはずだったけれど、二人が知らない撮影方法が存在して遠くから撮られるかもしれない。その忠告をしてくれた鷹姫は上着を脱いで鮎美の肩にかけてくれた。そうされると、鷹姫の匂いに包まれて鮎美は陶然として振り返り、少し身長差がある鷹姫を見上げて言う。

「キスしてくれたら着るよ」

「……何を言っているのですか？」

「……………」

思わず言ってしまったって自分でも、何を言っているんやろ、と鮎美は自嘲した。

「冗談よ」

「鮎美の冗談は、どこが可笑しいのか、わかりません」

「ごめん、ごめん。お風呂、入ってき。うちは、ちゃんと服を着てるから」

「はい。では…」

鷹姫が入浴しにいき、鮎美は昨日と同じ下着を着ける。

「これからは泊まる予定やなくても、替えのパンツくらい持っておこ」

一人言を漏らしながらスマートフォンで再び情報を確かめたけれど、大きな問題は無さそうだった。そのうちに日が昇り、空と湖面が明るくなる。

「キレイやな……夜景は見損ねたけど。東京と違って、たいしてイルミネーションないやろ。経済発展の程度がハンパやから星も見やすいわけでもないし」

「そろそろ朝食が始まります」

揚がってきた鷹姫が言ってくる。顔を見ただけで空腹そうなのがわかったので頷いた。

「腹が減っては戦はできんちゅーもんな。行こか」

「はい」

二人で2階のレストランに降りると食べ放題の朝食が始まっていて、早朝なので高齢の宿泊客が多い中、通常の三倍くらい食べている鷹姫と鮎美を見て老夫婦がクスクスと笑った。そして、婦人の方が声をかけてくる。

「大変な食欲ですね、お嬢さん方」

「……………」

鷹姫は恥ずかしそうに口元を手で覆ったけれど、鮎美は卵焼きを食べながら答える。

「食べられるときに食べておかんと、今日も忙しいかもしれないしね」

「あら、もしかして議員さんのセリ…芹…えつと…歳をとると、すぐに出てこなくて…」

今も鮎美は議員バツチの着いた制服を着ているので、すぐに議員だとわかるけれど、婦人は名前を思い出せない様子だった。

「芹沢鮎美です」

「そうそう芹沢さん。失礼しました。私は加賀田雪子と申します」

「加賀田……」

「そう、今の知事をさせてもらっている夏子は私の孫ですよ」

「あの人の…、お婆さんですか……」

そう言われると、面影を感じる。

「夏子の言うとおり元気で感じのいい人ですね」

「……、元氣くらいしか取り柄はありませんけど」

「夏子がね、言っていましたよ。一度で諦めず何度でも口説いて味方にしたい人だって」

「はは…、それは、どうも」

鮎美が困った笑顔で答えていると、いっしょにいた夫の方も老眼鏡をかけて鮎美を見てくる。

「おお、今朝の新聞に載っていた議員さんじゃないかね」

「はい、どうも。おはようございます」

「夏子が知事選で苦労させられた相手だと言っていたよ」

「うっ…その節は、どうも……。たまたま党が違いましたんで。……うちも夏子はんのことは、好感ももってますよ」

「ほお」

「それは良かったわ。夏子に言っておきますね」

「はは…」

その後も何人もの客に声をかけられて、なかなか食事を進められなかったけれど、急いでいるわけではないので一人一人と丁寧に会話して記念撮影にも応じた。ようやく客室に戻ってきた鮎美はベッドに倒れ込む。

「朝から疲れたわあ……はああ……」

「ご苦労様です」

「うっ……今になって眠たい……」

「はい、私も」

思い返せば夜10時頃に眠ったのに朝2時に叩き起こされ、そこから何もできないものの情報を得ようと頑張っていた。お腹がいつぱいになると、目まいがするような眠気が襲ってきた。

「えつと……告別式は12時からやんな……タクシーで行くんやったら、あと何時間、寝ていられるんかな……今、何時？」

「今は8時30分です」

「もう、そんな時間……けっこうレストランで大勢と話したから……、ちよつと寝たいわ。どのくらい寝られる？」

「ホテルのチェックアウトが11時です」

「ほな、ギリギリまで」

「はい」

二人とも目覚ましをセットすると目を閉じた。深く眠り込み、10時55分になって客室を出る。鷹姫が支払い手続きをして、その間に鮎美はタクシーを呼んでもらい、再び西村家を訪ねた。タクシーが西村家に近づくと、鮎美と鷹姫は集まっている報道陣を見て、タメ息をつきそうになった。

「夕べは、おらんかったのに」

「芹沢先生、お疲れではないですか？」

「うくん……」

鮎美は右手で左肩を揉んだ。

「ま、これも仕事のうちや。頑張ろ。……そもそも、西村先生の死を悼む告別式やのに……」

「はい、そこを忘れてたくないものです」

二人がタクシーを降りるとフラッシュが焚かれ、レポーターがマイクを向けてくる。

「今のお気持ちを一言お願いします」

「今は西村先生の死を悼む時間やと思ってますから、インタビューは

後にしてもらえますか？ 時間をとりますから」

「……。わかりました、後で、お願いしますね」

鮎美と鷹姫は報道陣に道をあけてもらい、再び読経の中で焼香した。

「……………」

そう言えば陽湖ちゃんも焼香とか仏教的なことはせんのかな、他宗教の葬儀とか出られんのかな、あかん、気が散って余計なこと考えてまう、西村先生の死を悼みに来たのに……。それにしても、うちしか議員は来てないみたいやけど、県議とか阪本市の市議とかも来んのかな、無所属って、そんなもんなのかな、と鮎美は焼香の後に周囲を見たけれど、西村の親族と近所の人たちがいるくらいで弔問客そのものも国会議員にしては少なかった。いよいよ出棺となり霊柩車が行くと、告別式は終わった。

「芹沢議員！ お時間をいただけますか？」

「……。はい」

「わずか18歳で議員とられたこと、どう思われますか？」

「……………」

何回同じこと訊くねん！ と鮎美は苛立ったけれど、それは顔に出さない。

「どれだけ勉強しても足りんとは思いますが、全力で取り組みたいと決意しております」

「所属されている自民党は総選挙で大敗されましたが、どう思われますか？」

「……。それが有権者の選択ですから、受け止めて次のアクションにつなげていきたいと思えます」

うちも口からでまかせ、テキストに言うようになったなあ、と鮎美は答えながら自嘲する。その後の質問にも無難に答えていたけれど、時間を区切らなかつたこともあり、政治とは無関係の質問までされる。

「現在、交際されている男性などはいますか？」

「……………ノーコメント」

ややぶつきらぼうに答えてしまい、レポーターを睨んでしまったタ
イミングでフラッシュを焚かれ、鮎美は後悔したし、内心で舌打ちし
た。そんな表情に鷹姫が気づいてくれて、言ってくれる。

「そろそろ次の予定がありますので、芹沢先生は行かれます」

「あと一つだけ！ 西村議員が亡くなったことで早めに議員となられ
たお気持ちは?!」

「……前例のないことばかりで戸惑いもありますが、西村先生も無所
属なりに阪本城の城跡保存などに取り組んでおられ、そのお気持ちも
引き継ぎたいと思います」

やっとインタビューを切り、鷹姫が待たせておいてくれたタクシー
に乗った。

「あいつら、色々訊くけど、記事にするのは、ほんの一部やん。うざい
わあ」

「お疲れ様です」

「うん、おおきに。次の予定って何やった？」

「何もありません。とりあえず支部に戻るくらいです」

「おおきに。あんたも嘘が巧くなったね」

「……………」

「ごめん、余計なこと言うて」

「いえ」

二人で支部に戻ると石永と静江の他に、鐘留と陽湖までいた。

「アユミン、おめでどうー」

「おめでどうございます、シスター鮎美」

「……………」

さきほどまで告別式にいた鮎美と鷹姫は違和感を覚えたけれど、石
永も弁えて言ってくれる。

「西村先生の逝去は残念だけれど、ともかくは無事の就任おめでどう、
芹沢先生」

「はい…、ありがとうございます」

「ささやかだけれど、みんなで祝おうと芹沢先生の友達も集まってく
れたんだ」

「……。せやけど、小笠原の地震はどうなってますの？」

「あれは芹沢先生には何の仕事も回ってこないよ。マグニチュードは大きくて夜中に起こされたけれど、津波は小さかったし、被害も少ない。気にしなくていい」

「そうですか、それは良かったですわ」

安心した鮎美は友人たちからの祝意を受けたものの夕方になると、自民党を支援してくれている企業や団体の忘年会に顔を出さねばならず、また自宅に帰ることはできなかった。

12月28日、やっと連日の忘年会への出席が年末近くなったことで終わった鮎美は支部で鷹姫と勉強していた。大学受験する気のない鐘留と、受験を予定していない陽湖も顔を出している。

「月ちゃんって、なんで受験しないの？ 就職？」

「神に仕える活動を予定しています」

「うわっ……特殊なニートみたいだね、それ」

「……いっしょにしないでください」

陽湖は飲み終わった全員の茶器を片付けようと立ち上がったけれど、小さな音量で常につけられているテレビが政治関連のニュースを流しているので音量をあげた。

「活力党の小沢六郎党代表が衆議院政治倫理審査会へ出席する意向を正式に表明しました」

ニュースキャスターの声を聴いて鮎美と鷹姫もテレビを見る。

「このオツちゃんの顔、うちは好きやったのになあ」

「えく…アユミンって、こういう男が趣味なんだ？」

「ちやうちやう、このオツちゃん、大阪でお好み焼き屋でも経営したら、うまくいきそうな他人を引き寄せる顔してへん？ きつと人気店になるで」

「……………」

鐘留も鷹姫も陽湖も、否定も肯定もできなかった。

「ほんでも、このオツちゃんも、お金の問題やったっけ？」

「はい。土地の取引か何かだったと思います。詳細を調べますか？」

鷹姫の問いに鮎美は首を横に振る。

「いや、ええよ。うちには直接関係なさそうやし。でも、結局は政策的な失敗やなくて、お金か女で転落するんか……もつと政策の是非を討論してやな、どの政策を採用するのが日本のためになるかとか、そういうレベルで進まんのかな？」

「来年1月には党首討論が予定されています」

「そやったね。活力党、どうするんやろ、民主との連立がないとなると、民主単独では3分の2にいかんし、共産との連立もなさそうやし」

「となれば、参議院の重要度が増します」

「アユミン、参議院の議席数って、どうなってるの？」

「総数203で自民が59、民主が90、共産18、活力3で無所属は33やよ」

「すごいね、暗記してるんだ」

「アホな女子高生ちやいますから」

「過半数は102からってことは、民主は12人でいいから無所属を味方につければいい？」

「そうやねん。たった12人や」

「あのキザったらしい雄琴は90に入ってるの？」

「入ってるよ」

「あいつ殺しちやえばいいじゃん。自民に、そういうヒットマンいないの？」

「……。静江はん、そういうことってあるん？ 今でも」

「バカな女子高生みたいなこと訊かないでください。ありません。せいぜい脅迫電話や銃弾が送りつけられるくらいですし、逆効果になるのでやりません」

「嫌がらせはありえるんや……低レベルやなあ……」

「低レベルといえばアユミンのエロ画像、ネットに色々出回ってるよ」

「そうなんや。どこに？」

「芹沢鮎美スペースエロで検索してみなよ」

「うちの名前と、エロでか」

鮎美は好奇心で調べてみる。静江が心配そうに言ってくる。

「そういうものは、あまりご覧にならない方が良いでしょう。少し若くて美人な政治家が出ると、だいたい作成されますから。ニュースキャスターなんかでも」

「……………あく……………こういうエロ画像にするんや……………これ、うちの身体ちやうやん」

ネット上には鮎美の顔に女性の裸体を合成した画像が出回っていた。次々と出てくるのを鮎美が見ているので静江は心配になる。

「あまりご覧になると傷つきますよ」

「うくん……………うちの身体とちやうし……………あ、でも、パンチラあるやん。しかも、本物、これ、うちやん！」

「アユミン、あんま気にしない方がいいよ。前にも言ったけど、アタシがモデルしてたときも色々あったから。男なんてゴミだよ、ゴミ」

「シスター鐘留、あなたが言い出して見せたのでしょうか」

「……………うちって男から見て、どう見える女なんやろ？」

「上の下」

「……………元モデルに言われると、喜ぶべきなんかな。静江はん、どう思う？」

「男性にもよるでしょうけれど、可愛らしい顔といい、細すぎず太すぎないスタイルといい、きつと日本一可愛い国会議員ですよ」

「……………参議院は女が半数やけど、衆議院は男ばかりやん」

鮎美は自分そっくりのAV女優が存在してDVDが売り出されているのを、いつそ買ってやろうかと開き直った気持ちで見ながら鷹姫に問う。

「鷹姫には……………う……………うちって、どう見えてる？　可愛いと想ってくれる？」

「……………」

鷹姫が鮎美の顔を見る。さらに、室内にも貼ってある鮎美のポスターも見た。

「はい。良い顔をされています」

「……おおきに……」

「芹沢先生、そろそろ東京へ向かった方がよいと思います。年末ですから」

「あ、そやね」

「え？ アユミン、今から東京に行くの？ お正月は？」

「うちは議員擬制されたから、西村先生が出席する予定やった新年祝賀の儀に呼ばれてるねん」

「新年祝賀の儀って何？」

「宮中行事でな、天皇陛下と皇族さんらに新年の挨拶しに行くような行事や。議員とか、最高裁の裁判官とか、外国の大使とかが呼ばれるねん」

「新年って、まだ四日もあるじゃん」

「行事は1月1日やけど、前日では不安やし、東京事務所のことやら議員宿舎やら色々あるさかい、もう行くねん。ごめんな、せっかく来てくれたのに」

「いいよ、いいよ、ヒマつぶしだし。あ、でも、月ちゃんは何か狙いがあるみたいで、そわそわしてるね？ ワイロでも渡すのかな？」

「違います！ あ、あの……シスター鮎美、お忙しい中、申し訳ないのですけれど、見て欲しい物があつて」

「うちと陽湖ちゃんの仲で遠慮せんでええよ。家族みたいに同居してる仲間。ま、うちが帰宅せんから、父さんが陽湖ちゃんが娘になつたみたいや言うてたけど。で、何？」

「はい、これです」

陽湖は通学カバンからA4サイズの封筒を出した。

「新設したい学園の大学について、校舎の完成図や学部の概要なんです。東京でも、お忙しいと思いますけれど、どうか、ご予約の空きで文科省への申請を手伝ってください」

「うん、わかったよ。新幹線の中で読んでおくわ」

鮎美は大学資料を受け取り、他の団体からの陳情資料は静江などに管理を任せているけれど、自分のカバンに入れた。

「ほな、いつてきます」

「いつてきます」

「「いつてらっしゃい」」

東京へ向かうのは、もう何度目になるのか、年末の混雑した中、鮎美と鷹姫はグリーン車で東京駅に着いた。今回もホームで詩織が待っていてくれる。

「遠路、お疲れ様です」

「新幹線のおかげで、そんなに疲れてないよ。国会議員が新幹線、無料なんは当たり前な気がしてくるわ」

「新幹線の無い地方の国会議員は大変なのでしょうね」

「そやね、切実かも。沖縄、北海道は飛行機やろけど、中途半端に遠い北陸なんかは雪も降るし大変やろな」

「議員宿舎の件ですが、他の同期となる参議院議員たちと公平にするため、亡き西村先生の部屋を引き継ぐのではなく、新年となってからクジ引きで決定するそうです」

「クジ引きで選ばれた議員が、またクジ引きで部屋を決めるんか、なんかシニールやな」

「今夜は事務所に近いホテルをとりました。年末でしたのでシングルを二つですが」

「牧田はんは、どこに住んでるん？」

「世田谷に叔父が建てたマンションがあり、その一室を借りています」

「……金持ちやな」

「広いですから、そちらに、いつしよに泊まりますか？」

「遠慮しときます」

「では、ホテルへ案内します。まだ早いですが、お二人ともお疲れにならないよう、しっかりと休んでください」

「は、い」

詩織の案内でビジネスホテルに到着した。一人部屋を二つという予約なので鷹姫と別々の客室に入る。

「狭っ……東京のビジネスホテルって鬼ほど狭いなあ」

それほど安価ではなかったのに、圧迫感のある客室で天井も低い。

「だいたい何でも東京に集中させすぎやねん」

淋しいので、つい一人言を漏らしていると、ドアがノックされた。

「はい？」

「私です」

「牧田はん、どないしたん？」

「緊急でお伝えしたいことがありまして」

そう言われてたので鮎美は、すぐにドアを開ける。

「何やの？ 緊急って」

「鮎美先生のごことが大好きです。私と付き合ってください」

「……それ、前にも言うたやん」

「あと何回かは、言いますよ」

「そのうち、諦めるんや？」

「しつこいのはマナー違反です。鮎美先生はビアンの世界、ぜんぜん知らないでしょ？」

「……」

「ちよつと遊びに出ませんか？」

「……うちは仕事で来たんやし」

「新宿2丁目って聞いたことあります？」

「……新宿なら、東京23区の一つちゃうん？ たしか、特別区、特別地方公共団体の一種で、原則として市と同じ扱いやけど、都との関係は府県と市より緊密で、都の統制力は強いはずの」

「ほら、何も知らない。何ですかその蘊蓄オジサンみたいな回答」

「……」

「日本最大のセクマイが集まるところですよ」

「……セクマイって何よ？」

「セクシャルマイノリティーの略です。ホントに何も知らないんですね」

「変な略し方するからやん。セクシャルマイノリティーくらい知って

るし！ 性的少数者ってことやろ。勉強したし」

「資料ばかりで勉強して実地を知らないから、ちよつとした言葉を知らないんですよ。自分と同じ人間と話したこと、ほとんど無いでしょう？」

「……」

「田舎だとそうですよね」

「大阪は都会やし」

「ビアンバーに行きませんか。男子禁制、女子のノンケの人も少しは来ますけど、基本的にビアンだけが集まるお店ですよ」

「そんなところがあるん？ 合法的に？」

「バーですから保健所には届けているでしょうね」

「……うちは18歳やし」

「別に呑めない人も、たくさん来ますよ。下戸だと言えば無理に勧められません」

「……」

「年末の新宿2丁目は、賑やかですよ。オフィス街は帰省で静かになります。田舎の家族のもとへ帰りにくいセクマイは、ずっと東京にいますから」

「……」

「見てみたい、見に行きたいって、顔に描いてあります」

「……。うちの立場で、そういう街や店に行けるわけないやん。もう全国で顔を知られてるねんで」

数日前に各紙の一面トップに載せられたことで、もう鮎美の顔を知っている人間は全国に多い。自惚れでなく紅白歌合戦に出場する歌手より有名度は高いと感じているし、東京駅でも議員バッチを着けていることもあって、かなり注目されている。

「そう言うと思って変装の準備もしてきましたよ。ほら」

詩織が嬉しそうにカラーウィッグや伊達眼鏡、カラーコンタクトまで出している。衣服もユニクロでそろえた目立たないカジュアルを鮎美のサイズで買ってきていた。

「どうです？ 行ってみませんか？ 少しだけ」

「……………」

「着替えてみてください。それでバレそうになれば行きましょう」

「……………」

「メイクもありますよ、カラコンを入れて伊達眼鏡して、地毛は隠してカラーにすれば、完全に別人ですよ」

「……………」

「ほら、こつちに座って。まずはカラコンを入れますね。コンタクトの経験は？」

「……………」

「では、私が入れてあげますね」

詩織に流されて鮎美はブルーのカラーコンタクトを着けられ、地毛を三つ編みにされてネットで仕舞い込まれ、同じくブルーのカラーウィッグをかぶせられた。ウィッグは鮎美の地毛と同じ長さで背中まである。

「次はメイクです」

メイクをされるのはポスターの撮影や演説時にも経験しているけれど、それは鮎美本来の印象を補助するためのナチュラルなメイクで、詩織が今してくるのは印象を変えるメイクだった。大きめのつけまつ毛を上だけでなく下にもつけられ、アイメイクも濃い。口紅も艶の強い色をつけられ、ファンデーションも三種類を駆使され、顔の立体的な印象まで変えられた。

「ここまで可愛くなったのに、もったいないですけれど、伊達眼鏡をしましょう」

「……………」

「ほら、鏡を見て来てください」

詩織に言われてバスルームの鏡を見ると、別人になった自分が見えた。

「……………」

「あとは関西弁も控えてくださいね。関西人って遠慮無く関東でも関西弁を使いますが、かなり目立ちますし、人の記憶に残る印象が強

くなりますから」

「……………」

「では、着替えてください」

「……………」

「着替えも手伝いますね」

「ええよ、一人でできるし」

「関西弁」

「……………いいよ、…一人でできるから」

やや恥ずかしくて顔が赤くなるのを自覚したけれど、メイクが濃いので赤みは出ない。

「議員バッチはもちろん、学生証とか、うっかり落として困る物は持つてこないでくださいね。悪いことをするわけじゃないですけど、カミングアウトする気が、まだ無いなら」

「……………」

着替えた鮎美は財布から現金を抜いて置いた。

「では行きましょう」

「……………少しだけやしな」

「関西弁」

「……………少しだけ…よ」

「クスツ…可愛い。鮎美先生、あ、うっかり名前を呼んでもまずいですね。偽名を…セリザワですから、セリカにしましょう。まったくの偽名だと呼んでも反応できないことが多いですが人間、頭の二文字まで合えば、そこそこ反応できるでしょう」

そう言いながら詩織もカラーコンタクトを入れている。鳶色のコンタクトをつけた詩織は四分の一がドイツ人なので印象が大きく変わる。

「ホンマに外人みたいや」

「……………関西弁」

「…本当に外人みたい…」

「あと、外人という日本語は、私は嫌いです。せめて外国人と言ってください」

「…………。クォーターって差別されたことある？」

「無いと思いますか？ この単一民族国家で」

「ごめん」

「私も芹沢鮎美の秘書としてチェックされると、まずいですからウィッグもかぶりましょう。冬なので温かいですし」

詩織が金髪のウィッグをかぶると、ほぼ日本人には見えなくなつた。

「さ、行きましょう」

「…うん」

二人でビジネスホテルを出ると地下鉄に乗る。ウィッグの前髪で顔を隠している鮎美は視界が狭い上、東京のことがわからないので詩織が手を引いてきた。

「セリカ、こつちですよ。迷子にならないでください」

「あ…うん…えつと…あんたの…ああなたの、名前は？」

「そうしたね、では、シオにゃん、で♪」

「シオにゃん、つて……」

「雰囲気では、私がタチでセリカが猫ですけど、いいじゃないですか」

「……」

「ビアンカツプルのフリをしてないと、バーでナンパされますよ」

「…………」

鮎美は拒否はせずに地下鉄内で別のことを感じた。

「……………」

変装してるおかげで、うちのことにも誰も気づかへん、めっちゃ気楽やわ、と鮎美は議員バツチを背負っているときには無い開放感を覚えていた。この半年、ずっと議員という肩書きを背負ってきたけれど、今は誰も鮎美に注目しない。田舎なら目立つはずのブルーのウィッグをかぶっていても、誰一人として気にも留めない。電車に乗っていることもあって高校2年生までの大阪で過ごしていた、ただの女子高生という気分が蘇ってきた。

「……………こんなに気楽な……………」

「セリカ、次で降りますよ」

「うん……シ、シオにゃんは東京に詳しいね」

「それほどではないですよ。ただ、自分がバイだと2丁目などには、よく行きますから」

「そ、そんな大きな声で……」

「クスッ、いいじゃないですか、セリカがビアンでも誰も気にしませんよ。とくに、この街はね」

駅から街に出ると、手を引かれて鮎美は恐る恐る歩いたけれど、やっぱり誰も鮎美が芹沢鮎美参議院議員であることに気づかない。

「……思ったより……普通なんや……」

「関西弁」

「思ったより……普通で……」

「何がですか?」

「街の雰囲気とか……あと、うちの……私の変装への反応とか……」

「どこも外観は普通のバーですからね。でも、よく見ると手をつないでるカップル、ノーマルとは違うことも多いですよ。ほら」

たしかにジロジロ見ないように観察すると、普通の街と違って同性愛者が多かったし、人目を忍んでいる気配がない。むしろ見せつけるように路上でキスしていたりもする。

「……路上チュー……」

細野の顔を思い出した。

「東京では路上チューって普通にすること?」

「ドイツでもしますよ」

「……」

「あと中央アジアの方々には挨拶代わりに抱擁されますし。自分の生きてきた世界だけが普通ではないこと、すぐにわかりますよ。さ、こっちはです。私の馴染みの店に行くと、私であることがバレますから、あまり行かない店ですがメジャーなところに案内します」

そう言った詩織はゴールドラグーンというバーの扉を開いた。

「いらっしやい。どうぞー!」

女性店員が歓迎してくれる。言われなくても鮎美にも女性店員も同性愛者なのだろうと見当がついた。鮎美は目を伏せているけれど、店員からの視線を感じる。それは普通の同性からの視線ではなくて、コートに包まれた鮎美の身体やメイクの奥の顔を見ているような視線だった。店はカウンター席が15ほど、テーブル席が20ばかりで、少し踊れるような何もない場所もあった。音楽は控え目で、いい匂いがするので香を焚いているようだった。

「セリカ、こっちへ」

「…うん…」

詩織がカウンターに座ったので、鮎美も隣りに座る。バーテンがいって男性っぽいスーツを着ているけれど、スタイルは女性だった。

「お飲み物は、何にしましょう?」

「私たち下戸ですから、私はダーズリンを、セリカはミルクティー?」

「…うん…」

関西弁を出さないようにと意識していることもあつて鮎美は口数が少なくなる。そんな様子を詩織もバーテンも可愛く想った。

「お連れさん、可愛いですね」

「……」

「セリカ、誉めてもらえて良かったね?」

「………べ……別に……」

ウィッグをかぶって前髪で顔を隠し、両サイドの髪も垂らして頬まで隠しているので、ほとんど顔貌は見えていないはずだった。バーテンが惚れ惚れするような手つきで紅茶を淹れている。一つ一つの動作がキビキビとしているのに女性的で美しい。

「ダーズリンです、どうぞ」

「ありがとう」

「ダーズリンのミルクティーです、どうぞ」

「おおき……っ……」

「はい?」

「…お……大きな……お店……ですね」

おおきに、と言いきりになったのを鮎美は誤魔化した。

「はい、ビアソールとしては一応、老舗ですから。セリカちゃんはビアソール自体が初めて？」

「……………」

「失礼、セリカちゃんって呼ばせてもらっていい？」

「…は…はい…」

「お姉様の方は？」

「シオにやんと呼んでください」

「クスッ、もしかして、シオにやんが猫で、セリカちゃんがタチだったり？」

「っ…」

鮎美がビクリとすると、詩織が言ってくる。

「セリカは、まだ経験が無いんですよ。私が口説いても、まだ怖いみたいで」

「……………」

別に怖いわけやないもん、と鮎美は不服に想ったけれど反論はできない。

「きつと初めては今好きな、あの子がいいのかな。でも、あの子は絶対にノンケですよ」

「……………」

見抜かれていて鮎美は完全に顔を伏せた。バーテンが興奮気味に言ってくる。

「可愛い……………5年前の私みたい。絶対にバレたくないって、しっかり変装までして。でも、この世界に興味はあるんでしょ？」

「……………」

答えられなくて鮎美はミルクティーを飲んだ。さらにバーテンが何か言う前に鮎美のスマートフォンが振動した。

「あ……………電話は？」

「小声ならいいですよ」

「……………ちよ、ちよつと出ます」

着信表示は鷹姫だったし、きつと話せば関西弁になる上、標準語で

話せば、それはそれで鷹姫に不思議に思われそうで鮎美はバーを出た。

「もしもし、うちよ」

「お部屋におられないのですか？」

「う、うん。ごめん、黙って出て」

「今は、どこに？」

「え……えつと……ま、牧田はんが東京の下町を案内してくれるって」

「そうですか。ご夕食は、どうされますか？」

「あ……ごめん。……けっこう遠いところにいるから……ごめん……鷹姫、ごめん、一人で食べておいて、ごめん」

「わかりました」

「ごめん、ごめんな、勝手なことして」

「いえ、そんなに謝らないでください」

「夕食、何でも好きな物を食べておいて、うちが奢るから」

「いえ、出張の度にそれでは……。それなりのお給料をいただいておりますから気にしないでください。では」

そう言った鷹姫が電話を切った。

「……鷹姫……」

すっかり詩織の勢いに流されて、鷹姫へ伝言することさえ忘れていた自分が情けなくて涙が滲む。

「……」

店の前に立っていると、見知らぬ女性に声をかけられる。

「どうしたの？ そんな顔して」

「っ……」

優しく慰める感じだったけれど、明らかにナンパで鮎美は店に逃げ込んだ。

「…ハア…」

「おかえりなさい」

「…うん…」

鮎美は冷めてしまったミルクティーを飲む。その背後で人が入店

してくる気配があった。

「なんだ、相方いるのね」

さっつきの女性の声だった。馴染み客のようでバーテンが挨拶する。

「いらつしやい、朝槍先生」

「いつもの頂戴。ここ、いいかな？」

朝槍が隣席に座ってよいかと、鮎美と詩織に訊いてくる。

「…」

「どうぞ」

鮎美は答えなかったけれど、詩織はこころよく返答した。

「お邪魔するね」

「…つ…議員バッチ…」

鮎美は隣りに座った朝槍が薄い橙色のスーツに議員バッチを着けているのに気づいた。けれど、百人いる女性参議院議員の中にも、数少ない女性衆議院議員の中にも、朝槍という姓はいないような気がするし、国会議員の議員バッチとは違うように見える。あまり観察して、こちらの顔を見られたくないので、すぐに鮎美は顔を伏せた。

「あ、ごめん。政治家とか嫌いだった？」

「…い…いえ…」

「朝槍さん…あなたのお顔、どこかで…」

詩織も思い出せそうで、思い出せずにいると、バーテンが言ってくる。

「朝槍先生を知らないなんて、東京に来て日が浅いの？」

「はい、私は名古屋…いえ、北海道、セリカも北海道出身ですから」

「嘘っぽいわね。どっちかというと言葉の感じは西の方じゃない？」

「詮索はやめてあげなよ。はじめして、私は朝槍那由梨、みんなはナユって呼ぶよ。朝槍先生でもいいけど。で、一応は東京都議です。ピアンってこともカミングアウトしてるから、この界限では有名人よ。もし、都に住民票を移していたら、次の選挙は、よろしくね」

「都議でしたか……」

詩織が納得したように頷く。東京で生活している詩織にとっては、ときおりポスターを街中で見かけていたはずだったので、どこかで見ただ顔だと思ったのだった。朝槍はショートカットが似合っていて化粧気が少ない女性だった。大きめのイヤリングが目を引き出し、ショートカットのおかげで形のいい耳も丸出しになっている。

「失礼ながら、どこの政党なのですか？」

「無所属よ」

「そうですか……」

「いきなり、そういう質問をするってことは、あなたも政治関連の？」

えっと……」

「シオにやんです」

「……。シオにやんのお仕事を訊いてもいい？」

「先月まで高校の教師をしていましたが、女子生徒に手を出したのがバレてクビです。幸い父が政治家でしたから、新聞には載らず、処分もなく依願退職で済みました」

「あく……やっちゃったのね」

「よくある話ね」

「……」

よくあるんかい！ 全部嘘やんけ！ と鮎美は心の中で突っ込んだ。

「で、セリカも学校を中退して私についてきてくれたの。ね、セリカ」

「……」

いやいや、さっきバーテンに話したことと整合せんやん！ と鮎美は突っ込みたくて震えたけれど、バーテンの方は客が話すことの整合性は気にしていないし、そもそもセリカもシオにやんも本名でないとわかっていて納得している。それでもバーテンが鮎美の手を見て言う。

「どおりで肌がピチピチしてると思った。羨ましい」

「じゃあ、さっきの電話は、ご両親と？」

朝槍の問いに鮎美は困ってしまい、答えない。すぐに朝槍は察した。

「ごめんね、これ以上の詮索はやめるわ。でも、困ったことがあったら相談してね。誰でも生活困窮者の対策はしているから、説明しにくい事情でも私が間に入ってあげるよ」

そつと朝槍は名刺をテーブルに置いてくれた。政治家が名刺を手裏剣のように撒くことは理解していても、今は朝槍の好意と真心を感じたので名刺をポケットに入れる。いつもなら、名刺を受け取るだけでなく自分の名刺もすかさず返すのに、今は架空の少女セリカなので黙って頭を下げた。

「はい、朝槍先生お気に入りのホワイトホーススペシャル」

「ありがとう」

朝槍はウイスキーとテキーラのカクテルを一息に呑み干した。

「話を変えるけど、民主も政権とって豹変するヤツがいてさ。なんだか、がっかりよ」

「お疲れ様ね。今日は何をしてたの?」

「また忘年会。企業団体がらみのが一段落したから民主の内輪でやるのに呼ばれて行ったの。けど、行くんじやなかった」

「ノンケの男とお酒飲んで話したら、どうなるかくらい予想つくでしょうに」

「予想はしてたけど、少しは期待もしてたの。なのに、くだらない話ばかり。って、愚痴いっても、しょうがないよね、ごめん。もう一杯ちょうだい」

「私もジンジャーエールをください。セリカは?」

「…」

黙って頷いたのでジンジャーエールが来る。グラスに注いだだけのジンジャーエールではなくハーブとライムが入っていた。

「セリカさんはともかくシオにゃんは呑まないの?」

「下戸ということにしています。セリカが呑める年齢になったら、いっしょに呑みましょうね」

「クビになっても教師ね。まあ一人で酔っても、つままないし」

朝槍は二杯目のカクテルは、ゆつくりと呑んでいる。鮎美も少し余裕が出てきて、店内を観察した。やはり女性客だけで男性はいない。そして、踊っていたりイチヤツいていたり、口説く相手を探していたり、黙ってスマートフォンをいじっていたりする。

「セリカさんの手、キレイね。触っていい?」
「え…」

朝槍に問われて鮎美が固まる。あんた都議やん、たとえ手でも立場的にええの、と鮎美は混乱している。詩織が鮎美の肩を抱いてきた。

「ダメですよ、私のだから」

「シオにやん、ケチね」

「ナユ先生、お相手は?」

「いるんだけど、私がかミングアウトしたことが原因で、ちよつとうまくいってなくて。あの子は目立ちたくないって…マンションから出なくなっちゃって」

「そうですか…それは気の毒に…」

「もともとおとなしい子だから。セリカさんも、あんまり話さないね。こういうお店、初めて?」

「…はい…」

圧倒されつつも最低限の返事はした。

「大事にしてあげなよ、シオにやん」

「それは、もちろん」

「シオにやんは次の仕事あてあるの?」

「お気遣いありがとうございます。大丈夫ですよ」

「なら、いいけど」

「…あ…あの…」

鮎美が口を開くと、二人とも黙って待つてくれる。

「…あの…ちよつと質問…しても…よいでしょうか…」

関西弁を封印して話すとなると、インタビューを受けるより難しく、途切れ途切れになる。

「いいよ、どうぞ」

「……あ…朝槍先生は、どんな気持ちでカミングアウトして……おられるのですか？　そ…そして、それは都議選の前に……後に？」

「前によ。私は女性同性愛者です、そういう者が存在します。そして選挙に出ます。私たちは少数ですが、たしかに存在しているのです。無視しないでください、って気持ち」

「……あ、ありがとうございます……。あの……もう一つ、いいですか？」

「ええ、いくらでも」

「…同性婚は……憲法上可能やと……可能だと思われませんか？」

「うくん……そこにくるわけね……セリカさん、身体より理屈で入る方かな……一応、私たちの勉強会は可能という結論にしているわよ。もつとも、私たちはセクマイの集まりだから、その結論が恣意的だとノンケに言われれば、反論しないといけないけど」

「どのような反論を？」

「基本的人権の本旨をかえりみれば、両性という文言にとられず解釈すべき、という反論」

「なるほど……」

「フフ、セリカさん、私たちの勉強会に参加する？」

「い…いえ……」

バーテンが注文を受けていないのに、朝槍のカクテルグラスが空になっていたので、国産ウイスキーをシングルで提供した。

「酔いが醒めるような会話してるわね」

「この子が欲しくて教師の立場を捨てた気持ちがわかるわ。シオにゃんは社会科の先生だったの？」

「さあ、どうでしょう」

「そう、詮索は無しってことね。じゃあ、セリカさん、他に質問は？」

先生が何でも教えてあげるよ」

酔ってきた朝槍が顔を近づけてくる。鮎美は顔を伏せたまま問う。

「命の盾の会、という団体は……、この界限で…、どういう評判ですか？」

「命の盾……ああ、あの三島さんの？」

「はい」

「狭い世界だから知ってるけどさ……うくん……評判かあ……」

朝槍の雰囲気で鮎美が少し察する。

「あまり良くないんですか？」

「まあ……私たちは差別を無くすべき、という立場だから……色々受け入れるべき立場なんだけど……あの三島さんは色々な問題をゴチャにしすぎなのよ。本人が同性愛者で性同一性障害もあるってだけでも、ややこしいのに。お子さんが障碍児だったから、その差別とも戦うって気持ちは立派だけど、あらゆる問題が積み上げられた感じで、とくに出生前診断の問題は、健常者から見れば財政的負担が青天井に増えることが予想されるわけで、結果としてマイノリティーへの拒否感が強まると思うの」

「……………」

「私たち同性愛者の同性婚を認めたとところで、大きな財政的負担は生じないけれど、障害者が増えるのは、それに見合う財源の確保がいるでしょ？ それは徴税でまかなうか、国債で先送りするか、どちらにしても負担しなければならぬ。……って、バーに来て、こんな話をするとは思わなかったわ……もう一杯、そうね、セリカさんの髪が青いからブルーハワイをちょうだい」

「ブルーハワイね」

バーテンがカクテルを作る間、酔った頭脳で難しい問題へ回答をした朝槍は音量ゼロでついているテレビを見上げた。テレビは今年の世相を振り返っていて、鮎美も見上げると、そこに鮎美の姿が映った。朝槍が興味をもって言う。

「ちよつと音量あげて」

「はいはい」

バーテンが店内の雰囲気を壊さない程度に音量をあげた。

「どれだけ勉強しても足りんとは思いますが、全力で取り組みたいと決意しております」

言った覚えのある鮎美のセリフが流れてくる。

「この子、この前、東京駅で見かけたわ」

「……」

鮎美と詩織は、そろそろ店を出ようかと考えるけれど、今出ると逆に怪しまれる気がした。バーテンがブルーハワイを置きながら言う。

「クジ運がいいだけで何の苦勞もしないで、この子の年収600万つて話よ」

「それは誤解、けっこう、この子は頑張ってるよ。ジリ貧の自民が期待かけて磨いてるし、私も期待してる」

「朝槍先生が？」

「私の勘だけだね、この子、ビアンだと思うの」

「え〜……どんな勘よ。ただの願望じゃないの？ 朝槍先生の好みっぽい顔だし」

「……………」

「これ見て」

朝槍が自分のスマートフォンでネット上の動画を再生する。

「このときのインタビューのテレビで流れなかった部分なんだけどさ、ネット放送ではノーカットであがってるの。で、ここ見て」

「現在、交際されている男性などはいますか？」

「……………ノーコメント」

「どう？ この感じ。それまでレポーターの質問へ女子高生とは思えないくらいそつなく答えてたのに、この質問が来た瞬間、顔をしかめたし、回答も拒絶してる」

「たしかにね……この感じだと、彼氏と別れた直後か、ビアンってところかな」

「ノンケのレポーターが無神経に訊くから苛立った感じでしょ」

「あの人たちは女と男が付き合うのが当然って考えてるから、自分が無神経なこと訊いたことにも気づかないのよ。ま、私たちでない限り気づかない程度の証拠ね。私としても半々ってところかな。彼氏と別れた直後でも、こういう反応はありえるでしょ。ノンケたちは、そう解釈してそうだし」

「きつとビアンよ。爪もキレイだし」

「それ完全に願望じゃん、っていうか妄想の領域」

「噂だけど、この子を獲得しようとして民主は10億円も積んだって話よ」

「10億も?」

「けど、自民への義理を立てるって蹴ったらしいの」

「すごいわね……まあ、女子高生だと、お金の価値がわからなくて逆効果だったのかな」

「見てみたかった。知事室に誘われて10億で自民から民主に言われて、この子が啖呵きつて蹴るところ! そういうときの関西弁ってカッコいいよね」

「……」

いやいや10億とか見てないし、ミルクティーごちそうになっただけやし、ホンマに噂って真偽テキトーで流れるなあ、だいたい知事室に10億も持ち込んだら、どっちも贈収賄とか、贈与税とか、いろいろヤバいことなるやん、そもそもカバンに10億も入らんし、と鮎美は突っ込みどころ満載な噂話に辟易しつつ、もう顔をあげられないし、声も出したくないので、詩織の膝を指先でつついた。それで理解してくれる。

「そろそろ出ますね。ごちそうさま」

詩織が財布を出して会計を済ませる。鮎美は黙って会釈だけしてバーテンと朝槍に背中を向けた。店の外に出ると、粉雪が降っていた。

「寒っ…」

「セリカ、お腹空いてませんか?」

「…うん…」

「別の店で食べましょう」

「うん……さっきの店の支払い」

鮎美がポケットから現金を出すと詩織は断る。

「おごらせてください」

「……おおきに」

「関西弁」

「……ありがとう、シオにゃん……」

「それにしても有名人ですね、あの芹沢鮎美って」

詩織が他人事のように言った。

「……」

「でも、真横にいても気づかないのですから、安心していいですよ」

「……生きた心地がせんかったわ……」

「関西弁、治りませんね」

「……」

鮎美は黙ってポケットへ入れていた朝槍の名刺を見なおした。ただ票集めのために配るだけの名刺ではなく、きちんと事務所の連絡先やメールアドレスなども書いてある方の名刺だった。

「………勇気のある人……」

「その彼女だって18歳のころは隠していたでしょう。焦ることはないので」

「……シオにゃん……」

「ここに入ってみましょう。私も初めての店ですが」

小百合の前庭という店名のバーへ二人で入った。

「暑っ……」

「かなり暖房が強いですね」

「あ、いらっしやい。どうぞお」

派手な化粧の女性スタッフが大きな声で言った。靴を脱いであがるタイプの店のよう地下駄箱がある。店内はカウンターが5席、テーブルが二つ、そのテーブル席は掘りごたつ式になっていたし、絨毯が敷かれていて洗練されたセンスは無いけれどアットホームな雰囲気がある。二つのテーブルには先客がいたので詩織と鮎美はカウンターに座った。

「何にしますか?」

「二人とも夕食がまだなのです。何かおすすめはありますか?」

「今夜はママが出てて、私だけだから料理はできなくて。よそから仕入れてる冷凍だけど美味しいピザがあるよ」

「では、それを」

「お飲み物は？」

「ソフトドリンクはありますか？」

「それなら、その冷蔵庫から好きなの、取って。一つ300円」

そう言われたので詩織と鮎美はカウンター横にある冷蔵庫からウーロン茶の缶を取った。そして、どうにも暖房が強くて暑いのでコートだけでなく上着も脱いでハンガーにかける。詩織はキャミソール姿になり、鮎美は半袖になった。

「お客さん、うちは初めてだよね」

「はい」

「お連れさんは未成年？」

「お酒は吞ませられません、成人していますよ」

「しつかり顔を隠してるけど、実は芸人だったり？」

「……………」

鮎美は黙って首を横に振った。店内は狭いのに大きな鏡が沢山設置されていて、テーブル席の先客たちが深いキスをしていたりするの
が、振り返らなくても見える。ピザが焼ける良い香りがしてきた。

「私たちが世間に顔を出しにくい趣味してるのはわかるけどさ、ここ
では顔くらい見せてよ」

「……………」

趣味ちやうやん、指向やん、そこ大事なんちやうの、と鮎美は思っ
たけれど口にせず、ウィッグの横髪を少しだけ掻き上げた。

チン♪

トースターが音を立て、焼き上がったピザを提供してくれる。

「……………美味しい……………」

期待していなかったのに意外にも美味しいピザだった。

「サンジェルノ・ド・ジバンのピザだから」

「……………」

「あ、知らない？　そこそこ有名店、行列できるくらい。あそこの女社
長がバイでき、旦那も子供もいるけど、うちのママとできてるから格
安で仕入れてるの。ちなみに、私もバイ」

「私もです」

詩織が答えると、嬉しそうに微笑んできた。

「へえ、私はカノン。本名は忘れちゃった」

「シオにやんです」

「あなたは？」

「…セ…セリカ…」

「セリカもバイ？」

「う…うちは…わ、私は……………」

ビアンです、と言おうとしたのに声が出なかった。

「そんな緊張なくていいよ。タバコ吸っていい？」

カノンが二人の食べ終わるタイミングで訊いてきたので詩織が鮎美を見てから答える。二人ともタバコを好きではないけれど、仕事柄よく男性たちの副流煙には慣らされてきたので不快さを忘れる術を身につけつつあった。

「どうぞ」

「二人は吸わない方？」

「はい」

「…うん…」

「じゃ、遠慮するよ」

そう言つてカノンは出しかけたタバコを片付けた。

「で、セリカの趣味は？」

「え……………えっと……………じょ……………女子…だけ……………です…」

今度は、かろうじで言えた。

「ビアンか、ビアンバーだしね。そう言えばバイバーって無いよね。つくったら、受けるかな？」

「…語呂が…」

語呂が悪いやん、と突っ込みたかったけれど、関西弁を封印すると、突っ込みにくかった。

「シオにやんとセリカ、今夜これから、どうするの？」

「もちろん、ホテルに戻って楽しいことをします」

「あ、もしかして観光？ 東京の人じゃない？」

「はい、北海道から来ました」

「っ……」

誰が道産子やねん！ そのネタまだ引つ張つとるんかい！ と突っ込みたいのを耐えた。

「つてことは常連にはなつてくれないね。一期一会、せつかくだから三人で楽しいことしない？ あと2時間で私の交替が来るからさ」

「……」

「2時間も待てないなら、ここで始めてもいいよ。どうせ、あそこの2組も、もう始めちゃってるし。裸にさえならなきゃOKだよ」

言われて振り返るとテーブル席にいた2組はキスだけでなく、お互いの手を相手の衣服の中に入れていいる。経験の無い鮎美にも、その手が股間の奥まで入っついていそうなことはわかった。さきほどの店と違って、かなり管理は緩い様子で、あまり秩序を感じない。

「ね、私も混ぜてよ。シオにゃん、お願いだにゃあ、その獲物を分けてにゃあ」

「フフ、さて、どうしましょう。セリカ、二人がかりで可愛がつてあげましょうか？」

「っ……」

鮎美が激しく首を横に振った。

「セリカが嫌がつているので、ごめんなさい」

「そっか……」

残念そうにカノンが諦めた。鮎美がポケットから一万円札を出してカノンに渡す。

「もう帰るの？ セリカの顔、もつと見ていたかつたな」

「……」

「2600円になりますね。無口なセリカがシオにゃんにベッドで、どんな声を出さされるのか、聴きたかつたにゃ」

「セリカは恥ずかしがりですから。カノン、美味しいピザをありがとう。早々に切り上げて悪いのですけれど、他のビアンバーで、もう少し初心者向けというか、過激でないところを教えてくださいませんか？」

「それならゴールドラグーンかな」

「そこは、さつき行ったので」

「じゃあ、ゲイも来るけど、ソロモン金平糖は？」

「そこは……」

そこは詩織の行きつけだったので今夜は避けたい。

「セリカが男性のいるところは避けたいので」

「女子だけで初心者向けだと……あ、SSSがいいよ。カラオケもあつて軽い感じだよ」

「はい、行つてみます」

カノンから場所を聞いてSSSという大きめの店に入った。そこはバーというよりダンスホールのような店で広くてピアノも置いてあつた。

「セリカ、踊りましょう」

「え……でも……」

「見よう見まね、何か技術があるわけではないですよ」

ピアノ演奏に合わせるわけでもなく、女と女で手を取り合つて揺れている。広い店には何十人と客がいたけれど、すべて女性だった。踊りながら詩織が言つてくる。

「隠すことも恥じることも無いのです」

「……シオにやん……」

「こんなに大勢、自分と同じ人たちがいるというのを、この場で感じて、どうですか？」

「……安心……したかも……」

「良かった」

「シオにやん……」

「ただ慎重に、あなた自身が傷つけられないように行動を選んでください」

「…慎重に……選ぶ……」

「世間は私たちにとって、冷酷で残酷で醜悪です」
「……」

「他人は他人の痛みに無関心ですし、人はそれぞれの欲望に夢中です」

「……………」

鮎美が黙っていると、詩織は踊るのをやめて抱きしめた。それからキスをしようとしたけれど、鮎美が戸惑ったので諦めた。

「セリカ、そろそろ帰りましょうか」

「うん……今日は……ありがとう、シオにゃん」

終電が無くなる前にホテルへ戻った。深夜、ホテルまで歩くと、鷹姫がホテル前にいて、変装している鮎美と詩織を見て、別人かもしれないと迷いつつも、体格や輪郭で判断して近づいてくる。

「芹沢先生ですか？」

「あ……うん……そう……ごめん……遅くなって……外で待っていてくれたの……」

「どうして、これほど遅くなったのですか?！」

その詰問は鮎美というより詩織に向けられていた。

「少し社会見学をしていたただけです。この時間帯でしか見られない世情もありますから」

「だとしても不用心です! こんな時間に!」

「置いて行かれて拗ねてるの?」

「そんな話はしていません! 芹沢先生の安全を考えるべきだと言っているのです! この愚か者!」

鷹姫は挑発に対して叱咤で応え、詩織は年下に本気で叱咤されて感情が動いた。

「鮎美先生は私が守りますっ!」

「深夜に連れ回して言うことですかっ! だいたい、その珍妙な姿は何ですかっ! 名実ともに参議院議員なのですよ!」

「たまには息抜きも必要でしょう!」

「……や……やめて……ケンカせんとい……うちが悪かったから……ごめん」

鮎美が歩道に積もりかけた雪に涙を落とすと、鷹姫と詩織が冷静になった。ホテルの客室に戻り、変装を解いて詩織は終電で世田谷へと帰り、鷹姫と二人になった。

「ごめん、ちゃんと行ってから、行けばよかった」

「いえ、もうよいのです。ですが、今後は注意してください」

「うん……気を付けるよ、ごめん」

「では、おやすみください」

鷹姫が出て行くと、一人になる。

「……………」

入浴しなければ、と思うのに気力が湧かない。冷たい身体のままベッドに横たわった。

12月29日 風邪

翌日の12月29日、鮎美は発熱して東京の休日診療所へ受診していた。医師が検査結果を伝えてくる。

「インフルエンザではありませんね。ただの風邪です」

「よかつ…ゴホツ…ゴホツ」

「よかつた」

そばにいた鷹姫と詩織も安堵した。

「お薬を出しておきますから、しばらく寝ていてください」

「はい、ゴホツ…1月1日までには治りますか？」

「ええ、おそらく」

東京に来た最重要スケジュールである新年祝賀の儀への出席は果たせそうだった。三人で待合室に戻ると、詩織が謝る。

「ごめんなさい、私のせいです」

「いや…ゴホツ…うちが…不注意で…」

「あなたのせいです。反省なさい！」

容赦なく鷹姫が言うのと、素直に謝っていた詩織が黙って鷹姫を睨む。

「……」

「鷹姫…今日の予定は？ ゴホツ…」

「健康であれば、改装された東京事務所へ行き、2、3の訪問客を迎え、雑誌社が取材を願っていました。もともと年末ということもあり予定は少なく、どれもキャンセルしても問題ありません。どうか、お休みください」

「お休みされるにしても、さきほどからホテルを探しておりますが、どこも年末で満室です。ですから、私のマンションに来ていただけませんか？ 客間もあります。看病するにしても、ホテルでは何もありませんし」

「……………」

「少しでも早く横になられた方が良いです」

「…そやね……ほな……お願いするわ…」

タクシーを呼び、世田谷にある詩織のマンションへ三人で移動した。マンションは大きな玄関にコンセルジュが待機している高級マンションで、詩織が住んでいるのは39階の8LDKだった。高速エレベーターであり、個別の玄関をカードキーで開けると、中に案内してくれる。中は24時間の冷暖房がされているようで暖かかったし、詩織は鮎美のために、さらに2度ほど気温設定をあげた。

「こちらです。どうぞ」

詩織が自分の部屋に向かいにあるドアを開けた。部屋のドアには、AYUMIというプレートがかけられていたので鮎美は計画めいたものを感じる。

「…あんた……うちを、ここに……」

「いずれ泊まっていたたく日もあるかと思い、準備していました。こんなに早くそうなるとは思いませんでしたけれど。それが役に立ちそうで良かったです」

準備していたと言うとおり、ベッドも家具もそろっていて看病するにも十分だったので今は有り難い。ふらふらと鮎美は二人に支えられてベッドへ横になった。

「…ハア…ハア…」

「また熱があがってきているようです。牧田さん、体温計はありますか?」

「はい、すぐに」

詩織は自分の部屋から体温計をとつてくると、鷹姫には渡さず、鮎美の胸元のボタンを外すと腋の下へ入れた。すぐに電子体温計が反応する。

「39.9度……」

「芹沢先生……(っ)気分は?」

「…そんなくらい……平気や……心配せんでええ……ハア……寝るわ」

ぐったりと鮎美は目を閉じた。今は制服ではなく詩織が変装のためにも持ってきたカジュアルな服を着ているけれど、このまま寝かせる

のは身体に良くない。

「鮎美先生、パジャマがありますから着替えてください」

「…ハア…」

鮎美は返事をしないけれど、拒否でもない。詩織はダンスからパジャマを出してきた。ちょうど鮎美の身体に合うサイズだった。

「脱がせますね」

「…自分で…」

自分で着替えようとしたけれど、指に力が入らない。もう判断力も無くなってきたので鮎美は身体を任せた。衣服と下着も脱がされて、新しい下着とパジャマを詩織と鷹姫が着せてくれた。

「ゆっくり、お休みください。何かあれば内線電話で呼んでください」

「早く良くなってください。何か欲しいものはありますか？」

「ううん……今は何も…」

そう言って目を閉じているので、詩織と鷹姫は部屋を出た。

「……………」

「……………」

詩織が黙ってリビングへ行くので、鷹姫も続いてリビングへ入った。部屋にいる鮎美へ声が聞こえないくらい離れてから詩織が言う。

「鮎美先生は私が見ていますから、宮本さんは東京事務所へ行って今後の準備などしてもらえますか？ 訪問客もキャンセルになったことですし、大掃除などしててください」

「いえ、私は芹沢先生のそばにいます」

「……。私一人で十分ですから」

「こうなったのは、あなたが原因です」

「だから、私が責任を持って看病します」

「信用できないと言っています」

「……………。では、勝手にしてください。言っておきますけど、宮本さんの部屋はありませんよ。泊まるなら、その床にでも寝てください。毛布一枚くらい貸してあげます」

「わかりました。ありがとうございます」

「え……う？」

この子、今、本気でお礼を言ったの……いくつも部屋がある一人暮らしなのは見てわかるはずなのに……、ソファもあるのに床へ寝ろなんて言ったのに、と詩織は驚くけれど、道場の床で寝てきた鷹姫は違和感をもっていないし、あまり詩織からの悪意も感じていない様子だった。

「……………」

「……………」

「私は雑誌社に電話しますから、宮本さんは訪問してくださいる予定だった石永先生の支援者へ謝りの電話を入れてくれますか？」

「はい」

二人で分担して予定がキャンセルになることを謝り、それが終わると、また沈黙になる。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

しばらく沈黙が続いた後に鷹姫が鮎美のカバンを開けると、陽湖から渡された大学資料を取り出し、それを静かに読み始めた。

「……………」

「…………それは何の資料ですか？」

「芹沢先生が、ご友人から陳情を受けた大学新設に関する資料です。文科省への申請を手伝って欲しいとのことですよ」

「大学新設……そのお友達は、どんな人ですか？」

「同級生の生徒会長です。良い人なのですが、私には理解できない神を強く信仰されています。この大学も、その信仰を是とする大学です。芹沢先生とは半年前から同居されていて仲が良いのですが、あまり信仰の影響は受けて欲しくないと懸念しています」

「同居っ?! いっしょに住んでるんですかっ?!」

「はい」

「どうして、いつしよに住んでるの?!」

「……話すと長いですよ?」

「鮎美先生の生活は私も秘書として知っておくべきです! 教えてくださいー!」

「それもそうですね。では、もともと私と芹沢先生が通っている高校そのものが、幸福のエホバというキリスト教系の学校なのです」

「幸福のエホバ……あの……」

「ご存じですか?」

「ええ、ドイツでも見かけましたし、フランスとロシアではカルト指定されていたと思います。どうして、そんな学校に鮎美先生が? あなたも」

「私の家から近くて便利だったのです。芹沢先生も同じ理由です」

「そんな理由で宗教学校に……私は大学からドイツで暮らしていたのですが、日本人の宗教感覚は、いい加減すぎますよ。普通、信仰していない宗教の学校に通わないものですし、親も通わせないものです。そんなことをしたら大問題になります」

「そうなのですか。それはともかく、私たちの学校では9割の生徒は、その宗教を信仰していません。けれど、ごく少数の生徒は強く信じています。その代表が月谷陽湖です。生徒会長……生徒信仰なにかし……総括……会長という正式名称もありますが、忘れてしまいました。ともかく代表です」

「その月谷さんが鮎美先生と同居を?」

「はい。学園の理事や校長からの手引きで芹沢先生が議員となることが判明してから、クラスも移籍し、強制的隣席となり、私たちの島に引越しまでして接近してきたのです。それで近くに借家を借りていたのですが、あまり立派とは言えない借家で、お優しい芹沢先生は見かねて、いつそ同居するように言われたのです」

「そんな怪しい人と同居するなんて!」

「……身元は……、身元調査はされていません。ですが、悪い人ではないと感じます。強い信仰心をもっておられ、やや発言が意味不明であることもありますが、芹沢先生も仲良くされています」

「そんなことで、あなたはいいんですか?!」

「……………」

鷹姫が深く考え込む表情になった。

「……………」やはり、芹沢先生が宗教の影響を受けるのは好ましくありません」

「そつちじゃなくて!」

ああもう! この子ノンケな上に、鈍すぎる! と詩織は苛立ったけれど、情報を得るために冷静になる。

「その月谷さんは鮎美先生と暮らしていて、怪しいことはされませんか?」

「されます」

「つ、どんなことを?!」

「島内すべての家に、怪しげなパンフレットを毎週のように投函されています」

「それは、あの人たち全員がやってることですよ! うちのポストにも入ってるから! そうじゃなくて! スキンシップとかいって、やたら鮎美先生の身体に触ったり髪を撫でたりしてませんか?!」

「……………」そういったことは、どちらかといえば、芹沢先生が月谷へされ、彼女に迷惑がられています」

「それを先に言ってくださいよ」

詩織は興奮して喉が渴いたので紅茶を淹れる。鷹姫の分を淹れずに一人だけで飲むかと迷ったけれど、それも大人げないので鷹姫にも淹れた。

「どうぞ」

「いただきます」

二人で紅茶を飲み終わると、また沈黙になった。

「……………」

「……………」

詩織が茶器を洗うために片付け始めると、鷹姫も手伝う。それから詩織は鮎美のために粥を作ることにした。弱火で米を炊きながら、鮎美のことが気になったので部屋の前まで行ってみる。

「……………」

寝ている様子で静かだったので、すぐにキッチンへ戻る。

「芹沢先生のご様子は？」

「眠ってくれているみたいです」

「何か手伝いしましょうか？」

「いえ」

手伝いを断られた鷹姫は静かに資料を読んだり、予定を確かめたりして過ごし、夜になると毛布一枚を借りてリビングの床に横になった。

「……………」

「……………」

本当に床で寝る気なの、そこにソファもあるのに、部屋だつて鮎美先生のために用意した部屋以外にも客間があるのに、一言お願いすれば私だつて折れるのに、何なのこの子、意地になつてるの、それともバカなの、と詩織は寝る体勢になつている鷹姫を見つめて思った。

「……………」

「……………牧田さん」

「何ですか？」

「あなたは眠らないのですか？」

「もう寝ます！ おやすみなさい」

詩織は床暖房を切つてやろうかと迷つたけれど、それをすると意地悪すぎて自己嫌悪に陥りそうなので24時間暖房はそのままにした。

12月30日の早朝、真冬の遅い日の出前に鮎美は目を覚ました。

「…………ちよつとマシかな…」

熱で疼いていた身体が落ち着いている。手を伸ばすとスマートフォンがあり、その明かりで体温計を探すと検温してみた。

「…37.5か…………うちの勝ちやな」

自分の身体を侵したウイルスたちに勝ちつつある実感を持ち、トイ

レに行きたくなかったので起き上がった。

「みんなに迷惑かけてしもて……情けないわあ……」

一人言を漏らしながら廊下に出る。足音を立てないように歩いてトイレを見つけて用を済ませ、今度は喉が渴いたのでキッチンへ行ってみる。詩織が冷蔵庫も勝手に開けてくれていいと言ってくれていたの、お茶をもらって部屋に戻ろうとしてリビングの床で眠っている鷹姫に気づいた。

「……鷹姫？」

「……あ……もう立ち上がって大丈夫なのですか？」

鷹姫も目を覚まして、鮎美の姿を見て問うてきた。

「うん、だいたい元気になったよ。7度5分やったし」

「そうですか、よかったです」

「鷹姫、なんで、そんなところで寝てるの？」

「牧田さんに泊めてもらいました」

「……泊めてって……せめてソファに寝るとか……他にも部屋とか無かったん？」

「部屋はないと言われました」

「……こんな大きなマンションに一人暮らしっぱいのに……」

「私のことは、どうかお気になさらず。まだ完全に熱が引いたわけではないのですから、休んでください」

「……うん……ごめんな……」

まだ熱がある自覚はあり、これ以上の迷惑はかけたくないので素直に部屋へ戻って、日が昇るまで眠った。昼前になって詩織と鷹姫が粥をもつてきてくれた。

「おおきに。迷惑かけて、ごめんな」

「気にしないでください。私が悪いのですから」

「うちの不注意よ。……せやけど、世話になっておいて、こんなこと言いたくないんやけど、なんで鷹姫を床に毛布一枚で寝かせてたん？」

「っ……それは……」

知られていないつもりだったのに、知られていたので詩織が動揺す

る。その動揺で鮎美は不信感を強くした。

「ソファもあるのに、ひどいやん」

「……………宮本さんが床でよいと言われたので…」

「他に部屋はなかったん？」

「……………あります…」

「……………」

鮎美が悲しい目で詩織を見た。

「っ……」

詩織が息を飲むほど後悔した。会話の流れで鷹姫を床へ寝かせたけれど、マンションの広さを考えれば、ひどい仕打ちで白眼視されかねない。一昨日にビアンバー巡りをした直後は、いい雰囲気にもっていきけるかもしれないと感じていたのに、今は外の寒気のように鮎美の気持ち冷え切っているのがわかる。詩織が嫉妬で鷹姫を冷遇したのだと、鮎美にはわかるし、それが悲しくもある様子で肩を落としている。とうの鷹姫は冷遇されたとは感じていないので医師からもらった薬を用意した。

「食後に飲んでください」

「…鷹姫……………」

「はい？」

「夕べは床で寝てて寒くなかったん？」

「はい、床が高価なホテルのように温かい床でしたから」

「せ、設定も2度くらい、いつもよりあげたんですよ！ お二人のために！」

「牧田はん……………」

鮎美が時計を見る。

「今日の予定も人と会うのは感染させたら迷惑やしキャンセルやとして、ホテルも予約がとれんなら、また泊めてもらうかもしれないけど……………鷹姫の寝るところ、もう少し考えてやってな。頼むわ」

「は、はい。今から準備しておきますね！」

そう言って詩織は部屋を出て行った。

「……………」

「食欲はありますか？」

「うん……おおきに」

作ってもらった粥を食べて薬を飲むと、鷹姫に訊いてみる。

「うちが倒れてる間、牧田はんに嫌なことされんかった？」

「はい。何も」

「ホンマに？」

「はい」

「……鷹姫は人間関係で妙に鈍いところあるから、気づいてないだけかも……ささいなことでも言うてよ？」

「はい、あえて言えば、私にとつて嫌なことではありませんが……」

鷹姫が昨日を思い出しながら答える。

「芹沢先生と月谷が同居していることを話したら、強く警戒しておられました」

「ああ……陽湖ちゃんのな」

「慣れてしまったので私も不覚でしたが、やはり特定の宗教の影響を芹沢先生が受けるべきではないと考えます。その点、牧田さんと同意見です」

「うん、わかったよ」

絶対に宗教やなくて同居の件やね、と鮎美は想いながら鷹姫の頬を撫でた。

「芹沢先生、やはり、まだ体温が高いようです。横になっていてください」

「おおきに」

その求めに素直に応じた鮎美はベッドに戻り、天井を見上げて不思議な想いを感じた。

「きつと、ここで年明けを迎えるんやろね。去年は大阪やったのに、今年は鬼々島でもなくて、東京の牧田はんのマンションで、二人と」

好きでいる鷹姫と、好きでいてくれる詩織の二人と年越しを迎えるのが、不思議だった。

「鬼々島の家では、うちの代わりに陽湖ちゃんがいて、年末年始まで実家に帰らんと、うちの父さん母さんと過ごすらしいし。ホンマに娘が

替わったみたいやろな」

「その件と関わりがあるのですが、最近、芹沢先生のお母様が月谷に誘われて日曜日の朝には礼拝へ参加しているようです」

「あゝ……父さんが言うてたわ」

「警戒した方がよいかと思います」

「別に、そこまで……母さんも好奇心かもしれないし、信仰の自由も……って言うても、陽湖ちゃんも着実に侵略してくるなあ……さすがキリスト教徒。昔やったら打ち首か島流しもんやな」

「打ち首はともかく現状で島流しといえば島流しです」

「そうなん？ 鬼々島って、別に過酷でもないやん。昔の島流しって佐渡とか、八丈島ちゃうん？」

「鬼々島も流刑地として対象になっていました。室町期には今参局などが流されています」

「いままいりのつぼね？」

「将軍義政の乳母です。将軍への影響力が強く、義政の正室だった日野富子が産んだ子が早世したのは今参局による呪詛だとの疑いがかげられ、鬼々島へ流されることとなりました。その途中で富子の意を受けた者に暗殺されたか、自害されたそうですから、厳密には鬼々島に到着していませんが」

「日野富子かあ、北条政子と並んで幕府にかかわった有名な人やね。クスっ……鷹姫は普段は無口やのに歴史のことになると語るね」

「……………」

鷹姫が返答に窮していると、詩織が戻ってきた。

「玄関を入って、右の和室へ宮本さんに泊まってもらえるよう準備しました。今、ロボット掃除機が埃を片付けているので40分くらいで入れますよ」

「ロボット掃除機……」

鮎美と鷹姫が何か想像しているので詩織は言っておく。

「念のため言っておきますが、人型じゃないですよ。丸い円盤型の売ってるやつです」

「あれか……。あれって役に立つん？ オモチヤみたいに見えるけ

ど」

「とても役に立ちますよ。あれがなかったら、家政婦を入れないと床掃除が大変です」

「さらつとカネちゃんみたいに家政婦って言うたなあ……このマンションといい、なんとなく、牧田はんの階級がわかったわ」

「私と結婚しませんか？」

「……」

短い沈黙の後に鮎美が答える。

「うちは、お金に釣られて結婚したりせんし」

「冗談ですよ。でも結婚といえ、石永さんから聞いたのですが、宮本さんは許嫁がおられるんですよね？」

「はい」

「どんな人ですか？」

「……」

鷹姫が悩む。子供の頃から知っているだけに、逆に問われると答えにくい。そして平凡な答えを選んだ。

「ごく普通の人です」

「普通って……ここで話していても、鮎美先生に迷惑ですから出ませんか？」

「はい。芹沢先生、しっかりお休みください」

「うん……おおきに」

鮎美は二人の会話の続きが気になったけれど、今は熱があるので自重する。詩織は鷹姫とリビングに戻った。

「それで宮本さんの許嫁って、どんな方なのですか？」

「ですから、普通の人です」

「もしかして話したくない？」

「いえ、別に」

「率直に言って、その人と結婚するの嫌ですか？」

「いいえ、嫌ではありません」

「では、好きなのですか？」

「……。嫌ってはいません。他の男性と同じです」

「他と同じって……、特定の男の人を好きになったことありますか？」

「いえ、ありません」

「……………もし、……………もしかして、……………男より女性が好きだったりしますか？」

詩織が緊張しながら問うと、鷹姫は首を傾げた。

「その好きというのは友人としてではなくですか？」

「え、ええ。そう。恋人として女性を好きになったりしますか？」

「いいえ、なりません」

「……………」

詩織は勘が外れていなかったので安心すると同時に、鷹姫を理解できずにもいる。

「じゃあ、初恋の相手は？」

「そもそも恋をしたことがありません。あの…、この会話に何か意味があるのですか？ 芹沢先生がお休みとはいえ、私たちは何か仕事をした方が良くいのではないのでしょうか？」

「女子高生なのに、仕事人間ですね……………」

「あなたは少し秘書としての自覚に欠けませんか？ 蒸し返しになりますが、夜中に芹沢先生を連れ出したりして。自分の役割を心得ていますか？」

「……………」

「いくら久野先生からの推薦があつたとはいえ、業務に専念する気がないのであれば、お辞めになった方がよいです」

「うっ……………そこまで言う……………一応、私の方が年上だって、覚えてますか？」

「長幼の序を持ち出すならば、それに相応しい態度をなさい。かつ秘書としては私が先達です」

「……………わかりました」

わかりましたよ、あなたは企業に入ったら男には目もくれず課長部長と出世していくタイプですね、コンパ合コン無関係、いくつになっても処女で恥じない、気がついたら役員だけど未婚、あ、そっか、親

御さんは見抜いたんだ、それで許嫁を決めたのね、賢明な判断かも、決められたら決められたで逆らいもしない、結婚相手なんて誰でもいい、そんな生き方をする人、バイの私とは対極にいる人、剣道しなさいと言われたら日本一になるまで剣道、きつと勉強しなさいと言われたら東大に入るまで勉強、出世しなさいと言われたら仕事一筋、だから秘書としても全力で秘書、あくまで秘書、鮎美のことを好きだから、そばにいるわけじゃない、鮎美のことを守るのも秘書の役割だから守ってるだけ、そっか、そういうことか、と詩織は心の中で納得した。

「わかればよいです」

「はい、すみません」

しかも素直で単純、他人の悪意に鈍いし、根に持たないタイプね、と詩織は理解する。

「では、ここにいて可能な仕事をします。ここに印刷機はありますか？」

「はい、あります」

「貸していただけますか。経費は請求してください」

「少々の量なら、かまいませんよ」

「些細であっても会計処理はすべきです」

「はい」

「石永さんから芹沢先生の演説会などで配る団扇のデザインが届いています」

鷹姫が小型のノートパソコンを開いて、メールに添付されていたファイルを見せる。

「これらのデザインの中から、三つを選び印刷会社に依頼するのですが、その絞り込み作業を最終決定は芹沢先生がされるとしても、私たちで前段階まで絞り込もうと思います」

「わああ♪ 可愛い！ これ、すごく可愛いですよ！」

デザインは元となる写真も豊富で可愛らしいアイドルのようなものから、勇ましく拳を握って若い男性政治家のようにガッツポーズするものまであった。詩織が嬉しそうに見ている。

「これ欲しいです。これも可愛い。こっちはカッコいいし」

「…………。さしあたって、すべて一枚ずつ印刷してみてもらえますか？」

「はい」

思ったより楽しい作業だったので詩織も意気揚々と進め、すべてを印刷すると壁一面に貼り付けた。

「たしかに、そうしていただく方が一望にできて選びやすいですが、壁紙が傷みませんか？」

「気にしないでください」

リビングの壁一面が鮎美の写真で埋め尽くされる。プロのカメラマンが撮影しただけあって写りも良く、メイクもプロに頼んでいるので濃すぎない範囲で美しいし、さらに一部の写真は加工修正されているので、もうアイドルと比肩しても見劣りしない見栄えだった。

「水着写真まで……………これ、やり過ぎでは？ ……とても、いい写真ですけど、演説会で水着写真は一部の人にはウケても…」

ごく少数ではあるけれど、学校指定の水着姿で写っている鮎美や、ビキニ水着で写っているものまであった。

「私もそう思います。撮影に立ち会ったとき、カメラマンが言い出しで撮ることになったのですが……………」

「鮎美先生は水着撮影OKしたのですか…………。カメラマンが、どう言って撮ることになったのです？」

「たしか……………18歳のスタイルで撮れるのは今だけだから、撮っておいた方がいいよ、などと書いていた気がします」

「…なるほど……………さすが…」

うまく女心をくすぐったわけね、と詩織は水着姿の鮎美を見て頷き、この写真が本気で欲しくなった。

「これ団扇にデザインされる前の元データは、もっと沢山あるのですよね？」

「そう思います。かなりの枚数を撮影していましたから」

「女性の目を見て、よりよい写真があるかもしれないから、元データを私のメアドに送ってもらえますか？」

「はい、そうします。私はデザインだとか、センスといった感覚に欠けるところがあつて善し悪しがわからないので助かります」

すぐに鷹姫はデザイン会社へメールを打つてくれている。その間に詩織は写真を鑑賞しながら団扇のデザインを絞り込んでみた。

「水着も捨てがたいですが、今回は秘蔵するとして、やはりフレッシュなイメージと若さ、情熱、清廉さを感じさせる、このあたりのデザインがよいかと思いますよ。けれど、たしか、団扇を配るのは自民と民主の間で論争になっていませんか？」

「そうです。もつと早くに用意するはずだったのですが、団扇が財物にあたるのではないかという論争が起こり、結局は骨組みのない厚紙性の団扇であれば政策メッセージを伝えるための印刷物という扱いになり問題ないという結論に落ち着いたので着手しています」

「くだらない論争……」

「同感ですが、公選法上の解釈は重要です。よりくだらない上に芹沢先生の負担が増すのですが、可能であれば一枚一枚にサインしていくようにと」

「サイン……どのくらい印刷されるのですか？」

「まず2万枚です」

「一枚あたり10秒かかるとして……一時間で360枚、一日かけても3600枚、三日目には腱鞘炎になると思いますが……」

詩織は団扇の山を前にしてタメ息をつく鮎美の姿を想像した。

「もう完全にアイドル扱いですね」

「……………」

「政治家としては戦略的に間違つた方向ではないでしょうか？」

「同感です。ですが、石永先生の秘書たちが言い出したことですから……………」

「あのオジサンたち……………わかりました。この件は私から彼らに言うてみます」

そう言つて、すぐに詩織は男性秘書らに電話をかけ、サインは求めてくる支持者にのみ、その場で可能な枚数だけということと話をまとめ、鮎美の負担を軽くした。それが終わると絞り込んだデザインに印

をつけて鮎美が回復するのを待つ。夜になって、ほぼ平熱にまでさ
がった鮎美が最終的な三つのデザインを、静江や石永もネット上のテ
レビ電話会議でまじえて決めた。

「ほな、これと、これと、これな」

一つは通学カバンを両手で股間の前に持ち、まっすぐ前を向いて少
しだけ首を傾げた女の子らしい立ちポーズで、二つめは両足を肩幅に
開いて立ち真剣勝負というロゴ文字を背景にした男性的なポーズ、三
つめは琵琶湖を背景にして振り返りながら広げた片手をさしのべて
いる上半身カットのポーズで、どれも制服姿で露出は顔と手だけにし
ている。街中に貼りだしているポスターに比べると、少しだけ個性を
出したものの、やはり無難なものとなり水着姿は候補にものぼらな
かった。静江がPC画面越しに問うてくる。

「それで、もう体調は完全なんですか？」

「うーん……学校で言うたら普通の授業なら明日は出席、プールとか
体育祭なら欠席しておこなくらしいに回復してるよ。けど、明後日に
は完全やろ」

「明日も、どこにも出歩かないでください。東京は人が多いからイン
フルエンザも流行ってますよ」

「了解しました。経験者は語るやね」

「私は地元でもらったんです」

「どこにいても危ないわけやし、もう油断しませんわ」

石永もPC画面越しに言ってくる。

「国会は会期中に体調を崩す議員もいるけれど、新年祝賀の儀は一日
限りだから気をつけてくれよ」

「はい、おとなしくしてます」

静江と石永との通信を終えると、鮎美は念のためにベッドへ戻り、
鷹姫は壁に貼り付けられている写真を片付け始めたけれど、詩織が止
める。

「その写真、どうされるのですか？」

「廃案になったものは廃棄します」

「もったいない……もったいないので、もらってもいいですか？」

「はっ。ぶっぐわ」

鷹姫は剥がした分を詩織に渡し、他の仕事を始めた。詩織はすべて丁寧に剥がすと自室に持ち込み、自室の壁に貼ってみた。リビングほど壁面が広くないので一面で終わらず部屋の四方に貼ることになった。

「……………」

どちらを向いても鮎美のポスターがある。さらに気になっていた水着姿が手に入っていないか、PCで確認してみると年末なのにデザイン会社は上得意からの求めに応じてくれたようで何百枚ものデータが送られてきていた。

「……………これをデスクトップの背景に……………あ、これも、すごい……………」

もともとモデルやアイドルとしての警戒心をもっていたわけではない鮎美がカメラマンにのせられて撮られた写真は水着姿とはいえないかなり刺激的だった。立ち会ったらしい鷹姫と静江も芸能事務所のマネージャーとしての警戒心を学んでいたわけでもないのです、どんな写真に仕上がるか、深く考えなかったのかもしれない。

「これなんか裸よりエッチ……………」

四つん這いになった鮎美を後方から撮ったり、足を開いて立っているところをローアングルから撮っていたりした。

「…ハア……………」

見ているうちに興奮してきた詩織は迷ったけれど、その場で欲求不満を解消してから、デザイン会社へ警告メールを送り、これらのデータを絶対に流出させないよう強く抗議しておいた。

12月31日 SM

2010年、最期の日、明日は早朝から準備しなくてはいけないので早めの夕食としての年越しソバを食べていた鮎美と鷹姫、詩織は感慨深く今年を振り返った。

「うちの人生にとつて今年は激動やったなあ」

「はい、私입니다」

「私입니다よ」

世田谷の高級マンションのリビングで一人の議員と二人の秘書が2010年を思い返している。鮎美にとっては大阪からの転居、そして当選、それからの激動の日々だったし、鷹姫にとつても順調な剣道の修練に加えて身近に引越してきた鮎美の当選と秘書への就職からの激動の日々であり、詩織にとつては所属していた会の陳情活動で出会った鮎美への恋と秘書への強引な就職だった。

「そういうえば、牧田はんの春風会の活動は、どうなん？」

「春の会から分裂してから低調です。自民党が低調なのと似たようなものですよ」

「そっか……前から訊いてみたかったんやけど……」

少し迷い、鮎美が前置きする。

「答えとうなかつたら、ノーコメントでもええんやけど……牧田はなんて風俗業の経験あるん？」

「あるといえは、ありますし、無いといえは無いですね」

「そ…そっか。変なこと訊いて、ごめんな」

鮎美は遠回しなノーコメントだと受け取って謝ったけれど、詩織は微笑む。

「いえ、気になるとは思いますよ。どうして女の身で売春を合法化する団体なんかに所属していたんだらう、学歴も職歴もあつたのに、と」

「……率直に言えば……そうやけど……」

「ごちそうさまです」

鷹姫が一番に食べ終えて手を合わせている。二人の会話には興味

をもっていない様子だった。

「私は風俗業に就職した経験はありませんが、利用した経験はありません」

「そ……そうなんや……」

「ビアンバーでの出会いもいいですけど、必ずしも自分の好みの人が都合良くフリーでいてくれるとは限らないじゃないですか。私は性欲が強い方なんです」

「……へ……へえ……」

話を振ったのは自分なのに鮎美は鷹姫の反応が気になって落ち着かない。鷹姫は、ごちそうさまと言ったものの、ソバの一杯では足りないという淋しそうな顔をして、空になった器を見ている。

「宮本さん、まだソバは残っていますから、湯がきましようか？」

「…あ………お二人は？」

「うちは病み上がりやし、軽めにしておくわ」

「私も十分です」

「……では……」

「遠慮しないでいいですよ。湯がきますね」

詩織が二杯目を用意しながら話す。

「風俗業もいろいろですけど、電話してもビアンお断りなところも多いですよ」

「え……そうなんや？」

「不思議ですよね、たいていの男性からの求めには応じるのに、女性だと電話口だけで断るなんて」

「そ……そやね」

「でも、応じてくれるところもありますよ。私ね、けっこうSなんです。ノンケの子が仕事だからと頑張ってくれるのを楽しんだり、逆に教え込んだり、そんな風にご利用した経験があります。しっかりMになってしまった子もいましたよ。ノンケなのに快感ほしさに言うことをきくようになってくれたりね」

「……」

「牧田さん、お話の腰を折って申し訳ないのですが、Mというのは、ど

ういう意味ですか？」

「……………」

「以前に石永さんにも訊いたのですが、教えてもらう機会が無く、卑猥な言葉なのはわかりませんが、意味を知らないのも不勉強かと思いません。さしつかえなければ、教えてください」

「ええ、いいですよ」

微笑んだ詩織は湯がく予定だったソバを鍋に入れず、冷蔵庫から高価なハムを出した。

「私の話は、ようするに情が移った風俗嬢の子たちの立場を少しでも良くしてあげたい。そのためには合法化が一番だと考えたからです」

詩織はハムを一口サイズに包丁で切り、皿に盛っていく。

「さて、Mの意味でしたよね。宮本さんはSMも知らない？」

「はい、知りません」

「Sはサディズムの隠語、Mはマゾヒズム。異常性欲の一種です。名称はSM傾向のある人物をかけたオーストリアの作家ザッヘル・マゾッホに由来しています。そして、Mとは肉体的精神的苦痛を与えられることによって性的満足を与える人や傾向のことを指します。逆にSはMへ苦痛を与える人や傾向のことです」

「そうですね、ありがとうございます」

「そんなあっさりと理解できるものでもないですよ」

「そうですねですか？」

「ええ、本格的なSMは過激なのですが、入口程度のことなら一般的なカップルも遊びで試したりしていますから、少し私もやってみますね」

そう言った詩織はハムを盛った皿を鷹姫の前に置いた。当然の流れとして三人で食べるものと思ったのに、詩織は命令口調で告げる。

「おあずけ」

「……………」

「うちらは犬か」

食べようとしていた鮎美が文句を言ったので詩織は微笑みかける。

「鮎美先生は観客なので、どうぞ食べてください。宮本さんと私で少し遊びますね。私がS、宮本さんがM役ですよ」

「……鷹姫に変なことせんといてよ」

「はい。宮本さんは性的なことに疎いようですから、食欲の方で遊びますね」

詩織は皿を鷹姫へ近づける。

「宮本さん、どうしても我慢できなくなったら犬みたいに食べてもいいですよ。けど、人としてのプライドがあるなら、食べていいと言われるまで我慢してください。いいですか？」

「はい」

「ではまず、お皿に顔を近づけてハムの匂いを嗅いでみてください」

「はい……」

素直に鷹姫は皿へ顔を近づけて匂いを嗅いでみる。冷蔵庫から出されて常温となりつつあるハムは肉とスパイスの香りがして食欲を刺激してきた。

「どうですか？ 美味しそうな匂いでしょ？」

「はい……」

「鮎美先生、食べないんですか？」

「おあずけされてる人の前で食べられんよ」

「じゃあ、あーん」

詩織がハムを指先で摘むと、鮎美の口元へもっていく。

「食べてみて、どんな味か、感想をください」

「……。……」

「ゲームを進めないと、いつまでも宮本さんが食べられませんか？」

「はい、あーん」

「……」

迷ったけれど、鮎美は口を開けた。詩織は食べさせながら、少し唇にも触れてから手を離れた。

「どうですか？ 美味しい？」

「……美味っ……このハム、めっちゃ美味しいやん。どこのハム？」
「ドイツから取り寄せたハムです。お肉料理については、やっぱり欧州に一日の長がありますよ」

そう言って詩織も一欠片食べる。

「うん、やっぱり美味しい」

「……………」

鷹姫の口は黙っていたけれど、お腹が切なそうに鳴いた。

「っ……」

お腹を鳴らしてしまい鷹姫がパツと赤面して顔を伏せる。その姿が可愛らしくて詩織だけでなく鮎美まで失笑した。

「クスっ」

「……………」

鷹姫の耳まで赤くなっていくので、鮎美は可哀想に感じた。

「牧田はん、もうやめてあげてよ。鷹姫は、こういうの弱そうやもん」

鷹姫は剣道で鍛えた体格と筋肉の量に相応して食欲は旺盛な方で、それは鮎美も知っているし、詩織も数日で感じ取っていた。そして、その食欲旺盛さを自制して隠してもいるし、恥じてもいるけれど、隠しきれぬものでもなく鮎美も詩織もわかっている。

「弱そうだから、そこを責めるんですよ」

「……………鬼や……真性のSや」

また、鷹姫のお腹が鳴った。

「フフ、口では黙っていても、身体は正直ですね。そんなに欲しいの？」

「……………」

「……………食欲やのに、なんかエロいセリフに聞こえるわ……」

「宮本さん、これはゲームですから、私が少々きつい言い方をしても、あなたはできるだけ従順に振る舞ってくださいね。女王様と奴隷、主人とメイド、そんなような立場関係だと思ってください。そして、どうしても我慢できないときは、ギブアップと言ってください」

「はい…」

「SMにギブアップとかあるんや？」

「ありますよ。本当に苦しいときのストップを決めておかないと危険なプレイもありますから。今の場合は遊びのはずなのに、宮本さんが本気で怒ってしまうのがゲームの破綻です。だから、もう我慢できない、まいった、というときの終わりは決めておきます」

また、鷹姫のお腹が鳴る。

「フフ、食欲って満たされると意識しませんが、かなり強い欲望なんですよ。ときに殺意さえ覚えるほど」

「それをわかってて責めるんや……鬼やわ」

「そろそろ限界ですか？」

「……いえ……」

負けず嫌いという鷹姫の性格も感じ取っていて詩織が問い、想定通りに否定してくれた。

「限界を迎える前に、少しだけ」

詩織は指先でハムを一切れ摘みあげると鷹姫の口元に運ぶ。

「あーん、して」

「はいっ」

「もつと大きく口を開けて」

「……」

素直に鷹姫は口を大きく開くけれど、詩織はハムを入れない。

「……」

そのうちに鷹姫の口から唾液が飛んで詩織の手についた。

「手に唾が飛んできましたよ。謝ってください」

「……はい……すみません……」

恥ずかしくて鷹姫が涙ぐんで謝った。

「なんちゅー理不尽な……」

可哀想で鮎美が口を挟もうとしたけれど、その口にハムが入れられない。

「うっ……」

目で抗議しつつも、吐き出すのはもったいないので食べた。詩織は手をティッシュで拭いてから、戸棚からアイマスクを取り出した。

「次のゲームをします」

「……………」

「三人での目隠しジャンケンです。宮本さんが勝てば、一切れ、食べさせてあげますね」

「誰が目隠しすんの？」

「もちろん、宮本さんです」

そうやってアイマスクを鷹姫に渡した。

「ルールは単純、三人でジャンケンをして宮本さんが単独で勝った場合のみ、食べられる。引き分けはもちろん宮本さんが勝っても勝利者が2名であるときは除外します。そして、宮本さんは目隠ししたまま行きます」

「そんな不正されてもわからんやん？」

「ですね。こちらを信じるしかないのです」

「しかも単独での勝利のみって……………確率的に……………」

鮎美と鷹姫が数学的思考を行った。

「……………9分の一……………」

「そうです」

「ひどっ……………」

「逆に言えば9回で一回は食べられるはずですよ」

「まあ、そやけど……………」

「では、宮本さん、目隠しをしてください」

「……………はい……………」

美味しそうなハムを一瞬だけ見てしまつてから鷹姫は目隠しをした。

「ジャンケンをする前に、必ずおねだりをしてもらいますね」

「……………」

「私にハムを食べさせてください、つて言ってみてください」

「……………私にハムを食べさせてください」

「では、ジャンケン、ポン！」

「……………」

鮎美と鷹姫も手を出したけれど、詩織がチョコキで鮎美と鷹姫がグー

だった。

「あら、残念。勝利が2名ですから除外しますね」

「……………」

「ごめんな、鷹姫、うちもチョコキを出してあげればよかった」

「…ということは、牧田さんがチョコキですか？」

見えない鷹姫は手を予想してみた。

「そうやよ。ごめんな」

「いえ、いずれ勝てるでしょう。気にしないでください」

なるべく平然と鷹姫は言っただけけれど、お腹が盛大に鳴ったので恥ずかしくて、また頬を赤くした。

「フフ、可愛い」

「……………」

あかん、可哀想やのに可愛く見えてまう、気の毒やのに、ちよつと楽しい、うちもSっ気があるんかな、と鮎美は赤くなっている目隠しされた鷹姫を見つめて少し興奮した。

「では、また、おねだりさせますね」

「……………」

「どうか私にハムを食べさせてください、と言いなさい」

「……………」

「では、ジャンケン、ポン！」

「……………」

今度も詩織はチョコキ、鮎美はパーで、鷹姫がグーだった。

「残念でしたね。三つ巴です」

「ごめん、ホンマごめん。なんで、うちはチョコキにせんかったんやろ

……………ホンマごめん」

「偶然ですから気にしないでください」

「今度、うちは必ずチョコキにするわ。ずっとチョコキにする。これで確率3分の1や」

「鮎美先生、不正行為はペナルティーを考えますよ。もちろん、罰は宮本さんに」

「うつ…」

「さ、今の宣言は忘れて、次の手を考えておいてくださいね。私だって三回連続チョコキとはならないかもしれないかもしれませんよ」
「……………」

鷹姫が口の中に湧いていた唾液を飲み込んだ。もうとつくにソバは消化してしまつて胃は空っぽという感覚だった。おまけに視覚が封じられたのでハムの匂いを強く感じてしまう。食べたくて、次から次へと唾液が口内に湧いてくるので、また飲み込んだ。

「おねだりさせますよ。どうかどうか私にハムを食べさせてください、お願いします。つて言つてごらんなさい」

「……………どうか私にハムを食べさせてくださいお願いします…」

「間違つていますよ。どうかどうか私にハムを食べさせてください、お願いします。です」

「……………どうかどうか私にハムを食べさせてください、お願いします」

そう言う鷹姫の口から唾液が飛んだ。

「フ、いいでしょう。では、ジャンケン、ポン！」

「…」

「くっ…」

詩織はパーで鷹姫はグー、鮎美はチョコキだった。

「また三つ巴ですね」

「……………」

「四回目、おねだりなさい。どうぞ私にお肉を食べるチャンスをご覧ください、お願いいたします。ちゃんと心を込めて言いなさい。でない」と、言い直しさせますよ」

「……………どうぞ私にお肉を食べる……………チャンスをご覧ください、お願い申し上げます」

「違いますよ。どうぞ私にお肉を食べるチャンスをご覧ください、お願いいたします。です」

「……………」

「ギブアップなら目隠しを取つて、いやしく食いつきなさい」

「……………。セリフを、もう一回、言つてもらえますか、お願いします」

「どうぞ私にお肉を食べるチャンスをご覧ください、お願いいたします。ですよ、一回で覚えなさい。この愚か者」

「……」

牧田はん明らかに鷹姫に言われたこと根に持ったの復讐やん、と鮎美は感じて詩織を見た。詩織も自覚はあるので余裕で微笑んだ。鷹姫が覚えたセリフを言う。

「どうぞ私に…お肉を食べるチャンスをご覧ください、お願い…いただきます」

「まあまあ合格ということにしてあげます。次からは、もっと心を込めなさい。では、ジャンケン、ポン！」

詩織がグーで鮎美もグー、鷹姫はチョキだった。

「残念、宮本さんの一人負け」

「……」

見えない鷹姫は確かめようがないけれど、鮎美が異議を唱えないので信じるものの、ただジャンケンして負けただけ、それも何度でも勝負ができる設定なのに、泣きそうな感情が湧いてきて鼻が赤くなった。唇の先が少し震えている。

「次こそ勝てるかな？ もうギブアップかな？」

「……もう一度、お願いします」

「鷹姫…：えらいね。頑張りい。うちも鷹姫が勝てるよう祈るから」

「おねだりなさい。愚かな私にお肉をください、どうか、食べさせてください、食べたくて食べたくて、もう我慢できません、って」

「……お…：愚かな私にお肉をください、…どうか、食べさせてください、食べたくて…：食べたくて…、もう我慢できません！」

かなり唾液を飛ばしながら最後の方は叫ぶように言った。

「フフ、いい声ね。じゃ、チャンスをあげますよ。ジャンケン、ポン！」

「……」

詩織がチョコキで鮎美もチョコキ、鷹姫はグーだった。

「……やった！ 鷹姫の勝ちやよ！」

「そ…そうなのですか？ ……私の勝ち……やっど…」

やはり見えないので勝利の実感遅れて湧く。

「あなたの勝ちよ、喜びなさい。そして食べさせてあげる。そうね、私より鮎美先生が食べさせてあげて」

「よっしや」

鮎美がハムを摘んだ。

「鷹姫、あーんして」

「はい」

鷹姫が素直に口を開け、そこに優しくハムを入れた。

「………ああ………美味しい………」

蕩けるような声を漏らした鷹姫は身震いするほど味わっている。

「このハム、めっちゃ美味しいやん」

「はい………とても………」

「牧田はん、これって高いん？」

「そういう無粋なことは訊かないでください。このハムを造っているところは、かつてドイツ皇帝へも納めていましたし、今も英国王室御用達だったと思いますよ。このジョニーウォーカーと同じに」

そう言った詩織は小さなグラスへ琥珀色の液体を酒瓶から注ぐと、一息に呑んだ。

「お酒、呑むんや…」

「もう勤務時間ではないですよね？」

「せやね。っていうか、秘書業も議員と同じで終わりがわかりにくくて、ごめんな」

「お詫びは口先だけじゃなくて、唇でしてほしいものです」

「………もう酔うたん？」

「いえ。さてと、宮本さん、もう一枚、食べたい？」

「はい」

「素直な返事ね。フフ、どんな快感でも焦らされた後に与えられると

格別でしょ。さ、ご褒美が欲しければ、また頑張つて勝ちなさい。
ジャンケン」

また詩織がゲームを続ける。

「ポン」

「……」

詩織がパーで鮎美もパー、鷹姫はグーだった。

「一人負けね」

「……」

「ジャンケンの心理を教えてください。人間、防衛的な気持ちの時はグーを出しやすいのです。今みたいに目隠しされているときなんて、とくに。逆にパーは開放的な気分するとき、そしてチョキは確率的には初手にもちいられることは少ない。指の動作が複雑ということもあり、ひねった策として出す傾向にありますよ」

「……」

「ですから、いじめる側がジャンケンを提案したとき、いじめられている側はグーを出しやすい、ということ、いじめる側が覚えていると、とても勝ちやすいのです」

「なんちゅー卑怯な……」

「さて、親切に教えてあげた私は、次は、何を出すでしょう。そして、あなたは勝ちたいならパーにする？ それとも、またグー？」

「……」

「いきますよ。ジャンケン、ポン」

「……」

詩織がグーを出し、鮎美はチョキ、鷹姫はパーだった。

「あらあら、残念でしたね。あなたは素直にパーを出したのに、鮎美先生がひねってしまいました。色々言う私の裏をかこう、という思考は悪くないけれど、結果は残念でしたね」

「ごめん……鷹姫、うちのせいで……」

「いえ、お気になさらず」

「フフ、また、おねだりもさせますよ」

アルコールのせいで少し頬が赤くなつた詩織がセリフを考える。

「美味しいハムを、また私に食べさせてください。お願いします、牧田様。と言いなさい」

「……。美味しいハムを…また私に食べさせてください、おねがいます、牧田さ…ま」

「もつと心を込めて、へりくだって言いなさい」

詩織が尊大さへ心を込めて言った。

「…………美味しいハムを、また私に食べさせてください。お願いします！ 牧田様」

「よろしい。ジャンケン、ポン！」

「…………」

三人ともグーだった。

「フフ」

「くっ…………9分の一なんて、ひどいわ…」

「負けてもペナルティー無しなんて、優しいゲームですよ。さ、おねだりの時間です」

「……………」

「お腹を空かせた私に、その肉片をください。牧田様、お願いします。と言いなさい。もちろん、心を込めて」

「……、お腹を空かせた私に、その肉片をください！ 牧田様、お願いします！」

「いやしい子ね。さ、ジャンケン」

「…………」

「ポン！」

詩織がチヨキ、鮎美はパー、鷹姫もパーだった。

「フ」

「……。うちの負けやわ…」

「…そうですか…」

「おねだりは…………そうですね。食べたい、食べたい、食べたい、どうか、食べさせてください、お願いします、お願いします。と言いなさい。大きな声で」

「……食べたい！ 食べたい！ ハア…食べたい！ どうか食べさせてください！ お願いします！ お願いします！ お願いします！」

かなり空腹感のこもった心からの絶叫だった。叫んでいる鷹姫の頬は赤くなっている。それが苦痛のせいなのか、羞恥心のせいなのか、それとも特殊な興奮によるものなのかは本人にもわからなかった。

「…ハア…ハア…」

「うーん♪ いい声ね。泣きたいときは、泣いてもいいですよ。さ、ジャンケン、ポン！」

「…」

詩織はチョコキ、鮎美もチョコキ、鷹姫はグーだった。

「ご褒美タイムですね」

「鷹姫の勝ちやよー！」

「ああ…ハア…」

鷹姫が身震いして、ご褒美を待っている。息を吐く、その唇から少しヨダレが見えるほどだった。

「鮎美先生、食べさせてあげて」

「鷹姫、口を開けて」

鮎美はハムを手で取って、鷹姫の口へ運ぼうとしたけれど、その途中で詩織がベキツと音がするほど、鮎美の指を握って逆関節に反らした。

「ぐうあああああああ〜?!」

鮎美は悲鳴をあげて冷や汗を流しているけれど、詩織は冷厳と言う。

「言ったはずです。不正行為にはペナルティーと」

「ううっ…」

鮎美は一度で2枚のハムを鷹姫に食べさせようとしていて、その2枚がテーブルに落ちていている。

「イカサマは見逃しませんよ」

「…ひ…ひどいわ…。指が折れるかと…」

「いいえ、慈悲深いです。指を折らなかつただけ」

「くっ……、ゲームや言うたのに、容赦ないなあ……」

「ゲームは本気でやるものです」

「……わかった……ええわ。この指は罰として受け入れるわ」

「何を言っているのですか。罰は宮本さんにくださいます。そう言ったはずですよ」

「そんな……うちの不正やのに……」

「M役は宮本さんですよ」

「……くっ……鷹姫、ごめん……」

「気にしないでください……それで、罰は？」

「口の利き方を考えなさい。罰は何でしょうか、牧田様。と言いなさい」

「……罰は何でしょうか、牧田様」

「音を聴いて苦しみなさい」

「……音？……」

「鮎美先生、テーブルに落としたハムを2枚とも食べながら、その可愛いらしいホッペを宮本の耳にピッタリとつけなさい。美味しく食べている音を聴かせるのです」

「……なんちゅー発想すんねん……めちやめちや鬼やん……」

「ゆっくり、しつかり罰を与えたら、逆にご褒美として5枚を一度に食べさせてあげます。口いっぱい肉を頬張って最高の快楽を感じなさい」

「……」

「その分、罰はきついですよ。道具も使います」

詩織はキツチンへ行くと、クツキーを生地から切り抜くときに使う金型を持ってきた。

「金型を啜えさせますから、大きく口を開けなさい」

「……はい……」

「ゆっくり啜えて」

詩織は怪我をさせないように刃の無い方を口内に入れて入れ、啜えさせた。直径3センチ程度の抜き型なので、これで鷹姫は口を開いたま

まになる。

「では、鼻で呼吸せずに口で息をしなさい」

「……。ハア……。フー……。ハア……。フー……」

鷹姫が口呼吸する。金型の直径は十分なので息苦しくはないけれど、息をする度にヨダレが垂れていた。目隠しされ、金型も啜えてヨダレを垂らしている鷹姫の姿は扇情的で鮎美はレスビアンとして興奮したし、詩織もバイのサディストとして高ぶった。

「鮎美先生、罰を与えて」

「……………」

「ハア……。フー……。ハア……。フー……」

「鮎美先生が、やらないなら私が罰を与えましょうか？」

「う、うちがやるー！」

鮎美は落としてしまったハムを口に入れると、鷹姫の耳へ頬をつけて噛み始める。

「……もぐ……もぐ……」

「……ハアあ……。フーう……。ハアあ……。フーうう……」

咀嚼音を聴いた鷹姫の口から滝のようにヨダレが溢れてテーブルに水たまりをつくっている。もうハムのことしか考えていない様子で、自分の姿が客観的に、かなり変だということには思い至っていない。

「……もぐ……もぐ……ゴク……」

「ああ……。フー……。ハア……」

切なくてアイマスクに涙まで染み込ませた。

「こんなにヨダレを垂らして。グシヨ濡れですね」

「ハア……。フー……。ハア……。フー……」

「鷹姫……………」

鮎美は可哀想に想っているのに、自分が興奮していることにも気づいていた。タラタラと透明な汗を垂らしている鷹姫を見ると、それが食欲によるものだとわかっていても、別の想像をしてしまう。

「そろそろ、ご褒美をあげますね」

詩織が金型を抜いてやり、ハムを5枚、手に取った。

「三つ数えたら、口に5枚もハムを入れてあげます」
「ハア…ハア…」

もう金型を抜いてもらったのに、鷹姫は口呼吸してヨダレを垂らし
ている。早く食べさせて欲しいと、舌がねだっているようだった。

「大きく口をあけて、舌も出しなさい。その舌の上のせてあげます
よ」

「はい…ハア…ハア…」

鷹姫が舌を出すと、舌先からもヨダレが滴った。

「三…あとしの我慢です」

「ハア…ハア…」

「鷹姫……」

人間って、こんなに大量のヨダレ出るんや、と鮎美が驚くほど、鷹
姫は唾液を垂れ流している。

「二…美味しいですよ」

「ハアハア」

「一。食べなさい」

詩織が優しく鷹姫の舌へとハムをのせた。パクリと音が聞こえる
ほど鷹姫が食いつき、ハムを頬張っている。噛みしめ、味わい、身震
いして、涙まで流した。

「ああ…あああ…美味い…」

「フフ、可愛い。おねだりしたら、お皿にあるハム、全部を食べていい
ですよ」

「…全部…ハア…ハア…」

「ただし、手を使わずに、お皿から直接に口で食べなさい」

「ハア…ハア…はい…」

「お皿は移動させて、ここに置きます」

そう言いながら詩織はテーブルにあった皿を足元の床に置いた。
見えなくても音で鷹姫にもわかる。

「おねだりの言葉は、もう我慢できません、全部ください、牧田様。で
す」

「ハア、もう我慢できません！ 全部ください！ 牧田様！」

「ええ、いいですよ。食べなさい」

詩織が許可すると、鷹姫は床に這ってハムを食べ始めた。

「ハアハアもぐハアもぐ…」

「……………」

詩織と鮎美は足元にいる鷹姫を見下ろしている。鷹姫は視覚が封じられている上、手も使うなど言われたので、深海魚やミミズが食べ物を探すような動きで嗅覚と唇の触覚を頼りにハムに食いついている。その姿は犬の食事より下等生物に見えた。

「鷹姫……………」

「美味しそうに食べてますね。1枚残さず食べなさい」

「はい…ハア…もぐ…ハア…もぐ…」

鷹姫が食べ終わるまでに、そう長い時間はかからなかった。もう皿に残っていないか、唇と舌で探し回り、小さな欠片も舐め取って平らげた。

「…ハア…ハア……………」

顔をあげた鷹姫の口周りだけでなく鼻先にもハムの油がついてテカている。

「フフ、ごちそうさまです、は？」

「ハア…ごちそうさまです」

「いい子ですね。さて、犬より下品に喰い漁った今の気分は、どうですか？ 宮本鷹姫さん」

「……………」

我を忘れて食欲を満たしていた鷹姫がフルネームで呼ばれて鞭打たれたように身体をビクリとさせた。

「やっちゃんしましたね」

「……………わ…私は……………」

「宮本さん、あと少し私の言うとおりにしてください」

詩織が尊大な言い方から、優しい保育士のような口調に変えた。

「宮本さんは今の変な気分を忘れるために、大きく深呼吸してください」

「……………はい……………はああ……………」

「そうそう、私の指示に合わせて、息を吸って」

「……すーっ……」

「吐いて」

「はああ……」

「吸って」

「すーっ……」

「ゆっくり吐いて」

「はああ……」

「次に吸ったら、しばらく溜めて」

「すーっ……」

「その息を吐いたとき、このゲームは終了です。もう変な気分も飛んでいきます。はい、吐いて」

「はああ……」

「はい、ゲーム終了です。お疲れ様でした」

言うと同時に詩織が目隠しも取ってやった。

「うっ……」

まぶしきで鷹姫が呻いた。詩織は油の付いた口元を拭くためにハンドタオルを差し出す。

「これで口の周りを拭いてください」

「あ……ありがとうございます……」

「どうでした？ こんな感じなのがMとSの遊びです。自分の別の一面を見つけたみたいですよね？」

「……」

鷹姫が真っ赤に顔を染めた。その様子を見て詩織は可笑しそうに指摘する。

「ほら、このテーブルのヨダレ。これ、あなたが垂らしたんですよ」

「言わないでください！」

鷹姫が急いでテーブルを拭いている。

「ちなみに、今のゲームにはSM要素だけじゃなく催眠術も少し加えました。視覚を封じられると、人間は人の声に支配されやすくなりますからね。そうして生理的欲求を我慢させていくと、どんどんストレ

スが高まります。焦らして焦らして、たった9分の一しかない勝率と、その目で勝利を確認できない苦痛、その結果、ご褒美の甘美さは理性を忘れさせるほどになります。さんざん焦らした後、一気に与えられる解放の快感、まさか自分がイモムシみたいに床へ這ってハムを食べるなんて思いました?」

「……………」

「大晦日のゲームとしては、ややハードプレイになってしまいましたね」

詩織が保温状態にしていた鍋へ、ソバを入れた。残りのハムも切つて新しい皿に並べる。鷹姫がうなだれているので鮎美は手を引いて洗面所へ導く。

「鷹姫、顔を洗いい」

「…はい……………」

ハンドタオルでは拭いきれなかった油を洗顔して落としてリビングへ戻った。詩織がおかわりのソバを用意していてくれる。

「どうぞ」

「……………ありがとうございます……………」

「もうゲーム終了ですから、遠慮無く食べてください」

「……………はい……………」

あまり美味しく無さそうに鷹姫がソバを食べ始めた。詩織と鮎美はハムを食べる。鮎美が空気を変えるためにテレビのリモコンを持った。

「牧田はん、テレビつけてええ?」

「どうぞ」

テレビでは紅白歌合戦が始まっていたけれど、別のチャンネルでは豪雪のために避難所で年越しする人たちのことを報道していた。

「この豪雪も災害といえは、災害やね。国会議員なはずの、うちが、こんなところでのんびりしてるのは罪悪感さえあるわ」

「……………」

「だからといって、駆けつけても足手まといなだけで、何かしたいなら消防か自衛隊にでも入って訓練うけろちゅーねんな」

どうにもできないことを自嘲した鮎美は紅白歌合戦にチャンネルを戻した。三人とも興味がなかったのでテレビは流れているだけになる。鮎美は歌謡ではなく政治について考え続けた。

「ダイエツトで一食抜くだけでも、つらいのに、災害で丸一日何も食べられなかったら、つらいやろなあ」

「……私は……自分が情けない……」

「鷹姫、ごめん。さっきのこと言うてるわけやないよ」

「……」

「でも、宮本さんは私の2倍は食べますよね」

「……すみません」

「謝らなくていいですよ、元気でいいじゃないですか。それで太らなわけですよ」

「……」

「鷹姫……そんな気にせんとき。太らんにやし、ええやん。羨ましいよ」

「……」

鷹姫が泣きそうな顔をしてから、真顔になって鮎美と詩織を見た。

「ずっと直したいのに直せないのです。小学校の頃から、男子より食べると言われても……つい……学校給食でも……」

「そら朝稽古して夕方も稽古するやん」

それに鷹姫の家は母さんがおらんかったし貧しいから、学校給食はかなり重要な栄養源やろ、それで食べてしまうのがトラウマになったのかな、と鮎美は心配したし、詩織も謝る。

「すみません。なにか、心の傷をえぐってしまったみたいで。SMプレイは、あくまでプレイですから、ごっこ遊びだと思って日常生活には持ち込まないものなのですが……食べることについて、何かあったみたいですね。ごめんなさい」

「……いえ……もう、いいです……明日は早いですから、そろそろ休みませんか?」

「そやね」

「そうですね」

三人は席を立ち、食器を片付けてから眠った。

2011年1月1日の初日の出とともに起きた鮎美は入浴して身体と髪を洗い、真新しい下着を身につけると、ほぼ新品と目新しい冬制服を着た。

「メイクは、どうしよ……」

「軽く私がしてあげます」

詩織が乳液とファンデーションを塗ってくれた。

「顔OK、制服よし、議員バッチよし」

鏡の前で身支度をチェックして頷いた。

「うちの番は午前11時やから、しつかり余裕あるね」

「はい」

準備が整ったので落ち着いた気持ちで朝食を摂る。鮎美は皇居で行われる新年祝賀の儀の次第書を見なおした。

「午前10時から皇太子、皇太子妃、親王、親王妃及び女王さんらが、まず両陛下に新年のご挨拶。その一時間後に、うちを含め内閣総理大臣、国務大臣、内閣官房副長官、副大臣、内閣法制局長官、内閣法制次長、両院の議長、副議長、議員、事務総長、事務次長、法制局長、法制次長、衆議院調査局長、国立国会図書館館長、副館長、最高裁判所長官、最高裁判所判事、最高裁判所事務総長、最高裁判所事務次長、高等裁判所長官、そして、それらの者の配偶者か……、秘書は配偶者にならないかな？」

「なりません」

鷹姫と詩織は皇居の駐車場までついていく予定ではあるけれど、いよいよ皇居に入るのは鮎美だけになる。余裕を持って一時間前には着く予定なので出発は9時過ぎのつもりだった。

「両陛下、大変やな。日の出前から儀式もあるのに、さらに11時半からは他の認証官、各省庁の事務次官、都道府県知事……ってことは夏子、…加賀田はんも来るんや。あの人も結婚してなかったかな……配偶者なしで出席かな。あとは議会議長か……単なる地方議員は呼ば

れんわけか……都議も東京にいても呼ばれわけか」

鮎美は同性愛者であることをカミングアウトしている朝槍のことを思い出した。

「……………」

もし同性婚が認められることになったら、この宮中行事にも配偶者を連れてくるってことになって、それに賛否が出そうやな、神道精神で同性愛って、どうなんやろ、キリスト教はガチ否定やったけど、一部では認めてるし、古事記と日本書紀を全部読んだら、どっかに書いてあるのかな、平安文学なんかやと、とりかえばやくらいしか知らんけど、あれもガチに同性愛の話やなくて、どっちかというのと、性同一性障碍の話やったし、ラストはご都合主義やったもんな、と鮎美が考えていると、詩織がコーヒーを淹れてくれながら問う。

「朝槍先生のことをお考えですか？」

「……………」別に。天皇さんも忙しいで大変やなって。午後2時半から、また各国の外交使節団の長と、その配偶者と会うわけやし……………」

「はい？」

「世界には同性婚を認めてる国があるやん？」

「はい、主に欧州で、いくつか」

「そういう国の外交使節の長が同性愛者で配偶者が同性やったら、この宮中行事に参加させるんやろか？」

「……………」どうでしょう……………」そういう前例があるのか……………」

「もし、連れてきはったら、宮内庁の職員は、どうするんやろ？」

「……………」論争になるか、それとも日本人らしく、とりあえず外国のすることには何も言わず、通すかもしれないね。事なかれ主義でいくか、それとも故意的な現場の英断で通すか、ユダヤ人にだってビザを出した国ですから」

「……………」

鮎美は朝食を終えて、再び服装をチェックした。髪型も普段以上に整える。

「皇族の女性らは白系のロングドレスで、うちら参列する女性もロン

グドレスか、白襟紋付き、やむ得ない場合はデイドレス、ワンピース、アンサンブル……皇居に相応しい服って庶民レベルを百貨店で買っても、めっちゃ高いやろな。うちの制服ってある意味で最強に便利やわ。普段によし、葬儀でよし、パーティーでも宮中行事でも」

「その姿も、あと三ヶ月なんですわね。可愛いのに。いつそ任期中ずつと制服で通したら、どうですか？」

「それめっちゃ痛い女やん、24歳になってもナンチャツテやで」

まだ時間に余裕があったけれど、鮎美たちはマンションを出てタクシーを拾った。鮎美がタクシーに乗ると、運転手は議員バッチに気づいたけれど、田舎の運転手と違い、何も言わず目的地が皇居と聞いてもマニュアル通りの反応だった。皇居に近づくと、車窓から堀を見た鮎美が言う。

「しつかり城みたいな構えやな」

「芹沢先生、皇居は江戸城跡に建っています」

鷹姫が言ってくれた。

「あ、そっか。そうやった。それで京都御所と違って防御的要素が強いんか。徳川はんも大阪城を超えたる思て頑張ったやろなあ」

「皇居内は城塞の名残もあって道に迷いやすいですから、お気をつけください」

「安土城はまっすぐな道が多かったらしいのにね。安土、大阪、江戸と、あの三人の性格が出たんかな。安土は大きな堀があった話もきかんし」

「安土城建立当時は後背は琵琶湖でした。今のように埋め立てられておらず、鬼々島と陸も遠かったようです。江戸城も当初は海が近く、堀の水も海水混じりだったようで現在でも多様な生態系が残っているそうです」

「ってことは、このあたりの海拔は低いんや。大阪城も似たようなもんやろな。……琵琶湖って海面よりは当然、高いやろな。どんなもんやろ？」

「たしか海拔85メートルだと小学校の遠足か何かで学んだ気がします」

「へえ、そういうえば、あの信長と鬼々島の人らって、どんな関係やったん？ 争ったん？ それとも味方したん？」

「織田信長が近江にいたのはわずかな期間で記録も見つかっておらず、豊臣政権となつてからは漁業権を認められる形で何らかの役目を負っていたようです。あの通り米作には向かない土地柄ですから」「そっか」

堀を渡る途中で、また鮎美は歴史を思い出した。

「徳川が造つた、この立派な堀で籠城されたら新政府軍も困つたやろな」

「そうですね、江戸城無血開城がなければ、籠城戦は長引いたでしょう。新政府軍に近代兵器ありといっても、大阪城の頃から銃撃戦砲撃戦を前提とした設計にはなつていきますから」

「東北の会津戦争みたいに首都が悲惨なことになったら、フランスイギリスにつけ込まれたやろなあ」

「アロー号事件の二の舞を避けたという意味では井伊直弼の深慮遠謀かもしれません」

「どつちにせよ、あの時期から英米仏め、調子にのりおつて」

「いずれ歴史の天秤は勝者を永遠に勝者とはたらしめないでしょう、源氏平氏しかり徳川しかりです」

二人の会話を聞いていた詩織があきれたように言う。

「あの……二人は女子高生で、これから王様いるお城へ新年のお祝いに行くんですよ？ 素敵な王子様に会ったら、どうしようとか、そういう会話にならないものですか？」

「うちは王子様に興味ないし」

「それはわかっていますけど、だからって城塞とか源氏平氏とかじゃなくて、やっぱリドレスで来ればよかつたとか、そういうのが普通ですよ」

「ドレスか……ドレスは着てみたいかな」

駐車場を歩く鮎美が遠目に見えるドレス姿の女性を見つめた。オレンジ色の華やかなドレスを着ていて、若い女性に見える。

「あの人、若いなあ……」

「そうですね。他の参列者の配偶者に比べると、かなり……」

鮎美と詩織が見ていると、女性もこちらに気づいて手を振ってきた。

「……あ、もしかして、知事の……」

オレンジ色のドレスを着ていたのは夏子で鮎美たちに早歩きで近づいてくる。

「あけましておめでとう、鮎美ちゃん！」

「おめでとうございます、加賀田はん……いえ、加賀田知事」

挨拶して、ほぼ政治家の習慣として握手もした。

「ずいぶん早くに来はるんですね。うちの30分後やのに」

「絶対に遅刻はできないからね」

「ドレス、よう似合えますやん。一瞬、誰かわからなかった」

鮎美は世辞でなく心底誉めた。それだけ夏子は美しかったし、女らしくて好ましく感じる。髪も完全にアップしていて、パンツスーツ姿の選挙戦や公務時とは大きく違った。

「ありがとう。鮎美ちゃんは制服が一番だね」

「来年はドレスで来ますよ」

「元旦から来年のことを言うと鬼が笑うかもね」

「鬼々島の人は、いつも笑えますから」

「言うねえ」

正月気分だからなのか、何回目かの出会いだからなのか、それとも田舎を遠く離れた東京で出会ったからなのか、鮎美と夏子は自民と民主という所属を忘れたように仲良く談笑を始めた。それで時間が経過し、いよいよ国会議員たちが皇居内の松の間へ招集されているので、鮎美も静かに向かった。

「……………」

松の間か……ちゃんと他にも、竹の間、梅の間と松竹梅がそろつてるんやなあ、と鮎美は真顔ではいたけれど、今上天皇に謁見する直前にしては、ほとんど緊張していなかった。むしろ、他の一期目の衆議院議員の方が緊張しているくらいで、燕尾服を着てカチコチと歩き、ペンギンのように見えた。

「入場された順番から、奥へつめて参列ください」

宮内庁の職員が案内してくれ、松の間に入ると報道カメラもあつて鮎美が入場する姿をアップで撮られている気がしたものの、カメラを向けられるのは、もう慣れたことなので道場へ入るときと同じように頭をたれて入場し、他の参列者の流れにのつて奥へ進んだ。かなり広い松の間は参列者でいっぱいになり、前方には総理大臣の鳩山直人もいたけれど、鮎美の位置からは見えなかった。

「……………」

天皇陛下のお顔も見えへんかも、と鮎美は落ち着いた気持ちで思った。新年の挨拶を陛下へ奏上する総理や議長などと違い、鮎美は参列するだけが役割なので立っていればいい、礼をするときに礼をすればいい、という気楽さもあつた。そのうちに今上天皇をはじめとした皇后、皇太子、皇族らの入場が始まり、壇上へ陛下が立った。

「……………」

あの人が天皇陛下なんや……テレビで見たのと同じや……当たり前やけど……、と鮎美は平凡なことを感じた。それでも、さきほどより緊張感を覚えている。今までにも議長や党首に会うことは多く、圧倒されることもあつたけれど、それにさえ慣れてきたのに、今上天皇という存在感は、また別格だった。広い松の間で、かなりの距離があつて、他の参列者の背中に隠れて、わずかしか見えないのに背筋が伸びるような緊張がある。鳩山総理も緊張している様子で、新年の挨拶を述べていて、それに対して陛下が言葉を返している。長くも感じたのに、終わると短かった儀式が終わわり、松の間を出ると、次に入る夏子たち都道府県の知事とすれちがった。

「…」

「…」

夏子とは目線だけ合わせて別れる。

「……………」

これで、終わりか、あつけないもんやね、と鮎美は年末から準備してきた予定が終わったことを感じていると、トイレに行きたくなつたので女子トイレに入り用を済ませて個室を出ると、洗面台の前で他の

女性参議院議員に声をかけられた。

「芹沢さんって運がいいわね」

「はい？ ……はあ…」

返事をしたものの、意味がわからなかった。

「西村先生が亡くなって、ここに来てるけど、ホントなら他の去年の当選者と同じに、新年祝賀への参加は来年からなのよ。最年少と合わせて運がいいわね」

「ああ、その話ですか…」

「いやいや運がいいってことなん？ このオバハン何が言いたいねん、と鮎美が不快に思っているうちに、その女性議員はトイレを出て行った。」

「……まったく、人が亡くなったちゅーのに…」

最期に咳き込んで苦しんでいた西村の姿を思い出して鮎美は気分が重くなった。気分を変えるために、いっそ顔を洗いたくなくなったけれど、メイクしているのでタメ息だけにして廊下に出た。

「芹沢鮎美参議院議員、こちらへ来ていただけますか」

鮎美を捜していた様子の職員が声をかけてきた。

「はい。………」

「何やる、もうお土産もらって帰るだけのはずなのに、と鮎美が予定外に呼ばれたことを不思議に思っていると、波の間という小さな部屋の屋へ案内された。」

「……ここでお待ちください」

「はい。……あの、……ここで何が？」

呼ばれたのは鮎美一人で他の議員はいない。聞いていない予定でもあったなら一大事なので問うと、職員が答えてくれる。

「義仁親王、由伊内親王が芹沢議員にお会いしたいとのこと。しばらくお待ちください」

「っ、よしひと……しんのう……ゆい、ないしんのう………」

えっと確か、皇太子はんの長男と娘さんで、15歳くらいと7歳くらいやった気が、さつきも松の間に居はったやろけど、見えなかった……その親王はんと内親王はんが、うちに会いたいって、なんよそれ、

どういふことなん、と鮎美が緊張した顔で混乱していると、二人の皇族が入室してきた。

「はじめまして、芹沢さん」

「はじめまして、芹沢さん」

テレビで見たことのある15歳の親王と、7歳の内親王に挨拶され、鮎美は頭を下げる。

「は、はじめまして！ せ、芹沢鮎美です！」

「そう緊張しないでください。急に呼び立てたりして、ごめんなさい。妹が、どうしても会ってみたいと。それにボクも君に会って見たかった」

そう言った男子は黒髪の日本文子で燕尾服で正装している。妹の方も幼い身体に似合うドレスを着ていた。由伊が7歳らしい幼さと、皇族らしい穏やかさで言ってくる。

「お姉さんが17歳で議員になるのですよね？」

「由伊、18歳だよ」

「あ、そうでした。18歳で議員になられるのですよね？」

「は、はい。そうです」

「大変そうですね」

「い、いえ、それほどでも」

「気苦労はありますか？」

「…」

な…7歳の子が気苦労とかいう言葉を使うんや、と鮎美が驚き、その感覚は兄の義仁には伝わった。

「クスっ…気苦労ばかりでしょうね。急にクジ引きで当てられたのだから」

「は…はい…まあ…」

「当たらなければ、なりたい仕事はありましたか？」

「い…いえ…これといって…」

「議員の仕事は、どうですか？」

「や…やりがい…感じたいとは…思ってますけど、…まだまだ…」

「これからも頑張ってください」

「これからも頑張ってください。会えて嬉しかったです」

たった、それだけの短い会談で二人とも秒刻みで行動しているらしく残念そうに去ってしまった。

「……………はああ…」

二人の姿が見えなくなると、鮎美は職員たちがいるのに大きく息を吐いて、膝が崩れそうになりヨロめいた。そばにいた職員が支えようと手を出してくれたので、ある程度は予想された反応だったのかもしれない。

「す、すみません、おおきに……………」

とつさに地の関西弁を出してしまい、下品だったかと後悔するものの、よく考えれば皇族も京都から東京へ移ってきたので、おおきには問題ないのでは、といった場にそぐわない思考が渦巻き、しばらく落ち着くまで時間がかかった。その時間を職員たちは静かに待っていてくれて、鮎美の様子を見計らって紙袋を渡してくれる。

「本日はご苦労様でした。こちらをお持ちください」

「は……………はい……………どうも……………」

渡されたのは聞いていたお土産だったので遠慮無く受け取った。中身は鯛や蒲鉾、数の子などの縁起物の料理のはずで、すべての参列者に渡されている。やっと足取りが確かになった鮎美は皇居を去ると、その日のうちに今度は地元で数限りなく行われる新年会へ顔を出すために新幹線で東京を去った。

1月3日 二十歳

翌々日の1月3日、月曜日、鮎美は地元の六角市で開催される二十歳の集いへ来賓として出席していた。大きな六角市文化会館には晴れ着姿の20歳を迎えた女性たちと、主にスーツ姿の20歳の男性、そして、ごく一部に紋付き袴を着た頭の悪そうな男性たちが座っている。

「ひっこめえ！」

市長が祝辞を送っているのに、頭の悪そうな袴の男が野次を飛ばしていた。次の次は鮎美が話す番なので気が重い。

「……………」

成人年齢が18歳まで引き下がったちゅーのに、20歳になっても幼稚園児レベルなんやね、男って意味わからん生き物やな、女子やとヤンキー化しても、あそこまで凶暴にならんのに、ホルモンの違いなんかな、と鮎美は壇上から二つ年上の先輩たちを見下ろし生物としての男女の違いを考えていた。鮎美が通っている高校も大阪で通っていた高校もレベルは高い方なので、ヤンキーを身近に見るのは中学以来でもあった。

「……………」

鮎美が見下ろす視線と、派手な赤と金色の紋付き袴を着ている男の目線が合い、鮎美は自然に目をそらしたけれど、男は席から立ち上がると壇上へ登ってきた。

「なんだ、君はっ?！」

「オッサンは、ひっこめ言とるやろが！」

男は鮎美へではなく市長に向かっていき、すぐに舞台袖から市の職員が出てきて、男が乱暴なことをしないように取り囲む。取り囲まれると、男は威勢を放ちながらも、席に戻っていく。その途中で、鮎美の方をチラリと見た。

「……………」

え、なんなん、そのドヤ顔、今の行為がカッコいいとも思ってる

ん？　うちへのアピールなん？　何を考えてるんやろ、ホンマに意味不明やわ、と鮎美は無表情を保つのに苦勞しながら座り続けた。市長は氣を取り直して話を続ける。

「これから社会で活躍していく皆さん。六角市と日本の…」

民主党所属の市長はありきたりな話をしている。続く自民党県議の話も無難で平凡なものだった。

「……」

たしかに叫びたい気持ちもわからんでもないわな、話してる方も聴衆が興味をもちそうな話題にすればええもんを、ありきたりに、しかも微妙に自分の政党へ少しだけ誘導しとるもん、けど、この程度の誘導やったら、普通の人にはわからんやろな、公約に近い話をしてるけど総選挙での公約なんか高速道路無料と沖縄基地移転以外は、普通の人は忘れてるし、もつと面白い話なら黙って聴くかもしれんけど……かといって、うちもウケ狙いで笑い取るわけにもいかんし、無難に原稿通りにしよかな、と鮎美も人前で話すことに慣れてきたとはいえ、それは多くの場合で自民党支持層だったり、駅前を通りかかった人だったりして、ぴったりと20歳のみで構成された人たちではなかった。自分より二つ年上ということは一年生が三年生に話すようなものなので、軽い緊張もある。

「続いて、参議院議員、芹沢鮎美さんより、お祝いの言葉をいただきます」

紹介されたので鮎美はパイプ椅子から立ち上がり、一礼して演壇へ向かう。

「アユミちゃん！　パンツ見せてくれ！」

「……」

下品な野次が飛んできたのに対しては、心の中だけで舌打ちして、鮎美はマイクを少し下に向けて設定し直す。どうしても市長や県議たちとは身長が違うので必要な処置だった。

「パンツ見せろおー！」

「……」

しつこいねん、ボケが、と言いたいのを我慢して、笑いを取って場

の空気を変えることにした。

「えーっ、ずいぶんと酔いの回った人もおられるようで、宴もたけなわといったところでしょうか」

「クスッ」

「……」

笑ってくれたのは市長や県議など年配の人たちだけで、20歳の若者たちには鮎美が言ったことの可笑しさが伝わっていない。野次を飛ばしている連中は、すでに酒を飲んでいて赤い顔をしているし、今は宴会ではなく式であり、これから各自で宴会になるにせよ、気の早いことを注意するのではなく、ボケで指摘するというネタだったけれど、それは宴会慣れしている年配の人たちにしか通じず、大きく滑っていた。

「お酒の飲める年齢になられたこと、お祝い申し上げます」

それでも凹むことなく話は続ける。

「先輩方に壇上より、お話しさせていただくのは少し気の引けるところもありますが、どうか、最期までご静聴ください」

「アユミちやーん、何か歌ええー！」

「踊れえー！ ダンスしろー！」

「スカートめくってくれ！」

「…」

たぶん、こいつら、静聴っていう言葉の意味、マジで知らんし、漢字で書けへんかも、そういう人らに、どう話すか、困りもんやな、と鮎美は高速で思考し決めた。

「前列のあたりで野次を飛ばしておられる先輩方」

あえて鮎美が無視せず、男たちのことを口にするのと、場の空気が緊張した。ここから鮎美が叱咤したり注意したりすると、当然に男たちは暴れ出すし、場合によっては鮎美に危害を加えるかもしれないので舞台袖の職員たちは、いつでも飛び出せる体勢になっていく。男たちの方も、ヤンキーらしい鋭い目つきで鮎美を見上げてきた。

「ご安心ください。実は、えらそうにしている議員も野次を飛ばしません。しかも議場で」

「……」

「本来、話し合うべき、自民と民主も、野次の飛ばし合い。品位あるべき議場でそうなのですから、二十歳の集いで遊び気分になるのを注意するのは、野暮かもしれません。案外、うまい野次を飛ばせる先輩は、議員としても立派になるかもしれないよ。ただ、女の子に向かって、言わないでほしいことはあるので考えてください。さて、お正月の三日から……」

そこから鮎美は原稿通りに話したけれど、もう野次は飛んでこなくなつた。鮎美が言及したことで自分たちの存在が認められたと無意識に満足したのか、それとも、うまい野次を思いつけなかったので黙っていただけなのかは不明だったけれど、式典は無事に終わった。

「お疲れ様です」

鷹姫と静江が労ってくれる。

「次の予定は？」

「六角市商工会青年部の新年会へ招かれています」

「ほな、行こか」

昨日に引き続き、新年会のハシゴをして遅くなり、島には戻れずビジネスホテルに鷹姫と泊まった。二人部屋だったけれど、別々にシャワーを浴びて、テレビを見ながら、やっと寛いだ。

「今日も疲れたわあ……」

「本当にお疲れ様です」

「お腹も空いてるのか、ふくれてるのか、わからんし」

参加した新年会で、まったく飲食しないのも非礼なので少しは食べたり飲んだりもする。主にウーロン茶ばかりを口にして、ときどき何かを勧められて食べたけれど、相手の話を聞いたり相槌を打ったり、サインに応えたりと、忙しいので味など感じていないし、どれだけ食べたのかも覚えていない。おかげで今になっても空腹なのか、それなりに満足しているのか、わからない。

「いただいた膳があります。召し上がられますか？」

「鷹姫、二人つきりなんやし、そんな言葉遣いでなくてええよ」

「そうでしたね。鮎美、食べますか？」

「うん……」

「四人分もあります」

気の利いた主催者だと会費を払った鮎美と秘書の分を膳として使い捨ての容器で渡してくれたりする。今日も一人あたり2膳ばかり頂戴し、静江は持って帰ったし、鮎美と鷹姫は素泊まりにしたビジネスホテルに持ち込んでいる。

「どうしよかな……」

鮎美は女子らしくウエストを気にして、お腹を撫でた。鷹姫はすでに1膳に手をつけ半分まで食べている。

「食べないと無駄になりますし、私一人で4人分は苦しいです。手伝ってください」

「そやね。ほな、一ついただくわ」

生温かくなった刺身と、冷たくなって湿った天ぷらなどを食べて夕食にする。テレビが鮎美の顔を映した。

「前列のあたりで野次を飛ばしておられる先輩方」

「あ、うちや」

本日のニュースとして二十歳の集いの模様を流している。

「ご安心ください。実は、えらそうにしている議員も野次を飛ばします。しかも議場で」

鮎美の映像を見ながらニュースキャスターが隣りにいるコメントーターに意見を求める。

「毎年各地で荒れる成人式…、いえ、間違いました。二十歳の集いですが、この六角市で行われた式典会場には参議院議員として最年少の18歳で就任した芹沢氏が壇上に立ったようですが、どう思われますか？」

「面白い子…、と言うと失礼かもしれませんが、魅力的な人ですね。彼女から見ると二十歳は先輩なのに、うまく受け流していて。しかも、彼女なりの政治批判もある。これは国会が始まるのが楽しみになりますね」

「一部情報では24日から始まる第177通常国会の開会式で総理の

施政方針演説などに続き、彼女が登壇して弔辞を述べるそうですが、ありえるでしょうか？」

「彼女は癌で亡くなった西村議員の後釜という形で少し早めに議員擬制されましたからね。現職の国会議員が亡くなった場合、通例では選挙区のライバルなどが弔辞を述べるものですが、現状の参議院選出制度ではライバルは存在しないので、同時期に議員である雄琴議員か、後釜となる彼女かの、どちらかとなるでしょう」

「次のニュースをお伝えします」

ニュースが変わったので鮎美が問う。

「うちが登壇するなんて話あるんや。けど、うちか、雄琴はんが登壇するのって、全国ニュースのコメントで触れるようなことなん？」

「……どうでしょう……わかりません。弔辞は当然ですが……」

「西村先生、在任中の死亡やもんなあ……」

鮎美と鷹姫が故人を思い出しながら食事を終えると、鮎美のスマートフォンが鳴った。着信表示は静江になっている。

「もしもし、うちよ」

「緊急で伝えたいことがあると、民主党の細野議員が連絡してきました」

「細野先生が？　うちに……何を？」

「芹沢先生へ直接にお話したいとのこと。先生の番号を教えてくださいと言われ、躊躇していると細野先生の番号をこちらに教えてくださいました。至急、連絡がほしいそうです。芹沢先生の番号を知られなくては、ホテルからかけるか、宮本さんに持たせている携帯からかけてみてください」

「わかりました。電話してみますわ」

「結果と内容は伝えてください。お兄ちゃんと寝ないで待っていますから」

「……心配せんでも、民主に移籍したりしませんから」

至急と言われているので、鮎美は迷わず自分のスマートフォンで静江から聞いた番号へかけた。

「もしもし、細野です」

「こんばんわ。芹沢鮎美です」

「ああ、ありがとう！ 伝えたいことがあるんだ！」

「はい、何でしょう」

「明日、発売される週刊紙に、芹沢さんと私の写真が載るらしい」

「……あの新幹線で撮られたやつですか？」

「おそらくそうだ。それ以外にない」

「そ……それで、どうすれば、いいんですか？」

「動揺せず、落ち着いて、何もなかった、男女の関係ではない、ただ自民から民主へ移籍しないかと、持ちかけられた。そう平然と答えてほしい。それが真実だし、私も、そう答える」

「わかりました」

「頼むよ。お互い、痛くもない腹を探られたくないだろう」

「はい。……どんな記事が書かれるんですか？ うちと先生が不倫したとか？」

「わからない。かろうじて知人から伝わってきた情報なんだ。どうせ、写真は加工しないまでも、うまく編集して何かあった風な記事に仕上げて曖昧に名誉毀損にならない程度にあることないこと書くだろう。ヤツらは、そういう人種だ。場合によっては名誉毀損の裁判覚悟で、でつちあげた話でも書く。とくに芹沢さんは注目されてるから売れるだろう」

「……………」

「私も前科があるから……、細野また不倫か?!と疑問符で終わるくらいは書かれるかもしれない」

「……………」

「どうか、動揺しないで、しっかりと答えてほしい。お互いの名誉のために」

「わかりました。情報ありがとうございます。この番号、うちのスマホからですから、また何かあれば、よろしくお願いします」

「わかった。では」

短いけれど重要な電話を終え、すぐに鮎美は静江にかけて、たまたま新幹線で隣りにいた細野と会話したこと、その様子を記者に盗撮さ

れ、それが記事になるらしいことを伝えた。

「…そうですか、お兄ちゃんと対策を立てます。けれど、細野先生のおっしゃる通り、お二人が冷静に否定すれば一週間もしないうちに鎮火できると思いますから、どうか落ち着いてください。あと、これからは男性と隣席するのは気をつけてください。いつでも狙われていると思ってください」

「はい、すみません。あと、別の件で訊きたいことがあるんですけど、ええですか?」

「どうぞ」

「さつきニュースで、うちが国会の開会式で登壇して弔辞を読むかも、つてことが言われてたんですけど、それってニュースになるほど重要なことなんですか?」

「とても重要です。どちらかといえば、栄誉なことです。実は私たちが水面下で動いていて、本人には黙っていました」

「……静江はん、知ってたんや」

「今も、その件で自民と民主で取り合いです。芹沢先生になるか、雄琴先生になるか、多数決なら民主が勝ちますが、民主の中にも雄琴先生をコウモリと言って嫌う先生方もいますし、西村先生の最期を看取ったのも、葬儀に参列したのも芹沢先生ですから、私たちが勝つ公算は高いのです。けれど、ご本人は決定するまで、この件については知らぬ顔をしてください」

「……わかりました……ホンマに、いろいろあるんですね……。それほど、栄誉なことなんですか?」

「普通、一年生議員は登壇する機会が、ほとんどなく国会は終わってしまします。まして開会式は天皇臨席のもと、両院の議員が参議院に集まって開催されるものです。亡くなった西村先生には悪いですが、これほどの幸運、めったとないことです」

「……そうですか……」

「芹沢先生は本当に強運です。これから、どうか宜しくお願ひします」

「……」

うちを幸運の女神か、商売繁盛の恵比寿さんみたいに言われてもなあ、と鮎美は答えに困りつつ電話を終えた。

翌1月4日の朝、鮎美と鷹姫は午前に新年の挨拶回りを予定していたけれど、週刊紙の件があり支部に顔を出して会議を開いていた。会議には石永と静江、男性秘書たち、県議が2名、市議が5名ばかり駆けつけているし、詩織も東京からネット回線で参加していた。

「すでに、外には報道関係者が集まっています」

静江が外の様子を報告してくれる。鮎美は黙って週刊紙の記事がコピーされたものを忌々しそうに睨んでいた。

細野議員また不倫か?! 今度は18歳を喰う?!

最年少議員芹沢鮎美は魔性の魅力?! 細野だけじゃない?!

京都駅で熱い抱擁?! 雄琴議員と三角関係?!

民主の口説きに鮎美ちゃん笑顔でバストタッチ!!

制服からのパンチラ7連発、袋とじ!

女子高生議員は日本再生の光りか、亡国の兆しか?!

週刊紙の表紙に書かれた見出しは、ほぼ鮎美に関わることばかりで今週号は完全に鮎美特集だった。

クシヤクシヤ…

鮎美が手元のコピー用紙を右手で握ってグシヤグシヤにしている。

「……………」

今にも爆発しそうな怒りを自制しているのが、誰の目にも明らかだった。男性たちは声をかけにくく、静江が恐る恐る言う。

「せ、芹沢先生……対策を考えるためにも、記事にあることを……一つ一つ検証させてください」

「……………」

鮎美が黙って頷きながらボールペンを折った。

ベキツ…

プラスチック製とはいえ、それなりの太さのあるボールペンだったのに折ってしまう握力を見て、男性たちは鮎美が中学剣道で大阪代

表になったことを思い出した。

「で、では、細野議員との間にあった事実関係ですが、たまたま新幹線に乗り合わせ、となりだったので会話を始め、細野議員から民主党に来て欲しいと誘われたけれど、断った、と。これでよろしいですね？」

「……」

また鮎美が黙って頷いた。県議の一人が言ってくる。

「この写真からして、かなり親密そうに見えるし、二人の距離が近いが、通路越しではないのか？」

表紙をめくって1ページの写真は細野と鮎美の写真で、鮎美が席を移動して細野と密談しているときのもので、細野は自分の党へ鮎美を勧誘したいし、鮎美も訊きたいことがあったので、二人とも笑顔で見合っているように見えなくもない写真だった。動画か、高速連写で撮っていたものを、なるべく二人に性的関係があるかのように見える表情を抜き出して編集していた。ごく丁寧に細野が不倫したときに撮られた以前の写真まで対比として載せていて、読者へ印象操作している。鮎美が県議を睨んだ。

「親密？ 先生らかて、他党の議員と会話するとき愛想笑いの一つくらいいしはりますよね？」

「う、うむ。まあ、そうだが距離がだな……」

「新幹線の席は、こういう距離やん」

「……通路越しではなかったのかね？ 満席なら仕方ないが、宮本君といっしょだったなら、指定席は二人席になりやすいはずだが」

「党を移る移らんちゅー話をするんですから、密談になって当然ですよん」

「まさか移る気がっ?!」

「……。ご希望なら、そうしましよか」

心外なことを問われて鮎美は心にないことを言い返した。

「なっ……なんだと?!」

「両先生とも、落ち着いてください」

石永が仲裁する。

「芹沢先生、お怒りはわかります。ですが、私たちの質問は、後で行う記者会見の予行演習だと思ってください。苛立ちにまかせて感情を見せれば、むこうの思うツボです。あいつらはね、芹沢先生が自民に残ってくださいていることが気に入らないんですよ。できれば、潰したいと思うほどに」

兄に続いて静江が言う。

「いつそ感情をみせるなら怒りではなくて、傷ついたという顔をしてください。こんな記事を書かれて、どれだけ傷ついたか、その方が出版社への反撃になりますから」

「被害者になれてか?! うちは負け犬かっ?!」

鮎美が机を叩いて怒鳴った。激しい剣幕で、この場にいる一同が黙り、ネット回線の向こうにいる詩織が冷静に言ってくる。

「女の涙は最強の武器ですよ、鮎美先生」

「うちは、そんな勝ち方しとうない!!」

「では、まず落ち着いてください。どのみち潔白なのですから」

詩織に続き、鷹姫が言ってくる。

「牧田さんの言うとおりです。ここは落ち着いて、かつ迅速に対策を決めなければ、会議が長引いて小田原評定となれば余計な疑いを持たれます」

「……そやね」

少し鮎美が落ち着いたので静江が事実確認を続ける。

「この写真を撮られた後、宮本さんが盗撮に気づき、取り押さえたものの、記者であつたため解放した。つまり、この場には二人きりではなく秘書の宮本さんもいっしょだった、不倫などではない、と、これで細野先生との件は、無難に流せると思います」

「……………」

鮎美が黙って頷く。

「では、次に雄琴先生との京都での件ですが、これの説明をしていただけますか?」

細野との写真の次項には直樹との写真が掲載されていて、京都駅のホームで鮎美が直樹に抱きしめられている写真だった。

「……こんなときから、狙って……」

「雄琴とは、どういう関係なんだ?! 今でもつながっているのか?」

また県議が詰問してきた。もう鮎美は冷静に答える。

「この写真を撮られた日、うちは参議院議長の竹村先生と会談してから、京都で当時は衆議院議長の久野先生とも会談して、さらに共産党の破志本先生とも会談して、疲れてヘトヘトやったんです。それで京都駅のホームで立ったまま寝そうになって、線路に落ちそうになったところを雄琴はんが助けてくれはったんです。やましいこともないし、この当時は雄琴はんも自民です。あと、その場には共産党の西沢先生もいてくれはりました。この写真、どうせ編集でカットしたんやろけど、すぐそばに西沢先生が立ってはるはずです」

「……そういうことならば……。加賀田知事とも、親しいのかね?」

「この写真は……」

細野や雄琴との写真よりスペースは小さいけれど、夏子との写真には、やましいことがあった。皇居の地下駐車場で夏子と出会って談笑しているところを撮られた写真で、オレンジ色のドレスを着ている夏子の胸に鮎美が手で触れている瞬間だった。ドレスを誉めるときに触ったのだったけれど、実は触りたくて乳房に触った写真なので鮎美としては、やましい。少し鮎美の目が泳いだ。

「親しいというのではないですけど……。このときは、ドレスが可愛いね、って……。新年で二人とも、浮かれてましたし……。ちよつとしたスキんシップです」

「あまり民主の者と接触するのは、好ましくないぞ」

「はい、今後注意します」

やましい気持ちに県議は欠片も気づかなかったけれど、詩織が核心をえぐってくる。

「思いつきり胸に触ってますね。これ、芹沢先生が男だったら辞職コースですよ」

「……………」

「女同士で良かったですねえ」

「次の袋とじですが」

静江も県議と同じく知事へのスキンシップは重要視していないので、バストタッチという表現は細野か、雄琴と何かあったように演出するための悪質な編集だと思っっているし、編集側も鮎美が同性愛者だとは気づいていない。詩織の発言は無視され、静江が話を進める。

「ご本人を前にして、下着の写真は、あまり男性方に見ていただきたくないなので、私たちが検証していきます」

袋とじページには7枚のパンチラ写真があった。どれも制服のスカートから見える下着の写真だったけれど、鮎美ではない写真が混ざっていた。

「この3枚以外は、すべて芹沢先生ではないと思いますが、どうですか？」

「制服からして、ちやう学校のやん」

「逆に言えば、この3枚は鮎美先生なのですか？」

詩織の問いに鮎美は嫌そうに頷く。

「そや」

鮎美のパンチラ写真は知事選の応援でステージのパイプ椅子に座ったときなどで顔も写っていて正真正銘、本人のものだった。

「他の4枚は地下アイドルか、ローカルアイドルかもしれないね。鮎美先生の方が可愛いですよ。とりあえずパンチラ7連発という見出しは嘘ではない、週刊紙のやりそうなことですね」

「どっちにしても盗撮やん。腹立つわ」

「さすがに記者会見で袋とじについての質問は大手新聞社からは無いかと思いますが、ゴシップ誌から問われたら……お兄ちゃん、どう思う？」

「うーん……そこは感情を少し出して、この前みたいに、ノーコメント！ と一喝しても悪い風には報道されないだろう。いや、悪質な編集をされると、細野先生との関係にノーコメントと答えている風に映像化される可能性もあるなあ……やはり、無難に、袋とじの内容についてはお答えできません、と言って恥ずかしそうに顔を伏せるとかで、いいんじゃないか？」

「男が喜びそうな反応ね……お兄ちゃんの発想、オヤジだよ」

「お前が、どう思うって言うから考えたんだろ！」

「はいはい。芹沢先生、この前みたいにノーコメントと切り捨てる感じなのは今回は控えてください。演技は必要ないですけど、丁寧に、そして袋とじの話だと主語をはっきりさせて、袋とじ記事の内容についてはお答えできません、とか、そんな風に」

「はい、そうしますわ」

「だいたいの対策が決まりましたので二、三回の予行演習をしてから記者会見を開きます。みなさんが記者として質問役、芹沢先生は不快な質問にも冷静に答える訓練だと思つて頑張ってください」

静江が取り仕切り支部内で予行演習が始まった。

1月4日 記者会見

お昼過ぎ、陽湖は鬼々島の借家で鮎美の母親である芹沢美恋（みこ）と心配そうにテレビを見ていた。

「……アユちゃん……」

「シスター鮎美は、きっと大丈夫ですよ」

お正月も4日目になるとテレビの番組内容は退屈きわまりない初詣客数やグルメ紹介になるものなのに、今朝は娘のことが何度も何度も報道されるので心配でたまらなかつた。今もテレビで司会者とコメンテーターが鮎美のことを話している。

「今日発売の週刊紙に掲載された最年少議員芹沢鮎美さんと細野議員の不倫疑惑ですが、さきほどのぶら下がり取材では細野議員は全面的に否定されましたが、芹沢議員は記者会見を開くようです。どう思われますか?」

「男性側と女性側で受け取り方が大きく変わることもありますからね」

「とうとう?」

「細野議員としては自民党から民主党へ移って欲しいがために、いろいろと彼女を口説くでしょう。現に、そのことについて話したということは細野議員も認めている」

「ですね」

「ただ、彼女の方では口説かれて、どう受け止めたか、というのは認識が変わってくるかもしれない。口説き方として、君が必要だ、とか、君にきてほしい、くらいのことは当然に言うでしょう。それを言われて18歳の女の子が、どう受け止めたかというのは、また話が変わってくるかもしれない」

週刊紙の記事を詳しく読めば不倫疑惑の根拠は新幹線で相席したことしかないのに、視聴率を伸ばしたいがため、疑惑が判明するまでは引つ張れるだけ話を引つ張ろうと憶測でコメントしているのを見て母親として悲嘆に暮れているので、陽湖が慰めるように肩を抱いた。

「大丈夫ですよ、お母さん。シスター鮎美は、しっかりした人です」
「…そうね…」

「はい、きつと大丈夫」

陽湖は本人から告白されて鮎美が同性愛者であることを知っている。それゆえ、男性との不倫など無いと確信しつつも、逆に男性へ興味をもつことができたなら、それはそれで幸いなことも思うけれど、こんな形では避けてほしい。二人がテレビの前から離れられずにいるのに、鮎美の父親である芹沢玄次郎はスーツ姿で玄関へ向かっていった。

「あなた、こんな時なのに新年会へ行くの？」

「鮎美からは直接連絡があつて不倫も誤解、抱かれたのも落ちそうになつたからと言つてくれたろう」

「でも…」

「鮎美なら大丈夫、大丈夫」

「新年会と娘、どっちが大切なのよ?！」

「娘。けど、ここでテレビを見ているも何もできない。そして、新年会は遊びじゃなくて、湖東地区建設業組合の懇親なんだ。オレは新参者なうえに、娘が有名人だから顔を出さないと何か言われる。ちゃんと新年会の場でも疑惑を否定しておくよ」

玄次郎は男性らしい理屈を言つて出かけていった。テレビが新しい情報を伝えてくる。

「あ、今、雄琴議員の映像が入りました！」

画面に民主党の近畿地区国会対策会議を終えて、会議室から廊下に出てきた直樹が映る。

「雄琴議員！ 鮎美さんと京都駅であつたことは事実ですか?！」

直樹のことは議員と呼びつつも、鮎美のことはアイドルのように下の名で呼んだレポーターの質問に直樹は冷静に微笑して答える。

「質問の仕方が悪質だねえ。事實は芹沢先生がホームから落ちかけたから慌ててとめた。それだけだよ。あと、あの時期は本来、候補予定者だったのだから取材は自粛すべき時期のはずだ。いくら最年少で話題性があるといつても、節操が無いね」

「鮎美さんとは親しくされていますか?！」

「ははは。ボクが民主に移ったからね。裏切り者といって嫌われたよ」

「雄琴議員に抱かれたときの鮎美さんの反応は、どうでしたか?！」

「ホントに悪質な質問をするねえ。抱いたのではなくて、落ちかけたから助けた。それだけだよ。ま、助けてくれて、ありがとうくらいの反応だったんじゃないかな。もう半年も前のことだから、政治家らしく言っておこう、記憶にございません」

そう言って立ち去ろうとするのに、レポーターは追いかける。

「雄琴議員は鮎美さんのことを、どう想っておられますか?！」

「立派な人だよ。ぜひ、民主党へ来てほしい」

直樹がエレベーターへ乗り込んで移動するのに、レポーターはエレベーターの中まで追いかけ、さらに質問する。

「雄琴議員が自民党を捨て、民主党へ移られた理由は何ですか?！」

「捨てたという表現はともかく、いい質問だね。これ、生放送?！」

「はい」

「ボクはクジ引きで選ばれた議員だ。だから、国民の総意に従う。総選挙前の世論調査でも民主党に支持が大きかった。今も少し下がったけど、それでも鳩山内閣は支持されてる。だから、ボクは民主にいる」

「では、もし、自民党や他の政党が与党になったときは、また党を捨てるということですか?！」

「ボクは常に国民の総意に従う。それをコウモリという人がいてもね。せっかく生放送なんだから、言わせてもらうよ。幼女を誘拐して殺すような性犯罪者には絞首刑では足りない。もっと過酷な刑を用意すべきだ。そのためならボクは何度だって党を移籍するさ。常に与党にいるつもりだ」

ザツ：

そこままでエレベーターに乗ったためなのか、電波が途切れたようで映像が切れた。司会者が政治評論家に話を振る。

「ずいぶんと雄琴議員は齒に衣を着せないというか、言いたいことを

「言いますね？」

「彼も自分で言っていたようにクジ引きで選出された議員ですから有権者への意識の仕方が、おのずと従来の議員とは変わってくるでしょう。ある意味で特定支持層のためではなく全体の奉仕者たらんとする意志の表れであると同時に、彼個人の強い志向も感じますね。井伊市連続誘拐殺人事件をご記憶の方も多いかと思いますが、その事件で彼の妹は犠牲になっている。性犯罪者に対して強い懲罰感情をもつのは当然かもしれません」

「ナオくん……」

美恋が悲しそうに直樹のことも心配している。一時は手土産をもって頻繁に訪ねてくれたので美恋とも親しく話していたこともあったものの、今は党が変わったことで見かけなくなっていた。

「まだ芹沢議員の記者会見は始まらないようです」

「……アユちゃん……」

「大丈夫です、お母さん」

「でも、あんなにマイクもカメラもたくさん。まるで、アユちゃんが何か悪いことをしたみたい。あの子が当選したときから、こんなことになるんじゃないかって、私……なのに、お父さんは他人事みたい……」

「……………」

陽湖が美恋の背中を撫でて聖書の一節を暗唱する。

「冷静さを保ち、油断なく見張っていなさい。あなた方の敵対者である悪魔がほえるライオンのように歩き回ってむさぼり食おうとしています。しかし、堅い信仰をもって彼に立ち向かいなさい。苦しみを忍ぶ点での同じことが、世にいるあなた方の仲間の兄弟全体の中で成し遂げられているのを、あなた方は知っているからです」

ペトロ第一の聖句を諳んじて陽湖は励ますように微笑む。

「きつと大丈夫です」

「……ありがとう、ヨウちゃんがいてくれて良かった」

「今！ 芹沢議員が出てきました！」

テレビの中で、支部の駐車場に用意された記者会見場へ鮎美が静江

と鷹姫とともに現れた。即席に置かれた机の上には何十本というマイクと録音機が並び、椅子は置いておらず鮎美たち三人は立ったまま会見する。

「新年よりお騒がせしており、また寒い中、長くお待たせして申し訳ありません」

鮎美が頭を下げると、静江と鷹姫も一礼する。

「本題に入ります」

頭を上げた鮎美は堂々と前置き無しに細野と直樹との関係は誤解に過ぎないと話し始めた。

「アユちゃん……」

「シスター鮎美、立派です」

美恋と陽湖は凜とした鮎美の姿に感動さえ覚える。鮎美が説明を終えた。

「以上が事実経過です」

静江が報道陣に告げる。

「では、ご質問を受けさせていただきます」

「細野議員とは、どういった関係ですか？」

「とくに何もありません。細野先生としても、民主党という立場から、うちを誘いたいのかなとは思いますが、それだけです」

「細野議員とは何回くらい会っておられますか？」

「回数を訊かれると、うちも正確には覚えておりませんが、当初に議員候補予定者であった頃にも民主党への勧誘活動として何度か。うちが自民党に入ってからには他党ということもあり、ほとんど接触の機会が無く、あの新幹線で出会ったのが、かなり久しぶりになります」

「細野議員を男性として、どう見ておられますか？」

「……。どう見たこともありません」

「民主党への勧誘には、どのような言葉で誘われましたか？ 条件は？」

「条件は、とくに無かったと記憶しています。言葉としては、ぜひ来てほしい、新しい政治を自分たちで、といったものです。いくつか、うちからも高速道路の無料化や社会保障、外交などで質問させていた

き、自民党とは違う解決策を説明していただき勉強になっています。さきほど男性として、どう見て、という質問がありました。教師と生徒ほど歳も離れていますので、話していると教えをいただくような雰囲気です」

「芹沢議員は雄琴議員からの勧誘で自民党に入っておられますよね？」

「はい」

「雄琴議員を、どう思っておられますか？」

「……………。裏切りもん」

率直すぎる物言いに報道陣から失笑のざわつきが起こり、隣にいる静江が背後で鮎美の腰をつついていているのも映ってしまい、また笑われる。そして、余計な質問まで喚起してしまう。

「裏切り者というのは、どういう意味ですか？ 一人の男性として？」

「一人の自民党議員として、かつて一人の自民党議員やったものに対する感情です」

「雄琴議員が自民党であったときは仲良くされていましたか？」

「……………。はい」

「どの程度、仲が良かったのですか？」

「……………。そこそこに」

「いっしょに出かけたりしたことは？」

「ありません。私用では、一切」

「仕事では、いっしょだったのですか？」

「この支部にも、よく出入りされていましたし、選挙の応援活動なんかも、いっしょにやっています」

「仕事で同じホテルに外泊されたことは？」

「一切ありません」

「雄琴議員は常に与党に在籍すると言っておられますが、もしも自民党が再び与党に返り咲くことがあったとして、そのとき雄琴議員が戻って来られれば、受け入れますか？」

「……………。党の総意で受け入れると決めたのならば、受け入れます。冷

やややかに」

「雄琴議員を一人の人間として、どう想っておられますか？」

「あのとき線路に落ちないように助けてくれた命の恩人ではありませんから、そこは感謝していますし、今回の件では彼に迷惑をかけていますから、申し訳なくも思います。そして、裏切りもんと言ってしまうましたが、一人の人間として見たとき、彼の妹さんのことも含めて考えれば、その行動を応援したい気持ちもあります」

「雄琴議員のことを好きですか、嫌いですか？」

「人としてなら、プラスマイナスゼロです。男の人としてなら、まったく一切興味はなく、ただの同僚もしくは他党の人です」

何度も予行演習をした鮎美は記者たちの質問に動じずに答えている。だんだんと事実関係が明らかになり、ただの盗撮写真を膨らませただけの捏造疑惑だったとわかってくると、それでも話題性を保ちたい記者たちの質問傾向が変化してきた。

「現在、交際されている男性はいますか？」

「いません」

これも演習問答の中にあつたので鮎美は話題性を与えないように、冷静かつ簡潔に答えて話を膨らまされるのを予防する。

「今までに交際されていた男性は？」

「いません」

「どのような男性が好みですか？」

「優しく抱擁力のある人です」

「雄琴議員の抱擁は、どうでしたか？」

ゴシップ誌の記者が挑発的な質問をしてきた。冗談としても悪質な言動だったけれど、鮎美は動じなかった。

「あのときは眠かったので覚えていません」

「もう一度、機会があれば？」

「そのとき、お答えします」

隙のない応答に記者たちが諦めつつあるけれど、今回は時間を区切らず、すべてに回答するという方針で鎮火を狙っているので、より質問の質が落ちてきた。

「県知事選で応援に行かれた写真も掲載されていましたが、ご覧になつていかがでしたか？」

またゴシップ誌の記者が袋とじページのパンチラ写真のことまで遠回しに訊いてきた。

「袋とじ記事の内容についてはお答えできません、っ…」

鮎美は決めていた答えを口にしたけれど、言い終わつた途端に涙が溢れてきて、頬を流れたので慌てて指先で拭いた。

パシヤツ！ パシヤツ！

シャッターチャンスを逃さずにカメラマンたちがフラッシュを連発してくる。その光りが目に痛いのと、何より今まで怒りと対応策への集中で自覚していなかつただけで、深く心が傷ついていて、もう限界だった。

「うっ…うくっ…」

泣けてくる。

パシヤツ！ パシヤツ！

泣き出してしまったのを、また撮られると、もう冷静さを保てない。全国に発売された週刊紙に自分のパンチラ写真が載つて、しかも記者から、ご覧になつていかがでしたか、と訊かれた。それはもう、お前のパンチラ写真が全国に出回つた気分はどうだ、と訊かれているのと同じだった。

「うあああ！ うわあああん！ うわああああん！」

つらいのと苦しい、そして悔しい気持ちで胸が引き裂かれるように痛くて、とうとう声をあげて号泣してしまう。その顔を撮られる前に静江が抱きしめて隠してくれたけれど、もう嗚咽は止まらない。泣き続けるので静江は支部内へと鮎美を匿っていく。そして、鷹姫は鮎美の代わりのようにマイクの前に立った。

「……………」

鷹姫はマイクの前に立つたけれど、何も言わない。

「……………」

「記者会見は、もう終わりですか？」

「……………」

質問されても答えない。ただ黙って鷹姫はまっすぐに記者たちを見据えている。

「……………」

「何とか言ってくれませんか？ あなた誰？ 芹沢議員の秘書？」

「……………」

「その制服、鮎美さんと同じですよ？ 同じ学校ですか？」

「……………」

鷹姫は怯みもしないし、答えもしない。ただ黙ってマイクの前立って見据えている。何を考えているのか、まったく記者たちにもわからないし、記者会見が終わりになるのか、続くのかも不明なので困る。とくに生放送している放送局は終わりなら終わりで画面を切り替えたいのに、まだ何かあるかもしれないので終えられずに困る。ずっと黙って対峙してくる鷹姫への対応に困り果て、司会者が番組運営のためにフォローする。

「今、映っているのは芹沢議員の秘書か、お友達なのでしょいかね」

「おそらく秘書でしょう。同級生を秘書にしたという情報がありますから」

「彼女、何も言いませんね。あ、情報が入りました。秘書で宮本鷹姫さん、剣道の全国大会で優勝しているそうです。そういわれると堂々としていますね」

テレビの中にいる鷹姫は相変わらず何も言わない。いろいろと訊いてくる記者に対して、困った様子もなく黙って見据えている。その何を考えているかわからない顔を見て陽湖は短い付き合っただけで、少しは感じた。

「……………シスター鷹姫……………あなたは盾に……………シスター鮎美を守ろうと……………でも……………ずっと、そのままでは……………」

陽湖も胸が痛かったけれど、隣にいる美恋は娘の可哀想な姿を見て泣き出していた。

「うっ……………うっ……………うっ……………」

泣き方が、やっぱり親子なのだと感じるほど、よく似ている。

「……………お母さん……………」

「アユちゃんが、どうして……あんな目に……もうやめて……」
「……………。祈りましょう。シスター鮎美のことを、泣くよりも祈ってあげてください」

陽湖は静江が鮎美を抱いていたように美恋を抱いた。そのおかげで美恋は泣き止み、陽湖は聖書を誦んじる。

「しかし、あなた方がしばらくのあいだ苦しみに遭った後、キリストとの結びつきにおいてあなた方をご自分の永遠の栄光に召された、あらゆる過分のご親切の神は、自らあなた方の訓練を終え、あなた方を確固とした者、強い者としてくださるでしょう。その神に偉力が永久にありますように。アーメン」

「……………アーメン……」

美恋も娘のために祈った。そして祈り終わると、真剣な顔つきで陽湖に言ってくる。

「私は……誰に相談していいのか、わからないことがあるの……聞いてくれる？　そして、絶対に誰にも言わないでくれる？」

「はい、誓って」

陽子の目を見て美恋は信じた。

「アユちゃんは……鮎美は……少し変なの……あの子、……今回、テレビで騒がれてるけど……実は一度も男の子を好きになった気配が無いの」

「…………。そう……なのですか……」

その理由を陽湖は知っているけれど、悟られないように表情をつくらった。美恋は相談を続ける。

「だって普通、あの年頃になったら一人や二人、好きになっているものでしょう？　誰かと付き合ったりして当然の年齢……もし、好みの男の子がいなくても、それなら、それでスポーツ選手とか、歌手なんかのポスターを貼ったり、少しでも興味をもつはずの時期よ」

「……………人それぞれ……なのかも……」

「ヨウちゃんは、いっしょに暮らしてくれていて、おかしいなって感じない？　あの子、あなたの身体に、やたら触るでしょ？　何度も、うちのフリしてヨウちゃんが入浴中に入っていくでしょ？」

「……」

「あの子も、わきまえて一線を越えないようにしてるのかもしれないけど、前にいた高校では後輩を部屋に連れ込んで裸にしていたの」

「……」

「宮本さんを連れ込んで野球拳だなんて言っただけで裸にしていたこともあったわ」

「……」

「ヨウちゃんのごときは傷つけないようにして、いつしよに長く暮らしたいのかもしれないけど、いつか、あなたにまで、ひどいことをしそうで心配なの。こう言えば、あの子が、どういう趣味の人間か、わかるでしょ?」

「……はい……」

「あの子、議員だなんて目立つ立場になって、もしも、このことが世間に知れたら破滅よ。週刊紙にだって、女性知事さんの胸を触った写真が載ってる……今は、みんな気づかなくても、そのうちバレるわ！」

私、どうしてあげたらいいのか、わからないの！ そんな風に育てた覚えはないのに！ あの子は女の子なのに、女の子ばかり好きになるのよ?! おかしいわ！ 変態よ！ 狂ってる!」

「落ち着いて、落ち着いてください、お母さん」

「普通じゃないのよ！ あの子！ あなたは男の人を好きになるでしょ?! 教会にいるブラザー愛也を好きでしょ?!」

「……」

陽湖は大人の女性の洞察力を思い知ったけれど、あまり自分でも隠せていないのだと反省もする。

「それが普通なのよ！ ちょっと歳の差があっても！ それでいいの！ なのに！ あの子は……っ……あの子は……っ……うっ……うっ……うっ……うっ……うっ……」

「……」

また泣き出した美恋へ、どう言えばいいか、わからない。陽湖は自分の言葉で慰めることができなくて、再び聖書に頼った。

「また、古代の世を罰することを差し控えず、不敬虔な人々の世に大洪

水をもたらした時に義の伝道者ノアをほかの七人と共に安全に守られたのであれば、またソドムとゴモラの都市を灰に帰せて罪に定め、来るべき事の型を不敬虔な者たちに示されたのであれば、また、無法人人々の放縦でみだらな行いに大いに苦しんでいた義人口トを救い出されたのであれば、この義人は日々彼らの間に住んで見聞きする事柄により、その不法な行いのゆえに、自分の義なる魂は堪えがたい苦痛を味わっていたのですが、当然エホバは、敬虔な専心を保つ人々をどのように試練から救い出すか、一方、不義の人々、わけても、肉を汚そうとの欲望を抱いてそれに従い、主たる者の地位を見下す者を、切り断つ目的で裁きの日のためにどのように留め置くかを知っておられるのです」

「……ソドム……みだらな行い……堪えがたい苦痛……肉を汚そうとの欲望……」

「お母さん、神が指し示す道は明確です。それを知って、そしてシスター―鮎美にも知ってもらおうのです」

「……鮎美にも……」

「正しい行いが何であるか、答えは明白です」

迷いのない陽湖の目を見ていると、美恋も信じたくなった。

支部内へ静江に匿ってもらった鮎美は号泣していたけれど、その嗚咽は10分で鎮まっていた。

「……ぐすつ……つ……はああ……」

これまでも自分の性的指向のために号泣したことが何度もある。死にたいと思うほど、つらかった。けれど、その経験のおかげなのか、もう気持ちが落ち着き、嗚咽は消え、冷静になっていく。

「鷹姫……」

支部内にあるテレビにも外の様子が映っていて、鷹姫が黙って報道陣と対峙している。

「……鷹姫、うちの代わりに……」

「……宮本さん……何を考えているの……どうする気……余計なこととは……」

静江には、わからなかったけれど、鮎美にはわかった。

「動かざること山の如し、静かなること林の如く……そして、沈黙は金なりやね……うちの代わりに場をつないでくれてる」

鮎美はトイレへ駆け込んで顔を洗うと、すっきりとした表情で再び外に出て行く。報道陣が騒いだ。

「あ！ 芹沢議員が再び出てきました！」

「芹沢議員が出てきています！」

騒がれても鮎美は冷静に鷹姫の隣りに立ち、その手を握った。

「おおきにな」

「いえ、私は何もしていません」

「十分よ」

鮎美が深呼吸してから、報道陣へ頭を下げる。

「先ほどは取り乱して、すんませんでした。あんまりにも配慮を欠く質問でしたので思わず泣けました」

そう言ってゴシップ誌の記者を睨む。もともと、さきほどの質問が無神経だったのは誰の目にも明らかだったので記者は居心地悪そうに身じろぎした。

「うちは、もう大丈夫です。ご質問があれば、続けてください」

もう記者会見は終わるものと考えつつあった記者たちは挙手しない。今のタイミングで性的な質問はしにくいし、さきほど子供のように泣いたはずの鮎美は、もう堂々として立ち直っている様子だった。記者の一人が手をあげた。

「どうぞ」

「芹沢議員、立ち直りが早いですね。なぜですか？」

「それが、うちの取り柄ですもん」

回答の仕方も予行演習で決めた型にハマったものでなく自然体で答えている。

「そのメンタルの強さは、どこから？」

「生まれもったもんやと思います」

「そちらの方は秘書ですか？ お友達ですか？」

「大親友兼秘書ですわ。な？」

「はい」

記者たちは初めて鷹姫の声を聴いた。

「彼女は無口ですね。いつも、そうですか?」

「沈黙は金、うちはしゃべりすぎるんで銀ですわ」

報道陣から笑いが起こる。

「さて、もうさすがに寒空の下、記者会見も終わりにさせてもろて、よろしいですやろか。みなさんには熱いお茶のペットボトルのみ用意しております。公選法に触れんように」

もう疑惑は明らかになっていて、しかも鮎美がペースをつかんだので、あとは静江の作戦で用意していたペットボトルを配って終わりになった。

「ありがとうな、鷹姫」

「いえ、私は何もしていません」

「動かざること山の如し、静かなること林の如く。そんなこと考えてたやろ?」

「お見通しですか」

「毎日いっしょにおるもん。わかるわ」

二人が談笑していると、テレビで観戦していた詩織が電話をかけてきた。

「もしもし、うちよ」

「一時は、どうなることかと思いましたがけれど、お疲れ様です」

「鷹姫のおかげよ」

「それは良かったですね。ところで鮎美先生、一難去ってまた一難で申し訳ないのですけれど、次の案件があります」

「うっ……マジか……何よ?」

「無所属の都議、朝槍那由梨先生が昨日、東京事務所の方へアポイントを求めるメールを送ってきていました」

「朝槍……」

「あのビアンをカミングアウトしている都議ですよ。さすがに、さきほどは言えなかったので黙っていましたけど、もう対応できますよね?」

「……………」

仕組んだな、と鮎美は疑ったけれど、詩織が言ってくる。

「仕組んでませんよ。偶然です。いえ、必然でしょう。彼女は同性婚を法整備する議員連盟を募っていますから、自民共産を問わず声をかけていますし、その関係で女性の権利に関する団体とも共同歩調を取っています。つまり、最年少の女性議員に声をかけるのは時間の問題だったと思いませんか？」

「そら……まあ、そやな……」

「あの店で会ったことには、気づいていない風なメールでしたよ」

「……………」

「アポイント、どうしますか？」

「……………普通の自民党議員やったら、どうしてるところ？」

「とりあえずは会うでしょう」

「そう……調整しといて。会う方向で」

「わかりました。本当にお疲れ様です。よく休んでください。では」

詩織との電話を終えると、また鮎美は苦悩しながら鷹姫に抱きついた。

「疲れたわああ……」

「お疲れ様です」

鷹姫に労ってもらおうと、疲れていても元気になれた。

1月5日 拉致問題

翌1月5日の水曜日、あの記者会見の後は挨拶回りの予定をキャンセルして休養を取ったものの、早朝の新幹線に乗らねばならなかったために帰宅はせず、鮎美たちは朝から東京に来ていた。

「9時集合やったのに、うち一人で待ちぼうけなんや……まあ、しょーがないか……」

参議院の議員会館にある広い会議室で鮎美は、たった一人ぼつんと座っていた。他の新たに参議院議員となるメンバーたちは国会事務局へ議員バッチを受け取りに行っているところで、また秘書たちも国会周辺施設の出入りに身分証明となる議院記章を受け取るために手続きをしているので、すでに議員バッチを着けている鮎美は指定された会議室で静かに待っていた。

「あ……やっとな来た」

一時間ほど一人で待たされた後、ようやく新たに改選された44人の参議院議員たちが会議室に入ってくる。初めて着ける議員バッチの着け心地に不慣れな様子を鮎美は懐かしくさえ思った。

「……」

初めのうちは、めっちゃ重たく感じるんよなあ、今でも重たいけど、と鮎美が見ていると、数人の議員が手を振ってくれたり、会釈してくれたりするので返しておく。鮎美を含めると45人になる新たな議員のうち自民党に所属することを選んだ者11人とは、すでに軽い懇親会をしているので顔を知っているし、他のメンバーの顔ぶれも新聞などで、すでに見ている。そして、民主党を選んだのは18人、共産党は5人、活力党が1人で、鮎美とは目が合うことがあっても、お互い微妙に目をそらして着席していく。

「……………」

うちが友達になるべきなんは、あの人か……写真よりキレイな人やね、と鮎美は無所属を選んだ10人のうちの一人に目をつけた。すでに党から、できるだけ無所属の議員と懇意になっておくよう指令され

ている。直樹が鮎美の専属担当になったように、今度は鮎美が誰かを口説かなければならないので、新人研修会といっても、すでに戦場という空気が政党所属の議員たちにはあった。

「こんにちは。よかつたら、ここ、空いてますよ」

鮎美はターゲットが通りかかったので声をかけた。鮎美は意図して会議室の入口近くに座っていたので、確率的に声をかけやすいはずで、その狙いは外れていなかった。けれど、にこやかに声をかけたのに冷ややかに見られた。

「そう、あなたが私の担当ってわけ」

「うつ…」

思いつきり見抜かれたやん、この人苦手かも、と鮎美は笑顔が引きつる。

「あ、あははは、バレました。そりゃ、そうですね。当選してから今日までも、いろんな政党から声をかけられてますもんね。うちも決めるまで、うつとおし…いえ、大変でしたよ。ははは」

愛想笑いしていると、鼻で笑われた。

「予想通り軽い子ね」

「……すみません」

「ま、いいわ。ここに座ってあげる。お昼、何か奢りなさい。どうせ、党から交際費でるでしょう」

「はい…おっしゃるとおりで…」

うわああ、やりにくい人お……前の担当から聞いてはいたけど、きつい人やわあ、と鮎美は肩が凝るのを感じた。それでも、隣りに座ってくれるので名乗る。

「はじめまして。うちは芹沢鮎美です」

「知ってるわ。何度も新聞に載ってるもの。週刊紙にまで、さっそく載って、いきなり泣きっ面をテレビで見せたでしょ」

「……」

「あんな顔を世間に出して、少しも凹んでいないなんて、どんな神経しているの?」

「……立ち直りが早いのが取り柄なんで。あの、お名前は?」

「どうせ、知っているんでしょ」

「はい……嵐川翔子（あらしがわしようこ）さん……先生ですよね？」

「ええ。他に、どんな下調べをしてきたの？ 私について知っていること、言ってみなさい」

「はい……京都産業大法科大学院2年」

「それだけ？」

「……26歳……」

「他にも色々聞いたのでしようけど、まあ、いいわ」

もう研修が始まり法務省の職員が関係法規についての説明を始めているので二人とも黙る。

「……」

聞いたとおりの、きつい人やなあ、前の担当が男性議員やったから、つんけんしてたわけやないんや、と鮎美は翔子を観察する。翔子は今どき珍しいくらいは一切染髪していない黒髪で、整った顔立ちをしているのに表情は冷たく、鮎美と話している間も一度として笑顔を見せなかった。そして、他の新人議員たちが、それなりに新調したスーツを着ているのに、翔子は着古した灰色のパンツスーツで靴も古ぼけている。机の上に出した文房具も古い。高校か、下手をすれば小学校から使っているのかもしれないと思うほど古い筆箱を使っている。何度も修復した痕があった。

「……」

この人、父子家庭で苦勞してきて法科大学院へ入ったらしいんよなあ……どの党が面談を申し込んで毎回食事時で、きつちり奢らせてから断るらしいし、何より性格が……うちが担当にされたんは性別が同じで年齢と地域が近いからやけど、こんな人を口説くんは精神的にきついわ、と鮎美は早くも挫折しかけてくる。同性愛者ではあるけれど、異性愛者が異性のすべてを好ましく思うわけではないように、たとえ外見が美しくても少し話しただけで相性が悪いことは感じていた。

「……」

どないしょ、けど、お昼ご飯いっしょしてくれるらしいし、ちよっ

とはチャンスもあるかな、と鮎美は気を取り直すことにして研修内容に集中する。研修は官僚が講師となつて次々と入れ替わり、参議院議員として関わる関係法規について説明されているけれど、自民党に所属してから勉強を続けてきた鮎美にとっては、すでに習ったことばかりで、しかも初歩的な事項が多かった。

「……………」

けっこう低レベルなことから入るんや、それやのにメモとってる人いるわ、あの人は無所属の顔ぶれやったかな、もしかして当選後、ぜんぜん勉強せんと今日を迎えたんやろか、もらった冊子に書いたることばかり講義してはるのに、メモ要るか？ と鮎美が思っていると翔子はタメ息をついた。

「はああ……………低レベルね。時間の無駄」

そう言うのと配られた資料ではなく、持参した法律書を読み始めた。なんとなく気になるので怒られないように盗み見ると刑事訴訟法について勉強しているようで、演習問題などがあり、マークシート方式の選択肢も見えた。

「……………」

国会議員に刑事訴訟法って関係すんのかな、雄琴はんみたいに何か目標があったり……………けど、マークシートってことは試験対策……………あ、法科大学院やから、司法試験か、なるほど、と鮎美は理解した。午前中の研修が終わり、議員会館にある食堂へ移動した。同じタイミングで昼休みに入った鷹姫や詩織、静江も見かけるけれど、彼女たちも、それぞれに無所属の議員についている秘書と仲良くなっておくという指命を与えられているので、いつでも話せる鮎美は目線だけ合わせて、通り過ぎる。そして、気を遣いながら翔子に話しかけてみる。

「お昼、何にされます？」

「カレー」

「カレーですか、もっと高いもんでも大丈夫ですよ」

「二度、言わせないで」

「はい」

鮎美も合わせてカレーにする。人間関係形成術も支部で勉強させ

られたので、こういうときに同じものを食べるのは初歩だった。カレーを食べながら訊いてみる。

「嵐川先生は秘書を雇ってはらへんて聴いたんですけど、そうなんですか？」

「ええ」

「無所属の先生方でも今月からは歳費と合わせて秘書への給与も国から出ますやん。そやのに、雇わんのですか？」

「ええ」

「それは、また、どうしてなんですか？」

「お金と時間の無駄だから」

「……な、なるほど……」

なるほど、と思っただけではないけれど、とりあえず相槌を打った。

「けど、スケジュール調整とか、電話受けとか、いろいろ手が要りませんか？」

「別に」

「無所属の先生は選挙応援とか無いかもしれんけど、陳情とか議員連盟とか、あと国会が始まったら、それなりに忙しいかもしれませんよ」

「決められた日には出席するわ。どうせ、居眠りしていても成り立つような会議でも660万円くれるのだから」

「そ……そういう考え方は……、失礼かもしれませんけど、そんな考え方は6年後の国民審査で確実に落ちますよ」

「それでいいわ。6年もあれば司法試験に受かるし、それで受からなければ私に力が無かったということ。6年で3960万円、ありがたい奨学金としてもらうから」

「つまり陳情も地元のこと、みんな無視して歳費だけもらうてことですか……せやから、秘書もいらんと……」

「あなた、よく喋るわね。食事は静かに食べなさい」

「はい……すんません……」

黙って食べると、すぐに食べ終わってしまった。

「うちそうさま」

それだけ言った翔子はスタスタと会議室へ戻るの、鮎美も追いかけた。会議室に戻ると、また司法試験の勉強を再開している。

「……………」

声をかけにくいので一旦、トイレに行こうとして、民主党議員からの視線に気づいた。今回改選された中で民主党へは18人が入っているけれど、その中で一番若い兵庫県選出の男性議員だった。

「……………」

「……………」

なんとなく雰囲気ですら民主党としての翔子へのアプローチは、この議員の担当なのだと感じたし、すでに向こうも同じことを感じているとも、お互いにわかる。まるで三角関係のようで、どちらが先に口説くか、そのライバルなのだと空気感で伝わってくる。ただ、すでに男性議員は議員バッチを受け取る時などに翔子へアプローチしたのか、翔子の冷たい態度に腰が引けている顔をしていた。

「……………」

鮎美はトイレに行くべきか、ここを離れず翔子についているべきか迷ったけれど講義中に我慢できなくなると恥ずかしいので女子トイレに向かった。用を済ませて戻ってみると、やはり予想した通り、男性議員が翔子に声をかけている。翔子はうるさそうに相手をしていいたかと思うと、鮎美が戻ってきたのを見つけ、二人に言い放ってきた。

「二日交替にしてちょうだい」

「はっ。」

鮎美と男性議員が意味がわからず首を傾げると、翔子は睨んでくる。

「今日のお昼は、あなたに付き合っただけでしょ。だから、民主の人は明日、明後日は、また、あなた。毎回、カレーでいいから」

「……………」

え……………それ、毎日、カレーを奢れてか、うちと民主の先生が交代で……………何を言うてるんよ、この女、と鮎美は茫然とするし、男性議員も

似たような反応だった。それでも男性議員の方が社会経験の豊富さから気を取り直して口説きにかかる。

「それなら、東京で美味しいカレーの専門店を知ってるよ」

「そういうのは要らない」

「そ……そう……フレンチの美味しい店も知ってるけど……」

「二万円のコース料理を奢ってくれる予算があるなら、カレーを10回奢ってちょうだい。それに一回あたりの金額制限があったでしょ。あまり高いと公選法違反、そんなことくらい常識」

「……………そ……そう……だね。…じゃあ、カレーにしよう」

「……………あんた、何を言うてるんよ？」

「頭の悪い子ね。奢ってもらった回数は、ちゃんとつけてるわ」

翔子が古びたメモ帳を出した。そこには各政党名の下に正の字が続けて書かれてあり、どうやら奢ってもらった回数を記録しているものとわかった。すでに総計300回を超えているようなので当選してから、ほぼ毎日のように、多い日は昼夜と奢ってもらったのだとわかる。

「そ……そんなん、つけて、どないすんの？」

「本当にバカな子。義理には義理で返すわ。国会での採決で私の票が欲しいときは言いなさい。そのとき参考にしてあげるから」

「なっ……………」

「じゃ、もう勉強の邪魔だから明後日のお昼まで話しかけないで。そっちは明日のお昼よ。今日と明日の夕食は懇親会が出るから要らない」

「……………」

「わかったよ、嵐川先生、聴いたとおりの人だね……………じゃ」

男性議員は諦めたように肩をすくめたけれど、鮎美は顔を真っ赤にして怒鳴った。

「ぎげんなっ!! 何やねんそれ?!!」

「……………」

怒鳴られて翔子は冷たく睨み返してくる。鮎美の声が大きかったので会議室にいる全員の視線が集まってくるけれど、二人とも気にし

ない。

「奢ってもらった回数で自分の賛否を決める気なん?!」

「ええ」

「ふぎけんな!!」

「別に、ふぎけてないわ。法律にも反してない。公選法の範囲よ」

「一回あたりの金額が制限内でも、毎食たかる気かつ?!」

怒鳴っている鮎美の肩を、年配の自民党議員が叩いてきた。新人議員であつても年配らしく、この場をおさめようと言ってくれる。鮎美のことも翔子のことも事前に知っている様子で穏やかな作り笑顔をしている。

「まあまあ、お二人とも、今日は初日なのですから、ほどほどに」

「……木村先生……せやけど……」

鮎美も名前くらいは知っている静岡県選出の60代の男性議員で地元企業の社長らしかった。肩に触れられても鮎美がセクハラだとは感じない程度に人徳もあつた。

「まあまあ、芹沢先生、あまり急いで有名にならなくても」

「うっ……木村先生……うちは、そんなつもりでは……」

「わかつてますよ、はい。ま、ここは一つ穏便に」

「木村先生が、そう言われるんです……」

「私へ怒鳴つたこと、謝りなさい。それで、許してあげるわ」

翔子の一言が矛をおさめかけていた鮎美の逆鱗に触れた。

「ぎけんなっ!! なんぼクジ引きで選ばれたからいうても国民の代表を何やと思てんねん!!」

「……」

翔子がうるさそうに顔を背けた。ますます鮎美は怒り、掴みかからんばかりになると、不祥事を起こされたくないので自民党議員たちが鮎美の手首や腰をつかんでくる。

「まあまあ!」

「落ち着いて!」

「あんたが、そんな態度で国会に出るんやったら、うちは懲罰動議で、あんたを除名するよう訴えたる!!」

「……………勝手にすれば。私は法の範囲で奢ってもらっただけよ」

「芹沢先生、まあまあ！」

「とにかく廊下へ！」

もう若い女の子の身体に触ると、あとあとセクハラ問題が怖いという遠慮をやめて自民党議員たちが鮎美をズルズルと会議室の外へ引っ張り出した。しばらく説得されて、ようやく鮎美は落ち着き、木村たちに謝った。

「どうも、すみません。ついカツとなつて」

「若さゆえですね。まあ、あの嵐川先生の態度も悪いから気持ちばかりですよ。ともかく芹沢先生は嵐川先生に近づかないようにしてください。担当の件は、党と考え直ししましょう。相性も悪そうですね」

「……………すみません、……………ホンマに、ごめんなさい」

午後の研修は翔子と離れて受け、5時前になると議員宿舎に初めて入る。部屋割りは無作為に決められていて、荷物を置いて少し室内を見ているうちに懇親会の時刻となりホテルの宴会場へ移動した。いっしょに研修を受けた45人で立食形式のパーティーが始まる。鮎美は翔子の担当を外されてしまったけれど、他の無所属の議員たちは鮎美に興味をもっていて、代わる代わる担当の自民党議員とともに声をかけてくれるので忙しかった。対照的に翔子は一人で黙々と食べる。早めに帰っていった。翔子がいなくなると、翔子の担当だった民主党の男性議員が鮎美へ声をかけてくる。

「あそこまで、はつきり言われるとスカつとしますね」

「……………言い過ぎたと反省しています。……………」

うちのせいで嵐川先生は絶対に民主党へ流れるやろな、いきなり大失敗や、と鮎美は後悔を隠せない顔をしたけれど、男性議員は付け加える。

「ボクも、あの人には内心でムカムカしていましたからね。懲罰動議の件、党にも言ってみますよ。ああいう人と、いっしょだと国民に思われたくないですから」

「ああいう女いるつすよねえ」

別の若い無所属の男性議員も言ってくる。

「夕飯を合コンで済ませようとする女、うちの大学にもいたなあ。鮎美ちゃん、合コンとかやってた？」

「いえ……田舎なんで、そういうことは……まだ、高校生ですし」
共産党に所属した50代の女性議員も生サーモンを食べながら言う。

「結局、嵐川さんはさ、面倒臭いことは全部避けて、歳費だけもらって、ついでに食費も浮かせようっていう魂胆なわけよ」

「あいつクビでいいんじゃないっすか」

「君も、その金髪なんかしないと懲罰されるかもよ」

「えーっ！ ファッションっすよ。んな校則みたいなことあるんすか？」

「まあ、目立ってるよ、ちよつとした失敗で弾かれるかもしれないから、どうだい、民主党に入っておかないか」

「うーん、考えておくっすよ。けど、とりあえず一年は様子見つてこと。鮎美ちゃん、二次会いくよね？ 二次会」

「い、いえ。ちよつと別の約束があつて」

「え、なにそれ、男？」

「……女です。しかも仕事やし」

「この時間から？」

「党に入ると、いろいろあるんですよ」

「そっか、大変だね、頑張つてね」

「……………」

いやいや他人事みたいに、あんたも参議院議員なんやで、と鮎美は呆れた顔をしないように努力しながらパーティーが定刻通り終わったので、ホテルのロビーで待ち合わせていた三人の秘書たちと朝槍に会うけれど、なぜか三人とも朝槍に頭を下げて謝ってる。なにかあったのか、心配になって問うた。

「どないしたん？」

「あ、芹沢先生、すみません。朝槍先生と会談される予定ですが、急遽、別のアポイントが入りましたので、そちらをお願いします」

静江が言ってきた。

「別のアポって、何なん？」

「お兄ちゃ…、石永先生と畑母神先生が横畑のぞみさんのご家族と会ってほしいと」

「……。朝槍先生の方が先約やん。いくら身内でも、っていうか、身内やからこそ、そとのお客さん大事にするもんちゃうん？」

「いえ、この場合は政治問題としても、また、横畑さんがご高齢であることも含めて、こちらを優先してください」

「せやとしても……ここまで来てはんに、目の前で…」

鮎美は朝槍の方を見て頭を下げる。鮎美としては再会だったけれど、朝槍の方は初対面と思っている。静江が再び朝槍へ謝る。

「本当に、すみません。どうか、ご理解ください」

「はい、わかりました。拉致問題も大切だと思います。……ただ、もし芹沢先生に無理がなければ、横畑さんのお話が終わってから10分でも話を聴いてもらえませんか。お願いします」

朝槍が頭を下げてくるので鮎美も慌てて頭を下げる。

「こちらこそ、すみません！ どんなに遅くなっても会いますし！ 約束しといて、すみません！」

静江が時刻を見て言ってくる。

「3階の会議室をかりて待っておられますから、もう芹沢先生と宮本さんは行ってください。朝槍先生のお話は、ある程度まで私と牧田さんで聴いておきますから」

「……。すみません」

鮎美は朝槍の目を見てから頭を下げ、すぐに向かおうとして一つ不安になったので静江に訊いてみる。

「静江はん、ラチ問題って何？」

「つ……」

静江が額をおさえて蹲ったけれど、すぐに立ちあがる。

「1分で説明します。数十年前、北朝鮮が日本海側の県などで日本人を誘拐し拉致していました。今も拉致されたままです。目的は色々あるでしょうが、スパイへ日本語の教育をさせるためや、情報収集な

どと思われます。拉致された人の家族は大変な苦痛を味わいながら、ご家族の帰還を待っています。この問題を18歳の芹沢先生が知らないのは学校教育課程で、その情報が意図的に隠蔽されているからでもあります。知らなかったことを恥じる必要はないですけれど、まったく知らなかったという顔をされると、横畑さんたちも深く傷つきます。少しは知っていた顔をしてください。とくに横畑さんの娘さんは拉致された当時、高校生です」

「うちと同じ高校生……、北朝鮮はミサイルだけやなかったんや……」

「3階のエレベーター右の会議室です。行ってください」

「はい」

鮎美と鷹姫が会議室に向かうと、会議室の前で男性秘書が待っていた。

「中へ、どうぞ」

「はい」

三人で中に入ると、石永と畑母神、そして横畑夫妻がいた。

「急に予定を入れて、すまない」

石永が謝ってくれ、夫妻も言ってくる。

「会ってくださって、ありがとうございます」

「無理を言って、ごめんなさい」

「いえ…それで、お話というのは？」

鮎美は着席し、鷹姫はそばに立って話を聴く。話の内容は拉致された娘を取り戻すために多くの国会議員に動いてほしいことと、掠われるまでの娘の想い出、掠われてからの苦渋の日々について、そして他の拉致家族の状況だったけれど、聴いていて鮎美は気の毒に思いつつも反発も覚えていた。

「……………」

たしかに切実かもしれないけど、朝槍先生の話かて切実に決まってるやん、序列でいうたら衆議院議員やった畑母神先生と石永先生が上かもしれないけど、朝槍先生も無所属とはいえ現職の都議やん、何より単純に人として約束の順番つてものがあらんちゃうん、と鮎美は朝槍へ

の申し訳なさを感じていた。詩織が早めに会えるようセツティングしたので夜間となり、しかも鮎美は会っても自分が同性愛者であることは隠すつもりでいるので二重の意味で申し訳ない。そんな風に夫妻の話へ集中していかなかった鮎美は気づかないうちに睡魔に襲われ、居眠りしてしまった。

「……………」

夫妻と石永、それに畑母神は鮎美が居眠りしていることに気づいたけれど、これが日中の会談なら政治家の先達として石永なり畑母神が叱りつけるところだったものの、鮎美は早朝に地元から東京へ出てきて丸一日の研修を受け、さらに同期となる新人議員たちとの気を遣う懇親会も経ている。懇親会が終わった時点で9時を過ぎていて、もう10時近い。居眠りを批難するのは酷だった。それでも夫妻の淋しそうな顔を見ると、畑母神と石永は、せめて鷹姫が気づいて起こしてくれないものかと彼女の顔を見て、鷹姫が泣いているのに気づいた。

「…っ……………」

鷹姫は立ったまま泣いていて、大粒の涙を零している。その表情で石永は思い出した。

「芹沢先生の秘書をしている宮本さんは幼い頃、母親を事故で亡くされているのです」

「それは、さぞかし……………」

「おつらいでしょうね……………」

親子が離別させられることの苦痛を知っている者が流す同情の涙は、夫妻の気持ちも幾分か救った。鷹姫へ十分に話が伝わっていれば、いずれ鮎美にも伝わるはずなので石永は鷹姫へ水を向けた。

「宮本さんは、^っ夫妻のお話を聴いて、どう思われました？」

「…………不甲斐なく思います…………畑母神先生！なぜ、日本は兵を挙げないのですか?!」

鷹姫の濡れた瞳がまっすぐに見つめてくると、自衛隊幹部だった畑母神は苦笑して答える。

「9条もあるからね」

「自衛のための兵力ならば！ 国民が掠られたとき動いて当然です！！」

「……………言うことは、わかるが、いや、その通りなのだが……………我々はシビリアンコントロールのもとにある。政治的決断が必要な問題なのだよ」

「誘拐犯を前にして決断すべきことに迷いがありますか?！」

「……………君は戦争をしろと言うのかね?！」

「その覚悟で兵を差し向け、江華島事件を範として艦を並べ、示威行動を取れば人質解放の可能性はあります!!」

「江華島事件か……………」

畑母神は1875年に朝鮮海岸で日本軍艦雲揚号が挑発行動を取り、結果的に朝鮮の鎖国を破った歴史を思い出しつつ、鷹姫の脳内が現代の電子戦を理解しておらず、また受けてきた歴史教育が1945年あたりで止まり、朝鮮戦争の前後の知識が乏しいことも再確認した。

「宮本君、まずね、現代の戦いにおいては自らの所在を隠すか、より遠距離から攻撃することが肝要となる。艦列を並べて砲艦外交する時代は終わっているよ。それから、北朝鮮との関係は対一ではない。後ろには中国、ロシア、そして韓国もいる」

「朝鮮半島へ権益を置こうというのでなく、単に人質奪還だと！ 各国へ通告すればよいではないですか!！」

「そう単純ではないけれど、かりに日本と北朝鮮、対一で戦争したとして、しかも弾道ミサイルを発射前に阻止できたとして、それでも20万将兵が朝鮮半島北部を占領し、各地を調査して拉致被害者を連れ出してくるまでに、上陸戦や掃討戦で自衛隊員が受ける死傷は負傷2万、戦死も10000は超えるだろう。少なく見積もっても」

「兵を思いやるのと兵を惜しむのは別です！ 拳げるべき時に兵を拳げず、撃つべき時に撃たぬなら、張り子の虎ではありませんか！ 軍に身を置くなれば、兵にも覚悟があるはずです！ 立つべき時に立たぬは名折れ！ そんな弱腰では交渉での解決さえできません!！」

「うむ……………その通りではあるのだが……………我々は総意で動いてい

る。民主主義国はね、基本的には戦争を嫌う。A B C D包囲網とハルノートで追いつめられた日本国民は総意として戦争に賛同したが、そもそも、なぜ追いつめられたかといえば、ルーズベルトが戦争をしたがったからだ。けれど、経済的に豊かだったアメリカ国民は民主主義的には戦争をしたくなかった。だから、ルーズベルトは日本に仕掛けさせた。対ドイツ戦へ正面玄関からではなくハワイという裏口を日本に蹴破ってもらうことで大義名分を得たのだよ」

「我々も総意で拉致された国民を救い出せば良いだけのことです!!」

「君の言うことは正論ではあるが、さきほど言った死傷者に加え、戦費、経済的負担も大きい。かりに北朝鮮の体制を崩壊させたとして、それでよしと引き上げるまでに朝鮮国民の生活を整えねばならぬし、民主的な選挙の下準備も手伝わねばならないだろう。その間に不穏分子によるテロも起きる、それでまた死傷者も増える。それでいて、我が国に見返りはない。こんなことに国民は総意で賛同するかね？」

「ならば有志だけでも救出に向かうべきです！ 目先の金銭より守るべきものがあるはずですよ！」

「そして、関東軍の再来、226の再現をすると？」

「石原完爾も北一輝も正義を通し、その結果が今の日本です！ あの時代に弱腰でいたらハワイ王国やインカ帝国が消えたように日本も消えていました！」

鷹姫の声が大きいので鮎美は目を覚ましたものの、話の流れがわからないので、わかっているような顔を取り繕う。畑母神は眩しそうに鷹姫を見つめた。

「……………宮本君が男で、自衛隊にいたら、本当にそうしたかもしれないな……………三島君がクーデターを画策したように……………」

うちは鷹姫が男やったら、鷹姫を好きになったんやろか、もしも鷹姫が私は実は男です、って言い出して身体が男やったら、うちは、どうするんやろ、けど、やっぱり、うちは女の子の身体が好きで、男な

なんて、なんとも想わんから興味を失うんやろか、逆に女性異性愛者が男装してる女性を好きになったのに実は女です言われたり、男性異性愛者が女装してる男を好きになったとき実は男です言われたら、どうするんやろ、牧田はんみたいないないやったら、なんでもOKなんやろけど、やっぱ性的指向は変えられんで、と鮎美は無関係のことを考える。鷹姫は言葉を続けた。

「拉致された人を見捨てるというのですか?!」

「そうならぬよう、今動いているのだよ。拙速な拳兵でなく、地道な活動によって。これを見てほしい」

畑母神は胸に着けている青いリボンのバッチを見せた。議員バッチを着けていた頃と同じバッチをつけていたし、石永もつけている。やっと鮎美が話に加わる。

「前から気になってたんですけど、それ何ですか?」

「このブルーリボンは拉致問題を解決するために動く議員連盟の象徴だよ」

「そうやったんや……」

なんとなくブルーやし、男性の権利とか、幸福の青い鳥とか、そういう系かと思てたわ、と鮎美は気になっていたものの、問う機会がなかったブルーリボンの正体を知り納得した。石永が言うてくる。

「芹沢先生も主旨を理解し、これを着けてほしい」

「え……うちも?」

「とくに、これは夕方になって決定したのだけれど、国会の開会式で芹沢先生が登壇して弔辞を述べることになった。そのとき、このブルーリボンをつけていて欲しくて、今夜は無理を言っつて時間をつくつてもらったんだ。お疲れのところ、すまない」

「……うちが、それを着けてるのは重要なことなんですか?」

「ああ」

「えっと……自民党的には、どうなんですか?」

「多くの議員が着けているよ」

「そういえば、そうかも……ほな、着けておきます」

半分寝ていた鮎美は深く考えずに、そういうものだと思い、畑母神

から新しいバッチを受け取り議員バッチの隣りに着けた。そして、夫妻と握手して別れた。丁寧には握手したけれど、つい朝槍のことが気になっていた。逆に鷹姫は秘書までは握手しないこともあるのに、しっかりと握手して夫妻と見つめ合ってる。

「鷹姫、後回しにした約束の方、もう行こう」

「はい。横畑さん、どうか、お元気でいてください」

「ありがとうございます」

「朝槍先生、まだ待っててくれるやろか」

すでに時刻は11時を回っている。少し居眠りしたので鮎美は元気になったけれど、今度は鷹姫が限界を迎えつつあり眠そうな顔をしていた。

「鷹姫、疲れてるんやったら、もう休み」

「いえ、大丈夫です」

「明らかに疲れてる顔してるのに……」

鮎美はスマートフォンで静江に連絡を取ってみると、ホテル内のラウンジで朝槍と待っていることがわかったので上層階のラウンジへ入った。東京のホテルらしく夜景が美しい窓際の席で静江と朝槍、詩織がノンアルコールのカクテルを飲んでいった。

「お待たせしました。朝槍先生、遅くなって、すみません」

「いえ、こちらこそ。無理を言って、ごめんなさい」

女五人でテーブルを囲んで座った。静江が概要を語ってくる。

「朝槍先生からは、五つの女性団体からのお願いをいただきました。資料をいただきましたので、後日説明します。ただ一つだけ、朝槍先生が代表をされている団体のお話をされたいそうですから、お聴きください」

「わかりました。朝槍先生、お願いします」

「はい。単刀直入に、まず、芹沢先生は同性愛について、どうお考えですか？」

「同性愛ですか……」

予想していた質問へ、用意していた演技で答える。少し考えるフリをしてから一般的な回答を述べる。

「個人の自由やと思います」

「そうですか…ありがとうございます」

朝槍は物足りなさそうな声だったけれど、表情は保っている。そして自己紹介をする。

「申し遅れましたが、私はレズビアン、女性同性愛者です」

「らしいですね」

鮎美は頷いたけれど、静江は知らなかったので驚いて朝槍の顔を見る。その動作で朝槍も詩織も女性同性愛者に対して静江が強い嫌悪感をもっていることに気づいた。それでも朝槍は慣れているので素知らぬ顔で話を続ける。

「芹沢先生は同性愛者を、どう感じますか？」

「どうと言われても、あまり考えたことがないので」

超嘘です、すみません、ごめんなさい、と鮎美が心中で謝っていたのに鷹姫が言う。

「芹沢先生は、よく勉強されていますから、多少は同性愛者についても理解されています」

「っ…鷹姫…」

鮎美は背中に汗が浮くのを感じた。鷹姫は単純に鮎美の名誉のためには言ってくれた様子で、しかも眠そうな目をしている。朝槍が嬉しそうに微笑んだ。

「それは嬉しいです。どうして興味をもっていてくださるのですか？」

「そ…それは…」

「障害者団体からの陳情がきっかけです」

鷹姫が三島のことを話す前に、朝槍が察した。

「もしかして、ライフラインズ、命の盾の会から？」

「そうです」

「あの三島さんは、さうとう特殊なケースですから…ごく普通の同性愛者のことを話させてください」

朝槍は説明し慣れた口調で段取りよく同性愛者の性的指向と同性婚についての法的問題、各国の状況などを語った。初歩的なことだっ

たので、すでに鮎美は知っていることだったけれど聴いていても眠くならず、むしろ質問したい部分が生まれたりしたものの、細かいことを質問したりすると、バレてしまいそうなので我慢して自分で調べることにした。対照的に既知の知識を復習させられた鷹姫は完全に居眠りしている。話していた朝槍が気づいた。

「彼女はお疲れみたいですわね」

「宮本さん、失礼ですよ」

静江が起こそうとすると、朝槍は止める。

「この時間ですから、無理ないですよ。寝かせてあげてください。芹沢先生は大丈夫ですか？」

「はい。続けてください」

「では…」

朝槍は淡々とした説明から、少しずつ実例にも入っていき、鮎美に賛同議員として名を連ねてほしいので感情に訴えかけるため、将来を悲観して二人で自殺した同性愛カップルの例などもあげたので聴いているうちに鮎美は涙を零したし、詩織も同情した。今までも統計上の数字としては自殺者のことも認識していたけれど、そのカップルの片方は朝槍も知っている人物で、アパートで自殺した二人の遺体も見てしまったという実体験を語られ、鮎美はハンカチを大きく濡らした。その様子に朝槍は手応えを感じて、七色のアーチ型をしたバッチを出した。そのバッチは朝槍も着けているし、話の流れで鮎美も瞬時に悟った。

「私たちに賛同してくださる人は、このレインボーアーチのバッチを着けてくれています。芹沢先生にも、ぜひ、その一員になってほしいのです」

「わかりました」

鮎美が即答してバッチを受け取り、胸に着けようとするので静江が止める。

「待ってください、芹沢先生！」

「え？ ……あかんの？」

「この問題は党としては慎重な議論を要するという立場です」

「……………けど……………朝槍先生の話は筋も通ってたし…」

「そういう問題ではなく、軽々にそういうものは着けないでください」

「……………ほな、これは？」

鮎美がブルーリボンのバッチを指した。

「それは大丈夫です」

「……………。なんで、これが良くて、こっちは、あかんの？」

「問題の違いです」

「……………けど、今の朝槍先生の話を聴いてたやろ？ 切実な問題やん。

バッチ一つ着けたくらいで、すぐに動く問題やないけど、だからこそ、

一歩一歩、進めていかなあかんことやん」

「とにかくダメです！ 朝槍先生、ご主旨はわかりました。ただ、芹沢

先生が参加するかは、党に諮ってからとなります」

「……………わかりました」

一瞬は期待したけれど、やはり予想していた回答に落ち着きそうなので朝槍は悲しそうに微笑をつくった。それを見て鮎美は切なくて怒鳴る。

「なんで、うちの判断で決められんのよ?! そんなん、おかしいやん!

朝槍先生は、こんな時間まで一生懸命に動いてはんのよ! それに応えよ思わんの?! 何より、さつき自殺しやつた話も聴いたやろ?!

当事者にとつては深刻な問題なんやで! それを、わかってあげるんが議員とちやうの?! 党に諮るにしても、うちが、これ着けて語る方が説得力あるやん!!」

「芹沢先生、どうか、わかってください。ダメなんです。まだ、この問題は微妙なんです。場合によっては変に勘ぐられることもあります。とくに昨日、週刊紙に載ったばかりじゃないですか。あることないこと書きつける彼らに、くだらない想像をさせないためにも、やめてください。うちのお兄ちゃんできえ、一時期はホモだとか書かれていたんですよ。あんなに夫婦仲がいいのに! 芹沢先生は、知事の胸に触ってる写真もあつたし、それでなくてもスキンシップ多めなんですから自重してください!」

「……………。石永先生にゲイ疑惑なんて、あつたん？」

「はい。お兄ちゃんが核ミサイルで日本も武装しようという主張をしているのが、左翼的な出版社に目をつけられて、まったく火のないところに煙をあげられたんです！ 記事の根拠は大学時代の男友達と新宿で呑んでいた、それだけですよ?! 新宿全体がホモの街じゃないのに！ そんなこと言い出したら議員は誰も新宿で呑めなくなる！ 家族だからわかりますけど、お兄ちゃんは絶対にホモじゃないですよ」

「……………。さつき朝槍先生も言うたやん、男性同性愛者のことはホモじゃなくてゲイって言おな」

「とにかく、朝槍先生、この問題については検討します。他の母子家庭への援助や、セクハラ、マタハラなどの女性差別についての陳情は前向きに検討しますから」

「……………」

それもう検討しますに前向きがつくか、つかんかで、イエスノー分かれてるやん、と鮎美は大人の言葉使いに強い疲労感を覚えた。手の中にある七色のバッチを見つめる。

「……………。朝槍先生、これ、もらってもええですか？」

「はい、どうぞ！」

「芹沢先生!!」

「検討するんやん？ 検討の結果、つけることになったら、すぐにつけられるよう、手元にあってもええやん？」

「それは……………。くれぐれも勝手なことはいしないでください。お願いします」

朝槍との会談が終わり、鮎美は握手を交わした。

「朝槍先生、大変やと思いますけど、頑張ってください」

「ええ、ありがとう。こんなに芹沢先生が理解してくださると思いませんでした」

「……………」

うちもビアンやもん、隠し通して、ごめんな、と鮎美は想ったけれど、顔には出さなかった。朝槍の姿が見えなくなると、詩織が耳元へ

囁いてくる。

「見事な演技力ですね。協力的な顔をしつつも同類に気づかせなかった。数ヶ月前と大違い」

「……」

鮎美は無視して七色のバッチをポケットに入れようとしてから、少し考え、制服の内ポケットの中に着けた。それから鷹姫を見る。鷹姫は居眠りから熟睡の段階に入ってラウンジのソファに崩れている。微笑みながら何か寝言を漏らしているようなので聴いてみた。

「……芹沢……先生……議員会館には……剣道場がありました……柔道場も……」

「鷹姫、あんたは……」

疲労感は強いけれど、鮎美も微笑みを漏らした。

1月6日 音羽

翌1月6日の木曜日、昨日に引き続き議員会館で研修があり、それを受けて昼休みを迎えると鮎美は自分の放った言葉が燎原の火のようにはびこっていることを肌で感じていた。食堂で木村が月見ソバを食べながら言ってくる。

「みなさんで芹沢先生のおしゃった懲罰動議の件、懇親会のあとも話していたのですが、賛同する方が多いようですよ」

「そ…そうなんですか…：…うちは、つい勢いで…：…」

鮎美はカツ丼を食べながら関西との味付けの違いに軽い違和感を持ちつつ、翔子の方を見る。翔子は離れたところに一人で座って一番安価なかけうどんを食べていた。誰も奢らなかつたようで民主党議員もそばにいない。

「勢いで言ったことが、ここまで拡がると芹沢先生も困惑するでしょうね。まあ、夜になれば参議院の先輩方をふくめて全体での懇親会がありますから、そこで落ち着くでしょう。懲罰での除名など、過去にも、ほとんど無かつたことですから」

「そ、そうですね」

午後からの研修も終わると、鮎美は議員会館にある剣道場へ行ってみた。

「さっそく、やってるんや」

鷹姫がTシャツとジャージ姿で竹刀を振っている。

「きつと次から防具も持ち込むつもりやな…：…竹刀は借りたんか…」

鮎美は一礼して道場に入ると、鷹姫へ声をかける。

「うちは懇親会に行くし、そのまま稽古していい。静江はんと牧田はんも今日はオフにしたし。あの二人は喜んで遊びにいったのに、あんたは偉いなあ」

「お供します」

「ええよ、昨日と同じホテルやし」

「すぐに着替えて参りますから」

「ほな、懇親会は7時からやし、ゆつくりでええよ」

そう言いながら女子更衣室へ入っていく鷹姫のあとに続いて入ると、他には誰もおらず二人きりだった。女性議員や女性関係者で剣道場を利用している者は少ないとみえ、あまり使われている気配もない。鷹姫が下着姿になっている。

「……あんまり汗はかいてないね」

期待したような匂いがしなくて残念だった。

「匂いますか？ ホテルへ行くのにシャワーを浴びた方が……」

「真冬やし、やめとき、風邪ひいたら困るやん」

「はい」

鷹姫が制服を着ていく。着終わった鷹姫の胸にブルーリボンがあるのに気づいた。議院記章の上に着けている。

「鷹姫も、それ着けたんや？」

「はい、お昼休みに畑母神先生から、いただきました」

「あの先生も地道やな……」

静かな二人きりの更衣室に長くいると余計な欲望に支配されそうなので廊下に出た。見知った女性の参議院議員たちが懇親会の服装について、総理大臣の臨席もあるので昨夜よりもフォーマルなドレスの方がよいのではないかと話し合っているけれど、どちらにしても制服で参加するつもりは鮎美たちは素通りして議員宿舎に行く。宿舎の廊下で翔子とすれ違った。

「……………」

「覚えてなさい。今に後悔させてあげるから。泣いて謝っても許さない」

すれ違いざまに忌々しく言われた。鷹姫が怪訝な顔で問うてくる。

「今のは何者ですか？」

「うちが仲良くすべきやった無所属の人なんやけどなあ。まあ、ちよつと……」

鮎美が自分の部屋に入ってから翔子との間にあったことを説明す

ると鷹姫は断言する。

「そのような輩は即刻、除名すべきです！」

「あんななら、そう言うかな、とも思ったよ」

鮎美は机の上にある朝槍から渡された各女性団体からの資料を読む。一番上には静江がまとめてくれた団体の主旨を書いたメモがあり、団体の性質と主張が400字程度でまとめられているのでありがたい。次々とある陳情のすべてに目を通すことなど、もう不可能なので、要点だけを覚えておくことにする。

「もう時間やね。行こか」

「はい」

ホテルへ移動し、化粧くらいはしてこるべきだったかと少し後悔した。女性議員たちは華やかなロングドレスなどに着替えていて、男性議員も一部は燕尾服を着ている。昨日は金髪だったチャラそうな男性議員まで黒髪に染め直して、真新しいスーツを着ている。

「昨日と違って、総理大臣も来るからフォーマルなんや……ま、ええか、制服やし」

それでも新年祝賀の儀よりは格式もさがるし、そこへも制服で行った鮎美は女子トイレに入って鷹姫に髪をといてもらっただけで、よしとする。隣の洗面台に翔子が来たのが鏡に映ってわかる。翔子も研修時と同じ服装で着古したパンツスーツのままだった。鮎美と同じで、せめて髪くらいは、と髪型を整えに来たようだった。

「……………」

「……………」

どちらも無言のまま、鮎美と鷹姫は女子トイレを出た。

「ほな、終わるのは9時やし。これで何か食べておき」

「いえ、自分で…」

「ええから。ホテルで食べると割高やん。その分よ」

鮎美は三千円を強引に鷹姫に渡すため、制服の内ポケットへ紙幣を挿入しつつ、鷹姫の胸の感触も手の甲で味わう。

「外のお店を探しますから」

「女の子一人で夜の東京をうろついたら、あかんよ。危険がいっぱい

や」

と言いつつ、手を返して掌で鷹姫の乳房に触れる。

「私なら平気ですから」

「たしかに、あんたなら5、6人の男にからまれても平気やるな。けど、考えてみ、からまれて撃退したとして、運悪く盗撮されたら、芹沢議員の秘書、路上で乱闘とか週刊紙に書かれるかもしれないよ。おとなしくホテルのレストランで食べておき。東京やし、足りんかな。いっそ、コース料理でも頼み」

たつぷり胸を揉んだので、さらに一万円をポケットに入れ込んだ。名残惜しく鷹姫の胸と別れて、パーティー会場に入る。

「……見事に年齢層が無作為やな……」

昨日も感じたけれど、今夜は参議院203人の全員がそろっているので見物だった。鮎美が見回していると、近くにいた自民党の三十代の男性議員が声をかけてくる。

「芹沢先生、どうかした？」

「あ、松尾先生、いえ、ちよつと、普段の自民党のパーティーなんかと違って年齢層が見事にバラバラやな、って」

「たしかにね。男女比も101人と102人で女性が1名多い。十代と九十代は一人ずつしかいないけれど、二十代は34人、三十代は29人、四十代は35人、五十代は32人、六十代が36人で、七十代になると24人、八十代では11人だからね。公平なクジ引きらしい結果だ」

「よう覚えてはりますね。九十代は男性でしたよね。けど、少し偏りがありませんか。とくに三十代が少ない」

「偶然もあるだろうけど、三十代は男性が11人で女性が18人と男女比も偏っている」

「男が少ないんや……なんで、やろ？」

「三十代は働き盛りだからね。人によっては660万以上の収入のある仕事をしていたり、たとえ少し下回る所得だったとしても6年後にはクビになるかもしれない、12年後には引退させられる仕事をするには、不安のある年齢だからさ。辞退したんだろうね。かくいうボク

も辞退を視野に入れたけれど、遠い親戚に自民党議員がいてね、とにかく頑張ってくれ全面的に支援するから、と言われて会社を辞めたよ。逆に女性は専業主婦だったりすれば、いいチャンスだし、そうでなくても女性の平均賃金は低く非正規雇用が多い。…と、失礼、女性に言うことではなかった」

「いえ、統計上の事実ですし。逆に八十代は男が7人、女が4人でしたよね」

「君も記憶してるじゃないか」

「特徴的でしたから」

「まあ、高齢層になると女性の辞退が多かったんだろうな。男性でも高齢を理由に辞退した人はいるし。けど、七十代では男13人、女11人だから、あまり差はない」

「男女の平均寿命の差を考えると、けっこう差があるんじゃないですか？」

「ああ、たしかに。母数は女性の方が多くははずだからね」

そう言っている松尾の視線が、ほぼ無意識に鮎美の脚へ流れていく。多くの女性が腕や肩を露出したロングドレスを着ているのに対して、鮎美は冬制服なので脚だけを露出している分、男の目には新鮮に映るようだった。鮎美は視線を感じたけれど、しつこい視線ではないので男の生理現象だと思い、気にしない。そして鮎美自身も、ついつい女性たちの露出された胸元や腋へ視線を送ってしまう。

「……」

あの人、可愛いな、たしか共産党やんな、あとで声かけてみよ、二十代は合計34人で男女とも17人なんよなあ、と鮎美は鐘留の可愛らしさと似たところのある若い女性議員を見ている。音羽響香（おとわきようか）という20代前半の女性で埼玉県選出だった。ライトグリーンロングドレスを着ていて、ほっそりとした華奢な肩は陽湖とも似ている女らしい魅力があって抱きしめたくなる。音羽が鮎美の視線に気づいて、こちらを見てきた。お互い、挨拶しようとして近づきかけたとき、定刻となり司会者が開会を告げ、鳩山総理が挨拶を始めたので、みなぎ傾聴する。

「…皆様の顔ぶれを拝見させていただいておりますと、実に年齢も性別もさまざままで、まさしく新しい政治の始まりを実感するわけであります。…」

鳩山総理も同じことを感じているようで挨拶の中にも含まれていたけれど、野次を飛ばす者がいた。

「贈与税は払ったか?! ちゃんと納めろやあ!」

関西弁だった。見ると、大阪出身の五十代の男性議員が野次っている。

「……」

さすが大阪のおっちゃん、総理にも容赦なしやな、うちも何か言うた方がええやろか、自民党として、けど、この場で野次は無いか、どっちがええのかな、と鮎美は大阪の血を騒がせながら木村の顔を見た。木村が黙って首を横に振ったので自重することにする。鳩山総理は野次に対して、目を閉じて少し頭を下げ、また挨拶を続ける。挨拶が終わると、九十代の男性議員と鮎美が壇上に呼ばれた。壇上には大きな酒樽が置いてあるので、何をすべきか、すぐにわかる。新年会で何度もやった樽割りを今回も最年少を理由に当てられているように、最年長の村井という男性議員と並んで木槌をそれぞれに持った。鳩山総理と参議院議長の竹村も木槌を持って並ぶ。

「……」

このお爺さん、意外としっかりしてはるなあ、元潜水艦の艦長さんらしいけど九十代ってことは1945年には三十代かあ、バリバリの時期に大戦やったんや、無所属やけど自民党寄りらしいんよな、頑張って任期満了まで長生きしてな、と鮎美は祈りつつ、木槌をかけ声とともに振り下ろした。

パキヤ!

酒樽の上板が割られ、アルコールの香りが拡がる。そして性別と年齢のために鮎美と、さきほどの音羽が柄杓で日本酒をくみあげ、酒杓やグラスに注いでいく。全員に飲み物が行き渡る頃に木村がウーロン茶をもってきてくれた。

「ご苦労様。どうぞ」

「おおきに」

竹村が乾杯の音頭を取る。

「では、皆様の〆活躍と平成23年の幸多きを願って！ 乾杯！」

「〆〆乾杯！〆〆〆〆」

飲食と歓談が始まり、鮎美は音羽と話してみたかったけれど、彼女も若さゆえに人気があり、常に誰かと話していたし、鮎美にも次から次へと声をかけてくる人がいるのでチャンスがない。別の気になる存在だった翔子は15分ほどカレーピラフを食べていたかと思うと、もう帰ってしまったようで姿が見えない。

「……」

もう帰らはったんや、しゃーないかな、みんな酔ってきて、嵐川はんの悪口、そこそこ大きい声で言うてはるし、どうなるかな、あんまり大事にならんとええけど、と鮎美が懸念していると、直樹が声をかけてきた。

「やあ」

「あんたか」

「また君を抱きしめたいね。今度も誘いについて入党してくれないかな。いつでも…グフツ?!」

直樹はボディブローをくらって蹲った。それでも笑顔で立ち上がる。

「あ、あいかかわらず元気そうだね。あんなことがあったのに」

「週刊紙の件では、新年早々ご迷惑をおかけしました」

セクハラまがいの発言の後に暴行にしか見えない鮎美のパンチがあっただけれど、普通に二人が話しているので周囲にいた議員たちは驚いたものの、どういう仲なのか少しはわかってくる。週刊紙に載せられた二人の会話に周囲も興味をもっているものの、鮎美と直樹の間に男女という雰囲気は無く、せいぜい気の強い後輩女子と自分が誘った部活なのに、よその部活へ移ってしまい、また勧誘している男子といった感じで、政治の世界というよりは学校生活のレベルで話しているような仲に見えた。

「民主党では、コウモリ言われてるらしいやん」

「コウモリをバカにしちやいけない。飛行機だつて有視界飛行より夜間飛行の方が、はるかに難しいからね」

「ものは言い様やな」

「ボクについては、ありがちなことさ。むしろ、君の方は話題が尽きないね、次から次へと、昨日もまた、やらかしたらしいじやないか。まだ議員の中だけでの話で報道は嗅ぎつけていないけど、嵐川先生と、やり合ってたって？」

「まあ、ちよつと」

「君のちよつとは全国ニュースになるから怖い怖い」

「あんたも酔ってるなあ…」

鮎美はアルコールを口にしないので、だんだんと他の議員が酔ってきたのが敏感にわかる。直樹も少し頬が赤い。女性はメイクしているのでわかりにくいけれど、男性は顔色でも言動でもわかりやすい。とくに鮎美の脚を見る視線がシラフのときより粘り着くし、それは直樹も例外でなかったりする。何より議員として公の場では自制しているはずの発言も軽くなりがちで、クジ引きで選ばれた議員だけでなく、衆議院議員の一部でさえ軽くなり、市議や県議レベルだと平気で女性差別や朝鮮人などへの差別を口にしたりする。一度も酔ったことがない鮎美にはアルコールが危険な薬品にさえ思えた。

「お話中に失礼します」

二人に声をかけてきたのは鳩山総理だった。そばに警護のSPもいる。

「これから、よろしくお願いしますね。芹沢先生」

「はい、こちらこそ、宜しくお願いします。うちは自民党ですけど、鳩山総理の最小不幸社会という考え方、好きです」

「それは、それは、ありがとう。雄琴先生も頑張ってください。期待していますよ」

二人と握手を交わした鳩山総理は別の議員へも声をかけていく。わずか120分という懇親会の時間のうち、歓談にあてられる時間は80分程度で、その間に200人を超える参加者と交流するのは大変そうだった。直樹がビールを少し口にしてから言う。

「君は恐れ知らずだねえ。とつさに総理と話したのに平然と返していた。うまいものだ」

「そう言われると、総理大臣やったのに緊張する間も無かったさかい……ま、何でも慣れるもんやね。あ、竹村先生」

「新年あけまして、おめでとう」

次に議長の竹村も回ってきたので握手を交わすけれど、やはり長く話す時間は無かった。そして副議長の女性議員とも握手した。鮎美は副議長よりも、その女性議員についていた女性SPに興味をもち、話しかける。

「こんにちは。うちは芹沢鮎美といいます。お名前は？」

「……。そういったことは答えられません」

女性SPは事務的に返してきた。握手を求める鮎美の手にも触れない。

「すごい強そうですね。柔道か何か？」

透き通るような白い肌をしている美人なのに、耳が潰れていて餃子か焼売のようになっていいる。それが柔道やレスリングを極めた人間の特徴であることは武道経験のある鮎美の知るところだったし、背も高く肩幅も広くてウエストは締まっているのに黒いスーツの変なところが膨らんでいるので、そこに拳銃を持っているのだと推測できるし、拳銃も一般の警察官がもっているものより大きそうで、スーツのボタンは留めていないので、いつでも拳銃を抜ける。お尻も女性らしい丸みに加えて発達した大臀筋の厚みを感じさせ、鷹姫そっくりのお尻をしている。鮎美は自分より強そうな女性を見ると、抱きしめてほしいという衝動を覚えていた。逆に自分より華奢な女性を見ると、抱きしめたくなる。鮎美が一步近づくと、女性SPは鋭い声で言ってきた。

「勤務中ですから話しかけないください」

そう言う女性SPは顔を鮎美に向けていても、この場にいる誰が襲ってきてても副議長を守れるように周囲への警戒を怠っていない。その凜とした気配に鮎美は、ますます惹かれたけれど、さすがに自重する。

「ごめんなさい。お仕事、頑張ってください」

「……………」

女性SPは何も言わず、副議長と行ってしまった。直樹がクスクスと笑っている。

「クク、君があんな可愛らしい声と喋り方をするとは思わなかったよ。クク」

「っ……」

「まるで憧れの先輩に出会った女子みたいだった。クク」

「……………かっこいい職業やなって！ そう思っただけやもん！」

「なるほど。たしかに。けど、普通は男の子が憧れるような職業だろう。彼らは警察官の中でも選りすぐりのエリート、とくに要人警護だから体力面はピカイチだろうね」

「お話中に、ごめんなさい。私とも話してくれませんか？」

音羽が声をかけてくれたので鮎美は頷く。

「ええよ、うちも音羽さん…先生と話したかったんよ」

「クスクス、お互い先生って柄でもないし歳でもないから、アユちゃんって呼んでいい？」

「ほな、キョウちゃんって呼んでええ？」

「いいよ、アユちゃん」

音羽が握手を求めてきたので手を握り合っただし、さらに抱きついてきたので抱き返した。

「……………」

この人ビアンかな、違うか、ただのスキンシップやね、と鮎美は抱き合いながら思った。音羽は肩や背中を丸出しにしたロングドレスを着ているので抱いていると、その感触が心地いい。

「……………」

同性愛者は3%程度いるから2000人無作為に選ばれた議員がいたら6人いる計算や、けど実は潜水艦乗りやった九十代のお爺ちゃんがゲイやったって可能性もあるもんなあ、と鮎美は議員の中に同類がいる可能性も考えつつ、音羽を抱き続ける。いつまでも鮎美が離さないで抱いているので、かなり長い抱擁になってから音羽が離れる。ま

た直樹がクスクスと笑った。

「熱い抱擁だね。また週刊紙に載るよ。自民と共産だから話題性たっぷりだ」

「アユちゃんはさ、どうして自民なんかに入っちゃったの？」
「え……」

自民なんか……なんか、って、その言い方はないやろ……酔ってるな、この子、と鮎美は音羽を見て気づいた。メイクしているので顔色は変わっていないけれど、首が赤い。耳も赤い。かなり酔っている様子だった。

「あんな金権政党にアユちゃんが入るなんて信じられないよ」
「ははは……」

「ね、共産党に入らない？ みんな優しいし、いい人ばかりだよ」
「共産党かあ……西沢先生には誘われたけどなあ……」

「光くん？ 光くんの地区なんだ。彼ステキだよ、結婚しちゃったけど。せつかく光くんが誘ってくれたのに、どうして入らなかったの？」

「……え……と……」

「ボクが自民に誘ったんだよ」

「ふーん……えつと、雄……週刊紙に出てた……」

「雄琴だよ」

「そうそう、雄琴くん。あ、先生の方がいいかな？」

「どっちでも」

「じゃあ、雄琴くん、君って民主に行かなかった？」

「行ったよ」

「誘った人が移動しちゃうなんてね」

「ねッ！」

鮎美が強調して言うと、直樹は両手をあげた。

「そろそろ退散するよ。女の子同士、仲良くやってくれ」

直樹が片手を振って離れていった。

「キョウちゃん、だいぶ酔ってるやろ」

「うん、ごめん。お水もらってくる。あとで役目あるのに、緊張して酔

「いすぎたかも」

「いっしょに、もらいに行こ。一回離れると、また別の人と話すことになるさかい」

党が違う同世代の人間と話してみたいのは、お互い同じなので二人でソフトドリンクをもらいに行つてから話す。

「アユちゃん、まじめな話、自民党なんて、もう古いし悪いことばっかりしてたのに、どうして?」

「あ〜……う〜ん……まあ、古さでいうと、1922年に生まれた日本共産党の方が、1955年に誕生した自由民主党より古いんよ。ほら、あそこにはいる鳩山総理のお爺さんと吉田茂がつくつたんやけど、知ってた?」

「知らない。そういうこと言ってるんじゃないよ。自民党って、すぐ悪いことするよね? お金に汚いし。アユちゃんもワイロとか欲しいの?」

「いらんよ。歳費はもらうけど」

「うん、660万円で十分だよ。だからさ、共産党においでよ」

「う〜ん……たしかに自民党は金権政治で戦後の日本をつくつてきたかもしれないけど、逆に1955年の時点で共産党が与党やったら、どうなつてたと思う?」

「すごいいい国になつてたよ、きつと」

「……………。今の中国とロシアを、どんな国やと思う? あそこに今、住みたい?」

「住みたくない。でもさ、中国の共産党と日本の共産党は別物だつて、党のみんな言ってるよ」

「最近日本共産党も軟化してきたけど、昔はバリバリやってんよ」

「あ〜……アユちゃんは自民党にいて、いろいろ吹き込まれてるね。そういうの全部嘘だよ。一種の洗脳」

「……………。ほな、現状の問題への態度で考えてみよ。とくに憲法9条、共産党さんは改憲反対やん?」

「うん、反対。9条は日本の宝!」

「軍隊が無いのは、街に警察がおらんと、いっしょよ?」

「軍隊があるから戦争するんだよ」

「……………もし、軍隊が無い国に、別の軍隊がある国が攻め込んだら？」

「そうならないよう話し合うべき！」

「……………話し合っても解決できんときは？」

「解決できるまで話し合う！」

「……………9条は日本の宝っていうけど、そんな、ええもんやったら、もつと世界中に拡がると思わん？ どこもかしも、この条文さえ憲法にあつたら、平和になれる、そんな素敵な条文なら、いろんな国が採用すると思わん？」

「そうなるように、いっしょに頑張ろうよ」

「……………」

どないしよ、時間の無駄や、西沢先生はそれなりに立派な人やったけど、この子は、いい子やけど、それだけや、お花畑で夢見てはる、お花畑かて根本では昆虫とか微生物が弱肉強食やってんの、花しか見てない、花か……………花つて植物にとつては生殖器なんよな……………それを丸出しにしてるわけで羞恥心ゼロやな……………まあ、それ以前に心も意識もゼロっぽい生き物やけど……………動物でも、犬も猿も裸やもん……………羞恥心、人間だけや……………知恵の実を食べた結果とか、陽湖ちゃんは言うけど……………アフリカとか、アマゾンに行ったら裸に近い部族もいるし……………単に生活環境の気温の問題ちゃうか……………でも、ああいう部族にも同性愛者いるんかな……………いるんやろな……………殺されるのかな……………話し合いで解決できるのかな……………、と鮎美は対話に徒労感を覚えて別のことを考えていく。音羽が鮎美の肩を揺すった。

「ね、聴いてる？」

「あ、ごめん、ごめん、ちよつと疲れてて」

「うん、疲れるよね。クジ引きで、こんな急に議員にされて。はああ……………」

音羽がタメ息をついたとき、司会者がマイクで告げる。

「それでは、ここで音羽響香先生より、新たな参議院議員としての決意表明をお願いします」

「は、はい！」

音羽が壇上へ向かい、原稿を読み上げる。

「私、音羽響香は国民の代表として……」

「……………」

可愛くて素直そうな子やな、うちが担当で共産党が手をつける前やったら、どうしても勧誘できたかも、と鮎美は緊張して額に汗を浮かべながら決意表明している音羽を見守った。終わると盛大な拍手を送る。音羽が戻ってきた。

「はああ……終わった。今日のお役目、終了♪」

音羽からアルコールと汗の混じった香りがする。

「キョウちゃんって響く香りと書くんやね。ええ名前やね」

「そうかな……子供の頃はキョウカだから強化人間とか言われてイヤだったよ」

音羽が額の汗を手の甲で押さえると、汗に濡れた腋が見えて、鮎美は舐めたい衝動にかられた。

「……」

「何見てるの？」

「あ、ごめん。可愛いドレスやと思って」

「今さら？　けど、今さらだけど、アユちゃんの制服も可愛いよ。あ、鮎美って、どういう意味の名前なの？」

「父さんが釣りが好きでな。縁起のええ魚やし、うちが今住んでる琵琶湖の名産やし、あとは母さんが美恋って名前で、その一字をもらっただんよ」

「美恋ってステキな名前」

「そやね。名前の通り、素直な人やわ。キョウちゃんみたいに。うちの性格は父さんに似たかな」

決意表明が終わったので、もう懇親会も終了となる。政治的方向性は別々になってしまったけれど、とりあえず音羽とは連絡先を交換してから会場を出た。出たところで鷹姫が待っていて、何か言いたそうな顔をしている。それは深刻ではなかったけれど、何かある顔だったので問う。

「鷹姫、どうかしたん？」

「さきほど嵐川先生より連絡があり、懇親会が終わったなら、話があるので芹沢先生の宿舎の部屋を訪ねるとのことです。予定は空いておりましたが、未定であると伝えました。お会いになりますか？」

「うん……会うわ」

「では、そのように伝えます」

鷹姫が電話をかけているのを見守っていると、直樹が声をかけてきた。

「ちよつと用件があるから、あとで部屋に行ってもいいかい？」

「あく……嵐川先生からもアポがあつて。あんたは、どうせ民主党への勧誘やろ。蹴り出すで」

「そうか、彼女から……むしろ、ちようどいい。ボクも彼女の件で行くから。入れてくれ。一時間後に行く」

「……そういうことなら……。今夜も、すぐに寝られそうにないね……」

鮎美は会場に戻ると、まだサービスしてくれているドリンクコーナーでアイスコーヒーをもらった。

「芹沢先生、まだ、お仕事ですか？」

そう問う木村も酔い醒ましにコーヒーを飲んでいる。よく見れば15人くらいの議員が同じく酔いを醒まそうとしているので、まだ人と会ったり、仕事をしたりするのだと、わかった。

「はい、まあ。今夜こそ、ゆっくり寝られる思たんですけど、急にアポが入って」

「体調には気をつけてください」

「おおきに。木村先生もご自愛ください」

握手を交わして、お互いを労った。

1月6日 号泣議員

懇親会が終わって鮎美が鷹姫と議員宿舎の自室へ戻ると、すぐに翔子が訪ねてきた。鷹姫が中へ入れる。

「どうぞ、お入りください」

「同級生が秘書なんて、まるで子供の遊びね」

言いながら翔子は勧められていないうちにソファへ座った。横柄な態度でドサツと、お尻をおろしたのに、もっていた古いリュックサックは丁寧な動作で隣のソファへ置いた。そのリュックサックのチャックは開いたままなので、鮎美と鷹姫は事前に相談した静江が言っていたことが当たり、何かの機器で会話を録音しようとしているのだと気づいた。そして、逆に鮎美も室内に録音機を隠している。翔子が座ったソファの前にあるコーヒーターブルの下段と、鮎美の執務機の筆立てに仕掛けていて、お互い様のようにだったし、実はネット回線で地元へ帰った石永もリアルタイムで聴いているし、必要とあれば助言をくれる予定だった。翔子は鷹姫を足元から頭の先まで見て言う。

「たしか秘書の給料って上限50万円くらいだったはずよね。いくら、もらってるの?」

「はい、50万円です」

「鷹姫……そういうこと素直に答えてええよ。まあ、隠すことでもないけど。それで、ご用件は?」

鮎美は執務机の前に座ったまま問うた。今まで習った接客態度としては相手へ近づいてソファに腰かけるところだったけれど、もう翔子の対決姿勢は明らかで、できれば関係を修復するよう静江からは言われているものの、不可能であればダメージを受けないようにとも忠告してもらったので、注意して対決することにした。翔子が座り直して足を組み、背もたれに上半身を預けて問う。

「お茶くらい出さないの?」

「招かれざる客に出す茶は無いねん」

録音されていることは、わかっているけれど、つい挑発に挑発で応じてしまい、鮎美は内心で自分の軽率さへ舌打ちしたけれど、表情には出さなかった。翔子が冷たい目で鮎美を睨む。

「……………ふーん、そういう態度なわけね」

翔子は組んでいた足を組み直して、腕組みもして鮎美を見据える。

「あなたは私のこと、いろんな党の担当に奢らせてケチな女だと思ってるんでしょね」

「……………ケチというか…」

さもしいというか、あさましいというか、同じ女でいるのが嫌なんやけどね、と鮎美は考えたけれど、口には出さない。できれば翔子とは仲直りしたいという党としての目標はあるものの、どうにも彼女を好きになれないし、頭を下げてまで関係を修復したいとは思えない。そこまで自分を曲げたくなかった。

「けど、あなただって当選してから、何度も誰かに奢ってもらったでしょ?」

「…それは、まあ……………そういうこともありましたけど……………面談として、定められた金額の範囲で…」

「私も金額の範囲よ」

「……………。やとしても、ほとんど毎日というのは、どうなんですか?」

それは単に食費を浮かしてるだけやん」

「何も違法なこととはしてないわ」

「……………」

「なのに、あなた、他の議員を扇動して、私を除名するよう影でコソコソ働きかけてるでしょう」

「別にコソコソなんてしてませんし。そういう声が起こるのは、あなたの態度に問題あると、みんなが思うからちやいますか?」

「そう言う、あなたは今日までに、どれだけ経費を使ったの? 党に所属すると去年のうちでも経費が出るはずよね。いくら使ったの?」

「……………別に、そんなん、あんたに答えることちゃうし」

「開示できないわけ? 政治資金の収支開示、決算報告は議員の義務

で、何人も閲覧を妨げられないはずなのを知らないのね」

「知ってるしー!」

「なら、言ってみなさい。いくら? 去年の経費、全部で、いくらなの?」

「……………」

鮎美は答えるべきか判断に迷ったので、気づかれないようにPC画面を見ると、開示してよし、と石永がメッセージを打ってくれていたのと言う。

「たしか…1千…4…、…鷹姫、正確には、いくらやった? 開示したって」

「はい、今調べます」

鷹姫が大きなロッカーからファイルを出して、必要なページを開き、答える。

「1千486万9165円です」

「い…いッ?! いっせん400万?!」

驚いて翔子が立ち上がった。

「どれだけ使い込んでるのよ?! 当選がわかったの五月でしょ?! すぐに党に入ったとしても、そこから半年で! 家が一軒買えるじゃない!!」

「……………家は無理やと…………」

「1500万もあれば中古で買えるわよ! 恐ろしい子!! 党からのお金って、もとは政党交付金だから税金なのよ?! みんなの!! それを1500万も半年で使い込むなんて、どんな神経してるの?!」

「……………使い込んだとか……………うちが着服したみたいに言うのやめてもらえます?」

「じゃあ、あなたの資産は?! 政治家には資産の開示義務もあるよね?! 当選する前と今で、どのくらい増やしたの?!」

「資産って……………うちには、資産らしいもんは、預貯金くらいしか…………」

「いくら増やしたの?!」

「……………鷹姫、うちの通帳ある?」

「はっ」

鷹姫が通帳を出してきてくれる。鮎美は受け取って自分で見る。あまり翔子には見せたくない金額に残高が大きく膨らんでいた。支部での勉強への出席や各種行事への参加手当、選挙応援で、しっかりと振り込まれていて、それを使う機会が少ないまま、普通預金においていた。

「……うちは普通の高校生やったから、当選する前はお年玉を貯めておいた分とかで15万くらいしか無かったんよ」

「見せなさい！」

「……………」

「開示は義務よ!!」

「わかってるし！」

鮎美は通帳を翔子へ渡した。受け取った翔子が、また驚いた。

「539万?!」

「……………」

「よくも貯め込んだものね!! たった半年で!! 1400万のうち540万も盗るなんて!!」

「それは勘違いや。うちへの手当は党から出る。党支部の経費にはなるけど、うちの政治資金としての収支には入ってこん。そんなことも知らんの?」

「ということは合計で2050万も手にしたの?!」

「手にしてへん! 1400万の方は右から左に払ってる! 東京事務所の内装を変えたり! 秘書への給与は、ここにあげるし! みんなの交通費もあるし! 宿泊費もある! 接待かてあるし! あんたに奢ったカレー代かて月末には帳簿にあげるし!」

「私は一回10000円以下ばかりよ! 300回でも30万円にしかならない! 2050万円も手にした人が30万円の接待を受けた私を除名?! 笑わせないで! あなたの方が、よっぽど悪質よ!!」

「誰が悪質やねんっ?!」

「芹沢先生!」

鷹姫に呼ばれて、鮎美は冷静に対応するはずだったことを思い出し

た。すでに石永からも何度も、落ち着いて、落ち着いて、とメツセー
ジが来ている。鮎美は深呼吸してから言う。

「政治活動には何かとお金が必要だよ」

「何それ？ どこかの腹黒な政治家が言いそうなセリフ」

「……」

うつ……指摘されると、うちも自分で言つてて、その通りやと思う
けど、会計も、この通りで不正はない、年末に鷹姫とチェックしたし、
と鮎美は座り直して横髪をかきあげ、耳にかけた。

「ポスター一つ作るにしても30万60万と要るし。うちも鷹姫も運
転免許はないから、もつたいたいと思つてもタクシーに乗るし」

「バスで移動すればいいでしょ」

「あんたの地元の京都と違って、うちのところは平日昼間は2時間
に1本や。ローカル電車も。大阪で育ったうちも最初は、めっちゃ驚い
たわ。乗り逃したら2時間待ちやで？ 接続が悪いと、うちの住ん
でる島から最寄り駅まで3時間や。新幹線やったら東京名古屋間ほ
どかかる。そんなんで仕事が進むわけないやん」

「……。免許、取りなさいよ。高校3年生でしょ」

「校則で3年生の3学期までは禁止なんよ。それに今月から鷹姫は教
習所いくけど、政治家本人は運転も避けるねん。知らんの？ 無過失
責任いうて交通事故を起こしたとき問答無用で運転手が……」

「無過失責任くらい知ってるわ。バカにしないでちょうだい。私、法
科大学院生よ」

「やったら、わかるやろ。運転は危険なんよ」

「なら免許のある秘書を雇いなさい。役に立たないお友達を連れてな
いで」

「バンっ！」

鮎美が机を掌で叩いた。

「鷹姫は記憶力もええし！ そこの男より体力もある！ あんたは
知らんでも、うちにとっては最高の秘書やー」

「フン、この子が月給50万ももらう価値があるつていうの？」

「忙しい日は早朝から深夜までや。今夜かて、あんたのせいで勤務中

なんよ」

「人のせいにして残業代を稼いでるのね」

「やかましわ！ あんた何が言いたいねん?! 用件は何や?!」

「経費の領収書を見せなさい。1400万も何に使ったのか、ちゃんと領収書はあるんでしょうね?」

「あるし！ 鷹姫、領収書の冊子を出したって」

「はい」

また、すぐに鷹姫は領収書を糊付けしたものを束にした冊子をロッカーから出してくる。翔子は受け取ると一枚一枚、目を通していった。

「……一日に何回もタクシーを使つて……」

「言うたやろ、免許ないし田舎なんや。秘書の自家用車を使つて送迎してもらつた場合もガソリン代と車両代を案分してるし」

「……………タカ井……………って、なに、この旅館？ 二人で泊まつて10万円以上とか」

翔子が高額な宿泊費に目をつけたけれど、鮎美は落ち着いて答える。

「それは一人1万円までしか経費化してない。残りは、うちのポケットトから出してる。なにも不正はないよ。選挙応援活動中の外泊でもあるし」

「だとしても高校生が、こんな高級旅館に泊まる必要があるとは思えないわ」

「県内の観光資源を知るのも勉強や。ここはグルメサイトランキングでも上位やし、知つておいて損は無いし、何より経費として計上したんは二人で2万円だけや」

「もっと安いビジネスホテルに泊まればいいでしょ。ネットで探せば2980円でもある」

「だいたいのは、ビジネスホテルがメインや。けど、あんまり安いと女だけで泊まるんは不安あるし、部屋の中で事務仕事したりパソコン開けたりするスペースも欲しいんや」

「あ、この日も高いホテルに泊まつてる」

翔子が西村の通夜後に泊まった高級ホテルの領収書を見つけた。琵琶湖が一望にできる高層ホテルで県内でも名高い。

「そこも県内の有名どころやし、その夜は通夜で遅くなったから、もともと選択肢は少なかったんや」

「うわっ……香典まで経費にしてる、どこまで、がめつい。どんな神経してるの?」

「っ……」

鮎美は頭に血が上るのを、はつきりと自覚した。経費にしたのは事実でも、西村の死を悼む気持ちを侮辱された気がする。そして一枚一枚の領収書や金銭の流れをチェックされること自体も、腹の中を探られるような不快感が本当に腹部に湧いてくる。怒鳴りつけて部屋から蹴り出したい衝動を覚えた。けれど、鷹姫とPC画面内の石永からの視線で、自制心を発揮して深呼吸した。

「はああ……うちが普通の女子高生やったら、阪本市に住んではった西村先生の葬儀に参加することは100%ありえんよ。私的な付き合いやなくて、完全に仕事、うちが死んで他の議員さんが来てくれはっても、きつと、みんな経費にしはる。そういうもんや」

「しかも、この香典の金額、自分で書き込んでるじゃない。ちゃんとした領収書ではないわ」

「どこの世界に香典の領収書もらう人間がおんねん! こつちで書証を作成してもよいことになったるし、いっしょに貼り付けたる西村家からの弔問感謝の書状があるやろ。それで十分なんや!」

「タクシー使いまくって香典まで経費にして、その夜は高級ホテルに泊まって。あなたって人として最低ね」

「……………」

「顔に冷や汗を浮かべて。さすがに、自分の立場が危ないって気づいたの? でも、もう遅いわ。ここまでの会話、録音させてもらってるから」

「……………これは冷や汗やない……………」

鮎美が額に浮いていた汗を指先で拭いた。

「あまりに怒りすぎて、どつき倒したいのを我慢する苦痛の汗や」

「脅迫？」

「芹沢先生、私も我慢の限界です。もう許せません」

「鷹姫……」

鮎美は頬を赤く怒りで染めてる鷹姫の顔を見て、逆に冷静になった。

「やめよ、うちらを怒らして、失言なり暴言なりを狙うんが、こいつの狙いやろ。うちの会計は党の指導も受けて、経験豊富な秘書がまとめている。何も不正はない。一つ一つに、ちゃんと理由と必要性がある」

「ふーん……お茶菓子も塵も積もれば山で、すごい金額ね……かねや？ あの有名なお店……そんな高級なお茶菓子が必要なのかしら……自分たちで食べたいだけじゃないの」

「いろんなお客さんが次々くるさかい、党支部でも用意してるし、うち名義でも用意するんよ。何も不正はないよ。かねやさんは東京でも有名やから、こつちでの接待にも使うし。……」

とは言うても、うちのポイントカードは、とんでもない勢いで貯まっていくんやけど、それは不正にならんって話やし黙っておこ、と鮎美は考える余裕も生まれた。痛くもない腹を探られる不快感にも慣れてきた。

「どうぞ好きなだけチェックしたって。何も出てこんから」

「……あ！ 制服！ 学生服まで経費にしてる！ これは完全に私的利用！」

領収書の中には学生服も含まれていた。

「選挙応援で汗かいたりするから予備もいるし、新年祝賀の儀に参加するのに新調したりで必要やったんや」

「だとしても制服なんて私服と同じよ！」

「女性議員のドレスに比べたら、はるかに安いし、男性議員の燕尾服に比べても安価や」

「学校に着ていくことがあるから私的利用よ！」

「普通の高校生としての分は転校してきたときに買ったし。普通の高校生やないから、冬服だけで5着もあるねん。私的な必要性の分は父

さんが出してきてくれる。追加で買ったんは、すべて政治活動に必要やからよ」

「……この制服、ずいぶん凝ったデザインね。私立？」

「そや」

「議員になる前から、恵まれた家庭だったわけ」

「……別に、ごく普通の家庭やし」

「父親は何の仕事をしているの？」

「……答える義務ないけど……建築家や」

「ああ、なるほど、それで自民党なわけ。ゼネコンと自民党、べつたりね」

「勘違いせんといて、うちの父さんは建築業やけど、公費での建設事業に入札するような仕事はしてへん。主に個人宅の設計や。ちよつとは有名やから、お金持ちとか、医者さんからの注文が多いけど、公費にからむことは無い」

「父親の年収は？」

「それこそ開示義務ないし、そもそも知らんし。あんたのオヤジは何の仕事してるねん？ 年収は？ 気分ええか？ こんなこと訊かれて！」

「公務員よ。役場の、つまらない仕事」

「……悪くないやん。あんたも恵まれた家庭やん」

「……」

「そろそろ用件に入るか、帰るかしてくれへん？ 明日もお互い朝から研修やん。それとも、きつちり領収書、全部に目を通すん？ ほんなら別に時間を取って他の秘書に立ち会わすさかい、日を改めてくれん。というか開示義務はあるけど、それは手続きを踏んでの話なんを、うちの善意で見せてあげてるんやし。まだ見たいなら、手続きとつてや」

「これだけあれば、もう十分よ」

翔子がバサツと冊子をコーヒーテーブルに投げ置いた。

「2050万円も好きに動かして、そのうち550万も貯め込んだ。この事実があれば、私の30万円なんて消し飛ぶ。あなた議員になっ

て調子に乗りすぎよ、庶民感覚とつくに無くしてるわ」

「……………」

そう言われると反論に困った。不正はないけれど、とつくに庶民感覚は無くなってきている気がする。タクシーで移動すれば一回で高校生のお小遣い1ヶ月分が飛んでいくのに、もう何とも思っていない。さきほどもホテルでの夕食代として鷹姫へ13000円も渡した。これは経費にしないけれど、500万円超も預貯金があるゆえの振る舞いで、高校生のすることではないと言われれば反論はない。翔子は微妙に四捨五入して金額をあげて言ってくるけれど、実は受け取った手当関連の報酬は総額700万円を超えていて150万円ほどは高めの宿泊費や個人的な飲食に費やしている。とくに東京に出ると、お金が湯水のように消えるし、そんな使い方は女子高生のことではないとも、頭の片隅ではわかっている。

「あなたこそ懲罰を受けるべきよ」

「……………」

不安になつてPC画面を見ると石永から、大丈夫だ、とメッセージが来る。

「……………」

ホンマに大丈夫なんやろか、総額2200万円くらい、うち一人の存在で動いてるし、すべて元は税金や、家一軒中古やったら買えるし、国民から批難されたら、うちの方が懲罰を受けるんちゃうやろか、と鮎美は少し不安になり腋の下に汗が浮かぶのを感じたものの、表情は変えずに翔子を見据える。

「……………」

「……………」

やや重い沈黙が場を支配したとき、直樹が訪ねてきた。鷹姫が対応して室内へ入れた。

「やあ。いい雰囲気では無さそうだね」

「……当たり前やん、何の用よ？ 民主党への勧誘やったらホンマに蹴り出すで」

「嵐川翔子の件については参議院の民主と自民で共同歩調を取ること

になったよ。二党だけじゃない、共産も活力も賛同してくれた。ここに署名がある」

直樹が数枚の紙片をコーヒーテーブルに置いた。

「参議院議員203名のうち、嵐川翔子を除いて202名、その中で181名もが懲罰に賛同の署名をしてくれた」

「っ…百8じゆう…そんなに…」

期せずして鮎美と翔子が異口同音した。

「わかるよね。除名に必要な3分の2を軽く超えてる」

「ビツ……」

翔子が息を飲んでから喚く。

「卑怯よ!! 罊にかけたわね!!」

「……………」

「どんな手を使ったの?! 訴えてやる!!」

「おいおい」

直樹が肩をすくめて言う。

「立法府がその権限で行った懲罰を司法が覆せると思うのかい?」

「っ…、う…ぐっ…罊よ! 私をハメるための罊!!」

「いいや、君への評価だよ。みんな、君の態度にかなり怒っている。とくにボクら一期目6年任期の議員たちは強い危機感を持つてる」

「危機感……なんでやの?」

「ボクらの任期が、あと3年だからさ」

「……………」

「ああ、まだ、この感覚は君たちにはわからないかな。いわゆる、そろそろ選挙が近いつて気分さ。正確には国民審査だけどね。実はボクらの中にも楽観していた人が多くてね。一期目3年任期だった議員で続投を望んだ人たちも、ほとんどは落ちないだろうと思っていた。最高裁判所の裁判官が、かつて誰も罷免されなかったように。けれど、蓋を開けてみたら無所属が19人、所属政党ありでも6人が落ちてしまった」

直樹が大袈裟に両手をあげた。

「正直、ビックリだったよ。けど、考えてみれば落ちた人は、落ちて当

然の人ばかりだった。嵐川さんみたいな無所属で一切仕事をせず国会にだけ顔を出した人や、実は認知症なのに家族がお金ほしさに出席させられていた人、仕事をしようとはするけれど変な法案を提出しようとして頑張ったりする人もいたし、所属政党があっても、お金にばかり目をやって党内での評判が悪かった人や、単純に偉そうにしまくった人なんか、軒並み落ちた。いやはや国民の目は厳しいし、正確だったよ。天網恢々疎にして漏らさずとは、このことだね。落ちた人の中には任期中にボクらも懲罰動議をかけようかと思うほど素行の悪い人もいたけれど、なかなか前例のないことには、みんなも及び腰になつてしまい3年を徒過してしまつた」

直樹が紙片をコーヒートーブルに並べた。そこには嵐川翔子への懲罰を動議する表題で議員たちの署名が集まつていて181名の名があつた。直樹が鋭く翔子を見据える。

「けれど、今回は違う。早期に芹沢先生が大声で言い出してくれたし、とくに怒っているのは嵐川先生の担当を半年間、各党から指令されていた議員たちだ。ボクは幸いにして芹沢先生が早めに入党してくれたから勧誘業務から開放されたけれど、嵐川さんに半年も付き合わされた議員は、たまつたものじゃない。昼か夜、必ず食事時に拘束されて時間を無為に過ごすわけだ。君は面談と言いつつ、一切の会話を拒否して食べるだけだったよね?」

「……少しは話したわ……」

「挨拶くらいにね。それは面談だと言ひ張るための口実だろう。いつそ君へ、お金を渡して無駄な時間から解放されたいと提案する議員もいたけれど、君は贈収賄にあたるって拒否したよね?」

「不明朗な金銭の授受は禁止されているはずよ」

「どこまでも合法的に君は、たかりまくつた。付き合わされた方の怒りがわかる? けど、なんとか勧誘したいし、入党してくれないまでも奢つた回数を君は闇魔帳のようにつけて、賛否きわどい採決のさいに義理を果たすと言ってくる。こうなると、怒鳴りつけて投げ出すことも党の指令を受けているから、やりにくい。悪い女だね、君は。女性に向かつて言いたくはないけれど……、いやいや、言つてしまいたい

から言うけれど、クソみたいな女だな、本当に」

「……………私以外にも所属政党を決めずに引つ張っている人はいるわ!」

「あゝ、いるね。一年は様子見するとか、そういう人も。けど、その気持ちはわからなくもない。かくいうボクもコウモリだし。支持政党の無い人間がクジ引きで、いきなり当てられたんだ様子見すること、どの党の担当も一定の理解するさ。党の上層部も同じくね。そして、ときどき勧誘に行つて面談のさいには飲食接待もあるだろうけど、君ほど露骨で悪質な者はいなかった」

「……………」

「はつきり言えば、君のような者を、のうのうと議員たらしめていると3年後、ボクらが受ける国民審査は実に辛いものになるだろう。辛口はカレーだけにしてほしいし、君の担当は、みんなカレーが嫌いになったそうだよ」

「つ…自分たちが落ちないために私を除名する気っ?!

「ああ、君を除名するという義務を怠るより、いいという結論だ。そのくらい、みんな怒ってる。いっしょにされたくないとね」

「つ…つ…」

翔子は二度続けて息を飲み、それからコーヒーテーブルにある帳簿と領収書の冊子を取り上げた。

「これを見なさい!!!」

「これは?」

「私より、ずっと欲深い女が2500万円も公金を使い込んだ証拠よ!!」

「ふーん…見てもいい? 芹沢先生」

「あ、うん、まあ、どうぞ」

鮎美が許可したので暫く直樹は帳簿と冊子をめくっていたけれど、タメ息をついた。

「はああ…これは普通の経費じゃないか。たまに、やたら高いところに泊まってるけど、私費で埋めてるし。何も使い込みはないよ」

「2500万よ! 全部で! たった半年で! しかも600万近く

私腹を肥やしてる！」

「たまたま選挙が重なったからね。それでなくても、ボクら新制度の参議院議員の歳費は660万円と少ない。選挙資金が要らないからというのが理由だけれど、本当は政党に所属して議員らしく活動してくれる人には以前と同程度の歳費になるよう制度設計して党からお金が出るのさ。ちゃんと活動すれば、かなり経費もいるし、報酬も国会議員らしくなる。芹沢先生は、これで他の議員と比べれば控え目な方だよ。ちよいワルな議員になると女性秘書との宿泊費を経費にしたりする。のちのち、その秘書と結婚したりするし、その議員は、たぶん国民審査で落ちたかな」

「……………」

鮎美は少し背筋に寒いものを覚えたけれど、顔には出さない。背筋が凍っているのは翔子だった。

「っ……っ……」

もう自分を守る理屈が無くなり、唇を震わせて涙を滲ませている。

「あとは発起人として芹沢先生が署名してくれば、除名にむけて動き出すよ。問題なのは日程かな、すぐに除名するか、国会の開会式後にするか」

「っ……まっ……待って……ちよつと待って……」

すがりつくように翔子が直樹へ言う。

「わ、私、まだ……1円だって報酬をもらってないわ……」

「ああ、そうだろうね。月末にならないと入らないから。だからこそ、君なんか1円の税金も投入せず除名したいって先生方が多くてね」

「ヒツ……………」

「旧来の懲罰による除名は、国民からの信託を得た議員を弾くわけだから、少数者の意見も大切にすって原則を鑑みれば、おいそれと行うことはできなかつた。けど、ボクらはクジ引きだ。あまりに質の低いものが混じっていたら、弾いて、もう一度、クジ引きをすればいい。誰かの一票が死票になるわけじゃない。きつと、高確率で君よりマシ

な人間に当たるだろう。それが一日でも早ければ、次の人が勉強する時間も早まるし、次の人に満額の歳費がいく方が合理的だ。だから、みんな、今夜のうちに署名を集めることに賛同してくれた。署名しなかった人も、だいたいの主旨には賛同しているよ、単に慎重だったり様子見だったり、議長だから一歩引いて見るという理由だったりするだけだよ」

「……嫌よ！ イヤ！ そんなこと私は同意しない！」

「……。芹沢先生、この一番上、ここにサインして、今夜中に竹村議長へもつていくから」

「雄琴はん……」

みんな本気なんや……。うちが言い出したこと……。どないしょ……。ホンマに除名してしもてええんやろか……。石永先生も除名つてメッセージをくれてるけど……。うちが発起人で……。一人の議員さんを切る……。と鮎美が悩みつつもペンを持ったときだった。

「させないから!!」

そう叫んだ翔子が紙片を奪うと、破いた。何度も破いて紙くずにしてしまう。

「ハアっ……ハアっ……ハアっ……」

「……………」

「こ、これでも、もう……」

「終わりだね。つくづくバカな女だ」

直樹が深いタメ息をついた。

「君は法科大学院生だったよね。なら、紙切れとはいえ、これが器物破損だつてわかるだろう。まして、良識の府に属する議員181名が手ずから署名したものだ。最高裁判所の判決文にだつて比肩するだろう。それを破り捨ててしまった。さっきまでなら、除名までいかず陳謝で済んだかもしれぬ。竹村先生は優しいからね、みんなの勇み足を止めてくれたかも。芹沢先生だつて迷った目をしていた。けど、もう終わりだ。さようなら、嵐川翔子」

直樹が冷たく微笑すると、翔子は顔を真っ赤にして涙を零した。

「っ……、こんな私でも！ 私も死ぬ思いで！ もう死ぬ思いでもう

！ あれよ！ 一生懸命！ 苦痛に苦勞に重ねて！ やつと選出された代表者たる議員になったからこそ！」

翔子が金切り声をあげ、号泣しながら叫びだした。

「こーやって法律機関のみんながイジメるのが！ 本当にツラくって！ 情けなくって！ 子供にだって本当に情けないのよ！ だから！ ……法律のイジメを受けて！ 議員という大きな！ くっ…カテゴリーに比べたらア！ 経費の！ 接待費の！ 政務調査費のオ！ セイツイツム活動費の！ 報告ノオオ！ ウエエっ！ ぐすっ！ 折り合いをつけるっていうっ！ ことで、もう一生懸命ホントに！ 子供の頃から！ 保証ウウ人のハアアアアア！ 連帯保証人問題はアア！！ 我が国のウワツハツハーン！！ 我が国のツハアアアアア！」

「……………」

「我が国ノミナラズ！ 世界みんなの！ 日本中の問題なのよ！！ そういう問題ツヒョオツホーっ！！ 解決ジダイガダメニ！ 私ワネエ！」

「……………」

え……………何……………この人……………泣いてんの……………何を言うてはるんやろ……………意味がわからんわ……………泣きながら喋ったら舌を噛むで……………、と鮎美が困惑して思考停止になり、直樹と鷹姫も似たようなものだったけれど、翔子は号泣しながら演説を続ける。

「ブッフッフンハアアア！！ ツウーン！ ずっと苦勞してきたのよ！ だけど！ 変わらないから！ 変わって！ ワダヂが！ 当選して！ 文字通り！ アハハーンツ！ 命がけでイエーヒツフアー！ ……ツウ、くっ…芹沢鮎美！ あなたには分からないでしょうけどね！ 平々凡々とした人生を終了して！ 本当に、誰が苦勞しても一緒なのよ！ 誰がなっても！ なのに私がああ！ 苦痛して!!! この世の中を！ ウグツブーン！ ゴノ、ゴノ世のブツヒイフエエエー…ンン！！ ヒイエー…ツフウンン！ ウウ……………ウウ……………ア…ア…アツア！！ ゴノ！ 世の！ 中ガツハツハアン！！ ア…ア…世の中を！ ウ変エダイ！ その一心でええ！！ イヒー

フーツハウ。一生懸命生きて、私に運もない、私がクジに選出されて！ やつと！ 議員に！ なったんですうう!! だから、こんなイジメを、みんなに指摘されて！ 受け止めデーヒイツフウ!! アーハーアツアツハアアーン!! 運命が、受け止めて！ 一人の大人として社会人として！ 折り合いをつけましょうよ！ そういう意味合いで！ 自分としては30万円でキツチリ遠慮してるのに！ どうして私が除名されないといけないの?! と思いつながらも！ もっと大きな、目標オ！ すなわち！ 本当に、連帯保証人を、自分の力で、議員一人のわずかな力ではありませんけれども、解決したいと思っ
ているからこそオオ!! ご指摘の通り、平成22年度には395回食べました。30万1010円支出させて、いただきました。ごちそうさまでございました！ そのご指摘を真摯に真剣に受け止めようとするから！ 一人の大人として、何とか折り合いのつくところで折り合いをつけさせて…議員として活動させていたきたいからこそ！ たえに、たえて！ 何とか折り合いのつくように！ これは議会全体の問題に関わることもかもしれないという、恐れもあるから！ 他の先生方のご意見も真摯に受け止めなければいけない、そういうスタンスに立って、もうお腹の中では、たえに、たえて！ たえに…うっ?!」

号泣しながら演説していた翔子が突然に両手で口元を押さえた。

「うっ?! ううっ…ウエエエっ!」

翔子が嘔吐した。カレーピラフだった嘔吐物が翔子の指の間から噴き出してきて、ボタボタとコーヒーターブルの上に拡がる。

「おい、大丈夫か?!」

「無理に泣きながら喋るからやよ……」

鮎美が近寄って翔子の背中を撫でる。

「とりあえず気の済むまで泣きいよ。それから話があんにやったら、ちゃんと聴くし」

「うっ…うぐっ…うわあああ！ うわあああん！」

泣き出した翔子の背中を鮎美が優しく撫でているのを見て直樹が

言う。

「芹沢さんは優しいというか、女の子というか……」

直樹は鷹姫といっしょに嘔吐物を片付け、バケツに集める。破られた紙片と嘔吐物が混ざっていて、すぐにトイレに流すべきか、判断に迷う物体になった。そのうちに翔子が泣き止み、シャワーと鮎美の体操服を借りて着替えた。

「……ありがとう……ごめんなさい……」

再びソファに座った翔子は顔を伏せて下を向いている。鮎美が水を向けた。

「それで？ さっき話したかったことは何なん？」

「……私の……私の父は公務員だったの」

「らしいね、ほんで？」

「母も公務員だった。二人とも役場勤務で知り合ったのよ」

「へえ……」

恵まれた家庭やん、と鮎美は思ったけれど、翔子は続ける。

「人並みの幸せを手に使っていたのは、私が小学校5年生までのこと」

「「……………」」

「私の祖父、父の父は小さな会社を経営していたわ。けれど、台風の強風で作業場が倒壊して祖母と圧死してしまった」

「…………それは気の毒に……」

「祖父には事業での借金もあったけれど、生命保険とか会社の土地とか、いろいろで父には相続で260万円が入ってきた。……もつとも葬儀で215万円も使っていたから、実際に手元に残ったのは微々たるものよ」

「「……………」」

三人とも相槌の打ちようがないので黙って聴く。

「なのに、祖父が亡くなって三ヶ月を過ぎた頃、銀行から通知が来たわ。祖父は地元の商工会の社長仲間と相互に借金の連帯保証人になっていて、300万円が焦げついているから支払えということだったの。……ここまでの法律関係、わかりますか？」

「えつと……相続放棄ができる三ヶ月を過ぎた後になって、連帯保証

人やったことがわかったから、問答無用で嵐川さんのお父さんに継承された。しかも、主たる債務者が支払えなくなったから、代わりに払えと？」

「そうです。芹沢さん高校生なのに、本当によく勉強されていますね……すごい……。それで、父と母は、お金を工面して、なんとか支払った」

「それは……不幸中の幸いというか……」

「でもね、祖父が連帯保証人になっていたのは、その会社の件だけじゃなかった。銀行は相互に連帯保証人を頼ませることで、融資しやすく、融資を回収しやすくしていたのよ。結局、祖父は5件、合計3600万円の保証債務を負っていた。これが次から次へと、父へ請求が来たの」

「……………」

「中学へ入るとき、制服を買ってもらえなかった。近所を頼み歩いて、譲ってもらった制服と靴で入学式へ行った………お小遣いをもらったことは小学校を卒業してから一度も無いわ。芹沢さんは、当選する前、いくらお小遣いをもらっていましたか？」

「……うちは3万円……」

「……………年に？」

「……………月に……」

「月にかよ?! 多いな!」

直樹も驚いて言うと、鮎美は言い加える。

「大阪から不便な島に移住するさかい、バイトもできんやろしって父さんが配慮してくれたんよ。結局、たいして使う店もないし、すぐ当選したし」

「にしても3万か。大阪にいたときは？」

「1万円」

「まあ、普通だな」

「……………その普通が私も欲しかった」

「……………」

直樹も妹を亡くしたこと以外は、ごく平均的な中流家庭で育ったの

で翔子が少し哀れになる。

「公務員の共働きでも3600万円は、きついな」

「……それで、終わりじゃなかった」

「……………」

「他の金融機関からも請求が来て……家は差し押さえられた。……母さんは別の男の子供を妊娠して、出て行った。……父に100万円だけ、慰謝料を払って。私を置いて」

「……………」

「自己破産すればいいって思いますか？」

「ま……まあ、その道もあるし、任意整理とかさ」

「銀行が父の職業が公務員であることに目をつけていないと思います？ 自己破産してもクビにはならないけれど、カツコは悪い。それに自己破産するほどの巨額の請求をせず、払えそうな額を、ゆっくりジワジワ回収してくるの。母さんが出て行ってから、父もやる気を失って無気力な仕事ぶりになったそうよ。かわいそうだからってヒマな部署に回されて出勤だけして。そのうち、お給料も差し押さえられるようになった。給料の差し押さえって全額じゃないんですよ。法定控除額を引いた4分の1。法定控除額とは国に納める税金や社会保険料なんかよ。フフ……国は、それでも税金は取るって言うの。それで、残った額が20万円なら5万円が差し押さえられる。残りで生活しろ、生活保護は受けるな、ってわけ」

「……………」

「公務員だと年功序列で昇給するけれど、給与から法定控除額を引いた額が33万円以上になった場合、その全額が差し押さえられるのよ。だから、どんなに頑張っても月給33万円が天井、天井以下でも常に4分の1が引かれる……父さんがお酒に溺れるのに十分な理由だと思わない？ 私はアルバイトと奨学金で大学に入った。私のバイト代は差し押さえられないの。でも、奨学金は、まだ返済してない」

「……………大学院への資金は？」

直樹の問いに、翔子は力なく笑った。

「フフ……父へ借金を肩代わりさせた人たちは、ほとんど逃げた。会社を倒産させたから関係ないとか、自己破産したとか。法人って解散させれば、それで終わり。社長個人を連帯債務者にしていても、社長の愛人の財産には手が出せない。子にも。彼らが個人的に貯め込んだ財産には手が出せない。だから同じように、グレーゾーン金利の過払い金請求でも、うまく計画的に倒産させれば、追えない。法律の壁が邪魔する。あ……私の大学院への資金の話だったわね……借りたわ。たった一人、父を破滅させたことを申し訳なく思ってる年寄りと、その息子を連帯保証人にしてね」

「……………」

「連帯保証人が危険なこととは勉強しないとわからない。しかも、知っ
ていても相続で毘にハマる。単純承認だと、被相続人のプラスの財産もマイナスの借金も、そして保証債務もすべて負う。プラスの財産の範囲でのみマイナスも弁済する限定承認は手続きが煩雑なうえに、相続放棄と同じで死亡日から三ヶ月でおしまい。後から知ったマイナスでも、知った日から三ヶ月で放棄できなくなるし要件が厳しい！

……何よりね！ 何より！」

また翔子が大きな声を出して言う。

「何より、ひどいのは連帯保証人制度よ!! しかも！ 死んだ人が、何件、いくら保証債務を負ってるか、はつきりわからない!! 土地みたいに登記されない！ 預貯金みたいに検索できない!! 信用情報機関に登録されてない連帯保証人になってる借書まで有効なのよ!! マイナスがどれだけあるか、わからないのに、たった三ヶ月の熟慮期間で終わり!! 自己破産する人の10人に一人が連帯保証人になってたことで破滅してるの!! 世の中、間違ってる！ だから、やっと、やっと私に幸運が来たの！ ずっとずっと苦しかった私に！ やつとクジが当たって！」

「……………」

翔子が鮎美にすがりついた。

「お願いだから、私を殺さないで！」

「っ……殺すって……」

「死ぬわ！ 除名されたら死んでやる!!」

「……………そんな……………」

「小学校から何もいいことなかった！ 今まで！ やつと、やつと！
なのに、ほんの少し！ ほんの少し幸せだったのよ！ 何も法律に
触れてない！ 奢ってくれるっていうから食べたのに！ どうして
今さら?!」

「……………」

「死ぬから！ 除名されたら絶対死んでやる！」

「……………」

鮎美が困って黙ると、直樹が怒鳴った。

「なら死ぬよ!!」

「……」

「君が、どれだけ不幸だったかは知らない。けれど、だからといって君
の態度が間違っていることに変わりはない！ 死ぬ死ぬというのな
らば死ぬといい！」

「……っ……せ……芹沢さん……助けて……」

「たすけ……いや……あなた……都合良すぎ……今うちを脅迫しとい
て……」

「……助けて、おねがい……お願いします」

翔子が土下座してきた。一瞬、鮎美は既視感を覚えて静江の土下座
を思い出したけれど、翔子はより切羽詰まった顔で泣きながら足にす
がってくる。もうプライドも意地も捨てて、しかも見捨てるとう本当に
死にそうな顔で助けを求めてくる。

「あんななあ……、雄琴はんが、雄琴先生が怒るのも無理ないわ。せこ
すぎるねん、やることも、根性も」

「お願いします、お願いします、助けてください、お願いします」

「その土下座は660万、3960万のための土下座やろ」

「お願いです、助けて、死んじやうから、もう限界なの、お願いします」

「……………。なんで、あなたは自分を不幸にした制度を変えてやろうと
思わんの？ 連帯保証人制度、法律の壁？ 全部、うちら立法院が変

えられることやん」

「変えられるわけがない！ この悪法は明治以来、ずっとあるの！
変えようとしても絶対に銀行が邪魔する！ 国債を買ってる銀行が
邪魔するのよ?! 変えられるわけがない！」

「うっ……………たしかに経団連が……………」

「自民党と経団連が君臨していた政権なら、変えられなかったらうね」

直樹が得意げに微笑して言う。

「今現在、民主、共産、活力の3党で合同して、親しい友人や親族など
の第三者に保証人を求めることを禁止する法案が国会に提出される
見通しで可決されるはずだ。加えて金融庁と協議して、夏までには中
小企業、自営業者への第三者連帯保証の原則禁止という指針を各金融
機関へ通達する予定だし、あと数年かけて民法を大きく改正し、連帯
保証人制度そのものを見直す予定なんだ。知らなかった？」

「……………うそ？」

「まあ、法案の段階だからね。それを専門に研究している教授なら語
るかもしれないけれど、法科大学院の授業には出てこないかもしれな
い。けど、君が面談で各党の担当と真剣に政治について語っていれ
ば、きつと、知り得た情報だ。本当に君はバカだ」

「……………」

「芹沢先生の言うとおりだよ。なぜ、変えようとしらない？ まして、そ
の権限の一部を与えられたのに。見向きもしないで、目の小さな利
益と、手間無く歳費を得ることしか考えなかった。フ、除名されて死
んだ方がマシかもな」

「……………」

「けど、君の経験は素晴らしい観点を生んでいる。相続については、ま
だ具体的な改正案があがっていない。たしかに、被相続人が、どんな
保証債務を負っているか、相続人は調べようがない。これを金融機関
に土地登記のような制度で登録させ、登録していないものは無効、も
しくは相続されないと決めれば、大きく問題は改善するし、誰しもマ
イナスの財産なんて相続したくないし、しないわけだから限定承認も

今少し使いやすい制度にすることも重要だ。今までの自民党政権では、これは銀行や経団連が邪魔してできなかったかもしれない。けど、ボクら民主党なら可能だ」

そこまで言った直樹が急に優しく翔子の肩に手をおいた。

「ボクたち、民主党といっしょに頑張ってみないか？」

「……雄琴さん……」

翔子の顔に希望が浮かび、直樹が男らしく優しく微笑みかける。

「民主党に入ってくれるなら、君への懲罰はボクが何とかしてみる」

「え〜……雄琴はん、めっちゃ我田引水やん……」

げんなりした顔で言った鮎美へ、鷹姫が携帯電話の画面を静かに見せてきた。そこには石永からのメールが表示されていて、PC画面を見てくれ、とあったので鮎美は執務机の前に座った。すでに石永からのメッセージが届いていて、彼女を自民に抱き込め、とある。リアルタイムで石永の顔も映っていてゴーサインを出している。

「……」

さつきまで除名いうてたやん、コロツと態度が変わるなああ……どう言うて抱き込むねん、好きですとでも言うんか……この手、雄琴はんなら使えるけど、うちやとダメダメや……抱き込め言われても無理や……、と鮎美が微妙な顔をしていると、ネット回線で鮎美の顔もウェブカメラを通じて見えている石永が再びメッセージを打つてきて、懲罰動議の発起人は私です。その私から議長へとりなしますから自民党に入りなさいと言ってくれ、と来た。

「……」

卑怯や、ゲスや、脅して入党させんのかいな、まあ雄琴はんも同レベルやけど、と鮎美が迷っていると、どんどんメッセージが来て、早く言うてくれ何とかする、とある。

「……あーっ……えっ！　うちが懲罰動議を言い出したんやから、うちから議長に話す方がええよ。うちから話してあげるから、嵐川はん、安心して、うちに任せい。……」

鮎美は勧誘の文言が恥ずかしくて言えなかった。どうしても人としての羞恥心が騒いで政党政治家に徹しきれない。それでも翔子は

振り返った。

「芹沢さん……助けてくれるの?」

「女の子の泣き顔は見とうないからね。あんた除名されたらホンマに困るんやろ?」

「はい、お願いします!」

「民主党は参議院で90議席を占めている。現在、最大だ。君が民主党に入ってくれるなら、他の民主党議員も懲罰には賛同しないはずだよ」

「……………」

翔子が直樹を振り返り、それから再び鮎美を見る。完全に迷っている顔で、どちらの党に入るのが自分にとって最大に有利なのか、不安そうに考えている。石永からメッセージが来て、自民党も59議席ある。何より私が発起人だ。君が一から自民党で勉強し直すと反省したから許したと言えば無所属の議員も賛同しやすい。民主党では雄琴のスタンドプレーにしかならないぞ、と長文だったので、それを読む鮎美の目の動きで直樹が気づいた。

「芹沢先生、何か見てるね?」

「うっ……」

「なるほど、石永先生が生きたカンペだったわけか。お久しぶり。見えてますか?」

直樹が近づいてきて画面に向かって手を振ると、石永は音声送信をオンに変えて言ってくる。

「元氣そうだな」

「おかげさまで」

「……。お前と話すのは、どうでもいい。いずれ自民が盛り返せば、こちらに来る気だろうからな。芹沢先生、画面とカメラを嵐川さんへ向けてくれ」

「はい」

鮎美がPCを動かした。翔子と石永がネットを通じて対面する。

「嵐川翔子さん、失礼ながらお話は聴いていた。私は石永隆也、自民党

の2世議員で父は大臣も務めていた。悔しくも今は議席を失っているが、衆議院議員を2期務めている」

「…は…ははじめまして…」

「率直に言おう。自民党に所属してほしい。総選挙では負けたが、参議院では自民党も59議席ある。何より懲罰動議の発起人は芹沢先生だ。嵐川さんが反省して一から自民党で勉強し直すと言ったから許したとなれば、無所属の議員も賛同しやすい。民主党では雄琴のスタンドプレーにしかない」

「そうかな？ 民主党は90議席、過半数はないけれど3分の1は軽く超えてる。懲罰での除名には3分の2が必要だよ」

「この男は民主党内でも、それほど信頼されているわけではない。いったん懲罰動議がなされれば、今までのことは世間の知るところとなる。そうなれば、はたして除名しないという民主党の態度が国民に、どう映る？」

「彼女は今日まで不幸に耐えてきた。そのために小さな失敗をしたけれど、それは不法行為じゃない。過去に自民党で、もつと大きな金額を誤魔化した人もいれば、民主でも自民でも不倫もあった。何より彼女を卑屈にさせた連帯保証人制度は民主が改革する。彼女を旗印にしてね。そして参議院の議長は民主党の竹村先生だ。芹沢先生は駆け出しの一年生にすぎない」

「芹沢先生は評判がいい。歯切れもいい。何より女性議員同士、男の出る幕はない。彼女たちが和解したというストーリーの方が説得力がある。発起人が取りやめたとなれば、懲罰動議そのものが無くなり、世間にも知れずに済む」

「……………」

男同士の熱い討論を鮎美たちは静かに見守る。

「それは、どうかな。ここまで燃え上がった火だよ。芹沢先生が尻込みしても、誰かが発起人になるさ。そして、彼女が自民に入るなら民主の90議席は確実に敵対する」

「それは自民も同じことだ。彼女が民主に入るなら全力で戦う」

「っ…」

わずかな希望を抱いていた翔子の顔が、また絶望の淵に沈み、小刻みに震えている。どちらへ所属しても対立陣営が攻撃してくるなら、もう望みは無いように思えた。鮎美は可哀想になって背中を撫でた。そして二人の男に言う。

「二人ともひどいやん！ ぜんぜん嵐川はんのこと考えてない！ 利用することしか頭にないやん！ そんなんやったらカレー奢らせてメモってたのと同じや!!」

「……………」

「許すなら許すで、気持ち良う、さっぱりしよ！」

「だが…」

異口同音しかけて、ネットを通じている石永が直樹に譲った。

「二つ問題があるよ。一つは、どの党に所属するか。このまま無所属では通らない。もう一つは、さつき署名が集まった書類を破いてしまったことだ」

「あれは……………」

鮎美は少し考え、閃いた。

「あれは破ったんやない。ちよつと体調が悪くて吐いてしもて、そのとき汚れて、どうにもグチャグチャになってしもただけや。って、ここにいた全員が記憶すればええやん。証拠もあるし、事実の一面や」

「なるほど…………けど、所属政党は、どうする？」

「ジャンケンで決めよ。うちと雄琴はんでジャンケンして勝った方の党へ入る」

「ジャンケンって……………」

「もともとクジ引きで選ばれたもんやん。恨みっこ無し、勝っても負けても、気持ちよく許す。悪いのは連帯保証人制度、嵐川はんは、うちと雄琴はんの二人で協力してフオローする。明日の朝にでも、みんなに詫び入れて話してみよ」

「…………うーん……………」

直樹が悩み、画面に映る石永を見る。石永も迷っていた。

「ジャンケンか……………」

「参議院の一議席を……」

「うちの懲罰動議の話、できれば無い方が参議院のみんなも国民の手前、ええんとちやうの？　今なら議事録も無し、全部丸くおさまる！」

「「そうだな……」」

「よし、決まりや！　いくで、ジャンケン！」

鮎美が大きく振りかぶり、勢いに流され直樹も構える。

「ポンっ！」

「……くっ……」

直樹はグーを出し、鮎美のパーを見て呻いた。

「うちの勝ちよ♪」

「……わかったよ」

直樹が諦め、竹村へ説明に行き、まだ震えが止まらない翔子は鮎美と鷹姫が部屋まで送った。途中ですれ違った他の議員にも二人が和解したことがわかるように肩を抱いて廊下を進んだので、明日の朝までにはかなり知れ渡るはずだった。

「芹沢さん、本当に、ありがとうございます」

「もう、ええんよ。うちも同じ立場やったら世の中全部嫌いになりそうやもん」

「ありがとうございます。この御恩は一生忘れません」

涙ながらに礼を言う翔子を休ませて、鮎美は鷹姫と自室に戻った。鷹姫が問うてくる。

「芹沢先…、鮎美、さきほどのジャンケン、勝つつもりで挑んだのでしよう？」

「あ、わかる？」

「わかります。牧田さんに習ったことを応用して、雄琴先生に考える時間を与えず、とつさの防御心理を利用してグーを出させた」

「何でも勉強したことは使わんとね」

鮎美は得意げに微笑んで、翔子を書いてくれた入党届を執務机の引き出しに片付けた。

1月7日 チョークスリーパー

翌1月7日の金曜日、もともと週末ということもあり鮎美たち改選された新参議院議員と直樹たち非改選組がそろって朝食を摂りながら、来週に向けての連絡事項を受ける朝食会議があり、竹村議長の計らいで、その最期に翔子による口頭陳謝が挿入されていた。

「最期に、嵐川翔子先生から、みなさまへお話があるということですよ」

「っ…はい…」

翔子は立って陳謝する予定だったのに、座ったまま動かない。

「………」

左右に座っている鮎美と直樹を見ると、翔子の膝がガクガクと震えていて、とても立てそうにないとわかった。まるで寒さに震えるウサギのように肩や手も震えているし、すでに泣いていた。目前に置かれている朝食には一口も手をつけていないし、鮎美が優しく腰をポンポンと叩いても、やはり立てないでいる。鮎美が代わって立ち上がった。

「二昨日より、みなさまへご迷惑をおかけしておりますこと、お詫び申し上げます。ご本人が大変に動揺しておられますので、代わって事情を説明いたしますこと、お許しください」

「おい、本人が詫びるんがスジやろ!!」

総理大臣にさえ野次を飛ばした大阪の男性議員が遠くの席からでも、よく聞こえる声で言ってきた。鮎美は関西弁に関西弁で応じるとケンカになりやすいので、標準語で応じる。

「少し私自身のことを振り返って、初めて多くの人の前で話したのは、市議選の応援演説でしたけれど、恥ずかしながら緊張のあまり腰が抜けて立てなくなり、秘書に助けてもらいました。私たちクジ引きで選出された者は、その経験や度胸もそれぞれです。総理大臣にさえ物怖じされない度胸ももんもおられれば、人前で話したこともない人間もあり、嵐川さんも26歳の女性として、居並ぶ参議院のみなさんの前で

萎縮するのも当然かと思えます。ここにいる過半数の人が、はじめの演説なり、挨拶なりで大変に緊張されたのではないでしょうか？」

鮎美の言葉で直樹たち3年の経験がある議員も3年前の自分を思い出している。ごく一部には社長であったり教師であったりして、人前で話すことに慣れている者もいるけれど、多くが不慣れで緊張したことを鮮明に覚えていた。

「演説や挨拶でも、はじめには緊張します。それやのに、自分が除名されるかもしれない立場で陳謝するのは、本当に怖いもんですよ思いますから、まず私から事情を説明させてください」

鮎美が昨夜のことを翔子のプライベートなことも含めて話しているき、連帯保証人制度と銀行の悪辣さによつて、翔子が苦しい青春を送ってきたこと、今も奨学金の返済も含めて苦労していることを語った。

「このような次第ですが、今は嵐川さんも自分の態度を深く反省し、自民党で一から勉強していきたくないと誓ってくださいましたので、どうか、ご理解ください」

「なんで自民なんや?!」

「それは…」

「ボクも民主へ誘いましたよ」

直樹も立ってくれる。

「芹沢先生とボクで話し合い、結果として自民党でという話になりましたから」

「コウモリは黙つとれ!」

「野次馬も黙つてくれると、うれしいんですが」

「何をっ?!」

「静粛に、なにより嵐川くんの声を少しでも聴きたい。発言できますか?」

議長の竹村が促してくれる。鮎美と直樹は翔子を見たけれど、まだ立てそうにないので左右から腕をもち、支えて立たせた。

「翔子はん、少しでもええから、何か言うて」

「っ……も……もうしわけ……ありません……でした……は、反省して……
おります……ゆるして……ください……」

支えられたまま翔子が震える声で謝り、頭を下げた。昨夜は一睡もしていないようで憔悴しきった顔をしている。ずっと不幸だった青春のあとで、ようやく手に入るかもしれない3960万円が消えるかも知れない恐怖は人間をここまで弱らせるものかと、見ていた全員が感じた。鮎美は可哀想になって同情の涙を滲ませて言う。

「懲罰動議を言い出した私としては、彼女の陳謝を受けて、一度の失敗は許してあげたいと考えます。みなさん、どうでしょうか？」

「……」

翔子が送ってきた人生を聴くと、わずかに30万円の卑怯であつても合法的な接待を受けたことと、卑屈で狡猾な態度も仕方ないかと全員が納得しつつあるけれど、また野次が飛んできた。

「にしても、なんで自民がもっていくんや!」

「うちといっしょに勉強してくれると決意していただきましたから!」

「芹ちゃんがもっていくんか?! そんなに手柄がほしいか!」

「手柄で……そんな風に、人が人を利用する。そんな発想そのものが今日まで彼女を苦しめてきたんです! まして弱つてる人間を餌食にするやなんて! うちが純粋に翔子はんが可哀想やから、うちが保護したいんや!! 文句あるか!!」

もう倒れそうになっている翔子を抱きながら鮎美が言うと、会場は静かになった。結局は関西弁に関西弁で応じてしまい、かなりケンカ腰になったけれど、その分だけ熱意は伝わったし、今まで鮎美をただ最年少だから目立っているだけの高校生と思っていた周りの印象も変わった。議長の竹村がしめてくる。

「芹沢くん、太田くん、議場外とはいえ品位は保つように」

関西弁になれていない地域の議員には二人のやり取りはヤクザのケンカに感じられるので竹村は軽く注意して終結と解散を告げる。

「私としても嵐川くんの身の上は、とても気の毒に感じます。今回の

ところは、さきほどの陳謝で咎なしとして、若い人の活躍を期待します。では、これにて朝食会を終わります」

議員たちは散っていき、鮎美は鷹姫へ翔子のことを頼むと、研修に出席したものの官僚が出欠確認をとった頃合いを見て廊下に出た。同じように出てきた議員が何名もいる。その中の若い議員が声をかけてくる。

「お、鮎美ちゃんもサボリ？」

「仕事です。あんた、まさかマジでサボリなん？」

「オレもサボりじゃないって。なんか田舎から峠に道路を早く造ってくれて話があつてさ。たしかに、あそこが通れるようになると遊びに行くのも、めっちゃ便利だし。知事も来るからオレも顔を出せってさ」

「立派な仕事やね。頑張ってください」

研修そのものは資料を読めば理解できる内容なので、地元から陳情などのある議員たちは各省庁へ向かう。鮎美も待ち合わせしていた石永と直樹、夏子、それに数名の民主党衆議院議員たちと合流して環境省へ出向いた。夏子が担当官僚に琵琶湖の環境保全について必要な予算を確保できるよう頼んでいるのを、わかった顔をしながら聴いているけれど、実は内容は知らない。その場にいることが大事なのだと石永に言われているので黙って立ち会い、下げるべきときに頭を下げてから環境省を出た。

「こういうときって自民と民主って協力するんですね」

「地元利益だからさ」

直樹の頭を夏子が資料で軽く叩いた。

「琵琶湖の歴史は人類より長いし、淀川水系は近畿経済の生命線なの。さ、次いくよ、次。私が来てる新幹線代は県の予算なんだから東京にいられる時間は、まさに時は金なりよ」

「オレは自腹だぞ」

石永が言い、鮎美が問う。

「行ったり来たり石永先生も大変ですね。今は議員やないんやから休暇ってわけちゃうんですか？」

「次に向けての布石なんだ」

「なるほど……」

「鮎美ちゃん、早く回らないと、鮎美ちゃんの件まで手が回らないかもよ」

「うっ、そんな……急ぎましょう！ 早く！」

その後も各省庁を忙しく回り、正午になっても昼食をとりながらの官僚との話し合いが始まったけれど、鮎美のスマートフォンが振動し、着信表示を見ると畑母神だったので頭下げて退室してから廊下で受話する。

「もしもし、うちです」

「今、大丈夫かな？」

「：はい。少しなら」

「もう噂は聴いていてくれるだろうけど、私は都知事選に立候補する」

「そ…それは、…えっと……おめでとうございます」

「ははは、その言葉は気が早いよ」

「そうですよね。頑張ってください。応援してます」

「うん、ありがとう。そこで本当に応援を頼みたいのだが、引き受けてもらえないか？」

「え……うちが？ ……うちは都民ちやいますけど？」

「都知事選ともなれば、必ずしも応援弁士は都民に限定されるわけじゃない」

「けど、たしか都知事選の日程って国会にかぶりませんか？」

「早く終わった日と土日に関心したい」

「……………」

鮎美は学校生活と県知事選が交錯した忙しかった日々を遠い目で思い出した。あれを、もう一度、しかも今度は通常国会と都知事選でやるのかと思うと、今から疲れてくる。学校の授業だと居眠りできるけれど、できれば国会では居眠りしたくない。しかも選挙が終わるまで、ずっと東京にいることになりそうだった。

「忙しいだろうけれど、なんとかお願いしたい」

「……………」

「頼む」

「……わかりました。調整します」

「ありがとう！」

「海自のトップやった人に、こうまで言われたら断れませんかよ。調整は、うちの牧田と畑母神先生の秘書で、お願いします」

鮎美は電話を切ってから気づいた。

「あ……畑母神先生は自民やない……日本一心党や……ええんかな？

石永先生は、ええ言うかもしれないけど……党全体としては、どうなんやろ……。自民と日本一心党は協力してたけど、今は議席が一つもないから……」

困惑しつつ、トイレに行きたくなったので女子トイレに入り、下着をおろして便座に座った。そのタイミングで再び着信があり、それは谷柿からだった。少し迷ったけれど、自民党総裁からの電話を無視できないので、向こうから見えるはずはないと羞恥心に言い聞かせてから受話する。

「もしもし、芹沢鮎美です」

「今、大丈夫かな？」

「はい」

総裁からの電話に鮎美は緊張して受け答える。要件は嵐川のことだった。

「彼女には、こちらで選任した秘書をつけますよ。いいですか？」

「はい、もちろん。あ、でも……できれば、女性秘書の方が良いかと……数が少ないと聞いてますけど」

「芹沢先生は配慮ができる人ですね。そうします。嵐川さんのこと、よく頑張ってくれたそうで、ありがとう」

「いえ、うちは勢いだけで……」

「これからも、頼みますよ」

谷柿が電話を終えようとしたので、鮎美は慌てて訊いてみる。

「い、いただいたお電話に質問で恐縮なのですが、一ついいですか？」

「どうぞ」

「実は畑母神先生から都知事選の応援を頼まれました。つい深く考えず返事してしまったのですけれど、自民党と日本一心党の関係は今は、どうなのですか？　うちが…、私が引き受けて問題ないのですか？」

「畑母神先生と親交があったのですか？」

「はい」

「どういうキツカケで…ああ、芹沢先生は石永先生と同じ地区でしたね。彼の紹介ですか？」

「はい、そうです」

「石永先生は元気にしていますか？」

「はい、今もいっしょに経産省へ出向いております」

「それは立派なことです。……ただ…」

「都知事選の応援に立つことは、芹沢先生の気持ち次第で判断いただいてかまいませんが、あなたは言葉の勢いが強いと聴いています。あまり過激なこと、とくに日本が核武装するだとか、そういった発言は厳に控えてください。男性議員が言うより、女性議員が言う方が海外に与える影響は大きいですから」

「はい、わかりました」

「あと、畑母神先生の応援に立つということは自民党内でも右寄りの議員だと、誰から見なされるといいうことは、わかっていますよね？」

「…はい……わかります」

「どうか発言には気をつけてください。お願いしますよ」

「はい、ありがとうございます」

電話を終えると、ずっと我慢していた生理的欲求を解放する。下着をおろして便座に座っていたことで下半身は条件反射で生理現象を進めようとしていたのに、音を聴かれたりしたら恥ずかしくて二度と顔を合わせられないので、我慢に我慢を重ねていた。

「はあああ…」

蕩けそうな開放感に浸ってから、話し合いの行われている部屋に戻ったけれど、遅くなったので鮎美は昼食をとり損なった。午後からも夏子たちと省庁を回る。政治家だけで交渉する場合もあれば、もとの要望をあげてきた団体の代表などと臨むこともあり、鮎美は何の団体かも、よくわからない人たちとも協力している顔をして過ごした。そして、いよいよ夕方近くになり鮎美が頼んでいた件の時間もとってもらえた。文部科学省の前で学園と教団の代表者である屋城たちと生徒代表としては陽湖が東京に出てきていて合流する。他の議員たちにとっては見知らぬ存在になるもの、お互いの協力ということで付き合ってくれて、学園に大学を設置したいという申請もできた。すべての予定が無事に終わった夏子が歩道で大きく伸びをした。コートを着ているも伸びをしたことで彼女の乳房が強調され、何人かの男性議員と鮎美は視線を送ってしまった。

「鮎美ちゃん、またバストタッチする?」

「冗談はやめてくださいよ。あ、週刊紙の件では、ご迷惑をおかけしました。お詫びするのも、忘れてて、すみません」

「いいよ、いいよ」

「大学設置の件も、みなさん、お付き合いありがとうございます」

「」「」「ありがとうございます」

屋城たちも礼を言う。夏子たちは頷いた。

「県内に大学が増えるのは、いいことだからね。けどさ…」

夏子は鮎美にだけ聞こえるように、鮎美の首を抱いて耳元に囁く。

「なんか怪しい教団じゃない? サリンとか琵琶湖に流さないでよ」

「そんな教団ちやいますって。マジで、いい人らですよ。うちの母校を悪く言わんといってください」

「ごめん、ごめん、冗談だって。ね、金曜だし、これから地元に戻るんでしょ?」

「はい、そのつもりですよ」

「新幹線、予約とった?」

「いえ、まだ」

「じゃ、いつしよに帰ろう。民主の衆議院議員さんたちは13日に党大会あるから、もう一泊するって。雄琴先生と二人じゃ淋しいし、鮎美ちゃんたちと、いつしよに帰りたいなア」

「また、密談とか言われんとええけど」

「石永先生もいるし、大丈夫だって」

「それは、たしかに」

東京駅に向かうと、やはり多くの国会議員が地元へ戻るために新幹線を待っている。その中に鷹姫と詩織もいて合流した。

「鷹姫、翔子はんの様子、どうやった？」

「はい、もう落ち着かれています。週末は地元に戻らず自民党本部で指導を受けるそうです」

「それがええやろね」

「鮎美先生、テレビ出演の依頼が来ています」

「テレビ……どんな？」

「生放送の討論番組です。深夜の」

「あく……あれか……。石永先生、どう思います？」

「牧田さん、議題は？」

「前半は参議院制度について。後半は売春の合法化について。ディレクターが、ぜひ鮎美先生に来て欲しいと言っていましたよ」

「それ絶対に仕組んだ」「な！」「やろ！」

「ディレクターとドイツにいたとき付き合っていたので。とりあえずOKで返事しておきましたけど、ダメですか？」

「勝手に……日程調整できるんやろな？」

「お任せください」

「はああ……ほな、また来週な」

「来週は火曜日から東京でしたね？」

「そや。月曜日は成人式があるねん。今回は、うちが祝われる側やから来賓やないけど、答辞は陽湖ちゃんといっしよにするから、研修は欠席やな」

「資料はまとめておきます。では」

詩織と屋城たち教団幹部は東京に残り、陽湖や鮎美たちは新幹線に乗る。また盗撮されても問題がないよう3列シートを対面させ、窓側から陽湖、鮎美、鷹姫と同級生で並んで座り、対面させたシートには直樹、夏子、石永が座った。夏子が男に挟まれて言う。

「私と石永先生だけ撮れば不倫に見えるかもね」

「安心してくれ。オレは週刊紙の中ではホモだ」

「うわあ……可哀想。ホモ疑惑も痛いね」

「うむ、だから雄琴と並んで座るのは避けたい」

「ボクもホモ疑惑は勘弁願いたいな」

「あの……」

鮎美が迷いつつも指摘する。

「男性同性愛者のことはホモではなくゲイと言われる方が、政治家として言葉の選び方に合うと思います。……僭越ながら」

「鮎美ちゃん、細かいね」

「……言葉は選べと、指導されてますから」

直樹が自分のスマートフォンで予定を確認しながら言う。

「異常者は異常者だよ、どう呼ぼうと同じだ」

「……」

「シスター鮎美、お昼、まだなのですよね？　これ、いかがですか？」

話題を変えるために陽湖が浅草で買った菓子を勧めてくれた。

「それ、お土産なんちゃうの？」

「いいんですよ」

陽湖が開封してまで勧めてくれるので鮎美は食べた。

「みなさんも、どうぞ」

「「ありがとうございます」」

「シスター鷹姫も、どうぞ」

「……ありがとう」

遠慮していた鷹姫も食べる。鮎美が食べながら言う。

「浅草、どやった？」

「私たちはお寺には、あまり入らないので周辺観光だけ……」

万が一にも文科省への集合時刻に遅れたくなかった陽湖たちは朝から東京へ来ていて、少し時間を潰していたら良かった。鮎美が口の中の咀嚼物を嘔きそうになりつつ、なんとか飲み込んでから突っ込む。

「浅草に行つて寺に入らんかったら、何の意味があるねん！」

「これを買いたかつたんですよ。たくさん買ったから、どうぞ遠慮無く」

「ボクはカートが来たらビールでも買いたいたいところだけど、立場もあるからねえ。それに未成年の前で…、いや、18歳の子たちの前で飲酒というのも、議員として微妙だし。あ、月曜には成人式だったね。ボクは井伊市の高校に来賓で出向くけれど、加賀田知事と芹沢先生は？」

「私は午前朽木市、午後阪本市の高校が入つてるかな。あと夜には高校に通つてない子たちの成人式があるよ」

「さつきも言うたけど、うちは来賓やなくて今回は祝われる側だよ。けど、学園内の講堂やなくて、阪本市にある立派な礼拝堂でやるらしいわ」

「主な来賓は？」

「西沢先生が来てくれるねんて」

「ああ、共産党は宗教色がゼロだから、いいかもね」

「そういう人選の配慮もあるんや…：…なるほどなあ。あ、答辞、陽湖ちゃんといっしょにするんやけど、原稿、もう決まった？」

「はい、ほぼ決まっています」

陽湖がカバンから原稿を出して見せる。

「うくん、無難に普通やな。政治活動でも無いんやから、もっと面白い感じにせん？」

「面白い感じですか、どんな風に？」

「せっかく二人なんやからボケと突っ込みに分けて。鮎美です、陽湖です、二人合わせて、ピチピチシスターズです。みたいな始まりにすんねん。それなら退屈な話にならないから、みんな聴くよ」

「えく…：…漫才じゃないですか、それ…：…イヤですよ。一応、宗教色は

薄いですけど、礼拝堂でやるわけですよ。保護者だけでなく近隣から信徒のみなさんも祝いに来てくださるんですから」

夏子が口を挟んでくる。

「漫才といえば、今度の都知事選、元お笑い芸人で宮崎県知事だった南国原先生と自衛隊のトップだった……えつと……」

「畑母神先生です」

「そうそう。二人とも変わった名前よね」

「そこかい！」

「民主は南国原を推すみたいだけど、自民はどうする気？」

夏子の問いは石永に向けられていた。石永は顎に手をあて考え込む。

「オレ個人は畑母神先生を応援しているが、自民党としては半々かな。こちらから見ると地域が遠いから、あんまり関係ないというのが正直なところだ。むろん、関東の先生方は関わるだろうがな」

「あ、言い忘れてましたけど、うちに畑母神先生から応援要請が来て、とりあえずOKしたんですけど、どう思いはりますか？」

「反対♪ 鮎美ちゃんは私を応援すべき」

「これで数理経済学者にして知事だからな……我が県の。それはともかくオレ個人は賛成だ。手伝えることは手伝うよ」

「ありがとうございます」

鮎美たちは駅弁を食べながら新幹線が静岡県に至までは色々なことを話していたけれど、やはり疲労感も強く全員が眠ってしまい、井伊駅で降りるはずだったのに寝過ごしてしまった。

「しまった……」

直樹が起きて動き出した新幹線の車窓から遺憾そうに井伊駅の看板を見ている。鮎美や夏子たちも起きた。

「あ……ってことは……」

「京都まで行くね。これ。はああ……」

夏子がタメ息をついたので石永が厭味を言う。

「誰かさんが新駅建設をストップしたからな。京都まで行かないと戻れない」

「寝過ごしたのは全員の責任だし、私が止めて無くても、まだ完成してないよ」

しばらく新幹線が走ると、三上市の新駅建設予定地を通過した。鮎美が真つ暗な外を見て言う。

「ここを加賀田知事はんと通るなんて微妙な気分やわ」

「そうね。御蘇松先生は元気にされてる？」

「……うちは知らんけど……石永先生は知ってはる？」

「ああ、父のところへは訪問があった。もう年齢もあるから表立ったことはせず、のんびり過ごそうだよ。やれることは、やった男の余生だ、ある意味、羨ましい」

「私たちが御蘇松先生の年齢になるには、まだ30年、40年、鮎美ちゃんたちなら、もっと先の話ね。2060年くらいかな」

「そのころ、うちの日本は、どうなってるんやろ。数理経済で予測つきますの?」

「変数が多すぎて無理。その頃までに、またインターネットや携帯電話話網みたいな技術的イノベーションがあるかもしれないし、悪いことなら世界大戦もあるかも、人口だけでも予測値に過ぎなくなる。さすがにペストや結核みたいに人がバタバタ死んで人口半減なんて事件は想定しないとしても、小さな戦争なら、ちよこちよこやるし。通貨価値だって、どうなることやら。神のみぞ知る世界よ」

「神は人を愛しておられます。正しく生きれば必ず良いところへと導かれるでしょう」

「」「」「」「」

陽湖がもたらした沈黙を鮎美が意図に破る。

「鷹姫、もう島に戻る時間ないかな?」

「はい、宿泊先を探しますか?」

「そうしてくれる。うち、温泉がある旅館がええな。差額は払うし、陽湖ちゃんもいっしょに泊まろう」

「私は……お金が……」

「石永先生、うちの政治資金から陽湖ちゃんの宿泊費を出すのは、あかん?」

「ぎりぎりOKだ。陳情の帰りに、こちらの責任で遅くなったという形だから」

「やった。決まり」

「いいなア、私も、いっしょに泊まりたい！ いっしょに予約して、宮本さん」

「はい。……民主党の者と宿泊するのは、問題では？」

鷹姫の疑問に石永が答える。

「逆に、深夜におよぶ会談ということで経費としては通りやすい。別に戦国時代ではないのだから、いっしょに泊まったところで問題はな
いよ。オレと雄琴の分も予約してくれないか、もう京都からだと三上
駅止まりの列車ばかりになる」

「え〜……ホモと泊まるのか……ボク、危険なんじゃ……」

「お前、露天風呂でチョークスリーパーかけてやる」

「母さんに帰れんくなったメールしとこ」

「お母さんはシスター・鮎美が帰宅すると想って、はりきって夕食を
作ってらしたのに……」

「明日の昼か、夜にでも食べるよ。鷹姫、明日の予定は？」

「午前中は六角市教育委員会主催の新年餅つき大会へ訪問される予定
です。お昼は同じく六角市の老人会が行う新年会に呼ばれており、午
後からも三つの新年会があります」

「はああ……政治家が新年会、忘年会に顔を出す習慣、なんとかならん
の？」

「それは、どっちかという投票で当選したわけじゃない鮎美ちゃん
たちの方が、なんとかしやすいかな」

「だが、そういった市井の場へ顔を出すことで市民の声を聴くことが
できる。おろそかにしてはいけない」

「さすが二世議員は言うことが違う」

「阪本市の石山寺近くにある温泉旅館であれば、朝食付きで予算内、全
員が宿泊できる空きがあります。予約しますか？」

「決まりね。予約して」

京都駅で降りた6人は在来線で坂本駅まで移動してタクシーに分

乗して旅館に着き、鷹姫に予約を任せたことを後悔した。

「鷹姫……たしかに全員で、いっしょに泊まるとは言ったけど……」

鮎美は予約されていたのが一番広い部屋で最大15人が泊まれるものの、男女いっしょの一室だったので戸惑う。夏子も驚いた。

「このメンバーで大部屋を予約して六人で泊まるって発想になるなんて……」

「すみません。やはり、自民党と民主党で部屋を分けた方がよかったですか?」

「ちやうて……こういうときは、男女別にするねん。小学校のキャンプ合宿やないねんから」

「申し訳ありません。以後、気をつけます」

「優秀そうな秘書さんにも意外な穴があるね。フロントに変更できないか、訊いてみるよ」

夏子は旅館のフロントに問い合わせたけれど、もう空き部屋は無かった。

「はああ……ま、いいか。遅い時間だし、今から別の旅館に行くのも大変だし、この二人は立場があるから変なことしないでしょ」

「……………」

直樹と石永は黙って頷いた。鮎美がスマートフォンで他の旅館を調べながら言う。

「他も無いなあ……前から思ってたんやけど、琵琶湖の周りって温泉が少ないことないです? 他の県やったら、有名な温泉地でのうても、調べたらいっぱいあるのに」

「火山が遠いからな。このあたりから、もっとも近い火山でも岐阜県と長野県にまたがる御嶽山まで300キロほどある。火山が無ければ温泉は少ないんだ。琵琶湖の周りだけでなく県内の山地でも温泉は少ない。地熱があるから少しは出るけど。県の観光政策上の課題ではあるが、逆にいえば全国的に見て災害が少ない地域でもある」

石永の説明を夏子が補足する。

「その分、県の防災意識も低いというか、経験が無いかな。台風だって

直撃しやすい和歌山県とか高知県に比べると、上陸して弱まってからしか来ないし。ま、それはともかく、私はいいよ、男女いっしょでも」

「うちもええけど、陽湖ちゃんは……大丈夫？」

「みなさんが、いっしょなら安心ですから」

「ほな、もう遅いし、温泉に入る」

荷物を置いて、すぐに露天風呂に入った。裸になった陽湖が手と胸と股間を隠しているのを夏子が珍しそうに言う。

「月谷さんは恥ずかしがり？　ここ、混浴じゃないから、男連中は来ないよ」

「いえ、ちよつと……いろいろ……」

陽湖は鮎美の性的指向を知っているの、なんとなく全裸を鮎美の視線に晒すのは抵抗があった。夏子と鷹姫は何も気にせず、どこも隠さない。鮎美は興奮しないように自制しつつ、湯に浸かった。今は他の客はおらず鮎美たちだけだった。

「チヨークスリーパー！」

「うわっ?!　うぐっ！」

男湯から叫び声が聴こえてくる。遅い時間なので男湯の方も他の客はいない様子だった。

「ふはははは！　チヨークスリーパーはな、前腕と二頭筋で絞めるのがコツだ！」

「ううっ！　あたって、あたって、あたって！　ケツに何かあったってるかー！　キモいキモい！　ギブギブ！　離せよ！　マジでホモか?!」

「うるさい！　お前を3年間育てるのに、いくら党費がかかったと思う?!　一言もなく出ていきやがって！」

「ううっ、すいません、すいません！　キモいから離して！　ごめんなさいー！」

熱めの湯だったので鮎美は上半身を揚げる。

「男はアホなことやってるなあ……」

「石永先生は体格がいいから、モデル体型の雄琴先生じゃ一方的ね。あの二人の裸なら、ちよつと見てみたいかな」

「っ……な……」

夏子の発言に陽湖が驚いて真っ赤になったけれど、もともと男性に興味をもっていない鮎美と鷹姫は何とも思わない。

「チヨークスリーパーか……鷹姫、ちよつと技、かけさせて」「どうぞ」

道場で稽古することが日常である鷹姫は鮎美に向かって無抵抗になる。鮎美は背後へ回った。

「チヨークスリーパーは後ろからやねん」

鮎美は右腕を鷹姫の首の前に巻きつけると、軽く絞めながら左腕で右手の甲を押さえて絞めを補強しつつ、左手で鷹姫の後頭部も押さえる。

「絞め技の一種ですか？」

「そうそう。小学校のとき、よくプロレス技は真似したもんやわ」

「この絞め技は道着がなくても、できますね」

「シスター鮎美、シスター鷹姫、お風呂で、そんなことしなくても……」

鷹姫は純粹に技を受けているけれど、鮎美は明らかに興奮してきていて顔が赤い。裸の鷹姫を抱きしめる喜びを感じているとしか思えなかった。

「ちよつと力を入れてみるから、抵抗してみてや」

「はい。……うっ……くっ……」

鷹姫は絞め技から逃れようと首に力を入れ、絞めている鮎美の右腕を両手で外そうとしたけれど、技が決まっていたので困難だった。

「さすがの鷹姫も、ここまでキメた後やと無理なんやね」

「……うく……うう……」

それでも降参せずに抵抗を試みている鷹姫の手足から力が抜けていく。ぐったりとした鷹姫の身体を抱きしめているのも快感で鮎美は離れたくなかったけれど、失神させてしまう前には力を抜いた。

「大丈夫？」

「ハア……はい、平気です。……」

鷹姫は頷くと、真剣な顔で何かを考えながら両手を宙で動かしたり

している。夏子と陽湖には何をしているのか不明だったものの、武道経験がある鮎美にはわかる。

「何か反撃、思いついた？」

「はい」

「やってみる？」

「いえ、ここでは怪我をさせてしまいます」

「寝技に持ち込む気やな」

「そうです」

露天風呂なので湯船や足元は岩とコンクリートで造られている。あまり派手に動くとは怪我をするので鷹姫は反撃を控えたけれど、鮎美は別の技で鷹姫を抱きしめたくなくなった。

「フロント・チョークもやらせて」

「どうぞ」

「ホンマは腋の下に首を挟むんやけど、ちよつと変則的に…」

鮎美は再び無抵抗になった鷹姫へ前から抱きつくように首へ右腕をからめ、右肩で鷹姫の首を圧迫しつつ、左手で鷹姫の後頭部を前へ押さえる。鮎美の右頬と鷹姫の右頬がぴったりと合わさる抱擁にしみえない偽フロント・チョークだった。

「このままギューって♪」

「…うっ…」

「シスター鮎美……………」

それ単にシスター鷹姫を抱きしめて頬擦りしたいだけじゃないですか、プロレスという名のセクハラですよ、と陽湖はぴったりと裸の身体をくつつけて鮎美が興奮しているのを見て、邪悪なことをしているように感じたけれど、注意もしにくい。夏子が呆れつつ言う。

「若いっていいね。あっちの男同士も似たようなことやってるかと思うと、そりやホモ疑惑が出るわ。けど、いくら真冬とはいっても鮎美ちゃんも宮本さんも二人とも腋の毛、ぜんぜん処理してないんだ。意外ね、最近の女子高生って、そうなの？」

絞め技を演習している二人は腕をあげたりもするので、夏子の目についていた。相変わらず鷹姫は一度も剃っていないし、鮎美も冬服に

変わってから、毎日が忙しいのと鷹姫と同じように伸ばしてみよう、という感じに処理をしていなかった。鮎美が鷹姫を抱き絞めながら答える。

「半袖も着る機会ないし、外泊も多いから、ついカミソリまで持ち歩かんさかい」

「女の子が……そんなことじゃあ急に彼氏ができたとき慌てるよ?」

「男なんか、どうでもええし!」

「あらあら。月谷さんは処理、どうしてるの?」

「わ……私は、最近、ようやくアトピーが治って、三日に1回くらい剃っても荒れなくなりました」

陽湖が恥ずかしそうに答える。見られたくないよう腕を閉じて手で腋を押さえている。

「アトピーだったの。治ってよかったね」

「はい、このシャンプーのおかげです」

陽湖は宿泊予定がなくても必ず持ち歩いているボディケアセットの入った防水ケースを見せる。中にはシャンプーやボディソープなどが小分けの容器に移し替えられていた。それが有名なマルチ商法の会社が製造している商品だと、夏子は社会人経験があるので知っていたけれど、あえて何も言わない。絞められていた鷹姫が首に力を入れて問う。

「反撃してもよいですか?」

「ええよ」

「では」

絞められているだけだった鷹姫が右手を鮎美の左腋へ入れて、右腕を自由にすると鮎美と同じように相手の首へ巻きつけて絞める。鮎美も息苦しくなった。

「うっ……くっ……」

「技としては隙が多いようですね」

さらに鷹姫が力を入れて鮎美の喉を肩で圧迫していく。同じ形で絞め合う状態になった。

「こうなると力比べです」

「うちかて負けへんよ。くっ！」

「私に勝てるつもりですか」

二人が密着して首を絞め合っている。もともと筋力も鷹姫が勝っていて、しかも鮎美は真剣に絞めているのではなくて、どうしても肌を感じる鷹姫の感触が心地よくて、本来は相手の後頭部を押さえ絞めを補強するはずの左手を鷹姫のお尻に移動させているので、じわりじわりと絞め負けていき、ぐったりと手足から力が抜けていく。意識を落とされる前のフワフワとした浮遊感と、裸の鷹姫に力一杯抱きしめてもらっているという幸福感で陶然とした表情になっていく。

「……ああ……」

「私の勝ちですね」

鷹姫は落としきってしまう前に力を抜いた。鮎美が倒れないように両手で抱いて支えている。

「大丈夫ですか？」

「……うん……でも、もう少し、このまま……」

鮎美は抱いてもらえて幸せそうにしている。陽湖が微妙な表情で見つめた。

「……………」

シスター鷹姫が鈍いからって好き放題しすぎなんじゃ……シスター鷹姫も何も考えないで男女同じ部屋で予約しちゃうし……この二人って心配……私も秘書か何かで見守った方がいいかな……お母さん、すごく心配してらっしゃるから、と陽湖は娘の同性愛を悩んでいる美恋のことを想い出した。四人の女性が風呂から揚がって客室へ戻っても、まだ直樹と石永は戻っていなかった。

「二人とも気を遣って、遅めにしたのかな」

夏子と陽湖は浴衣の中にシャツを着込んでいたので少し暑かった。鮎美と鷹姫は下着だけの上に浴衣を着ている。広い畳の部屋に戻った鷹姫は意欲的な顔で鮎美に頼む。

「もう一度、あの技をかけてください。後ろから絞める方の」

「チヨーク・スリーパーやね」

求められると鮎美も嬉しいので抱きつくように鷹姫を絞める。

「どや？ 反撃できる？ くっ…」

鮎美は鷹姫が全体重をかけてきたので支えきれず膝を着いた。その瞬間に鷹姫は後方へ跳ねるように反り、鮎美ごと後ろへ倒れる。

「うわっ?! けど！ チョーク・スリーパーはグラウンド状態でも逃がさへんよ！」

再び鮎美は絞めるために腕へ力を入れるのと同時に両脚を鷹姫の腰へ巻きつけ固定しようとしたけれど、鷹姫は待っていたように鮎美の右足首を捕らえると捻った。

「うぎっ?! 痛っ!!」

たまらず鮎美は首を離して逃げるけれど、鷹姫は逃がさず足首を握ったまま今度は両脚で鮎美の膝関節を逆方向へ曲げようと力を入れる。

「ううっ?!」

鮎美が呻いていると、石永と直樹が缶ビールを片手に戻ってきた。

「おお！ 膝十字か！ 見事に決まっているな！」

石永が嬉しそうな表情になる。鷹姫と鮎美は浴衣姿なので裾が乱れて太腿が露わになっているけれど、その肌の魅力よりも技の美しさに目がいつてる顔だった。

「ここまで完璧だと、もう抜けられまい」

「ううっ……ギブ！ 降参！ まいった！」

「降参ですね」

鷹姫が満足そうに離れた。さきほど露天風呂で落とされかけた雪辱を晴らした形になり満足している。

「ハア……痛かった……」

「シスター鮎美、ちよつとお話があります。二人で」

陽湖は乱れている二人の裾を男性の視線から守るように直しつっ言った。

「え？ うちと二人で？」

「はい」

「まあ、ええけど。何よ?」

「ちよつと注意したいことがあります」

「うう……なんとなく、わかるような……」

陽湖は調子に乗りすぎていている鮎美を注意するために二人で出て行き、石永は呑み干した缶ビールを捨てて、鷹姫に問う。

「宮本さん、剣道だけじゃないのか?」

「柔道と弓道も心得はあります」

「おお、すごいな。いい身体してるもんなあ」

「……」

横で聴いていた直樹と夏子はセクハラ発言ではないかと感じたけれど、言われた鷹姫が嬉しそうにしているので問題ないようだった。

「それ相応に鍛えていますから」

「さつきの膝十字も完璧だったもんな。寝技も強い?」

「はい」

「よし、ちよつとやらないか。オレはプロレスだけど、押さえ込みルールは柔道式で、打撃なし関節技あり、浴衣を破らないよう道着をつかむのは無しで」

「お相手しましょう」

二人とも最初の相手が不甲斐なかつたので欲求不満が燻っていて、広い畳の部屋という環境に血が騒いでいた。石永が受けに回って寝ころぶと、鷹姫が仕掛けていく。道着をつかめないというルールは鷹姫には新鮮でプロレス慣れした石永が有利に動くけれど、すぐに鷹姫も慣れていく。

「ハア……ハア……静江より、強いな……ハア……」

「……ハア……ハア……面白いルールですね……ハア……」

「プロレスは、いいぞ。ハア……」

いつも妹と技をかけあっている石永は女性の身体に遠慮もしないし、性的興奮もしない。鷹姫も女子相手では剣道も柔道も常に勝ってしまうので、男性を相手にすることに慣れている。相手を押さえ込むために石永が額を胸につけてきても平気だったし、石永の首に脚を巻

きつけ内腿で男の顔を挟んでも羞恥心は無く、むしろ楽しかった。

「…ハア…ハア…」

直樹が缶ビールをチビチビと呑みつつ呆れる。

「なんか、すごいことしてるね、あの二人」

「そうね。先生に襲われる女性秘書にしては、彼女も元気すぎるけどね、ビール、私の分は？」

「そう言うと思ってたから」

直樹は買っていた缶ビールを夏子に渡した。呑みながら夏子は小声で直樹に言う。

「石永先生、マジでホモじゃない？ 女子高生とあんなことして勃つてないよ」

浴衣で暴れているので石永のトランクスは見えているし、そこにある膨らみも程度が判る。大きくはなっていない、平常モードだった。直樹は見たくないトランクスと、見てしまいそうになる鷹姫のショーツから目をそらしている。

「雄琴先生、お風呂で大丈夫だった？ 勃起されなかった？」

「キモかったけど、勃たれてないよ。あの人はプロレスが好きなだけだよ。ああいうこと、よく妹さんとやってたよ。シスコンじゃないかってくらい」

「昔、シスコン疑惑もあつたらしいね」

「その話、民主党に入ってから聞いた。自民党内では誰も言っていないのに」

「あるあるだよ。相手陣営のあることないことウワサにして流すの。私も政治の世界に入ったばかりだけど、うんざりするところだよね、スキヤンダルで相手を落とそうとするの。先月、朽木市の市議選、応援に来てた？」

「いや。琵琶湖の向こう側だし、ボクは行ってない。たぶん、芹沢先生も呼ばれてないだろうな。あそこは保守的な地域だからクジ引き議員を嫌ってるかも」

「きつとそうね。若い候補者でさえ陰口いわれて苦労してたもん」「どんな？」

「若い会計士の男性候補者だったの。無所属で立候補したけど、立候補前に私には挨拶してくれたから覚えてるんだけど、選挙前から変なウワサが流れてね。その彼が市内に開業した会計事務所の受付嬢に手を出して妊娠させて仕方ないから結婚したって話。けど、本当は中学から交際してた彼女を受付嬢にして開業して、事務所が軌道に乗ったから結婚してハネムーンで妊娠したらしいの」

「ひでえ……順序逆にしてセクハラ疑惑かよ……にしたって責任とって結婚してるんだからハッピーエンドなのに。で、当落結果は？」

「彼のトップ当選、有権者の若年層が期待したみたい。けど、議会では年寄りに囲まれて居心地悪そうだし、トップ当選なのに一年生だから扱い軽いし。年末に会うことがあって話したら、参議院の年齢バラバラ男女半々なのが羨ましいってさ。結局、政治の世界って50代60代のオジサン社会だから。男のくせに陰湿な陰口まで流すし。若いってだけでバカにするくせに利用したがるし」

「県議会もオジサンばかりだね。ストレス貯まってる？」

「あいつら、腹の底では若い女が知事なのが気に入らないのよ。田舎の首長選挙に人気だけで当選するわけじゃないでしょうが、悔しかったら対案もってきなさいよね、対案！」

夏子が缶ビールを呑み干し、二つめを買いに行くか、我慢するか迷っていると、鮎美と陽湖が缶ジュースをもって戻ってきた。

「っ…鷹姫に何してんのよ?!」

悲鳴のような鮎美の声を聴いて、石永と鷹姫は絞め合っていた力を抜く。筋力では石永が上だったものの、鷹姫の筋力も強く、柔道とプロレスという根底技術の違いもあって夢中で戦っていた二人は汗だくになって息を乱し、抱き合うように畳の上にいた。ちやうど鷹姫が下で押さえられ、押さえ込みが完成しないように石永の腰に両脚を回して踵を足首にかけ解けないようにしているところを、石永は男の意地で腕力で鷹姫の脚を解こうとして両膝を押し下げていて、その隙へ鷹姫は石永の首を絞めるために腕を回して抱き寄せ絞めていた。一見して熱烈な正常位に見える体勢だった。

「ハアハアっ…ハア…」

「鷹姫……」

「シスター鷹姫……」

陽湖も驚いているし、誤解して真っ赤になる。二人が持っていた缶ジュースが畳の上に転がった。石永が誤解されたことに気づいた。

「いや、ちよつとグラウンドをやったただけなんだ。ハア、誤解しないでくれ。ハアハア」

「……………誤解で……………」

言われて鮎美は二人の浴衣は乱れていても下着は乱れていないことと、観客に直樹と夏子がいることに気づいた。言われてみると、さきほど自分と鷹姫がやっていたことの延長でしかないと理解できる。

「……………」

鮎美が唇を噛んで、落とした缶ジュースを拾った。陽湖は強姦現場を見かけた女子のように腰を抜かして座り込む。

「いったい……………どういうこと……………どうして加賀田さんも、雄琴さんも黙って見て……………。目の前で襲われてるのに……………」

「いやー！ だから！ 違うって！ 襲ってない！ プロレスなんだ！ プロレス！」

慌てて釈明する石永の様子が可笑しくて夏子はクスクスと笑った。

「写真でも撮っておけばよかったよね、雄琴先生」

「そうだね、いい材料に使えたかもしれない」

「…………プロレスって……………どう見てもセクハラにしか……………、シスター鷹姫、だ、大丈夫ですか？」

「はい。平気です。いいところだったので、次からは道場でやりましょう、石永先生」

「おう！ そうだな！」

「つ……………うちの……………うちの秘書と!! そういうことせんといってください!!」

鮎美が叫んで涙を零したので、夏子と石永、直樹は誤解した。二人

が抱き合っていたと誤解した後に、鮎美が涙を零す理由は一つしか思
い当たらない。

「……鮎美ちゃん……」

そうだったの、ぜんぜん気づかなかったけど、この子、石永先生が
好きなんだ、そっか、だから高校生なのに選挙も頑張って応援して、い
ろんな活動も全部、石永先生に認めてもらうため、と夏子は既婚者へ
の女子高生の切ない想いを想像した。

「オレは……」

気づかなかった、オレのこと好きでいてくれたのか、こんな歳でも
女性ってのは気持ちを隠すのが巧いな、けどオレが結婚してることが
知ってるはずだし、この子の気持ちを利用したつもりはない、だがど
うするべきだろう、下手をすると民主党に行くとか言い出されるかも
しれない、それは絶対に避けたい、くっ……困った、どうするべきだ、
と石永は悩む。これまでも衆議院議員という地位や、精悍な顔つき
と体格のおかげで女性にモテたことは多いので順当な誤解だった。

「……ボクは、そろそろ寝たいな……」

気づかなかったけど、わかってみれば彼女が頑張ってきた理由もそ
こにあったわけか、なるほど誘っても民主に來てくれないわけだ、け
ど石永先生が鞍替えしてくればセットで來てくれるかもしれない、
と直樹は冷静に考えた。

「……っ……ぐすっ……」

鮎美が涙を零すのを鷹姫は心配そうに見上げた。

「どうして泣いているのですか、芹沢先生？」

「っ！……これは目にゴミが入っただけよ！」

「そうですか。近くにコンビニがありました。目薬を買ってきましよ
うか？」

「っ……鷹姫……」

「「「……」」」

「そやね、めっちゃ目が痛いわ。行ってきて」

「はい」

鷹姫は乱れていた襟元を直すと、すぐに財布と携帯電話をもって出て行った。鷹姫がいなくなると鮎美は客室のトイレに一人で入り、気持ちを落ち着けてから客室に戻る。ちょうど走って鷹姫が戻ってきた。

「ハア…ハア…買ってまいりました。どうぞ」

「おおきに」

受け取った目薬をさして客室で休む。けれど、脳裏にこびりついた石永と鷹姫が抱き合っていた光景は強烈で、いつかは鷹姫が男性を受け入れて、結婚してしまうのだと想うと、また涙が零れた。

「ぐすっ…：ううっ…」

我慢しようと思うのに泣きそうになってくる。鷹姫が心配してくれた。

「まだ痛みますか？」

「ううん、…目薬のおかげで…：だんだん治ってきたよ。鷹姫、あんた汗臭いわ。うちのために走ってくれて悪いけど、もう一回、お風呂に入って身体を洗ってき。髪も顔も、ちゃんと洗いい。あと、男の人はな、道場以外で乱取りせんとき。変に思われるよ。ほら、みんなの顔を見てみ、ちよつと困った顔してやるやる？」

「…：…：…」

「はい。わかりました」

鷹姫が客室を出て女湯へ向かうと、鮎美は布団に潜り込んだ。布団の中で涙は零したけれど、声は漏らさないようにして眠った。鮎美が眠ってしまい、続いて鷹姫も眠ると、石永と直樹も寝たけれど、夏子と陽湖は寝付けなかった。静かに音を立てないように夏子は布団を出て、ビールを買うために廊下へ出ると、陽湖もついてきた。

「何か飲む？ おごつてあげるよ」

「ありがとうございます」

ビールとお茶を買って、客室には戻らず、フロント近くにあるソファへ座った。

「さっきの話だけじゃ」

「はい」

「宮本さんは本気で目にゴミが入ったから鮎美ちゃんが泣いてると思ったのかな？」

「はい、……たぶん……」

「鈍いところのある子かな、と感じてたけど、あそこまで鈍いと……なんて言うか……すごいね」

「はい、そう思います」

「はああ……けど、こっちも鮎美ちゃんが石永先生を好きだなんて気づきもしなかったよ」

「……それは……」

誤解です、と陽湖は言えなかった。言ってしまうと、鮎美の性的指向を話すことになるし、話さなくても気づかれてしまうかもしれない。どこまでも異性愛者の常識で考えることで固定している夏子が、涙の意味を誤解するのは仕方ないことだとわかるけれど、陽湖は同性愛者の生きづらさを擬似的に感じた。夏子はあまり美味しく無さそうに酔って睡魔に襲ってもらうためにビールを呑む。

「まあ、私が鮎美ちゃんと過ごした時間なんて限られてるから、そんなもんかもしれないけど、月谷さんは気づいてた？」

「……いえ……どうなのかな……単に私と同じでシスター鷹姫が男性に襲われてると誤解したから泣いただけかも……私も、びつくりしたから、あんな……姿……」

「いきなり、あれだとね。私も見ててバカなことしてるな、とは思ったけど、体育会系の人って、男女でああいうこと平気でする人、たしかに大学でも見かけたし。当人たちは普通のことしてるつもりなのに、異常に見えるっていうね」

「……普通……普通と異常って、どこで境目があるんでしょう？」

「数学的には偏差値で35以下65以上とか、知能指数なんかだと75もしくは70以下ってラインを引いてるけど、国語的な異常の定義は難しいかもね」

「……人口のうち数%。3%や5%、1%くらいの人たちというのは異常ですか？」

陽湖は質問してから、鮎美のことがバレてしまうのではないかと後悔して付け足す。

「私、みなさんから見て、変わった宗教を信仰してますから。やっぱり異常者に見えますか？」

「うーん……アイヌ語を話す人が1%以下だから異常者かといえば、ノーだよ。高血圧の人は人口の何割もいるけど、健康かといえばノーだよ。何が普通で何が異常か、どこまでが正常で、どこからが異常なのか、そういうことはさ、これからも人類が問い続けていくよ。地球の歴史を一年として見れば、私たち人類は大晦日のカウントダウンみたいなもんだからさ。もう寝よ」

夏子は親しみを込めて陽湖の肩を撫でると、客室へ戻るように促した。

1月8日 登山

翌1月8日の土曜日、鮎美たち6人は旅館の大部屋で朝を迎えたけれど、鮎美だけは布団から出ずに丸くなっていた。

「じゃ、私もう行くね」

県知事として忙しい夏子は浴衣からスーツに着替えると、食堂からそのまま出発するつもりなので石永たちに挨拶して客室をあとにする。直樹も予定があるので布団から出ない鮎美のことには触れず、客室を出て行く。

「ボクも井伊市の餅つき大会に呼ばれてるから行ってくるよ」

女子高生3人と部屋に残された石永は迷いつつも、布団の上から鮎美の肩を叩いてみた。

「そろそろ起きないと間に合わないぞ」

「……触らんといてください。セクハラですよ」

布団の中から鮎美の声がした。かなり不機嫌そうで男として扱いに困る。

「…………オレも予定があるんだ……呼ばれてはいないけれど、六角市の餅つき大会に顔を出しておくつもりだからさ。先に行っているよ。芹沢先生は少し具合が悪いから遅くなると伝えておく。年末から、ずっと忙しかったもんな、ゆっくり休んでくれ」

「……………」

鮎美が返事をしないので鷹姫が頭を下げる。

「わかりました。ありがとうございます」

「じゃ」

石永が出て行くと、陽湖と鷹姫、鮎美の三人だけになった。まだ朝7時なのでチェックアウトまでは時間がある。

「芹沢先生、まだ目が痛みますか？」

「……………陽湖ちゃんしか居いひんにやから、鮎美って呼んでよ」

「鮎美、まだ目が痛みますか？」

「ううん……………もう平気」

「では、どこか具合が悪いのですか？」

「……………」

「シスター 鮎美……………元氣を出してください」

「……………元氣が出るよう、祈ってみてよ」

「わかりました」

返事をした陽湖は本当に祈り始める。膝を着き、手を組み、真剣に神へ祈る。

「天にまします我らの父よ、願わくば御名を…」

「なんで神さまは父なん？ 母は？ 女やないの？」

「…………シスター 鮎美、祈りは中断できません。最後まで祈らせてください」

「……………」

「天にまします我らの父よ、願わくば御名を崇めさせ給え。御国を来たらせ給え」

陽湖は鮎美のために祈った。

「国と力と栄えとは限りなく汝のものなればなり。アーメン」

「……………」

本当に心を込めて祈ってくれたので、鮎美は引きつつも、少し元氣が出た。祈りを終えた陽湖が語り始める。

「なぜ、神が父であり、母ではないかということですが…」

「もうええよ。それ、どうでもええし」

「シスター 鮎美……………」

「鮎美、もう少し寝ていますか？ 電車ではなくタクシーで直行すれば時間的余裕はあります」

「鷹姫……………。……………寝技、教えて」

「……………今、ですか？」

「夕べ、石永先生と色々してたんやろ？ ああいうの、教えて」
「……………」

「うちが相手やったら嫌やん？」

「そういうわけではありません。わかりました、やりましょう。少し特別なルールの加わった寝技で相手の道着をつかんではいけません。自分の道着も使えません。そも浴衣ですから破れます」

やる気になった鷹姫が説明を始めたので陽湖が引く。

「え〜……やるんですか……」

「月谷も加わりますか？」

「いえ……私は見えます」

「道着をつかめないこと以外は、おおよそ柔道と同じです」

「つまりプロレスやんな。ほな、いつそ浴衣を脱いでやろ」

「たしかに、その方がいいかもしれませぬ。どうしても、つい襟や裾をつかみたくくなりますから」

鷹姫が浴衣を脱ぎ、鮎美も布団から出て浴衣を脱いで二人とも下着姿になる。

「では、まず基本的な形から教えますから、私に乗ってきてください」

下着姿になった鷹姫が仰向けに寝て、寝技を受ける体勢になると、鮎美は一気に興奮した。その興奮が見ている陽湖にもわかるのに、鷹姫は実直かつ真剣に寝技を解説しながら教授している。

「そう、そのまま鮎美の胸で私の胸を体重をかけて圧迫してください。それで私は呼吸も苦しくなり、より抜けだし難くなります」

「ハア…ハア…。さっきの縦四方固め、もう一回、復習させて」

「わかりました。では、そのまま膝で私の腕を踏みつけて動きを封じてみてください。そうそう」

「ハア…ハア…」

鷹姫にのしかかったまま鮎美が鷹姫の股間へ顔を進めていくのを見てみると、陽湖は強い罪悪感を覚えた。

「……………」

これセクハラしてるだけなのに、シスター鷹姫は気づいてないし、嫌がってないからセクハラじゃない？ でも、明らかにシスター鮎美は悪い衝動に負けて変な興奮をしてる、どうしよう注意すべきかな、でもタベ石永先生とのことを見て、すごく傷ついたから可哀想だし、でも……シスター鮎美も一生懸命に議員として頑張ってるストレスがあるのはわかるから……けど、これじゃ外面だけいいワガママなアイドルと、何でも言うことをきくマネージャーみたいな関係で、どんど

ん過激なことを要求していくかも、と陽湖は注意すべきか迷う。夕べは風呂場で裸でからんでいたのを注意したけれど、今は一応下着はつけている。けれど、体勢やからみ方は夕べよりひどい。同じような体勢でも石永と鷹姫のときは二人とも変な興奮はしていなかった。今から思えば、さすががしくさえ感じるし、鮎美と鷹姫のからみは鮎美だけが邪心をもって興奮しているので、まがまがしくさえ感じる。

「ハア…ハア…」

「覚えが早いですね。教え甲斐があります。ですが、ときどき舐めるのはやめてください」

「ハア…一回、ハンディつけて勝負しよ。ハア」

「いいでしょう。どんなハンディを？」

「鷹姫の片手を浴衣の帯で縛るねん」

「わかりました」

素直に、利き腕である右手を差し出す鷹姫の手首を縛ると、右腕をあげさせて首の後ろへ回して首輪にもして固定した。鮎美は汗ばんだ鷹姫の腋を舐めたそうに見ながら付け加える。

「ハア、勝負やし、一回につき、ハア、一つずつ賭けよ」

「何をですか？」

「負けた方は下着を脱がされるんよ」

「……」

すでに二人ともブラジャーとショーツしか身につけていないので一回の負けで、どんな姿になるか想像がつく。しかも鷹姫は右手首を首に固定されたので動きづらい。

「片手やと自信ない？」

「いえ、それでやりましょう」

「だ…ダメダメです!! シスター鷹姫も、なに見え透いた挑発にのつてるんですか?!」

「あ、陽湖ちゃん……」

すっかり鮎美は陽湖の存在を忘れていた。そして邪魔そうに言う。

「陽湖ちゃん、悪いけど喉が渴いたからジュース買ってきて」

「露骨に追い出そうとしないでください！ 私がいなくなったら、なににする気ですか！」

「陽湖ちゃんが怒鳴るなんて珍しいね。ハア」

「それだけのことをしてるからです！」

「ジュース買ってきてよ」

「……………言つてきかないなら…」

陽湖は鮎美へ近づいて耳元に囁く。近づくと鮎美の汗の匂いがして、陽湖は不快に感じた。いつもは嫌いではないけれど、今は気持ちが悪。その気持ち悪さを我慢して、絶対に鷹姫へは聴こえないように耳の穴へキスしそうなほど唇を近づけて囁く。

「あのこと、言いますよ。バラしますよ」

「っ…」

「嫌なら、これ以上は、やめてください。見ていただけません」

「……………」

興奮していた鮎美が一気に青ざめて冷静になった。

「…おおきに、うち……………どうかしてたわ…」

「鮎美？ やらないのですか？」

「鷹姫……………」

「ごめんな、なにも知らん子供みたいに無垢な鷹姫を、こんなカツコにして、ごめんな、と鮎美は謝りつつ手首と首を縛っていた帯を解く。

「鷹姫、陽湖ちゃん、朝ご飯、食べにいい」

「はい」

浴衣姿で3人で朝食をとり、鮎美は時計を見て言う。

「どうせ電車では間に合わんし、タクシーで行くんやったら、お風呂に入つてからいい。汗もかいたし」

「わかりました」

「……………」

それ私たちの裸が見たいだけじゃないですよ、という陽湖の視線に鮎美は申し訳なさそうに肩をすくめた。三人で露天風呂に浸かる

と、陽湖は真冬の朝空を見上げて言う。

「あく……気持ちがいい……けど、こんな贅沢していて、いいんでしょうか?」

「……………」

「ここに泊まったの、税金ですよね?」

「……鷹姫、ここ、いくらやったの?」

「朝食付き、夕食無しで9980円ですから基準内です」

「ほな、ええんちやう。何も不正はないし」

「……………」

「風邪ひかんように、しっかり温まっておこな」

「はい」

風呂から揚げると、三人とも制服に着替えて、呼んでおいたタクシーに乗って六角市の市民広場まで移動した。そのタクシー代は県最南部から中央部までの移動だったので高速代を入れて21100円だった。開始時刻を10分過ぎていたけれど、石永が場をつないでいてくれたので挨拶には間に合った。子供たちと笑顔で餅つきをして、多くの人と記念写真を撮って、つきたての餅を少しだけ食べて、次は老人会の新年会へ行く。もともと陽湖は参加予定ではなかったけれど心配だったのと、石永が年配の支持者からの勧めを断り切れずに飲酒してしまい、静江が石永の運転役として同伴することになったので再びタクシーで移動して新年会を回った。三人で4つの新年会を巡り、どこでも人気者だったけれど、何度か身体に触れられて陽湖は嫌な思いをした。

「やつと島に帰れるんですね」

「お疲れ様。付き合ってくれて、おおきに」

三人で連絡船に乗ると、懐かしささえ覚える。陽湖は本意に男性から身体を触られた記憶を振り払うように頭を振って言う。

「お酒って、どうして人を、あそこまで悪くさせるのかな………いっそ、禁酒にすればいいのに」

「そういえば、宗教的には飲酒ってOKなん?」

「禁止はされていません。ですが、大酒飲みは戒めるべきことになっ

ています。コリント第一、兄弟と呼ばれる人で、淫行の者、貪欲な者、偶像を礼拝する者、ののしる者、大酒飲み、あるいはゆすり取る者がいれば、交友をやめ、そのような人とは共に食事をするこことさえないように」

「……新年会、ゆすり以外は、だいたいあるかも……ケンカもしよるし、油断すると身体に触ってくるし、……なるほど、ああいうところで食べても美味しくないわなあ」

どの会場でも議員と秘書2名分の料理が用意されていて、静江の代わりに陽湖が秘書役として行動していたので、少しは食べたけれど、味を感じている時間は無かった。鮎美が温泉でほぐれたはずの肩を回しながら言う。

「ゆすりもあるかもな。町内会の新年会なんかは、呑み喰いに参加しとうない住民からも町内会費を集めて、そこから支出するし、町内会費を払わなかったら村八分やから、ある意味ゆすりや」

「ひどい話です、それ。ちゃんと会費制にして、町内会運営費と分けるべきですよ」

「そうすると、顔を出す人が激減するし、地域の交友が減ってしまうねん。良し悪しでな、シンプルな運営にすると、人間関係も疎遠になる、そうなると地域の問題を解決する力も弱くなってしまふ。かといって集団の縛りが強いと、個人主義な人は煩わしいて都会へ出て行く。難しい問題やわ」

「……シスター鮎美、大変なんですね。私もお手伝いしてあげたいです。あの話、受けようかな……」

陽湖は以前に時給制の秘書補佐を検討してみないかと言われていたことを思い出している。

「受けてくれるなら、うちも嬉しいよ。時給1000円、手の空いたときだけでいいよ。メインは宗教活動やろ」

「はい、お願いします」

「よっしゃ、決まり」

鮎美は陽湖と握手をして、微笑み合った。短い船旅が終わり、島に到着すると港で鷹姫とは別れ、陽湖と自宅へ帰る。

「おかえり」

「おかえりなさい」

父と母が迎えてくれた。

「なんや、久しぶりな気がするわ」

「鮎美、明日の夜も泊まるんだよな？ 二連泊は久しぶりかもな」

玄次郎がビールとジンジャーエールを開けながら言ってくる。美恋は温めた正月料理を卓袱台に並べていく。それを陽湖が手伝い、久しぶりに家族で食卓を囲むことになって鮎美は手を合わせた。

「いただきます。……………」

食べ始めようとして、鮎美は大きな違和感を覚えた。

「……………」

陽湖が食前に祈るのは、いつもの光景なので見慣れているけれど、母の美恋まで祈っているのには、強い違和感を覚える。そして、父の玄次郎はビツと右手を胸の高さにあげると、手のひらを前へ向け、威厳を強調するかのように口角をさげて顎に皺をつくっている。まるでナチスドイツの総統のようなポーズと表情で、ふざけてやっているのが明白だった。けれど、母の表情は真面目で陽湖と同じく心から祈っているように見える。

「……………父さん……………何してんの？」

まず鮎美は話しかけやすい、むしろ突っ込み待ち状態に見える玄次郎に問うた。

「うむ、一家の主として祈りを受けているのだ」

「……………」

「……………」

美恋と陽湖は祈りを終え、目を開けた。鮎美が恐る恐る問う。

「……………か……………母さん、何をしてたん？」

「祈っていたの。日々の糧が与えられる幸せに」

「うむ、オレが稼いだおかげだな」

「あなたのおかげです。そして、神の」

「……………」

鮎美と玄次郎は反応に困る。陽湖が嬉しそうに言う。

「お母さんも、神の存在に気づいてくださったのです」

「……………母さん……………マジで?」

「ええ。アユちゃん、あなたも正しい生き方を意識してみてください。今の言葉も女の子らしく無いわ。女の子は、女の子らしく、そう生まれてきたの。神がお造りになったのよ」

「お造りといえば、この刺身、美味しいぞ、鮎美。ビワマスだ」

「……………そ、…そうなん……………」

かなり意図的に父が話題を変えたので鮎美は箸で刺身をもちあげて食べた。

「うん、美味しいわ」

「お隣さんが一本釣りしたのを分けてくれたんだ。頑張ってる芹沢先生に食べてほしいってな。よかったな、鮎美、あとで礼を言っておけよ」

「うん、そうするわ」

「こつちも食べてみる。匂いの少ない鮎寿司だ」

「うくん……………鮎寿司は……………」

鮎美が迷っていると、玄関の外に人の気配がした。呼び鈴が鳴らされ、美恋が立ち上がる。

「はい」

鍵はかかかっていないので、来客が戸を開けた。

「芹沢さん、おつり持ってきたよ」

「ありがとうございます、原田さん、明日でもよかったのに」

美恋は小銭を受け取ると、来客を見送って居間に戻ってくる。

「母さん、おつりて何の?」

「シャンプーと健康食品を買ってもらったの」

「……………あのマルチ商法の? あんなん島の人に売り込んでるん?」

「売り込んでるわけじゃ……………」

「私のアトピーが治ったのを聞いた人が、親戚の娘さんにも試してみたいって買ってくれたんです」

「そうなんや……………。けど、たまたま治っただけかもしれないし、あんまり期待させんときや。そもそも商法に問題あるし。……………まさか、けっ

「こう島の中で広めた？」

「えつと……どうでした、お母さん？」

「5件ほど会員になってくれてるわ」

「……それ、うちの名前を出してへんやろね。……いや、出さんでも芹沢いうたら一件しか無いか。くれぐれも、国會議員として勧めてるわけやないって念押ししといてな。地位の濫用せんといてな。はああ……ちよつと帰宅せんうちに、ずいぶん変化してるなあ……」

夕食を終えた鮎美は陽湖が入浴し、美恋が台所を片付けているタイミングで父へ問う。

「母さん、いつから、あんな祈りなんかしてはるの？」

「ああ……その……お前が週刊紙に載ってテレビに出た後からなんだ……けど、責任を感じることはないぞ。ちよつと、ノリでやってるだけだろう、すぐに飽きてやめるさ」

「……。母さんは父さんと違って飽きっぽい人や無いやん」

「オレだって飽きないものは飽きないぞ。ビールとか釣りとか！」

「……アホ……」

「ま、しばらく様子を見よう」

「……そやね……父さんは、なんでヒトラーのポーズしてたん？」

「あれはナチ式敬礼を受ける総統のみがするポーズなのだ。ああしていると、一人から祈ってもらってる気になれるからな」

「……つまり、対抗してアホなことしてるだけやな……」

「オレ一人で食べ始めても、虚しいだろ」

「それは……そうかも……」

「あ、そうだ。鮎美なら今から頑張れば、総統になれないか。ハイル、アユミ！」

玄次郎が右腕を水平に伸ばしてから45度挙げピンと伸ばしてきたので、うんざりする。

「父さん、それ、外でやらんといてな。一応は参議院議員の父親なんやし」

「サーツイエッサー！」

「……うち、もう寝るわ。朝、お風呂に入ったし」
かなり疲労感を覚えた鮎美は自室に入り、早めに休んだ。

翌1月9日の日曜日、鮎美が起きたとき、陽湖と美恋は居なかった。しばらくして連絡船が着港するエンジン音がかすかに聞こえた後、二人が帰ってきた。

「母さん、どこ行ってたん？」

「日曜礼拝に行ってきたの。アユちゃんも、いつしよに行ってみない？」

「……一回、行ったから、もうええわ」

「アユちゃん、朝ご飯は？」

「まだよ」

「すぐに用意するね」

「お昼と兼用でええよ。陽湖ちゃん、ちよっと話があるねん、うちの部屋まで来て」

「はい」

陽湖と自室へあがり、睨むつもりは無かったのに、鮎美は睨んでいた。

「あんた、どういうつもりなん？ 人の母さんを連れて行くの、やめてくれん？」

「礼拝への参加は、彼女自身の意志です」

はつきりとした答えだったけれど、どこかマニュアルが決まった回答のように感じて鮎美は、より苛立った。

「あんたが誘うからやろ!!」

「神の導きは万人へ向けられています」

「っ、お前なあっ!!!」

経験したことがないような苛立ちが瞬間沸騰して鮎美は掴みかかると、陽湖を壁際まで押した。

ゴツ…

陽湖の後頭部が壁にぶつかり鈍い音を立てた。

「うっ…」

「人んちに変な宗教を持ち込むなや!!!」

「神は…」

「やかましいわ!!!」

「……………」

怒鳴られて陽湖はまっすぐに鮎美を見つめ、無抵抗に手を祈りの形に組んだ。

「くっ…………お前は…」

どうして、これほどまでに苛立ち、吐き気がするほど気持ち悪いのか、鮎美自身にもわからなかった。苛立ちは殺気に近くて、このままでは陽湖を殴る蹴るしてしまいそうだった。玄次郎がノックして声をかけてくる。

「鮎美、何を騒いでいるんだ？」

「何でもあらへん!!!」

「めっちゃ声が怒ってるぞ」

「アユちゃん、何をしているの？ シスター陽湖をイジメないで」

美恋の声も階段下から響いてきて、鮎美はゾツとして怒鳴る。

「っ…そんな呼び方真似すんなや!! 気色悪いわ!!!」

「鮎美、入るぞ」

玄次郎が入室してきて、続いて美恋も入ってくる。狭い部屋に4人が集まった。

「シスター陽湖、大丈夫？ なにかされたの？」

「いえ、何も」

まだ後頭部が痛かったけれど、陽湖は微笑をつくった。

「でも、すごい怒鳴り声と足音が…………」

「大丈夫です。少しサタンが騒いだけですよ」

「っ！ 誰がサタンやねん!!!」

再び不快感と苛立ちが頂点に達して鮎美は乱暴に陽湖を引き倒した。鷹姫ほど技は洗練されていないけれど、柔道の要領で倒されたので華奢な陽湖は為す術無く畳に転がる。

「うっ…」

「アユちゃん！ 乱暴なことほしないで！」

「鮎美、まあ、落ち着け」

「ハア……ハア……」

「アユちゃん……やっぱりブラザー愛世の言ったとおり、アユちゃんの中でサタンが暴れるのね」

「……………」

鮎美と玄次郎が言い様のない不安感を覚えた。美恋の目は真剣で、ふざけているわけでも冗談を言っている様子でもない。それだけに不安が膨らむ。

「母さん、それマジで言うてるの？」

「よく聴いて。人が正しい行いをしようとするとき、サタンが邪魔してくるの」

「……………」

「今、アユちゃんに乱暴なことをさせているのも、すべてサタンのせい。どうか、目を覚まして、神の声を聴いて」

「……くっ……」

鮎美は母親から目をそらして、陽湖を睨みつけた。今にも蹴り殺しそうな視線を向ける。なのに、陽湖は無抵抗にまっすぐ見つめてくる。

「……………くっ……このっ……」

鮎美が拳を握ってブルブルと震わせた。その手を玄次郎が撫でた。

「とりあえず飯を喰おう。人間、腹が減つてると苛立ちやすい」

「父さん……………」

「飯、まだか？」

「すぐに用意します」

「手伝います」

美恋と陽湖が一階へ降りていき、玄次郎は娘の頭を撫でた。

「いつのまにか、母さん、ああいうこと言うようになってな……………」

「うちのせいなん？ ……週刊紙に載ったりして心配かけたから……………」

「いや、オレのせいが大きいだろう。オレの趣味で島に移住して、なの

に、オレは市街での仕事が多いし、鮎美も帰宅しなくなって、母さんは近所に友達もいないし、月谷さんが話し相手で、いっしょに家事も手伝ってくれるから……影響されたのかもな」

「……………母さん……………淋しかったんか……………」

「鮎美は心配するな、オレが何とかする」

「……………頼むよ、父さん。……………父さんまで、勧誘されたりせんといてな？」

「フ、オレが、ああいうのを信仰すると思うか？」

「絶対ないな」

「シスター鮎美、お父さん、ご飯です。降りてきてください」

陽湖に呼ばれて居間で食事を始める。やはり陽湖と美恋は食前に祈りを捧げた。玄次郎は総統のポーズを取ったけれど、鮎美は箸を取った。

「いただきます」

祈る二人と、威張る一人を無視して食べ始める。

「ごちそうさま」

あまり会話なく食事が終わり、美恋と陽湖が食器を片付け、お茶を淹れてくれる。夫と娘に茶碗を差し出した美恋は正座して頭を下げた。

「玄次郎さんと鮎美に話があるの」

「……………」

二人ともお茶を飲む。美恋が続ける。

「私はバプテスマを受けようと思います」

「……………は？ 何やの、それ？」

「洗礼のことです。洗礼を受け、神に仕える身となります」

「じよ……冗談やめてや！」

いよいよ鮎美は寒気を覚えた。それでも美恋は続ける。

「私は本気です。玄次郎さんと鮎美には受ける前に話しておきたかったのです」

「……か……………母さん……………ホンマに本気なん?! 父さん、何か言うたってよ!!」

「鮎美、せっかく帰宅しているところ悪いが3時間ほど美恋と二人きりにしてくれないか」

いつも、ふざけていることが多い父親が真面目な声で言ったので鮎美は頷いた。

「父さん……そやね、夫婦で、よう話し合つてな」

鮎美はコートを羽織り、靴を履いて家を出る。陽湖もついてきた。

「……………」

「……………」

狭い島の中は3時間も時間を潰すには不便する。寒い上に喫茶店一つない。あっても観光シーズンのみのオープンなので一月に入れる店はなかった。友人の家といつても鷹姫しかいないし、久しぶりの家族団欒のために正月9日になって、やつと予定を開けて帰宅させたので邪魔をしたくない。それは鮎美にとつても同じだったのに、今は寒空の下で彷徨うことになってしまった。

「……………」

「……………」

陽湖がついてきているけれど、振り返る気になれない。顔を見たら怒鳴るか殴るかしそうだった。

「…………ど()行()…………」

「……………」

「はああ……………」

いつそ島を出ようにも、この時間帯は2時間に1本しかない。そして、さきほど陽湖と美恋が帰ってきた連絡船は港で2時間停泊し、それから往復するので乗ると4時間が過ぎてしまう上、本土側の港もバス停くらいしか無い。

「あいかわらず不便な島やな……母さん……退屈やったんかな……」

「……………」

「いくら退屈でも、アホな宗教に手を出さんでもええのにな！」

背後にいる陽湖へ聞こえよがしに言ったけれど、陽湖から反応はな

い。

「ちつ…………ム力つくわ。…………ホンマ腹立つ…………」

「……………」

「寒いし、何か買お」

鮎美は港近くにある自動販売機で温かいミルクティーを買った。ついてきていた陽湖は買う気にならなかったのか、財布を持っていないのか、何も買わなかったけれど、声をかける気は無かった。港も閑散としていて誰もない。冬休み最後の日で子供たちは宿題に追われているのかもしれないし、漁もない様子で無人島のように静かだった。みな、それぞれの自宅内で過ごしている様子で誰一人通りかからない。鮎美は温かい缶を両手で包み、チビチビと飲みながら、まだ15分しか経っていないので気が遠くなった。あと165分も、どうやって時間を潰すべきか、スマートフォンがあるので精神的な退屈しのぎはできるかもしれないけれど、寒さが深刻な問題だった。気になって振り返ると陽湖はコートを忘れたようすで寒さに震えている。

「アホや…………凍死するで…」

「……………」

「…………けど…………うちも…………どうしよ……………」

缶を飲みきってしまうと、また寒さを実感する。近頃、移動がタクシーだったので徒歩となると冷気が身に染みた。制服のスカートではなくて部屋着のズボンだったのは不幸中の幸いだったものの、じわじわと身体が冷えてくる。鮎美は周囲を見渡して、山が目についた。島には大小二つの山がある。小さい方の山には鷹姫の家と道場が中腹にあつて、山頂に至る道は無いらしい。けれど、大きい山には登山道があつて山頂へ至れるらしく、祭りをを行う公園もあり往復2時間と聞いている。山頂で少し休憩して戻れば、ちょうどいい時刻になるし、何より運動すれば身体が温まるというのが狙いだった。

「冬やし、虫も蛇もおらんやろ」

「……………」

「ええ運動になるし」

鮎美は家と家の間を抜けて、登山道の入口に着いた。陽湖もついできている。少し登ると右手に墓場が見えてきた。

「……………」

「……………」

「……………」

ここに島のみんなのお墓があるんやから、きつと鷹姫の母さんのお墓もあるんやろうなあ、集落を見下ろせる場所にあるんやね、ええ場所かも、と鮎美は眼下に家々を見た。まだ高さにして15メートルほど登っただけだったけれど、島内には二階建て以上の建物はないので全体が見渡せる。密集した家々と小さな港、漁船、小舟、連絡船、それですべてだった。

「……………」

「……………」

「……………南無阿弥陀仏」

鮎美は墓地に向かって両手を合わせると、めったに唱えない念仏を口にした。鮎美の家は浄土真宗で、このあたりも浄土宗と浄土真宗、それに禅宗が多いと聴いている。鮎美は合掌を終え、また登山道を登り始めたけれど、陽湖が墓地に対して何かするのかが気になって見た。

「……………」

何もせんのや、バチ当たりな奴やな、と鮎美は不快感を強くする。登っていくと、だんだんと登山道は険しくなり、場所によっては手も使わないと登れなかつたりした。おかげで身体が温まりコートを着ているのが暑いくらいになってくる。振り返ると陽湖もついてきていて、息を荒げて登っているけれど、寒いようで手足が震えている。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

いよいよ山頂が近づいてくると、岩肌丸出しの崖のような道もある。

り、道幅は30センチくらいしかなく、落ちると10メートルは転落しそうだった。

「……ハア……」

「ハア……ハア……」

「……」

鮎美は振り返って陽湖を見る。ちょうど陽湖は一番道幅の狭い場所を通るところで、とても不安定だった。

「ここで、あんたを突き飛ばしても、誰も見てへんね」

「……」

「うちの方が腕力もあるし。あんたが落ちて死んだのを確認してから警察を呼べば、完全犯罪や」

「……」

陽湖は祈りの形に両手を組むと、無防備に目を閉じた。鮎美がその気になれば、いつでも落とせるし崖下は岩で、かなりの確率で死亡すると思われる。

「……ちっ……」

鮎美は舌打ちして再び山頂を目指した。やっと山頂に至る。山頂の周囲には樹が無く、古い石垣が組まれて5メートル四方の広さが確保され、中央には何度も火を燃やした跡がある。中世には狼煙をあげたのかもしれないし、今では祭りで火を焚くのだとわかる。

「ハア……ハア……これで公園って……ベンチ一つ無いやん……ハア……」

「ハア……ハア……ハア……」

「けど……なちゅー、ええ景色や……」

「……はい……本当に、美しい……」

二人の眼下には360度、湖面が広がっていて風が無いので鏡のように凜いでいる。そして真冬は琵琶湖の水温の方が気温より高くなるので霞がかかって見え、標高は225メートルという小さな看板があつてわかる高さなのに、まるで高山から雲海を見下ろすような景色だった。

「……霞のおかげで対岸も見えん……まるで別世界にいるみたいや

……心が洗われる風景って……こういうのかな……」

「こんな美しいところだったなんて……」

「いつまで見ても、飽きんわ……」

そう言った鮎美は5分くらいで風景に飽きた。そして美しい景色という情緒的なことより現実的で生理的な現象に悩まされる。

「……くっ……公園いうからトイレくらいあるかと思ったのに……」

食後のお茶とミルクティーが鮎美の膀胱に巡ってきて疼いている。寒さで脚が冷えたことも要因して猛烈な尿意を覚えていた。登っているときも途中で引き返そうかと何度か迷ったけれど、ここまで登ったのに山頂に行けないのは残念という欲と、山頂が公園になっているならトイレがあるだろうという楽観で進んでしまった。

「くっ……う……」

鮎美は山頂の石垣を四方に歩き回ったけれど、やっぱりトイレはない。ここから最短距離にある公衆トイレは港にある観光客向けのトイレで、下山しなければいけない。

「……あかん……無理や……途中で漏らす……」

下山には登山より時間がかかるし、脚に疲労もでてくるので、我慢しきれるとは思えなかった。

「……くっ……漏らすよりは……」

さきほど堪能した景色を鮎美は再び見回した。しつかりと霞がかかっていて、どんな望遠カメラでも、ここを対岸から撮影されることはないと思える。麓の家々の屋根もぼやけて見えないので、向こうから山頂も見えないはずと判断する。それでも大きな抵抗感があるので鮎美は北側の石垣へ行く。島の北側は急な崖が多く、住居は無いし、対岸は何十キロも先で絶対に見えない。航行している舟が無いことも確認した。

「……もう無理……出る……」

「なっ?! 何してるんですか?!」

陽湖はコートを脱ぎ捨てた鮎美がズボンとショーツを足首まで一気におろしたので驚いた。

「くっああああ……」

鮎美は恥ずかしさと開放感に身震いしながら、できるだけ小水が後方へ飛ぶように前屈みになる。和式トイレで済ませるように、しゃがんでしまうと足元で飛び散って靴と靴下がドロドロに汚れるということは小学校4年生のときに渋滞した阪神高速道路の路肩で経験したので今回は石垣の下へ飛ぶように恥を忍んで立つたまま済ませた。

「……ハア……ハア……やってしもた……高校生にもなって……くっ……」

「こんなところで、するなんて……」

「しゃーないやん！ 漏らすよりマシやし！ 誰かに言うたら殺すからー！」

「……言いませんから……どうぞ、これ」

陽湖がポケットティッシュを差し出してくれる。

「……おおきに……」

受け取って拭いてから、ショーツとズボンをあげ、使ったティッシュを放置するのも気が引けるのでポケットに入れた。

「誰かに言うたら、ホンマに殺すしな」

「言いません。誓って」

「……」

鮎美は恥ずかしいのと、重ねて陽湖に秘密を握られてしまったので、悔しくて涙を滲ませた。

「……」

「あの……そろそろ下山しませんか？ また身体も冷えてきましたし」

山頂についたときは陽湖も少し汗ばむくらい身体が熱くなっていたけれど、やはりコートを着ていないので、また冷えてきている。そして鮎美と同じ生理現象に悩まされていることが、擦り寄せた両脚で見て取れた。

「あんたも、おしっこ我慢してるん？」

「……はい……」

ミルクティーの分だけ少ないとしても同じタイミングで食事を

とってお茶を飲み、そして身体の冷えは陽湖の方が強いし、全体的に小柄なので我慢できる量も少なかった。

「どうする？　ここにできる？　トイレ、港まで無いよ」

「……港まで……」

陽湖は眼下の港を見下ろした。気が遠くなるほど、遠い。鮎美は脱ぎ捨てたコートに砂埃を払ってから羽織った。

「山をおりながら1時間も我慢できるん？」

「……………他にトイレはないんですか？」

「あつたら、うちが使うと思わん？」

「……………」

「北側やったら家もないし、対岸も遠いよ。あとは舟が通ってへんタ イミングを狙い」

「…北側……」

陽湖は石垣の北側に近づいてみる。石垣は垂直に近く、その下も急な斜面で落ちれば命はないような気がする。その分、下には誰もいないし、対岸は霞がかかって見えない。けれど、タイミング悪く周航船が通りかかっている。

「……………あの船から、こちらは見えないでしょうか？」

「うくん……………こつちから肉眼で船が見えるんやから、向こうからも山頂は見えるやろな……………琵琶湖を見に来た観光客が乗る船やから、大きなカメラもって、こつちに向けてるかも」

鮎美は船に向かって大きく手を振ってみた。向こうが見えて手を振り返してくれたのかは遠すぎて小さくわからない。

「……………うう……………ハア……………」

「どうする？　船が通り過ぎるのを待つか、下山するか、うちは、どっちでもええけど、おもしろしたら大笑いしたろな」

「つ…鬼！」

「鬼々島やしね」

「悪魔！」

「サタンやもん」

「うう……………」

「ちなみに、しゃがんで地面にすると跳ね返ってきて汚れるから、うちみたいに立ってせんと、しゃーないよ」

「……あんなカツコ……嫌です……」

「うちが喜んでしたとでも?」

「……うう……早く通り過ぎて……」

陽湖は船が通り過ぎてくれるのを願ったけれど、遅々として進まず、ようやく船が通り過ぎてくれた頃には額に汗が浮かぶほど我慢していた。

「ハア……ハア……」

陽湖は両手で押さええて尿意に耐えている。今にも漏らしそうな顔色だった。

「脱がしてあげよか?」

「じ……自分で脱ぎます……」

もう我慢の限界だったので陽湖は迷っている時間もなくズボンとシヨーツをおろした。

「……ああああ……」

小さな悲鳴のような声も漏らしながら、鮎美と同じ姿勢になると恥ずかしくて涙も流した。そんな様子を見て鮎美は最悪に邪悪なことを始めた。スマートフォンを出して撮影モードにすると、シャッターを切る。

カシャ!

シャッター音を聴いた陽湖がギョツとして鮎美を見る。こちらにスマートフォンを向けて鮎美が構えている。

カシャ!

「っ……や、やめてください! 撮らないで!!」

「……」

カシャ!

容赦なくシャッターを切っているけれど、実はカメラの方向は自撮りモードで陽湖の姿は撮影していない。下半身を露出している女子の姿などを撮影すれば、自分の立場が危ういことはわかっているのでシャッター音で陽湖を脅しているだけだった。

カシャ!

「イヤー・やめてー!」

陽湖は急いでショーツとズボンを引き上げる。撮られたくない一心で着衣を直したけれど、生理現象を途中で止められるはずもなく、ショーツの中に出してしまい、すぐにズボンが濡れて大きなシミをつくった。白いジーンズ生地 of ズボンが薄黄色く濡れていく。

カシャ!

「あはははは、おもしろみたいやん。笑えるわ!」

「……………し……………信じられない……………ひどい……………」

陽湖は涙を零して鮎美を睨みただけれど、冷然と言い返される。

「信じられん? 信じられんなら、しゃーないね。神さまは助けくれんかったね?」

「つ……………そんなことを引き合いに出さないでください!!」

カシャ!

またシャッター音を鳴らした。

「こんな姿を撮らないで!」

カシャ!

「つ……………」

陽湖は恥ずかしさと悲しさでブルブルと震えて泣いた。なのに、鮎美は冷たく嗤う。

「さて、この写真をネットにバラまくけど、神さまは助けしてくれるでしょう?」

鮎美自身も週刊紙でパンチラ写真を全国に発売されたので、それが、どれだけ傷つくか体験している。死にたくなるような思いだった。

「……………やめてください……………、お願いします……………」

陽湖はボロボロと涙を流しながらも、はつきりと言った。鮎美は待っていたように条件を出す。

「やめて欲しかったら、うちの母さんに宗教勧誘すんのも、金輪際やめてや。やめると誓え!」

「つ……………」

泣いていた陽湖がピタリと涙を止めた。そして、鮎美の瞳を見通すように見つめてくる。

「サタン、やはりお前の仕業……お前がシスター鮎美に、こんな、ひどいことをさせている」

「さあ！ 誓え！ うちの母さんを勧誘せん！ でないと、マジでネットにバラまくよ！ あんたの人生終わりや！」

「好きにきなさい。そんなことで私の信仰は揺るぎはしない」

「なっ……マジでまくで！！ あんたが何を信仰しようと自由やけど、うちの母さんまで巻き込むなや！！ ボケ！！」

「彼女は洗礼を望み、信徒となり楽園へ復活するのです。聖書は神を信仰しない人間が死後、どうなるかについて沈黙しています。おそらく天国へ行くだろうというような曖昧な理解は間違っています。そこには何も無いのです」

「あんたとはマジで言葉が通じんわ！！ ホンマにお前が外で小便してるところを！ 世界中にバラまくからな！！ 実名も入れたるわ！！ 月谷陽湖！ 琵琶湖姉妹学園！ 生徒会長！！ ケツ丸出しの写真！ アップロードや！」

「神よ、どうかシスター鮎美からサタンを去らせ給え」

「ええ覚悟や！！ あと30秒だけ待ったろ！！ 実名つきの投稿、そこからじゅうの掲示板にあげたるわ！！ 月谷陽湖！ ついでに好きな男もあげたる！！ 屋城愛也！！ 彼のこと考えて毎日オナニーしてます書いておいたるわ！！ 屋城と、あんたの携帯番号も晒したる！！ めちゃくちゃにしたるしな！！！ できんと思うなや！！ うちの権限があつたら匿名投稿くらい可能や！！ 国会議員限定のアプリがあんねん！！ それで晒したるわ！！」

そんな便利なアプリは無かったけれど、鮎美は脅しのために吠え続けた。けれど、陽湖は揺るがず祈り続ける。とうとう声が枯れた鮎美はスマートフォン画面を操作しながら言う。

「終わりやね。もう送信したよ。せいぜい苦しめ」

「アーメン、ハレルヤ。私は悪魔の脅迫にも誘惑にも屈しません。主イエスがヨルダン川西の山でサタンを退けたように、私もサタンを退

けます」

「ちっ……ボケが……」

もともとアップロードする写真データそのものが無い鮎美は脅し続けるために、スマートフォンをいじりつつ、宗教、勧誘、撃退、迷惑、家族が入会、というキーワードで調べものをしながら下山を始めた。けれど、あまり有効そうな解決策は見つからず、足元が危ないのもスマートフォンをポケットに入れ、下山を続ける。陽湖も山頂で祈りを捧げてからおりてきたようで、少し後方に気配を感じる。

「……ちっ……」

山の中腹あたりの広い場所で、鮎美は足を止め、岩陰で陽湖を待った。そして陽湖が来た瞬間、殴りつけた。

ドツ…

お腹を拳で殴った。

「うっ?!」

陽湖が蹲って苦しむ。顔を殴るとバレるから、お腹というオーツドックスな選択だった。

「うう……うう……ハア……」

「また、神さまは助けてくれんかったね?」

さらに肩を蹴って地面に転がした。

「うっ……痛っ……」

「無力な神さんやね! お空のどっかから見てるはずなのに助けに来てくれん!」

言いながら鮎美は足で陽湖の腹部を踏みつけて押さえ込む。

「ううっ……うううっ……」

「か弱いくせに、意地はりおって」

こんな雑な押さえ込みでは鷹姫なら瞬時に反対の足首をつかんで逆に鮎美を転倒させてくるけれど、まったく格闘技の経験もなく暴力に暴力で応じる気がない陽湖は苦しそうに呻くだけで一切の反撃をしない。さんざんに踏みつけて陽湖の体力を奪った後に鮎美は身体を重ねるようにはしかかると、右手を陽湖の股間へやった。

「指つつこんで処女うばってグチャグチャにしたるか?」

「っ……」

さすがに陽湖が一瞬、怯えた顔をした。

「ええ顔や。もう一度だけチャンスをやる。うちの家にお前らの宗教を二度と入れんと誓え!!」

「……………」

「最後のチャンスや。さつきアップロードした写真も今なら間に合う。なんとか消せる。あんたが約束するなら、うちも助けてあげるよ。けど、言うこときかんにやったら、もう終わりや」

鮎美は右手で陽湖のズボンとショーツを乱暴に押し下げ、足の付け根へ手をあてた。そこは濡れていて、それが興奮ではなく先刻の小水であることはわかっていても、鮎美は怒りと敵愾心に加えて、性的興奮を覚えた。

「このまま犯したろ。奥の奥まで指つつこん掻き混ぜたるわ。そして、その写真も投稿や。全世界にバラまいたる! さあ、どうする?」

「選べ!」

「……………。……信仰は捨てません!」

「うちの家に入れるな言うてるねん!!」

「人はともしびを灯すと、それを量りかごの下ではなく、燭台の上に据え、それは家の中にいるすべての人の上に輝くのです。同じように、あなた方の光を人々の前に輝かせ、人々があなた方の父に栄光を帰するようになさい。マタイ5章は信仰を伝えることが信仰だと、広く神の威光を掲げよと書いています」

「そうか……………あくまで、言うか……………あと5秒だけ、チャンスをやる。」

「……………」

「すべて失って後悔せいや。3」

「……………」

黙っている陽湖の身体が恐怖で硬くなっているのが、のしかかっている鮎美には伝わってくる。

「優しくなんか突っ込まんよ。えぐり込んで引き裂くしな。2」

「…ハアっ……………ハアっ…」

処刑される寸前の人間のように陽湖は怯えているのに、意志を曲げない。鮎美の瞳を見上げて祈っている。

「どんな悲鳴をあげるんやろね。1」

「……アーメン」

「アホが!!」

怒鳴ったけれど、鮎美は言ったことを実行しなかった。もともと実行する気はなく、ただの脅しだった。

「骨の髄まで、アホやな……くそ……」

「……神よ……お救いください、ありがとうございます」

「ちやうわ! うちの判断じゃ!」

これ以上は犯罪行為として揉み消せなくなるという自己保身の結果だった。

「あんたを守ったんは、この国の刑法と、うちの理性や! せいぜい感謝しい!」

「はい。シスター鮎美、あなたの良心にも感謝をささげます」

「……どこまでも……どこまでも、……アホやな……お前はああああ!! くううう!!」

鮎美は空に向かって絶叫した。それから膝を着いて地面を拳で叩いた。その姿は陽湖にはサタンと戦う人間に本気で思えた。今まさに神の奇跡と人の自由意志がなせる業を見ている気になる。

「神よ、シスター鮎美にも導きをください」

「……くそ……」

悪態をつきながら、鮎美は立ち上がると、のろのろとした動作でスマートフォンを触りブラウザ画面を陽湖に見せる。

「安心しい。あんたの写真を投稿したりはしてない。このご時世、そんなことしたら、うちが捕まるし」

「ああ……あああ……神よ……ありがとうございます……ありがとうございます……」

自分の下半身裸の写真が世界中に出回っていると覚悟していた陽湖は安心と感謝で嬉し涙を零した。

「せやから、神やなくて、うちの判断や!」

「シスター 鮎美の良心にも本当に感謝をささげます。ありがとうございます」

「……………」

さんざん脅迫して暴行した相手に感謝されると、鮎美は自己嫌悪で背筋が腐りそうだった。

「もう帰るで。……………うちがしたこと黙っておきや。あと、うちの秘密もバラしたら、あんたの写真、どうなるか……………二人して破滅やからな……………」

「はい、誰にも言いません」

「……………」

鮎美は泣きそうになって、陽湖から顔を背けた。あれだけ手酷い目に遭わせた方が泣くのは道理に合わず恥ずかしいので顔を向けられない。けれど、やっぱり母親のことは許せない。そんな複雑な気持ちで、泣き出したくなったけれど、我慢しながら山をおりた。ちようど3時間が過ぎていて、鮎美と陽湖は家に戻った。

「ただいま」

「ただいま戻りました」

「おう」

「おかえりなさい」

居間には玄次郎と美恋がいて、二人は少し離れて座っていたけれど、なんとなく距離が普段より近いのが感じられた。そして、鮎美も陽湖も性的経験は無いけれど、もう18歳の女性として、その女の勘が夫婦二人が昼間から抱き合っていたのだと感じさせてくる。なにか痕跡があるわけではないけれど、そう感じている。そして、鮎美が美恋と目を合わせると、恥ずかしそうにそらされたので確信した。

「……………まさか……………うちらを寒空の下に追い出して二人でエッチしてたとか……………ちやうやろな?」

「……………」

美恋と陽湖が赤面し、玄次郎が笑った。

「だははは! 正解!」

「ぎげんな!」

「夫婦の仲直りといえば、一発だろ」

「このエロオヤジ……」

「ここに引越してから大阪のマンションと違って防音も無いから、美恋が恥ずかしがって、ついつい無かったからな。とくに一つ屋根の下に、よその娘さんまでいるのに、やりにくいだろ」

「だからって……」

「シスター陽湖、服が泥だらけよ。どうしたの？」

「これは……二人で山に登って、私が転んで汚したんです。すいませ
ん」

「転んで……そう。…怪我は？」

美恋は少し疑うような視線を鮎美に向けたけれど、陽湖の言葉を信
じることにした。

「平気です」

「お風呂に入ってらっしゃい。今なら、まだ温かいから」

「はい」

「母さん、エッチの後、お風呂を使ったんやね？」

「っ……」

「うむ、それも正解！」

「と、とにかく入ってらっしゃい！」

「は、はい！」

陽湖が浴室へ向かい、美恋も洗濯のために脱衣所へ入る。鮎美は寒
いのでストーブの前に座った。

「そんで？ 母さんと、どんな話したん？」

「これからも愛しているよ、と」

「っ………そういうこと、娘に言う？」

「訊いたのは鮎美だ」

「やとしても……ああ、もう！ うちもお風呂に入りたいわ！ 寒い
しー！」

今回は陽湖の裸が見たいわけではなくて、むしろ陽湖が怪我をして
いないか、気になる鮎美が浴室へ向かうと、美恋が立ちはだかった。

「一人ずつ入りなさい」

「……………うちも身体、冷えたねん」

「少し待ちなさい」

「すぐ揚がりますから！」

母娘の会話が聞こえてきた陽湖が扉の向こうから気を遣って言うてくる。

「ええよ！」

「いいのよ！」

「気を遣わんでええよ！」

「気を遣わなくていいのよ！ ゆっくり温まりなさい！ アユちゃん！ どうして、いつも、そうなの?! もう子供じゃないのよ！ 一人で入るのが普通でしょ！」

「別に……………いつもやないし。たまに、やし」

「……………。大事な話があります。こっちに来て」

いつになく美恋が強い調子で鮎美の手を引くと、居間に戻らせ、玄次郎の前に座らせた。美恋は夫の隣りに正座する。

「大事な話があります。玄次郎さんもふざけないで真剣に聴いてください」

「また宗教の？」

「違います！」

「そうか……………それなら、……………それで？」

「アユちゃんの、鮎美のことです」

「……………うちの……………」

鮎美は嫌な予感を覚えた。居心地が悪い。逃げたくなった。

「うち、寒いし、お風呂に入りたくないんやけど」

もうストーブで温まってきたけれど、逃げ口上に使ったものの、美恋は逃がしてくれない。

「本当に真剣な話なの。ちゃんと聴いて」

「……………はい……………」

背後で陽湖が揚がってきた気配がする。陽湖も親子三人の様子を見て、やや離れたところに正座した。

「私は鮎美のことが心配なの。とても心配なのよ」

「……そう……ごめん……週刊紙の件では心配かけて……」

「それだけじゃないの。……」

美恋は切り出し方を迷い、陽湖を見て、それから玄次郎を見て、鮎美へ告げる。

「私は玄次郎さんと愛し合って結婚しました」

「……」

「私は女性として、男性だった玄次郎さんを好きになったの」

「……」

もう鮎美には話の流れが読めた。

「鮎美は男の人を好きになったことがある？」

「……別に……」

「別にじゃないでしょ！ あるの?! ないの?!」

「……ないよ」

「どうして無いの?」

「……知らんし……」

そんなん、うちが訊きたいわ、と鮎美は思いながら、陽湖が秘密をバラしていたのではないかと疑えてくる。

「女の子はね、男の人を好きになるものなのよ」

「……ふーん……そうらしいね……」

鮎美が斜めに構えて、陽湖を一睨みした。睨まれても陽湖は動じない。玄次郎が退屈そうに言ってくる。

「母さんは何が言いたいんだ?」

「……」

三人は男性の鈍さを改めて実感しつつ、美恋が告げる。

「鮎美が女の子ばかりに興味をもっているのを、あなたは知ってる?」

「は? いや、知らないけど……そうなのか? 鮎美?」

「……」。はい、そうやよ

自分でも意外なほど、あっさりと認めていた。

「そうか……そうだったのか……そういや、彼氏できたことない

な……えっと、それは、あれか？ 女が好きなのか？ 女なのに」
「……うん……」

声が震えそうになるのを抑えて答えた。

「そうか………。そういう系の人か……。まあ、いいんじゃないか。人それぞれの個性と自由だ」

「父さん……」

父親の反応で泣きたくなくなるほど安堵したのに、母親は違った。

「いいわけないわ!! 自然の摂理に反してる!!」

「そんな大声を出すなよ」

「どうして、あなたは、そうなの?! この子は間違った道を進もうとしてるのよ?!」

「……いや……でも……」

「子供が間違ったとき、それを注意するのが親でしょ?!」

「……ああいうのは他人が注意して、どうなるものでもないだろう？」

「他人じゃない！ 親よ!!」

「いや、親でも、ああいうのは……。たぶん、そのままなんじゃないか？」

「そのままでもいいって言うの?!」

「いいとは言わないが、人それぞれだってことだよ」

「違う！ そんな考え方は間違ってる！」

「そうヒステリックに喚くなよ」

「あなたと私の子供よ?! 私たちが愛し合って産んだ子供が同性愛だなんて、おかしい!!」

「だから、大声を出すな、近所に聞こえるぞ」

「っ……………」

言われて美恋は口を押さえた。そして涙を流した。

「鮎美、お願い。変な道に進まないで」

「……………」

「人はね、夫婦になって幸せになるの」

「……………」

「私は玄次郎さんと結婚して幸せよ。少し不便なところに越してきた

けれど、それでも幸せ。鮎美を赤ちゃんから育てるのも、楽しかった」

「……………」

「鮎美も、もっと積極的に男の人へ興味をもってみて。ナオくんも感じのいい人だったし、学校でもカッコいい人、いるでしょ？」

「……………おらんし……………」

「……………。鮎美、お願いよ。私は鮎美にも幸せになってほしいの」

「……………。幸せは……………人それぞれやん」

「違うわ。男と女、それで夫婦。それが自然の摂理。神が人をお造りになったときも、そうおっしゃったわ」

「ちっ……………」

どうして母親が急にキリスト教系の考えに染まったのか、だんだんわかってきた。人権という思想の延長線上には同性愛の是認が含まれてしまう。けれど、神を持ち出してくれば、娘を説得できるかもしれないと、そう考えたのだと、わかった。そして陽湖が再び強烈に憎くなる。

「あんた、約束を破って喋ったな?!」

「いいえ、私は話していません。お母さんはシスター鮎美を心配していて気づかれたのです」

「っ……………くっ……………」

憎いけれど、陽湖がこんなときに嘘をつく人間ではないとも思える。

「鮎美、シスター陽湖は私の相談にのってくれたの」

「気色悪い呼び方をすんな言うてるやろ!!!」

「……………。私は洗礼を受けます」

「っ！　　なんで、その話になるねん!!」

「正しい行いが何かを、親が子に示す必要があるからです」

「示してくれんでええわ!!」

「私が正しく生き、鮎美も見習って、正しく生きて。お願い」

「……………。もう、お前、出て行け」

一瞬、母親へ言ったようにみえたけれど、鮎美が言ったのは陽湖へ

だった。

「お前、この家から出て行け!!」

「きゃっ?!」

陽湖は乱暴に髪をつかまされると玄関まで引っ張られ、外に突き出される。

「ううっ…」

外の地面に陽湖が裸足で転がる。すでに大声で口論していたために、外には4、5人の島民が出ていて、何事かと見守っていた。鮎美は人目も気にせず怒鳴る。

「おかしな宗教を母さんに吹き込みやがって!!」

「……」

「シスター陽湖、大丈夫?!」

「はい、平気です。またサタンが暴れ出したのです。気をつけて」

「っ……お前は……お前はっ……お前はああああ!!」

鮎美が陽湖を蹴りつけようとするのを、美恋は身を挺して守ろうとし、そして玄次郎は背後から羽交い締めにする事によって娘が暴行の現行犯になることを阻止した。それでも鮎美の怒りは治まらない。

「出て行け!! うちの家から!! この島から!!! 出て行け!!! アホン

だら!!」

「……………」

「落ち着け、鮎美、人が見てる」

外で怒鳴りだしたことで、ますます島民たちは集まってくる。そして、もともと陽湖が毎週のように礼拝案内のリーフレットを戸別配布することを、やはり保守的な地域だけにこころよく思っていなかった島民が多く、強い関心を引いていた。

「二度と、うちの前に現れるな!! 勝手に神の国でも樂園でも行つとけ!!」

「……………」

「日本はな! 仏教と神道の国なんや!! イエスなんぞ知るか!! サタンといっしょに去れや!!」

「そうじゃ！ 芹沢先生の言うとおりじゃ！」

島民の中の老人が同調してきた。一人が同調すると次々に陽湖を罵る声上がる。今までリーフレットを戸別配布しても苦情があらなかったのは、陽湖が国会議員として期待されている鮎美の家に同居しているから言いにくかっただけで、とうの鮎美が追い出そうとしてくれるなら、願ってもないチャンスだった。

「出て行け！」

「耶蘇教はいらん！」

誰かが空のペットボトルを陽湖へ投げつけた。さらに植木鉢まで飛んでくる。それは事件にならないように、少し狙いを外して、陽湖の足元へ落ちたけれど、割れて破片が飛び散り、陽湖の手を切った。群集心理は危険なまでに燃え上がってきている。このままでは魔女狩りになりそうだった。

「母さん、目を覚ましてや！ こっち来いい！」

「……………」

美恋と陽湖は支え合っていて、動かない。

「…………シスター陽湖……………」

「危険ですから、私から離れてください」

「いいえ…………私は洗礼を受けます。今」

「今？」

「はい」

美恋が西を指し示した。そこには琵琶湖がある。港の反対側で浜辺になっていて夏には子供たちの水遊びが可能な場所だった。美恋は堂々と言う。

「ご覧なさい、水があります。わたしがバプテスマを受けることに何の妨げがあるでしょうか」

「もし、あなたが心を尽くして信じるなら救われます」

陽湖が応じて言った。島民たちには二人の会話は意味不明だったけれど、鮎美は付き合いが長くなってきたので、それが聖書の一節なのだとわかる。美恋がまつすぐに陽湖を見つめて言う。

「わたしは、イエス・キリストが神の子であると信じます」

「母さん……何を……する気なん……」

「おい、美恋、お前……」

父娘が不安に思っているのに、美恋と陽湖は数メートル先にある琵琶湖へ向かい、そこへ入っていく。

「おい！ 死ぬぞ!!」

「母さん！ やめて!! 出て行くのは、そいつだけでええねん！」

真冬なので気温より水温は高いといっても、かなり冷たい。そこへ二人は入っていき、陽湖は肩まで浸かり、そして美恋は陽湖に支えられて、頭のとっぺんまで水に浸かった。それが洗礼の儀式らしく、それだけで終わりだった。二人が浜辺に戻ってくる。罵っていた島民たちも、やや圧倒されていたけれど、そういえば似たようなことは神道や空手家でもやっているな、と感じていく。陽湖と美恋が抱き合った。

「おめでどう、シスター美恋」

「シスター陽湖、ありがとう」

「……」

「鮎美、あなたも、よく聖書を勉強して、正しく生きてちょうだい。お願い」

「……そんな勉強はしとらない……もう、勝手にしてや……」

うなだれた鮎美はトボトボと家に入っていく。玄次郎が妻と陽湖の肩を押した。

「二人とも風呂に入れ。みなさん!! お騒がせしました！ ちょっと妻は興奮していたようです！ すみません！ よく言っただけで聞かせますので！ どうか、今日のところは、これで！」

何を言い聞かせるのか、自分でも不明だったけれど、とりあえず玄次郎は、その場を治めて風呂に二人を押し込んだ。

1月10日 成人の日

翌1月10日の月曜日、成人の日だったので18歳として予定のあの鮎美は早朝から目を覚ましていたけれど、布団の中にいた。

「……嫌な顔やね……」

自分の写真を見て、つぶやいている。

「……………まさにサタンや……」

山頂で撮った写真だった。陽湖を脅すためにシャッター音を出すとき、自撮りモードにしていたので何枚も自分の顔が撮れている。かなりのアップで撮れた写真は自分でも嫌になるほど、醜い顔をしていた。

「どこまでも最低やな……」

自分が生理現象を我慢できなくなって外で済ませたことを人に言わないでほしいと頼んだ直後に、陽湖も我慢できなくなったのを利用して撮影したフリをして脅迫するという卑劣極まる策略をろうしてしまった。けれど、そんなことをした理由はある。母親が宗旨替えしてしまったことは、まるで母親を盗られたような嫌な気持ちがある。鮎美も美恋も、とくに熱心な仏教徒でも神道家でもなく、なんとなく初詣は神社へ、お盆は寺と墓へ、そんな緩やかな日本人らしい心情でいたのに、それを変えられてしまった。

「何が唯一絶対の神やねん……八百万の神々でええやん」

再び鮎美は自撮り写真を見る。本当に、これが自分なのかと思うほど、嫌な顔だった。その嫌な顔を、あえて待ち受け画面に設定した。

「二度と、同じ失敗はせん」と」

鷹姫が好きな戦国時代の故事に習って、三方原の敗戦の後に徳川家康が自画像を描かせて戒めにしたことをスマートフォンで再現した。布団から出て、制服に着替える。式典なので、なるべく着古していない新品に近い物を選んだ。髪をとかして洗顔のために一階へおりと台所に美恋と陽湖がいて朝食の用意をしている。

「おはようございます、シスター鮎美」

「おはよう、…シスター鮎美」

「……おはようさん」

朝からケンカしたくないので気持ちの悪い呼び方については触れず、通り過ぎようとしたけれど、やっぱり虫酸が走るほど気持ちが悪いので詰問する。

「なんで、母さんまでシスターって、うちを呼ぶの？ シスターは姉妹って意味やろ？ おかしいやん」

「それは…」

美恋が言い淀むと陽湖が説明する。

「神の御前に、私たちは、みな平等に兄弟姉妹なのです」

「ああ、そうでつか。平等と言いつつ、しっかり性別だけは分けるんやね。差別主義な神や。親子でさえ平等やのに、男女別でつか」

「……………」

「あとな、あんたら知らんと思うけど、シスターって女同士で呼び合うの、かなり昔に流行った女性同性愛者間の隠語やよ。エスとも言う。今ではエス言うたらSMのエスやけどね」

「そんな淫らな話は聴きたくないわ！」

「っ…」

こつちかて気持ち悪い呼び方を母さんにされたくないわ、という言葉葉を飲み込んだ鮎美は洗顔してから父親が読んでいる新聞を分けてもらう。主に政治欄と地方欄に目を通しながら朝食を待った。

「いただきます」

「……………」

「……」

美恋と陽湖が祈り、玄次郎が威張る。鮎美は食べながら言った。

「父さん、しよーむないこと、もうやめい。さっさと食べい」

「そうか……習慣化してくると、だんだん総統な気分になってたのにな……」

「あ、もしかしてユダヤ教徒を虐殺した総統の真似をすることで、あえてアブラハムの宗教のくだらなさを暗に指摘してたりした？ それ

なら続ける?」

「いや……そこまで深く考えてない。そういえば、そうだったな。鮎美は物事を深く考えるようになったな」

「父さんが浅すぎるねん」

「これからは琵琶湖くらの深みをもつよ」

「微妙な深さやなあ」

父と娘で会話し、そして母と陽湖は別の会話をしている。同じ食卓を囲んでも、やや分断された家族は表面的には穏やかな朝食の時間を過ごしている。とくに鮎美が同性愛者であることを認めたことも考えれば、穏やかすぎたかもしれない時間だった。その朝食を終える頃に鐘留が訪ねてきた。

「ハーイ♪ おはよう」

「おはようさん。……そのカツコ、知らんかったら不審者と思わんな」

鐘留は全身を防寒してるので、少しも肌が見えない。真冬の登校時はスキーウェアのような上下にコートも着込み、毛皮の帽子と防寒マスク、ゴーグルまでしているのでシベリアに行くのかと思うような姿だった。しかも、今日は手袋も分厚い。

「ごっつい手袋して」

「だって今日は漁船で阪本市まで行くんでしょ。超寒いよ、きつと」

成人式は学園ではなく阪本市の湖岸にある大きな施設で行われる。そこは阪本駅から交通の便が悪く、多くの生徒たちは保護者と自家用車で出向くけれど、鮎美たちは島から六角駅へ行くだけでも時間がかり、タクシーを使う名目は立たないので、湖上交通の試用ということで島内の漁船をチャーターしていた。そうすることで経費から島へ現金を落とせるので、地元が潤う。物好きな鐘留は、その話を聞いて同乗を望み、両親と朝一番の連絡船で島へ来ているし、陽湖の両親も顔を出した。

「二いつも娘がお世話になっております」

陽湖の父である月谷啓治(けいじ)と母である月谷陽梅(ひうめ)が頭を下げている。玄次郎と美恋も保護者同士として頭を下げる。

「いえ、こちらは楽しく過ごさせてもらっていますよ」

「よく家事も手伝ってくれて、シスター陽湖がいてくれて助かります」

挨拶だけで終わらず、啓治が右手を出してきたので玄次郎は、たまに社会人として握手することもあるので自然と応じたけれど、陽梅と美恋まで握手しているのには違和感を覚えたし、さらに陽梅に握手を求められ、それにも応じたけれど違和感が続き、啓治と美恋まで親しく握手しているのは複雑な気分だった。同じく、そばにいる鐘留の両親とは日本的な挨拶だけで終わる。全員で港へ出ると、鷹姫と父の衛、継母の郁子と二人の義妹もいた。鷹姫と衛は和装で、鷹姫は晴れ着を、衛は何代も前から所持している紋付き袴を着ている。郁子と義妹二人は平服なので同行しないのだと、わかった。

「うわああ♪ 鷹姫、超キレイやん！」

「シスター鷹姫、とても美しい姿です」

「宮ちゃん、和装が似合うねえ」

「……ありがとうございます……」

郁子に着付けてもらい、髪も結び上げてもらった鷹姫は誉められて照れ臭そうにしている。高校生として迎える成人式は制服でも晴れ着でもよいことになっているので、宮本家は和装を選んだようだった。鷹姫が高給をもらうようになり、はじめて大きな買い物として購入した晴れ着は赤と橙を基調とした華やかなもので、鷹姫の女ぶりをこの上なく高めているので鮎美は見惚れた。

「鷹姫……ホンマにキレイやね……」

「……芹沢先生のおかげです……。予想以上に動きにくいのが難ですが……」

鷹姫が剣道の構えを取ったので、鮎美はやめさせる。

「今日は剣のことは忘れて、お姫様してい。鷹姫のお母さんかて、それを望むから、あんたに姫の字を与えたんやと想うよ」

「はいっ」

頷いた鷹姫は、いつもはしない女性らしい仕草を心がける。そうされると、鮎美はますます見惚れた。

「鷹姫、撮らせて」

スマートフォンを構えて撮影する。何枚も撮って、一番いい写真を待ち受け画面に設定した。やっぱり自分の醜い顔より、ずっといい。背中に母親からの心配そうな視線を感じるけれど、無視した。

「お姉ちゃーん！　いつてらちゃーい！」

「いちやちやーい！」

鷹姫の5歳と3歳の義妹と継母に見送られて、鮎美たちを乗せた漁船は島から西へ進路を取る。阪本市の北部にある大礼拝堂を目指した。陸路では大きく迂回しなければならぬのに、水上を行けば10数キロで済む。とはいえ、吹きさらしの漁船は寒かった。数十分の船旅で、制服やスーツ姿の鮎美たちはコートを着けていても寒さに震えた。震えなかったのは完全防備の鐘留と、鍛え上げている鷹姫と衛だけだった。

「うゝ寒っ…カネちゃん、その下は制服？　晴れ着？」

「制服だよ」

「金持ちなんやし、晴れ着にせんの？」

「動きにくそうだからヤダ。しかも、アタシのプロポーションの意味がないよね？」

「その完全武装でプロポーション言われてもなあ」

「寒そうだね。きやははは！」

鐘留は船の舳先に立って、両手を水平に広げた。寒風が直撃しているけれど、防寒のおかげで平気そうだった。鐘留の視線の先に大礼拝堂が見えてくる。

「アホみたいにデカイもの建てて」

「おお、素晴らしいな」

玄次郎が興味をもって見ている。大礼拝堂は湖岸にそびえ立ち富士山を思わせる形をさらに曲線的に洗練させた設計で銀色に光り輝いている。

「あそこにラスボスがいますよ。玄次郎」

「……………。なぜ、オレの名を知っている？　そして、なぜに呼び捨て？」

「アユミンのパパでしょ？　じゃあ、アユパパは？」

「そんなマダガスカル島あたりの部族みたいな」

「すみません！　育て方を間違えました！」

鐘留の父親が失礼な娘を取り押さえる。玄次郎は気にせず大礼拝堂を見つめた。

「いい曲線だ。どの方向からでも太陽を反射するのか、なるほど神々しいな」

「父さん…まさか、父さんまで入信するとか言い出さんといてよ」

「あなた、一度、いっしょに日曜日の礼拝へ参加してください」

「ほら、食いついてきた」

「オレは、ただ建造物として素晴らしいと思ってるだけだぞ。たしかに神を感じさせる、いい造りだ。こういう宗教施設は、たいてい関係者以外立入禁止だから堂々と入れるのは嬉しいな」

「琵琶湖の景観を崩してるだけやん」

「アユミン、なんかご機嫌悪いね？　月ちゃんをときどき睨むし。何かあった？」

「大有りや！　うちの母さんをアホな宗教に勧誘しおって！　入会させよってん！」

聞こえよがしに鮎美が怒鳴ると、陽湖が背筋を伸ばして声をあげる。

「シスター美恋は昨夜、私が洗礼を施しました。受洗は彼女自身の意志であり、神の導きです」

「ちっ……沈めたるか。琵琶湖に！」

「え？　え？　マジ？　マジでアユミンのママ、宗教やるって？　マジ?!」

鐘留が驚きながら美恋を観察する。美恋も背筋を伸ばした。

「はい。私は神が指し示す正しい道を行います」

「うわああっ……本気だよ。目がマジだよ。やばいね、アホって伝染するんだ。伝るんだ、バカが拡がってるよ」

「……………」

鮎美と玄次郎は家族をバカにされて反論したい気持ちと、鐘留の言

い様が低俗でも否定できない気持ちで板挟みになった。鷹姫も問う。

「本当に芹沢先生のお母様はキリスト教の信仰を始められるのですか？」

「はい」

「そうですか……………」

鷹姫が心配そうに鮎美を見てくる。鮎美は泣きたくなって、悪態をついた。

「秀吉と家康の苦労が、よくわかるわ。こいつら、何を言うても無駄やねん。殺すしかない。踏み絵させて磔や。イエスと同じ殺し方にしたろ」

「……………」

美恋と陽湖が黙っていると、陽梅が美恋の肩を抱き、啓治が娘の頭を撫でた。撫でられて陽湖が言う。

「シスター鮎美は、大学の設置にも協力してください、とても良い人です。お父さん、お母さん、どうか誤解しないでください」

「ああ、わかってるよ」

「きつと、彼女も気づいてくれるはずよ」

「ちつ…………どうせ、今はサタンが言わせてるだけとか、そういう発想やろ。ホンママムカつくわ。いつそ安土城が近いし、第六天魔王とでも思っておけ！」

「信長ですか…………ですが、第六天魔王は仏道の妨げをする存在、信長は宣教師を受け入れて布教を許可したのでですよ？」

鷹姫の指摘で鮎美が勢いを失う。

「うっ、細かいことを…………」

「私としては芹沢先生のイメージは江姫だったのですが…………」

「うくん…………そうなん？ ……姫は…………うちのイメージかなあ…………せいぜい堺の商人とか…………ほな、鷹姫の自己イメージは？」

「私は江姫に仕える近衛の一兵士となれば、幸甚です」

「一兵士で…………、いつそ、徳川秀忠になって、うちを守ってよ」

「2代将軍ですか、畏れ多い」

「うちと結婚するの嫌？」

少し恥ずかしそうに鮎美が問い返したとき、漁船が大礼拝堂最寄りの船着き場へ到着した。一人ずつ棧橋へおりていき、鮎美は狙って鷹姫の直前におりてから、鷹姫へ手を差し出した。晴れ着なので歩幅が限られていて、船の乗り降りには危ない。乗るときは父親が自然に助けていたので、今度は鮎美が手を貸したかった。少し気取って言う。

「お姫様、お足元が危のうございます。お手を」

「クスっ……さっきの話と逆ですね」

「たまにはね」

鷹姫の手を握り、エスコートした。少し歩いて大礼拝堂へ着くと、すでにマスコミが集まっていてフラッシュを焚かれた。鮎美は慣れているので会釈して、いい表情をつくったけれど保護者たちは不慣れなので緊張しながら歩く。大礼拝堂の敷地に入ると、マスコミの数は減った。許可された数社しか入っていないようで静粛が保たれている。建物に入ると、高い天井の広いホールで、備え付けの椅子が並んでいる。ぎつと3000人が座れそうな広さだった。その中央に成人を迎える鮎美たちの席があり、答辞をする関係上、鮎美と陽湖は最前列に並んで座り、そばに鷹姫と鐘留も座った。座った鐘留は手袋を脱ぎ、コートも脱ぎ、どんどんと装備を外して完全防寒から制服姿へとチェンジしていく。

「はあ……暖房、いい感じにきいてるね」

「そやね。……えつと、……陽湖ちゃん、しばらくケンカすんのやめよか」

「はい。私は一度もケンカした覚えはありませんが、仲良くするのは賛成です」

これから大役があるので一時的に関係を修正した。

「原稿ある？」

「はい、どうぞ。漫才はカットしてますよ」

「やっぱりな」

鮎美は原稿へ目を通していく。無難な答辞内容で宗教色も無かった。式が始まり、校長の挨拶に続き、屋城が短く聖書に由来する話を

して、続いて衆議院議員の西沢が祝辞をくれる。

「みなさん、おめでとうございます。また、保護者のみなさまも、今日まで育ててこられたご苦労と、無事に今日を迎えることができた…」

政治色も宗教色もない、ごく無難な祝辞が送られ、鮎美たちの番が来る。もともとは生徒代表は陽湖一人の予定だったがけれど、鮎美が参議院議員になったことで抜擢されつつも、例年の慣行もあり陽湖もおろされることなく、二人での答辞となる。

「今日この日を」

「迎えることができ」

「私たちは」

「晴れて一人の大人として」

鮎美と陽湖が交互に話すスタイルをとっての答辞だった。

「大人としての責任と自覚をもって」

「何事にも全力で」

会場は静粛でテレビカメラが鮎美たちを生中継している。多くの保護者は子供が成人してくれたことを心から喜んでいるし、一部は涙ぐんでいる。とくに母親たちはハンカチを濡らしていた。対して生徒たちの多くは冷静で、いよいよセンター試験が近づいている者もいるので一部は式典を無視して単語帳や参考書を見ていたりするけれども、教師たちは大目に見ている。一年生と二年生も静かに座っているけれど、やはり退屈していたし、冬休みの宿題を写している者もいる。

「お父さん」

「お母さん」

「今日まで」

「ありがとうございます！」

答辞が終わり、拍手が起こる。無事に式典が終わり、まずは西沢たち来賓が退場し、次に司会者が三年生の退場を告げる。

「卒業生退場！…し、失礼しました。成人された三年生、退場！みなさん、拍手で送り出しましょう！」

ありがちなミスに笑いが起こりつつ、鮎美たちが退場する。

「気の早い卒業やね。クスクス」

「人の失敗を笑うのはいけないことですよ」

一年生と二年生の間にある花道を抜けて、ゆっくりと退場していくときだった。

「芹沢アアツ!!」

二年生の中から一人の男子が猛然と迫ってきて、鮎美は最初、握手でも求めてくるのかと暢気に思っていたけれど、男子の手には刃物があつて強い敵愾心を目に宿していた。

「え……」

「っ……シスター鮎美っ……」

突き出されてくる刃物の前に、鮎美も陽湖も何もできなかつたけれど、二人の背後にいた鷹姫は動いた。

「危ない!」

鮎美を守ろうと、刃物を恐れず前に出ようとしたけれど、晴れ着のせいで素早く動けない。

ズッ!

刃物は出刃包丁で、その刃先が鮎美の腹部へ突き立てられる。

ベシッ!

深く刺される前に、鷹姫が手刀で男子の手首を叩き落とした。

スパッ:

それでも刺さっていた刃は鮎美の下腹部を斬り裂き、大きな傷口をつくった。

グッ:

鷹姫は男子の襟元をつかむと、柔道の投げ技である払い腰をかけて床に叩き伏せる。通常は相手を慮って受け身がとりやすいように手を引くところを、床へ叩きつけるように落として、さらに腕をとって肘を折る。晴れ着の裾を脚力で開いて、男子の腕を両脚で挟み込み、肘を反対に折り曲げた。

ベキッ!

骨の折れる音が鷹姫の内腿に伝わってくる。

「うっ……うわああああ?!」

男子の悲鳴が大礼拝堂に響き渡る。それでようやく周囲は異変に気づいて騒ぎ出した。

「い、今! 芹沢議員に何者がか! あ、あれは生徒でしょうか! 生徒の一人が芹沢議員に刃物をもって襲いかかった様子です!」

二階席で、ずっと静かにしていたレポーターがテレビカメラに向かって叫んでいる。

「血が…、芹沢議員は刺された模様です!」

「シスター鮎美?! 大丈夫ですか?!」

「……うん……大丈夫……ちよつと……痛い……痛い、だけ……うっ……うっ……」

鮎美は微笑をつくろうとしたけれど、傷は小さくないようで焼け付くような痛みがジワジワと激しくなってくる。

「うっ……うっ……うっ……」

立っている鮎美の両脚が腹部からの血に染まって赤くなる。臍の下あたりを刺されたようでスカートの前が斬られている。鮎美が両手で押さええても、指の隙間から血が溢れてくるし、両脚の内腿も生温かく濡れていく。

「キヤーー?!」

「うわー?!」

出血を見て生徒の一部が悲鳴をあげている。陽湖もパニックになった。

「ど……ど、どうしたら……きゅ……救急車!! 救急車を呼んでください!! 誰か!!」

やっと教師たちも事態の深刻さに気づいて、救急車を呼ぶ。けれど、警察は呼ばずに済ませられないかと迷っていた。鮎美を刺した男子は、ずっと鷹姫が押さえ込みをかけている。腕十字で肘を折った後は袈裟固めで押さええている。両脚を大きく開いて、晴れ着の裾が乱れて下半身があられもない姿になっているのを、気をつく女生徒が上着を脱いでかけてやり、一部の心ない男子がスマートフォンで撮影しようとしていたのを阻止してくれた。会場は騒然となり、鮎美の両

親は生徒たちを掻き分けて娘のもとへ駆けつけた。

「鮎美?!」

「鮎美っ?!」

「ハアっ…くっ…ううっ…痛いっ…ううっ…病院…」

もう鮎美は立っていられず、下腹部を押しえて丸く蹲っている。その腰回りには血だまりができていた。あまりの激痛に冷や汗と涙を流して青ざめている。

「すぐに救急車が来る! しっかりしろ!」

「鮎美! 鮎美! あああ! 鮎美い!! イヤよ! イヤ!! どうしてこんなことに?! どうしてアユちゃんが?!」

「パニックを起こすな! 誰か!! 会場の外に出て救急車の誘導を頼みます!」

「あなた、どうしてそんなに落ち着いてるの?! いつもそう!!」

「慌てたって無意味だ! お前も落ち着け!!」

「だって! アユちゃんが!! こんなに血が!!」

「喚くな! 本人までパニックになる! お前は神にでも祈ってる!」

「っ…神さま! 神さま! どうか鮎美を助けてください! 神さま!」

美恋は本当に祈り始めたし、一部の生徒と教師たちも祈り始める。鮎美は蹲った状態から、さらに倒れそうになる。それを玄次郎が抱きとめてくれた。

「鮎美、気をしっかりもて!」

「ううっ…痛いっ…痛いよ…ううっ…父さん…痛いっ…」

「痛いいいい! うわああ! 離せよ!! チクショー! うわああ!」

腕を折られた男子も鷹姫に押しさえつけられながら喚いている。

ガブッ…

袈裟固めで男子の身体へ斜めにのしかかっている鷹姫の肩を噛んできた。

「くっ…」

鷹姫は噛まれても身を引かず、逆に肩を相手の顔へ押しつけて呼吸を妨げ、それで相手が噛むのをやめた瞬間、袈裟固めを解き、再び折っていない方の腕を両脚で挟むと、また腕十字をかけた。

ベキッ！

「うああああ?!」

「ハア…ハア…これで抵抗できないはず…」

相手の両腕を折った鷹姫は鮎美の様子を見に行きたくて背中を向けた。

「うああああ！ チクシヨール!!」

鷹姫の背中へ男子が突進してくる。両腕を折られているのに頭から突っ込んでくる。鷹姫が振り返ったときには、もう避けている間になかった。

「っ…」

周りで見ていた生徒たちは一瞬、鷹姫が頭突きを受けて倒れたのかと思ったけれど、それは巴投げだった。鷹姫は相手の襟元を両手で持つと同時に後方へ倒れ、片足を相手の下腹部へあてると、自分が倒れる方向へ相手を投げた。男子の身体は宙を舞い、そして床に叩きつけられる。

ドンッ！

「ゲホッ…」

「…」

さらに鷹姫は素早く起き上がって相手の首を背後から絞める。道着の有無に関係なくできるチョークスリーパーだった。相手の首へ右腕を巻きつけ、前腕と二頭筋で頸動脈を絞めつつ、左腕で絞めを補強しながら左手で相手の後頭部を前へ押し出す。技は完璧に決まり、一瞬で男子は意識を失った。ぐったりと動かなくなり、崩れる。

「……ハア……ハア……やっど…」

「……殺した?! 大津田を」

「キャーっ!!」

格闘技を知らない生徒たちが、鷹姫が絞め殺したのだと勘違いして驚いている。

「芹沢先生は?!」

騒がれても鷹姫は気にせず鮎美の方へ駆ける。

「芹沢先生はっ?! つ……」

鷹姫は鮎美の姿を見て凍りついた。鮎美の下半身は朱に染まり、顔から血の気が無くなり、苦痛に震えている。

「ハア……うう……痛い……ううっ……」

「シスター鮎美、どうか気を確かに! きっと神の加護があります!」

「神さま! 神さま! 鮎美を助けてください、神さま!」

「……父さん……う……うち、……死ぬの?」

「大丈夫だ! しっかりしろ! すぐに救急車がくる!」

「……うううっ……イヤやっ……なんで……うちが……死……」

「鮎美……くっ、……」

玄次郎は泣かないように歯を食いしばって、娘を励ますために笑顔をつくろうとしたけれど、無理だった。夥しい量の出血で鮎美は下半身は生温かいのに寒くなってきた。見上げると天井が高い。偶像崇拜をさけていても、神秘的な造りを意図して設計された天井の骨格を見ていると、吸い込まれそうな気がしてくる。

「……うち……っ……ここ……で……死ぬんやっ……」

どうして刺されたのか、そんな考えてもわかりそうにないことよ、鮎美は死を感じて、この世に罪を残しておきたくないと想った。泣きながら励ましてくれている陽湖を見る。

「陽湖……ちゃん……これ……」

鮎美は血まみれの手で制服のポケットからスマートフォンを出して陽湖へ差し出した。

「耳……かして……」

「シスター鮎美……」

陽湖は鮎美の口元へ耳を近づけて話を聞く。

「撮っていないよ……あのとき……」

「っ……」

そう言われて、あのときというのが山頂のことだと陽湖にも、す

ぐわかる。鮎美は涙を零しながら続ける。

「…自撮りモードやったから…陽湖ちゃんの姿は写ってない…心配やろ…確かめていいよ…ロック解除は、0403…さんざん、ひどいことして…ごめんな…」

「シスター鮎美…そんなこと言わないでください…まだ、あなたは…」

「ホンマ…ごめん…うち…あなたに母さん盗られたみたいに感じて…ごめん…」

「ううっ…ううっ…シスター鮎美！ 死なないでください！ お願いします！」

陽湖の涙が降ってくる。それが温かくて、鮎美は自分の身体が冷たくなっているのだと感じた。もう死ぬのだと想うと、あと一つ心残りがあつた。目で鷹姫を探した。こちらを見て鷹姫も泣いている。

「鷹姫…」

「っ…はいっ！」

「あなたに会えて、よかつた…」

「っ…鮎美っ…死なないでください！ お願いですから！」

「ごめんな…好きよ、鷹姫」

「っ…ううっ…私も、あなたが好きです。だから、死なないで！」

「大好きよ…鷹姫…」

鮎美は手を伸ばして鷹姫に触れようとして、血に染まった手で触つては晴れ着を汚してしまふと、こんなときなのに気にして手を引っ込めようとしたけれど、鷹姫が握ってくれた。

「鮎美、どうか生きてください！ すぐに救急車が来ます！ もうサイレンが聴こえる！」

「…好きよ…あなたのこと大好きなんよ…あ…愛してるから」

「鮎美…」

「負傷者は、こっちです!!」

教師の声が聞こえて、担架を持った救急隊員が会場へ入ってきた。

「負傷者は1名ではなかったのですか?!」

救急隊員が血に染まった鮎美と、両腕が変な方向に折れ曲がり意識を失っている男子を見て迷っている。

「どちらを先に……」

「こちらです! その者は絞め落としただけです!! 早く! 芹沢先生は国会議員です! 早くなさい!」

鷹姫が一喝すると救急隊員は鮎美のそばに担架をおろした。

「担架に移します」

「そつと持ち上げますから、我慢して」

「動かないように」

救急隊員3名が鮎美の身体を静かに持ち上げ、担架へ移してくれる。

「ううっ…痛いっ…」

動かされると、下腹部の傷が疼いた。

「ハア…ハアっ…ううっ…」

「このシートで腹部を圧迫します」

救急隊員は吸収体と防水シートが一体になった四角いシートで鮎美の腹部を押さえ、それをバンドで巻くと、鮎美の全身を担架に固定するためベルトで脚と胴体を巻き、頭部をクッションで固定してくれた。

「付き添いされる方は?」

「私が!」

「オレが!」

「ご両親ですね? いっしょに来てください」

「うう…ハア…ハア…」

鮎美は鷹姫に付き添って欲しかったけれど、両親に付き添われて救急車へ運ばれる。担架ごと持ち上げられ、会場を出るとき、鮎美を心配してくれている生徒が大半だったけれど、ごく一部の三年生がセンター試験対策の参考書を読んでいるのを見た。

「……」

うちが死ぬか生きるかってときに、どこまでも他人事なんや……人

間違って……何やら……、と鮎美は人の身勝手さと、他人事は他人事でしかないということを思い知った。

「うう…ハア…うう…」

「こちら阪本消防救急隊02号、負傷者は2名でした。追加要請は入っていますか？」

救急隊員が無線で本部へ連絡している。それが終わると病院へ電話をかけ始めた。

「18歳、女性、腹部に刃物による切り傷です。バイタル安定、意識あります。受け入れ可能ですか？ ……。わかりました」

最初の病院は内科医しかいないと断られたようで次の電話をかけている。

「早く！ アユちゃんを早く病院に運んでください！」

「お前は落ち着け」

「うう…ハア…」

鮎美は担架の上から救急車の天井を見上げた。近くにモニターがある。よくわからないけれど、それは鮎美の血圧や脈拍、呼吸を計っているようだった。

「神さま、神さま、お願いです、どうか鮎美を助けてください、神さま、この子がバチ当たりなことを言ったことは私の罪です、どうか、この子は助けてください、お願いします、お願いします」

「母さん…ハア…うう…」

一時は鮎美も死を覚悟したけれど、だんだん自分は死なないような気がしてきた。傷の痛みも激痛ではあるものの、少し落ち着いているし、何より出血が少なくなっている気がする。

「神さま、どうか、どうか、お許してください、神さま」

「……………」

ちやうで母さん、陽湖ちゃんらが信じてる神さんは、サマとか敬称はいらんねん、神って言葉そのもので十分やねん、もしくはエホバな、あと人を罰したりはせんらしいよ、許すも許さんもなしに愛してくれてはるねん、そもそもバチ当たりって発想は日本のものやし、にわか信徒やね、まだまだ教義、理解してないわ、と鮎美は考える余裕がで

きていた。もう一度、モニターを見上げ、そこにある数字の意味を考
えてみる。やっぱり、医学的知識がないのでわからないけれど、西村
が危篤状態になったときに比べると、なんとなく良い数字なような気
はする。

「阪本記念病院へ搬送します」

やっと受け入れ先が見つかると同時に、もう一台の救急車が隣りに
駐まった。

「……」

うちを刺した生徒、なんで、うちを殺そうとしたんやろ、ぜんぜん
知らん顔やったのに、どこかで恨みを買ったんかな、顔……どんな顔
やったやろ……もう覚えてへんわ、と鮎美は犯人のことを少し考え
た。救急車が走り出しても、あいかわらず母の美恋は泣きながら祈っ
ている。それが気の毒になってきた。

「母さん……泣かんで……うち、ちゃんと頑張るから……うつ……くつ……」

喋ると腹部の傷が疼いた。

「……」

あかん、声を出すと、超痛いわ、けど、母さん、そんな真つ青な顔
で祈ってんと、うちの言葉を聴いてよ、と鮎美は母親に触れようとし
たけれど、手を動かすことはベルトで固定されているのでできなかつ
た。かわりに父親の姿を探した。寝かされたままでは視野に入り
にくいけれど、母親の隣りで、こちらを見守ってくれている。

「父さん……」

「何だ？ 鮎美！」

「……耳、かして……」

大きな声が出せない鮎美は玄次郎が近づいてくれるのを待って、
言った。

「……い……」

「い？ 痛いのか？ もうすぐ病院だ、頑張れ！」

「ちやう……。いた……が……」

「いたが？」

「……き……」

「き？」

「死す……とも……」

「……」

「自由は……死せず」

「……」。板垣死すとも自由は死せず、か？」

「うん」

「……プツ……くっ……くははは！ 母さん、きつと大丈夫だ！ 冗談が

言えるんだ、死にはしない！」

玄次郎が泣き笑いしている。鮎美も口角をあげて見せた。救急車が病院に着くと、鮎美は担架ごと救急処置室へ運び込まれる。付き添いだった両親は見えなくなり、何人もの看護師と男性医師2名、女性医師1名がいた。

「18歳、女性、高校生、腹部に刺し傷。あなた、刺されたのは一回？

それとも何回も？」

鮎美の顔色を見て、女性医師が問うてきた。

「い……一回です……」

「傷を見るわね。スカートを切ってしまったでもいい？」

「え……」

「こういうとき、脱がせると傷を動かしてしまうから、切ってしまうものなの。かわいそうだけど、我慢して」

「はい……予備ありますから……」

鮎美が頷くと、スカートが大きなハサミで切られる。いつのまにか、男性医師2名は鮎美から離れていき、隣で呻いている中年男性を診察している。

「ウウウアアアア！ ひいー！ー！」

中年男性は脂汗を流しながら苦しんでいた。

「痛いのは背中ですね？ おそらく尿路結石でしょう。CTを撮りま
す」

「うぎいいいい！ 頼むいい！ 痛てえええ！ 助けてくれ先生え
!!」

「痛いでしょうが死にはしませんよ」
「……………」

鮎美が中年男性を見ていると、看護師がカーテンを閉めた。
「下着も切りますよ?」

「あ……はい……うっ……」

お腹のあたりに触れられると、やはり激痛が走る。鮎美のショーツがハサミで切られた。靴と靴下も脱がされているので下半身は裸にされてしまった。

「傷を見ます。痛いけど我慢して」

「はい……うっ……うああっ! 痛いっ!」

女性医師が鮎美の臍の下から股間まで切られている傷口を白い手袋をした指先で開きながら診てくるので、再び激痛が襲ってきて呻いた。

「ハア……ハア……」

「大丈夫、傷は皮下組織で止まっている。内臓も筋肉も無事だから2週間もすれば治りますよ」

「ハア……ハア……2週間ですか……」

うちは国会の開会式で弔辞を……24日やからギリギリ間に合う……よかった……、と鮎美は死の覚悟とは、ほど遠い思考をした。

「念のためにCTを撮ってから縫います。身体をキレイにしてあげて」

「「はい」」

男性看護師1名と女性看護師2名が返事をしたけれど、片方の女性看護師が言う。

「私たちだけで大丈夫です」

「じゃ、自分、あっちの人を看てきます」

男性看護師は新たに救急車で運ばれてきた老人を看に行った。

「芹沢さん、脚を拭きますね」

「……あ……はい……お願いします……うっ……」

「痛い? あまりに痛いときは言っつてね」

優しく声をかけてくれながら二人の看護師が鮎美の脚を温かく濡

れたタオルで拭いてくれる。血まみれだった脚が拭かれていくと、鮎美は恥ずかしくなってきた。股間には綿の布をおいてくれてるので丸出しではないけれど、鮎美にとって男性はセクハラさえしてこななければ、それほど羞恥心を覚える対象ではなかった。むしろ、女性に見られる方が恥ずかしいとさえ感じる。そして、脚の血が拭き取られると、次は股間やお尻を拭かれたので赤面して恥じらった。

「恥ずかしい？ カーテンで見えないから大丈夫ですよ」

「……そ、そこは自分で拭きますから……」

鮎美はタオルを貸してもらおうとしたけれど、身体を起こそうとすると激痛が走った。とくに腹筋に力を入れると、激しく痛む。

「うううっ……くうっ……」

「動かない方がいいですよ」

「……はい……すみません……」

鮎美は顔を背けて股間を拭かれる恥ずかしさに耐えた。

「これに着替えてもらいますね。貴重品は、誰か預かってくれる人、いますか？」

看護師が緑色の術衣を見せながら、問うてきた。

「はい、父と母が、いるはずですよ」

「じゃあ、制服を脱いで裸になってください」

「え……は……裸ですか？」

「一応、手術だから」

「……わ……わかりました」

鮎美は上半身を起こしてもらい、制服の上着を脱ぐ。胸に着けている議員バッチに看護師が今さら気づいた。

「国会議員みたいなバッチですね。どこの学校ですか？」

「え……」

もう一人の看護師と鮎美が異口同音した。そして、看護師同士で会話を話す。

「知らないの？ 芹沢さんって、あの芹沢鮎美さんよ」

「あの、って、どの？」

「だから、国会議員の」

「国会議員？　こんな子が？　…あ、…、ご、ごめんなさい。え、え？
でも、ホント？　だって、この子、高校生なんでしょ？　高校生が、
どうやって国会議員になるの？」

「あなたニユース見ないの？」

「あんまり…：夜勤を多めに入れてるし」

「少しは世間を見なさいよ。参議院の制度が変わったのは知ってる
？」

「なんか、そんなことがあったような気はするくらいに。あ、ごめんな
さい。いつまでも、こんなカツコは嫌よね。早く着替えさせてあげま
すね。はい、全部脱いで、これを着て」

「……」

うちのこと知らん人、まだいるんや、そっか、ニユースとか見んかつ
たら、知らんか、街中のポスターも、いちいち気にせんかったら、わ
からんもんな、と鮎美は裸になりつつ思った。

「ハクシユン！　っ?!　ううううっ!!」

クシャミをしてしまうと、また斬られたのかと思うほど痛かった。

「うううっ……うううっ……」

「かわいそうに」

看護師が傷口に白いガーゼをテープで貼り付けてくれる。

「ハア…ハア…」

もうクシャミは懲り懲りなので術衣を着るけれど、あまり温かい服
ではなくてノースリーブで脇腹のあたりも紐で括るだけの構造だっ
たし丈も短い。看護師が毛布をかけてくれた。

「CT室に移動しますね。この担架から、こっちのベッドに移れそう
？」

「はい…う…」

支えてもらいながら立つと、お腹は痛いものの少しは立てた。すぐ
にベッドへ横になる。

「ハア…」

「じゃ、行きます」

移ったベッドも移動可能なもので、そのまま廊下に出た。廊下には両親がいた。

「鮎美」

「傷が浅いし、二週間くらいで治るって…うつ…喋ると痛いけど…」

「よかったああ…神さま、ありがとうございます！ ハレルヤ！

ああ、ハレルヤ！ 奇跡をありがとうございます！ アーメン！」

「……………」

鮎美と玄次郎は身内として少し恥ずかしかつたけれど、看護師たちは気にもしていない。

「保護者の方は、今暫くお待ちください。入院にはなると思いますが、その手続きは窓口から案内があります」

「わかりました。鮎美、よかったな」

「うん、ごめんな、心配かけて」

父親に謝ってから、鮎美はCT室へ運ばれた。CT室では若い男性の検査技師が待っていて、看護師と交替して鮎美を案内してくれる。

「こちらの台の上に移ってください」

「はい…うう…」

あまり気の利かない検査技師なのか、それとも軽傷扱いにされたのか、起き上がるときに支えてもくれなかったので、お腹が痛いし、少し血が出た気がする。

「うつ…くっ…すんません。痛いんで…寝るとき、支えてくれます？」

「わかりました。これでいいですか」

求めると医療従事者らしく、そつと鮎美をCT検査台の上に寝かせてくれた。

「身体をまつすぐにして、両腕をあげて頭の上で手を組んでください」

「はい、…うつ…こう、ですか？」

「そうそう…っ…」

若い男性技師は鮎美が腕をあげると、鮎美の腋を見てギョツとした

顔になった。冬服になってから、ずっと腋毛を剃っていないので、かなり伸びている。

「……………」

なんやの、そこまでギョツとせんでええやん、この女なんで腋ボーボーなんだ18歳だろ、みたいな顔を露骨にしおって、女やったら腋を剃って当たり前なん？　そういうのジエンダーに縛られてるゆゑねんで、そんなジロジロ見んとつてよ、と鮎美は腕をおろしたくなつたけれど、検査なので我慢する。不快な検査が終わって、再びベッドごと外科手術室に運ばれた。手術室内には配慮があつたのか、偶然なのか、女性スタッフしかいなかった。医師も、さきほどの女性医師で勇気づけるように微笑んでくれる。

「なるべく傷跡が残らないように縫ってあげますね。彼氏に水着とか見せたいもんね」

「……………」

なんで彼氏って発想しか無いねん、世界は異性愛者だけか?!

……………あかん……………うちは、さつき、もう自分が死ぬ思うて、命があるだけで有り難いのに……………また、世間に不満ばかりもつて……………こんなでは、人としてあかん……………この先生かて、うちを励まそうと思つて言うてくれるのに……………静江はんには土下座させてしもたときも、そうや、別に静江はんには悪意がなかったのに……………陽湖ちゃんも、あくまで善意やのに、うちはトコトンひどいこととして追いつめて……………もう、やめよ……………人として、もっと大きくなろう……………うちは議員として、やっていくんやもん……………と鮎美は心の持ちようを変えて微笑んだ。

「彼氏はおりませんけど、どうかキレイにお願いします」

「しっかりキレイに治す方法と、健康保険の範囲で縫う方法がありますけれど、どちらを希望されますか?」

「え……………それって混合診療の話ですか?」

「よく知ってますね。さすが議員さん。けれど、この怪我には混合診療はできません。全額自由診療でお支払いいただくか、健保適応のみにするかです」

「…………どのくらい、値段がちやいます？　あと、キレイに治る感じの
違いは？」

もう鮎美は自分が緊急の死ぬか生きるかの患者ではないとわかってきたし、医師も穏やかに説明してくれる。

「私が得意としている内部縫合式表皮湿潤療法で治療させていただいた場合、この写真のように違いがでます」

医師が何枚かの写真を見せてくれる。そこには健康保険で特別な材料と技術を使わずに縫った場合の傷跡と、高価な材料と高度な技術で治療した場合の傷跡の対比があり、かなり違いがあった。前者は大きく傷口の跡と縫糸の跡が残り、後者は、まったく傷跡が無くなったり、少し筋が残るくらいに治っている。

「こんなに違うんや…………」

女として明らかに後者を選びたい。けれど、金額は気になる。

「おいくらですか？」

「金額的には、健保なら3万円から10万円以下でおさまると思います。入院は今日一日で異常なければ明日、退院です。手術は15分ほど。自由診療ですと1週間は傷口を動かさず完全な安静を保つていただきたいので入院期間は1週間以上、手術は顕微鏡下で可能な限り細かい血管も縫いますし、消毒薬を使わずに生理食塩水で傷口を洗浄するので3時間から6時間ほど。金額は216万円です」

「に…………百倍くらいちゃうんですね…………」

「健康保険は3割負担ですから。阪本市にお住まいの高校生なら、助成金で1000円で済むかも知れません」

「うちは六角市やし、六角市の丸福は中学生までやねん」

「それで、どうされますか？」

「う〜ん…………」

鮎美が悩む。払えない金額ではないし、傷跡は残したくない。鮎美が悩む様子を見て、医師は支払い可能なのだと察して、売り込んでくる。

「特別な糸を使いますから、抜糸は必要ありません。手術は一度で済みます。結果を100%保証することはできませんが、お若い方です

し皮膚の再生力も高いでしょうから、まったく傷跡が見た感じではわからないところまで治せる可能性もあります。アトピーなどの既往歴はありますか？」

「いえ、とくに持病はありません」

「それなら、なおのことキレイに治せるはずですよ」

「そうですか……………どうしよかな……………」

「健保での治療ですと、やはり大きな跡が残ると思いますよ。ご自分の傷口、どの程度か見てみますか？」

「あ……………はい」

今まで、しっかりとは見えていなかった傷口を看護師に上体を起こしてもらい、ガーゼを剥がしてくれるので、恐る恐る見てみる。

「お臍の下から、ここまで斬られてますね」

「……………」

鮎美の臍下2センチから、まっすぐに股間の方まで斬られていて、陰毛の生え際まで傷は至っている。

「……………」

悲しくて、じわりと涙が浮かんだ。

「あまり見ているとショックを受けますから、もう寝てください」

「……………はい……………」

十分にショックを受けた。

「大丈夫ですよ、深いところでも筋肉までは達していないので、きつとキレイに治ります」

「……………」

「ただ、この傷口が残るのは、本当に嫌ですよ。帝王切開の跡だと誤解されそうですし。ご無理でなければ、きちんと治療されることをお勧めしますよ。本当に」

「……………」

「あと、健保での治療では消毒液を使うので、かなりしみます。麻酔は使いますが、刺されたときと同じくらい痛むかも」

「……………自由診療の方でお願いします」

今でもズキズキとはしているけれど、刺された直後は本当に死ぬか

と思うような痛みで、あの苦痛を再び味わうのは嫌だった。預貯金は500万円を超えているし、今月からは歳費も入るので216万円の出費を決めた。医師が少しだけ頭を下げる。

「ありがとうございます。では、書類を用意します」

「はい……………」

え…………治療の前に書類なんや…………まあ、金額が大きいし契約書は当然かな…………、と鮎美は社会経験を増やしていく。すぐに何枚もの書類を鮎美が寝たままでも見えるように看護師が持って見せてくれる。結果の保証は無いこと、金額に了承したこと、極めて稀な副作用で死亡することもあること、そして治療費の支払いに連帯保証人をつけること等があり、二つ気になることを問う。

「死ぬ副作用って…………どんな？」

「ほとんど起こりません。10万人に一人くらい、薬剤との相性でショック状態になることがあります。これは健保で使う薬剤でも同じです。ただの風邪薬でも亡くなられることはありますから。残念ながら医学は完璧ではないの…………」

「そうですか…………。あと、連帯保証人なんですけど、うちの預貯金で支払えますけど、要りますか？」

「一応お願いします。保護者の同意も」

「…………うち、もう成人なんですけど」

「それでも、お願いしているんですよ。他の患者さんでも」

「……………あの…………支払いは、すぐしますし。連帯保証人をつけるのは、かなり抵抗あるんですけど。あれ、検索の抗弁権も、催告の抗弁権も無いじゃないですか。法制度上、かなり改善すべきところがありますし、せめて単純保証になりませんか？」

「え…………つと…………何の話ですか？」

「ですから、連帯保証人をつける話ですよ。検索の抗弁権も、催告の抗弁権もないような保証をつける必要があるんですか？ 金融機関の貸し出しじゃあるまいし」

「……………それって法律の話ですか？」

「そうです」

「……あのですね」

少し医師がムツとしたような表情をした。

「私たちは医師なんで、そういうことは習わないんですよ。医師法に関わることでだけなんですよ。けんさくのこうべんけん、って何のことですか？」

「主たる債務者に弁済の資力があり、かつ執行が容易であることを証明したときは、保証人は、まずは主たる債務者へ請求するよう抗弁する権利のことです。この場合やと、うちに請求せんと、うちが頼んだ連帯保証人へ、いきなり病院が請求しても連帯保証人は問答無用で払わなあかん状態になることです。そんなん、おかしいでしょ？ あと、催告の抗弁権は、今言うたように、いきなり保証人へ請求されたとき、まずは主たる債務者に請求してくれ、という権利のことです」

「……………うくん……………できれば別居の方がいいですけど、やもえな
いときは連帯保証人は、ご両親でも大丈夫ですよ」

「それでも抵抗あるんですよ。いっそ、先に支払いましょか？ 秘書に
いうて現金もって来させますし」

「先払いですか……………えっと……………事務長を呼んできて、事務長」

医師が看護師に命じ、しばらくして事務長と法務担当者が手術室に入ってきた。二人とも男性だったので入室前に看護師がシーツを鮎美の身体にかけてくれる。

「事務長の田中です」

「法務の安田です」

二人は名刺を出そうとして、そんな場合でもないかと判断してやめた。

「芹沢です、どうも」

「それで、芹沢先生の苦情というのは？」

「別に苦情というわけやないんですけど、連帯保証人の書類にサインしてもらっているのは、両親でも抵抗あるんで、先払いしますと言うたんです」

「なるほど……………、……………」

事務長が考え込み、申し訳なさそうに答える。

「一応、先払いでも、この書類にサインをいただく決まりになっておりますので、お願いできませんか？」

「え……………それ、めちゃくちゃおかしくないですか？ 先に払ったのに、保証人つけるて、なんの債権につく保証債務なんですか？」

「それは……………その……………」

事務長が困って法務担当者を見る。法務担当者も申し訳なさそうに頭を下げる。

「芹沢先生のおっしゃる通りなんですが、病院の決まりなんですよ。別に自由診療だから求めているわけではなくて、健保でも入院のさいには、必ず連帯保証人をつけてもらっています」

「きまりって……………法に合わんの……………」

「私どもも、心苦しくはあるのですが、一部の患者様で退院後、お支払いが無いことも、ちよくちよくありまして、そういったことの予防という意味合いもあって、形式的なことですが、とりあえずサインをいただいております」

「とりあえずで……………連帯保証人なんや……………」

「おっしゃることが正しいのは、よくわかります。ただ、私ども病院も議員先生方に知っておいてほしいのですが、取りはぐれば、かなり多いのです。とくに、健保をつかった診療で3割負担を退院後に求めるのですが、払っていただけないことが、よくよくあります。それでいて、医師の方には応召義務というものがありまして、怪我や病気で再び来院されたとき、前回は払いなかったからといって患者様を追い返すことはできないのですよ。このあたり、ご理解いただいて、是非、国会の方で審議いただき、たとえば不払いの場合は一時的にでも国や国保連合会などから病院へ支払いがあり、後日、国の方で患者様へ国税と同じように強く取り立てていただけると助かります。ただ、現状では、予防的意味合いで連帯保証人のサインをすべての患者様にいただいているのです。健保、自由診療を問わずです」

「……………そうなんですか……………」

「サインを芹沢先生と、先生のご両親にもお願いできませんか？ 先払いいただくにしても、秘書さんが駆けつけるまで手術が後回しにな

ります。早めに手術された方が良いと思いますよ」

「……………」

どないしよ……翔子はんのがあるから、なんか抵抗あるけど……さつき、人として大きくなろうって思ったんやし、ここは理屈に合わんけど、折れておこ、連帯保証人は父さんでええかな、申し訳ないな、と鮎美は諦めた。

「わかりました。ほな、サインします。あと、父も廊下にいると思うんで、保証人は父で」

「ありがとうございます。どうか、お大事に」

事務長と法務担当者は鮎美がサインした書類をもって出て行った。医師が近づいてくる。

「もういいかしら?」

「はい、お願いします」

「では、準備に入りますね。脚を開きますよ」

医師と看護師が手術台にいる鮎美の脚を開いて、術衣をめくった。彼女たちに下半身が丸見えになっているので、鮎美は再び恥ずかしくなったけれど我慢する。

「毛を剃りますね」

「……………」

手術のときに毛を剃るということは聴いたことがあったけれど、まさか自分がそんな目に遭うとは思っていなかった鮎美は目を閉じて看護師たちに剃毛される恥ずかしさに耐えた。顔が真っ赤になってくると、医師が言ってくる。

「恥ずかしがらなくても、ここには女性しかいませんから安心して」

「……………」

それが、うちには恥ずかしいんやって……先生らから異性に囲まれて、こんなんされたら恥ずかしいやろ……いつそセクハラはせん男の先生の方が恥ずかしくないくらいなんよ……かといって、男の先生と男の看護師さんに全員かわってくださいつて言うたら、うちのこと変な女やと思うに決まってるし……、と鮎美は赤面し続けた。

「そうやって赤くなれるくらいだから、出血量も400ミリ以下かな」

「うち、輸血されるですか？」

「あ、芹沢さんの学校の宗教って輸血はダメだったですね」
「知ってはるんですか？」

「ええ、検索の抗弁権は知らなかったけど、輸血拒否の話は医師の間では有名だから。今回は必要ないと思うけど、万が一のために訊いておきます。芹沢さん、輸血は拒否されますか？ たとえ、生命に危険があるときでも」

「いいえ、必要なら、すぐしてください。うち、あの宗教は一切、信じませんから」

「わかりました。じゃ、次、浣腸しますね。お腹には力を入れず5分は我慢してください」

「え……なんで浣腸なんかするんですか？」

「手術後3日はトイレで息んでほしくないんですよ。縫った傷口が開きますから。開くと、そこが跡になります」

「そ……そうですか……じゃあ、お願いします。……うつ……」

鮎美は初めて浣腸されて、その感覚にうめいた。

「うう……あ、……あの、……出そうです……」

「5分我慢してください」

「……ううつ……痛つ……我慢すると傷が痛くて……うう！」

「お腹に力を入れず、お尻にだけ力を入れて我慢して」

「そ……そんな器用な……ううつ……もう無理です！ トイレに行かせてください」

「タライを置いてあるから、そのまま出しても大丈夫ですよ」

「つ……、こ……、ここで、するんですか?! ううつ……」

「まだ1分と経ってないから、我慢して。出しちゃダメ」

「はうう……ううつ……ひう……」

鮎美は涙を流すと同時に我慢できなくなった。

「仕方ないですね。もう一回。お薬が腸内に巡るまで、なるべく我慢してください」

「ううつ……はい……すいません……」

また浣腸されてうめいたけれど、再び我慢できずに3分で終わってしまった。

「ハア…ハア…痛い…傷が、また疼いてきて…もう勘弁してください…」

「浣便ならん、なんてね」

くだらない冗談を言った医師は別の浣腸器具をもってきた。細い透明な管状の器具で点滴と同じようなパックがセットされている。鮎美が怖くなって問う。

「そ…それ、なんですか？」

「管を腸の奥まで入れて、そこで薄い浣腸液を大量に出します。それで大腸内の便はすべて出ると思うから。あと、もう我慢しないでいいですよ、お尻の穴を手で押さえてあげます」

「そ…そんな恥ずかしいのイヤです」

「これやらないと、手術に入れないから我慢なさい」

「…うう…はい…」

鮎美は三度目の浣腸をされる。管を奥までさし込まれた。管を通って薬液が注ぎ込まれてくると、また排泄しそうになる。お尻の穴を手で押さえると云った医師は指を押し込んで堰き止めてきた。

「ううっ…ううっ…ハア…ううっ…」

「はい、もういいですよ。ゆっくり出して」

言われた通りに排泄したけれど、今度は医師が指を直腸まで突っ込んできた。

「ううっ?! なにするんですか?」

「これはね、摘便といって、残ってる便をすべて掻き出しておくの。お薬も残っていると、あとで下痢になって出てくるから、パックを生理食塩水に変えて腸内を洗浄しますね」

「ま…まだ…まだ、続くんですか…」

鮎美は医師が何度も指を挿入してくるので、これが本当に医療行為なのか疑わしくなってきた。今まで女性医師なのでセクハラはしないと思っていたけれど、氏名を確かめようと思い、胸の名札を見ると外科医、松田川紀子（ひだがわのりこ）とあった。しかし、氏名より、

名札といっしょに白衣へ着けているバッチに意識がいく。

「っ…」

松田川が着けているバッチは虹色のアーチ型のバッチで、それは朝
槍も着けていて、鮎美も制服の内ポケットに着けているものと同じ
だった。

「……」

この人、同性愛者なんや、ほな、これセクハラやん、と鮎美はお尻
に指を挿入されながら悔しく思った。けれど、どう言ってもやめてもら
うべきか、考えつけない。このバッチの意味を知っているということ
は鮎美も同類だと勘づかれる可能性があるし、周りの看護師たちは当
然の医療行為と思っっているようで、松田川の手伝いを平然としてい
る。

「…うっ…うっ…」

「検索の抗弁権は知らなかったけど、検索の肛便検査はしてあげるか
ら気持ち悪いだろうけど、我慢して。全部残らず掻き出しておきます
よ」

また、松田川はくだらない冗談を言った。鮎美は突っ込みも抗議も
できずに耐える。

「はい、おしまい。よく我慢したね。えらい、えらい」

「…ぐすつ…うう…」

泣けてきた鮎美の目を松田川は汚れた手袋を捨ててから、清潔な
布で拭いてくれた。それから松田川は新しい手袋をつけて、浣腸に
使ったより細い管を手にした。

「じゃあ、次は、おしっここの穴に、これを入れますね」

「っ…いい、イヤですよ！ やめてください！ 変態ですか?!」

「手術中、ずっと点滴するし、その後も水分補給は大切なんですよ。栄
養も固形物は食べさせられないから、点滴を通してになるし、かど
いってトイレにも立てない上、膀胱が膨らんでくると、せっかく縫つ
た傷口がひらくから、イヤかもしれないけど我慢しなさい。傷跡なく
治すための処置なの。人を変態あつかいしない！ 失礼しちゃうな、
もお！」

松田川は頬をプーと膨らませた。瞳が大きくて明るい色のロングヘアが似合っている。

「……うう……ホンマに必要な処置なんですか？ ……それで、何する気なん？」

「だから、この管をおしつこの穴に入れると、おしつこを常に出してくれるから、我慢しなくて済むの。まあ、入れられるとき、かなり気持ち悪かったり、抵抗すると痛いから、できるだけ力を抜いて」

「……………」

鮎美が不信感を込めた目で見上げると、松田川は肩をすくめた。「信じられないなら、やめようか？ さっさと縫うだけにする？ 傷跡のこるけど」

「……………」

「よろしい」

松田川は細い管に消毒薬混じりのローションをつけ、鮎美の尿道に挿入してくる。

「うう……うぐう……はうう……」

「力を抜いて。ハツハツと息を吐いて、力を抜いて」

「ハツ……ハア……うう……ハツ……んうう……」

異物が体内に入ってくる感覚で鮎美は身震いした。

「よし、入った」

松田川が頷くと同時に管の中に黄色い小水が流れ始める。管は手術台の横に吊られたパックにつながっていて、そこに鮎美の小水が貯まる仕組みだった。

「ぐすつ……」

こんな生き恥、もうイヤや……いつそ麻酔で眠らせてよ……けど、眠ってる間に、この人、うちに何するか、わからへん……次、何する気なんやろ……これ以上は……もう、お尻の穴も、おしつこの穴までイジられて……次は……次は、もう、あそこ狙ってくる……イヤや！ そんなん絶対イヤや！ もう耐えられへん！ と鮎美はパニックになって言う。

「お願いです、うち処女なんです！ これ以上は何も挿入せんとい

ください！ お願いです！ 傷の治療をしてください！」

「……………何か、変な誤解してるね……………まあ、いろいろされてイヤだったのはわかるし、芹沢さんの反応を見てると未経験なものもわかるけど、女の子の大事なところは消毒薬で拭くだけで何も入れないよ、安心して」

「ほ…ホンマに？」

「うん。だから、泣かなくていいから」

「ぐすつ……………」

「鼻をかんであげて。私は手術着に変わるから、しつかり消毒と洗浄、よろしくお願い」

「は…」

看護師たちが鮎美の泣いていた顔を拭いてくれて、さらに傷口を生温かい生理食塩水で時間をかけて洗ってくれる。それが終わると傷口の周りを大きく消毒される。胸の下から膝まで広く大きく茶色い消毒薬を塗られた。

「マスクしますね。大声を出して自分の唾を飛ばしたりしないでください」

「はい…」

鮎美は透明なプラスチック製のマスクで口元を覆われ、手術台の上に固定される。開かされていた脚は肩幅ほどに閉じてから足首も膝も固定されて身動きできなくなった。さらに大きな布で鮎美の胸から下は遮断され、鮎美からは自分の下半身が見えなくなる。もう何をされようが抵抗不可能な状態にされてしまった。そこへ松田川がやってくる。まるで鐘留の防寒装備のように、マスクだけでなく目もゴーグルで覆い、髪も包み、手袋も肘まである長いものをしている。

「…ハア……………ハア……………うう…」

「準備できたみたいね。そんな不安な顔しなくても、私の得意な手術だから失敗しないよ。むしろラッキーだったね、私の当番の日で。他の男の先生だったら簡単に縫い合わせて終わりにされたよ。お値段以上のことはするから期待して」

そう言った松田川は手術を始めた。腹部だけに局所麻酔がされて鮎美の意識はあつたけれど、腹部の皮膚感覚はだんだんと無くなつていく。縫い始められると、はじめはチクチクとした小さな痛みがあつたけれど、その痛みも次第に無くなり、時間の経過がわからなくなつてくる。

「眠いなら寝ていいよ」

「…はい…」

セクハラはされず、本当に真剣に縫ってくれている様子なので安心した鮎美は2時間くらいは起きていたけれど、出血と疲労感もあつて、だんだん眠くなり目を閉じた。

1月11日 発達障害

翌1月11日の火曜日、午前4時過ぎに鮎美は特別な病室のベッドで目を覚ました。

「……」
目を開けると、薄暗いけれど間接照明がついていて、真上に液晶モニターと大きな字で書いたメモ書きがあった。

「……」
手術は無事終了しました、起きたら右手にあるナースコールを押してください、身体は動かさなくてください、どうせ動けないけど、暴れると傷口が開くから一切動かないように、しばらくは声も出さないように、と女性らしい字でメモ書きされている。液晶モニターの方には松田川が映っているけれど、同じく薄暗い部屋の中で仮眠しているように白衣のまま横になって寝ている。

「……」
鮎美が右手を意識してみると、何かをテープで貼り付けられている感触がして、握ってみると、ナースコールのスイッチらしかった。なんとなく、これを押すと仮眠している松田川が起きて対応してくれるのだと、わかった。わかった分、かなり熟睡している様子の彼女を起こすのが気の毒に思える。鮎美は途中で眠ってしまったけれど、松田川は何時間もの手術に集中してくれて、かなり疲れているはずだとも慮った。

「……」
鮎美はスイッチを見て確かめようと思い、手を顔の方へ動かそうとしたけれど、手首や肘、腕が何か柔らかいベルトのような物を巻かれて固定されていることに気づいた。左腕も同じ状態で動かせない。足首や腿にも何かを巻かれている感覚があるので、一切手足は動かさず、胸と首も固定されていた。手術された腹部は露出されたままのよう皮膚で空気を感じるけれど、気温と湿度がコントロールされているように寒くも暑くもない。

「……………」

声も出さず、動くなつて……もう一回、寝よ……、と鮎美は諦めて目を閉じたけれど、さすがに眠れない。もう十時間以上は寝ている感じだった。それでも、しばらく我慢していると日の出を迎えたようで薄暗かった部屋がカーテンから漏れてくる光で少し明るくなってくる。それで室内の様子がわかった。鮎美は個室の病室に寝かされていて、鮎美のベッドの周りには透明なビニールのカーテンがあり、天井には大きな空調機が設置されていた。エアコンには見慣れない機械だったけれど、そこから温かくも涼しくもない、とても肌に優しい風が降ってきている。鮎美は裸に近い姿で胸だけは隠してもらっているようだった。

「……………」

そろそろ、つらいわ……：松田川先生、よう寝てはるけど……、あ、寝返りしはった、あっちの部屋も明るくなってるし、そろそろ呼ばせてもらおう、と鮎美は一切身動きできないこともあって右手のスイッチを押した。

「……………」

「……………」

画面の向こうで松田川が再び寝返りして、つらそうに起きた。それから、こちらに向かって手を振ると、手元の機器を操作して音声送信を可能にしたようで声が聞こえてくる。

「おはよう。もう起きたみたいね。あ、芹沢さんは声を出さないでね」

「……………」

「返事をするときはイエスならスイッチを1回、ノーなら2回押す。わかりました？」

「…」

鮎美はスイッチを1回だけ押した。

「うん、そうそう。じゃあ、今の状況を説明するね。まず手術は無事に終わりました。腕によりをかけて7時間もかかったけど、しっかり細かい血管も縫ってあげたよ。私としても大成功な出来です。けど、ここ

からも大切です。傷口の周りには消毒薬を使ったけど、傷口そのものは入念に洗っただけです。つまり、もしかしたらバイ菌が残ってるかもしれない、こいつが悪さすると化膿して跡が残りやすい、けど消毒薬を使っても傷の表面細胞が損傷して跡が残りやすい。だから洗浄だけして皮下組織を縫い合わせました。表皮は縫っていません。表皮も縫うと、それは、それで糸の跡が残りやすいから。つまり、見た目には薄いカサブタができてるだけの状態。これがキレイに治ってくれると、まったく跡が残らず治ることも期待できます。ここまでの説明、理解できましたか？」

「…」

鮎美は再びスイッチを一回だけ押した。

「次に、これからのことです。これから芹沢さんは最低でも3日は絶対安静です。もちろん、命に別状は無いんだけど、傷口を縫った糸は細くて強い力がかかると切れてしまいます。なので細胞と細胞がくっついて治るまでは本当に本当に、しっかりと安静にしてください。これを強制するためと、バイ菌が外からつかないために身体を固定させてもらいました。寝てるときに、うつかり自分で掻いたりされると、すべてがパーになるので手も動かさせません。声を出すのも響くのでやめてください。つまり、ものすごく早く退屈な数日を送ってもらうわけだけど、一生残る傷跡か、数日の我慢か、考えるまでもないですよ。そして外からのバイ菌をもらわないためと、傷口を乾燥させすぎず、湿らせすぎず、ちょうどいい状態に保つため、お腹は出したままです。股間まで斬れてたから、そこまで露出してますけど、その部屋には絶対に男性は入りませんし、今、芹沢さんの真上に二つのカメラが見えますか？」

「…」

スイッチを一回押す。

「二つのカメラは芹沢さんの顔を映して、こちらへ送っています。もう一つのカメラは傷口を映して、私とコンピューターが監視できるようにしています。コンピューターが何を見るかと言いますと、傷口が化膿してくるとピンクになったり赤くなったりします。炎症が起こ

るわけですね、あまり強い炎症が起きて膿んでくると、跡になります。これをさけるため、膿みそうになるまえに抗生物質を点滴するため、常に監視しています。でも、私が診るとき以外は画面のスイッチを切っておきますから安心してください。いいかな？」

「……………」

少し間をおいたけれど、鮎美はスイッチを1回押した。

「あとは、心を穏やかに、落ち着いた気分でご過ごしてください。興奮したりして汗をかくのもよくないから、のんびり、ぼんやりね。できるなら、傷がキレイに治るイメージをしたり、治れ、治れって祈ったりしてください。これね、けっこう効くんだよ。癌の患者さんでも気持ちの持ちようで予後が変わるから。あ、予後っていうのは、病気の経過のことね。ってことで、いいイメージをもつようにしてください。難しく考えないで、痛いのが飛んでいけを何回も唱えて、眠かつたら寝るって感じに。野生動物もね、大きな怪我をすると、じっとして治すから。そして、その間、何も食べない。芹沢さんにも薄い糖分が入った点滴がされてるけど、数日は絶食になります。とくに固形物を食べると、出さないといけないでしょ？ トイレで息むのは一週間は先のことだと思ってください。あれだけ、しっかりと浣腸したのは、そういう理由よ。別に法律の専門用語を使ってきた仕返しに嫌がらせでやったわけじゃないから誤解しないでね？」

「……………」

鮎美は相槌として1回、スイッチを押した。

「おしっこは意識しなくても、カテーテルが常に排出してくれてるから、行きたくなることはありません。点滴してる分、かなり多いけど、それも本人は感じません。けど、おしっこの穴が痒くなったり疼いたりしたときは、すぐにナースコールしてください。あと、傷口が痒い痛いつてときも、すぐに。そのときは声に出して症状を訴えて。それ以外では発声も控えて」

「…」

また1回押す。

「だいたいの説明は以上です。何か訊きたいことはありますか？」

「……………」

鮎美は声は出さず、天井付近にある空調機器と透明なカーテンへ視線を送った。それで松田川が気づいてくれる。

「その機械はエアコンだけど、特別なエアコンで無菌状態の空気を傷の治療に最適な湿度で流してくれます。ビニールカーテンは私が診察に行ったとき、私の身体についてるバイ菌が芹沢さんへいかないようにするため。ちなみに、私は今日から芹沢さんが退院するまで、ずっと病院にいます。異常があれば、いつでも対応できるように。どう、これなら216万円でも納得しない？」

「……………」

確かに、と思いながら鮎美は1回押した。

「ゆっくり休んでください。あ、ご両親が待っていてくれたけど、病院前にあるビジネスホテルへ泊まるように言いました。今すぐ呼び出すこともできますけど、お二人もゆっくり休む方がいいから、モニター越しの面会を、お昼前くらいに行うということでもいいですか？」

「…」

すぐに1回押した。

「じゃ、お大事に」

そう言った松田川は、また横になって仮眠を再開した。

「……………」

鮎美は眠れないので、ぼんやりを天井を眺める。

「……………」

こんなに、ゆっくり時間が流れるの、久しぶりかも……………去年に当選してから、ずっと忙しかったから……………あ、お腹空いたなあ……………けど、お腹が空くってことは、ぜんぜん命に別状ないんやろな……………鷹姫のおかげや……………うちを刺した犯人は、どうなったんやろ……………ううん、考えても仕方ないことは考えるのやめよ……………傷の治りを考えなさい、つて松田川先生も言うてくれたし……………いい先生かも……………ずっと泊まって診てくれるし……………一時はセクハラかと思ったけど、ちゃんと理由もあったし……………けど、うちの今の姿……………ベッドにつながれて、お腹

も出して……誰かに見られるのは恥ずかしいなあ……男性入室禁止でも……そのうち看護婦さんとか、松田川先生は来るんやろし……あ、これも考えても仕方ないことや……もつと有意義なこと考えよ……有意義……日本の将来とか……フフ……ベツドにつながれて、何一つできん女子高生が日本の将来なんか考えるのもシユールな話やな……あのとき、あと一瞬、鷹姫が遅かったら死んでたかもしれないのに……鷹姫にもらった、この命……少しでも日本のために頑張ろ……そのためにも、早く治ろ……、と鮎美は途切れ途切れに思考しながら時間を過ごした。

「芹沢さん、起きてる？」

「……」

松田川の声に呼ばれ、眠っていたいなかったけれど閉じていた目を開けた。モニターの中にいる松田川の背後には玄次郎と美恋もいた。

「これから、ご両親と面会ね。けど、興奮しないでね。汗かいたり泣いたりしないでね。絶対安静だけど、命に別状ないんだから。それはご両親にも説明してあるから、軽く面会して」

「……」

スイッチを1回押した。松田川がさがり、玄次郎と美恋の顔がモニターの中で近づいてきた。

「よ！ 退屈そうだな、鮎美」

「……アユちゃん……無事でよかった」

いつも以上に玄次郎は軽い調子で、美恋は泣きそうになるのを抑えて笑顔で言ってくる。鮎美も死ぬかと思った状態から、こうやって両親と顔を合わせることができるのは嬉し涙を流しそうになるけれど、松田川に注意されたので軽く微笑をつくってスイッチを1回押した。

「アユちゃん、不自由そうで……けど、キレイに治るそうよ。頑張つてね」

「……」

スイッチで答える。

「板垣死すとも自由は死せずとか、言ってたけど、鮎美死せず自由が死

んだな」

「……………」

あまり嬉しくないのでスイッチを2回押すことを試してみた。くだらない冗談が好きらしい松田川の笑い声が聞こえる。

「あははは。議員さんで刺されたといえば板垣さん鉄板ですよ。板垣だけに鉄板。けど、あんまり本人が笑うようなことも言わないでください。今日のところは、ここまで。退屈と孤独に耐えて頑張ってください。テレビとかも見せてあげると余計な体力を使うし、今は事件の番組ばかりだから、余計なことは考えないで治ることだけ考えておいて」

ごく短い面会が終わってしまった。鮎美は夜までの長い時間を一人で過ごし、いろいろと考えたけれど、考え込まないようにした。

翌1月12日の水曜日、お昼過ぎに鷹姫は鮎美が入院している特別病室の隣にあるモニター室で面会を始める前に松田川から注意点を聴き、気持ちを落ち着けるために目を閉じて深呼吸していた。あのと、自分が晴れ着などでなく、あと一瞬だけ早く動けば鮎美を負傷させずに済んだという何度も何度も悔やんだことは顔に出さないように心を静める。

「はい、大丈夫です。お願いします」

「じゃ」

松田川が機器を操作してモニター越しの面会を始める。

「芹沢さん、本日2回目の面会ね」

午前中には両親と短い面会をしていたけれど、今日は2度目が許され、モニターに映る鮎美は嬉しそうに微笑んだ。

「……………こんにちは…み、宮本鷹姫です」

「くすつ…」

鷹姫が緊張して名乗ると、鮎美は失笑してしまった。声を出さずにはいけないので鷹姫は慌てて言う。

「笑わないで聴いてください」

「…」

鮎美がスイッチを1回だけ押ししてきた。その意味は鷹姫も聞いている。

「ご気分は、いかがですか？ 痛むところがありますか？」

「……………」

スイッチが2回押され、隣りにいる松田川が助言をくれる。

「一度に二つ質問すると、向こうは答えに迷うよ。あと、答えがイエスノーで済む質問にしてあげて」

「はい。……………では……………」

返事はしたけれど、普段から無口なので自分から話を振るのは、かなり苦手だった。

「……………」

「……………」

鷹姫が黙ると、鮎美も返答のしようがない、モニター越しに見つめ合っているうちに、やっぱり二人とも涙が滲んできた。とくに鷹姫にとっては48時間ぶりに見る鮎美の顔で安否は知っていても、あの血まみれで搬送された後、命に別状はないと知るまでの数時間は祈るしかない不安な時間を過ごしている。

「……………生きていてくれました……………よかった……………」

「……………」

鮎美がスイッチを1回押すと同時に、モニター室にある他の計器が警告音を発してくる。鮎美の心拍数が上昇し、皮膚が発汗しつつあるという警告だった。松田川が二人に割って入る。

「はいはい、湿っぽい話はなしね。汗をかくとね、皮膚表面のバイ菌が元気になっちゃうから、芹沢さん、平常心、平常心。すぐ良くなってお友達とも会えるからね。今は平常心だよ」

「……………」

鮎美は涙を零す前に瞬きで耐え、ゆっくりと気持ちを落ち着けて心拍数をさげた。

「すみません。私がこれ以上話しては芹沢先生のお心を乱してしまいます」

「……………」

スイッチが2回押された。まだ面会を終わらないでほしいという意味を感じる。

「ですが……私は話をするといいっても……苦手で……」

鷹姫は話題を考える。今、外の世界は最年少議員が刺殺されかけたという話題でもちきりになっていて実は病院の外にも大勢のマスクミが集まっている。そんなことは教えたくない。他には秘書として、鮎美の負傷でキャンセルになってしまった予定の繰り延べなどの報告もあるけれど、それも勇気づける話にはなりそうにない。淡々と事務的にスケジュール変更を伝える場面でもないと思えた。かといって黙っていると、また泣いてしまいそうで、鷹姫は思い浮かんだことを口にした。

「平家物語は……いえ、あれは悲しい話もありますから、もつと勇壮な……あ、戦国において最強と名高い上杉謙信と、同じく最強と言われる鬼島津一族の対比を語るのは、どうですか？」

「……………」

松田川は、この場面で話すことなのかな、と思ったけれど、もともと鮎美は手足も動かさずヒマを持て余しているはずなので、鮎美が良いなら良いと思っただし、スイッチが1回押された。それで鷹姫が語りはじめ、今現在の自分たちとは無関係な話に耳を傾けている鮎美の心理状態は安定した。話は川中島の会戦や、朝鮮出兵、関ヶ原まで多岐におよび長時間になったけれど、松田川は止めず、鷹姫は3時間も話した。ようやく、そろそろ面会を終えようと松田川が言ったとき、鷹姫は強く気にかけていることを問うた。

「もし、よければ傷口を見せてもらえませんか？」

「……………」

その問いは本人である鮎美と医師である松田川にも向けられていた。鮎美は迷っているようでスイッチを押さない。松田川は考えるときの癖なのか、両手を向かい合わせ、その指先だけを触れさせている。

「そうね。すごくキレイに治りつつあるから、本人も見えてないけど、そろそろいいかも。芹沢さん、まずはお友達に見てもらっていい？」

「……」

スイッチが1回押された。それで松田川は機器を操作してオフにしていたモニターを映した。そこに鮎美の胸より下から両腿までが映る。

「……あそこが傷ですか？ 松田川先生」

「そうよ。思ったよりキレイでしょ」

「はい……あれほど血が流れたのに……もう、細い線のようにしか……」

モニターに映る鮎美の傷は臍の下から股間まで、まっすぐに続いているけれど、ごく細い線のようなカサブタができているだけで一見すると長い引つ掻き傷にしか見えなくらいになっていた。

「よかった……素晴らしい技術です……医学は、これほど進歩して……」

「フッフ、いずれ私は美容外科を開業しようかと思ってるからね。芹沢さんも自分の傷を見てみる？ そっちのモニターにも表示してあげようか？」

スイッチが1回押される。松田川が機器を操作して鮎美の真上にあるモニターへも傷口の映像を送った。それで松田川と鷹姫の顔を映していたモニターに自分の傷口が映り、それを見た鮎美も安心したような表情をしたけれど、すぐに顔を赤くして恥じらい始めた。反射的に両手で股間を隠そうとしているけれど、それもできない。鷹姫とは何度も温泉や風呂にいっしょに入ったけれど、こんな風にカメラで一方的に見られて、しかも剃毛された上で小水を取り出す管まで挿入されたところを見られるのは耐えがたかった。また心拍数が跳ねあがり、汗をかいて涙を浮かべている。

「あ、ごめん、ごめん、いくら同性でも恥ずかしいよね。はい、おしまい。じゃ、次は明日の朝、また、ご両親ね」

面会を終えると鷹姫は礼を言ってモニター室を出ようとしたけれど、一つ気になることができたので問う。

「松田川先生は同性愛者なのですか？」

「え？ ううん、違うよ。あ、もしかして、変なカッコにさせてセクハ

ラだ、とか思ってる？ これ本当に必要な治療だよ。斬られたところが下腹部だから、ああして晒すしかないの。傷跡をキレイに治すには服を着せずに適度に乾燥させることと、紫外線をあてないこと、人間って自覚してないだけで服の中は、かなり汗をかいてるから。だから、斬られたのが、お尻だったらうつ伏せでああするし、腕とか脚なら、あんな恥ずかしいカッコにはさせないよ。どっちにしても搔いてほしくないから手は縛るけど、私を変な趣味の持ち主と思うのは失礼だからやめてよね」

セクハラ疑惑は嫌なので松田川が多弁にまくし立てた。鷹姫は言い返す。

「いえ、SMだと思ったわけではありません。ただ、先生がされているバッチが目に入ったものですから」

「ああ、これ？」

松田川が白衣の胸に着けている虹色のバッチを指した。

「はい、それです」

「なるほどね。けど、これLGBT全般の運動で着けるやつだよ。これ着けてるから同性愛者つてのは、早とちり。トランスジェンダーかもしれないし、それに、あなたも胸につけてる青いリボンのバッチ、それって何かの政治運動だよな？」

松田川が鷹姫の制服の胸にあるブルーリボンのバッチを指した。

「はい、北朝鮮拉致問題のものです」

「そう。……………あなたの、ご家族が拉致されたの？」

「いえ、単に運動に賛同しているというだけで私の家族は関係ありません」

「ほら。同じように、私も当事者じゃないけど、運動には賛同してるっただけ」

「そうですか、失礼しました。これからも芹沢先生の治療をよろしく頼みます」

「任せて。……………あ、一応、言っておくけど、私の身体は女だよ。で、好きになるのは男の人。あの女医って、どう見ても女の人なのに実は

男なんだ、とか変な誤解をして帰らないでね」

「はい」

「まあ、性転換手術の技術は高めたいと思ってるから、もし、そういう方面の法律とか研究費とかの審議が国会であつたら、芹沢さんにはよろしく頼みたいかな」

「わかりました、伝えておきます」

今度こそ一礼して鷹姫はモニター室から廊下に出た。隣の特別病室の前には男性警官が2人も立っている。鮎美には知らせていないけれど、刺傷事件の直後から県警から派遣されてきた警備の制服警官だった。その2人の警官へ6人のスーツ姿の集団が近づいていく。集団の先頭は女性でOLのようなスーツとスカート姿だったが、すぐに拳銃を抜くためにスーツのボタンは留めていないし、動きやすいためにスカートのスリットはチャイナ服のように深い。何より、その女性の顔に鷹姫は見覚えがあつたので駆け寄った。

「「っー」」

急に鷹姫が駆け寄つたので6人のうち3人が鷹姫に向かって構えてきた。それで思わず鷹姫も間合いをとって構えるので、ますます睨み合いになる。

「……」

強い、相当な手練れ、と鷹姫は相手の強さを実感したし、相手も同じだったけれど、先頭にいた女性が言ってくる。

「急に駆けてくるから……あ、君は……宮本くん？」

「はい！ 介式（かいしき）師範お久しぶりです！」

「ああ、久しぶり。だが、今は遠慮してくれ。任務がある。あとで話そう」

介式は予定通りに県警の警官へ近づき、敬礼して名乗る。

「警視庁警備部警護課警護第4係の介式いつか警部です。芹沢鮎美議員の警護を引き継ぎます」

「はっ！」

二人の制服警官は敬礼を返して、持ち場を譲った。介式は部下を二名、鮎美の病室の前に立たせると、鷹姫へ問うてくる。

「やはり、宮本くんが秘書を務めていて、犯人を取り押さえたのも、君か？」

「はい。……不覚でした」

鷹姫が悔しそうに言うのと、介式は深く訊いてくる。

「状況は報告書で読んだが、君の口から、もう一度、聞きたい。芹沢議員の容態も含めて話してくれ」

「はいっ」

鷹姫は鮎美の容態と、事件当時の状況を細かに話した。同じことは当日にも昨日にも県警から問われたので時系列にそって明晰に話した。

「なるほどな。立派な活躍だ。どこが不覚だと感じる？」

「晴れ着などで浮かれていなければ間に合ったはずです。それに答辞が終わっていたのですから私は背後でなく隣りにいるべきでした。くわえて、取り押さえ方が甘く、何度も反撃を許してしまいました」

「相手の少年は大柄だったのに、よく頑張った。県警からは少々やり過ぎと言われなかったか？」

「はい。……両腕を折る必要があったのか、と」

「だろうな。柔道だけでは相手を制圧するのに足りない。怪我をさせずに制圧する方法と、いよいよ急迫したとき瞬時に無力化する方法、そのあたりの技術を習っていないければ仕方ないだろう。手錠などの拘束具も持っていないなかったわけだから、絞め落とした判断も悪くない」

介式はポンポンと軽く鷹姫の頭を撫でた。

「介式師範にお会いするのは5年ぶりですね」

「ああ、よく覚えていたな」

「自分が勝てなかった相手というのは、覚えているものです」

「こいつ、いくつ歳の差があったかと思っている。まだ剣道は続けているのか？」

「はい。近頃、秘書としての仕事が忙しく怠りがちですが」

「私も似たようなものだ。副議長の警護が終わったと思ったら、次は子供議員のお守りだ」

「…………。芹沢先生は立派な方です」

「そうか、すまない。私は口が悪いので、よく怒られる。SPとしては不資格なのだが、女性要人警護につく女性SPは極端に少なくてな」

「腕前を買われたのですね」

「そういうことだ。また芹沢議員のことを色々教えてくれ、しばらくは彼女につくことになるから」

「はい、よろしくお願いします」

「非番時には稽古をつけてやろう。噛まれたりせず制圧する方法や、武器を持った相手に挑む方法を」

「はい、是非」

鷹姫は介式と握手をして微笑んだ。

翌1月13日の木曜日、東京では民主党の党大会が開催されていたけれど、美恋は娘を見舞うために病院に来ていた。三度目の面会に父親である玄次郎は仕事へ出てしまい参加してくれなかった。スイッチを通じてイエスカ、ノーしか答えられない娘に何を話しかけるべきか、美恋は迷い、鷹姫と似たような選択をして聖書をもってきていた。

「ねえ、アユちゃん。嫌かもしれないけれど、少し聖書の話をお聴いてくれない？ ……少しだけでもいいの、ね？」

「……………」

モニターの中にいる鮎美は、こちらを見てくると、反抗的な目はせず、優しく微笑してくれて、スイッチを1回だけ押してくれた。

「っ…………いいの？ ……嬉しいわ」

意外だったので、とても嬉しかった。そして、不慣れな手つきで聖書をめくり、朗読し始める。

「ペテロ第一の…4章12節を読むわね。愛する者たちよ…………あなたの方の間の…燃えさかる火は、…………試練としてあなた方に起きているのであり、何か異常な…ことが身に降り懸かっているかのように当惑してはなりません。…………かえって、キリストの苦しみにあずかる者と

なっていることを…歡びとしてゆきなさい。…」

「……………」

たどたどしい母親の聖書朗読を鮎美は黙って、静かに聴いていた。お昼過ぎ、陽湖は美恋と交替に面会へ訪れ、美恋から鮎美が聖書朗読を聴いてくれたことを聞いていたので、思い切って問うた。

「ブラザー愛也から説教を受けてみませんか？ 彼の聖書理解は深く、私たちは遠くおよびませんから」

「……………」

鮎美は穏やかに1回だけ押ししてくれたし、陽湖が聖書を読み始めても、静かに聴いてくれた。

翌日1月14日の金曜日、党大会を終えた民主党は第二次鳩山直人内閣の人事を発表し、テレビは連日の女子高生議員刺傷事件報道を見飽きた視聴者へ、閣僚紹介をしていたけれど、鐘留はテレビとネットの情報をまとめあげ、鮎美の元へ面会に来ていた。いつも通りの完全防寒姿で場所は聞いていたので、すぐにモニター室へ近づいたけれど、ドアに至るまでに介式が鋭く言ってきた。

「止まれ！」

「…………… お手もしようか？」

鐘留は手袋をした右手に資料を、左手に飲みかけのペットボトルを持っていた。言われたとおりに足を止め、軽い口調で応じたけれど、鮎美の病室前にいた介式と男性SP1名は不審者として対応している。

「両手をあげて動くな！」

「面会があるの聞いてない？ アタシは緑野鐘留」

「…………… 顔を見せろ」

「はいはい」

鐘留は防寒マスクとゴーグルを取った。それで介式は静江から連絡のあった鐘留だと判じたけれど、警戒は解かない。

「身体検査をする」

「ヤダ♪ エッチ」

「こう見えて私は女性だ。安心しろ」

「どう見ても女性だよ。自信をもって安心して。それで実は男だったら、かなり女装レベル高いよ」

鐘留の発言で男性SPの方が失笑しそうになり耐えている。介式は氣にとめず命じる。

「帽子とコートを脱げ」

「冗談の通じないタイプなんだね。宮ちゃんみたい」

タメ息をついた鐘留は毛皮の帽子とコートを脱いだ。コートを脱いでもスキーウェアのような上下を着ているので、また言われる。

「その上着も脱ぎなさい」

「はいはい、さすが病院、いい感じに暖房されてるね」

防寒着を脱ぐと、中は女子の冬制服で鷹姫や陽湖と同じだったけれど、介式は鐘留のポケットなどを、すべて調べてから問う。

「なぜ、顔を隠していた？」

「寒いから」

「……」

「そろそろ面会したいんだけど？」

「医師と芹沢議員に確かめる。いっしょに入れ」

介式はノックしてからモニター室を開けた。机でカルテを書いていた松田川が振り返る。

「面会ね？」

「そうなんだけど、怖いお姉さんがアタシを疑うの」

「この者は緑野鐘留と名乗っていますが、不審な姿をしていました。松田川先生は、ご存じですか？」

「私は初めて見るけど、芹沢さんは知ってるんじゃない？ 顔を見せて訊いてみるね。その前に、そのペットボトルは、そっちに置いて。

芹沢さんは食べることはおろか、何も口にせずにごっこしてるから、そんなものを見せないであげて」

「え……アユミン、そんなに悪いの……？ 命に別状ないって聞いているのに……」

気楽そうだった鐘留が急に不安な顔になると、松田川は友人を心配

する女子高生に優しく微笑んだ。

「大丈夫ですよ。ただ、傷口を残さないために、私が考案した特別な治療をしています。少しでもお腹を動かさないように、あと少し何も口にしないの。声も出せないのは聞いてる？」

「それは聞いているけど……そっか、……アユミン、超ダイエツト体験中だね」

鐘留は指示された棚に飲みかけのペットボトルを置いてから、モニターとカメラの前に座った。松田川が操作して、双方向で通信する。

「ハイ♪ アユミン、顔色は元気そうだね」

「……」

鮎美が微笑んで1回押した。

「アタシがモニター室に入ろうとしたらさ、この怖いお姉さんが不審者あつかいしてくるの。なんとか言ってやってよ。アタシは防寒してただけなのに」

「……フっ……フっ……」

鮎美が鐘留と介式が、どんな問答をしたのか、想像して笑い出しそうになり、松田川が注意する。

「まだ笑うのはダメですよ。我慢して。芹沢さん、この人が緑野鐘留さんでいいの？ 面会OK？」

「……」

鮎美が苦笑しつつ1回押した。その様子を見て介式は出て行き、病室前の警備に戻った。鐘留は面会を始める。

「アユミン、飲まず食わずで寝たきりなんだってね。アタシがお昼ご飯に何を食べたか教えてあげようか？」

「……」

鮎美が真顔で2回スイッチを押した。

「きやははは、だよ。けどさ、人間って3日くらい水を飲まないと死ぬんじゃないの？」

「水分補給は点滴でしていますよ」

「へえ……っつてことは、おしっこは？」

「……」

「もしかして、垂れ流し？」

鐘留が見ているモニターには鮎美の肩から上の顔しか映っていないので身体全体がどうなっているかは、わからなかったし、それを見て知っている鷹姫も鐘留へは言っていない。それでも鮎美が赤面して目をそらしているのが可哀想なのと、少し心拍数があがったので柗田川は咳払いして答える。

「違います。ちゃんと処理しています」

「つてことは、オムツ？ アユミン、どう？ 高校生にもなつてオムツにしちゃう気分は？」

「……」

ますます鮎美の顔が赤くなる。

「きやははは、24時間寝たきりで、オネシヨして、おもらしもなんてアユミン恥ずかしいね」

「……」

「大きい方は、どうするの？ それも……うわあ…アタシだったら死にたくなるよ」

「……」

鮎美がスイッチを2回押した。

「え？ 違うの？ じゃ、大きいのは、どうしてるの？」

「あなた本当にお見舞いに来たの？ からかうのは、やめてあげて。絶食してるから大きいのは出ません」

「ふーん……お風呂も入れてなさそうだね。近寄ったら、アユミン超臭い？」

「……」

「顔や手足は最低限の清拭をしています。芹沢さん、この人を追い出しますか？」

「…」

瞬時に鮎美は1回だけ押した。

「え〜……」

「さ、出て行きなさい」

「ヤダ♪」

「出て行かないなら、介式警部につまみ出してもらいますよ」

「うっ、あの人、マジやりそう」

「さ、出て」

「待つて待つて。そろそろさ、アユミンが犯人のことを知りたいんじゃないかって、情報まとめて来たんだけど、聴く？」

「……………」

少し迷いがあつてから1回押してくる。それで桧田川も諦めた。

「それもそうね。気になるでしょうし。けど、心理状態が不安定になるなら、追い出しますからね」

「じゃ、まずは犯人の氏名、ま、これはテレビでは少年Aなんだけど、アタシたち生徒は、みんな知ってるしネットにも流した：じやなくて、流れてる。名前は大津田悟司（おおつださとし）、2年生、犯行の動機はフラれた逆恨み」

「……………」

鮎美が記憶を振り返るような顔をしているので鐘留が言う。

「ほら、覚えてない？ ラブレターをくれた男子がいたでしょ。なのに、アユミンは無視した。ってか、たしか市議選の日に重なってるとかでデートの約束を断るのも忘れてて、そのままになった。思い出した？」

「……………」

スイツチが1回押され、先を促すような目で見てくる。

「でね、その大津田は、いつまでもネチネチと逆恨みしてたわけだよ。そこへ、あの週刊紙の不倫疑惑とパンチラ写真があった。あれを見た大津田のバカは、こう考えた、オレのラブレターを無視したくせに権力者には媚びるのか、パンツまで見せてビッチな女だ、後悔させてやる、お腹を突き刺して子宮を引き摺り出してやる、ってことで、お腹を狙ったんだって。警察では殺意は否定してるけど。お医者さん的には、どうなの？ お腹を刺して子宮を取り出したら、アタシたち女の子って死んじゃう？」

鐘留の問いは松田川に向けられていたので、やや呆れつつ答える。

「きちんとした手術として子宮癌なんかで取り出すのと違って、乱暴に切り開いて、引っ張り出したら、動脈もズタズタになるから、もって10分、早ければ3分もなく意識を失って死んじゃうわよ。あなたさ、もう少し話し方を考えてね。今のところ、芹沢さん、落ち着いて聴いてるけど、泣かしたりしないでよ」

「はいはい。アユミン、続き、聴く？」

「……」

返答はイエスだった。

「こんな大バカな理由でアユミンを刺した大津田には、前科と障害があつたらしいよ。中学のときね、同年の女の子のお腹を殴って入院させてる。ひどい殴り方で、女の子は片方の卵巣が破裂してたんだって。三重県での事件だったからアタシたちは知らないでテレビにも出なかった。殴った理由は今回と似たような感じで相手にされなかつたから。そりゃ相手にしないよ、この当時、大津田は普通学級じゃなくて支援学級に通学してた。小学校3年くらいで、どうしても九九が理解できないってことと、クラスメートに乱暴するってことで検査を受けたら発達障害が見つかって、中学に進むときは市役所から支援学級へいくよう言われてる。殴られた女の子の方は学年でも可愛い方だったらしいから、まあ、フツて当然だよ。アタシみたいに学年トップに可愛い子がガイジなんか相手にするわけないじゃん。で、キレて殴った。アユミンを刺したのと同じパターンだよ、手に入らないなら壊してしまえ。バカな保育園児が友達のオモチャを壊すのと同じレベル」

「……………」

鮎美は何の返事もせず、けれど聴いている様子で待っている。鐘留は続ける。

「殴打事件は警察沙汰になったけど示談で終わってる。大津田の父親は関西便利電力の大株主で電力技術者でもあるみたいで発電所に勤務もしている。兄も3人いて優秀らしいよ、国立大を出て高度な電力

技術者になつてる。けど、一番下の弟だけは発達障害だった。バカな子ほど可愛いってバカ親のパターンかな、賢い親ならガイジなんか静かに殺すのにね。まあ、小3まで育ててからガイジってわかるのは困るかな。産まれた直後にわかるなら、うつ伏せに寝かせて数分で済むし証拠も少ない。小3までになると、大雨のあとに川へ遊びに連れて行くとか、そういう殺し方がいいかも。障害も色々だよね、もっと大きくなつてから実はホモでしたとか、実は性同一性障害でしたとか、わかると殺し方に困るかも」

「……………」

鮎美はとくに何の反応もしなかったけれど、松田川が静かに怒った顔になり、いつも持っている肩こりを治療するための携帯型低周波治療器を白衣のポケットから出すと、その出力を最大にしてから鐘留の両腕に貼り付けた。

「キヤアア?!」

鐘留の両腕が意思とは無関係に肘を曲げ、ビクビクと手のひらがそる。自分で剥がそうにも両手が思うように動かせないので、しばらく苦しんだ挙げ句、なんとか机に腕を擦りつけて粘着導子を剥がした。

「ハア…ハア…うう…痛かった…ハア…何するのよ?!」

「ずいぶん調べ物をして肩がこつてるかと思つて。ね、あなたの話の方、とても不快です。あらためた方がいいよ?」

「……………」。マッドサイエンティストめ。アユミンも縛りつけて楽しんで」

「あなた、右目を美容整形したでしょ?」

「っ…」

「一重を二重にする手術、受けたよね」

「……………」。医師には守秘義務があるよね?」

「はいはい、言われたくないことは誰にでもあるから。芹沢さん、まだ面会つづける?」

「……………」

イエスだった。

「そうね、自分を刺した人のことは知りたいよね。じゃ、緑野さんだったけ？ 口を慎んで続けて」

「……。アユミン、手術のこと誰にも言わないでよ。あと、さつき、か
らかって、ごめんね、アタシの、あのことも、誰にも言わないでね。ア
ユミンの状態も言わないから」

プライドの高い鐘留が夜尿症が治らないことを、これからも黙って
いてほしいと暗に頼むと鮎美はスイッチを1回押した。それで鐘留
は話を再開する。

「大津田の話に戻るよ。中学で事件を起こしたけど、大津田は三重か
ら、こつちに引越してくることでリセットして高校はアタシたちと
同じ私立高校にきた。九九も理解できないバカでも、ごく少ない障害
者枠を専願で受験すれば入れるし、普通学級に通える。おかげで周囲
は、たんに勉強が苦手でケンカつぱやい男子としか思わなかった。大
津田は身長も高いし体格もいいし、顔もハンサムといえなくもないし
ね。目が犯罪者の目って感じだけど。で、一年生で同じ一年生の女子
と1ヶ月だけ交際してる。別れた理由は、放課後に二人でカラオケに
行くか、ミクドに行くかで口論になって殴ったから。アホカツプルの
典型だね。相手の女子は鼻の骨と前歯を折られる重傷だったけど、ま
た示談。アユミンも、たっぷり慰謝料もらうといいよ。ね？」

「……」

返事はない。

「本当に、たっぷり請求した方がいいよ。卵巣を潰された子は三重で
公立高校に進学してたけど、月経不順と自律神経失調に悩んでたらし
いよ。月経が2回に1回くらいに減って、量が増えたんだって。腹痛
と頭痛も強くて欠席がちだった。これって卵巣を潰されたことと関
係ある？ 電撃先生」

「変なアダ名をつけないで。診察したわけじゃないから推測にすぎな
いけど、事件以前には普通に月経があったなら、大いに関係あるで
しょうね。その子、どうしてるの？ ちゃんと婦人科に通院して
る？」

「死んだよ。自殺」

「……………」

「二年生になって休み明けの始業式、なんとか不登校から脱すべく登校したんだけど、式の最中に月経が来ちゃって、足に血が垂れて、それを周りで見られたのが直接の自殺原因だったけど、自宅の部屋には、アタシの身体を返して、って書き記したノートがたくさんあった。自殺の方法は、始業式の帰り、列車に飛び込んだ。彼女の両親は大津田家と最初の事件で示談してたけど、追加の慰謝料を請求して、現在、裁判中。ちなみに、アユミンを刺した日の翌日に大津田も出廷して証人尋問がある予定だった。死んだ方がいいバカつてのは、いるよね？」

「……………」

また鮎美は返事をしなかった。

「いろいろ調べたんだけど、大津田の発達障害が、どういう病名だったかは不明。ワイドショーでも、いろいろ言ってるけど、信憑性は薄いかな。どっちにしても、そういうのが同じ学校にいるのは問題だね。処分しないまでも、増えないように去勢して、どつかの島とかに隔離すればいいのに。ガイジも、精神病も、ホモとかもさ。まともなアタシたちが被害者になるとか、割に合わないし」

「医師として一つ言っておきます」

今度こそ松田川が真剣に怒った顔になった。

「健常者が犯罪を犯す確率と、精神的な疾患や発達障害をもった人が犯罪を起こす確率に差はありません。あなたは差別主義者ですか？」

「そうだよ。それが何か？」

「……………」

「電撃先生も差別主義者を差別する差別主義者だよね」

「そんなトートロジーに誤魔化されません。障害の中には遺伝子が関係しているものがあることは事実です。けれど、ナチスドイツはユダヤ人と共に精神障害者などを虐殺しました。アメリカは先住民族や精神障害者に対して、断種を目的とした去勢などの強制不妊手術を行いました。この日本でも、つい最近まで優生保護法の名のもとに国が

障害者などの不妊手術を認めていました。他に、強制不妊手術を行った国はスイス、オーストリア、ベルギー、イギリス、フランス、スウェーデン、ノルウェー、中国、インド。あなたは正しいと言えますか？それらの国がしてきた事を」

「言えるよ。とても正しい」

「……………」

「ユダヤ人とインディアンは別の問題だから除くとして、いろんな国が、ちゃんと審議して決めたことじゃん。それを感情的に、なんだか残酷だから、正しくないと感じるのは、どうなの？ ナチスドイツがやったから悪？ じゃあ高速道路網の整備も、大衆車の生産も、みんな間違ったことなの？ 医師として一つ言うってさ、社会科の知識なんか、センター試験が終わって医学部に入ったら、ぜんぜん習わないでしょ。アタシたち高3と変わらないんじゃない。医師が言うから正しい、ナチスがやったから間違ってる、ステキな差別主義的思考だね」

「……………」

「でき、もし自分が被害者だったら、その説明で納得する？ お腹刺されて血いっぱい出てるとき、発達障害の人と健常者の犯罪率に差はありませんよ、って言われたら、どんな気分だろうね？ 卵巣つぶされてホームで列車を待つてるとき、どんな説明があつたら、納得できる？」

「……………」。 緑野さんは、なにか、そういう被害経験があるの？」

「別に何も」

「では、どうして、そこまで…」

「え？ 自分が被害者じゃないと、何か言えないの？ 被害者の言う

ことは無条件で正しいの？」

「そういうわけでは……………」

松田川と鐘留の会話は鮎美がスイッチを2回連続して押したので中断された。

「ごめん、アユミン」

「ごめんなさい」

「……」

鮎美は笑顔をつくって軽く頷いた。

「アユミンを刺した大津田については、だいたい、このくらい。いずれ親がお金もって詫びに来るんじゃないかな。あとは月ちゃんとかアタシを秘書補佐にするって話だけど、どっちの二人も問題あると思わない？ 一人は変な宗教やってるし、もう一人は性格が悪いし」

「……………」

鮎美は可笑しそうな笑顔になっている。

「まあ、ヒマなときは頑張ってあげるよ」

「……」

鮎美はスイッチを一回だけ押した。

「うん、じゃ、またね。バーイ」

鐘留が面会を終えると、分厚い防寒着に身を包み、ゴーグルやマスクをしたので松田川が問う。

「もしかして、皮膚に何か病気があるの？」

「ないよ。寒いのが嫌なだけ」

「……。少しは紫外線を浴びないと、逆に病気になりますよ」

「大丈夫、うちのガラス張りテラスで日光浴するから。アタシの美しい肌の日焼けあとが残らないように裸で5分だけ」

「それは合理的だけど……それに肌もキレイだった。ね、ちよつと、もう一回、お顔を見せてよ」

「いいよ、どうぞ」

機嫌良く鐘留は防寒装備を外して素顔を見せる。

「さすが女子高生、ピチピチしてる、しかも冬の乾燥した空気に晒してないから、赤ちゃんなみの肌」

松田川が美容外科を志す医師として、鐘留の頬を感動しながら撫でる。鐘留もプロに誉められて嬉しいので調子に乗った。

「身体も見せてあげようか？」

「うん、見たい、見たい」

鐘留は冬制服の上着とブラウスを脱いでみせた。ついでにブラジャーも外す。

「本当にキレイな肌ね。日焼けあとが、ほとんどない。夏はどうしてるの？ まさか夏も全身隠してる？」

「んな死ぬほど暑いことしないよ。制服改造して肩とお腹も出してるけど、ちゃんと日焼け止めを塗るし、時間を見つけて露出してない胸とか股間も自宅で焼くから、日焼けあとの差がでないの」

「完璧主義ね♪」

「まあね♪」

ますます鐘留は嬉しくなったのでスカートのチャックもおろしていく。

「下も見る？」

「見る見る」

鐘留が靴と靴下だけの姿になった。

「どうよ、アタシってキレイでしょ」

冬服になってから露出のチャンスが極度に減ったので楽しそうにポーズを取っている。

「すっごいキレイ……毛の処理も完璧、これレーザー処理、どこでももらった？」

「わざわざ東京に行ったよ」

「小さな火傷跡もないのに、毛根は一つも残ってない。かなりベテラン医師が調整しながら焼いてる。いくらかかった？」

「720万円」

「でしようね」

まじまじと顔を近づけて松田川は鐘留の腋と股間を見る。股間には金色の鐘が彫られていた。

「タトゥー入れちゃったんだあ……惜しいなあ、タトゥーと二重の手術がなければ、完璧なのに。でも、わかる気もするかな、私でも、あえて彫りたいかも。けど、この二重の手術は、はっきり言って下手くそよ。どんな医院で受けたの？」

「たまたま広告を見かけた三上市の医院……そっか、これ下手なんだ。なんとなく対応が悪かったから、脱毛は高くても東京まで行ったの……やっぱり田舎じゃダメなんだ……」

鐘留が悲しそうになると、松田川は顔を近づけて指先で鐘留の頬に触れる。

「この最後の縫い方がね、強すぎるから不自然になるの。私なら、もつとキレイにできるよ。再手術は難しいけど、やってやれなくはない」
「……………どうしようかな……………」

鐘留が迷った表情を見せているとき、鮎美をモニターしている機器類が警告音を発した。松田川が振り返ると、鮎美の心拍数が大きくあがっている。

「芹沢さん、どうしたの？ ……あ、……………もしかして、変な誤解した？」

「アタシたちの姿、まだ見えてたんだ。そりや変かもね」

鮎美へはモニター室全体の映像は送られているけれど、音声は止められているので、会話がわからないまま、鐘留が裸になり、松田川が顔を近づけて見つめていることしかわからない。かなり焦った顔で、こちらを見ていた。

「ごめん、ごめん、変な誤解をしないでね。ちよつと肌を見てただけだから」

松田川は会話の成り行きを説明してから付け加える。

「つてことだから、私は同性愛者じゃないよ。変に想わないでね」

「きゃははは、アユミンつてばアタシが襲われてると思った？」

そう笑う鐘留は、まだ裸でポーズを取っている。もともと簡単に脱いだのは松田川が白衣を着た女性医師だったということも大きい。

「そんなに堂々として。それだけ完璧な身体だと、恥ずかしいって気持ちゼロでしょ？ むしろ、誇らしいくらいなの」

「まーね」

「モデル並み、モデル以上かも」

「元モデルだよ」

「どおりで」

もう一度、松田川が鐘留の肌に触れようとしたとき、今度はモニ

ター室の扉を陽湖が開いた。陽湖の背後に屋城もいる。

「っ…な、何してるんですか?!」

陽湖は驚き、屋城は冷静に背中を向けている。

「あ、月ちゃん。本当にアユミンへ説教するためマスターブラザーを連れてきたんだ」

「ブラザー愛也に変な階級をつけないでください！ 神の前に、みな平等です！ そ、そんなことより、そのカッコは何ですか?!」

「シスター陽湖、激昂してはいけません」

屋城が背中を向けたまま言った。さすがに鐘留は服を着る。

「アタシは説教に興味がないから帰るよ。頑張つてアユミンを勧誘してみて。寝たきりだから弱気になって効くかもよ。洗脳が」

「……」

陽湖と屋城は反論せず、鐘留は鮎美へ挨拶してから帰った。陽湖と屋城がモニターの前に着席する。

「シスター鮎美、幸いにしてブラザー愛也の予定が空いていましたから同行いただきました。かまいませんか?」

「……」

鮎美がスイッチを1回押した。屋城がマイクに向かって話す。

「聖書に興味をもっていただいたことは幸いです。おうかがいしたいのですが、今のあなたは神を信じていますか?」

「……」

鮎美が迷いなくスイッチを2回押した。屋城は平静に問いを重ねる。

「単なる好奇心ですか?」

「……」

また2回押した。

「では、お母様が洗礼を受けられたことが遠因ですか?」

「……」

少し間があつて1回押した。

「お母様を喜ばせたいと、お考えですか?」

「……」

また1回押した。それで屋城は頷き、聖書を開いた。ゆつくりと聖書の朗読と説教を始める。その説教は内容が深く、鮎美は静かに聴き続けた。

1月15日 詩織

翌1月15日の土曜日、松田川は清潔な白衣とマスクを身につけると、鮎美のいる特別病室に食事トレーを持って入る。あいかわらず病室の前には2名のSPが立っていて、6人チーム3交替で24時間、鮎美を警護していた。病室に入った松田川はビニールのカーテンを開けると、ベッドサイドのテーブルにトレーを置き、真上を向いている鮎美の視野に自分が見えるよう覗き込む。

「いい感じに治ってきてるよ。さ、芹沢さん、五日ぶりの食事です。お粥だけど、きつと美味しいよ」

「……」

鮎美は返事をしなかったけれど、唾液が口の中に湧いたので、それを飲み込んだ。その喉の動きが松田川にも、よくわかる。

「あと声も少しなら出していいよ。できるだけスイッチで返事をしてほしいけど、穏やかに少し話すくらいならOK」

「……」

鮎美は頷きつつスイッチを1回押した。松田川は傷口の様子を見ながら、食事のために鮎美が寝ているベッドを電動で起こしていく。お腹の皮に皺がよらないギリギリまで鮎美の上体を起こした。

「では、ご飯の前に注意事項。五日ぶりだから、物を飲み込む力も弱まっています。うっかり気管に入って嘔せたりされると、傷に触るから、ゆつくり焦らず飲み込んでね。ただのお粥だけど、かなり美味しく感じるから」

「……」

また鮎美が唾液を飲み込んだ。食事トレーには蓋もさされていて、ほとんど匂いは立ち上っていないのに、嗅覚が強く米の香りを感じている。

「では、いただきますは省略して、一口目、どうぞ」

松田川は匙で粥を掬うと、鮎美の口へ運んだ。

「……………」

粥を口にした鮎美は舌から口全体に痺れるような快感を覚えた。その快感は頬や喉、胸にも拡がり、背筋を流れて脳に響いてきた。

「……ああ……美味しい……」

心から声を漏らして、そして涙を零した。

「やっぱり泣くよね。この療法をやった患者さん、ほぼ必ず一口目で泣くから」

予想していた松田川はナプキンで鮎美の涙を拭いた。

「すぐに二口目が欲しいと思うけど、ゆっくり、ゆっくりね」

松田川が少し間をおいてから二口目を食べさせてくれる。また、強烈な快感の痺れを覚えたけれど、それは一口目の半分くらいで、もう泣くことはなかった。

「代弁してあげる。ただのお粥が、こんなに美味しいものだと思わなかった。そうでしょ？」

「……」

鮎美が頷いた。

「あらゆる生き物、光合成をしない生き物にとって、食事は何よりも大切だから。雄雌のない生き物だってそうだから、食べることは基本中の基本。きつと、光合成をする植物たちは私たちの何百倍も、日光を気持ちよく感じるでしょうね。私たちが嫌がる夏の直射日光だって、最高の快感なのかも」

真冬の病室で鮎美は真夏の緑を思い出した。ゆっくりと食事をさせるために松田川は話ながら、食べさせていく。鮎美は何度も口の中に湧いた唾液を飲み込みながら三口目を待った。それを食べさせてもらうと、また涙が滲んだ。

「……美味しいです……とても……ああ……」

「私たち今の日本人は3食、普通に食べられるから、ほとんど感動しないでスマフォ見ながら食べちゃったりするけど、戦争中は大変だったらしいよ。ちよつと昔話をするね。私のお爺ちゃんの話」

ゆっくり食べさせながら松田川が語る。

「母方のお爺ちゃんは、けっこう運が良かった。赤紙っていうのかな、いよいよ兵隊になりなさいって命令が学生だったお爺ちゃんに来た。

あの当時の人だから、覚悟を決めて集合場所に行った。海軍に配属されたらしいよ。福井県の敦賀から掃海艇の乗組員として出発して、一路、太平洋を目指した。ぐるっと本州の北側を回って津軽海峡から太平洋に抜け、アメリカ軍と戦う予定だった。もう大和も沈んで、何度も空襲されてる時期だったけど、日本海側は、それほど危険じゃなかったらしいよ。でも、ただの学生だったのに、いきなり兵隊になれっつてさ、ただの女子高生が、いきなり議員っていうのに少し似てるよね。実際、刺されるくらい危ない仕事なわけだし」

「……」

「安全な日本海側から、津軽海峡に入って明日にも太平洋つてとき、天皇の玉音放送があった。そこで終戦、お爺ちゃんは助かった。けど、そこから自力で、青森県から、こつちまで帰ってくるのは大変だったらしいよ。掃海艇に積んでた食料を交通費にしたりしてね。最後まで家族のために残しておきたかった牛缶、牛の肉の缶詰ね、それを手放した話、何度も何度もしてくれたよ。それだけ心残りだったんだろうね」

「……」

鮎美のお腹がキューと泣いた。

「あ、ごめんね。お肉のこと思い出した？ また、3時間後には卵入りのお粥を食べさせてあげるし、明日にはお肉も出るよ」

また鮎美が唾液を飲み込む。もともと少なかったお粥は、ゆっくり食べさせてもらっていても、もう残り少ない。

「父方のお爺ちゃんは、ちよつと運が悪かった。学年の関係で、ほんの一年だけ早く兵隊に行つていて配属されたのは南洋諸島、ジャングルの中、敵との戦闘より飢えとの戦い。補給は来ない。食べる物が少ない。仕方なく現地調達するんだけど、ジャングルって毒をもった生き物が多いのに、その知識がない。何人も有毒生物を食べて死んでしまったらしいよ。そのうち、どれが危ないか、わかるようになるのには、あまりに飢えてくると、動く物がすべて食べたくなるんだって。ムカデとかの気持ち悪い生き物まで、見てるとヨダレが出るくらいに」

「……………」

鮎美は松田川が持っている粥の器へ視線を落とす。あと一口で終わりだった。

「死にそうな飢えの中、考えるのは食べ物のことばかりだったって。鍋焼きうどん、卵の入った鍋焼きうどんが食べたい、それ食べたなら、もう死んでもいい、つてくらいに。でも、飢え死にする前に終戦になった。まあ、私が存在してるわけだから、二人のお爺ちゃんが生きて帰ってるのは、読める話だけだし。今でも、お爺ちゃんたち、鍋焼きうどんに卵三つも入れたり、あんまり美味しくないのに牛の缶詰を買ってくるよ。タンパク質を摂るのは長生きの秘訣ではあるけどね。はい、おしまい、ごちそうさま」

「……………ごちそうさまです」

代弁してもらったけれど、鮎美は声に出して言った。松田川はベッドを水平に戻すとモニター室へ戻り、しばらく他の仕事をする。二時間ほどして、詩織が東京から面会に来た。モニター越しに顔を合わせると、詩織が泣いた。

「…鮎美先生……………本当に無事でよかったです…」

「……………ありがとうございます…」

「もう、声を出していいのですか？」

「……………少しだけ……………」

鮎美は泣かれるのが気恥ずかしいので、話題を変える。

「…東京は、どう？ ……業務連絡は？」

「……………そんなことより、言っておくことがあります」

「……………」

「愛しています、芹沢鮎美さん、私と結婚してください」

「っ……………」

「ブホッ！ ゴホッ！」

もう鮎美が食事可能になったのでモニター室の隅、カメラの死角でドーナツを食べていた松田川が盛大に噎せた。それから詩織を足元から顔まで見つめ、とくに股間や胸を見た。どう見ても女性で、整形手術の痕跡は感じない。

「結婚してください、鮎美」

「……まだ、法は認めてないと思うけど？」

「憲法が認めています」

「……いつ改憲されたん？　うちが入院してる間に？」

「第24条で、婚姻は合意のみに基づいて成立します。プロポーズにイエスがあれば、そこで成立です。気持ちだけで十分です。手続きはオマケです」

「……両性の合意やったよね？」

「その条文は人権侵害なので失効します」

「9条なみの解釈やん」

「芹沢さん、あまり調子に乗って会話しないでください。話したい気持ちはわかりますし、とんでもない話題ですけど……あの、立ち入ったことを訊きますが、牧田さんは男なんですか？」

「いいえ、女性です。バイです」

詩織が堂々と答えたので、逆に松田川がたじろぐ。

「そ……そうなんだ……それは……そうだよね……」

「松田川先生は？」

すでに詩織は一目見たときから、松田川が虹色のバッチを着けているのに気づいていて問うた。

「う、ううん。これは着けてるだけ。運動に賛同してるから。私自身はノーマルだよ」

「そうですか、ありがとうございます」

「……。あの、前からバイの人に訊いてみたいことがあったんだけど、いい？」

「どうぞ」

「男性も好きになるんだよね？」

「ええ」

「それなら、男性と結婚すればいいんじゃないの？」

「……。逆に問います。好きになった男性がいるのに、親からお見合いを勧められたとき、はいそうですかと好きな人を忘れて、お見合い結婚しますか？」

「うっ……なるほど……そういう気持ちか……それは……そうだ

よね……忘れられないよね。ごめんなさい、余計なことを訊いて……大切なプロポーズに水を差してしまつて……」

「いえ」

詩織は鮎美へ向かつて再び求婚する。

「鮎美が好きです。あの日、鮎美が刺されて搬送されたとニュースで見たとき、頭が真っ白になるほど絶望しました」

「……………」

「もう世界は闇だと思つうほどの絶望です。けれど、生きていてくれた。でも、人間、いつ死ぬかわからない、だから、今すぐ、あなたが欲しい。好きです、大好きです、鮎美、私と結婚してください。気持ちの上だけでいいんです、同居がなくてもいい、セックスもゆっくりで、ただ、心だけ、あなたとつながりたい」

そう言つて詩織が涙を零すと、鮎美の心拍数があがつていくのがモニターで、はつきりとわかる。

「……………牧田はん……………」

「詩織と呼んでください」

「……………」

「鮎美に他に好きな人がいるのは、わかっています。ゆっくり待つつもりでした。けれど、人生の時間が、いつ終わるかかわからないことは体験しました。だから、言います。愛しています、鮎美、大好きです。鮎美を抱きしめて、キスをしたい、ずっと二人で過ごしたい、だから、心で結婚してください」

「……………」

熱意のこもつた年上からの告白を受けて、鮎美は顔を赤くして心拍数を警告音が鳴るほどあげている。鮎美のいる病室にも心拍モニターはあるので自分が胸を高鳴らせていることが誤魔化しようのない数字として見せつけられている。逃げたくても逃げられず、赤くなつた顔を手で隠すこともできない。瞳が潤んで落ちつきなく動き回っていた。その反応で鮎美が同性愛者であることに桧田川も気づいた。普通なら同性から熱い告白を受ければ極度に困惑するのに、鮎美の反応は普通の女子が男子から告白を受けたときのようなもので、

少なくとも鮎美もバイカレズビアンだと感じた。そして、松田川は救急搬送されてきたとき、鮎美から脱がせた制服の内ポケットに自分が着けているのと同じバッチがあるのに気づいていた。同僚医師や看護師たちは松田川が着けていてさえ、気にしていないので鮎美が着けていたつけていたことに気づきもしていない。けれど、松田川には内側に着ける意味を察することができた。

「芹沢さんも、……」

「あなたには守秘義務がありますよね？」

詩織が確認するように鮎美のために言った。

「……ええ、絶対に漏らしてはしないから安心してください」

その言葉を聞いてから、再び詩織は鮎美へ求める。

「鮎美、好きです。結婚しましょう」

「……ハア……」

鮎美が熱い吐息を漏らして涙を零した。明らかに迷ってくれている。まったく同性愛の指向がない鷹姫と、自分を好きでいてくれるバイの詩織、天秤が葛藤している。

「……う……うちは……、……」

もう心拍数だけでなく、皮膚の発汗が好ましくないほど高まったので松田川が水を差したくないけれど、水を差すことにした。

「ごめんなさい。これ以上は芹沢さんを興奮させないでください。発汗が進むと、せつかく一度も化膿していないのに細菌感染が起こります」

「……」

詩織が口をつぐんだ。そして成熟した両性愛者として穏やかに微笑む。

「惜しいですけど、話題を変えます」

詩織がカバンからタブレットを出して予定を告げる。

「国会の開会式まで、あと十日を切りましたが、前日に退院して東京入りしてもらうことは予定どおり可能でしょうか？」

「……それは、そっちの先生の方に訊いてやってよ」

「はい、今の調子なら可能です。できれば、歩行は控えて車イスにして

「いただきたいですけれど」

「車イスですか……開会式では登壇、つまり階段を登らねばなりません……」

「短時間なら大丈夫ですよ」

「よかった。あと、これは谷柿総裁から問われたのですが、もしも可能なら前日の23日に行われている自民党大会へ、少しでも顔を出せな
いか、できれば集合写真には入ってほしい、とのことですよ」

「谷柿先生がわざわざ……、できれば、そうしたいけど……松田川先生、どうですか?」

「別に新幹線の座席に座ってるのも、車イスも変わらないから、いいですよ。要するに走ったり跳んだり控えて、ヨボヨボとお年寄りのように静かに歩いてほしいということですよ。でも、痒くなったり痛くなったりしたら、すぐに安静にして抗生物質を投与したいんですけど……」

松田川が退院直後の遠出を医師として推奨できない顔になると、詩織が頼む。

「松田川先生に東京まで主治医として同伴をお願いすることはできますか?」

「……うくん……別料金を取っていいなら一日25万円で引き受けます」

「では、お願いします。それは経費で落としますし、いずれ加害者へ求償すると思いますから。あと、すでに鮎美先生の口座から病院へ支払われている216万円も、高い可能性で補填されるはずですよ」

「……そうなんや……相手の親に……」

「私の治療は自由診療の中でも、かなり高価ですよ。おそらく交通事故の保険であっても損保会社が拒否するような金額です。東京への同伴も、私は不当とは思っていませんけれど、不当に高いと言われると反論に困るかもしれません」

「ご心配なく、そのあたりの話は秘書の石永が進めています」
「そうですか」

「先生は治療に専念してください。どれだけ高価になってもかまいま

せん」

「愛のあるセリフですわね♪」

松田川は詩織を応援したくなったので、二度目の食事時刻まで面会を許して、食事介助を詩織にさせることにした。一度、松田川だけが病室に入ると、専用の金属格子で腹部にシートが触れないようにしてからシートをかけて、鮎美が恥ずかしい思いをしなくて済むように配慮してから、詩織の入室を許した。卵入りの粥を詩織が嬉しそうに鮎美の口元へ運ぶ。

「はい、あーん、して♪」

「……」

恥ずかしそうに鮎美が食べる。鮎美の胃が食物を消化吸収することを思い出して何度も鳴くので余計に恥ずかしかった。詩織は指示された通りに、ゆっくりと食べさせ、食事介助を満喫すると、食後にねだった。

「キスさせてください」

「……」

「先生、問題は無いですよね？」

今は傷口へシートをかけているので詩織も松田川もマスクはしてない。そろそろ無菌状態の維持も必要度が低下しているし、もともとと人間の口内は患者本人も雑菌だらけなのでキスに問題はなかった。

「ええ、キスくらいならいいですよ」

「ですって」

「……」

鮎美は答えず、スイッチも押さない。詩織が言い募る。

「とつても心配したんですよ。なのに私は東京にいて何もできない」

「……それは……ごめんやけど……」

「一度だけ、お願いですー」

「……」

「人間、いつ死ぬか、わからないじゃないですか、今、この瞬間が私た

「ちの一期一会かもしれない」

「……………」

鮎美の瞳が考え込む色合いになって、詩織の唇を見上げる。

「……………」

「……………」

願ひ乞う詩織の瞳と見つめ合い、鮎美はスイッチも押さず、言葉も発しなかった。それを詩織は肯定を受け取り、顔を近づける。鮎美は動くこともできないけれど、逃げる素振りも無かった。

「……………」

「……………」

そつと詩織は鮎美へ口づけしたけれど、すぐには終わらず長いキスをする。

「……………」

長いキスを続けて、さらに詩織は舌先を鮎美の口内へ入れた。

「……………」

いきなりディープキスなん？　そこまで許した覚えはないのに、と鮎美は閉じていた瞼を開き、抗議の目で見上げたけれど、間近に見た詩織の閉じた瞼が涙で濡れていたので、受け入れた。

「……………」

「……………」

そばで見てる松田川まで興奮が伝染して頬が赤くなるような情熱的なディープキスで、しかも長い。

「……………」

息苦しくなっても詩織は終わらずにキスを続け、舌をからめて吸った。逃げられない鮎美はされるがままキスを続けられ、だんだんに興奮してくる。もともとベッドに縛りつけられて刺激の少ない生活だったところへ、詩織の唇と舌の感触は人恋しさも手伝って、一口目の粥を食べたときと同じような強烈な快感になってくる。いつまでもやめない詩織を止めたのは、またも警告音とドクターストップだった。

「はい、そこまで。そろそろシートの中も蒸れるから、牧田さんは部屋

を出てください」

「……はい……、ありがとう、鮎美」

「……」

鮎美は恥ずかしそうに目をそらした。その顔は赤くて、まだ心拍数は警告域まで高鳴っている。詩織が退室すると、松田川はシートと金属格子をのけ、また鮎美の下腹部を晒した。

「あんなに熱いキス、初めてみたよ」

「……」

「濡れちゃつてたりして」

松田川が鮎美の下腹部にある傷口を観察しながら言った。

「つ……、い、…今のは明らかにセクハラ発言ですよ！」

「あ……そうね。ごめんなさい。失言でした、忘れてください」

謝つてから松田川は退室して、廊下で詩織に出会おうと微笑みながら言った。

「ほぼ落ちたね」

「遠距離恋愛ですから、わかりません。けれど、国会が始まってくれれば、平日は毎日、会えます」

「頑張つてね。けど、入院中は首から下には何もしないでよ」

「はい」

涼やかに微笑んだ詩織は介士たちにも会釈して病院を出る。病院の敷地外ではマスコミが待機しているので病院前で客待ちをしていたタクシーに乗って六角駅前のビジネスホテルに向かった。よく鮎美たちも利用している高すぎず安すぎないホテルにチェックインして荷物を置き、鮎美との面会結果を静江にメールすると、赤いスーツに着替えて、上から目立たない灰色のコートを羽織ると、地毛をまとめてから黒髪のウィッグを着けた。そうしてホテルを出ると、六角駅構内を通り過ぎて反対側にあるショッピングセンターに入り、釣り具専門店で釣り竿と糸、アイスボックスを買い、別の階にあるスポーツ店で5キロのダンベルを二つ買って、女子トイレの中でダンベルをアイスボックスに入れ込むと、六角駅に戻り、在来線で大阪に向かう。大阪の街中にある高級車専門レンタカー店でベントンを借りるときは

ドイツで作ってもらった偽の身分証明書と国際運転免許証を出し、いつもは右手で書字するのに、本当の利き手である左手でレンタル契約書にサインし、ベンツで難波まで移動すると、地下鉄の駅で若い女性に声をかける。

「一晩で30万円のバイトしませんか。本番ありで」

声をかける相手は選んでいる。だいたいは、これから出勤する風俗嬢か、お金に困っているような女子学生だった。詩織が女性なので、あまり怪しまれず話を聞いてくれ、7人目の鮎美によく似た風俗店へ出勤する前の女子大生が領いてくれた。その場で出勤予定の店には体調不良で欠勤と連絡を入れてもらい、ベンツに乗せた。

「あなたの名前は、今夜はアユミということをお願いします」

「わかりました」

風俗業をやっていると名前はコロコロ変わるので気にせずアユミは領いた。

「アユミさん、夕飯は？」

「まだです。お店に着く前に、どこかで食べるつもりだったから」

「お相手していただくのは、かなり身分と立場のある人です。お腹を鳴らされても困るので、どこかに寄りますね。その前に携帯電話などの電源は切ってもらえますか。マナーモードではなく、電源をオフに。とても注文のうるさい方なので、お願いします」

「わかりました」

アユミが電源を切るのを、詩織はしっかりと確認してから次の注文をする。

「あと、関西弁は話せますか？」

「そりゃあ、中学から大阪に住んでいますし」

「それ以前は？」

「四国です。それ以上の個人情報はいけませんよ」

「今からは、丁寧語でなく関西弁で話してください。ちよつと可愛くないくらい、きつい感じで」

「えつと……こんな感じでええんやろか？」

「そうそう。あと、これに着替えてください」

詩織は難波駅近くのホテル駐車場で琵琶湖姉妹学園の冬制服をアユミに見せた。制服プレイは風俗としては定番なのでアユミは車内で着替えた。

「アユミ、夕飯は何が食べたいですか？ 洋食、中華？」

「なんでもええよ」

「では洋食にしましょう」

詩織とアユミはエレベーターで上層階のレストランへ向かった。エレベーター内の鏡でアユミは自分の制服姿を見て、思い出した。

「これ、芹沢鮎美のコスプレ？」

「やっぱり、わかりますか」

「つてことは、身分のある人って国会議員さんとか？ 本物の鮎美ちゃんにエロいことできないから、うちを代わりに？」

「フフ、詮索はやめましょう」

「そやね。うちはお金さえもらえたら、ほんでええわ」

二人でレストランに入り、難波の夜景を見下ろしながらフレンチを楽しんだ。

「こんな高そうな店、うち初めてやわ」

「本物の鮎美は、もうホテルのレストランくらい平然としているでしょうね」

「あの子、運がええなあ。国会議員って何百万ももらえるんやろ？」

「660万円らしいですよ」

「けど、刺されるんは勘弁やわ。かわいそうに超逆恨みやん。ずっと入院してはるらしいけど、もうあかんのやろか？」

「どうでしょうね」

「人のやつかみって怖いもんやし、こうやってエロい対象にもされるし。まあ、そのおかげで、うちは稼げるんやけどね。ああ、美味しかった。ごちそうさま」

食べ終わったアユミと詩織はベンツに戻り、詩織の運転で阪神高速から神戸に向かい、さらに明石海峡大橋を渡る。詩織が助手席にいるアユミへ目隠しを差し出した。

「場所を特定されないたため、ここから先は目隠ししててください」

「えらい本格的やね。ちょっと怖いわ」

「フフ、目隠しをされると言うことは、逆に無事に帰してもらえると
いうことですよ。他言無用のためです、どうぞ、ご理解ください」

「そ…そやね…ほな…」

アユミは30万円欲しさに目隠しをした。そろそろ月経が来る夕
イミングなので今夜なら避妊無しでも大丈夫という計算もあった。
詩織は淡路島を少し走ると、北淡インターで高速をおり、海沿いを南
西へ3キロほど走って、右は海、左は山という何も無いところに停車
した。

「どうぞ、目隠しをとってください」

「……」

周りを見ても、真つ暗なので淡路島のどこかというところしかわから
ない。大阪の街の人の多さに慣れたアユミには無人に感じるほど、人
も車も見えない。

「ここなん？」

「はい、海へおりた方に別荘があります」

「ふーん……」

「その前に、キスしましょう」

「…うつ…薄々感じてたけど、お姉さん、そういう人なん？」

「詩織と呼んでください」

「……詩織……、えっと……うち、そういう経験ないんやけど、詩織と
エッチしたら30万円もらえる？」

「ええ」

詩織が赤いスーツの内ポケットから札束を見せた。それでアユミ
は気持ちが悪いつつも、酔っぱらった汚い中年男性よりマシか
もしれないと、風俗経験から諦める。

「………いるんやね………こういう人……まあ、ここまで来たら、うち
も覚悟を決めるわ。どうぞ」

アユミが目を閉じたので詩織はキスを始める。キスしながら手を
スカートの中にも入れた。しばらく車内での行為を楽しむと、二人で
ベントを降りて、海岸に出た。

「別荘なんて、どこにあんの？」

「少し歩きます」

そう言った詩織は波打ち際までアユミを歩かせると、隠し持っていた出刃包丁をアユミの腹部に突き立てた。

ザクツ！

刃先は制服と皮下組織を貫き、腹筋を斬り裂き、小腸を傷だらけにする。

ズズ！

さらに下腹部の方へと斬り進めると、子宮と膀胱を割った。

「クウツ?! …うく……」

悲鳴も出せないような激痛でアユミが両膝を着き、前へ倒れた。

「うっ…あっ…あっ…ヒイ…あっ…」

「板垣死すとも自由は死せず、と言ってみてください」

「ううう…あ…うあ…」

「やっぱり無理ですか。では最期のキスを」

詩織は悶え苦しむアユミとキスをしながら、その子宮を手で引き摺り出した。温かい子宮が少し湯気をあげる。キスをしているアユミの唇は、どんどんと冷たくなり、もう呼吸もしていない。涙に濡れた瞳も動かなくなった。

「はああ…：：：楽しかった。本番の一発、ありがとう、アユミ」

もう死んでしまったアユミに礼を言って、詩織は血まみれになった手を制服で拭き、返り血を浴びた赤いスーツの上着を脱ぐと、ゴム手袋をしてベンツに戻り、後部座席に置いてあったコートを着る。トランクから釣り竿とアイスボックスを出し、再び海岸に出るとアユミの死体を全裸にして、血の付いた衣類と所持品はアイスボックスに入れる。アユミの首と片足に5キロのダンベルを釣り糸で固定すると、海岸の離岸流を探して、腿まで冷たい海水に濡れながら死体を海に浸ける。釣り竿で手首に巻きつけた釣り糸を引くことで、より深い沖へ流していく。途中で、あまりに脚が冷たくなったので詩織は小便がしたくなり、手が塞がっていて忙しいので、そのまま海に流した。これ以上は釣り竿では沖へ死体を誘導できないというところまで流した後、

出刃包丁で釣り糸を切った。海岸へ戻ると、出刃包丁や濡れたストッキングとショーツもアイスボックスに入れ、砂浜を2回、遺留品がなにかチェックしてからベンツに戻った。そこへ夜間パトロール中のパトカーが通りかかり、ベンツのそばに停車して、助手席の警察官が降車せずに車窓から問うてくる。

「ここで何をしているんですか？」

「見てわかりませんか」

詩織は釣り竿を強調した。

「わかりますけど、そんなカツコで？ 女性が一人で？」

「仕事帰りについ衝動的に、ここ釣れそうかなって。好きなことってダメですね。見境無くやってしまっただけ。うっかり足を濡らしてしまいました」

詩織は濡れたスカートの裾を搾ることで返り血を隠しつつ、真っ白い腿を警察官によく見えるようにした。それで警察官は目をそらしてくる。

「女性一人で気をつけてくださいよ。とくに、このあたりは潮の流れが速いから」

「はい、ありがとうございます。もうやめて帰ります。スカートを脱ぎますので、もう行ってもらえますか？」

「お…お気をつけて」

パトカーが発車して過ぎ去ってくれる。詩織は本当にスカートを脱いでからアイスボックスと釣り竿を積み込むと、すぐに高速道路で大阪へ向かいつつ、途中のサービスエリアで障害者向けトイレに入り、温かい湯で脚を流し、手を洗い、着替えた。

「誰でもトイレって本当に便利ですね。誰でも使える、どんな趣味、指向の人でも。フフ」

着替えたサービスエリアでは濡れたストッキングとショーツをゴミ箱に捨てたけれど、すべては捨てずに次のサービスエリアで制服のスカートを鉄で切って3分の1だけ捨てる。何度もサービスエリアとパーキングエリアに寄って小分けに証拠品を捨てていき、神戸で高速をおりると大阪へ向かう途中のコンビニのゴミ箱にも少しずつ捨

ててまわり、出刃包丁は橋から淀川へ捨てた。アユミが持っていた電源を切ったままのスマートフォンは安治川に捨てる。アイスボックスも、よく洗ってから尻無川に釣り竿とともに捨てた。京セラドーム付近で邪魔にならないところに駐車すると、日の出が眩しい中、レンタカーに血が付いていないか、しっかりと確認して朝一番に返却した。電車で大阪から六角市へ戻る。一睡もしなかったビジネスホテルの客室でシャワーを浴びてからチェックアウトし、いつもの服装で病院へタクシーで向かった。

「エサの時間には間に合いそう」

「は？」

タクシーの運転手が問うけれど、詩織は微笑んだ。

「何でもありません。病院前の道路ではなく、ロータリー奥まで入ってください。報道陣がいますから」

「はい、わかりました」

タクシーを降りてモニター室に行くと、松田川と美恋、そして日曜日のので玄次郎が面会していた。

「また、明日ね、アユちゃん」

「疲れてるんやったら、もう毎日は来んでええよ。友達も秘書も来てくれるし」

「オレは仕事があるから次の週末……いや、もう退院してるな。まあ、ヒマがあつたら来るよ」

「うん、おおきに」

両親が詩織へ会釈して出て行くと、松田川が時計を見て言う。

「そろそろ、お昼ご飯だけど、牧田さんが介助してくれる？」

「はいっ」

「つていうか、そのつもりでお昼時に来たよね」

「お見通しですか」

「わかる、わかる、ちよつと待ってね。準備するから」

松田川は金属格子とシートで鮎美の下半身を隠すと、モニター室へOKサインを送って詩織を呼ぶ。詩織は食事トレーを持って特別病室に入る。病室前には介式と男性SP1名がいたけれど、何も問われ

ず、詩織は軽い会釈だけして通り過ぎ、鮎美のそばに座った。

「お待たせしました、鮎美先生」

「おおきにな。……なんか疲れた顔してへん？ 大丈夫なん？」

「あ…やっぱり、顔に出てますか…夕べ、一睡もできなくて」

「どうしたん？」

「だって、鮎美とキスした後じやないですか」

「っ……」

鮎美の心拍数があがる。詩織も赤くなった頬を手で撫でた。

「私、夜になつても眠れなくて」

「……………」

「鮎美は私の夢、見てくれました？」

「……………」

鮎美は黙って赤面しているけれど、鮎美の胃が鳴いて急かした。食べ物匂いを嗅ぐと、もう胃が騒いで仕方ない。メニューは粥と卵焼き、トマトサラダとリンゴだった。

「あ、ごめんなさい。早く食べたいですよ。はい、あーん、して」

「……。 松田川先生、そろそろ、うち自分の手で食べたいわ。まだ両手を縛られてなあかんの？」

「うん」

「うんって……」

「表面的には、かなり治ってるように見える傷だけど、まだまだうっかり一回でも搔いたら、大変だよ。いいの？」

「……搔かんように気をつけたら……」

「カサブタが治つてくると、ちよつと痒いよね？ それを、うつかり搔くのよ。今まで何度失敗したことか。だから、もうダメ！ 両手を縛られてると気が狂う！ っくらいなら解除してあげてもいいけど、我慢できるなら我慢して」

「うゝ……」

「はい、あーん」

「……………いただきます……」

鮎美は恥ずかしそうに詩織に食べさせてもらうけれど、妙な匂いが

気になった。

「なんか血の匂いがせえへん？　ちよつと生臭いような」

「っ……」

詩織が手を引っ込めて、自分の手を見る。何度も洗ったはずなので血は着いていないけれど、鮎美の嗅覚は普段より鋭敏になっているようで確信的だった。詩織は瞬時に言い訳を思いついた。そして、恥ずかしそうに言う。

「夕べ眠れなかったんですよ……興奮して……それで一人で……。ずつと……そうしていたら、生理が始まってることにも、気づかなくて……。も、もちろん、ちゃんと何度も手を洗ったんですよ！　でも、ごめんなさい。気持ち悪くて食欲なくなりませよね。こんな汚い手で……」

詩織が申し訳なさそうに顔を伏せると、鮎美は慌てて言う。

「ええんよ！　ほんのちよつと、血の匂いがした気がただけやから！　ええよ、ぜんぜん、女やったら、あることやし。早う食べさせて、お願い」

「……では、はい、あーん」

食事を再開して、ゆっくりと食べさせ終わると、詩織はキスをしたかったけれど、今回は言い出さずに、あえて鮎美の反応を待つ作戦に出た。鮎美は期待していなくても予想しているはずで、その予想が裏切られたとき、どんな反応をしてくるか、それで今後の戦略を練り直すつもりだったけれど、鮎美は予想外のことを言ってきた。

「朝槍先生との連絡って取れる？」

「え……？　あ、はい。当然、連絡先などはわかります」

「うちはな、今回の件での真犯人に、きっちり反省してもらおうねん」

「……真犯人？　犯人は男子生徒で思想的背景のない単独犯との見方が濃厚らしいですが……。私は一種の快樂殺人だと思いますよ。未遂に終わっているところが実に浅はかですが」

「うちが今から話すことを、朝槍先生に賛同してもらえるか、協力を要請してほしいんよ」

そう前置きして鮎美は長い臥床生活で考えていたことを詩織に語った。聴き終えた詩織と、傍聴していた松田川が驚く。

「……さすが、鮎美先生……」

「……すごいこと考える……芹沢さんって、女の鑑かも……」

「タイミング的には国会開会式の後、そこに記者会見をセッティングしてほしいんよ。ただし、名目は退院の挨拶くらいで実質的な内容は隠して。このことは、うちらだけの秘密、静江はんにも黙っておいて。きつと、反対しはるし」

「わかりました。となれば時間がありませんね、私は東京へ向かいま
す」

詩織は手足を動かせない鮎美を口説く以上の楽しみを見つけて、すぐに井伊駅へ向かい、新幹線に乗った。秘書としてはグリーン車に乗る経費は出ないけれど、自費で補填して指定席を取って乗車すると、偶然に直樹と出会った。

「あなたは……」

「君は……」

お互い、少しは見知っているので、直樹が微笑した。

「やあ、たしか、芹沢先生の秘書だよ。東京がメインの」

「はい、牧田詩織です。雄琴先生のごことは色々とうかがっています」

「悪口ばかりだろうね」

「そう本気で嫌っているわけでもないと思いますよ。私は、どうでもいいです。ここ、空いていますか？」

詩織は予約した指定席とは違ったけれど、直樹の隣席が空いていたので問うた。

「ああ、どうぞ」

「一度、雄琴先生とは話してみたかったんですよ」

「それは光栄だね」

「妹さんのことはお気の毒でした」

「……。ああ。……」

いつも調子の軽い直樹が声のトーンを落としてしまった。

「……もう昔のことだよ……」

「今でも、妹さんのために動いていらつしやいますよね。鮎美先生も理解されています」

「そう……ありがたいね」

「雄琴先生は悪質な性犯罪者に絞首刑以上の死刑を、と唱えていらつしやいますが、具体的に、どんな刑を想定されているのですか？」

「フ……同じ殺し方をしてやるのが一番だと思っうね。被害者の苦痛を味わうべきだ」

直樹は気持ちを落ち着けるために微笑して答えた。詩織は淡々と問う。

「被害者が2名以上の場合で、それぞれに殺し方が違つたら？」

「ゆつくり、二つの殺し方を実行してやればいい」

「片方の被害者が銃などで一瞬に殺され、もう片方の被害者が殴る蹴るで長い苦痛を味わつた場合は？」

「さんざんに殴る蹴るした後には頭を撃てばいい」

「性犯罪の場合、たいいてい男が女を襲いますよね。強姦したりしてから絞め殺す。こういう犯人は絞め殺すだけですか？」

「女性が味わつたのと、同じ苦痛と恐怖を味わうべきだね」

「具体的には？」

「うゝん……ボクの頭の中では何度も考えたことだけれど、これに口に出すと、ドン引きされるかもしれない。まして、女性相手に口にするのはセクハラかもしれない」

「私は気にしませんよ。どうぞ、教えてください」

「じゃあ……たとえば、犯人より屈強な同性愛者に襲わせるとか、男性器を切り落とすとか、肛門に熱した鉄棒でも突つ込むか、そんなところかな」

「それが雄琴先生が男として考える、女が味わつたであろう強姦の苦痛ですか」

「ああ、まあ……」

「もつと常人には、おぞましいような殺し方がされていた場合は、どうですか？ たとえば、少しづつ皮を剥ぐとか、噛みついて喰らうとか。とても常人にはできないような凄惨な殺し方だったら、処刑人は誰が

？ 雄琴先生の理論では公務員が憲法で残虐な刑罰を禁止されているので、被害者の家族にあたらせるらしいですけど、本当に実行可能でしょうか？」

「ボクは可能だと思うよ。少なくとも、ボクは今でも許していない」「雄琴先生の妹さんは、どんな殺し方をされたんですか？」

「……………それを、ボクに語れと……………君は少し無神経じゃないか？」

「思い出すだけで、そんなに青ざめているのに、いざ犯人を目の前にして、本当に実行できるのですか？」

「……………できるさー」

「では、雄琴先生は実行可能だったとしても、他の被害者家族は、どうでしょう？ 妹と兄の関係だから血気盛んな若さがありますけれど、被害者が18歳、ご両親が50代だったりして、最高裁判所まで争った場合、刑の確定まで15年がかかれば、両親は65歳を過ぎますよね？ 犯人が逮捕されるまでに10年を要したなら75歳ですよ」

「……………」

「父親が他界していて、年老いた母親しか残っていないかったら？」

「……………」

「けっこう穴のある主張ですよね」

「……………君の目的は何だ？ ボクを怒らせることか？」

「いいえ、少し補完して差し上げたかったです。刑を実行する被害者家族がないケースを、ちゃんと考えておかないと、私が犯人だったら一家皆殺しなんて、いいかな、って思いますよ」

「……………それで、補完っていうのは？」

「二つあります。一つは処刑人を公募すること。さすがに先生方のようにクジ引きで選んでは660万円でも引き受けない人が多いでしょう。現在の刑務官でも死刑執行はボタンを押すだけなのに、複数名でやっていて誰が殺したか、わからないようにしているくらいですから。さつき同性愛者に襲わせるとおっしゃいましたが、同性愛者を野獣か何かだと思いませんか？ ご自分に置き換えて、雄琴先生はカレーにヒ素を入れた汚いオバさんを襲って絞め殺せと命じられ

「たら、いくら欲しいですか？ 勃ちますか？」

「うっ……うくん……あれをか……」

「女だからって無条件に襲えるわけじゃないでしょう？」

「ああ、そうだな。ボクは、そんなに同性愛者のことは考えたことがないから……芹沢先生は、ずいぶん親身に陳情を受けていたけど……。そう考えると公募も難しくないか？」

「一回につき100万か、200万、それで合法的に人を殺せるなら、やってみたい物好きはいるでしょう」

「……もう一つの案は？」

「これは、もつと安価に済みます。残酷な刑を課すべき、犯罪者を数名集め、エサをやらずに閉じこめておけば、そのうち共食いして最後の一匹になりますよ。そうすれば、また追加していく」

「……なるほど……いい案だ……けど、よくそんなことを思いつくなア。君は女性なのに」

「ときに女性の方が残酷ですよ。腕力が無い分、毒殺や放火をするし、嫌がらせも陰湿です。私の二つの案に共通するのは、どちらも異常者は異常者に始末させるということですよ。常人では耐えられない。だから、公募に応募してくるのも、きつと異常者予備軍です。それで満足すればよし、満足しなければ、いずれ自分が公募を募られる側になるか、完全犯罪で逃げ切るか、です」

「逃げ切らせなんかしないさ。日本の凶悪犯罪検挙率は高い」

「官僚があげてくる統計を信じているようでは議員として若いですよ」

「……」

「殺人事件は遺体が見つかってから始まります。行方不明者や家出人は統計に含まれません」

「……」

「話を変えていいですか？」

「ああ」

「凶悪かつ悪質な性犯罪から、軽度な性犯罪に変えます。雄琴先生は男性として、女性のパンチラ写真を撮影することを、どう思いますか」

？」

「ああ、その話か…」

ごく最近に自分も掲載された週刊紙にあった袋とじページの件を思い出した。この件について鮎美の秘書が質問してくるのは、死刑制度のことより合点がいく。むしろ、こちらが本題で死刑制度について残虐な刑罰を肯定してみせたのは、直樹の歓心を買ってから本題に入ろうという計画だったのかもしれないとも思った。

「同じ男として、情けなく思うよ。恥ずべきことだ」

「雄琴先生は、鮎美先生のパンチラ写真、ご覧になりました？」

「……」

「見たんですね」

「じよ、情報として確認しただけだよ！ 自分も別のページに載っているから！ ちゃんと確かめておかないと、記者からの質問で失敗するかもしれないだろ?!」

「フフ、慌てるくらいには後ろめたいんですね」

「……はああ……芹沢先生の東京秘書は、手強いな……」

「近いうちに、芹沢先生は女性の権利について、大きな運動を始められます。凶悪性犯罪も大切ですが、軽度な性犯罪にも目を向けて、雄琴先生にも賛同いただきたいのです。できれば、賛同者に名を連ねて。もちろん、ギブアンドテーク、雄琴先生の主張にも賛同する、ということだ」

「なるほど……具体的には？」

「具体的なことは、あとで資料を送らせていただいてよいですか？」

「ああ、そうしてくれ」

「では、私は、これで。色々あって昨夜寝ていないので失礼します」

詩織は予約した指定席に座ると、ぐっすりと幸せそうに眠った。

1月17日 性同一性障碍

翌1月17日の月曜日、午前中に美恋と陽湖が面会に来てくれ、世間話と聖書の話をした後、鮎美は昼食にトンカツを母親の手から食べさせてもらい、美味しさに震えていた。

「ん〜♪ 美味しいわ、最高やあ」

「フフ、可愛い。アユちゃんに、こうやって食べさせるなんて15年ぶり？ 16年ぶりくらいかしら」

母親が微笑んでくれるのは気恥ずかしいけれど、嬉しくもある。

「つまり、うちが3歳か、2歳までは食べさせてもろてたんや」

「そうよ。だいたい1歳半くらいから自分で食べ始めてくれるけど、ボロボロ零しながらだから、結局3歳くらいまでは、ちよつと手伝うの」

「その頃のシスター鮎美の写真を見ましたけど、とっても可愛かったですよ」

「うちのアルバムを見たんや。今度、陽湖ちゃんのアルバムも見せてや」

「はい」

「赤ちゃんを育ってるって、とっても楽しいのよ。私ももう一度したいくらい」

「ふーん…」

鮎美にとつて妊娠は遠い出来事に感じるけれど、否定的な声は出さずに二切れ目のトンカツを食べる。

「お肉、美味しいわあ」

味噌汁も飲ませてもらい、幸せな気分で横になった。午後からは鷹姫が来てくれる予定なので美恋と陽湖は帰り、それまでは松田川の許可もあつたので少しテレビを見る。ずっと松田川がいるモニター室を映していた真上にある液晶モニターをテレビチャンネルに変えてもらった。

「昨日行われた鹿児島県阿久根市の出直し市長選挙が投開票され…」

「……………」

一年前は気にもしなかった遠い自治体の首長選挙も、どの政党の候補者が勝つのか、気になっている。

「ブログ市長こと前職が落選し…」

「極端なことする首長は、最初だけで、あとは落ちていくなあ……そう思うと加賀田知事、よう頑張ってるわ」

「政府がロシアのガスプロム社と、ロシア極東・ウラジオストクでの液化天然ガスプラントの建設協力で合意し…」

「北方領土は返ってこんのかな……千島樺太交換条約って有効性、どうなんやろ……まだまだ知らんことばかりや」

「ジャスマン革命による混乱でチュニジアに足止めされていた日本人旅行者のうち117人が無事に出国し…」

「非常時の邦人救出も課題やな。9条のせいで自衛隊機の海外派遣が……はああ！ 世界は課題ばかりやん」

鮎美が大きなタメ息をつくとき、松田川が注意してくる。

「はい、テレビおしまいね」

「え〜…」

「穏やかに過ごしてほしいの。ごちやごちや考えないで」

「はいはい。鷹姫、まだ来んのかなあ」

「あ、来たみたい。息を切らして、どうしたの？ 走ってきたの？」

モニター室に鷹姫が入ってきている様子が映る。肩で息をしていた。

「ハアハア、遅くなりました。すみません」

「鷹姫、どないしたん？」

「介式師範が非番だったので、稽古をつけてもらっていて。ハア、遅くなりました、すみません」

「うちの警護をしてくれてる人のリーダーやんな。前に副議長についてはった美人さんの。あの人、強そうやったもんなあ……鷹姫と知り合いなん？」

「中学の頃、剣道の強化合宿で師範を務めてくださり、それで知ってい

ました」

「そっか……中学剣道で……あのころは、うちも頑張ってたなあ」

「お母様に芹沢先生が中学生だった頃の写真を見せていただきました」

「うっ…、うちが居ん間に、アルバム振り返り大会してるんやなあ。退院したら、鷹姫の写真も見せてよ」

「はい。……ですが、うちは貧しかったので写真らしい写真はありません」

「…そっか。…ごめん」

「鬼々島の公民館になら大会優勝時の写真くらいはありますけれど」

「それ、だいたい毎年あるんやろ」

「はい。私だけでなく男子も良い成績を残していますよ」

「…ふーん……岡崎はんは？」

「健一郎さんはベスト8です」

「……全国の？」

「はい」

「十分、強いんやな」

「けれど、今、介式師範に実戦の稽古をつけてもらおうと剣道がスポーツでしかなかったと思いい知ります」

「あの人、ごく最初に自己紹介を少し聞いたきりやから………ちよつと話してみたいわ」

「本日は17時から警護にあたられるそうです」

「そっか……」

「伝えておきます」

「おおきに。あ、鷹姫は自動車教習所にそろそろ行く時間ちゃうの？」

「はい、すみません。来たばかりで」

「ええよ、少しでも会いに来てくれて、ありがとうな」

鷹姫が教習所へ行き、しばらく鮎美は一人で病室の天井を眺めていた。静かな時間が過ぎて午後5時になり、介式がモニター室へ入って

きて、カメラ越しに敬礼してくる。

「芹沢議員がお呼びとのことですが、何用ですか？」

「ちよつと介式はんと話してみたかったんよ」

「はい、それで、お話とは？」

「別に話題が決まってるわけやのうて、どういふ人なんかなあ、と」

「……………警視庁警備部警護課警護第4係の警部です」

「うくん……………それは聞いたんやけどね。剣道強いの？」

「はい」

「…」

謙遜なしやね、鷹姫と同じタイプなんや、と鮎美は人柄を察した。このタイプとは、ゆっくり親しくなるしかないとも経験している。

「失礼やけど、耳も変形してはるやん。柔道とかも強いの？」

「はい。……………そちらのモニターには詳細に映っているのですか？」

介式が横髪に触れながら、カメラレンズを見ているような視線を送ってきた。お互いを映しているモニターは、それほど高解像度ではないし、人物の耳となると視認にくいはずなのに、という問いだったので鮎美は付け加える。

「前に参議院の懇親会パーティーで副議長さんを警護してはったやん？」

「はい」

「あのとき見かけて声もかけさせてもらたんやけど、覚えてくれてへん？」

「はい」

「……………そつか、うちは覚えてるんよ。強そうな人やなって」

「そうですか」

「うちの警護も、よろしくお願いします」

「はい。お話は以上ですか？」

「もう少し。介式はんって結婚はしてはるの？」

「そういつた個人的なことには答えられません」

「ほな、鷹姫とは、よく会うの？」

「ここ数日、非番の日に会っています」

「会って、何してはるの？」

「逮捕術と制圧技術、近接格闘術を教えてください。そろそろ持ち場に戻ってよろしいですか？」

「うん、おおきに。また話してやってな」

介式が敬礼して出て行くと、松田川が言う。

「あのタイプと、よく会話が続くね」

「まあ、慣れてるし。議員になってから、色んな人とも会うし」

「えらいね。けど、あの人は関東から来てるから、あんまりコテコテの関西弁で話すと失礼かもしれないよ。ちよつと怒った感じだったし」

「あれで怒ってはいはらへんよ」

「かもしれないけど、そのハルハラも、私たちには丁寧語に聞こえるけど、あつちの人には意味不明だったり、介式ハンって呼び方も、人によつては軽く扱われてるって感じるよ？」

「そうなんや……注意しよ」

「あと、私たちくらいの年齢の働いてる女性に結婚してるか、してないかを訊くのも。セクハラ」

「う……気をつけます。前から気になってたんやけど、松田川先生って、おいくつ？」

「それもセクハラ」

「厳しいなあ。あ、夕飯なに？」

「カレイの煮付け、ハウレンソウのおひたし、けんちん汁、白米、オレンジです」

「ちゃんとしたご飯が食べられるって幸せやわあ」

鮎美は夕食を楽しみに待った。

翌1月18日の火曜日、美恋から昼食の鳥唐揚げやキャベツのサラダを食べさせてもらっていた鮎美は、午後から面会に来てくれた鐘留との会話中に困った生理現象を覚えていた。

「ごめん、カネちゃん、まだ5分も話してないけど、ちよつと松田川先

生と二人にしてくれへん？」

「アユミン、どこか具合悪いの？」

「何でもないけど、ちょっと先生に診てほしいねん」

「ふーん……じゃ、アタシは廊下に出るよ」

鐘留がモニター室を出て行くと、松田川が問う。

「ウンチ出そう？」

「……………」

鮎美は久しぶりに一回だけスイッチを押した。

「そろそろだと思った。食べると出る、自然なことだから、そんなに恥ずかしがらなくていいよ。そっちに行くね」

松田川が廊下に出て、特別病室に入ってくると、ゴム手袋をはめるので鮎美は不安になった。

「うち……トイレでしたいです」

「ダメ」

「……そんな……」

「息むのが一番ダメ。あと我慢し続けるのも傷口によくはないから、出そうなら、もう出しちゃっていいよ。そのシーツの下は防水シートだから」

「……………」

「傷口の皮膚に張力、引っ張る力がかかるのが一番ダメなの。だから、トイレで息むのは、まだまだダメ。無理に我慢して緊張するのもよくないから、スルッと自然に出るのが一番いいの。けど、うまく出ないなら掻き出してあげる」

「ううう……」

「ほら、息みそうになってる。力を抜いて。私がやる呼吸法を真似してね。ヒツヒツフー、ヒツヒツフー、この呼吸で力を抜いて」

「そ……それ、妊婦が産むときやるやつちやいますの？」

「そうだよ。息まないための呼吸だから」

「…………ヒツヒツフー…………ヒツヒツフー…………」

鮎美は諦めて松田川の処置を受けた。処置が終わると鐘留がモニター室に入ってきて面会を再開する。

「アユミン、どうだったの？」

「うん、もう大丈夫だよ」

「何だったの？」

「何でもないよ」

「その顔は、何か恥ずかしいこと？」

「……………何でもないから」

「ま、だいたいわかるよ。きやははは！」

「……………」

カネちゃん、このネタで、うちのことからかうの好きやなあ……………自分がオネシヨ治らんから、かなりコンプレックスあるんかも……………もとはといえば、ご両親が先天障碍のあった弟さん二人を除いてしまわはったことが、ずっと心に引っかかって……………それはそうやろな、自分の親が自分の兄弟姉妹を……………なんてこと……………受け入れにくいに決まってるのに……………なんとか受け入れようって……………そやから、ご両親の行動を肯定するような発言をところかまわずするし……………その件さえなかったら、カネちゃんは可愛いし頭もいいし、ごく普通に異性愛者で、家も立派で何不自由ない人生やったのに……………そっか、ご両親も同じや……………障碍のある子供なんか産まれてこんかったら順風満帆、そう思ったから、手をくだした……………その選択……………それを悪やと言いつけるのは酷やろ……………かといって三島はんが言うように命は命や……………産まれた直後でも中絶でも、いつしよや……………キリスト教なんかはド真剣に中絶反対するし……………けど、うちら日本の神話ではイザナギとイザナミは最初の子が今で言う障碍児やったから川へ流してはる……………あれは、あれで示唆に富んだ逸話なんかも……………と鮎美が長く真顔で黙って考え込んでいると、鐘留が謝りはじめた。

「ごめん、アユミン、ちよつとしたジョークだよ、そんな怒らないですよ。ごめんってば」

「うん、もう、ええよ。気にしてないから」

根はええ子なんよなあ……………自分の可愛さを謙遜せんのと、偏った人権思想を隠さんから、女子の中で孤立してしても、転校生やったうちと孤高やった鷹姫にくつついてきてくれたし、陽湖ちゃんが生徒会長

やから、四人合わせて学園の最強女子軍団とか、四天王とか、いろいろ言われてるらしいけど、実際は新年会でオジサンに酌して回ったり、今なんかベッドに縛られてトイレも行けん有様や、と鮎美はタメ息をついた。

「はああ…」

「ごめん……」

「ホンマに、もうええよ」

「お詫びにさ、次からケーキでも持ってきてあげようか？」

「かねやさんのケーキか……」

鮎美が唾液を飲み込んで、傍聴している松田川を見る。少し離れた机で論文を読んでいた松田川が答えてくれる。

「よほど偏った食事じゃない限り、食欲のままに食べてくれていいよ」

「やった」

「良かったね、アユミン」

その後は鐘留と学校や世間のことを話して過ごした。

翌日1月19日の水曜日、鮎美は食べることは嬉しいけれど、一日のうちで一番嫌な時間を前にして、憂鬱だった。

「なあ、松田川先生、そろそろ、この両手を縛ってるのと、トイレ、お願いやし、自由にしておよ」

「せっかく、ここまで我慢したのにな？」

そつと松田川はゴム手袋をした指先で鮎美の下腹部にある傷跡に触れた。もうカサブタは一部が剥がれて、薄い表皮が見えている。室内の無菌状態維持も必要度が低下して透明なビニールのカーテンは片付けられていた。

「あと、お風呂も入りたいわ」

「お風呂ねえ、入りたいねえ」

松田川が油っぽくなった自分の髪を撫でた。

「なんとなく思うんやけど、もしかして松田川先生も、お風呂に入っかない？」

「一応、芹沢さんに我慢させてるからね。手術の日から入ってないよ」

「……………そんなことに付き合ってくれるんや……………。それに、うちばつかり診てくれてるけど、他の患者さんとか、ええの？」

「あ、それにも気づいた？」

「だって、ずっとモニター室におるやん、ほぼ24時間、ずっと」

「この治療中はね、他の患者さんを診るのはキャンセルしてるの。医道倫理的にも安全面でも、本来、精神障害もない芹沢さんを拘束するのは、あまり好ましくないことだから、せめて、その場を離れずにいるわけ」

「……………好ましくないって……………ほな、外してよ」

「全体的には好ましくないけれど、傷跡にとっては極めて重要なことだから拘束してるのよ。もう、この段階になるとバイ菌よりも、芹沢さんの爪の方が脅威なくらい」

「うち、搔かんように気をつけるし」

「そう言って何人の患者さんが後悔したことか」

「ううう……………」

「はいはい、掻き出してあげるね。本当なら看護師とか、看護助手にやらせるようなことでも、芹沢さんは女性に見られるのも恥ずかしそうだから、私が全部やってあげてるんだから我慢して」

　　松田川が処置を始めた。鮎美は目をそらして耐える。松田川は患者の気持ちの落ち込みを避けるために別のことを話すことにした。白衣の胸にある虹色のバッチを両手が塞がっているので顎先で示す。

「私がさ、どうして、このバッチをするようになったか、聞きたくない？」

「……………聞きたいですけど……………個人的なことかもしれない……………」

「隠してるわけじゃないからいいよ。私の彼氏……………彼氏だった、のかな。うん、まあ、私には好きな男性がいたんだよ。中学から好きだった」

「……………」

鮎美は話に耳を傾けて、受けている処置の感覚は忘れようと努める。

「芹沢さんの学校と同じで中高一貫教育だったから、同じ高校にも進んだ。そして、同じ医学部にまで」

「二人とも頭良かったんですね」

「まあ、謙遜しても厭味だから肯定しておくよ。けど、彼とは中学から友達って関係で、なかなか、それ以上は進めなかった。私は受験が終わるまでは男女交際は控えようって気持ちでいたし、彼もそうだと考えた。けど、晴れて医学部に合格しても、あんまり関係は進まなかった。私は焦ったよ。医学部ってさ、男子への女子からのアプローチ、ものすごいから」

「そうなんや?」

「うん、すごいよ。とくに看護学部の方からは、ものすごいアプローチが来るし、他大学の女子まで合コンを仕掛けてくるし、猛者になるとスポーツ部のマネージャーになってくるの。他大学なのに」

「え……自分の大学やない医大の部活のマネージャーになるんですか?」

「すごいよね、露骨さが」

「はい……すごすぎるといえるか……全力といえるか……」

「ひどいと、男子部員の人数よりマネージャーの人数の方が多くなるよ」

「うわああああ……修羅場というか、壮絶な光景ですよ。もう恋愛ちゅーより生存戦略みたいな」

「それだけ、みんな必死だからさ、私も焦ったよ。中学からの仲だからって油断してたら盗られるって。けど、関係が長い分、幼馴染み的な感じになるといえるか、なかなか男女って雰囲気になれなかった。でも、他の女子からのアプローチも無視してくれて、彼女をつくらないでいてくれた。医学部男子の一部は本気で勉強だけが好きって人もいるし、国試に合格するまでは男女交際を控えようって人もいるから、そういう気持ちでいてくれるのかな、って勝手に思った。おかげで二人とも勉強に集中して、晴れて国試にも合格、とうとう医者に

なれたの」

「よかったですやん……けど、バッドエンドは話なんや?」

鮎美が話の先を予想すると松田川は淋しそうに頷いた。

「医師として働き始めて、彼は美容外科に興味をもっていったから、私も合わせて、そばにいるようにした。いい感じにまわりの看護師たちにも、私が彼女候補ってオーラを出して追い払ってたし、彼も他の女子に目をくれなかつたから、友達以上恋人未満な関係で、いつか男女の仲になれるって、淡く想ってた……けど、ある日、私は待つてるのに耐えられなくなつて、酔った勢いで彼のアパートに押しかけたの」

「……それで?」

「入れてよ、って言ったたら、慌てて室内を片付けてくれて、そういう見栄は持つてくれるんだ、つて喜んでたのに、15分後にドアを開けてくれたら、女物の靴が玄関の隅にあった。片付け忘れたんだね……」

「……別に彼女がいたん?」

「つて、思うよね。私も顔に出るくらい驚いてたと思うけど、彼は親戚の子が忘れていった靴だつて。靴は忘れないと思うけど、そのときは信じた。でも、部屋に入ったら化粧品香りもして、チークブラシが一つ、部屋の隅に転がってた。そして、ベランダにはさ……外から見えない低い位置に女物の下着が干してあった……私は、いつのまにか泣いてた。彼女ができたなら、言ってくればいいのに、つて。私は勝手に友達以上恋人未満の関係って想ってただけのくせに、泣いて喚いて、彼女面して裏切りを責めた」

「……」

「ずっと彼は黙って私の批難を聴いていたけど、私が泣き止んだ後に玄関から、女物の靴をもつてきて、私の目の前で履いて見せて言った。これ全部、私の物だから、つて。男と女で靴のサイズって決定的に違うよね。27センチの女物の靴なんて店頭在庫もない、ネット通販でないと手に入らない。言われてみれば下着もサイズが大きくて、彼の顔にも証拠が残つてた。私が急に來て慌てて洗顔したんだろうね、アイメイクが落ちきつてなくて、泣くと黒い筋が頬にできていくの

……」

「女装趣味か……トランスジェンダー？」

「トランスジェンダーだって告白してくれた。ずっと、ノリちゃんに隠してごめん、って。言われてみると、彼と出かけても女友達とやるようなことやってた。シヨッピングにも付き合ってくれたし、化粧品店にも。美容外科の勉強になるからって言う言い訳を私は信じていた。彼の一人称がボクやオレじゃなくて、私だったのも中学でも秀才だったから気取ってるだけかと……けど、振り返れば、全部わかる。修学旅行のお風呂も必ず風邪を引いて入らなかつたし、言葉遣いも仕草も、それまでは上品なだけだと想ってたけど、言われたら、わかつた」

「……それで別れはつたんですか？」

「……。中学から15年以上も好きだった人を、そう簡単に諦められなかつた。そういう私の態度が彼を追いつめるのに……、彼……彼女は私にバレたことがキツカケで周りに隠さなくなった。それまではレーザー脱毛なんかも、医師として体験するためだ、なんて言い訳でやってたのを女性化したいからって。ホルモンも摂取して、どんな女性化していく彼女を見ていて、私は怖くなった。そして、言っちゃいけないことを私は言った。手術するとしても、男性器だけは残してって。彼女の両親も、それを望んだし、私の両親も中学からの関係だから、いつか二人は結婚するものだって期待してくれていたから、彼女には5人からの圧力がかった。ひどいこと、するよね、私たち」

「……」

「男性が女性になるための性転換手術って、どうすると思う？」

「……胸を造ったり？」

「豊胸は、けっこう簡単なの。けど、難しいのは性器。少しグロテスクに聴こえると思うけど、棒と袋状の男性器を女性器のようにするためには、表皮を剥いで、それを裏返して穴状にする。そして、それを肛門と尿道の間を切り開いて造った骨盤内に埋め込んで穴状の女性器にする。どう？ 芹沢さんはお腹の皮膚を斬られただけで、これだけ

の思いをしたのに、こんな大手術が身体に、どれだけの負担になるかゾツとしない？」

「……はい……」

「さらに術後も何ヶ月もケアが必要、造った膣が萎縮しないように拡張する作業を毎日しないといけないし、できるだけ神経は残すようにするけれど、感覚が残るとは限らない。排尿障害が残ることもある。トイレで済ませられない苦痛、芹沢さんは、近いうちに解放されるけど、もし今の状態が一生続くって言われたら、どれだけ絶望する？」

「……」

「そして、人間関係も激変する。どれだけ女っぽくなくても男性器が残っていれば、私は彼と結婚したかもしれない。けれど、完全な彼女となった人と私は、きつと結婚しないし、できない。みんなが悩んだ、本人も、私も、親も。けれど、その答えが出ないまま、彼女は死んでしまった」

「……自殺？」

「ううん。肋骨の一部を切り取って女性らしいウエストを造るためにタイで手術を受けてる最中に、ごく問題ない薬剤が使われたはずなのに、ごくごく稀な副作用でショック状態になって死んでしまった。芹沢さんにも説明した10万人に一人もないような副作用、それが起こった」

「……」

「これが私がバッチを着けてる理由、つまり、ただの未練」

　　椀田川は処置が終わったのでゴム手袋を外した。

「芹沢さんは、あと少しで何不自由ない生活に戻れるよ。もう少し我慢してね」

「……はい……」

　　鮎美は深く頷いて目を閉じた。

翌1月20日の木曜日、お昼に鷹姫の手で親子丼を食べさせてもらうという幸せな時間を過ごし、椀田川の手で大便を掻き出してもらおうという時間を我慢し、鮎美は美恋と陽湖、それに屋城の訪問を受けて

いた。少し話した後、陽湖も鷹姫と同じ自動車教習所に通っている
で退席した。

「カネちゃんも免許とるし、議員のうちだけが免許無しかあ」

鮎美がスケジュールのすべてがキャンセルになっているので秘書
業務をする鷹姫たちにとっては教習所へ通う格好のチャンスとなっ
ていた。美恋は娘の機嫌を取りながら言う。

「そろそろブラザー愛也にお話してもらってもいい？」

「あ、うん、ええよ。お願いします」

「では、今日はマタイの15章から。シスター美恋、読み上げていただ
けますか」

「はい。その時、エルサレムからパリサイ人と書士たちがイエスのと
ころに来て、こう言った。あなたの弟子が昔の人々からの伝統を踏み
越えているのはどうしてですか。たとえば、食事をしようとするとき
に、彼らは手を洗いません。イエスは答えて言われた、あなた方も自
分たちの伝統のゆえに神のおきてを踏み越えているのはどうしてで
すか。たとえば、神は、あなたの父と母を敬いなさい、そして、父や
母をのしる者は死に至らせなさい、と言われました。ところがあな
た方は、自分の父や母に向かつて、わたしの持つものであなたがわた
しから益をお受けになるものがあるかもしれませんが、それはみな神
に献納された供え物なのです、と言うのが誰であつても、その者は自
分の父を少しも敬ってはならない、と言います。こうしてあなた方
は、自分たちの伝統のゆえに神の言葉を無にしています。偽善者よ、
イザヤはあなた方について適切に預言して言いました、この民は唇で
わたしを敬うが、その心はわたしから遠く離れている。彼らがわたし
を崇拜しつづけるのは無駄なことである。人間の命令を教理として
教えるからである。そうして、群衆を近くに呼んでこう言われた。聴
いて、その意味を悟りなさい。口の中に入るものが人を汚すのではあ
りません。口から出るものが人を汚すのです」

「ありがとうございます。ここまでを聴いて、どう感じますか？」

「うーん……わかるような、わからんような……父母を敬えっという
道徳は、洋の東西を問わんのかなとか……」

「この部分を理解するには、当時の文化を知る必要がありますし、当時の人であるペテロもイエスに求めています。シスター美恋、その部分を読んでください」

「はい。ペテロはそれにこたえて言った、その例えをわたしたちに分かりやすくしてください。するとイエスは言われた、あなた方もまだ理解していないのですか。口の中に入るものはみな腸に進んで行き、下水に排出されることに気づいていないのですか。しかし、口から出るものは心から出て来るのであり、それが人を汚します。たとえば、心から、邪悪な推論、殺人、姦淫、淫行、盗み、偽証、冒とくが出て来ます。これらは人を汚すものです。しかし、洗っていない手で食事を取ることは人を汚しません」

「ありがとうございます。どうですか？」

「……………たしかに、そう思います。人の心の悪いもんは、口から出て来る……………うちは、母さんにも、ひどいこと言うて……………ごめんな、母さん」

「もういいのよ。早く良くなつてね」

「少し補足します。エルサレムから来た人たちがイエスに言ったこと、食事の前に手を洗うということは伝統と表現されていますが、法律のようなものです。もともとは旧約聖書に基づいて、この時代は様々な法律が作られているのですが、神の示した決まりごとについて、人間はより細々とした決まりを付け足していききました。たとえば、安息日に仕事をしてはならない、と示されているのですが、何をもつて仕事、労働と見なすのかには解釈の余地が生じてしまいます。歩くこと、これも労働なのか、と。そこで安息日には「一キロ程度しか歩いてはいけない」という決まりが付け足されるのです」

「一キロで……………」

「食事の前に手を洗うというのも、この一つでした。当初は高い身分にある人だけでしたが範囲が拡大されたようです。そして、イエスの弟子のうちには、この決まりに従っていない者もいたようです。それを批難に来た人たちに対して、イエスは問いに問いを返しています。これは、はぐらかしたわけではなく後半で答えています、まずは前

半を補足説明します。父母を敬いなさい、という普遍性の高い決まりがあるのに、続いて。ところがあなた方は、自分の父や母に向かつて、わたしの持つものであなたがわたしから益をお受けになるものがあるかもしれないが、それはみな神に献納された供え物なのです、と言うのが誰であつても、その者は自分の父を少しも敬つてはならない、と言います。とありますが、これは説明がないと、まったく理解できません。当時、年老いた父母は子が養うものと決まっています。ところが、子が財産は、みな神に献納された供え物なのです、と主張することによつて、この義務を逃れることができたのです。しかも、子の財産は必ず献納される必要はなく、ただ宣言するだけで扶養義務を逃れられたので、この当時でも評判の悪い決まりでした」

「社会保障費逃れ、実質はただの脱税やん。タックスヘブンに財産を移すのと、いつしよの」

「そうですね。ゆえにイエスは、あなた方は、自分たちの伝統のゆえに神の言葉を無にしています。とお叱りになるのです」

「……人間のやることつて2000年前と、ぜんぜん変わつてないなあ……法律も口から出る理屈も……連帯保証人制度も……法人の解散も……財産を隠して第三者名義にするのも……手前勝手に解釈した法テクニツクの理屈で、正義なんて欠片もあらへん」

「……………」

「汚い世の中や……それを考える、うちかつて18歳にして何百万も貯めて……なんもかんも経費で落として……人の汚さつていうのは、底なしやわ……下水に流れるもんの方が、なんぼかマシやわ……。神な……たしかに、神は、人にとって必要かもしれん……良心のないところには、どんだけ法整備したつて縛りきれん……9条解釈もひどいけど……努力義務イコールやらんでええ、と解釈されるし……行政処分には法的根拠が要るけど、行政指導には要らんちゅーのも、ご都合主義や……かといつて、行政に従わんものうちには、悪質なものもおるし……あまりに、ごちゃごちゃした人間社会のこと、なんもかも、神に頼りたい気持ちはわからんでもない。でもな、屋城はん」

「ほっ」

「あんた方、マジにキリスト教を信じてはる人らは、世界は6000年前に創造された。マリアは処女でイエスを産んだ。イエスは槍に刺されても復活した。いずれ神を信じていた者は樂園に復活する、そう信じてはるんよね？」

「はい、そうです」

「人生の規範として、聖書に学ぶことは多いと思うわ。けど、非科学的な部分について、うちは、どうにも信じられんよ。百歩譲ってマリアが処女で子を産んだ可能性は科学的にもあるかもしれん。生物には例外的な現象があるもんやもん。通例が異性愛者なら同性愛者も存在し、病気なのか突然変異なのか性同一性障碍というものもあるように、例外的にマリアという女性が一人で子を産む可能性もある。これを単為生殖というらしいわ。アメーバが分裂して増えるのと同じやね。どういう働きか、マリアの卵巢内で減数分裂が起こらず、そのままマリアのコピーを産む。こういうことは科学的な可能性として完全否定はできんよ」

「そうですか」

「よく、そんなこと知ってるわね」

「つい松田川が口を挟んだ。」

「まあ、うちも、こういう方面は自分の指向上、調べるから」

「……………」

「宗教者にも医師同様に強い守秘義務がありましたよね。そこ、よろしゅう頼みます」

「はい」

すでに美恋からの相談で鮎美の性的指向について知っていた屋城は明確に頷いた。

「ほんで、もしもマリアが単為生殖するとしても、産めるのは女子のみ。男子を産むことはありえへん、科学的に。槍で刺されても復活したちゅーんは仮死状態やったとか、ロンギヌスがすでにイエスの味方やって刺し方に加減があったとか、何かトリックや偶然があれば、可能かもしれん。うちでさえ、刺されて入院したままなんは自民党が死を隠している陰謀で、すでに芹沢鮎美は死んでいるという死亡説まで

ネット上には、あるくらいやもん。現代でさえ虚偽情報が拡がるんやから、当ても処刑されても生きてた可能性はあるわな。現に復活した後、そう長生きしたわけではなく天に帰ってはるし。けど、これらは言い伝えや口伝のうちに、ある程度の改変があつたとしても不思議ではない事象として説明できんこともない。けどな、6000年前に世界が造られたちゅーんは、なんぼなんでも無茶や。進化論も否定してヒトは神に造られた、女は肋から、と言われても。そもそも、うちら日本人にも縄文時代つてもんがある。皇紀2600年は誇張やとしても、三内丸山遺跡や各地の貝塚は6000年以上前に日本人が存在したことを示してるし、アフリカでの人類誕生は5万年前かもしれない。ヒトだけでなく類人猿、原人、これらの存在も化石人骨から明らかや。さらには世界は6000年前どころか、2億年前には恐竜もいたし、生命誕生は30億年前、そして地球や宇宙の誕生は、もつと前やん。こういう自分が習ってきたことを考えると、どうにもキリスト教のいうことは信じられんよ」

「……………」

「受験生だねえ。そろそろセンター試験も終わって入試本番かあ……懐かしいなあ」

 松田川が本当に懐かしそうに遠い目をして言う。

「私の死んじやった恋人もさ。楽園とやらで復活するのかな。医大入試に合格した日には抱き合って喜んだんだよねえ。国試に合格したときは、もう落ち着いてて二人でガッツポーズしただけだったけど、本当は私、抱きつきたかったよ」

「……。ホンマに楽園というのが、一番信じられんですわ。うちは人は死ねば終わり。猿の命とも、虫一匹の命とも変わらず、生命活動が終われば、そこで永遠の停止やと思います」

 松田川と鮎美の否定的な言葉に屋城は動じずに答える。

「イエスの復活と、信徒の楽園への復活、それが信仰の根幹です」

「……………」

「知ることと、信じることは違います。観察することと、信仰すること
も」

「……………」

「宇宙がビックバンで誕生し、ガスや塵の集まりから恒星と惑星が形成されたという見解からみても、私たちの命は奇跡的なまでに巧緻です。熱力学の法則は、世界は秩序から無秩序へ進むと想定しています。では、これほどに地球上で生命が溢れ、鳥が飛ぶことを覚え、人が言葉をあやつる、ここまでの秩序の形成と、その世界設計に何らの導きがなかったと考えることの方が非論理的ではありませんか。生命の誕生と進化を偶然の積み重ねにすぎないとするには、あまりに奇跡的な確率です」

「……………うちも思わず信じたくなるような論法やけど、飛ぶことを忘れた鳥もおれば、発達障害で書字困難な児童もいはる。あまりに奇跡的な確率やとしても、この銀河には1000億個の恒星があり、天の川銀河が所属する超おとめ座銀河団には100の銀河と銀河団があり、この宇宙に存在する惑星の数を考えれば、二つ三つ、知的生命体の存在する惑星ができて、それは起こりうる奇跡です。何より人の世に苦しみはたえん。こんな世界に誰かがしたのなら、うちは、その存在を讃える気持ちもあれば、恨む気持ちもあります」

「人の苦悩はすべて原罪に起因し、世の乱はすべてサタンによるものです。神の御心は常に人を愛しています」

「……………おおきに。今日はもう一人で考え事をしたので。また。……………母をよろしく願います」

「今日はお時間をくださり、ありがとうございます」

「いえ、こちらこそ、マタイ15章、勉強になりました」

鮎美は礼儀正しく屋城と別れ、本当に一人で考え事をした。

1月21日 セクハラ

翌1月21日の金曜日、三人の友人は教習所の学科と実技に忙しいようで、母親の美恋と半日を過ごしていた鮎美は3時のオヤツにバームクーヘンと苺を食べさせてもらった後、心配そうな顔をしていた。

「……母さん、ホンマに大丈夫なん？」

「ええ、平気よ。何でもないわ。……うつ……」

ときどき、母親が嘔吐しそうな表情を見せるのが心配で5回目にして、松田川に言った。

「松田川先生、ちよつと診てやってくれはりませんか？」

「はいはい。天使のように無料で診てあげよう」

気さくに言った松田川が近づくと、美恋は再び嘔吐しそうになる。

「うつ……」

「熱はありそうですか？」

「いえ」

いくつかの間診の後、松田川が美恋の下腹部を見ながら言う。

「最近、ご主人または、ご主人以外の男性と性交渉したことは？」

「……一度……久しぶりに主人と……」

「私や娘さんの体臭を苦痛に感じますか？」

「……少し……」

「妊娠の可能性ががありますね。ちよつと内線電話で連絡しておきますから、婦人科へ行ってください」

松田川が院内の婦人科に連絡を取り、美恋は素直に受診しに行つた。

「母さんが妊娠……うちに妹か、弟が……」

「つわりは普通だいたい妊娠6週くらいから顕著になるけど、私たち何日もお風呂に入っていないし、敏感になった嗅覚にはきついかもね。

芹沢さん、兄弟姉妹は？」

「うちは一人娘です」

「そつかあ、ずいぶん歳の離れた兄弟になるかもね」

「……うちと陽湖ちゃん山に登った……あの日の……一回で……一回で妊娠するもんですか？」

「百回やってもしないときはしないし、一回でもするときはずるよ。まあ、色々考え込まないで、基本的には、めでたいことだからさ。テレビでも見て、気を紛らわせておいて」

松田川はテレビをつけた。

「地球一周のアースマラソンを間寛平さんが成功されました」

「……地球一周か、うちは一歩も歩けへん……」

もうベッドの上で過ごすこと11日目、特別に柔らかいマットレスに寝ているので背中や腰は痛くなりくいけれど、寝返りもできないので身体が疼く。足を地につけたことは久しくない。

「東京地検が尖閣諸島中国漁船衝突事件で海上保安庁が保有する映像情報を流出させたとして取り調べを受けていた百色正春（ひやくしきまさはる）元海上保安官を起訴猶予しました」

「起訴猶予か……百色さん、仕事も無くなって……やのに、漁船の中国人船長は解放って、おかしいやろ……この事件で民主党は、めっちゃ支持率、落としたなあ」

「もし、芹沢さんが総理大臣だったら、どうしてた？」

「……う〜ん……中国側は無関係の日本人会社員を拘束したり、レアアースの輸出を止めたりと、武力行使以外の打てる手は打ちまくってきたからなあ……。鳩山総理は折られるだけ、折れたというか、親中国というか……対して中国は容赦なく、国交断絶くらいの勢いで来たから無難に済ませようとしたら折れるしか……」

鮎美はしばらく考え、答えを決めた。

「むしろ、早期に映像を世界中に配信して、海上保安庁の逮捕に不当性がないことを知らしめ、刑事処分については国内法に基づいて淡々と、総理大臣は関与することなく、あくまで一外国人の不法行為として地検の処分に任せれば良かったんちゃうかな。うちやったら、そうするわ」

「……それだと中国との関係が悪化しない？ 経済への影響もあるか

も」

「セクハラといっしよで、こつちが黙って受け入れてたら、ドンドンつけ込んでくると思うんよ。こつちも強い態度に出んと、曲がったことは曲がってると言い返さな、次はもつと不当な要求される。レアアースが無うても、食料が無くなるわけやない、石油もある。何より司法に行政が介入したら三権分立の大原則がグダグダや。ロシア皇太子を斬りつけた暴漢を大逆罪で死刑にせいと圧力がかかってても法秩序を守った大審院の児玉惟謙を思い出したらええねん。経済への影響も、セクハラで女が訴えるときと同じで、痛みは覚悟せなしゃない。後の歴史に、どう影響するか。もし、児玉大審院長が折れおったら、のちのち日露戦争で兵士の士気に、どう影響したか、下手したら負けたかもしれん。そもそも開戦の覚悟ができんで、ずっと不利な状況に置かれてたかもしれん。それを思い返したら、うちが総理大臣やったら、処分は検察に任せる。外交的には映像の公開で正当性の主張、これであらうと思うわ」

「……鉄の女って感じね……」

「もつとも、これは後知恵に過ぎんよ……そのとき現場で総理大臣やった鳩山さんは、刻一刻と入ってくる情報の中で、ベストそうな選択をしたんやろ……後になって外野やったもんが言うても、傍目八目やわ」

「たしかに、後から言ってもしよーがないってことはあるよね。中国の指導者の方が一枚上手だったわけかな」

「……………けど、傍目八目ついでに、うちが中国の指導者やったら、むしろ民主党政権とは仲良くするわ。それで油断させて9条の夢を見せて、米軍を日本国民が追い出すように仕向けてから、ゆっくり料理したるわ」

「怖っ……」

「そうせんのは、そうするだけの余裕が無いからかな……戦略的には短慮やな。戦略といえば、北朝鮮よ。いつも食料が無い、食料が無い、言うてるけど、緯度的には北海道より南なんやから、農業に気合い入れたら、すぐ芋でも獲れるやろに。なんで、いつまで経っても食料不

足なんやろ？ 食べることは基本やん。むしろ、食料不足こそが人民を支配する秘訣なんかな？ どう思う、松田川先生」

「えっと……私、医者なので、そういうこと、わかりません」

松田川はチャンネルを変えてみたけれど、ニュースの時間帯のようで、他のチャンネルもニュースを流していた。

「イギリスのBBCが二重被爆者の山口彊さんをバラエティー番組で不適切に紹介した問題で謝罪しました」

「英国紳士もゲスいなあ……」

「あ、これはさ、私のイギリスの友達と、さつきもチャットしてたんだけど、別に山口さんをバカにしたわけじゃないらしいよ」

「ほな、どういう話やったん？」

「この山口さんは広島で被爆した翌日に救援列車で長崎へ移動したんだって。で、それを聴いた出演者が、おいおい原爆の翌日に列車が動いてたのか、イギリスじゃ落ち葉が線路に積もったって言って運休になるのによ、って日本の鉄道を誉めたというか、自国の鉄道がよくストップすることへの自虐ネタだったの。ただ、山口さんが世界で一番不幸な男って風な紹介になったのは確かだけど、それも生き残ったわけだから、完全な不幸でもないよね。ただ、放射線は浴びたよね、って言い方になってたらしいよ」

「うくん……うちも大阪人やったから、ネタに生きるのわかるけど、自虐ネタに他虐が混ざるとなあ……難しいんよなあ、言われた方がキレたら、それはネタとして失敗やし。放射線かあ……。うちでも刺されたこと、自分で自虐ネタにするならともかく他人に何か言われたら、ええ気分はせんやろね。まして、ずっと残る放射線の影響は体験したもんしか、わからんやろし。結局、被害者、その当事者になってみると、わからんのかな、本当の痛みつてもんは」

「そんな顔しないで、もっと明るく気分を前向きに。あ、そうだ。夕飯の前に少しだけ、歩いてみようか。あと、シャワーにも入ってもらおうね」

「……シャワー……やっとな……」

鮎美が待ち焦がれたという顔で髪を撫でた。なるべく衛生的に身

体は拭いてもらっているけれど、やっぱり入浴とは違う。とくに洗髪は待ち遠しかった。

「じゃあ、これから手足を自由にして、おしっこを採ってる管も抜くけど、その前に注意事項を言います。よく聴いて必ず守ってください」

「はい……そんな怖い顔をつくらなくても」

鮎美は松田川が今までにない厳しい顔になったので言ったけれど、ますます険しく言われる。

「芹沢さんは、もし11日間24時間ずっと頑張つて造り上げ、見守ってきたもの、それも今までにない最高傑作を、つい、うっかり誰かに壊されたら、どのくらい怒りますか？」

「……それは……まあ……かなり……怒るかな……何すんねん、みたいなの……」

「ですよ。今のところ傷の治り方は最高の状態です。手術も会心の出来だったし、経過も良好。それを、うっかり痒かったから掻いたとか、そんな理由で台無しにされたら、どのくらい私が怒ると思う？」

「……そんな怖い顔せんでも……」

「言っておくね。もし、うっかり掻いたら、ケツの穴に手を突っ込んで奥歯ガタガタいわせるから」

「ひっ……」

医療的な処置として指は突っ込まれている鮎美が息を呑む。松田川は怖い微笑で問う。

「わかった？」

「は、はい」

「よしよし。まずは傷の具合を診るね」

松田川は傷口の様子を見ると、ガーゼを貼り付けてから、鮎美の膀胱から直接に尿を導き出しているカテーテルを、ゆっくり優しく抜く。

「息を吐きながら、力を抜いて」

「ハアア……ううん……ハアア……」

液体ではない物が尿道を動く感触に鮎美は唇と小鼻を震わせつつ

耐えた。

「はい、抜けた」

「はああ…」

「次、手足を自由にします。注意事項、絶対に忘れないでください」

「はい…」

鮎美は万一にも自分の傷口を触らないよう自戒して手を握った。

松田川が手足と胸、首の拘束を外してくれた。

「まだ起きないですよ。11日も寝たきりだった身体が、思うように動くななんて思わないで」

「はい…」

「歩いてもらう前に服を着てもらいます。病院で販売してる一着1980円の病人向け浴衣がありますけど、別料金ですが購入してくださいますか？」

「はい、お願いします」

鮎美は藍色の唐草模様が描かれた浴衣と大人用の紙オムツを着せてもらった。

「……うく……なんでオムツなんですか？」

「ずっと管を入れてた尿道が、ちよつと漏らしちゃったら恥ずかしいでしょ？」

「……はい…」

「まずは座る姿勢に慣れてもらいます」

松田川は電動でベッドを起こすと、鮎美をベッドの端に座らせた。久しぶりに座ると、身体を重く感じるし、軽い立ちくらみのような感覚もある。

「ちよつと歩行補助器を取ってくるけど、傷口を搔いたら、どうなるか、わかってるよね？」

「はい……わかってます…」

「よろしい。勝手に立たないですよ。最悪、転げるから」

松田川が出て行き、5分ほどすると、鷹姫と戻ってきた。なぜか暗い表情をしていた鷹姫は浴衣姿の鮎美を見て笑顔になってくれる。

「起きて大丈夫になったのですね」

「うん、これから歩く練習やって」

「はい、これに掴まって」

松田川が肩の高さほどある歩行補助器を鮎美の前に転がしてくる。金属パイプ製で大きな馬蹄形をしていて、その馬蹄形の中央に身体を入れると、どの方向にもバランスを取ってくれ、下部にはキャスターがついていて、ゆっくり転がすことができる。鮎美の左右に松田川と鷹姫が立った。

「ここを両手で掴んで、ゆっくり立ってみて」

「はい……うっ……痛っ……」

鮎美はスリッパを履いて床に立つと、足の裏に痛みを感じた。予想していた松田川が問う。

「体重をかけると足の裏が痛い？」

「はい」

「臥床が長いとそうなるの」

「がしょう？」

「ああ、ごめん。寝てること、寝たきりだと、足の裏がね、体重を受けることを忘れて、久しぶりに立つと痛い。すぐ慣れるよ、一度、座つて、また立とう」

「はい」

鮎美は三回ほど座つたり立つたりする練習をして、足の裏の痛みから解放された。

「いよいよ歩こうか」

「はい」

「頑張ってください」

鷹姫も励ましてくれるので頑張る。歩行補助器に頼りつつ、鮎美は一步、進んだ。

「……あ……歩けそうです」

「足に障害はないからね。病棟を一周して終わりにしよ」

三人で特別病室を出ると、扉の左右に介式と男性SPが立っていた。ずっと話には聴いていたけれど、本当に自分を警護してくれてい

たのだと鮎美は実感する。介式が問うてくる。

「どうされたのですか？」

「芹沢さんが歩く練習をしています。病棟をぐるりと一周」

「わかりました。警護します」

そう言った介式と男性SPは鮎美の前後に立った。

「こんなに、お伴がおったら、恥ずかしいわ」

鮎美は前後左右を4人に囲まれ、やや困惑する。介式が生真面目な顔で振り返った。

「芹沢議員、これも業務です。我慢してください」

「……おおきに……」

礼を言った鮎美は歩き始める。はじめは歩行補助器に頼っていたけれど、10メートルも歩くと、すぐに歩行に慣れた。

「ぜんぜん普通に歩けるわ」

「傷はお腹だけだから」

「この補助器具、もう無くても平気ですよ」

「それはね、むしろ芹沢さんの手を落ち着けておくため」

「……なるほど……」

動いているからか、少し傷口がむず痒い、何も意識していなければ、うっかり搔いてしまうかもしれないという桧田川の懸念はわからなくもない。ゆつくりと歩く鮎美が病棟を周り、道路側の窓辺に近づいたとき、鮎美は五階くらいの高さにいることに気づき、同時にチカチカと眼下にフラッシュの光りを見た。それに気づいた鷹姫と介式が窓と鮎美の間に立った。鷹姫はマスコミを、介式は万一の狙撃を心配している。

「芹沢先生、外には報道陣がいます。ご注意ください」

「そうなんや……もしかして、ずっと？」

「はい」

「寒いのに、ご苦労さんやな。手でも振ってあげよ」

鮎美がマスコミに応える気になると、鷹姫に異議は無かったけれど、介式は言ってくる。

「安全が確認されていません。窓に近づくのは遠慮してください」

「……何の安全？」

「外は暗く、こちらは明るいため、狙撃されやすくなります」

「……………犯人は逮捕されなかった？ 鷹姫のおかげで」

「過度に不安に思う必要はありませんが、万一にも模倣犯ということもありえます。そも私たちが派遣されているのは、そのような理由です」

「そうなんや……………」

「松田川先生、そろそろ芹沢議員を病室に戻せませんか？ もしくは窓のない部屋でのリハビリをお願いします」

「そうですね。一回目だし、このへんで終わって、シャワーを浴びてもらいましょう」

病室に戻ると、つけっぱなしだったテレビが鮎美のことを報道している。

「一瞬ですが、芹沢議員の姿をとらえました！ ご自身の足で歩いている様子です！」

テレビ画面は真下に向けているので立っていると見えないけれど、道路から病棟を撮影した望遠映像だろうと想像がつく。鮎美がタメ息をついた。

「はああ……………心配してくれはるのは嬉しいけど、うちの生存情報より、重要なニュースは、いっぱいあるやろ」

「言っちゃなんだけど、話題性は一番だから。じゃあ、裸になってもらうし、お友達は外で待っていてくれる？」

「はい」

鷹姫が出て行き、鮎美は自分で浴衣を脱いだ。特別病室の出入口横にバスルームがあるのは出るときに見ていたので、早くシャワーを浴びたくてウズウズしている。

「コラコラ、今ちよつと傷に近いところを触ったでしょ」

「触ってませんよ。帯を解いただけですよん」

「うくん、心配だなあ……………あ、これで」

松田川は弾性包帯を手にする、鮎美の首に一巻きして結び、結んだ端を両方とも30センチほど残して切る。さらに包帯の端で鮎美

の両手首を臍より下に触れない高さで結んだ。

「よし、これで傷口には触れない」

「……………」

鮎美は首輪と手枷のような状態にされて松田川を不審の目で見る。

「松田川先生、実はビアンで、しかもサディストってこと、ないですよね？　うちを、こんなカツコにさせて内心で楽しんでたりしません？」

「本当にサディストだったら、このまま廊下を歩かせてあげようか？

きつと全国放送で流れるよ」

「うっ……………すみません。それは勘弁してください」

「足元に気をつけて歩いてね。転けたとき、手を出せないから超危険だし」

松田川はバスルームの戸を開け、鮎美が万一にも転倒しないように腰を支えつつ湯船へ導き、紙オムツを脱がせた。松田川の予想通り、自覚しないうちに尿を漏らしていたようで五百円玉ほどの大きさに黄色く濡れているけれど、それを患者本人が知ると過度に心配するので黙っておく。松田川は防水性の強固な医療テープを裸にした鮎美の下腹部へガーゼの上から貼り付ける。

「シャワーを出すから、手すりに掴まっついて」

「はい」

病院のバスルームらしく、あらゆる箇所に手すりがあり、両手が狭い範囲しか動かせない鮎美もバランスを取ることができた。松田川が適温でシャワーを出してくれる。

「私は準備するから、しばらく身体を温めていてね」

「おおきに、ありがとうございます。ああああ……………気持ちええ……………最高やわ……………」

鮎美は身体を流してくれるシャワーの感触にうっとりとした。松田川はそばでビニール製の防水作業着を白衣の上から身につけた。

「身体を洗ってあげるから、絶対に手すりから手を離さないでよ。泡

で滑って転んだら大変だから」

「はい」

素直に鮎美は身体を洗ってもらい、気持ちよさに目を細めた。

「次、頭は自分で洗って。腰を支えていてあげるから」

「はい」

臍より下には触れないけれど、頭は洗えた。頭皮の油を流すと、また生き返る心地だった。ようやく全身がさっぱりしてから、松田川が汗だくになって頑張ってくれていることに気づいた。

「松田川先生も、いっしょに入らんの？」

「それは私の裸が見たいとか？」

「ちやいますよ。汗だくですよん、先生も何日も入ってへんのちやいますの？」

「私はあとで入るよ。さ、名残惜しいでしょうけど、もう揚がって。傷口が汗でふやけるから」

「はーい」

鮎美は身体を拭いてもらい、ベッドに横になった。首と両手を縛っている濡れた包帯を鋏で切ってくれるし、傷口を覆っていたガーゼと防水テープも剥がしてくれる。ビニールの作業着を脱いだ松田川はハンカチで顔の汗を拭いてから、ゴム手袋を着けて、新しいカテゴリーキットを開封して鮎美に向けた。それが、どこに挿入されるものか、知っている鮎美は脚を閉じる。

「それ入れんと、あきませんか？ もう歩けるし、トイレに行けるし」

「トイレに行ける行けないじゃなくて膀胱が膨らんで皮膚が張るのが困るの」

「こまめにトイレ行きますし」

「寝てる間は？」

「……………」

「ほら、脚を開いて」

「…はい…」

諦めて受け入れた。

「また手足も拘束なん？」

「それは、あとで」

松田川は新しい包帯を1.5メートルほど鋏で切ると鮎美に差し出した。

「私は、これから近所の銭湯に行くから、芹沢さんは自主的に両手をベッドに縛っておいて。万が一のときは、この鋏で脱出して」

そばに鋏も置かれた。

「え？ どういうことなんですか？」

「医師の監視下にならないのに、手足を拘束するのは、まずいの。けど、本人が自主的に縛る分には問題ないから」

「法律の抜け穴みたいなの……。それに別に銭湯へ行かなくても、そのバスルームを使わはったらええですよん」

「このバスルームは芹沢さんのためのもので、私が使うのは規則違反」

「……いろいろな縛りがありますね……。世の中……」

鮎美は自分を縛りながらつぶやいた。たしかに入浴すると傷口がふやけたようで痒い。油断すると搔いてしまうという松田川の心配は理解できるので鮎美は手首を包帯で縛り、ベッドの頭の方にあるパイプに通して、反対の手首を縛る前に長さを調節して臍までしか触れないようにした。ハンパなところまでしか手をさげられないので、いつそ両手を後頭部で組んで枕にすると、松田川が鮎美の腋を見ながら言った。

「かなり伸びてるから剃ってあげようかと思ったけど、私も暑くて限界だったから。どうせ、入院中はヒマだし、レーザー脱毛してあげようか？ 半額で」

「半額……うん……」

鮎美が自分の腋を見て悩む。冬服になったのと鷹姫が剃らないので、なんとなく伸ばしているうちに、もう鷹姫と同じくらいに伸びきっていて、肌が白いところに黒い毛が生えているので、手を枕にしていると、かなり目立つ。

「半額って、正規料金は、いくらなん？」

「両ワキ永久保証なら39万円、一回なら2万円の半額」

「……………どうしよかな…」

「女性が一生涯にかけるカミソリとソープ、お湯の値段は約36万円だけど、三日に1回、10分かけるとして7万2000分、1200時間、かりに一日16時間の活動だとして実に75日間もワキのお手入れにかかっている計算だよ」

「……………75日も……………腋剃りだけで……………」

「男性は顎まわりだから通勤中に信号待ちで髭剃っている人とか時間を節約してるなあ、って思うけど、私たちは風呂場でないとできないから面倒だよ。その面倒さから一生解放されるよ?」

「女って面倒なもんやね……………」

鮎美は片手で自分の腋に触れながら考える。

「永久脱毛って毛根を殺してしまうんやんなあ……………そう思うと、なんか可哀想な気も……………睫毛は大切にされて見せかけだけ増やしたり、眉毛は流行で剃ったり描いたり、そうかと思えば気に入らん毛は執拗に刈り取られて……………癌でもないのにレーザーで焼かれる……………うちはお腹の皮膚を傷跡が残らんように必死になっているのに、腋の毛根は焼き殺す……………人間って勝手やわ……………」

「あのオ、ワキくらいで感傷にひたるほど、入院生活でブルーにならないで。迷うなら、いつでもいいよ」

「おおきに。しばらく、このままで、女やからって腋は剃るべきって考え方も、どうなんかなって思うし」

「……………もしかして、芹沢さん、男に生まれたかったとか?」

「ちやいますよ。うちの性自認は女です。好きになるのも女やけど」

「そう。私もサツパリしたいから、もう行くね。くれぐれも、傷口は掻かないですよ。掻いたら、おしっここの穴に指を突っ込んで奥歯が抜けるほど悲鳴あげさせるからね」

「怖すぎますって」

「じゃ」

椀田川が病室を出て行くと、鷹姫がモニター室に入ったようで、こちらに映像と音声を送信してくる。もう鷹姫は操作を覚えているよ

うだった。

「松田川先生が話し相手になつていようと言われましたので」

「おおきに」

鮎美は裸だったけれど、鷹姫へ送信されている映像は肩から上の顔まわりだけだとわかつているので安心して手を枕にしたまま応える。

「やっとシャワーも浴びたよ。あああ、サツパリした」

「お元氣になられて、何よりです。……」

「鷹姫は今日一日、どうやった？」

「…。はい、普通です」

「普通って何をしてたん？」

「……。自動車の運転を習いました」

鷹姫の表情と応答が冴えないので、すぐに鮎美は気づいた。

「鷹姫、何かあったよね？ 何を隠してるの？ 言うてよ」

「……………」

しばらく考えた鷹姫が口を開いた。

「……………警察署の方から、私を犯人逮捕に貢献したとして表彰したいと……………言われましたが、断りました」

「なんでよ？」

「鮎美に怪我を負わせておいて、私が表彰されるなど、恥ずかしくてできません」

「……………あなたの羞恥心は感度が高すぎるわ。そんなん、気にせんでええのに」

「……………」

目を伏せた鷹姫の様子から鮎美は表彰を辞退した件だけではないと感じて重ねて問う。

「それだけやないね？ 他に何かあるの？」

「……………はい……………療養中のところ、また御心労をかけることになり……………申し訳ありません。……………今暫くお待ちください。石永さんなども来られてから説明されます」

「そう……………ほな、待つわ」

「……………」

「……………」

モニター越しに沈黙してしまうと、直接に対話しているときより沈黙を重く感じる。もう室内の無菌状態維持は必要ないので鷹姫を、こちらに呼びたかつたけれど、ただの裸なら見られても、そう恥ずかしい仲ではないものの、カテーターを挿入している姿を見られるのは、さすがに恥ずかしかった。

「……………」

「……………」

「…………痒……やっぱ、ふやけると痒いわ…」

黙っていると痒さを感じて鮎美は身じろぎした。鷹姫の方は誰かがモニター室をノックしたようで扉の方へ行き、食事トレーを受け取っていた。

「ご夕食だそうです」

「そっか……そんな時間なんや」

意識すると空腹も感じる。

「夕飯なに？」

「鶏肉の照り焼き、サラダ、ご飯、お味噌汁、ブドウです」

「そっか……………」

「冷めると味が落ちます。そちらへ行きましょうか？」

「…………うん。…………来て。…………ちよつと恥ずかしいカッコやけど、笑わんといてな」

「そんな非礼なことはいけません」

鷹姫がモニター室を出て、こちらへ来る。せめて鮎美は両手で胸を隠して待った。入室してきた鷹姫は裸の鮎美を見ても何とも想わず、ただ心配そうに傷口だけを見てきたけれど、それも順調に治りつつあるので安心した顔で食事トレーをテーブルに置く。鮎美は部屋の隅に置かれてる金属格子とシーツを指して頼む。

「その金属のカゴみたいなヤツと、シーツで身体を隠して」

「はい」

鷹姫が適切に金属格子とシーツで身体を隠してくれた。足から胸

まで隠れたので気持ちが落ち着く。鷹姫は電動ベッドのスイッチに触れた。

「ベッドを起こしますよ」

「うん」

ベッドを起こされると、包帯の長さのために、腕をあげざるをえず食事をするのに行儀が悪いのは承知で鮎美は再び両手を枕にした。鮎美の腋毛を見ても鷹姫は何の反応もしないけれど、手首の包帯は不思議に思う。

「いつもと拘束が違うようですが？」

「松田川先生がお風呂に行ってる間は自力脱出できる包帯にかえてくれはってん。うちは精神病やなくて、単に傷口をうっかり搔くことを心配されてるだけやから。実際、ちよつと手足が自由になると、ホンマに搔いてまいそうになるから縛られてるのが正解やと実感するわ」

「そうですか」

「……」

鮎美は少し恥ずかしいけれど、両手を枕にしたまま訊いてみる。

「うちの腋、かなり毛が伸びたやん？」

「そうですね」

「どう思う？」

「どうと言われても……前に女子は剃る方が良いと主張されていませんでしたか？」

「うん。でも、なんとなく鷹姫の真似して伸ばしてみたんよ」

「真似ですか……何の意味が？」

「うくん……そう言われると……」

「どれから食べますか？」

どうでもいい話題としか鷹姫は見なさなかったようで冷める前に料理を食べさせてくれる。鮎美も空腹が優先だった。

「お肉ー」

「どうぞ」

鷹姫が箸で口元へ運び、食べさせてくれる。

「ん〜♪ 美味しいわ」

最高に幸せな心地だったけれど、鷹姫のお腹が鳴った。

「鷹姫、夕飯は？」

「…もう食べました…」

また鷹姫のお腹が鳴る。鷹姫の顔が恥じらいで真っ赤になった。鮎美はクスクスと笑って言う。

「嘘は信じられるようにつこな」

「はい……まだです。いろいろあって…」

「そういえば、この時間に阪本市にいたら、もう島には帰れんのちゃう？」

「はい……いろいろありまして……それは、あとで説明があります…。まずは、お食事を、どうぞ」

「うん……。でも、鷹姫と半分ずつにしよ」

「それはダメです。きちんと栄養を摂ってください」

「うちだけ食べるのイヤよ」

鮎美は二口目を拒否した。

「……困らせないでください」

「ほな、鷹姫も食べいいよ。いっしょに」

「半分では栄養が足りませんよ」

「これ食べ終わったら何か買ってきてよ。一階にコンビニあるらしいやん」

「……」

「ほら、半分ずつ。早く食べよ。冷めるやん」

「……わかりました。いただきます」

「あ、うちも、いただきますを忘れた。いただきますーす」

一組の箸で二人で半分ずつ病院食を食べて、さらに鷹姫が院内コンビニで買い足してくれ、満ち足りた気分で、お茶を飲ませてもらう。

「あーっ美味しかった。コンビニの味付けも久しぶりやと、懐かしいわ」

「……」

鷹姫は黙って後片付けをする。松田川が銭湯から気持ちよさそうに戻ってきた。

「はあああ……生き返ったわ!」

「松田川先生って、ええ先生やね。うちに付き合って、お風呂を我慢してくれるなんて」

「フフフ、なんとしても、私も傷跡を残さず治したいからね。医師と患者の信頼関係は大切なもの」

松田川が微笑んでいると、病室の扉がノックされ、鷹姫が対応して静江と陽湖、鐘留を入室させた。鐘留以外は顔色が暗い。松田川は何かあったと察して、病室の奥に移動した。静江が沈んだ声で鮎美へ問う。

「お兄ちゃんも来てますけど、モニター室から対話してもらっていいですか?」

「そんな大事があんの?」

「なるべく大事にならないうちに、解決したいんです」

「そっか、ほな、どうぞ」

鮎美は胸がシートで隠れているか手で確認してから、また両手を枕にした。

「アユミン、腋毛がめっちゃ伸びてる」

「あかんの?」

「え? ……まあ、本人がいいなら、いいんじゃない。アタシなら死んでもヤダけど」

「そんな簡単に死ぬ言わんとさ」

くだらない会話をしているうちに、石永がモニターに映った。石永は胸をシートで隠しただけの鮎美の姿から目をそらして応答する。

「さっそく本題に入っていないかな?」

「はい、どうぞ」

「実は三人に通ってもらっていた自動車学校の件なんだが、ちょっとトラブルが起きた」

「鷹姫らの?」

「……………」

鷹姫は申し訳なさそうに、陽湖は泣きそうな顔で、鐘留は肩をすくめて、そろそろ暑くなってきたので、いつもの完全防寒を脱ぎ、制服姿になった。

「ここ暑いね」

「うちに合わせてるから。ほんで、トラブルって？」

「その自動車学校の経営者は我々の支持者なので、無理を言って、この時期に三人が早く免許を取れるよう計らってもらっていたんだ」

「…………？ 運転免許って、そんな裏工作がいるん？ 誰でも取れるもんちやいますの？」

「芹沢先生が知らないのは無理もないけれど、一月から三月にかけての時期は、どこの自動車学校も学科はともかく実技はキャンセル待ちが出るほど混雑するんだ。だいたい的高校が三年生の三学期まで免許の取得を禁止しているから」

「そうなんや…………」

「だが、芹沢先生が入院している間に、一気に三人が取得できれば、色々と助かるだろうと特別に頼んで実技のスケジュールを組んでもらった」

「…………それってバレたら、やばい？」

「いや。自動車学校は私立だから、たいして問題はない。問題は教官と三人の間で起こった。静江、続きを説明してくれ」

「はい。三人を主に担当した教官は経営者の息子でした。息子といっても30代で、実は以前に自動車学校のお金を使い込み、それがバレて父親からクビにされていたのですが、教官の資格はあり、今回、私たちが無理を言ったことで急遽、教官として復活していたのです」

「…………嫌な予感がするわ」

「ご察しの通り、彼が問題でトラブルが生じました。端的にいえばセクハラです」

「セクハラかア…………どこにでも、あるなア、ホンマに」

鮎美が枕にしていた片手を両目にあてた。そして、泣きそうな顔を見ている陽湖を見る。

「陽湖ちゃん、何されたん？」

「……はい……初めは手を触つてきたり……それも、ハンドルの握り方を教えるとか、そういう理由をつけて。肩に力が入っていると行って……肩を触られたり……シートベルトのつけ方を教えるといつて、胸や腰に……」

話している陽湖は嫌悪感が再燃したようで、零れてきた涙を拭い、静江が気遣って背中を撫でる。

「そのうちに……だんだんエスカレーターしてきて……運転中は制服の上着を脱ぎなさいと言われてたり……エンジンの回転を感じるためにアクセルを踏む足は素足でと言われてたりして……」

「ただの足フェチじゃん」

「カネちゃんもセクハラされたん？」

「うん、アタシの神聖な手に触れてきた」

「ほんで、どうしたん？」

鮎美の問いに鐘留は運転席から助手席にいる教官を睨んだときと同じ、真冬の曇り空のような冷たい瞳で言う。

「触んな、カス」

「……さすが」

鮎美が元モデルとしての社会経験がある鐘留の対応に感心し、静江も頷く。

「今回ばかりは緑野さんの言い方が正解だったかもしれませんが。以後、緑野さんへのセクハラは無くなりました。ですが、嫌がらせは受けようです」

「嫌がらせって何されたん？」

「アタシさ、5回も実技テストで落とされたよ。マジム力つく」

「テストって、どんななん？」

「普通に運転するだけだよ。けど、ちゃんとサイドミラーを見たかアとか、左右確認とか、こまごまと、うっさいの。っていうか、教官の主観で、何とでもなるよ、あれ。しかも、落とされると追加での実技教習が1回5000円税別でさ。アタシはともかく月ちゃんは、きついよね？ 時給5時間分だし」

「私は1回だけ、落とされました。それは車庫入力で壁に見せかけたパイプに触れたからで、あれは不当な判定ではありませんでしたけれど、シスター鐘留は何度も不当に落とされていました。私より上手いのに、何度も……。教官は私へも教習中に車内で、緑野さんは生意気だから、ああいうタイプが免許を取るとスピードを出して一番危ない、というようなことを言われて……。それを否定できない面もあり……」

「うわ、月ちゃん、どっちの味方?」

「私は判定で落とされると困ることより……。支持者の息子さんだつて聞いていたから……。ことを荒立てない方がいいのかもって思ったり……。身体に触ってくるのは、やっぱり指導の一部なのかなって……。けど、私が運転席に座るときにシートの上に手を置いたりして、お尻まで触られたし……。やめてください、って何度か言いましたけど、笑つて誤魔化されて……。だんだん自動車学校に行くのが嫌になって……。でも、入院しているシスター鮎美にも心配をかけたくないし……。ブラザー愛也に相談しようかと思つても、身体を触られたなんてこと彼に言いたくなかつた……。でも、どうしても行けなくなつて今日は朝から六角市内のショッピングセンターに、ずっといて……。私、どうしていいか、わからなくなつて……。ぐすつ……。ううつ……」

泣き出しながら話している陽湖は無意識に肘の内側を掻き始めた。首の皮膚もアトピーが再発しつつあるようで荒れている。静江が掻くのをやめさせて問う。

「月谷さん、芹沢先生にも見てもらつていい?」

「……はい……。ぐすつ……」

陽湖が背中を向けると、静江は陽湖の後頭部の髪をより分けて鮎美へ頭皮を見せる。そこには五円玉ほどの禿ができていた。

「かわいそうに、月谷さん、今朝起きたら髪が抜けていて、こうなつていたらしいのです」

「陽湖ちゃん……。せつかくアトピー治つたのに……。円形脱毛症まで……。それ絶対にストレスのせいやん! 許せんわ!! 警察に行こ!!」

鮎美が怒鳴ると静江が説明を続ける。

「芹沢先生が、そうおっしゃることは理解できますし、すでに警察沙汰になっていきます。今日の午前中に宮本さんが通報しました。その経緯を宮本さん、自分で説明できる？」

「はい。今日は2限続けて実技教習を受ける予定でした。それで六角市内の田園地帯を走行中、教官が農道へ入るよう指示され、そこで停車しエンジンを切るように言われたので、その通りになっております」

「……めっちゃ怪しいやん……なんで疑問に思わんの？」

鮎美が心配そうに鷹姫を見るけれど、淡々と説明を続ける。

「はい、私も疑問に思い、なぜ、ここで停車するのですか、と問うたところ、今日は自動車が事故でダムや湖に水没したときの脱出訓練をする、と説明されました。水没時は水圧でドアが開かないのでガラス窓を割るしかないが、素手では難しいし、専用のハンマーを積んであるケースは少ないが、努力のしよってではシートベルトの金具で割ることができると言われ、私の手を握ってシートベルトを外させ、いっしょに窓ガラスを割る演習をしました」

「あいつ手フェチ、足フェチだよね」

「次に窓ガラスを割る前には脱出時に衣服が引つかかかって溺れないよう裸になっておく方が良いと説明され、私に服を脱ぐよう指示されました」

「……まさか…脱いだん？」

「はい」

「「「「……………」」」」」

「私が制服を脱ぐと、教官は下着も脱ぐように指示されました。そこで私は疑問に思い、いくら人通りのない農道といっても、このようなところで裸になっては公然わいせつ罪に問われますよ、と忠告しました。ですが教官は、そのためにエンジンと暖房を止めているから大丈夫、ほら窓が曇っているだろう、これで外からは見えないから安心して、と言いました。私が迷っていると教官は、生きるか死ぬかかるときに恥ずかしがっていてはいけない、ボクも脱ぐから君も脱ぎなさい、

と言ひ、私のブラジャーを外してきました。そこで私は生死のかかった場面では、もつともなことだと思ひ、自分で脱げます、と言ひ裸になりました。二人とも裸になったところで教官はスマートフォンで私の姿を撮影しました。そして突然に怒つたような興奮した声で、この写真をバラ撒かたくなければ、言う通りにしろ！と怒鳴られたので、私は自分に何か落ち度があつたのかと、ここまです振り返つたのですが、思い当たらず」

「きやはは、落ち度だらけだよ」

「どうすればよいですか、と私が問うと教官は急に私へ覆い被さつてきました。そして私に身体を近づけて来るので、このとき私は性交を求められているのだと気づき、やめてください、と言いました。それでも教官はやめず、強引に身体を合わせようとするので、私には許嫁がいますので教官と性交はできません、と断言しましたが、なおも続けるので、これでは強姦ですよ、と警告しました。その警告さえ無視されたので、実力行使の要件を満たすと判断し、教官の頭髪を左手で握つて掴み、私の右腋の下へ頭部を入れ込み、右腕で首を絞めました。プロレスでいえばフロントチョーク、柔道でいう首挫という技です」

「ナイスファイト…」

プロレスが好きな静江と石永がつぶやいた。

「殺してしまわないように気をつけながら教官を絞めました。うまく技は決まり5秒ほどで、ぐつたりと動かなくなり彼の呼吸を確認してから、どうしたものかと3分ほど悩みましたが、やはり通報した方が良いという結論に至り、警察を呼びました。以上です」

「鷹姫……」

鮎美は頭痛でもするかのように額を両手で押さえた。

「きやははは、さんざん期待させといて秒殺でイかせるとか、宮ちゃん悪女だね。きつとアイツなんで自分が気絶したか、わかんないまま起きたら手錠されてたと思うよ」

鐘留が笑い、静江は補足する。

「当然、駆けつけた警察は彼を逮捕したのですが、実は彼の一家は私た

ち石永家のご近所で、斜め向かいにお住まいなのです。お兄ちゃんとは小学校中学校へ同じ時期に行っています」

「同級生なん？」

「いえ、二つ年上です。私も子供会などで、いっしょに遊んだこともあります」

「そんな変態と……」

「それほど悪い人ではなく、就職には失敗されましたが、父親のところ
で、それなりに働き、横領したのも他の従業員の半分しか給料をもらって
いなかったからで近所では同情的でしたし事件にはなっていない。未婚で、
性犯罪の前科はなく、父親からは何とか今回の件は穏便に終わらせてほしいと
本当に土下座して、お兄ちゃんのところへ頼み込みに来られ、普通、こう
いった件で警察は示談に干渉しないのですが、担当課の課長も同じ町内会
の人で、公選法に触れないよう奥さん名義で、お兄ちゃんの後援会に入
ってくれたりしている支持者で、いまだマスコミには知られていないの
だから、なんとか、穏便にと」

「まさか、それで、うやむやにしたんちゃうやろな？」

鮎美が剣呑な声を出すと、静江は背筋を伸ばして説明を続ける。

「いえ、こういった件で芹沢先生が友人を大切に想われ相談なく示談
させては判明したおり、お怒りを買うと考え、現在、すべての当事者に
待っていただくよう伝え、今、報告いたしております次第です」
「……………」

鮎美は本当に頭痛がしてきた。静江が恐る恐る続ける。

「被害を受けた三人の気持ちを私がつまとめ、相手方へはお兄ちゃんが
対応して、今のところは落としどころとして、一人当たり300万円の慰謝料、
その代わり刑事告訴はしないという案が出ております」

「……………もし、鷹姫が刑事告訴したら？」

「強姦は未遂に終わっていますから、それほど重い罪にはならず……
こう言っては芹沢先生のお怒りを買うかもしれませんが、宮本さんは
自ら衣服を脱ぐ等……落ち度というわけではありませんが……その
…状況的に加害者に有利な部分もあり……こちらで弁護士に相談し

たところ、おそらく前科が無いので執行猶予はつくだろうとのことですが。ただ、私たちとしても大切な支持者ということもありますし、父親だけでなく母親まで謝りに来られ、まことに気の毒というか……そのような次第です」

「……………鷹姫の気持ちはどうなん？」

「突然に襲いかかって来られた時は驚きましたが事なきを得ましたし、刑事告訴してしまうと、芹沢先生の秘書が襲われたということでも、またニュースになります。それが波及して石永先生にもおよびますし、自動車学校で特別な手配を受けたことも、好ましい形では報道されないと思われます。ここは発覚せぬよう、穏便に終わらせる方が良いかと考えております」

「……………うちのこととか、石永先生のことは抜きにして、女として宮本鷹姫の気持ちは、どうなん？ その教官のこと怒ってる？ 憎んでる？」

「……………私としては、あの件さえなければ、教官のことは尊敬していました。他の教官は予定外に入所した私たちへ、面倒そうに口先だけで指導され、手取り足取り教えてくださったことは、とても感謝しています」

「きやはは！ 脱がされたのにね！」

「落水時の対応としては正しいと思いますし、素足でアクセルを踏むよう指導されたことは本当に役立ち、他の教官たちは私の加速が急だと文句を言うだけでしたが、彼は手ずから私の足へ手を添えてアクセルの加減を教えてくださいましたし、そうすると本当にエンジンの鼓動が感じられて上達しました。しかも、教習後は教官自ら私に靴下と靴を履かせてくださり、師でありながら偉ぶらず私の足を拭いてくださるなど、蒲生氏郷を思い出すような人でしたから」

「ただの足フェチだって。気づこうよ。イエスも似たようなことしなかった？ しかも裏切り者がいるとかいないとかのとき」

「ヨハネ13章のいきさつですが……………今その話を出さないでください……………私も足を拭かれましたけど……………嫌な感じしかなかった……………スカート裾に顔を近づけてきて……………うう……………」

「うちも蒲生氏郷が気の毒になるわ。けど、鷹姫は最期の最期まで、ええ師匠やと思てたんや?」

「はい」

「……あなたにとっては道場と同じ素足の方が自然かもしれないし……手取り足取り教えてもらうのも、親切に感じるんかもなあ……男の内心が、どうであれ触られた側が嫌がってなかったら、それはセクハラやないかもしれないし……この子ならやらせてくれるかもって期待したんやろなあ……」

だんだん鮎美も強姦未遂犯に同情してくる。むしろ、自分も似たようなことを何度も鷹姫にしている。隙が無いようできて男女や性欲のことには大きな隙がある鷹姫へ、つついっせくハラしてしまい、そのうちに興奮が止まらなくなった男の気持ちだが、よく理解できてしまった。

「うん、わかった。鷹姫には、あとでお説教な。陽湖ちゃんは、どう?」

「300万で許せる?」

「私はお金なんて問題じゃありません。けれど……私は少し身体を触られたくらいですから……脱がされたのは靴と靴下だけです……でも、あの人には二度と会いたくない」

陽湖が身震いすると、静江が言い加える。

「条件として、もちろん、彼は教官を外され、しばらくは自宅謹慎にするということですよ。自動車学校も今回の件での評判の悪化をおそれ、三人への今後の教習は必ず女性教官のみをあてると約束してくれています」

「陽湖ちゃんはアトピーと円形脱毛症まで……」

「私が治してあげようか? 自由診療で300万円以内で、余ったら返してあげる」

松田川が手を挙げた。

「美容外科のプロやもんなあ……。となると、あとはカネちゃんやけど、カネちゃんも300万ももらうん?」

「アタシは5億円って要求したよ」

「それは却下しました。緑野さんは手を触られただけですよね。しか

も1回」

「テストで5回も落とされた。1回1億円」

「……静江はん、一人300万は妥当なん？ 総合的に」

「妥当というよりは被害から考えると多い方です。緑野さんはもちろんとして、月谷さんへは精神的ダメージは大きかったようですが、実際の行為は痴漢まがい程度で、宮本さんへは脱がせましたが、何もしないうちに絞め落とされていますから」

「アタシ、ちゃんと警察署ではあることないこと泣いて演技して盛っておいたよ」

「それ、ぼったくりやん」

女性たちの話が出尽くした様子なので石永がまとめる。

「芹沢先生、不本意だとは思いますが、宮本さんに落ち度があったとか、誘ったとは言わないけれど、慰謝料も少くないわけだから、なんとか、穏便に終わる方向で承知してもらえないだろうか？」

「……………うちは……………それは…被害者がOK言うたら、終わりやとは……………思うけど」

「では、その方向で相手と協議させてもらうよ」

「5億円！」

「カネちゃんは300万で我慢するとき！ 桧田川先生、陽湖ちゃんの診療をお願いします。あと、鷹姫にはお説教な！」

「はい。…………」

「鷹姫、ちよつと、この包帯、鋏で切って」

鮎美は、ずっと手首を拘束している包帯を鷹姫に切ってもらった。両手が自由になり少し肩を回してから、静江たちに言う。

「ご苦勞様です。大変なトラブルやったのに、よくまとめていただき、ありがとうございます。今回の件は石永先生と静江はんたちの判断で終わってください。うちは鷹姫をここに泊めて一晩、説教しますんで。もう帰って休んでください」

「はい、ありがとうございます」

「すまないな、芹沢先生の友達を。こちらの立場を理解してくれて助かるよ」

静江たちが去ると、鮎美はシートと金属格子をのけて立ち上がるために身体へ挿入されているカテーテルを引き抜く。

「これも抜いて…うつ、ひやぐうつ…」

「なんてことするの?!」

松田川が驚いているし、鮎美も引き抜くときの激痛に震えた。

「ううう…痛あ…なんで、こんな痛い…ううつ…先生が抜いたときはスルツと…ううう…」

「バカね！ それは脱落しないように内部で先端がバルーン状に膨らんでるの、そんな無理矢理引き抜いたら括約筋が切れて大変なことになるから！ まったく、ちよつと自分が動けると思うと、すぐこれだから！」

「す、すんません。けど、ちよつと鷹姫と話があるんで…」

鷹姫へ説教する前に、松田川から説教された。それでも鷹姫へ何らかの指導が必要であることは認めてくれて、いっしょにバスルームへ入りたいという希望を条件付きで許可してくれる。

「私も、いっしょに入ります。それが条件」

「さつき規則違反とか言わんかった？」

「お二人が使うのを安全監視する名目だからいいの」

松田川が再び鮎美の傷口へガーゼと防水テープを貼ってくれた。三人で裸になってバスルームへ入るけれど、鮎美は包帯と鋏をもつてきている。

「鷹姫、今日、自分が一歩間違ったら危なかったって認識ないやろ？」

「……………はい…」

「あんた素直に言うこと聞きすぎやで。裸になり言われて、はいそうですか、と脱いだら、あかんよ」

「……………すみません…指導だと思っただけですから…」

「んな指導を自動車学校でするわけないやん」

「……………」

「まあまあ、そう頭ごなしに怒らないであげなよ。私たち医師もそうだけど、指導的立場にある人間からのセクハラって巧妙で受ける側は

拒否しにくくて罨にハマるから。芹沢さんだって、私が悪い医者だったらセクハラを回避できたと思う?」

「……それは……」

「無理でしょ。とくに医師から脱ぎなさいと言われたら脱ぐしかないし、身体を任せるしかない。まあ、その分、私たち医師は立場を利用した患者への性犯罪は一発で免許取り消し処分だけだね。患者さんが受けるダメージは、とても大きい」

「……。とにかく、鷹姫、あんたについて前から気になってたんやけど、男の前で裸になるのを恥ずかしいって感じる?」

「……いえ、あまり……」

「やっぱりか……。 松田川先生、これって病気やろか?」

「うくん……。羞恥心のメカニズムは、それほど研究されてないの。文化とも深い関わりがあるし、個人差も大きい。状況や環境にもよるよね。単純に私たち今、裸だけど異性もないし、閉鎖されたバスルームだから少しも恥ずかしくない。けど、これが駅前だったら大変。でも、混浴だったら女性によるし、男性だって恥ずかしがる人と平気な人がいる。……」

松田川は語りながら気になったので鮎美の耳に口をよせ、鷹姫には聞こえない小声で問う。

「宮本さんって、芹沢さんの性的指向を知ってる?」

「……気づかれてないつもりです……」

刺されて死ぬのだと思いついたとき、愛していると言ってしまったけれど、その話題に鷹姫は触れてこないし、鮎美も小声で答えた。松田川は話し方に注意しながら説明する。

「感覚や感性って、本当に人それぞれなの。色盲って聴いたことあるでしょ。色の見え方だって個人で違う。私が見ている緑と、芹沢さんが見ている緑、宮本さんが見ている緑、それが脳へ同じように伝わっているとは限らないし、同じように脳が感じているとは限らない。あまりに色の識別ができないと信号機なんかが見にくくて、免許が取れなかったり職業に制限があるけど、そうじゃない健全人のレベルでも、きつと差はある。痛みでさえそう。同じ強さで打たれても平気な

人、苦しむ人がいるし、同じ人間でも状況で変わる。芹沢さんみたいに刺された場合や交通事故なんかで他人に傷つけられた場合は、より強く痛みを感じるし、逆に自分の失敗で怪我をしたときや自分一人で田んぼに突っ込んで交通事故になったときなんかは、けっこうな怪我でも我慢できたりする。これは子供を見ると顕著よね？ 兄弟や他の子に叩かれると、たいしたことないのに大泣きして親に訴えるし、自分で転んだときは、かなり強く頭を打ったのにグツと我慢して遊び続けたりする。実は大人でも同じで、他人に傷つけられると本当に痛みを強く長く感じるし、自分の失敗だと、さっさと忘れる。さらに、痛覚の個人差も大きい。極端な例では無痛症という病気があります。これは、まったく痛みを感じないという障碍です」

「それも障碍なんや？ 何しても痛くないのには？」

「何をしても痛くない、何をされても平気というのは、とても危険だよ。たいてい無痛症の人は長生きしない。子供の頃に死んでしまうくらい。よく考えてみて、指を物で挟んでも痛くない。高いところから飛び降りて足が折れても痛くない。つまり危険を認識しないし学習しない。こんな人間は危険を説明されても、なかなか認識できず死んでしまう。男の人の前で裸になっても平気っていうのも、ちよっと危ないよね」

「……………」

「宮本さん、どういうときに恥ずかしいって感じる？」

「……………失敗したときや人に迷惑をかけたときです」

「うんうん、そういうときも恥ずかしいって感じるよね。とくに男性なんかは集団の中で自分の能力が劣っていると感じたり、弱いと思われることを極端に恐れる。だから上半身裸でも筋肉隆々なら、むしろ堂々とするし、経済力を示すクルマの優劣なんかで恥ずかしく思ったり誇らしく思ったりもする。同窓会に軽自動車で行くのは恥ずかしいとかね。さて、女性も身体に自信があるか、無いかで羞恥心も変わります。緑野さんなんか、いい例よね。キレイな身体してるから隠すより見せたい、そんな気持ち。宮本さんは自分の身体をどう思ってる？」

「……別に、どうも……しいていえば、もつと鍛えようと思つています」

「あく……なるほど……性同一性障碍、トランスジェンダーって知ってる？」

「はい、知っています」

「自分をそれだと思う？」

「いえ」

「……即答なんだ……うくん……おっぱいがあつてイヤ？」

「いえ、とくにイヤではありません」

「じゃあ逆に、男の人の性器、おチンチンが自分にあつたら嬉しい？」

「いえ、とくに嬉しくはないです。胸と同じく邪魔そうですから」

「邪魔って……」

「よく男勝りと言われて育ちましたけれど、私は男になりたいと思つたことはありません。どうか、ご心配なく」

「うくん……宮本さんも腋の処理してないの？　ちよつと両腕をあげてみて」

「はい、こうですか」

鷹姫が腕をあげると、一度も剃っていない腋毛が長く伸びていた。

「それは恥ずかしくない？　とくに男性に見られたとき」

「いえ、別に」

「そつか。緑野さんなんかは死ぬほどイヤだつて言つてたけど、腋の毛は文化的影響も大きいし……あ、さつき芹沢さん、かなり堂々と見せてたよね。あれ、モニター室にも映つてたから、相手の石永さん、どんな顔してたの？」

「なんか目のやり場に困るって感じに目をそらしたりしてはりました。ちよつと面白かったです。毛くらいで、あんな顔して目が泳いでましたもん」

「あなたねえ……それ逆セクハラだよ？」

「……そ……そうなんですか？」

「女子高生って自分の身体が、どれだけ凶悪な誘惑をするか、わかってないから危ないのよ。とくに、どんどんスカートを短くするの。襲われる側の落ち度って話は私も女性として反感あるけど、逆に空き巣対策してない家、鍵もかけず戸も開けっ放しで居間に置いてある財布が道路から見えてる、そんな家が空き巣に遭ったら、そりや遭うわ、って思うし」

「鷹姫も、そんな感じよなあ…」

「お言葉ですが、私は自己防衛しました」

「宮本さんの場合、その居間の天井裏に隠れていて、空き巣が来たら飛び降りて木刀で撃退したみたいを感じるよ」

「秒殺やもんなあ…」

「やはり、私に落ち度はあるのでしょうか？」

「かわいそうだけど、あるよ。三人三様に同じ男からセクハラされて、それぞれに対応したけど、一番賢いのは緑野さんだったみたいね。それでも、不当に成績評価を落とされたりするから、指導的立場にある人間のセクハラって最悪なんだけど」

「鷹姫、あんたは自分が強いから平気って思うかもしれないけど、ホンマに今日は危ないところやったんよ？」

「……。相手は私より小柄でしたし、何の反撃もなく絞め落としていきますが…」

「うん、鷹姫、ちよっと車内でのこと振り返ってみよか。もう一回、やり直してみるな。うちが教官役、あんたは、あんたで」

「はい」

「シーンは、あんたが裸になった時点から。教官は写真を取る前に、こう言うねん。水没したときは車内は暗くなる。それでも脱出する訓練のために、君に目隠しをしよう。こう言われたら、あんたは、どう反応する？」

「目隠しですか……たしかに車内は暗くなる可能性があり……訓練としての意味はあるかと思えますから……」

「うん、あんたは素直に目隠しされるやろね。ほな、するね。この包帯で」

鮎美は持つてきた包帯と鋏で鷹姫に目隠しをした。それを見ていた松田川は先の展開が予想できてくる。鮎美は包帯を引っ張って強度を確かめつつ言う。

「次、教官は、さらに言うねん。事故で車両が水没したときシートベルトなどが絡まっていて手が動かせないこともありえる。それを体験するため、ボクのネクタイで君の手首を縛るよ、と。はい、手を出して」

「……こうですか？」

見えないので鷹姫はゆっくりと両手を前に出した。その手首に包帯を強めに巻き、縛るとバスルーム内にある手すりに結びつけた。両手首とも暴れても解けないほど三重に結びつける。

「次、さらに教官は言うねん。運悪くハンドルなどが変形して両脚が動かせないことも考えられる。そんな状況でも脱出できる方法を教えるから、両足も縛るよ、と。足を縛るし、できるだけ両脚を開いて立って」

「…はい…」

鷹姫が脚を開いたので鮎美は包帯で膝と足首を低い位置にある手すりに縛りつけた。

「完成やね。あとは、いただきます、だけの状態や」

「宮本さん……今日、こうされなくて本当に良かったね……犯人が写真での脅しを選んでくれて……。あ、宮本さんが強いってこと、その犯人は知らなかったの？ たしか、芹沢さんを刺した犯人を取り押さえたのも宮本さんよね？ しかも、両手を折ったとか」

「鷹姫が取り押さえたことは、犯人同様、氏名は伏せられてるねん。骨折させたこともあるし、鷹姫が表彰を辞退したから余計に学校関係者しか知らん感じで終わってるやろね」

「そっか。素直な子だし、写真で脅せば言いなりになるって思ったんだらうね……縛りを選ばれてたら今頃……」

「あの……それで、この状態から脱出する方法というのは？」

鷹姫が問うと、鮎美は頭をポンポンと撫でた。

「あるある、教官が満足したら、そのうち解いてくれるよ」

「満足？」

「うちの手を男の手、教官の手やと思ってみ」

そう言つて鮎美は鷹姫の乳房を揉んだ。

「どう？ 何か言うてみ？」

「あの……なぜ、私の胸を揉むのですか？」

「気持ち悪いとか思わん？」

「あまり嬉しくはないですが……何のために私の胸を揉むのか不思議に思います」

「ほな、はつきり教官が言うねん。君が好きだ、うちと性交しよ」

やや頬を赤らめながら鮎美が言ったので見ている松田川は説教と言いつつ、そこそこにセクハラだと感じたけれど、黙って見守る。

「こう言われて鷹姫は、どう答える？」

「……………ご好意は受けられません。性交もできません。私には許嫁がいます」

「そんな許嫁、うちが忘れさせてあげるよ」

そう言いながら鮎美は胸を揉んでいた両手を鷹姫の股間へ肌を撫でながらおろしていく。松田川は、どこかで止めるべきだろうと迷いつつも、まだ鷹姫が危機感をもっていないのでドクターストップはかけない。いよいよ鮎美に股間を触られても鷹姫は落ち着いて言う。

「そこには触らないでください。教官、これでは強制わいせつです」

「……………鷹姫……………危機感を、どうやったら……………うちの手を男のアレやと思ってみ」

「アレとは？」

「……………男性の性器。あと、さすがに鷹姫の処女は奪えんから、ここから先は口で言うけど、はい、教官は鷹姫が断つても性交してきました。どう抵抗しますか？」

「どうと言われても……………これでは、どうにも……………」

鷹姫は目隠しをされて手足を動かさないので困った。それでも思いつく。

「こうなれば、あとは噛みつくくらいです」

「うん…、ナイスガッツやね…。泣き喚くよりは正しい対応かもしれない…。」

鮎美は噛みつくという言葉で、鷹姫が天津田から噛みつかれたという話を思い出した。そして鷹姫の肩を見ると、歯形の傷が残っている。

「鷹姫、ごめん…うちのせいで…噛まれて…傷が…」

「かすり傷です」

「……………松田川先生、この傷は跡になる？」

言われて松田川も鷹姫の肩を診る。

「あく……………なんの治療もせず放置したね。残るかもしれないよ」

「鷹姫……………ごめん」

「どうか、お気になさらず。……………あの、そろそろ解いてもらえませんか？　手が痺れてきました」

「……………鷹姫……………あなたに危機感を与えるのが、せめてもの恩返しやと思うから言うけど、この状態で噛みついてても結局は強姦されると思わん？」

「……………はい……………されると思います」

「それは鷹姫にとって、苦痛やろ？」

「……………はい、…そう思います」

「そんな冷静な話ちゃうんよ。うちも知らんけど、きつとこうグイグイと嫌な感じに」

鮎美は手で鷹姫の下腹部をグイグイと押してみる。それで鷹姫が身震いした。

「つ……………やめてください」

「ちよつとは実感した？」

「いえ、ずっと裸だったものですから、トイレに行きたくなっています。解いてください」

「……………そんなこと言うても解いてくれるわけないやん。それが強姦よ」

「あの、本当にトイレへ行きたいのです。お説教は後で受けますから、どうか解いてください」

「……………大？ 小？」

「小さい方です」

「ほな、このまましい、どうせ風呂場やし」

「っ…そんな行儀の悪いことは嫌です！」

鷹姫が頬を赤くして言うので、鮎美と松田川は気づいた。

「こういうのは恥ずかしいんや」

「羞恥心って、ホント色々ね」

「早く解いてください。お願いですから」

鷹姫は脚を閉じようとしても閉じられないので困っている。

「そういえば、鷹姫って食欲も隠して恥じらうよね。出す方も、前に温泉旅館で似たようなことしたとき、かなり恥ずかしがってたし」

そう言いながら鮎美が下腹部を撫でてくるので鷹姫は切迫する。

「さ…触らないでください！」

「もう一回グイグイしよか？」

「っ…」

「芹沢さん、意地悪ね。けど、いい機会だから、ちよつと覚えておいて。膀胱というのは胃と同じで満タン時と空虚時でかなり大きさが変化するの。とくに膀胱の上皮組織は移行上皮といって尿の充満程度により形態と配列まで変えて風船のように膨らみます。尿がないときは一つ一つの細胞は大型で立方体だけど、尿が充満すると引っ張られて扁平化し、細胞層の数まで減ります。ようするに風船と同じで薄く伸びるわけ」

「ふーん……」

「…うう……解いて…ください……うう…」

「なぜ、こんな説明をしたかといえば、芹沢さんの傷跡を残さず治すため、皮膚に引っ張る力がかかるのが一番ダメだっって言いましたよね？」

「あ、はい」

「ちよつと宮本さんの下腹部を、いつしよに触ってみて。ここが膀胱」

絵田川が鮎美と手を添えて鷹姫の下腹部を触る。

「ほら、このあたりポツコリと硬い感触があるでしょう?」

「あ、はい、かなり質感がちやいますね」

二人の指先に硬い感触があった。

「こんな風に尿が充満すると何倍にも膨らんでパンパンになるの。これが下腹部の皮膚まで押してくると、傷に良くないのわかる?」

「なるほど……それで、うちは管につながれっぱなしなんや……」

「今は大目に見てるけど、これが終わったら、もう退院まで手足の拘束したまま過ごしてもらうから覚悟してよ」

「……うゝ……」

「うう……うう……鮎美……お願いです……」

それが最期の一言で鷹姫は我慢できなくなった。耳まで真っ赤にして恥じらうので鮎美は愛おしくてキスしたくなかったけれど自重して鷹姫の足元をシャワーで流した。

「おしっこで、そんなに恥ずかしいんやったら、うちの指で大を搔き出してあげよか。それなら強姦なみに嫌なんちやう?」

鮎美が手を鷹姫のお尻へ滑り込ませると、鷹姫が怒鳴った。

「そんなことをされるくらいなら舌を噛んで死にます!」

「ごめん、ごめん、そんなに怒らんといて」

「……。もう解いてください」

「そやね」

鮎美が袂で包帯を切ると、鷹姫は痺れていた手足でバスルームの床に四つん這いになった。かわいそうなので温かいシャワーをかける。

「身体を洗ってあげるし、この椅子に座って。洗いながら、最期のお説教よ」

「……はい……」

素直に鷹姫はバスチェアに腰かけた。鮎美は身体を洗ってやりながら、股間を洗うときに言うておく。

「人それぞれかもしれんけど、どうしてか鷹姫は女の子としての感性が少し足りんみたいやね」

「……そうかもしれません…」

「けど、これだけは覚えておいて。男の人いうんは、女の身体を狙ってくるんよ。たとえば鷹姫が強くても、うまく罠にハマたら、どうにも抵抗できないのは、わかったよね？」

「…はい…」

「頭も洗うね」

「いえ……頭は自分で…」

「今夜は洗わせて。これもお説教よ」

「……」

「抵抗できんで強姦されるんは、それこそ舌を嚙んで死ぬくらい嫌なことなんよ」

鮎美は優しくシャンプーで鷹姫の頭を洗う。それで鷹姫が亡き母を想い出すことは、よく覚えている。

「鷹姫がちよつと自分の身体に無頓着なんは個性かもしれないけど、少し想像してみ。今日、クルマの中で手足も縛られて強姦された自分の姿、終わってから警察を呼んでも、どうにも消えんよ。それこそ何百万もらっても割に合わん。それにな、性交は一回でも妊娠するかもしれない」

「………」

「もし強姦で妊娠したら、目もあてられん。そんで学校にも近所にも、下手したら家族友人にも隠して中絶に行くんよ。そんな鷹姫の姿を、鷹姫のお母さんが、あの世から見下ろしてはったら、どんな、つらい想いしはる？」

鮎美も言っていて、涙が零れてきた。あえて鷹姫が悲しむように言い募ると、背中が震えているので泣き出してくれたことがわかった。

「…うつ…うつ…私が……うかつで……すみません……私が…」

「鷹姫、これからは気をつけよな。男の人と二人っきりの状況とか、言いなりになるとか、注意しい。お母さんに安心してもらえるよう、自分の身体を大事にしよな？」

「はいっ…はいっ…」

「よしよし、それがわかったら、もうええよ」

鮎美は背後から鷹姫を抱きしめて、今夜は病室に泊めた。

翌1月22日の土曜夜、詩織は朝槍とともに東京都内の高級料亭で畑母神を待っていた。礼儀として先に到着して待っていたけれど、畑母神も待ち合わせの3分前に来てくれた。詩織は正座して畳へ手をつき、頭を下げる。

「畑母神先生、本日は、お越しくださりありがとうございます。また、本来ならば芹沢が自ら応接すべきところ、秘書の私などで接遇いたしますこと、お詫び申し上げます」

「朝槍でございます。本日は同席させていただきます」

朝槍も同様に年上男性に頭を垂れる。

「お二人とも、そう畏まらないで頭を上げてください」

畑母神も膝を着いて鷹揚に微笑む。お互いに礼儀正しく会席は始まり、畑母神は上座を勧められて腰を下ろし、黒檀の座卓を挟んで詩織と朝槍が対面して座る。

「今回は大変だったけれど、芹沢さんの具合は、どうかな？」

「日に日に回復しております。明後日の国会開会式はもちろんのこと、明日の自民党大会にも顔を出される予定です」

「おお、それは良かった。一部で不心得な者が死亡説など流しておるから心配したよ」

「そのようなデマをお信じになる畑母神先生ではないでしょうに。福島県の焼酎です、どうぞ」

詩織は対面して座っていた状態から腰をあげて畑母神のそばにより女らしい仕草で酌をする。

「ありがとう」

機嫌良く畑母神が酔ってくれるよう詩織は露骨すぎず控え目すぎない女性の魅力を駆使して応対する。朝槍は同性愛者として、男性に近づくのは好きではないけれど、無礼でない程度に笑顔で接し、鮎美の状態や国政、都政についての話をした。畑母神も都知事選に立候補

するので朝槍が無所属の都議で同性愛者であることをカミングアウトしていることも予習しており、気を遣って会話しているけれど、世代と認識の差は大きかった。

「朝槍先生も今は同性に興味をもっておられても、いずれ異性を好きになることもあるのではないかな？」

「さあ、どうでしょう」

朝槍は不快感を一切、顔に出さず、畑母神へ逆に問う。

「自衛隊というのは男の世界ですよ。やはりゲイも存在されるでしょうけれど、総司令官のような立場からは、どう扱われるのですか？」

「そういった問題には立ち入らないよ。規則さえ守っていれば」

少し畑母神が不快そうに答えたので、詩織は軽く朝槍を睨みつつ、酌をする。再び機嫌良く呑んでもらい、会席の後半からは鮎美の計画に賛同してもらえよう本題に入り、長い説明をした。すべてを聴き終えた畑母神は難しい顔で考え込む。

「すまないが、水を一杯、もらえるか」

「はい」

水を飲んで酔いを醒まして思考した畑母神は賛同できかねる顔をしているので詩織は機先を制する。

「やはり、芹沢の考えは浅いでしょうか？」

「…………いや、パンチラ…失礼、ああいった写真に対する反撃としては私も大いに賛同できる。ただ、他に付帯するフェミニズム的な課題には必ずしも賛同できない部分もある。同性婚も、はたして…：朝槍先生を前に言いくい部分もあるが、はたして結婚という形をとる必要があるのか。何より、妊娠中と育児中の女性に女子平均労働賃金を支給するというのは…：極端なバラ撒きという気がするな」

「ごもつともです」

詩織は頷き、付け加える。

「ただ勢いに乗って言い立てても、おそらくは多くが実現しないでしよう。それは民主党でも同じで、すでに高速道路の無料化も目処が立たず、子供手当も半額以下になりそうな気配ですから、公約達成と

というのは、与党をもつてしても困難。それは自明の理、挙げたテーマすべてが実現しないのは、国民もまた織り込み済みではないでしょうか」

「そのような態度は感心せんな」

「大切なのは前進することです。ことに、畑母神先生の都知事選、これが最期と決戦されるのであれば、打てる手は打ち尽くして置く方がよいでしょう」

詩織は自衛隊を定年退職し、衆議院議員を一期務めて二期目に落選した畑母神の政治生命が年齢的にも限界であることを、相手を怒らせないギリギリの表現で口にした。畑母神も自覚しているので黙って水を飲む。

「……………」

「昨日付で宮崎県知事は辞表を提出し、都知事選への立候補を公式に表明されましたが、今日になって宮崎市の養鶏農場で高病原性鳥インフルエンザが確認され、実に悪いタイミングで知事を辞めたと都民への評価もさがるでしょうが、畑母神先生もまた不倫報道をされています」

「…………… 認める事実は何も認めない」

「はい。奥さんとの別居は10年を超え、離婚調停中であることも存じておりますが、世間は愛人と騒ぎ立てるでしょう。けれど、私たち女性の権利を考える運動に連名していただければ、都内の女性票に好印象かと愚考します」

「……………」

「開会式後の記者会見に芹沢の隣りで立ち会っていただければ、都知事選への助力にもなるやもしれませんし、何より芹沢を助けてやってほしいのです。保守論客として名高い畑母神先生がついてくだされば説得力も増します。すべてが実現しないまでも、少しは動かせるかもしれません」

「ああ、政治とは、そういうものだよ。大きくは動かない。根気よく働きかけ、わずかに動かせる、それだけだ」

「……………もつともです。どうか、お願いします。もちろん、ご協力のあかつ

きには芹沢には都知事選の応援、最大限にスケジュールを空け、全力で応援させます」

「……………少しタバコを吸ってくる」

「どうぞ、こちらで」

「いや、将来ある若い女性の前で喫煙は控えるよ。朝槍先生だって趣味が変わって子育てをしたいと思いますと思うかもしれない。女性の産む力は国の光りだ」

「……………」

「すぐ戻るよ」

畑母神は和室を出ると、料亭の庭園に面した回廊に設置された灰皿の前でタバコに火をつけ、考え事をする。

「ふーっ……………」

煙を吐いた。

「……………あの秘書……………牧田……………こちらを脅してきおった……………度胸もあり、頭は切れるが癖が強い……………あれは芹沢くんには害になるやもしれんな……………」

タバコを吸い終わると、畑母神は考えをまとめ、詩織たちの待つ部屋に戻った。

「協力してもよいが、一つだけ条件がある」

「はい」

「妊娠中と育児中の女性に支給金を出す話だが、実現が難しいとしても、民主党の子供手当でも問題になっているように、にわかには日本へ入国して受給する者がいるかもしれない。とくに、キリスト教の牧師などが外国人孤児と養子縁組を多数行い、受給していることは報道にもあった。こういった不正とは言わぬが、税負担をしてきた国民ではない者が受給するのは、やはり国民感情には合わぬだろう。その部分について、たとえば産まれてから、ずっと日本において納税しておるような者は満額、そうでなく居住年数が浅い者については半額や3分の1支給など合理的な区別をつける案に修正するなら、賛同させていたいただきたい」

「……………わかりました」

「血統で差別するわけではないよ」

「はい。その案とするよう芹沢に伝えます。同意させます」

「……」

「では、明後日、記者会見場で」

会席を終え、詩織はタクシーで帰る畑母神へ御車代を渡して、車両が見えなくなるまで頭を下げた。朝槍が大きなタメ息を吐いた。

「はあああ！ わかつちやいるけど、わかってくれないなあ」

「性的指向と趣味嗜好の違いを理解しろと言っても、私たちが戦車や軍艦の種類を理解しないのと同じくらい、彼らの脳には入りませんですよ」

「勉強すれば覚えられるよ、その気があれば！ シオリンは、よく理解してくれてるし」

「私はバイですから」

「え?! ホント?! ホントに?!」

「こんな嘘について、どうなるものでもないでしょう」

「ね、呑み直そうよ。最近ね、私のパートナー、ずっと相手してくれないの」

「露骨なナンパですね」

「奢るからビアンバー行こつ」

「そうですね、一応は畑母神先生を巻き込むことにも成功しました。祝杯としましょう」

詩織は艶やかに微笑んだ。

1月23日 朝槍

翌1月23日の日曜、ピアノバーで午前0時を迎えた詩織と朝槍は計画の最終確認をして胸を高鳴らせた。

「鮎美先生の復活、とても楽しみです」

「男社会をぶっ壊して、世界を変えていけそう。あーん、楽しみでウズウズしてきた」

朝槍が両手を握って、ヒールを履いた足をばたつかせた。

「酔うと幼稚になるのですね、朝槍先生は」

「ナユでいいよ。はしゃぐ方が楽しいじゃん。世間は同性愛をカミングアウトした政治家ってレッテルを私に貼ってくるけど、そのステレオタイプもうざいんだよね。きちつと真面目で同性愛の問題について真剣に考え、努力する女、でも、ちよっぴり不幸、そして家の中では女同士でエロいことしてんだろ、スマした顔しやがって、お前の好きなプレイは何だよ、って感じの男からの目、うざすぎ」

「男は嫌いですか?」

「まあ、嫌いだね。いなくてもいい、いや、いない方がいい。シオリンはバイってことは男も好き?」

「ええ、可愛いじゃないですか、子犬みたいで」

「……どこが? もしかして、ロリ? 小学生男子が好き?」

「子供は好きじゃないです。やっぱり性に目覚めた中学生以降が可愛いですね。こちらがチラつと胸元を見せてあげたりすると、目を泳がせたり慌てたり、とてもわかりやすく可愛いです」

「にやるほどおっ……私には理解できない世界にやあ。ジロジロ見んな、としか思わないにや。ま、見たい気持ちはわかるんだけどね、私もおっぱい好きだし」

「ナユはピアノとしてネコですか? タチですか?」

「どっちでも可だよ。今のパートナーとは私がタチで、向こうがネコで固定だけど、あの子は性欲が薄くてさ。いっしょに暮らせて、ときどきチューできればいいの、パンツの中には興味ありません、みたい

な感じ」

「それは、さぞかし物足りないでしょうね」

「でも、人柄は好きだから。もう5年、いっしょよかな。浮気にうるさくないし。拗ねるけど、それが、また可愛いし」

「いい人そうですね」

「あーん、でも今夜は身体がウズウズして寝られなさそう！ シオリくん、相手してよ」

「ネコで？ タチで？」

「うーん、もつと過激なのがいい。そういうの嫌い？」

「程度によります」

「SMっぽいのは？」

「私が痛いのは嫌です」

「こつちが痛い分にはOK？」

「そういうのは好きですよ」

「女王様なんだね。……それならば、これ見てよ。読んでOKそうなら、やってほしい」

朝槍はスマートフォンメモ帳機能に保存してあるテキスト文書を詩織に見せる。そこには望むプレイ内容を記したシナリオがあった。受け取って目を通していく詩織が、つぶやく。

「ずいぶんと変わった趣味をお持ちですね」

「過激すぎて、今のパートナーやってくれないからシオリンなら応えてくれないかなって。その代わり、シオリンが望むプレイにも何でも応じるよ。受けでも、責めでも、変態っぽいのも」

期待感と他人に言いにくい自分の性癖をテキストという形で読んでもらっている羞恥心で朝槍は頬を赤らめつつ、一口だけカクテルを呑んだ。詩織は読み終えてスマートフォンを返した。

「この趣味についていける人は、そうそういないと思いますよ。しかも、まさか都議の朝槍先生に強姦願望と窒息趣味があるなんて……。死ぬかもしれないくらい強くされるのが望みですか……。危険じゃないですか？ 本当に死んでしまったら、どうするんです？ 私は殺人罪で捕まるのは嫌ですよ」

「うん、そう言うと思って。こういうのも作ってある。これ読んで、サインしてよ。そしたら、万が一のときにもシオリンは安心でしょ」

朝槍がカバンからA4用紙に印刷した文書を見せる。詩織は目を通すと応える。

「このこと、ここにサインすればいいんですね？」

詩織は文書に署名する。

免責契約書

私、朝槍那由梨（以下甲）は自己の性的な興奮と満足感をえるために（牧田詩織）（以下乙）に暴行および脅迫ならびに絞首を依頼します。

前記の行為により甲が死傷した場合でも、乙にあらゆる責任を問わず、また司法当局が乙を罰することも望みません。ただし、これは自殺幫助ではなく、また殺害の依頼でもありません。あくまで性的な遊戯の一環にすぎず、法律上の放任行為とし、人権に内包される愚行権の一場合として、乙には何ら責任が無いことを確認するため、この書面を2通作成し、署名の上、双方が所持するものとします。

平成23年1月23日

甲：朝槍那由梨

乙：牧田詩織

署名が終わった文書を1通ずつカバンに入れる。

「シオリン、さっそくホテルに行かない？」

「私のマンションで殺してあげますよ」

「さらつと言った。じゃ、ここ私が払うね」

二人でビアンバーを出て、世田谷のマンションに向かう。

「殴る蹴るは、あんまり強くしないでね。顔と手足は目立つし、お腹か背中でお願ひ」

「痛みは快感ですか？」

「軽く痣になるくらいまで叩いてほしいかな」

「さっき読んだシナリオでは居直り強盗に暴行され強姦されて絞殺される流れでしたが、私は男性っぽく振る舞った方がいいのですか？」

「嫌じゃなければ、そうしてほしいな」

「ビアンなのには？」

「私、歪んでてさ。ビアンなのに無理矢理男にやられるっていう被虐が好きなんだけど、じゃあ男に頼めよ、って話なんだけど、男のフリしてる女性にやられたいの。男が相手じゃ嫌。というか、男くらい強権的な存在に自分を蹂躪されて、死んでしまうっていう疑似体験で興奮するの」

「かなり相手を選ぶ嗜好ですね」

「ペニスバンドとか着けるのは嫌な方？ バイだよな？」

「ペニバンは使ったことがあります、男として振る舞った経験はないですね」

「嫌？」

「やってみるのも、面白そうです」

途中のオモチャ屋で、いくつか大人の玩具を買った詩織と朝槍はマンションに到着すると、お互いシャワーを浴びて身体を洗った。詩織は湯上がりの朝槍へ紙とペンを差し出した。

「さきほどの免責契約書だけでは足りないので遺書を書いてください」

「え？ ……遺書？ ……なんで？」

「万一のためですよ、万一。死の疑似体験がしたいんですよね？ ギリギリまで苦しめてあげますから、プレイの一環だと思って書いてください」

「本格的だね。いいよ、書く書く」

朝槍がペンを握ったので詩織が口述する。

「言うとおりに書いてください。…。私は疲れました。しばらく旅に出ます。探さないでください。どうして、自分が産まれてきたのか、それが見つかるまで、誰にも会いたくないから。ごめんなさい。朝槍那由梨」

「……うん、書いた。……なんか、これ本当に富士の樹海にでも行きそう……」

「同性愛者の自殺は珍しいことではないですから、誰も怪しまないし、

この置き手紙があれば、搜索願も出されないでしょう」

「なんかドキドキしてきた」

「じゃあ、私は着替えてきます。なるべく男っぽい強盗の服……あれがいいですね……」

詩織は自室のクローゼットを探し、大掃除のときに着るようなジャージと女物ではあるけれど、男っぽいもある革ジャンを見つけ、ペニバンを装着してから着る。リビングに戻ると、朝槍は着て来たスーツとスカート姿になっていた。

「シオリンの家にエアガンとか武器っぽいものある？」

「包丁ならありますが、うっかり斬っても許してくれますか？」

「顔はやめてね」

「了解です」

詩織はキツチンから包丁を出してきて、それを構えた姿を鏡で確認すると、どうしてもロングヘアが女性っぽいのでゴムで束ねて後ろに流した。

「はじめましょうか」

「うん、お願い」

二人で寸劇を開始した。テキストにあった通りに、場所は詩織のマンションではなく朝槍の事務所ということでプレイが始まる。朝槍が事務所に見知らぬ男がいたという設定で声をあげる。

「っ、あなた誰?! どこから入ったの?!」

「ちっ……見つかったか……くそ、こうなったらー!」

安っぽいセリフを吐いて詩織は包丁を構えて朝槍に迫る。それで、か弱い女として朝槍は悲鳴もあげられず腰が抜けて動けなくなった演技をする。

「……ひっ……や……やめてください……助けて……こ、殺さないで……」

「クク、なら、こいつをしゃぶれ」

私だったら噛み千切って通報ですね、と思いながら詩織はジャージをさげてペニバンを露出させた。朝槍は怯えた演技をしながらも、ペニバンの反対側は詩織の体内に入っているので、単に舐めるだけでな

く少しでも詩織が気持ちいいように両手をそえて前後させつつ擬似的なフェラチオを行った。

「よーし、もういいだろう」

「ハア…ハア…うう…」

「脱げ」

詩織がスカートをたくし上げ、朝槍の下着を脱がせようとすると、シナリオ通り拒否する。

「っ、い、嫌！ やめて！」

「抵抗するな！」

うっかり斬らないように包丁をもっていない方の手で朝槍の胸と腹を3発殴った。それで痛みで震え、おとなしくなり、乱暴に下着を剥ぎ取った。

「うう…うう…」

「……」

こんな安っぽい芝居なのに、こんなに濡らして、好きなことって本当に最高に感じますよね、と詩織は指先で朝槍を愛撫してから、痛くないギリギリの乱暴さでペニバンを押し入れた。

「ううっ…」

気持ちよさそうに朝槍がうめいている。詩織は腰を振る。

「オラ、オラ、どうだ、おう」

こういう犬以下の男、あんまり楽しくないです、そろそろ首を絞めさせてもらいますね、と詩織も楽しむことにした。包丁を遠くに置いて両手で朝槍の首を絞める。

「うっ！ うう！」

「死ね、オラ」

気持ちよく死になさい、と詩織は首を絞めつつ腰も振り、なるべく朝槍が長く苦しみを味わえるように頸動脈を絞めたり気管を絞めたりして、意識を朦朧とさせつつも落とさず、殺しきらず、腰の筋トレだと思って15分も頑張った。

「ハア！ ハア！」

「っ……」

とうとう最後に頸動脈を押さえて朝槍を昇天させてやり、息を整える。

「ハア…ハア…：…やっぱりペニバンは、あまり気持ちよくないですよ」

少しは感じたけれど満足とは程遠かった。

「しかも、こっちは寸止め気分ですし。仕方ないですね、お互い、趣味が合わないのに、ご奉仕のし合いなのですから」

そう言つて詩織は朝槍と唇を重ね、大きく息を吹き込んだ。呼吸が止まっていた朝槍が息を吹き返す。

「ゴホッ！　ゴホっ…ハア…ハア…」

「ナユ、どうでしたか？」

「ハア…：…ハア…：…シオリン…：…最高…：…」

うつとりと朝槍が声を漏らした。

「…：…最高だよ…：…最後、本当に殺されるのかと思った…：…シオリンの目…：…冷たくて怖くて…：…最高…：…」

「フ…：…」

鼻で笑つた詩織はペニバンを外して革ジャンも脱いだ。冷蔵庫からお茶を出して2つのグラスに注ぎ、飲みながら朝槍にも渡した。

「ありがとう」

「…：…」

「次、シオリンの番、私は何すればいい？」

「もう一度、もっと本格的に殺してあげましょうか？」

「え、いいの？　2連チャン私で」

朝槍は時計を見る、そろそろ午前2時50分で二度も朝槍の好みでプレイすると、詩織に楽しんでもらう時間が無くなりそうだった。恋人関係ではないのでフェアに終わりたいと想っている朝槍だったけれど、水を向けられると二度目の快感が欲しくなる。

「してくれるなら…：…して欲しい…：…いい？」

「ええ、今度こそ殺してあげます」

詩織は台所から大きなゴミ袋を複数枚出してくる。ガムテープも取りだした。

「どうするの?」

「ついてきなさい」

詩織がガムテープとゴミ袋を持って部屋を出るので、朝槍は急いでスカート裾を直してついていく。外に出てエレベーターで駐車場へおりた。

「私、立場的に外でのプレイは避けたいんだけど」

「この時間だから大丈夫ですよ」

「……うん……それならいいけど……」

不安になったので朝槍は都議としての議員バッチを外してポケットに入れ、なるべく髪をおろして顔を隠すようにした。詩織はマイカーである大きなBMWの後部ハッチを開けた。

「このゴミ袋を全体に敷き詰めなさい」

「……うん……」

「ナユ、あなたは海と山、どちらが好きですか?」

「え……海かな。どうして?」

「あなたの死体を捨てる場所、海にしてあげますね」

「……ほ……本格的すぎ……ちよっと怖いくらい……」

「海の方が、ありがたいです。山だと掘るのが大変ですし、結局は骨が残りますから」

「……」

朝槍はゴミ袋を後部ハッチの床に敷き終わった。

「これでいい?」

「では、裸になりなさい」

「え……ここで?」

「誰もいませんよ」

「……」

朝槍は周りを見る。深夜のマンション駐車場なので、たしかに誰もいないし、監視カメラはエレベーター前と車両出入口ぐらいにしかないようで、少しの時間なら全裸になっても問題なさそうだったけれど、やはり都議として戸惑う。

「やっさと脱ぎなさい。やめますよっ」

「……誰か来たら隠してよ……」

不安そうに朝槍は衣服を脱ぐ。全裸になると冬の地下駐車場は震えるほど寒かった。

「ううう……どうして裸にならないといけないの？」

「死体から衣服を脱がすのは大変ですから」

「……マジ怖い……殺したりしないよね？ ホントに」

「さあ、どうでしょうね？」

「……」

「背中を向けなさい」

「……こう？」

朝槍が背中を向けると、その両手首を背後でガムテープでグルグル巻きにして拘束した。

「後部ハッチへ入りなさい」

「……」

「早く。そのうち新聞配達などは来るかもしれないよ」

「……わかったよ……」

不安そうに震えながら朝槍は後部ハッチに足を入れ、乗り込む。

「横になって寝なさい」

「……」

朝槍が横になると、詩織は足首もガムテープでグルグル巻きにした。そして、朝槍の口もガムテープで塞ぐ。

「……ううっ……」

「色々計画が狂いますし、街中の監視カメラにも映っているでしょうけれど、あの遺書があれば、なんとかなるでしょう」

そう言いながら詩織も後部ハッチに入ってくると、朝槍に馬乗りとなった。

「うっ？ ううっ！ ううー！」

「あ、もちろん、今さらキャンセルはできませんよ。殺しますね」

「うううー！ うううー！」

朝槍が首を激しく横に振って涙を流した。

「泣くほど嬉しいんですね。よかったです」

「うううー！ うううー！ うっ?!」

朝槍は首を片手で絞められる。もう片方の手で詩織は股間に触つてやった。

「せめて最期も気持ちよくなりなさい」

「ううううぐうう」

もがいて朝槍は逃げようとしたけれど、手足は動かせず馬乗りになられていて抵抗の術がない。詩織は握力だけでなく体重もかけて首を絞める。股間を触っている方の手が朝槍の小水で濡れた。

「他人様の車の中に粗相をして、まあ、死ねば色々と出てくるのでゴミ袋を敷いておきましたから安心なさい」

「ううっ……………」

「さようなら、ナユ」

「っ…………」

朝槍が絶望の涙を流しガタガタと震えながら意識を失った。詩織はタメ息を吐く。

「はああ…………ダメですよね、やっぱり…………都内の監視カメラの数…………お互いのスケジュール…………ビアンバーでの目撃者…………もう、バレバレです」

詩織は名残惜しそうに、ぐったりと動かない朝槍の頬を撫で、口に貼ったガムテープを剥がすとキスをする。意識を失っている相手に舌をからめ、無抵抗な胸を揉み、股間の奥へ指を入れ、いよいよ朝槍が冷たくなりそうだったので胸部を叩き、息を吹き込んだ。

「ゴホっ…ヒュツ…ゴホ！ …ハア…………ハア…」

「おはようございます、朝槍先生」

「…こっ…殺さないで…………嫌…」

「もう終わりますか？」

「うん！ 終わり！ もう終わり！ だから殺さないで！」

「死を感じて、生きてるって実感しますよね。服を着て車の中を片付けてください」

そう言われても恐怖と寒さで朝槍はガタガタと震えていて、服を着ることさえままならないので詩織が車内を片付け、風邪を引かれる前

に朝槍を室内に戻すことにした。

「どうせ、すぐにお風呂に入れるので、そのままなさい」

「っ…でも…」

「早く」

「……………」

朝槍は震える両手で衣服を抱きしめて身体の前を隠しながらエレベーターに乗る。駐車場のある地下階から高層階を目指したけれど、1階でドアが開き男性が一人、乗ってくる。ドアが開く前に詩織は背中朝槍を隠したけれど、完全に隠しきれぬものでもないし、ガタガタと裸で震えている朝槍の姿に乗ってきた男性は驚き問う。

「…ど…どうしたんですか？」

「はい、妹が、すぐそこで襲われてしまいました」

詩織は平然と嘘を語る。

「っ…け、警察には？」

「妹は来月、結婚する予定なので、このまま黙って泣き寝入りした方がよいかと思つていますが、本人が落ち着いてから考えさせます。お氣遣いありがとうございます。今夜のことは他言無用に願いますよ」

「は…はい…」

男性は低層階の住人だったらしく、すぐにおりた。それ以上は他人に出会うことなく詩織の部屋に戻れ、朝槍はバスルームで身体を温めてもらった。

「飲みなさい。風邪を引かないように」

「…はい…ありがとうございます」

風呂上がりには、さらに温かい漢方茶を飲ませると、詩織は要求する。

「そろそろ私が楽しむ番にしてもらえますか？」

「え…ええ…何でもする…どうすればいい？」

「まずは私の下半身の性感帯を覚えてください」

「うん、どこ？」

「関節の内側が感じます。膝の裏、股関節の前、足指のまた。クリ派ですが、中も感じます。中は奥より少し手前の前方。お尻の穴に舌を入

れられるのも好きなので嫌でなければお願いします」

「けっこう普通なんだ……おっぱいは？」

「今は下半身だけで感じさせてください」

そう言って詩織は下半身裸になりベッドへ寝転がった。

「私がいってしまつて眠つたら叩き起こしてください。ナユが寝たら殺します」

「う、うん……たつぷりしてもらつたから、ちゃんとお返しするよ」

朝槍は緊張しつつも、舐め始めると詩織が身もだえして快感に踊るので、それを同性愛者として可愛らしく想い、眠気も覚えず朝7時まで続けた。おかげで、すっかり詩織のどこを、どう舐めると敏感に反応するのか覚えた。ベッドの上で朝食を摂り、二人でシャワーを浴びると、詩織が言う。

「これから事務所から鮎美先生へ報告するので、ついてきてください」

「え……つと……はい」

朝槍は脳内で今日の予定を振り返つたけれど、どれもキャンセル可能なものだったので一方的な求めに応じた。二人で鮎美と石永が兼用で使っている東京事務所へ出向く。詩織が顔を出すと、先に出勤していた男性秘書と職員たちが起立して頭を下げる。

「「おはようございます」」

「おはようございます。鮎美先生へ報告があるので、しばらく入らないでください。朝槍先生は、こちらへ」

「お邪魔します」

二人で事務所の奥にある執務室に入ると、詩織はロッカーを開けて鮎美の予備の制服と靴、靴下を出した。

「裸になって、これに着替えなさい」

「……え……これって……芹沢先生の……？」

「二度、言わせないでください」

「は……はい……」

もう一晩で人間関係が決まってきたので、朝槍は従うことを選んだ。裸になって鮎美の物を身につける。高校を卒業して久しいので、

かなり恥ずかしかった。詩織が持参したカバンから黒髪ロングのウィッグを出した。

「これをかぶりなさい」

「はい」

朝槍はショートヘアなのでネットで地毛を押さえると、ウィッグをかぶる。

「せっかく議員バッチもあるのですから、付け替えなさい」

「…はい」

素直に朝槍は都議としての議員バッチを自分の服から外して、鮎美の制服につけた。

「フフ…」

詩織が満足そうに微笑み、朝槍はプレイが続いていて、何を求められているか、だいたいわかった。

「シオリンは芹沢先生が好きなの？」

「でなければ、秘書なんて面倒な仕事を私がすると思いますか？」

「…うん…」

「ナユ、関西弁で喋ってみてください」

「…なんでやねん…」

「…他には？」

「おおきに。うちが芹沢鮎美どす」

「…やっぱり、これはネイティブでないと無理ですね。関西弁は諦めます」

二人とも関東人が無理して真似する関西弁に寒気を覚えていた。詩織は執務機の椅子に座って足を組み、肘掛けに頬杖をつく、冷たく見下した目で朝槍を見て言う。

「鮎美、そこに跪いて私の足を舐めなさい」

「…」。はい、牧田様」

やりたいプレイは理解できたので敬称もつけた。

「詩織様と言いなさい」

「はい、詩織様。お足を舐めさせていただきます」

普段は秘書として頭を下げている相手を逆に跪かせてみたい、コス

ブレでもいいから、という衝動は人間として朝槍も理解できた。少なくとも自分の死ぬ寸前まで絞首されたいという願望よりは普遍的な気もするし、絞首には懲りた。今まで頼んだ誰よりも詩織は本気で殺意を込めて首を絞めてきたし、もしかしたら朝槍が死んでしまったら、それはそれで動揺もせず海へ捨てられていた気さえする。なので、もう詩織には従っておきたかった。両手で靴を脱がせ、足の指を吸い、指のまたに舌を入れた。

「…ハア……ハア……」

「私の足を舐めながら、鮎美はオナニーなさい」

「はい、詩織様。鮎美はいやらしく詩織様の前でオナニーいたします」

朝槍も興奮してきて、セリフも熱っぽくなる。これから明日には全国に向けて大切な記者会見をするというのに、そして18歳の鮎美本人とは良好な関係を築いていかなければならないのに、本人の知らぬ間に制服を借りて淫らなことをしている自分たちの状況に強く興奮して止まらなくなる。今日は自民党大会が朝から開かれていて石永なども出席しているはずで、この事務所で隣室には職員もいるのにとこの背徳感、性的な少数者として社会の多数派からは蔑視されているけれど、その蔑視する彼らを欺いている気持ちとあいまって二人を酔わせていく。

「さて、そろそろ本当に報告します」

「え……何を……?」

「あなたは黙って私を舐め続けなさい。イカせる勢いで」

そう言った詩織は下半身裸になると、パソコンを起動させて病院にいる鮎美と映像付きの通信を始めるために陽湖へ連絡を取った。

「月谷さん、鮎美先生の、ご様子は?」

「はい、お元気です」

陽湖はタブレット端末で応答しているので手に持って、こちらを見ってくる映像が送られてくる。詩織は上半身だけを送信しているので下半身がどうなっているかは、陽湖にはわからないし、陽湖の下半身も詩織からは不明なもの、何一つやましいことはない敬虔な顔をし

ている。

「鮎美先生に報告したいことがあります。お互いの顔を見て話せるようにしてもらえますか?」

「わかりました。お待ちください」

陽湖はタブレットを通信状態のまま病室に持ち込み、鮎美のベッドを起こして、対面して話せるようテーブルにタブレットを固定してくれた。

「牧田さん、見えていますか?」

「はい、ありがとうございます。すみませんが、月谷さんは席を外してください」

「わかりました」

陽湖が病室を出て行くこうになると、鮎美が止める。

「陽湖ちゃんも、いっしょでええよ。もう明日にはわかることやし。陽湖ちゃん、まだ誰にも言わんといてな。聴くだけ、聴いておいて」

「…はい……」

「牧田はん、状況はどないですか?」

「昨夜、畑母神先生と会談し、若干の修正を飲むことで協力を約束してくださいました。他の賛同者も…」

詩織は真面目な声で報告していくけれど、下半身は朝檜に舐めさせている。催促するように脚を開くので、朝檜は股間に吸いついた。

「芸能人も7名、アイドルが5名、女性ニュースキャスターも2名が賛同してくれています」

「そんなに……おおきにな、牧田はん」

「感謝してくださいるなら、せめて詩織と呼んでください」

しおらしく求める下では、勝手に本人の制服を使ってコスプレさせて舐めさせている。舐めている朝檜は涼しい顔で会話されているのが悔しくなり、なんとしても喘ぎ声をあげさせてやろうと頑張る気になった。わざわざ下半身の性感帯をすべて正直に教えておいて、この状況に持ち込んだ詩織を通信中に絶頂させたくて舌と両手を使う。けれど、詩織は高まらず沈んだ声で言う。

「鮎美先生、報告の途中なのですが、どうしても気になるので言わせて

ください」

「うん、ええよ。何？」

「ずっと入浴できなかったこともあるでしょうが、かなり無駄毛が目立っていますよ」

パソコン画面に映る鮎美の腋には黒い毛が生えていて、詩織は見たくないのに目がいってしまい、言うまいと思ったけれど気になって忠告していた。

「ああ、これ？ あえて伸ばしてみたんよ」

鮎美が腕をあげて見せてくれるけれど、詩織は目をそらした。

「女やからって腋は剃るもんっていう固定観念もまたジェンダーにとらわれてる気がせん？」

「そんなフェミニズムをこじらせて頭が腐った女みたいなこと言わないでください。とても見苦しいです！ 鮎美先生の可愛さが半減、いえ、激減、いえ、可愛さあまって醜さ100倍です。今すぐ殺したいくらい見苦しいです！」

「そ…そこまで言わんでも…そんな拒絶反応でるんや…」

「激萎えです！ 東京で評判の良い脱毛がありますから案内しますよ」

「う…ん…女に腋毛あつたら、そんなにあかん？」

「ダメダメです！ 女の子は女の子らしく！ 男は男らしくするから魅力的なんです！」

「バイに言われると説得力めっちゃあるなあ」

「報告に戻ります。見苦しいですから腕はあげないでください」

「はい」

再び報告を始めたし、朝槍も頑張ったけれど、一度萎えた詩織の興奮はもどらず通信は終わってしまった。

「……………」

詩織が不満そうに黙っているの、朝槍は頑張り続ける。それでも詩織は高まらず椅子から立ち上がった。

「一度、気分を変えましょう」

「はい、どうするのですか、詩織様」

「その下僕キャラは、もういいです。本来のナユに戻ってください」
「うん、じゃあ。で、どうするの?」

「これを、お互いに入れます」

詩織がカバンから無線式リモコンバイブを二つ出した。

「今から、これを入れたまま、お互いにリモコンを交換して過ごします」

「リモコン交換かあ……」

朝槍も使用したことはあるので渡されたバイブを自分に入れて脱落しないように下着を穿いた。

「ナユ、ウィッグとネットを外してコートを着て、ついてきなさい」

「はい。……でも、…私が都議ってこと、忘れないでね」

コートを着れば見えないけれど、鮎美の制服を着たまま事務所から出た。詩織はスマートフォンで何かを検索している。

「今日一番、都内で人が集まるところは……ここですね」

「……秋葉原……ねえ、……私、都議なんだけど……」

秋葉原では本日から二年七ヶ月ぶりに歩行者天国が再開していた。

「秋葉原なら、コスプレしていても大丈夫でしょう。それに、あなたはカムアウトしているし、朝槍都議だとバレても、鮎美ちゃんのファンです、と言えば通りますよ」

「うくん……ギリギリありかなあ……でも、追悼の……」

「歩行者天国が歩行者の地獄になった場所ですが、もう忌明けでしょう。きつと、お祭り騒ぎですよ」

「あんまりバイブのスイッチ入れないでよ」

諦めて秋葉原に移動すると、予想通り多くの人が集まっていて賑やかだった。

「ウィッグをかぶってコートを脱ぎなさい」

「……はい……」

コスプレを再開しても、もっと派手なコスプレをしている者が何人も徘徊しているので、それほど目立たない。詩織と朝槍も徘徊しながら、ときどきリモコンでお互いのバイブを動かして、その反応を楽し

むというデートを続けていた。そのうちに興奮してきたし、制服と議員バッチという組み合わせにテレビ局のレポーターが目をつけて声をかけてきた。

「それは、もしかして芹沢議員のコスプレですか？」

「え……あ、はい……」

朝槍は覚悟を決めた。今はレポーターも気づいていなくても、この映像を見た者の中には朝槍都議だと気づく知り合いや支持者がいるに違いないとわかる。都議として問題ないように笑顔で堂々と答える。

「鮎美ちゃんのファンなんです！ 秋葉原での事件みたいに、鮎美ちゃんも刺されてしまって心配でしたけど、今日、退院するらしいから！ 鮎美ちゃん！ 大好き！ 早く元気になってえ！ 悲しい事件から立ち直ろうよ！」

カメラに向かって手を振る朝槍の近くで、詩織は他人のフリをしてリモコンのスイッチを入れている。しばらくして、朝槍がよろよろと歩き、恨みがましい目をして言ってくる。

「あのタイミングでスイッチを入れるとか、鬼すぎ」

「では、仕返しをしたいですか？」

「したい！」

「明日、私も春風会の代表として記者会見に立つ予定ですよね？」

「……まさか……」

「私の発言中、どうぞ、お好きにしてください」

「……」

「これから東京駅に鮎美先生を迎えに行きますから、コートを着てください。ウィッグも取って」

「………本人の前に、この制服で出ろつてこと……」

「コートを脱がなければ、わかりませんよ。スリルがあつて楽しいでしょう」

「……否定はしないけど……すっごい火遊びするんだ……絶対、マスコミも来るのに……もし、バレたら私たちの活動が、ふざけたものだって世間に思われる可能性も……」

「人間なんて上着を脱いで、下着も脱げば、誰もが裸です。神は裸に人間を造り、悪魔が服を着せてきた。服はみんな悪魔の小道具ですよ」

「……シオリンは、もしかして露出が趣味？」

「いいえ、バレないところで、とつても悪いことをするのが趣味です」

そう微笑んだ詩織と朝槍は東京駅へ行くと、まだ予定時刻には時間があるのに報道陣が集まっていて新幹線のホームには規制線がしかれていた。詩織は議院記章を着けているし、朝槍は都議の中では有名な方なので、規制線の外にいた記者やカメラマンたちは避けてくれ、二人は関係者として規制線の中に入った。朝槍がつぶやく。

「すごい注目……こんなにカメラが……」

コートの中に女子高生の制服を着ている朝槍は絶対にバレたくないで襟元まで、しっかりとチャックがあがっているか7度目の確認をした。そんな姿を見て、詩織がポケットの中でリモコンのスイッチを入れてくるので、仕返しもする。二人で平静な顔を装いつつ、多数のマスコミに囲まれてスイッチの入れ合いをして鮎美たちが到着するのを待った。

「17番ホームに新大阪発、東京行き、のぞみ23号が到着します」

「……………」

どの車両に鮎美が乗っているかは、詩織もマスコミたちも知っている。新幹線が停車すると、駅の職員が車イスで降りするための補助板を車両とホームの間に渡し、車イスに乗った鮎美が鷹姫に押しってもらって降車してくる。一斉にフラッシュが焚かれ、笑顔で応える鮎美は上半身は制服だったけれど、スカートは制服ではなく黒の足首まで長さのあるロングスカートだった。

「芹沢議員！ お怪我の具合は？」

記者の一人が質問を投げかける。

「上々です」

鮎美は答えるけれど、鷹姫は車イスを押ししてホームを進み、あまり質問を受けないうちにエレベーターへ向かう。詩織と朝槍も会釈し

て続き、他には介式と5人の男性SP、そして主治医として松田川がついてきている。駅構内に入ると、鮎美は車イスのまま、障害者向けトイレに運んでもらい、穏やかな声で言った。

「うちが、このトイレを使うことになるなんてなあ……自分には無関係のことやと思ってたけど、これが無かったら、うちも困るし、他にも困る人が大勢いるんやな……ホンマに当事者になって体験せんとわからんわ」

新幹線の中のトイレでは狭いので東京駅に着いてから松田川の処置を受けるつもりで広い障害者向けトイレに入った鮎美は振り返って、鷹姫と詩織、介式まで入ってきていたので問う。

「あの……なんで、こんなに大勢、入ってきたん？」

「これも警護です。ご理解ください」

介式は短く答えた。広い障害者向けトイレといっても、鮎美の他に、松田川、鷹姫、介式、詩織の合計5人もいると、やや狭く感じる。朝槍と男性SPたちは遠慮したようだった。

「鷹姫は車イスを押してくれて、おおきにやけど、できれば出ていってほしいわ」

「私も介式師範を見習って要人警護のイロハを学びたいと思っています。介式師範たちSPは数ヶ月で離れていく予定ですが、私はずっと芹沢先生を守りますから」

「…………… おおきに……けど。…………… 牧田はんは、なんで？」

「見たかったからです」

「出ていけ」

「やっぱりダメですか」

諦めて詩織が障害者向けトイレを出ていく。

「…………… 鷹姫は、…………… 見習いたいんや？」

「はい」

「…………… 介式はん、トイレの警護って重要なん？」

「はい、きわめて重要です。入室前に安全確認しましたが、可能な限り警護対象と離れないことが求められます。通常の女子トイレでも、できる限り離れませんから、同性の私が選ばれています」

「……まあ……介式はんは仕事やもんな……ある意味、松田川先生と、いっしょで……」

それでも鷹姫に見られるのは嫌だったのに、鷹姫が断られる前に言ってくる。

「かの上杉謙信も厠で絶命しましたが、脑梗塞説、心筋梗塞説の他に暗殺説もあります。安全に見えて、もっとも危険なのかもしれない」

「そうらしいけど……暗殺って時代でも……まあ、うちも刺されたけど……」

「そろそろお腹がはってるでしょ？ 立ってパンツ脱いで」

松田川がゴム手袋をしている。

「う……せめて鷹姫には……」

松田川と介式は業務なので諦めがつくけれど、どうにも鷹姫に見られるのは嫌だった。そして鷹姫に出ていってもらおうよう説得する方法を閃いた。

「鷹姫、あんたが先に、うちと同じ処置を受けいよ」

「……なぜですか？」

「このトイレは初めて使うやん？ 安全か、どうか、さきに、あんたが毒味役になり」

「……便座に座ればよろしいですか？」

「ちやうよ。松田川先生、どんな処置か説明したって」

「はいはい。ま、見られたくないよね、友達にはさ」

松田川が小声で鷹姫に処置内容を説明すると、鷹姫は戸惑う。

「……それは……」

「ほら、さきに。鷹姫が身をもって安全確認してや」

「……室内は安全なようですから……わざわざ私が処置を受けなくても……」

「やってみな、わからんかもよ」

「……」

「鷹姫、うちも見られとうないし、出て行って。介式はんが警護してくれはる期間中に、うちも普通にトイレできるようになるはずやし。お

願い、出て行って」

「はい」

鷹姫も出ていった。

「じゃ、自分でスカートをあげててね」

松田川はゴム手袋で処置を始めた。終わると、カテーテルを接続している小型のパックも交換する。パックは鮎美が歩行しても座ついても尿を貯めてくれるように、ふくらはぎの下部にサポーターで支持されていて、それを他人に見られないためのロングスカートだった。

「もういいよ。終了」

「おおきに」

松田川から処置を受けることには慣れてしまったので平静に鮎美は鏡を見て衣服を整えてから車イスに座った。松田川が車イスを押してくれ、介士が油断なく扉を開けて先に出て安全を確認する。外には男性SPもいるので何の危険もなく、ただマスコミが再びフラッシュを焚いてきたので不快だったものの、鮎美は笑顔をつくった。

「芹沢議員、刺されたことで障害は残るのですか?!」

「……」

残らない予定だったけれど、そう答えると不治の障碍者と自分を離断するような気がして答える気にならなかった。秘書しか護衛がないときと違い、体格のいい男性SPたちが円陣で守ってくれるのでマスコミは近づけず、松田川に代わって鷹姫が早いペースで車イスを押ししてくれるので、東京駅構内を進み、外のロータリーで待つてくれた自民党の車両に乗り込む。乗り込むときは一時的に自分の脚で立って歩いた。その姿を目が眩むほどフラッシュを連発して撮影されたので、車が走り出してからタメ息をついた。

「これ、うちが治らん障碍やったらキレたかもしれないわ。どんだけ人を晒しもんにするねん」

鮎美の言葉を聞いて松田川もタメ息をつく。

「他人の不幸は面白いんだよ。救いようのない人のサガだね。私が婚期を逃してるのも、看護婦たち、裏でコソコソ言ってるから」

「女医さんって恵まれた感じしますけど？」

「そう見えるでしょうけど、かなり生きにくいよ」

松田川が女医の苦労を語っているうちに、自民党大会が開かれている会場に到着した。再び車イスに乗せてもらい、鷹姫に押ししてもらって会場に入ると、万雷の拍手で迎えられた。ステージ上で他の国会議員たちと合流する。鷹姫は記念撮影のために押ししていくべきステージ上の位置を事前に教えられていたので、そこに車イスを停めると、ステージをおりる。鮎美はステージの中央、谷柿の隣りに配置されていた。谷柿が笑顔で全体へ叫ぶ。

「芹沢先生が復活してくださいました!!」

「……」

うちはイエスカ、と突っ込みたいのを我慢して笑顔で手を振る。大きな声は出せないなので、せめて笑顔だけは全力でつくる。

「芹沢先生の復活は、我が自民党復活の象徴です!! みなさん、万歳三唱でしめましょう!」

もう大会のプログラムは、ほぼ終了していて、あとは万歳三唱しつつ記念撮影するという段取りだけだった。

「万歳! 万歳! 万歳!」

鮎美も大きく手を振るのは腹部の傷に悪いので、ゆつくりと低めに万歳して会場の雰囲気を持ち合わせていく。総選挙で大敗した自民党は復活を狙い、朝からの党大会で気運を盛り上げていたようにテンションの高さに入場したときは引いたけれど、鮎美も盛り上がりに合わせて、ゆつくりと車イスから立ち上がった。鮎美が立つと、また大きな拍手と万歳が続く、党大会は谷柿の願い通り成功裏に終わった。

1月24日 第177回国会

翌1月24日の月曜朝、鮎美は議員宿舎の自室で身支度をしていった。なるべく大きな動作はさけた方が好いので鷹姫と松田川が着替えを手伝ってくれる。

「うちは今は着替え一つにも人の手に頼る……。前に鷹姫と視覚障碍者の体験をしたけど、あのときは短時間やったけど、こうやって朝から夜まで……。夜も自由に寝返りできん状態ちゅーんは、精神的にも肉体的にも、かなりの負担やね。本人だけや無くて、まわりで助けられる人も」

「あの話は他言無用ではなかったのですか？」

「松田川先生は医師やし、守秘義務があるからええんよ」

「どんな体験したら人に言えない障碍者体験になるわけ？」

「鷹姫が全盲の人で、うちが盲導犬ですわ。事情を知らん人が見たら、変な行為に見えますやん？」

「盲導犬かあ……。あれの育成って大変らしいし、年老いて役目を終えた盲導犬を引き取る事業もあるらしいよ。癌の多い犬種だから、かわいそうな最期になることもあるみたい」

「犬も癌になるんや？」

「らしいよ。私は人医、人の医者だから、詳しく知らないけど。はい、終了」

身支度が終わり、今日も鮎美は上半身は制服、下半身は黒いロングスカートという服装になった。車イスに乗り、鷹姫に押ししてもらって廊下へ出ると介式と男性SP、それに翔子が待っていた。翔子も国会開会式なので新調したスーツとスカート姿だった。

「翔子はん、元気そうでよかったわ」

「そんな…芹沢先生の方こそ大変で……。お怪我は、どうですか？」

「うん、順調よ。心配おおきに。ほな、遅刻せんうちに行こか」

国会開会式は参議院で開催されるので議院宿舎から車イスで移動すると、少し回り道しなければいけない部分もあり、やや早めに行き、

議事堂内では車イスから立ち上がって自分の脚で、決められていた自席に座った。

「……………」

とうとう国会議員としての議席に座る。鷹姫と介式、松田川らは外で待ち、翔子は同じ自民党となったので配慮があつたのか隣席になつていた。鮎美の右手が少し震えているので翔子が心配する。

「大丈夫ですか？　手が震えて…」

「……………」

鮎美は震えていた右手を左手で押さえた。

「この感じ……………懐かしいわ……………」

「懐かしい？　国会議事堂が？」

「ちやうよ。いよいよ始まるんやな、うちの戦いがって想う気持ちよ。

剣道の試合前も、そうやった。この震えは武者震いよ」

「今日は二度の本番がありますから気合が入ります」

「翔子はんも、うちに賛同してくれて、おおきにな」

「私は芹沢派ですから」

すっかりなつてくれた翔子からは尊敬の眼差しを感じる。他の議員たちも少しずつ入ってきた。民主党の直樹も、それほど遠い席ではなかったので声をかけてきた。

「やあ。弔辞、頑張つて」

「頑張るようなもんとちやうけど、頑張りますわ」

直樹も鮎美の計画に賛同してくれていると詩織から聞いているけれど、今は秘匿を優先して、とくに何も言わず、西村の弔辞についてだけ触れて離れていった。直樹と鮎美の、どちらが弔辞を述べるかについては本人たちの知らぬところで民主党と自民党が取り合いをしていたらしいけれど、二人とも争って得たいようなものではないので決まったことに異議はなく、直樹はあつさりとしていた。そろそろ多くの席が埋まり、真冬でも暑苦しいほど燕尾服の紳士たちで議事堂は埋まる。国会開会式は参議院へ衆参両院の議員が集まり執り行われるので、参議院議員203名が男女半々、年齢も各世代ほぼ均等なのに対して、従来通りの選挙で選ばれている衆議院議員1200名は9

割が男性で、しかも50代から70代に集中している。合計1403名が参加するには席が足りず、傍聴席を使っても立ち席があるほどだった。そんな密集した中で、がらんと一部に空席が続く一帯があり、とても異様だった。

「あそこは共産党か……やっぱり、今年も参加せんのか？」

「え？ 共産党は開会式に参加しないのですか？」

翔子が問うてくる。まだ政党に所属して日が浅いので、知らないように鮎美が教える。

「戦後ずっと欠席やって。理由は国民主権なはずなのに、天皇陛下が政治的な内容も含む、おことばを述べられるのが、気に入らんらしいわ。憲法の国事行為を逸脱するて」

「それほど政治的な発言があるのですか？」

「いんや、毎年ほぼ同じおことばで、たいして政治的やなかったよ。どっちかというと、あの玉座っぽい高いところから、国民を見下ろすのが気に入らん感じやと思うわ」

鮎美が見上げる先には議長席や事務総長席、大臣席などがある壇上があり、そこを今だけは広くスペースを空けて、天皇の着座する御席が置かれていた。

「ま、どう見ても王様か皇帝の席やちゅー見解は、うちも理解できるけど、だからって欠席するのは、どうかと思うわ」

「そうですね。そういう態度は私が言うのも何ですけれど……あ、一人だけ……」

翔子が共産党議員たちのために空席になっている場所に一人だけ若い女性議員が進んでいくので注目し、鮎美も見ると、ライトグリーンのスーツスカートを着ている20代前半の女性議員で、ほっそりとした華奢な肩は陽湖とも似ている魅力があり、鮎美には見覚えがあった。

「キョウちゃんやん」

「あの人、もしかして党の方針に逆らって出席を？」

「みたいやね。顔が硬いもん」

音羽は緊張して強ばった顔つきで決められた自席に座ると、まわり

に誰もいない中、背筋を伸ばして膝に手を置いている。全員が欠席するはずの共産党議員が一人だけ顔を出したことは、他の議員たちにも注目され、話題にされているので、ますます音羽は緊張してメイクしている。それでも顔色が悪くなっている。それでも堂々と座っているという決意が感じられる目をしていた。

「キョウちゃん、キョウちゃん」

あまり大声を出さないように鮎美は手を振った。音羽が気づいて鮎美を見て、一瞬手を振り返そうとしてやめ、それから数瞬迷って、手を振り返してくれた。さらに可愛らしい安物っぽいナイロン製のライトグリーンベルトの腕時計を見て、まだ少し時間があったので、鮎美たちの方へ歩いてくる。誰かと話して緊張を解きたいのが、よくわかったので鮎美は笑顔で迎える。

「元気そうやね、キョウちゃん」

「アユちゃんこそ、元気そうでよかった。怪我は、もういいの?」

「完全やないけど、元気やよ。なあ、キョウちゃん、一人だけ参加なん? 党内で」

「うん……」

「なんで?」

鮎美の率直な問いには周囲の議員たちも興味津津なので雑談していた声が消えて静かになる。

「だって普通に考えて開会式って出るものじゃない? なのに、党のみんなが絶対ダメって言うし。絶対ダメって言われると、逆に絶対出なくなるし。ダメな理由が天皇がどうのこうの、意味不明だったから。いい人たちなんだけど、変に頑固なところあって話し合ってもラチあかないし」

「なるほど。けど、それで党内での立場は、大丈夫なん?」

「処分するかもって言われたけど。なら、すれば? って言い返した。女を舐めるな、って感じ。争いは話し合いで解決するって言ってたくせにさ、決裂したら処分っておかしくない?」

「ええ根性してるやん。追い出されたら、拾ってあげよな」

「えく……自民はお金に汚いから嫌。いつそ、若い女の子だけで何か

政党をつくろうよ。アユちゃんの秘書が誘ってくれた超党派連盟も面白そうだけど……あ、…」

音羽は何か考えたようで少し黙り、それから鮎美に顔を近づけてくる。それが密談したいという意味であることは、政治家になる前、女子小学生になったときから本能的に知っている。鮎美も心得て音羽の唇へ自分の耳を近づける。緊張で口が渴いた音羽の健康的な口臭を感じると、鮎美はキスしたい衝動が燃え上がったけれど、自制した。

「党の人に訊いたら、アユちゃんのグループに入るのもやめとけって言われたけど、今からでも間に合う?」

鮎美は頷いて、今度は唇を音羽の耳へよせる。

「もちろん、歓迎よ。なんで気が変わってくれたん?」

「今週号の週刊紙に私もパンチラ写真、載せられた。アユちゃんと同じパターン、壇上で椅子に座っていると、膝の隙間からスカート狙われた。めっちゃ眩しいフラッシュ焚かれて、ずっと手で押さえてたのに立ち上がる時の一瞬を撮られてた」

「懲りんヤツらやな。とことん懲らしめたる」

「うん、叩きのめそう」

囁き合った後に笑顔で拳を合わせたので、ますます周囲の議員たちは興味をもっているけれど、内容は漏れていない。定刻が近づき、音羽は席に戻った。いよいよ開始時刻なので静かになり、国会議員以外の参加者である最高裁判所長官、会計検査院長、議員でない国務大臣もそろって起立する中、天皇が入場し御席前方の階段を登って着座した。演壇へ久野にかわって新たな衆議院議長となった民主党の横道高広が議場に向かって式辞を述べ、それが終わると天皇が議場に向かって、おことばを述べる。

「本日、第177回国会の開会式に臨み、全国民を代表する皆さんと一堂に会することは、私の深く喜びとするところであります。国会が、永年にわたり、国民生活の安定と向上、世界の平和と繁栄のため、たゆみない努力を続けていることを、うれしく思います。ここに、国会が、当面する内外の諸問題に対処するに当たり、国権の最高機関とし

て、その使命を十分に果たし、国民の信託に応えることを切に希望します」

「……………」

例年通りやん、どこが政治的やねん、と鮎美は黙って心中だけで夕メ息をついた。これから大役があるのに不思議と緊張しておらず議長に呼ばれるのを待つ。たとえ失敗しても、いきなり刺されたりすることはないという開き直った余裕だった。鳩山総理をはじめとする閣僚による施政方針演説などが終わり、いよいよ弔辞となった。

「議員西村広松君は、昨年12月20日逝去されました。まことに痛惜の極みであり、哀悼の念に堪えません」

日本国1億2千万人の代表たる千数百人が静かに居並ぶ中、鮎美の名が議長に呼ばれる。

「芹沢鮎美君から発言を求められております。この際、発言を許します。芹沢鮎美君」

形式的には鮎美が求めて弔辞を述べたいということになっていたので、前例通りの言い回しで呼ばれた。

鮎美は自席から立ち上がり、自分の脚で議場を歩いて進み、ロングスカートの裾を踏まないように、ゆっくりと登壇する。

「……………」

「……………」

天皇と目が合い、目を伏せて一礼した。それから議場に向かって一礼し、原稿を読み上げる。

「議員西村広松先生は、平成22年12月20日、胃ガンのため逝去されました。享年70でありました。まことに痛惜哀悼の念に堪えません」

原稿は鷹姫が前例を模範として、西村の活動や人生を調べて書いたものだった。鮎美は、はつきりとした大きな声を議場に響かせる。今ばかりは傷跡完治のことも忘れた。

「西村広松先生は平成21年10月、阪本市再生会病院において、現在の医療では治ることのないステージ4の進行ガンであるとの確定診断を受けられました。胃ガンは国民の中でも罹患率が高く、その克服

と予防が今後の課題とされるガンです。以後、西村広松先生は末期のガン患者として、常に死を意識しながら国会議員の仕事に全身全霊を傾け、一年二ヶ月の月日を懸命に生きられたのであります。私は、ここに西村広松先生の御霊に対し、謹んで哀悼の言葉をささげます」

鮎美は一呼吸おいて目を閉じ、弔辞を再開する。

「西村広松先生は昭和15年、福井県敦賀市にお生まれになり、その後は京都市、井伊市、阪本市と転居されました。先生が4歳のとき、アメリカ軍が阪本市を空襲し、その帰路において爆撃機を護衛していた戦闘機があぜ道にいた先生の姿を見つけ、機銃掃射してきたそうです。先生はとっさに田へ逃げ込み、事なきをえたのですが、わき腹にカスリ傷を負われたそうです。わずか数センチでもズレていけば、そこで終わりだったと物心ついてから何度も周囲に述懐されています。けれど、このときの空襲で阪本市で働いていた父親を亡くされておられます。投下された爆弾は後に長崎へ投下されるプルトニウム型原爆ファットマンと同形、同重量、同寸法で通常爆薬を充填した原爆投下演習用の模擬原爆パンプキンです。西村先生は後に、亡きがらとなった父の頬を母が撫でていた姿と、お前が生きていてくれて良かったと抱きしめてもらったことを鮮明に覚えていると言ひ残されています」

この部分を推敲した鷹姫が妊娠中だった母親を事故で亡くしたことを想い出して泣いたかもしれないと想うと、鮎美も涙を流した。弔辞なので涙はたむけになるけれど、声は泣き声にならないように気を張って読む。

「西村先生は戦後、父親を亡くされたことで経済的に苦勞され、進学を諦め東京の日本橋にて呉服商へ丁稚働きに出られるも華麗な呉服の世界が肌に合わぬと3年で帰郷された後は堅実な左官の仕事に就かれ、その道一筋に67歳までお勤めされます。この間にご結婚され一男二女を育て上げられました。地元の阪本市を愛され、参議院議員に当選されてからは諸政策には是々非々をもつてのぞまれつつ、阪本城の遺構を保存し、多くの人々が訪れるような美しい場所にしたいと、風景保存会を設立され、精力的に活動されていました。西村先生が大

切に愛された阪本城について少し説明いたします。この城は、かの明智光秀公の居城として築城され、琵琶湖に面し京都に近い要衝として、安土城とつながる織田政権にとって重要な城で、その壮麗さについてはポルトガルの宣教師が安土城に次ぐ日ノ本2番目の城だと書き残しています。それほど城でありながら歴史に埋没したのは、ご存じの通り光秀公の本能寺の変からの転落にあります。西村先生は史上に咲いた一輪の花として愛されました」

鮎美は流した涙をそのままに原稿から議場へ視線をあげて読む。鷹姫が書いてくれた原稿なので、ほぼ暗記しているし、アドリブで変更するつもりは一切無かった。

「議場の皆様に申し上げます。この国のありようは先人たちが命をかけて築いてきた一瞬、一瞬の歴史の積み重ねです。そして、私たちは今、国民の代表であります。これからの国のありようについて、この国会において真摯に、真剣に、そして徹底的に議論しようではありませんか」

ゆつくりと鮎美は議場全体を見渡した。高い壇上からだど、前列から最後列、そして傍聴席まで、すべてが見えるし、全員がこちらを見ている。鮎美は千を超える議員たちの視線を受けて、怯みよりも勇みが湧いた。人と会うことの極端に少ない入院生活より、この場こそが自分の居場所だと感じる。

「西村先生は平成21年、阪本城の風景保存会を任意団体から法人格のあるNPO法人へ導かれました。新しい一歩で活躍しようとなさっていたやさき、病魔に侵されておられました。平成22年2月、西村先生は委員会での質問に立たれ、抗ガン剤による副作用に耐えながら、渾身の力を振り絞って文部科学省の城郭保存に関する姿勢を質されました。命を削って、立法者の責任を果たされました。先生は12月20日、よみの国へと旅立たれました。その最期に私を呼んでくださり、病身をおして声を絞りだすように次の如く、おっしゃいました。阪本の城下町を人々が訪れるようなええとこにしたい。琵琶湖の中にまで続く石垣の痕跡も利用してな。と、生涯の多くを左官仕事に打ち込まれた西村先生にとって城木造部分が焼失しても残る石垣

はことに思い入れが深かったのだと想います。その後間もなく息を引き取られました」

鮎美は演技ではなく本当に胸へ痛みを覚えたので両手を胸の前で組み、涙の粒を零しつつ、顔を天へ向けた。西村の死は鮎美にとって、死の直前までは他人事だったけれど、今では生涯忘れない一期一会だと想っている。その想いを声にしてあげる。

「バトンを渡したしの、タスキをつないで、しっかりと引き継いでくれや、そうおっしゃる西村先生の声が聞こえてまいります。先生、あなたは国民の誇りであります。ここに、西村広松先生の国と地域、歴史への愛、気骨あふれる気高き精神をしのび、謹んで御冥福をお祈りしながら一同を代表して、お別れの言葉といたします」

鮎美は弔辞を結ぶと、黙祷してから一礼し降壇した。天皇が退場し、開会式は完全に終わった。鮎美は少し疲れたので自席に腰を下ろした。翔子はもちろんのこと、他の自民党議員たちが口々に誉められる。とくに谷柿がわざわざ声をかけに来てくれたときは礼儀の上でも立とうとしたけれど、手で制してくれた。

「そのままです。お疲れ様でした、芹沢先生、素晴らしい弔辞でしたよ」

「ありがとうございます」

「これから退院の記者会見をされるそうですね」

「はい」

「あまり先走ったことはしないでくださいよ」

「………」

鮎美が目を泳がせた。どういうルートで情報をつかまれたのか、どこまで知られているのか、静江や石永にも黙っていることを、知られているようだった。谷柿は穏やかに忠告すると、他の議員たちへも声をかけていき、鮎美とは離れた。鮎美は通路が空く頃合いを見計らって立ち上がり、議場の外に出た。介式と松田川、鷹姫が待っていてくれた。

「お疲れ様です」

「お疲れ」

鷹姫と松田川が労ってくれ、介式は鮎美のそばに立つと、鮎美ではなく周囲に目を配って警戒する。鮎美は車イスに座りながら問うた。

「国会内やのに、そんなに警戒せんでも大丈夫なんじゃないですか？」
「不快でしょうが、ご理解ください」

介式は一瞬だけ、鮎美を見て短く答えた。

「不快なことないよ。おおきに、ありがとうございます」
「……」

介式は鮎美から感謝を込めて手を握られて困る。

「……。芹沢議員、私の手を塞がないでください。いざというとき対応が遅くなります」

「そうやね。気いづけますわ。介式はんの手、強そうで頼もしいわ」
「……」

「芹沢さん、そろそろトイレに行っておく？」

主治医の問いに鮎美は感謝と恥じらいで答える。

「あ、うん、そやね。お手数ですけど、お願いします」

鷹姫に車イスを押してもらい、多目的トイレに入る。鷹姫は車イスを固定すると、すぐに多目的トイレを出て、扉の前に立つ。男性SPも1名、そばに立ってくれた。音羽が近づいてきて問う。

「アユちゃんは一人でトイレができないくらい悪いの？ お腹の下のあたりを刺されたらしいけど、ちゃんと治るの？」

「……。そうだったことにはお答えできません」

鷹姫は介式と同じような答え方をした。まだ鮎美は下腹部の皮膚に張力がかからないよう息むこともできないし、尿もカテーテルを通じて足元のパックに貯めてもらっている。そういう姿を自分だったら他人に知られたくないので鷹姫は唇を固く閉ざした。それで音羽も配慮して訊くのをやめて待つ。他の議員たちも通りがかりに鮎美が医師同伴で多目的トイレに入るのを見ており、若い女性が気の毒にという目はくれていた。一方で鮎美はトイレ内で松田川から処置を受けて衣服を整えると、ずっと制服の内ポケットに着けていた虹色のバッチを表に出して胸襟へ着ける。

「……うくん……位置が……並べたいのに、ぎちぎちや」

議員バッチと虹色のバッチ、そしてブルーリボンのバッチを三つとも同じ高さに並べて着けたいのに、女物の制服では胸襟の面積の都合上、どうにも狭くて不格好だった。鏡を見て悩む鮎美へ松田川が提案する。

「いつそ胸襟は議員バッチだけにして、その二つは胸ポケットに着けたら？」

「その手もあるね」

やってみると、美しく決まった。

「よっしゃ」

「じゃ、いよいよ行きますか」

松田川も、めったに確認しない自分のバッチが歪んでいないか手で触ってから鮎美の車イスを押して、多目的トイレから出た。待っていた鷹姫と音羽はバッチのことには気づかず、音羽が自分に関わることを問う。

「アユちゃん、さっきの話、私はこれから、どうすればいい？」

「キョウちゃんとは打ち合わせする時間もないし、このままついてきて。頭数に使って悪いけど、顔を出してくれてるだけでいいよ。訴訟への参加手続きは、すぐに弁護士さんに頼むし」

「OK、泣き寝入りなんかするもんかよね」

音羽も連れて進むと、年齢の近い同性議員なので仲良くなるのは自然という見方もあるものの、やはり自民党と共産党なので周囲が注目してくる。その視線を受け流して赤坂にあるホテルへ移動した。ホテルの大会議室では、すでに記者会見の準備が終わっていて、鮎美たちが控え室に入ると、詩織が呼びかけてくれた朝槍、畑母神、直樹、夏子、翔子、三島などの他にアイドルや芸能人、ニュースキャスター、以前に鮎美へ陳情してきた女性団体の代表などがそろって待っていた。

「みなさん、うちの呼びかけに応じて、お集まりいただきありがとうございます
ございます」

鮎美が挨拶を始めたのに詩織は小声で、すいませんトイレに、と

言って控え室を出て行く。朝槍もついていく途中で松田川と目があつた。直接の面識は無いけれど、同じバッチを着けている者同士、あしからず会釈したし、何より朝槍にとつては鮎美がバッチを着けてくれていたことが、とても嬉しい。なので詩織と女子トイレに入ってから戸惑いつつ言った。

「ねえ、シオリン、本気でやる気?」

「はい、本気です」

あつさりと当然のように詩織は頷きながらスカートをたくし上げ、下着をおろした。二人で一つの個室に入っているので誰にも見られることはないけれど、ホテルのトイレなので女性記者も出入りする可能性や隣りの個室にいる可能性もあり、ごくごく小声で耳へキスするほど、唇を近づけて話し合っている。

「全国放送されるの? つままない開会式より、この記者会見の方がずっと注目されてて視聴率すごいはずだよ。長く入院してた芹沢先生が、とうとうカメラの前に出てくれるってことで。しかも、ただの退院挨拶じゃないことは控え室に出入りしてるメンバーを見れば記者たちもわかるはずだし。きつと生放送で日本中に流れるよ」

「だからこそ興奮するんじゃないですか。こんな大舞台で大まじめな話をするのに、私はいくつもバイブをつけてイクなんてこと世界中で知ってるのはナユだけですよ」

そう言つて詩織は便座に座り、ウォッシュレットで股間の前後をしっかりと洗った。それから求めるように背中を向けて両手でお尻を広げてみせるので朝槍は仕方なく舌を入れて、前からは指で刺激して、いつその場で絶頂させようかと思つたけれど、詩織は寸止めを要求した。

「ハア…そろそろ、これを入れてください。数珠になつているのを後ろに、前には凸になつてるところを奥まで入るように、あとツブツブがクリにあたったままになるようにテープで強く貼り付けてください」

「……こんな凶悪そうなバイブ……生放送中に喘ぎ声を出したら、どうする気?」

「あと、これを乳首にお願いします。挟むようになっていきますから、強めに挟んでテープで貼り付けてください」

「……………」

もう忠告を聞いてくれないので朝槍は言われるままに準備しつつも、やっぱり気が引けた。

「芹沢先生も私たちのバッチを着けてくれて。いっしょに連れてきてたお医者さんっぽい人も着けてくれたのに、とうの私たちが、こんなフザけたことしてるなんて知ったら……………私たちのこと、どうしようもない変態だつて偏見が……………」

「これがリモコンです。操作を覚えてください。こっちは乳首につけているバイブのリモコンで、どちらも片手で操作できますから、ナユの左右のポケットに入れて容赦なく責めてください。私が発言している間は、とくに」

「……………」

「あと10分ありますから、操作を覚えるついでに何度もイカせてください。もしかして私が満足したら記者会見中はやめるかもしれないよ」

「……………わかったよ」

わずかな望みをかけて朝槍は巧みに操作しつつ、リモコンだけでなく舌も使つて詩織を高まらせたし、何度も絶頂させたものの、女性の絶頂は男のように一度で終わるものではないことは熟知している。やはり詩織は記者会見が始まる時刻になつても、やる気満々だった。二人で女子トイレを出てから、朝槍が乗り気でない顔色なので脅迫する。

「もし、記者会見中に私を3回以上イかせてくれず、3回以上イかせてくれた後でも焦らしではない手加減を感じたら、どうすると思いますか?」

「……………どうするの?」

「私は泣き出して朝槍先生に無理矢理こんなもの着けられましたって言います」

「ちよつ……………それ……………私が破滅……………」

「破滅したくなければ、ちゃんとしてください。リモコンを操作するだけじゃないですか。何食わぬ顔でスイッチを入れたり切ったり、それだけのことです」

「……………」

もう逃げ道が無いことを朝槍は思い知りつつ、せめてバレないことと記者会見の政治的目標が達成されるよう祈りつつ、控え室に入った。鮎美が詩織を見て言う。

「トイレ長かったけど、調子悪いん？　うちの頼んだことで、かなり疲れたんちゃう？」

「疲れはしましたが、やり甲斐はありました。そして、ここからが本番です。私は人前で話すのは経験が少なくて、もし緊張してあがってしまったらフォローしてください」

「……………」

嘘つけ、と朝槍は思ったけれど、鮎美は労うように詩織の背中を撫でた。肌が敏感になっていく詩織は気持ちよさそうに目を細めているし、目線で求めてこられたのでスイッチを弱で入れた。詩織は熱いタメ息を漏らしたけれど、モーター音は外に漏れなかった。控え室より記者会見場は、もっと雑音が多いので音は問題なさそうだったけれど、やはり演説の最中に絶頂するつもりでいる詩織の喘ぎは心配この上ない。何より鮎美が真剣に同性愛の問題に取り組んでくれているのに、大きく裏切っていて申し訳なかった。詩織が淫靡な野望に光った目で告げる。

「鮎美先生、定刻です」

「おっしや。いざ出陣やー！」

鮎美は雄々しく頬を両手で叩いて、自分の脚で記者会見場へ向かう。続いて夏子、畑母神、朝槍、直樹、三島、他の女性団体代表、詩織、翔子という演説の順番で歩く。松田川や音羽、アイドルや芸能人などは賛同者として列する。長時間の記者会見になる予定なので全員に椅子が準備されていて、そこに着席した。鮎美がマイクをとり話し始める。

「本日はお集まりいただき、まことにありがとうございます。この通

り、私は元気に回復しつつありますので、ご心配くださった皆様方、重ねてお礼を申し上げます。ありがとうございました」

鮎美は一度、起立して一礼してから、触らないように下腹部へ手をやる。

「まだ傷に障りますので、座ってお話させていただきます」

鮎美は着席してマイクもスタンドに固定した。

「さて、刺された私が犯人に対して、どのような発言をするのか、そこに大きく注目されていることと思います」

すでに入場した時から激しく焚かれていたフラッシュがより激しくなる。鮎美は日本国民のすべてとは言わないまでも大半に見られている覚悟で語る。

「まず、私を刺した人、名前は伏せさせていただきますので彼とします。彼に対し、私は先に謝っておくことがあるので、どうか彼がこの放送を見る機会があることを祈りつつ、謝ります」

鮎美は感情が高ぶって早口になりそうなのを自戒して一呼吸おいた。

「ラブレターをくださったのに無視してしまい、ごめんなさい。勇気を出して告白してくれはったのに、完全に無視して忘れてしまい、本当にごめんなさい」

鮎美は頭を下げ、それからカメラの列を見上げる。

「少し言い訳させてください。あのデートに指定してくれはった日、うちは当選して初めての市議会議員選挙を応援するという仕事があり、とても忙しかつたのです。それでも返事だけはすべきだと考えて、自分の代わりに秘書にでも行ってもらうかと思っていました。それが党費で給料を払ってもらっている秘書の私的利用になる気もして、かといって自分の多忙さでは無理で結論が出ず、とくに指定の時間は選挙において出陣式という大切な式典にかかる時間であったので、どうにも行けなかったのです。ごめんなさい」

また鮎美は頭を下げた。

「あと一つ、あの当時は自民党に入ったばかりで、いろいろと指導をうけ、勉強することも多く、そして党からは、彼氏をつくるな！ とア

アイドルのように注意されていて、どんな男子に告白されても、きつと断っていたと思います。それでも自分を好きになつてくれた人が、どんな人か知ろうともせず、まして断りもせず無視したことは申し訳なく想います。せめて無視せず、断っていたら、こんなことにはならなかつたのではないかと深く後悔します」

鮎美はテレビカメラを探して、いつか大津田が映像を見ることがあるかもしれないと想いながら言う。

「ごめんな、シカトして。後になつて手紙くらい送ろうかと想つたけど、連絡先もわからなくて、どうにも忙しいで忘れてしもたんよ、ごめん」

鮎美は深く長く頭を下げた。

「私を刺すという凶行に彼が及んだ責任の一端は私にあつたと思いません。私、個人としては傷の治りも進み、また一部の報道で彼が発達障害を患っていたということもあり、彼には罰より療育こそ必要ではないかと考える部分もあります。けれど、これも一部報道であり確定事実ではないかもしれませんが、三重県に彼が住んでいたとき、他の女子に傷を負わせ、結果としてその子が自死してしまったことを考えると、また、その子の家族の気持ちを考えると、次の被害者を生まないための方法も必要ではないかと考えます。いずれにしても、罪刑法定主義にのっとり犯行時の法律によって適正に司法機関が判断を下すことかと考えますので、私から彼へ言及することは以上です。けれど！」

鮎美が語調を強めた。

「この事件の真犯人に対しては、うちは容赦なく報復したいと考えていますし、その準備はできています！」

記者たちも、そしてカメラの向こうの視聴者たちも、真犯人などいるのか、と強い疑問に戸惑っている。その戸惑いがピークに達して一部の記者が、まだ質問時間ではないのに問うてくるまで鮎美はたっぷり間を取ってから、焦らしの後の快感である答えを与える。

「真犯人とは！　うちを特集した週刊紙です！」

今も記者会見場のどこかにいるだろう週刊紙の記者を睨むように

前を見て続ける。

「あの悪意に満ちた報道とは言えぬ報道！ 報道の名を借りた悪！ ありもしない、そして自分たちさえ可能性はないとわかっていながら私と細野先生や、私と雄琴先生に何か不倫のようなことが有ったかと表紙を見ただけの人には誤認させる書きよう！ あの週刊紙を見た彼は、刃を私に突き立てることを選びました！ 告白を無視したくせに権力ある男には媚びる女、スカートから下着を見せつけ男を誘う下品な女、こんな女は糾さなければいけない！ そのように発達障碍の彼は思考してしまった。報道機関には、真実をわかりやすく伝える道義的義務があるにも関わらず！ また色々な読者がいて、読み手の知的レベルによっては誤解される可能性を極力排除すべき配慮も必要だと自覚すべきであるにも関わらず！ いたずらに、わずかな写真から疑惑を捏造し、無用の凶行を発生させた責任!! この責任は重大かつ明白であると私は強く批難します！ はっきり言います、うちを刺したのは、あの週刊紙です!! 真犯人は週刊紙であり、包丁やナイフに罪がないように、週刊紙にただ踊らされて包丁を握った彼にも罪はない！ 真に罰するべきは、あの記事を書いた記者！ 写真を撮ったカメラマン！ 編集者！ 出版社！ 印刷所！ 書店です！」

鮎美の断言にどよめきが起こり、それに答える。

「印刷所や書店まで含めるのかと、驚きのことでしよう、これについては後述します。そして現在の法体系では、この真犯人に直接的な刑事罰をかけることはできません。また、今後も言論の自由という大切な権利のことを思えば、報道機関に出版内容によって刑事罰がかされるような法整備はすべきでないでしょう。けれど、実質的犯人を今回の件で見逃すことはしません！ きっちり訴えます！」

鮎美が合図すると、アイドルの一人が立った。

「彼女は愛知県犬山市のローカルアイドルでワンコちゃんです。うちと彼女の共通点、わかりますか？」

鮎美は問いを発したけれど、答えを待たずに話を続ける。

「そう、あの週刊紙にパンチラ写真を載せられたうちの一人です」

「ワンコちゃんです！ 犬山市をよろしく！ って、そんな場合じゃ

ないですよ。今回は芹沢さんに賛同してます。いっしょに頑張ります！ あと、犬山市名物ゲンコツ、美味しいですよ！」

この記者会見では、今しかチャンスがないのでワンコは最大限にローカルアイドルとして地元を売り込み、着席した。鮎美は真剣な声で話を続ける。

「さて、みなさんが電車に乗っているとき、向かいに座っている女子高生のパンツを撮影してネットにあげたりすると、即逮捕されて、えらい目に遭うというのわかりますよね。では、なぜ、うちを含めた女性議員、アイドル、芸能人、ニユースキャスターなどの下着写真や下着のラインが明らかかな写真を出版しても大丈夫なのでしょう？」

この問いにも答えを待たず語る。

「そう、公人だから、という理由です。他に、壇上に座るとき撮られるような短いスカートを履いていたからだ、という落ち度の指摘もあるでしょう。胸元の開いた服も同様です。立つとき、座るとき、物を拾うとき、ちよつとした動作で撮れる一瞬を狙っています。公人が公の場で行った行為だから撮影して出版してOKという認識なのかもしれません、そのへんの女子高生が公の場である電車内や駅で、立つとき、座るとき、うっかり下着を見せてしまったところを撮影して出版するのは、法律上は何らかわりません。公人と私人で名誉毀損の扱いに差があるのは、公共の利害に関する事実にかかり、かつその目的が専ら公益を図ることにあったと認める場合のみです。そして、いわゆる痴漢行為を罰する迷惑防止条例には被害者が公人、私人であることによる扱いの差はありません。ここまで言えば、おわかりでしょう。名誉毀損罪と迷惑防止条例違反で、こちらは行為にかかわったすべての当事者を訴えます。カメラマン、記者、編集者、出版社、印刷所、書店、すべてです」

また、どよめきが起こる。

「書店や印刷所までは、やりすぎではないかとお考えになるでしょうが、ネットに同意無く卑猥な写真をアップされた女性がプロバイダーに公開の停止を求めることはできますよね。停止の求めがあったのに漫然と放置すれば責任を問われることもあります。ひるがえって

印刷所がすべての印刷物をチェックするのは不可能だ、という言い訳もあるかもしれませんが、うちが載せられた週刊紙では表紙に明白にパンチラ写真である旨があり、少しでも善良さをもってチェックすれば、きわめて容易に発見できたでしょう。これをしなかった責任を今回は問います。名誉毀損罪の公訴時効3年、刑事告訴できる期間は6ヶ月です。加えて民事的な不法行為による損害賠償請求の時効は3年。今から3年に遡って、週刊紙や写真誌に同意無く精神的苦痛を感じるような写真を載せられた人たちを集め、集団訴訟します。すでに賛同してくれはったアイドル、芸能人、ニュースキヤスターのみなさんを紹介します」

鮎美は賛同者を紹介していき、また話を続ける。

「今まで一人一人では泣き寝入りしていたケースでも、集まって力になれば、きつと勝てます。また、この裁判に対しては裁判所に女性裁判官が担当することを求めます。普通、裁判官の忌避には裁判の公正を妨げるべき事情があるときに限られますし、そもそも女性裁判官の数は少数ですが、今回の訴訟は証拠として大量に、私たちにとって男性に見られたくない写真が提出されることになるでしょう。したがって、裁判官だけでなく訴訟にかかわる書記官、鑑定人などにも可能な限り女性であることを求め、また被告が立てる代理人たる弁護士にも、被告に良心が残っているなら、女性弁護士を選んでくれはることを強く期待します」

鮎美は長く話したので手元の水を一口飲んだ。

「過去3年分の写真で、この訴訟に賛同してくれる方、どのくらい集まるかわかりませんが、うちらが被った精神的苦痛として請求する額は1部あたり10000円です。つまり1万部の発行部数があれば1000万円となります。この設定理由は単純です。もし、自分のパンチラ写真を撒かれたとき、それが50枚なら5万円、100枚なら10万円、そのくらい求めようと考えたからです。また、被告は複数におよび訴訟テクニク上、できるだけ連帯責任を追及しますが、フリーのカメラマン等、零細な事業者については個別に少額で示談します。大手には大手なりの大きな責任を問います。これでは法的恫喝では

ないか？　と思われるでしょう。そうです、これは恫喝です。そのくらい強く私たちが怒らないとセクハラは無くならないでしょう。会社内での小さなセクハラも、曖昧なうちは何度も繰り返しますよね？

こちらが怒鳴るほど強い拒否をしないと、いつまでも笑って誤魔化す。そして繰り返す。報道機関の役割とは何ですか？　公人のパンチラを追いかけることですか？　違うでしょう。横領や談合、不正を見つけて報道したり、これから行われる政策の利点と欠点を国民に紹介することであつたり、野党が示す対案を紹介したり、隠れた被害者、今回であれば自死した女子のことなどを取り上げることです。そういったところに心血を注いでいただきたいのです。そして今も、かなりの枚数を撮影してくれてはりますよね？　うちは今日は事情があつてロングスカートですけど、それだけ何百枚も連射してくればつたら、他の女性賛同者が動いたとき下着が写つたりするでしょう。それを撮るなどまでは言いません。取材は自由です。けれど、わざわざ何百枚もの中から下着が写った一枚を選び出して出版する、そこには公益性も良心もありませんよね。スカートを履けば、見えるときは見えるでしょう。けれど、撮って晒すのはやり過ぎです。花でいえば、桜は見るものであつて、枝を折って傷つけるものではないのです」

鮎美は原稿を見ずに話していたけれど、次の話題はより複雑なのでメモを開いた。

「お話をかえさせていただきます。ご質問などは私たちの方向性を示してから、お受けします。さて、現在、民主党が子供手当を大きく増額する政策を検討され、これが公約の半額程度で落ち着きそうです。私は政治を勉強し考える中で、対案を考えましたので紹介させていただきます」

話が糾弾ではなく表明になつたので鮎美は一礼してから続ける。

「少子高齢化を解決する施策として子供手当も良いかもしれませんが、私は同一労働同一賃金の原則から、妊娠と育児をする女性に対して全女性労働者平均賃金を国が支給し、個別の企業が負担している産休や育児休暇中の手当は努力義務に変えるべきだと考えています。

概要としては妊娠22週以降から子が幼稚園もしくは保育園に入所するまでの期間、月額21万円を支給するという施策です。この施策の利点は、そも日本社会の大半を占める中小企業において産休育休は与えられるケースが少なく、非正規雇用においては言うまでもありません。産休育休は一部の優良な企業と公務員である場合くらいに限定され、ここに女性間において大きな不平等が生じています。妊娠が労働といえるのか、という問いの答えよりも、妊娠育児は食料生産と同じくらい社会にとって重要なことであり、社会に対する貢献です。この貢献に報いるに平均賃金をもってあてるわけです。これによって多くの中小企業経営者を悩ませる女子雇用のリスクは激減すると同時に女性間の平等化がはかれます。すなわち、高給取りであろうが、無職であろうが、同じ月額21万円ということですが、妊娠が中絶される年間件数は10万〜20万で推移していますが、もし、この半分が産まれていたら少子高齢化は問題にならなかつたくらいです。とくに私も含めた10代での妊娠は多くが中絶されていますが、生物学的には妊娠に適した年齢です。もし、月額21万円が支給されるなら産むという選択をした18歳、19歳は多いでしょうし、この国の法律は16歳から女子に結婚の道を開いています。さて、ここで当然の声があるでしょう。それでは無責任な妊娠を誘発する、という声です。では逆に考え、無責任な妊娠とは何でしょうか？ 若年労働者の多くが非正規雇用となる中、いったい責任ある結婚をして出産ができる層は何%いるでしょうか？ きちんと企業が雇用という社会責任を果たさない中、それでも人口を維持するには国が妊娠に責任をもつべきだと、いえ、国ではなく国民全体が責任をもつべきだと考えるからです。とくに社会が複雑化し、教育が高度化したことで女子の大学進学率も向上しましたが、大卒時には22歳です。ここから3年働けば25歳、けれど妊娠に適した期間は18歳から27歳です。そして子は一人ではなく二人以上を産まなければ人口を維持できません。女子にとっては、あまりに忙しいですし、女子を雇用する経営者にとっても、たった数年働いてくれただけの労働者に長い休暇を与えねばなりません。この軋轢を解消するには、個人や企業の努力ではな

く、国すなわち国民全体の平等な負担が必要です。この施策が実行された場合、中絶件数は激減し、ゆるやかに少子高齢化は解消すると、加賀田知事も計算してくださいました」

鮎美が夏子を見ると、頷いて語る。

「これまでの子供手当などの努力もあり実は少子化には歯止めがかかりつつあります。これは出生数と合計特殊出生率のグラフを読み解けば、誰にでも見て取れるのですが、1975年から1985年の十年は出生数が急降下しています。この時期に産まれた人たちが再生産する20年後30年後である1995年から去年2010年にかけては出生数の低下傾向には歯止めがかかりごく緩やかとなり、合計特殊出生率に至っては回復傾向に転じます。もし、同じ率で出産を控えていたなら再生産する層が急降下していたのですから、もつと低下したはずですが、まるで生態系を維持するかのように微増に転じました。けれど、まだ足りません。欧米に比べれば、なお低い水準にとどまっています。この原因の一つに日本の妊娠中絶への容易さがあります。キリスト教国においては妊娠中絶に強い制限がなされており、対して日本はほぼ無制限です。ただし、これに制限をかけるのは女性の権利、ことにリ・プロラクティブライツにかかります。けれど、実質的に多くの妊娠中絶は経済的不安からなされています。つまり、産みたかったけれど、お金が心配でやめた、という悲しい選択です。この不安を解消すれば年間10万人の人口増が見込めますし、これは十年で100万人、移民を100万人受け入れるより、はるかに低リスクですし言語や文化の違いなどは生じません。未婚の私が言うのも何ですが、若いうちに産んでいただくのが生物学的には正しい選択です。かといって産まない結婚しないという選択も尊重されるべきですよ、念のため。むしろ、そういう選択を尊重するため、産みたい層には産んでもらわないと人口を維持できないわけです。私は県知事として芹沢先生の施策に強く賛成し、ここに党をこえて賛同の意志を表明します」

夏子がバトンを渡すように畑母神の肩を軽く叩いた。

「現在の子供手当でも、いささか問題になっているが、受給を目当て

で、にわかには日本へ入国するケースが想定される。これへ無制限に支給しては、納税者も強い違和感を覚えるだろう。とはいえ、外国人であることの一点をもって排除するのも、すでに日本で何年も働いていただけ、納税している人がいることを考えれば相応しくない。この区別を明瞭にするため、支給は日本での居住が五年を超える者に限り、また全額の受給には十五年を要するとし、六年目より1割ずつ漸増させる。つまり居住が10年であれば5割の半額ということになる。これは母親が外国人である場合で両親が外国人である場合は、より厳格な運用とし、最大で50%の受給とするよう調整する」

畑母神は鮎美の案への修正を語り終わると、自説であり都知事選の公約にもなる尖閣諸島を都が地主から購入することと、小笠原海域の警備強化の必要性と、北朝鮮拉致問題について説いた。次に朝槍が同性婚の法制化について語る。

「戸籍謄本は、その人の生き死にと婚姻が記載される、もつとも根源的な身分証明記録です」

ずっと真剣に活動してきたことなので熱く語るし、今だけはリモコンを操作して詩織を高めることをやめても不満そうな視線は来ないので話すことに集中する。

「人が産まれると、日付と出生地と父母が記録され、婚姻すれば別戸籍となつてパートナーと一つの戸籍になり、そして死ねば除籍される。その記録は遺産相続などの関係もあり、今から100年以上も昔のものまで残っています。生き死にと婚姻、この二つの情報がきわめて法的に重要だから残っているのです。けれど、同性愛カップルのことは、まるで無かったかのように、何も残らない。強引に残そうと想えば、養子縁組で疑似家族となれますが、親子とパートナーは違います」

朝槍は語り終わると、畑母神もしたように鮎美の施策に賛同していることと、鮎美も自説に賛同してくれていることを強調して終わった。次に直樹が自説を語る。やはり凶悪な性犯罪者に対する過酷な死刑制度の創設で、その死刑執行には詩織の提案を入れて公募もありうると修正した。

「芹沢先生も理解してくれているし、さつき控え室で話していたけれど、今回の刺傷事件で死んでいたり、より深い傷だったら、そう簡単に犯人を許せるものではないとも言ってくれていたよ。曰く、うちは聖人君子とちゃうし、自分が殺されたんなら、誰かソイツを殺してほしいわ、とね。ボクの妹を殺したヤツは、まだ獄中で生きている。三食、しっかり税金で食べて。そういえば、サリンを撒いたヤツも、まだ生きていたね。ああいう宗教テロなのか、政治犯なのか思想犯なのか、そんなヤツもさつきと殺したいけれど、政治犯の中には共感はできないものの、自ら正義と信じて変革を求めるケースもあるだろうさ。そういう思想犯に厳しくあたることは国家権力が自戒しなくてはいけないし、憲法36条の公務員による拷問及び残虐な刑罰の絶対的禁止は戦時中の特高を繰り返さないためというのが規定された本旨だろう。ボクも、これは大切だと考える。けど、けどね、性犯罪者つてのは、ただ自分の快樂、ただ自分の満足のためだけに、人を殺し、命を奪う、しかも殺す前に苦しめる、それ自体が楽しみだと。こんな存在に人権がいるのか？ いらないさ！ 明らかに！ この考えに賛同できないなら、少し想像してほしい、自分の家族が同じ目に遭ったら、友人が同じ目に遭ったら、そして自分が同じ目に遭ったなら、と」

直樹の次は三島の番だった。

「我々、ライフイージス、命の盾の会は芹沢殿の政策に強く賛同する！ 我々は出生前診断に反対する会である！ 産まれる前の命が障碍をもった子が否かを診断した夫婦は、子が障碍児であったとき96%が妊娠中絶する。しかし、中には片親、ことに母親が障碍をもった子でも産みたいと願うこともある!! だが、夫の反対や家族の反対で断念して中絶するケースが非常に多い！ 自己紹介が遅れたが、私の肉体は女であるが、心は男である」

三島が立ち上がって胸を張った。喪服のような黒い男物のスーツをノーブラで着ているのは相変わらずだったけれど、胸襟には色あせた虹色のバッチが着けられている。控え室で朝槍が嬉しそうに問うたとき、かなり以前から所有していたがデザインと色が男らしくなく

て普段は着けていない、と答えていた。

「つまりは性同一性障碍だ。加えて朝槍殿と同様に同性愛者でもある。すなわち男に好意を抱く！ 確率的にこのような者は一億の人口がいれば千人程度存在する計算になるとも言われているが、幸いにして我は理解ある配偶者をえて法律婚をした。そして子をなした。障碍児であつたが感性豊かな可愛い子であつた」

そこまで言つて三島は男らしく涙を零した。

「去年11月、生来の心疾患が悪化し亡くなつたが、産み育てて良かったと想っている。あの子は死んでも、その魂は我の心にあるゆえ！そして、男の心で妊娠を体験した経験から言う！ 妊婦を経済的に支えるという芹沢殿の意見は素晴らしい！！ 男の精神でもつて妊娠しても、かなりの不安を覚えるものなのだ！ 妊婦には幸せな者もおれば、様々な事情を抱えた者もいるだろう！ それを等しく一億が国民で支えるという発想は日本精神の真髄であり、男の誉れである！」

断言した三島は着席し、言い加える。

「男に生まれ、女に興味をもつというのは多数の指向なのだろうが、カメラを向け下着の写真を撮るなどというのは、腐りきつた精神だ！ そんなゲスに語る言葉は無いが、いまだ日本男児の精神を欠片でも残しているのなら、自ら腹を裂いて死するがよい！！ この場に、そのゲスはおるのか?!」

三島が会場全体を睨みつけると、だいたいのカメラマンは目を合わせないようにした。

「フン！ 名乗る勇氣もないか、それが自らの不正義を自覚しておる証拠よ！ 両親と祖先に詫びておけ！！ 以上だ！」

次に女性団体の代表たちがセクハラ問題やフェミニズムについて語り、鮎美への賛同を示して、いよいよ詩織の番になった。ずっと朝槍がリモコンを操作して性感を与えていた詩織は何度か絶頂していたのでハンカチで額の汗を拭いたけれど、それは見ている者には緊張しているだけに見えた。

「は…春風会の代表、牧田詩織です。…っ…」

必ずしも立つ必要はないのに詩織は立ち上がつて全身に視線と力

メラを向けてもらう。そのタイミングで朝槍がスイッチを全開にしたので絶頂していた。

「…ハア…ハアっ…」

「……」

朝槍はスイッチをオフにして休息を与えるけれど、容赦なく2秒後に、また全開にした。それで詩織は再び絶頂して汗を流す。

「…ハアっ…」

「……」

朝槍は手加減などすれば詩織が許してくれないことを感じ取っていた。もし手加減して詩織が不満に感じたら、予告したように泣き出して朝槍に無理矢理装着されたと言い出すかもしれない。そうなったら朝槍は破滅だった。どう言い訳してもリモコンを持つていた方が加害者で、バイブを入れられていた方が被害者だと世間は信じ、都議と議員秘書という力関係もまずい、詩織なら嘘をついて鮎美へ協力するかわりにバイブを入れさせると朝槍に強要されたのだと、もつともらしく言い出すことは容易に思いつく。そんな風に世間に解釈されたら朝槍は社会的に死ぬし、同性愛者の少数社会でも生きていけなくなる。真剣かつ深刻な問題であるはずの同性婚を求めていく場で、ふざけたことをした者として永遠に抹殺される。もう朝槍に選択肢は無かった。詩織をリモコンで最大限に高まらせる、それだけを行う奴隷でしかないとわかっていた。

「…ハア…、す、すみません。人前で話すのは初めてで…き、緊張して…声が…」

人前で性的な絶頂を繰り返しながら詩織が喘ぎ声で言うと、朝槍以外の全員が信じてくれた。ここまでマイクを握ったのは全員が政治家や活動家で人前で話すことに慣れていたし、むしろ望むところとなっている。けれど、詩織は春の会では副代表で、ごく最近になって分派して代表になったにすぎないので、公の場は未経験だった。

「…ハアあ……」

また絶頂している。もう立っている膝がプルプルと震えていて、しかも故意にマイクを口元へよせて全体に息づかいを送っていた。わ

ざわぎ目線をあげて会場全体を見回して、どれだけ大勢が集まっていたかメラを向けているか、脳に焼き付け、さらにカメラの向こうにいる何千万という視聴者も意識する。

「ハアっ…ハアあ…」

絶頂が連続するようになり、うつとりと詩織は目線を彷徨わせる。

「…わ…私たちは…」

詩織は原稿を汗ばんだ手で握りしめ、絶頂に震えたけれど、見ている者たちは極度の緊張で震えているのだと優しい目で待つ。

「ええんよ、慌てんで。ゆっくり話してよ」

大きな声で鮎美が声援を送ってくれた。

「は、はい…わ…私は売春婦…いい、いえ、私は売春を…」

わざと言い間違えて、いよいよ恥ずかしくて泣き出した演技をする。

「…うつ…ハアあ…うつ…」

本当は快感に震えているのに、女々しく涙を零してみせた。見かねて鮎美が立ち上がって、そばに来てくれる。

「そんなに緊張せんでもええよ。言い間違えても、言い直したらええんよ」

「…うつ…すいません…っ…大切な場なのに…っ…脚が震えて…ハアあ…」

詩織は背中を撫でてもらったので、その感触で絶頂しつつ、鮎美に抱きついた。抱きつかれて鮎美は優しく詩織の頭を撫でる。面白い構図なのでフラッシュが大量に焚かれた。

「原稿は、これやね。うちが少し読んであげるし、ゆっくり気持ちを落ち着けい」

「はい…すいません…」

詩織は離されそうになったけれど、抱きついたらまま離れない。鮎美は原稿を手にして読み出した。

「私たち春風会は売春の合法化を目指しています。その目的は非合法であるために売春に従事する女性たちが不当に搾取されている、この

現状から彼女たちを救いたいからです。けれど、合法化には大きな壁があります。反対意見も女性団体からあります。そこで：…」

鮎美は抱きつかれたまま代弁していたけれど、ゆっくりと詩織がお尻を撫でてきたので、すべてが演技だったことに気づいた。詩織の性格で、いくら大舞台でも泣き出すほど緊張するというのは考えにくかったものの、やはり人前は不慣れなのかと心配したのに、すべては演技でカメラの前で鮎美に抱きつきたかったのだと悟った。けれど、ここで引き離して怒るわけにもいかず、諦めて原稿を読み進める。

「そこで性的な風俗業に従事する女性を対象とした不確定拠出年金制度の創設を提唱します。この制度は確定拠出年金制度をモデルとし、大きな所得控除枠を用意しつつ、必ずしも安定収入ではないことから納める額は不確定でよいとし、性的風俗業を始めた時点から加入でき、年金の受給は35歳から65歳まで受けられるとします。65歳以後は他の職業だった人と同じ扱いになります。利点は、やはり年齢を重ねたとき、仕事を続けることが難しくなりやすいので、これを救うためです。また風俗業に従事すると簡単に大金を手に行うことができるため、生活が乱れやすくなり、また収入が途絶えたとき非行や自殺といった極端な行動に出る傾向を予防することもできます。たとえば、30歳で収入が下がってきたとき、あと5年で受給できると思えば、死ぬのは損、と考えられるわけです。また、確定拠出年金と同じく差し押さえ禁止とすれば、不当な貸し付けによる搾取からも彼女たちを救うことができるわけです」

「…ハアあ…」

詩織は抱きついたらまま、左手は鮎美の胸にあて、右手はお尻を撫でながら、だんだんとお尻の割れ目に指先を入れていく。鮎美はカテーターを挿入している都合でTバックのような生地が少ない下着をつけているので柔らかいロングスカートの生地越しに肌の感触が味わえた。前方にある胸は目立たないように手を動かさないけれど、背後には人目もカメラもないので、鮎美が身じろぎしない程度に指先を忍び込ませていく。鮎美は早く読み終えようとペースをあげた。

「反社会的勢力の資金源となつていことも風俗業の大きな問題です

が、きちんと申告して所得控除を受け、後に年金受給した方が得だとなれば、徐々にクリーンな業界にできます。加えて脱税や年金の未加入などの誤魔化しに対しては罰則の強化をはかることで、より効果を狙えます。また、男性身体障害者などが利用するさい、領収書を受け取れば所得控除や一部が助成されるなどの制度をもうければ、より売上の誤魔化しが困難になり、高い効果を得られつつ人道的配慮ができます。このように、今すぐ売春を合法化することはできなくても、現状の性的な風俗業に対して特別な年金制度を創設することで、かなり状況を好転させられます。この春風会からの提案に芹沢鮎美先生も賛同してくださいました。……………」

鮎美は自分に先生をつけて読んだことが恥ずかしいのと、いよいよ詩織の指先が好き放題に股間を触ったりカテーテルをいじったりするので大きく逃げて詩織を座らせた。着席させられるとバイブが強く食い込んで詩織は悶えた。

「ハアあ…」

「まったく……………」

あまり人前で秘書を強く叱ることもできないので鮎美は我慢して自席に戻る。これで予定していた表明はすべてだったけれど、あと一つ、翔子が迷っている表明があったので視線を送った。

「……………」

翔子が勇気を出して領いたので指名する。

「嵐川翔子先生、お願いします」

「はい」

翔子は人前で話す自信が無くて表明したいことがあったのに物怖じしていたけれど、詩織が緊張のあまり泣き出す演技をしてくれた後なので、勇気を出すことができた。

「私も人前で話すのは慣れないので、お聞き苦しいかもしれませんが…頑張りますので、よろしくお願いします。……………わ、…私は嵐川翔子、参議院議員です。今月から芹沢先生の紹介で自民党で勉強しています」

やはり緊張している様子なので鮎美が背中を撫でにいくと、翔子は

微笑して頷いた。そして続ける。

「私は頭の悪い女です」

意外な言葉に静かだった会場は、より静かになる。

「法科大学院に通っていますが、努力して努力して、やっと人並みです。法律の条文を読んでも、一回では理解できず、何度も読み直して、演習問題をやって、それでもわからず答えを見て、答えを暗記して、やっと点数が取れるくらい、頭の悪い女です」

翔子は声が震えそうになったので深呼吸して気持ちを落ち着けた。

「私に比べて芹沢先生は、驚くほど頭がいいです」

「んなことないって…」

思わず鮎美は恥ずかしくて謙遜したけれど、翔子は少し睨んでくる。

「いいえ、本当に差があります。私が何年もかけて、やっと理解したことを、芹沢先生は、たった半年で追い越しています。条文を一度読んだだけで理解して、それだけでなくて、その欠点や利点、考えうる抜け道、それを予防するために改正すべき点まで考えたりされます。あまりに大きな差があつて、腹が立ちます!」

「……翔子はん…」

「たとえていうなら、私が中学高校と陸上部で努力して小学校では遅かった脚が少しは早くなったと思つたのに、高3の体育祭で文芸部だった芹沢さんにリレーで負けるような気分です!」

「……………」

鮎美は言葉にも表情にも困り、身じろぎして立つ。

「私の頭の悪さは知能指数でも明らかでした。小学校で少しトロかったので、検査を受けました。結果は85。人並みは100で、75以下で保護の対象ですけど、85や90では放置です。これを補いたくて努力して勉強しました。家が連帯保証人制度のせいで貧しくて、そこから抜け出すには勉強しかないって思つて、ちゃんと宿題もして、予習もして、いろいろ頑張りました。けど、数学も物理もわからず、化学も、そのうち英語もついていけず、古文も漢文も難しくて、なのに

現代国語まで、長文になると苦しくなります。選択肢が騙すみたいに意地悪で、ひっかかるんです」

「うん……あれは、ひっかけるために考えられてるから……気にせんときよ」

「芹沢先生は、そうやって深く考えられるけど、私には無理なんです。司法試験も、きつと受からない。もうわかるんです。処理速度がぜんぜん違う。努力して努力して理解しても、試験時間内に答えきることは無理だつてわかるんです。決められた時間の3倍あれば、私だつて合格できるかもしれない。法科大学院までは、なんとか入れた。文系の大学から、なんとか滑り込めた。けど、きつと就職していたら、ちゃんとした企業には入れなかつた。適性検査なんかで落ちる。私の頭が悪いのがバレる。知能指数が低いのがバレるんです。だから、せいぜい私はアルバイトとか、非正規雇用、ずつと、そんな階級なんです。頭が悪いのを知られたくなくて、逆に頭がいいフリをして法科大学院生だつてことで高校生だつた芹沢先生をバカにしてみたり。ホント私つて究極にバカなんです」

「……そんなに自分を卑下せんと……」

「芹沢先生にはわかりませんよ。きつと、芹沢先生は余裕で知能指数100を超えています。110、120くらいに」

「……どうやらね……」

「じゃあ、授業を聴いていてわからないと思つたことはよくありますか？」

「……聴いてればわかるよ……」

「私は聴いていてもわかりません。その差なんですよ。ここにいるマスコミのみなさんも、どちらかといえば頭がいい方ですよ。いい大学を出た。もし高卒でも、きつと知能指数は低くないから、ちゃんと難しい仕事ができる。ハア……えつと……私が言いたいのは……」

少し疲れてきたようで翔子は頭を押しさえて息をついた。

「私が言いたいのは……そう、不平等です。人間、努力すれば報われるって小学校のころはならつたけど、そんなの嘘だつた。努力しても、たいしたことない人は、たいしたことないんです。なのに賢い人

は雑談しながらでも授業を聴いてる、そして、わかつてる。頭が悪いのが遺伝するのか、しらないけど、私の父も賢くなくて、公務員だったけど、それは公務員になりやすい時代があつて、そこで運が良くくて公務員だったのに、銀行がうまく父を騙して、お金を盗っていった。賢い人がコツコツ努力してる人から騙し取っていく！ バイトだつてパートだつて、まじめに頑張るのに時給安くて、賢い人との差が大きい。努力の差じゃなくて、生まれついた才能の差なのに！ これって不平等ですよね?! なのに賢い人は騙してくる！ ひっかけてくる！ 私は頭が悪いから、新車が半額で買えるとか、ケータイが今ならゼロ円つて広告されると、そう感じてしまう。小さい文字で、そうじゃないって書いてあるのに！ 勉強すると契約書は騙すことばかりで嘘ばっかり！ 働かないで株を売ったり買ったりだけで、お金持ちになる人もいる。そういうの全部、間違つてると思います。けど、芹沢先生は平等にするって言うてくれた！ 子供を産むのも、子育ても、みんな同じ仕事、賢くてもバカでも平等！ こんな素敵なことつてない！ だから、私は芹沢先生が総理大臣になればいいと思います！ 以上です」

「……………」

鮎美は恥ずかしいので返答に困った。けれど、翔子の気持ちには答えたいのでマイクを握る。

「おおきにな、翔子はん、ホンマに苦労しはったんやね。うちは小賢しいかもしれんけど、苦労知らずなんよ。家も普通で借金はなかったし。けど……………まあ……………総理大臣は言い過ぎやし、恥ずかしいから、やめてな」

会場に笑いが起こった。なごやかな雰囲気になったところで質疑応答に入った。やはり記者たちは鮎美たちが提案した政策よりも話題性のある刺傷事件から問うてくる。

「刺される前に加害少年と面識はあつたのですか？」

「いえ、学年が違いますし、私としては認識しておりませんでした」

すでに警察発表で判明していることも重ねて問われるけれど、丁寧に答えていった。

「刺されたときは、どう思われました？ その前後で」

「あまりにも一瞬のことで、彼が迫ってきたときも、うちは暢気に握手でも求めてきはるのかな、と」

「刺された後は？」

「それはもう痛いの一言ですわ」

「板垣死すとも自由は死せず、と叫ばれたというのは本当ですか？」
「っ……」

冷静に答えていた鮎美の顔が火がついたように赤くなった。

「なっ……な…、なにを根拠に、そんなことを？」

「お父さんがインタビューで答えておられましたから」

「……………」

あのクソオヤジ！ と鮎美は心の中で叫んだ。そして変な噂が固定すると嫌なので訂正しておく。

「前後の状況から、はつきりと説明しますので、誤解せんといってください。まず、救急車に乗ったとき、すでに出血はおさまりつつあったのですが、なにしろ大量やつたもんですから、母が心配して私が死ぬのではないかと泣くので、そんなに心配せんといほしい、そう言うても心配するので、ここは一発なにか冗談でも言うたる思いまして、声を出すと痛いのもあったので小声で父に、そう言うたのは事実です。けして叫んだということはありませんので、そこよろしくお願いします」

「開会式も、今もロングスカートですが、何か理由が？」

「治療上の都合です。怪我の状態については松田川先生から、ご説明いただきます」

「主治医の松田川紀子です。傷そのものは鋭利な刃物で……」

松田川は傷病の状態について医学的に説明しつつも、排泄に介助が必要でカテーテルなどを隠すためにロングスカートにしていることは遠回しにしか言わなかった。その後も加害少年への懲罰感情などを重複して問われたものの、しっかりと答え刺傷事件についての質問が出尽くした後、別の質問がきた。

「朝倉都議の活動に賛同して、そのバッチをつけておられますが、芹沢

議員ご自身の性的指向はどのようなのですか？」

「……」

きた、と鮎美は予想していたし、二つの答えを用意していた。一つは隠し続けるために、こちらのブルーリボンを着けているからといってわざわざ拉致家族なのか、その親戚なのかと問いませんよね、そのような質問を受けて答えること自体が、この虹色のバッチを着けにくくさせる理由でもありますから私の性的指向についてはご想像にお任せします、とかわす応答だったし、もう一つは、はい、私はレズビアンです、と明確にカミングアウトする解答だった。

「……」

必ず来る質問だと思っていたので、二つの答えを用意して備えていた。そして迷っていた。どちらを答えるか、迷い続けて、今日を迎えたし、今も迷っている。

「……………」

迷いながら鮎美はわかっていた。こんな風に長く沈黙してしまうこと自体が、もう答えになってしまうと、わかっただけで誤魔化しも真実も声にできず、顔を蒼白にして唇を震わせた。そこに追い打ちされる。

「あなたはLGBTなんですか？」

「……………」

質問した記者を見た目から涙が零れた。大量のフラッシュ光が襲ってくる。大スクープを取れそうな予感を覚えた記者が興奮気味に畳みかけてくる。

「そうなんですか？」

「……………」

また涙を流した。唇が震えて喉が凍りついて声が出せない。世界が真っ白になるのかと思うほどフラッシュが目を焼いてくる。

「どうなんですか?! 芹沢議員!」

「っ……」

しつこく問う三度目の追い打ちが、鮎美を泣き出しそうな恐怖から、関西人らしい怒りに導き、そして公人として習得させられた冷静

さが言わせてくれた。

「はい、……そうですね。うちは……同性愛者です」

どよめきが会場を沸かせ、三島が喝采して叫んだ。

「よくぞ言った！ あっばれである!!」

「……………」

言うた……言うてしもた……もう後戻りはできへん……、と鮎美はフラッシュを浴びながら告白した余韻に漂っていた。誰かがいたわるように鮎美の肩を撫でてくれている。それが松田川なのか、朝倉なのか、詩織なのか、わからないし、撫でてくれた誰かが、同じバッチを着けていることで、またLGBTなのかと記者に問われ、続けて鮎美のパートナーなのかと問われているけれど、遠い世界の出来事のように聴覚も視覚も遠い。

「私がこれを着けているのは亡くなった婚約者がトランスジェンダーだったからです。芹沢さんと私は患者と医師、それ以外の関係は一切ありません」

松田川の援護してくれるような声で、鮎美は少し勇気付けられた。

「芹沢議員！ いつから同性愛者なんですか？」

「……………」

あんたは、いつから異性愛者やねん、と鮎美は腹立たしく思った。

それは三島も同じだったようで言い返している。

「愚問だな。では、いつから貴様は女に興味をもった？」

「芹沢議員！ パートナーはおられますか？」

「……………」

おったら、そこにも取材に押しかけるんやろな、朝倉先生のパートナーが家に引き籠もったんが、よおわかるわ、と鮎美は静かに思った。あまりにも周囲が騒がしくて、鮎美は黙ってカメラとマイクの列、記者たちの顔を眺めた。いろいろと質問しているけれど、あまり耳に入らない。もう涙も止まっている。

「芹沢議員！」

「芹沢議員！」

「……………」

「ここで負けとうないな……逃げたら負けや……日本中のセクマイが見てるはず……きつと世界中でも……これは放映される……泣いて逃げて終わりには絶対にせん……戦ってみせる……、と鮎美は覚悟を決めた。

「うちの性的指向に関する質問は、あと三つだけ、お受けします。以後は私たちが提案した政策に関する質問や、政治的意味のある質問のみ、解答します」

会場が静かになった。三つと限られ、記者たちがお互いの出方を様子見している。全国紙の記者が挙手して問う。

「芹沢議員は同性愛者、つまりレズビアンという理解でよろしいですか？ バイセクシャルのように男性へ興味をもつことはありますか？ 完全なレズビアンですか？」

「女性同性愛者です。先輩政治家の男性を尊敬することはあっても興味をもったことは一度もありません」

別の記者が挙手する。

「現在、恋人やパートナーに相当する人はおられますか？」

「いいえ、おりません。あと一つでお願いします」

また少しの静かさがあり、ゴシップ誌の記者が問うてくる。

「加賀田知事の胸に触られましたよね。あれは痴漢行為じゃないですか？」

「……………」 相手が不快であればセクハラだったと思います」

鮎美の答えで、次に夏子へ注目が集まる。夏子は余裕をもって笑った。

「今さら不快とか言う仲じゃないし。さ、三つの願いはかなえてあげたよ。そろそろ政治の話をしましようか」

まだ記者たちは鮎美の性的な事情について問いたい顔をしていて、いくつか質問が飛んできたけれど、沈黙を返すので、次に話題性が高い、都知事選と畑母神の不倫疑惑について質問がきた。畑母神は落ちていて硬い顔で答える。

「これまでに述べたこと以上の事実はない」

「奥さんと最後に会われたのはいつですか？」

「離婚調停で……いや、あれは別室で交替だから……あまり、記憶が定かでないので、答えは差し控える」

「それでは解答になっていませんよ」

「日記でもつけておれば、わかるが、そういう趣味はない」

「いわゆる記憶にございませんですか？」

「……………そうだ」

「芹沢議員は女性の権利を大きく主張されていますが、不倫はいかなものでしょうか？」

「……………」

質問が畑母神に向けられたものか、鮎美に向けられたものか、判然とせず、二人とも黙ると、追い打ちがくる。

「離婚が成立するまでは別居が続いていても、不倫は不倫ですよね？」

「……………」

「畑母神先生、うちが答えていいですか？」

「あ、ああ…どうぞ」

防戦していた畑母神を助けたくて鮎美は記者たちに言う。

「細野議員、と、聴いて何を思い浮かべます？」

「……………」

「そう、だいたいの人が、路上チューを思い出しますよね。うちも同じでした。あのスクープされた新幹線の中でも、細野先生に声をかけられたとき、とつさに思い浮かんだのは、それですわ。そして、それしか、細野先生について知りませんでした。細野先生が、どういう政治家で、どういう政策に賛成していて、どういうことには反対しているのか、まったく知らなかった。こんなことで、ええんでしょうか？」

鮎美の問いに答えはないけれど、続ける。

「たぶん、細野先生、今、テレビで見えてはりますよね。すみません、お名前を出して」

鮎美が頭を下げると、記者たちから笑いが起こった。

「マスコミさんも視聴者ウケを狙うから、ついつい細々とした政策よ

り、面白い不倫の話ばかりしはるし、事実を伝えないどころか、たまたに捏造もしますよね。うちが言うた板垣はんの、あのセリフ、あれも捏造らしいです。板垣はん本人は刺されたときアツと思うばかりで何もできなかったとおっしゃってはるのに、のちのち新聞にはカツコよく板垣死すとも自由は死せず、と載ったらしいです。で、それが定着したと。うちも刺されたんで、ようわかります、刺された時そんなん言えるかい！」

鮎美は一人突っ込みをしてから続ける。

「これは良質な捏造の例で、当時は自由民権運動の助けになつたんじゃないかと思えますけど、悪質な捏造の方が多い。不倫は文化。誰かさんが言うたセリフらしいですね。けど、これも真相は違う。本当は、文化や芸術といったものが不倫という恋愛から生まれることもある、と言わはつたそうです。よくこれだけ悪質な捏造ができるとあきれますわ。これだけ有名になつたセリフなら、いつそ書いた記者さんの名前が歴史に残るのもええやろに、あまりそうはならん。さて、都知事選でも畑母神先生について、どうこうと言いたいのは仕方ないかもしれんけど、もつと大切なこと、いっぱい言うてはりますよね？ 尖閣諸島も小笠原海域も、拉致問題も、ずっとずっと一人の男の不倫より、大事なことちやいますの？ 大事なんは有権者が対立候補の政策と比べて、どちらが東京のために、日本のためになるか、考える、そこですよ」

鮎美がテレビカメラを見つめて言う。

「有権者のみなさん、もつと究極に喩えますと、消費税を下げるといふ政治家と、消費税を上げるといふ政治家がいて、片方が不倫していたとき、あなたは不倫を理由に投票しますか？ 不倫するようなヤツが唱える政策は信用できん、これも一つの判断でしょう、けど、不倫するということとは2人の女に好かれた男やというわけで、誰一人相手にせん男よりは魅力的な部分があったという証拠でもありませんわ。そやからって、それを判断材料にするのもちやいますやろ。大切なのは、日本の将来のために、どっちの判断が正しいのか、うちらも自分の頭で考えることやと思います」

鮎美の講釈が終わると、すぐに質問が飛んでくる。

「芹沢議員は一人の女性として、不倫をどう思われますか？」

「……………。どうも思いません」

「もう少し何かありませんか？」

「では、あなたは三人の同性愛者が恋愛のもつれでケンカしているとき、どう思いますか？ どうも思わないのどちらですか？ わからんでしょう？ うちにとって、わからんことやし、どうも思わないんですよ。むしろ、そんな、どうでもいいことに時間と資源を費やして話題にする、これは実に国益を損ねると思います」

「同性愛者が同性婚した場合、不倫は許されるのですか？」

「それは……………」

鮎美にとつて考えたことがないことだった。朝槍が代わる。

「その点については私がお答えします。結婚という形をとる以上、それは男女でも強い誓いであり、その不貞が有責事由となるように、同性婚においても同様と考えています。すべての法的取り扱いが、男女の結婚と同じ、相続においても子の無い夫婦と同じか、養子があれば通常の相続になる、これが私たちの想定する同性婚です。そして、浮気を許す許さないは結局は世間が決めることではなく当事者が決めることです」

女性記者が挙手して鮎美へ問う。

「さきほど平均賃金を妊娠育児中に支給するという政策を述べられましたが、気になる点として、支給は子供が保育園幼稚園に入るまでと言われましたよね？」

「はい」

「なぜ、そう限るのですか？」

「一つは財源の問題と、もう一つは保育園不足の問題を解消するためです。保育園に入れると支給されない、そうなると自分で働いて給料をもらうべきか、育児を続けて支給を受けるべきか、かなり迷うでしょう。とくに給料が平均賃金を下回るなら、自分で育てるという選択をする人は多いかと思えますから」

「それでは芹沢議員は、女は家にいるべき、という考え方なのですか

？」

「いいえ、働きたい人はでる、家にいたい人はいる、その人の選択次第です。また、4歳くらいで支給が打ち切られるということは、次の子を産む動機になります」

「あなたは自分の性的指向に対する質問を三つに限りましたが、これは政策にも関わる政治的な信条を問う質問なので、ぜひ答えていただきたいのですが、同性愛者である芹沢議員は子供を産む気はないわけですよ？　なのに、他人には産めと強制されるのは矛盾していませんか？」

「矛盾していません」

「なぜですか？」

「それは生き物として、生物の一種としてのヒトにおける生態系内での役割分担の問題だからです。たとえば、アリという種において、女王アリは産む機械でもないし女王でもない、働きアリは奴隷でもないし関白亭主でもない。人間の価値観で、どちらが上か下か決めるのはバカげた視点です。同様に、働く女がえらい、産まない女に価値がない、そんな考え方もバカけています。実際に男女の夫婦でも1割程度は不妊です。不妊の原因は男女半々としても、ごく自然な数字の結果として1割の夫婦に子供はできません。では、その夫婦に価値はないのでしょうか？　それこそ同性婚したカップルと同じに、社会において不要、生物として淘汰されるべき弱者、そんな考え方は浅すぎます。とくに人間は分業という手段で大きく発展してきました。すべての個体が出産と育児を行うのではなく、一定数は別のことをする、それが生態系全体にとって利益となる場合もあります。とくに意図的に不妊層をつくることは歴史上中国の宦官などで知られるように、ある役割を求められて去勢されています。それが人道的でないことは現代では明らかですが、望んで宦官になった者も多く、人の人生において必ずしも子供をつくることだけが最高の価値ではないし、逆に子供をつくり育てることを最高の価値とするのも、どちらもあるべきなのです。そして同性愛者の存在を、よく自然の摂理に反した、と表現されることがありますが、同性愛者は自然の摂理によつて産まれてきま

す。どの社会でも一定数、存在します。それどころかヒトに限らず、他の哺乳類や昆虫にさえ似た行動が見られます。もし、単純な自然淘汰ということを考えたら、次世代を残さない同性愛者など何億年も前に、その要因が消え去っていて当然なのに、そしてキリスト教圏やイスラム教圏では極度に排除されるのに、それでも一定数、産まれてきます。これはヒトという種の社会に同性愛者が何らかの役割を期待されて誕生しているのだと、私は考えますし、きつと私は子供を産まず、この社会のために働きたいと思っています」

長く話したので一呼吸おいたけれど、まだ続ける。

「男女が結婚して三人の子供を産み、健康に育っていく。とても理想的で多数の人に訪れてほしい幸福です。けれど、同性愛者は少数ながら確かに存在します。性同一性障碍の人も少数ですが、います。別な障碍をもつて産まれる人も、事故や病気で後天的に障碍をもつ人も、事情があつて貧しい人も、障碍といえないまでも知能指数が低い人も、家族を北朝鮮に拉致された人も、家族を犯罪者に殺された人も、幸せな結婚をしたはずなのに不妊だったという人も、みんな少数ですが、確かにいます。存在します。これらの少数の人たちが集まれば、それはもう多数です。逆に、何の不幸も問題もない人は、どのくらい社会にいますか？ ある程度の豊かさ、両親そろつた家庭、良い学歴、志望した仕事、適齢期での望んだ結婚、複数の健康な子供の出産と無事な成長、ごく普通の幸せと言いつつ、すべて満たせる人は、また少数ではないでしょうか。私は少数者を顧みること、全体に寄与し、種としてのヒトの集団である日本国が維持発展していくために、ベビシック・インカムに類似した制度として、ベビーインカム、赤ちゃん手当を提唱します」

「…ハアあ…ハアっ…」

ずっと詩織は着席して絶頂していた。朝槍が発言するとき以外はリモコンを操作してくれるので、もう背筋に力が入らなくなり、そばにいた翔子と音羽が心配して、体調不良ということで退場させるけれど、本当の目的があり女子トイレに入ってバイブをすべて外すと、控え室で最後の賛同者だったドイツ人に声をかけ、再び会場に戻った。

詩織も鮎美も予想していた通り、記者からの質問は財源のあてについてになっていった。

「はい、財源のことも考えています。その説明の前に、紹介させていただきます」

鮎美が言い、詩織が連れてきたドイツ人男性を紹介する。

「ドイツはベルリンでベーシック・インカムの実施へ向けて活動しておられるルカス・マンヒマール氏です」

「ハジメマシテ。ルカスデス」

日本語は片言のみなので詩織が仲介して語る。

「ルカスさんはベルリン市の議員で、貧困救済と若年者就労の問題に取り組み、ベーシック・インカムについて活動されていますし、私たちにも賛同、協力してくださるとのことです」

詩織の後にルカスがドイツ語で話したので、それを詩織が通訳する。

「セリザワ氏の発案は実に興味深いので我々としても全面的に協力したい。詳しくは彼女が自分で語るだろう」

「はい。私が考えた財源のあては現状の子供手当などからの振りかえの他、通貨発行増によるインフレーション税です。ただし、これが危険なことは承知しています。けれど、一国で行えば危険ですが、先進国、OECD加盟国など経済力のある国々で協調し、為替相場の大きな変動を避けながら共同歩調でインフレをはかろうと考えています。現在も自国経済の活性化を狙い通貨安競争をしていますが、競争ではなく談合するのです。なぜ、このようなことをするのか、その最大の狙いはタックスヘブンへの課税にあります。どんなに各国の税務当局者が努力しても主権の壁が、徴税の手を阻み、超富裕層への課税ができていません。これを糾すには、経済力のある民主主義国家が共同歩調でインフレを進め、タックスヘブンにある資産へ手を伸ばすことなく実質的に課税する連合インフレ税が必要です。この優位点は何しろ主権の壁を超える必要がないのですから、資産の調査も差し押さえも必要ありません。名義人の確定も、実質所有者の特定も、要らんです！」

鮎美が気合いを入れて語る。

「かつてソビエト連邦があり、今もEUがありますが、各国家間の連携は難しく共通施策の実施には様々な障壁があります。けれど、私が提唱する連合インフレ税は単に通貨発行増を為替相場の変動を避けながら協調して行うだけのもので、支出については各国家間の裁量に任せるものとしめます。つまり何に使用しようと自由やということ。社会福祉の充実でもよし、オリンピック誘致と会場建設でもよし、どうしようと、それは各国の国民が選んだ主権者が決めることです。この点でソ連やEUより、はるかに自由度は高くなり交渉決裂で頓挫といったリスクは低減します。そして、経済力のある国々がタックスヘブロンへ実質課税することで安定的な漸次インフレとなれば、じわりじわりと経済力のない国々、とくに対外債務の多い国々の債務が実質的に目減りし、国家間の平等がはかれます。現在、経済力のない国から、経済力のある国への移民や不法入国が相次いでおり、EUも苦慮していますが、いずれ国家間の差が埋まるとあれば、故郷を捨ててまで危険を冒す人は激減します。結果として先進国は不法移民の問題から開放され、先進国内でも平等化が進み、国家間の平等化もはかれるというわけです」

鮎美が語り終えると、しばらく静かになり、それから質問が来る。

「壮大な計画ですが、はたして実行可能なものでしょうか？」

「EUもソ連も、はじめは思いつきにすぎんかったと思います。みんなでもやろう、そう動き出せば、きっとできると思います」

「芹沢議員は第二のマルクスになるつもりですか？」

「それは西沢先生か破志本先生あたりに、お願いしてください。うちには私有財産制は否定しませんし、資本主義の競争して頑張ろうということも否定しません。けど、あんまりにも富みが偏在するのは誰にとっても害にしかならんし、この修正が必要なのに、一国家では不可能なところまで経済がグローバル化しておりますから、そこを是正したいと考えております」

以後も質問は続いたけれど、鮎美は丁寧に答え続け、記者会見が終

わると賛同者との懇親会があり、それが終わると深夜だったので、何より気になる鷹姫と話すタイミングは無く、議員宿舎で松田川と休んだ。

1月25日 強制わいせつ

翌1月25日火曜朝、鷹姫は国会に近い場所にあるビジネスホテルの一室で目を覚ました。鮎美には議員宿舎があるものの、秘書には公的な施設がなく議員宿舎へ議員の家族以外が泊まることは、主治医の桧田川が泊まるような場合を除いて、あまり好ましくないので東京滞在中はホテル暮らしになっていた。鷹姫はベッドから起きて洗顔すると、鏡を見てつぶやく。

「……連合インフレ税……ベビーインカム……きつと世界が変わる大事業に……」

他人より無口な方ではあるけれど、一晩一人で泊まっていると、一言も発しないわけでもなく、一人言を漏らしながらホテルの浴衣を脱いだ。眠るときはノーブラなので鏡へ形のいい乳房が映る。おろしていた髪を手櫛でポニーテールへまとめ上げていると、鏡に両腋の毛も映ったけれど、下腹部の毛を気にしないのと同様に少しも気にせず、ブラジャーを着けてから制服姿になった。

「準備よし」

鮎美は薄いメイクをするけれど、鷹姫は何もしない。単に議員秘書として着乱れがあつては恥ずかしいので剣道着を美しく着るよう制服も正しく着て、鏡に映る自分を見た。

「……鮎美……あの人は……私を愛している？ ……愛……」

昨日、鮎美は同性愛者だと自分で言った。そのことについて鷹姫は、あまり驚かなかつたし、そういうこともあるのだ、と深く考えなかつた。むしろ、鮎美が鷹姫にも秘密で記者会見に多くの政治家を集め、一大事業の発表をしたことにこそ、驚いたし心が躍つた。ただ、刺傷されたとき、もう死ぬのだと自他ともに思ったとき鮎美が言ったことを、はつきりと思いつている。大好きなんよ、愛してるから、と言われた。

「……どんな顔をして会えば……」

やや困ったけれど、空腹を覚えたので荷物をまとめ、ホテル2階のレストランで食べ放題の朝食を摂る。食べ放題なので遠慮無く食べていると、周囲から視線を感じたので遠慮しながら食べるものの、視線は鷹姫の制服に注がれていて、議員芹沢鮎美と同じ制服を着ている人間はコスプレ行為を除いて都内には二人しかいないので目立っているのだった。とくに国会へ近いビジネスホテルなので鷹姫と同じく秘書という立場で宿泊している者も多いし、地方公務員や地方議員が出張で泊まっていることも多い。平日火曜ということもあって、ほとんどの客が男性なので鷹姫の存在は浮いている。客の中には鷹姫が鮎美の秘書であることに気づいている者も少なくないけれど、声をかけて知己をえたい動機と、昨日の生放送で表明した容赦なくセクハラは訴えるという姿勢から感じるリスクを天秤にかけ、また議員本人が同性愛者ということと複雑さもあり、ついつい鷹姫にまで同性愛者なのかもしれないという目を向けているけれど、それを問うと、セクハラと言われたとき怖いので誰もが声をかけないでいる。そんな中、一人の体格のいい男が鷹姫のテーブルしか席が空いていなかったの
で問いかけに来た。

「お嬢さん、ここに空いてるかい？」

「はい。どうぞ。…」

鷹姫は頷きつつ、つい男の手を見た。明らかに打撃系の格闘技で鍛えた手で、拳の皮膚が厚い、体格は熊のようで真正面から素手で戦ったなら勝てないかもしれないと、考えなくてもいいことを考えながら鷹姫はイワシの蒲焼きを食べる。男も山盛りにしてきたトレーの料理を食べ始めた。

「……………」

「……………」

黙々と二人とも周りの客より多く食べている。料理を取りに行つて戻ってくるタイミングが同じになったのをきっかけに男が鷹姫に話しかけてきた。

「お嬢さんは芹沢議員の秘書だったりするのかい？」

「はい、そうです」

「おお、そうか。やっぱり」

「……。失礼ですが、どこかで？」

鷹姫は男の顔に見覚えがあるのに、思い出せずにいたので素直に問うた。

「オレは、百色正春(ひやくしきまささはる)。今はクマのプーさんだよ」

「百色さん……あの尖閣諸島中国漁船衝突事故で映像を投稿された？」

鷹姫は元海上保安官で起訴猶予になった百色のニュースを思い出した。

「おう。そうそう」

「私は宮本鷹姫です。……なぜ、クマのプーさんなのですか？」

「いやなに、今はプー太郎だからな。んでもってオレは熊みたいだろ？」

「はい」

「わははは！ お嬢さん面白いな」

「……」

どこが可笑しいのかわからないので鷹姫は黙って白身魚のフライを箸で切って食べる。百色も同じフライを取ってきていたので一口で食べた。

「芹沢議員は刺されたつてのに、えらい元気に面白いことを始めたな」

「……」

鷹姫は相槌が思いつかず、不機嫌でも笑顔でもない顔で二口目のフライを食べる。百色は気にせず話を続けた。

「オレにも畑母神先生から誘いがあったよ。前向きに考えるとは言ったんだが、優男の雄琴と閣下、ドイツ人以外は、みんな女で居心地悪そうだな、と思うんだが、実際の雰囲気は、どうなんだい？」

「今朝が発足二日目ですから、雰囲気というほど決まったものはありません」

「そりやそうかもしれねえな」

「集まりとしての名称も未定で、昨夜の懇親会では、愛の会、もしくはマイノリティーパーティーという案がありましたが、賛否両論で決まっています」

「なるほどな。いつそ芹沢組にでもしたらどうだい？」

「それは良い案ですね。ありがとうございます」

「おいしい、オレは冗談でいったんだぞ」

「……………」

どこが冗談なのかわからないので鷹姫は合挽ハンバーグを箸で切って食べた。

「にしても、お嬢さん、女の子なのに、よく喰うね」

「っ……」

鷹姫が赤面して顔を伏せた。

「おっと、すまねえ。余計なことを言っちゃまったみたいだな。ごめんな、オレは口が軽くてよ、それでクビになったばかりなのにな」

「……………。ごちそうさまです。お先に失礼します」

鷹姫はデザートを取りに行くのはやめて、議員宿舎へ向かった。国会周辺を歩いていても、やはり鷹姫の制服姿は人目を集めているようだったけれど、気にせず議員宿舎の鮎美の部屋へついたものの不在だった。

「朝食会に……………」

携帯電話にメールが入っていて、急に谷柿から朝食会へ呼ばれて出席していることがあった。

「昨日のことで何か指導が……………」

鷹姫は朝食会が行われている議員会館へ移動した。小会議室で行われていて、出入口に介式と松田川がいたので挨拶する。

「おはようございます」

「おはよう」

「芹沢先生は中ですか？」

「うん、きつと小言だよ。勝手なことしたから。医師会でも医局でも似たようなもんだし」

「……………」

鷹姫は時刻を見て、黙って待つことにした。しばらくして鮎美と谷柿、その他の自民党衆議院議員が20人ほど出て来た。鷹姫は議員たちと挨拶を交わしたけれど、介式はSPとして黙って過ごし、松田川も消極的に黙って車イスを準備する。鮎美が静かに車イスに座ったので鷹姫は押しながら問う。

「朝食会の席上、何か指導があったのですか？」

「思ったより、たいして何もなかったんよ。谷柿先生、優しい人やし、赤ちゃん手当と連合インフレ税については、素敵なことを思いつきますね、の一言やったし。けど、出版社とかを訴えるのには、自民党の女性職員も一人、派遣して事務処理なんかを手伝ってくれるらしいけど実質は見張り役って感じで、落としどころは相談させてください、って言われたわ。明らかに昨夜のうちに、どこかの出版社あたりと連絡とってる感じで。さすが自民党総裁、仕事早いわ。昨夜の今朝で、朝飯前に呼び出しやもん」

「そうですか。ところで、愛の会にするか、マイノリティーパーティーにするか、決まりそうですか？」

「ううん、ぜんぜん」

「では、芹沢組というのは、どうでしょう？」

「……………」

「ダメですか？」

「ヤクザやん」

鮎美は国会前に多目的トイレに車イスごと入れてもらい。鷹姫は外に出る。トイレの外には交替の男性SPが二名、立ちに来た。介式が出て来ると、交替を確認して鮎美の警護を始める。非番になった介式は表情が少しやわらぎ、鷹姫に声をかけてくれる。

「非番になった。宮本くんに時間があれば稽古をしないか？」

「はい。予定は……………」

鷹姫は脳内で予定を検索する。これから国会がある鮎美についても、あまりやることは思いつかなかった。それに鮎美も気づいてくれる。

「ええよ。稽古していよ。どうせ、議場に缶詰やし。松田川先生はい

てくれるし」

「ありがとうございます」

「うちこそ、おおきにな、鷹姫」

言いながら鮎美は車イスを押してくれている鷹姫の手に手を重ねた。いつもより恐る恐るという動作だったけれど、鷹姫と手を重ねると安心したように微笑している。

「宮本くん、せっかくの時間だ。すぐに始めよう」

「はい、介式師範」

鮎美とは別れて議員会館の剣道場に行くと、しばらくは剣道の稽古をしたけれど、次には素手で戦う技術を学び、さらには実際の場面では道着ではなくスーツや制服姿であるので、それに着替えてから、より実戦的に修練した。

「ハア：ハア：、ありがとうございます！」

「ありがとうございます」

終わると真冬なのに制服が汗で濡れていて、女子更衣室に干しながら、二人でシャワーを浴びる。鷹姫の裸を見ながら、介式が言った。

「芹沢議員から気持ちの悪いことはされないか？」

「え：：？ はい、とくに何も」

「そうか。：：。宮本くんは芹沢議員が同性愛者なのは知っていたのか？」

「いえ、昨日まで知りませんでした」

「隠してたのか：：。卑怯だな」

「：：：：。あれは、言うべきことなのですか？」

「こうして、いっしょにシャワーを浴びているときでも劣情を覚えられているとすれば、気持ち悪くはないか？」

「：：：：。気持ち悪いということは想ったことはありません。よく触られますが：：」

「それが、すでに犯罪といえれば犯罪だ。ずっと警護されていて感じたが、昨日言われて、やはりと思った。：：。気持ちの悪い：：。子供議員かと思えば、変態議員だったとは：：」

介式はシャワーを浴びながら、鮎美に握られたことのある手を不快そうに見つめた。

「……介式師範は同性愛者が嫌いなのですか？」

「同性愛者に限ったことではない。男の中にも腐ったヤツはいる。まして政治家は、どいつもこいつも腐っている」

「……」

「あの芹沢議員も、口では美しいことを言っても、腹の中は欲望にまみれている。いずれ、正体を現すだろうから注意することだ。もつとも、宮本くんなら鎧袖一触だろうが、薬など盛られたら抵抗できないこともある。注意するに越したことはない」

「……芹沢先生は、そんな方ではありません……」

「君も……宮本くんは、同性愛を、どう思う？」

「……以前は、人の道に外れた愚かな行為だと思っていましたが……今は……よく、わかりません」

「おかしな趣味に毒されるな。人は欲で失敗をする。おのれを律することだ」

「……。はい……」

シャワーを終えると、昼食を摂るために食堂へ移動し、食べ終わった頃に詩織から電話が入った。午前中の行動を訊かれて答えると、詩織が冷たい声で言ってくる。

「それは、いい身分ですね」

「はい、環境にも師にも恵まれた有り難いことです」

「……」

詩織が黙り込み、それから舌打ちしてきた。

「……ちっ……、人に舌打ちを聴かせるなんて下品なことほしたくないですけれど、あなたは厭味が本当に通じない人ですね。こちらは、とても忙しくしていたのです。余裕があつたなら、手伝ってほしいほど！」

「そうだったのですか、すみません。何が、それほど忙しかったのですか？」

「集団訴訟に参加したいという人からの問い合わせと、連合インフレ

税への問い合わせ、どちらもです！ 東京事務所だけではさばききれないので、集団訴訟は石永さんが担当で、月谷さんが補助！ 海外からも問い合わせがあるインフレ税への対応は私とネットが得意な緑野さん！ 宮本さんも英語はできますか？」

「はい」

「……。どのくらい？」

「英検2級なら、合格しただろうと言われています」

「……。合格したわけではないのですか？」

「二年生の頃、受験料が無かったのでクラスメートが受けたテスト用紙を使わせてもらって試してみました結果です」

「……。まあ、いないよりはマシそうですね。石永さんの英語力も惜しいですが、セクハラ写真相談は、あなたや緑野さんでは性格的に、まったくダメでしょうし」

「はい」

「……。とにかく事務所に来て手伝ってください」

「はい」

鷹姫は東京事務所に出向き、国内とアジア系英語圏からの問い合わせを担当して午後の時間を終え、国会が終わった夕方になって鮎美に呼ばれ議員宿舎へ行く。詩織も行きたいという顔をしていたけれど、昨夜も睡眠時間が少なく、今日の業務も多かったので精根尽き果てた様子で事務所のソファで眠っている。鷹姫が部屋にはいると、鮎美と松田川は全国紙の一面を並べて読んでいた。

「うちのことを全部の新聞が一面にあげてくれはったけど、扱い方は、それぞれちやうなあ」

「朝日新聞は扱いが小さいね。いよいよ国会始まる鳩山総理うんぬん、芹沢さんのことは、二番目で朝槍さんが話した同性婚をメインに紹介してる」

「逆に産経新聞は畑母神先生メインやし、同性婚のことも、うちのカムアウトのことも扱い小さいし。しかも二面には百色さんと畑母神先生の対談を載せてる」

「あの人の……」

「鷹姫、知ってるん？」

あえて鮎美は普段通りという態度で鷹姫と話すけれど、顔は向けても目は長くは合わせない。鷹姫は今朝のことを語った。

「なるほど、芹沢組は鷹姫の発想やなかったんや」

「はい」

「日経新聞は、さすがに連合インフレ税のことに触れてくれてるなあ。でも、どの新聞も集団訴訟のことは、ほとんど扱いなしや」

梶田川が読んでいた毎日新聞をテーブルに置いた。

「そりゃ週刊紙と新聞は資本的につながってるし、印刷所まで訴えるなんて言ったら、これ以上、広めたくないでしょ。それに、芹沢さんたちが主張した内容が、あまりに多岐にわたりすぎていて、視聴者も読者もついていけない感じだと思うよ」

「ここからは絞らんとあかんかもな。……」

おかげで狙い通り、うちのカムアウトのことも全体からみれば扱い小さいし、と鮎美は心配していた自分の性的指向についての書かれ方が大きくなかったので安心しつつ、鷹姫の様子を見る。鷹姫も普段通りで大きな変化はない。避けられることは無さそうで鮎美はポニーテールを撫でたくなかったけれど、昨日の今日での接触は朝に手を重ねただけで自重することにした。

「鷹姫、夕飯まだやんな？ 天井とつたし、いつしよに食べよ」

「はい、ありがとうございます」

一昨日までと変わらない雰囲気だ。鮎美と過ごした鷹姫は夜になってビジネスホテルに戻った。連泊しているので使い慣れたバスルームで身体を洗い、お湯に浸かって想った。

「世界を貧困から救う……鮎美……芹沢先生……あなたは世の光りです」

明治維新を超えるような歴史の転換点、それに関われることを、誇りに思い、そして嬉しかった。

翌1月26日水曜の夕方、議場の自席で鮎美は本日の審議が終わったので眠そうに首を回した。となりでは翔子が大きく伸びをしてい

る。つい、翔子の胸を見てしまい、それに気づかれた。

「今、私のおっぱい見てませんでした?」

「ごめん、つい」

「本当に同性愛者なのですね」

「今まで、まわりにビアンおらんかったの?」

「うくん……それっぽい子はクラスにいて女の子同士でキスしたとか、そんな話を聞いたことはあるけど、それくらいかな……。それにしても、予想以上に退屈というか、つらいですね。国会」

「居眠りせんと思っても、自分の出番がない上、ぜんぜん自分と関わりのない東北地方の高速道路整備とかになると関心を維持するのがしんどいね」

「そうですね。けど、東北の日本海側って、ぜんぜん高速道路がつながってない」

翔子が配られた資料をペラペラとめくっていると、音羽が二人に近づいてきた。

「お疲れえ」

「お疲れさん」

「お疲れ様です」

「って言っても、座ってたただけなんだけど、疲れるね。三回も寝そうになつたよ」

「うちは五回。議会が成立するには出席議員の数が要るとはいえ、無駄な労力やなあ。そういえば、開会式に出たことでの処分どないなつたん?」

「あーあ、あれ。うん、大丈夫。さすがに出席して処分って、おかしいし。破志本先生も考えてくれて。もしかしたら、来年から参加不参加は各議員の任意になるかもって」

「共産党さんも軟化してくれてはるなあ」

「自民も最近、悪いことしないね」

「与党ちやうしな」

「与党になつたら、またやるんだ?」

「口利きの一つや二つ、やるやろな。うちがやってる陳情の仲介でも、

どのラインからアウトなんか微妙やもん。ワイロもらうのはダメやけど、寄付金ならOKとか、官僚への圧力はあかんけど、仲介は良さみたいな」

そろそろ他の議員たちが退場して通路が空いたので鮎美も立ち上がる。外に出て車イスに乗ると松田川と多目的トイレに入った。介式は非番で男性SPはトイレ内のチェックだけして出てくれている。

「お腹の傷を診るから、パンツおろしてスカートを完全にあげてみて」

「はい」

鮎美はロングスカートへ両手を入れ、下着を膝までさげてからスカートの裾をたくし上げて胸のあたりで握った。松田川が臍の下から股間まで続く鮎美の傷跡を見つめ、満足そうに頷いた。

「写真撮るね」

「それホンマに流出させんといってくださいよ」

今までも三日に一度くらい撮影されていた。松田川は顔を映さないよう胸から下、膝より上を被写界に入れてデジカメで傷跡を撮った。

「ほぼ完治してるよ。ほら」

撮った画像を見せてくれる。

「ホンマや……もう傷が無かったみたい……」

カサブタが取れると、ごく薄い線があるくらいで、ほぼ傷跡は無くなっていく。過去の写真と見比べると回復は明らかだった。

「カテーテルは、もう要らないかな。これからは普通にオシッコしてみても、なるべく、こまめに。ウンチは、まだ一人でしないでよ」

松田川は鮎美の脚にテープで貼り付けてあるカテーテルを剥がしていく、ゆつくりと体内から抜くと、丸めて専用の医療廃棄物入れに片付けた。

「一応、制服のスカートを持ってきてあげたけど、着替える？」

「はい！ やつと管付きの生活から解放されるんや。ああああ……長かった」

慣れてはいたけれど、嬉し涙が滲むほど心が躍った。

「じゃ、スカートを脱いで。お尻をこっちに向けて。ウンチ取ってあげるから」

「はい。……これは、あと何日、されるんですか？」

鮎美の問いに松田川はゴム手袋を着けながら考える。鮎美はロングスカートを脱ぎ、松田川に背中を向けると、手すりを握って前屈みになる。松田川は慣れた手つきで優しく摘便するため、鮎美の肛門へ指を入れた。

「あと数日かな、月末には完全に完治で、芹沢さんとも、お別れね」

「長いこと、ありがとうございます。先生とも、あと数日かと思うと、名残惜しいですわ」

「名残惜しいって、お尻に指を入れられるの癖になりました、またやってください、とか言わないですよ」

「うっ、そういう意味ちやいますよ。ずっと24時間、こんなに長いこと人と過ごしたことないから」

「今日で17日目かあ。一度も搔かずに我慢してくれたし、いい子いい子」

松田川がゴム手袋をしていない方のお尻を撫でてくれると、鮎美は恥ずかしくなった。処置を終えた松田川はゴム手袋も廃棄して、制服のスカートと下着、生理用ナプキンを出した。

「しばらくオシッコはチビるかもしれないし、ナプキン着けておいて。不安ならオムツにする？」

「ナプキンにします」

鮎美は下着とナプキンを受け取り身につけると、制服のスカートを履いて鏡を見た。

「ああああ……やっど、やっど、この姿に戻れた！」

嬉しくて飛び跳ねたくなる。松田川も主治医として嬉しそうに微笑む。

「今夜から、お風呂も普通に入っていていいよ。車イスも終了。飛んだり跳ねたり走ったり、息むのはダメ、あと少しの我慢。いっしょに頑張ろうね」

「はい！ はい！ ありがとうございます！ うう！ やつと、やつとやー！」

鮎美は飛び跳ねる代わりに腕をウズウズと動かして回復を喜ぶ。笑みを零しながら多目的トイレを自分の脚で出ると、外で待っていた翔子と音羽も上下とも鮎美が制服になったことに気づく。

「芹沢先生、もう車イスでなくていいのですか？」

「アユちゃん、完全復活だね？」

「うん！ 走ったりせん限りOKやって！ 傷跡も完璧に治ってる！」

松田川先生、あのカメラ貸して。二人にも見てもらいたいわ」

「流出させるな、とか言ったくせに。最初の方はグロテスクだから注意してね」

松田川がデジカメを貸してくれ、翔子と音羽にも回復の具合を見てもらった。

「傷跡なんてわからない……」

「どこを斬られたの？」

「これが今日の写真な。三日前は、こう」

鮎美が過去の写真へ変えていく。

「けっこう長い傷……」

「痛そお……」

「最初の頃は、もっと、エグかったんよ」

「はつきり傷がありますね」

「臍から下まで……エグ……この傷跡が残ったらビキニ着れないね……」

「手術前のも見る？ めっちゃエグいけど」

「……………」

翔子と音羽は迷ったけれど、好奇心が勝って頷く。鮎美が手術直前の写真を見せた。大きく斬られた生々しい傷と血が二人を青ざめさせる。

「うわあ……ひどい……」

「よく生きてたね……血だらけ……」

「うちも死んだかと、思ったわ。っていうか、こんな写真、撮られてる

の気づかんかったし。血も、これで拭いてもらった後なんよ。会場やった大礼拝堂の床とか血だまりできて、桜田門外の変でもあったんかちゅーくらい赤かったよ」

「芹沢先生が刺されたのも十分、歴史的事件ですよ」

「これで死んでたら誰がアユちゃんの弔辞を読んだのかな？ 生きてたから冗談を言えるけど、シャレにならない傷……でも、クスッ、アユちゃん、あそこの毛、剃られてるんだ。あそこツルツル。フッフ」

「っ……そこは見んといてよ」

鮎美は恥ずかしいので指先で液晶ディスプレイの一部を隠した。そして、他の議員と話していて議場を出るのが遅くなった直樹が声をかけてくる。

「弔辞は、きつとボクだったろうね。西村先生のと合わせて」

話の一部が聞こえていたようで言ってきた。

「よっぽど、ひどい傷みたいだね。今は元氣そうだけど」

「死ぬかと思うほどやったよ。雄琴先生も、見る？」

鮎美は指先で下腹部は隠しながらディスプレイを直樹に向けた。翔子と音羽は同性はともかく異性に負傷写真を見せられる感覚に違和感をもったけれど、同性愛者の感覚は自分たちと少し違うのかもしれないと考える。いずれ二人とも直樹と近い年齢の異性と結婚するという意識を大なり小なりもっている。それに対して鮎美は下腹部さえ隠しておけば平気という顔だった。逆に見せられた直樹が動揺して青ざめた。

「っ……す……すまない……血は苦手なんだ……」

「あ、すんません。エグいもん、見せて」

鮎美も直樹の妹が惨殺されたことを思い出して謝る。よろめきなから直樹は男子トイレへ入っていった。

「アユちゃん、今のは見事なまでの逆セクハラだったよ。レズビアンって男に見られて恥ずかしいって感覚ないの？」

「うん、あんまりないよ。しつこい視線とかベタベタ触られるのは嫌やけど、ドキドキはせんから」

「私たちとは世界の見え方が違ってそう」

「世界かあ……ええね、こうやってカムアウトして隠さず話せるの。最高やわ」

しみじみと鮎美は国会議事堂の廊下で天井を見上げた。日本の中心、そこで隠すことなく自分の指向について友達と話せる。それが嬉しくて気持ちが高揚してくるし、車イスとカテーテルからも解放されて最高の気分だった。女性議員たちの会話が落ち着いたところへ木村と最年長議員である村井が声をかけてきた。

「芹沢先生、お元気そうで何よりです」

「ワシらもまぜてくれんか？」

「あ、はい。……うちの傷、見ます？ エグいですよ」

「それはまたの機会に。その話ではなくて、畑母神先生もまじえて始められたことに、私と村井先生も入れてくれませんか？」

「っ、はい！ 喜んで！ でも、ええんですか？ どうして、また？」

「私も村井先生も、畑母神先生が好きなんですよ」

「……」

え、同性愛者って、こんなにいるんや……、と鮎美が勘違いしているのに木村は気づいた。

「いえ、そういう意味の好きではなくて、海上自衛隊のトップから政治家に転身されているところがね。応援していききたいな、という好きです」

「ワシも海軍じゃったしな」

「たしか、潜水艦の艦長やったんですよね？」

「おお、覚えておってくれるかね」

「はい。けど、うちら女の権利をバンバン言うつもりはないけど、やっぱり男の人から見たら、女寄りって感じがしませんか？」

鮎美が遠慮がちに問うと、木村が神妙な顔で答える。

「妊娠22週から保育園に入るまで、給料分を出す、赤ちゃん手当でしたね？」

「はい」

「もう40年も前の話になりますが、うちの家内を結婚前に妊娠させ

てしまつてね。当時、私もお金がなかった。事業を立ち上げたばかりの頃で、すまんが墮ろしてくれと、頼んでしまった。それから3年、結婚して一人目が生まれたし、二人目も無事で産まれたが、三人目と思つているときに子宮癌が見つかつて、それきりです。今でも悔やむんですよ、あのとき、墮ろさず産むという選択をしていたら……と。男というのは勝手なもので、申し訳ない。せめて今から少しでも罪滅ぼしできれば、と思つたまでのことです」

「そうやつたんですか……わかりました。こちらこそ、よろしゅうお願いします」

鮎美は年配の男性二人が加わってくれたことを心強く思いながら、議員宿舎に帰る。他の議員たちは会談や接待などに出ていくけれど、まだ負傷が完全でない鮎美は松田川と部屋に戻ると、制服を脱ぎながら再確認する。

「普通にお風呂、入つてええんですよね？」

「どうぞ」

「やったー！」

歓びながら入浴して身体と髪を洗つた。揚がつても、まだ早い時刻だったので再び制服を着て松田川が見ていたテレビをいっしょに見る。

「緊急特番！ 太田元総理と秘書田中」

お笑いコンビをメインにした政治番組が鮎美のことを取り上げていた。

「赤ちゃん手当、これな。あの、あれ、クリスマスあたりから流行つた児童養護施設にランドセルとか寄付して回る。タイガーマスクみたいなの？」

「違います。赤ちゃんはランドセル背負わないから！ はい、今ね、もつとも総理大臣にしたい人、ナンバーワン、芹沢鮎美さんの紹介です。琵琶湖姉妹学園3年生」

「え？ ガキじゃん！」

「いやいや、もう成人してるから」

「いやいやいや！ どう見てもガキじゃん！ つてか、おかしくね？」

「20歳で総理大臣でもダメだろう？ オレが総理でもダメだし！」

「あなた元総理ですから。そういう設定ですから」

「あ、じゃあ、あれだ。この女の子も設定だ。そういう設定の子だ」

「設定かどうかはおいて。一応、議員ですから」

「一応とか言ったらダメだろ。訴えられるぞ。この子、怖いんだろ？」

「ま、パンチラ撮るとね。キレるわね。うん。泣いてたから」

「週刊紙ひどいよな。死刑でいいよ」

「どうやって死刑にすんだよ？ 燃やすのか？」

「焚書だな」

「カツコよく言ってるじゃねえよ」

「パン書だな」

「下品にも言うな。なんだよ、パン書って？ アンパンマンのレシピか？」

「パンツが載ってるからパン書」

「訴えられるぞ」

「まさにパンドラの箱、開けるとね、やばいんだ。もうパンドラの箱つてな」

「お前が死刑だ！ 公募して死刑にしてやる！」

勢いのあるコンビの会話へ、女性芸能人が入る。

「あ、私もさつき、彼女の事務所に電話して集団訴訟に入りました」

「ええっ？ マジで?!」

「一昨年、かなり嫌な写真を載せられて、どうにもムカムカしてたし。やっぱり彼女の言う通りだと思うんですよ。一瞬のパンチラ撮って晒すのって芸能人だから痴漢行為じゃないって認識、あらためないとスカート穿けないし」

「オレもスカート穿こうかな。載せてもらおう」

「お前は死刑だから。元総理死刑」

「オレがスカート穿いたら売春できるだろ。で、年金に入れてもらおう」

「ああ、あれな。不確定……なんだっけ。あ、そう、不確定拠出年金。」

水商売の人が納めておくと35歳からももらえるっていう」

「35歳ババアだからな。年金が要るな」

「お前今、日本の大半の女性を敵に回したぞ。少子高齢化だから35歳以上の方が多くぞ、きつと」

色々な話題に触れているけれど、鮎美が同性愛者であることには、どの番組も深くは触れずにいた。

「うちがビアンなこと、どうでもええのかな？ 世間にとつて」

「どうでもいいというより、触れにくいんだと思うよ。かたや、がつつりパンチラで裁判するつて言ってるし、それで同性愛です、つて言われても、下手なこと言つて怒らせたなら、また裁判つて気がするし。あ、私もうお酒、呑んでいい？ カテーテルの操作もないし」

「あ、はい、どうぞ」

「じゃ遠慮無く」

今までは寝る直前まで飲酒しなかった松田川は買つておいたライチ味の缶酎ハイを呑み始めた。鮎美のスマートフォンが鳴る。着信は鷹姫からで報告を受けた鮎美は電話を終えると、ガッツポーズして叫ぶ。

「集団訴訟への参加人数が269人！ 連合インフレ税への興味ありな問い合わせが海外も含めて39件！ しかも二つの経済研究所が試算を始めたんやつて！ めっちゃ勢い出てきたわ!!」

「浮かれるのは、いいけど、そんな派手なガッツポーズしないで。まだ怪我人なんだから」

「総理大臣にしたい人とか言われてるし！」

「はいはい。あ、さっき負傷の写真、けっこう平気で人に見せてたけど。学会と広告で使いたいわつて言つたらダメ？ 学会では患者氏名は伏せるし、広告で使うなら、それなりの料金を払うよ。私、近いうちに独立開業して美容外科やりたいし。今は病院で外科全般だけど、そろそろ開業なつて気分だし」

「学会はええけど……広告は……うくん……。あ、お酒つて、どういう味するん？」

「急に興味もつて、どうしたの？」

「だって、なんや祝杯って気分やもん」

「呑んでみる？」

松田川は細かい法律を気にせず鮎美に呑んでいた缶を渡した。鮎美も二人しかいないので気にせず呑んでみる。

「けっこう美味しいですよん」

「これ、ほぼジュースって味だから。あ、けっこう呑んだね。これストロングなのに」

松田川は返してもらった缶が軽くなっていたのでアルコール度数を見る。

「9%だから……まあ、大丈夫かな。外出はしないでね」

「今日はもう鷹姫が報告結果を印刷してもってくるだけやし。外には出ませんよ」

そう言っているうちに鷹姫が書類をもって訪れ、翔子や音羽と同じくロングスカートから制服のスカートに変化していることを喜んでくれた。

「ご回復おめでとうございます。芹沢先生」

「そんなかしこまらんとってよ。二人きりやないけど、松田川先生しか、おらんし。な」

「はい、鮎美、元気になってくれてよかったです。ですが、顔が少し赤いですよ？」

「これは…、お風呂上がりやしね」

うまく鮎美はアルコールで赤くなった頬のことを誤魔化した。

「入浴も自由にできるようになったのですね」

「そうよ。あとで、いっしょに入ろ」

「……………」

「冗談やって。それで、報告の書類は？」

「はい、こちらです」

「紅茶でも淹れるわ。寒かったやろ、ま、座り」

「いえ、私が淹れます」

「ええよ、長いこと運動不足やったし。うちが淹れるから。松田川先生は、紅茶、どうします？」

「遠慮する。アルコールとカフェインって変に興奮するから」

松田川は2本目の缶酎ハイを呑み、鮎美は二人分の紅茶を淹れた。電話で簡単に報告した鷹姫は書類をもとに詳細な報告をしたけれど、それが終わると鮎美は立ち上がって、ソファへ座っている鷹姫に近づき言う。

「少し上を向いて、目を閉じて」

「はい」

素直に従った鷹姫は何も予想していなかったけれど、横で見ている松田川は予想通りに鮎美が鷹姫へキスするのを見た。キスされた鷹姫は言われた通りに目を閉じていたけれど、形のいい眉をひそめている。しかも鮎美は長いキスをして舌先を鷹姫へ入れていく。これまでも頬や首筋など、いろいろなところへ唇や舌を這わせることは多かったけれど、口と口で完全なキスしたのは初めてだった。

「…ハア…」

「……」

鮎美が熱い吐息を漏らしてキスを終え、鷹姫は黙って目を開けた。

「好きよ、鷹姫」

「……………そうですか……………」

「うちが総理大臣になったら、うちと結婚してよ」

「……………私には許嫁がいますから」

「っ…総理大臣でも、あかんの？」

「……………そういう問題では……………なく……………」

「……………。松田川先生、少し二人にしてもらえますか？」

「そ、そうだね。ごめんね、つい見えて」

興味津々で二人を見ていた松田川は缶酎ハイをもって隣室に移動した。鮎美は攻め方を変える。鷹姫の背後に回って後ろから抱きしめた。

「鷹姫の耳、好きよ」

そう言っただけにキスをする。くすぐったさで鷹姫は身じろぎした。耳から首筋へもキスを降らせる。

「鷹姫の髪も好き」

ポニーテールを撫でた。

「鷹姫は、うちのこと嫌い？」

「いえ……」

「好きでいてくれる？」

「……尊敬しています」

「好きって言うてよ。あのときは言うてくれたやん」

「……好きです」

言ったところへ、またキスをされて舌を入れられた。同時に鷹姫のスカートへ鮎美の手が入ってきて太腿を撫でてくる。

「…ハア…」

「……」

「鷹姫」

呼びかけて、またキスをしようとするので鷹姫は顔を背けて逃げた。

「やめてください。……私に何を求めているのですか？」

「……。立って、こっち来てよ」

「……」

鷹姫はソファから立ち、手を引かれたのでベッドの方へ歩いた。

「座って」

「はい」

素直に鷹姫はベッドの端へ座った。鮎美も隣りに座ると、手を握る。

「鷹姫は最高に可愛いよ」

「……」

「うちは鷹姫が大好きなんよ」

「……」

「愛してるわ」

「……」

「鷹姫」

今度は拒否されないように唇ではなく首筋へキスをして、キスした

まま唇の方へ近づく。鷹姫が逃げようとするするとバランスが崩れて二人でベッドへ倒れ込んだ。

「…ハア……」

「……………」

「……………」

黙って鮎美が制服を脱がせようとする、鷹姫は抵抗した。抵抗されて対抗できるとは思っていないので、鮎美は攻め方を再び変える。

「うちの傷跡、しっかり治ったんよ。見てくれる？」

「はい」

それは心配だったので見たかった。鮎美は傷跡を見せるために制服を脱ぐ。全裸にまでなる必要はないのに、全裸になった。さすがに裸になると恥ずかしくて赤面する。

「…ハア……ほら、ここから、ここまで、スパッと斬られてたのに、ぜんぜん、わからんやん？」

「はい、ほとんど、わかりません。まったく見事な治療です」

鷹姫は指先で傷跡に触れた。触れてくれるのが嬉しくて鮎美は心臓が高鳴り興奮する。

「…ハア…ハア……そういえば、鷹姫も噛まれてたよね。傷は、どうなん？」

「そういえば……見ていません」

毎日入浴しているけれど、気にしていないので見ていなかった。

「見るから服を脱いでよ」

「……………」

「心配やし、うちのせいやし、見たいんよ」

「…はい…」

鷹姫は上半身をブラジャーだけの姿になった。鮎美は傷跡を確認する。やはり傷跡は残っていて、もうカサブタなどはないけれど、皮膚の色合いと皺が違うし、そこだけ産毛も生えていない。

「ごめんな……うちのために」

「いえ、気にしないでください」

「せめて、少しずつでも治るとええのにな」

そう言いながら鮎美は傷跡にキスをした。自分を守ってくれために負った傷なので本当に申し訳なくて涙が流れる。

「ごめんな、ごめん」

「どうか、気にしないでください。気にされる方が私もつらいです」

「鷹姫……」

抱きついて抱きしめた。

「本当に気にしないでください」

軽く抱き返してくれる。それが嬉しくて抱きついたまま首筋へキスをした。

「…ハア…ハア……鷹姫も、裸になってよ」

「……」

「お願いよ、鷹姫」

「……嫌です」

「………。お願い、鷹姫」

「嫌です」

「……」

「もう離してください」

「もう少しだけ、こうしてて」

「……」

「鷹姫……」

鮎美はスカートを脱がせようとチャックへ手をかけたけれど、手を払われた。

「鷹姫……」

「あまり裸でいると風邪を引きますよ」

「……ほな、いっしょにお風呂へ入ろ」

「……お一人で入ってください」

「いっしょに入ろおよお」

「……」

鷹姫は鮎美を押しつけて脱いでいた制服を着て、はつきり言う。

「鮎美、服を着てください。病み上がりに体調を崩しますよ」

「……………」

鮎美は一時撤退を決めて下着と制服を着た。それで鷹姫も安心した顔になってくれる。

「そろそろ私はホテルへ帰ります」

「まだ用事あるし残って」

やや欲求不満な声で強く言った。

「はい。何の用事ですか？」

「……………」

どうすれば鷹姫を脱がせられるか、何も考えていなかったの、少し考えるために部屋を見回して思いついた。松田川の医療器具が入っているバックを開け、そこからカテーテルを出した。

「ちよつとこれを体験してもらおうから、ベッドに寝て」

「……………それを……………ですが……………どうして？」

「身体障害者の気持ちを知るためよ。うちも体験してみて、初めて気づくこと、いっぱいあったから、あんたも知りたい」

「……………ですが……………私は……………」

「あんた秘書やろ、うちの命令には従い。ほら、寝て！」

「……………。はい」

鷹姫はベッドに仰向けに寝た。

「パンツ脱ぎ」

「……………」

「早く、パンツ脱ぎ」

「……………はい……………」

鷹姫は命令に従った。

「膝を立てて、脚を開き」

「……………こうですか？」

「そうよ。ええ子やね」

「……………」

「ほな、これを入れるし、ちよつと初めは変な感じするけど、我慢しいな」

鮎美はカテーテルのパッケージを開封する。何度も挿入されたの

で、どこが挿入する部分か知っていた。先端が丸くて細い管を鷹姫へ向ける。

「ゆっくり入れるしな」

「……………うツ…」

「けっこう難しいわ……………ここかな…」

「…んツ……………」

思わず鷹姫が両手を股間にやると、鮎美は追加で命令する。

「あんたは障害者なんよ。両手両脚が自由に動かせへん、何一つできん障害者なんやから動いたらあかん」

「……………はい…」

鷹姫が手を戻して力を抜いたので鮎美は続ける。

「あ、入った、入った。もう少し奥まで突っ込むよ」

「……………うう……………」

「ほら、見てみ。鷹姫のオシッコが勝手に出て来て、このパツクに貯まるんよ」

「っ…み、見ないでください!」

「そんな真っ赤になって恥ずかしがって鷹姫、可愛いな」

「っ……………っ……………」

「どんなに止めようとしても、勝手に出てくるやん? どう気分は?」

「いや……………嫌です……………やめて……………やめてください」

「途中で抜くと、たぶん溢れるから最後まで採るよ」

「……………うう……………」

鷹姫が恥じらいで涙を零すと、鮎美は目尻を舐めて涙を拭った。そして、どうしようもなく衝動が高ぶってしまい、鷹姫を脱がせて身体を舐める。乳首を吸い、腋を舐めた。真冬だったけれど、一日中忙しく電話応対を、ときには英語も使っていた鷹姫の腋は強い匂いが出て、毛が生えているので性器を舐めているような気持ちになる。

「ハア……………ハア……………」

「く、くすぐりたいです」

「……………」

鷹姫は身体を舐められることには、あまり羞恥心を覚えないうで鮎美としては面白くない。股間を舐めてさえ反応は薄かったので、鮎美は右手の指先を鷹姫のお尻へやりつつ、舌を噛まれたりしないよう左手の指を鷹姫の口へ入れた。左手の指を鷹姫の舌にからめつつ、右手をお尻の奥に入れる。

「んんっ?!」

鷹姫がビクリと動いた。実直に手足は動かさないうけれど、鮎美の指を噛んでくる。

「痛っ…」

鮎美は指を噛まれても続けた。痕が残るくらい噛まれてもいい覚悟で続ける。

「んんん！ んんん！」

鷹姫が拒否するような声をあげながら指を噛んでくるけれど、食いちぎられるほど強くはない加減されたものだった。

「お尻も初めは気持ち悪いけど、慣れると、これはこれで不思議な気持ちよさがあるんよ」

「んんん！」

鷹姫が反応してくれると、ますます鮎美は衝動が強くなり、もう最後の一線も越えたくなくなる。右手の親指を鷹姫に触れさせた。せめて挿入する前に問う。

「鷹姫……………ここに指、入れていい？」

話ができるように左手を口から抜いた。

「嫌です！ やめてください！」

「……………お願いよ。痛くせんから」

「嫌です嫌です！ あなたは私を愛してくれているのではないのですかっ?! これでは、ただ欲望の対象にしているだけです！」

「っ…」

興奮していた鮎美の脳が冷や水を浴びせられたように醒めた。

「ごめん……………鷹姫……………もう、やめるわ。これ抜くよ。力を抜いてな」

「うう…」

ゆつくりと抜かれても鷹姫は尿道の違和感に身震いした。

「抜けたよ。パンツ、穿かせてあげるし足あげて」
「…ぐすつ…」

「ほら、おしまい」

鮎美は鷹姫のスカートを直して手を引いて起き上がらせた。

「ごめんな、鷹姫」

「…もう帰らせてください」

「うん、送るわ」

「一人で平気です」

鷹姫は部屋を出て行き、残された鮎美はソファに座って後悔する。
しばらくして松田川が入ってきた。

「どうだった？ その顔はダメだった…っ?! どうしてカテーテル
が出てるの?!」

松田川はベッドに残っていたカテーテルと尿の入ったパックを見
て驚き問うた。

「あ…これは…」

「まさか、これを宮本さんに使ったの?!」

「…すみません…勝手に…」

「すみませんじゃない!! 素人が勝手に触っていいようなものじゃな
いのよ!!」

「……………」

「あきれるわ!! バカ!!」

「……………弁償しますし…いくらですか？」

「……………」

松田川は怒ったまま黙り込み、鮎美も言葉がないので室内は重い沈
黙に支配される。しばらくして、すでに夕食の時間が過ぎているので
鮎美は恐る恐る問う。

「夕飯、何を頼みますか？」

「…何でもいい」

「ほな、親子丼にしますね」

出前を取り、静かさが痛い夕食を終えた。

「…お風呂、入れ直しますし、入ってください」

「……………」

返事はなかったけれど、鮎美は風呂の用意をした。

「お風呂、準備できましたし、どうぞ」

「……………」

かなり松田川は怒っている様子で、黙ったまま動かない。鮎美は居心地悪くソファに座ってから尿意を覚えたのでトイレに向かおうとしたけれど、突然に激痛に襲われた。

「ううっ?! 痛っ! 痛い痛い! ああああ!」

股間が刺されたように痛くなり、蹲ると尿を失禁してしまった。ナプキンをあてていたけれど、それでは吸収しきれず下着と制服が濡れて床に水たまりができる。

「ハア…ハア…ううっ…」

「どうしたの?! 傷が痛むの?!」

怒っていた松田川が医師らしく怒りを忘れて駆け寄り診てくれる。

「傷跡は大丈夫。…どうして急に……。どのあたりが痛かった?」

「傷跡より、おしっここの穴あたりが痛かった気がします。そろそろトイレに行こうと思ったら、急に我慢できんようになった感じで、そしてナイフか錐で刺すような痛みがして。けど、漏らしてしまったら、痛みは消えました」

「尿道に傷でも…ああ!」

松田川が思い当たる。

「一度、入院中に強引にカテーテルを自分で抜いたでしょ!」

「あ…はい…そんなことしたかも…」

「あれで傷になってるのよ、奥で」

「…傷に…それ、治るんですか?」

「……………」

松田川は黙って考え、鮎美を懲らしめることにした。

「治らないよ」

「……………治らないって…?」

「カテーテルは先端がバルーン状になるって言ったよね。そのバルーンを膨らませたまま強引に抜いたりしたら、そりゃ括約筋が切れて、オシッコが我慢できなくなるよ。膀胱は尿が一定量を超えたら排出しようとするから、それを止めるのが括約筋で、その状態で尿意を覚えるから。括約筋が切れると、トイレに行く間もなく漏らすの」

「松田川の説明を聞いて鮎美の顔が不安そうに青ざめる。」

「……………薬とか手術で治らんですか?」

「医者は魔法使いじゃないから、失明した人が失明したままなように、芹沢さんは一生、オシッコ垂れ流しだよ。気の毒にね。けど、自業自得」

「…そ……………そんな……………な、何とかしてくださいよ、医者でしょ?!」

「医者は魔法使いじゃないけど、診断書なら書けるから、それで障害者認定してもらえば、オムツ代とか補助がでるはずだよ」

「……………障害者……………うちが障害者になるんですか?」

「なるよ。だんだん悪化するし」

「悪化って?」

「尿道の奥で括約筋が切れるなんて普通の怪我じゃありえないから、括約筋を含めた排泄をコントロールしてる神経が、だんだん変調をきたすの。腰の背骨から出てくる神経は腰神経叢って言う、いわば小さな脳みだいに再集結して排泄をコントロールしてるからオシッコのコントロールが狂うと、大便をコントロールする括約筋も本人の意志に関係なく漏らすようになる」

「……………」

「そして、いずれ腰神経叢の全体に神経障害が拡がって、腰から下が麻痺するから車イス生活になるよ」

「……………い……………いずれって?」

「半年から一年。それで歩けなくなる」

「……………い……………一生?」

「一生」

「……………い、嫌や!」

「嫌なのは他の障害者もいっしょだから。我慢しなさい。障害者の気

持ち、理解できて良かったんじゃないの？」

「……そ……そんな……うちが……」

青ざめて蒼白になった鮎美は両手をブルブルと震わせている。絶望に沈んでいく顔を見て、松田川は調子に乗りすぎている鮎美を反省させる良い機会だと思った。

「私は宮本さんが心配だから診てくる。あの子まで障碍者になったら、あなたの責任ですからね！」

心配なのは本当だったので松田川は議員宿舎を出ると、鷹姫が宿泊しているビジネスホテルを訪ねた。ノックすると、すぐに鷹姫がドアを開けてくれる。室内からコンビニ弁当の匂いがした。

「ちよつと、さっきのことで話があるの。入っていい？」

「はい、どうぞ」

「ご飯中だった？」

「今、食べ終わったところです」

「誰か来てたの？」

松田川は空になった親子丼とカツ丼と幕の内弁当の容器を見て問うたけれど、恥ずかしそうに鷹姫が片付ける。

「いえ、誰も。それで、お話というのは何ですか？」

「さっき芹沢さんと何をしていたか、教えてくれる？」

「それは……」

「誰にも言わないし。何より心配だから教えて」

「はい」

鷹姫は鮎美との間にあつたことを説明した。

「そんな、ひどいことされたの……」

「……。気にしていませんから」

「気にしようよ……」

松田川は再び考え込みながら、とりあえず診察する。

「カテーテルを入れられたところ痛くない？」

「はい。大丈夫です」

「診せてもらっていい？」

「はい」

鷹姫が下着を脱ぐので、松田川は窓のカーテンを閉めた。

「ベッドに寝て。足を開いてもらっていい?」

「はい」

ホテルの照明では暗いので、松田川はペンライトで鷹姫を診た。

「血は出てないから、外に傷はないかな。中に傷があるか気になるから、採られたばかりで出ないかもしれないけど、お風呂場で、これにオシッコしてみてください」

松田川は鷹姫がゴミ箱に捨てた幕の内弁当の蓋を取り出して、よく洗い、完全に水分が無くなるようにティッシュで拭いた。その透明な蓋を差し出されて鷹姫が戸惑う。

「それへ……………食べ物を入れる器なのに……………」

「どうせ捨てるし。むしろ捨ててあったし」

「それは、そうですが……………行儀の悪いこと、この上ないというか……………バチ当たり……………。あの…、これはSMですか? そういうことは嫌です。お断りします」

「違う違う。ホテルの部屋で、お弁当箱にさせられると思うから、変なことさせられてる気になるかもしれないけど、実質、医者に紙コップへ検尿させられてるのと同じだから。れっきとした医療行為だよ。疑わないで、オシッコしてきて」

「…はい……………」

鷹姫は弁当の蓋を持ってバスルームへ入った。しばらくして恥ずかしそうに持ってきた。顔を真っ赤にして耳まで赤くしている。

「……………少しだけ……………ですが…」

「すぐに脱ぐわりに、そういう羞恥心は強いよね」

受け取った松田川が、じつくりとペンライトで照らして診るので、鷹姫はとても恥ずかしくて目をそらして問う。

「そんなに……………見ないといけませんか?」

「血が混じってるかどうかを診てるの。オシッコを出すとき、痛くなかった? あとカテーテルを抜かれるとき、どうだった? 痛かった?」

「いえ、大丈夫です。……………抜かれるときは、変な感じがしましたけれど

「……痛くはなかったです」

「そう。バルーンを膨らませる操作をしなかったのね。よかった」

安心した松田川がトイレに流してくれたので、やっと鷹姫は落ち着く。

「もう下着を穿いてもいいですか?」

「あ、ごめん、ごめん、どうぞ」

「芹沢先生が括約筋を傷めたのは大丈夫なのですか?」

「うん。たぶん2、3日で治るよ。大袈裟にデタラメ医学で障碍者になるって脅しておいたけど、括約筋も切れてはないと思うし、軽い肉離れくらいかな。ただ、肉離れた腕や足で運動したら、とても痛いようにオシッコを我慢すると、すごく痛いから私の指導を守って、こまめに行けば平気なはず」

「そうですか、よかった」

「心配してあげるんだ……えらいね……。でもさ、芹沢さん、かなり調子に乗りすぎだと思うの。カムアウトして怪我也治りそうで、何より記者会見も成功して、世間がチャホヤしてくれるから、つい浮かれるのは人間として仕方ないと思うけど、そういうときって足元をすくわれやすいよ」

「そうなのですか?」

「うん、全能感っていうんだけど、物事がうまくいっていると、ついつい自分は何をしても許される。そんな勘違いをしてしまう。路上チューとか不倫は文化、とかね。で、世間ってあげるだけあげておいて叩き落とすときは、どん底まで落下させるから。そうなる前に、しっかりと芹沢さんには反省してもらいたいの」

「反省ですか……」

「私も賛同した以上は、彼女が失敗するところは見たくないし。今のうちにお灸を据えて今後の糧にしてほしいわけ。宮本さんは介式さんと仲いいよね?」

「はい、親しくさせていただいております」

「介式さんにも協力してもらって反省させるから呼んでもらえる?」

「わかりました」

鷹姫が電話をかけ、三人で相談した後、松田川は議員宿舎へ戻った。鮎美は濡らした制服を着替えたようで予備の制服を着ているけれど、ソファに座って沈んだ顔をしていた。松田川が帰ってきたのにも、すぐ気づかず絶望的な顔をしている。

「ただいま」

「……あ…、……た…鷹姫は、どうでした？」

「………」

あえて松田川は冷たい目で鮎美を見下ろして言う。

「宮本さんのことは、彼女の個人情報だから言えません」

「そんなん言わんと、教えてくださいよ。うち丁寧にしたつもりやけど、傷になってたんですか？　まさか鷹姫まで障害が残るとか、無いですよ？！」

「障害が残るか、残らないか、そういうこと他人に知られたくないものですよね。医師は同意書が無ければ、ご家族以外に患者情報をつけることはありません」

「そんな……」

「芹沢さんは、かなりひどいことを宮本さんにしたよね？　彼女、ずっと泣いてたよ」

「…鷹姫が……」

「実質、強姦したみたいなものでしょ？」

「………」

「ご両親に相談して、警察に通報するかもって」

「っ?! そんな?!」

「私が親だったら許せないよ」

「う…：うちは、そんなつもりじゃ…」

鮎美が頭を抱えて震えるので松田川は時計を見た。そろそろメールが来る頃で、鮎美のスマートフォンが鳴り、慌ててメールを確認している。鷹姫の携帯電話からのメールだった。

これから警察へ行きます。反省してください。

とだけ、打たれている。読んだ鮎美は青ざめていた顔を、さらに蒼

白にして鷹姫へ電話をかけたけれど、電源が入っていない。

「鷹姫……そんな……ホンマに警察へ……」

「あ、通報されたんだ。そりやそうだよ。あと、カテーテルを勝手に使うのは医師法違反だよ。実は浣腸でも自分でするのはOKだけど、業として他者にやると医師法違反だし。知ってた？ 芹沢議員さん」

「っ……っ……っ……」

「私のカバンから無断で盗ったから窃盗もあるよね」

「……っ……っ……」

もう鮎美はパニックになっていて、あまり話を聴いていない。ソファの上でガタガタと震えて、冷や汗と涙を流している。

「……鷹姫……ごめん……そ……そや……示談……300万円で……」

「うわ、お金で解決とか、最低。しかも、安いし」

「い、いくらでも……払うし……」

鮎美はブルブルと震える指で鷹姫へメールを打ち始めた。

「い、一千万でも……そ、そや、うちが大学に行くお金が浮いたって父さんが……父さんに頼んだら、うちと合わせて二千万でも……。う、うちが逮捕されたら……鷹姫も秘書の仕事が……。う、うちが在職してたら……四千万でも……党からの、お金も……。鷹姫……。い、……一億でも払うから……」

「それ自分で働いたお金じゃないよね。売春でもして苦労を味わえば？ そういえば、女性同性愛者って男相手に売春できるの？」

「……た……鷹姫……お願いよ……電話に出て……」

「まあ、芹沢さんは、そのうち下半身麻痺になるから売春も無理かな」

椀田川は、そろそろ眠たいので3本目の缶酎ハイを開けて、ゆっくりと鮎美が怯える様子を眺めながら眠った。

1月27日 取調

翌1月27日木曜の午前2時50分、人間の脳がもつとも活動しにくい時間帯に、議員宿舎の鮎美の部屋で、松田川は自分のスマートフォンにセットしていた目覚ましアラームで起きた。

「うゝ……腰いた……」

「……っ……っ……」

松田川はソファに座ったまま眠っていたので少し腰が痛い。缶酎ハイのせいで軽い頭痛もする。目前には鮎美がいて同じくソファに座り、一睡もしていない顔で震えていた。

「……っ……鷹姫と示談……っ……それから……うちの身体は……もつと、大きな病院で診てもらって……」

それなりの対策を震えながら考えている。松田川は二日酔いでの頭痛を消すために、冷蔵庫から水を出して飲み、時計を見た。

「……」

ちょうど午前3時になり、チャイムが鳴らされた。

「こんな時間に誰かな」

打ち合わせ通りに介式が来てくれたのだと、わかっているのにトボけながら応対しようとする、鮎美の方が先にドアを開けた。

「鷹姫……っ……か、……介式はん……」

ドアの向こうにいたのは期待していた鷹姫ではなくて、介式だった。その顔が険しいので鮎美は本能的に一步さがった。介式が室内に入ってくる。

「宮本くんから相談を受けた。芹沢議員に訊きたいことがある！」

「っ……な……なんですか？」

「宮本くんに性的なイタズラをしたというのは本当か？」

「っ………………い…………いえ…………い、イタズラ…………というようなことは…………な……ない、ですよ。ない、です」

鮎美は目を泳がせ、額に汗を浮かべながら、しどろもどろに言った。介式は容疑者を睨む警察官の目で鮎美を見据える。

「宮本くんの話では、いきなりキスをされたと聞いたが？」

「そ……それは……あ、挨拶というか……す、スキンシップで……」
「キスをしたのは事実なのだな？」

「つ……じ……事実というか……す……少し、唇がツ……触れたか……触れていないか……そ、そのくらいの……」

鮎美は額の汗を手で拭いつつ、震える唇で言った。松田川が白々しく問う。

「介式警部、こんな時間に、どうされたんですか？」

「宮本くんから相談を受け、芹沢議員へ事実確認に来た。場合によっては強制わいせつとして逮捕する用意もある」

「つ……た……逮捕……。……け、けど！ 会期中やし！ 不逮捕特権があるはず！」

その程度の反論を鮎美がすることは予想されていたので介式は言い返す。

「性犯罪等で証拠の保全を要し、かつ犯行から12時間以内である場合、現行犯とみなしうる」との判例が出ている」

「つ……そ……そんな判例が……」

刑法と刑事訴訟法は一通り勉強したけれど、細々とした判例までは把握していない鮎美は存在しないデタラメな判例を本職の警察官に言われて背筋が凍った。恐る恐る時計を見ると、まだ12時間は経過していない。こんな時間に押しかけてきた理由は本気で鮎美を逮捕するためなのだと感じて全身に冷や汗が流れた。

「キスをしたのは事実なのだな？」

「……じ……事実か……どうか……その……に……認識の相違が……あ、あるんじゃないかと……」

「松田川先生は現場におられましたか？」

「はい、見ていました」

「ひ……松田川先生……」

鮎美は額からの汗で濡れた目で露骨な目配せをして、証言しないで欲しいと伝えたいけれど、松田川は無視する。

「たしかに、あれはキスでした」

「っ……。……や……。いえ……。違う……。と……。い。う。か……。そ……。そう
見えたかもしれんけど……。い……。いつも二人の……。あ、挨拶のような
スキンシップで……。ちよ……。ちよつと……。いつもより……。勢いが
……」

「松田川先生、どのような状況でしたか？」

「宮本さんが事務的な報告をしていたんですけれど、それが終わると
芹沢さんが彼女へ、上を向いて目を閉じるよう言われ。それに従った
ところを、いきなり」

「いきなり同意無くキスをした？」

「はい、そう見えました」

「た……。鷹姫は嫌やとは言わんかったし！」

「宮本さんは嫌そうでしたけれど、困った顔で何も言えない感じでした」

「宮本くんは舌を入れられたと言っているが、そう見えましたか？」

「はい、そう見えました」

「っ……。あ……。あれは……。あれは……。別に……。な……。何でもない……。
た、たまたま……」

「その後、芹沢議員は宮本くんへ何をしましたか？」

「え。っ。と……」

松田川が記憶を辿る演技をしてから答える。

「好きよ、鷹姫。と言っていました」

「っ……」

鮎美が顔を伏せた。介式は冷厳に続ける。

「言われた宮本くんは、どうしていましたか？」

「そうですか、と困った顔で受け流している感じでした」

「それで芹沢議員は、次に何を？」

「うちが総理大臣になったら、うちと結婚してよ、というようなことを
言い出していました」

「……。っ……。っ……」

鮎美は勢いで言ったことを詳細に語られ、伏せた顔をあげられな
い。自分でも総理大臣などとバカなことを言ったという自覚は強く

ある。

「宮本くんの返答は？」

「私には許嫁がいますから、と断っていました」

「はつきりと宮本くんは拒否した？」

「はい」

「それで芹沢議員は納得した？」

「いえ、それでも宮本さんに迫って、総理大臣でも、あかんの？ など

と言っていました」

「言われて宮本くんは？」

「そういう問題ではなく…、と困り切っていました」

「拒否しても引き下がってくれないので困っていた？」

「はい」

「その後は？」

「その後、芹沢さんは私へ部屋を出て行くように言いましたから、後は何があったか見ていません。…あのとき私が、しっかりしていれば…宮本さんは傷つかずに済んだのに…」

　　松田川が顔を伏せ、介式は鮎美を睨んだ。

「その後、宮本くんの背後へ回り、抱きついたそうだな？」

「っ……だ……抱きついた、というか……少し触れたくらいのこと……」

「宮本くんは、抱きつかれ耳へ口づけされたと言っているが？」

「……じゃ……じゃれ合った……感……感……い、いつも……あること……」

「さらに首へキスし、髪を撫で、再び口へ舌を入れたそうだが、事実か？」

「っ……そ……そういう……感……感……言……言……方……方……た……ただ、じゃれ合っていただけです……」

「さらに宮本くんのスカートの中へ手を入れ、みだらに腿を触ったそうだが？」

「……た……た……た……た……た……た……手……手……が……が……あ……あ……た……た……り……り……に……に……当……当……た……た……つ……つ……て……て……」

　　鮎美は何度も額の汗を手で拭いているうちに、手がびしょ濡れになってきたのでハンカチを使うことを、やっと思い出した。せわしな

い動作で額や首筋の汗をハンカチで拭いている。

「宮本くんは、やめてください、と言ったそうだが、芹沢議員はソファからベッドへ行くよう指示し、嫌がる宮本くんへ何度もキスし、無理矢理に押し倒した」

「む…無理矢理ちやいますよ！　だ、だいたい、うちと鷹姫やったら、腕力は鷹姫が強いし！　うちが無理矢理に押さえつけるなんてこと無いですわ！」

やっと反論できそうなことを見つけて鮎美は叫んだけれど、介式は冷たい声で続ける。

「芹沢議員は宮本くんの衣服を脱がせようとしたが、抵抗されたため、自分の下腹部にある傷跡を見ろと言い、裸になって性器を露出した」

「そ、そういう言い方、やめてくださいよ。ホンマに傷跡を見てもらったんですよ！　うちの傷、パンツまで脱がんと見せられへんし！　鷹姫は責任を感じてくれてたから、ちゃんと治ってるそこ！　見せたかったです！　やましい気持ちはありません！」

「さらに宮本くんへも肩の負傷跡を見せるよう言い、衣服を脱ぐよう指示し、脱いだところへ抱きついて負傷跡へも口づけした。その後、全裸になるよう宮本くんへ求めたが、はつきりと拒絶されている」

「鷹姫が嫌がったから、うちは何もしてません！　怪我が治ったばかりの、うちが風邪を引くからって鷹姫は、うちを心配してくれたし！　うちも鷹姫も、そこで服を着たんです！」

「だが、帰ろうとする宮本くんに対して、居留まるよう指示し、何をしたか説明してもらいたい」

「つ……そ……それは……、あ、あれはですね。ちゃんとした理由のある行為なんですよ」

鮎美はベッドを振り返って、いまだに放置してあるカテーテルを見た。鷹姫へ使って、そのままになっている。これが大きな証拠になることは法知識が無くてもわかるほどなので、鮎美は捨てておかなかつたことを激しく後悔しながら言い募る。

「い、一種の体験学習ですよ！　病気や障碍のある人の気持ちを知ろ

うというー」

「どのようなことをした？」

「で、ですからね……まあ……なんというか……あれ……ですよ……それ……」

「まず宮本くんにベッドへ横になるよう指示したか？」

「……は……はい、それは……まあ……そう言いましたけど……」

「だが、宮本くんは先刻から続く性的な求めを警戒して渋った。にもかかわらず、芹沢議員は、身体障害者の気持ちを知るべきだ、お前も体験して気づけ、と強制した」

「きよ……強制ちやいますよ。……言い方も、そんなキツくないし……」

言い訳する鮎美へ、松田川が横から言う。

「よくもそこまで卑劣な理由付けができるものねえ……しかも、身体障害者のことを引つ張り出してくるとか、人間として最底ね。もう最低の最低、底なしの卑劣さ」

「なおも宮本くんが渋ると、お前は秘書だ、私の命令に従え、寝ろ、と言ったはずだ」

「そんな言い方してませんよ！ た、たしか……、鷹姫も秘書なんやし、これも秘書業務の一環やと思ってるやってみて、と言うただけです」

「どつちにしても地位と立場を利用した典型的なパワハラ・アンド・セクハラね」

「よ、横からゴチャゴチャ言わんといってくださいよ！ き、記憶が曖昧になりますやん！」

「芹沢議員に命じられ、宮本くんは選択の余地なく、ベッドに寝た。そこへ、パンツを脱げ、と命じた」

「そ、そんな言い方やないですよ。パンツ脱いでよ、と優しく言うただけです」

介式は鷹姫から聞いた関西弁混じりの報告を意識して記憶していたし、鮎美は脳内で記憶の改変を始めていた。

「不安を感じた宮本くんが下着を脱がずにいると二度目は、早くパンツを脱げ！ と怒鳴ったはずだ」

「怒鳴ってませんよ。恥ずかしがらんと早く脱いで、と穏やかに言うただけです。そしたら、鷹姫も理解してくれて、はい、って返事してくれたんです」

「下着を脱がせた宮本くんへ、膝を立て両脚を開いて、性器を露出するよう命じた」

「変な言い方せんといってください。必要性があつてのことです。カテーテルっていうてね、それでオシッコを採るんですよ。身体の自由な人のために」

「松田川先生、新しいカテーテルを一つ拝借できますか？ 容疑者に実演させます」

「はい」

「っ、誰が容疑者なんよ?! し、失礼にも、ほどがあるわ！ う、うちはな！ うちには自民党の参議院議員！ 芹沢鮎美なんよ！ た、たかが警部の分際で！ あんたなんか谷柿総裁に頼んで飛ばしてもらおうしな!!」

「うわああ……ここまで増長してんだ。人間の醜さつて、横で見るとイヤになるよ。まあ、医師会の中にも似たような人いるけど、18歳で、ここまで……」

げんなりとした顔で松田川は新しいカテーテルを医療バックから出すと介式に渡した。渡された介式は鮎美へ突きつける。

「お前が正当だという行為を再現してみろ」

「……。……覚えていや、ただでは、すまさんで」

オドオドと彷徨う瞳で介式を睨んで悪態をついた鮎美はカテーテルを受け取ると、パッケージを開封した。

「うちは正しい扱い方で、ゆっくり入れるよ、と鷹姫に言うてから、この先端を入れたんよ」

「宮本くんの、どこへ挿入したのだ？」

「……お……オシッコの穴……。そ、そういう器具なんですわ！ これが正しい扱い方！」

「芹沢さん、手を消毒したりゴム手袋を使うとか、してあげた？」

「っ……そ、……それは……」

「汚い手でやったのね。それだけで膀胱炎のリスクがあるのよ？
ちよつと私も心配だから、やったように、きちんと再現してみて」

松田川は自らベッドに寝ると両脚を開いた。ズボンタイプの白衣を着ているので性器は見えないけれど、状況再現には役立つ。

「はい、どうぞ。どういう風に入れたの？」

「えつと……こう、この丸い先端を鷹姫に向けて」

「ちゃんとヒダを広げて、尿道を露呈させた？」

「そ…、そのつもりです……さ、最初は、うまく入らんかったから、苦労したけど」

「宮本くんは痛みを覚えたそうだ」

「……それは……鷹姫に謝るし……うちも、一生懸命やっただです」

「痛みと恐怖を覚えた宮本くんは、思わず両手で防御しようとしたが、お前は怒鳴りつけて手足を動かすなど、言った」

「怒鳴ってませんし。今の鷹姫は障害者なんよ。両手両脚が自由に動かせへんの。何一つできない障害者さんの気持ちを、いっしょに勉強しよな、と言ったのです。そしたら、鷹姫は、はい、って理解してくれたもん」

「あの子は何にでも、はい、って言うよね。よっぽど嫌なこと以外は」

「……………」

「で、カテーテルの操作を実演してみてよ。どう突っ込んだの？ 私のお腹の上でやってみて」

松田川は医療従事者らしくM字開脚していても、着衣のままということもあり何一つ恥じる様子がない。むしろ、鮎美が鷹姫にしたことを本気で心配している。

「えつと……こうして……こう……こんな感じに……ゆつくり突っ込んでいって……うまくいったみたいで抵抗が無くなって、黄色いオシッコが管を流れてきました」

「やっぱりバルーンは膨らませなかったの？」

「……はい……」

「そう。よかった。ちよつと、それ貸して」

松田川は寝たままカテーテルを受け取り、操作する。

「ここを強く押すと。ほら、こんな風に先端が膨らむでしょ？」

松田川の操作で、細い管の先端が風船のようにピンポン球小に膨張した。

「ホンマや……こんな仕掛けなんや」

「こうして膨らませておくと、脱落しないわけ。けど逆に……」

松田川は膨らんだ先端より少し下を指で挟んで見せる。

「尿道括約筋が、この指だとしたら、もしも膨らんだままカテーテルを強引に引っ張り出したら、どうなると思う？」

「……………」

「ブチッと括約筋は切れて、二度と元に戻らない。内臓の奥で組織が破壊されると、その破壊は全体に広がるの。体験どころか、芹沢さんは一生、障碍者の気分でごせよ。まあ、それが本当の意味で、気持ちがるってことかもしれないね。お気の毒様」

「……………」

「医療器具はオモチャじゃないのよ。よくわからずに勝手に使ったこと、一生後悔しなさい」

「……………」

鮎美が今にも泣きそうな顔で問うと、松田川はそろそろ許してあげたくなり、介式の顔を見た。

「……………」

あまり意思疎通しやすい相手ではないけれど、まったく許す気がないことは伝わってきたので松田川も説教を続ける。

「治らないから障碍者って言うのよ」

「……………」

鮎美が涙を滲ませて手で拭ったけれど、介式は容赦しない。

「宮本くんは強引に尿を取り出され強く羞恥し、見ないでください、やめて、嫌です、と何度も懇願したのに、お前は続けた」

「……………」

「あの子が一番恥ずかしがるところだね。それ知っててやったでしょ？ 変態」

「お前は激しく羞恥する宮本くんを見て、真っ赤に恥ずかしがる鷹姫は可愛い。どんなに止めようとしても勝手に出てくるだろう。気分はどうだ？　　と言いついてた」

「ド変態ね……医療行為でやるのと、イタズラでやるのは、ぜんぜん意味が違うのに。しかも自分だって初めてされたときは泣いて嫌がったよね？　私に向かって、お願いです、私は処女なの、これ以上は何も挿入しないでください、って」

「……」

「宮本くんが泣き出すと、その涙を舐め、さらに衣服を脱がせて身体を舐め回した。とくに乳房と腋の下を執拗に舐めた。どのような必要性があつて行つたのか、説明を求めろ」

「……」

「さらにカテーテルを挿入したままの股間を舐め、右手を臀部にやると指を肛門に挿入した。どの指を挿入した？」

「……」

「何センチ挿入した？」

「……」

「右手を出せ」

「……」

鮎美は力なく右手を前に出した。その手首を介式が握り、鮎美の眼前に突きつける。

「人指し指を、どこまで挿入した？　　思い出せ！」

「……」

「第二関節だな」

「あ、私たち関西人と、介式警部たち関東人で第一第二関節の認識が違ふかもしれないよ。これ人によってバラバラだけど、正確には一番先が遠位指節間関節、で、先から二番目は近位指節間関節。指先を第一と思う人と、逆に考える人もいるし。指の根元を第一関節と思つてる人がいたり、これを第三関節と思つてる場合もあるけど、中手指節間関節なの。言いにくくて噛みそうな名前だから、私たちはDIP、PI

P、MPって言うけど。で、どこまで挿入したの？ 爪で腸粘膜とか傷つかなかった？」

「……このくらい……まで……です……」

鮎美は震える左手指先で右手人指し指の中ほどを指した。その左手指先には鷹姫が噛んだ跡がある。くつきりと歯形が残っていて、そこへ三人の視線が集まる。

「お前は宮本くんが悲鳴をあげないように左手を口に押し込んだかな？」

「ちや……ちやいます……そんなつもりじゃ……」

「悲鳴対策っていうより、これ前に宮本さんが、お尻に指を入れられるくらいなら舌を噛んで死ぬ、って言ってたから、その対策じゃないの？」

「っ……」

「ひっど！ やっぱり覚えてて一番傷つくことやったんだ？」

松田川が指摘し、鮎美が否定できずにいると、これまで警察官らしく冷静に追いつめていた介式が激昂した。

「このゲスが!!」

怒鳴って鮎美を殴ろうとするので、慌てて松田川が止める。

「やめて！ 暴力はダメ！ まだ完全に治ってるわけじゃないから、やめて！」

「くっ……こんなゲスに生きている資格はない!!」

「っ……うっ、うちは……た……鷹姫が嫌がったから……そこで……やめた……」

鮎美が頭を抱えて、そのときのことを思い出す。鷹姫に言われた言葉が蘇った。嫌です嫌です！ あなたは私を愛してくれているのではないのですか?! これでは、ただ欲望の対象にしているだけです！ と、悲痛な叫びが頭に響く。

「……鷹姫……ごめん……ごめん……鷹姫……」

「もう一度、両手を出せ」

「……」

もう思考力もなく鮎美が言われるまま両手を出すと、介式は手首へ

手錠をかけた。

ガチャっ…ガシャ…

重くて冷たい金属の音がする。

「ひっ?」

鮎美が引きつった声を漏らした。

「午前4時19分、芹沢鮎美、逮捕」

「ひっ……ひい……」

「逮捕容疑は強制わいせつ及び医師法違反、ならびに窃盗」

実務的には一度に複数の容疑で逮捕せず拘留期間が終わる頃に、あえて再逮捕して拘留期間を延長するという法テクニクを使うのが常套手段だったけれど、今まで万引き一つしたことのない鮎美は並べられた罪状に震え上がって腰を抜かした。

「ひいひい……い……いやよ……ご、ごめんなさい!」

足に力が入らず、お尻を床につけて蹲りながら謝り始めた。

「うちは…っ…そんなつもりじゃ…っ…ちやうんです…。…ごめんなさい…ごめんなさい。ううっ…ううっ…ゆ、許してください…ひーううう…」

泣きながら謝っているの、もう松田川は許してやりたくなかった。これだけ灸を据えれば、深く反省しているだろうと考える。

「介式警部、そろそろ…」

「……」

けれど、介式の顔は険しく一欠片の容赦もない。

「お前には弁護士を呼ぶ権利。ならびに黙秘権がある」

「ううっ…うわあああ! うわあああん!」

とうとう鮎美が子供のように声をあげて泣き始めた。

「……」

「……」

まだ許してあげないの、そろそろ可哀想だよ、という松田川の視線を受けても、介式は手錠のように冷たくて硬い。そこには松田川との大きな温度差があつて、松田川にとっては医師と患者、そして大きな計画の賛同者という親近感に根ざした叱咤と、介式にとっては可愛い

教え子へ性的な暴行を加えた加害少女と警察官という懲罰感情しかない熱量の違いがある。

「ひっ…ひぐっ…ううぐうっ…」

手錠をされた鮎美は床に蹲って土下座のような姿勢で泣いている。そろそろ警察署へ連行されないのか、という疑問をもつてもよさそうなほど放置されているのに、地位も名誉も計画も、そして健康さえ失うと思ひ込んでいたので、その絶望は深く、もう泣くことしかできなくなっている。そんな鮎美の号泣を20分ほど、介式と松田川は見下ろしていた。

「介式警部、そろそろ、いいんじゃないかな？」

「……………」

介式は冷たい目で松田川を見た。その瞳の奥に怒りが燃えている。松田川は人選をミスったかもしれないと、やや後悔してきた。

「ね？ そろそろ」

「松田川先生、私は宮本くんに連絡を取る。彼女の気持ちを今一度、確かめたい。しばらく、容疑者を見張ってもらえないか？」

そう言った介式は鮎美の両手首を前で拘束していた手錠を背後にかけ直し、たとえ暴れても容易に押さえられる状態にしてから、廊下には出ず、室内のトイレに入った。そこで水道を流しっぱなしにしながら、鷹姫へ電話をかける。これで部屋にいる松田川と鮎美へは会話内容は漏れないはずだった。

「もしもし、私だ」

「芹沢鮎美の秘書、宮本です」

「……………三人で話した通り、手錠をかけた」

「そうですか……………芹沢先生は？」

「……………子供のように泣いている。幼稚な声で」

「介式師範に睨まれたら、そうかもしれない。そろそろ許してあげてください」

「……………君は、それでいいの？」

「はっ」

「……………いや……………だが……………」

介式は納得できず、拳を握って言う。

「現場検証をしたが、思った以上に下劣なことをされている！」

「芹沢先生は私が本気で嫌がったら、やめてくださいました」

「あそこまでされれば十分に逮捕可能だ！ 会期中の国会議員を逮捕するのは難しいが、宮本くんさえ告訴してくれば、必ず罪を償わせてみせる！ 医師法違反と窃盗では構成要素が弱い！ 議員の逮捕は無理だ！ 協力してくれ！」

「……私は告訴しません」

「くっ……仕事か？ 秘書の仕事を失うのが心配なのか？ それなら、警察学校に入れ。宮本くんなら、どこでも入れる！」

「いえ……そういうことではなく……もともと逮捕は狂言ということ、反省してもらおうのが目的のはずです。……介式師範は芹沢先生を逮捕したいのですか？」

「ああ！ あのような輩！ 野放しにしておけるものか！」

「………。昨夜は、私も悲しく想いましたが、尊敬できるところも多い人です」

「どこがだ?! 特権意識で腐りきった他の政治家と同じだ！」

「……私は介式師範も尊敬しています。芹沢先生も尊敬しています」

「くっ……そんな悲しい声を出さないでくれ」

「芹沢先生は私を愛していると言ってくれました。それは同性愛者だからかもしれませんが、私も嬉しく思うところもあつたのです。けれど、昨夜は急に人が変わったように強引で……私は性欲の対象でしかないのかと感じて悲しくなりました……」

「自分のことしか考えていないのだ！ ヤツらは！」

「……それは私たちも同じではありませんか」

「っ……」

「結局、人は自分のことしか考えられません。私も勝手に芹沢先生へ期待して、期待が裏切られたから悲しかった……。芹沢先生は私へ自分の身体を大切にせよ、とおっしゃってくださいました。なのに、その芹沢先生が私を性欲の対象に……けれど、嫌がったらやめてください

ました。それで十分です。計画がうまくいきそうな滑り出しで、浮き足だつて足元をすくわれるかもしれないという松田川先生のご指摘は正鵠を射ていると思ひ、お二人の狂言に賛成しましたが、あまり芹沢先生に負担をかけないでください。まだ、病み上がりなのですから」

「……だが……ああいう輩は、許せば、また繰り返すぞ！」

「抱きつかれたり、キスくらいなら……。ただ、股間……とくに排泄するところへ指を入れたりするのは、二度としてほしくないのです。それだけ、反省していただければ、私は秘書の仕事に精励します。介式師範も夜中に私のために、ありがとうございます。もう、おしまいにしてお休みください」

「……許すのか？ 告訴しないのか？」

「許しません。告訴しません」

「くっ……わかった。あと少し強く言つて、終わりにする」

介式は電話を終えたけれど、納得できずに黙り込む。

「……」

水道の音が響いている。

「……。性犯罪を二度としないほど、反省させるべきだ……」

介式は腰に装備しているオートマティック式の拳銃を抜くと、弾倉を取り出し、全弾をポケットへ落とし込むと、銃本体にも装填されていないことを3回確認してから、水道を止め、トイレを出た。まだ鮎美は泣いていて、松田川は気の毒そうに見ている。

「介式警部、宮本さんは何て？」

「……。昨夜のようなことをされるのは二度とごめんだ、と」

「っ……鷹姫……、……うちなんか、産まれてきたのが間違ひなんや

……」

「そうだ！ お前は性犯罪者だ！」

「……」

フラリと鮎美が立ち上がった。後ろ手に手錠をされたまま、ぼんやりと室内を眺める。その瞳の色合ひで、松田川は医師として、介式は警察官として、自殺する気であることを気づいた。病苦で飛び降り自

殺しようとする患者や、裁判の結果を待たずに首を吊る容疑者が、自殺方法を考えている時の目で鮎美は室内に手頃なロープやコードが無いことを見ると、次に窓を見た。ここは高層階で落ちれば、ほぼ確実に死ぬはずだった。

「っ！」

「やめなさい！」

窓に向かって頭から突進しようとするのを松田川が駆けつけて止めた。

「離してや！　うちなんか死んだ方がええねん！」

「嘘よ！　全部嘘なの！　芹沢さんは下半身麻痺なんかにならないから！　ちよつと調子に乗って宮本さんにイタズラしたから怒って嘘をついただけ！　カテーテルくらいで下半身麻痺なんてありえないの！　安心しなさい！　オシッコ我慢すると痛いのも、すぐ治るから！　括約筋が肉離れになってるようなものなの！　切れてないから！」

「そ、…そうなん？」

「そうよ！　だから自殺なんてバカなこと考えるのは、やめなさい！　どうせ、こんな分厚いガラスに頭突きしたって、割れっこないけど！　怪我はするから！　あと、逮捕も嘘よ！　全部、嘘！」

「……逮捕まで……」

「いや、芹沢鮎美を逮捕しているのは本当だ」
「っ……」

「介式警部！　もういい加減にして！　本気で自殺する気だったのよ?!」

「……………。松田川先生、宮本くんが心配だ。見てきてくれないか?」
「そんな露骨な嘘を信じるもんですか！　芹沢さんと二人になったら、どうする気?!　今だって自殺しそうなのに止めようとしなさい！」

「先生もおっしやったように、そのガラスは簡単には割れない。それに、警護中の対象に自殺されれば、私の責任だ」
「治療中の患者に自殺されても私の責任なの！」

「宮本くんが心配なのは本当だ。見てきてほしい。彼女にも自殺などさせたくない」

「っ……鷹姫、そんなに傷ついて……」

「お前は傷つけていないつもりか？」

「っ……」

「頼む。松田川先生、早く行ってほしい。手錠は外そう。暴力を振るったりもしない」

「……………先に手錠を外してあげなさい」

「わかった」

介式が鮎美の手錠を外した。それで松田川は部屋を出て鷹姫がいるビジネスホテルへ向かう。二人になると介式は鮎美を睨んで言う。

「お前に生きている価値があると思うか？」

「……………」

答えずにいる鮎美のそばにあるテーブルへ、介式はオートマティック式の拳銃を置いた。

「自分で死ね」

「っ……………」

「言っておくが、私は予備の拳銃をもっている。それを私に向ければ、お前を射殺する口実ができる。そして、たとえ私を撃てても、お前には言い訳はない」

「……………」

「さあ、死ね。性犯罪者は死刑、お前たちの主張だろうか？ それとも、やはり二枚舌か？」

「……………」

鮎美は黙って拳銃を手に取った。ずっしりと重い。

「早く死ね」

「……………」

鮎美が疲れ切った顔で自分の頭に銃口を向けた。そして、引き金を引く。

カチッ……

虚しく金属音がして、弾丸は飛び出してこなかった。

「……ハア……ハア……」

死を覚悟したのに空振りして鮎美が息を乱す。介式は冷静に鮎美へ近づくと、震えている手から拳銃を取り上げた。

「こうしないと弾が発射されない」

そう言ってスライドさせる。

「これで次は死ねる」

再び鮎美へ拳銃を手渡した。

「……ハア……ハア……」

「死ね」

「………っ……ハア……」

もう一度、鮎美は自分の頭へ銃口を向けたけれど、今度は怖くて指が動かない。一度は覚悟した死が、とても怖くなって、死にたくなって泣けてくる。もう涙が枯れ果てるくらい泣いた後なので、目尻に滲むくらいで流れはしない。手が震えるのと、銃の重さで狙いが定まらない。

「ハア……ヒイ……ハア……ヒイ……」

「手伝ってやろう」

介式は銃を持っている鮎美の手を握ると、その狙いを頭部から腹部へ変える。

「頭では一瞬で死んでしまう。お前の罪を考えれば、苦しんでから死ぬべきだ」

「っ……」

「腹なら、頭や胸より長く苦しむ。さ、引き金を引け。私が支えていてやる。自分で引け」

「ううっ……」

鮎美が呻いた。腹部は刺されたことがある。その痛みの記憶が蘇ってきた。

「い……いや……あんな痛いのは……もう嫌ッ……」

「早く引け。苦しんで死ね。お前たちの主張だろう。政治家の皮肉だな。小沢も検察審査会を設置し、そして自分が強制起訴される。お前

は性犯罪者を残虐に殺すと主張し、お前が第一号になる。自ら模範を示すとは、立法者の鑑だな」

「ひっ…違っ…あれは被害者が二人以上でツ…強姦だけやなくて殺人が…要件で…直接証拠があつて…えん罪の余地が皆無の…」

「理屈はいい。死ね」

「うう…うう…」

もう死の恐怖より、苦痛への恐怖で鮎美は首を横に振った。

「そうか。無理か。では私が撃つてやろう。すでに十分に、お前の指紋は銃に付着している。私が撃つても、誤魔化しようはある」

そう言つて介式は鮎美の手から銃をもぎ取ると、銃口を鮎美の瞳へ向けた。

「ひっいいい…」

「選ばせてやろう。頭を撃たれて一瞬か、腹か、どちらがいい？」

「うううっ…ううううっ…」

呻くような声で泣きながら鮎美は眼前の銃口に恐怖して尿失禁する。

「ういう…痛っ…」

まだ括約筋が痛むけれど、松田川の言うとおりの回復傾向にあるのか、一度目ほどの痛みではなかったものの、そんなことを感じている余裕は少しもない。また腰が抜けて自分が漏らした水たまりにお尻をついた。

「ひい…ひい…あうう…あひい…」

「頭か？ 腹か？」

「あひいいい…ふいひい…はあひい…」

まるで下半身麻痺になったように腰から下に力が入らなくて、鮎美は両手で這つて後退る。後退つても介式の銃口が追いかけてくる。

「足がいいか？ 膝にするか？ 腹より長く苦しめるだろうな」

「ふひいいい！ ひああああ…はいいい…いひいいい…」

「膝がいいんだな？ 嫌なら嫌と言え」

「いいひいいいいい！」

鮎美は両手で両膝を押さえ、顔を引き攣らせて泣きながら首を必死に振った。その額に介式が銃口をあててきた。

「やはり、お前の悲鳴はうるさそうだ。一瞬にしよう」

「ひうひー！」

「そうだな。一瞬がいいな。よく考えたら議員宿舍だ。一発目の銃声で人が集まる。私が正当防衛だと主張するには、頭がいい。膝や腹だと、お前も何かしゃべるだろう。うむ、頭だな」

「ひいいひいいひい」

「そうヒイヒイと喚くな。お前にとつても最後の時間だ。ゆっくり罪を反省しろ。黙っていてやるから、祈れ。お前の祈りが終わるとき、撃つ」

「っ……」

「……………」

黙って介式は銃口を向けたまま、微動だにしない。殺気と気合いのこもった射撃姿勢で、よく訓練された人間独特の揺るぎない構えで鮎美へ銃口を向け続ける。剣道で打ち合う前の静止した気迫のぶつけ合いと読みの応酬にも似ているけれど、似ていて非なるのは鮎美には一切の対抗手段が無く恐怖しか存在しないことと、介式には圧倒的な武器と怒りがあることで、竹刀の先まで気を送るように、銃口から鮎美の額まで気を刺してくる。

「っ……っ……ひっ……っ……っ……死……っ……嫌……っ……」

「……………」

「……っ……嫌……っ……っ……っ……っ……」

いつ撃たれるかわからない恐怖が続き、蒼白だった鮎美が気絶しかけたとき、介式が引き金を引いた。

「死ね」

「っ……」

気絶しかけていた鮎美がビクリとする。

カシャン…

スライドされていたオートマティック銃は撃鉄を突出させる音を

出したけれど、肝心の銃弾がないので、またしても金属音だけが響く。

「ひいハア…ヒイ…ハア…」

鮎美は呼吸筋を引き攣らせたような呼吸をして涙を流している。介式は拳銃を見つめてつぶやく。

「私としたことが、安全装置の解除を忘れていた」

安全装置は解除していたけれど、実弾を装填していないと悟らせな
いたために嘘をつく。そして、より鮎美へ恐怖を与えるために、ポケッ
トから実弾を出して、目の前に突きつけた。

「私たちSPが所持している拳銃は、このように口径が大きい。……
この言い方では、お前には意味不明かもしれない。ようするに弾が
大きいのだ。その分、威力も大きい。この一発で、お前の頭は大型ト
ラックに踏み潰されたように弾け飛ぶ」

「っ…っ…」

鮎美の瞳へ触れさせるほど実弾を見せつけた介式はポケットに片
付け、また銃口で脅す。

「頭を撃てば一瞬で死ぬると言われているが、それが本当か体験して
証言した者はいない。実は一瞬ではなく、長く長く苦しむのかもしれ
ないな。火葬場に行くまで、一つ一つの脳細胞は苦しみ続けているの
かもしれない」

「…っ…うぐっ?!」

鮎美は銃口を唇へ押しあてられた。

「口を開け」

「ううっ」

顎の筋肉にも力が入らなくて、ずっとカチカチと歯を鳴らしていた
ので銃口を押しあてられると抵抗できずに口内へ銃身を挿入された。
喉の奥まで銃口を突っ込まれて鮎美は嘔吐しそうになったけれど、胃
が空っぽだったので苦しみ悶えただけだった。

「うぐう！ うえ！ ハアひ！ うう！」

鮎美の歯と金属の銃身がガチガチと音を鳴らし、銃に付着している
火薬と機械油の匂いを感じる。介式は冷たく見下した目で続けた。

「できれば、地獄があつて、お前はそこに行つてくれると、私も嬉しい。立場を利用して人を辱める等、ゲスの極み。地獄に落ちて当然だろう？」

「…っ…」

「見苦しく言い訳し、どこまでも逃げようとする。さあ、三度目の正直だ。もう安全装置も解除した、次で殺す」

「ふひい！ ふひい！」

「地獄に落ちて豚にでも生まれ変われ、ゲス」

「まだまだ介式は恐怖を与えるつもりだったので、かなり長めのカウントダウンを設定する。」

「あと100数える。それで最期だ」

「っ…」

「100、99」

「うううっ…」

鮎美は銃口を咥えさせられたまま恐怖に震え続けた。

「35……34……33…」

「いよいよ0が近づいてくると、介式はカウントダウンのペースを落とした。」

「5………」

「…っ…っ…」

「4………」

「極端に遅くなるけれど、もう鮎美は時間の経過を感じる感覚さえ恐怖で混乱をきたして、ただただ怖がって震えて泣くことしかできない。」

「1………とうとう最期だな。………」

「…ひっ…っ…ひっ…」

「いや、あと300数えよう。それで頭ではなく腹を撃とう」

「介式は銃口を鮎美の口から抜くと、再び腹部に狙いをつけた。やはり刺されたことのある場所を狙われるのが一番に怖いだろうという読みは的中して鮎美の恐怖は、さらに高まり、不自然すぎるカウント

の長さには気づかない。そのカウントが300から70まで続いたとき、松田川と鷹姫が部屋に入ってきた。

「介式警部、何してるんですか?!」

「芹沢先生に何をっ?!」

「暴力はふるっていない。二度と卑猥なことをしないよう銃で脅していただけた」

「銃で……」

「……っ……」

鮎美は鷹姫と松田川の姿を瞳にうつしても、ぐったりと手足を弛緩させていて、すでに震える体力もないほど弱っていた。駆け寄った松田川と鷹姫が抱き起こしても、反応が薄い。

「……っ……」

「芹沢さん、どこか痛い?!」

「芹沢先生……」

「……き……ぶ……め……」

やっと鮎美の目が鷹姫を認識して謝った。

「……ごめん……鷹姫……」

「もう、いいんです。……介式師範、やり過ぎです……」

恐怖で弱り切った鮎美を見て鷹姫は悲しくなった。介式は弾倉を抜いて言い訳する。

「弾は抜いてあった。万一にも暴発する可能性はなかった」

「……そういう……問題ですか……」

「介式警部! もう出ていってください!! 銃なんか向けられて、どれだけ怖かったと思うの!! なんて非常識な警官!!」

「……失礼する」

介式は部屋を出て行った。あまりに弱っているし、汗や涙を流したせいで鮎美には脱水症状もみられるので松田川は点滴をして、ごく少量の強心剤も与えた。鷹姫は床を拭いて鮎美の衣服を洗濯する。

「たしか予備の制服があったはず……」

クローゼットを探したけれど、上着はあってもスカートが無い。洗濯機を見ると、スカートが入っていたので2着とも汚してしまったよ

うだった。

「……………事務所に、もう1着あつたはず」

もう国会まで時間がないし、気がついた鮎美が制服を濡らした理由を思い出すのは気の毒だと想い、鷹姫は桧田川に言ってから、早朝の東京をタクシーで移動して事務所に入った。鍵はもっているのだから入り、事務室を抜けて奥の執務室へ入った。そこには誰もいないと思つたのに、二人もいて驚く。二人の方も時間的に誰も来ないと思つていたのに驚いている。

「っ……」

「あ、いたのですか。牧田さん、…………誰ですか、あなたは？ 私たちの学校の……」

「…………」

詩織は国際電話で忙しく外国人と話しているようだったけれど、鮎美か石永が座るはずの執務機の椅子に腰かけていた。そして、詩織は片足が素足で、その足を舐めている制服姿の女性がいた。鮎美の制服を着た朝槍はウィッグをかぶつていて、一瞬は誰かわからなかったけれど、すぐに鷹姫も気づく。

「朝槍先生ですか？」

「っ……」

朝槍は舐めていた詩織の足から離れて顔を伏せ、声を震わせて言う。

「……………、……………これには……………わ、わけがあつて……」

「W i e b i t t e ?」

詩織の方は堂々と国際電話を続け、聞き逃したことを問い直している。朝槍がコスプレしていたことはフォローせず放置する気だった。朝槍は顔を伏せたまま、しどろもどろに言う。

「な……………なんていうか……………あ……………憧れというか……」

いい歳をして本人に無断で制服を借りていた都議は不倫記者会見をする政治家のような心地で汗を流し、そして誤魔化しきれないで、認めて謝ることにした。

「ごめんなさい!! どうか今見たことは誰にも言わないでください

！」

「朝槍先生……………」

鷹姫は朝槍へ歩み寄る。

「どうか黙っていて！　お願いですから！」

「朝槍先生、あなたのお気持ちはわかりました」

歩み寄ってきた鷹姫が右手をサツと動かしたので、朝槍は引っぱたかれるのだと覚悟したけれど、頬に痛みは走らず、右手を温かく握られた。

「っ……？」

「立派な覚悟です。感動しました」

「……………え、……………？」

芹沢鮎美コスプレをして詩織の足を舐めていたところのどこに感動する要素があるのか不明で朝槍が首を傾げると、ウィッグの人工毛がサラサラと本人のようになびく。鷹姫が澄んだ瞳で朝槍を見つめた。

「姿を真似、影武者を演じるとは。暗殺されかけた芹沢先生も心強いでしょう。自ら、もつとも危険な役目を負い、芹沢先生を支えてくださるとは感動です」

「か……………影武者……………」

「ですが、年齢が違いすぎて、暗殺者に見抜かれるかもしれません」

「…ね……………年齢……………」

「私が演じられれば歳は同じなのですが、身長が違います。これは人選が難しいですね。何より、勇気が要ります。そして秘密にする必要性も高い。近いうちに話し合います。今は取り急ぎ、その制服を取りに来ましたので脱いでいただけますか？」

「え……………脱ぐのは……………」

実は制服の下には詩織が記者会見で使ったバイブを貸してもらっているのです、鷹姫の前では脱げない。しかも詩織は国際電話を続けながら、ときどきリモコンを堂々といじっている。おかげで朝槍はモジモジと身をくねらせ、顔を赤くする。

「ちよ……………ちよつと……………脱ぐのは……………その……………あの……………わ、私、ピア

ンだから……宮本さんの前で脱ぐのは、ちょっと恥ずかしくて。そ、
そういう気持ち、なの」

別に平気で女湯に入れるけれど、朝槍は嘘をついてみた。それを鷹
姫は信じてくれる。

「わかりました。事務室にいますので持ってきてください」

鷹姫が執務室を出て行き、詩織は国際電話を終える。受話器を置い
たついでにリモコンを全開にした。

「んんっ…はあんっ…」

朝槍が膝を着いて身悶えする。詩織はスケジュール表にメモしな
がら注意する。

「変な汗をつけないください。すぐに持っていくそうですから」

「ハア…ハア…だ、…だったら、スイッチを…」

「ナユが脱いだばかりの制服を着て、鮎美は国会議事堂に行く。それ
を想像しながらイキなさい」

詩織がバイブだけでなく手と唇も使って愛撫してくる。朝槍の性
感帯である耳を舐めて吸い、スカートの前後を両手で押さえてバイブ
全体をピストンしてくる。

「あはっ！ うくうう！ イ…イク…そ、そんなにしたらスカート汚
しちゃう！」

「我慢しなさい。下の口から垂らしたヨダレまみれのスカート、宮本
さんに渡す気ですか？」

「んうう！ だって、だって、自然に出ちゃうんだもん！ 嫌、嫌！

そこ、それ以上、ペロペロしないで、あん！ あん！ イヤあくんっ
！」

嫌、嫌と言いつつ、朝槍は舐めてもらいやすいようにウィッグの髪
を手でのけ、耳を露呈する。もともと朝槍が地毛をショートカットに
しているのも、耳を責めてもらうためだった。結局、鷹姫を15分も
待たせた朝槍はティッシュで拭けるだけ拭いた制服を事務室へ持つ
ていった。

「遅くなって、ごめんなさい」

「……………」

鷹姫は事務椅子に座り、腕組みして目を閉じ、返事をしてくれない。さすがに待たせすぎて怒らせたか、と朝槍は不安になったけれど、鷹姫は座ったまま寝ていた。

「なんだ、寝てるの。お疲れなのかな。起こすのかわいそう……けど、こんな時間に取りに来るあたり急ぎなんだろうし。宮本さん、宮本さん、遅くなつて、ごめんなさい」

朝槍が揺り起こすと鷹姫は目を開けた。

「ここは……事務所、……なぜ……あ……制服を……」

「はい、遅くなつて、ごめんなさい」

「いえ、どうも、ありがとうございます」

受け取った鷹姫はクリーニングに出しておいたはずの予備制服から朝槍の匂いを感じて違和感を覚える。

「……………」

制服の生地へ顔を近づけて匂いを嗅がれると、朝槍は赤面しつつ言う。

「ご、ごめんなさい！ か、影武者をやるかと思うと、緊張して汗をかいてしまつて！ それで匂いがしたら、ごめんなさい！」

詩織が考えた言い訳で、とうの詩織は新たにかかってくる国際電話を受けている。こんな言い訳が通じるのかと、朝槍は不安だったけれど、鷹姫は頷いた。

「お気になさらず」

「……………あ、ありがとう……」

「影武者の件も、また話し合います。では、失礼します」

鷹姫は議員宿舎に戻り、制服を用意しつつ松田川に問う。

「芹沢先生のご様子は？」

「今は眠ってるわ。かわいそうに、よっぽど怖かったみたい。寝ながら涙を零してる」

「そうですか……」

「今日の国会への出席、どうしよう……ここまでダメージを与えるつもりじゃなかったのに……」

「……………」

「やっぱり、休ませてあげた方がいいかな」

「……私も同意見です。けれど、芹沢先生のお気持ちを考えると、無理をしても出席したかったとおっしゃられるような気がします。私が芹沢先生の立場でも同じです。学生議員として甘く見られるのを避けようと頑張っているから、少々の風邪でも休まないつもりだ、と何度か言っておられました。お怪我は大丈夫なのですか?」

「傷はね。暴力を受けたわけじゃないから。けど、精神的には……」

「医師として、どう思われますか?」

「うくん……身体的には問題なし、睡眠不足くらいかな。それは、私たちも、だけど」

　　松田川は眠そうに目を擦った。鷹姫は考えをまとめぬ。

「では、遅刻しないギリギリの時刻まで休んでいただき、そこで起きていただいて、ご体調を見て判断するということで、どうでしょうか?」

「そうね。抜けてるところあるかと思うと、意外としっかりしてるよね、あなた」

「……。今後も精進します。私も少し休ませてもらいます。五分前には、戻ります」

「うん、そうして」

　　松田川は鷹姫に手を振り、再び鮎美の寝顔を確認してから自分も眠ろうと思ったけれど、気になることがあった。

「……介式警部……まるで個人的な恨みでもあるみたいに芹沢さんを追いつめて……政治家が嫌いなのかな……にしても、あそこまで……。……たしか、芹沢さんの秘書補佐で緑野さんが情報収集とか得意だったかも……加害少年のことも、しっかり調べてたし」

　　松田川は聞いていた緑野のメールアドレスへ介式いつか警部について調べてくれるようメッセージを送ってから、ソファベッドの上で目を閉じた。

「ううっ……」

　　目を閉じて一瞬かと思うほど短く感じる3時間が過ぎて、目覚まし

が鳴っている。松田川は眠気と戦いながら起きた。鮎美を診ると、顔色は悪くないけれど、やはり寝たまま涙を滲ませている。

「芹沢さん、起きられそう?」

「……うう……」

呼びかけると、ぼんやりと目を開けた。

「そろそろ国会の時間なんだけど、行けそう?」

「……うちは……逮捕……」

「されてないよ。障碍者にもならない。ちよつと、いつしよにトイレ行こうか。診てあげる」

「……。はい……」

鮎美は起き上がったけれど、あまり脚に力が入らない様子なので松田川が肩を貸してトイレに二人で入る。鮎美を便座に座らせた。

「まだ、そんなにオシッコしたくないと思うけど、こまめにするのが大事だから、出してみて」

「はい」

鮎美は力を抜く。もともと力が入りにくかったこともあり、すぐに放尿できた。

「ううっ……痛っ……」

それほど勢いのある放尿でもないのに、尿道へ痛みを覚える。松田川は飛び方と色合いを確認して問う。

「痛みの程度は、どう? 昨日より強い? 弱い?」

「昨日の半分くらいです」

「そう、よかった。その調子なら、すぐに治るよ」

「……よかった……ぐすっ……」

下半身不随の障碍者になるかもしれないと思いついていた鮎美は滲んできた涙を拭いた。松田川が優しく抱きしめる。

「脅して、ごめんね。もう医療器具は勝手に触らないですよ」

「はい、反省してます」

二人でトイレを出て鮎美は制服へ着替える。

「国会、行けそう?」

「行けば座ってるだけです。ズル休みはしたくないですから。それ

に3月の修学旅行に行くなら、欠席するかもしれんし、今は皆出席にしておきたいんです」

「修学旅行が3月にあるの？ 三年生の」

「うちの学校、変なんです。宗教的理由らしいですけど」

「ふーん……ま、どうでもいいわ。朝ご飯、どうする？」

「あんまり食欲が……」

「じゃあ、最低限の栄養だけ摂ってもらうね」

そう言った松田川はキッチンで生卵へ塩と砂糖を入れて掻き混ぜ、それを電子レンジしてから差し出す。

「朝の元気レシピ、パーフェクトフード、どうぞ」

あえて鮎美が昨夜のことを思い出さないように明るく振る舞って、料理と言えないような料理を出した。鮎美が力なく笑う。

「なんですのこれ……」

「最低限の栄養を最短の時間で提供する、あらゆる面でパーフェクトな料理だよ。レシピ監修は松田川医師」

「……いただきます……」

突っ込みを入れる元気がない様子で鮎美は少しずつ食べる。

「……微妙な味ですね……まずいことないけど……」

「うん、難民キャンプで配られてる飢餓対策ドリンクを参考にしたら」

「……どんなドリンクなんです？」

「塩と砂糖を水で混ぜる」

「……」

「これで飢餓から救われる第一歩のなるの！ いきなり濃いものを食べさせても、飢餓状態の人は受け付けられないから」

「……難民キャンプかあ……」

鮎美が食べ終わる頃、鷹姫が入室してきた。

「おはようございます」

「あ……鷹姫……おはよう……タバは、ごめんな……。タバやなくて、もう一昨日か……」

「いえ、私こそ……」

二人の雰囲気は暗くならないうちに松田川が明るい声をあげる。

「さー！ 座ってるだけの会議に行ってもらおうかな！ 日本の最高意志決定機関へ！」

「そやね…」

鮎美が上着を着て議員バッチと二つのバッチにズレがないか、指先で確かめ、部屋を出る。

「ひっ…」

部屋を出た鮎美は介式が立っていたので短く息を飲んで、腰を抜かした。

「…ひい…」

床に座り込み、膝を震わせている。

「……」

介式は黙って今まで通りSPとして立っているけれど、その目は冷たい。松田川が介式を睨む。

「何しに来たの？ もう十分でしょ！」

「警護任務だ」

「…………。 芹沢さん、大丈夫よ、もう何も無いから」

「…ひいう…ひいう…」

介式の顔を見ただけで泣き出してしまつて、もう立てないでいる。

「芹沢先生、座り込んでいると身体が冷えます」

鷹姫が肩を貸して立たせても、まったく両脚に力が入らず膝がガクガクと笑っている。松田川は車イスをもってきた。もう時間が無いので介式に文句を言うのはやめにして、参議院へ急いだ。途中で鮎美を見かけた議員たちは、車イス姿と鮎美の顔色を見て、また傷の調子が悪くなったのかもしれないと気の毒そうに見てくれる。その反応で松田川は昨夜のことを隠す口実を思いついた。

「芹沢先生が不調なのは、刺傷されたときのPTSDとします。立ち直ったはずが、思い出してしまい、心の具合は悪いけど、身体は元気、そうします。いいですね？」

「はい」

「……………」

鷹姫は返事をしたけれど、介式は警護さえすれば自分は無関係という顔で黙っている。松田川は違和感を覚えて問う。

「そういうえば、介式警部が一人で警護ですか？　いつも、二人だったはず」

「本日より警戒レベルを一段階下げ、6人チームは3人チームとなり、常時は一名による警護となる」

「……………タイミングの悪い……………仕組んだんじゃないの？」

「安全度に対する自分の判断ゆえ、主治医の意見は関係ない」

「あっそ」

松田川は心配になった。だいたい24時間、鮎美のそばにいるけれど、松田川自身も食事をしたりトイレに行ったりする。その間に一人しかないSPが警護対象に何かしないか、とても心配になる。

「宮本さん、今日は事務所で電話対応するのをやめて、こっちについてくれない？　SPがいるのが不安っていう本末転倒な話だけど」

「介式警部は立派な方です。……………。今日は、こちらにつけるよう、事務所へ連絡します」

鷹姫は板挟みになった戸惑った顔で介式を見、松田川を見、そして車イスで震えている鮎美の背中を見て決めた。国会議事堂内は車イスでは移動しにくいので、鮎美の前へ回ると、横抱きにするため膝の裏へ左腕を入れ、右腕で背中を抱き上げる。軽々と鮎美を横抱きにする鷹姫を見て松田川は驚いた。

「うわっ……………すごっ……………お姫様抱っことか、余裕でできるんだ」

「宮本くん……………」

「鷹姫……………重いやろに……………」

「芹沢先生は食べる量が少ないので軽いです」

横抱きにしたまま移動して、参議院の議場に入ろうとしたところ、警備をしている衛視に止められる。

「議員以外は議場に入れません」

「芹沢先生を議席へお運びするだけですが、ダメですか？」

「規則ですから」

国会議事堂は介式たちとも違う独自の警察組織で警備されていて、かなり融通が利かない。かつて首相でさえ議員バッチを忘れたために入場できなかったことがあるくらいなので秘書でしかない鷹姫が入れないのは当然だった。困っていると、なかなか鮎美が登院してこないで心配して出入口を見ていた翔子が気づいて来てくれる。

「芹沢先生、どうされたんですか？」

「っ…」

鮎美は腰が抜けて動けないところを翔子に見られるのが恥ずかしくて鷹姫の胸へ顔を伏せた。偽の説明をするため松田川が問う。

「PTSDって知ってる？」

「はい、心的外傷後ストレス症候群ですよね」

翔子は正確に答えた。

「そうです。よくご存じですね。医療系の議員さん？」

「いえ、私は法科大学院です。昨日退学して議員専業にしましたけどPTSDは損害賠償でも話題になる病名ですから」

「つてことは、説明は簡単でいいですね。大きな事件の後、心の傷が疼く、それで一時的に不調になりますけど、身体に問題はありません。昨日まで芹沢さんも気を張ってたんだけど、あの刺傷事件のことを思い出してしまって、今日は少し不安定な気分なの、もしよかったら議席へ連れて行ってあげてくれない？ 私たちは入れないから。医師も入れないとか、ふざけたシステムよね」

松田川は少し医師としての特権意識をみせて衛視へ視線を送ったけれど、衛視は慣れているので顔色を変えない。翔子は自分一人では不安だったので音羽を呼んできて、二人で鮎美を左右から支えた。おかげで、ほとんど力の入らない脚でも歩ける。

「アユちゃん、かわいそうに。無理もないよ。よく出席してきたね」

「おおきに…キョウちゃん…」

声にも張りが無いし、やや枯れているけれど、仲良くなった議員仲間を支えられて鮎美は嬉しかった。議席に座ると隣席の翔子が心配して手を握ってくれた。

「大丈夫ですよ、もう安全です。きつと、心の傷も時間が経つと治りますよ」

「…うん……ありがとうな……翔子はん」

審議が始まると、鮎美の気持ちも落ち着いてくるし、ずっと翔子の手を握っていてくれる。それで鮎美は、やや別の心配をして私語る。

「議場がテレビ中継されてるとき、うちと手えつないでるのが映ったら、翔子はんまで同性愛者かも、って変な噂が立つかもしれないよ」

「そんなの気にしませんよ」

「翔子はん……でも、……レツテル貼りは、いろいろとリスクが……」

「大恩人であり友達である人が弱つてるとき、助けられないなら、議員以前に人としてダメですから。……以前の私は自分のことしか、考えてなかったけど、芹沢先生のおかげで目が覚めました」

翔子は両手で鮎美の手を握った。

「人と人は助け合いですよ。もちろん、連帯保証人にはなりませんけど。あれは助け合いじゃなくて銀行が仕組む悪魔の友人契約ですから」

「クスっ……翔子はん……ありがとうな」

お昼休みまで、ずっと手をつないでいたことで鮎美は議場を自分の脚で退場できたけれど、場外で介式の顔を見ると、やはり膝が笑った。すぐに車イスに座らせてもらい、議員食堂に移動した。

1月27日 介式

同日、昼12時過ぎ、午前中の国会が終わり、お昼休みとなったので車イスに乗った鮎美と、それを押す鷹姫、主治医の松田川、SPである介式に加えて、同僚議員である翔子と音羽の6人は国会議事堂の廊下を移動して食堂へ行く前に、多目的トイレまで来たけれど、先客が入っていたので扉の前で待っている。

「アユちゃん、お昼ご飯、何にする？」

「うくん……あんまり食欲ないし……うどんか、カレーかな……」

「私はカレーにします」

翔子が嬉しそうに言った。音羽が肩をすくめて両手をあげる。

「翔ちゃんはカレーばっかりね」

「私はカレーで育ったから」

「……」

家が貧しかった翔子の発言に短い沈黙があり、鮎美が話をふる。

「そう言うキョウちゃんは何にするん？」

「バランス良く、肉じゃが定食にしようかなと思ってるよ。気分的にはハンバーガーだから、ミックにでも行きたいけど、食べて午後まで戻ってくるの大変だし」

「ミックもええね。っていうか、関東の人、ミック言うよね」

「こっちはミックって聴く方が違和感あるよ。ドーナツ屋さんかと思う」

「それはミスドやん。松田川先生はお昼、何にしはります？」

「私は広東麺」

「そんなん、ここの食堂にあつたつけ？ ……」

鮎美が尿意を覚えて、車イスの上で座り直した。まだ先客は多目的トイレから出て来てくれない。

「あるよ。昨日から狙ってた。国会の食堂って、けっこうメニュー多いね。しかも、そんなに高くない。それほど安くもないけど」

「女医さんなら、どんな高いものでも平気ではないですか？」

翔子の問いに松田川は同じような質問に慣れた口調で答える。

「医師って、そんな貴族みたいなものじゃないよ。イギリスとかインドだと階級で入るレストランまで違うけど、日本って、だいたい同じなの。そりゃあ、高級料亭やフレンチにだって行くけど、吉野屋にもミクドにも行くし。仕事で忙しいとコンビニ弁当連続ってこともある」

「国会議員と似たようなもんやね。鷹姫は、何にする?」

「……。まだ決めかねています」

「ゆつくり迷いい。…はあ…」

鮎美がつかうようにタメ息をついて両膝を擦り寄せた。少しずつ括約筋が痛くなってくる。ある程度は回復してくれたようで昨夜のように刺すような痛みは無いけれど、筋肉痛の脚で階段を登るような疼きが強くなってきた。

「…まだ、なんかな、前の人……うう…」

「長いね。アユちゃんが待ってるのに……大丈夫?」

「……。松田川先生、オシッコだけでも女子トイレでしてええですか?」

「そうね。まだ空きそうにないし。立てる?」

松田川と鷹姫が左右に回ってくれたので鮎美は立とうとした。

「……っ……うくっ……」

車イスから腰を上げると急に尿意が強くなって冷や汗がでる。

「うう……痛い、痛い……」

鮎美は腰を下ろして呻いた。松田川が心配して耳元に囁きかける。

「無理に我慢しないで、いっそ漏らした方がいいよ。ナプキンあててるし」

「…イヤよ……そんなん……うう……」

拒否したけれど、急に限界が来る。建設中のダムに土石流が襲って来たように鮎美は漏らした。じわりと股間が温かく濡れて、あてていたナプキンが吸収してくれるけれど、その容量を超えて溢れてしまい、下着やスカートが濡れる。

「っ……っ……」

鮎美は、せめて周りには気づかれなくなかったけれど、車イスの座面前からも零れて滴ってしまい、松田川と鷹姫だけでなく音羽や翔子も気づいた。

「アユちゃん……」

「芹沢先生……」

音羽と翔子は周囲から見えないように車イスを囲んで立ちつつ、肩を震わせて泣きそうになっている鮎美の背中や頭を撫でた。鮎美は泣くと余計にみじめで恥ずかしいので、涙を我慢するけれど、どうにも泣けてきて、両手で涙を拭い、鼻を真っ赤にして顔を伏せる。自室で漏らすのと違って、よりによって国会議事堂で、しかも鷹姫たちに見られてしまい、恥ずかしくて顔をあげられない。ここから逃げ出したいのに動くこともできず、生温かいお尻が冷たくなる頃、やっと、多目的トイレの先客が出て来てくれた。

「あら、ごめんなさい」

先客は五十代の女性議員で大腸癌を克服した人だった。

「ストーマの処理に手間取ったの。ごめんなさいね」

自分のせいで鮎美が間に合わず失禁してしまったことを謝ってくれる。

「……うっ……ぐすっ……いえ……」

鮎美は顔を伏せたまま答え、松田川が車イスを押しながら言う。

「宮本さん、床を拭いて、替えのスカートを取ってきてくれる？ もう

乾いてると思うし」

「はい」

床に滴ったのは、それほど大量ではなかったので鷹姫と翔子のポケットティッシュで拭ききれた。松田川は車イスを押しして多目的トイレに入る。介士が先行していて、室内とゴミ箱をチェックした。

「異常なし」

それだけ言って冷たい表情で立っている。

「芹沢さん、仕方ないことだから泣かなくていいよ」

「……ぐすっ……はい……」

「無様だな」

介式が言った。

「宮本くんを辱めた罰だ。因果応報と知れ」

「…うううっ…ううううっ…」

泣き止みかけていた鮎美が泣き出したので、松田川が怒る。

「介式警部！ いい加減にしてください！ たかだか18歳の女の子をイジメて楽しい?!」

「楽しくなどない。実に不快だ」

「だったら黙って任務だけしてなさい！」

「……」

介式が黙り、松田川は濡れたスカートと下着を脱がしてやり、お尻や脚を優しく拭いた。

「靴と靴下は濡れてない？」

「はい…大丈夫です…ぐすっ…」

「じゃあ、嫌だと思うけど、あと少しの我慢だから、お尻を向けて」

松田川がゴム手袋をするので鮎美も両手を多目的トイレ内にあつた簡易ベッドについて、お尻を松田川へ向ける。この処置には慣れてきたので鮎美は受けながら申し訳なく思った。

「食事の前に、すんません」

「あ、そんなの気にしないでいいよ。医師って、こんなの慣れてるし」

松田川が優しく続ける。

「ぜんぜん平気。もっと食欲無くすようなのも慣れたし」

「……もつと、つて、どんな？」

「バイクに二人乗りして湖岸道路をすっ飛ばしてたカップルがスピードの出し過ぎでカーブを曲がりきれず、ガードレールと樹にぶつかって男の方は指が3本ちぎれて、あとチンチンもちぎれて、女の方は首が飛んでたけど、それでも死亡診断書は必要だから、運ばれてきたのを診た後に、ソーセージと骨付きカルビを食べたり」

「……………」

「建設現場でクレーンから3トンの積み荷が落ちてきて右腕がペシヤ

ンコに潰れた男の人が、来月結婚するんだ、頼む、治してくれ、って泣くのを、ごめんなさい、無理です、切断しかありません、って説得して切断手術した後、大学の同期との忘年会で高級ラウンジに行つて、テーブルサイドで生ハムを豚の前足から直接切り取ってもらう演出を楽しんで赤ワインを美味しく呑んだりできるから」

「……………」

「だから、あと数日で完全に健康になる女の子のウンチなんか、なんでもないよ。お昼ご飯がカレーでも平気。ま、広東麺が希望だけど」

「……………ぐすつ……………うっ……………」

鮎美が前屈みになったままポタポタと涙を簡易ベッドへ落とし始めたので松田川は処置する手を止めて言う。

「そんなに泣かないでよ。あと数日の我慢だよ」

「……………いえ……………ぐすつ……………むしろ……………嬉しくて……………」

「えっ……………やつぱり癖になっちゃった？ 言っておくけど治療が終了したら、やらないよ。誰か他の相手を見つけてしてもらって。これは医療行為ではあるけど、衛生的にやれば大きな問題はないから」

「そうやないですよ……………夕べ、うちは自分が障碍者になる思て、すごい絶望してて、けど今は目の前に希望があつて……………それが嬉しいて、嬉しくて……………」

「ああ、そういうこと」

松田川は処置を再開した。

「……………ぐすつ……………ううっ……………」

「泣き虫さん、そんなに泣いて、涙が枯れるよ」

「……………うち、なんもわかってへんかった……………今まで、自分が同性愛者やから、社会の中でマイノリティやし、障碍者の気持ちもわかってるつもりでいたけど……………ぜんぜん、わかってへんかった」

「そう。……………それに気づいたのも成長だね。はい、終了」

松田川は処置を終え、ゴム手袋を外した。鮎美も涙とお尻を拭いて立つ。

「ぐすつ……………多目的トイレかって、数が無かったら困る人いっぱいいるんや……………それも自分が漏らして初めてわかる……………」

「そうね。トランスジェンダーだと、五体満足だから、ここを使うのに気が引けるって人もいるし。パンツは替えがあるけど、スカートは、もう少し待って」

松田川が予備のショーツを渡したとき、ドアがノックされ鷹姫の声が響いてくる。

「スカートをお持ちしました。ハアハア！」

かなり息を切らして走ってきてくれたようだった。

「鷹姫、そんなに急いでくれたんや」

体力のある鷹姫が息があがるほど走ってくれたことで鮎美は感動した。松田川はドアへ近づき、鮎美に断る。

「開けていい？ 受け取ったら、すぐ閉めるし」

「はい」

松田川がスカートを受け取り、鮎美は着替えた。脚の震えは止まっている。あまり介式の方を見ないようにしてドアに向かった。

「歩けそうです」

「よかった。じゃ、お昼ご飯にしよう」

トイレの外に出ると、鮎美は鷹姫に礼を言い、翔子と音羽にも礼を言った。鮎美は歩いて議員食堂に行く。少し食欲が回復していたので鮎美はカレーライスを、翔子も迷わずカレーライスで、音羽は肉じゃが定食、松田川は広東麺、鷹姫はカツカレーと焼肉ライスにした。鷹姫が、いただきます、を言う前に介式へ頭を下げる。

「お先に失礼します、介式師範」

「気にするな。私は任務だ」

警護中のSPは食事はおろか水分さえ最低限しか採らないので、五人がテーブルについていても、介式だけは立って周囲を警戒している。音羽や翔子は介式と人間関係がないので平気だったけれど、鷹姫はいまだに慣れないので、申し訳なさそうに食べ始める。五人が食べ終わった頃、鐘留から連絡が入り、鷹姫はカバンからタブレットを出してネット回線を通じて、対面会話できるようにして四人に向けた。鐘留は地元の六角支部にいて、何もない壁を背景にしているけれど、タバコの色合いがついた壁紙に鮎美は見覚えがある。タブレット画

面の中の鐘留が手を振ってくる。

「ハーン♪」

「誰このテロリスト？」

初対面の音羽が完全防寒の鐘留を怪しがる。ゴーグルに防寒マスク、毛皮の帽子で、まったく顔が見えないのでテロリストという表現は同じく初対面の翔子も頷くところだった。言われた鐘留が調子に乗る。

「フッフ、国会議事堂に爆弾を仕掛けた」

「カネちゃん、周りにも響いてるから、ふぎけんといて」

「しかも核爆弾だ♪」

「どっから持ってきてん！」

「ロシアから98円で買った♪」

「どんだけ安いねん！」

「昭和9年頃の98円換算で」

「それなら買えそうやな。って、その頃は核ないやんけ！」

「きやはははは！ 元気そうだね。陰険警部にイジメられてシクシク泣いてるって聴いたけど？」

「べ、別に泣いてへんし！ 早う本題に入ってよ！ お昼休み終わるやん！ 何なん用件は？」

学校の友達と話すと鮎美は萎えていた元気が戻ってくるのを実感しつつ、恥ずかしいので捲し立てた。鐘留は可愛らしい舌先で自分の親指を舐めてから語る。

「OK、ではアタシの調査結果を語ろう。宮ちゃん、タブレットを陰険警部に向けて」

「はい。……介式師範は陰険ではありません」

鷹姫は一言いってからタブレットを介式に向ける。鐘留はいい加減暑いので完全防寒を投げ捨てて、素顔で語る。お互い面識は鮎美が入院中の特別病室前で形成されている。

「ハーン♪ 番犬警部さん。番犬が飼い主を噛んじやいけないね」

「……」

介式は表情を変えなかったけれど、鐘留は続ける。

「介式あいか」

「っ……」

「フフ、表情が変わったね。ビンゴ？ アタシって大ビンゴ？ 超ビンゴ？ ミラクルビンゴ？」

「……………」

「珍しい名字だから、調べるのはアタシなら苦労しなかったよ」

「……………」

「介式いつか警部には4つ年上の姉がいた。名は介式あいか」

「……………」

「どうしてアユミンをイジメたか。ごく簡単な話。介式あいかは政治家にイジメられて自殺した。だから、その復讐」

「……………」

介式は表情を変えないけれど、返答もしないし、否定もしない。それで鐘留の指摘が事実なのだと思美たちも感じていく。鐘留は調査結果が当たった歓びで楽しそうに語る。

「少し前に小さな政党が産まれて潰れた。与党の左派と野党の右派が集まって産まれた、くだらないアホ党。そのアホ党が職員を募集するのに応募したのが、あいかちゃんの運の尽き。よくある話、セクハラを受けて月ちやんみたいに拒否れなかった。しかも、政党支部の仕事は夜遅いことも多い。で、ざっくり議員に襲われた。もちろん、議員は事実を否定。ゴタゴタがあって200万円で示談。けど、お金が欲しかったんだろ、って支持者に罵られて、あいかちゃんはプラインと照る照る坊主になりました。きやはっは！ プライン、プラインと、おうちの二階で首吊り自殺。おかげで議員は次の選挙で落選、再挑戦した市長選でも落選、なんとアホ男も首吊り自殺、地元の神社でプラインプラインと樹にぶらさがって照る照る坊主。二人仲良く天国でエッチしてるよ、きつと」

「っ……………」

介式の黒いスーツが似合う色白な顔が怒りで赤くなった。

「さてさて幹部議員のエロスキャンダルで、アホ政党もへ口へ口、一人抜け二人抜け一人落ち二人落ち、あつという間に消滅。すごいね、

たった一晩の過ちが政党一つ潰しちやったとき、おしまい、ちゃんちゃん」

「……………」

介式が拳を握りつつも冷静さを保つ、鐘留は憎らしく微笑む。

「さて第二話のスタートです♪ あいかちゃんにはバカな妹がいました。名を、いつか、五月五日生まれだから、いつか、子がバカなら親もバカだったんだねえ、ネーミングセンスを疑うよ。第二話のヒロインは、このバカ妹です。体力バカの妹は復讐を誓います。お姉ちゃんを殺したのは政治家だ、政治家はみんな敵だ、だから芹沢鮎美も敵だ、悪いヤツだ、懲らしめてやる。なんて単純でバカなんでしょう、脳みそ筋肉です」

「……………」

「バーカ、バーカ！ お前のネエーチャンでべそ。きやはつは！ 姉妹そろってアホバカだねえ。あいかちゃんは首吊ったあたり、やっぱりバージンだったのかな？ バージン奪われたのかな？ で、シクシク泣いて照る照る坊主、明日天気なりますように。でもでも、バージンってことは、あの一晩が人生で最初で最後のエッチ。きやははは！ かわいそー、ちゃんと好きな人とするエッチって、すぐく気持ちいいのに。それ知らないで死んじやった。まるで一回限りの使い捨てオナホみたいに！ 介式あいかはオナホとして産まれてきました。定価200万円♪ けど、使うと呪われます、呪いのオナホ。使ったら、さっさと燃やさないかね。ね、どうだった？ 火葬場に行く前の、お姉ちゃんの顔。安らかな死に顔だった？ お買い上げありがとうございます、ごきます、ご使用は一回限りです、いっしょに昇天しましょう、天国でラブラブ？ 地獄でエロエロ？ 自殺したあたり実は妊娠してたりしてね？ エロ議員との受精卵も、火葬場でメラメラ。いつかちゃんの甥っ子もメラメラ。オナホお姉ちゃん、さようなら、私も、いつか立派なオナホをつとめて後を追います、いつかだけに、いつかきつと、オナホになり…痛っ?!」

可能な限り憎らしくカメラに顔を近づけて話していた鐘留へ、公職選挙法の冊子が飛んできて頭に当たった。

「痛い！ 月ちゃんのバカ！」

「黙って聴いてろというから、黙っていたら、亡くなった人になんてこ
と言うんですか?!」

陽湖の声がして、鐘留に迫っていくのが画面の端で見える。迫られ
ても鐘留は反省しないで言い返す。

「あ、怒鳴った。戒律違反だ。しかも暴行だ。本ぶつけた。痛いよ、痛
いよ、アタシの美貌に傷が残ったら3億円！ 傷が残らなくても30
0万円。さ、示談してあげるよ、お金ちょうだい」

「人が思い悩んで自死したんですよ?! セクハラを受けるのが、どれ
だけつらいか！ 妹さんだって、どれだけ傷ついてるか！ なのに！
なのに、死んだ人に対して、どこまでひどいことが言えるの?!」

「え？ だって、月ちゃんの宗教も死んだ人にひどいこと言うよね？

我々と同じ信仰をもたぬ者は死んだら楽園に行けない、永遠の闇
だ、あいかちゃんも、きつと闇の中、ほらほら、ひどいこと言う宗教
だね。そんなの信じてるんだね？ ひどい人だね、月ちゃんは」

「つ…そ、…それは…ま、まぜつかえさないでください！」

「鷹姫、もう通信、切って」

「はい」

鷹姫がタブレットをオフにした。鮎美が介式を見る。

「介式はん、今の話は…」

それ以上言う前に定刻となってしまう、昼休みが終わった鮎美たち
は議場に戻らねばならなかった。鮎美は自分の脚で議席につくと、考
え込む。しばらくして隣席の翔子に問うた。

「翔子はんってセクハラ受けたことある？」

「え？ はい、まあ、生きれば、それなりにアルバイト先とか、大学で
何度か」

「そんなとき、どうしたん？」

「もともとバイトは時給が安かったので、もう少し高いところを見つ
けて辞めています。大学ではコンパだったし、どっちかというと私が食
べるだけ食べて男子に奢らせるパターンの女だったから、ちよつと触
られるくらい仕方ないかなあと」

「……たかつてたんやね。若干、どっちもどっち感あるなあ……けど、バイト先では何されたん？」

「ジツと見るとか、そんな感じですよ。コンビニだったんですけど、店長がお尻ばかり見てくるんですよ。しかも、背後からだから、こつちが気づいてないと思って顔を近づけて見てたり。危ないなあ、と思ったからバイト中はトイレも行かないようにして、すぐ別のバイト見つけて、しばらくしたら、トイレ内にカメラを仕掛けて盗撮してたのが発覚して捕まっちゃいました。お店は閉店。たぶん、私は一度もトイレを使つてないから被害を受けてないと思うけど、もしかしたら一回くらいはトイレを使ったかもしれないし、そのときの映像があるなら、嫌だなあつて気持ちだが、ずっと続いています」

「盗撮か……盗撮は証拠があるもんな、けど、ジツと見るのは、見ただけやもん、立証が難しいなあ」

「嫌じゃないですけど、芹沢先生もときどき私のおっぱいジツと見えますよ」

「うっ……すみません、気いつけます」

「あとは居酒屋でのバイトでお客さんからのセクハラがうざかったなあ。腕とか肩に触ってくるのは当たり前。ときどき、お尻や胸まで触ってくるし」

「そんなとき、どうしたん？」

「どうせ2時間もすれば帰るわけですし、注文コールされても、なるべく男子バイトに行ってもらってました。セクハラ問題に興味をもたれたんですか？」

「うん、まあ……」

「今、ひどいのは医療と介護現場らしいですよ」

「医者が患者に？」

「それも少しはあると思うけど、多いのはボケたお爺さんか、ボケたフリしたお爺さんがナースや介護士さんに触るのが、日常茶飯事らしいですよ」

「ボケたフリかあ……。歳いっても元気やなあ。けど、立場的に職員は言いにくいもんななあ」

また鮎美は考え込み、それから振り返って後席にいる三十代男性の松尾に問う。

「ちよつと、いいですか？」

「ん？ 何かな？」

まじめに審議を聴いていたものの退屈していた松尾も私語に応じてくれる。

「松尾先生はセクハラされたり、セクハラしたことありますか？」

「……………。率直すぎる質問だね。セクハラかあ……………」

松尾は腕組みして記憶を振り返る。

「どうだろうな、こっちはセクハラと思っただけでも、今だって芹沢先生の顔を見てるわけだ。視界に胸だつて入ってる。それを、あとでセクハラだと言われたら男としては困るな。逆に、社会人から見ると君たち女子高生のスカートは、逆セクハラかと思うな。とくに短く改造してる子は」

「つい見てしまいますもんね」

「あ、そうか、芹沢先生は同性愛者だったか。ってことは、スカートをめくりたいとか、脚に触りたいって思う？」

「思う思う！ そりやもう、駅の階段で見上げてパンツ見えたときなんか、誘ってんのか、思いますもん」

「ああいうのも、逆セクハラかもなあ。嬉しいような、見せられるだけで、うっとおしいような。たとえば言うならさ、めっちゃ腹が減ってるときに、目の前に美味そうな肉まんを見せられて、けど食べるな、って言われたら、じゃあ見せるんじゃないやねえよ、って思うのが人間だから」

「たしかに……………」

「その点、イスラム教徒なんかは厳しく女性に隠せと強要するね。あれも一種の道徳ではあるし、彼らの価値観だ。前に嫁と中東へ遊びに行ったら、飛行機を降りる前にスカートを買って屋外では常につけているよう注意されたな。短いスカートもノースリーブも禁止でさ。宗教警察っていう別の警察が存在して、イスラムの道徳に反すると国民だと逮捕、観光客だと国外追放だった」

「うちのスカートやったら、つまみ出されるんや」

「たぶんね。けど、開会式のときはロングスカートだったからか、中東の友人に聴いた話、向こうでも芹沢先生の姿がテレビで流れたらしい。たった18歳の少女が皇帝の前で弔辞を述べた、と。あと、ここだけの話、オレも痴漢被害に遭ったことがある。2回」

「女の人から？」

「いや、あれはホモだな」

「……。ホモっていう言い方は差別的なんですよ。ゲイが現在は適切な表現です」

「そうなのか。じゃあ、ゲイ。一回目はコスプレ会場で、二回目は満員電車だったな」

「コスプレ会場って何ですか？」

「オレは趣味でコスプレイヤーやってるからな。男装も女装もする」

「どんなコスプレを？」

「こんな感じ」

松尾はスマートフォンに入っている写真を数枚見せてくれた。剣士や女学生に扮した松尾の写真で、どれもカッコ良かったり美しかったりする。鮎美が本人の顔と見比べて驚く。

「なっ……。これが松尾先生なん？」

「メイクと撮影技術で誤魔化しまくっているからね」

「めっちゃ可愛い。なんていうキャラなん？」

「まどマギのまどかだよ」

「ふくん……。知らんわ」

「今月から放送が始まったばかりだからね」

「松尾先生ってトランスジェンダー？」

「いや、ぜんぜん。嫁いるし。女装するからってトランスジェンダーって発想は短絡的だよ。コスプレが趣味で、その中に女装が含まれるだけだ。趣味での女装はしない」

「趣味かあ……。けど、こんだけ可愛かったら痴漢されるんかも。何されたんです？」

「ケツ触られた」

松尾が思い出したく無さそうに語る。

「TFIで、と言ってもわからないか。有名な大勢あつまる会場でミクドナルドのマスコットキャラのコスプレをしてたんだ」

「ああ、あの可愛いのかキモいのか、よくわからんキャラの。かなりミニスカートですよ、あの子、肩も丸出しでアームカバーやし。腋の処理とか、どうするんです？ 先生、男やのに」

「そりゃ、ちゃんと剃るよ。マナーだろ。っていうか学生時代にコスプレを始めてから常に剃ってるし」

「え？ 男やのに、ずっと腋キレイにしてるんですか？」

「剃るのに慣れると、逆に伸びてくるとモジャモジャした感覚がうっとおしいから」

「たしかに、伸びてくると、ちよつと最初は…」

言いかけて鮎美は自分が伸ばしていることは黙っておくことにして、話の先を促す。

「それで、どんな痴漢被害に？」

「会場でカメラに囲まれてるとき、誰かがケツに触ってきて、最初、まさか、と思っただ。いくらメイクしてても肩幅とか身長で男ってわかるだろうに、ケツに触って楽しいわけないだろ、って」

「それで、どうしたんです？」

「たまたま手があたっただけだろう、ここでオレが騒いだら自意識過剰って思われてカッコ悪い、と考えて黙ってたんだ。そしたら、二度目はスカートの中まで手を入れて遠慮無く思いつきケツを揉まれて、ゾツとした。男でも痴漢されてゾツとするものかと思いついたよ」

「それで泣き寝入りに？」

「いや、次の瞬間、怒りが湧いてきて、気がついたら背後へ回し蹴りしてた。けど、蹴った瞬間、ヤバイって思った」

「なんで？」

「しつかり相手を見てから蹴ったわけじゃなくて、振り向きざまに蹴ったし、何より暴行罪になるかもしれない、って蹴ってから焦って

さ。相手がケツなんか触ってない、いきなり蹴られた、って言い出したら困るし。周りにいた人たちも、めっちゃ注目してきたし、何があった、あのレイヤーは背後のカメラマンを蹴ったんだ、みたいな空気になったけど、蹴られた側は罪の自覚があったみたいで、オレが蹴った腹を痛そうに抱えながら、すみません、ごめんなさい、とか言って逃げていったから助かったものの、開き直ってケツなんか触ってないと言いつ張られたら、オレの方がやばかった。女子なら泣けばいいかもしれないけど、ケツ触られたくらいでオレは泣けないし」

「男らしい反撃方法ですね。なかなか回し蹴り入れられる女子はおらんかも。満員電車での痴漢は、どんな感じに？」

「それもケツだった」

「またミニスカートやったんですか？」

「コスプレして電車には乗らない。ごく普通にスーツで通勤中、もちろん男物のスーツだ。なのに、ゲイなんだろうな、ケツ撫でてくるから、睨んだら、それで終わった」

「松尾先生、ハンサムやから面食いのゲイがよってくるんかも」
「嬉しくないね」

「……。痴漢する同性愛者をどう思います？」

「死ね」

「……。ですよね」

「急に変なことを訊くね。もしかして、痴漢にでも遭った？ それとも上層部からセクハラでも受けてる？ だったら、相談にのるよ」

「……女の子が、つねに被害者とは限らないですよ」

「は？ まあ、ハニートラップや美人局もあるからね」

「松尾先生は今まで一回も悪いことしたことないですか？」

「……。無いと言えるほど、オレは聖人君子じゃないよ。生きてれば友人や家族、会社の同僚、いろいろあったさ」

「法律に反したことは？」

「それは……。交通違反くらいかな。駐車禁止とスピード違反、一旦停止違反で、捕まった」

「……」

「三回で懲りて、今はゴールド免許だよ」

「……そっか……刑事罰やなくて行政罰があった……」

長く私語していたので鮎美は背中に議長からの視線を感じて前を向き、審議中の資料を手にして読んでいるフリをしつつ考え込む。それからペンで色々試案し、本日の国会を終えて外に出た。再び介式がSPとして横についてくるけれど、もう脚は震えない。五体満足で歩行できるのに多目的トイレを使うのは気が引け、女子トイレに入ると、介式は先に個室をチェックしてから一人にしてくれた。

「……う〜……あと、少し痛いかな……」

排尿時の痛みは減ってきている。個室を出ると、鷹姫と松田川も個室から出て来た。松田川が手を洗いながら言う。

「じゃあ、議員宿舎に帰ろうか」

「はい。鷹姫もついてきて」

「はい」

「介式はんも、ついてきてください」

「言われずとも警護する」

四人で鮎美の部屋前まで行くと、再び鮎美は介式に声をかける。

「介式はん、部屋の中までついてきてください」

「……。了解した」

警護対象の部屋前や玄関前までしか警護しないのが基本であるので、一瞬、意外そうな顔をした介式は鷹姫が入室することもあって、むしろ見守りたいと想い、入ってくる。四人が部屋の中にそろると、鮎美は鷹姫を見つめた。

「宮本鷹姫さん、私はひどいことを、あなたにしました。お詫びします」

そう言つて鮎美が床へ膝を着き、両手も着いて土下座する。

「本当に、ごめんなさい」

途中で涙声になりかけたけれど、弔辞を読んだときのように気を張って、はつきりとした声で謝った。

「っ、芹沢先生、やめてください。もう、いいのですから」

慌てて鷹姫も膝を着き、鮎美の肩に触れ、頭を上げさせる。

「頭を上げてください。もういいのですから」

「ごめんな、鷹姫、ごめん」

「総理大臣を志すお方が、このように軽々土下座などしないでください。その方が悲しいです」

「鷹姫……」

「さ、お立ちください」

「うん……」

鮎美は立ち上がったけれど、再び頭を下げる。次は桧田川と介式に向かつてだった。

「桧田川先生、介式はん、うちの間違った行為を叱っていただき、ありがとうございます」

「うん、うん、わかればよろしい」

「……」

桧田川は頷いたけれど、介式は黙っている。鮎美は再び介式に向かつて頭を下げなおす。

「お昼は、うちの秘書補佐が失礼いたしました。お詫びします」

「……」

「あの子は少し発達障害でもないけど、ちよつと性格が間違った風に育ってしても、ああいう曲がったことを言いますけど、今回は狙いがあつてのことで、おそらく、うちを庇うために、わざと介式はんを怒らせようと挑発したんやと思います。怒らせてタブレットでも殴らせて器物破損にもっていかうみたいな狙いで。とはいえ、あまりにも、ひどいことを亡くなつたお姉さんに言うたこと、代わってお詫びします。ごめんなさい、すみませんでした」

「……」

「介式師範、私からもお詫びします。当事務所の愚かな秘書補佐が申し上げたこと、あまりに申し訳なく、お許しただけは不足もありませんが、どうか、お怒りは私に向けてください」

鷹姫が土下座しようとするので、介式は止めた。

「もういい。子猫の遠吠えなど気にしていない」

「すみませんでした」

「……………」

介式が居心地悪そうな顔をしているので松田川が仲介する。

「まあまあ、たまには介式警部も、いっしょにお茶でもいかが？」

「勤務中ですからお断りする」

「お堅いことで」

「介式はん、うちは今回のことで多くを学びました」

「……………」

「セクハラする側の気持ち、セクハラされる側の気持ち、うちは女性同性愛者やったおかげで、どちらの気持ちも体験しました」

「……………」

「選挙戦や宴会で何度も、うちもセクハラを受けました。逆に、鷹姫だけでなく地元の友人へも何度も痴漢まがいのことをしています」

「……………」

「セクハラされる側は、この上なく嫌な気持ちです。けれど、なかなか文句を言えない、注意できない。なぜなら、セクハラする側が狡猾やからです。文句を言わせないよう、言われない範囲で、相手が本気で怒らない範囲で、ジワジワと攻めていく。攻め方を変え、言い方を変え、ずる賢く、セクハラされる側に我慢させる、受け入れさせる、手を握り、肩を撫で、胸に触れる、このくらいはいいじゃないか、挨拶だ、スキンシップだ、と誤魔化して痴漢でしかないことを我慢させる。拒否されなければ犯罪にならない。だから、どんどんエスカレートして最期は、お互いの破滅を招くことさえある。セクハラした側は、それが露見すると、地位も名誉も職も何もかも失うから、必死に揉み消そうとする、それこそ全力で、お金や権力を動員して、押さえつけようとする。同時に、セクハラされた側も苦しむ。我慢していたときも苦痛やったのに、勇気を出して告発しても、お金がほしいからかと言われたり、そもそもセクハラされたことを知られるのも苦痛で、そして加害者が破滅していくのも、けて気持ちのいいものでもない。むしろ、加害者が雇い先やったり、なにか関係がある場合は、その関係も終わってしまって苦しむ。こんな起こってはならないセクハラが日本中で毎日、起こりまくってる。死者さえ出る」

「……………」

「こんなことを繰り返さないためにこそ、国会は法整備すべきやと、うちは考えました。まだ半日考えただけで、稚拙で穴だらけかもしれないけど、聴いてください」

「……………」

「まず強姦や強制わいせつと交通事故を比較して考えます。交通事故も示談しますが、その示談と刑事罰、行政罰はさほど連動しません。むしろ発達した自動車保険による示談が予定されているため、無保険である場合を除き、裁判所は運転の悪質さに着目し、示談の有無を重視しません。対して、性犯罪は示談すれば告訴されず、そこで終わります。これが大きな間違いです。この結果、お金持ちは女性を蹂躪しても何千万と積むことで、罪を免れるからです。そして逆に女性は不当に示談金をつり上げることできる。強姦された心の傷の深さというのは、まったく目に見えないものです。交通事故の負傷であれば、かなり相場が形成され、自賠償基準、任意保険基準、弁護士基準、裁判所基準と、いくつか基準はあるものの、基準があるだけマシです。強姦や強制わいせつには、まったく基準が無く言い値です。これによって、もたらされる利益は、ほぼありません。せいぜい、犯人がお金持ちやった場合、被害者が潤うこともあるかもしれない、という程度で、世の中全体の強姦事件を見たとき、ほぼ保護法益はないと私は考えます。こんなことを許しているのは、たとえば飲酒運転で人を死傷させても、何億と積めば無罪、としているのと同じです。人を死傷させた民事賠償は民事賠償として別、刑事責任は刑事責任として追及すべき事柄です」

「……………」

「そこで私は性犯罪においても交通事故と同じく示談とは別個に刑事責任を追及するよう法改正すべきであると考えます。具体的には一度、警察へ届け出られた性犯罪については示談による告訴の取り下げを認めず、その悪質さ、えん罪の可能性など、他の犯罪と同じく検証すべきで、また被害者が受け取るべき慰謝料は客観的に裁判官が判断すべき事柄であると考えます。どのみち、大金をもらっても心の傷が

癒えない女性もいますし、逆に不当につり上げる女性もいるのですから、交通事故のように相場が形成されていくのが誰のためにもなると考えます。また、これは性犯罪による民事賠償に限ったことではなく、あらゆる賠償金について言えることですが、現在の法体系では、確定判決であつても、加害者が逃げることで、十分に賠償されないことが多々あります。これがために、性犯罪では示談との引き替えで賠償金が得られることもありますが、このケースは性犯罪全体の、ごく少数、つまりは加害者が金持ちであつた場合に限られます。本来的には加害者が刑事責任を償つた後、働いて支払うべきですが、出所後、どこへ就職したかもわからず、被害者は追求のしようがありません。これに対して、現在運用されている住民基本台帳システムと連動させ、日本全国どこに居ようが、被害者は正当な賠償金を簡単な手続きで加害者から得られるべきですし、加害者の両親が死亡した場合など、ただちに遺産相続手続きに先んじて保障されるべきで、これには国税徴収より強い権限が与えられるべきと考えます」

「……………」

「ここまでは強姦や強制わいせつ等、いわゆるセクハラを超えた重い性犯罪への対処ですが、より多くの女性を苦しめているのは、軽い性犯罪、軽いセクハラです。そして、軽いセクハラはエスカレートして性犯罪になります。これを防ぐにも交通事故と同じく、私は行政罰のシステムが有効だと考えます。以前に、うちが介式はんの手を握ったことを覚えていますか？」

「……………覚えてる」

「不快でしたか？」

「不快だった」

「ごめんなさい」

「……………」

「とくに、うちが同性愛者やと知った後、より不快になりましたか？」

「……………なった」

「同性愛者だったということを含めれば、あれはセクハラだったと思

いますか?」

「……………そう思う」

「では、上司に相談したり、私に注意したりしなかったのはなぜですか?」

「……………そんなことで、いちいち言えるものか」

「では、何度、手を握ったら、上司に相談されますか? 警護対象がセクハラしてくると」

「……………」

「肩に触ったら?」

「……………」

「胸に触ったとき?」

「その場で逮捕する」

「現行犯ですから可能ですが、本当にできるでしょうか? 18歳の女性が、剣道も柔道も強い女性警部の胸に触った。国会議員でなくても、ただの高校生だとしても、たまたま警護対象になっているとき、たまたま女性同性愛者で、警部を好きになって、わがままにも胸に触れてきたとき、逮捕しました、と上司に報告できますか?」

「……………お前は何が言いたい?」

「お互いの立場や関係もあって、いきなり逮捕では、なかなか難しいでしょう。でも、もし、それまでに30回、手を握っていて、10回肩に触っていて、その度に女性警部は相手にやめるよう言い、上司に相談していたら、胸に触ったから逮捕した、というのも通ると思います。たとえば、相手が女性同性愛者でも。そして、相手が、うっかり触れただけ、たまたま手があつた、と言いついても、その言いつに真実味がないことは裁判官も領くところですよ」

「……………」

「けれど、手を握られた時点で上司に報告することはできない。そんな報告をすれば、よほど神経質か、自意識過剰か、もしかしたら仕事が嫌なのか、そんな風に思われるかもしれない」

「……………」

「他の職場で働く女性でも同じです。職場だけでなく、自動車教習所

や学校、部活、あらゆるところでのセクハラは、いきなり決定的なこととはしない、じわじわと始まる。まるで運転免許を取ってから、じわじわと運転が荒くなつて事故を起こすみたいに」

「……」

「もし、行政罰が無くて、いきなり前科がつくような刑事罰しか、自動車運転に法整備されていなかったら？ 一旦停止違反では捕まらない、信号無視も、シートベルト不着用も、駐車禁止も罰が無い、スピード違反も50キロまでは罰がない、としたら、世の中の交通事故は増えますか？ 減りますか？」

「答えるまでもない。激増する」

「もしも、セクハラに対して行政罰が整備され、現在の迷惑防止条例のように痴漢で逮捕されると一回で懲戒免職になるような大ダメージが違反者にあるのではなく、相手が嫌がつているのに肩に触れることが3回あったら罰金8000円、そんな法律ができたなら、世の中は、どう変わると思いますか？」

「……」。女性には有り難いが、立証が難しいだろう。被害者の証言だけでは、えん罪の可能性もある。嘘の証言で他人をおとしめることもできる」

「コンビニでのアルバイトのように監視カメラが整備されていたら、どうですか？」

「それなら……。いや、だが、わざと男性をおとしめようと、3回触らせてから実は嫌だった、嫌だと言っていた、と言いつけ出すこともできる。言つた言わないの水掛け論となるだろう」

「言うと同時に、労働基準監督署などに言ったことを通報し記録され、男性側にも相手が嫌がつていることが通知されるとしたら？」

「それなら抑止力になる。悪くない。だが、行政上の手間は膨大になる。いったい毎日、何万件の通報があることか」

「それらがネットやスマートフォンアプリを通じて行われ、ネット等の情報手段を持たない者は郵送で有料で受付てもらえらるとしたら、どうですか？」

「……………。良いかもしれない……。だが、それでも通報をためらう女

性もいるだろう」

「そういった女性には、匿名での通報を行ってもらい、匿名であっても同一の通報者からの通報は情報が累積して記録され、もしも、大きな性犯罪に遭ったとき、証拠として情報公開されるといえるのは？ また、通報したことが男性に通知されないことも選択でき、その場合でも通報が累積すれば、いきなり罰金ではなく、単なる警告文が通知されるとしたら？」

「……………かなり世の中のセクハラは減るだろう」

「どこにでも監視カメラがあるわけでもなく、また目撃者がいても協力してくれるとは限らないとしても、それはすべての駐車違反、すべてのスピード違反が捕まるわけではないとしても、交通事故を減らせるように、かなりの抑止力になり、また違反者も大きな罪を犯す前に、相手が本気で嫌がっているのだと知ることができます。なおかつ、このような通報システムが整備されれば、よく違反する人物、会社を特定していくことも可能です。そして、何より現在は労働基準監督署などの相談は平日の昼間に限られています。電子システムなら24時間、受付可能です。これは、セクハラされている人に大きく勇気と機会を与え、セクハラしている人に悪いことをしているのだと知らせることができると考えます」

「……………」

「今後、この考えを詰め、うちの仕事の一つにしたいと思います。少しでも、犠牲者を減らせるように。不幸な女性が減り、同じくスピード違反で調子に乗って死ぬ人が減るように、うちみたいに調子に乗ってセクハラして破滅する者が少なくなるように」

「……………」

「長い話を聴いていただき、ありがとうございました」

鮎美が一礼した。介介は一呼吸おいて問う。

「芹沢議員は、これを昼から考えたのか？」

「はい。審議中に」

「……………」

「もつとも、今までの色んな経験があつてのことですけど」

「……………」

「やはり芹沢先生は総理大臣たるに相応しい方です」

「ちよつ、鷹姫、それ恥ずかしいから」

鮎美が尊敬の眼差しを受けて恥ずかしくなるけれど、鷹姫は本気だった。

「いずれ総理大臣となつてください。私も奉公する甲斐があります」

「そうなん？」

「本懐です」

「……………」。そうやね、目標は大きい方がええかも。よし！ 鷹姫と約束するわ。うちは総理大臣になつてみせる！」

「はいー」

「……………」

介式と松田川が黙つて見守つてしていると、誰かがチャイムを鳴らした。鳴らしたのは男性SPで介式と交替に来たのに部屋前に居なかつたからだつた。介式が少し話して交替確認をしたので、鷹姫が誘う。

「介式師範、お茶を飲んでいってください。夕食もごちそうします」

「フ……忘れたか？ 公務員への饗応は禁止だ」

「あ、そうでした。すみません」

「しつかり勉強しろよ。総理大臣秘書官殿」

そう言つて介式は部屋を出ると、交替した男性SPと敬礼を交わし、エレベーターに乗つて一人になつたので、つぶやいた。

「……………芹沢鮎美……………なんと立ち直りの早い女だ。……………精神的に殺すつもりで脅したものを……………朝に泣いて、夕に笑うか」

勤務が終わりに緊張が解けたので、強い空腹と喉の渇きを覚える。近くの食堂で焼肉ライスと広東麺とカレーを食べてから、インターネットカフェに寄つた。

「私には謀略など性に合わないから、お前たちが使えるなら使え」

ネット上に保存してあつたデータを介式は新しく作つたヤフーIDで芹沢鮎美の事務所へ送りつけた。それはSPとして政治家を警

護しているうちに得た情報で、SPにある守秘義務をあてにして油断して政治家が口にしたことなどのうち、彼らの弱みになりそうなことで、いつか復讐に使えないかと貯めていたものだった。

「お前たちの性にも合わないかもしれないが、役立つ場面もあるかもしれないからな」

用事が済んだので外に出ると、コンビニでファミチキ三つとビールを買った。公園で飲食していると、匂いにつられて猫がよってきたのでファミチキ一つを諦めた。猫といっしょに食べ終わる頃、電話がかかってきた。

「もしもし。誰だ?」

見知らぬ番号からだったので堅い声で問うた。

「きやははは!」

甲高い鐘留の笑い声だった。

「……………」

「このタイミングで政治家の弱みをタレ込むとかさ。誰の仕業か、特定されないでも思うの? しかも、IDが s e n g o k u 3 9 とか、笑える! どうせ、どっかのネカフェに自分の身分証明書で入場したのに、送信したでしょ。苦手なことは、やんない方がいいよ」

「……………」

「ま、いいよ。クビになったら、かわいそうだし、アユミンの味方になるなら黙っていてあげる」

「……………」

「これからも、アユミンを守ってね」

「任務だからな」

「ずっと噛みつく機会を狙ってた番犬って怖いね。弱み握られた人たち、かわいそお」

「……………」 お前の性格なら、うまく使えるだろう」

「誉められたと、思っておくよ。忠犬警部くん」

「話は終わりか?」

「うーん……………」あと少し」

「何だ?」

「…………お昼、ひどいこと言っつて、ごめんね。怒らせて画面を殴つてもらうつもりだったから…………ごめん。そんだけ！　じゃ」

鐘留が電話を切った。

「フ…………人徳か、いい友人が多いな」

介式は猫を撫でた。

「…………姉さんにも、相談できる友人がいたなら…………」

それだけ言っつて、次の交替に備えて休むことにした。

1月28日 朝ナマ

翌1月28日の金曜日、鷹姫は百色とビジネスホテルで食べ放題の朝食を摂っていた。約束して二人で食べているわけではなく、ただ時間帯が重なることと、有名すぎる女子高生議員の秘書と、有名すぎる元海上保安官のそばで食べようという者がいない上、朝のビジネスホテルはテールに空きが少ないので、鷹姫も百色も連泊している流れで、いつの間にか、朝食だけはともにしている。そして鮎美が都知事選を応援する予定なので、同じく畑母神を応援している百色とは朝食会議のような会話になる。

「閣下の不倫騒動は、お嬢さんのボスが派手な記者会見やってくれたおかげで下火になったぜ」

「ボス？」

「組長の方がいいか？」

「芹沢先生のことですか？」

「おうよ」

「組長……」

鷹姫は反社会勢力よりも、幕末の剣客集団を思い出しているようで、いつもは乏しい表情を嬉しそうにしたけれど、それほど笑顔になるわけでもない。デザートプリンとフルーツを食べ、満足して鮎美がいる議員宿舎へ顔を出した。秘書としてスケジュールを告げる。

「本日の芹沢先生のご予定ですが、午前10時より国会、予定通りであれば午後5時に終了。すぐに宿舎へ戻っていただき、お弁当を用意しておきますので召し上がっていただき、できるだけ早く仮眠してください。午後11時30分には起床していただき、テレビ局へ向かいませう」

「朝ナマか……ぼんやり見てる側やと夜更かしのついでやけど、出演する方は気合い入れて仮眠せなあかんのやなあ」

つぶやきながら鮎美は習慣的に鷹姫のポニーテールを撫でようと

したけれど、その手を途中で止めた。もうセクハラはしない、鷹姫とは議員と秘書、そして友人という関係に留めると自戒したので、撫でたり頬擦りしたりするのは我慢した。もしも男性議員と女性秘書で同じことをやっていけば、すぐに性的関係があると周りに思われるし、もう鮎美はカミングアウトしたので人目のあるところで同性に触れるのも慎重にならなければいけないと考えている。

「私自身の行動は、どちらを優先すべきでしょうか？」

「鷹姫の？ どっちって何を？」

「芹沢先生のそばで付き添うことを優先すべきか、いまだ忙しい東京事務所の電話応対を手伝うべきか、です」

「そうやね……………。うちが国会に出たら、議場外にいてもらっても、

……………介式はんは当番なん？ 非番なん？」

「当番です。すでに部屋前で待機しておられます」

「ほな、二人で稽古もできんし、事務所を手伝ってやって」

「はい」

「……………」

また鷹姫に触れなくなった。物足りない。いつもなら、胸やお尻に触ったり、うなじを舐めたりするのに、髪に触れることさえ自戒すると、物足りなくて淋しい。

「議場までお伴します」

「……………うん……………その前に、うちの髪の毛、ちゃんとなってる？ 櫛でといてくれる？」

「はい、美しく整っていますが、ときなおした方が良いですか？」

「お願いするわ」

「わかりました」

鷹姫が髪に触れてくれるのを、せめてもの悦びとして松田川と三人で廊下へ出ると、介式もついてくる。国会議事堂に着くと鮎美は議場へ、介式と松田川は議場外で待機し、鷹姫は事務所へ向かった。鮎美は隣席の翔子と私語して、昨日は思いつきにすぎなかったセクハラへ行政罰を科す法整備と、その運用に電子システムをもちいる案を話し合った。昼食時も翔子と音羽も交えて話し合ったけれど、夏子から顔

を見て話したいとメールが入っていたので急いで食べ終え、国会の廊下でタブレットを持ってネット回線で県知事と対面会話する。

「いよいよ今夜だね、鮎美ちゃんの朝ナマ出演」

「あつという間でしたわ。いろいろあつて」

「まだまだあるよ。アメリカのテレビ局NBCが取材させてほしいって言うてきたらしいね?」

「らしいですね。牧田はんから報告がありましたわ、今朝」

「牧田さんが条件付きでOKして、その条件が私も同席すること、だつてさ」

「加賀田知事を?」

「どのみち話はセクハラ問題とかより、経済学的な連合インフレ税のことがメインになりそうだから、鮎美ちゃんじゃ知識面で不安なところあるでしょ?」

「ありまくりですよ。うちはサラツと半年勉強しただけの小娘ですもん」

「そこで私の出番、数理経済学が専門だった私を同席させれば、なんとかなる、みたいな発想」

「さすが牧田はん、手抜き無いわ」

「忙しい中スケジュールを空けた私にも感謝してよね。アメリカのテレビに出てても、地元には何もアピールにならないんだから」

「おおきに、ありがとうございます」

「じゃ、土曜の朝10時からある県の消防団イベントに顔を出して。」

私と仲良く地元愛アピールに」

「ちよつ、うち今夜、朝ナマですよ?」

「始発の新幹線で十分に間に合うよ。地元愛をアピールしておくのは大切だよ。天下国家、国際社会のことばかり語っても、民衆はついてこない。何より、朝ナマで早朝まで東京にいたはずの鮎美ちゃんが朝10時には阪本市でのイベントに参加してくれた。これは小さなレジエントになる。新幹線でぐっすり眠れば若いから大丈夫だよ、頑張るよ」

「鬼や……あんたのせいで近場に駅がのうて、京都まで乗るのに」

「その分、長く寝れると思って、京都駅から会場まではタクシーの中で寝ればいいよ。政治資金の正しい使い方」

「それは、そうかもしれないけど…」

「月曜に1ドル82.69円だったドル円相場が、この一週間でジワジワ2円も円高になってるの、知ってる?」

「一応は」

「日経平均は1260円も下がったよね」

「……うちの記者会見のせいなんですか?」

「金1グラムの価格が4000円を突破したよ」

「各国の紙幣価値の下落を見越して?」

「そう。でも、これは私たちのせいだけじゃない。10年前に1グラム1105円だった金は着実にあがってきていた。有事の円買いと言われるほど、安定してると思われてる円に対して、金は4倍も価値をあげた。有史以来、経済的価値の象徴は金。紙幣や株は紙切れになるけど、金は永遠に金、利息も配当もつかないけど、超安定、絶対的に価値が保たれる。ある意味で連合インフレ税を脱税するなら、金だね。素早いね、超お金持ちたちはさ」

「……」

「この一週間で世界は反応した。鮎美ちゃんが開けたのはパンドラの箱かもしれないよ?」

「……。うちは、まともなこと言うつもりです」

「そうだよ。でも、まともだからこそ、反応する。タックスヘブンの問題は世界の首脳たちにとっても悩みだった。けど、一方で首脳たちの一部や周辺もタックスヘブンを利用する側の人間だったりする。鮎美ちゃんが言ったのは、そういうこと」

「……」

「ま、これからも、お互い、協力していきましょう。じゃあね」

「はい、また」

通信を終えた鮎美は午後の国会が終わると、議員宿舎へ戻り早々に椀田川と眠った。夕方から夜中まで眠り、テレビ局に移動する。この時点で本来なら介式は非番になるはずだったけれど、鮎美と同じタイ

ミングで仮眠してテレビ局での警護についてくれる。どうしても男性SPではトイレや更衣室、楽屋などに入りにくい場面が出てくるので連続勤務してくれる。鷹姫はテレビ局への同伴よりも事務所での仕事を優先し、今はビジネスホテルで眠っていて、始発新幹線での移動から合流する予定だった。

「牧田はん、お疲れさん。少しは眠ってくれた？」

「2時間ほど」

ずっと国際電話などの対応をしている詩織は時差のおかげで24時間体制で働いてくれている。そして、今は春風会の代表として鮎美と同じく初出演のメンバーとしてテレビ局に来たのだった。控え室に入ると、本日の出演者たちと顔を合わせたものの、ゆっくりと挨拶している時間は、すでに無い。国際経済学者や共産党議員、漫画家、眼科医などで直接の面識はない人たちがばかりだった。わずかに畑母神が党代表である日本一心党の元衆議院議員がつながりがないわけではないという程度だったし、その落選中の女性元議員が声をかけてくる。

「おはよう、芹沢先生」

「おはようございます。水田先生」

事前に鮎美は水田脈実（みずたみみ）のことを詩織から聞いていた。保守的な政党である日本一心党に所属しているだけあって同性愛者に対しては寛容でないらしい。とはいえ、畑母神と鮎美が協調路線を取っているので挨拶は穏やかなものだった。鮎美と水田が何か言葉を交わす前に漫画家が話しかけてくるので応対し、挨拶を交わして一番に訊いてきたのは自分の漫画についてだった。

「鮎美ちゃんさ。ワシの漫画、読んでくれてる？」

「夕方30分ほど予習してきましたよ」

挨拶を交わしたときに、鮎美ちゃんと呼んでいいと許可したので笑顔で答えた。漫画家として中林よしのぶはガツクリと肩を落とした。

「そっか。もう漫画とか読まない世代になってきてるよね。君の歳だと」

「そう気を落とさんといってください。うちが漫画を読まんのは、自分が同性愛者やいうことが大きいですから」

「ほオ？ なぜ？」

「だいたいの漫画は男女の恋愛を描きますやん。読んでもつまらんです。中林先生も男と男の恋愛漫画を読みたいとか、描きたい思いますか？」

「そ、それは勘弁してくれ」

「ということですよ」

定刻となったので全員がスタジオに入り着席した。スタジオ中央にテーブルがあり、それを囲んでの討論となる番組で、放送が始まり司会者が名乗る。

「司会の畑原壮一郎です」

出演者の紹介となる。

「国際経済学が専門の榊添直樹（ますぞえなおき）氏です」

「榊添です。よろしく」

「共産党衆議院議員で弁護士の辻本瑞穂（つじもとみずほ）さんです」

「辻本です」

「漫画家、中林よしのぶ氏です」

「中林です」

「元衆議院議員の水田脈実さんです」

「水田です」

「番組後半のテーマである売春の合法化について活動されている春風会代表の牧田詩織さんです」

「牧田詩織です。よろしく願います」

「眼科医の可山ミカ（かやまみか）さんです」

「可山ミカです」

「史上最年少の自民党参議院議員の芹沢鮎美さんです」

「芹沢鮎美です。よろしく願います」

本日のメインゲストに位置づけられている鮎美へ、いきなり司会者の畑原が質問してくる。

「番組前半のテーマは新しい参議院制度についてですが、今現在、ちまたで、もつとも総理大臣にしたい人ナンバーワンと言われている芹沢さんは、どうですか？　総理大臣にならないか、と、もし言われたら？　なりますか？」

「国会議員は衆参合わせて1403名ですが、この一人一人が、いつかは自分が総理大臣になるつもりで勉強していくのが本道やと思います」

鮎美は予想していた質問だったので落ち着いて答えたけれど、さらに追求してくる。

「今ずいぶん言葉を選んだ答えを用意されていましたが、つまり否定しない？　自分が総理になる可能性を」

「…。否定しません」

ざわつきがスタジオに拡がった。出演者の周囲には一般視聴者が応募で50名ばかり着席している。ざわつきは好感と失笑が混じっていた。畑原は嬉しそうに笑って言う。

「芹沢さん、度胸がありますね」

「いっぺん刺されましたし」

「あの事件、あれも難しいテーマを多く含んでいて触れたいけれど、今は参議院制度に絞りますね。どうですか？　一週間、国会議員として登院した感想は？」

「すでに三年間、クジ引きで当選した先輩方が体験され、一部で正直に述べてはりますし、従来の選挙で選ばれる衆議院の先生方も本音では思てはるでしょうけど、座ってるだけというのは大いに無駄ですね。うちやったら少し制度を変えたいですわ」

「ほオ、どう変える？」

「現状は、代表質問に立つ議員と内閣のやり取りを、ただ座ってみているだけ。ひどいと野次を飛ばしますよね。むしろ、野次は議場の花とか意味不明なこと言うて。あんな風に野次を飛ばしてるくらいなら、いつそ各議員に発言の機会を一会期あたり30分までは与えると制度を変え、ただ聴いているだけでなく、どうにも言いたいことがあるなら、挙手して議長に許しを得て、言いたいことを言うべきです。そ

うすれば、どうせ座っているだけ、という気持ちから、何か指摘すべきことは指摘せねば、と気持ちが変わり眠気も飛ぶでしょう」

「新しい発想ですね。若干、学級会という気もしますが」

田原が言い、榊添が付け足す。

「時間が足りないよ。国会が終わらなくなる」

「誰もが目一杯30分を使うとは限りませんし、そこは議長の差配もあるんじゃないですか。あと、制度を始めるときは10分で試験運用してもええやろし」

鮎美の意見に辻本が頷いてくれた。

「賛成ですね。開かれた国会には、発言の機会があるべきです」

その後も議論は鮎美を中心に展開し、前半が終わってCMを流しながらの休憩中に鮎美はトイレに立った。介式と桧田川、詩織もついてくる。

「はあ…疲れた。後半は牧田はん中心になってくれるとええなあ…」

「私はディレクターとの人間関係で無理に割り込んだ雑魚ですから。というか、鮎美先生を出演させるのと引き替えに出演してくるくらいに思われてますよ」

「せやとしても、後半のテーマは売春合法化やん、頑張って発言してな」

「それも半分は連合インフレ税や赤ちゃん手当の話になるでしょうね」

女子トイレに入ると介式が個室をチェックしてくれ、そこに鮎美が入って小便だけ済ませて出たのに、詩織が鮎美の手首を握って再び個室へ連れ込み、二人きりになろうとするので介式がドアを押さえて制止した。

「何をしている?」

「鮎美先生とキスしたいなって想っているだけです。中で殺したりしませんよ。ご安心ください」

「……」

介式が詩織から鮎美へ視線を移す。キスと言われて鮎美は赤面し

ていた。

「い、今なん？　こんなせわしないトイレ休憩中？」

「してくれないなら、私はもう仕事を投げ出しますよ。連合インフレ税の国際的な連絡、私がいなくなったら、とても困るはずですよ」

「……」

鮎美が応じる目になったので詩織は介式へ涼やかに言う。

「ということですよ。二人きりにしてください」

「いや、私も立ち会おう」

「……。いいご趣味ですこと、どうぞ中へ」

三人で女子トイレの個室に入ると、かなり狭い。詩織はキスと言ったのに無線リモコン式のピンクローターをポケットから出した。

「鮎美先生、ショーツを膝までおろしてください」

「キスなんちゃうの？」

「今までの人生に無いほど、頑張ってる私にご褒美があってもいいと思いませんか？」

「……。それを……うちの中に入れる気なん？」

去年まで電マの使い方も知らなかったけれど、スマートフォンを持つようになって大人のオモチャに対する知識も少しは得ている鮎美は楽しそうに詩織が指先で摘んでいるピンクローターが振動して快感を与えてくるものだとは、なんとなく知っていた。

「安心してください。今はクリアだけです。ロストバージンは、もっと素敵な夜にしますから」

「……」

「お願いします」

「……ちよつとだけやよ」

鮎美は諦めて膝まで下着をおろした。詩織がピンクローターを鮎美の股間へテーピングテープで固定する。

「これはリモコンで動かせます」

そう言っって詩織はリモコンを操作して微弱で振動させた。

「んっ……」

「いいところに当たっているようですね。背中を向けてください」

「…何をする気なんよ…」

時間が無いのはわかっているのに鮎美は言われる通りにしつつも不安になる。

「可愛いお尻にキスさせてください」

「……」

鮎美は詩織へ背中を向けているので介式とは向かい合ってしまい、恥ずかしそうに目を伏せた。詩織はしゃがむと鮎美のスカートをめくり、お尻へキスしてくる。したい気持ちは、よくわかるし、鮎美も似たようなことは何度も鷹姫にしたけれど、するのと、されるのでは感覚が大きく違う。温かい詩織の唇が何度もお尻へ押しあてられる。くすぐったいのと気持ちがいいの、そして何より恥ずかしいので顔が火照って目が潤む。こんなときでも介式は詩織が不審なことをしな
いか、しつかりと見張っているようで視線を感じる。

「…んっ……く、くすぐったいって…」

「大好きですよ、鮎美先生」

「お尻に話しかけんといてよ。…ひゃうっ?!」

鮎美はお尻を舐められて身もだえした。唇より温かい舌がお尻を舐め回してくる感触は何倍も艶めかしくて性感を刺激されたくないのに高まってしまう。さらに詩織の舌が割れ目の奥まで入ってくる。

「…ハア…いい、嫌よ、そんな奥まで舐めんといて…」

「芹沢議員は行為を嫌がっている。やめなければ強制わいせつとみなす」

「鮎美先生、ご褒美ください」

「……」

鮎美は強くは拒否しない。それで詩織は調子に乗る。

「もつと脚を開いて、お尻を突き出してください」

「……そんなカツコ嫌よ…」

「ご褒美をくれないご主人様へお仕えするのは辞めますよ？ 私がジェットロへ勤めていたときの同僚が今はIMFにいます。明日にも連絡が入ります。私は仕事を辞めるとき、引き継ぎなんて一切し

ませんか」

「……………」

海外経験のある詩織の人脈は大きく鮎美の計画に役立っていて、もともと野党の一年生議員にすぎない鮎美が何を言い出しても絵空事にしかならないはずが、外圧に弱いという日本の特徴を利用して外から変えようとしているので、もはや詩織は欠かせない存在になりつつある。鮎美がクリストファー・コロンプスなら、理論を補完してくれる夏子が羅針盤、そして詩織は帆船だった。

「私にご褒美をくださるなら、お尻を突き出して、ご自分の両手で広げてください」

「……………丁寧に言うてくれるけど、それ、ほぼ命令やん…」

「芹沢議員、ご命令いただければ、今すぐ、この女を逮捕する」

「鮎美先生、どうします?」

「芹沢議員、どうする?」

「……………うちは…」

二人に迫られて鮎美は恥ずかしさで涙を流しながら、お尻を突き出して自分で広げた。すぐに詩織が触れてくる。松田川がゴム手袋で触れてくるのとは、まったく違う感覚だった。優しくても医療処置でしかない松田川の触れ方と、優しくても性的欲望に溢れた詩織の触れ方では、受け取る側の感触も恥ずかしさも別格だった。そして、詩織の舌が鮎美の中に入ってきた。

「っ?! そ、そんな中に……………汚いって…」

「フフ、毎日、松田川先生から調教されてるだけあつて敏感になつてますね」

詩織は舌先を鮎美へ出入りさせつつ妖しく言った。

「ちよ、調教なんか、されてへんし…」

「私の舌を吸ってきますよ。鮎美先生のお尻の穴がキュキュウって」

詩織がリモコンのスイッチを入れた。それで前後から刺激され、鮎美は意に反して高まる。どうしようもなく感じてしまい、上半身がふらつくと介式の胸へ倒れ込んでしまった。

「っ……す、すみません。わざとやなくて……」
「……」

介式は無表情のまま、鮎美の両肩を握って支えてくれた。おかげで、まるで介式まで協力して鮎美を攻めているような体勢になる。

「……ハア……う……ハア……んっ……も、もう立つてられへんによ……ハア……詩織はん、かんにんして……」

「フッフ、では仕上げに入ります」

詩織はポケットから二つめのピンクローターを出すと、鮎美のお尻へ入れ込んだ。

「んう……何を入れたのん？」

「前に貼りつけたものと同じですよ」

「ハア……ハア……これ以上、うちに何を……」

個室の外から松田川の声が響いてくる。

「いつまでキスしてるの？ もうCMが終わったって、スタッフの人が焦ってるよ！」

「すみません！ 鮎美先生の具合が悪いみたいで、あと少しかかります！」

平然と詩織は嘘を叫んだ。

「私が診た方がいい?！」

「いえ！ あと少し休めば大丈夫そうです！」

「じゃあ、そう言ってくるね！」

松田川が遠ざかっていく。

「鮎美先生、この前、ジェンダーがどうのと変なことを言って腋を処理していませんでしたよね。退院して、ちゃんとキレイにしましたか？」

「……まだよ。……このままにしてみよ、思てるし」

「はああ……」

詩織が大袈裟にタメ息をついた。

「失望します。がっかりです。残念です。悲しいです。上半身を脱がせたくなくなります」

「……毛が生えるのは自然なことやん」

「もし、宮本さんがヒゲを伸ばしたら、どう感じますか？」
「……………」

鮎美と介式が立派なヒゲをたくわえた鷹姫の顔を想像した。もともとポニーテールが鬚のようなので、ヒゲが加わると、いよいよ武士に見えてくる。日本刀がよく似合う美青年が想像された。

「…………それは、見とうないかも」

鮎美は同性愛者なので、やはり男性化されると萎える。一部の同性愛者には異性装した同性が好きだ、という性癖があるのは知っているけれど、やっぱり鮎美は女子としての鷹姫が好きだった。詩織もバイセクシャルではあっても、何でもいいわけでもなかった。

「そういうことなんですよ。性的指向、以後の問題です」

「……………」

「あんな腋を堂々と見せられると、すごく引くんです。女の子って感じがしないじゃないですか」

「……………」

「羞恥心を無くした女の子なんて、知性を無くした人間、鼻を無くしたゾウ、首が短いキリンです」

「……………」

「鮎美先生には、すっかり羞恥心を思い出してもらいます。さ、ショーツをあげてください」

「……………」

言われるとおりに鮎美は下着を直した。

「では、スタジオに戻ります」

「っ、なっ？ まさか、このまま?!」

思わず大きな声をあげてしまい鮎美は口を押さえた。女子トイレには鮎美たちしかいない気配だったけれど、聴かれたら議員として困るので小声になる。

「まさか、このまま生放送に出演しろなんて言わんよね？」

「言います」

「……………」

「さあ、行きますよ」

「……嫌よ」

無線リモコンで操作されるピンクローターを前に貼りつけられ、後ろに挿入された状態で全国に流れる生放送に出演するなど、とてもできない。トイレの個室内で詩織に舐められるくらいなら、嫌と言いつつも許容範囲だったけれど、今度こそ本当に嫌だった。

「絶対、嫌やし」

「ご褒美をくれないなら何もかも投げ出します」

「……」

鮎美が困っていると、介式が黙っていられず口を開いた。

「これではセクハラではないか？」

「いいえ、これはセクトレです」

「セクトレ？」

「取引ですよ。セクシャルトレード。世界を救う大事業には犠牲がつきもの、それにバレなきや鮎美先生もハラハラドキドキで気持ちいい、私も楽しい、いいことだらけです」

「……うちの嫌がつてるのに無理強いすんの？　うちのこと愛してくれてるんちゃうの？」

「愛していますよ、とつても」

「けど、これやと、ただ欲望の対象にしてるだけやん。そんなん愛ちやうよ」

「哲学的なことを言いますね。鮎美先生は聖書を読んだことがありますか？」

「一応、そういう学校に行ってるから、パラパラと全体の100分の1ほど」

「私は一度だけすべて読みました。そして、あの本のどこかにあります。神は愛」

「……そやから？」

「神はいると思いますか？」

「……どちらかといえば、おらんと思うよ」

「ではイコールで結ばれる存在も不存在なのでしょう」

「……」

「男女の夫婦にしても同じです。お互いの欲望にとって望ましい関係であるうちは、いっしょにいますが、そうでなくなれば彼らも離婚しています」

「……そうかもしれんけど……」

「欧州で暮らして感じましたが、私には仏教の説く愛別離苦や諦観の方が説得力を感じますね。ハルマゲドン後の復活と楽園など、ただの願望にすぎません」

「……」

「そして、私は願望に忠実です。鮎美先生の可愛く悶える姿が見たいです」

「……嫌よ……」

「お仕事、辞めさせてもらいますよ」

「……ううっ……そうやって、自分の欲望を押し通すんや……うち、本気で嫌やし、怖いわ。こんなん着けられてテレビに出るの、嫌よ。かんにんしてよ」

鮎美は悲しくなつて涙を零した。もう鷹姫へ性的な接触はしないと自戒していくなら、これからは詩織との性的関係も年齢差はあつても悪くないと想っていたのに、穏やかに求められるのでなく、こんな風に迫られるのは悲しい。なのに詩織は自分が不可欠な存在となっていることを利用してくる。

「そろそろ戻らないと本当に、みなさんが困りますから、覚悟を決めてください」

「……うち、もしバレたら自殺するしな。生きていけへんから、ホンマに死ぬし」

「バレないように楽しみましょう。二人で」

そう言った詩織は介式の不快極まりない顔を流し目で見た。警護対象が目前で性的虐待を受けているのに何もできない。単純な襲撃者なら撃退するのに、介式には立ち入れない鮎美たちの事情があり、どうにも口出できない。そして詩織は警察組織の一つの先鋭であるSPを無力化していることにも悦びを感じているような顔をしている。

「そろそろ戻りますよ」

「……………」

詩織に続いて鮎美と介式も女子トイレを出るとスタジオに戻った。すでにCMは終わっていて、かなり迷惑なほど離席していたので畑原が言ってくる。

「ああ、やっと戻ってきてくれましたか。具合でも良くないですか？」

「はい…ちよつと…」

鮎美は顔を伏せて言う。トイレの個室内にいるときは、それほどもなかつた羞恥心が明るいスタジオで大勢に囲まれると、枯れ野へ火を放ったように燃え上がってくる。なのに詩織はリモコンを操作して気の休まる間もないほど頻繁に刺激してくる。介式は心配そうについてきたけれど、テレビカメラの被写界に入る前には足を止め、他のスタッフたちと同じ位置で待つ。後半の議題は売春合法化だったけれど、詩織の読み通り連合インフレ税や赤ちゃん手当など、どうしても話題の中心は鮎美になる。

「…ハア…」

つらそうに鮎美が熱い吐息を漏らす向かいで水田が発言している。

「赤ちゃん手当というのは一見素晴らしいと思いますよ、私も。けれど、やっぱり無責任なセックスを助長するかと考えるのです。そのあたり芹沢さんは、どう考えておられますか？」

「…ハア…んっ…」

鮎美が言い返そうとするタイミングで詩織が振動を強めてくるので思考力が無くなる。詩織はリモコンでは攻めておいて、議論ではフォローに回る。

「その点、私も秘書という立場でよく鮎美先生のお考えを聴いているのですが、若年層の雇用が安定しない中、責任が取れる世帯収入がある世帯がどれだけあるのか。大企業の利益を増大する中、被用者の所得は減り続けている。ここを是正すると同時に、より動物的な観点から助けが必要だと考えるわけです」

「動物的というっ？」

畑原が鋭く問うてくれるので詩織は話を進めやすい。

「動物、とくに哺乳類、その一生を観察しているとき、どこで一番助けてあげたくなるか、どこで助けが必要か、これは妊娠中と子育て期なのです。妊娠中、メスはエサも取りに行けません。このこのフォローをオスが行う場合と、そうでない場合があります。この部分のフォローを公、種集団全体でやってしまおうというわけです」

詩織の発言へ中林が口を挟んでくる。

「待つて待つて。動物論よしとしよう。人と動物の違い、そこに人情がある。けど、一方でヒトも動物だ。進化とか、弱肉強食、優勝劣敗ということを考えてとき、マルクス主義のような極度な平等化は、どうなんだろうな？」と立ち止まって考えることも必要じゃないか？」

「いいえ、むしろ立ち止まるべきは資本主義社会、偏った極度な競争社会です」

「ハア…っ…」

せめて鮎美は賛同を示すように頷いておくけれど、前後のピンクローターが攻め続けてくるので、今にも喘ぎそうに額に浮いた汗をハンカチで拭った。詩織はリモコンを操作しながら真面目な顔で語り続ける。

「今の日本社会で子供を産み育てられる世帯というのは非常に限られてきます。これだけでも集団としての総数が減るといふ問題があることは、すでに認識されていますが、再生産を行う世帯の性質が非常に一様になってくるというのも問題です」

「っ…ハア…」

「一樣というっ？…芹沢さん、大丈夫？ やっぱり具合悪いかな。ドクターいたよね。診てあげて。で、一樣というっ？」

畑原は番組に影響がでないよう議論を進めながら松田川へ手招きした。それで松田川は鮎美に近づいて診るけれど、トイレの個室内では詩織と鮎美がキスしたくらいとしか認識していない松田川の問診へ、鮎美が、大丈夫です、と答えると聴診器をあてるわけにもいかな

いので、それでスタッフたちと同じところへ戻る。詩織はリモコンを操作しながら議論を続ける。

「食える職業に就いている人だけ、あと、ごく一部の才能があつて運もあつた成功者だけが子供を産み育てられる経済力をえるわけです。これが繰り返し返されると、クジヤクの尾羽が美しくなるように、この能力が秀でていくという進化圧をかけることができますし、それは一つ肯定されることです。けれど、この一つの肯定のために他はほぼすべて否定されてしまいます。一つと言いましたが、才能があつて運もあつた成功者の子が、また成功するということは今の社会、ほぼ無いですよ。漫画家の子が、また漫画家になつて成功している例、私は知りません。ありますか、中林先生？」

「いやあ、ワシらは他の先生方には、あんまり干渉せんし付き合ひも薄いから。それにアニメ化されたヒット作を出したような漫画家でもね、ずっと食えてるかというと、食えてないというのが実体だよ。漫画家なんてのはヤクザな仕事で、使い捨ての消耗品みたいなもんだよ。漫画家で安定して子育てしたなんてのは、ほんの一握り。あとは転職して、たぶん、まあ、それほど望むような仕事には就けてないだろう」

「歌手の子が歌手、ダンサーの子がダンサーというのも、成功例は希有です。けれど、この二代目が保護されていれば、三代目で、また面白い作品なり素晴らしい歌声などを発揮するかもしれない。なのに、安定して再生産できるのはコツコツ働く正社員型の人間ばかり。このタイプの人間ばかりになつたとき、その社会は多様性を失い、とてもモロくなります。大きな変化が外部環境にあつたとき、それについていけず、受け止める幅としての多様性がなく、ポキッと折れてしまいます。それこそ巨大化しすぎた恐竜のように」

詩織へ畑原が突つ込む。

「つてことは、つまり役に立たないことをしてる人間にも子供を産ませようかと？ その性質を残してもらおうと？」

「そうです。今は役に立たなくても、何か変化があつたとき、それは役立つかもしれない。もつと単純に早く走る能力というのは動物の

中では、それなりに役立つ大切な能力ですが、この能力で今の社会で食べていける人はオリンピッククに出られるような、ごく一部の層ですよ。この層が王族のように一夫多妻でドンドン子供を産めば、それは一つの進化の方向性になりえますが、実際には一夫一婦の国が多く、また多子であつても、せいぜい10人を超えません。なのに、オリンピッククに出られなかった層、各国の候補選手レベルの層は、かなり脚が早いのに十分な経済力をえられず再生産できないなら、そもそも種全体の中で脚が早いという層は消失していくでしょう。これでもいいのか？ というわけです」

中林が言ってくる。

「牧田さんは売春合法化が持論らしいけど、一夫多妻制も否定しない？」

「むしろ肯定します」

「おお！ 珍しいね、女性なのに。けど、一夫多妻制は実は男性に不利なんだ。これ、あんまり知られてないけどね。力のあるオスが複数のメスをえるとき、あぶれるオスが絶対いるんだ。女だつてさ年収3000万円の旦那の第二婦人か、年収200万の男を独占するか、と問われたとき恋も愛もねえ、お金だ、となるわけだ」

「男性の魅力はお金だけではありませんよね。ハンサムな顔立ち、素敵な仕草、不思議とときめく匂い、足の速さでもいいですし、ダンスの巧さ、私を軽々と持ち上げてくれる筋力というのも魅力です。でも、これらの魅力は現代社会では評価されにくいものです。そこに赤ちゃん手当があれば、女性は魅力的と感じる男性と子供をつくることができます」

「…んう…」

とうとう鮎美が絶頂してしまい、身震いしつつヨロめく。

「…ハア…ぐすつ…」

全国に放送されている番組中に性的な絶頂を迎えてしまい、泣きそうになった。少し詩織がリモコンで攻めるのを止めてくれる。水田が拳手して発言した。

「芹沢先生がいる前で言うのは気が引けますが、ちょうど赤ちゃん手

当の話になったので言いますけれど、L G B Lの方々というのは、やはり生産性に欠けると思うわけですよ」

「……」

鮎美はぼんやりと聞き流したけれど、畑原が意見を求めてくる。

「今、水田さんが言ったこと、芹沢さんは当事者の立場で、どう思います?」

「…ハア…ただの役割の違いやと思います。…すべての男女が結婚すべき、と考えるのも間違っているように。また、望んでも子供ができない不妊症の夫婦がいるように、社会の中で、すべての個体が子育てを行わなくても、それぞれに分業して何らか社会に寄与できればよし、まったく寄与できない障碍者も、その存在を否定されるべきでないと考えます。…、それゆえ合計特殊出生率を維持しようと思えば、健康に出産できる夫婦は4人、5人と産んでいたdakのが望ましいですし、それをサポートしようと思ったら産まない層の人間が別の働きをして社会を維持し、赤ちゃん手当の財源になればよいかと思います」

ずっと思い悩んできたことへの答えの一つなので鮎美は一息に話したし、途中で詩織に攻められても耐えた。

「芹沢さん、そう言ってるけど、水田さん、どう?」

「けれどね、トランスジェンダーなんかも、いろいろあって、トイレの問題もあるじゃないですか。学校に男子トイレ、女子トイレだけじゃなくて、そういう子たちのトイレも作ろう、それを無駄とは言わないけれど、生産性が落ちることにつながるわけですよ。男は男に産まれたら、ずっと男でいればいいわけで、女は女、そう割り切っていくべきというのが道德だと考えますよ」

「芹沢さん、どう?」

「うちが東北新幹線や水俣病のことを、よく勉強せんと勝手なイメージでしゃべったら見当違いのことを言うかもしれないように、よく知らんことを適当に言うたら、こんなもんかと思えます」

「っ、それは私が不勉強なこと?」

水田が怒ったので鮎美は、うっかり思ったまま言ってしまったこと

に気づいた。注意力が散漫になっているのは詩織のせいなので一睨みしてから、水田に謝る。

「すいません。……言い過ぎました。ただ、トイレの問題、多目的トイレや、誰でもトイレ、身障者トイレなんかは、きわめて必要度の高いものです。たまたま自分が健康やからといって、いつか世話になるかもしれない…ハアッ…。うち自身も刺されて、やや不自由があつて、初めて思い知るわけですよ。多目的トイレが一つでは長く塞がってるとき、とても困る。トイレを失敗するとね、ものすごく悲しいんですよ。これ、体験したもんでないとわからん思います。まして中学生、小学生やったらクラスでからかわれるし、不登校になると思いますよ」

「ウンコ、シッコつてのはギャグマンガの基本ネタだからな。どんな美少女でも漏らしたらクラス内でのポジション激変するから」

「……」

鮎美が冷たく睨むと、中林は目をそらして口を慎んだ。

「別にトランスジェンダーに限らず多目的トイレは、もつと多く作られるべきです。今は健康な人も病気や事故で不自由になるかもしれないでしょ。いっそ、トイレを男女別に作るのはやめて全部個室にしたらええとも思います。小さいコンビニなんかやと、そうですやん。覗きなんかの問題は実は同性愛者の痴漢が存在することを思ったら、個室の上下をしっかりと封鎖することで解決しますし」

「ごめん、睨まれたばっかで悪いけど、もう一回。男はさ、小便は立ってほしい生き物なんだ。全部、個室になったら悲しいぜ」

「立って…ですか……」

鮎美には兄弟もいないので感覚がわからない。思い出す姿といえば、父の玄次郎が釣りの途中で琵琶湖に立ちションしている背中だった。

「それって重要なことなんですか？ 男の人にとって」

「かなりね。ああ、男だ、ワシは男なんだ、と思うから。とくに外ですると、たまらんな」

「外で…」

鮎美は山頂で我慢できずに排泄したことを思い出した。たまらなく恥ずかしい思い出でしかないけれど、おそらく陽湖と自分の胸の内だけで外部に漏れることはないと考えている。中林が真面目な顔で続ける。

「あと個室の上下を完全に封鎖するというのも覗き対策にはいいけど、安全な日本だから言えることで海外なんかだと、テロの関係もあって扉は、かなり小さい。足元と立てば顔も見えるくらいの扉なんだ。男のワシで男子トイレでも、ちよつと最初は抵抗あるくらい外から丸見えだから、海外旅行だと、なるべくホテルの部屋で済ませてたよ、大は」

「男の人って小は平気で外でするのに、大は見られるの嫌なんですか？」

「あれはカッコ悪いからな」

「小はカッコいいつもりなんですか？」

「うむ、堂々たるものだ」

榊添が鮎美へ言う。

「男全部がそうじゃないよ。都会育ちだと立ちシヨンに躊躇いあるから」

「男性の羞恥心も多様なんですね。…っ！」

しばらく攻めてこなかった詩織が、いきなりリモコンを前後とも最大にしたので鮎美は座ったまま前屈みになり身もだえした。

「っ…ハア…っ…」

畑原と中林が心配する。

「芹沢さん、大丈夫？ 痛みますか？」

「刺されても出演してくれるなんて、いい度胸してるけど、無理はしないでくれよ」

「は…はい…平気です…」

そこから15分間、番組が終了するまで、ずっと最大のまま刺激されたので鮎美は放送が終了した瞬間、テーブルに突っ伏した。

「…ハア…ハア…ハア…」

「お疲れ様です」

白々しく詩織が言ってくる。介式と松田川も近づいてきて介抱してくれた。あまり他の出演者と会話して気づかれたくないので、すぐにテレビ局を出る。地元へ戻るために東京駅に行く鮎美と介式、松田川たちと、東京に残る詩織は別々のタクシーに乗るけれど、別れる前に詩織がリモコンを渡してくれる。

「ご褒美をくださったお礼に、これは差し上げますね。ご愛用ください」

「……」

鮎美が黙り、松田川が驚く。

「あ！ 様子がおかしいと思ったら、こんなイタズラしてたの?!」

「私がプレゼントした物を宮本さんと使われるのは悲しいですけど、向こうで淋しいとき、私を想って使ってください。何も知らない月谷さんにでも頼んでスイッチを操作してもらえば、楽しめますよ。あの誰よりも敬虔な信徒さんに、それと知らせず刺激してもらうのは背徳の極み、神への挑戦だと想いませんか?」

「……ろくなこと考えんなあ……」

「フフ、仕事は真面目にしますよ。IMFが反応してくれば、いよいよ日本政府も芹沢鮎美を無視できない。今週、10兆円の女と言われた芹沢鮎美は来月には100兆ドルの女、そして、すぐ世界のアユミです」

「…そんなお笑い芸人みたいな…」

鮎美がリモコンを受け取らずにいると、詩織はスカートのポケットに押し込んできた。

「では、また来週」

「…仕事、頼むわ…」

詩織と別れて東京駅に着いた鮎美は松田川と多目的トイレに入る。介式もいっしょに入ってきたし、長距離移動なので連絡を受けた男性SPも2名、トイレ外で合流し待機している。鮎美は鷹姫と合流する前にピンクローターを身から外しておきたかった。

「…う〜…このテープ、なかなか剥がれへん。松田川先生、悪いけど剥がしてもらえますか?」

「あらあら、こんなテープで貼られて」

「これ、どういうテープなんです?」

「捻挫とかしたときテープピングするテープだから粘着力は強いし、汗にも強いよ。粘液にも強かったみたいだね」

「……………」

「人体に使用する物としてはナイスチョイスだから、肌にも優しいし固定力も高くて牧田さん、よく考えてくれてるね。毛も剃ってあるから剥がすとき、抜けて痛くないし」

　　松田川は丁寧な手つきでテープを剥がしてくれた。そして珍しそうにピンクローターを見つめる。

「ネットで見たことはあるけど、こういう物なんだ。これってリモコンで動くの?」

「はい」

「ちよつと貸して」

「どうぞ」

　　鮎美はポケットにあつたりリモコン2つを松田川へ渡した。

「これがスイッチかな」

　　松田川が操作すると摘んでいるピンクローターが振動した。

「うわああ…………ブルブルする…………初めて見た。この振動が気持ちいいんだ?」

「…………」

　　鮎美がノーコメントでいると、つい好奇心で松田川は、もう一つのリモコンも操作した。

「つ…ちよ、やめてくださいよ! それ、まだ、うちに入ってるんやから!」

「クス、今、ビクってなった。可愛い。面白い!」

　　同性愛指向はないのに、つい楽しくて松田川は何度か遊んでからゴム手袋をつけた。

「名残惜しいけど、取り出してあげるよ」

「すみません」

　　鮎美は恥ずかしそうに前屈みになる。今までの医療行為と違い、大

人のオモチャを体内から出されるのは、とても恥ずかしかった。いつそ捨てようかと思うものの、駅のトイレに捨てるのは憚られ、ビニール袋に入れてからカバンに収めた。多目的トイレを出ると、始発時刻も近づき、鷹姫も制服姿で現れる。

「おはようございます」

「おはようさん」

「おはよう」

松田川だけでなく介式も今はトイレ内以外は非番となり緊張が解けているので挨拶してくれる。警護は男性SP2名が行ってくれている。人の少ない早朝の東京駅だったけれど、始発に乗る乗客はそれなりにいて新幹線ホームには列もできている。鮎美たちは指定席なので、ゆつくりと乗車した。鮎美は鷹姫に隣りへ座って欲しかったけれど、警護のしやさから男性SPが隣りへ座ったし、前後も介式と男性SPだった。行きが6名のSPに囲まれていたことを思うと、ものしきは減った。

「……はあ……やつと一週間が終わるって気分やわ……。地元か……カムアウトして一週間……東京では思ったより反応なかったけど……田舎では、どうかな……」

「……」

男性SPはもちろんのこと、介式や松田川、鷹姫も、どう言っていないか、わからない。

「まあ、悩んだって仕方ない。出たところ勝負や。寝て体力温存しとこ。どうせシヨック受けること、なんべんか誰か言いよるやろ。いちいち気せんと忘れたるわ」

そう言いながら目を閉じて、京都駅まで眠った。

1月29日 地元の反応

同1月29日土曜の午前9時過ぎ、鮎美は県の消防団が主催するイベントに参加するため京都駅からタクシーで県境を越えていた。タクシーの後部席中央に鮎美が座り、警護のため左右に男性SP、助手席には介式が座っていて、鷹姫と松田川は後続車に分乗している。

「……………す……………」

新幹線でも熟睡していた鮎美はタクシーに乗ってから深く眠っている。介式も連続勤務による注意力低下を避けるため、今は部下に警護を任せて目を閉じていた。

「……………」

とくに大きな危険は想定されていないけれど、二人の男性SPは鮎美が無防備なので、やや緊張している。男性を意識しないからなのか、それとも習慣なのか、眠っている鮎美は鷹姫へもたれかかるときと同じように男性SPの肩を無意識に枕にしている、若い女性独特の香りが立ち上っているし、じわじわと姿勢が崩れてきたためにスカートの裾も乱れてきている。介式であれば黙って直したかもしれないけれど、やはり男性として勝手にスカートに触れるのは怖いので、鮎美の太腿は見ないようにして、あるはずが無いとは思っていても狙撃の可能性などを想定してみても気を紛らわせていた。

「芹沢議員、そろそろ到着します」

男性SPが嬉しかったような緊張して苦痛だったような時間を終え、イベント会場である琵琶湖に面した広い公園が見えてきたので、もたれかかってくれている鮎美を揺り起こした。

「ん……………あ、すみません」

起きた鮎美はもたれかかっていたことを謝り、めくれあがっていたスカートを座り直しつつ整えた。それから手鏡で寝癖や着乱れがなにか自己チェックした。タクシーがイベント会場に到着すると、まずはSPたちが降りて安全確認し、ゆつくりと鮎美も車外へ出る。

「……………」

「あ、鮎美ちゃんよ！」

「鮎美が来たぞ！」

やや離れていても人々の声は聞こえる。大勢が集まっている。主に県内の消防団員と、その家族で千人はいる。今までなら群がってきてサインや記念撮影を求められたのに、SPがついているからなのか、それとも鮎美が同性愛者だと世間に公言したからなのか、誰も近づいてはこない。

「歩いてるぞ」

「歩けるのか」

「夕べ朝ナマで、お腹、痛そうだったのに」

「朝ナマって東京で撮ってるんだろ？ よく来れたな」

夏子の狙い通り、未明まで東京にいて登場したのは受けが良いように色々言われているけれど、おおむね好意的で同性愛者を嫌うような発言は聞こえてこない。鮎美は県民たちに手を振った。

「退院おめでとう！」

「頑張ってくれや！」

「おおきに、頑張ります！」

晴々とした笑顔で返答して用意されたステージへ登り、来賓の列につく。来賓は県知事たる夏子や参議院議員としては夕べのうちに帰県していた直樹、そして数名の衆議院議員と県会議員、阪本市の市長で、だんだん見慣れた顔という気がしてくる。夏子が明るく駆け寄ってくれる。

「来てくれて、ありがとう！ 夕べ、かなり痛そうだったけど、ホント大丈夫？」

「ご心配をおかけしました。もう大丈夫です」

二人でステージ上から開会の挨拶をすると、音だけの花火があがり、公園から見える湖上に停泊していた消防船が大きく放水して水流のアーチをつくった。真冬の陽光を反射して虹ができると観衆から拍手が起こる。イベントは無事に始まり、長年の消防団活動を勤めた人を表彰したり、放水演習を披露したりと、例年通りの流れで進んでいく。今までならステージ上でパイプ椅子に座っている鮎美へカメ

ラを向ける者は多かったけれど、下手にパンチラを撮ってしまい怒られると怖いので撮影も控え目だった。

「……………」

うちが同性愛者やってカムアウトしても、ぜんぜん以前と変わらんにやね、覚悟してたのに拍子抜けやわ、と鮎美は安堵していたけれど、お昼過ぎになってブラックバスの天井を食べた後、便意を感じて松田川の白衣の袖を黙って恥ずかしそうに引いた。それで松田川も気づいてくれる。

「あ、お尻の穴を気持ちよくしてほしくなっただ？」

「う〜…………そういう言い方、せんといてください。ドクハラですよ」

小声とはいえ言われたくないので鮎美は主治医を睨んだ。

「ごめん、ごめん。介式警部、トイレに行きます」

「了解した」

三人で公園の多目的トイレに入る。

「…………寒つ…………」

下着をおろしてスカートを完全にあげて処置を受けていると、寒くてお尻が凍りそうだった。

「もつと力を抜いて。掻き出しにくいから」

「そんなこと言われても寒くて。これ高齢の身体障害者やったら命にかかわるかも。けど、予算には限りがあるし、屋外トイレまで暖房しとつたら予算にもエコにも問題あるなあ」

いつもより時間がかかっていると、となりの男子トイレから天井に反射した声が響いてくる。公園のトイレは多目的トイレが中央にあり、その左右に男女のトイレがあつて高い壁はあるものの、天井付近は共通の吹き抜け空間になっているので声が響きやすかった。

「あの鮎美ってレズなんだろう？」

「……………」

鮎美と松田川、介式は簡単に声が響く構造なのだ天井を見上げた。また男の声が響いてくる。

「らしいな。可愛い顔してんのに、もったいないよな」

「やらしてくれねえかな」

「チンポ突っ込んだらレズ卒業するかもよ」

「お前のチンポじゃ物足りないだろ」

「うっせー！ オレの舌技は神の領域だ。豊郷小のペロリストと呼ばれた妙技、鮎美マンコに決めてやるぜ」

「お前それ給食を食べるのが早かっただけじゃん。しかも早食いしすぎて、一回死にかけたよな。食パンを一气食いして喉に詰めてさ」

「何度でも蘇るさー」

「蘇らせてくれたのは先生のおかげだろ。あのババア、お前の喉に手え突っ込んでパンの固まり掻き出してさ。ブチューって人工呼吸して、お前の顔、あのババアの口紅まみれになって。ククク、今思うと笑えるな。あれファーストキスだろ」

「くっ……オレの黒歴史だ。どうせなら、鮎美にキスされたかった」

聴いていた鮎美が顔を伏せて右手で唇を押さえ肩を震わせたので、
松田川と介式は泣いているのかと心配したけれど、鮎美は笑いを我慢しているだけだった。

「……プフ、…アホや…クク…」

「救命処置が、とっさにできる人と、できない人の差は大きいよ。笑い事で済んでよかったよ」

小声で言いつつ松田川は処置を再開する。男子トイレにいた男たちは小便だけのようで、女性ではありえない速さで、すぐに立ち去り静かになったけれど、今度は女子トイレから声が反射してくる。

「鮎美ちゃんってさ、高校生のくせに言うこと難しくない？ セクハラ写真で訴えるのはいいとして、連邦インフル税って何あれ？」

「連合インフレ税よ。あなたインフレの意味知ってる？ インフレーションの」

「知らない」

「それ知らない人に、あの仕組みを語るのには二時間かかるよ」

「ふくん、あれってレズと関係あるの？」

「ない！」

「赤ちゃん手当とか言ってるけど、自分がレズじゃ無意味なのにね」

「男が嫌いなのかもね。赤ちゃん手当があつたら、ムカつく彼氏と暮

らさなくても、自分だけでギリギリ子育てできそうだし」

「けど、保育園に入れたらもらえないんでしょ？」

「もう一人産めばいいじゃない。3年ごとに産めば9年くらい税金で暮らせるよ」

「それ国が破産しない？」

「だから連合インフレ税なの」

「イミフウ。それよりさ、鮎美ちゃんの恋人っているかな。今日も3人も連れてたよね。女医さんと同級生と、キツイ感じのスーツの人。あの中で、どれが本命だと思う？」

「どうかな。好みもあるけど、確率的には同級生じゃない？ でも、私がレズだったら、あのキツイ感じの強そうな人かな、守ってくれそうだし。けど、女医さんもいいよね。養ってくれそう」

梶田川は処置を終えゴム手袋を外しながら小声で言う。

「自分で働け」

「……………」

鮎美と介式は黙って多目的トイレを出て、梶田川も続いた。屋外トイレから十分に離れてから鮎美が言う。

「トイレって人の本音が聴けてオモロいわ」

「人間はトイレで物理的な排泄だけじゃなくて心からも排泄するのかもしれないね」

「ですね。さて、そろそろ、このイベントは終わりにして、次は…」

鮎美は目で鷹姫を探した。近くの屋台でタコ焼きを買っている。地域のイベントではなるべく買い食いして、とくに手作り屋台のお店にはお金を落とし、愛想良く美味しかったと言っておくよう静江から教育されているので、遊んでいるわけではなく勤めを果たしている。近づいた鮎美が入院中のように口を開ける。

「あーん」

「どうぞ」

鷹姫が爪楊枝でタコ焼きを食べさせてくれた。

「うん、美味しい！ おっちゃん、めっちゃ美味しいよ！」

「そうかい。ありがとうよ」

感じ良く屋台の店主と別れて、タクシーを2台呼んだ。

「鷹姫、次の予定は？」

「はい、三上市で開かれている道の駅オープン3周年記念イベントへの顔出しです。すでにオープニングセレモニーは終わっており、挨拶などはありませんが、なるべく買い食いして顔売っておくようにとのことです。すでに石永さんたちは参加されているようです」

「政治家ってダイエツト難しそうやなあ」

「タコ焼き、まだありますよ」

「……。鷹姫が無理ないなら、食べておいて」

「はい、では、いただきます」

タクシーが来るまでに匂いの強いタコ焼きは食べ切り、三上市の道の駅に移動した。ごく普通の道の駅で、大きな駐車場とトイレ、お土産物店、レストラン、芝生広場があり、駐車場と芝生広場の一部に屋台が出ていて、地元の市議や市長も顔を出している。県のイベントよりは小ぶりなので優先順位は低く、国会議員は誰も来ておらず、落選中の石永は気さくに屋台の手伝いをしていた。

「お、芹沢先生、やっと来てくれたな」

「タオルハチマキ似合えますよ」

石永が焼いているヤキソバは美味しそうだったが、安価で順番待ちが出るほど人気なので、あえて売れて無さそうな屋台へ脚を運ぶ。やや高価な川魚の丸焼き屋台の売り子が頑張って声を出して集客していた。

「アユの塩焼き、いかがですか？」

「……。そっちのイワナの塩焼き、もらえますか？」

「こちらは、あと3分かかりますが、よろしいですか？」

「うん、ええよ」

鮎美がアユを避けたので松田川が問う。

「芹沢さん、アユが嫌いなの？」

「嫌いやないけど、自分の名前が因んでるもんを食べるのは、なんか縁起が微妙ですやん。串刺しにされて丸焼きやし。料理で出たときは残さず食べますけど、あえて選ぶのはやめます」

「ふーん、あ、私はアユの塩焼き、一つちようだい」

「介式師範、今は非番ですか？」

「ああ、芹沢議員のトイレ以外はな」

「では、いっしょに食べませんか？」

「そうだな。芹沢議員、私が30分ほど、離れてもトイレは大丈夫だろうか？」

「はい。おおきに。けど、あんまり大きい声で言わんといってください。みんな食べ物売ってはるんやし、なにより、うちもレディーですから」

あまり大人数で移動しているとSPのものしきがイベントの雰囲気壊すので別行動を取り、鮎美には松田川と男性SP2名がついてくる。魚を食べてから会場を巡ると、静江と陽湖も来ていた。

「芹沢先生、：歩けるようになったのですね」

「シスター鮎美、元気になってくれて、本当に良かった」

静江が女性同性愛者を嫌っていることは忘れていけないけれど、わずかに会話の間があつたくらいで、再会に大きなぎこちなさは無かつた。陽湖の方は、ずいぶん以前から告白していたので、とくに変化はなく、回復を喜んでくれている。

「うん、おおきに。この通りよ。飛んだり跳ねたりはできんけどね」

また大人数で移動することになったけれど、陽湖と静江は物腰が柔らかいので、人が寄ってくる。鮎美へ次々と声をかけてきた。

「芹沢さん、サインください」

「いっしょに写真撮ってもいいですか？」

「タベテレビに出てましたよね」

一人一人へ丁寧に対応しているうちに日が傾き、タクシーに乗ると疲労感を覚えて、すぐに眠った。

「芹沢議員、港に到着しました」

「あ……また、すんません」

鮎美は再びもたれかかっていた男性SPに謝り、連絡船で自宅へ19日ぶりに帰る。連絡船で同乗した島民や、島の港ですれ違った島民たちは、みな一様に鮎美の回復を祝ってくれたし、表面的には政治活

動の内容や鮎美の性的指向については何も触れてこなかった。介式たちSPは自宅前まで警護して言う。

「私たちは近くの宿泊施設を探す。この島の状況からして夜間警備の必要度は低いと判断されるが、芹沢議員が望まれるのであれば、玄関前へ一人、歩哨に立つ」

「この寒いのに、そんな気の毒なことさせられませんよ。どの道、犯人も捕まっていますし、もう連絡船が無いんで、この島に出入りできるのは漁船をもってるもんだけです」

「そうか。では、明日朝9時をもって警護を終了する予定であったが、現時刻をもって終了する」

「え……終わりなんですか？」

「終わりだ」

「そうですか。長いこと、ありがとうございました」

自然と鮎美は握手するために右手を出したけれど、介式は一瞬迷い、鮎美が手を引こうとしたものの、その前に握手してくれた。介式と握手を終えると、鮎美は2名の男性SPとも握手を交わした。そして、気づく。

「あ、宿泊施設って……もう予約されています？」

「いや、これから探す」

「……………鷹姫、あるの？ この島にホテルとか」

「ホテルはありませんが、民宿なら2件あります。ですが、予約は食料品仕入れの関係で1週間前までの受付と聞いたことがあります。素泊まりでも当日夜で受けてくれるか、どうか……民宿といっても、本当に普通の民家ですから」

「……………」

東京とは宿泊施設の整備が、まるで違う離島の状況にSPたちは、やや困惑した。いろいろな地域の要人を警護した経験はあるけれど、ここまで特殊な環境は無かった。直線距離なら、ほんの数キロ先にビジネスホテルはあるのに、そこへは船でないと行けない。その困惑は大阪で育った鮎美も理解できるので介式たちのために考える。

「うちの家は松田川先生に泊まってもらおうし……………」

「剣道場でよければ、私のところへ泊まってください。何人でも大丈夫です」

「すまない。お願いする」

「介式師範、今から非番になるのでしたら、稽古をつけていただけませんか？」

「ああ、いいぞ。望むところだ」

「道具はすべてそろっています」

かなり合宿気分で鷹姫たちが立ち去り、鮎美と陽湖、松田川が芹沢家に入る。

「ただいまー」

「ただいま帰りました」

「お邪魔しまーす」

「やつと帰ってきたな」

玄次郎が嬉しそうに居間から言い、美恋がエプロン姿で台所から出てくる。

「おかえりなさい。鮎美」

「母さん、父さん、心配かけて、ごめんな。まだ飛んだり跳ねたりはできませんけど、元気になったよ」

「ああ、よかった。本当によかった。……抱きしめてあげたいけど、……」

美恋は自分の下腹部を撫でた。それで鮎美も思い出す。

「妊娠、どうなん？」

「昨日、確定されたの。まだ小さい小さい影だけど、超音波検査にも映ってくれて」

「よかったやん！ おめでどうー！」

「おめでどうございます」

初診した門外の医師として松田川も祝った。五人でのめでたい夕食となり、政治や宗教、性的指向の話は一切せずに、産まれてくる弟か、妹の名前や鮎美と何歳違いになるのか、といった話題で穏やかに時間が流れ、入浴後に鮎美が一人で自室にいるとき、玄次郎がノックして入ってきた。

「まだ起きてるか?」

「まあね。何?」

「いきなり兄弟ができること、本音では、どう思っている?」

「率直な質問やね」

鮎美は、よく国会周辺で自分が言われることを父へ返した。

「ええことやと思うよ。めでたいやん。うちが抱っこしてたら、うちの子供に見えるかもしれないくらい歳が離れてそうやけど」

「あきれていないか? 年甲斐もないと」

「別に。……経済的には大丈夫なん?」

「ああ、鮎美が大学に行かないことが確定したから、問題ない」

「それならええやん」

「さらに、あと一人、二人、産ませようと考えていると言ったら?」

「え……? 今から三人目とか考えてんの? ……父さん、赤ちゃ

ん手当て狙い? あれ、すぐには実現せんよ。月曜には今年度予算案が衆議院の予算委員会で審議入りするし、そんな一朝一夕に変わるもんやないから、あんまり期待されても……」

「そうじゃないさ。オレの狙いはな、子育ての忙しさだ」

「忙しさ?」

「母さんはヒマになりすぎた。島にはパート先もないし、鮎美も親離れして、やることが本当になくなってしまった。おかげで誘われて教会に行くようになって影響を受けたけど、子供が産まれてみる、おっぱいだ夜泣きだと、忙しくて礼拝どころじゃない。で、3歳くらいになった頃、また一発やって妊娠させれば大忙しで宗教参加は育休が続く。そのうち忘れるだろう、という作戦だ」

「……………」

鮎美が親指を立てて、にっこりと笑顔になった。

「父さん、ナイス。その作戦イケてる!」

「だろ。明日の日曜礼拝だって、この寒いのに船で出かけるのは胎児に悪いと言ったら、自宅礼拝で済ませるそうだし」

「ええね。ええ作戦やわ」

「それに鮎美が結婚するつもりがないことを気にすることは無くな

る」

「あ……そつか……そういうことも……。おおきに、父さん」

「あとは、一応、鮎美に断っておくが、鮎美が大学に行くことにそなえて学資保険や貯金を500万ほどしていた。他に結婚するときの資金として200万くらい用意していたが、これを下の子に使っていてもいいか？」

「うん、ええよ。うちは、もう大丈夫やし。気にせんと、しっかり育てやって」

「そうか。鯉次郎も喜ぶぞ」

「その名はやめてやり。湖恋（ここ）なら、ええけど」

「それはキラキラネームっぽくないか。まあ、いい。おやすみ」

「おやすみ」

鮎美は長かった土曜日が終わると思い、布団へ入って目を閉じたけれどスマートフォンが鳴ってメールが届いたので読む。鐘留からだった。

今まで、さんざんアタシのおっぱいもお尻も触ったよね。

ずっと同性愛だつてこと隠して。

体育の後に、アタシの汗を舐めたこともあるよね、ヘンタイ！

で、東京から帰ってきたくせに一言もなし？

駄犬警部のことも調べてあげたのにお礼も無いし！

アタシを手下とか思ってる？

アタシは人にナメられるの超嫌い！

アタシを軽く見たこと後悔させてやる。

今すぐお金いっぱい持って謝りに来たら許してあげるけど、じゃなきや週刊紙に何もかも喋ってやる。

読み終わった鮎美は、すぐに電話をかけた。

「……………出てくれへんの……………」

電源は入っているようだけれど、受話してくれない。

「……………カネちゃん……………今すぐって……………無理なん、わかってるやろ……………」

鮎美は時刻を見た。あと数分で日付が変わる。

「…………けど、カネちゃん、言い出したら…………ホンマにやるかも…………うちが悪いし…………忙しくて、忘れて、一言もなし…………お礼も…………忘れて…………怒るの当たり前やん…………」

鮎美は布団の中で頭を抱えて悩んだ。そして結論は60秒で出した。

ごめんなさい。今すぐ行くし、待ってて。

そうメールを送信して制服に着替えて、家族や陽湖、桧田川たちに気づかれないよう書き置きだけして家を出た。

1月30日 IMF

翌1月30日の日曜日、午前0時過ぎ、鮎美は非常識を承知で飲酒しない下戸の漁師がいる家を訪ねていた。けれど、その漁師は風邪を引いていて舟を出せないと言われる。

「そうですか。夜中に、すみません。他をあたってみます」

さらに3件を訪ねたけれど、どの漁師も飲酒していた。

「……………。たしか、馬力の少ない小型舟なら、免許無しで運転できたはず……」

鮎美は電動モーターで動く小舟を持っている漁師を訪ね、貸してほしいと頼んだけれど、怒鳴られる。

「アホ言いな！ こんな真冬の夜中に死ぬ気か！ ウミ舐めるなや！

あんな小舟、晴れた風の無い日に使う遊び道具じゃ！」

「すみません。どうしても、本土に渡らんといかんのです。お願いします」

「わかった。ちよつと待つとれ！」

漁師は寝間着から防寒着に着替えてきた。

「送つちやる」

「え……………いえ、でも、お酒、呑んではりますよね？」

「ガキが余計なこと気にせんでええ。本土の道路じゃあるまいし、誰が飲酒検査するんじゃ?! ワシの顔が赤いのは日焼けじゃ思とけ」

「……………すみません……………助かります」

鮎美は頭を下げて、漁船に乗せてもらった。港を漁船が出ると、冷たい北風が吹きつけていて、波も高い。海に比べれば凪いでいるように岸からは見えても30センチほどの波があつて、意外なほど漁船でも揺れる。小型のボートのような舟では危険だと思ひ知つたし、ここを渡ろうとして鷹姫の妊婦だった母親が事故に遭つたことも思ひ出した。漁船なら5分で渡れるし、夏なら泳いでも渡れるけれど、今の水温を考えると、この時期は危険だった。

「着いたぞ」

「おおきに、ありがとうございます」

鮎美は礼を言つて燃料代と手間賃を払い、港へ呼んでおいたタクシーに乗る。鐘留の家に一番近いコンビニへ寄ってもらい、ATMで現金をおろしたけれど、限度額の問題で100万円しか確保できなかった。

「……とりあえずは100万で……」

銀行が開いていないので、どうしようもないし、今まで大きな金額の交渉をすることはあっても実際に現金の束を手にしたのは初めてだった。たいして重くはないはずなのに、議員バッチを手にしたときと同じに、その質量以上に重量感を覚える。

「……これが100万なんや……」

厚さ1センチ程度の札束を制服の内ポケットに入れてタクシーに戻った。

「かねやさんの本店へ、お願いします」

有名な店なので、タクシーは迷わず到着してくれた。

「………ご両親、寝てるよね……」

一般の一戸建て住宅の5倍くらいある鐘留の家を見上げると、鐘留の部屋だけ、ぼんやり照明がついている。鮎美が到着したとメールを送ってみると、門扉や玄関ドアのロックが自動で開いた。

「……失礼します……」

小声で挨拶して中に入る。靴をそろえて脱ぎ、足音を立てないように鐘留の部屋を目指した。

「……カネちゃん部屋の、ここやんな……」

静かにドアをノックした。部屋の中から不機嫌そうな鐘留の聲が響いてくる。

「入りなよ」

「……お邪魔します……」

物音を立てないように入室して、頭を下げる。

「遅くなって、ごめんなさい」

「………」

鐘留は黙っている。部屋は高価な間接照明で今は照度をさげている。

るようで薄暗い。鐘留は机前の椅子に座っていて、こちらを向いているけれど、背中からデスクライトの光りを浴びているので、表情が見えない。服装さえ、よく見えないけれど、なぜか夏服の制服を着ているように見える。

「いくら、もつてきたの?」

「……さしあたって、これだけです」

鮎美は頭をあげ、内ポケットから100万円の束を出した。受け取った鐘留が予想通りの反応をしてくる。

「たった、これだけ?」

「今は銀行も開いてなくてコンビニのATMやと、これが限度やったんです」

「アタシのおっぱい何回触った?」

「……よく覚えていませんけれど、毎日のように……」

「お尻にも、よく触ったよね?」

「はい……」

「スカートの中にまで手を入れたこと、多いし」

「……はい……」

「夏に体育の後にさ、おでこの汗と腋の汗で塩分の濃度は同じかな、とか理科の実験っぽいこと言いつつ、アタシと宮ちゃんの顔と腋、舐めたよね? 月ちゃんは嫌がったから遠慮してみたんだけど、あれってさ、男子がアタシたちにやったなら、犯罪級のヘンタイ行為だよね?」

「………はい……すみません……」

「なんで舐めたの?」

「……舐めたかったからです……」

「テレビで言ってたけど、同性愛ってマジに?」

「…はい、本当です」

「………。アタシへも性欲を感じるの?」

「………はい……」

「うわぁ……マジに?」

「…はい……」

「…………。ようするに、男子がアタシたちの裸を見たいみたいに、見たし、男が触ってくるのと同じ感じで、アタシたちに触って舐めて、いろいろ楽しんでたんだ？ 耳にも、ほっぺにも、よくキスしてくれたけど、あれも性欲？」

「…………親愛の情という部分も大きいですけど、性欲と言われれば否定できません」

「何その官僚みたいなムカつく答弁。アユミンの本心は、どうなの？」

「…………見てたら、可愛くてキスしたくて、しました」

「ふーん…………。で、さんざんアタシにいろいろした代償が、たった100万？」

「月曜になれば、銀行が開くので、また用意します」

「いくら？」

「…………。できる限り多く」

「一億円」

「…………。20年くらいかけて、なんとか用意します。今は、これが限界なんです」

鮎美は通帳を開いて鐘留に差し出した。最大で500万円を超えていた残高は松田川への支払いで減り、今週振り込まれた歳費で55万円増え、さきほどコンビニでおろしたために減り、今は270万円ほどだった。

「これ、全部アタシにくれるの？」

「…………。せめて10万円ほど、生活費を残していただけると、ありがたいです」

「それが精一杯の誠意ってわけ？」

「はい、どうか、許してください」

また鮎美は頭を下げる。鐘留は満足そうにクスクスと笑って言う。

「ちよっと、顔あげて」

「はい」

鮎美が顔をあげると、鐘留は100万円の札束でペシペシと鮎美の

頬を叩いた。

「クスっ…フフ…これ、一回、やってみたかったんだ」

「……」

「あと、これも」

さらに鐘留は札束を天井へ向けて放り投げた。一万円札が降ってくる。

「いまいち、足りないね。あと暗いし、わかりにくい」

鐘留はリモコンで照明の照度を最大にして部屋を明るくすると、机の引き出しから現金300万円を出した。金額的に自動車教習所でのセクハラで手にした示談金だとわかる。鐘留は三つの札束の帯封を破り、なるべく紙吹雪として散らばるよう、ほぐしてから一気に天井へ投げた。今度は迫力のある量が降ってくる。

「うーん♪ いいね」

「……」

「アユミン、拾って。百万円と3百万円に分けて」

「…はい…」

言われるとおりに散らばった紙幣を拾い集め、合計で400万円あるはずなので100枚だけ数えて別にする、残りは積んだ。鐘留は100枚の方を手にすると、それを鮎美に返す。

「ん」

「……はい？」

「もういいよ。君の誠意は見せてもらった。許してあげよう」

「……お……おおきに…」

「じゃ、それはポケットに入れて。この3百万で、もう一回、紙吹雪やろうよ」

「……もう、ぜんぜん怒ってへんの？」

「まあねん♪」

鐘留は300万円を雑に半分へ分け、鮎美にも投げさせる。

「ほら、321で投げよう。いくよ、3、2、1！」

「……。こうなったらヤケや！」

少しタイミングが遅れた分、長い紙吹雪が部屋に降る。

「きゃははっは！」

「……フ……あははは！」

可笑しさが込み上げてきて笑った。

「雪合戦みたいに投げ合おうよ」

「ろくなこと考えんなあ」

「えい！」

鐘留は掻き集めた紙幣を投げつけてくる。

「育ちのええことやね！」

もう吹っ切れて鮎美も掻き集めて投げ返した。しばらく二人で紙幣を投げ合った後、鐘留は汗ばんだ額を指先で拭いて、鮎美に向けた。

「アタシの汗、舐めたい？」

「……わりと本気で、そう感じるから、からかうのやめて」

鮎美が顔を背けると、鐘留は両手を後頭部で組んで腋を見せる。改造した夏制服を着ているので、よく見える。

「アユミンってさ、腋フェチでしょ？」

「……」

「どうなの？ 正直に答えてみなよ」

「……誘惑されます」

「やっぱりね。前から変だと思ってたんだよ」

「……いつから、気づいてたん？ うちがビアンやって」

「それを知ったのは記者会見で自分で認めてたときだけだよ。夏場とか、めっちゃアタシの腋を見ってくるし。アタシだけじゃなくて月ちゃんや宮ちゃんの腋も凝視するしさ。この人、他人の腋チェック厳しいなあ、アタシはレーザー処理したから、どんなにチェックしても生えてこないのに、よく毎日毎日、他人の腋をチェックするなあ、って感じてたの。けど、同性愛って言われたらピンときたよ。そっか、フェチなんだ、こいつフェチだ。絶対、腋フェチだ、ってさ」

「……」

「ほらほら、触りたい？ 舐めたい？」

鐘留は腕をあげたまま、鮎美の顔へ腋を近づけてくる。

「ちよつ、それ、もう逆セクハラやって。うちはホンマに同性に感じるんよ」

「味見くらいさせてあげてもいいよ。久しぶりにアタシの味、舐めてみたい?」

「からかうのやめてよ。下手したらカネちゃんのこと襲うよ。うちを男子やと思つてみ、こんな夜中に二人でいるのに、そんな誘惑されたら爆発するかもしれんよ」

「男子ねえ……アユミンが男子だったら、彼氏にしてあげてもいいくらい、スペック高いよね。宮ちゃんや月ちゃんと取り合いしてでも、アタシの彼氏にしたかも」

「……………」

「そういえば、前にアタシの足へキスしたこともあつたよね? あのときも、したくてした?」

「……実は……………」

「ふーん♪」

鐘留はベッドに座ると、右足を高くあげて鮎美へ向ける。

「靴下を脱がせて」

「……………」

鮎美は言われる通り、両手で鐘留の靴下を脱がせた。白い素足が輝いてみえる。

「……………こんな冬場までネイルアートしてるんや……………」

鐘留の足爪には正月らしいネイルアートが施されていて、雪だるまや鏡餅、羽子板が描かれている。

「左はクリスマスバージョンだよ。見たい?」

「……………見たい……………」

「じゃ、アタシの右足にキスしたら、左の靴下も脱がせていいよ」

「……………。からかうの、やめてつて。さつきから本気で刺激されてるんよ。カネちゃん、ピアンちゃうやる? うちに何かさかれたら気持ち悪いやろ」

「足にキスなら、していいよ。むしろ、させてみたい。ネットで言われてるよ、10兆円の女、つてき。ほらほら、キスしてごらん」

鐘留が足の指を動かしている。片足をあげているので極端に短いスカートから下着も見えている。鮎美は強い衝動を覚えた。キスどころか、足の指に吸いつきたいし、スカートをめくりあげて下着を脱がせたい。生意気に動く唇を息もできないくらいにキスで塞いでやりたい。

「…ハア…カネちゃん…、どういふつもりなん？ これ以上、うち我慢せんかもしれんよ」

「アタシの可愛さは、アユミンの目には、どう映るの？」

「……………めっちゃ……………可愛いよ……………」

鷹姫と違い、鐘留は女子としての身なりやスタイルに強く気遣っていて、足の指先まで美しく整えているし、一本のムダ毛もない。脛の肌まで瑞々しくて、内腿になると赤ん坊のようにきめ細かい。頭も小さくて可愛い、そのくせ瞳と唇は生意気で、よく動く。胸もウエストも理想的なバランスで羨ましいのと、抱きしめたいので鮎美は脳が沸騰してくる。いつのまにか、鐘留の右足へキスしていた。

「きやは♪ くすぐつたい」

「…ハア…」

「じゃ、左の靴下も脱がせていいよ」

「……………」

興奮を沈黙で抑えながら鮎美は靴下を脱がせた。

「どう？ 可愛いでしょ」

鐘留の左足にはクリスマスをイメージしたネイルアートが施されていて、小指に星、薬指にプレゼント、中指にトナカイ、人指し指にサンタ、親指にツリーだった。可愛すぎて鮎美は小指を吸った。

「んっ♪ 足、吸われるの、けっこう気持ちいいね」

「…ハア…」

「でも、腋フェチだから、やっぱり腋がいい？」

鐘留が挑発的に右腕をあげて腋を見せてくる。鮎美の目が熱く視線を注いでしまい、その視線を鐘留も感じた。

「舐めたい？ 舐めさせてあげようか」

「……………あとでセクハラとか、示談金、言わん？」

「言わないよ。お金なら、ほら」

鐘留は散らばっている紙幣を握り、また投げた。降ってくる紙幣を受けとめるように両腕を広げてあげながら、鐘留はベッドに倒れ込む。

「舐めたいなら、舐めていいよ。腋フェチ君」

「…ハア…ハア…」

「それとも宮ちゃんみたいに毛が生えてるのが好きなのかな？」

「…カネちゃんは…カネちゃん…キレイで、可愛いよ…ハア…」

「きゃっはは、マジ興奮してるじゃん。息づかいがヘンタイだよ。キヤツ?!」

鐘留は食いつくように腋へ舌を這わされると同時に胸を強く揉まれて驚いた。

「アユミン…マジなんだ…」

「ハア…ハア…」

「…。マジに、…同性愛なんだね…」

「カネちゃん、ハア…ノーブラなんや…ハア…」

言いながら鮎美は手を制服の中へ入れて直接に鐘留の乳房を揉む。張り柔らかさのある乳房の感触が、たまらなく手に広がる。

「アユミン…おっぱいも吸いたい？」

「吸いたい！」

「…。いいよ」

鐘留は無抵抗を示すように両腕を広げ、肘を曲げた乳児が寝るようなポーズになる。鮎美は制服をめくりあげると、乳首に吸いついた。

「…うっ…ヤバっ…アタシも、ちよつと気持ちいい、かも…」

乳首を吸われる感触に鐘留も快感を覚えてしまった。もう鮎美は遠慮も自制心もなく、乳首を吸いながら鐘留のショーツに触れてくる。ショーツの上から何度も股間を擦ってくる。

「ちよっ…そんな風に擦られると…アタシも…ヤバいかも…」

「カネちゃん…ハア…」

鮎美が乳首を吸うのをやめて口へキスしようと顔を近づけてくる
と、鐘留は顔を背けた。

「キスはヤダ♪ キモい」

「っ……」

「おっぱいなら吸っていいよ」

「……」

また鮎美は乳首に吸いつき、今度はショーツの中に指を入れてきた。
た。

「うわあ……マジにアタシのアソコ、触るんだ……アユミンは……ガ
チに……」

「ハア…ハア…ハア！」

「指、アタシの中に入れてたいの？」

「入れたい！ 入れさせて！」

「……………。いいよ。どうせ、処女じゃないし」

「入れるよ。入れるしな？」

「…うん…」

鐘留が頷くと鮎美の指が入ってきた。

「…うっ……………」

「ハア…ハア…」

「…いい、…いきなり、そんな激しくしないで、濡れてても痛いから」

「…ハア…ハア…」

鮎美は指を入れたまま、乳首を吸うのをやめ、鐘留の股間に吸いつ
く。

「うっはっ…か、感じちゃう……アユミンの舌なのに……うわっ……
マジ……これ、そのうち……イクかも……」

「ハア！ ハア！」

もう鮎美は指と舌で鐘留を感じることにしか頭がないし、鐘留も女性
器の特徴を熟知している同性からの愛撫に高まってしまい、果てた。

「…ハア……嘘……アユミンにイカされちったよ……きゃはは……」

「ハア…ハア…」

「…………イクんだね…………アタシ…………女同士なのに…………うわあ…………キモ…………」

「…………ハア…………ハア…………カネちゃん…………ごめん…………」

「別に謝らなくていいよ。何も悪いことはないし。妊娠はしないし。したら産んであげるよ、きやはっは」

「…………ハア…………」

そう言われて安心した鮎美は猛烈な眠気を覚えた。興奮で忘れていたけれど、いったい睡眠不足が、どれくらいになるのか、仮眠ばかりでろくに寝ていない。安心してしまおうと気絶するように眠った。

「…………ぐすつ…………うう…………」

「…………」

朝、鐘留の泣き声で鮎美は目を覚ました。

「…………ひつく…………ぐすつ…………」

「カネちゃん…………」

泣かれるようなことをした覚えはある。明るく軽く受け入れてくれたと想っていたけれど、あとになって嫌になったのかもしれない。鮎美は後悔しつつ、どう慰めるべきか考えているうちに、気づいた。

「…………カネちゃん、オネシヨしたん？」

「つ…、こつち見ないですよ…ふえええん、ふええええん！」

鐘留が声をあげて泣き出した。

「アユミンのせいだよ、ふええええ！ タベ、トイレいかないで、そのまま寝たから、ふええええ！ ナプキンも忘れたから、ふええええええ！」

二人とも制服のまま眠ってしまい、鐘留はスカートとショーツを濡らしていた。シートにも大きくシミができている。どう見ても夜尿だった。

「ぐすつ…ひつく…………二人で寝ても怖い夢みるなんて…………ううつ…………」

「そんな泣かんとときよ、制服は濡れたかもしれんけど、どうせ登校も自由登校期間やし、そもそも日曜やし、夏服やし。うちは誰にも言わへんから」

「ううっ……アタシのうちは洗濯物は全部、家政婦がやるの！　だからバレルのー！」

「そうなんや……シーツも？」

「っ、ふええええん！　ふええええん！」

「それ嘘泣き？　ホンマに泣いてるの？」

「ふえええー！」

鐘留は幼児のように大粒の涙を零していて、嘘泣きには見えなかった。とにかく落ち着かせようと鮎美は背中を撫でながら抱きしめる。それでも泣き止まないので提案する。

「オネシヨしたの、うちつてことにしてあげるよ」

「え？」

「制服、交換しよ」

「……でも、これ、明らかにアタシの改造制服だよ」

「だから、うちは改造制服を着てみたかったし、カネちゃんは議員バツチの着いた制服を着てみたかった。つてことで交換して、そのままお泊まりして、うちは刺された傷もあるから、調子が悪くてオネシヨしてしても。そう言うて誤魔化したらええやん」

「……でも、……それじゃ、アユミンがオネシヨしたことになるよ？」

「だから、それでええよ」

「………いいの？　ホントに」

「ええよ」

「……ごめんね……じゃあ、これ」

鐘留がベッドの上に散らばっている紙幣を30枚ほど掻き集めて差し出してくる。

「ええよ、そんなん」

「ううん、受け取っておいて」

「だから、いらんて。友達同士で、そういうのやめよ。しかも、お礼と

しても多すぎるし」

「そうじゃなくて。ベッドマットの弁償代、このベッド、たぶんマットだけでも30万くらいするから、これママに渡して」

「……オネシヨしたし弁償させると？」

「だって、今夜からアタシはオシッコの染み込んだベッドマットで寝るの？ そんなのヤダし、買い換えてもらおうし」

「……ほな……受け取っておくわ……。とりあえず着替えよか、服を交換して」

「うん、……ごめんね」

鐘留は謝りながら裸になり、鮎美も裸になるとショーツも交換して着替えた。濡れた下着とスカートは冷たかったけれど、それは表情にも口にも出さない。部屋に散らかっている270万円も集めて机に突っ込んでから、鮎美は濡れたシーツの上に座り込む。

「ほな、うちは嘘泣きしてるし、お母さんか、家政婦さん、呼んできて」

「……うん……」

「顔を洗ってから行きよ。まだ泣いたの、わかる顔してるし」

「……ありがと……」

鐘留が部屋を出て行く。鮎美は嘘泣きするために精神を集中する。最近、泣くことが多かったので、それを思い出してみると、すぐに涙を零せた。

「……ぐすっ……」

しばらくして鐘留と母親が入室してきた。

「おはよう、芹沢さん。夕べ、泊まっていたのね。おかまいできなくて、ごめんなさい」

「……ぐすっ……おはようございます……すみません……お布団を汚してしまいました。……うっ……うううっ……」

「あらあら、泣かなくていいのよ」

「アユミン、いい歳して、オネシヨとか笑えるよね。きやはははー」

「……」

あんたってヤツはあ！ と怒った顔を見せないように鮎美は顔を

伏せて両手で隠す。鐘留はポンポンと鮎美の頭を叩いて言う。

「もう高校も卒業なのにさ。かわいそうだし、黙っていてあげるね」

「…ぐすつ…絶対、誰にも言わんといてな……」

「きやははっははー!」

「芹沢さん、お風呂に入ってください」

もってきたバスタオルで腰を巻いてくれるので、鮎美は立ち上がった。

「すみません。ベッドマット、弁償します」

「そんなの気にしなくていいのよ。さ、お風呂へ、どうぞ」

「あ、アタシも入る。使い方、教えてあげるよ」

鐘留と二人で広いバスルームに入った。

「さすが金持ちやな……」

バスルームは5人でも同時に入れそうなほど広くて豪華だった。身体を流して、バスタブに二人で浸かっても余裕がある。昨夜はショーツも脱がせなかった鐘留の全裸を見ると、鮎美は衝動を覚えた。

「……………」

「またエロい目でアタシを見て。ホント好きだね」

「……おっぱい揉んでいい?」

「どうしようかな。フフ」

「濡れ衣、着てあげたやん。文字通り」

「しよーがないな、どうぞ」

鐘留の乳房を揉むと、より衝動が強くなる。鮎美が向かい合って浸かっている鐘留の身体へ、身体をよせる。

「アユミンにおチンチンがあったら、よかったのにね」

「……。うちは男になりたいとは思ってないよ。身体、くっつけていい?」

「うくん……まあ、……いいかな……」

鐘留が迷いつつ承諾してくれたので、鮎美は身体を合わせた。

「ああああ……ハア……」

「…………。アソコとアソコ、くっつけて楽しいの?」

「うちも初めてで…」

鮎美の言葉は母親が脱衣所に入ってきた気配で中断される。

「芹沢さん、朝ご飯も食べていってね」

「あ……す、すみません。ありがとうございます」

いきなりドアを開けられることは無いと思っただけでも、鮎美は鐘留から離れた。真夜中と違い、あまり長湯も怪しまれるので、名残惜しかったけれど揚がって朝食をいただく。両親と四人で穏やかに食べ終わり、お礼を言っただけで30万円は鐘留に渡してから、鐘留と家を出た。鮎美は自分の制服を着て、鐘留は冬制服の上に完全防寒でタクシーに乗り、党支部へ出勤する。

「すぐに支部へ来て、って静江はん、何かあったんかなあ」

鮎美はスマートフォンを見て考える。

「アタシとエロいことしたのがバレたのかもよ」

「どうやってバレるねん」

運転手に聴かれないよう小声で囁き合っているうちに支部へ到着したけれど、駐車場にパトカーが5台も駐まっただけで、警護任務が終わったはずの介式たちまでいるので冗談では済まない事態が起こっているのだと二人とも感じる。

「なんやろ……」

「やばそうだね。アタシ以外に襲った子、いる？ それともワイロとか、もらってた？」

「……………」

鮎美が緊張した面持ちでタクシーを降りると介式たちに取り囲まれた。けれど、それは鮎美を逮捕するためという雰囲気ではなく、鮎美を完全に包囲して守るためという感じがする。

「介式はん、なんかあったんですか？」

「それは中で説明されるだろう。早く中へ」

「わかりました」

鮎美と鐘留が中へ入ると、すでに静江と石永、陽湖、鷹姫、松田川もそろって一様に顔が硬い。他の党職員たちの雰囲気も重かつたし、県警の警察官と刑事が何人もいる。鷹姫と陽湖が駆けよってく

る。

「芹沢先生、ご無事で何よりです」

「シスター鮎美、心配しましたよ。夜のうちに島を出ているなんて」

「ごめんな。けど、書き置きはしたやる。で、何があったん？ ただごとやない感じやけど」

鮎美の問いには静江が戸惑いつつ答える。

「あまりショックを受けないで聴いてください」

そう言う静江の顔が少し青ざめている。

「さきほど受け取った郵便物の中に……あんなものが…」

静江が刑事の方へ視線を送る。刑事はビニール袋に入った銃弾と、別のビニール袋に入れた手紙と封筒をもっている。銃弾は大きめで、鮎美は知らなかったけれどライフル弾だった。

「……鉄砲の玉……、手紙には何て？」

「こちらがコピーです」

静江がコピーしたものを渡してくれる。

セリザワアユミ

オマエハセカイヲテキニマワシタ

カナラズコロス

筆跡鑑定を逃れるためなのか、定規で書いたような直線のカタカナで脅迫文が記されていた。

「……うちを……殺す、てか……」

「アユミン……」

「シスター鮎美……」

「芹沢先生は私が守ります。私だけでなく介式師範たちも」

「報告が遅れたが、先刻より警護を再開している。また、人員は12人チームとなり警視庁からの増員が到着するまでは所轄の協力をえる」

「……おおきに……」

鮎美は手近な椅子に座った。

「……陽湖ちゃん、落ち着きたいし、お茶、もらえる？」

「はい、すぐに」

陽湖が熱い日本茶を淹れてくれた。それを飲み終わった鮎美は夕メ息をついてから言う。

「こんなもん、どうせ脅しや」

「」「」「……………」

「ホンマに殺す気のあるヤツは、いきなりザクツと来おる。こうやって銃弾なんか送ってきたり、銃口チラつかせるもんは本心では殺す気なんか無いねん。な、介式はん」

鮎美が意味ありげに介式を見上げて言った。鮎美へ銃口を向けたことのある介式は表情を変えずに答える。

「読みとしては正しい。だが、我々SPは最大限の警戒をする。それが任務だ」

「おおきに。ほな、今日の予定は予定通りやろか。静江はん、スケジュールは？」

「え……………あ、…えっと、…………ちよつとお待ちください」

静江が慌てて、すっかり頭から消えていた予定を確認するためメモ帳を開く。鐘留が手を叩いて目を輝かせた。

「アユミン！ 超カッコいい！ すごいよ！ なんかボスって感じ！

芹沢組組長って感じだよ！」

鐘留だけでなく鷹姫も深く感動している。

「ご立派です。組長、いえ、局長たるに相応しい度胸です。感服いたしました」

「…………その…、反社会勢力とか剣客集団みたいな呼び方やめてな」

いつの間にか定着しつつある名称に抵抗を覚えつつ、鮎美は静江からスケジュールを聴き、予定通りに行動する。午前中は六角市ゲートボール協会の30周年記念親善試合を観戦し、お昼には三上市で行われた新幹線新駅再チャレンジ委員会の新年会兼決起集会に参加して挨拶した。移動手段は午前中は静江が経費削減で買い換えた軽自動車だったけれど、午後からは党の京都支部が所有していた防弾措置が施されているセルシオに変わった。その前後を覆面パトカーが走るという車列になり、運転も熟練した党職員があたり、静江は助手席に座っている。

「静江はん、次の予定は？」

「次は六角市に戻って新年少年野球大会の観戦ですが、介式警部が反対されています」

「なんで？」

鮎美の問いへ隣りに座っている介式が答える。

「野球場は広すぎ見渡しがいい、警護しにくく狙撃しやすい」

「……どうせ脅しやって」

「だとしても、万一のとき、芹沢議員は少年たちを巻き込みたいか？」

「……なるほど、選択の余地なしやね。うちに脅迫状が届いたニュースは流れてる？」

静江が答える。

「はい、お昼のニュースで流れました」

「ほな、少年野球の団体には、万一のこともあるから、うちは行けへんし、ごめん、と伝えておいて。その次の予定は？」

「阪本市で琵琶湖放送のスタジオを借りたNBCからの取材を受ける予定でしたが、やや変更があり、取材でなく対談、それも大きなゲストを招けそうだから、京都まで出て来てほしいとのことですよ」

「ゲストって誰？ 加賀田知事ちやうやろ？」

「牧田さんが調整中ですが、はつきりしたことは先方の返事があつてからになる、と。知事は京都なら、かまわないとのことですよ」

「加賀田知事が、そう言うなら、うちも合わせるわ。ちよつと時間に空きできるやんな？ ゆっくり京都まで移動して。うち寝るし」

「……………」

今朝、脅迫状が届いたというのに、目を閉じた鮎美が本当に眠ったので静江と介式は寝顔を見つめ、静かに驚いていた。鮎美が眠りやすいように高速道路を時速80キロで移動した車列はNBCが指定した京都の古刹に駐まった。駐まってからも一時間ほど眠ることができた鮎美へ、定刻近くになって到着した夏子が県有車から降りてきて、防弾ガラス越しに右手でつくった銃の形を向けて冗談を言おうとする。

「……。怖いボディガードがついてるね」

黒い狼のような鋭い目つきで介式に睨まれたので夏子は冗談をやめて、防弾ガラスをノックする。介式が5センチだけ窓を開けた。

「そろそろメイク直しも含めて準備しないと間に合わないよ」

「了解した」

介式が鮎美を揺り起こした。目を開けた鮎美は手鏡で身なりをチェックしてから言う。

「トイレ行きたいし、松田川先生は？」

「後続車にいる。降りよう」

降車して古刹のトイレを見て鮎美と松田川は困惑した。かなり古い便所で本堂とは離れた別棟の木造で、扉は薄い木の板だったし、便器は無くて床に四角い穴があるだけだった。その床も木の板で鮎美が立つだけでギシギシとなり二人で入ると体重で落ちそうな気がする。そして狭いので二人が入ると木戸を閉められないし、処置するスペースもない。松田川がロールではない四角い紙片のトイレットペーパーを見下ろしつつ言う。

「こんな古いトイレ、まだ存在するんだ」

「島の民家やと見かけるよ。…………でも、どうしよ…………近くにコンビニでもあるかな」

「都市部のコンビニもトイレ狭かったりするよ」

「うう…」

「お寺に頼んで、どこか部屋が借りられないか訊いてくるよ」

松田川が住職に頼み、本堂を使つてよいと言われたので移動する。

「…………ここは、ここで、広すぎて恥ずかしいわ」

「ま、しょうがないよ。お尻を出して」

「……………」

鮎美は本堂を見回した。広さは40畳ほどあり、これから対談に使用するため、すでにセットが組まれていてテレビカメラや照明がある。鮎美のために一時的にスタッフが出ていき、今は松田川と介式の三人しかいない。庭に面した戸も閉めてもらったし、監視カメラの類

は無い。本堂の周りは10人近い警官が守ってくれているので覗きの心配もない。

「ほら、早く。意識すると余計恥ずかしくなるよ。さっさと脱いで」

「はい……なんや、バチ当たりで、すみません」

鮎美は本堂に安置されている仏像に手を合わせてから下着をおろし、スカートをめくりあげた。松田川はゴム手袋をして処置を始める。なるべく鮎美が恥ずかしくないように別の話題をふる。

「お腹の傷は、どう？ 痛みある？」

「ぜんぜん大丈夫です」

「そう。予定通り明日で終わりかな。長かったけど、お別れね」

「ありがとうございます」

処置が終わったので鮎美はお尻を拭いて衣服を直した。松田川は片付けて出ていき、代わりに夏子や男性SPたち、テレビ局のスタッフなどが入ってくる。鮎美は匂いが残っていないか、とても心配だったけれど、どうにもできないので黙って正座した。夏子も隣りに正座して、仏像へ合掌する。

「……」

夏子が合掌を解いたので鮎美が問う。

「加賀田知事は仏教徒ですか？」

「どうかな？ 家は禅宗だけど」

夏子は少し正座を崩してから、スタッフに声をかける。

「対談の相手ってアメリカのテレビ局で、わざわざお寺を指定ってことは外人さんですか？」

その問いが肯定されたので夏子は注文する。

「椅子を用意してもらえますか。外人さんに正座は無理ですし、私たちもスカートなので」

夏子のスカート丈だと問題は無かったけれど、鮎美のスカートで畳へ正座すると、多少の問題はあった。鮎美が夏子へ礼を言っているうちに、レポーター分を含めた4脚の椅子が用意された。まだ、対談の相手は到着しないということで生放送ではなく録画編集するので白人女性レポーターが日本語で鮎美たちへ質問を始めた。

「ミス・セリザワは18歳で議員になったこと、どう感じていますか？」

「はい。その責任……」

やっぱり、そこからやんな、と鮎美は慣れきった質問へ丁寧に答え、いき、話はセクハラ問題や赤ちゃん手当て、連合インフレ税などに拡がっていくし、アメリカでは深刻な問題である妊娠中絶の倫理的是非についても話題になった。一時間あまりして夏子が外に車が入ってくる気配を感じて問う。

「そろそろ今日の対談相手を教えてくれないんじゃないですか？」

到着したみたいだし」

「はい。そうですね。相手はドミニク・ストロス・ハーン氏です」

「なっ……」

夏子は驚愕したけれど、鮎美は知らない名前だった。

「誰なん？ 有名な俳優さんとか？」

「IMFのトップ！」

「国際通貨基金の？」

「そう！ 専務理事、経済学者でフランスの大統領候補としても有力！ そんな大物が、わざわざ日本に？」

夏子の問いにレポーターが答える。

「日本へ仕事と観光で来ていらしたので、ミス・マキタの仲介で依頼しました。今、日本で話題になっている18歳の女性議員と対談してほしいと。こころよく受けてくださいましたよ」

「…………女好きらしいからね……」

「ゲイやない限り、男は女が好きなんちゃいます？」

「その視点も新鮮ね」

かなり驚愕していた夏子だったけれど、切り替えの速さは鮎美と比肩するようで、もう落ち着いている。ドミニクが本堂内へ入ってきた。京都観光の流れで来たようでスーツではなくラフなジャケットとストラックス姿だったけれど、オシャレで女性が好感を持ちそうなファッションセンスをしているし、筋肉と脂肪のバランスが取れた恰幅のいい男性だった。そして、国際金融機関のトップらしく専属のS

Pを連れていて、彼らは介式たちと同じくテレビカメラの被写界に入らない位置で待機する。まず、レポーターがドミニクと挨拶し、欧米人らしく抱擁されている。次に鮎美へ向かって両手を広げてきた。

「ハジメマシテ、アユミサン」

「はじめまして、よろしゅうお願いします」

礼儀の上で鮎美も抱擁を受けたけれど、しっかりレポーターよりも長く抱きしめられた。

「ハジメマシテ、ナツコサン」

「はじめまして。お会いできて光栄です。本当に」

夏子とも抱擁を終えると、着席し日仏語ができる通訳がドミニクのそばに控える。ドミニクは欧米人らしく眉を活発に動かしながら語る。

「日本の女性は本当に上品で可愛らしい人ばかりで驚きます」

「おおきに」

「アユミサンの黒髪はとくに美しい」

「それは、どうも…」

日本人女性として鮎美も率直な讃辞には慣れていないので少し困った表情を見せると、ドミニクは微笑んだ。

「そういう奥ゆかしいところが日本女性の魅力です」

「うちは日本女性のうちでは、出しゃばる方ですよ。もとが大阪育ちですし」

関西弁が入ったので、やや通訳が時間を要し、鮎美は言うておきたいことを続ける。

「うちが考えた連合インフレ税、どう思ってくれてはりますか?」

「仮定の話として、その方向に動き出した場合、ルールと元が、どうなるかで結果も大きく違うだろうね。アユミサンは中口を説得できるかな?」

「説得が可能な相手でも、必要な相手でもないと思います」

「ほオ。では、どうする?」

「通貨安の談合に入ってくれる国だけで共同歩調を取りつつも、入っ

てくれない国へも十分な情報提供、とくに通貨発行残高や、その状況と近未来の計画について隠さず偽らず伝えていけば、実質的に共同歩調を取らざるをえないと考えます」

「はははは、大変に興味深いね、それは」

ドミニクは大きく笑ったけれど、目が笑っていない。鮎美は愛想笑いせずに言う。

「タックスヘブンの問題は資本主義の癌です。これを治さんと誰も幸せにならないと思います。たとえば、超富裕層に生まれたとしても、そんな閉鎖された先細りの集団、息がつまる思いますわ」

「それでアユミサンの連合インフレ税なら、本当に解決すると思うかね？」

「はい。この税から逃れようと思つたら、金を買うか、他の実物資産をかうしかありませんが、金は隠せても、実物資産、とくに不動産は隠せませんし、不動産への課税は各国が適正に行うでしょう。そして世界経済に対する金の総量は少ない、これがブレトン・ウッズ体制がほころびた遠因ですよ。つまりは世界経済において、もう金の占める割合は脱税されるとしても小さい。何より、いつか金は通貨と交換せな、使えません。このとき課税するシステムを作れば、脱税不可能です」

「他の解決策を我々も、また各国首脳も考えているところだよ。とくにタックスヘブンに対して圧力をかけ、口座情報を公開するように、とね」

「その方法は、きつと抜け道を見つけられると思います」

「なぜ？」

「欧米の方々が、うちら日本人に明治の頃、法律を教えてくださいましたよね。うちらはアメリカに開国を迫られたけど、採用したんはフランスとドイツの大陸法です。英米の判例法は採用せなんだ。ドミニクさんは、大陸法と英米法、どっちが好きですか？」

「愛国心をくすぐる質問への答えは決まっているだろう」

「うちが明治の頃に政治家でも、やっぱり成文化された大陸法を採用しますわ。英米の判例法はゴチャゴチャとややこしすぎて、まるで抜

け道、裏技をつくって、そして知ってるもんだけが得するような、そんなシステムに感じられます。権利の上に眠る者を保護せず、と銘打つのは裏を返せば、知らんヤツを出し抜いて損させたる、いうのと同じです。成文法のドイツでさえ、連帯保証人制度で違憲審査までやっていますよね。父親の借金の連帯保証人に女学生にすぎんかった娘をつけたのは、人権侵害の違憲行為か、有効な法律行為か、と。そんな人情で考えたら、答えは簡単やのに。なんとかゴチャゴチャと法律で縛って個人からお金を奪い、法人が肥え太る。きつと、法で縛るだけではタックスヘブンは絶対に抜け道つくりしますよ。そもそも主権があれば、どんな法律でも通る。とくに判例法システムをとるアメリカなんか、デラウエア州をうまいこと使いまくるでしょう。あれは国でもないから対外的な圧力も難しいのに、アメリカの州やから自治権が強い。そこをアメリカ人なら、どこまでもうまいこと使って誤魔化しまくるでしょ。今までやってきたことやん、これから心を入れ替えて、やりません、なんて、ありえん話ですから」

「前言を修正しよう。日本の女性は日本刀のようだ」
ドミニクが欧米人らしい大袈裟な動作で両手をあげ、肩をすくめた。女性レポーターが鮎美に問うてくる。

「ミス・セリザワは資本主義と共産主義、どちらが良いと思いますか？」

「その質問は前世紀に答えが出てる思います。今現在で人類が採用しているのは公正な課税と所得の再分配を社会保障で行う修正資本主義路線でしょう。けど、この妨げになんのがタックスヘブンです」

「似たところのある主張で今アメリカで、ウォール街を占拠せよ、と若年失業者が盛り上がっていますが、どう思われますか？」

「デモは民主主義の基本かもしれませんが、占拠と叫ぶと、建物を包囲するだけでは小田原城も大阪城も落ちんかったでしょう。暴動はいけませんけど、実行力のともなう手段でなければ何一つ解決せんと思います」

「それはビルに飛行機を突入させるような、という意味ですか？」

「アメリカは中東の貧しい国々をさんざんに空爆していますよね。あ

んな貧しいところを悪の枢軸やと言うて空爆するくらいなら、タックスヘブンの国々を空爆したらええんです。彼らこそ悪の枢軸やし、悪質な法的テロリストですよ。本来、納められるはずやった税金が国へ入らんことで、医療、教育、貧困救済、これらが滞り、餓死、自殺する人が何千何万と出てる。先進国内でさえ、経済苦で自殺してる。この半分がタックスヘブンの責任やとしたら、空爆するに十分な理由です」

「……………」

ドミニクとレポーターが黙り、夏子が鮎美の袖を引く。

「鮎美ちゃん、言い過ぎ」

レポーターが気を取り直して畳みかけてくる。

「ミス・セリザワは、タックスヘブンを空爆せよ、が主張ですか？」

「いえ、そんな血を見る手段より、10年かけて通貨価値を半減させれば、50%の課税をしたのと同じですし、これを財源に人头税の逆、いわゆるベーシック・インカムのように個人へ恩恵を与えれば良いんです。うちは日本では勤労意欲と人口維持の問題もあり、赤ちゃん手当て、ベビー・インカムである方が良いと思いますが、どう使うかは各国の自由、EUやソ連のように拘束はなく、ただただ共同歩調で通貨安をはかろうというだけです。誰も血を見んし、超富裕層にしても後ろめたかった脱税が是正されるのと、自分だけが見つかって課税されるのでなく、全部が全部、世界中の金持ち、全員が課税されるんやったら、すつきり諦めもつきますやん」

「血を見るといえば、今朝、ミス・セリザワの事務所へ銃弾が届いたそうですね、どう思われますか？」

「日本で平和やな、と思います。アメリカやったら配達せんと、発砲ちやいます？ 発砲より配達、空爆より課税。貧困と絶望がテロを生むなら、豊かさや希望はテロを忘れさせるでしょう。日本人かて、もし戦後の経済復興が無くて貧しい国やったら、基地を置くアメリカに対して自爆テロやったと思いますよ。逆に今、貧しい国々も対外債務が目減りして余裕ができれば、テロも減るし、テロへの警備費用も減るでしょう。世界を好循環にもっていくか、悪循環にもっていくか、

今が歴史の正念場やと思います」

収録が終わり、それぞれに握手したとき、ドミニクが鮎美へ言った。

「夕食をいっしょに、どうですか？」

「えっと……それは……」

鮎美が静江に視線を送ると、これからの予定を教えてくれる。

「阪本市で県の酒造組合が催す新年会へ出ていただく予定です」

「まだ、新年会やんのや……しかも、飲酒年齢やないのに酒造組合……」

「それ、私も呼ばれてるけど、キャンセルして。京都で渋滞したとかテキトー言つて」

夏子が予定を変えてドミニクとの会食を優先するので鮎美も習った。そして、もともとドミニクが観光の一環で訪れる予定だった料亭に移動して会食になる。ドミニクと夏子は飲酒したけれど、鮎美は法律を守った。

「今夜はナツコサンとアユミサンに会えて、とても嬉しい」

会食中は、さほど経済や政治の話は無く、はじめは鮎美を口説いていたドミニクは同性愛者を口説くのは諦め、夏子へシフトしたし、夏子も楽しそうに話している。鮎美は権力をもち知性に溢れる男性に惹かれる女性の様子と、旅先で一夜を楽しみたい男性の様子を、ごく冷静な目で見ていた。

「そろそろ、うちは失礼します。東京まで戻る新幹線の時間がありますんで」

「アユミサン」

ドミニクが抱擁ではなく握手を求めてきたので応じる。鮎美の手が小さく見えるほど、分厚くて大きな手で握りながらドミニクが問うてくる。

「アユミサンが連合インフレ税を着想したキツカケはありますか？」

「キツカケですか……」

鮎美は料亭の庭へ視線を流した。京都らしく、わびさびを重んじた

簡素な岩と苔の庭で芭蕉の句に出て来そうな雰囲気だった。

「少なくとも日本に限れば、住む家も、着る服も、食べる物も、衣食住、すべて十分にあるはずなのに、それでも貧しさに困る人がいる、これは量的な問題ではなくて、システムや仕組みの問題ではないかと、そう思っているうちに、通貨価値って何やろ、と考え始めたのがキツカケです」

「そうですか。私もアユミサンに賛同します。また、会いましょう」
「はい、ありがとうございます」

笑顔でドミニクと別れ、残る夏子と何をするかは自分とは無関係のことだと思いつつ、重厚な防弾車に乗って京都駅に向かった。途中の車中で介式から珍しく話しかけてきた。

「インタビュー中に、芹沢議員は脅迫者を挑発したな？」

「挑発？ 別に、そんなつもりは無いですけど……」

「発砲ではなく配達にすぎない、と笑った」

「ああ、そのくだりですか……たしかに挑発とも取れるかも」

「あのような発言は、脅しが脅しでなくなる動機を与えかねない。今後は慎んでほしい」

「わかりました」

京都駅に着くとSPたちに囲まれながら新幹線ホームにあがる。夜遅い時間のホームだったけれど、京都は修学旅行生が多く、向かいのホームには学校で貸し切った専用列車に乗る他校の高校生たちが何百人かいた。

「あれ芹沢鮎美がやー！」

「ああ！ 鮎美先生さい！」

「宮本様もめんせーり！」

方言がきつくて意味がわからないけれど、ようするに鮎美を偶然見かけたことが嬉しくて遠くから撮影したりしてくれているので、鮎美は手を振ったし、鷹姫も議員秘書として愛想が悪いと言われないうように会釈して控え目に手を振る。パンチラ写真と不倫疑惑を週刊紙に載せられたときの記者会見以降、鷹姫も全国的に高校生たちから人気が出ているようで様付けだった。

「鮎美様ちゅらさん！」

「芹沢組長！」

「宮本局長！」

太秦映画村へも訪れる日程だったようで新撰組のハッピを着ている生徒もいるし、木刀や模造刀を買った生徒もいる。ふざけて一人の男子生徒が抜刀して叫ぶ。

「芹沢、また刺すぞ！」

「……………」

鮎美と鷹姫は笑顔を崩さないようにしたけれど、SPの数人が模造刀とわかっていても、鮎美を囲む。他校の生徒たちは向こうのホームなので模造刀では何一つできないのに、それでも警戒するのだと感心した。そして囲まれたために鮎美を撮影できなくなったので、叫んだ男子生徒が周囲から響燈を買っている。駅職員が放送マイクを握った。

「ホームで騒がないでください！ 木刀、模造刀、傘など長い物は危険ですから振り回さないでください！ まもなく7番線に列車がまいります、黄色い線の内側にさがって、お待ちください」

他校生たちの騒ぎは鮎美がグリーン車に乗っても続き、座席に座った鮎美は発車して彼らが見えなくなるまで笑顔で手を振っておいた。

「……………疲れた…」

真顔に戻って愚痴る。

「はい……………疲れました…」

作り笑顔が苦手な鷹姫もつぶやき、松田川が労ってくれる。

「お疲れ様。アイドルも大変だねえ」

「はああ……………刀ぬいてアホなこと言うてる男子もおったなあ……………ああいうヤツ、成人式でも暴れるタイプやで」

「方言が強かったけど、どこの修学旅行生かな？」

「さあ？ 関西弁やないことはたしかやね。鷹姫、知ってる？」

「知りません。介式師範は、ご存じですか？」

「いや、知らない」

鮎美たちの疑問に男性SPの一人が頭をさげながら答える。

「あれは沖縄です。すみません」

「沖縄の言葉なんや、ふーん…」

「知念警部補、そうか、君の父親は沖縄出身だったな」

介式が部下の出自を思い出した。知念が再び頭をさげる。

「はい、芹沢議員へ無礼があり、申し訳ありません」

「いえ、ええですよ。高校生って、あんなもんやし。とくに男子」

「芹沢さんも、その高校生なだけどね」

「うちは最近、自分が老けてきたような気がしますわ」

鮎美は心配だったので髪の毛を手櫛で流し、白髪が無いかチェックした。

「芹沢先生は成長されたのです」

「鷹姫……そう真顔で、あんたに誉められると照れるし…」

鮎美は赤面しつつ目を閉じた。眠れるときに眠っておきたいので東京まで仮眠し、議員宿舎に戻ってから明日からの国会のために、よく眠った。

1月31日 会議会議

翌1月31日の月曜朝、鮎美は議員宿舎に鷹姫だけでなく陽湖まで来てくれたので、やや戸惑っていた。しかも、陽湖は鮎美の髪型を真似、議院記章の他にブルーリボンと虹色のバッチを鮎美と同じ位置に着けているし、華奢な肩を鮎美と似せるため少し肩パットを入れて盛っている。もともとの顔立ちも似ていて身長差もないので遠目には両親でさえ間違うのではないかと思うほど、そっくりになった陽湖は始発新幹線で東京へ来ていた。

「鷹姫、これは何のつもりなん？」

「はい、影武者です」

「……影武者で……」

「シスター鮎美の助けになれば、と、私も覚悟を決めました」

「陽湖ちゃん……」。けど、うちを狙うって脅迫してきたんは、どうせ脅しやよ」

「芹沢先生は、すでに一度襲われています。二度目がないとは限りません」

「鷹姫……もし、そんなことがあるとしても……うちは、陽湖ちゃんを犠牲にしてまで生きとうないよ」

「もはや芹沢先生のお命は、先生一人のものではありません。これも大義を成す者の勤めと、ご理解ください」

「……うくん……そら、二人が並んで歩いたら、襲ってくるもんも、どっちを襲うか迷うやろけど……現代で……影武者って……松田川先生、どう思う？」

「さあ？ 私は医者だから。要人警護の専門家に訊いてみたら？」

鷹姫が部屋前にいた介式と知念を呼んできて意見を訊いた。

「……………」

介式も知念も黙って悩む。

「介式師範、ご意見をお願いします」

「……………」。前例がない……」

「そうっすよね」

知念も頷いた。

「お言葉ですが、前例なら武田信玄、徳川家康の例をあげるまでもなく多数あり、元の木阿弥という慣用句が生まれたのも、筒井順昭と声の似ていた木阿弥なる者を代わりに立て…」

「いや、そこまで遡らず、ここ最近の要人警護では、そういったことはしない」

「北朝鮮では影武者がいるって噂はあるっすけどね」

「そうらしいが……知念警部補、有効な手段だと思うか？」

「うくん……守る自分たちの側からすると、とっさのとき、どっちを守るか迷ってしまうかもしれないし、それで人員が分散すると、かえって危険では？ 何より昨日みたいに一般から撮影されたとき、二人の芹沢鮎美がいるのは、どうかなあ、と」

「そうだな。宮本くん、せっかくの考えだが、我々SPとしては賛同しかねる」

「…そうですか…」

かなり残念そうに鷹姫が肩を落とすので介式と鮎美が同時に鷹姫の肩に触れた。

「…そう気を落とさ…」

異口同音しかけて二人ともやめた。鮎美が議員として秘書へ言う。

「せっかく陽湖ちゃんも東京へ来てくれたんやし。今夜はセクハラ写真出版被害者の会の発足式もあることやし、いろいろ勉強していつて」

「はい。午後には石永さんと石永先生も来られます」

「石永先生も、うちの案内のためにありがたいことやね。鷹姫、今日のスケジュールは？」

「参議院会館にて朝食会の後、国会は本会議での代表質問が終了し、各委員会での審議となり、芹沢先生は地方行政、文教、環境の委員会へ出席していただきます。昼食は自民党若手議員が集まる昼食会で」

「国会後は？」

「これが……大変にお忙しいのですが、…」

「ここまででは暗記していた鷹姫も間違えないようにメモ帳を開いて話す。」

「まず17時より土地改善推進議員連盟会議、同じく17時より遺族会議員連盟会議、同じく17時より国防統合部会、17時30分より全国ダム建設検討会議、同じく17時30分より淀川河川整備促進議員懇話会、18時より砂防事業部会、同じく18時より環境改善懇話会、18時15分より街路整備促進議員連盟会議、同じく18時15分より土地改善整備事業促進委員会、ハア、18時30分より都市再開発議員統合懇話会、同じく18時30分より共済年金合同部会、同じく18時30分より農政促進協議会発足式、19時より海洋対策合同部会、同じく19時より青少年対策委員会、同じく19時よりセクハラ写真出版被害者の会発足式、同じく19時より宇宙開発合同部会、19時30分より住宅対策委員会、同じく19時30分より琵琶湖環境保全委員会、ハア、同じく19時30分より離島振興対策合同部会、20時より地震対策懇話会、同じく20時よりセクハラ写真出版被害者の会懇親会、21時よりテレビ局にてニュース番組へ出演、22時よりセクハラ写真出版被害者の会懇親会二次会。以上です」

肺活量の多い鷹姫をして二度の息継ぎを要するスケジュールだった。

「……影武者どころが分身が4つくらい要りそうなんやけど……ま、なんとかなるて石永先生が言うてるし、やってみよか」

「あと、報告事項として、ささいなことですが、秘書補佐の緑野がインフルエンザにかかり寝込んでいるそうです」

「カネちゃんが……」

鮎美は日曜朝に入浴して、そのまま外に連れ出してしまったことを思い出した。

「カネちゃん、寒がりやのに……うちのせいだ……」

「あれがひ弱なだけです。お気になさることはありません」

「鷹姫……、陽湖ちゃん、花屋さんに注文して、お見舞いを届けさせて。うちの私費で。メッセージカードには、ゆっくり休んで、しつかり治

してよ、カネちゃんのこと大好きやしね、って記してもらって」

「はい。きつと、喜びますよ」

「あと、そのカツコでウロチョロせんときな、万が一、狙ってるヤツがおるんやったらSPなしの陽湖ちゃんが危ないし。鷹姫がポニータールやし、陽湖ちゃんはツインテールにしておいて。それで他人からも別人やてわかりやすいやろ」

「はい、ありがとうございます」

「ほな、うちは会議の嵐に行ってくるわ」

鮎美は朝食を会議しながらの朝食会で撮り、国会へ出席し、昼食も会議しながらの昼食会で撮った。食べ終わった鮎美が松田川を振り返る。

「……………松田川先生」

「トイレね？」

「…はい…」

昼食会の終わりにトイレへ立った。多目的トイレ内で、下着をおろしてお尻を向けようとする鮎美へゴム手袋をせずに松田川が言う。

「お腹の傷跡を診せて」

「あ、はい」

お尻ではなくお腹を向けた。松田川は指先で傷跡のラインを押して確認する。

「痛い？」

「ぜんぜん」

もう傷跡は手術した松田川でなければ、どこだったか、わからないほど消えつつある。

「写真を撮るね」

「どうぞ」

撮影が終わった松田川は、ゴム手袋をしない。

「芹沢さん、普通にウンチしてみて」

「え……………いいんですか？」

「最終確認だから。便秘っぽくて、出そうにないなら、あんまり頑張ら

ないでね。普通の頑張りくらいの息みで、ウンチしてみても「はいっ」

鮎美は便座へ腰かけ21日ぶりに、ゆっくりと息む。

「……………あ……………出る……………」

スルリと大便が肛門を通って出てくれた。

「……………ああ……………気持ちいい……………ウンチするのって、こんな気持ち良かったんや……………」

「お尻を拭いて、お腹を診せて」

「はい」

鮎美の下腹部を診た松田川は頷いた。そして、介式たちがやるように敬礼して言う。

「完治であります！ 現時刻をもって医療任務を終了とする！」

「……………終わり？ 治ったんですか？ 完全に？」

「うん、完全に治癒。完治だよ。飛んでもいいし、跳ねてもいいよ。ウンチも好きなきときに一人でして」

「……………ヤッターア!!!」

「飛び跳ねるのはパンツをあげてからにしようね」

「治ったアア!!!」

全身で喜びつつ、午後の国会へ出席して17時を迎え、自民党本部ビルに入った。玄関で石永が待つていてくれた。

「よし、オレが案内する」

「すみません、石永先生に秘書みたいなことさせて」

「気にしないでいいぞ。やたら会議が多いのは半分はオレが入れたものだ。オレが落選したから、引き継いでほしい事業なんかを入れたんだ」

「え……………」

「さ、時間が無い。急げ。だいたい一つの会議、10分ほど顔を出したら、それでいい。出席にさえなればいいから」

もともと目立つ存在の鮎美が鷹姫と石永、それにSP4名と移動すると、かなり自民党ビル内でも目立った。

「だいたいの会議が同じ階であるんや。これなら移動は楽ですね」

「だろ」

同時刻から始まる会議でも10分ほど滞在すれば出席になる上、鮎美は目立っているのです、すぐに出席確認してもらえます。せめて会議の内容を理解しようと資料をめくる気力があつたのは三つ目まで、あとは諦めた。それぞれの会議は事前に族議員が、だいたいの方向を決めているようで、今さら鮎美が発言しても無視されるのが、空気感でわかるので石永のためにも、黙って座り、黙って早退する。わずかにエレベーターで移動するとき、自分たちだけになったので鮎美は石永へ問うた。

「うちが同性愛者やってカムアウトしたこと、どう思うてはりますか？」

「その話が……テレビで見えて驚いたし、一時は支部も右往左往したけれど、だから、どうだという問題でもないと次第に落ち着いている。どちらかといえば、セクハラ写真の訴訟、これは女性側に勝ち目がある分、出版社とつながりのある先生方は、どうしたものかと考え中だし、無視して問題ないと思つた連合インフレ税の提案に、予想外に海外が反応していて、そのうち鳩山内閣も無視できなくなるのでは、と囁かれているよ。その二つの影にレズってことは、どうでもよくなつたんだらう」

「そうですね。あと、レズって言い方、嫌なんでやめてもらえますか」

「わかつた。……じゃ、なんて言うんだ？」

「レズビアンか、ビアン、または女性同性愛者です」

「気をつけるよ。ま、我々としては芹沢先生を利用したいし、芹沢先生としても同じに、持ちつ持たれつ、オレが組んだ会議に出てくれるのは、ありがたいし、今日の被害者の会に自民党ビルの一室を貸すのも、与党だつたらありえないことだが、今の流れなら、使ってもらおうという裏工作もあつたんだ。静江が頑張つたよ。誉めてやってくれ」

「そうだったんですね。ありがとうございます」

数える気にならないほどの会議の後、鮎美が主催する被害者の会発足式も17分ほど顔を出し、決意表明すると静江と陽湖に任せて次の

会議に出た。時間带的に、どの会議でも夕食として幕の内弁当や松花堂弁当が提供されるけれど、滞在時間が短いので食べるに食べられない。

「うち一人のために、いくつ弁当が無駄になるんやろ……もったいな話やわ」

「いつそ手をつけなければ党の職員か、誰かの秘書がありがたいただくかもな。いや、芹沢先生の食べ残しなら、大食漢な先生でも喜んで食べるかも」

「……。男の人って、女の食べ残しとか、嬉しいもんなんですか?」

「うくん、たとえば、ピアノならピアノで、好きな女の子の食べ残しとか、もらったら、嬉しくないか?」

「なるほど、そういう気持ちなんや」

鮎美は一瞬だけ鷹姫の唇を見てしまっただけから頷いた。地震対策懇話会では顧問として議員を引退した久野も顔を出していたし、弁当ではなく非常食のレトルトパッケージを温めたチャーハンだったので、食べてみた。

「けっこう美味しいわ」

他の議員たちも頷いている。

「鷹姫も、食べてみ」

秘書に分け与えている議員はいないけれど、鮎美は鷹姫にも食べさせた。

「……美味しいです」

久野が言ってくる。

「それは10年間の保存がききますよ」

「10年……すごいもんですね……」

「宇宙食開発の技術が役立っています」

「いろいろからんでくるもんですね」

鮎美は失礼のないように時刻を確認する。まだまだ地震対策懇話会で勉強したい気持ちはあるけれど、すでにセクハラ写真出版被害者の会懇親会が始まっている。うまく静江と陽湖が運営してくれているとしても、やはり主役不在はつらいだろうと思う。久野が資料をめ

くつて言う。

「大震災において、食の確保にまず目が行くが、試食中の諸君には悪いが、食べれば、出るわけだ。この処理が、また大きな問題になるし、この問題は文字通り溜まる。これを快適かつ衛生的に保たねばならない。被災者に気持ちよく過ごしてもらうことが大切だ」

「すつきりウランチできるんわ、最高に気持ちええですもんね」

思わず鮎美が言ってしまったので一同から大笑いされた。それを奇貨として恥ずかしくて居られないという顔で出ていくことにした。鮎美が席を立つと石永が言う。

「オレは、ここに残るよ。久野先生との付き合いもあるし」

「すみません。……あと、すみませんついでに、もし、嫌やなかったら、もったいないし、チャーハンも食べるといってもらえますか？ 非常食を残して捨てられるんは、気が引けますから」

「了解、いただきます」

頷いてくれた石永を残して鮎美と鷹姫は被害者の会へ急いだ。女性ばかりの懇親会は経費の関係で、お茶とお菓子程度でささやかに進んでいた。鮎美と鷹姫が入室すると、拍手で迎えられる。

「遅くなって、すみません」

発足式では、あまり発言しなかった被害女性たちも井戸端会議のような雰囲気が進められている懇親会では色々と本音を言ってくる。鮎美は聴いていて、大きく二つに分かれることを感じた。一つは本当にパンチラや胸元が見えた写真を週刊紙などに載せられて不快だったし今後のためにも訴訟を起こして懲らしめておきたい女性たちと、もう一つはお金が取れそうなら欲しいという女性たちだった。そして、前者は現在も週刊紙に載るような立場にある芸能人やアイドル、若い公人女性で、後者は鮎美が中学の頃に見かけた気もするような売れなくなった芸能人やアイドルなどで名乗られて初めて気づき、これが本人なのかと思うほど変わり果てている人もいて、その驚きを顔に出さないようにするのに鮎美も周囲も苦労した。懇親会の雰囲気そのものは重くはなく、もともとが強姦などの深刻な性的被害を受けた人たちではないので、半分はお祭り騒ぎのようなものとなり、大勢が

鮎美との記念写真を求めたので丁寧に応じた。

「すみません、お先に失礼します」

次は21時からのテレビニュースに出演するのでSPたちと移動した。移動の車中で15分だけ仮眠して、控え室でプロにメイクを直してもらい、スタジオに生出演したけれど、あまり深い政策の話にはならず、つい2時間前の被害者の会発足式のことと女性の権利や参議院制度についての基本的な事項へのインタビューで終わった。

「ちよつと寝るわ」

車に戻ると少しだけ仮眠させてもらい、また22時からの被害者の会懇親会の二次会に出席する。二次会は少人数で主に発足式で役員に選ばれた女性たちとの懇親が目的だったのでお祭り騒ぎではなく静かに訴訟の準備や今後の日程について話し合い、日付が変わる少し前に議員宿舎へ戻ることができた。

「……はあああ！ 疲れた！」

大きな声で言ったけれど、誰も何も言ってくれない。

「あ……そっか、うち一人なんや……」

さきほどまで大勢に囲まれていたし、ずっとSPもいたけれど、部屋の前で待機しているし、鷹姫とも別れ、この21日間ずっと近くにいた松田川もない。

「松田川先生とは、いつの間に……そっか、お昼から姿を見てへん……ちゃんとお礼も言えてないのに……」

部屋のテーブルには書き置きと議員宿舎のカードキーがあった。

じゃあね、お大事に。

あっさりとした一言だけだったので淋しくてスマートフォンを見ると、詩織からメールが入っていた。

寝る前に10分だけ私に時間をください。

短いメッセージだったけれど、忘れないようにしたい。まず鮎美は遅い時間だったけれど、松田川へ電話をかけてみた。

「遅い時間に、すみません」

「お疲れ様、さつきテレビ見たよ」

「ちゃんとお礼も言えず、すんません。長いこと、ありがとうございますました」

「うんうん、私も完治してくれて嬉しいよ」

「お昼から、先生はどうしてはりました？」

「うくん、それを仕事みっちり頑張ってる芹沢さんに言うのは気が引けるけど、オフ気分ですDLで遊んだよ♪ ごめん」

「ほな、まだ東京に？」

「うん、ミラコスタにいる。けど、こういうところ、お一人様で来るものじゃないね。家族連れかカップルばかりだし。お一人様もいるんだけど、そういう人は超デイズニーオタクって感じだし。ふらっと来た私には淋しいところだったよ」

「そうですか…」

鮎美は松田川が婚約者を亡くしたことを思い出した。性同一性障碍で女性化手術を受けている途中での薬剤との相性によるトラブルで亡くなっていて、松田川も医師であるだけに、それが医療ミスでないとわかっていて、つらいだろうと想う。

「芹沢さん、頑張ってるね。いろんな人が住みやすい社会にして」

「はい、必ず」

「じゃ」

「またお世話になることがあったら、よろしくお願いします」

「ダメダメ、ちゃんと健康でいなさい。じゃあね」

「はい、ありがとうございます」

名残惜しかったけれど電話を切った。

「……松田川先生……ええ人やった……出会えてよかった」

たまたま救急車で運ばれた病院の、たまたま当番だったにすぎない出会いが、とても貴重に想える。鮎美は制服を脱ぎ、裸になってバスルームで傷跡を鏡で見た。

「完璧やわ」

もう刺されたことなど、わからない。

「……毛を剃られたのが、まだ生えてこんくらいで……皮膚は完璧やわ」

シャワーを浴びながら、お腹を撫でた。

「はあ……お腹空いてるのか、空いてへんのか、微妙やなあ……」

夕食は食べたような食べていないような中途半端に終わっているけれど、この時間に飲食するのは女子として避けたい。髪を拭いて裸のままベッドに寝転がった。風邪を引かないように暖房の温度をあげておく。

「……今日も長い一日やった……あとは詩織はん……」

眠気に襲われる前に鮎美は電話をかけた。

「もしもし」

「お疲れ様です」

「おおきに。そっちも疲れた声してるね」

「国際電話が次々かかってきますから。とうとう、さきほどNBCが鮎美先生とドミニク氏の対談を放送しました。これから、もっと世界は動きます。ここまでの下準備と調整、大変だったんですよ」

「うん、おおきに、ありがとうな」

「ご褒美ください」

「言うと思った。何が望みなん？」

「とは言っても私もヘトヘトです」

「珍しいね、誰よりタフそうな詩織はんが」

「どうせ、まだ国際電話がかかってきますから。今はナユが下手な英語で一生懸命ちよつと待ってもらっています」

「まだ、事務所なん？」

「今夜も朝まで、ここですよ。今は執務室で一人ですけど」

「遅くまで、ありがとうな」

「つてことで、ご褒美お願いします」

「どんな？」

「これから私はオナニーするので、電話越しに私へ愛を囁いてください」

「……。そんなことしたことないし」

「私に元気をくださいよオ。欲望は活動の原動力です」

「たしかに、……そやけど……どう言えばええの？」

「鮎美先生がオナニーするとき、どんなことを好きな人から言われたら興奮するか、自分で考えて言ってください」

「……………。心の逆レイプみたいなプレイを思いつくなあ……………」

「お願いします」

「わかったよ。……………えつと……………」

「……………」

「……………うちののために毎日ありがとうな」

「はい」

「……………今、エッチな気分なん？」

「すつごく」

「じゃあ、自分で、おっぱい触ってみ」

「はい。服の中に手を入れて詩織は鮎美先生の手だと思いながら、おっぱいに触ります」

「……………。乳首、強く摘んでみ」

「……………んっ……………はい、摘みました」

「少しゆるめて、今度は連続して摘んでみ」

「はいっ……………んっ……………んう……………」

「……………。反対のおっぱいも同じようにしてみ」

「はいっ……………んっ……………んう……………。鮎美先生、大好きです。ハア……………」

「……………うちも詩織はんが好きよ」

「あああ！ やつと言ってくれた」

「……………そ……………そういうプレイやし……………」

「もつと言ってください」

「……………好きよ、詩織はん……………、もつとエッチなところ、自分で触ってみ」

「はい、詩織はスカートをあけてパンツの中に手を入れます」

「……………そこ、執務室やんな？ 鍵、かけた？」

「そんなことより、次、どうすればいいですか？」

「……………」。指先で感じるところ、ゆつくり擦ってみ」

「はい。……………ハアツ……………あああ……………」

「もつと、ゆつくりがいい？ もつと、早くがいい？」

「……ハア……早く……してほしいです……」

「じゃあ、ゆつくり擦りい」

「あんっ……焦らすなんて鮎美先生……ハア……ハア……余計に感じちゃう……」

「……」

鮎美は湿っぽい詩織の声を聴いていると自分も興奮してきたので電話を持ち替え、右手で自分の股間に触れる。

「……ハア……次、詩織は、どうすればいいですか？」

「ゆつくりゆつくり、だんだん早く、擦って」

「はい……っ……んう……ハア……すごく気持ちいいです……ああ……」

「指先でクリ、剥いてみい」

「んっ……んあ……」

「剥いたら爪の先だけでクルクルって回すように擦って」

言いながら、つついっい鮎美も同じようにしてしまう。電マを買うまでに鮎美自身が自慰するとき行っていた定番の方法だった。

「……ハア……ああ、これ気持ちいい……ハア……」

「もつと早く、でも、もつと弱く、触れるか触れへんくらいに弱く、早く擦ってみ」

「んあああ！ ああああ！ ハアああ！ んふううう！」

「詩織はんのエツチな声、可愛いね。ハア……」

「あああっ……あああっ……い……イキそう……イッてもいいですか？」

「そんなにイキたい？」

「はい、はい、イキたいですっ！ 詩織、鮎美先生のこと思いながらイキたいですー！」

「焦らしてほしいんやね。けど、焦らさへんよ。すぐイキい。けど、一回でやめたら、あかんよ、三回連続イクまで擦り続けい」

「あっうわああ！ はあああわあ！ くはっ！ んんうっはあ！

ハアっハア！ んんうっくくうう！ 2回、うううくくう！ あと一

回ハアハアー！」

「手を止めたら、あかんよ。擦り続けい。ハア……」

「んんっ、はい、んはっ！ うあんっ、うはんっ、くうんっ……ハア……ハア

…ハア…」

「ええ子やね。ちゃんと3回、いった？」

「はい。ハア…ハア…」

「ゆっくり、おやすみよ」

「ハア…鮎美先生、いつしよにいつてくれましたよね？」

「……………」

「わかりますよ。途中で電話を持ち替えてから、自分でも始めましたよね」

「……………」

「でも、一回しかイってない、それも軽く」

「……………」

「今度は私の誘導で、あと2回、イってください」

「……………」

「返事してください」

「……………うん…」

「今、議員宿舎で一人ですか？」

「……………うん…」

「どんな姿ですか？」

「……………お風呂上がりよ」

「裸ですか？」

「……………うん…」

「電マはありますか？」

「……………うん…」

「フフ、ちゃんと持ってきているのですね。エッチな議員さん、そんなものカバンに入れて新幹線に乗ってきた」

「……………肩もコるし…」

「嘘つきは政治家の始まりですよ」

「……………」

「オナニーするために電マを持ってきましたって、言ってください」

「……………オナニーするために、電マを持ってきましたんよ」

「じゃあ、取り出してください」

「…うん…ちよつと、電話おくな」

鮎美は起き上がってカバンの奥を漁り、電マを取り出した。コンセントに差し込み、準備も終えた。

「出したよ」

「これから鮎美先生の右手は私の言う通りに動きます。2回いくまで、途中でやめることはできません」

「…うん…」

「電マのスイッチを最強にしてください」

「…いきなり…」

「最強にして、すぐにイってください。できるだけ早く、今までにないくらい早く」

「…うつつ！ うつつ！ イっ」

「そのまま続けてください」

「うんうあああ！ イっく」

「2回で終わりませんよ。もっと、もっと、4回、5回、イキ続けてください」

「あああああはああああ！ うううああああ！ もう！ もうやめてえー！ やめてえやあ！ あああああつ！」

「イクのが止まらない！ イキ続けます！」

「ふああああつ！ ああつ！ ああああつ！ つ…ハア！ つ…はああー」

「息が止まるくらいの快感ですよ？ もうやめていいですよ」

「…ハア…ハア…ハア…ハア…」

「鮎美先生の喘ぎ声、最高に可愛かったです」

「…ハア…」

「まだまだ、大きく成長してください。大輪の花に。大きく、大きく、咲いてください。どこまで、あなたが大きく咲くのか、とっても楽しみにしています。おやすみなさい」

「……………おやすみ」

ぐったりとした鮎美はスマートフォンと電マを置き、最後の気力でパジャマを着てから眠った。

2月1日 アユミ・シヨック

翌2月1日の火曜早朝、鷹姫は予定よりも一時間ほど早く、鮎美が眠っている議員宿舎を訪れた。

「ご苦労様です」

部屋前にいる男性SPたちに会釈して、カードキーで室内に入つた。

「芹沢先生、お疲れでしょうが、起きてください」

まだ鮎美はベッドで深く眠っている。起こすのが気の毒なほどの熟睡だったけれど、重要な用件なので揺り起こす。鮎美の枕元にはスマートフォンと電マが転がっている。

「……うつつ……」

「起きてください。火急の用件です」

「あ……鷹姫……」

目を開けた鮎美は眠そうに目を擦る。

「急いで着替えてください」

「何なん？」

「民主党の野田大臣がお呼びです」

「……財務大臣が？」

「はい」

「そんな人が、うちに何の用なん？」

「わかりません。朝の閣議前に芹沢先生へ来るよう連絡がありました。早く着替えてください。……これは何ですか？」

鷹姫は枕元にあった電マを問うた。

「ごっ、これはな！ こ、こうやって肩コリを治すもんなんよ！」

一気に目が覚めた鮎美は電マを肩にあて、どう使う物か実演した。

「お疲れなのですね。時間のあるおり、肩を揉みます。今は急いでください」

「そ、そやね」

鮎美は簡単に洗顔して制服へ着替えた。急いで外に出ると公用車が待っていたので、それで首相官邸に移動すると、小さめの会議室に案内される。室内には野田に加えて、もう一人、閣僚がいた。

「……前原外務大臣……」

「おはよう、芹沢さん。急に呼んで、ごめん」

前原は爽やかに挨拶してくれた。鮎美は男性へ性的興味は覚えなけれど、単純に人として、いい印象を受けた。

「おはようございます。ご用件は何でしょうか？」

鮎美の問いに、野田が時刻を見ながら答える。

「ドミニク氏との対談で、どのようなことを話したのか、我々にも話してほしい」

「とくに録画放送では編集されてしまうから、放送されなかった部分などを、詳しく頼むよ」

前原が補足し、鮎美は落ち着いて答える。

「すみません。放送を見る時間はなかったので、多少重複するかもしれませんが、全体をお話します」

鮎美はドミニクとの対談内容を、できるだけ急いで簡潔に語った。

聴いていた野田がゆっくり言う。

「なるほど、ありがとう。もういいよ」

「はい、失礼します」

鮎美は退室しようとしたけれど、前原が送ってくれる。

「芹沢さん、今度ゆっくりお会いできないかな。食事でも、いつしよに」

「……ありがとうございます。ただ、民主党への勧誘はお受けできませんよ」

「ははは、鋭いね」

「すみません」

忙しい大臣たちとの会合は短時間で終わり、鮎美は朝食会を経て国会の委員会へ出席したけれど、他の議員たちが審議中もスマートフォンをいじって相場を見ているので、気になって鮎美も検索してみた。

「……1ドル77円切ってる……」

ドル円相場が動いていた。

「日経平均も下がってきてるし……金は？」

金地金の価格も調べてみた。

「……1グラム4200円超え……」

腕組みして考え込む。

「……金上昇はともかく、これ以上のドル円不均衡はまずいんちやうの……」

「誰のせいだろうね」

斜め後ろに座っていた木村が言う。

「ここまで円高になると輸出関連の企業が受けるダメージは大きすぎる。遠からず政府も為替介入に踏み切るでしょうな」

「……」

鮎美が黙って深く考え込むので、木村は邪魔しないことにした。午後の国会と夕方の連続する会議の出席中も考え事をしていた鮎美へ、午後20時を過ぎて、予想通りに詩織がスケジュールを入れてきた。外国テレビ局からの取材が3件もあり、インタビューへの回答を一日考えていた通り、ドミニクと対談したときと同じトーンで答えた。議員宿舎へ帰ると、鷹姫が労ってくれる。

「お疲れ様です」

「……うん……」

「お考えの邪魔にならないければ、肩を揉みます」

「……おおきに……お願いするわ」

「はい」

鷹姫は30分も丁寧に肩を揉んでくれたので、固まっていた心と身体がほぐれた。

「ありがとうな。遅くまで、おおきに、もう、おやすみ」

「はい、また、明日。おやすみなさい」

鷹姫と別れて入浴してからスマートフォンを見ると、詩織からメールが来ていた。

寝る前に15分だけ私と燃えてください。

電話はかけずメールへ返信する。

毎日しようと、せんといて。ゆっくり休んで、明日も頑張ってください。

と送って眠った。

翌2月2日水曜朝、鮎美は議員宿舎を出る前にスマートフォンと朝刊を見ていた。各紙の一面には再び鮎美の名が踊っている。

「…………アユミ・シヨックとか、名付けるか…………うちが倒産したみたいやん」

「それだけ芹沢先生の影響が大きいということでしょう」

鷹姫は誇らしげに言ってくれるけれど、鮎美は狙い通りとはいえ調子に乗る気持ちになれない。

「うちは主要通貨の足並みをそろえたインフレが目標なんよ。今の円高、ドル安の継続は好ましくないし。新聞が印刷された時点では76円割ってないけど、スマホ見ると、もう割りそうやん」

「ニュージージーランドの市場は3時間早く開きますから」

「半世紀前、ニクソン大統領が金ドル固定の政策を転換するて発表したんは、わざわざ日本市場が開いてる時間やってん。日本市場が混乱するの見過して、やりおった。ええ根性してるわ、アメリカ人」

「彼らの本質は侵略者です」

「何が、あの人らをそうさせるんやろね…………日本と中国は、めったと戦争してこなんだのに、欧米中東は何回でも飽きんとやりはる…………」

「キリスト教とイスラム教のせいでしょうか…………」

「アブラハムの宗教か…………うちらには、わからんもんやね。あつ…76円割った」

鮎美がスマートフォン画面を見ているときにドル円相場が75円台に突入した。

「…………鳩山総理…………野田蔵相、なにやってんのよ、早う市場介入しいや」

「芹沢先生、お時間です」

「そうやね、うちが焦っても、何もできんね。けど、発言には気をつけ

ていこ」

鮎美が議員宿舎を出て国会へ入ろうとすると、多数の記者が取材しようを集まってきたけれど、事前に介式たちに頼んでおいたので守ってくれる。守られながら、会釈だけはして通り過ぎた。お昼休みは参議院の若手が集まる昼食会で、党の別なく30代以下が庶民的な雰囲気でお話している。話題の中心は、やはり鮎美だったけれど、新しいニュースが入ってきて松尾が言う。

「政府が為替介入を発表したぞ」

「…よかった…」

鮎美は一安心したし、さらに別のニュースが入った。

「アユちゃんに銃弾を送ったヤツ、捕まったよ」

「え？ ホンマ？ もう？」

「ほら」

音羽がスマートフォン画面を見せてくれる。犯人は自称民間軍事会社経営の38歳の男で、過去にミリタリーショップを運営しており、送りつけたライフル弾はかつての商品だった。

「ちよつと介式はんと喋ってこよ」

「あ、私も聴きたい」

「私も」

音羽と翔子もついてくるし、松尾も廊下に出てきた。鮎美は廊下で待機していた介式に話しかける。

「介式はん、うちを脅迫したヤツ、逮捕されたいらしいですよ。何か知ってはいりますか？」

「私たちも、さきほど連絡を受けた」

「えらい早い逮捕ですよ。なんでやの？」

「送りつけてきた銃弾はNATO弾というものだった」

「それって北大西洋条約機構とか関係あるもんですか？」

「ああ、主に西側諸国で使われているもので珍しくはない。だが、日本で所持している者は多くはない。他に、郵便の消印や投函前後の付近コンビニに残っていた監視カメラの映像、封筒と手紙に残っていた指紋、ミリタリーショップ経営という経歴、これらから届けられた翌日

には目星をつけていたらしい。指紋を確かめる最終的な絞り込みに今日までかかったのだらう。一応、訊くが犯人との面識や見覚えは？」

「ぜんぜん知らへん人です。地元でもないし。犯行の動機は？」

「芹沢議員が行った1月24日の記者会見後、円相場が2円動き、それで1500万円の損をしたらしい」

「2円で1500万も……」

「FXだな」

松尾が言い、介式が頷く。

「そうらしい。為替の証拠金取引をしていて大損したことを恨んでの犯行だ」

知念がSPとしての緊張を少し解いて肩を回しながら言う。

「あきれた動機つすよね。逆恨みもいいとこだし。おかげで介式警部は友達の結婚式に出られずじまい」

「そうやったんですか、うちの警護のために、すみません」

「知念！ 余計なことは言わなくていい！」

「はっ、すみません！ 以後気をつけます！」

知念は敬礼して謝った。鮎美が問う。

「にしても、けっこう犯人に関する情報、わかってたんですね。うちにも教えてほしかったわ」

「捜査情報は秘匿を要する。とくに逮捕までは」

「うちは被害者ですやん」

「芹沢議員の身近な者や学校関係者が犯人という可能性も最後まで排除できない」

「……そうですね……最初の刺傷事件は、学校の後輩やった……」

鮎美は沈んだ表情をしたけれど、すぐに気を取り直して問う。

「つてことは、これで介式はん、知念はんとも、とうとうお別れですか？」

「いや、まだ数日は用心のため、警護任務は続くだらう」

松尾が考えてから言う。

「犯行の動機から考えると今週の値動きの方が、危ないぞ。オレの弟

は、円高が進むと見て50万儲けたらしいから、すっかり芹沢鮎美
フィギアを拝むようになったけど、逆だったら投げ捨てたかもなあ」

「うちのフィギアなんか、あるんや……」

「制服もコスプレ目的とコレクション目的で人気が出て、中国業者が
レプリカを作り始めてるし、過去の卒業生がヤフオクに出した本物は
高値がついてる。アユミコスはホコテン復活した秋葉にいけば、よく
見かけるらしい。どう思う？ 本人としては」

「……ノーコメント……」

そう言った鮎美はトイレに入った。一人で排便を済ませられる喜
びを再確認して午後の国会と夕方の連続会議も終え、また詩織が調整
した外国メディアの取材に応じるけれど、国内メディアも無視すると
悪いことを書かれるかもしれないので静江を選んだ2社の取材に応
じ、議員宿舎に帰って、その録画を鷹姫と視聴する。

「うちの計画、怖いくらい、うまくいってるね」

「芹沢先生のおっしゃることが正義だと誰もが感じるからです」

「中には脅迫しよるヤツもおるよ」

「愚か者にすぎません」

「……。うちにも愚かなところは多いよ。浮かれて足元すくわれんよ
うにしよ」

鷹姫と別れて入浴後にスマートフォンを見たけれど、詩織からの
メールは無かった。

「押しと引きがうまいなあ」

少し淋しいので鐘留へメールを送ると、インフルエンザから回復し
熱も引きつつあると返事をもらったので、金曜の夜には訪ねると送っ
た。

翌2月3日木曜の夜、国会を終え、自民党本部での連続する会議も
終えて石永とロビーで話していた。

「来週からはオレの案内なしでも、大丈夫そうだな」

「はい。けど、来週からは都知事選が始まりますし、国会が終わったら

夕方は応援に行く予定なんで、しばらく欠席してしまうかもしれません。すみません」

「いや、謝らなくていいよ。畑母神先生と引き合わせたのはオレだし。芹沢先生は本当に人気者になって忙しいな」

「自分で始めたことも多いですから」

「そうだな。まだ始まったばかりだけど、オンとオフの切り替え、休息も、しっかり取らないと疲れは気がつかないうちに溜まるから注意して。オレも落選して実感するよ、ちよつと背伸びしすぎてたなあ、つてな」

「はい……そういえば、今週も忙しかったなあ……ご飯食べるときも人と話して……気が休まるんはトイレくらい……まだ、今夜も取材あるし」

少し気の抜けた声を漏らしつつロビーから玄関に出る。石永と鷹姫、そして介式たちSPもついてくる。玄関から党の防弾車に乗ろうとしたとき、騒ぎが聞こえてきた。本部前に集まっていた報道陣の中から不審な男がハンマーを持って駆け出してくる。門前を警備していた警備員を振り切り、鮎美へ向かってきている。疲れていた鮎美は、それを危険と認識するのに時間を要したけれど、介式が前から、知念が後ろから鮎美を抱き庇い、他のSP2名が男を取り押さええている。

「芹沢議員を車へ！」

「はい！」

介式と知念が軽々と鮎美を持ち上げ、車に運び込んでくれる。

「車を出せ！ ゆっくり急いで！」

「は、はい」

党職員だった運転手が介式の矛盾した指示を正確に意図を汲み取り、すぐに発車しつつも、ゆっくりと徐行で道路へ出た。まだ、介式と知念は鮎美の頭や胸を左右から抱いていてくれる。少し走って運転手が問う。

「目的地は、どこですか？」

「……あ、えつと……鷹姫を置いてきて……しもてるから……。介式

はん、なんで鷹姫を置いてきたんです?」

「芹沢議員の安全が最優先される。それに、宮本くんなら大丈夫だ」

言いながら介式は鮎美を抱くのをやめ、知念もやめた。

「うち、とっさで何もわからへんかったけど、鷹姫は怪我してないですか?」

「ああ。おそらく犯人は一名、すぐに取り押さえている。刃物ではなくハンマーのようなものを手にしていた。宮本くんは私が教えておいた通り、我々の邪魔にならぬよう、その場に伏せてくれたから無事のはずだ」

「そうですか。ちよっと、電話かけてみます。次の予定も確認せんとあかんし」

鮎美が電話すると、すぐに鷹姫は出た。

「ご無事ですか?!」

「うん、うちは平気よ。介式はんと知念はんのおかげで。鷹姫は怪我してへん?」

「はい」

「そっちは、どんな様子?」

「今、SPが所轄警察に犯人を引き渡しています」

「犯人が、どんな人か、うちを狙った動機とかわかる?」

「20代か、30代くらいの男性という見たままのことしか……武器はハンマーの他に針金かワイヤーのようなものを所持していました」

「ハンマーと針金って……どうする気やってんろ……」

「わかりません」

「とりあえず、次の予定はテレビ局やんな? どこに行けばいいか、教えて、ほんで合流して」

「はい」

鷹姫が告げてくれたテレビ局でニュース番組に出演すると、話題は政策のことより襲撃のことばかりになり、鮎美自身も何もわかっていない段階だったので答えるのに言葉を選び、苦労した。出演が終わると、鷹姫とSPたちが待っていてくれる。SPの数が4名から6名に

増えていた。

「うちの警護のために、ありがとうございます」

鮎美は囲んでくれるSPたちに一礼した。時間で交替したのか、それとも取り押さえ現場にいたからなのか、介式と知念がいなくなったのは少し淋しい。次のテレビ局に移動し、またニュース番組に出演した。今度は襲撃事件の話は少なめで、経済の話になった。ニュースキャスターが言ってくる。

「政府の為替介入で円高は止まり、割安感の出た株も買い戻されましたが、どう思われますか？」

「正直なところ、もう少し早く為替介入していただきたかったです。うちの言ったことの影響やとは責任を感じてますけど、ドル円の不均衡はリーマンショックから米経済が立ち直っていないことが主因やと思います。日本株が買い戻されたのは割安感が出たし、うちが投資家でも、そうすると思いますから普通の反応やと思います。問題の本質は、普通の反応の積み重ねで、大きな利益を蓄えるところが出てくるのは良いとして、そこへ適正な課税がされないことや考えております」

しっかりと答える鮎美に意地悪しなくなったのか、ニュースキャスターは別のニュースの後に、また問うてくる。

「今の大相撲、八百長問題は、どう思われますか？　とうとう協会の調査に対し、数名の力士が八百長を認めています。芹沢さんは高校生として、また議員として、どうお感じになりますか？」

「…え…」

相撲なんか、まったく見んし、けど国技やから下手なこと言うてもあかんよね、と鮎美は考えを巡らし言葉を選んだ。

「相撲は国技ですから、国技に相応しい形に整っていくのが良いと思います」

「国技であると同時に女性の立場から見るとき、土俵に女性があがってはいけない、というのは、どう感じられますか？」

「……」

あ、この人、うちが女性の権利を大きめに言うのを期待してんのや、

と鮎美はニュースキャスターの質問が何を狙っているか気づいた。そして、また言葉を選ぶ。

「普遍的な人権意識と、それぞれが大切にしている文化と道徳、宗教の衝突は今世紀において人類が深く考えるべき問題やと思います。道徳と信仰の自由、これが衝突してしまうこともあり、たとえばカトリックの妊娠中絶問題もそうですし、女性の服装規定に厳しい宗教もそうです。逆に女性による逆セクハラもありますし、ファッションだ、という主張もあり、すぐに答えは出ないと考えます」

「土俵の問題に限っていくと、どうですか？」

「……。大切にしてはる文化やと感じます」

ニュース番組が終わり、強い疲労感を覚えた。

「はあ……」

スタジオを出て、鷹姫とSPに囲まれながら車に乗った。

「……鷹姫、さっきの、うちの答え、どう思う？ 相撲の話」

「ごく無難で問題のない解答だったと思います」

「……………もし、剣道が女子禁止やったら、どう思う？」

「それは……………」

考え込む鷹姫の頭を撫でた。

「ごめん、ちよつと意地悪いうてみたかってん、ごめんな」

「芹沢先生……」

「なあ、SPさんらは守秘義務あるし、車内は二人きりって考えて、その呼び方、やめてくれん？」

「……………」

鷹姫が迷っていると、鷹姫の携帯電話が鳴った。

「はい、芹沢鮎美の秘書、宮本です」

「私も鮎美先生の秘書、牧田です」

「ご利用をどうぞ」

「あいかわらず録音再生みたいな話し方ですね、まあいいです。イタリアのテレビ局が鮎美先生にインタビューしたいそうです。今から浅草に来てもらえますか？ たしか、今夜の予定は、もう無いはずですよね」

「はい、予定はありません。芹沢先生に、うかがってみます」

鷹姫が鮎美に問うと、鮎美は頷き、電話が終わってからタメ息をついた。時刻は午後11時を過ぎている。時差の問題でイタリアでは、ちようどいい時間なのかもしれないし、鮎美の予定に空きがあるのは早朝か深夜になってきている。

「うちを殺す気か……」

「やはりお疲れですか、今からでも断りますか？」

「ううん、頑張って調整してくれたんやし、受けるわ。うちが影響力を發揮できるんは海外でもパンダやからやねん。パンダなりに頑張るわ」

鮎美は過密スケジュールを受け入れて気合いを入れ直した。

2月4日 第218条

翌2月4日の金曜、国会議事堂の議員食堂にて鮎美は昼食を摂りながら、介式からの報告を聴いていた。他の議員たちも鮎美が襲われた理由や状況に強く興味をもっている。で議員食堂は会議室のように静まりかえっている。

「氏名は平井功一、年齢24歳、無職、所持していた凶器は大工作業用の金槌ならびに直径2ミリ長さ約2メートルの針金で、いずれも犯行の直前にホームセンターで購入している」

「どういうつもりで、そんな凶器やったんですか？」

「本人の供述によると、金槌で頭を殴りつけ、針金で首を絞めるつもりだったそうだ」

「うちにはSPついてくれてはるのに、そんな悠長な方法で殺せるわけないやん」

「それも供述によれば、前日に脅迫犯が逮捕されたことで、もう警護されていらないだろうと考え、犯行におよんだそうだ」

「アホや……けど、うちも脅迫犯が逮捕されたし、警護は終わりやと思つたから、同じか……介式はんらの判断のおかげやね。おおきに、ありがとうございます」

鮎美は広東麵を食べるのを中断して、頭をさげて礼を言った。未遂とはいえ殺人事件の報告は食事時に相応しい話題ではないとわかっているけれど、忙しい上、他の議員や秘書たちも興味津々なので誰も怒らない。多くの議員は夕方から地元へ帰るので、今もつとも話題となつている鮎美についての情報を知って帰るのは土産話として最高のので皆静聴している。

「うちを殺そうとした動機は何なん？」

「就職がうまくいかず国会議員なら誰でもいいから殺そうと思ひ、たまたま芹沢議員の報道を見て、選んだそうだ。若い女性で一对一なら殺せるとも考えている」

「……………」

鮎美が麺を食べる箸を止め、左手を額にあて深く嘆いた。

「……………なんやの……………それ……………」

「アユちゃん……………」

「芹沢先生……………」

音羽と翔子が心配してくれる。これで三度目の事件の被害者となり鮎美が傷ついているだろうと、背中を撫でようとしたけれど、鮎美は昼食を再開した。

「ホンマに男ってアホやな」

「……………」

音羽と翔子が驚き、直樹が言ってくる。

「君は太いというか、タフな女性だね」

「今回は介式はんらが守ってくれはったし、前回のも逮捕されてるし、一回目のは、さすがに、つらかったけど、いつまでもウジウジしてられんもん」

「たしかに、ボくら国会議員は、大なり小なり脅しも受けるからね。うちの事務所にも、たまにカミソリが届くし。自民から民主に鞍替えしてから、ひどかった」

「あ、私にも来るよ！ とくに共産党に入った直後は多かった！ お前を赤く染めてやる、とか脅迫状つきで！」

「私にも来てます。ラブレターも来るけど、無視すると脅迫文に変わるし、かといって相手する気になれませんし」

音羽と翔子が言い、鮎美が介式に問う。

「みんなにもSPつかはらへんの？ 危ないやん」

「芹沢議員が脅迫状を、脅しにすぎないと考えたように、大半は脅しにすぎず、いちいち警察も取り合わない」

「ほな、うちにだけSPついてるのはなんで？」

「最初の事件が実行されたからだ」

「……………あれは危なかったもんなあ……………」

鮎美は食べ終えて下腹部を撫でた。もう痛くも痒くもないけれど、激痛の記憶は残っている。

「アユちゃんは強いよね。私だったらガクガクブルブルで、もう家か

「出不ないよ」

「キョウちゃんかてカミソリ届いたのに頑張ってるやん」

「あんな脅しに負けてたまるか、って思うから」

「ほな、うちも、いっしょよ。アホな男の脅しなんか、負けてたまるかやー!」

松尾が言ってくる。

「男全部が、そうだと思わないでくれよ。あれは一部だ」

「それはわかってますけど……けど、やっぱり男ってアホなことする人、多くないですか? 極端な話、幼女を連続誘拐して殺すのも男やし、サリン撒いた集団も主要メンバーは男ですよ」

鮎美の発言に音羽が同調する。

「たしかに、女が幼い男の子を誘拐して殺したとか、あんまり聴かないね」

「強姦もセクハラも、ほとんど男の仕業ですし。女性の逆セクハラって言っても、それって見せるだけですから」

翔子も追加したので太田が2杯目のカツ丼を食べながら怒鳴ってくる。

「カレーにヒ素を入れたババアは男か?!」

「……………」

女性陣が黙り直樹が言う。

「なぞの白装束集団、正式名称は忘れたけど、あの集団のトップは女性じゃなかったかな。まあ、サリンは撒かず、電磁波も意味不明で、それほど害はなかったけど。あと、ボクにも女性からラブレターは来るとよ。そして、ごく稀だけど、自分の髪の毛とか、血を送ってくる。あれは何がしたいんだろう、って首を傾げるよ。君たちは同じ女性として、どうだい? 理解できる? 男に髪や血を送って楽しいのかい?」

「うちは同性愛者やし」

「私にも理解できないよ。一部の男性がバカなように一部の女性もバカなんじゃない」

音羽が両手を挙げ、翔子が問う。

「雄琴先生、それが送ってきたとき、その女性は自殺をほのめかしたりしてませんでした?」

「あ、…ああ、そんな内容の手紙だったかも。交際してくれないなら、死ぬ、みたいな」

「女つて自傷行為に走りますから。私も家が貧しいのが嫌で何度か手首に刃物をあてたことありますよ。結局、そんなことに負けるのが嫌で、切ったりしませんでしたが、切っていたら、その血を銀行にでも送ってやったかも。切ってしまうか、思い止まるか、その差って紙一重だと思います」

「嵐川先生のは同情するけど、交際してくれなきゃ死ぬ、ってのは、じゃあ死ぬ、としか思えないよ」

「それは、たしかにそうですね」

何の結論もえることなく昼休みが終わり、議員たちはそれぞれの委員会に出席し、夕方になると東京駅の新幹線ホームや空港に向かう。鮎美は2時間ほど、畑母神の選挙事務所でミーティングをしてから新幹線に乗ったので遅い方だった。

「こんだけ忙しいと、いつそ新幹線に寝台車つくってほしいわ」

そう言って貴重な睡眠時間を得て井伊駅で降りる。数台の党の車が迎えに来てくれていて、うち一台は陽湖が運転してきたようで初心者マークがついている。

「陽湖ちゃん、免許取れたんや?」

「はい」

「せっかくやし、陽湖ちゃんの運転する車に乗ろうかな」

「反対する」

「私も反対です」

介式と鷹姫が異議を唱えた。陽湖も疲れた顔で頷く。

「行きだけ私の運転で、帰りは石永さんをお願いする予定なんです。はじめて隣りに教官無しで運転して、もう緊張しっぱなしでしたし、みなさんに乗せて運転するのは万一の時申し訳ないので」

「よっぽど緊張したんやね。この寒いのに、汗かいてるやん」

鮎美は陽湖へ近づいて襟元に触れた。制服のブラウスが汗で湿っ

ているし、陽湖は肌が弱いので制汗スプレーを使わないため、汗の匂いが少しして鮎美は顔を近づける。

「…」

陽湖が身を引いて防御した。

「何する気だったんですか？」

「ちよつとしたスキンシップやよ」

「そういうところからセクハラが始まるんですよ」

「ごめん、ごめん」

鮎美は謝りつつ党の防弾車に乗った。運転手は熟練した男性で、鷹姫は助手席に座り、介式と知念に挟まれて鮎美は後席に座った。すでに島へ戻るには遅い時間なので六角駅前のビジネスホテルをSPの分も含めて予約しているけれど、鮎美は運転手に頼む。

「ホテルに行く前に、かねやさんの本店に寄ってもらえますか。友達のお見舞いに行きたいので」

「わかりました」

運転手が返事をして発車したけれど、鷹姫が振り返って問う。

「緑野の見舞いへ行かれるのですか？」

「うん」

「…………。やめておかれた方が良いと思います」

「なんでよ？」

「緑野はインフルエンザだったのです。芹沢先生へ感染するおそれもあります」

「もう熱も引いてるらしいし、平気よ」

「だとしても、わざわざ芹沢先生が行かなくても、すでに月谷が花を贈る注文をしたはずですし、十分かと思えます」

「顔も見たいんよ」

「それは次の機会でよいのではないですか？」

「次っていうても明日も予定がいっぱいな上、日曜から東京で選挙応援やから明日の夜には東京へ行かなあかんし。その次の土日も、次の土日も選挙応援でつぶれるやん。今夜、カネちゃんに会わなかったら月末まで会へんやん。その月末かって、どんな予定が入るかわか

らんねんし」

「芹沢先生がお優しいのは立派なことですが、私が緑野の立場であれば、これほどに忙しい中、お見舞いに来ていただくなど申し訳なくて顔向けできません。まして、わずかとはいえ感染の可能性もありますですよ。もしも芹沢先生が大切な時期に寝込むようなことがあれば、緑野も責任を感じてしまいます。何より、動き出した大事業の黎明期ではないですか、どうか、ご自重ください」

「……………。鷹姫とカネちゃんは違うやん」

鮎美は苛立って前髪を払った。

「カネちゃんは、そういうことで責任を感じるタイプちゃうし。むしろ、笑う方やし」

「あれは愚か者なのです」

「っ…なんで鷹姫は、いつつもカネちゃんの悪口言うん?!」

「……………」

鷹姫は怒鳴られて黙った。運転手と介式、知念は無関係とばかりに黙っているので沈黙が重い。

「とにかくお見舞いに行くし」

「……………。どうか、お考え直してください」

「うちが行くいうたら、行くんよ。もうカネちゃんにも行くてメールしてあるし」

「たかが秘書補佐の見舞いなど不要です」

「っ、なんそれ?! 自分の方が秘書やし上とか思ってるん?!」

「そういうことでは…」

「ほな、いつそカネちゃんを首席秘書にするで?!」

「……………。どうして、急に人が変わったように……………。芹沢先生は世界を救う方です。救世主となられるお方です」

「勝手な偶像を押しつけんといてよ！ うちは、ただの人間やし!!」

「……………」

「……………」

沈黙が続き、運転手が耐えかねて問う。

「ラジオニュースをかけてもよいですか？」

「……どうぞ」

誰に向けられた問いだったのか、不明確だったけれど、この場の上位者として鮎美が返答した。沈黙が重い車内にニユースが流れる。

「ロシアのセルジユコフ国防相が択捉島と国後島を訪問し、各施設を視察したことを受けて、日本政府は遺憾の意を表すとともに領土問題の平和的解決を……」

「ちっ！」

鮎美が大きく舌打ちして言う。

「何が遺憾の意やねん。鳩山直人そのものが遺憾の塊やんけ！ 遺憾総理が！」

「………」

「うちが総理大臣やったら、四島に攻め込んで取り返したるわ！ 千島列島全部な！」

「……それではロシアと戦争になります」

鷹姫が指摘したけれど、知念と運転手は言わなければいいのに、という顔をしたものの黙って、とぼつちりを避ける。男として険悪な雰囲気の子に何か言うのは本能的に避けたし、介式も仲裁する気は無かった。

「今もロシアとは戦争中やん！ サンフランシスコ講和条約にあいつら入ってへんし！」

「実質的には戦争が終結していることは誰の目にも明らかです。ここを攻め込んで我々に大義名分がありません」

「日ソ不可侵条約を無視したんは、あいつらやん！」

「だとしても、我らの同盟国であったドイツが独ソ不可侵条約を無視していますし、何より現在の彼我戦力差は核の保有を考えれば明らかです」

「くっ……」

単に鮎美は思いつき言い出したことが引つ込みがつかなくなつて勢いで言っているだけなのに、鷹姫から正論を言われて悔しかった。その気配を隣にいる知念は感じたので、もう黙っていられず平和的解

決を模索する。

「お、お二人とも、よく勉強してるっすね！ 高校生なのに、ホントすごいつすよー！」

「SPは黙っとれ！」

「はい、すいません」

「核ならアメリカにあるやん！ 今は同盟国やし！ 思いやり予算で飴ねぶらせてるだけやのうて、たまにはあてにしたらええねん！ 一気に千島列島を攻め取って制空権、制海権を守っておいたら在日米軍も無視できん！ 朝鮮戦争で韓国が米軍あてにしたみたいに後ろ盾に使たらええねん！ どうせ核なんて簡単に使えん！ アメリカもベトナムで使わなかったし！ ソ連もアフガンで使わなかった！ きつとロシアも千島列島では使わんはずや！」

「そんな希望的観測で戦端を開くおつもりですかっ！ まして朝鮮戦争では半島全体が焦土と化したのですよ！」

「反ロシアの国々は多い！ ウクライナもフィンランドもそや！ ロシア軍かて極東に全戦力を向けられんのは日露戦争のころといっしょや！ 地続きの朝鮮半島と日本列島はちゃう！ ロシア軍に日本海を渡って上陸作戦やるノウハウと根性は無い！ しかも在日米軍おつてのことや！ 大戦終了の火事場泥棒やつても千島列島しか盗れんと北海道に至れんかった連中にできることは少ない！」

「なればこそ核使用の可能性があがります！」

「制空権とつてたら空爆はできん！」

「弾道弾による攻撃があります！」

「イージスでの防衛網がある！」

「あてになりません！」

「……………あんたは、うちの秘書やろ！ うちの理屈を補完するのが仕事であつて反論するのは仕事やない！」

「……………そんな論法は卑怯です……」

「っ……うちを卑怯やて言うんなら、もう辞めてや！ もうカネちゃんに秘書になつてもらおうし！ あんたは秘書補佐か……もうクビや！ もう、うちのそばにおらんでええわ！」

「っ……………本気でおっしゃっているのですか？」

「ああ、本気や！　うちの目の前から消えて！　あんた見てると……見てると……うつといねん！　クビや！」

本当は、いつも抱きしめたくて、その衝動を抑えるのに苦勞するの
で、いつそ存在しない方が楽かもしれない、と勢いに任せて鮎美が
言った。

「……………」

「……………」

再び重苦しい沈黙が車内を支配する。数分間の沈黙があつて車内
に泣き出した鷹姫の嗚咽が響くので、鮎美は居心地の悪さが数倍に
なった。

「……………うつ……………うつ……………」

鷹姫は泣き声をあげないように両手で口を押さえているけれど、そ
れが余計に痛々しくて、知念も運転手も可哀想になった。秘書と議員
の雇用契約は法律上とても曖昧で脆い。一度の口論や議員の気まぐ
れで解雇された事例は少なくない。

「……………うつ……………うつ……………」

気の強い鷹姫が泣き声をあげないように泣いている姿は見ていて
男として慰めたくなるけれど、今は鮎美が怖いので何も言えない。介
式が背後から助手席にいる鷹姫の肩を撫でて言う。

「宮本くん、こんな横暴な議員に使われているより、もっと良い仕事は
いくらでもある。警察学校だつて入れば給料をもらえる。君が泣く
ことはない」

「……………ぐすつ……………ありがとうございます。介式師範」

鷹姫は泣くのをやめた。すると、逆に鮎美が焦れてくる。

「……………さっきのは本気やないし……」

「……………」

「つい、勢いで言うたんよ。ごめんな、鷹姫」

「……………はい……」

「宮本くん、いつそ君から辞めてしまえ」

「……………介式師範……………」

「辞めた方がいい。君が深く傷つく前に」

「……………」

「鷹姫、ごめん！ ホンマごめん！」

鮎美が身を乗り出して助手席にいる鷹姫の肩をつかんだ。

「うちが悪かった！ うちが間違ってたよ！ ごめん！ 鷹姫の存在は、うちにとつて何より大切なんよ！ だから辞めんといて！ うちにはアホやから勢いで、いらんこと言うてしまうけど！ そやから、鷹姫がいてくれんと困るのよ！ 鷹姫がすっかり反論してくれるから、うちは間違えずに済むの！ もう二度とクビなんて言わんから！ うちの任期中、鷹姫のクビを斬ることは絶対がない！ そやから、うちが間違つてるときは遠慮のう反論して！ そういう鷹姫が必要なん！ お願いよ！」

「……………芹沢先生……………はい、これからも、私はあなたにお仕えます」

「おおきに、ありがとう！」

「よかったすね！ 仲直りして！ ね、介式警部！」

「……………。知念、お前は喋りすぎだ。SPは、なるべく静かにしていろ」

「はい、すみません」

やっと車内の空気が少し改善し、運転手は分岐点にさしかかったので問う。

「かねやさんへ向かいますか？ 駅前ホテルへ向かいますか？」

「……………ホテルに行ってください」

鮎美が言い、鷹姫が喜ぶ。

「自重してくださるのですね。ありがとうございます」

「……………。カネちゃんには……………お見舞いしたいし……………けど、……………私的なお見舞いに党の車を使うわけにいかへんし……………運転手さんも、みんなも疲れてはるやろ……………うち、タクシーで行くわ。一人で」

「芹沢先生……………」

鷹姫は遺憾の意を表情に浮かべた。鮎美は肩身が狭そうにスマートフォンで地元タクシー会社に電話をかけ、駅前のビジネスホテルに10分後に来るよう頼んだ。また重い沈黙が10分間続き、車列はビ

ジネスホテルに到着した。静江や党の職員は帰宅する予定で、もう島には帰れない鮎美と鷹姫、陽湖、そしてSPたちが宿泊するはずだったけれど、鮎美は呼んでおいたタクシーに向かう。

「もう地元やし…、安全やし…、うち一人で行かせてもらおうわ」
「危険です！」

鷹姫が回り込んで道を塞ぎ、介式と知念は警護を続けるのが当然という顔で鮎美についてくる。

「介式はんらも疲れてるやろ」

鮎美は介式の背中を撫でようとして、セクハラと言われないよう思い止まり、知念の背中を撫でる。

「知念はんも、お疲れさんです」

「い、いえ。任務つすから！」

知念が少し赤面した。知念はスポーツ刈りの童顔なので30代なのに、鮎美たちと歳の差が少ないように見える。鮎美は笑顔をつくつて言う。

「ほな、うち一人で大丈夫やし。ちよつとカネちゃんち行くだけやし一人にして」

「現在24時間体制で警護している。例外はない」
「……………」

鮎美が左手で自分の前髪をクシヤリと握った。強い苛立ちを抑えている表情なのが一目瞭然だった。不穏な様子を見て、静江と陽湖も近づいてくる。

「どうかしましたか？」

「シスター鮎美、何かありましたか？」

「別に、なんもあらへんよ」

鮎美は説明しないけれど、鷹姫が説明する。

「芹沢先生が緑野へお見舞いに行かれるというのですが、私は反対しています。大事の前の小事ですし、すでに見舞いにも非常識な時間です。何より警護をつけないなど、ありえません」

もう午後11時を過ぎている。鷹姫の言い分は正しかったけれど、鮎美はタクシーに乗ろうとする。

「おやめください!」

鷹姫が鮎美の手首を握った。

「……離してよ」

「いいえ、離しません!」

「……。……くっ! うちにはプライベートは無いん?! ちよつと、友達に会いに行くだけやん!!」

「何も今でなくてもよいではないですか!」

「今やなかったら、いつなんよ?!」

「さきほど私に反論すべきは反論せよと言われました! 今がそのときです!」

「つ……。……行かせて……」

「ダメです」

「……。行かせてよ! お願いやし!」

叫んだ鮎美が涙ぐむので鷹姫が驚く。

「……泣くほど……。それほど……。行きたいことなのですか……。……」
「ぐすつ……」

鮎美と鷹姫が感情的になってしまったので静江が間に入る。

「まあまあ、二人とも冷静になってください」

「……………」

鮎美は深呼吸してタメ息をついたし、鷹姫も強く握っていた鮎美の手を離した。

「ご無礼、ご容赦ください」

「……。うちこそ、また怒鳴ってごめん」

「それでケンカの原因は何ですか?」

「別にケンカなんかしてへんし。うちはカネちゃんのお見舞いに行くだけやし」

「緑野さんのお見舞いに、それほど執着されて……。……、そんなに行きたいことですか?」

「……………」

静江の穏やかな問いに、鮎美が黙って頷いた。

「では行ってください。けれど、せめてSPはつけてください。彼ら

は党から要請して警護についてもらっている国の人員です」

「……………」

「石永さん、ですが必要性和リスクを考えれば…」

鷹姫の発言を静江は途中で遮った。

「議員だって人間なんです。私たち秘書は大なり小なり、気を抜く時間があっても、今みたいに注目されているときの議員は気の休まるヒマもない。私のお兄ちゃんだって似たような時期があって見えて心配でしたから。どうしても会いに行きたいなら、行つてください」

「……………静江はん、……………おおきに…」

「ですけど」

静江は鮎美にしか聞こえない小声で言う。

「明日朝9時からの近畿剣道連盟少年大会には遅刻したり、寝不足ということがないようにしてください。芹沢先生が経験者で大阪代表であつたことと、秘書の宮本さんが全国優勝者であることで、連盟の方も来賓として他のスポーツ大会とは比較にならない期待をします。まして、うなじにキスマークがあるなんてこと、やめてください」

「……………はい…」

鮎美は素直に頷いてタクシーに乗った。介式と知念も乗ってくる。

「私も行きます」

「鷹姫は、こんといてよ」

「心配なのです。同伴をお許しください」

「……………。鷹姫は明日、剣道指南と演武もするやろ。子供らにちゃんとサービスできるよう、よう休んでおき」

「ですが…」

「介式はんがいてくれはるのに、万一のことがあると思うの？」

「……………。わかりました。介式師範、どうか、芹沢先生をお願いします」

「ああ、心配するな」

タクシーが走り出すと、知念が問う。

「芹沢議員と緑野さんって、どういう関係なんすか？」

「……ノーコメント」

「知念」

「すみません」

すぐにタクシーは鐘留の家に到着した。夜中だったけれど訪問することは伝えてあったので鐘留の母親が出迎えてくれる。

「わざわざ来てくれてありがとう」

「いえ、こんな時間になって、すみません」

「あの子は、部屋にいるの。あがってください」

「お邪魔します」

「お邪魔する」

「お邪魔するっす」

鮎美と介式、知念が鐘留の部屋を訪ねる。かなり広い部屋なので三人が入っても余裕がある。

「カネちゃん、調子はどう？ ……あ、……まだ……寝込んでるんや……」

「……ハア……ハア……アユミン？ ……ハア……」

鐘留はベッドの上で布団をかぶり顔だけ出している。熱のせいなのか、つらそうな呼吸をしていた。鮎美が心配して近寄るのを介式と知念は止めない。暴漢やテロから鮎美を守るのが任務であり、風邪のウィルスから守るのは、任務に含まれていなかった。

「カネちゃん……熱さがたつたってメールくれたのに……また悪化したん？」

「うん……ハア……今朝、また……急に……それで病院に行ったら……」

「ハア……肺炎性……なんとか……かんとか……症候群とか、言われて……」

「ハア……」

弱々しく鐘留は布団から手を出して鮎美へ向けるので思わず手を握った。

「熱っ……めっちゃ熱あるやん」

鮎美は握った鐘留の手が熱すぎて驚く。

「…ハア…アユミンと過ごした一年…ハア…楽しかったよ…ハア…」

「ちよつ…何を死ぬみたいなこと言うてるのん？」

「ごめんね…ハア…アタシの分まで…ハア…頑張つて…ハア…アユミンは…ハア…生きて…ハア…」

「うつ…嘘やろ？ カネちゃん……そ、そや、桧田川先生に……あかん、あの人は内科やのうて外科や……」

「最後に…ハア…アユミンに…ハア…会えて…ハア…よかった…ハア…」

それだけ言った鐘留は目を閉じ、呼吸を止めた。握っていた手からも力が抜ける。

「ちよつ?! カネちゃん?! カネちゃん！ しつかりしてよ！ カネちゃん！」

「医者を呼んでくるつす！ いや、救急車を！ まず、親御さんに報告を！」

知念も慌てているけれど、介式は冷静に近づくと、鐘留の首筋に触れた。

「脈はある。生きている。気絶しただけか、もしくは…」

「…ハア！ ハア！ ハア！ ハア…」

「…カネちゃん？」

「きやはっは、アタシが死んだと思った？」

元気で張りのある声だった。布団の中で手を温めていたカイロを見せってくる。

「…うちを騙したん？」

鮎美が悔しそうに涙の滲んだ目尻を手の甲で拭きつつ問い、だんだん怒れてくる。

「本気で心配したんよ、ひどいやん」

「ごめん、ごめん。でも、アタシだってアユミンが刺されたとき、かなり心配したんだしさ、30秒くらいいいじゃん」

「う〜…」

「それに、きつき部屋に入ってきたとき、アタシが寝込んでるの見て、露骨に残念そうだったよね。せつかく忙しい中、エッチなことしよう
と来たのに、まだ体調が悪いんだ、って感じに」

「う、うちはお見舞いに…」

「ウソウソ、アユミンの行動パターン、男子だと思えば、けっこう読めるよ。一回やらせてくれたし、もう一回ってことでしょ?」

「……………」

「どうなの? したいの? したくないの?」

「……………」

「黙ってるなら、させてあげないよ」

「…したい」

「ふーん♪ その体温計を取って。たぶん治ってるけど確認するか
ら」

「これ?」

鮎美はベッドサイドのテーブルにあった体温計を鐘留へ渡した。
鐘留はパジャマの胸元をはだけると体温計を腋に挟み込む。電子体
温計は、すぐに鐘留の体温を計測した。

「36.1、うん、平熱。いいよ、エッチしても」

鐘留が了承した途端、もう待ちかねたように鮎美がベッドへあが
り、はだけていた鐘留の胸元に吸いついた。

「ちよっ、そんなガツかないですよ。せめてシャワー浴びてからにして。
あと、君! その君! こっち見ないで背中向けて!」

根本的には異性愛者である鐘留は男性である知念に注意した。

「すいません!」

すぐに知念は背中を向けてくれる。その間も鮎美は鐘留の肌を舐
めていた。

「くすぐりたい。きやはは、だから、せめてシャワーしてからにしよう
よ。アタシ何日もお風呂入ってないから」

「ハア…ハア…カネちゃんの匂い、好きよ」

「とか言いつつ、腋を舐めるとか、マジで腋フェチだね。あと5分だけ
だよ。アタシ、自分で自分の匂い、嫌だし」

いつも鐘留は女子らしく清潔にして匂いも気づかっているのが、はつきりと鐘留の匂いを感じたのは初めてだった。寝込んでいた鐘留の身体からはランとユリの花卉のような香りがして、鮎美は夢中で舌を這わせた。

「きやはは、く、くすぐりたい、きやははは！ 腋ばつかやめてよ、きやははは！ あん、パンツの中に手を入れるのは、さすがにお風呂の後にしてよ。ヤダ、ヤダ、ヤダって。もお、強引！ アユミン、やめて!! その手、外から入ってきて洗ったわけじゃないよね?! お風呂に入らせて！ それからアユミンもキレイにして!! でないと、もう拒否るから。お巡りさん、ヘンタイがいます、助けてください。アタシ襲われています」

「……………」

介式と知念は黙ったまま動かないけれど、冗談めかしていても本気で嫌がられつつあるので鮎美もやめた。鐘留はパジャマの胸元をなおしてベッドから立ち上がった。

「アタシ、お風呂に入ってくる!」

「いっしょに入ろお」

「ヤダ! 待ってて!」

「…………ごめんなあ……」

鮎美は仕方なく待つ。ただ待っていると、興奮は残っているのに疲労感で眠くなってしまう、眠ってしまうと朝まで起きられない気がする。なので、ベッドから立ち上がった。介式とは目を合わせないように、待ち遠しい30分を耐え、日付を超えた。

翌2月5日土曜、午前2時過ぎ、鮎美が深く眠ってしまったので鐘留は抱きつかれていた腕をどけてベッドから立ち上がった。

「やりたいことやったら寝ちゃうとか、まさに勝手な男といっしょだね、アユミン」

「……………」

介式と知念はコメントせず、鐘留は唾液の匂いがする自分の身体を気持ち悪そうに触った。

「あくキモかった。気持ち悪っ。指とか舌を使ってくれるのは気持ちいいんだけど、やっぱり根本的に無理あるよね、同性愛」

「……………」

「アタシは、やっぱり男がいいよ。アユミンに、おチンチンがあったら、よかつたのに。えっと、君、男だよね。名前は？」

ずっと背中を向けていた知念が問われ、まだ鐘留も鮎美も裸のはずなので背中を向けたまま答える。

「知念っす」

「チンネ？」

「チネン！」

「きやはっははー！」

「……………」

「アタシ、もう一回、お風呂に入るよ。チンネも来る？」

「い、いえー！ 任務中っすからー！」

「クスクス、ずっと真面目に背中を向けてたけどさ、チンチンガチガチにしてたでしょ。アタシとアユミンがからんでる間さ」

「っ…そ、そんなことは…」

「部下へのセクハラはやめろ」

「はいはい」

鐘留は裸のまま部屋を出て行く。

「……………」

介式と知念は午前1時で交代する予定だったけれど、女性SPは介式しかおらず、状況的に危険度は少ないので、このまま交代せずに連続勤務するとビジネスホテルで休んでいるチームに伝えている。しばらくして鐘留がバスルームから裸で揚がってきた。ポタポタと水滴が床に滴っている。外は真冬で零度以下だったけれど、鐘留の家は全館暖房されていて、設定温度は高かった。

「アタシ、裸だから、引き続き、こっちは見ないでね」

「は、はいー！」

「服を着ろ」

「アタシの部屋だしー」

鐘留は椅子に座ると机に向かい、パソコンを開いた。昼間十分に眠ったので、まったく眠くない。

「ずっと寝込んでたから、いくつか依頼が入ってる」

殺さない正しい子供の捨て方と親の捨て方、という個人サイトを副業で運営し始めている鐘留は代金の振込が確認できた案件から、手を着けていく。かなりの速さでキーボードを叩き、3件の仕事を終わると、両肩をグルグルと回した。

「はああ……お仕事、終了」

午前4時なっているけれど、まだ外は暗い。鐘留は裸で眠っている鮎美に布団をかけてやり、自分はTバックのショーツを穿いた。

「ずっと背中を向けてるのも可哀想だし、アタシも服を着たから、こっち向いていいよ、チンネ」

「知念っす。うおっ……」

振り返った知念は鐘留の乳首を見て驚く。

「ふ、服、着てないじゃないっすか!」

「きやはは、パンツは穿いたよ。そのうち見慣れるって。慣れといえど同性愛も3度目になればキモさも減るかなあ。キスしたそうな顔されたけど、やっぱ無理だったし」

「……………」

「チンネは、どう? 男とキスできる?」

「無理っす」

「だよね」

「……………」

「君たちヒマそうだね。ずっとアユミンを見守ってるんだから、仕方ないかな。そうだ、アタシがやりだした副業の話、お巡りさんにしてあげるよ。保護責任者遺棄等の罪って知ってる? チンネ」

「当然知ってるっすよ! あと、知念っす!」

「じゃあ、条文を暗唱して」

「うっ、たしか…老人、子供、病人を保護する者が、これらを遺棄したとき……五年以下の懲役……」

曖昧なのが警察の恥なので介式が、はっきりと言う。

「第218条、老年者、幼年者、身体障害者又は病者を保護する責任のある者がこれらの者を遺棄し、又はその生存に必要な保護をしなかつたときは、三年以上五年以下の懲役に処する」

「さすが、狼警部。でも、世の中、子供を捨てたい、親を捨てたい、つて人、多いよね？」

「……………」

「ボケ老人になった親もいらぬし、障害のある赤ちゃんとかさ、いらぬゴミは、ちゃんと分別して正しい捨て方をしたいよね？」

「ひどい言い方っすね。緑野さん、どういう人格してんすか？」

「ひどい人格だよ」

「……………す……」

「どんなゴミでも間違つた捨て方は罰されるよね。不法投棄は罪。冷蔵庫でも生ゴミでも、ちゃんと正しい出し方がある。それは市役所が教えてくれる。なのに、ゴミのような人の正しい出し方は秘密にされてる。そこにアタシは目をつけて、代金を取って教えてあげてるの。刑法218条に触れない、人の捨て方」

「んなものあるっすか？」

「一番、みんなが知ってる捨て場、ほら、熊本県にあるじゃん、赤ちゃんダストポスト」

「赤ちゃんポストっすよ」

「コウノトリのゆりかごだ」

「あれ便利だよ。赤ちゃんに障害があつて捨てたいとき、超便利」

「……………」

「けど、全国にない。あんな不便な田舎、捨てに行くだけで、ここからだと往復かなり大変」

「……………」

「あと、あれの年寄りバージョン無いよね。爺ちゃんポストとか、ババアのゆりかごが無い」

「そんなのあつたら、すぐいっばいっすよ。でなくても、老人施設は順番待ちなんすから」

「みんな捨てたいんだね。けど、捨て方を間違うと逮捕。どこに、どう

捨てるのと逮捕されないのか、そういうノウハウって売れそうでしょ？」

「……たしかに……」

「今夜は特別にタダで教えてあげよう。君たちお巡りさんの忌憚ない意見も聴きたいしね」

「……………」

「でも、蓋を開ければ簡単だよ。捨てたいお爺ちゃんといっしょに市役所なんかに行くの。で、介護課とか福祉課のカウンターで職員に相談するの」

「……それじゃあ、結局、施設の順番待ちになるんじゃないっすか？」

「ううん、ならない。その場にポイするから」

「…その場に…」

「いろいろ相談して、どうして面倒を見られないのか、このあたりの訴え方にもコツはあるけど、だいたい相談が終わったら、あとは私ちよつとトイレに行きます、って言って離れる。お爺ちゃんは置いてね」

「……………」

「で、自分はオシッコした後、カウンターには戻らない。そのまま市役所の外に出て、はい、さようなら。ちよつと親切心があるなら市役所に電話して、もう介護無理です、私は旅に出ます、と言ってあげればいいよ。あとは市役所がなんとかするから。ほら、これなら刑法218条に触れない。捨てられた人が保護される高い蓋然性を期待して行動しているから、大丈夫」

「……………」

「ダメな捨て方としては遠く的高速道路サービスエリアに捨てるとか、山に捨てるとか、そういうの。危険があるからね。事故に遭うかもしれないし、凍え死ぬかもしれない。アタシが教える捨て方は、あくまで次の保護者を見つけるやり方だよ。それを、それぞれの依頼者の情報を判断して、教えてあげて、お金をもらうの。どう？」

「……………どうもこうも……………」

げんなりとした知念に替わり、介式が狼のように鋭く鐘留を睨む。

「たしかに実行者が刑法218条に触れる可能性は低いだろう。だが、お前は行政書士法違反もしくは弁護士法違反に問われる」

「その程度のこと、アタシが考えなかつたと思う？ 行政書士は官公庁への書類作成の助言や代理、法律相談が業務だよ。弁護士は法律相談と法廷代理人になることとか、けど、アタシがしてるのは、あくまで人生相談、その範疇で終わるように気をつけてる。それに、そのうち行政書士なら取得してもいいし。けど、テストは難しくないんだけど、登録すると会費を取られるのが、うざいよね。あと、この捨て方、そのうち広まって価値が無くなりそうだし、やっぱり片手間の副業かな」

「……勝手にするがいい」

「きやはっはは！」

「介式警部！ オレは、こいつに一言いいたいっす！ 警護対象の友人を罵倒するのはSP失格でも！」

「言いたければ言え」

「言ってみなよ、チンネ君」

「お前は絶対ロクな死に方をしないっ!!」

「きやは♪ それ、よく言われる。で、いつも言い返すんだけどさ、あまりに失礼じゃない？」

「お前にはちようどいいくらいだ！」

「ちやうちやう。今現在までのロクな死に方をしなかつた人たちに失礼すぎるよ、つてこと。ほら、たとえば広島長崎で被爆して焼かれて藻掻き苦しんで死んだ人たちは、ロクな死に方をしないような人生を送ったからなの？ シベリアに抑留されて餓死した人は？ 北朝鮮に拉致られて拷問とかで死んだ人は？ 富山県で痛い痛いって泣きながら死んだイタイイタイ病の人は？ 熊本県で水銀入りのお魚定食で水俣病になった人は？ 沖縄で米兵に強姦殺人された女の子は？ 米兵だつて中東で地雷ふんで、おチンチン吹っ飛んで大量出血で死んだら？ まあ、その米兵が強姦殺人したのに日米地位協定のおか

げで無罪になってたなら、地雷グツジヨブ♪ 神さま、いい仕事してるね、つてなるけど、どうよ、お巡りさん？ 今までひどい殺され方した被害者は？ ひどい轢かれ方だった交通事故で死んだ人は？ ロクな死に方しないようなヤツらだ、つて、お巡りさんは思ってるの？ だから、アタシに言ったの？」

「……………」

「あ、こいつには何を言っても無駄だつて、思った？ きやははー！」「……ん……うるさい……静かにしてよお……ん……ん……」

寝惚けた鮎美が、つらそうに呻ったので鐘留は静かに美容と健康のためにストレッチを始めた。なるべく知念の視界に入る位置でストレッチを続けて遊び、朝食前になって鮎美を起こす。

「かわいそうだけど、起きて。アユミン、お仕事の時間だよ」

「う……う……チュウしてくれたら起きるう」

「そのまま永眠してる？」

「……………チュウしたい」

「脳が幼児化してるね。アタシの足にならチュウしていいよ、ほら」

ふざけて鐘留は足を前へ出したのに、鮎美はキスをしてから舐めてきた。

「きやは、くすぐりたい」

鐘留は毎日のようにテレビへ出ている鮎美が今は足元にいて言いなりになることに背筋がゾクゾクするような快感を覚えた。元モデルとして少しは芸能界にいたので、口に出さないものの衆目を浴びている鮎美へ対抗心もあった。

「コラコラ、誰が、そこまで舐めていいって言ったの？」

「……ハア……」

鮎美は足から股間まで舐めあげて鐘留の下腹部にあるタトウーにキスをしている。金色の鐘を描いたタトウーが鮎美の唾液で湿った。

「あんっ、またクリまで吸う……うっ……うっ……ハア……キモチいい……」

「ハア……ハア……」

鮎美は鐘留をベッドに押し倒して身体を合わせた。

「もう時間だよ」

「ずっとカネちゃんといいたい」

「このエロ魔神め」

「カネちゃんも東京に、いつしよに来てよ」

「うくん……それ、エロ要員として?」

「……。秘書補佐から秘書に昇格で。時給から月給制で」

「どうしよかなあ……アタシの経歴、すでにゲスイ週刊紙が調べてるし。チンネ、その本棚から、噂の真実、っていう週刊紙を取って」

知念は背中を向けたまま、本棚から週刊紙を取って、鐘留に差し出した。受け取った鐘留は可愛らしく礼を言う。

「ありがとう」

「……いえ……」

「ほら、これ見てよ、アユミン。芹沢鮎美嬢王が囲う6人の恋人候補か?! 美人秘書軍団とレズ都議ってタイトルの記事でき、アタシが元モデルだったこととか、宮ちゃんの剣道経歴とかアユミンとの中学での対戦とか、月ちゃんの宗教が同性愛厳禁なこととか、シズちゃんが未婚でお兄ちゃんがホモなこととか、シオちゃんがドイツで女性とも付き合ってたこととか、朝ヤル先生が彼女とうまくいってないこととかアユミンのコスプレで秋葉にいたこととか、いろいろ書いてあるよ。で、誰がアユミンの恋人なのか、探ってる。すごいよね、この週刊紙、訴えられるかもしれないのにさ、根性あるよ」

「………………。これ、借りていつていい? 買うのシヤクやし」

「どうぞ」

「朝ご飯、せっかくやけど、時間無いし、もう行くわ」

鮎美は興奮が冷めた顔で制服を着ると、部屋を出て鐘留の母親に謝る。

「昨夜は急に泊まって、すみません。せっかく朝食まで用意していただきましたけれど、もう時間がないので失礼します」

「どうぞ、また来てください」

「じゃあね、アユミン」

玄関で鐘留と別れて扉を閉めた。扉を閉めてから歩きだそうとして背後から鐘留の怒鳴り声が響いてきた。

「アタシが誰と何しようが自由でしょ?!」

「あなただけは、まともにも育ってほしいの！　お願いよー!」

「じゃあ、アタシも殺せよ、殺害ババア!」

「……………」

親子ゲンカしているようで声が外まで響いていることに気づいていない。鮎美は歩き出した。介式と知念も黙ってついていく。道路に出ると、党の車とSP6名が待っていて、介式と知念は長い勤務を終えて交代した。鮎美は男性SPと車に乗り、三上市にある県立体育館に向かった。途中のコンビニで牛乳とパンを買って車内で食べながら、週刊紙を読んだ。

「はああ……………うちは、ともかく、陽湖ちゃんなんか可哀想やん。さすがに顔写真は目元を隠して、美少女Yやけど、カネちゃんは元モデルやから、容赦なく顔出しして芸名やったKANENEで載せてるし…………」

鮎美は5分ほど悩んだけれど、県立体育館が近づいたので両手で頬を叩いて気分を入れ替えた。体育館前に車が到着すると、剣道連盟の役員たちがスーツ姿で、鷹姫が剣道着姿で出迎えてくれた。

「…………おはようございます。お越しいただき、ありがとうございます」

「…………こそ、お招きいただき、ありがとうございます。少し遅くなつて、すみません」

遅刻したのは2分ほどだったので問題なく予定は進み、鮎美は来賓席に座り、鷹姫も今日は来賓の一人として剣道着姿で着座している。大会が始まると、鮎美からの挨拶もあり、もう原稿も無しで、ごく無難な挨拶をして拍手をもらい、次に鷹姫が見事な演武を披露し、それからトーナメント形式で小学中学の子供たちが試合を行い、鮎美は入賞者へトロフィーを渡す役割を果たした。さらに、鷹姫が子供たちへの剣道指南を行う。ずっと試合中にそれぞれの子供たちの悪癖や弱点を観察していた鷹姫は良い助言をして名声を高めた。大会が終わ

ると、鮎美も鷹姫もさすがにいい気分で連盟役員たちと握手を交わした。たいていの政治家来賓は挨拶や表彰を終えれば試合の一部だけ観戦して引き上げるし、今まで鮎美も他のスポーツ大会では例にならって一部しか列席してこなかったけれど、今回は朝から終わりまでいたので役員たちや保護者、子供たちの好感度も高い。

「ほな、これで失礼いたします」

「ありがとうございます。芹沢先生のご活躍、期待しています。宮本さんも頑張ってください」

「はい、ありがとうございます。精進いたします」

制服に着替えた鷹姫も笑顔で応え、党の車に乗った。発車して役員や子供たちが見えなくなるまで手を振り、見えなくなると鮎美が真顔になって問う。

「鷹姫、次の予定は、あの事件のご両親との面談やったよね？」

「はい」

すがすがしい気分だった二人は重い心持ちに変わり、六角市の支部に戻った。二人がSPたちと支部に入ると、すでに大津田の両親が待っていた。母親は青白いやつれた顔をしていて50代なのに70歳くらいの老婆のような女性で、父親も60代だったけれど年齢以上に老けて見えた。息子が鮎美を刺傷したことを謝罪に来たのだった。もともと、すぐにも鮎美の両親へは詫びに来ているけれど、鮎美本人への謝罪は傷の回復を待ってからと言っておいたので今日になったのだった。しかも、それほど時間があるわけではなく新幹線で東京へ行くことを考えると、両親との面談は30分以下になると伝えてある。

「この度は息子が、とんでもないことをしてしまい、本当に申し訳ありませんでした！」

「申し訳ありません！……ごめんなさい！」

大津田の両親は鮎美の顔を見ると、すぐに頭をさげ、母親が土下座し、父親も続いて土下座してくる。

「……………」

鮎美は困った顔で両親を見下ろし、それから答えを求めるように支

部内にいる仲間を見た。石永と静江、陽湖、鮎美の両親である玄次郎と美恋、党の職員たち、誰もが判断するのは鮎美だという顔をしていて、どこにも答えはない。鷹姫も同じだった。そして明らかにトラブルを起こす可能性が高い鐘留へは謝罪訪問のスケジュール自体を静江の判断で伝えていない。鮎美は判断に迷い、困る。

「……………」

まだ両親は土下座を続けている。母親の方は嗚咽していて小さい背中が震えていた。

「……………」

加害者の両親って、どんな気持ちなんやろ……自分が直接に悪いこととしたわけやないのに、世間からも責められて……こんな風に土下座に来るって……うちが悪いことしたら、うちの父さん母さんが謝るのかな……うちが鷹姫を襲ってたら、鷹姫の家に、うちの父さん母さんが、こんな可哀想な姿で謝りに行くんかも……罪は、本人だけでええのに……、と鮎美は悲しく考え、これ以上の土下座をやめさせる。

「顔をあげてください。陽湖ちゃん、二人に椅子を」

「はい」

陽湖が用意した椅子に両親は頭をさげながら座った。鮎美も向かい合って座り、自然と鷹姫も隣りに座した。SPたちは、いつでも鮎美を守るように間近の背後に立っている。まだ、母親は嗚咽していて、鮎美も胸が痛かった。あまり長く面談していたくないので、鮎美から切り出す。

「まず、すでに記者会見でも言うてましたように、私個人の大江田くん本人への懲罰感情は強いわけではありません。それは、この通り、傷が完治したこともありますし。けど、あのとき、この鷹姫が守ってくれなかったら、うちは殺されてたと思うし、一時は死ぬんじゃないかと思うほど痛くもありました」

言っているうちに、鮎美は鷹姫の手を握っていた。鷹姫も握りかえしてくれる。

「私どもの息子が……、本当に申し訳ありません」

「う、うう、申し訳ありません……うう……」

「…………。一部の報道で、大津田くんが発達障害やったと言われてますけど、それは本当ですか？」

鮎美の問いに、母親が答えようとして泣き崩れたので、父親が答える。

「事実です」

「そうですか…………その発達障碍と、今回の事件との因果関係は？」

「申し訳ありません。わかりかねます。正直、私たちも知りたいくらいです。ただ、息子の知能が低いことは確かです。それが善悪の判断にも、大きく関わっているとは感じます」

「ううっ…うううっ…」

泣き続ける母親の背中を父親が撫でながら語る。

「すべて私たちの責任です。末っ子で障碍があり、甘やかしすぎた」

「……………」

「責めるなら、どうか父親である私を責めてください」

「……………責めたところで…………どうにも……………うちが同性愛者なのを知ってはりますか？」

「…はい。…………報道で…」

「うちが同性愛者になったんは、両親のせいやと思います？」

「……………」

「お二人の謝罪の気持ちは、よく伝わってきました。大津田くん本人については家裁の判断に任せます。うちへの慰謝料と治療費については弁護士をたてますんで、その弁護士と話し合ってください。傷も治ったし、多くを請求するつもりはありませんけど、治療費は高かったです。…………鷹姫、松田川先生から、いくら請求されてた？」

「441万1980円です」

「だそうです。大丈夫ですか？」

問いながら鮎美は、この父親が関西便利電力の株主であり、電気技術者でもあることを思い出した。上の息子たちも頭が良く、同じく電気技術者を勤めているらしい。末っ子が障碍をもって生まれるとい

うことさえなければ、どれほど幸せな一家だったろうかと想う。まだ嗚咽している母親も、やつれ老いることなく子育ての終わりが近づいたことで、元気に夫と旅行へ出かけたりしたかもしれない。なのに、全国的に注目されている鮎美を息子が刺してしまったことで、まるで大逆罪を犯した者の両親のように扱われていた。それでも父親は、ハッキリとした口調で答える。

「はい、すぐに振込みます」

「では、うちは、もう東京へ発ちますんで、失礼します」

まだ時間に余裕はあったけれど、鮎美は事務所を出る。鷹姫とSPがついてきた。鷹姫に言う。

「とても言えんかった……うちは生きてるけど、殴られた傷が原因で自殺した女の子のこと、どう思ってる、どう償う、って……訊きたかったけど、とても言えんかった」

「芹沢先生………社会の問題、すべてを背負おうと、考えようとするのは、いっそ、お諦めください。あまりに、すべてを考えては、お心が疲れ果ててしまいます」

「………うん………ありがとうございます……。ちよつとだけ……抱きついてい

い？」

「は？」

駐車場で抱き合う二人の姿をSP6名は完全に包囲して隠した。

2月6日 都知事選

翌2月6日の日曜午前6時、鮎美は議員宿舎で起床した。前の晩に東京駅で買っておいいた味噌ヒレカツ弁当を朝食として電子レンジで温めてから一人で食べる。

「できればトイレも済ませておきたいねんけど……」

今日一日は都知事選の応援なので、大便是済ませておきたい。田舎と違い、都内のコンビニには駐車場がないことが多い。途中でトイレに行きたくなるとSPを連れて歩く鮎美は目立つので、今のうちに室内のトイレに入った。

「……やった。出た」

思い通りに一人で済ませることができる幸せを噛みしめつつ、身支度を調える。制服を着て髪をとき、普段より少し濃い目にメイクした。

「2月とはいえ、丸一日外やと紫外線けっこう浴びるやろなあ……」

淋しいので一人言を漏らしながら準備を終えた頃、鷹姫が来てくれたので二人で廊下に出た。いつも通りSPがついてくれる。

「やっぱり日曜の議員宿舎って静かやなあ」

「そうですね。多くの先生方は地元へ帰っておられるのでしよう」

畑母神の出陣式に参加するため、中野区にある選挙事務所まで車で移動した。選挙事務所は畑母神の支持者で高齢のために会社を閉めた男性の社屋跡が安価で提供されていた。

「さすが都内、狭いなあ」

「土地の価格が違いますから」

「新宿とか札束を踏んで歩いているようなもんかもしれない」

「選挙資金の上限を考えれば、これでも広い方なのかもしれません」

社屋跡は古いビルと倉庫があり、駐車スペースは2台分しかない。車で来た支持者はそれぞれに別の場所にあるコインパーキングなどを利用していたし、応援弁士である鮎美にさえ駐車場所の提供はない。鮎美たちの地元では市議レベルの選挙でさえ30台ほど駐車スペースのある廃コンビニ跡などを使うのとは、かなり差があった。そ

れでも、社屋前に駐められている選挙カーは立派で、レンタルされている中では最上グレードの大きさをした屋根の上にステージがあるタイプのものです。鮎美も県知事選で登壇したことがある。

「あれに登るとき、気をつけんとパンチラになるんよなあ」

「お守りします」

「おおきに」

鮎美と鷹姫は事務所に近づくと、多くの支持者や応援弁士の中に朝槍と詩織を見つけた。出陣式は集まる人数が多い方が勢いを見せられるので可能な限り動員されているし、都議である朝槍の存在は大きい。

「朝槍先生、詩織はん、おはようございます」

「おはようございます」

朝槍も詩織も選挙応援に相応しい華美すぎないスーツとヒールの低いパンプス姿で、白と赤で彩られた安っぽいジャンパーを着ている。周りには白と赤の旗が無数に立っているの、それが畑母神の選挙カラーなのだとわかる。

「畑母神先生らしい日の丸と同じ色やね。うちらも着た方がええ？」

「鮎美先生と宮本さんは制服のままの方が可愛いですよ」

「そういう問題やなくて」

「応援という意味でも、芹沢鮎美が畑母神先生を応援しているのは、もう宣伝しなくていいほど広まった事実ですから。それに制服のままの方が目立ちますし宣伝になりますから、そのままにしてください」

「やっぱりそうやんね。地元でも、そうやったわ」

「鮎美先生、コート無しで寒さ対策は大丈夫ですか？」

「ばっちりよ」

鮎美は制服の内側を見せた。しっかりと張るカイロが何個も装備されていて、スカートの内側にまで貼ってあるので寒くない。ショーツも厚手を2枚重ねて着ているし、万が一トイレに行くタイミングを得られず演説中に失禁などしたら恥ずかしいので大きなナプキンを

あててもいる。靴の中にも小さな靴用カイロを貼っているので大声で演説すれば汗ばむくらいだった。

「東京は、うちの地元より、ちよつと温かいね」
「それで…」

朝槍の言葉は途中で声をかけてきた水田に遮られる。

「おはようございます。今日は畑母神の応援に来ていただき、ありがとうございます」

「あ、水田先生、どうも、おはようございます」

鮎美が挨拶し、朝槍たちも挨拶したけれど、水田は鮎美と朝槍を見比べて言う。

「やっぱりコスプレと本物では違いますね。フフ」
「っ…」

朝槍が恥ずかしそうに顔を伏せた。鮎美は疑問に思っていたことを問う。

「朝槍先生が、うちのコスプレしてはるってホンマですか？」

「……は……はい……ごめんなさい…」

「別に謝ってくれんでもええですよ。なんか流行ってるみたいやし」

「実はナユが第一号だったりするかもしれませんよ」

「っ…シオリン、やめて」

「うちの真似は、うちが当選した直後から学園では流行ってたよ。まあ、同じ制服やから髪型が流行っただけやけど」

くだらないことを女性たちが話していると、百色が声をかけてきた。

「おはようございます、芹沢組長」

「……。えつと、どこかで顔を…」

鮎美が記憶を巡らせていると、鷹姫が教える。

「百色正春さんです。海上保安官だった」

「あ、ああ、あの。どうも、おはようございます」

鮎美が右手を出すと、熊のように大きな手が包んできた。それを機に遠慮していた男性たちが鮎美へ握手を求めてくる。支持者には元

自衛官が多く、在任中は禁止されていた選挙活動への参加が堂々とできるので嬉しそうだ。鮎美との握手と記念撮影が一巡した頃、石永が駅から走ってきた。

「ハア…ハア…間に合ったか」

鮎美と違い、遅刻しても大きな問題はないので始発で地元から駆けつけている。そして、ちょうど立候補の届出が終わり、畑母神の選挙ポスターを貼る位置が決まったと連絡が入り、選挙対策委員長が発表する。

「一番です！ 一番!!」

「「「おおおっ!」」」

別にポスターの位置が1番になったからといって当選したわけではないのに、とりあえず場が盛り上がった。

「いいぞ!」

「勝利まちがいなし!」

「見的必殺!」

「閣下万歳!」

「……。えいえいおー!」

関西と関東で文化が違うかもしれないと一瞬迷ったけれど、鮎美が叫ぶと、鷹姫ものる。

「会会、応!!」

女子高生二人の意外にも勇ましい掛け声に周囲ものった。

「「「えいえいおう!!」」」

元自衛官が多く、元海上保安官や警察OBもいるので野太い声が朝の東京に響き渡った。すぐに届出を済ませた畑母神が戻ってきて演説を始める。あまり長い演説ではなく短く簡潔なものだったので、鮎美の応援演説も考えていた3分の1に絞り、すぐに選挙カーで出発する。ウグイス嬢が連呼を始め、他の運動員や支持者たちはポスターをもって都内の掲示板に貼って回る。

「関西と関東で、そんなに変わらんですね。選挙の雰囲気」

「そうなのかね。私は関西の選挙を、さほど知らないから」

「うちは関東の選挙、初めてです」

選挙カーの中から手を振る合間に、少し畑母神と会話した。けれど、会話している時間は少なく、ほとんどは街路にいる都民へ手を振っていた。鮎美が選挙カーに乗っていると気づいた都民は地元での反応と同じに喜んで写真を撮っていてくれたりする。

「鮎美ちゃん！ こつち向いてえ!!」

できるだけ要望に応えるようにしながら笑顔を振りまいていた。

「はあ……田舎と違って人が多いですね。休憩が少ないわ……」

歩道に人がいないということは、ほぼ無い都内と、市街地と市街地の間は田んぼという地元では選挙カーの中で気を抜けるタイミングの量に差があり疲れる。トラックとトラックに挟まれて信号待ちするといった状況くらいしか、休憩が無かった。

「芹沢くんが参戦してくれたおかげもあって都民の反応は上々だよ」

「お役に立ててればええですけど」

「十分だよ。総選挙のときは雲泥の差だ。君の人気はすごい！」

「……。それが票につながればええですね」

鮎美は県知事選を応援したときのことを思い出した。人気はあった。女子高生議員ということ、かなり反応は良かった。けれど、結局は御蘇松は夏子に負けた。女性、男性ということより、何の経験もない18歳が応援する高齢男性と、女性であつても知識と経験を蓄えた30代の差という気がする。

「うちは……」

鮎美は言いかけたことをやめた。今は負けた場合のことや、負けるかもしれない可能性についての思考はしたくないし、口にするのも避けたい。鮎美はウグイス嬢の肩を叩いてマイクのスイッチを切り替えた。

「おはようございます！ 畑母神です！ 東京都知事には畑母神を、

よろしくお願いします！ 日本を守る、それができる男です！」

「……ありがとう、芹沢先生……」

畑母神も窓から身を乗り出して街路へ手を振った。それから予定

した各所での演説を終え、午後2時になって昼食休憩となる。選挙事務所に戻ると、鮎美とウグイス嬢はまっすぐにトイレへ入った。便座に腰かけ、ずっと我慢していた尿意を解放すると吐息が漏れた。

「はあ……」

なるべく水分を摂らないようにしつつも、喉を潤す必要もありチビチビとお茶を飲んでいたし寒かったので大量に出た。古いビルのトイレは男女共用で扉が薄い。外にいる男性SPに音を聴かれているかと思うと恥ずかしかつたけれど諦めた。トイレを出て30分間の昼食時間を15分で食べて、10分だけでも仮眠したかったけれど、事務所には多くの支持者が集まっていて彼らとの握手や記念撮影があり、ろくに食えることもできなかった。鷹姫が心配してくる。

「芹沢先生、お食事を十分に摂ってください」

「大丈夫よ、どうせ時間ない思て、朝から味噌ヒレカツ食べてきたし」

鮎美が駅弁を買うのは鷹姫もいっしょだったので知っている。鷹姫も同じ物を買ったけれど、その日のうちにビジネスホテルで食べていたし、朝食はビジネスホテルの食べ放題だった。議員宿舎は食事が出るわけではないので朝食会が無い場合などは、ビジネスホテルに泊まる鷹姫の方が待遇が良くて申し訳なく思っている。

「鷹姫は、お昼、ちゃんと食べた？」

「はい、すいません。12時に、ここでいただきました」

申し訳なさそうにする鷹姫の頭を撫でた。

「ほな、うちは、もう行くわ。うちが食べ残したお弁当、悪いけど、もつたいたいし食べておいて」

「はい。せめて、これをお持ちください」

鷹姫は栄養ゼリーとオニギリを持たせてくれた。鮎美は礼を言つて選挙カーに向かったけれど途中で踵を返し、トイレに入っておく。ほんの30分前に済ませたけれど、念のために行くと、それなりに出た。

「よしっ、午後からもガンバロー」

選挙カーに乗ると、畑母神が申し訳なさそうに言ってくる。

「丸一日使って手弁当で、すまない」

「いえ、お弁当なら、いただきましたよ。うちも鷹姫も」

鮎美は意味がわかっていて冗談を言い、笑った。選挙の応援をすればクジ引き議員は5万円が党から支給されるというのは、所属政党からだけで、畑母神が代表をしている日本一心党には鮎美は所属していないし、現在は国会に占める議席がゼロなので政党要件も満たさず、鮎美へ一日5万円を渡すと公選法違反になる可能性が高かった。一日なら5万円でも一週間となれば35万円になり、それなりの大金になる。明日からも国会が終わって17時から応援する予定だったがけれど、鮎美には1円の実入りもない。それを詫げる畑母神へ、鮎美は冗談で返していた。

「…ははは…、では、せいぜい、美味しい弁当を取ることにするよ」

「それより、やっぱり畑母神先生と、そのまんま南…もとい、南国原先生の一騎打ちになりそうですね」

「ああ、そうだな」

都知事選には15人が立候補しているけれど、有力候補は2人だけだった。鮎美はポスターが貼られた掲示板を見る。午前中のうちに都内すべての掲示板に貼ることができたのは畑母神と南国原、そして共産党の候補と自民党の候補だけだった。

「自民は今回も愛知県での選挙みたいに分裂やし」

「うむ」

もともと自民党は都知事選に現職の続投で望む姿勢だったものの、本人が高齢のために辞意を示し、慌てて柔道オリンピックメダリストで国会議員経験があるも落選中だった女性議員を擁立しようとしていたけれど、本人が直前に辞退し、急遽、栃木県知事選に落選した直後の元財務省職員を出しているものの、まるで人気が無く、自民党の都議でさえ3分の1が畑母神の出陣式に来てくれている。民主党は南国原を公認候補として応援していた。

「南国原先生も、総理大臣にしてくれるなら民主党に入る、とか言うたてマスコミに書かれて人気を落とさばつたし、うちも気をつけよ」

民主党との水面下での交渉中に、宮崎県知事にすぎない立場で総理

大臣ならと言ったと不正確な報道をされ人気を落としているものの、最近では鮎美を総理大臣にというテレビ番組での話題もあり、そのイメージは消えつつあった。

「にしても、ミック赤崎とか、明智光秀、ミスター独松って、なんなんやろ……唯一神かつおイエス・キリストとか意味不明なんやけど……これ、キリスト教やから、ギリで殺されへんけど、アラーとか、ムハンマドの生まれ変わり言い出したら、殺されるで。……でも、学歴すごい人もいるなあ……」

鮎美は泡沫候補のポスターを見た。すべての掲示板には貼りきれない候補が多い。

「明智光秀の公約が、当選3日で辞任するから三日天下とか、選挙制度で遊んでるとしか、思えんわ」

「どんな時代にも、たわけはいるのだろう」

そう言った畑母神が沿道に向かって手を振るので、鮎美も選挙活動を再開した。そうして最初の日曜日の夕方を迎えると、早くもライブルである南国原の選挙カーと秋葉原のスクランブル交差点で遭遇した。もともと東京都は広くない上、日曜日に人が集まる場所というのには限られていて、街頭演説をする時間がかぶることは、よくあった。すでに南国原は演説を終えつつあり、畑母神に場所をゆずってもよいタイミングだったけれど、押されて逃げるようにも見えるので、舌戦を挑んで来た。

「今ね、美味しそうな霜降り牛肉みたいな旗が、いっぱい押し寄せてきましたね」

畑母神のカラーは赤と白で日の丸をイメージしているけれど、国旗をそのまま使うわけにはいかないので向かって左半分が赤、右半分が白という二色長方形で構成されている。横縞模様になると米国旗を連想させるので縦にしていた。その色合いが林立すると、霜降り牛肉に見えなくもないことを南国原が言ってくる、畑母神はムツとした。

「無礼なことさ……」

選挙カーの天井に登っている畑母神が何か言い返そうとしたけれ

ど、やや不穏当なことを言いそうだったので鮎美が先にマイクを取った。

「美味しそうなんは、そっちのオレンジやと思いますよ」

「お、芹沢さん、いや、芹沢先生か。うん、そうだね。霜降りといえば、宮崎牛。柑橘類も宮崎が美味しいよ。ステーキにへべスポン酢を絞れば最高だ。少々、柑橘類の味が肉に勝ってしまうけどね」

南国原はオレンジ色の選挙カラーについて鮎美がいじってくるとうまく切り返してきた。鮎美も負けない。

「宮崎牛なんてあるんですか、知りませんでした。勉強になりましたわ。うちは琵琶牛くらいしか知らんし。まだまだ不勉強で、せいぜい日本三大和牛の松阪、神戸、琵琶牛くらいしか覚えておりませんので」

「…。宮崎牛も美味しいよ、ぜひ、こっちに來て食べて」

暗に鮎美がブランド牛としては地元が優位だと言うと、南国原も暗に鮎美を民主党へ勧誘してきた。鮎美が言い返す。

「こっちの水は甘いよ、もええけど、ここは東京やし、そんなに宮崎県に未練が残ってはるなら、帰ってニワトリの世話でもしはったら、どうです。あつちは、まだ鳥インフルエンザで大変らしいですよん」

「言うね。さすがだね。けど、女の子の影に隠れてる幕僚長殿つてのは、どうかな？」

「女を引きよせるんも、男の甲斐性やん。同性愛者のうちでも畑母神先生には惚れ惚れするような尊敬を感じますわ。男好きになれるんやったら、三人目の奥さんにして欲しいほど。悔しかったら、うちより可愛い子、連れてきてみ」

そう言いながら鮎美は畑母神と腕をからめ、マイクを渡した。

「ゴホン…」

畑母神は咳払いした。鮎美はゆっくりと腕をからめるのをやめる。

「口達者な二人の後にマイクを握ると、正直、何を言うべきかと考えてしまうが、私は冗談などより、東京都の現状、そして日本の現状を有権者のみなさまに再認識していただきたい。歌舞伎町で起こる外国

人犯罪、小笠原諸島での外国漁船による珊瑚礁の乱獲、そして東京都ではないが尖閣諸島での事件も、みなさまの記憶に新しいことだと……」

鮎美と南国原の調子の軽い舌戦を聴いているうちにムツとしていた畑母神は冷静になっていて、持論を述べる演説を始めた。おかげで南国原は対抗する糸口が見つからず、もう演説を終えていたこともあり、移動していく。単純な交代劇ではあったけれど、見ていた聴衆には畑母神陣営が勝ったような印象が残った。それから日が暮れてからも夜8時の拡声器使用が可能な時間いっぱいまで交差点や駅前を巡り、拡声器が使えなくなると、鮎美はその場に集まっていた聴衆との握手を始めたけれど、途中でかなり後悔した。

「おおきに、ありがとうございます！ 畑母神をよろしくお願いします！」

なんちゅー人数が多いねん……まだ、いるやん……何千人？ もしかして万とかいるんやろか、と鮎美は握手を求めてくる人の多さに戸惑っていた。地元でも選挙カーの周りに集まってくれた人と握手を交わすことは多かったけれど、せいぜい数百人、多くても千人程度だったのに、東京の人の多さは想像以上だった。しかも朝に装着した貼るカイロの効力が落ちてきて寒い。さらに、弱小政党でしかない日本一心党のスタッフは大規模選挙に慣れておらず、握手を求めてくる人の行列を締め切る、といった対応をしてくれないので延々と2時間近くも寒空の下で握手を繰り返した。ようやく選挙カーに戻れた鮎美は、ぐったりと座席にもたれた。

「……静江はんらの影でのサポートあつてのことやったんや……」

選挙に慣れた静江たち自民党スタッフの助力が無いことは細々としたところで大きな差が出てくる。せめて、そばに鷹姫を置きたいのにSPを乗せる都合や、畑母神の側近の都合もあり、また長い車列を組むと渋滞しやすい都内で不評を買うので同行させられない。ずっと鷹姫は選挙事務所で来訪者の接遇をしている。

「お疲れ様、どうぞ」

畑母神がお茶のペットボトルをくれるけれど、一口だけ飲んで置い

た。結局、お昼休憩から一度もトイレに行けていない。夕食も摂れていない。空腹と尿意を耐えながら選挙事務所に戻った鮎美は、まっすぐにトイレへ向かったけれど、残酷にも二つある個室が二つとも先客で塞がっていて、横にある男子用小便器で用を足している男たちが恨めしかった。

「……うゝ……すみません、まだですか？」

つらすぎて鮎美は個室をノックした。個室の中から返事がある。

「その声は芹沢先生ですか？」

「あ、鷹姫なん？」

「はい。すぐ出ます、お待ちください」

鷹姫が着衣を直している衣擦れの音がする。

「…ハア……もう限界やわ…」

「お待たせしました。っ?!」

鷹姫は戸を開けて鮎美と交代しようとしたけれど、開けた瞬間に鮎美は切迫した顔で個室へ押し入り、鷹姫を押し戻す形で戸を閉めた。

「…ハア……ハア!」

「っ……また、そうやって人が変わったように……私へ性的なことはしないと…」

鷹姫は両肩を握って押し戻され二人きりにされたので何かされるのだと勘違いした。鮎美についているSPは男性だったので個室前で待機していて何も言っていない。鷹姫の両肩を握っている鮎美は息を荒げていて、目はうつろだった。

「……嫌です……何をやる気ですか？」

「…ハア……ハア……うゝ……」

「………鮎美……漏らして……」

鷹姫は足元から昇ってきた湯気と匂いで鮎美が漏らしてしまったことに気づいた。お昼から寒い中、ずっと我慢した小水は今までにないくらい大量でナプキンをあてていたことが逆にわざわいして防波堤のように流れを塞いでしまい、真下へ漏らせば下着は濡らしてもス

カートの濡れなかったのに、立ったまま失禁してもナプキンの中にダムのように溜まり、溜まりきって股間の前後左右から勢いよく溢れてしまい、スカートの前後まで濡れていく。靴や靴下も濡れた。

「……………ハア……………また、漏らして……………しもた……………」

「つ……………申し訳ありません……………私のせいで……………私が、もたもたして……………」

謝る鷹姫は涙を流した。

「…私のせいで……………なのに、疑ったりして……………」

自分のせいで鮎美が間に合わなかっただけでなく、変に疑ったことが申し訳なくて、この場に土下座したいほどだった。

「……………うゝ寒つ……………冷えてくると、余計寒いわ」

鮎美は後ろ手で個室の鍵を閉め、下着をおろす。ナプキンが薄黄色に染まり膨らんでいた。

「すみません、申し訳ありません、ううっ……………」

「なんで鷹姫が泣いてんのよ?」

「だって……………私のせいで……………。鮎美は泣かないのですか?」

「幼稚園児やあるまし、おもしろいのに泣いてられんよ」

「……………傷の具合は、まだ悪いのですか? 隠していたのですか?」

「ううん。傷は治ってるよ。っていうか、午後2時から、ずっと我慢させられたら、そら漏らすよ。今までの選挙では静江はんらが、それとなくタイミングをつくってくれたし、コンビニにも広い駐車場があったのに、東京ってホンマにトイレ一つ不自由するから、驚くわ」

「……………すみません……………役立たずのうえに、邪魔までしてしまい……………」

「そういう意味で言うたんちゃうよ。けど、濡らしてしもた服、どうしよ。このままでは外に出られんし……………」

「私の服をお使いください」

そう言つて鷹姫はスカートと下着を脱ぐ。

「え……………そやけど……………鷹姫は、どうするん?」

「濡れた物を貸してください」

「……………鷹姫が漏らしたみたいに見えるよ? ええの?」

「鮎美は常に周囲から注目されています。私は影に隠れていれば、そ

う目立ちませんし、もうビジネスホテルへ帰るだけです。ここから走って帰ります」

「……………距離的には5キロくらい……………風邪ひかん？」

「走れば身体も温まりますし、途中で乾くと思います」

「……………うん……………けど、鷹姫、こういうの人一倍、恥ずかしがるやん。ホンマに平気？」

「はい」

「……………どうしよ…」

「寒いです。早く交換してください」

下半身裸の鷹姫が自分のスカートと下着を押しつけてくれる。

「……………おおきに、ありがとうな」

鮎美も濡れたスカートと下着を脱ぎ、鷹姫へ渡す前にナプキンを剥がして汚物入れに捨てた。

「パンツは2枚重ねて穿けば、濡れてても透けへんと思うし」

「はい」

もともと2枚穿きしていた鮎美の下着を鷹姫も2枚重ねて穿いた。寒いトイレの中で濡れた下着を身につけると、かなり冷たかったけれど、それは表情に出さない。鷹姫が濡れたスカートも穿くと、鮎美は軽い興奮を覚えた。鷹姫は制服を一切改造していないのでスカート丈も長い。鮎美は少し改造したので短くなっている。普段、見慣れた鷹姫の制服姿でも少しスカートが短くなると、より魅力的だった。

「そんなにジツと見ないください。恥ずかしいです」

鷹姫が濡れているスカートの股間を両手で隠した。その表情が可愛らしくて余計に興奮が強くなる。

「ごめん」

これ以上見ていると、また衝動に支配されそうなので鮎美は背中を向けて鷹姫の下着とスカートを穿いた。

「このままやとスカート交換したの丸わかりやし、うちの方は巻くわ」

スカート丈を合わせるために、鮎美はウエストの部分で2回ほど巻いた。それでスカート丈は同じになる。

「鷹姫の方は、どうしようもないね。ダッシュで帰る？」

「はい」

「ごめんな。濡れ衣を着せて」

「いえ、私のせいですから。もう行きます」

二人で個室を出ると男性SPが黙ってついてくる。おそらく会話は聴かれていたと思うけれど、守秘義務に期待して選挙事務所内を平静をよそおって二人で通り過ぎる。畑母神や選挙対策委員長、その他のスタッフたちも疲れていて、何も言っていない。鷹姫を先に行かせて鮎美は事務所の出入口で振り返った。

「ほな、うちは帰ります。また、明日。午後5時に国会前で」

「ああ、よろしく頼む。よく休んでくれ」

「はい、畑母神先生も、しつかり休んでください」

うまく気づかれずに事務所から議員宿舎に帰った。鷹姫からもメールで無事にビジネスホテルへ戻ったとの連絡が入り、安心して風呂に入ってからテレビを見た。ニュースキャスターが今日の知事選開始を報道している。

「本日スタートした東京都知事選は……」

報道のされ方に大きな問題はなく、平等な扱いだと感じた。

「続きまして、さきほど結果が出ました愛知県知事選挙と名古屋市市長選の結果をお伝えします」

「どうなったんやろ……自民公認候補と自民を飛び出した議員さん……」

「愛知県知事選挙では大村秀章氏が100万票を超える得票にて当選されました。名古屋市市長選挙では河村たかし氏が再選されました」

「あのオッチちゃんら、勝ったんや……名古屋から総理を狙う男、とか自分で言うてる。……市長選は再選が妥当かもしれんけど、県知事選、よう頑張ったなあ、大村さん、自民党の公認候補選びが迷走してるからって自分が出る言うて河村さんと組んだけど、自民党からは、めっちゃ止められたのに、それでも圧勝や……っていうか、与党のほの民主党が推す御園真一郎さんが3位止まりって、愛知県って民主

王国やって久野先生が言うてたのに、……政党的影響が落ちてるんかな……けど、選挙は組織で戦わんと、兵糧の巡りも悪いし、段取り悪いと、トイレも行けへんし……。民主と自民の二大政党で交代って流れやなくて、細川と山名が応仁の乱でメタメタになったみたいのに、これから戦国時代になるんかなあ……」

鮎美はベッドに寝転がって考え事をするけれど、入浴前に脱いだ鷹姫のショーツに目がいった。

「……鷹姫の……」

手を伸ばしてショーツを取り、見つめる。

「……………鷹姫……………匂いを、嗅いでもいい？」

ここにいないのに、一応は問い、拒否が返ってこなかったという政治家らしい思考をしてから、鷹姫のショーツを顔に近づけた。

「……………ハア……」

鷹姫の匂いがする。鷹姫の腋より強い匂いで、鬼々島で造られている鮎寿司と似たところもあるような匂いなのに、何度も嗅いでしまう。

「……ハア……」

もつと嗅ぎたくてショーツを広げ、鷹姫の股間にあっていたところを見つめた。朝から一日、鷹姫の股間にあっていた布には白っぽいオリモノが着いていて、そこを嗅ぐと一番匂いが強い。

「ハア……………」

自分の唾液をつけると匂いが変わってしまうことはわかっているも、つい舐めてしまう。何度か舐めて、それから口に入れた。

「……ハア……………ハア……………」

そのまま右手を自分の股間へ滑り込ませると、もう濡れていて、つい自慰を始めた。

「……ハア……ハア……ハア……っ……」

だんだん快感が強くなってくる。

「ハア……ハア……ハア……鷹姫……ハア……ああ、鷹姫、好きよ……ハア……」

声に出すと余計に興奮するし、どうせ誰もいない一人だけの部屋なので大きな声で言ってみる。

「好きよ！ 鷹姫！ 大好きよ!! 鷹姫!! ああ！ 鷹姫い！」

ずっと想ってきたし、今も想っている。そして、この一年近く演説で鍛えた喉は一日の選挙戦の後でも大きな声で愛を響かせた。絶頂し、その余韻に浸っていると、玄関のチャイムが鳴った。

「っ…誰やろ」

慌てて服を着ていると、激しくドアを叩かれる。

「何かあったっすか?!」

ドアの向こうから知念の声が響いてくる。一人でいるはずの鮎美が何度も大声を出したことを不審に思っているようだった。

「っ…なっ、なんでも無いですわ!!」

「そうですか。けど、規則なんで一度開けてくださいっす!」

「なんでも無い言うてるやん!」

「すいません! 規則なんで! 何でもないと言わされている可能性もあるんで! 開けてもらえないなら、こちらのカードキーで開けますよ!」

「ちよっ、ちよい待ち!」

鮎美は振り返って室内を見る。電マは出していないけれど、鷹姫のショーツがベッドの上にある。せめて、それは隠したかったのに知念と男性SP3名が突入してきた。

「大丈夫っすか?!」

突入してきた知念は拳銃を抜いていたし、遠慮無く鮎美を抱き庇い、他の3名は室内やバスルームを拳銃をもったままチェックしている。

「…う…レディーの部屋をお…」

脱いだ靴下やブラジャーなど見られたくないものは多いし、あまり男性に対して羞恥心は覚えなないといっても自慰していたことに気づかれるのは人として恥ずかしくない。怒りたかつたけれどSPたちの真剣な表情を見ると、守ってくれているのだと感謝も湧いて諦めたし、男性たちは鮎美の部屋に女物のショーツがあることは当然としか感じなかったようで、かなり怪しく枕元に裏返しになって置いてある鷹姫のショーツについては何も問われなかった。

「おおきに……何でもなかったんです……すみません」

「どうして、あんな大声を出してたっすか？」

「それは……」

鮎美は言いたく無さそうに目線をそらせ、そして嘘をつく。

「演説の練習をしてました。なるべく大きな声を出せるよう」

「そうっすか。お騒がせして、申し訳ないっす」

「いえ、守ってくれてはるって感じます。おおきに」

知念たちが出ていき、鮎美はタメ息をついたのに、すぐにチャイムが鳴った。

「なんやの、まだなんか、あんの……っ、鷹姫」

「連絡もなく急に訪ねて、すみません」

玄関を開けると知念ではなく鷹姫がいて驚いた。知念たちはSPらしくドアの左右に整列している。

「どないしたん？」

「お弁当を買ってきました。夕食をきちんと召し上がっておられなかったので。あと、朝食も買ってきました。連絡すると遠慮されると思い勝手ながら無断で……遅い時間に、すみませんでした。すぐ帰ります」

玄関を開けながら文句を言われたので鷹姫は、すぐにも帰りそうな申し訳ない顔をしている。鮎美は慌てて引き止めつつ、さらに慌てる。

「ごめん、おおきに。ちょっと待って！ 部屋の中を片付けるし」

「お手伝いします」

「ええから、そこで待って！」

急いで鷹姫のショーツや自分の洗濯物を洗濯機へ入れて証拠隠滅すると、鷹姫を中に迎えた。鷹姫は5つの弁当をテーブルに並べた。

「どれでもお好きな物をどうぞ」

「おおきに。ほな、これを今食べて、これは朝食用にするわ」

鮎美は夕食としてタヌキそばを、朝食としてカルビ弁当を選んだ。あとの三つは鷹姫の夕食になるのだと、長い付き合いになってきてい

るのでわかる。

「お金は精算しといて、うちの私費で」

「いえ、たまには私から、おごらせてください。いつも、ごちそうになっていきますから」

「そんなん気にせんでええのに。でも、おおきに、嬉しいわ」

二人でコンビニ弁当での夕食を初め、ニュースや選挙戦、時事問題のことを話し合っていると、詩織からメールが入った。

「……………」

また二人で電話オナニーしよとか、そういう話かな、と鮎美は鷹姫には絶対に見られない角度でスマートフォンを操作したけれど、思ったより真面目な話でワシントンから流れた発表放送を動画ファイルで送るので、すぐに見て欲しいというメールだった。鮎美は椅子に座ってパソコンを開いた。受け取ったファイルを再生すると、そこにドミニクと夏子が映る。背景にはIMFのロゴがある。

「IMFは検討を繰り返した結果、日本のアユミセリザワとナツコカガタ経済学博士が提唱した主要通貨の足並みをそろえた緩やかなインフレ政策による、いわゆる連合インフレ税を主要各国が採用することを強く勧めることとした」

ドミニクに続き、夏子が発言する。テロップに夏子の学位と日本の県知事である旨が表示される。夏子は自信をもって話し始めた。

「このためにIMF8条国に適応できる時限条項を追加し、参加国は他の参加国との間で為替相場を半固定化させます。完全な固定ではなく、一週間に一度、水曜日のみ1%を最大上限幅として変動させ、大きな変動や投機的な資金の動きによる変動を強く抑制しつつ、完全な固定化による弊害をも防ぎます」

「……………加賀田はん……………今、ワシントンに……………県知事やのに……………放送が夜11時過ぎやから……………すぐ帰れば、そんなに遅刻にならんかな……………というか録画放送なら、もう飛行機の中かも……………。現地時間は……………朝9時過ぎ……………この時間にしたんは、日本市場が開くまで時間があるし、ニュージールランドでも、まだ週末休暇中や……………ええタイミングで発表してくれたんや……………新聞も間に合う。愛知県知事選投

開票で印刷を遅らせてるとこ、編集現場はパニックになるやろけど、ギリギリ間に合う。一面は、どっちになるかな……」

鮎美がつぶやきながら思考を巡らせているうちに夏子の説明が続き、ドミニクがしめる。

「このプランによる体制をアユミ・ナツコ体制と呼ぶ。IMFは主要各国からの参加表明を心待ちにしている」

「……………フフ……………フフ……………やった、……………IMFを動かした……………ここまで……………ここまで来た」

「はい、ついに、ここまで」

鷹姫も嬉しそうに頷き、鮎美は椅子から立ち上がった。

「ヤッタあ!!!」

大声で喜び叫んだ。

翌2月7日月曜の朝、鮎美は新聞とスマートフォンを鷹姫と見ていた。

「思ったより反応薄いなあ……………一面にIMF発表を載せたんは日経新聞だけやん」

「そうですね……………掲載していない新聞もあります……………愛知県知事選と名古屋市長選のインパクトが大きかったのでしょうか……………」

「八百長問題で大相撲春場所中止とか、そんなん、どうでもええやん」

「人々の関心の方向性が違うのでしよう」

二人とも残念そうにしている。

「為替相場も、動いてないなあ……………動かん方がええんやけど……………」

「ニュージーランドは規模が小さいですから、日本市場が動き出せば変化はあるかもしれません。おっしゃるとおり変動は無い方が良いのですが……………こうも無反応とは……………」

「けど、金地金だけは着実に上昇してるなあ……………これ、24時間以内に50000円を超えそうやん」

「はい」

「まあ、ええ、ここは一つ様子見しておこ……………様子見……………市場も様子

見なんかな…」

気を取り直した鮎美は議員宿舎から国会へ向かう。途中で3人の記者が駆けよってきた。

「芹沢議員！ アユミ・ナツコ体制の真意は?!」

ぶら下がり取材に対して鮎美が足を止めたので鷹姫とSPたちも止まった。鮎美は落ち着いて答える。

「すでに述べておりますように、連合インフレ税の実施による世界の不均衡を正すためです」

「タックスヘブンを空爆せよ、という言葉がアメリカで拡がっていますが、どうお考えですか?!」

「私の真意ではありませんが、そう考えるアメリカ市民は格差社会に苦しんでいるのだと考えます。私の真意は武力的なことではなく制度的な改革です」

「芹沢議員は同性愛者とのことですが、加賀田夏子県知事とは、どういった関係ですか？ お二人とも未婚ですよね？」

「………」

鮎美は質問を無視して歩きだそうとしたけれど、夏子に迷惑がかからないよう足を止めて答える。

「政治的な方向性が一致する部分もある賛同者というだけです。世界経済レベルでは、ほぼ完全に一致して、いっしょに考えていますが、地域経済ともなれば新幹線新駅の問題など、一致しない部分もあります。何より、私を感じるどころ、加賀田知事は、おそらくはノンケ…、失礼、いわゆるノーマル、多数派であるところの同性愛者だと感じます。同性愛者が同性愛者にアプローチするほど無駄なことはありませんから。……。失礼します」

自分で言いながら、胸に痛みを覚えたけれど、それも表情に出さず、鷹姫と登院した。鷹姫は鮎美が審議に出席してしまおうと、お昼休みまでの時間を別行動にする。鮎美に頼まれた買い物をするため、連泊しているビジネスホテルに戻ると制服を脱いで私服に着替えた。

「芹沢先生の名誉のため、絶対にマスコミに見つかからないよう行動しなければなりません。肝に銘じなさい、宮本鷹姫」

バスルームの鏡に向かって自分へ言い聞かせると変装する。いつもはポニーテールなのをおろして三つ編みに結い。コンビニで買ってきたメイク道具で濃いアイメイクをして後悔する。

「……これではパンダ……」

目の回りを黒く塗りすぎてしまい、変な顔になった。

「いえ、隠密行動らしくてよいかも……」

さらにマスクをして口元を隠すと、伊達眼鏡もした。

「これで芹沢鮎美の秘書とはバレないはずです」

準備ができたのでビジネスホテルを出ると、電車に乗り千代田区から離れて荒川区まで行き、ドラッグストアに入った。

「……………」

店内を歩き回り、目的の商品を探す。

「……………」

「何かお探しですか？」

20代後半くらいの女性店員が声をかけてきた。

「え……いえ……別に……」

「ご用のときはお声がけください」

女性店員は鷹姫の変装と口調で知られたくない物を買うのだと察して、離れていく。鷹姫は店内を一巡して目的の商品を見つけたけれど、戸惑った。

「こんなに種類がたくさん……どれを買えば……」

一つの商品棚が埋まるほど種類と量があり、どれを買うべきか迷う。ずっと迷っていると怪しまれるので一旦離れたりしながら、何度も近づいて品定めしていると、さきほどの女性定員が見かねて声をかけた。

「大人用オムツをお買い求めですか？」

「つ……い……いえ、違います……。いえ……その……少し説明をしていただけだと、ありがたいかも……しれません。勉強のために……た、たとえば、身体障碍者の苦勞を知るなど……いろいろと……ハア……」

緊張のあまり汗が噴き出して伊達眼鏡が曇り、マスクをした口元の

息が荒くなったので女性店員は色々察した。

「お使いになるのは、お客様ですか？」

「っ……、ち……違います！」

「では、どういった方がお使いですか。男性、女性？」

「………女性です………」

「身長や体格は？」

「………こ………個人情報ですから、言えません。ハア……ハア……」

「………。サイズがありましてフィットしないと窮屈だったり、ずり落ちてしまったりしますよ。ご使用になる人と、お客様の体格は、どのくらい違いますか？」

「ハア………ハア………少し私より小柄です……ハア………」

「私くらいですか？」

女性店員の体格は鮎美に近かった。

「はい、そうです。ハア……」

「ではSサイズか、Mサイズですね。身体に何か障害があつてお使いですか？ おしつこの量は多いですか？ 少ないですか？」

「……ハア………ハア………」

鷹姫は昨夜、古いビルのトイレで失禁してしまった鮎美の量と、国会議事堂で車イスに座ったまま漏らしてしまった量を思い出す。

「……お………多いときもあれば………少ないときもあります………障害は治りました」

「障害が治った………のに、お使いなのですか？」

「……ハア………い………いろいろと事情があります………ハア……ハア……」

この場から逃げ出したような鷹姫の目を見て女性店員は心配する。

「あの………もし、彼氏とかに強制されて買いに来てるなら、そんなSMを強要するような彼氏とは別れた方がいいですよ。ホント」

「い、いえ！ 彼氏はいません！ 許嫁はいます！ SMはしません！」

鷹姫が大きな声で答えたので、他の客がこちらを見てくる。一目見て不審な客だと思われるっていくし、だいたいの大人用オムツを買う世代は親が寝たきりになった50代60代か、逆に子供に大きな障碍がある40代50代なので鷹姫のような健康そうな若い女子が買いに来ると、かなり目立っていた。

「…ハア…ハア…早く、売ってください…ハア…」

「わ、わかりました。えっと…Sサイズで、多めに吸収できる商品は、こちらと、こちらになりますか、どうされますか？」

「…ど…どちらが動きやすく目立ちませんか？」

「こちらのパンツ型が目立ちにくいかと思えますよ」

「…………絶対に着けていることはバレませんか？」

「…………。スカートで、ご使用ですか？ズボンで？」

「スカートです」

「どんなスカートですか？」

「…………このくらいの丈の…襷のある…………」

「女子高生の制服のようなスカートですか？」

「っ…いい、いえ！女子高生のような女子高生でないです！」

「…………。スカートで見えてもバレたくないなら、上から短いスパッツを穿くといいですよ。ご案内しましょうか？」

「お、お願いします！ハアハア」

極度に緊張しながら鷹姫はSサイズの大人用オムツと丈の短い黒スパッツを買った。あまりに可哀想なので女性店員は持ち歩いても見えないように濃い色のビニール袋を二重にしてオムツとスパッツを包んで渡してくれた。汗でメイクを溶かしながら鷹姫はビジネスホテルに戻ると、今夜の選挙戦で必要になりそうな2枚だけを30枚入りの袋から取りだして、スパッツと風呂敷に包むとカバンに入れた。

「あとは、お昼休みにお渡しするのみ…………」

準備を整え、メイクを落としてポニーテールを結び、制服に着替えて待つ間、相場を調べた。

「やはり為替も株式も、ほぼ無反応……………けれど、金だけは4400

円を超え、もう4500円に迫りそうな勢い……」

少し気分が落ち着いた鷹姫は早めに国会議事堂へ向かおうとしたけれど、携帯電話が鳴った。

「はい、芹沢鮎美の秘書、宮本です」

「…。石永静江です」

「ご用件をどうぞ」

「芹沢先生は、まだ審議中？」

「はい。おそらく」

「昼休みに入ったら一番に私へ電話してもらって。周りに人がいない環境で」

「わかりました。お伝えします。悪い知らせですか？」

「ええ」

「わかりました。慎重に伝えます」

再び鷹姫は緊張したけれど、さきほどとは質の違う緊張だった。国会議事堂に向き、委員会が終わって出てくる鮎美へ耳打ちする。

「石永さんから、すぐに電話がほしいとのことでした。周りに人のいない環境でかけてほしいと。残念ながら悪い知らせのようです。また、例の物は買いつけております。こちらを、どうぞ」

「おおきに」

鮎美は風呂敷包みを受け取ると、国会の前庭へ出た。ここなら自分が大声を出さなければ聞き取られることはない。静江に電話をかける。

「静江です」

「悪い知らせって何？」

「緑野さんのお母様が、さきほど支部へ来られました」

「っ…、それで？」

「娘さんと芹沢先生の関係について、お話ししたいことがあるため、今日中にお会いしたいとのことでした」

「今日で……」

本日は17時まで国会で、その後は畑母神の応援に出るので23時くらいまでは予定に空きはない。まして地元に戻ることは不可能

だった。

「ご無理なのはわかっていきますから、丁寧にお断りしたのですが、なんとしてもこのことで、また芹沢先生のお父様も同席しておられ、深刻な雰囲気でしたので、午前0時過ぎであれば、議員宿舎にて面談可能かもしれないと、お答えしました。受けられますか？」

「夜中なら空いてるけど……それって、どういう話なん？」

「芹沢先生と緑野さんの性的な関係について、だと思えます」
「……………」

わかってはいたけれど、問わずにはいられなかった鮎美へ最悪の答えが返ってくる。背筋がザワつき、腋の下に汗が湧いた。静江が落ち着いて言ってくる。

「私も同席します。時間が時間ですし目立たない方がよいですし終わり次第、お帰り願うと思いますからクルマで向かいます。宮本さんや牧田さんにも伝えない方がよいでしょう。こちらでも情報はできるだけ秘匿します」

「……………うん……………おおきに……………」

「顔に出ないよう気をつけてください。今、日本で一番、注目されているのですから」

「……………おおきに……………」

電話を終えた鮎美は沈んだ顔になりそうなのを取り繕う。そして気持ちも切り替える。

「考えんとこ……………相場は、どやろ」

スマートフォンで情報を見て、議員食堂に向かった。先に食べているように言っておいた鷹姫が音羽や翔子たちと昼食を摂っている。

「……………」

一瞬、目が合い、鮎美は微笑をつくった。

「ご飯、何を食べよ。考えるの面倒やし、カレーにでもしよかな」
「国会のカレー、美味しいですよ。任期中に何回、食べることになるのかなあ」

翔子が言い、周りの議員たちも考える。やはり任期中、かなりの回数、この食堂で食べるので、思えば考え深い。

「ここが日本の頭脳の胃袋なんやねえ」

「アメリカとかイギリス、中国なんかは、何を食べてるんだらうね」
音羽が軽く言った。

「どうやるね。とりあえずカレーにしとこ」

やや食欲が無いので飲み込みやすいものを選んで食べ、昼休みが終わる前にトイレで用を足した後、鷹姫が買ってくれた大人用オムツを着けた。

「見栄はってパンツで漏らすより、オムツ濡らす方がマシやし」

入院中も何度か嫌々受け入れたオムツだったけれど、真冬の東京での選挙を考えると、いつそベストな選択に思える。

「もしかして、従来の選挙で女性議員が少ないのって、こういうことも影響してんのかなあ」

短いスパッツも穿いてオムツを隠すと制服を整え、午後の審議に出席し、夕方からは選挙カーに乗った。わずか3時間しか拡声器での応援演説ができないので一度の休憩もなく応援弁士を勤め、さらに集まっていた聴衆との握手もした。日曜日に比べると、やや少ないものの、それでも田舎とは比べものにならない人々がいて、大学生や高校生も握手や撮影を求めてくるので丁寧に対応していると、終わったのは昨日と同じくらいの時間だった。事務所へ戻る選挙カーの中で畑母神が言ってくる。

「やはり芹沢先生の人気は圧倒的だ。戦列に加わってくれた5時から、聴衆の反応がまるで違う」

「女の子やし、それが珍しいって部分が大きいですよ」

「いやいや、同じ女性でも水田くんに演説してもらっているときと比べても格段の差がある」

「……。それ、本人に聴こえるところで、絶対言わんようにしてください。女は怖いですよ」

「…そうか。……わかった、気をつけるよ」

そう言った畑母神は明日のスケジュールを自分の秘書と確かめ始めたので、鮎美は座り直して尿意に耐えるけれど、限界が近い。

「……………」

あかんわ、事務所まで我慢できそうにない、そのためのオムツなんやし、してしまお、と鮎美は諦めて力を抜いた。股間が生温かくなり、切ない吐息が漏れる。

「…はああ…」

「……………」

隣りに座っていた介式が鮎美を見てくる。

「芹沢議員、どうかしたか？」

「……………」

音は立てないようにしたけれど、どうしても隣席にいる介式には伝わったかもしれないし、オムツのおかげで匂いも昇らないものの、鮎美自身かすかに感じたので介式も感じたかもしれない。

「小便をしたのか？」

「……………」

「宮本くんに着替えをもってきてもらおうか？」

「いえ、大丈夫です。吸収してくれるようにしてるんで」

「そうか」

「そういうば介式はん、見事に任務中はトイレに行きませんね。オムツでも着けてるんですか？」

「いや」

「それで漏らしたことないんですか？ 任務終わってギリギリ駆け込みで漏らしたりしません？」

「……………」

「……………」

あるんや、と鮎美が黙って介式の顔を見てみると睨まれたので目をそらした。事務所に着してトイレで濡れたオムツをビニール袋に片付けカバンに入れると、ショーツを穿いた。個室を出ると鷹姫が心配してくれる。

「芹沢先生、大丈夫でしたか？」

「うん、おおきに、おかげさまで」

心配をかけないよう笑顔で応え、議員宿舎に帰って鷹姫と遅い夕食

を損った後、鷹姫はビジネスホテルへ帰ってもらおう。鷹姫が見えなくなるのと、鮎美は介式を振り返った。いつも通り部屋前にいてくれる。

「介式はん、そろそろ交代の時間ですよね？」

「ああ」

「悪いんですけど、これから女性の来客があつて難しい話になるかもしれないんです。男性SPに同席してもらうのは、ちよつと困るような話かもしれないので。任務を延長してもらえませんか？」

「わかった」

「トイレ、よかつたら使ってください」

「必要ない」

「……。あ、知念はん」

交代要員だった知念と男性SPが近づいてくる。お互いに敬礼して交代を確認するのが通例だったけれど、介式は残った。

「今少し私も警護する」

「介式警部が？」

「女性の来客があるそうだ」

「そつすか……。お疲れ様つす」

「介式はん、来客があるまで休憩してください」

「必要ない」

「……。話が長くなるかもしれませんが」

「問題ない」

「……。休憩せんと、注意力落ちますよ？　せつかく知念はんらも来てくれはったんやし」

「そうつすよ。休憩してください」

「了解した」

「ほな、部屋の中へ、どうぞ」

鮎美は室内へ介式を招き入れ、トイレを勧める。

「どうぞ、トイレも使ってください。今まで気がつかんで、すみません」

「……。お借りする」

やはり我慢していたようで介式はトイレに入った。鮎美は紅茶と洋菓子を用意し、トイレから出て来た介式に勧める。

「お腹も空いてはるでしょう。どうぞ」

「……………。私を口説くつもりなら無駄だと言っておく。そして、不快だ」

「そういうつもりやないんですけど……………ただ、たんに、うちの都合で延長させたし悪いなあ、と」

「……………」

「ご不快なら、仕方ないですね……………すみません」

鮎美は2杯の紅茶を一人で飲み、洋菓子はそのままテーブルに置いておく。しばらくしてチャイムが鳴った。訪ねてきたのは鐘留と母親、そして静江、玄次郎だった。鐘留は子供のように静江の腕にすがっている。そして、母親は敵意丸出しで鮎美を睨んできた。いつも穏やかで会うと、にこやかに微笑んでくれるのに今は敵意しか感じない。そんな様子を見て介式は鮎美のそばに立った。

「どうぞ、中へ」

鮎美は室内のソファを勧めて、紅茶を淹れようとしたけれど、鐘留の母親が怒鳴ってくる。

「二度と鐘留に近づかないで!!」

「…………。お話の本題は、それですか?」

鮎美は相手の興奮を冷まそうと、穏やかに問うてみたけれど、無駄だった。

「他人様の娘をヘンタイ趣味に巻き込んでおいて、その態度は何ですか?!」

「……………」

「芹沢先生、私から状況を説明します。奥様もよろしいですか?」

「……………」

沈黙で肯定があり、静江が語る。

「今朝方、支部の方に緑野さんとお母様の鐘美（かねみ）さんが、お二人で訪ねてくださいました。大変に重要なお話で芹沢先生御本人へ訴えたいとのことでしたが、なにぶん東京にありますことを、奥様に

もご理解いただき、私の判断で芹沢先生のお父さんをお仕事でしたが、お呼び立てさせていただきました。それから奥様のお話を長い時間おうかがいいたしております。その要点は、芹沢先生が緑野さんへの接触を断つこと、緑野さんが秘書補佐を辞すること、これらをすべて秘密にすることです。どうしても今すぐに芹沢先生へ訴えたいとのことでしたので、お父さんにクルマを出していただき、駆けつけておりますが、このこと自体、妊娠中の芹沢先生のお母さんにも、緑野さんのお父様にも知らせていません。お父さんは急な出張、緑野さんと奥様は気まぐれに温泉旅行に出かけたということになっています」

簡潔に語る静江の顔には疲労の色が濃い、そして玄次郎も長距離運転で疲れている顔だった。

「…アタシ…辞めたくないし…」

静江の腕にすがったままの鐘留は怯えた声でつぶやいた。鐘美が怒鳴る。

「鐘留は黙ってなさい!!」

「っ…うっ…」

鐘留が泣き出した。親子ゲンカの段階で済むうちは鐘留が優位でも、母親が本気で怒ると太刀打ちできない様子で、怯えて泣いている。

「カネちゃん……」

「二度と娘に近づかないで!! 二度と! 二度と!! 二度と!!! その顔を見せないで!! まともな育った鐘留を、よくも!! よくも!!」

「……少し落ち着いてください」

鮎美がなだめようとすると、鐘美はテーブルにあった洋菓子を投げつけてくる。投げられた洋菓子は鮎美の顔面へ直撃するコースだったけれど、介式の腕が守ってくれた。

「大事な娘をよくも!!」

洋菓子を投げつけただけでは飽き足らなかつたようで、鮎美の髪をつかもうとしてきたけれど、介式が手首を捕まえて捻る。

「ううっ?! 痛い!! 何するの?! 警察を呼ぶわ!!」

「私が警察だ。芹沢議員への暴行はやめろ！」
「っ……」

介式の迫力ある声で警告されると、鐘美は悔しそうに引き下がる。

「よくも……被害者は、こっちなのに……」

「どうか落ち着いてください。うちとカネちゃんて話をさせてください」

「娘には二度と触れさせない!! ひああああああ!! きいいいい!!」

金切り声をあげて鐘美が頭をブンブンと振る。鐘留に似て美人なのに、形相が怖くて般若のように見える。

「鐘留はね! 鐘留は大切な娘なのよ!! うちの跡取りになるの!!」

400年続く、かねやの大事な跡取りを産む身体なの!!! うみひいひい!!」

「……………」

あまりにヒステリーを起こしていて、静江と鮎美が引き、見かねた玄次郎がなだめる。

「奥さん、どうか、落ち着いて、奥さん」

「鐘留は失敗作じゃない! まともな子だったの! それを、よくも!!」

「落ち着いてください、奥さん」

「同性愛者なんてデキソコナイのキチガイにしないで!! たった一人の娘なのよ!!」

「奥さん! 落ち着いて!」

「ひあああ! 私はもう産めないのよ!! だから、たった一人なの!!」

芹沢家だって、娘がデキソコナイの失敗作だから、二人目を産むんでしょ?! 私に子宮はもう無いのに!!」

「……………」

鮎美は失敗作と言われても聞き流した。気持ち悪い、ヘンタイ、キモい、色々と言われ慣れていたので聞き流したけれど、玄次郎が怒鳴る。

「黙れ!!! 鮎美は失敗作ではない!! 最高傑作だ!!!」
「っ……父さん……」

鮎美は胸が熱くなつて涙を零したし、鐘美は怒鳴られて急に勢いを無くして怯える。まるで虎に吠えられた子猫のように身震いして小さくなり、その怯え方は娘に似ていて、言葉の選び方も精神的な脆さも親子なのだと感じさせる。

「っ……私は……被害者……なのに……」

「失礼した。女性相手に大声を出して、すまない」

玄次郎が形だけ詫び、母親が勢いを無くしたので鐘留が口を開く。

「……アタシ……秘書補佐、辞めたくない……アユミンといたい……」

「カネちゃん……」

「鐘留……こんなヘンタイに……ヘンタイの仲間になるの?」

「アユミンは……アユミンはヘンタイだけど、友達だもん! 気持ち悪いけど、慣れてきたしー!」

「っ……ああ……鐘留……鐘留が……鐘留が、失敗……ううっ……、よくも……あなたのせい、……あなたのせいだから……」

怯えながらも鐘美が恨みがましく鮎美を睨んでくる。

「あなたのせいよ……あなたのヘンタイが伝染した……うちの大事な子に……あなたのせいで……そうよ、あなたのせいなんだから、あなたの子宮を貸して……」

「……え?」

「あなたの子宮を貸してよ。どうせ、同性愛者なんだから、子供を産まないってテレビで言ってた。だったら、子宮を貸して、私の子を産んで。まともな子が生まれてきたら、鐘留は捨てるから、あなたにあげる」

「なっ……なんちゅー……思考を……」

「ヤダ! アタシを捨てないで! ママ! 捨てちゃヤダ!」

「貸してよ、子宮、私のまともな子を産んで」

「……」

鮎美が黙ると、鐘美は玄次郎にすがる。

「貸してください。うちの娘を盗ったんだから、あなたの娘を貸して」

「…お…奥さん…どうか、落ち着いて」

玄次郎も狂気じみた顔ですが、つてくる鐘美に、青ざめて引いた。

「貸して、貸して、子宮を貸してよ」

すがりつく鐘美は玄次郎の身体に身を寄せている。二人とも既婚者だということを考えれば、不貞なほどだった。鐘留が静江にすぎるように、とにかく何かにすがっていないと生きていけないような顔をしている。

「ヤダヤダ！ ママ、アタシを捨てちゃヤダ！」

鐘留が静江から離れて、母親にすぎた。それで鐘美も娘にすぎる。すがり合って二人とも泣きじゃくるので鮎美は言わざるをえず、告げる。

「もう二度と娘さんと性的な関係をもつことはいたしません。誓っていたしませんので、どうか、友人として接すること、秘書補佐の仕事をしていただくことをお許しください。娘さんと二人きりになることも、いたしません。身体を接したりもしません。どうか、どうか信じてください。お願いします」

鮎美が礼儀正しく頭をさげた。

「……………」

玄次郎も静江も介式も見ていて、どちらが大人なのかと思うほど鮎美は落ち着いていたし、鐘美と鐘留は子供だった。鮎美の誓いが効いて、泣きじゃくっていた親子は落ち着き、玄次郎は鮎美を心配しつつも、これ以上、鐘美と鐘留が娘と同室にいるのは望ましくないと考え、二人を立てさせた。

「奥さんと娘さんを送ります。石永さん、残って鮎美をお願いします」

「はい、わかりました。運転、お気をつけください。くれぐれも、無理の無いように」

「ああ、ありがとう」

玄次郎は鐘留と鐘美の背中を押しながら鮎美を振り返った。

「鮎美、…………お前は、お前のままでいいぞ」

「父さん…………うん、おおきに。…………うち、父さんの子で良かった」

玄次郎たちが退室し、しばらく黙っていた鮎美は介式に頭をさげた。

「勤務を延長していただき、ありがとうございました。おかげで助かりました。どうぞ、お休みください」

「…………。了解した」

介式は退室しようとして、少し振り返った。

「同性愛者というのは不憫なものだな。…………落ち込むな」

「…………。うちは、うちのままでいいそうですから」

「そうか。よく休め」

介式が退室すると、静江はカモミールティを淹れて、鮎美の前に置いた。

「どうぞ」

「おおきに」

鮎美は礼を言つて少し飲み、ソファに身体をもたげて目を閉じている。静江は音を立てないように自分のスマートフォンで長文のメールを打ち始めた。打ち終わって送信した頃、鮎美が目を開けて気づいた。

「石永先生に報告ですか？」

「いえ、お兄ちゃんにも、この件は秘匿しています」

「すみません。家族にまで」

「知る人間が少ないほど、秘密は守れるものです」

「…………さすが、自民党経験が長いだけありますね…………日本一心党は、にわかで組織が弱いわ…………。あ、でも、ほな、誰にメールを？」

「芹沢玄次郎さんにです」

「父さんに？ 運転を気をつけて繰り返して？」

「それもありますけれど、嫌な予感というか、ありがちな懸念があった、さつき緑野さんのお母さんが変に玄次郎さんへ身をよせていたのを見ていますか？」

「うん…………一瞬、どういうつもりなんって思うほどやった…」

「ああいうタイプの女性は危険です。あれで美人だから余計に夕チが悪いし、しかも妊娠できない。そうになると安心して不倫できる」

「……父さんと?」

「すっかりした男性ですから大丈夫とは思いますが、女の誘惑が巧ければ、男も一夜限りとフラつくかもしれない。とくに妻が妊娠中というのは男性は変な気を起こしやすいものなのです。なのに、あんな風に抱きつかれると危ない。もし、今の状況で万一にも不倫というところが起こったら、この後、どうなると思います?」

「……何もかもグチャグチャのドロドロやん……」

「そうメールで警告しておいたのです。それで万一の可能性も消しておける。娘さんも同じクルマで移動するのですから、ほとんど無い可能性ですけど、嫌な感じだったので一応」

「……女と男か……危ないもんなんや……」

「女と女でも、トラブルを起こしてくれますね?」

「うっ、すみません。静江はんも遅くまで、うちの不始末のために、ありがとうございます」

「どういたしました。議員の下半身の世話ができてこそ、一人前の秘書なんて言われることもありえますから。これからは芹沢先生を男性なみに危険だと思っておきます」

「……」

「あ、言っておきますけど、私、同性愛はぜんぜんダメですよ」

「はい、知っています」

「なら、いいですけど、今、二人きりなので変な気を起こされても困るなあつて。うっかり下半身の世話と言いましたけど、手配はしても自ら奉仕はしませんから。あと手配も女と女は、ちよつと勉強不足です。今夜は一人で寝てください」

「……そこまで見境無いわけやないつもりなんですけど……」

鮎美はカモミールティーを飲み、この際、想っていたことを静江に問うてみる。

「詩織はんがバイなん知ってはる?」

「はい、それとなく」

「あの人、……うちのこと好きやって言ってくれてはるねんけど……」

「けど？」

「こんなこと言うたら失礼やし、あの人、仕事も頑張ってくれるし、すごい優秀で人脈をつくるんもピカイチやと想うけど……どこことなく……どこことなく、やけど……嫌な感じがするんよ」

「……はい、それは私も感じます」

静江が真顔で頷いた。

「牧田さんが秘書として有能なことは確かです。いえ、秘書というより執行役として優秀とっていいレベルです。けれど、私も接する機会は少ないものの、どこことなく、なんとなく、すごく嫌な感じがします」

「……静江はんも感じてるんや……」

「はい、さきほどの緑野さん親子が、親子そろって人を人とも思わぬ嫌な感じの人であるレベルを超えて、なにか、もっと、より本当に人を駒や消耗品、悪ければオモチャやゴミとしか思っていないのではないかと……そう感じるだけなんですけど、感じてしまいます。具体的なことがなくて、すみません」

「……うち、あの人と……深い仲になるの、怖いんよ」

「その勘には従った方がよいと思います」

「……結局、……一人か……」

鮎美がつぶやくと、静江は微笑んだ。

「私も一人ですよ、この歳まで」

「……ははは……そやね……焦らんとこ……」

「もうベッドでお休みください。私は隣室で休ませてもらいますけど、夜這いに来ないでくださいよ」

「はい。いろいろ、おおきに」

鮎美は眠る前に相場を見た。金だけが上昇し1グラム5000円を超えていた。

2月8日 エステ

翌2月8日火曜の朝、鮎美はキッチンから朝食を調理する音と匂いが響いてきて目を覚ましたので自宅にいるのかと錯覚したけれど、議員宿舎だった。キッチンを見ると、静江がエプロン姿で料理している。

「あ、静江はん、おはようさんです」

「おはようございます」

「今何時……ヤバッ?! 朝食会が!」

とつくに議員会館で朝食会が始まっている時間だった。静江が大根を切りながら言ってくる。

「朝食会は体調がすぐれないので欠席すると連絡しています」

「そ、そうなんや、おおきに」

「かなり睡眠不足でお疲れのようでしたから眠っていてももらいました。けれど、国会には出てください」

「うん……」

「顔を洗って着替えてください。朝食できますから」

「おおきに」

鮎美は洗顔して制服に着替えた。静江が用意してくれた朝食は家庭的な和食で鮎美は美味しく食べ始める。

「ああ、美味し。こんな朝ご飯、久しぶりやわ」

「ずつと、ご実家にも帰れていませんね」

「そやね……何日帰ってないやろ……もう2月も一週間が過ぎたんや……そのうち何日、家にいたことか……月日が経つの、あつという間やったわ」

「今日は国会以外の予定はすべてキャンセルしておきました。勝手ながら都知事選の応援も疲労が溜まっていると言って」

「……………お礼を言うべきか……………勝手すぎると怒るべきか……………」

鮎美は左手で自分の右肩に触れた。知らず知らずのうちに疲れが溜まっていた。

「芹沢先生、部屋にオムツがありましたけど、使ってるですか？」

「あ、うん、まあ」

「完治したとき聴きましたが傷の具合が悪いのを隠していらっしやるのですか？」

「ちやうよ。選挙応援でトイレに行く間もないとき、漏らして大恥かくよりマシやなって」

「牧田さんのすすめで？」

「ううん、自分でベターな選択かと思って」

「……………。自分でオムツを着けられるようになったんですか。大人になりましたね」

静江が感動した顔で言ってくるので鮎美は眉をひそめる。

「は？……………どういう意味？」

「ここまで成長してくれて嬉しいです。ご自分でオムツを着けるなんて立派になって」

「……………。うちのことオチヨくってんの？」

鮎美が睨む。

「違いますよ。本当に立派なことですよ。本当に一生懸命に仕事をしている人、宇宙飛行士も長時間手術の外科医も、みんなオムツを着けています。仕事への姿勢、求められる頑張り、その必要性から着けるオムツは誇っていいことですよ」

「…………誰かに言わんといてな」

「ああ、ここまで成長してくれたなんて……………まだ高校生なのに」

「……………誉められてんのか、オチヨくられてんのかビミョーやわあ……………。けど、東京で選挙活動してみても、つくづく地元選挙では静江はんらが、うちのこと気遣ってくれてたんやと思いきりしましたわ。演説会場に入る前のコンビニでトイレに行かせてくれたり、移動中もこまめに気遣ってトイレの位置とか、うちがしたくなりそうな時間とか、考えてくれてたんやね」

「それにも気づかれましたか」

「静江はんらのバックアップがない選挙活動はつらいわ」

「もしかして、人前で漏らしてしまいました？」

「ううん、ギリギリ個室に駆け込んだとき、鷹姫に見られただけ」

「よかったですね。口の堅い彼女なら安心です」

「いっそ、もっと早くにオムツ着けてればよかったかも」

「それは芹沢先生が成長したから思えるだけで半年前や入党直後の自分を思い出してください。はじめての演説でガチガチに緊張して立てなくなるような、ただの女子高生だったんですよ。そんな子に漏らすよりマシだからオムツを着けなさいと言ったり、気遣いがなくて演説中や握手中に人前で漏らしたりなんかさせたら、離党どころか、議員を辞めたり、家から出ない引きこもりになったかもしれないよ」

「うっ……たしかに、……当時のうちやったら、何の嫌がらせでオムツ着させられるねんとか……まして漏らしたりなんかしたら外に出られへんわ……」

「そんなメンタリテイから、すっかりタフになってくれて嬉しいですよ。才能ありますよ。きつと、芹沢先生には、もって生まれた天賦の才があります」

「オムツから、そこまで言われても……。けど、もって生まれた才能かあ……。カネちゃん、すごい外見は可愛いし、お母さんも美人さんやけど、あの性格は、ちよつと気の毒やなあ……。よく子供の前で、子供を捨てるとか、口走れるもんやと思うわ……。カネちゃん、めっちゃ傷ついてた……」

「緑野さんは協調性皆無なのに、依頼心は人一倍強いようです。芹沢先生の秘書補佐を続けたいのも、お役に立ちたいからではなく、どこかにすがっていたいからです。あまり彼女をアテにしない方がいいですよ」

「……うん……」

「その点、宮本さんは芹沢先生の役に立ちたい一心で動いてくれます。ただ、抜けているところも多く、まさか食生活も朝食会が無ければコンビニ弁当、夕食もコンビニ弁当なんてこと女性議員と女性秘書の組み合わせでやっていると思いませんでした。キッチンも料理ができない女子大生のアパートみたいキレイでしたし。食事は大

切ですよ。人間、食べるのと出すのが基本中の基本です」

「うん、それは入院中に思い知ったはずなんやけどね、つい忙しいとコンビニに頼ってしまうわ」

「休むヒマもないほど忙しいのに、ちゃんと栄養を摂ってないなんて危険です。心の休息だつて取らないから、夜中に緑野さんの家に押しかけてお母さんに拒否反応を出されたりするんですよ。あのときの芹沢先生、かなり危なかったです」

「……………自覚せんうちに……………そうなのかな……………鷹姫にも、人が変わったみたいになつて言われるわ……………」

「月谷さんにもセクハラを警戒されてますね。自動車学校の一件以来、彼女も嫌なことは嫌と言えるようになってよいですし、月谷さんが性格的にも能力的にも一番バランスの取れたご友人です。ちよつと信仰が特殊ですけど、悪い人でないことは確かです」

「そうやね」

「牧田さんは能力は拔群なのに、底知れない感じが……………とはいえ、芹沢先生の事業に不可欠な人のようですし」

「……………そういう静江さんは、うちとの関係、どう想つてくれる？
うちが同性愛者やつて知つて、やつぱり嫌悪感ある？」

「あります」

「…そう…」

「けれど、私に何もしてこなければ、私としても、ちゃんと秘書を務めますよ」

「……………お兄さんのために？」

「ええ。ちまたでは芹沢先生を総理になんて言ってますけど、20年後に総理になっているのは、お兄ちゃんです。まあ、30年後に芹沢先生が総理のバトンをお兄ちゃんから受け取るのは、いいかもしれませんけど」

静江は食べ終わつた食器を片付けてくれる。

「さ、もう国会へ行つてください。終わつて6時から、いいところを予約しておきます」

「いとろつとっつ。」

「それは夕方のお楽しみということだ」

微笑む静江を部屋において、鮎美は国会に出席した。お昼休みは議員食堂で翔子たちと食べ、食べ終わった頃に鷹姫が他人へは聞こえないように問うてくる。

「昨日、石永さんから連絡のあった件は、どのようになっていますか？」

鷹姫としては、悪い知らせで秘密にするよう言われたので、かなり気になっていたし、今朝は議員宿舎へ行く前に、静江から鮎美は疲れて眠っているのだから来なくてよい、と連絡され、しかも地元にははずの静江が新幹線の終電が終わってから東京に来ていて、余計に気になっていたので。鷹姫に心配そうな顔をされたので鮎美は微笑む。

「うん、あれは無事に終わったよ」

「それは良かったです。……。一件落着いたところで、すぐに次の用件で大変に申し訳ないのですが、三島さんから連絡が入っています」

「なんて？」

「悪い知らせではないようですが、頼み事をしたいので芹沢先生とお話しされたいそうです。芹沢先生のご都合がよいときに連絡いたしますと返答いたしておりますが、ご対応可能でしょうか」

「うん、すぐかけてみるわ」

すぐに連絡しないと、つい忙しくて忘れてしまいかねないので鮎美は即座に鷹姫がもっていたタブレットで対面通話してみる。

「もしもし、芹沢鮎美です」

「三島だ」

やや緊張した三島の端正な顔が映っている。肉体は女性で、かなり美人に生まれたのに一切の化粧をせず髪もスポーツ刈りなのもあいかわらずだった。

「頼み事って何ですか？」

「あ、……うむ……わざわざの、電話、ありがたい」

「いえ、それで？」

「わ……我々は同じ方向性をもつ賛同者であり、すべてに一致している

わけではないとしても、今現在は同志でもある」

「……」

いつもは単刀直入な三島が長い前置きをしてくるので鮎美は頼み事の中身が気になるけれど、黙って待つ。

「その同志に、頼み事をするにあたって、あえて言っておくが、頼み事を受けてくれようと、断ろうと、我らの団結に変化は無いし、我は賛同者たる立場を利用して、頼み事の実行を迫るような卑劣漢ではない。この点、よくふまえていただきたい」

「はい。それで？」

「や…やや、恥ずかしい頼み事ではある」

「…どんなことですか？」

「私の故郷が福井県であることはご存じだろうか？」

「えつと…そうかも…」

以前に静江から三島について調べたファイルを見せてもらったことがあるけれど、細かいことまでは覚えていない。元自衛隊員でクーデターを画策したことは印象に残っているものの、出身地までは興味をもつていなかった。

「その故郷の衆議院議員とも以前から障碍児教育について親交があったのだが、我らの記者会見を見て連絡があり、芹沢殿に頼んでほしいと頼まれ、頼むのだ」

「ああ、そういうことですか。ようありますよね、政治の世界では」

「我は関係を利用して頼み事を押しつけるようなことは美しくないと考える。だが、今は恥を忍んでお願いしたい」

「はい。とりあえず、内容を教えてもらえますか？ 協力できることなら頑張りますし」

「ああ、わかった。これが…、我田引水のように恥ずかしくはあるのだが…、故郷にとつて必要なことでもあるのでお願いする。福井県には北陸新幹線が通るといふ計画があるのだが、これが遅々として進まない。何度も陳情している。その陳情に、芹沢殿も列席してほしいのだ」

「そういうことですか」

鮎美は平凡な頼み事で、しかも北陸新幹線については県内新駅の問題と同時に勉強したので、よく知っている。その陳情に付き合うのは、まったく問題ないのに、三島が恥じらって赤面しているのは意外だった。もともとが美人なので男装していても、つい可愛く感じてしまうけれど、それを言ったら怒るか悲しむかしそうなので黙っておく。赤面した三島がまっすぐに言ってくる。

「貴殿の信条に合わぬなら断ってくれても、我らの団結に変わりはない。ただ、一考していただきたい」

「わかりました。都合をつけて陳情に参加できるようにします」

「……………よいのか？」

「はい」

「……………無理なら断ってくれても、よいのだぞ。このような破廉恥な頼み、恥ずかしからう」

「いえ、北陸新幹線は必要ですし。というか、なんで、そんなに恥ずかしいんです？」

「自らの故郷のみ繁栄すればよいと、我田引水の如く予算を引き込むなど、破廉恥の極みではないか。我らの陳情が実現すれば、その分、どこかの予算が削られ、その地が後回しにされるわけだ」

「うーん……………たしかに、そうですね、その土地もその土地で、どうせ陳情してるでしょ。ある意味で陳情合戦の戦争ですよん」

「そういう解釈もあるか……………たしかに戦いといえば、戦いだ。なるほど」

「ともかく北陸新幹線の福井県への早期延伸に協力させてもらいます。陳情の日程なんかは、その議員さんの秘書と、うちの秘書で擦り合わせますわ」

鮎美は議員の氏名を聞き、通信を終えた。そして議員食堂を見回すと、すでに教えられた議員の秘書が待ちかまえていて、挨拶してくる。準備の良さは田舎の衆議院議員らしいと思いつつ笑顔で握手を交わし、日程の調整は鷹姫に任せた。

「はああ……………問題ない頼み事でよかったわ」

夕メ息をつきつつ午後の国会にも出席して座って過ごし、畑母神に

は悪いと思いつつも静江に言われたとおり、まっすぐ議員宿舎に戻った。

「芹沢先生、これに着替えて髪型も少し変えてください」

静江が私服を出してくれた。

「変装させて、どこに連れて行く気？ ビアンバーとか？」

「あの界限で芹沢先生は超有名人ですよ」

「うっ……そらそうやな」

「議員という身分では窮屈でリラックスしないでしょ。今日だけ、これからツキタニヨウコになってください。ヨウコと呼び捨てますね」

「影武者の逆パターンなんや」

鮎美は制服を脱ぎ、私服に着替えて、おろしていた髪を簡単にまとめて低い位置のポニーテールにした。変装というほどではないけれど、その姿で歩道を歩くと、すれ違う人々は、他人のそら似と思ってくれるのか、それとも議員バッチと制服という組み合わせで鮎美を記憶しているのか、ほとんど気づかず通り過ぎてくれる。静江と徒歩で赤坂の一流ホテルへ入った。豪華なのに落ち着いた内装の廊下を進み、高画質液晶で春の中庭にいるような空間を演出したエステルームへ進む。

「予約していた石永とツキタニです」

「ようこそいらっしやいませ。奥へどうぞ」

受付が奥へ案内してくれる。

「こちらで裸になっていただき、そちらのペーパーショーツをおつけください」

王宮をイメージさせるような薄い桃色のカーテンで仕切られた脱衣スペースで静江と鮎美は裸になる。手元に置かれてある紙製のTバックショーツを着けた。

「……ロイヤルエステコース……120分、一人45000円、税、サービス料別……」

鮎美は予約票に書かれているコースと値段を見た。さらりと静江が言う。

「ワリカン、私費で払ってくださいね」

「払えるけど、すごい金額やね」

「すごく頑張ってる人には、すごいご褒美が必要なんですよ。でない
と、土曜の夜みたいに爆発しちゃう」

「……………」

「石永様、ツキタニ様、こちらにお座りください」

ゆったりとした大きな椅子に腰かけると電動で心地よい角度まで
倒してくれる。

「まずは手足をオイルマッサージいたします」

静江と鮎美の2人に対して8人のエステティシャンがついてくれ、
両腕両脚を同時にオイルをつけて揉んでくれる。

「……………うわっ……………めっちゃ気持ちええわ……………」

「ヨウコ、その関西弁、恥ずかしいから、こっちではやめて」

「はーい」

「寝てしまうと、もったいないから、私もヨウコも寝たら起こしてくだ
さい」

「承りました」

「たしかに気持ち良すぎて寝てしまいそうやわ。……………ああ……………気持
ちいい……………」

鮎美は手足を揉んでくれる四人の顔を見下ろした。四人とも鮎美
より年上だけれど、美しい化粧をした可愛らしいエステシャンで鮎
美は裸同然の姿で揉まれていることに、だんだんと興奮を覚えてき
た。

「……………ああ……………ハア……………」

可愛らしい8本もの同性の腕が自分を揉んでくれて、しかも指先か
ら、だんだんと内腿や腋の方へ手があがってくるので、より興奮して
くる。さらに背もたれが倒され、一人が首を、もう一人が胸を揉んで
くれると、両内腿を揉んでくれている手に股間へ触ってほしくなっ
てしまった。

「……………ハア……………ハア……………あああん……………」

「ヨウコ、変な声ださないの」

そう言う静江も気持ちよさそうな声をときどき漏らすけれど、そこに性的興奮は一切ないので鮎美の声とは性質が違う。エステیشنには股間と乳首以外のすべてを揉んでくれる。耳や顔、頭皮までほぐされ、さらにベッドへうつ伏せに寝かせてくれると、首と背中、お尻、脚を同時に揉んでくれる。とくに、お尻を揉んでくれる手には強く感じてしまい、もつと奥まで滑り込ませて中に入ってきてほしいとさえ感じてしまった。

「……ハア……：松田川先生……元気にしてはるかなあ……」

毎日、お尻に入ってきた松田川のゴム手袋をした指を思い出してしまった。つい、だらしなくヨダレを垂らしてしまうけれど、それも予想されていたようでペーパータオルが敷かれている。心地よい45分間のマッサージが終わると、温かい泥を塗られ、ビニールで全身をミイラのように巻かれた。

「しばらくお休みください」

そう言われて静江はすぐに眠ったけれど、鮎美は興奮の余韻が冷めるまで眠れなかったものの10分もすれば眠っていた。そして睡眠が深くなりすぎないうちに、優しく起こしてくれた。

「シャワーで流します。その後、全身トリートメントいたしますが、ツキタニ様、いっしょに腋の処理もなさいますか？」

「え？ ……ああ……ううん、このままで」

「では、流します」

香りのいい泥を流してくれた後、また全身マッサージしながら乳液を塗り込んでくれる。眠った後だったので、より頭が冴えて8本の手が全身を撫でてくれる感触を鮮明に感じてしまう。

「……ハア……：ハア……んう……」

うつ伏せでお尻を揉まれているうちに、刷り込まれた習慣だったのか、お尻を突き出すようにあげ、お尻の穴で指先を受け入れようとするような動作をしてしまった。

「クスツ……」

「フフ……」

頭上で4人のエステティシャンが静かに笑っている気がする。そ

してマツサージのタッチの仕方が変わってくる。鮎美がリラックスではなく性的な興奮を覚えていることに気づいて、指使いが艶やかな動きに変わり、より鮎美を感じさせて遊んできた。両耳や首筋、両腋、背筋、お尻、内腿、膝の裏と、まるで性感帯を探るように8本の腕が動き、鮎美の反応と息づかいで感じるポイントを探し当てられてしまう。

「…ハア…ああつ…」

「シー」

耳たぶを揉んでくれていたエステティシヤンの指が鮎美の唇に押しあてられ、隣にいる静江へ喘ぎ声を聴かせないよう伝えてくる。鮎美と静江の間には薄いカーテンがあるし、室内は薄暗い。喘ぎ声をあげなければ、ただのマツサージと静江は思い続けるはずだった。

「ツキタニ様、仰向きになってくださいませ」

「…はい…」

素直な声で鮎美は返事をして仰向きになる。また8本の手が鮎美を撫でてくれる。仰向きになったので胸に触られるし、今度は乳首も刺激してくれた。さらに紙シヨーツの中まで指先が入ってきてくれるし、うつ伏せのときと違い、目を開けるとエステティシヤンたちの微笑んだ顔が見えてしまい、恥ずかしくて余計に高まった。もう鮎美が興奮していて、絶頂を欲しがっていることが完全にバレている。欲望を見透かされてしまい、赤面する鮎美の頬や耳も撫でられた。

「…ハア…ハア…ハア…あああ…」

「シー」

つい喘いでしまうとエステティシヤンが清潔なタオルを口に咥えさせてくれた。これで喘ぎ声を漏らさずにすむようになり、より8本の手が妖艶に鮎美を高めてくる。さきほど探り当てた鮎美の性感帯を8カ所同時に攻めてくる。両耳、両腋、乳首、股間の前後、その感じやすいところを息を合わせて同時に攻められると鮎美は何度も絶頂してタオルに唾液を染み込ませたし、紙シヨーツも濡らしてしまった。エステティシヤンたちは余計なことと言わず、うやうやしくサービスを終えた。

「…ハア…」

「本日はお越しいただきありがとうございます。どうぞ、またご利用ください」

「…うん…」

「ご指名いただければ、また私たちがサービスさせていただきます」

につこりと微笑むエステイシャンたちに、鮎美は目を合わせられず頭をさげて更衣室に戻った。服を着ると静江とホテル内のフレンドレストランに移動した。高層階の窓際で東京の夜景を見おろしながら、ゆつくりと夕食をとる。

「こんなゆつくり、ご飯食べるの、ホンマに久しぶりかも」

「どんな豪華なレストランや料亭でも接待だと味気ないですしね。何より、あまり頑張りすぎると、どこかで燃え尽きてしまいますから」
「気を遣ってくれて、おおきにな」

鮎美はデザートを食べながら眼下の道路を見おろした。選挙カーが走っていて候補者のミック赤崎が真冬なのにランニング姿で元気に両手を大きく振っている。

「昨日も、そして明日も、うちもあそこにいるんやろうなあ」

「日本一心党の他にも、民主党の加賀田知事や雄琴先生とも共同歩調をとられていますね。自分が自民党の議員だつてこと、忘れないでくださいよ」

「それは大丈夫よ。うちのグループは党とは無関係に、つていう連盟やし」

「最初はそうでも、そのうち新党を造ろうなんて話になって雨後の竹の子みたいに弱小政党が生まれては消えていくということが何度もありましたから」

「ご忠告ありがとうございます」

「さ、今日は何も考えず、よく眠って休んでください」

「おおきに」

国会には出席したけれど、骨休めすることができた鮎美は早めに議員宿舎で眠った。

翌2月9日の水曜朝、鷹姫は朝刊を握って議員宿舎に駆け込むと、鮎美に見せて言う。

「ドイツがアユミ・ナツコ体制への参加を検討すると表明しました！」

「見せて！」

着替え途中だった鮎美はスカートを穿くのを中断して、新聞に目を通す。

「……メルケル連邦首相が発表……」

「彼女はドイツ初の女性首相です」

「そやったね……参加検討に入った理由は……2010年欧州ソブリン危機なんや……ギリシャが国家財政の粉飾決算やったもんなあ……会社ならともかく国家が粉飾とか、しかもユーロ圏やのについていう統一通貨の脆さがモロにでる事態やもんなあ……」

「危機はスペイン、ポルトガル、ハンガリー、ラトビアと拡がっています。財政規律を重視するドイツとしては業を煮やしたのでしよう。場合によってはユーロを離脱し、マルクを復活させての参加を考えていると表明しています」

「ユーロ離脱かあ……そこまで大胆に動くかなあ……ドイツってユーロの中核国やん。そこが抜けるのは、ほぼ崩壊を意味するんちゃう……」

「芹沢先生が提示された連合インフレ税によってもたらされる財源の使途が各国の自由であるところに高い魅力があるとメルケル首相は述べています」

「ユーロで縛られるのに、我慢できんようになつたんやろ。ギリシャのツケをドイツ人が払うというのは、割に合わんって」

鷹姫と話ながら国会に登院すると、周囲の話題も同じだったし、ぶら下がり取材が鮎美へ集まってくる。今日は国会で党首討論が行われる日だというのに、各党の党首より注目されていた。

「芹沢議員、ドイツの参加表明を受けて、どう思われますか？」

「参加表明ではなく検討ですよ。ご質問は正確に」

「どう思われますか？」

「提唱した者としては嬉しい限りです」

「このまま各国が参加してくると思われませんか？」

「そうしていただきたいと願っております」

「肝心の日本政府は何ら動きがありませんが？」

「慎重な検討をしていただいているのだと期待しております」

「都知事選への影響はあると思われませんか？」

「……………。わかりません。都知事選は東京都の知事を選ぶものです

から、影響はあっても限定的かと思えます」

「都知事選の結果が、連合インフレ税の是非にかかってくると思われますか？」

「いえ、やはり都知事選は都知事を選ぶものですから、そう短絡的に何もかも、くつつくとは思えません。もう時間なので失礼します」

鮎美は取材を切って移動する。やはりSPがいてくれるおかげで取材を切りやすい。鮎美は党首討論が行われる委員会には選ばれていないので、いつも通りに退屈な審議をまじめに座って過ごし、お昼休みになつて議員食堂で木村に言われた。

「党首討論で連合インフレ税の話がだよ。小沢党首が鳩山総理に問いかけた」

「どう言うてはりました？」

「検討してみる価値はあるかもしれないが、山積している問題の処理が先だ、と。先送り感のある返答に、民主党内の小沢寄りの議員からも野次が飛んでいた」

「民主党内の結束、だいぶ乱れてますね」

「支持率19%まで落ち込み、支持しないが65%だ。1月に内閣改造したばかりなのに」

そう言った木村はラーメンを食べている雄琴に声をかける。

「国民の総意とともにあるという雄琴先生におかれては、どうかな？」

今日の民主党支持率の中で民主党に所属しているのは？」

「一時の支持不支持より、総選挙の結果という大きな指標がありますから」

「そうだ！ その通り！」

隣の席にいた若い民主党衆議院議員が野次のように飛ばしてきた。木村は肩をすくめて謝る。

「失礼。食事中によしまししょうか」

お昼休みが終わり、鮎美は午後の国会も静かに過ごす。女子トイレで排泄を済ませ、ショーツからオムツに穿き替える。上からスパッツも着て見えないようにしてメイクも軽く直すと、国会議事堂前に走った。県知事選でしたように高校の校門から選挙カーに乗る姿が話題性があるように、国会前から選挙カーに乗るのも話題になってくれているので期待に応え、畑母神と握手してから周りに手を振る。

「東京から日本を変える！ 畑母神をよろしくお願いします！」

鮎美の応援演説は内容を変えたわけではないのに、聴衆の空気感は変わってきていた。都政に直接は関係ない連合インフレ税について聴きたがっている気配がする。わずかな休憩時間のうちに畑母神と確認し合ってから言及することにした。

「この都内でも格差は大きな問題です。先進国と最貧国の格差も大きいけれど、都民のうちでも差は開くばかりです。これを、なんとかせんとあかん！」

「どげんかせい！」

誰かが野次を飛ばした。対立候補のキャッチフレーズを捻ってきている。鮎美は言い返さず、頭をさげて言う。

「どないかします！」

切り返しの速さで拍手が起こり、演説は無事に終わった。それからも次々と寒風が吹く都内の各所を選挙カーで巡っては屋根の上から演説していると、カイロを着けていても身体が冷え、小便をしたくなる。

「みなさま、うちの話を寒い中、聴いてくださりありがとうございます！」

演説に集中したいので我慢するのはやめ、話ながらオムツの中に済ませた。もう月経でナプキンが汚れても、人に見えていなければ、いちいち恥じらわないように数千人の前でオムツを濡らしても恥ずかしくなかった。そして議員宿舎に帰ると鷹姫がキツチンで夕食を

作ってくれていたので感動する。

「わあ、鷹姫がつくってくれたん？」

「はい。石永さんが選挙応援を途中で抜けてでも、まともな食事をつくるよう言われましたので従いました」

鷹姫がつくったのは焼き魚を中心とした和食で、とくに温かい味噌汁が冷えた身体に嬉しかった。

「鷹姫って、こんな女の子らしいことできたんやね」

「お褒めいただき、ありがとうございます」

「かわいいわあ！ キスしようなる！」

「……………」

「あ、ごめん。思わず」

まだ演説していたときの興奮が残っていて、またセクハラしそうになり自重した。

翌々日の2月11日金曜夕方、鮎美は前日を休養日として国会出席だけにして選挙応援は一日おきとしたので疲れのとれた声で演説していたけれど、途中で聴衆の変化に気づいた。なぜか、ざわついている。

「都政を刷新する男の中の男、畑母神をよろしくお願いします！……………」

鮎美は不安になり数分前に演説しながらオムツを濡らしたことに気づかれた可能性も考えてみて、さりげなく脚を触ったりしたけれど、横漏れして濡らしたりはしていない。そして、聴衆は鮎美の話を聴かず、スマートフォンや情報端末ばかり見ている。畑母神の秘書が車上にあがってきて鮎美と畑母神に伝えてくる。

「今、イギリスがユーロ離脱を宣言しました。芹沢先生のプランに参加するという表明と合わせて」

「おお、そうか。英国が」

「……………」 検討やなくて？」

「はい！ 参加表明です。IMFのドミニク氏と共同で発表しました」

畑母神がしたり顔で頷く。

「英国人は世界の中心でありたがるからな。ドイツが検討しているうちに、追い越して自分たちが主導権を握ろうというのだろう」

「……うちの……言うたことが……世界で……」

やや茫然としている鮎美に代わって畑母神がマイクを握る。

「みなさん！ 今、英国が我らの計画に賛同すると発表したそうです！」

「……とうとう……一国が……」

「みなさんは日英同盟を覚えておられるだろうか！ この1902年に日本と英国が締結した同盟！ これが再び形を変えて100年を経て蘇ったのです！」

やや大雑把な解釈であり、別に対ロシアという計画ではないけれど、勢い流れるままに述べる演説なので聴いた聴衆も意味解釈よりも盛り上がり優先して拍手や歓声が起こった。そして、鮎美もマイクを握って何か言おうとしたけれど、言葉の前に涙が零れた。

「……ぐすつ……すいません……今は……言葉が……」

感無量の涙だった。聴衆も言葉より少女の涙を喜んだ。また拍手と声援が起こり、鮎美は応えて述べる。

「鳩山総理、どうか、検討してください！ 今、日本は対外的には債権国でも国債残高は1000兆円を超える勢いです！ これを消費税で償還できますか?! 所得税でやりますか？ もう無理な数字です！ 歴史を振り返れば乱暴な徳政令があり、大きな経済的混乱を生みました！ 国が乱れる前には財政の破綻があります！ なぜ、財政が破綻するのか?! それは徴税システムが時代に合わず抜け穴だらけになるからです！ 結果、国にも個人にもお金が入らず、一部の豪商、今で言う富裕層だけにお金が集中します！ けれど、現代のお金は突き詰めれば紙切れにすぎない不換銀行券です。もちろん乱造すればインフレが起き、それが一国であれば輸入品が決済できず大混乱に至ります。けれど、足並みをそろえたインフレならば！ 多くが解決します！ それにイギリスは気づいてくれた！ ドイツも考えてくれます！ 総理！ お願いします、どうか考えてください。あな

たが言われた最小不幸社会、この実現にも財源となりえます。お願いします！」

聴衆というよりは総理と、今の総理を間接的には選んでいる聴衆の意識に訴えかける演説で夜8時を迎え、拡声器の使用時間が終わった。その後も金曜夜ということもあつて聴衆との握手は長引き、選挙事務所に戻った頃には疲労困憊だった。

「……………疲れた……………」

早く夕食を作つて待つていてくれる鷹姫のところへ帰りたいのに、一度座つた椅子から立ち上がれない。濡らしたオムツもそのままなので、そろそろ着替えたいのに気力がない。そんな鮎美に水田が行つてきた。

「今日の最後の演説、あれは、どうかと思いますよ」

「…は……………はい……………はあ…」

「本来、あなたは畑母先生の応援をすべき要員であつて自説を述べる場ではないことを、自覚すべきです」

「……………すみません……………」

ぼんやりと鮎美が謝り続け、水田が責め続けていると、畑母神が仲裁してくれる。

「まあまあ、お二人とも、よくやつてくれてますよ。おい、二人にタクシーを！ 二人ともお疲れだから」

タクシー代を前払いしてもらつて議員宿舎まで帰る途中、知念が言ってくる。

「さつきの水田とかいう人が文句いつてきたのに、よく素直に謝つてたつすね」

「…え？ ……ああ……………あの人……………うん……………別に、どうでもええから……………」

「あの人だつて日本一心党なわけだから、いわば芹沢議員は客分じゃないっすか」

「はは……………うちは、お客さんちやうよ……………」

鮎美が疲れた声で言う。

「知念はんがもし大事な用事があるとき、小さな砂粒が目に入ったら、

そのことで、いちいち怒る？」

「……いえ、どうでもいいです」

「ほな、そういうことよ」

「………芹沢議員、ビツクつすね」

「たんに面倒なだけよ。……うちが寝てしまっても………鷹姫のご飯、食べたいし、起こしてな……」

そう言った鮎美は眠りに落ちた。

2月12日 チョコ

翌2月12日の土曜朝、鮎美は眠気と疲労感と戦いつつ起床したけれど、キツチンで朝食を準備してくれているエプロン姿の鷹姫を見ると、元気になれた。

「おはよう、鷹姫」

「おはようございます、鮎美」

制服の上からエプロンをしている鷹姫は可愛かった。つい、見惚れるし、抱きしめたくなるし、スカートの中に手を入れたくなる。それを我慢して洗顔した。朝食前に新聞3紙へ軽く目を通した。

「いただきます」

二人で朝食をとり再び新聞を読む鮎美の髪を鷹姫がといてくれる。

「お疲れではないですか？」

「大丈夫よ。鷹姫がご飯つくってくれるし、コンビニ弁当とは、ぜんぜんちゃうわ」

「お役に立てて幸いです」

「鷹姫も無理せんといてな」

「はい」

「ほな、いってきます」

「いってらっしゃいませ」

鷹姫はSPたちと出発した鮎美の背中を見送ると、部屋の中を片付け、ビジネスホテルに戻った。もう9時前で食べ放題の朝食は終わりがけだったけれど、朝食チケットがもったいないのと、この時間になると皿に残っているハンパな料理は捨てられるのだと聞いているので、なるべく廃棄が少なくなるように、あと一切れ、二切れといった残っている料理を食べて早めの昼食として2時間ほど眠る。連泊しているのでチェックアウトの時間は気にしなくていい。お昼になって議員宿舎で鮎美のためにオニギリを中心とした弁当をつくる。

「石永さんが、わざわざお米を送ってくださいましたし」

人間は食べ慣れた食材の方が頑張れるという理屈で静江は地元米を送ってくれたけれど、鮎美は大阪出身なので、はたして食べ慣れているだろうか、という疑問はあったけれど、オニギリをつくっていく。海苔を使って歯に残ってしまうと街頭演説に見場が悪いので海苔無しのおニギリと卵焼きだった。その弁当をもって鮎美を探しに行くけれど、選挙カーで移動する鮎美に必ず渡せるわけでもなく、そして渡しても食べる時間がとれるとは限らなかったものの、今日は午後3時過ぎに食べてもらう時間ができた。鷹姫が介式に弁当を渡していき、選挙カーで移動する間にカーテンを閉めて鮎美が食べた。

「ああ、美味しかった。ごちそうさま」

鷹姫にお礼のメールを打っておき、歯磨きの代わりにガムを噛んでから、再びマイクを握ったけれど30分くらいで大便をしたくなった。さすがに大はオムツの中にしたくないし、すでに一回濡らしたので、そろそろ交換したい。夕方になると、さらに多忙になるので今のうちにトイレへ行っておきたかった。ちょうど午後5時で介式たちSPが交替する都合もあり、休憩として選挙事務所に戻った。

「……う……一時間も我慢したし、もう出えへん」

トイレに入ったけれど、便意がおさまり排便できなかった。オムツだけ交換して鷹姫が用意してくれたお茶とお菓子を少し食べて、また選挙カーに乗った。

「芹沢先生、お顔の色がすぐれませんが、どうかされましたか？」

鷹姫に問われ、鮎美は微笑む。

「ううん、なんでもない、平気よ」

「そうですか、では、いってらっしゃいませ」

鷹姫は鮎美を見送ると、しばらくは街頭演説の旗持ち要員として選挙カーの後続車で移動し、午後8時を過ぎて拡声器の使用が終わり、鮎美と畑母神が聴衆と握手を始めると、先に議員宿舍へ帰って夕食の用意をする。食事の用意が終わって1時間ほど待っていると鮎美が帰ってきた。

「……ただいま……」

「お帰りなさいませ」

「…先、…お風呂…入るわ…」

一日中声を出していた鮎美が小声でしか話さないのは、今までの選挙応援でもあったことなので鷹姫は気にしない。鮎美はバスルームに入ると、お尻をよく洗ってから湯船につかった。

「……凹むわあ……」

誰にもバレなかったけれどオムツを大便で汚したのは嫌な記憶だった。その記憶も鷹姫がつくってくれた夕食を前にすると消えた。

「美味しかったよ、ごちそうさん」

「お粗末様です。どうぞ、早くお休みください」

「うん、おおきにな」

寝るのも仕事のうちと鮎美はベッドに入る。鷹姫は夕食の後片付けをすると、明日鮎美が着る制服などの準備をしてから議員宿舎を出て、ビジネスホテルで眠った。

翌2月13日、日曜日の早朝、鷹姫は目を覚ますと、すぐに制服に着替え、議員宿舎に向かう。まだ眠っている鮎美を起こさないようにエプロンをして朝食の準備をする。もう起こしてもよい時間になると音を控えるのをやめ、朝食の仕上げをしていると鮎美がつかさうに起きてきた。

「…おはよう…鷹姫…」

「おはようございます、鮎美」

「……鷹姫かわいいなあ……お嫁さんにしたいわ……」

ぼんやりとしたまま鮎美が洗顔しに行き、二人で朝食を食べる。食べ終わった鮎美はしばらくトイレにこもり身支度が終わると、畑母神の選挙事務所へ駆けつけ、朝から応援演説を続ける。乾燥した冬の空気で喉を荒らさないよう、ときどきはお茶を飲むけれど、あまり飲むと小便をしたくなるし、うまくトイレ休憩のタイミングが取れれば、オムツを濡らさなくて済むものの、本当に都内はトイレが少なくて苦労した。そして、せっかく鷹姫が届けてくれた弁当を食べる間もなく夕方になり、日が暮れてから昼食を口にした。それもテレビ局の楽屋

でだったし、これから畑母神といっしょにニュース番組に出演することになっている。食べ終わった鮎美に鷹姫が歯磨きセットを渡してくれた。

「おおきに」

歯を磨いて時計を見る。

「5分だけ寝させて」

「はい。どうぞ、お休みください」

鷹姫は楽屋内の照明を可能な範囲で暗くしたし、鮎美のスマートフォンも預かって廊下に出る。テレビ局のスタッフが駆けてきた。

「鮎美ちゃん、スタンバイOKですか？」

「はい」

「じゃ、もうスタジオ入って」

「あと3分だけ、お待ちください」

「了解です。急いでね」

次にスタッフは畑母神が入室している楽屋をノックしている。鷹姫は時刻を確認しつつ、ギリギリになって鮎美を起こした。

「おおきに」

鮎美は両頬を手で叩くと気合いを入れている。堂々と畑母神とならびスタジオに入っていく背中を見守った。番組が始まり、対立候補の元宮崎県知事と討論になっても、落ち着いて応える鮎美の姿をスタジオの隅からSPたちと見ていると、鷹姫は尊敬と喜びで胸が熱くなるのを感じた。

「……素晴らしい方……」

鷹姫のつぶやきが聴こえていた知念も頷く。

「あれで18歳っすからね……末恐ろしいっすよ」

番組が終わり、議員宿舎に戻ると、鷹姫は作り置きしておいた夕食を温めて用意した。

「どうぞ」

「おおきに、いただきます」

「さきほどの情報では、フィンランドも参加を表明してくれました」

鷹姫が告げると、鮎美は肉じゃがを頬張った頬をほころばせた。

「財政的に手堅い国ほど、タックスヘブンの弊害、わかっているんやろ」

「はい、そう思われます」

「けど、スイス、シンガポールあたりは、タックスヘブンの性質があるから、参加は遅れるか、参加せんかもなあ…」

「参加しなければ自国通貨高と外貨建て対外債権の実質的減少にみまわれますが、どう手を打つでしょう?」

「結局のところ、自国通貨高の解消のため、うちらを後追いして軽いインフレにもついていくか、対外債権の保全のため相手国内で実体資産に変えるかやね。けど、実体資産には、それぞれの国で課税がしやすい。世界中どこにも逃げ場はないよ」

「……………逃げ場を無くしたとき、思わぬ反撃をしてくるやもしれません」

「どんな?」

「それは……………わかりません」

夕食を終えると、鮎美は急激な眠気を覚えた。

「うち、もう寝るわ」

「お風呂に入ってください」

「もう疲れたし」

「入浴してお休みになる方が疲れがとれます。お背中流しますから、入ってください」

「……………ほな、そうしよかな」

二人で脱衣所に入り、服を脱ぐ、鮎美はテレビ出演中も念のために穿いていたオムツを見られて、ふざけて言う。

「鷹姫お姉ちゃん、鮎美のオムツ脱がせてくだちやい」

「……………」

「お願いでちゆ」

「……………そんな赤ん坊みたいに……………これが、さつきほどまでテレビに……………。全世界が注目する人の……………」

鷹姫は目まいを覚えたけれど、鮎美が疲れているので入浴を済ませ

るため、優しく脱がせた。

翌2月14日の月曜、陽湖と鐘留は六角市の支部でお昼休みを過ごしていた。議員たる鮎美が不在でも集団訴訟についての弁護士との調整や連絡雑務があり、それなりに忙しい。それでも都知事選ほどではなく、お昼休みは穏やかに過ごさせている。

「アユミンのママの妊娠、どうなの？ 男の子か、女の子か、わかりそう？」

「まだ小さいからわからないみたいですよ。ただ、つわりは強くなってきた、お母さん苦しそうです」

「月ちゃんが代わりに料理もしてあげてるんですよ。えらいね」

「料理するときの匂いが、とくに気持ち悪いそうですから」

「つわりかあ……アタシたちも、いつか妊娠するのかなあ」

「……………」

明け透けな鐘留の物言いに、陽湖は恥ずかしくなって少し頬を赤くした。鐘留は大声で言ったわけではないけれど、支部内の他の職員にも聞こえている。陽湖はテレビの音量をあげてニュースを見る。ちやうど昨日の鮎美が映り、渋谷区で選挙カーから演説している。

「東京都から日本を変える！ 日本から世界を変える！ 東京都知事には……」

候補者である畑母神の名は報道の公平性から流されず、画面が切り替わりニュースキャスターが述べる。

「都知事選は後半戦に入り、芹沢鮎美議員の提唱するいわゆる連合インフレ税もからめた様相を呈しております。これを受けて世論調査を行い、連合インフレ税に対する国民の意識を調べました」

「……………」

陽湖と鐘留が黙って注目し、他の職員たちもテレビに視線を送る。自分のためにコンビニ弁当を買って戻ってきた静江も音を立てないように弁当を開いた。

「連合インフレ税に対する賛否は賛成39%、反対20%、わからない41%となっております。賛成する人の理由は、社会が平等になる、

脱税手段のない課税で評価できる、鮎美ちゃんのファンだから賛成する等です」

「アホだねえ、きやはっは」

「反対する人の理由は、金持ちだけでなく貧乏人のお金まで半分の価値になる、結局は税金だ、悪しき平等主義で考えが足りない等です。わからないと答えた人の理由は、そもそもインフレの意味がわからない、わからないけどEUみたいになりそう、わからないが芹沢さんには頑張っしてほしい等です」

静江が梅干しの種を弁当の蓋に箸で置きつつ言う。

「理屈がわからないまま、芹沢先生の人気で盛り上がっている部分もあるわね」

「続いて、売春行為の合法化についての世論調査では、合法化に賛成が33%、反対が29%、わからないが38%です。芹沢議員らが提唱した性関連風俗産業に従事する人に対する不確定拠出年金制度の創設については、賛成62%、反対3%、わからない35%と賛成が多数を占めています」

「アユミンやるね。っっていうか、これはシオちゃんの案だっけ」

「同性愛者同士の結婚を法整備することについては、賛成25%、反対56%、わからない19%と反対が多数を占めています」

「まあ、キモいから。きやははは」

「シスター鐘留！ あなたは当事者の立場に立って物事を考えられないのですか?!」

「うん、無理」

「っ……」

「っっていうかさ、アユミンも当事者の立場に立って連合インフレ税のこと考えたのかなあ。お金持ちからしたらさ、せつかく貯めたお金が半分の値打ちになるんだよ。アタシの家も何十億円あるか知らないけど、30億円だとしたら、それが15億円分の値打ちになる。えげつない増税だよ」

「シスター鐘留は貧しい人の気持ちわかりますか？」

「わかんない」

「そうやって、わかろうともしない」

「月ちゃんは、お金持ちの気持ちがわかる？」

「え……………何でも買えるとか……………幸せ……………でも、自分の家だけ豊かというのは……………」

「なってみないと、わからないもんだよ。あ、ちなみアタシは同性愛は経験したから、ちよつと気持ちわかる。気持ちいいけど、キモい。キモちいい感じ」

「……………まさか……………シスター・鮎美と……………」

「月ちゃんも当事者の気持ち、経験してみたら？ それから考えようよ」

もうニュースが終わり、鐘留と陽湖の話が変な方向に行っているの
で静江が食べ終えて修正する。

「連合インフレ税に反対が20%というのは、思ったより少なかった
というのが私の感想です」

「アタシも」

「私は、反対なんて5%以下だと思ってました。お金持ちって3%か、
5%くらいだと。20%の人は単なる増税だと勘違いしているの
は……………」

「月谷さんの言うとおり、富裕層は上位3%程度でも、中間層は30%
くらいいますよ。この中間層にとっても5000万円あった資産が
2500万円になるとしたら、それは苦い増税です。けれど、芹沢先
生が、うまく言葉を選んで発信しているから、そこに目がいかず、赤
ちゃん手当てに目がいつている。けれど、有権者の多数を占める高齢
者にとっても連合インフレ税は歓迎できない。とくに年金生活者に
とっては死活問題です。支給額は変わらないのに物価は2倍になる。
ここにベーシック・インカムのような救済措置をすることで、結果、
厚生年金などの高額年金受給者や付加年金をしていた人のメリット
が半減もしくはゼロになる。これから子供を産める人、これから働け
る人は新しい通貨価値での収入を得られるけれど、過去の積み立てで
生きる人にとっては、過酷な政策です」

「アユミン、年寄りから巻き上げる気なんだ？」

「日本の金融資産の大半は65歳以上が持っていますから、そうなります」

「でもさ、日本の借金が1000兆円超えそうなのは、その年寄り世代のせいじゃん」

「ええ、その借金、国債もまた預貯金を原資に金融機関が買っているものですから、豊かな個人が国へお金を貸し付けている状況です。その値打ちを半分にして、借金も半分を一気に解消しようという狙いで、いわば税金を取りはぐれて個人が貯め込んだ財産を貯金箱の底から抜き取るような手段です」

「アユミン、えぐ……さすが、堺の商人。琵琶商人より、えぐいじゃん」

「これに気づいた人は、もう金地金を買っています。今日、とうとう166000円を突破し、歴史的高値になっている」

「アタシんちにも金あるよ。仏壇の仏像とか、おりん、純度の高い金だから、あまり強く叩くなつて怒られたことある」

「それは相続税も逃れるためのオーソドックスな手段です。富裕層の仏具は、たいていそうです。ひどいと墓石の下に10キロの金塊がある、なんてことも」

「アーメン」

陽湖が手を組んで神に祈っている。

「……………」

静江と鐘留が黙ってみていると、支部の玄関に宅配業者が大きなカーゴを持ってきた。

「お届け物です」

カーゴの中には多数の包装されたバレンタインチョコが入っていて、ほとんどが芹沢鮎美宛だった。党の職員が静江の前に運んでくる。大きなテーブルいっぱいになるほど送られてきていた。

「アユミン、すごいー！」

「シスター鮎美の人気、これほど……でも、女性なのにバレンタインに……」

「お兄ちゃんにも、こんなに来たことないのに……」

静江は兄宛のチョコを探して分けていく。石永にも50個ほど来ていた。既婚者なので少ないのは理解できるとして、議員であった頃より5つほど増えたので落選中の慰めという感じがした。一部に雄琴直樹宛のチョコが混ざっていて、送った女性は自民党から民主党へ直樹が鞍替えしたことさえ意識していないのかと思ってしまう。

「これ食べてみよ」

鐘留が鮎美宛の箱を開けたので陽湖が驚く。

「え?! それ、シスター鮎美宛ですよ! 勝手に開けちゃダメですよ!」

「いいじゃん。うん、美味しい」

「そんな……勝手に食べるなんて……送った人の気持ちを……」

「どうせ、アユミン一人で食べきれないし。きつと、東京事務所にも来てるよ、かなり」

「だからって……」

「月谷さん、驚くかもしれないけど、私たちが賞味期限の短いものは、いただいてしまいますから、開封しつつ名簿をつくり、お礼状を送る準備作業をします。今日明日は、この作業で潰れそうですね。まだ郵便でも来るでしょうし。とにかく生チョコなんかの賞味期限が短いものは、送った人の気持ちを無駄にしないためにも、せめて誰かが食べましょう。芹沢先生は今週末も東京ですから」

「……。はい……。たしかに食べきれない量……」

「きやはは、そういうこと。うーん、美味しい」

「緑野さん、食べる前にデジカメで写真を撮って名簿を作成してください。どんなチョコが送られたのかは、芹沢先生にレポートに見てもらいますから」

「うああ……面倒臭つ……そんなレポートに目を通すアユミンも大変」

「それが議員です」

「はいはい」

党の職員も加わり、手分けして名簿の作成作業をしながら、生チョコなどは食べ始める。しばらく、その作業を続けていたとき、女性職

員の一人が突然に立ち上がり、トイレに駆け込もうとして途中で吐いた。

「斉藤さん、大丈夫?! どうしたの?!」

静江が問いかけても嘔吐を続け苦しんでる。その顔色は真っ青で、床に吐き出したチョコレートからは塩素系の化学薬品の匂いがしたので静江も顔色が青くなった。

「外に出て!! 全員!! すぐに! 誰か斉藤さんを担いであげて!」

男性職員が苦しむ斉藤を担ぎ、全員が外へ駆け出た。そこへ石永が挨拶回りから帰ってきて静江から話を聴くと、すぐに110番通報した。静江は119番にかける。救急車とパトカー、県警の化学防護班が駆けつけるまでに、鐘留も青ざめた顔色をしていたかと思うと吐いた。

「ううええ! ハア…ハア…うえつ!」

「シスター鐘留っ?!」

陽湖が鐘留の背中を撫でる。斉藤ほど藻掻き苦しんではいけないけれど、顔色は青いしガタガタと震えている。静江が追加で119番した。石永は鮎美へ電話をかけたけれど、国会で審議中なのか応答してくれないので介式と鷹姫にかけ、送られてきたチョコレートは食べないように告げ、詩織にも電話して同じことを言った。ずっと外にいると寒くて凍えそうなので車の中にも避難したいけれど、キーやコートも支部内なので近所のコンビニへ避難させてもらった。鐘留と斉藤は救急車で搬送されていき、石永は苦々しく言った。

「考えるべき可能性だった…くっ…銃弾だつて送られてきたんだ。チョコに何か入れるくらいの可能性…くそっ!」

「ごめんなさい、お兄ちゃん、私がいながら」

「静江…泣くな。お前は悪くない」

「お兄ちゃん…」

「シスター鮎美を、どうして、こうも狙うの…。シスター鮎美が何か悪いことをしましたか?!」

「……………」

石永も静江も何も言えなかった。

翌2月15日火曜の午前0時過ぎ、鮎美は新幹線で東京から井伊駅まで走り、鷹姫とSPたちに囲まれながら党の車で六角市内の病院に見舞いへ来ていた。

「カネちゃんが無事でよかったわ」

「まあね……ありがと、夜中に」

鐘留は病室のベッドに寝ているけれど、医師による検査で異常は出なかった。陽湖が説明してくれる。

「お医者さんによると、別のチョコを食べていたものの、先に吐いて苦しむ人を見て、強く不安になって嘔吐しただけだろう、とのことですよ」

「そうなんや。その斉藤さんは？ 失礼やけど、うち記憶に無いねんけど、そんな人おらはった？」

「ここ最近、集団訴訟の件で忙しくなり新たに雇われた人ですから、シスター鮎美が知らないのも無理ありません。病室にご案内します」
「お願いするわ。カネちゃん、またあとでね」

陽湖をともない、鷹姫を鐘留のそばにおいてSPたちと斉藤の病室を訪ねる。陽湖がノックすると母親が開けてくれた。

「シスター鮎……、芹沢先生が一言、お見舞いしたいと来られたのですが、お会いできますか？」

「はい……どうぞ……」

母親は疲れた声で中に導いてくれる。鮎美たちが入ると、斉藤はベッドの上において意識があった。顔色も悪くない。

「芹沢です。……この度は、うちのせいで申し訳ありません」

自分に送られたチョコに異物が入っていて入院することになった女性に対して、鮎美はどう言っていいいかわからず頭をさげた。

「……………」

斉藤は無言のまま手を振ってくれ、陽湖が説明する。

「斉藤さんは口の中を化学的な火傷をされているそうです。ですが一週間もしないうちに、ほぼ治るそうです。ただ、今は話せません」

「…一週間……うちのために、ホンマすみません！」

また頭をさげた鮎美は恐る恐るポケットから20万円を入れた見舞い袋を出した。最初、鮎美は100万円でもと言ったけれど、静江が負傷の程度と公選法、社会通念に照らして最大限で20万円と言ったので、それに従っているし、治療費などは労災保険で出す予定だった。斉藤も母親も遠慮したけれど、強引に受け取ってもらい、あまり長居しても双方困惑するので鐘留の病室に戻った。そして、気になることを鐘留に問う。

「カネちゃんのお母さんは？」

「あの人はアタシが病院に運ばれたニュースを見て、その場に倒れて入院してる。一つ下の階にいるけど、会わない方がいいよ。またキーってなって倒れるかもしれないし。だいたい、あの人は口先と外面ばっかで精神的には超脆いから」

「……………」

それは、あんたもやん！ という突っ込みは飲み込んで謝る。

「うちのせいで、ホンマごめんな」

「いいよ、アタシは平気だし。っていうか、月ちゃんからの報告が聴きたい。警察の人なんて？」

「はい、斉藤さんが食べたチョコレートは中にお酒が入っているタイプだったのですが、これを注射器か何かで抜き出し、かわりに洗剤のようなものを入れたのだろうと、今のところ判明しています。送り主の氏名は鳩山直人でしたが、もちろん、偽名というか悪質なカタリと思われまます」

「二国の総理が、うちをそんな姑息な方法で殺すわけないやん。犯行の動機とか、まだ、わからんよね？」

「動機につながりそうな手紙が箱の底に入っていました」

「なんて？」

「売春婦の年金をやめろ、さもなくば、次は殺す」

「……………」。そっちの話でなんや……………うちは、連合インフレ税か、うちへのストーカー行為の一種かと思っただけ……………」

鮎美が左手を額にあて考え込むので鷹姫が言う。

「今夜は、ここまでにて、もうお休みください。健康を害されませう」
「……うん、おおきに、忠告に従うわ」

鮎美は井伊市内の深夜でもチェックインできるビジネスホテルで休み、朝になると東京に行き、国会に出席したけれど、選挙応援は休んだ。介式たちにも引き続き警護任務で疲れさせたくないので議員宿舎で夕方の時間を過ごしている。

「……………」
「……………」

鮎美も鷹姫も口数が少ない。鷹姫が淹れてくれたミルクティーを飲みながら、鮎美は考え込んでいる。そこへ詩織と介式が訪ねてきた。

「鮎美先生、お久しぶりです。同じ東京にいるのに、なかなか会えなくて淋しいです」

「頑張つて海外へのアプローチしてくれはってホンマおおきに。それで、報告というのは？」

「ベルギーとフランスも近いうちに、いい返事があるかもしれません。あと、東京事務所へ届いたバレンタインチョコですが、総計3965個、うち石永先生へが15個、雄琴直樹宛に送ってきたバカな女が2人、鮎美先生宛のうち2554個が女性からです。イタズラや好意をこじらせた脅迫まがいの手紙がついていたのは7件、すでに警視庁へ届きましたが、毒物、危険物は発見できていませんが、念のため全て捜査機関に預けています」

「そう……いっぱい、くれはつたのに……悪いなあ……」

「こちらだけはお受け取りください」

詩織がリボンの着いた小箱を差し出すので、隣にいる介式が検めたような視線を注ぐ。なんとなく鮎美はわかったけれど、問う。

「それは？」

「私からです。ヨーロッパから航空便で取り寄せました」

「おおきに」

鮎美が開けようとするので介式が止める。

「警察の方で検めさせていただきます」

「それを言い出したら、うちは飢え死にするやん。せめて秘書が出してくれたもんくらい信用せな」

「……………」

「変な物は入れてませんよ、入れたのは私の愛だけです」

「いただきます」

鮎美は小箱から丸い板チョコを摘んだ。クッキーくらいの大きさで、ブラックとホワイトが半々に混ざっている。

「ロイズのやん。一回、食べてみたかったんよ。おおきに」

有名なブランドのチョコレートで食べてみると、美味しかった。とくに異物もなく三つ食べて小箱を置いた。

「介式はんからの報告は？」

「劇物入りのチョコレートを送った犯人はいまだ不明。福岡市内から発送されており宅配センター周囲の監視カメラにそれらしき人物は映っていたが、防寒具をもちいて顔を隠しており人物の特定はできない。指紋も検出されたのは宅配業者やチョコレートそのものを製造している店の従業員のものだった」

「そうですね……………。今回は捜査情報を教えてくれはるんですね？」

「度重なる事件で上層部は芹沢議員の心理状態を心配しているようだ。支障のない範囲で安心させるよう言われた」

「それは谷柿総裁の指示で？」

「私にはわからない。私は上司から言われたただけだ。安心させる材料になるかは、不明だが劇物は一般家庭でも使用する洗剤と同じような成分で、致死量を飲み込むことはできず口に含めば、ただちに吐き出すもので、犯人もそれを知って脅しに使った可能性は高く、殺意は感じられない」

「わかりました。おおきに」

介式と詩織が去り、また鷹姫と二人になった。

「……………うちの心理状態か……………どうなんやろ……………。最初の刺傷事件以外は、あんまり実感が無いんよ。介式はんらが守ってくれはるのも大きいかもしれんし……………。鷹姫から見ても、うちは、どう見えてる？」

「………………。大きな目標を前にして、脅しに動じておられないのだ
と思います」

「そう……………おおきに」

鮎美は座っていたソファから立ち上がった。そして前を見て、手の
ひらを柔道で構えるように挙げた。

「誰か知らんけど、うちは負けん。前に進む、鮎美の名はな、歩みを止
めんちゆる意味もあるて父さんがつけてくれたんや。前に進んで、な
んぼなんよ」

手のひらを握って拳にした。

2月16日 提訴

翌2月16日の水曜朝、静江は自宅で目を覚ますと、母親が作ってくれた朝食を兄と食べる。元大臣の父親もいっしょだった。

「お前たちが世話している芹沢鮎美、活きがいいな」

「よすぎて困ってるわ」

「いい子なんだけどなあ……こっちの思い通りに動く子じゃないよなあ」

石永が納豆ご飯を食べながら東京にいる鮎美のことを考える。今現在、都知事選を応援してくれているのも、石永の政治志向には合うけれど、自民党全体としては黙認という程度だった。

「せっかく手にした鮎だ。活きがよすぎて手から逃げ出したということのないようにな」

「はい」

「お前たちの今日の予定は？」

「オレは県議の先生方が県道整備の現状視察に呼んでくださってるので、そこへ。午後からは例のチョコレートで口を火傷した斉藤さんの見舞いに。緑野さんは退院してる。夕方は六角市議の集まりに」

「私は東京で、例の集団訴訟の提訴と告訴に出向きます。終電で帰ってこられれば帰ってくるつもりですけど、わかりません」

「その件、谷柿くんからも相談があったよ。ほどほどにな」

「はい。すでに芹沢先生の頭の中で、この訴訟は小さなことになっていきます。活きはいいいけど、こちらの話も聴いてくれる子ですから、落とすところを間違えないようにします」

家族での朝食会のような会話を終えると、それぞれに車で仕事に向かう。静江は六角駅で陽湖を拾うと、井伊駅まで車で走り一日500円の安い駐車場に駐めて陽湖と新幹線に乗った。

「いよいよシスター鮎美が日本中の出版社を訴えるのですね。女性を淫らに撮った写真をバラまいた罪で」

「そうね。大変な準備作業だったし、まだまだ訴訟が進めば事務作業

も増えると思うわ」

「報いは受けるべき人たちです。カメラマンも、印刷所も、書店も」

「……………。そう興奮しないで、到着したら休む間もないかもしれないから、いまのうちに寝ておいて」

「はい」

二人とも鮎美ほど多忙ではないけれど、寝られるときに寝ておくのは重要なので新幹線の中では寝て過ごし、東京駅に到着すると駅構内で昼食にする。事前に静江が予約しておいた2000円以内で食べられるイタリアンの人気レストランで陽湖とパスタコースを楽しみ、きっちりと領収書をもらって国会議事堂に向かう。鮎美の方も議員食堂での昼食後に国会議事堂前に出て来てくれ、一部のマスコミに通告しておいたので囲み取材を三人で受ける。鮎美が中央に立ち、静江と陽湖は左右に立った。

「芹沢議員、国内の大手出版社すべてを訴えるようですが？」

「すべてでも無いですよ。児童書や専門書ばかりの出版社は入っていません。入っているのは同意無く女性の下着や胸元を写した写真を出版したところ、そして、カメラマンや印刷所、書店です。書店は大手のみに限りました」

あいかわらず鮎美は多数のカメラに囲まれても堂々と話している。その背中を見て陽湖は立派だと感じていたけれど、急にトイレへ行きたくなった。

「……………うう……………」

お腹が痛い。昼食に食べたパスタに載っていた生ハムが悪かったのか、それとも朝食に自分で焼いた湖魚が生焼けだったのか、おそらく後者な気がしてくる。時間が無かったので自分の分だけ早めに仕上げてしまい、美恋と玄次郎の分にはしっかりと熱を通したけれど、陽湖が食べた物は芯が生しかった。それを思い出すと、ますます腹痛は強くなるし脂汗が流れてきた。

「…ハア…………ハア…………うう……………」

気を抜くと今にも限界を迎えて失禁してしまいそうで、テレビカメラの前でそんなことになるのは避けたい。陽湖の役割は鮎美の左右

に立っているだけで、喋る予定などはない。そつと陽湖は持ち場を離れ、そばで見えていた鷹姫に小声で告げる。

「ちよつとトイレに。私の代わりに立っていてください。うう……」
「わかりました」

鷹姫は了承して陽湖が立っていた場所に立つてくれる。陽湖は痛むお腹を揺すらないようにまっすぐ国会議事堂のトイレに向かった。女子トイレに滑り込み、個室のドアを閉める前に急いでショーツをおろして便座にまたがり、ギリギリ間に合った。

「ああああ……ハア……ハア……危なかつた……」

手を伸ばして個室のドアを閉める。

「やっぱり、あの魚かな……ううっ……まだ、痛い……」

長くトイレにこもって腹痛が治まるまで排泄を続け、終わって国会議事堂前に戻ると、もう取材は終了していて、静江は裁判所へ、鮎美は国会に戻るため陽湖とすれ違った。

「陽湖ちゃん、途中でどないしたん？」

「すいません。急にお腹が痛くなつて。それでトイレに」

「……ふーん……それでトイレに行けるのは、ええ身分やね」

「……え？」

今まで秘書業務をしていて鮎美から厭味を言われたことはないけれど、今の言葉は心にひかかった。

「体調管理も仕事のうちやで。しっかりしてな」

「はい、すみません」

「あと、東京はトイレ少ないし。気をつけいな。駅のトイレも混雑していることもあるし、大恥かきとう無かつたら注意しい」

「はい」

「お腹の具合が悪いんやったら、いつそオムツ着けるのも手よ」

「……。そういうセクハラ発言やめてください。不快です」

「……」

「もう行きます」

「うん、ほなね」

鮎美と別れて静江に追いつき、霞ヶ関にある東京地方裁判所に向か

う。裁判所前で連名の原告となってくれる芸能人やニュースキャスターと合流し、受任してくれたセクハラ問題に詳しい女性弁護士とともに裁判所内へ進む。外観は威圧感のある長方形が印象的なビルだったけれど、中に入ると天井の低い市役所のような雰囲気。陽湖は拍子抜けした。女性弁護士が地裁のカウンターで事務員に分厚い訴状を差し出す。

「こちらが訴状になります」

「確認します」

事務員は中身を読んだりせず、総額398億円という訴額に合う印紙がつけられているかなど、ごくごく事務的な確認をすると受理した。

「初回の期日については、大きな裁判になりそうですから、すぐに決まらないかもしれません。決まり次第、通知します」

「はい」

やり取りは、それで終了し正面玄関横のロビーで女性弁護士を囲んで軽いミーティングになる。

「もう2月も半ばですから、年度末で裁判官の移動もある時期で、初回は4月以降になると思います」

女性弁護士に続き、静江が告げる。

「次に警視庁へ告訴状を出していきます。有志の方はついてきてください」

裁判所の次は警視庁に移動し、カメラマンなどを痴漢行為として逮捕してくれるように願う告訴状を出した。本来、単独に芸能人が行っても受理されないような告訴だったけれど、弁護士が作成し、何より全国的に話題になっていたので難癖をつけて受理しないという対応は取られず、ともかくも受け取ってくれた。

「今日のメインは、これで終わりですが、新たに訴訟に加わってくださった方々と面談を行いますので、石永芹沢共同事務所までお越しください」

静江の案内で東京事務所へ原告たちと移動した。東京事務所では詩織が中心になって諸外国との連絡を取り合っていて、かなり忙しそ

うだったけれど、スペースを空けてもらい、静江と陽湖が手分けして26人の新原告と面談する。もう面談の内容は定型化されつつあり、いつ、どんな出版物に、どんな性的な写真を載せられたのか、その掲載で心が傷ついた結果、どのようなことが起こり、今はどう思っているのか、そういつたことを録音しつつメモしていく。静江は年配の女性を相手にし、陽湖は若いアイドルなどを相手にする。手分けして定型的に行っても、6時間以上かかり終わったのは午後8時過ぎだった。

「……………」

「……………」

ぐったりと疲れた静江と陽湖は話す気も起きない。もちろん面談の内容はセクハラ写真なので聴いていて愉快ではなかったし、途中で泣き出すアイドルもいて陽湖の精神的負担も大きかった。かがんだときに胸元を撮られて乳首が写っていた子や、座っていて足を組み変えた瞬間にパンチラを撮られてナプキンの一部まで写されていた子、お尻のパンチラを撮られて泥で汚れていたのか下痢便で汚してしまっていたのか茶色いシミを撮られた子、ニュース番組中に新アトラクションの紹介で高所恐怖症なのに空中に張ったワイヤーを滑り落ちる体験をさせられ恐怖で尿失禁してしまった濡れたズボンの写真がネットに出回り続けているニュースキャスター、アイドルになる前に甲子園のチアガールをやっているときはレーザー脱毛していなかった腋の写真とアイドルになってから脱毛後の腋写真を対比で載せられた子、体調が悪いのにステージ出演して嘔吐したとき白目をむいて鼻水を垂らした顔を晒され続けている歌手など、美しかったり可愛かったりするはずの女性たちの一番見られたくない姿を抉り撮ったような話ばかりで、静江も陽湖も聴取していて胸がムカムカとしたし、持参してくれた雑誌や写真を見ると、これを撮影したカメラマンや編集した編集者を刑務所に放り込みたくなる。

「……………うう……………胸がムカムカするのに……………お腹は空きました……………」

「夕飯、どうしよう……………」

静江が楽しみに夕食を予約していたレストランは間に合いそうに

ないのでキャンセルしている。陽湖は熱心に外国語で通話している詩織の方を見た。

「牧田さんの体力……すごい……私たちが来る前から、やってて、今も……」

「あつちの仕事の方が、建設的で楽しそう……英語なら、私も負けないのに……」

「セクハラ話は、もう、うんざりです」

「もう新幹線で帰るのもつらい時間ね……どこかホテル探すわ」

「お願いします」

「夕ご飯、洋食と和食、どっちがいい？」

「お任せします」

ぐつたりと精神的に疲れた二人は精力的に仕事をしている詩織に会釈してから東京事務所を出て、最寄りのビジネスホテルに入った。つい、ホテル横のコンビニで弁当を買ってしまい、それを二人部屋でわびしく食べる。テレビをつけるとニュースが流れていて、やはり関東なので都知事選のニュースが地元より大きく扱われている。

「シスター鮎美、頑張ってますね」

「あの子の体力も、けっこうなものね」

ニュースが変わり集団訴訟の話になった。国会議事堂前でのシーンで、また鮎美が映り、その左右に自分たちが映る。途中でテレビに映る陽湖の顔色が曇り、お尻に力を入れて我慢しているのが自分のことなので、よくわかる。

「……もし、このとき……漏らしたら、私もネットに晒されて……」

無理に我慢して立っていたら、きつと失禁していた気がする。そんな姿が配信されるのは死にたくなるほど嫌だった。静江が言う。

「私たちは公人じゃないけど、公人に近い存在だし、私たち秘書が芹沢先生の恋人候補って変な特集も組まれたしね。いまだに、お兄ちゃんをホモって書くし。本人が否定してるんだから、いい加減にしろっていうの！ あ、そうだ！ お兄ちゃんも原告に加えるの、どう?!」

「男性の石永先生をですか？」

「だって、しつこくホモホモってさ！ 芹沢先生みたいに自分で認めたら、そりゃわかるよ。その通りだし、本人も否定しないし。けど、お兄ちゃんが否定してるのに、いつまでもホモホモって言い立てるのは、ある意味、セクハラじゃない?！」

「たしかに……もし、自分がそうじゃないのに、同性愛だってしつこく言われたら、すごく嫌……いくら公人でも、限度があります……」
「よし、加えよう！ ……あ、でも……」

静江は集団訴訟が途中で和解にもつていかれる予定路線であることを思い出してトーンを落とした。

「でも、何ですか?」

「ううん、何でもない。やっぱり男一人は、ちよつと、お兄ちゃんが嫌がるかな、って」

「かもしれないね」

コンビニ弁当を食べ終えた陽湖はベッドに寝転がる。静江は立ち上がった。

「寝ちやう前にお風呂にしよ。先、入っていい?」

「どうぞお」

「いっしょに入ろうなんて言わないでよね」

「それはシスター鮎美ですよ」

疲れていた陽湖は静江が揚がってくるまでに眠ってしまった。

翌2月17日木曜、静江と陽湖は昨日と同じ下着を使うことに抵抗を覚えつつも諦めて着た。鮎美は会計処理を厳しくしてほしいと言っているので、コンビニで自分たちの下着を買って計上するのは遠慮した。少し汗の匂いがする下着を我慢して、パンツスーツと制服も着る。

「泊まる予定ではなかったし、これからどうする? ……いっそ遊びに行くのダメかしら?」

「えく……東京事務所は大忙しだし、シスター鮎美も選挙応援を頑張ってるのに、ですか?」

「やっぱりダメよね。せめて、美味しいランチを食べて帰りましょう」

静江はレストランの予約をしてから午前中の予定を考える。

「昨日、面談で聴取したことを、まとめるのは地元に戻ってからの方がいいし」

「東京事務所を手伝うのはどうですか？」

「それ、今夜も帰れなくなりそう」

「ですね」

予定が決まらず、とりあえずホテルで食べ放題の朝食をとり、外に出た。

「う〜……寒い……」

「東京の方が暖かいとはいえ、寒いですね」

「目的もなく歩き回るには、つらい気候ね」

歩いていると寒いので目的もなく電車に乗った。なんとなく品川駅で降り、スマートフォンで検索した有名なクレープ店で一つ買って二人でシェアする。

「たまには、こういう、のんびりした時間もいいものね」

「東京って誰も彼も忙しそうです。道路も、だいたい渋滞してますし」

陽湖が車で混雑した道路を眺める。

「これは、たぶん流れてるレベルで、渋滞って思っていないかな、東京のドライバーは」

「そうなんですか……私、ここで運転しろって言われたらパニックになりそう」

「首都高は、もつとすごいよお」

二人がクレープを食べながら話していると、大きなトラックが動き、その向こうに隠れていた畑母神の選挙カーが見えた。一瞬、静江は背中を向けて顔を隠そうかと思っただけ、この時間は鮎美は国会にいるはずなので観察することにした。今は畑母神と水田が乗っているようでチラリと見えた。

「よかった。こんなところ、芹沢先生に見られたら、ドスの効いた関西弁で、ええ身分やね、静江はん、クレープ美味しそうやね、とか言われ

そう」

「シスター鮎美は、そんな厭味、言わないですよ」

「何にしても、昨日の嫌なセクハラ話は忘れて、息抜きして帰ろう」

「そうですね」

静江と陽湖は白金台を少し散策して、予約したレストランで昼食をとる。ゆつくり食べていると、見知らぬ中年女性たちに声をかけられた。

「もしかして、鮎美ちゃんですか？」

「あ、いえ、違います」

陽湖は制服を着て議院記章を着けているし、六角市内では珍しくない制服でも、都内では今現在3人しか着ていないので間違えられるのも無理なかった。否定すると、陽湖のツインテールにした髪を見て言ってくる。

「鷹姫ちゃん？」

「いえ、私は秘書補佐の月谷陽湖です。これからも、芹沢鮎美をよろしくお願いします」

陽湖が立つて頭をさげると、女性たちは握手とサイン、記念撮影を求めてきた。

「え、いえ、私は秘書補佐ですから」

それでも欲しいと言われ、静江と相談してから応じた。中断した食事を再開したけれど、さらに3回、声をかけられて、あまり食べた気がしなかった。

「はああ……びつくりした。私にまでサインや撮影を求めてくるなんて……」

「だんだん、アイドルグループみたいに見えるのかもね。私は除外みたいだけど」

「そろそろ帰りませんか。また囲まれると疲れますし」
「そうね」

品川駅から新幹線に乗った。井伊駅で降りて駅前スーパーで陽湖は食料品を買い、静江が車で琵琶湖岸の港まで陽湖を送った。

「お疲れ様」

「お疲れ様です」

静江と別れて陽湖は連絡船に乗り、島に渡る。まだ早い時間だったので玄次郎は仕事から帰っておらず美恋だけが家にいた。つわりが激しいらしく布団に寝ている。

「ただいま、戻りました。シスター美恋、何か作りましようか？」

「あ…おかえりなさい。…うん…何も要らない…お水だけ、湯冷ましのを、ちょうだい。ヤカンにあるから」

「はい、少し温めますね」

陽湖は微温水を妊婦へ与えると、台所を観察した。昨夜は陽湖が帰宅しないことを見越して玄次郎がホカホカ弁当を二つ買ってきただけで、その箱がゴミ袋に入っている。そして、朝食は玄次郎が目玉焼きを作ったようで、美恋の分が半分以上、皿に残っていた。

「シチューと肉じゃがなら、どちらが食べられそうですか？」

「…ごめんなさい…何も要らないわ…」

「二つとも作ってみますね。そういう材料を買ってきましたから」

「…ありがとうございます…シスター陽湖がいてくれて、本当に助かるわ」

「神は必要などころに必要な者を召し使わされます。きっと、シスター鮎美が東京で頑張っているのも、そうですね」

陽湖は換気扇を回してから夕食を作り始める。出来上がる頃に玄次郎が帰ってきた。

「ただいま」

「おかえりなさい」

「おお、我が愛しの娘よ」

玄次郎がエプロン姿の陽湖を拜む。三人での団欒となった。つわりが続く美恋も薄味に作られたシチューは少し食べることができた。美恋は両手で慈しむように下腹部を撫でて声をかけている。

「ママから栄養がいきますよ。大きくなつてね。美味しい？ 優しいお姉ちゃんが作ってくれたの。あなたが女の子だったら、一字いただいて湖恋ってお名前にしますね」

「……………」

「男の子で鯉次郎はイヤですよねえ。パパには、もう少し考えてもら

「はいしょう」

「はははは」

笑いながら玄次郎がテレビをつけると鮎美が映った。

「もう一人の娘は遠くにいったままだな」

「今週末には投開票ですから帰ってきましたよ」

「いや、日曜の夜まで選挙事務所において月曜には国会だろう。早くて来週の週末だな」

「あ…そうなりますね…」

「本当に娘が入れ替わったみたいだ。にしても、国会議員というのは忙しいものだな」

「そうですね、ここまで拘束時間が長いなんて」

「鮎美の顔、テレビで見ている方が多い」

「秘書補佐の私でも、地元事務所メインなので、そうかもしれません」

「鮎美、疲れて倒れないといいが……」

「昨日、お見かけしたときは元気そうでしたよ」

「そうか、よかった」

微笑んだ玄次郎は立ち上がって風呂の用意をした。湯が溜まった頃に陽湖へ声をかける。

「女の子から、お先にどうぞ」

「すみません。ありがとうございます」

夕食の後片付けをした陽湖は入浴する。脱衣所で全裸になり鏡で両腋を見る。毛が1センチ近く伸びてきている。

「……そろそろ剃っておこうかな……肌も荒れてないし……」

真冬なので誰かに見られる機会は極端に少ないけれど、女子として整えておきたかった。洗い場に立ってシャワーで身体を流していると、寒さもあつて小便がしたくなる。

「……………」

わざわざトイレに行くことはせず、シャワーの音と流れに隠して、そのまま済ませた。身体を洗い、一度、湯船で温まると、腋を剃るために洗い場の湯椅子に座る。肌の荒れ具合を確かめるために、右腕を

あげ、左手指先で右腋を撫でた。

「うん、大丈夫そう」

肌はなめらかで荒れていない。荒れているときに無理して剃ると、翌日とても嫌な匂いを発するので強く気にかけている。自分用のカミソリで、ゆつくりと肌を傷つけないように剃った。左右とも剃り終わってシャワーで流して身体を温め、髪を洗って脱衣所に出た。

「見せる機会はないけど、やっぱり、ちゃんとしてないと」

鏡の前で両腕をあげてみて、剃り残しがないか確認した。去年までは夏場でも剃れないことが多くてコンプレックスだったので、今は美しく整えられたのが嬉しい。全身の肌もアトピーが治り、円形脱毛症も松田川のおかげで治りつつある。治療費は7万円しか請求されなかった。

「……………あのお金、どうしよう……………寄付……………でも……………」

示談金として300万円もらったので293万円が手元にあり、この大半を教会へ寄付しようと考えたものの、そうなる大金の出所を屋城に説明しないといけなくなるかもしれない。セクハラを受けて身体を触られたことは永遠に黙っておきたかった。

「そろそろ揚がらないと」

パジャマを着て居間に出る。

「お先です。どうぞ」

次に美恋が入浴する。パジャマ姿で玄次郎と二人きりでいるのは少し抵抗があるので二階へあがらせてもらう。階段あがって、すぐの鮎美の部屋は長く本人が不在で冷え切っている。その隣室に住まわせてもらっていて、玄次郎が自分の部屋を暖めるついでに暖房をつけておいてくれたようで入室すると暖かかった。造りが狭く天井も低いので冷暖房が効きやすい。乳液を肌につけてから布団に潜り込んで女子高生らしくスマートフォンをチェックすると、鐘留から電話がほしいとメールが入っていた。

「もしもし、私です」

「ハイ♪」

「どうかしましたか？」

「ううん、何も」

「……」

「だって淋しいじゃん。アユミン超忙しそうだし、月ちゃんならヒマかなって」

「あなただって与えられた仕事があつて大変なんじゃないですか？」

「うーん……まあね、シオちゃんから回される仕事があるけど、重要な国とのやり取りは全部、シオちゃんがやるし。アタシに回ってくるのは、どうでもいい国ばっかだよ」

「どうでもいい国なんて無いですよ」

「あるある、アフリカの聞いたこと無い国とか、人口10万人くらいでそれって国じゃなくて街じゃねって国家とか。そういう国と英語でやり取りしてるんだけどさ、向こうも母国語じゃないから文法が間違つてたり、スペルが違うこともあるんだよね。明らかにAI翻訳ソフトで変換しただけの変な英語で送られてきたりするし」

「それは大変そうですね」

「しかも、国によつては大臣がバカだったりするよ」

「そんなことはないでしょう。一国の大臣となれば、それなりの人物があてられているのでは？」

「ひどいと大統領の息子つてだけで、すごいバカが大臣だったりする。しかも、そういうバカに限ってアユミンに会いたいとか下手な英語でメールしてくるし、アユミン忙しくて無理って断るとアタシでもいいからとか。アタシらの写真を見て言ってる感じ。お前、日本に何しに来る気だよつての」

「加賀田知事が言つてらした腐敗国家ですね。そういう国は一部の王族や支配層が富を独占しているから、連合インフレ税には参加しない可能性が高いらしいですよ。むしろ、その一国そのものが、お金持ちファミリーの一家みたいなものだからって」

「アタシ、学校にいるときは自分ちが一番お金持ちって気分だったけど、上には上がいるって思い知ったよ」

「…………。そういうものの見方ばかりするんですね…………」

「ま、アユミンが考えた連合インフレ税は参加しなくても主要通貨の価値が下がれば逃げられないもんね」

「シスター鮎美、あの人は歴史に名が残るかもしれませんが……私たちは、そんな人のもとで手伝いをして……光栄なことです」

「なに、宮ちゃんみたいなこと言ってるの?」

「神の救いのおときが来るまで、地上は原罪による苦しみに満ちています。けれど、少しでも良い方向にしようとする努力を、きつと神は見てください」

「……。また、始まった。眠いし、じゃあね」

鐘留が電話を切った。

「アーメン」

陽湖は祈ってから眠った。

翌2月18日金曜夜、鮎美はテレビ局で都知事選投票日前、最後のテレビ出演となる畑母神とともにスタジオで外国人エコノミストと討論していた。通訳を介して専門的な経済用語を使ってくるので、言われていることの半分が理解できない。押され気味になる前に鮎美は反撃する。

「わざと18歳の、うちに理解できん言葉を選んでありますよね。経済の理論的な話については加賀田知事とやってください。何より、経済学は発展したように見えて、結局のところ現在の富の集中と、非道な格差を解消することはできてません。何一つ手を打たんより、ずっと良いと考えます。経済という言葉の語源は経世済民、世をおさめ、民をすくう、これができての経済です」

鮎美が言ったことも翻訳するとなると難しいので時間を要して反論が返ってくる。

「簡単な言葉を使えば、君たちのプランでは通貨価値が落ちすぎたとき、産油国や資源国が極端に有利となる。文明を築いてきた功績が軽視され、社会は自堕落な者たちの楽園となるだろう」

「それは欧米の白人さんから見たとき、そう見える一面があるにすぎんですよ。資源国に対しても、たいてい欧米の企業は自分らがガツチ

り優位な契約を結ばさせますやん。採掘や加工技術を隠して。しかも、いよいよトラブルになったときは裁判所管轄の条項を適応して、自分らに有利な自国の裁判所で戦えるようにする。治外法権を押しつける構造は幕末から、いっしょですよん。うちらアジアの漢字文化圏では経済は経世済民、せやけど、エコノミーの語源は、ギリシヤ語カラテン語の家政術ですよね。家を管理する、こっちの言葉で言えば家訓や。そこに世界はない。世間もない。うちうちのことだけ、自分の家のことだけ、そういう出発点がエコノミーやと理解すると、先進国と最貧国の差が開くのも、先進国の中でさえ、世帯所得に格差ができるのも、よう理解できます。数式や法則で誤魔化す前に、そこで起こってることを見たら、高校生にもわかるような卑怯なやり方が、法律という屁理屈をつけまくって正当に見せられてるだけですよん。資源国や産油国が極端に有利になるほど、各国の蔵相と中央銀行はアホちゃいますから通貨価値が落ちすぎることは無いでしょう。何より、うちは働く人に有利になってほしい。なんぼ資源があっても、それを掘り出す人、加工する人、そういう人の手の働きのあつて、なんぼのことです。自堕落な者の楽園と言いますが、不安定な雇用で働く人に助成金を出すような制度なら、ベーシック・インカムのように、ただもらえるというわけやないので各国も採用しやすいでしょう」

関西人らしい喋り出したら止まらないトークで鮎美は押し勝ったし、最後に気になったので問う。

「うちとの討論のために来日してくれはったらしいですけど、お国はリヒテンシュタインですよ。あちらで連合インフレ税の評判はどうですか?」

「良くはない。愚かな政策だと言われている」

「でしょうね。リヒテンシュタインはタックスヘブンですもん。ふぎけるな、というのが本音やと思います。けど、うちらからしたらタックスヘブンの存在そのものがふぎけるな、ですから。正直、このタイミングでの討論、タックスヘブンからの回し者かと思ってしまうわ。どうです、ちゃいますか?」

「まったく、無礼な小娘だ。日本の女性とは、もつと美しく可愛らし

いものだと聴いていた」

「日本の女の中でも、大阪の女は別格です。商人の中で堺と琵琶の商人がちやうようにね。それにイメージはイメージですよ。インド人全員がカレー好きなわけやない。ついでに言えば、うちもイギリス人もカレー食べますし、紅茶も好きですけど、文明を築いてきた功績とやらに食文化への功績が含まれるなら、日本もイギリスも相当、インドに支払わなあかんもんがある思いますよ」

番組が終わり、候補者であるはずの畑母神よりも目立ってしまったことは少し後悔した。テレビ局の玄関で畑母神と別れるとき、言ってくれる。

「明日が最後の戦いだ。よろしく頼む」

「はい、きつと勝ちましょう。閣下」

「組長にはかなわんよ」

投票日まで、あと2日となった。

翌2月19日土曜の朝、島の自宅で玄次郎は目を覚ました。つわりで呻いていた妻は静かに眠っているので起こさないよう一階へおる。すでに陽湖が朝食の準備を始めてくれていた。

「おはよう。ありがとう」

「おはようございます」

陽湖は制服を着ているので出勤予定らしかった。

「今日の予定は？」

「セクハラ訴訟の資料をまとめるため、支部に5時まで。お父さんはお休みですか？」

「いや、オレも出勤する」

「土曜なのに。今まで土曜に仕事があつたこと少ないですよね？」

「うむ、二人目が産まれるからな。稼がないと」

「フフ、いいお父さんですね。うちの父はあまり稼いでくれませんでしたから、ちよつと羨ましいです」

「お仕事は何を？」

「新聞配達と代行運転のかけもちです」

「……。お母さんも仕事を？」

「母はヤクルトの販売員をしていましたが、一昨年、居辛くなつて辞めました」

「……………」

「二人とも頑張つてくれてますよ。でも、布教活動もあるから都合の合う仕事が少ないよ」

「家計は大丈夫なのか？」

「贅沢しませんから平気です。私の生活費をもつていただき、すみません。……あの300万円で払わせていただいても……」

「その話は、もうやめなさい。一度、男が要らぬと言えば、要らぬ。それに月谷さんが居てくれて、とても助かっている。君の働きは十分に生活費と見合っているよ」

「ありがとうございます」

陽湖は三人分の朝食を作り、それを玄次郎と二人で食べて、美恋の方は冷蔵庫に入れた。起きてこない美恋には書き置きをして、二人で連絡船に乗る。本土の港に渡ると、玄次郎は島民として用意してもらっている駐車場に駐めてある自家用車に乗り、陽湖も乗せて支部に送る。玄次郎の建築事務所も近所にあり、ほとんど遠回りにはならない。

「さて、始めるか」

玄次郎は依頼された邸宅の設計を始めた。本来なら土日は休みと決め込みたかったけれど、二人目が産まれるので仕事を増やしている。依頼主は女医で、松田川の大先輩にあたる医大教授だった。依頼も松田川と世間話をしているうちに拾っている。

「この人も未婚か……」

邸宅の総工費は3億円、けれど一人で住む予定で、大きな中庭を造り、そこでドレスを着てダンスをするのが若い頃からの夢だったらしい。周囲から見えない中庭で踊る独身女性の姿を想像しつつ、図面を進める。お昼には陽湖が作ってくれた弁当を食べ、午後5時になって陽湖へ連絡して、いっしょに食料品を買うため支部の前で駐まった。

「ありがとうございます」

陽湖が助手席に乗ってくる。真冬なのに陽湖の身体から強い汗の匂いがした。言っていた通り、一日中セクハラがらみの具体的な出来事を訴訟のためにまとめていたなら、かなり不快な仕事をしていたはずで、精神的緊張が続いたときの人間独特な匂いだった。とくに陽湖は制汗スプレーを使わないので、それがわかりやすい。言えば傷つくに決まっているので玄次郎は何も言わず車を走らせ、近くのスーパーに入った。二人で食品をカートに入れてみると、今までより周囲から視線を感じた。

「オレら、目立ってるな。鮎美と同じ制服だしな。けど、その制服を着た女の子なら、いくらでもいるのに」

「私もチラつとですが、何度かテレビに出てますし、そういえば、東京で私にまでサインや記念撮影を求めてくる人がいました」

「都知事選なのに、こっちでも放送回数が多いし。まあ、鮎美が近畿出身だから、そうなるのかもな。演説でも興奮すると関西弁モロ出しで、都民に、どう思われているか…」

「相手も宮崎弁が出るから大丈夫ではないでしょうか」

「そうだな。畑母神さんは福島県の出だし、そもそも東京や大阪は外部からの流入が多いから」

連絡船の時刻を気にしながら買い物を終え、車で港まで走り、船に乗る。同じように市街で仕事をしてきて帰る島民に声をかけられた。

「鮎美ちゃんが応援する人、どうだい？ 都知事選、勝ちそうですかい？」

「ははは、どうでしょうね。勝って欲しいが、私たちには一票も入れてやれない」

「だなあ。ぜんぜん、こっちで見ねえから、また帰って来てほしいな。東京行ったきりじゃ淋しい。ご家族は余計に淋しいでしょ？」

「淋しいと言えば淋しいですが、大学に進学していたら、同じように出ていく歳ですから。覚悟していた時期でもありませんよ」

「そっか、そうだな。けど、陽湖ちゃんが残ってくれてよかったな。う

こちらの島で婿さん探してやろうか？」

「い、いえ！ 遠慮します！」

「そうかい。芹沢さんも奥さんが寝込んで大変だ。具合どうだい？」

「つわりですから、そのうち回復しますよ。鮎美のときも半年ほど続いた」

船が到着したので玄次郎と陽湖は買い物袋を持って帰宅した。家は一階も二階も電灯がついていないけれど、それは予想されたことなので二人とも静かに入る。美恋は二階で寝込んでいるようだった。

「オレは様子を見てくる」

「はい」

陽湖は夕飯を作り始めた。玄次郎は二階にあがって妻と会話し、麦茶を頼まれたので麦茶と梅干し、糸切りクッキーを取りに来て、また二階へあがった。つわりは続いているらしく美恋はトイレ以外はおりてこない。陽湖が作った夕食を二人で食べ始めた。

「鯉次郎という名はダメだと思うか？」

「……まあ……ちよつと、かわいそうかな……」

「陽湖は、いい名前だね。やっぱり、琵琶湖から？」

「はい」

「琵琶次郎ってのは、どう思う？」

「………。……ちよつと、かわいそうかな……」

「湖次郎は？」

「……こじろう……それなら……」

くだらない会話をしつつ食事を終え、陽湖が先に入浴する。一階には玄次郎しか居ないので脱衣所のドアに鍵をかけた。

「……ブラザー愛也と……私なら……愛湖って名前に……」

明るい未来を想像しながら全裸になると少し赤面していた。洗い場に立つと、しっかりと身体を洗う。今日は午後から汗の匂いが自分でも気になっていたので周囲に申し訳ない。明日は日曜礼拝で愛也と会うので絶対に匂ってほしくない。いつもより時間をかけて入浴

した陽湖は玄次郎に謝る。

「遅くなつて、すみません」

「いや、いいよ。おやすみ」

「はい、おやすみなさい」

陽湖が二階にあがつても、すぐに玄次郎は風呂に入らず、ビールを呑み終わるまでテレビで鮎美の様子を見て、風呂に入って揚がつてくるとウイスキーを呑む。

「……鮎美、頑張れよ」

だいぶ酔つてきたので一人言を言い、その場に寝そうになった。明日は日曜なので予定はない。陽湖は礼拝に出かけるだろうけど、美恋はつわりで動けないし、玄次郎も家にいるつもりだった。ふらりと立ち上がると風邪を引かいたために二階へあがり、つわりで起きているのか、寝ているのかわからない妻の隣で眠った。

2月20日　お願い

翌2月20日の日曜朝、鮎美は議員宿舎でゆっくり寝て、ビジネスホテルで朝食を食べ終えた鷹姫に9時過ぎに起こしてもらった。

「……うくん……おはようさん……」

「おはようございます」

「ふああ……」

あくびをして立ち上がる。

「すぐに朝食を用意します」

「おおきに」

鷹姫が一人分の朝食を用意してくれて、食べ終わると残念そうに夕メ息をついた。

「あんだだけ応援した畑母神先生に、うちも鷹姫も一票も入れられんのかな」

「そうですね。選挙権がありませんから」

選挙権があれば二人とも朝一番に投票所へ向かったところだけど、応援はしても投票はできない身分なので、ゆっくりとしている。

「寝たいだけ寝て、食べたいときに、ご飯を食べられて、したいときにトイレに行ける。幸せやわあ」

今日はオムツを穿いていない鮎美はトイレに入って、ゆっくりと排便した。オムツに済ませるのと違い、すつきりとした気持ち良さがある。

「久野先生が自分は政治家に向いてない言うてはったけど、向き不向き以前に、政治家って大変すぎるわ。休日があらへんやん」

「お疲れですか？」

「うん、めっちゃ」

「肩を揉みましようか」

「ええの？」

「はい」

「ベッドに寝るから、揉んでくれる？」

「はい」

「……ほな」

まだパジャマ姿だった鮎美はベッドにうつ伏せになる。制服姿の鷹姫がそばに膝をついて両肩を揉んでくれた。

「どうですか？」

「うん……気持ちええよ」

鷹姫の手が身体に触れてくれるのが嬉しい。エステティシャンより力強くて少し痛いけれど、それも心地いい。もっと身体をよせて欲しくなった。

「パジャマ脱ぐし、鷹姫も横からやと腰がひねれて疲れるやろ。うちに乗って揉んでよ」

そう言つて鮎美はパジャマの上を脱ぎ、上半身裸になつてうつ伏せに寝る。そこへ鷹姫が馬乗りになつて揉んでくれると、鷹姫はスカートなので内腿の肌が鮎美のわき腹に密着してくれて鮎美は興奮した。

「…ハア……ハア……うん、すごい……気持ちいいよ」

話すとヨダレをベッドに垂らしてしまう。腰の皮膚で感じる鷹姫の股間の温かさばかりに意識がいく。肩より胸に触れて欲しくなった。

「鷹姫、仰向きになるから、胸を揉んで」

「はい」

鷹姫が腰をあげてくれたので鮎美は寝返りして仰向きに寝た。ずっと圧迫されていたのに乳首が勃っている。鷹姫が胸を揉もうとして疑問に思った。

「……胸も凝るのですか？」

「えっと……」

問われて、また自分が衝動に負けていることに気づいた。けれど、離れて欲しくない。

「胸、揉んで欲しいの。でも、また、うち、鷹姫にセクハラしそうな気分やし、制服のリボン貸して。自分の手首、縛るし」

「……………はい」

素直に鷹姫がリボンを貸してくれたので左手首を縛ってから、首に一卷きして反対の端を右手で持って言う。

「これで、うちの右手首も縛って。そしたら、うちが鷹姫に何かすることはできんよね」

「……それほど耐えがたい衝動なのですか？ 同性愛というのは？」

「うん。……たとえば、鷹姫かって一週間、ご飯、食べて無かったら、どう？」

「一週間ですか……それは、つらいと思います」

「そんなとき、目の前に食べ物があったら、どう？ けど、食べてはいけません、って言われたら、いつそ縛って欲しくならん？」

「…はい……」

鷹姫は年末に詩織からハムで攻められたことを思い出した。ずっと忘れていたのに、あのとときの衝動に負けて芋虫のように皿を舐めた記憶は恥ずかしくて消し去ってほしい。鷹姫は鮎美の右手首を縛った。これで鮎美は何もできなくなる。両手を首のそばから離せないし、無理に動かせば首が絞まってしまう。

「鮎美、苦しくないですか？」

「うん、自分で気をつけてれば大丈夫よ」

鮎美は赤面しているけれど、それは首の拘束のせいではなくて興奮のせいだった。

「胸、揉んでくれる？ イヤなら、ええけど…」

「イヤではありません。揉みます」

鷹姫が肩を揉むように、乳房を揉んでくれる。

「あ…ハア…」

「痛いですか？」

「ううん、気持ちいいよ」

鷹姫に馬乗りになられて両胸を揉まれると、両手と首の拘束もあつて鮎美はマゾ的な興奮を覚えた。そして、どんどん下半身が熱くなつてくる。

「…ハア…鷹姫、脚も揉んでほしい。ええかな？」

「はい」

「…ほな、…パジャマのズボンも脱がせて…」

「わかりました」

鷹姫がズボンを脱がせてくれると、鮎美は興奮で下着を濡らしていた。

「…ハア…ハア…」

「言いにくいことですが…下着が濡れています。少し失禁されたのではないですか？」

「……………。…どうなんかな…不安やし、パンツも脱がせてくれる？」

どうして濡らしたのか、鮎美はわかっていて鷹姫にねだった。

「オムツにされるのですか？」

「…………うん…今日は…いつでも、トイレ行けるし。…夜、選挙事務所に行くときは、していくかもしれないけど、今はパンツ脱がせるだけにして」

「わかりました」

鷹姫がショーツを脱がせてくれる。鮎美は拘束のリボン以外は全裸にされて、ますます興奮する。

「ハア…ハア…」

「大丈夫ですか？ ずっと息が荒いようですが」

「ごめん、また鷹姫にエッチなことしたくて、理性が飛びそうなんよ。もし、襲いかかったら、すぐに反撃してな」

「…………はい。…その両手では、どうにもできないでしょうし、ご安心ください」

「うちが命令したことでも、嫌なことは従わんでええよ」

「はい、お気遣い、ありがとうございます」

「…………。脚、揉んでくれる？」

「はい」

鷹姫が素足を揉んでくれる。連日の選挙応援で立ちっぱなしだった脚は本当に疲れていて心地よかったし、何より興奮する。鷹姫の手が爪先から、ゆっくり登ってきてくれる。

「…ハア…ハア…」

「首のリボン、解きましようか？」

「ううん、ハア…このまま…、…あ、…脚の付け根、もう少し、揉んで」

「はい」

「もう少し、股間のところ…嫌やなかったら、揉んで」

「あの…トイレに行かれますか？ 漏らしていますよ」

「こ…これは…、…ずっと、オムツやったからかな。自分で気づかんうちに漏らしてるのかも」

「それは…お医者に行かれた方がよいのでは？ ややヌルヌルとした感じですし。痛みはないですか？」

「うん…痛くないよ。…けど、…おもらしするようになるのは困るから、鷹姫の指で特訓させて」

「特訓ですか？」

「うん…ギョツと締めつける筋肉をトレーニングしたいし…鷹姫の指を…うちの中に入れてくれへん？ …嫌？」

「……………」

鷹姫が自分の指を見て考える。

「…ハア…ハア…入れて欲しい…ハア…お願い…」

「……。女性の身体で、この部分は、もつとも大切に嫁に行くまで守れと教えてくださったのは鮎美ですよ？」

「うちは嫁に行かんもん」

「……………たしかに……………」

「なあ、お願い、入れてよ。初めては鷹姫がええの」

鐘留は入れさせてくれたけれど、鮎美へ入れるのは気持ち悪がつて拒否したし、エステティシャンたちも法に触れるからかサービスの限度なのか、入れられてはいない。鷹姫が迷う。

「……………」

「ハア…ハア…お願い…鷹姫の指…欲しい…」

言いながら鮎美が涙を零したので鷹姫は応じることにした。しばらく鮎美の望むまま、指を動かした。終わってから鷹姫が問う。

「……今のは……同性愛的な行為だったのですか？」

「っ……………うん……………ごめん、また鷹姫に変なことさせて……」

「……………。血が出ています。大丈夫ですか？」

「平気よ……………ごめん……………また、鷹姫に……………」

「……………。鮎美こそ、そんなに泣かないでください」

鷹姫は鮎美の頭を撫でようとして、指に血がついているのでやめた。

「そろそろ選挙事務所に行きますか？」

「……………。ううん……………もう少し、二人でいたい」

「いずれにしても、もうリボンを解きます」

「あ、うん、お願いするわ」

鮎美は両手首を自由にしてもらい、リボンを鷹姫に返した。鷹姫は剣道着を正しく着るようにリボンをキュツと結び直した。

「……………」

「……………」

「鮎美、服を着てください。風邪を引きますよ」

「うん、おおきに」

鮎美は下着を着け、制服を着る。今日の予定は選挙事務所に待機して当確を待つのが定石だったけれど、早く行っても遅く行っても、もはや選挙活動は公然とはできないので、あまり差がない。そして、地元ではないのでイベントなどへ顔を出す用事もなく、他の集団訴訟や連合インフレ税にかかわる業務等も、今日は都知事選の日なので連絡も入ってこない、急にポツカリと時間が空いた形になっている。

「……………」

「……………」

「お昼ご飯、どうしますか？」

「すぐに、そんな時間やね。あ、たまには、うちが作るから、いっしょに食べてよ」

「はい。手伝います」

「ええよ、たまには、うちにも女の子らしいことさせて」

そう言つて鮎美は冷蔵庫や戸棚の食材を見て、メニューを決めた。

「お好み焼き、嫌い？」

「いいえ、好きです」

「ほな、そうするな」

ほぼ初めて議員宿舎のキッチンにまともに立った鮎美はキャベツを刻み、お好み焼きを作る。ホットプレートはないのでフライパンで焼く。

「鷹姫、焼き方に注文ある？」

「いえ、とくに何もありません」

「うち流に焼くよ」

「はい」

鮎美はフライパンいっぱい生地を垂らすと、生卵を三つ潰さないように入れた。さらに生地をかけてキャベツを載せ、さらに生地をかける。蓋をする。焼き加減を見つつ、少し焦げたくらいで裏返すことにした。

「これが一発勝負やねん」

「これほど大きく焼くのですか……」

「二人で、いっしょに食べたいやん。さて……」

鮎美は気持ちを集約して、鷹姫に揉んでもらった肩を少し回した。そして両手でフライパンの柄を握る。

「えいっ！」

一気に全体を裏返すため、お好み焼きに宙を舞わせる。

「おっしやー！」

うまく受け止めて成功させた。

「お見事」

「あとはマヨネーズ作るわ」

弱火にして、次にマヨネーズを酢と油、卵黄を使って作る。

「お好み焼きはな、マヨネーズが美味しいと、ぜんぜんちゃうんよ」

焼き上がった頃合いを見て、フライパンごとテーブルに移すと調理ヘラでホールケーキを切断するように8つに分割してからトッピングをする。

「鷹姫、ソースのかけ方に注文ある？」

「いえ、とくに何もありません」

「ほな、これも、うち流な」

鮎美は作ったマヨネーズにソースも入れ込む。

「マヨネーズ2に対してソース1が黄金比なんよ」

「美味しそうですね」

よく混ぜられ、琥珀色になったマヨネーズソースを全体にかけた。

「はい、できあがり。カツオ節と青のりが無いのは残念やけど、その分、マヨネーズソースとお好み焼きそのものの味が楽しめるし、食べてみて。ちなみに鷹姫が8分の6、うちが8分の2を食べる計算よ」

「鮎美は8分の2で足りるのですか？　せめて3は食べませんか？」

「うち、朝ご飯が遅かったもん」

「ああ、そうですね。では、いただきます」

二人きりの昼食を楽しみ、食後も選挙事務所に出向かずキッチンを片付けた後はゆっくりとする。鮎美はテレビをつけようとして、やめた。今は二人の時間を楽しみたいし、鷹姫に触れたい。

「さっきのお返しに、鷹姫の肩も揉んであげよ。ここに寝てよ」

「……」

「そんな警戒せんでも、もう変なことせんから。な、信じて？」

「…はい…」

鷹姫がベッドに寝ると、鮎美は優しく肩を揉んでみた。やはり鷹姫も慣れない東京生活に疲れていて、揉んでいると20分ほどで眠ってしまった。鮎美は少し興奮していたけれど、眠っている鷹姫の股間に触ったりすることは自戒して離れる。そばに寝たかったけれど、それをするときスしてしまいそうで我慢する。テレビをつけると、うるさいのでスマートフォンをいじった。しばらく政治関連のニュースを見ていたけれど、不意にヤフーの知恵袋に入り、新規のアカウント名を作って質問を投稿した。

私はビアンですが、自分の性欲が怖いです。

好きな人がいて、私を慕ってくれるのですが、その気持ちを利用して彼女の身体に触れてしまいます。一線を越えないようにしてきたつもりですが、とうとう今日、彼女の手で私にしてみました。前に私の手で彼女にしようとしたときは嫌がったのでやめました。彼女には親が決めた結婚相手があります。私たちは大学2年生です。

これから、どうしたら、いいの？

そして、私は彼女が好きなくせに、他の女子にも手を出しています。最低です。でも、やってしまいます。何度もやめようと思うくせに、可愛い子がいると、すぐに手を出します。相手が嫌がるギリギリまでセクハラします。

一度、気持ち悪いと言いつつ受け入れてくれた子がいたけど、相手の親に見つかって激怒されました。

もう嫌になります。何度も死のうと思いました。

けど、死にたくない。

どうしたら、いいですか？

投稿して30分ほどで3件の回答がついた。

回答者 k a k a t o

質問主は本当にビアンなのかな。

行動が男っぽい。

実は性同一性障碍なんじゃない。一度、医師に診てもらったら。

回答者カヲル

自死はいつでもできるから、最後の選択肢にしてください。

その慕ってくれる彼女もビアンなのでしようか。そうでないように読めますが、相手がビアンでないなら、あまり関係を進めない方がいいと思います。好きな気持ちを抑えるのは難しいかもしれませんが、もう大学も2年生なのでから大人になってください。

相手の慕ってくれる気持ちを利用してある自覚はあるんですよね？ だったら、やめましょうよ。あと、セクハラもやめましょう。女の子同士で相手が油断してるからって続けてるとビアンだってバレたとき超嫌われます。

ビアンはビアン同士が一番ですよ。

あなたが誰かと出会えて、幸せになりますように。

回答者モーニングフランス・カテゴリーマスター

異性愛者の性欲がそれぞれなように、ビアンの性欲もそれぞれです。

草食系男子がいるみたいに、ビアンでもおとなしい子はキスだけで満足しますし、男女とわず肉食もいます。質問主はガッツリ系みたいです。ですね。

二つ忠告します。

一つは恋と性欲は別物なこと。これは男性の性欲にみられるパターンですけど、ビアンでもみられます。好きな人は一番好きなんですけど、それ以外の人にも惹かれてしまう、という感じで、バリバリ肉食なビアンなんでしょう。他に目移りするからって本命を軽視してるわけじゃない。けど、罪悪感はある。でも、私たちビアンは一対一に縛られることも無いといえは無いのですよ。普通の男女の恋人や夫婦が縛り合うのは妊娠しちゃう危険があるからで、それが無い私たちは、ある意味で幸せ。いろいろ不幸なことが多い同性愛者としての人生の中で、わずかに幸せなのが、そういうところ。とはいえ、独占欲の強いビアンと付き合ったときは配慮が必要です。

二つ、その彼女はビアンでない風ですが、これからどうするかは、あなたが決めることです。とことん二人の関係を進めてみるか、彼女に結婚相手もいることですし、泣く泣く諦めるのか、どちらの選択もありです。どちらにしても後悔するかもしれませんが、後悔の無い人生なんて無いものです。

あんまり悩まず、なるようになるかと構えて、自分も彼女も傷つかないようになしてください。

読み終わった鮎美はベストアンサーにモーニングフランスの回答を選んで目を閉じた。

「……………」

目を閉じているうちにソファで眠ってしまい、夕方になって鷹姫に揺り起こされた。

「さすがに、そろそろ選挙事務所に行かねば援軍たる旗色を疑われま
す」

「そやね」

身支度をしてトイレにいつて鷹姫とSPたちに囲まれ、議員宿舍を
出てタクシーで選挙事務所に移動した。かなりの遅参だったけれど、
連日の応援で疲れていたのだと畑母神陣営も理解してくれる。鮎美
は雛壇上のパイプ椅子を勧められ、鷹姫は調理場を覗き、手伝うこと
はないかと言ってオニギリを作るのに参加した。

「いよいよ開票時刻です。やるべきことはすべてやりました。あとは
天命を待つのみ、皆様いましばらく、この畑母神にお付き合いくださ
い」

畑母神がマイクで事務所内に挨拶した。誰もが固唾を飲んでテレ
ビを見守る。そろそろ夕食の時刻を過ぎているけれど、あまり空腹を
覚えない。鷹姫たちが作ったオニギリが折たたみ式事務机に並ん
でいるものの、ほとんど減らない。

「先生方、お茶をどうぞ」

鷹姫が雛壇にいるメンバーにお茶を配ってくれる。こういうとき
に一番若い女性が選ばれるのは関東でも同じだった。そのお茶を飲
み終え、今日はオムツを穿いていない鮎美がトイレに行つて戻つてき
たとき、動きがあつた。テレビに当確が出る。

「出ました！ 畑母神氏です！ 当確、畑母神氏に出ました！」

「…………おおおっ……」

低く呻るように畑母神が言い、鮎美は高い声をあげる。

「やったー!!」

他の歓声も続き、すぐに万歳三唱になった。

「二二バンザイ！ バンザイ！ バンザイ！」

万歳しているうちに鮎美は涙を零した。畑母神は涙を耐え、集まっ
ている全員に礼を言おうとして鮎美に抱きつかれた。

「畑母神先生！ おめでとう！」

抱きついた勢いで鮎美はキスしそうになり、ギリギリで思い止まっ
た。あまりに嬉しくて衝動的に動いていた。平常時なら問題になり

そんな行動だったけれど、そこは当確の瞬間なので、お祭り騒ぎに近い雰囲気でもらえる。畑母神も鮎美の手を握り、高く掲げた。

「皆様のおかげです！ 芹沢先生の！ そして、都民のみなさまの！」

また万歳が始まり、それが終わると鮎美は鷹姫に抱きついた。今度もキスをしたくなるけれど、それも思い止まる。お祭り騒ぎが落ち着くとテレビのインタビュー取材が始まり、畑母神は元幹部自衛官らしく、もう冷静な顔で答える。

「私が当選させていただきましたからには、あとは公約の実現に向け邁進するのみです」

「尖閣諸島を都の所有として施設を建設する公約もですか？」

「当然です。そのための寄付金もすでに20億円を超えている。地権者との交渉も進んでいます。明日にも売買契約を結びたい」

「尖閣諸島は沖縄県石垣市に所属していますが？」

「そんなことは、すでに何度も説明した通り、東京都の財産は都内に限定されない。また、沖縄県と石垣市の権限は土地所有権におよばない。もし、両者に尖閣諸島を管理する気がないのであれば、東京都に移管していただくのも一つの手だと考える。もう少し言えば、沖縄県にばかり基地負担が偏っているというならば、尖閣諸島を東京都とした上で、そこに基地を移設すれば、鳩山総理が言われた最低でも県外という発言が実現しなくもない。もっとも、米軍基地が増えるよりは、日本国は日本人の手で守るべきだと、誰もが思うだろうから、そこは議論していききたい」

当選した興奮もあるようで畑母神は言い過ぎなほどの発言をした。マイクが鮎美にも向けられる。

「芹沢議員、ずっと応援してこられた畑母神氏が当選されたこと、どう感じておられますか？」

「嬉しいに決まってるやないですか！ 思わず抱きついてしても、あとで畑母神先生にセクハラや言われたら、どうしよか思えますわ。さつきは、すんません」

「いや、いいよ。私も嬉しかった」

「これで芹沢議員が提唱された連合インフレ税も進むとお考えですか？」

「……………」

すつと鮎美の顔が冷静になり、左手を唇にあてて考え込む。

「はい。追い風になると思っています」

「鳩山総理へ何か一言ありますか？」

「……………」 民主党も自民党も、日本を豊かにしたい。平和で安全な、そして誰もが笑顔で過ごせる国にしたいという大枠は同じはずです。いっしょに頑張りましょう」

「芹沢議員が総理大臣になられたら、どうされますか？」

「また、そんなこと言わせようとする。調子に乗って小娘がいらんこと言うたら、そのまんま南…、あの宮崎県知事みたいに、めっちゃ叩く気でしょ。やめたってや」

鮎美も興奮していて言葉が荒かった。冷静になろうとしても、どうしても心が躍っている。鷹姫が忠告しにきた。

「芹沢先生、ご予定、覚えていますか？」

「あ…うん…鷹姫、おおきに」

それが冷静になれ、という暗号であることは忘れていない。

「芹沢議員、集団訴訟の件でも勝てるとお考えですか？」

「その件と都知事選は、まるで関係がないのでコメントを控えます」

「尖閣諸島を東京都の所有とした場合、中国からの反発が予想されますが、どうお考えですか？」

「……………慎重な対応が必要で、今すぐ明言することはさけないと思いますし、うちにその権限はありません。ただ、百色正春さんのようなことは、もう起こってほしくないと思います」

「百色氏と面識がありますか？」

「面識も、なにも、そこにはありません」

鮎美が言うのと、すでに酒樽を開けて酒杯をあおっていた百色が返事をします。

「おう！ なんだい、組長！」

「テレビの前で組長いわんといってください。ノーカットの生放送ですよ。レポーターさん、そろそろ切り上げてください。もう酔うてはる人もいありますさかい。うちは帰りますし。明日も国会あるんで」

国会を口実に鮎美は取材を切り上げて、鷹姫とSPに囲まれて選挙事務所を出た。

翌2月21日月曜朝、鮎美は朝刊を見て予想通りだったけれど、肩を落とした。

「やっぱり、この写真を使うんやね……」

当確が出た直後、喜びのあまり畑母神に抱きついてキスしそうになった写真を一面に載せられていた。鷹姫が髪をといてくれながら言う。

「畑母神先生には法律上の配偶者と、内縁の妻がおられますから、問題かもしれません。鮎美は異性にも性欲を覚えるのですか？」

「うっ……ちやうって。これは純粋な喜びのアピールよ。鷹姫まで変に想わんといて」

「そうですか。お時間です。お疲れではないですか？」

「うん、平気よ。行こか」

二人で部屋を出ると、知念と男性SP3名がついてくる。

「おはようっす。おめでとうございます。当選したっすね」

「おおきに」

「畑母神知事に抱きついてたっすけど、男もイケるっすか？」

「……。あれは喜びのあまり勢いでやっただけよ。うち男の人は、ぜんぜん感じんから。知念はんかって剣道か柔道やってへん？」

「オレは柔道っす。あと琉球空手を少々」

「もし全国大会団体戦で優勝したらメンバーと抱き合っつて喜ぶと思わん？」

「ああ、そういう感情っすか」

「そういえば、鷹姫は団体戦で優勝したことないの？」

「……ありません」

鷹姫が悔しそうに言ったので、なんとなくわかった。全島民が武道を習うとはいえ、もともと人口は少なく、女子で武道を極める子は、さらに少ない。団体戦で実力あるメンバーがそろわなかったのは想像がついた。話ながら議員宿舎を出ると、さすがに知念もSPとして周囲を警戒して黙り、鮎美は移動して朝食会に参加する。やはり朝食会でも都知事選の話題が雑談のメインだった。そして、遠い上座にいた谷柿に呼ばれて、そばに寄る。

「芹沢先生、今夜、ご夕食の予定は？」

「…あ…はい…えつと…空いてるはずです」

スケジュールは空いていたけれど、実は静江と訪れた一流ホテルで再びエステを受けて休養日にしたかった。とはいえ、明らかに自民党総裁の谷柿が夕食に誘ってくれているので、断るわけにはいかない。エステは諦めた。朝食会が終わって国会に出席しても、やはり雑談の話題は都知事選だった。共産党所属の音羽は選挙中は共産党公認候補も都知事選に出っていたので鮎美と仲良く話すのを控えていたけれど、もう選挙が終わったので屈託無く喋る。

「やっぱりアユちゃんの勝ちだったね。おめでとう」

「おおきに。畑母神先生の實力よ」

「でも、あの人がえらくなると戦争になりそう」

「守ることはあっても、仕掛ける人ではないと、うちは感じてるよ」

松尾が言ってくる。

「当確直後から夜間にもかかわらず中国軍機が3回、尖閣諸島に接近したそうだ」

「……………」

鮎美と音羽が考え込み、翔子が言う。

「くだらないことするのですね。そんな燃料代があるなら人民に温かいスープの100万食も配ればいいのに」

「戦闘機の燃料代は、すごいからな。スクランブルで対応する空自は相手より多数で出撃するのが基本だから、余計に高くつく。タバだけで1000万円は飛んだらうな。お金といえば金地金の価格1グラム6500円を超えたね。これって金本位制に戻る予兆なんだろう

か」

「ちやうと思えますよ。世界に存在する金の量は、もう世界に存在する富みの総量を反映するには少なすぎますから。単に連合インフレ税の租税回避行動として予防的につり上がってるだけやと考えてます」

「だとしても、まだまだ上昇すれば産業にも影響を与えるかもしれない。銅より電気抵抗が低くて錆びない金は回路の中に使われてるらしいから。レアメタルも中国からの輸入が一時期ストップしたおかげで、日本企業は躍起になって代替材料を研究してる。もう、いくつか方法を見つけたそうだ」

国会が終わると、鮎美に迎えの車が来た。鷹姫も招待されていたので、いつしよに乗る。当然、SPたちもついてきてくれるけれど、知念は勤務時間が終わり、介式に替わった。

「谷柿先生、鷹姫まで招待してくれるなんて嬉しいね」

「……。過分なことに畏れ多いです」

「そう緊張せんとき、柔らかい感じの人やし」

「それは知ってるのですが……わざわざの会席ということは、なにかお話があると思われます。いかがお考えですか?」

「いくつか思い当たることはあるけど、それも今考えてもしやーないことよ。静江はんと陽湖ちゃんも招待されてるあたり、やっぱり集団訴訟の件かもしれんけど……」

鮎美のスマートフォンが鳴った。

「畑母神先生から電話や。何やろ。もしもし? うちです」

「昨日まで色々ありがとう」

「いえ、共闘は約束したことですから」

「今、話していても問題ないかな? 周りに人は?」

「車内です」

「実は少し困ったことが起きてしまい、芹沢先生に警視庁まで来てほしい」

「警視庁に? なんで、また?」

「水田くんが逮捕されてしまった」

「水田先生が、なんで？」

「彼女は冗談のつもりでバレンタインに芹沢先生宛でチョコレートを送ったのだが、そこに少々のイタズラをしていた」

「……。どんな？」

「タバスコのような辛い香辛料、なんといったか……ああ、デスソースか、そういうソースを混入されていたようなのだ。あくまで食品であり、彼女は冗談だったと言うのだが、警察の方は、他のイタズラや劇物混入と同列にみなして彼女を逮捕してしまった」

「……………それで、うちは、どうしたら？」

「警視庁に来て、彼女と和解してほしい。冗談だと主張する彼女とは友達で、これは事件ではなく仲間うちの遊びだと」

「……………」

「このタイミングでの逮捕は私の選挙の終了を待ってくれたのかもしれないし、もしくは警察としては淡々と処理したのかもしれない。彼女も冗談として行ったことだから、箱から指紋などが検出されている。他のイタズラでは手の込んだものは、指紋は出ていない」

「他のイタズラって、どんながあったか、聴いてくれます？」

「ああ、水田くんの他に3人が逮捕された。いずれも男性で異物混入だった」

「どんなものを混入してきてたんですか？」

「うむ……………その……………男性の……………その……………」

「その？」

「……………君は同性愛者だからかな……………ここまで言っただけからかな？」

「その……………そういう液体だ」

「そういう液体……………精液ですか？」

「あ、……………ああ、ざっくり言うのだな……………」

「見たことはないですけど、保健体育で習いましたし。理科でも鮭の産卵とかで」

「ともかく3人のうち2人は精液の混入、あとの1人は刃物だったそうだ」

「刃物は、かなり嫌かなあ……」

「その3人も警視庁にいるのだが、それは、どうでもよいとして、水田くんは出してやってほしい。マスコミに知れる前に」

「……あの人……」

「ほんの冗談のつもりだったそうだ。頼む、できるだけ早く来てくれ。警察は被害者本人が許すなら、釈放すると言ってくれている」

「わかりました。けど、これから谷柿総裁と会食なんですよ。その後でもええですか?」

「総裁と……そうか、それは優先順位が……わかった。マスコミ対策は努力する」

畑母神との電話を終えると、鮎美は水田のことを考えた。あまり、いい印象はない。向こうは同性愛者を蔑視しているし、鮎美も蔑視されて心安いはずがない。畑母神の選挙中は同じ陣営内でトラブルを起こさないよう我慢していた。

「幼稚なイタズラするなあ……チョコにタバスコって……デスソースって、どんなんやろ」

鮎美はスマートフォンで調べた。

「……バーテンやったブレア氏が閉店時刻になっても、帰らない客に出した激辛ソースが始まり……別名、ブレア氏の午前2時50分。デスソースの名は、あまりの辛さで心臓発作を起こして死亡した人がいるため……って、あかんやん! 死んでるやん!」

「芹沢先生、どうされました? 畑母神先生との電話の内容は?」

助手席の鷹姫が問うてくるので鮎美は説明した。

「どう思う? 鷹姫」

「冗談にしては悪質です。傷害未遂で裁かれるべきです」

「とは言っても、畑母神先生の日本一心党での、数少ない元議員やし、まだ4年先になるやろけど総選挙には出てもらはるやろし……」

「……。では、こういう罰は、どうでしょう?」

そう言っ鷹姫が語ったことに鮎美は笑いながら頷いた。

「それナイス! 鷹姫、まじめな顔して、めっちゃオモろいこと考えるやん! それで行こー!」

方針が決まった頃、新宿の料亭に到着した。少し前に到着した静江と陽湖が待っている。

「静江はんと陽湖ちゃんは今新幹線で？」

「はい。総裁に交通費まで出していただいて呼ばれて来ないわけにいきませんから」

「予定もあつたやろに。陽湖ちゃん、大丈夫？ 疲れてない？ 行ったり来たりで大変やろ？」

「大丈夫です。でも、新幹線が無かったら、とても無理だったと思います」

招待されたメンバーがそろつたので料亭に入ると、奥の和室に通してもらった。和室には上座と下座がわかりにくい大きな円卓が置かれていて見知らぬ先客2人がいた。一人は和装の男性で年齢は70代くらいに見える。もう一人は60代でスーツ姿だった。鮎美たちを見ると、立って挨拶してくれる。

「はじめまして。全日本出版紙商連合会、総務理事の大原です」

「はじめまして。私は経済団体連合会の理事、富井です」

かなりの高位にある男性なのに鮎美たちへ丁寧な頭をさげてくれた。鮎美たちが名乗り終わって握手を交わした頃、谷柿と木村が入室してきた。木村が同席するのは、参議院で自民党議員をまとめているからだ。もう鮎美にも理解できる。そして大原と富井の肩書きから話の内容も想像がついた。ただ、どこが落としどころになるかは、まだわからない。

「まずは、あらためて都知事選の畑母神先生の勝利、おめでとう」

谷柿が乾杯で会食を始めしてくれる。鮎美たちが飲酒できないのに配慮してくれたのか、すべてノンアルコールの飲料が提供されていた。会食の前半は都知事選の話と、鮎美を誉めること、さらに鷹姫と陽湖へも讃辞が送られたし、静江にも労いがあつた。男女比4対4で本題がセクハラ絡みなので谷柿たちがタイミングを見てくれているので鮎美はデザートが出てくる前に、本題を求めた。

「そろそろ本題をおうかがいさせていただきたいと思えますけれど：どうでしょう？」

「そうだね。大原会長、どうでしょう」

「うむ、君たち、いや、失礼、芹沢先生方が行っておられる訴訟だが、経済と出版、言論界に与える影響は、計り知れない」

「……………」

「とはいえ、正義は芹沢先生の方にあって、いくら売上のためとはいえ、女性が不快に感じる写真などを出版し続けてきた責任は我々にある。そこで、我々出版業界と、出版物の流通業界は共同で謝罪文を主要新聞に載せよう。また、今後、女性の人権に配慮した出版を心がけることも、そえる。それをもつて訴訟の終結としてもらえないだろうか？」

「…………。心がける、というのは努力義務ということですか？」

「……………」

鮎美の問いが、男たちを黙らせた。努力義務が義務に比べて、はるかに拘束力がないことは、ここにいる全員が知っている。せいぜいスローガンのようなものだど、わかっていた。鮎美が続ける。

「うちの号令で集まってくださった女性被害者の中には、大きく分けて二種類の方がおられます。一つは今後人権に配慮された表現活動がされることを期待して参加され、賠償金が取れることはさほど期待していない人。もう一つはすでに芸能活動などから引退しつつあり過去の被害を金銭的に償ってほしい人です」

「……………」

「さきほど、おっしゃられた謝罪文を新聞にあげていただくことは前者には相応の評価がされると思われませんが、後者には意味が少ないでしょう。何より、うちは訴訟の勝ち目を半々、もしくは半々より、こちらに不利やと思つてます。日本の訴訟は大きな精神的被害があつても、そこを評価せず、ごくわずかな賠償判決で終わることが多いからです。そういった意味で、あなた方、出版業界のトップと話させていただくのは、とても意義のあることやと喜んでおります」

「…………。お詫びの機会をいただいております。ただ、表現活動の萎縮はさけないのですよ。また、万一、裁判官が大きな賠償判決をなしたとき、業界が受けるダメージは大きすぎる。芹沢先生の世代

は、もう紙媒体で情報をえることが少なくなっていないかな？」

「はい、ほとんどスマホです」

「結果として出版業界は先細りだ。そこにきて、この訴訟、これでは優秀な人材を集めることもできない」

大原の言葉を木村が付け足す。

「新規採用どころかね、リストラや倒産ということも起こるんだよ。そこを芹沢先生たちにも考えてあげてほしい」

「もちろん考えます。けれど、どんなひどい写真が今まで印刷され配布されてきたか、そこは考え直してほしいのです。どのみち、裁判は始まっていません。今すぐ落着点を見つけることはできないとしても、たとえば謝罪文を見て、こちら原告団の中にも変化がでるかもしれない。もう二度と非道な写真を載せないと信じられるなら、原告団から抜ける人もいるかもしれませんし、被告にふくめた出版社のうち誠意の感じられるところは除外していくとか、個別に和解していくこともあるかと思えます。逆に、あまりにも非道な写真を撮り続けてきたカメラマン等に対しては、どうにも許せないと言って、うちが止めても訴訟を続ける人はいるかもしれません。今日の会談は大きな一歩でしたけれど、はい、そうですかと、うちも原告団に、これで終わりよ、とは説明できません。そこは、わかってください」

「……………」

大原と富井が頷いて目を閉じる。自分たちが提示した条件が譲歩したものの、大きな譲歩でないことは自覚していたので鮎美へ反論する材料が無い。谷柿が言ってくる。

「芹沢先生も各社に大きなダメージがあることは避けたいと考えてくれているようですから、一度、双方持ち帰って、それぞれに集まった中で意見をまとめてきていただくのは、どうでしょう。謝罪広告があつて、それに対して原告の方々が軟化されるか、そこを互いに見極めていっていただくということ」

「はい」

「総裁の言われる通りですな」

「私たちも意識改革をしていきます」

本題が終わり、料亭の女将はタイミングを見ていたようでデザートを運んでくる。食べたことがないほど美味しいメロンを口にして、蕩けた顔で鷹姫がつぶやいた。

「…美味しい…」

ずつと行儀良く黙って食べていた鷹姫の一言で場がなごむ。言った鷹姫は恥ずかしそうに顔を伏せた。

「クスクス、今の鷹姫みたいな可愛い表情やったら盗撮してでも印刷しようなる気持ちはわかりますわ」

「「ははははは」」

「シスター鮎美も趣味が悪いです。被告に加えますよ」

「それは勘弁したって」

「「はははは」」

笑いが取れたところで、鮎美が一礼する。

「今夜は、うちの秘書までごちそうになりました、ありがとうございます。うちからも原告団には業界の姿勢を見て軟化の方向で指揮していきますし、石永先生の妹さんの方が社会経験も豊富なんで、まとめたいってもらいます」

「はい、努力いたします」

静江が両手を円卓について谷柿たちに頭をさげた。法廷では争う予定でも日本人らしく裏で握手した8人はそれぞれに車で解散する。鮎美と鷹姫は介式たちを連れて警視庁に向かった。

「遅くなりました」

案内された取調室に入ると、水田と畑母神、そして刑事が2名いた。刑事2名は敬礼してきたけれど、それは鮎美へというより介式へという感じだった。

「ありがとうございます、芹沢先生」

畑母神は礼を言ってくれたけれど、水田は文句を言ってくる。

「遅いわよ！ いつまで私が、こんな侮辱を受けなきゃいけないの！

私は衆議院議員だったのよ！」

水田が不満そうに手錠をされた両手を鮎美に見せつけてくる。

「さ、もういいでしょ。さっさと外して」

「……………」

鮎美があきれて黙っていると、鷹姫が叱った。

「非礼もほどほどになさい！ 悪質な罫を仕掛けておいて、その口のききようは無礼千万！ 芹沢先生、やはり告訴すべきです！ 和解してはなりません！」

「鷹姫……………」

「水田くん、とにかく謝りなさい。ここは穏便に願います、芹沢先生」

都知事となつた畑母神が代わりに頭をさげてくるので鮎美は男の肩に触れた。それから鮎美は刑事に問う。

「それで、うちに食べさせようとしたチョコって、どれですか？」

「こちらです」

刑事がビニール袋に入った証拠品であるチョコレート箱を見せしてくれる。箱には4つのウイスキーボンボンが入っていて、美味しそうに見えるけれど、表面に水田の指紋もある。うち1つは科学捜査のために解体されたようで割られていたし、中身に入っていた液体は別に小瓶で保存されている。その液体を見て鮎美がつぶやく。

「……………うわぁ……………辛そう……………これ食べて心臓麻痺した人もいるんやろ……………そら逮捕されるわ」

「アマゾンで買った正規品よ！ 毒じゃないし！ ただの食品だから！」

「ほな、食べてみてください」

「え……………？」

「4つとも、もつたいないし、水田はんが一人で食べてくれたら、証拠も消えることですし、和解ということだ」

「おお、なるほど」

畑母神が感心した。

「鷹姫、差し入れたって」

「はい。水田…先生、こちらをどうぞ」

鷹姫は先生と呼ぶのを嫌そうに、途中のコンビニで買ったペットボトルの水を出した。水田が疑わしそうに鮎美を見る。

「何か入れたの？」

「ファミマで買ったサントリーの正規品です。めっちゃ辛いやろし、水くらいあげようという武士の情けですわ」

「……………ま、まあいいわ、ちよつと食べてみたい好奇心はあるし」

水田は強がった。すでにチョコレートに細工するとき、興味本位で1滴だけ舐めているけれど、まさに舌が燃えるような辛さだった。それがウイスキーボンボンいっぱいに入っているのは細工した本人なので、よく知っている。指先を震わせないようにしてチョコを摘むと、口に入れた。

「……………」

「……………」

「……………」

水田がペットボトルに手を伸ばした。真っ赤な顔をして水を飲む。涙と鼻水を流していた。

「ハア…ハア…ううっ…ひ…ハア…ううっ…ひ…」

一つ食べただけでペットボトルの水、半分まで飲んでいる。

「…も…もう許してよ。一つで十分でしょ。ハア…」

「ただの食品なんですよね」

「どうせ、あなたが食べたとしても飲み込まずに吐き出していたでしょ」

「そんなこと人前でさせられたかと思うと腹も立ちますし、うちの秘書が被害に遭ったかもしれないのですよ。現に、地元では秘書補佐と党職員さんが入院してるし。タイミングの悪い冗談のツケは払ってください」

「……………わかったわよ」

水田は二つ目を摘むと、口に入れたけれど、その表面を口内で転がしてチョコの角を溶かすと、一息に飲み込んだ。

「あ、その手があるんや」

「ハア…痛っ…」

噛まずにウイスキーボンボンを丸呑みしたので喉が痛かった。さらに、もう一つ飲み込む。

「もう、いいでしょ」

「これも食べてください。食品がもつたいないですよん」
「……………」

水田が解体されたウイスキーボンボンと小瓶に入ったデスソースを見つめる。

「ちゃんと飲み干してくださいよ」

「……………わかったわよ!」

小瓶を後にすると口直しがないので水田は先にデスソースをラツパ飲みしてからチョコを口に突っ込んだ。

「ううっ…ううう! はひい! ううう!」

「……………」

鮎美と鷹姫、畑母神は笑いそうになるのを我慢する。刑事たちも顔を背けて笑っている。

「ハア…ハア…ひーっ…ハア…」

そこそこに美人ではある水田が口や目、鼻を真っ赤にして呻いている。水で口を洗い、やっと手錠を外してもらった。

「…………ハア…………ハア…………」

「芹沢先生、疲れているところを、くだらないことで呼び出して、すまなかった」

「いえ。……刑事さん、他の、うちにイタズラを送ってきた人に会えますか?」

「はい。可能です」

「畑母神先生、うち、他の犯人にも会ってきますし、水田先生には甘いミルクティーでもおごつてあげてください」

「そうだな。水田くん、ちよつと休憩しよう」

「…………はい…………」

水田は鮎美の背中を恨みがましく見つつも取調室を出て自動販売機の方へ行く。鮎美は取調室に残り、他のイタズラを仕掛けた男性に面会した。まず一人目は27歳の男性で、鮎美へ送るチョコレートに精液をかけた上で送付してきたサラリーマンだった。鮎美を見るなり土下座してくる。

「すいませんでした！ ふざけてやりました！ 許してください！」

「……………」

鮎美と鷹姫は顔を見合わせる。それからチョコレートを見た。コンビニで買える安価なバレンタインチョコに上から何か干涸らびたものがかかっている。見たことがないので鮎美は刑事に問う。

「この上にかかっているのが、精液なんですか？」

「そうです。DNA鑑定の結果も一致しています」

「……指紋以上に、モロバレな……。とりあえず土下座はやめて椅子に座ってください」

「……はい……」

男性は顔を伏せたまま椅子に座った。軽い気持ちでイタズラしたのに逮捕された者らしく顔に後悔と恐怖が貼りついている。

「えっと…………お名前は？」

「…山田義彦です…」

「山田はんは、うちが同性愛者なんを知ってはりますか？」

「…はい…………テレビで…」

「ほな、なんで、うちに自分の精液を送ってきはったんですか？」

「…………テレビで見えて…………あと、ポスターとかで可愛いな、と…………」

「そういうとき、男の人って、そういうことするもんなんですか？」

「……………。自分がバカで……………。最初は、鮎美ちゃんを応援したくてチョコを送ろうなんて……………。考えて……………。けど、送る前に魔が差して……………」

「精液をかけはったと……………。うちが、これを食べると期待しはったんですか？」

「……………。いえ……………」

「ほな、何のために？」

「……………。なんか……………。やりたくて……………。やりました……………。申し訳ないです！ ……ごめんなさい！ ……ごめんなさい！ ……許してください！ ……逮捕されたのが会社にバレたらクビなんです！ ……頼みます！ ……どうか！」

どうか、許してください！」

男性が深々と頭をさげるので鮎美は許すことにした。

「少し表現の仕方が間違っていただけで、うちに好意をもってくれはったわけやし、とくに実害も無いですし。もう許します。刑事さん、手錠を外してあげてください」

手錠をされることが、どれだけ心理的ダメージになるかは介式にされたので思い知っている。鮎美は手錠を外された山田の手首を撫でた。

「これからも、普通にやったら、うちを応援してください。もう精液は送らんといてください。あと、どれだけ、うちを好きになつてくれはつても、うちは同性愛者です。男性に興味はもちません。応援してくれはるのは政治的な意味だけにして、他の女の人の興味をもってください」

「ううっ…ありがとうございます、ありがとうございます」

泣きながら礼を言って山田は去った。次の男性と面会する。次は41歳のラーメン店経営の男性だった。送ってきたチョコレートは、またもウイスキーボンボンで中に精液を入れ込んでいた。

「……うち、もう一生、ウイスキーボンボン、食べるのやめよ……」

「……………」

手錠をされ、連行されてきた男性は鮎美をチラリと見ただけで目を伏せた。

「お名前は？」

「……………」

「氏名は村川祐二、年齢41歳、自営業、ラーメン店経営です」

刑事が教えてくれた。

「うちに精液を送らはった理由はなんですか？」

「……………」

「うちのこと好きでいてくれはったんですか？」

「……………」調子にのんな、ブス」

「……………」

「無礼者！」

「鷹姫、いちいち興奮せんでええよ」

「…はい」

「村川はんも、軽い気持ちでイタズラしはったんやとは思いますが。けど、こういうものを送られると、うちの秘書が食べる場合もあるし、うち自身が食べても、やっぱり気持ちが悪いです」

「……………」

「ラーメン店って、どこでやってはるんですか？　お店の名前は？」

「……………」

「八王子の高尾、オレのラーメン最高や！八王子本店です」

また刑事が教えてくれた。

「…八王子…オレのラーメン最高…」

鮎美は女子高生らしくスマートフォンで食べログ検索してみた。

「けっこう人気店のオーナーですよ。支店が8つもある」

「慰謝料なんか払わねえぞ、銭ゲバ娘」

「……………」

「芹沢先生、この者、打ち首にすべきです！」

「鷹姫、そう興奮せんと。あと武家諸法度やのうて日本刑法を思い出そな」

「ですが…あまりに無礼で…」

「もうええよ。どのみち実害は無かったし。けっこう美味しそうなラーメン作ってはるし。そのうち食べるにいつてみますわ。八王子本店は何を入られるかわからんし、東京駅前店あたりに」

「……………」

「刑事さん、もうええですから、解放してあげてください。二度とせんといってくださいね。村川はん」

「……………」

村川は何も言わずに去った。鷹姫が強く疑問に思い、問う。

「なぜ、あのような者を無罪放免とするのですか?!」

「鷹姫、静江はんに習ったこと、思い出して。国民の中には、自民党というだけ、政治家というだけで反感を持つ人もいて言うてはったや

ん。そんな人の敵意に敵意で返しても、ろくなことがない。味方につけられんまでも、これ以上は敵にならんよう目をつぶるんも政治家の度量やって」

「……たしかに……それは習いましたが……、あの者は罫を……」

「精液は毒やない。今の刑法では罰しても、たいした罪にならんよ。ほな、いつそ敵意をそいでおく方がマシやん」

「……………見識、感服いたしました」

鷹姫が頭をさげるので鮎美は肩に触れた。ついでに頬や胸にも触れたくなるけれど、せっかく尊敬してくれているので我慢する。

「刑事さん、あと一人の逮捕された人って刃物を送ってきはったんですよね?」

「はい」

「どんな?」

すぐに刑事は送付された刃物をもってきてくれた。そして、猫の死骸の写真もある。刃物は出刃包丁で猫の血に染まっっていて不気味だったし、鮎美は完治したはずの下腹部に疼きを覚えた。

「どんな感じに送ってきはったんですか?」

「送付されたのはバレンタインデーでしたが、チョコレートや菓子類はなく、クロスと猫の血で書かれた手紙、そして、こちらの出刃包丁が入っていました。逮捕後、自宅の庭先から殺害された猫を発見しています」

「犯行の動機は?」

「仕事をクビになりムシクシヤしたのでやった、とのことです」

「……………そのパターンなんや……猫、かわいそうに……」

鮎美は写真に写る猫を撫でた。

「芹沢先生、お会いになるのはすすめられません」

鷹姫が言ってくる。介式も頷いた。

「面会は、どちらのためにもならないだろう」

「うん……そうやね……この犯人は警察に任せます」

「はい」

「迅速な逮捕、ありがとうございました」

「芹沢先生の危険を排除していただき、ありがとうございます」

鮎美と鷹姫は刑事たちに礼を言って、警視庁の1階ロビーにおりた。畑母神と水田がいたので、鮎美は3名の犯人のことを簡単に説明した。

「そうか。私が知事となるからには都内の治安維持は、より強化する」

「よろしくお願いします」

「また、水田くんにも、よく注意しておいたし、これから党内で臨時総会を開き、総括を行う」

「総括？」

「反省会のようなものだよ」

「そうですか、ほな、こちらは、これで」

「失礼いたします」

鮎美と鷹姫はSPたちと去り、畑母神と水田はタクシーで日本一心党の本部事務所を置いている中野区の古いビルに入った。すでに召集をかけていて、半分は畑母神の当選を祝う意味もあり大勢の党員が集まっているので臨時総会は成立した。畑母神がマイクで全員に語る。

「諸君に、いいニュースと悪いニュースがある。良い方は、すでにテレビで流れた通りで、今夜は仲間うちで祝いたい。だが、その前に水田くんが少々の問題を起こしてしまった。すでに解決しているが、本人から報告させ、総括してもらおうので傾聴していただきたい。水田くん」

「はい」

水田がマイクを受け取り、党員たちに説明する。

「もともと笑って済ませられるようなことだったので。あの芹沢鮎美と私たちが共闘していたのは、ご存じの通りですが、私と芹沢は女性同士ということもあり冗談の通じる間柄でした。それで私はバレンタインに、ちよつとした茶目っ気というか、お茶目で、タバスコのような辛い香辛料を入れ込んだチョコを送ってみました。食べて、びつくり、笑っておしまい、という軽いジョークです。ところが運悪

く悪質なテロと重なってしまい、警察の中にも私たちの党を潰そうとする勢力がいるのかもしれないが、大袈裟に私を逮捕してきたのです。もちろん、すぐに畑母神先生が動いてくださり、芹沢が警視庁に顔を出して、ただの冗談と認められ、ことなきをえて……っ……」

流暢に説明していた水田が急に腹痛を覚えて呻いた。

「う、うう……」

下痢の腹痛よりも何十倍も痛くて熱い、まるで直腸に熱湯を流し込まれて掻き混ぜられているような腹痛で、ほとんど我慢する時間もなく水田は失禁した。

「うううっ！ 痛い痛いー！」

失禁すればしたで肛門や股間が焼けるように痛む。ショーツの中に画鋲を押し込まれて膝蹴りされたような激痛で水田はマイクを落とし、両手で股間を押さえて床に転がった。

「ああああああ！ ぐううう！ ひぐううう！ やううう！ ぎゃっわわああわ！」

「水田くん?! どうした?!」

「水田先生、しっかり！ おい、救急車だ！ 救急車！」

「いや、救急車はまずい！ 目立ちすぎる！ おそらく、これは食べたチョコのせいだ！ 水田くんは芹沢先生に冗談の責任として、食べるよう言われて、食べたから、それがアタったんだろう」

「ひぐうう！ ひいひい！ 水、水！ ひいうう！ 水！」

あまりの痛さで水田は大勢の男性に囲まれながらも女性としての羞恥心より苦痛からの解放を優先してスカートとショーツを脱ぎ、デスソースと下痢便が混ざった凶悪な物質を股間から手で拭いつつ、水を求めた。

「おい、水だ！ 水！ 水田くんに水をもってきてやってくれ！」

「ううう！ 早くくうう！ ぎううう！」

股間を炙られているような激痛に泣きつつ、バケツで持ってきてもらった水にショーツを浸けると、ゴシゴシと股間を拭いた。何度も何度も拭きつつ、さらに腹痛が襲ってきて、その場で失禁して、また肛門の激痛に苦しみ、二度目に持ってきてもらったバケツにお尻を突つ

込んで直接に洗った。

「ハア…ハア…ハヒっ…ハア…ハヒイ…」

「「「「……………」」」」

室内に充滿するデスソースと下痢便の匂いは暖房で締め切っているので強烈だった。百色が窓を開けつつ言う。

「くう…目にしみる辛さだな。どんなタバスコを入れたんだ？」

「デスソースと言うらしい」

「あれか……そりゃ鬼だ。けど、まあ、自業自得の極みだな。はははは」

百色が豪放に笑ったので他の数名も笑い、水田は屈辱に泣いた。数少ない女性黨員たちが、あまりにかわいそうだと思い、コートやタオルを貸してくれるので下半身を隠して党本部事務所を去り、自宅であるマンションに一人で戻ると、シャワーを浴びた。何度も股間を洗い、まだ痛む直腸にシャワーでお湯を入れてデスソースの残留物を流し、やっと苦痛から解放された。

「…………ぐすつ…」

一人でベッドに潜り込むと呻く。

「…………この屈辱…………この恨み…………芹沢鮎美…………絶対に許さない…………」

水田はスマートフォンを手にすると、保存してある動画データを確かめる。そこには都知事選の初日にトイレへ駆け込んできた鮎美が隣の個室で、おしっこを漏らしてしまう画像があった。もともと選挙カーから帰ってきたとき我慢しているだろうことを見越して2つあった個室の1つに陣取って塞いでいたところ、運良く鮎美の秘書まで個室を塞いでくれて大失敗させることができ、それを個室の壁にある下部の隙間から撮影していた。見つからないように撮ったので、顔は撮れていないし、下着も映っていないけれど、濡れていく足とスカートの裾は撮れている。都内では珍しいスカートなので鮎美たちしか着けていない。他にも動画と静止画があり、鮎美と鷹姫が着衣を交換した後、濡れたスカートで事務所を出て行く鷹姫の後ろ姿や、翌日からオムツを着けるようになった鮎美の不自然に膨らんだ臀部、ト

イレのゴミ箱に捨てられていた濡らしたオムツの画像などもある。

「……………フフ……………全国に恥をさらしてやる……………今にみてなさい……………あの雑誌に垂れ込んでやる……………集団訴訟がはじまってもビビらず戦つて……………噂の真実……………あそこへ……………フフ……………」

そんなことをすれば、また逮捕されるということとは、もう考えないほど鮎美への熱い思いに燃えていた。

2月22日 ニュージーランド

翌2月22日火曜朝9時30分、委員会での審議が控えている鮎美は国会議事堂に登院して、いつも通り玄関にある各国会議員の出欠を把握するためのスイッチを押した。ちょうど直樹も登院してきたので声をかけられる。

「おはよう、芹沢先生」

「あ、おはようさん、雄琴先生」

「夕べは谷柿総裁に呼ばれてたらしいね。どんな話だった？」

「自民内情の偵察ですか？」

「そんなところさ」

「ほな、情報交換で民主のこと何か教えてくださいよ」

「可愛い顔して抜け目がないな。ま、いいさ。コウモリのボクに回ってくる情報なんて、たかが知れてるけど、やっぱり支持率の低空飛行が続いてるからね。鳩山総理も苦しそうだ。かといって、内閣改造はやったばかりだし、もう打つ手といえば総理交代で野田さんか、前原さんあたりにするか。あとは無理だとは思うけど、小沢さんは、もともとは民主党だ、彼に戻ってきてもらう手もあるかもしれないが、そうなるも民主党内の反小沢派が黙っていないし、そもそも鳩山さんと小沢さんの仲が微妙だし、次の手が打てないまま、じわじわとジリ貧といったところさ」

「そうですか。うちの方は谷柿先生から都知事選おめでとうって話と、ここだけの話」

そうやって鮎美は唇を直樹の耳元に近づける。男性を意識しないので鮎美は平気だったけれど、直樹はいい香りのする鮎美の髪が頬にあたって赤面しないように努力しつつ聴く。

「集団訴訟の件、出版社側のトップと経団連の理事さんと話し合いました。そこそこで手打ちにしよ、という方向性で」

「なるほどね」

秘密の話が終わったので鮎美は離れて喋る。

「雄琴先生が目指してはる法案は進みそうですか？」

「法案そのものは鍊っているけれど、民主党内にはそもそも死刑反対というバカ！　な連中がいる」

あえて直樹は大きな声で言いつつロビーを鮎美と歩く。

「どんな凶悪な犯人も死刑にすべきでないと、凶悪なまでのバカさ加減で主張してやがるからな」

「雄琴先生に汚い言葉使いは似合いませんよ」

「そりやどうも。君こそ黙っていれば花だったろうにね」

「よく言われますわ。ほな、また」

廊下で別れ、鮎美は委員会が行われる部屋に入り、自席に座ると資料をパラパラとめくり、それからスマートフォンをチェックする。詩織から連合インフレ税の世界各国への浸透は順調というメールが来ていた以外は連絡はない。時刻は9時49分で、あと10分もすれば審議が始まる。その前にトイレに行っておこうか、迷っていると、翔子に声をかけられる。当選から国会開始まで勉強する期間が無かった翔子は、だいたいの委員会を鮎美と同じに配置されているので、いつも見る顔という状態だった。

「おはようございます、芹沢先生」

「おはようさん、翔子はん。髪型、変えた？」

「わかります？　ちよつと切りました」

女子らしい会話をしているとき、二人のスマートフォンが同時に鳴った。

「っ……」

しかも他の議員たちの携帯電話やスマートフォンも鳴っている。すでに審議が始まる直前なのでマナーモードになっている議員が多いのに、けたたましい警告音だった。

「……地震や……南太平洋……」

「マグニチュードは6以上みたいです」

鮎美と翔子だけでなく他の国会議員たちや官僚も審議の準備を放り出して情報端末を見ている。大雑把だった情報が6分後には確度が高くなる。

「震源地はニュージーランドなんや」

「クライストチャーチって、ご存じです？」

「知らんよ。マグニチュードたいしたことないな、6.3やて」

「それなら死者は出ないかもしれないね」

「建物の耐震基準によるやろけどね。にしても、久野先生が整備してくれはった、このアプリ、便利やな。小笠原の地震のときも思ったけど、はるか遠いニュージーランドの地震まで、発生直後に知らせてくれるんやもん」

「もし津波が発生していても日本に到達するのは何時間も後になりそうですね」

「そやね」

「皆様、ご静粛に！ これより予定通り審議を開始します！」

委員長がざわついている場内に号令している。地震の規模が大きくないので対応は内閣のみに任せて、委員会は予定通りに開始された。審議中、鮎美はスマートフォンで為替相場をチェックしてみた。

「……………」

ニュージーランドドル、どんどん下がってるわ、死者が出てるかもしれないのに、こんなときまで金勘定なんや、と鮎美は人間の救いがたい業を見ている気分だった。

「……………」

「何か、お考えですか？」

翔子が小声で雑談してくる。

「うん、まあ、いろいろ」

「どんなことを？」

「ニュージーランドもオーストラリアも、それぞれのドルやん？」

「はい、そうですね」

「けど、たしか、あの二カ国は英国女王のもとにあるはずやん」

「日本の天皇並みに形だけという気はしますが、そうですね。それが何か？」

「なんで、イギリスみたいになんてニュージーランドポンドとか、オーストラ

リアポンドにせんかったんやろ」

「さあ……」

くだらない雑談をしていると、委員長が授業中の生徒を睨むように見てきたので二人とも黙った。そして、お昼休みになるとマグニチュードに比して在留日本人被害が甚大であることが明らかになってきた。議員食堂に流れるテレビ放送を誰もが静聴している。

「ニュージールランドで発生した地震により市内のビルが倒壊したとのことです。このビルには日本からの語学留学生が多数在籍しており、その安否が気づかわれています」

「「「「……………」」」」

安否もなにもビルは完全に倒壊していて、跡形もない。そこに何百人の人間が入っていたとしても、生き残っているのは奇跡的に一人二人という程度にしか見えない。

「日本政府は国際緊急援助隊の派遣を決定しました」

「……………」

鮎美は静かに食べかけだった焼肉定食を口にし、翔子もカレーをスプーンで食べた。他の議員たちも昼食を再開し、ごく一部、富山県が地元の議員だけが忙しく電話で何かを話し始めている。なんとなく周囲の議員には、語学留学生の出身地が富山県に偏っているのかもしれないと伝わった。夕方になると、さらに入ってくる情報は増えた。鮎美は都知事選中は欠席していた自民党本部で行われる会議に出席していたけれど、ほとんどの議員が聞き流しつつ、スマートフォンなどを見ている。鮎美も同じだった。会議が終わるとニュース出演があったのでテレビ局に出向き、ニュースキャスターと対談する。やはり都知事選の話はそこそこのうちに終わり、ニュージールランドでの地震に話題がシフトした。

「芹沢議員は、この地震について、どう思われますか？」

「みなさんと同じく一人でも多く無事でいてほしいと願っています」

「発生直後から、ニュージールランドドルが下がっていますよね。それについては、どう思われますか？」

「こんなときまで金勘定かと思うと悲しくなります。たしかに開かれた自由な為替市場というのは重要かもしれませんが、けれど、下落を見越した売り浴びせで必要以上に大きく下げ、地震の規模から考えてニューヨークランド経済は、すぐに持ち直すでしょうに、通貨価値が下がってしまったら、何を輸入するにも高くついてしまう。こんなときですから、いろいろと入り用なもんはあるやろに割高に買わんならん。その原因が投資家による売り浴びせで、その投資家は儲けが出てもタックスヘブンに隠すと考えたら人間の業の深さ、神様が糾さんなら、人間が新しいシステムで対処するしかないと思います」

「具体的には？」

「たとえば、大規模な天災については為替相場を一時固定し、混乱が収束するまでは前日の通貨価値で取引するように仕組みをつくり、またFXみたいな個人でデータだけやりとりするような取引は完全に停止、実体経済として決済が必要なものだけ動かすような形が良いと思います」

番組が終わり議員宿舎に戻ると、鷹姫とテレビを見た。時差で三時間早いニューヨークランドは深夜から早朝にかわる時間帯で搜索活動などは二次災害の危険性の問題で止まっている。昼間の映像が流れていた。

「……マグニチュード6やのに……被害家屋5万か……ひどいなあ……」

「死者も1000人を超えています……おそらく日本人で連絡が取れない生徒たちも……20人を超える犠牲者が……海外の地震で日本人が亡くなる記録としては、かなり多くなるのでは……」

「このビルだけやん、周りで全壊してるの……絶対、耐震基準を満たしてないとか、そんなんやで……ニューヨークランドにも姉歯みたいな建築士いるんかも……にしても、犠牲者が若い子ばかりって……」

「専門学校生ですから、私たちより一つ、二つ上というくらいです……」

「……陽湖ちゃんやないけど、もはや祈るしかないねんな……死んでしまった人は……どうにも、ならん……」

鮎美が涙を零したので鷹姫はハンカチを出した。

「おおきに」

「……。あまり心を痛めないでください。心労が重なります」

「ありがとうございます。そろそろ鷹姫も、帰って休みたい」

「はい」

鷹姫と別れ、今夜も鮎美は一人で眠った。

翌2月23日水曜朝、ビジネスホテルで百色と相席して朝食を摂っていた鷹姫は静江から電話を受けていた。

「わかりました。確かめてみます」

電話を終えると百色が問うてくる。

「どうした？ 怖い顔して、悪いニュースなのか？」

「はい」

「そうか。……………聞いていいか？」

「いえ」

「はつきりしてるな、お嬢さんは」

「……………」

鷹姫はデザートを食べていたペースを速める。百色も食べながら言う。

「オレの方は、いいニュースがあるぜ」

「どのような？」

「閣下が知事になったからよ、オレを尖閣諸島方面の調査官として雇ってくれた。実質、東京都の尖閣諸島方面軍、現地指揮官つてここだ。このホテルでお嬢さんに会える機会も減りそうだな」

「そうですね、それは、おめでとうございます。適材適所だと思えます。ご健勝ご活躍のほど祈念いたします」

「ありがとう」

百色と別れた鷹姫は東京駅の売店に向かった。売店で搬入されてくる今日発売の雑誌を待ち、棚に並べられる前に買った。

「っ……」

雑誌には鮎美のことが特集されていて表紙にもなっている。しば

らく読んでいた鷹姫は怒りで顔を真っ赤にして震えた。あまりの怒気で他の通行人たちが避けていく。

「……よくも、こんな記事を……芹沢先生が、どれだけ傷つくか……いったい、誰が裏切つて……あの女に決まっている……」

普段は無口なのに怒りのあまり思考を漏らしながら鷹姫は議員宿舎に向いた。部屋の前には介式と男性SP3名が立っている。

「介式師範、いっしょに中へ、お願いします」
「了解した」

鷹姫と介式が入室すると、鮎美は制服姿でニュージールランド地震の続報と為替相場を同時に見ていた。

「おはようございます、芹沢先生」

「うん、おはようさん」

鮎美と呼んでもらえず、芹沢先生と呼ばれたので鮎美が残念そうに鷹姫を見て、そばに介式がいたので納得し、そして鷹姫の顔が硬いで問う。

「何があつたん？」

「かなり、ひどいことが起こっています」

「ニュージールランドの話？」

「いえ……芹沢先生が傷つくようなことです」

「そうなんや……で、何？」

「その前に抱きしめさせてください」

「……うん、……お願い」

かなり嬉しかったので素直に頷いた。どちらかといえば、感情表現が薄い方の鷹姫が優しく抱きしめてくれる。

「………。そんなに悪いニュースなん？」

「はい」

「……母さんの妊娠が……流れたとか……なら、うちに直接連絡が……」

抱きしめてくれるのは嬉しいけれど、悪いニュースが何なのかは、とても気になる。鷹姫は心配した目で鮎美を見つめて言う。

「どうか、お心をしっかりとってください。くれぐれも早まったこと

はなさらないように」

「……………」

「介式師範、もし芹沢先生がパニックを起こりしたり、早まったことをされそうなら、いっしょに止めてください」

「わかった」

介式も頷いて近づいてくる。

「芹沢先生、落ち着いて聴いてください」

「……………うん……………父さん、母さんは無事やんな？」

恐る恐る鮎美は突然の交通事故でも起こったのかと問うた。この歳で天涯孤独になるのは淋しい。その不安は鷹姫が否定してくれる。

「はい、そういうニュースではありません」

「ほな……………何？」

「……………」

「早う言うてよ、余計に不安になるやん」

「……………口の端にのぼらせるのも憚り多きことながら……………。これを、ご覧ください」

鷹姫は片手で鮎美を抱いたまま、もう片方の手で買ってきた雑誌を鮎美に渡した。鮎美が表紙を見る。

オムツもとれない赤ちゃん議員が世界にももの申しゆ！

芹沢鮎美ちゃん、おもらし治りません。

お友達秘書の前でジャー！濡れ衣は友達に押し着せ。

刺された後遺症か、オムツ持参で選挙応援！

このままで大丈夫か、日本の政治とオムツ議員アユミ！

表紙をめくると、鮎美を盗撮した写真と記事がある。写真はトイレの個室隣から撮った動画を静止で印刷したものや、スカートからチラ見える黒いスパッツの不自然な膨らみを撮ったもの、鮎美が素知らぬ顔でオムツの中に済ませているときの少し視線が浮いたもの、ゴミ箱に捨てたはずのオムツをわざわざ撮ったものだった。付属している記事は部分的にはトイレへ行く間もない忙しい政治家の選挙応援現場をレポートする体裁をとっていたりもするけれど、結局は鮎美が

オムツを着けて公衆の面前に出ていたことを嘲る内容だった。

「……また、こんなもん書きおつて……」

「お見せしたくなかったのですが、外に出れば知らずにいることはできないと思います、お届けいたしました。どうか心折れることなく立ち直ってください」

そう言った鷹姫が強く抱きしめてくれる。

「……鷹姫……」

雑誌の内容は不愉快で、これが全国に発売されているかと思うと、心も疼いたけれど、むしろ心配した鷹姫が積極的に抱きしめ慰めてくれるのが、嬉しくてお徳感さえ覚えた。鮎美も抱き返して上を向き、鷹姫と頬を寄せ合う。このままキスもしたかったけれど、それはグツと我慢した。

「おおきにな。鷹姫がいてくれるから、うちは耐えられるよ」

パンチラ写真を発売されたときも傷ついたし、今回の内容はより下劣だったけれど、一度目ほど傷ついていない。しばらく鷹姫と抱き合って幸せを味わった。

「そろそろ時間やね。朝食会、行くわ」

「大丈夫ですか?」

「うん、鷹姫のおかげよ」

遅刻ギリギリに朝食会に駆け込むと、一部の議員たちは雑誌のことを知っている顔をしていたけれど、下手に話題にしてセクハラと言われると怖いので誰も何も言わない。あえてニュージールランド地震のことばかりが話題になる。外の廊下で待っている鷹姫は介式に頼む。

「掲載されている写真は盗撮されたものです。警察として動いてください」

「わかった。担当課に連絡する」

すぐに介式は警視庁へ通報してくれ、さらに他のSPとも相談してから鷹姫に教える。

「我々も芹沢議員を警護していて不審な動きをしていた者に心当たりがある。畑母神陣営内のことにて不干涉であったが、被害が明らかに

なったからには黙っているのはやめる。ただし、我々に捜査権はない。捜査は担当課が行う、それでいいな?」

「はい。私は水田元議員が怪しいと感じています」

「証拠は?」

「……ありません」

「憶測でものを言うな」

「すいません」

「だが、私も同意見だ。はっきりするまでは君たちは黙っておけ」

「はい」

朝食会が終わり鮎美は平然と出て来た。

「芹沢先生、盗撮者については警察の捜査に任せます」

「うん、そうして。……うち、なんとなく心当たりあんやけど……あれ、選挙中、かなり、うちのそばにいる人でないと撮れん写真ばかりやん」

「いずれ明らかになるまで私たちは黙っていきましょう」

「そうやね」

朝食会から国会へ行く途中で、ぶら下がり取材が寄ってきた。

「今朝、発売された雑誌に芹沢議員のことが掲載されているのは、ご存じですか?」

「はい」

あえて鮎美は足を止めて答えた。

「雑誌の記事は事実ですか?」

「はい、おおむね」

「ああいった記事が書かれることと、表現の自由、人権をどうお考えですか?」

「人権や自由といったこと以前に執筆者の品格を気の毒に思います」

「今回の件も訴訟で争われますか?」

「腹立たしいことは事実ですが、ニュージールランドのことが重大事に思います。訴訟については、今までのことを反省してくださった会社と、そうでない会社に対して、大きく態度を変えていくつもりで

す」

「具体的には？」

「それは係争中のことですから、コメントを差し控えます」

「一人の女性として、今回の記事に傷ついておられますか？」

「はい」

「……それだけですか？ お気持ちなどは？ 悲しいですか？」

「いちいち泣いていられませんし、お気持ちと言われても、宇宙飛行士も必要があればオムツをつけますよね。それだけのことです。ただ……」

「ただ？」

「すでに、うちは多くの政治的課題を進めているので、これ以上は抱えられませんが、東京都内はトイレが少なすぎます。人の多さとトイレの数が見合っていない、これは解決した方がよい課題やと思いますが、うちが手を出すより鳩山総理か、いえ、どっちかという畑母神都知事にお願ひします」

鮎美が動じずに答えていくのでレポーターたちは面白い映像が撮れず諦めつつあり、取材が終わりかけた。

「もう審議に行きます」

「一つだけ言わせてください！」

レポーターではなく鷹姫が声をあげた。誰もが驚いて鷹姫を見る。

「芹沢先生が濡れ衣を私に押し着せたなどということはありません！ 私がもたもたしていたせいで失敗なされたから私が責任を取ったまでのことです！ 芹沢先生は秘書に濡れ衣を着せるような卑劣な人ではありません！」

言いながら鷹姫が涙を零したので鮎美はハンカチを渡して、背中を押した。

「ほら、もう行くよ」

「はい……取り乱して、すみません」

「ええよ、おおきに」

鮎美と鷹姫は背中にフラッシュを浴びながら国会に行った。お昼

休みになるとニュージーランド地震の全貌が明らかになってきて被害の集計も日本に伝わってくる。もう雑誌のことは話題にならなかった。

翌2月24日木曜、お昼休みに議員食堂はざわついていた。

「なんかあつたんですか？ 木村先生、知ってはりますか？」

ラーメンを食べながら鮎美が訊くと教えてくれる。

「小沢先生を民主党に戻して内閣に入れるという話があつたらしいけれど、民主党内の反小沢派の動きでポシヤってしまい、それを受けて親小沢だった民主党の松木謙公衆議院議員が農林水産大臣政務官を辞任したらしい」

「政務官が辞任……いよいよ、鳩山内閣、危ないんじゃないですか？」

「という話で、ざわついているわけだよ」

「なるほど……」

鮎美がラーメンを食べるのを再開すると、スマートフォンが鳴った。

「誰やる、この番号……」

登録にも記憶にもない番号からの着信だった。しばらく迷って鮎美は受話した。

「もしもし？ ……」

やや警戒した鮎美の声に男性の声が返ってくる。

「細野くんから、あなたの番号を聞きました。鳩山直人です」

「……………総理大臣の？」

「はい、鳩山です。芹沢さんですか？」

「は、はい。芹沢です。……………ご用は何でしょうか？」

「芹沢さん、あなたを特命大臣として内閣に迎えたいのです。名付けて最少不幸大臣」

「最少…………不幸…………大臣…………」

「あなたは以前、私の政策に賛同してくれましたね」

「…あ…………はい…………考え方は好きかな、と……」

「ぜひ、私の内閣で活躍していただきたい。大臣として」

「……………内閣府特命担当大臣としてですか？」

「はい、そうです」

「……………み、民主党政権ですよ。ということは、うちに民主党に移れど？」

「お願いします」

「……………」

鮎美は緊張のあまり気づいていないけれど、木村をはじめ周囲の議員たちは水を打ったように静かになっている。

「……………いい、いつまでに、お返事すればよいでしょうか？」

「今すぐ、お願いします」

「……………」

スマートフォンを耳にあてたまま、鮎美は左手を唇にあて、考え込む。

「芹沢さん、いっしょに日本のため、頑張ってください」

「……………日本を連合インフレ税に参加させてくれはりますか？」

「……………それは、まだ検討中です」

「……………では、うちにも検討の時間をください」

「即答が欲しいのです。イエスなら、すぐに首相官邸へ来てください」

「……………」

「……………まだ、未熟者ゆえ、辞退します」

「……………残念だ……………また、いずれ」

鳩山が電話を切った。鮎美は額に浮いていた汗を指先で拭く。

「……………」

まだ考え込む鮎美に木村が声をかける。

「なぜ、断ったのです？」

「……………もし、受諾して、そのとき、うちに何ができるか、少し考えてみたんです」

「それで？」

「何もできんと思いました。うち一人では何もできん。日本一心党の選挙応援をして身にしました。組織で動いて支えてもらわんと、うち一人ではトイレ一つ満足にできんで、おもらしする有様です。まし

て、党を移るとなると、雄琴先生でもコウモリ言われて苦勞してはるし。いくら大臣でも特命大臣は名ばかり大臣に終わった例も多いし。何より誘い方が急すぎて、明らかに思いつきという感じで。うち、あの人のフットワークの軽いところは好きなんですよ。カイワレ大根がつつり食べはった厚生大臣やったとき、うちは幼児やったけどテレビで見て覚えてます。この大臣、爽快やなって。思えば、はじめて政治家を認識したのが、鳩山直人さんやったかもしれん。けど、今回は思いつきにすぎるといふか、うちを入れたら支持率アップかな、という狙いだけで、連合インフレ税についても受け入れつつわけやないのに、うちを大臣にしても何をするねん、って感じで。そもそも最小不幸大臣って、もろに厚生労働大臣と所管がかぶりそうですやん。それに、うちを民主党に誘うんやったら、雄琴先生を使うか、加賀田知事も民主党なんやから、そつちからコンタクトあつてもええかもしれんのに、いきなり一本釣りみたいにされたら、釣られた後、なんのフォローも無い気がしたんです。それこそ、おもらし大臣とか小便不幸大臣とか世間にバカにされて、裏切った自民党は当然、入った民主党でも本気では歓迎せんでしょ、もつと経験ある衆議院議員さん、いっぱいいるのに、差し置いて入閣して誰が、ええ気がします？ せいぜい最年少大臣記録を更新しておしまいですわ。しかも歴史の汚点として

「それだけのことを、あの数秒で考えていたのかね」

木村が感心して言う。

「この件、谷柿総裁にあげてもいいかな？ まあ、どうせ周りにいた者は聞いていたが」

「はい、どうぞ。どうせ、終わった件ですけど。……うちはビビったんでしようか？ いきなり大臣と言われて……木村先生が、うちやったら受けた方がよかつたと思います？ 民主、自民は抜きにして」

「あなたの判断は正しいと思いますよ。浮かれて受けるのも一興ですが、おっしやるとおり最年少記録を更新して、おしまいでしよう。その後はない」

「……………ラーメン、すっかり伸びたわ……………もう時間もないし」

そう言った鮎美は、かつて子供の頃に見たカイワレ大臣のようにラーメンを頬張って時間内に食べきった。

翌2月25日金曜夕方、久しぶりに地元へ帰る予定で国会を出た鮎美に詩織から電話が入った。

「もしもし、うちよ」

「詩織です。東京事務所に変な物が届きました」

「また刃物？ それとも銃弾？」

「ラーメン店の無料サービス券とオムツ1袋です」

「……………誰からか、わかる気がするわ」

鮎美は精液入りチョコを送ってきたラーメン店の店主を思い出した。

「送り主は村川いう人？」

「はい」

「やっぱり、あのオッサンか。詩織はん、それ東京駅前店でも使える無料券なん？」

「えっと……………はい、チェーン店なら全店OKです」

「ほな、いっしょに夕飯、食べよか。せつかくの無料券やし」

「えく……………ここで？ 変な物が入ってるかもしれせんよ」

「東京駅前店なら大丈夫やろ」

鮎美と鷹姫、SPたちが東京駅に着くと、詩織も朝槍と事務所から駅に出て来た。少し歩いてラーメン店に入る。店に村川はおらず流っている普通のラーメン店だった。

「うちは味噌ラーメン、味噌濃い目」

「……………」

鷹姫と詩織、朝槍は注文を迷っている。不安そうに厨房を見ると、ごく清潔な気配で精液を混入しているような雰囲気はない。他の客も美味しそうに食べている。鷹姫が決めた。

「私は味噌ラーメン大盛りチャーハンセットにします」

「……………」

詩織と朝槍も決める。

「味噌チャーシュー麺にします」

「私も」

しばらくして、ごく普通に美味しい味噌ラーメンが提供された。鮎美は食べる前にスマートフォンで撮影し、少し味見して感想を静江に送る。静江が文章を練り、鐘留が管理する鮎美名義のフェイスブックに日常生活として投稿される段取りだった。議員としての庶民的な日常生活を発信するのも重要ということで静江が企画し、初めての投稿になる予定だった。そうして、やっと一週間の仕事が終わった気分ですラーメンを食べているとテレビがニュースを流した。

「京都大学の入試でインターネットサイト、ヤフー知恵袋より不正に回答を得た仙台市の受験生が逮捕されました」

「無理に京大へ行かなくても仙台にも大学あるやろに」

「愚かなことです」

鷹姫が美味しそうにチャーハンを頬張った。

「次のニュースです。日本一心党の水田脈実元衆議院議員が芹沢鮎美参議院議員に対する盗撮容疑で逮捕されました」

「仕事早っ、日本の警察、優秀やわ。やっぱり、あの人やってんな」

「愚かなことです」

「鮎美先生、今回は和解しませんよね？ 許すわけありませんよね」

詩織が静かに怒っている目で言ってくる。連日の海外との調整で、かなりハードワークなはずなのに瞳は光っていた。

「うん、さすがに許せんよ」

「私にいい策があります。懲らしめるための」

「どんな？」

「弁護士を入れて、水田に示談をチラつかせます」

「そんで？」

「示談金をつり上げるだけ、つり上げ、全財産に匹敵するほど上げ、いよいよ示談かと思わせた上で、示談せず厳しい罰を求めると告訴します」

「……………えぐいこと考えるわ……………」

「鮎美先生を侮辱した罰、万死に匹敵します」

「牧田さんの言われる通りです。私もその策に賛成です」

「鷹姫……詩織はん……まあ、そやね。トイレの盗撮とか、同じ女として許せんし。この件、詩織はんに任せてええ？」

「はい」

食べ終わると、鮎美と鷹姫は新幹線に乗り、詩織と朝槍は世田谷にある詩織のマンションに入る。詩織は朝槍との軽い性行為を楽しんだ後、強い睡眠薬入りのカクテルを朝槍に飲ませた。

「朝まで、おやすみなさい、ナユ」

熟睡したのを確認して、詩織は地味なコートと帽子で変装すると大きなカバンを持ってマンションを出る。二つ離れた駅に行き、監視カメラの無い公園のトイレでカバンから男物の衣服を出して男装し、タクシーで大田区に移動すると、別のタクシーに乗り換え、川崎市まで行った。火力発電所が見える海辺、多摩川の河口付近で待ち合わせていた雑誌編集者と出会う。

「こんばんわ」

「なんだ、女みてえな声だな。ま、いい。で、芹沢鮎美が朝ナマの最中、バイブでイッてた証拠ってのは？」

「はい、こちらです」

パソコンにUSB端子でも差し込むかのような自然な手つきで詩織は雑誌編集者の男根に千枚通しを突き立てた。

「っ……うわあああ?! なにしゃがる?! ぐうう!!」

男は蹲って苦しむ。それを楽しそうに詩織が見つめる。

「男性の悲鳴ってゾクつとします」

「うううぐううう! 痛てええええ! このクソアマー!」

詩織の顔を殴りつけようとしたけれど、やすやすとかわされた。詩織は千枚通しを男の右わき腹に突き刺し、肺まで通した。

「ふぐうっ?! ぐはっ!」

呼吸が苦しくなり藻掻き始め、血の混じった咳をしている。さらに左わき腹も刺して肺に穴を開けると、苦しみながら窒息死した。

「ああ、楽しかった。久しぶりに、すつきりしました。ありがとう。で

も、あなたが悪いんですよ、私の鮎美をおとしめるから」

死体から衣服を脱がせると、腹部にも穴を開けて腐敗ガスで浮上しないようにして重りをつけて多摩川の河口に沈める。地面に残った血痕は凶器が千枚通しだったので、ほとんど目立たない。脱がせた衣服や靴はビニール袋に入れ、男が持っていたスマートフォンは破壊してからビニール袋に入れる。すべてをカバンに隠すと、最寄り駅まで歩いてタクシーを拾い、神奈川県の実にビニール袋を沈めると、またタクシーで三カ所を移動してから男装を解いて、男装に使った衣服も捨て、マンションに戻った。まだ、朝槍は眠っている。詩織はパソコンを開いて世界31カ国が連合インフレ税に賛同していること満足そうに見つめ、白ワインを呑み、シャワーを浴びてから、朝焼けの空を眩しそうに見て、カーテンを閉め、朝槍の隣で眠った。

翌2月26日土曜朝、松田川は医師としての夜勤明け、眠たそうに自宅アパートに帰ると、習慣でテレビをつけ、シャワーを浴びるために裸になる。

「今朝発売のニンテンドー3DSを買うために…」

興味のないニュースが流れている。松田川はココナツ味の缶酎ハイを半分まで呑み、バスルームに向かった。

「ああ、疲れた……あのお爺さん助けられなかったなあ……まあ、8歳だし、しよーがないか……交通事故って、ある日、突然で…」

一人暮らしの淋しさで一人言を漏らしながらバスルームの戸を開けて、驚愕する。

「っ、だ、誰っ?!」

目出し帽をかぶった大柄な男がバスルームに隠れていて、松田川に拳銃を向けてくる。

「シズカニシロ」

日本語だったけれど、外国人の発音だった。目出し帽から見える瞳も青い。松田川は腰が抜けて、その場に座り込んだ。

「お、お金なら、財布が、あ、あつちに！ マネーある！ My purse…」

英語で財布の位置を教えようとしたけれど、大男は松田川の頭に銃口を突きつけてくる。恐怖で松田川は失禁し、裸だったので尿が飛び散って床に水たまりをつくった。暖房の効いていなかった寒い室内に湯気がのぼり、すぐに冷え、松田川はガタガタと震えた。お金でなければ、女性として狙われているのかもしれないけれど、大男からは性的な興奮も感じない。まるで仕事をしているような冷静さを感じる。

「コレヲミロ」

「っ…お父さん?! お母さん?!」

大男が見せつけてきたスマートフォンには両親の映像が映っていた。ライブ通信しているようで、向こうの二人も怯えているし、そばに目出し帽をかぶった男がいてナイフを持っている。

「はじめまして。ドクター松田川」

向こうの男は日本語の発音が巧かった。両親は縛られていて、どこかの廃工場にでも監禁されている様子だった。

「我々の要求は簡単だ。パパとママを殺されるを望まないときは、お前はセリザワに薬を飲ませろ」

「コレダー」

大男がスマートフォンを床に立てて置き、ポケットから包装された粉薬を松田川に見せる。

「その薬をセリザワに飲ませれば、パパとママは元気で死なない。家族は幸せになる。失敗すれば、パパとママは死んでしまう。悲しい家族になる」

下手な日本語だったけれど、意味はわかる。下手なだけに、凄味があって怖かった。

「今日中に飲ませろ。でなければ、パパとママは我々が殺される」

助詞は間違っているけど、悪意は伝わってくる。映像の中の男がナイフで父親の腕を浅く斬った。もう70代の両親は怯えて震えているだけだった。

「ワカッター?」

「…っ…っ…この薬、なに?」

「お前には関係ない。飲ませろ。騙して飲ませろ、お前の薬、飲むはず。お前、セリザワのドクター」
「……」

相手は松田川のことをよく調べているようだった。大男は松田川の手粉薬を握らせると、ゆつくりとアパートを出て行く。

「ケイサツ、イウ、クロス」

「っ……っ……」

「ノマセロ」

「……っ……」

「ヘンジ！」

「っ、はい！」

返事をした松田川は大男が去っても一時間以上もショック状態で一人で震えていた。やつと暖房が効いたのと、身体が震えることに疲れ果てたので、のろのろと這うと涙を流しながらベッドに潜り込んだ。

「……お父さん……お母さん……」

今も両親を人質に取られていると思うと、気が気でない。どうするべきか、混乱する頭で3時間ほど考え、鮎美へ電話をかけていた。

「もしもし……私です」

「松田川先生、お久しぶりです！ おかげさまで、すっかり元気にやっていますよ」

「そう……よかった……」

「どうされたんですか？ 声が震えてますやん？」

「……ちよつと……疲れてるから……」

「そんなお疲れで、うちに何の用ですか？」

「ごめんなさい……あなたに最後に飲ませるべき薬を忘れていたの」

悩みながら考えた嘘だった。

「薬？ どんな薬です？ もうバリバリ元気ですよ」

「それでも必要な薬なの」

「あ、雑誌に変なこと書かれて、気にしてくれてはります？ あれは半

日トイレに行けんかって漏らしただけですし。後遺症でも何でもないですよ」

「そういう薬じゃなくて……あなたのお腹を縫った糸を溶かす薬なの」

「え？ 自然と溶けるんちゃいますの？ そんな説明しはったと思うけど」

「ごめんなさい、私の勘違いで、溶けない糸だったの。でも、この薬を飲めば溶けるから」

「そうですか。わかりました。どうしましょ？ 送ってくればります？」

「ううん、今すぐ、持っていくから。どこにいるか教えて」

「今すぐって……」

「どこにいるの？」

「六角市の文化芸術会館で婦人会の新年芸能披露会を観覧してますけど……そんな急ぎなんですか？」

「ごめんなさい、私の手違いだから、一刻も早く飲んでおいてほしいの」

「わかりました。あと2時間は、ここにいますから来てください」

「六角市の美術館ね？」

「文化芸術会館です。大丈夫ですか？ お声が変わりますよ？」

「つ……疲れてるだけだから……」

「そうですか……お疲れ様です。お待ちしておりますわ」

電話を終えると、松田川は、また震えてきた手で包装された粉薬を取った。

「……これ、いったい……何なの……」

粉薬は白っぽい不成形の顆粒状で、見たことがない。きちんとした工場で作った物ではなく手製という感じがして、包装もビニール袋を熱接合して閉じてある。何より、これを鮎美に飲ませると、彼女の身体に何が起こるか、ろくでもない想像しかできない。十中八九で毒だと思えるし、死なないにしても今後政治活動ができなくなるような重度の障害を残す劇物に違いないと感じる。

「……………どうしよう……………うつうつ…」

また泣けてきたけれど、時間がないので松田川はタクシーを呼び、勤務先の病院に戻った。病院の院内薬局に入ると、看護師が不思議そうに声をかけてくる。

「あれ？ 松田川先生、夜勤明けで休みなんじゃ？ また、呼び出されたんですか？」

「…うん……………ちよつとね…」

ふらふらと松田川は薬局内にある薬剤パッケージを造る機械に辿り着くと、渡された粉薬をパッケージし直した。渡されたままでは怪しくて誰も飲まないような物だったのを薬らしく包装していく。

「……………ぐすつ……………」

「……………」

看護師と薬剤師が背後で不審の目で見ている。松田川は疲れ果てた顔色で髪もボサボサのまま、うつろな目をして夜勤明けの汗臭さに加えて、小便の匂いまでする。

「あの…松田川先生、それ、何の薬ですか？」

「…何でもないから……………ごめん、この機械、洗浄しておいて。念入りに…」

「……………はい…」

松田川は包装し直した粉薬を白衣のポケットに入れると、待たせておいたタクシーに乗り、六角市の文化芸術会館まで走ってもらう。阪本市にある病院からでは高速道路を使えば40分だった。運転手がバックミラー越しに松田川を見て言う。

「お客さん、顔色が悪いですよ？ 大丈夫ですか？」

「……………私には関係ない……………私は知らなかった……………」

声をかけられても、松田川はブツブツと一人言を漏らしているだけで、ろくな返答をしない。運転手は会話を諦め、松田川の身体から嫌な匂いがするので気づかれないように少しだけ窓を開けた。タクシーは目的の文化芸術会館に着いた。

「着きましたよ」

「…カードで…」

松田川はカードでタクシー代を払うと、会館の玄関から鮎美に電話をかける。鮎美は演劇の鑑賞中だったので受話せず、鷹姫と介式、男性SP3名を連れてロビーに出て来た。玄関にいる松田川を見つけ、手を振ってくれる。

「わざわざ、おおきにです」

「……うん……これ、飲んで」

松田川は手を震わせないようにしたけれど、うまくポケットから出して渡すことができずに途中で落とす。落とした粉薬を鷹姫が拾って鮎美へ渡す。

「松田川先生、めっちゃ顔色、悪いですよん。大丈夫ですか？」

「……夜勤明けだから……早く、飲んで」

「はい。……鷹姫、水か、お茶か買ってきて」

「はい」

鷹姫が自動販売機へ走っていく。鮎美は粉薬の包装を破り、不味い薬だと嫌なので鷹姫がペットボトルを持って戻ってくるのを待った。

「……………」

「松田川先生、帰って休んだ方がええんとちゃいますか？」

「……飲むのを……見たら……帰るから……」

「芹沢先生、どうぞ」

鷹姫がペットボトルを開封して鮎美に渡した。鮎美が上を向いて粉薬を口へ入れる。

「……………っ！」

ずっと迷っていた松田川は鮎美に飛びかかって止めようとした。両親の命と、鮎美の命、ずっと天秤にかけていた。まだ18歳の鮎美と、もう70代の両親、けれど、育ててくれた恩は強い。それでも両親からの忘れていない言葉があった。ずっと想っていた性同一性障碍だった恋人が死んだとき、言われた一言、これで紀子も解放された、その言葉を聴いてから両親と会う回数は極端に減った、正月でも当直を希望して同僚医師にありがたがられているくらい、親と会っていない。もう二度と会えないとしても、鮎美を助けようと思つたの

は、それが一つ、そして、あとは保身だった。もし鮎美が死んだら、医師として、その先にあるのは破滅でしかない、いくら脅迫されたからといっても患者からの信頼を逆手にとって暗殺に加担すれば、罪に問われなくても医師免許は剥奪されるかもしれない、そうなった後、自分に何が残るのか、無事に解放されたとしても両親に何が残るのか、そう考えて飛びかかった。

「やめて！ 飲まないでー！」

飛びかかろうとした松田川は視界が回った。鮎美が見えなくなり、文化芸術会館の天井画が見え、そして床に全身を叩きつけられた。介式に投げ技をかけられたのだと気づくこともできないほどの早技だった。介式が松田川の身体を押さえつけながら叫ぶ。

「吐き出させろ!!」

「「はい」」

男性SP3名が鮎美を囲む。

「芹沢議員！ 吐いてください！ 早く！」

「……」

鮎美は口に含んだ粉薬を口を開いて、その場に出した。大理石製の床に鮎美の唾液と白っぽい粉が溶けた物が拡がる。介式が松田川を絞めつつ詰問する。

「何を飲ませた?!」

「っ、わ、わからない！ わからないんです！ 私は脅されて!! 助け
て!! 父と母が人質に取られてるの!! お願い!!」

泣き出しながら松田川が事情を話し始めるけれど、介式は鮎美への応急処置を優先する。

「芹沢議員！ 少しでも飲んだのか?!」

「……全部、出したような……ちよつと、飲んだかも……しれんような
……」

当事者なのに鮎美は、痛くも痒くもないので緊迫感のない声で答えた。

「口を漱げ!!」

「……」

鮎美はペットボトルの水を口に含み、この場に出すべきか、少し迷う。

「早く出せ！ 宮本くん！ あと3本、水を買ってくるんだ！」

「はい！」

鷹姫は全力疾走で自動販売機から水を買って戻ってきた。その間に鮎美は何度も口を漱いで床に吐き出していた。

「宮本くん、芹沢議員の喉へ指を突っ込んで胃の中身を吐かせろ！」

「はい！」

「…え…：そこまで、せんでも、うち、どこも痛くないし…」

「早くしろ！」

「口を開けてください！」

鷹姫にも緊迫した声で言われて鮎美は口を開けた。鷹姫の指先が喉の奥に突っ込まれる。嘔吐反射が起こり、鮎美の胃から昼食だった幕の内弁当が登ってくる。

「…うつ！ ううええ!! うええええ！ ハア…ハア…」

また鮎美は床に吐いた。

「芹沢議員、水を飲むんだ！ こいつを拘束しておけ！ あと、救急車だ！」

介式は部下に松田川の拘束と救急車の手配を指示して、鮎美には水を飲ませる。

「早く飲みきれ」

「…ハア…ハア…：そんな水ばかり飲めませんよ。胃がタプタプで…」

「口を開けろ！」

「うう…：…また、吐かせるんですか？」

「開けろ！ 死にたいのかっ?！」

「…」

諦めて鮎美が口を開くと、介式の指が喉の奥に入ってくる。鷹姫の突っ込み方は優しくかったのだと思うほど、力強くて指も2本だった。

「うげええ！ うげえええ！ ヒュツ…うげええええ！」

大量に飲まされた水が喉を逆流してくる。息苦しくて、あまりに苦しくて鮎美は涙を零しながら介式の腰を格闘技で降参を意味する2度連続して叩く動作で叩いて、やめてほしいと伝えたけれど、容赦なく続けられて何度も嘔吐させられるうちに下着を少量の失禁で濡らしてしまうほど苦しんだ。ぐったりと嘔吐で疲れきった鮎美は救急車に乗せられ、松田川はパトカーに手錠をさされて乗せられる。それぞれに六角市内の病院と警察署に運ばれた。

2月27日 オムツと暗殺

翌2月27日の日曜朝、各種の検査で異常なしだった鮎美は医師の判断では即日退院可能だったけれど、松田川の両親が人質に取られているという状況もあり、県警からの判断で入院していた。そして、繰り返された暗殺未遂のためにSPは常時6名体制にまで増員され、さらに県警も10名を派遣して病院内外を見張っている。

「アユミン、超VIP待遇だね」

「嬉しいないよ。健康やのに入院してるのも、微妙な気分やし」

高価な個室の病室に、鐘留と鷹姫、陽湖も集まってくれている。静江と石永は鮎美が出席を取りやめた三上市で行われている新春大日本プロレス関西大会へ代理来賓として顔を出していて、鮎美には他にも3つのスポーツ大会と2つの宴会への出席が地元日程として組まれていたけれど、毒殺されかけたという報道も流したので欠席している。おかげで、友人たちと、ゆっくり会話する時間ができていた。

「うちを暗殺しようとする手口、だんだん手が込んでくるよね」

「はい、今回は高度に計画的です」

「単独犯やのうて組織やし。うちを殺したい組織っていうたら、やっぱりタックスヘブンに莫大な財産がある者のうちの誰かなんかなあ」

「連合インフレ税が実現しては困るという…」

鷹姫の言葉を鐘留が切る。

「宮ちゃん、アユミン、そういう暗い話しないようにってシズちゃんが言ってたじゃん。明るくいこうよ。そのためにアタシたち集まってるんだしさ」

「そやね」

気分が落ち込まないようという静江の配慮もあって地元日程はキャンセルの上で病室での休養になっている。鐘留と陽湖が買い込んできたスナック菓子を開封してジュースを鮎美に渡した。

「じゃ、アユミンの強運を祝って、カンパイ♪」

ジュースを飲んで、お菓子を食べながら、テレビをつけた。

「こちらは芹沢議員が入院している六角市の病院です。容態について医師からの説明は無く……」

陽湖がチャンネルを変える。けれど、どのチャンネルも鮎美のことを流していたのでテレビを切った。

「月ちゃん、なんか面白い話題ない?」

「急に言われても……修学旅行の準備、そろそろできていますか?」

シスター鮎美の参加は可能ですか?」

「うくん……一応、準備はしてるよ。パスポートも取ってあるし。けど、国会会期中になあ……欠席してはなあ……しかも、明日も、この病室に缶詰で国会は欠席するかもしれんし……」

「行こうよ! アユミン! アユミンには絶対、休暇が必要!」

「シスター鐘留、修学旅行は遊びじゃないですよ」

「信者さんには、そうかもしれないけどさ、アタシたちにとっては、ただの海外旅行だよ。聖地のあるイスラエルって言ってもさ。奈良の東大寺に行くのと変わんないし」

「そんなものと、いつしよに……」

「陽湖ちゃん、イスラエルに鹿っておるの?」

「いません! ……たぶん」

「陽湖ちゃんも行ったことないの?」

「簡単に行けるような距離じゃないですから。一生に一度になるかもしれない」

「聖地巡礼なあ……そらまあ、宗教学校なんやし。修学旅行の定番といええ、お寺の総本山、京都と奈良つてのが普通の感覚やとしたら、キリスト教やったら、その聖地に行きたいもんなんかもなあ……うちはアメリカのデイズニーランドが行きたかったかも。ま、千葉のでもええけど」

「アユミン、しよっちゅう東京に行ってるんだし、寄り道しないの?」

「無理無理。公費で行ってるわけやし、スケジュールに空きないし、なにより、今のうちが行ったら、あのネズミよりも囲まれて記念撮影も

とめられるちゅーねん」

「きやははは！ 人気者だね。宮ちゃんさ、食べてばっかりいないで何か話なよ。アユミンを明るく励ますのも秘書の仕事だよ？」

「……………」

急に話を振られて鷹姫が困った顔で考え込む。わいわいと女子同士が盛り上がって話しているときに入っていくのは、とくに苦手だった。

「……………鮎美、お身体に異常はありませんか？」

「うん、ないよ」

「本当に？」

「ぜんぜん平気よ。しいて言えば、指を突っ込まれた喉が少し痛いかな」

「すみません」

「ううん。鷹姫のせいやないよ。あとで突っ込まれた介式はんの指が、こたえたわ。指2本も入れてくるし、吐いても吐いても吐かされるし、死ぬか思たわ」

そう言いつつ、今も警護してくれている介式と知念を見る。

「……………」

二人とも警護中なので黙っている。

「ま、それも、うちを助けるためなんやし感謝してますよ。おおきに」

「……………」

「月ちゃんさ。今朝も礼拝に行ってから、ここ来たよね。あのマスターブラザーとは、どうなの？ 付き合ってくれそう？」

「っ…、そういう次元で見えていませんから！」

「じゃ、どういう次元？ 四次元？ 五次元？ きやははは！」

「どうして、そう低次元というか……………品位の低い……………」

「じゃあ、月ちゃんは高い次元で頑張るんだね。超次元セックスとか」

「……………」

「ある意味、同性愛が、そうかもね。アユミン」

「うーん……超常識ではあるかもしれんけど、次元は………どうかなあ」

「他に面白い話ないかなあ？ あ、クスクス、アユミンって東京で、ずっとオムツ着けてたらしいね？ きやはははは」

「その話題、絶対からかってくると思ってたわ。好きにして」

「きやははは！ ホントなんだ？ ホントのホントにオムツ着けてたの？」

「そうよ。漏らすよりマシやし。選挙の初日に漏らしてしもたし」

「うわあ♪ おもらしもホントなんだ。宮ちゃんの前で漏らしたんでしょ？ 宮ちゃんどうだった？」

「……コメントを差し控えます」

「きやははは。アユミン、よくオムツなんか着けて人前で演説できるね」

「東京はホンマにトイレないし。ま、自分でも笑えるよ。この歳で、おもらしとか情けないわあ。ははは……」

「きやははは！ きやははははは！」

「……ははは……」

からかわれても鮎美は受け流していたけれど、しつこく鐘留が20分以上も笑って、からかい続ける。

「アユミンちゃん、オムツ着けてるんでちゆね。かわいいでちゆね。ハイハイできまちゆか？ もう歩けるのかな？ アユミなだけに、ちゃんとオムツ着けて歩いてくだちゃいね」

「はい、はい」

「シスター鐘留、ちよつと、しつこいですよ」

「非礼です。黙りなさい」

「きやははは！ いいじゃん、面白い話題なんだしさ。アユミンも笑ってるし」

「どうとでも言うて」

「アユミンのオムツ姿、ちよつと見たい。着けてみてよ」
「嫌やし」

「おもらしアユミン、パンツだと漏らしちゃうよっ。」

「こっちではトイレに行くし」

「きやははは、トイレに入ってもパンツ脱ぐ前にジャーってしちゃうよ？ 水たまりつくらないでね。あ、でも、鮎なだけに、そこでピチピチ泳げるかな。ピチピチの議員さん」

言いながら鐘留が魚の泳ぐ真似をして見せ、それが珍妙で可笑しくて、つい陽湖と鷹姫まで失笑してしまう。

「クスッ……」

「きやははははは！ ピチピチおもらしチャー♪」

「クスクス……」

「きやははははは！ ひーはははははは！」

ずっと受け流していた鮎美が作り笑いから真顔になり、そして急に怒鳴る。

「いつまで笑ってんねん!!」

「っ……」

「……………」

「しつこいんよ!! うちが好きでオムツ着けたとも思うんっ?!」

「……………」

「からかうにも程があるやろ!!」

「…………ごめん…………アユミン……」

「鷹姫と陽湖ちゃんまで笑うし!!」

「すみません……………」

「ごめんなさい、シスター鮎美……………」

「腹立つわア!!」

「……………」

「ちよつと、あんたらもオムツ着けてみいよ！ どんな気持ちか思い知りい！」

「……………」

「鷹姫！ 一応、東京からオムツ持って帰ってきたよね?! あれ、出して！ 3枚！」

「…………はい……」

鷹姫が叱られた子供のような顔でカバンから大人用オムツを3枚

出した。それを受け取った鮎美は三人へ投げつける。

「着けてみ！」

「……………ヤダよ…………セクハラだ…………横暴だ…………」

鐘留が小声で抗議した。

「セクハラちゃうし！　うちが体験したことを、あんたらも秘書として学習しいい！　静江はんはな、ちゃんと選挙のとき、しつかり気を遣ってトイレのタイミング計ってくれてはったんよ！　あんたら、そんな気遣い無いやん！　この機会に学びい！」

「……………うう……………ヤダよ……………死んでもヤダ……………」

「あんたが一番しつこく笑ったやん！」

「……………」

「緑野は非礼すぎましたが……………私と月谷は……………ご勘弁願えませんか？」

恐る恐る鷹姫が寛恕を乞うたけれど、睨まれる。

「鷹姫、後から考えたら、うちが選挙カーで帰ってくるので遠くからでもスピーカーの声でわかったはずやんな。むしろ、わかったからこそ水田はトイレを塞ぎよったんやと思うわ。意地悪したる思う水田は当然かもしれんけど、逆に秘書の鷹姫が何も考えんと、うちが我慢して帰ってくるの予想もせんとトイレ塞ぐって、どういうことなん？」

「……………配慮が足りませんでした……………お許しください」

「陽湖ちゃんも国会前でのインタビューのとき、お腹壊して持ち場を放棄したよね？　あんなこと、うちの立場でできると思う?!　うちがオムツ着けてでもやってること、少しでも体験してみいよ！」

「……………本当に、ごめんなさい……………わかりました。着けます」

投げつけられたオムツを持って陽湖は病室にあるバストイレに入る。スカートへ手を入れ、ショーツを脱いだ。ショーツはポケットに入れて、オムツを見つめる。

「……………かなり嫌……………こんな嫌なことにシスター鮎美は耐えて……………」

いざオムツを身につけるとなると、激しい抵抗感があった。吸収体

があるということでは毎月の月経で身につけるナプキンと大差ないのに、形のせいなのか、赤ちゃんや寝たきり老人が着けるものというイメージがあるからなのか、脚を通すのに心理的な抵抗で時間がかかった。それでもお尻まで引き上げ、スカートの上から撫でてみた。

「……………うう……………モコモコする……………見て、わからないかな……………」

バストイレにあった鏡で自分の姿を確認する。制服のスカートのおかげで立っていればオムツの膨らみはわかりにくいけれど、前屈みになるとお尻が不自然に膨らんで見える。

「……………はああ……………シスター鐘留のせいなのに……………どうして、私まで……………」

「…ついつい愚痴をこぼしつつ、バストイレを出た。

「着けてきました」

そう言うだけでも陽湖は恥ずかしくて顔が真っ赤になるのを自覚した。ショーツと違い、妙に密着感が無いので股間がスカスカして頼りない。動くとガサガサするのも恥ずかしかった。

「鷹姫とカネちゃんも着けてきい！」

「……………」

「早う！」

「……………」

落ち込んだ顔で鷹姫がオムツを持ってバストイレに入る。

「……………」

「ショーツを脱いだ。」

「……………」

「オムツを開いて見つめる。」

「……………ハア……………」

オムツを持つ手が震えた。そのまま3分以上も固まっていた鷹姫は外から鮎美が早くするよう言ってくるので、震える手でオムツを穿いた。

「……………ハア……………」

「全身に鳥肌が立つ。立って歩こうとするのに平衡感覚がおかしく

なったように、まっすぐ歩けずヨロヨロとバストイレを出た。

「……………」

「着けたん？」

「……………」

黙って頷いた。とても顔をあげることができないし、陽湖は赤面したけれど、鷹姫は赤面を通りこして羞恥心で青ざめている。長時間プールに入って身体が冷えた小学生のように唇まで青かった。よろめきながら、なんとか椅子に座るとオムツのガサガサとした感触がお尻いっぱいにはたがり身震いする。

「っ……………ハア……………」

「次！ カネちゃん！」

「……………ヤダ……………」

駄々をこねる子供のように鐘留が抵抗する。

「嫌でも着けてきい！」

「……………うう……………アユミン、許して……………」

「許さんし！」

「……………」

「早う！」

「……………オムツはヤダけど、アタシにエッチなことならしていいよ……………」

「……………」

「また、腋とか舐めたり、アソコに触ってくれてもいいし……………」

鐘留が制服のスカートを手でつまんであげ、下着を見せる。鮎美の

睨んでいた視線が鐘留の股間に落ちてとまる。

「……………お母さんが怒ってはったやん……………」

「黙ってれば、わかんないよ……………」

「今は、そういう問題やなくて……………うちと同じ体験を……………」

「オムツは絶対イヤ！ 死んでもイヤ！ 着けさせたらママに言うし……………」

「……………ヘンタイ議員に強制されたって……………」

「……………そんなにイヤなんやったら……………」

「やった♪ アユミン優しい！ 愛してるよ、それなりに……………」

「もお、カネちゃんにはかなわんわ」

鮎美は肩をすくめて諦めた。陽湖が納得いかない気分になる。

「そんな……もとはといえ、シスター鐘留が悪いのに……」

「じゃ、月ちゃんもエツチさせてあげる権利にチェンジすれば？」

「……ありえませんか」

「陽湖ちゃんと鷹姫は一週間、それで過ごしてな。うちは選挙期間中、ずっとやってんし」

「一週間……」

陽湖と鷹姫が異口同音し、鐘留が面白そうに言う。

「ねえ、ねえ、高3にもなって、オムツ着けてる気分どうなの？ きやははは！」

「……シスター鐘留……あなたって人は……いったい、誰のせいで私とシスター鷹姫が……こんな目に……」

「……ハア……ハア……」

鷹姫が肩で息をしている。青ざめていた顔が、ますます蒼白になり小刻みに全身を震わせていた。

「鷹姫？ 大丈夫？ 汗びっしよりやん」

「……ハア……ハア……」

鷹姫の顔色は、まるで冤罪なのに死刑が確定してしまった囚人が、これから輪姦されることが決まっている奴隷少女のような絶望しきったもので、鮎美は心配になってきた。

「なんか、このままオムツ着けさせてたら、ストレスで胃潰瘍にでもなりそうな顔してるやん」

「……ハア……ハア……」

「……鷹姫……、もうええよ。鷹姫、あんたに具合悪くなられると困るし、トイレ入ってパンツに替えてき」

「……ハア……私は……ハア……」

「ええから、早く！ 命令よ！ パンツに戻り！」

「……はい……」

鷹姫はバストイレで着替えてきたけれど、それでもフラついて出て来た。鐘留でさえ心配そうに鷹姫の背中を撫でる。

「宮ちゃん、死んでも嫌なことを、無理にやると死ぬよ?」

「……ハア……」

「鷹姫、ちよつと、ベッドで横になっておきよ」

「…はい……ありがとうございます…」

よろよろと鷹姫は本来は擬装入院中の鮎美のものであるベッドで横になった。陽湖が期待半分、不安半分で鮎美へ問う。

「シスター鮎美……私も……とてもイヤです。……私も、許してもらえませんか?」

「………………。せめて、一人くらい、うちと同じ体験してよ」

「ううっ…」

「月ちゃん、頑張れ♪」

「……誰のせいで……」

陽湖が鐘留を恨んでいると、ずっと黙っていた介式がマナーモードにしていた携帯電話が振動したので警護を知念に任せて廊下で電話を受け、しばらくして戻ってきた。

「松田川医師が芹沢議員に飲ませようとした粉の正体が判明した」

「なんやっただんですか?」

「テトロドトキシシンだったそうだ」

「……」

女子高生4人にとっては知らないものだったけれど、かなり危険そうな響きは感じた。

「毒なんですか?」

「致死率の高い猛毒だそうだ。少量でも死に至る上、多少の知識があれば入手は容易らしい。なにしろ、フグから抽出される」

「フグ……って、あの魚の?」

「そうだ」

「フグ毒やったんや……」

鮎美が大阪の繁華街では、よく見かけるフグの模型を思い出し、そして松田川のことも考える。

「松田川先生は、どうしてはるんですか?」

「逮捕の上、六角警察署に拘留中だ」

「……………」両親、人質やったのに、逮捕まで、せんでも……………」

「殺人未遂の可能性もある。彼女は高い可能性で毒物だと認識して芹沢議員に飲ませようとした」

「……………」けど、寸前で止めてくれはったし……………」脅迫されて仕方なくやったことですよん。無罪で、ええんちゃいますの?」

「それは裁判官が決めることだ」

「……………」。六角警察署ですよね!　うち、松田川先生に会いに行きます!」

「ダメだ」

「行きます!」

「芹沢議員が健康を害していないと知れば、松田川医師の両親が殺されるかもしれない。もつとも、すでに殺されている可能性もあるが」

「……………」

鮎美は考え込み、陽湖に頼む。

「陽湖ちゃん、その髪ゴム貸して」

「あ、はい」

陽湖はツイントールに結っていた髪ゴムを外して鮎美に渡した。受け取った鮎美は自分をツイントールに結う。

「あと陽湖ちゃんと制服の上着、交換しよ」

「なりすましですね。どうぞ」

もともと影武者計画まであった陽湖と鮎美なので髪型と制服を交換すれば、議員バッチが議院記章になり、周囲を騙しやすくなる。知念が心配して問う。

「警護は、どうする気っすか?　オレら絶対、離れませんよ」

「介介はんと知念はんだだけ、うちについてきてください。行くのは警察署ですよん。行くのもパトカーで行かせてもらえませんか?　それなら警護が2人でも安全です」

「……………」

「あと、鷹姫も来て」

「はい」

オムツを着けさせられたダメージから立ち直りつつあった鷹姫がベッドから出る。

「介式はん、知念はん、お願いします。協力してください」

「……………わかった。県警に車両の手配を頼む。だが、なりすましは本当に大丈夫なのか？ 外にはテレビカメラも多い」

「顔にハンカチあてて嘘泣きしながら行きますわ。大泣きしてたら、いかにも芹沢鮎美が死にそうに見えて、ええんちゃいますか」

「名案っすね！ 芹沢議員、策士っすよ！」

「おおきに。ほな、鷹姫、いっしょに嘘泣きしよ。うちは泣いて知念はんを支えてもらうし、鷹姫は介式はんを支えてもらい。それでSPつきで移動しても不審に思われる可能性も減るし。他の警護は残って陽湖ちやんを守っておいてもらお」

作戦が決まり、鮎美は気持ちを集中して涙を零して鼻を赤くしたけれど、鷹姫は戸惑い、泣くことができない。

「早う泣き。ぐすっ…」

「……………泣けと言われましたも……………悲しくもないのに……………」

「また、オムツ着けさせるよ」

「っ……………」

鷹姫の顔色が悪くなった。

「うん、涙まで出んでも、その顔でええよ。あとはハンカチあてて、介式はんを抱きついておき」

「……………はい……………。あの……………、鮎美は同性愛者なのに知念警部補とのペアで大丈夫なのですか？ 私が知念警部補とでも……………」

「うちは男が嫌いなわけやないよ。大きな犬みたいな気持ちで抱きつけるし」

「オレ……………犬か……………」

「逆に、介式はんには、うちが抱きついたらセクハラやし、嘘泣きどころか興奮しそーやし。あ、知念はん、うちとペア、イヤ？」

「大丈夫っす。どうせ、犬っすから」

「ごめん、ごめん、頼もしい番犬やと思えますよ」

そう言つて鮎美が身を寄せると知念は赤面しないよう努力した。

「……ぐすつ……ほな、行こ…」

今にも友人が死にそうで泣いているという顔になった鮎美はハンカチをあてつつ、知念と病室を出る。介式と鷹姫も続いた。介式が病室前にいた部下たちに言う。

「しばらく離れる。室内は安全だ。誰が来ても入れるな」

「「はっ！」」

介式は手配したパトカーを病院の裏口に回させていたけれど、それでも数台のテレビカメラが敷地外から撮ってくる。

「あ、今、誰か出て来ました。あの制服は芹沢議員と同じ……あれは友人で秘書の宮本さんと月谷さんかもしれません。泣いています……芹沢議員の状態、かなり悪いのかもしれない。パトカーで移動するようです」

うまく取材はかわせた。六角警察署に着くと、すぐに取調室に案内してもらい、松田川が連行されてくる。

「つ……松田川先生……」

一目見て鮎美は気の毒で泣けてきた。女医として自信に満ちた颯爽とした人物だった松田川が手錠をされ憔悴した顔で見ているのは見るに忍びない。歩み寄って手を握った。

「松田川先生、ごめんなさい、うちのせいで…」

「……芹沢さん……無事に生きて……よかった…」

「刑事さん！ 手錠を外してあげてください！」

「で、…ですが…」

「うちの命の恩人です！ 早うしてください！」

「……とは、いつても、殺人未遂という形も…」

「今さら逃亡のおそれも、証拠隠滅のおそれもありません！ うちには被害者やし、参議院議員ですよ！」

今まで公務員に対して地位を誇示したことは、ほとんどない鮎美が叫び。刑事は迷いつつも応じてくれた。

「もう犯人グループの特徴なんかも松田川先生から聞き出してはるんでしょ？ いつまでも警察署に拘留なんかせんといってください！」

うちがホテルをとりますから、そこにおいてもらいます！」

「それは……逃亡はともかく、被疑者の自殺のおそれも……」

「知念はん！ 松田川先生についてあげてください！」

「え……けど、それは……オレは芹沢議員の警護が任務で……」

「うちを一度は狙った人物を引き続き監視するのは警護になるでしよ」

「すごい理屈を思いつくつすね……介式警部、どうします？」

「仕方ない。私が芹沢議員を連れて帰る。お前は宮本くと松田川医師をホテルに保護しつつ監視しておけ。警察署長には見張りを手配してもらえよう頼んでみる」

「わかりました」

「宮本くん、大丈夫か？」

「はい」

返事をした鷹姫は知念といっしょに松田川を鮎美が予約した六角市で一番高価なホテルに連れていった。かつて天皇行幸のさいには宿泊されたこともあるホテルだったものの、六角市そのものが小さな街なので、一番高い部屋でも一泊10万円程度だった。その部屋で鷹姫は松田川にお茶を淹れた。

「松田川先生、どうぞ」

「ありがとう」

警察署に拘留されていることに比べれば、天と地ほど差があるので幾分か松田川の顔色も良くなった。

「芹沢さんが元気そうで本当によかった……ぐすつ……」

「……………」

「あの粉薬が何か、判明してる？」

「テトロドトキシンだったそうっす」

「……………」

医師らしく瞬時に知識を思い出しているけれど、それを自分が手にして鮎美に飲ませようとしたのだとも思い出すと、また顔色が悪くなる。鷹姫がバスルームに入りつつ言う。

「お風呂の支度をいたします。どうぞ、ご入浴ください」

「……うん……ありがとう……」

思い返せば夜勤明けでシャワーを浴びようとして以来だった。松田川は自分の体臭と、乱れきった髪を男性である知念がいるので恥じる。鷹姫が用意してくれた風呂に入って、やっと少しは気分が落ち着いていた。知念は介式から連絡をうけ、鷹姫に言う。

「今夜中に六角署の方が人を手配してくれるそうだから、宮本さんは、もう芹沢議員の方へ戻ってください」

「はい」

「一人で大丈夫ですか？」

「はい、問題ありません。……帰りは泣き真似をした方がいいでしょうか？」

「う、うくん……俯いて歩くくらいでいいんじゃないですかね」

「わかりました」

鷹姫は沈んだ表情をつくり、俯いて病院に戻った。鮎美が擬装入院している病室に入ると、鐘留が楽しそうに陽湖をいじめていた。

「そろそろ限界かな？ オムツに漏らしそうだね」

「……ううっ……ハア……」

ずっとトイレに行かせてもらえなかった陽湖が苦しそうに呻いている。もう陽湖はツインテールに戻っていて、鮎美は髪をおろしている。

「鷹姫、ご飯、どうする？」

擬装入院で状態は絶対安静なので病院食は出ないし、病室には4人もいる。

「何か買ってきてみましょうか？」

「ピザでも取ろうよ」

「カネちゃん、うちが死にかけてるときに、みんなベッドの周りでピザ食べるの？」

「あ、そっか」

「……うう……ハア……ハア……」

「陽湖ちゃん、あんまり我慢しすぎんと、もうオムツの中に済ませてしまえばいいよ。楽になるよ」

「…ハア……そう言われても……」

トイレ以外で排泄することに大きな抵抗があつて、出そうなのに出ないで苦しんでいる。

「きやははは、月ちゃんの顔、必死すぎ」

「……あなたつて人は……うくつ……うくう……もうダメ……」

座つて我慢していた陽湖が立ち上がり、ほぼ条件反射でヨロヨロとバストイレに向かう。その進路上に鐘留が立ち塞がった。

「月ちゃん、どこ行くのかな？」

「…ど……どいて……もう、限界…」

「きやはつはは！」

鐘留が陽湖の左手首を握つて離さない。

「生徒会長さんが、おもらしなんてしないよね？」

「…ううくう……ハア……お願い……はなして……トイレに行かせて…」

「ダメダメ♪」

「カネちゃん、楽しそうやなあ。これ学校でオムツ無しやったら、完全イジメやよ」

「し……シスター鮎美……お願いです……」

すぐるように陽湖が右手を鮎美に向けた。もう両脚をしつかりと閉じてプルプルとお尻を震わせている。つま先立ちになって我慢しないと漏らしそうでバランスが悪くても足先だけで立っている。鮎美は支えるように肩を貸してやった。

「そんなに、ぴたつと脚を閉じてたら、漏らしたとき、ちゃんと吸収してくれんと横からハミ出てくるから、少しは脚を開きいよ」

「…っ……うう……」

陽湖がフルフルと首を横に振った。

「…ハア……ううっ……ハア……うきゆうう…」

「きやははは！ ウキユクだって！ 変な声出してる！」

「っ……わ、笑わないで……ひどい……」

陽湖が涙を零したので鮎美は気が変わる。

「そんなにイヤなんやったら、トイレでする？」

「…はい………お願いします」

「え、このまま、おもしろいさせようよ」

鐘留が陽湖の手首を握ったまま離さない。鮎美は肩を貸してバストイレの方へ連れて行くとしたけれど、左右から引つ張られて陽湖は限界を迎える。

「っ……うきゅっ……うぎゅううう……ああああ！」

「……………」

「きゅうああああ……」

陽湖が着けているオムツから音が響いてくる。

ジュボボボボ……

オムツの中で水流がぶつかっている音だった。

「…ハア………ああああ……ハア………ひうう……ハア……」

「もらった、もらった、生徒会長が、おもしろした！」

「カネちゃん、からかうの、やめてやりいよ」

「きやはっはははー！」

鐘留が笑うので陽湖は泣けてきた。その場に座り込みそうになるのは鮎美が支えてくれるけれど、涙は溢れて止まらない。

「…ハア……ううっ……ぐすっ……ううっ……」

「きやは、可笑しい！ おもしろして泣いてるとか、超笑える！」

「…ぐすっ………あなたは………あなたって人は………ううっ……」

悔しくて余計に泣けてきたのを鮎美が抱いてくれたので思わず胸に顔を埋めて泣いた。しばらく泣いて涙が止まった頃、生温かった股間も冷たくなる。

「陽湖ちゃん、お風呂に入ってきて」

「はい……ぐすっ……」

「鷹姫も、いっしょに入って慰めてあげてよ」

「わかりました」

陽湖と鷹姫が入浴し、鐘留が問う。

「アユミンが、いっしょに入りたがると思った。なんで、あの二人？」

「うちが入ったら絶対セクハラするし」

「きやはっは、自覚があるんだねえ」

「それに、うちは後で力ネちゃんとするつもりやし」

「きやはは、絶対やる気だ」

「約束やん？」

「キスはヤダからね。首から下のみね」

「うん……わかってるよ……」

「さてと、月ちゃんに2枚目を用意してあげよう」

鐘留は新しいオムツを入浴している陽湖の衣服の上に置き、ショー
ツは取り上げてきた。

「きやはははは、いつそ学校に行かせたら面白いのにね。オムツでさ」

「鬼やなあ……」

「にしても、アユミン、よく耐えたよね。選挙中ずっとオムツでしょ
?」

「慣れたら生理のときのナプキンと変わらんよ。それより、ご飯、どう
しよっ。」

「宅配ピザがダメなら誰かが買ってくるしかないよ。アユミンは出ら
れないから……あ！ 私と月ちゃんで行く！」

「それ道中でオムツ着けてること、さんざんからかって泣かす気やろ
?」

「泣かさないう程度にするから」

「あ、静江はんからメールや」

静江からメールが来て、食事を買っていくので何がいいか問われて
いて、可能ならピザと送信した。陽湖が悲しそうな顔で新しいオムツ
を着けて揚がってくる。鷹姫は気の毒そうに見ているけれど、あまり
何も言わない。交替で鮎美と鐘留が入浴し、静江がピザを届けてくれ
る頃に揚がってきた。遅い昼食なのか、早い夕食なのか、とてもハン
パな時間に5人でピザを食べ始めた。静江が陽湖の顔を見て問う。

「浮かない顔してるわね。何かあったの？」

「……いえ……何も……」

「きゃは、月ちゃん、オムツ着けてるんだよ。アユミンが選挙中に苦勞したのを体験させてるの」

「っ……言わないでよ……」

陽湖は食べていたピザを投げつけたくなかったけれど、宗教的理由で怒りを否定していることもあって我慢する。静江が一瞬だけ陽湖の股間を見て言う。

「体験もいいけど、イジメみたいにならないでよ」

「静江はん、外の様子は、どう？ 政治的ニュースとかある？」

「あいかわらず病院の周りにはマスコミがいたわ。このピザはダンボール箱に隠して持ってきたから元気なのはバレてないはずだけど、明日の国会出席、どうするべきか迷いどころね」

「他には？ うちのニュース以外で」

「あとは知っておくべき政治的動きはないけど、注目されてる裁判の判決が、そろそろ出るくらいです」

「どんな？」

「大阪愛知岐阜連続リンチ殺人事件の。ご存じです？」

「ちらっと、この前、新聞で読んだような」

「この事件、未成年だった少年たちが無計画に仲間や無関係な人をリンチのあげく殺して捨てた大事件なんですけど、発生当時に阪神大震災やオウム真理教の事件と重なって、あまり人々の記憶に残っていません。主犯格の3人には死刑がくだり、近々それが確定しそうですけど、また、ちようど芹沢鮎美連続暗殺未遂事件と重なって、重大性のわりに注目されずに終わってしまうかも」

静江もピザを食べつつ、話を続ける。

「ひどい事件だったそうですよ。少年たちには他者への共感性が欠落していて、ちよつとしたことがキツカケで仲間をリンチした直後に、のほほんとピザを食べていたりしたそうです」

「ふーん……ひどい話やね」

「私も今、リンチされてるような気分です……」

オムツを着けている陽湖が恨みつつ、美味しくピザを食べている鮎美や鐘留、鷹姫を見てから自分もピザを頬張った。いつも食事の前に

は祈りを捧げるのに、オヤツなのか食事なのか判然としない時刻だったことと、苛立つて食欲が増しているので忘れていた。静江が話を続けていく。

「当時は18歳19歳が未成年で、ちょうど少年たちの年齢と芹沢先生たちの年齢も重なりますから、もしかしたらコメントを求められる機会があるかもしれません。まったく知らないというのは勉強不足の感がありますから、概要くらいはネットで見ておいてください」

食事が終わると、また病室に閉じこめられている時間が続き、静江が頭数を見て言う。

「このまま、この部屋に宿泊するのは誰と誰にします?」

「うちは当然として、鷹姫は? 島に戻る?」

「おそばにいさせてください」

「おおきに。陽湖ちゃんは?」

「……………」

「オムツ着けて帰れば? きゃははは! 替えのオムツも忘れずにね」

「……………ここにいさせてください。ご迷惑でなければ」

「うちは賑やかな方が嬉しいよ。カネちゃんは?」

「アタシは……………お泊まりはイヤかな。ベッドの数も足りないしさ。

外泊するとママがうるさそう」

鐘留は時刻を確かめて言う。

「あと一回、月ちゃんがおもらしするとこ見たら帰るよ。月ちゃん、コーラ残ってるよ、どうぞ」

「要りません」

陽湖は飲み物を勧められても拒否して過ごしたけれど、夜になるとピザといっしょに飲んだ分が膀胱に溜まってくる。鐘留は母親が迎えに来たので残念そうに言った。

「また明日ね。月ちゃん頑張って我慢してね。クスクス。おもらし生徒会長さん」

「……………」

陽湖は完全に無視して鐘留の方を見ようとしめない。

「カネちゃん、そんなニヤニヤ笑ったまま、病院を出たら、あんたが毒をもった真犯人みたいに思われるよ」

「あ、そうだったね。泣きべそでいくよ」

鐘留は病室を出る前に嘘泣きを始めてから帰った。静江も帰り、残った三人で病室の病床と付き添い者用のベッドで眠る。制服から病人向けの寝間着に着替えつつ、陽湖がタメ息をつく。

「シスター 鮎美が苦勞したのは理解しますが、シスター 鐘留は、ひどすぎます。前から、ひどい人とは思っていましたが、あそこまで、ひどいとは思いませんでした」

「……………」

「こんなことを言っただけですけど、私、あの人と同じ仕事場でやっていく自信がありません」

「…………… 陽湖ちゃん……………」

鮎美が迷い、ある程度は言っておくことにした。

「カネちゃんにも、うちとは違うけど他人に言えん事情があるんよ」

「…………… どんなん？」

「それ絶対に言わん約束やから」

はじめて三島が鮎美へ陳情に来たとき、陽湖は同席していなかった。鐘留が両親によつて障碍のある弟2人が殺められていたことが心理的な傷になり、いまだに夜尿症が続いていることを詳しくは知らなかった。鮎美の口調から重いものを感じて陽湖も察する。

「…………… そうですか……………」

「カネちゃんて口は達者やけど、精神的には、すごい不安定なん、わかるっ。」

「…はい…………… なんとなく……………」

「…両親のことも大好きなのに、大嫌いみたいなんよ」

「……………」

陽湖も両親とは不仲ではないけれど、関係は微妙だった。いつしよに暮らしていると気持ちが悪く、この半年、芹沢家で暮らしている気持ちが悪くなっている。

「はつきりとは教えられんけど、カネちゃんは陽湖ちゃんへ悪意を

もってからかかってるわけやのうて、うちに対しても、しつこいからかいをしはったやん？」

「…はい……」

「うちへも悪意があるわけやなくて、どっちかというとき自己嫌悪の裏返しみたいなものなんよ。腹立つやろけど、受け流してやって」

「……わかりました……」

納得まではいかなかったけれど、鐘留への反感を軽減させた陽湖は付き添い者用のベッドで眠った。おしっこをしたいのを我慢しながらだったので、かなり寝付きは悪かった。そして眠っているうちに悪夢を見た。幼い頃から何度も読み聞かせられたノアの箱船のシーンから夢は始まり、大洪水で世界が沈む、そして夢の中なので時系列も無視で新約聖書の最後まで話が飛び、今度はハルマゲドンの世界終末になる。大きな災いが起こり、洪水ではなく津波が襲ってきた。その津波は3メートル5メートルの大きさから、どんどん高くなり、世界のすべてを飲み込むような津波になって陽湖へ襲ってきた。そんな怒濤の流れに掠れながらも、水が冷たい海水ではなく温泉のように温かい水で、とくにお尻の周りばかりが生温かいので、陽湖は眠ったままでも夢の中で、十年ぶりくらいに自分がオネショしていることに気づいていた。

翌2月28日月曜午前2時50分、詩織は連合インフレ税の調整のために連絡を取る海外が、だいたいは時差の都合で日本より時刻が遅れているため、日付が変わっても仕事を続けた後、制服姿の朝槍と世田谷のマンションに帰ってきた。

「……………」

「どうしたの？ シオリン」

「……………」

玄関から入り、わずかに男性の体臭を感じたので数秒ほど考え込んだものの、すぐに普段通りに奥へ進む。リビングからベランダに通じるガラス戸が小さく割られていて、外部から何者かが侵入した形跡があるけれど、カーテンで覆い隠されている。開けていたはずのカーテ

ンが閉まっていることにも、ガラス戸が割られていることにも気づいていないフリをして、あえて大きな声で朝槍と会話する。

「疲れましたね。早くお風呂に入って休みましょう」

「え？ エッチしないの？」

「ナユは盛りのついたメス猫みたいですね」

そう言いつつ詩織が脱衣して裸になっていくと、朝槍も入浴より性行為を期待して制服を脱ぎ、ウィッグも外した。二人でバスルームへ向かった。

「シズカニシロ！」

「っ……」

バスルームに隠れていた大男から拳銃を向けられて、朝槍は息を飲み、詩織も息を飲むフリをした。

「ナユ、私の後ろに。逆らってはダメですよ」

「う、うん……」

怯えた朝槍が詩織の背中に抱きつく。大男は目出し帽をかぶっていて松田川へ向けたのと同じ拳銃を詩織たちに向けている。

「コレヲミロ」

「……お父さん……お母さん……」

大男が見せつけてきたスマートフォンには詩織の両親が映っていた。ライブ通信しているようで、縛られた両親はうなだれているし、その背後に松田川の両親も生きていた。画面の中に、目出し帽をかぶった男も映り、ナイフを見せながら言う。

「はじめまして。牧田さん」

向こうの男は発音が聞き取りやすい。

「我々の要求は簡単だ。パパとママを殺されるを望まないときは、お前はセリザワにナイフを刺せ！」

「コレダー！」

大男がスマートフォンを床に立てて置き、ポケットからナイフを出している。その隙に詩織は拳銃を奪って大男を蹴りつきたい反射的欲望にかられたけれど、まだ犯人たちから情報を得たいので我慢した。

「そのナイフをセリザワに刺せば、パパとママは元気で死なない。家族は幸せになる。失敗すれば、パパとママは死んでしまう。悲しい家族になる」

苛々するほど下手な日本語だったけれど、詩織は我慢し、朝槍は黙って怯えている。そして、見せられたナイフには刃に白っぽい粉薬が塗りつけてあった。

「すぐに刺しに行け。でなければ、パパとママは我々が殺される」

「…………。我々に殺される、が正しい日本語です。が、と、には、では意味が大きく違います」

つい我慢できずに指摘すると、画面に映る男が怒った。

「お、お前、オレの先生と違う！ 黙る！」

「ワカッタ?!」

大男が拳銃を強調して向けてくる。

「ケイサツ、イウ、コロス！」

「…………。お父さんと話をさせてください」

「H e r m a n o ?」

兄貴、と大男が問い、それがスペイン語で南米訛りがあることに詩織は気づいた。

「いいだろう。話せ」

「お父さん、詩織です。そちらにも映像は見えていますか？」

「…ああ…」

娘の全裸が見え、その背後には女性都議の全裸も見えたので、やや目をそらし気味に父親は頷いた。

「お父さんたちを掠って監禁したのは二人組ですか？ 他に犯人は？」

「…………。二人だ…」

「わかりました」

と言った瞬間、詩織は大男が持っていた拳銃の銃口をつかみ、射線を自分からそらせると反対の手で人指し指と中指を突き出し、大男に目つぶしをくらわせた。

「U g g a ? !」

さらに膝蹴りを股間に入れ、蹲った後頸部に肘打ちを落とす、手首を捻って拳銃を奪うと、大男の膝を撃った。

バンっ！

「A g a a !!」

悲鳴をあげた大男を蹴り倒して銃口を向けつつ、朝槍に頼む。

「ナユ、そのスマフォを拾って、こちらに向けて」

「……………」

あまりに一瞬の出来事に朝槍は硬直したまま動かない。画面の中にいる男も何が起こったのか、わかっていない様子だった。

「ナユ！ しっかりしてください！」

「…あ……………うん！」

朝槍はスマートフォンを拾い、詩織と大男に向けた。画面内の男と大男がスペイン語で何か会話をした直後、画面内の男は詩織の父親をナイフで刺した。

「お前のパパ殺す！ 殺す！」

「ぐうツ!!」

父親は太腿を深く刺され呻いた。

「銃を弟に返せ！ でなければパパ殺す!!」

さらに3回、腿を刺している。

「ぐぐう…ハア…ハア…」

「U g a u … h a … h a …」

こちらでも向こうでも一人ずつ腿と膝の痛みで呻いているけれど、詩織は顔色を少しも変えない。

「テロリストの要求には屈しない。世界の警察の基本です」

「パパ殺す!!」

「弟さんを殺しましょうか？」

「や、やめろ！」

「人質交換しましょう。これから、こちらに行きます。警察には言いません。人質を交換したら3時間だけ、あなたたちに逃げる時間をあげます。父と母、あと松田川先生の両親も無事なら」

「くっ……………わかった！ 弟、殺すな！ 殺したら殺す！」

「はっ」

通信を終えると、詩織は大男を駐車場に連れて行き、自分のBMWの後席に乗せ、隣に座った。朝槍に運転してもらい、聞き出した静岡県内の下町にある廃工場に移動する。移動中に大男から、鮎美を殺すよう依頼したのは日本のヤクザであること、バレンタインに洗剤入りチョコレートを地元事務所に送ったのもヤクザであること、南米から来ている実行犯となった自分たちの報酬は日本国籍がえられる擬装結婚であること、ヤクザが鮎美を殺そうとしたのは連合インフレ税ではなく不確定拠出年金制度が風俗産業に定着すると脱税が困難になることが理由だと突きとめた。

「なるほど、タックスヘブンの富豪がするにしてもは稚拙な手段ですしね。とはいえ、あの年金制度は、ほとんど進んでいなかったのですよ。連合インフレ税に手一杯で。にしても、帰宅した女性がシャワーを浴びるため裸になった直後を狙うなんて手口、よくよく男として最低です」

「Uuuuuutt…」

大男は膝を押さえて呻いている。かなり出血したので弱っていたし、詩織が目出し帽の前後を回転させて目隠し代わりにしたので、もう抵抗できずにいる。廃工場に到着すると、朝槍に車を中まで入れさせた。詩織は大男に銃を突きつけた状態で車を降りる。待っていた男も父親に銃を向ける。

「交換しろー！」

「その前に、お顔を見せてください」

詩織が大男から男へと銃を向けると、男も詩織に向けてくる。

「我々を逃がす約束だ！」

「ええ、逃がしてあげますよ。ただ、せつかくの機会、こんなチャンス、めったに無いですから」

そう言いながら詩織は銃を構えたまま、片手でスカートを脱ぎ、フグ毒が塗られてあったナイフで自分の下着も切り落とした。下半身裸になって男に近づいていく。

「…な……なんだ……？」

「ハンサムなら、一回楽しみたいです」

「……………く……………狂った女だ…」

「そんなの昔からですよ、ね、パパ、ママ」

詩織が問うと両親は顔を伏せた。高校から海外に出した娘は小学中学でも異質だった。育てた親なので、知りたくなくても知っている。頭が良く社交的で何をやらせても優秀だったけれど、おそろしく冷たい面があり、小学校で一人、中学校で一人、それぞれ溺死と交通事故で仲の良かった友達が死んでいる。それを娘の犯行だとは思いたく無かったけれど、手元におくのが怖くて海外に出した。娘は友達が生んだ日も、葬式の日も、外では泣いてみせたけれど、家では平然としていて、きつちりと宿題も済ませたし、食事も普段通りに食べた。まるで友人の死など無かったことのように平穩に過ごしていて寒気がした。

「さ、顔を見せてください。銃は私に向けたまま、私も、あなたに銃を向けたまま」

「……………」

「あなたは二丁拳銃なので有利ですよ」

そう言って詩織は片膝をあげ、男に性器を見せる。

「P e r r a」

メス犬め、と罵ったけれど、引き下がるのは男のメンツが許さなかったのでズボンのチャックをおろした。白人らしい勃起していない状態でも大きめの男根が見えた。詩織は目出し帽の上から見える顔を想像して微笑をつくった。

「あえて覆面のままというプレイも面白いかもしれませぬね」

「銃をおろせ」

「いいえ、お互い、向けあったまま楽しみましょう。きつと、どちらかが撃てば、撃たれた方も力が入り撃ってしまいますから撃つに撃てませんよ。でもスリルは最高です」

そう言って詩織は銃口を男の胸に密着させる。男の方も詩織の頭に向けている。

「そっちの椅子に座ってください」

「パパとママの前でフアックする気が……とことん狂った女だ……」

あきれながら男が人質4人を見張りやすい位置に置いてあった椅子に座った。ストープも近くにあるので温かい。

「ちゃんと勃つてくださいね」

「……………」

銃口を向け合った状態では興奮しにくかったけれど、椅子に座った男へ詩織が跨り、何度も濡れた女性器を押しあててくると次第に興奮して合体した。ストープで温かいので、お互いに空いている片手で上半身も裸になる。

「ああっ……ゾクゾクしますね……」

詩織は頭に銃口を向けられながら、男の心臓に狙いをつけている。自分の生命の危機でさえ興奮の糧になるようで、うっとりとしている。そして射精されると満足そうに離れた。

「ナユ、私の車のキーを、この人にあげてください。約束通り逃げてもらいます」

「……………うん……………」

茫然と見ていた朝槍がBMWのキーを渡そうとし、男が詩織から朝槍へ注意を移した瞬間、目出し帽の中央を撃った。

バンッ！

どさりと男が倒れる。

「っ…………シオリン…………なんてこと……」

「あと一人は、どうしましょう」

考えつつ、詩織は射殺した男から拳銃を取り上げ、その銃で大男の胸を撃った。もともと出血していた大男は、すぐに絶命する。詩織は振り返って松田川の両親を見た。監禁された日数が長くなっていたので、やっと解放されたという状況でも顔色が悪い。

「松田川さん、娘さんに何か言い残しておきたいことはありますか？」

「……………？」

夫婦は言われた意味がわからなかった。けれど、詩織の父親は娘の

冷酷さを知っていた。

「やめるんだ！ 詩織！」

「無理です、お父さん。一人目はともかく大男の方は、過剰防衛の殺人ですから目撃者は生かしておけません」

そう言つて松田川の両親を撃った。

「なんてことを……お前は……」

「詩織……あなたは頭が、変よ……」

詩織の母親が絶望しきつた顔で娘を見上げ、娘は微笑んだ。

「きつと生まれつきですよ。お父さん、お母さん、外れクジ、残念でしたね。でも、私は生きていて楽しいですよ。産んでくれて、ありがとう。育ててくれて、ありがとう」

「……………」

それが自分たちへの弔辞であると両親は感じた。

「でも、どうして私がパパとママを殺すと思いますか？」

「……………」

「一昨年のお正月、私へ言いましたよね。兄さんたちの方が子供も数多くいるから遺産の分配は長男次男を優先するって」

「……………」

「ひどいですよ。男女同権の時代なのに。だから、遺言書の無いうちに死んでもらいます」

「……………」

「何か遺言はありますか？ 聴くだけ聴いてあげますよ。お母さん？」

「……お前なんて……産むんじやなかった……」

「はい、さようなら」

詩織が自分の母親を撃った。

「お父さん、何か遺言はありますか？」

「……………せめて一馬と敬二郎は殺さないでやってくれ。あの子たちの子も、妻も」

「フフ、覚えておきます。さようなら」

詩織が自分の父親も撃った。

「これで6人、一晩に、こんなに殺したのは初めてです」
詩織が振り返って朝槍を見た。

「っ…、や、やだ！ 殺さないで!!」

「ナユを殺すわけじゃないですよ」

「っ、ほ、ホントに?! ホントに殺さない?!」

「はい。ちゃんと私の言うとおりにしてください」

「うん！ する！ 何でもする！ 絶対に喋らない!!」

「では、服を脱いでください。そっちは寒いから、こっちにきて」

「……うん……」

殺されたくない一心で朝槍は恐る恐る詩織に近づくと、ストーブのそばで裸になった。

「ナユは強盗に絞め殺されるプレイが好きでしたよね？」

詩織が銃を片手に言う。

「も、もう、その趣味は飽きたから！ 今はコスプレが好き！」

「そこに寝そべって両脚を大きく開いてください」

そこ、と詩織が指したのは最初に殺した男の上だった。死体を布団の代わりに考えている。

「こ……殺さないよね？ 私を……」

「言うとおりにすれば、殺しません」

「……こ、こう？」

朝槍は死体の上に寝転がり、両脚を開いた。詩織は手にした銃を朝槍の股間に向ける。

「ゆっくり入れますから力を抜いて」

「…そ……そんなの怖いよ……お願い、やめて……」

「言うとおりにしない気ですか？」

銃を持った詩織に問われ、朝槍に逆らう選択肢は無かった。深く銃口を挿入され、その恐怖に身震いする。

「ナユ」

「……っ」

それが最期の呼びかけなのだ、朝槍が気づくと同時に発砲された。銃弾の破壊力だけでなく、火薬の爆圧まで体内で炸裂し、激痛を

感じる間も無く朝槍は死んだ。

「……………すべて終わった後の、この静けさ……………いいです……………」

もう、誰も生きていない。呻き声も呼吸の音もしない。

「……………これだけ静かだと、考えもまとまって有り難いです」

少し考えた詩織は最初に撃った男の死体に銃を握らせると、いっしよに壁やBMWを残弾が無くなるまで撃って、自分からしか硝煙反応が出ないという状態をさけ、さらに廃工場にあった可燃物をまとめてストーブのそばに置き、二人の白人男性を重ねるようにしてストーブのために用意してあった灯油をかけ、BMWの燃料タンクも近くになるようバツクさせ、ゆっくりとストーブを倒した。自動消火装置で消えてしまいうけれど、男が持っていたライターで灯油に着火し、大きく燃え上がるまで炎を見つめてから、その場から裸のまま走り出る。廃工場から出ると、人気のない下町で、さんざん銃声を鳴らしたのに通報されなかったのは空き家ばかりだったからで、今度はそれが都合が悪い。裸なので寒さで震え上がりそうになる。走って、人がいそうな民家を探すと、大声で叫びながらドアを叩いた。

「助けて！ 助けて!!」

すでに日が昇りかけている早朝に、女性の必死な声が響いて民家から徹夜でネットゲームをしていた青年が出て来た。

「何っすか?」

「助けてください！ 助けて!」

寒さで震え、青ざめた詩織が泣きながら懇願すると、青年は中に入れてくれる。玄関で座り込み、詩織が顔をおおって泣くと、優しく声をかけてくれる。

「大丈夫ですか? 襲われたんっすか?」

「っ……………」

思い出したくないという顔をつくって涙を零し、青年に頼む。

「…シャワーを貸して…ください…おねがい…します…」

「……………いいっすけど。…警察、呼んだ方がよくないっすか?」

「おねがい…シャワーを……………」

「……………。わかりました。どうぞ」

青年が浴室に案内してくれたのでシャワーを浴び、髪と身体を何度も洗った。そのうちに外から消防車の音が響いてくる。ずっと浴室に入っていると青年の母親らしき女性が声をかけてきた。

「大丈夫ですか？ お嬢さん」

「……ううっ……ううっ……」

嘘泣きして返事はしない。

「警察、呼びますよ」

「ううっ……ううっ……」

イエスともノーとも言わず泣き続けた。母親は通報したらしく10分ほどで婦人警官が浴室の前に来た。

「警察です。何があったか説明してくれますか？」

「ううっ……うううっ……」

「どうして裸で外にいたんですか？」

「うああっ……あああっ……うわあああっ……」

「戸を開けますよ。落ち着いてください。女性の私しか、いませんか」

婦人警官が浴室の戸を開け、中を覗いてくる。詩織はシャワーで身体を温めながら嘘泣きを続けた。かすかに婦人警官は硝煙の匂いを感じた。それは錯覚くらいに少なかつたけれど、警官として射撃術も訓練したことがあるので嗅覚が覚えている。

「……。近くで火事がありました。あなたは関係していますか？」

「うあああっ……うわあああっ……」

「落ち着いてください。あなたの名前は？」

「あああっ……うあああっ……」

何を訊かれても泣き続けてみせたけれど、警官も曖昧にはできないので根気よく問い、どうやら火事に関係があり、男に襲われたらしいというところまでは、ときおり頷く詩織からつかんだ。

「つらかったですね。そうやって身体を洗い流したい気持ちはわかります。けれど、もし本当に襲われたなら犯人逮捕のためにも、あなたの身体から犯人の痕跡を見つける必要があるの。とてもつらいと思うけれど、女性のお医者さんを探してあげますから、どうか我慢して」

「ううっ……ううっ……」

遠回しに膣内に精液があるか確認すると言われ、それが狙いだっただけで頷いた。もう硝煙反応は検出されてもわずかなはずで、精液が膣内にあれば強姦だと勘違いしてくれる。素直に婦人警官に案内され、青年の母親から衣服を借りて早朝にもかかわらず緊急の診察に応じてくれる女医がいる婦人科病院に行った。

「……ぐすっ……ううっ……」

なかなか嘘泣きを続けるのは疲れるけれど、常に顔をおおって泣きながら診察台にあがった。婦人科の内診用の診察台なので電動で変形し、下半身をM字開脚の形にしてくれる。

「うううっ……うわああっ……」

「つらかったね。落ち着いて。もう誰もあなたを襲わないから」

女医が優しく声をかけながら極薄のプラスチック手袋をして詩織の膣内を検査する。シャワーは浴びたけれど股間は洗わないようにしたので、しっかりと精液が検出された。女医は検出されたことは口に出して言わず、詩織の生理周期を訊き、アフターモーニングピルの説明をしてくれた。

「一応、飲んでおきますか？」

「……ぐすっ……うわああああ！」

これで妊娠するなら、それも一興と想っていたけれど、また大声で泣き出して誤魔化した。そして、泣き疲れた風に眠る。かなりの睡眠不足だったので心地よく眠れたし、とりあえず入院という扱いにしてくれた。しっかりと10時間あまり眠っていると、廃工場で燃えているBMWのナンバーから牧田詩織という氏名に見当をつけた静岡県警から連絡が回ったようで鮎美がSPたちと病室を訪ねてくれた。

「詩織はん……」

もう鮎美は詩織と松田川の両親が焼死体で見つかったことも、同じく朝槍が殺されていたことも知っている顔で涙を零しながら詩織に近づくと、抱きしめてくれた。

「ああっ…鮎美…」
抱き返しながら、すべてがうまくいったと確信した。

3月1日 同性婚

翌3月1日火曜朝、衆議院では平成23年度の予算が通過する予定だったけれど、鮎美は静岡県にある病院の個室病室で詩織とベッドの上にいた。他に本会議であるにもかかわらず欠席した国会議員は民主党内部の抗争で16名もいるらしいので、毒殺されかけ、さらに秘書が両親を殺され、主治医の両親と賛同者である女性都議まで亡くした鮎美が欠席していても、少しの批判も起こらずに済んでいる。

「鮎美…」

「…詩織はん」

そしてベッドの上で抱き合っていた。詩織は全裸、鮎美は制服姿でショーツだけは脱いでいる。夕べから、何度も抱き合っているし、S Pは病室の前にさがってもらっている。最初、両親を亡くした詩織を鮎美が慰める形で始まり、鮎美は手や舌を使って詩織を愛したし、何度か自分も裸になろうとしたけれど、詩織のこだわりで腋毛を処理していない鮎美を見たくないということが伝わってきたのと、ときおり静岡県警の刑事が訪ねてきて事情を訊きたいと言ってくるのに、裸で対応するわけにはいかなかったので鮎美は制服を脱いでいない。今もノックされて鮎美だけが病室を出て刑事たちと対面する。今度は静岡県警だけでなく、警視庁の刑事までいた。

「芹沢議員、少しだけでも牧田さんとお話できませんか？」

「今は、とても動揺してはりますから、もう少し待つてください」

「ですが、時間が経つほど記憶は不鮮明になるものです。彼女は唯一の生存者で、何があったのかは彼女しか知らないのです。どうか、10分、5分だけでもご協力ください」

「……………」

「お願いします」

お願いと言いつつ、刑事たちは強い圧力を発してくる。鮎美も常識的に考えて、これ以上の拒否は難しいとわかっていた。

「……………少し、本人に訊いてきます。待っていてください」

病室に戻って詩織に問うと、鮎美が困っているので詩織も応じるけれど、条件を出した。

「あとで鮎美の裸が見たいです。鮎美のキレイな身体が」

「……それは、いいけど……」

「どこか、コンビニでカミソリとご飯を二人分、買ってきてください」

「……ご飯は、詩織はんの分、来ると思うよ？」

「病院食は残しておく方が、ショックを受けていると思ってくれますから」

「…………。ほな、お米か、麺類、どっちがええの？」

「鮎美と同じで、お願いします」

「ほな、刑事さんらに入ってもらおうよ」

「はい」

詩織は刑事が入ってくる前に頭からシーツをかぶった。鮎美は注文された物を買うに出る。当然、SPたちは鮎美についてきた。そろそろと多数のSPをつれて病院近くのコンビニに入った。コンビニの店員が一瞬、ボディガード付きのヤクザの令嬢でも来たのか、という顔をしたけれど、鮎美の胸にある議員バッジと顔を見て、つぶやいた。

「…鮎美だ…」

「どうも」

軽く会釈しておく。いずれ6年後にある国民審査は都道府県単位なので静岡県民は無関係だけれど、自民党としての顔もあるので誰にでも愛想良くするのは、もう習慣だった。コンビニ入って左側にある商品棚から女性向けカミソリを買う。

「……………」

やはり多くの男性SPに囲まれて買う物としては迷いもあつたし、日常的な商品ではあるけれど、今買う物としては違和感が大きい、男性SPたちも鮎美が同性愛者であることは知っているし、夕べからずっと病室に二人きりで、ついてきていた鷹姫も東京へ向かわせている。カミソリの次に弁当を買う。サラダとパスタ、デザートという組

み合わせにした。会計を済ませて病院に戻ると、玄関で介式と男性SP数名が向かってきた。交替のようで互いに敬礼して、今まで鮎美についていたSPたちは空腹だったらしくコンビニの方へ行く。交替は見慣れた光景だったけれど、鮎美は介式の様子に強い違和感を覚えた。いつも冷静沈着な彼女が、ひどく動揺しているようで顔色が悪い。

「介式はん、何かあったんですか？」

「……いや……何も無い……」

「嘘は信じられるようにつくもんですよ」

介式には鷹姫と似たところがあって、感情表現は乏しいけれど、ときに感情をコントロールできない場面もあるらしく、今は動揺が隠せていない。

「体調が悪いんやったら無理せんといってください」

「私は万全だ」

「ほな、なんで？　ちよつと見ただけで、様子がおかしいのわかりますよ？」

「………。芹沢議員、トイレに行っておいたら、どうだろう？」

「わかりました」

鮎美は病院1階の女子トイレに入った。これで男性SPたちはついてこないの二人きりになる。

「で、どないしはったんです？」

「………。実は、とても困った事態が発生している」

「また暗殺？」

「いや、……むしろ、それなら対処のしようもあるが……部下の不祥事なのだ……どう対処したものか……上への報告も……」

「不祥事ですか……それは困りますね。金銭ですか、性的なことですか？」

もう鮎美も社会で発生する、だいたいの不祥事は金銭か、性だと経験から理解している。

「……性的なことだ……。……知念が……」

「知念はんが……あの人、そんな男性には見えんかったけど……」

「……痴漢でもしはったんですか？ それともセクハラ？」

「ごく一時的に知念には松田川医師の見張りを頼んだ。……そのとき、ホテルの部屋に宮本くんもいて、それから県警から応援も来る予定だったから、問題ないと思っていたが、宮本くんが帰り、県警の応援が来るまでの間は、知念と松田川医師が二人きりだった」

「……それ、うちにも少し責任ありますね……」

「私の責任だ」

「何があっただんですか？ セクハラ……それとも、もっと、ひどいことまで……」

「性交したらしい」

「……。知念はん、そんな男やと思えんけど……。松田川先生……。めっちゃ傷ついてる状況で、さらに追い込むみたい……。強姦とかがありえんよ……」

「知念は暴力はふるってない。同意はあったと主張している」

「……。松田川先生は、なんて？」

「彼女も同意の上だと言ってくれている」

「……。ほな、問題ないんちやいます？ 二人とも未婚ですし」

「だが、警護対象と……。いや、見張りの対象で、松田川医師は容疑者という面もあり……。知念は勤務中だった」

「……。介式はん、こういう分野苦手そうですし、うちにも責任あるし、ちよつと知念はんは電話してみますわ」

鮎美は知念にかけてみた。

「もしもし、うちです」

「知念っす」

「松田川先生とエッチしたってホンマなん？」

「うっ……。た、単刀直入っすね」

「事実なん？」

「……。はい……。すみません……」

「どういう状況で？」

「宮本さんが帰ってから、自分が慰めてたんっす。あのときはご両親の生死は不明だったっすけど、外国人に拉致されてたから生存の可能

性は低いって紀子も思ってた」

「で。」

「で、慰めてるうちにキスしたりしてしまっただけ……あとは……ホテルの部屋でベッドもあったから……すみません」

「松田川先生は嫌がったん？ 無理矢理？」

「いえ！ 誓って、そんなことはないっす！」

「ふーん……松田川先生にも訊いてみるわ。どっちにしても、ホテル代、あんた持ちな」

「…はいっす」

知念との電話を終え、松田川にもかけてみる。

「もしもし、うちです」

「私よ」

「知念はんとエッチしたってホンマですか？」

「……その話、そんなに広げないでよ……。知念くん、なんで上司に報告しちゃうかなあ……。あのバカ」

「どういう状況でやらはったんですか？ 押し倒されて？」

「ううん。……あのさ、人の恋愛沙汰に首をつっこまないでくれる？」

「今、知念はんへの対処をどうするか、上司の介式はんが悩んでるんですよ。うちは同意の上なら放置がベストやと思うし。セクハラとか強姦なら、それなりに対処せな、と」

「……放置でお願い」

「同意あったんですね？」

「うん……どっちかというと、……私から誘った……。知念くんは悪くないし、処分とかやめてあげて」

「わかりました。そうします」

鮎美は電話を終え、介式に言う。

「すべて二人のプライベートなこと、うちらは関知してないということにしましょ」

「……。だが……勤務中で……」

「見張りを放り出したわけじゃないですよ」

「……………」

「介式はん、恋愛しはったことあります？」

「ない」

「……………鷹姫と似てるなあ……………男とか、女とかに興味ありません？」

抱かれないとか、抱きつきたいって」

「そのような劣情を催したことはない」

「……………そうですか。ほな、余計に関わらん方がええですよ。放置しておきましょ、むしろ、ハッピーエンドに向かつてる感じなんで。……………」

一応、訊きますけど、知念はんのこと男として好きですか？」

「いや」

「ほな、この話は終了ということまで」

鮎美と介式は女子トイレを出て、男性SPたちと詩織の病室へ向かう。病室には鮎美と介式が入った。詩織はベッドに寝ていて、シーツから少しだけ顔を出して、ぼんやりとした表情をつくっている。刑事が質問しても、あまり答えず、世田谷のマンションに帰宅した直後から、何も覚えていない、気がついたら病室にいた、という回答はしつつも、犯行におよんだ二人はヤクザに雇われていて、鮎美を暗殺しようとした理由は連合インフレ税で国際的にも高額紙幣でありカード取引が少なくマネーロンダリングしやすい日本の一万円札の値打ちが落ちるのをさけたいからだと言っていた、と証言している。

「…鮎美…」

詩織が手を伸ばして求めてくるので鮎美もベッドにあがって抱きしめ、背中を撫でた。それで詩織が泣き声をあげる。

「ううっ…ううっ…」

「刑事さん、そろそろ終わってあげてください」

「……………しかし…」

結局のところ廃工場で起こったことは具体的なことは何一つ語られず、警察として判明しているのは詩織以外の全員が銃で射殺された後に火災で死体が燃え、BMWのガソリン爆発で死亡時の状況もわかりにくく、あとは詩織の膣内から検出された精液のDNAが犯人の一人と一致しているというだけだった。

「せめて、なぜ、犯人が二人とも死亡したのか、その状況だけでも…」

「うううっ！ うわああああ！」

「もう思い出させんといてあげてくださいよ！ どんなつらいことがあったか！ きつと必死に反撃して逃げたんですよ！ そんなん、わかりますやん！」

鮎美も涙を流しながら抗議するので刑事たちは引き下がった。順当に想像すれば、松田川の両親を拉致して暗殺させようとしたものの、不完全に終わり鮎美が入院しているので次は秘書の中では唯一の一人暮らした詩織を狙い、まず愛知県にいた両親を掠い、それから世田谷のマンションに侵入したのだとわかる。けれど、そこからなぜ静岡県に犯人たちのアジトに行つたのか、そして犯人たちが射殺されたのかは不可解といえは不可解だった。朝槍の遺体は膣内に銃口を挿入されて発砲された残虐なもので焼けても痕跡は残っていた。先に拉致されていた母親二人からは強姦などの痕跡は見つかっていない。それは年齢的な好みだと理解できる。問題は殺された順番や状況だった。いつ詩織は銃で脅され強姦されたのか、朝槍は抵抗して殺されたのか、なのに犯人二人が射殺されたのは、なぜか、あえて松田川の両親まで生かしていた犯人が急に人質を殺し、さらに朝槍も撃ち、そして詩織は強姦された後、隙を見て銃を奪い、無我夢中で犯人たちを撃つたのかもしれない。その生死を確認せず、流れ弾で起こった火災から逃げ、民家に辿り着いたのかもしれないし、そう理解するしかない。目の前で両親と友人を殺され、自分自身も強姦された女性が当時の状況を思い出せずに号泣するだけ、というのも理解できなくもない。そのわりに犯人の背景がヤクザであることを語り再発防止や、暗殺の理由を知った世論がますます連合インフレ税の実現に傾きそうな証言だけはしてくる。

「…わかりました。今日のところは、これで…」

諦めた刑事たちが去ると、シートから顔を出した詩織は鮎美にキスしてから頼む。

「二人きりになりたいです」

「詩織はん……。介式はん、しばらく外に出ててもらえませんか？病室内は安全ですし」

「だが…」

「お願いします」

「……わかった」

介式が出ていくと、もう一度、キスした後、詩織は涙に濡れた目で、まっすぐに鮎美を見つめて言う。

「私と結婚してください」

「……うん…」

もう断るという選択肢は鮎美に無かった。どこか底知れず避けようとしていた詩織という人間からの求婚を、もう断ることができない。直接にはなくても、詩織の両親が殺されたのは鮎美の存在が原因だと思っているし、鷹姫や鐘留は同性愛の指向そのものが無い。たいてい詩織からは強い欲望は感じる。自分を欲しいと想ってくれていることは感じられる。両親を亡くした代償に、どれだけなるかはわからないけれど、そして法整備はされていないけれど、鮎美は求婚を承諾した。

「やった！嬉しいですよ！」

欲しかった新しいオモチャを手に入れた子供のような笑顔で詩織が瞳を輝かせた。ときめくはずのプロポーズ受諾場面で、鮎美は寒気を覚えた。まるで実弾の入った銃口を向けられているような寒気だった。

「私、シャワーを浴びてきます」

そう言っつて詩織は病室のバストイレで入浴してきたし、次に鮎美へ入浴を勧める。

「鮎美も身体を洗ってきてください」

「……うん…」

それが性行為の前準備だと理解している。どちらかというとな鮎美は相手の匂いを感じたい方だったけれど、詩織や鐘留は清潔な方が好きで、詩織はコンビニの袋からカミソリを出して渡してくる。

「ちゃんとキレイにしてくださいね」

「…うん…」

「ここも剃ってください」

「……………も？ ……」

鮎美は股間を撫でられて迷った。

「可愛い鮎美が見たいです」

「……………わかったよ…」

鮎美はバストイレに入り、裸になると鏡を見た。両腕をあげてみる。

「……………そろそろ春やし……………」

未練はあったけれど腋の毛を剃ることにした。

「こっちは、せっかく生えてきたのに…」

下腹部の手術を受けてから1ヶ月半ばかり、ようやく1センチを超えてくれた股間の毛も求められたので剃ることにした。詩織は自分が入浴した後、お湯を流して新しく貯めてくれている。そういう細かい気遣いは嬉しいけれど、要求もはつきりしていて、鮎美は詩織との関係をどうしていくべきか悩みつつも、肌を整えた。再び鏡の前に立つ。

「……………けっこう印象、変わるもんやね……………子供みたいやわ……………恥ずかし…」

さきほどまでであった腋毛と陰毛が無くなると、同じ自分なのに幼く見えるし、妙な羞恥心を覚える。

「…男っぽくしてたつもりもないけど、腋に毛が無いと、女の子って感じするわあ…」

自分の身体ながら印象の違いに戸惑いつつ、裸のまま病室に戻る。恥ずかしくて乳首と股間は両手で隠していた。

「お待たせです」

「フフ、可愛い」

ソファに座って待っていた詩織が裸で抱きついてくる。ベッドに導かれ、舌を使われると、すぐに何度も絶頂した。鮎美も興奮すると羞恥心が無くなり、お互いの全身を舐め合ったし、しばらくは時間の

経過も忘れた。時刻を意識したのは夕方になって空腹を覚えたときだった。朝から一食も摂っていなかったのに、性的な興奮と絶頂のおかげで、ずっと食事さえ忘れていた。冷蔵庫に入れていたパスタとサラダ、デザートを食べると、また性行為に耽った。いつ眠ったのか、記憶にないほど蕩けた夜を過ごした。

翌3月2日水曜早朝、まだ眠っていたかっただのに、詩織の舌が口に入ってきて、指が膣と肛門に入ってきて、強引に起こされ、鮎美は呻いた。

「うぐ……寝させて……」

「ダメです。もう出発しないと国会に間に合いません」

「……今日も休みたいわ……あかんやろか？」

どうせ出席しても座っているだけなので、いつそ今日も抱き合つて過ごしたいという自堕落なことを考えると、詩織は否定してくる。

「期待を裏切らないでください。鮎美は、私の鮎美、日本の鮎美、世界の鮎美、そして私の鮎美です」

「……。まあ、国会、サボるのは、ありえんよね……昨日は別として……行けるなら行くべきやね」

眠気を訴える身体に鞭打つて鮎美は制服を着たし、詩織は借り物の衣服を着て病室を出るとSPたちに声をかけ、静岡駅に向かい、新幹線に乗った。乗ってからスマートフォンをチェックすると何度も静岡江らから連絡が入っていたのに、詩織が勝手に電源を切っていたせいで無視している形になっている。鮎美の安否だけはSPを通じて確認されていたので大きく心配されてはいないものの、勝手に過ぎる。

「うちのスマホオ、勝手に触らんといてよ」

「ごめんなさい。でも、エッチの最中に電話が入ると冷めるじゃないですか」

「……それは、そやけど……」

鮎美はメールで静岡江に、これから国会に出席する、と伝えた。鷹姫たちにも同じような内容で送り安心してもらう。それから駅弁を朝

食にしつつネットのニュースをチェックして状況を確認した。すでに松田川と詩織の両親、都議の朝槍が死体で発見されたことはニュースになっっているけれど、詩織が強姦されたと警察が判断していることはプライバシーの問題で伏せられ、単に無事だということしか世間に広まっていない。静岡から東京は新幹線では寝る間もなく到着したし、鮎美が国会に出席してくる可能性を見込んでいた一部のマスコミは東京駅のホームに張り込んでいた。鮎美はSPを使って取材拒否することもできたけれど、カメラの前で足を止めた。

「芹沢議員！ 体調は?!」

「うちは、まったく健康です。入院していたのは、松田川先生のご両親が人質に取られていたからです」

「ご両親は焼死体で見つかったそうですが?! どう思われますか?!」

「……言葉にならない悔しさ、そして申し訳なさを感じます」

鮎美が答えている隣で詩織が泣き出したように両手で顔をおおっているのです、その背中を撫でつつ、はつきり言っておく。

「松田川先生は両親を人質に取られ、やもなく私に指示された薬を飲ませようとされましたが、寸前に止めてくださり、ことなきをえています。……ご自分の両親……」

泣くつもりは無かったのに涙が零れた。嗚咽は努力して飲み込み、言葉を続ける。

「ご自分の両親を犠牲にしてまで、患者であった私を救ってくれはった先生には感謝してもしきれませんし。卑劣かつ非道な手口をもちいた犯人たちには強い憤りを覚えます。うちが直接、殺してやりたいくらいです！ 秘書の牧田の両親まで殺され、朝槍先生まで犠牲になった……くっ……」

また嗚咽を噛んで、涙を手で払った。

「犯人も死亡したとの情報がありますが?!」

「実行犯は日本国籍ほしさに操られていた南米の人のようです。黒幕は日本の反社会的勢力で、うちが言い出した連合インフレ税が都合悪いらしく、うちを消したいようです。今まで、さんざん脱税してきた

人らが、これからも脱税したいがために、人を殺してまで金銭に執着する。言語道断悪逆非道にすぎる！　　うちは負けん!!　　絶対に引かん！　　たくさんの人に迷惑かけて、こんなにも申し訳ないことはないですけど！　　けど、ここで負けたら、もっと申し訳ない！　　この命ある限り！　　前に進みます!!」

涙は流したままだったけれど語調は強く、集まっていたマスコミは、いい映像が撮れたので、寒い中でも早朝から東京駅に張り込んだ自分たちの勘と、コメントしてくれた鮎美に感謝している。鮎美が国会に出席してみると、国会も荒れ模様で前日に衆議院を通過した予算の受理日を参議院では本日とするとして紛糾していて、慣例によれば予算の衆議院通過と参議院受理は同一日とするものらしかったけれど、その一日のズレが、どれほど問題なのかはクジ引きで選ばれている参議院議員たちには、あまり理解できなかった。ただ、野党が与党を叩きたいという空気感は伝わってきて、それぞれに所属政党がある議員たちは党の方針に従って野次を飛ばしていた。お昼休みになり、詩織が10分だけ時間が欲しいと言っていたので議員食堂前の廊下で会うと、田崎真珠の営業マンを連れていて、指輪のサイズを測られた。

「結婚指輪を造りますね」

「……。うん……けど、詩織はんのお父さん、お母さんが亡くなつてはるし……喪中とか……お葬式とかは大丈夫なん?」

「遺体は司法解剖に時間がかかるようですよ、しばらくは警察で保管されそうです。お葬式は兄たちが考えます」

「そう……うちも行くようにするし、連絡してもらってな」

「国会を優先してください」

「……」

「それより私はプラチナリングがいいのですけど、鮎美の好みは？」

金?　銀?」

「……任せるよ。金はやめよ。連合インフレ税のこともあるし」

「ではプラチナにしますね」

「うん。でも、地味なんにしよな」

「はい。日常的につけるので引つかからないよう石の無いものがよいと思います」

「そやね……」

「あと、姓はどうしますか？ 私は結婚するなら、同じ姓を使いたいです」

「それは……そういう気持ちは理解できるけど、そんな法整備してないやん？ そもそも、うちの間の約束っただけで、どこにも届出を出せるわけやないし」

「現状でも男女間の夫婦で夫婦別姓を行っている人たちもいるじゃないですか、あれの逆をやりたいです」

「逆……？」

「私はこれから芹沢詩織と名乗りたいです。戸籍では牧田のままでも日常的には芹沢姓を使いたいです」

「……………そういう考え方も……あるんや……」

「いいですか？」

「……………うん、どうぞ」

「嬉しいです。では、リングにも芹沢鮎美、芹沢詩織と彫ってもらいます」

注文が決まり田崎真珠の営業マンは今日中に仕上げしてほしいと言われているので走っていく。ずつと、そばで黙って聴いていた鷹姫が問う。

「芹沢先生は牧田さんと結婚されるのですか？」

「……………うん……………そうよ」

「はい、昨日、結婚しています。これからは芹沢詩織です、よろしく、宮本さん」

「……………おめでとうございます。…と、言うべき場面ですか？」

「おおきに……………同性婚は、まだ法整備も、……………それを進めてはった朝槍先生も……………うっ……………うっ……………」

また涙が溢れてきた。今度は嗚咽を耐えられず議員食堂前なのに泣き出してしまった。朝槍を喪ったことも同性婚の法整備の話で実感してしまうし、そして胸の痛みに失恋も混ざっている。もう、ずつ

と前から鷹姫のことは諦めると決めていたのに、それが現実になった実感があつて悲しかった。

「……うっ……」

食堂前で泣いている鮎美を他の議員たちは気の毒そうに見てくれる。仲間だった都議や秘書の両親が殺された話は有名すぎるほど有名で、誰も甘つたれて泣いているとは批難しない。鮎美は食欲が無くなって昼食はミルクティーだけにした。紛糾した国会が終わり、遅い時間に議員宿舎に帰ると、まだ食欲が無いので一人で入浴だけしてベッドに寝転がった。

「……ぐすつ……こういうの……マリッジブルーっていうのかな……」

頭と気持ちの整理がつかない。何をすべきで、どうすればいいのか、わからない。とりあえず、明日も国会に出席しよう、とだけ考え眠ろうとすると詩織からメールが入った。連合インフレ税がらみでの海外との連絡は再開しており順調ということと、そのために遅くなるけれど仕上がったリングを持って午前5時に議員宿舎を訪ねるのを抱き合いたいことが打つてあった。

「……詩織はん……もう仕事して……あんたは超人なん……、しかも朝から……やる気で……どんだけ体力あんの……」

わかったよ、とりあえず寝るわ、とだけ送った。

翌3月3日木曜朝、また陽湖は悪夢を見ていた。夢の中で陽湖は風邪を引いた鮎美の代理で演説することになり選挙カーの上でマイクを握って話していたけれど、オシッコしたくなり必死に我慢していた。そばにいる静江や鐘留に目くばせしても気づいてくれず、どうにも我慢できなくなつて聴衆たちの前で漏らしてしまう夢になり、さらに夢らしい脈絡の無さで場所が学園の体育館に変わる。マイクは握ったまま、生徒の代表として全校集会で壇上に立っているのに、おもらししている状況になっていて三年生だけでなく二年生、一年生にまで笑われるという展開になったかと思えば、全校生徒の顔が鐘留の顔になり笑ってくる。もう、こんな世界はイヤだと叫ぶと、体育館に

津波が流れ込んできた。波に飲まれるとお尻が温泉に入っているように温かくなり、また今夜もオムツの中にオネシヨしているのだと気づいたところで目が覚めた。

「っ……やっぱり夢……はあ……いつも津波で終わり……」

予想通りオネシヨしていたし、住ませてもらっている芹沢家の布団を汚していると申し訳ないので心配になって敷き布団を触ったけれど、オムツの中だけで済んでいる。まだオムツは温かいので濡らしたばかりのようだった。

「これで5日目……あと二日で一週間……」

課せられた一週間のオムツ生活は後半に入っている。三日目まではオムツを濡らす度に鐘留がからかってくることもあって涙で目元も濡らしていたけれど、四日目になると、さすがに慣れたしオムツに漏らしても周囲の人に気づかれるわけではないので泣かなくなった。

「でもシスター鮎美ほど、開き直る気には……期間が長くなるとそうなるのかなあ……生理でのナプキンとは、ぜんぜん違うと思うけど……」

誰もいない自室なのでパジャマとオムツを脱いで、股間をよく拭いてから、新しいオムツを穿いて制服を着る。濡らしたオムツは丸めてビニール袋に入れ、しっかりと縛ってからゴミ箱に入れた。今朝はゴミの日なので家にあるゴミ箱を回収して、まとめる。いつもより重いのが自分の使用済みオムツのせいだとわかっていても考えないようにして島のゴミ捨て場に出した。見つからないかと不安になるけれど、よく見ると他の家から出ているゴミにもオムツがあつて要介護老人などがいるのだと、初めて実感した。

「はあ……」

それでもタメ息をつきつつ芹沢家に戻り、朝食の用意をする。つわりが少し改善した美恋は申し訳なさそうに少し手伝ってくれた。

「シスター陽湖がいてくれて、本当に助かるわ。ありがとう」

「いえ、お母さんたちと生活できて楽しいです。もうすぐ卒業だけど、そのあとも赤ちゃんが生まれてくるまで、いっしょにいたいくらい」

「あなたさえよければ、いつまでいてくれてもいいのよ」

「お母さん……」

同居が長くなったせいか、実の母親より美恋に親しみを覚える。美恋の方も実の娘が帰ってこないこともあつて陽湖の存在が心理面でも家事面でも大切になっていた。起きてきた玄次郎と三人で朝食を摂ると、連絡船で本土に渡り、玄次郎に支部まで送ってもらった。ほぼ同時に鐘留も出勤してくる。鐘留も運転免許を取ったので親に買ってもらったフェアレディーズで来ている。

「シスター鐘留、ちゃんと初心者マークを貼ってください」

「貼つてあるよ。ここに」

鐘留は初心者マークを、かなり見えにくいところに貼っていた。そして、ニヤリと笑つていつてくる。

「月ちゃん、ちゃんとオムツを今日も着けてきた？」

「……」

無視して支部に入る。支部の前にも県警の制服警官が2名いて鮎美が不在のときでも警備する体制になっていた。陽湖は集団訴訟の事務仕事を、鐘留は連合インフレ税についての詩織の補助を始め、一時間して鐘留は持参した菓子箱を開き、全員分の紅茶を淹れた。可愛らしく全員に配つて歩き、最後に陽湖にも提供する。

「どうぞ、粗茶ですが♪」

「…ありがとう、シスター鐘留」

「おかわりも淹れるよ？」

「……一杯で十分です」

「クスクス」

楽しそうに鐘留も休憩して、お菓子を食べ、紅茶を飲むと、トイレに行つてから仕事を再開した。お昼休み前になつて陽湖はセクハラ被害者の訴えを弁護士に指示された要点に振り分けてまとめながら、限界が来てオムツを濡らした。

「…っ…はあ…」

「あ、漏らしてる？」

「……………」

鐘留の問いを無視して顔を伏せる。どんどん生温かく股間が濡れ、ずつと我慢していたオシッコを解放する快感と仕事場で排泄している羞恥心が混ざり、陽湖のメイクしていない頬が赤くなった。

「きやははっはー！」

「……………トイレで替えてきます」

「ダメダメ、アユミンは選挙活動中だったから、すぐ交換もできない環境に耐えてたんだよ。月ちゃんもお昼休みまで我慢しなよ」

「……………」

腰を上げていた陽湖は黙って椅子へ腰をおろした。濡れたオムツの感触がお尻いっぱいに広がる。またセクハラ被害者の訴えをまとめ始めた。

「月ちゃん、アソコ濡らしたまま、お仕事するの、どんな気分？」

「それももうセクハラ発言です」

「ごめん、ごめん」

口先では謝ってくれるけれど、まったく反省していない。お尻が冷たくなる頃、やっと昼休みになった。トイレに入ってオムツを交換し、お弁当を食べる。

「どうぞ、粗茶ですが♪」

また鐘留がお茶を淹れてくれた。

「……………」

口先では感謝したけれど、まったく感謝していない。鐘留は奥の執務室にいる石永へも秘書補佐として、お茶を淹れに行った。

「石永先生、お茶どうぞ」

「ああ、ありがとう」

石永は妻に作ってもらった弁当を開いている。期待された二世議員の妻らしく栄養のバランスが取れた内容だった。鐘留は微笑みながら言う。

「お茶に毒は入ってませんから、ご安心を」

「君は冗談にならない冗談が好きだなあ。ま、落選議員のオレを殺しても仕方ないだろう」

石永はお茶を啜り、弁当を食べる。鐘留が執務室を出て行ったので食べながらパソコンを操作して詩織のデータを出した。詩織の履歴書やマンションで襲われたときの情報などだった。

「……………彼女、ドイツ警察に勤めていた経歴もあるのだから……………やすやすと犯人に強姦されるものだろうか……………だが、両親が人質では、どうにも……………ならないか……………。けど、マンション床にあった血痕は犯人のもので、硝煙反応もあったということは、マンションで撃たれたのは犯人のうちの一人のはず……………そこから朝槍先生もつれて静岡へ……………そして、彼女以外は全員死亡……………実に不可解だ」

石永は弁当を食べ終えた。

「ま、オレは刑事でも探偵でもなく二世議員だからな、オレはオレの仕事をしよう」

お茶のおかわりが欲しいので女性を呼びつけるのではなく、自分で茶碗をもって事務室に行った。鐘留たちがテレビを見ながら寛いでいる。

「お、また芹沢先生が映ってるな」

鮎美のことが報道されない日はないくらいだったし、今も映っている。

「芹沢議員、そのリングが結婚の証しということですか？」

「はい、そうです」

鮎美が答え、そばにいる詩織も頷いている。

「ですが、同性愛者の結婚は法的に認められていません、そのところは、どうお考えですか？」

「二人の気持ちの問題やと、思ってます。憲法にも婚姻のもつとも大切な要件は合意であり、合意のみに基づいて成立する、とあります。気持ちが一番大切やということ。また、いずれ同性婚が法整備されたとき、それぞれの結婚記念日は遡って認められるようにしたいと考えます。法的な遡及適応は刑事的な処罰については憲法39条で厳に戒められています、婚姻のようなことなら遡及も認めていくべきと考えますから」

「そのリングに彫られている2011.03.01というのは、お二

人の結婚記念日ですか？」

「はい、そうです」

「結婚されたという風に解釈すると、これからは他の同性と性的な関係をもつことは不倫となるとお考えですか？」

「…それは……そう……なる、と思います……」

やや歯切れの悪い答えに、詩織が追加して言う。

「不倫したら殺します」

「……。だそうですから、やめときますわ」

「お二人には、すでに性的な関係があるのですか？」

「……その質問は、ちょっと……」

答えようか迷っている鮎美へテレビカメラの前で詩織がキスをした。はじめ抵抗しようとした鮎美も途中で諦め、ディープキスになる。

「…ハア……カメラの前で、アホなことさせんといてよ……」

「百聞は一見にしかずですよ。他に、まだ、ご質問はありますか？」

「牧田さんは、ご両親を亡くされていますよね？」

「芹沢詩織です」

「失礼しました。芹沢詩織さんは、ご両親を亡くされていますが、このタイミングでの結婚というのは、どうですか？」

「……………」

詩織が黙って顔を伏せ、両手で顔をおおった。鮎美が肩を抱いてレポーターを睨む。

「このタイミングやからこそです。不謹慎やとは思いますが、新しい命を育める関係でもないですけど、慰め合っていきたいと想ってます」

インタビュ어의放送が終わり、石永と静江は頭を抱え、鐘留と陽湖は驚いた。

「あいつら……」

「あの子はまた相談も無しに……」

「アユミン、電撃結婚だ！」

「シスター鮎美……法も……神も……認めていないのに……」

支部内も騒然となり、すぐに各所から問い合わせの電話も入ってくる。それらへの対応が終わった頃、そつと陽湖はトイレに向かったけれど、鐘留が追ってきた。

「どこ行くのかな？ 月ちゃん」

「トイレです」

「ダメだよ。ちゃんと、おもらししなよ」

「……大は行かせてもらえるはずですよ」

さすがに大きい方は鮎美からの情けで許可が出ていた。

「おしっこはしちやダメだよ。終わったら、そろそろ3時だし、お茶にするね」

「……」

黙って陽湖は個室に入り、オムツをおろし、スカートをあげて便座に座った。息みつつ律儀に小便は我慢したけれど、我慢しきれるものでもなく両方が出た。

「はああ……」

すつきりとして陽湖は事務室に戻る。

「おしっこしたの？」

「……」

嘘はつきたくないので答えずに着席すると、鐘留が大きめのカップで紅茶を淹れてくれた。

「粗茶ですが、どうぞ♪」

「……」

お礼を言う気になれない。美味しそうな高価なお菓子さえ憎らしく見えた。それでも食べると、やはり名店の菓子なので憎らしいほど美味しい。諦めて紅茶も飲むけれど、また鐘留が見ているうちに漏らすのはイヤなので午後5時まで我慢した。

「月ちゃん、残業しないの？」

「しません。お父さんが迎えに来てくださいますし、お先に失礼します」

鐘留が割り当てられている連合インフレ税の仕事は対応が速ければ速いほどよいけれど、陽湖が取り組んでいる集団訴訟は、まだ初回

の日時も決まっていなくて余裕がある。裁判が始まって月にも一回程度のペースだと聞いていた。陽湖は立った拍子に漏らしそうになったので身震いして我慢する。

「きやはははは！ 漏らした？」

「漏らしてませんから」

「夜は、どうなの？ やっぱり毎晩オネシヨしてるの？」

「……………」

「きやはっ♪ してるんだ。オネシヨ、恥ずかしい！ ねえ、ねえ、どんな夢見て、オネシヨするの？ 殺される夢？ 捨てられる夢？」

「……………」

津波の夢だと答えると、またろくでもないからかいを受けそうなので黙って支部を出た。すぐに玄次郎が車で拾ってくれる。

「夕飯の材料、サテイで買うか？」

「お父さん、もうサテイとジャスコは統一されてイオンになりましたよ」

「そうらしいな。で、どうする？」

問いながら信号が青になったので玄次郎が車を前進させると、その加速が下腹部にこたえて陽湖は漏らしそうになる。

「っ……はあ……」

少し漏らしてしまった。万一にもオムツから漏れ出て玄次郎の車を汚すと申し訳ないのでギョツと両脚を閉じて、すべて出してしまうのは我慢した。

「…はあ…」

「疲れてるなら、弁当にでもしよう。それか、二人で外食して美恋にはテイクアウトして帰るか」

「いえ、作ります。大丈夫です。料理は事務仕事ばかりより気分転換になりますし」

「そうか……ありがとう。無理はしないでくれよ。少し顔が赤い、大丈夫？ 今週、ちょっと様子がおかしいぞ？」

「大丈夫です、気にしないでください」

少し漏らした直後なので、やや膀胱が楽になり陽湖は微笑みをつ

くつた。二人でスーパーに入り、食料品を選ぶ。冷蔵庫が並ぶ食品コーナーで買い物をしていると脚が冷えて、また陽湖は漏らしそうになる。

「っ……はぁ……」

他人が食品を買っているところで排泄するのは気が引けて、オムツの中とはいえ漏らさないように我慢するけれど、また少し漏らした。

「……小出しにすれば……家まで我慢できるかも……」

スーパーや車内で、すべてを漏らすのはさげたい。内股にならないよう姿勢に気をつけながら、玄次郎と買い物が続いていると、よりによって屋城に出会った。キリスト教の指導者として、きっちりとしたスーツを着ているので持っている買い物カゴとの組み合わせには違和感があるけれど、それも好ましく感じてしまう。

「シスター陽湖、お買い物ですか？」

「っ、は、はい。ブラザー愛也も？」

「ええ、母が風邪を引いたので」

「それなら、お手伝いに……」

行きたいと想う気持ちと、オムツを着けて屋城の家に行くのは避けたいと思う気持ちが拮抗した。屋城は断ってくる。

「いえ、たまには母がしてくれていることをなすのも勉強ですから」

「……そうですね……」

残念さと安堵が入り交じったとき、気が抜けて急に膀胱が収縮してきた。

「っ……んっハア！」

何度も我慢を強いられた括約筋がいうことをきいてくれず、おもらししてしまう。

「……はっあぁあ……」

「シスター陽湖？」

「月谷さん？」

屋城と玄次郎が不思議そうに見てくる中、陽湖はオムツいっぱいに漏らしてしまい、震えた。

「ハアっ…ハアっ…ぐすっ…」

泣きそうになった陽湖を心配した屋城が見つめてくる。オムツからの音は店内の音楽や雑踏に紛れて聴かれていなかった。

「どうしたのです？ 大丈夫ですか？」

「やはり疲れているのか、それとも風邪でも引いたか？」

「っ…は、はい！ 風邪を！」

オムツを着けて、おもらししていましたとは、とても言えない陽湖は玄次郎の言葉にのったけれど、直後に後悔する。

「い、いえ！ 違います！」

嘘をつくのは戒めるべきことで、とくに屋城に対して嘘があるのは一生後悔する。陽湖は両膝を床につくと屋城に向かって祈りの形に手を組んだ。

「告白します。私は嘘を申しました。風邪ではありません。ただ、どうしてもブラザー愛也に隠しておきたいことがあって、嘘を申しました」

「そうですか…お立ちなさい」

屋城は右手で涙に濡れた陽湖の頬を叩くような動作で撫で、さらに反対の頬も撫でた。見ていた玄次郎には、それが何か宗教的意味のある動作に思えたし、他の買い物客たちも同じだった。陽湖と屋城の周りだけ、神聖な空間が生まれたように人の流れが避けている。陽湖が立った。

「はい、ここに罪を悔い、反省いたします」

「よろしい。シスター陽湖、あなたの気持ちには以前から気づいていました」

「…え？」

「まなざしを受ける度、私を慕ってくれていることは伝わっています」

普段からの視線と、今さきほどの赤面して涙ぐみ、息を乱した様子で屋城は自惚れでなく確信していた。

「…ブラザー愛也…」

「あなたのような心美しい人に想われ、私もあしからず感じ入ってい

ます」

「っ……」

陽湖が驚きと嬉しさの混ざった表情になりかけたけれど、屋城は厳しい表情で言う。

「けれど、私は学園の指導者、教師でないにしても、教師と類似した立場であり、あなたは生徒です」

「……………はい……」

「卒業まで、隠し続けてください。では、失礼します」

そう言つて買い物カゴを持った屋城は立ち去つた。陽湖はよろめき、玄次郎が押していた買い物カートに手をつく。

「…お父さん……今………あれは………どうということだと思いますか？

私は……フラれてない、ですよね？」

すぐるように問われ、玄次郎は頷いて微笑む。

「ああ、彼が大人で、立場を忘れていないというだけだよ。あまり女子高生であるうちに言ってしまうのはよくないけれど、けっこう裏で教師と生徒が付き合っていることは少なくない。で、卒業後、すぐ結婚という流れ。まあ、何しろ教師は公立校なら公務員だし、私立校でも不祥事がない限りクビになりにくい、それなりにモテる職業だが、在校中に交際がバレると、実に体裁が悪い。卒業式まで、あと9日、四月まで1ヶ月、鮎美に頼んで四月になったら休みを多くもらつてデートを楽しめばいい」

「……………ああ………神よ………ありがとうございます………」

陽湖はイオンの売り場で神に祈りを捧げた。それからトイレに入つて濡らしたオムツを替える。

「………なんだか、すっごい恥ずかしかったけど………おもらしして………よかつたかも………」

トイレ内のオムツ専用のゴミ箱に捨てつつ、怪我の功名という言葉を思い出していた。

「最初はイヤだったけど………ずっと我慢してた状態から解放されるとき………とても気持ちいいし………これ癖になるかも………でも、おもらしは淫らなことじゃないはず………聖書にも禁止されてないから

……」

かつて僧侶が女人との交わりを禁止され教義に規定が無い美少年との男色に走ったように、普段から自慰もしない陽湖は新しい趣味に目覚めつつあり、聖書的に問題がないと解釈していた。

3月4日 行旅死亡人

翌3月4日金曜午前5時、伴侶として議員宿舎のカードキーを持っている詩織は時差のある海外との調整業務を終えて、鮎美の部屋に入った。鮎美は裸で眠っていて一糸まとわぬ姿でありつつ結婚指輪だけはしてくれている。

「今、世界が一番注目している存在がこの手の中に。フフ」

鮎美の無防備な寝顔と、警戒嚴重でSPも多数ついているのに、やすやすと自分は近づける状況に背筋が沸き立つような快感を覚えた。今すぐ鮎美を殺しても大きな歴史的事件になるけれど、まだもつたいない。まだまだ成長してくれると想っているし、大臣にもなつてくれるはずで、どこが頂点か見極めてから盛大に殺すつもりだった。

「死は人の価値を最高の状態で高めるのです。ナユも都議として絶頂期に殺されて、きつと同姓婚の母と呼ばれます。鮎美は織田信長を超えてください」

高校からドイツにいたので、あまり日本の歴史を知らないけれど、さすがに信長くらいは知っていた。一人言を漏らしていたのと、午前5時には訪ねると予告していたので、鮎美が目を覚ました。微笑んで両手を伸ばして求めてくれる。

「おはよう、鮎美」

「お疲れ様です、詩織はん。進捗は、どう？」

「そんな話、あとでいいじゃないですか」

「うん、ごめん」

キスから性行為を始めて、服を着ている詩織を鮎美が脱がせる。

「鮎美のぐよ要望通り昨日からシャワーを浴びていません。こんな可愛
い顔して匂いフェチなんて意外です」

「詩織はんの匂い、好きよ」

脱がせた詩織の腋を嗅いだ。汗の匂いがして鮎美は起き抜けの脳が興奮するのを自覚する。詩織は四分の一がドイツ人だからなのか、体臭も顔立ち同様に少し違う。美味しそうなチーズフォンデュのよ

うな匂いと、使っているシャネルの香水の香りがして、鮎美は舌で詩織の腋を舐めた。詩織も鐘留と同じようにレーザー脱毛して毛穴一つ目立たない。その美しい腋を舐め続けていると、くすぐったがられた。裸にされた詩織が問う。

「シャワー浴びてきていいですか？」

「もう少し楽しませてよ」

「自分の匂い、イヤなんですよ」

「あと、ちよつとだけ。反対の腋も」

鮎美は抱きついて舐め続ける。

「本当に人の性癖って見た目ではわからないものですね」

「ハア…詩織はん…男と付き合ったこと、何回くらいあるの？」

「過去は過去です」

「…。また、未来にも男に興味もつもん？」

「そんな可愛くて不安そうな顔してくれるうちは鮎美だけですよ」

お返しに詩織も鮎美の乳首を吸ってから腋を舐める。詩織が要望した通り鮎美は昨夜も毛を剃ってくれていて可愛らしい。陰部が無毛なものも18歳という年齢以上に幼く見えて14歳くらいに感じた。その陰部に舌を這わせて一度、鮎美に絶頂してもらい、詩織はシャワーを浴びる。シャワーの途中で鮎美が入ってきてバスルームでも抱き合った。揚がってから髪を乾かす時間も惜しくて暖房の設定温度をあげてからベッドに二人で倒れ込む。舐め合って眼球以外の全身に舌を這わせ合い、絡まり合って2時間以上を過ごしていると、鷹姫が入室してきた気配がする。二人が、そのまましていると、鷹姫が現れる。

「おはようございます。芹沢先生、芹沢さん」

「…うん、おはようさん」

「おはよう、宮本さん」

「そろそろ、お時間です。制服を着てください」

二人の性行為現場を見ても鷹姫は昨日も見かけたことなので平静に言った。気持ち悪いという顔もされないけれど、微笑ましいとも想われていない感じて、ただ単に女子更衣室で裸の二人を見たときと同

じような反応の薄さだった。鮎美は時刻を見る。

「……もう、そんな時間なんや……」

「頑張つて来てください。私はお昼前まで、ここで休ませてもらいます」

「うん、ゆつくりしてな。週末やし、うちと鷹姫は夕方から地元に戻るけど、詩織はんも、いつしよに来る？　うちの両親に……挨拶とかする？　……結婚したし」

「そういう風習も……同性婚だと、ご両親も、そういう顔で会うべきか迷われると思います。もうしばらく時間をおいてからの方がよいのではないですか。お義母さんも妊娠されているそうですから。あと、私はお昼から夏子とハワイに行きます」

「えっ?!　なんで?!」

驚く鮎美へ意地悪く詩織は微笑んだ。

「さあ、なぜ、でしょう?」

「なんで加賀田知事となんよ?!　どういうこと?!」

「芹沢先生、そろそろお時間です」

「詩織はん!　どういうことよ!」

「フフ、そんなに慌てなくても不倫じゃないですよ。夏子はノーマルです。単に土日ハワイでドミニク氏を中心として連合インフレ税についてフォーラムを行うので、そのコーディネーター役をしているだけです。参加表明した国々の調整と、鮎美が先日のニュージールランド地震のさいに言い出した大規模災害時の為替固定プランについて仮のマニュアルを作る。夏子は一応、日本代表の一人、あと畑母神知事も来てくれます。提唱元の日本からの参加が国政参加者や財務外務の官僚でなく自治体首長というのが残念ですが、畑母神知事は小笠原と尖閣諸島を視察する日程を遅らせて参加してくださいました」

「そうなんや……そんな大事そうな会議……うちも見てみたいわ。うちのレベルでは足りん?」

「私も参加してほしかったのですけれど、月曜になる帰国日程が国会遅刻になることと、石永さんが鮎美に週末は実家で過ごしさせると言わ

れるので諦めました」

「そうやったの……うん、今回の週末は地元日程なしで休暇にしてくれはるから、ホンマ久しぶりに家へ帰れそうやわ」

「次、抱き合えるのは火曜朝になりますね。それまで淋しいです」

そう言つてキスをして指を挿入してくるので鮎美もお返しする。

「芹沢先生、そろそろお時間です」

鷹姫は素早く制服を着られるように下着や荷物を並べてくれている。ギリギリになつて国会へ出席すると、民主党政権には激震が走っていた。前原外務大臣が在日の韓国籍女性から献金を受けていたことが明らかになり、大臣の辞任を迫られていた。その紛糾した国会が終わると、鮎美は地元へ帰る予定だったけれど、鷹姫が極秘という顔で耳打ちしてきて、谷柿がいる部屋に呼ばれた。

「お呼びでしょうか」

「お互い忙しい身ですから単刀直入に言つておきますよ」

いつも穏やかな谷柿からも政権に走る激震を、どう利用するか、様々な手段を講じているという気配がした。

「はい」

「もし、鳩山総理が再び芹沢先生に、何らかの大臣などのポストを提示して勧誘してくることがあれば、即答せず谷柿に相談してから答える」と、言つてください」

「はい」

「以上です」

「……。質問してもよろしいでしょうか？」

「ええ、どうぞ」

「即答を迫られると思うのですが、そのときは、どうすればよいですか？　まして自民党総裁に相談すると言うと……結局、断るのだと鳩山総理も予想すると思うのですが……」

「それも折り込み済みです。芹沢先生は一度目、最少不幸なにかし大臣という思いつき大臣を断っている。もしも鳩山総理が再び声をかけることがあるなら、本当に藁にもすがる思いで言つてくるはずで

す。即答で断らない限り、こちらの条件を飲ませることができるとも
しれない。そういうことです」

「……さすが……わかりました。おっしゃる通りにいたします」

「芹沢先生は慎重な人ですね。それに賢い」

「……いえ……」

「何が、わずか18歳で君をそうしたのでしょう……」

「……」

「同性愛者として、それを隠して生きてきた苦悩かもしれませんね」

「……」

「詮無いことを言いました。忘れてください。以上です」

「はい、失礼します」

鮎美が背中を向けかけたとき、谷柿が呼び止めた。

「あ、あと」

「はい？」

「ご結婚、おめでとうございます」

「っ……ありがとうございます」

鮎美は一礼して退室した。鷹姫が問うてくる。

「谷柿総裁は何と？」

「うん………仮定の話やし、鷹姫にも黙っておくわ」

「わかりました。一件終わった直後で、しかも帰郷前ですが、さらに一

件、芹沢さんから連絡が入っています」

「……？ ああ、詩織はん。誰かと思たわ」

「奥様と言う方がよろしいですか？」

「う、うくん、それやと、うちが旦那みたいやん？」

「では、あちらを旦那様にしますか？」

「………そういうのとも………ちやうような……。夫婦同姓の真似する

と、こういう文化的言語的な障壁があるんや………奥様と奥様も変やし

なあ………今後の課題やね。とりあえず用件は？」

「はい、水田元議員が危篤状態で芹沢先生に会いたいと呼ばれている

そうです。芹沢詩織さんは会う必要はないが一応は伝えるので、ご判

断ください、とのことですよ」

「……あの人が……危篤って、……なんで？」

「多発性潰瘍性大腸炎を発症し、どんどん悪化していたそうです。おそらくは激辛の香辛料を大量に摂取したことで、逮捕前後の精神的ストレスが原因ではないかと」

「まさに……死のソースやん……」

「会われますか？」

「……会うわ」

鮎美と鷹姫はSPたちと都内の警察病院へ移動した。病院内の集中治療室に水田がいた。点滴や呼吸器につながれ、下痢か血便がひどいようにオムツを着けているし、カテーテルで尿も採られている。その尿はパックに貯められているけれど、鮎美が入院していたときのような薄黄色の透明な尿ではなくて、濁った尿で黄白濁していた。最後に見かけたときより痩せ細っていて一瞬、誰だかわからないほど顔貌も変わっていた。

「水田はん……」

「…ハア…ハア…来て…くれたの…ハア…」

もう頭を上げる体力もないように上を向いたまま水田が言った。

「……頑張ってください……まだ、若いんですし……」

今にも死にそうな人を、どう励ましていいか、鮎美は迷いつつ言っただけれど、水田は苦しそうに嗤った。それは自嘲だった。

「…フフ…私は…ハア…もう…ハア…終わりよ…ハア…フフ…」

「そんな…」

「最後に、あなたに…ハア…言っておきたい…ハア…ことが…ハア…あるの…」

息も絶え絶えに水田は語り始めた。それは身の上話から始まり、水田が二十代後半で交通事故によって両親を亡くし、そのとき入った多額の賠償金を選挙資金に日本一心党で活躍するも前回の総選挙で落選したこと、一人っ子で兄弟はおらず、親も一人っ子同士の結婚だったので危篤になっても駆けつけてくる親戚がないこと、日本一心党も盗撮容疑で逮捕されると同時に除名処分になったので、このまま死

ねば遺体の引き取り手もないことを、途切れ途切れに話した。

「ハア……言っておいてあげる……ハア……あなただって……ハア……今はチヤホヤされても……ハア……すぐに、若い子が出て来て……ハア……あつさり捨てられるのよ……ハア……3年後……ハア……6年後……また、どうせ十代のクジ引き議員……ハア……が出るわ……ハア……政治はね……ハア……結局、男の……ハア……世界なの……ハア……女は飾り……ハア……飾りの花は新鮮な……ハア……方が……ハア……いい……ハア……フフ、私みたい……ハア……ならないことね……ハア……」

「……ご忠告ありがとうございます」

「ハア……あなたが……ハア……同性愛者じゃなきゃ……ハア……ちゃんと結婚しておきなさい……ハア……とも言っておきたいけど……ハア……同性愛者じゃ……ハア……余計なお世話よね……ハア……ううん、同性愛者でも……ハア……結婚しておくべきよ……ハア……ちゃんと男と……ハア……せつかく子宮あるんだから……ハア……子供を産みなさい……ハア……淋しいわよ……ハア……一人は……」

「……」

「芹沢先生は先日、ご結婚されました」

「……へえ……ハア……男と？」

「鷹姫、余計なこと言わんでええよ」

「すみません」

「ハア……男と結婚したの？　ハア……」
「女性同士ですけど、パートナーになる約束をしました。弁護士を介して水田はんと折衝していた牧田とです」

「……ああ……ハア……あの……嫌な感じの女……」

「詩織はんは……いい人です。嫌な感じがするんは誤解です」

「フフ……ハア……」

嘲笑した水田は、さらに何か言おうとしたけれど、そこで呼吸が止まった。集中治療室にいた看護師たちがバタバタと動き回り対処したけれど、息を吹き返すことなく亡くなった。看護師が鮎美に問うてくる。

「ご家族の方ですか？」

「いえ」

「ご家族は？」

「話を聴いた限り、おられないようです」

「……。遺体を引き取っていただけますか？」

「うちが……？」

「芹沢先生に、そのような義理はありません」

きつぱりと鷹姫が言った。なおも看護師は押しつけるように言ってきたけれど、もう地元へ帰る時間が無くなるので病院を出た。東京駅から鷹姫と新幹線に乗る。疲れていたけれど、すぐに眠れず話題は遺体のことになった。

「あの人……行旅死亡人と同様の扱いになんのかな？」

「はい、おそらく。身元が判明していても遺体の引き受け手がありませんから」

「最近、増えて問題になってるらしいね」

普通の女子高生は知らない言葉だったけれど、静江から教え込まれたので鮎美も鷹姫も行き倒れの死体を行旅死亡人と言い、遺体を引き取る者がいない場合も同じ扱いになることを知っていた。

「市町村の費用で火葬するらしいやん」

「はい。所持していた財産があれば、それをあてるそうですから、元職員ですし十分にあるでしょう」

「それが、そうでもないらしいわ。詩織はんから示談の途中報告あがってたけど、財産らしいもんは無いつて」

「では、公費での火葬になりますね」

「公費いうても最低限で棺桶代と、読経代くらいらしいやん。その読経代も普通の葬式は30万から80万ぼるのに、行旅死亡人の場合は良心的な僧侶が1万円くらいで引き受けるらしいわ」

「ずいぶんと価格に開きがあるものなのですね」

「ぼったくり商法の典型やん。水商売より、ひどいわ。うちの父さんな、前から不満に思ってた自分の父さん、つまり、うちの爺ちゃんが一年前亡くなったとき、喪主やった兄さんと相談して、寺に電話かけるとき、うちは貧乏で5万円しか払えません、それでも来てくれはりま

すか、と頼んだらしいわ」

「それで読経してもらえたのですか？」

「定価のあるもんちゃうしな、坊主も断るに断れんやん。仕方なしに
来よったよ。戒名も要らんいうたけど、なんか、それなりのがついて
た」

「……鮎美の家は貧しくなかったと思いますか？」

「うん。普通よ。っていうか最近、感じるけど普通よりちよい上やね。
父さん、それなりの建築士やし。けど、ケチるところはケチる人やか
ら。自分と家族が楽しいことにはお金を使っても、どうでもいいこと
には、とことんケチらはるから」

「……どうでもいいことですか？ 葬儀が……」

「葬儀で気持ちの問題やん。坊主に払うお金の大ききさなんて関係ない
し。葬儀自体も、小さなお葬式っていう業者に頼んで安くあげはった
よ。全部で40万とか言ってたかな」

「それでも、相当な金額ですね」

「欧米の平均は30万台らしいよ。日本が高すぎるねん」

「キリスト教の場合、どうなるのでしょうか？ お通夜など」

「陽湖ちゃんから聞いたけど、お通夜そのものが無いねんて。七日七
日もやらんらしいよ。まあ、当たり前やー当たり前やけど宗教が違
うわけやし。けど、日本に入ってきたキリスト教の一部は、さすがに
お通夜無しは淋しいというて前夜式みたいななんがあるようになった
らしいわ」

「キリスト教も日本に入ると変質するのですね」

「日本人の宗教観テキトーやからなあ。とりあえず拜んでおけみたい
な。けど、うちの父さん、お通夜無しのプランにしはったよ。おかげ
で疲れんで済んだし仕事に影響でんで良かったとか言うてた。まあ、
爺ちゃんもサツパリした人やったし、その方が喜んでるかもね」

「……宗教とは何なのでしょう……」

「そやね……鷹姫は神様や仏さん信じる？」

「……いえ、……あまり……」

「うちもよ」

「……」

「人は死んだら、どうなると思う？」

「……………。残された人たちの心の中にいます」

「そやね……………」

「鮎美は、どう思いますか？」

「うちは自分が同性愛者のくせに、DNAが引き継がれるのが生きた証しやと思うわ」

「……………そうですか……」

「けど、水田はんが言うた生産性の話やないけど、同性愛者にも生きた価値は、きつとあるよ。それは個体だけで見ると、種集団全体への貢献ってことで。うちは子育てせん分、しっかり社会に貢献せんかね」

「立派なお考えだと思います」

「寝よか」

「はい」

二人ともSPに守られている安心もあつて目を閉じて井伊駅まで眠った。井伊駅からは党の車両と警察車両で移動し、港に到着する頃には連絡船の最終便は終わっていたけれど、今回はSPたちが宿泊予約を入れている民宿の亭主が漁船を出してくれて島に渡れた。鮎美は夜間自宅前に立つてくれるSP2名と帰宅し、他の男性SPたちは民宿に、介式だけが民宿の部屋数に限りがあることから、鷹姫と剣道場に寝ることにしている。

「お疲れ様です。介式師範」

「君もな」

お互い、鮎美と別れると勤務が終わったという気持ちで肩の力が抜ける。二人だけで夜の島内を歩いていると静かさが身にしてみた。

「また、たった二ヶ月なのに、これほど議員の仕事、そして秘書の仕事が多忙かつ激動だとは思いませんでした」

「疲れたか？」

「弱音を吐くつもりはありませんが、予想以上だったことは確かです」

「だろうな……最年少というだけでも注目されるのに、芹沢議員は新しいことを始める上、まわりからの妨害や暗殺まであるのでは疲れない方がおかしい。この二日、ゆっくり休むといい」
「はい」

小さな島なので話ながら歩いてても、すぐに鷹姫の家に着く。

「わああ♪ お姉ちゃんだ!」

「おかえりなさい、お姉ちゃん!」

鷹姫とは腹違いの5歳と3歳の妹が玄関で出迎えてくれた。鷹姫は東京駅で買った土産のバームクーヘンを5歳の妹に渡すと3歳の妹を抱き上げた。

「少し見ない間に大きくなりましたね」

「お姉ちゃん、この人は?」

「この前も泊まってくくださった介式師範です。今夜も泊まってくださいます」

「お世話になります」

介式は鷹姫の父親である衛と継母の郁子と挨拶する。すぐに6人で夕食となり衛を交えて剣道談義に花が咲き、明日朝から稽古しようということになり、早めに休むため鷹姫は妹たちと入浴した。鷹姫が3歳の妹の頭を洗ってやっていると、自分で洗える5歳の妹が問うてくる。

「お姉ちゃんは、どうして、いつも頭を洗ってくれるとき、悲しそうな顔するの?」

「そんな顔をしていましたか……」

思わず頬に触れると、泡がついてしまった。

「気にしないでください」

「……気になるよ」

「そうですか……昔、悲しいことがあったからです。あなたたちが大きくなったら話してあげますね」

「……お姉ちゃんの本当のお母さんが死んじゃったこと?」

「……隠しているわけではありませんから……、ええ、そうです。もう悲しいことが無いといいですね。ほら、早くお湯に浸かりなさい」

入浴を終えると、介式と剣道場に敷いた布団に入る。眠る前に介式が言ってきた。

「この前、ここに泊めてもらったとき、男性の部下たちまで泊めてもらい、宮本くんに不安な思いをさせたかもしれない。すまない」

「……不安？　何がですか？」

「やはり君は、こういうことにうといな。まあ、私もものだが。一晩でも間違いが起きることがある。知念と松田川医師のことで思い知った」

「私なら大丈夫です」

「たいていの男が相手なら、そうかもしれないが、私の部下は全員が君より強い」

「……」

「そんな男たちと寝させてしまって、すまなかった」

「いえ、お気になさらず、結果として何も無かったですから」

「これからは気をつける」

「ありがとうございます」

それだけ話して朝稽古にそなえて眠った。

翌3月5日土曜朝、芹沢家の2階で、また陽湖は津波の夢を見ていた。神聖な礼拝中にトイレへ行きたくなり我慢していると、屋城に聖書の朗読をあてられ、読んでいるうちに漏らし始めてしまい、どれだけ漏らしても止まらず、どんどんと股間からおもらしを続け、そのうちに足元から水位があがり、礼拝堂全体の腰まで水位がきてから屋城が、これは何ですか、と問うので、津波です、と答える夢だった。

「…ハア……夢の中で……嘘をついてしまって……」

嘘は戒められていることだったけれど、その教義が夢の中まで適応されるのかには疑問がある。

「今日でオムツで生活するもおしまい……長かったような……短かったような……」

課せられた一週間が過ぎようとしていた。終わるとなると、少し淋しい気がした。温かかったお尻が冷たくなつてくると淋しさが強く

なる。陽湖は掛け布団をどけてパジャマを脱ぎ自分のオムツ姿を見つめた。

「……見慣れると赤ちゃんみたいで……可愛いかも……」

少し腰をあげてから、布団に腰をおろすと、濡れたオムツの感触がお尻に広がる。それを三回やっているると完全にオムツが冷たくなつてしまい、切なくなる。陽湖はコロリと寝転がると赤ん坊がするような動作で手足をジタバタとしてみて、言ってみる。

「……えーん……えーん……お母さん……オムツが濡れたよお……えーん……」

言ってみると恥ずかしくて誰もいない自室でも顔が赤くなつたけれど、なんだか心が解放された気がする。小さな頃から信仰心厚い両親のもとで厳しく育てられたので、あまり甘えた記憶がない。赤ちゃんの真似をすると、気負っていたものを投げ捨てたような快感があった。もう少し続けたいくなる。

「えーん……えーん……オムツ冷たいでちゅ……えーん……お母さん……オムツ替えてよ……えーん……」

しばらく赤ちゃんになっていると、急に部屋の戸が開いて鮎美が入ってきた。

「っ?!」

「陽湖ちゃん？　頭、大丈夫？」

「……」

「さつきから、やばそうなんやけど……陽湖ちゃん？　自分が高校生つって覚えてる？」

「っ……お、覚えてますよ！　戸を開けるときはノックくらいしてください！　いくらシスター鮎美の家でも、私にもプライバシーがありますよ！」

陽湖が真っ赤になつて抗議した。このところ、ずっと鮎美が不在だったので隣室には音が丸聞こえなことを、すっかり忘れていた。赤ちゃんの鳴き真似を聞かれていたかと思うと恥ずかしさで涙が滲んだ。

「いったい何をしてたん？」

「……これはですね……も、もうすぐ、私たち、お姉さんになる
じゃないですか」

「そやね」

「それで、赤ちゃんの気持ちを知ろうという体験ですよ。どうせ、オムツ穿かされてますし。や、やってみると、赤ちゃんの気持ちが理解できますよ。とくに、オムツが濡れてるのに交換してもらえないのは、つらいです」

後付の理屈だったけれど、嘘はついていないつもりで陽湖は言い募った。笑われないか不安だったけれど、鮎美は神妙に頷いた。

「たしかに、濡らしてから交換できん時間が続くと、つらいなあ」

オムツを体験したことについて先輩である鮎美は東京での選挙応援中を思い出している。早めに済ませると尿意から解放されて楽になるものの濡れたオムツで過ごすことになるし、逆に我慢し続けると落ち着かない時間が続いて演説への集中力が落ちてしまう、一長一短だったけれど、後半戦は早めに済ませることが多かったので、蒸れたオムツで過ごす不快感は鮮明に覚えていた。

「私たちがお姉さんになったら、赤ちゃんのオムツは濡れてから、すぐに交換してあげようと思います」

「そやね。体験してみんと、わからんことあるよね」

鐘留と違い、からかって笑うこと無く、むしろ同じ体験をしている者として連帯感を覚えたので、陽湖は思い切って頼んでみる。

「私のオムツ、交換してみてくださいませんか？ 私、また赤ちゃんになりますし」

「うん、ええよ」

鮎美も陽湖も芹沢家に二人目が産まれるのは楽しみにしているので赤ちゃんと母親ごっこをしてみる。布団に寝た陽湖のオムツへ鮎美が手をかける。両サイドを破いて、オムツを開くとオシッコの匂いが拡がり、陽湖は恥ずかしくて赤面したし、鮎美は丸見えになった陽湖の股間を見て性的興奮をってしまった。

「お母さん、エッチなこと考えないでください。結婚してますよね？」

「ごめん、ごめん」

「不倫したら殺されるらしいですよ」

「けっこうマジに殺気がこもってた気いするわ、あれ」

鮎美はティッシュの箱を取り、陽湖の股間を丁寧に拭いてみる。

「もうちよい、脚ひらいて」

「…はい……。えーん…えーん…お母さん…寒いでちゅ…」

「あ、そやね。スツポンポンは寒いわな。気がつかんで、ごめんな」

鮎美は暖房の温度をあげて陽湖の上半身に布団をかけた。

「…えーん…えーん…」

「他に…どうしたらええ？」

「いえ、これは、ただ、泣いてるだけです。赤ちゃんとして」

「…けっこう、なりきるね。こんな毛の生えた赤ちゃん、おらんし。

「いつそ剃ってあげよか？」

「…えーん…お母さんがセクハラ発言します…えーん…」

「ごめん、ごめん。けど、うちは手術のとき剃られてたから、ほとんど毛が無かったけど、陽湖ちゃんは毛があるから、しっかり拭いておかないとあかんね」

「はい…お願いします…えーん…えーん…」

「よしよし、いい子やから、もう泣かんでええよ。よしよし。すぐキレイにしてあげるな」

鮎美は興奮しないように努力しつつ陽湖の股間を拭いて新しいオムツを穿かせる。細くて華奢な陽湖の脚にオムツを通す作業は鮎美の方がショーツを濡らしてしまいそうになる。

「ちよつと腰あげてな」

「はい。…これ、赤ちゃんだったら腰をあげてくれないうですよ？」

陽湖は腰をあげつつ問い、鮎美はオムツを穿かせつつ答える。

「そやね。どうするんやろ。あとで母さんに訊いてみよ」

「やっぱり体験してみると疑問点がわかりますね」

「ほな、ハイハイもしてみる？」

「してみます」

「……」

するんかい！ と鮎美は突っ込みそうになったけれど、陽湖が生真面目にハイハイを始めたので黙って見守る。陽湖は本当の赤ん坊を想像しながら部屋の中を四つん這いで動き回る。

「……………」

オムツ姿やし、なんか変なプレイしてる気いするけど、陽湖ちゃんマジメにやってるし黙っておこ、と鮎美はSMの一種な気がしたけれど、言わないことにした。

「赤ちゃんのオモチャでもあるとええけど……ティツシユの箱でもオモチャにする？」

「あーい♪」

陽湖はティツシユ箱を渡されると笑顔で返事して、ティツシユを抜き始めた。無駄遣いをしてはいけないという規範を忘れたように、次々とティツシユを抜いて、その場に投げる。もったいないことをしているという意識はあったけれど、赤ちゃんなら仕方ないという楽しさがあった。

「きゃきゃ♪」

「……」

そこまでなりきらんでも……、と鮎美は若干引きつつも、新たな提案を試みる。

「お母さんのオツパイ吸う？」

鮎美が自分のパジャマをはだけて乳首を見せると、陽湖がハイハイで近づいてくる。迷い無しに陽湖が唇で乳首を咥えようとするので、むしろ鮎美が逃げた。

「ちよ、ごめん。やっぱり無し。ちよつと不倫っぼいし」

「……………」

陽湖が畳に寝転がって手足をジタバタとさせた。見事なまでに赤ん坊で、もらえるはずのオツパイを寸前で隠された反応だった。

「えーん！ えーん！ お腹ちゆいたよお！ えーん！」

「……………」

諦めて鮎美が乳首を出すと、食いついてきた。

「……」

「……」

鮎美は母親役として、陽湖は赤ん坊役として、しばらく乳首と唇でお互いを感じた。陽湖の吸い方は、しっかりと赤ん坊の真似で性行為でするような相手の性感を高めようとするものでなく穏やかな動きだったので鮎美も母親らしく陽湖の頭を撫でてみた。そのまま授乳ごっこを続けていると、玄次郎が起きて1階へ行く気配がしたので離れた。

「そろそろやめよか」

「はい……ありがとうございます」

夢から覚めたように陽湖が言つて、恥ずかしそうに目をそらした。オムツの上から制服を着る。鮎美も出かける予定はなかったけれど、もう習慣になつているのと議員バッチが着いているので制服を着た。二人で階段を降りると、玄関に男性SPが2名いる。タベ、外に立つてもらうのは気の毒なので玄関内に入ってもらい、一つ電気ストープも置いていたのだった。その2名と挨拶していると、知念と男性SP3名が交替に来た。島内は安全という判断で人員は控え目になっている。

「知念はん、松田川先生とは、どうなん？」

「ノーコメントっす」

「政治家の真似やね」

「政治家は記憶にございせんが、十八番っすよ」

鮎美が知念と話しているうちに陽湖は朝食を作り始める。つわりが再び重くなつたのか美恋は起きてこなかった。玄次郎と鮎美、陽湖の三人で朝食を食べた。食べ終わると陽湖が紅茶を淹れる。

「シスター鮎美、ダーズリンとアッサム、どちらがよいですか？」

「うちは遠慮するわ。朝ご飯でコーヒー飲んだばかりやし」

「オレも要らない」

鮎美と玄次郎が飲まなかつたので陽湖は一人で3杯の紅茶を飲んだ。鮎美は予定のない休暇になつていて、玄次郎も今日は土曜出勤を控えたので、のんびりとテレビをつける。ニュースが流れていた。

「岩手県を通る三陸自動車道の釜石両石インターから釜石北インターの間が、本日開通いたしました。関係者がテープカットを…」

「岩手県かあ……遠いところやなあ…小沢先生がいたかなあ…」

「何もないところだぞ。ジャジャ麺だったか、ジャジャウマ麺だったか、そんな辛くて美味しい麺があつたけど」

「父さん、行ったことあるん？」

「若い頃、自動車で日本一周したからな」

「自転車やなくて？」

「そんな疲れることやらない」

「父さんらしいわ」

テレビが芹沢鮎美連続暗殺未遂事件の報道を始めたので、玄次郎がチャンネルを変えた。

「前原外務大臣の辞任を求める声が…」

「鮎美、見るか？」

「政治ニュースも今日はやめとくわ。もし辞任が決まったら、どのチャンネルでも字幕速報やるよろし」

「そうだな」

さらにチャンネルを変えると料理番組だったので、それを三人で見ていたけれど、陽湖が落ちつきなく何度も座り直すので、鮎美にはトイレを我慢しているのだとわかった。このまま玄次郎と三人でいるときにオムツへ出すのはかわいそうだと思い、散歩に誘う。

「陽湖ちゃん、散歩でも行こ」

「あ、はい」

「じゃ、オレは裏で釣りしてるぞ」

「うん。ほな、お昼ご飯で、また集合ってことで」

ずっと父親と過ごすような歳でもないので鮎美と陽湖は外に出て、あてもなく歩いた。

「……ハア……」

陽湖が漏らしそうな顔をしているので知念たちSPに言うておく。

「すいません。できるだけ離れて警護してもらえますか？ 陽湖ちゃ

んと友達同士、いろいろ話したいんで
「了解っす」

島内は安全度が高いと判断しているので知念たちは声の聞こえない距離に離れてくれた。

「陽湖ちゃん、さつき無理して3杯も紅茶、飲むしやん」

「もつたいないですし…ハア…」

「今なら誰も近くに居いひんし、済ませてしまい」

「いえ、我慢できるうちは我慢します」

「…それ、変なタイミングで限界来るかもしれんよ」

「我慢して我慢して、ずっと我慢した後にするおもらしって、すごく気持ちいいですから」

「……………そう……………かもしれんけど……………まあ、気持ちいいけど、……………わざわざ、せんでも…」

「ハア…」

熱い吐息を漏らしている陽湖と港に出ると、鷹姫が介式と待合所で缶紅茶を飲んでいた。介式は非番なので鷹姫と並んで座っている。

「鷹姫、連絡船で、どっか行く気なん？」

「はい、健一郎さんに誘われて剣道具を買いに市街へ行くつもりです」
「そっか……………」

それ誘った方は二人きりのつもりやったろうにね、と鮎美は介式の存在を気の毒に思ったけれど、何も言わずに自分も缶紅茶を買った。陽湖も缶コーヒーを買っている。

「陽湖ちゃん……………飲むん？」

「はい」

「……………まあ……………ええけど…」

四人で缶に唇をつけていると、岡崎が私服で現れる。他に同じ中学生らしき女子も来た。その女子も私服で島内で過ごすような平服ではなく寒いのに短めのフワリとしたスカートでコートも新品だったので、鮎美と陽湖の目には岡崎への好意が見て取れたけれど、鷹姫と

介式には見えていない。

「鷹さん、お待たせしました」

「いえ、私たちが早く来ただけですから」

「……。介式先生もついてこられるのですか？」

「そのつもりだ」

「……そうですか…。芹沢先生と月谷先輩も？」

「ううん、こちらは、たまたま、ここで休憩してるだけよ」

「…ハア…」

もう陽湖は我慢することに集中していて、あまり周囲の音が聞こえていない。なのに缶コーヒーを飲み干している。

「鷹さん、こいつも勝手についてきたんですけど、つれて行っていいですか？」

岡崎がそばにいる女子を指して問うた。

「はい、どうぞ」

「すみません」

「ありがとうございます…宮本先輩…」

「白川さんは弓道の方が得意でしたね」

鷹姫は何とも思っていないけれど、鮎美には白川の気持ちを読めた。ほほ確信しているけれど、あえて質問してみる。

「白川はんって何年生やったっけ？」

「健ちゃんと同じ2年です。もうすぐ3年生の」

「来年、受験やね。頑張ってたな」

「はい、ありがとうございます」

「ハア…ううっ…」

「月谷先輩、大丈夫ですか？ 顔が赤いんですけど熱でもあるんじゃない？」

「そ、そうかな、大丈夫やと思うよ。こちら散歩を続けるわ。陽湖ちゃん、行くよ。立ってる？」

「そっとなら…」

「ほな、あっちの突堤でも見に行こ」

鮎美は立たせた陽湖を連れて突堤まで歩く。そのうちに連絡船が

定刻になってエンジンをかけたので鷹姫たちは乗り込んでいる。それに手を振ってから陽湖の背中を撫でた。

「陽湖ちゃん、もう済ませてしまいい。あんまり無理に我慢すると身体に毒よ」

「…ハア…あああつ…もう…ハア…漏れそう…」

「せやから、してしまいいよ。オムツにするのがイヤやったら、もうトイレに行ってもええよ?」

「いえ…このまま…ハア…ハア…うくつ…」

陽湖が前屈みになって両手で股間を押さえて我慢する。

「ああつ…ハア…あああつ！ くっああ！」

「病気になるよ……」

「…も…ダメ…ハア…」

陽湖がプルプルと震えた。

「あああああつ…」

貯まりに貯まった膀胱が一気に解放される快感に酔いしれ、陽湖は前屈みだったのでヨダレも地面に零した。制服の中のオムツが大きく膨らみ、重くなる。

「ハア…ハア…ああ…気持ちよかったあ…」

うつとりと陽湖がつぶやいた。

「……陽湖ちゃん。……こういうこととして宗教的に、大丈夫なん?」

「え? …ハア…問題ないですよ。旧約聖書にも新約聖書にも、おもらしするな、とは書いてませんし」

「そ…そんなら、ええのかな…」

寒くなつたので二人は家に戻った。帰宅するとSPは玄関内までしかついてこないで陽湖は自室に入ってオムツを交換すると、台所に立った。

「お昼ご飯、オムライスでいいですか?」

「うん、手伝うわ」

二人で料理をして4人分を作った。お昼時になり玄次郎が釣りから戻り、釣ったばかりの魚も焼き魚にした。また美恋は、つわりのために起きてこられず水分だけは摂らせて3人で昼食を食べる。玄次

郎は美恋の体調そのものには問題が無いことを確認すると瓶ビールを開けた。

「父さん、昼から呑むん？」

「フフ、これこそ休暇だ」

「まあ、島には車も無いし、この時間から本土に渡っても、すぐ帰らんならんし呑んでも問題ないかあ」

「お前も再来年には呑めるぞ」

「なるべく、やめておくわ。お酒の席でトラブルが起こること、多いし」

「それも賢い選択かもな。けど、人間に楽しみは必要だぞ。とくに月谷さんは戒律を守ってばかりで精神的に鬱屈が貯まるだろう」

「いえ、そんなことはありません」

「本人は意識してなくても無意識に貯まるものだ」

「……………」

昼食が終わると、また玄次郎は釣りに出た。陽湖はトイレで大便を済ませると、アッサムティーとダージリンのミルクティーを作りながら鮎美に言う。

「今から、いっしょにおもらしするまで我慢してみませんか？」

「……………そんな……………新しい遊びを見つけたから、友達としよう、みたいなノリで言われても……………うちは選挙中に、さんざんやったし」

「それは限界まで我慢してじゃないですよね。済ませる感じで終わらせるんじゃないかって本当の限界の限界まで我慢してからする、おもらし最高ですよ」

「……………え……………」

「やってみましょうよ」

陽湖が新しいオムツと紅茶を目前に置いてくれるけれど、穿く気にはなれない。紅茶だけ啜った。

「鷹姫から聞いた話なんやけどな。オシッコと縁のある戦国武将がいってはってん」

「おかわり、どうですか？」

「あくまで、うちにおもらしさせる気やね……………はあ……………」

タメ息をつきつつ、諦めて紅茶を飲んだ。

「竹中半兵衛って知ってる？」

「いえ、知りません」

「さすがに豊臣秀吉は知ってるやんな？」

「それは、もちろん」

「ま、キリスト教弾圧し始めた人やし、当然やわな。その秀吉の軍師、いわば作戦係やった人なんやけどね。最初から秀吉に仕えてたわけやのうて、当初は美濃、今の岐阜県で齊藤氏に仕えてたんやけど、このとき内部の派閥抗争で城の上から他の武将にオシッコかけられてバカにされはってん。そやけど、後日、わずかな兵を率いて見事な作戦で城を取って、オシッコかけた武将を討ち取りはってん」

「それはまた、あまりカッコいい歴史ではないですね」

「別のとき、半兵衛が息子へ戦争の話をしてるとき、オシッコに行きたくなった息子は立ち上がったんやけど、どこへ行く、と半兵衛は問うて、息子がオシッコです、言うたら、武士は戦争の話に夢中になってオシッコ行くのを忘れて漏らす方が名誉や、って言わはつたらしいわ。二つもオシッコに関わる話が残ってる武将は少ないらしいよ」

「それ……その後、その息子さんは結局、漏らすまで話を聞かされたんでしょか？」

「……………どやろ？」

「漏らしたら漏らしたで、かなり父親を憎んだ気がします」

「たしかに……信玄が父親を追い出したみたいになるかも……」

「その半兵衛さんは最期、どうなつたんですか？」

「けっこう若いうちに病死しはつたよ」

「息子さんによる毒殺かもしれませんよ」

「毒殺説かあ……新しい見解かも。オシッコかけられて怒って相手を殺した人が、息子にオシッコの恨みで殺される……シユールやなあ……」

そう言いつつ鮎美はトイレに行こうとしたけれど、その進路上に陽湖が笑顔で立った。

「どこへ行くんですか？」

「……オシッコ、したいんやけど」

「ダメです。いっしょに、おもらししてください」

「えく……陽湖ちゃん、一週間、会わんうちに性格変わってない？
こんな性格やった？」

「この一週間、さんざんシスター鐘留にイジメられたんですよ。シスター鮎美が私にだけオムツ着けて過ごせさせて命令して東京に行くから。放置された私、大変だったんです」

「うっ……カネちゃん、けっこうイジってきた？」

「もうさんざんに！ やつとオムツに慣れましたけど、最初の二日三日は気が狂うかと思いました！」

「カネちゃん……ええ性格してるもんなあ……」

「毎晩、変な夢みてオネシヨするし」

「どんな夢で？」

「津波に掠られる感じです。大きな大きな津波が来て、お尻が温かくなって目が覚めると漏らしてます」

「あく……なるほど……うちもカテーテル突っ込まれてるときは、人に言えんような夢、見たわ」

そう言いつつ、いよいよ尿意が強くなってきた鮎美は陽湖をかわしてトイレに行こうとしたけれど、しっかりと捕まえられた。同性に抱きつかれるのは嬉しいけれど、今の場合は下腹部がづらい。

「逃がしません」

「はああ……わかったよ、オムツ穿くわ」

諦めた鮎美がオムツに手を伸ばすと、それも止められる。

「シスター鮎美、オムツに済ませて解放される気ですね。ダメですよ、もつとギリギリ限界まで我慢してみてください」

「えく……そわそわするやん」

「それが楽しいんですよ」

「……その趣味は、ちよつと……」

「コーヒーと紅茶、どちらがいいですか？」

「……ミルクティー、甘さ控え目で」

「はい」

「宗教勧誘してた強引さが、変に発揮されてるなあ……」

鮎美は居間の畳に座って、淹れてもらったミルクティーを飲む。

「はあ……オシッコしたいのに追加で飲むとか、したことないわ……うゝ……くゝ……」

「このドンドン限界が近づいてくる感じ、ドキドキして素敵ですよね」

陽湖も尿意が高まってきたようで頬を赤らめている。さらに2杯、二人とも飲むと、頭と下腹部が痺れるような尿意に襲われた。座っていられず鮎美も陽湖も畳へ横になって丸くなる。

「ハア……ハア……そろそろオムツ着けてええ？ もう漏れそうやわ」

「まだダメですよ。どうせ、着けた途端に出す気ですよ。ハア……あ、この感じ……最高ですよ……」

「うう……陽湖ちゃんだけオムツしてるのズルいやん。うちは漏らしたら、ホンマのおもらしになるんよ。ハア……くゝ……」

「もう限界ですか？」

「うくつ……見たらわかるやん……ハア……ハア……今にも漏らしそうよ……」

もう両手で股間を押さえていないと溢れてきそうだった。

「シスター鮎美、話題を変えるので我慢を続けてください。前原さんは辞任されると思いますか？ ハア……」

「ハア……くつ……外国人からの献金が大臣に……ハア……辞めたらええねん。……くつ……うくうう……漏れる漏れる！ お願いよ、オムツ取って！」

「議員は政治の話に夢中になって漏らす方が名誉かもしれませんよ。」

「ハア……」

「ハアハア……あああ……ハア……」

もう鮎美は膀胱が痛くなってきたので手で押さえるのをやめて下着を濡らしてしまう覚悟をしたけれど、陽湖が手を伸ばして鮎美の股間を押さえてきた。

「ひゃう?! ちよ、どこ、触ってんのよ……」

「私は淫らな気持ちで触ってるわけじゃないですから。今、このまま

「しちゃう気でしたよね？」

「ハアハア…もう、おもらしでも何でもええから、させて…ハアハア…膀胱はじけそう」

「そうそう、こういう風に最後はパンパンに膀胱が膨らんできますよね」

陽湖が右手で鮎美の股間を押さえながら、左手で鮎美の下腹部を押さえてくるので、鮎美は悶えるほどの尿意に震えた。

「あああああ…させて…オシッコ出させて…」

「もう限界ですか？」

「限界の限界よ。ハアハア…押さえられてるから漏れただけで…ハアハア…」

喘いで畳へヨダレを零してしまった。

「では、手を離しますから急いでオムツを穿いてください。ハア…」

「ハアハア…」

鮎美が頷き、陽湖は手を離してオムツを取って渡した。

「ハアハア！ うつ、ハアハア！」

もうショーツを脱ぐと漏らしてしまうのがわかるのでショーツの上からオムツを穿こうと両足首を通したのに陽湖がオムツを引っ張って邪魔してくる。

「ちよつ、何すつ…ううう！ 離して！ 漏れる！ うくう！」

「そのままではパンツが濡れますよ？ まずはパンツを脱いでから」

「もうそんな時間が…ぐくくう…うあわ！ あつ、アツ…あつ…あはあああ…」

今まで経験したことのないような勢いで小水が噴き出てきて、もう止められない。オムツを穿こうとした中途半端な姿勢のまま鮎美は盛大に失禁してしまった。ショーツと靴下、畳が濡れた。

「ハア…ハア…ぐすつ…結局、漏らしたやん!! 陽湖ちゃんのアホ！」

「この島の山頂で、私も似たような目に遭いましたし、おあいこということで」

「ううっ……やっぱり、恨んでたんやね……」

「雑巾を取ってきます。ハア……ううっ……」

まだ陽湖は我慢したままバケツと雑巾を持ってきて鮎美が漏らした痕を拭いた。鮎美は長い我慢から解放されて、ぐったりとノーパンで横になった。

「…ハア……しんどかった……ハア……」

「けど、おもらししてるとき、すっごく気持ちよくて、今の解放感もいいですよ？ ハア……うう……」

「……ハア……うちは、普通のエッチの方がええわ……」

たしかに快感と解放感は覚えたけれど、詩織の舌に愛してもらう感覚に比べると劣ったし、今も変な余韻が下腹部に残っている。いつそ電マを使いたいようなざわつきがあった。

「ハア……私も、そろそろ限界です……ハア……」

うっとり陽湖が自分の下腹部を撫でている。

「陽湖ちゃん、くすぐったるか？ それとも、お腹グイグイ押してあげよか？」

「やめてください。そんなことされたら、すぐに漏らしてしまいます。もっともっとギリギリまで我慢したいので、お茶をいただけますか？ もう立てないので」

「はいはい」

鮎美は居間から台所へ行きつつ、つぶやく。

「変な趣味に目覚めさせたの……うちのせいちゃうよね……」

若干の責任を感じつつ、お茶を淹れて陽湖に出した。それを飲んでから、さらに30分も悶えた陽湖はオムツを濡らして大きく喘いだ。

「あっはああああんっ！」

「……」

見てる分には可愛い顔やけど、オシッコ漏らしてのアへ顔かと思うと、かわいそうな趣味に目覚めさせたかも、ちゃんとお嫁に行けるかな、と鮎美は心配しつつ日本茶を啜った。日が暮れて玄次郎が帰ってくる頃には二人とも何事もなかったように痕跡を消した。また二人

で食事の用意をしていると、やっと美恋が降りてきた。

「ごめんなさい、一日なにもせず……せつかくアユちゃんか帰ってきてるのに……」

「気にせんでええよ。妊婦さんは座ってて」

「お母さん、サトイモの煮物とカレイの煮付けですけど、食べられそうですか？」

「ありがとう。半分くらい、いただくわ」

「母さんの分のオムライスも残ってるけど、どうする？」

「それは悪いけど、誰か食べてくれない？」

「ほな、うちと陽湖ちゃんて半分ずつするわ。ええよね？」

「はい」

一食だけだったけれど、美恋もそろっての団欒となり入浴後に陽湖はオムツを着けてから鏡を見て言った。

「今夜でオムツも最後……また、着けてみようかな……」

名残惜しくなっていた。

翌3月6日の日曜朝、オネショで濡らしたオムツを脱いだ陽湖は匂いが残っていると嫌なのでシャワーを浴びさせてもらってからショーツを身につけ、ブラジャーも秘書補佐としての給料で買った新品を着けると、制服を着て一人で家を出た。始発の連絡船で日曜礼拝に参加する。連絡船を降りてバスに揺られつつ一人言を漏らす。

「やっぱり普通の下着が一番……オムツがいいとか……私、どうかしてみたい……」

学園前のバス停で降りて、校内に入ると礼拝が始まる前に女子トイレに入った。シャワーを浴びたときにも排泄しておいたので、ほとんど出なかったけれど、念のために便座で息むと少量の小水と大便が出た。お尻を拭いてショーツをあげる。

「ああ、すつきり」

女子トイレを出たところで屋城に会ったのでドキリとする。

「っ……」

「おはようございます、シスター陽湖」

「お、おはようございます！ ブラザー愛也！」

やや大きな声を出してしまっただけれど、ごく普通に挨拶できた。

「シスター美恋の具合は、どうですか？」

「はい、やっぱり、つわりが重くて昨日も夕方になって少し起きられただけでしたから今朝も在宅礼拝としました。来週こそ、参加できるとよいのですけれど」

「無理をすることはありません。お身体とお子を大切にしよう伝えておいてください」

「はい！」

返事をした陽湖は思い切って言ってみる。

「あ、あのー！ ブラザー愛也は四月……お花見をされませんか？ わ…私と、いつしよに」

季節の行事は、その多くが節分七夕など他の宗教的意味合いや伝承に基づくとして避けているけれど、お花見は避ける対象になっていなかった。何よりデートに誘いたかったし、口実としては桜に感謝したいくらいのタイミングだった。

「…………お花見ですか…」

「ダメ…………なら…………。ブラザー愛也の……都合は？」

「ご存じの通り、私は日曜日忙しい身です。けれど、月曜日なら…………。とはいえ、シスター陽湖のお仕事は平日でしたね」

「あ、いえ！ まだ時給制なんです！ だから、都合をつけられると思いますー！」

「それなら、お花見もいいですね」

「は、はい！ ぜひ！」

舞い上がるような気持ちで礼拝を終え、またバスに乗って港へ戻ると連絡船で島に渡り、芹沢家で鮎美が朝食を作っているのを手伝った。玄次郎も起きてくる。

「よお、今日は、どうする？ 鮎美」

「ノープランよ。修学旅行も持っていくもん、めっちゃ少ないし。そもそも参加自体、寸前まで迷うし」

「修学旅行のしおり、オレも見ただけど、所持品がパスポートと聖書、下

着の替え、常備薬だけだったな。どういう旅行なんだ？」

「なんか宗教的理由らしいよ。あと、飛行機に積める重量の問題と」

「にしても、ケータイも現金、カードも持つてくるなどは徹底してるな。イスラエルって飯が不味かったりするかもしれないぞ」

「噂によると、ご飯も断食があつたりするみたいやわ。それってイスラムの習慣ちやうの、って思うけど、まあ、もとはアブラハムの宗教やしね。ユダヤ教もそやし。陽湖ちゃんは生徒会長なんやし、何か知らん？」

「いえ、修学旅行の内容は毎年、秘匿されています。経験した3年生が帰国直後に卒業式を迎えるので後輩に伝わることもなく」

「……洗脳でもするんちやうか……」

「そんなことはないですけど、毎年数人が修学旅行がキツカケで神の導きに気づかれます」

「チャクラを開いて空中浮遊する、とか言わんといてな」

「尊師、元気にしてるかなあ……オレ、あいつの歌のセンス好きだったんだよなあ。わあたあしはあ♪ やつてないー、潔え白うだあ♪ とかき。そそそつそそ尊師い♪ って歌、おもしろかった。今でもネットで検索すると見られるし。新作発表とか、してほしくらいだ」

「アホなこと言わんとき、あのサリン事件で何人も亡くなつてはるんですよ。はよう死刑にしたらええねん。それこそ最終解脱やん」

「……………あの……………どうして、いつも宗教の話になると、だいたいオウム真理教の話へもつていくんですか？」

「……………」

鮎美と玄次郎が同時に考え込む。

「ま、インパクトありすぎやったし」

「それだな」

「神の導きと、そういった話を、いつしよにしないでほしいです」

遅い朝食が終わると、美恋が起きてきたので陽湖は食べられそうな物を訊いて、煮素麺を作った。どこにも出かける予定が無く、雨も降ってきたので釣りもできず、昼食の話題になる。

「母さん、お昼は何が食べたい？」

「今、陽湖ちゃんが作ってくれた煮素麺で十分だから、私は夜まで要らないわ」

「ほな、どうしよ。父さん、リクエストは？」

「鮎美の食べたいものでいいぞ」

「陽湖ちゃんは？」

「私もシスター鮎美が食べたいものでいいですよ」

「うちのターンなんやね……………うくん……………やっぱり、お好み焼きかな。小さく焼けば母さんも食べる気になるかもしれんし」

「ありがとう。なら、私が作るわ」

「ええよ、母さん、うちが作るし」

「たまには台所に立っておきたいの。寝てばかりも身体に悪いから」

「ほな、いつしよに作る。陽湖ちゃんは休んでいよ。いつも、おおきにな」

鮎美と陽湖が昼食を作ることになり、とくに急ぐわけではないので、のんびりとした準備になった。冷凍していた豚肉を解凍し、キャベツを切って生地を作る。玄次郎が大きな鉄板をテーブルに置いた。朝食が遅かったので昼食も遅めに焼き始める。焼いているとき旅番組を流していたテレビが字幕速報を映した。政治ニュースだったので鮎美が反応する。

「前原外務大臣が辞任……………いよいよ鳩山政権も……………」

「そうか。オレは前原が総理大臣になるのが、いいかと思ってたのにな……………これで、あとは野田か……………細野か……………来月にも野田政権かな」

玄次郎は男性らしく鮎美が当選する前から政治に少しは興味をもっていたので次期総理を予想している。現役で国会議員の鮎美は父の見解を否定的に見る。

「まだ、気が早いよ。鳩山総理、いよいよ追いつめられてから、まだ粘りはると思うわ。いうてもカイワレ大臣やしね。一発逆転を狙いはるんちやうかな」

「この状況で一発逆転か……………お前を大臣にでもするか？」

「…はは、それは無い。アホすぎるわ」

「だよな。けど、案外、赤ちゃん手当て大臣とか、マイノリティー大臣にすれば5%くらい支持率回復を狙えるだろう」

「シスター鮎美が入閣すれば20%はあがると思います」

「ほんで、何の成果も出せず二ヶ月後には内閣は空中分解ってところね」

「そうなるだろうな。鮎美は使い捨てにされる」

「あ、焦げますよ」

陽湖がお好み焼きを裏返そうとして失敗して、空中分解させた。

「す…すみません…」

「焦げそうに見えて、まだ火が通ってないんよ」

鮎美が手慣れたコテ使いで分解したお好み焼きを上手に修復していく。

「お好み焼きも人間も、できあがるのに、それなりの時間はかかるよ。うちが大臣なんて文字通り10年早いわ」

「それでも28歳だからな。けど、こいつは9歳になるか」

そつと玄次郎が美恋の下腹部を撫でた。焼き上がったお好み焼きを4人で食べて、生地もキャベツも余ったので夕食もお好み焼きという大阪出身らしい献立になった。そう広くはない家から出ない一日はゆつくりと過ぎ去り、静江や詩織からの連絡も無かった。鮎美が風呂の準備を始めたので、陽湖は食事の後を片付ける。珍しく三食を食べることができた美恋はソファに座って下腹部を撫でている。玄次郎も妻の子宮に向かって声をかける。

「男だったら、立派な建築士にしてやろう」

「あらあら、今から勝手に進路を決めてしまうのね」

風呂にお湯を入れてきた鮎美も母親の下腹部に触れながら言う。

「うちが姉ちゃんよ。聞こえてる？ めったに帰ってこんし、うちの声を聞いたん初めてくらいいちゃう？ もう耳、聞こえてる？」

「……………」

皿を拭いていた陽湖は振り返って鮎美たちの様子を見た。両親と

娘、そして新しい命、見ている微笑ましい光景なのに、陽湖は胸の奥が疼いて、心がざわつき、オシッコを漏らしたくなった。それほど、貯まっていたわけでもないのに、そして居間で微笑ましく寛いでいる一家がいるのに、台所にいる自分がおもらしをしたら、どうなるのかな、という意味不明な思考が湧いてきて、気がつけば力を抜いて、おもらしをしていた。

シヨーーー…

あまり勢いのないおもらしだったけれど、夕食の後なので、それなりに貯まっついて陽湖の足元に30センチほどの水たまりができていく。シヨーツの股間が温かく濡れて気持ちいい。内腿やふくらはぎ、靴下も濡れてしまった。

「…ハア……しちゃった……」

「……陽湖ちゃん？」

居間にいる鮎美がこちらを見て気づいた。

「ちよっ?! あんた、何してんの?! そんなところで、おもらしして…」

驚いて批判的な声をあげた鮎美の唇を美恋が人指し指で押さえた。そして立ち上がると陽湖の方に歩いてくる。陽湖は叱られる気がして、お尻に痛みを覚えた。幼い頃、何度も実の両親にイチジクの枝で叩かれた臀部が疼く。陽湖の脳裏に言い訳が浮かぶ、トイレに行くつもりが間に合わなくて急に漏れてしまった、これはオシッコじゃなくてお茶をこぼしただけです、そんな嘘が思い浮かんだけれど、陽湖は正直に言った。

「…お…おもらしを……したくて、しました……ごめんなさい」

「そう。あなたは本当に、いい子ね」

美恋は優しく微笑むと陽湖を抱いた。

「……………叱らないの?」

「謝るのは私の方、あなたのことを忘れてるわけじゃないのよ。いっしょに、お風呂へ入りましょう」

「…ううっ……ぐすっ…」

泣けてきた陽湖と美恋が浴室へ行く。途中で美恋は目くばせして、

鮎美へ床を片付けておくよう伝えてきたので、雑巾で拭き、陽湖がしていた食器の片付けも受け持つ。やってみると、風呂の準備より手間が多くて、最初から手伝ってあげればよかったと想った。風呂から揚げたってきた美恋と陽湖は、すぐに2階へあがり、美恋は陽湖を寝かしつけている気配だったので、鮎美と玄次郎はそれぞれに入浴した。鮎美が小さな音でテレビニュースを見ていると、美恋が降りてきた。

「鮎美、少し話があるの」
「うん」

鮎美はテレビを消し、玄次郎は2階へあがった。

「さっきのこと、からかったり笑ったりしてはダメよ」

「そんなことせんよ……けど、むしろ、病院に行かせた方がええかも」

「それも必要ないわ。あれは自然なことなの」

「……自然で……」

「母親が妊娠するとね、上の子は淋しくて、イタズラしたり、おもらししたりして、気を引こうとするのよ」

「そういうのは聴いたことあるけど……」

高校の家庭科と静江から教え込まれた大学課程の心理学で、それなりに知ってはいたけれど、違和感は大い。

「けど、そういうのって小学校低学年くらいまでで、陽湖ちゃんは高校生やん。やっぱり病院に行かせた方がええよ」

「あの子は、たぶん幼い頃から、ほとんど親に甘えずに育ったのよ。その反動と、どうしても私たちとは本当の血縁が無いから、鮎美が帰ってきて余計に意識してしまって、とても淋しかったのだと思うわ。あんまり繰り返して、おもらしするようなら対処を考えないといけないけど、しばらくは、そっとしておいてあげて。絶対に笑ったり、からかったりしないこと。病院に行けと言うのも、叱ったり、汚いと言うのもダメよ。いい?」

「はい」

返事をした鮎美も眠るために立った。

「……………母さん……………いろいろ優しい人やね」

「あなたも……」

母親になればわかるわ、と言いかけて美恋は言葉を飲み込んだ。もう娘が左手の薬指にしている同性との結婚指輪については、触れないと決めたのだから。

3月7日 呪い

翌3月7日月曜早朝、鷹姫は介式と剣道場で起床し短時間の朝稽古をすると、制服姿で始発の連絡船に乗るため港へ向かう。民宿に泊まっていた男性SPたちと、さらに鮎美と夜間当番だったSPたちも港で合流する。

「鷹姫、おはようさん」

「おはようございます、芹沢先生」

連絡船で本土の港に渡ると、鮎美とSPたちは党の車両と警察車両で新幹線に乗るため井伊駅に向かっていくけれど、それを見送った鷹姫は一人でバスに乗り、学園前を過ぎて、六角駅から在来線で三上駅まで行くと、またバスに乗って琵琶湖岸にある運転免許センターまで来た。

「……………必ず一度で合格しないと…」

東京についていかなかったのは運転免許取得のためだった。陽湖や鐘留に少し遅れること、いよいよ筆記試験を残すのみになっている。鮎美の秘書として忙しい中、落ちて再試験というわけにはいかない。剣道試合前と同じく気持ち落ち着けて挑むと、午後には運転免許証を手にした。制服で写真撮影されたので、いかにも高校新卒の取得者という免許証になった。

「……………これで今から運転できる……………」

あまり実感なく、さほど嬉しいとも思わなかった。またバスに乗って東京へ向かうため移動していると、携帯電話が鳴った。バス内なので遠慮して会話する。

「もしもし、芹沢鮎美の秘書、宮本です」

「同じく秘書補佐の月谷です」

「ご用件をどうぞ」

「シスター鮎美の家に、ちょっと困った感じの郵便が届きました」

「また、毒物ですか？」

「ただの手紙ではありませんけど、恨みの手紙なんです。石永さんにも

写メを送って相談しましたけど、あまりシスター鮎美に見せたくない内容ではあるものの、朝槍先生の恋人からなので見せないわけにもいかない、という判断になりましたので、シスター鷹姫へも送信するのを見ていただいて、夕方にもシスター鮎美に見てもらってください。手紙の原本は、一応、指紋鑑定などのために警察へ送ります」

「わかりました」

電話を終えた鷹姫はタブレット端末でメールをチェックすると、陽湖からメールが来ていて、手紙の内容を読む。

私の那由梨を殺した芹沢鮎美へ

那由梨が殺されたのは、あなたのせい。

呪う。呪う。呪う。

ずっと呪う。

あなたに不幸が訪れますように。

人の不幸のあとに結婚したあなたに罰がくだりますように。

世界で一番あなたを憎む小山田清美より

読み終わった鷹姫は眉をひそめた。そしてバスが三上駅に着くと、電車待ちの時間に陽湖へ電話をかける。

「これを芹沢先生に見せるのですか？ 反対です。私たちが処分した方がよいです。それでなくても御心労が重なっているのですから、このような手紙があつたこと自体、伏せておくのが最良です。知つたところで、どうにもならないことです。もし、この者が危害を加えようと企てるなら、それは警察の手にゆだねるべきことですし、他の不埒な手紙と同様に芹沢先生を煩わせること無く捨て置くべきです」

普段は口数の少ない鷹姫が一気に話した。陽湖は予想された内容だったので、予定していた答えを言う。

「私と石永さんも同じことを考えました。けれど、他のイタズラ手紙と違って、朝槍先生の同性愛者としての恋人だった人ですし、私たちが隠してしまってシスター鮎美に知らせなかったと、あとで知れば、シスター鮎美は怒るか悲しむかする性格の人です」

「それは……そうかも……しれませんが……この手紙の内容は……実に不快で……気持ちの悪い……」

「牧田さんに…いえ、芹沢詩織さんには伝えない方がいいとは思いますが。彼女は現場にいたわけですし、けれど、シスター鮎美は自分が知っておくべきだった、と考える人です。私たちが伏せることは簡単ですけれど、それをすると秘書と議員の間での信頼関係が崩れることにもなると石永さんが言われるのです」

「……………」

「私も石永さんの意見に反論がありません。ただ、オブラートに包んで説明しておく手もあるそうです。いきなり手紙の写真を見せるのではなく、ぼやかした内容で、そういう手紙が来ていることだけ伝えるという手も。それでシスター鮎美が、どうしても手紙を確かめたいと言っているのであれば、シヨックを受けないように、気にしないように、と前置きしてから見てもらう、という手段です。これは電話では難しいのでシスター鮎美の表情を見ながらシスター鷹姫にやってほしいのですが、できますか?」

「……………わかりました。善処します」

「あと、いただいたお電話に別件で恐縮ですが、一ついいですか?」

「はい、どうぞ」

「シスター鷹姫も、おもしろいすべきです」

「……………はっ」

「私は一週間のオムツを着けての生活に耐えました。それでシスター鮎美と同じ体験をして多くの新しいことに気づきました」

「……………」

「あなたも逃げてないで同じ体験をすべきです」

「……………」

「これから一週間、オムツを着けて生活してください」

「……………しゅ…修学旅行もありますから…」

「オムツなら、おもしろいしても見た目には、まずわかりませんし、もしバレて、からかう生徒がいたら私が守ります。校則の特別事項で修学旅行中、生徒の信仰を代表する私の権限は飛躍的に高まります。場合によっては他の生徒を退学にもできるほど」

「……………それほど…」

鷹姫は日本国憲法や民法刑法、行政法などは、鮎美といっしょに勉強したけれど、在学している学校の校則は詳しく読んだことがなかった。

「今、オムツはもっていますか？」

「……はい……」

もし鮎美に長時間トイレに行けないような事態が急に生じた場合にそなえて鷹姫はカバンにオムツを入れていた。

「では、それを今から穿いてください」

「つ……こ、ここは駅のホームなので……」

「トイレに入れば済むことです。あ、トイレでオシッコをしてはダメですよ。今から一週間、シスター鷹姫はオシッコは必ず我慢してください。我慢して我慢して、どうにも漏らしてしまうときだけ、出していいです、オムツに」

「………」

「では、電話を切りますから、オムツを着けたら、また電話してください」

「………」

鷹姫は返事をしなかったけれど、陽湖は電話を切った。もともと幼い頃から宗教の勧誘活動に参加していたので、穏やかそうな性格に見えて押しの強さもあり、自分が正しいと信じる道を他人にも歩かせようとすることに迷いは無い。

「………」

ずっと無言で携帯電話を握っていた鷹姫は言われた通りにトイレへ行くこともなく、まして駅のホームでオムツを着けることもなく、電話でもたらされた二つの案件について悩んでいたけれど5分して、陽湖から電話がかかってきた。

「オムツを着けましたか？」

「………いえ……」

「どうして着けないんですか？」

「………嫌です……」

「その嫌なことを、シスター鮎美も私も耐えて成長しました。あなた

も成長するときです」

「……………も…………もう電車が来ました。切ります」

動揺気味に鷹姫は嘘をついて電話を切った。けれど、すぐに陽湖から電話がかかってくる。

「……………」

かなり迷ってから、別の緊急案件だと困ると思い、受話した。

「嘘をつきましたね。井伊方面行きは、あと10分は来ません」

「っ……」

都会と違って平日昼間はJRでも本数が少ない。ダイヤは誰でもネットで見られる。陽湖の口ぶりはネットで調べた感じだった。

「シスター鷹姫、自分の胸に手をあてて、よく考えてください。何が正しいのか、何が罪なのか」

「……………」

「嘘をついて逃げることは罪です」

「……………」

「まだ時間があります。トイレに行ってオムツを着けてください」

「……………せ…………芹沢先生に相談してから……」

「そうやって逃げる気ですね。シスター鮎美が自分にだけ甘いのを知っていて。あなたは卑怯です」

「っ……………私は……………」

「さ、オムツを着けなさい」

「……………嫌です！」

「嫌でも着けなさい」

「嫌です嫌です！」

「……………。少し落ち着いて考え直しましょう」

相手が強く拒否したときは一旦は引いて切り口を変えろというのは宗教勧誘でも常套手段だった。

「シスター鮎美を尊敬していますか？」

「……………はい…………尊敬しています」

「では、彼女と同じことをするのに、どうしてためらうのです？」

「……………わ…………私と芹沢先生は違う人間です。すべて同じにはできま

せん。私には女性を性欲の対象とすることはできません。あなたも、そのはずです」

「……。だとしても、おもしろいについては同じはずです。シスター鮎美も本心では、私たちにオムツを着けることを望んでおられます。私は彼女の導きを受けました。そして新しい喜びを見つけました」

「…喜び？」

「はい、喜びです。おもしろいすることで人は解放され、幸福になります」

「……………私には月谷の頭がおかしくなったようにしか聞こえませんが」

「導きの声は、ときとして耳に届かないものです。けれど、確かに真実なのです。シスター鷹姫も、シスター鐘留も、この真実に気づき、喜びに目覚めてください」

「私も緑野も嫌なものは嫌です。とくに緑野は、あの歳で、いまだ夜尿が治らないことを気にしていますから余計に嫌でしょう」

「……。え？ シスター鐘留はオネシヨするのですか？」

「あ……月谷は、このことを知らなかったのですか？ ……他言無用に願います」

鷹姫は初めて三島が陳情に来たとき同席していたけれど、陽湖がいたか、いなかったかを明白に覚えていなかったし、鐘留から鮎美のように重ねて他言しないよう警告されたわけではないので、うっかり話してしまった。

「…シスター鐘留……、でも、どうしてですか？ 普通、私たちの歳ならオネシヨしないとしますけど」

「……………。心理的な問題というか、ご家族のトラブルというか、……………親子関係の問題のようなものです。詳しくは言えません。とても深刻な問題を抱えています。それも解決はしない類のもので、変えようのない過去の出来事に悩んでいるのです」

「……………そう……ですか……………」

「本当に電車が来ますので、失礼します」

鷹姫は電話を切って3分ほどして来た列車に乗り、井伊駅に着き、

新幹線に乗り換える間に駅弁を選んでいたけれど、また電話が鳴った。あまり着信表示を見る習慣は無かったけれど、今回は見てから受話した。

「もしもし、芹沢鮎美の秘書、宮本です」

着信表示は党支部の固定電話からだったのに、響いてきたのは陽湖の声だった。

「月谷です」

「……………。ご用件をどうぞ」

「あなたは責任を取るべきだと思います」

「……………何の責任ですか？」

「シスター鮎美が都知事選初日に個室で、おもしろしたのはシスター鷹姫に大きな責任があります」

「……………」

「しかも盗撮されてしまって、そのときの動画はいまだにネットに流れています。シスター鮎美は精神の強い人ですから耐えておられますが、もともとの原因をつくったシスター鷹姫が何の責任も取らないのは罪です」

「……………私に、どうしろと…」

「今日、これから、ずっとオシッコを我慢して東京へ行き、シスター鮎美の前で、おもしろしながら謝るべきです」

「……………」

「勇気があるならオムツは着けず、そのまま下着で漏らしてください」

「……………」

「いいですね。今からトイレに行ってはいけませんよ。これは償いなのですから」

「……………償い……………」

電話を終えた鷹姫は食欲が無くなったので、三つ買うつもりだった駅弁を一つにして新幹線に乗った。お茶は買わなかった。昼食を終えた頃に名古屋を通り過ぎたけれど、ときおり陽湖からの確認メールが届いてくる。東京に着くと、また陽湖から電話で咎を受け、夕方に

なって自民党本部である連続した会議に出席する鮎美をサポートするはずだったけれど、動き回ると漏らしそうだったので鮎美へはメールと電話で案内をしてビジネスホテルの部屋で我慢を続けた。夜になって、いよいよ昼から我慢していた鷹姫は青白い顔で議員宿舎に向かう。部屋の前で介式が鷹姫の顔色を見て、懸念を抱いて問う。

「宮本くん、顔色が悪いぞ。どうかしたのか？」

「……いえ……何も……」

「……。こんな夜に芹沢議員へ何の用だ？」

「……報告事項が……あります……」

「身体検査をする」

「つ………やめてください……」

鷹姫が身を固くして両脚を閉じ、腹部を守るように両手で防御すると、介式は疑いを強くした。すでに2度も鮎美にとって身近な人間が狙われ、暗殺の道具に仕立て上げられている。鷹姫の父親は剣道の達人で拉致が容易とは思えないし、ずっと島に居るので家族の拉致も難しいはずだけれど、別のことで脅されているのかもしれない。何より鷹姫の顔色の蒼白さは明らかに普通ではなかった。まるで呪いでもかけられているような、うつろな表情で、いつもポニーテールにしている髪もおろし、顔を隠すようにしている。

「宮本くん、誰かに脅されているのか？」

「……いえ……」

「ともかく身体検査をする。拒否するなら芹沢議員には会わせられない」

「………」

介式は鷹姫の身体に触れて刃物や毒物、爆発物などを持っていないか調べる。他の男性SPは鷹姫のカバンを調べるし、さらに別のSPは静かに離れて鷹姫の家に電話をかけ家族の安否を確認した。鷹姫は危険物ももっていなかったけれど、一つだけ不審な点があった。おろした髪で隠すように携帯電話に接続したハンズフリーマイクを着けていて、イヤホンを片耳に入れていた。通話しながら自動車運転もできるので忙しい政治家秘書が持つ物としては珍しくない事務用品

だったけれど、今現在も通話中だった。

「誰と通話している？」

「……月谷……です……」

「秘書補佐の子か……なぜ、通話しながら芹沢議員を訪ねようとした？」

「……………」

「私が話してみるぞ」

「……はい……」

鷹姫はハンズフリーマイクを抜いて携帯電話を介式に渡した。

「警護中の介式警部だ」

「こんばんは。月谷です。いつも、お勤めありがとうございます」

陽湖は穏やかに挨拶した。

「宮本くんの顔色が悪い。何か事情を知らないか？　そして、なぜ、通話しながら芹沢議員に会おうとしていた？　いかに同級生とはいえ、非礼に過ぎるし不自然だ」

「シスター鷹姫はシスター鮎美に対して償うべきことがあります。なのに、シスター鷹姫が逃げようとするので私が導いていたのです」

「…償う？　宮本くんが何かしたのか？」

「はい。そのためにシスター鮎美はつらい思いをしました。その責任を取らせるべきなのです」

「…そうか……それで顔色が……、わかった。そういう事情なら、私は立ち入らない」

事務所内部のことだと判断したので介式は介入をやめた。携帯電話を返してもらった鷹姫は暗い顔でハンズフリーマイクを接続し直し、イヤホンを片耳に入れた。そしてカードキーで入室する。鮎美は入浴直後のように裸で髪を拭いていた。

「あ、鷹姫。報告って何？　髪おろしてるんや。……顔色、悪いよ？　どうしたん？」

「……まずは……亡き朝槍先生の恋人から、不穏な手紙が来ておりました」

「朝槍先生の……」

そう言われると鮎美の顔色も悪くなる。

「恨み言を書いた手紙で…、脅迫とまでは言えないものですが…、ともかく、報告だけ…いたします…」

「どんな手紙？ 中身は？」

「…手紙は、すでに警察へ送ったそうです…」

「コピーか、写真くらいあるやろ」

「…ありますが…ご覧になっても心労を…重ねるだけかと…」

「うちには、それを見る責任があると思うわ。見せて」

「……………では……………これを…」

鷹姫はカバンからタブレットを出して画像を表示すると鮎美へ渡した。読んだ鮎美は表情を暗くして、左手の薬指にしている指輪を重く感じた。

「…うちの……………せいで…」

「芹沢先生のせいではありません」

「……………とにかく、返事は書くわ。忘れんうちに」

鮎美はパジャマを着ると、便箋を前に考え込む。忙しいので、すぐに書いておかないと大津田のラブレターを忘れたように大切なことなのに忘れそうだった。とはいえ、さらさらと書けるような種類ものでもなく文面を悩む。悩んでいるうちに鷹姫の様子がおかしいことに気づいた。

「……………ハア……………う……………」

「鷹姫、オシッコでも我慢してるん？」

「……………はい…」

「身体に悪いよ。トイレへ行き」

「……………」

鷹姫の目がトイレの方を見て迷い、それから何か言われたように暗く曇ると、震える声で言う。

「……………このまま……………漏らします……………罪を償います…」

「……………。誰かに操られたみたいなの目えして……………」

鮎美は鷹姫を見て、おろしている髪から見えるハンズフリーマイクのコードに気づいた。

「その線なに？」

「……」

「ケータイにつながってるやん。誰と話してるん？」

「………月谷です……」

「陽湖ちゃんか………ってことは、おもらし勧誘されたんやね。うちと陽湖ちゃんて話すし、あんたはトイレへ行き」

「………」

「病気になるよ！ 身体も心も！」

「…ですが………罪の…償いを…」

「ええから、行き」

鮎美は鷹姫をトイレに押し込むと、ショーツをさげて便座に座らせた。お昼から我慢していた鷹姫は遭難していた登山者が救助隊の担架に載せてもらったときのような脱力感に包まれる。鮎美はイヤホンを自分の耳に挿入した。

「もしもし、陽湖ちゃん？」

「はい。あと少しで、おもらしだったのに………トイレでしてしまうと、わからない快感なのですよ」

「あんたは宗教といい、変な趣味といい、人に無理に勧めるのやめい！」

「シスター鮎美なら、わかってくれると思いますのに残念です」

「二度と鷹姫に、おもらし強制せんといて！」

「私は導いただけで強制してませんよ。我慢していたのも漏らそうとしたのもシスター鷹姫の意志です」

「そんな風に宗教勧誘のマニュアル流用せんとき！ あと、うちの家でも漏らさんといてよ！ あんまり何回も漏らしたら母さんも対処を考える言うてはったからね！」

鮎美は電話を切り、鷹姫にも言うておく。

「もう陽湖ちゃんの言うこと聞いて、おもらししようと思わんでええよ」

「………ですが………あのととき………私がトイレを塞いでいなければ………あれは、私の罪………」

「妙な罪悪感も持たんでええから」

しばらく時間をかけて説得すると、鷹姫も陽湖による言葉の呪縛から解放された。鷹姫の目が新興宗教のセミナーにまかり間違つて参加してしまい真つ直ぐな性格につけ込まれて入会しかけていた若年者のような目から、誠実な政治家秘書の目に戻った。鮎美は昼食の駅弁以後、何も食べていないという鷹姫にチャーハンを作つて食べさせる。

「ごちそうさまでした」

食べ終わった鷹姫が食器を片付けているうちに、鮎美は呪いの手紙への返信を書いていた。

「これで静江はんに見てもらつてOKやつたら送つておいて」

「わかりました。……読ませていただいて、よろしいですか？」

「うん、どうぞ」

鷹姫は返信を読んでみる。

小山田清美様へ

前略 小山田様よりいただいたお手紙を拝見いたしました。

たしかに私が居なければ、朝槍先生がヤクザに殺されることもなく、今でも生きてご活躍であつたと思えば、お恨みを受けることは当然だと思います。

また、人の幸せを壊しておきながら、結婚した私のことを軽蔑されるのも当然です。

朝槍先生のこと、そして小山田様に恨まれていることも一生忘れません。

申し訳ありませんでした。ごめんなさい。

どうか、今回の出来事から、あなたが立ち直つてくださいますようにお祈りいたします。早々 芹沢鮎美

読み終わった鷹姫が言う。

「二つ言わせてください」

「うん」

「二つ、やはり朝槍先生を害したのは反社会勢力の仕業です。これももつと強調され、芹沢先生を恨むのはお門違いだと主張しておくべき

です」

「……二つめは？」

「今回の手紙は不問とするが、より脅迫めいたメッセージを送ってきたり、何か害のあることをする場合、即時警察が対応することを知らせておくべきです」

「うん、うちも同じことは考えたけど、文面には入れんかったんよ」「なぜですか？」

「うちが直接に朝槍先生を殺したわけやないことなんて小山田さんも重々承知やろ。そんなん言うても責任逃れにしか聞こえんよ。あと、警察って言葉を出して相手の動きを封じるんも脅迫というか警告とつかせて相手を黙らせるんは、今回の場合、しとくないよ」

「ですが、言っておかなければ短慮に出て、介式師範らがおられますから危険は少ないにしても何かあるかもしれせん」

「そこまでアホな人なら仕方ないよ。……言っておいてあげる方が、未然に犯罪を防げるかもしれんけど……うちの心情的にも、こつちら警察のこと言うて黙らせるのは、しとくない。あと何回か恨みの手紙が来ることくらい受けるべきやと思うわ。この点、静江はんにも伝えておいて。それをふまえての文面やと」

「……わかりました」

「遅くまで、おおきにな。もう休んで」

「はい、私こそ、夕食までごちそうになり申し訳ありません」

「ええんよ。鷹姫が食べてるとこ可愛いし」

「……」

少し頬を赤らめた鷹姫は一礼して退室する。部屋の外で介式に声をかけられた。

「芹沢議員は許してくれたか？」

「はい、寛大な方ですから」

「そうか。よかったな」

介式も鷹姫の顔色が良くなったので安心し、鷹姫が去ってから延長していた勤務を終え深夜番と交替した。

翌3月8日火曜朝5時、詩織は議員宿舎の鮎美の部屋へカードキーで入った。鮎美は15分前に起きてシャワーを浴びて剃毛した後だった。二人とも性行為のために出会ったので挨拶代わりにキスをして、鮎美は匂いを嗅ぎながら詩織を脱がせていく。

「うちのお願いした通り、ずっとお風呂に入らんといってくれたんやね」

「金曜に出会って以来ですから、もう五日目です」

詩織は脱がされながら鮎美が腋の匂いを嗅いでくるので顔を背けて頬を赤くした。

「私は温暖なハワイに行って帰ってきたんですよ。週に2回、ジムでトレーニングもするのに、その後もシャワーを浴びてないなんて、帰りの飛行機で隣になった人に嫌な顔をされました」

「ごめんな、でも、詩織はんの匂い最高よ」

「匂いフェチに應えるのも、ここまできると軽くSMですね。私はMって苦手です」

自分でも不快と思っている体臭を嗅がれるのは詩織の羞恥心に響くようで赤面しながら舐められている。とくに決めたわけではないけれど、鮎美が前半は攻めという雰囲気になった。脱がせた詩織の全身を舐めて楽しみ、二人でシャワーを浴びると受け攻め交替する。

「詩織はんにも、お好みのプレイとか性癖ってあるよね。うちに言うてないようなこと、まだあるんちゃうの？」

何度かの絶頂の後に鮎美が甘えながら問うと、詩織は怪しく微笑んだ。

「そのうち求めますよ」

「なんか怖いわあ、もうテレビカメラの前にバイブ入れられて出演するのは嫌よ。どうしても、って言うなら応じるけど、手加減してほしいわ。せめて連合インフレ税がうまくいくまでは、うちを失脚させんといてね」

「ええ、鮎美には歴史に残る人になってほしいですから。信長よりもガンジーよりも女性でいえばジャンヌダルクより」

「そこまで立派な人と並べられると恥ずかしいわ。けど、三人とも途中で亡くなつてはるなあ……あの三人、生きてたら、もつとビツクになつたんちゃうかな」

「それは、どうでしょうね。ある意味、あの絶頂期に殺されたがゆえ、より人々の記憶に強く、そして美化されて残ったのかもしれないよ。ガンジーをしてインドパキスタンの分裂を止めることはできず、ジャンヌをして英仏の争いに決着はつけられなかったでしょう」

「信長が生きてたら、全国统一は20年早かつたんちゃうかな。朝鮮出兵は……あつたかな……島津氏の琉球進出も……。世界史は、もつと大きく変わったかも」

「いい方になるとは限りません。彼はキリスト教の布教を許していませんし、それが続けば次第に日本が日本でなくなつたかもしれないん」

「詩織はんもキリスト教、嫌い？」

「どうでもいい存在ですが、押しつけがましいところが嫌いです」

「そやね……詩織はんは神様つていると思う？」

「いたら会つてみたいものです。キリストを刺したロンギヌスが羨ましいくらいです」

「神様を刺すん？」

「ええ、神様なら痛くも痒くも無いはずですよ。どんな顔をするのか見てみたいです」

「……神様はともかく人の身で刺されると、めっちゃ痛いよ」

鮎美がそう言うのと詩織は舌を出して、鮎美の下腹部の斬られた傷跡を舐めた。もう跡は残つていないけれど、どこだったのかは覚えていない。

「刺されたとき、どんな感じでしたか？」

興味津々という顔で詩織が問うた。

「うくん……最初は、そんなに痛くなかつてん。もちろん、痛かつたけど、あとから来た激痛に比べたら、ぜんぜん。で、じわじわ痛くなつてきて立つてられんようになって、血まみれやし、身体も冷たくなつてくるし、うちは、もう死ぬんや……そう思つたわ」

「ということとは、鮎美は、いずれ二度目の死の体験をすることになりませぬ」

「そやね……90年くらい先であつてほしいけど」

「けっこう長生きするつもりなんですね。フフ」

「うちが言い出した連合インフレ税を世界各国が受け入れてくれるなら、そのあと、どうなるか、見届けたいやん。できるだけ長く。きつとケインズもマルクスも、長生きしたかったと思うよ」

「もうそんな話よりプレイに集中してください。次に会えるのは修学旅行からの帰国が3月11日金曜で関空ですし、土曜が卒業式、そのまま地元で……。私とは、また火曜朝まで、一週間は会えませぬね」

「一週間、お風呂やめてほしいって頼んだら？」

「このヘンタイ」

「やつぱり、あかんよね……」

「ま、考えておいてあげます。我慢できなくなったらやめますけど、忙しくて入浴の時間が無い日もありますから。それに卒業証書を手にする前の正真正銘の高校生としての鮎美と抱き合えるのは今が最後、その鮎美が願うことですから、耐えてみてあげます」

「やった。おおきに」

「でも、夏場は絶対嫌ですよ」

「夏になったら、詩織はんと新婚旅行に行きたいわ。国会も休みあるやろし」

鮎美が左手で詩織の左手を握った。それで二つの指輪が触れ合う。

「詩織はんに出会えて、うちホンマ幸せよ」

「ええ、私もです」

そう言つてキスをする、また燃え上がつて抱き合う。鷹姫にはギリギリまで顔を出さないように言つておいたので本当に遅刻ギリギリになつて部屋を出る。その寸前にもキスをした。やつと自分の性的指向と合う相手に出会えて結婚した喜びで一秒でも長く、いっしょにいたかつた。国会に出席すると、直樹が言ってくる。

「おはよう。キスマークがついてるよ」

「っ、どい?!」

鮎美が慌てて首筋に触れるのを直樹と音羽が可笑しそうに笑った。

「うう……カマかけおつて……」

「アユちゃんの新婚生活、どうなの?」

「……うん……まあ……まあ……」

多忙で時間が無く夜より早朝に抱き合っているとは言えないし、自分の趣味嗜好で何日も入浴しないでいてもらっているとも言えない。鮎美がお茶を濁していると音羽が言ってくる。

「一応言っておくし、アユちゃんに横取りされるとは思わないけど、アユちゃんと直樹はもともと仲が良かったし地元いっしょだから黙っておくのもなんだからさ」

そう前置きして音羽が鮎美の耳に囁いてくる。

「私と直樹、付き合うことにしたから、よろしくね」

「え?! 民主党と共産党やの?!」

大きな声は出さなかったけれど、かなり驚いた。

「恋愛に党は関係ないじゃん。性別まで関係ない人が今さら驚くこと?」

「意外というか……何の前触れもなかったというか……いきなりやん」

「アユちゃんが見てないところで、いろいろあったの♪」

「そらま、そやね。ついクラスメート気分やったけど、学校とちやうやらね。で、いつ結婚すんの?」

「そんなアユちゃんみたいに電撃ではやんないよ。まだ付き合い始めただけ」

「ま、ボクの3年後の国民審査次第かな」

仲良くなった男女を鮎美は微笑ましく見て国会スケジュールを終え、鷹姫と修学旅行のために夜の羽田空港に來た。最終便で関空へ飛ぶつもりだったけれど、搭乗口で2社のマスコミにカメラを向けられた。

「芹沢議員、明日から国会を欠席して修学旅行に出られるのは本当で

すか？」

「はい」

想定していた事態だったので冷静に答えた。

「国会議員として、本会議もある中で欠席されることについて、どうお考えですか？」

「できるだけ欠席したくないと思っていましたし、寸前まで迷っていたのですが、私の高校は修学旅行に出席しないと、大きく単位を落としてしまう教科があり、結果として高卒資格を得られないか、かなりの多数回にわたって行われる補講に出る必要があります、やむなく修学旅行だけは行かせてもらうことにしました。あと土曜の卒業式をふくめて4日、国会議員としての活動をお休みさせていただきます」

「それで国民への責務を果たしたことになるかと、お考えですか？」

「はい。今後、クジ引きで選出される議員にしても、衆議院議員にしても、どこまで私生活を犠牲にして議員活動を行うか、という問題に直面することと思います。この問題が今まで、産休や育休の問題を含めた女性議員の増加を阻んできた側面もおおいにあると考えますし、また男性議員の家庭生活での不在化ということも出てきます。結果として、おおむね子育ての終わった時期である50歳以上の男性ばかりという議員社会が出来上がるわけです。多くの社会経験を積んできた50歳以上の男性の国政参加は、きわめて重要ですが、彼らばかりというのは、どうでしょうか？ そう考えたからこそ、無作為に選出される参議院制度が始まったわけで、幅広い年齢層と男女半々で構成される参議院においては、大学生大学院生は当然、私と同じくギリギリ高校生で当選ということもできます。そのとき、卒業式や修学旅行など大きな行事と国会出席が重なったときどうするか、と迷う局面も出てくる中で、最初の一步になる自分の歩みを、非常に迷いましたが、のちのち広く開かれた国会と持続可能な議員活動ということを考えたとき、修学旅行と卒業式への参加を決めました」

考えていた長いセリフを言い、一礼して飛行機に向かった。国内線なので身体検査だけでパスポートなどは出すことなく座席に座った。隣に鷹姫、そして周囲にSPという形になり、周りに聴かれない声で

鷹姫に言う。

「思ったよりマスコミ少なかったね」

「内閣が外務大臣が抜けたことで不安定ですから、そちらへの批判と取材が多く、芹沢先生の欠席はニュースにならないかもしれません」

「微妙なところやもんなあ……国会と卒業式、修学旅行、どっちが大切やねん、となったとき、どっちにも理由はあるし。ま、鳩山内閣がガタガタのときでなくて、他に大きなニュースも無い時期やったら、もつと集まってたかもしれないけど、ある意味、鳩山総理さまさまやね」

「この分では関空では取材は無いかもしれませんが」

「そやね。とりあえず着くまで寝ておこか」

「はい」

そう言ったものの、鷹姫は初めてのフライトだったし、鮎美も飛行機に乗ったのは家族旅行をふくめて数えるほどしか無かったので眠くなる前に大阪の関西国際空港へ着陸していた。すでに時刻は23時前だったけれど、まだ合流するはずの他の生徒たちを乗せた修学旅行バスは来ない。陽湖からメールが来ていて名神高速道路の事故渋滞のために予定より遅くなるようだった。

「渋滞なんや、しゃーないな。ま、最悪でも飛行機が待つてくれる飛行機やし大丈夫やね。学校が飛行機を所有してるとか、すごいな。どんだけ寄付金あってんろ」

「正確には、教団の世界本部が所有している飛行機で、それを一年を通じて世界各国にある教団所属の学校に貸し出し、聖地エルサレムへの巡礼に使っているそうです。いわば、うみのこの世界版のようなものです」

「……うみのこ、って何？ どこかで聞いたことあるけど……」

「あ……芹沢先生は小学校を大阪で過ごされましたから、うみのこの印象が薄いのですね。琵琶湖を周遊している大きな船です。県の事業で小学校5年生を乗せ、船内宿泊もできる設備があり、琵琶湖の環境などを修学旅行として学ぶのです。県内すべての5年生に体験してもらうため、一年を通じて運行されています」

「ああ、そんなんもあつたね。うみのこの世界版か。どんな飛行機なんやろ」

鮎美は修学旅行のしおりをめくった。

「ふーん……エアバスのA321……最大乗客220人……けっこう大きいなあ。学年全員と先生ら、それに、うちのSPを乗せてもらっても余裕あるやん。めちや手荷物を制限されてるから、ボロい飛行機やったら怖いと思ったけど、まともそうやね」

「分類としては中型ジェット機のようにです」

鮎美と鷹姫が話ながら空港玄関あたりを歩いていても取材は無く、日付が変わる頃に修学旅行バスの列が到着した。

翌3月9日水曜の午前0時、やつと到着した修学旅行バスから陽湖と鐘留が降りてきたけれど、顔を隠して泣きじやくる鐘留を支えるようにして陽湖が抱いていて、何があつたのだらうと鮎美と鷹姫が見ると、鐘留の冬制服のスカートが座つたまま小水を漏らしたように後ろだけ濡れていた。

「陽湖ちゃん……あんた、まさか……こんな学年全員がそろつてる中で……カネちゃんに……おもらし強制……。ありえんやろ、かわいそうすぎるわ」

「緑野……。月谷！　あまりに非道です！」

「ち、違いますよ！　私は何もしてません」

「ほな、なんでよ?!」

「シスター鐘留はバスの中で寝てしまつて……寝たのは渋滞もあつて、みなさん眠つていたのですけれど、さつき空港に着くということのできたのです。そうしたら、シスター鐘留は眠っているうちに漏らしてしまつたようで……。泣き出されて……。本当に私は何もしていませんよ。私は嘘をつきません」

「……………」
陽湖が嘘をつかないことは信用できるし、鐘留に夜尿症があることは鮎美も鷹姫も知っていた。

「カネちゃん……こんなときに……」

「ひくっ…ううっ…」

鐘留は顔を隠して泣き続けている。そして、同じバスだった他の生徒たちは鐘留が泣いている理由を知っているし、それが他のバスに乗っていた生徒たちにも広まってしまう。

「あいつ、なんで泣いてんだ?」

「緑野さん、おもしろしたらしいよ」

「違う。オネショだったって」

「うそ、マジで?!」

「この歳で死にたくなるだろ」

「ザマないよね、笑える」

「あの子、調子に乗りすぎだし」

「神様っているんだよ、天罰天罰」

大きな声ではないけれど、からかいの声が飛んでいて、とくに女子からのいたぶりが酷かった。鐘留の家が裕福で本人もモデルになるほど可愛らしく、しかも謙遜せずに自慢していたので同性からの鬱屈した感情は強く、それがあざけりになって投げつけられている。このさい鮎美の秘書補佐という立場になっているのも注目を集めてしまっていた。

「カネちゃん…とにかく着替えよ。着替えある?」

「…ぐすっ…ううっ…無いよお…持ち物、ぜんぜん無いもん…」

「そやった。普通、体操服くらい修学旅行に持たせるやろに」

鮎美も貸してやろうにも、自分が着ている制服と下着、そしてカバンには替えの下着1組しか無い。極端に持ち物がない旅行だった。

「ううっ…ううっ…ひうううっ…」

泣き続ける鐘留がかわいそうで、鮎美と陽湖が同時に言う。

「スカートを貸してあげるから」「泣くことないよ」「泣きやんでください」

鮎美と陽湖が目を合わせた。

「うちが貸してあげるわ。陽湖ちゃん、生徒会長として、これから色々あるやろ」

「ですが、シスター鮎美は議員で…」

「修学旅行中は、ただの生徒よ。カネちゃん、おいで」

ずっと顔を隠している鐘留を女子トイレに連れて行き、スカートと下着も交換してやった。鐘留はお礼を言う気も回らず泣き続けている。鮎美は濡れたスカートのお尻を鏡に映してみた。だんだん乾いてきて、あまり目立たなくなりつつある。平気な顔で立っていれば、とくに問題なさそうだった。

「…ううっ…ひううっ…」

「カネちゃん……」

泣き止むまで抱きしめていようとしたけれど、出発の時刻も近づいてくるので鷹姫が呼びに来た。

「芹沢先生、そろそろ出国手続きなどを始める都合もありますから」

「そやね……カネちゃん、行く」

嫌がって帰宅すると言い出すかと心配したけれど、その気力も無いのか、泣きながら手を引かれるまま鐘留はついてくる。空港ロビーでは修学旅行らしく生徒たちが整列して点呼を受け、人数確認が済むと教頭が注意事項などを話し、次に屋城が短い礼拝を行い、そして陽湖が前に立って話し始めた。

「この修学旅行は私たちの学園生活の締めくくりとして執り行われま
す」

「緑野が漏らしたらしいよ」

「あはは、やっぱ、それマジ」

「だって泣いてるじゃん」

「ホントだ。笑える」

「あいつムカつくから、いいきみ」

陽湖が話し続けているのに私語がやまない。ほとんどの生徒は大学受験などの進路も決まり開放感もあつて規律が無い。

「静かに私の話を聴いてくださいー」

「バスの中でオネショだって」

「普通しないよね」

いつまでも私語を続けているし、鐘留への揶揄が大半だった。だん

だん腹が立ってきた鮎美が怒鳴ろうとする直前、陽湖が叫んだ。

「そんなに人の失敗が可笑しいですかっ！」

「「「「……………」」」」

静かになつたけれど、まだ一部の女子たちはクスクスと笑っているし、鐘留は泣き続けている。

「わかりました。笑いたいなら、私を笑ってください！ 私も漏らしませんから」

そう言い放つた陽湖は立った姿勢のまま、深めの呼吸をして下腹部の力を抜いた。長いバス移動で、それなりに貯まっていたのでビチャビチャと音を立てて漏れ出てくる。少し湯気があがり、陽湖の足元に水たまりができた。陽湖の故意によるおもらしで水を打ったように生徒たちが静かになる。

「さあ、笑ってください」

誰も笑わないし、もともと他人に親切で、嘘もつかず、信仰心厚い陽湖の人望は高かったので、泣いている鐘留のために自分まで濡れて見せたことに賞賛さえあがる。

「月谷さんって優しいよね」

「あの人、完璧だよな」

「普通できないよ」

「わざとでも漏らして、あんな堂々としてるとか、すごいな」

「あいつが議員だったら、どうだろう」

「うーん……………いいような……………オレらの学校の宗教、ちよい変だから微妙なような」

陽湖が時間が無いので言う。

「私からの話は飛行機へ搭乗してからとします。みなさん順番に手続きしてください！」

ぞろぞろと生徒たちが動き出し、陽湖は汚してしまった床をハンカチやティッシュで拭くけれど漏らした量が多いので足りない。鮎美と鷹姫も手伝い、床を掃除してから、まだ泣き続けている鐘留を連れて搭乗手続きを終え、ターミナルの一番端だった教団専用機に乗った。細長い機内は中央に通路があり、左右に3列ずつシートが並んで

いる。トイレは前方と後方の二カ所だった。

「うちの席は……一番後方に介式はんらとやね」

鮎美の席は最後部だった。鷹姫と鐘留は中央部で、陽湖は最前列だった。

「カネちゃんの隣がよかったけど……席、変わってもらおかな……」

泣いている鐘留が心配なので離れたくなかった。中央部に指定されている鐘留と鷹姫の席も離れている。

「どういう席割りやねん。うちがSPと、ひとまとまりなんは、わかるけど……。鷹姫、誰かと変わってもらってカネちゃんの左右を空けてもらって！」

「はい」

鷹姫が席替えを交渉しようとする、陽湖が言ってくる。

「今は、その席割りで我慢してください。すぐに離陸しますから」

「けど、陽湖ちゃん……」

「これ以上、シスター鐘留をからかう人がいたら、私が許しません！」

かなり強い口調で陽湖が言ったので機内に響き、泣きながらも鐘留は一人で座り、あまり仲が良いわけではない男子に挟まれた。その男子たちも無用な叱責は受けたくないで黙って座る。全員が着席すると、わかりやすい発音の英語でシートベルトを着用するように案内された。鮎美は湿っているスカートで座席を汚さないようクルリと回転させて濡れたところを前にしてから座り、シートベルトを締めながら隣になった知念に言う。

「日本語の案内が無かったけど、パイロットは外国人なんか？」

「そんな感じっすね」

「話を変えるけど、桧田川先生と結婚しそう？」

「プライベートなことには答えないっす。あと、こういう出発のタイミングで、この仕事から帰ったら結婚するんだ、とか言う、途中で撃たれたりして死ぬのパターンっすから。まだ結婚しないっす」

「それは賢明かもね。うちも自分のせいで人が亡くなるのはイヤやわ」

そう言いながら鮎美が知念の胸に触れ、スーツの中に手を入れてカッターシャツの上から撫でてくるので知念は赤面した。

「ちよっ、ど、どういうつもりっすか?」

「ちちゃんと防弾チョッキ着てるんやなあ、と」

鮎美はカッターシャツの下に着込んでいる防弾チョッキの感触を確認しただけだった。

「これ重いん?」

「そんな重くないっすよ。気候によっては暑苦しいっすけど。というか、前から思ってたんすけど、男の身体に平然と触るの、よくないっすよ。芹沢議員に、そのつもりがなくても、触られた方は気があるのかと変に思うっすから」

「あゝ、すんません。気をつけます。さて、鷹姫の席も遠いし、寝るしかないかな」

「イスラエルまで長いフライトっすからね」

話しているうちにA321の巨体は動き始め、滑走路に出ると加速し離陸する。つい先刻も羽田から関空まで飛んで来た鮎美は飛行機が珍しくなくなつたので今度こそ寝ようと目を閉じたけれど、京都上空を飛んでいるうちに陽湖がマイクで全体に放送を始めた。

「神に仕えているシスター、ブラザーのみなさんは前方の会議室に集まってください。他の生徒たちは眠らずに待っていてください」
「……なにか始める気なんや……」

最後部にいる鮎美からは見えにくいけれど十数人の洗礼を受けている生徒たちが機体前方にある小さな会議室に入っていく。中型ジェット機の設計としてはエコノミーより高価なシートを並べる部分半分を犠牲にして部屋にしていた。屋城と聖書研究科の教師も入っていく。

「寝んと待てて、この時間に……」

もう深夜だったけれど、多くの生徒にとっては飛行機が珍しいし、修学旅行気分なので、まだ眠気は襲ってこない。陽湖たちが会議室に入って30分、もう日本の領空を離れた頃になって出て来た。出て来た陽湖たちの姿が機内天井に設置されているモニターに映るので最

後部の鮎美にも、よく見えた。

「……なんや……あのカツコ……」

陽湖は制服から司祭のような紫色のローブに着替えていて、他の信仰心厚い生徒たちも黄色のローブを着ている。

「これから、この修学旅行の意味を説明します」

穏やかなのに確かな声で陽湖が全体に向かって言った。

「神を信じていない生徒のみなさん、あなた方にとって、この修学旅行が最後のチャンスになるかもしれません」

「「「「………」」」」

生徒の9割は陽湖たちが信じる神を信じていないし、神道や仏教に影響されているわけでもない生徒たちなので、この3年、長い生徒では中学から6年、何度もあつた説教なのだと思いつつも、いつもより雰囲気重いので、やや圧倒される。

「今、この飛行機が墜落して全員が死んでも、私たち神に仕えるシスターブラザーは永遠の楽園に復活しますが、神を信じていない人は救われません」

「陽湖ちゃん……イヤなこと言うなあ……フライト中に墜落なんて単語、結婚式で離婚の話するくらいタブーやん……」

鮎美と同じことを感じた男子生徒が陽湖へ野次を飛ばす。

「感じ悪いぞ！ 墜落とか言うな！ だいたい、お前らウザいんだ！」

「すべて真実です」

「お前の脳内だけでな!!」

「……」

ナイスつつこみ、と鮎美は思ったけれど、陽湖とはさんざんに論議したので、もう話すことはなく穏やかな人間関係が続けたいと思っているので黙って聴く。

「これから最後の指導を行います。この導きに逆らう場合、卒業に必要な聖書研究科の単位は与えられません」

「なっ?! それ横暴だろ!!」

「信仰の自由とかあるだろ！ おい！」

他の男子生徒も野次を始めたけれど、陽湖は微塵も動じない。

「この学園に入学するさい、神の導きの声に耳を傾け、正しく生きようと努めることを誓約する文書に全員が署名したはずです」

「……あれか……」

多くの生徒にとつては3年6年前のことだったけれど、鮎美にとつては編入した1年前のことなので、よく覚えている。今でこそ法律を勉強したので、そこにあった文言が信仰の自由を侵さない範囲で、聖書研究科の授業などに耳を傾け、従う努力をし、それに逆らい学園の秩序を乱すとき、単位が与えられないことや退学になることに同意する巧妙な文書だったとわかる。

「しかも日本の領空を出てから言い出すとか……っ！ 陽湖ちゃん!!

この飛行機の登録国は?!」

この一年、演説で鍛えてきた鮎美の声は最後部から最前部にいる陽湖まで届いた。陽湖の声は小型マイクを着けているので、おごそかなエコーがかかって響いている。

「イスラエル国です、シスター鮎美。そして私のことはシスターをつけ、シスター陽湖と呼んでください」

「………やられた……」

鮎美が額に手をあて空で天を仰いだ。知念が問う。

「それが、まずいつすか？」

「知念はん、警察官やろ。身体ばかり鍛えてんと、法律も勉強しい。機上での犯罪は、その飛行機の登録国で裁判されるんよ」

「そ、それくらい知ってるつすよ！ オレ、要人SPですから！」

「そやったら意味わかるやろ」

「………別に、悪いことしなきゃいいんじゃないつすか」

「うちもイスラエルの法律を知ってるわけやないけど、宗教学校に同意書も出して入学してるもんが、その指導に逆らって秩序を乱したとき、日本の刑法188条の礼拝所不敬及び説教等妨害の罪なんか比較にならんくらい厳しく裁かれると思わん？ ユダヤ、イスラム、キリスト、その三つの宗教が聖地にひしめきあって、人口の大半はユダヤ教の国の法律が、日本ほど甘いと思う？」

「う……………なんかヤバそうっすね……………オレらは関係ないっすよね。SPだし、同意書は出してないし」

「たしか、機長には警察権まであったよね？」

「はい、あるっす」

「……………もう、あかんわ、逆らわんとこ…」

鮎美は無難に修学旅行を終えるため、陽湖に逆らわないことにした。同じことは鷹姫も思い至ったようで黙って考え込んでいる。他の生徒たちも細かい理屈はわからないけれど、何より卒業できないと高卒資格を得られず、せつかく決まった大学などに入学できない可能性は、卒業できなくても議員や秘書たる立場を失わない鮎美たちより深刻なので野次が止まった。陽湖がおごそかに続ける。

「これから洗礼を受けていない生徒全員に信仰告白を行います」

そう言った陽湖は英語で機長と内線電話で会話し、天候が安定していることを確認してから生徒たちに命じる。

「生徒は全員、姿勢をただし、座席番号5Aから13Fに座っている生徒は起立して順に通路に並んでください。13Fの生徒が最後尾です」

言われたとおりに生徒たちが動く。座席は横にA B C D E Fと6席あり、5から13列までなので、およそ48人が並ぶと最後尾は鮎美のそばまで伸びてきた。さらに、学園生活中もよく聴いた賛美歌のような音楽が流れ、陽湖は一番前にいる女子生徒に問う。

「シスター理恵、あなたは神を信じますか？」

「はい！ 信じますー！」

一番前に並んでいた生徒は、すでに実の姉が洗礼を受けていて本人も高校2年生頃から日曜礼拝にも参加するようになり、近々洗礼を受けようと考えていた生徒だったので、この機会に決断する。

「私は神に仕えるため、洗礼を受けたいと思いますー！」

「素晴らしいことです。私はシスター理恵を祝福します」

そう言った陽湖は理恵と抱き合い、それから理恵を会議室に送る。理恵には洗礼を受けている黄色のローブを着ている女子生徒が2名つき、会議室に入っていた。次に陽湖は二番目に並んでいる男子生

徒に問う。

「ブラザー康文、あなたは神を信じますか？」

「はい、信じます」

その男子生徒も3年生の一学期から日曜礼拝に参加するようになり、それなりの信仰を持ちつつある生徒だった。

「では、ブラザー康文は洗礼を受けますか？」

「……………はい！ 受洗を望みます！」

最後の迷いが無くなり宣言した。陽湖が右手を出し、男子生徒と固く握手をする。そして康文は会議室の前に導かれ、少し待って先に入っていた理恵がオレンジ色のローブを着て出て来たのと交替に2名の洗礼済み男子生徒と入っていった。理恵は元の席に座る。

「ブラザー良樹、あなたは神を信じますか？」

「はい、信じます」

同じようなことが繰り返され、6人の生徒が受洗を宣言してオレンジ色のローブに着替えていったけれど、7人目の生徒は迷った。

「シスター桜、あなたは神を信じますか？」

「……………はい……………信じていると……………思います……………」

「では、シスター桜は洗礼を受けますか？」

「……………まだ……………ときが来ていないと思います……………ごめんなさい……………ああ！ ごめんなさい！ ごめんなさい！ シスター陽湖、どうか許してください！ ごめんなさい！」

桜が両膝をついて陽湖に謝り泣き出した。陽湖は優しく桜を抱いて言う。

「いずれ、シスター桜にも導きがあります。そのときまで聖書の教えを大切にしてください」

「はい！ はい！」

泣きながら頷いた桜もまた会議室に導かれ、しばらくして青銅色のローブに着替えて出て来た。鮎美がつぶやく。

「色で分けていくんや……………うち、何色にされるんやろ……………信じてへんと黒かな……………あ、この席順……………もしかして……………」

鮎美は飛行機の前から後ろまでの席順の理由に見当がついた。陽

湖が最前列で、最初に会議室へ集まった洗礼を受けている生徒たちも教師たちと並ぶ前列だった。そして、信仰を告白し、洗礼も受けたいと言った生徒たちも前の方にいる。逆に在学中に素行の悪かった生徒、ありがちな喫煙や飲酒で停学処分を受けたり、万引きで補導された生徒などは後部に座っていた。そして鮎美の予想を裏付けるように桜の後だった5人の生徒は神を信じつつあると言うものの洗礼を受けるのは保留し、青銅色のローブになった。その次の女子生徒は思いきって受洗を宣言し、オレンジ色のローブになった。さらに次の男子生徒に陽湖が問う前に全体に言う。

「座席番号14Aから順に起立して並んでいってください。座っている生徒も姿勢をただすように！」

「……………」

16Eだった鷹姫が無言で立ち上がり、行列の最後尾に並び、鮎美のそばになった。

「このような茶番、いつまで続ける気なのでしょう？」

「最低でも全員に質問するやろね。せめて着陸したら終わってほしいわ。帰国するまでやと、ぞっとする」

「はい、まったく」

鷹姫と鮎美の他にも私語を始めた生徒がいたので陽湖が警告してくる。

「私語は慎んでください！ 神聖な信仰告白を妨げることは許されません！」

「……………」

鮎美は軽く肩をすくめ、鷹姫はタメ息を飲み込んだ。

「シスター愛花、あなたは神を信じますか？」

「……………信じたいとは思いますが、信じ切れていません」

「正直は美德です。シスター愛花に祝福のあらんことを」

愛花はオリーブ色のローブになった。

「ブラザー貴久、あなたは神を信じますか？」

「いいや、信じてない」

はつきりと貴久が言った。その断言に後ろに並んでいる生徒の何

人かが静かな賞賛を送っている。陽湖は動じずに受け止める。

「神はいつも私たちを見ておいでです」

「……戦争ばつが続くのか?」

以前に鮎美も問うたことだった。そして答えも予想される。

「この世が間違った道に進むのは、アダムが原罪を犯し、サタンに隙を与えたからです。私たちと、いつしよに聖書を学びましょう」

「……で、オレは何色だ? 赤レンジャーがいいな、リーダーがよ」

貴久は素行も成績も良い生徒だったけれど、在学中の聖書教育には不満をもっていたようで悪態をついている。会議室に入るとローブではなく白い長袖のシャツとズボンで出て来た。そして変身ポーズを取る。

「ホワイトレンジャー参上!」

「ブラザー貴久、ふざけるのはやめてください」

「やめなきや退学か?」

「その可能性もあります」

「怖え……オレ、一応は同志社大学に受かったからさ、頼むぜ、卒業単位。っていうか、オレ、単位はもらえるのか? 聖書研究科の。もらえないなら、オレ、神を信じるぞ」

「この修学旅行中の態度と課題に取り組む姿勢によります」

「……あくあ……やっぱ、信じてると答えておけば、よかったか……」

「嘘は罪です。その罪を犯していないブラザー貴久を神はよく見ておいでです」

「……はあ……」

貴久はタメ息をついて元の席に座った。その後は白いシャツで出てくる生徒が多くなり、だんだんと多数派になっていく。

「ブラザー義隆、あなたは神を信じますか?」

「正直に言っているのか?」

「はい」

「クソムカつくんだよ、この神ボケ女!」

そう言つて義隆は陽湖の顔を叩いた。叩かれた陽湖は軽い身体なので倒れそうになるけれど、背後にいた黄色のローブを着ている生徒たちが支えた。そして暴力行為なので教師たちが義隆を捕まえる。

「離せやコラ！ もう付き合つてられるか！ オレは帰る！ おろせ！ 卒業なんか、どうでもいいぜ！」

喚いている義隆へ恐れず陽湖が言う。

「ブラザー義隆、あなたは手加減してくれました。許します」

「くっ……うぜえ！ 誰が女の顔面、思いつき殴るか！」

学園そのものが、それなりに偏差値の高い学校なので素行の悪い生徒でも程度は低すぎない。しばらく悪態をついた義隆がおとなしくなったので再び陽湖が問う。

「ブラザー義隆、あなたは神を信じますか？」

「……信じない……」

義隆も白いシャツになった。次が鷹姫の番だった。

「シスター鷹姫、あなたは神を信じますか？」

「わかりません」

「……。わからないとは、どういうことですか？」

「まったく、わからないということですよ」

「………神を信じていないのですか？」

「そもそも、神というものが、どういう存在で、それを人が見聞きできうるのか、そもそも世界を創った存在が、世界に内在するのか、そんな禅問答になります。そんな問いへの答えは、まったくわからないというのが正答ですよ」

「……お考えはわかりました」

鷹姫はオリーブ色のローブで出て来たけれど、陽湖に不満を言う。

「白のシャツとズボンにしてください」

「なぜですか？」

「不相当です。そしてローブのようなこの服は、とつさのときに動きがとれず、万一にも芹沢先生を守れないことがあつては悔やみきれな

いからです」

「……………」

判定を覆すことが可能なのか、陽湖は屋城と相談した後、鷹姫に着替えさせた。また、しばらく白のシャツが続き、鐘留の番になった。まだ泣いていた。

「…ひっく…ううっ…」

「シスター鐘留、あなたは神を信じますか？」

「ううっ…うっ…」

泣きながら鐘留が頷いた。意外だったので陽湖が問う。

「シスター鐘留、神を身近に感じますか？」

「…ううっ…うああっ…ぐすっ…ひぐうう…」

もう何も考えていない様子で、とりあえず頷いている。陽湖はオレンジ色のローブを選ぶ動作をして配下の黄色ローブたちに会議室へ鐘留を案内させたけれど、しばらくして困った顔をした黄色ローブに相談され、自ら会議室に入って鐘留と話した。

「シスター鐘留、聖書以外の一切の私物は預けてください」

現金、携帯端末はもちろん、すでに手荷物は機内下部の貨物室で、さらに学園が貸し与える衣服に着替える前には下着も靴も髪飾りも預かり、革のサンダルと月経中の女子には木綿の綿と腰布を与えていた。鐘留は月経で使うナプキンを握りしめて離さないでいる。

「ぐすっ…ナプキンだけ…ううっ…でないと、またオネシヨするから…ううっ…寝ると必ず…ううっ…怖い夢みて…うう…誰にも言わないで…」

告白したくないことを涙ながらに告白して頼んでくるので、陽湖も可哀想になったけれど、規則には従わせる。

「今夜も明日の夜も課題が多く、眠る時間は無いかもしれません。シスター鐘留には後でトイレに近い席に移動してもらいますから、よく注意して頻繁にトイレへ行ってください。生理で使ってもらおう木綿の綿も多めに渡します」

「うう…ヤダよ…もう帰りたい…ひうう…」

「飛行機は引き返すことはできません。従ってください」

やや強い口調で陽湖が言うと、鐘留はビクリとして従うことを選んだ。握っていたナプキンを渡して、制服を脱ぎ、下着も靴も預けて全裸となり、木綿の綿を股間にあてると腰布で巻いてからオリーブ色のローブをかぶった。

「…ぐすつ…」

「何も怖いことはありません。私たちの導きに従ってくださいれば、きつと希望を見いだせます」

「…ホントに？」

「はい、信じてください」

「…ぐすつ…」

それでも泣きながら鐘留は席に戻り、陽湖も信仰告白を続けた。白いシャツが続き、次の男子生徒へ陽湖が問う。

「ブラザー泰治、あなたは神を信じますか？」

「ボクはプロテストダントだから信じている」

「宗派の違いを超え、神の導きがあります。お互い、よく聖書を研究いたしましょう」

陽湖はオリーブ色のローブを選ぼうとしたけれど、泰治は続けて言う。

「けどさ、…一つ、言っておきたい」

「はい、どうぞ」

「…ボクは…」

よほど言いにくいことなのか、泰治は何度も深呼吸した後、陽湖よりも機内全体に向かって叫んだ。

「ボクはゲイだ！　そして義隆が好きだ！」

「」「えええーっ?!?!」「」

機内が騒然となる。男子も女子も騒ぎ出して陽湖たちが注意して静粛にさせるのに、かなりの時間を要した。そして疲れを隠して陽湖が告げる。

「ブラザー泰治、あなたは列の最後尾、シスター鮎美の後ろに並び直してください」

「え…それ、って、どういうっ?」

「あなたへの説論は長くなります。少し待っていてください」
「わかったよ……」

泰治は踵を返して最後尾を目指した。その途中で義隆と目があつた。この3年、バレエ部で切磋琢磨した仲だった。

「義隆……いきなりで、ごめん、あと、隠してて」

「いや……けど……オレは……仁美と付き合ってるから……それに男に興味ない……ごめん」

「うん、知ってるよ。ごめん。言いたかったから、言った。卒業したら、もう会わないしさ」

「そうか……」

短い別れがあり、泰治は最後尾に行く。もう鮎美も残りの人数が少ないので起立して並んでいて、その後ろにつく。

「芹沢さん、ありがとう。君のおかげで勇気をもらった」

「タイジはん……」

学年は百人を超えているので確率的に同性愛者が鮎美の他に一人二人いて自然だったけれど、カミングアウトが容易でないことはお互い身に試みている。ずっと隠して苦悩してきた経験は二人に固い握手をさせたし、握手だけで足りず、思わず抱き合ったので周りが言うてくる。

「おいおい、お前ら、そのまま付き合えよ」

「……ははは……」

抱き合っていた状態から離れて異性愛者たちに語る。

「うちは男には感じんのよ。あんたらが男同士で抱き合ったとき、何も興奮せんやろ？」

「ボクもだよ。女の子は、よくわからない」

そう言った泰治へ、スカートを短く改造することでは鐘留と1、2を争っていた女子が言うてくる。

「だから私が誘ってもスルーしたのね……あくあ！ 好きになつて損したー！」

「ごめん」

「ゲイってさ、見た目でわかんないの？ 見分け方とか無いの？」

「一応、ボクは左耳だけにピアスをしてるだろ。これはオシヤレじゃなくて、そういうシグナルらしい。通じないことが多いけど」

「覚えとくわ」

「私語は慎んでください」

また陽湖が信仰告白を続けるけれど、後部の生徒になるほど素行が悪くなるので罵倒も受ける。

「シスター由香里、あなたは神を信じますか？」

「人のことキモい呼び方しないでよ！」

そう言つて由香里は陽湖の顔面に唾を吐きかけた。今まで同じことをしようかと考えた男子もいたけれど、実際に陽湖を前にして、女子の顔面に唾を吐くのは難しくて白シャツになつている。唾を吐かれた陽湖は拭いもせず、悲しそうに由香里を見て再び問う。

「あなたは神を信じますか？」

「アーメン♪ ザーメン♪ クリトリス♪ ハレルヤ♪ チンチン腫れてきた♪」

由香里が賛美歌を替え歌にして唄った。由香里の両親は離婚していて進学もできなくなり、母親のスナックを手伝っているので高卒資格もどうでもよくなつていて、この修学旅行に参加したのも単に安価に海外旅行へ出られそうだったからで、単位のために陽湖に従う気はサラサラ無かつた。そして、同級生との最後の思い出になりそうだったから参加したのに内容が面白くないので実に不満に感じている。下品な歌で侮辱されると、陽湖の顔色も冷たくなった。

「神を侮辱する気ですか？」

「気ですわ、きやははは！」

「わかりました」

陽湖が会議室に連れて行くよう仕草で示したけれど、由香里は従わない。

「そんなダサイ服、着せられる気もないし」

「指導を受けない場合、単位は認定されません」

「パワハラ楽しそうね」

いくら陽湖が言つても由香里は従わず制服のまま、女性教師と後部

席に戻った。次は男子生徒だった。

「ブラザー孝文、あなたは神を信じますか？」

「はい、信じません♪ ついでに侮辱もしてやろうと、思うけど、侮辱した後、素直に着替えると何色の服になるんだ？」

「灰色です」

「灰色かあ……まあ、そんな感じだろうな。ちなみ、課題って、どんな課題なんだ？ 色別に違うのか？」

「全員、写聖です」

「……全員射精かあ……お前、可愛い口で、すごいこと言うなあ。半分は女子なのに。ははは！」

すでに聖書研究科の宿題などで聖書の一部を書き写すことは課されてきたし、それを写聖ということも生徒みんなが知っていることだったけれど、いまだに音の響きから神聖さよりも卑近さを感じている。

「オレは陽湖ちゃんに射精したいぜ」

「……。まじめに指導を受ける気はないのですか？」

「微妙。こうなったら、その灰色の服を着てみてやろう。ザーメン」
「わかりました」

孝文が会議室から、どんな風に出てくるのか、生徒たちの注目が集まったけれど、白いシャツとズボンが灰色に変わっただけで、大きな変化は無かった。その後は灰色と白が半々になり、とうとう鮎美の番が来た。

「シスター鮎美、あなたは神を信じますか？」

「いいえ」

短く答え、それから言う。

「お疲れさん。こんだけの人数を相手にするのは、めちゃ疲れたやろ」

今まで最年少議員として握手とサインをこなしてきただけに、気を張って他人の相手を繰り返すのが、どれだけ疲れるか知っているので、労った。

「ありがとうございます。ですが、大丈夫です。神に仕える仕事は喜びですから」

陽湖が微笑した。けれど、その微笑が消え、質問する。

「シスター鮎美、あなたは悔い改め、同性愛から遠ざかりますか？」

「……………そういう質問なんや……………それに正直に、いいえ、と答えると、どうなるん？」

「とても過酷な指導があります」

陽湖の目が心配してくれている。

「過酷なんや……………ほな、嘘をつくど、どうなるん？」

「……………とても過酷な指導があります」

「つつこみどころ満載やね」

「シスター鮎美、あなたは悔い改め、同性愛から遠ざかりますか？ ど

うか、今だけでも神を感じ、悔い改めてみる気持ちをもってみてください」

「……………いいえ」

「もう一度、問います。シスター鮎美、あなたは悔い改め、同性愛から遠ざか……………」

「いいえ!!」

丁寧にも二度も問われて、さすがに腹立たしかった。逆らわず無難に流すつもりだったけれど、曲げられない部分もあった。

「……………わかりました。会議室で待っていてください。私が直接、指導します」

陽湖は会議室へ鮎美を送る。着替えがあるのがわかっていたのでSPとしては介式だけがついていく。陽湖は最後の一人になった泰治に問う。

「ブラザー泰治、あなたは悔い改め、同性愛から遠ざかりますか？」

「いいえ」

「……………指導は、とても過酷です。あなたは神を信じているはずですから、明白に罪であると聖書が示す同性愛から身を遠ざけないのですか？」

「信仰と同性愛は矛盾しない。そして、はっきり言えば、君たちの信仰は異端だ。近所にあるキリスト教系の学校だから入学したけど、大失敗だった。けど、卒業はしたい。でも、嘘はつかない。相手が異端者

でもね」

「……」

「もつとも、プロテスタントもカトリックから見れば、異端の一種だろうし、ユダヤ教から見れば、キリスト教そのものが異端だろうけどさ。どっちにしても、ボクの答えは芹沢さんと同じ、いいえだ」

「わかりました。会議室へ入ってください。他のみなさんは写聖を始めてもらいます」

もう日本時間では深夜なのに、聖書を書き写す作業を指導した。黄色のローブを着ている生徒たちが席替えと課題を配り始める。席替えも事前に練られたもので信仰の厚い生徒が信仰のない生徒の隣席になっていたり、とくに素行の悪い生徒の隣には教師となったり、在学中の相性を考えた男女という組み合わせもあったりして、鐘留も黄色のローブを着た男子生徒の隣席でトイレ近くになっている。陽湖は会議室に入った。

「シスター鮎美、ブラザー泰治、今一度、問います」

「……………」

「この修学旅行の間だけで、かまいません。少しだけでもいいです。正直に心から、同性愛から離れてみる試みをしてください。試みでよいのです」

「……………」

「問います。シスター鮎美、ブラザー泰治、あなた方は同性愛から遠ざかりますか？」

「いいえ」

「…………。シスター鮎美、あなたは神を信じていません。あなたへの指導はブラザー泰治への指導より過酷になります」

「殺したりせんよね？ 卒業できる？」

「そんなことはしませんし、卒業はできます」

「ほな、自分に嘘をつくのは、もうイヤよ」

「ボクもだ！」

「…………わかりました。これに着替えてください。…………お二人は同性愛者ですから、背中を向け合って着替えることに抵抗はありませんか

？」

「ぜんぜん」

異性の身体に興味がない二人は背中を向けて裸になる。陽湖は泰治の身体を見ないように背中を向けた。鮎美と泰治は渡された茶色の麻製の服を着た。シャツとズボンではなく上半身は長袖、下半身は長いスカート状のワンピースで麻製なのでチクチクとして着心地が悪いし歩きにくい。しかも胸と背中に何か文字が書かれていた。

「これ文字なん？」

「たぶんヘブライ語だろう」

「そうです」

「どういう意味なん？ どうせ、ろくな意味やなさそうやけど」

「……はい、前はヘブライ語でメルフラフ、汚い、という意味です。後ろはマスリアフ、臭い、という意味です」

「つまり同性愛者は汚くて臭い、と？」

「……。悔い改めると言えば、今すぐ脱いでいただけます」

「踏み絵させたらるか？」

「つ……。指導を続けます。お二人とも両手を出してください」

「……」

素直に出した二人の手首へ、陽湖は鎖を巻きつけ、南京錠で鍵をかけた。両手が30センチほどの幅しか動かせなくなる。見ている介式は既視感を覚えたし、鮎美も同じだったけれど、本物の手錠に比べると軽く感じた。介式が言っておく。

「芹沢議員の生命に危害のあるようなことは指導でも認められない」

「介式さんには相談してから行います。これから、この鎖でシスター鮎美の足首をつなぎます」

「……」

介式は許可も不許可も出さず黙っている。陽湖は鎖で鮎美の両足首を30センチほどの幅でつないだ。さらに手と足の鎖を別の鎖で30センチほどでつないだので鮎美は常に前屈みの姿勢を強いられる状態にされた。腰がつかいので鮎美は両膝に手をやり上半身を

支える。その手にある結婚指輪に陽湖が気づいた。

「指輪を……シスター鮎美、私物の一切は預けてください」

「これだけはイヤよ」

「規則です。シスター鐘留や他の女子にも生理用品さえ預けてもらっています。外してください」

「これを外させるような指導を、これからするんちゃうの？ 同性愛から遠ざかろうと自主的に思うとき、外すわ」

「……わかりました」

陽湖が諦め、泰治は手にしか鎖をされなかったので問う。

「ボクの足には？」

「ブラザー泰治には手の鎖だけです。神を信じておられますから」

「……。芹沢さんと同じにしてください」

「できません」

「いいから、してくれ！」

「マゾやないんやったら、やめとき。これ、腰がっらいわ」

「つらいので鮎美は床に座った。手足の自由が無く奴隷のような服を着せられていると、さすがに不満が漏れる。

「うちは、たしか学園に多大の貢献をしたと思うけど？ お忘れなんかな」

「もちろん覚えています。その節はありがとうございました」

陽湖は大学の設置に協力してくれた礼をあらためて言い、そして自分が着ている絹製の紫のローブと同じ物を出して見せる。

「これはシスター鮎美のために新調していたものです。この修学旅行の間だけでも、同性愛から離れてみると試みられるなら、学園への貢献を評価され、信仰が無く受洗されていなくても、私と同じ物を着ていただけます」

「極端やな……天か地か……そんなに同性愛って、あかんことなん？」

「殺人と同じほどの罪です」

「……殺人犯あつかいなんや……」

「正直なところ、この指導をした前例は無いのです。ここから先は本

「当に過酷です」

「……………」

「いつでも、あなた方の悔い改めを受けます」

陽湖の目が、やりたくない、と語っているけれど、鮎美も泰治も自分を曲げたくなかった。今まで、さんざんに隠して曲げてきたし、異性を好きになれないか試したこともあるけれど、それが不可能なのは思い知っている。陽湖は気の進まない顔で会議室の壁にあつたイチジクの枝を手にする。木刀ほどの枝で、人を叩くのに手頃だった。

「介式さん、これから、この枝でシスター鮎美のお尻を打ちます」

「……………」

今でも厳しい道場では似たようなことがあるので、介式は教育的指導の範囲だと判断した。陽湖は鮎美と泰治に言う。

「これから、この会議室にある監視カメラの映像は写聖中の生徒たちにも見えるようメインモニターに映されます。いわば公開で二人を叩きます。とても屈辱的でつらい指導になります。その前に問います。少しでいいですから、同性愛から遠ざかる気持ちをもってみませんか？ その一言で許します」

「陽湖ちゃん、やりたくないことは、やらんとき」

「つ…：…今はシスター陽湖と呼んでください。悔い改めますか、シスター鮎美？」

「悔い改めるべきは、聖書の作者やろ。二千年ぶりに書き加えて、同性愛を認めたら、どや？」

「はははは！ それはいい！」

「そやろ。なんなら、うちが書いたろ。アユミ第一、一章一節、同性愛を禁止したのは間違いでした。主は、それもありかと思ひ直し、ソドムのみなさんも復活することにしました。めでたし、めでたし」

「はははは！」

二人が鎖を揺らして笑った。

「……………聖書への侮辱は、神への侮辱とみなします」

「ほな、どうぞ、叩きいや」

「……………」

陽湖が迷いつつも壁にあるコントロールパネルを操作して会議室内の監視カメラ映像を機内のモニターに映した。会議室の外から生徒たちのざわめきが聞こえてくる。同性愛をやめないと云った鮎美と泰治への処遇がどうなるのか、どの生徒も注目していたし、見せられた映像の中で鮎美と泰治は奴隷のような茶色の服で鎖によって拘束されていたのでインパクトは大きかった。陽湖は音声も送信されていることを確認してから言う。

「これから神の教えに背き、同性愛に身を置く二人に反省させるため、イチジクの枝で二人に改悛を促します。つらい映像ですが、目を背けず見てください」

陽湖が枝を構えると泰治が言う。

「男のボクから叩けよ」

「こんなんに男も女もないやろに」

「男つてのは、そういうもんだ」

堂々としたゲイの態度に女子生徒の一部は惹かれた。

「わかりました。では、ブラザー泰治、そこに両膝をつき頭をさげなさい」

「ごうかよ」

言われたとおりに泰治は床に膝をついて頭をさげた。

「い、…いききますよ」

「どうぞ」

「……………えいー」

陽湖は枝を振り上げると、泰治の背中を打った。

「…つつ…」

「い、痛いですか?」

「それなりに」

「悔い改めますか?」

「ぜんぜん」

「……………また、叩きます」

再び陽湖は叩いたけれど、もともと腕力が弱い上に他人へ暴力をふるったことなど無く、しかも遠慮がちに叩いているので合計10回打

たれても泰治は平然としていた。

「……ハア……ハア……次はシスター・鮎美です」
「どうぞ」

「……では、そこへ獣と同じように四つん這いになってください」
「え……うちの場合、より屈辱的なんや……」

信仰が無い鮎美は諦めつつ、もともと鎖の長さのせいで背筋を伸ばすこともできないので両手をつけて獣と同じに立った。陽湖が叩く前に問う。

「悔い改めますか？」

「いいえ。何回も言うたけど、悔い改めて同性愛指向は変わるもんちやうしな。そこ忘れんといて」

「……叩きます」

陽湖が杖を振り、鮎美のお尻を打った。

「イタっ……」

「悔い改めますか？」

「もう早く10回、叩いて。この姿勢、しんどいわ」
「……」

陽湖が連続して叩き始めると、会議室の外が騒がしくなり、鷹姫がドアを叩いてきた。

「ここを開けなさい！ 月谷！」

「邪魔をしないでください。これは指導です」

「開けぬなら蹴破ります！」

鷹姫になら可能そうな気がして鮎美が叫ぶ。

「鷹姫！ すぐ終わるし、おとなしくしてて！」

「見ておれませんか！」

「ちよつと道場のガラス割って竹刀でお仕置きされてるくらいに思っ
てみ！」

「……それ……なら……」

鷹姫の勢いが弱くなった。

「ですが……芹沢先生は……国会議員……あまりに失礼で……」

「今は、ただの生徒やし。ちよつと価値観が違うけど、まあ我慢してみ

るわ。おまけに現代の治外法権、利用されてるし、逆らわんとこ」
「……そう言われるのであれば……」

鷹姫が席に戻っていく気配がして、陽湖は残り3回を叩いた。
「終わりです」

「ありがとうございます、とか言うた方がええ？」

「それは悔い改めるといふことですか？」

「ううん、こういうときの、とりあえずの挨拶。道場でも、よくあるよ。
竹刀でバシバシ気合い入れるの」

中学時代、それなりに竹刀で叩かれたことのある鮎美は四つん這い
をやめて座った。陽湖は心外そうに言う。

「そういう野蛮なものといっしょにしないでください」

「神聖でございました、ごちそうさまです。で、次は何？　いつまで、
この鎖、されてるの？」

「次は……少し待っていてください」

陽湖は教師や屋城たちと相談してから、気の毒そうに告げにきた。

「このまま悔い改めないのであれば、生徒全員に打ってもらいます。

一人3回」

「百叩き超えるやん……」

「悔い改めてください」

「……………」

鮎美と泰治は目を合わせ、口先だけでも応えようかと迷いもしたけれど、やっぱり意地があつた。

「うちは負けんし」

「ボクもだ」

「……………では、順に叩きます」

陽湖は黄色のローブを着ている生徒から呼び、鮎美と泰治を叩かせ
る。受洗している生徒は同じ罰を子供の頃に受けたことがあるのか、
それなりに強く叩くけれど呻くほどの痛さではなかった。むしろ、信
仰のない生徒が面白半分に強く叩いたり、お尻を向けている鮎美に性
的な言葉を投げかけたり、イチジクの枝先でお尻を撫でてきたりした

のが苦痛だった。とくに鮎美が当選してからサインや記念撮影を求めて応援すると言ったはずの女子生徒の一部が楽しそうに叩いてきたのは傷ついた。そして鷹姫の番が来た。陽湖から杖を渡されると、強度を確かめるように宙で振り、静かに陽湖へ問う。

「あなたは、これで叩かれたことがありますか？」

「……あります」

「今一度、その痛みを知り、どれだけひどいことをしているか、思い知らせてやりたいので、あなたを叩かせてください。代わりに私を打つてもよいです」

「…わかりました。どうぞ」

陽湖が覚悟して鷹姫へ背中を向けようとする、鮎美が注意する。

「やめとき！ 鷹姫に叩かれたら骨が折れるよ！ 鷹姫も！ めっちゃ

力一杯本気で叩く目してるやん！ やめてやり！」

「ですが……」

「ええから、さつさと3回、叩いて」

「……失礼します」

鷹姫は遠慮がちに干してある布団を叩くようにパンパンと素早く済ませたけれど、涙を滲ませながら、弁慶と義経の、といった言葉を漏らしていた。そして鐘留の番がきても、まだ鐘留は泣いていて黄色のローブを着た男子生徒に背中を撫でられながら鮎美のそばに立った。

「…ごめん……アユミン……ぐすつ……叩くよ……」

「うん、どうぞ」

鐘留は形だけは黄色のローブを着ている生徒たちの真似をして大きく振ったけれど、弱々しく叩いて席に戻っていった。それからも強く叩く生徒はいたけれど、座席に戻るとき周囲から白眼視されるし、とくに鷹姫が睨みつけてくるので、そのうち誰も強くは叩かなくなり全員の番が終わった。それでも、ぐったりと鮎美は床に崩れて女子らしく涙を流したし、泰治も背中が痛いので、うつ伏せに倒れた。

「……みんなが手加減してくれて、この痛さ……うち、この時代の、日

本の同性愛者に産まれてよかったわ……中世やったら、今頃は血まみれでピクピクしてるんやろなあ……」

「中世でも日本なら、よかったさ」

「あ、タイジはんも戦国時代の男色、知ってる？」

「ゲイだしね、そういうアンテナは高いさ」

「シスター鮎美……ブラザー泰治……悔い改める気はないのですか？」

「……………」

もう答えるのも面倒そうに鮎美と泰治は床に倒れたまま、恨みのこもった目で陽湖を見上げた。

「ご、ごめんなさ……い、いえ！ わ……私は……正しい指導をしているだけです。間違っているのは、お二人です！」

「……………」

「つ、次！ 写聖してもらいます！」

「ちよつと寝させて。もう朝やん」

「ダメです。眠らずに聖書を書き写してください」

「……………。今度は、そういうランチなんや……」

「ランチではありません。写聖は他の生徒も既に取り組んでいます。

全員、眠らずに」

「…………それって判断力を奪う常套手段やん……」

「ボクは腹がへった」

「うちも……………。機内食ってあるん？ 羽田関空間は、飲み物だけ

やったけど、さすがに日本イスラエル間やし、あるよね」

「食事はありません」

「…………フライト14時間やんね……奴隷階級には、ご飯も無しなんや。神様、平等やな」

「神は真に平等な存在です。お二人には悔い改める機会があります。そして奴隷階級などではありませんし、食事は私たちにもありません」

「…………不眠不休で、ご飯も無し……空飛ぶサティアンなんや……ハメられた……しかも治外法権や……上九一色村の方がマシやん

……」

「せめて、水をくれよ。喉が渴いた」

「うちも」

「……………」

陽湖は500ミリリットルのペットボトルを2本もつてきて渡してくれた。

「おおきに」

「それが着陸までに与えられるすべてですから大切に飲んでください」

「……鬼や……」

鮎美はペットボトルを開けたけれど、手足をつながれているので飲みにくい。口元まで手をよせると足も引つ張られるので横になったまま苦勞して不格好な姿勢で飲んだ。半分まで飲んで残りは置いた。そして仕方なく床に這うような姿勢のまま指定されたペテロ第一の一部を書き写しつづけるけれど、聖句もまったくありがたくない。しばらくしてトイレに行きたくなった。

「うち、オシッコしたい。まさか垂れ流せとか言わんよね？ シスター陽湖様」

「様は要りません。あなた方は後部のトイレを使ってください。遠いですが転ばないよう注意して」

陽湖が会議室のドアを開けてくれた。密室でのリンチから解放された気分で歩み出るけれど、鎖のせいでペンギンのようにしか歩けないし、前屈みのままなのでバランスも悪くて、おまけに飛行機が揺れるので歩くのが危なくて獣のように這うしかなかった。通路を這う姿を他の生徒に見られると、密室で責められていたときとは違う苦痛を感じる。気の毒そうに見おろす生徒やクスクスと笑う生徒がいて、心が痛い。中央部まで進むと、鷹姫が気づいて寄ってきた。

「芹沢先生、何をさせられているのですか？」

「ちよっとトイレに行くだけよ。バランス悪いし這うしかないねん」

恥ずかしくて鷹姫から目をそらして答えた。

「つかまってく下さい。いえ、抱き上げます」

鷹姫が助けてくれようとする、背後で見ていた陽湖が言う。
「罪人の手助けをしてはなりません」

「くっ…」

刀を持っていたなら今すぐ斬りかかりそうな目で鷹姫が陽湖を睨んだ。

「鷹姫、おおきに。いちいち怒らんでええよ。今、あの人の中には神様がきてはるねん。うちの友達やったと思うと腹も立つけど、神様の言いなりやと思えばええよ」

「……芹沢先生……」

「それに……うちが、こういう目に遭うのは因果応報かもね。小山田さんからの呪い、よう効果が出てるわ」

自分が悪いという風に考えると涙が溢れてきた。泣きながら最後部まで這うと、知念が心配して鮎美の背後にいる介式に問う。

「介式警部、これ助けなくていいんすか？」

「……。学校教育だそうだ」

「いや、どう見ても虐待っすよ」

「……、生命に危険があることをすれば止める」

「知念はん、おおきに。気にせんといて。ぐすっ…神様ごっこに付き合ってるだけやし」

「……そうっすか……」

「ハア…やっつと着いた」

鮎美はトイレに入ると麻製のロングスカートをめくり上げようとするけれど、またしても鎖のせいで膝上までがせいぜいで、うまく上げられない。チクチクとする生地が肌に引っかかって痛いし摩擦が高い。そのうちに、どうしてもよくなり便座に座って力を抜いた。スカートの中に放尿しているけれど、気にする気力がない。下着は着けていないし麻なので保水せず、あっさりと便器に流れ落ちてくれた。

「……いっそ、このままビデしよ…」

あとで匂うと嫌なので濡れたスカートをビデで洗い、トイレットペーパーで股間を拭くのも鎖のせいで不格好に両膝をあげて大股を開かないと拭けなかった。

「……はあ……疲れた……」

トイレを出ると、もう床に崩れてしまい、そのまま寝たかったのに陽湖が言ってくる。

「会議室に戻ってください」

「……牢屋へ、戻れと……はいはい……」

また這って戻ると、濡らしたお尻を生徒たちに見られながらになった。そして眠たいのを我慢させられ、聖書を書き写す作業を、どのくらいしていたのか、わからなくなった頃、座席へ戻るよう言われ、戻ると鎖を外してもらえた。

「やつと外してくれるんやね」

「離着陸のときだけです」

「……もう着いたん？ 時間の経過がわからんけど……」

鮎美は窓から外を見たけれど暗い。夜は明けていなかった。

「着いていません。燃料補給です。シートベルトをしてください。私も席に戻ります」

陽湖が最前列に行ったので知念に問う。

「今、どのへん？」

「中国の西部、ウルムチ地窩堡国際空港へ着陸するはずですよ。ちよつと迂回ルートつすけど、イスラエルそばのシリアやイランイラク上空を避けるとなるとトルコ寄りに飛ぶことになるつすから」

「今、何時なん？ 日本時間と中国現地時間で」

「日本時間で、午前8時過ぎ、現地は3時間遅れだったかな……午前5時だと思っすよ。この飛行機で一気にイスラエルは航続距離的に無理なんつすね」

「……着陸したら逃げたろかな」

鮎美が冗談半分で言うのと介式が注意する。

「やめておけ。中国ウイグル自治区に日本人が許可なく降りて無事に済むわけがない」

「ウイグル自治区なんや……そら、こんな虐待ごっこで済まんよね」

鮎美は中国のウイグル自治区が漢民族と他の民族が争い、虐殺も行われていることを静江から学んでいた。二年前にもウイグル騒乱が起きたばかりで宗教的民族対立が今も燻っている。飛行機は着陸態勢に入り、ごく無難に着陸するとターミナルの一角に駐機したけれど、搭乗口が開くことはなく、徹夜して眠りそうな生徒がいるので陽湖が号令した。

「生徒は全員、起立して賛美歌を謳います！」

「……一睡もさせん気や……」

フラフラと鮎美も立って謳った。そのうちに翼の下に燃料補給するトラックが走ってきて、パイプを翼と地下燃料庫につなぎ、補給を始めた。

「……お腹空いたわ……。そういえば、知念はんらは？　ご飯、どうされた？」

「学校側から機内食が無いことは説明されてたつすから。カロリーメイトとか、持ち込んだつす。すいません、目立たないよう交替でトイレで食べました」

「体力落とされても困るもんな。気にせんと、堂々と食べたらええねん」

「いや、なんか、生徒たちが食べてないのに自分らだけつてのも」「いつもの逆やね」

鮎美が私語していると、巡回していた黄色のローブの生徒が陽湖に報告し、賛美歌の最中に私語していた5人とともに反省のために大声で賛美歌を謳わされた。謳っているうちに二人の女子生徒と鮎美は朦朧としてきて涙を流した。

「……あかん……これヤバイ……マジで洗脳されていくかも……」

心の片隅で今すぐ陽湖の足元に土下座して許しを乞いたい感情が湧いてきて、人間の精神の弱さに気づいた。不眠と絶食、ゆるやかでも強圧的な課題の実行で、脳が溶けるように意地やプライドが、どうでもよくなってくる。革のサンダルを履いている陽湖の足指を舐めたくて仕方ない。指導の総指揮を執ってる陽湖も引き続き緊張で汗

をかいていて、その匂いが恋しかった。

「…抱きついてチューしたら…：異端審問うけるやろな…：ちやうか、強制わいせつか…：いや、イスラエル国法やし、同性愛やとめちやキツイかも…：」

自分を保つために一人言を漏らさないと維持できないのに、私語を禁止され、破ると課題を与えられる。燃料補給が終わって離陸すると、鎖をもった陽湖が近づいてきて心が縮んだ。もう謝って口先だけでも改悛したくなる。

「シスター鮎美、悔い改め同性愛から遠ざかる気持ち但至少でもありますか？」

「……………」

「私も、あなたを責め続けたくないのです。ご覧ください。あなたのために新調したローブです」

しかも陽湖は右手には紫のローブを持っていて、左手には鎖だった。絹のローブは麻と違って、肌触りがよさそうで触れなくなる。生まれた頃から衣食住のうちの衣にも困ったことは無く、産着から先進国日本の良質な物を着慣れてきている鮎美にとって粗末な麻の服は8時間ばかり着ただけでも苦痛だった。チクチクと肌触りが悪くて座ればお尻が痛いし、動けば乳首や腋が痛い、歩けば足がもつれる。なぜ、わざわざ危険を冒してまで昔の人々がシルクロードを造って絹を運んだのか、生糸から布を造る紡績業が産業革命を押し進めたのか、そこには強い渴望があったからだと頭の片隅で実感した。そして、もう鎖は嫌だった。

「一言だけ、悔います、と言ってください。それで終わりです」
「……………」

ぼんやりと従った後、自分がどう感じるか考えてみて、それこそ悔いそうだったので自分を保った。そして、もう陽湖には一言も答えまいと決意して、両手首を自首する犯人のように差し出した。鎖の苦痛を身体が覚えていて手が震えたし、涙が溢れた。それを見て、陽湖の方が戸惑う。

「…………シスター鮎美…………どうして、そこまで…………」

陽湖まで泣きそうになったとき、機長が放送を入れ、英語で日本から鮎美に無線通信が入っていて、それが日本の最高責任者ハトヤマからだと伝えた。

「…最高責任者……鳩山総理？」

鮎美の問いに答えられる者はなく、とにかく操縦席に行った。まだ鎖でつながれていなかったなので、すぐに着く。副操縦士のイスラエル人が鮎美へマイクの付いたヘッドセットを渡してくれるので装着してみた。

「もしもし、うち、いえ、芹沢鮎美です」

「鳩山直人です」

「総理……」

「修学旅行中に失礼します。何度でも、あなたを誘いたい。私の内閣に入ってほしい」

「……」

「外務大臣として」

「が……外務大臣?!」

予想より、はるかに重要なポストだったので驚いた。財務と外務の両大臣は次期総理候補が担うようなポストで、いくら先日から空席となったとはいえ、18歳の鮎美には異例中の異例で考えられない提案だった。

「どうか、良い返事をください」

「……………ま……………前向きに考えたいのですが、相談したい人がいます」

「どなたに？」

「……………谷柿先生に」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

鮎美は沈黙に耐え、鳩山が折れてくれた。

「わかりました。良い返事を期待していますよ」

「ありがとうございます」
「では」

通信が終わり、鮎美は英語で日本にいる自民党総裁に連絡を取ってくれるよう副操縦士に頼んだ。時刻を確認すると、日本では午前9時前で連絡するに悪くない時間だった。航空通信からなので、すぐに直通とはいかず自民党本部や谷柿の秘書などを介してしまい、かなり時間がかかったけれど、なんとかつながった。

「もしもし、谷柿です」

「芹沢です」

「なに大臣でした？」

すでに予想されていたので、話が早い。

「が、外務大臣に、と」

「ほお……思い切ったことを。あ、失礼」

「いえ、思い切り過ぎです」

「一晩飛んでいた芹沢先生はご存じないでしょうが、鳩山総理には在日韓国人から104万円の献金があったことが明らかになり、それもパチンコ店に関係する者からとのことで、もはや内閣の命脈は尽きているのです。しかも、竹島を放棄する密約に土肥隆一議員が署名していたことも発覚してね、民主党政権はグダグダです」

「……もう、やぶれかぶれで、うちを外務大臣に？」

「そのようですね。あの男は、なんとか内閣を延命することだけを考えている」

「そ…それで、うちは、どうしたら？」

「受けてください」

「……外務大臣を？」

「はい」

「……………、い、…いつしよに死ねと、鳩山総理と……」

「いいえ、私たちがバックアップします」

「え？ ど、どういうことですか？」

「たしかに連続したスキャンダルで鳩山直人の内閣は、もう終わりです。けれど、衆議院議員の任期は、まだまだ3年以上も残っている。

つまり、鳩山内閣は終わっても民主党政権は続くわけです」

「それは、……そうですね」

「そこで、あなたには自民党所属のまま、外務大臣になってほしい」

「……民主党に入らず？ ……連立政権に……」

「そうです。我々も一人も大臣がいけないのは官僚とのやり取りに、実に困っている。かといって、がっちり連立政権を組めば失政の責任まで私たちに来る。けれど、たった一人だけ、しかも18歳の大臣を送れば、どんな失敗があっても、あなたなら泣けば国民は許してくれる。私は、ひどいことを言っているのを承知で言いますが、失敗しても低リスク、けれど大臣は大臣、しかも外務大臣とは有り難い。おおいに利用できます」

「……どうせ、失敗してもいい……しかも、鳩山内閣を終わらせると、また次の内閣は、それなりに一時的にでも支持率がアップして、また切り崩すのに苦勞する。なら、いっそ、小さく組み合せて利用できるだけ利用する、と？ うちも鳩山総理も」

「そういうことです」

「……」

「すみません。あなたには賞賛と、やっかみの嵐が襲ってきます。期待と希望の最年少大臣として賞賛され、たかが18歳で外務大臣になった小娘とそしられます。自民党内部からも民主党内部からも、笑顔で歓迎され、陰口を叩かれます。けれど、頑張つてほしい。鳩山内閣とともに倒れるまで、その後も、きちんとバックアップします。だから、受けると返答してください。ただし、自民党所属のまま、と」

「……条件を出すわけですか……」

「それを飲んだ後は、私が彼と話します」

「……わかりました。やってみます」

鮎美は通信を終え、しばらく考え込む。喉がカラカラだったので、そばで見守っていた陽湖に頼む。

「陽湖ちゃん、何か飲むものちょうだい」

「はい、すぐに」

陽湖がダッシュで飲みかけだったペットボトルを持ってきてくれ

た。それを少し飲み、さらに2分間、考え込んだ鮎美は副操縦士に鳩山総理と通信してくれるよう頼んだ。二度目だったので、すぐにつながる。

「もしもし、鳩山です」

「芹沢です」

「受けてくれますか？」

「はい。ただ、二つだけ、お願いがあります」

条件だったけれど、お願い、と鮎美は言い直した。若すぎる女性からのお願いに鳩山は悪くない反応をしてくれる。

「どんなことですか？ 私にできることなら何でも」

「一つは、うちが自民党所属のまま、内閣に入ることです」

「……………うむ……………」

「もう一つは、連合インフレ税に参加してほしいことです」

「……………なるほど……………」

「お願いします！」

「……………。わかりました！ いっしょにやりましょう！」

「っ、ありがとうございます!!」

鮎美は両手をガッツポーズで握りしめながら日本人らしく頭をさげていた。入閣が決まり、谷柿へ通信しておく。これも二度目なのでスムーズだった。

「もしもし谷柿です」

「芹沢です」

「どうでした？」

「うちが自民党所属のまま入閣すること、そして、連合インフレ税に参加していただくことを承知してもらいました」

「……………。ふっ……………あはははははは！ 君は抜け目がないね！

ふっはははは！ 尻に火がついた男に自分の馬車を引かせようというわけか！ あっははははは！ それも、自分を目くらましの花火に使おうとした男を逆に利用して！ ははは！ 愉快、愉快！ これは愉快だよ！ そして君は外務大臣をこなせそうだ！」

大いに笑った谷柿との通信を終えると、鮎美は陽湖へ告げる。

「ごめん、陽湖ちゃん、うちと鷹姫、イスラエルに着いたら速攻で帰国せなあかんし、もう寝させて。あと、制服とか私物、全部返して」

「…は…はい…わかりました。…では、あの会議室でシスター鷹姫と休んでください」

「おおきにな」

礼を言った鮎美は鷹姫と会議室で制服に着替えてから、床に横になって休んだ。ベッドやシートは無かったけれど、若さのおかげで仮眠くらいならカバンを枕に平気だったし、二人で使う広さとしてはファーストクラス以上の待遇になった。

3月9日 イスラエル

同日、日本時間16時、イスラエル時間9時、鮎美たちを乗せたエアバスA321はテルアビブのベン・グリオン国際空港に近づいていた。鮎美と鷹姫にはベッドは当然、シートも無い、ただ広さだけは二人で使うにはファーストクラス以上になる会議室が与えられ、その床で仮眠していたけれど、毛布もないので体育館の床にそのまま寝ているような待遇だった。それでも若さと睡眠不足のおかげでカバンを枕にして、よく眠ったし身体の痛さも無い。着陸寸前になって陽湖が起こしに来た。

「起きてください。シスター鮎美、シスター鷹姫」

「う〜……おはようさん……」

鮎美と鷹姫が起きて、髪や制服を整える。ずっと起きていた介式も座っていてスーツにできた皺を伸ばした。

「三人には添乗員用のシートでシートベルトをしていただきます。他の生徒は大切な礼拝を受けている最中ですから、けっして私語したり雰囲気壊すことなく目立たないよう先に降りてください」

「うん、そうするわ」

鮎美たちは領いて会議室を出ると、示された搭乗口そばの簡易シートに腰かけシートベルトを装着した。陽湖も最前列に座ると、シートベルトをし、そしてマイクで機内全体に語る。

「これから聖地エルサレムそばのベン・グリオン空港に着陸します。シスター、ブラザーのみなさん、祈りましょう。飛行機において着陸時がもっとも多く事故が発生しています。もし、今、ここで私たちの命が終わるとしても、みなさんと楽園で再会できるよう深く祈ってください」

「……………」

鮎美と鷹姫は黙って顔を見合わせた。二人が眠っていた間も陽湖は不眠不休で生徒たちを導いていた様子だった。

「今しも信仰告白は受けます。神を信じ、洗礼を望む人は拳手のうえ、

名乗ってください」

「っ、はい！ 木野崎桜！ 洗礼を望みます！」

出発直後の信仰告白では受洗を保留した桜が大きな声で言った。陽湖が祈りの形に手を組み、満足そうに頷く。

「シスター桜の告白を受けました」

「……………」

再び鮎美と鷹姫は顔を見合わせた。着陸寸前に恐怖をあおっていて仕向ける手法に違和感は大きかったけれど、私語を強く禁じられたので黙り続ける。他にも2名の生徒が受洗を望み、さらに驚くべき告白があった。

「はい！ 長瀬良弘！ 神を信じ洗礼を望みます！」

「長瀬警部補っ?!」

最後尾から知念たちの驚く声が聞こえてくる。男性SPの一人が挙手していた。陽湖はシートベルトを外して機長へ着陸を数分遅らせるよう伝え、最後尾へ歩いていくと騒いでいる知念たちに静かにするよう頼み、長瀬と短い会話を交わすと信仰心を確かめ、背後についできていた黄色のローブの生徒が差し出すペットボトルから、わずかな水を手のひらに受けると、それを長瀬の頭にかけて。同じことを桜たち受洗を望んだ生徒3名にも施してから着席し、機長に着陸を頼む。飛行機は事故に遭うこともなく、ごく普通に着陸した。搭乗口が開く。陽湖が手のひらで示して降りるよう促してきた。

「……………」

降りよか、はい、という意思疎通を鮎美と鷹姫が交わし、無言で飛行機を出る。介式たちSPも降りてくるけれど、長瀬の処遇に困った。長瀬は急な休暇を望み、このままエルサレムにて陽湖から正式な洗礼を受けたいと言い、介式は上司として無責任な任務放棄は認められないと叱る、鮎美と陽湖が話し合ってから決めた。

「長瀬はんには、このまま残ってもらって、陽湖ちゃんとカネちゃんがテロリストなんか人質に取られんよう、警護してもらいます。うちの秘書補佐を守るのも任務のうちという解釈でお願いします、介式はん」

「だが…しかし…：…勝手な…」

「信仰の自由は憲法で保障されていますし、本人が望むんやったら、しやーないですよん。実際、一人くらいSPがカネちゃんや陽湖ちゃんについててくれる方が安心ちやいます？」

「…：…わかった」

渋々介式が認め、長瀬を置いて搭乗口からターミナルへ移動する。歩きながら知念がぼやく。

「長瀬警部補は飛行機が苦手だったすからね。あの脅し、効いたみたいすね」

「やからって、いきなり入信とかありえんわあ」

「あ、前からオレらにも月谷さんが、いろいろパンフレットとかくれたし、長瀬警部補は興味をもって非番の日曜日、誘いにのって礼拝に行ってみたいいつすよ。オレってつきり月谷さんが可愛いから、それが狙いかと思つてたつすけど、マジに説教を聴きに行つてたんすね」

「陽湖ちゃん、見えんところでもコツコツ勧誘活動してるなあ…：…抜け目がないというか、うちのSPにまで声かけてたとは、びっくりやわ」

「つすね」

「知念、警護に集中しろ！　ここは外国だぞ！」

介式に叱られて知念は敬礼する。

「はっー！」

そこからは知念も緊張感を持ち、空港ターミナルを進むと、イスラエル駐在の日本大使館職員とジエトロ職員が待っていた。

「ようこそ、イスラエルへ」

「お出迎え、ありがとうございます」

谷柿あたりから連絡が回つたのだろうと鮎美は察した。

「うちの戻りの飛行機は、いつになりますか？」

「あいにく日本イスラエル間は直通便が無く、経由便もSPの方々のシートまで確保するととなると、いつそ明日17時発の修学旅行専用機で帰っていただいても到着に数時間しか差がありませんでした」

「そうですか…」

「それに、イスラエル側が非公式ながら芹沢議員と会談をもち交流を…あつ！」

説明していた大使館職員が、近づいてきた高齢のイスラエル人を見て緊張したので、相手が要人なのだと鮎美は経験から悟った。せめて外国要人と会話する前には、相手国のことを予習しておきたかったけれど、修学旅行として来たので旅行ガイドブックで知れるようなことしか知らず、また詩織が以前に勤めていたジエトロの職員も来てくれていたので会話したかったものの諦めて笑顔をつくった。

「元大統領のエフラヒム・カシール氏です。今年で95歳になられたはず」

大使館職員が教えてくれるし、エフラヒムにはジエトロ職員がヘブライ語で鮎美を紹介している。元大統領は高齢にもかかわらず確かな足取りをしていたし、やはりボディガードを2名つれていた。しかも2名とも大きな銃を丸見えに持っているし、介士たちのような警察職員ではなく軍関係者のようで軍服姿だった。

「ようこそ、イスラエルへ、と、おっしゃっています」

ヘブライ語が得意らしいジエトロ職員が通訳してくれる。鮎美は関西弁を控えて標準語を使う。

「はじめまして。芹沢鮎美です」

条件反射で握手をしようと右手を出したけれど、エフラヒムは静かにヘブライ語で何か言い、それが通訳のジエトロ職員を困惑させ、そばで聴いていた大使館職員も緊張させる。鮎美は気になって問う。

「エフラヒムさんは、何と言われたのですか？」

「あ…はい…えー…」

言いにくそうに考えながら言われる。

「…あなたとの握手は、今少し、あなたを知ってからにする。ともかくは、あなたを知りたい。とのことですよ」

「そうですか…」

鮎美は右手を引きつつ、ユダヤ教の戒律が男性同性愛を明白に禁じ

つつ、女性同性愛については禁じてはいないものの、どのみち印象は悪いに違いないと、わずかに予習したとき考えていたことを思い出した。そして、はつきりと記者会見でカミングアウトし、結婚も公言している自分の性的指向を、わざわざ会いに来てくれたエフラヒムが予習していないわけではないと感じ、笑顔は崩さずに頭をさげた。

「会いに来てくださり、ありがとうございます」

鮎美が礼儀正しさを失わなかったことに日本人職員はホッと安堵しつつ提案する。

「立ち話も何ですから、近くのホテルに場所を用意します」

その提案はヘブライ語にも通訳して伝えられたけれど、エフラヒムは別の提案をしてきた。

「私の家は、すぐ近くだ。そちらで話をしよう。とのことですよ」

「お招きいただき、ありがとうございます」

緊張しつつも鮎美は応じた。大使館職員が問うてくる。

「芹沢議員、パスポートを貸していただけますか。そちらの秘書さんの分も」

「あ、はい」

鮎美と鷹姫がパスポートを渡しておく、空港の入国審査は、ほぼフリーパスで通過できた。空港玄関に大きな高級車が待っていて、それにエフラヒムと鮎美、鷹姫、日本人職員2名が乗り、介式と知念はボディガードが乗ってきた軍用車に乗せてもらい、他のSPはタクシーでの移動となる。車内でエフラヒムが鮎美にヘブライ語で何か言ってくる。それを聴いた日本人職員が、またも困惑した顔になり、鮎美は何を言われたのか、とても気になる。

「私へ、何と？」

「あ、…はい。…どういふ冗談なのか、わかりませんが。直訳すると。日本の新しい外務大臣がイスラエルへ一番に来てくれたことは、ともかくも歴史に残る嬉しいことだ。とのことですよ。こう訳すしかないです。意味がわかりませんが」

「それは、そのままの意味やと思いますから、こちらこそ元大統領にお会いでき光栄です。とお伝えください」

「……、それでは誤解が生じませんか？」

「どんな？」

「芹沢議員が外務大臣のように思われます」

「うちは外務大臣になる予定ですよ、帰国したら。谷柿先生から聞いてはりませんか？」

「二なっ?! 本当ですか?!」

二人の職員は谷柿から鮎美の帰国と、イスラエル側の政治家と会談するならば、そのサポートをするよう頼まれただけだったので激しく驚き、その様子を見てエフラヒムは嘲笑して、何か言った。それを職員が訳してくれる。

「あいかわらず日本の大使館は暢気だな、ハワイを攻撃したときから一つも進歩していない。情報は命だ」

鮎美は畑母神との会話で真珠湾攻撃の際、宣戦布告が在米日本大使館が宴会をしていたために米側への通知が遅れ、宣戦布告のない不意打ちだと言われた話を思い出したけれど、イスラエルと英米、ドイツ、日本の戦時中の関係も記憶しているので余計な切り返しをせず、質問してみる。

「私が外務大臣になる情報は、どうして知っておられるのですか？」

「あんな風に航空通信でやりとりすれば、ユーラシア大陸中の諜報機関が察知しただろう。もちろん、アメリカも」

「言われてみれば、たしかに……」

「夕べのハトヤマとタニガキを相手にして、自分の狙いを通した少女戦士の舌戦は、しばらく語り草になるだろうな。諸国に丸聞こえだ。」

「日本は第二次大戦後、諜報というものを、どうして忘れたのだ？」

「……。おそらくは憲法9条の平和主義による影響だと思います」

「ああ、あれか。どうにも日本人の考えることはわからんな。あなたは天皇を神だと信じているか？」

「……………」

鮎美は左手を唇にあてて考え込み、慎重に答えを選ぶ。脳裏に新年祝賀の儀で見かけた今上天皇と、別室で会見した15歳の義仁親王と、まだ7歳だった由伊妹宮が浮かんだ。

「ユダヤの方々の神に対する観念と、私たちの神に対する観念は大きく違うと感じています。唯一絶対の神と、私たちが感じている万物に宿る八百万の神々については、語り合ってもお互いに深く理解し合うのが難しいようで、私の友人にもアブラハムの宗教を信仰する人がおり、ずいぶん語り合いましたが理解には至っていません。その上で、誤解を恐れず私たちの天皇陛下への感覚をたとえるなら、もしソロモン王の子孫が代々王として引き継がれてきたのなら、それはユダヤの方々にとっても半分、神のような存在として尊敬したり崇めたり、誇りに思ったりされるのではないのでしょうか？」

かなり長い上に率直な見解だったので職員は額に汗を浮かべつつ訳した。それを聞いたエフラヒムは顎を撫でて頷き、車が彼の邸に到着したので全員が降りた。邸は白と直線が印象的な建築物で父の玄次郎が見たら喜んだかもしれないと思いつつ、鮎美たちは応接間に案内され、紅茶とバクラワというナッツ入りの焼き菓子をごちそうになったけれど、鷹姫のお腹が大きく鳴った。

キユウ

「っ……」

ずっと黙っていた鷹姫が真っ赤になって顔を伏せ、エフラヒムが問う。

「そうか、朝食がまだだったのか？」

「……………」

鷹姫は顔を伏せたまま答えないので鮎美が答えて訳してもらおう。

「はい。機内食が無かったものですから」

「それは……かなりの時間……………」

時差のせいで朝食だけ抜いているように感じるけれど、すでに日本では夕食時が近い。徹夜明けに朝昼と抜いているようなものだった。

「食事の用意をさせよう。何が食べたい？ 当家のシェフは日本料理もできるぞ」

「ありがとうございます。せっかくなのでイスラエル料理でエフラ

ヒムさんが好きな物を食べてみたいです」

鮎美の回答に日本人職員2名は、ただ運がいいだけの女子高生でなく、それなりの応接教育も日本で受けてきてくれたのだと、やっと安心しつつあった。初めは、これが外務大臣か、本国は何を考えているのだ、と半ば混乱していたけれど、元大統領を相手にして非礼のない落ち着いた対応をしてくれているし、気後れもしていない。鮎美と鷹姫は食事を出してもらい、テヒーナルハツイリームという茄子の胡麻ソースがけと、シシユリックという羊の串焼きをご馳走になった。二人の若い女子が美味しそうに食べてくれるのをエフラヒムは満足そうに見て言った。

「料理は口に合うかね？」

「はい、とても美味しいです」

「まだ、食べられそうだな。揚げた魚を出そう。一番の郷土料理だ」

「私は、もうお腹いっぱいでも、鷹姫は……」

「……………いただいても、よろしいですか？」

「ああ、食べる、食べる」

勧められて鷹姫は油で揚げた魚も美味しそうに食べた。

「刺身を食べる日本人には、その料理は泥臭くは無いか？」

「それが土地の味だと思います。私の郷里の魚も泥の風味がして、それで育つと離れると恋しくなりますから」

主なタンパク源が琵琶湖の魚だった鷹姫が懐かしそうに言った。ずいぶんと東京生活が続ぎ、地元に戻っても島まで帰れないことが多いので本当に懐かしい。二人が食べ終わるまでは政治的な話を控えたエフラヒムが問うてくる。

「あなたは日本の海軍トップだった男と盟友だそうだが、日米関係をどうしたいと考えている？」

「……………単純に単独で国土を守るなら、それが一番いいと思いますが、近隣国との関係もあり、今しばらく日米同盟は続くと思えます」

「近隣国とは？」

「中国、ロシア、朝鮮半島です」

「いずれ戦争になると思っているか？」

「いえ、あまり」

「なぜだ？」

「どちらにも、戦うだけのメリットが無い上、軍事力のバランスも取れているからです。何より海を越えて戦うのは、どちらにとつても大変です」

「うむ、日本が島国なのは、羨ましいことだな。だが、日本人は戦いが好きだろう？」

「……どの民族にも勇敢な人、とくに男性の中には、戦いが好きな人は数%いると思います。それも一つの才能かもしれませぬ」

「あなたも戦いが好きだろう。剣の腕前も相当で、その従者は国一番の使い手と聞く」

「鷹姫は従者ではありません。秘書であり友人です」

かなり自分のことを予習されているようで鮎美は居心地の悪さを感じた。相手は自分の多くを知っているようなのに、こちらは相手を知らない。元大統領で95歳という情報しかなく、彼がイスラエル国内で右派なのか、左派なのかさえ知らない。会話の落としどころと相手の狙いが見えず、まさに右も左もわからなくて困った。そして困らせて自分の本質を見ようとしているのではないかと勘ぐれてくる。

「剣で戦うのは好きか？」

「……中学までは。鷹姫に負けて以後、引退しています」

「タカキさんは剣で戦うのは好きか？」

「はい」

「戦争も好きか？」

「いいえ」

「タカキさんも同性愛者か？」

「いいえ」

「鷹姫、帰るよ。ごちそうさまでした」

非礼な質問に怒った鮎美が席を立て去ろうとするので、慌てて大使館職員が止め、ジェット口職員はエフラヒムに性的な質問は日本では非礼に感じることもあり、とくに若い女性は怒りやすいと説明して仲

を取り持とうとしてくれる。鮎美を試していたエフラヒムは離席しようとしたことに気分を害した様子もなく、クナファという菓子を二人に出してくれた。チーズとシロップの組み合わせが美味しい菓子で鮎美の気分が少し癒えた。そして鮎美から口を開く。

「失礼ながら私はエフラヒムさんのことを元大統領という以外、存じておりません。イスラエルで、どのような大統領であられたのですか？」

「うむ、私の姉は日本人に殺された」

「つ……それは……大戦中ですか？」

鮎美の問いに日本人職員は、やっぱり知らないのか、と焦ってテルアビブ空港乱射事件のことを説明しようとしたけれど、エフラヒムが仕草で止め語る。

「1972年のことだ。あなたが産まれる前のことだが、学校の歴史で習わなかったか？ それとも興味が無かったか？」

「言い訳になりますが、日本は大戦後、歴史の教育がとても偏り、1945年以前の歴史ばかり習うのです。これには学校教育現場に左派である共産党系が多いこと、政治は右派である自民党が握ってきたことが影響し、左よりの教育にするか、右よりの教育にするか、中道とはどこか混乱して決まらず、見解の分かれやすい現代史よりも、大学受験での答えが決まりやすい中世近代ばかりが教育されたことが影響しています。お願いできるなら、95歳の先生から教えていただきたいと思います」

「そうか……学校で教えないのか……なるほど。さきほど、あなたと出会った空港、以前はロッド空港といったが、あそこで日本人が無差別に人々を銃撃し何人も殺した。その中に私の姉もいた」

「そうだったのですか……すみません」

「とりあえずは謝るのだな、日本人は」

「……なぜ、そんな事件が起こったのですか？ わざわざ、遠いイスラエルまで、その日本人が出かけた理由はあったのですか？」

「我々ユダヤ人がパレスチナ人と争っていることくらいは、知っているか？」

「はい、それは、ときおりニュースになりますから」

「そのパレスチナ人の組織は共産主義的であったし、乱射事件を起こした日本人も共産主義的な組織、日本赤軍に参加していた」

「日本赤軍……」

「それも、知らないか？」

「少しだけ、知っています。山荘に立て籠もって日本の警察と銃撃戦をした事件があったことくらいは」

「その日本赤軍が本来は無関係だった私たちの争いに参加してきた。反アメリカという共産主義らしい動機はあったかもしれないが、資金や武器の提供のような間接的な参加ではなく、自殺同然、自らの命もかえりみない自爆テロとして」

「……」

「カミカゼを知っているか？」

「はい」

「本来、イスラームの教えも、ユダヤ教キリスト教と同じく自殺を禁じている。だが、この事件を契機に、彼らのいう聖戦において自殺同然にテロを仕掛けてくることが始まった。結局、それは9・11テロにまでなる。あの9・11を見て、どう思った？ カミカゼだと思ったか？」

「……同じ点もあれば、違う点もあると思います」

「どのように？」

「同じ点は死を覚悟した攻撃だということです。違う点は日本の神風特攻隊の攻撃は米軍艦船に向かって行っています。民間人を狙ったものではありません。この点が大きく違います。むしろ、民間人への攻撃を遠慮無く行ったのはアメリカ軍の空襲と原爆です」

「あなたはアメリカが嫌いか？」

「……好きではありません」

「嫌いか？」

老人の目が射抜くように鮎美を見てくる。

「……正直に言えば、嫌いです。やり方の汚さが、とくに」
「彼らを殺したいと思うか？」

「そこまでは……、もう二度と、殺し合いはごめんです」

「どうも、あなたという人間が、わからないな」

「……………」

「あなたはイスラエルが嫌いか？」

「いえ。失礼ながら知っていることが少なく好きとも嫌いとも、ただ、イスラエル料理は好きです」

正直な答えにリップサービスも付けたけれど、老人は微笑んでくれず、質問ばかりされて鮎美は反撃しなくなった。

「私たち日本のことを、どう思っておられますか？ 嫌いですか？」

思い切って質問したけれど、鮎美の腋の下と背筋に汗が浮く。とくに腋の汗は毛を剃ったので先日までと違い、少しも毛が濡れることで吸収してくれたりせず、そのまま腕へ流れ落ちてくる。これでは動揺していることが相手に知られてしまいやすい、無駄毛と言われつつ、ちゃんと役割があるのではないかと鮎美は場違いなことも考えたし、何よりエフラヒムに、ここで日本が嫌いと言われると、ますます居心地が悪くなるので墓穴を掘ったかもしれない。

「アユミさんへの気持ちと同じだ。知れば知るほど、よくわからないな。戦えばロシアに勝ち、負けそうになっても逃げずに自殺攻撃してくる。かと思えば平和が好きだと言い、宗教が違う私たちにも敬意を払う。そのくせ、私の姉を殺した。さらに共産主義を求めているかと思えば、経済大国にまでなる。まったく、ちぐはぐだ」

「……………」

「あなたも、ちぐはぐな人物で計りかねる。少女で剣が好きというのは、稀だが、どの国にもいる。けれど、核武装を唱える元軍トップの老將軍と組み、首都での選挙に勝った。極右の思想かと感じるが、逆に共産主義かと思わせるような税制を唱え、世界に号令してくる。個人生活も、ちぐはぐすぎる。自分は同性愛者だと言いドイツ人の血を引く同性と結婚しながら、同性愛を禁じている宗教学校に在籍している。キリスト教の一派だというが、フランスなどはカルト指定している教団の学校に。また、度胸があるのは確かだろう、何度も暗殺されかけているのに怯えたところがない。当家のシェフが作った料理を

疑いもせず美味そうに食べてくれた。それが自殺攻撃までする日本人の気質なのかもしれないが、わからないな、ああ、まったく、わからない」

「……キリスト教学校に入ったのは、たまたま近所にあつたからです……それは外国の方には、とても変に見えるかもしれませんが、日本では、たまに普通にあることです」

「では、あなたの信じる神は？ やはり天皇か？ それとも天皇は王にすぎないか？」

「……………」

鮎美が考え込む。日本人同士なら、軽く初詣とお盆は寺、と答えれば済むけれど、唯一絶対の神を信仰し、その聖地にいる外国人に、どう説明すれば納得してもらえるのか、神社が祭る神と天皇もつながっているし、神社は自然そのものも祭っている、そのことを説明する言葉選びが難しかったし、さらに強く信仰しているか、と問われると、なんとなくでしかない。仏教に対しても同じで、そもそも詳しく教義を知らないし、とりあえず南無阿弥陀仏と唱えて、先祖を大切にしよう、くらいの軽い知識しかない。一昨年亡くなった祖父が極楽浄土に行ったのか、それとも灰になっただけで無に帰したのか、真剣に考えでもない。

「実際のところ私は、ほぼ無神論者です。けれど、天皇陛下は尊崇の対象ですし、亡くなった人のことは大切にしたいと感じます」

「……。日本では宗教観と進化論がぶつからないそうだが、あなたは、どう考えている？ 自分も天皇も猿と親戚だということになるが、それでいいのか？」

「私には逆に、それぞれが大切に思う神様ということと、科学的な事実が相容れないからといって、ダーウィンやガリレオを異端と言いつつ、この方が理解できません。科学は科学、宗教は宗教で、それぞれに大切にしたい人が大切にすればよいだけで、相容れない考えをもつ人を排斥しようという流れになる方が……」

愚かだ、と言いかけて鮎美は言葉を選ぶ。

「残念です。自分と違う他者が存在すること、それを歓迎しないまで

も、排斥しない社会になつてほしいと考えます」

「やはり同性愛者としてはキリスト教が嫌いか？」

「……………自分の存在を否定する価値観を嫌わずにいるのは難しいです」

「正直だな」

エフラヒムは紅茶を勧めてくれた。いつの間にか、喉が渴いていた鮎美は素直に飲む。少し場の緊張が解け、再びエフラヒムが問うてくる。

「杉原千畝という日本人を知っているか？」

「……………」

大使館職員とジェット口職員が知っていてほしい、という目で鮎美を見てきたけれど、知らないものを知ったかぶりすることはできない。

「いえ」

「そうか。イスラエルでは一番有名な日本人だぞ。1945年以前の歴史にも出てくる」

「すみません、知りません。その杉原は、やっぱりイスラエル人を殺したのですか？」

「……………クク、ははは！ お前は人を笑わせてくれるな。タニガキの笑い声も夜中に響いていたそうだが。クク」

エフラヒムが仕草で示したので大使館職員が手短かに説明してくれ、杉原千畝が大戦中の外交官でドイツに追われるユダヤ人を逃がすため、本国の命令に抵抗して通行ビザを発給し続け数千人のユダヤ人を救ったことを鮎美は知った。そして、自分がどれだけマヌケな質問をしたのかも理解して頬を赤くした。恥ずかしい、ただの女子高生なら知らなくても恥ずかしいと感じないことでも、外務大臣にとまで言われているのに、無知でいたことが恥ずかしくて鮎美は唇を噛んだ。杉原千畝のことは高校三年生で習う日本史の資料集には載っているものの、鮎美は一学期のうちに日本史での大学受験をしないことが決定的となり現代社会の復習に切り替えたので知識の穴になっていた。ただ、知らないことが多いのは若年者として当然なので、その場合の

対応は心得ている。

「そんな人がおらはったんですか不勉強でした。エフラヒムさんは杉原を、どう感じておられますか？」

「日本はドイツと同盟していたからな。それを考えると官僚としては自国への裏切り行為でもある。そうしてまでも同胞を助けてくれたことを感謝しているし、自分を犠牲にする精神が杉原にもあったのだろうか、と思っている」

また老人が鋭く鮎美を見てくる。

「あなたは自国のカミカゼを、どう思っている？」

「……………やむをえない選択であったと思います」

「カミカゼで死んだ戦士のことを、誇りに思っているのか？」

「……………はい」

「そうか。いろいろと質問に答えてくれて、ありがとう。まだまだ日本人というのは理解できないが、少しはわかった気がする」

そう言ったエフラヒムが握手を求めてきたので鮎美は喜んで応じた。そこへ執事が伝達に来て、邸へ日本大使が駆けつけてきたこと、鮎美が外務大臣となる旨が日本の首相官邸から正式に発表されたことを伝えた。日本大使を交えて今後の予定を話し合い、やはり帰国便の都合で予定通りの専用機となるも、それまでの間、イスラエル政府として鮎美を歓迎したいということになった。

「アユミさんとタカキさんはお疲れのようだ。歓迎パーティーは夕刻からとして、それまで休んでもらえば、どうだ？ 部屋を提供しよう」

「ありがとうございます」

徹夜の後に飛行機の床で仮眠しただけの鮎美と鷹姫の顔には疲労が出ていたので、エフラヒムの邸でシャワーとベッドを借りた。機内での不快な体験と、鳩山総理と谷柿総裁とのやりとり、そして他国政府の元大統領との会話で疲労していた鮎美はベッドに横になると、すぐに深い眠りに落ちた。イスラエル時間での18時になり、ヘブライ語が堪能なジエト口職員に起こされ、制服を着て邸の庭で開催されたパーティーに参加する。

「紹介しよう。日本から来たアユミ・セリザワ外務大臣と、その秘書タカキ・ミヤモトさんだ」

エフラヒムの紹介で列席していた100名あまりの男女が拍手をくれる。列席者にはイスラエル政府の要人もいたし、鮎美が若いので要人の子供や孫もいて、歳の近い者が他国で大臣になることに興味をもち、いろいろと質問してくれた。それへも丁寧な答え、連合インフレ税についても問われたので熱心に語った。

「タックスヘブンを空爆せよ、という言葉が一人歩きしていますが、あれは私の発言ではありませんし、真意でもありません。また、共産主義ではないかと懸念されていますが、それも違います。分類としては修正資本主義です」

あまり一気に話すと通訳が大変なので一呼吸おく。

「経済力のある参加各国が協調して自国通貨を多めに発行し、ゆるやかなインフレにもっていきます。そうして10年15年をかけ、通貨価値を半分にする。これによってタックスヘブんに貯め込まれた租税回避財産は実質半減、50%の税金をかけたのと同じことになります。これを財源に各国は福祉政策などを充実できますし、経済力の無かった国との格差も軽減します」

途中で若い男性イスラエル人が挙手したので頷いて発言してもらう。

「その政策では、タックスヘブンの財産だけでなく、しっかりと納税していた人間の財産も半分の値打ちになるし、ただ流入してきただけのパレスチナ人のような者にも福祉をバラまくことになる。賛成しかねるな」

「現状の制度ではタックスヘブンは永遠に逃げ続けます。結果として、しっかりと現状で納税している人へ、より重い税金が課され、福祉などが維持されるでしょう。この方が不平等です。また世界の富みが上位5%の人間によって50%を占められていることを考えれば、この25%に課税できたとき、しっかりと現状で納税している人の税金を軽減することもできます。そして、私はイスラエルの方々とパレスチナ人の関係を失礼ながら、ほぼ知りませんが、それは在日朝

鮮人問題を他国の方が知らないのと同様で、それぞれに複雑な歴史と事情のあることです。したがって、どのような福祉政策を実施または実施しないか、は各国の自由です。その点、EUやソ連とは違います。税収は協調して得ますが、国家支出は各国の裁量のままです。また、私の国でも流入して数年といった過去の納税期間が短い人へ、赤ちやん手当てなどの手厚い福祉は支給されないか、減額して支給される、といった案を練っています」

今まで何度も母国で説明したことなので立て板に水で語ると、多くのイスラエル人が頷いてくれた。そして今度は英国の大学院を卒業したという若いイスラエル人女性が手をあげた。

「スイスのような経済力のある国が参加しなかった場合、どうしますか？」

「参加しない場合、自国通貨高に非常に苦しむと考えます。もちろん、輸入は割安にできるわけですから、あらゆる食品、資源が豊富かつ容易に入ってくるものの、一人の人間が食べる量には限りがあり、輸入食品が増えすぎれば食糧自給率の低下を招きますし、国内の第一次産業が苦しみます。資源にしても多く輸入したところで製品化して輸出するとき、他国でインフレが進んでいては、とても苦戦するでしょう。何より、もともと参加しないという選択肢はタックスヘブンを保護するようにも見えますし、スイスはリヒテンシュタインを抱え、ややタックスヘブンよりの国ですから、そういった意味での批判も集まり、苦しい立場に置かれると考えます」

趣旨の違う質問も来る。

「あなたの同性愛趣味について、あなたの国では許容されているの？」

「……。趣味で……え……私が同性愛者であることは個人的なこと、このさい、政策とは無関係ですから、時間を惜しみます」

「日本では共産主義者と資本主義者、どちらが多い？」

「明らかに共産主義者は少数派です。いまだ共産党は残っていますし、共産党議員とも知り合いますが、あまり本気で共産主義化しようとしているとは感じません。単に大企業から税金を多く取って、貧し

い人への福祉を充実しよう。日本の軍事費を減らそう、アメリカ軍を追い出そう、そのくらいの団体に感じています。昔は左派の一部が過激化し、イスラエルの方々にも多大の迷惑をおかけし、犠牲者まで出したことは申し訳なく思います。ただ、ここ最近は政治的な理由でのテロは無くなり、ごくごく一部の狂信主義的な宗教テロによって毒ガス散布があつたくらいで、かつての過激派は高齢化によって沈静しています」

「日本は本当は核兵器をもっている？」

「もつていません」

「もとうとする意志は？」

鮎美が若くて訊きやすい雰囲気があるからか、通常は外交の場では出ないような率直な質問が、やはり若者から飛んでくる。それに鮎美は慎重に答える。

「一部にはありますが、少数派です」

「アユミ大臣の意志は？」

「日本は唯一の被爆国です。たとえば、核兵器に有用な抑止力があるとしても、世界における核不拡散の潮流に対して、被爆国日本の核武装はきわめて悪影響を与えるでしょうから、私の意志は核武装を否定します」

単なる核アレルギーでもなく、これまでに石永たちと培った討論の経験も役立ち、自分の意見として言うことができている。

「ユダヤ人とイスラエル国を、どう思っていますか？」

「よく知らないのですが、これから勉強し、より友好的な関係でありたいと思います」

「ドイツによるホロコーストを知っていますか？」

「歴史の授業で習いました」

「また戦争になったとき、日本はドイツの味方をしますか？」

「いつもドイツの味方とは限りません。現に第一次大戦では対独宣戦していますし、何より、もう戦争が無いことを祈ります。が……」

疲れてきた鮎美は間を置いて一堂を見回してから言う。

「選べるなら、勝つ方に味方したいと思います」

それで笑いが起こり、あまり食べていなかった鮎美へ、鷹姫がラム肉の炭火焼きを勧めてくれたので歓談が続き、政治の話は控え目となったけれど、最後にエフラヒムが問うてきた。

「明日の昼過ぎには帰国せねばならないようだが、今一度、アユミ大臣を囲んでイスラエル政府として正式な昼食会をダン・テルアビブホテルで催したい。来てくれるなら嬉しいが、その場合、あなたはエルサレムを訪れる機会を逸してしまう。聖地を見ておきたいという気持ちには、どうだろうか？」

「せっかくのお招きですし、みなさんとの友好を大切にしたいと思います。聖地を訪れる機会は次の楽しみにしておきます」

うまく答えてくれる鮎美に通訳のジェットロ職員は安心しつつ、それなりの応接教育は受けたようでも18歳でしかない女子が大臣になる本国のことを憂う。外国赴任していると、日本のニュースやテレビ番組を見る機会は限られるので、最近の鮎美ブームは知らないし、知ったところで、やはり不安だった。パーティーが終わり、鮎美と鷹姫はダン・テルアビブホテルに宿泊する。大使館の車両で送ってもらった途中で鮎美はジェットロ職員に問うた。

「うちのパートナーの牧田詩織はんは以前にジェットロに勤めてはったんですけど、ご存じですか？」

「牧田……詩織さんですか……ジェットロで、どこに？」

「ドイツです」

「それでは会ったこともないと思います。なにぶん、世界各国に散っていますし、日本でも東京大阪の事務所は大きいですが、各都道府県には小さい事務所が、ほぼ各県にある状態ですから」

「そうですか、おおきに」

車両がホテルに着く。鮎美たちの車両の前後には軍用車が3台ずつの計6台がつき、うち2台は車というより対空火器を装備した装甲兵器に見えた。

「えらい厳重な警備ですね。うちには自前のSPもいてくれるのに」

「外国の大臣として警護している面もあるでしょうが、率直に言えば、

芹沢大臣の性癖も原因しています」

「うちが同性愛者やし？」

「外国大臣が在留中に万一にもテロの対象になればイスラエル政府としては大きな傷になります。その上、宗教上の理由で狙われやすい性癖をお持ちとなれば、こうもなります」

「そうですか……一応、言っておきますけど、日本語の意味として性癖というのは同性愛者に使うのは不適當ですよ。うちらが同性を好きになるのは性的指向です。あなた方、異性愛者が異性を好きになるのも、そのような性的指向であるように。そして性癖は、また別のもの、異性愛者にも色々な性癖があり、同性愛者にも色々な性癖があります。できれば、覚えておいてください」

「わかりました」

「……キレイなホテルやなあ……」

ダン・テルアビブホテルは外観が虹色に染められていて、鮎美は制服の胸に着けている虹色のバッチを撫で、朝槍のことを想い出した。

「……朝槍先生……」

発見された遺体は腔に銃口を挿入されて発砲され焼かれた無残なものと同じ。そんなことをした犯人を同じ目に遭わせてやりたいけれど、その犯人も撃たれて焼かれ死んでいて、おそらくは詩織が必死の反撃で仕留めたのだと思っている。

「……詩織はん……忘れたみたいに振る舞ってくれるけど……一番つらいのは詩織はんのはず……」

鮎美の瞳が悲しみに満ちると、鷹姫が心配する。

「芹沢先生、明日も忙しく、またフライトは長時間になり、帰国すれば大臣です。どうか、お休みください」

「そうやね、おおきに」

礼を言っただけでホテルの客室に向かう。部屋の外に日本から連れてきたSPの他に、イスラエル軍の女性兵士4名が立っただけのことになっていた。軍服を着て大きな銃を持っている女性兵士に鮎美と鷹姫は興味をもった。

「女性で兵隊さんかあ」

「車から見えた街中でも兵士を多く見かけましたし、女性も少なくなかったです」

二人へジェット口職員が教えてくれる。

「イスラエルは女性にも兵役がありますから」

「そうなんや……」

鮎美は話しかけてみようかと思ったけれど、彼女たちの視線から同性愛者である自分への嫌悪感が見て取れたのでやめた。強く神を信じているなら、その分だけ戒律を無視している人間への嫌悪感は強くなるかもしれないし、鮎美だけでなく鷹姫や介式まで同類と見ている感じがする。その誤解をとくのも一苦勞しそうなので、このさい諦めて鷹姫と客室に入った。

「明日の朝、お迎えにまいります」

ジェット口職員は緊急時の電話番号だけ置いて帰ってくれる。鷹姫と二人になった。

「この国の兵隊さん、多いなあ。しかも、もろに鉄砲を丸出しでもつてるし」

「何度も戦争をした中東諸国と国境を接している危機感なのだと思います。四国程度の面積に900万に満たない人口では不意打ちされてはかなわぬと、つねに備えているのでしょう」

「戦争かあ……リアルに戦争が身近なんや……。宗教が戦争を生むんちやうかなあ……」

鮎美の言葉を聞いて鷹姫は急に近づいてくる。鷹姫の唇が顔に近づいてきたので鮎美はドキリとしたけれど、鷹姫は小声で鮎美の耳へ囁いてきただけだった。

「芹沢先生、杞憂にすぎないかもしれませんが、大使館の職員が、どこでも盗聴されている気持ちでいてほしいと言っておりました。友好国ですが盗聴はありえると。むしろ、それが常識だそうです。ですから、この国にいるうちに宗教批判はおやめください」

「……そっか……そやね。航空通信なんかモロに聴かれてたもんね」

鮎美も小声で囁き返すと、室内を見回した。盗聴や盗撮の可能性を考えると、女子として気持ちが悪い。もう一度、鷹姫の耳に唇を近づけた。

「バスルームまで何かしてると思う？」

「さあ……」

「さすがに、それはないかな。お風呂は入りたいし」

「私が先に入って、それとなく確かめておきます」

鷹姫はバスルームに入ると、制服を脱ぎながら鏡や壁、天井を見られるけれど、ごく小型のカメラであつたなら、目で見ただけではわからない気がしたので、いっそ湿度で曇らせることにした。シャワーを浴びてから鮎美に謝っておく。

「すみません。行儀が悪いですが、全体を曇らせるため、お湯を飛び散らしています。今なら大丈夫かと思えますので、どうぞ」

「っ……う、……うん……おおきに……」

鮎美はバスローブを羽織っただけの鷹姫が近づいてきて囁きかけてくれると心臓が高鳴るのを感じた。鮎美からは何度も鷹姫を押し倒そうとしたけれど、自分より一回り身体が大きくて力強い鷹姫から押し倒しに来て抱きしめてほしいという欲求がある。押し倒されて、少しでも抵抗して諦めて抱かれるまま翻弄されたという嗜好だった。いっそ見下した目で見られながら、竹刀で翻弄されたいとも思うし、竹刀を身体に挿入されるなら衛生面からコンドームをかぶせてほしい、といった具体的なことを考えたこともある。けれど、そんなことを言えば、剣道を大切にしている鷹姫から本気で軽蔑されるかもしれないので永遠に黙っておくつもりだったし、結婚指輪の感触も忘れていないので冷静に入浴を済ませた。

「疲れたし、早よ、寝よか」

「はい」

疲れているのと盗聴を懸念していること、そして明日の昼食会でも連合インフレ税について自ら売り込みたいために、静かに別々のベッドで眠った。

翌3月10日木曜、ドイツ時間での昼12時、ベルリン市街のカ
フェで詩織からのメールをスマートフォンで見っていたルカスは、いつ
しよにランチを食べた女性からの質問に答えていた。

「4年前？ シオリの部屋に泊まったときか……」

「そう、2007年6月8日のこと」

「あの夜は金曜だったから、シオリと呑んで、たしかに彼女の部屋に
いったよ。この話、少し前にも刑事に聞かれた。彼女、何かしたのか
いっ？」

「ちよつとした探偵ごつこよ。ねえ、お願い、詳しく思い出して」

「詳しくと言われても、ボクは、すぐに寝てしまったから」

「どうして寝てしまったの？ ルカスらしくない。本当に寝たの？」

女性は美しい金髪をゆらして訊いてくる。その金髪とカナリアの
ような美声が魅力的でルカスは刑事には言わなかったことを告げる。

「寝てしまったのは、たしかだよ。たまにはボクも酒に負けるんだろ
う。部屋に着いて呑み直してからベッドに、というつもりだったの
に。シオリから、もらった日本風のカクテルを呑んだ後、すぐに眠く
なって。坊やのようにネンネさ。おいしいことをした」

「それで朝まで？」

「ああ」

「ということは、その間、シオリが外出していても、わからないのね？」

「まあ、そうなるけど、あんな時間から外出しないだろ。女性が一人
で。それより明日も金曜だ。ボクと呑みに行かないか？」

「ごめんなさい、用事を思い出したわ。また、今度ね」

あつさりと逃げられたルカスは肩をすくめ、コーヒーを飲みながら
スマートフォンを眺めた。そしてニュースでアメリカが連合インフ
レ税への参加を表明し、直後に日本の鳩山総理も参加を言い出したの
で、嬉しくて詩織に国際電話をかけた。日本時間では20時過ぎで詩
織は受話してくれた。

「シオリ、とうとう日米が参加するようだね」

「はい、とうとう、ここまで来ました」

二人とも世界を動かした一員としての喜ばしさがあつた。今もタブレット端末でライブニュースを見ながら電話しているので、鮎美の顔も見ている。これからイスラエル政府に招かれての昼食会というタイミングで日米の参加表明を受け、各国の報道機関に囲まれてフラッシュを浴びている。鮎美は神妙ながら堂々とした顔で取材に応えていた。きっと、この放送は世界中の政治と経済にかかわる人間が見ていると思うと、ルカスも詩織も協力者として心が躍った。

「大成功だ。発信国日本の参加表明が遅かったのは残念だけれど、アユミは大臣になるそうじゃないか。日本政府も大胆だな」

「当然の結果です。すぐに鮎美は首相にもなりますよ」

「ははは、それは楽しみだ。シオリも大臣婦人からトップレディーになるわけだし。ボクもドイツとスイスでのベーシック・インカム実現に努力しよう。あ、それは、そうと、気になることがあつた」

「どんなことですか？」

「やたらと、昔のシオリとボクの関係、それも4年前の6月8日について訊かれるんだ」

「……。どんな人から？」

詩織の声のトーンが少しだけ落ちた。

「刑事と、あと逆ナンしてきた金髪の女」

「そうですか。なにか誤解があるのかもしれませんがね」

詩織は答えながら4年前に殺した男性のことを想い出した。ウィーンで出会った音楽隊所属の美男子で、美しい金髪とカナリアのような美声に惹かれて、その喉があげる悲鳴を聴きたくて両目を抉ってから、指を一本ずつ折って楽しんだ。最期にシューベルト作曲の魔王を謳ってもらい、お礼に苦しまないようナイフで心臓を刺した。遺体は発見されていないはずだったけれど、なるべく交友関係のあつた人間をターゲットにすることは避けていたのに、鮎美と同じく魅力的すぎたので我慢できず欲望に負けた。その時のアリバイ作りにルカスを利用したけれど、そこを疑われているということは、ある程度の物

証も掴まれたのかもしれない。

「……」

もう鮎美の殺し方も決めている。連合インフレ税が始動した日に誘拐して、お腹を時間をかけて裂くつもりだった。キリストのように手足を固定してから、大津田に斬られたのと同じ場所を、ゆっくり1ミリずつ斬っていく。一度に深さ1ミリずつ。マゾ気もエス気もある鮎美は、きつと始めのうちはハード過ぎるSMプレイだと想ってくれる。けれど、その受け止め方を裏切られて自分が本当に殺されるのだと悟ったときの鮎美の顔が見たい。見たい、絶対に見たい。裕福な家に生まれたのに献身したナイチンゲールや、不自由のない生活を捨てて尽くしたテレサのように、世界中の弱者のことを考え、人類社会をマルクスを超えて動かしつつある自負と、最愛のパートナーだと想ってくれていること、それが幻のように終わって、あとは苦痛と絶望しかないと悟ったときの顔が見たい。それを見るまでに捕まるわけにはいかない。そして鮎美の遺体は隠蔽せずに全世界へ晒したい。きつと歴史に残る事件になる。千年先の歴史の教科書にはジャンヌダルクより、エリザベス女王より、鮎美の名が残ってくれる。殺されるときにの最期の叫びと表情もライブで世界に発信したい。問題は、そこまでして詩織自身が捕まらない方法だったけれど、それが難問で、まだ対策を思いつけていない。かの切り裂きジャックのように、永遠の謎として、逃げ切ってみせたい。早くしないとドイツ警察がICPO経由で逮捕状を日本警察へ回してくるかもしれない、じわりと詩織の腋に汗が流れると入浴していいないので匂いが強かった。

「シオリ？ 聞いてるかい？」

「あ、ごめんなさい。少し通信状態が悪いようです。また、メールしますね」

詩織が唐突に電話を切ったので、ルカスは諦めてコーヒーを飲み干した。

3月11日 心を折る

翌3月11日金曜、日本時間午前0時、イスラエル時間では日付は3月10日の17時で、まだ太陽が見えている。鮎美を囲んだ昼食会は長引き、終わりにかけに現大統領のシモン・ネタニヤフが連合インフレ税への参加を表明してくれたので鮎美は握手しながら涙を零した。その絵になる会見が終わり、いまだ正式には外務大臣たる親任式は終わっていないけれど、前回1月の内閣改造でも急遽閣僚が入れ替わることになり、前原、片山、馬淵などが外交日程を短縮したりキャンセルする混乱があった後なので、逆に首相周辺も慣れていて鮎美の外相就任については国外にいたことが問題にはなっていない。そして、イスラエル政府は鮎美を日本国外務大臣として遇し、ベン・グリオン空港まで同格の外務大臣ツイッピー・リヴニが見送りに来てくれた。

「また、イスラエルへ来てください」

「ありがとうございます。ぜひ、日本へも来てください。できれば近いうちに。でないと、私が大臣でいるのは短い期間だと思いますから」

同じ女性大臣だったので、少し打ち解けて冗談を言った。ツイッピーが切り返してくる。

「では、少し未来に首相として訪日しますから。アユミ大臣も首相になって出迎えてください」

「招待状を送ることにします」

そう言って握手を交わして、空港ターミナルから搭乗口へ向かう。その道筋には左右にイスラエル軍の儀仗兵が並び、特別に敷かれた赤絨毯の上を歩いた。飛行機に乗る寸前も振り返って、手を振り、日本人らしく一礼してから乗り込んだ。

「っ……………」

鮎美と鷹姫は飛行機に乗った瞬間、空気感の違いにかたまった。機内には大音量で賛美歌が流れ、それを生徒たちが合唱している。それは今までの学園生活でないような熱唱だったし、指揮を執っていた陽

湖は行きに着用していた紫のローブの上に白銀のマントを羽織っていて、右手には白銀の短い杖を握り、額には白銀のティアラをつけていた。美しい姿ではあったけれど、空気が臭い。他人の体臭が実は好きだったりする鮎美でも、幼少の頃からの武道生活で汗の匂いには慣れきっている鷹姫でも、思わず息を止めるほど、臭かった。その匂いは生徒たちの身体から立ち上るもので、修学旅行に出発した日から一度も身体を洗っていないのだと訊かなくてもわかった。しかも、入浴しないだけでなくイスラエルに到着してからも一睡もしていない顔色だった。

「おかえりなさい、シスター鮎美、シスター鷹姫」

一睡もしていないのに輝く瞳で陽湖が言った。

「…うん、ただいま、陽湖ちゃん」

「ただいま戻りました。月谷、その姿は？」

「私は教団からマザーの称号を授かりました。これからはシスター陽湖ではなく、マザー陽湖と呼んでください」

「マザー……」

「もう離陸です。着席してください。お話はそれから」

陽湖に促されて鮎美は最後尾へSPたちと向かう。今回は鷹姫も中央部ではなく最後尾に指定されていた。通路を進むと、異様さは鮮明になる。たしか行きでは十数人だったはずの黄色ローブの生徒が全体の7割になっていて、鐘留やゲイだとカミングアウトした泰治、着替えることを拒否して制服のままだったはずの由香里まで、うつろな目で黄色ローブを着ている。青銅色やオリーブ色のローブを着た生徒は1割に満たず、あとは白いシャツの生徒が2割だったけれど、出発時から不眠不休、食事も与えられていないようでフラフラと揺れながら賛美歌を謳っている。つい眠ってしまうと左右にいる黄色ローブの生徒が立たせていた。

「……………」

鮎美と鷹姫は言葉が無く、とにかく着席してシートベルトを締めた。飛行機が滑走路に向かい始める。陽湖がマイクで語りかけてくる。その声は行きより、ずっと枯れていたけれど、音量は大きい。

「これから聖地を離れます。けれど、受洗しているみなさんと神は、つねにともにあります。聖地を発つ前に、告白しておきたい人はいますか？」

その問いかけて二人の白いシャツの生徒が挙手して氏名を叫んだ。

「お二人の告白を受けました。離陸後、前に来てください」

飛行機が滑走路に着いて加速し始めると、さらに一人、氏名を叫んで洗礼を望む生徒が増えた。飛行機は現代の科学技術のおかげで高度をあげ、ごく安定した飛行に入る。シートベルトを外した陽湖が立ち上がって三人の生徒を会議室に導いていった。その間も出発時から黄色ローブだった生徒が先導して賛美歌の合唱になる。つい謳わずに見ているだけだった鮎美と鷹姫には起立して大声で謳うことが指導された。

「諸人お！　こぞりてえ！　讃え祭れーえ♪」

仕方がないので熱唱する。もう機内の臭さには鼻が慣れていた。

「主は！　主はあ！　来ませりい！」

さきほどまでのイスラエル政府から歓迎を受けていた世界から、別世界に迷い込んだ心地で謳うこと7曲、前方の会議室から陽湖と三人の生徒が出て来た。白いシャツから黄色ローブに着替えていて、髪が湿っている。全身を水につけたような様子だった。鮎美は母親の美恋が洗礼を受けるといって琵琶湖に入ったことを思い出した。そして、いつたい自分と鷹姫がイスラエルの要人と会っているうちに、陽湖たちはエルサレムで何をしていただろうと考える。

「…」

鷹姫と会話したいけれど、賛美歌を歌い続けることを見張られているので一瞬だけ目を合わすのが、せいぜいだった。陽湖が両腕をあげ、朗々とした声で機内に問う。

「まだ、神のそばにいない生徒たちに問います。神を信じますか？」

「信じます！」

また一人の生徒が白いシャツから黄色ローブになった。さらに陽

湖は問いかけて回り、黄色ローブが全体の8割になった。そして最後尾にいる鷹姫と鮎美の横に来る。

「シスター鷹姫」

「……」

シートに座っていた鷹姫は見下した目で陽湖を見上げた。

「あなたは神を信じますか？」

「ええ、いる人にとっては、いるのでしょう。ずいぶんと困った神が」

「神を冒瀆する気ですか？」

本来、穏やかな性格のはずの陽湖が鋭い目つきで問うた。一睡もせずに指導にあたっていて目の下に隈ができてきているのに瞳は輝いている。ホテルで、よく眠った後の鷹姫は理性的な目で言い返す。

「いいえ。素戔嗚尊をはじめはあらゆる高天原で暴れましたが、のちに八岐大蛇を退治して天叢雲剣をえています。困った神も、また神です」

「神は唯一絶対です。複数の神など存在しません。それらは、すべて偶像、そしてサタンの化身です」

「……」

もう話すことはないという顔で鷹姫は目を飛行機の窓に向けた。十分な高度を得ていて、夕日が美しかった。そろそろトルコ上空かもしれない、これから地球の夜側に向かって飛ぶことになる。陽湖が問いを重ねてくる。

「シスター鷹姫、あなたは同性愛に身を置くシスター鮎美を正道へと導くことに協力する気はありますか？」

「……」

鷹姫が鮎美を見るので、目線が合った。鮎美は、ここは無難に合わせさせておき、と融和路線を目で伝えたつもりだったけれど、鷹姫は別の判断をする。

「ありません。人それぞれの人生です。そして芹沢先生は立派な方です。あなたごとき愚か者に導かれることは微塵もありません」

「……」。わかりました。修学旅行としての指導があります。着替える

「ために前に来てください」

「鷹姫、あんまり逆らうのは、やめとき。うちは、どう言われても平気やし」

「芹沢先生……」

「お二人とも私語は慎んでください。礼拝中です」

「……………」

鮎美は黙り、鷹姫は陽湖と前方の会議室に入った。

「これは……………」

会議室は行きと様子が変わっていた。小さめの風呂桶のようなものが隅に置いてあり水を湛えている。他にも行きには見かけなかった物品が、いくつもあり、そのうちのひとつだった首枷と手枷が一体になった拷問道具を陽湖が持ち上げた。それは横1メートル、縦30センチ、厚さ3センチほどの板を半分に分り、中央に首を入れる穴があり、左右に手首を拘束する小さめの穴がある物で、木材と固定金具の色合いから、かなり古い年代の物に感じられた。

「シスター鷹姫がおっしゃる通り、シスター鮎美は立派な方です。あの方が私たちの学校に来てくださったのも神の導き、素晴らしい福音です。ですが、ただ一つの欠点があります。その欠点をただし、神の正しい道へと導くためには心を鬼にして接しなければなりません。シスター鷹姫、彼女を悪しき同性愛の淵から救うのに協力してくださいませんか？」

「……………」。芹沢先生には帰国すれば外務大臣としての仕事が待っています。これ以上、くだらないことに付き合わせるのは、やめなさい。国益を損ねます」

「指導を続けます。シスター鷹姫、すべての私物を預け、裸になってください」

「……………」

行きにも着替えたので鷹姫は制服と下着を脱ぎ、ポニーテールにしていた髪ゴムも外してカバンに入れ、そのカバンも置いた。風呂場や更衣室ではない場所で全裸になった鷹姫の姿は鮎美が見れば興奮しそうなほど若々しくて扇情的だったけれど、本人は少しも恥ずかしい

と感じていないし、見ている陽湖も異性愛者なので一片も興奮しない。

「では、これに着替えてください」

「……………」

鷹姫は行きに着せられてた白いシャツではなく、麻製の茶色い粗末な服を示されて、自分への待遇も変わったことを感じたけれど、鮎美も着ていた物なので気にせず、頭からかぶり着てみた。着てみると、長袖のロングスカートではなく、袖は無くてタンクトップのように露出が大きく、丈もミニスカートより短い鐘留の夏制服のようなギリギリの長さだった。しかも下着はつけていない。それでも剣道着や柔道着を着るときにも下着をつけない鷹姫は気にしなかった。

「では、この枷をつけます」

「……………そんなものをつけられるいわれはありません」

さすがに拷問道具をつけられる気は無かった。

「シスター鷹姫がつけなければ、これはシスター鮎美につけてもらいます」

「…くっ……………卑怯な…」

「どうしますか？ シスター鮎美のために、これを自らつけますか？」

「……………つけます」

仕方なく鷹姫は首と手首を差し出した。行きで鎖につながれて這っていた鮎美の泣き顔は覚えている。あんな姿を二度と見たくないので自分が犠牲になることを選んだ。

「では、ここに首を、手首はこちらに」

陽湖が床に枷の下部を横に立てて置いたので、そこに首を合わせるため、鷹姫はうつ伏せに寝るような姿勢になった。両手首も穴に合わせる、陽湖が枷の上部を嵌めてくる。そして古風な金具の門をハンマーで止めた。ハンマーで叩かれるたびに振動が伝わってきて痛かった。こんな目に鮎美が遭わなくて済んだことだけは、よかったと思う。

「この道具は中世において本当に同性愛者へも使われていたもので

す。エルサレムの教団本部から特別に貸し与えられました。大切にしてください」

「……………」

叩き壊してやりたかったけれど、本物の拷問道具だけあって、まったく両手が使えないし、動かそうとすると首が苦しい。

「立ってください」

「……………」

両手首と首が完全に固定されている鷹姫はうつ伏せの状態から立つだけでも、かなり苦労した。手は使えず、肘もろくに動かせないで、左右の膝を何度も動かして、まずお尻をあげる。その動作で下着をつけていないお尻が丸出しになった。しっかりとお尻をあげられるようになって、やっとバランスが取れて上体を背筋で起こした。立ち上がると服の裾が戻って、お尻を隠してくれるけれどギリギリの長さなのでローアングルから見上げれば鷹姫の股間が見えてしまう。

「この姿のまま、みなさんの前に出ていただきます。覚悟はいいですか？」

「……………」

「悔い改めるなら今です。心から神を信じると誓い、シスター鮎美を悪しき同性愛の淵から救うのに協力すると宣言してください」

「……………」

鷹姫は黙って睨むだけだった。恐れてもいないし恥じらってもいない。陽湖は言葉で煽ってくる。

「その服に書いてある文字の意味がわかりますか？」

「……………」

「前はヘブライ語でメルフラフ、汚い、という意味です。後ろはマスリアフ、臭い、という意味です」

その文字は行きに鮎美と泰治に着せた服と同じだった。行きの場合、露出が激しいと聖地巡礼で当局に規制されているので長袖ロングスカートだったけれど、今は容赦ない露出で苛むようなデザインだった。両手が固定されていて股間を押さえることもできないのに、麻の

衣服は頼りなくヒラヒラとして生地も薄い。着ている者の感覚としては下半身裸のような頼りなさだった。これで生徒たちの前に引き出されるとなると、たいていの女子なら泣き出して誓いを立てそうなものなのに、鷹姫は少しも動揺していない。逆に陽湖が人間味を見せた。

「シスター鷹姫…、腋も丸見えですから、男子にも見られますよ」
「……」

手枷のために両手首を首の高さまであげているので鷹姫の腋は半開きで、タンクトップのようなカットの麻服なので一度も剃ったことのない腋毛が見えている。そろそろ春なので多くの女子は修学旅行前には剃ったり、親に頼んで脱毛していたりするのに、あいかわらず鷹姫はそのままだった。少しだけ人間味を見せた陽湖は、再び指導者の顔になる。

「悪しき同性愛を否定しない者は同罪です。その姿を晒して悔いてください」
「……」

鷹姫は陽湖から背中を押され、会議室の外に出た。そのまま中央部まで歩かされると、最後尾にいる鮎美からも見えた。

「鷹姫に、なんてことを……」

鮎美が啞然とする。中央部に立たされた鷹姫は枷の左右を鎖で天井に吊され、身動きできなくなる。さらに両足首にも同じサイズの板製の枷を嵌められ、両脚を80センチほど開いたまま、何一つできなくされた。陽湖はイチジクの枝を持ち、ゆっくりと鮎美の方へ歩いてきた。

「シスター鮎美、あなたは神を信じますか？」
「信じます！」

鮎美は即答した。このさい、嘘をつくのは平気だった。すぐにでも鷹姫を解放してもらうため、鮎美は意地など捨てた。考えてみれば、泰治や由香里も、この異様な雰囲気にならわらず、今は合わせているだけかもしれない。とくに鮎美が公務で抜けてしまった後、たった一人の同性愛者になった泰治が変節したのは、わからなくもない。二人な

ら耐えられても、一人だとバカらしくなったのだと思う。

「シスター鮎美、あなたは悔い改め、同性愛から遠ざかりますか？」

「はい！ 遠ざかります！」

到着までの14時間くらい、どんなことでも言えた。

「ではシスター鮎美、その指輪を外してください」

「……………これは……………勘弁してよ……………」

それはできなかった。結婚指輪は詩織との誓いの象徴であり、想いの結晶なので外したくない。

「シスター鮎美、あなたは同性愛から遠ざかると宣言したはずです。嘘だったのですか？」

「……………行きのときは、一言、遠ざかるって言えばOKやったはずやん……………」

「心から神を信じ、同性愛から離れてください」

「う……………ハードルあがってる……………動くゴールポストみたいやん……………」

「やはり、あなたには指導が必要なのですね。会議室へ来ててください」

「……………拷問部屋やろ……………」

鮎美はシートから立ち上がり、指輪を撫でながら通路を歩く。中央部で鷹姫に何か言いたかったけれど、先に陽湖が言ってくる。

「私語は慎んでください」

「…………………………」

うちのせいでごめん、私は平気です、というアイコンタクトは成立した。鮎美と介氏が会議室に入ると、陽湖は持っていたイチジクの枝を壁にかけた。まるで、いつでも叩けるといふ威嚇のようで鮎美はお尻の痛みを思い出した。

「陽湖ちゃん、うちはともかく鷹姫を叩くのはやめてよ」

「私のことはマザー陽湖と呼んでください」

「……………あんた、いつから子持ちになったん？ なによ、その呼び方」

「昨日、聖地巡礼を経て、私は教団本部から世界に3人しか指名されないマザーの称号を受けました。この称号をいただいた記録としては

最年少になります」

陽湖たちは他の観光客と同じにエルサレムの聖墳墓を訪れ、キリスト教各派が共同管理しているイエスの墓で祈りを捧げた後は、新市街の一角にある教団世界本部へ入っている。そこに到着した段階で黄色ローブに変わっていたのは生徒の5割で、それは信徒率の低い在日本の教団学校としては歴史的な快挙だったし、毎年数人しか新たに洗礼を受けないのに、鮎美のSPまで一人教化したことも評価され、さらに鮎美が外務大臣になると発表があり、すでに鮎美の母親へも受洗していること、そして鮎美と協力して教団学校に大学の設置まで可能にしつつあること、それ以前から熱心に勧誘活動を行い、小学校でも級友を1名、中学校でも2名を導いていること、修学旅行の直前にセクハラ示談で得た300万円を秘書補佐の立場で正当に得た金銭と説明して教団へ寄付したこと等が大いなる功績とされ、そして最年少の国務大臣となる鮎美と並んで遜色がないようにという教団内部の配慮もあり、最年少で教団組織トップ層の地位についていた。

「……あんたらは、神の前に平等やったんちゃうん？」

「平等です。ただ、役割を負っているだけです」

「……………まあ、たしかに、国会議員と国民も、平等ちやー平等やし、大臣も貴族とはちやうけど……それに、どのみち、組織を運営するとなると、リーダーとか代表はいるもんなあ……小学校の班でも班長いるし。プロテスタントでも、万人祭司と言いつつ、牧師やら伝道師が設定されてるし、集団には代表がいるわな。猿の山でもボス猿おるように。にしても、あの屋城はんより上みたいやね？」

行きと違い、屋城や教師たちまで陽湖に対して傅く態度を取っていたことを鮎美は見逃していなかった。もともと、この修学旅行に参加している教師は、すべて信仰をもっている教師たちのようで無信仰の日教組系はいない。今や完全に陽湖が女王として立っている雰囲気だった。

「ほんで、マザー様、どうすれば、うちらは許してもらえるの?」

「私物をすべて預け、裸になってください」

「……………はああ……」

タメ息をついた鮎美は制服と下着を脱ぎ、靴と靴下もそろえて置き、カバンを渡して結婚指輪だけ身につけた全裸になった。

「この指輪だけは勘弁してください、マザー陽湖」

きちんと呼び、両手を合わせて慈悲を乞うた。

「シスター鮎美、外さなければ過酷な指導を行います」

「……………」

鮎美は迷った。奪われるわけではないし、羽田空港のやたら感度の高い金属探知ゲートでは一時的に外したし、今だけ陽湖に合わせて外す大人の判断をしても、詩織との関係に何か変化があるわけでもない、と考えることもできた。

「……………うちが、これを外したら、鷹姫は自由にしてくれる？」

「いいえ」

「何ですよ?!」

「シスター鷹姫は自らの意志でシスター鮎美の同性愛を否定せず、あの枷を受けると決められたからです。シスター鷹姫が許されるのは、シスター鷹姫の改心によつてのみであり、シスター鮎美の改心は関係ありません」

「くっ…………。けど！あの服の中、パンツもブラジャーも着けてへんにやる！ひどすぎるやん！男子も、いっぱいいるのに！手足も動かさずで万一のことがあったら、あんた責任とれんの?!」

「多くの受洗した生徒が見守っている中、淫らなことはありません」

「あんなカッコ、見ただけでもエロいわ！イエスカペドロが言うてたやん！見てエロいこと考えただけで犯したんと、いっしょやて！

今、鷹姫は犯されまくってんのと、いっしょやん！」

「この飛行機が到着するまでに、すべての生徒へ受洗をすると私は神に誓いました。淫らなことはありません」

「あるわ！あんなカッコ、うちも見た瞬間、開いたまんまの脚の間に手を入れたくなるし！男子の性欲なめんな！うちと同じなんやからエロエロに決まってるやん！」

「サタン、またお前がシスター鮎美を狂わせている。今日こそ、お前を追い出してみせます」

陽湖はハンマーを持った。

「ちよっ……」

一撃で骨折しそうなハンマーを見て、無防備な全裸でいる鮎美は怯え、介式は素早く前に回る。

「芹沢大臣に危険をおよぼすことは看過できない」

「シスターいつか、ご安心ください」

陽湖は介式の名も覚えているようだったが、介式も鮎美への敬称を更新していた。陽湖はハンマーの柄を鮎美に向ける。

「サタンに惑わされたシスター鮎美、悪魔との契約を象徴する、そのリングを外し、このハンマーで叩き潰してください」

「なっ……」

「二度と、同性愛に溺れること無きよう、悪魔とのつながりを打ち砕くのです」

「……こ、これはなっ！　うちと詩織はんを結ぶ大事な大事なもんなんよ!!」

「いいえ、それは悪魔とのつながりです」

「悪魔は、あんたや!!」

鮎美が怒鳴り、介式も陽湖に言ってみる。

「いくら指導でも、いきすぎではないか？」

「シスターいつか、あなたは同性愛を間違ったことだと感じないのですか？」

「……」

「シスター鮎美のお母さんが、娘の同性愛を、どれだけ嘆いているか、ご存じですか？」

「……」

「女と女で淫らなことをしても、何も生まれません。悪の淵に堕ちるだけです。シスターいつか、邪魔をしないでください」

「……」

どちらかといえば、性欲全般に嫌悪感を覚えている介式は同性愛にも否定的だったし、警護対象の個人的問題なので介入せずにいるだけで、陽湖と対話するとなると、警護任務とは別のことになり、鮎美の

身に切迫した危険が無いのなら、介入の根拠と動機が無くなる。それを陽湖も知っていて畳みかける。

「シスター鮎美は素晴らしい人です。ただ一つの欠点さえ改善されれば、より素晴らしい存在になります。同性と淫らな行為に耽るのは、悪魔の所業です。悔い改めるべきであり、そのチャンスなのです。どうか、見守ってあげてください」

「……………そのハンマーを置け」

「はい」

陽湖がハンマーを置いたので介式は会議室の隅に立った。

「シスター鮎美、同性愛を断ってください」

「……………これは絶対、外さへんし」

鮎美が守るように左手を握りしめ、さらに右手で結婚指輪を包んだ。

「これ外されるくらいやったら拷問でも何でも受けるわ！ 好きにしいよ！ また鎖?! それとも鷹姫みたいな枷なん?! 叩きたいだけ、うちを叩き!」

左手の指輪は絶対に外したくないと同時に、罪悪感も覚えている。あの朝槍と、その恋人だった小山田に対して、深い罪悪感が残っている。いつそ肉体的苦痛を与えてくれるなら本懐でさえある。介式がいるので日本へ到着してからの外務大臣としての業務に差し障るようなことはされないなら、痛めつけるだけ痛めつけられても、それでいいと考えた。

「うちには、どんな服を着せる気なん? 何でも着るよ、汚いとか、臭いとか、好きに罵りい! うちの気持ちは、あんたには永遠にわからんし!」

「同性愛は獣以下の所業です。獣には服はありません」

「…ま……………まさか、うちを裸で、みんなの前に出す気ちやうやろな……………」

鮎美は不安になって後退り、天井付近にある監視カメラを見上げた。それから壁にあるコントロールパネルを見る。おそらくは送信されていないと思われるけれど、全裸でカメラのもとにいるのは、か

なり気持ち悪い。

「シスター鮎美には、ここで指導を受けてもらいます。まだ受洗していない生徒の前に、その姿を出すわけにはいきませんから」
「……」

警戒している鮎美の前に、陽湖は金属製の手錠のような物を置いた。鷹姫への枷と同じく年代物に見える。

「シスター鮎美、そこに座って右手を出してください」

「……………お座り、お手、とでも言えばええやん」

悪態をつきながら鮎美は床へ座り、右手を出した。その手首に陽湖が手錠をはめてくる。行きで巻かれた鎖と南京錠はホームセンターで売っていいそうな物だったけれど、今回はずっしりと重い、中世の手錠だった。

「シスター鮎美、右足をこちらへ」

「……………手と足を……………」

鮎美は右手首と右足首をつながれた。さらに左手首と左足首もつながれると、立つこともできない状態にされた。陽湖はメートルほどの鉄棒を持ってきた。

「……………それで叩くとか……………」

「叩きません。手足の力を抜いてください」

「……………」

鮎美が脱力すると、陽湖は足首へはめた錠へ金具で鉄棒の端を固定すると、さらに反対の端を反対の足首にある錠へ固定した。鮎美は大きく開脚した状態を強いられた。

「こんなカツコにさせて、強姦でもする気なん？」

「シスター鮎美、女は男と結ばれるように神が造られました。それを思い知ってもらいます」

「……………ど……………どうする気なんよ?!」

怖くなってきた鮎美を座った状態から、仰向けへと陽湖が押し倒してくる。手足がつながれているので何の抵抗もできず、鮎美は仰向けにされて、開脚を強いられているので恥ずかしくて真っ赤になった。

「や……やめてよ！　せめて、アソコくらい隠してよ！」

股間も剃毛しているので陽湖や介式に見られるだけでも恥ずかしくなかった。

「シスター鮎美、そのリングを外し、自らハンマーで叩き潰しますか？」

「……イヤよ……。どうする気？」

鮎美の問いに陽湖が男根を横した鉄棒を持ってきて答える。

「これは中世に女性同性愛者を矯正するために用いられていたアダムの槍という道具です」

「……」

もう見ただけで使い方の想像がついた。ネーミングセンスも、そのままだと思う。

「悔い改めなければ、これを使ってシスター鮎美を矯正します」

「……」

「問います。悪魔との契約の象徴、悪しき同性愛の軛、その指輪を自ら外し、二度と指を通さぬよう正義の鉄槌をもって粉碎しますか？」

「……この指輪は絶対、守るし」

「アダムの槍を使うということは、シスター鮎美は処女でなくなりますよっ。」

「……」

「さあ、神に誓いを立ててください」

「……………ええよ、それ刺しいよ。男と結ばれる体験でも、何でもするわ」

すでに鮎美は自分を処女とは思っていないし、いつか理想の男性と結ばれるときまで処女でいたい、という異性愛の女子が思うようなことは一度も考えたことがなかったので、さほど苦痛でもないと自分に言い聞かせた。ただ、不安は大きい。

「け、けど、それ、中世に使ってたもんやろ。挿入する前に、石鹼でよく洗って。あと、熱湯につけて。どんなバイ菌、ウイルスがついてるか、わからんやん。できたら、コンドームをかぶせて挿入してほしいわ」

「……………」

「うちが性病になったら、どうするんよ？　中世にエイズは無いけど、梅毒とかあったやん。しかも今の梅毒とは遺伝子が微妙に変化してるかもしれないし、現代の薬が効くとは限らんやん。お願いやし、突っ込む前にキレイにして」

「……………わかりました」

中世の異端審問のように拷問の挙げ句に殺すのが目的ではなく、どうにかして鮎美に同性愛から異性愛へと転向してもらうのが目的なので、性病にならないと元も子もない。陽湖は教団から貸し与えられたアダムの槍をトイレの水道でよく洗い、それから会議室の隅にある給湯設備で煮沸消毒した。さらに貨物室に通じる床下の戸を開けて、自分の荷物からコンドームを出してくる。修学旅行の内容は寸前まで陽湖も知らなかったのも、もしも屋城と結ばれる機会があったときのために常備薬の中に含まれると旅行規約を解釈して入れておいたものだった。教義で淫らな行為は禁止されているけれど、愛し合う男女が結婚の上で結ばれることは推奨されているし、その結婚は神への誓いが重要なのであり、戸籍上の婚姻届は後になっても問題ない。屋城にも、そして今自分にも結婚式を司祭する権限があるので、いつでも、どこでも結婚できるとも解釈している。陽湖は三つあるコンドームのうち一つを鮎美のために使うことにした。ほどほどに冷ましたアダムの槍にコンドームをかぶせる。やり方は保健体育で習ったので一度で成功した。

「……………シスター鮎美、最期のチャンスです」

やはり友人の処女を奪うのは、いくら正義のためとはいえ、躊躇いがある。陽湖は迷いを顔に出さないようにしつつも、繰り返し問う。

「悪魔との契約の象徴、悪しき同性愛の軛、その指輪を自ら外し、二度と指を通さぬよう正義の鉄槌をもって粉碎しますか？」

「……………突っ込むの、いきなり深くまで刺さんといてな。女の、……、めっちゃデリケートなん、わかってるよね？　男と結ばれる感じを教えにくれるんやったら、優しく挿入してよ」

もう鮎美は挿入される前提で、明らかに処女という感じの陽湖に教えている。

「シスター鮎美、本当に処女でなくなりますよ？」

「ゆっくり、ゆっくり入れてよ」

「……………」

陽湖はアダムの槍を鮎美に触れさせた。煮沸消毒した後なので、ほどよく温かい。

「…………シスター鮎美…………カウントダウンします。30数えるうちに指輪を潰すと誓いを立てれば許します」

「……………」

「30、29」

二人とも既視感を覚えた。美恋への宗教勧誘をやめろ、と迫る鮎美が島の山中で同じようなことを陽湖にしたことがある。それを思い出しながらカウントダウンが進む。

「…3…………2…………1……………」

「……………」

鮎美は挿入されると思ったけれど、陽湖は手が動かなかった。

「…………本当に最期の最期のチャンスです。誓いを立てますか？」

「……………答えはノーよ」

「シスター鮎美……………」

陽湖がアダムの槍を1センチだけ進めた。

「まだ間に合います」

「…………一回、抜いて、まわりをほぐして」

「こうですか？」

アダムの槍を回してみる。

「うん、そう。ゆっくり、なじませてな」

「はい」

「もう、ええよ。入れて」

「……………では……………」

今度は3センチほど挿入した。

「痛いですか？」

「うん、ちょっと、けっこう太いね。それ。どこ製？」

「……それは、わかりません。おそらくヨーロッパの、どこかだと思います」

「つてことは、欧米人サイズなんやろね」

詩織の指3本分くらいの圧迫感がある。

「どうですか？ シスター鮎美、男性と結ばれる感覚は？」

「……うくん……」

どっちかというと、陽湖ちゃんと結ばれてる気いするわ、詩織はんには悪いけど指輪を守るには、これしかないし、にしてもビアンは男に抱かれたら治るとかいう迷信、アホな異性愛者どもは本気で信じてるもんなあ、そんなんで治るんやったら世界からビアンは消えるやん、と鮎美はアダムの槍で突かれながら思った。近々バイブを使ったプレイも詩織と話し合って計画していて、修学旅行出発前に二人でネット上の大人のオモチャ店で鮎美の膣に合いそうな商品を3種類も買っている。さすがに議員宿舎へ配達されるのは、なにかと不安があるので詩織のマンション宛にしている。そんなタイミングだったのでアダムの槍は怖くなかったし、それで男性との性交の疑似体験になるとも思えない。

「シスター鮎美、女として男を愛せそうですか？」

「……まだ、気持ちよくなってる………ゆっくりピストンさせてみてよ」

「こうですか？」

「うん……そう……だんだん、早くして」

鮎美の注文に陽湖は忠実に応えるので、しばらくして鮎美は絶頂した。

「…ハア……ハア……」

やはり詩織に悪い気がして、絶頂した後に涙を流した。陽湖が心配する。

「大丈夫ですか？」

「……強姦した後に、そんな言われてもね……」

「こ、これは強姦ではありません！ 正義の指導です！」

「アメリカみたいなこと言うて」

「っ……」

「やっぱり欧米の精神はキリスト教から来るのかな。その独善性、あ
きれるわ。仏教でも神道でも異端審問なんかやらんやん」

「……廃仏毀釈はありました。踏み絵も」

二人とも高校生なので、まだまだ受験に出そうな言葉は覚えてい
る。

「たしかに……けど、廃仏毀釈は明治政府が欧米から開国とキリスト
教布教を求められての防衛的反応やん、天皇を中心とした神道国家に
しようていう。踏み絵なんか、そもそも日本に無かったキリスト教を
突っ込んできたことへの拒絶反応やし。結局、キリスト教が争いを持
ち込むやん」

「っ……」

「インカ帝国なんか皇帝へキリスト教宣教師が改宗を迫ったあげく、
受け入れたのに殺して金銀財宝を奪ったやん。まさに、国と力と栄え
とは、限りなく汝のものなればなり、やね」

「黙りなさい！ 主の祈りを冒瀆することは許しません！」

パンっ！

急に怒鳴った陽湖が平手打ちをしてきて鮎美は鼻血が出そうなほ
ど痛かった。睡眠不足のせいなのか、それとも大きく向上したマザー
という自分の地位と責任への自負のためなのか、いつもの穏やかさが
無い。叩かれた鮎美は涙を滲ませながら睨んだ。

「ほら、本性丸出しや。っ、痛っ?!」

さらに鮎美はアダムの槍を掻き回されたので痛みに呻いた。そろ
そろ手首と足首をつながれているという姿勢も苦しくなってきたとい
る。

「さあ！ シスター鮎美！ 誓いなさい！ 同性愛を捨て！ 正しく
生きると！」

「ううっ……痛い、痛いつて！ そんなに激しく動かさんといてよ！
うううっ……」

鮎美は呻き、陽湖は出血を見たので動かすのをやめてアダムの槍を

挿入したままにする。

「ううっ……陽湖ちゃん……マザー陽湖、……腰が攣れそう……脚も……一回、解いてよ」

反論しても痛い目をみるだけだと思い知った鮎美は懇願に切り替えた。陽湖は気持ちを落ち着けるように短く祈っている。

「……………」

「ホンマにつらくなってきたんよ。アソコも痛いし……殺す気？」

もともと長時間不自然な姿勢を強いることで傷つけずに苦痛を与える拷問道具なので、いよいよ効果が出てきて鮎美は悶える。何度か、脚が攣ると、もう泣けてきた。

「ひっううっ……痛いっ……痛いっ……お願い……お願いです、一度、解いてください。マザー陽湖」

鮎美の足が攣り、足指がピクピクと痙攣している。腰も痛そうで涙を流しているし、手を動かせないのも、顔を拭くこともできない。もう余裕が無くなってきて、口の利き方も変わる。

「お願いです……ううっ……ハア……ぐうっ……マザー陽湖……どうか……これ、めっちゃキツイから……足腰、どうにかなりそうなんよ……うあああっ！ また攣る！ 攣るから！ ああ、ああ！ ひい！ お願いです、ごめんなさい！ ごめんなさい！」

「指輪を外し、自ら潰しますか？」

「ううっ……それだけは勘弁してよ！ うあああっ……痛いっ！」

「…………しばらく悔い改めていてください」

少し考えた陽湖は会議室に鮎美を放置して外に出る。外では生徒たちが眠らずに礼拝を続けていた。陽湖は泰治と博史を呼んだ。泰治はエルサレムで洗礼を受けて黄色ローブになっているし、博史は高校入学前からの信徒で鮎美と鷹姫のクラスに初めからいた男子で当然、出発時から黄色ローブを着ている。

「ブラザー泰治、ブラザー博史、お仕事をお願いしますか」

「はい」

「会議室にいるシスター鮎美の拘束具を解いてあげてください。優し

く、ただし、私の許可はえていないから秘密に、と」

「はい」

泰治は即答したけれど、博史が疑問に思う。

「マザー陽湖、それでは嘘をつくことになりませんか？」

「いいえ、これは指導です。私は気づいていないフリをしますから、お二人はシスター鮎美に優しくしてください。足腰が痛いようですから、マッサージをしてもかまいません。ただし、彼女は裸でいるので淫らな気持ちになってはいけませんよ。また、手足は自由にしてください。矯正のために股間につけている物は、そのままにしておくよう」

「はい……」

「もし、お二人のうち、どちらかがシスター鮎美と祝福された結婚を望むなら、より優しくしてあげてください。水を飲ませることも許可します。彼女に男性の素晴らしさを気づかせてあげてください。30分後には私は会議室に戻りますから、そのときまでには再び拘束しておくよう」

「わかりました」

男子二人は会議室に入っていく。陽湖は礼拝を続けている生徒たちを二つのグループに分けた。いまだ白いシャツを着ていて洗礼を受けない生徒へ3対1で黄色ローブの生徒がつくようにしつつ、残りの黄色ローブの生徒で中央部に拘束している鷹姫を囲ませた。

「ブラザー鷹姫、悔い改める気になりましたか？」

鷹姫も、ずっと立たされたまま手足も動かさないので鮎美ほどではないけれど、苦痛を感じてきている。それでも陽湖が近づくと敵を見るような目で睨んできた。

「月谷、芹沢先生は？」

「ご安心ください。シスターいつかも、いつしよなのですから」

「……………」

「そして、私のことはマザー陽湖と呼んでください」

「……………」。芹沢先生には何をしていますのです？」

「他人の心配より、あなた自身、悔い改める気持ちは生まれましたか」

？」

「……………」

鷹姫は反抗的な目で睨むだけだった。それで陽湖も十分に理解する。

「お尻を叩きます。これは暴力ではありません。改悛のための愛の鞭です。お受けください」

パン！

陽湖が手のひらで鷹姫のお尻を叩いた。会議室ほどのスペースがないのでイチジクの枝は振り回しにくいことと、やはり自分の手で叩いて相手の痛みを感じておきたいからだだった。

パン！　パン！

よく鍛えられて筋肉のついた鷹姫の臀部を何度も叩いていると、陽湖の手が痛くなってきた。鷹姫の方は不快そうに睨んでくるだけで動じていない。

「シスター鷹姫、使徒信条を暗唱してください」
「お断りです」

高校生活の三年間で何度も礼拝や聖書研究科の授業で、主の祈りとならんで使徒信条も出てきたので、鷹姫も暗記しているけれど、言いたくはない。

「シスター鷹姫、これは指導です。使徒信条を暗唱してください」
パン！

「……………」

「シスター鷹姫、暗唱してください」
パン！

「……………」

叩かれても鷹姫は黙っている。もともと毎日のように竹刀で打ち合っているのです、いつも防具に当たるとは限らず、強く身を打たれることには慣れている。薄い陽湖の手のひらなど侮辱は感じても、痛みは軽い。

「わかりました。シスター鷹姫が暗唱しないのであれば、この課題はシスター鮎美に課します」

「っ……くっ、どこまでも卑怯なっ…使徒信条！ 我は天地の創造主、全能の父なる神、エホバを信じます。我は主のひとり子イエス・キリストを信じます。聖霊によって宿り、処女マリアより生まれ、ゴルゴダにて死に葬られ、黄泉にくだり三日夜に死より復活し天に昇り、父なる神の右ありて、かしこより来たりて生者と死者を裁きたまわん。我は聖霊を信じます。罪の赦し、身体の復活、永遠の命を信じます。アーメン」

「よろしい。シスター鷹姫、あなたは悔い改め、悪しき同性愛に溺れるシスター鮎美を救うことに協力しますか？」

「……どうせ、天に昇るのであれば、未練がましく復活などせず、潔く死んでいればよかったです。自然の摂理に逆らっているのは、同性愛者より復活信仰の方です。執着を断ち涅槃に入ったブツダの方が、ナザレの私生児より、よほど高みに至っています。弟子に裏切られた愚か者と、弟子に見守られて80年の生涯を穏やかに終えた者、どちらが賢者か自明の理です」

「っ…」

パン！ パン！ パン！！ パン！！

陽湖は手が痛くても叩き続けた。それから周囲の黄色ローブに命じる。

「シスター鷹姫の中にいるサタンは強固です。みなで順に彼女のうちからサタンを追い出します。一人5回ずつ、叩いてください。その間、シスター鷹姫は休まず使徒信条を唱え続けてください。休めば、同じことをシスター鮎美に課します」

「……」

「さあ！ 始めてください！ シスター鷹姫！」

「………使徒信条、我は天地の創造…」

「もつと大きな声で言ってください」

パン！！

「使徒信条！！ 我は天地の創造主！ 全能の父なる神！」

大声で暗唱する鷹姫を生徒たちが手で叩き始めた。陽湖は見守りながら追加する。

「このまま順に叩くことを繰り返してください。シスター鷹姫が悔い改めるまで続けます」

「処女マリアより生まれ！　ゴルゴダにて死に葬られ！」

唱えながら鷹姫が睨んでくるのを、陽湖も睨み返した。そろそろ鮎美のことを博史と泰治に任せて20分になるので陽湖は黄色ローブの女子生徒を5人ほど集める。その中には鐘留も含めた。

「これからシスター鮎美を同性愛から救うため、男性を好きになってもらい、女性を嫌ってもらいます。そのために、みなさんには心苦しいと思いますが、シスター鮎美に意地悪を言ったり、身体を傷つけない程度に叩いたりしてもらいます。約30分間、これを繰り返し、また男子に変わってもらい、男子にはシスター鮎美へ優しくするよう言っております。みなさんには苦痛な役回りになりますが、どうか、心を鬼にしてシスター鮎美が女性を嫌うよう振る舞ってください」

「「「はっ」「」」」

陽湖は細かい説明もした上で会議室へノックしてから入った。中には鮎美と介式、博史、泰治がいて、陽湖が命じた通り、再び鮎美は拘束具で手足をつながれて開脚を強いられていた。命じたことと違ったのは鮎美の股間に、介式のハンカチがかけられていたことくらいだった。

「ブラザー博史、ブラザー泰治、ご苦労様です。また30分後に来てください。それまでは未受洗の生徒を導く礼拝に参加しててください」

「はい」

博史と泰治が出ていく。陽湖は問う。

「シスター鮎美、悪しき同性愛から身を遠ざけますか？」

「…はい…遠ざけます…」

鮎美は30分弱、拘束具を解いてもらい、それなりに休憩できたので身体の痛みは消えていた。そして再び拘束されて仰向けに寝かせられ開脚しているので、反論しても苦痛を味わうだけだと自分に言い聞かせ、もう陽湖に逆らわない態度を選んでいた。

「では、その指輪を外し、自ら叩き潰してください」

「…………勘弁してください、マザー陽湖」

「まだ悔い改める気持ちになれていないのですね。残念です」

陽湖が事前に打ち合わせた仕草で命じると、鐘留たち5人の女子が口々に鮎美へ罵詈雑言を浴びせる。

「アユミン、いいカツコだね」

「同性愛とかマジ気持ち悪い」

「なんか突っ込まれてるけど、チンポも感じるの?」

「あはは、一応、濡れてるじゃん」

「つていうかパイパンだし」

「…………見んといてよ…………うちに何の恨みがあんのよ…………」

見下ろされて罵られているうちに、すぐに鮎美は陽湖の作戦に気づいた。あまり同性愛者のことを知らない異性愛者が考えそうな浅はかな作戦で、さきほどまで優しくしてくれた男子二人が消え、今度は意地悪な女子五人がいびつてくる。これで男を好きになり、女を嫌いになるだろう、という単純かつ無効なもので、では逆のことをされたら異性愛者は同性愛者になるのか、と問いたい。

「アユミンさ、もう同性愛、やめれば?」

「ホント、キモい、キモい!」

「もしかして私たちに見られて興奮してんの?　なんか濡れてきてるんですけど」

「これで国会議員とか、ありえないし」

「性交大臣じゃん。外交得意そう」

「…………ううつ…ぐすつ…………助けてください…………マザー陽湖…………」

作戦はわかったので、鮎美は傷ついて泣いてみせる作戦をとった。逆らっても無駄なので、いっそ泣き出して震えてみせる。置かれている状況は悲惨なので嘘泣きしなくても本当に涙が流れてくれる。いびつてくる女子たちも鮎美が泣き出すと、やつかみはあっても深い恨みがあるわけではないので手はあげず、罵りもほどほどでクスクスと笑うくらいになり、ときどき同情した目で見てくれた。

「シスター鮎美、同性愛を捨てますか?」

「捨てます、捨てますから、許してください。ぐすつ…」

「では、その指輪を外しますか？」

「……外すけど、……壊すのはイヤよ。お願いです、これだけは許してください」

「まだ悔い改める気持ちが足りないようですね」

「」「……」「」

なんか、すつごい可哀想、と女子たちは哀れに想った。さらに時間が経過すると拘束具のせいで足腰が痙攣してくる。

「ううつ、痛い痛い！　痛いです！　痛いです！　ひいい！　助けて！　ああああ！」

「シスター鮎美、悔い改めますか？」

「あらためます！　あらたためますから！　ううつ、痛い！　攣る、また攣る！　うあああ、痛い、痛い痛い！　あらたためます！　たためめあう！」

「月ちゃん、やり過ぎなんじゃ……」

陽湖が睨むと、鐘留は言い直す。

「マザー陽湖、やり過ぎじゃないですか……アユミン、可愛いそう」

「では、シスター鐘留が代わって受けますから？」

「っ、ヤダ！　イヤです、ごめんなさい！　神さまを信じます！　アーメン、アーメン！」

学園から関空までのバスでオネシヨをして以来、鐘留は周囲の視線に怯えたように生きていて、すべてに流されているようだった。

「痛い！　マザー陽湖、お願い！　ひいい！」

もう、わざと泣こうという涙から本気の涙に変わって鮎美は懇願する。陽湖は、また問う。

「リングを諦めますか？」

「ひううう！　ううう！」

涙を撒き散らしながら鮎美が首を左右に振った。そこで、ようやく30分となり陽湖たち女子は男子一人と交替した。陽湖が会議室の外に出ると、新たに白いシャツの生徒が二人、洗礼を望んできた。もう、あと数人で学年全員を導ける。手応えを感じながら陽湖は中央部

にいる鷹姫に近づいた。

「黄泉にくんだり！ 三日夜に死より復活し！」

鷹姫は大声で使徒信条を唱え続けていた。剣道全国優勝の体力と気合いは伊達ではなく少しも弱気が見えない。そろそろ泣き出して、神を信じます、と口先だけでも言いそうなものなのに、お尻を叩かれながら怒鳴るように暗唱していた。

「シスター鷹姫、一時やめてください」

「……ハア……」

「問います。神を信じ、悔い改めますか？」

「……………」

黙って反抗的な視線を送ってくる。鷹姫の額から流れた汗が眉毛に染み込み、それから涙のように流れたけれど、泣いてはいない。そして黄色ローブの女子が同じ黄色ローブの男子を指して告げてくる。

「告発します。ブラザー貴久が淫らな気持ちでシスター鷹姫のお尻に触っていました！」

「っ、ち、違うって！ 普通に叩いただけだ！」

「私も見ました！ 叩いた後、お尻の間に指を入れてました！」

鷹姫が着ている服は丈が短くて、お尻を叩いたときに指を回せば肌に触れることができるほどだったので、男子としては普通の現象だった。しかも鷹姫は手足が動かせず、使徒信条を諳んじていて文句も言えない、これでは他の男子も誘惑に負けて当然だった。

「ブラザー義隆も触っていました！ 何度も！ 淫らに！」

「っ、仁美……お前……チクるとか……」

告発された二人の男子に注目が集まる。二人のローブは股間の前が小さく湿っていて、それが先走り液だということを陽湖は知らなかったけれど、だいたい女子は知っていた。男子もローブの中は下着を着けていないので興奮もわかりやすい。

「ブラザー貴久は勃起していました！」

「ブラザー義隆もです！」

「うっ……お前ら……」

「オレは……別に……」

陽湖が厳しい目つきで二人を見て問う。

「ブラザー貴久、ブラザー義隆、正直に答えてください。嘘は罪を重ねることになります」

「……………」

「お二人は淫らな気持ちでシスター鷹姫に触れたのですか？」

「……ち、違う！ こいつに誘惑されたんだ！」

「そうだ！ 宮本の中のサタンがオレらを誘ってきたんだ！」

「そうだ、そうだ、サタンだ！ こいつは魔女だ！」

「ああ、そうだ、洗礼を受けたオレらが淫らになるはずがない！ 魔女のせいだ！」

神を信じれば、サタンの存在も信じることになり、聖霊や魔女もいて当然という短絡的な思考だった。二人は罰を受けたくない一心で、すべてを鷹姫のせいにする。セクハラや強姦には女性の側に落ち度があったという現代でも馴染み深い思想でもあった。陽湖が鷹姫に問う。

「シスター鷹姫、あなたは二人を誘惑しましたか？」

「……………」

あいかわらず反抗的な目をするだけだった。

「答えなければ、罪ありとみなしますよ？」

「……………」

「わかりました。悪いのは二人ではなく、誘惑したシスター鷹姫です。これからは叩くのは女子のみとしてください。シスター鷹姫、使徒信条を続けてください」

「使徒信条！ 我は……」

暗唱とお尻叩きが再開される。男子が抜けたので打撃力が激減した。陽湖も参加して鷹姫のお尻を叩きつつ、鮎美と鷹姫への責めが決め手を欠いていることに気づいていく。鮎美は泣きながらも守りたいものは守っているし、鷹姫は微塵も動じていない、これ以上の体罰強化はSPの目もあってできない。今も知念たちが何か言いたそうに、こちらを見ている。鷹姫が泣かないので介入してこないけれど、

泣き叫んで助けを求められると、やついかもしれない。陽湖はSPとの間にカーテンでもあればよかったと考えつつも黄色ローブの女子生徒が一人、お尻叩きの列から抜けて陽湖へ会釈してから後部のトイレに向かうのを見て、閃いた。

「シスター鷹姫、喉が渴いたでしょう」

睡眠不足のせいで頭が回っていないなかったのか、それとも聖職者という気分のせいなのか、鷹姫を追い込む一番いい方法を忘れていた。陽湖が命じてペットボトルを3本も持ってきてさせた。

「ヨルダン川の聖水です。お飲みください」

きちんと飲用に消毒されている水を鷹姫に飲ませる。両手が使えない鷹姫の口にペットボトルを押しあてて飲ませた。

「ううっ…もう、けっこうです」

かなり喉が渴いていた鷹姫はコップ1杯分は飲んだけれど、それ以上は拒否する。日本人が慣れている軟水と違い、硬水なので飲みにくいし、陽湖の目つきが聖職者の澄んだ目から、悪趣味な人間の怪しい光りに変わっていて怖かった。

「聖水によつてシスター鷹姫の中のサタンを清めます。すべて飲んでください」

「……………嫌です…」

反抗的な目が、恐がりの子供のような目が変わった。責めの手応えを感じた陽湖は背筋に悦びが走ったけれど、顔には出さない。

「シスター鷹姫が飲まないのであれば、すべてシスター鮎美に飲んでいただきます」

「っ……………」

「どうしますか？ 飲みますか？」

「……………」

答えない鷹姫の口にペットボトルを挿入する。

「零さないように飲んでください。零せば、シスター鮎美を叩きます」

「……………」

鷹姫が困り切った目で水を飲み始めた。たつぷりと1.5リット

ルも飲まされて、鷹姫は不安そうに問う。

「……トイレに行きたくなったら、枷を外してくれませんか？」

「あなたの心がけ次第です」

陽湖は無自覚に舌なめずりし、小さな可愛らしい舌先が乾き気味だった唇を潤している。鷹姫は迷子になった子供のように視線を彷徨わせていた。もう、お尻叩きは終了させ、鷹姫には何もせずに限界までの時間を味わってもらうことにした。陽湖はマザーとして別の仕事も始める。まずトイレで手を洗い、それから生徒と教師たちに告げる。

「聖餐を行います」

その一言で準備が始まり、パンと蜜壺が用意された。パンは二千年前と同じ方法で焼かれたパンで、蜜壺にはハチミツとコンデンスミルクとオリーブオイルが入っている。ずっと食事を与えられていない生徒たちは祈りながら待つ。教師たちも並んだ。

「ブラザー愛世、こちらへ」

「はい、マザー陽湖」

出発前とは上下関係が逆転した想い人を一番に呼び、屋城が目前で膝をつく、陽湖は蜜壺に手を入れる。そこから掬い取った蜜を、屋城が係から受け取って掲げているパンに注いだ。そのパンを食べる屋城を満足そうに見下ろし、次の教師を呼ぶ。教師全員に聖餐を施すと、次は黄色ローブの生徒へ与えていく。鮎美を担当している博史と泰治も交代で呼び、黄色ローブ全員に手で蜜をかけたパンを与えた。けれど、白いシャツを着ている生徒たちにはパンだけというのは、もう3度目なので誰もが理解している。そして、白いシャツの男子が手をあげた。

「オレも聖餐を望みます！ 神を信じます！ 洗礼受けます！」

「私も！」

「よろしい、お二人は、こちらへ」

甘い香りに負けた生徒たちへ蜜を注いだ。そして陽湖自身はパンで手を拭いて食べる。教団内でもマザーだけが行う特殊な聖餐だった。それが終わると、再び鮎美を責めるために五人の女子と会議室に

入る。今回から鐘留は外した。

「シスター鮎美、同性愛と離別しますか？」

「はい、そうします」

「……嘘は罪です」

「嘘やないですよ、マザー陽湖」

「では、証拠にリングを破壊してください」

「……お願いいたします、どうか、どうか、これだけは許してください、ご勘弁ください」

「……………」

無言のまま陽湖が指輪へ手を伸ばすと、鮎美はギョツと手を握って強い意志を示した。拘束しているので無理矢理奪うことは簡単だけれど、やはり自分で外させないと意味がない。そして今は別の仕事もあつた。

「受洗を望む生徒たちを中へ入れてください」

陽湖は鮎美の股間にかけている介式のハンカチを押さえなおしてから白いシャツの生徒たちを呼び、会議室の隅にある小さな風呂桶へ順番に浸けていく。見ていた鮎美は飛行中にも正式な洗礼ができるよう改装したのだと理解した。今回は洗礼があつたので、あまり鮎美への責めはなく終わった。陽湖たちが出ていき、博史と泰治が入ってくる。

「大丈夫かい、シスター鮎美」

「すぐ解いてあげるよ」

「……おおきに……」

苦しい姿勢を解いてくれるし、足腰をマッサージしてくれる。見え透いた親切心に溢れる男子へは余計なことは言わず、してもらえるまま、身体を任せただけれど、右手で両乳首を隠し、アダムの槍を刺されたままの股間のハンカチは左手で押さえおいた。やはり、もともと同性愛者である泰治は裸の鮎美を揉んでも一欠片の興奮もしていない、かなり疲れた目をしている。本気で同性愛から離れるつもりで異宗派の洗礼を受けたのか、それとも今だけ合わせているのか、そんなことを問う気力はなかった。逆に博史は異性愛者だったようで鮎

美の身体に触れるのに緊張しているし、ときどき興奮している。男子の興奮はわかりやすいので、なるべく見ないようにした。

「ごめんね、シスター鮎美、そろそろマザー陽湖が戻ってくるから、また、これをつけるよ」

「つらいだろうけど、頑張って」

博史と泰治が再び拘束具をつけてくる。素直に拘束されると二人が出ていき陽湖たち女子が入ってきた。

「シスター鮎美、同性愛をやめますか?」

「……はい……」

陽湖ちゃんも疲れてんのかな、だんだん訊き方が雑になってるわ、そんな人間やめますか、それとも覚醒剤やめますか、みたいに同性愛やめますか、とか訊かれても、やめられるもんなら、とつくにやめてるし、と鮎美は遠い目で天井を見上げた。リングについての質問は平身低頭に拒否する。すると、また女子たちが鮎美を罵ってきた。ときどき叩かれたり、髪を引っ張られたりもする、痛いし悔しいので泣けるだけ泣いて、加害者たちに罪の意識をもってもらった。つらい30分が終わって博史と泰治が入ってきてくれる。抱きつきたくらい嬉しいけれど、そのいとしさと性欲は別で、どんなに大好きで可愛い飼犬とでも結婚したいとも、性交したいとも想わないのと同じで、裸を見られる恥ずかしささえ少ない。しかも、今の場合、この忠犬たちの飼い主は陽湖だとわかっている。

「水をもってきたよ、どうぞ」

「おおきに」

「シスター鮎美、き、…君は、美しい女性だ」

「…おおきに……」

「ぼ……ボクでよければ……その……」

博史が赤面しているのは可愛く思うけれど、正直どうでもいい。本気の告白なのか、状況に流されてなのか、それも、どうでもいい。

「ボクと……付き合ってみないか? 結婚を前提に……」

「……ごめんなさい、うちは仕事が忙しいし、無理なんよ、ごめん」

どうせ後で報告されていそうなので同性愛者だからとは言わず

断った。そして鮎美は別の身体の変化に気づいた。

「……あ……」

「どうしたの？」

博史と泰治が同時に訊いてくれた。

「……オシッコしたい、どうしよ？」

「そ、それは……」

二人の男子が顔を見合わせて困っている。ようするに陽湖の許可がなければ、この部屋から出すこともできないように二人を困らせるのは気の毒だった。

「まだ我慢できるし、ええわ。気にせんというて」

「……そ……そう……」

心配してくれた二人が出ていき、また陽湖と女子たちが入ってきた。何度目になるのか数える気にならない質疑応答の後に、鮎美から質問してみる。

「オシッコしたいです。マザー陽湖、うちはトイレへ行かせてもらえますか？」

「悔い改める気持ちがありますか？」

「質問に質問で返さんというよ。オシッコしたい、トイレ、お願い」

開脚させられているので、我慢しにくい。アダムの槍の圧迫感もつらかった。

「悔い改める気持ちが無いのであれば、その拘束を解くことはできません」

「……漏らすやん」

「我慢してください」

陽湖が一瞬だけ舌なめずりした。

「……」

このヘンタイ！ 異性愛者のくせに同性がオシッコ我慢して悶えるところ見て何が楽しいねん、自己投影でもしてんの?! このサドマゾおもらしビッチが！ と鮎美は脳内だけで罵ってから、介式に頼む。

「介式はん、ハンカチを汚すと悪いし、どけて。オシッコ出そう」

「…わかった…」

介式がハンカチを引き上げてくれたので鮎美は力を抜いた。

「えく……そんな、あつさりしちゃうんですか？　こんなところで……」

陽湖が残念そうに見下ろしてくる。鮎美の小水はアダムの槍のせいで変な風に飛び散った。悪口役を与えられている女子たちが、いろいろとバカにして罵ってくる。

「うわあ、人として終わってる」

「犬以下」

「平気で放尿とか、頭大丈夫？」

「もうマンコゆるくて感覚ないとか」

「オシッコ臭つ。おもらし議員つてホントだったんだ。あはは」
「……………」

出るもん、しゃーないやん、この状況で、どうせいちゅーねん、と鮎美は開き直っていたけれど、泣いておく方が身のためなので傷ついた顔で泣いて過ごした。むしろ後始末を女子たちに押しつけられた博史と泰治が床を拭いてくれているときの方が本気で泣けた。

「ぐすつ……ごめんな、二人とも……汚いのに……」

「気にしないでいいよ、シスター鮎美」

「しよーがないさ。そのリング、そんなに大切？」

「うん。タイジはん、ピアス……盗られたん？」

行きの飛行機で泰治は片耳にだけピアスをしていたけれど、それが無くなっている。鮎美は知らなかったけれど、一部のゲイの間では、それがシグナルになっているらしいかったのに、今は無い。

「ああ、まあ、諦めた」

「……大事なもんやったんちゃうの？　誰かにもらったん？」

「いや、駅前のサテイで買った。千円ちよつとだったし、まあ、いいよ」

「そう……………」

男子と過ごせる時間が終わって、また陽湖たち女子が罵るために入ってきた。質疑応答の後に陽湖はペットボトルを鮎美の口内に挿

入して無理矢理に水を飲ませてきた。手足に自由がない鮎美は仕方なく受け入れる。そして、悪い予感がして言う。

「鷹姫には、飲ませんといてあげてな」

「……。それは彼女次第です」

「っ…、お願いよ！ やめてあげて！」

「……。では、シスター鷹姫の分も、シスター鮎美が飲みますか？」

「うん！ 飲むから！」

「よろしい」

陽湖はさらに2本を飲ませてから、ガムテープも持ってこさせた。

「ちよっ…：…何する気……」

「シスター鮎美は我慢しないので床を汚さないよう、穴を塞ぎます」

そう言つてガムテープを股間に貼られた。アダムの槍も抜け落ちないように固定される。不幸中の幸いだったのは剃毛しているので剥がすときに痛みが少ないことと、足腰が30分おきの拘束に慣れてくれたのか、攣りにくくなつたことくらいだった。陽湖たち女子は時間が来たので会議室を出て男子と替わつた。そこへ屋城が報告に来る。

「マザー陽湖、あと5名ですべての生徒が受洗いたします」

「それはシスター鮎美とシスター鷹姫を含めて？」

「はい」

「あと3人は……」

陽湖は、いまだ黄色ローブになつていない三人の生徒を見る。白いシャツが二人、青銅色のローブが一人だった。青銅色のローブは神を信じつつあるものの、洗礼は望まないと云っている者への色で、その生徒は半年ほど前から陽湖も日曜礼拝で見かけていたので、とつくに黄色ローブになつていふと思つたのに、いまだ最初に着せた青銅色のままだった。陽湖が近づくと、教皇を前にしたカトリック信徒のように膝を着く。

「シスター留香、あなたが受洗を望まないのは、なぜですか？」

「はい、私は神に誓いました。洗礼を受けるのは一度は聖書全体を読み通してからと」

「そうですか……それは、良い心がけですね」

この修学旅行で量産した受洗者は、ほとんどが聖書を読み切っていない、にわか信徒で聖書研究科の授業で聞きかじった一部しか知らない。陽湖自身も洗礼を受ける前には3回、通読していたので、その気持ちはわかる。けれど、今の場合は不都合だった。なんとか飛行機が日本に着くまでに全員を受洗させたいという目標がある。

「シスター留香、読めていない部分は、あと、どれほど残っていますか？」

「えっと……」

留香が聖書を開く、ちゃんと葉を挟んでいた。

「残りはフィレモン、ヘブライ、ヤコブ、ペテロ、ヨハネ、ユダです。ヨハネは一度、読んでいるのですが、通して読むと神に誓いましたから」

「……そうですか……」

間に合いそうに無い量が残っていた。

「シスター留香、あなたの誓いは立派です。けれど、この修学旅行は二度と無い機会です。今、受洗し残りは休まず読み切るとするのは、どうですか？」

「……それでは誓いをたがえることになります……」

「……。私は、この修学旅行中にすべての生徒を受洗させると神へ誓いました。私の誓いと、あなたの誓い、両方をなしましょう」

「ですが……」

「シスター留香、ご安心なさい。あなたのために特別な朗読をいたします」

そう言った陽湖は7人の黄色ローブを集めると、留香を囲ませ、残っていた聖書の部分を7分割して一齐に読み上げさせる。これなら7倍の速度で進められる。

「シスター留香、心して耳を傾けなさい」

「……はい……」

留香は聖徳太子の逸話を思い出したけれど、空気を読んで言わないことにした。そして陽湖は白いシャツの生徒には一人につき12人の黄色ローブで囲わせ、行きの飛行機で鮎美と泰治に着せた麻服と、拘束に使った鎖を見えるところに置いて説諭したので10分後には二人とも受洗を望んでくれた。

「あとはシスター鷹姫とシスター鮎美だけ……フフ……」

かすかに笑いを漏らした。達成感が満ちあふれてくる。歴代の生徒信仰告白総括会長は多くても十数人しか受洗に導いていない。陽湖が学年全員を受洗に導けば、それは歴史に残る伝説的快挙だったし、すでにマザーという称号も教団から与えられ、教師よりも強い権限をもっている。

「……私は神の代理人……外務大臣さえ、私の前には……」

世俗の権力では頂点に近い位置にいる鮎美さえ、今は逆らうこともできない。陽湖は表情には出さずにいたけれど、強い興奮と高揚感に包まれた。自分が万能である気がしてくる。

「シスター鷹姫の様子は……」

中央部へ歩き、鷹姫に近づいた。そろそろ飲ませた水が効いてきて、陽湖がそばによると懇願してくる。

「月谷、この枷を外してトイレに行かせてください」

「私のことはマザー陽湖と呼びなさい」

「……マザー陽湖、トイレに行かせてください」

鷹姫の態度も変わってきている。陽湖は無表情を保ったまま、鷹姫の腹部を撫で、少し圧迫してみた。

「うう……」

下腹部が張ってきている。今すぐ漏らすほどではないにしても、かなり我慢している様子だった。

「シスター鷹姫、あなたは神を信じますか？」

「………すみません………よく、わかりません……」

「邪悪な同性愛を否定しますか？」

「………」

鷹姫の瞳が彷徨い、唇は震えた。

「まだ反省が足りないようですね」

「これを外してください。お願いです。でないと……」

「でないと？ 何ですか？」

「……トイレに行きたいのです……お願いです……」

「我慢なさい。まさか、こんなところで漏らしたりしてはいけませんよ」

「そんな……」

鷹姫が潤んだ目で見てくると、陽湖は快感を覚えた。そして動員できるだけの黄色ローブに命じる。

「これからシスター鷹姫の中でサタンと聖水が戦います。よく見張っていてください」

鷹姫に視線が集まるようにしておいて、鷹姫へも囁いておく。

「どうしても我慢できなくなったら漏らす前に私を呼びなさい。私はシスター鮎美の様子を見てきます。いいですね？ 絶対に漏らしてはいけませんよ」

「…はい…」

呼ばば枷を外してもらえるかもしれないという、ほのかな期待をした鷹姫が返事をしたけれど、一言も外すとは言っていない陽湖は会議室へ今回は女子たちを連れず、一人で入った。博史と泰治が出ていき、陽湖は拘束されている鮎美を見つめる。股間にガムテープを貼りつけたおかげで鮎美も排尿できなくなり、開き直った垂れ流しを選ぶことができず呻いていた。

「ううっ……陽湖ちゃ……いえ、マザー陽湖、ううっ……お願いやし、これを剥がして……ううっ……オシッコが出なくて……ううっ……ハア……ハア……めっちゃめっちゃ苦しいんよ……ううあ！ うあああ！ また！ また出そうやのに、出んからっ！ あああっ！」

拘束されたままの鮎美が身悶えしている。よく見える状態の下腹部で腹筋が収縮して排尿しようとしているけれど、出口が物理的に塞がれているので出すに出せず、鮎美は大きな口をあけて喘いでいた。

「あああっ……ハアひい！ うううっ……オシッコさせて……はあっああ！

くうう！ お願いです！ ひいい！ ハア！ ああああつ！ 神様を信じます！ 信じますから！」

「……………それ、そんなに苦しいのですか？」

ちよつとした思いつきでガムテープを貼ってみたのだけれど、効果抜群のようで鮎美は顔を赤くしたり青ざめたりさせて喘ぎ続けている。身体は排尿の反射に入っているのに膀胱が楽にならず、とても苦しそうだった。

「ひいハア！ め、めちやめちや苦しい！ 死ぬ！ 膀胱がはじける

！ ひいハア！ オシッコの穴が壊れる！ お願いよ！ お願いよ

！ ひいハア！」

「……………」

「オシッコさせて！ させて！ ううっ！ うぐうう！ 痛ぐうう！」

泣きながら呻いているので陽湖は貼りつけたガムテープを剥がしてやった。

プシッ…

剥がす途中で隙間から小水が噴き出てきて、鮎美は蕩けた顔になる。

「ああああああ…」

やっと膀胱が楽になつていく解放感で頭が真っ白になっていた。

「そんなに、つらかったのですか？」

「…ぐすつ…限界を超えて、おもらし状態になつても出せへんのもんやん。お腹の中で爆発するかと思つたわ！ うちのオシッコの穴が壊れたら一生恨むしな！」

「……………少し休憩をあげます」

陽湖は予定より早くに男子と交替して、かなり興味が湧いていたのでガムテープを持って一人で飛行機前部のトイレに入った。

「そんなに、すごいのかな……………」

白銀のマントとティアラを外して壁にかけ、紫のローブも脱ぐ。陽

湖も下着をつけていないのでサンダルだけの全裸状態になった。

「はああ……」

絹製とはいえ、着慣れないローブなので疲れている。脱ぐと肩の荷が下りたように楽だったし、何よりトイレの個室内は一人きりで誰からの視線もなく、急に教団から与えられたマザーという地位に相応しい態度もとらなくて済む。とても気が楽になり、裸で便座に座った。

「あああ……疲れたあ……」

閑空から出発したのが9日未明で、そのまま徹夜し聖地巡礼、さらに翌日も徹夜で教団本部からマザーの称号を受ける儀式などがあり、そして今夜も徹夜という予定だった。目を閉じると寝てしまいそうなので、気を抜いたのは5秒だけで、すぐにガムテープを手にして自分の股間に貼ってみた。陽湖自身も立場上、おもらしはできないものに、つつい我慢してみているので限界は近い。意図的に自分を限界に至らせるため、両手で下腹部を強く押した。

「うううああつ……漏れちゃう……」

当たり前だったけれど、膀胱からの圧力に括約筋が負けて失禁状態になった。膀胱から尿道に小便が流れてきて、そして噴き出すはずがガムテープに堰き止められた。

「ひっ?! くうきゆうううう?!」

おもらしで解放されるはずの膀胱が堰き止められたことで楽にならず、何度も何度も収縮して排泄しようと反射運動を繰り返すし、尿道は尿道で流れ出してくれるはずの小便が滞留しているのに、あとからあとから膀胱からも送り込まれてきて直径が何倍にも膨れあがっている感じがする。

「ああああああ! こ、こんな初めてえ! うくうきゆううううう! す、すごい! これ、しゅごい! はあああああ! ああははあああん!」

陽湖は便座に座っていられないほど身悶えし、床を這ってヨダレを垂らした。

「んあああああ! すごいいいん! まだ続くううん!」

おもらしだと一回10秒弱で終わる感覚が何度も連続し、膀胱と尿道が痛くて涙が出るけれど、快感もあつて気持ちいい。

「うぐうん！」

また腹筋が強く収縮すると、ニユルつと大便を漏らしてしまった。

「っ、ヤダ?!」

慌ててお尻を押さえ、大便を両手で受けた。軽いパニックになって思わず肛門に押し戻そうとするけれど、すぐそこに便器があるので両手で受けた大便を捨て、一部は床に零してしまったので拾い上げ、また便器に捨てる。その作業をしている間も膀胱と尿道は開放されたがって灼熱しているので陽湖は身震いしながら手を洗う。

「ハアハア！ これオシッコの穴が本当に壊れそう。もう剥がさない
と！」

急いで手を洗い終え、ガムテープを剥がす。

「うくっ！ 痛いっ！」

鮎美と違い、毛が生えているので慌てて剥がすと何本も抜けた。

プシッ！

そして鮎美と同じようにガムテープの隙間から小水が噴き出してくる。

「ああああああ…」

ようやく開放される膀胱と尿道からの感覚に蕩けた声が漏れた。

「…ハア…ハア…これ、すごい…この遊び、おもらしの何倍も気持ちいいし、何回も快感の波が…」

手の甲で口元のヨダレを拭いてから、さきほど大便を触った手が本当にキレイになっていくか確かめ、まだ聖餐をする予定もあるので念入りに洗い直した。そして陰毛の付着したガムテープは丸めて便器に捨てた。捨ててから英語とヘブライ語で備え付けのペーパー以外は捨ててはいけない、と書いてあることに気づいたけれど、もう遅いので2秒だけ神に祈っておいた。

「さてと、息抜きおしまい。まだ10時間以上、頑張らないと」

自分へのご褒美の時間は終了として、教団指導者としてのマザー陽湖に戻る。ローブを着る前に、自分の腋の匂いを嗅いだ。

「う〜……臭い……」

最期に入浴したのは8日夜なので汗臭い。陽湖はトイレットペーパーを適量とると、水道で湿らせ、腋と股間を拭いた。少し匂いがマシになる。同じことをしている女子は多いようで、トイレットペーパーの減りは早い。拭き終わった腋を鏡に映して見る。

「出発前に剃ったけど、また生えてきて……やっぱり300万円、全部を寄付しないで私もレーザー脱毛すればよかったかなあ……：松田川先生、半額サービスって言ってくれたし……でも、私の肌の弱さだと、荒れるかもしれないし……セクハラされたお金で腋処理も……一生忘れられなくて嫌かも……でも300万円……」

思い切って全額を寄付したけれど、未練はあった。これから外務大臣になる鮎美と違い、マザーという称号は与えられても固定報酬があるわけではないので大金を手にするには無さそうだった。

「……ううん、忘れなきゃ……コリント第一、貪欲な者は罪」

自戒してローブを着て、マントを羽織りティアラを装着する。やはり姿形を整えると、気持ちも引き締まった。トイレを出る。

「マザー陽湖、シスター留香が洗礼を受けたいと申しております」

屋城が報告してくれた。屋城も不眠不休なので疲れた様子はあるけれど、毎年の修学旅行と違い、あと二人で全員が受洗に至るという興奮も感じられるし、自分の教会員からマザーが出たという高揚感も漂っている。目で語り合い、この修学旅行が終わったら結ばれようと思疎通した二人は留香に洗礼を施した。会議室の小さな風呂桶での洗礼が終わると、鮎美にペットボトルで水を飲ませた。

「うぶっ……ハア……ハア……もう飲ませないでください……また、漏らすし……」

「では漏らさないように塞いであげます」

陽湖がガムテープを手にするると、鮎美はイヤイヤと首を左右に振った。

「それ、めっちゃ痛いし苦しいんです。勘弁してください、おもらしさせ

てください」

「リングを諦めますか？」

「……うう……うう……」

鮎美が目をそらして涙を零した。大量に飲まされたので涙の材料も多い。そしてガムテープを鮎美の股間に貼りつけた陽湖が去り、博史と泰治が入ってくると拘束具を外してくれたので手足が自由になる。

「ぐすつ……介式はん」

「何だ？」

ずっと立って見ているだけの介式へ、結婚指輪を外して差し出した。

「これを持っていてもらえませんか？　どうか、無くさないでください、お願いします」

「……。わかった」

介式は結婚指輪を受け取ると、身分証明書と同じケースに入れた。博史と泰治は黙って手足を揉んでくれる。何度も拘束されたので手首と足首は赤くなってきた。鮎美は中世から存在している拘束具を濡れた目で見た。

「……これをつけられた、うちと同じ同性愛者は……きつと、みんな、殺されて……神を信じてる人間が、なんで人を殺すんよ……人が大切にしているもんを……踏みにじって……」

「……………」

「うちは陽湖ちゃんを憎みとうないけど……もう限界やわ……」

「憎めばいい」

泰治が言った。

「タイジはん？」

「憎いなら憎めよ。愛したいから愛すように」

「……………」

あまり会話すると監視カメラで見られているかもしれないので、もう黙った。時間が過ぎて再び鮎美は拘束され、陽湖が来る。すぐに陽湖はリングが鮎美の指にないことに気づいた。

「リングをどこに？」

「もう外しました。神を信じます。同性愛をいたしません」

「神はすべてを見ておいでです。シスター鮎美、リングをどこへやったのですか？」

「もう外しました。神を信じます。同性愛をしません」

「……。ブラザー博史、ブラザー泰治、あなた方はシスター鮎美のリングを持っていきますか？」

「……いいえ」

「本当に？」

「はい」

「なら、外に出ていてください。また30分後」

二人が出ていくと、陽湖は介式へ問う。

「シスターいつかですね、リングを持っているのは」

「……」

「シスターいつか、リングを持っていますね？」

「……」

介式は聞こえなかったように無視している。その態度で陽湖との会話は任務ではない、と伝えていた。陽湖は穏やかに頷いた。

「わかりました。どうであれ、シスター鮎美の悔い改めが大切です」

そう言つて鮎美の下腹部を撫でた。まだ漏らすほどではないけれど、そこそこに貯まってきている。

「シスター鮎美に訊きます。リングは、どこですか？」

「も…もう外しました。神を信じます…。同性愛から離れます」

「シスター鮎美、質問に答えてください」

陽湖の左手が鮎美の下腹部を圧迫し、さらに右手でアダムの槍を握った。ずっと鮎美へ挿入されたままになっている槍を、ゆっくりと動かす。

「うっ?! うううっ?!」

「つらいでしょう。膀胱を外と中から押されるのは」

「ううっ! やめて! やめてください! あああっ!」

「こういう振動は、どうですか？」

そう言った陽湖がアダムの槍を小刻みに振るわせる。半年ばかり薄い壁を隔てて同居していたので、たまに鮎美が夜中に電マを使っていたことは陽湖も知っていた。陽湖が聖書を読んでいた遅くなると、眠ったと思うのか、そつと動く気配がして押し入れから電マを出し、布団の中で使っていたのを知っている。最初は意味がわからなかつたけれど、なぜ夜中にだけ使うのか、おそらく淫らなことなのだろうと、数ヶ月で見当がついていた。そして鮎美が好きそうな振動でアダムの槍を振るわせると同時に外からも下腹部を圧迫している手を振動させる。

「うはああ！ くううう！」

鮎美が身悶えしている。

「ほらほら、シスター鮎美、リングはどこへやりましたか？」

「ううっ！ くうう！ 神を信じます！ 洗礼を受けます！ あああ

！ ゆるして！ もうゆるしてよおー！」

「洗礼を望みますか？」

「望みます望みますから！ やめてやめて、とめて、やめて、とめてエー！」

鮎美が涙と汗を流しながら言うと、とりあえず洗礼の意志を確保できたので陽湖は手を止めた。

「シスター鮎美の受洗を祝福します」

「ハア：ハア：ぐすつ…」

「ですが、受洗は戒律を守ることを宣言するものでもあります。同性愛に身をおくままでは…」

陽湖が言っている途中で会議室のドアがノックされた。

「どうぞ」

「失礼します」

黄色ローブの女子が入ってきて陽湖に耳打ちし、鷹姫が呼んでいることを伝えた。

「わかりました。すぐ行きます」

鮎美のことは再び博史と泰治に任せ、陽湖は中央部に拘束している鷹姫のところへ行った。

「お呼びですか、シスター鷹姫」

「…ハア…ハア…この枷を外してください」

鷹姫は足枷で開脚を強いられているけれど、可能な限り内股になって尿意を我慢している。その姿に陽湖は趣味嗜好に合う楽しさを覚えてたし、見ている男子の大半も性的指向の対象である鷹姫が今にも失禁しそうで震えているのに興奮していた。

「シスター鷹姫、神を信じますか？」

「ハア…っ…もうトイレに行かせてください。もう…ハア…ハア…」

首枷手枷で動かせない腕も震えていて、半開きの腋から汗が流れ、肘まで垂れて床に滴っている。近いうちに股間からも滴るのは誰の目にも明らかだった。

「うう…ハア…外し…て…ください…」

「あと5分、我慢してください」

「…あと…5分も…」

限界になったら呼べと言ったので呼んだのに、延長された。その上、あと5分で外すとは言っていない陽湖は膨らんだ鷹姫の下腹部をゆっくりと撫でた。

「あああ…さ、触らないでください！ うゝ…」

「おもしろなんか、しないでくださいよ、シスター鷹姫。我慢です」

「っ、ハア…外して…トイレに…」

鷹姫の手足が震え、唇が喘ぐように開閉している。もう限界は間近だった。

「シスター鷹姫、神を信じますか？」

「ハア…っ…ハア…し…し…し…あ…あと…あ…あ…あとで考えます！ トイレに行かせてください」

「ダメです。先に答えなさい」

「っ…ハア…うっ…くう…もう何も考えられないんです！ 漏れてしまいます！ お願いですから、これを外してトイレに行かせてくださいー」

「シスター鷹姫、私の質問に…」

陽湖へ知念が声をかけにきた。

「あの…これ、イジメじゃないっすか？」

「違います。部外者は黙っててください」

「けど…宮本さんが、すごいかわいそうで…」

「ハア…ハア…」

鷹姫は救いを求めるように知念を見つめる。その視線を遮るように陽湖が立った。

「今いいところ…いえ、今大切なところなのです。当学園は同性愛を否定しています。それは信仰の自由による教えです。その教育に反した考えを持つ生徒に指導しているところです。邪魔をされるなら警視庁へ抗議します」

「…指導も、ほどほどにしないと…宮本さんが…」

知念は引き下がる。捜査権のないSPにすぎず、そして鷹姫は警護対象ではないし、かつて警視庁も信仰の自由を盾にするオウム真理教への対応に苦慮し、とうとう大事件を起こすまでは具体的なアクションをとれなかったように、知念は介入の口実を見つけられず席に戻った。陽湖は念のために男性SP一人につき、三人の女子生徒がつくよう指示する。すでに黄色ローブとなっているSPの長瀬を班長として、なるべく知念たちの好みに合いそうな女子生徒を選ばせ、最後尾にいるSPたちの前に壁となって視線を遮りつつ、神と楽園について語るように仕向けた。

「さて、シスター鷹姫、あなたの罪について、いっしょに考えます」

「…ハア…ハア…」

鷹姫は無駄とわかっていても手枷を外せないものかと、両手を動かすけれど、手首の皮膚が痛いだけで徒労に終わる。

「ハア…もう5分すぎたのでは？…ハア…」

「では、あと3分」

「…っ…っ…っ…っ…っ…」

鷹姫が泣き出しかけた。結局、トイレには行かせてもらえないのだと悟れてくる。鷹姫の目に涙が貯まり、陽湖の口に唾液が貯まった。陽湖は舌なめずりして問う。

「あれ？ シスター鷹姫、泣くんですか？ 剣道日本一、向かうところ敵なしの宮本鷹姫が、どうして泣くのですか？」

「っ………あ…あなたが…これを外してくれないから………」

「泣くということは自分の罪を認め、間違っていたと悔い改めるのですね？」

「っ…それとこれとは無関係です。早く、これを外してください！

うう…」

もう声を出すと今にも失禁しそうだった。

「みなさん、よく見ていてください。今、シスター鷹姫の中にいるサタンと聖水が戦っています。彼女が悔い改め、サタンに打ち勝つならばよし、彼女が罪を認めず悪にあり続けるなら、サタンは彼女のうちから聖水を押し出します。彼女が負けて、おもらしするようなら、みなさんは悪に影響されないよう、悪をそしり、悪を笑い、彼女のうちにいるサタンを糾弾してください」

かなり陽湖は本来の教義を歪めて好き勝手なことを言い出したけれど、もともと大半の生徒は聖書を通読したことがないし、教師たちもマザーの称号をえた者が言うことなので異を唱えずにいる。おおよそ、どこの宗教団体にも地位が向上すると本流の教義と違うことを言い出す者はいるし、それが分派のキツカケになるのは数千年前から同じだったので、すでに原始キリスト教とカトリック、プロテスタントはかなり異なっているし、もともとアブラハムから始まったあたりからも分派を繰り返しているし、仏教も仏教で好き勝手に分かれている。陽湖は自分の言葉が常に真実だ、という教祖的な気持ちで問う。

「シスター鷹姫！ 悪に勝ちますか?! 負けて、おもらしですか?!

さあ！」

もうカルト的な雰囲気を抑える者はいなかった。

「…ハア………ううっ………助け………て………」

「悪に助けは来ません。諦めなさい、シスター鷹姫」

「っ………」

とうとう鷹姫に限界が来た。

シャツ：

シヤアアア：

漏れてきた。それでも我慢して力を入れて止めようとしたけれど、身体がブルブルと震え、もう尿意に負けるしかない。

シヤアアアアア：ボタバタバタジヨジヨ!

鷹姫の股間から滝が流れ落ち、足枷の中央にあたって大きな音を立てる。

「っ……う……っ……う……っ……」

呻くように鷹姫は泣き出し、喉けられていた生徒たちは笑った。

「うわ、もらした」

「あはは、もらしてる」

「聖水が出てきた」

「悪に負けた」

「ってか、エロ」

「超悲惨」

「みじめえ」

生徒たちは残酷だった。剣道が強くて美人、成績もいい、そんな鷹姫の失態が可笑しくて楽しい。しかも鷹姫自身にも強さと行儀の良さに自負があつて、他の生徒を見下しているところがあつたので余計に生徒たちは盛り上がる。陽湖も何度も異教徒、愚か者などと言われたことがあり、秘書補佐という身分も明らかに鷹姫より下という扱いだったので、心に貯まっている澱はあつた。

「みなさん、もつと反省させるため、強く言つてあげてください！ シスター鷹姫、おもしろなんかして、あなた、いくつですか?! 恥ずかしいですね! オムツでもつけますか?」

指導的立場にある陽湖が罵詈雑言を吐いたので、他の生徒たちは、さらに汚い言葉を投げつける。何一つ抵抗できない鷹姫へ集団で投石するように口から唾を飛ばして、打ちのめした。

「……う……っ……ひ……っ……う……っ……」

鷹姫は両手が使えず、涙や鼻水を拭くこともできない。いつもポニーテールにしている髪もおろされているので落ち武者のように見

えたし、美しい顔も悲痛に歪んでいる。けれど、丸出しの太腿や脚線美は男子たちを刺激しているし、それゆえ男子からの言葉も激しい上、やっかむ女子からの悪口も強烈だった。泣き続ける鷹姫へ容赦なく陽湖が問う。

「シスター鷹姫、おもしろしした感想は？」

「……っ……う……」

「幼稚園見みたいに泣いて。あなた、いくつですか？」

「……ひ……」

「ホント、子供みたいです。……本当に」

陽湖は少しくらい反論されるかと思っていたのに、あまりの鷹姫の崩れ方に疑問をもった。気の強い鷹姫なら、鮎美のように開き直ったり、そもそも手足を拘束されたのだから、漏らして当然、何も恥ずかしくない、と泣かずに怒るかとも考えていたのに、幼い子供のように泣いている。生意気だった鐘留も一回のオネシヨで何時間も泣き続けたけれど、それには家庭的な事情があると聞いている。それを考えたとき、陽湖は気づいた。鷹姫にも家庭的な事情はある。幼い頃に母親を亡くしていて、しかも妊婦だった。陽湖自身、切なくて美恋の前でおもしろしして見せたのは記憶に新しい。かつて鷹姫も下の子が生まれる前に母親の気を引きたくて、おもしろしたかもしれない。そのとき、叱られたか、甘やかしてもらえたか、どちらにしても直後に母親は亡くなっている。鷹姫にとって、おもしろしは大きな心の傷かもしれないと考え至る。

「……を、もつと攻めれば……落ちる……きつと……」

陽湖はゾクゾクと背筋が熱くなった。鮎美も鷹姫も、なかなか落ちない。二人とも意志が強い。けれど、片方を落とせば、もう片方も連鎖で落とせる気はする。このまま一気にマザーの信徒とするために、陽湖は泣いている鷹姫の耳元に囁きかける。

「おもしろしして、ごめんなさい、お母さん、って試してみなさい」

「っ……」

鷹姫がビクンと身震いした。陽湖は確信して微笑んだ。

「お母さんが心配してますよ。鷹姫ちゃん」

「うゝつ……うゝつ……」

「タカちゃんかな？ タカちゃんは、おもらししてダメな子ですねえ」

「つ、うああああん！ うわああああん！ うわああああん！」

母親がしてくれたのと同じ呼ばれ方をされて、忍び泣いていた鷹姫が大きな口をあけて泣き出した。

「フフ」

落ちた、獲った、シスター鷹姫が落ちれば、シスター鮎美も砦なきマサダ要塞、陥落寸前、と陽湖はエルサレムを落としたローマ軍の気分になった。泣き続けた鷹姫の声が枯れてきた頃、陽湖は問う。

「シスター鷹姫、あなたは神を信じますか？」

「……」

鷹姫は横に首を振った。その憔悴した表情で、神も仏もないのだ、と語っている。陽湖はペットボトルを持ってこさせて鷹姫の口に挿入した。

「聖水を飲みなさい。おもらしタカちゃん」

「……うゝ……うう……」

「あなたが飲まなければ、シスター鮎美に飲ませますよ」

「……」

「いい子ね、タカちゃん」

鷹姫へ水を流し込んだ陽湖は会議室へ行ってみる。会議室でも鮎美が泣き呻いていた。

「ハア……ハア……マザー陽湖、剥がしてください……うう……苦しくて……苦しくて……」

水を飲ませてガムテープを貼りつけた鮎美が懇願してくる。陽湖は仕草で博史と泰治を追い出すと、アダムの槍を手で振動させた。

「うあああ！ ひいひい！」

「苦しいですか？」

「ひううう！ ひい！ はひい！」

「私は慈悲深いですから、苦しみを分かち合っただけです」

そう言った陽湖は監視カメラをオフにしているのを再確認してか

らドアに鍵をかけ、マントとティアラを外し、ローブも脱いで裸になった。

「私もオシッコを我慢しています。そろそろ限界なくらいに」

陽湖はガムテープを自分の股間に貼り始めた。しつかりと失禁しても漏らさないように貼りつけ、呻いている鮎美を見下ろす。

「ほら、これで同じ感覚を分かち合えます」

「…ハア…ハア…」

「私も苦しんであげます」

そう言った陽湖は鮎美へ身をよせる。仰向けに寝て開脚を強制されている鮎美の身体へ、まるで正常位で交わるように覆い被さると、アダムの槍の持ち手が自分の下腹部を圧迫する位置を取り、ゆっくりと腰を前後にピストンする。アダムの槍の持ち手が陽湖の膀胱を圧迫し、同時に鮎美の膀胱にも圧迫を加える。

「うっ…ああっ…私も…漏れそう…」

「ううっ…ここ、これ、思いつきり同性愛的な行為ちやうん？」

アダムの槍を同性である陽湖に刺されたときから思っていたけれど、いよいよ陽湖が裸で腰を押しつけてくると、本当に同性愛から脱却させる気があるのか、疑問に思えた。

「何を言っているのですか、シスター鮎美、これはオシッコの我慢を二人で共有しているだけです。何も淫らなことではありません。ハア…ハア…」

「…ハア…ハア…」

あかんわ、ここまで趣味嗜好がちやうと、うちも嫌悪感しかないわ、と鮎美は何度も抱きたいと想ったことのある陽湖が身体を重ねてきているのに、少しも興奮しなかった。陽湖は臨界状態の膀胱をアダムの槍で二人同時に責めることを楽しんでいる。すぐに陽湖も括約筋が圧力に負けて失禁状態になると、尿道が膨張して喘いだ。

「あああ！ うきゆうん♪ すごい、すごい、この感じいい、あ、あーん！」

「ううっ…もうやめて。膀胱がはじける…オシッコの穴が壊れるから…ひーっ」

鮎美が白目をむきかけているので陽湖はガムテープを少しだけ剥がしてやり、満杯だった膀胱から2割ほど漏らさせてやると、またガムテープを押さえ、二人で尿意を共有する。

「ああーっ！ ハア！ 気持ちいい！」

「オシッコ全部、出させてよお」

「ハアあん！ 私のオシッコの穴も壊れそう♪」

正常位に近い体勢で陽湖がヨダレを垂らすと、鮎美の胸に滴った。陽湖のヨダレに嫌悪感は覚えないものの、膀胱の苦痛は苦痛でしかない。気が遠くなるほど何度も何度も陽湖はピストンしてきて、最後に二人の出口を塞いでいるガムテープを同時に剥がすと、溢れた小水が空中で衝突して交わった。

「ハア……ハア……ああ……おもらし気持ちいい♪」

「ぐすっ……うちが陽湖ちゃんに一週間オムツ強制したのは、悪かったから、その変な趣味から目を醒ましてよ。おもらし真理教はやめて」

「これは何も淫らなことではありません。オシッコが気持ちいいのは自然なことです」

「聞いて、性的指向は変更できんけど、趣味嗜好は変えられるんよ。おもらし趣味は、やめておきよ。お嫁に行けんくなるよ。それとも屋城はんと、こんなことする気なん？」

「……ブラザー愛也と……」

少し陽湖が想像してみる。受けとして屋城の前でオムツへ失禁したスーパー売場での体験は恥ずかしかつたけれど、かなりの快感だった。逆に責めとして、あの屋城に我慢を強制して漏らさせてみるのも、とてもワクワクする。いつも教会指導者として取り澄ました彼が、どんな顔で漏らしてしまうのか、異性愛者として見たくてたまらない。年上男性が泣きじやくってくれたら優しくオムツを着けてあげたい、という歪みきった母性本能も湧く。陽湖が舌なめずりを3度もしたので鮎美は余計なことを言ってしまったと後悔する。思春期に入ってから、淫らなことを教義によって回避し続けてきた陽湖の脳が禁忌でないところへ欲求不満のすべてを向けているようで将来が

心配だった。

「さて、シスター鮎美、あなたは神を信じますか？」

すつきりした顔で、ついでに陽湖が問うた。

「……信じます」

「同性愛から遠ざかりますか？」

「遠ざかります」

あんた、さつき変な趣味を、うちに押しつけたやん、どの口で言うねん、と鮎美は膀胱の疼きを覚えながら答えた。

「隠したリングを出して、自ら破壊しますか？」

「……勘弁してください。あれだけは奪わんといってください」

「では、これを飲みなさい」

陽湖が新しいペットボトルを向けてくる。

「ううっ……また、オシッコ責めすんの……」

「私もいつしよに飲んであげます」

「それ絶対、自分が楽しみみたいだけやん」

鮎美へ水を飲ませた陽湖は自分も飲んでから会議室を出て、再び鷹姫を責める。一度おもらしさせられた鷹姫の膀胱に再び尿が満ちてきている。

「シスター鷹姫、まさか二度も、おもらしなんてしませんよね？」

「……ぐすっ……この枷を外してトイレに行かせてください。お願いします」

「神を信じますか？」

「……すみません。嘘はつきません……ですから、許してください」

「嘘をつかないのは立派なことです」

「……うう……」

鷹姫が苦しそうに内股になるけれど、足枷のおかげで膝を合わせることはできない。

「同性愛をやめるよう、シスター鮎美に諭しますか？」

「……お許しください。どうか、トイレに行かせてください」

「主の祈りを12回、唱えなさい」

「……」

鷹姫の瞳が迷い、一縷の望みをかけて唱えた。

「次、使徒信条を7回、唱えなさい」

「……うう……もう……お願いです……この枷を外してください……また床を汚してしまいます……」

「心を込めて使徒信条を7回、唱えれば枷を外してあげます」

「……本当に？」

「私を疑うのですか？」

睨まれて鷹姫は使徒信条を7回唱えた。信じていないことに、どう心を込めればいいのか戸惑いつつも、ともかくも大きな声で唱えきつた。

「ハア……ハア……」

「外してあげます」

そう言った陽湖は足枷だけを外した。

「あああ……ありがとうございます」

やっと自由になれると思った鷹姫は涙を零したけれど、手枷首枷はそのままだった。

「こ、これも外してください」

「あなたの心の込め方では、枷一つ分です」

「っ……そ、そんな?!」

手枷首枷は天井から鎖で吊られているので、足枷が無くなったところで、この場から動けないことには変わりない。単に、脚を閉じられるようになったただけだった。そして、すぐに鷹姫の膀胱に限界が来る。今回は脚を動かせるのでモジモジと耐えたし、その姿を見て陽湖は楽しんだ。

「……う……う……う……」

ぴったりと閉じている鷹姫の両脚の間が濡れていく。括約筋が負けても脚力で頑張り続け、音を立てずに静かに漏らした。陽湖は床の水たまりを指して、問う。

「シスター鷹姫、この水たまりは何ですか？」

「っ……」

「また、おもしろいのですか？」

「……うっつ……」

「返事をしなさい。もらしたの？ もらしてないの？」

「……もらし……ました……うっつ……うっつ！」

「みなさん、またシスター鷹姫が悪に負けました。彼女を反省させるため、彼女の中の悪をそしつてください」

再び生徒たちに罵詈雑言を浴びせさせ、さらに水も飲ませてから、また会議室に一人で行き、博史と泰治を追い出して、鮎美と尿意を共有して遊んだ。

「ああ……ハア……ハア……気持ちよかった」

「ぐすつ……ハア……痛かったあ……いつまで、こんなこと繰り返すの？」

このヘンタイ教祖！ という言葉は脳内に留めて鮎美が問うた。

「あなたが悔い改めるまでです。リングを出し、壊しますか？」

「……、……」

「お水を飲みましょう。二人で」

「……せめて紅茶とかないの？」

「贅沢は敵です」

「……それ、教義やなくて大戦中の日本の標語やん」

あと日本まで何時間なんやろ、と鮎美は時間の経過がわからないものの、もう陽湖に膀胱と尿道で遊ばれることは諦めて、それに耐えてリングを守るつもりになっている。やや信仰告白を迫る圧力は落ちてきていたけれど、陽湖は鷹姫から落とすつもりだった。二人で水を飲んだ後、また機内中央部に行くと、鷹姫は脚を閉じて我慢していたものの、ぼんやりとした表情をしていて、陽湖の顔を見ても何も言っていない。懇願もしない。

「シスター鷹姫、主の祈りを12回、心を込めて唱えなさい」

「……はい……」

あまり大きな声ではなかったけれど、鷹姫は唱えた。唱え終わると、手枷首枷を天井から吊している鎖2本のうち1本を外してもらえた。

「あああ…」

解放される予感がして、鷹姫は涙を流した。けれど、もう1本は外してもらえない。動き回れる範囲が半径1メートルほどでできただけだった。そのうちに尿意が高まってくる。

「うう…」

「また、おもらしする気ですか、タカちゃん」

「……この鎖を外してください」

「使徒信条を12回、心を込めて唱えなさい」

「はい」

素直に鷹姫は唱えたけれど、陽湖は満足しない。

「心の込め方が足りません。もつと心から唱えなさい」

「………はい…」

どんな声を出せば心がこもっていると判定してもらえるのかわからないまま、とにかく鷹姫は何度も唱える。頭がボーっとして唱えながら涙が流れた。

「ハア…うう…」

「あと一回、きちんと唱えれば鎖を外してあげます」

「はい…」

不明な判定基準ではなく、たった一回というゴールを見せてもらえ、鷹姫は希望を感じながら唱えた。唱え終わると鎖を外してもらえた。

「あああ……」

やっと動けるといふ喜びで涙が溢れる。けれど、手枷首枷は、そのままだった。

「………これも…外してください」

「まずトイレに行つてきなさい。また、おもらししますよ」

「は、はい。行つてきます」

鷹姫は歩き出した。中央部から前部のトイレへ通路を進む。けれど、トイレの前に到着してから、手枷首枷がつけられたままでは戸を開けるのに苦労する。ドアノブの高さまで頭をさげて前屈みになり、手枷のまま手を近づけ、やっと戸を開けた。

「ハア……うう……」

ようやくトイレに入れると思ったのに、手枷首枷の長さのために航空機の小さなトイレには正面から入れない。横になって入る。

「……う……う……」

便座の蓋が閉まっついていて、それも開けないと座れない。しゃがんで枷の端をひっかけ、蓋を開ける。しゃがむと膀胱が圧迫されて、もう漏らしそうだった。

「……ハア……ああ……あつ」

ついに便座へ座れると思つたのに、正面を向こうとすると、枷の長さが邪魔して室内で方向転換できないことに気づいた。その瞬間、もう泣けてきて、おもらしする。

「ううう……ああ！」

シヤアアア……シヨアアア……

脚の間が生温かく濡れて、トイレの床に水たまりができる。鷹姫は気力が尽きて座り込んで泣いた。その姿を、ずっと見ていた陽湖たちが笑う。さんざん笑った後に、また水を飲ませて中央部に鎖でつないだ。陽湖は会議室に一人で入る。

「シスター鮎美、リングを壊しますか？」

「……リングの前に、うちと陽湖ちゃんのオシッコの穴か、膀胱が壊れるんちゃうの……もう、やめようよ。うちは鼻が慣れてわからんけど、この部屋、めっちゃオシッコ臭いんちゃう？」

「オシッコの匂いって、なんだか気持ちが悪くなりますよね」

「……」

ド変態！ 超弩級の変態教祖！ と鮎美は脳内だけで罵ったけれど、瞳の色で伝わったかもしれない。リングを諦めない鮎美とアダムの槍を通じて膀胱を圧迫しあって失禁遊びをした陽湖は再び中央部に戻って、啜り泣いている鷹姫を責める。ほんの少し言葉で責めただけで、もう括約筋も疲れ果てたのか、鷹姫は漏らして水たまりをつくった。

「タカちゃん、いったい何回おもらしすれば気が済むの？」

「……うう……うう……うう……」

もう幼児のように泣くことしかできなくなってきた。いよいよ落とせそうだった。

「おもらしして、ごめんなさい、お母さんって12回、言いなさい」「……うっ……うぐっ……おもらしして、ごめんなさい……お、お……お……お母さん、うっううー！うわああん！ うわああん！ ああああん！」

鷹姫は号泣したけれど、きつちり12回言わせた。言い終わってもボロボロと涙を零している。陽湖は優しい顔をつくった。

「鎖を外してあげて、枷も」

「はい」

生徒二人が鷹姫を自由にした。ずっと首の高さまであげた位置で固定されていた両腕は痺れてダルく思うように動かない。床に崩れそうになる鷹姫を陽湖は優しく抱きとめた。

「こっちへ、いらっしやい。タカちゃん」

「……ぐすっ……」

「よしよし」

優しい母親のような顔をして陽湖は鷹姫をシートに座らせると隣へ自分も座って抱きながら言う。

「タカちゃんのお母さんは、どんな人だったの？」

「……うっ……うっ……」

想い出すだけで、また涙が零れる。

「ね、教えてちょうだい」

「……り……立派な人です……優しくて……」

亡くなったとき、幼児だったので、たいして覚えていない。いいイメージだけが残っている。

「そう。なのに、お父さんは、新しい女と結婚しちゃうなんて、ひどいね」

「……う……うっ……うわああん！ うわああん！」

もう心の防御力がゼロになっているのを見越して、弱そうなところを突く。たっぷり泣かせて幼児化させた上で方向性を与える。

「ねえ、タカちゃんのお母さんは、どう思うかな？ 同性愛なんて、ちよっと間違ってるよね？ 本当に正しいのは、タカちゃんのお母さ

んみたいに優しくて立派な人が、ちゃんと男の人と結婚して、タカちゃんみたいな元気な子供を産むことだよね？」

「…………ぐすつ…」

「きつと、アユちゃんのお母さんも、そう願ってる。娘に幸せな結婚をしてほしい、つて。また自分たちと同じ夫婦になって、また子育てして、幸せになつてほしいって。もしも、お友達が間違ったことをしてるとき、タカちゃんは、どうするのが正しいと思う？ 見ないフリして、やらせておく？ 違うよね。間違ってることは、そうじゃないよ、正しい道は、こつちだよ、つて教えてあげないといけない」

「…………正しい…道…」

「そう。お友達も正しい道に。もし、ちゃんと教えてあげることができるタカちゃんを見たら、お母さんも喜ぶよね。いい子だね、タカちゃん、いいことしたね、つて」

「…………お母さん…」

「…」

よし、落ちた、これで決まり、と陽湖は手応えを感じ、問う。

「私たちの大切な友達へ、二人でいっしょに同性愛はやめようよ、つて言いに行こう」

「……………」

「ね、そうしよう？ 私たちのお母さんも、きつと喜んでくれるからね？」

「……………はい」

返事をした鷹姫へ周囲から拍手が送られるように陽湖は仕草で命じた。それで拍手が起こり、祝われる。

「おめでとう！」

「おめでとう！」

「よく気づいたね、おめでとう！」

一部の信仰心厚い生徒たちと陽湖は夏期に教会合宿などで自己啓発セミナーに近い研修も受けてきたので、その手法を流用していた。まるで生まれ変わりを祝うように拍手で包み、さんざん罵られて萎縮しきっていた鷹姫の心を自分たちの都合のいい方向へ解き放つ。も

とも鷹姫も同性愛には懐疑的だったので、ここ最近は鮎美の同性愛指向を個人の自由とみなしつつあったけれど、一気に引き戻した。

「さ、二人で言いに行きましよう」

「はい」

鷹姫を連れて会議室に入った。

「鷹姫……」

「っ、こんなお姿にされて……」

鷹姫は手枷首枷と足枷をされた自分より、さらに苦しそうな鮎美の拘束された姿を見て胸を痛めた。

「ひどすぎます！　すぐに解いてくださいー！」

「落ち着いて。私もしたくてしているわけではありません。すべては同性愛という悪に誘惑されている私たちの友達を助けるためです」

陽湖が真つ直ぐに鷹姫を見つめた。それで鷹姫も黙る。

「さあ、いっしょに言いましょう。同性愛はやめてください」

「同性愛はやめてください」

「鷹姫……」

「やはり間違ったことです」

「……」

「人の道に外れたことをなしては、親を悲しませます。鮎美のご両親はご健在ではないですか。牧田さんの結婚を知って、複雑な思いをされているはずですよ」

「……」

「どうか、同性愛をやめてください。鮎美が同性愛から抜け出したと知れば、きっとお母さんはとても喜んでくれます。私も誇りに思います。お願いです、同性愛はやめてください」

「……」

「シスター鮎美、リングを出してください」

「……っ……うっ、うちかってな！　同性愛者に生まれたくて生まれたんちゃうねん!!　なんべんもやめよう思たわ!!　けど、それでやめられるもんちゃうねん!!!　知らんヤツが、どうこうぬかすな!!!」

「……」

「うちと詩織はんは愛し合って結婚したんよ!! あんたらに何がわかる?! 何もわからんねん!! ほっといてよ!!」

「鮎美……」

「ここまで強固なサタンとは……」

陽湖は鮎美が鷹姫を想っていたことを知っていたので、鷹姫からの説得なら聞き入ると算段したけれど、すでに詩織をパートナーと想っている鮎美は拒絶して怒鳴った。

「サタンちゃうわ!! うちの意志や!! うちそのものや!!!」

「……………」

陽湖は一時撤退を決め、鷹姫と会議室を出た。

「……………くっ……」

「月谷……」

「っ、私のことはマザー陽湖と呼びなさい!!!」

「……………」

「あと、どうすれば……」

陽湖は無意識にボリボリと肘の内側を掻いた。そして何度もガムテープを貼りつけた股間にも痒みを覚えるけれど、それは我慢する。しばらく考えた陽湖は外した手枷首枷、足枷をもってこさせた。

「シスター鷹姫、もう一度、これをつけなさい」

「え……………」

本能的に鷹姫が一步後退るけれど、後方には黄色ローブの生徒が立っていて逃げ場がない。

「ど……………どうして……………私か?」

「シスター鷹姫、あなたは神を信じますか?」

「……………」

「やはり指導が足りなかったようです」

「……………いい、嫌です! もうこれは嫌!」

拷問道具をつけられるのが、どれだけ苦痛か身体が覚えている。強く拒否する鷹姫に陽湖が言う。

「シスター鮎美を改悛させるためです。我慢してください。自分のせいでシスター鷹姫が苦しんでいると知れば、シスター鮎美も考え直す

「かもしれません」

「……………」

「あなたはシスター・鮎美のために身を捧げる気がないのでですか？」

「……………」

「さ」

陽湖が促すと、生徒たちが鷹姫に枷をつける。鷹姫も拒否しなかった。今度は中央部でなく会議室のそばに吊された。

「シスター・鷹姫、あなたの悲鳴をシスター・鮎美に聴かせます。叩かれるのと、おもらしするの、どちらが苦痛ですか？」

「……………」

「より苦痛な方を行います。泣き叫んでシスター・鮎美に助けを求めなさい」

「……………」

「つらいのは叩かれる方ですか？」

「……………」

「おもらしですか？」

「…っ…」

鷹姫が正直に頷いた。また水を飲まされる。

「できるだけ悲鳴をあげてください。情けなく、必死に助けをもとめて、シスター・鮎美が後悔するように」

「……………」

「返事はっ?!」

「っ、はい…」

返事をした鷹姫のお尻を手で叩いてから、陽湖は博史と泰治を呼び、鮎美の拘束具を外して、アダムの槍も抜いて、鷹姫と同じ麻服を着せ、暴れないよう鎖で両手に手錠をし、片足首を室内の部材につなぐように指示した。鮎美は身体が楽になり、人心地ついたけれど、しばらくして鷹姫の悲鳴が会議室まで聴こえてきたので苦しんだ。

「鷹姫……………」

「ああああ！ ううっ！」

陽湖が鷹姫の悲鳴を背にして、会議室に入ってくる。

「シスター鮎美、あなたのせいでシスター鷹姫は苦しんでいます」
「っ……卑怯もんが！」

「宮本くんは何をしている?！」

介式も怒るけれど、陽湖は静かに答える。

「お水を飲ませただけです」

「拘束しているだろう?！」

「シスター鷹姫は自ら望んで試練を受けています。シスター鮎美を改悛させるため。部外者は指導の邪魔をしないでください。私はシスター鷹姫の望み通りにし、ただ、お水を飲ませただけです」

「くっ……」

そう言われると介式は引き下がるしかなくなる。陽湖は鮎美に問う。

「いいんですか? シスター鷹姫が苦しんでいますよ?」

「……………」

「リングを出しなさい」

「……………」。鷹姫!! こんなヤツに付き合わんと、外してもらい!!」

「シスター鷹姫は心から、あなたに同性愛をやめてほしいのです。その真心を知るべきです。そう、彼女は主イエスが人類の罪を背負ってくださったように、自ら進んで、あなたの罪を背負い、苦しみ喘いでいるのです!」

「……………」お前は絶対、地獄に堕ちるわ……………」

「あああつ! うううくうくう! 鮎美! 同性愛をやめてください

! あああつ! 鮎美のお母様だつて! きつと! きつと喜んで

! ううつ! ううつ! くあああつ!

「……………」鷹姫……………」ごめん……」

鮎美は苦しみ迷ったけれど、あのリングを叩き潰すのだけは嫌だった。鮎美と鷹姫が苦しむこと2時間、夜を抜けるように飛んでいたエアバスA321の行く先が明るくなり始め、行きと同じ中国の西部、ウルムチ地窩堡国際空港へ燃料補給のために寄る。全員にシートベルトを着用してもらうため、拘束を外すことになり、陽湖は肘の内側を搔いていた。

「……まだ……落ちないなんて……」

鷹姫は同性愛を否定したけれど、信仰告白はしない。鮎美は口先だけは全力で神を肯定するけれど、リングは守り続けている。

「………行きの飛行機でも、この燃料補給のあとに逃げられたから………ここからが勝負………」

往路では外務大臣就任の話が入ってきて仮眠を認めてしまったけれど、今度こそ追い込んで洗礼を受けさせるつもりだった。まずはシートに鷹姫を座らせる前に、鮎美の制服をもってきた。制服の上着を鷹姫が座るシートの座面に敷いて、そこに座らせる。

「なぜ、こんなことを………これは鮎美の……芹沢先生の制服では………」

「床ならともかくシートを汚されるのは困りますから、ちゃんと我慢してください。さつきから、シスター鷹姫は垂れ流し状態ですよ」

「っ……あれだけ水を飲まされれば………」

鷹姫が恥ずかしくて顔を伏せた。もう括約筋がろくに働かないので尿意を覚えると、すぐに漏らしてしまっている。

「まさか議員バッチも着いている大切な制服を汚いオシッコで濡らしたりしませんよね？」

「………」

鷹姫は強い不安に震えた。シートベルトはゆるめに締める。隣に陽湖が座り、その隣には鮎美を座らせ、今回は三人とも最前列にしたし、介式も鮎美の隣となる。飛行機が着陸態勢に入った。陽湖は生徒全員に賛美歌を謳わせる。そうしないと、寝てしまう可能性があるほど睡眠不足になっている。飛行機は無事に着陸し、日本時間で朝7時過ぎ、中国時間で朝4時だった。

「………うう………トイレに………」

「シスター鷹姫、まだシートベルトをしていなさい。あと、この飛行機は一機100億円以上します。いったい何回おもらしする気ですか。汚らしい」

「あんたが、さんざん水を飲ませてイジメるじゃん。鷹姫、うちの制服は気にせんと無理に我慢せんとき、病気になるよ」

三人が話していると、窓際の生徒が騒ぎ始め、鮎美たちも外を見た。

飛行機はターミナルに近づき、往路と同じように燃料補給のため地下燃料庫と翼をパイプでつなぐトラックに接続されつつあるけれど、他にも多数の車両が集まってきていて、飛行機を包囲してくる。それらの車両は武装警察のもので、装備している機関銃をこちらに向けていた。さらに、ターミナルと接続され、搭乗口から中国人が乗り込んでくる。機長と中国人がやり取りした後、銃で武装した3名と隊長らしき人物、そして通訳が客室の方へ来た。隊長らしき男が北京語で何か言い、通訳される。

「お前が芹沢鮎美だな？」

「いいえ、違います」

陽湖は正直に答えた。中国人の目には一人だけ上質のローブを着て、テイアラとマントもつけている陽湖が一番上に見えたようだったし、陽湖と鮎美は顔立ちが似ている。まさか、隣にいる奴隷のような服の少女が外務大臣とは思わず、隊長は話を続ける。

「私は武装警察少将、習平宝（しゅうへいほう）だ。中国へ、ようこそ、芹沢大臣」

「ですから、私は芹沢鮎美ではありません」

重ねて陽湖は訂正し、鮎美を指す。

「シスター鮎美なら、そちらです」

「うちに何の用ですか？」

鮎美が立ち上がるとうすると、平宝の後ろにいる3名が銃口を向けてきた。

「動くな！」

「……ほな、座ってますわ」

鮎美の関西弁は通訳されず、隣から介式は座ったまま鮎美の上半身をかばうように身を乗り出しておく。いまだ平宝は陽湖へ言う。

「フ、我々の目は節穴ではない。誤魔化されんぞ、芹沢大臣。身代わりを立てるとは、どうやら、よほど怯えているようだ」

銃口は陽湖へも向けられているけれど、陽湖は怯えるような精神状態ではなくマザーとして堂々と平宝を見返す。それが余計に18歳にして大臣に指名された者の貫禄に見えた。

「私たちに何のご用ですか？」

「臨検だ。我が国の正当な権利だ」

「罪なき生徒たちに銃を向けるのも正当な権利ですか？」

「フン、それにしても、臭いな。日本人が清潔な民族というのは嘘だったか。嘘ばかりの人種だな」

「わけあって入浴いたしておりません」

陽湖が答えているうちに、隣りに座っていた鷹姫が震えながら漏らした。

シユ〜…ピチャピチャ…

我慢できなかつた小水を座ったまま漏らしてしまい、あまり水分を吸収しないブレザー生地 of 制服から床へと流れ落ちて音を立てた。

「ううっ…ぐすっ…ううっ…」

「フフ、それほど我々が恐ろしいか」

鷹姫が恐怖で失禁したと思ひ込んだ平宝は満足げに微笑む。飛行機を包囲している車両も銃口を向けてきていて、他の生徒たちは本当に怯え始めていたけれど、陽湖と鮎美は冷静だった。陽湖は死ねば楽園に行くと本気で信じているし、マザーとして振る舞っている。鮎美も銃口を向けられた経験があるので、なんとなく目前の中国人たちも本気で撃つつもりは無いのだと感じていた。

「芹沢大臣、長生きしたければ余計なことはするな。とくに島のことだな」

「島？」

つい鮎美と陽湖は琵琶湖に浮かぶ鬼々島を思ったけれど、すぐに鮎美は尖閣諸島のことだと気づいた。畑母神と論調を合わせて都知事選でも日本の領土であると繰り返し叫んだ。その鮎美が大臣になり、そして燃料補給のために中国の空港に立ち寄るといふ情報をえて臨検に来たのだと察した。

「…そういうことか…」

鮎美がつぶやき、陽湖も政治の勉強は秘書補佐として少しはしたので遅れて察した。

「それで臨検とは何をされるのですか？」

「お前の顔を見ておきたかっただけだ」

「…そうですか……」

私じゃないのに、と思いつつも陽湖は毅然として見つめ返す。誤解を解くにはパスポートや学生証を見せて、かなりの時間を要しそうだし、どう見ても奴隷という服を着せた鮎美には手首や足首に拘束された痕が残っている。これで実は外務大臣です、ということも納得してもらうのは不可能な気がした。

「顔はいいな。鳩山の愛人にでもなつて大臣にしてもらったか？」

「いえ、そういうことはありません。いいことではありませんが同性愛者ですし、不倫も罪です」

だから私じゃないですよ、だいたい総理に愛人がいるのがわかったら即辞任です、と陽湖は常識感覚が違う平宝との会話に疲労が倍加した。

「オレの嫁にしてやってもいいぞ。オレの父は指導部にいる、いずれオレもトップだ」

「遠慮します」

シスター鮎美に男性のお婿さんができるのはいいことですし、いつそブラザー博史かブラザー泰治と結婚される方がシスター美恋も喜んでくださるはずで、それはいいにしても、あなたとはありえませんが、と陽湖は無表情で思った。陽湖の反応が面白くないので平宝は鼻を鳴らす。

「フン……こんな小便臭いところは、うんざりだ」

そう吐き捨てて平宝は引き上げた。しばらくして飛行機を包囲していた武装車両も去り、何事も無かったかのように燃料補給は終わった。鮎美がつぶやく。

「わざわざ脅しに……そんなに、あの島に、こだわってるんや……」

国際社会の摩擦を肌で感じた。イスラエルも当たり前のように銃が目に入ったし、今も銃口を向けられた。介式に向けられた銃口と違い、その内部には実弾が入っているはずだった。

「ごめんな、陽湖ちゃん、うちのせいで…」

「いえ、それより離陸します」

またしても燃料補給で場の空気を変えられてしまい、陽湖は焦った。もう逃がすまい、と飛行機が安定飛行に入ると先手を打つ。

「シスター鷹姫!! また漏らして!! 汚らしい!!」

大声で怒鳴りつけると鷹姫は震えて小さくなった。

「っ…、すみません…うう…」

「鷹姫を責めるのはやめいよ!! うちに文句言い!! 同性愛なんか、うちやろ!」

鮎美が狙い通り自分を責めろと言ってくれたので陽湖は命じる。

「ではシスター鮎美、あなたは会議室へ!! ブラザー博史! ブラザー泰治! 連れていってください!」

鮎美と鷹姫を分離し、鮎美には再び鎖で手錠をさせ、さらに片足首を鎖で会議室内の部材につないで行動を制限した。それから会議室を出て、泣いている鷹姫を苛む。

「大切な制服を汚して、どういう神経してるの?!」

「っ…お許してくださいっ…ううっ…」

「シスター鷹姫を吊るしなさい!」

陽湖が睡眠不足で血走った目で命じると、黄色ローブたちも睡眠不足で判断力のない脳で応じる。枷を鷹姫の前にもってきた。

「ひっ…い、…嫌…嫌…」

枷を見ただけで鷹姫は震え上がってしまった。自分自身でも気の強いつもりでいたのに、繰り返された苦痛を身体が覚えていて、枷や鎖を見ると手足が震え、涙が溢れて腰がぬげ、貯まってもいかなかった小水まで漏らしてしまう。

チヨロチヨロ…

情けなく鷹姫が失禁しているのを陽湖は見逃さない。

「また漏らして! 少しは我慢しなさい!」

「っ、ごめんなさい、ごめんなさい。ううっ…ううっ…」

泣いている鷹姫の髪を掴むと、陽湖は乱暴に首枷へ押しつける。

「嫌っ…嫌っ…」

鷹姫は震える手足で抵抗を試みたけれど、男子生徒も押さえつけてくるので、ろくな抵抗ができないうちに手枷もはめられ、脚を開かれて足枷もつけられた。手足の自由が無くなり、もう泣くことしかできない。男子たちが鷹姫の身体に触って持ち上げ、鎖で手枷首枷を天井に吊した。

「見なさい！…これを！」

陽湖が濡れてしまった鮎美の制服を鷹姫の顔に押しつける。

「おもしろい！大事な制服を汚すなんて！！ 秘書失格です！！」

すでに議員本人も何度も漏らしていて、他の同級生秘書である鐘留と陽湖自身の方もオネシヨや失禁を繰り返していたので、どちらかといえど鷹姫が一番汚れていなかったけれど、そんな反論もできないほど鷹姫は弱っている。その弱っている心を、さらに打ちのめすために陽湖は言葉の鞭をふるった。

「死んだお母さんが泣いてます！ おもしろいばかり続けて！ あなたが死ねばよかったです！ おもしろい汚い子より、新しい子供とお母さんが生きればよかったです！ あなたのせいでお母さんが死んだ！」

思いつく限りの最大限に鷹姫を傷つけそうな言葉を選んでいる。言われた鷹姫は呻き泣いた。

「うううっ…うううっ…」

「あなたは生きてはいけけない！ 呪われた子！ だから、お母さんが死んだ！ 剣を取る者は剣によつて滅びる！ さあ！ その汚い心を滅ぼしなさい！ 生まれ変わるのです！ 悔い改め！ 悔い改め！ 悔い改め！ 悔い改め！ 悔い改めるのです！」

叫びながら陽湖は鷹姫のお尻を何発も叩いたし、さらに顔も叩いた。顔を打たれると首枷に首があたり、余計に痛い。さんざんに鷹姫を打ちのめした陽湖は会議室に入る。鮎美は鎖でつながれていても、恐れず陽湖を睨んでくる。もう屈しない、という目だった。介式もいて今までの不干渉から介入の口実を見つけようという目になっていく。やはり燃料補給で世俗の外界と接したために大きく空気感を変

えられている。陽湖は最後の手段に出ることにした。アダムの槍を手にする。

「これを使います」

「……好きにしいや。それ冷たいし突っ込む前に温めてや」

「使うのはシスター鷹姫へです」

「っ、強制わいせつ」「やん！」「だ！」

鮎美と介式が同時に叫んだ。

「いいえ、シスター鷹姫には同意をえて行います」

そう言った陽湖は吊されている鷹姫へとアダムの槍を持って向かう。鮎美は追いかけてしようとしたけれど、鎖につながれていて動けず介式に頼む。

「介式はん、見てきて！」

「だが、しかし、芹沢大臣の警護を……」

「うちは大丈夫やから！ この二人は安全やし！」

鮎美は丈の短い露出過多の麻服を下着なしで着ていて手錠もさされている。そんな警護対象を安全そうに見えるとはいえ博史と泰治という男子二名と残しておくのはSPとしてありえなかつたけれど、鷹姫のことも心配でならない。もう陽湖は常軌を逸した表情だった。介式が鷹姫のところへ行くと、陽湖はアダムの槍を鷹姫に見せていた。

「シスター鷹姫の処女を奪います。それに同意したと言いなさい。そのことをシスター鮎美に話して、同性愛を捨てさせます」

「……………」

「大丈夫、きっと、シスター鮎美は、あなたを助けるため、同性愛を捨ててくれます。だって、シスター鮎美は本当は、あなたを愛しているのだから」

もう無茶苦茶な論理を口走り、同意を迫る。

「さあ、シスター鮎美を悪から救うチャンスを与えてください。あなたの身を犠牲にして。大丈夫、槍で突かれた主イエスが復活したように、あなたの処女も復活します。神の国においてなさい」

「……………」

もう意味不明で聴いている鷹姫も介式も言葉がない。

「いいですね？ 領きなさい。脅すだけです、きつと同性愛を捨ててくれます。さあ！」

「…」

疲れ切った目で鷹姫は領いた。陽湖は振り返って介式に告げる。

「余計な口出しは無用ですよ！」

「……………」

「シスター鮎美を救いに行きます！」

陽湖は会議室に向かおうと急ぐあまり途中でローブの裾を踏んで顔面から転んだ。

「うぐつ……私は負けない！ 神を信じる者は7度転んでも起き上がるのです！」

鼻血を拭いて陽湖は会議室に入ると鮎美に告げる。

「シスター鷹姫はアダムの槍を受けることに同意しました！ さあ、同性愛を捨てなさい！ でなければ、シスター鷹姫の処女を奪います！ あなたのせいでシスター鷹姫は祝福された結婚ができなくなる！！ 汚れた悪魔の売春婦になる！ さあ！ 同性愛を捨てリングを破壊しなさい！！」

「……………」

奇妙に落ち着いた目で鮎美は陽湖を見つめ、そして介式に頼む。

「介式はん、あの指輪を返して」

「……………いいのか？」

「鷹姫の処女と、宝飾品、どっちが大事か、わかるやろ？」

「……………」

介式はスーツのポケットから身分証明書ケースを出し、そこからリングを抜いて鮎美へ手渡した。陽湖がハンマーを持ってくる。

「さあ！ 打ち壊しなさい！ 悪魔との契約を！ その象徴を！」

陽湖がハンマーを渡してくる。指輪を床に置き、手錠をされた両手でハンマーを受け取った。

「決別するのです！ 悪魔と！」

「……………」

指輪はまた田崎真珠で買えばええねん、詩織はんに謝って、同じ物を注文して、また造ってもらったらええねん、ただの宝飾品、ただの金属、うちの想いは指輪が無うても、あるはずやもん、鷹姫のためだけにだけはアホどもに合わせよ、と鮎美は合理主義的に自分へ言い聞かせ、ハンマーを振り下ろした。

ガツ…

床の上で指輪が少し平べったくなる。打ち壊すといっても金属なので割れはしない。陽湖が手を出してきた。指輪を摘み、床の上で縦にして言う。

「二度と指を通さないよう潰しなさい！」

「……………」

あんたの指の骨をグチャグチャにしたるか、それとも頭どついて潰したるか、と鮎美は頭の片隅で殺意を覚えたけれど、小さくハンマーを振ってコツコツと何度も叩いて指輪を変形させ、閉じた女性器くらいの楕円形にした。

「よくやりました!! おめでとう!! シスター鮎美!!! あなたは生まれ変わったのです!」

「……………うっ……………くっ……………ぐすっ……………うわあああああ!!」

耐えるつもりだったのに鮎美は泣き崩れた。その号泣は鷹姫にも聴こえていた。

「……………鮎美……………」

「うあああああ! 詩織はん、ごめんなさいいいい! うああああん!!」

泣き続ける鮎美を陽湖は博史と泰治へ命じて、小さな風呂桶へ浸ける。その水は何人も浸かった後なので汚かった。

「ううっううう…ぐすっ…ううっ…」

全身ずぶ濡れされた鮎美へ陽湖は聖母のような微笑みをつくって問う。

「シスター鮎美、あなたを男性と結婚させます。ブラザー博史とブラ

ザー泰治、どちらがいいですか?」

「「え……」」

「選びなさい。私が司祭して結婚式を行います」

「「……………」」

三人とも啞然として何も言えない。まるで犬猫を交配させるようにくつつけようとしていて、しかも陽湖の目が狂気の本気なので鮎美は仕方なく選ぶ。

「タイジはんで」

「ボクで?! ゲイだぞ!」

驚く泰治より、残念そうな博史へ鮎美は言うておく。

「ヒロフミはん、あんたは、まともな嫁さん探し。好きになっけてくれ、おおきにな」

「……………ボクこそ……………ありがとう…」

居づらくなつた博史が退場し、陽湖は司祭する。

「これより、シスター鮎美、ブラザー泰治の結婚式を執り行います」

「……………」

鮎美が肩をすくめて諦めた様子なので泰治も察した。なぜ、鮎美のことを好きでいる博史よりゲイの自分を選んだのか、この場だけ合わせるつもりなら、下手に本気な博史より泰治の方があとと問題にならない、という思考だった。二人とも結婚式ごっこに付き合うことにして陽湖の前に立った。

「万物の創造主たる父なるエホバ、主イエス、聖霊の御名において、ここに二人の誓いを立てます」

「……………」

「六角市は鬼々島3の47に住まう芹沢鮎美ことシスター鮎美、あなたはここに、六角市は八幡堀町1の11に住まう国友泰治ことブラザー泰治と夫婦となり、永遠の愛を結ぶこと、ここに誓いますか?」

「はい」

タイジはん、ホンマに学校のすぐそばなんや、八幡堀町って学園敷地の隣やん、カネちゃんと同じ町内会やね、それにしても陽湖ちゃん、しつかり住所を覚えてるあたり、このつもりで調べておいたんやな、

どこまでも頭の腐った女やなあ、と鮎美は司祭している陽湖を見る。陽湖は厳かに儀式を続ける。

「ブラザー泰治、永遠の愛を結ぶこと、ここに誓いますか？」

「はい」

ま、いいや、と泰治も返事した。

「よろしい。では、誓いのキスをしなさい」

「……………」

それがあつたか！ と鮎美と泰治は緊張する。

「……………」

どうする？ ボクはいいけど、ほな、よろしく、と二人は軽くキスを済ませた。

「ここに二人の結婚を祝福します！」

「……………」

これで満足やろ、と鮎美は終わりだと思ったけれど、陽湖は満足していない。

「結婚式は終わりました。二人は夫婦です。愛を確かめるため、ここで今すぐ抱き合い、肉を交わしてください」

「なっ……」

「夫婦として当然です」

「なんで、そこまでせなあかんのよ?!」

「お二人が本当に同性愛を捨て去ったか、確認するためです」

「……………」

「さあ、肉を交わしてください」

「嫌よ！ ふざけんといて！ なんで、そんなところ見られなあかんのよ?!」

「そうだよ。夫婦でも、そういうことは隠れてするだろ?!」

「同性愛を捨てきっていないのですか？」

「……………」

「神に偽りの誓いを立てたのですか？」

「……………」

「わかりました。二人が肉を交わさないのであれば、シスター鷹姫に

神罰をくだします」

「なっ、何する気よ?!」

「彼女はうちなるサタンにより周囲の男子を淫らに誘惑しています。その罰として男子たちの中に宿させたサタンを彼女へ返します。その淫らな誘惑の罰を、淫らな汚れによって肉の中へ返すのです。サタンに悶える男子全員から」

「ただの輪姦やん!!」

「同意させます」

「っ……」

「どうしますか、シスター鮎美？ ブラザー泰治と交わりますか？ それともシスター鷹姫を見捨てますか？」

「くっ……ぐぐっ……どこまでも……どこまでも、お前はっ……」

鮎美は怒りに震えた。今すぐ陽湖を叩き殺したい衝動が湧いてくる。けれど、鎖につながれていて、どうにもできない。そして今も鷹姫の状態が心配だった。機内は半数が女子なので、鷹姫へ淫らなことをすれば告発されるという抑制もあつて、すぐに強姦ということはなくとも、もう睡眠不足と空腹で理性を失っている集団が手足を拘束された鷹姫に何をするか、わからない。まして陽湖がゴーサインを出せば、鷹姫が陵辱されつくすのは明白だった。

「ぐううう……」

「ここは従うしかない、と鮎美は怒りを抑え、泰治に頼む。

「……お願いします……」

「本気か？」

「うん……ごめん、抱いて。……できる?」

「……どうかな……」

二人ともバイではなく、完全な同性愛指向だったので異性の身体で、まったく刺激されない。とりあえず向かい合ってみただけで、鮎美は男を男として見たことがない、大きな賢い犬くらいの感覚で、キスは犬に舐められるのといっしょだったし、まして性交となると考えたこともない。泰治はバレー部で活躍してきただけあつて、背も高くて筋肉も発達している。女子から人気もあつてハンサムだったけれ

ど、そもそもハンサムな顔立ちそのものが、どうでもいい、いい顔をしたハスキー犬くらいにしか感じない。そして男の匂いは、あまり好きではない。

「……ボクは……ガチだから……」

泰治も女子に一切の興味が無い。目の前にいる鮎美は、ふわふわナヨナヨとした身体で頼りないし、変に胸も大きい、それが最高に刺激的だということは知識で知っているけれど、泰治の目には変なコブがあるようにしか感じない。手足が細いくせにお尻だけはポチャとしていて豚に似ているとさえ思う。鮎美の顔も可愛いと評判なのは知っているけれど、リスやウサギを可愛いと思うようにしか感じない。まして抱き合うとなると、なんだか捕まった宇宙人グレイと性交しろと迫られている気さえする。

「早くしなさい。シスター鷹姫が、どうなっても、いいのですか?」

もう言い回し無しで完全な人質として陽湖が脅迫してきた。

「ああ、かわいそうな、シスター鷹姫、島で待っている許嫁のもとへ帰る前に、穢れきった身体になってしまう。もう塵は塵に還るしかない」

「……タイジはん、ごめん、お相手してください」

鮎美は手錠されたままの両手をあげ、泰治の後頭部へ回して抱きついていた。男性に嫌悪感はない、むしろ申し訳ないと想うし、泰治から嫌悪感をもたれていないか心配だったけれど、泰治の方も女子を嫌っているわけではなくて単に興味がないだけだった。とりあえず、誓いのキスよりも深めのキスを試してみた。

「……………」

犬やリスとキスしているような感じがする。温かいし柔らかいし不快ではないけれど、身体が高鳴る衝動が無い。ぴったり身体をくっつけて抱き合っても、フニヤンと柔らかい鮎美の乳房は、牛の乳房で興奮しないように泰治を刺激しないし、何より勃起しない。鮎美の方も、やっぱり興奮できない。鷹姫や詩織のような鍛えていても皮下脂肪のある丸い身体が好きなのに、男の身体はゴツゴツとして味気ない、ゴリラに抱きついているような気持ちだった。

「……………」

「……………」

見つめ合っても困惑しかない。

「そうです！ そのまま抱き合いなさい！ 男と女は、それが正解なのです!!」

「……………」

そんなことは幼稚園から知っているけれど、それに違和感を覚えて成長してきた。今、こんな形で強制されていることが悔しくて嫌だったけれど、鮎美は鷹姫のために頼む。

「お願いします、タイジはん」

「……………わかったよ……」

泰治は黄色ローブを引き上げて脱いだ。下着は無しだったので、それで裸になる。やっぱり勃起していなかった。鮎美も忌々しい麻服を破いて脱いだ。

「……………」

裸で抱き合っても、やっぱり感じない。体温の温かさが心地いくらいで、それは冬に猫を抱いたときにも感じるものと変わりがなく。泰治は猫を抱いても勃起しないように、鮎美を抱きしめてみても勃起できなかった。鮎美のサラサラとした美しい髪も美しいのは理解できるけれど、義隆のようなスポーツ刈りの頭が好きだった。

「……………」

興奮できない二人は次の動きに迷う。詩織との性行為なら湧いてくる衝動のままに舌を肌に這わせるのに、あまり舐めたくないし、舐められたくもない。犬に舐められて許せるのは、せいぜい手先までのように乳首や股間を舐めるのはしないほしい。泰治はゲイとしても童貞だったので余計に経験が無くて困る。ただ男友達の家でアダルトDVDなどは見たことがあるので、だいたい何をすればいいかは知ってはいるし、あのときDVDで見た男優のお尻は魅力的だった。キュツとしまった男の尻には惹かれる。いつか、その奥にある肛門へ自分の男根をねじ込んでみたいと想うし、自分の肛門に男根を受け入れてみたいとも想っている。そんなことを想うと、少しだけ勃起でき

た。

「……おチンチン、……触ってみてもええ？」

「ど……どうぞ……」

「……………」

陽湖と介式は静かに見守ることにした。介式にしても、鮎美が異性に愛に目覚めるなら、それは、いいことだと考えるし、一応は結婚式の後の和姦なので口を出す筋合いはないとも考える。

「ほな……触るよ……」

鮎美が手錠された両手で男根に触れる。細い指が宇宙人グレイのように見えたので萎えそうなるけれど、泰治は義隆のことを想い出してみた。義隆に鎖で手錠をして拘束してみたい。もしくは拘束されてみたい。そういう妄想をすると一気に勃起できた。

「……………こういう風に……………勃つんや……………すごい……………クリと、ぜんぜんちやう……」

「……………」

「えつと……………挿入してください」

「あ……ああ……」

泰治は鮎美を抱きよせて前から挿入しようとしたけれど、見当違いの角度で腰を押し出した。立って向かい合ったまま、まっすぐ腰を押し出したのでは女性の膣は上方向に形成されているので、ただ股間を虚しく抜けるだけで挿入には至らない。もともと女性の身体に興味をもっていなかったのも、そんなことも知らなかった。けれど、淫らな情報も避けてきた陽湖も保健体育では体位など説明されないのだから知らなかった。

「ああ、ついに！ 神よ、ご覧ください！ 二人が導きに従いました！」

「……………」

あ、これで納得してくれるかも、と二人は挿入までしなくても陽湖が満足しそうなので素股で終えることにした。

「あん、気持ちいいです、タイジはん」

よがる演技もする。泰治も合わせて腰をふつてみたけれど、鮎美の

顔を見ていると、どうしても萎えてくる。鮎美も濡れていないので摩擦が高い。すぐにフニャフニャになった男根がパンパンと毛の無い鮎美の股間にあたるだけになった。

「ああ、タイジはん、中に出して。精液、いっぱい出して」

そういうセリフを言うものだと大阪にいた頃、同級生が読んでいた漫画で知っているので安っぽい演技をした。

「おお、出すぞ。ううっ！ うー！ うー！」

泰治も律動的に腰をふってフィニッシュしている演技をした。

「ハア……ハア……」

「……………」

陽湖も介式も処女なので二人が性交したのだと感じた。

「神よ、ああ、ハレルヤ」

「やれば、できるのだな」

「……………まあ……」

「その調子で励め」

「……………そんな剣道の打ち込みみたいに言われても……」

鮎美は泰治から離れて陽湖に言う。

「そろそろ鎖を外してよ」

「わかりました」

鎖を外した陽湖は紫色のローブをもってきた。

「さあ、シスター鮎美、これに着替えてください。あなたは洗礼を受けました。神を信じると言い、同性愛と決別し祝福された結婚をして男性と結ばれました。素晴らしい人です」

「……………」

裸のまま嫌なので鮎美は紫色のローブを着た。着心地はいいけれど、やや暑苦しい。陽湖は最終段階に入る。

「さあ、シスター鮎美、あとはシスター鷹姫に受洗させるのみです！」

「……………鷹姫にまで……………？」

「でなければ、シスター鷹姫は吊ったままです！ おもらしもさせます！ 叩きます！ さあ、彼女を受洗させ、助けてあげてください！」

もう陽湖は全員を受洗させるという目標まで、あと一步となったので興奮しきっている。逆に冷めた鮎美は、あと少しだけ合わせてやることにした。

「うちが言い聞かせれば、ええんやね?」

「そうです! シスター鮎美の言うことなら聞くはずです!!」

「わかったよ」

鮎美は髪を掻き上げて耳へかけ、会議室を出ると吊られている鷹姫に近づいた。

「鷹姫、今、助けてあげるしな」

「……鮎美……」

ずっと涙を流していた鷹姫が紫色のローブ姿となった鮎美を不思議そうに見る。

「よく聴いてや」

そう言った鮎美は鷹姫の耳元に囁く。

「隙を見て、うちが合図したら対応Cよ」

「っ……」

鷹姫の無気力だった目に闘志が宿った。対応Cは、取り押さえて警察に通報、ということで認識は一致している。ここまでされて反撃する気になっている鮎美へ、鷹姫も領いた。

「さ、鷹姫、神を信じてます、と大きな声で言い」

「はい、神を信じています!」

「洗礼を受けい」

「はい、洗礼を受けます!」

「」「おおっ!」「」

「」「わああ!」「」

男子女子から歓声があがり、場の空気は最高潮に盛り上がり、お祭り騒ぎとなる。

「おめでとう!」

「アーメン!」

「ハレルヤ!」

「神の国バンザイ！」

「主は来ませり！」

「マザー陽湖バンザイ！」

「マザー陽湖に祝福あれ！」

「マザー陽湖！ マザー陽湖！」

まるで選挙カーの連呼のようにマザー陽湖が繰り返され、鷹姫がずぶ濡れにされて黄色ローブを着た頃には、マザー陽湖の連呼は空耳で、マヨ、マヨ、と聞こえた。

「あんたらはマヨラーか」

冷めた顔で鮎美は会議室の壁からイチジクの枝を取り、ハンマーも握った。陽湖が問うてくる。

「シスター鮎美、それで何を？」

「もう全員が受洗したんやし、こんな枝いらんやろ。ハンマーで折つたる思て」

「それは素晴らしいですね」

幼い頃、自分も叩かれて嫌だったイチジクの枝が再び消えてくれるのは嬉しい。鮎美はハンマーでイチジクの枝を小太刀程度の機内で振り回すのに手頃な長さに折った。木刀ほどだった枝は2本に分かれ、2本とも鷹姫に渡した。そして陽湖の手を握り、盛り上がったいる機内の最前列から敵になりそうな人物を見定める。教師と信仰の厚い生徒、他に多くて20人、もっとも手強いのはSPから信徒になった長瀬だと見込んだ。

「はい、注目！」

よく通る声で鮎美が言うのと視線が集まる。その視線を受けながら鮎美は手を握っていた陽湖を見つめ、抱き合うように両手を広げた。それで陽湖も抱きついてくる。紫ローブの二人が抱き合うと、さらには盛り上がったけれど、次の瞬間に鮎美は陽湖の首を絞めた。

「うきゅっ?!」

フロントチョークだった。なんの格闘技も経験したことのない陽湖は一瞬で絞め落とされ、オシッコを垂れ流した。ぐったりと崩れた陽湖をシートに置くと、鮎美は鷹姫から小太刀にした枝を1本受け取

る。

「はい、この飛行機は、うちが乗りました。文句のあるヤツは出てこい！　うちと鷹姫が相手するで!!」

「…」

鷹姫が小太刀を構えて鮎美の前に出る。すでに鮎美が陽湖を絞め落としてる間に黄色ローブの裾を動きやすいように裂いていた。鷹姫の実力は誰もが知っていて、そして教義で格闘技を否定しているので、誰も襲ってこない。唯一、屋城が叱ってくる。

「どういふつもりですか?!」

「どうもこうもあるかい！　人をバカにしくさって！　もう許さん!!!」

「……………」。指導に従わなければ単位は与えられません」

「で?」

「卒業できなくなります」

「ほな、裁判で争うわ」

「……………」。この飛行機はイスラエル国の登録です。日本の裁判所では争えません。入学時の書類にも、聖書教育にかかわることの争いはイスラエル国の裁判所を専属的裁判所とする合意がなされています」

「ええよ、イスラエルの裁判所で」

「……………」

屋城がひるんだ。鮎美が畳みかける。

「争った前例は無いんちゃう?　今までの生徒と保護者は、みんなビビって従ったやろ。けど、うちは争う。それにな、結婚指輪やそれに相当する物品で財産的価値が金地金3オンス以下の物は、たとえ罪人でも取り上げられん、というイスラエルの判例があるの、知らんやろ」

「そんな判例が……………」

「うちは、これでも立法府の一員よ、自分が出かける国の法律くらい調べて行くと思わん?　まして、うちは同性愛者、野蛮な国に出かけたら、すぐ死刑ってこともある身よ」

「……………」

「イスラエルの裁判所が、結婚指輪だけは許すって判例をつくったんは、あのホロコーストの影響や。あれで何もかも取り上げられたユダヤ人のつらさ、それを繰り返さん意味だよ。さ、どうする？ 単位認定権の濫用と人権侵害で、イスラエルで裁判、やってみよか。うちにとってには、ええ勉強になるわ。けど、そっちにとつては、とんだスキヤンダルやね。とんでも学園やって世間に知れるし」

判例は口からでまかせだったけれど、そもそも当該国の裁判官でも判例をすべて諳んじていることはない。そんな判例は存在しない、と言えただけの知識がある者は、まずいいことを利用して鮎美は優位を保つ。

「別に裁判なんか、現地の弁護士を雇ってテキトーにやったら、数年で決着つくやろ。けどな、日本社会では社会的制裁つてもんもあんのよ！ 週刊紙にも新聞にも、この学校の、とんでもない部分、うちの地位と立場で喋ったるか！」

「……………」

「だいたい今まで、こんな修学旅行して、よく卒業生が公開せんかったもんやね？ どうやって口止めしたん？ 帰国後即卒業式でも腹にすえかねて言うもんおるやろ」

「……………」この修学旅行の内容には守秘義務を課しています。これを破ると以後、卒業証明書は発行されません」

「えぐいことしてなあ……………」さすが、欧米からのキリスト教精神」

「……………」頭を冷やしてください。そちらの要求は何ですか？」

「頭を冷やすんは、そっちゃ！ とりあえず全員に私物と服を返して睡眠を取らせい！」

「……………」わかりました。マザー陽湖に危害を加えないと約束されるなら」

「さんざん、うちと鷹姫に危害を加えておいて」

「私たちは争いを望みません。お願いします」

「ちつ…まあ、ええわ」

交渉が成立した。準備はしていたけれど乱闘にはならず、威嚇だけで終わり、望む生徒から制服に戻り、一部の生徒はローブのままだった

たけれど7割の生徒が制服姿になった。着替えた由香里が鮎美へ言ってくる。

「これ、あげる」

由香里はネックレスのチェーンを差し出してきた。

「え？　なんで？」

「さつき、リング潰されたでしょ。無くさないように、これに通しておきなよ」

「……。でも、ええの？　もらっても……」

「ずっと前に彼氏にもらったネックレスだけどさ。もう別れたし、そいつには新しい彼女いるし。いい機会だから、あげる」

「……………おおきに、ありがとう」

鮎美は潰した指輪へチェーンを通し、首にかけた。由香里が軽く手を振って背中を向ける。鐘留が黄色ローブ姿で戸惑いながら声をかけてきた。

「アユミン……………」

「カネちゃんも着替えい」

「……………うん……」

場の支配者が変わったので、それに従うことを選んで鐘留も制服姿になった。着替えを望む生徒の着替えが終わる頃には5割の生徒がシートで死んだように眠っている。黄色ローブのままにいる生徒も聖書を読んだり、祈ったりしたまま眠りへ落ちていく。ほぼ全員が眠り始め、鮎美と鷹姫もSPに交替で守ってもらいながら6時間ばかり眠った。日本時間で14時過ぎ、エアバスA321は日本領空に入る。絞め落とされたまま睡眠に入っていた陽湖が屋城の隣で目を覚まし、ここまでの経緯を聞き、そして鮎美へ謝りに来た。

「本当に、ごめんなさい！　私、どうかしていたんです！」

睡眠を取ったおかげで脳が正常な判断力を取り戻し、自分がしたことを心から謝り、床に土下座するので鮎美は頭を上げさせた。

「もうええよ。ゆっくり休み」

「っ…あんなに、ひどいことをしたのに……許して…くれるのですか？」

「うん、うちも経験あるもん。急にうまくいきすぎて調子に乗りすぎて、人を人とも思わんで、鷹姫にひどいことしそうになつたこともあつたし」

鮎美は国会開会式後の記者会見が成功したとき、高揚のあまり鷹姫へ強姦まがいのことをした記憶を思い出しつつ、陽湖の頭を撫でた。涙ぐんだ陽湖が再び頭をさげてからシートに戻ると、鷹姫が問う。

「……あれほどのことを……こんなに、あつさり……許してしまわれるのですか？」

「鷹姫」

鮎美が唇を鷹姫の耳に接する。

「許すわけないやん。許したフリして地獄に叩き落としたるわ。うちの立場が危うくならんように工夫して、両親か本人に連帯保証債務でも負わすか、事故にみせかけて障害者にするか、とにかく、この世の地獄を見せたる。教義で自殺できんのやし、死んだ方がマシやっと思いを何年も何年もさせたるわ」

「……………」

「うちのこと軽蔑する？」

「いえ、当然だと思います」

鷹姫も強く恨んでいた。鮎美がタメ息をつく。

「はああ……何にしても、やっつと、ろくでもない修学旅行が終わって、関空に着いたら、すぐ東京で外務大臣か……気合い入れんとなあ……明日の卒業式は欠席やな。どう考えても大臣への親任式の方が優先やもん」

「そうですね」

「それにしても」

鮎美は、まだ少し痛い手首の拘束痕を撫でてつぶやく。

「中世の異端審問なんてアホなことやと思っただけど、それなりに政治的意味はあつたんやなあ」

「……………？ なぜ、そうお考えなのですか？」

「一部の逆らう人間を見せしめにすることで全体の規律を保てるやん。あんな拷問を受けるくらいなら、とりあえず従おう、地球が丸か

ろうが人と猿が親戚やろうが、どうでもええ、と」

「たしかに、一つの考えでまとめるには、異端審問は有効だったかもしれない。……私は……自分が、こんなに弱い人間だと思いませんでした……情けない……」

鷹姫が思い出して、目に涙を浮かべた。

「鷹姫……：気にせんとき。人は本来、弱いし、アホなもんよ。ちよつと流されたら全体の色が変わるくらい。行きの飛行機で国会議員のうちが奴隷みたいに扱われたんを見て、他の生徒はみんなビビって黄色になっていった。指導側も毎年数人やった新規の黄色が量産できたら欲が出て暴走する。半数が黄色を超えたら、もう全体が染まるまで簡単なもんや。それでも染まらん者には拷問。異端審問も、共産主義者を排除したレッドパージもいっしょやん。人間って進歩してないわあ。外務大臣になるうちをマザー陽湖が跪かせるなんて、カノッサの屈辱の繰り返しやん。世俗権力か教皇権力か、そんな争いを人間は、これからも、ずっとしていくんかなあ……：信仰の自由も、人権も、都合のええように使つていつて」

「……：人は道を踏み外すとき……：踏み外していることも、わからないでしょう」

「そやね……：鷹姫は、今は、もう冷静？」

「……：そのつもりです」

「ほな……：うちが同性愛者で居続けること、どう思う？」

「……：……：わかりません……」

「遠慮せんで、ええんよ。本当に思つてること、言うて」

「……：……：はい……：本当に、わかりません。……：たしかに、お母様やお父様のことを考えれば、単純な答えで親孝行な選択もあるかもしれませんが、本人の人生は本人のもので。本人が苦痛を感じる結婚生活が、親の望みとも思えません。……：そもそも同性愛は望んでなられたものではないですから……：ああ、やはり、わかりません。私は愚か者です。すみません」

「ううん、おおきに。さて、もう着陸やね。絶対に関空にはマスコミが山ほど来てるやろし、気持ち切り替えて頑張つていこか」

「はい、閣下」

「閣下で……たしかに、大臣閣下ではあるけど……」

「一度、言ってみたかったです」

鷹姫が微笑んだので鮎美も微笑み返し、二人が気持ちを切り替えていると、エアバスA321は関西国際空港への着陸段階に入った。それは3月11日14時46分のことだった。

2011年3月11日14時46分

2011年3月11日14時46分、鮎美たちを乗せたエアバスA321は関西国際空港へ着陸するため、減速し高度を下げていた。鮎美は窓側に座っている知念の方へ身を乗り出して窓から外を見る。

「大阪の街やあ……」

「なつかしいっすか」

「そら、育ったとこやもん」

どんどんと高度が下がると見える範囲も狭くなり、いよいよ海面が近い。

「ん？」

「どうしたっすか？」

「目の疲れかな……」

鮎美は地上の風景全体の像が二重に見えているような気がして目を擦ったけれど、それは治らない。街が二重三重に見え続ける。そして古そうなビルから崩れていくのを見て悟った。

「っ、地震や……」

「すげえ揺れてるっすね。自分らが飛んでるから地面が、どんだけ揺れてるか、わかる」

知念も地震だと判断したとき、減速し降下していたエアバスA321はグッと加速し、鮎美たちをシートに加速度で押しつけた。身を乗り出していた鮎美は知念の胸によりかかってしまい、支えてもらった。

「すみません」

「いえいえ」

「加速つてことは着陸、やり直しなんや。そら、そうかも」

「うお?! 連絡橋が落ちた!!」

知念が叫び、他の窓側に座っていた生徒たちも騒ぎ始める。関西国際空港と陸地をつなぐ連絡橋が崩落していく。街のビルも次々と倒

壊している。

「これ阪神大震災以上の被害なんちゃうの……」

「まだ揺れてるっすね」

「スマホの電源を切ってるから情報が入らへん」

鮎美は着陸のために電源を切つてあるスマートフォンを悔しそうに見る。電源が入っていて電波圏内であれば発生直後、もしくは揺れが震源から伝わってくる前にも、そこその情報を得られたかもしれないのに、今は窓から見下ろしていることしかできない。着陸を取りやめた飛行機の高度はあがり、その分だけ広い範囲の街が見える。あまりの被害の甚大さに鮎美も知念も言葉がないし、通路側のシートに座っていた鷹姫も窓を覗いてきて驚く。

「これほど……街が……」

ビルも家も大半が倒壊し、海に近い埋め立て地区は液状化によつて沈んでいく。飛行機は右旋回し大阪市の上空を通る。鮎美が息を飲んだ。

「っ……ああ……USJが……天王寺区も……おばあちゃんの家あるのに……」

もうシートベルトを外して知念の膝に乗るようにして窓に顔をつけ、なんとか遠い眼下に見える街の中から生國魂神社あたりにある祖母の家が無事か見つけようとするけれど、小さすぎて判別できないし、ほとんどの建物が倒壊しているので涙で視界が歪んだ。

「……おばあちゃん……っ……ううっ……」

生きていて欲しいけれど、生きていく気がしない。運良く地下鉄や頑丈な建物で買物でもしていてくれれば、と祈った。知念が支えるように鮎美の肩に触れ、鷹姫は鮎美の背中を撫でた。義隆がスマートフォンを手に叫ぶ。

「マグニチュード1.0以上って、なんだよこれ?!」

「あれって二桁ありえるの?!」

由香里もスマートフォンを手に叫んでいる。情報が欲しくてスマートフォンで電源を入れたようだった。もう飛行機は安定した旋回を続けているだけなので鮎美も電源を入れた。けれど、情報が入っ

てこない。高度が高すぎて電波が届かないのか、電波を発信する基地局そのものが倒壊したせいなのか、遅れて電源を入れた鮎美のスマートフォンには何の情報も入ってこない。

「ごめん、ちよつと見せてよ」

鮎美は叫んでいた義隆に画面を見せてもらう。

「……なんよこれ……震源地も一つやないの……東北が一番規模が大きいつて……東北から、大阪まで何百キロもあるのに……」

画面には複数の震源地が表示されていて、東北、東海道、近畿、九州などの沖合に×印がついていて、あまりの震源地の多さに誤送信か、センサー類の誤作動ではないかと思うほどだった。そして地震の規模を示すマグニチュードは9や8に並んで10もある。

「……もつと、情報を……再確認……あかん、このスマホも電波が入ってない」

見せてもらったスマートフォンも、すでに電波が入らなくなっていた。鮎美は叫ぶ。

「陽湖ちゃん!! 機長に高度をさげてもらえるか頼んでみて!! あと、スマホ使わせて!!」

「はいー」

まだ紫ローブでマントやティアラもつけている陽湖が内線電話で機長に頼んでくれたので、旋回高度が少しさがった。それでも電波は入らない。そして情報機器ではなく窓の外を見ていた泰治が叫んだ。

「あれ、何だよ?!」

鮎美たちも窓を見る。

「なっ……なんよ、あれ……っ……津波?」

大阪の街が黒い海に飲まれている。桜が叫んで泣き出した。

「お兄ちゃんの大学まで!! ウソつヤダよ!! うわああああん!」

建物の倒壊に巻き込まれていなければ生きているかもしれないという希望が絶望の海に飲まれていく。鮎美も祖母が生きている可能性はゼロに近いと再認識した。

「……この津波……どこまで……」

黒い海は、どんどんと拡がっている。大阪市全体、さらに守口市、門真市、八尾市まで飲まれていて、山でもない限り進み続けている。まだ黄色ローブを着ている博史が言う。

「ハルマゲドンだ！ 世界の終わりだ！」

「……………」

鮎美は手のひらに浮いていた汗を制服で拭いた。

「……………今、できることは……………」

浮き足立っていた気持ちを落ち着け、考えてみる。

「……………被害状況の把握……………それには首相官邸へ……………うちは外務大臣なんやから……………一秒でも早く……………関空は、もう……………陽湖ちゃん!! 機長に東京の方にある空港へ向かってもらえへん?! できれば羽田か、成田!!」

「言ってみます!!」

陽湖が機長に伝え、しばらくして機内アナウンスが英語で流れたけれど、地名にはコウチと入っていたように聴こえた。

「……………コウチ……………高知なんか……………」

鮎美へ鷹姫が言う。

「高知県には高知空港があつたはずです。関空から近いといえば、近いかもしれませんが……………その後の移動が大変です。今日中に東京へ着くのは難しくなるかと……………」

「うん……………大阪が、この状態やと新幹線も……………」

知念が言ってくる。

「大臣レベルになれば、自衛隊のヘリで移動ってこともあるっすよ。これだけの災害っすから」

「ヘリかあ……………ほな、空港にいる方がええかな……………ともかく着陸までは機長に任せるしかないし」

「けど、オレは高知へ遊びに行ったことあるっすけど、あそこ海の近くなんっすよね。空港も」

「大阪を襲った津波が、高知県にも行くやろか?」

「どうっすかねえ……………津波って、せいぜい2メートルくらいのものでイメージだったんっすけど……………マジでハルマゲドンかってくら

「大阪は沈んで……」

知念も青ざめた顔色をしている。ずっと黙っていた介式が言う。

「最寄り空港であれば、徳島、高松もある。伊丹がダメでも、鳥取や小松も。だが、これだけの災害で関空へ降りる便は、すべて振り替えられるだろう。各空港管制側の混乱も大きいはずだ。ここは専門家に任せて、我々は黙っているしか、あるまい」

「……そうですね」

鮎美は黙って窓の外を見た。淡路島が見える。淡路島の南部は海から、すぐに山という地形が多く、黒い海に襲われている部分は少なく見えるけれど、もともとの地形を知っているわけではないので、その下に漁師町があるのかもしれないと考えるとゾツとした。そして、鳴門海峡にかかる巨大な橋が黒い海に押し倒されるのを目にすると、お腹が冷えるような寒気がした。

「……あんな大きな橋が……」

鮎美は中学の頃に家族で徳島県へ、うどんを食べに来たことがあったけれど、やはり地形など覚えていない。徳島県に親戚がいる貴久がつぶやく。

「あのあたりに徳島空港があるはずなのに……見えない……吉野川も、わからない……眉山が半分まで沈んでやがる……ははは……いよハルマゲドンだな……ハレルヤってか……昭一……香奈ちゃん……叔父さんも、叔母さんも……死んだのかよ……チクシヨーっ!!」

貴久が拳から血が出るほど窓ガラスを殴った。しばらくして機長と会話した陽湖が説明にくる。

「高知空港だけが当初、受け入れ可能と返信をくれたそうです。ですが、今は連絡が取れず、どうなっているか不明。それでも他の空港からも着陸許可がもらえないので、とりあえず向かうそうです」

「そうなんや。……あ！　谷柿先生か、鳩山総理に連絡とれへん？」

「訊いてみます」

陽湖が内線電話で機長と話し、申し訳なさそうに帰ってくる。

「東京も相当に混乱しているようで、まったく連絡が取れないそうです」

「そっか、おおきに」

眼下に四国の山中が見えてきた。さすがに山中までは津波は押し寄せていないけれど、多くの箇所で崖崩れが起こっている。本来、緑に包まれていたはずの山のところどころに茶色い部分が拡がっていて、その下では川を堰き止めていたりする。

「……道路が寸断されて……輸送も……これを復旧する工事の予算、とんでもない額かも……そんなことより、それより人の命が……いたい、どれだけ……」

土佐中街道の曲がりくねった道路を観察しているうちに、高知市が見えてきたけれど、知念が驚く。

「高知市が、ほとんど全部、津波に沈んでる……」

「このへんが高知市やったんですか？」

知らない地形なので鮎美には、まったくわからない。知念が青ざめながら説明してくれる。

「あの山の中を通ってる高速道路の下が、高知市の中心で……全部、水没してる。高知城までも……城だから、そこそこ高い位置にあったのに……」

鷹姫も言う。

「高知は、もともと低地で洪水被害が多かったのです。それを嫌った山内一豊が縁起を担いで、河内だった地名を、高地と同じ発音の高知に変えたそうです」

「名前だけ変えても、結局は低地やったんでは……、空港は？」

「高知空港も海のそばだったすから、……たぶん、連絡が途絶えたのは管制塔ごと……」

着陸態勢に入らない飛行機は高知市上空で旋回を始めた。次の目的地を探している様子だった。約5分後に西の九州へと進路をとった。四万十川の源流となる山地も各所で崖崩れを起こしている。愛媛県山中に入っても状況は同じだった。

「これで東北の方が、よりひどいって情報がホンマやったら日本、終わってるやん」

すぐに九州の大分県が見えてきたけれど、やはり海岸線は水没しているし、低地の市街地が見えない。そして山地は土砂の性質なのか、崖崩れの範囲が四国より広くて数も多い、ひどいと山の半分が岩肌を晒していた。飛行機は熊本空港を目指していて、空港そばの上空で旋回を始めた。ときおり遠くの空に同じく旋回している飛行機が見える。

「着陸の順番待ちみたいっすね」

「ようやく降りられるんや……熊本で、えらい遠くまで」

鮎美は九州に来たことはなかった。知識も、ほとんどない。

「熊本城は無事っすかねえ」

「築城の名手と言われた加藤清正が築いた名城ですから、きっと無事だと思います」

鷹姫の希望的観測を確かめる前に飛行機が熊本を離れ始めた。

「どこいく気なんよ?」

鮎美の問いには機長から話を聞いた陽湖が答える。

「熊本空港に降りる予定でしたが、余震が発生し着陸中だった飛行機が横転、炎上したため、他の空港を探すとのことです。さしあたって鹿児島方面へ向かうようです」

「鹿児島で……陽湖ちゃん! 津波は太平洋側から来てる感じやん!

日本海側の空港を目指す方がええんちゃうの?!」

「それが、すでに日本海側の空港は受け入れが満杯みたいなんです。私たちの飛行機は大手の航空会社ではなく教団所属ですから一機のみ運営体制でやっていますから、後回しにされた感じで……すみません」

「後回しって……」

「月谷! 外務大臣となる芹沢先生が搭乗していると行って優先させなさい!」

「すでに、それも伝えたそうですが、空気がないと言われたそうです。残りの燃料が少ない飛行機が優先されるみたいで、私たちの飛行機に

は、まだ余裕があるそうです。それに熊本空港が使えなくなったことで、余計に空気が無くなり、他の空港でも事故があったそうです」

「……………」

鮎美も鷹姫も言葉が無くなり、機内に機長からのアナウンスが英語で流れる。鹿児島へ行つても着陸できそうになく、次に目指す地名として聞き取れたのはナハだった。

「ナハって…………どこやった？」

「沖縄つす」

沖縄出身の知念が言った。

「沖縄で、また遠すぎるとこへ…………まあ…………たしかに、そこまで行けば地震の影響もないかもしれないね」

「混乱している地域に降りるより、良いかもしれません」

目的地が決まり、そして眼下が黒い海でなく、平穏な青い海に変わったことで機内の雰囲気も少し落ち着いていた。九州から沖縄までの飛行中に日が暮れる。

「そろそろ沖縄のはずつす」

「あの光りなんか」

眼下に沖縄本島が入り、夜なので暗いけれど、電灯の明かりが見える。

「知念はん、停電してる地域はあるように見える？」

「うーん…………北部は山ばかりつすからね。暗いもんですよ。けど南部は、しっかり明かりも見えてますから、ぜんぜん大丈夫に見えるつす。たぶん、どこも停電してないつすよ」

「つてことはスマホも使えるかなあ」

鮎美の望みはかない、情報が入ってきた。

「やった、ちゃんと動いてくれる……………」

けれど、新着情報に目を通していくと鮎美たちはお腹が冷たくなるような寒気を覚えた。

「…………東京壊滅……………」

「…………23区、すべて…………水没したようです…………動画が拡散していて…………鮎美たちと同じく幸運にも飛行中だった者が撮った映像がネット

上に拡がっていて、東京が完全に飲み込まれる様子が目の当たりにできた。

「…………名古屋も…………大阪も…………太平洋側、壊滅って…………っ…………ハア…………」

鮎美は胸を手のひらで押さえて息をした。入ってきた情報を知れば知るほど、息苦しくなる。鷹姫も蒼白だった。

「仙台も…………東北から東京、名古屋、大阪にかけて襲ってきた津波の高さは200メートルを超えたそうです」

「二百で…………桁が二つほど、間違ってるんじゃないの…………。けど、守口市やら門真市まで達してたから…………そのくらいあった…………」

さらに鮎美へ英語圏の情報を調べていた泰治がスマートフォンを向けながら言ってくる。

「この地震、太平洋全体で起きてるぞ！ 日本、アラスカ、メキシコ、チリ、ソロモン！ ぐるっと太平洋プレート全体が動いたらしい！」

向けてくれた画面を鮎美が読む。地震観測と地震情報の拡散では日本が世界一だったけれど、あまりの被害で混乱し日本語情報よりもヨーロッパ経由の情報の方が、まとまっていた。

「…………日本のマグニチュードは10.3…………太平洋プレート全体では総マグニチュード11.1つて…………十一つて…………たしか、マグニチュードは二つ増えるとエネルギーは千倍やったから、マグニチュード9の千倍…………」

「芹沢先生、これを!!」

鷹姫が動画を見せてくれる。それは素人ユーチューバーが国会議事堂前を実況中継している動画で、今日は鳩山総理に在日韓国人からの献金問題で退陣を迫るデモ隊を撮影していたけれど、途中で地震に遭い、混乱しながらも撮影と発信を続け、最期は国会議事堂よりも高い津波が全体を飲み込む様子だった。

「……………翔子はん……………キョウちゃん……………雄琴はんも……………中にいたはず……………今日は本会議で……………地震発生は15時前……………総理も……………谷柿総裁も……………」

「大半の国会議員が……いえ……もしかしたら、……芹沢先生以外の……すべての国会議員が……」

急に飛行機が進路を変えた。それが加速度でわかるほどの急な操舵だった。

「那覇空港に降りるんちゃうの?」

鮎美が窓を見る前に知念が見ていた。

「津波が……沖繩にまで……」

沖繩本島に巨大な津波が押し寄せてきて、着陸するはずだった那覇空港を飲み込み、さらに市街地を蹂躪している。電灯の明かりが消えていき暗闇になる。飛行機が旋回を繰り返したおかげで、沖繩が消える様子を最初から最後まで鮎美たちは見た。

「……………」

「……………」

「……………ツアンマー……………死んじゅとお……………」

知念の悲痛な声でツアンマーという方言が、鮎美にも鷹姫にも母親を意味するのだと、なんとなくわかった。

「くそっ! ……沖繩に帰省するの、止めてれば……………くっ……………東京に居たって同じかよ……………チクシヨー!!」

知念が窓を叩いた。飛行機は旋回を続けている。

「……………うちの飛行機……………燃料……………大丈夫なんやろか……………」

「……………」

「ハルマゲドンだ! やっぱりハルマゲドンが来たんだ!!」

博史が叫んでいる。陽湖も叫ぶ。

「祈りましょう!! 神に!!」

陽湖が使徒信条と主の祈りを始めると、教師と黄色ローブの生徒たちも追従し、さらに機内の5割の生徒が同じく祈り始めた。泣きながら祈っている生徒も多い。けれど、鮎美は祈る気にも、泣く気にもなれなかった。祈るべき神は、ずっと鮎美のことを否定してきたし、泣いても解決しないことは多い。ハルマゲドンなどと言われると、ただ大きいだけの地震だ、今までの人生でも想定外のこととは、いくつもあつたし今回も、その一つにすぎない、と落ち着いて考える。

「知念はん、那覇空港から近い位置にある空港は？」

「ぐすつ……他の島の空港も、そんなに高い位置にないっすから、今頃は津波で……」

鼻を嚙った知念はまた窓の外を見た。まだ沖繩上空で旋回しているのだから沖繩本島が見える。

「っ！ 山の上に明かりが……ははは！ ちょっとは生き残ってるっすよ！」

車のヘッドライトや仮設照明器の明かりが山頂や山道に見える。逃げ延びた人数は少ない様子だった。

「ははは！ やったぜ！ 高さんと逃げよおたい！」

「よかったやん。津波の到達までに時間があったから、対処した人が多そうで」

全滅ではないというのは大きな希望だった。けれど、飛行機は行くあてなく旋回を続けている。鷹姫が思いついた。

「琵琶湖に着水するというのは不可能でしょうか？」

「どやろ……」

「琵琶湖っすか。たしかに海より凧いでるっすけど、至難の業らしいっすよ。あと運と」

「運なら、この飛行機は抜群やで。関空でも那覇空港でも、あと少し早く着陸してたら、やばかったもん。ついでに言うなら中国で、ちよっかい出して来よったへーホーとかいう奴がおらんかったら、ちよい遅れることもなく関空に着いた直後に地震やったやろし。あいつに感謝しとくわ」

「芹沢先生の強運はあてにできます」

「アユミン……これ……」

一人にしておくのが不安だった鐘留を前席に座らせていた。その鐘留が怯えた声で言い、自分のスマートフォンにある画像を見せてきた。それは航空機事故の記事を事前に静止画で撮ったもので、ネット環境が無くても見られた。

「この飛行機、2002年に事故に遭ってるかもしれないの。それで全日空が2006年に中古で売却してる。ちようど、教団がA321

を使い始めたのと、同じ時期に……これ事故機なんだよ。後部を損傷してる。一機100億円以上するけど、それは新品の話で中古のワケありだったら、きつと格安だったんだよ……もう、みんな死んじやうかも……ぐすつ……」

「カネちゃん……このタイミングで……全日空391便函館空港着陸失敗事故……」

鮎美は記事を読んでみた。

「うくん……むしろ、やっぱり幸運機やと思えば？　この事故、全員が生存してるやん」

「そうです！　不吉なことを言うのはやめなさい！　何度も苦難を乗り越えた雪風の例もあります！」

「ユキカゼ？　鷹姫、それも戦国武将なん？」

「いえ、大戦中の駆逐艦です。16回以上の大きな作戦に参加し、あの大和の最期にも随伴しながら、大きな損傷無く生き残った奇跡の幸運艦として有名ですから」

「敗戦国側で、それはすごいなあ……最期は、どうなったん？」

「……無事に終戦を迎えたのですが、賠償艦として中華民国、いわゆる台湾へ引き渡され、丹陽と改名、しばらくは中華民国海軍の主力艦として活躍したのですが、1971年に解体されました。畑母神先生からうかがったのですが、解体前に日本へ返してもらおう交渉も旧日本海軍の交友会である海友会が行ったそうですが、かなわなかったのとです。とても残念です」

「とはいえもう71年、戦後26年も形を保ってたんやと思えば、すごいやん」

「たしかに長門に比べれば……」

「ナガトつて？」

「かつて大和が国民に秘匿されていたとき、連合艦隊の旗艦として長く海軍の象徴になっていた戦艦です。終戦まで温存されたのですが、アメリカ軍に接收され1946年にビキニ環礁で行われた原爆実験の目標艦とされ、二度の核攻撃で水没しました」

「取り上げて実験で使い捨てとは……ホンマ、ろくなことしよらんな、

アメリカ。そら9・11も起こるちゅーねん。うちらに知らされてへんだけでイスラム圏でも、さんざんなことしとるやろ、どうせ」

「アユミン、この飛行機と同じパターンで墜落した事故があるの」

「……あんまり聞きたくないけど、どんな？」

「日航ジャンボ機墜落事故、同じように着陸での失敗でお尻を擦った後、何年かして不具合が出て、山の中に墜落、500人以上が死んだの」

「…………。聞くんやなかった。だいたい、カネちゃんは、なんで、そんな情報をもってるの？ ずっとネット遮断されてるのに」

「出発前に、なんとなく調べておいたんだよ。いくら宗教団体がお金あるっていつても、こんな飛行機が買えるなんて、どうしたのかなって……きつと事故機の中古だから超格安だったんだよ。全日空は日航みたいな事故になったら嫌だし、売っちゃえって考えたのかも。アタシもフェアレディZを事故ったから売ったもん。縁起悪いし」

「あんたは調子に乗ってドリフト試してケツ擦っただけやん。それで、また新車を買うとかありえんよ」

「今度は、みんなで乗れるエステイマにしたよ。選挙応援でも使えるよ」

「そっか。おおきにな、よしよし」

鮎美は鐘留の頭を撫でた。ようやく立ち直ってくれつつあるようで少しは会話が成立した。あいかわらず場の話題としては最悪のチョイスをしてくれるけれど、そこは目をつぶって優しく撫でていとキスしたくなる。それで詩織のことを思い出して胸に痛みを覚えた。東京の状態を考えると、生存の可能性は低い。なにかの幸運で地上200メートル以上の高層ビルにでもいてくれたなら生きていくれるかもしれないけれど、高層ビルでさえ多くが津波で薙ぎ倒されている。鮎美はネックレスチェーンで胸に吊っている潰れた指輪を手で押さえた。知念が沖縄本島が見えなくなったので言う。

「旋回をやめた……行き先が決まったみたいっす」

機長がアナウンスして行き先を告げると、介式が立ち上がった。

「介式はん、どうしたんですか？」

「少し機長と話をしてくる」

「ほな、うちも」

「いや、芹沢大臣は座っていてほしい。あまり多くが動いては生徒たちが動揺するだろう。落ち着いていてくれ」

「わかりました」

鮎美を置いて介式は前部に行くと、祈っている陽湖に声をかける。

「機長と話がしたい」

「わかりました」

「私は英語が苦手だ。通訳も頼めるか？」

「はい」

陽湖の通訳で内線電話を通じて機長と介式が会話する。

「私は芹沢大臣の警護責任者、日本警察の介式いつか警部だ。行き先について変更を願いたい」

「変更はできません。すでに燃料に余裕がない」

「だが、台中空港は国外だ。せめて日本国内の空港に降りてくれ。九州まで戻れないか？」

「九州と台湾では台湾が近いのです。それに台中空港は標高202メートル、太平洋に面していない台湾西側です。多くの空港が海沿いにあつて水没する中、もはや台中空港が唯一の選択肢です」

「……………そうか……………。台湾側に芹沢大臣が乗っていることを伝えたか？」

「いえ、まだ。どこの空港管制も忙しく長話の余裕はありません。大臣の件より、燃料が無いことで優先されましたから」

「そのまま言わずにおいてくれ。絶対にだ」

「わかりました」

機長との内線電話が終わると、介式が陽湖に言う。

「君は宗教指導者という立場であるが、秘書補佐という立場でもあるな？」

「…はい」

「では、今の件は守秘義務として、誰にも言うな。芹沢大臣にもだ」

「……わかりました……でも、どうしてですか？」

「また臨検などされたいか？」

「……」

「願わくば、中華民国の諜報機関が嗅ぎつけていないことを、無事の着陸とともに祈っておいてくれ」

「……中華民国……台湾……」

「あと、ハルマゲドンなどと騒がせるな。パニックになれば收拾がつかなくなるぞ。そのときは実力をもって芹沢大臣を警護する」

「……シスター鮎美、一人を優先するつもりなのですね……」

「それが私の任務だ。学校教師ではない」

「わかりました。他に気をつけるべき点や、しておくべきことはありますか？」

「できれば生徒たちに食事をとらせ、祈るのもいいが、仮眠させておくことだ。もつとも那覇から台湾までは40分ほど、この状況で眠れる者はいないだろうが」

「最期のパンがあります」

「……最期の晩餐などと言い出すなよ」

「しっかりと注意した介式は後部へ戻ろうとしたけれど、振り返って陽湖を見る。

「……」

「まだ何かありますか？」

「君は……」

「珍しく介式は言い淀み、迷ったけれど言う。」

「君は、いよいよのとき、芹沢大臣の身代わりになる気はあるか？」

「……身代わり……」

「これまでも顔立ちが似ていることで、鷹姫から影武者になどと言われたけれど、介式の問い方は、より深刻な気配がして陽湖は即答できなかった。

「考えておいてくれ」

「そう言った介式は後部に戻ると、通路から窓際にいる知念に声をかける。」

「知念、私の腰を揉んでくれ。長く座っていてダルくなった」

「え……警部の……」

「介式師範、私がお揉みします」

「いや、知念がいい」

「そうですか……」

役に立てないことを鷹姫が悲しそうにすると、介式はポニーテールを撫でた。

「宮本くんは疲れているだろう。できれば眠れ。顔色がよくないぞ」

「……はい、……お心遣い、ありがとうございます……」

「知念、こっちに来い」

そう言つて介式は後部のトイレに知念を入れ、自分も個室に入る。航空機の狭いトイレなので密着しそうになった。

「知念は座れ」

「は、……はい……。こ、こんな場所で、介式警部の腰を……」

「いや、あれは方便だ。秘密の話がある」

「そ、そうつすよね。はああ……ビビった」

「私が合図したら、芹沢大臣を落とせ」

「え？ 彼女はガチレズつすよ？ オレには紀子がいるし……オレに彼女が触ってくるのは完全に犬あつかいで、その気が無いから……」

「バカか、貴様は。絞め落とせという意味だ」

「ああ、その落とすつすか。って、警護対象を絞めて、どうするつすか?!」

「不測の事態のおり、本人が騒がない方がよいからだ」

「不測の事態って?」

「お前は顔に出るから、知らずにおけ」

「そうつすね……わかりました」

密談が終わつて知念と介式が、それぞれのシートに戻ると前部で陽湖がマイクで全体に語り始める。

「大変な地震が起こり、とても不安なときですが、落ち着いて過ごしましょう。これから望まれる人には聖餐を施します。また、望まれない

人にもパンと蜜を配ります。落ち着いて食べてください」

それを聴いて泰治が言う。

「フリー聖餐にするのか……まあ、形だけは全員、洗礼を受けてるけど……」

「フリー青酸つて、なんよ？」

「今ビミヨーに変な発音にしたね。ああ、芹沢さんは会議室に閉じこめられてたから一度も聖餐を経験してないか。プロテスタントでもやってる定例の儀式だよ。礼拝時に洗礼を受けている人にパンと葡萄酒を与えるのが正なんだけど、最近は飲酒運転のこともあるからボクが行ってる教会だと葡萄酒の代わりにファンタグレープだったりする。未成年飲酒も問題だし。で、その儀式で洗礼を受けてない礼拝参加者にもパンと葡萄酒を与えるのがフリー聖餐って言われて、問題になってる。それで揉めて日本キリスト教団から破門された牧師もいるし」

「どこの教団も、いろいろあるんやね。政党でもいろいろあるみたい」

泰治と鮎美が話しているうちに陽湖は教師や望む生徒には儀式としてパンと蜜を与え、望まなかった生徒には単なる給食としてパンを配り、蜜をかけるかはその生徒に訊いてから手ずからかけている。あまり気乗りしない女子生徒も3月9日から、ろくに食事をとっていないので蜜を求めた。由香里がパンに蜜をかけてもらいながら陽湖を睨んで言う。

「あんた、これをする前に、ちゃんと手を洗ったんでしょね？」

「はい、きちんと洗いました。ごめんなさい、スプーンなどは積んでいないのです」

陽湖は半日ほど前に、うっかり自分の大便を触ったことは、永遠の楽園まで黙っておこうと誓いつつ、上手に蜜をかけていく。ハチミツとコンデンスミルク、オリーブオイルという高カロリーな物は空腹時には貴重だった。順番に配っていき泰治にもパンを渡した。

「蜜をかけますか？」

「いや、いい」

泰治は陽湖の手から蜜をもらうのを辞退した。次に鐘留へもパンを配る。

「蜜をかけますか？」

「……う〜……お腹空いたよお……もつと、いいものないの？」

「ごめんなさい。これしかありません」

「ぐすつ……お腹が空いて泣きそう……はああ……蜜かけて、たっぷり」

陽湖は泰治の分も鐘留にかけた。最後尾の鷹姫に問う。

「蜜をかけますか？」

「………。……いただきます。……いえ、要りません」

かなり迷っている。

「きちんと手は洗っていますから、どうぞ」

「………。……いえ、……要りません」

結局は嫌悪感が食欲に勝った。最後になった鮎美に問う。

「蜜をかけますか？」

「う〜ん……まあ、腹が減っては戦ができんやしね。かけて」

もう宗教に付き合わされるのは懲り懲りだったけれど、そこに宗教的意味を見出さないと、単なる食品であり、陽湖が握ってくれたオニギリと似たような物だと思っただけ。配り終えた陽湖は額のティアラがさがってきたので、蜜がついていない方の手でティアラを押しあげた。

「ひッ……」

鷹姫が短く息を飲み、ビクリとしてパンを落とす。まるでイジメられている生徒がイジメてくる生徒を恐れて、ただ頭を掻いただけなのにビクリと防御するように身震いして、陽湖も鮎美もキョトンとして鷹姫を見る。

「……つ……ハア……ハア……」

「鷹姫、どうしたん？」

鮎美は落ちたパンを拾おうとして、鷹姫が両膝も震わせていて、その膝の間が小水で濡れてきていることに気づいた。

「……鷹姫……」

陽湖も気づいた。

「…………え？ ……おもしろし？」

「っ…………」

鷹姫も自分が漏らしたことに気づいていなくて、またビクリとする。手も震えていて、顔が青い。その青かった顔が自分の失禁に気づいたことで今度は赤くなる。赤くなって涙を零した。そして隠すように膝を閉じて顔を伏せた。

「…なんでも……………ないですっ……………う、……………う…」

「鷹姫……………陽湖ちゃん、鷹姫に何をしたんよ？」

「な…何もしてませんよ！」

「なんでも……………ないですから……………騒がないでください……………うう…人に気づかれたくない…」

「……………」

周りの生徒に知られたくないという気持ちはよくわかるので、鮎美と陽湖は目配せすると、陽湖は中央部まで進み生徒の注意を自分に集める。

「食べ終えた人から、目を閉じてください。お祈りされる人は祈りを、お休みになれるなら、どうぞお休みください」

陽湖が話しているうちに鮎美は鷹姫をトイレへ立たせる。そばにいる知念や介式は気づいていないのか、気づいていて気づかぬフリをしてくれているのか、ともかく鮎美が鷹姫の背後に立って、濡らしてしまったスカートを見られないように後部のトイレに入った。幸いにして最後尾なのでトイレは至近で、心配なので狭い個室に二人で入った。

「鷹姫、気にせんとき。陽湖ちゃんにオシッコ責めされた後やし尿道が調子悪いんやろ、こまめにトイレ行けば、すぐ治るよ」

「……………う……………」

「スカート、交換してあげよ」

「っ、い、いえ！ そんなことはできません！」

「遠慮せんでええから」

鮎美はスカートと下着も脱いだ。

「ほら、いつまでも、うちを脱がせたままにせんと、鷹姫のスカートを貸してよ」

「……私は……自分が情けないです……芹沢先生の上着まで汚したのに……」

「あれは、どう考えても陽湖ちゃんが悪いし、いつか復讐するから待ってて。手っ取り早いのは柔道か剣道を教えるって口実で道場に連れ込んで二人してボコボコにするとかやね。道場は刑法の治外法権やし。首の骨でも折って一生寝たきり生活にさせても刑事的には責任軽いし。とはいっても、陽湖ちゃんをオシッコ趣味に目覚めさせた責任は、うちにあるから、それを控除したら、やっぱりボコボコくらいかな」

陽湖による責めから解放された直後は復讐心に満ちていた鮎美だったけれど、時間が経ったことと地上で起きた大災害のおかげで、かなり怒りは忘れつつあった。

「まあ、この状況で道場に連れ込むのは何年も先になるかもしれないけど、うちの島は震源地の情報が確かなら、そう被害は大きくないやろ。ぐるつと山に囲まれた県で淀川しか津波が侵入するところはないし」

「……情けない……なんて……情けない……」

鷹姫が嘆き続けている。

「鷹姫、そんなに落ち込まんときよ」

「……私は……自分では強いつもりでいたのに……あんな……月谷に……怯えて……」

「……鷹姫……」

うちが会議室で責められてる間、鷹姫も手足の自由無しで、よっぱどひどいことされたんかも、本人に訊くと思いきや出させるし、由香里はんにでも訊いてみよ、と鮎美は泣いている鷹姫のスカートを脱がせて自分が穿き、濡れているところをトイレットペーパーで拭いてから、鷹姫には個室で待っているよう伝えて、由香里の席まで行くと訊いてみた。

「うちが会議室にいる間、鷹姫って陽湖ちゃんから、どんなことされて

たん？」

「うくん……ごめん、私も参加したから言いにくいんだけど、けつこ
う、ひどかったよ」

「由香里はん、うちを罵りにも来たやん。どうせ、陽湖ちゃんに女性を
嫌って男性を好きになるよう仕向ける作戦とか言われたんちゃう？」

「あ、うん、よくわかるね」

「同性愛を知らん人間の考えそんなことやもん」

「それがわかってるとしても、芹沢さんは、よくケロっと、あのクソマ
ザーと平気で話せるよね。私だったらフルボッコにして死ぬほどア
ダムの槍で刺してやるよ。ケツとマンコがつながるくらい」

「あははは……まあ、そのうちボロボコにはするよ。今はこんな事態や
し、後回しということだ」

先に陽湖へ暴力をふるったのは島の山中で自分がしたことなので、
それも控除しなければ、と思いつつ知るべきことを問い、由香里から
鷹姫が受けた仕打ちを聞いた。それを聞くうちに、再び陽湖への復讐
心が燃え上がる。由香里も思い出さたく無さそうに語る。

「もう最後の方は、めっちゃめっちゃひどかったよ。お尻だけじゃなくて
顔までパンパン叩きだしてさ。はじめのうちは宮本さんも睨み返す
気があつたけど、オシッコ漏らしてからは急に精神的な限界が来た
みたいでワンワン泣き出したし。あの人、プライド高そうじゃん。そ
のプライドを狙ってズタズタにした感じ。しかも亡くなった母親の
ことまで引き合いに出してさ。人のトラウマを抉って、もう聞いてら
れないくらい、ひどいこと言ってたよ。どっちの中に悪魔がいるん
だ、って思ってたくらい。おかげで宮本さん、完全にビクついて、子供
か赤ちゃんみたいに泣いてさ、同性愛を否定します、って意見に変
わっちゃやし。あれを見てて月谷みたいな腕力に頼らないで人の心
を操作するヤツが一番怖いって思ったわあ。最終的には宮本さん
バージンっぽいのにアダムの槍を受けるのにまで頷いてたし。あそ
こで芹沢さんが止めなかったらマジ今頃はヤバかった。みんなでハ
ルマゲドンだあ、って絶叫してたよ。ま、今も一部のヤツらは、そう

だけど」

「……鷹姫……そこまで、ひどいことされて……うちは、自分のことばっかりで……」

鮎美は心配になってトイレに戻った。思った通り鷹姫は便座に座って、うなだれたまま啜り泣いていた。言葉が無くて鮎美は泣いている肩を抱いた。鷹姫は泣きやめない自分へ自己嫌悪を覚えているようで、できるだけ声をあげないように、泣かないようにしているのが余計に痛々しい。

「鷹姫……泣きたいだけ、泣きいよ。すごい嫌なこと、されてんのやし。それで泣くのは弱いことやないよ」

「……うう……う……」

「鷹姫が傷ついてること、うちにも話してよ。どんなことが苦しいの？」

「……うう……」

しばらく鷹姫は迷ったけれど、鮎美が優しく問いかけたので、泣きながら話してくれた。それは陽湖が邪推した通り、亡くなった母親の妊娠中に何度か鷹姫がおもらしをしたという幼児にありがちことから始まり、亡くなった直後はシヨックで記憶が残っていないけれど、より回数が増えてしまい、頻繁に衣服を濡らすようになったものの、島の大人はもちろん周りの子供も、母親と生まれるはずだった下の子を同時に亡くした鷹姫がおもらしを繰り返すのは淋しいからだと察して、誰もからかったりしなかったもので、そのうちには治ったけれど、父親が再婚したタイミングで、また再発して漏らすようになり、もう小学校も大きい時期になっていた。それでも鷹姫が武道場の子で強かったことと、島の同級生たちも事情を知っていて優しくしたこと、からかわれることは無く、むしろ場の空気を読むのが苦手な鷹姫は学校で女子と男子が対立していたり、学校のガラスを割った児童が名乗り出ずに学級会が困った雰囲気になったときなどに漏らしたりし、鷹姫のおもらしがキツカケで対立が終わったり、ガラスを割った児童が名乗り出たりしたので無意識に問題の解決のために漏らすことまであった。それが終わったのは五年生の湖上学習船うみのこに

他の小学校の児童たちも合わせて参加したときだった。島の小学校は人数が少ないので他校生と合わせての日程となり、よくあることに島の児童を他校生が貧乏、魚臭い、等と言ったりして対立することになり、その場で鷹姫は癖になっていたおもしろしをした。それで解決に向かうと思っていたのに、むしろ事態は悪化し、他校生は鷹姫をバカにしてきて、島の同級生は守ってくれ、口論が乱闘に変わると、鷹姫も参戦して人数の多かった他校生たちを相手に圧勝した。けれども、勝った後に島へ帰ってから同級生の女子たちに、おもしろしが本当はとも恥ずかしいことで今までからかわなかつたので気づかなかつたかもしれないけれど、もうしてはいけない、お母さんが亡くなったことは可哀想だけれど、おもしろしを繰り返していると亡くなったお母さんも悲しむよ、と諭され、二度としないと島の大山の登り口にある墓前に誓ったのに、陽湖によって何度も繰り返しおもしろさせられたのだった。そして、さきほどのおもしろしは我慢していたわけでもないのに、陽湖が手をあげた瞬間、叩かれるイメージがして身体が震え、気がついたら漏らしていたと告白すると鷹姫は大粒の涙を零した。

「……ううっ……情けない……恥ずかしい……」

「鷹姫……」

「私が4つも年下の健一郎さんと許嫁になったのも……おもしろしするような娘では、嫁のもらい手が無いかもしれないと父が……島の風習では近い年齢の男女を縁組みさせるのに……私が小学五年生だったとき、まだ一年生で何も知らなかつた健一郎さんにしてもらったのです……年上や同級生、三つ下くらいの子まで、みな、私の恥を恥とも知らぬ姿を知っていましたから……」

「そっやったんや」

高校3年生と中学2年生という、やや無理のある縁組みの理由がわかると、おもしろしを極度に気にしている理由ともつながった。どう慰めようか、鮎美は考え込み、思いつかなかつたけれど、ともかくはトイレを二人で出て、シートに戻った。沖縄と台湾は近いので、もう着陸態勢に入っている。機長のアナウンスを聞いて全員が緊張した。

「燃料ギリギリ……一発勝負なんや……」

アナウンスにより燃料がゼロに近く、着陸のやり直しはできないので、たとえ横風に煽られて姿勢が崩れても、そのまま着陸するのでシートベルトを確実に締め、鋭利な物や眼鏡、ハイヒールなどは身から遠ざけ、身構えていてほしいと伝えられた。

「主よ！ 我らを見守りください！」

陽湖が祈り始めると6割の生徒が続いて、主の祈りを捧げる。

「ママっ、パパっ、お願い、お願い！」

鐘留は両親へ祈りを捧げた。

「……お母様……」

鷹姫は母親だった。

「……」

鮎美は玄次郎のふざけたときの笑顔を思い出して祈る気がなくなつた。

「なんとかなる。ならんときより、なつたときのこと考えよ」

そう言つて鷹姫の手を握つた。

キュッ！

台湾の地にA321が接し、着陸は無事に終わった。

2011年3月11日 夏子 石永 畑母神

2011年3月11日正午過ぎ、夏子は京都市中京区丸太町にある京都地方裁判所の地下一階食堂で20歳前後の若者たち5人と、その親数名、そして弁護士3人と安価な定食を食べながら、話し合っていた。

「加賀田知事、やっぱりボクらのお金は返ってこないんでしょうか」

問いかけた青年は京都衛生専門学校の元学生だったけれど、学校そのものが2009年4月に39億円の負債を抱え、学校の土地建物が強制執行によって差し押さえられたため、授業を受けることができず、授業料や入学金の返還を求めている。他の若者たちも同様で、とくに入学を予定していた者は入学金を含めて150万円前後の支払いをしたのに一度も授業を受けることができず2年が過ぎているし、お金は返ってこないのに奨学金や奨学ローンは返済せねばならず社会問題になっている。その問題に夏子は大学時代の恩師であった法学教授との人間関係と、立候補予定だった県の若者も被害者の中にく、当初から関わっていたので県知事となった今も時間を割いている。今日は午前中から被告証人尋問で、それを傍聴した後の昼食時間だった。

「学校に、どれだけ財産が残っているかによりますよ」

「京都府の学校教育課の責任は追及できないんすかね？」

「行政は許認可しているだけで、経営の中身まで保証しているわけではないですから難しいでしょうね。吉田先生」

夏子は弁護士に話を振った。弁護士も手弁当で参加している。

「うん。提訴時にも説明したけれど、京都府を被告に加えるのはしてないからね」

「加賀田知事が仲いい、あの芹沢議員が出版社も印刷所も全部を被告にするみたいな手法はダメなんすか？」

「あれはねえ……かなり、きわどいというか、無茶というか、道義的にはセクハラ写真を頒布した作業過程に加わっているから、請求したく

なる気持ちもわかるけれど、普通の法感覚ではやらない。ちよつと法律をかじった女子高生が考えそうなことだよ。けど、加賀田知事も原告に入られているのでしたね？」

「私は10万円だけ請求してみています。お金の問題というよりは、腹が立つというのが正直なところかな。私が選挙活動中に鼻かんでるときの変な顔を撮って出版されたから」

どんな美人でも瞬間的には不細工な顔になるのを撮られてゴシツプ誌に載せられていたので夏子の怒りも強い。嫌がらせ的な言論の自由行使に対して、嫌がらせ的な訴訟をしている気分だった。

「その雑誌の編集者、行方不明になってるらしいっすね。熱烈な芹沢鮎美ファンにポアされたって噂あるけど」

「君たちの世代でもポアって言葉、使うのね。私が女子高生だった頃の事件だよ、オウムは」

「オレ、もっと頭がよかったら宇宙開発やってるジャクサに入ってたんすよ。オウムの上祐も一時期、その前身組織に所属してたらしいけど」

「彼は早稲田卒じゃなかったかな。ああ言えばジョウユウ、いまだに忘れないわ。オウムの残りも、うちの県にもいて対応に困ってるのよ。紫香楽村あたりについて追い出してくれて住民から陳情があるけど、具体的に悪いことしてるわけじゃないから、なかなかね」

「紫香楽村って昔、都があったらしいっすね。なんで、あんな山ん中に都を造ったんすかね。その京都御所でいいのに」

青年が北を指した。ちようど裁判所の前が京都御所で、道路の向かいにある。

「そうね、740年の藤原広嗣の乱に聖武天皇が衝撃を受けたからって説と、一説では当時、勢いのあった中国王朝の唐が西域諸国や朝鮮まで版図を広げていたから、もしや日本まで攻めてくるのでは、という恐れもあり移したのかもしれないって大学の歴史学の教授が言ってたなあ」

「それビビり過ぎじゃないっすかね」

「それから数百年して元寇があったよね。幸い九州で止めたけど、危

機管理としては正解といえ、正解よ。危機管理はね、過剰なくらいで、ちょうどいいの。なのに、過剰反応だって言われる。まあ、すべてのリスクに完全に備えるのは無理なだけだよ」

夏子は食べ終えたので席を立った。午後からも証人尋問があるけれど、他に用件もあるので若者たちに謝ってから別れる。地下一階からエレベーターで地上一階へあがると裁判所の駐車場に駐めてある公用車で仕事をしている秘書に言う。

「石永先生と会う約束してるから、京都御所をブラブラしてるね」

「はい。京都衛生専門学校の裁判は、どうですか？」

「勝つには勝つでしょ。問題は、お金が残って無きそうなことね」

「そうですか、学生たちが気の毒です…」

「うん。私の選挙応援もしてくれて50票くらいにはつながってそうだから、その義理は果たさないとねえ……けど、他の仕事も忙しいし、被害者の会とはいっても水俣病みたいに、深刻な生き死にが関わってるわけじゃなくて、一人50万から150万円の訴訟だし、そろそろ社会も忘れてきてるね。今日、証人尋問なのにマスコミも来てないし。とりあえず石永先生と密談してくるわ」

そう言った夏子は道路を渡って京都御所に入る。御所の南側は公園のように出入りが自由で平日昼なので、人が少ない。庭園になってるものの、観光客が来るほどの人気スポットではないし、かなり広い。夏子の胸ポケットに入っているプライベート用のスマートフォンが振動した。

「また会いたい。って言われてもエッチ目的かあ」

仲良くなつたIMFのドミニクから私的なメールが来ていた。

「一回限りの、いい思い出しようよ。不倫とか、ヤダし」

連合インフレ税での協力関係があるので、当たり障りのない返事をしておく。返信した頃、約束していた13時30分になって石永が静江と現れた。

「二人きりじゃないのね」

「変に写真を撮られても、うざいからな。静江がいれば、仕事っぽいだろ」

「実際、仕事だしね」

石永と夏子は今日にも外務大臣となる鮎美が内閣に入った後の自民党と民主党の県内での協力関係を模索するため会っていた。わずか一人とはいえ大臣が自民党から入り、連立内閣となるので地方行政に与える影響もあり、その事前調整だった。場所を京都にしたのは夏子の都合と、県内で二人が会うのは目立つからで、その狙い通り、通りかかる京都市民は、二人の顔を見ても反応しない。長く話し込み、落着点が見えてきた。

「じゃあ、凍結した新幹線新駅は工事費を半額になるよう見直すってことで再開を視野に」

「どうせ、無理でジワジワ上がるでしょうけど、当初の予算よりは押さえてよね」

「ホームと改札だけの、しよぼい設計にすれば、なんとかなるだろ。それで三上市民が納得すればの話だが、とりあえず造って何十年か後に、建て直す手もある」

「その頃にはリニアも動いてるから、黒字化は難しいよ」

「リニアは、うちの県を通りそうにないからなあ」

「ギリギリ県南部をかすめるんじゃない？」

「ギリギリな。あんなところに駅をつくっても、しようがない。長野県や山梨県も、しよぼい駅になりそうで怒ってる」

「県最南部って、私は開発のねらい目だと思うなあ。京都府と三重県とも接するあたり」

「紫香楽？ あんなところか？ バブルの頃、ゴルフ場を造りまくったけど」

「あそこにはリニアが通るでしょ。山の中とか、大深度地下に。その上を空港にするの。山を潰して」

「空港に？」

「そう。海外からも人が来る国際的なハブ空港に。で、飛行機から降りたら、すぐに地下のリニアに乗れる。大阪、名古屋まで15分、東京にも70分。車でのアクセスもいいよ。第二名神ができる予定だし、名神高速道路にも遠くない。名神で東西、北の北陸自動車道にも

行きやすいし、京名和自動車道で南へも」

「なるほど、リニアと空路の接続かあ。日本は空港と他の交通インフラの接続が悪いからなあ……狭い国土のくせに」

「狭い国土だから、接続が悪くても、なんとか移動できちゃうのよ」

「だな。それぞれの利権もあるし。たしかに県南部にリニアと接続できる空港ができるのは、日本全体のためになるだろう。ストロー効果で地元が潤いそうにないのと、あの山地を開発する自然環境破壊を無視すれば」

「絶対、誰か反対するよね」

「それが民主主義なんだから。できれば、強権的に、だーっと大きな空港を造りたいな。横風対策のV字滑走路のある」

「大きなダムも造りたい？」

「ダムは全面中止なんだろう。知事選の公約通りに。その方向で調整する。けど、もしも何十年に一度の大雨が降れば、下流域で死者が出るかもしれないぞ。それは今年かもしれない」

「すべてのリスクに備える予算は無いし、費用対効果もあるよ。けど、それが起こったときは、私が、その人たちを殺したのね」

「予算を浮かせたことは評価されず、恨まれるだけ。損な役回りだな」

二人の話を黙って聴いているだけの静江は自動販売機を探して缶コーヒーを3本買って二人に渡した。礼を言って、それを飲んだ夏子が空を見上げた。よく晴れている。

「それが政治家かあ……なってみただけど、大変。でも、予算が浮くならともかく、借金するつもりだったから止めないと」

「今度は借金して空港でも計画しようか？ あの山の中に」

「土地の買収に困って海の中に造るよりいいよ。関空なんか、大きめの津波が来たら一発アウトだよ」

「紀伊水道の奥だから大丈夫だろ。そんなに大きなのは、こないさ」

「そんなこと言っていると、そろそろ大きな地震、来るよ。阪神淡路から、だいぶ経つし」

「そうだな。それは、そろそろだなあ。うちの県に関係ないといいな」

「よそごとで済んでくれれば…、っ?! っ、言ってるそばから来るし!!」

三人がもっているスマートフォンがJアラートの警告音を響かせてきた。三人とも仕事用とプライベート用をもっているので6台の大合唱になる。

「地震か、ミサイルか? 地震だな」

「地震ね」

「お兄ちゃん、どこかに逃げる?」

「うくん……」

石永は周りを見る。広い庭園で石畳の上、周りには何も無い。上を見ると空だった。

「ミサイルだったら、急いで地下にでも逃げるところだけど、地震なら、ここにるのがベストだろう」

「そうね。加賀田知事は、どうされますか?」

「私も、ここで…っ! 来た!」

「デカイぞ! 静江、伏せろ!」

大きな揺れを感じて石永は他人でしかない夏子より妹を守るために、静江を抱く。揺れは大きく、まるで反復横跳びを強引に繰り返させられるような揺れから始まり、もう立っていられないほどになった。三人とも地面に伏せる。その地面が激しく揺れているので、石畳で手や膝を擦り剥く。

「震度5か、6だな。くっ…」

「っ…お兄ちゃん…」

石永と静江は阪神淡路大震災で震度4を経験していたけれど、明らかに今回は、それを超えている。立ってられない揺れを経験して、静江は本能的な恐怖から兄に強く抱きついた。石永は冷静に再び上を見る。広い庭園にいて、上は空のみ。落ちてくる可能性がある物は幸いにして無い。石永は地面を背にして妹を胸の上に抱き上げると、両脚を開いて揺れに耐える。

「お兄ちゃん……」

「揺れが長い……まだ、続くのか……」

背中が痛いけれど、平気そうに言った。

「やっとな、おさまったか」

「ありがとう、お兄ちゃん」

「静江、怪我は無いか？」

「うん、平気。お兄ちゃんは？」

「大丈夫だ。スーツはダメだな。買い直さないと」

膝や背中が破れている。夏子は擦り剥いた膝を痛そうに撫でた。

「痛あ……誰も私のことは守ってくれなかった。独り身のつらさね」

文句を言いつつも現職の知事なので、やるべきことをやる。県の防災センターに連絡して被害状況の確認に入った。石永は周囲の安全を確かめ、静江はスマートフォンを操作して情報を得る。周囲は安全そうで京都地裁のビルも健在だったし、ここからは見えないけれど京都御所の建物も無事に思える。

「お兄ちゃん！ これ見て！」

静江がスマートフォンを石永に向けた。

「なっ?! 震源地が、いくつもあるぞ！」

「そうなの！ 東北、東海道、近畿の沖合が震源地！」

「しかも一つ一つがマグニチュード8、9。…10まであるぞ！」

「県内は震度5強程度ですね。すぐに戻ります！」

電話で県職員と話した夏子は地裁に駐めてある公用車へ痛む膝で駆けるし、石永と静江も続くけれど、京都御所から歩道に出たところで倒れている高齢女性を見かけた。胸を押さえて苦しんでいる。石永が問う。

「大丈夫ですか?!」

「ううっ！ うーっ！」

顔色も悪くて大丈夫そうに見えない。夏子が言う。

「ごめん、任せる！ 私、県庁へ行くし！」

「わかった。大丈夫ですか?! しっかりしてください！ 静江！ 救

急車を！」

「はい！」

「持病はありますか?! 心臓は?!」

「ううーっ！」

呻いていた女性は、どんどん顔色が悪化している。素人目に見ても心臓発作に見えた。石永は10秒ほど迷ったけれど、女性に胸骨圧迫式心臓マッサージをすることにした。地元の消防団活動などで経験しているので手つきは確かだった。

「地震で驚いたショックか……静江! 救急車を呼んだら裁判所からAEDを借りてきてくれ! たぶん、あるだろう! ハア……ハア……」

「はい！」

「ハア……しつかり! 頑張れ! ハア!」

運動不足ではないけれど、圧迫式マッサージを続けるのは、かなり疲れる。息を乱して汗をかきながら続けていると静江がAEDをもってきた。それも手順通りに使ったけれど、女性は回復しない。

「くっ……オレは医者じゃないからな、これ以上の処置は………静江、救急車は、まだか?」

「うん、かなり混んでるみたい」

救急車のサイレンは聴こえるけれど、他にも要請されているように西からも東からも聴こえるのに、ここへは来ない。無情にも一台の救急車が目前を通り過ぎていった。そのうちに女性は冷たくなり、どう見ても死んでいるようにしか思えなくなつた。

「…ハア……ハア……」

「お兄ちゃん……」

「ハア……もう無駄か……ハア……」

まだマッサージは続けているけれど、無駄な気がしてくる。救急救命処置のやめどきがわからない。講習では、やめるという選択肢は習わない。救急車に引き渡すまで続けるのが基本で、死亡診断は法律上医師しかできない。疲れた兄に替わって静江もマッサージを続ける。またスマートフォンがJアラートを発して津波警報を知らせてくる

けれど、二人とも京都市にいたので注意を払わなかった。

「…ハア…もう、やめるか…」

「でも…ハア…」

救急車は来ないし、女性は蘇生しない。それでもやめないのは二つ理由があつた。もし、この老婦人が自分の家族だったら、ここで投げ出したかどうか、という気持ちと、落選中とはいえ衆議院議員で父親も大臣まで勤めた家系の人間が、疲れたから蘇生をやめたとマスコミに報道されるのは苦しい。大災害の後には様々な美談と醜聞が流れる。もし、うまく蘇生して人命を救えたなら石永にとつてこの上ない加点になるけれど、逆に見捨てたという評判が流れば落選中の自分にとつては致命傷になりかねない。そんな考えもあつて、やめるという選択肢が取りにくい。やめる決断ができないままマツサージを続けていくうちに、二人の前に津波が来た。

「え？ お兄ちゃん、あれ？ なに？」

「ん…なんだ？ 地下水？ 液状化でも起こつたか…」

京都市まで押し寄せてきた津波は道路に拡がり、またたく間に二人を包んだ。けれど、その高さは3センチ程度で京都御所敷地の手前で止まった。

「…海の匂い…海水なのか、これ…」

「海水つて…ここ京都なのに…」

老婦人の遺体は海水に浸っているけれど、二人とも疲れていて抱き上げようという気力はない。勢いを失った津波は排水溝へ流れていき、二人の靴を濡らしただけで終わった。

「やっぱり、津波なのか…これ…」

「そうみたい…大阪が沈んだって…」

今になって青ざめた顔で静江がスマートフォンを見ている。石永も鼻白む。

「大阪を襲つて京都まで…」

「ここまで来るなんて…」

「…昔の人間が…ここを選んだ理由…当初は奈良盆地を都にした理由…大津波を警戒して…だったのかも…それが海

運と商業を優先して大阪や名古屋……江戸に……」

「ここは……もう、大丈夫なのかな？ これ以上は来ないかな？」

恐ろしそうに静江が兄の腕をつかんだ。

「二応、山の方へ逃げよう。この分だと高速道路も国道1号も大渋滞か、通行止めだろう。途中峠越えで六角市に戻るぞ」

「うん……この人は、どうする？」

「……………ここに……置いていこう。……すまない」

石永が手を合わせて頭をさげたので静江もならった。

2011年3月11日14時44分、畑母神は海上保安庁の巡視船しきしまに乗って太平洋上の八丈島付近にいた。しきしまは7000トンを超える大型の巡視船で2機のヘリコプターも搭載している。東京都知事という立場で中国漁船の出没が盛んな小笠原諸島と尖閣諸島を視察する予定の航海で百色も都の特命職員として、そばにいる。二人は後部甲板のヘリコプター発着場から太平洋を眺めていた。

「海はいいなあ。百色くん」

「まったくですな。閣下」

以前の職が自衛官と海上保安官なので海に出ると、心が安らいだ。

「わずらわしいテレビも無いし、陳情もない。都知事にはなってみたが、やれ保育園が足りない、特養も足りないだのと。なかなか疲れよ」

「あのお嬢さんたちの言う赤ちゃん手当てが実現すりゃ、保育園不足は解消しそうですな」

「そうだな。子供を保育園に入れると受け取れない制度設計だから、一気に待機児はゼロになるかもしれない。それはそれで保育園が定員を満たせず経営で困るかもしれないが、若い保育士さんたちが結婚して子供を産めば、それでいいわけだから」

「それにしても、やっぱり海はいいですなあ」

「ああ、最高だ。このままの日本ではいかんと使命感で政治家になっ

だが、わずらわしいこと、この上ない。陳情に耳を傾けるのは当然としても、金銭の管理がグレーゾーンが多すぎて困る。いっそ、会計検査院の外郭団体でもつくって、そこに政治家の財布を預けるとか、そこへ領収書を送れば通るものは通してくれる、ダメなものはダメと返されるようなシステムにしてほしいな。あとで、ごちやごちや言われるのは、かなわん」

「ですな」

「自衛官の頃は、よかった。経費とプライベートなど、すっぱり分かれていたからな。政治家になると、ちよいと気前よく人に飯をおごるのさえ、公選法上、大丈夫かと気にせねばならんからな」

「海にいれば三食、いただけますな」

「本当に海はいいな」

勝利に終わった都知事選の疲労もとれた畑母神は穏やかな海を眺めていたけれど、浮遊感を覚える。

「ん？」

二人とも、まるでヘリコプターの離陸時のような持ち上げられる加速度を感じて経験の長い畑母神が気づいた。

「地震による津波発生か……このあたりが震源なのだろう」

「へえ、こんな感じですか」

「二度、経験したことがある。たまたま洋上の震源地にいて……だが、あの時より、ずいぶん浮遊感が大きく……艦橋へ行こう。下手をすれば視察は取りやめくらい地震かもしれない」

「また、あの大都会東京に戻るんすかねえ。オリヤ海がいいなあ」

「私もだよ」

二人とも急いで船長のもとに行き、ともに情報を得る。地震の規模と衛星写真で確認できた津波の大きさを知ると、戦慄した。

「……まさか……こんな地震が起きるとは……」

「こりゃあ、死人が一万二万じゃ済まないんじゃない」

「ああ……死者数は大戦時を上回るだろう……都民1000万……名古屋……大阪……加えて海上自衛隊が受けるダメージも……」

畑母神は脳内で基地のある場所と海岸線を正確に思い出し、東北か

ら東京、東海道、近畿にかけて100メートル以上、最大で200メートルを超える高さの津波が襲った場合の被害を、波の物理的性質も考慮して予想する。

「横須賀は全滅だ……だが大湊は残る。……舞鶴はもちろん、佐世保も。あとは呉だ……呉もギリギリ残る……かの地に鎮守府を置いた先人に感謝せねば」

「横須賀が中心で、その中心が無くなった場合、海自は、どうなるんです？」

「呉を中心にする」

「空自と陸自は？」

「三沢、浜松、厚木は確実にダメだ。横田がどうなるか……南の新田原と那覇だが、新田原は、そこそこの標高にあつたはず……問題は那覇だ。震源地から遠いが、ほとんど海面と高さは変わらない。10メートルの津波でも全滅するだろう。揺れは無く津波の到達までに時間があるから飛ばせるだけ飛ばせればいいが……。陸自は7割が残るものの、海自と空自は整備も考えれば戦力は5割、半分以下になつた」

「在日米軍も？」

「明らかに半分以下になる。三沢と東京、沖縄に集中しているのが痛い。残るのは岩国と佐世保くらいだ。……そうか、アメリカ人は、津波のことを、ほぼ考えずに基地を置いているのだな……こうなつて、わかるか……」

「オレらは、どうします？」

「この船で救援に向かいたいところだが、津波の引き戻しには大量の瓦礫もあるだろう。何より貴重となる艦船を傷つけぬよう、不甲斐ないが正確な情報の収集にあたるしかあるまい」

「……東京壊滅か……八王子の山手くらいは残るか……何にしても、閣下が、ここにいたのは天啓ってヤツですな。国会が消えちまったなら、東京都知事で自衛隊のトップだった閣下が日本の大将だ。……だが、今は何も……オレも……」

百色は空手で熊のように鍛えた手が今は何もできないことを悔し

く
思
っ
た。
。

2011年3月11日 翔子 松田川 三島

2011年3月11日14時39分、翔子は国会議事堂で本会議に参加していたけれど、欠席になっている隣の鮎美の席を淋しそうに見た。

「外務大臣にまでなっちゃうなんて」

一人言として漏らしたけれど、近い席にいる松尾が言ってくる。

「この分だと、五年先十年先には芹沢総理かもしれないな」

「日本って女性首相、まだでした？」

「まだだねえ」

二人とも小声で会話している。本会議は荒れていて、やはり在日韓国人からの献金を鳩山総理が受けていた問題で退陣を迫られているけれど、鮎美が外務大臣として入閣し自民党との連立政権となるので、野次を飛ばしているのは共産党と活力党、そして無所属の議員たちだけで少数になっている。ただ、明らかに国民への目くらましで18歳の鮎美を大臣にして人気取りしようという魂胆は見え見えで、その分だけ野次は強烈だった。

「辞めろ辞めろ！」

「贈与税も忘れるな！」

「アユちゃんを変に使うな！ このハゲえ!!」

音羽も野次を飛ばしている。別に鳩山総理は禿げていないけれど、勢いで言っている。民主党と自民党の議員は黙って聞き流すか、小声で私語していて議場の雰囲気は悪かった。

「肝心の新外務大臣は、どこ行った?！」

「国会ほってお遊びか!!」

「イスラエルのついでに韓国観光か?！」

「……はああ……それにしても」

タメ息をついた翔子が松尾に話しかける。

「私の友達にも在日韓国人の人いるんですよ。中学で同じクラスで、普通に友達になったんですけど、氏名は日本人としか思えない名前

で、本人も、ずっと自分は日本人だって思って生活してたんですよ。日本語しか話せないし」

「在日3世くらいになると日本語しかわからない人は多いよ。逆に日系ブラジル人3世もポルトガル語しか話せなかったりする。それで？」

「はい。それで、高校を選ぶときに親から朝鮮系の学校も選択肢にあるよ、って言われて、びっくりだったらしいです。びっくりしてから、ああ、お前には家系の話は、まだしてなかったな、みたいに軽く言われて。その子が言ってたけど、そういうえばキムチとか豚足を食べるこ

とが多いなあ、と言われてから思ったらしいです」

「結局、どういう高校に行った？」

「普通に学力と見合った商業系だったかな」
「まあ、難しい問題だな。ボクだって先祖なんて調べたことないからさ。普通に日本人だろうと自分のこと思ってるけど、実は違ったりしたらビビるだろうなあ」

「私も。どうして差別って無くならないのでしょうか？」

「簡単かつ複雑な問題だよ。世界のどの国でも差別を受けている層は平均して所得が低い。所得が低ければ教育水準も下がるし、結果として就職先も限られる。となると一部は犯罪や犯罪といかないまでもグレーゾーンの仕事をしたりする。パチンコも風俗産業もグレーだからね」

「私んちも貧乏だったんですけど」

「平均して、ということだよ」

「一部の人が悪いからって全部を差別するのも……」

「そうだね。別のたとえで、性犯罪は再犯率が高い。けれど、全員が再犯するわけじゃない。しっかり反省して、もうしない、という人もいる。それでも彼らを見る目は厳しい。これは差別だと思うかな？」

「うっ……うっ……」

「ボクらだって貧しい国に生まれたら、なんとか先進国に不法入国でもいいから入りたいさ。けど、入った後も不法就労だから待遇は悪い。そのうち自棄になつて窃盗やテロに走つても、不思議じゃない。

そして、一部はそうなる。結果、全体が避けられるようになる。誰だつてリスクは負いたくないさ。危険かもしれないなら避けておこう、それが自然だ」

「でも、私の友達には危ない感じは無かったですよ。いつそ、完全な日本人に帰化すればいいのに」

「そうする人もいるだろうし、なんとなくしない人もいるだろうね。断固としてしない人もいるだろうし、ボクらだって海外で長く生活して仕事もしていたとき、じゃあ日本人を辞めますか、となったとき、迷うし先送りにするだろう」

「世の中、複雑ですね。とりあえず地球人ってことで全員に番号をふつて、ついでに遺伝子も登録したら、人類のルーツも判明していいのに」

「ははは、たしかに。けど、危険でもあるね」

「どうして?」

「たとえば、黒人は足が速い、というのはオリンピックの短距離走メダリストを見れば、だいたい確からしいよね」

「はい」

「足が速い、というくらいの性質なら、あまり差別にはつながらない。けれど、たとえば、白人にはロリコンが多い。日本人にはホモレズが多い。黒人は算数が苦手。そんなことが科学的事実として、しっかり判明してしまつたら、かつてのユダヤ人差別より危ないことになる。現代の地動説にね。それでも遺伝子は語っている、と言われたとき、人権という神聖な権利が危うくなる。現に人種ごとのかかりやすい病気やアルコール分解能力なんかは違うと判明している。さらに踏み込んだ調査がされたとき、どうなることやら。もしも芹沢鮎美が産む子供は75%の確率で同性愛者になる、と判明して、さらに芹沢鮎美の兄弟姉妹は、たとえば本人が異性愛者でも、その子供は50%の確率で同性愛者になる、と判明するのは危なそうだろう?」

「それは……」

「まだ、同性愛なら差別感情が無くなればいいさ。けど、40歳で癌になるとか、知能指数が低いとか、心臓病をもって産まれてくるとかさ。

そして、さらに日本人は自殺しやすいとか、朝鮮人は怒りやすいとか判明してしまつて。データになつたら、いわれなき差別が、いわれある差別になつてしまう」

「……いわれある差別……」

「別に自殺しやすい、怒りやすい、という性質を善悪で論じるわけではなく、もしかしたら自殺しやすい性質がある方が集団にとって有利かもしれないし、怒りやすい性質がある方が交渉ごとで有利かもしれない。いい、悪いでなく、そういう能力だと判明してしまうかもしれない」

「……差別つて複雑ですね……いろいろあつて……」

「他にも、差別を受けた、という被害を訴えて過大な要求をする行為も問題だ。これは人種差別に限らず、日本に昔から存在する被差別階級による場合もあるし、実際はそうでないのに、そうカたる場合もある。だんだんと、誰が真の被害者か、わからなくなつたりね。芹沢大臣が始めた、あのセクハラ写真訴訟も一部年配の議員たちは本気で彼女の戸籍を取り寄せようとしたりしたそうさ。結局、裏で彼女の父親が応じたらしい。で、日本人ではあるけれど、大阪人だから、あんなものだろう、と落ち着いたそうだよ。これ、彼女に言わないでね」

「…はい……大阪人つて人種じゃないですよね？」

「大阪の女は怖いらしいよ。芹沢大臣も見た目は可愛いけど、ときどき中身はオツちゃんかと思うし、実質、太田議員と、あんまり変わらない気がする。そういう意味では大臣が勤まるかもね」

「芹沢先生は立派な人ですよ……私の身体への視線がオジサンなどきがありますけど……」

突然、翔子のスマートフォンがけたたましい音を立てた。

「っ……」

うっかり国会中に鳴らしてしまつて、あとで教育役の先輩議員に怒られるかもしれないと、慌てて切ろうとするけれど、他の議員の端末も大きな音を鳴らし始める。議場の野次が止まった。

「Jアラートか」

「地震が来るみたいです」

のんびりと言った翔子は次の瞬間に目の前の机が迫ってきて腹部を強烈に打たれて呻いた。

「うっ?!」

「くっ!・伏せろ!」

松尾も身体を打っている。それほど仲が良かったわけではないけれど、男として松尾は翔子を抱きかかえるようにして机の下に入った。その間にも揺れは激しさを増して横揺れに混じって縦揺れもくる。

「キヤー?!」

「うおっ?!」

二人とも机や椅子ごと宙に浮き、そして床に叩きつけられる。

「うっ!」

「ぐはっ!」

翔子は頭を打って気絶し、松尾は右腕を折った。ほぼ同時に議事堂の天井が落ちてきた。崩落の音と粉塵で聴覚も視覚も奪われる。咳き込んで呼吸もできない。まるでカクテルを作るためにシェーカー内で氷が舞わされるように人と机などの備品が舞い、無傷な者はいなくなる。松尾も重い机に頭を打たれ即死した。やっと揺れがおさまり、少しは粉塵も落ち着いて呼吸と視界をえつつある音羽は息苦しさで恐怖で失禁していたけれど、まだ咳き込んで苦しんでいる。

「ゴホッ!・ヒュッ!・ゴホッ!・ハア…ゴホ!」

自分の命が残っていたことに気づく余裕もないほど、息苦しい。気管の中が粉塵だらけで、いくら咳をしても楽にならない。苦しみががら嘔吐した。それで、ようやく喉が洗われ、息ができて、わずかながら、もの考えることができた。

「…ハア…ハア…」

目が痛い、手足も痛い。何力所か骨が折れている気がするけれど、どこが折れているのか、確かめる気力もない。あまりにも不運な状況だったが、一つだけ幸運なことに直樹の声が近くでした。

「ううっ…」

「ナオくん?!」

「ゴホッ……くっ……」

直樹は崩落してきた天井に下半身を潰されていて、すぐに自分の死を悟った。

「……くそっ……」

「ナオくん！ しつかりしてナオくん！」

「……ああ……ゴホ！ ……まったく……人生は不条理だな……」

妹を性犯罪者に殺され、今また突然の災害で自分が死ぬのかと思うと、運命が呪わしかった。

「ナオくん！」

「……ごめん……りさ……」

音羽の声は聞こえていなかったのか、最後に妹の名を口にして直樹は死んだ。

「ナオくん！ ナオくん！ つ、うああああ！」

付き合い始めたばかりの恋人に死なれるほど、悲しいことはない。

音羽の泣き声が響き、気絶していた翔子は目を覚ました。

「うろう……ゴホ……ゴホ……」

早いうちに気絶して身構えたりせず揺すられるまま身を任せていたおかげか、奇跡的に翔子は骨折はせずに全身の打撲傷だけで済んでいた。停電し、照明器具も落ちている。暗い中、天井が崩落したおかげで空から太陽の光が入ってきていて、その明かりを頼りにロビーへ出た。

「……ゴホっ……ゴホっ……」

「誰か無事な者は?! こっちを手伝ってくれ！ 谷柿総裁が負傷された！」

「ハア……ゴホっ……」

手伝える気力と体力は無さそうだった。衆議院の方も、ひどい状態のようでも混乱している。

「動かすな！ 首の骨が折れているかもしれない！ 脊椎損傷の可能性がある！ そっと担架にのせろ！」

「ゴホっ……あの先生、医師だったから……ゴホっ……」

名前は思い出せないけれど、日本医師会から議員になっている男性

も片腕を骨折しつつも救助活動を始めている。平時は医療利権の権化のように言われているが、多くの負傷者を前にして使命感を思い出したようだった。

「……私も……なにか……しなきゃ……」

やっと少しだけ気力が戻ってきた。けれど、再びドンと建物全体が揺れる衝撃があつて余震かと身構えると、正面玄関から津波が入ってきて、同時に議事堂全体が崩落する。その流れに翔子は飲み込まれた。

「………私の人生……何もいいこと………なかった……」

やっと手にした歳費は一月分と二月分で110万円、あまり派手に使わず勉強も忙しくて、せいぜい3回、都内の有名カレー店で話題のカツカレーを食べたくらいだった。

2011年3月11日14時39分、松田川は在籍していた阪本市の病院へ辞表を出しに来ていた。理事長室で辞表を差し出し、挨拶している。

「ご迷惑をおかけしました」

「いや、君も大変だったね」

病院理事長が労ってくれる。救急車で運ばれてきた鮎美を診察したことが始まりで両親を亡くした。しかも、殺人未遂の疑いでも逮捕された。幸い検察からの取り調べも途中で甘くなり、すでに被害者として扱ってもらっているし、鮎美が念のために谷柿と久野に頼んで医道審議会へも声をかけていくるので医師免許への処分も無く終わりそうだったものの、毒物をパッケージし直すのに病院の設備を使ったりもしたので居づらさもあり辞表を書いている。理事長が辞表を受け取った。

「松田川先生の評判は良かったのに………惜しいなあ………辞めて、どうする？」

「………検察や医道審議会からの処分が無いことが確かになってから、東京で就職先を探そうと思っています」

「東京かあ………引く手あまただろうね。田舎に残ってほしいものだ」

「すみません」

「いつ出発する?」

「今日にも、これから」

「送別会も開けないね」

「すみません」

つらい気持ちもあるけれど、明るい希望もある。付き合い始めた知念は警視庁所属なので鮎美と行動をともししているものの生活の拠点は東京にある。しばらくは謹慎という名の無職状態になるけれど、知念が非番の日には会うつもりだったし、年齢的に結婚を見据えた交際はこれが最後のチャンスになると思っている。年下彼氏を逃がす気は無かった。迷っているのは自分の進路で美容整形外科の道を究めるか、それとも楽で子育てと両立できそうなレーザー脱毛くらいしかしない毛抜き医師になるか、もしくは亡くなった想い人に合わせて美容の道に来たけれど、本当には医師としては小児科に進みたかった。もう外科に来たので小児の内科系よりも、なり手の少ない小児の外科系に進むかだったけれど、とても大変で体力的にもきつく勉強することも多いし、自分の子育てとの両立が難しくなる。でも、やり甲斐はある。鮎美は小児というには大きかったけれど、若くて細胞が元気な分、治療効果も出やすく、また患者本人の後の未来も長いので責任が大きい分だけ達成感も大きかった。そして外務大臣になる鮎美を診て完治させたという実績は、すでに全国的に有名なので東京では、どこでも望む就職ができそうだった。なので進路は、これからたっぷりと時間があるので、ゆっくりと迷い、決めるつもりだった。

「じゃあ、元気で」

「はい、お世話になりました」

再出発をするつもりだったのにJアラートが鳴った。

「……………」

理事長が、ちよつと待ってほしいという顔をした。そして揺れがくる。

「お…大きいな…」

「この県が震源地になるなんて…」

「いや…アラートのタイミング的には、距離はありそうだ…」

「そうなんですか？」

「君は地学の知識がないかね。アラートは予想しているのではなく発生を感知してから、揺れが伝わるまでの時間を…うわっ?!」

「きゃっ?!」

揺れが大きくなり、理事長室の戸棚が倒れてきた。理事長が趣味で買った美術品や見栄えのいい医学書などが入っていた重い戸棚を二人ともギリギリで避けた。

「まだ揺れるのか…」

「こんなに揺れて…」

もう二人とも踏ん張って、また戸棚などが倒れてこないか警戒している。もう一つ、戸棚が倒れてから揺れがおさまった。

「ふーっ………」

「はああ……理事長、ちゃんと棚を固定してなかったんですか？」

「ああ、すまん、すまん。患者さんが来るスペースは万全を期しているはずだが、理事長室は、ついな」

「こんなの下敷きになったら入院確実ですよ」

「ところで松田川先生」

理事長が受け取ったはずの辞表を松田川へ向けて返してくる。

「うっ……まさか…」

「せめて一週間は、これを出すのを待つて欲しい」

「……はい」

これだけの揺れで県内だけで転倒し骨折した高齢者は多いはずだったし、若年者も負傷していきそうな大地震だった。きっと戸棚や冷蔵庫の下敷きになった人もいる。震源地に近い県から回されてくる患者もいるかもしれない。すでに119番は鳴りっぱなしだろうし、ここで、さようなら、と東京に行くことは医師としてできなかつた。

「着替えて、救急外来に行ってきます」

「ありがとう！」

松田川は女子更衣室で着替えながら、お菓子を食べて甘い缶コーヒーも飲んだ。どうせ、これから深夜まで食事できないのはわかっていたし、次々と運ばれてくる患者を診ているだけで精一杯で全国的に、どれほどの被害が出ているかを知るのは翌日になった。

2011年3月11日14時20分、三島は福井県の郷里に障害をもって産まれ、その障害のために短命に終わった子の納骨を済ませた後、曹洞宗大本山の永平寺に来て座禅を組んでいた。静かな山林の中にある僧坊を借りている。

「……………」

今は無私の境地を意図しているのではなく、考え事をしている。子が亡くなり、二人目をもうけるべきか、それとも盟友となった鮎美の支援に全力を注ぐべきか、深く考えている。

「……………」

我が子と同じく我も障害をもって産まれた、性同一性障碍という、しかも同性愛者という稀な存在であり、この身がなすべき事業は何であろうか、7歳の頃、男根が生えてこぬ事実にした、13歳になって恋をした少年に告白したが、お前は男っぽいから嫌だ、と言われて悔しかった、だが、この身が女であつても心が男であることに変わりはない、男たるを極めんと自衛隊に入り、多くの仲間ができた、楽しかった、ついつい仲間たちに身を許すを、同僚たる女子自衛官どもは白眼視したが、なんの外連もない、身の欲望もまた自然の摂理、若き血を滾らせるは至極当然のこと。

「……………」

だが、私の血は肉欲のみにあらず、国家精神の健全たるをも求め、理解ある仲間とクレーターを検証し続けた、矛の会と称し研究し合ったものよ、だが其が発覚し隊を追われたとき、妊娠も判明し、迷ったが結婚し産んだ、いかなる因果か、子もまた障害をもち、我がなすべき事業は、弱き子、危うき命らを守ることだと、矛の会を休眠させ、命の盾の会を創設した、集まった同志に左翼的な女性たちも多かった

が、それもまた学習になった、真に子を守る会として過度に政治運動になつてはならぬと、会の役員には必ずや子があり、その子が障害をもっていることを条件にしたが今や、会長たる我が、その規約に外れ、範を示して辞するべきか、規約を障碍児子育ての経験とゆるめるべきか、迷いもあるし、芹沢殿を助けるには何が最良であるか、見極めねばならぬ。

「……………」

彼女は素晴らしい、わずか18にして自己の指向を世間に告白し仮面をとった、あの胆力、あの構想力、まことの友にしたき者よ、うむ、我はついつい男仲間は友としつつも、おのが性欲の対象ともしてしまい、我が怪しき目で見れば、相手も相応、欲も出る、然れども、芹沢殿は女、私の性欲の対象にはならず、そして尊敬すべき人、彼女と切磋琢磨し、まことの親友となりたきものよ、女と親友になる、これこそ、いわゆる純粹に無欲な男友達と同じ存在ではないだろうか、だが、彼女は今、危機にある、外務大臣への昇格といえば聞こえはよいが、実質は悪しき自民党と、軽薄なる民主党に利用されておる、これを利用し返し、連合インフレ税を認めさせたは神業なれど、この先、いかに彼女を支えるべきか、わずか18、擦り切れてしまわぬよう守らねば、まさしく彼女の盾でありたいのだ。

「……………む」

地震か……揺れておるな……震度3といったところか……この程度で思考を乱すは精神の薄弱、芹沢殿との関係、今一度、深く思考する前に一旦、無我の禪を組もう。

「……………」

三島が結跏趺坐すること3時間、風呂敷で包んだ日本刀をもった青年が僧坊に駆け込んできた。

「ハアハア！ ここにおられましたか、三島先生」

「何を慌てている」

「我ら、矛の会に決起のときが来ました！」

その青年は自衛官時代の後輩であり同志だった。

「状況は？」

「大震災です！ 東京が壊滅しました！ 大阪も名古屋も！」

「なんと……」

「かかる国家存亡の危機！ 我らが立つは今です！」

「子細、話せ」

「はっ！」

青年から被害状況を聞いた三島は立ち上がった。

「たしか芹沢殿のみが国外におられたはず！」

「はっ、本日も国会を欠席していたとの報道がありました」

「雌伏させし、矛の会同志たちに伝えよ！ 今や雄飛のとき！」

「はっ！」

「トラトラトラである！ ただし、これはクーデターではない。合法的な政権維持であり、芹沢鮎美内閣総理大臣臨時代理の名のもとにあれと！ 我は彼女と盟友なり！ 日本をともに変えようと約束しておる！ この約束を果たすため、合法的に動くのだ！」

号令を発した三島は自身も最寄り自衛隊基地である小松基地に向く。永平寺から軽自動車で移動すること北陸自動車道を使い40分、あえて歩いて基地を訪ねるため安宅パーキングエリアに車を駐め、青年と降りた。

「それは置いていけ」

青年がもつ日本刀を指した。

「ですが……」

「言ったであろう、これは合法的な政権維持。クーデターではない」

「はっ」

二人で歩いて移動し、民間飛行場としての玄関である海岸側でなく、ぐるりと飛行場を周り陸側の小松基地出入口に来た。

「あいかわらず空自の地上警備は手薄に過ぎるな」

「まったくです」

二人とも陸自出身なので航空自衛隊基地の地上からの侵入に対する警備の無さには遺憾さを覚える。その気になって武器があれば、まったく間に侵入して一人で戦闘機10機は使用不能にできそうだった。手頃な小銃と爆薬があれば、たった一人での夜襲で基地内の全航

空機を破壊できるかもしれないし、それを同時多発的に行えば一夜にして航空戦力をゼロとできる気がする。失敗しそうなのはアメリカ軍と共同使用している基地くらいだった。

「どなたですか？　ここに何か用ですか？」

さすがに二人が門に近づくと、もう日も暮れているので隊員に誰何され、それに堂々と答える。

「我は芹沢鮎美内閣総理大臣臨時代理が命を受けし、三島由紀子！」

これより小松基地を日本の中心とする。基地司令に通せ」

「……………わかりました。とりあえず、どうぞ……」

対応した隊員は鮎美の名を知っていたし、外務大臣になる予定だったことも知っており、三島の顔もテレビでチラッと見た気がするの
で、通すことにした。

2011年3月11日 久野 美恋 詩織

2011年3月11日14時10分、久野は栃木県にある那須御用邸の一室で学習院長の島津久厚(しまづひさあつ)と対話していた。島津は九州の戦国大名島津氏の子孫で今年で92歳になるも壮健で薩摩隼人らしい眼光を保っている。

「そろそろワシも学習院の院長を引退し、久野さんに後を任せたい」「は……、そのような大役、勤まるかどうか…」

予想していた話だったけれど、久野は辞退したそうに座り直した。やっと国会議員を引退し、少しは人並みの老後を送ろうかと思っただのに政権交代があつて若い自民党議員たちを助けられないわけにもいかず、いろいろと支えているところなので、これ以上は仕事を増やしたくない。まして島津のように90歳を過ぎて働くのは遠慮しなかった。

「まあ、ゆつくり考えてください」

「はい……ところで、由伊様の具合は？」

「妹宮様のインフルエンザは治っておるよ。今度は兄様が寝込んでおられたが昨日には熱も引いておられる。二人ともお元気でおられるものの、学校へ出て級友へ感染させては気の毒だと自重されておられる次第」

「それはそれは」

「まあ、若いうちに免疫を鍛えるは必要なこと。ご高齢の陛下に感染させては一大事と那須にて休養いただいたが、明日にもお帰りいただけるじやろう」

島津と久野は予定通りに2階で静養している15歳の義仁親王と7歳の由伊妹宮を見舞う。兄妹は静かに生物学の本で甲虫のことを調べていた。

「由伊、甲虫ほど自然界に愛されている種はいないよ」

「そうなのですか？」

「彼らほど、多様に…あ、島津先生」

「お元気そうでなりよりです」

「久野さんも、お久しぶりです」

兄に続いて妹も挨拶する。

「お久しぶりです」

「こちらこそ。お二人とも回復されたようで安心しました」

久野にしても議員生活の中で一年に何度かは儀式や祝典で親王らを見かけてきたので、年々順調に成長してくれていることは、とても嬉しい。島津が言う。

「これからは久野先生を学習院の先生の長にと考えているのです」

「……」

「島津先生、久野さんが困っているよ」

「ははは、しかし、そろそろ、この90過ぎの年寄りにも樂をさせていただけませんかね」

「年齢のことをいうなら、あの芹沢さんが外務大臣になるというのは本当ですか？」

義仁の問いが、政界の話題なので島津よりも久野が答える。

「はい、事実です。今日明日にも陛下から新任いただくことになるかと」

「見てみたいな」

由伊が興味深そうに言った。義仁は気の毒そうに言う。

「まだ18歳で、そんな大役、かわいそうに」

「兄様、ここの御用邸でも親任式が行われたことがあるそうですね？」

「ああ、一度だけ例外的に昭和天皇の御世に。たしか、最高裁判所長官の親任式だったかな。その一度以外は、すべて皇居で行われているよ」

義仁が聡明に答えたとき、久野がもっているスマートフォンがJアラートを鳴らした。

「し、失礼しました。ですが、地震です。身構えてください」

「はい」

兄が妹をかばい、身構えたとき震度6の激震が襲ってきたけれど、

古風に見えても強固な御用邸の建築構造は揺れに耐えた。

2011年3月11日7時過ぎ、自宅を出て仕事へ向かう玄次郎を、運動不足解消の散歩をかねて美恋は見送りに港まで出ていた。

「じゃあ、行ってくるよ」

「はい、いつてらっしゃい」

「おはようございます、おばさん」

鷹姫の腹違いの妹二人が挨拶してくるので、美恋と玄次郎も微笑む。

「おはよう」

「赤ちゃん、元気ですか？」

上の5歳の子が問うてくる。

「ええ、元気よ」

まだ胎動は感じられないけれど、つわりの程度からして妊娠は無事に続いている気がするし、定期検診の超音波検査では人の形になっている。玄次郎は連絡船が出るので三人へ手を振って乗船した。船長が言ってくる。

「おらが島から大臣を出してくれましたな」

「ありがとうございます。なにか失敗しないとよいのですが…」

「今夜は島をあげて祝うそうですよ」

「それは、それは、ご丁寧に…」

「大臣がお帰りになるのは、いつ？」

船長以外の乗客である島の住民たちも口々に鮎美のことを言ってくれるので玄次郎は失礼のないように答えながら過ごしたため、わずかな乗船時間でも疲れた。

「ふーっ……大臣の父親つてのも、しんどいな。オレには給料でないし」

愚痴りつつ自家用車に乗る。ときどきいつしよに乗せている陽湖がいないのを少し淋しく感じた。市街地の建築事務所で依頼を受けている女医の邸宅を設計していると、電話が鳴った。

「もしもし、芹沢建築事務所です」

「応野です」

「ああ、どうも」

今は落選中でも自民党の衆議院議員を4期もこなし、それ以前も県議や市議として25歳から活躍してきた井伊市の古参政政治家からの電話に玄次郎は疲れた声を出さないように注意する。

「また、お願いしたいことがあります」

「お力になれることであれば、頑張ります」

「古い豊郷小学校を観光地として盛り立てていくことになり、もともとの設計を大切にしつつ、リフォームしたいのです」

「なるほど」

「つきましては、芹沢さんにもご意見願いたいと」

「わかりました」

「来週の月曜など、現場に来ていただけますか？ 市議も集まりますし」

「はい、調整します」

電話が終わり、玄次郎は日本茶を淹れた。

「仕事が増えてきたなあ……そろそろ女性事務員でも雇うか」

鮎美が有名になってくれたおかげで県内からの仕事も増え、以前の間人関係がある大阪からの仕事も入ってくる。今の依頼も明らかに鮎美が大臣になるということで、その父親の意見があつたりリフォームであれば予算を取りやすい、という根回しだとわかる。

「そういうえば、月谷さんのお母さんが仕事を探していた……あの人なら、変なことにはならないだろう」

娘の成人式で顔を合わせたことがある陽湖に似ている陽梅を思い出した。以前に大阪で雇っていた女性事務員は美人だったこともあり、ついつい食事に連れて行ったりしているうちに不倫一步手間まで進みそうになった。最終的に面倒なことは嫌だったので、わざと美恋に彼女とのやり取りがあるスマートフォンを見られるように置いておき、嫁が怒っているし大阪の事務所は引き払うので辞めてください、と関係を終了させた。陽梅であれば強い信仰をもっているらしいので不倫のようなことにはならないと期待できる。思いついたつい

でに電話してみた。陽湖を住ませている都合上、携帯番号は知っている。

「もしもし、月谷です」

「どうも、芹沢です」

「この度の大臣就任、おめでとうございます」

「あ、ああ、どうも」

「いつも娘がお世話になっており、重ねてお礼申し上げます」

「いえいえ、こちらこそ。少し別の用件なのですが、よいですか？」

「はい、どうぞ」

「うちの事務所で電話番号や雑用をしてくれる人を探しております。もし、よろしければ月谷さんをお願いできないかと。時給は850円ですが」

陽湖は鮎美の下で時給1000円で働いているらしいけれど、電話番程度の仕事で850円は県内の相場としては少し高めだった。

「本当ですか?! ありがとうございます! 実は夫も失業してしまい困っていたのです! ありがとうございます! ああ、神よ、ありがとうございます!」

「……」

「あ……その……存じかと思いますが、私も夫も日曜日には仕事ができません」

「ええ、うちも日曜は休みです。土曜は不定ですが、土曜は電話などは少ないので平日をお願いしますよ」

「たまに平日も参加しなければならぬ活動があつて……」

「そういった活動が、どの程度の頻度なのかといったことや、詳しいことを面接したいのですが、お昼はお時間ありますか?」

「はい」

「では、駅近くのココスでお会いしましょう」

電話を終え、昼まで仕事をした玄次郎はファミリーレストランに向く。電話番号なので学歴などは、どうでもよかったけれど、陽梅は丁寧に履歴書を用意してくれていて好感がもてた。ただ、やはり失業中の人間独特の雰囲気はある。それは言葉にならないものの、どここな

くわかる気配だった。面接ではあるけれど、不採用という選択肢はもとも無いので、とりあえず10時から16時の契約で来てもらうことになり、昼食は玄次郎がおごる。

「何でも、お好きな物をどうぞ」

そう言ったのに陽梅が遠慮して一番安価なパスタを選ぶほうとするので、玄次郎は自分が頼む予定のステーキセットを指した。

「よければ、いっしょに、これにしませんか？」

「…あ…はい…ありがとうございます。では、そのライス無しで」

娘に似て華奢な陽梅は食べる量も少ないようだった。注文をして履歴書を片付けた玄次郎は言ってみる。

「注文の品が届くまでに、先に祈っておかれたらどうですか？ その方が熱いうちに食べられますし」

「先に……」

「ときどき、娘さんや嫁と外食するとき、そう言っているのです。教義上は問題ないそうですよ」

「そう言われればそうですが……あの子が考えたのですか？」

「いえ、自分が」

陽梅は少し迷ったけれど、届くまでに祈ることにした。

「主よ、今日の糧を与えたもうこと感謝いたします」

「……」

与えてるのはオレとココスだけだな、まあ、いいや、と玄次郎は黙って待ち、その間に豊郷小学校のリフォームについて考えてみた。やはり、ほぼ完成された建物なので修繕と追加設備は取り外し可能なものがないなどと決めた頃、二人へステーキセットが届いた。

「いただきます」

すぐに食べ始める。

「ああ、美味しいです」

「それはよかった」

ただのファミレスで、そんなに感動されてもな、と玄次郎は思ったけれど、陽梅は夫が失業してから節約生活に入っていて、ここ最近は大マゴやモヤシなど、なるべく安価なものばかり食べていて、肉は食

べることがあっても、ササミか鳥ムネ肉の割引品だったので牛肉の塊を食べるのは本当に久しぶりだった。少し恥ずかしいほどガツいて食べたので紙ナプキンで口を拭く姿が可愛らしかった。

「では、仕事中は宗教の話はしないということだ」

「はい、わかりました」

「よければ、今から来ていただけますか？」

「はい」

二人で事務所に戻り、電話対応の基本などを教える。もともと陽梅も宗教勧誘をしているのでコミュニケーション能力は高く、年齢相応の社会経験もあって、すぐに仕事を覚えてくれたし、気を利かせてお茶を淹れてくれたり、言わなくても電話が無いときなどは掃除してくれたりして採用してよかったと思いつつ、玄次郎は設計に集中できるようになったけれど、陽梅が困った顔で電話の受話器をもってきた。

「お電話を受けたのですが、相手が名乗ってくださいません。とにかく芹沢社長を出せ、と」

「そういうのは無視でいいよ」

「一度、そうして切ったのですが、再びかかってきて。大変なことになるぞ、娘が、と言われるので……」

「わかった。出るよ」

玄次郎は受話器を受け取った。

「もしもし、芹沢ですが？」

「おう！ ワシや！」

「どちら様ですか？」

「北砂夕子（きたすなゆうこ）の父親や、忘れたとは言わさんど！」
「……………」

覚えている名前だった。鮎美が以前在籍していた高校の後輩で、鮎美と夕子が交際のようなことをしていてトラブルになっている。鮎美が夕子を自分の部屋に連れ込み、裸にして性的関係を迫ったところ拒否されたというトラブルで、親同士で話し合っていた。美恋も話し合いに加わっているし、夕子の母親も来ていた。玄次郎も途中から参

加している同性愛ではなく悪ふざけの類だと思っていたものの、今になって思い出すと、同性愛だったのだと、よくわかった。

「他人様の娘を傷もんにしておいて、大臣とはえらくなったもんやのおー！」

「……その件は決着がついたはずですが。もともと、夕子さんから鮎美へ交際を申し込んでいたとか」

「ケツまくる気か?! そんな態度やったら、こっちは週刊紙にタレ込むぞー！」

「……………」

話の先が読めたので、玄次郎は机の上にあつたスマートフォンを操作して録音を始める。

「ワシの娘が、どれだけ傷ついたか！」

「……はい……」

返事をしつつ録音がスタートしているか、目で確認する。なるべく相手の声が雑音無く入るように受話器をスマートフォンの上に置いて玄次郎自身は椅子に座って前屈みになって話す。

「相応の償いがあるやろ!!」

「……たしか、あのとき話し合いに要した費用ということで2万円をお渡ししたと思いますが？」

「あんなもん挨拶料やんけ！ ワシが言うてるのは、お前らの誠意じゃー！」

「……はい……」

「誠意を見せい!!」

「……はい……」

「せやなかったら週刊紙にタレ込むぞ!!」

「……それは、お待ちください」

「おう！ ほな、誠意みせろや!!」

「一度、落ち着いて、当人も交えて話し合いませんか？」

「あかん！ ワシとお前だけで決着つけたる言うてるうちに誠意みせい!!」

「……夕子さんは、どうされていますか？」

「ゆ、夕子は、…学校や！ 学校いっとるわい！ この時間、当然やんけ！」

「……」

お前は、この時間に仕事もせんと、何しとるねん、と玄次郎は久しぶりに関西弁で思考し、おそらく相手が失業中か、ろくな仕事をしていないと判断した。そして父親単独で金銭の無心をしていて、夕子や母親は知らないか、別居しているか、離婚したのではないかとも考える。島の自宅には固定電話が無いけれど、建築事務所には置いてある上、芹沢という名も屋号に入っていて、調べればわかることだった。

「とにかく誠意をみせろ！」

「わかりました」

「お、おう！ そうや！ そういう態度が必要なんや！」

「それで、どうすれば、よろしいですか？」

「はア?! 大人やったらわかるやろ！ 誠意ゆうたら金や!!」

「……お金ですか……おいくら、ほど？」

「一千万！ いや、三千万や!!」

「……三千万円ですか……」

「おう！ 三千万きつちり用意せい！」

「……それだけの金額、さすがに、すぐには……」

「なんとかせい！」

「……私単独では難しく……」

「大臣になるやろ！ なんとかせい！」

「……一度、娘に相談してみないと」

「ほな、そうせいや！」

「では、そうさせていただきます」

「……。い、いや！ 待て！ まず前金でいくら払える?！」

「前金？ 何の前金ですか？」

「慰謝料に決まっておるやろが！ トボケよると、しばくどー！」

「慰謝料の前金ですか……」

「いくら払える?！」

「私の単独だと、せいぜい30万です」

「なんや、情けない男やお！」

「はい、赤字なもので」

「アホが！ ちゃんと働けや！」

「どうも、すみません」

お前が働けや、と言わないように自制して、とりあえず謝った。

「まあええ！ ほな30万、すぐ払え！ 振り込め！」

「振込先の銀行口座を教えてくださいいただけますか？」

玄次郎は教えてもらった口座情報をメモしてから言う。

「振り込みますが、早くても月曜になるかと思います」

「なんでや?!」

「すでに14時40分で大阪と違い、こちらは田舎なのでATMまで遠くて。それに30万となると定期預金を解約しないといけないので支店に行く必要がありますし」

「ちっ……必ず月曜には振り込めよ！」

「わかりました」

電話が切れると、玄次郎は録音を停止し、大きなタメ息をつきながら椅子にもたれる。

「はああああ……」

「……大丈夫ですか、芹沢社長」

陽梅が心配そうに見てくれる。会話は、ほぼ聴こえていた。

「月谷さん、今の話は内密に」

「はい、誓って」

「さて、どうしたものか」

玄次郎は腕組みして考える。本人に言うべきか、まずは石永あたりに相談するか、それとも夕子が関わっていないなら父親単独の証言では週刊紙も相手にしないかもしれないので放置するか、とりあえずは月曜までは時間があるし、30万なら余裕である。本当はATMも近いし、手元資金も200万は普通預金口座にあった。

「いっそ、あのクソ野郎、交通事故にでも遭って死ねばいいのに」

「……………。神はすべてを見ておいでです」

「はああ…」

「仕事中に宗教の話はしない約束だろ、と玄次郎はタメ息をついた。

「あの……芹沢社長、ここは赤字なのですか？　もしかして、赤字なのに無理して私を雇ってくださったのですか？　娘に何か頼まれて……」

「あ、いえ、あれは嘘です。普通に儲かってます。ご安心ください」
「……そうですか……嘘……」

「ここで、嘘は罪です、というほど社会経験が無いわけではないので陽梅は自重した。

「月谷さん、考え事をするので少し黙っててください」

「はい」
「……………」

鮎美が夕子さんに何をしたかによるが、もともと同意はあったんだろう、今日まで言ってこなかったのは、話し合いと2万で納得していたからだし、2万も払うべきではなかったのかもな、非を認めたことになる、オレが参加してからクソ野郎が明らかに金目当てな雰囲気だから2万で黙らせたが、失敗だった、ここから、どうするか、週刊紙が相手にしない可能性もあるし、30万をやれば調子に乗るし、また非を認めたことになる、だが逆に脅迫ということで録音を証拠に警察へ告訴ということもできる、とはいえ対決姿勢で臨むなら鮎美にも話しておかないと、あいつも結婚までした大人だし、今回は本人に告げるべきかもな、悲しむかもしれない忙しいだろうが重要な案件だといって本人と石永先生に連絡を取ろう、と玄次郎が方針を決めたときJアラートが鳴った。

「地震か」

「みたいです。どうしますか?」
「ここは大丈夫だよ。座っていて」

慌てずに玄次郎は言った。大阪で阪神淡路大震災を体験したのは16年前、その経験から、この事務所を借りるときも3階建てビルの3階にしたし、築年数のわりに丈夫そうなビルを選んでいる。そして

戸棚は当然、パソコン本体やディスプレイなども耐震粘着マットで机に固定してあるし、その机も壁に鎖でつないである。壁掛け時計でさえ、ひっかけるネジとは別のネジを打って、針金で時計と結んであるので落ちても落ちないようになっている、考えうる限りの対策をしているので机の下に隠れることもしなかった。

「おお、揺れるなあ、これは大震災クラスかも」

激しく揺れ、狙い通り時計は落ちたけど、針金のおかげで30センチ落ちただけで床まで落ちたりしない。ちよつと嬉しかった。陽梅は祈っている。そのうちに揺れはおさまりビルの窓ガラス一枚が割れたけれど、そのガラスにも飛散防止シートを貼ってあったので被害は軽微だった。

「よし、だいたいOKだ」

「……とても落ち着いていらつしやるんですね……すごい人……」

「大臣を育てましたからね。ははは！」

調子に乗った玄次郎はナチ式の敬礼をやった。おかげで陽梅は、あつてはならないことなのに玄次郎へ惚れかけていた気持ちが静まった。

「二応、妻にも電話しておこう。妊婦だし」

自宅も同じように家具の転倒防止もしてあるし、古い日本建築ではあるけれど頑丈さは確かである。とくに鬼々島の家屋の間取りは狭いので揺れに強いはずだった。ただ、心配なのは美恋が妊娠中なことで本人が転んでいる可能性はある。

「……つながらないな……」

電話回線は混雑していて、かからない。何度もかけてみて30分しても連絡が取れないので玄次郎は立ち上がった。

「月谷さん、いっしょに来てください。自分が運転をするので、妻へ電話をかけ続けてみてほしい」

「わかりました」

玄次郎が運転し、陽梅は助手席から電話をかける。回線混雑が続きつつも、たまに通じているのに、電源が入っていないか、圏外だと言われる。

「芹沢社長、鬼々島は圏外が多いのですか？」

「いや、遮蔽物は山くらいしかないし、どこにいてもかかるはずなんだが……」

だんだんと玄次郎から余裕が消え、焦りが増してくる。走り抜ける街は、さほど被害を受けていないけれど、救急車のサイレンは聴こえるし、窓ガラスが割れていたり、古い看板が落ちていたりはする。市街地から港に向かう途中で、娘たちが通う学園の近くまで来た。

「っ?! なんだ?!」

「っ……いったい何が……」

街の一角が消えていた。そして濡れている。

「どうして……こんな風に……」

「……なぜ……水浸しに……このあたりに、あつた家は……」

娘たちが通う学園のそばなので街並みは覚えている。その街並みが消えていた。鐘留の家も無いし、隣接していたはずの店もない。一つの町内、丸ごと消えている。車を停めて降りると、琵琶湖のヘドロの匂いがした。

「まさか……津波? ……琵琶湖から……」

鐘留の家は堀に隣接していた。堀の水面の高さは琵琶湖と変わらない。津波だと考えると高さ5メートル程度の津波が襲った痕に見えるてくる。消防団の隊員が駆け回っているので問う。

「何があつたんですか?!」

「津波みたい琵琶湖の水が来たんじゃない!」

「っ……鬼々島は?! 鬼々島は無事ですか?!」

「わからん!!」

「くっ……とにかく港へ……」

再び車で移動する。海の津波ほど広範囲ではなく、すでに引いているけれど、湖岸の低い場所は被害に遭つていて、家が消えていたりする。もともと高波さえ想定していないので家と琵琶湖が隣接していることは少なくなかった。やっと港に着く。

「港も被害を……」

「壊れている船が……」

港にも被害があり、破損したり横転している漁船がある。襲ってきた波は津波と高波の性質を半分ずつにもったような波だったのか、内陸までは標高が低くても達していかないけれど、湖岸部は破壊力が強い。一家に一艘ほどあった船は半数が使用不能になっていた。そして湖面には色々な物が浮いている。発泡スチロールの箱や自動車、家の一部がそのまま浮いているし、見たくなかったけれど、死体もあった。

「……………」

「おーい！ 助けてくれ！」

少し沖から声がする。浮いている家の一部にしがみついている男性だった。

「…………使える船があれば…………だが、キーが…………免許も…………」

所有船も船舶免許もない玄次郎が迷っていると、他にも市街地で仕事をしていた戻ってきた島民が使える状態の船を動かし始めた。それで救助や捜索活動が始まる。玄次郎と陽梅も漁船に乗って手伝った。はじめの一時間は生存者が多かったけれど、だんだんと水死体や圧死体を回収する方が増えていき、鐘留の両親も死体で見つかった。

「…………美恋は…………」

「神よ。シスター美恋を、どうぞ、お救いください」

陽梅は祈りつつ作業を進めたけれど、暗くなる頃に美恋と鷹姫の腹違いの妹を死体で見つけた。下の3歳の妹で灯油のポリタンクに美恋が使っていたスニーカーの靴紐で胴体を縛りつけられていて、なんとか溺れずに浮いているように縛られたのだとわかるけれど、低体温症で亡くなっていた。状況的に、外を散歩していて、いっしょに波に襲われたようだった。美恋の身体にも目立った傷はないので溺死か、低体温症だと思われた。

「…美恋……………」

「…………シスター美恋…………」

「……………おつちは息があるぞ！」

上の5歳の妹が同じように灯油タンクに縛られて、それに抱きつく

ことで生きていた。

2011年3月11日昼前、詩織は世田谷にある自宅マンションのベッドで目を覚ました。時差の大きいヨーロッパやアメリカと連絡をとっている都合上、朝に眠って昼に起きるという生活パターンが定着しつつある。

「……あく……シャワー浴びたいです……あのヘンタイめ……」

身体がベタとしているし、やや匂う。裸で寝るのが習慣なのでシーツや枕カバーも汚れが早いけれど、鮎美が求めるので入浴してない。好きな人を喜ばせるのも、好きな人を苦悶のあげくに殺すのに比べれば、はるかに劣るものの、嬉しいとは感じるのでシャワーを浴びる快感は我慢して、洗顔だけしてメイクする。事務所へ出勤するため、スカートスーツを着て準備を終えた頃、玄関チャイムを誰かが鳴らした。

ピンポーン♪

訪問される予定はない。

「鮎美のバイブは、もう届いていますし……他に宅配はないはず……」

警戒して玄関チャイムの防犯カメラ映像を内線電話のモニターで覗きつつ問う。

「どなたですか？」

「警視庁の者です。牧田さんにお訊きしたいことがあります」

モニターには2名の刑事が映っている。

「わかりました。ですが、私は芹沢詩織です」

「失礼しました。ここを開けていただけますか？」

刑事に訪問される心当たりは二つある。一つは静岡県での事件で被害者として、もう一つは過去の自分の犯罪だった。

「今、シャワーを浴びていましたので、少々お待ちください」

平然と嘘をついてから、別のモニターをチェックする。そのモニターは玄関前の天井照明に隠して付けた360度カメラに接続されていて、ドア前しか映さない防犯カメラよりも周囲の状況がわかる。

「……………」

モニターには合計6名の刑事が映っていて、ドアの前にいる2名の他は防犯カメラの死角になるような位置に立ち、手にはボールや大型金属切断具を持っていて、玄関ドアを破壊してでも侵入できる準備をしていた。

「……………そうですか……………とうとう……………日本警察が優秀なのか……………それともドイツ警察か……………」

この日が来るのは想定してもいた。そして準備もしている。詩織はリビングと玄関前天井に仕掛けてある爆薬へつながる電線のスイッチを入れて、いつでも無線で爆破できるようにすると、無線リモコンを持って再び内線電話のモニターに問う。

「逮捕状を見せてください」

「つ……………ここを開けろ……………」

「どうせ逃げられませんよ。まず逮捕状を見せてください」

詩織が住んでいるのは高層階で出入口は玄関だけ、どのみちベランダ側を見張る刑事も数人いると想定している。

「いいだろう……………」

刑事が逮捕状を防犯カメラに向けてくれた。

「殺人容疑……………ドイツから……………ICPO経由ですか……………わかりました。すぐ開けます」

また平然と嘘をついてから、もつとも爆風の影響が少ない自室に入ると、両耳を手で塞ぎ、口に咥えた無線リモコンのスイッチを歯で押した。

ズンツ!!!

リビングの床に四角に四カ所、玄関前天井に二カ所、仕掛けてあった爆薬が爆発し、玄関前にいた刑事たちは吹き飛んだはずで、さらにリビングの床は階下まで落ちたはずだった。

「……………次、鮎美に会えるのは、いつになるか……………」

国外に逃亡するつもりなので偽造パスポートや現金、偽名でのカードが入ったハンドバックをクローゼットの奥から出し、明るい金髪の

ウィッグをかぶって伊達眼鏡もつけ、走りやすいスニーカーを履く。

「忘れ物なしです」

タバコを吸わないのにベッドサイドの引き出しに入れてあるライターで自室に放火すると、そろそろ爆破後の粉塵がおさまったはずのリビングに行く。リビングの床は無くなっている。一つ下の階のリビングが見下ろせた。着地地点を見定め、飛び降りる。

ザッ：

2メートルあまりの飛び降りに難なく成功して周囲を見る。

「ママっ、ママっ」

幼児が泣いている。詩織の部屋のリビングが落ちてきたことで、階下でテレビを見ていた主婦が押しつぶされ、手と血だけが見える。その手を引いて6歳くらいの幼児が泣いていた。

「っ、お姉ちゃん、誰？ どうして上から…」

「子供に興味は無いのです。よかったですね、殺してあげる時間もなくて」

幼児の横を通り過ぎ、玄関から外に出た。一つ下の階の共用通路には予想通り刑事はいない。けれど、一階エントランスや裏口、非常階段にはいると想定する。エレベーターまで歩くと、下へ行くボタンを押した。詩織の階に止まっていたエレベーターが降りてくる。それに乗ると一人の若い刑事が蒼白な顔をして無線で話しているけれど、エレベーターは金属に包まれるせいで通信状態が悪く苦労していた。すでに一階のボタンは押されているので詩織は刑事に背を向けて立つ。

「状況不明です！ 大きな爆発音がして…もしもし?! 大きな爆発音がして、駆けつけたところ6人とも…もしもし?!」

エレベーターが一階に着くと刑事は駆け足で降りていく。詩織は歩いて一階エントランスに出た。若い刑事が他の刑事に何か説明している。その隣を歩いて抜ける。

「……」

「……」

説明を受けていた刑事が詩織の背中を見る。容疑者と背格好が同じで、二つ気になる点があった。一つは出勤するような整ったスカートスーツを着ているのに不似合いなスニーカーを履いていること、それは足の健康のためにパンプスやヒールは会社に着いてから履くのもかもしれないし、そういう女性もいるので見逃せるとしても、もう一つは若い女性のわりに汗の匂いがして気になった。二つ気になるときは迷わず疑ってきた刑事は声をかける。

「ちよつと、いいですか？」

「はい」

振り返ると同時に詩織はスタンガンで刑事を失神させる。もう一人の刑事が身構える前にスカート裾をあげると同時に蹴りを入れた。

「ぐっ…」

さらにスタンガンで失神させると、何事も無かったようにエントランスから道路に出る。外にも刑事がいたけれど、上を見上げて火事の様子を消防署へ通報していて、何も問われず詩織は歩道を進み、次の通りでタクシーを拾った。

「羽田空港へお願いします。急いでいるの。父が危篤で！」

とつくに殺した父親のことを危篤にするとタクシーの運転手は頑張ってくれる。

「わかりました！ 羽田ですね！」

世田谷から羽田へと多摩川沿いにタクシーは走り、詩織はメールを鮎美へ打つ。

愛する鮎美へ

私は無実です。冤罪です。これは罨です。

きつとタックスヘブンの仕掛けた罨です。

私は誰一人殺してなんていません。

鮎美を愛しています。

私だけの鮎美、鮎美だけの私です。

いつか必ず会いに行きます。

その日まで、どうか待っていてください。

永遠に愛しますから。

しつかりと鮎美を縛りつける言葉を送ると、トイレに行きたいと言ってコンビニへ駐まってもらい、女子トイレの洗面器にスマートフォンを押しあて二つに割ってから水で濡らし、コンビニ前のゴミ箱にスタンガンとともに捨てて再びタクシーに乗った。詩織の嘘を信じてくれた運転手は羽田空港へ、かなり早く到着してくれた。

「ありがとうございます」

なるべく運転手に印象を残さないよう、ごく普通の態度で支払いを済ませると、国際線ではなく国内線で関空へ飛ぶことにした。その便が待ち時間が少なかったし、マンション一階で失神させた刑事を見て、もう手配が回っているかもしれない、という勘だった。搭乗前の身体検査を受け、搭乗待ちロビーで遅くなった朝食を摂る。

「こんなに美味しいご飯は、しばらく食べられないかもしれませんね」

日本の食事が美味しいことは、よく知っている。そして、これから関空を経てICPO未加盟国に逃げるので、そこでの食事が期待できないこと、偽名カードに移してある財産も多くはないこと、他にも考えるべきことを再検証しながら食べ終えて口紅を塗り直したとき、刑事が2名、自分に近づいてくることを視界の端でとらえた。

「日本の警察も優秀なのですね。もう逃げ道が…」

かなり追いつめられたけれど、詩織は諦めなかった。席を立つと走る。身体検査のゲートを逆走し、空港ロビーを駆け抜け羽田空港駅から電車に乗った。

「ハア！ ハア！」

きわどい駆け込み乗車をした詩織を他の乗客は迷惑そうに見ているけれど、もう一人、駆け込み乗車をした刑事が隣の車両から追ってくる。

「ハアハア、牧田だなぁ?! 動くな!!」

そう警告されても詩織は動いて、そばにいた赤ん坊を抱いた母親を母子ともに人質にする。午後の13時という半端な時間なので電車内は人が少なく、母子は海外赴任する夫を見送った後のような雰囲気

だった。詩織は人質にした母親と刑事に警告する。

「動かなければ殺しません」

母親の首筋に口紅のスティックをあてた。まったく殺傷力はないけれど、それで母親は何かの凶器だと思い込み動かずにくれる。

「た…助けて…」

赤ん坊を抱いた母親は、まったく状況がわからないけれど、とにかく警察のように見える刑事へ言った。刑事は拳銃を抜いているけれど、銃口は天井へ向けている。

「無駄な抵抗はやめろ!!」

「銃を捨てなさい!」

いかにも刃物であるかのように母親の首筋へ口紅を押しあて続ける。それでも刑事は銃を捨てない。詩織は母親のわき腹に膝蹴りを入れて薙ぎ倒すと、赤ん坊を奪った。そして盾のように刑事に向ける。

「弾倉を抜き、弾を床に捨てなさい! でなければ、この子の腕を折ります! 3! 2! 1!」

ごく短いカウントダウンで詩織は赤子の手を捻るようにして腕の骨を折る。

「ビギャー…!!」

すでに泣いていた赤ん坊の泣き声が変わる。火がついたような泣き方になった。

「次! 反対の腕! その次は首です! 3! 2!」

「ま、待て! 弾倉を抜く!」

オートマティック式の拳銃をもっていた刑事は弾倉を抜いて反対の手に持った。

「弾を出して捨てなさい! 3! 2!」

「くっ…わかった! わかったからやめろ!」

刑事は弾倉から弾を外して床に落としていく。そうしながら車窓を見た。電車は大鳥居駅を過ぎ、京急蒲田駅へ向かっているが、近くの道路からはパトカーの音が聞こえる。すでに、この容疑者を逃がす

ことはないが、きわめて凶悪で人質を殺すことに躊躇いが無い、と判断して、赤ん坊のことを優先した。今も母親が詩織にすがってくるのを蹴って倒し、その頭を踏みつけて気絶させている。

「…ハア…」

「ハア…」

「ビギャー！！」

「その子を離せ！」

「はい」

素直な返事をした詩織は刑事へ赤ん坊を投げつけた。

「なっ?!」

慌てて受け止める刑事の股間を蹴り、蹲ったところを赤ん坊ごと膝蹴りして倒し、体重をかけて頭部を踏みつけて無力化した詩織は拳銃を拾い、乗客たちに向ける。

「動けば殺します！」

弾倉が抜かれるところを一部始終見ていたのに、銃口に向けられた乗客は誰一人として動かない。詩織は車窓を見た。糞谷駅を過ぎているし、その糞谷駅にはパトカーが駆けつけつつあった。ということ、次の京急蒲田駅へは、すでに先回りされている可能性が高い。

「…ハア…ハア…」

詩織は額の汗をスーツの袖で拭き、電車の非常停止レバーを操作した。それで電車が減速して停車すると、車窓から線路へ逃げる。線路は高架だったので一般道へは出られず、あえて電車が走ってきたのと逆を行き、糞谷駅まで戻った。幸いにして糞谷駅のホームに警察官はいない。ホームにあがると、一般の乗客だったような顔をして歩き、女子トイレで金髪のウィッグを外して、その場に捨てた。トイレを出ると改札で駅員に告げる。

「すいません、切符を無くしてしまいました。羽田から乗っています」

「そうですか。じゃあ、いいですよ。どうぞ」

駅員は親切にも素通りさせてくれて、駅前に出たけれど、そこにはパトカーが2台も待機していて、髪の色が違っても背格好と服装が一

致する詩織を追ってきた。パトカーで追いきいよう道路の細い駅北側に逃げたけれど、制服警官たちが走って追ってくる。詩織は交差点では、なるべく曲がるようにしてジグザグに走った。

「ハア！ ハア！ くっ…」

それでも500メートルと走らないうちに先回りされ、前後から挟まれる形になり逃げ場を失った。しかし諦めず、たまたま保育園前だったので150センチほどしかない塀に手をつき飛び越えると園舎内に侵入した。保育士が見知らぬ詩織の顔を見て問うてくる。

「どの子のお迎えですか？ 違う方がお迎えにくる場合は事前に連絡し…うっ?!」

保育士は腹部を殴られて悶絶する。詩織は2階へ駆け上がり5歳児のクラスに入る。別の保育士が2名いて、その二人も身構える間も与えずに倒した。子供たちがパニックになって騒ぐけれど、気にせず一人の体重の軽そうな子を選ぶと、窓から外の道路に投げ落とした。

「近づけば子供を殺します!!」

道路にいる警察官たちが園を包囲し、応援を呼んでいる。また軽そうな子供を選んで文房具からガムテープを出すと、身体をグルグル巻きにしてから窓から出し、身を半分ほど外に出してガムテープで窓枠に貼りつけた。

「子供たちに爆弾を仕掛けました！ 近づけば爆発します!」

そう警告した詩織は急いで園舎の四方を確認する。どこかに逃げ場は無いか探した。

「…くっ…」

逃げ場は無かった。園舎の裏もマンションと接していて、飛び移ることはできないし、その先に逃げ場はない。表や園庭側は警察官たちから丸見えだったし、もう一方には窓さえ少なく、道路から見える。

「…ここで終わり…静かにしてください!!」

騒いでいる子供の一人を蹴りつけた。大人の力で本気で蹴られると子供はサッカーボールのように飛び、動かなくなる。子供たちは教

室の外に逃げるといふ知恵もなく隅で震えている。都合良く教室の戸には鍵がかかるし、その鍵は大人の身長でしか届かない位置にあった。他のクラスの園児は騒ぎに気づいた担当保育士たちが不審者対策マニュアルに基づいて避難させつつあり、園庭や道路に出て行くけれど、あわれな5歳児クラスの子供たちには導いてくれる保育士がない。担当保育士が欠けた場合、マニュアルに穴があるようだった。「静かにしなければ殺します!!」

さらに5人を蹴ると、騒いでいた子供たちは啜り泣くだけになった。何人かは失禁して小便で制服を濡らしている。もう一度、詩織は窓から道路を見る。すでにパトカーも駆けつけてきて、包囲している警察官は15人ほどに増えている。そろそろ突入してきそうなので詩織は髪の長い女兒を選ぶと、言う。

「言うことを聞き、おとなしくしていれば、おうちに帰してあげますよ。だから、おとなしくしてください」

殺すとは言わなかったけれど、もう女兒は詩織を鬼より怖い存在としか思っていないので震えながら動かずにいる。話しかけられているだけで怖いので女兒が小水を漏らして脚を濡らした。その女兒を抱き上げるとベランダ側に出て、女兒をベランダ柵の外に出しておろす。地面までの高さは3メートルほどで女兒は恐怖して柵にしがみついた。

「やめる!!」

「やめるんだ!!」

道路から警察官が叫んでいる。

「近づけば、この子を落とします!」

そう言うってから女兒の長い髪を柵にガムテープで貼りつけた。

「落ちないように、しっかり柵をもっていないさい」

「うわああ! 怖い! 怖い! やめてやめて!」

さらに教室の文房具からビニール紐を出し、女兒の首に括りつけ、反対の端を柵に括った。これで女兒は落下すると首吊りになり、下に回って救助することはできない。

「私の要求を飲めば、子供たちは殺しません!!!」

「わかった!! 要求は何だ?！」

「銃と車両を用意しなさい!! 1時間以内に!!」

そんな要求をしても無駄だということ、もう承知していた。ただ1時間は突入が先延ばしになるはずで、その1時間が最期だと悟っている。

「最期が子供なんて……私はロリコンではないので、あまり楽しくなさそうですね。犬猫なみの反応でしょうし……でも、初めて殺したのは公園の子猫……そして、最期も子猫たち……因果ですね」

ベランダから教室に戻ると、文房具の中から大型カッターナイフを選んだ。そして子供たちに斬りかかる。首に致命傷を負わせることもすれば、腕や脚を斬るだけの子も残す、ただただ楽しく斬りつける。頭を防御した子は防御しなかった腹を斬り、背中を向けた子は背中や膝の裏を斬ってみた。

「おチンチンを斬られて、女の子になりたい人はいますかーあ?」

誰も返事をしなかったけれど、三人の男児を斬ってみた。一人が白目をむいて失神し、もう二人は血まみれになった股間を押さえて泣いている。目についた女兒の口に押し込んで飲み込ませた。

「はい、次は耳なし法師の話を知っている人いますかーあ?」

まだ斬られていない園児のうち5人が両耳を手で守った。守らなかった二人を斬った。

「けっこう子供を殺すのも楽しいですね」

思ったより充実した時間が過ぎせし、より恐怖を与えるため三人だけ無傷で残した。まだ突入されたくないのにベランダ外に出した女兒も落ちないうちに回収し、警察官たちに叫んでおく。

「銃とクルマはまだですか?！」

「すぐに用意する!! もう少し待ってください!!」

「あと2時間あげます!! 現金で一億円、用意しなさい!!」

「……。2時間では無理だ!!」

「では一千万です!!! 3時間待ちます!! でないと子供を傷つけますよ?！」

「わかった!! わかったから待て!!」

これで警察官たちの突入は、また遅くなる。時間をつくった詩織はベランダの内側へおろした女兒に訊いてみる。

「あなたの、お名前は？」

「ひっ…ひぐっ…」

「言わないと、今すぐ殺します」

「ま…松尾! 松尾恵理香(まつおえりか)！」

「恵理香ちゃんですね。では、目を閉じてください」

「……………」

ベランダから落ちるかもしれない恐怖で泣き続けた後なので、もう涙の枯れた目を閉じてくれた。詩織は恵理香を抱き上げ、教室に戻る。

「まだ目を開けてはいけませんよ」

「……………」

恵理香は他の子供たちの呻き声を聴いたけれど、恐ろしいので目を閉じたままである。詩織は恵理香を教室の中央におろした。

「はい、目を開けて周りをごらんなさい」

「…っ?! ひー…っ?!」

恵理香は血の池地獄を見て悲鳴をあげた。同じクラスの友達が斬りつけられて血まみれになっている。もう死んでいる子もいる。恵理香は腰が抜けて座り込み、両手を床についた。その手が真っ赤になって、また悲鳴をあげる。その悲鳴を心地よく聴きながらも、詩織は一人の男児に注目した。太腿を斬りつけた男児だった。

「へえ…5歳くらいでも、そんなことができるのですか…」

男児は斬られた太腿をセロテープでグルグル巻きにして止血している。それだけでなく、さらに友達の腕へも応急処置をしていて詩織は深く感心した。

「ねえ、君、お名前は？」

「……………村井勇氣(むらいゆうき)」

「いいお名前ですね」

「……………」

「お友達を助けたいなら、こつちへ来てください。チャンスをおあげます」

「……………」

勇気は痛む脚を引き摺りながらも詩織の方へ来た。

「勇気くん、この教室の中で、あなたが一人だけ助けてあげたい友達を選ぶとしたら、誰ですか？ 指を指してください」

「……笑笑（えみ）ちゃん」

勇気はセロテープを腕に巻きつけて止血していた女兒を指した。

「わかりました。笑笑ちゃんを助けてあげます」

「……………」

「手紙を書きます。少し待つてください」

詩織は画用紙に警察へ手紙を書く。別に内容は何でもいいので、日本では手に入りにくいドイツ産のソーセージとフランス産のチーズ、世田谷有名店のサンドイッチを午後6時までにもってくるよう要求する手紙を書いた。

「この手紙をもって外に行ってください。まず笑笑ちゃんから助かります。けど、私がみんなを斬ったことを警察に言っただけじゃありません。絶対に言っただけじゃありません。みんな元気になっていると答えてください。でないと、全員を呪い殺します。いいですね？」

「……………」

「お返事は？」

「……………はい………」

「きつと、みんな元気になって一人ずつ助かりますから、安心してください」

詩織は教室の扉を開けた。

「……………」

笑笑が勇気を振り返る。

「早く行け！」

「……うん」

笑笑が手紙をもって逃げていく。詩織は扉を閉めると窓から叫ぶ。

「一人解放します!! 早く要求に応じてください!! 私は無実です!!
これは陰謀です!!」

眼下で笑美が園を出ていき、警察に保護されている。すぐに現場指揮官になっていて警部が手紙を読んでいるのを見ると、そろそろライフルで狙撃する準備もしているかもしれないので窓を閉めた。

「よかったですね、勇気くん」

「……………」

勇気は詩織から嫌な感じしかしないので返答しなかった。

「勇気くんのお願いをきいてあげましたから、私のお願いもきいてください」

「……………」

「服を脱いで裸になってください」

「……………なんでだよ?!」

「ほら、早く。私も脱いであげますから」

あと十歳成長してくれば、でも試してみましよう、と想いつつ詩織は裸になる。勇気は脱がないけれど、詩織は出血多量で死にかけている園児の頭を踏んで言う。

「脱がないと、お友達を殺しますよ」

「……………くっ…」

悔しそうな顔をして勇気が裸になった。その勇気に近づいて詩織が抱きしめる。さらにキスを試してみた。

「ううっ…」

勇気は気持ち悪そうに呻く。魔女にキスされたような気分だった。詩織は床へ勇気を押し倒して、馬乗りになった。

「おチンチンを大きくしてください」

「……………そんなことできない!」

「では吸ってあげます」

「ううっ?!」

詩織は勇気を刺激してみたけれど、やはり5歳児なので鮎美の小指にも満たない。それでも、こんな状況なのに勃ってきたことは嬉し

かった。もしかしたら自分と同じで頭のネジが一つ二つ、生まれつきズレているのかもしれないと感じた。

「立派ですね、勇気くん」

そう言いながら身体を重ねてみた。鮎美の小指程度なので物足りないし、今現在の行為が何を意味するのか、勇気も少しは感じていて嫌悪感で胸がいっぱいになった。

「や、やめろよ！ は、はなせよ！」

「かわいいですね、勇気くん」

「はなせよ！ お前、臭いんだよ！」

「……………あくあ……………死亡確定です」

詩織は勇気の身体を噛み千切った。

「ぎゃああああ?!」

どんなに暴れて叫んでも助けは来ず、詩織は歯だけで勇気を殺した。詩織は頬の血を手の甲で拭きつつ問う。

「さて、次は誰の番ですか？」

「……………ヒツ……………」

恵理香と他三人の無傷な園児が震えた。

「また一人助けてあげます。ジャンケンで勝った人を逃がしてあげます」

「…………………………」

子供にとって身近なゲームなので状況の非日常さから奇妙に解放された。

「きつとね、チョコキを出した人が勝ちますよ。さあ、はじめてください。もちろん、何も手を出さなかった人は、すぐ殺します。はい、ジャンケン♪」

詩織が音頭を取る。

「ポンー！」

「…………………………」

三人がグーを出し、恵理香だけがチョコキだった。けれど、恵理香は嬉しそうではないし、グーを出した三人は殺される気がして蹲って震える。

「恵理香ちゃんには、どんな手紙を…」

まだまだ遊ぶ気だった詩織はJアラートの不協和音を聞いた。侵入したときに倒した保育士がもっていた携帯電話が警告している。

「……地震……」

ほとんど身構える時間もないうちに激震が来た。

「なっ……こんな揺れが……」

高校からドイツにいた詩織は地震の経験が少なく、かなり驚くし、園児たちにとつても初体験な上に今日という日は最悪だった。

「キヤーツ?!」

「うわあ?!」

「助けてママあ!!」

「ママア!」

「嫌あああ!」

悪魔の日か、鬼の日だと感じる。園舎全体が激しく揺れ、人も机も舞う。戸棚も固定されてあったのに倒れてから舞い、もともと出血して弱っていた子は次々と死んでいく。やっと揺れがおさまったとき、詩織は身を守るために使っていた子供を捨て、啜った。

「フフ、最高のチャンスです。鮎美にまた会える」

絶望が希望に変わった。裸だった詩織は保育士の衣服を奪い、身につけると生きている子供を二人選んだ。その二人に言い含める。

「今の地震で、私は悪い魔女から、いいお姉さんになりました。助けあげます。いっしょに逃げましょう」

「……」

キョトンとしている子供を左右に抱えると、園の外に出る。

「この子たちを助けてください!」

まるで犯人から隠れていて隙を見て逃げ出してきたような演技をして警察官に子供を引き渡す。警察官たちも激震のために大混乱していて、パトカーの下敷きになっている警察官もいるくらいで、詩織の人相を確かめる余裕がない。それでも一人の警察官が気づいて拳銃を向けた。

「動くな!!」

「っ…」

発覚しても詩織は反撃した。地震で怪我をしていた警察官を盾にし、その銃で撃ち返した。銃声で別の警察官たちも気づく。撃ち合いになり詩織は五人の警察官を殺したけれど、自身も2発の弾を腿と腕に受けた。

「ハア…ハア…」

「銃を捨てろ!!」

「どうせ、もう空です」

あくまで詩織を射殺せず、生かして逮捕しようとしている警察官たちに銃口で包囲された。もう走れないし、体力もない。

「…ハア…ハア…まったく…多勢に無勢です…いつもマイノリティーは疎外されますね…鮎美…」

「銃を捨てろ!!」

「……………あっ」

詩織は黒い壁を見て指さした。壁というには高すぎる壁で東京タワー並みに感じる。その壁には飾り付けのように船や飛行機が貼りついている。

「あれ…なんですか?」

「……………」

嘘ばかりつく詩織が背後を指さしても警察官たちは振り返ったりしない。やっと逮捕できる。仲間の仇だ、と包囲を狭める。詩織は知識として知っていた津波という日本語を思い出した。

「……………シャワーを浴びたかったのですが……………これは、また盛大すぎますね……………どうせ、いつかは死ぬのですから……………もっと苦しんでから死にたかった……………」

さんざんに他人の死で楽しんできたけれど、いつか来る自分の死も楽しみだった。ゆっくりと老いて死ぬのもいいし、癌の苦痛に喘ぐのも、殺した被害者の家族に拉致されてなぶり殺しにされるのも、警察に逮捕されて最高裁まで冤罪だと言って争ったあげくに再審請求を繰り返しながら拘置所で毎晩殺した被害者のことを思い出しながら

自慰して過ごし最期の最期まで冤罪だったと首に縄をかける刑務官に泣きながら言ってみたかった、そんな期待していた。なのに、たった2発の銃弾と、あとは一瞬の津波で終わるようで、とても残念だった。

「……………鮎美……………」

銃を捨て、結婚指輪にキスしてみた。せめて、もう少し新婚生活を送りたいかったし、送らせてあげたかった。

3月12日 領空侵犯

2011年3月12日土曜、日本時間午前1時、台湾時間午前0時、鮎美たちは着陸した台中空港のターミナルそばの一角でエアバスA321の中に閉じ込められたまま5時間を過ごしていた。多くの民間旅客機が緊急着陸したために、もともとは空軍の空港だった台中空港の民需向けスペースでは受け入れができず、かといって台湾国内に入国させるわけにもいかなないので機内に閉じ込められているのは鮎美たちだけではなく、他の旅客機の乗客も同じだった。

「腹が減ったなあ」

機内の会議室で義隆が言った。

「そやね」

「すみません」

陽湖が謝る。今は会議室で鮎美、陽湖、義隆の三人で集まり情報交換していた。現在、機内は三つの派閥に分かれていて、陽湖を中心とした信仰をもつ集団と、鮎美を中心とした信仰をもたず素行のよかった集団、義隆を中心とした微妙に素行の悪い集団がある。とはいっても対立しているわけでもなく、とくに鮎美と義隆の集団は男女別という感じもあり、また由香里などは所属が明確でないし、ただ、なんとなく集団っぽくなり、とりあえずリーダー的な存在ということとで三人が話し合っただけ協力しており、屋城と介式も加わっている。学園と修学旅行の会計を預かっている立場の屋城が言う。

「空港側に食事の提供を依頼していますが、台湾国内も混乱気味で今少し時間がかかりそうです」

「我慢せなしゃーないね。これだけの事態やもん」

着陸してから情報を得るためにインターネットを利用している。台湾の設備と適合する機種のス마트フォンをもっていた生徒たちへ、いずれ鮎美が政治資金から弁済するという約束で海外でのデータ通信を行ってもらい、三つの班に分けて、日本の被害状況、英語での世界の被害状況、中国語サイトを含めた検索、という調査をしてもらっている。全員が従事しているわけではなく、すでに深夜なので眠

い者には眠ってもらい、またA321の機内に入っていること、すでに24時間を超えているので起きている者は順番で中央通路を前後に歩くことで運動してもらっている。

「とんでもない地震やね……まだ津波は来るし……」

集まった情報の結果、震源地域は太平洋プレート周囲、アラスカ、日本、ソロモン、チリ、メキシコで、いずれの地域でも巨大な津波が発生し、沿岸国を襲っている。アメリカとカナダの西海岸、日本の太平洋岸、パプアニューギニアとオーストラリア太平洋岸、チリとペルーの太平洋岸、メキシコ西海岸に壊滅的ダメージがあり、さらに日本とソロモンの間となる台湾やフィリピン、インドネシアへも10メートル以上の津波が襲ってきており、とくに二つの震源地域からの津波が重なる位置にあるフィリピンなどは深刻で、同じように震源地域の中間となるロシア極東地域、パナマも大きな被害を受けていた。くわえて太平洋の中央にあるハワイや南太平洋の島々には時間差で360度周囲から津波が襲っている。総人口のすべてが死に絶え消滅したと思われる小国もあった。義隆が言う。

「日本人口の3000万から6000万が失われたってよ……世界全体では3億とも10億とも……ははは……桁が違いすぎて、意味わかんねえよ」

「日本でいうたら第二次大戦の犠牲者の10倍……世界でも大戦で亡くなった人は5000万から8000万やったから10倍と言えるね……」

「あの大戦の10倍って……マジか……」
「……………」

陽湖と屋城は祈っているし、鮎美と義隆も言葉がない。会議室へネットでの調査の技術面を統括している鐘留が入ってくる。

「ご飯の確保なんだけどさ。ぼったくりなのか、この状態なら仕方ないのか、一食10万円くらいなら届けるって業者あったよ。けど、先払いで。かなり怪しい」

「なめとんなあ……足元みてんのか、仕方ないのか不明やし……先払いは、たぶん詐欺やと思うよ」

「だよねえ。あと、日本の日本海側は、けっこう大丈夫みたい。というか、ほぼ被害がない県もあって秋田県、山形県、新潟県、群馬県、長野県、山梨県、岐阜県、富山県、石川県、福井県、鳥取県、島根県、山口県、福岡県、佐賀県は、ほぼゼロ被害っぽい。アタシたちの県も震度5強くらいだから大丈夫そう」

「せめて、それが救いやね」

「あ、あとね♪」

かなり嬉しそうに鐘留が右手の指を5本、左手の指を2本立てた。

「シートで仮眠してた生徒のうち女子5人、男子2人がね。フフ」

含み笑いしつつ語る。

「なんとオネシヨしてました。きやははは♪」

「……………」

鮎美と陽湖、義隆が学園から閑空までのバスで寝てオネシヨしてしまった鐘留が、この世の終わりのように泣いていたのを思い出した。他人の失敗を自分の立ち直りの材料にできるらしく鐘留は喜々としている。トラブルは起こされたくないので鮎美が言う。

「しゃーないよ。あんな風に大阪が消えるところ見た後やもん。うちも見ててチビるかと思っただし、オシッコ貯まったら漏らしたかもしれないわ」

「しかも、腹が減ってるのを、ヨルダン川の水を飲んで誤魔化してるからなあ…………おい、ホントに食い物ないのかよ？」

「すみません。もうありません」

また陽湖が頭をさげる。涙ぐんでいる。鮎美は一瞬気の毒になっただけで、陽湖から受けた仕打ちも覚えていたのでフォローする気にはなれない。機内には泣いている生徒も多い。鮎美が求めた作業に従事してくれる生徒もいれば、鬱ぎ込んで泣いている生徒もいるし、鐘留にとって好材料だったようだけれど街が沈む光景を見たショックで就寝中に衣服を濡らした生徒もいたようだった。わざわざ鐘留がカウントしてくれたので、その生徒のフォローを陽湖と相談し、相性の良さそうな生徒についてももらうことにした。義隆は鬱ぎ込

むむというよりは空腹と何もできないことに苛立っている。

「くそっ！ ああ、なんかムカつくぜー！」

「ヨシタカはん、イライラするのやめいよ。うちら、みんな空腹やし、すぐケンカになるよ。実際、飛行機をおろしてもらえんのも、先におりてた人らがケンカして暴動になりかけたから、おろさん方針になつたみたいやし」

「そうだな……つい、イラつとするな……」

義隆は鮎美に背中を撫でられて少し落ち着いた。同性愛者ではあるけれど、当選してからの一年で男性と関わることも増え、どういうタッチをすると男性が落ち着き、触れすぎると誤解してくるというのを学びつつあった。陽湖も言う。

「よろしければ、いっしょに祈りませんか？ 気持ちが悪くなります」

「ちっ…この女、一発殴るか、2、3発、ぶち込んでやりたいぜ」

義隆が陽湖の身体を男らしい目で見ると、屋城が視線を遮るように立った。仕方がないので鮎美がフォローする。

「はいはい、あんたにはヒトミはんがおるんちゃうの？」

「さつき、あいつとはケンカした。しつこくネチネチ言うし」

「なにを？」

「宮本を叩くとき、ケツを触ったとか、そういう話だよ」

「……鷹姫の……」

「アユミン、その話とは別で宮ちゃんが、めっちゃ落ち込んでるよ」

「なんで？」

「さつき中国のユーチューブみたいなサイトにあった動画でさ。宮ちゃんがオシッコ漏らしてる姿が流れてた」

「なんで?! どんなん?!」

「ほら、これ」

鐘留がスマートフォンを見せてくれる。再生された動画は、臨検だと言って平宝が機内に入ってきたときのもので、平宝の背後にいた者の誰かが小型カメラをもっていたようで、まずは陽湖の姿を撮っていたけれど、途中で鷹姫が失禁してしまう姿に変わった。

「なんかバカにした風のコメントも、どんどん投稿されてるけど、漢字の意味は半分くらいしかわかんないし」

「……………鷹姫……………あんたのせい……………」

今度は鮎美が陽湖を睨んだ。

「……………ごめんなさい……………おつしやる通り、私のせいです……………」

「うちも、あんたにアダムの槍でも、ぶち込んでやりたいわ」

「……………どんな罰でも……………受けます……………同意します……………」

「ええ覚悟や」

鮎美の怒りに満ちた視線を屋城が遮る。

「マザー陽湖の行き過ぎた指導は認めます。私の責任です。私を罰してください」

「……………あかん、ついイライラする。……………はい、この話題は、おしまい。お腹へつてるとホンマあかんわ。なるべく怒る話題は無しでいい。呉越同舟は中国のことわざやし」

鮎美は感情を自制して意図して話題を変える。

「カネちゃん、台湾の被害は、どうなん？」

「やっぱり太平洋側に集中してるよ。10メートルクラスの津波が来たみたい。それが引いたと思ったら、今度はソロモンからの津波が時間差で来て、二度目でも、かなり犠牲が出る。けど、台湾は日本とは逆で大陸側の方が人口多いし発展してて、太平洋側は山が多いから、犠牲者数は少ないかな」

「そっか……………にしても、インターネットって、すごいな。こんな台湾なんかについて、日本の被害が、それなりにわかってしまうなんて。しかも、日本の状態ボコボコなのに」

「もともとインターネットっていうのは核攻撃にそなえて開発されたシステムだから」

「そうなん？」

「インターネット以前のコンピュータネットワークは、いわゆるマザーコンピュータがあって、その下に端末機がある感じだったから中枢が攻撃されて消えると、終わりだったの。でも、それじゃ核攻撃で一気に情報が遮断されちゃうから、そうならないように網の目みた

いに張り巡らそう、一部の地域が消滅しても、ぐるっと他を回って、つなげよう、つていうのが今のインターネットだから」

「へえ……核攻撃にそなえたシステムが、超大震災で役に立つやなんてねえ……」

感心しつつも鮎美は疲労を感じた。気が立っているけれど、眠くもある。

「これ以上は機内でゴチャゴチャしててもしゃーないし、何かあったときのため、もう遅い時間やし、とりあえず、みんな寝よか」

「そうだな」

義隆が頷き、機内会議は終了となり、鮎美は最後尾のシートに戻った。鷹姫は俯いて座り、鮎美が近くまで来たのに気づかない。

「……………」

「……………」

いつそ失禁動画のことは話題として触れない方がよいと思い、黙って鮎美は鷹姫の前を通り、隣に座った。窓際の知念は眠っている。鮎美の背後についてきていた介式も黙って通路の反対側のシートに座る。鮎美は長く眠るつもりなので、制服のリボンを解き、ブラウスのボタンを一つ外して胸元を楽にする。背中に手を回してブラジャーも外した。シートで座って寝ているうちにスカート裾を乱してしまつて知念を困惑させないように上着を腿にかける。

「うちは寝るわ。鷹姫も、しっかり寝ておき」

「……………」私は……………日本の恥です……………」

「そういう風に考えんとき。悪いのは陽湖ちゃんよ。さ、眠るよ」

「……………」もう……………消えてしまいたい……………」

「鷹姫……………。話を変えるけど」

わざと話題をそらすため、鮎美は窓を指した。

「ときどき飛んでいたり、おりてきたりするの、あれ戦闘機なんかかな？」

「……………」わかりません……………」

「おそろくそうだ」

介式が答えた。今も深夜なのに2機のジェット戦闘機が滑走路を

飛び立っていく。

「地震のとき戦闘機なんか飛ばして、どないすんの？　こんな暗いのに被害地域視察もできんやろ？」

「中国と台湾は一つであって一つでない。領空侵犯があるのだろう」

「……こんなときに……アホちやうか……」

「……………」

「寝よ」

鮎美は目を閉じて眠ることに集中した。おかげで外が明るくなる頃まで眠れた。座ったまま眠って腰が痛いので、中央の通路をしばらく歩く。同じように歩いている泰治が前にいた。

「タイジはん、おはようさん」

「ああ、おはよう。眠れた？」

「うん」

「いい度胸してるよ」

「あ…」

「ん？」

「なんでもないよ」

鮎美はブラジャーを外したままだったことを思い出し、トイレで直してからシートに戻った。まだ鷹姫は鬱ぎ込んでいる。機長からアナウンスがあり、食事が提供されることになった。搭乗口が開き、ダンボール箱に入った弁当のような物が運び込まれたので陽湖が数人の女子を選んで配給してくれる。鮎美たちの前に得体の知れない食べ物らしき何かがあった。雰囲気的に、どこかの屋台で急いで大量に作られ、そして配送が遅れて時間が経った物に見える。

「なんやのこれ？」

「なんなんだよ、これ？　食えるのか？」

泰治も困惑している。配られたのは広島焼きに餡かけしたような物で、しかも冷たい。冷たいので固まって一塊になっている。箸は無かった。フォークもスプーンも無い。どの生徒もためらっていたし、介式たちSPの分も配られたけれど、食べて逆に体調を崩さないかと

懸念している。一番に食べたのは義隆だった。

「うわあ……まあ、喰えるけど、……これは、熱々だったら美味かったかもなあ……冷めてるとゴミに近いなあ……けど、超腹減ってるから、うまいわ」

「……冷めたお好み焼きも、そのままでは、つらいもんなあ……」

鮎美が食べてみようとすると介式が言う。

「芹沢大臣、できれば我慢して食わずにいてほしい」

「……そうですね、下痢になっても、かなんし」

食べてみたい気持ちはあったけれど、イスラエル滞在中には食事が摂れていた鮎美は食わず、介式たちSPも食べなかった。鷹姫も食欲が無い様子で食べない。一部の女子たちも食べなかったので、それらは望む男子たちに再配給された。

「なんとか燃料補給してもらって日本に帰らんとあかんなあ」

鮎美がつぶやいたときA321へ軍用車両が3台も近づいてきた。

そして搭乗口から軍人が6名ほど入ってきて芹沢鮎美がいるかと英語で問うているので、介式は知念へ合図した。

「ごめんっす」

「え?」

急に鮎美は知念によって柔道技で首を絞められ、何の抵抗もできないうちに意識を失う。鷹姫が驚く。

「何を……うっ?!」

その鷹姫の首にも後ろから介式の腕が回ってきて、一瞬のうちに落とされた。ぐったりと二人の身体がシートに横たわる。

「打ち合わせ通り、知念と長瀬が残れ。学校教師のような顔をしていろ」

「はい」

そう言った介式は他の部下を連れて陽湖のところに行く。やはり再び最前列にいた陽湖は台湾の軍人たちにも鮎美だと思われる。その誤解を助長するように介式たちは、いかにも陽湖のボディガードだという顔で陽湖と軍人たちの間に立った。通訳が言ってくる。

「私たちは芹沢大臣を歓迎したいのです」

「……歓迎か……わかった。ただ、他の生徒たちは一刻も早く帰国させてやりたいとの大臣の意向がある。整備と燃料補給を頼めないか？」

「わかりました」

交渉が成立したので介式たちSPと屋城は陽湖を囲みながらA321をおりて空港ロビーに入った。陽湖がガラス越しにA321を振り返って言う。

「友人たちの出発を見守らせてください」

「30分はかかります」

通訳は早く連れて行きたい顔で言ってくる。陽湖は介式に求められていた芝居をする。

「どうか、出発を見守らせてください。友人たちが心配なのです。お願いします」

「……わかりました」

「……」

陽湖は祈った。整備と燃料補給が始まり、最低限の発電用しか供給してもらえなかったA321が満タンに燃料を入れてもらい、飛べる状態になった。陽湖は最後尾の窓を見た。もう失神させられていた鮎美と鷹姫は目を覚ましている。鮎美も、こちらを見ていて、目が合った。

「……」

「お元気で。神の加護と栄光が、あなたたちにあらんことを祈ります。アーメン」

「……」

機内の鮎美は黙って無表情だった。A321が滑走路に向けて動き出す。離陸位置につくと3割の生徒は無事の帰宅を祈った。鮎美は見えなくなった陽湖がいるターミナルを見続ける。

「……」

「芹沢大臣、シートに戻ってシートベルトを締めてください」

長瀬が言ったので、今まで鮎美は機体最後尾右側の中央シートに

座っていたけれど、ターミナルがある左側窓際に座ってシートベルトを締めた。介式たちがいなくなったのでシートは、いくつも空いている。隣に知念と長瀬が来た。A321が加速を始め、フワリと浮き上がる。またターミナルを振り返る。もう小さくて視認できないけれど、そこに陽湖と介式たちがいて、こちらを見ているだろうと思った。

「……………殺されはせんやろ……………北朝鮮とはちやうし……………」

鮎美は胸につけているブルーリボンのバッチを指先で撫でた。もう陽湖たちは雲の下で見えなくなる。

「そういえば北朝鮮では、日本の地震、どう報道してんのかなあ……………」

何気なく思ったけれど、鐘留が前席斜め前から言ってくる。

「北朝鮮の報道は見てないけど、韓国では、日本の大震災をお祝いします、って横断幕を出してる人もいたらしいよ」

「……………ああ……………神よ！」

鮎美が空で天を仰いだので鐘留が驚く。

「ちよつ、とうとうアホが感染したの?!」

「神サンよ！ もう少し、ちゃんと人間を造らんかい！ 欠陥だらけやん！」

叫んだ鮎美は冷静になる。

「異なる民族の死滅を願うのは、今までも人類がやってきたことやし、そもそも種は、そういう風に争って競い合い進化してきたんや。横断幕くらい可愛いもんやよ。アホらし」

「アユミンって基本的に進化論で世界をとらえるよね」

「そうよ。せやから、日本に帰ったら、やることいっぱいや。もう一部で、うちのこと内閣総理大臣臨時代理って言い出してるみたいやし頑張るしかないわ。ってことで力ネちゃんに頼みたいねんけど、情報収集は続けてほしいけど、うちのおばあちゃんとか、うちにとって大事な人についての安否情報は朗報しか、伝えんといて」

「朗報しか？ いいニュースしか聞かないの？」

「そうよ。知ってもダメーჯを受けるだけのニュースは教えんとい

て。震災直後の三日、一週間が勝負なんよ。すでに台湾なんかに寄り道して出遅れてる分、少しでも政府を立て直さな、どんだん混乱するもん。うちが中心にならざるをえんにやったら、気になるけど気にせん方がいいことやもん」

「……そつか……そういうのも……いいかもね……」

鐘留は離陸寸前までネット接続していて琵琶湖でも津波が発生し数百人の死傷者が出た情報を得ていたけれど、黙っていることにした。全国的に死者数が多すぎて、いまだ氏名の発表などはされていない。その確認作業さえ進んでいない様子だった。

「……ぐすつ……介式師範……うう……」

鷹姫が泣いているし、知念も悔やんだ顔をしている。

「介式警部がオレと長瀬警部補だけ行かせてくれたのは、長瀬警部補は半年前に結婚してたし、オレにも紀子がいたから……ぐすつ……」

「長瀬はん、結婚してはったんや？」

「はい」

「結婚指輪してへんやん？」

鮎美は長瀬の左手を再確認した。指輪は一つもしていない。そして一時は黄色ローブだった長瀬も今はSPらしいスーツに戻っている。

「単純に指輪をつけると、指がムズムズして気持ち悪いので結婚式当日しかしていません」

「そういう人もいるんやね」

知念がまじめな顔で言ってくる。

「しばらくは芹沢大臣は月谷陽湖さんとして振る舞ってほしいっす」

「そうやね。そうするわ」

鮎美は髪を左右に分けてまとめると、ツインテールにした。陽湖はティアラをつける都合上、アップにしていたけれど、普段の陽湖はツインテールだったので鮎美が真似をしてツインテールにすると、クラスメートでも間違えそうなほど似る。それから議員バッチは内ポケットに隠し、陽湖の制服についてある議院記章を借りた。変装が終

わり、また知念が言う。

「月谷さんから伝言があります。こうなったとき、伝えてほしいと、あらかじめ聴いていたつす」

「そう……それで？」

「本当に私は、ひどいことをして、どんなに謝っても謝りきれません。これで償いになるとは思いませんが、シスター鮎美は日本にとって必要な人です。苦難ばかりでも、どうか頑張ってください。そして一つだけ言わせてください。自分が最高権力者だと感じたとき、私は権力に酔い、狂いました。権力は人を簡単に狂わせます。自分が言うことは何でも正しい、自分の判断こそ最高、他人は自分に従えばいい、そんな悪魔の酩酊です。私はその酔いが醒めたとき、悔やみきれないほど悔い、今も悔いています。私と同じ失敗だけは、どうかしないでください。ご活躍と日本の復興、全身全霊をもって祈念いたします。……、以上です」

「……陽湖ちゃん……あんたの気持ちはわかったよ。おおきにな」

鮎美は台湾の方向を振り返り、そして前を見る。前を見て、これらのことを考えようとして、かたわらで泣いている鷹姫に目をやった。

「鷹姫、いつまでも泣いてるときよ。介式はんにも、また会えるって」

鮎美はシートベルトを外し、長瀬と知念の前を通らせてもらい、鷹姫の隣りへ戻った。

「……うう……ぐすつ……」

「鷹姫、ほら」

鮎美はハンカチで鷹姫の涙を拭いた。それでも、また濡れる。泣きながら鷹姫が言う。

「……芹沢先生の秘書を……辞めさせて……ください……」

「な……なんでよ？」

「私には、その資格がありません……ぐすつ……ううつ……」

「鷹姫……いろいろ気にしすぎやって。あんたは最高の秘書よ」

「……いいえ……恥ばかりの……愚か者です……」

「そんなことないって」

「いいえ……いいえ、あるのです……ずっと、黙っていました……卑怯にも……ずっと隠していました……私には発達障害の疑いがあるのです」

「発達障害……」

鮎美は自分を刺した大津田のことを思い出した。詳しい病名までは知らされていないけれど、ラブレターを無視しただけで凶行におよんだ大津田には発達障害があったらしいことは忘れてたくても忘れていない。それは鮎美も鷹姫も同じだった。

「私は……ううっ……小学校の頃に発達障害ではないかと……ぐすっ……検査を受けています」

「……なんでよ？ 鷹姫は普通やん」

「……私は……まわりの空気を読むということが……できません……」

「それは……そやけど」

「興味が偏っていて、好きなことに拘り過ぎます。人との距離感、関係が一方的で……拒絶的であることが多いのです……」

「……たしかに」

「過去のこととはよく覚えていますが、未来を想像し新しいことをするのも苦手です」

「そう言われると……」

もともと鷹姫はクラスで浮いていたし、まわりの空気を読むことは少なく、剣道を極めたし、戦国時代にかかわることの記憶も豊富で、また出された課題である学校の勉強や党支部での政治の勉強は優秀だったけれど、鮎美のように新しい発想をすることは少ないし、スケジュール管理のような定型なことは得意でも、未来や状況の変化に対応するのは苦手で、なにより人間関係は極端に一方的で、鮎美に対しても当初は見下す態度だったのに、議員と秘書という関係になると、見上げる態度に変わり、他のクラスメートに対しても、たいていは見下す態度で接し、教師や介式などの目上に対してはきちんと敬って接するけれど、おおよそ対等な人間関係というものを築くことは少なく、相手を自分より上か、下かという目線で見てきている。

「ぐすつ……知識はあっても、一般人が備える常識が備わっていない部分があります……言葉を言葉通りにとらえ、裏にある意味が読めないことがあります……」

「……………」

普通の女子は年頃になれば無駄毛を気にするし、平気で服を脱いだりしないのに、鷹姫は夏でも腋を剃らないし、裸を見られることへの抵抗も欠けていて、また児童だったとはいえ、おもらしをすれば周囲の空気が変わって問題や雰囲気改善することがあつたとしても、おもらしを繰り返すことは普通はしない。許嫁にしても、今どきの女子であれば、たまたま好きな男子と組み合わせられる場合以外は抵抗をもつのが普通なのに、好きでも嫌いでもないで結婚し、剣道場を続けていくという決まり切った未来を受け入れていた。秘書業務においても、夏子や石永らと陳情の帰りに急遽外泊することになったとき、みんなदैいっしょに泊まろう、という言葉を手面通りに受け止め、男女別にせず大部屋を予約したりしている。それらは普通ではないと、鮎美も何度も感じている。

「私は変です……普通の人から見ても……人と違います……」

「……………普通の女子高生では……ないとは思ってたけど……」

話し方も古風で、それが礼儀正しいのか、癖や趣味なのか、判然としないものの、ごく普通の女子高生から、かけ離れていることは確かだった。

「……ぐすつ……そして、ときに過去の嫌な出来事がフラッシュバックして情緒不安定になります……母を亡くしたこと……それに甘えて、おもらしなどしていたこと……」

「お母さんを亡くすのは、誰にとつても、ものすごい嫌なことやと思うよ。まして幼児期にお母さんが死ぬのって、一億人の他人が死ぬよりショックやん」

そして、今まさに情緒不安定なんやね、陽湖ちゃんのせいで、と鮎美は泣きながら話す鷹姫をかわいそうに思った。また鷹姫が涙を零す。

「……………でも……私は……普通ではありません……きつと、発達障害で

す…」

「……………」

「こんな私は……ううっ……秘書に相応しくありません……辞めさせてください……」

「……ちなみに、その検査で疑われた障害の病名は何なん？」

「アスペルガー障害……もしくは……高機能自閉症です」

「そう……それが、さっき言うた特徴にあてはまるんや」

「はい」

「そんなん気にせんときよ。ただの個性やん。うちが同性愛者なんど、いっしょやと思てみ」

「……いえ……違います……障害は障害です……私に秘書たる資格も気力もありません。まして、総理代理の秘書など……とても……つとまりません……ぐすっ……ううっ……どうぞ、辞めさせてください……お許しください……」

鷹姫がシートからおり、床に土下座してきた。

「ちよっ……鷹姫、そんなことして……」

「辞めさせてください……お願いです」

「鷹姫……」

「もう無理です……私には……無理です……」

「……………」
「……うちも総理代理なんて、ちゃんと勤まるか、不安でいっぱいよ。けど、ここは踏ん張りどころやん？ いっしょに頑張つてよ」

鮎美は床に膝を着いて、土下座している鷹姫の両肩を握って頭をあげさせるけれど、鷹姫はイヤイヤと首を横に振る。

「いいえ……いいえ……私にはできません……無理です……辞めさせてください……うう……」

「鷹姫………うちにも支えてくれる人が欲しいのよ。地元にいた静江はんらかつて無傷とは限らんし。たちまち、そばにいてくれる鷹姫が、どんなに心の支えになるか、わかってよ、ね？」

「うっ……ううっ……ううっ……無理です……ぐすっ……ひぐっ……嫌です……うぐっ……辞めさせて……ひう……あうう……もう嫌っ……帰りたい……お家に帰りたい……島のお家に帰りたいです……うう、うわああん！」

子供のように鷹姫が泣き出した。

「鷹姫……」

「あああん！ もう帰りたいッ！ うわあああん！ あああん！ お母様ああん！」

機内に鷹姫の泣き声が響き渡る。そのために何人かの女子が同じく帰りたい気持ちになって泣き出した。

「アタシも帰りたいよ……ぐすっ……ママ……パパ……」

「私も……ううっ……」

「仁美まで、泣くなよ。すぐ帰れるって。オレらの地域は地震の影響ない感じだしさ」

慰める方もつらそうだった。

「鷹姫、そんな大声で……みんなまで、つらい気持ちになるから……」

「うわああん！ ああああん！」

大声で泣き続ける鷹姫は胎児のように身体を丸くして、自分の両膝を抱いた。そのせいで下着が丸出しになるのにもかまっていないうし、下着の股間がジワジワと濡れてきて、おもらしを始めたので鮎美は肩を握っていた手を離れた。

「……鷹姫……こんな……あんだ……見たくなかった……」

恋が冷めるのを感じた。詩織と結婚していても、まだ鷹姫に恋していた。剣道で無敵の強さを誇って、いつも凜としていて、まるで侍のようで、そんな鷹姫に強く惹かれていたのに、この窮地になって、辞めたい、帰りたいと言って大声で泣き、オシッコまで垂らしている姿は幻滅だった。

「……くっ……」

こんな時に……この土壇場で……こんな腑抜けた姿……見たくなかった……もうええよ……うちの前から消えて、あんたは邪魔なだけやわ……好きになるんやなかった……、と鮎美は愛想が尽きて言う。

「わかったよ。辞めていいよ。鷹姫は家に帰り。今日まで、ありがとうな。鷹姫が家に帰れるよう、ちゃんとするから安心して泣かんと

待っておいで」

鮎美は片腕と恋を同時に喪った心地だったけれど、それでも優しくポンポンと鷹姫の頭を撫でた。抱きしめると自分も泣いてしまいそうなので意識して感情を抑え、日本のことを考える。帰れば、中央行政機関の再編をしなければならない、霞ヶ関は消失している。ハコ、モノ、ヒト、カネ、どうやって確保するか、問題は山積みで初動が肝心だった。

「おっ！ 戦闘機だ！」

窓の外を見ていた貴久が言った。義隆が興味をもつ。

「どれ？ ああ、あれは……………J-10Bだな」

義隆は機体の特徴から確信的に機種を言った。2機の戦闘機がA321の左右に平行飛行してきて、窓から、よく見えるほど近い。鮎美も見た。

「ジェイテン……………ふーん……………飛んでる戦闘機なんて初めてみるわ」

「あの独特なエアインタークと、ベントラルフインの配置、水滴型キヤノピー、間違いない。J-10Bだ」

「まだ沖縄の手前やのに、わざわざ自衛隊が来てくれたんや。うちが乗ってるの知ってるのかな？」

「……………芹沢……………やっぱ、お前が総理だとか不安すぎる。いや、危険すぎる。どう見たって中国軍だろ！」

「え、でも、ジェイテンやろ？ ジェイって言うたら日本やん。ジェトロもジャクサもジャパンのJよ」

女子たちは鮎美と同じ程度の認識だったけれど、貴久もタメ息をつきながら言う。

「はああ……………日本の戦闘機はFで始まるよ。まあ、アメリカの系列だけだ」

「ほな、中国軍が、なんで、ここに……………ろくなことやない気がするけど……………」

鮎美の言葉は機長のアナウンスで遮られた。呼ばれた鮎美は操縦席に行った。副機長が往路で鳩山や谷柿と通信したときのヘッドセットを渡してくれる。どうやら平行飛行している戦闘機から通信

を求められているようだったので、ともかくは応じる。

「もしもし、私は生徒代表の月谷陽湖です」

鮎美は英語で嘘をついた。

「我々は中国人民解放軍だ」

向こうも英語で言ってくるし、アジア人同志の英会話なので発音は聞き取りやすいけれど、相手の声は酸素マスクをしているせいで、くぐもって聞こえる。

「はい、こんにちは。お会いできて光栄です」

「月谷ではなく芹沢鮎美と話がしたい」

「すみません。この飛行機にシスター鮎美は乗っておりません」

「嘘をつくな。乗っているはずだ」

「私は神に仕える者、嘘はつきません。真実、この飛行機に芹沢鮎美は乗っておりません」

「……」

向こうのパイロットが、こちらを見ているけれど、大きなヘルメットをつけているので鮎美には相手の顔は見えない。相手からも鮎美の顔など、いくら接近していても見えていないだろうと判断し、あえて堂々と陽湖がやりそうなポーズで祈りの形に手を組んだ。

「なぜ、芹沢鮎美が乗っていない？」

「台湾で歓迎するとおっしゃられましたので、降りて行かれました」

「……………。少し待て。確認する」

「はい……………」

やばいかな、中国と台湾って、どのくらい情報やりとりしてんのかな、もう陽湖ちゃんの正体バレてるかな、バレても、そんな速攻で中国にも伝わるんかな、確認するって、どこにやろ、自分の上司やろな、ってことは中国軍の基地とかで、その指揮官がどう判断するかやね、と鮎美は思考しつつ、台湾を出発した時間から考えて、そろそろ沖縄の日本領空に入るはずだとも期待する。また中国軍パイロットが通信してきた。

「君たちを保護する。我々の誘導に従え」

「……」

とりあえず捕まえるちゅーの、おおざっぱやな、けど正解や、くつ、どないしょ、と鮎美は左手を唇にあてて考える。

「私たちは地震に遭った家族のもとへ急いでおります。一秒でも早く日本へ帰りたいのです」

「日本は危険だ。原発から拡がった放射能で、とても危険だ。だから、保護する」

「……………」

たしかに原発にも津波が襲ってきたって情報は見たけど、放射能の情報までは知らん……そんな情報あんのかな……けど、わざわざ親切に保護してくれるるもんやろか、っていうか先に芹沢鮎美を出せ、とか言うたし、基本的に平宝と同じやろ、それにチェリノブイリの事故でも間近にいた人間は亡くなってるけど、10キロ20キロも離れてたら平気やん、とりあえず日本海側の空港に降りる予定やし問題ないやろ、ただモロに拒絶すると余計に、向こうも強引なこと言うかもしれんし、ここはゆっくり返事しよ、あと少して沖縄のはずやし、と鮎美は時間稼ぎを試みる。

「保護していただいた場合、どうしてくださるのですか？」

「とても歓迎する」

「……………」

嘘丸出しやん！ とつつこみたいのを鮎美は我慢した。

「我々の誘導に従え」

「どこへ誘導してくださるのですか？」

「浙江省の義烏空港だ」

「それは、ぜひ行ってみたいのですが、まもなく沖縄が見えます。沖縄に母親がいる人も乗っています。どうか、地上の様子を観察する時間をください」

「……………」 沖縄も原発が壊れて放射能で危険だ」

「……………」 そうなのですか……………」

沖縄に原発は無かった気がするんやけど……きつと無いよ、沖縄に原発は……、と鮎美は国内の原発の位置を思い出してみるけれど、やはり沖縄にはない気がする。印象的なのは隣県の福井県敦賀あたり

に関西便利電力の原発が多数あることだった。

「繰り返す。我々の誘導に従え」

「少しだけ沖繩を見せてください。危険であれば離れてくださってけっこうです。故郷を見たいと泣いている人がいます」

「……………危険だ。早く誘導に従え。危険だ」

鮎美たちの視界に沖繩本島が入ってくる。鮎美は機長に沖繩上空を低空で旋回するように頼んだ。

「危険だ。早く離れろ」

「……………どの原発が壊れたのでしょうか……………わかりますか？」

っていうか、もう領空内ちゃうん、いつまでついてくんよ、と鮎美は沖繩本島を観察しつつ焦った。まさか領空内まで入ってくるとは思わなかった。けれど、沖繩本島を見ておきたいのは真実なので、しっかりと観察する。沖繩を襲ったのは20メートル前後の津波で那覇空港には飛行機や自動車、建物の残骸などが散乱している。大きな船さえ、陸上に打ち上げられていた。

「……………」

胸が痛くなった。

「危険だ。早く誘導に従え」

「……………ぐすつ…」

かなり胸が痛い。死体さえ転がっているように見える。あれが死体でなく、ただの漂流物であってほしいと思う。そして泣きそうなので、いっそ泣いておくことにした。

「ううつ……………ぐすつ……………ああつ……………街が……………ううつ……………人が……………」

「……………元氣を出せ」

「……………」

女の子への優しさはあるんやね、と鮎美は中国軍パイロットに人間味を感じた。

「ありがとうございます」

「もう、いいだろう。西へ転進しろ」

「少し機長とお話しします」

鮎美は機長に頼み、鹿児島方向へ進んでもらった。当然、通信が

入ってくる。

「どこへ行くつもりだ？」

「鹿児島が無事だという情報がありましたので、そちらへ向かいます」

「ダメだ。我々の誘導に従え」

平行飛行していたJ-10Bが加速して鮎美たちの前方に出ると、翼下の空対空ミサイルを見せつけるように旋回して機体の腹側を向けてきたけれど、鮎美にとっては戦闘機は常にミサイルがついているものという認識で、それが脅しだと感じる知識が無かった。

「西へ転進しろ」

「……義鳥空港までは何分ですか？」

「約1時間だ」

「私たちの燃料は残り少ないのです。台湾で、わずかにしかいただけませんでした」

本当は満タンで、まだ5000キロは飛べたけれど、鮎美は嘘を重ねて時間稼ぎを試みる。

「鹿児島と距離は変わらない。転進しろ」

「……」

ホンマかいな、そもそも浙江省って、どこやねん、と鮎美は中国の地図など覚えていないので思いつつ、話を変える。

「私のクラスメートが言っていたのですが、乗っていらっしゃる、その戦闘機はジェイテンビーというのですか？」

「……ほオ、わかるのか。フフ、否定はしない」

かなり誇らしげな声が返ってきた。せっかくなので鮎美は男性心理をくすぐることにする。

「それに乗っていらっしゃるといふことは、かなりのエリートなのですね」

「そうだ。厳しい訓練を積んだ者だけが搭乗できる」

「すごいですね。カッコいい」

男性に対してのカッコいいという概念そのものが鮎美には理解できていないけれど、一応は心を込めて言ってみた。

「フフ」

満更でもない様子で、また接近してくる。

「陽湖といったな。お前の顔も見てみたいものだ。早く西へ転進しろ。悪いようにはしない。可愛がってやる」

「……」

男の人の単純さって人類共通なんやね、女の子への評価はまず顔やし、次おっぱいでお尻、まあ、うちの女子への評価も似たようなもんやけど、と鮎美は女子を抱きたい気持ちには共感しつつ、さらなる時間稼ぎを試みる。

「あなたの名前を覚えていただくことはできますか？」

「金胡晋（きんこしん） 上尉だ」

「私は18歳ですが、金さんは、おいくつですか？」

「オレは……少し待て」

胡晋が別の無線を受けているような気配があつて、しばらくして言うてくる。

「陽湖、おしゃべりは終わりだ。ただちに西へ転進しろ」

「え？ どうしてですか？」

「ただちに西へ転進しろ」

またJ-10Bが加速して前方へ出ると機体腹側を見せてくる。さきほどよりもA321との距離が近く、意味がわかつていない鮎美も操縦席にいる機長と副機長の緊張感で、なんらかの威嚇的な行動なのだと悟った。

「ただちに西へ転進しろ」

「わかりました。台湾にいるシスター鮎美と連絡をとってみます」

そんな手段は無かったけれど、時間稼ぎで言ってみて、通信をやめ、機長に鹿児島までの時間を聞いた。あと25分だと言われる。

「……………」

「ただちに西へ転進しろ」

再び平行飛行で接近してきている。機長が危険だと胡晋へ警告しているけれど、離れてくれない。鮎美でさえ威圧感を覚えた。

「ただちに西へ転進しろ」

「ぐすつ……私は日本へ帰りたいです」

涙声で言ってみた。

「ただちに西へ転進しろ」

もう女の子の武器は通用しなかった。また胡晋がA321の前方に出ると、今度は腹側を見せるのでなく減速して距離をつめ、進路を妨害してくる。じわじわとJ-10BとA321の距離が近づくと、操縦席にいるのに鮎美たちはジェットエンジンの熱と振動を感じ、機長が危険と判断して高度をさげてかわした。すぐに再び胡晋が前に回ってくる。

「警告する。ただちに西へ転進しろ」

「……。金さんに家族はいますか？」

「ただちに西へ転進しろ」

「私の母は妊娠しています。中国へ避難する前に顔を見に行きたいのです。お願いします」

「ただちに西へ転進しろ。これは警告だ」

そう言った直後にJ-10Bが23mm機関砲を発砲した。

ジィー！

あまりに連発速度が速いので一つの音に聞こえつつ、撃ち出された弾丸が前方で流れ星のように飛んでいる。鮎美は息がつかまるような圧迫感を覚え、背筋が冷たくなった。それは機長も同じだったように、A321が民間機であることを繰り返し、伝えている。

「ただちに西へ転進しろ。これが最期警告だ」

「……この飛行機は以前に着陸に失敗して後部に損傷があります。中国の空港に迷惑がかかるかもしれません」

「転進しろー！」

前方に出てきたJ-10Bが距離をつめた直後に強烈に加速し、ジェットエンジンの熱風をA321の操縦席に浴びせてきた。

「熱っ……」

さきほどよりも熱を感じたしA321の風防が損傷しないか心配になるほどの衝撃も感じた。機長が胡晋へ返信し西へ進路をとった。鮎美は抗議したけれど、これ以上は危険だと言われると従うしかない。

い。

「……………くっ……………」

どないしょ、中国でも、うちは月谷陽湖です、と通すか、それとも、いずれバレることやし、素直に言うか、あかん、うちは閣僚中、唯一生存が確認されてるもんや、それをわかって拉致る気なんや、平宝がちよつかい出しにきたときのレベルとは、もうちやう、そやったら、どうする、機長に背後からチョークスリーパーかけて副機長を脅すか、それとも二人ともを眠らすか、無理や、うちの技量では不意打ちで一人がせいぜい、こんな時に鷹姫がいてくれたら……………鷹姫……………、鮎美が、つらさで涙を浮かべたとき、前方右側から別の戦闘機が4機も接近してきた。

「くっ……………応援まで……………」

鮎美は胡晋の援軍だと思っただけけれど、通信が入ってくる。

「こちらは日本航空自衛隊です」

「自衛隊……………」

鮎美は英語に対して思わず日本語で答えていた。鮎美にはわからないけれど現れた4機はF-15DJだった。

「中国軍機に告ぐ。意図を明らかにせよ」

「……………。我々は民間機を保護している」

「うちは……………私たちは日本へ帰りたいのです」

日本語で鮎美は言った。自衛隊機も日本語で問うてくる。

「芹沢鮎美総代理代理ですか？」

「……………。いえ、その友人の月谷陽湖です。ですが、彼女の所在を知っています」

鮎美は嘘を突き通すことにした。ここで正体がバレると、胡晋の反応も懸念されたし、まだ台湾まで近いので通信が傍受される可能性も考えた。

「金さん、……………ここまで、ありがとうございます。私たちは日本へ帰りませう」

心にもない謝辞だったけれど、陽湖なら言うかもしれないと考えたのと、胡晋のメンツを立てた方が素直に引き下がってくれるかもしれない

ないと期待していった。

「ちっ…」

舌打ちされたけれど、さきほどまでのような威嚇行動はしてこなくなり、A321は九州方向へと進路を戻した。しばらく2機のJ-10Bは平行飛行していたけれど、日本領空に入る前には消えた。自衛隊機が問うてくる。

「どちらの空港へ行かれるのですか？」

「決まっています。とりあえず日本海側でおりられるところを探す予定ですが、できれば関西に近いところがよいのです」

「では、小松を目指してください。あと、新田原基地司令より通信があります。対応してください」

すぐに航空通信が入ってくる。

「新田原基地司令の岩本信一1等空佐です。芹沢鮎美総代理代理の所在についてご存じというのは本当ですか？」

「はい、本当です」

「彼女は、どこに？」

「この通信が傍受される可能性はありますか？」

「……あります」

「では申し上げられません」

「……。だが、彼女を早く見つけないと困ったことになりかねない。

小松ではなく新田原へ一度、おりていただけませんか？」

「困ったこととは何ですか？」

「傍受の可能性を考えると申せません。ですが、非常に大切なことです」

「わかりました」

鮎美たちのA321は宮崎県にある新田原基地に着陸する。宮崎県の海岸線には高知県よりは低かったものの高さ40メートルを超える津波が襲っていて、沿岸部は壊滅している。新田原基地は標高79メートルの位置にあり、幸いにも損傷していなかった。着陸中に義隆が叫ぶ。

「飛行教導群が無事だった。おっしや！ 日本、終わってねえぜ！」

「……ヨシタカはん、それが何なんか説明してもらえると、うれしいんやけど。一応は防衛白書で見かけたことはあるけど、そんなに重要なもんなん？」

「戦闘機パイロットの中でもエリート中のエリートが集まってる隊だよ。他の隊に指導するための隊だから、ここが日本のトップ集団なんだ」

さらに義隆は興奮気味に色々と言ってくれたけれど、専門用語が多すぎて鮎美の脳には残らなかった。とはいえ、朗報だとは判断して搭乗口が開くと、鮎美と知念、長瀬の三人でおりる。純粋な軍用の空港であり、民間機のためのターミナルなどないのでタラップを足でおりました。時刻は午前11時で日は高く、3月のわりに寒くないものの風が強く、鮎美のスカートが舞ったので手で押さえる。車両で迎えが来て、基地司令がいる建物へ案内された。

「基地司令の岩本です」

岩本に続き、もう一人いた見知った男性が挨拶してくる。

「県知事臨時代行の南国原で……ああ?! 芹沢さん!!」

南国原が鮎美の顔を見て気づいた。

「どうも。……芹沢です。岩本さん、嘘について、すみませんでした」

頭をさげた鮎美が議院記章を外して議員バッチに付け替える。ツインテールにしていた髪もおろした。それで岩本もテレビで見たことのある鮎美を思い出した。

「あ、……本人だ……所在を知るもなにも、ここに……」

「すみません。うちが乗っているとわかった場合の中国側の反応が読めず、友人の名をかたりました」

「なるほど。たしかに、それが賢明な判断です」

岩本と鮎美が握手し、ついでに南国原とも握手する。

「南国原先生、どうも、お久しぶりです」

「ええ、お久しぶり」

「あの、県知事臨時代行というのは？」

「芹沢さんと似たような状況なんですよ。たまたま帰郷していて、そ

してボクが辞めた後の選挙で知事になっていた人と副知事、さらに県議会の議長副議長まで津波のために行方不明で、法的な根拠はないけれど、ともかくもボクが、ここで行政の長として仮に権限を執っています」

「そうやったんですか。ご苦労様です」

「もしよければ、芹沢さん、いや、芹沢総代理代理からボクが宮崎県の知事を代行することを承認してほしい。事態が事態なので自衛隊にも県内各地へ出動要請を出しているけれど、そもそも今のボクは法的には、ただの無職なんだ。この基地には去年、口蹄疫で処分した家畜の埋却を頼んだよしみもあって岩本司令にもよくしてもらっているけれど、総代理代理の口から承認いただけると、いろいろやりやすい。お願いします」

「わかりました。南国原先生を県知事の臨時代行として承認します」

「ありがとう」

「それで、岩本司令、うちが見つからないと困ったことになる、というのは？」

「はい。現在、自衛隊の指揮が二分されているのです。一つは小松基地から司令してくる三島氏、もう一つは洋上の巡視船しきしまから指揮を執る畑母神都知事。三島氏は陸自を中心として指揮下におさめ、畑母神都知事は海自を中心としており、この両者が我々空自へ協力するよう別々に言ってくるのです」

「それは、また……こんなときに……」

「こんなときに権力争いをしている場合でないことは二人とも承知しているようで、両者は協力し合っているのですが、どちらが上かということでは一致せず、いずれ険悪になるかもしれません。法的根拠のあるトップが決まれば、おさまるかと思えます。ここに芹沢鮎美総代理を発見し無事であった発表させてください」

「……………」

「何か不都合が？」

「……私の友人を台湾に置いてきました。芹沢鮎美の身代わりとし

て。いまだ彼女が芹沢鮎美を名乗っているなら、嘘であったことが台湾政府にバレます」

「それは……」

「けれど、冷酷ですが、それも覚悟の上のことです。発表してください。その前に、現在わかっている状況を教えていただけますか？」

「はっ！」

岩本が九州地方の被害状況と、わかっている範囲の全国の被害を教えてください。加えて自衛隊の救助活動の進行状況も教えてもらい、それに1時間かかった。

「わかりました。ともかくも小松に向かいます。私の無事は小松基地への着陸後に発表してください」

「はっ。離陸前に用意するものはありますか？」

「………。いえ」

鮎美自身も生徒たちも空腹だったけれど、言わないことにした。言えれば出発が、また1時間は遅れるし、宮崎県は沿岸部の道路に被害を受けていて物流が山側のみになっている。ほとんど被害の無い石川県や福井県に到着するまで我慢することにした。再びA321に搭乗し離陸すると4機の戦闘機が護衛についでくれた。四国を飛び越え淡路島上空になると、鮎美たちも帰ってきたという気持ちになる。

「お、護衛の交替か」

ずっと窓の外の戦闘機を見ていた義隆が言った。4機の戦闘機に、さらに4機の戦闘機が合流してきている。

「小松の303飛行隊か」

「あんだ、よくわかるなあ、まったく同じ戦闘機に見えるけど」

「同じF-15DJだけど部隊マークが違うんだ」

「ふーん……あ、呼ばれてる」

また鮎美は機長から操縦席に呼ばれた。もう慣れたので、すぐにヘッドセットをつけて通信する。

「もしもし、生徒代表の月谷陽湖です」

「こちらは小松303飛行隊プリースト、芹沢鮎美総代理代理について

の情報を教えてほしいと、三島氏から言われています。ご存じですか？」

「はい」

「総理代理は、どこに？」

「着陸後に告げます」

「わかりました。護衛を交替します」

話しているうちに琵琶湖上空になる。高々度からは平穩そのものに見えて心から安堵した。

「よかった。……けど、自分の地域……自分の国に被害が無ければ、それでええなんて……人間は……ホンマに勝手なもんや。こんなときに領空侵犯やら、ちよつとした移動にまで護衛がいるやなんて……。それぞれの立場の違い……。……それに鷹姫……。もう、立ち直れへんのかな……」

鮎美は着陸まで鷹姫のことを考えた。着陸すれば総理代理として忙殺されるはずで、生徒たちはバスか何かで帰郷させるつもりではないかもしれない。もし鮎美が島に帰るなら、もう二度と鷹姫と会うことはないかもしれない。もし鮎美が島に帰れる日があっても、鷹姫は自分を恥だと思つて顔を出さない気がする。

「……鷹姫……。陽湖ちゃんに、されたことで、それほど……」

鷹姫の立場になつて気持ちを考えて、あれだけ打ち拉がれているのが、わからなくもない。鷹姫自身、凜とした自分を保つことにプライドもあつたらうに、その芯を破壊するように陽湖は責めたし、あれだけ嫌がつて二度とすまいと誓つたおもしろしを学年みんなの前で何度も強制されて、しかも手足の自由がなかった。鮎美も侮辱的な姿勢で拘束されたけれど、松田川の治療を受けたときにも拘束は体験したので少しは慣れていたし、鮎美は30分おきに外してもらえた。鷹姫は心が挫けるまで、ずっと拘束されていたし、自分の強さに頼る心も大きかったはずなのに手も足も出せない状況にされて、叩かれ、水を飲まされ、失禁して泣き出しても罵られ続けていたらしい。途中着陸した中国では平宝たちの前でも失禁してしまい、その動画がネットで万を超えて再生されている。さらには鮎美の同性愛を否定する言

動まで強制され、心をねじ曲げられている。なのに鮎美は復讐を後回しにして、当座は陽湖と協力してしまった。鷹姫は陽湖がズリ落ちた額のティアラを直すために手をあげただけでビクリとして失禁するほど怯えていた。腕力では陽湖など一瞬で叩き伏せられるはずの鷹姫が、そこまで怯えている自分を、どれだけ強く恥じたか、想像を絶した。おかげで黙っていた幼少期のおもらし癖や、発達障害を疑われたことまで告白して、秘書を辞めたいと言っている。

「辞めさせてあげるしか……ないかな……限界超えてイジメられたんやし……」

最後尾のシートに戻ると、鷹姫は制服の上着を頭にかぶって顔を隠している。それが逮捕された容疑者のようで滑稽に見えるということにさえ気が回っていない様子で震えているので泣いているのだとわかる。ときおり他の女子が来て、罵ったことを謝ったりするけれど、彼女たちの罪悪感を軽くすることはできても、鷹姫の傷ついた心には余計に痛みを与えるようで鮎美は睨んで追い返しておいた。ここまで鷹姫が傷ついていると、たとえ陽湖が台湾で輪姦されていても自業自得としか思えない。ただ、もしも介式まで、そんな目に遭っているとしたら鮎美の心も痛むし、介式がいなくなってしまったことも鷹姫には大きなダメージに見えた。また、別の女子が鷹姫へ謝りに来たけれど、鮎美が睨んで追い払う。そんな空気を読まずに義隆が言ってくる。

「宮本さ。いつまで泣いてんだよ？ もう立ち直れよ」

「あんたも叩くのに参加して、よう言うなあ」

「悪かったつて。あとさあ、発達障害のこと気にするなよ。実はオレも発達障害の検査を受けさせられたことがあるし」

「え？　なんでよ？　ヨシタカはんも普通やん」

「オレさ、全校集会で整列してるのとか苦手だし。物理とかの理系は成績いいけど文系はサッパリだし。興味あることは覚えるけど、興味ないことはスルーなんだ。あと空気を読まないどころか、あえて乱すし」

「あく……そういう感じはあるね。けど、単にヤンチャなだけちゃう

？」

「って思うよな。なのに宮本と同じアスペとか、高機能自閉症って言われた。まあ、疑い止まりだったし、宮本も疑い止まりなら、それでいいじゃないか。確定診断だったとしても、それで自分が変わるわけじゃないし」

由香里も話に入ってくる。

「私も中学で発達障害とか言われたよ。あれって教師が従わない生徒を、とりあえず弾こうとしたり、自分の指導が悪いわけじゃないって言い訳するために検査を勧めてる感じするし。マジム力つく」

「由香里はんは、なんで？ 普通に女子として空気読んでると思うけど？」

「単に中一するとき初エッチした先輩に捨てられて自棄になって6人くらい男をチェンジして、どんどん遊んでたら、教師が親と相談して検査に持ち込みやがった」

「そんな理由で……。むしろ、ヨシタカはんも由香里はんも強引な宗教勧誘に、けっこう対抗して、骨のある方やったやん」

「全体が流れそうな方向に、はねつかえる奴は邪魔ってことなんじゃないの」

「黙ってるけど、けっこう発達障害を違われたヤツは多いぞ。宮本、気にするなよ」

「そうそう。あと、意地悪言ってごめんね。やり過ぎだって思ったけど、あのときはクソマザーにそれを言ったら、今度は私までリンチされそうだし。言えなかった、ごめん」

由香里も謝ったけれど、鷹姫は顔を隠したまま泣き続けA321は小松空港に着陸する。民間機なので基地側でなく空港ターミナル側におろしてもらえた。

「うおおお！ 帰ってきたぜ！」

義隆が叫び、貴久も叫ぶ。

「ああ、腰がダルい！ やつとシートから、さよならできる！」

「とりあえずコーラ！ できればビールくれ！」

泰治も自販機を見つけて喜んだ。小松空港に地震の影響は無く、海

の近くだけれど日本海側なので平穩そのものだった。女子たちも喜ぶ。

「あく……お風呂入りたい」

「お腹空いた。あ、オニギリとか売ってる！」

「アタシも買う！」

時刻は13時で、今すぐ自動車で帰れば六角市まで16時には着ける。教師たちは生徒を帰宅させる責任を果たすため、バス会社などに電話してみている。幸いにして東京行きの観光バスや大阪行きのバスツアーなどが中止になっていて、空きはありそうだった。鮎美も自動販売機でミルクティーを買い、糖分を得て、やっと一息ついたけれど、三島が日本刀をもった青年と近づいてくる。知念と長瀬は素早く鮎美の前に出た。

「おおっ！ 芹沢殿！ 乗っておられたのか！ 黙っているとは人の悪いー！」

「悪い人に、いっぱい狙われたんでね」

「ともかくも無事のご帰還、心よりお祝い申し上げます」

三島が握手を求めてくるので応じた。さらに日本刀をもった青年が名乗る。

「自分は田守広志（たもりひろし）であります。三島先生の護衛を務めております」

「はじめまして。芹沢鮎美です。三島はん、さっそくですけど、状況を聴かせてください」

「ああ、もちろん！」

三島と小松基地司令の鶴田都司（つるたとし）空将補から、鮎美が状況説明を聴き終え、今後の方針を生き残った全国民に向けて発信するため、カメラの前に立ったのは15時前で、地震発生から24時間が過ぎていた。

3月12日 物価統制

2011年3月12日土曜15時、鮎美は小松基地の広報室でネット配信のためにカメラの前に立っていた。マスコミはいない。

「日本全国のみなさん、とてつもなく大変な地震に遭い、その被害と、これからのこと、すべてに不安でおられることと思います。また、すでにご存じの方もおられることでしょうが、国会議員のうちで生存が確認されているのは私、芹沢鮎美ただ一人です。さらに行政の中央である霞ヶ関も水没しており、行政の処理能力は著しく低下していません。けれど、幸いなことに自衛隊は基地が全国に分散していたこともあり、その大半が残存しており今も救助にあたっています」

鮎美の言葉を聴いて、背後に立っていた鶴田空将補は自衛隊の戦力は実質的には半減したと説明したはずなのに、国民を安心させるために大半という言葉を選んだことに複雑な思いを感じたけれど、顔には出さなかった。同じく鮎美の背後にいる三島も同じだった。

「また、ほぼ被害の無かった県もあります。秋田県、山形県、新潟県、群馬県、長野県、山梨県、岐阜県、富山県、石川県、福井県、鳥取県、島根県、山口県、福岡県、佐賀県などには目立った被害はありません。これらの県が被害に遭った県を助けるといいう体制を組みます。具体的にはネット上でも公開しますが、北海道は自衛隊の救援のみで行政においては自立的に運営してください。青森県、岩手県へは秋田県の県と市町村職員が応援する体制をとってください。宮城県、福島県へは山形県が応援してください。栃木県、茨城県、埼玉県へは群馬県にお願いします。千葉県、東京都、神奈川県へは山梨県が応援してあげてください。静岡県、愛知県へは長野県をお願いします」

鮎美は北から南まで被害県への支援を割り当て、さらに告げる。

「他県への応援をお願いします。新潟県、富山県、石川県、福井県へは霞ヶ関の代理をお願いします。具体的には金沢市に臨時の霞ヶ関を置きます。できるだけ国家行政に通じた職員を派遣するよう人選

してください。また、中央行政を担う人が北陸の方だけに集中する弊害をさけるため、各県在住で省庁勤務経験があり、転職または定年退職されている方で志のある方は集まってください。そういった方で、ご家族の介護等、不安のある場合は別途メールにて、ご相談ください。もちろん、各省庁所属の人で幸運にも出張や休暇で生き残っていた方は引き続き同一省庁で働いていただきたいので金沢市を目指してください。また、すでに取りかかっている救援活動で、これまでに述べた各県協力体制と相容れないものも、そのまま続けてください。その有効性と必要性を感じているうちは継続してください。次に自衛隊については小松基地を中央とします。小松にすべての情報が集まるようにしてください」

鮎美は一呼吸おき、おそらくはこの放送を視聴するはずの畑母神が、すぐに連絡してくるだろうことを想定しつつ、次の話に移る。

「都道府県知事および市町村長が欠け、その代行者まで欠けているとき、かりに職務を代行する人を選任する方法ですが、市町村長においては知事が、知事においては総理大臣臨時代理の私が選任し承認します。目下、宮崎県知事は南国原先生としますが、他の知事で代行者まで欠けているときは小松基地まで連絡してください。また、必要な量を超えての食料品や物資の買い占め、平時の1.5倍を超えての値上げは厳に慎んでください。買い占めについては法人、個人を問わずですし、法人においては通常の過去三ヶ月の平均仕入れ額を超えての購入を控えてください。個人においては食料品は3日分の消費量を超えての買い込みを控えてください。米、ティッシュペーパー等のまとめ買いについても一袋もしくは一括りまでとし、同一世帯で二度並んで購入するなど、せこいことはせんといてください。この遵守について、皆様方の道徳心に強く期待すると同時に、違反について各地の警察および市町村職員に行政指導の権限を与え、なお違反する者について法人名および個人氏名ならびに住民票コード等の個人を特定する情報の公表を予定します。法人については登記上の代表者および実質的運営者の個人情報を含めます。この物価統制は今後30日間継続します」

「……」

三島も鶴田も顔色を変えなかったけれど、鮎美が戦時中のようなことを言い出したのも意外だった。さらに鮎美は強い口調で続ける。

「最後に、被害に遭った地域で必要とされているのは医師、看護師、その他の医療従事者です。各県の医師会は医療ボランティアを募り、派遣してください。そのさいは、さきほど申し上げた各県の連携体制に準じてください。くわえて、美容整形外科等の不要不急の医療行為は控えてください。消費者として、これを利用することも憤み、また今の私の発言によって美容整形外科医院の売上は激減することと思いますが、各医院の医師が被災地において救助活動にあたる場合、個々の医院の固定経費を最低限倒産しない範囲で国が補填する制度をつくります。また、当該医師および各医院に勤務していた医療従事者には被災地において活動した場合、国家公務員に準じた給与と、活動中の事故による負傷について公務災害が補償されることとします。以上です。大変な困難ですが、いっしょに乗り越えていきましょう」

鮎美は頭をさげ、さげたまま録画を終えてもらおうと、再生してもらいチェックすると、問題が無かったので配信してもらった。配信して、お茶を一杯飲みきる前に畑母神から通信が入ってきた。

「もしもし、芹沢です。畑母神先生もご無事でよかったです」

「ああ。君も無事でよかったです」

「今は、どちらに？」

「巡視船に乗って東京湾付近にいるのだが、漂流物の数が多くて陸には近づけない」

「そうですか。それで、ご用件は？」

「自衛隊の指揮を小松に集めるという件だが、どういう風に決まったのかな？」

「私が決めました」

「…そうか。……」

「畑母神先生は東京の状態を把握しておられますか？」

「ああ、へりから視察した。ひどいものだ。標高の高い八王子あたり

以外は壊滅している」

「畑母神先生は東京都知事ですが、お願いしたいことがあります」

「どんなことかな？」

「東京都知事としての業務は八王子市の市長か、山梨県知事に任せ、自衛隊全体の指揮をとる防衛大臣臨時代理人をやってもらえませんか？」

「……………わかった。引き受けよう」

「助かります。つきましては小松に来ていただけると頼もしいですが、他の場所で指揮をとるのが最適だと判断されるなら、そうしてください」

「うむ……………まずは小松に行こう。ヘリで行く」

「ありがとうございます」

鮎美が通信を終えると、三島のそばにいた田守が言ってくる。

「防衛大臣の任は三島先生こそ最適であると考えます！ 地震発生直後から、もつとも救助に活躍したのは陸自であります！ その陸自をまとめたのが三島先生です！ あの男は船の上にいたのみ！」

「三島はんには法務大臣をお願いします」

「法務……………」

田守も三島も意外だった。

「芹沢殿、なにゆえ我が法務大臣なのか？ 実務経験でいえば、陸自の指揮が最適である。我は佐官であったゆえ、将であった畑母神氏の下風にたつも当然、彼の指揮下でも異存なく働きたい！」

「なぜ、三島はんが法務大臣なのかは、あとで説明します。陸自の指揮は現役の自衛隊員が畑母神先生のもとで十分にやってくれることと思います。むしろ、三島はんには、あなたにしか頼めない仕事を頼みたいのです。お願いします」

「……………我にしか、か。わかった。総理代理の任命に異存はない」

「ありがとうございます」

鮎美は次の仕事に取りかかろうとしたけれど、複数の通信が入っていた。そのうちから鮎美は石川県の知事との通信から受話する。

「もしもし芹沢です」

「さきほどの放送は、どういうことなんだ?！」

「全国の被害状況からみて、金沢市を仮の首都とするのが最適と考えた次第です。残っている交通とインフラ、日本の南北の中央あたりであること、立て直すべき東京、名古屋、大阪の3都市への距離とアクセスなどが理由です」

「む……そ、そうだとしてもだ! そう決める前に知事である私に連絡するなり相談するなりあるだろう?！」

「すみません。その根回しの時間を惜しみました。意志決定の速度を優先した結果です。どうにも受け入れていただけない場合、福井県知事が、富山県知事へお願いしてみます」

「……………。今さら……………」

「なにとぞ、よろしくお願いします」

「わかった。尽力する」

通信を終えると鮎美は向こうが、小娘が、と悪態をついている気がしたけれど、いちいち歯牙にかけない。

「はああ…」

どうせ事前に根回ししたら、ごちゃごちゃ条件つけたり、検討したりに何時間もかかるやん、結局おらが街さ首都なるならヨシと食いつくくせに、決定プロセスに知事として何の手柄もないとグチグチ言うて、よそに頼む言うたら慌てて取りにくる、まあ自分のせいで首都になりそこなったとなれば県史永遠の禍根やもんな、と思いながら鮎美は基地の給食班が用意してくれたオニギリを一つだけ食べて、お茶を飲み、次の通信を受ける。茨城県知事が行方不明で代行者もおらず生き残った30代の県議が知事を代行することに承認を求めてきた。南国原と違い、まったく知らない人物で実績も人柄もわからず、簡単に承認してよいものか迷い、また無所属ということもあって政治信条など色々と問い、ともかくは任せようと判断したので言う。

「わかりました。不破島明雄(ふわじまあきお)県議を茨城県知事臨時代行として承認します」

「ありがとうございます。承認されたから言うのですが、実は私も同性愛者です」

「え？　そうですか、カミングアウトして当選しはったんですね？」
気がゆるんで思わず関西弁で問うたけれど、不破島は軽く笑って言う。

「いや、今、カミングアウトしました。総理代理に言った今が初めてです」

「それは……どうも……無線ですから、誰か傍受してるかもしれないよ……」

「ははは！　吹っ切れましてね。津波が何もかももっていった。とりあえずは結婚してみた妻も、それなりに可愛かった2歳の娘もね。残ったのは県議としての責任くらいのもんです」

「……それは……ご愁傷様です……。同性愛者と、はじめに言うてくれはったら、よかったのに……」

「それを始めに言つては、まるで同類だから承認してくれと、ねだつているようなものじゃないですか。嘘をつくことだつてできる。総理代理が行政指導を便利につかつたように。あの物価統制は、効果的ですよ。少々の罰金より、ずっと残るかもしれない個人情報公開の方がきつい。とはいえ、公表は予定にすぎず、行政処分には法的根拠がいつても、行政指導にはいらぬ。二重三重に法のうまいところだけを使った。それに今頃、無事な県の美容整形外科医は真つ青でしような。お客の方も、被災地は死ぬか生きるかの瀬戸際で、日本海側は平穏で羨ましいが、さすがに、のんびり脱毛や二重まぶたの手術をしようつて気にはならぬでしょう。だから本当は総理代理の発案は美容整形外科医を救つてやることになるのに、ヤツらの一部は激しく逆恨みするでしょうな。何にしても医師は医師だ、医師団の到着、期待しますよ。では！」

不破島が無線を切った。

「フフ……言いたいことを言う男やな。顔を見てみたいわ」

人として好感を覚えたし、いつか会つてみたいと思つた。さらに何件もの通信に対応した後、夏子にも連絡を取る。夏子へは鮎美のスマートフォンから電話通信用でかけた。

「加賀田知事にお願ひがあるんですけど」

「着信を見た瞬間に何かお願いされるとは、思ったよ。で、何?」

「財務大臣臨時代理人をやってほしいんです」

「臨時……代理人?」

自衛隊出身の畑母神と違い、学者畑から政治家になった夏子は、あえて代理人という言葉を使うところにひかかって問い直した。完全な任命による就任でなく、代理人であれば、いつでも代理権を解除することができる。そういう鮎美の狙いを感じた。

「はい、代理人です」

「……完全な就任じゃないのは、いいとして……。それって県知事と兼務することの抜け穴も狙って?」

「はい」

「おくまぐえくはア!　うちの県職員に三重県と京都府のフォローまで押しつけておいて、知事の私を外向させようっていうの?!」

「地震発生は日本時間で15時前、マーケットが閉まるまで2時間やったし、東京市場は市場そのものが水没しましたけど、ヨーロッパは動いたし、ニューヨーク市場は西海岸の被害と相場の激変を恐れ、ヨーロッパが閉まると同時に閉めてはる。そやけど一気にユーロ高、円安ドル安に振れてますやん。ニュージールランドドルなんて、もう一段、さがってるし」

「不幸中の幸い、地震発生は金曜午後で、この土日はマーケットは動かない。今、ドミニクがIMFとして世界全体に月曜から大規模災害時の相場固定マニュアルを発動しようとしてくれる。まさか、この前、ハワイで作ったマニュアルが、1ヶ月と経たないうちに使われるなんて……」

「相場の激変は誰もが避けたいはずです。それで儲かるのは、ごく一部、大半は大損する。そのマニュアルを理解してて財務の舵取りができる人間で、うちが頼める人間は一人しかいてくれはりません」

「だからって……県知事に財務大臣を……実質兼務させるのは……」

「日銀も大阪造幣局も東京市場も大阪市場も各都市銀行も水没。そろそろ海水が引いて証券やら債券証書、手形、国債、紙ベースでも電子

化されてても、ともかくは復旧させんとあきません。こんなこと18歳の実務経験が無いもんには指揮がとれると思います?」

「……手伝っては、あげたいけど……」

「各地方自治体に財務省から出向してる人や定年退職した人らを集めて、水が引いた東京で回収するもん回収して、金沢市で日本の財布を立て直してください。お願いします」

「……私の身体は二つは無いのよ。県内だって少しは被害あるし、三重京都のフォローム」

「副知事以外にも県知事の代理人を立てて、三重か京都方面だけでも指揮してもらおうか」

「そんな都合良く代理人なんて見つからないし。それなりの経験のある人材でない」と

「御蘇松先生では、あきませんか?」

「……あなたねえ、選挙の結果を何だと思ってるの?」

「それなりの接戦でしたやん。ある程度の信任はあるし。何より県職員を指揮する経験は1年未満の女性知事より8年ある人の方が。たとえ引退してはっても、健康なんやし頑張ってくれはりますよ」

「老骨に鞭打つ18歳かあ……。けど、県知事と大臣の兼務……県民国民が納得するかな? こんなときに、お金の話もなんだけど、っていうか、財務はお金だけど、私は知事としての報酬と大臣代理人としての報酬、ダブル取り?」

「大臣代理人の報酬を丸ごと、もらってください。県知事としての報酬は、右から左に御蘇松先生へ代理人報酬として。どちらも実質業務があつての報酬ですから、公選法上いけますやん」

「ギリギリね……かなり、いろいろ言われそうだけど、いろいろ言うマスコミも大半は水没したし」

「財務省が復活せんかったら、ダブル取りどころか、県知事報酬も止まりますよ」

「たしかにね。わかった。じゃあ、御蘇松先生がOKしてくれたら、私もOKするよ」

「ありがとうございます!!」

「知事選で負けた相手の代理人をするって、男性のプライドとしては、けっこう微妙だよ。引き受けてくれない可能性の方が高いと思って」

「頑張ってお願ひしてみます!」

すぐに鮎美は御蘇松へも電話をかける。選挙応援した仲なので番号は知っていた。鮎美が依頼内容を話すと、笑われる。

「ははは、あなたには選挙を応援してもらったのに苦杯を舐めさせた借りがありますからね。それを死ぬまでに返せるなら本懐ですよ。引き受けましょう」

「ありがとうございます!! お身体には気をつけてください!」

「むしろ、あなたこそ、気をつけてください。ちゃんと食事を摂り、十分に休んで」

「はい、ありがとうございます! 気をつけます!」

電話を終えると、さすがに疲労を感じた。まだまだ、やるべきことはあるのに頭と身体が疲れている。不意に知念と長瀬を見ると、やはり二人からも疲労を感じる。長いフライトと交代要員の無いことから、かなり疲れているはずなのに、ずっと鮎美についてくれている。

「三島はん、うちが今、暗殺されると日本は、どうなると思う?」

「……極めて混乱する。さしあたって防衛大臣、法務大臣、財務大臣と指名してはいるが、すべて臨時の臨時。法的根拠たる芹沢殿を失えば、もはや那須御用邸におられる陛下のみが国家の代表となる」

「たった15歳で国の象徴か……しかも、ずっと……。三島はん、うちと陛下の警護を自衛隊に頼める?」

「すでに陛下は陸自が警護している。芹沢殿についても今は基地内ゆえ、取り立てて要員をあてていないが、そのつもりである」

「ほな、できたら、女性自衛官か、男性同性愛者の自衛官とか、あてられへん?」

「同性がよいのはわかるが、なぜゲイを望む?」

「お互いにセクハラせんやん。女性自衛官やと、うちが我慢すれば済むけど、ゲイやと、お互いに気楽やなって」

「かつつか！ あい、わかった。その手の人脈には、よく通じておる。用意いたそう」

「え？ オレらお払い箱っすか？ こんな急に？ 警視庁に戻っても……」

知念が淋しそうに言うのと、鮎美は知念の背中を叩いた。

「知念はんと長瀬はんも、おつて。逮捕権のある警察官がいてくれんと、ややこしいときあるやん。けど、今から二人体制で警護せんと、一人ずつ交替にして片方は休憩してて」

「わかりました」

二人が話し合い、まず知念が休憩に入った。鮎美も目を閉じて考え事をする。太平洋岸にあった原子力発電所の被害状況も認識しなくてはいけないし、避難を促すべきか、さきほどの放送で触れなかったように、まだ黙っておくべきかも判断しなくてはいけない。太平洋ベルト地帯の工業の復活も、残った人口把握も住民票の整備も、何もかも問題だらけで急に鷹姫が憎らしくなってきた。

「こんなときに秘書の一人もおらんなんて……」

鷹姫と鐘留は帰ってしまうし、陽湖は台湾、静江は地元にいるはずだった。司令室の窓から外を見ると、鷹姫たちは通用門そばの庭に集まっている。そのうちには迎えのバスが来て帰ってしまう。ずっと鬱ぎ込んでいる鷹姫は他の生徒たちから離れた位置で地面に座って膝を抱えている。そんな様子を見かねたのか、一部の女子たちが優しく声をかけて背中を撫でたりしているし、給食されたオニギリを食べさせたりしている。鷹姫はビクビクと怯えながらも周りが優しくしてくれるので、礼を言つてオニギリを食べている。

「……鷹姫……」

ずっとクラスメートたちを見下した風になっていたのに、今は自分が一番下という認識に変わったのか、恐る恐る接している。逆に女子たちの方も今まで明らかに見下した目で見てきた鷹姫がへりくだってくれるので、仲間の輪に入れようとしていた。

「………そんなん……タカキちゃやん……低い……ヒクキやん………」

見ていたくなかった。誇り高かった者が挫折して卑屈になっていく姿は痛々しい。鮎美のスマートフォンが鳴り、静江から電話が入っていた。

「もしもし、うちです」

「生きておられたのですね」

「おかげさまで」

「でも、いきなり、なんて勝手な発表するんですか!」

「ベストやと思ったんやけど?」

「どうせ首都を移転するなら六角市か三上市、新幹線がとまる井伊市にしてくださいよ!」

「地元根性丸出しやな。現在、新幹線は運行してないし。安土城を日本の中心にした時期は京都に近くて、湖上交通も盛ん。敦賀への便も、東海道を押さえる意味でもよかったけど、現代では空港もないところに首都機能はおけんよ。敦賀の原発も問題やし」

「……それにしても……。もう済んだ話ですネ……。たしかに金沢がベストです……。これから、どうされるつもりですか?」

「情報収集と内閣の再編よ」

「本気で総理大臣になるつもりなの?」

「うち以外に誰もおらんやん」

「お兄ちゃんの方が、うまくやれるはずですよ」

「……………落選中やったやん」

「2期も衆議院をつとめてます! お父さんは大臣だったし! 芹沢先生は三ヶ月と任期を過ぎないじゃないですか。どう考えても無理ですよ!」

「それを言い出したら全国各地に落選中の自民党議員がいはって誰が総理になるか收拾がつかんようになるよ。5期6期の人もいはるやろ?」

「それは……。じゃあ、芹沢先生が総理だとして、内閣の他のポストは、どうするんですか?」

「防衛、法務、財務は決めまし、本人もOKしてくれたよ」

「誰に?」

「畑母神先生と三島はん、加賀田知事」

「加賀田知事は民主党ですよ?!」

「そういう場合でもないやん。任せられそうな人に頼まな」

「畑母神先生はともかく……三島さんも元自衛官で法務畑は……。お兄ちゃんを官房長官にしてください！ もしくは国土交通大臣！

いいえ、お父さんに国土交通大臣をやってももらいます！ まだ元気だし！ あと応野先生に経産大臣！ それから……」

「って、思いつきり地元で固める気なん?! 薩長藩閥みたいに言われるでー!」

「このチャンスを逃す手はないですから!」

「チャンスって……人が、どれだけ死んだと……。地元の被害は、たいしたことなかったん?」

「はい、ほとんど被害はありません。京都にいたので、あやうく津波に飲まれるところでしたけど。お兄ちゃんも元気です。父も母も」

「自分の周りが無事やと感覚がちやうんやね……」

鮎美は考えないようにしているけれど詩織のことを想い出してしまい、胸にさげている結婚指輪を押さえた。

「官房長官をお兄ちゃんでお願ひします! 他にあてはあるんですか?」

「……無いけど……」

他に鮎美が頼めそうで国政の知見がある人間といえば、直樹くらいで、その直樹たちが元気なら、そもそも鮎美が総理にならなくて済む。

「わかったよ。石永先生を官房長官をお願いします。本人に伝えて、小松に来てもらえます? あ、もう少ししたら、こっちからバスが出て、それで生徒をみんな帰すさかい、戻りのバスに乗ってきてくれてもええよ。他に支部のスタッフとかで来てもらえる人には来てもらって。こっちは自衛隊の人ばかりやし事務作業を頼める人がほしいんよ。できれば、顔見知りで」

「やつぱり芹沢先生だって使い慣れた人を使いたいんじゃないですか」

「うつ……まあ」

「わかりました。バスの件は宮本さんと調整します」

「あ…鷹姫は、もう秘書を辞めるって言うてるからカネちゃんにしてみて」

「はア？　なんで辞めるんですか？　またケンカでもしたの？」

「ケンカちゃうけど……本人が、もう嫌やって……家に帰りたいてって」

「こんなときに、そんなことを言い出すなんて！」

「……」

「しよせん高校生ですね。この大切なときに……さんざん色々教えてあげたのに……肝心なときに役に立たないなんて」

「そんな風に鷹姫を言わんといてあげてよ」

「言いたくもなりませんよ！　あの子、あれで月に50万ももらって、さんざん手間かけて勉強させたのに！　これじゃ公費で海外留学して大学院を出したのに辞める官僚みたいですよ！　50万っていえば、高卒公務員の初任給3倍近い額ですよ！」

「……修学旅行中、いろいろ可哀想なこともあったんよ。着陸前には大阪が沈むのを見たし」

「でも、五体満足なんですよね？」

「まあ、怪我はしてないよ」

「ちよつと私、電話してみます。ふぎけすぎ！　仕事なめすぎ！」

静江が電話を切った。心配なので鮎美は窓から外を見る。すぐに静江は鷹姫の携帯電話にかけたようで、鷹姫は着信表示を見つめて受話するか悩んでいる。かなり長時間、コールが続き、諦めて鷹姫が電話に出ると、何か言われている。しばらく見ると鷹姫が泣き出した。さらに静江から何か言われているようで泣きながら答えている。

「静江はん……きついこと言うてるんやろなあ……鷹姫……」

泣きながら電話を受けている鷹姫をクラスメートの女子たちは心配して困んでいる。困んでもらった鷹姫が、おもらしをしている。小さな水たまりが鷹姫の足元にできて、見かねた留香が電話を替わり静

江と話し始め、鷹姫は他の女子にハンカチやティッシュで脚を拭いてもらい、慰められながら泣いていて、見ていた鮎美は嫌悪感で胸がいつぱいになった。

「……な……なんちゅー………情けない生き方なんよ、それ………女の腐ったみたいな………困ったことがあったら、泣いて漏らして周りに助けてもらうって………そら発達障害いわれるわ………鷹姫、そういう生き方、卒業したんちゃうの？ 島に帰っても、そんな鷹姫では………恥さらしなだけ………」

どうにも我慢できなくなつて鮎美は鶴田に問う。

「この基地って道場ありますか？」

「ええ」

「少し貸してもらえますか？ 根性叩き直してやりたいヤツがおるんで」

「はい………どうぞ」

鶴田はテレビで紹介されていた鮎美のイメージとは違うなあ、と思いつつも、いつそ総理としては、可憐で知的な同性愛少女よりも、自分たちと似たような方法で根性をなんとかしようとする関西弁少女の方が頼もしいとは感じた。

「田守はんも、いっしょに来て」

「はっ！」

日本刀をもった田守と鮎美、三島、長瀬も司令室を出て、通用門そばにいた鷹姫のところへ行った。鮎美が近づくと女子たちは道を開けたけれど、鷹姫は鮎美の表情を見て怯えたように目をそらした。何を言われても秘書を辞めて家に帰りたい、と震える。

「あんた、島に帰って、どうする気なん？」

「……ぐすつ………お家で………お手伝いをします………」

「それで岡崎はんの嫁になると？」

「……はい………」

「いくら見た目が美人でも、発達障害に甘えて、困ったことがあったら小便垂れて泣くような女が、まともな嫁になると思うん？」

「っ……」

「自分の姿、お母さんに誇れるん？」

「……………うう……………うう……………」

鷹姫が座り込んで膝を抱えて丸くなった。まるで赤ん坊に戻りたいというような姿勢だった。

「どうなん?! 島に帰っても恥さらしなだけちやうの?!」

「……………うう……………もう……………私は……………消えたい……………消えてしまいたい……………」

死にたいとは言わないのは、かろうじて亡き母と同じところに逝くのは、まだ先であるべきだと鷹姫自身がわかっているからだと思い、鮎美は田守が持っている日本刀を指した。

「そこまで恥さらして生きるんやったら、いっそ死に！ 自分で腹裂いて死んでみせい！」

「っ……………」

「田守はん」

「はっ」

まだ短い付き合いだったけれど、話の流れから田守は察して日本刀を鷹姫の前に置いた。

「言うとかけど、腹を斬るのは、めっちゃめっちゃ痛いよ」

「……………うう……………ぐすっ……………」

「早う死に」

「っ……………」

「おい、芹沢！」

義隆が言ってくる。

「やめてやれよ！」

「あんたは関係ないし黙ってて」

「なっ……………お前さ！ 今のお前、月谷が暴走したときと同じ感じだぞ！」

「……………」

言われた鮎美は問うように鐘留を見た。

「……………アユミン……………なんか怖いよ」

泰治も言ってくる。

「別人みたいだよ」

「……………」

鮎美は自分の頬を撫でる。期せずして一国の最高権力者になっていて、今や思いつくままに首都を移し、県の知事代行を指名し、仮とはいえ組閣している。その自覚と自負が鮎美の気持ちに騒がせている。正直、人を人と思わぬほど、意のままに人を動かす気でいた。それを指摘されて、あの穏やかな陽湖でさえ、権力に酔ったことを思い出し、自戒する。

「おおきに。ちよつとは冷静になったよ。鷹姫」

鮎美は震えている鷹姫のそばに膝をついた。

「あんたは、よく役に立ってくれた。今のうちがあるのは、あんたのおかげよ。うちを三回も助けてくれた」

「……………」

「うちが市議選のときビビって立てんかったのを叱ってくれたし。パUNCH写真が悲しいて記者会見中に泣き出したうちの代わりに場をもたせてくれたし。何より、あんたがおらんかったら、うちはお腹裂かれて、今頃は墓の下。そして日本は国会議員が一人もおらん状態で大混乱やった。あんたは日本を救ったんよ」

「……………私は……………日本の恥です……………」

「立って。こっち来て」

鮎美は立たせた鷹姫を基地内の道場に連れ込む。心配なので生徒たちも見に来た。気が利く鶴田が、すでに二人のサイズに合う防具と竹刀を用意していてくれた。二人とも制服の上から防具を身につけると、竹刀を握って向かい合った。

「根性叩き直したる」

「……………鮎美では……………無理です……………」

「言うたな、小便垂れ！」

まっすぐに打ち込んだ鮎美の竹刀は払われて瞬時に打ち返されていた。面をくらい、防具越しても痛いけれど、すぐに再び打ちかかる。けれど、結果は何度仕掛けても同じだった。

「…ハア…ハア…くそっ…一回も…」

「……………」

「…一回くらい…ハア…勝てても…ハア…よさそうなもんやの…ハア…」

「……………ろくに稽古もしていないのに、私に勝てるはずがありません」

「はは、そうそう、そういう高飛いな感じ、ええよ」

「……………」

「たあつ！ …と見せかけて！」

真つ直ぐな打ち込みと見せかけて、タイミングをずらして胴を狙ったけれど、鷹姫は難なくかわして打ち込んできた。また負ける。

「ハア…痛ああ…ハア…」

「いつまで続ける気ですか？ あなたは忙しいはずですよ」

「あんたが、うちの秘書を続けると言うまでよ」

「……………」

「発達障害がなんやねん！」

また打ち込むけれど、また負ける。それでも続ける。

「人間にはな！ 強力な牙も爪も無いねん！」

「……………」

「走つても馬におよばん！」

「……………だから？」

「多様な個性と才能があつてこそ人間やねん！」

「……………」

「そして人間は死を理解する！ 仲間の死、家族の死！ 限りある命やと、知ってるねん！」

「……………」

「しかも理不尽に終わることもある！ 明日死ぬかもしれん！ 昨日死んだ人が、どれだけいたか!! 今も誰か死んでる！ あんたが手伝ってくれたら、うちは2倍も3倍も頑張れる！」

「……………」

「あんたがおらんかったら、うちは判断を間違うかもしれん！ うちかて疲れて何もかも投げ出しとうもなる！ うちを支えい！ 日本

を支えいや!! たかが何度か自分らしいない自分、理想の自分やない自分を晒したくらいで! 島に戻ってフジツボみたいに引き籠もって生きるんか?! 生きたかったのに何千万何億と他の人らは死んで逝ったのに!!」

「……………」

また鷹姫が勝つ。

「ハアハア、こんなに元気で! どんだけ打つても負けんくせに! お家に帰ってシクシク泣いて過ごすんかい?! この弱虫! 死んだ気で立ち直れや!! あ…」

鷹姫が防御しなかったので鮎美の一撃が通り、面が入った。

「…ハア…ハア…わざと…ハア…」

「わかりました。私は死んだのです」

そう言った鷹姫は防具を外すと、田守がもっていた日本刀を抜き、一息に長い髪を切った。もうポニーテールを結えないほど短くなる。

「鷹姫……………」

「死んだ気で、お仕えます。もう一度、死ぬときまで」

「…鷹姫!」

「「おおっ!」」

三島と田守、長瀬が感動しているし、他に見ていた生徒たちと、非番だったので見物に来ていた隊員たちも詳しく事情はわからないものの、うまく二人が和解したようなので拍手を送った。そのタイミンで迎えるバスが数台、基地に入ってきた。点呼しながら生徒たちがバスに乗る。鮎美と鷹姫は乗らず、鐘留は申し訳なさそうな顔で言うてくる。

「…………アタシ、秘書補佐は続けるけど…………一回、家に帰りたい。ごめん、アユミン」

「うん、ええよ。ネット関係のことやったら、どこにいてもできるよろし。静江はんも、こっちに来るとなると、地元に一人いてくれるのも助かるし」

「ごめんね」

鐘留がバスに乗り、乗る予定だった泰治が言ってくる。

「なあ、芹沢さん、いや、芹沢総理」

「さんでええよ。なに？」

「ボクにも何か手伝えないか？」

「え？」

「ボクも日本のために何かしたい。どうせ、帰っても四月からボクが行くはずだった大学も名古屋だったから無くなってるだろうし。雑用でも護衛でもやるよ。ボクなら芹沢さんといっても、セクハラしないし、したくもならないだろ」

「そやね。ちよつと頼みたいこともあるし」

「どんなこと？」

「大きな災害の後つて必ずデマが流れるねん。そして少数者への差別が燃え上がる。関東大震災の後も、朝鮮人が井戸へ毒を入れたとか、結果、自警団が組織されて、その暴走で少数者へのリンチがあったり。現代の阪神淡路大震災の後でさえ、外国人が放火したとか流れたんやけど、ホンマは停電が回復した後の漏電による出火やつてん。そやから、少数者の気持ちかわかる人間に、差別やデマを許さないという自警団をやって欲しかったんよ。ネット情報ならカネちゃん得意やけど、あの性格やから差別抑止どころか、差別助長して楽しみそうやし。タイジはんやつたらゲイを隠してきた過去もあって、少数者の立場で物事を考えられるやろ？」

「ああ、やらせてほしい」

「ほな、決まりやね」

鮎美と泰治が握手をしていると、義隆も言ってくる。

「オレも役に立てないか？ 軍事関連の話なら得意だぞ」

「うーん……それは、本職の隊員さんがいるし」

「空気読まないのも得意だ」

「はいはい。あんた異性愛者やし、うちや鷹姫をエロい目で見るよね。さつきも道場で倒れたときとか、もろに、うちのパンツ見てきたし」

「あんな制服のまま剣道するとか、パンツ見てくださいって空気だったぞ。オレは、ちゃんと空気を讀んだ」

「わかったよ。あんた観点が違うから貴重な意見をくれるかもね。とりあえず残って」

残るメンバーが決まりバスが出る。鐘留は鮎美たちが見えなくなるまで手を振ってから仁美に問う。

「ヒトちゃん、いいの？ あいつと付き合ってたのに」

「家には帰りたいし」

「だよ。でも、誰かに盗られるかもよ？」

「芹沢さんレズだし、宮本さんも男に興味ない感じだし許嫁いるらしいし……あ、でも……国友くんゲイで……ま、大丈夫でしょ。ずっとバレー部で、いっしょでも問題なかったわけだから。気持ち悪い想像させないで」

「ごめん、ごめん」

鐘留は流れで鮎美に身体を許したことは言わないでおこうと思いつつ、バスの車窓を眺めた。北陸自動車道を使っているので、すぐに福井県に入り、直線ばかりなので眠ってしまい、敦賀地方の山道で曲がりくねる頃には熟睡していて六角市最寄りのインターで高速道路をおりる頃になって起きた。

「っ……」

起きてから、どうしてナプキンを着けず、乗車前にトイレにも行かずに眠ってしまったのか、ひどく後悔して泣きそうになる。また親に殺される悪夢を見て、下着とスカートを濡らしていた。

「緑野さん、どうしたの？」

同じく寝ていた仁美が気づく。

「ぐすっ……うう……」

「………。あ………また、しちやったの？」

「っ……ううっ……」

「はいはい、声あげて泣かない。黙ってれば、わかんないよ。私たち何日、お風呂に入っていないと思う？ 鼻が慣れてるからわかりにくいけど、超臭いし。バスの運転手さん可哀想ってくらい匂ってるよ。今さらオシッコ一回分くらい誰も気づかないって」

仁美の言葉通り、鐘留が声をあげて泣かないようにしていると、誰

も気づかずバスは学園に到着した。鐘留はスカートの後ろが濡れているので一番最後におりた。保護者たちが迎えにきていて、親子が抱き合っている。あと少し早く関空に着陸していたら、この再会は無かった、我が子が生きていてくれて嬉しくて泣いている。抱かれた生徒の方も泣き出ししていた。

「緑野さん、鮎美は？」

「マザー陽湖は？」

他の保護者同様、迎えにきていた玄次郎と陽湖の両親が問うてきた。教師からの連絡体制が万全ではなく抜けがあるようで、陽湖がマザーの称号をえたことは伝わっていても、陽湖が帰国していないことは伝わっていないようだった。

「自分の娘をマザーって……。えっと、アユミンは小松に残って総理大臣になるって」

「そうか。……。あの放送……。本気か……」

玄次郎は娘が帰ってこない可能性もわかっていたらしく落ち着いている。

「マザー陽湖は？」

「月ちゃんは……。えっと……。いろいろあって……。もう少し帰るのが遅れるかも」

とても両親に向かって台湾に置いてきたとは言えなかった。

「宮ちゃんも残ったし……。宮ちゃんのパパと義理ママは？」

「宮本さんのところは、下の妹さんが亡くなられたので家におられるよ」

「そう……」

ほとんどすべての生徒に保護者が迎えにきているのに、鷹姫にだけ迎えないのは可哀想だと感じた。泰治と義隆の両親がいないのは本人が連絡したからかもしれない。鐘留は玄次郎を見ていて違和感を覚えた。ほとんどの保護者は両親で来ているし、片親の場合でも母親が来ている感じなのに、主婦で近所にいるはずの鮎美の母親がいないのには違和感がある。

「アユミンのママは？」

「……………」

玄次郎が答えにつまり、陽梅もつらそうにしている。鐘留は空気が読めないわけではないので、察した。

「もしかして…………アユミンのママ…………死んだの？」

「…………ああ」

「琵琶湖の津波で？」

「そうだ」

「……………あ…………あの…………アユミンは結婚した女の人も東京で…………大事な人の情報については…………いいニュースしか聞きたくないって…………シヨックで仕事できなくなるから…………朗報しか教えるなって…………言つて…………ました」

「そうか……………あいつは…………賢いな。では、黙っていてくれ。オレも言わない」

「うん……………」

急に鐘留は不安になった。どうして、まだ自分の両親が顔を見せないのか、とても不安になり、自宅の方へ走る。学園と自宅は、ほとんど離れていない。校門を出て、少し進み、街の光景を見て愕然とした。

「…………アタシの…………家が……………無い……………」

あつたはずの場所に自宅がない。

何もない。

「…………アタシの家は？……………ママ……………パパは？」

自宅は消えていて、基礎しか残っていない。むしろ基礎も消えてくれたら、ここは自宅のあつた場所ではないと思ひ込むこともできたのに、基礎があるおかげで思い知るしかない。庭にあつた2本の樹、早世した二人の弟を想つて母が植えた樹も、根っこごとさらわれている。

「……………」

鐘留は腰が抜けて歩道に座り込んだ。

「…………ハア……………ハア……………うそだ……………これは……………違う……………こんなことは…………アタシの人生じゃ……………ない……………」

泣いたら受け入れてしまう気がして、鐘留は泣かなかった。なんとか、否定する方法を考える。

「…………アタシの…………家…………アタシの…………」

歩いて追ってきた玄次郎が気の毒そうに言う。

「緑野さんのご両親は…」

「聞きたくない!! アタシも朗報しか聞かない!! いいニュースしか聞かない!!」

「…………」

そう叫ばれると玄次郎に言葉はなかった。この付近で亡くなった人たちの遺体は、ひとまずは学園の体育館に安置されている。そこに美恋も、鐘留の両親も横たわっている。

「…………ハア…………ハア…………」

「…………」

玄次郎も立ちつくすしかない。陽梅と啓治が教師から陽湖のことを聞いてから、鐘留を心配して来た。台湾にしていると聞いて、娘のことも心配でならないけれど、生きてはいてくれる。死という情報とは天地の差がある。陽梅が鐘留の背中を撫でた。

「シスター鐘留、私たちの家に来てください」

「ああ、おいで。これも神の導き、ボクたちの娘だと思って迎えるから」

「っ、うっさい!! アタシはアタシ!! 導きなんかない!! どっか行け!! クソ宗教!!!」

「…………」

「さっさと消えろ!! この!!!」

鐘留が自宅跡の土をつかんで投げつけると、陽梅と啓治は退散した。

「ハア…………ハア…………」

「…………」

玄次郎は鮎美が産まれた日にやめたタバコを吸いたくなくなった。このまま鐘留が落ち着くまで眺めているしかない。三月なので、まだ寒いし、もう暗い。玄次郎は意図して話題を変える。

「鮎美は修学旅行中、どうだった？」

「……………最悪だった……………」

「鮎美が何かしたのか？」

「……………宗教が……………最悪……………」

「そうか」

玄次郎と鐘留のそばにタクシーが停まった。静江と石永がおりてくる。

「ここ、かねやさんがあった場所ですよね？」

「…」

玄次郎は厳しい顔で人指し指を唇にあてた。それで静江も石永も言っただけいけないことなのだと悟る。石永が問う。

「自分たちは、これから小松へバスで向かいます。芹沢総代理へ伝えることや、渡す物はありますか？」

その口調で石永らが湖水による津波の犠牲者を氏名までは把握していないのだとわかった。

「いえ。むしろ、あまり色々なことを伝えない方がいいでしょう。それだけでなく、あいつが結婚したと想っていた人は東京にいたし。あいつ自身も仕事に集中するため、個人的な不幸なニュースは知りたくない、と言っているそうです。小松でも、そういうニュースに触れないよう配慮してやってもらえますか？」

「わかりました。では」

「娘さんの体調にも、お気持ちにも、気をつけます」

石永と静江は学園まで歩き、先についていた党の職員たちとバスに乗る。石永らの一行は少人数なのでバスは淋しいくらいガラガラになった。

「お兄ちゃん、これから日本は、どうなるの？」

「そういう不安そうな顔はするな。オレたちが不安になれば、国民はパニックになる」

「……………はい」

「眠れるときに寝ておけ。小松についたら徹夜かもしれない」

そう言っただけで石永は目を閉じ、これからのことを考えつつ眠った。

3月13日 原発

2011年3月13日午前0時、鮎美と鷹姫は小松基地の司令室で不眠不休のまま状況把握に努めていた。鶴田司令が言ってくる。

「芹沢総理代理、一度ベッドでお休みになられてはいかがですか？」

「いいえ。今この瞬間にも救助を待っている人がいるのですから、おちおち寝てられません」

「では、せめて食事をとってください」

「さつきオニギリをいただきましたし十分です。いまだに地震発生から食事を摂れてない人も大勢いるでしょうし。それより、関西便利電力からの技術者は、まだですか？」

「まもなく到着する予定……あ、今」

鶴田が通用門の方を見ると、乗用車とバスが入ってきた。乗用車は橙色の関西便利電力の社用車で、バスの方は夕刻に生徒たちを送っていったものと同じで石永らが乗っていた。人数の多い石永らよりも、一人で来た関西便利電力の社員の方が自衛隊員に案内されて駆け足で司令室に入ってくる。

「関西便利電力、美浜原発原子炉管理課、技術課長の天津田一朗（おおつだいちろう）です」

「天津田……」

鮎美と鷹姫は同時に反応した。珍しい姓なので忘れてたくても忘れられないし、顔つきも似ている。知念は警戒しなかつたけれど、鷹姫は警戒して鮎美の前に出た。素手なので柔道の構えを取り、いつでも戦える体勢になる。一朗は睨まれる覚えはあるので頭をさげる。

「弟の件では、芹沢さんに大変な迷惑……いえ、大変なことをしてしまい。本当に申し訳ありません」

「弟……お兄さん？」

「はい、悟司は末の弟です」

「……………」

鮎美の刺殺しようと下腹部を刺してきた加害者の家族を前にして、

鮎美と鷹姫は思考が止まる。知念は業務上、大津田悟司の名は伝えられているけれど、三島や田守は当然に知らないし、鶴田たち自衛隊員も少年法のおかげで知らない。鐘留がネット上に実名をバラまいたので、その気になって調べた者は知っているものの、そう多くはなかった。

「……………」

「芹沢総理代理、お知り合いですか？」

鶴田の問いに答える前に、石永と静江が司令室に入ってきた。石永が問う。

「芹沢先生、状況は…、こちらの方は？」

「あ、えつと…」

「関西便利電力、美浜原発原子炉管理課、技術課長の大津田一郎です」

「大津田……………」

石永も悟司の氏名を聞いてはいるし、静江も知っている。一郎は同じように頭をさげて悟司のことを謝った。石永は当事者ではないので、すぐに思考を切り替える。

「今は、そんな場合でもないでしょう。兄弟は他人の始まり。必要なことを進めましょう。それで、今の状況は？」

「うちから言いますわ。太平洋岸の原発がヤバイ状態なんです。100メートルを超える津波をくらった原発は建物そのものが崩壊、その場にいた職員も亡くなってはります。けど、10メートル、20メートルぐらいの津波をくらった原発は建物は残ってるけど、予備電源やらが無くなってヤバイ。一部の原発の責任者が海水を使って冷却したいと言うてはるんですけど、そんなん許可してええもんか。迷ってます。それで、手近な敦賀にいる技術者を呼んだところなんですわ」

「なるほど。では、大津田課長、お願いします」

石永が促すと、一郎は専門的な話をし始め、一生懸命に鮎美と鷹姫も聴くものの、理解できない部分も多く不眠不休だったので目線が彷徨っている。今にも寝るか、倒れるか、しそうな目だった。見かねて

静江が言う。

「二人とも少し休んだら？ あ、先にお兄ちゃんを内閣官房長官に指名しておいて」

「こんなときに休んでられませんよ。えつと……ほな、石永……たか？」

「隆也だよ。いつもポスターで見てるだろ、やっぱり少し休めよ」

「いえ。石永隆也を芹沢鮎美総理大臣臨時代理の権限において、内閣官房長官臨時代理人に指名します」

「はい。受けます。大津田課長、続きを」

「海水を入れることで生じるリスクは……」

一通りの説明を聴いた石永は決断する。

「現場の判断を尊重して、許可しよう」

「……うくん……どう思う、鷹姫？」

「……………」

鷹姫は一朗が襲ってこないかを警戒していたので、あまり聴いていなかった。

「鷹姫？」

「……安全とは思いますが油断しない方がいいでしょう……兄弟で違う道に行くことは、多くありましたが……真田や源氏も……」

「いや、そつちやなくて。だいぶボケてんなあ、鷹姫は休み」

「いえ、大丈夫です。頑張ります」

「ほな……えつと、鶴田司令、静岡県の原発までへりで飛べますか？」

「可能ですが夜間飛行は危険です」

「到着する頃には明るくなりますやろ。うち、ちよつと見てくるわ」

「はア？」

「危険です！」

石永と静江が驚き、鷹姫が注意した。

「現場を見な、わからんこともあるかもしれんやん？」

「臨時代理とはいえ、総理大臣が軽々に動くものじゃないぞ」

「そやろか？ もし、鳩山直人総理やったら自分の目で行かはず

「たんちやう？」

「そんなバカなことはしない。現場で放射能漏れが起こったら、どうする？」

「それは現場で作業する人も、いっしょやん。うちは子供を産む予定ないし、適任よ」

「総理大臣が動くということは、その警護役もヘリのパイロットも、みんながみんな動くということだ。全員を危険に晒す気か？」

「……………」

黙って反論を考える鮎美の目線が彷徨っているし、そばに立っている鷹姫はフラついている上、空腹なのかお腹を鳴らした。静江が問う。

「二人とも、ちゃんと食べてるの？ 顔色が悪いですよ」

「うん、それなりに」

「はい」

鮎美と鷹姫は肯定したけれど、鶴田が否定する。

「いえ、握り飯を一つ二つ、召し上がられたのみで、まともに食事をしてくださいません」

「被災者のこと考えたら、そんで十分よ」

「ダメです!! そんな子供じみた同情は捨ててください!」

「……………」

「ちゃんと食べて、ちゃんと寝てください!! さっきから目が半分寝てます!! もう目がメルトダウン状態です!!」

「……………」

「もう、その発想が判断力の低下をあらわしています!!」

「……………」

「二人とも、お風呂も入ってないですね! はっきり言って臭いです!!」

「……………」

あ、言った、とうとう言った、と司令室にいる隊員たちは思った。頑張って勤めを果たそうとする18歳の女子へ、隊員たちは遠慮して言えなかったことを、同性の静江は遠回しでなく断言した。

「上に立つ者が、そんな身だしなみではダメです！」

「うちが、のんびり風呂入ってる間に何人も死んでいくんよ！ 災害直後の72時間が勝負やん！」

「入っても入らなくても死にます！ ちゃんと休んで明日から正しい判断をしてください!!」

「……………」

「ほら、お互いの顔を見てください！ まともな顔ですか?!」

「……………」

鮎美も鷹姫も目の下にクマが濃い。目線も怪しくて脂ぎった顔をしていた。脂ぎっているのに栄養不足で血色が悪い。どちらかといえば救助される側の顔色だった。

「さあ！ ここは石永官房長官に任せて、二人は休んでください！」

「…………そうやね…………そうするわ。石永先生、頼みます」

「わかった」

石永が頷き、鶴田が用意していた担当に命じる。

「お二人を食堂に案内し、入浴と部屋を用意せよ」

「はいっ」

すぐに2名の女性自衛官が鮎美と鷹姫へ敬礼して名乗る。二人とも自衛官らしいショートヘアで制服が似合っている。

「芹沢総代理代理のお世話をいたします。石原里華（いしはらさとか）3等空尉です」

「宮本鷹姫総代理秘書官のお世話をいたします。大浦麻衣子（おおうらまいこ）2等陸士です」

「よろしく願います」

司令室から食堂に移動すると、夕食時に用意されたのに鮎美と鷹姫が食べなかつたので残されていた分の食事を、里華と麻衣子が電子レンジで温め直して出してくれた。

「どうぞ」

「いただきます」

イスラエルでの昼食会以来、まともなものを食べていなかった二人はカロリー多めの自衛隊食を美味しそうに食べる。麻衣子がお茶を

出しながら言ってくる。

「宮本秘書官、お話してもよろしいですか？」

「はい」

「一昨年の高校剣道、東京大会で私と戦ったこと、覚えていますか？」

石川県の星陵高校から出てたんですけど」

「いえ」

「……そうですか……すぐ負けましたからね……」

「鷹姫は、いつも、そんな感じじゃから、気にせんととき。大浦はん、うちらと歳、近いの？」

「高卒すぐの入隊でしたから、一つ上なだけです。タメ口きいてもいいですか？」

「ええよ」

さきほどまでの司令室と違い、若い女子だけで雑談という雰囲気になり、鮎美が気を緩めると、麻衣子も学生気分になった。

「石川弁が出たら、ごめんなさい。けど、関西弁の人って、どこでも遠慮無く関西弁を出すね？」

「フォーマルそうな場所やとさけてるけど、標準語やと本心から話してない感じするねん」

「あゝ、そういう気持ちはわかるかも」

麻衣子は腕組みして頷き、鮎美は20代半ばに見える里華に問う。

「石原はんは、うちらより、いくつ上？」

「……。答える義務はないし。私に変な気はおこさないで。そういう趣味はないから」

「……………」

にこやかだった鮎美の表情がスーッと冷たくなり、それから怒りで赤くなった。

ドンっ…

右手でテーブルを叩いて席を立つ。ここまで怒るとは思わず、接遇すべき相手を激怒させたことに里華は後悔した。鷹姫と麻衣子が、どう仲裁すべきか戸惑うけれど、鮎美は立ち去らず、深呼吸して席に

戻った。

「ふーっ……うちは睡眠不足でイライラしやすいよ。もう黙って食べるわ」

鮎美が黙って野菜炒めを食べると、麻衣子も鷹姫も黙る。打ち解けた場の空気が重くなり、すぐに食べ終えた。里華が業務的に言う。

「芹沢総理代理は3階の貴賓室へ、どうぞ」

「宮本秘書官は私と相部屋よ。ごめんね、差別的で。自衛隊って階級社会だから」

「……………」

どう答えるべきか二人とも迷い、挨拶だけする。

「ほな、鷹姫、おやすみ」

「はい、お休みなさいませ、芹沢総理」

鮎美は里華と知念の三人で階段をあがっていく。鷹姫は麻衣子に案内されて4人部屋へ荷物を置いた。

「宮本さんの担当になったおかげで4人部屋を二人で使えるの。ラツキー♪」

「……………」

「あ、ごめん、なにか機嫌そこねた？」

「いえ」

「こんな部屋で怒ってる？　これ自衛隊の標準だから我慢してやって」

学校の校舎のようなコンクリート造りの建物にある4人部屋は二段ベッドが二つ左右の壁際にあり、窓際に机は4つ、ロッカーも4つという殺風景なものだった。三島が空自基地全体を陸自に守らせるために呼び寄せた陸自隊員が寝泊まりするためにあてがわれたので麻衣子も今夜使うのが初めてであり、まったく私物がないので殺風景さが増している。

「いえ、これで十分です」

「うーん……なにか怒らせた？　タメ口、やめた方がいい？」

「何も怒っていません。あなたの口調も気になりません」

「……………そつちもタメ口でいいよ？」

「私はこれが普通です」

「そうなんだ……………。道場でも、すごかったよね。空気読まないって
いうか、総理が根性叩き直してやる、って竹刀ふってるのに、容赦な
く勝ち続けるし。見てて、どうなるかと思ったよ」

「あれは私が腑抜けていたので気合いを入れてくださったのです。
…………やはり、私は空気を読めていませんか？」

「…………うん……………まだ初対面だし……………とりあえず、お風呂に行こう。こ
の時間は浴槽の湯は落ちてるらしいけど。シャワーは使えるから」

「はい」

麻衣子と鷹姫は浴場に行く。浴場もホテルや旅館と違い、殺風景な
造りだったけれど、二人とも気にせず脱衣所で裸になった。

「……………」

「……………」

なんとなく、お互いの身体を見た。麻衣子は全国優勝する鷹姫が、
どの程度の身体なのか気になったし、鷹姫も陸上自衛隊の女性隊員が
どの程度鍛えているのか、見たかった。

「宮本さん、やっぱり、いい身体してるね」

「はい」

「……………あ……………もしかして、そつちの趣味あり？」

「……………どういう趣味のことですか？」

「……………それは……………だから、その……………女と……………女で……………イチヤイチャ
みたいなの？」

「……………そういう趣味はありません。そして、同性愛は趣味ではなく、指向き
と書いて、指向です。趣味のように変わるものではなく、一生を通じて
不変らしいです」

「……………そう……………」

「……………。私は、また空気が読めていませんか？」

「……………そ、そうだねえ。今は変な空気だから、さくつと言っちゃうと、私も、
そつちの趣味も指向も無いんで、この変な空気が普通の空気になって
くれると、安心してシャワーできるかな、って」

「……普通の空気……」

鷹姫が少し考え、右腕をあげて腋を見せる。

「普通の女子は腋の毛を剃るそうです。あなたも、そう思いますか？」

「え……ま……まあ……剃るよ。できるだけマメに。女性自衛官に、
どういうイメージもってくれてるのか知らないけど、別にマッチョな
人ばっかじゃなくて、普通の女子だよ」

「そうですか……」

鷹姫は両腕をあげて鏡で自分の腋を見てみる。

「……」

「いろいろ忙しかったの？ ぜんぜん剃ってないね」

「……身だしなみとしては、これも剃るべきなのでしょうか？」

「うん。そろそろ春だから、剃った方がいいよ」

「そうですか……」

鷹姫が腋を撫でているので麻衣子が言う。

「新品のカミソリもってるから、一つあげようか？」

「ありがとうございます。……剃ったことがないのですが、どう剃
るのですか？」

「え……それも、すごいなあ……じゃあ、私も剃るから、いつしよに
やってみてよ」

麻衣子はそろそろ捨てようかと思っていた使い古しかけのカミソ
リをもって洗い場に入り、シャワーで身体を温めてから鷹姫に教え
る。

「このジェルを腋に塗って」

「ありがとうございます」

鷹姫は手渡しされたジェルを腋に塗る。

「それで、こう腕をあげながら、できるだけ残さないように剃るの。宮
本さんはボーボーだから、一度、全体をササッと剃ってみて」

「……こうですか……。見えにくいですね……」

初めて腋を剃るので苦労しつつ鷹姫は左右の腋を剃り終えた。そ
れから髪を洗っているうちに、日本刀で雑に切っただけの髪型が気に

なった。

「私の髪型は、どう見えますか？」

「え……正直に言う……破滅的だよ。あんなザツクリ切って。左右で長さが違ってるし。イジメられた子みたい」

「そうですか……」

「基地の前に散髪屋さんあるよ。美容師もいる。明日の朝、ちゃんとすれば？ ゆっくり休むように言われてるし。たぶん、起床のラツパが、この基地でも6時には鳴ると思うけど、私たちは、それ無視して寝てていいらしいから。のんびり起きてカットすれば？」

「……」

「そのままだと空気読めてない以前の問題だし」

「そうですか、では切ってもらいます。ああいったお店に行くのは初めてなのですが、いくらほど必要でしょうか？」

「え？ カットしたことないの?!」

「はい」

「なんで？」

「私の家は貧しかったので、まとめて切りやすい長さまで伸びた頃に自分でハサミで切っていましたから」

「そうなんだ……喋り方から勝手にお嬢様なイメージもってたよ。ごめん」

入浴を終えると部屋に戻った。二人ともベッドに入ると疲れていたの、すぐに眠り8時過ぎに起きる。自衛隊生活としては遅い朝食を出してもらい、まだ眠っている様子の鮎美へはメールを送ってから鷹姫は基地前の床屋へ行く。世話役の麻衣子もついてきた。

「私も切ってもらおう」

二人で髪を切ってもらいながら、麻衣子は美容師へ問う。

「空自の石原3等空尉の話ってききます？」

「まあ、いろいろと」

美容師は慣れた手つきで麻衣子の髪を切りながら会話する。

「夕べ、ちよつと軽くモメかけたんですけど、どういう人なのかなって」

「悪い子じゃないっしー。防衛大んとき先輩とセクハラでモメてから、少々うるさがたで、ここの上官へも予防線はって、ちよい扱いに困っておるらしいわー。お姉さんら、なんでモメようど？」

「私ら直接じゃないっしー。石原さんがお客さんに向かって予防線いきなりはって、お客さんが怒ったとよ」

「ダラなことすんなーて」

「おいね」

麻衣子はカットしてもらっても、あまり変化は無かったけれど、鷹姫は髪を首の上くらいの長さに切りそろえてもらい、かなり印象が変わった。基地へ戻りながら麻衣子が言う。

「日本人形みたいになったね」

「そうですか」

「石原さんが、ちよいカたい理由もわかったしー。基地の近くにある床屋って、スパイより情報もってるっての、やっぱり本当ねー」

「……………」

鷹姫は聴いているのか、いないのか、短くなった髪を不慣れそうに触っている。麻衣子が訊いてくる。

「根性叩き直されるほどフヌケてたって、どうして？ やっぱり失恋？」

「いえ、違います」

「じゃあ…………地震で大事な人が亡くなったとか？」

「いいえ。……………すいぶん前には亡くなりましたが……………」

「彼氏とか？」

「いえ、母です」

「そう……………」

「単に、みつともない姿を見られて、もう何もかも嫌になって、お家に帰りたくなったのです」

「そうなんだ…………何か失敗したの？」

「人前で失禁してしまいました。……………今、あえて言ってみたのですが…………やはり、恥ずかしいです。他の人には言わないでください。お願いします」

「うん、言わない。あれは恥ずかしいよね。私も、やらかしたわー」
「……………」

「陸自の高所移動訓練でさ。3階建てくらいの高さをワイヤーだけで移動するんだけど、手が滑って落ちたの。命綱があるからプラーンって吊されるだけで済むけど、私、ビビってさあ。宙吊りのまま、ジョーって、おもらし。下から見てた男どもに笑われるし。その夜は泣いたよ。女で自衛隊に入るくらいだから、ちよつとは気が強いつもりだったのに。恥ずかしいやら、情けないやら、三日後に辞表出したけど、上官が受け取ってくれなくて」
「……………」

「その上官が言うの。笑ってたヤツらも実際に危険な目に遭ったらビビって漏らす。激しい実戦の戦場では兵士の半分は漏らしているから気にするなって」
「……………」

「気にしないことだよ。うん」

「……………気持ち強く持とうと思います。……………そして、空気が読めるようになりたい……………」

「空気かあ……………」

たしかに、この子、空気が読めてないというか、空気感が違うよね、と麻衣子は思いつつ、鷹姫が基地内のコンビニへ入ったのでついていく。鷹姫はコンビニで口紅と制汗スプレーを買い、店の外に出ると、ガラスに映る自分を見ながら口紅を塗った。

「……………」

「手つきが慣れてないね。塗るの初めて？」

「はい……………、これで、いいですか？」

「塗ってあげるよ。ジツとして」

「はい」

麻衣子は鷹姫に口紅を塗ってやった。

「あとは馴染ませるように唇をムニユムニユってして」

「はい」

鷹姫は麻衣子の真似をして口紅を馴染ませ、再びガラスに映る自分

をみて頷くと、今度は制汗スプレーを開封して、胸のボタンを外し始めたので麻衣子が止める。

「ちよつと！　ここでシユールする気？」

「はい。いけませんか？」

「あんまりよくないよ。絶対ダメじゃないけどさ。お化粧だつて、こんなところでの行儀のいいことじゃないよ？」

「っ……………」

言われた鷹姫が恥ずかしそう赤面した。

「なるほど、こういう風に空気が読めてないわけね。あなたが自分を変えたい気分なのはわかったからさ。女子トイレに行こう。その前にファンデも買って」

麻衣子は再びコンビニへ入って鷹姫にファンデーションと乳液を買わせると、女子トイレに入った。

「口紅だけだと浮いた印象になるから、この乳液を薄く塗って」

「はい」

「それから、このファンデを軽く叩く」

「こうですか？」

「そうそう」

鷹姫に化粧を指導し、それから制汗スプレーの使い方も説明する。

「これを男性に見られるところで使うのは、かなり恥ずかしいことなの。基本的に使うのは更衣室かトイレね。ただ野営とか…えつと、テントの中で雑魚寝とか、そういう隠れる場所が無いときは、失礼します、って断ってから使う。いい？」

「はい」

鷹姫は自分の腋に制汗スプレーをかけてみた。

「これで汗の匂いは消えるのですか？」

「汗の量によるけど一日もつよ」

「……………」。これで総理大臣秘書官として恥ずかしくないのでしょうか？」

鷹姫が自分の身体を足元から頭まで鏡で見る。麻衣子も見た。

「うん、OK。これ以上に化粧すると逆にケバいから。今の年齢なら、これくらいでいいよ」

「ご指導ありがとうございます」
「いえいえ」

準備が終わった鷹姫が貴賓室に向かうので麻衣子もついていく。部屋の前には長瀬と里華が立っていた。麻衣子が敬礼すると、長瀬と里華も敬礼を返すけれど、鷹姫は自分が文官扱いという身分を理解しているので会釈だけして問う。

「おはようございます。芹沢総理は起きておられますか？」

「おはようございます。はい、さきほど」

長瀬と里華が異口同音した。連携が取れているというよりは、警察と自衛隊、どちらが今の状況で総理代理を警護していくか、分裂している感じがする。それを鷹姫は気にせずドアをノックした。

「入ってもよろしいですか？」

「どうぞ」

「失礼します」

「失礼します」

鷹姫と麻衣子が入室する。

「おはようございます」

「おはようございます。うわあ、豪華な部屋」

貴賓室は20畳ほどの広さで、専用のバスルームとトイレもあり、古びているけれどカーテンなどの内装も豪華なものだった。輪島塗や友禅など、石川県の特産である調度品も置かれている。

「おはようさん。大浦はん、隊員やのに、この部屋を見たことないの？」

静江が持ってきてくれたクリーニング済みの制服を着ながら鮎美が問うた。

「この基地自体が初めてだし。こういう部屋には私の階級じゃあ掃除の担当にでもならない限り近づけないから」

「鷹姫、髪をちゃんと切ったんやね。お化粧も」

鮎美が気づいて鷹姫の髪に指先で触れる。

「はい、秘書官として恥ずかしくない姿になっていますか？」

「うん、可愛いよ」

まだ触れていたのでカットを確かめるような手つきで誤魔化しながら、鷹姫の髪を撫で続ける。

「……………」

レズって本当なんだ、うわあ怪しい関係、石原3尉が警戒するのも正解かも、と見ていた麻衣子は思った。

「お化粧の匂いだけやなくて……鷹姫、スプレーとか使った？」

「はい。腋も剃りました」

「へえ……ちよつと見せて」

「……………」

いやいや、そういうこと報告する？ しかも見せてとか、つていうか芹沢総理、鼻がよすぎ、よくスプレーの匂いまでわかるなあ、犬なみ、と麻衣子が思っているうちに鷹姫は上半身の制服を脱いだ。

「腕あげてみて。ちゃんと剃れてるかチェックしてあげるし」

「ありがとうございます」

鷹姫はバンザイのように両腕をあげた。よく見えるようになった鷹姫の腋にも指先をあてて鮎美は顔を近づけた。

「うん、ちゃんと剃れてるね」

「もう腕をさげてもよいですか？」

「反対側も見てあげるよ」

「はい」

「……………」

いやいや、どう見てもセクハラなんですけど、今一瞬ペロつと舌なめずりしたし！ 舐めたいんだ、同性の腋とか舐めたいんだ！ 気持ち悪っ！ こいつヘンタイ総理だ、日本終わった、あ、でも宮沢総理とか愛人いたし、もつと古い時代の総理なんか愛人いて普通だったらしいし、そんなもんなのかな、登り詰める人って、そっちの欲も強いよねえ、と麻衣子は鮎美への印象を改めつつ黙ってみている。その視線に気づいた鮎美は自制することを思い出した。

「うん、もういいよ。腋もお化粧も、ばっちり女の子らしくて。別人み

「たいに可愛くなってる」

「ありがとうございます」

「ほな、今日も頑張るか」

「はいー」

鮎美は気合いを入れるように左手の拳を右手に叩きつけ、鷹姫は背筋を伸ばして返事をした。二人が司令室へ向かうので、長瀬と里華、麻衣子も付き従う。司令室に入ると、石永と静江がいて、休憩中なのか三島と田守、鶴田はおらず副司令がいた。石永と静江も徹夜はせずに多少の睡眠はとった顔色だった。

「二」「おはようございます」

「二」「おはようございます」

お互いに挨拶し、鮎美も状況報告を受ける。時刻は11時で地震発生から48時間が過ぎようとしている。副司令が言ってくる。

「畑母神防衛大臣臨時代理人が、まもなく到着されます」

ヘリポートに海上保安庁のヘリが着陸し、畑母神が百色とおりてくる。石永が司令室を見回して言う。

「ここで話し合うのは手狭だな。どこか部屋はないか？」

「はっ、大会議室を用意します」

「頼む」

正午が近いので大会議室で昼食をとりながらの会議となり、鮎美が上座につき、その横に石永と畑母神、正面に三島、そして直前になって陸路で到着した夏子が座った。さらに鷹姫と静江、田守、百色、夏子の秘書なども座る。会議は陸海空の幹部自衛官による状況報告から始まり、それぞれに全国各地で救助活動を進めていて、畑母神が二つ三つの指示をした以外は鮎美たちに言うことはなく、聴くだけだったので食事を終えた。石永が全体へ言う。

「救助は現場が頑張ってくれている。我々が判断すべきは、原発の問題、そして内閣の再編、沖縄基地の早期回復だ」

「まず原発ですが」

静江が報告する。

「高さ100メートル超の津波に襲われた女川、福島第一第二、東海、

浜岡の原発は建屋ごと崩壊し、原子炉が地上に露呈しているものと、原子炉ごと海中に引き込まれたものが半々です。海中に引き込まれたものは専門家によれば、冷却が続くので、さらなる核反応は生じないものの、放射能汚染が続きます。地上に残ったものは、すでにメルトスルーを起こし、空気中に放射性物質を撒きながら地中へ落ちていくようですが、空気中に撒かれる量は少ないという期待ができるそうです。むしろ、問題は20メートル程度の津波に襲われた東通、伊方、上関の原発です。各所長の判断で炉内の圧力を逃がすベントが行われたものは周囲に放射性物質を撒いています。爆発まではしないそうです。また、臨時内閣へベントと海水の注入許可を求めてきた各所長に対しては石永官房長官が昨夜のうちに許可され、いまだ予断を許さない状況ですが爆発はしていません。けれど、すでに地震発生24時間で五つの原子炉が水素爆発を起こしており、宮城県と愛媛県に大きく放射性物質を大気中へ放出しております」

「伊方、上関は呉に近いな……あんなところに原発をつくるとは……」

畑母神が言った。鮎美が問う。

「住民への避難勧告は、まだですよ？」

「はい、まだです。何の説明もしていません。いつ、どの程度の説明をし、どの範囲の住民を避難させるか、まったく決まっています。不幸中の幸い、と申しますか、言い様に問題はありますが1000メートル超の津波に襲われた地区は、そもそも避難させるべき住民が、ほぼ死滅しています。家財道具を取りに戻る住民も少しはいるでしょうが、原子炉が流れるほどの津波ですから住宅など基礎ごと消えています。すぐに諦めて避難場所へ戻るでしょう。やはり問題なのは20メートル前後の津波を受け、残っている住宅地と住民もありつつ、放射能汚染される可能性がある地区です」

「ただちに避難させよ!!」

三島が言った。

「どの範囲をですか？」

「可能性のある地区すべてだ!」

「どこに避難させるのですか？」

「離れたところだ！」

「広く範囲を取れば数十万人が対象になります。狭く範囲を取れば数百人。その数百人への放射能汚染も、ただちに健康に害をおよぼすレベルではありません。レントゲン写真を30回浴びるほどです」

「……………」

「むしろ、慌てて避難するよりは屋内で静かにしている方がよいかもしれません」

「とはいえ、赤子や妊婦もおろう！」

「それだけにパニックを起こさない周知が必要なんです！ レントゲン写真くらいは被爆かもしれないのに、避難中に転倒して流産したら、元も子もないんです！」

「……………」

「次に内閣の再編についてです。すでに決まっている閣僚以外を、昨夜のうちに候補をあげました。こちらをご覧ください」

静江がモニターに組閣図を映す。鷹姫は目配せされて窓のカーテンを閉めた。内閣の候補を見て、鮎美はつぶやく。

「これは……………また……………思いつきり……………石永派やん……………」

まだ他の国会議員との付き合いが浅い鮎美にも、挙げられた候補が落選中の自民党衆議院議員で、しかも石永と付き合いのある者たちだと、すぐにわかった。

「民主党は私一人ってわけ？」

夏子が愚痴った。

「民主党の先生方は、さきの総選挙で、みなさん当選されており地震当日国会におられましたので……………まことにお気の毒です」

「探せば、落選した候補もいるよ。自民党だってゼロ議席だったわけじゃないからさ」

「あれだけの大勝で風に乗れず落ちた者など、一兵卒にもならぬよ」

畑母神が言い、夏子が言い返す。

「と、ゼロ議席だった政党の党首が言っております」

「……………」

畑母神が渋い顔をしたので鮎美が二人へ頭をさげる。

「頼みます！ いきなり空中分解せんといってください！」

「……………」

二人とも舌の矛をおさめた。静江が続ける。

「この人選で進めさせていただいて、よろしいですか？」

「……………」

畑母神がつくった日本一心党は東京が主な活動拠点だったので、閣僚に推せるほどの人物はいなくなっていて、現役の自衛隊内には見込みのある人物もいるものの津波で統合幕僚監部が消失した今、ただでさえ貴重な幹部自衛官を現場から引つ込めることはしたくない。鮎美にも、もうあてはない。三島も個人的なカリスマ性で組織をつくってきたので自分以外の者となると推しにくい。夏子にしても畑母神が言ったとおり、あの大勝で落選した国政候補者は推しにくいし、県議や市議というわけにもいかない。

「よろしいですね？」

「ちよつと待つてよ。もう少し考えさせて！」

鮎美が言った。

「ですが、芹沢先生、もう時間がありません。一刻も早く発表すべきです！ あと二時間もすれば、地震発生から48時間です。これを目処に新内閣を打ち出すべきです！」

「……………」

くっ…………一晩のうちに勝手に人選しておいて…………うちに、ゆっくり寝てる言うた人は、こういうことやったんか、と鮎美は悔しく思うけれど、別に悪い人物を推されているわけではないとも感じている。

「芹沢先生、他に候補がおありですか？」

「……………ある」

ないけれど、あると言った。

「どなたですか？」

「まだ交渉中なんよ。決まったら言うわ」

「いつまでに？」

「……………。ちよつとトイレ行くわ」

そう言つて鮎美は席を立ち、目線で鷹姫を呼んだ。二人で大会議室を出ると、女子トイレへ向かう。会議室前の廊下で待機していた長瀬と里華、麻衣子もついていくけれど、長瀬は女子トイレの前で止まり、里華と麻衣子はトイレ内までついていく。鮎美は密談したので鷹姫だけを個室に連れ込んだ。そして外に漏れないよう鷹姫の耳元へ囁く。

「このままやと、石永内閣みたいになるし。悪い候補やないと思うけど、鷹姫は、どう思う?」

問われた鷹姫も、麻衣子や里華には聴こえないよう鮎美の耳に囁く。

「人脈がすべて石永先生に偏っています。当然ではありませんが、地域的にも関西付近に偏り、他の地方から不満が出るでしょう。とくに北海道九州はゼロです。また、石永先生より若い先生が多く、当選回数も多くても3期と経験の浅い先生が多いようです」

「石永先生が2期やからね。自分の言うこと聞いてくれそうな先生を選んだんやろ」

「私たちが年齢や経験のこと言うのは滑稽ですが、それだけに高齢で経験豊富な先生が畑母神先生だけというのは不安です。畑母神先生にしても政治ではなく軍事の専門家です」

「静江はん、お兄さんを総理大臣にする気でいはるねん。わかる?」

「はい、人が変わったように強引です。非礼なほど」

「うちが総理大臣いうのも無茶やけど、法的安定を考えると、うちがベストやし。明らかに権力争いしてる場合やないのに、思いつきり権力争いになつてる。石永先生は、いい人やけど、若干シスコンというか、ガチにブラコンな妹に押されての消極的シスコンなどこあるし。何より、石永先生が判断を間違つたとき、それを抑制する者がおらんのは不安やわ。けど、うちには、もう思い当たるのは久野先生くらいしか、おらんし。声はかけるとしても引退したと固辞されるかもしれない。そこで鷹姫にお願いなんやけど、石永先生より多選で経験豊富、そして生き残ってくれてはりそうな地域にいた先生で、できれば、うちが声をかけて内閣に引き込んだことを多少なりと恩義に感じてく

れはりそうな先生を捜してよ。一時間以内に」

「一時間以内……」

「ごめんな、無茶な注文で。けど、それまでは会議を引き伸ばすわ」「やってみます。いえ、お任せください!」

結論が出たので二人が個室を出る。待っていた麻衣子に変な想像をして赤面していたし、里華は嫌悪感を隠しきれない顔色だったけれど、二人とも気にしない。鷹姫は麻衣子をつれて基地内の情報室へ行き、鮎美は長瀬と里華につかれて大会議室に戻ると静江が言ってくる。

「候補はおありですか?」

「あるよ」

「まさか、宮本さんなんて言いませんよね。女子高生大臣は一人で十分です」

「内閣のポストについては、もう少し考慮するとして。次の沖縄について進めてください」

「……………。わかりました」

静江が別の資料を配る。

「沖縄は那覇空港の機能が停止し、津波到達までの時間があつたため犠牲者は少ないのですが、その分、避難場所や食料品の確保が課題です。また、中国軍機と思われる飛行機の侵入が何度も確認され、平時であれば、これらの領空接近には那覇から飛び立った戦闘機で対応していたのですが、今は新田原から飛ぶため、航続距離の問題もあつて十分な対応ができていません。早期の那覇空港機能回復は重要な課題です」

「それについて本州で救助にあたっている隊員の一部をさききたいのだが、芹沢総理代理のご意向は?」

畑母神の問いに鮎美は少し考えてから答える。

「あと24時間、全力で救助にあたってもらうことはできませんか?」

地震発生から72時間、その間は全力で救助に」

「おっしゃることはわかるが、領空侵犯への対応というのは素人が考えるより重要なのだよ。これに対応しないと我々に対応能力無しと

みて、より大きな侵入行為を呼び込むことになりかねない」

「領空侵犯は、この目で見ました。沖縄本島上空やのに、あいつら平気で、うちが乗ってる飛行機を拉致りに来ましたもん」

「ああ、その報告は受けている。それだけに重要だと理解してほしい」

「……………」

「芹沢総理代理、私の判断で救助をやめ、沖縄へ必要な隊員を派遣する。どうか、理解してほしい」

「……………今も、何人も救助してはりますよね。救助をやめるということは、助かったかもしれない救助を待つ人を見捨てるということですよん……………」

「苦渋の決断だ」

「……………漂流してる人もいるかもしれないのに……………絶対、いますよね……………こんな寒い中、家の残骸につかまって浮いてる人とか……………壊れた船に乗って……………」

「東京方面、大阪方面の部隊は削らない。他を削る」

「……………そんな、うちの大事な人さえ助けられたいな……………」

「地理的な問題だよ。九州、四国、中国の部隊を削る」

「……………」

「救助は海上保安庁、地上では警察と消防も行っている」

「自衛隊と圧倒的に能力が違うのは、わかってますよ……………ガソリンスタンドが動いてなかったら、警察も消防も自前で補給できませんやん」

「九州から沖縄へ部隊を移動させる途中に漂流者を発見する可能性もあるよ」

「……………」

「あなたが迷っている間にも事態は進行する」

「迷ってるうちに誰か助けてるかもしれないやん!!」

「……………」

「大きな声を出して、すみません」

「いや……………私も強引だった。だが、必要なことなのだ」

「……………それをしなかった場合、どうなりますか？」

「最悪の場合、戦争になる。無人島はともかく、有人島に上陸された場合、こちららも隊員を派遣しないわけにはいかない。結果、当然に戦闘となるだろう」

「……………」

「多くの隊員が死傷することになる」

「……………そこまで……………向こうも、してくるでしょうか？」

「……………」

畑母神は立ち上がると、カーテンを開け、滑走路の方を指した。

「あそこに、あなたが乗ってきたA321が駐機されているが、中国機のジェットを浴びて、正面が焦げている。再び飛ぶには修理が必要だ」

「……………」

「威嚇射撃さえ、されたそうだね？」

「はい」

「百色くん。平時であつたのに漁船から体当たりされたとき、どう感じた？」

「それを今、お嬢さんに語るのは可哀想つてもんですよ、閣下」

「だが、無視できない事実だ。総理代理お一人の決断ではなく、暫定内閣の多数決としよう。沖縄への部隊増派に賛成の者は？」

「賛成である！」

「賛成する」

三島と石永が挙手し、鮎美と夏子は目を合わせる。そして同時に、ゆっくりと手をあげた。

「賛成」

「全会一致。私は司令室へ行かせてもらいます。他に経済関係の議論があるそうだが、先に指揮をしておきたい。経済のことは、進めておいてください」

畑母神は百色と大会議室を出て行った。

「あの、おっさん、苦手な経済から逃げたわね」

夏子がぼやき、時間が惜しいので話を進める。

「IMFとのやり取りは私が進めています。アメリカ経済も大きなダメージがあるし、南米は、もともと経済が安定してないし、ニューヨークランドは当然、オーストラリアも津波の被害は少なくとも、海運が停止しているから、じわじわと経済に響きます。東南アジアも当然。これだけの事態に対してヨーロッパも協力的なので、月曜から通貨の固定はできそうです。ただ、霞ケ関の再建について、石川県知事とやり取りしていますが、くだらない利権争いが始まって困っています」

「愚か者がっ」

三島が言い放ち、鮎美が問う。

「どんな争いですか？」

「霞ケ関を再建するにはハコが要るよね。ビルが要る。買い上げか、借りるか、所有者と交渉しないといけない。空きテナントは、どんどん借りてるから、そこそこには用意できそうだけど、どうしても値上げされちゃうし、ミニバブルが起きそうなの。金沢市の琵琶町市場の周辺なんて、家賃相場をあげたいから不動産業者がホームページに掲載してる価格を、全部、応相談に変えてるし」

石永が付け加える。

「まあ、琵琶町市場そのものが、琵琶商人が北陸へ出て行って造ったものだからな。三方よし、と言いつつ、琵琶商人の通った後には草も生えない、とも言われてる。こういうときに儲けようと悪い根性が出てくるなあ」

「解説はいいからさ。このままだと金沢駅周辺が新宿か銀座並みの地代になりそうなの。どうしよう？ しかも、石川県知事は、これを機会に地元を潤そうって気配で値上げ抑制に消極的なよ。ホント、男ってヤダヤダ」

「うちに、ええ考えがありますよ。っていうか、想定内ですわ」

「どんな？」

夏子と石永が問うた。

「琵琶商人の根性には堺の商人の悪知恵で対抗したらええんです。福井県か、富山県に副都心を置くと発表します。どちらかの街が、より安く、より使いやすいビルや土地を提供してくれたら、そこへ霞ケ関

の半分を置くと言い、金沢市は急に値上げして交渉が難航してるので、この国難に協力しない県民性が信用できない、と裏で言いつつ、表では東京一極集中の結果として一気に霞ヶ関が失われて困っている。今後は中央行政機能は二つの土地に分ける方針にした、と言えれば済みます。福井と富山は値下げ合戦するし、きつと金沢も慌てて値下げしますわ」

「……大阪の女子高生って、みんな、こんななの？」

「えぐいなあ……堺の商人も。田舎の土地持ちの足元見て叩き崩すとは……」

「芹沢殿の見識は小悪党の猿知恵など、ゆうに凌駕しておるなあ」

用地買収については方針が決まり、石永が別の議題を出す。

「今の一極集中をさけるという議論にも通じるが、陛下と妹宮様について。今は那須の御用邸においでだが、幼い兄妹を分けるのは忍びないものの、お二人には離れた場所に暮らしていただきたいのだが、どうだろうか？」

「そんな気の毒な……」

鮎美が言い、三島も頷く。

「妹宮様は7歳であろう。ご両親を……この上、兄と引き裂かれるのは……だが、石永殿のおっしゃる懸念もわかる……万一、余震などで、お二人が……そのときは、日本の……」

「オレは地震のとき京都御所にいたんだ。津波は御所の前までしか、来なかった。まるで古代の占星術師が知っていたかのように。京都御所の建物も無事だ。陛下には京都御所に戻っていただき、妹宮様には那須にて生活していただきたい」

「それ、南北朝みたいに権力が分散しません？」

「それは大丈夫だ。この際は兄弟でなく兄妹であることが幸いする。皇統は男子優先となっているからな」

夏子が言う。

「単純にさ。15歳のお兄ちゃんから7歳の妹を引き離すのは、どうよ？ 石永先生と石永さんも兄妹でしょ。自分たちが中学生小学生のとき、そんなことされて、いいわけ？」

「……………」

「うちは反対！」

「私も反対よ」

「……………オレは、気の毒だが、進めさせてほしい。おそらく畑母神先生も賛同してくれるだろう」

二対二となり、三島へ注目が集まる。

「……………我は……………」

即断即決が多い三島が悩む。

「……………申し訳ない。この件は継続審議としていただきたい。なににより、御本人様方のお気持ちもあろう。おそれながら、そこも問わねばなるまい」

「そうだな、それは、たしかに。オレの先走り過ぎか」

「お兄ちや…いえ、石永官房長官の心配は当然です。どんな災害や事故が、いつ起こるかわからないのですから。同じ心配は芹沢鮎美総理大臣臨時代理にもあります。本人を前にして言いにくいですが、もし、後継者を指名しないまま、死んでしまったとき、とても困ります。このさい、自分が死んでしまった場合の総理大臣候補を指名しておいてください」

「……………うちが……………死んだらかあ……………」

「無礼であろう！」

「三島はん、別にええよ。うちは不死身ちゃうし。刺されて死にかけたことあるし」

「このさい、石永官房長官が最適ではないでしょうか？」

「静江はん……………」

「静江……………」

石永も妹の強引さに疲れてきたし、鮎美に悪いと思う。鮎美は少し考え、石永へ問う。

「石永先生は、もし、うちが死んだとき、今の閣僚の中やったら、誰がベストやと思いますか？」

「……………畑母神先生だろう」

「では、そう指名します。鷹姫、なにか紙を…あ、そっか、おらんのか」

鮎美は手元にあつた資料の裏に書く。

「これって一種の遺言やね」

自分が死んだときは畑母神を総理大臣臨時復代理にすると書いてから気づく。

「あ、ハンコがない。拇印でええか」

「玉爾も見つけ出さないとなあ」

だいたい議論が終わつたので石永も気を抜いて伸びをした。静江は畳みかけにくる。

「閣僚の人事を決めたいと思います」

「ちよつと休憩しよ。うち、何か飲んでくるわ。これ畑母神先生に届けるし」

「そんな資料の裏とか失礼じゃないか？」

「ただの紙くずになるよう。死なんようにするわ」

鮎美は疲れたので肩を回しながら廊下に出た。長瀬と知念が交代したようで知念と里華がついてくる。また鷹姫と密談するつもりなので二人の意識を別のことにそらすため鮎美は余計なことを言うことにした。

「石原はん、気をつけいや。さつきまでの長瀬はんは結婚してはるけど、知念はんは未婚やし。しかも、うちの主治医やつた女医さんの見張りを一晚頼んだだけで、押し倒してもものにしはつたし」

「なっ?! ちよ! 何を言うんすかっ!」

「事実やろ?」

「……事実つすけど……言い方が……」

知念から里華が一步離れてついてくるようになった。鮎美は鷹姫からメールをもらつていたので情報室へ里華に案内してもらおう。

「石原はん、情報室つて、どこ?」

「こちらです。どうぞ」

すぐに古いファイルやパソコンが置いてある部屋に案内してもらつた。そこで調べ物をしていた鷹姫に問う前に、麻衣子に出ていってもらい、他に誰もいないか確認し、知念と里華に言う。

「三人は悪いけど廊下で待ってて。大浦はん、石原はん、変なことされそうになったら悲鳴あげいよ。助けにいくわ」

「しないっすよ!」

「え? この人、ヤバいの?」

「ヤバくないっす!」

「ご忠告ありがとうございます。ですが、情報室内でも変なことは控えてください」

さくらつと里華が言ったので、鮎美は力なく笑う。

「…はは…」

「ほーら、自分だって言われた。日頃の行い的に芹沢総理の方が危ないっすよ」

「はいはい」

三人に廊下で待機してもらい、鷹姫と話す。

「どう? うちが頼めそうな政治家、見つかった?」

「お一人だけ」

鷹姫がメモを見せる。

「……北海道……鈴木宗緒(すずきむねお)……女性の大家政治家やんな。小柄で可愛らしい感じの……いくつやったけ?」

「現在62歳です」

「この人、生き残ってはるん? 当選してそんな人やけど」

「2010年9月に最高裁で有罪判決を受け、現在は栃木県にある刑務所、喜連川社会復帰促進センター女子部に服役しています。刑期を3分の1以上過ぎていますので仮釈放は可能です。公民権は停止されていますが、芹沢総理が指名している大臣臨時代理人は、あくまで代理人であって、本来の権限は総理臨時代理にあるまま、ということなら、通ります」

「気づいてたんや。うちが代理人にしてる理由」

「はい。いっしょに勉強した間柄ですから」

「フフ。栃木県か……那須御用邸も栃木やし。実は外務大臣としての親任式も、まだなんよな」

「非常時ですが、それゆえに形も重要かと思えます」

「うん、久野先生もいはるし栃木に飛ぶわ。ついてきて」
「はい」

話が決まったので鮎美は鷹姫をつれ、司令室に行くと畑母神に親任を受けるためと説明し、ヘリの準備を頼んだ。それから胸ポケットに入れていた紙を差し出す。

「こんな紙で失礼ですけど、万一、うちが死んだら、あとを頼みます。もっと、きちんとした紙で帰ったら内閣の大臣代理人、委任状なども作りますわ」

「これは？」

受け取った畑母神が目を通し、自分を後継者に指名してくれていることを知った。嬉しそうな顔はしなかったけれど、頼られていると感じて微笑する。

「若い君が死んで定年退職した私が残ることがないようヘリの整備は万全にさせよう」

「お願いします。栃木までヘリで何分ですか？」

「片道2時間といったところだ」

「わかりました」

鮎美は久野へ電話をかける。

「もしもし、芹沢です」

「久野です」

「これから、そちらに向かいますので、外務大臣としての親任式と、内閣総理大臣臨時代理としての承認なり、何らかの形を陛下からいただくことはできるでしょうか？」

「わかりました。事態が事態ですから、ごく簡単な式典になりますが、用意します」

「お願いします」

電話を終えた鮎美へ鷹姫が囁き問う。

「久野先生に入閣をお願いされないのですか？」

「会ってから話すつもりやねん」

司令室を出て大会議室に戻った。他のメンバーもそろっている。鮎美が問う。

「石永先生、マスコミの様子は？」

「地震発生から48時間を前に、基地の前に集まっている。どこの局も本社が消滅しているから少数だが、北陸の地方局は元気だしな。どうする？ 今日の記事会見、内閣の人事を発表するか？」

「その発表は夜に行うと発表してください。うちは、これから栃木へ飛んで陛下より親任を受けてきます。記者会見は石永先生がやってください。原発の問題は、避難が容易である人は念のために避難、避難が困難な人は自宅待機、すでに津波で原発から離れている人は不要不急であれば自宅へ戻らないよう。発表してください」

「それで住民が納得するかな？」

「納得させるのが官房長官の仕事です」

「言ったな。わかった、やろう」

「あと、加賀田知事：いえ、加賀田大臣」

「夏子でいいよ」

「それは仕事上の気分的に、どうやる？ うちも軽い気持ちになるし。まあ、ええわ、夏子はん、さっきの富山県と福井県に副都心を打診する件、夏子はんから福井県知事に電話してもらえますか？ そんな富山県知事には静江はんが、後腐れのないよう同時に連絡してください」

「隣の知事から言われると、福井県知事も頑張らないとねえ。いい狙いしてるよ、鮎美ちゃん」

「私より、お兄ちゃんの方がよくないですか？ ただの秘書官より官房長官」

「お兄さんの仕事を減らしてあげましょうよ」

「はいー」

「ほな、その連絡が終わった一時間後に副都心計画は発表。原発の話のあとに。その方が北陸のテレビ局は、そつちに食いついてくるでしょうし」

「なるほど、たしかに」

「鮎美ちゃん、豪腕ねえ」

「みなさんの協力があったの事です。これからも、よろしくお願い

します」

鮎美は頭をさげた。静江が声をあげる。

「あー！」

「なんやの？ 静江はん」

「議事録をとってないわ！」

「あ、たしかに……」

「そうだな。議事録か、そういうことを忘れていたなあ」

大会議室へ司令室から移って、話し合おうと暫定内閣で進めた経過を誰も記録していなかった。静江が鷹姫に言う。

「宮本さん、記憶力がいいから、それなりに問題無さそうな議事録を作成してみよ」

「はい」

「あ、鷹姫は、これから栃木に連れて行くし。途中、抜けてた部分あるし、静江はん頑張ってよ」

「うっ……はい……」

「あと、鷹姫を首席秘書官とします。それで、よろしく」

「……」

静江と鷹姫に微妙な間ができる。陽湖と鐘留は秘書補佐なので明らかに鷹姫の下だったけれど、これまで静江と詩織は同列の秘書だった。むしろ、年齢と経験がある分、静江が中心だった。それを自覚している鷹姫が言う。

「経験的に石永さんが首席だと思いますが」

「首相の首席秘書官は法定のものやなくて、たんなる習慣やし。単にお気に入りという意味合いが強いよ。これからも協力し合って、頑張って」

「はい」

「……はい」

鷹姫と静江が返事をし、鮎美は三島に声をかける。

「三島はん、二つほど話があるんで、いっしょにヘリポートまで来てもらえますか」

「承知した」

三島と田守が立ち、鷹姫と四人で会議室を出ると、知念と里華もついてくる。麻衣子がいないことに鮎美が気づいた。

「あれ、大浦はんは？」

知念が答える。

「栃木まで行くなら装備するものがあるって上に言われたみたいですよ」

「ふーん……まあ、ええわ。えっと、三島はん、二人つきりで話がいんやけど、女子トイレって入れる？」

「……。法律上は入れるが心情的に入りたくはない」

「ですよ、すみません。ほな、えっと……石原はん、どっか、手頃な部屋ない？」

「貴賓室をお使いになれば？」

「あ、そっか」

鮎美は貴賓室で三島と二人になった。鷹姫と田守さえ、外で待たせる。

「二つめは、たいした話やのうて、刑務所に入ってる鈴木先生に仕事を頼みたいし、仮釈放は法務省の管轄やから、もしかしたら、三島はんは手続きが回るかもしれんってことよ。うちが直接、刑務所に行くつもりやから、たぶん臨時総代理の名でいけると思うけど」

「刑務所？ 鈴木宗緒氏か。わかった。なにがしか手続きがあれば、即対応しよう」

「もう一つは、なぜ、三島はんが法務大臣か、という話ですよ」

「うむ」

三島も、その説明は待っていたので傾聴する。

「この三日間で数千万という人が亡くなり、その5%が同性愛者やとすると、1000万人でも50万人、6000万人なら300万人もが同性愛者という計算になりますやん？」

「うむ、そういう計算も成り立つ」

「同性愛カップルで、いっしょに暮らしてはったら、二人とも亡くなるか、二人とも助かるかしてはるかもしれん。けど、片方が行方不明というケースも……ハア……ある」

自分があてはまるケースを口にする。鮎美は胸がつまるような息苦しさを覚えて呼吸を乱した。三島が男らしい動作で鮎美の肩を撫でる。武術鍛錬などで荒れた手だったけれど、女性の手なので鮎美は慰められた。

「ハア…大丈夫です。おおきに。それで、そういうケースで、相手の安否を知ろうにも、個人情報壁が立ちほだかる。家族やない、法律上の結婚相手やない、ということ。病院も役所も、安否確認に協力してくれん」

「うむ、そうなる」

「三島はんは、性同一性障碍と同性愛者って稀なケースやから、普通の結婚をしてはるけど、同性愛者の気持ちもわかってくれはりますやろ？」

「むろん」

「ほな、うちは、うちに内閣総理大臣としての権限がある間に、同性婚を法律上、成立させてしまいたい。それに協力して」

「この国難の時期に…か？」

「そうよ。この混乱に乗じるように見えるかもしれんけど、そうやないよ。もう差し迫ったことやん。行方不明で安否が知りたい。けど、法律の壁が邪魔する。これは非人道的な差し迫った危機やん」

「…たしかに」

「そして、この混乱期やなかったら、また異性愛者らは、議論が成熟してないとか、慎重な検討を要するとか、グタグタぬかして、いつまでも、いつまでも同性婚を認めおらんよ」

「うむ……」

「多数決では少数者は負けるねん。議会が無いから法律の成立は難しいけど、省令でも閣議決定でも、なにか形になるように作り上げたいんよ。協力して」

「………芹沢殿のお気持ち、よくわかった。全力で応えよう」

「おおきに。でも、まだ表立っては動かんといてな」

「慎重に進めよう。我もクーデターが露見した経験がある。その失敗に学ぼう。それにしても、これは同性愛者による異性愛者へのクーデ

ターかもしれないな。かつつか」

「フフ、多数が常に正義とは限らんのよ」

鮎美が横髪を左手で掻き上げ、耳にかけた。

「あと、国友泰治って、うちの同級生が小松基地にいらってるんやけど、ゲイなんよ」

「それで？」

「彼には災害時に少数者への差別がおこらんようにする自警団的なものをつくるよう指示したんやけど、そこに法的根拠というか、法務省のお墨付きみたいなもんも、つけてあげてほしいの。取り組んでおいて」

「承知した。弱き者こそ、助けねばな」

二人の密談が終わり部屋を出る。待っていた鷹姫、田守、知念、里華に加え、麻衣子がフル装備で駆けてくる。

「ハア：ハア：間に合った」

大きな銃や弾倉、手榴弾、背囊など、かなり重そうな装備をつけていた。ガスマスクなどは鮎美の分として二つ装備している。

「重そうやな、それ」

「だって、芹沢総理、ハア：何度も暗殺されかけてるし：ハア：陸自で装備というと：ハア：こうなるんですよ。警察さんは、いいですよ。拳銃だけで」

「防弾チョッキもあるっすよ。ま、そのゴツツい銃で撃たれたら通りそうっすけど」

「石原はんって何も武器もってないの？」

「はい」

里華は空自の制服だけで拳銃さえ装備していなかった。麻衣子が言う。

「空自さんは地上装備が、ほとんどないから」

「オレら、三つの組織に分かれてるっすから、いざ芹沢総理を守るとき、ちゃんと連携とれるっすかね？ 二人とも要人警護の経験は？」

「……………」

二人とも、たまたま女性だったし、近くにいたので上官が鮎美の担当にすると差し出した隊員で、空戦や陸戦の訓練はしてきていても、要人警護など習ったことが無かった。

「無いっすか」

知念が少し考えて言う。

「じゃあ、明らかに銃などの武器を持って襲いかかってくるヤツがいたときは大浦陸士がオフエンス、オレが中間、石原空尉は芹沢総理をかばって地面に伏せる。武器を持っているか、持っていないかわからない、そもそも敵意があるのか、ないのか不明な怪しいヤツが近づいてきたときはオレがオフエンス、大浦陸士が中間、石原空尉は芹沢総理をかばう。オレがオフエンスになってるとき二人に注意してほしいのは容疑者が一人じゃないかもしれないってことで前ばかり見てないで、後ろから襲ってくる奴がいるかもって考えてほしいっす」

「わかりました」

「あと、三人のうちで誰が指揮者にするっすか？ 階級的に陸士と空尉なら空尉が上でしょうけど、警部補と空尉って、どっちが上なんっすか？」

「……さあ？」

「今まで基地内だったっすから、つい決めてなかったっすけど、外に出るとなると、いざってことがあるかもしれないし」

「混成部隊の脆さがでそうね」

里華も悩む。

「やっぱり指揮者は要人警護の経験がある知念警部補にまかせましょ。私たちは指示に従う」

「了解っす。何度か軽く模擬戦をやってみましょう。ちようど日本刀なんかもってる田守さんがいるし。不審者役お願いしていいっすか？」

「……わかった」

「あと、宮本さんと三島さんは、不審者が実はオトリで背後から襲う役で」

「よかろう」

「はい」

廊下で7人が分かれて立つ。鮎美を中心に知念、里華、麻衣子が移動しているときに前方から日本刀をもった田守が近づいてきたという設定で始まった。まず知念が前に出て、田守に職質をかける。

「あーっ、ちよつといいですか？ 持ち物を見せていただきたいんですが」

「……………」

田守はセリフが思いつかないので立ち止まるだけだった。

「では、ここでオレと田守さんが揉み合いになる、と。で、後方から宮本さんと三島さんが襲ってきてください」

知念と田守は格闘しなかったけれど、鷹姫が里華へ、三島が麻衣子へ近づくと格闘になる。鷹姫と里華は柔道、三島と麻衣子は近接格闘術だった。

「はいはい！ ストップ！ ホントに格闘しなくていいっすからー！」

「ハア…いぎ、やってみると、本当に発砲していいのか、迷ってるうちに襲われますね」

銃をもっていたのに発砲するという判断ができなかった麻衣子が言った。知念が頷く。

「そうなんすよ。あと石原空尉は戦うより芹沢総理を抱いて地面に伏せるのを優先してくださいっす。次、正面から明らかに武器をもって襲ってくる三人を大浦陸士が発砲して応戦、オレは中間で盾になり、石原空尉は芹沢総理をかばうパターンをやって、終わりにしましよー」

再び7人が廊下で配置につく。鷹姫、三島、田守の3人が正面から迫り、麻衣子が銃を構える。

「撃ちます。発砲！」

「二人は伏せるー！」

知念は、ときどき持っているカバンを広げて盾にした。里華は鮎美を見る。

「……」

「……」

「失礼します」

「はい」

里華が片腕で鮎美を抱き、床へ伏せさせた。里華は自分の身体が襲撃者の方向になるようにして庇う。鮎美は里華の顔を見上げた。短髪なので耳が出ていて、耳朶の形が蠱惑的だった。使っている香水の匂いがよくて、銘柄を知りたくなる。

「……」

「変な目で見ないで」

「すみません」

鮎美は目をそらして謝った。知念が終了を告げる。

「終了です。お疲れ様です。ご協力ありがとうございました」

「」「」「ありがとうございます」「」

演習が終わり、鮎美は知念に言う。

「そのカバンって、そんな風に広げると盾になるんや」

「秘密ですよ。拳銃の弾くらいなら防いでくれるっす。けど、やっぱり大浦陸士がもってる小銃で撃たれたら通るでしょうね」

「ふーん……。ほな、三島はん、さっきの件、よろしく」

あまり武器に興味がない鮎美は、密談した三島に重ねて頼んだ。

「あい、わかった。栃木への往復、無事を祈る」

「おおきに」

鮎美は鷹姫と知念、里華、麻衣子をつれてヘリポートに移動した。陸自のヘリUH-1Jが待機していて、回転翼を回しているので、とても騒音が激しく、風が強い。近づくときスカートが舞わないように鮎美と鷹姫は手で押さえたけれど、鮎美が知念に言う。

「知念はん、海の方を見てて」

「はいっすっ。」

意味がわからなかったけれど知念は日本海の方を見る。小松基地の滑走路からは遮蔽物があって海は見えない。北陸自動車道が邪魔だった。次に鮎美は鷹姫に頼む。

「鷹姫、バンザイして」

「はい」

素直に鷹姫が両手をあげると、鷹姫のスカートが盛大に舞って、オシヤレさのない白いシヨーツが丸見えになった。

「おおきに。疲れが取れたわ」

「はい？」

「……………」

里華と麻衣子が日本海より冷たい目で総理代理を見る。

「もういいっすか？」

「うん、ええよ」

「何だったっすか？」

「気にせんとき。SPは警護対象のプライベートを気にしないってことで」

「はいっす」

五人がUH-1Jに乗った。すぐに離陸し、大きな山脈を避けて飛ぶ2時間あまりの空の旅は騒音と振動、シートの堅さで、とても疲れだ。けれど、石川、富山、新潟、長野、群馬、栃木と被害の少なかつた県の街並みを見ながら飛べたので、まだまだ日本は持ち直せるという気持ちになれた。着陸してから短距離の車両での移動があり、鮎美たちは那須御用邸に到着した。敷地全体を陸自が警護していて、里華と麻衣子は敷地の前で待機することになり、知念も御用邸の玄関で皇宮警察に止められた。鮎美と鷹姫だけが応接間へ通される。

「お会いするのは、二度目やなあ……………三ヶ月ぶり……………新年祝賀の儀からやし、二ヶ月半か……………えらい昔のことに思えるわ」

「……………私まで、お会いして、よいのでしょうか……………ハア……………」

二度目の鮎美も緊張しているけれど、初めてとなる鷹姫は強く緊張している。

「ええんちやう。お正月から、うちら激動やったなあ」

「はい……………」

静かな応接間で数分ほど待っていると久野が入ってきた。

「やあ、芹沢先生。いや、芹沢総理」

「そう呼ばれて恥じないよう頑張ります」

ともかくも、お互い生きていたという気持ちで二人が固く握手し、久野は鷹姫とも握手した。

「宮本さんも大変だね。頑張って」

「私のような愚か者が、どこまで芹沢総理のお役に立てるかわかりませんが全力を尽くします」

「うん、うん」

久野が頷き、鮎美が問う。

「久野先生、陛下は？」

「あと10分ほど、準備にかかるそうだよ」

「そうですか、では、折り入って久野先生にお願いしたいことがあります」

「この年寄りに何をさせようというのかな？」

「阪神淡路大震災を経験され、復興に尽くされた知見を、今一度、国土交通大臣臨時代理人として、どうか私に力を貸してください」

「やはり、そういう話になりますか……上手に断らせないように言ってくるね」

「お願いします！」

鮎美が頭をさげたので鷹姫も慌ててさげる。

「お願いします！」

「うん、わかったよ。ボクも頑張ろう」

「ありがとうございます!!」

久野が承諾してくれたので、鈴木のことを相談する。

「あと一人、声をかけようと思っっているのです」

「誰にかな？」

「ポストは決まっていますませんが、鈴木先生に」

「鈴木……宗緒さん？」

「はい」

「彼女は収監中ではなかったかな？」

「これから仮釈放を所長にお願いするつもりです」

「……だが、公民権は？」

「私が委任する大臣臨時代理人は、内閣法の原則でいう國務大臣の代理には他の國務大臣が就くケースや、事務代理とは違い。ほぼ民法でいう代理人です。ですから私に公民権がある限り問題ないと解釈します」

「ずいぶんと強引だね……たしかに、内閣法は国会議員が、たった一人になるような事態は想定していなかった。しかも、この状況だ。きちんとした国政選挙が行えるのは、いつのことか……それゆえ、民法の法律行為をもつてくることも不法とまではいえないか……だが、そうしてまで鈴木さんを組み込みたい理由は？ 彼女と接点でも？」

「接点はありません。ただ、石永先生が、やや強引で、このままでは実質、石永内閣となります。若さばかりでは、どこかで間違いを起こします。年長者による抑制がほしいのです。どちらかといえば畑母神先生も右寄りです。久野先生、鈴木先生なら、その経験から私たちの間違いを指摘してくださるかと思っています」

「なるほど……石永先生は、あなたの後に正式な総理になるのは自分だ、という気持ちなのだろうね。さつきテレビで彼が官房長官として話しているのを見たよ。たしかに、そういう顔だった」

「別に悪いことではないと思いますし、自然かもしれませんが、石永先生の人脈だけで内閣が固まるのは、よくないかと考えた次第です」

「そうだね。仮釈放や、鈴木さん自身の意志がどうなるかはわからないが、それが必要かもしれないね」

落着点が見えた頃、宮内庁の職員が天皇陛下の到来を告げた。三人とも姿勢をただして起立する。正装した義仁が静かに歩いてきた。成長期の15歳という時期のせいかな、正月に見たときより大きく感じる。応接間の中央で義仁が立ち止まり、鮎美は職員に言われていたので義仁の前へと頭をさげたまま進む。

「朕は芹沢鮎美を鳩山直人の任命により外務大臣と認証する。平成貳拾参年参月壹拾壹日」

「はい」

義仁が渡してくれる証書を鮎美は恭しく受け取りながらも、ふと高校の卒業式は、どうなったのだろうか、場違いなことを思い出した。

「……」

「……」

義仁と鮎美の間に、やや沈黙があり、鮎美は一度、さがる予定だったことを思い出して鷹姫と久野が立っている位置までさがると、証書を鷹姫にもつてもらおう。

「……」

鷹姫が震える手で証書を受け取った。鮎美は再び義仁の前へ頭を下げたまま進み、義仁は別の証書を宮内庁職員から受け取り、読み上げる。

「朕は芹沢鮎美を非常の時なれば、内閣総理大臣臨時代理と任命する。平成式拾参年参月壹拾壹日」

「はい」

受け取りながら鮎美は、日付が遡っていることはよいとしても、今後の元号は、どうなるのだろうか、また今上陛下を前にして緊張感に欠けることを考えていた。式が終わり義仁は退室していく。義仁が完全に退室するまで鮎美たちは礼をしていた。

「これにて式を終わります」

職員が告げ、さらに義仁が着替えた後、鮎美と話したいとのこと、今しばらく応接間で待った。軽装に着替えた義仁が由伊と島津の三人で入ってきた。

「芹沢さんがお元氣そうで安心したよ」

「陛下こそ、お元氣そうでよかったです」

さきほどの式と違い、穏やかな雰囲気では話が始まった。六人がコーヒーテーブルを囲んで椅子に座り、職員が紅茶を出してくれる。また義仁が鮎美へ言う。

「まさか、こんな風に再会するとは思わなかったね」

「はい、本当に」

島津が自己紹介する。

「島津久厚と申します。学習院を仕置きしておりましたが、今となつては陛下のお話相手をしておるだけの爺ですな」

順番的に、この場で自己紹介が必要なのは鷹姫のみだったけれど、ずっと緊張していた鷹姫は声が出なかった。

「……っ……っ……」

発声しようとしても息を吐いて唇が動くだけで声帯がうまく動いてくれない。しかも息を吐くだけで吸うのを忘れていて、そのうちに気が遠くなつて倒れる。

「ちよっ?! 鷹姫……」

鷹姫の顔面がコーヒーターブルに直撃するのを隣にいた鮎美はギリギリで止めた。

「鷹姫、大丈夫なん?」

「ハアっ……ハアっ……」

化粧をしているので血色がわかりにくい。義仁が言ってくる。

「そう緊張なさらなくていいですよ」

「ゆっくり息をしてください」

由伊も言う。立场上、自分たちを前にして卒倒する人間がいることに慣れている様子だった。

「すみません。鷹姫は上下関係を極端に重くみますんで」

上下を気にする人間にとって今上陛下は地上で最高位となるので同じ高さの椅子に座っているだけでも恐れ多かった。鮎美は卒倒しかけた鷹姫が漏らしていないか心配になって、さりげなくお尻を触つたけれど幸いにして濡れていなかった。ヘリの着陸に使った道の駅で二人ともトイレを済ませていたのがよかったのかもしれない。また落ち着かない鷹姫にかわって鮎美が紹介しておく。

「うちの秘書をしてくれてる宮本鷹姫です。同じ歳で同じクラスやつた縁です」

「良い縁のようですね」

島津が言い、鮎美が問う。

「よく鷹姫が戦国時代の話をしてくれるのですが、島津さんの名字も九州の大名におられますが、関係ありますか?」

「ははは、さて、どうですかね」

笑って島津がトボけたので由伊が言う。

「お人が悪いですよ。島津先生」

「そうだよ。島津は、その島津ですよ。芹沢さん」

義仁が肯定したので鮎美と鷹姫は感動した目で島津を見る。

「……………」

よく話に聞く戦国大名の末裔を目にして対話でき、とても嬉しかった。

「…すごい……ホンマにいてはるんや……」

「なんの。そこにおわす陛下の方が、血統の確かさは、はるかに上。ワシの家など、田舎者の証明のようなもんですぞ」

「命をつないできたということについて、私も芹沢さんも同じだよ。一匹の甲虫だって、そうだ」

義仁の言葉に全員が頷いた。義仁は妹を見て言う。

「由伊から、芹沢さんをお願いがあるそうなんだ」

「はい。どのようなことでしょうか？」

「お兄様の御世で使う元号、復という字を一文字目につかってくれませんか。復興、復活、回復の復です」

「復興……復活……はい、必ずそうします。あ……そう決める会議などの機関も未定なのですが、必ず、それは使います」

「由伊のわがままをきてくれて、ありがとう。復なら、頭文字はFだから、明治大正昭和平成、MTSHにかぶらない。私からもお願いするよ」

「はい。必ず。……それにしても、陛下がアルファベットまで気づかわれるのは意外というか……和風の象徴みたいな方がアルファベットを口にされるのは驚きです」

「フフ、漢字も中国からの外来語だったんだ。ひらがな、カタカナ、私たち日本人は何でもよいところを学び使ってきたからね。そのうちアラビア語だって使うかもしれない。げんに数字はアラビア数字も使い、ローマ数字も使う」

「たしかに……。復興……復活……いつそ、復興か、復活、どちらか、そのまま元号では、どうでしょうか？ 実は諮問する会議などもないので陛下のご意向、ご許可がいただければ、即断即決に決まります」

鮎美の提案に久野が助言してくれる。

「芹沢総理、元号には熟語として意味が通り、ごく普通に使われているものは、さけるのですよ。平成も平成以外の意味は、ほぼ無いでしょう」

「あ……そうですね……これは失言でした。つい急ぎすぎて……すみません」

鮎美が謝り、鷹姫がつぶやいた。

「和……、復和……では？」

由伊が手を合わせて喜ぶ。

「昭和の和ですね。重ねて、再び、あの時代のように復興する意味もこもります。とても、いいと私も思いますわ。お兄様。いえ、陛下」

「そうだね。復和（ふくわ）という音の響きも、ふわりとしてよいね。いっそ、腹話術のように、国民みんなに笑いがくる時代になってくれるといい。どうだろう、島津？」

「お若い四人が良いとお考えになることに、年寄りが水を差しては、つまらぬことです」

島津が頷き、決まった。鮎美も異存ない。

「今夜にも発表します」

「お身体に気をつけて」

「宮本さんも元気でいてください」

「は、はい、あ、ありがとうございます！」

鮎美と鷹姫は礼をして御用邸を出る。玄関前で待っていた知念と車両に乗り、敷地前で待機していた里華と麻衣子も乗せると、元号が決まったことを教えた。

「復和ですか。いいと思いますけど、こんなに簡単に決まっちゃうものなんすね」

「平時やったら、学者やら専門家やら集めて、何十回も会議して、その予算だけでも報酬と会場費ふくめて、すごい額になるやろね」

「経費節約っすね」

「……………」

鮎美が黙って義仁と由伊の顔を思い出している。鷹姫が問う。

「どうかされましたか？」

「あのお二人を前にして、とても言えんかったよ。二人別々に暮らし
てください、って」

「それは……」

「あと、あの島津の殿様にも相談役というか、閣僚になってほしいわ。
静江はんが出した案では九州地方がゼロなんよな。宮内庁関係のこ
とか、それか特命大臣で九州沖縄復興関連で……久野先生に、合わせ
てお願いしてみよ」

鮎美は車を鈴木がいる刑務所へ向かわせながら、再び久野と話すた
めに電話をかけた。皇統の保安のため義仁と由伊を那須と京都に分
けること、島津に内閣へ加わってもらうことを頼んでほしいと伝えて
みた。

「わかりました。お話ししてみます」

「お願いします」

長く話したので、もう刑務所に着いている。鷹姫が事前に連絡して
おいてくれたので、すぐに所長と会った。鮎美が総理代理として話す
と、所長は悩む。

「仮釈放ですか。……犯罪傾向のある人ではないですから……た
だ、総理代理からの口添えが……越権行為といえば……越権か……」

「おっしゃるとおり、中国漁船衝突事件で鳩山総理が検察に手を回し
たという話もあり、自制すべきとも思いますが、過去にも緊急事態に
おいて超法規的な処分がなかったわけでもないですよ。テロリス
トの要求に従って刑務所にいる仲間を解放するのに比べたら、事案と
して軽微やと思います」

「まあ……刑期の3分の1も過ぎていますし……」

迷いつつも所長が折れた。

「わかりました。とりあえず本人と面談してください。それで受諾す
るようなら、就職先も決まるわけですし、仮釈放します」

「ありがとうございます」

「では案内します。……ですが、その武装された人は……ちよつと……」

所長が麻衣子のフル装備を見て渋る。非常事態とはいえ、完全武装の女性兵士が刑務所内に入るのは、受刑者に与える影響もあつてためらわれた。

「私は、ここで待機しています。刑務所内で襲われることはないでしょうし」

「ほな、待ってて」

「忘れて帰らないでくださいよ」

「私も残ります」

空自の制服を着ている里華も残ることにした。スーツ姿の知念が拳銃を預け、鮎美と鷹姫の三人で鈴木に会う。面会室に連れてこられた鈴木は手錠をさされているかと鮎美は予想していたけれど、ごく自由になっているようで夕食直後なのか、野菜を煮込んだ匂いが鈴木の身体から漂っている。おかげで鮎美たちは空腹を覚えた。

「こんにちわ。鈴木先生。もう、こんばんわの時間かな」

「こんばんわ。刑務所は朝も夜も早いからね。お会いできて光栄ですよ、芹沢総理代理」

鈴木が政治家の条件反射のように握手を求めてくるので鮎美も条件反射で握った。

「実は鈴木先生にお願いがあつてきました。外の状況は、ご存じですか?」

「とんでもない地震と、あなたが総理大臣という、とんでもない事態、新聞さえ発行が止まっているけれど、知っていますよ」

「では、かりに組閣しているところなのですが、私の先輩議員というか、指導役になつてくださつていた元衆議院議員がおられるのですが……」

「石永隆也くん?」

「つ……よう知つてはりますね……。はい、その石永先生です」

「ここにおいても政界のことは頭にありますよ。はつきりと」

「すごいですね……。ほな、いつそ、見てもらう方が早いかな。鷹姫、静江はんの組閣案だして」

「はっ」

鷹姫が静江が一晩で作った組閣案を鈴木に見せる。一目見て鈴木が笑う。

「ほっほっほっ、まあ、こうなりますわな」

石永の人脈で固められていることに、すぐに気づいている。鮎美が言う。

「悪いことはないと思うんですけど、やっぱり関西に偏るし、北海道、東北の先生がおられませんし」

「何より、このままだと芹沢内閣というより石永内閣、私は言いなりのお人形になる、だから自分の派閥をつくりたい、けれど人脈がない、いっそ収監中の鈴木なら、恩に感じて味方になってくれるかも、と？」

「………………。はい、その通りです」

「ほっほっ、さすががしいほど正直に認めるのね」

「取り繕えないほど、言い当てはりましたやん」

「私に公民権が無いことはどうする気ですか？」

「大臣臨時代理人として働いてもらいます。代理人です。民法的な」

「危うい手法ね……………それしか、ないけれど」

「お願いできますか。農林水産大臣の臨時代理人として」

「外務大臣をさせてください」

「外務大臣ですか……………」

「自分が兼務しようと思っていた？」

「……………はい……………何でもお見通しですね……………」

「もともと、あなたは外務大臣として任命されていますよね。本来の役職に未練があるのは当然です。自分が外務大臣だったのは、たった一日、もしかしたら、一日もないのかもしれない、と。報道では、あなたを無欲のように言うけれど、欲のない人間が、ここまで登つてきたりはしない」

「……………」

「でも、どうせ、総理と外務の兼務なんて忙しすぎて無理ですよ。第一、石永くんも予定通りの人をあてるでしょう。私にさせてください」

い」

また鈴木が握手を求めてくる。この握手をすると話は成立という意味合いだった。

「さすがですね、ホンマに」

負けを認めて鮎美は握手した。

「さっそく私は出られますか?」

「はい、せわしなくて申し訳ないですけど、このまま小松へ飛ぶへりに同乗してくれはりますと助かります。久野先生も乗ってくれはりますし」

「わかりました。着替えてきます」

鈴木は刑務官に連れていかれ、鮎美たちは所長室に移動して待つ。すぐに鈴木は赤いスーツスカート姿で現れた。入所するとき化粧品も預けていたようで、しっかりとメイクもしている。鮎美は同性愛者として軽く見惚れた。いつか自分も60歳を超えるなら、こういう風に歳を取りたいと思うような女ぶりで好感を強く持った。

「行きましようか。芹沢総理」

「はい。口頭になります、鈴木宗緒先生、あなたを外務大臣臨時代理人としてお願いします」

「お受けします」

鮎美たちは刑務所を出ると車両で移動し、ヘリが駐機している道の駅へ向かう。その途中で鮎美は国道沿いのコンビニへ寄ってもらった。

「ちよつと、お腹空いたし、ついでに物流の様子も見てくるわ。鷹姫と知念はんだけ来て」

「えーっ…:私は? 私もお腹空いた」

麻衣子が言った。

「ほな、交替で入る。いきなり総理代理と武装した隊員がコンビニに来たら、店員ビビらせてまうやん」

「それは、そうですね」

鮎美は鷹姫と知念をつれてコンビニに入った。

「いらっしやいませー」

店員は鮎美の顔を見ずに商品を整理しながら挨拶だけした。鮎美は店内の品揃えを見て回る。新聞は無い。雑誌や書籍はある。生活雑貨もそろっている。けれど、清涼飲料は半分くらいしか並んでいない。パンも無い。弁当も無い。デザート類も無いし、冷凍食品さえ売り切れていた。鮎美はミルクティーのペットボトルだけ持ち、レジへ向かう。

「すいませーん」

「はい！　すぐに！」

男性店員がダッシュでレジに来る。いちいち客の顔など確認していないように鮎美のことには、まだ気づいていない。鮎美は訊いておきたいので問う。

「食料品などの入荷はありそうですか？」

「いや、わかんないっす。うおっ?!　アユちゃん総理?!」

店員が鮎美に気づいて驚く。

「驚かせて、すみません」

「おおっ、本物だ。すげえ！　生アユちゃんだ！」

「塩焼きにはなってますんから」

「ちよっ、写真撮っていいっすか?!」

「……。はい、どうぞ」

迷ったけれど愛想良く応じた。男性店員は鮎美を一枚撮ると、次にツーショットを求めてくる。もう慣れたことなので鷹姫が笑顔をつくって申し出て、店員のスマートフォンを受け取り撮影した。

「ありがとうございますっす！　あ、もしかして鷹姫ちゃんっすか？」

「…はい」

「髪切ったんすね！」

「…はい」

「オレ、めっちゃファンなんっすよ！　鐘留ちゃんと陽湖ちゃんは?!」

「……」

鷹姫が困っているので鮎美が話す。

「二人には別々に仕事をしてもらっています。もしよかったら、この

あたりの食料品、供給の状況、軽く教えてもらえませんか？」

「あーっ…一応、これナイショなんすけど、うらに地元のもんだけに売るオニギリとかは、ありますよ。手作りっすけど。もし、お腹空いてるなら、特別に売るっすよ」

「いえ、そういうのは地元の人で大事に食べてください。他の食品は入ってこない感じですか？」

「工場が流れたり、センターが止まってるみたいっすからね。いつも売ってるのは、だいたい来ないっすね」

「食べるものに困ってる感じですか？ スーパーも、こんな感じ？」

「田舎なんで家に帰れば米あるっすよ。スーパーは、まだ商品あるんじゃないっすかね。コンビニはバックヤード狭いし、飲み物くらいしか在庫ないんで」

「そうですか。ありがとうございます。お仕事、頑張ってください」

「アユちゃん総理も頑張ってます！ 応援してるっすよー！」

「ありがとうございます」

札を言つて鮎美は車両に戻った。そして千円札を麻衣子に渡す。

「ぜんぜん食べ物はないわ。飲み物だけ買ってきて。鈴木先生の方も。まとめ買いするの気がひけて。うちと鷹姫の分しか買っていないのよ」

「食べ物ないなら私はいいです。水筒あるし、やっぱり完全武装でコンビニはやめときます」

「ほな、石原はん、お願い」

「はい」

「私も店内の様子を見てきます」

鈴木もおりる。里華と鈴木が店内に入ると男性店員は、すぐに気づいた。

「おおっ！ ムネオ！ 疑惑の総合商社！」

「こんにちは」

「脱獄したのか?!」

「仮釈放ですよ」

「釈放かあ。……。ちよつ写真撮っていいつすか？」

「はいはい、どうぞオ」

男性店員は一枚だけ撮り、60歳過ぎの女性政治家とのツーショットは望まなかった。鈴木も店内を観察した。

「やはり食料品は無いようですね。生活雑貨も今ある分が無くなれば、しばらく入ってこないでしょうね」

「ムネオ、日本やばくね？　どうなるつすか？」

「大丈夫、なんとかしますよ。そのために仮釈放されましたから」

「頼むつすよ。正直、女子高生が総理とか、超やばいつすから！」

「ええ、お任せください。この鈴木宗緒、女の矜持にかけて日本を復興させます！」

「ホント頼むつす！」

鈴木はお茶だけ買って車両に戻り、鮎美におつりを返した。

「あ、石原はん、買ってこんかつたん？　ほな、うちと鷹姫で半分ずつするし。石原はんは大浦はんには、これあげるなあ」

鮎美は2本あつたペットボトルの一方を里華に渡した。

「いえ、自分は…」

「ええやん、もらっておいて」

「……はい……」

水筒をもっていない里華は何時間も水分を摂っていなかったのを受け取った。そして少し迷って言う。

「今、店員が女子高生が総理では、超やばい、と言っていましたよ」

「そやろね」

笑顔でツーショット撮影を求めてきた人間が裏で別のことを言うことに、もう慣れている鮎美は気にせず鷹姫とペットボトルを分け合って飲む。知念はSPとして慣れているので何も飲まずにいる。里華は納得いかない顔で言う。

「鈴木先生にも疑惑の総合商社などと失礼なことを言っておきながら、頼っていました。どういう神経をしてるの……あんな国民のために……」

「君は若いね。その階級章は尉官？」

鈴木が問い、里華が答える。

「3等空尉です」

「防衛大を出て、何年？」

「もうすぐ二年です」

「そうか。大変な時期だが、腐らず頑張りなさい」

「別に私は……」

それほどの会話をしたわけではないけれど、里華は鈴木のもつ政治家としての雰囲気から懐深さを感じていた。走り出した車両が目的の道の駅に着くと、ヘリでの飛行時間が長くトイレが無いので全員が順番でトイレを使った。久野も駆けつけてくる。

「急ぎましようか」

「はい」

鮎美たちはヘリに乗り込み、小松を目指した。もう19時で到着は21時なので今夜中に内閣を発表するために騒音激しいヘリの中で久野と会話する。

「島津先生は？」

「固辞されました」

「……そうですか……」

「九州出身が内閣にいないことは気にしないでよい、そんな小さなことで薩摩隼人は文句を言わぬ、だが芹沢総理の気持ちは、みなに伝えよう、と」

「ありがとうございます」

「あと、陛下と妹宮様を引き離す件ですが、これも島津さんから伝言があります」

「はい、どんな？」

「陛下は神である前に人であられる、人の子の家族を引き離すは非道、非道は治世の邪道なり、と」

「……反論ありませんわ……まあ、うちも、もともと反対やったけど」

到着すれば発表までに石永との内閣人事調整があるので眠れるときに寝ておこうと目を閉じるけれど、騒音とシートの堅さのために眠

れない。栃木から群馬へ飛んでいるときに麻衣子が東京の方を見て言った。

「東京のあたり真っ暗……誰も生きてないのかな……」
「……………」

里華が涙を零した。我慢しようとするけれど、次から次に涙が溢れてきて止まらない。知念がハンカチを渡し、鈴木が問う。

「ご家族が東京に？」

「ぐすつ……いえ……横浜に……」

横浜も絶望的だった。

「……横須賀の友達も……みんな……」

横浜出身で横須賀の防衛大学校に進んだ里華の人間関係は、ほぼ津波にさらわれていた。麻衣子が謝る。

「すいません……無神経なこと、言っつて」

麻衣子は石川県出身なので誰一人として知人に犠牲者いなかった。鈴木が言う。

「泣きたいときに泣いておきなさい。その方がスッキリする」

「……泣くと……認めるような気がして……」

「つ……………」

うちと同じこと考えるんや、と鮎美は驚き、ずっと東京の方は見ないようになっていたけれど、里華が泣きやめないでいるために、鮎美も泣きそうになってくる。

「……………」

「芹沢総理」

鷹姫がハンカチを渡してくれた。気がつくとも涙を零していた。久野も鈴木も鮎美が東京にいた詩織と電撃結婚を発表したことは大ニュースになったので知っている。ヘリの機内に里華と鮎美が泣く心配だけが拡がった。

「……………」

「……………」

今すぐヘリのパイロットに命令して世田谷へ飛んでほしいになる。詩織のマンションか、それとも東京事務所か、そこに行けば奇跡的に

生きているかもしれない。もしかしたら助けを待っているかもしれない、そんな風に考えると息がつまりそうだったけれど、そんな命令をしてはいけないことはわかっている。

「くっ…鷹姫！」

「はい！」

「何でもいいから関係ない話して！ ぜんぜん関係ない話！」

「関係ない話を…ですか…」

いきなりな注文に鷹姫は気持ちを無理矢理に変えたい鮎美の思考を理解して、外を見てから言う。

「ちようど群馬県です。かつては上野国、暗いのでよくわかりませんが、箕輪城の城主、長野業正という戦国武将がおりました」

「うん、それで？ ぐすっ…」

「かの武田信玄をして、業正ひとりが上野にいる限り上野を攻め取ることはできぬ、と嘆かせたほど、戦にすぐれた武将でした。彼の死を知ると、信玄は大いに喜び、これで上野は手に入れたも同然、と述べて、すぐに軍を上野へ向けたとされます」

「信玄、えげつないな。弱つてるところ、叩きに行くてか」

「業正も見越していたのでしょう。遺言として嫡男へ、私が死んだ後、一里塚と変わらぬような墓を作れ。我が法要は無用。敵の首を墓前に一つでも多く供えよ。敵に降伏してはならない。運が尽きたなら潔く討ち死にせよ。それこそが私への孝養、これに過ぎたるものはない、と伝えていきます」

「降伏せんと玉碎せいてか……」

もう鮎美の涙は止まってきた。里華も、あまりに関係ない話をされているし、女子であっても軍人なので興味が湧いて涙が止まった。鷹姫は通りかかる各地にちなんだ戦国時代の話をしたし、長野や新潟、富山は無事な地域で街の明かりもあつて悲愴な気持ちは抑えることができた。石川県に入ると前田利家の話の途中で小松基地に着陸した。

「おっしや、うちの戦の幕開けやね」

「はっ」

「大浦はんの装備は結局、役に立たなんだね。重そうやのに。ま、それに越したことはないんやけど」

「お腹が空きましたよ」

「うちの警護は長瀬はんに変わってもらおうし、基地内やし大浦はんと石原はんは先に、ご飯を食べておいて」

「はい」

基地の建物に入ると、長瀬が待っていて知念と交代した。鮎美は鷹姫、久野、鈴木とともに大会議室へ入る。待っていた石永と静江が、久野と鈴木顔を見て察しつつも驚く。

「おおっ……久野先生……それに、鈴木先生。ご無事で……」

「幸い栃木の御用邸にいましてね」

「幸い栃木の刑務所にいましてね」

「……………」

石永と静江は目で鮎美に問うた。

「お二人には国土交通大臣と外務大臣の臨時代理人を願います」

「た……たしかに経験豊富な両先生は頼もしいが、久野先生はともかく鈴木先生は公民権が……」

「その問題も大丈夫です。うちが指名している臨時代理人は内閣法での臨時代理や事務代理でなく、民法でいう代理人ですから」

もう何度も説明したことなので鮎美は立て板に水で語った。有無を言わさぬ気配もあり、また経験の豊富さにおいて久野も鈴木も確かなので30代が中心だった石永の選抜メンバーを押しつけて、副大臣の臨時代理人や、政務次官臨時代理人へ格下げすることで折り合いをつけていきながら、鈴木以外は夕食がまだだったので会議しながら食べた。

「ほな、これで決まりということだ」

「ああ、そうだな」

石永も納得し、発表するメンバーが決まったので鮎美は広報室で撮影の準備に入り、臨時内閣の発表と元号の発表を録画してみた。一度目、少し噛んだので二度目で成功させ、見直してからネット配信する。また、マスコミは呼ばず質問も受けなかった。発表配信は23時とな

り、疲れきった鮎美は貴賓室に入ると、ベッドに倒れ込んだ。

「はああ……」

「お風呂を用意します」

世話役である里華が貴賓室のバスルームへ入っていく。鷹姫にも休むように言ったので二人きりで、長瀬は外の部屋前だった。

「あかん、寝てまいそうや。お風呂、入らな」

鮎美は睡魔に襲われながら制服を脱ぎ捨て、下着もベッドの上で脱ぎ、裸のままバスルームへ向かう。

「用意ができました。っ……」

「おおきに」

「前くらい隠してください」

「あゝ、ごめん」

疲れているので目を開けるのもつらい。精神的には義仁らと会ったことと組閣、肉体的には往復4時間の乗り心地の悪いフライトで疲れてヘトヘトだった。湯船につかると寝そうになる。なんとか髪と身体を洗って部屋に戻ると、またベッドに裸で倒れた。詩織と抱き合うようになってから、裸で寝るのが習慣になっている。自衛隊員として集団生活をしてきた里華が批判的に見てくる。

「そのまま寝る気ですか？」

「うん」

「……………もう退室してよろしいですか？」

「おおきに、また明日よろしゅう」

「失礼しますっ」

里華が電灯を消して退室してくれたので、やっと眠れると思いきや鮎美は目を閉じた。なのに基地司令の鶴田がノックしてきた。仕方なくバスローブを着て応対する。ドアを開けると、鶴田と見知らぬアメリカ軍人がいた。入浴中に大きめのヘリコプターが着陸する音がしたので、それに乗っていたのかもしれない、と感じた。

「ケン・ズコビク大佐であります！」

ズコビクは正しい日本語の発音で言ってくれた。疲れた脳で英語を使いたくなかったので助かる。鮎美は日本語で問う。

「芹沢鮎美です。ご用件は？」

「私と二人のみで話をしてください。大切なお知らせがあります」
「……………」

鮎美はズコビクの顔を見る。白人男性ではなく黄色人系で深い皺が印象的な男だった。軍人らしく身体も鍛えている様子で押し倒されて勝てるとは思えない。とはいえ、ドアのそばに長瀬も鶴田もいてくれるので、応じる。

「わかりました。どうぞ」

「失礼します」

ズコビクが入室してドアを閉め、貴賓室で二人きりになった。

「ご用件は？」

鮎美はバスローブの胸元を閉めながら警戒気味に問うた。

「フセイン・オパマ2世アメリカ大統領より、極秘の連絡があります。極秘にて口頭でのみ伝えます」

「……………」

なぜ、日本語が流暢な士官が選ばれたのか、わかった気がした。

「一つ、アメリカ合衆国はIMFを通じた通貨相場の固定に全面的に日本と協力する。二つ、在日米軍は日本より暫くの間、撤退する。以上です」

「なっ……………」

「二つ目については今からオパマ大統領が発表されますので極秘ではありません。二つ目については極秘です。発表せず芹沢鮎美内閣総理大臣臨時代理だけに伝えます」

「……………」
あの地震でアメリカ軍の被害も相当でしたよね？
全体の何割を損失していますか？」

「答えられません！」

「ハワイと西海岸の被害状況は？」

「答えられません！」

「答えられることは何がありますか？」

「二つの伝達事項のみです！」

「はああ……………」

鮎美がタメ息をつき、よろめいて机に左手をついた。頭が痛いので右手を額にあてる。

「……このタイミングで……撤退てか……」

「……」。どうか、元気でいてください」

優しいな声でズコビクが言ってくれたので頷く。

「おおきに」

「……オオキニとは何ですか？」

「あ、関西弁は、わからんにゃ」

「はい、訛りは苦手です」

「おおきに、とは、とても、という意味なんよ。本来は、大いにあるがとう、という意味で、おおきにありがとう、と使っていたのを、いつしか省略して、おおきに、のみでサンキューの意味で使ってます。おにも関西で」

「勉強になりました。おおきに！」

「はは、そうそう」

「では、失礼します」

「……あ」

「はい？」

「ズコビクさんのご家族や友人は地震で無事でしたか？」

「……いえ、海軍にいた弟が、船と運命をともにしました」

「そうですか……それはお気の毒です」

鮎美は、まだズコビクと握手をしていなかったなので右手を出した。

「ズコビクさん、お互い、頑張りましょう」

「はいっ、おおきに！」

ズコビクと握手をして別れる。バスロープ姿なので見送りはドアまでにした。鶴田が問うような視線を送ってきたけれど、今は言えない。ドアを閉めた。

「……はああああ……寝る前に、なんちゅー問題を!!!」

眠れそうになくてベッドを殴った。

「……国家に真の友人なしや!!」

また殴る。

「あああもおお!! フセイン!! オパマ!! イエス・ユー・エスケープ
!」

叫んだので長瀬がノックしてくる。

「大丈夫ですか?!」

「ハア：うん! おおきに! 大丈夫よ! ちよつと苛ついただけ
!」

「どうぞ、ゆつくり休んでください」

「うん、おおきに」

時計を見ると、もう24時で、鮎美の長い日曜日が終わった。

3月14日 復和

復和元年3月14日月曜、午前1時、鮎美は米大統領からの在日米軍撤退の知らせを受けて、眠れずにいた。

「……アメリカの被害……どんなもんなんやろ……かなり、ひどいとか知らんし……今まで自分の国のことで精一杯やったけど……」

海外の情報まで細かくチェックしている余裕はなかった。

「あかん……眠れへん……」

明日のために眠らねば、と思うのに寝付けない。軍事のことについては、ほとんど知識がない。誰かに相談するとして、思い浮かんだのは畑母神、鶴田、義隆だった。けれど、畑母神も日中の指揮と会議で疲れているはずで、義隆は泰治の手伝い程度の仕事しかしていないので起こしてもいいかもしれないもの、まだ高校生に過ぎない義隆の守秘義務に対する意識に不安があり、もつとも信賴している鷹姫も疲れているはずなので起こしたくないし現代の軍事的知識は自分と変わらない、鮎美は内線電話で司令室へかけていた。

「鶴田司令は起きてはりますか？」

「はい。替わります」

運良く副司令ではなく鶴田が夜勤しているようだった。

「はい、鶴田です」

「大事な話がありますので、来てもらえますか？」

「わかりました。すぐに」

鶴田は駆け足で来てくれた。鮎美がドアを開けたのでドア前にいた長瀬は鶴田を通す。

「お話とは何でしょうか？」

「入って、ドアを閉めてください」

「はい」

鶴田は女性一人しかいない部屋へ深夜に入ることと遠慮して入口で聞くつもりだったけれど、鮎美が促したので入室してドアを閉める。ほんの一時間前に米軍士官が鮎美に何かを伝達したので、その話

だろうと見当はつけていた。

「……………」

「……………」

鶴田が待っているけれど、鮎美は言っただけのものか、まだ迷っている。

「……………」

「……………」

「……………今は、お忙しいですか？」

「いえ、夜間は救助活動も止まっておりますし、領空侵犯も今はありませんから」

「そうですか……………」

「……………」

鶴田が目のやり場に困るという風に視線をそむけたので鮎美は悩んでいるうちにバスローブの胸元が乱れていることに気づいた。慌てて直しつつ謝る。

「すいません。ちよつと考え事をしていましたもので気が回らなくて」

「いえ。……………それで、お話とは？」

鶴田が促してきた。

「えつと……………鶴田司令は当然に守秘義務がありますよね？」

「はっ！ 当然です！」

「ですよね……………」

「さきほどの米軍士官の件でしょうか？」

「……………はい……………」

まだ鮎美も鶴田も立ったままでも向かい合っている。鶴田は四十代後半くらいに見え、副司令と交代で24時間体制で勤務していても、顔に疲れは出ていない。たいして鮎美の方は疲れて悩んだ顔をしていた。鶴田は心配になつて問う。

「お一人で考え込まれるより、話していただけませんか？」

「はい……………そのつもりで呼ばせてもらったのですが……………。……………この部屋に外部の人間が盗聴器を仕掛ける可能性ってありますか？」

鮎美は疑心暗鬼になっていて、あらゆることが信用できないという顔をしていた。もしも、盗聴器が仕掛けられているなら、すでにズコビクと話した時点で情報漏洩していることになるのに、それにさえ気が回っていない。

「そんな可能性は……。ゼロとは言えませんが、限りなくゼロに近いものです」

「……そうですか……」

「何をお悩みなのですか？」

「……」

「どうか話してください」

父親と娘ほど年齢が離れている鶴田に優しく言われて鮎美は口を開くことにしたけれど、バスルームの戸を開けて言う。

「こちらに来てください。盗聴対策に水道の音を立てながら話します」

「……はい」

二人でバスルームへ入ると鮎美は水を流しっぱなしにする。

「……今から言いますが、絶対に口外しないでください」

「はい」

「実は……米大統領より、在日米軍を暫くの間、撤退させる、と通告されました」

「っ……」

鶴田も驚く。幹部自衛官として鮎美の様子から色々想定していたけれど、想定の中で一番悪い内容だった。まだ原子力空母なり原潜が座礁して放射能漏れを起こしていると言われる方がマシというほど悪い。

「うちには……私には軍事の知識がないのですが、これは、かなり悪い知らせと感じます。そうですね？」

「……はい」

鶴田も言葉を選ぶあまり、一言しか発せなかった。

「……やっぱり……」

「このことを畑母神防衛大臣には？」

「今すぐ知らせるべきか迷っています。こんな時間に眠れなくなるよ
うな知らせ、朝になってからの方が良いのではないかと。もう定年す
ぎてはりますし」

「たしかに……」

鶴田はセイコー製の腕時計を見る。時刻は1時17分で、今すぐ疲
れている畑母神や幹部自衛官たちに知らせたところで、できることは
ない。明日も救助にあたるしかないし、そのためにも休息が必要だっ
た。鮎美が一人で悩んでいた理由もわかった。そして、アメリカとの
時差のために、今頃は昼間である向こうの意志決定伝達が、鮎美の就
寝直前になったことも仕方ないとはいえ、あまりに可哀想で異国の大
統領が憎くさえなる。

「鶴田司令、明日の朝、畑母神先生と話し合おうと思います。他の閣僚
には、まだ伏せるかもしれません。周りに気づかれないよう、この部
屋で畑母神先生と朝食をとりながら救助状況の報告を受けただけ、
ただし二人きりで、という風にセッティングしていただけませんか
？」

「わかりました。ですが、自分も参加させていただけませんか？ す
でに知っているのですから。また、畑母神防衛大臣とて引退されて年
月が経っています。自衛隊の能力は年々変わっています。最新の状
況を知るのは現役の者のみです。ゆえに、あと二人、陸自、海自から
も幹部を一人ずつ、同席させてください」

「あと二人……」

「守秘義務は命にかけて守ります」

「はい、疑って、すみません……つい……。この部屋の盗聴、明日の朝、
それまでに調べてもらうことはできますか？」

「用意します。ですから、どうか、ご安心して、お休みください」

「……おおきに……」

ひどく疲れているのに眠れそうにない鮎美はフラついている。鶴
田は心配になって言う。

「眠れそうになくても、身体を横にしてベッドで休めてください」

「……うん………できたら、睡眠薬とかもらえへんかな？」

丁寧語を使う気力がないのか、関西弁が漏れた。

「睡眠薬ですか……お若いうちから、薬に頼られるのは……とはいえ今は……。わかりました。係の者を呼びます」

鶴田はバスルームを出て貴賓室の内線電話を使う。鮎美は水道を止めてからバスルームを出た。内線電話を終えた鶴田が言ってくる。

「看護師資格のある女性自衛官を呼びました。すぐに参ります。自分は司令室へ戻りますが、二つだけ、忠告させていただきます」

「…え？ あ…、はい、どうぞ」

「国の安全と機密を守ろうと気配りされる総理代理は立派です。ですが、あまりに疑心暗鬼にならないでください。精神を磨り減らしますし、我々幹部まで信じていただけなのは悲しく感じます。また、信じてほしいと言いつつ逆説的になります。このような夜中に二人きりバスルームなどに招かれるのは危険です。同性愛者ということがあります。男には気をつけてください。同じようなことを部下にされては困りますし、実際、バスルームからでは水道の音もあり、あなたの悲鳴は外の長瀬警部補まで届かなかったことでしよう。どうか、国の安全だけでなく、御身の安全も気にしてください」

真剣に忠告してくれた鶴田へ、鮎美は頭をさげた。

「すみません。気をつけます。ありがとうございます」

「では、明日の朝、参ります」

鶴田は敬礼して出ていき、交替で女性自衛官が入室してきた。当然、米軍撤退のことは言わず、単に眠れないので薬を出してほしいと伝えると、鮎美の様子を看てくれる。

「今までに睡眠導入剤を使ったことはありますか？」

「いえ」

「では、あまり、おすすりできません。薬に頼るようになってしまいました」

「……そうですか……」

期待はずれという顔をした鮎美へ、女性自衛官が言ってくる。

「ベッドに横になってください。眠れるよう手伝います」

「……手伝い？」

「部屋を暗くしますよ」

女性自衛官は50歳近く見える。手足が短くて胴が長く太い、顔立ちもお世辞にも美人とは言い辛いけれど、肌だけは餅のような艶があった。そして鮎美を総理代理としてでなく、ただの18歳の患者として接してくる。

「あなたは眠れますし、眠れなくても、大丈夫、そのうち眠れる、そう思いながら、横になって目を閉じてください」

「……はい……」

鮎美は松田川に身を任せたように、医療従事者の言うことをきくことにした。ベッドに寝て目を閉じる。

「少し世間話をしますよ。聞いていても聞き流してもいいです。返事もいりません」

「……はい……」

「北陸は同性愛者には生きにくい地域です。保守的で閉鎖的、もしもバレたら、どうなるか、そんな風に怯えて生きています」

「……」

「今日まで誰にも言いませんでしたが、実は私も同性愛者です」
「っ……」

鮎美が目を開けた。

「目は閉じていてください。こんなブスな顔、見られるの、恥ずかしいですから」

「……」

鮎美は返答に困って黙って目を閉じた。

「こんなブスですし、北陸には大都会みたいな出会いの場もありません。インターネットも十年前まで無かったんです。何より、私も自分の指向を直そうと無駄な努力をしました。その努力は実ったのか、実っていないのか、男に囲まれば変わるかもと自衛隊に入りました」

「……」

「囲まれて幸いだったのは、こんなブスなのに、男の人が言い寄ってく

れることです。だから、しばらくして結婚して、二人子供ができて、大
学も出てくれて、気がつけば、みんなが幸せと思う幸せを手に入れて
います」

「……………」

「けれど、指向はいまだに続いています」

「……………」

「安心して、今、どうこうしようということじゃないの」

「……………」

「ただ、きつと多くの同性愛者が今まで自分を偽って生きてきた。保
守的な土地なら、なおさら」

「……………」

「だから、芹沢さんは新しい時代をつくってくれるかもしれない。星
なんですよ、私から見ても」

「……………」

「だから頑張りすぎないように頑張ってください。さあ、もう寝る時
間です。もつと、つまらない話をしますね。退屈な退屈な話。金沢市
にはルネス金沢というリゾート施設がありました。プールと温泉、宿
泊施設…」

本当に退屈で起承転結のない地元の話をしてくれるので、いつしか
鮎美は眠ってしまった。そつと女性自衛官は貴賓室を出て行くと、司
令室に連絡して今から8時間は休ませるよう鶴田に頼んだ。鮎美は
8時間後に鷹姫が淹れてくれた紅茶の香りで目を覚ました。

「ん〜……鷹姫、今何時？」

「10時です」

「っ！」

飛び起きると、慌てて洗顔する。

「鶴田司令より、ゆっくりしてくださいとのことですよ」

「そもいかんやろ！ こんなときにも！」

洗顔して下着をつけ、制服に身を包むと、冷める前に紅茶をいただ
いた。鷹姫は鮎美が飲み終わるのを見てから問う。

「では、盗聴調査の要員に入ってもらってよろしいですか？」

「うん、お願い」

鷹姫が部屋前に待機させていた隊員たちを貴賓室に入れる。知念と里華、麻衣子も入ってきた。

「おはようございます」

「おはようございます」

「おはようございます。遅くまで寝てて、すみません」
すぐに作業が始まり、知識のある隊員が電波探知やコンセント内部などを調べ、盗聴器などが無いことを確認してくれた。それが終わると、もうお昼近いので貴賓室での昼食会となる。畑母神と鶴田、他に陸自と海自の幹部自衛官もそろい、里華や麻衣子は食事の準備だけして出ていった。鷹姫も百色もないので、畑母神もただの昼食会ではないと、すでに察した顔をしている。鶴田はいきなりではなく、まずは現在までの救助活動の状況を鮎美へ各幹部が報告するという形から始め、おおよそ食事が終わってから鮎美に目配せして問うてきた。

「芹沢総理代理、昨夜の件、私から言つてよろしいですか？」

「はい、お願いします」

「昨夜、自分は芹沢総理代理から、きわめて重大な通告が米大統領より総理代理へあったと、相談を受けております」

「……………」

「在日米軍が暫くの間、日本より撤退する、と通告してきました」

「……………」

畑母神も他の幹部も驚きが顔に出る。

「米側は通信ではなく、わざわざ大佐を派遣し、口頭のみで伝えてきたそうです。その通告が24時前で、芹沢総理代理が自分へ相談されたのが1時過ぎでしたから、畑母神防衛大臣へ知らせることは今、いたしました」

「……………そうか……………起こしてくれてもよかつたが……………だが、まあ……………ありがとう……………聞けば眠れなくなりそうな話だ……………」

「はい。自分は、ずっと考えておりましたが、結局のところ、今すぐ何かできることは無いと考えます。目下の救助活動にあたるしかなく、戦力の強化どころか、回復も難しく、現状の維持が精一杯です」

「うむ……………それにしても撤退か……………そう言われると、今朝からの在日米軍の動きに合点がいくな……………いや、在韓米軍でさえ、撤退を視野に入れて動いているのではないか……………表向きはハワイを救援しに出ると言っているが……………」

「……………」

三人の幹部が黙って考え込む。鮎美はデザートの苺を食べきった。一晩寝たおかげで聞いた直後のショックからは立ち直りつつある。逆に畑母神たちは今聞いたばかりなのでショックが大きい。

「……………いつかは独力で防衛をと、それを旗印にしてきたが……………まさか、このような形で実現するとは……………」

「畑母神先生ら専門家に訊きたいんですけど、アメリカ軍の津波によるダメージは、どのくらいやと思われれますか？　どのくらいのダメージやったら、日本から撤退すると、自分が大統領やったり、米軍総司令官やったら考えはりますか？」

「向こうの立場で考えると……………全体の半分……………いや三分の二までダメージを受けなければ、これほど早期に撤退はしない。在日米軍は6割から8割が失われていると見たが、ハワイは全滅に近く、西海岸も壊滅的なのかもしれん」

畑母神の見解に海自の幹部が補足する。

「パナマ運河の損傷も大きいのかもありません。メキシコとチリからのダブルパンチで津波が行っていますから」

「パナマが半年……………いや、数年は復旧できないと判断したか……………そうになると、太平洋に大きな空白が生じる。そんな空白を作るくらいなら日本への駐屯を続けそうなものだが、補給路が……………それに、米国内の事情もあるのもしれん。多民族国家だけに津波後、暴動も起こっているだろう。国外にかまっていられないほど、国内が乱れている可能性はある。いや、可能性でなく、それが事実なのだろう。でなければ撤退などしない」

「……………」

「畑母神先生以外の閣僚への周知も迷っております。うちとしては石永先生と久野先生くらいには話しておきたいのですが。夏子…加賀

田先生あたりは財務担当で畑違いやし。言うて悪いけど、石永先生が推してきた他の閣僚は、忘年会とかのパーティーで一回挨拶したくらいしか知らん人やったりしますし。そもそも米大統領も、わざわざ、うち一人だけに知らせるため、ヘリ飛ばしてはるし。これは言いふらすなちゅーことですよん？」

「米側の思考としては……さすがに黙って出ていくわけにはいかないうことと、通告したからには独力でなんとかしろ、というメッセージも入っているだろうな。そして、いずれ発覚することだとしても、なるべくは遅い方がいい。当面はハワイを救援しているだけと言いたい張ればいい。回復が早ければ戻ってくるだろうし、どうにも回復しないときは本気でモンロー主義に立ち戻る気なのだろう」

「うちが米大統領やったら、この震災を機会に自国だけに軍を置いて、国内の社会福祉制度を充実させるかもしれません。オパマ大統領は日本の医療保険制度を参考にしたいとまで言うてはりましたし、撤退通告と同時に通貨安定については協力すると言うてはりましたから」

「通貨か……それは加賀田先生の専門だな。芹沢先生も、得意そうだが……何にしても機密を守るには知る者が少ないのが一番だ。私としては当面、この場にいる者だけがよいと考える。石永先生は信用しているが、知らせるメリットがデメリットを上回るかもしれない」

「石永先生にまで黙っておくんですか……」

「彼も知れば、側近には話したくなるだろう。信用している者、たとえば彼の妹などには話すかもしれない。そして、彼女は親友なり父や母へ話すかもしれない。その父は、また旧友に相談し、と、いわゆる政治家のここだけの話、というヤツになってしまう。前から思っていたのだが、政治家の秘密の守り方と、軍人の秘密の守り方では、まったくレベルが違う。我々は妻にも親友にも話さない。防衛大同期の親友にさえ語るべきでないことは語らない。君も宮本くんなどに話さないでほしい」

「鷹姫にまで……」

「それが機密というものだよ。この話し合いの前に盗聴器の調査をし

た賢明さを、再び發揮してほしい」

「……わかりました」

「うむ。この話は当面、ここだけ、この部屋だけとしよう」

「二はっ！」

「よし、解散！」

昼食会が終わり、鮎美は一人になった。ノックをして鷹姫と里華、麻衣子が入ってくる。

「救助活動の状況は、どうですか？」

鷹姫が問うてくる。里華と麻衣子は自衛官なので自分たちをそばに置かなかつた理由は機密保持のためと理解しているけれど、鷹姫は鮎美と情報を共有しないことは、ほとんどないので問うていた。

「うん、まあ、やっぱり救助すべき対象と範囲に隊員の数が追いつかんし、そろそろ疲れもでてくる上、事務方の中心やった東京が壊滅してる分、即応予備自衛官や予備自衛官を呼び寄せて配属する事務処理も大変みたいやわ」

鮎美は昼食会の前半に聞いたこと話して誤魔化した。そして気になっっていることを問う。

「為替相場は、どうなってる？」

「大規模災害時の相場固定マニュアルが、うまく機能しており値動き無しです。不幸中の幸いと申しますか、時差の都合上、ニューヨークから市場が開くものの、ほとんど休業状態ですし東京は言うにおよばずです。それゆえ、このまま推移すれば一週間に一度、1%程度の動きで抑えられるはずですよ」

「そっか……夏子はんと、詩織はんが頑張ってくれたマニュアルが……」

鮎美は悲しくなりそうだったので次の確認をする。

「金は？」

「金地金の価格は上昇中です。1g一万円を超えそうな勢いです」

「実質的通貨安やね。けど、世界に流通する金の量は多くない。富のすべてを金に移すことはできんよ。何より金は喰えん。穀物価格は？」

「やはり上昇しています」

「原油は？」

「変化ありません」

「工業地帯のダメージが大きいから消費もあがらんという読みやな」

「……………」

里華と麻衣子が冷たい視線を送ってきていることに鮎美は気づいた。

「ん？ 何よ？ なんか言いたそうな顔して」

麻衣子が言う。

「こんなときに、お金の話って、どうなのかなって……………いったい、どれだけの人が亡くなったか…」

「そうやね。その感覚はわかるよ。けど、生きてるもんは、これから復興せんなんねん。それには銭がいる。ご飯もいる。エネルギーも。とくに銭は大事や。これが紙切れになったら大混乱よ。けど、まがりなりに各国が今まで通りの通貨価値で実体取引を行うんやったら、ずいぶん状況はマシなんよ。鷹姫、夏子はんは？」

「すでに金沢市に仮の財務省を置かれ、朝からそこに」

「石永先生は？」

「お昼12時に通用門前で記者会見をされましたが、救助者数の発表など、数的な報告事項にとどまっています」

「これからの、うちの予定は？」

「14時より地震発生72時間を前に、昨夜発表した臨時内閣の閣僚がそろいますから、全員でカメラの前に立ちます。場所は小松基地通用門そば。記念撮影ののち、地震発生時刻に全国民とともに黙祷の予定です。ただ、二つばかり未決定なことがあります」

「なに？」

「一つはマスコミを入れるか、入れないか、入れるなら、どれだけの人数を受け入れるか、セキュリティ上の問題もあり意見が分かれています。もう一つは記者からの質疑応答を受けるか、受けないか、です」

「……………。鷹姫は、どう思う?」

「芹沢総理を失えば、法的根拠のある代表者が消えてしまい、取り返しのつかない混乱を呼ぶおそれがあります。過去の暗殺未遂も考えれば、セキユリティーは最大限とし、不特定多数の記者の前に立つのも避けるべきです。国民に語りかけるのは広報室からの配信で十分です。質疑応答も原発の状況など、不確定、未判明のことが多く質疑応答はかえって不安を煽ります。石永官房長官による説明以上のことは触れない方がよいと考えます」

「うん……………。そやね……………。ちよつと閉鎖的な気はするけど、全部の情報を開示してパニックになるより、ええやろ」

「うちが鷹姫にさえ米軍撤退を黙ってるのに、原発はボンボン爆発、実は石油化学コンビナートもダメーヅあつて復旧の目処未定、そんな情報を国民に教えたところで不安になるだけやもんな、大本営発表になるけど自衛隊が頑張つて何万人と助けました、つて話だけにしとこ、と鮎美は決めた。

「緊急時やし、今まで通り基地内にマスコミは入れんとこ」

「そうされるのであれば、敷地外から見える通用門そばよりも滑走路側の方がよいと思います」

「ほな、そうして」

「はい」

鷹姫が別の報告に入る。

「次に三島法務大臣が信頼のおける者を選し、陸自から選抜する許可を畑母神防衛大臣にとりつけ3名の護衛がつきます。入室させてよろしいですか?」

「うん、お願い」

鷹姫が貴賓室のドアを開け、廊下で起立して待っていた3名の隊員を招き入れる。鮎美の前に整列して敬礼してくれた。

「高木裕一（たかぎゆういち）3等陸曹であります!」

高木は男性自衛官としては珍しく長髪で頭の後ろで束ねているけれど、不潔な感じはなく、むしろ清潔感が漂う精悍な青年だった。

「三井真白（みついいしんじ）3等陸曹であります!」

三井は筋骨逞しく自衛官の中でも目立つほど発達した筋肉をしていてボディービルダーのようだった。髪はスキンヘッドに近いほど短い。麻衣子が嬉しそうに言う。

「うわあ、いい身体されてますね！ キレてる、キレてる！」

つい麻衣子が三井の上腕二頭筋へ触れようとすると、睨まれた。総代理理への挨拶の途中なので当然といえば当然だったけれど、男性自衛官から冷たくされたのは麻衣子にとって初めてだった。たいてい、よほどの失敗をしない限り今まで会った男性自衛官は上官であつても麻衣子に優しくかつたのに、三井からは嫌悪感さえ感じた。

「今泉芳樹（いまいずみよしき） 1等陸士であります！」

今泉は自己紹介するときに見えた白い歯が印象的な美男子だった。三人とも大きな銃をもっている。鷹姫が彼らに関する書類を見ながら鮎美に言う。

「書類には載っていませんが、三島大臣によると三人とも男性同性愛者です」

「よろしゅうね」

「「はっ！」」

敬礼を終えた高木が頼む。

「よろしければ、芹沢総理と握手したく思います！ 尊敬しております！」

「自分も！」

「自分もです！」

「うちこそ、よろしく」

椅子に座っていた鮎美は立ち上がって一人一人と握手していく。

「三井はん、筋肉すごいなあ。男って鍛えると、どんどんデカなるよね」

「はっ！ 自分は女性が嫌いですが、芹沢総理だけは別です！

一人の人間として尊敬し、ご活躍、期待しております！」

「おおきに。頑張るわ」

やはり同性愛者同士として強い共感を覚える。そして、お互いに一

切の性的興味をもたないので接するのに気楽さもあった。

「では、これより三名で24時間体制交替で護衛につきます！　まずは私、高木から。いずれ太平洋側での救護活動が一段落すれば、一個中隊のゲイをもって芹沢総理を守る予定です」

「え？　じゃあ、私と石原空尉は任務終了ですか？」

麻衣子の問いに高木が答える。

「もともと大浦陸士は宮本首席秘書官の従卒的役割が主であり、これを受けよ、とのことですが、石原空尉については知りません。空自の上官に問い合わせてください」

「了解です」

麻衣子は残り、里華は内線電話で上官に問い合わせる。男性の上官は里華が苦手そうだった。

「戻ってくるのか？　そうか……まあ、陸さんが身辺警護するなら、自分ら空自としては本来の仕事……。けど、なあ、石原くんが望むなら、そのまま総理のそばにいてもいいぞ。総理の警護なんて光栄なことじゃないか」

「自分は操縦士になるために空自へ入りました。従卒のようなことをするためではありません！」

「まあ……そう言うなら、戻ってこい。けど、先輩らとモメるなよ」
「っ、あれは前任の……」

里華の反論は途中までしか聞いてもらえず上官は内線電話を切った。受話器を置いた里華は鮎美へ向かって形式的に敬礼しながら言う。

「今まで、ありがとうございました！　次の任務にあたります！」

「そっか。淋しいなるね」

「……。失礼します！」

「おおきに、またね」

里華が貴賓室を退室し、当番でない三井と今泉も敬礼して出ていった。鷹姫が時刻をみて言う。

「そろそろ大会議室に閣僚がそろっているはずですよ。お越しください」

「うん」

鮎美は制服に乱れが無いかチェックし貴賓室から大会議室へ移動した。ちょうど夏子も金沢市から戻ってきたので廊下で出会い、財務省復旧について話し合いながら大会議室に入ると、閣僚全員がそろっていた。鮎美と夏子、鈴木以外は男性で、過去の内閣と男女比は変わらない。三島は男性らしい軍服のような独自に用意した服を着ているしスポーツ刈りなので周囲も男性として扱っている。今は会議ではなく記念撮影前の時間待ち雑談になっていた。

「芹沢総理代理、よろしくお願いします！」

環境大臣臨時代理人となる男性が鮎美へ握手を求めてくる。もちろん、鮎美も愛想良く対応し、他のメンバーとも次々と握手するけれど、石永家を選んでくれたおかげで自分が入閣できたという意識は明白で、石永との会話と握手にこそ力が入っている。そばにいる静江も一見して鮎美の秘書というよりは石永の秘書のように振る舞っていた。いきなり閣内が分裂すると困るので、経験豊富な久野と鈴木はうまく全体の雰囲気を取り持つてくれている。そんな中、国家公安委員会委員長の臨時代理人となる3世議員が鮎美へ握手を求めてきた。

「芹沢総理、よろしくお願いします！ …」

「こちらこそ、よろしくお願いしますわ。 …」

鮎美は握手をしている反対の手に小さなメモを渡された。他の閣僚と同じ通り一遍の挨拶が終わってから、誰にも見られないように、そのメモを開く。

自分もゲイ

それだけが書いてあった。

「……あの人……新屋寛政（しんやかんせい）はん……」

もう新屋は石永へ挨拶しているけれど、また一瞬だけ目が合った。

「……」

それで十分、気持ち伝わった。新屋は公にカミングアウトする気はないけれど、同じ同性愛者として鮎美にだけは伝えておきたかった

のだと、わかる。鮎美はメモを丸めてポケットの奥に仕舞い込みつつ、新屋のことを思い出す。家系は長く国政議員をしているけれど、入閣は新屋が初めてで石永と同じ2期を勤めた後に落選中だった。一度は女性と結婚し一男一女をもうけているものの離婚、親権は新屋の家が取り祖父祖母が育てているらしい。

「……人生いろいろやな……」

ふと小泉総理の言葉を思い出した。静江が全体へ告げる。

「お時間となりました。滑走路の方へ移動してください」

ぞろぞろと大会議室から滑走路へ移動する。閣僚たちは3割ほどは作業服で2割が燕尾服、残りがスーツで夏子と鈴木もロングドレスではなく動きやすいパンツスーツで、スカートは鮎美の高校制服だけだった。北陸にしては珍しく天候良好、風もない。撮影場所には階段状に踏み台が生まれ、背景には戦闘機の列が入るようにされていた。閣僚の一人が小さくない声で誰にともなく言う。

「戦闘機が背景というのは軍国主義的に見えませんか？」

「うーん……」

石永が玉虫色の声を漏らしつつ、この準備をさせた畑母神へ視線をやる。畑母神は平然と答える。

「基地ですから基地らしく。のんびりと赤絨毯の上で無く、非常時に滑走路で、ともかくは記念撮影した内閣というのも歴史の一ページでしょう」

「ですが……」

「戦闘機でなく海を背景にすれば……、いや、北陸自動車道が邪魔ですな」

別の閣僚も戦闘機を背景にするのに反対のようだった。夏子も反対する。

「装備品を見せびらかすのはいいけど、今の雰囲気的に、救助に使えるへりにするのは……」

「使えるへりは、とつくに現場へ出しておるよ。これだから女は」

「はいはい、差別発言は聞き流してあげるね。あと二回だけ。とりあえずワンアウトよ」

「……」

「……」

黙って畑母神と夏子が視線をぶつけ合い、久野と鈴木が同性の方へフォローに入る。鮎美は本当に久野と鈴木に入閣してもらって良かったと思った。それでも戦闘機を背景にすることに賛否が分かれ、石永も困る。石永個人としては戦闘機を背景にすることに賛成だったけれど、官房長官という立場としては中立的でありたい。自然と視線が鮎美に集まってきた。

「うちは、どっちでも……」

本当に、どっちでもいいし、どうでもいいことだと思えてきたけれど、畑母神が真っ直ぐに視線を送ってくる。高齢の、まして異性とはアイコンタクトだけで意思疎通することは難しかったけれど、今は通じた。明らかに畑母神は米軍撤退を意識して、この背景を組んだのだと気づいた。

「せっかく畑母神先生が用意してくれはったんですし。戦闘機は救助には役立たんけど無事な装備品が日本にしっかり残ってることを国内外にアピールするのは、ええんちやいますか」

「うん、芹沢先生が、そういうなら、そうしよう」

石永がまとめてくれて記念撮影が始まる。鮎美が前列中央、左右に同性の夏子と鈴木、その三人を男性たちが囲む形で撮影された。撮られながら夏子が言う。

「必要な形式とはいえ、今も救助活動してるのに、こんなことしてるなんてね」

「うちも同感ですわ。一人でも多くの人に助かってほしいですけど、もう72時間……」

鮎美の背中を鈴木が撫でてくれた。

「気をはってください。弱気な顔はダメですよ」

「おおきに」

鮎美は試合前のように顔をパンと両手で叩いた。さらに数枚が撮影され終了が告げられた。いよいよ地震発生時刻となり、ネット配信用のライブカメラと、マスコミではNHKのテレビカメラマンだけが

身体検査を受けた上で基地へ入ってきた。鮎美はカメラの前で原稿を読む。

「3月11日発生した想定をはるかに超える地球規模の大震災は環太平洋大連動震災と名付けられました。計算上の総マグニチュードは11.1です。発生した津波は最大で高さ200メートルを超え、日本国内だけで犠牲者は少なくとも3000万人。太平洋の小国では国が丸ごと消失しています。このような人間の無力さを痛感するよ
うな天災を前にして、それでも私たちに何ができるのか、そんなことは考えるまでもありません。まずは一人でも多くの人を救助することです。あと30秒で地震発生から72時間がたちます。けれど、まだ生きている人もいるはずです。救助はやめません。まだまだ全力で続けます。一人でも多く助けるために。一人でも多くが無事であるように。そして、あまりに突然喪われた命に。黙祷をささげます。黙祷！」

鮎美が目を閉じた。静かさが滑走路を支配する。無風だと思っていたのに、かすかに風があることを前髪の揺れで感じた。今は泣くまい、と決めていたので鮎美は黙祷を短めにして全国民に告げる。

「みなさん！ 今必要なのは忍耐と秩序です！ たしかに恐ろしい天災でした。けれど、ここから先に恐ろしいのは人災です！ パニックになる、デマを信じる、食料を買い占める、自棄になる、言い争う、奪い合う、このような人間が起こす災いの方が、これから先は恐ろしいのです！ パニックにならないでください。この震災は規模が大き
いだけの、ただの地震です。世界の終わりでもハルマゲドンでもありません。かつて人類社会は人口の半分を喪うような災いに何度も遭っています。ペストの流行、局地的な飢餓、それでも耐え忍び生き残ってきました。世界の終わりなどということはありません。我々人類だけでなく古くは恐竜を滅ぼした隕石もまた天災です。あの
大災害に比べれば、まだまだ軽い天災です。そして、この放送を聴いてくださっている方々は今現在、生きている、とても幸運なことに生きています！ この幸運をパニックや自棄で喪わないでください！
食料はつきません！ 店頭に商品が無くても、それは流通の問題にす

「ぎず、近いうちに解消します！ つらくても静かに耐えてください！
清潔な水さえあれば人間は長く生きられます！ そして、赤ちゃんのいるところには一日も早く食料が行き渡るよう努力します。そのときまで、赤ちゃんを支える両親を支えてあげてください。お願いします。繰り返しします。食料はつきません。そして世界の終わりではありません。復興の始まりです。どうか、一人一人が頑張ってください。最後に、この放送を聴きながらも、いまだ救助されずに待っている人たちへ！ 諦めないでください！ 助けに行きます！ どうにか命をつないでください！ 今も自衛隊、消防、警察、海上保安庁、そして自主的な組織が次々と救助しています。あなたのところへも行きます！ それまで諦めないで待っていてください！ 必ず行きます！」

鮎美はカメラを見つめたまま、演説を終えた。NHKのテレビカメラが去ると、夏子が言ってくる。

「恐竜を滅ぼした隕石ときたか。たしかに、あれに比べると、まだまだ軽いね。2億年に一度の災害に比べればさ。百年千年で語らず億万年で語られると、なんだか悟れちゃうよ」

「キリスト教圏では、やっぱりハルマゲドンいうて、かなりパニックになってるそうです。とくにアメリカがひどいみたいで」

「あそこは銃社会だから暴動になると大変そう」

「公表していませんが日本でも3カ所で暴動まがいのことが起きました」

「そう……どうなった？」

「自衛隊と警察が協力して鎮圧したそうです」

石永が閣僚たちに号令する。

「では、第一回の閣議を行いますので大会議室へお戻りください」

また、そろそろと全員で滑走路から大会議室へ移動するけれど、その途中で戦闘機が離陸し、ジェットエンジンの轟音を響かせた。鮎美と閣僚たちが2機の戦闘機のお尻を見上げる。わざわざ、こんなタイミングで離陸させたのはパフォーマンスではなく、どこかで領空侵犯があったからだ。と国政に携わっているだけに誰もがわかる。石永が

言う。

「こんなときに、こんなタイミングで……地震発生時刻だと、わかつてるだろ……」

「うちから海外に向けて、しばらく領空侵犯せんといってください、って嘘泣きしながら放送で言うてみましょか？ 燃料代もつたいないし、何より隊員をさかんならんし。女の子に泣きながら頼まれたら、ちよつとは手加減するでしょ」

「……それは……情けないなあ……女の武器ではあるけど……それを全面的に発射するのはなあ……」

「涙一滴で燃料1トンやと思えば、うちも嘘泣きし甲斐がありますよ」

「うーん……さっきの演説中に泣くかと思ったのに、泣かない方向にしたのは国民の支持を考えてだろ？」

「はい、そうですよ」

「じゃあ、泣き落としは最後の手段というか、とりあえずやめておこう」

「ええ考えやと思ったんやけどなあ……国際社会の評価からしたら、泣いてる女の子イジメるの最低ですよん」

「それを計算して泣こうとする君が怖いよなあ。男がそれをやったら一発、世界の笑いものになあ」

鮎美と石永が話しているところへ静江が言ってくる。

「そんな情けない総理大臣をするくらいなら、お兄ちゃんに代わってください」

「静江、その話は……」

「泣いて同情を買おうなんて。同じ女として嫌です」

「堺の商人は売れるもんは何でも売るし、買えるもんは何でも買うんですよ」

「泣いて同情を買おうとするのは宮本さんだけで十分です。情けない首席秘書官」

そばにいる鷹姫へ聞こえるような声で言い、付け加える。

「あのとき電話の向こうで、おしっこ漏らしてたそうですね。頭、大丈夫

夫？」

「……………」

秘書を辞めたいと言い出したときのことを蒸し返されて鷹姫が何も反論できずにいるのが可哀想で鮎美は頭に血が上がった。

「県知事選出陣式の前に土下座してストッキング破りながら謝ったんは誰やったっけ？」

「……………」

「夏子はんと知事室で会談した直後、鷹姫の給料を不当に寄付させようとしたんを泣いて謝ったのは？」

「……………」

「あのとき、うちが民主党に移る言うたら、あんた立場なかったやん。謝りながら小便たれたら許したる言うたら、きつと、あんた犬みたいに小便もらしてキャンキャン言うたよ」

「……………たかが市議選の応援演説で腰が抜けたくせに……」

「静江！ 芹沢先生！ いい加減にしてくれ！」

「……………」

石永は周囲に聞こえないギリギリの声で女同士の醜いケンカを男らしく怒る。とくに妹が自分を総理大臣にしようと頑張ってくれていることは理解しているし、妹自身も順当なら総理代理の首席秘書官になつていたはずなのに、お気に入りという鮎美の個人的な感情で外されているのも、やはり心に引つかかるのは仕方ないとは思っている。

「今は争っているときじゃないと言ったのは芹沢先生だろ？」

「はい……………すみません」

「静江、オレは総理になるとしても実力でなる。今、芹沢先生に譲ってもらっても法的根拠が弱すぎるのは確認したじゃないか」

「……………はい……」

「二人とも頼むから協力し合ってくれ」

「はい」

燃え上がりかけた火種を鎮火して大会議室に集合したけれど、また同じような燻りが生じる。入閣できたことを石永へ恩義に感じてい

る一人が挙手して述べる。

「やはり、どう考えても女子高生が総理大臣代理というのは、無茶があまりすぎます。わずか18歳で本人の負担も大きいでしょうし。そこで提案なのですが、総理大臣代理は石永先生として、芹沢先生には外務大臣に戻っていただき、鈴木先生には官房長官をやっていたかどうか、どうでしょうか？」

「賛成！」

「……………」

鮎美は出るだろうな、と思った話なので表情を変えずに聴く。どちらかといえば、自分の立場より救助の進行状況と経済復興が気になっている。石永が応じて言う。

「たしかに、おっしゃる通り無茶だ。けれど、法的安定ということは大切だし。この中で適任ということなら、自分より経験のある久野先生か、鈴木先生の名前があがってくるだろう」

「……………」

名前をあげられた久野と鈴木も、あえて黙る。夏子が言ってみる。

「政権継承の正当性で言うなら、民主党が継ぐべきじゃない？」

「それも一理あるが、では加賀田先生がやりますか？ 知事と兼務で」

「つてなるよね。畑母神先生も知事と兼務だし。久野先生は失礼ながら高齢でいらっしやいますし。年齢と経験で一番バランスが取れるのは鈴木先生ですよね？」

「ほっほっ、けれど、公民権がありませんよ」

「みんな一つ二つケチがつくけど、鮎美ちゃんだけは法的正当性もあるし、経験は無くても、この子の口はたつよ。つて、この子とか失言でした。この方の見識は確かですよ。もし、間違ったことを言い出されても私たちがフォローすればいいわけだし」

夏子がまとめようとするけれど、まだ最初に挙手した者が食い下がってくる。

「しかし、18歳というのは、いくらなんでも……………」

「たしか15歳で陛下と呼ばれる人も誕生したよね？」

「それは飾り：いえ、国の象徴ということですから」

「飾りとしても鮎美ちゃん総理は一番かわいいし、話させても絵になる上に話がうまい。今のところ、世論調査もしてないけど、目立った反対意見は無いよね。地震前のおふざけな世論調査では総理にした人ナンバーワンだったりもした。ところが、民主党の私が総理代理なっても、自民党で落選中だった先生方になっても、やっぱりケチがつく。ぶっちゃけ私たちの内閣に何か失敗があっても少々のことから鮎美ちゃん総理が謝れば国民は許してくれるよ。ま、失敗した大臣臨時代理人は、別の人と交替ってことになるだろうけど、それは過去の内閣とも同じだし」

議論が引き続くので鮎美は静江を手招きして何か囁いた。それを聴いて領いた静江は急いで大会議室を出て行き、すぐに2枚の賞状のような紙をもって帰ってきた。そして習字の心得もそこそこにはあるので静江が何か書き始め、完成すると鮎美が署名して拇印を押した。静かに進めた作業だったけれど、さすがに目立っていて他の閣僚たちも注目している。その注目に鮎美が答える。

「うちが急に死んでしまった場合、畑母神防衛大臣臨時代理人を総理大臣臨時復代理とする書類は、すでに渡してありましたが、かなり急いでコピー用紙に書いたものですから、これを機会に作り直しました。くわえて、第二位の臨時復代理として石永官房長官臨時代理人を指名します。あつて欲しくないことですが、うちに加えて畑母神先生まで亡くなられた場合、石永先生を後継とします。今日のところは、これで、もつと急ぐべき議論を進めませんか？」

鮎美が言い、静江が乾いたのを見計らって誇らしげに証書を掲げた。

「……………まあ……………他の議論もありますし……………」

言い出した者も引き下がる。少なくとも石永に恩義を少しは返せた形になるので、鮎美に花をもたせてもらって納得した。静江も当面これで納得という顔になっている。

「宮本さん、そちらの広蓋をもってきてください。予定を少し変えて

委任式と総理臨時復代理の指名式を同時に行います」

「はい」

静江に言われて鷹姫が用意してあった広蓋を手にする。広蓋の中にはA3サイズの上質紙に大臣臨時代理人として芹沢鮎美から委任する旨の墨書きあり、鮎美の署名と拇印があった。静江が司会をする。

「芹沢総理代理、中央へお願いします」

「はい」

リハーサルは無かったけれど、説明は受けていたので鮎美は大会議室の中央に立つ。地元から連れてきた党職員の斉藤がカメラを構えた。静江は兄から呼ぶ。

「これより大臣臨時代理人の委任式と合わせて総理臨時復代理の指名式を行います。内閣官房長官臨時代理人、石永隆也、前にお願ひします」

「はい」

呼ばれて石永が前に出る。石永もリハーサルはしていないけれども、ようするに証書を受け取るだけなので2世議員として慣れているので鮎美の前に進む。鮎美は校長や義仁の真似をしておごそかに読み上げ、証書を手渡す。

「石永隆也殿、貴殿を内閣官房長官の臨時代理人として委任します。

内閣総理大臣臨時代理、芹沢鮎美」

「はい。慎んでお受けします」

石永が受け取ると、静江は続けて言う。

「こちらの復代理証書も合わせてお願いします」

「…」

えー、それは畑母神先生が先やる、まあ、ええか、こんなこと早く終わって議論せなあかんこと、いっぱいあるし、と鮎美は2枚続けて渡すことにした。

「石永隆也殿、貴殿を内閣総理大臣臨時代理芹沢鮎美に事故のあるとき、第二位の継承者として内閣総理大臣臨時復代理に指名します。内閣総理大臣臨時代理、芹沢鮎美」

「はい。慎んでお受けします」

石永がさがると静江は畑母神を呼び、鮎美も同じように授与して行く。すべての閣僚に授与し終えると、かなり疲れた。

「あく疲れた。これ校長先生なんか生徒100人を超えるんやから、大変やなあ」

席に戻りながらボヤいた。閣僚は20人に満たないので一クラス分もなかったけれど、卒業式と違い、いちいち読み上げたので、かなり面倒だったし、授与の瞬間をカメラ担当の斉藤だけでなく、他の閣僚の秘書も頑張つて撮影するので一人一人の時間が長くて大変だった。授与の後に握手を頼まれることもあり、その握手は護衛担当になったゲイの高木たちと交わしたような真実の親愛の握手ではなくて、笑顔で握手してカメラのレンズを見るという表面を重視したもので、あとでそれぞれが自分の公式SNSにアップしたり、広報や党支部日より、後援会だよりに使うのだと鮎美も熟知していたので笑顔をつくるのには努力を込めた。とくに当選回数のない者ほど、いろいろと撮影を望んできたので本当に疲れた。

「こんなことしてる場合ちゃうし、静江はん、そろそろ議題に入ってください」

「はい。では金沢市、駅周辺での、かりの霞ヶ関の準備状況から説明します。富山もしくは福井に副都心をおくという発表をしたことで賃料の上昇はとまり、順調に契約が進んでいます。少し駅から離れたビルになれば、震災前と同じ価格になっています。こちらの地図をご覧ください」

静江が賃貸したビルの状況などを説明していく。その説明には各省庁に所属していたけれど、当日は運良く東京に居なかった者なども加わり、どのビルにどの省庁が入るか、という話になった。

「この話と合わせて、当面の閣議の場所と、首相官邸が問題になります」

静江が鮎美を見ながら話す。

「首相官邸として用いる建物には相当のセキュリティが求められますが、その条件を満たす建物は無く、せいぜい駅前ホテルのスイート

ルームなどを借り上げるくらいですが、それは贅沢をしているようで国民からの視線が厳しくなります」

「うち、そんな、ええとこに住んでええよ。ビジネスホテルでもええし」

「毎朝、すべての閣僚が集まって会議できるスペースと、暗殺対策は過去の首相より、はるかに大切です。げんに何度も暗殺されかけていますよね？」

「うっ……たしかに……ホテルにも迷惑かかるし……ほな、この基地は？ 小松と金沢、そんなに遠くないし」

「はい。芹沢総理代理には、このまま基地に残ってもらい、また畑母神防衛大臣なども残留を希望されていますし、防衛省の再生には、この基地をあてる予定です」

「うむ、借り上げた建物など防諜対策できんからな」

「まだ、金沢市でも十分なスペースと宿泊場所が確保できているわけではありませんし、この基地で全閣僚が生活するのも、さすがに手狭です。また、いずれ富山か福井に分散していくことも視野に入れれば、今は小松と金沢にわけ、閣議は毎朝、この大会議室で行い、その後、半数の閣僚は金沢へ。もう半数は小松で仕事をするという形は、いかがでしょうか？」

静江の提案に色々な賛否が出る。しかも、久野や鈴木などの経験豊富な者以外は、各省庁の生き残り官僚と相談しながらになるので議論は長引き、それでも早く決めなくてはいけないという意識は共有していたので19時前に決まった。結局、静江の案がすぐに通ったものの、では、どの省庁を小松とし、どの省庁を金沢とするのかに、かなり時間がかかった。石永がしめる。

「では、本日は、ここまでとします。お疲れ様でした」

「……お疲れ様でした」

解散となり、静江は鷹姫と連絡事項を確認すると小松基地を出る。

「四人部屋に雑魚寝は、もう嫌……あーっ……疲れた……」

貴賓室にいる鮎美と違い、プライベートのない自衛隊基地での生活

に短期間で疲れていた。兄は個室を望めば可能だったものの、物好きにも隊員たちと同じ四人部屋を志望している。おかげで静江も女性自衛官との相部屋となり、石原と同室だった。

「ホテル取れてよかったあ」

金沢市内の視察という名目で外泊を望み、兄と基地内の宿泊管理をしている担当隊員には伝えてあるので、タクシーで金沢市駅前の大きなホテルに入った。一泊2万円の部屋でシャワーを浴びると心身の疲れがやわらぐ。

「はああ……気持ちいい……自衛隊のお風呂って、刑務所なみに殺風景……」

髪も洗う。

「しかも、あの石原とかいう子、ジロジロ見ないで、なんて言ってきた。芹沢の秘書をしているからって全員がレズじゃないっての。週刊紙の話なんか信じてバカみたい」

同性愛者を嫌悪しているのに同性愛者に間違えられたのは実に心外だった。シャワーを終えるとスマートフォンに富山県議から着信が入っていたので、かけてみる。

「さきほどは、お電話ありがとうございました。芹沢鮎美の秘書、石永静江です」

「あー、どうも、どうも、石永秘書官さん、今夜は金沢市に出ておられるとのことですが、ご夕食はお済みですか？」

「いえ、まだですけど……」

ラッキー♪ と思いつつも一応は遠慮した声を出しておく。接待するつもり満々の県議は静江を夜の金沢へ誘い出した。もちろんセクハラやセックスが目的ではなく、副都心を富山においてもらうための工作なので、あえて妻や富山市議も同伴して来ている。小松弥助という寿司屋に招待された。静江は知らなかつたので入店した後にトイレ内でネット検索してみると食べログ上位の寿司店で全国屈指、予約も取りにくいとあった。それを知ってから食べると余計に美味しい。

「美味しい♪」

「海の幸はね、我々、北陸人の誇るものですからね」

「うちの県は海に面してませんから、こんな美味しいお寿司は初めてです」

本当は物流の発達のおかげで県内でも美味しい寿司屋があるので世辞だったし、父や兄と有名店に行ったこともある。とはいえ、食ベログ最上位は銀座や新宿に集中していたけれど、今は銀座も新宿も存在しないので、この店が全国トップかもしれないも思った。富山市議の中川という年配の男性が静江に日本酒をすすめながら言ってくる。

「富山市にはね、ノーベル街道という有名な通りがありましたね」

「へえ…」

有名といわれても静江は知らなかった。日本酒は美味しい。寿司のネタも太平洋側からは入ってこないけれど、日本海側の海の幸は鮎美が言い出した物価統制が効いているのか、いつも通りの価格で動いているので、まるで大震災が無かったかのように北陸の街は平穏だった。電力も北陸電力管内は、どこも停電していないし、断水もない、食品も豊富で、むしろ全国的な有名寿司店に急な予約で入れているのは、東京や大阪から来る予定だった人たちが永遠に来られなくなったためだろうと察した。そう考えて見ると、カウンターには予約席という立て札が並んでいる空席が多い。この時間帯、有名店なら満席だろうに半分が空いていて、もう半分はキャンセル見込みで入れた様子だった。静江が少し胸に痛みを覚えていると、中川が言ってくる。

「富山から高山にかけてのわずかな街道ぞいからノーベル賞を受賞する人を何人も輩出していますね。いわば世界の頭脳を富山が産んでいるというわけですよ」

「それは、すごいですね」

「富山の気候風土が、そうさせるのかもしれませんが。覚えておいてくださいよ、石永秘書官さん」

「ええ」

「もう一杯、どうですか？」

「ありがとうございます」

「いい呑みっぷりですなあ。総理代理も呑まれますか？」

「いえ、あの子は未成年……ではなくて、飲酒可能年齢ではないですか」

「あはは、たしかに。世の中、ややこしくなりましたな。まあ、富山はおおらかな土地ですから、もう高校卒業で呑んでますよ、みんな。ちよつと失礼」

中川はトイレに立った。そのついでに振り返って静江の背中とお尻を眺める。ぴっちりとしたパンツスーツのお尻は魅力的だったけれど、接待する側であることは忘れていないので押し倒したりするのは脳内だけにとどめ、男子トイレで立ったまま用を済ませると、食べているのが寿司なので念入りに手を洗い、席に戻るときも静江のお尻を鑑賞したものの、横に座るときには紳士な市議の目になった。紳士といつても裏工作中なので、それほど澄んだ目ではないけれど、地元愛と金銭愛に輝いている。

「小松弥助さんの寿司は最高ですけどね、やっぱり白エビは富山で食べるに限りますよ。今度、富山にいらしてくださいな」

「はい、ぜひ」

「結局、可愛いだけの総理ちゃんより、裏で頭のキレる石永秘書官さんと、お兄さんが全部、動かしてらっしゃるんですよ」

「まあ、だいたい、そうなりますね。わかりますか？」

「閣僚メンバーを見れば、わかりますよ。他に、あの首席秘書官のお嬢ちゃんも、やっぱり飾りですか？」

「飾りというか、総理代理の精神安定剤というか、ようするに、お友達ですよ、お友達」

「まあ、たしかに担がれるのも可哀想な年齢ですからねえ。お友達は、必要ですなあ、はははは！」

寿司を食べ終わったので2件目はバーに行く。金沢片町にあるバークルーズという店だった。ここでも静江はトイレに入ったついでに食べログ検索してみた。

「……ケチられたのかな……」

評判はいいけれど、それほどランキング上位には入っていない店

だった。価格帯も中ほどで、総理代理秘書官を接待するには安い、とさえ思ったけれど、中川市議のおすすめという加賀棒茶のカクテルを呑むと、美味しかったので上機嫌になった。

「美味しい。いいお店を知ってますね。中川先生」

「ははは！ 金沢ではここくらいで、富山なら、もっと知ってますよ」

「富山に行ってみたいです」

「なんなら明日の晩、どうです？ 高速道路で45分、金沢と富山は一つの都市みたいなもんですよ。副都心にするなら、ぜひ、富山で願います。福井は遠いですし新幹線もまだまだ、それにほら、敦賀に原発も」

「たしかに……、うちの県にとつてもリスクなんですよね。京都府ギリギリに建ててる原発もあるのに、お金が落ちるのは福井ばかり。いまだに市町村合併による行政効率化もしないし」

「さすが、ご見識ですな。やっぱり、日本を動かしてらっしゃるのは今や石永兄妹お二人ですか」

「私はね、裏方でいいんですよ。裏方で」

「裏の女性総理ですな。ははは」

「もう、お上手なんですな。ただの子守りですよ、子守り」

「子守りも大変でしょうなあ」

「そりや大変ですよ。今でこそ堂々としやべってくれますけど、最初は市議選の応援演説でもプルプル震えて腰抜かしてたんですから」

静江は美味しいお寿司と素敵なバーで上機嫌に酔い、中川も裏話が聴けて楽しい。

「そりや大変でしたなあ」

「ここまで育てるのが、どれだけ大変だったか。なのに、あの首席秘書官の子が地震の後で里心がついちゃって、秘書を辞めて、おうちに帰りたい、なんて泣き出すし、あの子が辞めたら総理まで辞めかねないし、しつかり叱って引き止めましたよ」

「おお、本当に大変ですなあ」

「まさに子守りです。私が叱ったら、あの子、おしっこ漏らして謝ったんですよ」

「厳しいママ役ですなあ。明日の日本があるのも、石永秘書官さんのおかげだ。まさに国母！」

心地よく世辞を受けた静江はバーを出るとタクシーを呼んでもらい、乗り込むときに車代を受け取ったけれど、かなり封筒が分厚いのでためらった。静江の常識的には3万円か、多くても5万円が限度なのに、厚さ的に15万円くらいありそうだった。

「……これは……ちよつと……」

「いやいや！ 北陸では、このくらい車代がいますよ！ 雪も降る！」

今夜は快晴だったけれど、押し渡されて静江は封筒を受け取り、ホテルの部屋で中身を数えた。

「……うわあ……17万円かあ……割れない数字なのは、縁起を担いでるのかな……結婚式じゃないんだから……それとも雑収入で申告がいらぬ額を狙ってるのか……」

今さら返す気もないので財布に入れて封筒は細かく破って捨てた。

「…………総理大臣かあ……」

もう眠いのでベッドに入って消灯する。

「…………お兄ちゃんが総理大臣で……私が首席秘書官…………」
以前からの夢だった。

「……もし今……あの子と畑母神先生がテロか暗殺でいなくなったり……原発でも視察に行つて、そのとき爆発が起こったら……一気にお兄ちゃんが総理大臣……」

シーツを頭までかぶる。

「……ま、自然にそうなるならいいけど、さすがに、仕向けるのは、やり過ぎね」

ちよつと暗殺計画を考えてみたけれど、自分にはできそうにないの
で、明日は富山で夕食が食べられるといいな、と思いつながら眠った。

3月15日 G8+2

復和元年3月15日火曜7時、鮎美はまだ寝ていたかったけれど、起きなければという使命感でベッドから身体を起こした。ほぼ同時にドアがノックされ、鷹姫と麻衣子の声がする。

「おはようございます」

「どうぞ、入って」

「失礼します」

鷹姫と麻衣子が朝食をもって入室してきた。鮎美はバスローブを着て、食べながら報告を聴く。夜間の領空侵犯と原発からの放射線漏れの状況報告だった。

「毎晩来るなあ」

「鈴木外務大臣が正式に抗議する予定ですが、相手の反応も予想されるそうです」

「どんな？」

「日本政府が放射線漏れの状況を詳細に明かさないので独自に調査している、と言ってくるだろう、と鈴木大臣は予想されています」

「戦闘機とか爆撃機で放射線って計れるの？」

「……わかりません。空自に問い合わせてみます」

「いや、ええわ。どうせ、テキスト言うだけって話やろ。大阪のヤクザといっしょや」

鮎美がトーストを食べながら言うと、石川県出身の麻衣子が問う。本来、従卒扱いなので気軽に質問してよい立場ではないけれど、鮎美と鷹姫は一つ年齢が下で、タメ口で話していいと言ってくれたので気安くしている。

「大阪って、そんな悪いとこなの？」

「うん、大阪は日本の伏魔殿や」

鮎美も麻衣子と年齢の近さもあって同級生感覚になってきて寛いでいる。食べていたトーストを半分に裂いて鷹姫に分けた。もう鷹姫が朝食を済ませていることはわかっているけれど、単に鮎美の胃袋

には自衛隊の高カロリー食は多すぎて、鷹姫に半分くらい食べてもらうのが流れになっている。

「ヤクザだと福岡も有名じゃない？」

「らしいね。けど、福岡のヤクザは九州男児で、スパツとしてそうやん。頭にきたら発砲する、みたいな感じに、いい悪いはおいて男らしいというか、動物的というか」

「頭の悪い犬くらいに思ってるね」

「一応、誉めたつもりよ。大阪のヤクザはネバツとしてんねん。喋り方も攻め方も…」

鮎美が話している途中でドアがノックされ、鶴田の声がしたので入室を許可した。

「おはようございます」

「「おはようございます」」

「どうぞ、食事は続けてください。ですが、二人で話せますか？」

「わかりました。鷹姫、大浦はん、ちよつと出てて」

「はい」

鷹姫と麻衣子が出ていくと、鶴田は在日米軍の様子を報告する。通告通り、撤退の準備に入っているようだ、おおまかな状況とともに教えてくれた。

「そうですか。わかりました」

「失礼します」

鶴田が出ていくと、鮎美は食べ終わったので洗顔して下着をつけ、制服を着る。鷹姫と麻衣子は再び入室してきて後片付けと、閣議への準備をしてくれた。鷹姫の顔を見て鮎美が言う。

「鷹姫、お化粧が上手になったね」

「大浦さんに教えていた দিয়েおります」

「もとがいいから教え甲斐があるよ。でも、基地内は男社会だから気をつけて」

「自衛隊に、そんな悪い人おらんやろ」

「いいイメージをもつてくれるのは嬉しいけど、一万人男がいれば、一人二人、悪いのも混ざるんだよ。あと微妙なセクハラはあるよ。訓

練のときとか支えてくれてるのか、お尻触ってるのか、文句言いにくい感じの」

「ああ、どこでもあるやんね、それ。まあ、うちの護衛はゲイで固めると大丈夫よ」

「ゲイでか……すごい集団になりそう……あ、長瀬警部補と知念警部補もゲイ？」

「ううん、二人とも異性愛者。長瀬はんは既婚やし、知念はんは、うちの主治医をゲットしたって言うたやん」

「そうだったね」

「芹沢総理、定刻です」

鷹姫が告げてくれたので貴賓室から大会議室へ移動する。知念と三井が左右を守ってくれ、鷹姫が前を歩き、麻衣子は背後に回る。

「あ、知念はんと三井はん、また警察と自衛隊で、うちの警護と護衛、どう役割分担するか話し合っておいてなあ。……警護と護衛、ってどうちやうの？」

「………わかりません」

「まあ、ええわ。ほな、よろしゅう」

大会議室の前で知念と三井、麻衣子は待機する。鷹姫といっしょに入室すると閣僚と官僚がそろっていた。各省庁の官僚は地震当日10%程度が地方や海外に仕事や留学、休暇で出ていて無事だった。そこに退職者と転職者を加えつつあるので、それなりの形になりつつあった。久野が鮎美に問うてくる。

「芹沢総理、当初の演説で復職を望む者のうち、家族の介護に悩む者にメールで相談するよう言われていますが、200件を超える相談がきています。どう対応されるつもりで言い出されたことですか？」

「特養に優先的に入れるよう取り計らってください」

「………ありていに言って順番抜かしですか？」

「緊急度が高い高齢者を保護する枠がありましたよね。あれに該当すると判断するよう健在な市町村の福祉課に通知してください。200件くらいの枠はあるでしょう。ただ……」

「ただ？」

「実務経験のない私が言うのもなんですけど、これは父から聞いた話、公務員というのは、ちゃんと頑張る人と、まったく役に立たない人に分かれるそうです。まったく役に立たん人を戻しても、しゃーないの分かる範囲で、その志望者の在職中の勤務態度なども調べ、それなりの面接もしてから三ヶ月の臨時雇い期間をへて本採用になると通知してください。それまでは要介護家族も特養でなく三ヶ月が期限の支援施設へ入れるということだ」

「わかりました。……その年齢で、よく介護保険のことを理解されますね。なにかご家族で経験でも?」

「はい、まあ……ちよつと……」

鮎美は言いにくそうにしたけれど、久野たちは興味があるので問いたくなる。

「どのようなご経験が?」

「えつと……ちよつと議事録、止めたって」

鮎美は速記を止めさせてから言う。

「うちの父さんが爺ちゃんが死ぬ前に、やっぱり介護が大変そうでおばあちゃんが可哀想やってことで特養に入れようと思ったんやけど、いっぱい順番待ちやったんですわ。けど、市役所の窓口でヤクザっぽく話してゴリ押しで入れようとしたんやけど、だいたいの大阪人は似たようなことするから市役所の窓口も慣れとって、なかなか進まんし、いつそ地方の市町村やったら、のんびりしとるやろ、ということ爺ちゃん連れて田舎の市町村にいつてゴリ押しで入所させたんですわ。まあ、都市部と田舎で空き枠の違いもあつたやろけど、ようする頑張り次第と攻め方次第、押しダメなら、別のところ押ししてみよ、そんな経験ですわ」

「ははは、それは、総理のお父さんにも会ってみたくなる話ですな」

「やめたって。ふざけた人やし。次の議題、お願いします。議事録、再開で」

「では……」

石永が次の議題を説明しようとし、速記も再開したのに鮎美が、また言う。

「ちよつ！　ごめんなさい！　さっきの議題に、もう一つ！　で、議事録また止めて、すんません」

再び記録に残らないようにしてから発言する。

「高い経験があつたのに事情があつて退職してた公務員に復帰してもらう件ですけど、軽い犯罪、たとえば痴漢とか、金額が多くない横領とかで懲戒免職か、依願退職になった人を再任用するのを、公表しないまでも水面下でリストアップして、高い能力がありそうな人は積極的に声かけしていく方針にしてもらえませんか？」

「……意外なことを言うなあ……」

石永がつぶやいた。

「少額の横領は魔が差したということ、次から金銭を扱わない部署にすればいいわけだし、こんなときだから能力ある人は一度の失敗で切り捨てず、少しでも再利用したいのはわかるが、女性の芹沢先生が、痴漢くらいなら、また使おうというのは意外だよ。案としては、こんなときだから悪くないが」

「うちも大阪におつたころはラツシユの電車とか乗ってましたけど、ああいうところの痴漢とか、ふらつと魔が差してもしやーないですよん。やのに、懲戒免職は罰が厳すぎますわ。こんな大震災が起ころんかったら提案しよ思ってた法案で、軽い性犯罪を交通違反みたいに軽い取り締まりで処分していこいうのも考えてましたしね。正直、うちもラツシユの電車に同級生と乗ってるとき、密着してラツキー♪みたいなこと、ようありましたし。つつい、お尻の方まで手が伸びたり、とか。まあ、それで罰金2万3万ならともかく公務員クビちゅーのは、やりすぎですよん」

「まあ、たしかになあ……」

石永が頷き、夏子が言う。

「それ、思いつきりオジサンの視点だよね。そういえば、私も誰かさんにバストタッチされたかも。この総理、見た目は女子高生、中身はオジサンね。みなさん、18歳の女子高生が総理だと不安にならなくていいですよ、今までの総理と同じ、ただのスケベオヤジですから」

夏子が茶化すと閣僚だけでなく官僚たちまで笑った。石永が次の

議題に入る。久野が国土交通大臣として京都から神戸までの高速道路が一部区間で復旧しつつあることを報告し、次に新屋が国家公安委員会委員長として各地の避難所で発生している強姦事件18件について報告する。

「軽い痴漢ならともかく、こういった事案は今後、増加すると見込まれます。被害者の救済はもちろん、加害者の弁護をするわけではありませんが、避難生活でのストレス、一部ではいまだ世界の終わり、といった迷信からの自棄で犯行におよんでおり、どちらにも精神的ケアが必要かと思われまますし、予防するのにも、このケアは重要ですが、そんな余力などないのが現状です」

夏子が問う。

「この18件という数字にあがる以前の示談が成立しそうとか、被害はあつたのに告訴してない件数は、どのくらいか見当がつかますか？」

「氷山の一角の氷山本体を推測するのは難しいですが、ぎっと10倍20倍だと思われまます。ひどい事案では父親が13歳の娘を強姦しています」

「避難所で？」

「この事案は学校のグラウンドに車中泊で避難していたケースです。母親は津波のために死体で発見され、父娘の二人きりで車中泊を続けていたようです」

「……………」

闊達な政治家であっても身体は女性である夏子、鮎美、鈴木、三島の四人が重く沈黙して、母親を突然に亡くしたのに父親に強姦された娘の気持ちを考える。虫酸が走って吐き気がした。新屋が報告を続ける。

「18件のうちで、もつとも悪質であつたのは修学旅行中だった男性教諭と6人の女子高生のケースです。乗っていたバスごと津波に飲まれ、多くの生徒と教諭が亡くなりましたが、この7人は幸運にも流れてきたヨットに乗り移り命は助かりました。ただ、自衛隊の護衛艦が救助したときには2人の女子高生が男性教諭によって絞殺され、他

の4人は抵抗せず強姦されていたため無傷でしたが、救助後、一人の生徒が兄と連絡を取り、両親が死亡していることを知った直後に、艦内のトイレで首を吊って自殺しています。警察であれば、この手の事件の被害者が自殺しないよう保護するマニュアルもあるのですが、自衛隊は、そのようなことに慣れていませんし、次々と救助にあたっているのも忙しくて、とても、ということですよ。しかも、この事件のために一隻の護衛艦が帰港しての警察による現場検証をよぎなくされています」

「……修学旅行で……教師が生徒をつて……せつかく助かりかけたのに……どれだけクズやねん」

「最悪中の最悪ね。きつと世界の終わりだと思って自分の欲望のままに行動した……胸くそ悪いを通り越して、この犯人に原発の後始末でもさせたいくらい」

「シベリアの代わりに扨捉にでも送りますか。真冬に全裸で」

夏子と鈴木も憤慨している。

「私の前へ連れてこい！ 法務大臣として切つて捨てよう!!」

三島が言い、感情的には皆が賛成だったけれど、法治国家であることは忘れていないので賛成の声はあがらず、新屋が続ける。

「残念ながら正式な裁判をへての懲役刑と……いえ、2名を殺していますから死刑の可能性が大ですが、いずれにしても法的手続きが必要です。ただ、警察も手一杯、裁判所は最高裁判所が失われていますし、被災地の裁判所も機能停止しています。また、三島法務大臣の管轄ですが、刑務所も大変のようです」

「うむ、一部で食料が行き渡っていない。だが、犯罪者など、飢えさせておけばよい」

「まあまあ、犯罪者といつても色々ですよ。私も刑務所に入っていますから体験したのですが、あの単調な生活の中では食事が一番の楽しみになる。これが無くなると、もともと粗暴な人もいますからね、暴動や自傷行為といった可能性も出てくるわけです。人道的には食料供給の努力をした方がよいでしょうし、軽微な犯罪での初犯の者は、私のように仮釈放も視野に入れた方がよいでしょうね。それで空

いた枠に凶悪犯や、大震災後に新たに犯罪を犯した者を収監すればよいでしょう」

「だいたいの意見が出て、次の議題となる前に鮎美が言う。」

「うちは亡き雄琴直樹先生の法案をこのさい、通すべきやと考えます。鷹姫、ネットにあげてはったやろ。探してきて。無かつたら地元支部か、どっかにもあるはずやし」

「はい」

鷹姫が大会議室を出て走る。鮎美は閣僚たちに直樹の法案を語った。ほぼ記憶しているの、鷹姫が資料にして配付する頃には説明し終えていた。石永も直樹との付き合いは鮎美より長かったので説明を受けるまでもなく知っていて、凶悪な性犯罪者に厳罰で臨むこと自体は賛成だったけれど、一番の問題を指摘する。

「だが、法案を通す議会が無いぞ」

「このさい、大統領令のような形、総理大臣臨時代理の権限による発令ということを通したいと思います」

「それは……かなり無茶だぞ」

「けど、先生方もわかってはると思いますけど、この先、他の必要ある法案も通せへんでしょ。法案どころか、来年度予算案かって、めっちゃめっちゃ変更が出てくるのに、議会を通せへん。おまけに、ちゃんとした国政選挙ができるまで6ヶ月、もしかしたら一年かかるかもしれないよ。その間、ずっと空白ちゅーわけにいきませんやん」

「うーん……そうなんだよなあ……さしあたって閣議決定にするか、だけど、そもその閣議決定が今これで閣議が成立しているのか、という疑問さえある。みんな着任したばかりだから官僚からの助けもあるし、秘書も入れてるし。あえて議事録を残してみてるが………やっぱり、平時から、もつと危機管理をして法整備しておくべきだった。巨大津波でなく核ミサイルでだって国会と首相官邸を吹っ飛ばせるんだから」

「雄琴先生の法案、法律という形では無理でも、総理代理令として出したいんですよ」

「まあ、待ってください。芹沢総理代理」

久野が諫めてくる。

「予算などは仕方無しと、その総理代理令で通すのは緊急時につき、問題ないかもしれませんが、刑事罰を変更するとなると、相当の慎重さを要しますよ。とくに雄琴先生の案は憲法第36条を強引な解釈で抜けている。くわえて憲法第31条、何人も、法律の定める手続きによらなければ、その生命もしくは自由を奪われ、またはその他の刑罰を科されない。とある。これを、どうします?」

「それは、もう考えてあります。罪刑法定主義ですよ。むしろ、罪刑法定主義やからこそ、急いで、この雄琴先生の遺志を公布施行する必要があるんですよ。まず31条に対しては、こう考えます。法律の定める手続きによつて私は総理代理になっています。その権限において、ある行為につき、ある刑罰が科されると、公布施行するのです。これなら字面の上では憲法9条ほど強引でない解釈で、一応は法律の定める手続きで刑罰が更新されますやん。憲法改正みたいに明文で議決や国民投票を31条は求めてません。法律の定める手続き、でいいんですよ」

「たしかに、字面では、そうですが。それでは総理代理が死刑といえ、誰でも死刑にできる。極端な話、あなたが気に入らない人間は皆、死刑とできますよ。ここにいる全員、今すぐ」

「それは極端な話で、たとえ、そんな公布施行をしても、誰も本気にせんし、ほな、ここにいてくれる全員、逮捕せい! と、うちが命令しても廊下にいる警官も隊員も、気の狂った小娘が何か言うてると思つて、むしろ、うちを取り押さえるでしょ。まったく道理にかなわん命令や規則は無視されるのがオチです。その意味で9条がいい例です。けど、雄琴先生の案はちやいます。凶悪な性犯罪者、しかも冤罪の余地がなく、二人以上を殺した者、こんなヤツをどつき回して殺すのは、ごくごく道理にかなつたことですよ。丁寧に苦しまんように絞首刑にする必要が、どこにあります?」

「言いたいことと気持ちはわかるけれど、法の安定を考えたとき、危険なことだよ」

「むしろ、法の安定を守るために、早く公布施行すべきなんですよ。罪

刑法定主義、これは守る、このためには、憲法39条の何人も、実行の時に適法であつた行為、では裁けへんのです。けど、雄琴先生の案を先に公布施行しておけば、明日から裁けます。すくなくとも起訴できます。法の安定を大事にするのは裁判官もいっしょですよ。うちが総理代理令を出して、道理にかなつた嚴罰を公布施行しておき、その後、凶悪な犯罪を犯した者に、裁判官が、その嚴罰を科すか、再び憲法と法律と、この状況を比較考量して判決してくれはりますよ。どうせ、一審では決まらず十年かけて最高裁まで行くでしょう。その間に、新たな議会で雄琴案が追認されるかもしれんし。そうなれば、ますます法的根拠は増します。何より大事なのは、この混乱期に強姦は、まだまだ起こります。それに対して嚴罰で臨むという臨時政府の意向を知らしめれば、未然に犯罪を防ぐことさえできます。たとえば、のちに無効であるとされても、普通の強姦殺人としては裁けますし、何より！ 何より！ さつきみたいな悲惨な事件を抑止できるかもしれないのですよ?! 被害者を生まない、事件を起こさせない、この効用は大きいですよん!!」

「……………うん……………芹沢総理代理の熱意はわかるけれど……………」

久野が意見を求めるように夏子を見る。夏子は三十代であるけれど、久野からみれば、若い女性として鮎美と一括りでもあつた。

「そうね。見た目は女子高生、中身はオジサン、でも芯の部分は、やっぱり女の子なのかもね」

「茶化さんといってください！ うち我真剣に言うてるんです！ もし夏子はん自身や、姉妹とか親友が、こんな被害に遭つたとき、どう思います?! うちが助かつた方の4人やつたら、殺された2人の同級生のためにも、こんな男、八つ裂きにしたいですよん！ しかも教師やつたんですよ！ 本来なら6人の女の子を助けて頑張るべきやのに!! 二人殺して全員強姦つてケダモノ以下の悪魔ですよん！ 公立学校やつたら、こいつの給料、税金ですよん?!」

「……………うん……………ごめん。じゃあ、賛成」

「我也賛成である!」

夏子と三島が賛成してくれるけれど、鈴木が言う。

「私は反対しておきます。雄琴先生の遺志には賛成ですが、それを拙速な形で出すのは、いかがかと思えますから」

「私は賛成しよう。この件、艦長も嘆いていた」

畑母神は味方してくれる。

「私も賛成します。男の風上にも置けない」

新屋も賛成してくれた。石永は悩む。

「うくん……………他の、みんなは、どうだ？」

問われて石永が推した閣僚たちは6対4で鮎美への賛成が多かったけれど、久野が言う。

「落ち着いてください。ともかくは、この話は継続審議としましょう」

「……………はい」

渋々鮎美が頷いた。自分が呼び入れた久野と鈴木に反対されたので、勇み足だったと反省する。石永が議事を進める。

「では、次の件、厚生労働大臣から」

「はい、避難所での医療は無料としていますが、今後、無事な県でも医療に制度的な問題がでてきます。東京が壊滅したことで、多くの企業が提供していた医療保険を担う、健康保険組合が本社ごと消えています。けれど、無事な県にある支社や支店なりに勤めていた会社員とその家族は、本社が交付した健康保険証をもっています。これを病院の窓口で出されると、病院としては対応せざるをえず、結果、医療費の7割分を診療報酬請求書、いわゆるレセプトとして発送しても、受け取る先そのものが無く、病院としては取りはぐれてしまいます。また、これは市町村が交付していた国民健康保険の保険証にもいえることです。もはや市役所は庁舎ごと流れているのに、県外にいた住民は保険証を持っています。これを、どうするか？ とりあえず避難先を住所地として全員、国保あつかいとするか、避難していない無事な県でも、本社が再生するか不明であるゆえ、とりあえず国保に入ってもらうか、けれど、前年度の所得証明も取り寄せられず困ります。はっきり言えば、かなりゴチャゴチャです。どうしたものでしょう？ もっと困った例では、保険証や免許証などの身分証明書を本人が持つ

ているケースは、まだ幸いです。命からがら、裸同然で助かった人は何も持っていません。田舎であれば近所の人や親戚が、氏名などを第三者証言として証明してくれますが、家族も親戚もいない、ただ本人だけがいて、自分は山田太郎だ、と名乗れば、それを信じて保険証なり戸籍なりを与えていくのか、もし嘘だったら、どうするのか、という問題があります。すでに、在日韓国人などの身分証明に手こずっていますし、まったく日本語が話せないアフリカ系にしか見えない黒人が鈴木次郎だの、田中三四郎だの言ってきたりあります」

夏子が意見を述べる。

「とりあえず国保にすると、ますます避難先の自治体の負担が増えるよね。積極的に受け入れる自治体と、そうでない自治体で差も生まれるし。いっそ、この災害を機会に健康保険、医療保険の制度そのものを見直して一元化しない？ 前から思ってたし、私の持論でもあるんだけどさ。日本の医療制度は優秀なんて海外から誉められてるけど、ごちゃごちゃしすぎなのよ。健康保険って言っても、大企業の社員が入る企業健保、中小企業の社員が入る社会保険、そして自営業者や無職などが入る市町村運営の国民健康保険があつて、さらに生活保護者の医療券もあつて市町村が担当してるけど、健康保険課とは別の課になるし。あと公務員は公務員で共済組合から保険証を出すし、これがまた、省庁ごと、県ごと市町村ごとに分かれたりして、ややこしい。とくに、ややこしいのが自衛隊で基地ごとに健康保険証を出してるでしょ？」

問いは元自衛隊所属だった畑母神に向けられている。

「うむ。ややこしい。いまだにカードでなく三つ折りの保険証、正確には自衛官診療証を出している。基地内で医官に診てもらうと無料なのはありがたいが、帰省中などに一般の医療機関にかかると、速やかに所属長の認印を受ける必要もあるし、医療機関からも印鑑を診療証に押しってもらうことを指導されている、いや、私は今は防衛大臣なので指導している側だが、実質は事務方がやる。さらに医療機関から印鑑をもらった後、すみやかに医務室に呈示して部隊確認印欄に医官の認印をもらう必要がある。実にややこしいし、煩雑だ。一般の病院

に行くのが嫌になる」

「私の友達で医療事務やってる子がいるんだけどさ。自衛隊の人がくると、ややこしくて嫌だっけってたよ」

「ああ、基地のそばにある医院などは慣れていくくれるが、出先や実家などの付近で病院にかかると、窓口で戸惑われるよ」

「ここまで言っただけでも、ややこしいのに、さらに各市町村ごとに3割負担を軽減したりする福祉医療券、いわゆる丸福を出してるよね。これがまた母子家庭に出したり、単純に子供の年齢で小学校卒業まで、中学校卒業まで、と市町村ごとのサービスで区分するし、親の所得によって3割全額支給して無料になる世帯と、500円だけ毎月窓口で各医療機関ごとに払ってもらおう世帯があったりと、ややこしいし、この助成を目当てで引越したり、家を買ったりしてくるから、市町村が競争でサービスしたりする。さらに県の事業として里親制度で預かってる子とかにも別の福祉券を出すし。ハア……」

夏子は息継ぎしてから続ける。

「さらにさらに、労働中、通勤中の怪我だと、労災保険になるよね。あと交通事故だと公的医療制度じゃなくて、自動車保険で民間企業が受け持つし。場合によっては保険点数が違って、同じ医療を施してるのに、安かったり高かったりする。ひどいと、明らかに、ぼったくりって病院もあるし。だからさ、いつそ、一元化しちゃおうよ。いきなりはできないかもしれないけど、この災害を機に、まずさ、とりあえず市町村の国保に入れるんじゃないかと、保険証が無い人、会社ごと消えてる人、身分証明がない人、そんな人を先に入れる保険者を厚労省の中につくって、そこにレセプトを送ってもらう。で、審査して支払い。ぼったくりとか、患者側のドクターショッピングとか認めない感じに。もちろん、生活保護者が薬の転売のために何カ所も病院を回るのもさせないようにする。そんな保険者を用意して、じわじわと、そこに全国すべてのレセプトが集まるようにする。どう？」

「ええんちやいますそれ！ 賛成！」

「ですが……」

厚労大臣が難色を示す。

「身分証明のない者の処理が困ります。徴収する保険料も所得から計算しますし」

「住民基本台帳カードがありますやん。いっそ、あれに所得情報も突っ込んで、保険証代わりになるようにしたらどうです？ あのステムもサーバーが安全なところにあつたし生きてますやん」

「あ、それいいね。あれを発行すれば顔写真もあるから、保険証の不正使用も防げるし。っていうか、顔写真のない保険証なんて簡単に不正使用できるし、病院の窓口は身分確認しないから、性別とだいたいの年齢が見た目で合つてれば、それで通すし。結果、外国人が同じ保険証を何人も使い回して病院にいくし。偽名をカタるのも、氏名と生年月日が登録されていない人は疑えばいいし」

「ですが、不法滞在や離婚などで戸籍無く誕生した人もおられますし、一元化は拙速かと…」

「そういう人にも温情つてことで、とりあえずカードを交付したらええですよん。ただし、二重給付なんかを防ぐために、顔写真に加えて指10本の指紋と、髪の毛の一部を提出してもらうつてことで」

「それは人権侵害です」

「ほな、いらんにやね、出さんわ。保険証が欲しかったら指紋と髪の毛、出しい。そういう行政指導したらええですよん。うちは自分の指紋とDNA、行政に登録してもらうのに、何の抵抗もないよ。抵抗あるヤツは何か悪いこと考えてるか、隠してるんちゃう」

「指紋採取はともかく、この状況で一人一人をDNA登録するなど不可能です。いちいち検査機関に出すのですか？」

「ううん、髪の毛を提出してもらつて保存しておくだけ。それだけで不正の抑止効果になるやん。あと、犯罪捜査に使える」

「それこそ人権侵害です！」

「いやいや、強姦された人は、もつと人権侵害されてるやん。精液あつたら、すぐ犯人わかるんやで？ めっちゃ便利やん、警察の仕事も減るし、冤罪ものうなる」

「人権は憲法で保障されています！」

「憲法のどこにも、指紋の話は出てこんし、ましてDNAの話なんか」

946年には想定してませんやん。昭和憲法の基本的人権の本旨は、表現や信仰、思想、学問の自由、貴族の禁止、人種、門地による差別の禁止であって、DNAの話は一切出てきませんやん。差別は禁止、そやけど犯罪捜査は当然、ごく簡単な話ですよ」

「……………」

「まあ、鮎美ちゃん総理が言うように犯罪捜査に使うのは行き過ぎかもしれないけどさ。身分証明書が一切ない人は、やっぱり保険証を渡すにつき、指紋と髪の毛、出してもらった方がいいよ。平時でも、オウム真理教の残党が社会保険のシステムを悪用して、偽名の保険証を造ってるって話もあるし」

夏子に続けて畑母神が言う。

「戦後、食糧難のおり、政府が米を給付したが、これを純然たる日本人は正直に一度だけ受け取り満足した。だが、在日の外国人の一部は何度も受け取りに行き、窓口の役人を困らせた。役人が拒否すれば、わめきちらし、怒り狂う、しぶしぶ給付すると、その給付米で酒を造り、売って財をなした」

「えげつな……………」

「混乱期に不正をはたらく者は必ずいる。当時は不可能でも現代ならばDNA検査も容易だ。不正防止のため本人確認は厳格に行うべきだろう」

「だいたいの意見が出尽くして、夏子の提案した通り、医療保険は一元化を目指すことになったけれど、厚労大臣が不満そうなので夏子が問う。」

「もしかして、あなたは医師会系の族議員？」

「っ、そ、そういう言い方は失礼じゃないか！」

「あ……………やっぱり……………」

「族議員なんや……………」

鮎美も厚労大臣の経歴を思い出してみる。父親と兄は開業医で、耳鼻科と皮膚科をやっており、本人は医学部受験を2浪して諦め、関西大学の法学部を出て行政書士の資格をもっていて衆議院議員を2期こなしての落選中だったし、2期目の選挙では小選挙区で落ちて比例

代表復活している。比例代表での順位が高かったのは医師会がバツクにあったことが大きかった。そして、石永が厚生労働大臣の臨時代理人に推したのも、そのような理由が大きかった。

「ボクはですね！ 族議員と言われればそうかもしれないけど！

じゃあ、言わせてもらいます！ さつき加賀田先生は、ぼったくりなどと言われましたがねっ、今、全国の被災地で活躍してるのは外科、整形外科の先生方ですよ！ ただね、近年は労働安全指導の効果もあって外傷的な労働災害は減り、スポーツや学校教育現場での安全配慮も高まり、交通事故も減って外傷全般が減ってるんですよ。これは、けっこうなことですよ。怪我をする人が少ない。いいことです。けれど、今回みたいに、ひとたび災害が起これば一気に多くの外科医整形外科医が必要とされる。となると、普段から、ある程度の数をやしながらおく必要があるじゃないですか。そのへん、自衛隊さんと、いっしょですよ。災害や戦争が無ければ、ある意味、給料泥棒なわけですよ。けれど、今は大変にありがたい。本当に、あって良かった。そういう存在ですよ。そこにね、ぼったくりとか言われると現場は非常に悲しい思いをするわけです。赤字でやってる病院だつて多い。そのところをね、加賀田先生もね、よく理解してくださいよ、本当に。あとね、あと、芹沢総代理の当初の美容整形外科医への脅しとも、営業妨害ともいえるような、あの発言、あれ、何ですかっ。かなりね、評判悪いですよ、はつきり言って」

「それについては…」

鮎美と夏子が異口同音しかけ、鮎美が年長者に仕草で譲った。

「それについては開業医と勤務医の実体を分けて考える必要がありますよね。おっしゃった赤字の病院というのは、たいていが公立病院で、この赤字は自治体などが補填しています。そして、そこで働く勤務医の給料も多くはない。いえ、民間企業に比べると多いんですけど、せいぜい700万とか1500万くらい。それで夜通し、さらに翌朝まで働いたりされてますよね。これは頑張りすぎで改善すべきです。頑張らせすぎ、というのが正確ですね？」

「ええ、そうです」

「けれど、開業医になると平日9時から12時、16時から18時なんて医院が多い。日曜日お休みで、あと木曜日あたりに休むことも。週休二日以上というのも、けっこうなことですし、研修もあるでしょう。けれど夜勤はない。せいぜい休日診療所の持ち回り当番くらいのもんです。それで申告所得が平均2500万円くらいあがってきます。平均ですよ、平均。ご存じでしょうが、個人の自営業みたいな一人開業医の所得申告なんて、かなり怪しい経費が多い。これはワマン企業の社長にもいえることですが、別に高価なベンツに乗るのはいいとして、それを経費にするのは、いかがなのか、と。まして、医師は特例的な減税がありますよね。社会保険診療報酬が5000万円以下、自由診療分を含めても7000万円以下であれば、およそ収入の7割を経費化できる。売上の7割を自動的に経費なんて、ふざけた会計やつてるのは医師だけです。しかも、この特例を利用するのに税務署への事前の届出なども一切不要なんて。また同じように医療保険収入のある助産師、あん摩師、鍼灸師、柔道整復師などには、この特例の適用は無しです。所得としては、はるかに低い他の医療資格業より、高収入な医師が極度に有利な節税制度の対象というのはノーブレスオブリージュは、どこに行ったのか、と思いますよ。まして上限5000万というのは、ちょうど一人開業医の売上くらいで、大きな病院は対象にならない。ふざけすぎた制度です」

「こんな風に関業医が極端に有利だから、公立病院で働いてくれる勤務医も経験をつむと、開業したがる。おかげで、せっかく育てたベテランは出ていき、労働環境は悪化するわ、患者つれて出ていくから病院の赤字もひどくなるわ、で県の財政も大変なんです。なのに、税金も納めない。医学部で一人育てるのに、いくら税金がかかったことか。いつそね、公的な医療保険での収入には上限を設けるべきなんですよ。参議院議員の報酬を660万円としたのは全労働者平均賃金の二倍という、ざっくりした基準でしたが、この三倍990万円の年収で満足してもらえませんか？ さつき自衛隊を引き合いに出されましたが、自衛隊員で990万円の年収がある者は、どのくらいいま

すか？ 畑母神先生」

「まあ……ほんの一握りだよ。幹部自衛官で、やっと一千万を超える。あと、階級が低いと定年が早い。このフォローも忘れないでほしいが、今は、その議論はよそう」

「自衛隊では、ほんの一握りなのに、開業医は平均で2500万円ですよ。これで、ぼったくりと言われて現場が悲しむって、ほくそ笑むの間違いじゃないですか？」

「……………」

「そりゃ医師免許をえるまでに努力をしたかもしれないけど、国家予算100兆円くらいなのに医療費30兆円に近づいてるって、ここまです。経済を圧迫してくると、格差社会の問題も含めて、是正すべきときですよ。医師がたんまりもってるから、デパートの外商や証券会社の営業では医師専門の部隊がいるくらいなんですよ。いきすぎじゃないですかね？ 自分たちの医療保険も自営業者の入る国保や、小規模企業として社会保険に入ったりせず、医師国保なんて独自の健康保険組合を用意して病院にかかったとき自分と家族が特別扱いされることを当然だと思ってるし。なのに、自分の医院で働く人には普通の社会保険しか用意しなかったりと、特権意識が芽生えすぎ。女性看護師にはナイチンゲールを引き合いに出して献身を求めくせに、ヒポクラテスの誓いは、どこいったの？ 医は仁術が、医は算術になってますよね。そのくせ、産休をとるからって女医には冷たいし、女性開業医は少ないっていう男社会。これで本当にいいの？」

「……………さきほど、芹沢総代理が言われかけたことは？」

「え……あ、はい」

夏子はんの言うたことに反論なかったら、思いつきり無視すんにや、ええ根性してるわ、と鮎美は急に振られたので、何を言いかけていたのか思い出してから喋る。

「えっと、美容整形外科医についてでしたよね。うちもお腹を刺されて高価な自由診療を受けてるんで、そういった治療を否定するつもりは、まったくありません。ただ、日本人って、あんまり顔の本格的な

美容整形はせんでしょ。せいぜい脱毛とか、腋汗対策とか、二重まぶた、あと男の人はおチンチンを、どうこうするらしいですけど」

「鮎美ちゃん、そういう知識あるんだ？ ビアンなのに」

「さんざんCM流しますやん」

「まあね。豊胸もあるよ。前から気になってたけど、鮎美ちゃんのおっぱい天然？」

夏子は豊かな鮎美の乳房を指さした。男性閣僚であれば大問題になりそうだったけれど、鮎美は気さくに答える。

「もちろん本物ですよ。100%天然です」

「そりや羨ましいことで、顔にしても、日本人も影でやるよ、年齢と性格にもよるけど、あんまりあつさり、しないのが普通なんて言うのと、やっかまれるから控えなさい。可愛い顔に産まれた幸運は鼻にかけてないで」

「そんなつもりは……ないんですけど……。えっと、本題に戻ります。この大災害において、無事な県であつても、美容整形してる場合でしょうか？ という人として根本的な問いですわ。あと、逆恨みされるのは覚悟してますけど、実質的には美容整形医院を倒産から救おうと言うてます」

「とは言っても最低限と条件をつけられている」

「そりやそうですよ。この大震災で、いったい何千社の倒産があつたか。やのに、一部の医師だけは倒産から救つて、しかも被災地で活躍してくれたら国家公務員待遇、これで評判が悪いたら、求める側が求めすぎです」

「……………」

「もともとの話に戻りましょ。夏子はん、いえ、加賀田大臣が言われたように一元化するのに、うちも賛成です。そのうえで住民基本台帳カードそのものを新たな保険証として発行していきましょ」

「いや、あのカードには記号番号など、何も無い。あれではレセプトができない」

「記号番号が必要なのは保険者が何千とあるからですよ。たった一つの保険者、便宜的に記号1もしくは0とか入力してもええかもしれ

んけど、氏名と生年月日だけで請求できるようにしたらええですよ。あとは同姓同名同一生年月日対策だけしたら」

「負担割合は、どうするのですか？」

「三割を基本として。福祉医療分は……指紋の登録をしてくれた人は二割、さらに髪の毛まで預けてくれた人は一割、母子家庭、中学校までの子供がいる家庭は、子供が一割で、どうです？ もしくは、ゆくゆくは逆に指紋登録などをしない人は4割とか5割」

「……………」

「鮎美ちゃん総理つて、福井と富山を天秤にかけるのも、そうだけど、人にエサを見せて食いつかせるよね」

「アメとムチは政治の基本ですよ。と、自民党教育で習いましたよ。市町村合併のときの合併特例債とか、もろアメですよ。で、ムチは市町村議員の総数削減」

「たしかにねえ。いい教育したね、石永先生」

「……………」

石永が開き直って次の議題に入ろうとするけれど、その前に久野が言ってくる。

「ちよつとね、さつき族議員という言葉が出たんで、気になって言っておきたいのですがね」

さきほどの議論では厚労大臣の立場が無いのでフォローに入っている。

「私も族議員なんですよ。立派な。なにしろ道路公団出身で議員になって、当然、道路関係のことで働いてきたし、陳情も受け、阪神淡路大震災では、あの倒れた高速道路のイメージが皆さん強いと思いますが、道路復旧にも尽力しました。今だって、あの頃より伸びた高速道路が津波に洗われたのを、どこから、どう復旧していくか、指揮をしてるわけで、これは知識があつて、経験があつて、そこを見込んで芹沢総理代理が私を国土交通大臣にあててくれているわけですけど、厚労大臣も石永先生が見込んであててくれてるわけなんですよ。畑母神先生だって、防衛族と言われて否定できんでしょう？」

「むしろ、それを自負していますなあ」

「というわけだね、それぞれの専門性という意味もあるので、あまり族議員という言葉だけで、それそのものが悪いとは思わないでほしいのです」

「はい、わかりました。気をつけます」

鮎美が頭をさげ、夏子は別の方向性から厚労大臣へ穏やかに言う。

「一元化することで医療事務の負担も減ると思います。これは開業医も病院も、窓口や月初の事務作業を減らせるということで、人件費負担が楽になります。最近、公立病院では直接に雇用せず派遣の方を使っていますから、業務への習熟度が積み重ねられず、あまりに複雑な医療保険制度が、逆に仕事を増やして社会の負担を増しています。一元化は医師にとっても朗報ですよ。また、現状では転職したり無職になったりしたとき、保険証が変更になりますが、この手続きのタイムラグで、その間に本人や家族が病院へかかったとき、実は被保険者の資格が喪失していて、レセプトを送っても返戻になってきますよね。けれど、一元化すれば、返戻にならず、中央で処理し、医療機関の二度手間三度手間、場合によっては取りはぐれ防ぎます。さらに、労災保険とも一元化することで、当初は個人的な鬱として通院していたのに、のちに労災に切り替えたときの処理なども中央で行えますし、返金などの処理も中央で行い病院事務局がタッチしない形にすれば、ずいぶん楽になるでしょうし、そもそも厚生省と労働省が合併したことの、本来の意義を發揮できるはずですよ。どうでしょう？ 厚労大臣、ご一考してもらえませんか？」

「……。そうですね、わかりました。ともかくも、保険証を出さないと、ますます混乱しますし、とはいえ簡単なものを出すと偽造のおそれもある。いっそ、すでに用意されたシステムである住民基本台帳システムを使うのが、よいでしょう。その方向にします」

あまり険悪にならず議題が終わり、石永が次の議題に入る。結局、朝の閣議と言いつつ昼までかかり、昼食をとりながら話し合っ、ようやく終わった。鮎美が大会議室から貴賓室へ戻ると鷹姫と麻衣子が窓のカーテンを閉めた。

「では、お休みください」

「ご飯の後って眠くなるよね。おやすみ」

「……こんなときに昼寝なんかしてバチ当たらんやろか……」

「芹沢総理は夜になれば、G8の首脳らにオーストラリア、ニュージーランドの首脳を加えた10カ国の首脳とテレビ会議されるのです。休息は当然のこと、ごゆっくりお休みください。休むのも仕事です」

「うん、おおきに。鷹姫も休めたら、休んでおきな」

「はい」

鷹姫と麻衣子が出ていき、鮎美は制服を脱いで下着姿になると素直にベッドへ入った。時差と相手国の都合もあり、夜になった21時からネット回線を通じて各国首脳と話し合うので、疲れがあつては、とても対応できない。何も考えないようにして眠ろうとすると、外国首脳と話し合うことへの追憶なのか、イスラエルの元大統領で鮎美を邸に招いてくれたエフラヒム・カシールのことを思い出した。

「……イスラエルは、震度1も揺れんと、平和なんかな……あ、医療団を派遣してくれてはるのに、ちゃんとお礼も言えてないわ……」

今すぐ起きて国際電話でもかけようかと思つたけれど、それでは鷹姫の配慮と期待を裏切ることになるので、また目を閉じた。鮎美は眠ることができて、午前中の閣議だけでも、かなり頭が疲れていた。夢も見ずに16時になって起きた。わずかに余裕時間があつたのでエフラヒムとイスラエル外相に国際電話をかけ、医療団派遣の礼を言った。逆にニュージーランドから、大震災前の2月22日に発生した地震で日本人留学生が多数死亡したことの追悼と、この地震への救援として派遣した日本の国際緊急援助隊を3月11日以後も引き上げずに現地で援助活動を行ってくれていることに礼を言われた。実際的には、引き上げようにも、いまだ両国の空港も混乱しているし、いっそ人命救助できる能力があるなら現地で取り組んでもらう方が効率的だ、という鈴木と鮎美の判断で残留させている。とはいえ、日本の被害も甚大なのに援助してくれていることに深く感謝され、また夜の会議でも、これを讃えたいと言われて気恥ずかしかった。

「次の仕事は……」

「国友が会える時間があれば、芹沢総理にお会いしたいと申請しております」

「そんな同級生に会うのに申請とか……まあ、うち、めっちゃ忙しいから、しゃーないけど。ほな、会うわ」

鷹姫が呼びに行き、すぐに泰治と義隆が入室してきた。泰治は普通に鮎美の前に立ったけれど、義隆は自衛隊員たちがしているように敬礼してきた。明らかにノリでやっているのがわかるので、突っ込まずにスルーして問う。

「タイジはん、調子はどう?」

「デマと少数者への迫害を防げって言われたしき。それなりに成果はあげてるつもりだよ」

「へえ、すごいやん!」

「ネット上だけど、仲間も募ってさ。三島法務大臣が認証してくれたし。デマっぽい情報が流れたら、それはデマかもしれない、落ち着いて考えて、と流すようにしている」

「少数者への差別は?」

「同性愛者への差別は、地震前後と変わらないよ。むしろ減ったかな。やっぱり在日朝鮮人、在日中国人への差別と警戒が多い」

「そっか……どの国でも起こる現象やな……。けど、同性愛者への差別は減ったん?」

「まあ、総理大臣が同性愛者だって自分で言ってるから。あと、ボクもネット上でデマを取り締まる部隊の隊長ってことでゲイだって公言してるし、募って集まってくれた仲間もLGBTが多いよ。ハンドルネームだけで参加できる手軽さもあるし。物価統制にも一役買ってる」

「そうなんや、どうやって?」

「やっぱり一部で買い占めする人や企業があつてさ、そういうのを目撃した人が撮影したのをツイッターにあげたり、買い占めする企業に勤めてる人が良心の呵責から密告してくれたりするから、それがネットで自然に拡散するし、そこへ抗議が殺到したりする」

「炎上かあ…」

「ひどいと、その企業に脅迫電話とか、放火未遂まで出てきたから、それは警察が動くんだけど、ボクらは炎上されすぎて、買い占めた商品を手放したり定価で売ったりした場合は、もう許してあげよう、でない、逆に差別というか、迫害になってるから、って赦免宣言をすることにしてみたら、うまくいった。まあ、法務大臣認証でバックに総理もいるってのが大きいけど」

「うちの名前が役に立つんやったら、しつかり使こてやつて」

「うん、認証を受けるとき、親衛隊っぽい名前にしたからさ」

「まさか、アイドルの親衛隊みたいにへんよね？」

「ははは、それは大丈夫。ちゃんとマジメに、芹沢少数者差別阻止部隊としたよ」

「ほな、ええわ」

義隆が言ってくる。

「オレらにも何か装備くれよ。銃とか」

「明らかにダメな方向に走りそうやん」

「やつぱりダメか。せめて制服でもあればなあ。ピシツと決まるのに」

「あんた軍隊的なこと好きやなあ。戦闘機にも詳しかったし。二人とも学校の制服のままなんやし、そんでええんちゃう。主にネットで活動してるなら、姿形は関係ないやん」

「そうだけどき。なんか、連帯感的なものがほしいだろ？ 芹沢がつけてるレインボーとかブルーのバッチみたいな」

「なるほどねえ。ほな、デザインとかロゴを考えてみいよ」

「よし。やってみる。にしても、芹沢のネームバリューすげよな、オレらが芹沢の同級生で友達だってわかると、めっちゃ協力してくれるし」

「そうなんや？」

「オレにまでファンレター来るぞ。最初は男からだっただけど、オレはホモじゃないって公開したら、女子からすげえくる」

「まあ、世の中、異性愛者が大半やからね。あと、うちや鷹姫へ来る

ファンレターは覚で対応してるから、定型的な返事しかせんし。直でメッセージやりとりできるのが、うれしいんやろ。あんまり期待させんときな、うちみたいに刺されるよ」

「うっ……それは怖いな……」

義隆と泰治が異口同音し、義隆が言ってみる。

「オレが仁美と付き合ってるのは、ネットにあげてないんだけどさ。……芹沢、一つ言っただいいか？」

「うん、何？」

「オレ、お前が好きになった」

「……んく……うちがビアンやって覚えてる？」

「覚えてるけどさ、お前が好きだ」

「…はああ……あんた自由人やな。たしかに、軽く発達障害かもしれないね。空気読まんというか、相手のこと考えんというか、縛られへん性格してるわ」

「オレと付き合うのダメか？ ネットで交流した同性愛者とか、けっこう異性と結婚してる人、ときどきいるぞ」

「あんた、仁美はんは？」

「別れる」

「やめたりい。そして、うちはお断りよ。ホンマ、男に、ぜんぜん、まったく興味ないから」

「カモフラージュ彼氏でもいいからさ」

「もう、うちはカミングアウトしたのに、カモフラージュする意味ないやん」

「あ、そっか……」

「あと、うちは結婚してるんよ。不倫はせん！」

鮎美が首にさげているリングを摘んで見せる。入浴するときも外さないので24時間、これだけは鮎美の身体から離れない。

「そういうえば、そうだったなあ」

「だいたいな、ガチに同性愛なもん異性が告白しても無駄なんよ。逆に、あんたはタイジはんが好きって言われたやん？ それ、受け入れの余地あるの？」

「…………いや…………ごめん…………無理だ…………」

「そんな感じなんよ。うちが、あんたに好きって言われても、マジいらんわあ、つてのが本音」

「そうか……………」

「仁美はんと別れんときや」

「ああ、そうする」

「あと！今の告白、ここだけの話で忘れるし！みんな聴かんかったことにしよな！」

聴いていた泰治と鷹姫に異存はなかったけれど、麻衣子が言う。

「えー、それヒトミさんつて子が可哀想じゃないですか？」

「大浦はん、うちのクラスの人間関係知らんやん」

「知らないけど、一般的に、ひどくない？」

「そうなん？　うちは男女の恋愛、ようわからんけど。単に波風たてん方がええかと思ったんやけど、ちやうの？」

「だって、もう気持ち離れて、他に告白してるのに、やっぱり付き合うつてさ。とりあえずキープちゃんにされてるわけでしょ？」

「うくん…………けど、好きな人が相手にしてくれるんやし、そんでええやん」

「そりや、そうだけど…………同性愛者つて子供をつくらないからなのかなあ…………気持ち離れてるのに、付き合ってくれても虚しいつていうの、わからない？」

「わかるけど、いってくれへんより、いってくれる方がええやん。あと同性愛者の恋愛感情は、けつこう人それぞれらしいんよ。そら独占欲つていうのはわかるし、一番ええのは相思相愛やけど、男女の結婚でも、三年目の浮気くらいおおめにみろよ、とか歌にあるやん」

「古っ！　それ上官でカラオケする人いるんだけど、毎度、私にデュエットを求めてきて、めっちゃウザい歌」

「芹沢総理、そろそろ準備してください」

鷹姫が時刻を見て言ってくる。ここまでの会話には興味をもっていなかった様子で、ずっと手に持った資料を読んでいた。資料にはアメリカ、南米、オセアニア、東南アジア地域の震災被害状況が書いて

あり、首脳らとの会議までに鮎美へ説明しておく必要があった。

「そやね。二人とも、引き続き頑張つて」

「はっ！」

「頑張るよ。じゃ」

義隆は敬礼して、泰治は普通に退室した。鷹姫は資料の説明を始める。やはりアメリカはハワイが360度方向からの津波で沿岸部が壊滅し、津波の到達までには時間があつたので山などに逃げ延びた人間は多かつたものの、今度は残つた物資や施設の奪い合いによって多数の死傷者が出ていて、また津波到達前には脱出のための飛行機を奪い合つていて、ハワイへ旅行中で無事に日本へ帰国できた邦人は地震発生前に離陸して、日本海側の空港へおりられた者だけだつた。の混乱時を過ぎ、日本海側の空港へおりられた者だけだつた。

「ハワイは、まさにハルマゲドンやね……これは世界の終わりやと、思つてしまうかも」

タブレットで動画を見た鮎美はタメ息をついた。動画はハワイにいた者たちがスマートフォンなどで撮影したもので、ハワイは銃の所持率が低いので銃撃戦は少ないものの、多様な人種と言語の観光客が多く、やはり同じ人種、同じ言語でグループになり、他のグループと食料の奪い合いになり、素手や椅子、落ちていた石などで殺し合つている。

「……武器が原始人レベルやと、えぐいな……」

「言葉の壁を感じます」

「聖書にあつたよね。バベルの塔を造ろうとして、神が人間の言葉を乱して通じんようにしたつて話」

「はい、創世記だつたと思います」

陽湖がいないので詳しくはわからないものの、かなり最初の方に書いてあつたことなので鮎美も鷹姫も読んだことがある気がするけれど、どうでもいいとしか脳が判断しなかつたので覚えていなかった。

「悪魔が乱すならともかく、なんで神さまがやるねん。ホンマ意味わからん宗教やわ」

「神の意志は人に推し量れないそうですが……」

「世界観設定の矛盾を丸投げしただけやん、それ」

「はい、そう思います」

もう二人ともキリスト教には、かなり反感を持っているので容赦ない。

「だいたい、ハルマゲドンって発想があるから、こんなときパニックになるんやん」

鮎美は次の動画を見る。津波到達前、空港から離陸できる最後の便になった飛行機に無数の人々が群がり、離陸のために走り出しても翼下の主脚にしがみついて逃げようとする者までいた。

「……………うち……………これと似たような映像を……………どこかで見たかも……………あ、そや、ベトナムから米軍が撤退するときの映像として見たわ」

「これほど無理に乗り込む危険を冒すくらいなら、ハワイにも、それなりの標高の山はあるでしょうに……………」

「ただ、ハワイは生き残つても食料の供給を、ほとんど外部に頼つてるやろ。あそこの農業とか知らんけど……………船の往来も止まつてるし……………下手したら飢餓の島みたいになるかも……………きつと、まだハワイで生きてる日本人もいるやろに、救援にも行けへん……………うちに総理としての責任あるやろに……………」

「あまり気に病まないでください。すべてのことに対応することはできない状況です」

「……………うん……………そやね」

鮎美はタブレットを置いて、資料をめくりアメリカの状況を確認していく。もう動画を見ると、気持ち沈むので死傷者は数字として確認することにした。

「アメリカも日本と同じに原発が破損してんにや……………」

西海岸にあった原発が破損し放射能漏れや爆発を起こしており、さらに南部の州のいくつかが大統領が黒人であることに反発し、独立宣言をしたり、州兵を動かして西海岸から逃げてくる人々を州境で白人だけは通して有色人種は追い返すなどの差別をしていたり、逆に黒人

たちが銃で武装して警察署や州行政府を占拠したりしている。米軍の一部まで大統領の命令に離反していて、さすがに同士討ちまではしないものの、さながら南北戦争のようになりかけていた。より震源に近かったメキシコからも大量の避難民が押し寄せており、当初は受け入れていたものの、今は壁を築いて追い返すべきだという主張が拡がり、その論者としてミクドナルド・トランプという美しい39歳の白人女性が台頭していて大きな支持を得ている。

「ミクドの創業者一家か……父さんはデブい人やけど、このミクさんは可愛いなあ……ツインテールが、よく似合ってるわ」

「えー、その歳でツインテールは痛くない？」

麻衣子が言ってきた。

「ちよつと痛いのが、イタ可愛いねん。支持する気持ちわかるわあ」

「たしか、あの一族って女性は代々ツインテールじゃなかった？」

「らしいね。創業者が、そうやったから引き継いでるって。このミクさん、どんなに寒いときでも演説するのに肩も腋も出たデザインの服でアームカバー、下はミニスカートなんや」

鮎美は興味を湧いたので自分のスマートフォンでミクドナルドについて英語で調べると、かなりの情報が出てきた。フェイスブックに載っているミクドナルドの写真を見ている鮎美の目が彼女の顔や足より、腋ばかり見ているので麻衣子は感じた。

「……………」

うわあ、やっぱり同性の腋が好きなんだ、こいつ腋フェチ総理だ、同性愛者の恋愛感情もそれぞれなんて言ってたけど、フェチもそれぞれなのかな、三井陸曹は絶対に自分の筋肉にフェチなんだろうなあ、まあ、私も男の筋肉好きだけど、男はやっぱり上腕二頭筋だよな、腋あたりの大胸筋もいいけど、きつと三井陸曹なら私を片手でヒョイと抱き上げてくれそう、なんで三井陸曹はゲイかなあ、ノーマルだったら超好みなのに、と麻衣子は一目惚れしかけて忘れようとしている男を想った。

「にしても、アメリカの状況がここまで、ひどいやなんて……」

そら日本から撤退するわ、よその国どころやのうて自国が分裂しか

けてるやん、鷹姫にだけは米軍撤退のこと言うておきたいけど、やっぱり機密は守らなあかんし、と鮎美は迷いつつも南米の資料を見る。

「南米は予想通りやな。もともと通貨が安定してなかったし、米ドルに頼るわなあ。さらに避難民で大混乱か……」

さらにオセアニアの資料へ目を通した。

「オーストラリアは、軽い被害で済んでるんやね。シドニーは震源地から遠いし。けど、海軍のダメージが大きいんか……。ニュージーランドは二回も地震に遭ったわりには秩序を保ってはるわ。南洋諸島は、情報も入ってこんにゃね……。津波が無くても地球温暖化の海面上昇で消失しかけてた国があるくらいやもんな……。カヌーにでも乗ってはつたら少しは生き残ってるかな」

「東南アジアも大きく混乱しています。インドネシアなどでは伝染病が拡がっているそうです」

「日本も気温があがってきたら気をつけんとね」

資料を見終えた鮎美はティーカップから一口ミルクティーを飲み、ソーサーにカップを戻してから気づいた。

「うちは冷たい人間やわ……。日本人が1000万人単位で死んだって情報に接したときは、お腹が冷たくなって胸が苦しかったのに、他の民族やったら億単位が死んでるのに、優雅に紅茶を飲んで……。この大震災前かって、アフリカで難民が100万人、死んでます、毎年、って情報を聴いても、美味しくミクドでミックシェーク飲んでたもん」

「……………」

「きつと、この大震災に関係ない地域の人らは、のほほんとしてるやろね。まあ、それでええんやけど。人類全体で悲嘆してもしゃーないし」

「……………」

鷹姫も麻衣子も答えるべき言葉が見つからず黙っている。鮎美は冷める前にミルクティーを飲み干した。資料を見ているうちに時刻は19時前になっていた。

「芹沢総理、ご夕食の時間になりました。準備いたします」

「鷹姫もいつしよに食べよ。ここで」

「はい」

「大浦はんも、いつしよに食べへん？」

「私は……では、お言葉に甘えて」

貴賓室で三人いつしよに食べることになり、すぐに鷹姫と麻衣子が準備した。今夜のメニューは加賀茄子と白エビの天ぷら、大根とニンジンの味噌汁、ホウレン草とジャガイモのサラダ、白米、オレンジだった。

「いただきます」

手を合わせて食べ始めてから鮎美が思った。

「これだけ贅沢なご飯、うちらは食べられてありがたいもんやね。陽湖ちゃんやないけど、祈ってから食べてもええくらいやわ」

「……………はい、そう思います」

「ヨウコさんって、どんな人？」

オレンジから食べ始めている麻衣子が問うた。

「変な宗教やってる友達」

「うわあ……………」

「鷹姫、これと、これ。半分食べて」

鮎美が天ぷらとサラダを鷹姫へ分ける。麻衣子は天ぷらを味噌汁につけてから食べた。

「あんた食べ方が変やなあ」

「え？ これ、美味しいよ」

「まあ人の好みは、それぞれやし、ええけど」

「誘われたし、いつしよに私も食べてるけど、これ見つかって怒られないかな？」

「なんで？ もしかして、この食事、盗んできたん？」

「ううん。ちゃんと支給されてる分だよ。ただ、私の階級って自衛隊内で一番下なの。なのに総理と普通に、ご飯ってヤバくないかな？」

防衛大臣とか司令と食べてる人なのに」

「ええんちゃう。被差別階級やあるまいし」

「だよね」

三人で食事を終えた頃、夏子と鈴木が貴賓室を訪れてきた。二人とも首脳らとの会議に陪席する予定できている。鮎美は二人と事前の話し合いを行い、鷹姫と麻衣子はネット会議の準備のため机や椅子を並べ替え、多数のモニターやウェブカメラなども用意する。開始ギリギリになって静江が富山から戻ってきた。静江の口からアルコールの匂いがしたので夏子が眉をひそめる。

「まさか呑んだの？」

「すみません。断り切れなくて」

「まったく。まあ、三人とも英語ができるからいいけど、通訳が酔ってくるとか、ありえないし」

「はい、すみません」

静江は富山市で生ビール2杯、日本酒1合ほど呑んでいてフラついてはいないけれど、かなり匂う。誤魔化すために香水をふっているので余計に臭い。

「カメラに映らないようにしなさい」

「はい」

会議が始まった。フランス、アメリカ、イギリス、ドイツ、日本、イタリヤ、カナダ、ロシア、オーストラリア、ニュージーランドの首脳がネットを通じて会する。日本以外は陪席者はなく首相が一人でモニターに映っている。外務大臣と財務大臣である鈴木と夏子を鮎美が陪席させることは事前に通知してあったし、鮎美の18歳という年齢を考えれば、各国の首脳たちは当然と思っているようだったけれど、強い注目は感じる。まずはオパマ大統領が犠牲者への追悼を捧げる形でスタートした。

「…すべての犠牲者に対して心から哀悼の意を捧げます」

次にニュージーランドの首相が口を開き、鮎美へ2月の地震で日本が派遣した国際緊急援助隊をニュージーランドから引き上げずにいてくれることの礼を言い、花をもたせてくれる。鮎美は在日米軍を撤退させるというオパマ大統領の表情が気になったけれど、鈴木から、なるべくカメラレンズを見て話すように言われていたので、それを守

りつつ返答する。

「お礼を言われると恥ずかしくなります。正直に言えば、引き上げるだけの余裕がなく、そうであるなら、いつそ派遣先で一人でも多く救助していてもらう方が合理的ですし、人類皆兄弟と言いますから、ニュージーランドの方が助かるなら、それは私たちにとつても大きな喜びです。そして、私からお礼を言いたいのは、ヨーロッパの方々です。すでに表明いただいた義援金はもちろんですし、月曜から為替相場の固定に協力していただき、本当にありがとうございます」

まだ為替相場は地震前から大きく動いておらず、わずかにドルと円が安くなり、ユーロが上がった後は固定され、固定に参加しなかったロシアのルーブルとブラジルのレアルが5%ほど上昇したものの災害の規模に比べれば微動と言え、複数の通貨に連動させた通貨バスケットによる管理変動相場をとる中国の元も変動していない。もつとも値下がりしたニュージーランドドルでさえ7%以下の変動にとどまっていた。ドイツの女性首相が言ってくる。

「それこそ、お礼を言うのは私たちの方ですよ。アユミがIMFに素晴らしいマニュアルを与えていたおかげで、これほどの災害なのに大きな混乱が起きていません。ありがとうございます」

「いえ、ご協力あつてのことです。市場で金は大きく値上がりしていて、これは実質的な全通貨の通貨安です。その痛みを分かち合ってください。諸国に感謝しております。また、あのマニュアルはニュージーランド地震のうちに私が言い出しただけのことを、ここにいてくださる財相の夏子さんとIMFのドミニク氏、それに今は行方不明の私の愛する人が作り上げてくれたものですから、功績は彼女、彼らにこそあります」

「ドイツは日本へ惜しみない支援をお約束します」

「ありがとうございます」

ドイツに対抗意識が芽生えたのか、イギリスの首相が言ってくる。

「イギリスも日本へ惜しみない支援をします。アユミに一つ訊きたいのですが、いいかな？」

「はい、どうぞ」

「アユミは今回の大地震を予知していて、かつて日本に降臨したというヒミコのように人々を導いている気持ちなのだろうか？」

「え……………」

一瞬、鮎美の頭が真っ白になる。まさか、卑弥呼に並べられるとは思ってもみなかったし、自分に予知能力があるなどと考えたことは一度もない。冗談として問われているのか、どういう意図なのか読めず鮎美が固まっていると、ロシア大統領のドミトリー・プーチンが失笑して言う。

「フっ、あいかわらずイギリス人はファンタジーが好きのようだ。だが、訊いてみたい気持ちはわかるな。アユミ、どうだろうか？」

「……………あ、はい……………いえ……………私は予想はしても予知はしません。地震の予知などできません」

「そうか。お互い忙しい身だ。時間を大切にしよう。日本の原発事故は、どうなっている？ どの程度の被害だ？」

「……………正直に申し上げますが、マスコミや国民への周知は慎重になさってください」

ネット回線なので100%の安全はないけれど、それなりには防諜対策されているはずなので鮎美は話すことにした。津波で海中に引き込まれた原子炉、地上に露呈してメルトスルーを起こした原子炉、水素爆発を起こした原子炉について、わかっている限りの情報を話した。

「とてつもない事態ですが、5キロ圏内ではレントゲンを数回浴びる程度の被害です。そう計測しています。長期の被害は予想できません。むしろ、チェリノブイリを経験されたロシアの方に聞きたいのですが、どうなるでしょう、ここから事態は？ 国民の健康は？」

「近づかなければ、どうということはない。国土の狭い日本には気の毒なことだが、我々が生きているうちに、そこへ近づくことはないよ。若いアユミが今から100年を生きても」

「……………」

「アメリカ西海岸も原発事故を起こしているが、どうだろうか？ オパ

マ大統領」

フーチンが素早くオパマに問いかけた。その質問を予想していたオパマは、ゆっくりと両目を閉じてから答える。

「いたましい事故で現場では、つらい思いをしている人たちがいます。事故の状況や様態は日本と同じです」

それ以上の詳しい説明はしなかった。鮎美はチェリノブイリを参考にしたくて問う。

「フーチン大統領、近づかないことしか、ありませんか？　これから自然環境の回復などは、どうなるでしょう？　人々の暮らしは？」

「近づかないのが一番だが、できるならコンクリートで固めてしまうことだ。自然環境は、むしろ活発なほどになる。人が入らないからな。奇形種もたいして産まれない。現場は緑に包まれている。人々には近づいて暮らすなど禁じたが、一部は帰郷している。その者たちにも目立った健康被害は見られない。ようするに、それほど心配するようなことではなかったのだ」

「……そうですか、ありがとうございます」

「ヒロシマやナガサキは66年を経て、どうだ？　自然環境は？」

人々の暮らしは？」

「はい、自然環境に問題はありません。今、暮らしておられる方も大勢います。ただ、被爆された方は、やはり苦しんでおられます。今でも日本には、そのための健康保険制度があるくらいですから」

午前中の閣議にあった資料で鮎美は初めて原子爆弾被爆者に対する特別な医療制度があることを知ったけれど、とっさに口を出していた。さらにフーチンが問うてくる。

「この地震後、日米の協力関係は、どうだ？」

「あ、はい。いつも通り、協力してやっています」

鮎美は自分でも驚くほど、さらりと嘘をついた。あえて不意をつくように問うてきたフーチンの質問に少しも動じなかった。陪席している夏子と鈴木へも在日米軍撤退の話はしていないので二人の様子も変わらない。フーチンは鈴木へ声をかける。

「ムネオ、久しぶりだな」

「はい、お久しぶりです。フーチン大統領」

「アユミは賢いな。ムネオに助けをもとめたのは正解だ。彼女は私の知る限り、日本で、もっともすぐれた政治家だ。その手腕を恐れられて不当に逮捕されるほどな」

「……………」

鈴木は謙遜から、鮎美は、どう答えていいかわからず、二人とも沈黙した。フーチンは少しだけ微笑んだ。

「ロシアも惜しめない支援を送りたいところだが、カムチャツカ半島の被害も大きい。さしあたってルーブルの変動をさけることで協力しよう」

「はい、ありがとうございます」

その後はイタリアとフランスが被害国への支援を約束し、会議は終わった。終わった途端に夏子が鮎美へ抱きついてくる。

「鮎美ちゃん総理すっごいよー！」

「うわっ?!」

押し倒されそうになって鈴木が支えてくれる。

「な、なんですか?」

「鮎美ちゃん、超すごい! 私ビビって一言も出なかったのに、なに普通にフーチンとまで話してるの?!」

「そら、話しかけられたら、答えなあかんし。チェリノブイリは絶対、訊きたかったから」

「いやいやいや、彼に向かってチェリノブイリとか言い出した瞬間、私は背中がゾクってしたよ。なに言い出すの、この子って。ぶちギレられたら、どうしようかと思ったよ」

鈴木も頷いて言う。

「ええ、あれは私も肝が冷えました。フーチン大統領に向かってチェリノブイリという言葉を出した人間は、きつと数えるほどいませんよ」

「そうなんや……………」

「鮎美ちゃんがチェリノブイリって言った瞬間、各国みんなギョツとしてたもん!」

「してましたねえ」

「あかんことやった？」

「ダメじゃなかったよ。結果的には。鮎美ちゃんが、あんまりあつさり訊くから彼も、かなり正直に答えてる感じだったし」

「ほな、よかつたやん。めちや参考になつたし。結局、コンクリかけて封印しかない。被害は、あんまり無い。超重要な情報やわ」

「まあね、一応、意趣返しにヒロシマナガサキの話を持ち出されたけど、あれは、どっちかというアメリカへの嫌がらせだし」

「何にしても私も疲れしました。ウオツカでも飲んで休みたいくらいです」

そろそろ日付が変わるので、明日のために解散となり、鷹姫と麻衣子は風呂の用意をしてくれてから退室した。鮎美は一人になって入浴する。

「あく疲れた。今日もハードやったわ」

昼寝のおかげで体調は悪くないけれど、やはり疲労している。髪を洗ってからネックレスでさげている結婚指輪へ触れた。

「……………詩織はん……………あんたのおかげで世界の通貨は安定したんよ……………これは、ものすごいことなんよ……………ノーベル賞10個くらい贈りたいわ。詩織はんは何億、何十億って人を助けたんよ……………ぐすつ……………」

泣かないようにしてベッドに入ると、早く眠ることに努力した。

3月16日 イニシエーション

復和元年3月16日水曜、台湾時間午前1時、陽湖は戸惑いながらベッドの中にいた。台湾でも有名な一流ホテルの中級クラスの部屋にいます。当初、陽湖を芹沢鮎美だと思い込んで台湾側はスイートルームに入れてくれたけれど、鮎美が小松に到着して日本全国に向けた動画配信をすると、さすがに疑われ、ずっと陽湖は沈黙をもって台湾側の思い込みを否定せずにいたけれど、あなたは本当に芹沢鮎美なのか、と問われると教義上、嘘はつけないので、月谷陽湖です、と答えました。騙したので、ひどい仕打ちを受けるかと覚悟していたけれど、スイートルームから中級クラスの部屋に変更されただけで、手錠をされたり監禁されたりはしなかった。ただ軟禁はされている。ホテルの部屋に介式と同室で寝泊まりすることを求められ、部屋から出ることはできるけれど、見張りがつき、ホテル敷地からは出ないでほしい、と言われていた。一度だけ日本の大使館や領事館にあたる日本台湾交流協会の職員から連絡があり、状況を訊かれて答えると、とりあえず言われた通りにはしておいてください、という官僚的な指示が返ってきている。明らかに責任を問われたくないし面倒そう、という雰囲気と、上位機関に問い合わせようにも日本外務省そのものが津波で消失しているので仕方ない状況でもあった。

「まさか、私まで日本の代表、それに台湾まで任されるなんて……」

加えて、東京にあつた教団の日本本部も消失しており、さらにタイミング悪く台湾の教団幹部たちは石垣島に研修旅行へ出ていて津波により行方不明となっている。そのため教団の世界本部はマザーの称号を与えた陽湖を日本と台湾の教団指導者代表と指名してきていた。流れとして鮎美が外務大臣に任命されたので釣り合うように陽湖をマザーとし、さらに鮎美が総代理になったので、東京の日本本部も消失したことなので陽湖を日本代表とし、おまけに規模が小さめだった台湾の教団も任せてきている。かなり人事にいい加減さを感じられるけれど、連絡してきた世界本部は、より信徒の多いアメリカなど

のキリスト教圏へのフォローを重視していて、アジア地域まで手が回らないという雰囲気だった。

「……ちょうど台湾にいたから、ついでに台湾も……みたいと言われなくても、ぜんぜん文化が違うのに……」

おかげで毎日、台湾にいる信徒たちが陽湖詣でにくる。ホテルの敷地から出ないでほしい、という軟禁はされていても訪問は自由なので、どんどん来る。せっかく来てくれたので、と陽湖も頑張って祝福したり、パンと蜜を用意してもらって聖餐を施したりすると、人氣が爆発して行列ができるようになった。道教が主である台湾では日本と同じく信徒は総人口に対して少数派だったけれど、それでも2000万人口を誇る台湾なので万を超える信徒がいる。

「……でも教義が、ぜんぜん違う風に変化して……それも直しておいてください、ってサラっと言われても……」

その万を超える台湾の信徒たちの信仰は日本で広まっている教えとは、かなり違っていて道教がベースにあって、そこへ聖書の教えが入っているのに、なぜか日本の天皇と中国の皇帝は親戚で、しかも、もともとは太平洋の中心にあって高度な文明を誇ったのに一夜にして沈んだムー大陸の王族の生き残りとして信じていて、モーゼは天皇に教えを乞うていたり、キリストが日本へ来て天皇と話し合い、いっしょに世界を導こうと約束していたり、そもそも天皇でさえ、神道に興味がない陽湖も神武天皇が始めだと記憶しているつもりなのに、天神七代という始めがあって、他にも皇統二十五代などと続いているから神武天皇になっっているらしく、それを台湾の信徒の口から語られるのはカルチャーショックが大きかった。

「……ムー大陸って都市伝説なんじゃ……いったいモーゼは、どうやって天皇に……だいたい中国の皇帝は、何度も家系が入れ替わっているから親戚って、どこが、どう親戚……台湾の教団幹部たちは何を考えて、こんな教えを広めたの……こんなの、シスター鮎美だったら、つつこみどころ満載やん！ って一蹴するのに、台湾のみなさんが大切にしている考えだから尊重しながら修正しないと……。でも、世界本部だって日本と教義の解釈が違ったのに……」

さらにイスラエルで教団世界本部を訪問しマザーの称号を得たとき、あなたは樂園に行ける数少ないアジア人と言われていて、徹夜で睡眠不足だったので判断力が低下していたものの白人優越主義的な空気を感じていた。いずれ世界の終末後に樂園へ復活できるのは14万4000人だけという聖書の記述を、そのまま信じている上、その14万4000人は白人が主であるという認識らしくて、日本の教団では14万4000という数字は12使徒に12部族と千をかけた、とても多い数字という意味に解釈しているのに、広まっている教えが違うようでショックを受けてもいた。

「……いったい、真実の教えは……どこにあるの……14万4000人なんて六角市の人口以下なのに……でも、たしかに聖書には、そう書いてある……日本の教団が勝手に、とても多い数字と解釈してるだけなの？ ……解釈次第で変えられるなら、憲法9条といっしょ……」

陽湖の中で信仰がグラついていた。台湾、日本、世界本部の三カ所だけでも教えが違っていて、どれが正しいのか、わからなくなる。もともと、子供の頃から日曜礼拝に参加していたけれど、指導者が替わると少し説教の内容も変わった。屋城が来て、イチジクの枝で叩かれることが無くなり、とても嬉しかったのに、世界本部では同性愛は殺人と同じ罪だから絶対に鮎美を悔い改めさせるよう言われて、その通りにした。そして、今はひどく後悔している。

「……人は間違いをおかす……それは仕方ないけれど……教団そのものが間違っていたら……」

ずっと聖書を信じてきた。けれど、鮎美と接触するようになってから、教団外の情報も多く入ってくる。鮎美に出会うまでは勧誘活動にしても、拒否する人とは会話が少なくなったり、教義に基づく陽湖の親切を利用することはあっても、心は閉ざしている感じだった。なのに、鮎美は当初こそバカにしてきたけれど、刺されて入院していたときは真剣に聖書の話に耳を傾けてくれたし、陽湖と会話するときも真剣味をもってくれた。

「なのに……私は……シスター鮎美を……傷つけて……無理矢理に

リングを……」

とても悔いている。悔い改めるのは自分だという気がする。その償いとして身代わりに台湾へ残ったのに、台湾側はホテルに泊めてくれるだけで何もしてこない。津波による東側の被害が大きくて、陽湖への対応は後回しという感じだった。

「……私の信仰は……教団の教えは……本当に正しいの？」

そんな不安をもって今まで調べたことのない脱会者がネットにあげている情報を見ると、知らなかった情報を次々と目にした。以前に教団は1977年を世界終末と予言して活動していたことや、その予言が外れると、今度は1999年を世界終末と言い出していたらしい。その頃、幼児だった陽湖も少しは覚えていて。幼稚園で出会う信仰をもっていない子供たちもハルマゲドン、ノストラダムス、世界の終わり、そんなことを話していて、より陽湖は信仰を強くしたし、両親も今年で終わり、楽園で会おう、そんな会話をしていたし年末には預貯金の半分を教団へ寄付し、残り半分を使って家族で最後の晚餐をやった。あのとき、これはクリスマスプレゼントではないよ、陽湖に買ってあげたいからパパとママが買うだけなんだよ、と説明した後でトイザラスのクリスマスセールで初めてシルバニアファミリーのフルセットを買ってくれて、ものすごく嬉しかった。これで遊べなくなるなら、世界の終末は、できるだけ遅い方がいい、とまで秘かに思っていたら、その願いが神に届いたのか、ごく平穩に正月が来て、節分が過ぎてもバレンタインになっても世界終末は来なかった。

「……あのとき……辞めていった人もいたのに……私たちは……」

世界終末が来なかったことで陽湖の家族が通っていた教会でも何人かの信徒が日曜礼拝に来なくなかった。教団の幹部クラスでさえ、信仰を失っているようにも見えだし、その幹部はいまだに残っているけれど、高校生となった陽湖とは聖書への知識や態度がまるで違う。もう、ろくに聖書を読んでいないのではないかと疑っている。また、あの当時に教会の空気が変わったのも、幼児ながらに感じていた。とても居心地が悪かった。そのうちに世界終末の話は、あまりされなくなり、正しく生きよう、教義を守ろう、そんな礼拝が主になった。

「……この2011年の巨大地震は……ただの地震のはず……少ないとも私は神の化身じゃないし、シスター鮎美と二身一体でもない……別の人間……津波を予知なんてしてない……」

日本で大人気だった鮎美は台湾でも人気を集めていた。連合インフレ税によりタックスヘブンから実質的徴税をして福祉を充実させるという政策は、台湾の人々もとらえていて、台湾の政治家も一部が人気取りのために失業した若者やニート、母子家庭、低所得家庭の大学進学者などへ給付すると喧伝していた。そして、うっかり陽湖が台湾の信徒たちに、地震前よく津波の夢を見たという話をする、予知夢だと信じられてしまった。

「……あんなの、オネシヨしたから見たに決まってるのに……もし予知だとしても、予知して何かしたわけじゃないし……生きてるのが証拠だって言われても、たまたま着陸がギリギリだっただけ……」

もちろん、オネシヨをしたことは言っていない。すると、どう解釈したのか、陽湖を救世主であり、鮎美と二人にして一人の同一存在と信じ、いずれ世界を救うという変な信仰をもってくれた。しかも今回の巨大地震は世界終末の始まりで、沈んでいたムー大陸が浮かび上がる予兆だと言っている。ムー大陸こそ楽園になるとも言い出している。

「そんな何千年も沈んでたところが浮いてきても住めないし……そこまで大きく大陸プレートが動いたら、もっと、とんでもない地震が起ころのに……つっこみどころ満載やん……」

突っ込みたくても言えなかったこと夜中にベッドの中で漏らした。

「……言った者勝ちで教義が増えていく……民族性なのかな……それとも道教が習合的だから……日本の宗教観と似て、なんでも吸収しちゃう系……親日で天皇崇拜もあるのに中国皇帝もありだし……だいたい、道教の道って何？ 道の意味が多義的すぎ……剣道も、道だし……」

陽湖は寝返りした。隣で寝ている介式に悪いとは思えけれど、静かにしてられない。

「……日本の教団も指揮しないと、いけないし……」

日本の信徒たちは世界終末には飽きているのか、それとも地震に慣れているのか、かなり冷静に対応している。災害時には、助け合うという、いつも通りの対応で、信仰をもっている、もっていないに関わらず炊き出しをしたりして被災者を助けている。もともと災害時に、信仰をもっていない人たちも助けるのは勧誘活動の一環でもあるし、単純にやっつけていて人として充実感がある。平時に勧誘訪問しても冷たい目で追い返してくる人たちが、災害時に炊き出しをすると、笑顔になってくれたり、ときには涙を流したり、両手を合わせて拝んでくれたりする、高齢者だと南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏と言われるので、そこはできれば直してほしいけれど、あえて黙って配る。

「国内指揮は……とりあえずシスター鮎美の真似したけど……」

陽湖が日本の教団代表者なので指揮しなければいけないけれど、ちやうど鮎美が被災県を近いところにある無事な県が助けるといふプランを発表したので、そのまま乗っかって指揮すると、あとは陽湖の指揮が無くても、それぞれに進めてくれていた。

「……はああ……明日も一日……神の化身扱いされるの……」

日本の指揮より、台湾の指導が悩ましい。もともと日本の教団はプロテスタント的で指導者はいても、他の信徒と同列、神の前に平等という精神が強いけれど、世界本部はカトリックの影響があるのか、階層的だったし、台湾の教団はそこへ道教の霊には格がある、より高い格の人物や霊に祈ろうという精神が強くて、陽湖を聖人や天使、神の化身として拝謁してくるし、聖餐への憧れも強く、ひどいときは陽湖の手を舐めてくる。そういうことは異性にされても同性にされても気持ちが悪いらしい、次の人への間接キスになるので衛生的にも控えてほしいのに、這うように拝みながらされると言えずにいる。

「……はああ……ああつ、もう限界……」

オシッコを限界まで我慢している。昼間のストレスを発散するために、夕食の後からトイレに行っていない。食事はホテル内のレストランでもルームサービスでも自由にとつていいと台湾側に言われていて感謝しているけれど遠慮して、なるべく安い物にしている。それ

は介式たちSPも同じだった。いずれ日本政府が精算するかもしれないし、もともと芹沢鮎美を歓迎したいと言ってきたのも本当なのかもしれない、と感じている。

「ハア……もう限界……ああつ……漏れそう……」

「……」

介式が寝返りした。介式へ悪いとは思うけれど、陽湖と違い、介式たちは本当に何もすることがなく一日を過ごしている。警視庁へ連絡を取ろうにも、その警視庁が消失しているし、都知事だった畑母神に連絡しても今は防衛大臣なので山梨県知事に問い合わせられ、と言われ、山梨県知事も金沢市で立ち上がるはずの臨時政府に問い合わせさせてくれ、とたらい回しにしてくるので、諦めて情報収集とホテル内のジムでトレーニングだけしている。たいして、陽湖は朝食後ずっと訪問してくる信徒たちの相手をしていて、昼食は諦めて夕食まで祝福したり、聖餐したりしている。どこか大きなホールに集めて一気に終わらせたけれど、台湾の信徒たちは一人一人に祝福していることを、とても感謝してくれているので、今さらやめられなかった。

「……ハア……ハア！ ああつ！ ああ！ おもらしちゆるう！ うきゅ……」

神の化身でも何でもない、ただの一人の人間として、ひそやかな趣味を楽しみ、シーツの上にムー大陸のような大きなシミをつくる。

「ハア……ああつ……もらしてる……陽湖は、お布団にオチッコもらちてる……ハア……赤ちゃんみたい……オチッコ……ハア……」

「……」

「いいの……気持ちいいの……おちっこ、おもらし、気持ちいい……」

「ハア……ハア……ああつ……また、しちやつた……」

ずっと黙っているけれど、介式が眠っていないのにも気づいていない。あえて口に出して語ることで陽湖は羞恥心が刺激されて、より快感が高まるので介式を観客として使っていた。

「ハア……気持ちよかったア……」

「主よ、今日も一日、無事に過ごさせてくださり、ありがとうございます。アーメン」

そして生温かい感触に包まれたまま眠る。朝になって起きると、冷たくなっていた。枕元へ多めにチップを置いておく。修学旅行には、ろくに現金をもつてきていけないけれど、台湾の通貨は手元に大量にある。とくに請求したわけではないけれど、台湾の信徒たちが祝福や聖餐を受けるつど渡してくれるので、この数日で日本円にして二千万円を超えていた。もちろん、教団への寄付とみなしているので、当座に使う場合は借用したとして記録をつけていた。陽湖は目があった介式へ挨拶する。

「おはようございます」

「……おはよう」

介式は一言だけ挨拶すると、もう朝食をとるためにレストランへ向かう。日本のホテルと、それほど変わらないバイキング形式の朝食を部下たちと食べる。

「前田警部補、何か新しい情報はあるか？」

「昨夜、G8他2カ国の首脳と、芹沢総代理が会談された件は、ご存じですか？」

「ああ、ネットのニュースで見た」

「無事に成功されたようです。あれで18歳とは……たいしたものです」

「会談の内容による」

やはり会議の内容は伏せられていて、開始時のオパマ大統領による追悼くらいしか流れていない。介式たちは朝食を終えると、各自にスマートフォンで情報収集するため部屋に戻る。エレベーターをおりて廊下を進むと、陽湖が部屋の掃除を担当しているメイドに頭をさげている。メイドは多めにチップをもらえたので、濡れているシーツをバスケットに放り込むと笑顔で次の部屋に向かう。見ていた前田は介式に言う。

「彼女、毎晩のようにシーツを濡らしていますね。よほど今の状況が怖いのかもしれませんが、台湾側も、それほど悪い扱いはしてこない

と思います。処刑される夢でも、見るのでしょうか？　夜中うなされて
いますか？」

「……………さあな」

「死刑を待つ囚人も布団を濡らすことがあるそうですが、介式警部か
ら安心するように言ってやっては、どうでしょうか？」

「……………見なかったことにしてやれ」

「はっ！」

介式たちは部屋に入り、陽湖は朝食をとると、寄付されたとみなし
ている現金でホテル内の会議室を借り、屋城と現地教団スタッフに手
伝ってもらい、聖餐の用意をする。陽湖には台湾警察の職員が見張り
についているけれど、宗教活動へはノータッチで退屈そうに廊下で
立っている。すでにホテル敷地外には行列ができていて、ホテルへ迷
惑にならないよう少人数ずつ交替で祝福する。もう教義を修正する
のは諦めて、これ以上に変なことを言い出されないよう単純な祝福に
とどめておく。英語や陽湖も不慣れで聴く方の信徒も理解できない
ヘブライ語で祝福するより、日本語で祝福する方が喜んでくれるの
で、そうしている。

「主の御名において、あなたに祝福がありますように。アーメン」

「嗚呼、ありがとうございます。私は今日からイエスと関羽に加えて、
あなた様を信仰します」

「……………聖書をよく読み、信仰を深めてください」

「謝々！　我加油！」

そこそこに日本語ができる信徒が逆に誤解を広めていそうで怖い。

「主の御名において、あなたに祝福がありますように。アーメン」

「おおっ、私も陽湖様を信仰します！　ヨハネと孝謙天皇、陽湖様が私
の神です！」

「……………、聖書を何度も読み、信仰を深めてください」

しかもイエスだけでなく使徒も信仰対象としているし、そもそも信
仰告白の意味を取り違えている。ミカエルやガブリエルなどの天使
や、マリアやモーゼなどを信仰対象としているのは、まだマシな方で

明らかにキリスト教と無関係なものも含まれていたりする。天使や使徒を信仰対象とするのは、本場のヨーロッパでも生じていて、それでは唯一絶対の神への信仰がゆらぐので、やめようという流れになっているとは聴いたことがあるし、神と聖霊とイエスを三位一体として一つとみなすのも、信仰対象を一つに絞るための努力なのかもしれない。なのに台湾の教団は、日本の八百万も負けそうなほど、何でも信じていて、本当に自分と同じ教団の人間なのか、疑わしくなってくる。

「私は陽湖様とノア、アブラハムを信じます！」

「……………聖書は、どこまで読みましたか？」

「はい、タベ創世記を読み終わりました！」

「そうですか……………どうぞ、読み続けてください」

それぞれの信徒が思い思いに、気に入った聖書の人物を信仰していたりするようで、何が正しいのか、陽湖にもわからなくなってくる。実は陽湖も鮎美から言われるまでもなく聖書の記述に無理がある部分が存在するのは小学生の頃から気づいていた。ノアの箱船にしても、すべての動物を一組ずつ乗せるとして、ゾウやサイ、キリンなどの大型動物を乗せられるだけの船を造る造船技術があったのか、それは神の奇跡でノアが頑張ったとして大型動物のエサも積載でき、さらに動物が暴れたりせず、ちゃんと管理でき大洪水がおさまるのを迎えられるたとして、それが約五千年前、その一組から動物が増えていくなら、ネズミ算式に個体数を増やせば十分な群れになったかもしれないけれど、草食動物はともかく肉食動物のエサは、どうしたのだろう、とも思う。さらにコアラやカンガルーなどのオーストラリアにしかない動物は、どうしたのだろう、ニホンオオカミは、ツキノワグマは、パンダは、シロクマは、コウテイペンギンは、きちんと考えると上野動物園より大きな船を造る必要があるし、そんなものを短時間で丘の上に造ることは不可能としか思えないし、パンダやコアラを、どうやって連れてきたのか、どうやって戻したのか、聖書をそのまま信じなさいと言われて、考えないようしてきたことまで思い出ししまった。

「聖書にすべての真理があるのです。……」

もしかりに聖書に書いてあることの一部は童話や神話のようなのと解釈し、よい教えだけを吸収するという姿勢をとるのは、どうだろうか、げんに欧米では、そうなりつつあるし、鮎美も聖書の話に耳を傾けたとき、たんに生きる規範や道徳として聴いていた。けれど、そうなると好き勝手に取捨選択することになるし、同性愛禁止は現代の人権感覚に合わないから死文としたり、地球が丸いのも、生物が進化するのも認め、そうしていいよ、やっぱり神が七日間で世界を造ったのも怪しくなる。イエスの復活さえ疑わしくなるし、マリヤも隠れて性交したのか、それとも強姦されて妄想を抱いたのかもしれない、ただ、イエスが残した言葉は素晴らしいものが、いくつもある、そこは大切にして、非科学的な部分は、わきに置いておく。それでは、聖書は単なる教訓と諺を集めた道徳教科書になってしまおうし、そんなものは信仰ではなくて、せいぜい処世術や哲学、道徳観念に過ぎなくなる。では、信仰とは何なのか、陽湖の中で疑問が渦巻く。

「主の御名において、あなたに祝福がありますように。アーメン」

「ありがとうございます！ 聖餐もしてください！ お願いでございますー」

「ブラザー愛世、パンと蜜を」

「はい」

聖餐をすれば手を舐められるし、言うように頭をさげたかと思うと、足の爪先にキスされたりする。中年女性の信徒が両手を合わせて頼んできた。

「私の母は膝が悪いのです、どうか、陽湖様の膝を拜ませてください」

「……………どうぞぞ」

仕方なく許すと、両手で陽湖の右膝を包みながら祈ってくれた。そんなことで老婆の膝が癒えればいいけれど、とにかく陽湖も、いっしょに祈る。

「あなたのお母様に主の祝福がありますように。アーメン」

「ありがとうございます、ありがとうございます」

地域ごと、国ごとに宗教への理解や接し方が違うのはわかるし、日本でも信仰を始めたばかりの信徒は土着の宗教観が混ざってしまう。陽湖が受洗した美恋も、バチ当たりという概念をもっていたし、いざれ直すとしても、ここまで台湾の信仰が違っていると、実は自分が真実だと信仰してきた日本の信仰も違ってきているのかもしれない、と不安になる。一つ不安になると、二つ三つとグラついてくる。やっぱり聖書の世界観は地中海世界しか見ていないし、アメリカ大陸や日本、中国など、まったく存在しないかのようになっている。かといって、天皇と中国皇帝とイエスが協力して世界を導くという信仰にはついていけない。どこから修正していいのかもわからない。何時間も次々と訪れる信徒を相手にしていると、だんだん頭がボーッとできて、どうでもよくなってくる。

「ボクは陽湖様と鮎美様を信じます！ 鐘留様と鷹姫様も！」

大きく四人の写真がプリントされたTシャツを着た30代の男性が言ってくる。それはもう信仰ではなくてアイドル崇拜だし、党の方針では、あまりアイドル的に売るのはやめようとなっているのに、どうして台湾にまで、こんなTシャツがあるのか、正規品なら自民党のロゴマークが入っているはずなのに、それはないのでバッタものか、密造品かもしれない、陽湖はとても疲れてくる。それでも、対応する。

「……次の人、どうぞ」

「オラは陽湖様と孫悟空、呂布を信じます！ 日本が大好きです！」

「っ……………フ……………フフ……」

明らかに西遊記でもなく、三国志でもない日本のアニメキャラを愛している感じのTシャツやキーホルダーの20代の男性に言われると、陽湖はボーッとしていた頭がグルグルと回るのを感じた。まず西遊記はフィクションだし、せいぜい実在していたのは玄奘三蔵くらいで、しかも仏教の話だし、よく知らないけれど最終的に孫悟空も仏になって闘戦なんかか仏とされたらしい、三国志にいたっては何を考えているのか、わからない、わからない存在なのは、むしろ日本人かもしれない、何でもアニメキャラにしてしまおうし、何でも神様にしてし

まう、外から見ても、こんな変な民族はいないかもしれない。なのに日本が一番と思っっている。けれど、白人たちも自分が一番だったし、中国も中国で自分たちが一番と思っっている。キリスト教に限っただけでも、イスラエルを訪問して聖墳墓の周りを見れば、プロテスタントとカトリック以外にも、なんとか正教会だの、なんとか派だのが存在し、みんな自分が一番正しいと思っっている。陽湖の中で何かが切れた。

「…フフ…んフフ…」

「陽湖様の笑顔だ！」

「陽湖様が笑っていらっしやる！」

「陽湖スマイル万歳！」

「…フフ…んフフ…そんなに私が好きなら…」

陽湖は聖餐につかっていた蜜壺を足元においた。紫ローブの裾を摘んであげると、壺を跨いで放尿した。もう、どうでもよかった。私は、ただの人間で、神の化身ではない、その証明に聖餐につかう大切な道具に放尿した。大切な道具といっても、粘土を焼いただけの物だし、偶像崇拜はしないので物は物にすぎない、まだ蜜は残っているけれど、聖なる食べ物でもなく、ただのコンデンスミルクと蜂蜜とオリブオイルにすぎない。ずっとトイレに行きたいのも我慢して、信徒の相手をしていたのに、本当に信徒なのか疑わしい人ばかりなので陽湖は微笑みながら、壺に小水を貯め、手で蜜と混ぜて差し出した。

「さあ、これを舐めてみなさい」

「……………はい！」

舐めてくれた。次の男性も舐めてくれたし、女性も舐めてくれた。

「…フフ…」

おもらしとは別の喜びを見つけた。とても優越感がある。自分の小水が混じった蜜を与えると、まるで相手を支配し、自分を受け入れさせているような感覚があった。その後の信徒たちにも尿蜜を与え続けた陽湖は19時まで祝福を続け、本日の聖職者としての業務を終

えた。

「……少し一人にしてください」

「「はい」」

屋城と現地教団スタッフたちが出ていくと、陽湖は会議室で一人になった。

「……フフ……」

寄付金を集めている木箱を見下ろした。ニュー台湾ドルとも台湾元とも言われるドルなのか、元なのか、どっちでもある通貨が、ぎつしりと入っている。外国紙幣なので実感は薄いけれど、ぎつと今日だけでも、また一千万円を超えたかもしれない。

「………そっか……やめられないんだ………やめられるわけない……」

どうして世界本部が14万4000人しか救われないと解釈しているくせに、どんどん信徒を増やすのか、どうして信仰を失った幹部が教団をやめないのか、木箱に入っている金銭を見て感じた。

「……ずつと……私の家から巻き上げて……」

子供の頃から、ぎりぎりの生活だった。両親は勧誘活動もするので定職につけず、今でも時給労働をしている。なのに、少しでも寄付しようとする。

「……これが諭吉だったら……」

台湾紙幣に描かれている蒋介石を福沢諭吉だと思ってみると、心が騒いだ。

「……ずつと行きたかった……連れて行ってほしかった……USJも……東京デイズニーランドも……鈴鹿サーキット……ひらかたパーク……長島スパワールド……ぐすつ……びわ湖タワーしか行ったことない……」

家族三人で入る入場料が無かったし、交通費もかかる。子供心に連休明けなど同級生たちが話していることが羨ましくて羨ましくて、なぜ自分の家は毎週毎週日曜朝に教会へ行くのか、そしてお金が無いのか、知っていた。

「……私の青春を返して……ぐすつ……行かないうちに津波で無く

なつて……あ、富士急ハイランドなら残つてるかな……あそこまでは津波……襲つてないかも……あとは芝政ワールド……」

行つたことがないのに、憧れて色々な遊園地を記憶している。陽湖は木箱へ両手をつ突つ込んで紙幣の握りしめた。

「……リアルに……濡れ手に粟……」

蜜でベタついた手は大量の紙幣を握っている。これだけで両親の月収3ヶ月分はありそうだった。

「お金……お金さえあれば……お金の力……」

芹沢家で暮らしたことで自分の家庭との格差は思い知っている。一見、平均的に見えるけれど、芹沢家は贅沢だった。鮎美の議員報酬がなくても玄次郎の所得だけで十分に贅沢だった。何度も玄次郎とスーパーに買い物へ行つたけれど、食品売場では玄次郎は値札をあまり見ない。それどころか、同じ牛乳でも高い方を買つたりする。タマゴも特売の安売り品より、一番高い有機農法飼料を与えたというタマゴを買う。牛肉も狂牛病を恐れて国産か、オーストラリア産を買う。晩酌に呑むビールも必ずビールであつて発泡酒だったことはない。チビチビと呑んでいるウイスキーなどは響や白州という銘柄で、とても高価だった。たいして陽湖の父は鏡月や二階堂という焼酎を買つてきて、お湯や水で薄めて呑んでいた。

「……私のアトピーが治らなかつたのも……宗教のせい……」

飲食物だけでなく、身の回りの物もレベルが違った。シャンプーもボディークリームも化粧水も、マルチ商法企業の良質なものを買っていた。シャンプー一本が7000円という価格は、ぼつたくりとしか思えなかつたし、悪徳商法に騙されているだけでは、と心配になる部分もあつたけれど、使つてみると使い心地がよくて肌に優しく髪もキレイになつた。ボディークリームも香料が控え目なのに、いい香りで、ちゃんと垢を洗い落としてくれて、きつかつた腋の匂いも、穏やかになつた。それまで陽湖の家庭で使つていたシャンプーは一番安いものだったし、ボディークリームではなく石鹸で身体を洗っていた。芹沢家にも石鹸はあつたけれど一個1200円と聞いて使わせてもらうのに抵抗があるほどだった。

「……いい環境で……いい物を使えば……すぐ治ったのに……」

空気のキレイな島で暮らし、高価で良質なタマゴや牛乳を口にしてい、同じく高価で良質なスキンケアを使うと、陽湖のアトピーは日に良くなった。低所得家庭の福祉医療補助で無料だからといって病院でもらったステロイドを塗り続けるより、ずっといい。それは肌でも味覚でも感じた。陽湖が買い物任せられて、つつい安い牛乳やタマゴを買ってしまうと、それは水っぽかったり臭く感じるように味覚が変わっていたし、さりげなく美恋は野良猫にそれらを与えていて、今まで自分が食べてきた物は猫のエサだったのかと感じてしまっている。一度、1パック59円の豆腐と、1パック198円の豆腐を何もつけずに食べてみるよう言われて、やってみると59円の方は苦くて薬臭かったし、198円の方はまったりと甘くていい匂いがした。別に静江のようにフランス製の車に乗りたいとは思わないけれど、身体のためにも、いつか産む子供のためにも、いい物は食べたい。そんな風に一つ一つの商品で高い方を買うので芹沢家の買い物では、買い物かご一つ分を精算すると一万円くらいになるのが平均だったし、陽梅や陽湖が買うときは3000円を超えなかった。

「……エビフライ……」

子供の頃の外食でも一番安いお子様カレーセットより、エビフライのあるお子様プレートが食べたかったけれど、空気を読んで一番安いので我慢してきた。

「……大トロ……ウニ……」

谷柿総裁に招かれて行った料亭で、はじめて大トロを食べた。脂の塊のように真っ白なのにすがすがしい甘味で、醤油も上等だった。ウニは自然薯とあえられていて、コクと甘味、口当たりのハーモニーが最高だった。セクハラ写真訴訟の裏交渉だったので、ゆっくり落ち着いて食べたわけではないのが、もったいない。あんな料亭にプライベートで行ってみたいと思つて調べたら、一人一食7万円、一見さんお断りだった。そんな超高級店なのに鮎美も静江も平然としていたし、鷹姫でさえ少し慣れてきている感じで、料理を味わうことに集中していた。鷹姫も子供の頃から貧しかったらしいけれど、もともと島

全体が現金収入の少ない世帯が多いので格差を感じていない風だったし、ひがみも無いようだった。陽湖はひがみを、ずっと信仰で抑えてきた。

「お金があれば、すべてが変わる」

再び陽湖は木箱に両手をつまむと、爪を立てて紙幣を掻き上げ、両腕で胸に抱きしめた。

「っ、ああああ……」

脳が痺れるような快感が走った。この胸の中に一千万円があると
思うと、背筋がゾクゾクとして唾液が口の中に湧いた。股間までざわ
ついて、おもしろもしていないのに、なんだか濡れたような感触があ
る。

「フフツ……フフ！ フフフ！ んフフ！ フヒヒ！ ヒーヒヒヒ
ヒッ！」

笑えてきた。心の底から嬉しくて笑えてきた。ひとしきり笑うと、
陽湖は唇から垂れたヨダレも拭かずに、つぶやく。

「政治家なんて……くだらない……宗教家の方が、ずっといい……」

秘書補佐として、わずかに政界を経験したけれど、議員の鮎美でさ
え支持者へ頭をさげてお願いして回り、忘年会新年会では、したくも
ない酌をして機嫌をとっていた。自分もそれに付き合わされた。

「……宗教……最高……」

けれど、宗教家、聖職者という立場なら自分こそが神の代弁者、神
の代理人、くだらない連中に頭をさげるところか、足元に這わせるこ
とができる。そして、お金も集まってくる。

「……お金も、ぜんぜん違う……」

静江から、すぐに勉強するよう言われて学んだけれど、政治家の金
銭はがんじがらめだった。法律でしっかり縛られている。けれど、宗
教家は違う。

「……領収書なんて……いらない……」

この胸にある一千万円、客室にある二千万円、合わせて三千万円に
領収書など出してない。まさに、親切な人がくれたお金だった。

「フフ……そうなんだ……考えてみれば、教会も、神社も、お寺も、み

んな、お金を集めるところ……人類最初の自動販売機は聖水売って
た……礼拝は最後にお金を集める……祈りは、ただの放任行為……法
律行為としてみれば、支払いのみがある……しかも、仕入れもない
……在庫も……経費も、ごくわずか……マルチ商法よりも、ずっとい
い……政治家よりも、もつと、もつと……寺社仏閣なんて、もつ
と露骨、真ん前に御賽銭箱……偶像を置いて、そこに箱をおいて集め
る……そっか！ 宗教とはお金を集めること！ 信仰とはお金を払
うこと！ 私の仕事はお金を払わせること！ んフフ！ フヒヒ！
あつはははははは！ エウレーカ！ アカントーレ！ 南無不可
思議不換紙幣！ ハレルヤ！ ああ、ハレルヤ、アーメン！ んフフ
ウフウフフフ！」

陽湖は紙幣を抱きしめたまま、床をゴロゴロと転がって笑った。
笑っているうちに股間がざわついてヌルヌルに濡れてきたので、紫
ローブをめくって紙幣を押しつけて擦った。

「ハアッハアッ、ああ、気持ちいい。お金って気持ちいい……あ、そっ
か、私が日本代表になったんだから、裏からシスター・黠美を支配して
日本を操ればいいんだ……日本全体を私の神の国にすればいい、つい
でに台湾も……んフフ！ フヒヒ！ あつははははあはは！」

また笑って気持ちよくなって、その興奮が落ち着いたとき、会議室
の窓ガラスに映る自分の醜い顔を見て、一気に酔いが吹っ飛んだ。

「つ……私、また酔って……狂ってる……権力に酔った次は、金銭に
酔って……ああ、神よ。どうか、導きを！ もう二度と間違いません
！」

イスラエルから日本へ向かう機内で暴走した記憶は苦々しく残っ
ている。その教訓から自戒して、しばらく祈り、思いついた。

「酔いすぎるからダメ……ほろ酔いくらい……そう、コリント第二、大
酒はダメ。でも、ぶどう酒を楽しむのは、いいこと……ヨハネ2章1
0節、ほかの人はみな、上等のぶどう酒を最初に出し、みんなの酔い
がまわったところに、それより劣ったのを出すものですが、あなたは上
等のぶどう酒を今まで取って置いたのですね。……んフフ！ 私
の人生、今まで、つらかった。けど、これからは、上等のぶどう酒が

出てくる」

脳内から都合のよい聖句を呼び出すのは簡単だった。まるで弁護士が判例を引つ張り出すように湧いてくるし、解釈も自分次第、判決も自分次第だった。

「はああ……落ち着いて……もう失敗はしません。幼い頃に貧しかったから、大人になってから金の亡者なんて、そんなわかりやすい、麻原彰晃みたいな風にならない……だいたい、あの人、なんのためにサリンなんか撒いたのかな……せつかく数万人規模の教団のトップなんだから、そのまま、楽しめばよかったのに……」

陽湖は落ち着くために散らかした紙幣を片付けつつ考える。

「うん、こうしよう。ちゃんと、みんなのために使おう。そして、ほんの一部だけ私が酔うために使う。ほどほどに。もう酔って狂ったりしない。それでいいですよね、神」

否定は返ってこなかった。

「とりあえずシャワー浴びよう。不潔にしてると、余計に変な考えに支配されるから」

夕食の前にシャワーを浴びることにして、木箱に紙幣を戻し、その10分の1だけは自分のものという認識にした。

「あ、ちようど300万円くらい」

自動車教習所でのセクハラで受け取った慰謝料を寄付した額と同じになるので、ますます自分のものという認識が強固になった。客室に戻り、紫ローブを脱いでシャワーを浴びる。舐められたりキスされた手足は入念に洗った。身体がキレイになり、バスローブを着ると、同室の介式に頼む。

「すみません。少しの間、ブラザー愛也と二人になりたいので出ていともうえますか?」

「わかった。夕食に行く」

介式にとつて陽湖は警護対象ではないし、陽湖の意志で客室に呼び込んだ男性と、何をしていようと自由だと判断したので出ていく。陽湖は屋城を呼ぶと、自分は椅子に座り、屋城には床に跪かせた。紫ローブとは違いバスローブなので陽湖の若々しい脚が見えやすい。

「これから黄金聖水のイニシエーションを行います。ブラザー愛也、あなたが初めて受けることになります。よろしいですか?」

「…はい」

「列王記第二一八章27節を朗読してください」

「はい。しかしラブシヤケは彼らに言った。わたしの主がこれらの言葉を語るよう、わたしを遣わされたのは、あなたの王や、あなたに対してであろうか。それは城壁の上に座っている者たちに対してではないか。彼らがあなた方と共に自分の糞を食らい、自分の尿を飲むようになるためではないか」

「よろしい」

そう言った陽湖は立ち上がると、客室備え付けのティーカップをバスローブの隙間から股間へ入れ、そこに放尿した。大量には貯まっていなかった。ちょうどティーカップ一杯分になった。

「黄金聖水のイニシエーションです。お飲みなさい。ブラザー愛也」

「……はい……」

飲んでくれた。半分嬉しくて半分悲しい。屋城とは対等な恋人関係になりたい気持ちもあった。けれど、マザーとなるまでは見上げていたし、マザーとなった今は見下ろしている。自分の尿を飲んでくれたので、なんだか支配しているような気がして嬉しい。けれど、見上げているときは凛々しくて憧れたのに、見下ろしていると恋心が半減し、これでもいいかな、というくらいに冷めている。もう明らかに今までの教義とは違うことを始めたので、それを指摘して自分を叱り、正しい方向に導いてくれたなら、もう一度、憧れてみたかったけれど、それはかなわなかった。教団内のヒエラルキーには従うという男の態度に失望しつつも、もう半分では快感を覚えていたので満足した。

「ブラザー愛也、いずれ、あなたとは結婚いたしましょう。ですが、今はマザーの勤めを果たしていくとき、ともに励みましょう」

「はい」

「では、おやすみなさい」

「はい、おやすみなさいませ。マザー陽湖」

今すぐ結婚して処女を卒業してもよかったけれど、なんだか少し惜しくなったので先延ばしにした。単純に人妻のオシッコより、処女のオシッコの方が高く売れそうな気もするし、ロストバージンは控える。それに、お腹も空いている。昼食を抜いているので、かなり空腹だった。屋城が退室すると、陽湖はルームサービスを取ることにした。また遠慮して、それほど高価でない大腸麵線というモツ入りラーメンのようなものを頼み、加えて紹興酒とビールも注文した。

「台湾は18歳から飲酒可能……国の法律もいろいろ……ほろ酔いが、どんな感じかも試してみよう……神よ、いいですよね？」

また否定は返ってこない。法律上も問題無いので美味しくいただいた。

「あく……ふわふわする……」

酔いを体験していると、介式が戻ってきた。

「あ、おかえりなさい」

「……ただいま。酒を呑んだのか？」

「はい」

「……そうか……」

警察官として一瞬戸惑ったけれど、国によって飲酒可能年齢が違うことも知っている。日本は一部のイスラム教国のように属人主義をとっていないので海外に行けば、その国で飲酒やマリファナが許されていれば、問題ない。いまだ高校の卒業式を迎えていない陽湖へ一瞬注意したくなっただけれど、適法なので黙った。

「ん……気持ちいいものですね……酔うって……」

「……、ほどほどにしておけ」

「はい、ほどほどにしておきます。大酒は罪ですから」

「普遍的な真理かもしれんな、それは」

介式も衣服を脱いでシャワーを浴びるとバスローブ姿になった。お互い、異性愛者なので意識したりはしないけれど、陽湖は怪しく微笑むと、聖書を持った。

「シスターいつか、ここを朗読してください」

さきほど屋城に朗読させた聖書の一節を指し示したけれど、介式は拒否する。

「いや、私は、けっこうだ」

「そう言わず、どうか一度だけお願いします」

「断る」

酔った人間がしつこいのは警視庁の上司も女子高生も変わらないな、と介式は不快そうに断言した。陽湖は脚をモジモジとしながら頼む。

「オシッコ出そうなんですよ、お願いします」

「……? ……トイレに行け。それから、寝る前にもトイレに行った方がいい」

「では、私が朗読しますね」

お互いに会話のキャッチボールが成立しないまま、陽湖は聖書を読む。

「列王記第二一八章二七節。しかしラブシヤケは彼らに言った。わたしの主がこれらの言葉を語るよう、わたしを遣わされたのは、あなたの王や、あなたに対してであろうか。それは城壁の上に座っている者たちに対してではないか。彼らがあなた方と共に自分の糞を食らい、自分の尿を飲むようになるためではないか」

「……………」

「では、黄金聖水のイニシエーションを施します」

大腸麵線のスープとビール、紹興酒を呑んだので、かなり貯まっている。陽湖はビールジョッキを手にすると、バスローブの隙間から股間に入れた。

「何をする気だ?!」

嫌な予感しかしない。そして予感的中する。陽湖はビールジョッキへ放尿すると、それを介式に向けた。

「シスターいつか、飲んでください」

「断る!!」

「なぜ、飲まないのですか?」

「そんなものが飲めるか!!」

「どうしても飲まないつもりですか?」

「当たり前だ!!」

「シスターいつか、あなたに拒否権はありません。これを、お飲みなさい」

「……………もう私に話しかけるな。それを流して洗っておけ。汚らしい!」

介式は嫌悪感しかないという顔をしているけれど、陽湖は怪しく優しく微笑んだ。

「あなたには、これを飲む義務があります」

「そんな義務はない!!」

「いいえ、あります。あなたは罪を犯しました」

「何の話だつ?!」

「介式いつか警部は警護していた芹沢鮎美を逃がすため、民間人だった月谷陽湖を身代わりとして台湾政府に差し出した」

「つ……………あれは、君も同意して…………」

「同意があれば、何をさせてもいいのですか?」

「くつ……………お前が言うのか…………」

「これを飲めば、あなたの罪を許します」

「……………断る!」

「神とマスコミは、すべてを見ておいでです。なるほど、警護していた議員を守るのは大事なことです。けれど、そのために似た顔の18歳の少女を外国に差し出す警察官に、どのような罪があり、罰をくだすべきでしょうか?」

「……………」

「さあ、これをお飲みなさい。すべてを許します」

「……………勝手に告発でも、タレ込みでもするがいい! 私は、そんなもの飲まない!!」

介式は厳罰も世論の批判も覚悟したけれど、陽湖は畳みかける。

「あなた一人で済むことでしょうか? あなたの部下も協力したのに」

「っ……」

「ただ、これを飲むだけで、すべてを許します」

「……………」

「警察としては、どのくらいの不祥事なのですか？ 議員の身代わりに民間人を外国政府に差し出すのは？ あなたの部下の出世にも、響くのですか？ クビになりますか？ 依願退職で済みますか？」

「……………そんなものを私に飲ませて楽しいのかっ?！」

「はい、楽しいです。私は嘘をつきません」

「……………」

「さ、飲んでください。お願いします」

陽湖がビールジョッキを介式に持たせた。生温かい。泡立っているし、陰毛が一本浮いている。そして酒を呑んだ人間が出した尿なのでアルコール分解産物が混じり、余計に臭い。

「……………」

「どうぞ、ゆっくり飲んでください」

「……………悪魔め……」

震える手で介式は一気に飲む。

「……………うっ、ハアハア……」

不味くて臭くて、とても一気には飲めない。夕食の後なので胃が苦しい。

「ハア……ハア……」

「ごゆっくり、どうぞ」

「くっ……」

介式が飲み、陽湖が嗤う。

「フフ、んフフ♪」

酔った目で陽湖は楽しそうに嗤った。信仰をもっていない者にも論法次第で飲ませることができた。むしろ、嫌がっているのを拒否できない状況に追い込んで飲ませた分、とても楽しかったし、身体がゾクゾクと波打つほど気持ちがいい。介式は飲み終わると気持ちが悪くなった。

「……ハア……ハア……うっ……ぷっ……」

「吐いたら許しません。箴言5章15節、あなた自身の水溜めから水を、あなた自身の井戸から水の滴りを飲め。あなたの泉が戸外に、あなたの水の流れが公共広場に散らされてよいだろうか。それは、ただあなただけのものとなるように。あなたと共にいるよそ者たちのためのものとなつてはならない。あなたの水の源が祝福されるように」

「……ううっ……」

吐きそうなので口を押さえて震える。せめて水を飲んで口の中を洗った。

「どんな気分ですか？ シスターいつか」

「……………」

「あなたは毎晩おもらしして楽しむ私を心の底で蔑んでいましたよね？ 目を見ればわかります」

「……………」

「他人の趣味を蔑むなんて、失礼ですよ。人はそれぞれ、多様なのですから」

「……………」

「でも、そんな風に蔑んでいた私のオシッコを飲んじやった気分はどうですか？」

「……………」

「これから、あなたの身体に吸収され、私のオシッコが、あなたの血となり肉となるのです。心臓に、肺に、脳に、子宮に、卵巣に、すみずみまで私のオシッコが、あなたの身体を巡る。巡る、巡ります」

「っ……………」

また気持ちが悪くなって吐きそうになる。

「吐いたら、また飲ませます。一度で済ませたいですよね？」

「……………ハア……………ハア……………」

なんとか介式は吐き気に耐えた。陽湖は眠くなってきたのでベッドに入りながら礼を言う。

「あく楽しかった。ありがとうございます」

「……………くっ……………」

変態に弄ばれたような気がして、介式は悔し涙を耐えつつベッドに入った。会話なく時間が過ぎ、そろそろ日付が変わりそうになった頃、陽湖が叫ぶ。

「あっ!!」

「……………」

またシートでも濡らしたのでらうと介式は嫌悪感に満たされたけれど、陽湖は飛び起きると、スマートフォンを触り始める。

「義援金を集めるの指揮しなきゃ! 教団の口座は東京だろうし、とりあえず私の銀行口座に!」

台湾から日本の信徒たちへ、琵琶湖銀行の自分名義口座へ、震災義援金を集めて振り込むよう指示した。

3月17日 競争

復和元年3月17日木曜、朝6時、陽梅は鬼々島の芹沢家2階の陽湖が住ませてもらっていた部屋で寝泊まりしていた。隣室の鮎美の部屋では鐘留が寝ている。陽梅は静かに起きると、階段をおりて台所で朝食の準備をする。妊娠していた美恋が琵琶湖の津波で亡くなり、鐘留にいたっては両親と自宅を同時に喪っている。鐘留と玄次郎が心配なのと、夫の啓治が教団が行う三重県での炊き出しに出張しているので、三人で生活していた。朝食の支度ができる頃、玄次郎がおりてきた。

「おはよう」

「おはようございます。芹沢社長」

「毎日、すみませんね」

「いえ、お給料はいただいておりますから」

玄次郎と鐘留、そして自分のために三食つくって他の家事もして一日1万円ということになっている。啓治が参加している教団が行う炊き出しは完全なボランティアなので陽梅の収入は重要だった。

「いただきます」

「主よ、今日の糧を与えたもうことを感謝し…」

玄次郎が食べ始め、陽梅は祈ってから食べる。

「食料品の価格はどうかかな？」

「日に日に少しずつあがっています」

「そうか。鮎美も頑張っているが、当然だろうな。スーパーは、どんな感じに？」

「遠い県の工場や畑で作られていた物が入ってこなくなり、地元の農協から入る野菜や肉、敦賀からの魚が売られています。フィリピンのバナナなどが無くなっていて、代わりに長野や青森のリンゴが並んでいましたから、日本海側経由なら届くようです」

「あるだけマシか。オレが好きなサントリーモルツも入ってこなくなって、県内に工場があるキリンビールだけになったからな。まあ、一番搾りも美味しいんだが」

「島の漁師さんたちが琵琶湖の魚が高く売れると喜んでいました」
「この島は食糧自給率が高いから。そこは安心だが、全国的には、どうなるか……」

食べ終えた玄次郎がテレビをつけると、鮎美が映る。

「新しい元号は復和となりました」

数日前の録画映像が流れている。

「復興の復、回復の復に、昭和の和です。とくに復の字は由伊妹宮様がお望みになり決まっております」

テレビ画面の中で鮎美は静江が墨で書いた元号を発表している。このところ、何度も流れている映像だった。東京や大阪が壊滅したのでテレビ番組は減り、同じニュースの再放送が多い。

「平成を発表した小淵恵三を思い出すなあ……まさか、オレの娘が、次の元号を発表するとは……」

「シスター美恋が亡くなったこと、娘さんへは、いつ伝えるおつもりなのですか？」

「まあ、隠せるだけ隠しておこう。あいつ忙しそうだし」

「……。芹沢社長も、強い人ですね。奥さんが亡くなられたのに」

「鮎美と同じで仕事して考えないようにしてるからなあ。建物が壊れまくったから建築業界は当面、忙しいし。まあ、オレの歳で緑野さんみたいに鬱ぎ込むのもカッコ悪いから」
「……………」

陽梅が天井を見上げた。鐘留が起きておりてくる気配はない。玄次郎も見上げつつ問う。

「彼女、食事は、ちゃんと食べて？」

「はい。少しずつ食べてくれるようになって昨日はお風呂にも入ってました。ただ……」

「ただ？」

「毎晩、お布団を濡らしてしまうみたいです」

「まあ、あの歳で両親を亡くせば泣くだろう、まだまだ」

「いえ、そうではなくて、その……オネショを……してしまみたいです」

「ああ、そつちで濡らすのか。うくん……子供といえば、子供な歳だから仕方ないだろう。それも、そのうち治るさ」

テレビから鮎美の声が響いてくる。

「臨時政府は原発事故の状況について、IAEA国際原子力機関の調査を受けます。近隣の皆さん、ご安心ください。あのチェリノブイリ事故でも、原子炉の間近におられた方々は不幸にして死傷されましたが、数キロ離れたところでは安全でした。IAEAの調査を受け、報告がまとまり次第、より確かな情報を発表いたします」

「鮎美、大変だな……せめて、あと十歳ほど大人だったら……いや、子供なだけに、国民も責められないか……だいたい、原発を造ったのは、あいつじゃないし」

「……。シスター美恋は火葬になるのですか？」

「ああ、その予定だが、順番もまだまだだし、大阪京都からも遺体が運ばれてくるかもしれない。火葬場もパンク状態らしい。……火葬が何か？」

「……少し信仰の話をしてよろしいですか？」

「少しなら」

「私たちは死後、いずれ復活すると信仰しています」

「らしいな」

「生前の肉体をともなつての復活です。ですから、できれば火葬より土葬が好ましいと考えているのです」

「……なるほど……」

「やはり火葬になるのでしょうか？」

「50年くらい前は日本も土葬が多かったらしいが……。ただ、この大震災で亡くなった人間の数と、ガスや灯油などの燃料のことを考えると、もしかしたら土葬、下手をすれば水葬さえあるかもしれない。鮎美もエネルギー問題くらい考えているだろう……石永先生たちもいるわけだから……。にしても、復活か……。それを本気で信じるなら、月谷さんたちは死を悲しいとは、とらえないのかな？」

「はい、そうなります」

「……。まったく悲しくないのか？ 美恋と、あなたは友人という

ほど付き合いがあったわけではないけれど、何度も礼拝をともにしたわけだろうか？」

「しばらくのお別れですから、それは悲しいです。けれど、いずれ会えます。彼女は受洗され、私も信仰を続けていますから。芹沢社長も神を感じてみませんか？　いつか、シスター美恋と再会できます」

「……………」

玄次郎は黙って、お茶を飲み、別のことを問う。

「オレの母も大阪にいた。生きてはいないだろうな。月谷さんの親類は、みな無事だろうか？」

「……………いえ、父とも母とも連絡がとれません。名古屋でしたから生きていないと思います。兄も、妹も」

「そうか……………だが、いずれ会えると思えば悲しくない？」

「……………私の家族は、私以外は誰も信仰をもっていませんでしたから、復活できません。死は永遠の闇です」

「……………では、悲しい？」

「……………はい」

「ご家族は信仰に反対だった？」

「はい、とても反対されました。もう長く連絡をとっていませんでした。今回の地震で電話したのですが、すべての連絡先に通じないので無視されているのではなく電話機や携帯電話ごと……………」

「そうか。……………けど、確認したわけじゃないなら、生きてるといいな。ケガをして入院くらいですんでいるかもしれないし、携帯電話が壊れて番号がわからないだけかもしれない」

「はい、ありがとうございます」

「ちなみに、いつから、どういうキツカケで宗教を？」

「大学時代にヨガに興味をもって、オウム神仙の会というサークルに入っていたのですが、中学高校の友人が、真実の信仰を教えてあげると言ってきて。おかげで救われました」

「そ……………それは、救われたねえ」

かなり危ないところで、と玄次郎は陽梅が死刑囚にならずにすんだことを、とりあえず神に感謝した。

「その友人も今でも？」

「……いいえ……せつかく私を救ってくださったのに、エホバへの信仰まで無くされてしまい、礼拝にも来られなくなつて……連絡も取れず……」

「……」

「けつこうな危険回避能力のある友人なんじゃないか、と玄次郎は思ったけれど、辞めた理由が気になる。」

「その友人が、辞めたキツカケとかは？」

「二時期、1999年で世界が終わると私たちは考えていたのですが、この考えは神の意志を読み違えた間違いだったのです。それが外れたからといって、聖書が確かな導きであることは何一つ揺らぎはしないのに……」

「ああ、199X年か。あつたなあ。2000年問題も、しよぼかつたけど。でも、もし阪神淡路大震災や今回の環太平洋大連動震災が、ほんの少しズレて、ぴったり1999年に来たら大騒ぎだったろうな。地球の時間感覚でいえばズレでさえないくらいだし。もしかしたら、阪神で高速道路が倒れるのを見たり、今回の津波に遭つた信徒は終末キターーっ！ 楽園イキターーっ！ って思いながら死んだのかもな。そう思うと幸せなラストだな。むしろ信仰が強くなれば強くなるほど、早く死にたくなる。なるほど、キリスト教が自殺を禁じるわけだ」

「……」。深い信仰を保って亡くなられた方は、いずれ楽園で再会できます」

「美恋も……そう思いながら……どうだろうな……あいつは最後まで宮本さんちの姫花ちゃんと姫湖ちゃんを助けることばかり考えてそうだったが……低体温症なら、そう苦しまなかったか……。考えても、どうにもならんか……。オレみたいな人間でも、死の最期には信仰を持つと思うかもな」

「そうお考えなら今からでも、いっしょに聖書を学びませんか？」
「……」

見事の食いついてくるよな、と玄次郎は嬉しそうな陽梅の顔を可愛

いとほしいつも、鬱陶しく感じた。

「いや、死の最期の瞬間がいい。普段からの礼拝とか面倒だし、寄付もしない」

「……………」

「けど、もう死ぬって段階になると、本気で何かにすがりたいだろうな。合理主義は主観の死に無力だ。ゆえにプラグマティズムは信仰を否定しない、か。そうか、遺留分は、だからあるのか」

「イリュウブン？」

「遺産相続の話だよ。遺留分というのは子や妻が必ず遺産の一定割合をもらえる権利で、たとえ死ぬ瞬間にオヤジが財産を全部、寺や教団に寄付するなんて言い残して死んでも半分は家族に残る。そういう制度が無いと、生活に困るし、強欲な僧侶や教団だったら、うまいこと死ぬ間際に弱ってる人間に、極楽の話をして寄付させるだろ。その意思表示を混乱していたので無効とする裁判に負けても、遺留分で半分は確保できるから。きつと、キリスト教社会でも中世あたりに、いろいろあつて定まった法律なんだろう」

「……………」

「そういえば美恋にも県民共済をかけてたなあ……………あいつが死んで300万くらいもらつても少しも嬉しくないが……………今回の震災、規模がでかすぎて払えば各保険会社は破綻するし、約款で津波は除外されたかも……………琵琶湖の津波はどうなるか……………誰か裁判するだろうな……………はああ……………考えても、仕方ない……………」

玄次郎はあまり考えないようにしてテレビを見る。もう鮎美ではなくニユースキャスターが映っている。

「岐阜県飛騨高山の神社で起きた強姦殺人事件で、岐阜県警は名古屋から避難してきていた無職、北条悟司容疑者49歳を指名手配しました。この事件では自宅神社の境内を震災避難所として提供していた巫女の宮本三葉さん15歳と妹の宮本四葉さん8歳が強姦され金属バットで撲殺されたとみて調べを進めていましたが、DNA鑑定の結果…あ、今、新しい情報が入りました！ 指名手配されていた北条悟司容疑者が死体で発見されました！ そばに宮本さんの同級生の男

子Tくんが血のついた金属バットを持って立っていたことから駆けつけた警察官が問いたですと、北条容疑者を殴り殺したことを認めたとのことです！」

「……たしか、鮎美を刺したヤツも悟司だったなあ……サトシに、ろくなヤツがないな。まあ、いいサトシもいるかもしれないが。……宮本姓は多いし岐阜県は遠いから、宮本さんと無関係だといいなあ……」

「きつと地獄に落ちます」

「あ、地獄はあるのか。ってことは復活しなくても魂は永遠なのか？」

「永遠に地獄の業火に苦しむのです」

「永遠にかあ……たかだか百年に満たない人生のうちでの失敗で、永遠の罰は割に合わなくないか？　せめて百年くらいで生まれ変わらせてやれよ」

「人は生まれ変わったりしません。人生は一度きりです」

「そういう設定なのか……じゃあ、このTくんは、どうなる？　地獄行きか？　詳しいことはわからないけど、ニュースの感じからして、同級生の女の子が殺されたから、その復讐について流れを感じるけど」

「……殺人は罪ですから……」

「けど、それを言い出すと、死刑執行する刑務官は？」

「……そのような業務の場合は、大丈夫だと思います。きちんと信仰をもっていれば」

「じゃあ、強姦殺人した後、後悔して反省して、洗礼を受けたら？」

「……すみません。私ではわかりません。指導者に訊いてみます」

そう答えつつ、今は指導者が実の娘なっているので、やや違和感も覚える。

「その指導者は誰に訊いて決めるんだ？」

「……神です」

「そうか。直接、訊けるようになるといいな。だいたい、そのシステムだと量刑も不明確だし、罪刑法定主義もあつたもんじゃないな。ま

あ、罪刑神定主義なんだろうが、ヨーロッパで法学が発展したのはキリスト教のおかげかもなあ。ちゃんと決めようぜ、みたいな。ああ、すまない、つい失礼な風に言ってしまった。気を悪くしないで、ほしい」

「いえ、大丈夫です。フフ」

陽梅に微笑されて玄次郎は首を傾げる。

「え？ なにか可笑しいかな？」

「娘から聞いていた鮎美さんと、そっくりの考え方をされるものですか」

「フフ、つつこみどころは、逃さない方だからな。大阪人として。じゃあ、仕事に行くよ」

「いつてらっしゃいませ」

陽梅は玄次郎を送り出すと、教団から来ているメールを見た。教団を統括している屋城を経由しているけれど、発信元は実の娘の陽湖だった。

「……震災義援金……」

災害がある度に集められているので今回も当然にあるとは思っていたけれど、振込先は月谷陽湖の口座だった。幼稚園の頃に二人で作りに行った琵琶湖銀行の通帳で、ここからも何度か、教団へ寄付しているけれど、今回から、ここへ寄付金が集まることになったらしい。

「立派になってくれて……産んでよかった……」

やっぱり子の出世は嬉しかった。そして教団代表の母親として恥ずかしくないよう玄次郎からもらった給料の半分を振り込む。まだ、しばらくは玄次郎と鐘留へ三食用意した方がよさそうだし、そうなると一日一万円もらえる上に陽梅自身の生活費はゼロで済むし、夫もボランティア先の教会で寝泊まりしているはずなので問題ない。

「さてと、あの子にも食事をとらせないと」

朝食をトレーに載せて、鮎美の部屋にいる鐘留へもっていく。

「おはよう。入りますね？」

「……どうぞ……」

昨日まで返答も無かったけれど、布団の中から返事してくれた。少しずつ立ち直ってくれているのかもしれない。陽梅が部屋に入ると、昨日の夕食を運んだトレーが布団のそばにあつて、どの食器も空になっていいる。ちゃんと食べきってくれたようだった。

「朝ご飯ですよ」

「……ありがと……」

血のつながりが無い上に、本来二人とも芹沢家の住人ではないので距離感が難しい。鐘留は昨夜も布団と鮎美のパジャマを濡らしているの、顔を伏せている。

「パジャマを洗っておきますから脱いでください」

「……」

目を合わせないように鐘留は下半身裸になった。一瞬、陽梅は下腹部にあるタトゥーを見て驚く。

「……」

この子、あんなところに刺青なんかして、と陽梅は顔に出さないものの、軽い嫌悪感を覚える。キリスト教的にも、刺青は絶対的禁忌ではないものの好ましくなかったし、腕や背中ならまだしも、あえて下腹部に入れたというところに、同じ女性として淫靡さを感じた。そして、そんな大胆なことをする18歳のわりに毎晩布団を濡らしているのが滑稽に感じる。

「布団も干しておきますね」

「……」

「……」

お礼くらい言わないのかしら、私はあなたのママでも家政婦でもないのよ、と陽梅は無表情に布団を窓から出す。濡れた方を外に向けられたので鐘留が頼む。

「外からわかんないように干して」

「……わかりました」

だったら自分で干しなさい、けど、この子も両親を亡くして可哀想な子、優しくしてあげなさい、と陽梅は布団を干し直す。

「……いただきます……」

鐘留は朝食を食べ始める。陽梅は干し直した布団のシミを見て考えた。

「こう毎晩だと、どんどん布団も汚れますから大人用のオムツを買ってきましようか？」

「っー」

鐘留が使っていた箸を投げつけようとして振り上げ、そして陽梅が他人にすぎないことを思い出して、うなだれる。

「……オムツなんてヤダ……大きいナプキン買ってきて……ぐすつ……」

「わかりました」

女のプライドとしてナプキンならありなのね、赤ちゃんや老人みたいなオムツは嫌でも、ナプキンなら生理かもしれないというプライドの保ち方、こういう人こそ信仰をもって自分を保つべきよ、と陽梅は布教精神が湧いた。ちょうど本棚には聖書も賛美歌もある。鮎美が転校時に買わされたもので、全生徒がもっている。陽梅は少し借りることにした。

「ルカ24章26節を読ませてください。キリストはこうした苦しみを経て自分の栄光に入ることが必要だったのではありませんか。そして、モーセとすべての預言者たちから始めて、聖書全巻にある、ご自分に関連した事柄を彼らに解き明かされた」

「……………」

鐘留は黙って食べる。陽梅の声はラジオか、車の騒音だと思うことにした。鮎美と違い、学園生活が長いので、聴いていない聖書朗読を続けられることには慣れているつもりだった。けれど、食べ終えるとタメ息をついた。

「はぁぁ……………」

こいつがアタシのママでなくて本当によかった……………ママ……………なんで死んで……………パパまで……………アタシの家……………アタシの部屋……………ぜんぶ……………せめてママくらい残ってよ……………、また想い出してしまった。

「うつうつ……………ぐすつ……………ひうつ……………あうつ……………」

「キリストは苦しみを受け、三日目に死人の中からよみがえり、その名によつて罪……」

「よみがえるかっ！ アホっ!!!」

叫んで食器を投げつけた。陽梅に当たり、血は出なかつたけれど痛そうだった。

「っ、ハア……ハア……」

「……………」

「……………ごちそうさま……」

「え？ ……」

「ごめんなさいじゃなくて、ごちそうさまなの、この子、すごく失礼で、ろくに挨拶もしないのに、いただきませす、と、ごちそうさまだけは言う、どういう躰けを受けたの、と陽梅が止まっているうちに、鐘留は部屋から出る。そして、かなり久しぶりに外に出た。芹沢家の周囲は津波の被害が無く、ごく平穏だった。一部の古い家屋だけが少し傾いている。鐘留は目的地など無かったので、なんとなく港の方へ歩いた。港に着くと、やはり津波の被害が目につく。漁船の三割が損傷しているし、湖岸に面した家は半壊している。ただ、鐘留の自宅を襲った津波ほどの威力と高さは無かつたようだった。漁協の作業場にある自動販売機で缶紅茶を買くと、漁師たちが話をしていた。

「ほんでも、まさか琵琶湖で津波が起こるとはなあ」

「ああ、けんど、大昔にもあつたらしい。浅井市あたりの湖岸に痕跡があるんじゃないと」

「じゃが震源は太平洋じゃろに」

「夕ベテレビで学者が言うておつたぞ。なんでも、水を貯めたバケツを揺らすようなもんで、チャプチャプと襲ってくるで、海の津波とちごうて高波と津波の半々みたいな波になるらしい。海の津波は大陸のプレートたらが海水全体を押しあげる理屈らしいが今回は長期……横になんとか……」

「長周期震動の横揺れじゃろ。それで長く横揺れが続いたで、琵琶湖の水がチャプチャプなりよつて。ワシらの島は被害が軽かつたが、六角市街の方は堀あたりが、ひどいらしい」

「高波の性質があんなら湾で、だいぶ変わるじやろうな。島でも20人も犠牲になつとお。あの総理大臣さんの力カアも子持ちやったのに可哀想にのお」

「ええ人じゃったなあ。宮本の子さ、助けようて。一人で泳ぎやあ助かったかもしれんに」

「女やでな。子供は見捨てんじやろ。ワシでも見捨てん。年寄りが死ぬ方がええ。姫花ちゃんだけでも生きておってよかったわ」

「表彰もんじやな。けど、死んでは元も子もないわ。腹の子も可哀想に」

「けど、上の娘は、この地震で一氣に総理大臣じゃて。運の使いすぎかもしれんな」

「運はしやーないな。市街の方は運が無かったの」

「あつちは家が100件は流れたらしい」

「江戸時代からの金持ち地区じゃな。とうとうバチが当たったんじゃ、ザマ見ろやで」

「金持ち言うても半分は年寄りだけの空き家が多いぞ」

「庭木も自分で刈つとる落ちぶれもおるし」

「一番の金持ちは、かねやじゃな。あれは大成功しようた」

「何十億で儲けよつたらしいな」

「それで死ぬんでは運の使いすぎじゃわ」

「欲たれるでよ」

「おい、シツ」

「なんね？」

「あの子、かねやの娘じゃ、聴こえるぞ」

「なんで、かねやの子が島におる？」

「総理の友達縁で居候しとるらしい」

耳の遠い老人たちの会話は声が大きかったので作業場の屋根に反響して缶紅茶を飲んでいる鐘留に丸聴こえだった。

「……………」

鐘留が黙って睨むと、老漁師たちは目をそらして網の手入れをする。鐘留はまだ残っていた缶を琵琶湖に投げ捨てた。そして突堤の

方へ行く。コンクリート製の突堤は津波に負けず健在だったので、やはり東京や大阪を襲った津波とはレベルが違ったようだった。

「ぐすつ……あんな堀の近くに住まなきゃよかったのに……初代の選択ミスが今になって……」

突堤からおりて日当たりのいい温かそうなコンクリート壁に囲まれた静かな場所に座った。ここなら、くだらない噂話も人の視線もない。

「……………ぐすつ……………これから……………どうしたら……………」

やつと、これからのことを考えた。昨日までは泣くだけで何も考えられなかった。どうやって芹沢家に来たのかも覚えていない。たぶん、玄次郎と陽梅が見かねて保護してくれたのだらうと思う。

「……………ぐすつ……………何も考えられない……………」

それでも思考はまとまらず、また泣きそうになる。我慢する気もないので声をあげて泣こうかと思っていると、人の足音が近づいてきた。足音は二つで鐘留がいるコンクリート壁に囲まれた区画の隣へおりた感じだった。

「健ちゃん、これから日本は、どうなるのかな？」

「どうだろうな……………ヤバそうだな」

中学生くらいの声で、鐘留は興味が湧いて静かに覗き見した。岡崎と白川が並んで座っている。普通なら中学校で授業を受けている時間だったけれど、震災のために休校なのか、それとも二人がサボったのか、制服姿ではなく私服で白川は、かなり短いスカートを穿いていた。鐘留は白川のことを知らなかったけれど、岡崎が鷹姫の許婚だということくらいは知っているので、ますます興味が湧く。そして静かに覗き見していると、白川が不安そうに岡崎へ抱きつき、鐘留の予想通りにキスをした。

「……………」

中坊のくせに、やるじゃん、超積極的、こりや宮ちゃん負けたわ、と鐘留は音を立てないように注意しながらスマートフォンで撮影もする。白川も岡崎もファーストキスだったらしく興奮していて鐘留の視線には気づいていない。そして、キスだけで終わらず白川は胸を

触ってもらったり、腿を撫でてもらったので自分からショーツを脱いだ。

「……………」

ここでヤリますか、うわあ、コンドームもつけないで、もろにハメてもらってるよ、つてか、ここに誘い込んだ時点でやる気だったね、この子、宮ちゃんから盗る気満々じゃん、にしても一発目が屋外って大胆すぎ、この島って家が狭いし、ラブホどころか、カラオケボックスもないから、こういうところでやるのが主流なのかな、野良猫みたい、と鐘留は一部始終を覗き見した。中学生カップルは初めての性交を夢中で終え、鐘留の視線には最後まで気づかない。終わってから白川が問う。

「…………宮本先輩との約束…………もう、いいの?」

既成事実つくってから訊くのかよ、もうそれダメ押しじゃん、このタイミングで訊くとか、断らせない戦略つてか、もう策謀だよ、この子、すごい策士、中学生にして諸葛孔明、と鐘留は同じ女性として感心した。

「…………鷹さんはさ……………なんか、オレにとって、もう遠い存在っていうか……………」

そりゃ内閣総理大臣臨時代理首席秘書官様だから中坊から見れば遠いよね、けど宮ちゃんがこれを知ったときの反応が予想できないなあ、レズかよつて思うほど男子に興味もってないし、あっさり、そうですね、さようなら、つて別れそうな気もするけど、逆にワンワン泣いてオシッコ漏らして引き止めようとするかも、そうなったら超かわいそう、と鐘留は両極端な鷹姫の反応を想像した。

ザツ…

ずっと注意していたけれど、とうとう鐘留は物音を立ててしまう。靴とコンクリートの間にあつた砂が鳴ってしまった。

「「あ…………」」

三人が気づく。鐘留は慌てて撮影していたスマートフォンを背中に回した。

「……………どうも……………い……………いい天気だね?」

「……………」

白川は急いでショーツを穿き、岡崎もチャックをあげる。

「……………」

「……………」

重い沈黙が場を支配する。鐘留は逃げることにした。

「じゃ、アタシはこれで」

「っ、待ってよ！撮ってたの?!」

白川が叫んだ。

「えつと……………その……………あ、安心して！週刊紙に売ったりしないから！」

「……………」

少し考えると、いくら芹沢総理に関係することとはいえ、首席秘書官の許婚が婚約外の性交を屋外でしていたというのは、岡崎と白川が一般人であることを考えると、記事になりそうになかった。少なくとも鷹姫が嘆いて何かしない限りニュース性も公益性も低い。むしろ、他人の性交を盗撮している方が問題だった。

「消してよ！消してください！」

女子中学生として当然の要求だった。

「あ……………うん……………えつと……………でもさ、宮ちゃんと君は許婚なんだよね？」

「……………」

岡崎も白川も鐘留のことは有名人なので知っている。鮎美の秘書補佐で元モデル、かねやの一人娘、この島で知らない者はいないし、海外でさえ彼女のTシャツが売られていたりする。当然、鷹姫とは同僚であり友人であると、わかっている。

「さっきの、ひどくない？これじゃ、フタマタじゃん」

「……………」

「宮ちゃんの気持ちはどうなるわけ？」

「……………」

「何とか言いなよ。泥棒猫」

「っ、親が勝手に決めた許婚だもん！健ちゃんと、きちんと付き合っ

てるわけじゃないから!」

「自覚があるだけに、泥棒猫って言われると反応するんだ? 泥棒猫」

「っ…、…とにかく消してよ! あんなの撮られてたら生きていけない!!」

「アタシは琵琶湖の風景を撮ってただけだよ。たまたま動物の交尾が映っただけ」

「…っけ、警察に通報するから!」

「お巡りさん、公然わいせつの現行犯です。これが証拠の映像です。その二人が屋外でエッチしてました。逮捕してください」

鐘留は瞬時に盗撮を正当化した。白川は困り切って絶句する。

「っ…」

「中坊がアタシに理屈で勝てるわけないじゃん」

「……………」

「さてと、どうしたものかな?」

「…っ…うっ…うっ…」

白川が両目からポロポロと涙を零し、岡崎は両手を地面についた。

「お願いします!! 消してください! オレが悪いんです! すみません!」

「…………土下座とか、されると…………」

今度は鐘留が困った。

「これじゃアタシが悪役みたいじゃん」

「すみませんでした!」

「あく、もう、わかったよ。消してあげるよ。けどさ、宮ちゃんを傷つける風にはしないでよ。それが条件」

「……………」

「宮ちゃんさ、ああ見えて、けっこう繊細だよ。だいたいのところで鈍いし、何も感じてないけど、一回崩れるともうサツポロ雪祭りを沖縄でやろうとするくらい、どうにもならなくなる」

「…………そうなんですか?」

「うん、もうピツチャピツチャのクツチャクチャ。君たちから見ると年上だから、気が強そうに見えるけど、ある部分で、すごい幼いし。だいたいさ、やっぱり泥棒猫なんだよ。盗る方はいいかもしんないけど、盗られる方の気持ち、少しは考えた？ ある日突然、オレやっぱリコイツと付き合うから、お前はいらさない、とか言われるんだよ？人を何だと想ってるのって思うじゃん！」

「……私は……ずっと、健ちゃんが好きだったから……なのに、気がついたら許婚が決まって……」

「それならそれで、せめて宮ちゃんに、それ言いなよ！」

「……はい……すみません……何度か、健ちゃんといるとき目が合ったことはあるんですけど……」

「宮ちゃんは鈍いから、ちよつとした目使いくらいじゃ気づいてないよ、きつと。普通なら気づくくらいにはガンつけたのかもしれないけど、たぶん宮ちゃんは、そういうの気づかない。睨み返されたりしなかったでしょ？」

「はい……」

「はああ……まあ、どっちも、どっちかな。とりあえず消してあげる。

ほら、画面みて」

鐘留は白川にも画面が見えるようにしてスマートフォンを操作する。

「こういうのは確認しないと不安でしょ。はい、これで消去」

「ありがとうございます」

「じゃあさ、宮ちゃんとの結婚、どうするにしても、傷つける感じに伝えないでよ」

「はい」

「さっきのこと、アタシは見なかったことにして誰にも言わないから。自然と宮ちゃんに伝わるとも思わないで自分たちの口で言っつてよ」

「はい」

「あ、でも……」

「？」

「今さ、宮ちゃんとアユミン、超忙しくて頑張ってるときだから、いき

なり電話してバイバイとか無しで。もつと状況が落ち着いて、こつちに帰ってきたとき、ゆつくり親とか交えて話してみて」

「はい、そうします」

白川と岡崎が頭をさげて立ち去った。

「はあああ……アタシが、なんで、こんなこと……ちつ……あいつらのせいで、嫌なこと思い出したし」

鐘留は痛そうに右手で額をおさえた。付き合っていた男子にフタマタをかけられて捨てられたことは鮎美たちと交遊しているうちに忘れたつもりだったのに、忘れきつてはいなかった。

「結局、男ってワガママきいてくれる女の方がいいのかな……ちつ……お金持ちで超可愛いアタシを捨てるとか超アホだよ。あんな普通の、たいして可愛くもない、せつせとお弁当つくってきたりするだけの女」

つぶやきながら歩き、お腹が空いたので芹沢家に戻ると卓袱台の上に昼食が作ってあった。卵焼きとホウレン草、琵琶湖の魚の煮付け、井伊市産のキャベツとニンジンの炒め物で弁当に入れるにも手頃なメニューだと思いつながら近づくとメモがあり、玄次郎へ弁当を届けてスーパーに寄ってから戻る、と陽梅が残している。

「……あのオバサン……アユミンのパパを狙ってるのかな……」

状況を振り返ってみると、色々と思いつた。

「……どうしようかな……」

陽梅が作った昼食を食べながら鐘留は迷い、ずっと泣いて過ごしてきたのでスマートフォンをいじって世間の状況を確認した。

「やっぱり日本の半分が死んだんだ……」

知れば知るほど気持ちが沈んだ。夕方になっても電灯をつける気になれず、情報確認を続けた。その暗い居間に陽梅と玄次郎が帰ってくる。

「お、緑野さん、今日は下にいるのか」

「あ、どうも……こんにちは……」

なんだか恥ずかしくて、礼を言うべき場面なのに何も言えなかった。陽梅は夕食を作り始める。スーパーで買い込んだものは少

ない。今日明日分の食材だった。

「アユパパ、お店に商品、少ないの？」

「いや、そこそこにはある。けど、立場上、たっぷり買うと視線が痛いからな。鮎美が三日分を超えて買うな、とテレビで言ってるし、そのオヤジが島暮らしとはいえ、買い込むと視線どころか撮影されてツイッターにあげられると怖いから」

「総理。パパも大変だねえ」

「あいつは、よくやってるさ。これだけの災害でスーパーに商品がある。誰も誉めてやらないが、あとあとの歴史で誰か誉めてくれるだろう」

「そんな、すごいことなんだ？」

「ああ」

答えながら玄次郎はキリンビールの缶を開けた。鐘留は情報確認を続けつつ、玄次郎がつけたテレビへも耳を傾ける。石永が映っていた。

「本日救助された方の数は1366名で、地震発生より7日目となっておりませんが、諦めず漂流しておられる人が多く、海上自衛隊、海上保安庁は引き続き捜索と救助を継続します。また停電していた5万世帯に対して電力供給が再開されましたが、3件の火災が発生しています。通電直後は漏電による火災に注意してください。これは放火ではありません」

石永は、すでに遺体の回収は収容場所もないことから中止していることは言わず、救出した数だけを発表している。氏名などは発表しないものの、やはり体力のある年齢層が多くなっていた。

「……」

鐘留は台所にいる陽梅の背中を見る。野菜を切りながら小声で賛美歌を歌っていて本当に、陽湖の母親なのだ実感すると同時に揺れているお尻に冷たい視線を注いだ。

「イエスは神の子」

「……………」

やっぱり宗教って集団で穽る中2病みたい、自分らだけの脳内設定

熱く語りすぎ、ウザすぎ、つていうか、このオバサンやっぱアユパパを狙ってる、貧相なケツふって誘ってる、と鐘留は露骨でないものの、陽梅が3月にしては薄着なのと、本人も無意識でやっていそうな動作で何度も玄次郎へお尻を向けることに気づいた。胸元を見せつけるほどの露骨さはないけれど、料理を作りながら、鍋やフライパンを取るとき、お尻のラインが顕わになるような前屈みになるし、本能的に膺を向けてきている。鐘留は同性なうえに同性愛者ではないので中年女性の求愛動作が目障りだった。

「あなたの翼の陰にわたしを隠してくださいますように♪」
「……………」

月ちゃんち、かなり貧乏なはず、パパもろくな仕事してないって、40歳すぎてスキルなし資格なし非正規じゃ、もう終わってるじゃん、それに比べてアユミンちは地味にアタシンちを羨ましがらないくらいには上の方、アユママが死んじゃったから不倫してでもゲットしたいんだ、永遠の夫婦とか言ってるけど、稼ぎのない旦那は寄付も少ないから捨ててもいい裏ルールあるし、たしかテモテ第一、自分の家族に必要な物を備えようとしなくていいことだっけ？ アタシも長年通学したから頭に残ってるよ、プー太郎な旦那は捨ててもいいし、あと都合が悪かったら相手にサタンがついたとか言っただけで別れることもできる、博史くんの両親がそのパターンで別れてたはず、と鐘留が考えているうちに陽梅はオムライスを作り上げた。何度か美恋と日曜昼などに、いっしょに料理をしたこともあるので味付けも美恋を真似ている。モヤシと鶏胸肉で作ったサラダは陽梅のオリジナルでポン酢と梅肉で味を調えている。三人で夕食をとると、もともと家族ではない三人なので空気が複雑だった。とくに、お互いに家族を亡くしているのので、その話題を避けて玄次郎が娘のことを問う。

「緑野さん、鮎美が総理になって、どう思う？」

「うーん……地震がなきゃ、連合インフレ税とか不確定拠出年金とか面白そうだったけど、こんな非常事態のときは、政治に慣れたオジサン政治家がいいんじゃないかな」

「だよなあ、鮎美もそれがわかってるから久野さんや鈴木さんを入れ

「たんだらうが」

「けど、きつとアユミンなら、うまくやるよ。アタシほど可愛くは生まれてないけど、頭の良さは確かだし、口の達者さはアタシと対等だもん」

「はははー」

少なくとも多少の笑いがあつて食卓は終わった。陽梅は給料をもらっているので家事のすべてを担当して風呂を用意し、鐘留が一番に入る。丁寧な身体を洗った後、自分の肌を見つめた。

「うん、完璧」

高価なレーザー脱毛をしたので手入れしなくても腋や股間は美しいし、松田川に見破られてショックだった二重まぶたの手術痕も素人にはわからない。

「お先♪」

鐘留は鮎美のパジャマを着て居間に出た。玄次郎と陽梅はテレビを見ている。東京や大阪にいた芸能人たちが軒並み行方不明になっているので、あまり有名でなかったローカルアイドルなどが出演していた。

「ワンコです！ 犬山市の停電も、ようやく回復しました。けど、水力なんで、あんまり使わないでくださいねえ」

「このアイドル、鮎美といっしょにセクハラ訴訟してた子だなあ。あ、緑野さん揚がった？ じゃあ、月谷さん入って」

「ありがとうございます、お先に失礼します」

陽梅は脱衣所で裸になり、実の娘と同じく小さめの乳房を鏡で見た。美恋も大きい方ではなかったのに、鮎美は目立つほど豊かなので玄次郎側の遺伝子かもしれないと余計なことを考えつつ、洗い場に立つと排水溝に向かって放尿した。

「はああ…」

水道代の節約になるので、ほぼ習慣的に入浴時に済ませている。長く我慢していたので一気に出すのが気持ちよかった。黄色い流れの渦が排水溝へ落ちていく。シャワーを流しっぱなしにするのも、もつたないなので湯船から汲んだ湯で排水溝まわりを流した。髪と身体

を洗い、両腋を鏡で見る。

「……少し荒れてきてる……今日はやめておきましょう……」

娘と同じく肌が弱いので毎日剃ると腋が荒れるので、数ミリほど伸びていたけれど、今夜はカミソリを使うのはやめた。身体を温めて早めに揚がる。

「お先です」

「ああ」

玄次郎が交替で入り、どうせ自分が最期なので身体を洗わずに湯船へ入った。

「ふーっ……疲れた」

頭まで湯船に潜って一気に身体を温めると男性らしく短い髪を洗い、硬めのボディタオルで身体も擦る。視界に美恋が愛用していたメイク落としが入った。

「……………」

一瞬、死んでしまった妻のことを思い出しそうになったけれど、忘れるために明日の仕事を考える。

「土日返上で取りかからないと終わらないなあ……けど、こつちが設計しても、ちゃんと材料は用意できるんだろうか……物流の回復が、どうなるか……オレみたいな末端は楽でいいな。とりあえず自分の仕事をすればいい。トップの鮎美は大変だろうに……まあ、あいつが頑張って解決できるもんでもないか……」

一人言を漏らしながらパジャマを着て居間に戻ると、もう鐘留は2階へあがっていて陽梅だけが待っていた。

「月谷さん、ビール、いっしょに呑みますか？」

「はい、ありがとうございます」

二人で瓶ビールを分け合って呑む。美恋は下戸ではなかったけれど、あまり呑まない方だった。陽梅は美味しそうにビールを呑むと、少し頬を赤くした。

「芹沢社長は、どうして建築関係の仕事を始められたのですか？」

「高校の頃に、やり甲斐のある仕事がいいなあ、と考えていて。建築なら、やった成果が建物という形で残るし、やってみよう、くらいの感

じだったな」

「それは素晴らしいですね」

誉める陽梅の目が、あなたが押し倒してくれるなら、私はOKです、と語っていた。そういう視線に何日も前から玄次郎は気づいていたけれど、やはり人妻というのは面倒そうだった。

「そろそろ寝ようか」

「はい」

居間の電灯と暖房を消して階段を登ると別々の部屋に入る。玄次郎は一人になってから、もう一口だけウイスキーを呑み、布団に入った。目を閉じて眠ろうとしたのに、ごく静かに部屋の戸が開いて誰か入ってくる気配がする。

「淋しい……いっしょに寝て」

鐘留の声だった。

「緑野さん？」

「アユパパ、いっしょに寝て」

「……………」

もう少し子供なら、すぐに布団へ入れたけれど、鐘留は18歳で元モデルだけあってプロポーションもいい、子供扱いも大人扱いも難しい年頃で玄次郎は迷った。迷っているうちに鐘留が布団に入ってくる。

「抱っこしてギュっつ、ってして」

「……………」

甘えてくる鐘留から、いい香りがするし、触れてくる身体が女の子らしく柔らかい。

「お願い、ギュっつってして」

「……………」

玄次郎は両親を亡くした鐘留が毎晩オネショしていることを思い出して優しくすることにした。これは幼児にすぎない、ただの子供だと自分に言い聞かせて抱いてみる。

「これでいいか？」

「うんっ」

抱いてもらえた鐘留は嬉しそうに頷き、子猫がするように玄次郎へ身体を擦りつける。擦りつけながら鐘留からも抱きつき、さらに脚をからめて動くので10分もすれば玄次郎は勃ってしまった。

「なんか、エッチなこと考えてるでしょ、玄次郎」

「なぜに呼び捨て……」

「エッチしていいよ」

「……………もう寝るから」

「してほしいな」

「……………」

「アタシは処女じゃないし」

「……………」

迷っている男に鐘留からキスすると、もう決断してくれた。

「いいんだな？」

「うん♪」

鐘留は頷き、パジャマを脱がされることに喜びを覚えた。自分の身体が男を刺激していることが嬉しい。脱がされて抱かれ、挿入する前に玄次郎がコンドームを探そうとしたので言う。

「中出しで大丈夫だよ」

「……………わかった」

布団の上で一つになり、鐘留は乳首を吸われてよがり、次に腋を舐められたので高まった。

「あんっ♪」

さんざんアユミンに責められたからアタシの腋もう性感帯になっているよ、っていうか親子そろって腋好きなんだ、フフ、なんだかアユミンが男になって大人になって抱いてくれてるみたい、そっか、やっぱりアタシはアユミンが好きだったんだ、男になったアユミン最高、女同士じゃ、どんなに丁寧なクンニと手マンがあっても、それが延々と続くんじゃないよ、それはやっぱりセックスじゃないよ、こうやって熱いおチンチンが入ってきてくれないと満足できないよ、と鐘留は異性愛者として満足して果てる。

「ハア…ハアんっ…」

鐘留は喘ぎつつ、まだ突いてくるので二度目の絶頂を迎える。去年別れた彼氏より年齢的な理由なのか、玄次郎は射精が遅くて鐘留は引き続き快感に悶えた。ようやく射精してもらえると、当初言ったように、いっしょに寝る。そして言う。

「責任取って結婚してね」

「……………せめて四十九日が開けてからな」

「怒らないんだ？ 処女じゃないって言ったくせに、結婚しろって言ったのに」

「今いろいろ不安なんだろう？」

「……………うん」

「……………」

玄次郎は鐘留の母親のことを思い出した。鮎美が鐘留と性的な行為をしたことで静江と親子を連れて東京の議員宿舍まで夜中に往復した記憶は鮮明に残っている。あの時、鐘留の母親は不安を埋めるためなのか、玄次郎にすがってきた。それを見た静江が警告の連絡をくれるほど人妻なのに露骨にすがってきて、困惑していた。あの母親をして、この子と思えば、理解できる。両親が亡くなり、大金持ちといえど家も店も流れ、その再建は18歳では容易ではないし、途中で誰かに騙されるかもしれない。すぐに急いで頼りになる男が欲しくて、同世代ではあてにできず手近で信頼できそうな男に食いついてきたのだと感じた。

「まあ……………オレも淋しいからな……………」

「利害が一致したね♪」

「……………あ……………」

「ん？」

「いや、何でもない……………」

オレは娘と穴兄弟というか、娘のおさがりをもらったのか、人類史長しといえど、同性愛の娘が手を出した後の女性をもらった男は少ないだろうな、と玄次郎は鐘留の乳房に触れながら思った。

「ねえ、玄次郎」

「ん？」

「アタシは芹沢姓になってもいいけど、アタシとの子供ができたら命名には鐘の字を使ってね。初代の鐘吉さんから代々そうしてきたらしいから。名字は何度か変わってるから、変更してもいいらしいけど、鐘の字は鉄板だって、死んだお婆ちゃんが言ってた」

「……そうか……祖父母で生きてる人は？ 叔父か叔母などは？」

「いたら、ここに泊まってたと思う？」

「……かわいそうにな……」

「だから、優しくしてね。裏切ったらアユミンに言いつけてやる」

「それは怖いな。小姑みたいに怖そうだ。にしてもオレは建築が専門なのに、菓子屋と肉屋、ロープウェイ屋を継ぐのか……」

有名な地元企業なので、もう玄次郎もだいたいこの事業内容を知っていた。

「よろしくね」

「はああ……こんな時期だから、ロープウェイ屋は休業させて、食品関係を、どうにかしないと……気が重い……オレは一人社長が気楽でよかつたのに……従業員を使うのは、かなり大変なんだぞ」

「だから玄次郎が要るの。アタシじゃ無理」

「はあああ……」

「……あと……一つ……」

鐘留が言いにくそうにする。

「……あと一つ、お願いがあるの……いい？」

「ん？ もう、このさい、全部、言ってみろよ」

「じゃあ……もし……アタシが妊娠したら、胎児に障害があるか無いかの出生前診断は絶対を受けたい。……受けて……もし陽性だったら中絶するけど怒らないでほしい」

「出生前診断か……気の早い話だな。そんなこと考えてるのか……」

「……お願い……」

「そんな深刻そうに言われなくても、オレも賛成だけど、君の若さなら障害児が生まれる確率は低いだろう」

「でも、ゼロじゃない」

「まあ、ゼロではないな。けど、それを言ったら検査結果が間違ってる可能性だつてゼロじゃないのを知ってるか？」

「うん……知ってる。だから、もし……産まれてから、障害児だつてわかったら……逮捕されないように捨てるか殺すかしたい。アタシは障害児なんて育てたくない」

「……………」

玄次郎は鐘留の目を見た。暗いので、よく見えないけれど、怯えているのがわかった。大胆なのか、臆病なのか、泣きそうな目をしている。

「…アタシの親は……アタシ以外の子供、二人を殺した……産まれてきて……障害児だったから……」

「……バレなかつたのか？」

「バレないように、うつ伏せに寝かせただけ……らしいから……」

「そうか……」

「……………ぐすつ……ママとパパが死んだのは……バチが当たったからなのかな……」

「違う。そんな風に考えない方がいい」

「……なんで、そんなに、はつきり言えるの？」

「災害も事故も、いい人、悪いヤツ、関係なく襲ってくる。バチが当たって死ぬのなら、今回の震災で死んだ人間、以前の阪神大震災で死んだ人間、みんな悪いヤツだったことになる」

「……………そういう……考え方、好き……」

「何より、君の両親は悪い人じゃない。オレだつて同じ選択をする」

「つ……ホントに？ ホントのホントに?!」

「さすがのように鐘留が問うてくるので玄次郎は、この問題が少女にとって人生最大のトラウマなのだと察した。そして、嘘をつくことにした。

「ああ、本当だ。これから言うことは鮎美には言っていないから、絶対に言うなよ」

「……………うん……」

「鮎美にとって姉か兄になったかもしれない子ができたことがある。

けれど、障害があるとわかってオレが墮ろしてくれと、頼んで墮ろしてもらった。その次に鮎美が産まれて、健康でホツとしたけれど、一人っ子は淋しいだろうと二人目をつくったら、また障害児だったので墮ろした。鮎美は小さかったので、まったく覚えていない。無かったことにした話だ」

本当は計画的に一人しかつくらなかつたけれど、玄次郎は作り話をした。もう美恋は亡くなつたし、墮胎したのは大阪の病院だと言えば、この嘘がバレることはないと確信して玄次郎は語る。

「どこの家庭でも、やっていることだ。気にすることはない。うちの親戚では、君の両親がやったように産まれてからタオルを押しあてて殺したケースもあるらしい。そんなことは、どこでも、しょっちゅうやっている。何も気に病むことはない。当たり前の間引きだ」

「……当たり前……」

「殺人になるかもしれないのが怖いなら熊本県に赤ちゃんポストというのがあるのを知っているか？」

「知ってる！」

「あそこが最高に便利そうだな。国の負担になるし、いずれは税金として自分たちに返ってくるから間引く方がいいけれど、九州へ温泉旅行のついでに捨ててくるのもいい。あとは貧しい家庭だったら自動車事故にみせかけて間引く手もある」

「……自動車事故に？ どうやって？」

「今みたいな寒い時期は自分も死ぬからやめた方がいいが、夏に自動車ごと池や川に突っ込めばいい。事前に窓を開けておいて、冷静に自分だけは脱出し、障害児にはしっかりシートベルトをつけておけば、たいてい溺死する。この方法の欠点は、運転手が過失致死として少々の刑事責任を問われることだが、たいしたことはない。利点は自動車保険の人身傷害から最大5000万円がもらえることだ。乳幼児はせいぜい2500万くらいだが。注意すべきは保険金詐欺と言われないよう実行前後に誰へも語らないこと、妻へも、親友へも。そして、池や川の近くを走行する合理的な理由があつたこと、たとえば子供を寝かしつけるためにドライブしながら釣りスポットを探していたら、

つい自分も眠くなつて落ちた、などだ」

「……すごい発想……さすがアユミンのパパ……」

「もともと、こういうのは産婆か、男の仕事だ。母性のある女性が気に病むことはない。だから、鮎美に言つてない。知れば君のように傷つくだろう。獅子は子を千尋の谷へ突き落とす、というだろう。健康な子だけが這い上がってくるのを見越して、オスがそうするという故事だと思えばいい。だから、もう気にするな。そして、検査も受けよう、産まれてきて障害があつたら、オレがなんとかする。君は気がつかなければいい。オレが子守りしているとき、なぜか、呼吸が止まつてしまった。ただの乳幼児突然死症候群だ、と。あんな便利な病名、そういうことに使うために発想したんだと思えばいいさ」

「うんっ！ うんっ！ そうする！ アタシそうするよ!! アタシ安心して産んでいい?!!」

「ああ、いくらでも産めばいい。当たりクジの方が多いクジ引きだ。外れクジだつて勇気があれば保険金に変えられる。人生は前向きに生きた方がいい。堂々人生だ、と、どつかの保険会社が言つてただろ、あんな感じだ」

「そうだよね！ そうだよね！ やった！ やった、そうする！ アタシ、玄次郎が大好き!!」

喜びに輝く瞳で鐘留が叫んだ。

3月18日 公布施行

復和元年3月18日金曜、朝6時に鷹姫と麻衣子は割り当てられている4人部屋で起床した。部屋には二段ベッドが二つあり、二人とも下の段を使つて寝ている。

「おはよう、宮本さん」

「おはよう、大浦さん」

お互いに制服へ着替えると、鷹姫は口紅以外のメイクもしてから食堂へ行き、男性自衛官たちに混ざつて朝食をとる。一部の行政官僚も小松基地内に宿泊しているので女性は鷹姫たちだけではないけれど、やはり比率としては9対1以下なので目立つし、若さでより目を引く。目立っていることを鷹姫は気にせず素早く食べ終わると、女子トイレで口紅を塗った。

「よし」

「そんな気合い入れてメイクするあたり好きな男でもできた？」

そう問う麻衣子は日焼け止め程度のメイクしかしていない。

「いえ」

「あつさり否定するんだ」

「きちんとメイクするのが社会人の常識だと言われたのは、あなたですよ?」

「あく……まあ、言ったけどね。そのルールは守る系の思考、すごいね」

「……………また、私は空気が読めていないのですか……………どこが間違っていますか?」

「ううん! 間違つてないよ! 私のメイクが薄いのは、ただの個性だし陸自の雰囲気に合わせてるだけ。宮本さんは秘書官なんだから、しっかりメイクしてるのが正解だよ。ぜんぜん、OK」

「では、芹沢総理に朝食をもつていきます」

「あいさー」

二人は再び食堂に戻ると一人分の朝食をトレーにもらい、貴賓室へ

向かう。部屋の前には長瀬と今泉が立っている。

「おはようございます」

「おはようございます」

挨拶した鷹姫が時刻を見て、ちょうど7時にドアをノックした。

「どーぞ」

今起きたという感じの鮎美の音がする。鷹姫と麻衣子は入室してテーブルへ朝食の準備をした。裸で寝ていた鮎美はバスローブを着てから食べる。半分を鷹姫に食べてもらいながら、鮎美はメイクされた鷹姫の顔に見惚れつつ、複雑な気持ちになった。

「……………」

もともと鷹姫の顔はノーメイクであるのが鮎美の中のイメージだったし、しっかりとメイクされた顔は詩織のイメージと重なってしまふ。見つめられて鷹姫が首を傾げる。

「私の顔に何かついていますか?」

「うん」

「どこに……………」

鷹姫が頬に触れると、鮎美は悪戯っぽく微笑する。

「ファンデーションがついてるよ」

「……………」

「今日は、外での行事もあるし、うちもメイクしとこ」

鮎美も制服を着て日焼け止めとカメラ映りを意識したメイクをする。麻衣子が食器を片付けながら言う。

「あつという間に地震から一週間ですね」

「……………」

鮎美がメイクを終えた頃、畑母神と幹部自衛官たちがドアをノックしてきた。

「どーぞ」

「……失礼します」

畑母神の他、鶴田と陸自、海自の幹部自衛官が入ってきて、鮎美は米軍撤退についての報告だと察して鷹姫と麻衣子に出ていってもらう。

「鷹姫、大浦はん、ちよい外にいてて」

「はい」

二人は外に出て長瀬と今泉の隣に並ぶ。麻衣子が誰にともなく言う。

「宮本さんまで出すってことは、よっぼどの話なのかな？」

「……………」

長瀬と鷹姫が何も言わず、このままでは発言した麻衣子が無視されているようで可哀想だと感じた今泉が言う。

「さつき大臣の顔、けっこう険しかったから、やっぱ、よっぼどなんだろうなあ」

今泉も階級は麻衣子の一つ上でしかなく年齢も近いので気さくだった。ゲイだということは麻衣子も覚えているけれど、別にゲイへ嫌悪感はない。むしろ、相槌を打ってくれたので嬉しくて話す。

「秘密の話ってことは原発かな？」

「あれって公開してる情報が真実なのか？ 大浦陸士の前で、総理たち話す？」

「うくん、普通に話してるから隠してる部分があるとは思えないんだけど」

「公表してる情報との差は？」

「多少あるよ、たとえば…」

麻衣子が話すのを鷹姫が途中でやめさせる。

「情報漏洩にあたります。黙っていなさい」

「はっ！」

厳しく言われたので思わず二人とも敬礼したけれど、鷹姫が女子高生にすぎないと思うと微妙な気分にもなる。とはいえ、首席秘書官だと考えると、幹部自衛官と同等かもしれない気もする。

「……………」

宮本さんって普通の空気は読めないのに、こういう軍隊的な空気は馴染む感じ、と麻衣子が静かに思っていると、屋外から太鼓の音がかすかに聴こえてくる。

「……………こんなときにお祭り？ ……まあ、石川は被害が無いけど……………」

貴賓室のドアが開き、鮎美たちが出てきた。幹部自衛官たちは解散し、鮎美と畑母神はこのまま閣議に向かうので鷹姫たちも付き従う。鮎美は考え込みながら歩く。

「……………」

通告した通りに日本から撤退、さらに韓国からも、これで極東地域の軍事バランスは一気に変わってしまう、うちにできることは何やる、と鮎美は悩んでいるので、引き続き太鼓の音は耳へ入らなかった。閣議を行う大会議室に入ると、すぐ後から金沢市に宿泊している夏子も出勤してきて言う。

「表の騒ぎは何あれ？」

「何かありましたん？」

「鮎美ちゃん総理は見えてないの？ 基地の前に百人くらい集まって太鼓を叩いたりクラクション鳴らしたりしてるよ」

「何のために、そんなこと……………」

まったく知らずにいる鮎美へ、畑母神は鶴田基地司令から報告を受けていたので教える。

「デモ集会のようなものだ」

「デモ……………こんなときに……………」

「まったくだが、事情はわからなくもない。岐阜県で起きた強姦殺人の容疑者を殴り殺した少年の解放と赦免を求めていることらしい」

「岐阜で強姦殺人あったんですか？」

忙しくてテレビを見る時間もない鮎美が問うと、畑母神が説明し、夏子も経済対策に忙しくて知らなかったので暗い顔で考え込む。

「こういうときに強姦殺人とかやめてよね。普通のとときでも、ろくなものじゃないけど」

「そら、その少年Tが正解やわ。けど、現地の検察官が判断することであって、うちに釈放を求められてもなあ」

「鮎美ちゃん総理が前から雄琴先生と提唱してた性犯罪者を厳罰に処すを実際に行ったような事件だから、期待もするよ。岐阜の飛騨高山あたりって山村で一致団結するから、あれだけ人が集まるあたり少年

Tは、いい子なのかもね。殺された宮本さん姉妹も自宅神社を避難所に提供するような家の子だから人気あったでしょうし」

「……………」

鮎美が振り返って鷹姫を見る。

「鷹姫って岐阜県に親戚いる?」

「いえ」

「この事件の宮本さんとは無関係なん?」

「はい」

「そっか、よかった。……………よくは、ないけど、よかった…」

先に大会議室に来て資料を見ていた石永が言う。

「とはいえ、午後には陛下が小松基地にお越しくださる。それまでには解散させるか、静穏にさせないといけないな。陛下の動向は公表していないだけに難しい」

「私がさつき見た感じだと、要求が通るまで一週間でも二週間でも居座りそう。少年Tの母親っぽい人も来て叫んでたし」

「……………感情的には、うちが検察官に連絡して、忬度するよう言うてあげたいけど、それすると尖閣諸島中国漁船衝突事件といっしょで法秩序が……………明らかな行政権から司法権への圧力やし……………しかも、一回、そうやって要求を飲むと、次に似たようなことがあったら、また別の団体とかが基地前に押し寄せてくるし……………例外を認めると、きりないし……………」

「鮎美ちゃん総理って自民党で、よく教育されたのね。感情のままに動く女子高生ってイメージを外の人たちは期待してるのに、きちんと分析して考える。けど、その教育係は最近、遅刻ギリギリね。二日酔いって顔だし」

夏子は定刻ギリギリに入室してきた静江を見る。夕べも富山市で市議や県議たちと呑んでいた静江はメイクも少し荒い。閣議が始まると、午後から行う震災から一週間を迎える行事として、小松基地において鮎美と義仁が国民へ語りかける内容の話と、それに先だって基地前に集まっている人々を、どうするかということになった。国家公安委員会委員長の臨時代理人である新屋が言う。

「法的には無許可のデモ、道路占拠ということで退去させる根拠はありません」

「……………」

鮎美は黙って聴いている。石永が悩む。

「説得で解散してくれればいいが、強制的に解散させるのはイメージが良くないな。警視庁なら、この手の対応に慣れているだろうが、石川県警は、どうだろう?」

「それなりの訓練はしているはずですが、そもそも被災地に多数を派遣しているので人数の確保も難しい状況です。現状、わずか6人の警察官で百名を超える集団に対応しています。集まっている方々は今のところ良識ある行動をとっており、拡声器で叫ぶ、車のクラクションを鳴らす、軽トラに載せてもってきた神社の太鼓を叩く、という程度ですから、制止せずやらせています。基地の敷地へは入らないよう警告しており、それも守ってくれているようですが、芹沢総理に会えるまでは帰らないと主張し、いずれ興奮すれば触法行為の可能性もなるといえます。興奮してしまった場合、双方に死傷者なく解散させるとなると、最低でも50人の人員は必要です」

新屋が答え、石永が畑母神へ問う。

「陸自の人員に対応していただくのは?」

「警察の指揮下で動けなくもないが、丸腰というわけにもいかず、かといって小銃などを装備させてあたらせるわけにもいかない。なににより、そういった訓練をしていないし、軍服で民衆を押さえるといった構図はマズイだろう」

「ですね。……とはいえ、もう時間がない。どうしたものか」
「……………」

鮎美も黙って考え込む。鈴木が申し出る。

「私が彼らを説得してみましようか?」

「鈴木先生なら、いいかも…」

石永がのりかけたけれど、鮎美が反対する。

「いえ、それでは結局、うちが対応するのといっしょで、無許可デモによつて大臣との面会を引き出したことになりまし、要求が飲まれな

いなら、うちが出てくるまで続けるとも言うでしょう」

「……………」

「いっそ、うちが会いますわ。代表者数名と」

「うくん……………会うのも微妙だが、会って、どうする？」

「それは夕方までに考えます。彼らに伝えてください。これから慰霊行事を行うので静穏にしてほしいのと、夕方には代表者5名までと、うちが面談すると。山村地域から、それだけの人数が来てはるなら、町議なんかも来てはるでしょう。多少、法秩序の話がわかる人も向こう側にいてくれはると助かりますし」

「芹沢先生の期待を裏切って悪いが、山村地域の町議は法秩序なんて少しも勉強していなかったりする。そのへんの山村にいる爺さんをクジ引きで選んだのと変わらないと思って」

「うちもクジ引きですけど、なんとか話せますやん。立場のある人は立場なりに振る舞いはりますよ」

「うくん……………そうだな、それで夕方までは静かにしてくれるかもな」
「冷却時間がある方が、話も進みややすいですやん。うちらは午後の準備せんならんし、そつちに専念しつつ、表の人らには芹沢鮎美にも騒ぎの音は聴こえてるから、会うか、会わんか、迷ってる、と伝えれば、さらに大きな声で騒ぐでしょう。それで、あと二時間たつぷり騒いで疲れてもらってから、夕方には会うので静かにしてほしいといえ、ぐったりするでしょう」

「策士だな……………だが、そうしよう。けど、会うか、会わないか、迷っていると伝えるのは、どう伝える？」

「それは、うちの身近にいる大浦陸士に頼んでみますわ。先生方は、もう午後のことを進めてください。うちも10分で戻ります」

そう言った鮎美は大会議室を出る。廊下には長瀬と今泉、麻衣子が待機していた。

「ちよっとトイレに」

鮎美が女子トイレに向かうと、ついてきた長瀬と今泉はトイレ前で立ち、麻衣子だけがトイレ内まで入る。さらに鮎美は個室内へと麻衣子を誘う。

「ちよつと入ってきて」

「えく……私に変なことする気なの？ セクハラで訴えるよ」

「ちやうて。表の人らのことよ。大浦はん、岐阜県の避難所での強姦殺人の話、知ってる？」

「まあ、それなりに」

やや警戒しつつ麻衣子は個室に入った。事件の概要は麻衣子も知っていたので話が早い。

「うち、今、迷つてんのよ、あれだけ頑張つて騒いではるし会うべきか、それとも強引なデモやし無視するべきか。大浦はん、ちよつと私服に着替えて、いかにも非番つて感じに出ていって、あの人らが、どんな人らか会話してきてくれへん？」

「なるほど、偵察任務つてわけ。はっ、了解です！」

ずつと鷹姫の従卒役をしていることに飽きてきていた麻衣子は楽しそうに着替えると、私服で通用門から出た。門の周りには軽トラなどが路上駐車され、高校生から老人まで百人超えの男女が声を張り上げている。少年Tの釈放を求めて大騒ぎしているけれど、殺気立っているわけではないので、麻衣子が私服で通り過ぎようとすると、通してくれた。一度、麻衣子は通用門を離れ、最寄りのコンビニまで歩くと、肉まんとコーヒ―、女性雑誌を買い、肉まんを食べながら通用門に戻る。ただの個人的な買い物という雰囲気が集まっている群衆の一人に声をかけた。

「こんにちは」

「あなた、自衛隊の人？」

話しかけた中年の女性が問うてくる。

「はい、一番下の階級ですけど」

「この基地の中に、今、芹沢総理はいるの？」

「はい、いますよ。私、身近でお世話をする係ですし」

諜報関係の任務をしているわけではないので麻衣子の守秘義務に対する意識は、それほど高くない。あっさりと言ったけれど、同世代で同性の鮎美の世話を麻衣子がしていることは、ありそうなことなので話しかけた中年女性以外の周りで聴いていた者も信じた。

「お願い！ 芹沢総理に私たちのことを伝えて！」

「なんとか総理に会わせてくれ！」

そして麻衣子が鮎美のそばにしていると知ると、取り囲んで口々に嘆願してくる。こういったことに、まったく慣れていない麻衣子は正直に話す。

「えっと、芹沢総理も、みなさんが一生懸命に言っておられるので、会うべきか迷っているそうです。そのうち、会ってくれるかもしれませんよ」

「おっしや！ 聴こえてるんだ！」

「もつと太鼓叩け！ 奥まで響かすぞ！」

「……。…じゃ、私は、これで…」

余計なことを言ってしまったかな、と思いつつ麻衣子は立ち去ろうとしたけれど、取り囲んでいた群衆は逃がしてくれない。少年Tの母親や殺された姉妹と直接に友達だった子たちが麻衣子へ涙ながらに事情を伝えてくるので、さきほどまで他人事にすぎなかった強姦殺人事件と、その復讐殺人について麻衣子も当事者に近い立場で聞き知ることになり、同情して涙を流した。

「わかりましたっ！ ぐすつ、必ず、みなさんの想いを伝えてきます！」

涙を拭きながら基地に入り、制服に着替えて大会議室前に戻る。基地外からの太鼓や声は、ますます盛んになっていた。

「……」

いつも通り大会議室前で鮎美が出てくるまで待つつもりだったがけれど、外からの懇願が聴こえてくると、いてもたってもいられず、今泉に問う。

「私が入って総理に話しかけちゃダメかな？」

「……普通にダメだろ。ただの大会議室だけど、一応、閣議だし。上官たちの会議でもオレらが入って発言したら、めっちゃ処分されるだろ」

「でも……」

「お昼になれば、チャンスあるだろ。貴賓室で飯にするか、忙しかった

としても大浦陸士が飯もつていくから。つてか、そんなに急いで伝えたいことつて？」

「さつきね……」

麻衣子は基地前にいる人々のことを今泉にも話した。

「なるほどなあ……強姦殺人と、その復讐か……」

「ゲイの人つて強姦を、どう思うの？」

「ゲイだから、どうこうつてこと関係ないさ。強姦は悪いことだ。大半の男が強姦しないように、大半のゲイも強姦しない。ごく一部、ちよつと狂つたヤツはいるけど、そういうのは異性愛者にもいて、げんに今、事件になつてるだろ」

「そっか……」

基地外からの切実な声はやまない。けれど、廊下にいる麻衣子たちには聞こえても、大会議室内までは響いていない。それが悔しい。爆音で離着陸する戦闘機が所属する基地なので会議室などの防音設備は高い。おそらく、まったく鮎美の耳には届いていないと思うと、彼らに同情している麻衣子は決意した。

「私つ、行つてくる！」

「おいっ?!」

今泉が止める前に麻衣子は会議室のドアを開け放つた。

「芹沢総理！ 外にいる人たちに会つてください！」

「……」

居並ぶ閣僚たちの視線が集まり、麻衣子は一瞬怯んだけれど、それでも言う。

「あの人たちの話を聴いてあげてください！」

「……大浦はん、思いつきり同調して……」

鮎美が席を立って麻衣子に向かう前に、畑母神が叱る。

「バカもん!! 立場を弁えよ！」

防衛大臣として当然の叱責だったし、麻衣子を取り押さえる警備要員さえいないことに気づいた。鮎美は麻衣子と畑母神を交互に見てから言う。

「大浦はん、あんたの報告はお昼に受けるから、静かに待つておいて」

「……はい」

「畑母神先生、すみません。うちが頼んだことで、ちよいと暴走しはったみたいで、許してあげてください」

「総理が、そう言われるのであれば……、話を続けましょうか、今の件でも明らかかなように会場を警備する要員も不足しがちです。最大限に被災地へ要員を派遣しているため、この閣議を行う部屋でさえ、今のような有様ですから、やはり陛下がお越しになることを考えると、マスコミは抜きということにいたしましょう」

畑母神の意見に久野が問う。

「せめてNHKのカメラくらい入れませんか？」

「その気になればカメラに爆発物を仕込むこともできます」

「NHKの職員は、そんなことしないでしよう」

「総理の主治医は両親を人質に取られて暗殺未遂に至っていますよ」

「それは……たしかに……」

「陛下の安全を最大限にということと、総理が何度も狙われていることを考えると、ここは取れる対策はすべて取っておくべき場面です。カメラは我々で用意したカメラで十分でしょう。映像をライブ配信すれば、済むことです」

震災後一週間の節目に行う国民への語りかけにマスコミは入れないことに決まり、その他の事項も決めると昼過ぎになり、やや遅くなったものの会議しながらではなく休憩として食事がとれるので鮎美は貴賓室で鷹姫と食べる。その間、麻衣子は門前の人々の訴えを報告した。

「うん、わかったよ。大浦はんが、そこまで言うなら、会うことにするわ」

単に疲れさせるために使ったって知ったら、めっちゃ怒るやろな、と思いつつ鮎美は麻衣子の手柄として群衆に通告できるようにした。

「ありがとうございます!!」

「タメ口で、ええって」

「ありがとうございます!!」

「けど、会うのは夕方な。今から震災一週間の行事があるし、それが終わった夕方。で、それまでは慰霊行事でもあることやし、一度、解散して静かにしててほしいのと、代表者5人を決めてもらって。さすがに全員とは会えへんし。あと、代表者の中には町議とか、多少の法知識のある人も入れてもらって。感情だけで話しても前に進まんこともあるし」

「はい。……え？ 私が、みんなに知らせるの？」

「その方がよさそうやし、他の隊員さんら忙しいし、頼むわ」

「はっ！ 行つてきますー!」

「そんな慌てんでも…」

鮎美の言葉を最後まで聴かず、麻衣子は通用門まで走った。

「ハアハア！ みんな聴いて!」

私服から制服に変わっても群衆は麻衣子の顔を覚えていた。太鼓が止まり、叫ぶのもやめて静かになる。

「今すぐは無理だけど、夕方、芹沢総理が、みんなに会うって!」

「!!!」

「!!!」

男女の歓声に通用門前が沸く。

「ハアハア、けど、今から震災犠牲者の慰霊行事をするから夕方まで一度解散して静かにしてほしいって!」

「!!!」

岐阜県の被害は無きに等しかったけれど、名古屋や大阪、東京に親類がいた者もいるので、いよいよ一週間となり慰霊という言葉は重く痛かった。

「あと、さすがに全員とは会えないから5人の代表者を決めて。できれば、チョウギとか、法律のことも少しは知ってる人も入れてほしいそうです」

「ありがとうございます!! あなたののお名前は?」

少年Tの母親が問うてくる。

「お、大浦麻衣子2等陸士です！」

「大浦さん、ありがとう！」

「ありがとう！」

大勢から握手を求められ、麻衣子は困惑したけれど、嬉しかった。群衆たちも何か大きなことを達成した気になり、これによって殺された姉妹が生き返るわけではないけれど、泣き笑いで解散してくれた。麻衣子は貴賓室に戻り、鮎美へ結果報告し、鮎美と鷹姫の昼食トレイを片付けると、自分も食堂で急いで昼食をとり、再び鷹姫のそばに戻ろうとしたけれど、貴賓室前で里華に出会った。

「あ、石原空尉」

麻衣子は敬礼し、里華も敬礼して言ってくる。

「連絡します」

「はっ」

「ただ今より大浦麻衣子2等陸士は任務を解かれ自室にて謹慎、芹沢総理代理および宮本秘書官のお世話は私、石原里華3等空尉が引き継ぎます」

「え？　なんで？」

「復唱はっ?!」

「はい！　ただ今より大浦麻衣子は任を解かれ自室にて謹慎、総理と秘書官のお世話は石原空尉が引き継がれます！」

「よろしい。……あなた、何したの？　それともされそうになって拒否したの？　畑母神防衛大臣からの直々のお達しらしいけど」

里華は鮎美からのセクハラを疑っていたけれど、麻衣子は心当たりを思い出した。

「えっと……閣議の最中に……勝手に入って総理へ発言を……」

「……。謹慎で済むといいわね。あれでも総理は総理なんだから、お友達じゃないのよ」

「はい……」

トボトボと麻衣子は鷹姫と相部屋の自室に戻った。

「……はああ……謹慎かあ……そりやそうかな……クビにならないかな……今は人手が足りないし、クビにはしないかな」

ベッドに倒れ込んで一人言を漏らす。

「……石原空尉、嫌そうに言ってたなあ……せつかく本来の任務に戻ったのに、って顔してた……私も石原空尉も隊で余ってる人員とみなされてるのかなあ……まあ、同性をお世話にあてるとなると、限られてくるし……そのうちゲイだけをあてるかもしれないけど、さすがにノーマルな宮本さんにまでゲイはあてないだろうし………寝よ」

いつそ昼寝してやろうと目を閉じたのに、すぐに呼び出されて小松基地外縁の歩哨に立つよう命じられた。

「しかもフル装備でか……」

小銃や背嚢を装備して、基地フェンスと道路の間に立つ。麻衣子の他にも50メートルおきに歩哨が立っている。無線で連絡が入り5分前後で義仁を乗せた皇宮車両が通るので警戒を最大限とするよう通達された。今は群衆も解散しているし、目につくのは田んぼしかない。

「陛下が来るんだ……そりやデモ隊は解散してもらわないとね………つてか、直前まで私たちにも知らせないんだ……」

連絡のあった通り5分後に義仁と由伊を乗せた皇宮車両が目前を通る。一瞬だったので二人の顔は見えなかった。しばらくして滑走路の方で慰霊行事が始まっている気配がしたけれど、麻衣子の任務は警戒なので振り返らず、田んぼを眺め続ける。田んぼを眺めること2時間で解放され基地内に戻ったけれど、直接の上官から再び集まってくる群衆の相手をするよう命じられた。

「人使いが荒いなあ……」

鮎美から離れてしまったので、この命令が鮎美によるものなのか、中間あたりで決められたことなのかもわからない。

「総理のそばにいたから私、勘違いしてたよ。ただの一兵卒じゃん。当たり前だけど」

つぶやきながら小銃などの装備を片付け、丸腰で通用門に向かう。

「その一兵卒が閣議で発言したら、そりや怒られるよねえ」

自嘲しつつ通用門を出ると、群衆に囲まれたけれど、感謝の笑顔に

包囲されたので後悔は消えた。鮎美は約束した通り17時になって通用門そばに歩いてきた。群衆は沸き立ち歓声があがるけれど、警備は厳重だった。いつもは交替で警護にあたる知念と長瀬がそろっているし、高木と三井、今泉も小銃を装備して護衛している他、ゲイではない陸自の隊員が12名、石川県警の警察官6名が鮎美を取り囲むというもののしきだった。鷹姫と里華は警備の都合なのか、少し離れたところにいる。

「なんだか急に遠い存在になったような……」

麻衣子は近づきがたい雰囲気を感じたけれど、それは群衆も同じだった。

「オレら警戒されてるのか……」

「しよーがないかもな、鮎ちゃん総理、何度も襲われてるし」

「だな、あの子が殺されたら日本の代表がややこしくなるもんな」

遠く感じたけれど群衆たちも今の状況は理解していて文句は出ない。警備要員たちは鋭い目で周囲を警戒しているけれど、鮎美は笑顔で麻衣子に手を振ってきた。

「大浦はん！」

呼ばれた感じだったので麻衣子が近づく。さすがに陸自の制服を着ている麻衣子は鮎美にノーチェックで歩み寄れたけれど、群衆たちが決めていた代表者5名は少年Tの母親まで含めて警察官による身体検査が実施された。その検査が終わって、ようやく鮎美と握手ができる距離になる。

「はじめまして。芹沢鮎美です」

「ああ、ありがとうございます。本当に会ってくださるなんて」
母親が握手しながら深く頭をさげた。

「大浦はんが、みなさんの熱意を伝えてくれはりましたから」

「私は……ちよつと言っただけですよ……」

恥ずかしくて麻衣子は謙遜したけれど、鮎美が言ってくる。

「閣議に割り込んで謹慎くらうのは、ちよつとちやいますよ」

「あ、あれは……ちよつと勢いで……」

「大浦さん、ありがとうございます、ありがとうございます」

また母親に涙で感謝され麻衣子は困惑気味に笑顔をつくった。鮎美は通用門外にいる群衆たちに一礼してから、代表者5名を基地内の広報室に案内した。そこで事件の概要を聴取するけれど、だいたいわかっている。自宅神社を避難所として提供し、名古屋からの被災者を受け入れていたのに、その被災者の一人に裏切られ、強姦されて撲殺された姉妹、その復讐に姉妹の姉と幼馴染みだった少年Tが強姦殺人犯を撲殺し、殺人容疑で警察に捕まっている。それを解放し無罪放免としてほしいという嘆願だった。

「お話はわかりました。うちとしても、できる限りのことをしてあげたいと思います。けれど、直接に現地の検察官に総理として何か圧力をかけることは法秩序の関係から難しいのです」

「……。それでも、どうか、お願いします」

「「お願いします！」」

代表者5名には鮎美の期待に反して町議などの政治経験者はおらず、少年Tと姉妹の姉とも幼馴染みであった少女と、姉妹の妹の友達、70歳近い町内会長、同じく70歳近い神社の氏子代表という構成で、母親以外は子供と老人だった。鮎美は、その5人の感情をなだめるのに苦労しつつも簡単に司法権と行政権の話をし、それから自分の提案をする。

「実は、この悲惨な事件が起きる直前、うちは雄琴先生の法案を無理にでも通そうとしていました。自分の快樂のためだけに強姦して人を殺す、そんな人間には息子さんが実行しはったように、同じ苦しみを与えて殺すのが、人としての道理やないかと、うちも思いますから。雄琴先生の案を知ってくれてはりますか？」

「はいっ、知っています！ 息子も言っていましたから！」

「うちも息子さんと同じ思いです。今は議会もなく法案を通すことはできませんが、こんな悲惨な事件は二度とあつてほしくない。なのに、この混乱期に、また同じことをするヤツは、きつとでてくる。そんなことをさせないために、少しでも抑止できるように、そして息子さんの思い、雄琴先生の遺志を、うちは総理代理令という形で世間に出したいと思います。今すぐ」

「『今すぐ…』」

「三日前の15日、うちは今すぐ発表しようと閣僚たちに提案しましたが、拙速であるとの意見もあり、つい慎重論に傾きました。けれど、それを今は強く後悔しています。もし、あのとき、うちが発表していたら、姉妹は強姦されなかつたかもしれない。殺されなかつたかもしれない。たとえば、最初の事件が起きたとしても、雄琴先生の案が行われる可能性があれば、息子さんは自分の手で実行しようと思わなかつたかもしれない」

「『……………』」

「もう二度と後悔はごめんです。今すぐ全国に発表しましょう。お母さんも同席してください。みなさんも」

「……………はいっ！」

「『はい！』」

母親たちの同意をとり、もともと準備させていた鮎美はカメラの前に5人と立った。生放送だと失敗するかもしれないので録画にして、すでに全国が知っている岐阜県での強姦殺人事件と復讐殺人について、はじめて聴く人にもわかるように語り、それから母親と少女の幼馴染みに発言してもらい、再び鮎美が語る。

「すでに何度か紹介しておりますが、ただ快樂のために二人以上を殺し、冤罪の余地がない犯罪者については、被害者を殺したのと同じ方法で殺すなど、現在の絞首刑による死刑よりも、過酷な方法とするこゝとを、ここに法律と同等の拘束力をもつ、臨時の総理代理令として公布施行いたします。今、この瞬間から、施行されました。これよりのち、二人以上を快樂のために殺した者には過酷な刑罰をかせます」

そう言った鮎美は長い放送になるけれど、直樹の法案をすべて読み上げた。

「…以上です。また、今後は自衛隊基地の周辺2キロ圏内にてデモ、集会等の行為による請願を禁止します。違反者には罰金30万円以下をかせます。臨時政府へのご要望、請願などはメール、手紙など、負担のかからない方法にしてください。最後に、総理代理として、個々の検察官に影響を与えることは、尖閣諸島中国漁船衝突事件を振り返

るまでもなく厳に慎まねばならないことですし、そのつもりです。ただ、早まったことではありましたが、正義の鉄槌をくだした少年Tくんに明るい未来があつてほしいと願います」

鮎美が頭をさげたので左右にいた5人も頭をさげた。収録は一回で見事に決まった。すぐに配信する。鮎美は母親たちと握手をしながら謝る。

「すみません。あなたたちを利用したような形になつて……」

「いいえ！　ありがとうございます！　これ以上ないほど感謝していますー！」

「そう言っていただけだと、うちも嬉しいです」

そう言つて鮎美は、麻衣子に後のフォローを頼み、かなり急いで貴賓室に向かった。この国で一番待たせてはいけない人を待たせている。ノックして貴賓室に入ると、義仁と由伊がソファに座つて待つていた。

「遅くなつて、すみません！」

「申し訳ありません！」

鮎美と鷹姫が頭をさげる。義仁と由伊は微笑した。なぜ、待たされたのか二人とも事情は聴いている。

「かの少年のお母さんは、どんな様子でしたか？」

「もつと取り乱しておられるかと思いましたが、冷静に話し合つてくださいました」

「それはよかつた。会うべきか、迷つた上で、お会いされた芹沢さんは優しいですね」

「いえ……そう誉められると恥ずかしくなります……」

鮎美は事件を利用した自覚はあつたので赤面して目を伏せた。しかも、閣議で諮つたことではなく独断での公布施行であり、今頃は久野や鈴木が渋い顔をしているだろうし、明朝は土曜日で閣議は予定されてない。そういうタイミングで行つたことだし、言い訳も用意してあつて少年Tの母親たちの想いに突き動かされたと言い逃れる気だつた。そして、その母親たちにしても午前中に基地前で騒がせておいたので会つたときには疲労していて、法知識のある人物はいなかつ

たけれど面談と説得は短くて済み、現地検察官への圧力は最小限の表現で満足してもらえている。そういう裏事情があるのに、義仁に誉められると本当に恥ずかしい。

「遅くなりましたが、お食事の準備をいたします」

里華が言った。もともと義仁からの提案で鮎美と鷹姫、義仁、由伊の四人で会食する予定で、少し遅れてしまったけれど、里華と宮内庁職員が給仕をして準備してくれる。小さめのテーブルに義仁と鮎美が対面して座り、対角線上に対面して由伊と鷹姫が座る。メニューは他の隊員たちが食べているのと同じ物だったけれど、トレーではなく食器は上等のものが用意されている。食べ始めると、由伊が鷹姫へ言う。

「宮本さん、そんなに緊張しないでください」

「は…はい…」

鷹姫はかなり緊張しているけれど、鮎美は義仁たちに会うのがもう三度目なので落ち着いていた。鷹姫も初回のように卒倒しそうになることはないけれど、食事が喉を通りにくい。鮎美は穏やかに話す。

「陛下と由伊様は明日には京都ですね」

義仁と由伊は石永と三島の発案で那須御用邸から京都御所に移ることになっており、かなり遠距離移動の上、新幹線が動いていないので日本海側の高速道路を使い移動しているけれど、一泊しないと無理があり、ちようど一週間という節目の日だったので小松基地で鮎美といっしょに慰霊と生き残った国民への言葉を述べていた。

「私と由伊が京都で暮らし始めることで人々を勇気づけられるという意見もあって、その通りになれば嬉しいけれど、どうなるか……」

「石永先生が言っておられました、京都御所は、まったく無事で、津波は手前で止まったそうです」

「そのようだね。先人の知恵なのだろうか……」

「大阪や東京は埋め立て地を開発しすぎたのかもしれない。ある程度の標高がないと、地球上での地震の8割が太平洋で起こると考えれば、海沿いは危険でした……」

「そうだね。災害は起こってから教訓を学ぶ。これを忘れたくないものだ」

「はい」

「食事しながらの話題としては不粋だけれど、原子力発電所の方は、どうかな?」

「まだ未定のことが多いのですが、先人の知恵に学ぶという意味では、ロシアが先輩になりますし、鈴木先生がチェリノブイリ事故後の対応、原子炉の封印方法について問い合わせられています。それに習うことになるかと存じます」

様々に日本の状況を義仁へ報告しているうちに、鮎美は米軍撤退のことを言うべきかと迷ったけれど、結局は黙っておくことにした。それは義仁が他に話すという危険を考えたわけではなく、まだ15歳という義仁の年齢を考えた結果だった。つい鮎美が考えるべきことが多くて、会話への集中力を切らしてしまうと、義仁は同じ問いを二度してくれた。

「芹沢さん、落ち着いたら、今度は京都で、このように会食できますか?」

「あ、はい。ぜひ。……とはいっても、落ち着くのは、いつのことになるか……今後10年は落ち着かないかもしれません」

「それは……淋しいな」

「私が総理でいられるのも、わずかのうちでしょうし……」

「……………」。瀬をはやみ、岩にせかるる、滝川の……」

「?」

「……………」

急に言われて鮎美はわからずにいるけれど、聴いていた鷹姫と由伊はハツとして義仁と鮎美の顔を交互に見るので、鮎美は記憶をたぐった。

「われても末に……、あわむとぞ思ふ? ですか?」

百人一首の一つだった。

「ええ、これを詠んだ崇徳院も幼くして即位されたよ」

「……………」

えっと、だから、どういう意味なんやろ、わかってて当然な場面な
んかな、と鮎美が相槌に困っていると、鷹姫が言う。

「お、おそれながら陛下、不吉にご言います。若くして即位された例は
過去に多く昭和天皇も20代半ば、明治以前には10代での即位も珍
しくありません。なにも、崇徳院を例になさらなくても」

「宮本さんの言う通りです。お兄様、今おっしやらなくても」

二人とも崇徳天皇が保元の乱で讃岐へ流され40代で果てたこと
を念頭に言っているけれど、義仁は反論する。

「そうかな。歴史の流れの中で埋没することは常だけれど、一首の歌
を残したことで崇徳院は千年を生きておられる。あながち、さらに千
年後、人々が記憶しているのは、やっぱり百人一首に名を連ねる方々
で、私などは誰も覚えていないかもしれないよ」

「……………」

「芹沢さんの名は大きく残るだろうね。かつて無いほどの大災害を恐
竜が滅びた隕石の話で相対化してみせた度量は惚れ惚れしましたよ。
もしかしたら一億年のうちも、百人一首や芹沢さんのことは残るかも
しれない」

「……………そう言っていただけでも……………」

鮎美が困っているのを由伊が話題を変え、会食が終わって鮎美と鷹
姫、里華は貴賓室を出る。ドアを閉めた途端に鷹姫は腰が抜けたよう
に座り込み、鮎美がタメ息をつく。

「はああ…、そこまで緊張せんでええよ」

「……………芹沢総理、今の状況がわかっていいるのですか？」

座り込んだまま小声で鷹姫が問う。立てない様子なので鮎美が肩
をかした。

「状況って？」

「さきほどの歌の意味です。そのままの」

「意味なんか知らんよ。小学校6年で丸暗記しただけやし」

「……………と……………とにかく、ここを離れます」

鮎美と鷹姫、里華が廊下を進む。貴賓室前で待機していた知念と三
井が歩いてきて、義仁と由伊の警護は皇宮警察が担当している。鷹姫

は麻衣子と相部屋になつてゐる4人部屋に鮎美と里華を連れて入り、知念は長瀬と交代し、三井はそのまま部屋前で待機する。ベッドに寝転がっていた麻衣子が驚いて起きた。

「うわつ、総理?! ここに何しに?!」

「今夜は、うちも、ここで寝るんよ」

「石原里華3等空尉です。今晚のみ、こちらにてお世話になります」

里華が敬礼して業務的に言い、部屋の先住者である麻衣子も敬礼を返して答える。

「はつ、よろしくお願いします。どうぞ、おくつろぎください。……で、石原空尉はともかく、総理まで、ここに? どうして? 罷免されたんですか?」

「あははは、罷免な、ありそうやけど、うちを罷免したら次を誰にすんねん、そもそも誰がうちを罷免できるねん、つて話やね。ちやうよ、陛下に貴賓室を譲ったから、うちが寝るとこ無いねん。序列から言うと、畑母神先生が使つてる個室とか空けてもらつてズレるらしいけど、それをすると全体にズレるし一晩くらい、うちが4人部屋で寝たら済む話やし、そうしよ、いうたんよ。石原はんの部屋も宮内庁の職員さんらに譲つたし、今夜は小松基地、満杯らしいわ」

「なるほど、それで」

「芹沢総理! そんなことより陛下からのお言葉をどうされるのですか?」

「どうつて?」

「明らかにご好意を向けてくださいました。どう、お返事されるのですか?」

「……好意?」

「どうして、わからないのです?!」

鷹姫が興奮気味に言ってくる。

「男女のことに鈍い私でもわかります! はっきりと好きだと、また会いたいとおっしゃったではないですか?!」

「そうなん?」

「ええーっ?! マジで?!」

麻衣子が驚く。

「鷹姫、あの歌の意味は？」

「歌って何？ 何があったの？」

「瀬をはやみ、岩にせかるる、滝川の、われても末に、あわむとぞ思ふ。とは、川の瀬の流れが速いので岩にせき止められた急流が一度は分かれても、のちには一つになる滝川、それと同じように、たとえ今は恋しい人と別れても将来は必ず結ばれると信じています。という意味です。しかも、芹沢鮎美という名に合う歌を選ばれるあたり、ご執心の深さを感じます」

「……………うくん……………」

「陛下って今いくつだったけ？」

「15歳よ」

「総理は？」

「18。って、被選挙権は18からやで。あんた、ええ加減やな」

「三つ年下かあ、ありなんじゃない？」

「いやいや、うちは、ピアノやし。陛下、知らんのかな？」

鮎美のスマートフォンが鳴った。メールの着信音で鐘留からだった。件名に極秘、とある。

「もう陛下からメール？」

「メアド交換してないし。陛下はスマホなんか持たんやろ。見んといて」

麻衣子が覗いてくるので鮎美は画面を隠して見る。

アタシね、タベオネシヨしなかったよ。このまま治るといいなあ。アユミンにだけ教えたから宮ちゃんにも言わないでね。あと、すぐにメール削除して、お願い。

鮎美はメールを削除しつつ微笑んだ。短文の返信も送る。

「フ、よかったやん」

「朗報ですか？」

鷹姫が問うてくる。

「うん、まあ、いい知らせではあるよ。ささいなことよ、気にせんといて」

「はい。それよりも陛下への返事は、どうされますか？」

「……………あれに、返事つて必要？ ただの自意識過剰かもしれんよ。つていうか、鷹姫だけが考えてるんちゃうの？」

「由伊様も察しておられましたから、今おっしやらなくても、と遠回しに注意されたではないですか」

「うくん……………鷹姫は、あの空気は読めるんや……………」

「総理、とりあえず、お風呂いかない？ この部屋、お風呂はないよ」

「行く行く。大浴場、行つてみたかつてん」

「そんないい物じゃないよ。超殺風景」

麻衣子と鮎美、鷹姫は入浴の準備をする。里華は荷物を隅に置いたままだった。

「石原空尉は、お風呂は？」

「あとで入るから。……………大浦陸士、その人が同性愛者だつて覚えてる？」

「あ……………そういえば……………」

「あんたホンマ大雑把やな。あと、うちかつて見境無しつてわけやないから。いっしょにお風呂入つたくらいで何かするわけちゃうし、そこ、よろしく」

一瞬だけ鮎美と里華の視線がぶつかり、すぐに鮎美は背中を向けた。部屋を出て鮎美と鷹姫、麻衣子は入浴するために、里華と長瀬、三井は警備要員として共同浴場に向かった。脱衣所には女性だけが入り、長瀬と三井は出入口に立った。麻衣子が裸になりながら問う。

「総理つて好みのタイプとかあるの？」

「そらあるよ」

鮎美と鷹姫も裸になった。里華は着衣のまま黙つて立っている。

「どんな女子が好きなの？」

「可愛い系と強そう系」

「両極端じゃない？」

「可愛い子は抱きしめたいし、強そうな人には抱きしめてほしいのよ」

「あく、後者は理解できるかな。私も強そうな男が好き」

「あなたの好みは？」

女子らしい会話をしながら浴室へ入る。里華は脱衣所に残った。

「私は、がっしり筋肉のある男性が好き」

「三井はんみたいなの？」

「そうそう！　ってか、総理と、こういう話をしていると、やっぱり、ただの女子だね。通用門のところで見たときは、なんか、すごい遠い存在に感じたけど」

「そうなんや。そういうえば、あなたの謹慎は？」

「謹慎は5分もしないうちに次の命令で歩哨に立ったし、上の方も忙しいからテキトー感あるよ。またすぐ総理たちのお世話任務に戻るかも」

「うちは、あなたの方が気楽でええわ」

鮎美は声を小さくして言う。

「石原はんは、ちよつと苦手やわ」

「あれだけ露骨にされれば、しょーがないよ。総理、下の毛まで処理してるんだ？」

「うん、まあね」

いつ詩織が帰ってきてきても喜んでくれるようにと、鮎美は肌を整えていた。

「なんか、そこって剃るとエロいね」

「やっぱり、そう思う？」

「エロいエロい」

麻衣子は、ずっと黙っている鷹姫の方を見た。鷹姫は腋を剃っている刃物を使っているので慎重な動きをしている。鮎美も鷹姫の方を見た。

「鷹姫、毎日、剃ってるの？」

「はい」

「うちは二日に一回かな。さすがに毎日やと荒れるわ。美容整形して

る場合やないと布告したけど、人間の営みって自然に任せる方がええんかな」

鮎美は昨夜剃った腋を撫で、身体をシャワーで流すと、大きな湯船に入った。麻衣子と鷹姫も入ってくる。

「まだ震災後、一回も風呂に入れてへん避難所あるんよなあ」

「陸自も入浴設備提供より救助を優先してるらしいね」

「うん、まだ生きて救助を待ってる人いはるもん」

「……………」

三人とも心地よく湯船で身体を温めていることに罪悪感を覚えた。その罪悪感を責めるように険しい顔で里華が着衣のまま浴室に入ってきた。ストッキングを穿いている足が濡れるのもかまっていない。

「芹沢総理代理へ、緊急でお伝えします」

「はい、どうぞ」

「尖閣諸島へ中国人と思われる集団が上陸し、これに対応するため海自の護衛艦2隻、海上保安庁の巡視船2隻を向ける、と畑母神防衛大臣が命令され、このことを総理代理に伝えておくよう緊急伝達が来しました。以上、お伝えしました」

「……………上陸……………何人くらい？　どんな人らが？」

「私は伝達事項しか知りません」

「司令室に行くわっ」

急いで鮎美は風呂を揚がり、着る予定だったパジャマではなく制服を着る。鷹姫と麻衣子も急いで続いた。その間に里華は濡らしてしまったストッキングが気持ち悪いので脱ぐ。髪を乾かすのもそこそこに鮎美たちが司令室に入ると、畑母神は難しい顔でモニターを睨んでいた。

「畑母神先生、状況はどうなんですか？」

「わざわざ来てくれたのか。もう夜も遅いのに。しかも、入浴中だったようで、すまない」

「いえ、それで状況は？」

「30人程度の集団が、何らかの機械を設置しているようで、当然、警

告しているが退去しない」

「どんな機械を？」

「わからない」

「……。これから、どう対応することになるのですか？」

「航空機からの警告を無視しているので海上保安庁の巡視船に対応させる。だが、もはや領土侵犯だ。海上保安庁の手にあまる場合にそなえ、海自にも同伴させた」

「中国政府は？」

「夜間なので担当者がいない、という、ふざけた回答だ」

「ふざけとんなあ……」

「せっかく来てくれて悪いが、あなたが、ここにいても、できることはない。明日のために休んでおくのも仕事だと思っしてほしい」

「はい……」

返事をした鮎美は周囲を見回してから、畑母神の耳元に囁く。

「対応に向かっている船の船長だけにでも、米軍撤退のことを伝えた方がよくないですか？」

「うむ……」

畑母神も周囲に聴こえないよう鮎美の耳元へ囁く。まだ髪が湿っている鮎美には風呂上がりの女性独特の花香があつて、闘争本能で軽い興奮状態にあつた畑母神は、あまり近づかないようにして言うし、司令室全体も若い女性たちが明らかに風呂上がりという雰囲気入室してきたので空気感に困惑があつた。若い隊員などは脳内で鮎美たちを押し倒すイメージさえ抱いてしまうし、鮎美と鷹姫はそういう男性からの視線に気づきにくい、麻衣子と里華は気づいたし、里華はストッキングを脱いだ素足に嫌悪感が走った。

「私も、それは考えたが。むしろ、その事実を知れば各艦長たちの対応が過剰になったり消極的になったりするかもしれない。それによつて相手にも、その事実を悟られるくらいなら、いつそ知らぬ方がよいし、そもそも暗号通信するにしても100%漏れないとは限らない。ここは知らせぬ方針でいく」

「わかりました」

「繰り返すが、ここに君がいてくれても、できることはない。もう休んでほしい。よほどのことなら伝達するが、あとは私に任せてくれ」

「はい……………、戦争になる可能性がありますか？」

「……………無いよ。安心して寝てほしい」

「…。ありがとうございます……………失礼します」

あるんや、顔を見たらわかるわ、畑母神先生は正直な性格してはるわ、と鮎美は察したけれど、軍事の素人でしかない自分には何もできない上に邪魔だと悟り、司令室を去った。歩きながら考える。

「……………」

現代戦って、実際は、ほとんど対等な戦闘がないらしいんよな……………アメリカがイラク叩くみたいに一方的だったり……………たしか、フオークルランド紛争が、そこそこ対等やったんかな……………あれも英国が本国から遠かったから……………何らかの機械を設置って何やる……………携帯電話の基地局です、とか、ふざけた回答してくるかも……………うちが中国の指導者やったら、どう言うかな……………あ、放射能を見張る機械とか言うかも……………と鮎美は考え込みながら歩いていたので建物の壁に衝突しうになり鷹姫が止めてくれた。

「危ないですっ！」

「っ……………おおきに……………」

部屋に戻っても、やはり考え込む。

「……………」

合計4隻で対応……………向こうは、どういう風に来てるんやろ……………訊いておけば、よかった……………うちが訊いたところで何もできんけど……………船で対応に向かわせるってことは、まだ到着には時間あるんやろな……………明け方になるか……………あかんわ、考えるにも材料がないし、知らんことだらけで結論なんかでんわ、諦めて寝よ、と鮎美は気持ち静めた。

「寝よか」

「はい」

「自分が入浴してきます」

里華が出ていった。麻衣子が問う。

「消灯しますか？」

「それは石原はんが戻ってきたとき、感じ悪いやろ」

「あえて訊いてみました♪」

「あっはは」

「芹沢総理、陛下へのお返事はどうされますか？」

「あ、そつちを忘れてた……うくん……」

鮎美は考えようとしたけれど、尖閣諸島のことや頭にあつて邪魔をするし、もともと異性に好かれても、どうしようもない、としか思っていないのに、鷹姫は重大事として捉えている。今も、やや空気を読まずに問うていた。

「……うくん……どう断るか……なんか、そういう感じのええ和歌か、短歌でもないの？ 遠回しに、たとえば、うちの勘違いやっただとしても、失礼でないような」

「お断りされるのですか……陛下、直々の……」

「だって、うちビアンやもん」

「……このさい、その性的指向もおして封印され、お受けになるの？」

「なっ………そ、そこまでのことなん？」

「陛下からのご好意を袖にするのは通常ありえませんが。ありえないがゆえ、かぐや姫などが有名なのです」

「竹取物語か……あれ、今から考えると、実はヒロインがビアンってことありそうやね。いろんな貴公子さんが迫ってくるから、無茶ぶりの要求して、とうとう、みかどから声がかかったし、月に帰るという喩えで、本当は入水でもしたんかも。………って、うちは断ったら、めっちゃヤバい立場になるの？」

「あの場にいたのは、わずかな者ですから、そう問題にはならないかと思いますが、由伊様でさえ気づいておられるのです。忖度されるべきかと思えます」

「………今頃、岐阜の検察官は忖度してるやろけど、それを迫ったうちが今度は忖度すんのか……。男の人そのものが……うちには……無理っていうか……」

「二人とも、そんな難しく考えないでさ。ぶつちやけ15歳の少年の初恋って考えれば、まあ、なるように、なるんじゃない？ 遠回しても、いきなり告白って、すごいけど、それも若さゆえ。こんな大災害の直後だし、心がざわついて当然な時期だよ。あと、総理と陛下の關係って、昔の、殺生とタンパクみたいなあれに近くない？」

「摂政と関白な。まあ、たしかに現代の天皇と総理は、昔の天皇と摂関に近いかもね」

「そうそう。なんか昔あったらしいよ。女性天皇が好きになった僧侶か何かを高い地位にしたとか。そういうロマンス」

「えっと、何の天皇さんの話やった？ 鷹姫」

「孝謙天皇です。僧侶は道鏡で太政大臣となつて権勢をふるい、法王ともなり、ついには皇位を狙いましたが失敗しています。ですが、孝謙天皇と道鏡が睦まじい仲にあつたというのは平安時代以降の邪推であつて真偽は不確かです。似通つたイメージで語られる人物としては中国のロウアイ、ロシアのラスプーチンがおり、どちらかといえば道鏡はロウアイの故事にこじつけられています」

「ラスプーチンは聞いたことあるけど、ロウアイは知らんわ」

「中国を初めて統一した秦の始皇帝、その母であつた趙姫と不倫關係にあつた男です。本来、宦官しか入れない後宮に偽宦官として入り、趙姫との間に子をなし、御璽を盗み出して皇位篡奪をもくろみましたが失敗して刑死、享年21歳だつたそうです」

「うちと三っしか変わらんのに皇位篡奪か、頑張る人やなあ」

「ロウアイには巨根伝説があり、非常に男性器が大きく、宴会の余興として自らの男根で馬車の車輪を回してみせたということですよ」

「…………アホや。おチンチンで、そんなことできるもんなんかなあ？」

鮎美は陽湖と同居するまでは風呂上がりに、よく裸でウロウロしていた玄次郎の男根と、飛行機の中で強引に性交するよう向き合わされた泰治の男根を思い出したけれど、せいぜいプールで使う浮き輪くらいしか回せない気がする。

「うちのスチャラカオヤジやつたら酔つたら、やってそうやわ。浮き

輪とかで」

「いずれにせよ、その巨根伝説のイメージが道鏡にも押しつけられたようです」

「カンガンって何？」

麻衣子の問いに鮎美が答える。

「おチンチンを切り落とされた高級官僚よ。そうすると中国では皇族に近づけたから出世が早かってん」

「うわあ……痛そう……」

「ゲイの一部に受けそうやけどね。とはいえ、偽宦官とかまでおるんやな」

「ロウアイは髭を抜いて顔貌を変え、偽の記録を作って宦官となっているとしたそうです」

「宦官制度そのものが、どうかと思うけど、それを出し抜いて不倫する根性もすごいな。ラスプーチンはキリスト教の人やったっけ？」

「はい。宗教家という意味では道鏡と同じですけど、ラスプーチンは19世紀の人物ですから、道鏡とは1200年ばかり時代が違いますが、権勢をふるった点でも類似しています。彼は本当に女性好きだったようですが、淫乱ぶりは敵対者や後世に捏造、誇張されたようです。また、貧しい家庭に生まれたため、読み書きが不得手で聖書を独自に解釈していたようです」

「聖書の独自解釈かあ……」

「……………」

鮎美と鷹姫は陽湖のことを思い出した。

「けど、女子にはモテたんや」

「不潔で怪奇な容貌であったそうですが、当時は神秘主義に傾倒していたロシア帝政末期で、巨根という噂もあり、かなり人気を博したそうです」

「また巨根か……男のおチンチンが大きいのに魅力って感じる？」

「いえ」

鷹姫は即答したけれど、麻衣子は恥ずかしそうに手をあげた。

「感じるよ」

「そうなんや。大浦はん、ムキムキな筋肉で巨根が好きなんや。ザ男って感じやね」

「総理こそ、おっぱい大きいけど、相手の女の子も、おっぱい大きい方がいいの?」

「どつちかというのと形がキレイな方がいいかな。にしても、歴史つて、あとで色々イメージが脚色されてるなあ。淫乱やなかったかもしれんのに、敵側から色々残されるとか……うちを特集した週刊紙の記事も、そのまま歴史に残りそうで嫌やわ。へタしたら、うちが周りの女子みんなに手え出してたとか残ったら腹立つわア」

「ありそう。ってか、それ私も含まれない? 今夜、相部屋だし」

話し込んでいると鮎美のスマートフォンが鳴り、メールの着信音を響かせた。

「っ?! 詩織はん?!」

その着信音は詩織だけの設定にしていたので寛いでいた鮎美はスマートフォンに飛びついた。急いでメールを開く。

愛する鮎美へ

私は無実です。冤罪です。これは罠です。

きつとタックスヘブンの仕掛けた罠です。

私は誰一人殺してなんていません。

鮎美を愛しています。

私だけの鮎美、鮎美だけの私です。

いつか必ず会いに行きます。

その日まで、どうか待っていてください。

永遠に愛しますから。

読んでいるうちに涙が溢れてきて何度も拭った。ずっと詩織の生死について意図的に考えないようにしてきた。生きているかもしれない、救助されるかもしれない、けれど、おそらくは死んでいる、そう感じていても、それを考えないようにして精神力を保ってきた。今、メールを受けて、その感情が涙になって流れて、なかなか字が読めないほど視界が歪む。

「……うっ……ぐすっ……うっ……」

「……………」

鷹姫と麻衣子が心配して覗いてくれるので三人で読んだ。けれど、読み終わっても意味がわからない。

「……………詩織はん……………生きて……………。でも、どういことなん……………無実？ 冤罪？ 殺し……………」

頭が混乱する。それでも条件反射のように詩織へ電話をかけた。

「おかけになった番号は電源を切っておられるか、電波の届かない……………」

「出てよ……………生きてるなら、出てよ……………メール送ってくれたのに……………どうなってんの……………」

「……………」

「こつちもメールを送れば……………」

鮎美はメールを打ってみる。

鮎美です。

そちらは無事ですか？

それだけを送信してみた。

「ぐすつ……………うっ……………ううっ……………」

「シオリさんっていうのは、あの同性結婚を発表した人？」

「……………」

泣いている鮎美に代わって鷹姫が答える。

「そうです。地震のさい東京におられ、行方不明だったので……………」

「そつか……………メールが送れたんだから生きていてくれるのかな……………けど、それなら、それで津波とか地震のこと少しでも書きそうなのに……………無実とか、どういう意味……………」

「ぐすつ……………帰ってきて……………お願いよ……………」

鮎美が泣きながら祈っていると、里華がパジャマ姿で帰ってきた。

「……………」

里華には泣いている鮎美を鷹姫と麻衣子が見守っているという構

凶になった理由はわからないけれど、問う気もなくて二段ベッドにあがった。ベッドで鮎美たちに背中を向けて横になる。

「…ぐすつ…：ううつ…あつ?!」

メールの着信音がして、すぐに開いたけれど、送信先が無くエラーというメッセージが機械的に返ってきた。

「エラーメッセージ…：なんでよ?!　なんで、こっちから送れへんのよ?!　どうなってるの?!　なあ?!」

パニック気味に鮎美が叫び、鷹姫の両肩を揺すった。

「私に訊かれても…：、緑野なら、わかるかもしれせん」

「カネちゃん、ネットに詳しいから!」

鮎美は鐘留へ電話をかけた。

「もしもし!」

「ハイ!」

軽い鐘留の声とテレビの音がする。

「カネちゃんに訊きたいことがあんねん!」

鮎美が泣き声で事情を話すと、鐘留も真面目に聞いてくれて、とりあえず詩織からのメールとエラーメールを鐘留へ転送するように言われた。それをして、しばらく待つと鐘留から電話がある。

「結論から言うと、今までと状況はかわんないよ」

「どういうことなん?!」

「シオちゃんがメールを送信したのは3月11日の12時39分なの。これは地震が起こる前に送信したメールだよ」

「なんで、それが今くるのよ?!」

「そのときアタシたちは飛行機に乗って中国上空にいたよね。ってことはメールは到着せずネット上のどこかで待機状態になるの。そしてアタシたちのケータイやスマホは圏外状態か、機内モードのまま、着陸する予定だったけど、そこで地震がくる。すると、地上では、いろいろなところが断線したり停電したりする。けど、運良くメールは、どこかのサーバーに残ってた。そのサーバーが、ついさつき停電から回復したか、光ファイバーの断線をつないでもらったかしたんだと思うよ。それで今になって来たの。けど、こっちから送っても、も

うメアドごと認識しない状態……つまり行方不明ってこと……、だから、昨日までと状況は同じ、生きてるかもしれないけど、死んでるかもしれない。……でも、たぶん……津波には遭ったんだと思うよ……ごめんね、悪いニュースで」

「ううん……おおきに……ぐすつ……」

「けど、ネット的には、そういう状況だけど、このメールの内容は、意味わかんないね。タックスヘブンの罫とか、誰も殺してないとか、何かに追われてる状況なのかな？」

「わからへんねん……ぜんぜん、意味、わからへん」

「そっか、アタシも調べておいてあげるよ」

「うん、おおきにな」

鐘留との電話を終えると、また涙が出てきた。この一週間、考えないうようにしてきた詩織の生死、生と死で、死の可能性が高いとわかってきたのに考えないようにして目をそらして耐えてきた。それが、ごく一時的に生の可能性が出てきて、また死に傾いてしまったショックは大きくて泣けてくる。

「ううっ……ぐすつ……ううっ……」

「……………」

鷹姫も麻衣子も言葉がない。里華が鬱陶しそうに言う。

「もう消灯していい？」

誰も否定しなかったので里華は二段ベッドからおりて電灯を消した。そろそろ眠るべき時間なので当然だったけれど、鷹姫も麻衣子も鮎美のそばを離れない。

「…………ぐすつ……うちも……寝るわ」

泣きながら鮎美が二段ベッドにあがる。その下に鷹姫、麻衣子は里華の下に入った。

「……………ひうっ……」

鮎美は布団をかぶって泣いている。その声が室内に響くので15分ほど我慢した里華が言う。

「静かにしてよ」

「……………はい、……………すいません……」

謝ったけれど、泣きやめず鮎美が嗚咽を漏らし続ける。声をあげて泣きそうなのを両手と枕で押さえていた。

「…うつ…くつ…ぐすつ…うつ…」

「……………」

鷹姫も麻衣子も眠れないし、里華が怒鳴った。

「うるさいって言うてるでしょ!! 情けなくメソメソしないで鬱陶しいー!」

「ぐすつ、ごめんなさい、ごめんなさいっ」

「謝ることないよ。もう私も限界だわ。階級とか関係ない。コイツ、人として終わってるわ!」

そう言い放った麻衣子が両足をそろえて一気にあげ、里華が寝ている上段のベッドを蹴りあげた。

「うつ?!」

里華はベッドマットごと浮き上がり、麻衣子が斜めに蹴っておいたので二段ベッドから落ちて床に叩きつけられた。

「くつ…」

里華も訓練は怠っていないので受け身をとってケガしなかったけれど、麻衣子は飛びついてマウントポジションを取ると殴りかかる。それを里華が防御するけれど、体勢が不利で追い込まれる。鷹姫が止めるべきか迷っていると、物音で異常とみなした長瀬と三井が入室してきた。

「どうしました?」

問いながら長瀬は電灯をつけて鮎美の身体が無事か確認し、三井は有利な体勢で殴りかかっている麻衣子の手首を握った。

「やめろ!」

「離してください! コイツは許せない!」

「もう、お前の勝ちだ。これ以上は問題になる」

発覚すれば十分に問題だったけれど、できれば内密に終わらせたい三井は男同士のケンカを制止するときにも使う口上で言った。麻衣子とは同じ陸自で、殴られている里華は空自なので組織的な問題になつてほしくないし、防御していた里華は涙を流しているので、勝敗

は決まっているようにも見える。長瀬が状況を説明してくれそうな鷹姫に問う。

「どうされました？ 何が原因ですか？」

「はい」

鷹姫が時系列にそって簡潔に説明していくうちにも、麻衣子は口で里華を攻めた。

「バーカっ！ バーカ！ 超弱い！ 情けなく泣いてやんの！」

「くっ……」

里華が殴りかかろうとするのを三井が手のひらで受けた。子猫が猟犬を叩いた程度にしか効かない。

「ダサっ！ 弱っ！」

「お前は黙ってる」

三井が大きな拳を麻衣子の頭に落とした。

「あうっ?! う〜…痛い……」

麻衣子が頭を押さえて蹲る。銃床で殴られたのかと思うほど痛かった。

「うう…三井陸曹の筋肉で殴られたら死にますよお」

「加減はした。で、先に手を出したのは大浦だな。さっさと謝れ。女のかせにケンカまでしやがって」

「あ、差別発言」

「もう一発くらわすぞ」

「すいません、ごめんなさい！」

「オレじゃなくて石原空尉に謝れ」

「…………それは嫌です。私は間違っていないもん！」

「くっ…………女って、どうしてこう…………」

「2、3発、殴ったくらいで泣いてるヤツになんかに謝るもんか」

もつと殴ったけれど、麻衣子は少なめに言った。里華がパジャマの袖で涙を拭いて怒鳴る。

「うるさい！ 悲しいのは、あなただけじゃない!! みんな耐えているのに!! 総理が、そんななら辞めなさいよー！」

里華は麻衣子ではなく、まだ泣いている鮎美に怒鳴っていた。

「レズの結婚相手が死んだくらい何よ?! 私なんて家族も! 友達も! 先生も! みんな、みんな! うっ、くっ!」

「そこまで言った里華が背中を向けて泣いたので麻衣子たちは、あまりコミュニケーションを取っていなかった里華が横浜出身で、鈴木と久野を迎えに行った帰りのヘリでも悲しんでいたことを思い出した。あの日から、まだ誰とも連絡が取れないのであれば、もう一週間になるので絶望は絶対的になってきている。静かになった室内に鮎美と里華の嗚咽が響く。ぽつつりと長瀬が言った。

「自分も妻と連絡が取れません。練馬区にいたはずです」

「」「」「」

「もう眠ってください。ケンカしても泣いても無駄です。できることは神に祈るくらいですから」

「……………」 石原空尉

麻衣子が頭をさげる。

「殴って申し訳ありませんでした! 私を殴ってください!」

「……………」もういい。…………寝て」

里華が二段ベッドにあがるので、長瀬と三井は退室し、鷹姫と麻衣子もベッドに戻った。もう泣き声を我慢しなくなった鮎美と里華は声をあげて号泣し、その声を聴いているだけで麻衣子も泣けてきた。鷹姫は静かに三人の泣き声を聴きながら思った。

「……………」

「……………」こういうとき、私もいつしよに泣くべきなのでしょうか……………大浦さんまで泣いているのだから……………たしか、大浦さんは家族も知人もみんな無事だったはずなのに……………私は冷たい人間なのでしょうか……………牧田さん……………芹沢詩織さんが亡くなっているだろうこと……………多少は残念に思う気持ちもありますが……………私と彼女は、それほど親しかつたわけでもなく……………他に東京事務所の方々も、きつと亡くなつて…………………………雄琴先生が一番よくお会いしたくらい……………やっぱり私は冷たい人間で……………空気も読めない……………今するべきことは早く眠ること……………朝になれば尖閣諸島の問題も……………なにより陛下への鮎美の返事……………今は寝不足になるべきでない……………何か別の話をして鮎美

の気をそらしておくべき、と鷹姫は決めた。

「先日、へりが到着したので途中になった前田利家の話をします」

「ぐすつ……鷹姫？」

「前田利家が信長の同性愛の相手をしたという逸話は有名ですが、両者とも嫁をとり子をなしていますから、当時の文化である衆道、今風にいえばバイセクシャルであつたといえます」

「……………」

泣いていた三人の耳に鷹姫の声が入る。

「とはいえ、前田利家は勇猛果敢な人物で短気かつ喧嘩っ早いといわれ、初陣から武功をあげるだけでなく晩年、秀吉の死後に豊臣家との対立をみせつつある家康が病床にある利家を見舞いに来たときも布団の下に抜き身の刀を隠していたという話もあります。とくに信長の寵愛を受けていた拾阿弥が利家へ無礼をはたらいたおり切り捨てて、一時期は浪人となつています。ところが、浪人中にもかかわらず桶狭間の戦いが起こると勝手に参戦して三つの首級をあげるなどの武功をあげます」

「命令無視どころか、ただの私戦つてみなされそう。っていうか、味方に味方と思つてもらえないんじゃないや……………」

麻衣子が泣き止み、鷹姫は続ける。

「手柄をあげたものの、信長に許されず翌年、斉藤家との戦いで頸取足立なる異名をもつ怪力の豪傑を再び無断参戦で討ち取り、とうとう許され加増の上、家臣にもどつています」

「ぐすつ……諦めん男やな。そもそも、拾阿弥は、どんな無礼で切られたん？」

「利家が正室まつから送られた品を盗んだのです。それは、まつの父の形見でもありましたし、それ以前から拾阿弥は横柄な態度が目立っていたということですよ」

「そら切るわ」

「このように武断的性格が強い一方で、経済感覚にも優れ、当時日本に突つたわつたばかりのソロバンを操り、前田家の決裁はすべて自ら行つていたそうです。曰く、金があれば他人も世の聞こえも恐ろしくはな

いが、貧窮すると世間は恐ろしいものだ、と。それでいてケチではなく困窮した他の大名に貸し付けた金銭を遺言にて、返せぬ者には催促してやるな、返せぬ借金は無かったことにしてやれ、と残すなど懐深い人物であったとのことですよ」

「……………」

里華も泣くのをやめた。

「若い頃には目の下を矢で射抜かれてもひるまず、その射手を討ち取り、死の最期は病死でしたが、その苦痛に腹を立て割腹自殺したとも言われています。それを聴いた家康は、あっぱれ、と賞賛したそうです」

それからも鷹姫が語り続けるので、そのうちに三人とも泣き疲れていたこともあって穏やかに眠った。

3月19日 御前会議

復和元年3月19日土曜、午前1時、鷹姫はなかなか寝れずに布団の中にいた。

「……………」
鮎美と麻衣子、里華は前田利家の細々としたエピソードを聴いているうちに寝付いているけれど、鷹姫は目が冴えていた。

「……………」
昨日は、あまりに大きな事件があった。鮎美にとっては詩織の生死、その次に尖閣諸島のこと、頭にあつたようだけれど、鷹姫にとっては義仁が鮎美へ恋の歌を詠んだことが強く頭に残っている。おかげで眠れない。

「……………」
鮎美……………女と生まれて、これ以上ないお声掛かりなのに……………同性愛の指向というのは……………やはり変えられないものなのでしょうか……………けれど、その相手だった芹沢詩織さんが生きている可能性は、もう無い……………その淋しさを埋めるのにも……………何より、この国にとって、新たな世継ぎの誕生は、この厄災の悲嘆を振り払う朗報に……………鮎美は同性愛者といっても身体は健康な女性……………子を宿すことも十分に可能……………このさい、個人的な指向よりも優先すべきものがあるので……………、と鷹姫は考えているうちに身体が熱くなって寝返りした。

「……………」
鮎美にとつても……………ご両親にとつても、また、芹沢の家名にとつても、これ以上ない榮譽……………本来、今夜にでも同衾し……………後朝の歌を詠み……………このまま京都に……………政務は石永先生に任せ……………三日夜餅を……………、と鷹姫は古典的な思考をしていく。

「……………」
陛下は明日になれば京都へお発ちになつてしまう……………午前中は閣議は無いものの、各閣僚の状況報告をお聴きになられ、お昼は閣僚全員と召し上がる……………そのような場では話せない……………となれば朝

……早朝くらいしか、何か申し上げることができない……まだ鮎美は泣き尽くした顔で陛下の御前に出るのは遅い方がいい……となれば、私が、せめて芹沢詩織さんが亡くなっていて……同性愛者であっても、健康であること……可能性は大いにあることを伝えて……きつと陛下は明け方には日の出の儀式を執り行われる……その直後にお会いして……となれば、私は今すぐにでも眠った方がいい……眠る……眠る……すぐに眠る……、と鷹姫は念じながら眠り、日の出前に起きた。

「……」

そつと静かに着替えて、誰も起こさないようにして部屋を出る。

「……」

「……」

部屋の前には知念と今泉が立っていたけれど、鷹姫が静かに会釈しただけだったので何か用事があるのだろうと思い、声はかけない。鷹姫はまっすぐに貴賓室へ向かった。ここ数日、当然のように訪ねている部屋なので中にいる存在の高位さに気圧されることなくノックしようとしたけれど、皇宮警察に止められた。

「何用ですか？」

「陛下に申し上げたきことがございます」

「……」

警備していた三人の皇宮警察官が戸惑う。平時なら追い返して当然の場面だったけれど、今は非常事態が続いている上、ただの女子高生にしか見えない鷹姫は無位無冠ではなく総理代理首席秘書官であり、そして凜とした鷹姫の雰囲気には平安時代の女官か女房が火急の用件を御前にもってきたような気迫があった。

「どのような用件ですか？」

「皇后をお選びになられます前提として伝えたき事項です」

「……」

さらに皇宮警察官が戸惑った。真面目な顔で大胆すぎることを言う鷹姫も18歳で年齢的には十分に候補になりうるし、昨夜は義仁と夕食をとみにしているのです、その席上で何かあったのかもしれないと

思うと、単に追い返すという対応は取れなかった。

「わかりました。今は儀式の最中ですから、お伝えしておきますので30分後に再びお越しください」

「はい、ありがとうございます」

鷹姫は頭をさげて廊下を戻る。部屋に戻ろうとして、相談できそうな相手が脳裏に浮かんだ。

「三島大臣なら…」

三島が宿泊している個室を訪ねてみると、すでに起床していて法務省と厚労省の職員と非公式な会議をもっていて、田守と新屋もいた。会議の内容は朝槍が遺した同性婚を実施することと、加えて同性婚の遡及適応を認めることであり、今回の震災以前に同性婚関係にあった二人のうち片方が亡くなっている場合に安否情報の確認の権利や、遺産相続についてだった。とくに遡及適応を認める場合、遺産目的の虚偽申請がなされるであろうし、また鮎美自身、公然と詩織との結婚を震災前に発表していたとはいえ、牧田家には相当の財産があり両親が亡くなった直後に震災が来たので放棄も含めた慎重な取り扱いが必要だった。他には高齢の同性婚的な生活を送っていた二人で片方が生き残っている場合の年金の取り扱いなども問題であり、これを討議するため厚労省の職員も来ているし、そして呼んだ職員は内密に打診して同性愛者であることを確認した者ばかりだった。

「宮本殿のご相談とは？」

三島は会議を続けさせながら、窓際に移動して鷹姫の話聴いてくれた。

「なんと……陛下が……そのような懸想を…」

「この上なき、もつたいないことです」

「その言い様、宮本殿は推し薦めたいとお考えか？」

「はい」

「だが、芹沢殿の指向はご存じであろう？」

「ゆえに、三島大臣に相談したのです。圧して性的指向を封印し、公のために結婚することは、このさい必要であるかと考えます」

「……………」。公のためにか……………たしかに個人の欲望を公のために圧

すのは一つの善であるが……夫婦というのは……一年や二年のことではない。一生続く人と人の関係であるから……」

「同性愛者の中にも異性と結婚されている人は多いようです。そうして平均的な家庭を築く人も」

「言いたいことはわかるが……いくつも問題はある。一つ、当然に芹沢殿の気持ちだ。二つ、陛下がどうお考えであるかは別として芹沢殿は、いわば既婚者、皇家へ嫁ぐに相応しい相手といえるか、同性婚が有効であるとすればするほど問題がでてくる。三つ、今や芹沢殿は最大の権力者、ここに国家の象徴、最高権威まで加われば、絶対的独裁者ともなりうる。四つ、これは私の私見であるが芹沢殿は有能であるがゆえ、男勝りな部分があり嫁ぐよりは、嫁をもらうような人間と感ずる。はたして皇妃たるにおさまりきるか、ヘタをすれば陛下の前に出てしまうかもしれぬ。五つ、公のために個人の欲望を圧するにしても一生というのは長い。たしかに同性愛の衝動を圧して男女の家庭を築く者もいるが、衝動の強さも人それぞれなのだ。ことは慎重を要する」

「……衝動……」

「恋もまた衝動。この強き焦がれる心と、性欲という衝動もまた、やっかいであるし至福である。宮本殿とて恋の一つや二つ覚えがあらう？」

「いえ」

「恋をしたことがないのか？」

「はい」

「男性だけでなく女性へも？」

「はい」

「では、男か、女、いずれかの身体に興味を覚え、抱きしめたい、抱き合いたいと感じる衝動は？」

「そういったことは感じません」

「まったくか？」

「はい、まったく」

「……………。自分が女であるという意識はあるか？」

「一応、そういう性別に産まれたのだと自分の身体を見ればわかります」

「女である自分をどう思う？」

「剣道を極めるにつき、筋力面で劣り悔しく感じることはあります」

「男でありたかったか？」

「いえ、別に」

「……………より美しくなり、誰かに見て欲しいと想う気持ちはあるか？」

「いえ、ありません。社会人として恥ずかしくない姿であれば、それでよいと思います」

「そうか……………宮本殿は無性愛者、ノンセクシャルかもしれない」

「ノンセクシャルとは？」

「うむ、いわゆるLGBTとは、レズビアン、ゲイ、バイセクシャル、トランスジェンダーのことをいうのは知っているな？」

「はい」

「この四つに隠れて、つい見過ごされがちな上、本人の葛藤も軽微なもので目立たないのだが、N、ノンセクシャルというものがある。これは異性にも同性にも興味を示さず、また自身の性自認も希薄であり、性欲や恋といった衝動から縁遠い人間をいう」

「……………病気や障碍なのですか？」

「その判断も難しいところだ。単に個性と言えなくもない。自ら強く求めることが無いゆえ、他者からの求婚を素直に受ければ、誰にもわからず本人にさえわからぬまま過ごすこともある。単に恋をしたことのない人間、性欲の薄い人間と思われるだけだ。だが、やはり同性愛者と同様、全体の数%は存在していると調査により見込まれている」

「……………そうですか……………」

「恋や性欲というのが何なのか、わからぬと思うか？」

「はい、わかりません」

「だろうな……………陛下と芹沢殿のことを考えるのも、それは国体を慮つてのことだろうっ…」

「はい」

「……うむ……この件で宮本殿が動くのは、かえってことをしくじるやもしれぬぞ。竹刀を振ったことのない者が真剣を振れば自分の脚を切るように。陛下へ奏上するため貴賓室を訪ねたというが、何を奏上する気であった?」

「芹沢総理は、たしかに同性愛者ですが、同性愛者として異性と結婚する可能性はあること、今は伴侶にと想っていた女性が行方不明で、おそらく亡くなっているがゆえ、淋しく泣いておられること、です」

「なるほど……悪くはないな……」

「そろそろ30分になりますので戻ります。ご意見、ありがとうございます
いました」

鷹姫は礼を言い、貴賓室前に戻った。

「由伊様と島津氏がお会いになるそうです。こちらへ、どうぞ」

宮内庁の職員が貴賓室ではない応接室に鷹姫を案内してくれた。
入ると由伊と島津がいる。鷹姫は深く頭を下げた。

「おはようございます。早朝に押しかけ、申し訳ありません」

「宮本さんのお話というのは?」

由伊が問い、鷹姫は頭を下げたまま話す。

「昨夜、陛下がおっしゃいましたことにつきまして、芹沢は女でありながら女に恋するタチですが、そのような者として男子と結ばれる例も多くございます。また、今は伴侶にと想っていた女性が行方不明にて、おそらくは亡くなっておりますゆえ、深く嘆き、昨夜も淋しく泣いております。このことを陛下に奏上いたしたく存じます」

「……島津先生、どう思われますか?」

「さて、色恋の話は、この爺めには、遠い昔のことにて忘れてしまいましたな。卒業して何十年になりますことやら」

「卒業されているなら、まだ入学していない私より見識をお持ちでしょう?」

「これは、したり。では、二つ。まずもって、ご当人方のお気持ちが一であり、周りが騒ぎ立ててどうなるものでもありません。二つ、古来より皇統との婚姻を出世の道具にした例は多くあり、宮本さんが友

人であり主人である者の栄光を望むは自然なことなれど、いささか先走りの感が匂いますな。如何？」

「っ……おっしやる通りです」

鷹姫が深く頭をさげた。由伊が言う。

「頭をあげて、こちらを見てください」

「はい」

鷹姫は言われたとおりに由伊を見る。

「お兄様も少々性急でした。いろいろな出来事があり、お心が騒いでいるのだと思います。そのような時期に、うかつなことを重ねるのは、より危ういと思います。宮本さんの言われたことは伝えますが、お昼すぎには私たちは京都へ発ちます。伝えるのは、その後とします。いいですね？」

「御意のままに」

「……」

この女子高生は一般家庭育ちのはずなのに、どうして、こんな言葉遣いが自然に出てくるのだろう、と島津と由伊は少し疑問に思いつつも領いた。鷹姫は退室して四人部屋に戻る。ちょうど6時で自衛隊生活に慣れている麻衣子と里華は目を覚まし、鮎美はまだ寝ている。

「おはようございます」

「あ、宮本さん、早いね」

麻衣子と里華はパジャマから制服に着替える。着替え終わっても少し時間があったし、まだ鮎美が寝ているので室内は静かになる。その静かさを里華が破った。

「大浦陸士、メアドか、SNS、交換しない？」

「あ、はい」

素直に麻衣子はスマートフォンを出しつつ、問う。

「でも意外です。交友をさけてる感じがあったのに。どうしてですか？」

「……。誰とも連絡のとれないケータイなんて意味ないから」

「誰とも……。夕べ家族も友人も津波で、って……。誰とも連絡がと

れないんですか？」

「防衛大の同期や高校の同級生で運良く生きてる人もいるでしょうけど、私のケータイに登録されてる人とは、誰とも連絡が取れなくなつたわ」

「……………」

「この世に誰一人として友達がいなのは、淋しいし、死にたくなるから。とりあえずの友達になつて」

「はい！」

「宮本さんも交換してくれる？」

「はい」

三人が連絡先を交換していると鮎美も起きた。

「う……………おはようさん。鷹姫、珍しいことしてるやん？」

鮎美は鷹姫が女子らしく連絡先交換をしていたので問うた。

「はい、石原さんの友達になりました。彼女は友人がすべて亡くなつたそうです」

「……………すべて……………」

起きたばかりで重い話題だった。家族も友人も、すべて亡くすのは、どんな気持ちだとかと、想像を絶する。鮎美も転校したので友人らしい友人は五指に満たない。もともと同性愛指向もあつて女子との交遊は多かつたけれど、後輩だった北砂夕子を裸にした後は他の女子との交遊も減り、そのタイミングで転校した後に当選し、鮎美が議員になると知った古い友人からは多くのメッセージをもらったけれど、明らかに鮎美の地位と知名度が目当てという感じだった。あまり嬉しくないけれど、無碍にもできず静江に対応を任せ、求められたサインなどは送っていたし、夏休みなどに何人か支部を訪ねてきたものの、もう友人というより著名人との関係を喜んでいただけという気がした。そして、彼女たちは全員が大阪在住だったので、よほど運がいい子以外は生きていないと思うし、名前も覚えていない男子も同様で、それは中学、小学の同級生も変わらないと頭の片隅では考えていた。それでも家族も含めて誰一人、知己がいなくなつたという里華の胸中は察するにあまりある。これまでの態度の硬さも、その感情を押し

し隠していたのだと思えば理解できた。

「うちとも交換してくれはる？」

「ええ。総理とつながってることを自慢する友達もないけど、お願い」

鮎美と里華も連絡先を交換した。鷹姫が問う。

「芹沢総理、朝食の時間ですが、ここで召し上がられますか？ それとも食堂で？」

「もって来てもらうのも手間やし、うちも、いっしょに行くわ」

「わかりました」

「あ、待って」

麻衣子が挙手して言う。

「総理が私たちの手間を考えてくれるのはありがたいけど、食堂の雰囲気と警備の都合でいうと、ここで食べてくれる方がありがたいよ」

「そうなんや……ほな、ここで……うち一人で、ここで食べるの淋しいし、四人で食べられる？」

「あ、それいいね。なんか、秘密の会食って感じで」

「……………」

鷹姫と里華は反論が思いつかなかったので四人で食べる準備を室内に整えた。

「……いただきます」

食べながら麻衣子が問う。

「ときどき防衛大臣とか幹部が来たとき、総理と話してることって、やっぱり私たちには言えない？」

「そうやねえ……どんな拷問を受けても黙ってる自信があるなら言うてあげるよ」

「うっ…拷問って」

「そう言う、あなたは拷問に耐えられるの？」

里華がパンを飲み込んでから問うた。

「無理やね。拷問の序の口を受けたことあるけど、あれが本格的な拷問になったら嘘でも何でも喋りまくって泣くわ」

「序の口って…」

麻衣子と里華が強く疑問に思っているので鮎美は飛行機の中で陽湖から受けた仕打ちを語った。里華が食べていた目玉焼きが不味くなったという顔で言う。

「それは、もう友達ではなくて訴えた方がよくない？」

「飛行機の中は治外法権でイスラエル登録やったからね。日本の法律は通用せんよ。あと、仕返しというか償いはしてもらったし」

「どんな？」

「台湾に置いてきた。うちの身代わりに」

「……………」

「石原はんに訊いてみたかったんやけど、しつかりセクハラを警戒するよね。なんか嫌なことでもあったん？」

「ええ、父と兄から性的虐待を受けたし、神奈川あたりは電車でも痴漢も多いの。それで、うんざりよ」

「石原空尉……………」

麻衣子が心配そうに見てくるので里華は微笑をつくった。

「そんなにひどい性的虐待ではないわ。父も兄も、よく冗談で私の胸やお尻に触ってきたの。中学までは、それが普通だと思ってたけど、だんだん嫌になってきて、でも言い出すタイミングがなくて。防衛大に入ってホツとしたわ」

「うちのオヤジといっしょやん」

「総理のお父さんまで？」

麻衣子が驚いて問うた。鮎美は美味しそうに目玉焼きを食べながら答える。

「うん、中学までは、よく触られたよ。あと、うちが欲しいもんとか、お小遣いネダると、ホッペにチューしてくれたりとかの、プチセクハラ要求されたわ」

「総理がレズになったのって、それで？」

「そんなことでビアンにはならんし。もともと男は他種族というか、犬みたいなもんと感じてたから、チューしたら一万円くれる便利な犬って感じよ。けど、ある日、母さんがマジギレして、それ以来無く

なつたよ」

「何をされて、お母さんは怒ってくれたの？」

里華が興味をもって問うた。

「中3の終わり、いよいよ高校の制服ができたとき、それを着て父さん母さんに見せてたとき、あのスチャラカオヤジがスカートめくりしよってん。うちは、またか、このアホと思っただけやったけど、母さんはマジギレして怒鳴るわ叫ぶわ物投げるわの大騒ぎで、最後は泣いてやめて言うから、父さんも反省したし、うちも、あかんことなんやと感じてん。うちはビアンやし、自分が男みたいな性欲を女の身体に覚える感覚はあっても、男が女に同じ感覚をもつてるとは実感しにくかったから、高校に入るまでは、そういう男の視線とかタツチがエロいことやとは感じてなかったんよ。っていうか、うちもスカートめくり、よく友達にやったし」

「……………」

里華と麻衣子はへりに乗り込むときに風を受けている鷹姫へ、両手をあげるように鮎美が命じたことを思い出した。麻衣子が言う。

「似たもの親子だね」

「ろくでもない父親だけれど、いいお母さんね。私の母は無関心だったわ。助けてくれなかった。あの三人、私は家族が大嫌いだったけれど、それでも死んだと想うと一晩泣くほどには悲しいのね。意外だったわ。けど、おかげで私は同性愛にはなっていないけど、異性だろうと同性だろうと、触られるのも見られるのも嫌いよ。スカートをめくったりしたら必ず訴えて辞職に追い込むから覚悟しておいて」

「……………はーい……………。セクハラって、イジメといっしょで、やられる方は最初黙って我慢するし、やる方は軽い気持ちでやるからタチが悪いよなあ。うち、やった経験も、やられた経験もあるし、わかるわあ」

朝食時にするには重い話題だったけれど、仕事中には何千万人が死んで、死体の処理をどうするかや、放射性物質の処理方法と経済の立て直しなど、より重い話題を扱っている鮎美は美味しく食べ終えて両手を合わせた。

「……ちそうさまでした」

今朝は閣議は無いけれど、義仁を前にして大会議室で状況報告する予定なので身支度を調べ、定刻15分前に鷹姫と顔を出した。他の閣僚もそろっていて、閣議なら鮎美を上座にして口の字型に顔を合わせていたが、今日は義仁を一段高い壇の上に迎え、鮎美たちはコの字形に並ぶ。定刻を前にして壇の上の一つと、壇の横に一つ椅子が追加された。石永が開始を告げる。

「これより陛下をお迎えし、御前にて報告会を行います。全員、ご起立ください」

一堂が起立すると、大会議室へ義仁と由伊、島津が入ってきた。当然、義仁は壇中央の椅子に腰かけ、その隣に追加された椅子に由伊、壇横に追加された椅子へ島津が座した。石永が述べる。

「由伊妹宮様からの要望で、ご参加いただきます。また、学習院院長の島津氏にも陪席いただきます。よろしいですか？」

とくに異議はあがらなかったので石永は続ける。

「では、現在までに判明している震災の状況ですが、あれほどの地震でありながら余震が軽微であるのは不幸中の幸いです。とはいえ、本震の巨大さはいうまでもなく、少なくとも3000万の人命が失われております。まったく機能停止し人口の大半が失われた自治体もあり、この再編に取り組み始めたところですよ」

概要を石永が話し、次に畑母神が述べる。起立して義仁へ一礼してから資料を読む。

「すでに一週間を過ぎましたが、なお漂流し命をつないでいる方もおられますので、今しばらく海上自衛隊および海上保安庁による救助活動を続けます。また、陸においては陸上自衛隊、警察、消防、自治体の協力により救助活動ならびに生活支援を行っております。しかしながら、航空自衛隊と海上自衛隊、海上保安庁が尖閣諸島において中国人とおぼしき集団を発見し、退去するよう警告しておりますが応じず、本来は不法入国として逮捕するのが正当な対応ですが、海上保安庁による上陸を阻むように中国籍の船が島の周囲を旋回しております。この状況は昨夜から続き、現在も継続しております」

報告する畑母神は短い仮眠を繰り返したただけのようで目が疲れて

いた。次に夏子の番が来た。

「財務省の形は再編しつつありますが、日本銀行および都市銀行が動いていないため、実際的なお金の動きができずにいます。霞ヶ関で保存していた証券、外貨準備等、地下金庫にて保存していたような貴重品は幸いにして残っていますが、この開封に手間取っています。また、いよいよ一般市民も自己の財産を探しに出るため、再び居住地に戻るなどの動きをする方もおられますが、個人がタンス預金に使っていたような金庫は同種同形のもものが流通しており、あれだけの津波の後、たまたま発見した自分の物と同一の金庫が真実、自分の所有物であるかは開封してみないとわからず、この開封のための鍵も流失しているような状況ですから、今後、大きな混乱、場合によっては騒乱が予想されます。そして、通貨価値は一週間、固定されましたが次の一週間で1%動きます。おそらくは円、米ドル、豪ドル、ニュージーランドドルが下がり、欧州通貨が上昇すると見込まれます。物価は良く言えば、市民が相互に監視し合い、悪く言えばインターネットに晒されるなどの通報、密告を恐れる心理から目立った上昇はありませんが、じわじわと上昇し、また品薄状態が悪化しつつあります」

新屋も述べる。

「さきほど、加賀田大臣が述べられたように、被災地から金庫を拾うなどの拾得物横領が、これから目立ち始めるかと思われ、いよいよとなれば夜間の外出禁止などを総代理より指令いただく必要が出てくるかもしれません。また、避難所での事件も少数ながら発生しており、個々に対処しているところですが警察官の人手も足りておりません」

それからも、すべての閣僚が所轄する行政の状況を報告したので、すべてが終わったのは昼前になった。最期に鮎美が立つ。

「これまで述べられた通りの状況に加え、来週の火曜22日には、副都心を福井とするか、富山とするかを決定します。この決定にさいしては、不公平のないように言い出した本人である私は意見を述べるにとどめ、決定は私以外の閣僚による多数決によって行いたいと考えています。以上です」

黙って聴いていた義仁は頷き、何か言いたそうな顔をしたけれど、天皇の立場で意見することに慎重さを要するのは自覚しているので、労うのみにとどめる。

「ご苦労様でした。引き続き、復興のため尽力してください」

「はい」

「」「はい」「」

鮎美の返事につづき閣僚たちも答えた。それから義仁と由伊は一度、貴賓室に戻り、鮎美たちは残ったままで昼食準備待ちの雑談形式の話し合いになる。鮎美は新屋に声をかけた。

「夜間外出禁止って、必要なんですか？」

「現場からは求める声があがっています。もちろん、本当に自分の財産を探している人もいるのかもしれないけれど、わざわざ夜間では危険もあるし。どちらかといえば、不正なことは夜に行われる。これを見張るために、そのうち自警団などができると、また衝突も起こるから未然に防ぐため、いつそ夜間は公務員以外は外出を禁じる。公務員も正当な公用のある者に限ることにしたいと」

「ほな、そういう命令の文案、すぐに作ってもらえます？ 今日、土曜日ですし、土日の夜が一番、危なそうですやん。げんに無事な県のアホな若者が事故った原発に近づく動画をあげてるらしいですし」

「わかりました。すぐに」

「あ、待ってください」

制止して久野が言う。

「公用のある公務員のみ限定されると、物流面で非常に困る。寸断された高速道路が通れないので迂回しているトラックもあります。また、危険ながら夜間も含めて24時間体制で復旧工事してもらっている道路もあります」

「それは、たしかに問題ですね……だが、正当な理由のある行動をしている民間人と、不当な行動をしている民間人を見分けるのは、難しい。服装なども着の身着のままな人もいる……」

「ほな、命令としては公用のある公務員および復旧工事、輸送など正当な理由のある民間人のみ夜間行動可として、それ以外は禁止。違反に

は罰金をつけるのと、見分けるために職務質問する権利は平時よりも強固に、ただし、いよいよ罰金をかすのは軽犯罪での逮捕より慎重に、それでいて不正なことを職質で見つけたら、その罪名での処罰は厳格にするというので、どないでしょう?」

「なるほど、その案で夜まで、いえ夕方までにつめますので即時、公布施行してもらえますか?」

「はい」

話が終わるのを待っていた静江が言ってくる。

「芹沢先生は富山と福井、どちらがいいという意見をお持ちなんですか?」

「うーん……秘密。当日に言うわ。何より22日にコンペするやん。それまでに先入観は無い方がいいかなって」

「私は富山市がいいと思いますよ。あそこは地元議員たちも協力的ですし」

「福井は非協力的なん?」

「そ……そんなこと、ないと……思いますけど……。富山にはノーベル街道というノーベル賞をいっぱいもらった街道もあるんですよ」

「道がノーベル賞もらうの?」

「そ、そうではなくて、その道あたりから受賞者が、いっぱい出てるんですよ」

「ふーん……って、せやから先入観なしにするし。福井かって、なんかあるやろ。へしことか」

「へしこって?」

「鮎寿司みたいな名物料理らしいよ。父さんが買ってきたことあるわ」

「美味しいんですか?」

「鮎寿司よりは匂いもマシやったかな。サバで作るらしいし」

「富山の白エビは絶品ですよ。富山湾の宝石と言われるくらい」

「そうなんや。……まあ、喰い物グランプリちゃうし、うちが言い出してなんやけど、食べ物は無関係やろ。ようは、どっちが副都心に向いてるかかって話で、久野先生あたりの意見が最重要かな、と思うわ」

「そ…そうですね…芹沢先生は多数決に加わらないのは、どうして？」

「あんまり独断専行でもあかんかなって」

「それは、いい心がけですけど…」

静江はこれ以上、鮎美を口説いても票にならないので他の閣僚のところへ行つた。鈴木が鮎美に声をかけてくる。

「いつそ北海道に副都心をおくのは、どうです？ 札幌は無事ですよ」

「あはは…、さすが選挙で叩き上げられてはる先生は地元愛が強いですな」

鮎美が空笑いし、鷹姫が首席秘書官として全体に言う。

「みなさま、昼食の用意がととのいました。食堂へご移動願います」

全員が食堂に移ると、地魚のフライと加賀野菜の炒め物、味噌汁、白米、デザートは林檎というメニューだった。中央に義仁と由伊の席を空け、閣僚たちが囲んで座り、閣僚の秘書や行政官僚は外周に、さらに外側を囲んで階級の高い空自と陸自の隊員が座る。すぐに義仁と由伊も現れて宮内庁職員と鷹姫が案内して中央に座つた。今は壇の上ではなく全員が同じ高さとなる。鮎美はテーブルを挟んで義仁の正面という位置だった。義仁と由伊の左右には夏子と鈴木が選ばれている。石永は鮎美の隣で久野は反対の隣だった。

「皆様おそろいとなりましたので、どうぞ、お召し上がりください」

鷹姫が全体を見て言った。鷹姫自身は鮎美の後方に座る。食事が始まり、石永が義仁に声をかける。

「長旅でお疲れは出ていませんか？」

「大丈夫です。由伊が少し心配ですけど」

「私も平気ですよ、お兄様」

今は政治の話などは出ずに歓談として穏やかに時間が過ぎるけれど、義仁は何か言いたそうに迷っていた。その迷いは正面にいる鮎美に伝わっているので、率直に訊いた。

「なにかおっしゃりたいことがあるのですか？」

「…はい。ですが、立場もありますから…」

「……………」

鮎美は黙って白米を食べる。義仁も黙って食べるので鷹姫が後方から言った。

「おそれながら、陛下がお想いのことが気にかかります。教えていただけませんか？」

「……………宮本さんは、お米は好きですか？」

「は？ ……はい。好きです」

食べ物で嫌いな物が無い鷹姫は頷いた。鷹姫の肯定を受けて義仁は微笑む。

「私も好きです。そろそろ田植えの季節というのに、この震災では今年の田植えは、どうなるか、それが心配なのです」

「田植え…ですか…」

てつきり鮎美へ何か言うのかと思ったのに、鷹姫は期待が外れて戸惑った。

「ケガをされた農家の方もいるでしょう。元気でいても田が海水に浸かった人も。田畑を耕す機械も軽油で動くのに、その供給も危うい。もともと農家は高齢の人々がになってくださったのに、この震災で、どうなるかと思うと心配なのです。だから、どうこうせよ、と私の立場で申すことはできませんが、芹沢さんは、どうお考えですか？」

「はい。…………えつと…………農林水産のことは、正直、あまり考えていませんでしたけれど、陛下がおっしゃるように、田はあっても人がいない、人がいても田がやられてる、というケースもあるでしょうし、軽油がなければ手作業が膨大となりますから。…………これを埋めるために、人材派遣の農協を通じてやってもらう策があるかな、と思います」

「人材派遣ですか？」

「お年寄りや田を大切にしているし、なかなか他人には売りはりません。その結果、耕作放棄地の問題が出てきました。自分で耕せないのに他人には売らない、売らずにもっていても子供も継がない、そういう問題です。すでに田を作ってもらおう貸し出しは多く行われていましたけれど、これを発展させ、農協から人材派遣する形で繁忙期だけ

でも人手が回るようにしたり、非農家の若者、就職に失敗したり、事情があつてニート化した人などに働いてもらう場を作る形で両者を結びつけたいと」

「それは素晴らしいですね」

義仁は頷いたけれど、石永が言う。

「それは難しいだろう。農家は儲からない。そんな人件費は払えないぞ」

「この震災が起こる前なら、連合インフレ税を財源にと言いたかつたところですけど。今は財務省が立ち直れば、なんとかなる可能性がある」と、うちは見えています。日本の人口は半減したのに、流通している通貨は銀行の金庫などに、かなり残ったままです。さらに、日本政府の借金であつた国債は銀行に買ってもらつていましたが、その銀行は国民の預金で買っていました。ところが大本の債権者である国民は半減、その多くは法定相続人も亡くなつていよう。相続する者がいないとき、その財産は国庫のものとなります」

「…………たしかに…………死者の金をあてにするようで申し訳ないが……冥土には持つていけないからな…………」

「それに、これから食料価格は上昇するでしょう。今まで日本社会は一次産業をおろそかにしすぎました。二次産業も肥大化後に効率化し、今では第三次産業、サービス業どころか、さほど必要性のない美容や広告、場合によっては悪徳商法など、人を騙してでもお金を集めようとする産業が盛んです。銀行でさえ、その傾向がありました。証券、不動産、オレオレ詐欺、化粧品、ブランド物、怪しげな投資話、みんながみんな儲けよう儲けようとするから、騙してでもお金を奪い合う始末です。本来、一次産業と二次産業が効率化された時点で、人は、もつと自由になれたはずなのに、実際はその逆で労働時間は延びるばかりでした。いつそ、ここらでガラガラポンと一次産業に人手をシフトさせたらええんです。その財源はあり、そして耕耘機などの燃料は乏しくなる、ほな、人の手でやるしかないんちやいますか？」

「二次産業へか…………」

石永が考え込み、義仁が問う。

「芹沢さんは田植えをしたことがありますか？」

「いえ、ありません」

「ないのか？ 小学校でやるだろう？」

「思わず石永が問うた。」

「そうなんですか？ うちには記憶にないですよ」

「大阪だと田んぼが無いのかもなあ……」

「石永先生はあるんですか？」

「ああ、小学校で実習があるし、ときどき春に地元の農家を手伝いに行ってる。まあ、オレの場合は人気取りだが。歴代の天皇陛下も慣習として田植えをされているぞ」

「陛下もされていたのですか？」

「はい、毎年、由伊と手伝いに出ていました。あれは正直、なかなか大変ですよ」

「そうですか……。うちは何一つ実務経験がなくて頭で考えるだけです……」

本当に鮎美は働いたことがなかった。アルバイトをしたこともない。鮎美が視線を落とすと、義仁は励まそうと言う。

「芹沢さんの考えは素晴らしいと思いますよ。私は、ただ今年の田植えが心配だったのです。それが少しでも行われるなら、芹沢さんが何万の苗を植えたも同然です。そんな顔をしないでください」

「……………おおきに、ありがとうございます。あ、おおきに、という関西弁は失礼ですか？」

「そんなことはないですよ。東京で生まれ育ったので面白く感じますが、もともとは私たちも関西出身のはずですから、これから京都に戻れば私も由伊も変わるかもしれない」

「お兄様、そろそろ出発しないと」

「ああ、そうだね。つい話し込んでしまった。政治に口出しして、すまない。忘れてほしい」

「いえ、重要なことを、ありがとうございます」

鮎美と石永は異口同音して礼を言った。昼食が終わり、義仁たちの出発を通用門で見送ると、緊張が解けた石永が言う。

「ふーっ……ある意味、御前会議だったな」

「いかにも」

三島が頷く。鮎美は気になっていることがあるので一瞬だけ畑母神と目を合わせた。それで畑母神も察した。それとなく閣僚たちから離れ、畑母神と二人きりで話せるように彼が使っている個室に入る。当然、鷹姫と麻衣子、里華、知念、今泉はドアの前に立つ。

「この部屋って盗聴器のチェックはりました？」

「……いや……」

「ほな、バスルームで水道を流しっぱなしで話しましよ。そんなところに二人きり連れ込まれるのは困る言わはるなら遠慮しますけど」

「……君の感覚は逆だなあ……困るのは普通、女性だ」

「そうなんですか。前に鶴田司令に注意されたんで。まあ、あのとときは夜中で、うちはバスローブやったから余計かと思えますけど」

「彼も、まだ若いんだ。考えてやりなさい」

「はい、うちが逆の立場やったら我慢するのに苦労したかもしれんし、配慮が足りませんでした」

「それは女性と女性でという状況で？」

「もちろん」

「そうか……やっぱり、根本的に感覚が違うなあ……まあ、そんな話は、どうでもいい」

畑母神は同性婚や同性愛については否定的な保守的思想をもって、いるけれど、政治的なパートナーとなってくれている鮎美は国家防衛面では保守的な思想に傾いてきてきているので、もう個人的な性的指向の話は本気で、どうでもよかった。二人はバスルームに入って水道を出したままにする。

「夕べ、尖閣諸島は、どうなりました？」

「ああ、軍事的な衝突はしていないが、海上保安庁の巡視船が何度も衝突を受けた」

「映像はありますか？」

「ある」

「ほな、あとで司令室で見せてください。それで？」

「こちらの上陸を阻むように船をぶつけてくるので安全にボートをおろせずにいる」

「……ヘリから島へ降りるのは？」

「ヘリからの降下は、より危険なのだよ。そして、もし逮捕のさい抵抗されたら発砲し制圧するのかな、という問題がある」

「向こうは武装してるんですか？」

「不明だ。明るくなくても、持ち込んだ物品すべての中までは見えない。銃をもっているかもしれないし、もっていないかもしれない。やはり状況は司令室で説明しよう。その前に、米軍撤退の件、今まで陸海空の幹部それぞれ一名ずつにしか知らせていなかったが、私たちの方で人選し、少なくとも5名ずつ合計15人。できれば基地司令クラスには全員に伝えておきたい。いずれわかることだが、心づもりと物理的な準備もある。どうだろうか？」

「畑母神先生が、そう判断されるのであれば、うちに異議はありません。ただ、うちの方でも考え事をするのに鷹姫まで排除しているのは、つらいです。鷹姫にだけは話させてください。あと、少しずつでも、うちと鷹姫、それに同級生でデマ対策の手伝いをしてもらっている込山義隆（こみやまよし）という者に、現代の戦争の基本的なことを教えてもらえませんか？ 正直、うちの頭の中は長篠合戦くらいのレベルです」

「……。まあ、そうだろう。高校で教えないし、だいたい国会議員も知らないから、気に病むことはない。わかった、ごく初歩的なことは、身近にいる石原空尉に講義するよう命令しておく。より広範なこととは幹部に時間を作らせよう」

「お願いします」

「では、米軍の件、引き続き極秘とするが、認知範囲を広げるといこうとで」

「はい」

鮎美が水道を止め、畑母神と二人で司令室へ向かう。司令室には二人だけでなく、鷹姫と麻衣子、里華、知念、今泉も入室する。その道中で畑母神は里華に基本知識を講義するよう命令し、また麻衣子には

謹慎の解除と再び鷹姫の従卒役を続けるよう伝えた。

「では、昨夜からの状況を説明します」

海自の幹部自衛官がモニターを指しながら語る。

「高い可能性で中国人と思われる集団が島に上陸し、何らかの機器を設置しています。これに対し、畑母神防衛大臣の命令により海上保安庁の巡視船2隻、海自の護衛艦2隻をさし向けています。明け方に到着し、巡視船2隻が接近しようとしたが、周囲に5隻の中国漁船がおり、衝突をじささない動きで妨害してきております。繰り返し、接近を試みていますが、双方の安全を考えると強引な操船はできず、小競り合いが続いている状態です。映像を流します」

別のモニターに編集された画像が流れる。白色の巡視船に青と赤に塗装された中国漁船が浅い角度で衝突してくる映像だった。

「めっちゃ既視感あるわ……」

鮎美は百色がユーチューブに漏洩した映像を思い出したし、鷹姫たちも同様だった。説明が続く。

「こちらは巡視船2隻と護衛艦2隻に対して、中国漁船が5隻、10海里離れた海域に中国の海上保安庁にあたる海監の執法船が4隻、さらに50海里的距離において中国海軍の駆逐艦が3隻、配置されています。こちらの護衛艦も同様に50海里をしております。1海里は1852メートル、50海里は約93キロです」

畑母神が補足する。

「もっと多くの艦で対処したいが、いまだ救助活動を続けている。この4隻の他、交替に4隻を向けているので合計8隻をさかれているが、それでも多勢に無勢だ」

鮎美が問う。

「お互いの軍艦が遠いのは、軍事衝突を避けるためですか？」

「ああ。あと、現代の戦闘艦は大戦中の艦と違い、きわめて装甲が薄い。ぶつけて相手を停船させたり牽制するような設計にはなっていない。今では海保の船の方が衝突や機銃程度の攻撃に対する防御は高いので、このような布陣になっている。まるで自衛隊が高みの見物をしているように見えるかもしれないが、これで両軍とも必殺の距離

なのだ」

「……………」

鮎美が考え込み、畑母神は続ける。

「海保も頑張ってくれているし、よく指揮に従ってくれている。現場には百色くんを飛ばしたから、彼らの士気も高いだろう」

「……………今後の選択肢は？」

「この状況が続けるか、発砲もじさずに拿捕と逮捕に踏み切るか、諦めて撤退するか」

「とりあえず撤退は無いわ」

「……………。君が島の一つくらい諦めようという女の子でなくて、よかったよ。撤退と言いつき出されたら、どう説得しようかと思うから」

「現代戦には知識不足ですけど、これをセクハラやと思えば、ちよつとを許したら、次は、もつときよる。肩に触るんを許したら、次は腰、腰の次はお尻、常套手段ですし」

「……………まあ、そのたとえも外れてはいないが……………」

女子の口から聞くのは違和感があるな、と畑母神は思ったけれど言わないことにした。鮎美は横髪を掻き上げて耳にかけた。

「鳩山総理が前に中国漁船の船長を無罪放免で逃がすから、今回は、こうなる。津波の被害で手一杯なところを狙ってくるやなんて……………あ、中国も報道されてませんけど、それなりに津波の被害あつたはずですよんね？ 台湾も受けてたし」

「中国の東海岸には5メートル前後の津波が襲いかかったと予想されている。それなりの被害はあつたらう」

「たつた5メートルか……………自然災害は不公平やなあ……………」

「まっただな」

「中国政府に抗議はしてますか？」

「鈴木外務大臣が正式に何度も抗議しているが、中国漁船は中国政府の管理下になく、独自に放射性物質を測定する機械を設置している自然保護団体だそうだ」

「やっぱりそのネタを口実に……………」

「この状態から、どうしたものか……………常套策であれば、より多数の艦

を派遣してから拿捕、逮捕とするのだが……」

我々には米軍の後ろ盾が無くなった、と畑母神は目だけで鮎美に語り、続ける。

「実は燃料が無い。このことは予想できることだが、今ここで聴いている者も、よそで言えば嚴重な処分を覚悟しておいてほしい」

チラリと畑母神が麻衣子たちを見たので自衛官らしく背筋を伸ばして答えている。

「抗争がエスカレートすれば、向こうもより多数の艦を出してくるだろう。航空機も。それに対応して、より多数を動かせば、しばらくはもつが、あつという間に無くなる。今も4隻しか派遣していないのは救助活動もあるが油を惜しんでのことでもある。むしろ、救助活動があるので少数しか向けられないという建前で油を惜しんでいることを隠せるような状況だが、津波の被害を分析すれば、日本の製油能力が3分の1になり、近いうちに民需用が枯渇することは推測できるはずだ」

「この4隻で上陸している者たちを逮捕することは不可能なんですか？」

鮎美の問いに畑母神は、ゆっくりと頷いた。

「不可能ではない。警告射撃の上、体当たりしてくる漁船に発砲、機関を破壊し停船させる。上陸している者へも警告射撃の上、ボートをおろして逮捕に向かう。それで彼らは中国政府に雇われた半民半官の便衣兵のようなものだから降参するだろう。問題は、その過程もしくは結果において、海監の船まで介入してくる可能性があること。海監の船の方が多数だ。体当たりよりは警告射撃をしてくるだろう。すると、こちらも警告射撃をする。さて、次は狙って当てるように撃つか。どちらが先に。そして撃沈しないまでも少数の死傷者はでてくる。ここで平時なら終わったかもしれないが、在日米軍、在韓米軍がハワイへ救援に出ている、アメリカ国内の事情もあり、おそらく尖閣諸島などには米軍としてはかまっていられない状況なもの、中国側も折り込み済みだろう。それゆえ、駆逐艦まで出している。事態のエスカレートを望まない我々としては選択肢が限られてくるわけ

だ」

「…………無駄かもしれませんが、うちが動画で中国と国際社会に訴えてみます」

「なんと言うおつもりか？」

「この救助で手一杯なときに、こんなことをされては困ります、まだ生存者が漂流していて、今日までに在日中国人、観光中やった外国人、中国人も救助してるし、今日も明日も助けるかもしれないのに、いらんことに船をつかったら、その分だけ中国人も洋上で救助を待ちきれず脱水して死ぬんや、と」

「うむ…………少しは態度も変わるかもしれないな…………そもそも、国家のリーダーが18歳という危うい状況なのは国際社会も注目しているわけだから。私も後ろに立とうか？」

「それやと、いかにも畑母神先生に言わされたみたいですやん。途中で嘔泣きするかもしれんし、いつそ一人で頑張って訴える方がええんちやいます？」

「…………嘔泣きかあ…………」

「というか、この場合、嘔泣きやなくて本気入るかもしれませんけど」

「うむ…………一応、一国のリーダーなのだから、子供のようにワンワンとは泣かないでほしい。せいぜい、一粒二粒、涙を零すくらいで」

「畑母神先生と鈴木先生も収録を監修してくれはります？ それでOKやったら配信ということぞ」

「ああ、そうしよう」

広報室に移動して鈴木を呼ぶと事情を説明し、打ち合わせをして収録が始まる。鮎美はカメラの前に一人で立った。

「昨夜から尖閣諸島に十数人の不法上陸者があり、この逮捕に海上保安庁の巡視船を向けておりますが、中国籍の漁船が体当たりによつて妨害してきます。そばには中国政府の海監の執法船、90キロ離れて中国海軍の駆逐艦まで。彼らは放射性物質の測定と言っていますが原発事故とは、まったく関係のない地域です。放射線の状況は福岡と鹿児島島の測定値を発表しております通りです」

鮎美の背後には官僚たちが用意したフリップや映像が表示され、島の周りで起こっている出来事がわかりやすく見せられる。

「何より、まだまだ海上に漂流し、救助を待つ人たちがいるのに、このようなことへの対応に船をさかねばならないことは、悲痛を通りこして、断腸の思いです。このようなことを仕掛けている人に知って欲しい数字があります！ 242人と、621人です！ 242人とは、不運にも地震の日、日本を観光旅行やビジネスなどで訪れていた滞在中国人のうち、不幸中の幸い、日本の船が漂流しているところ救助した数です。同じく621人とは仕事や留学で日本に住んでいた在日中国人のうち、津波で流されながらも幸運にして日本の船が救助した数です。今日もまだ、救助は続いています。もう72時間が、とつくに過ぎ、それでも壊れた船や浮く物に必死にしがみついて、雨水を啜って生きている人がいます。大半は日本人ですが、数%は中国人、韓国人、ベトナム人、そして欧米の人もいます。尖閣諸島の出来事に現在8隻をさいていますが、救助を続けていたなら、まだまだ10人20人と救えたでしょうに！ う、くっ…」

話ながら鮎美は涙を零した。嘘泣きではなく、やっぱり詩織のことを思い出している本気での嗚咽だった。

「必死にしがみついて救助を待っていたのに、見えていた船が別の目的地へ方向転換する絶望がわかりますか?! 国際的な仕事をするほど優秀やった中国人ビジネスマンもいれば、親御さんの期待を受けて日本で学ぶ中国人留学生もいるでしょう?! 日本の工場や漁村で働いて中国にいる両親に仕送りする人も！ そんな人たちも津波に巻き込まれて、流されて、それでも！ それでも、まだ生きてるかもしれんのですよ?! 8隻の船があれば、次々生存者を見つけられます！

なのに、このまま事態が悪化すれば16隻、20隻と多数を尖閣諸島に派遣しなければなりません！ それで人が死ぬんです！ 現場で発砲がなくても！ 息のあった人が、誰にも見つけられず死んでいくんですよ！ 大事な家族が！ 242人と、621人！ まだ増やせるかもしれんのに！ 余力があるんなら、この800人を迎えに来てあげてください！ そういうことに船を使ってください！

…ぐすつ…」

両目から涙を流していて、やや感情過多になってしまったので、見直してから撮り直しになった。顔を洗ってから気持ちを入れ替え、さきほどよりはトーンと感情を落として演説し配信することになった。外務省の職員が英語と中国語もつけてくれる。鮎美は二度目の涙は一筋だけだったので鷹姫がくれたティッシュで拭いていると、麻衣子が言ってくる。

「なんか、総理っていうより女優って感じかも」

「ぐすつ、誉められたと思っておくわ。さて、女の武器が通用するか、どうか」

涙を拭いた鮎美は畑母神に頼む。

「尖閣諸島で頑張ってくれてはる艦長さんたちには、現状を維持、引かず、攻めすぎずで対応してもらえますか？」

「わかった。そうしよう」

しばらくの方針が決まり、畑母神は司令室へ、鮎美は貴賓室へ移動した。鮎美は貴賓室に入ると麻衣子と里華に言う。

「ちよつと二人は出て。鷹姫に話があるし」

「はい」

「変なことされそうになったら悲鳴をあげなさい。助けてあげる」

二人が退室すると、鷹姫は期待した目で問うてくる。

「陛下へ、お返事されるのですね？」

「は？ ……いや、その話とは、ちやうよ」

男性と結婚することについて、ほとんど考えていない鮎美は貴賓室でも声をひそめて話す。

「ときどき畑母神先生らが、ここに来てくれてはるときの話なんよ」

「その話ですか……」

二人は最大関心事に齟齬が生じていたけれど、鮎美の顔がいつにも増して真剣なので鷹姫も上擦っていた気持ちを押さえた。

「聴いて、びつくりしても大きな声は出さんといてな」

「はい」

「実は在日米軍が本国へ撤退するって、うちに通告してきたんよ」

「……………」

覚悟して聴いたので鷹姫は声をあげず表情も変えなかった。

「今、ハワイの救援に行くって名目で日本を出て行ったけど、津波で戦力の大半がやられたらしいし、アメリカは原発事故に加えて、白人黒人で内戦になりそうな気配まであつて撤退を決めたらしいわ」

「……………逃げ足の速い……………」

鷹姫はシヨックを受けた様子はなく鼻で笑うような風だった。

「これ今現在、機密中の機密で、うちと畑母神先生と一部の幹部自衛官しか知らんことなんよ。石永先生にさえ、言うてへんの」

「そうですか……………それで、ここで会議をされていたのですか」

「そうよ」

「わかりました」

「……………。鷹姫、あんまり驚かんね。うちも、どれくらいのことなんか、軍事関係の知識がないからわからんけど、明らかに極東のパワーバランスは変わったやろ」

「はい……………そうは思います……………」

「ともかく、そういうことなんよ。頭に入れておいて。その上で、うちらも軍事的な知識を教えてもらう予定なんよ。とりあえず石原はんが講義してくれるし、義隆はんもまじえて学ば」

「はい」

鮎美は麻衣子に義隆を呼びに行ってもらい、里華には講義を頼んだ。里華は悩みながら何から教えるべきか考え、資料室から冊子を選んできた。

「では、はじめます」

「「お願いします」」

鮎美と鷹姫、義隆が貴賓室で並んで座り、麻衣子は近くに立つ。里華は冊子を開いて鮎美たちに見せながら語る。

「まずは、この遺体の写真から見てください」

「「……………」」

「うっ…」

麻衣子が呻いた。見せられたのは戦車に轢かれた陸自隊員の写真

だった。自分と同じ制服を着ている人間が戦車に轢かれて潰れている写真は背中が寒くなる。鮎美と鷹姫、義隆は学校の授業を聴くように黙っているので里華が続ける。

「この事故は模擬戦中に生じたものです。戦車側の運転手は茂みに隊員が伏せていることに気づかず、隊員の方は亡くなっているので事故原因は推測になりますが、味方戦車なので回避してくれるものと思いい込み、伏せたまま回避せず轢かれてしまったものです」

「……………」

「次の、この写真を見てください」

里華は別の冊子を開いた。護衛艦の甲板で頭部が潰れた隊員が倒れている写真を見せられる。

「この事故は魚雷装填中に生じたものです。クレーンでつり下げている魚雷がバランスを崩し、この隊員の頭部を直撃し、甲板構造物との間に挟まれ、頭蓋骨は粉々に砕け、脳が飛び散っています」

「……………」

「……………」

また麻衣子が呻く。里華は続ける。次は輸送ヘリの墜落事故で死亡した空自の隊員の写真だった。五体が千切れ、人の形に見えない。

「この事故は整備ミスから生じたものです。離陸後、20分で機体の異常を連絡し、帰還を試みるも墜落、住宅地をさけ、山中へ落ちていきます」

「……………」

「…ハアっ……………」

麻衣子は気分が悪くなり胸を押さえてタメ息をついた。里華が言う。

「あなたがショックを受けて、どうするの？」

「だって、きつい写真ばかり……………戦車の事故は先輩から聞いたことがあるやつだったし」

「続けます」

それからも里華は10枚以上、殉職した写真や生存していても、ひ

どい負傷をした写真を鮎美たちに見せた。けれど、三人とも顔色を変えないので里華が鮎美へ問う。

「よく平気な顔で見えていられるわね？」

「いえ、平気ではないですけど、どういう関連と、教育効果を狙ったものなんですか？」

「……………。今見せたのは、すべて戦争が起こっていない平時の訓練などで生じたものです。もしも、戦争となれば、この千倍、万倍の被害が出ます」

「……………」

里華は今度は義隆と鷹姫に問う。

「あなたと宮本さんも顔色を変えないわね。平気なの？」

「まあ」

「はい」

「……………。ちゃんと写真を見ていた？」

里華が心外そうに言うので義隆が言い訳する。

「オレと宮本は軽い発達障害があるかもしれないから、他人への共感が欠けてる。そういう写真を見せられても、あんまり同情しないんだ。自分がケガしたわけじゃないし」

「……………発達障害……………」

「込山、私に発達障害の疑いがあることは、あまり他人に言わないでください。石原さん、大浦さん、黙っていてももらえますか？」

「え、ええ……………」

「はい」

里華と麻衣子が頷き、里華は疑問に思ったので鮎美へ問う。

「あなたも発達障害か何か？」

「うちは、ただ同情せんように心を閉ざして見ただけよ。同情したら気分悪くなるか、泣けてくるか、するやん。今は講義やし早く知識をえなあかんから、そういう感情は抑えて見てるんよ」

「……………その歳で、そんなにうまく感情をコントロールできるものなの？」

「今まで、さんざん同性愛を隠してきて、いろいろあったし。そもそ

も、うちら人間は、けつこう冷酷なもんよ。毎年5000人が交通事故で亡くなつても平気やし、毎年3万人が自殺しても、みんな美味しく夕ご飯を食べるやん。いちいち毎日、報道されんかっただけで単純計算、一日に13人が交通事故で死んで82人が自殺してるんよ。人つて他人の苦痛に、かなり無関心で無神経やよ。石原はんかて同性愛者の苦痛なんて欠片も想像できんやろ？」

「……それは……たしかに……でも、こういう死傷の痛みは共通なはず」

「そやから、心を閉ざして見たし。鷹姫と義隆はんは、ちよい普通とは違うかもね。それも個性やと思うし、こういう人の方が医者や消防士には向いてるかもしれんね。血い見てパニックになるようでは勤まらんやん。その点、大浦はんは共感性たつぷりやな」

「えつと……誉めてくれた？」

「ある意味な」

鮎美は肩をすくめてから里華に促す。

「石原はん、講義を進めてください。ただ、注文をつけさせてもらえんなら、悲惨な事故を見せることで何が狙いか教えてもらえますか？」

「……、私たち自衛隊が扱う機材や武器は一つ間違えば、取り返しのつかない事故につながります。人の死をリアルに感じてみなさい」

「すみません。そういう情緒的な話も大切ですけど、今はもつと理論というか、論理というか、概論とか無いですか？ 軍事概論みたいな。とくに、うちの立場、総理大臣の立場で知ってる方がええことを教えてください。一人一人の死は重いですけど、10人の命と1万人の命やったら、どっちを優先するか、迷うまでも無く後者という考え方で」

「……ずいぶんマキャベリックなのね」

「今、何千万という人が亡くなったのにリアルに感じたたら心が壊れますやん。あえて数字として考えるようにしてます。それが政治家の立場やと思います。うちらが予算配分で生活保護を手厚くすれば、その分野で自殺などが減るでしょうし、道路安全の工事に予算を配分す

れば事故死が減ります。戦争をしていなくても、実は予算で人の生き死に決まっていますから。そういう視点から学びたいんです。お願いします」

「……………では、防衛学について話します」

里華は防衛大学校で習ったことを話し始める。

「防衛学とは国家の安全と存続を内外の勢力から守ることを体系化したものです。外部の勢力とは、多くの場合は他の国家、ときに国家ではない集団、組織などになります。内部の勢力とは反乱や暴力的手段によつて国家統治の体制を変えようとする者たちのことで、これは自国民のみによつてなされる場合もありますが、外部の勢力に扇動、援助を受けて行われる場合もあります」

「……………」

「逆に侵略側の視点から見ると、侵略には直接侵略と間接侵略があります。直接侵略とは、いわゆるイメージするような侵略であり、他国に軍隊を派遣し、そこを占領し植民地化もしくは自国の領土とすることです。間接侵略とは相手国の内部に働きかけ、反乱を起こさせたり、道路や鉄道などを爆破して混乱させるなど、正面切った戦闘ではない方法で攻撃することです。宮本さん、今言ったことを理解しているなら、間接侵略の例を歴史からあげてみてください」

「はい。……………島原の乱でしょうか？」

「……………まあ……………それも、そうだったかもしれませんが……………もう少し現代の例はありませんか？」

「では、三島大臣が起こしたクーデターは？」

「……………ありましたね、そんなことも……………あの人は今、大臣なのが微妙ですが、あれは未然に発覚して懲戒免職で済ませましたし、調査によつて外国勢力との関わりは否定されています。込山くん、何か無い？ 1945年以後で」

「ロッキード事件……………は？ ダメですか？」

「ダメではないですし、とても、いい例です。間接侵略というのは、見えにくい特徴があります。たとえば実行された後でも、それが間接侵略であったのか、単なる事件であったのか、わからなくなります。あれ

が力を持ちすぎた田中総理に対するアメリカの陰謀だったのか、それとも単なる汚職だったのか。今でもわからないことになっているのでアメリカの一部が、そう画策したのであれば、実に成功した間接侵略の例と言えます。逆に間接侵略を防ぐ場合、いわゆる国策逮捕などがあります。たしか、鈴木大臣は自身の逮捕を今でも国策逮捕であったと主張されています……なんだから、火種を抱えた政権ね……話を戻します。このように間接侵略とは見えにくい上、あまり自衛隊が関わることは遺憾ながらありません。いわゆるスパイ活動は強国間では非公式ながら常識的に存在していますが、この分野でも日本は遅れていますし自衛隊は関わりません。道路や鉄道の爆破にしても、まずは警察が動きまわすし、たとえ犯人を逮捕しても自供が無ければ外国との関わりは証明しにくいですし、そもそも犯人自身が扇動された自覚がなく実行している場合もあります」

里華の講義は休憩を入れつつ3時間ほど続いた。夕方になり新屋と三島が夜間外出禁止令の案をもってきたので中断となり、鮎美は3回読み直して公布施行する決断をし、広報室で収録に入る。

「こんばんは。芹沢鮎美です。あの津波から一週間が過ぎ、ようやく被災地の地面も乾いてきましたが、これから、みなさんの財産を守るため、被災地での夜間外出を禁止します。この総理代理令という被災地とは、津波痕に限定せず、現在も停電している地区を含みます。この状況下での夜間外出は危険ですし、不要です。もちろん、正当な業務での活動は認めます。具体的な例と地区を……」

やや説明を要する総理代理令で、細かいセリフや条文を何度か噛んだので撮り直しが続き、5回目でも成功して配信し、鷹姫が入れてくれたミルクティーを一口飲んだところで広報室に鈴木が入室してきた。鈴木は顔に緊張があったので鮎美が問う。

「鈴木先生、どうされました?」

「中国の胡錦燈主席から芹沢総理にネットで顔を合わせて面談したいと申し入れがきました」

「中国の……最高指導者……。いつ?」

「すぐに、と」

「時間をくれんにやね。けど、あるかとは思ってたわ」

鮎美は熱かったけれどミルクティーを飲み干して自分の顔を叩いた。

「すぐに受けます。準備してください」

広報室なので機材はそろっていて、すぐに準備が終わった。準備までの数分間、目を閉じていた鮎美はモニターとカメラを見つめる。通信がつながった。

「はじめまして。芹沢鮎美です」

椅子に座っていた鮎美は浅く頭をさげて名乗った。それを通訳が中国語にしてくれる。そして、モニターに映る胡錦燈が何か言い、通訳されて日本語が返ってくる。

「はじめまして。私は胡錦燈。まず、今回の巨大地震に遭われた日本の人々へ弔意を送ります」

「……。ありがとうございます」

「私たち中国からも手助けをする用意があります。日本は、これを受け入れますか？」

「ありがとうございます。お気持ちだけで十分に感謝いたします。今回の巨大地震は日本だけではないので、他の国々へ支援の手を伸ばしてあげてください」

すでにドイツやイスラエルなどからの支援は受けているけれど、中国からの支援は感謝しつつ断るといふ方針が閣議でも出っていて、日本からも2008年にあった中国の四川大地震のさい、自衛隊の救援派遣を打診して、感謝の言葉はありつつも断られているので、今回も双方前例に従い、儀礼的な言葉を交わしている。

「芹沢総理代理が震災前に唱えていた連合インフレ税に、私も興味をもっていました」

「そ……そうですか、ありがとうございます」

「今となっては、この混乱の收拾が第一になってしまいますが、資本主義の悪い部分によって貧しい人々から奪われた豊かさが、一部の資産家に集まっている、これを打破し改革しようとされた若き英雄に拍手を送りたい」

「……………どうも…ありがとうございます」

いつ対決路線になるのか、いつ尖閣諸島の話をされるのか、身構えていた鮎美は調子を崩された。

「さらには日本の首相代理までされていて驚きますし、さきほどの厳戒令は意外でした」

「厳戒令？ ……あ、夜間外出禁止の話ですか…まあ、あれは必要かと思いましたが…」

配信したばかりの情報まで、すでに知られていて内心で驚いたけれど、さらに驚くことを胡錦燈が言ってくる。

「私も7歳で母を亡くしましたが、あなたは母を亡くされたばかりなのに仕事をしておられる。心からお悔やみ申し上げます」

「え？ ……うちの母さんは…」

何の冗談やの、感じ悪いわ、けど、うちは母さんと連絡、まだ…、と急に鮎美は不安になってきた。玄次郎へは、そっちは大丈夫？ とだけメッセージを送り、だいたい大丈夫だ、という返信をもらったけれど、美恋へ送ったメッセージには今日まで返信がない。また、つわり

が悪化して連絡する気力がないのか、それとも鮎美が多忙を極めることを察して遠慮してくれているのか、と考えるようにしていたけれど、胡錦燈が断言的に言ってきたので不安は急激に膨らむ。

「……………父さん、何も言わんし……………母さんが……………嘘やろ…」

「……………」

胡錦燈は鮎美の動揺を見て余計なことを言ったことに気づいた。芹沢美恋の死は地元の琵琶湖新聞では、おくやみ欄に掲載されたけれど、それを実の娘である鮎美が知らずに働いているとは思わなかった。日本で情報収集にあたっている者も、さすがに総理代理となつたばかりの鮎美自身や島暮らしである芹沢家のそばには、いまだ近づけていないので、せいぜい地方新聞や町内だより等を入力して報告してくるにすぎない。胡錦燈は対談前に政治家の常識として鮎美の情報を仕入れたし、それで母親の死を知り、社交辞令と自身の幼児体験による共感から言っただけだった。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

鮎美の動揺は激しくなり、ありえないことに外国首脳と対談中なのに制服のポケットからスマートフォンを出すと美恋に電話をかけている。

「おかけになった電話は電波の届かないところにあるか、電源が入っていない…」

美恋のスマートフォンは琵琶湖の底にあつて生活防水仕様だったけれど、もう機能していない。鮎美は玄次郎にもかけた。

「もしもし、父さん！ 母さんも生きてるよね?!」

「鮎美……………」

電話に出た玄次郎が答えてくれないので重ねて問う。

「母さん生きてるよね?! 死んだって嘘やんね?!」

「…………伝えるタイミングをみていたが…………美恋は琵琶湖の津波にさらわれて亡くなった。明日、火葬される予定だ」

「っ……」

「言うのが遅くなって、すまない」

「……………」

鮎美が涙を流し始めたので、カメラの横で見守っていた鈴木が泣き出した背中を押して被写界の外に出し、胡錦燈に謝る。

「胡主席、お見苦しいところを申し訳ありません」

「こちらこそ、余計なことを言ってしまったようです。彼女は母親の死を知らずに働いていたのですか……………」

「ご家族の配慮のようです」

鈴木も知らなかったけれど、あえて、それは言わない。総理の身辺情報さえ共有していない寄せ集めの内閣であると思わせないため、どちらとも取れる言い方をした。鈴木は目の端で鮎美を見る。もう泣き崩れていて麻衣子が気づかって背中を撫で、遅れて鷹姫も慰めていく。すぐに立ち直ることはできそうにないと鈴木は判断して胡錦燈とは自分が決着をつけることにした。

「胡主席、私たちは事態の悪化を強く憂慮しています」

「…………。それは私もです」

「ご存じだと思いますが、今、自衛隊全体の指揮を執っているのは畑母

神です。海上保安庁の船もまた彼の指揮下にあります。現状、なんとか穏便に終わらないものかと、強く心配しています」

「……」

胡錦燈も都知事選で尖閣諸島を民間人所有者から買い取り都有とすることを畑母神が公約にしていたことは把握している。くわえて畑母神が戦後の日本としては珍しい自衛隊出身での臨時とはいえ防衛大臣になっていることも念頭にある。

「芹沢総理が彼を押さええている様子もあるのですが、今の様子では、しばらく立ち直るのは難しいでしょう。私から畑母神に話します」

「……どう決着をつけるか？」

「休憩のために一時撤退した海上保安庁は隙をつかれ、かの自然保護団体を取り逃がしてしまう。今回は逮捕者は出ず、体当たりで傷ついた巡視船の修理代請求先もわからず、やむをえず設置された機器のみ回収して終わる、ことになるかもしれません。前回に比べて、より遺憾な結果ですが、震災対応で手一杯の時期に私たちには、これが限界です」

「………そういうことも、起こるかもしれません」

前回は海上保安庁が中国人船長を逮捕し、それに対抗して在中日本人の逮捕やレアアースの輸出差し止めなどがあり、鳩山総理が折れる形で中国人船長は解放されている。今回は領海侵犯の上、上陸して機器を設置し、複数回の体当たりが継続しているのに、逮捕できずに終わるのであれば、外形的には撤退であっても、実質的には積み重ねによる既成事実の構築という勝利を中国側がえることになる。鈴木がそういう意味を込めて言ったので胡錦燈も遠回しに承知した。これ以上の衝突によって、どちらかに死者が出ると双方が引けなくなるし、このタイミングで中国が永続的に尖閣諸島を占領し続けるのは、現在の国際社会に対しても外間が悪い上、未来の歴史においても卑怯さが目立ってしまう。このあたりが潮時だと胡錦燈も判断した。

「芹沢総理代理へ、ご愁傷様です、とお伝えください。弔電を送らせてもらいます」

「ありがとうございます」

ネット通信が終わり、鈴木は駆け足で司令室へ入った。胡錦燈との話を畑母神に伝えると、悔しそうに、それでも安心したように頷く。

「うむ……現状では、それが、せいぜいか」

「それから、胡主席には、芹沢総理が畑母神大臣に慎重な対応をお願いしているという風に話しておきました。覚えておいてください」

「なるほど、その方が構図としては、わかりやすい」

すぐに畑母神は巡視船に尖閣諸島から離れて休息を取るよう命令をくださった。護衛艦にも3海里だけ後退させる。鈴木も気になるので見守っていると、中国漁船にも動きがあり上陸していた者に乗せて撤退の準備に入っている。鈴木も安心し、次に気になる鮎美の様子を見に行つた。貴賓室の前には三井と長瀬が立っていて、鈴木がドアをノックすると里華が開けてくれた。

「芹沢総理のご様子は？」

「ご覧の通りです」

里華は冷静に言つたけれど、彼女自身も目が赤い。里華が指した鮎美はソファの上で泣いていて鷹姫と麻衣子が慰めていた。慰めている方も泣いているので見るに忍びない。しばらく見守つた鈴木は里華へ胡錦燈と畑母神の対応結果を告げ、鮎美が落ち着いたら伝えるように頼んで退室した。里華はメモを取りたいような長い内容だったけれど、かなり機密性が高いと判断して何度も頭の中で諳んじて覚えた。気がつけば夕食の時間が終わりにかけている。空腹を覚えた里華は麻衣子に言つてから食堂に行き、一人で2往復して4人分の夕食を貴賓室に運び込んだ。

「……………いただきます」

勧めても鮎美は食べなかつたので里華から食べ始め、麻衣子と鷹姫も交替で食べたけれど、結局、鮎美は泣き続けて食べなかつた。

3月20日 根本博陸軍中將

復和元年3月20日の日曜朝、台湾の一流ホテルで、ゆっくりと朝食をとった陽湖は台湾政府が用意してくれた部屋とは別に借りた客室へ出向いた。その客室には介式を監禁している。陽湖が客室に入ると全裸でベッドの上にいた介式は怯えて身震いした。

「んフフ、そんなに怖がらなくても、ただ様子を見に來ただけですよ」

「…も…もう許して…ください…」

「償い続けなさい。その身体で」

陽湖は介式に売春をさせていた。今も次の客が待っている。陽湖が介式を支配するのは手早かった。一度だけと言って自分の小便を飲ませた翌日から飲ませ続けた。当然、介式は、一度だけと言ったはずだ、と拒否したけれど、あなたが私を芹沢鮎美の身代わりにした罪の意識はその程度なのですか、あの一度は部下一人分です、と言って部下の将来を人質にとる論法でゴールを動かし、介式を責め続けた。さらに平行して陽湖は前田たち男性部下を味方につけた。介式に言われて身代わりになったけれど、こんなことは警察のやり方として正しいのですか、素直に従ったけれど、当たり前という顔をしている介式に反省してほしい、と陽湖が彼らに囁くと、もつともなことだ、と反省会という名の糾弾と吊し上げが始まった。もともと介式はA321の機内会議室で陽湖が鮎美にした仕打ちを見ていたので、その代償という形もあつて身代わりを依頼していたけれど、男性部下たちは機体の最後尾にいたので、せいぜい鷹姫がイジメまがいの教育的指導を受けていたことしか知らないのです、上司が迷い無く一人の女子高生を警護対象の身代わりにして外国へ差し出したことを、差し出された本人が苦情を言うのは当然という意識になつて女性上司を批判した。その批判が高まってきたところで陽湖は以前に介式が銃弾を抜いた拳銃で鮎美を脅したことも彼らに言いつけ、より激しく批難するように仕向けた。これまで強圧的な態度で男性部下を従えてきた女性上司の弱みを握った男性心理は苛烈だった。

「あなたは身体で罪を償うのです」

激しい批難を受けて弱った介式に、また陽湖は自分の小便を飲ませ、さらに男たちにも介式へ小便を飲ませるように仕向け、何度も嘔吐しながら介式が泣く泣く飲み終わると、次は口内に白濁した男性の体液を注がれたし、それが一巡すると、もう輪姦が待っているのみだった。部下の将来を守るために陽湖の言いなりになっていたはずなのに、その部下たちに処女を奪われ輪姦されると、もう介式は何も考えたくなくなつたし、死にたいと思つたけれど、陽湖は介式の姉がセクハラを苦に自殺したことを引き合いに出して、あなたまで自分を捨ててはいけない、生きて償うのです、と自殺を予防する心理を植え付けた。男性部下たちも勢いで女性上司を輪姦したけれど、これが日本に帰ってから発覚すると困るので、より徹底的に介式を蹂躪した。本来、強靱な肉体と精神力を持つはずのSPたちが、こうも簡単に陽湖の口車に乗せられたのは、陽湖の経験からくる巧みさもあつたけれど、彼らにしても日本で何千万という人間が死に、さらに原発事故といい、自分たちの所属していた警視庁の消失といい、大きな不安があつたし、やはり家族は東京にいる者が多かつたので妻子や両親と連絡が取れなくなっている。そして、台湾政府は多忙さから軟禁状態のまま放置してくるし、警護するはずの鮎美は日本にいて、もう仕事もない。そんな無意識にストレスが高まる状況で陽湖が喉けてきたので、あつさりと女性上司をおとしめたし、いつそ陽湖に従っておけば日本に帰ってからも、悪い処遇は受けずにすむかもしれないという心理に傾いていた。そして、陽湖も輪姦されている介式を見ているうちに、これをお金に替えられないかと思いつき、男性信徒たちに売り出した。大人気だった。もとより台湾では日本人とウクライナ人の売春婦には高値がついていたし、陽湖は卒業したらヤフオクで売るつもりだった自分の学生服を介式に着せたので年齢的に無理があつたけれど、なんちやつて女子高生にしている。もう完全に介式は言いなりになってくれる。気が強そうに見えて、性格のタイプ的には鷹姫と同じで一度崩れると砂上の楼閣のように脆かつた。普段からの周囲を威圧するような言葉遣いも、やたらと肉体を鍛えていたのも、心の弱

さを隠すための手段であつて、姉が自殺で亡くなっているトラウマを
つつき回して、さらに警察官としての正しさを崩せば、泣きながら強
制売春させられるだけの女になってくれた。

「ブラザー愛也、夕べの寄付金は？」

「はい、こちらに」

さらに、台湾は売春が違法化されているので抜け道として介式の売
春は償いの儀式という形をとっている。罪を犯した日本人女性を聖
なる台湾の男性信徒が導くことで神に近づき従うようになるという
ことで、従軍慰安婦という名称をつけた。陽湖は自民党教育を受けて
日が浅いし、学んでいた学園は教師が信徒と共産党系が半々という構
成だったので歴史教育において慰安婦問題は左翼寄りに記憶してい
る。台湾では韓国ほど有名ではなかったけれど、親日感情と日中戦争
が相まって複雑な感情をもっているし、韓国が頑張つて宣伝している
ので従軍慰安婦を聴いたことくらいはあつたりして、似たような名称
と何より介式の顔と学生服姿に盛り上がってくれた。一応、陽湖には
監視役の台湾警察職員がついているけれど、それほど嚴重でないので
ホテル敷地内では自由に行っているし、陽湖は寄付金の一部を抜き取つ
て、差し入れとして渡したので売春行為ではなく宗教行為とみなして
くれている。介式にも、さすがに本名は晒さず、ホーリーネームとい
う設定をつくつて慰安婦アカルという鮎美鷹姫鐘留から一字ずつ借
りた源氏名を与えた。

「宗教って便利♪ お金って最高」

集まった寄付金も、あくまで寄付金であつて売春の対価ではない
し、このお金は介式が身代わりに陽湖を使ったことを償うために集め
ているので全額、陽湖のものという認識だった。介式には不眠不休で
売春させているので、かなり売り上げていた。そして、他人の売春で
得る金銭には内腿がゾクゾクするような快感があつた。処女だった
介式が女としての価値をどんどん失っているのに、自分は処女のま
ま、儲けられるだけ儲けようと想うと、お金が愛しくて股間が熱く
なってくる。

「さてと、私も真面目に仕事してきます」

陽湖は男性客と入れ替わると、屋城とホテル内の借りている会議室に出向き、女性信徒も含めた現地信徒たちに祝福を施して集金し、お昼ご飯も美味しく食べると、再び祝福業で稼ぎ、15時になると休憩のため寝泊まりしている客室に戻ってルームサービスで紅茶を頼んだ。集まった金額を数えながら、お茶を飲みたいので屋城も入れず一人で台湾通貨と過ごしている。数え終わって満足すると、テレビをつけてNHKの国際放送を見ながら、かなり甘い台湾菓子を食べる。日本語でニュースが流れてきた。

「尖閣諸島へ不法に設置された機械を撤去しようとしたところ、仕掛けられていたとみられる爆発物が炸裂し、現場にいた海上保安庁の職員2名と、東京都の職員で元海上保安官の百色……」

「あの人……亡くなって……」

陽湖は、あまり知らない男の死を少しも悲しいとは思わなかったけれど、気の毒に、とは感じた。

「冥福を……でも、冥福を祈っても、どのみち洗礼を受けていない者は復活しない……これって、ただの欺瞞なんじゃ……」

直接には知らない男だったけれど、鷹姫や鮎美が面識をもっているらしいことは知っていたので冥福を祈ろうかと思ひ、両手を組んだけれど、途中でやめた。

「祈っても1円にも1元にも1ドルならないし……」

祈らずに紅茶を飲む。テレビのニュースが切り替わり、六角市の火葬場にいる鮎美が映った。

「次のニュースをお伝えします。日本各地で大震災により亡くなった方の葬儀が執り行われており、六角市でも芹沢鮎美総代理の母、芹沢美恋さんの葬儀が行われています。臨時政府の広報から配信された画像をお届けします」

「シスター鮎美の……シスター美恋が……」

今度は心底悲しかった。美恋とは長く同居した。いつしよに台所で食事をつくったことも多い。こんな母親がいる家に生まれていたら、よかった、と想ったほど好きだったし、何より彼女へ受洗したのは陽湖なので親子や姉妹とは、また別の親近感があって肉親を失った

ような悲しさがあつた。

「……ぐすつ……けれど、シスター美恋、あなたとは再会できます……きつと、楽園で。アーメン」

永い別れではあるけれど、永遠の別れではないと考えている。テレビに映る鮎美は永遠の別れだと知っているので涙を流していたし、そばにいる鷹姫も泣いている。なぜか、陽湖の母親である陽梅まで画面の端に映っていたし、玄次郎がいるのは当然として鐘留も立っていた。鮎美は葬儀のために小松基地から六角市まで移動したようだった。高速道路で片道3時間もかからないので、日帰り可能だったけれど、泣き疲れた顔をしていて鮎美による発表や演説は無く、ニュースキャスターが伝えてくる。

「この葬儀へは天皇陛下から弔電が送られ、また中華人民共和国の胡錦燈主席からも弔電があつたとのことですよ」

「……天皇と皇帝から、弔意があつた人つて歴史上、なかなかいないかも……」

「次のニュースです。同じく臨時政府より配信された画像です。石永内閣官房長官臨時代理人が尖閣諸島で起きた爆弾テロに対して、強い抗議と犠牲者への……」

「醜い人の争いがいつまで続くの……神よ、どうか、お救いください……神、ちよつと、遅すぎますよ。やっぱり、この大震災をハルマゲドンの始まりにしませんか？ もう、あと20年くらいで世界の終わりということですよ」

上の方に向かって一人言をこぼしてから陽湖は休憩終了ということとで再び祝福業で稼ごうと腰をあげたけれど、屋城がドアをノックして伝えてきた。

「マザー陽湖、台湾の元総統、李登騎がお会いして話したいと連絡してきました。二時間後にとのことですが、よろしいでしょうか？」

「リトウキ？ ……はい、わかりました。お会いします」

ようやく台湾側から何か反応があるようなので陽湖は紫ローブを脱いでシャワーを浴びる。祝福中に信徒から手や足にキスをされたので要人に会う前に、よく洗った。

「……総統って……総理とは違うのかな……」

シャワーを浴びながら陽湖は台湾の政治制度を、ほとんど知らないことに気づいた。

「総統って言えば、ヒットラーだけど……台湾の元総統って、どんな人……」

陽湖は秘書補佐として静江から多少の政治教育は受けていたけれど、それは地元で挨拶回りをするとき、ただのオジサンにしか見えない市議や町議を先生として扱う作法や、わけのわからない無理難題や、高校生にでも違法だと思えるようなことを要求して陳情してくる支持者へ笑顔で対応する心構えなどであって、国際政治のことなど一切習っていない。それでも最低限、会う前に相手のことを調べておく、できればお互いの共通点を見つけ出し連帯意識をはぐくむという基本中の基本は覚えているし、それは宗教勧誘活動でも共通なのでシャワーを浴び終えると、スマートフォンで李登騎のことを検索した。地元にいるような市議や町議のことを調べるのは苦労するけれど、さすがに元総統だけあってインターネット上に情報がのついで、陽湖は自分との大きな共通点を見つけた。

「……キリスト教徒……へえ……プロテスタント長老派……」

聖書は何度も読んでいるけれど、実は他宗派のことは、たいして知らない。それでも同じ神を信じているという意識はあるし、聖書も新共同訳と新世界訳で表現は違っていても、だいたいいっしょだった。しっかりと李登騎のことを頭に入れ、約束の時間に屋城と見張り役の台湾警察職員とともにホテル内のレストラン個室に入った。

「やあ、こんにちは」

「はじめまして、月谷陽湖です」

調べていた通り李登騎は流暢な日本語で挨拶してくれたので陽湖も安心して微笑んだ。秘書補佐という立場で接すると、元国家代表を相手にして萎縮してしまいそうなので、あえて教団の重要幹部マザーという心構えで、ゆったりと微笑む。李登騎には多数の護衛がついていたけれど、それも鮎美のそばにいて見慣れた光景だったので、陽湖は少しも緊張しなかった。李登騎は長身で年老いていても堂々たる

姿勢で陽湖に笑みかけてくる。

「月谷さんに、お会いできて、嬉しい」

「こちらこそ。きつと、神のお導きです」

「月谷さんもキリスト教の一宗派に属しているらしいね。どうぞ、座って」

李登騎が椅子を勧めてくれたので用意されていたテーブルを挟んで李登騎と対面する位置に座った。

「はい。聖書を研究し理解することを大切にしています」

「なるほど、すばらしい」

カルトや変な宗教とは言われず、テーブルに中国茶が出された。やはり歓迎されているので陽湖は謝りたくなかった。

「まずは、お詫びします。私を芹沢鮎美だと思って扱ってくださいったのに、本当のことを黙っていて、すみません」

「いやいや、用心にこしたことはない。中国共産党の連中には、ひどい扱いを受けたようで。若い君たちが、我々を同一視するのは、まあ、仕方ないことだ」

「……………」

どう答えていいかわからないので、日本人らしく、とりあえず頭をさげた。

「芹沢さんは急に総代理代理となったので、さぞや大変だろう。私たち中華民国も彼女に注目している。彼女の人柄を知りたい。ご学友で秘書も務めている月谷さんから見て、彼女は、どんな人物だろうか？」

「はい、彼女は…」

陽湖は素直に知っていることを李登騎に色々と話した。李登騎は領きながら聴きつつ、ときおり陽湖の言葉の端々から、陽湖自身の家庭が貧しかったことで鮎美へ強い羨みをもっていることに気づいたけれど、そこには触れず18時近くなったので、そのまま陽湖と夕食をとともにすることにした。

「美味しいです」

陽湖は李登騎が勧めてくれたビーフステーキを食べて喜ぶ。一流ホテルに泊めてもらいながらも遠慮して麺類ばかり食べていたし、多

額の現金が手元にあっても、せいぜいルームサービスで紅茶や紹興酒を楽しむ程度だったので、しつかりとしたコース料理は食べ応えがあった。食事の間も李登騎は鮎美の思想傾向について色々聞き出したし、とくに鮎美が言い出した連合インフレ税とマルクス主義の関連を問うてきたけれど、そもそも鮎美は共産主義へ対して否定的でも肯定的でもない、現代っ子なので話しているうちに李登騎もそれに気づいた。より本音を聞き出しておきたいので李登騎が飲酒を陽湖へ勧めた。ここ数日で、すっかり紹興酒が気に入っている陽湖は黒砂糖を入れて呑む方法を李登騎に教えてもらい、しつかりと酔っぱらった。

「日本は北方領土、竹島、尖閣諸島と争う土地を抱えているが、芹沢さんは、どう考えているだろう?」

「えっと…ヒック…シスター鮎美は、よく領土問題をセクハラにたえます。ちよつとを許したら、じわじわエスカレートするから、シバいとかなアカンと」

「はっはは、なるほど」

「そう言う自分も、じわじわ私へセクハラするから、やる側の気持ちもわかるみたいですよ」

「ははっ! 彼女が同性愛者なのは有名だけれど、月谷さんも、そのようなのだろうか?」

「いえ、まさか。よく誤解されますけど、牧田さんがバイだった以外は他の秘書はノーマルです。そもそも同性愛は神が許していません」

「うむ、その通りだな。月谷さんが、いい影響を彼女に与えられるとよいね」

「はい……………そうだと……………いいんですけど……………」

気持ちよく酔っていた陽湖の瞳が悲しげに彷徨ったので李登騎は追求する。

「なにか、あったのかな?」

「……………シスター鮎美は本気で同性愛者同士で結婚が成立すると考えて、牧田さんとの結婚を発表したのは、ご存じですか?」

「ああ、聞いている」

「そのときの指輪を……私は叩き潰すように強制したんです。神の教えに背いているから……けれど、……そんなことをさせて、本当に良かったのか……ひどいことを、した気もして……」

「そうか。……それで芹沢さんは同性愛を捨てたのだろうか？」

「口では、そう言いましたけれど、彼女はズルいところがあって、口先だけ合わせることは平気でしますから」

「はっはは、したたかだね。だが、人それぞれの自由は大切といっても、やはり夫婦は男女であるべきだろう。男女が子供を育てることも何より大事だ。そのあたりを彼女は、どう考えているのだろうか？ 個人としても政治家としても」

「シスター鮎美は、かなりダーウィンの進化論に影響を受けています。人も動物も、すべて神が創造されたという創世記を受け入れず、人も猿も共通の祖先から進化したと考えています」

「では、なおさら子供をつくることは重要だろうに」
「そこでズルいというか、狡猾というか、ひねった考え方をしている、ハチやアリが一つの集団を形成しているも、すべての個体が子を残すわけではないように、人の集団にも役割分担があつて同性愛者が一定数、生まれ続けるのは働きアリののように子を残さない層がいる方が有益性があるからかもしれない、と」

「ほお、なるほど、種なしの果実にも存在意味はあると……なかなか手強い理屈を考えるものだ。生物学として見れば、そこそこに説得力はある。ネオネオ・ダーウィニズムといったところか。ほぼ唯物史観なのか……。では、芹沢さんは、どういう信仰をもっているだろうか？」

「えつと……今の日本の若い世代が、ほとんど信仰を失っているという感覚はわかりますか？ 仏教も神道も、それほど否定しないけれど、信仰してもいない。とりあえず初詣には行くけれど、そこにいる神様の名前も知らなかったり、仏教の経典を読んだこともないけれど、お葬式では手を合わせるといふ、いい加減な感覚」

「ああ、知っている。残念なことだ」

「彼女もその一人です。彼女の母親には私が受洗しましたが、そのこ

とで余計に彼女はキリスト教に反感をもったようです。本音では、キリスト教は欧米人の侵略の道具などと思っっているようです」

「侵略の道具か……悲しい受け止め方だな……歴史を振り返れば、そういう見方も成り立つが、それはキリスト教の副作用であって本質ではない。芹沢さんにも主の声が届く日がくればよいものだ」

「はい」

「今夜は、月谷さんと会えて本当によかった」

李登騎が盃を掲げてくるので、陽湖も做った。かなり酔っているアルコールに慣れていない日本人女性を可愛らしく想いつつも、節度を保った李登騎は用意していた書類を陽湖に呈示する。

「私たち中華民国から、今回の大震災で被害を受けた日本へ、この書類にある通りの援助をしたい」

「……食料……燃料……こんなに……。で、ですけど、台湾も東側の海岸が津波に遭って大変な被害があったはずではないですか？」

「それらとは比較にならない甚大な被害を日本が受けているからだよ。雪中に炭を送るといふ故事があるように、かつて根本博陸軍中將がやってくれた支援を、今度は返したい」

「……ねもとひろし？」

「やはり、知らないか。本当に日本の若い世代は戦後史が欠落しているなあ」

「すみません……」

「いや、習わないものは知りようがない。せめて蒋介石くらいは知ってくれているだろうか？」

「はい。この国の建国者のような人だと……」

学校での成績はいい陽湖が自信なさそうに言う。実は蒋介石も毛沢東も東条英機も、とりあえず大勢の人を殺した悪い人くらいの認識しかないけれど、さすがに、それを口に出すことはしない。基本的に陽湖は人間の政府による統治を信用していないので、ルーズベルトもトールマンも、いい印象をもっていないし、チャーチルもヒットラーも似たようなもの、という歴史観だったし、天皇も英国女王も存在そのものが間違っているけれど、まだ英国女王の方がキリスト教を大事

にしているだけマシと考えている。李登騎は若年者へ教え諭す調子で語った。

「かの蒋介石の国民党軍は8月15日の終戦後、中国大陸から引き上げる日本人を捕らえるようなことはせず、引き上げに協力的だったが、ソビエト軍と中国共産党軍は違った。終戦降伏後も日本軍に攻撃を仕掛けたし、シベリア抑留が示すように不当な拘束も行った。これに根本中將は対抗して、降伏後の戦闘は責任を問われる可能性もあったが、切腹覚悟でソビエト軍に反撃し4万の民間人を逃がしている。このとき、輸送面で協力した蒋介石へ恩を感じていた根本は4年後、台湾へ渡り、共産党軍との戦いで不利となっていた国民党軍を支援、効果的な戦術指南を行い、金門島の防衛戦で共産党軍を全滅させる快勝に導いた。今日、中華民国が存続しているのは、この勝利が実に大きい。これに大いに感謝した蒋介石は根本へ英国王室と日本皇室へ贈った物と同じ花瓶を贈っている。ただ、残念なことに私たち中華民国の中でも、また日本の戦後の歴史においても、根本の義拳は長く黙殺されてきた。もともと日中戦争は日本軍と国民党軍の戦いで、共産党軍などは逃げ隠れしておっただけで、今でこそ、偉そうにしておるが日本と真正面で戦ったのは蒋介石である。だからこそ、降伏後、追い撃つような卑怯はしなかったし、逆に共産党軍はソビエト軍と同様、火事場泥棒をした」

「……………」

陽湖は相槌が思いつかなかった。卑怯も悪いけれど、戦争をすること自体が悪だと思っている。正々堂々戦えば、そこに美学がある等とも思わない。剣をとる者は剣によって滅びる、という言葉が思い浮かぶくらいで、そういう気配は李登騎も察した。

「女性から見れば戦争など愚かなことかもしれないな。まあ、こういった歴史があつて、もともと日中戦争は国民党軍と日本軍の戦いだったので、疲弊した国民党軍が共産党軍に台湾まで追われたところで根本が来援してくれても、諸手を挙げて英雄だと讃えにくい部分があつた。かくゆう私も日本の陸軍少尉として名古屋で終戦を迎えているので、この国でも偉人とされたり売国奴とされたり論者によつて

評価が変わる。少尉の私から見れば中将は、まさしく英雄だが、大声で讃えにくかった。それでも一昨年、戦役60周年式典において、根本に縁のあった日本人を招き、馬総統が会見している。と、このような歴史があるので今回の大震災で日本へ雪中の炭を送りたいわけだよ。明日にも出発できるよう、もう船団を用意してある。日本とは正式な国交が無いので、断られると無念だし、またぞろ共産党の連中のように爆弾でも仕掛けているかと疑われるのも悲しい。そこで、いつそ、月谷さんといっしょに送り返せば、受け取ってくれるのではないかと思っている。どうだろう？ それらの援助物資を芹沢さんに届けてほしい。神への信仰にかけて誓おう。これは策略などではない。純粋な支援であり、恩のやり取りだよ」

「……………。ハレルヤ。わかりました。ありがたくお受けします」
「おおっ」

李登騎と陽湖は握手を交わした。陽湖はホテルの玄関まで李登騎を見送り、見えなくなるまで手を振ると、熱い夕メ息をついた。

「はああ……………李登騎さん、とても立派な人……………昔の日本男性も、ああいう感じだったら……………」

異性愛者として、かなり年齢は離れていたけれど、好ましく感じていた。

「私も、あんな立派な生き方ができたら……………」

すでに日本で何人かの国会議員と会話したことくらいあったけれど、李登騎からは比べものにならない迫力と器の大きさを感じている。純粋な尊敬と、わずかでも模倣したいという欲求を覚えたけれど、寝泊まりしている客室で一人になって介式が昼間の売春で稼いでくれた金銭を見ると、そんな気持ちは雲散霧消した。

「んフフ♪ やっぱり、お金、最高」

日本人として長く福沢諭吉を愛してきたけれど、だんだん台湾紙幣に描かれている蒋介石へも愛を感じる。祝福で得た寄付も混ぜて、高額紙幣だけを束にして積む。数千枚ある紙幣の隅を指先で愛しくなぞった。

「お金、大好き」

紙幣の束を股間に挟んで悶えた。もう偉人を見習って生きようという気持ちは吹き飛んで、楽園に復活する前に、今の世界でも楽しめるだけ楽しみたかった。

「……子供の頃から、今まで、さんざん、神に尽くしてきたんだから……少しくらい……。だいたい、売春させてるわけじゃなくて、あれは償い……。淫らな行為じゃない……。それに彼女は受洗してないし、どうせ復活しないし……。……。っていうか、カトリックの司祭の方が修道女を性奴隷にしたりして、よっぽど悪いことしてる……。うん、大丈夫、まだ、大丈夫……。カトリックって聖職者は結婚できない、とか不自然な制度にするから欲求不満が溜まって変なことになる……。産めよ増えよ、って神も言ったし……。お金も増えてほしいなあ……。」

他宗派の醜聞を批判して自己正当化し、また紹興酒を一杯あおつた。

「ああ、神よ。お酒って、美味しいですね」

アルコールと金銭に酔っている。

「あー、そうだ、日本での震災義援金、どのくらい集まったかな？」

陽湖はスマートフォンで琵琶湖銀行の自分名義口座にアクセスして残高を見た。

「っ?! なっ……。い、……。いくら? これ、……。えつと……」

見たこともない金額に桁が膨らんでいる。こんな数字は小学校の算数で演習問題として見たくらいで、すぐに認識できない。

「いち、じゅう、ひやく、せん、まん」

画面を指さし、桁を下から一つずつ数える。

「じゅうまん、ひやくまん、いっせんまん……。いちおく……。じゅうおく。……。も、もう一回。いち、じゅう、ひやくッ、痛っ?!」

酔っていて、うっかり自分の舌を噛んでしまった。

「ううっ……。痛い、……。」

口の中に血の味がするけれど、傷より金額が気になる。

「いち、じゅう、ひやく……。せん……まん……。じゅうまん……ひやくまん……。いっせんまん……。いちおく……。じゅうおく。……。もう一回、いち、じゅう、ひやく、せん、まん、じゅうまん、ひやくまん、いっせんま

ん、いちおく、じゅうおく!! 30億! 32億6472万円! すごい! すごい! 32億6472万円!」

日本中の信徒から善意の募金が集まっていた。とくに高齢の信徒などは、これが最期と全財産の大半を送金してくれている場合もあるし、陽湖の母親も玄次郎からもらった給料の半分を送っている。信徒個人から送金されたり地区教会で集めた上で送金されたりしていて、大災害だったので無事な県の信徒からの献金は、とても高額だった。

「……………32億円……………ん……………んヒ! んヒヒっ!」

嗤えてきた。腹の底から嗤えてきて嬉しくて身体がゾクゾクする。

「んヒヒヒヒヒっ!」

嬉しすぎて床を転がって嗤い、嗤っているうちに小便を漏らしてしまい、それでも衝動が続き、スマートフォン画面を舐めた。

「はあああ! お金、お金! お金!」

嬉しくて唄えてくる。

「お金、お金♪ お金え、お金がほしいなあ。お金、お金、お金え♪

さあさあ、みんなでえ、私のところへえ。お金、お金、お金え」

たまにスピーカーの鮮魚売場で聴く曲を替え歌にして踊り、さらに一人ツッコミする。

「それは魚やツちゅーねん!」

関西育ちなので、使おうと思えば鮎美と同じレベルで関西弁も使えたりする。また熱い吐息を漏らす。

「はああ……………32億円……………」

やっぱり台湾通貨より、慣れ親しんだ日本円の方が実感がある。

「いつそ、これをもって、どこか遠い国に……………どうせ、日本は放射能まみれで、なんか危なそうだし」

すでに一部の日本人は海外に逃げているし、もともと海外にいた日本人の中にも帰国を遅らせたりして様子を見ている者もいた。陽湖には信仰心はあっても愛国心は自覚したことがないので、いつそ海外で暮らしたくなる。

「これは寄付金だから所得税はかからないはず……でも、追跡はされるかも……なんとか、琵琶湖銀行から、どこかのタックスヘブンに移して……」

無い知識で逃げる方法を考えてみる。

「つていうか、タックスヘブンつて英語ができれば、申し込めるのかな……怪しいサイトとかありそう……信用できるタックスヘブンつて、どこ……太平洋の島とか、全部、壊滅してそう……ケイマン諸島も、なんか怪しいし……やっぱり契約書は日本語でない……いっそ、竹島とか北方領土に日本語のタックスヘブンを造ればいいのに……あ、米軍基地内の銀行とか、どうなのかな……つていうか、それぞれの国の大使館の敷地にATMを置くような体制にして、少しずつ預けられるようにしてくれたら……ううん、やっぱり外国は信用できない。小笠原諸島の一部をタックスヘブンにすればいいのに……あ！琵琶湖の鬼々島！あれをタックスヘブンにすればいい！あそこに銀行を造つて、どんどん送金……あれ？あ、主権が日本だからダメなのかな？じゃあ、いつそ鬼々島だけで独立宣言して民主的に過半数が独立に賛成したら、独立できるかも。一人百万円ずつくらい、あげたら賛成票をくれるかも。あ、でも、もつたない……10人で一千万……。それより信徒を島に移住させて、島民より多数になれば私の思うまま！……あ、これはオウムが上九一色村でやろうとして失敗したパターンか……きつと、あの島も閉鎖的だから、信徒の住民票移動を受け付けなかったりするかも……ううん、なんか、もつと手軽なタックスヘブンがあればいいのに……」

鮎美の方向性とは真逆なことを考えていて、連合インフレ税のことを思い出した。

「連合インフレ税つて……この32億円が実質16億円の価値に……ありえない……そりや暗殺されるよ、世界中から殺しに来るかも……そんな、ふざけた税金、許せない……」

取られる側の気持ちになると、鮎美へ殺意が湧いた。

「私ならSPがいても簡単に殺せるかも、紅茶にヒ素で。問題はヒ素をどこから……あ、でも、結局、カレーにヒ素といっしょで、見つ

かるかな……殺せるだけじゃなくて見つからない方法……あと、殺人は罪だから、罪じゃない方法で殺す解釈を考えないと……」

考えながら、また紹興酒を呑むので酔いも回る。

「あ、普通に異端というか、不信心だし、殺してもいいのかな……そういう解釈で、さんざん十字軍やったし……だからってジャンヌダルクまで殺さなくても……どうして昔の聖職者たちは、自分の都合のいいように聖書を解釈したのかな……神の教えは明らかなのに……ポアしたらオウムと、いつしよ……ジャンヌダルクをポア……ダメすぎ……ガリレオガリレイはポアしなかったけど……中世キリスト教、ポアしすぎ……」

もう思考がまとまっていけないし、自分も見えない。見上げると天井が回っていた。

「っていうか、シスター鮎美をポアするより、どこか遠い国へ、お金をもって……うくん……結局、見つかるかな……横領かな……」

少し正常な思考ができた。このまま32億円を着服して逃げて、いずれ見つかる気がする。何年かして、国際手配され捕まって手錠をされて小松空港から護送されるときの写真が新聞に載って、それを見た鮎美と鷹姫が冷たい目で記事を読み、そばに鐘留がいれば大笑いするような想像ができた。

「やっぱり、これは義援金だから、ある程度は震災復興に使わないと。それに李登騎さんから託された支援物資もあるし。まずは支援物資を届けて32億円は、ゆっくり考えよう……私が会長の財団を造るとか……ユニセフ的な……」

眠れそうにないほど興奮しているのでグビグビと紹興酒を呑み、通帳残高を表示させたスマートフォンで濡れた股間を擦りながら眠りに落ちた。

復和元年3月21日の月曜朝、鐘留は芹沢家の2階、玄次郎の隣で目を覚ました。

「……やった……オネショしてない……とうとう治ったかも……」

シーツを濡らしていなかったので嬉しくて両手を握った。夕べは玄次郎が性交には応じてくれたけれど、一つの布団で寝るのは疲れるから隣の布団で寝てくれ、と言ってきて不安だったものの、夜尿せずに済んでいたようで嬉しい。

「やつと治った……あ、オシッコしたい、さっさと行く」

朝起きてトイレに行きたいという感覚は新鮮だった。裸だったのでパジャマを羽織って1階トイレに行き、勢いよく小水を便器に出すと、同時に精液の一部が垂れてきた。

「君たちは生存競争に負けちゃったねえ♪ 誰か辿り着いた子はいるのかな？」

妊娠したいと想っている。ずっと子供の頃から不安だった。もし、自分も障害児を産んだら、どうしよう、と悩み続けてきた。けれど、玄次郎はあっさりと言が責任を取って処分する、と言ってくれたので、とても気持ちが悪くなった。そうなるとも一日でも早く妊娠したい気持ちになっていた。股間を拭いてトイレを出ると、台所で朝食を作っている陽梅と目が合った。

「……」

「……」

「おはようございます、鐘留様、って言いなよ。家政婦さん」

「……おはようございます。…鐘留さん」

「まあ、合格。おはよう、家政婦の月谷さん」

陽梅を家政婦として扱い、注文する。

「紅茶、ロシアンティーで。すぐに」

「はい」

陽梅は手を止めて紅茶を淹れて、苳ジャムを落とした。

「どうぞ」

「ありがとうございます♪」

美味しそうに飲みながら鐘留は言っておく。

「家政婦には守秘義務があるからね。家の中のことを外で話したら、ものすごい金額の損害賠償を請求するよ」

「……はい……心得ておきます」

「わかつてると思うけど、アタシが両親を亡くしたショックで何日かだけ、オネシヨしたことも外で言ったらマジ殺すから」

「はい、言いません」

「あと汚したアユミンの布団は捨てて、新しいのを買っておいて。お金、渡すし」

「……御本人に相談してからのの方がよくないですか？ お気に入りかもしれないし」

「……………」

アタシに意見する気？ という目で鐘留は陽梅を睨みただけれど、陽梅が言うことはもつともなので、仕方なく鮎美へ電話をかける。まだ、この時間なら閣議は始まっていないはずだった。

「もしもし、アタシ」

「お電話ありがとうございます。芹沢総理の首席秘書官宮本鷹姫です」

「あれ？ 宮ちゃんなの？ アタシはアユミンにかけたつもりだったのに」

「芹沢総理は疲れておいでです。どのようなお話ですか？」

昨日、鮎美は小松基地から六角市の公営火葬場まで来て、母美恋を送ったものの、そのまま小松基地に戻っているので、わずかしか鐘留とは会話していない上、会話というよりは、お互い泣いていた。

「アユミンは、まだ泣いてる？」

「……母親を亡くされたのですよ。当然です」

「そっか……アタシたち3人ともママがいなくなっただね……」

「……………だから、どうだと言うのです？」

「お仲間だねえ」

「……………あなたは父親も亡くされたようですが、大丈夫ですか？」

「クスッ……初めて、宮ちゃんがアタシに優しいこと言ってくれた気がする」

「……………」

電話の向こうで鷹姫が困っている気がしたので鐘留は本題に入る。

「アタシがアユミンの家に住ませてもらってるのは言ったよね」
「はい」

「それで、うっかりアユミンの布団にワインナーコーヒーとオレンジジュースをぶちまけたの。で、シミが取れないから捨てて新しいのをアタシのお金で買うから。アユミンが使ってた布団、捨てちゃっていいよね？ って確認とってくれる？」

「愚かなことを……わかりました。訊いてみます」

少し待たされて、すぐに了解が返ってきた。鮎美は使っていた布団へ、とくに愛着はなかったようで、コーヒーとジュースだと言った鐘留の言葉を鷹姫は裏を考えずに伝えたようだったけれど、鮎美は夜尿で汚れた布団は使いたくない感じだった。

「じゃあ、アユミンに、ごめんね、って言っておいて」

「わかりました。忙しいので、もう、これで」

すぐに鷹姫が電話を切った。

「あいかわらず愛想悪いなあ」

鐘留は肩をすくめ、そばにいた陽梅に言う。

「コーヒーで汚れた布団、汚れてる面が見えないようにして、ちゃんと捨てておいて」

「はい」

陽梅は朝食を仕上げ、玄次郎が降りてくると三人で食べる。

「いただきます」

玄次郎と鐘留は同時に食べ始めるけれど、陽梅は祈ってから箸をを持った。鐘留が玄次郎に問う。

「アタシと今日、入籍してくれる？」

「けっこう急ぐなあ……」

「うちの会社を継いでよ。何十億って財産あるよ。テキトーに働かなくても、お金が入ってくる感じに監視して整えて」

「やっぱり、それが狙いか」

「大好きだよ、玄次郎」

「わかった、わかった。けど、鮎美になんて言うか……」

昨日は美恋の火葬だけで、ろくに会話していない。鷹姫へも腹違い

の妹だった姫湖が亡くなっていることを父親の衛が伝えに来たので、鷹姫も悲しみに沈んだ。まさか、そんな場で鐘留と結婚するつもりであることは言えず、まだ黙っている。

「アタシから一週間くらいしたら軽めに言うよ。とりあえずエッチしちやつた、とか、そんな感じで」

「……まあ、同居してるし、そういう可能性は察するか……エロオヤジって思われそうだが、事実だし」

「じゃ、決まりね。市役所行って、それから会社とか、いろいろ、なんとかして」

「了解」

「あと、姓は、どうする？ 緑野、それとも芹沢？」

「芹沢で」

「変えたくないんだ？」

「総理大臣の家だからな、自慢できる」

「だね。あ！ アタシ、総理大臣のママだ！ ヤツタ、なんか、ちよつと嬉しい！」

はしゃいでいる鐘留を見かねて陽梅が言う。

「シスター美恋が亡くなったばかりだというのに、あんまりではないですか？」

「……………」

それは自覚しているので二人とも黙る。二人とも悲しみを直視せずには乗り切るといふ選択をしていて、亡くなった人間のことは考えないようになっていた。

「鮎美と美恋には悪いけれど、鐘留のご両親は安心してくれるだろう。このまま、彼女を独り身にさせておくのは可哀想だし、おそらく会社も役員なり部長なりが好きに動かして、まずいことになる。そこへオレが口出しするには、入籍が必要だから。養子という手もあるが、それは、いかにも金目当てという感じがして抵抗も起きるだろう」

「クスッ、養子とエッチしちやマズイね。アタシはママになるのに娘とエッチしちやつたけど」

「……………淫らすぎます……………食卓で、そういう会話をしないでください」

「すまない。月谷さん、手数だが、いっしょに市役所へ来てほしい。婚姻届には証人がいるから。あと一人は仕事関係で口の堅い人に頼むけれど、二人要るから」

「……………わかりました。ただ、嘘の結婚の証人にはなりたくありません。お二人は本当に夫婦となって愛し合い、生活をともにしていくのですか?」

「ああ」

「アーメン♪」

「……………。結婚式は、どうされるのです?」

「……………」

玄次郎と鐘留が目を合わせ、玄次郎が言う。

「この状況で派手なことは無理だろう。そもそも鮎美に黙っておくわけだし」

「それでは緑野さんが、かわいいそうです……………」

「アタシ、別に平気だよ。裏切ってフタマタかけられたら殺すかもしれないけど。結婚式とか、いいや」

「…………女の子としてドレスを着てみたいと思いませんか?」

「モデルやってみたとき、さんざん着たし。そのうち、落ち着いたら写真だけ、撮りに行く、玄次郎」

「大金持ちなのに、安上がりだなあ」

「うちの会社の規模で派手婚やったら一千万じゃきかないよ。社員、多いはずだし。なのに親戚がいないから、なんか淋しいし」

「その社員たちをオレが、まとめるのかあ……………やっぱ一人社長がよかった」

タメ息をつきながら玄次郎は朝食を終え、陽梅が食器を片付けると、三人で連絡船に乗り、玄次郎が運転する自家用車で六角市の市役所へ出向いた。ロビーで玄次郎が呼んだ仕事関係の知人と合流し、婚姻届を出す住民課の窓口に行くと、職員の説明を受けているうちに困ったことに気づいた。

「そうか、オレは本籍地が大阪のままだから戸籍が……………」

大阪の区役所は津波で消失していた。市の職員が説明してくる。

「戸籍が入手できない人は、指10本の指紋と髪の毛を10グラム、提供してください。他に顔写真のついた身分証明書の確認と、こちらで顔写真の撮影も行います」

「ずいぶん嚴重な身分確認だな」

「はい。臨時政府からの通達です」

「……わかった」

娘が関わって決めたことなので素直に玄次郎は指紋と頭髪を提供し、デジタルカメラによる撮影も受けた。さらに職員が問うてくる。

「ご結婚を新聞で公表されることを望みますか？」

「いや」

「わかりました。では、年金と健康保険の手続きがありますので保険年金課へ、行ってください」

職員はドンっと、婚姻届に日付印を押すと、コピーを玄次郎にくれた。もう証人は要らないので玄次郎は知人には車代を渡して帰ってもらい、保険年金課へ移動する。再び玄次郎は頭髪と指紋、顔写真を求められたし、さらに鐘留まで提出を要求された。

「えく……アタシまで……アタシの本籍地は六角市のはずだよ？ 江戸時代くらいから」

「臨時政府からの通達です」

「人権侵害チックじゃない？」

「提供いただけない場合、3割負担の自己負担金が最大で6割負担となります。頭髪、指紋、顔写真、それぞれにつき1割ずつ負担が軽減されます。また、提出いただけない場合は戸籍が入手できていない芹沢玄次郎さんには、健康保険証の役割を果たす住民基本台帳カードを交付できません」

「……アユミン、えぐい……」

「鮎美……徹底してるなあ……」

「どうか、ご理解ください。すでに津波で亡くなられた他人の身分証

明書を拾って不正使用する例が発生しています。あなたが、あなたであることを証明していただく手段が指紋とDNA、顔写真になっています。不正に身分証明書を二重三重にえることを予防しているのです。とくに故意に二重にえた場合、懲役15年以下とする総理代理令が今朝、公布施行されました。また三重に身分証明書をえる行為は死刑を最高刑とされました」

「死刑……」

「悪質な不正を取り締まるためです。ご理解ください」

「……仕方ないか……」

玄次郎は再び頭髮の一部を諦めたけれど、鐘留は納得しない。

「ヤダ、アタシの髪、切りたくない」

「その場合、他の体毛でもかまいません。ただし、切り取るところを職員が目視しますので、女性の職員を呼びましようか？」

「体毛って、どこの毛？」

「あなたの体毛であれば、どこでもかまいません。ただし10グラム以上です」

「アタシは腋とか、マンコの毛も一本も無いよ。完璧なレーザー脱毛したし」

「……」

職員の視線が鐘留の手を見てから、眉毛を見て、10グラムは無いかもしれないと考えているのが、わかった。

「いやいや、眉毛とか、ありえないし」

「後頭部の奥の頭髮などは、いかがでしょうか？」

「嫌！ もういい！ どうせ健康だし、健康保険証なんか要らない！」

「それは急病で困るぞ」

玄次郎が言っても鐘留は拒絶する。

「全額、払えばいいじゃん。うちはお金持ちだし！」

「全額お支払いいただいても医療費控除の対象となるのは3割のみです。また、所得に応じた保険料は、これまで通り徴収されます」

「……アユミン、ケチい……お金持ちに厳しい……」

「提出をお願いします」

「…………ヤダー！ もういい、帰る！」

鐘留は席を立ったけれど、職員が言ってくる。

「提出手続きを途中で放棄された場合、ここまでの手続きで提出された指紋や筆跡などを公安当局に送付することになっております。あとあと問い合わせなどがあるかもしれません。放棄されない方が、よいです」

「……………アユミン……………やり過ぎ……………あゝ！ もおお！」

鐘留は髪の毛を手櫛で何度もすいて抜け毛を集め、なんとか10グラムにした。やっと、すべての手続きが終わり市役所を出ると、陽梅にタクシー代と昼食代を渡して玄次郎が経営している建築事務所での電話番号を頼み、玄次郎と鐘留は、かねやの社屋ビルに移動する。津波で自宅と隣接していた本店は流れたけれど、牧場や精肉工場、菓子工場、各支店、ロープウェイを管理している社屋ビルは、まったく健在に残っていて、唯一の相続人である鐘留が結婚した上で現れると、従業員たちは驚いたものの、夫となった玄次郎に事業内容を説明した。

「わかった。ロープウェイは運休を継続してくれ。肉屋と菓子屋は需要を見つつ継続ということ。飼料や原材料の値上がり分だけを、価格に転嫁する形で、大幅な値上げはさけるように」

「「「はい」」」」

「あと、私は建築の専門家であって菓子や肉には、うとい。私の指示に對しての意見は、遠慮無く出してほしい。他に意見がある場合も、言ってくれていい。何かありますか？」

「では、社長…社長で、いいのでしょうか？」

専務が挙手して問うた。

「うん…………鐘留、お前が女社長でオレが副社長とかにするか？」

「うん、めんどいし、アタシは総理の秘書補佐だから。全部、玄次郎がやって。お小遣いだけ、ちょうだい」

「いいとこ取りだな。まあ、いい、では私が社長で。専務、それで？」

「はい。すでに震災後、物価が15%は上昇しています。あと4日で社員やパートさんたちの給料日ですが、物価の上昇に合わせて支給していただけではないでしょうか？ 実は、それを今日、話し合おうかと思っていたのですが、鐘留お嬢様が行方不明で、私たちだけで決めていいものか、ずつと迷っておりましたところですよ」

「物価か……：……かりに上昇した15%を、そのまま支給する財務的な余力はありますか？」

「あります」

「その人件費上昇分も、これからの商品価格に転嫁するとすれば、来月の価格は震災前と比べて、どの程度になるでしょう？」

「およそ……：……3割か、4割の上昇かと思われます。あくまで原材料や飼料、燃料が今の価格の場合で」

「逆に、支給しなかった場合、生活が苦しくなる社員やパートさんは全体の何割ですか？」

「食品を中心に値上がりしていますから、ほぼ全員が厳しいです」

「ちよつと人件費を詳しく見せてもらえますか。パートさん、若手社員、課長級、店長級など、階層別に」

玄次郎は2時間あまり帳簿や資料と格闘し、役員たちと相談して低所得層には15%、課長店長クラスには10%、役員クラスには5%の臨時給与を出すことにした。あくまで臨時であつて物価の下降があれば減額があるという条件で、まとめた。おかげで従業員たちの士気は高まり、とりあえず会社は回りそうだった。それから夜まで玄次郎は貸借対照表や資産、負債、製造原価などをチェックして、順調な会社であることを確かめた。鐘留も面倒と言いつつも、不安なのでチェックを見守り、自分が相続する会社を知った。

「明日からも大変そうだな。オレの本来の仕事、ぜんぜんできなかった」

「アタシ、相続税かなり払わないとダメっばいね」

「そうだな。ご両親が同時に亡くなられたからな」

「なにか誤魔化す方法ないかな？」

「やめておけ。この規模の財産があつて、それをすると逆に無一文に

なる」

「そうなんだ？」

「相続税は超怖い。明日は税理士も呼ぶかだな」

「アユミン、相続税まで値上げしそう」

「……しそうだな。あいつ、完全に為政者の側に立つてるから」

途中で陽梅を拾い、最終便の連絡船で島に帰って夕食をとりながらテレビを見る。ニュースキャスターが険しい声でニュースを読んでいる。

「尖閣諸島での爆弾テロにより3名が亡くなったことの報復として、日本各地の避難所では在日中国人が暴行などの被害を受ける事例が発生しています。また、中国においても在留日本人が暴行を受けたという被害報告があり、両国の国民感情が悪化しています」

「アホね」

「神よ」

「当然の結果とはいえ、また鮎美の仕事を増やしやがって……あいつ、押し潰されないと、いいが……」

「……………」

「月谷さん、もう1本、ビールをもらえるかな？」

「はい」

すぐに陽梅がビールを注いでくれるので、玄次郎は一日1万円としていた家政婦の対価について考えた。

「明日から物価の上昇に合わせて、月谷さんへの給与も一日1万1000円としよう」

「っ、ありがとうございます！」

とても喜んでくれたので、二人でビールを呑み、つい鐘留にも勧めた。

「鐘留も呑むか？」

「いらない」

「そうか。まあ、秘書補佐の立場もあるしな。勧めて悪かった」

「そういうことじゃなくて、飲酒は妊娠に悪いから。障害児とか産まれたらヤダし。どうせ捨てるとしても、産むだけで大変だし、中絶も

「ヤダもん」

「そうだな。……悪かった」

「あんま酔わないでね。玄次郎、酔うと勃起しなくなるし」

「うっ……わかったよ」

テレビが次のニュースを流す。

「金沢市にてデモが行われ、金沢駅から片町にかけての一带をデモ隊が行進しました。このデモは臨時政府の横暴を訴え。政府が身分証明に指紋や頭髮の提出を求めていること。総理代理が事実上の首相官邸として小松基地周辺でのデモ等の民主的な請願が禁止されていること。国家公安委員会委員長の臨時代理人である新屋寛政氏が大学生だった頃に女性の下着を盗み出したことを理由に臨時政権の姿勢を質している模様です」

映像が切り替わり、片町を歩くデモ隊が映った。それほど大きなデモではなく十数人程度の規模だったけれど、カメラが近づいて撮っているので規模が小さいことは視聴者にはわかりにくい。

「臨時政府の横暴を許すな！」

「法治国家を守れ！」

「パンツ大臣は辞めろ！」

「傀儡政権だ！」

「落選議員に大臣の資格なし！」

玄次郎がテレビに突っ込む。

「じゃあ誰が大臣やるんだよ」

「次のニュースをお伝えします。臨時政府が新たな発表をしました。映像を流します」

テレビに石永が映った。

「臨時政府より、みなさまにお願いいたします。ガソリン、軽油の使用を可能な範囲で控えてください。不要不急な外出をさげ、公共交通機関の利用や、乗り合いなど、できる限りの工夫をしてください。すぐに燃料が枯渇することはありませんが、夏頃を目処に需給が厳しくなる可能性があります。みなさまのご協力があれば、危機は避けられます。また、ガス、灯油については安定供給できる予定ですが、やはり

可能な範囲で控えてください。今、暖房の温度を1度、節約していた
だけると幸いです」

「…」

すぐに陽梅が手を伸ばして灯油ファンヒーターの温度設定を2度
下げた。

「素直な性格してるね。きっと、天国に行けるよ」

「私たちは天国ではなく地上の楽園に復活するのです」

「もう喋んな、ババア」

「……………」

「鐘留、そういう言い方はよくないぞ」

「……………」どっちの味方？」

「平和の味方だ」

石永が続けている。

「また、燃料の買い占め、過度な値上げに対しては罰金をかします。個人においては、これまでに所有していた自動車の燃料タンク以外にガソリン携行缶などで買い占める行為。法人や事業主については例年の仕入れ、消費量を20%以上超えての購入を買い占めとみなします。値上げについては前日比2%増を限度とします。つまりリッター1000円の場合、翌日は高くても102円です。罰金は個人においては100万円以下、法人と事業主については3000万円以下とします」

暖房の温度を下げたので三人とも早めに入浴して布団に入る。今夜も鐘留が性交を求めたので、玄次郎は応じた。

「そんなに、早く子供が欲しいのか？」

「うん。なんかね、急にソワソワするの。ママもパパも死んじゃったし、うちは昭和の初期くらいから相続で財産が分割されるのをさけるために子供の数を調整したら、親戚もいなくなって、ママも一人娘、お爺ちゃんも一人息子だったから、今現在、かねやの伝統を受け継げるのはアタシ一人だから。そう思うと、早く子供つくらなきゃって、血が騒ぐみたいな感じがする。こういう衝動には素直に従っておくのが、いいと思わない？」

「まあ、そうかもなあ」

「アユミンとアタシに似た娘が欲しいな」

「そうなるよ、いいな」

性交が終わったので玄次郎はウイスキーを呑んでから目を閉じる。脳裏に鮎美の顔が浮かんだ。

「なあ、鐘留」

「ん？」

鐘留は裸のまま隣の布団に入った。

「明日、車で小松に往復して鮎美にオレと鐘留が結婚したこと、報告しておかないか？」

「……………アタシはいいけど……………早過ぎて、アユミンがショック受けないかな？」

「だが、もしも、よそから知れば余計にダメージを受けるだろう。美恋のことも黙っていて、中国の代表との会談中に知ったらしい。まあ、オレと鐘留の結婚は新聞に載せないから、すぐにはバレないとしても、変なところから聴くより、オレたちが報告に行った方がいいだろうと思う。鐘留が鮎美の立場だったら、どう思う？ 乙女心的に」

「うーん……………アユミンはレズだから、レズの気持ちはアタシにも、わかんないけど、アタシとアユミンは恋愛関係じゃなくて、もろアユミンの性欲のお相手だったから失恋って感じはゼロだと思うけど……………どうかなあ……………自分のママが死んで……………パパが、友達と結婚する……………たとえば、アタシのママが死んでパパが残ってくれて、宮ちゃんあたりと結婚するって言われたら……………すごい速攻だなあ……………ママのこと、嫌いだったのかな、って思うかな」

「そうか……………」

「実際、どうなの？ 玄次郎、前の奥さんのこと、どう想ってたの？」

「言ってもいいけど、本当に訊きたいか？」

「……………聞きたい！」

「オレと美恋は恋愛結婚だったけど、あいつから高校の頃に告白され

て、じゃあ、まあ、付き合おうって感じで始まって。大学時代はオレは理系で他の女子が少なくて浮気する機会もなかったし、そもそも浮気するのが面倒だし、まあ続いていて。それから、たいしてケンカもしなかったし同じ歳で、そろそろ適齢期かって頃に美恋が結婚しようって言うから反対する理由もなかったし、素直に言うこと聞いてくれるし、料理もうまいし見た目も可愛いし、じゃあ、よろしくって。そんな感じの結婚だ」

「……玄次郎って、実はホモだったり?」

「お前なあ、さつき、思いつきりチンポ刺したろ。ホモは、たぶん女で勃たないぞ」

「じゃあバイ?」

「男に感じたことは一度もない! 普通に女が好きだ」

「そっか。とくに女子の腋が好きでしょ?」

「……………否定はしない」

「アユミンも、そうだよ。ガン見するし、めっちゃ舐めてくる」

「……………そうか……………そんなのが遺伝してるのか……………」

「結局、玄次郎は奥さんを好きだったの?」

「そりゃ、それなりに」

「でも、亡くなったのに平気そう」

「真正面から考えると、つらいから、あんまり考えてない。ちょうど、お前が来てくれたし」

「……………アタシのこと、好き?」

「愛している」

「つ……………そういうこと、さつと言えちゃうんだ……………バカ……………」

鐘留は異性愛者として胸と頬が熱くなったので布団の中で背中を向けた。

「……………アタシも……………玄次郎が好きだよ。アタシを守ってね」

「ああ」

「おやすみなさい」

「おやすみ」

「……………」

アタシは幸せになる、きっと明日の朝も大丈夫、もうオネシヨは治ってる、と鐘留は安心した心地で目を閉じられる幸せを感じた。

3月22日 核ミサイル

復和元年3月22日火曜朝、鮎美は小松基地の貴賓室で鷹姫と麻衣子に起こされて、泣き腫らした目を開けたけれど、自分で着替える気力もないので鷹姫たちに制服を着せてもらい、髪もすいてもらった。

「芹沢総理、メイクはされますか？」

「……………でも、ええよ……………ぐすつ……………」

「目の周りが赤いのでメイクします。目を閉じてください」

かなりメイクが巧くなってきた鷹姫が鮎美にメイクを施していく。まったく気力がなく様子を見ていると、里華は叱りたくなかった。

「……………」

すっかりしなさいよ、これから幹部自衛官がそろつての朝食会だつていうのに！ でも、お母さんが亡くなつて……………私の母みたいに無關心な人じゃない、優しいお母さんだったなら、そんなに、すぐに立ち直れないのも当然よね、と里華は言いたいことを飲み込んで貴賓室での朝食会を準備していく。今朝は他の基地司令や主要護衛艦の艦長まで集まつての朝食会で、これほどの幹部がそろつことに里華は尉官として強い緊張を覚えている。しかも里華と麻衣子は追い出される予定で、同席するのは鷹姫だけだった。広い貴賓室とはいえ、大勢の幹部自衛官が朝食会を開けるようにテーブルを並べると所狭しという状態になった。

「……………」

この子が総理代理として防衛大臣といっしよに、幹部自衛官を激励する初顔合わせだつて名目だけど、それなら広い食堂でやってもいいのに、わざわざ極秘会議みたいに私まで追い出すなんて、絶対に何かあるから、やつぱり尖閣諸島の件かしら、でも、それなら表立った会議でもいいのに、と里華は準備しながら滑走路に並ぶ輸送機やヘリを見た。燃料を節約したい状態なのに、それをおして各基地や洋上の艦

から幹部たちが集結している。それでいて激励の朝食会というだけで、他の閣僚とは顔を合わせずに解散する。忙しい総理代理の日程を空けやすいのが朝食時とはいえ、やはり異常だった。

「準備ができました。私たちは失礼します」

里華と麻衣子が敬礼して出ていくと、ドアの前で待っていた畑母神と幹部自衛官たちが次々と入ってくる。鮎美と鷹姫、畑母神が前に座り、すでに米軍撤退の件を知っている鶴田たち三人も前に座って、他の自衛官たちは対面して並んだ。女性は鮎美と鷹姫の他は、わずかに一人だけ艦長を勤めている世々部迪子（よよべみちこ）という40代の将官だけだった。いつもの鮎美なら礼儀の上からも立って彼らを迎えたのに、今は前を見ているものの何も見えないような目で座っている。鷹姫は横に立って背筋を伸ばしていた。

「まあ、楽に座ってくれたまえ」

畑母神がなごやかな声をつくって言う。

「まずは、冷めないうちに、いただきよう」

「」「」「いただきます」」

朝食が始まり、畑母神が雑談してよい、と言ったので食べながら幹部たちは話し合っている。雑談といっても、やはり話題は津波被害と尖閣諸島のことになっている。鷹姫は食べながら、鮎美を見る。

「……。芹沢総理、少しでも召し上がってください」

「……うん……」

鮎美は味噌汁を少しだけ飲んだ。昨日も、ほとんど食べていないので顔色が悪い。

「あと、鷹姫が食べておいて」

「……こんなに、たくさんは……」

ほぼ二人前そのままを食べるのは可能であっても、気が引けるし、もう少し鮎美に食べさせておきたい。

「せめて、ご飯を半分まで、あと味噌汁は、すべて召し上がってください」

「……うん……」

食欲を感じていない顔で鮎美が食べる。そんな内閣総理大臣臨時

代理の様子を幹部自衛官たちは対面しているので目にしていた。

「…ぐすっ…」

味噌汁の味が美恋が作ってくれたものと違う、と想うと泣けてきた。この一年、外食が多くて、家で過ごすことが少なかったのに、もう永遠に母親の味がなくなってしまった。

「うう…母さん…」

「鮎美…：…みなが見ています。しゃんとしてください。あなたは総理大臣です」

鷹姫が小声で耳元へ囁いたけれど、鮎美の涙は止まらない。横にいる畑母神も白身魚のフライを飲み込みながら、フォローを考える。

「みなのうちにも知っている者もいるかもしれないが、芹沢さんは津波で母親が亡くなっていたことを、あえて父親が黙っていてくれたのだが、先日になって知ってしまい。一昨日、最期の別れをしたばかりなのだ。こう見えて元気なときは頼りになるし、もう数日で立ち直ってくれるだろう」

鶴田もフォローする。

「あとで、お伝えしますが、機密を要する話も彼女は慎重に取り扱ってくれます。慎重になるあまり、私を夜中に呼んでおいて盗聴機も心配だからとバスルームに連れ込まれましたね。水道の音で盗聴妨害をした上で話し出してくれるくらいです。ただ、そのとき彼女はバスローブ姿だったので、自分の方は目のやり場と邪心に困りましたよ。ははは！」

「「はははははっ」」

何人かの自衛官が空気を読んで、いっしょに笑ってくれる。暗い雰囲気とならずに朝食が進むけれど、鷹姫は斜め前に座っていた陸自の基地司令が大柄な男性で熊のような立派な体格が百色に似ている、と想っていたら、彼も一口で魚のフライを食べたので、その光景に強烈な既視感を覚えてしまった。東京でビジネスホテル暮らしをしていた頃、毎朝のように百色と朝食をともにした時期があった。そのときの百色が、そっくりそのまま帰ってきたような気がして泣けてきた。

「…っ…くっ…うっ…ぐすっ…」

彼が死んだということが唐突すぎて実感できていなかったのに、今の既視感で心に刺さってきたし、再び腹違いの3歳の妹が亡くなったことでも泣けてくる。六角市で父から聞いて30分あまり泣いたけれど、まだ足りなかった。上の妹が産まれたときは、まだ父が再婚したことに納得しきれず、あまり素直に妹を受け入れられなかったけれど、鷹姫が中学3年のときに二人目が産まれると、もう素直に抱き上げたり、お風呂に入れることもした。お風呂の中で抱いていると鷹姫の乳首を吸ってきたりして、母乳など出るはずがないのに一生懸命に吸う赤ちゃんの顔を見ていたら、男性に興味は無かったけれど、子育てはしてみたいと感じたりしていたのに、あの子が溺死したと想うと、涙が止まらなくなった。鷹姫まで泣き出してしまうと、畑母神もフオローに困る。

「宮本くん、君まで、どうした？」

「…すいません…」

それでも鷹姫は涙を拭いて、言い訳しておく。

「立派な体格をした男性を見ると、百色さんを想い出してしまいました。何度も、こうやって朝食をいっしょにホテルで食べたことがあったので」

「…そ…そうか…、…そういう……ことが、あつたのか…」

「…」

そういう関係だったのか、それは悲しいだろう、かわいそうに、と男性自衛官たちは畑母神と同じ誤解をした。いっしょにホテルで朝食を食べるイコール、いっしょに泊まった、という等式を考えている。鷹姫と百色には、かなり歳の差があるけれど、いつのまにか親密になっていたのだろうと、鷹姫の言葉を遠回しな肉体関係の告白と追悼だと考えた。横で聴いていた鮎美は母のことを想っていたし、鷹姫にそんな気配が無かったことは熟知しているので聞き流している。鷹姫と面識が無かった者のうちでは迪子だけが、単にビジネスホテルかどこかで相席しただけね、と女の勘で察したけれど、黙って食べる。鷹姫は涙を止めて謝る。

「女々しいことで、すみません。どうか、みなさんは気をつけてください。敵は卑劣きわまりない者たちです」

「……」

はつきりと、敵、と言った鷹姫の言葉で余計に貴賓室が静かになった。畑母神は悔しそうに言う。

「置き土産のブービートラップを警戒させなかったのは、総司令官たる私の責任だ。百色くんたちには、申し訳ないことをした」

畑母神にしても戦友を亡くした気持ちでいる。潜水艦の艦長をしている水嶋幸輔（みずしまこうすけ）が拳手して問う。

「政府は、すでに戦争に準じた状態とみなしておられますか？」

「うむ、よい質問だが、それに対して、よい答えがなくて、すまない。もう本題に入ろう。これから君たちに語ることは、臨時内閣の閣僚にも伏せている機密事項だ」

「……」

幹部自衛官たちの顔つきが変わり、まだ食べていた者も箸を置いた。

「内閣では芹沢総代理と私のみが知り、自衛官では鶴田司令ら3名のみであったが、今から諸君に告げる。在日米軍は当面、日本から撤退する、そう米大統領から総代理へ通告があった。また、衛星写真などの情報を分析した様子では在韓米軍も撤退している」

「……」

やはり自衛官たちに驚きが走った。

「これを受けて、今すぐ何か対策をということは検討中だが、いよいよ救助活動は終わりに近づき、陸上では、まだまだ道路の復興などに陸自に頑張ってもらいたいが、海自、空自については、米軍撤退ということを入れて動いてほしい。ただし、動きによって外部に悟られぬように。過敏すぎず、慎重すぎず、今まで通りの我々でありつつ、もはや国を守るのは我々だけなのだ、と肝に銘じていてほしい」

「……」

「今日、ここに来られなかった艦長、他の司令には今から言う者が直接、口頭で伝えておいてほしい。無線不可は当然、必ず二人きりで」

そう言つて畑母神は氏名を読み上げ、各員が伝える相手を指定した。単純に僚艦との距離や基地間の距離で最短となる者を選んでいく。それが終わると、自由に意見を交わす場となる。鮎美と鷹姫が泣いた後なので、畑母神は自衛官たちの士気の低下を心配したけれど、それは杞憂だった。具体的な命令をくだすのは畑母神以下の体制となつているし、むしろ鮎美たちを守りたいという気持ちになつてくれた顔をしている。意見交換は津波で失われた戦力の立て直しや、米軍不在での行動方針など多岐にわたつた。対外的には、やはり尖閣諸島が大きな議題となつたけれど、水嶋が別の懸念を言う。

「今年は主体暦で、ちょうど100年となります。北朝鮮の立場で考えれば、この震災は千載一遇のチャンスであり、偶然の100周年は大きな行動を試みる動機になりかねません。また、最高指導者の金正陽（キムジョンヒン）は70歳、二代目として大きな業績を残す野心をもつかも知れません」

「主体暦で百年だったか……」

つぶやきつつ畑母神は鮎美と鷹姫がわかつていないので説明しておく。

「北朝鮮は、当たり前だが平成や復和などの元号は使っていないし、西暦を使うのもよしとせず独自に主体暦という建国者の生年を起源とする暦を使つているのだよ。まあ、普通は知らないことだから気にしなくていいが、敵を知り己を知れば百戦して危うからずだ。府中基地が津波でやられているが、ミサイル防衛に緊張感をもつていこう」

迪子が挙手して問う。

「防衛大臣と総理代理の意思疎通は、どのように、どの程度なされていますか？」

ヘタをすれば、かなり失礼な質問だったけれど、朝食会で泣き出すような女子高生がトップなので他の隊員も気になつてはいる。男性自衛官は鮎美を責めるような質問は控えていたけれど、やはり同性の迪子は訊くべきことを突いてきた。

「うちは……知らないことが多すぎるので、ほぼ畑母神先生にお任せしている状態です。頼りなくて、すみません」

鮎美は正直に答え、畑母神はフォローに入る。

「彼女は自分の無知を自覚して、私に任せてくれている。独断専行するつもりはないが、こと防衛に関しては、ほぼ私の判断で行い、事後に総理代理へ報告という形が多い。くわえて、そばにいる空尉などが基礎を講義しているし、それを熱心に学んでくれる。もともと、私と彼女が懇意にしているのは石永官房長官の紹介があって、政治的パートナーとして近づいた面が大きい。彼女の秘書官の宮本くんなども、しつかりした考えを持っているし、総理代理自身も防衛問題に積極的だ。ただ、防衛か経済かというと、ご存じの通り経済面の勉強を積んできた人だ。あと、今日は御母堂を亡くされたことで意気消沈されているが、いつもは、この状況でも立派に元気にやってくれているから安心してほしい」

いつになく畑母神は多弁に鮎美のフォローをした。その様子で自衛官たちは二人の関係が見えてきて、安心する。とくに畑母神が海自出身なので大先輩にあたることは大きかった。朝食会が終わって幹部自衛官たちが去り、畑母神は赤い目をしている鮎美に言う。

「そろそろ閣議に行こう」

「ぐすっ…はい…」

貴賓室を出たところで、鈴木が待っていた。

「畑母神大臣、激励会には出てきた皆さんの顔が険しかったですね」

「……。三名も殉職者を出していますから」

畑母神は親露的な政治家である鈴木を信用していなかった。自衛隊の発足そのものが冷戦下だったので、対露、対中というのが基本姿勢になっている。鈴木が女性らしく柔和に微笑む。

「そんな風に、私のことをロシアのスパイみたいな目で見ないでくださいよ」

「そんなつもりはないのだが……」

「畑母神大臣は、素直に顔に出るタイプですよ」

「むう……鈴木大臣は、なぜ、ここに？」

「早朝から次々と着陸する飛行機やヘリがあつて、いったい何事なの

かと目が醒めまして。朝から幹部が大集結して、どんな会議をしていたのですか？」

「ただの激励会です」

「外務大臣の私も知っておいた方がよいことなのでは？」

「……………。どの国に対しても慎重な対応をお願いしておきたい」

「わかりました。そうします」

鈴木が大会議室へ向かって歩くので、畑母神と鮎美たちも続く。閣議が始まる前にマナーモードにしておいたスマートフォンが振動したので鮎美は画面を見た。珍しく玄次郎からメールが来ている。

昼休みに報告したいことがあるので会ってほしい。会えそうか？

鮎美は少し考えて返信する。

いい報告なん？ 悪い報告なん？

すぐに玄次郎が返してくる。

一応は一般的には、いい報告の部類に入る場合も多い。

もってまわった言い方だった。

「なんやの、それ。まあ、ええわ。おいで。できたら電車で」

ガソリンを節約するように送信してから、鷹姫にスマートフォンを預け、通用門を警備している部署へ、父が来るので通してほしい、と伝達するよう頼んだ。鷹姫は廊下にいる麻衣子に伝えて、すぐ戻る。石永が司会して閣議が始まった。

「今日は10時から富山県と福井県の関係者がプレゼンに来るので、それまでは尖閣諸島のことを。鈴木大臣、中国側からの反応は？」

「あくまで爆弾を仕掛けたのは自然保護団体に潜入していたテロリストという回答でした。テロリストは逃亡し、行方不明とのことですよ」

「ふざけたことを……………中共め……………」

石永が苦々しく言い、鷹姫は生麦事件で島津久光がイギリス人を切ったのは藩士ではなく、通りがかりの浪人とシラを切ったことを思い出し、その後、薩英戦争となったことも考えたけれど、古すぎる話なので黙って鮎美の様子を見る。鮎美は座って前を見ているけれど、

ぼんやりとしていて議論を聴いていない。鈴木が言う。

「私の私見にすぎませんが、胡錦燈主席と対談したときの感じからすると、現場の独断専行であり、爆発物を仕掛けるところまでは彼の指示とは思えません」

「……」

また鷹姫は久光が直接に斬れと命じたわけではないことを思い出した。いつの時代も必ずしもトップが決めて戦争になるわけではないのかもしれないとも考える。けれど、起こってしまった事件に対しては、それぞれの立場で争うしか無いのも変わらない。鈴木と石永が話し合っていると、大会議室に鶴田司令の副官が入室してきて敬礼し、畑母神にだけ何かを報告した。すぐに畑母神が閣僚たちに言う。

「再び領海侵犯が発生している。中国漁船ではなく海監の船が1隻、尖閣諸島の領海へ入ったり出たりを繰り返しているようだ。とりあえず、こちらにも1隻、さし向ける」

畑母神が対応を決めたので副官は敬礼して出ていき、石永が言う。

「いっそ、爆発の現場検証をしたまま、ずっと海保に滞在してもらっていれば……、余計にエスカレートするか……」

閣僚の誰もが事態の悪化は望んでいないので尖閣諸島の話は終了となり、道路復旧の話は久野がするけれど、あいかわらず鮎美は聴いていない様子だった。必ずしも鮎美が発言しなくても、復旧作業は進むし、久野はベテランなので他の閣僚も、あまり意見しない。次の夏子も財務省の話を一人ですべて一人で決めて終わった。ある意味で順調に進む閣議の中で、今日一番注目されているのは新屋だった。学生時代に女性の下着を盗んだことが世間で話題になっていて、閣議の席でも何かあるかと思われるだけけれど、本人は国家公安委員会委員長として治安の状態を報告するのみにとどめる。

「さぎの尖閣諸島中国漁船衝突事件で不法に動画をネットへアップされた百色さんは、その後畑母神知事、いまは大臣ですが、畑母神先生のもとで都の職員として返り咲き、再び尖閣諸島へ出向かれています」

て、海保にとつても国民にとつても、いわば英雄であつたわけで、その彼が卑劣な罠によつて亡くなつたことで国民感情の悪化はすさまじく。向けようのない怒りを、やはり再び在日中国人へ向けるという形で17件の事件が発生し、うち2件で殺人もしくは傷害致死に至っています。この2件は右翼的な団体に所属していた日本人男性によるものですが、他に避難所にいた在日中国人の16歳の女性が強姦される事件も発生しております。この犯人は国籍は日本ですが昨年帰化した元韓国籍の男性です。くわえて強姦を目撃した男性2名が女性を救出したのはよかつたのですが、犯人へ過剰な暴行を加えており、罪に問われる可能性があるも、駆けつけた警察官が、それを見逃そうとする様子の一部始終を傍観していた者がスマートフォンカメラで撮影しており、動画がインターネットに流れたため、犯人が元韓国籍であつたから日本警察が過剰な暴行を見逃したと騒ぎになっております。この警察官は上司からの調べに対し、見過ごしたのは事実だが元韓国籍ということは、あとになってわかつただけで、総理代理令でも強姦への罰則は強化されたので、その影響を受けた市民の行動を過剰な暴行として逮捕するのに気が引けた、と言つております。この事件は一部に尾ひれがつく形でインターネットを流れております」

「ややこしいときに、ややこしいことを……はああ……いつそ強姦犯への裁判権を放棄して、被害少女とともに中国へ引き渡したくなるなあ……」

石永がタメ息をついて天井をあおいで言う。

「これ以上、ややこしくしないでくれよ、頼むからさあ」
「……………すみません」

新屋は暗に下着泥棒のことを問われたのかと感じて謝り、石永の目を見た後に、鮎美の顔も見た。鮎美は何の興味ももっていないか、もしくは世間でパンツ大臣と騒がれていることさえ知らないような顔でいる。

「……………」

「……………」

鮎美へはゲイだと秘かに伝えているのに、こんな過去の事件が発覚してしまい、どう思われているか、気になるけれど何も言う機会がない。鮎美の無気力な様子には他の閣僚も気づいているけれど、あと数日は仕方ないだろうと誰もが目をつぶっている。むしろ、総理代理令を閣僚へ相談なしに発されるよりいいので、お飾りとして座つてもらっている形になる。その形のまま富山と福井の知事と県議、県職員、市長、市議、市職員が入室してきて、どちらの街が副都心にふさわしく利便性などが高いかのプレゼンテーションになった。県議と市議、職員はそれぞれ一番ベテランの者が来ているし、富山市からは中川市議が顔を出している。ずっと、中川は静江へ接待を続けていたので、これに代えて静江も閣僚たちに根回ししていた。司会も石永から引き継いで静江が行う。

「では、富山県からお願いします」

「はい！ ハシカイのが富山っこの売りです。ノーベル賞の受賞が…」

まず知事が語り、次に県議と県職員がフォローし、さらに市長と中川、市職員も富山県と富山市を売り込む。副都心として提供できるビルや土地、その代金、交通の便、産業、人的資源、観光資源、名産品などを熱心に宣伝した。石永が腕組みしながら言う。

「なるほどなあ、静江がイチオシなのもわかるけどなあ……」

「美味しい物もたくさんありますよ、お兄ちゃ……いえ、官房長官」

「まあ、美味しい物は、このさい関係ないとして……じゃあ、次、福井をお願いします」

「福井県、どうぞ」

静江が待機していた福井県関係者へ促す。福井県知事も熱心に地元を売り込む。

「芹沢総理が、ご自分のことをウチと関西弁で言われますが、福井ではウラと言います。まあ、そのくらい関西と福井は近いわけですよ」

石永と静江が選んだ閣僚たちは、やはり地理的に関西に偏っている。福井は関西に接しているので、そこをアピールしてきたし、新屋は敦賀市の人間だったので、どんなに静江が根回ししても福井への投

票が鉄板だった。両県のアピールの間も、鮎美は興味なさそうにしていたので、初めて鮎美を間近に見た両県関係者は、やはりお飾りの女子高生だったのだと感じた。昼12時となったので静江が言う。

「では、みなさま、研修室に移りまして、立食形式の食事をもちます。ご歓談、ご質疑等、交流をまじえながら行つてください」

そろそろと大会議室から研修室へ移動すると、さすがにアルコールは出ないものの、食事が用意されていて、両県の名産品も並んでいる。白エビや越前ガニなどもあった。

「……こんなときに……こんな豪華な……」

つぶやいた鮎美の声が福井県知事の耳に入ったので、穏やかに言うてくる。

「当県では、たまにですが学校給食にもカニができます。子供たちにも地元の売りを知ってもらう機会ですし、たしかに、おっしゃるとおり、この大災害のうちに豪華な食事など私も気が引けますが、カニ漁をしている漁師の生活や生鮮市場関係者の生活もありますから、どうか、美味しく召し上がってください」

「……そうですか……そうですね……」

「さっさと、どうぞぞ」

福井県議も勧めてくれるけれど、食欲がないので断つて言う。

「うちにアピールしてもらっても、うちは投票には加わりませんよ」

「……そうですか……」

本当にこの子はお飾りで投票さえしないのか、と思った知事と県議は鮎美から離れて他の閣僚へ声をかける。鮎美には麻衣子と里華、長瀬、三井の四人が囲むように守りについでるので近づきにくさもあって、もう誰もアピールに来なくなった。かわって新屋だけが来る。

「芹沢総理、あとで、二人でお話する時間をいただけませんか？」

「……あ……はい、テキストに鷹姫にでも、言っておいてください……」

スケジュールさえ、どうでもいい様子の鮎美へ鷹姫が言うてくる。

「芹沢総理のお父様がお見えになったそうです。貴賓室でお会いにな

りますか?」

「……うん……ほな、ここは、もうええよね」

鮎美がいなくても食事会に支障はないので研修室を出て貴賓室に向かった。ちょうど廊下で玄次郎と鐘留に出会う。

「……あ、カネちゃんまで来たんや」

「うん……ごめんね……」

やや後ろめたそうに鐘留が謝った。

「別に、ええよ。ここで、いっしょに生活する?」

「……うん……」

鐘留が戸惑うので鮎美は力なく微笑した。

「基地なんて嫌かもね。家の方がええよね。カネちゃんち広いし」

「……アタシの家は津波で流れたよ……それでママとパパが死んじやったし……これ、言っただけ……」

「あ……ごめん……うち、ぼんやりしてて……」

「ううん、気にしないで」

「……。とりあえず、入って。父さん、報告つて何?」

「ああ、中で話そう」

貴賓室に入ろうとしたけれど、長瀬が謝りながら言う。

「すみませんが、お二人の身体検査をさせてください」

「あ、ああ、どうぞ」

玄次郎は軽く両手をあげた。玄次郎へは長瀬が、鐘留へは里華が、しっかりとポケットの中まで身体検査を行った。

「アタシたち、門のところでも身体検査されたよ? やん、エッチ♪」

鐘留はスカートのポケットにまで里華が手を入れてきたので、くすぐったくて身をよじった。長瀬と違い、里華は要人警護の経験もないし、研修も受けていないので、余計に嚴重となる。本気で刃物を隠そうと思うなら、靴底や下着の中まで疑わしくなる。鐘留は衣服の上からとはいえ、お尻の割れ目や股間まで触られたので不快そうに文句を言う。

「アユミン、コイツ、レズ? めっちゃ触ってくるんだけど」

「ちやうよ。我慢したって。お互いに」

里華も不快そうに黙って鐘留の身体をチェックする。そして、ふと気になって長瀬に質問する。

「長瀬警部補、全身に触れましたが刃物のような物はありませんが、少量の毒物や爆薬なら体内、……肛門や膣に隠すことができると思うのですが、そういう検査は、よいのでしょうか？」

「それは……刑務所に入れるときなどは、やりますが……通常の警護では……」

長瀬が迷う。平時であれば行わないことだったけれど、今や鮎美は、たった一人の政治的代表であり、今までも刃物だけでなく毒物でも狙われている。玄次郎と鐘留の顔は長瀬も見知っているけれど、見知っていた松田川は毒をもってきたし、詩織も両親を人質にされた。

「……………」

玄次郎と鐘留が不安そうに、お尻を守った。

「ちよ、オレは鮎美の父親だし！」

「アタシも親友だし！」

二人とも他人に体内を探られるのは、とても嫌だった。里華が言う。

「以前、主治医や秘書が両親を人質にとられて暗殺におよぶ事件がありましたし、この二人は今朝になって急にアポイントを取ってきた外部から来た人間です。教えていただいた疑うべき項目に該当します」

廊下に立って待っているときなどに要人警護について長瀬と知念から教授を受けていた里華が言うと、ますます長瀬も迷う。富山県や福井県の関係者は公務で予定を立てて訪問してきているけれど、玄次郎と鐘留は私用で急なアポイントなので、怪しいと言われると怪しく感じる。

「オレの両親は、もう死んでるし！ 鮎美は娘だ。この世に、鮎美と等価になる人質なんて存在しない！」

「アタシの両親も！ アタシ天涯孤独になったから、ここにいる人以

外、大事な人なんていないし！」

「……」

そろそろ里華はレズよばわりされた復讐もできたし、天涯孤独がつらいのはわかるので鐘留を許すことにした。

「長瀬警部補、この二人は大丈夫そうです」

「そうですね。では、お入りください」

貴賓室へは鮎美と鷹姫、玄次郎、鐘留、麻衣子、里華が入り長瀬と三井はドアの前を守った。

「それで、父さんの報告って？」

「ああ……もし、オレが再婚するって言ったら、どう思う？」

「再婚………えらい早いね………隠してた愛人でもいたん？ ……」

母さん、かわいそうに………っ……ぐすっ……」

鮎美が泣きそうになると、鷹姫が怒った。

「あんまりです！　せめて数年！　わずか数ヶ月でも待とうと思わないのですかっ?!　忌明けもまだなのに！」

父親に再婚された経験のある鷹姫は自分のことのように悔しかつたし、いつになく感情的になった。里華と麻衣子は第三者的な目で見られるので、すぐに話の先が読めた。再婚話を、なぜ鐘留といっしょに来て言うのか、少し考えればわかることだった。ただ、鐘留は鮎美たちと同じ冬制服を着ているので、娘と同じ年、もしくは年下と再婚ということになるし、娘の友達との再婚というのは、かなり乙女心にも微妙だった。

「愛人じゃないぞ！　美恋が亡くなってから関係したんだ！　つい、お互い、淋しくて！」

「ほな、相手は誰なんよ?!　まさか、お手伝いしてもらってる陽湖ちゃんのお母さんちゃうやろね?!　旦那いるんよ！　不倫やん！」

「アユミン、ごめん!!」

鐘留が大声で謝って両手を合わせた。それで鮎美と鷹姫も悟る。

「まさか……」

「ごめん……アタシ、本当に誰一人、家族いないし、親戚もないし、

すごく淋しくて……優しく泊めてくれてたから、つい……ごめん」

「カネちゃん……けど……年齢が……そ……そもそも、こんなスチャラカエロオヤジでええの?!」

「……頼りになる……感じだし……。……す……好きだよ」

「……………」

鮎美がよろめいてフラフラと椅子に座った。

「鮎美、急すぎる話で、すまない。けれど、黙っていてバレルより、いかと思っただ」

「……………ぐすつ……………」

鮎美は椅子の背もたれに身体を預け、顔を天井に向けた。その目尻から涙が流れていく。

「…鮎美……………」

「アユミン……………ごめん……………でも、パパを盗るわけじゃないよ。アタシがアユミンのママになるから」

「つ……クスっ……………はは……………」

かすれた声で鮎美が笑った。

「うちの……………ママに？ カネちゃんが……………はは……………」

「緑野……………なんと、愚かな考えを……………」

鷹姫もよろめいて机に手をつく。空笑いしていた鮎美が問う。

「ほな、うちのママになつて、おっぱいでも吸わせてくれる?」

「……………うん……………いいよ……………」

「……………やめとくわ、そんな気持ち悪い関係」

同性愛指向はあっても、肉親が関わってくると性的嫌悪感があった。父親と同じ女性を性欲の対象にしたいとは想えない。

「はは……………まあ……………死んでもた母さんには、わかることやないし……………二人が、そこでええなら、ええんちゃう? うちには関係ないことやん」

「……………」

「鷹姫、公選法の範囲内で二人に祝儀、送っておいて」

「……………ですが、……………そんな、あつさり……………」

あまりに鮎美が可哀想で鷹姫は抱きしめて言う。

「どうか、お気をしつかりもってください」

「……鷹姫……」

鷹姫に抱いてもらおうと、自棄になりかけていた気持ちが静まった。

「おおきに………」

鮎美は礼を言つて目を閉じると、決めた。

「父さん、カネちゃん。おめでどうとは素直に言えんけど、二人で支え合つて、やっつていつて」

「鮎美……」

「アユミン……」

「うちはうちで頑張るわ。いつまでも母さんが死んだこと、泣いててもしゃーないし。復活もせんし、せめて生まれ変わるなら、早めに日本を復興させておいてあげんとね」

「「「「………」」」」

玄次郎と鐘留、鷹姫、麻衣子、里華たちも生まれ変わりを本気では信じていないけれど、そう考えると死を永遠の終わりとして直視せずには済むので心が幾分か楽になる。

「そろそろ昼休み、終わるし。うちは研修室に戻るわ。父さんとカネちゃん、今日は、これから、どうするん？」

「鐘留の家の会社やオレの仕事が溜まつてるから、実はすぐに帰りた。言われた通り電車で来たなら時間もかかったし」

「ほな、警護に知念はんをつけるわ。鷹姫、知念はんに伝えて」

「はい。なんと伝えますか？」

「父さんとカネちゃんを地元まで送つて、それから県警に頼んで今後ずっと二人を警護してもらおうよう手配して」

「オレたちは別に……」

「今までのこと考えたら用心は要るし。あと、知念はんに、せつかくやから二、三日、休んで松田川先生に会つてきい、とも言うておいて。長瀬はんには一人では無理あるし、もともと二人での24時間もきつかったと思うし、高木はんら自衛隊と交替シフト組むようにしてもらつて」

「わかりました。伝えます」

鷹姫は伝えに行き、鮎美は研修室に戻った。少し食欲が湧いたので福井県の名物だというソースカツと富山県のブラツクラーメンの小鉢を味わって食べた。遅れて食べに来た鷹姫は食材に無駄がないよう、わずかに残っている大皿からさらえて食べた。昼休みが終わりに、いよいよ大会議室に戻って副都心を福井にするか、富山にするか、決める。ここまでの両県関係者の手応えでは、静江が推している富山に傾く閣僚もいれば、より関西に近い福井と考えている閣僚もいる感じだった。自由な討議の時間ということになり、閣僚だけでなく両県関係者も発言してよいし、秘書レベルでも発言可という風に静江が司会した。久野が国土交通大臣らしく言う。

「富山には空港、新幹線とそろい、高速道路も北陸道と東海北陸道があつて名古屋へもアクセスはいい」

やはり久野も選挙で勝ってきている政治家なので、つい地元である愛知県のが頭にあるし、鈴木も少しでも北海道に近い富山という気持ちでいる。

「私も富山がよいかと考えています」

夏子も地元優先で隣県の福井を推す。

「私は断然、福井！ 経済的な発展の余地としても平野部の広さが魅力よね。富山は、うちの県庁がある阪本市が琵琶湖と山に囲まれて、もう開発する土地が無いのと同じに、山と海に囲まれてるから」

新屋も当然に福井よりに発言する。

「中部縦貫道が通れば、富山より名古屋へ早いでしょうし、現状でも井伊市の関ヶ原ジャンクションで名古屋へ、京都大阪へも近い。何より首相官邸が置かれる小松基地と近いし、小松空港から東京へも飛ばます」

新屋の発言の途中で中川が、パンツ大臣が、と小声で野次を飛ばした後、閣僚を前にして市議の立場で発言するには勇気が要るけれど、恐れずに一番言っておきたいことを言う。

「福井市は敦賀市に近すぎます。敦賀には全国最多の原発が集まっている。もう原発事故は懲り懲りというのは全国国民の共通認識である

と思いますが！」

福井県知事がすかさず反論する。

「すでに震災直後から関西便利電力は、すべての原発を安全に停止させており、今後も稼働の見込みは少ないようです。このさい、原発はリスクではありません」

「わからんでしょう、どんな事故、どんな巨大地震が、また来るか！」

「それを言ったら富山市は海に近い！ 福井市は海岸から離れていまず！」

福井県知事と中川が白熱しているのを、鮎美は黙って見つめながら考える。

「……………」

火力発電所に燃料を喰われるくらいやったら、いつそ原発を動かしたいんやけどなあ、いずれ廃炉にするにしても現況で使ってる核燃料は、もつたいないし使い切るまで使った方がええし、と鮎美は再稼働の余地を選択肢に入れていたけれど、今は言わない。かわりに静かに挙手した。午前中では、ぼんやりしているだけだった女子高生総理が意欲的な目で挙手しているのが福井県知事と中川が黙る。

「うちは両県に競ってもらうことを言い出した立場ですので投票はしませんが、一つだけ意見を言っておきます」

「……………」

両県関係者は、テレビや配信動画で見る通りしつかり喋る子だな、と感じたし、静江や石永ら付き合いの長い者は、立ち直ってくれたのだと安心した。

「臨時政府の立場としては、たとえ原発はチェリノブイリのような事故を起こしても数キロ離れば安全、長期的な健康被害も無いということを国民に発信しています。その立場で、福井市は原発に近いので副都心にしない、という考え方をするのは国民への背信です。閣僚のみなさまには、投票のさい、原発銀座を福井市のマイナス要素にはしないでいただきたいと考えます。とくに敦賀一帯は経済的恩恵はあったとはいえ、北陸地方でありながら関西地方へ電力を送ってくれ

ていたのですから、その恩も忘れずにいたいと感じます」

「「おおっ……」」

この鮎美の意見に、福井県関係者は涙が滲むほど嬉しかったし、お飾りと思っていた鮎美への印象を一変させてファンになった。

「くっ……」

小娘が余計なことを、と中川ら富山県関係者は顔をしかめ、静江の方を見た。こんなことを言わせる予定だったのか、あれだけ接待したのに、という詰問するような視線だった。静江はプルプルと首を横に振った。その後も自由な討議は続き、もう鮎美は黙って尖閣諸島のことや同性婚をいつ合憲的に発布施行するかに思考を巡らせ、投票も静かに見守った。投票結果の集計は、静江ではなく鷹姫と斉藤が行い、鷹姫が発表する。

「投票の結果、福井市を副都心とします」

まるで文化祭の出し物が決まった程度の言い方で淡々と述べた。

「「おおおっ!!」」

福井県関係者はオリンピックの誘致が決まった場合よりも大きな喜びに包まれる。

「「バンザイ!・バンザイ!」」

田舎の政治家にありがちな激しい喜び方をしている一方、富山県関係者は苦々しく黙っている。鷹姫は予定を述べる。

「では、福井県関係者は移設される各省庁との打ち合わせがありますので研修室へご移動ください。富山県関係者はご苦勞様でした。お帰りください」

すぐざごと帰るのは悔しくて中川が新屋に怒鳴った。

「パンツ大臣が! 女子高生の小便パンツもらったかつ! やくちやもない!」

「「……………」」

新屋は黙っているし、この場に女子高生は鮎美と鷹姫しかいないので、ひどく不快だった。鮎美は都知事選のときに失禁してしまったことを、それほど恥とは思っていないけれど、鷹姫は飛行機内で漏らし

た動画が中国で出回っていること等を強く恥じているので顔を伏せて震えた。それが可哀想で鮎美の頭に血が上る。

「誰がパンツ大臣やねん!! セクハラで逮捕させたらかつ?!

「逮捕するなら、パンツ大臣を捕まえい!! お前も盗まれるぞ!」

「はア?! 意味わからんねん、ボケが!!」

鮎美は大学時代に新屋が下着泥棒で逮捕された件が世間で話題になっていることを、まったく知らなかったので齟齬が生じる。何より総理代理と市議が、柄の悪い女子高生と品のない中年のように閣議の場で言い争うのはやめてほしいので、石永や久野が鮎美を止め、富山県関係者は中川を止めて出て行った。

「意味わからんわ……ムカつく……誰がパンツ大臣やねん。いつまでパンチラの件、引き摺ってんねん、腹立つわあ」

「……………」

石永と久野は鮎美が下着泥棒の件を知らないことに気づいたし、他の閣僚たちの視線も自然と新屋に集まり、彼は深く頭をさげた。

「申し訳ありません」

「……………なんで、新屋はんが謝るのん?」

「芹沢総理は、ご存じないようですが今、世間では自分のことをパンツ大臣と批判されています」

「そうなんや……………なんで?」

「少しの間、二人だけで話し合わせてもらえませんか。お願いします」

「えつと……………ほな、閣議は副都心も決定したし休憩ということで、新屋はんは貴賓室に来てもらえます?」

「はい」

鮎美と新屋は貴賓室に移動する。石永たちは過去に女性下着を盗んだことを二人きりで女子高生相手に、どう言い訳するのか、とても興味があったけれど我慢して、するべき仕事をするために、福井市へ移設となる省庁の大臣などは研修室へ行った。鮎美は鷹姫さえ廊下に待たせて新屋と完全な二人きりになった。

「ほんで、新屋はんのお話っていうのは?」

「はい、ちまたで噂になっている通り、自分は大学時代に女性の下着を盗みました。父が政治家だったおかげで被害女性とは示談になっていますが、逮捕された事実があります」

「……ゲイやなくてバイやったん？ 下着フェチの」

「いえ、ゲイです。女性にも下着にも興味はありません」

「ほな、なんで？」

「あのころは自分が同性愛ということが認められず、なんとか異性に興味を持たないものかと、いろいろと間違ったことをしていたのです。風俗にも行きましたが、行為そのものができず、いつそ違法行為とわかっていて女性の下着でも盗めば興奮できるのではないかと考え……犯行におよびました」

「そうなんや……」

「この話は選挙のたびに地元に流れますが、今回は自分が大臣ということで全国的に広まってしまいました。週刊紙などが印刷されなくなったとはいえ、インターネットで拡がっています。これ以上、総理にご迷惑をかけることはできません。大臣は別の者に替えてください」

「……けど、もう示談して、終わった件で、大学時代って10年以上前ですよんね。そやから再チャレンジして選挙で当選しはったこともあるんちやいますの？」

「はい……それでも過去の罪が追いかけてくるのです……」

「……自分が同性愛なんが認められず……か……」

鮎美は深い同情を覚えた。同じような試みは鮎美も経験している。中学の頃、次々と同級生が異性に恋をしていくのを見て、なぜ自分は同性のことばかり見ていたり、気になったりするのかわからず、無理に男子へ興味をもとうと話しかけてみたりもしたけれど、少しも楽しくなかったし、逆に好きになられて困ったこともある。剣道が抜群に強かった鷹姫に恋をして、もしかしたらと剣道男子を見つめてみたりもしたけれど、無駄だった。それだけに新屋が風俗に行ったり、とうとう違法行為と知って下着を盗んでみたりしたのも理解できる。

「うちにとって、新屋はんは、きわめて重要な政治的パートナーです。」

三島はんも、そうですけど、同性愛であることの苦惱、ノーマルとは違うことの苦しみ、これらマイノリティのことを、多数派は、まったく理解しようとせんでしょ。そんな中で閣僚に2名、うちも入れれば3名もマイノリティがいることは、歴史的快挙やし、最高のチャンスやと思います」

「……………」

「同性婚のことも進めたいし。単純に、新屋はんが異性愛者やったとしても10年以上前の、もう示談したような話を引っ張り出してきて大臣をおろすのは、国政の安定にも問題あると思います。今は省庁の立て直しに、過去に痴漢とかで退職した人も再雇用してますから、むしろ新屋はんのことは、最大限にかばっていきたいと思います」

「……………総理……………」

「幸い、うちは女で、新屋はんが盗んだのは女性下着、うちが過去のことなんか、どうでもええと言ええ、これ以上の追求もしにくいでしょう。すぐに演説して動画を配信しますわ。もちろん、新屋はんがゲイなことは隠したまま。……………それとも、これを機会にカムアウトしますか？」

「……………」

新屋が激しく迷ったので鮎美は優しく言う。

「迷ううちは隠しておかはずたらええですよ。敵を欺くには、まず味方から。うちに強力なパートナーがいること、閣僚にも隠しておくのは有利な場合もありますし。どのみち同性婚の発布施行は、かなり強引になるでしょうから。そのとき援護射撃をお願いします」

「はいっ！ 必ず！」

二人は密談を終えて貴賓室を出ると、大会議室に戻り、他の閣僚たちには過去の解決済みの罪で進退を問うことはしないと宣言し、また全国に向けた演説動画を作成して、強姦など重い性犯罪を厳罰に処すことは当然だが、軽い性犯罪で犯人の人格を全否定するようなこともしないし、反省して再発することを推奨すると流布した。配信が終わってからの夕食は鷹姫に手配してもらって、新屋と三島、それに高木と三井、今泉、泰治にもテーブルについてもらい、貴賓室とともに

した。その間、ドアの前には長瀬と武装した麻衣子、里華に立つてもらった。鷹姫以外は同性愛指向のある者ばかりでの夕食をすすめ、三島はいよいよ救助活動が一段落したので中隊規模の男性同性愛者ばかりで構成された陸自隊員を集め、鮎美を護衛できる体制が明日から整うことを述べ、また新屋と協力して省庁内の同性愛者にもコンタクトをとってグループ化する計画をもった。泰治も民間のマイノリティで構成されたネット上の協力者が、どんどん増えていることを誇った。鷹姫にとっては本当に興味のない話題だったので、黙々と夕食だった福井県から小松基地へ提供された越前ガニを食べた。

「鷹姫が美味しそうに食べる顔って、ホンマに可愛いね」

不意に鮎美が声をかけてくれたのでカニ味噌を飲み込んでから応える。

「私からも一つ話題をふつてもよいですか？」

「うん、ええよ」

「もうお元気に立ち直られたので一考していただきたいのですが、陛下のことです」

「……………」

めっちゃ空気読まへんね、あいかわらず、今思いつきり同性愛者同士で盛り上がったのに、と鮎美は微妙な笑顔になる。鷹姫は淡々と続ける。

「夕刻、宮内庁の職員より私へ電話があり、陛下が芹沢総理を心配され、予定が許すのであれば、京都か、小松でお会いして慰めたいとのことです。玉体お運びあるは恐れ多きことにて京都が適切かと思いません。お伝えするタイミングをみていたのですが、今まで言い出せませんでした。できれば、明日朝にでもお返事される方がよいかと思えます」

「……………」

タイミングみてて、このタイミングなんや、と鮎美は、さらに微妙な顔になる。その表情で泰治や新屋たち同性愛者には、やはり鮎美にはバイの指向は一切ないのだとわかる。

「……………うん……………まあ……………失礼のない返事を考えておくわ……………」

そうして、越前ガニを食べ終わって解散しようという頃に、複数のスマートフォンや携帯電話が、ほぼ同時に警告音を鳴らしてきた。

「Ｊアラート！　Ｊアラート！」

本震以後、それほど強い余震はなかったのに、とうとう強い余震が来るのかと鮎美たちが覚悟したけれど、警告は別のメッセージを流してきた。

「ミサイルが発射されました。東北、北陸、関西、九州に向かっている可能性があります。地下または頑丈な建物に避難してください」

「……ミサイルで……」

「芹沢総理、窓から離れてください」

窓のそばにいた鮎美を鷹姫が身体で押したとき、窓ガラスを割って金属片が飛び込んできた。

「っ?!」

「くっ……」

鮎美が驚き、鷹姫は飛び散ったガラス片が背中に刺さって呻いたけれど、それほど重傷ではなかったので、そのまま鮎美の身体を押して床に伏せる。何が起るのか、とにかく身構え、鷹姫は全身で鮎美をかばったし、すぐに三井と高木の大きな身体が二人をかばってくれる。けれど、もう何も起こらず15分が経過したので鮎美は司令室へ行きたかったが、行っても役に立たないことを自覚しているので小松基地の構造をよく知っている里華に案内されて地下室で待機した。二時間過ぎ、鶴田司令が直接に鮎美へ報告に来た。

「核ミサイルが北朝鮮より、我が国と韓国へ向け、発射されました。合計10発」

「10発も……」

「日本へは、小松、京都、那須、札幌、福岡を目標として発射され、小松と京都を狙ったミサイルは迎撃しましたが、金属片などが飛散し、宮本秘書官のように負傷された人が少数ながらおられます。那須と札幌を狙ったと思われるミサイルは、30キロ以上離れた山中で核爆発を起こしましたが、死傷者は少数と思われる。ですが、福岡を狙ったミサイルは市街地で核爆発に至り、数千もしくは数万人の死傷

が出ています」

「…………津波で無事やった福岡を……………」

鮎美がつぶやき、三島も苦々しく言う。

「陛下と妹宮様を京都と那須に分けているという欺瞞情報を信じてくれたのはよいが、両方を一挙に消そうとするとは……………」

鶴田は報告を続ける。

「韓国を狙った核ミサイルと思われるミサイルは、ソウル、釜山、仁川、大邱、大田の市街地に命中し、仁川を狙ったミサイルのみ、不発だったのか核爆発は観測されていませんが、他の市では数万人規模の死傷者が出ているものと予測されます。また、韓国の他の都市や基地へは断続的な通常弾頭によるミサイル攻撃が続いており、北朝鮮陸軍も進軍しています」

「…………戦争…………する気なん…………第二次朝鮮戦争でも……………」

鮎美が寒気を覚え、三島が問う。

「日本を狙ったミサイルと韓国に落ちたものでは、ずいぶん命中率が違うが、理由はわかるか？」

「はい。小松、京都にはミサイル防衛を展開しておりましたのが奏功しています。那須と札幌を狙ったものは、単純に距離が遠いので精度が落ちたのでしょう。逆に韓国は北朝鮮から至近ですから、命中させやすいものと思われます」

「そうか…………金正陽、本気だな」

「…………うちが、この状況で、すべきことは…………自衛隊を…………他に……………」

鮎美は地下室で時間を過ごしながら、よく考えた。

3月23日 総理大臣

復和元年3月23日水曜、午前0時、鷹姫は医務室で背中にガラス片が刺さった負傷を治療してもらっていた。

「どう？・痛むかしら？」

以前に鮎美を寝かしつけた看護師の資格を持つ女性自衛官が包帯を巻かれた鷹姫の美しい背中を眩しそうに見ながら言った。彼女が女性同性愛者であることは、胸に着けているマークでわかる。義隆と泰治が組織化した芹沢少数者差別阻止部隊に任意で参加している者は、同じく任意でマークをつけることになっていて、部隊名の頭文字をとってSSSSでフォーエスと義隆が決めた。金属製のバッチや記章を作る時間的余裕も予算もないので、ただの紙に印刷したマークを切り抜いて貼るというだけだったけれど、総理代理が同性愛者である今、かなり存在感のあるマークになっていた。さらにSSSSのマークを虹色で印刷すると、LGBTのいずれかであることのカミングアウトになるし、虹色でなくピンクを選ぶとレズビアンであるとしていた。

「あなたも女性同性愛者のですか……意外に多いのですね」

背中を見られていた鷹姫が制服を着ながら言った。

「変な目で見られたつもりはないけれど、不快だったら、ごめんなさいね。あんまりにも、あなたの背中がキレイだから」

「別に気にしていません。私はノンセクシャルらしいですから」

「へえ……いるのね、話には聞いたことがあるけれど。あなたはフォーエスのマークは着けないの？」

「私は芹沢総理の秘書であることが第一ですから」

鷹姫の制服には秘書としての議院記章がついている。もう国会議事堂は存在しないので、出入りに要する用途は消えても、いよいよ着け始めて時間が経ち、自衛官が階級章を誇りに思うよう、鷹姫も議院記章を誇りに思いつつあった。

「そう。それも、いいわね。そう言う私も、やっと、ふんぎりがついて、

さつき着けたばかりだもの」

「そうなのですか？」

「ええ、自分の性的指向のことは生涯、黙って、結婚して子供もつくったことだし、ひっそり生きていこうと思っただけで、さつきの核ミサイルで死んでいたかもしれないと思っただけで、隠しているのがバカらしくなって」

「……。やはり女性同性愛者でも異性との結婚は可能なのですか？」

急に鷹姫が興味をもって問うた。

「え、ええ。まあ、……本意ではないけれど、結婚すれば両親も喜んでくれるし、やっぱり、子供は愛しいから」

「子供……」

鷹姫は憧れた目をしたけれど、今は非常時なので顔を引き締め、制服を整えた。背中の傷は医官に3針縫われただけで、貴賓室の窓ガラスを割って飛び込んできた金属片も自衛隊側の迎撃ミサイル由来の破片だったので放射性物質なども無く、北朝鮮側のミサイルに搭載されていたろう核物質は大半が海に没したようだった。

「治療を、ありがとうございます」

「いえいえ、とても大変なことになったけれど、あなたにも総理さんにも、どうか頑張つてほしいわ。お願いします」

「はい、頑張ります」

秘書として答え、鷹姫は医務室から鮎美たちが閣議を開いている地下室に移動する。

「……鮎美……」

心配だった。鮎美は無傷だったし、鷹姫の傷を心配してくれたけれど、それよりも鮎美の精神的ダメージが心配だった。やっと母親の死から立ち直ってくれた様子だったのに、その直後に核攻撃という最悪の事態が発生し、どんな気持ちになっているのか、とても心配している。足早に鷹姫が地下室に入ると、鮎美と石永、鈴木、新屋、三島の他2名の閣僚がいて臨時の閣議を開いている。夏子や久野などの閣僚は省庁をおく金沢市や福井市に宿泊していたので、その場で安全に

過ごしてもらおうことにしていた。防衛大臣である畑母神は司令室にいて、地下室とは有線でモニターをつないだので盗聴の危険なく閣議に参加しながら自衛隊への指揮もとれる。

「もはや戦争状態だな」

石永が言い、三島が頷く。

「もともと朝鮮戦争は休戦してただけで終戦しておらんからな」

「韓国と北朝鮮……どう戦っているのか……」

朝鮮半島で起こっていることで、入ってくる情報は、せいぜい衛星写真を分析したものや電波を傍受したものくらいなので、つかんでの情報が正確なのかは不明だったし、北朝鮮軍は快勝しつつ南下中という宣伝をしている。モニターに映っている畑母神が言う。

「推測にすぎないが、韓国は首脳部が核攻撃を受けて、かなりのダメージがあるようだ。もし、大統領が健在であつたなら、もう何らかの報道なり、反撃宣言をするだろうに何の反応もない」

「韓国軍の現況は？」

「各個に反撃しているような戦火は衛星写真や電波傍受で確認できるが、優勢か、劣勢かは正確にはわからないが、やはり核攻撃直後の混乱と、米軍不在を突かれ押されているようだ。市民は逃げ出そうとし道路は大渋滞。しかも道路と鉄道へ潜入していた工作員が爆破テロを行ったようで重要箇所で寸断されている。車のヘッドライトのおかげで、渋滞の程度はわかりやすい。いずれ車を諦め、徒歩での避難になるだろう。……他国の国民とはいえ、気の毒なことだ」

司令室にいて生々しい電波傍受の声や戦火を見ている畑母神は普段は蔑視している他国民に、やや同情していた。今しも再度の核攻撃が小松にあつて、今度は迎撃ミサイルが外れてしまえば、地上階である司令室は危険だったけれど、その怯えは彼にない。地下室の方は、基地なので爆撃ということも多少は想定した造りになっているけれど、本格的な会議を開くような造りにはなっておらず、狭くてジメジメとした壁紙もない剥き出しのコンクリート壁の部屋へ臨時にテーブル運び込んで顔をつきあわせているので、まるで敗戦寸前のような気分になりそうだった。官僚や隊員が状況報告を記した文書を

もって出入りする鉄扉の音もボタンボタンとうるさい。新屋が報告を受けた国内の治安について述べる。

「我が国でも爆破テロが試みられましたが、夜間外出禁止令と職質の強化のおかげで2件の爆破テロを未然に防げています。引き続き厳重に警戒しておりますが、不幸中の幸いというか、大阪と東京、名古屋が壊滅しているため、平時から潜入していた北朝鮮工作員も多くが津波で流されたのでしよう。わずか2件の未遂で終わりそうです」

鈴木が外務大臣として言う。

「北朝鮮の金正陽は演説と対外向けメッセージを発し、長い演説でしたが、ようするに他国は朝鮮半島のことには口出しするな、我々は米軍によって盗まれた勝利を取り返す、日本は核攻撃を受けたことを大戦中の代償として甘受すべき、他国が朝鮮半島に介入しなければ、これ以上の核攻撃はしない、朝鮮南部の民衆は邪悪な資本主義から目を覚まし、我らに協力すれば寛大なる処遇が待っている、無駄な抵抗をすれば無慈悲な炎に焼かれるだろう。」と

「……………」

座ったままの鮎美は黙って無表情に聴いている。石永はテーブルを拳で叩いた。

「ふざけやがって！ だから、こつちも核ミサイルを持っておくべきだったんだ！ ちくしよーめ！」

「……………まずいな……………やはり押されている……………」

畑母神が斜め上を見上げながら、つぶやいている。その方向には司令室なので、いろいろなモニターがあつた。

「……………陸でも……………海でも……………意外に潜水艦による攻撃が巧いのか……………」

鈴木が報告を続ける。

「オパマ大統領は北朝鮮へ、核による報復を行う可能性を強く伝え、ただちに進軍を止めるよう求めています。ですが、そのアメリカ自体が内部分裂しており、白人中心主義を是とする州が、独立宣言をしてミクドナルド・トランプ氏を新たな大統領としたり、黒人が多い州では黒人の州だと言って独立宣言したり、すでに2007年からインディ

アンの末裔がアメリカ大陸中央部のネブラスカ州、サウスダコタ州、ノースダコタ州、モンタナ州、ワイオミング州の一部を自分たちの領土であるとしてラコタ共和国をつくっています。ずっとアメリカ政府は無視しているのですが、法的には19世紀にアメリカ連邦政府とスー族が不可侵条約協定で確約したものを、その後、一方的にアメリカ側によって破棄されたもので不法占拠しているのはアメリカという状態でもあったりし、勢いづいています。まさに大混乱しており、米軍でさえ、手続き上の正当な大統領であるオパマ氏を支持する部隊と、ミクドナルド氏を支持する部隊に別れているようですから、核攻撃といった大胆な決断は期待しにくい状況です」

「……………」

鮎美は黙って横髪を耳にかけた。その仕草をするときの鮎美が怯えているわけでも悲しんでいるわけでもなく、むしろ冷静に考え事をしようとしているときだと知っている鷹姫は安心した。鮎美の目には恐怖や悲嘆より、かなり強い怒りがある。その目を見つめて目が合った。

「あ、鷹姫、傷は、どうやった？」

「ご安心ください。かすり傷です」

「ザックリ刺さってたやん。縫うた？」

「ほんの3針だそうです」

「…………ごめんな、うちのために…………嫁入り前の、女の身体に…………」

「お気になさらず、その話も流れましたから」

「え？」

「先日、地元で父に会ったおり、健一郎さんは白川と交際しているの
で、もう許婚の件は無かったことになったと言われました」

小さな島で交際を始めた中学生2人が隠し続けられるはずもなく、もう周りに知られているようだった。無表情だった鮎美が気の毒そうな顔をする。

「つ……………そんなん……………ひどいやん…………」

「気にしていませんから、ご心配なく」

「…………けど…………それなら、なおのこと、嫁ぎ先が未定やのに身体に傷が

……この状況では松田川先生の治療も受けられへんし……ごめん、うちのために……」

「どうか、お気になさらず、気にされると逆に苦しいです」

「……ほな、おおきに、ありがとうな」

鮎美は立ち上がって鷹姫のそばによると両手で握手する。

「うちが生きてるのは、あんたのおかげよ。鷹姫が背中を押してくれなかったら直撃して死んでたかもしれんもん。あんたは二度も総理大臣を助けた立派な秘書よ。陛下に会うことがあったら、勲章を頼むわ」

「もったいなきお言葉、そのお気持ちだけで私は十分です。この戦乱の世にあつて身を尽くしてお守りいたします」

「……」

石永たちは見えていて、やっぱりこの二人は普通の女子高生じゃないな、と思った。鈴木は続ける。

「中国とロシアは沈黙、事態の推移を見守っているようです」

三島が問う。

「韓国政府は日本へ何か連絡はあるか？」

「大統領の健在が確認できておらず、何もありません。こちらから問い合わせるのも、かえって混乱させますし、手助けを求められても……困りますから」

「……避難民には赤ん坊もおおろうに……」

「その件だが……」

石永と畑母神が同時に言いかけ、畑母神はモニター越しなので石永に仕草で任せる。

「その件だが、もし避難民が日本へ渡ってきてても、我々としては受け入れられない。正直、どこの学校の体育館も震災の避難所として使っていて手一杯だ。やっと今日になって初めて食料を届けられた被災地さえある。この上、何万何十万という難民など、まったく受け入れられない。来ても排他的経済水域で追い返し、追い返しても入ってくるようなら、非常時だ、非常の手段をとるしかないだろう」

「非道な……だが、……以前の朝鮮戦争でも難民の処遇に困って

おったな」

「ああ、難民を受け入れろと要求され、不法入国も多いのに、戦火が治まっても、帰還を受け入れず、逆に排他的経済水域のラインを巡って争う過程で日本の漁師を捕縛し、こちらが漁師の返還を求めると、難民の帰還を受け入れるのでなく日本国内に収容所から解放しろと言ってくるし、あげく日米の隙を突いて竹島を占拠する始末だ」

「……それも、また非道な……」

「まして今は、こっちも限界ギリギリだ。いつそ、韓国語でデマを流そうかと思う」

「欺瞞工作か、なんと流す？」

「日本は原発事故と核ミサイルで放射能まみれ、バタバタと人が死んでいる、と。在日韓国人に報酬を払って頼み、動画でも撮るか、外務省のスタッフに作文してもらおうかで」

「……それは……諸刃の剣では……？」

「少し危険だが、では逆に日本にいる日本人で、危ないと思い、朝鮮半島や中国大陸へ漁船で逃げ出す者がいるだろうか？　まして情報ソースは韓国語だ」

「……我が乳飲み子を抱えておれば、岐阜の山奥か、奈良盆地に逃げるかもしれない。赤子がおらぬ今は自ら剣をとって戦いたい、国土を守る戦いならともかく朝鮮半島の争いは朝鮮人に任せておこうとも……だが、第二第三のミサイル攻撃があるのであれば、ミサイル基地だけでも叩きたいが、いかんせん上陸作戦も空爆も我らには手段が乏しい。韓国軍と協力しようにも対日感情を考えると、うまくいかんだろう……」

「烟母神防衛大臣、難民が来る気配は？」

「レーダー上は無い。まだ夜間であることと、韓国軍が劣勢であることは市民に知れていないからだろう。だが、逃げるにしても南下するし、とりあえず漁船で海へ逃げた後、中国、ロシア、日本のどこへ逃げるかと迷えば、日本を選択する者も少なからずいるだろう。やっかいなことだ」

「海保と海自で徹底して追い返してほしい」

「うむ……それしか、あるまいな。まず対馬に指令を出す。わずかに残っているイージス艦にはミサイル防衛に専念してもらいたい上、まさかとは思うが北朝鮮の潜水艦も警戒せねばならぬ。救助活動で疲れきった隊員たちに……なっ?!」

畑母神が急に驚いて、また斜め上を見ている。そして鶴田たち隊員と慌ただしく情報を確認しているので、ろくでもないことが起こったことだけは鮎美たちにも伝わってくる。しばらくして畑母神が眉間に深い皺を刻んだ顔で報告してくる。

「尖閣諸島を巡っていた巡視船が突然に轟沈した。おそらく……いや、100%、潜水艦からの魚雷攻撃だ。座礁や機関の故障であれば沈没までに、いくらでも連絡のしようがある。こうも一瞬で沈没するのは魚雷攻撃以外に無い」

「……尖閣諸島は北朝鮮から、かなり距離があつたはず……だいたい、あいつらが手を出す意味がない……」

石永が懸念を否定したくて、顔を歪める。畑母神は言ってくる。

「どう考えても中国海軍だ。この機に、攻め取るつもりなのだろう。……くっ、また殉職者が海保から……」

鈴木が肩を落として言う。

「抗議しても無駄ですよね……遺憾は聞き飽きたでしょうし……私たちも言い飽きました」
「……………」

飽きているうちが花やつたんやな、遺憾も、くだらん宴会の挨拶も、と鮎美は平和な頃を懐かしく思った。自然と閣僚たちの問うような視線が鮎美に集まっていた。

「うちは、まず石永先生の難民を追い返す案に賛成です。こっちも手一杯、福岡は今頃、地獄で、札幌と那須も死傷者はいる。とても無理です。非常時に非常の手段で難民を追い返すのは、やむをえないでしょう。諸刃の剣でも欺瞞情報もよいと思います。さらに、提案があります」

「うん、何だろう?」

石永が頷いて求めた。

「うちの知り合いというか仲間にワンコちゃんというローカルアイドルがいます。彼女は在日韓国人でした」

「そうだったのか……犬山市の人間だと思っていたが……」

「犬山市には10歳から住んでいるそうです。可愛い子やし、ローカルアイドルに合格したんでしょうけど、本名は李王娘（リーワンニャン）、在日やとわかったんは、セクハラ写真集団訴訟で弁護士に法廷代理人となっってもらうのに戸籍を取り寄せたからですが、それはいいとして、彼女には、うちと似たような役割を担ってもらおうと思います」

「君と？」

畑母神と石永が問うた。

「今、核攻撃を受けた韓国は首脳が健在なのか不明、せめて結束の象徴でもなければ、市民の心も支えられんでしょう。そこで、ワンコちゃんに在日の代表として、日本で在日韓国人の義勇軍を募って、すぐに助けに行くから頑張って、と情報を流すんです。見た目も可愛いし、アイドルだけあつて喋りもイケます」

「なるほど……しかし、在日韓国人が本国を助けに行くだろうか……言っただけだが、今の在日の若い世代は、ニューカマーと呼ばれ、ほぼオレたち日本人と同じような感覚でハングルが理解できず、日本語を母語としていることが多い。今さら、どの程度の愛国心があるか、まして、戦争中のところへ行くとなると、よほど勇気と愛国心が無ければ難しいだろう。それに、義勇軍といっても武装はどうする？ 自衛隊に余分な武器はないぞ」

「義勇軍が組織できるか、できないかは問題ではありません。助けが来る、と信じて戦うことが重要なんです。正直、義勇兵が集まっても武器も食料も供給できません。それをすると日本政府としての戦争協力になりますし、また無慈悲なミサイルが来るかもしれないから、ワンコちゃんには頑張って演説させますが、それを流すのは韓国に向けてのみで日本では石永先生のいう放射能汚染のデマと同じになるべく流れないようにしますし、私たち日本政府は無視します。いえ、むしろ、迷惑扱いして、私たちとは無関係やと北朝鮮にはアピー

ルします」

「……君がひねった策を考えるのは知ってたけど、また、えぐいことを……」

「可愛いアイドルが頑張って演説してるのに、男としては逃げられんでしょ？」

「男の生態を突くなあ……君はやっぱり、男を働きアリか、ハチだと思ってるだろ？」

「ハチもアリもヒトも同じ命です。巣を守るために頑張るのも同じ」

鮎美の目は静かに怒っていて、巣を荒らされた女王バチのような冷たい目をしている。鮎美が視線を畑母神が映るモニターへやった。

「畑母神先生、北朝鮮は、あと何発、核兵器をもっていると思われませんか？」

「今までに精製されたであろう核物質の量から予測して10発から17発と言われていた。あと7発あるか、それとも、もう1発も無いかもしれない」

石永が言う。

「いきなり全部は使わず2、3発は残すのでは？」

「うむ。残したいという考えにも説得力はあるが、電撃的に勝利するのであれば、全弾をもって一挙に有利としたい動機もあるだろう。あえて二度目の核攻撃に言及しているが、他国が介入しないのであれば、これ以上は撃たないと言うのは、核の報復を予防するのと、もう無いことをカモフラージュしつつ、もう無いかもしれないので核報復は様子を見ようと、アメリカに考えさせる戦術でもある。結果として即時の核報復はされていない。それどころでないこともあるだろうが、金將軍、敵ながら賢しいことだ」

「つまりは0発から7発ですね？」

鮎美の問いに畑母神は頷く。

「うむ、すまないな、断言できず」

「いえ、あと一つ提案があります。これは対中国も含みで」

「ああ、何かなの？」

「自衛隊を日本軍にします」

「……軍に？」

「ずっと畑母神先生らも自衛隊が完全な軍でないことに忸怩たる思いをしてきはりましたよね？」

「ああ」

「とくに戦死しても殉職と言われるし、PKOの海外派遣でも殉職であって戦死でない。軍艦やなくて護衛艦、そんな、くだらない言い回しをしてきましたが、これを全部、取り去ります」

「……どうやって？ 改憲でもせねば無理だろうに」

「そもそも、あの1946年のアメリカ製憲法は無効と言えば無効です」

「「「「……」」」」

「法律的思想として、強迫によってなされた意思表示は、取り消すことができ、法律行為の効果の初めに遡って無効とできます。武力によって強迫され押しつけられた憲法は、追認できない部分は無効です。もともと9条なんて何十年も前から守っていません。私たちは、まだ大日本帝国憲法下にあると考え、この国を統治する天皇に、その大権をもって私を内閣総理大臣臨時代理ではなく総理大臣としてもらいます。さらに私が自衛隊を日本軍であると宣言します。その瞬間をもって自衛隊は完全な軍となるのです。また遡って殉職は戦死とします。百色さんも海保の方々も、さらに過去にPKOで亡くなられた方も」

「……そんなことに何の意味があるの……」

思わず静江がつぶやいてしまうと、鮎美は説明する。

「うちにも実感としてはわかりませんが、自衛隊の方々には大きな意味があると考えます。どうでしょう？ 畑母神先生、日本軍である場合と、自衛隊である場合の、この状況下での士気の違いは？」

「……ああ、大きく士気に関わる。行動の選択にも」

「では、そうします。行動の選択も、自衛隊法ではなく国際法上の一国の軍隊として秩序ある行動をとってください。難民の追い返しは厳

重に、威嚇射撃も許可します。著しく指示に従わず排他的経済水域を犯す船に対しては、なるべく殺傷を避けつつも船体へ命中させることもおこなってください。結果として沈没しても責任は問いません」

「……。わかった」

畑母神がモニターの中で敬礼した。石永が言う。

「理屈はわかるが……とうとう君は昭和憲法まで解釈一つで無効とするのか……」

鈴木も言う。

「あなたは独裁者になる気ですか？ さきほども総理大臣と言われたけれど、内閣総理大臣ではないということの内閣さえ無視するという意味ですよ？ 私たちのことも臨時代理人としている」

「私が総理大臣となった後、先生方には国務大臣として就任していただき、総理大臣を輔弼していただきます。私の死亡時にもそなえて後継者の順位を決めて」

「」「……」「」

「独裁といっても明治政府の初期くらいです。そして、もう先生方と、ここにおられる官僚方にも言うておきます。ただし、守秘義務は守るように」

鮎美の前置きで、畑母神も何を言うつもりなのか、悟ったし、もう止めない。

「在日米軍はハワイへ救援に出て行ったのではなく、撤退したのです。暫くの間、という表現で私へ通告してきましたが、すぐに戻るつもりなら通告しなかつたでしょう。同じく在韓米軍も撤退しているようです」

「」「つ……」「」

「日米同盟があるの?!」

静江がパニック気味に問うた。鮎美は唇だけで微笑して言う。

「どこの国も誰でも、自分らが一番ですよ。自分の家が燃えてるのに、よその火消しに行きますか？」

「……今まで、思いやり予算だって、たつぷり……」

「あんなもん、ちよつと工夫した賠償金ですよ。第一次大戦でドイツ

に過大すぎる賠償金をかしたのが次の戦争の原因になったし、ほな、そこそこダラダラ取れる賠償金にしよ、えらい経済発展しよったし、このイエローモンキー変わった種やな、エコノミックアニマルやん。合衆国に住み着いてるブラックとレッドも、使いよう無いかなあ、くらしいの感覚ですよ、白人の本音は」

「……」

「もつと言えば、民主主義やってたら黒人が大統領になりよった、ムカつくわ、やっぱ白人に変えようぜ。しかも大地震で原発まで、もう世界の警察なんかやってられるか、オレらはアメリカ大陸だけでやる、お前らなんか知らん。きつと、そんな気分にいるんですよ。うちがアメリカ人でも、そう考えます。面倒やもん、世界中に軍隊派遣して頑張るとか」

鮎美は三島を見て問う。

「死刑囚への刑の執行は終わりましたか？」

「うむ、昨日すべて終了しておる」

「ありがとうございます。では次は、うちが総理大臣になったら、無期懲役と殺人もしくは傷害致死で懲役10年以上の刑にある者、および窃盗等の軽微な犯罪であっても懲役3年以上の刑に服すること3度以上である者への刑務所での食事の提供を止めてください。労役に服させるのも手間なんで牢に入れたままでよいです。麻薬等の薬物濫用犯は2度以上の収監で、そうしてください。くわえて、丈夫な紐など、容易に自殺が可能となる物品もズボン紐として与えておいてください」

「……：食料の節約か……：国民へは、伝えていないが、きわどいことは確かだが……」

三島以外の閣僚たちも反対しない。鮎美は当初の演説でパニックを避けるために食料は足りると言っていたけれど、かなり状況は悪化していて先行きは不透明になっている。

「あと、安楽死を認めます。病院に通達を出してください」

鮎美は厚労大臣が金沢市にいたので副大臣に言っておく。

「入院中の65歳以上の高齢者、若年であっても難病である者、精神疾

患にて90日以上入院をしている者の安楽死を認めます。精神疾患で事理の弁識ができない者、自殺の念慮が当初からある者へも、選択肢として呈示するよう。強制はせず、あくまで選択肢として。それによって浮くはずの医師を福岡で被爆した人への救援に向けます。ですから、安楽死の説明、死に至る薬剤の付与は薬剤師と看護師でもできる、とします」

「「「……………」」」

また反対は出なかった。核攻撃を受けた被災地では医師の手は、いくらあっても足りないし、鮎美が列挙した病人は統計上回復する見込みが少なく、一応は強制でなく選択であるなら虐殺でもなかった。石永が考えつつ挙手して言う。

「だが、その案だと浮く医師は老人の療養病棟専門だったり、難病専門、精神科医ってことになるぞ。福岡で必要なのは外科医や皮膚科医だろう」

「それでも医師は医師ですし、一部で浮けば、医師会の方で都合もつけてくれるでしょう。それに原爆症の治療経験がある医師は70年前ですから……もう現役ではないでしょう。たとえ専門でなくても、医師に診てもらえれば少しはマシだと思います」

「そうだな……」

石永が納得し鮎美が続ける。

「また65歳以上の老人を介護する個人および事業者に刑法218条を免責します。加えて治る見込みのない障害者を介護する個人および事業者へも」

「芹沢殿!! それは、あんまりである!!」

三島が一喝したけれど、鮎美は予想していたので動じない。

「見捨てる自由を与えただけです。積極的に傷害する行為は傷害罪により罰しますが、食事を与えない等の不作為は認めます。また、当事者の安楽死も認めます。今現在、それだけ余裕が無いということですね。三島はん、あなたは障害者福祉に尽くしてこられた人であり、経済的な豊かさを形成しながら弱者に冷たい社会を糾したいと行動しておられました。今現在の状況悪化でも福祉の充実が可能であると

考えますか？ この春の田植えは農業機械で可能だったとしても、秋の刈り取りは燃料をつかう機械でなく私たちの手で刈り取るようになるかもしれないよ」

「……………」

「どのみち私たち政府が認めなくても現実的に介護困難で、思い悩み介護者まで心中するケースも出てきます。保護責任遺棄や自殺幫助で、まだ労働力たりえた人を逮捕するのも私たち全員にとって損失です。私の友人にね、平時でも、このことで悩み続けて逆に性格がおかしくなった子もいるんですよ。もともと無理なものは、無理、治る見込みのない障害者を優しく介護し続けるなんて、よほど精神が強靱な家族にしか無理なんです。人に無理を強いるのは、よくない。心の弱い人が、より思い悩むケースを無くすため、見捨てる自由を与えます。見捨てない自由もあります。それぞれが決めることです。この件に関して国家が刑法で国民を縛るのをやめ、各個人の判断と愛に一任するわけです」

「……………」

状況悪化を考えると三島に反論はなかった。

「この方向性で細部を詰めておいてください」

そう言った鮎美が立ち上がったので石永が問う。

「どこへ？」

「陛下にお会いしてきます」

「この夜中にか？ いや、ことは一刻を争うか…」

「京都へ着く頃には朝になるでしょうし、うちも車内で仮眠します」

「芹沢殿、自動車では危険だ。せめて装甲車で行かれよ。護衛も準備してある」

三島が言ってくれて鮎美は装甲車に乗った。不眠で閣議していた鮎美のために車内には毛布が敷いてあったので鷹姫と横になる。背中に傷がある鷹姫は横向きに寝た。

「鷹姫、到着までは？」

「装甲車は速度が出ないので高速道路でも4時間ほどになるそうです」

「仮眠には、ちょうどええね」

「陛下にお会いする前に礼儀の上でも、ご入浴されてからの方がよいです」

鷹姫は血で汚れて穴が開いた制服を鮎美の予備を借りることであらためているけれど、二人とも夕食の直後にミサイル攻撃を受けてから、そのままだったし強い緊張感で汗もかいていた。しかも夕食が越前ガニだったので手がカニ臭い。

「この非常時に、そんな悠長な…」

「非常時であっても、お相手は陛下です。まして、ご好意を受けているのですから、女として恥ずかしくない姿で行くべきです」

「……………クスッ……………鷹姫が、そんなこと言うなんてね……………ほな、手配しておいて」

「はっ」

鷹姫は旅館と京都御所に電話をかけ、京都の手前である阪本市にある以前に泊まったことのある旅館に入浴と朝食を頼み、京都御所には10時に重要な用件で訪問すると伝えた。鮎美は阪本市の旅館を鷹姫が手配したので、松田川が勤務している病院に電話をかけ、起きて夜勤していた松田川にも旅館に来るよう頼んだ。

「鷹姫の傷、診てもらおう」

「……………この程度の傷、もつと重傷者もおられるでしょうに……………」

「うちが気になるんよ。ちゃんと診察、受けて」

「…はい」

装甲車の乗り心地は悪かったけれど、二人とも眠っておかなければという義務感で睡眠をとった。明け方になって旅館に到着する。ほぼ同時に松田川と知念を乗せたタクシーも着いた。松田川は装甲車の列を見て驚く。鮎美一人を護衛するために7台の装甲車と、それに分乗した隊員、さらに2台の対空火器を装備した車両が配備されていて、以前のSPに警護された状況を見慣れていても、びっくりしている。

「どこかの將軍様みたい……………」

「そうっすね」

松田川は普通に接しているものか、やや迷ったけれど降りてきた鮎美と鷹姫は高校生らしく挨拶してくれる。

「おはようございます。無理を言っつて、すみません」

「ううん、おかげで、やっと休憩がもらえたくらいだから。じゃあ、傷を診せて」

鮎美たちは旅館に入る。旅館は震災後、開店休業状態だったので、りがたく受け入れてくれているし、貸し切りとして護衛の隊員も16名が同行した。知念が問う。

「長瀬警部補は？」

「長瀬はんらは長いこと、うちの警護を交替でしてくれてはったから今回は休みを出したんよ」

三島が男性同性愛者の部隊を用意してくれたので、連続勤務していた長瀬や里華、麻衣子は同行しておらず、高木以外は新顔だった。

「みんな、うちと同じ同性愛者やし気楽なんよ」

鮎美と鷹姫が装甲車で眠っているときも、そばで見守ってくれていたし、寝顔を晒しても安心だった。逆に知念は少し怖い。高木たちが三人だったときは、それほど感じなかったけれど、部隊全員がゲイとなると、一人の男として感じたことのない脅威を覚える。

「全員……みなさん、ゲイなんつすね……」

「はっ、芹沢総理にゲイツと部隊名を命名いただきました」

高木が答え、知念は微妙な顔をする。

「ゲイツって……あの大富豪に怒られないっすかねえ……」

「ゲイの騎士団ってことで、ゲイナイトの略やよ」

旅館に入って、まずは客室で鷹姫の傷を松田川に診てもらおうので、知念は客室の前で遠慮したけれど、ゲイツは4名が入室して鮎美たちを見守る。鷹姫は男性の視線が気にならないので、すぐに脱いだ。松田川も男性看護師がいるのと同じだと思い、鷹姫の背中を診る。

「……………」

まあ自衛隊の医官だと美容整形なんか考えないから、このくらいの縫い方かな、他にも負傷者がいたんなら急いで縫ったかもしれないし、と松田川は荒い縫い方をされた鷹姫の傷を黙って縫い直した。

「うん、応急処置も正しかったし、今、縫い直してるから、完璧とはいかないまでも、そこそこキレイに治るはずだよ。お風呂にも入れるようにシート貼っておくね」

「ありがとうございます」

「おおきに、やっぱり松田川先生に診てもらって、よかつたわ」

治療が終わったので知念もまじえて四人で朝食をとり、女三人で入浴する。貸し切りにしておいたので女湯にもゲイツを6名、護衛につけることを鷹姫が提案し、松田川は心理的抵抗があつたけれど諦めた。のんびりしている時間はないので一息だけ寛いで、髪と身体を洗い、揚がると鷹姫が鮎美の髪を乾かして櫛でとく。

「メイクもされた方がよいです」

「……別に紫外線があたるところに行くわけちゃうし……」

「ふさわしい姿で行くべきです」

「……うん……」

鷹姫めっちゃ陛下と、うちの仲を進める気まんまんやね、うちは既婚者といえれば既婚者なんよ、処女ちゃうといえれば処女ちゃうし、と鮎美は異性との仲を推し薦めようとしてくる鷹姫に戸惑いを覚えつつも、かなり重要な会見になるのでメイクも整えた。松田川は一息ついたら病院に戻るつもりだったけれど、鮎美が制服を着ながら言うてる。

「松田川先生、このまま参与になつて」

「使う気なのね……やっぱり……」

「自衛隊にも医官がいてくれはるけど、そばにいて助言してくれる人がほしいんよ。福岡に核ミサイルが落ちたん知ってはる？」

「看護師が、そんなことウワサしてたけど、あれマジなの？ 朝鮮半島で戦争が起こってるっていうの」

松田川は診察優先で、ほとんどニュースやネットを見ないので事態の緊迫感が無かった。

「超マジなんよ。ってことで急いで原爆症の勉強しておいて。ネットでも、かなり情報のつてるけど、専門家が見んと、わからん感じやつたし。少しでもキレイに治る方法、考えたつて」

「そんな魔法のようにキレイに治せるわけないけど……まあ、頑張るよ。……原爆……本当なんだ……しかも……日本に……」

やっと緊迫感を覚えて松田川が身震いした。自分がいる時代が平和でなくなつたという実感は背筋が冷たくなるし、ヘタをすると小水を漏らしてしまいそうな怖さがあった。今、この瞬間も核ミサイルが飛んでくる可能性があるというリアルに感じる。

「ハア……気合い入れなきゃ」

いい年齢の大人が女子高生の前で漏らすのは恥ずかしすぎるので、お腹に力を入れて気を取り直す。

「わかつたよ。頑張れるだけ、頑張る」

松田川は自衛隊員がするような敬礼を鮎美に向かってやった。全員で旅館を出て、装甲車に乗り京都御所に向かう。その間に松田川は勤務先の病院へ総代理に求められたので政府の参与になると伝えて退職し、もともと退職届は書いてあったので理事長も激励してくれた。さらに恩師へ電話して広島にいる医師を紹介してもらい、色々と学ぶ下地をつくっていく。鮎美と鷹姫は京都御所に着いたので職員に案内されて清涼殿へ歩いて向かった。もともと明治以後は皇居が東京に移つたため、京都御所は保存と期間が限定された一般公開がされていくくらいなので、あまり現代の天皇が国事行為を行うのには適した造りになっていないし、宮内庁側も鮎美を、どう接遇するか迷う部分が多く、事前に鷹姫と相談して、迎賓館などで那須御用邸で面談したときのようなソファにかけて対面する形や、小松基地の貴賓室で会食したときのように喫茶をまじえての懇話にするか、それとも清涼殿などで儀式めいて玉座を前に平伏するか検討し、鷹姫の意見で一番古典的な形式が選ばれていた。

「芹沢さん、宮本さん、顔をあげてください」

義仁は玉座から畳に正座して平伏している二人に声をかけた。鮎美と鷹姫は静かに頭をあげ、鮎美が口を開く。

「急な訪問で、すみません」

「あなたが元氣そうでよかった。宮本さんも」

「鷹姫は、うちを助けてくれて背中を負傷しましたが、良い医者にか

かつておりますので大丈夫です。鷹姫が、うちの命を助けてくれるのは、これで二度目です。できれば、陛下から勲章を贈っていただけませんか？」

「っ……」

鷹姫はいきなり自分のことで、ねだりごとをされたので畏れ多いのと恥ずかしすぎるので畳へ額を打ちつけるように平伏した。その耳が真っ赤になって肩が震えている。義仁は微笑んで答える。

「わかりました。ふさわしい叙勲を与えます」

「おおきに、ありがとうございます」

「っ……っ……」

鷹姫は何も言えずに平伏したまま震えている。もう義仁も鷹姫と複数回会っているので性格を感じてきていて、極端に上下関係を重視するタイプの人間だとわかっていた。

「宮本さん、そんなに畏まらないでください。立派なことをされたのですから当然です」

「も……もつたいなき……お言葉……ハアっ……ハアっ……」

「鷹姫、落ち着き。かえって失礼やよ」

「は……はい……ハア……」

「陛下、おそれながら、まだお願いがあります」

あまりおそれていない感じに鮎美が頼む。義仁は、そういう鮎美を好ましく感じて問う。

「なにかな？」

「この国難にさいし、明治憲法の本旨を是とし、私を総理大臣に任命してください」

「……………それは、どういう？」

「ごく一部の者にしか伝えず、陛下にまで今まで隠しておりましたが、在日アメリカ軍は私へ通告の上で撤退しました」

「……………」

「暫くの間、と保留しましたが、現状のアメリカを見る限り、戻ってこない可能性もあります。ゆえに、これからも国のために戦う者へ、曖昧模糊とした立場でなく、正真正銘の防人として働いてもらうため、

陛下に総理大臣としていただいた私が、自衛隊を日本軍とします」

「……………第11条の統帥権を、あなたが補弼すると?」

義仁も15歳にして大日本帝国憲法の内容を知っているようだった。鮎美は迷わず答える。

「はい」

「……………けれど、かの憲法は現状と、あまりにそぐわないことも多い。兵役、身分、それに今は議会の不在、かなり無理があるのではないですか?」

「第17条に摂政をおくことができます。また、摂政は天皇の名において大権を行う、とも。総理大臣は摂政に相当するものとお考えください」

「……………。それでも無理があるよ。何より、あなたは独裁者になる気ですか?」

「無理はしません。明治憲法と現状が合わない部分も、アメリカ製憲法の良いところも、すべて道理によって私が判断し適応します。そして私は独裁者にはなりません。私が大きく道理に外れたことをしたとき、私は陛下によって罷免されます」

「……………道理……………」

「欧米が私たちに伝えた法学、もとは聖書とローマ法が源となった技術は、法の言葉、法の理、法理によって運用されますが、法理は抜け穴を探し、解釈を歪めることで、いくらでも本質を歪められてしまいます。けれど、道理は道理です。道の理に外れたことは明文の規定が無くても、見ればわかります。道理に外れていたからアメリカ製憲法9条は無視されましたし、無視しきれず不当な処遇を隊員たちにかしました。我が国は、道理によって治められるべきです」

「……………」

「私は独裁的に決定をくだしていく予定ですが、周囲の意見に耳を傾け、道理で判断します」

「……………独裁を否定しない?」

「はい。独裁という政治形態も、国というヒトの集団がとる一つの意志決定形態です。議会制民主主義は成熟した余裕のある社会でしか

なしえませんが。げんに王制期はそうでしたし、現代でも経済的な余裕がない、治安が悪い、国民の知見が低い、そのような国々では独裁的に政治がなされていますし、それでうまくいっている国も多く、それが自然な選択なのです。現在、日本は人口の多くを失い、パニックを避けるため、余裕があるとみせていますが、食料も燃料も切迫してきています。その上、外敵から攻撃を受け、さらに難民という異集団の流入も懸念され、決定にまごついている時間はないのです。だから、私は独裁しますが、独裁者ではなく、道理と陛下のもとにあります。この国を二人で守らせてください」

「……………あなたは重い責任をかされ、どう判断しても批判を受ける立場になりますよ」

「それが政治家です。覚悟の上です」

「……………私に、あなたを助けられることがあるだろうか？」

まじめに同情して問う義仁の問いに、鮎美は少し考えてから、女の子らしく首を傾げ、両手を合わせてお願いする。

「それは……………長い目で、見てやってください。ちよつと短気に判断することもあるので」

「……………クスッ……………本当に、面白い人だね」

「よく言われます」

「わかりました。芹沢鮎美さんを総理大臣とします」

義仁の信任を受け、鮎美は総理大臣となる式典を受け、鷹姫も叙勲された。その様子は連れてきていた斉藤が撮影し、リアルタイムで配信される。そして、鮎美は義仁に一礼してから、国会議事堂で登壇して平成天皇の前で弔辞を読んだように、清涼殿で復和天皇を後方上位にして、全国民に告げる。

「巨大な地震と津波、さらなる核攻撃によって苦しむ私たちは、より秩序をもって行動しなければ破滅します。暴れてもケンカをしても、より状況は悪化します。守りながら前に進むため、今、私、芹沢鮎美は復和天皇より、総理大臣に任命されました。この権限をもって国政の安定をはかり、国民の衣食住を守り、平和と秩序を維持するために、道

理に外れた武力による強迫で成立した1946年の憲法の、もつとも道理に外れた部分である9条を無効とし、自衛隊を日本軍とします。すでに私が内閣総理大臣臨時代理となつてからも多くの殉職者が海上保安庁職員に出ています。彼らは戦死です。遡つて国民を守るために亡くなつた戦死者であると思います。そして、国民のみなさまにお願いがあります。食べる物とガソリン、あらゆる燃料は枯渇しないまでも余裕はありません。無駄をさけ、節約してください。被災地で財産を探す行為もやめてください。すべて警察などの公務員が探して保管し、所有者のもとに戻るよう手配します。動ける余裕のある人は、燃料を使わず、近くの農家を手伝ってください。農家は高齢者ばかりです。これから春になり、収穫のときが来るまで食料はありません。けれど、収穫がなければ、より厳しい現実が待っています。輸入は難しいです。太平洋の多くの港が機能停止し、大きな穀倉地帯をもつ、アメリカ、オーストラリアもダメージを受けています。それでも、幸い、計算によれば、みなさんの努力で農業を頑張れば、国内消費はまかなえます。米、麦、芋などを醸造してアルコールにすることは禁止しないまでも、おおむね半減させてください。その分の経営を支えるための値上げは認めます。牛、豚、鶏は飼育数を減らし、飼料は食料とし、釣りとしカ、イノシシ、クマ、クジラを狩ることで乗り切れます。一年乗り切れば、もう大丈夫です。この一年、どうか頑張ってください。お願いします」

鮎美は頭をさげて演説を締めくくつた。義仁が玉座から立って、短いけれど心のこもつた言葉を述べる。

「国民の皆さん、日本の歴史で今ほど大変なときは、そうはありませんでした。そんな中、皆さんが耐えていることを、とても心強く、また誇りに思います。今しばらく、つらいときは続きますが、芹沢鮎美さんと頑張つていきましょう」

二人からの国民への言葉は終わり、昼過ぎだったので義仁から昼食を勧められ、鮎美は急いで小松に戻るつもりだったので車中で日本軍が携帯している缶詰でも食べるつもりだったけれど、鷹姫が断ること自体が失礼すぎると言つて引き止めたので応じた。それで、てつきり

三人で食べるか、もしくは由伊もまじえての会食になるのかと鮎美が思っていたのに、宮内庁の職員に案内された一室で義仁と二人で食べるセツティングがされていて、鷹姫は今後のことを宮内庁の職員と会議しながら食べるとなっていたので、鷹姫が仕組んだことだと気づいた。とはいえ、こうなつては非礼のないよう応じるしかないなので義仁と時間を過ごす。昼食のメニューは琵琶湖で獲れた鯉の煮付け、白米、京都の漬け物、味噌汁だった。鮎美は無難な話題をふる。

「由伊様はどうしておられますか？」

「由伊は下京の避難所へ島津と慰問に行っているんだ。私も行きたいけれど、警備の都合もあるから」

「お互い、ちよつと外出するだけで大勢に動いてもらうことになりま
すもんね」

「芹沢さんは一年前まで、そうではなかったから、つらいでしょう？」

「う〜ん……慣れたといえば、慣れたかな。というか、考えるべきこ
とが多すぎて、そういうことを感じてる時間が少ないんですよ」

義仁からは、やっぱり好意を感じるけれど、男子からの好意を受け
入れるという選択肢は鮎美にない。それでも、素っ気なくしていい相
手ではないので愛想良く、それでいて愛想良くしすぎない、という難
しい舵取りをしながら15歳の男子と会食したので、終わった頃
は、とても疲れていた。京都御所の車乗り場で装甲車に近づくと、鷹
姫が待っていて問うてくる。

「陛下との会談は、いかがでしたか？」

「……………」

かなり怒っている鮎美は質問を完全に無視した。なのに、鷹姫が再
び問うてくる。

「陛下との会談は、いかがでしたか？」

「……………」

鮎美は完全無視して装甲車に乗り込んだ。鷹姫も乗り込んでくる。

「ご会食は、どのような話題をもたれましたか？」

「…………… 次の予定は？」

「はい。小松に真つ直ぐ戻ってもよいのですが、台湾政府からの支援物資を載せた船団が敦賀湾に到着したそうです。月谷と介式師範らも戻ってこられたので、お会いになり、台湾政府の関係者に直接謝辞を述べる機会がもてるとよいでしょうし、敦賀湾は通り道です。お会いになりますか？」

「会うわ。そう手配して」

「はい」

鷹姫は電話で手配し、それが終わると再び問う。

「陛下と昼食をもたれて、どうでした？」

「……………」

鮎美は女子高生らしい露骨さで、私はあなたを無視しています、という風に顔を背けた。それは見ていた松田川や知念、高木にも乗り込んだときからわかっていたし、空気を読むのが苦手な鷹姫でも、さすがにわかるほど露骨だった。

「……………何か悪いことでもありましたか？」

「……………」

「……………お怒りになっておられるのですか？」

「……………」

何を問われても鮎美は業務連絡以外は無視するので、装甲車が京都から高速道路に乗り、阪本、三上、六角、井伊と走るうちに、鷹姫は悲しくなってきた。小中学校でも同じように無視されたことがある。鷹姫は剣道が強く成績も良かった上、それを謙遜しなかったため、女子と衝突することが、たまにあった。男子は無視などせずにケンカを売ってきて返り討ちにして、それ以後は近づかなくなるという終わり方だったけれど、女子は無視という対応に変わられる。空気が読めない鷹姫は、どうして嫌われたのか、わからないうちに友人だと想っていた女子たちと会話が無くなったことが何度かある。そんなことがあったので尊敬している鮎美に無視されるのは、とてもつらかった。

「……………ぐすつ…」

鷹姫が涙をスカートに落としたので、桧田川が見かねて言う。

「何があつたか知らないけど、そろそろ許してあげなよ。泣いてるじゃん。無視は中学生までで卒業しよ」

「……………」

鮎美は、まだ、かなり怒っているけれど、桧田川が追加する。

「命の恩人を無視するのは、どうなのかな？ 背中傷、ちよつとは残るかもよ」

「……………うっ…………それを言われると……………」

痛いところを突かれて鮎美が折れる。

「ああ、もう、わかつたよ。陛下とは、普通に話して終わり！ 今後も協力してやっていきましょつて話だけ！ あんな風に、いきなり二人きりにするの、もうやめてよ！ うち鷹姫を信頼してんねんから！」

「……………よかれと想つたのですが……………芹沢総理は、やはり男性が嫌いですか？」

「別に嫌いちゃうけど、好きにもならんの！ もう鷹姫は理解してくれてると想つたのに、そんな風に考えられるの、うちかつて、つらいわ！」

「……………この世に、あの方との縁談ほどの、ご縁がありませんか？」

「くっ……………その古臭い考え方……………無いことも無いやろ。平清盛とか、源頼朝とか、ああたりから一番の男子は変わつてるやろ。室町、江戸と、ずっと」

「現在はまた明治以後、ずっと輝いています。徳川家も皇室を大切にしています。不朽の名家です」

「……………本気で、うちと、あの人結婚、考えてんの？」

「はい」

「……………」

「女と産まれて、これ以上の誉れはありません。それに、同性愛者でも普通の家庭をもつことも多いのです。どうか、亡くなられたお母様のためにも、ご結婚を考えてください。芹沢美恋さんが遺した子供は、あなた一人です」

「くっ……………」

また鮎美が痛いところを突かれて苦しそうに呻くと、見かねた高木が言う。

「我々、同性愛者は、そういうことを言われると苦しいんだよ。まして、まじかにいる同性の親友に」

「そうなのですか……」

やはり感覚がわからない鷹姫へ松田川も言う。

「私も前の恋人がトランスジェンダー、心が女なのに、身体は男だったから、つい結婚を迫ったよ。最期まで、わかってあげられなかった。つらさを」

松田川は思い悩むときの癖なのか、両手を向かい合わせると、指先だけくっつけている。

「結局、自分の都合を押しつけて、ずっと苦しめてしまったの。ときどき女装してもいいから、結婚して普通に子供をつくろうって。じゃあ、逆に自分が男の身体でいて、好きになってくれた女から、そう言われて受け入れられたのか、って……………その、つらさは、それぞれだよ」

「……………すみません。私は、たぶん無性愛者なので……………まったく、そういう感覚はわかりません。……………産まれた身体に従って……………結婚すれば、それで……………よいかと……………どうにも、ダメなのですか？ 芹沢総理」

鮎美は装甲車の小さな窓から外を見た。ちょうど賤ヶ岳サービスエリアを過ぎたところだった。思いついたことがあるので運転している隊員に頼む。

「次のパーキングエリアで停まってください」

「はっ、了解です」

運転手が返答し、助手席の隊員は他の車両に無線を入れている。15分ほど走行すると刀根という小さなパーキングエリアに全車両が停まった。ごくごく小さなパーキングエリアで周囲は山ばかり、売店もなくトイレと自販機だけがある。隊員たちは鮎美がトイレに行くのだろうと思っただけで、違った。鮎美はゲイツたちに同性愛指向を

抑えて異性と結婚しろと言われると、どんな気分か答えてほしい、と言いたい。それぞれに短く返答してくれたが、どれも否定的な答えだった。

「そもそも勃たないっすよ」

麻衣子と同じく、まだ19歳の隊員がぐくだけで本音を言ってくれた。鮎美は8名の隊員に頼む。

「この山の中から、食べられるけど、不味い食料を集めてきてもらえますか？　そういう訓練されてますよね。ちよつと鷹姫は性的なことに、うとすぎるんで、いつそ食欲でわかつてもらいたいし」

「二二はっ！二二」

鮎美の狙いが、なんとなくわかったゲイツたちは山に入っていく。三日三晩、食料現地調達で山に潜む訓練もしている隊員たちは、野草や冬眠から醒めた蛇をとりはじめた。それを待つ間に、鮎美のスマートフォンに不破島から電話が入った。

「……めずらしい人から……」

震災直後に茨城県知事臨時代行に指名した30代の男性で同性愛者ということを知り、鮎美には言ってくれた県議だった。他の知事と違い、自分が臨時に指名したので任命責任もあると思う、携帯番号くらはいは交換していたけれど、今まで一度も連絡が無かったのに直接言いたいことがあるようだった。

「もしもし、芹沢です」

「総理大臣、就任、おめでとうございます」

「あ、どうも……」

「なんや、そんなことか、と鮎美は電話を切りたくなかったけれど、その気配を察した不破島が言う。

「ま、この忙しいのに世辞など、どうでもいいですな。本題に入りますよ」

「……クスッ、あいかわらずな男やな。どうぞ」

「富山県で不審な動きがあるようです。議会を設置すると言って、全国の県議や知事、市議などの一部が連絡を取り合っています。まあ、ようするに、これ以上、小娘の独裁は許したくない、ということですよ」

な。主には民主党、他に共産党、活力党、それに自民党では反石永派というか、つまりは石永官房長官に選んでもらえなかつたヤツらが拗ねている、と。そして場所が富山なのは副都心に選んでもらえなかつたからでしょうな。ようするに不平分子が集まりつつあるわけです。で、私にも声がかかり、即答でOKしました」

「……」

「ぎつちりスパイしてきますよ。ご報告をお待ちください。というか、こんなことせず、復興活動でもしてろって時期ですが、まったく人間ってヤツはろくでもないですな。議会が開かれたら、祝電でも送ってやりますか?」

「ははっ、将軍様に通報しとくわ。次の狙いは、富山がええですよ、迎撃ミサイルもありますよ、って」

「それは、さぞかし青ざめるでしょうな。では、また」

電話が終わると、また鮎美は不破島の顔を見てみたくなつたけれど、その機会は遠そうだった。山に入っていた隊員たちが野草や蛇をもつて戻ってきている。鮎美は蛇を見ながら言う。

「へびって実は、けっこう美味しいですよんね。ちゃんと料理したら」

「はい！ よくぞ存じで！」

「大阪でも父さんに連れられて居酒屋で食べたことあるし、へびは、うちの夕飯に残しておいてください。国民に節約してほしい言うた手前、自分でも食べるとこ動画であげてみますし。カイワレ大根よりインパクトあるかもしれんし。で、美味しいのは残しておいて、どつちかという和不味の鷹姫に食べさせてください。お腹を壊さない状態にした上で」

「はっ」

すぐに隊員たちは水を携帯ガスコンロで加熱して、湯がいただけの山菜と昆虫の幼虫を飯盒の蓋で鷹姫に提供した。

「どうぞ」

「……これを、食べれば、よいのですか?」

鷹姫が問い、鮎美は頷き、見ていた知念は可哀想になった。

「それイジメつすよ。すげえ、不味そう」

美味しいのは残して、不味いのを、と鮎美が指示したので山菜の中でも食べにくいアクの強い物が選ばれているし、この時期に美味しいフキノトウなどは入っていない。パツと見た感じでは、その辺の雑草と芋虫を加熱しただけのものだった。それでも鷹姫は平気そうに食べた。もともとが島育ちなので山菜は定番だったし、食べ物に好き嫌いはない。

「……………うっ……………うっ……………」

けれどアクが強いので飲み込むのに苦労したし、幼虫も泥の匂いが出て不味い。しかも昼食の直後なので満腹で食欲も無い。かなり吐き出したくなつたけれど、我慢して食べきった。見ていた隊員たちは不味さを知っているのので、てっきり鷹姫がギブアップすると思ったのに、根性があるな、と感心した。

「どう、鷹姫、不味かった?」

「…はい……………美味しいとは、…言えませんでした……………せつかくですが……………」

まだ口の中が泥臭くて気持ち悪い。なのに鮎美は美味しそうにトイレ前にあつた自動販売機で買ったミルクティーを飲んでいる。口直しに鷹姫も何か飲みたかつた。いつもなら、すぐ分けてくれるのに、今はペットボトルを渡してくれない。

「ほな、これから、鷹姫のご飯は毎回、これな」

「……………はい……………」

「それは可哀想つすよ! ……ってか、そこまで日本の食糧事情ヤバいんすか?!」

知念が騒いでいるけれど、鮎美は続ける。

「大丈夫やよ。ステーキ、トンカツは、むしろ早めに牛、豚が殺されるし、しばらくは食べられる。今年の秋くらいから卵を産まんようになった古い鶏とか、そんなことになるけどクジラが獲れたら上等やし、シカもイノシシも増えてて問題やったんが解決するし。お米、パンは最低でも毎食、みんなが食べられるはず。でも、鷹姫は、ずっと、この不味いご飯だけよ。虫と草だけ」

「……はい。国民に範を示します」

鷹姫が背筋を伸ばして答えた。この子は本当に、すごいな、と隊員たちは思ったけれど、鮎美は冷たく言う。

「鷹姫は一生、これだけな。死ぬまで、ずっと。二度と美味しいもんは食べさせへん」

「……」

さすがに鷹姫が戸惑う。もともと家が貧しかったので淡水魚や川エビなどがタンパク源だったけれど、鮎美と行動をとにもするようになって宴会や会席への参加も多く体験したし、鮎美とグルメを楽しんだこともある。天ぷら、刺身、焼肉、寿司、一流料亭では前菜も驚くほど美味しいし、吸い物の味も絶妙、デザートも魅力的だった。そして鷹姫は人一倍、食べる量も多いし、食べるのが好きだった。なのに、これからの一生、たとえ日本の状況が好転しても死ぬまで一生、虫と草を食べると言われると、かなり絶望する。その絶望した顔が可哀想で知念が叫ぶ。

「最低つすよ！ それイジメ超えて虐待つすよ！ あんた北の將軍よりタチ悪い！」

「……知念はん、もし、これから一生、女の子とエッチすんな、男とだけエッチしろって決められたら、どんな気分？」

「っ………そ………そういう………たとえに………うっ………うくん………」

知念が悩む。正直、無理だった。

「無理やろ。松田川先生とエッチする方が楽しいやろ。っていうか、男なんて願ひ下げやろ？ ゲイツのみんなは逆やんね？ 女なんか願ひ下げやろ」

「二二「はっ！ おっしやる通りであります！」二二」

「とういことよ、鷹姫。うちに男と結婚しろっていうのは、一生、虫と草を食べてろって言われるのと、いっしょ。虫と草でも生きていけるんやから、それで我慢しろって。そんな気分なんよ。わかってくれた？」

「………はい………」

「ほな、出発しよか。みなさん、ありがとうございました」

鮎美は手伝ってくれた隊員たちに礼を言い、装甲車に乗る。口の中が気持ち悪いままの鷹姫にはミルクティーを分けた。

「鷹姫、大丈夫？」

「はい」

紅茶で鷹姫の口内にある泥臭さが漱がれた頃、装甲車の列は敦賀湾に到着した。敦賀湾は大きなコンテナを扱う港なので鬼々島の港とは規模が、まったく違う。大型車両でも余裕をもって通れる広さの道路と、広大な駐車場、岸壁、巨大な船が並んでいる。鮎美たちの車列は台湾政府の関係者たちと陽湖たちのそばに停車した。鈴木と外務省の職員も来ている。まず鮎美は台湾政府の関係者たちと握手を交わし、支援に礼を言った。

「本当に助かります」

かなり有り難い支援であり、とくに燃料が嬉しい。さきほど実感したけれど、いよいよよとなれば日本は豊かな山の幸もある。けれど、燃料は採れない。薪では車両も飛行機も動かせない。鮎美は支援物資の受け取り証書に署名をして、関係者らと記念撮影もしたし、斉藤に動画も撮影してもらい、リアルタイムで配信する。

「日本国民のみなさん、台湾、中華民国から大きな支援をいただきました。これで、とても助かります」

鮎美が再び台湾関係者と握手をして、コメントを求めると応じてくれる。日本に派遣されるだけあって日本語に堪能だった。

「日本のみなさんへ、雪中へ炭を送る援助をしたくて来ました。どうぞ、受け取ってください」

セレモニーが終わり、あとは双方の実務者が物資の確認などを行い、鈴木は礼儀の上でも台湾関係者を敦賀市の温泉施設に案内して接待する。ミサイル攻撃もある中、届けてくれたので歴史的な出来事にもなりそうだったし、帰りには日本海軍の護衛をつけると約束した。さすがに鮎美自身は忙しさもあり、小松基地に戻る。戻る途中、女形谷パーキングエリアに休憩で停車したとき、やっと陽湖と鮎美が話す時間があつた。

「久しぶりやね」

「はい、お久しぶりです」

「その紫ローブ、ずっと着てたんや」

「シスター 鮎美だって、ずっと制服じゃないですか」

「まあ、そやね」

二人の再会は意外なほど、あっさりとしていた。あのA321の機内であったことや、台湾に身代わりで置き去りとしたことを考えると、不思議なほどだった。震災と戦災という巨大すぎる出来事が、個人の出来事を小さくしているように感じる。

「まだ、あれから2週間と経ってないのに、えらい昔のことに思えるわ」

「そうですね」

陽湖の口臭は、やや酒臭かった。宴席慣れしている鮎美が問う。

「もしかして、お酒、呑んでるの?」

「あ、はい。領海、ギリギリまで呑んでいました。もう呑めなくなるので」

「あく……まあ、ええか。台湾船籍やろし」

「日本も18歳から飲酒可にしませんか? 今のシスター 鮎美なら、一言で可能ですよね? 紹興酒って、すごく美味しいですよ」

「やめとくわ。さつき演説で米と麦を醸造するのを控えてつて言うたし」

「それは残念です。あ、もう出発ですね」

単なるトイレ休憩だったので、すぐに別々の装甲車に乗り込む。鮎美は心配そうな顔で鷹姫が戻ってきたので問う。

「どうかしたん?」

「介式師範が、とてもやつれておられて……あれほど……」

知念も上司や同僚と出会ってきたので心配そうに言う。

「あんな風に介式警部が、落ち込むなんて想像してなかったつす。たしかに、民間人を警護対象の身代わりにしたのは、かなりマズイことつすけど、あの状況では仕方なかった面もあるし……結局、月谷さんは無事だったし……。なのに、依願退職するって……」

「そこまで責任を感じてはんにや……今は一人でも人材は欲しいし警察官は貴重な存在やのに……退職して、どないしはるの?」

「前田警部補と結婚するらしいっす」

「ほな、めでたいやん」

「……めでたいって顔じゃなかったっすけど……なんか、いろいろあつたみたいっす」

陽湖は台湾を船で出発すると、もう介式に売春させることができなくなつたので、逆に発覚したとき面倒なので自殺を勧めていた。船の舳先から飛び降りれば楽になれる、極楽浄土で姉に会えるかもしれない、と信じてもない仏教概念を吹き込んだ。部下たちも介式を輪姦したことが発覚すると困るので、いつそ彼女が責任を感じて自殺したという形で治まるのが一番だったので見て見ぬフリをしたけれど、いよいよ飛び降りるとき、前田が止めていた。前田は尊敬もしていたし多少は思慕してもいた女性上司を陽湖の口車にのつて勢いで輪姦したけれど、さすがに自殺へ導いているのは見るに耐えなかつたので手をさしのべていた。介式自身は、もう何も考えていなかったけれど、助けてくれそうな異性が現れると、それにすがって生きていた。結局、介式が依願退職し、前田と結婚して台湾であつたことは誰もが言わないという形をとつてる。

「うちの護衛はゲイツがしてくれるし、知念はんは松田川先生の警護を長瀬はんと交替で。あとのSPさんらは、それぞれ男性の大臣を警護してもらおかな。警視庁がないし、新屋はんの直轄くらいの扱いで。介式はんの依願退職は、とりあえず休職つてことで待つてもらお」

「そうっすね」

「介式はんには夏子はんあたりの警護を頼みたかったけど、無理そうなんかな?」

「あの様子だと……とても要人警護は無理っす。むしろ、病院に行つた方がいいくらいっすよ」

「介式師範……」

鷹姫も鮎美も心配で何かしてやりたい気持ちになつたけれど、小松

基地に戻ると仕事が山積みだったので忘れてしまった。まず、今まで臨時代理人としていた各大臣たちを國務大臣として任命する。これは義仁から任命される形式をとっているので詔書を預かってきている。鮎美が手渡し、非常時であるので式典はネット回線でモニター越しに義仁が読み上げる。鮎美は義仁の代理人として手渡すのでなく、単なる使者としてであり、これまで代理人であつたので鮎美の意向一つで委任を解くことができたけれど、これからは罷免するには、総理大臣が天皇に奏上し、天皇が罷免する形とした。これで、引き続き鮎美は摂政に相当する総理大臣として大権を行うけれど、ある程度の縛りは生じてくる。そして、鮎美が死亡したとき、後継者となる者の順番も、すべての國務大臣について決めた。これには鮎美の意見が反映され、畑母神、石永、久野、鈴木、三島、夏子、新屋という順を決めて、あとは石永に決めてもらったので石永派の中では新屋が鮎美のお気に入りなのだ周囲にわかつた。それらが終わった時点で夕食時を過ぎていたので、もう閣議は終了としたいほど疲れていたけれど、朝鮮半島情勢に加えて、国内でも問題が生じていたので閣議が引き続きしている。夏子が頭痛がするような顔で言う。

「給料日の25日まで、あと二日、っていうか実質一日だけ。なのに、お金が足りない。どこの傾きかけた企業でも社長が悩むところね」

「そうだな、協力してくれる銀行は目一杯協力してくれたし……福井銀行は頑張ってくれた。富山系は、見事に蹴ってきたけど」

石永も悩む。国庫にお金が無かつた。日本銀行は機能停止しており、都銀も動かない。なので地方銀行に協力を要請しているし、応じてくれた銀行もある。さらに石永など閣僚個人の資産も提供できる者は提供している。鮎美も、これまでの預貯金を全額提供したし、さらに玄次郎に頼んで500万円を借り、鐘留にお願いして2億円を借り、鷹姫も実家の食費を抜いた全額を提供している。閣僚の中には落選中なので、むしろ震災前から借金があつてマイナス状態の者もいて、大臣としての歳費は無理でも、せめて妻子の食費は欲しいという状態だったりもする。掻き集めた官僚たちも余裕のある者は給与の保留を申し出てくれたけれど、余裕のない者もいる。急に借り上げた

金沢市のビルや土地への支払いもあるし、諸経費も生じている。それらも待ってもらえるものは、待ってもらい、いろいろと工面したけれど、結局は30億円が足りず、明後日になると給与の不払いなど問題が生じそうだった。

「く〜う……明治政府も、当初、金がのうて困ったらしいんよなあ……うちらも、いっしょよか……」

鮎美も頭を抱えている。静江も言う。

「確定申告時期だったのも、つらいところですね。税金もあるけど還付金もあるし、3月11日の震災で15日が申告期限。いつそ16日に震災が来れば、よかったのに……ややこしいタイミングで……」

「それ言うたら、まだ昼過ぎやっただけ、マシよ。阪神淡路大震災みたいに早朝とか、核ミサイルみたいに夜とか、現場はクチャクチャになるやん」

「核ミサイルは人為的だからな。夜襲という意味で狙って、あのタイミングだろう。それを思うと広島長崎は明るい時間だったなあ……」

石永のつぶやきに、今も司令室にいて地下室での閣議にはモニター越しで参加している畑母神が答える。

「広島長崎は、直後の襲撃など考えていなかったからだだろう。むしろ、初めての原爆の威力を撮影するため、晴天の昼間を狙っている。北朝鮮軍は核ミサイルの後の夜襲で、かなり韓国軍を押ししている。もう韓国の半分まで進軍してしまった。綿密に作戦計画を以前から練っていたのだろう」

「難民は生じてるの？ 絶対、追いついてよ。国庫がパンクしちゃう。っていうか、今、パンク寸前だから」

夏子が彼女らしくない余裕のなさで髪先を指でクルクルと回しながら言った。その様子が財務が立ちゆかないと、敗戦なみの破綻が来ると語っている。畑母神が目は朝鮮半島の戦況を見守りながら、口では夏子に答える。

「すでに生じているし、漁船で向かってくるが、すべて海軍と海保が追いついていない。現場も頑張っているし、欺瞞情報も効いているよ」

だ」

「そう。……韓国って、お金を貸してくれないかな？　これだけ迷惑かけてるし」

「貸してくれるわけないやん」

「だよねえ。中国かロシアでもいい」

「貸してくれても、すぐには無理やろ。とうとう通貨変動の固定も韓国ウォンが、実質の両替で無理になってきてるし……」

「災害と違って戦災は、どこまで続くかわかんないから。どんな地震も、大雨も、とりあえず一日で終わるけど戦争は期間未定、ヘタしたら国家が消失するまでやるから」

「明後日、日本政府が不渡りみたいになったら、円もヤバイかも……うゝ……」

鮎美も頭を抱え、石永が言う。

「足を引つ張ってるヤツらもいる。本来、地銀がみな協力してくれれば、なんとかなるものを富山を中心に、いくつかの地域で銀行が非協力的だ。オレたち臨時政府とは別に議会を設置するという動きがあつて、そこに自民系の落選議員や県議まで参加しているらしい。裏で何かしてるんだらう。とくに年配の議員は地銀とつながりが強い」

夏子が言う。

「食品価格があがってるし、企業によっては給料日に給料が振り込まない事態も生じるから、預金者が定期預金なんかを解約する可能性もあつて銀行も取り付け騒ぎを出したくないから私たちに全面協力は難しいのよ」

「やからつて、うちらが紙幣を刷るにも3ヶ月はかかるし。東京の金庫とか、まだ開く気配ないんですか？」

「瓦礫の下に埋まつてるから、あと1ヶ月は無理だつて。現金と準備金、手元がないと厳しいわ。今月さえ乗り切れば、なんとかかなるけど、今月がヤバイと後は破綻の連鎖になるよ」

「……はあああ……」

「弱つたなあ……」

鮎美と石永はタメ息をつく。畑母神は防衛大臣の任へ専念している
ので、ほとんど財務については考えていない。三島も鮎美から新憲
法の草案を法務省のスタッフと練るよう頼まれているので、財務への
感心はもっていない。議論が暗礁に乗り上げているので新屋が別の
議題にふれておくため職員に資料を配らせる。それと同時に夕食が
運び込まれてきた。メインはクジラの竜田揚げだったけれど、鮎美の
分は半分が蛇の唐揚げだった。

「シスター鮎美のだけ特別だそうです」

配膳してきた陽湖が言う。陽湖は秘書補佐として地元で活動して
きたくらいの実験しかないので閣議の場ではお茶汲み程度の仕事を
していた。

「あ、おおきに」

「そのウナギみたいな何ですか？」

「へびよ」

「っ……へび……」

陽湖が気持ち悪そうに身を引いた。

「…へびは……サタンの化身……」

「神道やと、神様のお使いってこともあるね。いただきます」

忌まわしいものでも、尊いものでもなく、ただの爬虫類にすぎない
と思っっている鮎美は斉藤が向けてくれているカメラに向かって美味
しそうに食べた。石永が言う。

「パフォーマンスのためとはいえ、女の子なのに平気そうだな」

「気持ち悪いって考えるんやったら、越前ガニの方が気持ち悪いと考
える文化が多いかもしれませんよ」

「そうだなあ……言われてみると、見た目、グロテスクだな。カニは」

「クジラも美味し。もしかして、うちが演説で挙げたから獲ったとか
？」

鮎美の問いに陽湖が答える。

「いえ、調理していた隊員さんが言っていたのですが、ちょうど冷凍の
ものがあつたので急遽変えてみたそうです。お口に合えばよいので

すが、とのことですよ」

「そうなんや、わざわざ、おおきに、つてお伝えして。けど、クジラって高いんちゃうのかな。うちが父さんと居酒屋で食べたとき、めっちゃ高かった記憶があるけど」

石永が教える。

「それは刺身だろ？」

「あ、そうやったかも」

「自衛隊には、…いや、もう日本軍か、軍には水産庁から調査捕鯨のクジラが格安で入る仕組みがあるんだ。そもそも、カツオやタイじゃあるまいし、すぐ獲って夕食に出せるなんてものじゃないぞ」

「調査捕鯨か…あ、三島大臣」

「うむ」

「WBCやったかな、あれ、近いうちに脱退しよ。白人が決めたクジラ保護のアホな論理に付き合ってられる状況やないし。食べ物がないのでクジラ獲ります、つて、なるべく波風が立たないように脱退する法を準備しておいて」

「了解した」

長年の懸案を思いつきで決めた鮎美に対して、とくに反対の声はあがらなかったけれど、久野が言っておく。

「WBCではなくIWCですよ。国際捕鯨委員会。まあ、これを機会に脱退しましょう。あれは実質、日本人がクジラを食べると和牛にせよ輸入牛にせよ、肉の消費が減ってしまう。和牛でさえ飼料は輸入に頼っていますから、ようするに商売です。クジラを適度に獲れれば、その分、他の魚も多く獲れるようになります」

久野の言葉に鮎美たちは深く頷き、配っていた資料が回ったので新屋が述べる。

「やはり再び、避難所や街で在日韓国人、朝鮮人、中国人に対する嫌がらせや傷害事件が発生しています。また一部では同性愛者に対する嫌がらせ、傷害事件もあったようです。前者の原因はミサイル攻撃と尖閣諸島での殉職、いえ、戦死による対外感情の悪化、後者では…その…：ありていにいえば、総理大臣が同性愛者であることへの反発の

ようです。国の代表が同性愛者というのは気に入らない、というわけ
です」

「……………。どっちも、今までの法に従って対処したって」

「そうしてはいますが、目撃証言などの聞き取り捜査で違いが鮮明に出
ており、前者では目撃者が犯人のことを喋らず捜査が難航し、後者で
は芹沢総理への支持もあって捜査への協力はえやすいとのことですよ」

「……………。少数者という意味では……………同じやけど……………」

「ホモとレズは爆破テロはしないからな」

石永が言い、鮎美が不快そうに睨む。

「ゲイとレズビアンやよ、何回言わせるの?」

「す、すまない。差別用語らしいね。気をつけるよ」

「次、言うたら逮捕させるで」

「あ、ああ……………。國務大臣に不逮捕特権はないのか?」

「あ、それも考えんとね。というか、無いとあかんやん。天皇陛下し
か罷免できんのに、うちが気分で逮捕できるんやったら意味ないし。
不逮捕特権ありで、まとめよ。けど、現行犯での侮辱は、気をつけて
や」

「ああ、すまない」

「性的少数者への協力はありがたいけど、在日の人らは、かわいそうや
ね。いつそ、どこかに集めて保護するのは、どうやる?」

「素直に集まってくれるのかという問題と、集めた場所を自分たちの
土地だと認識されると困るからなあ……………。あと、じゃあ、同性愛者を一
カ所に集めて保護すると言われたとき、どんな気分がする?」

「うっ、うくん。こちらは動物か?! ふざけんな! と思うわ。けど、
異民族……………しかも、戦争中……………。韓国人はともかく北朝鮮人は、保護と
いうより逮捕したいねんけど……………。ああ! もう! うち差別する
側にも立つけど、差別される側の気持ちもわかるねん! ややこしい
わ! どうせいちゅーねん!!」

「差別でなく区別だと考えれば、どうだ?」

「そんなもん国語的レトリックを駆使しただけで、ほな、区別される側

の気持ちは、どうやねんって話やわ。これは差別でなく区別です、って言われて、はい、そうですか、と受け入れられるわけないやん。差別も区別も本質と作用は、いっしょや。むしろ、正当さを装う分、区別の方がタチ悪いわ。まるで隣人愛と言っておきながら、結局は受洗した者と未受洗の者を差別するキリスト教といっしょやん」

「博愛主義は幻想だからなあ……」

「かといって戦地から命からがら逃げてくるもんにしたなら、同じ人間やんけ！ 入国させてくれや！ っとなるもんなあ。にしても半島問題、難しいなあ。入国してくるのも、現状で在日なんも。……たしか、アメリカも戦時中に国内の日本人を収容したよね」

「その悪例に倣うのか？」

「っっていうか、自然な反応やと思うわ。人権って発想が不自然なんであって、たとえばホモサピエンスとホモエレクトウスが地球上に同時にいるとき、戦争してたら、とりあえず見かけたら殺すやん。たぶん、そういう方法で、こちらホモサピエンスだけになったんちゃう」

「ああ、そうだろうなあ」

「いい感じに日本列島と朝鮮半島で住み分けしてたのに、ペリーに言われて開国してから、ろくなこと無いなあ。出島は、ええ発想やったわ」

食べ終わって、お茶を飲む。新屋からの議題にも解決策は見つからず、再び財務の課題に戻った。夏子がタメ息をつく。

「はああ……あと、30億円……」

「戦車が一台、そんなもんの値段でしたやんね。パッと売れたらええのに」

「ヤフオクでね。……」

冗談で言った夏子だったけれど、真剣に考え込む。

「なんか、装備品、売る？ 即決価格で」

「バカもの」

畑母神が怒ったけれど、夏子は気にしない。

「冗談よ。はああ……」

「うち、ちよっとトイレ行ってきます。鷹姫、話、聴いておいて」

鮎美は議事を止めないようにしてトイレに立った。今泉らゲイツ6名が同行してくれる。鮎美はトイレへ行く前に食堂へ寄って、調理を担当している隊員たちが厨房にいるうちに礼を言うことにした。厨房に入ると、陽湖が洗い物を手伝いながらコップで紹興酒を呑んでいた。他の隊員たちも夕食が終わったので一日が終わったという気分でも飲酒していた。そこへ前触れ無く最高司令官が6名の武装した護衛と現れたので規律違反の飲酒を咎められないか、やや緊張した空気が漂う。鮎美は詳しい規律など知らないので陽湖にだけ注意する。

「ここ、我が国の領土やと思うけど？　いつから20歳になったん？」

「す、すいません。つい」

「うちの秘書補佐って立場で、そういうことされると困るんよ。わかる？」

「はい、もうしません。ごめんなさい」

陽湖が謝るので、そばにいた厨房担当の隊員も頭をさげる。

「自分が誘いました。申し訳ありません！」

「……。まあ、うちも小言を言いに来たわけやないですから……」

鮎美は予定通りクジラを出してくれたことと、急に蛇を調理させたのに美味しく仕上げてくれたことへの礼を言い、隊員たちと握手した。隊員たちも紹興酒を呑んでいて、李登騎が陽湖へコンテナ一つ分を贈ってくれたものだった。もう鮎美も李登騎が、かつての陸軍中將だった根本博の救援へ恩義を返してくれたことは聴いている。鮎美は紹興酒のアルコール度数を確かめた。

「けっこう高いやん……陽湖ちゃん、アル中にならんときや」

「はい、気をつけます。李登騎さんの好意ですし、シスター鮎美もお呑みになりますか？」

「うちが平然と違法行為をやりだすと、世の中がグチャグチャになるし。紅茶、ちょうだい」

食堂なので、すぐに陽湖は紅茶を淹れてくれた。それを飲んでも美味しかったけれど、タメ息が出る。

「はああ……」

「どうかしたんですか？ さつきの閣議も、みなさん困った顔でしたけれど」

「うん、お金がないねん」

「お金が……それは、困りますね」

「あと、30億円、明後日までに掻き集めんとあかんのよ。陽湖ちゃん、誰か金持ちの知り合いおらん？ 返済は政府補償、金利は7%よ」

「7%……かなり高いですね」

「どうせ、東京の金庫が開いたら、すぐ完済できるし。いつそ10%でもええわ」

「……………」

少し考えた陽湖は自分のスマートフォンを鮎美に見せる。

「30億円なら、私の琵琶湖銀行口座にありますよ」

「っ?! マジで?!」

鮎美がスマートフォンを凝視する。たしかに32億円の残高があった。

「こんなお金、どうしたん?!」

「日本中の信徒のみなさんが震災復興のために寄付してくれたお金です」

「ちよっと来て!!」

鮎美は陽湖の手首を握って地下室へ走った。そして石永たちに琵琶湖銀行に32億円があることを伝えると、もう夜だったけれど石永は阪本市にいる銀行頭取に電話して確かめた。個人口座の残高にすぎなかったけれど、ほんの数日で32億円に膨れあがった口座のことを頭取も認識していて、たしかに陽湖名義で存在していると教えてくれた。

「陽湖ちゃん、それ貸して、お願い!」

鮎美が手を合わせて頼むと、戸惑っていた陽湖の目の色が変わった。秘書補佐として働く者の目から、強欲な教祖の目になっている。

「…………どうしようかな…………」

「お願い！ それが無いと、めっちゃ困るんよ!!」

「そうですか、困るのですか…………どのくらい困るのですか？」

「いろいろ滞って、ホンマに大変になるんよ！ やから、お願い！ 金利15%でもええから！」

鮎美が陽湖の両肩をつかんで頼む。陽湖は調子に乗った。

「人にものを頼むときの態度ってありますよね」

「…………お願いします！」

鮎美は手を離して起立すると深く頭をさげた。

「……………」

独裁者として振る舞ったり、素直にお願いしたり、臨機応変な子だな、と石永たちははしみじみと思った。陽湖は、さらに調子に乗る。

「そこに跪いて心から祈りなさい」

「…………はい…………」

何に対して祈れっちゅーねん、福沢諭吉か、と鮎美は強く不満に思っただけれど、我慢して言われた通りにしてみる。跪いて両手を組んで祈った。

「お願いします、貸してください」

「んフフ♪」

陽湖は心の底から楽しくなってきた。教祖が信徒にするように鮎美の頭を撫でて訊く。

「シスター鮎美、あなたは今までにお金に困ったことがありますか？」

「……………いえ……………あまり……………」

「そうですよね、裕福な家庭で育ちましたから」

「……………はい……………おかげさまで……………」

陽湖ちゃん、台湾にいる間に性格また変わったかも、と鮎美はマザーの称号をえた陽湖が変化したように、さらに台湾で何かあったのかもしれないと感じたけれど、今は素直に従うことで国庫を保ちたかった。

「どうですか、お金に困った気分は？」

「……とても困っています……苦しいです……」

「国庫と家計では実感に差が大きいかけれど、困っているのは確かだった。」

「んフフ♪」

「…そろそろ貸してください。30億となると、事前に銀行へも通知しないと、そろわないので……」

「まだ貸すとは決めていません」

「………お願いします」

また頭をさげる。そんな二人の様子を見ていて、静江や一部の国務大臣の秘書たちは陽湖の気持ちが少ないのは理解できた。同じ同級生なのに、議員というだけで上下関係が形成されて今日まで下にいたけれど、キツカケが掴めたなら逆転させてみたい、そういう気持ちはわかる。とくに、近い年齢で秘書になっていたり、昔は同級生だったけれど就職に困って相談したら秘書にしてもらえたというパターンだったりする者は深く共感できる。しかも、ちよつとしたミスや遅刻で、クドクドと怒られたり、禿げてもないのにハゲと罵られたり、運転中に運転席のシート越しに背中を蹴られたことのある者は一度くらい議員に土下座でもさせたいと思っていたら、陽湖が言った。

「土下座して頼みなさい。この30億円は、あなたが何度も侮辱したキリストを信仰する人たちの善意の集まりです」

善意の集まりで憂さ晴らしする陽湖は、どんな顔をして土下座してくれるか、楽しみにしていたけれど、かなり普通に鮎美は土下座してくれた。地下室の床に正座して、両手をつき、額も床につける。

「お願いします」

「……」

面白くない、もっと悔しそうな顔をしてほしかった陽湖が追加注文する。

「私の爪先にキスをしなさい」

「……。はい」

やや迷って鮎美が実行しようとする、鷹姫が怒る。

「いい加減になさい！ 月谷！ 誰に向かってものをつけているので

す！」

田守も怒鳴る。

「あるじを侮辱するは自身を唾棄するも同じこと！」

二人とも鮎美や三島に心酔して仕えているので、陽湖の所業は我慢ならなかった。怒鳴られても陽湖はマザーとして動じない。

「キリストを侮辱した罪を、私の爪先にキスをして詫びなさい」

「……申し訳ありませんでした」

鮎美は、それほど嫌ではなかったのでサンダルを履いている陽湖の親指にキスをした。陽湖はゾクゾクとした高揚感を覚えて、同時に喉の渴きも覚えた。ほろ酔いだった脳が追加のアルコールを求めている。

「18歳以上でも飲酒できるようにしなさい」

「……18歳以上で飲酒していただけます」

「シスター鷹姫、食堂から紹興酒というお酒をもってきてください」

「くっ……」

とても嫌そうに鷹姫が拳を握って震えるので、さっさと30億円を国庫に入れてほしい夏子が動く。明らかに子供の遊びになっているので、付き合っただけで終わらせるつもりだった。「グラスでいい？ 氷は？」

「グラスとお砂糖をお願いします。できれば、黒砂糖で」

「はいはい」

夏子は食堂からグラスと紹興酒、黒砂糖をもってきた。陽湖は美味しそうに呑むと、次の要求をする。

「キリスト教を、この国の国教にしなさい」

「……し……信仰の自由というのも、ありません……」

「信仰の自由があっても、国教が決まっている国もあります」

「………わかりました。そうします」

「フ……フフ、んフフ！」

やった、できた、こんなにも、あっさり、かのフランシスコ・ザビエルの時代から宣教師たちが苦労に苦労を重ねてきたことが今、私の手で実った！ と陽湖は心が踊り、また紹興酒をあおる。

「……そろそろ30億円をお願いします」

鮎美が繰り返す頼む。陽湖は酔った目で考える。

「うくん……」

「お願いします」

「……デイズニールランドと、USJも作り直してください。あと長島スパールランドも」

「あれは公共施設やなくて民間企業やし……いえ、すぐに復興できるように優先的に援助します」

「あとは……」

また陽湖は紹興酒をあおりながら考える。すべて思い通りになっているのに、なぜか満足感が足りない。足元に正座している鮎美の反応が面白くない。そして、まだ悔しかった。

「子供の頃、よくデイズニールランドに両親と行ってましたよね」

「……まあ……ときどきは……」

「2年に一回は写真がありました」

「……」

そう言えば、うちが入院中にアルバムを見とったんや、こいつ、と鮎美は妬まれていることに気づいた。

「しかもランド前のホテルに泊まって。ミラコスタに泊まったこともあって、三つの公式ホテルすべて制覇して。公式ホテルに泊まると、優先的なファストパスがもらえて、みんなが並んでいるのに、アトラクションに並ばずに乗れるし、入場も開園15分前に入れるんです。こんな不平等ってありますか？ 信仰心がないのに楽園へ復活できるようなものですよ、お金で！」

「……はい……すみません……」

とりあえず謝っておく。周りで見ている閣僚たちも、何が陽湖の心に引つかかっているのか、だいたいわかって可哀想になったので、しばらく好きにさせることにした。大半の閣僚は2世、3世の議員なので子供の頃から豊かだったし、お金に困ったのは前回の総選挙で落選してからくらいだったし、その苦労も親の財産という後ろ盾があるので、それほど深刻でなかったりする。モニター越しに様子を見ている

畑母神は福島県の農家の生まれだったので、まだ18歳にすぎない陽湖が強く拘っている気持ちは理解してやれたけれど、今する話なのか、と疑問に思いつつも関わりたくないで司令室のモニター類を監視することにした。陽湖が鮎美の鼻先を指さす。

「ホテルのブティックで白雪姫やアリスのコスプレもしてましたね」

「……はい……そんな記憶もあります……」

むしろ鮎美より美恋の趣味でデイズニールランドに行っていたし、いろいろとやった記憶はある。

「あれが、いくらするか知っていますか？」

「……いえ……」

「衣装、撮影込みで3万円はします」

「……すみませんでした……」

「USJには毎年のように行っていましたね」

「……近かった……」

「年々、入場料があがっていたのに」

「……すみません……」

それは、うちやなくてUSJに言うてや、と言いたいのを我慢して鮎美は頭をさげ続ける。陽湖は言えば言うほど悔しくなってきた。どんなに頭をさげさせても、過ぎ去った幼少期は取り戻せない。とてもとても着てみたかった白雪姫やアリスのコスプレも、小学校6年生までの年齢制限がついているし、今やつても痛いし、楽しめない。なのに、鮎美は当たり前前に楽しんできている。同じ歳に生まれ、同じ一人娘なのに、まったく違う。悔しくて土下座している頭を踏みつけたくなる。しかも、鮎美は30億円のために感情を殺して大人の対応に徹しているのです、陽湖は苛立ちを覚えた。

「いったい何回、USJには遊びに行ったの?！」

「……すみません……覚えていません……」

「高2の頃、年間パスポートをもっていましたね!」

「……父さんに買ってもらいました……すみません……」

年間パスポートがあれば、夕子と遊びに行ったとき、入場料の半分

をもってあげられるという狙いがあった。鮎美は玄次郎にねだつていた。

「自分が、どれだけ恵まれた生活をしてきたか、わかっていますか?!」

「……すみません……勉強不足でした」

「一度も苦勞したことがないから、連合インフレ税なんて、ふざけた税金を思いつくのです! 自分で稼いだこともなくせに!」

それは一部の富裕層も鮎美に対して思っているところだったし、閣僚たちの一部も考えてはいる。格差が生じるのは努力の差もあった。とはいえ、陽湖が鮎美を妬むようにスタート地点から違うことも多い。親の世代の富が受け継がれ、少々の努力では埋まらないことや、そもそも努力のチャンスがないこともあり、格差の固定化は政治的課題でもある。鮎美は持論を否定されても、とにかく謝る。

「本当に、申し訳ありませんでした」

「……心がこもっていません。もっと心から謝罪なさい」

「……。本当に! 申し訳ありませんでした!!」

「それは、ただ声を大きくしただけです」

「……くっ……」

とうとう鮎美が悔しそうな顔を見ると陽湖はゾクツと快感を覚えた。泣かせたい。ぼろぼろに泣かせたい、という衝動が走った。幼い頃の陽湖の心が言ってくる、ずるい、この子は、ずるい、と泣きながら訴えてくる。私も小さい頃にたくさん遊びに行きたかった、と泣き喚いでいる。

「本当に悪いと思っっているなら、土下座しながら、おしっこを漏らし、泣いて謝りなさい。それで許してあげます」

「……………」

そこまで、うちに屈辱を与えんと満足せんの……うちが、あんたに何したっていうんよ……、と鮎美は思い出してみると、かなり、ひどいことをした記憶がある。キリストの教えを語る陽湖を邪険にしたし、島の大山に登ったときは野外排尿の途中でスマートフォンカメラを向けて撮影したフリをして慌てて衣服をあげさせ失禁状態に

して笑ったし、下山の途中で殴って押し倒し、処女を奪うと脅したこともある、その復讐は機内で受けたつもりだったけれど、やられた方は復讐と償いが足りない、と感じているのかもしれないし、家庭環境の違いを妬まれているのもわかる。そして、淡々と土下座するのではダメだとも感じたので、もう陽湖の望み通り泣くことにした。こんな大勢の前で土下座をさせられるだけでも嫌だったのに、人間としても女子としても嫌すぎる姿を晒せと言われたし、いつそゲイツに命じて陽湖を逮捕して財産を供出させるという選択肢もあるけれど、それでは公権力による強奪になってしまう。銀行口座も陽湖名義なので銀行側も預金を動かすには本人の意志確認を重視してくる可能性が大きい。今は国庫のために陽湖の言いなりになるしかなかった。

「……本当に……申し訳ありませんでした……」

再び土下座して、謝りながら下腹部の力を抜いた。もともとトイレに行く途中で陽湖が30億円をもっていることを知って地下室に戻ってきたので、力を抜くと勢いよく小水が出てきて下着を濡らし、すぐに漏れ出てきてスカートも濡れるし、土下座姿勢なので内腿は濡れず足首や靴下、靴が濡れる。水たまりが床に拡がり、その中で土下座をしていると、情けなくて、みじめすぎて泣こうと思わなくても、ぼろぼろと涙が零れた。

「っ……うっ……うぐっ……ごめんなさい……もう許してください……お金を貸してください……ひーうう……」

「くっ……」

鷹姫と三島、田守が菌を食いしばって悔しさに耐える。尊敬している対象が侮辱されているのに助ける手段が無いのは胸を抉られるような心地だった。

「んフフ♪ んフフ！ んヒヒヒヒ！ あらあら、本当に、おしっこしちゃったんですか？ 冗談だったのに。 んヒヒ」

陽湖は最高に美味しそうに紹興酒をあおった。

「……ぐすっ……ううっ……おっしやる通りにしました……お金を貸してください……」

「その姿、撮ってあげます」

やっぱり撮られた恨みは深かった。陽湖は鮎美へスマートフォンを向けると、しつかりと鮎美の姿を撮影した。

「あーっ、スっした」

「……ううっ……ううっ……ひううっ……」

鮎美は土下座したまま泣いている。昨夜から睡眠時間も足りていないし、とても疲れている。もう頭がクラクラとして泣くことしかできなくなった。夏子と静江が見かね、なんとか陽湖の機嫌を損ねないように誘導する。

「今まで、いろいろあったかもしれないけどさ。そろそろ許してあげようよ。本気泣きしてるしさ」

「もう一杯、どうぞ」

静江は紹興酒をグラスに注いで黒砂糖を混ぜる。このところ、ホストクラブでも接待を受けていたので女性の機嫌の取り方もわかっている。そして、実は静江も快感を覚えていた。今まで何度か、鮎美へ土下座したことがある。立場の上下と状況がなければ、なぜ自分が、ずっと年下の女子高生などに土下座して許しを乞わねばならないのか、そんな思いは心に貯まっていた。

「私も見ていて、スっとなりましたよ」

小声で囁いたけれど、足元にいる鮎美にも聞こえている。夏子は30億円の確保に専念する。

「銀行も頭取に今から言っておかないと用意できないから。もう同意が取れたってことでいいかな？ 判子は、どこに？」

「えっと、家のタンスに。母が管理しているはずですよ」

「お母さんに連絡してもらえますか？」

「……………」

「ね、お願い。あなたは日本の救世主になるよ」

「はい。もともと、お貸しするつもりでしたから。でも、あと一つ
そう言った陽湖は紹興酒を呑んでいたグラスを紫ローブをまくつて股間に入れる。そうしてグラスに放尿し、小便を満たすと、鮎美へ差し出した。

「黄金聖水です。飲みなさい」

「……うう……うっ……」

鮎美が嫌そうにグラスを見ると、夏子が言う。

「土下座して漏らして謝れば許してあげるんじゃないの？」

「はい、許しました。でも、お金を貸すとは言っていない。これを飲みきれば、貸します。30億円を金利30%で」

「……」

この子、出資法とか、利息制限法は知らないのね、と夏子は思ったけれど、余計なことは言わず鮎美を見る。

「……うっ……」

「私が代わりに飲みます！」

鷹姫が叫んだ。

「では、シスター鷹姫の分も出しますね。でも、シスター鮎美も飲んでください」

「くっ……」

「鷹姫……うちが飲むから……ええよ……。ヒトのおしっこは出て、すぐは無菌やし……」

同性愛者ではあっても、同性の排泄物を飲みたいという気持ちはなかったけれど、我慢すれば不可能ではなかった。もともと女子の腋の汗や股間の分泌物なら舐めとりたいと想うので、おしっこもそれらに近いといえれば近い。鮎美はグラスを持つと一息に飲んだ。

「……うう……」

「では、次はシスター鷹姫も。あなたも何度もキリストを侮辱しました。同罪です」

「……」

そう来るだろうことは、わかっていたので鮎美が問う。

「ホンマに、これで30億円、貸してくれるよね？　もう時間がないよ。これが無かったら避難所への食料配送とか、いろいろ止まってしまうの。わかってな？」

「ええ、誓って」

「……」

あんたの信仰は、どこにいったん、どうなったん、そんなん誓われ

ても神様が迷惑やろ、と鮎美は思ったけれど、鷹姫に頼む。

「鷹姫、ごめん。お願い」

「はい」

「では、少し待ってください」

再び陽湖はグラスに黄金聖水と称する小便を満たした。すぐに鷹姫に手渡した。

「お飲みなさい」

「……………」

いただきます、とは言いたくなかった。黙って鷹姫は迷わず、すぐに飲んだ。草と虫を湯がいたものと同じくらいの抵抗感で飲めた。夏子が終了させる。

「はい、じゃあ、私が琵琶湖銀行の頭取に電話するから。月谷さんはお母さんに頼んで判子を用意してもらって。あと、頭取と途中で替わるから、同意を証言してね」

「はい」

やっと子供の遊びじみた変質者の復讐が終わったので銀行に準備をしてもらう。その間も陽湖に気が変わったと言われると困るので鮎美たちはおとなしくしていたし、静江は吞ませて寝てもらおう作戦に出て、どんどんと紹興酒をつぎ、泥酔した陽湖はフラフラになって貴賓室で眠った。貴賓室は窓という窓を厚さ2センチの鉄板で塞いでいるけれど、やはり核ミサイルが極めて正確に小松基地へ着弾した場合は耐えないので、鮎美や閣僚たちは地下室で眠る。寝る前に鮎美が天井に向かって言った。

「罪と罰、って小説を書いたドストエフスキーは死刑宣告されて処刑台へ連れていかれたらしいけど、あいつは処刑台の上で何を思うんやろね」

「……………」

怒りはわかるけど本気で殺すのだろうか、と聞こえていた閣僚たちは不安に思った。

3月24日 難民

復和元年3月24日木曜、午前11時過ぎ、陽湖は強い頭痛を覚えて呻きながら貴賓室のベッドで起きた。

「ううっ……痛い……ズキズキする……」

頭痛は二日酔いによるものだった。台湾でも呑みすぎて経験したことがある。

「……神よ……どうぞお救いください……ううっ……」

祈っても無駄だったので起きて水を飲もうと周りを見る。

「……どこ？ たしか、シスター鮎美に黄金聖水のイニシエーションをしたあと……ううっ……とにかく、水。……あと、オシッコしたい……飲ませるまで我慢しないと……」

寝る前の記憶が曖昧なほど酔ったので頭痛も強いし、膀胱も張っている。よろよろと貴賓室から出てみると、ドアの前に里華と麻衣子が立っていた。

「おはようございます」

「え……ええ……おはようございます。たしか…石原さんと大浦さん？」

「はっ」

里華と麻衣子は世話役として陽湖につくよう言われていて敬礼している。なるべく機嫌よく陽湖に過ごしてもらおうよう指示されている。里華が問う。

「朝食は、どうされますか？　すぐに昼食の用意ができますが」

「お水を一杯いただけますか。あと、シスター鮎美は、どこに？」

麻衣子が水を汲みに走り、里華が答える。

「地下室で閣議中です」

「そうですか。ありがとうございます」

麻衣子から水をもらって飲むと、陽湖はそのまま地下室に向かう。廊下も多くの窓に鉄板が固定されてあって昼なのに照明を使っている。陽湖の後ろをついていく里華と麻衣子は昨夜入浴せずに紫ロー

ブのまま眠った陽湖の体臭が気になったけれど、女性らしく顔には出さず黙って歩く。地下室に着くと陽湖は閣議中なのに鮎美へ声をかける。

「シスター鮎美、ちよつと女子トイレまで来てください」

「……今、ホンマに忙しいのよ。あとにして」

閣議は三つの深刻な事態への対処に迫られていて、陽湖にかまっているヒマはなかった。けれど、陽湖が臨時政府に貸し付ける30億円の問題もあった。

「おしっこ漏れそうなんですよ。私が、ここでおもらししたら30億円の話は無しにしますからね。ハア……」

「……………」

勝手に漏らしとけ！ 変態！ と言いたいのを我慢してモニターの中にいる畑母神に言う。

「畑母神先生の判断で、もつとも日本軍の戦力が温存できて、生存戦略にかなないような手段をとってください。あと、台湾の方々の船団も安全に帰らせてあげてください」

「了解した」

夜間のうちに尖閣諸島には中国軍が上陸しており、さらに早朝には中国空軍の戦闘機が沖縄本島に飛来して何度も領空侵犯を繰り返してくるのに日本空軍が対応しているうちに、とうとう戦闘となり双方3機が撃墜され、新田原基地からの応援が到着したことで、中国軍機の航続距離の問題で退散してくれたという事態が発生していた。いまだ那覇空港は滑走路こそ復旧したものの、整備や武装の換装などほできず、せいぜい燃料補給くらいという状態で、朝鮮半島からの難民追い返し作業もあり、もう尖閣諸島へ船や飛行機をさく余裕は無くなっていた。畑母神が険しい顔で言う。

「中華民国の船団には必ず無事に帰っていただく。遠回りになるが津軽海峡を回って太平洋側から台湾本島南部へ向かってもらう。すでに台湾海峡でも中国軍と台湾軍が衝突している。戦力温存に賛成だが、むしろ攻勢に出た方がよいときは、そうさせていただいてよろしいですか？ 芹沢総理大臣」

「はい」

鮎美は一件の深刻な事態に決断を下して、次の事態にも対処する。

「死刑が望みやと言うなら死刑にしてやってください」

神戸市の避難所で、まるで鮎美が発布施行した総代理令に挑戦するかのような強姦殺人犯が現れ、女子小学生5人を強姦して殺害した上、逃げもせず、逮捕されると、死刑でいい、と言いつつ田熊衛士（たくまえいじ）という男に鮎美も他の閣僚たちも死刑しかないと言っている。

「うちが昨日のうちに施行発布しておいた総理大臣令による即決裁判をお願いします」

「あいわかった。どのみち冤罪の余地など皆無だ。このようなゲスには食事は当然、日本の空気を吸わせるのも、もったいないわ」

三島が頷いた。現状、最高裁判所も壊滅しているので鮎美は昭和憲法を無効化した上、特別裁判所の設置も可能にしていた。明らかに冤罪の余地がない証拠のそろった事件で悪質なものについてのみ適応可能としている。

「うちが参議院議員になったのと似たような制度で廃案になったのが、役に立つやなんてね」

国民の中から無作為に選んだ者を裁判員にあてて裁判するという制度を焼き直して適応したので一から造らずに済んでいる。審理に時間をかけるつもりもなかった。さらに新屋が問う。

「こちらの件は、どうしますか？ まさか一人で三重に戸籍をとろうとするとは、二重でも死刑だとしたのに。まったく……どういうつもりなのか」

在日外国人が津波で死亡した人間の保険証などを悪用し、別々の市役所の窓口で新たな戸籍を二つ取得し、さらに三つ目をえようとしたところで逮捕に至ったという事件だった。

「犯人の名前も、名乗ってるのがホンマかわからんけど、それも死刑しかないですよ。ようやるわ。三重にとれたら四重五重と狙ったんやろかね。それも一審のみの即決裁判でやってください。市役所も

大忙しやのに、いらんことばっかりしおって」

「わかりました。適応可能だと思われれます。自ら発行を依頼した身分証明そのものが動かぬ証拠になりますから」

「やつと三つの事態への結論が出たので鮎美はそばで尿意を我慢して悶えている陽湖に問う。」

「で、なんででしょうか？ マザー陽湖さん」

「トイレに来てください。あなたの罪を問います」

「……………はい…」

仕方なく閣議を休憩にして鮎美はトイレについていく。心配なので鷹姫も同行したし、里華と麻衣子も女子トイレへ入ったので護衛のゲイツたちはトイレ前に立つのみとなる。

「ハア…漏れそう…ハア…」

陽湖は恍惚としながら尿意に耐えつつモジモジと身体をくねらせ、鮎美に言う。

「あなたには個人としても議員としても国家としても、一つずつ罪があります」

「……………どのような罪でしょうか？ 教えてください」

聴きたくもないけれど、とりあえず相手はする。

「まず個人として、台湾で機内から動けなかったとき、食事を手配して、それが届いたのに、怪しいと見て食べなかった罪です」

「……………」

「あれを食べた生徒たち、あの後、誰もお腹を壊したりしなかったそうです」

「……………」

「それどころか、あれはフォイハイフーという屋台の名物料理で、普段でも行列ができるようなお店です。台湾の信徒さんが教えてくださいました。日本の学生たちが空腹で苦しんでいるからと、店長さんが徹夜で作ってくれた真心のこもった料理でした。それを、あなたは怪しいなどと見て、食べなかった。これは大変な罪です」

「……………そうやったんや……………」

たしかに義隆たちは体調を崩さなかったし、できたてなら美味し

かったのかもしれない。震災直後の混乱もあり配送に手間取ったのは仕方ないし、一人で全員分を作ってくれたなら、頭のさがる恩だった。

「他の航空会社の飛行機でも食事が届かなかった機は多かったのに、日本の修学旅行生と聞いて頑張ってくださった店長さんの誠意を、あなたはドブに捨てたも同然です」

「……………疑って…すみませんでした……………」

陽湖にではなく、名も知らない台湾人の屋台店主に鮎美は申し訳ないと本当に思った。いつか機会があるなら台湾を訪問して直接謝りたいと思うほど、せっかく作ってくれたのに怪しいと思って食べなかったことを悪いと感じた。さらに陽湖が罪状をあげる。

「議員としても、中華民国政府は津波で着陸できずに彷徨ううちに予定外に飛来していた日本の議員がいると知って、歓迎しようとか大変な中で使いを出したのに、身代わりに私を出して騙すということをしました」

「……………」

「他国の好意を疑い、あまつさえ騙して背中を向けるなど議員として最低です」

「……………」

あれはウイグルの空港での扱いがあったからやん、と鮎美は反論したいのを我慢した。

「あなたは中華民国政府の誠意をドブに捨てたも同然です」

「……………悪いとは……………思ってます……………」

「次に、国家として」

陽湖は威厳をもって言うけれど、もう失禁寸前なので両手で股間を押さえながらプルプルと震えている。一見するとイジメられている子に見えるのは陽湖の方という構図だったけれど、わざわざ鮎美の罪をあげてくるあたり、どんな罰をくだすつもりなのか、だいたい想像がつく。

「この大変な時期に、台湾の方々には日本を援助してくださいました。途中で核ミサイルが頭上を飛んでいくような状況なのに、それでも支

援を届けてくださいました。なのに！　なのに、日本は台湾、中華民国を一つの国として応対せず、ハンパな対応しかしません。援助を受けておきながら、正式な国交がないというのでは恩知らずにもほどがあります！」

「……それには……複雑な歴史が……」

もともとは中国大陆での覇権を巡って国民党軍と共産党軍が戦ううちに、劣勢となった国民党軍が台湾へ入り、根本博も援軍に駆けつけた上陸阻止作戦の成功によって二つの中国として残ることになり、戦後は中華民国の方が国連にも加盟しアメリカの援助もあつて高い国際的地位を得ていたけれど、中華人民共和国が国連の代表権を得たことから1972年に中華民国は国連を脱退、以後は中華人民共和国が国交のある他国に圧力をかけることもあつて孤立化の道を進み、また人口でも10億人对2000万人という国力差もあつて現在では苦しい立場にあるし、日本も国としては承認せず、形式的には国交が無く、実質的には国交があるという状態だった。

「これら三つの罪により、あなたを罰します」

「……どうするんよ？」

訊きたくないけれど、訊いた。

「身につけているものをすべて外し、完全な裸になってトイレの床へ便器のように寝なさい。上を向いて口をあけて。あなたは便器です。私が使つてあげます」

「……」

「月谷!!」

鷹姫が怒り、里華と麻衣子は状況が理解できない。閣議には顔を出せないで昨夜から30億円のために鮎美が言いなりにならねばならないという状況となつていることを知らず、陽湖は鮎美の性的パートナーであり、これから特殊なプレイを始める気なのかと軽蔑した目で見ている。

「さ、裸になつて寝てください」

「………あんた、結局、うちが子供の頃にデイズニーランドへ行つたり、いろいろ遊んでたのが妬ましいだけやん」

鮎美が反論した。言い当てるというほどでもない、わかりきった指摘だった。陽湖は考え込む。

「……………その感情は否定しません。けれど、あなたの罪は罪のままです」

「別に、それを、あんたが裁く必要性も権限もないやん。そんなにディズニーランドに行きたかったん？ あんなもん、ただの遊園地やで」

「夢の国です」

「……………」

鮎美が反論に悩むと、麻衣子と言う。

「私も行きたかった……………金沢から東京って、すごく遠いから……………修学旅行も左翼的な教師と右翼的な教師が一致して沖縄にしちゃったから……………」

行きたかったのに行けなかったというところで、陽湖と麻衣子が共感した。陽湖は里華にも問うてみる。

「あなたは行かれたことがありますか？」

「……………。横浜に住んでいたので……………それなりに……………」

どうして、こんな、くだらない会話を、これほどの非常時にしているの、という疑問をもちつつも里華は答えた。

「そうですね。もてる者に、もたざる者の気持ちはわからないのです。とくにシスター鮎美は二泊三日で公式ホテルに泊まっていました。しかも、学校をサボって！」

「あれは、父さんが、その方が空いてるし、ホテル代も安いって言うからやよ。うちの家は、そんなに言うほど金持ちちゃうよ」

「二年に一回、一度に50万円を使うとして、16歳までに400万円です。他にも富士急ハイランドにも長島スパワールドにも行っています、一泊で。だいたい毎年2回は遊園地に行くし、年3回は温泉旅行にも行っていました」

「人んちのアルバムから妬みのネタを見つけんといてよ、うちが自慢して見せつけたわけちゃうやん。たいして金持ちちゃうから海外旅行に行けん分、国内で遊ぼうって父さんが言うてたから」

「しかも、いつも学校をサボって！」

「だから、それは安いし、長スパあたりやと平日は、ほとんど並ばずに乗れたりするし、USJでも最近では外国人が多くなってたけど、ちよつと前やと一日で全部乗れるくらいやから。あと、学校はサボったけど、ちゃんと成績は維持したし」

「そんな考え方は間違ってます。学校は、ちゃんと行くものです！
そして日曜日は教会に！」

「……あんだ、かわいそうな日々を……けど、あんだも長スパくらい行ったことあるやろ？ 六角市から山を越えたらすぐやん」

「っ、びわ湖タワーしか行ったことない!!」

「……びわ湖タワーって何？ そんなん地元にあつた？」

「くっ……バカにして！ 早く便器になりなさい！ でないと30億円、貸しません！ びわ湖タワーには世界一のイーゴス108もあつたのに！ 高くて乗れなかった！」

「……イーゴス108って何よ？」

「観覧車です！ イーゴスは、すごい、を逆さ読みしたもので108mの高さがあつたから！」

「それは……すごいね……」

ネーミングセンスといい、あんだの煩惱といい、108つの妬みくらい持たれてそうやわ、と鮎美は妬みを隠さなくなった陽湖への対応を考える。いくら30億円のためとはいえ便器扱いされる気はないし、もう陽湖へは強い嫌悪感をもっているけれど同性愛者なので股間に口をつけるくらいならやってもいいものの、寝起きで貯まった尿を排泄されるのは、まっぴらごめんだつた。

「30億円を貸してくれんにやったら、国教をキリスト教にする話は無しやしね」

「っ……」

今度は陽湖が考え込む。罰と言いつつ、個人的な変態的欲求と逆恨みの復讐心を満たすことと、歴史的一大事業の成就を天秤にかけて悩む。そのうちにも尿意は絶え間なく襲ってくるので股間を押さえて震えている。それを見ている里華と麻衣子には、陽湖のことは残念な

子にしか見えなかった。鮎美が提案する。

「ほな、こうしよ。日本の運命をかけて、陽湖ちゃんが頑張ってみよ」

「私が何をするといいのですか？」

「キリスト教を国教にするための条文を考えてみてよ」

「…ジョー分…」

「条文よ、条文。憲法の文言を、どうするか。とくに、うちは天皇陛下に任命されて総理大臣なんよ。天皇は神道の存在でもあるわけで、それとキリスト教の国教化との兼ね合いをどうするかは、すごい難しいのよ。あと、創世記と理科の知識の矛盾とか、いろいろあるやん。どうするか、教育施策も考えてみて。それを完成させるまで、陽湖ちゃんがオシッコ我慢できたらウインウイン、おもらしたら破談。そんなギリギリの我慢してみ。きつと、気持ちいいよ」

「……………」

他人に自分の尿を飲ませる趣味を覚えた陽湖だったけれど、まだ我慢のあげくに失禁するのも飽きたわけではない。そんな気配を嗅ぎ取った鮎美は畳みかける。

「しかも閣議してる真ん中でやってみいよ。おもらしたら、みんなに見られるし、我慢しきったら、すごい立派よ」

「……………わかりました。いいでしょう。やります」

「……………」

鷹姫と里華、麻衣子には、まったく理解不能だったけれど、陽湖は条件を飲んだ。よろよると地下室に戻り、椅子に座らせてもらい机に向かつて鉛筆を握る。もらった紙は審議が終わった資料の裏だった。鮎美は閣僚たちに謝り、閣議を再開する。いろいろな問題が山積みで時間が惜しいので閣僚たちも陽湖のことは目障りだけれど、触れないことにした。陽湖は昭和憲法を模範にキリスト教の国教化を考えてみる。

「……………第一条……………いきなり、ここで天皇が出てくる……………象徴……………国民の総意……………ただの人の王にすぎないはず……………王家にすると……………ううん、第一条で、まずキリスト教を定めよう……………第一条、日本国はキリ

スト教の国であり、この事実は全知全能の神の意志に基づく。うん、これで決まり！ うっ……く、漏れそう……ハア……ハア……」

陽湖は片手で股間を押さえながら机に向かう。その姿はテスト中にトイレへ行きたくなくなった女子高生のようで、思想信条と性的趣味はともかく顔立ちは鮎美に似て美しいので、男性閣僚の一部は劣情を催したし、変な趣味に目覚めそうだったけれど、今は4月からの学校開始や大学に合格したのに大学そのものが無くなった生徒や、大学はあるけれど、かなりの数の学生が亡くなった大学などの調整をどうするか、真剣に話し合う。陽湖は第二条に取りかかった。

「第二条、このあたりで天皇を入れて……天皇は日本国の象徴であり単なる王家である。……うくん……でも、あとあと、出てくる身分制度の廃止や平等に反するんじゃない……思いつきり門地というか血筋だし……まあ、でも、イギリス王家もあるから、いいのかな。もつとシンプルに。第二条、日本国は天皇家を王家とし、皇位は世襲する。世襲制度は国会の議決した皇室典範で定める。……国の統治は王制じゃないけど、いいのかな……あ、だから次から権限を縛るんだ……国事行為……内閣の助言と承認……でも、今回みたいに内閣とか議会在が一気に無くなったときは……今、シスター鮎美が総理大臣なのは天皇の任命だし、それを有効にしておかないと……平時は内閣と議会の助言で、非常時は天皇の聖断で……あ、でも聖なるものは神のみだから、王断……皇断とか……じゃあ、第三条、天皇の国事に関するすべての行為には内閣の助言と承認を必要とし、内閣がその責任を負う。ただし、非常時は天皇の判断によって国事行為を行うことができる」

焼き直しとはいえ、一から憲法を作るのは大変な作業だったし、尿意と戦っているのも思考も幼稚だった。額と腋から汗を流しつつ身震いしながら8条まで焼き直した。

「第九条、戦争の放棄……うくん……武力による威嚇、行使は、解決の手段には……ここにこそ、キリストの精神を入れて隣人愛と、剣をとるものは剣によって滅びる……けど、非キリスト教国が攻めてきたら……陸海空軍を保持しないのも……キリスト教国でも、軍隊はあるし……どう考えても現実的じゃない……ううん、ここで無抵抗不服従

を……違う、これはガンジーだからダメ……もつとジャンヌダルク的
な……でも彼女も英仏戦争に神の名を使っただけなんじゃ……神が
片方の国に肩入れするなんて考え方、異端審問されて当然……うう、
漏れそう……あんまり考えてると完成する前に、おもらししちゃう……
ハア……ハア……ややボカした感じに、第九条、日本国民はキリスト教精
神に基づき国際平和を誠実に希求し、隣人愛を信条として国際紛争を
解決する。第二項、前項の精神に反しない範囲で自衛のための手段を
もつ。……こんなもんかな……」

「……………」

シヨンベン垂れそうなくせに、一応は現実的な思考で9条は実質放
棄なんやね、日本共産党よりはマシか、まあキリスト教国は戦争しま
くるしなあ、と鮎美は閣議の合間に陽湖が書いているものをみて思っ
た。

「第十四条、これは簡単。すべて国民は、神のもとに平等であつて、人
種、信条、性別、社会的身分または門地により、政治的経済的社会的
関係において差別されない。……受洗してる場合と、未受洗でも平
等でいいのかな……あ、政治経済社会だからいいのか、宗教的には
違つても。でも神のもとに……やっぱり法のもとの方がいいかも
……………」

考え込み、変えないことにした。

「十九条まではいいとして、やっぱり二十条は変えないと……いかな
る宗教団体も、国から特権を受け、または政治上の権力を行使しては
ならない、つていうか、天皇が象徴で国事行為をする時点で、国から
神道が特権を受けてるとしか思えないんだけど……この憲法、もとも
と穴だらけかも。……あと、何人も、宗教上の行為、祝典、儀式また
は行事に参加することを強制されない、つて……もし、親が信仰し
てる宗教の礼拝に行くのが嫌だったら……それつて強制じゃないの
かな……親権……親権でも親権濫用なんじゃ……。第三項の宗教
教育、その他いかなる宗教的活動もしてはならない、つて、じゃあ、君
が代も賛美歌みたいなものだから、ダメすぎるかも……国歌を変えな
いと……もう、国歌なんて世界中の国がやめて主の祈りにすれば丸く

おさまるかも……うくん……難問……というか、天皇制そのものが邪魔すぎ」

「……………」

こいつ、やっぱ非国民やなあ、GHQみたいな思考しておつて、けど、親に強制されて礼拝いくのは嫌やったやろな、毎週日曜日を奪われるって鬼やん、と鮎美は親による専制と隷従、圧迫と偏狭を受けてきた陽湖を可哀想に感じると同時に逮捕して拘禁しておきたくなる。

「ハア…ハア…漏れちゃう……決めよう。第二十条、信教の自由は、何人にも保障される。ただし、国教はキリスト教とする。第二項、何人も宗教上の行為、祝典、儀式または行事もしくは礼拝に参加することを強制されず、親は子に宗教を押しつけてはならない。第三項、国はキリスト教を教育する」

「っ……」

矛盾だらげやん!! と叫びそうになった鮎美に文部科学大臣が問うてくる。

「総理は受験生という年頃でもあったわけで、どう思われますか？

この問題」

「あ、はい」

閣議も聴いていたので答える。

「これだけの事態ですから、大学が無くなった生徒と、学生が亡くなってしまった大学のマッチングは、やっぱり偏差値を基準にランク分けして決めることにして、本人と学校の面接も行う感じにしていくのがよいと思います。その作業に2ヶ月は要するでしょうし、いつそ四月から新学期とせず、夏休みを返上というか、前借りして4月5月が夏休みの代休、6月から入学式くらいにスケジュールを組めば、そこそこマッチングの時間はあると思います。あとは定員に少し今回だけ余裕をもたせてあげるとか」

「なるほど、6月から新学期と……大胆ですが、それがいい。時間的余裕が生まれる。どうせ、だいたい大学にエアコンは設置されていますから夏休みが無くても問題ない」

「あ、けど、エネルギーは節約してほしいんで……いつそ、この機会に大学を減らしたら、あかんでしょうか？」

「大学削減ですか」

「中学生の頃から、思ってたんですけど、勉強せん子は、ぜんぜん勉強せんし、そういう子が野球だけで大学まで行くのも無駄な気がするし。スポーツに打ち込むのは、まだマシな方で何もせん子も、とりあえず大学っての見かけるし、教育予算の効率を考えたら中学校までは全員、高校からは8割、大学は3割が行けば、ええ方ちやいます？」

「まあ……そうなんですけど、正直、大学の教授ポストが天下り先といえど、天下り先ですから」

「そこを今回、さりげなく切り込んでいったら、どうでしょう？ 偏差値が高いか、もしくは専門教育で実績がある大学だけ、震災での補助金を出して。いまいちな大学は予算が無いと言って断る感じに。あと、スポーツだけの大学は、いつそプロスポーツ団体に施設ごと売却するとか」

「予算的には、よい案ですが、教育の機会を国民から奪うことになりませんか？」

「だいたいの講義は聴いたら理解できますやん。放送大学の講義をユーチューブに流したら、無料で学びたい人は学べるし。それで伸びた人は本気で大学に入り直すのもいい、みたいな感じに」

鮎美が議論しているうちに、陽湖は作文を続けていた。

「第二十三条、学問の自由は保障する。ただし、聖書を否定してはならない。ハア……」

「……」

おいおい、天体観測もできんようになるで、イルカに残ってる骨盤の残滓とか、どう説明するねん、と鮎美は突っ込みたかったけれど面倒なので放っておく。

「第二十四条、結婚は神の名のもとに男女の誓いによって成立し、夫婦が同等の権利を有することを基本として、相互の協力により維持されなければならない。第二項、配偶者の選択、財産権、相続、住居の選定、婚姻、家族に関するその他の事項は男女の平等と個人の尊厳に配

慮して法律において定める。ただし、離婚は神への誓いを反故にする悪行である。ハア：ハア：うう：」

「……………」

で、離婚はできるの？ できんの？ そんな憲法にしたら、またゴチャゴチャ最高裁まで争うケースが、いっぱいでてくるで、現状でも離婚でダラダラ裁判するし、もう裁判所で争ってる時点で終わってるカップルやん、離婚は片方の意思表示のみで十分に成立して養育費とかは双方の所得から換算する年金制度みたいなんを設計して、源泉徴収といっしょに取り上げて配分したらええやん、と鮎美は呆れつつ瞬時に新制度を思いつき、陽湖が条文で男女と限定していることは予想通りだったので気にもしない。陽湖は尿意に震える目で35条までを読み飛ばし、次条を考える。

「36条……………うくく……………漏れるうう……………公務員による拷問及び残虐な刑罰……………ハア：ハア……………自白を強いる拷問はダメだけ……………刑罰は絞首刑だつて残虐でないとはいえないし……………カトリックも、よく火あぶりやつてた……………ハア：ハア……………強姦殺人犯で反省しない人は、もう、どうしようもないし……………隣人愛といつても刑罰無しつてわけには……………ハア……………ハア……………第三十六条、公務員による拷問は絶対に禁じる。第二項、法律の定める手続きにより刑罰はかされる」

「……………」
法律に丸投げしたけど、一応は雄琴先生の考えを受けてくれるんやね、と鮎美は共感を覚えつつ、閣議を進める。石永が核武装を検討していた。

「今のうち、というか、もはや手遅れの感もあるが、日本も核ミサイルをもつべきだろう。これ以上の核攻撃を受けないための報復手段として」

もともと石永の持論だったので強い語調で言った。鈴木が問う。

「今すぐですか？」

「ええ、日本のロケット技術は十分にありました。あとは核弾頭、これも健在な原発から核物質を取り出せば可能なはずです」

「お気持ちにはわかりませんが、ロケット技術者も設備も津波で喪われている可能性もありますし、物理的に可能性があつたとしても原発から取り出すのはIAEAが黙っていないでしょう」

「IAEAも核攻撃を受けた直後の日本がすることであれば、文句も言えないでしょうし、文句を言うなら、どうにかしてくれ、と反論しようもあります」

石永が執着するので久野も諫める。

「その意見も正しいですが、現状で太平洋側の原発は、みな放射能漏れなど事故を起こしています。国民は核アレルギーどころの騒ぎではない。そこにきて核武装というのは正気のようにも狂気のようにも見えるでしょう。おっしゃることはわかりますよ、核には核をと武装する、しかも撃たれた直後です。福岡での死者は広島長崎よりビル群が発達していたこともあつて2万を超えないかもしれない。けれど、2万人の命が失われた。こうなつたら、こっちも核を、というのは正気とも言えます。とはいえ現実問題、経済の立て直しや復興に、これからも国際社会からの理解と協力をえたい。さらに、では核武装するとして、どこに発射基地をおくのか、種子島の宇宙センターも津波で被害が出ています。あそこに核物質を搬入するのも大変だが、ロケットを本州などにもつてくるのも大変だ。そして、どこにもつてこようと、撃たれる前に撃つというのは、どちらも同じだから、こちらが準備しているうちに次のターゲットになるのは、そこです。さらには鈴木先生もおっしゃられたが技術者も不足するでしょう。未熟な者にロケットを扱わせるのは通常の人工衛星を積んでいても怖いのに、核物質を積むとなると、そのリスクは大きすぎる」

「……………くっ……………しかし、このまま……………」

石永が悔しそうに眉間を顰めるので久野がなだめる。

「核武装という選択肢よりも、まだ残っている全戦力をもつて韓国を応援し、北朝鮮の発射基地を叩く方が現実的ですし、国際社会の理解もえられるでしょう。完全占領ではなく発射基地の破壊にとどめるならば、中口の反発も強くはないかもしれない。けれど、我々が半島のことに手を出さなければ金正陽は、もう撃つてこないかもしれない」

い」

「そんなものは今だけですよ。かりに朝鮮半島すべてを支配すれば、次に攻め込む、もしくは脅すのは日本しかない」

「……………韓国軍は、どうですか？ 畑母神先生」

久野の問いに畑母神は司令室からのモニター越しに答える。

「持ち直したのか、それとも単に北朝鮮軍が疲れたのか、やや進軍の速度は落ちている。くわえて韓国軍の一部は集結して反撃の機会をうかがっているように見えるところもある。これに期待したいが逆に、これが失敗に終われば、もう終わりかもしれないな」

「……………」

閣僚たちが静かになると、陽湖の声が響いてしまう。

「……………うきゆく……………第五十四条に第四項を加えて緊急集会どころか、国会議員が一人しか生き残ってない状況とか、全員が死んじやった状況を想定しないと……………また、今回みたいに一人が独裁しちゃう……………」

その独裁者を30億円で昨夜は言いなりにした少女が今はキリスト教の国教化というエサにつられて作文しているけれど、どの閣僚もキリスト教が本気で国教になるなどと思っていないので黙っている。まだ鮎美との付き合いは短い者が多いけれど、金沢と富山、福井で霞ヶ関を再建するにあたって地価の高騰をさせないよう富山と福井の人間に競わせた性格の持ち主が素直に口約束を守るはずがなく、借りてしまえば手のひらを返すつもりでいることは感じている。むしろ問題は借りた後、陽湖がどんな目に遭うかだった。まさか本当に死刑にしたりはしないはずという期待と、昨夜の屈辱を考えると餓死くらいさせるかもしれないという不安が交錯している。

「…ハア…全員が死んじやった場合は……………全国の知事に出てきてもらって議会をつくるとか、副知事に県のことは任せて……………それで、だいたい50人……………二院制を保つなら、県議の議長にも出てきてもらうシステムにすれば、そこそこ民主的に……………少なくとも今回みたいな独裁にならない……………もし、一人だけ生き残ってる場合は、その人の権限を制限できるように知事と同等って扱いにすれば…ハア…うきゆく」

…これ、第四項だけに、まとめるのは無理で、緊急臨時国会つて章でもつくった方がいい…あああ…漏れるうう…」

「「「……………」」」

おもしろし寸前で呻いている少女でも思いつくようなことを、どうして今まで放置していたのだろうと、閣僚たちは少し悲しく思った。

「ハア…とりあえず第四項で、災害等により両議院の議員が大きく欠け、その三分の一以下となったときで、ただちに選挙を行いえないときは衆議院については都道府県知事が議員の資格を得、参議院については県議会議員が議員の資格を得る。ただし、この資格は2年以内とし可能な限り早急に選挙を実施しなければならない。ハアつ…ハアつ…」

「「「……………」」」

けつこう、まともなこと決めたな、と閣僚たちは思った。今の閣僚たちは完全に鮎美と石永が好きに選んだ者たちなので地域にも政治信条にも偏りがあり、国民の総意とは言いにくい部分もある。それに対して県知事と県議会議員であれば経験においても、また票をえて政治家となっている点からも、妥当性があつた。鮎美が挙手して閣僚たちに言う。

「敦賀の原子力発電所も震災後、順次停止してはりますけど、うちは燃料節約の観点からは、できるだけ原発を動かした方がええと思うんですが、あかんでしょうか？」

「大胆だな」

「核武装するよりは、大胆ちやいますよ」

「まあ、そうだが…どうだろう、みんなは？」

石永が問うと閣僚たちは賛否両論に別れた。危険性と国民感情、想定外の余震、二度目の核攻撃の目標になる可能性をあげて反対する者と、燃料節約という鮎美の観点に同調する者に別れて半々となり、慎重論で落ち着いた頃、陽湖は司法の章に辿り着いていた。

「ハア…ハアつ…第七十六条、司法権は最高裁判所および法律の定めるところにより設置する下級裁判所に属する。ただし、信仰の問題については別に定める。第二項、前項但書の問題について審判を要す

るときは特別裁判所を設置し、裁判官は聖職者から選任する。第三項、すべて裁判官は、その良心と神に従い、この憲法と法律および聖書にのみ拘束され、人の定めた法が聖書に反するときは、これを無効とする」

「二」「……………」

そんな国に住みたくないな、と石永たちは思った。食料価格は急上昇していないものの、上昇傾向が続き、さらに出し惜しみから店頭で品薄状態が続いていることと、いずれ配給制を導入するかについて話し合いながら昼食をとる。陽湖にも食事トレーが配られたけれど、食べたり飲んだりすると漏らしそうだったし、周りが食事中に失禁するのは遠慮したいので、まだまだ作文を頑張る。

「ハア、第八十九条、公金その他の公の財産は、キリスト教の組織もしくは団体の使用、便益もしくは維持のために支出される他は、宗教上の組織もしくは団体または公の支配に属しない慈善、教育もしくは博愛の事業に対し、これを支出し、または利用させてはならない………」

鮎美たちが食べ終わった頃、とうとう陽湖が改正案を完成させる。

「ハアつ…ハアつ…第九十六条……………二項……………うきゆうう……………」

憲法改正について前項の承認を経たときは、天皇は神の名で、この憲法と一体をなすものとして、直ちに公布するうう………」

「……………」

どの神やねん、と思いつつ鮎美は食事トレーを静江に渡した。

「ハアつ…ハアつ…シスター鮎美……………おわり……………終わりました…うう……………た、立ったら漏れちゃう……………取りに来てくださいいい……………」

陽湖が両手でプルプルと改正案を記した資料の裏を見せている。

「どれどれ」

食後の休憩をかねて、だいたい聴こえていたけれど、眺めようと鮎美が紙片を受け取ったとき、陽湖に限界が来た。

「うきゆうんつ……………」

甲高い鼻声のような切ない声と尿を漏らして陽湖は恍惚としている。

「間に合ったあ……ハアあんう……」

まるでテスト用紙への回答は間に合ったけれど、結局は教室でおもらしした女子高生のような姿だった。

「ハアっ……漏らしたけど、間に合ってますよね。ハア……どうですか、その改正案は？」

達成感と変態的趣味による快感と尿に浸っている陽湖に問われ、鮎美は条文に目を通していきながら思った。

「……………」

陽湖ちゃんって与えられた課題をこなすのは鷹姫といっしょで頑張るよね、生徒会長になったら教師の期待に応えて勤めを果たすし、信徒の家庭に生まれたら一生懸命に宗教勧誘もするし、けど自分がトップになったら急に迷走したり暴走するんよなあ、自分だけがべてを決められる立場って確かにヤバいわ、うちも気をつけよ、陽湖ちゃん何度でも反面教師になってくれるし、最低でも殺すのはやめとこ、と鮎美は陽湖に覚えていた殺意を抑えた。

「おおきに。ほな、次は教育基本法の改正案を考えてみて。その前にシャワー浴びて着替えてきて。臭いし」

「はい」

「お湯は、あんまりたくさん使わんといてな。燃料もつたないし」

このまま銀行での手続きが終わるまで陽湖には日本法とキリスト教の兼ね合いを考えさせて時間を過ぎさせ、平行して閣議も進めるつもりだったけれど、ずっと司令室からのモニター越しで閣議参加していた畑母神が地下室においてきて困った顔で言ってくる。

「困ったことになった。申し訳ないが対応を決めてほしい」

「はい、どんなことですか？」

「韓国からの難民船を一隻、受け入れてしまった艦長がいる」

「……受け入れ………追り返す命令のほうですよね？」

「全艦に徹底して命令してあるにも関わらず、独断で受け入れたのだっ！」

畑母神が吐き捨てるように言う。

「しかも、わざわざ小松に近い金沢港に入港している上、総理へ直接報告したいなどと言っておる。呼びつけたから、まもなく来るはずだ」

「わかりました」

「……第一条、教育は人格と信仰の完成をめざし、平和的な国家および社会の形成者として、聖書の真理と正義を愛し、神を尊び、勤労と責任を重んじ、キリスト教精神に充ちた心身ともに健康な国民の育成を期して行わなければならない」

「……………」

こいつも排他的経済水域の外に追い出したいな、と鮎美も畑母神も思ったけれど、今は30億円のために我慢する。陽湖はシャワー浴びて介式に貸して売春させた制服のクリーニングが終わっていたので制服姿となって机に向かっていている。今は失禁した後なので息を荒げていないけれど、紅茶を飲みながら法案を書いているので、そのうち再び股間を濡らすつもりなのだと感じられた。こんな変態が閣議の場にいるのは残念だったけれど、あと少しの我慢だと思い、今は難民船を受け入れた艦長が現れるのを待った。すぐに一人の女性艦長が地下室に来て鮎美へ向かい敬礼してくる。

「出頭しました、世々部迪子です！」

「…………あの朝食会に来ておられましたよね？」

在日米軍が撤退していることを広く幹部自衛官たちに伝えるための朝食会で鮎美は母の死を知ったために泣いてばかりいたけれど、唯一の女性艦長のことは脳裏に残っていた。正直、他の男性自衛官の顔は覚えていないけれど、迪子のことだけは覚えているというくらいだった。

「はい、覚えていただき光栄です！」

「それで、どうして難民船を受け入れたんですか？」

「追い返せと厳命したはずだ」

鮎美が問い、畑母神は怒っている。迪子は防衛大臣の怒りを恐れず鮎美へ言う。

「受け入れた船には赤ん坊と母親が7組、核ミサイルで被爆した負傷者が3名、合計219名の戦火から逃れてきた人々が乗っておりましてから、人道上の観点から受け入れました」

「……………二百二十人も……………」

鮎美が額に右手をやって悩む。一日3食で660食やん、かりに半年の滞在でも12万食……………ふざけんな……………他にも宿泊場所……………光熱費……………エネルギー……………、と必要となるものを考えて鮎美が肩を震わせると、迪子は勘違いした。

「やはり難民の追い返しは畑母神大臣の意向で、芹沢総理の真意ではないのですね？」

「……………は？」

「赤ちゃん手当てや弱者救済を訴える芹沢総理の意志とは思えず、以前より朝鮮人への差別意識を著書にまであらわしていた畑母神大臣の独断と感じました。防衛に関しては事後報告と追認が多いとおっしゃられていたので懸念していましたが、難民については防衛にあたらぬと考え、芹沢総理の判断をいただきたく願います」

「……………」

鮎美と畑母神が顔を見合わせて勘違いされていることに気づき、畑母神が迪子へ何か言おうとしたけれど、鮎美は手の仕草でそれを制して言うておく。

「勘違いせんといってください。難民追い返しは閣議での全会一致事項です」

「……………総理まで？」

「はい！うちも追い返しに賛成です!!」

怒鳴ってはいけないと思っていたのに怒鳴ってしまう。

「徹底して追い返せと言ったはずです!!」

「……………ですが、海上の現場は風もでて波も高くなっており、明らかに定員オーバーどころか今にも転覆沈没しそうな状態でしたから」

「定員オーバーで沈没すんにやったら、そいつらの自己責任やん!!」

受け入れた瞬間に、こっちに保護責任が生じるんよ?! ふざけんな!!」

鮎美は迪子の襟首をつかむと揺すった。女性同士なので体格に差はなく、激しく揺すられた迪子の制帽が落ちる。美しく結い上げている髪が頭わになった。

「命令されたことだけしとけや!! ボケが!!」

「……………」

抱いていた印象と、あまりに鮎美が違うので迪子は絶句している。

「どんだけ迷惑なこと自分がしたか、わかっとなのか?! アホンだら!!」

「「「……………」」」」

大阪の女の子って怒ると可愛らしさの欠片もないな、まあ怒りは同感なんだが、と石永たちは思った。

「二隻が受け入れられたらなア!! 二隻三隻と期待してよってきよるやんけ!! それ全部受け入れんのか?! 追い返し作業が余計に大変になるやんけ!!」

「……………あなたまで人種で人を差別されるのですか……………見損ないました……………」

迪子が悲しそうに言うと、鮎美の怒りは倍加した。

「うるさいわ!! 小賢しいことぬかすな!!! このっ……………」

鮎美は殴りつけようと拳を握ったけれど、それが違法行為であるという認識は残っているので拳を振り上げたまま、震わせた。不快だった。難民船を受け入れたと聴いたときから脇腹のあたりには不快感がある。今朝、中国空軍との戦闘で戦闘機が撃墜されたと聴いたときは右手の人指し指から腕にかけてピリリとした痛みが走ったし、今は難民が入ってきたと思うと、脇腹に泥を塗られたような気持ち悪さがある。まるで日本という国家を自分の身体のように感じる。その身体が犯されたようで迪子に殺意さえ覚えた。それでも冷静になろうと思ひ、襟首をつかんでいた手を離れた。

「…ハア……………ハア……………くっ……………畑母神はん! こいつにかせる一番重い処分はっ?!」

「それは……………実は難民追い返しという命令自体が国際法上は問題が

あるので命令不服従を問うのは難しい面もあって……適法な懲戒処分というのが、なかなか……いや自衛隊法が無効で軍隊としての処分なら検討できるかもしれないが、軍法も定まっていないうし、軍法会議の規定も、まだないわけで……背広組の専門家に相談してみないと……。むしろ、それだけに今回の命令違反は、痛いわけで……」

詳しいことがわからない分野について問われたので畑母神は珍しく歯切れが悪くなる。対して鮎美は瞬時に女性らしい意地悪な処分を思いついた。

「ほな、こいつに竹島の奪還を命令しといて」

「この状況でか……」

石永が言い、鮎美は畳みかける。

「尖閣諸島でもええし。いっそ、択捉でもええわ。ああ、そやね、択捉送りにしよ。クワもって屯田兵として行ってこい」

「択捉をシベリアみたいに使いなよ。独裁者っぽいぞ」

「ちっ……」

言われた鮎美は舌打ちした。あえて石永が気安く指摘してくれたので、自分でも、どこまで本気だったのか、ほぼ死刑に近い命令をくだそうとしたことを反省する。迪子が制帽を拾って言う。

「……総理の実体は、こんなもの……結局、子供の遊びみたいに……」

「ガキなんか、あんたや」

再び鮎美は迪子の襟首をつかんで大阪のヤクザのように顔を近づけて言う。いっそキスして指を挿入し閣僚たちの前で陵辱してやるかときえ思うほど怒っている。

「220人へ一日三食を出したら660食や。単純計算一年で24万食。もし、あんたのせいで難民が増えて一万人になってみい、どんだけのことになると思う？ 一日で3万食、一年で1095万食や。あんたは、どう責任とるん?!」

「……………」

「どうせ、そんなこと考えんと、見下ろした難民が可哀想やったから思わず助けただけやろ。うちが女子高生やから直接報告して、うまいこ

と言うたら命令違反も許されると思ったんやろ！」

「……食料に余裕があると発表されたはず……」

「ギリギリな!! こんだけの大地震の後で凶作にならん保障はない!! さらなる気象変動があつて食料が獲れんこともありえる!! そんなとき、どうする?!」

「……………」

迪子が視線を落とした。

「受け入れてしもたら保護せなしゃーないんよ!! くそっ! ボケが!」

「……………ですが……………人道的には……………。私は、あの場面で助けを求める人々を追い返すことなどできなかつた……………自分のしたことは間違っていないと考えます」

「……………ちっ……………あんたは、杉原千畝つて知ってる?」

「はい、尊敬しています」

「くっ……………あのボケの悪影響が、こんなところにも……………」

鮎美はイスラエルで聴いた日本のかつての外務官僚について翌日の歓迎会でも話題になると知らないでは恥ずかしいのでネットで調べて知識をえ、今では杉原に嫌悪感をもっていた。迪子は落としていた視線を鮎美に向けた。

「彼は本省からの命令に背いても、正しいことをしたのです」

「へえ」

「結果として彼は6000人のユダヤ人の命を救った。あの狂気の戦争の中で」

「その6000人は1年2ヶ月ほど、日本に滞在したんよ。あの戦争中に! 杉原が書いたんは通過ビザや! 日本を通過してもよいってな!! けど、通過した後の行き先なんか決まっていなかったから、敦賀や神戸に滞在することになる!! 滞在したら、飯も喰う! 一文無しかつておったんや! 神戸市の担当者が、どれだけ困ったと思う?!」

「そんなことは人命の前に問題ではないはずですよ!」

「ああ、そうか! ほな、そう言えばええ! 戦後、どれだけの日本人

が餓死したと思う?! 運悪く凶作も重なって!! 栄養失調になった!
! 餓死数に含まれんでも栄養失調になると脳出血も増える!! 6
000人が14ヶ月滞在したら765万食や!! それだけあったら、
どれだけの日本人が助かったか! あんたは妹が餓死した兄貴に言
えるの?! 子供に食べさせるために自分は食べずにいた母親が脳出
血で亡くなった人に言えるの?! それでも、杉原は立派な人よ、と!!
言うてこいや!! まだ爺ちゃん婆ちゃんの世代で生きてはるわ!!
うちの来年の食事がヤバくなるかもしれないけど、私は難民を受け
入れましたって!! 今年と来年が二年続けて凶作で日本人の赤ちや
んがバタバタ死んでも、あんたは堂々としてるんか?!

「……………そこまで考えて……………」
「それが政治や! 食料の安定供給は政治の根幹! 人権意識が無
かった時代でも食料不足は打ち壊しやら、米騒動になってる! あん
たも将校なら、そんなくらい考えい! 杉原はユダヤ人には英雄でも!
日本人には虐殺者や! 目に見えん隠れた虐殺者の非国民なんや
! せやから外務省をクビになつたし、ずっと冷遇したんや! 当然
の対応や!! 誰かって助けを求める人がいたら、気前よう助けたいわ
! けど、それは自分の財布と弁当でやることや! 国の財布と他人
の弁当でやることちゃう! 審査もなしに通過ビザ書きまくりおつ
て! あいつが日本に、どれだけ迷惑を……………あいつの借り……………そや、
イスラエルに借り返してもらお。台湾も返してくれたし」

鮎美は別のことを思いついたので、閃いた内容を鷹姫に伝えてイス
ラエルに連絡をとってもらおう。そして難民と迪子への処遇を考える。
「……………どうしたもんか……………畑母神先生、艦長がおらんでも、それなりに
追い返し作業には戻れるの? 船は一隻でも抜けん方がええんよね
?」

「うむ。副長がいるので、やや交代での24時間体制がたらくなるが、
副長にも副たる自覚があるはずだ」

「ほな、船には作業に戻ってもらおうとして……………けど、できたら受け入れ
た難民船も引っ張っていつてほしいわ」

「そうして欲しいが、この馬鹿者が難民たちを上陸させてしまった。銃口でも突きつけねば、もう船には戻るまい。戻すにしても定員オーバーで途中沈没すれば、その責任は日本国にくる」

「くっ……ホンマに余計なことしくさって……なんで上陸させたん?!」

「……赤ん坊を抱いて立ったまま乗っている人もいたのです。みな立っていて座るスペースもなかった……総理も、あの人たちを見れば、ご理解くださるはずです」

「見たら助けとうなるに決まってるやん。せやから見て見ぬフリするんよ。自覚してないだけで、ずつと、こちらはそうして先進国であり続けたんよ。アフリカや中東で何人死のうが気にせんかったようにな。見えるもんだけ見んと、来年の日本を考えてみい！」

「……………」

迪子に反論が無くなった。鮎美は畑母神へ問う。

「畑母神先生、マスコミ対策は？」

「このこと自体を機密指定して報道規制している。ただ、金沢港は見晴らしもいい。突堤に難民を集め、とりあえずの水と食料を与えつつ海軍と県警が包囲して見張っているが、遠くから望遠レンズで撮影することは可能かもしれない」

「石永先生、マスコミ対策をお願いします。しばらくは存在自体を秘密に。報道した場合は罰則もありで」

「わかった」

「あと、難民といっても現代のことやしスマホオを持つてる人もいるやろ。うちも台湾で似たような境遇になったことあるけど。やつかいやな。情報端末を全部取り上げられる？」

「身体検査をすれば可能だが、反発も予想されたので今は艦から妨害電波を出している。カメラ機能で自分たちの状況を撮影できても、それを発信することはできないはずだ」

「妨害電波……そんなんもあるんや……ほな、引き続き情報を漏らさんようにして。端末と携帯電話会社の相性によるけど、日本のキャリアアでも発信できるかもしれんし」

「了解した」

「あとは……………どう追いつ返すか……………」

「シスター鮎美」

難しい考え事をしているのに陽湖が声をかけてきた。

「なによ?!」

「韓国からの難民を受け入れてください」

「……………あなたは教育基本法でも焼き直しといて!」

「もう終わりました」

憲法ほど分量はなく、もう条文にキリスト教精神を突っ込むことに慣れてきた陽湖は作業を終えていた。

「ほな、次! 学校教育法!」

「その前に韓国からの難民を受け入れるようにしてください」

「なんでよ?! 無理やし!」

「韓国にはキリスト教徒が多いのです。見過ごせません」

「くっ……………またキリストか……………」

「追いつ返すのもやめてください」

「お断りよ!」

「30億円の貸し付けをやめますよ」

「やめてみいや! 国教化もペアやし! 日本の避難所でも食料の配給が止まって、難民みたい困るんよ!」

「……………では、こんな手段は本来避けたいのですが……………」

陽湖はスマートフォンを見せて言う。

「あなたの、この姿をネット上にバラまきますよ」

「っ……………」

陽湖のスマートフォンには昨夜、鮎美が漏らした小水の中で土下座しながら泣いて謝る姿が残っていた。撮るフリではなく、しっかりと撮られている。

「……………うちは撮るフリしか、せんかったのに……………」

「私も、こんな脅し方はしたくありません。ですが、人の命がかかっているのです。難民を受け入れてください。韓国には私たちの教団に所属している人も多いのです」

「……………どうせ、死んだら楽園に行くんやん。沈没して死ぬ方が幸せなんぢやう?」

「まだ、信仰が深まっていない人や、受洗前の人もいます」

「難民が何万人に膨れあがるか、わからんよ?! 何百万かもしれん!」

「では、せめてキリスト教徒だけでも受け入れてください」

「どうやってキリスト教徒を見分けるんよ?!」

「……。主の祈りを暗唱していれば、キリスト教徒とみなしてください」

「んなもん、うちでも覚えてるわ!! あれだけの文章を覚えたら入国させてくれるんやったら、その情報をえて必死に覚えよるに決まってるやん!! だいたい、あんた韓国語での主の祈り、聴いてわかるの?!」

「……………では、聖書を踏めと言つて踏まなかつた者を助けるように…」

「逆踏み絵なんか、みんな踏まへんに決まってるやん! そもそも、そんな仕分け作業を海上でするん?! 一人一人、神を信じますか、と訊くだけでも大変やわ!!」

「……………」

「だいたいキリスト教徒だけ助かればいいって考え方、めっちゃ間違ってるやん! 隣人愛は、どこに行ったん?!」

「つ……。おっしやる通りです。私が間違っていました。やはり難民全員を受け入れてください」

「そんな無理なんよ! 日本かってギリギリなんよ! わかつて!」

「いいえ、あなたは余裕を見えています」

「政治家として当然やん!」

「さらに予定外に台湾からの支援もありました。受け入れられるはずです」

「くつ……。難民を受け入れたら国内は食料が配給制になるかもしれんよ」

「分かち合って生きていけるなら、素晴らしいことです」

「……………」

鮎美は両手を握って震わせる。陽湖の言っていることは人道的には正しい気もするけれど、正直なところ気に入らない。それがキリスト教精神に根ざしているかもしれないことも気に入らない理由だったし、そもそも国民の総意として自分たちが配給制になってまで他国民を受け入れると考えるはずがないと直感している。二人のやり取りを見ていた迪子は同じ制服を着ていて顔立ちが似ているので、いつそ陽湖が総理大臣だったらよかったのに、と思っただけれど、石永たちは陽湖の悪趣味を知っているので聖人のように難民を受け入れると言いつつ出されても冷めた目で見ている。しかも、本音ではキリスト教徒優先という精神も見え隠れしている。

「さあ、シスター鮎美、難民を受け入れると指示を出してください。神の意志にも人道にもかかいません」

「……………」

泣けてきた。涙が溢れてきて、鮎美は乱暴に手の甲で拭いた。人間を助けたいとは人間として思う、けれど、一国の代表として現状で難民を受け入れるのは下策としか思えない。震災から今日まで大きな暴動も起こらず、国民は耐えてくれている。そこに異質で言語の違う集団が大量に入ってきたら、きつとお互いに争い、殺し合いにも発展する。げんにアメリカが分裂しているのは白人、黒人、インディアン、黄色人種、メキシコ人と人種の違いが大きな原因でもある。

「シスター鮎美、早くしてください。バラまきますよ。一度、ネットに拡がれば二度と取り返しはつかない」

陽湖は自分が迫られた脅迫を鮎美へも迫る。一人の女性として死にたくなるほど嫌なのは知っている。まして鮎美は有名人すぎるので世界へ確実に拡がる。迪子は見えていて、誰が被害者なのか、わからなくなってくる。鮎美は立ったまま、より強く拳を握って震えている。

「……………」

また鮎美は涙を拭いた。感情が爆発しそうだった。ふらついたの

で、そばにいた畑母神が支えてくれる。

「芹沢総理、どうか、落ち着いて。ともかく座って考えよう」

畑母神は時間稼ぎとして鮎美を椅子へ導き、静江に目線で命じて、お茶を淹れさせる。そうしておいて陽湖にも声をかける。

「君も、まあ、座りなさい。現状を説明しよう。昨日、ここへ来たばかりで、あまり知らないだろう」

「……はい……」

ゆっくりと時間稼ぎとして、朝鮮半島の戦況や国内の食糧事情を語り、陽湖への説明も兼ねて閣僚たちにも再確認してもらい、そのうちに鮎美は気持ちが悪くなり、そして待ちに待ったメールが夏子から届いた。この場に夏子はおらず金沢市で財務大臣として動いている。その夏子からのメールを開いた。

振込終了、30億円を全額確認したよ。

あとは、お好きにどうぞ、でも、殺さないでね、マジで。

さつきまで泣いていた鮎美は笑えてきた。

「……くっ……くっ……」

まだ笑ったらかかん、もうちよいや、と鮎美は笑いを噛み殺しながら陽湖に語る。

「陽湖ちゃん、ほな、こうしよ」

「はい？」

返事をした陽湖の手首を鮎美は手刀で中学剣道元大阪代表らしい鋭さで打つ。陽湖の細い手首は折れるかと思うほど痛かったし、持っていたスマートフォンは落ちてしまう。

「痛いっ……」

「月谷陽湖を脅迫の現行犯で逮捕して」

「はっ！」

そばにいたゲイツが陽湖を取り押さえる。装備品として手錠はもっていないので、参与として地下室の隅にいた松田川の警護をしている知念に来てもらった。

「13時36分、月谷陽湖さん、逮捕っす」

「そんな、どうして?!」

「……普通に脅迫してたつすから……芹沢総理、マジで逮捕でいいんすか？ 友達なのに」

「他にも罪状があるやろし、いろいろ調べておいて。でっちあげにならない程度に、でっちあげて」

「そんな付度しろ、みたいな命令……オレ苦手つすよ」

「椅子の上にシヨンベンしたのも器物破損、うちに土下座させたんも強要罪、あと飲酒もあるし」

「飲酒は許可されたはずです！」

手錠をされた陽湖が叫んだけれど、鮎美は鼻で嗤った。

「フ♪」

「これを外してください！ でなければ30億円を貸しません！」

「もう借りました」

「では、すぐに返しなさい！」

「あんたアホやなあ……素直な性格というか……返すわけないやん」

「っ……では……」

陽湖は叩き落とされたスマートフォンを目で探した。迪子が拾って持っている。

「それを返してください」

「迪子はん、命令、それを、こっちに持って来て」

「……………」

「脅迫の共犯にしよか？」

「……………」

女性を辱めた写真が入っているスマートフォンを迪子は触って、いたく小さくそうに机の上へ置いた。

「証拠として没収♪」

「シスター鮎美！ 写真は、他にもあります！ クラウド化して保存してあります。そのパスワードは私しか知らない！」

「なるほど、拷問を受けたいと？ 現在、憲法が曖昧なんを、ご存じよね？」

「っ……………」

「あと、国庫への30億円もの寄付、まことにありがとうございます。日本国を代表してお礼申し上げます。総理大臣芹沢鮎美」

「っ?! 何を言っているのですか?! あれは貸し付け金です! 金利30%の!」

「え? そんな法外な金利、冗談やと思ひまして。心裡留保の一種ですよね」

「違います! 国の借金です! 私への!」

「寄付として受け取りました」

「っ:いいえ! あなたも借りていると言いました。もう借りました、と、さつきも!」

「え〜♪」

鮎美は政治家として言ってみたかったセリフを微笑みを漏らしながら言う。

「記憶にございません」

「っ:…う、嘘つき!! あなたは地獄に堕ちます!! 悔い改めなさい!!」

「キリスト教って、ホンマにアジアから見たら侵略の道具やね。精神を侵略してくるわ。知ってる? あの杉原千畝もキリスト教に影響されてたんよ。難民が領事館に集まってきたのを見て、頭の中に聖書の一節が浮かんだらしいわ。それで本国の命令を無視して大量のユダヤ教徒を日本に入れて大迷惑かけた。やのに、本人は自分が正義のつもり。イスラエルからは表彰されて、さぞかし気分よかったやろ。けど、日本の犠牲は知らず見えず。まさに洗脳状態やね。知念はん! こいつを閉じ込めておいて! ついでに屋城はんも共犯で!」

鮎美は知念へ陽湖と屋城を共犯として拘留しておくよう命令して、次に迪子を睨む。

「難問は、こっちやね」

「……………」

「あんたより、受け入れてしもた難民が問題やわ。まさか虐殺というわけにいかんし、帰れと言うても帰らんやろし:…はああ:…」

鮎美は座って考え込む。他の閣僚も考えるけれど、良案はない。し

ばらくして外務省と法務省の職員が金沢港にいる難民へ聴取して調べてきた情報を報告する。

「避難民は219名、うち男性が105名、女性が114名で年齢は0歳から82歳まで。一人だけ日本語が話せる女性がおりましたが、それほど流暢ではありません」

「その人の名前と年齢は？」

「ヨンソンミヨ、21歳だそうです。ちなみに身分証明書を持っていたのは難民のうち3割に留まります」

「まあ、着の身着のまま逃げたら、そうやわね……」

「あと219名には含んでおりませんが、途中の海上で2名が死亡したようです。死因は持病の薬をもっておらず心臓発作で死亡した者と、被爆による火傷で死亡したと思われる者です」

「……」

どの閣僚も気の毒に、とは思ったけれど、日本では数千万人が津波で亡くなっているのです、もう感覚が麻痺してきている。わずか2名の死者に、とくに言葉は無かった。

「石永先生、どないしょ？ 基本、追いつ返し？ しゃーないで受け入れる？」

「うん……」

「はああ……あんだ」

鮎美が、また迪子を睨む。

「あんだ、責任もって自発的に帰るよう説得してみいや」

「……」

「安っぽい人道主義を振りかざしおつて。さぞかし気分がよかつたやろね」

「……」

「他の艦は追いつ返してるのに、あんだだけが受け入れてくれたんや。神様仏様みたいに拜んでもらったやろ？」

「……」

「はああ……そんで、また、この混乱期が終わったら、あんだも歴史の教科書に載るかもね。凶作にならず日本で餓死者が出んかったら、優

しい女性艦長さんの美談として、日本と韓国の教科書に……まあ、韓国が残ってたらの話やけど。で、うちは冷酷非道な難民追い返しの女性総理として悪名が残ると………あかん、ムカついてきた」

鮎美が両手で顔をおおった。ムカついたと言ったけれど、むしろ悲しかった。

「……あくあ……もお………次から次へと、うちの仕事を増やしおつて………総理大臣として進めたいこと、いっぱいあるのに………ぐすつ……」

また泣けてきて一筋涙を零したけれど、すぐに立ち直る。

「はああ、泣いても解決せん。今、思いついたわ。あんたには難民の神様になってもらおう」

「………私が？」

「石永先生、こういう案は、どうやろ。まず、迪子はんはんに避難民一人一人と握手して回ってもらおうねん。で、あなたたちを難民として受け入れてもらうよう日本政府を説得する、と約束してもらおうねん」

「そんな期待をさせて、どうするんだ？ まさに神様仏様だろうが」

「それで、その直後に避難民の目前で防毒マスクをかぶったゲイツの人らに迪子はんを逮捕してもらおうわ。乱暴に5、6発、蹴りでも入れて。そのくらいの演技は同意してな。迪子はん」

「………はい。ですが、それで、どうするのですか？」

「当然、避難民は嘆かざるやろ。自分らを助けてくれたおかげで恩人が逮捕されたと。まあ命令違反が原因なことくらい説明せんでも察しがつくやろし」

「暴動が起こらないか？」

「そこまでアホなら、その場で射殺でええんちゃう。暴動やし。そもそも外国籍の集団が入国審査もないまま警察や軍の指示に逆らったら、どこの国でも射殺やろ」

「そうだな。警察だけでなく陸自、いや、陸軍にも立ち会ってもらえば、普通は暴動は起こさないだろう。それで？」

「それで、石永先生に悪役をさせて悪いんやけど、モニター越しに避難民へ同時通訳で、日本政府としては難民認定は難しい、帰国してもら

う方向で進める、また日本へ上陸できたことを漏洩したら女性艦長は厳罰に処する可能性がある、と言ってもらおう。ついでに日本は核ミサイルだけやなくて原発事故もあって、受け入れる余裕なんてホンマに無いから、と説明してもらおう」

「まあ、嘘ではないな、それは。そして神様仏様を人質にするのか、人質は日本人艦長だから問題が少ない。で？」

「で、次に、うちが可哀想やし赤ちゃん連れだけは、しばらく助けるけど、他の人は帰国して、とお願いしてみますわ。それで、帰国してくれたら、母子7組くらいは受け入れてあげましょ」

「うくん……まあ7組14名くらいなら……いずれ帰国するという条件で……だが、中には赤ちゃんの父親や兄弟もいるだろう。それも受け入れるのか？ それに老人も追い出すのも国際的に外聞が悪い」

「もう一段階として、やっぱり、多くの人が入国したいと主張しはるようなら、15歳から60歳までの男性は、本国へ戻って国のために戦うべきや、それが兵役もある韓国国民男子の義務やろ、と言いつつ、もし立派に戦う気なら、女子供老人は受け入れる。しかも、父親が戦いに出て子供や妻が残る場合は妻子に一時金として日本円30万円を支給する。勇敢に戦いに出るなら逮捕した女性艦長さんの処遇も甘くする。この条件を飲むか、飲まないか、避難民219名の多数決で民主的に決定してくれ、ただし14歳以下の子供の意見は母親が代弁すること、という感じに」

「……それは民主的という名を借りた専制だな。15歳から60歳までの男性は約3割、多数決をしたら結果は見えてる。しかも30万円……公選法は関係ないが、ただの買収だな。やっぱり君は男を……まあ、国を守るために戦うのは男の本分だが、その気骨がある韓国男子は今も残って戦っているだろう。逃げてきたのは、意気地がないからで、そんな彼らが素直に行くだろうか？」

「……そう言われると男性の心理は詳しくは、わからんし……」

鮎美が困ると、イスラエルとの連絡を終えていた鷹姫が挙手した。立場が首席秘書官なので閣僚たちの手前遠慮して、すぐに発言はしないので鮎美が促す。

「鷹姫、なにかある？」

「はい、四面楚歌という故事がありますが真似て、その多数決に至るまでの話し合いの間、ある程度の音量で韓国の国歌と軍歌を流しておけば、どうでしょうか？　くわえて用意しているワンコさんが在日韓国人で義勇軍を組織するという演説と、その演説につける歌も」

「ええね、それ」

「なるほど愛国心を刺激するわけか」

「ほな、あと乗ってきはった難民船に金沢市内の韓国料理店へ発注して美味しそうな料理と韓国産のお酒も載せておこ。もちろん帰国できただけの燃料も。で、排他的経済水域までは引っ張って行く」

「鬼だな……エサで釣るのか……まさに、男を犬だと思ってるなあ……乗せられた男には過酷な運命が待ってるなあ……まあ、国民の義務といえば義務だが」

「うちらが債権者代位権みたいに行使する感じに誘導するだけよ」

「兵役の債権者代位権行使か……どう言おうが男は不遇だなあ」

「残つてもらう女の子にも、ちゃんと役目を与えるよ」

「どうする気だ？」

「若くて可愛い子に、従軍慰安婦になつてもらお。ヨンソンミヨちゃんの写真も、けっこう可愛かったし」

「……」

そう言えば、この人は同性愛者だった、と閣僚たちは思った。静江が一堂を代表して問う。

「それが、とんでもない国際問題になることは、わかりますよね？」

「冗談やって、冗談。ただ、そんな扱いを受けるのかも、って感じに徴集だけはしよ。その映像は、こっちでも盗撮するけど、どうせ情報端末の一つや二つは持つてるから自分らでも自衛のために色々撮りはるやる。で、それらの映像を意図的に漏洩する。すると、これから日本へ逃げてこようとする難民は、やっぱり日本は危ない、ろくな目に遭わん、となって追い返し作業も減るかもしれん。というわけよ。で、それが終わったら、しゃーないし、7割の女子供老人は受け入れよ。指紋頭髪顔写真を登録して、どこか一カ所で過ごしてもらお、安

全に」

「およそ150人か……まあ、一人も難民を受け入れなかったと評されるよりはいいかもな。……あとあと、犯罪など、されないといいが……」

「だいたいの犯罪は男がやりますやん。その男は追い返すから、それほど問題にならないと思いますよ」

「……………男に厳しいなあ……………」

石永がぼやきつつも鮎美の案で動くとした。迪子が鮎美へ謝る。

「ご迷惑をおかけしました。すみません」

「うん……………まあ……………うちも目の前で難民を見たら、迪子はんと同じやったかもしれないね……………けど、うちは日本の利益を代表するもんやから、冷たいけど、これが限界なんよ」

「……………すみません……………」

頭をさげた迪子は鮎美たちと装甲車に乗り、金沢港へ向かった。到着すると予定通りに避難民と握手をして、受け入れてもらえるよう日本政府を交渉すると言い、外務省のスタッフが同伴して韓国語に通訳して伝えた。大いに感謝されたし、その直後に迪子が逮捕されると大いに嘆かれた。迪子に蹴りを入れる役は大柄で女性に嫌悪感をもっている三井が担当した。次に石永がモニター越しに受け入れは難しいと語り、さらに鮎美が赤ちゃん連れだけは受け入れると提案したけれど、やはり全員を入国させてくれと懇願され、鮎美が考えた狡猾な多数決で15歳から60歳までの男子は難民船に戻して副長が指揮する軍艦に曳航させた。そうして女子供老人だけになった状態で三井たちゲイツが鮎美の好みで選んだヨンソンミヨを含めた5人を小松基地に連れてきた。

「奥へ進め」

「……………」

三井が命じたのを外務省のスタッフが丁寧に翻訳する。ヨンソンミヨたちは不安そうに基地の奥へ進んだ。子供の頃から反日教育を受けてきたし、たつぷりと従軍慰安婦についても学んだので、だんだ

ん自分の運命が悲観的に思え、どうして日本になど逃げてきたのだろう、むしろ同一民族の北朝鮮に迎合した方がよかつたのではないかと後悔する。ヨンソンミョたちは若い女性が命の次に大切にすることをマートフォンなどを持っていたし、ポケットなどに隠して映像を記録していた。それに三井たちも気づいていたけれど、放置しておくよう鮎美に言われているので撮らせておく。鮎美に会わせる前には嚴重な身体検査を要するので女医である桧田川が全身を調べた。

「……はああ……」

こんな役は嫌だなあ、と思いながら桧田川はヨンソンミョたちよりも先に診察した被爆者の容態を心配していた。

「はい、終了、異常なし」

身体検査の後スマートフォンなどは取り上げず鮎美と面談してもらった予定だったけれど、寸前でイスラエルのエフラヒムから連絡が入り、ネット回線で見通しで話すことになった。

「お久しぶりです、エフラヒムさん」

「ああ、元気そうでよかった。日本は大変だな。なにか、願いがあるそうだな。アユミ首相。ははっ、18歳で首相とは大変だな、疲れているだろう。力になるぞ」

エフラヒムは鮎美が言い出しやすいように促してくれた。

「ありがとうございます。では、お願いします。できるだけ多く、できるだけ早く、自動小銃と、個人が携帯できるタイプの小型対空ミサイル、同じく個人が携帯できるタイプの小型対戦車ミサイルを贈ってください」

「ほお………医薬品や食料でなく、武器を欲しがるのか……」

「はい。医薬品や食料は足りる予定です。今の日本に足りないのは武器です。大戦後、これが欠如しています」

「うむ、三度目の核攻撃を受けて………アユミ首相の目の色も変わったな」

「………そうですか？」

鮎美は左手で自分の頬を撫でた。

「もう戦士の目だ。武士だったかな」

「……。お願いは、かなえてもらえますか？」

「届けよう」

「ありがとうございます！」

「借りは返しておきたいからな。その方が杉原の評判も日本であるだろう」

「あげときます」

「ははは！ まだ、話している時間はあるか？」

「はい」

「ステインガーやRPGを欲しがるほど、日本の戦況は悪いのか？」

「直接、戦闘しているのは韓国だろう？」

「一番大きな国の不在が、別の大国に野心をもたせるかもしれませんので、最悪中の最悪の事態を想定した予防です」

「そうか……。女性は防衛本能が強いな。それに最悪の事態を想定するのは首相の責任だ。これほど優れた指導者が危難のときに首相とは、日本はクジ運がいい」

「御恩は、いずれ返します」

「気にするな。まだ欲しいものがあれば言ってくれ」

「……。一つ質問があります」

「うむ」

「今、韓国から難民が来ています。ですが、日本と韓国の国民は、過去の戦争での経緯や島の領有権などを巡って、仲が悪い部分も大きくあります。そんな状態で難民を受け入れると、かつてユダヤ人の方々に滞在してもらったときのような悪感情ゼロというわけにはいかないと思っっていますが、もし、イスラエルの人たちがパレスチナ人とうまくやる方法などを知っていれば、教えてほしいのですが、どうでしょうか？」

「ふっ、ははは！ それは知っていれば惜しみなく教えたいな！ だが、知らない。千年先には知っていたいものだ」

「クスっ……。詮無いことを訊きました。これからも、よろしく願います」

「ああ、また、連絡してくれ」

鮎美はエフラヒムとの通信を終えると、ヨンソンミョたちに会う予定を中止した。代わりに鬼々島にいる鐘留のそばに移動してもらったワンコとネット通信で知り合ってもらい、アイドルグループ的に韓国国民の戦意を高める歌などを考えてもらおうことにした。鮎美自身がヨンソンミョたちに会えば情が移るかもしれないし、鮎美が同性愛者であることは国際的に有名なので、変に思われたりすると余計にやっかいなので、従軍慰安婦にされるかもしれない、という印象を与えるのも中止して、別の閃きを畑母神に内線電話で伝える。

「追いつても入ってくる難民船に韓国語で、こう言ってみてください。竹島に難民受け入れ施設をつくるので、そこへ上陸しておいてくれ、と」

「……避難民に領有権が日本にあると認めさせる踏み絵をさせるのか……しかも、認めたところで孤島……君は……なんというか……意地悪だな……」

「ほな、受け入れますか？」

「言うとおりにしてみるよ。芹沢総理」

内線電話を終えると、鮎美は地下室で金沢市から来た夏子と夕食をとった。夏子は30億円も含めた財務状況を報告しながら食べるけれど、二人とも同席している鷹姫の夕食が虫と草だったので問う。

「宮本さんは、なに食べてるの？」

「鷹姫、なんで、また、虫と草にしたんよ？」

「しばらく、これが続けてみようと思います」

「……………」

「月谷にも、これを出しています」

「まあ、あいつは虫と草でもええやろけど、鷹姫は体調を崩したりせんといてな？」

「はい」

気になって夏子が問う。

「まさか、難民にも虫と草を食べさせたりしてないよね？ 虐待だつて国際問題になるよ。戦時中に捕虜へゴボウを食べさせただけで、木の根を食べさせられたつて戦後に訴えられて戦犯にされた人もいる

から気をつけて」

鷹姫が噛み切りにくい草を、よく噛んで飲んでから答える。

「韓国からの避難民には米と塩、味噌、卵、大根を与えたそうです」

「寝る場所は？」

「自衛隊、いえ、軍がテントを提供したそうです。金沢港から能登半島の目立たない場所へバスで移動させています」

「それならいいかな。虫……よく食べられるね……美味しいの？」

「いえ、あまり……、けれど、タンパク質は豊富とのことですよ」

「ふーん……私まで、それを食べなきゃいけない事態にならないように財務省の立て直しを頑張るよ」

夏子との夕食が終わる頃、鈴木が報告してくる。

「ロシアのフーチン大統領が芹沢総理と電話で話したいそうです」

「フーチン……わかりました。すぐに？」

「はい」

鮎美は用意してもらった電話の受話器を握る。

「もしもし、芹沢です」

そばにいる外務省のスタッフも別の受話器を持っていてロシア語へ通訳してくれる。フーチンがロシア語で何か喋り、すぐに通訳が訳してくれる。

「そちらは、こんばんはの時間だろうか。親愛なるアユミ」

「……」

ネット通信での対面と違い、相手の顔の見えない会話で、しかも通訳を介するので真意が探りにくい。鮎美は慎重に言葉を選ぶ。

「お話しできて光栄です。フーチン大統領」

「核ミサイルで被爆した福岡は、どうだろうか？」

「……。死者数は2万超と聞いています」

「小松も狙われたそうだな。アユミの友人も負傷したと」

「……はい……」

「タカキの傷は、どうだ？」

「幸い軽傷です。お気遣いありがとうございます」

そろそろ本題がくるかな、と鮎美が身構えていると、フーチンが

言ってくる。

「カウボーイは本国に逃げ帰って、もどってこないようだな？」

「アメリカが落ち着くには少し時間がかかるのかもしれない」

カマかけされることは想定内だったので鮎美は冷静かつ玉虫色に答えた。

「そうだな。かなり時間がかかるだろう。そこで提案なのだが、アユミたちを私が守ってあげたい。どうだろうか？」

「……………具体的には、どのようにですか？」

「アメリカと同じことをしよう。同じ条件で」

「……………ロシアの核の傘に入れてくれるということですか？」

「そうだ。沖縄も守ろう」

「……………」

それ、ほぼ占領やん、まあ、アメリカも占領してたけど、と鮎美が黙る。さらにフーチンは畳みかけてくる。

「もちろん、貴国の経済は自由だ。防衛面でだけ協力しよう」

「……………アメリカが引つ込んだ今、ロシアにとって中国の拡大が好ましくないから、協力して抑えようということですか？」

「察しがいいな。どうして、そう思った？」

「単純な話で、結局は世界は一番と二番が争い続ける。日米戦争が終わったら米ソ、その次が米中やったのに米が引つ込んだら中口。……………」

中口で争うんやったら、日本が味方した方が勝つんちゃうの、と鮎美は考えたけれど口には出さなかった。代わりに別のことを言っておく。

「地理的にも日本列島は、ぐるりと中国大陸を囲いますから。太平洋に出るのに中国としては目障りですし、ロシアとしては南下は2世紀前からの野望ですよん」

鮎美の関西弁を通訳は標準語として伝えた。

「野望か。アユミは言葉が率直すぎるな」

「よく言われます。フーチン大統領、ご提案を考える時間はいただけますか？」

「レディーを急かせるのは控えよう。今夜のところは、これで失礼する」

「お電話、ありがとうございます」

「おやすみ。よい眠りを」

電話を終えると、鮎美は自分が背筋と腋に大量の汗をかいていることに気づいて、胸のボタンを外すと、手の甲で腋をぬぐった。嗅ぎ慣れた自分の匂いがする。

「なんちゅー難題を……こういう問題が、土下座してシヨウベン漏らしてみせたら解決するんやったら百回やつてもええわ……」

重圧を感じる。世界の歴史が一言一言にかかってきていると、はつきり感じる。鮎美は反対の腋もぬぐった。まるで風呂上がりのように濡れている。電話対談を傍聴していた鈴木が問うてくる。

「フーチン大統領の提案、どうお考えですか？」

「……ロシアか……」

「芹沢総理の世代なら、そう悪い印象はもっていないでしょう？ 実は、けっこう、いいところも多い国なのですよ」

「……印象以前に、アメリカと同じ条件でということ、戦争なしに敗戦したのと同じやん。頭から蹴るつもりはないけど、対等な同盟ならともかく、今夜の提案は最大限にロシア側が出ばってみたちゅーことやろ。ここから交渉するか、状況の変化を見るか、いずれにしても、はい、そうですね、と尻尾ふるるのは国民の総意にも合わんでしょ」

「たしかに」

「はああ……お風呂に入って、言われた通り、寝よ。よい眠りで。核ミサイルにビクビクしてもしゃーない。今すぐ2発目は無いやろ。貴賓室で寝たるわ」

鮎美は地下室より貴賓室で身体を休めることを選んだ。

3月25日 核報復

復和元年3月25日金曜朝、鐘留は鬼々島にある芹沢家の2階で玄次郎と同時に目を覚ますと、鮎美の私服を着て1階におりる。台所では陽梅とワンコが朝食を作っていた。

「あ、おはよう、ワンちゃん」

「おはようです」

ワンコは現役アイドルらしい鈴が鳴るような可愛らしい声と、同性愛者ではない鐘留でも抱きしめたくなるような子供っぽい仕草で挨拶してくれた。茶色く染髪した髪を短く切りそろえ、まるで犬の耳のようなツインテールにしているし、目も大きくて唇もふつくらとした美少女だった。玄次郎もおりてきて4人で朝食をとる。メニューは近所の漁師が獲ってくれた小魚と、生協が配達してくれる卵を目玉焼きにしたものと、白米と味噌汁だった。昨日から鬼々島の島民は燃料節約のために今までのように各自で漁船と自動車を使って本土のスーパーに出かけたりするのは自主的に控えることになって生協に島までもらっているし、連絡船もダイヤが、もともと少なかったのに半減となっていた。

「いただきます」

鐘留と玄次郎は食べ始める。陽梅は食前の祈りを始めた。ワンコは少し戸惑いつつも昨夜も見た光景なので食べ始める。

「……………いただきます」

「ワンちゃんの動画、狙い通り韓国で閲覧数めっちゃ伸びてるよ。タベのうちに300万ヒット超えたし」

「それは良かったです。……………」

ワンコは歌と演説で韓国男子を奮い立たせるための動画を鐘留の協力をえて作成し、配信も韓国語が理解できるワンコとインターネット技術をもつ鐘留が協力しておこなっている。プロの映像技術者が作るより、いかにも緊急の手作りという方があざとくないだろうという鮎美のあざときで、鐘留とワンコの二人体制での制作配信だった

し、北陸にある日本政府とは無関係を装うためにも地理的に離れているのは都合良かった。ただ、日本で在日韓国人による義勇軍を組織して応援に向かわせると宣伝しているけれど、実際には日本国内では何一つ動き出していないことも知っていてワンコは同胞に罪悪感を覚えつつあった。鐘留は屈託無く言う。

「今日は、あと5人、本場韓国の子が来て、いっしよに収録する予定だったけど、3人がキャンセルになって2人が来るから、ワンちゃんとか合わせて3人グループで、また収録して流してほしいってアユミンから連絡があったよ」

「そうですか……仲良くできるといいなあ」

「だよ。芸能界って女同士の争い熾烈だから、嫌になるよね」

「カネルンもモデルだったんですね。そういうの、ありました?」

「あった、あった。アタシは美人なうえに家がお金持ちだからさ。妬まれて妬まれて大変だったよ。それも辞めた理由の一つかなあ」

「大変ですよ。芸能界……まあ、ただのユーチューバーと、あんまり変わらない状況に落ちてきましたけど」

「アユミンも、ひどいよね。娯楽番組もエネルギーの節約のために、あんまり造るな、古いDVDで映画でも見とけてさ。しかも、できればテレビも控えて、畑でも耕しておけて国民に言い出してるし」

「豊かだった日本も……」

「あ、そういえばさ。韓国の人たちに祝い返ししないといけないよね?」

「祝い返し?」

「だって、日本の大震災をお祝いしてくれたし。韓国の戦災をお祝いしてあげないと♪」

「……あの……私が在日韓国人だったことを覚えてます?」

「うん、まあ」

「……いっしよにいてカネルンの性格、だいたいわかってきたけど、今日これから来る2人の前で似たようなこと言うのは絶対に控えてください。怒る人は、めっちゃめっちゃ怒りますから。私は、どつちかというところと日本文化で育って、ハングルを習ったのは日韓両方で活躍

できるアイドルになりたいって理由だったけど、これから来る2人が生粋の韓国人だったなら、そういう発言はデブにデブって言うようなものだと思うってください」

「そりゃキレるねえ……まあ、もしアユミンの好みで選んだんだったら、デブってことは、ないと思うよ。腋もチェックしただろうし」「ワキ?」

「アユミンは超腋フェチだよ。あと、玄次郎も」

「そういうことを食卓で言うな。というか、どこでも言うな」

「きやははは♪」

「まったく」

ろくな会話をしないので玄次郎は節電を要請されているけれど、テレビをつけた。ニュースキャスターがニュースを読んでいるもののスタジオの照明も控え目なのか、影がある。

「日本政府は小学生5人を強姦のうえ殺害した田熊衛士被告に対し、新制度による即決裁判を行うと発表しました。この制度は国民の中から無作為に選出された人を裁判員として任命し裁判を行うものです。また、田熊被告へは従来の死刑を超えた過酷な死刑が適応されると見込まれており、これに対して京都弁護士会、山梨県弁護士会内東京第二弁護士会が連名で芹沢鮎美総理大臣宛に抗議文を送付したとのことです」

映像が切り替わり死刑反対論で有名な弁護士が映った。

「まったくもってね、けしからん制度ですよ、これは！ 制度といえるものではない！ ただのリンチです！ そもそも人を死刑にするとすることは、あつてはならんわけです。どんな人にも立ち直りの機会、反省の機会を与えるべきで、ここを丁寧に行っていていかんとね、人権の根幹が失われるわけです！」

目玉焼きを食べながら鐘留が言う。

「にしてもさ、このタクマくんさ、すごい遅しいね、一気に5人も強姦ってさ、ちゃんと全員に射精したのかな?」

「ゴホッ！ ゴホッ！」

味噌汁を飲んでいた陽梅が盛大に噎せた。ワンコがティッシュを

差し出す。

「あと、すごいロリだね。あえて小学生つてとこがき。ロリつて病気なのか、障害なのか、とりあえず死刑しかないね。この弁護士、アホだね。お前の娘が殺されればいいのに、つて、みんな思ってるよ」

「国民感情としては、おおむね鮎美に賛成してくれているんだろうな。街角インタビューも、そんな感じだし。むしろ、抗議した弁護士会が、たった二つというのが少なくて驚く。まあ、これだけ日本中がざわついてるときだ、弁護士もヒマじゃないだろう」

「次のニュースです。同じく日本政府は津波で死亡した人の身分証明書を拾い、これを悪用して3重に戸籍を取得しようとした在日外国人へも死刑を求める即決裁判を行うと発表しております。この在日外国人は取り調べに対して黙秘しており、本当の国籍もわかっていませんがDNA鑑定の結果、日本人ではないことは確からしいと：あ、臨時ニュースが入りました。北朝鮮、朝鮮民主主義人民共和国の金正陽の長男で後継者と目されている朝鮮陸軍大将の金正雄（キムジョンウ）による映像がライブで配信されるそうです」

画面が切り替わり、軍服姿をした恰幅のいい39歳の金正雄が映った。

「あ、マサオだ」

「カネルン、あの人はジョンユウだよ」

「ネット上では、みんなマサオつて呼んで意外と人気あるよ。マサオは日本のデイズニールランドにも、ちよくちよく遊びに来てたらしいし、偽造パスポートで。日本のアニメとかも好きみたい。じゃあ、攻撃するなよつて話だけど、パパが撃つつて決めたら仕方ないかなあ。逆らつたら死刑な国だし」

金正雄が演説を始めた。

「我が忠勇なる朝鮮人民軍兵士たちよ！ 今やアメリカ軍艦隊の半数が海に消えた！ この津波こそ、我ら朝鮮の正義の証である」

「マサオ、元気そう。マカオに飛ばされたつて話もあったけど、ちゃんと後継者になれてんだ」

「決定的打撃を受けた南朝鮮軍に、いかほどの戦力が残つていようと、

それはすでに形骸である」

「痩せたらハンサムかもねえ」

「敢えて言おう!! カスである!!」

「頑張るねえ、本音では日本のデイズニーランドが消えて残念、こんな震災が無きゃパパが余計な野心をもたないで、また日本へ遊びに行けたのに、とか思ってたそう」

「それら軟弱の集団が、我ら朝鮮人民軍に抗うことは出来ないとは私は断言する」

「軍服が似合って無くてコスプレっぽい。なんか、こういうデブ、コミケとかに出没してそう。でっかいカメラもって、アタシたちのスカートとか狙ってきそうな感じの」

「人類は!! 我ら選ばれた優良種たる朝鮮国、国民に管理運営されて、はじめて永久に生き延びることができる」

「人類は朝鮮が起源だもんね」

「これ以上戦い続けては人類そのものの存亡に関わるのだ」

「っていうか、これ日本語じゃん?! マサオ、日本語うますぎ! 日本語なんかで演説して大丈夫なの?! もしかして自棄?! パパへのあてつけ?!」

「明日の未来のために、我が朝鮮国国民は起たねばならなのである!!」

ジーク・ジ…」

演説の途中で画面が、パアッ! と明るくなり、真っ白になった次の瞬間、真っ暗になる。

ザア…

「映像が途切れました。……しばらく、お待ちください」

日本のニュースキャスターが言っている。

「マサオ……ポアされたのかも。命かけて何か言いたかったのかも…」

鐘留たちが待っていると、ニュースキャスターがスタジオスタッフから紙片を受け取り、かなり驚いた顔をしてから読み上げる。

「アメリカから北朝鮮へ核攻撃があつた模様です!」

「「「つ……」」」

鐘留たちも驚き、ニュースキャスターが続ける。

「この核攻撃について、声明を発表するとして、アメリカのミクドナルド・トランプ氏が映像を配信するそうです。ミクドナルド氏は現在、アメリカ合衆国大統領を名乗っていますが、正式にはオパマ氏が大統領です。映像を流します」

画面が切り替わり、星条旗を背景にした若い白人女性が映る。いつも通りの長いツイントールをしていて、ノースリーブで肩や腋の見える上着にネクタイをしめ、アームカバーを着けている。

「Let's work for peace, brother s.」

英語だったので、同時通訳が追ってくる。

「みなさん、平和のために努力しよう。日本と韓国へ10発の核ミサイルを北朝鮮が撃ち込み、うち5発が核爆発を起こして、多くの人々が犠牲になりました。悲しいことです。同時に強い怒りを覚えます。これを放置しておくことはできない。と、私は考えます。けれど、オパマ氏は決断しませんでした。だから、私が合衆国大統領として決断しました。核には核を！ ごく単純なことです。私は1発のミサイルを発射するよう命令しました。これは大西洋から発射され、狙い通りに命中し、少なくとも演説中だった金日雄へ報復の鉄槌をくだしました」

「…マサオ……アメリカにポアされたんだ……」

「ポアって言うなよ。なんか、軽いことに感じる」

玄次郎が冷めてしまった味噌汁を、もったいないので飲みきりながら言った。

「発射したミサイルの威力はソウル市を攻撃したものと同じ程度です。あと4発、私は決断をくだすかもしれませんが。5発には5発、当然のことです」

「じゃあ、日本もアメリカに2発、撃たないと♪」

「それは時効なんだろう」

「アメリカ軍は半世紀以上にわたって極東地域の平和と安定に貢献してきました。けれど、私たちはアメリカ人兵士が犠牲になることに大

きな疑問を感じています。なぜ、アメリカ人の兵士が家族と離れ、遠く太平洋、大西洋を越えて赴任しなければならないのか」

「じゃあ、来んなよ、バカ♪」

「帰った途端に、攻め込まれたけどな」

「もし、再び朝鮮半島へアメリカ軍兵士を派遣すれば、多くの犠牲が出るでしょう。そんなことはしません。けれど、核攻撃だけは放置しておけない。私は合衆国大統領として、核には核を、この単純なルールを世界に敷きます。先制的に核を使った国へは、どんな理由があろうと、同程度の核攻撃を行います」

「…ふーん……」

「わかりやすいルールではあるな」

「日本と韓国の指導者へ告げます。あと4発、北朝鮮へ報復する権利があなた達にはあります。どこへ撃って欲しいか、考えておいでください」

「……」

「1発につき10億ドルを求めます。最初の1発は5億ドルとします。日本と韓国が支払うべきものです。私たちが防衛を肩代わりしたのですから当然です」

「売るのかよ……アメリカ人らしい……」

「また、核を保有しないすべての国へ告げます。あなた方が核攻撃を受けたとき、私たちが報復を肩代わりすることができます。ただし、対価は求めます。1発15キロトン級で10億ドルです。けれど、お得なプランも用意します。事前に入会していただくと、1発1億ドルとなりますし、月額会費は1000万ドルとします。また経済規模の小さい国へは10万ドルを月額会費とし、報復時の核ミサイル代は実費プラスアルファで交渉に応じます」

「マジで売る気だ……」

「この核クラブの名称を、N友の会、とします。さらに核を保有する国と、核兵器を保有していると疑われる国へも告げます。いまだ相互確証破壊の能力に至らない核は北朝鮮を見ても明らかのように脆弱です。けれど、N友の会に入会されると、自国が先制攻撃を受け、発射

基地等を失っても報復可能です。これにより大量の核兵器をもつコストを抑えられます。核保有国がN友の会に入る場合、報復時の核ミサイル代は無料、月額会費は300万ドルとします。これをバリュウプランと呼称します。このバリュウプランに加入後、所有する核兵器を放棄した場合は、さらに50%引きで月額会費は150万ドルになります」

「ホント、アメリカ人の中のアメリカ人だね、ミクドちゃん……お得なのはバリュウセットだけにしときなよ。あれ、ポテトで大儲けできるし」

「逆にバーガーだけだと、きついらしいな」

「私が提唱するプランの素晴らしいところは、このプランが広まれば、世界の核保有国が次第に減っていくということです。完全にゼロにはならなくとも、最終的に二カ国となる可能性もあります。そのときは、当然に相互確証破壊の能力のある二カ国となりますから、今回の北朝鮮による核使用のようなことは起こらなくなります。これは素晴らしいプランです」

「あ、なるほど」

「理屈の上では、そうなるかもな。鮎美の連合インフレ税と同じで。面白い女だな」

「ご入会をお待ちしています。また、日本のアユミ・セリザワ総理大臣にインターネット回線での公開の面談を申し込みます。12時間後に私と話し合いをもってください。第45代アメリカ合衆国大統領ミクドナルド・トランプより」

「アユミン、また仕事が増えたね……」

「わざわざ公開でか。派手なことが好きそうな女だな」

「アユミンにだけ申し込みして、韓国 of 指導者はいいのかな？ ワンちゃん、そういうえば韓国の指導者って、どうなってるの？」

「最初の核攻撃以後、ずっと現れませんし、他の政治家も顔を見せないの……たぶん……日本の前の指導者たちが津波で全員行方不明になったように……ただ、昨夜は韓国軍が攻め込んできた北朝鮮軍に対して大きな勝利をしたという情報がハングルでは流れました……い

ろいろなデマが流れているし、欺瞞しようとする情報もあって、両方が勝利したと、いつも言ってますが、今回は本当っぽい感じに」

「ふーん……どんな感じに？」

「趙舜臣(チヨスンシン)中領の作戦で北朝鮮軍の二個師団を壊滅させたそうです」

「中領？」

「あ、中領というのは韓国軍の階級で、中佐にあたるのかな。たぶん。今は2佐？　けど、日本軍に戻って階級も古いのに戻すって話もあるらしいから……とりあえず中領は中佐なはず」

「へえ」

「昨夜の勝利で彼は李舜臣(イスンシン)の再来と言われているそうです」

「イスンシン？」

「えっと、日本人だとリシュンシンと言った方がわかりますか？」

「なんか聴いたことあるかも」

「文禄慶長の役っていえば、わかるかな？」

「ああ、あの秀吉が調子にのってやらかしたやつ？」

「そう、それ！」

ワンコが嬉しそうにツイントールをヒョコヒョコと揺らした。日本文化で育っていても、やはり秀吉には悪感情があるようで鐘留の中でも秀吉の扱いが軽そうなのは嬉しいようだった。

「あの侵略があったときに日本軍の撃退に貢献したのが李舜臣なの！」

亀甲船を改良して日本の水軍を撃破してる。韓国では知らない人がいないほどの英雄！」

「へえ……じゃあ、趙舜臣は李舜臣の子孫かなにか？」

「いえ、姓が違いますし、おそらく彼の父親か祖父が李舜臣にあやかって命名しただけかな」

「ああ、自分の子供に信長とか信玄って名付ける感じね。こういう話は宮ちゃんが詳しいから訊いてみよ」

鐘留は鷹姫に電話をかけてみた。

「はい、芹沢鮎美総理大臣の首席秘書官、宮本鷹姫です」

「もしもし、アタシ」

「あなたですか。何の用ですか？」

「急に上から目線になるね。まあ、いいや。李舜臣って知ってる？」

「ええ」

「ちよつと教えてよ」

そう言った鐘留が後悔するほど鷹姫は閣議前の忙しい時間なのに李舜臣について語ってくれた。おかげで、李舜臣が何度も不遇から脱し、温存した朝鮮水軍で日本軍の後方を攻めたことや、それによって補給線を混乱させて撤退に追い込んだ説と、そもそも陸上での日本軍が戦国時代だったこともあり強すぎて予定より早く進軍すぎたことが補給線が伸びきった原因という説があることや、せっかく李舜臣は功績をおさめたのに、後に攻撃命令を受けても機ではないと判断して動かず、命令不服従として死罪を求刑されたものの、代わりに攻め込んだ將軍たちが全滅してしまい、再び將たる立場に戻り、最期は秀吉の死によって双方の上層部で日本軍の無血撤退が決まっていたところ、約束を破って小西行長の軍を包囲しようとし、これを石田三成は見捨てて軍を引こうとしたところ、そんなことは武士の恥だからと、立花宗茂が頑として反対し、これに共感した島津義弘たちも救援に向かい、夜間の戦闘で小西軍の撤退を成功させたこと、この戦いで李舜臣は島津軍の銃弾により討ち死にしたことを教えてくれた。

「ふーん……じゃあ、結局は日本軍の勝ち？」

「朝鮮と明側も自分たちの勝ちだと主張していますが、朝鮮明の連合軍は、およそ2万、対する日本軍は1万弱、しかも困難な撤退戦で日本軍は主だった武將が一人も討たれていないのに比べて、朝鮮軍は主將だった李舜臣の他、李英男、方徳龍、高得蔣、李彦良らの將官が戦死、明軍も副將だった鄧子龍が討たれています」

「約束違反で余計なチャチャ入れて死んだんだ。きやはは♪ じゃあ、李舜臣って、たいしたことない？」

「いえ、もともと日本軍の武將たちは戦国時代を経験した百戦錬磨の猛者ばかりです。たいして朝鮮軍は平和な時代が続いていましたから、あまり実戦経験がないという状態です。それで兵を率いて勇戦し

たのですから、かなりの人物のはずです。朝鮮側にとって英雄というのは間違いないでしょう」

「ふーん……」

「わざわざ朝から李舜臣について訊くということは、緑野も趙舜臣が北朝鮮軍に勝利した情報をつかんだのですね。どのくらい広まっている情報ですか？」

「ワンちゃん、どうなの？」

「ここまでの通話も、そばで聴いていたワンコが答える。」

「韓国語圏では、ものすごい速さで拡がってますからデマじゃないと思います」

「デマではありません。こちらでも衛星写真と無線傍受で確認しています」

「やった！」

「デマでないことと、趙舜臣の勝利を盛り立てる動画を、まもなく到着するはずのヨンソンミョと作成して、早く配信しておいてください。情報戦の撃ち出す速度も、鉄砲玉を撃つと同じく速さが求められます」

「はいっ！」

「はいはい」

ワンコと鐘留が返事をして電話を終える。そろそろ連絡船が着く頃なので二人で港に出てみると、今泉らゲイツ3名に護衛されたヨンソンミョら2名の韓国女性に不安そうな顔で到着する。もともと鮎美が従軍慰安婦にされるかもしれないという雰囲気を与えておけ、と命令した後、それは国際問題になると面倒なので中止し、今度は韓国軍を応援するアイドルとして売り出すと決めて、本人たちにも説明し同意をえようとしたけれど5名のうち3名は話を信じなかったか、もしくは単に気持ちが悪くなかったからか、同意せず2名に減っている。本国から逃げては来たけれど、残っている韓国軍と、戻された父兄たちを応援できるならとヨンソンミョたちは勇気を出して来たけれど、小松基地から車で3時間かけて運ばれ、琵琶湖の港から連絡船に乗せられると、行き先が鬼々島と表記されていたので怖くてたまら

ない。それでなくても日本鬼子と学習してきたのに、まさか鬼々島などという日本で一番ダメそうなところあるとは思わなかった。連絡船からおりようとしないうんソンミヨたちに今泉が言う。

「はい、おりて。わかる？ おりて」
「……………」

　　ヨンソンミヨは日本語がわかるものの、おりようとしないうんソンミヨはゲイである上、彼女たちの身体に触れないように静江から念押しされているので、口頭で促すにとどめている。ヨンソンミヨらは自分たちが日本海を船で渡ってきた難民だと言つてはいけないうんソンミヨらには難民に求められているし、それを破ると恩を感じている迪子の処遇が極端に厳しくなりそうなので破るつもりはないし、鐘留とワンコには難民ではなく、たまたま震災の日に日本へ観光に来ていて帰国にまごついているうちに本國で戦争が起こってしまった、帰るに帰れなくなった二人と鮎美から説明されている。不安そうな二人の同胞を見てワンコが韓国語で声をかけた。

「アンニョハシムニカ」

「……………」

「チャルチネヨセ？」

　　こんにちは、元気ですか、程度の韓国語だったので今泉でも手にしている韓国語ブックにあつて理解できる。それでもワンコの発音が正確だったのでヨンソンミヨたちも次第に安心していき、ワンコとは打ち解けた。鐘留は韓国語など一切理解できないのでヒマそうに待ち、演説と歌の内容もワンコたちが決めるのに任せた。

「アタシは漁協の倉庫で撮影の準備しとくよ」

「はい、お願いしまーす」

　　ワンコだけが返事してくれる。鐘留は、すぐそこにある倉庫まで行くのと、撮影の準備に入る。もともとモデルの経験もあるので少しは太陽光の利用の仕方や撮影現場を構築する知識もある。あまりプロっぽくなくていいので楽だった。ただ、撮影現場が鬼々島であると視聴者に悟らせてはならないと言われているので地名を特定できそうなものは嚴重にチェックして取り除いた。

「まあ、倉庫のシャッター前なら、どこも似たようなもんだしね」

結局、倉庫のシャッターをおろして、その前で撮影する。ワンコら3名が演説の内容と歌も決めてきた。作成し配信する前に静江と外務省のスタッフがチェックすることになっているので、まずは鐘留が日本語訳された原稿を見る。

辛くとも、苦しくとも、国のために立ち上がろう。

昨夜の勝利は夜明けの光明なり！

再び舞い降りた舜臣の前に、どんな軍も敵ではない。

大韓人よ、立ち上がろう！

我が国万歳。

直訳なので鐘留には、あまり良いのか、悪いのか、わからない。演説の後には国歌と軍歌が入り、さらにオリジナルの曲は、もともとワンコが自分のために温めていたものを一部の歌詞をより愛国的にして、さらにヨンソンミヨらにも少し変えてもらい、共同作業ということで仕上げて収録した。収録が終わると鐘留が外務省に送信してみる。

「OKだって。じゃ、ポチツとな」

問題ないと判断されたので発信元が日本だと特定されないようにアフリカのサーバーを経由してから韓国語圏のネットへ広めた。

「ワンちゃんは、けっこう短い演説にするね、毎回さ。アユミンの演説はクドクド長いことが多いのに」

「あまり長くすると、意見の違いも出てくるので、簡単な方がいいの。私は韓国人ではあるけれど、在日だから韓国のことを本当に詳しく知ってるとは言えないし、日本だって右派と左派で意見が違うように、韓国内にも色々あるから」

「なるほどねえ。ワンちゃん、賢いね、よしよし」

鐘留がワンコの頭を撫でるとヨンソンミヨが不快そうに韓国語で何か言った。それにワンコが韓国語で答えているので、終わってから鐘留が問う。

「なにか言われてたの？ 悪い感じだったけど」

「えつと……私が日本人から犬扱いされてるようだって怒ってくれた

の。けど、私は犬山市のローカルアイドルっていうのが出発点だから、犬っぽい感じを売りにしてるから気にしないで。カネルンにも悪意はないよ、って答えたの」

「ふーん……お手♪」

「噛みつこうか？」

「きゃははは♪」

「まったく」

ワンコは自分たちが配信した動画がどうなるか見るためにスマートフォンでチェックする。動画の再生数は伸びていたけれど、もう一つ、伸びている動画があった。

「趙舜臣本人も出してる。カネルン、PCで映して」

「はいはい」

鐘留がノートパソコンの画面で表示して再生した。当然、趙舜臣は韓国語で話しているのでヨンソンミヨたちは聞き入るけれど、鐘留には理解できない。終わってからワンコが説明してくれる。

「えっと、我々の反撃が始まる。最前線にいた北朝鮮の主力部隊は我が軍が撃滅した。北朝鮮の中枢部にはアメリカの核が落ちた。もはや残っているのはカスばかりだ。攻め込め、攻め込め、反撃のときは来たのだ。北朝鮮の兵士よ、民衆よ、武器を捨てて投降せよ。我々は同胞を厚く遇する。我らに銃口を向けるならば銃口で応じ、手をあげるなら握手で応じよう。独裁者ではなく自分たちが決めよ！ っ感じだったかな。たぶん、北朝鮮の人たちは情報端末は、ほとんど持っていないからラジオでも流してるんじゃないかな。余裕があれば飛行機からチラシを撒くかもしれないけど、たぶん、飛行機とかへりは、あんまり残ってないかも」

「けっこうハンサムな感じの人だったね。チヨスンくん」

「……………」

鐘留がつけたアダ名が気に入らないような顔でワンコたちが見てくる。とくにヨンソンミヨは露骨に睨んできた。

「ん？ なに？ 何か文句があるなら日本語で言ってみなよ。聴いてあげる。ヨンミヨン」

「…………… 私たち……………の……………名前を……………汚すな。……………日本……………野郎」

「あく……………最後をビツチに変えると正解だよ。女の子に野郎だと、アホな日本語にしか聴こえないから。きやははは♪」

「カネルン、やめて」

ワンコは鐘留とヨンソンミヨの間に入って仲裁する。鐘留へは日本語で本国が戦乱に陥ってヨンソンミヨたちは気が立っているからと説明し、ヨンソンミヨへは日本人の中でも鐘留は特別に口が悪いので本気で相手をしないように頼んだ。それでもヨンソンミヨは言わずにはいられないように鐘留を罵った。

「…………… 私たちの……………不幸を利用した……………お前たちは……………呪われる……………」

日本語で言わないとワンコが正確に伝えず、穏やかな内容に変更すると感じて恨みを込めて言った。言われた鐘留はサラリと言り返す。

「じゃあ、もう国へ帰りなよ。泳げる？ きやははは♪」

「……………帰る」

怒ったヨンソンミヨが港の方へ歩いて向かうので、もう一人もついていくし、今泉らゲイツも護衛のために追いかける。ワンコも追って、帰ろうにも連絡船は3時間後にしかないのです、なんとかなだめた。なだめるうちに、ワンコへも日本人に利用されて恥ずかしくないので、か、と怒ってきた。日本は戦火が自分たちにおよばないようにと、韓国人に戦わせて、自分たちは安全なところにいると指摘されたので、ワンコは諦め気味に答えた。利用されても利用し返して、自分たちが有名になって国を支えられるようになれば、という考えを語って納得してもらい。明日も状況に合わせた演説や歌を収録し配信するつもりなので、前向きに語り合うことに専念し、夕方になると玄次郎が和牛2頭をつぶした肉を島へ運び込ませてきた。鐘留が相続した会社の和牛だったけれど、飼料の調達見込みが悪いので早めにつぶしている。さらに牛肉だけでなく犬の肉も持ってきていた。

「犬の肉もあるぞ。バーベキューにしよう」

「パパさん、犬の肉なんて、どうしたんですか？　日本では手に入りにくいはず」

ワンコが問い、玄次郎は得意げに答える。

「ペットシヨップから大きくなりすぎたのを買って、殺してみた」

「え〜……かわいいそう…」

「いや、もうペットシヨップは、この御時世だから閉店するらしくてな。エサの供給も危ういらしいから処分されるらしい。で、オレと同じ考えの在日も来てて、みんな、その場で殺して持って帰ってたぞ。その場で殺さないと余計な情が移るからな」

「玄次郎って合理主義だねえ。犬なんて食べられるの？」

「韓国や中国では普通に食べるし、大阪だと探せば提供する店もあったんだぞ。ワンコさんも食べるだろ？　在日だし」

「私は食べませんよお……キャラ的に共食いなので、絶対に食べないって決めてます」

「そうなのか。君らは？」

玄次郎がヨンソンミョらに問うた。

「………歓迎………ありがとう………でも………犬は………食べたことが………ない………最近………あまり………韓国でも………若い者は………犬を………食べない………」

「そうか………いらなかったか………」

玄次郎が残念そうにすると、ヨンソンミョは笑顔をつくった。

「私は………今日………食べてみる………ありがとう………」

「おお、そうか、そうか！」

「……ぐすつ………ありがとう、ご主人………」

感情が動かされてヨンソンミョは泣いた。玄次郎からは日本に着いて初めての歓迎を感じる。排他的経済水域の境では、きわめて排他的に扱われ、怖い思いを何度もした。日本の艦船から鼓膜が破れるかと思うような大音量の汽笛を何度も鳴らされたし、韓国語で日本国内は放射能で危険だから来てはいけないと嘘なのか本当なのか気持ちに折ろうとするアナウンスも流していたし、難民船の進路を塞ぐように艦列を並べていて、海上保安庁の巡視船からは放水を受けたし、そ

れで諦めて韓国へ帰る難民船もあった。さらに諦めずに進もうとすると威嚇射撃までされたし、並走していた難民船は被弾さえしていた。それでもヨンソンミョたちが乗ってきた船は諦めず、母親たちが赤子を掲げて泣き叫び、とうとう迪子の同情を引くことができず受けて入れてもらえた。なのに、金沢港に到着すると吹きさらしの突堤に何時間も武装した日本兵に囲まれて過ごさねばならなかったし、与えられたのは冷たい水とオニギリ、粉ミルクだけだった。それでも迪子が戻ってきて、なんとか日本政府に受け入れてもらえるよう頼むと言ってくれたときは握手した手のぬくもりに涙が出たのに、直後に迪子が逮捕されて大柄な筋骨逞しい日本兵から足蹴にされているのを目の当たりにしたときは胸がわれるほど嘆き悲しんだ。さらに、日本側は石永が官房長官だと名乗った後、モニター越しでもわかる実に迷惑そうな目で受け入れ拒否を通告してきたし、それでヨンソンミョたちが北朝鮮軍がどんどん迫っていて、とても帰れないと泣いて頼むと、鮎美が総理大臣だと名乗り、鮎美のことは国際的にも先月あたりから有名だったので知っていて、迪子と同じく温情をくれるかと思つたのに、赤子と母親のみ受け入れると言うだけだった。どうにか全員受け入れて欲しいと、みなで泣いて頼むと、狡猾な多数決で父や兄たちを追い出すように仕向けられた。わざわざ韓国の国歌や軍歌まで流して、戦つてこい、と冷酷な圧力をかけてきた。それで泣く泣く父や兄たちと別れた。もう会えないかもしれないと、軍艦に曳航されていく避難船を見えなくなるまで泣きながら見送った。

「…うう…」

そうして男たちを追い出した後、今度はヨンソンミョたちのような若くて美しい女を選ぶように連行しにきた。銃を持った日本兵と日本警察に囲まれていて逆らうことなどできなかつたし、ヨンソンミョたちと引き替えのようにテントや毛布、最低限の追加の食料が用意されて、赤子の母親や被爆者たちのために自分の身を諦めて連行された。連行された先は日本軍の基地で、まず女医が身体検査をしてきた。この女医も被爆者を診るときは親身になっている様子だったのに、ヨンソンミョたちを身体検査するのは面倒そうにタメ息をつきな

がら、まるでドブさらいでもするような顔でやられた。それでも、やつと18歳でありながら総理大臣という鮎美に面会する機会があると云われたのに、直前になってキャンセルされ、何日も入浴していなかった身体を深夜になって基地の女湯で洗うよう言われ、日本の女性兵士たちが使った後の湯に浸かった。入浴するときでさえ、銃をもった女性兵士に見張られていたし、それから外務省の職員が来てアイドルのように韓国軍を応援するような演説と歌を収録するよう言われた。報酬は一時金10万円で、ワンコという在日韓国人と協力するよう言われて、くたくたに疲れた身体で指示された車に乗ると、冷たい缶詰とパンを与えられ、食べると泥のように眠った。

「…はうう…」

起きるとき、海のように広い湖のほitoriで貧相な港から船に乗せられた。行き先と思われる漢字表記は、鬼々島と書いてあったので、もう騙されたのだと深く後悔した。アイドル扱いではなく、たった10万円で売春婦にされるのだと思った。思い返せば、鮎美も売春に肯定的で、年金制度なども謳っているらしかったし、同性愛者ということとは男と同じ目で女の身体を見ているのだと、今さら気づいた。そうして到着した鬼々島では地獄が待っていると思っただけれど、迎えてくれたワンコには悲愴な雰囲気がなく、約束通りアイドルとして収録された。ただ、やたらとワンコは日本人に媚びているし、鐘留の目は明らかにヨンソンミョたちを見下している。鬼々島の島民も遠巻きに様子を見てくる保守的な目だったし、ずっと銃をもった今泉たちはそばにいるし、男性同性愛者だから安心しろ、という説明はあつたけれど、単純に気持ちが悪い。

「…ぐすつ…」

それでも利用されていると、わかりながら、韓国軍に持ちこたえてほしいのは確かだったので心を込めて歌ったし演説してみた。その演説内容を考える時点で、趙舜臣の勝利を知り、またアメリカによる核報復を知った。やつと光りが見えてきた。そんなとき玄次郎が現れて、せっかく来たのだから、とりあえず肉でも喰え、という裏表のない軽い気持ちでの歓迎が、身にしみた。お前らは犬の肉も喰うよ

な、いつしよに喰おう、という軽々しい好奇心と、利用する気もない、ただ単純な歓迎が人間として嬉しくて泣けた。

「そんなに泣かれると……すまん。もしかして、犬を殺したの、悲しいか？」

「いいえ！　いいえ、です。食べて……みる……食べたい！」

「……そうか。じゃあ、準備しよう」

玄次郎は運んできた肉を町内会の役員たちと協力して分ける。この頃は淡水魚ばかりを食べていた島民たち全戸に分けると、とても喜ばれた。一応、いまだに公職選挙法は気にしているので、無料でバラまくわけにはいかず、町内会に処分価格で買い取ってもらい、運搬に協力してくれたので運搬料を支払い、どちらにも領収書を書いて、結局は無料になるけれど、公選法上の問題がないようにした。バーベキューは公民館で始める。今夜は鮎美とミクドナルドが公開の面談をするはずなので町内会所有のプロジェクターを出してきてテレビを投影しながら肉を食べる。娯楽番組が無くなりつつある中で、かっこうの人々の楽しみになるし、政府も記者会見を行うことが少なく、あまり質問を受け付けず一方的に動画配信することが多いので、総理大臣となった鮎美が米大統領と、どんな対談をするのかは日本中が注目していた。テレビ局も何時間も前から特集を組み、今も時事ニュースなどを流している。

「議会が消失した中、議会を再建しようという動きも見られますね？」

「はい。富山県に有志が集まり、近日中にも議会が行われるようです」

「震災から今日まで、臨時政府は非常に乱暴なやり方で政治を行ってありますが、どうでしょう？」

「とうとう芹沢はね、大切な憲法まで捨てると言っておつてね。もう、はちやめちゃですよ」

「これらは彼女の意志なのでしでしょうか？　裏で糸を引いているのは石

永氏だとの話もありますか？」

「大いにありえることですね」

「彼もホモ疑惑があつて、そういう意味では芹沢と通じるところがあるよ。これはね、極秘につかんだ話なのですが、再建している霞ヶ関の中でも、同性愛者のグループができあがって、幅をきかせているよ」
うで懸念されるよ」

「同性愛者とは、そんなに多いものでしたか？」

「人口の3%から5%と言われていて、さらに他の性的な特殊者を含めると10%に届くかもしれない。こういう連中を集めて親衛隊のようなことをやられるとね、非常に危険なわけです」

「法務大臣の三島氏も、同性愛であると公言されていますね」

「彼は…いや、彼女…いや、まあ、あの人はね、一番危険な人物ですよ。なにしろ自衛隊にいたころクーデターを画策して懲戒免職になっている。今回の震災にさいして、機は熟したとばかり小松基地へ一番乗りして政権奪取を行ったし、全国の基地へ勝手に指令を出している」

「今は畑母神氏が防衛大臣ですが、どうでしょう？」

「そもそもね、彼は都知事なわけで、知事と大臣を兼務するというのは、ありえんことですよ。その点、加賀田氏も同じで県知事でありながら財務大臣という形で、本来の職務は御蘇松氏に丸投げしたまま県を放りだしている。選挙を愚弄するにも、ほどがある」

鐘留が和牛の串焼きを食べながらつぶやく。

「アメリカが核報復した途端に、マスコミが元気になってない？ 急にアユミンの批判とか始めてる」

「そうだな…いや流れが変わるのか…」

玄次郎は犬肉の串焼きを嚙ってみる。売れ残りの子犬が大きくなった若い犬なので柔らかかったし、和牛ほど油でギトギトしていない。

「イノシシともシカとも違うなあ…ウサギは不味かったけど」

「玄次郎、ウサギとかも食べたことあるの？」

「フランス料理とかスペイン料理に普通にあるぞ。ハトも」

「あ、そういえば、あつたかも」

島民がワンコとヨンソンミヨらへ追加の肉を持ってくる。

「お客さんたちも食べたってや」

「はい、ありがとうございます」

「ありがとうございます」

「あんたら日本語うまいね」

「私は在日ですから。私のこと、テレビで見たことないですか？」

「おお、そういや、最近みるのお。ほな、こっちのお嬢さん二人も？」

「いえ、彼女たちは観光中に震災に遭って戦争まで起こっちゃって帰れなくなつた韓国人さんですよ。ちよつと政府にとつて大切なお客さんなんで護衛がついてますし、ここに彼女たちがいることはシーつですよ。鮎美総理が困りますから。写真もNGです」

「そうか、そうか、ゆつくりしていき」

「…ありがとうございます」

ヨンソンミヨが礼を言つて、初めて犬を食べてみる。

「……おいし…い？」

「私は食べませんよ。ワンコですから」

再びテレビが鮎美を痛烈に批判する。

「彼女の命令なのか、本当に信じがたいですが、刑務所では罪の重い者に食事が出されなくなっています。そればかりか、自分で死ぬ、とばかりに自殺の予防措置がとられず、急に支給されたズボン紐で首をくくつた受刑者が立て続けに出ています。さらに、ひどいのは老人や病人を見捨てるに罪に問う刑法も適応しないと発表したことです！

法律無視の無茶苦茶ですよ！」

吐き捨てるようにコメンテーターが言い、別のゲスト出演である法学者が言う。

「一応、芹沢さんは法律を無視してはいないようで、期待可能性という、ほとんど適応しない法理を使っていますね」

「期待可能性とは？」

司会の問いに、法学者が頷いて説明する。

「期待可能性というのは、適法行為の期待可能性という意味です。刑法で人が罰される時、その責任を問うのに、故意に人を殺せば、殺

人罪、うっかりミスたとえばクレーンの操作を失敗したとか、そういうのは過失として過失致死で罰しているのは、みなさん、ご存じかと思えます。あとは心神喪失で責任能力がなかった、というので罰されないのも、馴染みはあるでしょう。他に馴染みがあるのは正当防衛です。刺されそうだったからナイフを奪って刺した、これで殺人罪といわれてはたまらないから、相手を殺しても罰されない、こういうのを専門用語で違法性阻却事由というのですが、期待可能性は非常にレアな違法性阻却事由の一種です。今まで、ほとんど適応されていません。たとえば話で言うなら、とてもお腹が空いているときパンを店から盗んだとします、普通に考えれば万引き、窃盗ですね？」

「はい」

「ところが、もしパンを盗まなければ、そのとき餓死していたかもしれないほど空腹だったとしたら、この場合ですとパンを盗まなければ死ぬわけですから、盗まないという適法行為をする期待可能性はなかったわけです。もうやむをえず盗んでしまったといった場合に、例外的に適法行為の期待可能性がなかったから故意犯不成立ということに理論的にはなりうるということ。ただ、あくまで理論的にであつて、この論理で無罪というのは、ほとんどなかった。ところが、芹沢さんは、震災後の窮乏が今後も続くから、家族や施設が病人や老人を見捨てるのは、自分が生き残れるかも危うい状況なので、一年先二年先を考えたとき介護や保護を続けていくことは自分のクビをしめるので、もう無理だと思つて見捨てた、これで今までだと保護責任遺棄を問われたのに、現在の状況を鑑みれば、広く被災地域でない場所でも罪を問わないと発表してしまい、警察にも通達を出してしまつた。おかげで事故を起こした原発に近い地域では要介護者を置いたまま施設職員が立ち去つたり、家族への介護をやめる例が散見されています。この状況でできない、というのは仕方ないかもしれないが、それをおおっぴらに許すと発表までしてしまう。そうしておいて他方で国民へは食料には余裕があり、来年再来年と続けて凶作にならない限り、また輸入が一切ない場合でもギリギリは、やっていけるから安心するよう言っています。そして政府の立場も見殺しを推奨している

のではなく黙認するという立場です」

「二種の虐殺ですよ！ しかも政府は手を汚さずにやっている！ 不作為の虐殺だ！」

「究極の自己責任社会とでも言うような状況ですね。家族を助けたければ助ければいいし、助けたくなければ見捨ててもいい。どちらでも、ご自由にというわけだ。この件以前から、私は芹沢さんを見て感じていたのですがね、彼女は人間をヒト、生物の一種でしかない、と見る傾向が強いようです。神も仏もない、人道も倫理も、すべてヒトの集団が生き残るための道具でしかなく、最高の価値は人類の存続、民族の繁栄、群れとしてのヒトの安定的生存といった観点で物事を判断しているように感じますよ」

「次に韓国から入ってきている情報ですが、ご存じの通り韓国は同時に5カ所も核攻撃を受け、まさに大混乱で今朝方は一部で韓国軍が北朝鮮軍を押し返したという情報も入ってきましたが、命からがら日本へ渡ろうと難民となって漁船などに乗ってくる人々がいるそうです。この件を日本政府は、ずっと発表せずにいましたが、韓国側から漁船に乗って助けを求める人々が日本の船によって放水などを受けている映像が入ってきています」

映像が切り替わり、漁船に乗っていて防水のスマートフォンなどで撮られた動画が流れる。立錐の余地もないほど人々が乗った漁船へ海上保安庁の巡視船が放水したり、警告を無視して排他的経済水域へ侵入した船へ威嚇射撃がおこなわれている動画を、諦めて引き返した避難民がインターネットへ流したものだ。韓国側へ帰港してから船体に銃弾が当たり穴が開いている部分があることなどもカメラに向かって訴えている。転覆して沈没した船もあると主張していた。

「…ぐすつ…」

見ていてヨンソンミヨらは泣けてきた。動画に入っている叫び声などは、すべて韓国語なので意味はわかるし、何より自分も同じ境遇に昨日までいた。避難船に乗って日本へ来るまでも大変だったけれど、避難船に乗るまでも苦難と恐怖の連続だった。あの核ミサイルに

よる攻撃があつた夜、もともと鮎美に利用されなくてもユーチューブでのアイドルとして注目されたかつたので風呂上がりメイク動画を作っていた。つけまつげによるメイクのコツをカメラに向かって紹介しているとき、遠くで爆発音がして窓ガラスが揺れた。ガス爆発か交通事故でもあつたのかと思ひ、日本の津波同様に自分には関係ないことだと、ベッドへ寝転がってスマートフォンで情報を見ていたら、北朝鮮からの核ミサイル攻撃だと知り、ゾツとした。こういうときに、どうするべきかは学校でも習つたので必要な物が入っているリュックをもつて、とにかく南へ逃げた。道路は大渋滞で、徒歩しか手段がなかつた。徒歩でさえ人が道路に溢れ、ガソリンが切れた車が邪魔をするので、なかなか進めず、一部では橋などが爆破により落ちていて、大きく迂回したり引き返しをしなければならず、ときには人々が争ひ、ケンカをしたり、ひどいと殺し合いをしていた。

「…うう…」

日本語のサイトをスマートフォンで見っていた者が横から覗いた者に日本人だと疑われて殴り殺されるのも見た。殺した後で持ち物を奪うと、たしかに日本のパスポートが出てきたけれど、観光で韓国にきていた在日韓国人だった。同胞を殺してしまったという後悔よりも、今度は、そのパスポートを巡って奪い合いが起きた。なんとなく日本が受け入れてくれない予感、すでにあつたので、日本のパスポートを持っていれば入国できるかもしれないという期待は、奪い合いをするのに十分な理由だった。ヨンソンミヨは奪い合いには加わらず先を急いだけれど、だんだんとリュックに入れていた食料や水も無くなってくるし、道路には持病で倒れた人が踏み潰されていたり、人々の糞尿が落ちていた。最初のうちはコンビニのトイレも機能したけれど、すぐに限界がくるし、行列に並ぶより早く逃げようと、歩きながら小便を垂らしている人もいた。けれど、ヨンソンミヨは女子として最低でも周囲から見えないところを探して用を足した。逃げる途中、急に道路が歩きやすくなる地域があつた。ガソリンの切れた車が放置されずに撤去されていて避難しやすかつたし、軍の秩序もとれていて反撃の準備をしているようで頼もしかつた。指揮していた

男性士官の横を歩いて通り過ぎたとき、チラリと見た階級章は中領のもので、顔を見たはずなのに記憶は曖昧になってきているけれど、もししたら趙舜臣だったかもしれない。彼は避難民の誘導もしてくれたし、一人につき一本の飲料水もくれた。その水がなければ釜山まで何万人という人が倒れていたかもしれない。ようやく到着した釜山で、そこに留まる人と日本へ渡る人に分かれ、ヨンソンミヨは渡れたけれど、沈没していたら泳げないので死んでいたと思う。映像を見ると、記憶が蘇ってきて胸が痛かった。ワンコも同情して泣いてくれる。

「ひどい……こんな風に追い返して……せつかく逃げてきたのに……」

テレビの司会者が言う。

「この件について日本政府は質問を受け付けていませんでしたが、これらの映像によって石永官房長官が渋々、そういった避難船があることは認識しているが、尖閣諸島での爆破テロの件もあり、確実に安全と確かめられるような船でない限り、入国させることは無い、避難民に見えても武装している可能性はある。これからも排他的経済水域に入ってくる船は原則的に受け付けない。と答えています。どうでしょう？」

「人道的には大きな問題がありますね。どう見ても避難民ですし、確実に安全という証明を難民にしろ、というのは無理です。無理を承知で言っているのです。尖閣諸島の件を口実に利用している感さえあります。難民は保護し、受け入れていくべきでしょう」

コメンテーターの発言に、視聴していた島民の一人がスクリーンに向かって焼酎を呑みながら野次を飛ばす。

「そんな余裕が今の日本にあるか！ 追い返して正解じゃ！ 沈没させられ！」

「……………」

ワンコたちが黙っていると、島民は失言に気づいた。今は身内だけでなく韓国人が島を訪れていることを思い出して謝る。

「いや、あんたらは、ええんじゃぞ。いてくれるの。すまんの、あんた

らに言うたんとちやうしの」

訛りが強くてヨンソンミヨには理解できなかったけれど雰囲気は伝わったし、ワンコは意味も理解できているので日本的な曖昧さで答える。

「いえ、どうも…」

とりあえず、こう言うと、その場はおさまるという便利な日本語なので言っておいた。周りにいる日本人たちから、すでに入国している外国人は笑顔で受け入れるけれど、これ以上は来るな、という空気を感ずる。和をもつて尊しとする、とは近くにいる人間のことだけなのだろうと思う。テレビは難民の様子を紹介した次には、趙舜臣を紹介する。まだ、断片的な情報しか入ってきていないけれど、やはり父親が李舜臣にあやかつて名付けたことや、優秀な士官であること、中領が中佐にあたること等を彼が配信した映像とともに流した。見ていてヨンソンミヨは違和感を覚えて、ワンコに韓国語で問う、まるで自国の英雄のように趙舜臣が紹介されていて、いくら韓国軍が勝つてくれる方が日本にもありがたいとしても、難民を追い返していたときと、態度が違いすぎる、日本人は何を考えているのか、と問うた。ワンコは少し考えて答え、政府と国民の大半は韓国人に冷たいけれど、マスコミの大半と国民の一部は韓国人に好意的だ、と教えておいた。テレビが次にミクドナルド・トランプを紹介し始めた。彼女が14歳の頃からアイドルと経営学を両立して進め、世界的なファーストフード店の後継者であることや、米国人の支持を集めていることを報道したけれど、白人中心主義的であることなどは報道されなかった。「アユミンVSミクドなのに、なんで、こういう感じに紹介するかなあ……」

鐘留も不満を感じたし、玄次郎も同様だった。

「前からマスコミは自虐的だからな。外国を持ち上げるんだ。NHKでさえ、その傾向があるし、民放になると、もっと、ひどい。どこの国のテレビ局かと思うほど」

「いつそアユミンが粛清しちやえばいいのにね」

「それをすると、引き返すことができなくなるからなあ……」

再びテレビが憲法の話をする。

「芹沢が言ってるのか、石永がやらせてるのか、平和憲法が無効だ、なんていうのは、まったくの空論ですよ。いいですか、国民のみなさん、憲法は、たしかに、あります！ 平和憲法は日本の宝、しっかりと存在しているんですよ！ 政府に騙されてはいけません、平和憲法は有効です！ ずっと存在しつづけます！」

鐘留が一口だけ犬の肉を食べてみてから言う。

「なんか法律と宗教って、どっか似てるね？ なんていうか……うん……」

「物理的には存在していないのに、あると信じれば、あるような感じなのが、だろ。神も憲法も物理的存在ではないからな。神は死んだ、といえれば存在しないし、憲法は無効、といってしまうえば存在しなくなってしまう」

「あ、そうそう、そんな感じ！ やっぱ、玄次郎はアユミンのパパだねえ」

「オレは建築家だからな、物理学と法学の両方に縛られるから感じるんだ。建築法規は、ちよいちよい変わるけど、物理法則は不変だし。どんなに多数決をやっても自然の法則は変えられない」

「ふくん……」

「あとイスラム圏では、法律と宗教は不可分だからなあ。政教分離は人類の課題だ」

まだテレビが鮎美と石永への誹謗を続ける。

「これは未確認情報なんですがね、芹沢の秘書で結婚相手だった牧田という女はドイツで殺人犯として手配されているんですよ。それどころか、国内でも殺人を犯している可能性がある。彼女を逮捕しようとした刑事が何人も犠牲になったという話もあって、保育園か、幼稚園を占拠して子供たちを惨殺したと言われている。証言する少女も、いるんですよ」

「……アユミン……」

鐘留も、その情報はネット上でつかんでいた。東京へ巨大地震が襲いかかる直前、詩織のマンションで爆発があり、現場が騒然となって

いるのが、ツイッターなどであげられていたし、列車内で赤ん坊を人質にして刑事に向けている動画なども流れている。当時の関係者は、ほぼ全員が津波で亡くなっているけれど、唯一の生き残りである幼女がいて、彼女の下の名は笑美（えみ）といい、詩織に解放された直後、身体的な傷は無かったけれど、PTSDなどを懸念され、すぐさまドクターヘリに乗せられていたので助かっている。その子が証言している動画も流れていたし、鐘留も見た。詩織からの最期のメールでは冤罪を訴えていたけれど、前後の状況と動画を総合すると、白とは思えず黒に感じる。それを調べはしたけれど、まだ鮎美には伝えていない。

「快樂殺人などを厳罰に処すると主張する本人の配偶者が、こういうわけですし、本人も同性愛者だ」

「だから、なんだッ！」

珍しく玄次郎が感情的に吐き捨てた。見ていたヨンソンミヨは玄次郎が怒っている理由がわからないのでワンコに問うと、玄次郎が日本の女性総理の父親だと教えてもらった。かなり驚く。貧しそうでもないけれど、金持ちそうでもないし、島民に対しても丁寧に接していて、偉ぶった感じがしないので総理大臣の父親と言われると、かなり驚きだった。テレビが石永のことについて報じる。

「これも未確認情報ですが、北朝鮮からの核ミサイル攻撃を受けて、石永が秘かにロケットと核物質を用意しているという話もあるんです。もうアメリカからの報復あったのに、それでも用意するという大義名分は無いはずで、なにより国民への説明もなくやっていいことではない。お昼にも沖縄沖で再び中国軍と交戦したのではないかと言われていますが、どのくらいの被害があったのか、公表しないし、基地に戻ってきた戦闘機の状態を撮影しようとする勇氣あるカメラマンが滑走路に入ろうとしたところ、警備していた陸自の隊員に射殺されるという事件がありました。これについて政府はテキスト情報で公表したのみです」

「アホね、アホが一匹死んだ」

「ああ、この状況下で基地に侵入するとか、アホとしか言い様がない

な。戦場カメラマンのつもりだったのか……撃った隊員は後味が悪くて気の毒にな……」

その後も鮎美と石永への中傷報道が続き、逆に趙舜臣とミクドナルドを持ち上げているので、ヨンソンミヨも見ていて不思議だった。そうして、いよいよ鮎美とミクドナルドの公開対談が始まる15分前になって、急なニュースが入ってくる。

「あ、今、アメリカ政府より緊急の情報配信がありましたので映像を出します」

映像が切り替わると、ホワイトハウスにいるオパマ大統領が映った。通訳の声も入り、事前に用意していた映像のようで訳も正確だった。

「世界のみなさん、とくに日本の人々に伝えます。現在、ミクドナルド・トランプという女性が自分こそがアメリカ大統領であると喧伝しております。ですが、真実、アメリカの大統領であるのは私フセイン・オパマ2世です。ミクドナルドは、いくつかの州で不正な選挙を行い、大統領に選出されたとしていますが、まったく法的根拠もなく、また投票したのも人種差別意識をもつ人々だけです。非常に残念なことに、アメリカ軍のごく一部が彼女を支持しており、彼女は大統領権限もないまま、弾道弾を発射し、北朝鮮の人々を大量虐殺しています。たしかに、先制的に核兵器を使ったのは北朝鮮の指導者ですし、これは許されざる暴挙です。けれど、アメリカ軍の一部が私の指揮下を離れ、核兵器を所持して動いていることは非常に危険なことです。このままでは彼らはテロリストと変わらなくなってしまう。アメリカ軍同士が砲火を交えることのないよう、これからも根気よく説得していきますが、日本と韓国の人々、アユミさんと趙舜臣中佐たちに伝えておきます。ミクドナルドはアメリカの代表ではありません。彼女と交渉することはテロリストと交渉するのと同義ですし、まったくもって無効であり、アメリカ政府とは何の関係もありません。どうか、テロリストを利用するようなことがないよう正しく行動してください」

映像が終わると、テレビの司会者たちも、玄次郎たちも考え込む。そもそも日本の状況でも正確には把握していない状況なのでアメリ

カ国内で何が起こっているのか、よく知らない。日本のように原発事故が起こり、津波での被害も大きく、さらに人種差別意識と銃社会であったために騒乱が起こっているらしいとはインターネットの英語情報で得られるけれど、なにが正確な情報で、なにがデマなのか、誇張されているのか、まったくの嘘なのか、無数の情報があつてわからない。それは、きつと鮎美たち日本政府も同じだろうと思つてうちに定刻になった。テレビ画面が切り替わり、右半分に鮎美、左半分にミクドナルドが映る。

「鮎美……」

「アユミン……なんか暗い感じ……」

右半分の鮎美は薄暗い地下室にいるようでライトも一つだけ、服装は普段通りの制服で一応は今でも議員バッチを着けているし、レインボーブリッジとブルーリボンのバッチも着けていた。ただ、顔に影ができるほど室内が暗い。国民全体へ節電も呼びかけているので、自分たちが多くの照明を使うわけにもいかないというのは理解できるけれど、それにしても暗かった。それでもメイクは美しく仕上げている髪も整えているし、椅子に座つて机に向かい、上半身だけを映している。

「ミクドちゃんは、あいかわず派手だねえ」

たいしてミクドナルドは大量の照明を使い、自分を明るく照らしているし、丸い椅子に腰かけた姿を足元から全身を撮している。美しい脚のラインやミニスカートが照明で輝いているし、肩や腋の出た鮎美好みのノースリーブも、いつも通りでツインテールも完璧に決まっている。見事に二人は暗明にわかれていて日本の視聴者は不安になった。

「Hello! Ayumi」

「はい、ミクドナルドさん、こんにちは」

二人とも平凡な挨拶から始めた。どちらも母語を話し、鮎美には静江がついて同時通訳しているし、ミクドナルドにも日本語に堪能なスタッフがついている様子だった。ミクドナルドがアメリカ人らしい大袈裟なジェスチャーで両手をあげながら言う。

「オパマが私をテロリストだなんて言ったけれど、まったくの嘘よ。私は正当な選挙で7つの州からアメリカ大統領として支持されているわ。そして、アメリカ軍の核兵器を所持している部隊は大半が私の指揮下にあるの。真実、私がアメリカ大統領になっているわ。彼は自分が罷免されたのを認めたくないだけよ」

「そうですか……」

鮎美も玄次郎たちと同じで、何が真実か計りかねている。ミクドナルドが追加して言うてくる。

「北朝鮮へ正義の鉄槌をくだしたのも私よ。それが証拠になると思わない？」

「……はい……そういう面もあるかと……感じます」

鮎美は歯切れが悪い。何しろ、オパマが大統領なのか、ミクドナルドが大統領なのか、どうにも判然としないので答えに困っている。ミクドナルドは、もう自分が大統領という前提で話を進める。

「アユミ、日本の様子はどうかしら？」

「なんとか立ち直るよう努力しているところです」

「そう。私のおかげで北朝鮮の脅威も取り除かれたわよね？」

「はい、かなり……」

アメリカによる核報復後、演説中だった金正雄は顔を見せないし、金正陽は開戦直後の演説以来、顔を見せておらず70歳という年齢から死亡説と体調不良説があるし、多少とも健在であるなら、今頃は顔を見せているはずだった。

「それで、どうかしら？ 私提案したN友の会へ、アユミが一番に入ってくれと信じてるのよ。もちろん、アユミが考えた連合インフレ税プランへも私たちは参加するわ。だから、N友の会へ入会してくれるわよね、国として」

「……検討中です」

鮎美は日本人らしく答え、ミクドナルドはアメリカ人らしく迫る。

「日本と韓国は最低でも、あと4発、報復する権利があると思うわ。撃たれた合計は10発で迎撃した2発はともかく札幌と那須でも死傷

者はいるのよね？」

「はい。正確な数は、まだ報告待ちですが山間部とはいえ、人は住んでいましたから」

「なら、あと6発とを考えても不当じゃないわ」

「……………6発もですか……………」

「次のターゲットは、どこにする？ 北部にある発射基地でもいいし、軍港でもいいわ。どこにするか考えてくれている？」

「いえ……………日本が市街地で、くらったんは1発ですし……………北朝鮮の指導者が亡くなっているなら、今後の情勢をみて考える必要もでてきますし。また、韓国の指導者とは連絡が取れず、意志決定も難しいようですから」

「韓国は、もう趙舜臣が指導者になっていくと私は見ているわ」

「……………軍事政権ですか……………」

「民衆の人気をえて、正当に就任するという推測よ」

「まあ……………そんな気配はありますね……………」

鐘留がコーラを飲みつつ、つぶやく。

「なんとなくアユミン押されてる？」

「いや、ここで、じゃあ、次のターゲットは、あそこと、あそこで、よろしく頼みますわ、とか言い出す娘であつては欲しくないな」

「だよね、ミクドちゃん、核兵器による報復を売り込みただけって感じ。ごいっしょに、ポテトはどうですか？ つて感じで核ミサイルのバリューセット盛りそう」

雑談しているうちにもミクドナルドは鮎美へ答えを求める。

「2発目は、どこにする？」

「……………しばらく検討します」

「そう、決まったら、すぐ連絡しようだね。じゃあ、N友の会の話をしましょう。もちろん、入会してくれるわよね？」

「……………その前に日米同盟がありましたやん。あれは、どうなっているんですか？」

「アユミンが切り返したよ ちよい関西弁で」

「そうね、その話も大切ね。私はオパマが撤退させた決断を支持して

るわ。そして私の政権では、もうアメリカ兵を遠く海の向こうへ派遣することはしません。そもそも、どうして私たちのパパやボーイフレンドが、あなたたちの平和を守らなければならぬの？ あなたたちの平和は、あなたたち自身で守るべきものじゃないの？」

「……はい、そう思います」

「なら、答えは簡単よね。もうアメリカ兵に血を流させない、これは私の公約でもあるのよ。みんな、もう、うんざり。だから私が支持された。でも、核兵器だけは別。どんな国も先制的に核を使ったときアメリカによる報復を受けるわ。もうアメリカ兵を海の向こうへ出すことはしないけれど、ミサイルは地球のどこへでも届ける。きつと、こう宣言しておけば、もう北朝鮮みたいなことはしないと思うし、私のN友の会が拡がれば、だんだん核軍縮にもなるはず、だから入会してね？」

「……前向きに検討します」

「うーん……せっかく、私たちが顔を合わせて話し合いをしているのを世界中に見せているのは、どういう効果を狙ったものなのか、考えてくれないかしら？」

「それは、わかりますが、正直……オパマ大統領の任期中ですよね、まだ？」

「私は7つの州で大統領として認められているし、軍の支持も強く集めているわ」

「……」

「私のことより、あなたは日本の核の傘について考えるべきじゃないの？」

「それは……まあ、そうですが……」

「こうしている間にも、日本へミサイルが飛んでくるかもしれないのよ」

「……」

「私たちも慈善事業としてやっているわけではないし、核兵器を開発し維持するにも、大きな予算を必要とするわ。その一部を、恩恵を受ける国が支払うのは当然ではないの？」

「……ミクドナルドさんの、おっしゃるN友の会という提案は、とても興味深いものです」

「ありがとう」

「ただ、今夜、今すぐ決めるといふのは、やはり難しい部分がありますので、しばらく様子を見たいと考えます」

「……。それは、私が大統領であるということ信用していないから？」

「………そういう部分も……あります」

「いいわ。今すぐ北朝鮮のどこへでも核ミサイルを撃ち込んで証明してあげます」

「いえー！ それは、ちょっと待ってくださいー！」

「じゃあ、信じてくれるのね？」

「……ええ……まあ……では、信じた上で、今少し時間をいただけますか？ せめて数日」

「……。いいわ。けれど、すでに撃ち込んだ1発目の代金を日本は私たちに支払うべきです。これは、すぐに」

「すぐに……」

「すでに商品を受け取っているのですから、当然です」

「商品で……」

「もし、この支払いが行われない場合、アメリカは日本への核の傘の提供を永遠にしません」

「………」

「明日、5億ドルが支払われることを求めます」

「明日で………5億ドル………360億円………」

「日本の財政規模を考えれば、簡単なはずです」

「まあ、そうですが、まだ東京で金庫の発掘が進んでない段階なんですよ。これが開けば、それくらい払えると思いますよ、今は、ちょっと」

「では、明日中に支払えるのは、いくら？」

「………財務省も、いっぱい、いっぱい、ギリギリなんですわ」

「日本は、いつも答えを先延ばしにしますが、そういう態度が福岡の悲

劇を生んだと思いませんか？　まだ、北朝鮮に発射基地は残っていますよ」

「……………」

「もう一度、言いますが、支払いがない場合、アメリカは日本へ核の傘を永遠に提供しなくなります。これが、何を意味するか18歳のお嬢さんにもわかるはずですよ」

「……………」

ずっと背筋を伸ばして話していた鮎美が椅子の背もたれへと少し身体を傾けて言う。

「同盟を組む相手というのは、やはり、しっかりと吟味したいものです。オパマ氏のこと也是如此ですし、実はロシアからは対等な同盟を持ちかけられていますから」

「……………ロシアから？」

一瞬、明らかに驚いたという感じでミクドナルドの眉が動いたけれど、すぐに平静を装う。鮎美は一応は日米同盟は対等という名目だったので、フーチンが持ちかけたアメリカと同じ条件でと言った同盟も、そうであるはず、と落ち着いて言う。きつと、この対談はフーチンも胡錦燈も見ていると感じる。そう感じると、彼らに比べて、まだ39歳の女性であるミクドナルドは、それほど圧迫感を覚えない相手だった。

「はい、ロシアから日本を核の脅威から守るという提案がありました。返答を待っていてくださる状態です」

「……………ロシアが、どういう国か、アユミは若いから知らないだけよ」

「いいところも多い国だと聴いています」

「だとしても、今までのアメリカとの関係を考えると、ありえない選択じゃない？」

「困ったときに、さっと引き上げていく友人との関係は考え直す時期かもしれません」

「……………あなたは世界を独裁者の王国にする気なのかしら？」

「いいえ。平和で豊かな世界を望みます。自由な競争がありつつ、公正公平で、過度な格差のない社会を」

「ここで経済思想を論じても始まらないわねッ。私も同じ考えよ。けれど、今は1発目の代金について話し合うべきよ」

「……」

鮎美の瞳が少し動いた。その動き方が同性の腋を見ているときだと鐘留は、よく知っているし、左半分に映るミクドナルドの両腋が汗で濡れて、その滴が垂れている。照明が明るいので着目すると、よくわかった。鮎美が唇を舌先で舐めてから言う。

「支払うとしても韓国と折半で2億5000万ドルが妥当やと思いますわ」

「……ええ、そうね。それでいいから、明日、必ず支払うように」
「……」

鮎美が左手をあげ、横髪を耳にかけた。そうするときが娘が考え事をするときだと玄次郎は10年前から知っているし、玄次郎の目から見てもミクドナルドが財政的に逼迫しているのだとわかった。思い返してみるとファーストフード事業は数年前から赤字に転落したままだし、その赤字を解消しようと手を出した不動産事業では失敗を続けている。それを挽回しようとアイドルとしての知名度と白人中心主義的な政治信条を活かして大統領選挙に挑戦するはずだったのに、突然の巨大地震で大きく前倒しして強引に大統領を名乗っている彼女が連邦準備銀行などには手が出せないでいるのは想像がつくし、アメリカ軍の支持を集めているとしても、兵士への給料を支払うのは正当な政府の財務部門のはずで、ミクドナルドの指揮下にある兵士の給与をオパマが支払い認可するとは思えない。鮎美も先日、金銭に困った経験があるので、もう嗅ぎ取っていた。いくら白人の支持を集めていても銀行は、よりシビアに貸し付け相手のことを見てくる。法的に唯一正統だった芹沢政権に対してさえ、協力する銀行と協力しない銀行があった。きつとミクドナルドの台所事情も明日明後日が山なのだ、腋汗の量で悟っている。

「ミクドナルドさん、5分ほど考えさせてください」

「……ええ、どうぞ」

数日は待てなくても数分ならミクドナルドも待てる。また鮎美は

横髪を耳にかける動作をした。そうして、ミクドナルドに協力した場合と、しない場合の結果を考える。おそらく法的な正当性はオパマ大統領にあり、ミクドナルドは白人の支持を武器に、軍の半分程度を指揮下においていると感じる。それが財政的に破綻すると、次第にミクドナルド政権が萎んでいくのは予想できる。逆にミクドナルドへ協力すると、アメリカは二つ以上に割れたままかもしれない。そう思いつき、鮎美は決めた。

「やはり北朝鮮の核の脅威は感じます。これ以上の核報復は今のところ望みませんが、おっしゃる通り1発目の恩義には相応の返礼をしたと思います。ただ、私の政権も現金が不足しております。ギリギリの状態なので、ミクドナルド政権が銀行から借金をするのに日本が保証人になるという形は、どうでしょうか？ 金利5%まで、上限3億ドル。これで米国内の銀行と話をつけてもらえませんか？ 少なくとも東京の金庫が開けば、債務不履行には絶対になりません」

「……………」
今度はミクドナルドが考え込む。経営者として銀行の反応を予想し、そして笑顔になった。

「いいわ、それで」

思わず握手をしようと手を出したけれど、お互い、画面の向こうだと気づいて肩をすくめるだけだった。対談が終わり、鐘留が玄次郎へ問う。

「…………日本が借金の保証人になって…………アユミンの負け？ ミサイル押し売りされた？」

「いいや、あいつ……………」

韓国と北朝鮮、中国と台湾みたいにアメリカを割り続ける気だ、と玄次郎は娘の真意に気づいていたけれど、口にはしなかった。

3月26日 草と虫

復和元年3月26日土曜朝、鮎美は京都にいる義仁へ電話をかけていた。昨夜のミクドナルドとの対談は義仁も見ていたけれど、他の政治的決定についても、これからは2、3日に一度くらい報告してほしいと言われているので、それを実行している。

「鮎美さんがお疲れにならないか、心配です。大丈夫ですか？」

「うちは、まだ大丈夫ですよ」

会話していると、やはり義仁からは好意を感じる。男子からの好意には鈍い鮎美でも、そうだと知っていればわかりやすいし、自惚れでもなく実感し、まだ15歳でしかない異性愛者からの好意を、どう扱うか、相手が世界で唯一、自分を罷免できる人間であるだけに戸惑っていた。

「ほな、うちは閣議の準備がありますんで」

報告すべきことを報告し、あまり素っ気なくならないように電話を終えた。鮎美が電話を終えると、鷹姫と里華、麻衣子が朝食の準備をしてくれる。準備が終わると鷹姫だけは貴賓室を出て廊下の隅で義仁へ電話をかけた。

「おはようございます。芹沢鮎美総理大臣の首席秘書官、宮本鷹姫です」

「おはよう、宮本さん。わざわざ、ありがとうございます」

「いえ、それで、芹沢総理のご反応は、どうでしょうか？」

「うん、あなたの言う通り、彼女への呼びかけ方を、鮎美さん、と変えてみていいかな、と訊いて、いいと言ってくれたので、そうしてみたいよ」

「それは、よかったです。呼びかけ方は男女交際の第一歩だと、私へ恋愛を指南してくれている者も言っておりましたから」

鷹姫は麻衣子から男女の恋愛について教わりながら、鮎美と義仁の仲をすすめるようとしていた。鮎美に位人臣を極めた総理大臣になつてほしいと心から想っている。もし鮎美が総理大臣のまま義仁と結

婚することがあれば、かの道鏡や日野富子、北条政子、淀君らもなしえなかった日本の政治的頂点に立つことになる、誇らしく想っている。麻衣子は普通の恋愛として、とりあえず呼び方から変えてみたら、と軽い気持ちでアドバイスしていた。今朝の電話で若干の戦果をえた義仁だったが、やや気落ちした声で言う。

「私にとって恋をしたのは初めてのことですが、このようなときに、しかも大切な仕事をしている人に懸想するなど、のちのち愚かな天皇であつた回顧されるでしょうね」

まだ15歳であっても、天皇として、どうあるべきかを考えている義仁が自嘲気味になっているので鷹姫は進言する。

「いいえ、おそれながら、御身のお立場で、もつとも重要なことは皇統の存続です。その意味で、なすべきことをなさっているのです。どうぞ、誇りに思ってください」

「……………宮本さんも、面白い人だね。たしかに、理屈の上で、私の立場では、その通りかもしれないけれど、このようなときに恋へうつつを抜かしたと言わず、そういう風に誉めてくれる感覚は現代風でも古風でもないのに真理の一面ではあつて面白いよ」

義仁は少し笑うと、ありがとう、と言つて電話を切つた。鷹姫は貴賓室に戻る。鮎美は女性の勘で鷹姫が誰と電話していたのか察していたけれど、何も言わずに制服を整えると、食べ残した朝食を鷹姫にすすめる。ハムエッグと焼き鮭が半分ずつと、パン一つがトレイに残っている。

「鷹姫、食べておいて」

「せっかくですが、私は遠慮します」

鷹姫はトレイの方を見ないようにして答えた。

「……………あんた、まだ草と虫を食べてるの？」

「はい」

「……………。それでは、栄養が足りんかもしれないよ？」

「いえ、しばらくは大丈夫だと言われています」

「それでも……………もつたいないし…」

鮎美は自分のウエストを掴む。今は適正体重を維持しているので、

朝から軍人向けの高カロリーなメニューを食べきりたくない。

「この御時世、まさか捨てるわけにも……石原はん、食べてくれる？」

「人の食べ残しを食べる趣味はないわ」

「……。ほな、大浦はんは嫌？」

「嫌とか以前に、私は食堂でガッツリ食べた直後なので遠慮しますよ」

「ほな、どうしよ。あ、鷹姫、あいつにも草と虫しか与えてへんて言うたよね？」

「月谷ですか？」

「うん」

「はい。私と同じ物を与えています」

「ほな、あいつに喰わせといて」

「……。わかりました」

捨てるよりはいいと、鷹姫は閣議の前に陽湖を拘禁している部屋に行く。部屋は基地建物の最上階にある研修室に付属した準備室で、2畳もない広さで、もともと使われていなかったし、今後も使う予定がないので、とりあえず陽湖を入れていた。部屋には窓があるけれど、核ミサイル攻撃に備えた鉄板は準備していないし、施錠していないので陽湖が、その気になれば飛び降り自殺することは可能だった。鷹姫が食事トレーをもって部屋に入ると、陽湖はハムエッグと鮭の匂いに反応して、お腹を鳴らした。陽湖のそばにはバケツに盛られた草と虫を湯がいた物が残っている。鷹姫の朝食と同じ物だったけれど、鷹姫は食器で食べている。草と虫がバケツに入っていると、どう見ても食べ物には見えなかった。しかも準備室にトイレはないので、食べた物が出てくるときは同じバケツにするよう言いつけてあり、草と虫を入れる前には洗ってもらえるものの刑務所以下の扱いだった。

「月谷。芹沢総理の慈悲です。その草と虫を食べれば、これを与えます」

「こんなの食べられませんよ！　お願いです！　もう許してください！　私が悪かったです！　あのときは酔ってたんです。どうか、この

通り！」

陽湖は土下座して貯めていた小便を垂らした。その姿を鷹姫は汚物を見るように見ながら言う。

「早く食べきりなさい」

「……うう……」

「冷めると余計に不味くなりますよ」

「本当にシスター鷹姫も、これを食べているのですか？」

「はい」

「……」

あまり嘘をつくタイプではないと陽湖も知っている。鷹姫は食事トレーを床に置いた。鷹姫のお腹も鳴る。お腹いっぱい草と虫を食べたばかりだったけれど、最低限の塩分でしか味付けされていないし、牛のように大量に食べないとカロリーは不足しやすい。草と虫に比べて、ハムエッグと鮭とパンは魅力的すぎて鷹姫は見ないようになっているのに唾液が口の中に湧いて何度も飲み込んだ。その様子を見ると陽湖も鷹姫が嘘をついていないと感じる。

「シスター鷹姫も何か失敗して罰を受けているのですか？」

「……あなたと、いっしょにしないでください。私は自分が言い出したことの責任を自分にかしているだけです」

「言い出したこと？」

「鮎美へ男性と結婚するようお願いしています」

「っ、それはっ、素晴らしいことじゃないですか?!」

「いいえ、同性愛者にとつて、それは、とてもつらいことだそうなんです。言うなれば、一生涯、美味しい食事を与えられないのと同じだと」

「……もしかして……それで？」

「はい。他人に苦行をもとめておいて、自分が快樂にふけるわけにはいきませんから」

「……」

「早く食べなさい。私は忙しいのです」

「……うう……」

とても嫌だったけれど、陽湖は草と虫を口に入れ、飲み込んだ。え

ぐいし不味いし気持ち悪い。それでも、すべて食用可能なものだったので胃に入ると、吐き気まではしない。なんとか食べ終えると食事トレーへ手を伸ばした。

「ああ……美味しい……」

冷めたハムエッグが感動的に美味しいし、焼き鮭が香ばしくて涙が出る。

クウウ…

また、鷹姫のお腹が鳴った。気がつくまで食べている陽湖の口元をジツと見ていたので視線を背ける。陽湖がパンに手を伸ばして、半分は裂いた。

「私には主イエスのようにパンを増やすことはできませんが、分かち合うことはできます。半分、どうぞ」

「けっこうです！ さつさと食べなさい！」

基地には十分な食料があるので、どうにも食べたくなれば食堂へ行けば食べられる。あえて我慢しているのに、見せられると余計につらいので鷹姫は苛立って言い放った。そして食事トレーを回収して食堂に返却すると、閣議に参加する。やはり閣議は国内情勢より海外に目が向けられていて、朝鮮半島では韓国軍がソウルを取り戻し、さらに平壤へ向かって進軍していた。この報告を受けて石永が言う。

「案外、あっさりだな。まあ、前線の主力と、後方の中枢が同時に叩かれれば、こんなものかもな。オレら日本だって今、前線に出している艦隊主力と、ここに地下室まで破壊する核ミサイルが落ちたら似たようなものかもしれない」

司令室にいる畑母神がモニター越しに言ってくる。

「たしかに、そうなれば、我々は何の尽力もできないが、国内各地に残った陸軍は頑張ってくれるだろう。私が死んだとき、次に誰が実戦指揮をとるか、すべて順位を決めて表にしてある。そちらにも表を送らせよう。芹沢総理に相談なく勝手に決めてしまったが、この表にある者たちは、ふさわしい者を選んでいく。信じてほしい」

「はい。畑母神先生の選抜やったら、うちに異論はありませんわ。異論を唱える材料そのものが無いですし」

すぐに鮎美たちの手元にも畑母神が作らせた表が来たけれど、階級や経歴、人物で選ばれているものの、それがわかるのは畑母神だけで他の閣僚たちには黙って頷くことしかできない。鈴木が言う。

「やはり韓国は趙舜臣をリーダーとして動いているようですね。非常に戦果をおさめた指揮官が台頭するのは当然といえば、当然ですが。彼は日本に対しては、どのような態度で接してくるでしょうね？」

「どうせ、反日だろ」

石永が言い、鮎美が付け加える。

「軍人がトップちゅーのは、ちよい危なそうやし、ワンコちゃんか、ヨンソンミヨはんを押し立てて民主的にトップについてももらえるよう誘導できんやろか？」

「それは国際社会から、すぐに傀儡政権だつて見抜かれるぞ。満州国を繰り返す気か？」

「あ、そういや、そうやった」

鮎美が諦めたのに鷹姫は挙手する。

「鷹姫、何か案があるの？」

「満州国の失敗をふまえ、次こそ成功するように注意を払って実行しては、どうでしょうか？」

「失敗は成功のもとてか」

「好戦的だなあ……また、朝鮮半島を足がかりに大陸へ出るとか言うなよ」

「大陸へ出ないまでも、朝鮮半島の情勢、ことに核ミサイル発射基地は問題です」

「それは、そうだが……趙舜臣が、なんとかしてくれそうな勢いだし。援助でもしておくか……いや、それは戦争協力になるから、まだ北朝鮮に発射能力があるかもしれないうちは、やめておいて……能登で保護している難民たちに本国の勝利を伝えて、帰ってもらおうか。ヨンソンミヨらも利用しそこねて余計なトラブルの種になる前に、帰ってもらうのが一番じゃないか？」

「そやね、こうも簡単に韓国軍が押し返してくれると思わんかったし、

ミクドはんの核ミサイル1発には、まあ3億ドルの保証人になる価値はあったかもしれんね」

一昨日までの韓国劣勢が挽回されたので閣議の雰囲気も、やや明るくなっていくけれど、別の問題も生じていた。久野が責任を感じているので言う。

「私が推して芹沢総理の秘書にいただいた牧田詩織さんの件ですが、国民の間でも、かなり話題になっていくようです。ドイツに問い合わせたところ、ICPO経由で逮捕状を出していたのは事実のようで、申し訳ない」

「……………」

鮎美は黙って目前にあった紅茶を飲む。昨夜まではミクドナルドとの対談に備えて彼女のことを予習したりと忙しかつたけれど、今朝になって世間で詩織のことが連続殺人犯ではないかと騒がれていると知り、とても不快だった。鐘留からも連絡があつて、シヨックを受けないように聴いてと前置きがあつてから、事実であるか、事実でないとすれば、かなり巧妙すぎるほど巧妙に落とし入れられている、と説明があつた。けれど、鮎美は詩織を信じているので動揺せず、ただ怒っている。

「悪質なでつちあげに決まっていますやん。相手にせんとこ」

「……………」 お気持ちはわかりますが、ICPOは、めつたなことでは逮捕状を出さないので。十分な証拠があつてのことでしょう。まして、あのときの時点でも一国の国会議員の秘書という立場でしたし、国際的に注目され始めた時期でしたから、逮捕して間違いではありませんまないだけに、ドイツ警察もICPOも慎重に検証した結果でしょう」

「……………」 新屋はん、国内で詩織はんが、どう追いつめられたか、わかっている範囲を教えてください」

「はっ」

新屋がまとめていた資料やインターネットに出回っている動画を見てもらいながら説明する。

「日本側の関係者が、すべて亡くなっているので不明な点が多いので

すが、ドイツ警察は以前から牧田詩織さんをマークしていたようで、捜査そのものは3年前からおこなっていたそうです。日本警察側は直前まで知らず、ICPOから依頼があったので他の事件と同様に、たとえ国会議員の関係者でも手続き通りに進め、おそらくは牧田さんの行動パターンを調べた後、自宅マンションにいるところを逮捕するため、数人、おそらくは10名ほどのチームで行ったものと思われる。そのとき、何らかの理由でマンションで爆発が起こり、現場は騒然となり、多くの救急車なども呼ばれていた様子はインターネットに投稿されています。次に足取りが判明するのは、羽田空港から都内へ戻る列車の中です。空港から駆け込み乗車で乗ってきた女性、牧田さんと刑事のように見える男が対峙し、女性はそばにいた母子から赤ん坊を奪い、人質にしていたようです。動画があります」

新屋が大型液晶モニターで動画を再生させる。別の小型モニター越しの閣議参加である畑母神からは、とても見づらけれど、指揮下の日本軍部隊と韓国、北朝鮮、中国、台湾の動きに注意を払っている。鮎美の同性婚の相手に、どんなスキヤンダルがあるかと無かるうと、実はどうでもいいし、意見する気もないので黙っている。

「ハアハア、牧田だなぁ?! 動くな!!」

「動かなければ殺しません」

「た…助けて…」

動画は乗り合わせた乗客が、膝の間あたりで隠し撮りしたようで、あまり状況がわからない上、列車の走行音もあって聞き取りづらい。それでも詩織の声だったし、久しぶりに詩織の声を聴いて鮎美は胸と目頭が熱くなった。

「無駄な抵抗はやめろ!!」

「銃を捨てなさい!」

たしかに詩織の声だった。

「弾倉を抜き、弾を床に捨てなさい! でなければ、この子の腕を折ります! 3! 2! 1!」

「ビギャー!」

腕を折られた赤ん坊が大声で泣く。

「次！ 反対の腕！ その次は首です！ 3！ 2！」

「くっ…わかった！ わかったからやめろ！」

動画の中で、刑事より詩織の方が落ち着いているくらいだったし、詩織は赤ん坊を刑事に投げつけて隙をつくり瞬時に蹴倒しているようだった。

「動けば殺します！」

乗客たちへ、そう叫んだ詩織が非常停止レバーで列車を止め、車窓から線路へおりていった。そこで動画が終わる。

「……詩織はん……」

「……………」

新屋が心配そうな視線をくれるので鮎美は泣きそうだった表情を引き締めた。

「続けてください」

「はい。この動画の直後、付近の保育園が不審者によって占拠され、警察が包囲しますが園児を人質にされ、膠着状態となります。その動画もあります。保育園の向かいにあるアパート2階から撮影されたものようです」

また動画が再生される。

「やめろ!!」

「やめるんだ!!」

道路から警察官が叫び、保育園のベランダから女兒を人質にした詩織が叫ぶ。

「近づけば、この子を落とします！」

「うわああ！ 怖い！ 怖い！ やめてやめて！」

「私の要求を飲めば、子供たちは殺しません!!!」

「わかった!! 要求は何だ?!!」

「銃と車両を用意しなさい!! 1時間以内に!!」

保育園内の様子はわからず、ときおり詩織が外に叫ぶのが撮られている。

「一人解放します!! 早く要求に応じてください!! 私は無実です!!
これは陰謀です!!」

「このとき、一人の園児、石原笑美さん5歳が解放され、運良くドクターヘリに乗せられたことで津波からも逃れています。この後も映像は続きますが、膠着状態のまま地震が到来し、それでも撮影者は撮影と同時に配信を続けたようで、牧田さんが保育園から混乱する警察官の囲みを突破しようとして出てくるのですが、そこで銃撃戦となります。……かなりショッキングな映像ですが、ご覧になりますか？」

「……はい、お願いします」

鮎美が頷き、新屋は止めさせていた再生を進めた。保育士の衣服で変装した詩織が二人の幼児を抱えて保育園から出てきて逃げ去ろうとするのを警察官が呼び止める。

「動くな!!」

「っ……」

詩織は地震で怪我をしていた別の警察官を盾にしつつ拳銃を奪い、迷い無く撃つ。見事な射撃の腕前と落ち着きで、次々と警察官を射殺している。その様子は連続殺人犯と思われるほど冷静かつ冷酷だった。冤罪を訴える者にしては殺人に躊躇いが無さすぎるし、元ドイツ警察勤務だったゆえの射撃術だとしても、同じ警察職員に対して容赦が無さすぎる。けれど、さすがに多勢に無勢で詩織も腿と腕を撃たれ、弾も尽きて反撃できなくなる。容疑者を生かして逮捕する気にいる警察官たちが包囲していく中、詩織は津波が迫ってくるのに気づいて、空を見上げている。何か言っているけれど、声が小さくて収録されていない。けれど、最期の言葉は唇の動きでわかった。

「……鮎美……」

そう言った詩織は銃を捨て、結婚指輪にキスしている。その詩織と警察官たちを津波が飲み込み、次の瞬間には撮影者とカメラも飲み込まれ、映像が終わった。

「……詩織はん……必死に無実を訴えて……うっ……うっ……」

鮎美が涙を流し、我慢しようとしても結局は閣議中に号泣するのを、石永たちも予想していたけれど、地下室の外にいた里華が予想外に開いていた扉から入ってきた。大会議室と違い、鉄扉なので官僚た

ちが資料をもつて出入りするたびにボタンボタンとうるさいので、最近はどのみち関係者しか基地にいないので開けたまま閣議をしていた。その扉から入ってきた里華が言う。

「石原笑美、5歳の子って、笑うに美しいと書いてエミですか？」

「え、ええ。そうですが…」

新屋は閣議に割って入った里華へ丁寧に答えていた。男性同性愛者ではあっても、里華の切羽詰まった顔を見て、叱ろうとは思えなかった。インターネット情報やマスコミは把握していない笑美の氏名などが記されたファイルさえ見せてやる。そのファイルを見ながら里華が涙を零すので、閣僚たちも黙って待った。待つてもらった里華が説明する。

「……ぐすつ……すみません……兄の子です……生きて……いたの……あの子が……」

「そうですか。よかったですね」

「はい……っ……」

天涯孤独になったと思っていたのに、横浜市から大田区に通勤していた兄夫婦の子が生きていたと知ると、嬉しくて泣けてきた。大嫌いな兄だったし、姪と会ったことも少ないのに、嬉しくて嬉しくてたまらない。

「ぐすつ……笑美の両親、兄と奥さんは？」

「付近で仕事をしておられたようですし、生存情報はありません。笑美さんは山梨県の精神病院に入院していますが、おおむね健康のようです。……あなたには、あとで教えますが今は閣議中ですから、控えていてください」

「はい、すみません」

里華が敬礼ではなく頭をさげて退室し、新屋は続ける。

「えーっ……この笑美さんによる証言では、保育園内で牧田さんは何人も園児を殺していたと、しかも笑いながら殺していたと言っている動画がありインターネットに流れています。けれど、そもそも精神病院に入院している子供を撮るといふ状況が怪しく、ここを追求したところ、看護師の一人が情報を漏洩したようで、しかも動機は牧田さんへ

の反感というか、同性愛者全体への反感があったようです。つまりは総理が同性愛者であるのが気に入らないというわけです」

「なんやの、それ?! ふざけんな! そんなヤツ、逮捕したって!」

泣いていた鮎美が怒鳴った。

「すでに情報漏洩で逮捕しています。精神病院は公立で公務員でしたから」

新屋の答えに鮎美は涙を拭いて頷き言う。

「そんな怪しい証言、子供にテキストと言わせただけかもしれないやん。これ、見てください」

鮎美は自分のスマートフォンを見せる。詩織からの冤罪だと主張するメールだった。さっと読んだ石永が言う。

「タックスヘブンの罫か……まあ、ありそうだな」

「せやろ! 詩織はんが連続殺人犯なわけないやん!」

「うむ……ICPOまで抱き込むのは……どうだろうなあ……」

「だいたい、誰のおかげで震災後も日本円や米ドルが暴落せんと通用してるか、みんなわかってんの?! 詩織はんと夏子はんのおかげなよ!! なあ?!」

鮎美に求められて夏子は同意する。

「そうね、彼女はすごかったね。語学力も、コミュニケーション能力も、彼女がいなければ、ハワイでの会議もまとまらなかったでしょう。ね、畑母神大臣?」

「え? あ、ああ、うむ」

都知事として、いっしょに会議へ出席していた畑母神は中国軍の動きが気になっていたので、まったく聴いていなかったけれど、とりあえず頷いておいた。鮎美は詩織の名誉のために怒る。

「こんな悪質なデマ! 流したもんは許さんし! 詩織はんが世界に、ただだけ貢献したと思ってるの?! そや、陛下に頼んで勲章を贈ってもらおう! それで日本中に冤罪やって言うたるわ!」

そう言った鮎美は義仁へ電話をかけようとする。

「ちよつ?! 待てよ! そんな軽々に陛下へ電話するなって! 小淵総理のブッチフォンじゃないんだから!」

「お待ちください！ 陛下との関係は大切にしてください！」

冷静なようであり、かなり気が立っている鮎美を石永と鷹姫が慌てとめる。

「離してや！ ええやん！ 詩織はんと夏子はんの貢献は、あきらかに表彰もんやん！ 誰にも文句言わせんよ！ なっ?! 夏子はん！」

「え〜…贈られる側としては、そんな思いつきはヤダなあ。貢献した自負はあるけどさ、それだけに、もうちよつと落ち着いて検討してよ。冤罪を晴らす道具に使わないで」

「……………」

鮎美が勢いを無くして、うなだれた。

「…………ぐすつ…………ほな、どうしたらええんよ?! こんなん言われて放っておくの?!」

「鮎美ちゃん総理、落ち着いて。悪質なデマほど妙に拡がるものだから。慌てて何かすると余計に混乱するよ？」

「……………はい…」

詩織と接していた時間のある夏子もデマだと思ってくれているので鮎美は落ち着いた。夏子は議題を進める。

「はいはい、次の議題の方が深刻なだけどさ。石永くんが秘かに核ミサイルを造ってるってデマは、本当にデマなのかな？」

「…………デマだ」

「あ〜、そっか、本当なんだね。準備してるんだあ」

「……………なぜ、わかる？」

「女の勘と、石永くんの答え方、そして、今、カマかけに引っかかった」
♪

「くっ…………」

「はい、説明してください」

「……………わかった…………」

石永は一堂を見回してから、言う。

「すまない。オレの独断。何名かには説明したが、芹沢総理にも黙って、実は核ミサイルを準備している」

「……………」

鮎美が涙目で石永の顔を見つめ、それからモニター内にいる畑母神の方を見た。畑母神も視線を感じて答える。

「私にも石永官房長官から、わずかに説明はあった。おかしな動きをする船舶があったので不審に思っていたら、見逃してほしい、と。それで、だいたい察しはついたが、詳しく説明してほしいものだ」

「わかりました。すべて説明します」

石永が諦めて語る。

「核ミサイルと言つても、残念ながら核兵器と言えるほどのものではない。使用済み核燃料を種子島に持ち込み、ロケットに搭載する準備をしているだけだ。関西便利電力に命じて。大津田一朗技術課長を覚えているかな？」

問いは鮎美に向けられていたので答える。

「はい。うちを刺した大津田の兄さんでしょ？」

「ああ。彼に頼み、実は震災直後から用意を始めてもらった。まさかオレも米軍が撤退するとは思わなかったが、あらゆる事態を考えたと、日本にも核ミサイルが要するというのは前からの持論だったから」

「……………小松基地に来はった、あの日ですか？　うちと鷹姫が寝てる間に勝手に閣僚を決めた」

「うっ、うむ」

もう公然の事実なので石永も認める。鮎美にしても、わずかな人脈で集めた畑母神、夏子、久野などはともかく刑務所にいた鈴木に至っては一か八かの賭けだったし、それで十分な働きをしてきているので抜擢してよかったかと思っっているものの、畑母神と夏子は仲が悪いし、三島も群れることをよしとしないので、派閥というほどの結束はない。たいして石永が選んだ新屋らは、じわじわと長年におよんで築かれた人脈なので、さすがに協調性が高いし、無難に仕事を進めてくれていて久野や鈴木なども仲がいい。なので、もう閣僚メンバーに鮎美も納得していたけれど、あの日のうちに一朗に根回しして原子力発電所から使用済み核燃料を徴集していたと言われると、さすがに驚

きだった。

「やや卑怯ではあったが大津田課長は、弟の件で我々に借りがあつたからな。無理を言つて動いてもらった。もちろん、発覚したときの責任は私が取るということだ」

「うちの知らんうちに……………」

独断専行が自分だけでない実感し、鮎美は戸惑いを覚える。総理大臣が知らないうちに官房長官の独断で、そこまでの事が進められるのだと、やや怖くもなる。けれど、すべてを一人で把握するのは不可能だと思ひ直し、頷いた。

「それで、どういうミサイルができたんですか？」

「ダーティー・ボム、いわゆる汚い爆弾と言われるものだ。核爆発を起こすには高度な技術シュミレーションや設計を要するし、核物質の精製も要るが、ただ単に強い放射能をもった使用済み核燃料を弾頭として搭載し、着弾点にバラ撒くというだけのものだ。それでも破壊力は小さいが、長期にわたって人が着弾点に接近することができなくなる。発射基地に命中させれば使用不能にできるかもしれない。そして、命中については去年、小惑星イトカワへ送った探査機はやぶさを回収した日本の技術だ。少なくとも那須御用邸を狙つて高原山に落ちた北朝鮮製ミサイルのようなことにはならない。きっと、オレを狙えば、ここにいるオレの頭の上に落ちてくるだろう」

「命中精度は信用するとして、長期つて、どんなもんですの？」

「長ければ10万年だそうだ」

「……………10万……………人類も進化して次の人類になってそうやね……………未来の人類に、めっちゃ文句言われそうな爆弾やわ」

「核爆発を起こす技術は無いからな。核物理学者にも協力を秘かに要請したが、みな断られたし、短期に造り上げるのは全力で取り組んでも無理だと言われた」

「そうですか……………それにしても、震災直後やと米軍撤退も北朝鮮の核ミサイルも、まだやったのに、大津田はんを使って用意させてるとか、先見の明があるというか、たんに核ミサイルが好きやったというか。どさくさに紛れて日本も核武装したろ、という気やったんですね？」

「……まあ、否定はしない。役に立つかもしれないだろう？」
「どうなんやろ……畑母神先生、どうです？ この核爆発せんミサイ
ル」

話題が話題なので畑母神も聴いていたし、答えてくれる。

「無意味ではないが、戦術的には大きな力になるわけではない。かりにダーティー・ボムを街中に落としても、たまたま周囲にいた数十人を即死させ、さらに放射能によって近づいた者を死傷するかもしれないが、それも百人に満たず、すぐに避難するだろう。それで終わりという爆弾だから、うまくすれば敵基地の一つを使用不能にできるが、基地にあった移動可能な兵器などは持ち出せばよいから、大きく戦局を動かせるようなものではない。水爆ならともかく原爆でさえ、それだけでは一国家を屈服させるには足りないものだ。韓国や我々を見ればわかるだろう。あまり、あてにしない方がよい、と言っておく」
「そうですか……」

鮎美と石永は残念そうに言い、鮎美は責任を求めておく。

「ほな、引き続き、石永官房長官による独断ということで、うちは知らないことにしますね」

につこりと笑顔で女子高生に言われたので石永は諦めて頷いた。

「ああ、いつでも発射できるようにはしておくよ」

「あ、それって他国から気づかれています？」

「精密な観測ができる人工衛星をもった国なら可能だろうな。なにも、この時期に日本が普通の人工衛星を打ち上げる必要性は少ない。津波に遭った種子島宇宙センターを急いで復旧させていることも、もしかしたら敦賀湾から出港した船が種子島へ行ったことも把握しているかもしれない。……いや、そのうえで日本のマスコミヘリークしたのかもしれない。バレるのが早いと思ったが、そういうことだろう」

「情報戦かあ……」

「おそらく米口中は把握しているだろう。そして今のところ黙認して

いるのも、どうせ核爆発は起こせないタイプの弾頭だろうと推測されているからだろうし」

「だろう、だろうなんやね。どっちも正確な情報はつかめず、推測で攻め合うしかない」

鮎美はタメ息をつきたくなかったけれど、それを我慢して総理大臣らしく姿勢を正した。まだ詩織のことは胸の中で疼いているけれど、それだけに進めておきたいこともある。

「ちよつと休憩とします。新屋はん、三島はん、ちよい来ててください」

「はい」

「了解した」

三人で地下室を出る。新屋はさりげなく石原笑美の入院先などが書いてあるファイルを里華に渡した。里華は礼を言って連絡を取りたいので鷹姫に許可をもらって持ち場を離れる。鮎美は護衛のゲイツたちに囲まれて地上1階にある自動販売機で紅茶を3人分買って、新屋と三島に渡しながら言う。

「うちらが秘かに進めてる同性婚の法整備の件、そろそろ閣僚らには言うておこな、と思うのよ。どやろ？」

「なるほど。敵を欺くには味方から、というのが常套とはいえ、さきほどの石永殿の独断専行を見て、考え直されたか？」

三島の問いに鮎美が頷く。

「うん、石永派との協調も大事やし。どうやろ、新屋はん？」

「どちらかといえば、私は石永派と周りは見えていますから意外かもしれませんが……」

新屋の目が迷う。それが同性愛者であることを周りに告白してしまおうか、強く迷っているときの目だと、同じ属性を持つ鮎美たちにはわかるし、ゲイツたちも気づいている。気づいていないのは麻衣子と鷹姫くらいで本当に休憩だと思って、麻衣子はコーラを、鷹姫は水道水を飲んでいいる。新屋が結論を出した。

「法案を準備してることとは閣議で言っておくべきかもしれません。芹沢総理が同性婚法案を言い出すことは、ある程度、予想されたことで

すし、反対する者がいても、それを聞かずに進めることも予想の範囲です。いつそ、ある程度は議論した上で公布施行される方が閣内での理解は得られるでしょう」

「そやね。ほな、そうするわ」

暗に新屋が個人的なカミングアウトを今はしなないと決めたことには、あえて触れず紅茶を飲み終わると、地下室に戻った。着席して鮎美が閣僚たちに告げる。

「核ミサイルほどではありませんけど、うちも独断専行で進めている件があるので、これ以上は黙って進めず、みなさんに言っておきます」

「……」

やはり一堂が静かになり、何事かと構える気配がした。

「実は同性愛者同士の結婚を合法化しようと法案を練っています」

「その話か……」

石永が予想内という顔で言った。

「はい、その話です。進めて、ええですよね？」

「……この時期にか？ もっと落ち着いてからで、よくないか？」

「よくないです。いつまで経っても議論が成熟してないとか言うて同性愛者の権利を無視してきたのは、多数の異性愛者による専制です。なので今、うちが独裁者であるうちに決めてしまいたいと考えています。一応、ご意見をうかがうので、どうぞ」

「……」

この子は何を言われても進める気だ、と閣僚たちも悟った。核ミサイルに比べると、それほど衝撃的ではないけれど、異性愛者が多数である閣僚たちは考え込む。世界には、すでに同性婚を合法化している国があるし、そこで大きな問題が生じているとは聞かない。猛反対するほどの理由は思いつかず、どのみち個人の自由、という気がしてくる。久野が慎重に問う。

「どのような法案にまとまりつつあるか、見せてもらえますか？」

「はい。三島法務大臣、お願いします」

「はっ！」

指名された三島が起立して、法務省官僚たちに資料を配らせ、熱く語り始めると、どうして三島を法務大臣にしたのか、震災直後から石永と同じく鮎美も画策していたのだと、閣僚たちは悟った。法案を読み進めた久野が指摘する。

「この法案は公布施行後、施行前まで遡って遡及適応できるのですか？」

「はい」

「それは……大きな問題を生みますよ」

「わかっています、この震災でパートナーを亡くした人も多いはずです。……うちも、そうですし」

鮎美は胸にある結婚指輪を押さえて言った。ずっと覚悟していたけれど、とうとう詩織が100%確実に死んだのだと、映像を見て知り、胸が痛いし、ヘタをすると泣きそうだったけれど、喉に力を入れて言う。

「不幸中の幸い、うちは愛する人の最期を知ることができました。けれど、日本全国にはパートナーの安否情報を確認することさえ、個人情報保護の壁に阻まれてできない人もいるのです。入院していても、入院先を教えてもらえなかったりします。こういった方を救うためにも、同性婚を合法化し、なおかつ遡及適応可能とし、二人が結婚したと想っている時点から、結婚したことにすればよいと考えています」

「芹沢さんのご不幸は本当にご愁傷様です。けれど、落ち着いて考えてみてください。たとえば、牧田さんの家は地元でかなりの資産家でした。国会議員や県会議員も選挙で味方につけておきたいほど、名望家でもあります。そして、これまた不幸なことに牧田さんの両親も殺されています。その時点で牧田家の財産は長男次男、そして詩織さんの三分にされるのが法定相続ですが、詩織さんの生前に遡って芹沢さんとの結婚を有効とされてしまうと、ほぼ自動的に牧田家の資産の3分の1が、あなたのものになります。その点、どうお考えですか？」

「うちは相続放棄します」

「あなたは、そうするかもしれない。けれど、そうしない人も出てくる。何より異性愛者でも結婚詐欺のようなことは常から発生しますから、この混乱期と遡及適応可能な同性婚というのは、とても危険な組み合わせですよ。死人に口なしで、私だって実は同性愛者でした、近所の金持ちと結婚していましたが、彼は津波で死んだので財産は私のものです、などと言い出せる」

「そういった悪質な行為には婚姻冒瀆罪という罪をつくり、最高刑を死刑とする、ということも考えていますが、どうでしょう？」

「ある程度の効果はあっても、すでに戸籍の取得で3重に不正を犯し死刑となりうる者も出てきているように、必ず人間は不正を行いません」

「そんなヤツは死刑でええですよん」

「罪を犯させる機会を与えないことも為政者の仕事ですよ。その点で芹沢さんは身分証明で指紋や頭髪の採取を強制したので、かなり戸籍の不正取得は予防できたでしょう。けれど、結婚はそうはいかない。まして遡及適応可能、しかも死者との結婚も対象となると、芹沢さんは牧田さんとの結婚をテレビで公表したので誰も疑わないでしょうが、他の人の場合、どうなるか、もつと冷静に考えてみてください。婚姻届もない、指輪も紛失しているかもしれない。たんなるルームシェアの同居なのか、同性婚だったのか、誰が証明するのです？」

「……………」

「また、逆に財産相続を目的として結婚を騙るのではなく、本当に結婚していたと想っていても、最高刑が死刑である婚姻冒瀆罪が怖くて申請できない人もいます。証明してみせろ、と言われたとき、せいぜいツーショット写真くらいしか無かったら、どうです？」

「……………」

「さらには詐欺目的で申請され、それを逮捕したとき、有罪とする証拠はどうします？ 本当は詐欺目的であっても、詐欺目的だと立証できなければ、かなり困ります。まんまと財産を騙し取るケースも多く発生するでしょう」

「…………丁寧な捜査と審理をすれば、ええですよん」

「では、異性愛のカップルでも一夜限りの関係というのは生じますが、もし、あの震災前夜に、たまたま出会い、意気投合して同性愛者同士、性的な関係をもったとします。そのとき、本気とも冗談ともつかず結婚しよう、と言っていたら、どうですか？　また、結婚する気など、まったく無く最初から一夜限りの関係とお互いに割り切って過ごしたけれど、片方が津波で死んでいて、あとになって芹沢総理が便利な法案を公布施行したので、財産目的で申請した者は、どうしますか？」

「う〜……」

鮎美が額をおさえて呻った。それが反論が思いつかない人間の一般的な仕草であることは、だいたい皆が知っている。

「芹沢さん、あなたは震災後、混乱を避け秩序を保つために、多くのアイデアを出してくれたし、人権無視と言われても指紋頭髪を採取させたのは、賢明でした。けれど、この同性婚法案、とくに遡及適応可能とする条項は問題だらけです。きつと、大きな混乱が生じる。そこを、もつと考えてください。同性婚がダメだと言っているわけではないのです。法の遡及適応というのは刑法に限らず、極めて危険なのですよ」

「……………はああ……………やっぱり、同じ問題点が思いつきますやんね……」

鮎美がタメ息をついて言う。

「うちらが法務省の職員と内密に話し合つてるときも、だいたい久野先生が言われた問題点が出て来ました。ほな、いっそ、遡及適応の場合は財産相続権を無しにするとか、そういう対策も考えましたが、今度は外国人との結婚の問題が出てきます。日本人と外国人の同性婚を想定したら、異性愛者の婚姻制度でも日本国籍ほしさに擬装結婚が横行するのに、遡及適応可能な同性婚を用意したら、津波で亡くなった人の死体を拾ってパートナーやと言いつくす外国人が出てくるかもしれない。いや、きつと、出てくる。そのとき、結婚は認めるけど日本国籍は与えんという処分にするのか、という問題もあるし。そうやって、とりあえず結婚は認めるけど、その他の権利関係は一切動かさんとしてしまうと、いったい結婚の意味って何やねん、となるし。」

「はああ……」

「芹沢さん、わかっていて言い出したのですね」

「はい……なにか妙案ないでしょうか？ 遡及適応しても問題ないよ
うな」

当事者の鮎美が思いつかないことを異性愛者たちが思いつくはず
もなく、鮎美は額を押さえたまま、全閣僚たちに問う。

「みなさんのご意向を多数決で知っておきたいと思えます。二つ問
います。遡及適応が可能である同性婚に賛成していただける方、挙手
をお願いします」

誰も手を挙げなかった。

「では、公布施行の当日以降のみ有効とする同性婚を、いずれ公布施行
する新憲法下で創設するのに、反対という方、挙手をお願いします」
「反対に手を挙げさせるのか」

思わず石永が言う。

「中学生の学級会みたいな決議誘導だな」

「どうせ高校生やし！」

「わかった、わかった、オレは反対しない。けど、新憲法で婚姻の条文
は、どうなる予定なんだ？」

「今のところ、婚姻は自由である。婚姻は両人の合意のみに基づいて
成立する。という感じですが未定です」

「両性を両人にするのか、その一字の違い、けっこう大きな」

「反対という方、挙手をお願いします」

鮎美が涙目で全体を睨んだので誰も反対しなかった。

「ぐすっ……ありがとうございます。みなさまのご意見、参考にしま
す。では、次の議題をお願いします」

次の議題は税務で確定申告の期限だった3月15日を過ぎても、申
告がない人が多いので、すでに期日延長をおこなっているけれど、追
加延長を5月15日までとするかだった。が、外務官僚が地下室に飛び
込んできて北朝鮮に新たな指導者が現れ、再度の核攻撃をおこなった
直後に演説を配信したと報告した。司令室にいる畑母神もソウルと
平壤の間で核爆発を観測した。演説は今から外務官僚が翻訳すると

のことで、走り書きのメモに近い報告書を受け取った鈴木は予想していた人物が指導者になつていたので閣僚たちに語る。

「次の指導者は金正忠(キムジョンチュン)と決まったようです。彼は金正陽の三男で現在26歳、金正雄とは腹違いの兄弟で母親は日本の北朝鮮帰国事業で北朝鮮へ渡った大阪出身の元在日朝鮮人で、名は高優姫(コシユウヒ)ですが、金正陽からは日本風に、あゆみ、と呼ばれていたそうです。まあ、偶然なんでしょうが、ここにも大阪出身のアユミさんがおられますね。それに高優姫は、なんだか鷹姫さんと似ていて、できすぎた偶然ですが、美や姫を女性への命名につかうのは漢字文化圏では珍しくないので、やはり偶然でしょう。アユミ総理」

「その人の母さんの名前はともかく26歳で国の指導者ちゅーんは、なんぼなんでも無理があるんちやいますか? もっと、他に誰かおらんかったんかな?」

「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」

一堂に沈黙が訪れ、鮎美は自分が18歳だったことを思い出した。

「あ……まあ、周りに支えていただければ、やれば、なんとかなるもんですわ。ははは」

「笑って誤魔化すのかよ。まったく……そういえば、趙舜臣は、いくつだった?」

石永の問いに鈴木が答える。

「46歳だったはずです」

「一番いい年齢だなあ、経験と若さのバランスが取れてる」

「金正忠の説明に戻りますよ。彼は母親の影響もあつてか日本文化に触れて育ったようです。専属料理人が日本料理を用意し、とくに寿司を好んで食べるなど、また東京タワーへ興味をもつたりという情報もありますし、来日経験もあり、日本語にも通じているようです。英語、中国語、ロシア語、ドイツ語、フランス語を話せるとする情報もありますが、どこまで本当かは北朝鮮の公表ですから話半分としても、母親が大阪出身であれば関西弁を話す可能性は、そこそこありますね」

「あ、ちよつと会談してみたいかも」

「向こうも、きつと、そう思っているでしょうし、その機会はあるでしょうね。こちらを利用したいでしょうし、お互い若すぎる指導者ですから、興味をもたない方がおかしい」

「そやね……それで？」

「スポーツ好きで、とくにバスケットボールに熱中したこともあり日本のバスケット漫画なども愛読していたようです。映画も欧米のものを鑑賞するなど、本人は主体思想のみに染まっているわけではなく、広く海外の知識もあるようです。そろそろ、演説の翻訳が終わったでしょう、見てみましょうか」

鈴木が外務官僚に動画を再生させる。北朝鮮の国旗を背景にし、場所を特定されないよう工作した上で配信されていて、短く刈り上げた頭髪の美青年が映った。静江が好みだったので、つぶやく。

「けっこうハンサムね」

金正忠は目の大きなハンサムといえる顔立ちで短く刈り上げた髪には清潔感があり、体格も金正雄が肥満体だったのに比して金正忠はバスケットボール選手のように良かった。演説が始まり、通訳の声も再生される。

「我が国民よ。銃を手に立ち上がれ！ 我が偉大なる父は昨日、偉大な人生の最後の日を迎えた。最期の瞬間まで国を思い、民を憂い、我らの勝利を確信して病身をおして軍を統率しておられた。また、勇敢なる兄正雄は卑劣なアメリカ軍の攻撃に倒れたが、その霊は永遠に我らを守るだろう。父と兄の霊は我らに勝利をもたらしてくれる！

南朝鮮の蛮族に我らが負けることはない。我らには偉大な父が遺した究極の兵器が残っている。今、愚かにも我らの領内に入ってきた蛮族の軍100万が核の炎によって消滅した。我らの地上核実験に巻き込まれた不運を同じ民族として憂いてはやるが、これからも38度線を越えて入ってくる蛮軍には無慈悲な運命が待っているだろう。容赦なき爆炎を欲するなら38度線を踏み越えよ。命が惜しくば家に帰るがいい。慈悲によって追撃はせぬ。我が軍、我が国民よ、38

度線を死守せよ、共和国の命運、この一戦にあり！ 我は金正忠、我は新たな領導者として、ここに誓おう。我が国は永遠であると！ 何も恐れるものはない、敵を見たら撃て、我らに核は残っている。負けることはない。我らは永遠に無敵である」

演説が終わり、石永が畑母神に問う。

「本当に核攻撃があったのですか？」

「ああ、衛星画像で確認した。平壤に迫ろうとしていた韓国軍の先方が丘の上に仕掛けられていた核兵器により壊滅した」

「また使うとは……まだ核が残っていたのか……それに、報復を恐れないのか……」

「だが、これでわかったことはある」

「なにがです？」

「もうミサイルに搭載できるような小型化された核弾頭は無いのだろう。ゆえに丘の上に仕掛けて待ち伏せ的に使ったのだ。それに、報復を恐れているから、自国領内での実験という名目に行っている。本来、38度線を越えないはずの韓国軍が、北朝鮮側にいたとき実験に巻き込まれたのだから、文句はないだろう、という論法だ」

「大胆なのか、姑息なのか」

「手強いやん。百万の軍が消滅したってホンマですか？」

「いや、せいぜい3個中隊ほどだ。とはいえ、押し返して逆に攻め込んでいた韓国軍への精神的ダメージは大きい。まだ核兵器が残っているなら、平壤を目指すのは難しくなるだろう。現に、進軍が止まっている。徹底的な空爆でもすれば可能だが、韓国軍にまとまった航空戦力は残っていないし、もう核兵器はないと思って陸軍で攻め込んでいたところに、この核攻撃を受けたのだから兵士たちにも厭戦気分が漂うだろう。それを狙って38度線で、また決着としよう、というメツセージにしている。父親が始めた戦争を、とりあえず無かつたことに、というわけだ」

「都合のええことを……せやけど、ええ判断かもしれんね」

まだまだ閣議で話し合うべきことはあり、今日も昼食時となつたけれど、ゆつくり昼休みとはいかず、静江たちが食事トレーを運び込ん

でくれる。昼食はチキンソテーと野菜炒め、フキノトウの味噌和え、ミカン、コーンスープ、白米だったけれど、鷹姫の分だけは草と虫だった。

「鷹姫、ホンマにそれで栄養、足りるの？」

「はい、そう聞いています」

「三井はん、ホンマに足りるの？」

「栄養としては、それなりに足りるのですが……まあ、気分的に、というか、どうでしょう……我々も三日三晩の山での現地採取生活は訓練しますが、ずっと続けることにはないので……」

「鷹姫……うちが言うたことで意地になってんの？」

「はい」

「………これ、半分、食べる？」

鮎美が自分の食事トレーを向けたけれど、鷹姫は草と虫を食べる。

「鷹姫………一つだけ交換しよ。その虫と、チキンソテーを交換して」

もらったところで食べる自信はなかったけれど、箸でチキンソテーを渡そうとしたものの、鷹姫は受け取らなかった。

「………松田川先生はいてくれはる？」

「はいはい」

地下室の隅で原爆症の論文をタブレット端末で読んでいた松田川が来る。

「鷹姫が、ずっと、こんな食事を続けて大丈夫なもんですか？」

「うっ……うくん……私は栄養士じゃないからねえ……」

「めっちゃ栄養が偏ったりしません？」

「どうかなあ……虫は一応タンパク質が豊富そうだし、食物繊維は、むしろ理想的なくらい増えるかなあ……ビタミンとかも、ホウレン草と変わらないかもしれないし。しいていえば、炭水化物が足りないかなあ」

「病気になるたりしません？」

「顔色は悪くないし………偏ってるけど、じゃあ、パンダやコアラの方

が偏ってるのに、それなりの身体になるし、とりあえず大丈夫なんじゃない?」

疑問形で松田川は健康相談を終えた。齊藤が問うてくる。

「宮本さんの食事の様子を撮影して配信しますか?」

「やめといて、国民が立派やと思ってくれるところか、そこまでギリギリなんかとパニックになりそうやし」

「わかりました」

閣僚たちは食事をしながら三つの議題に結論を出した。さらに鮎美のスマートフォンが振動した。着信表示はミクド大統領(仮)で、昨夜の対談後に登録した番号だった。

「もしもし、芹沢です」

鮎美は英語で答え、ミクドナルドも英語で言ってくる。

「こんにちは、アユミ。さつき朝鮮半島で核爆発があったのは知ってる?」

「はい」

「報復を望みますか?」

「……………こちらは被害者ちゃうし」

「だよね。でも、趙舜臣に訊いたら、報復を望むが、お金は日本が支払うべきだ。って言ったの。払ってくれる?」

「ぎげんな、って……………伝えるのは、やめて……………うくん……………趙舜臣はんは、どういう思考で、そう言うたん?」

「日本は韓国に多くの借りがある。第二次大戦の精算も終わっていない。さらに今回は避難民が太平洋へ逃げるのを邪魔して転覆させ、銃撃までした。この借りは100億ドルを超える。って言った。アユミ、日本はN友の会に、まだ入会してくれてないけど、今回は直接の被害者じゃないし2億ドルで1発、撃ちます。どうですか?」

「……………どうと言われても……………いろいろと……………」

「決断できる指導者になろうよ」

「決断しない決断というのもありまして」

「じゃあ、N友の会の入会は考えてくれてる?」

「まあ……………じわじわと……………あく、たしか、核保有国がN友の会に入る場

合は月額会費300万ドルでしたよね？」

「そうだけど、ダーティー・ボムはダメよ。ちゃんと核爆発するやつね」

「……………」

知ってるんやな、やつぱり、と鮎美は石永が命じたことを衛星などで米軍が観測していることを確かめた。

「アユミ、そっちはランチタイム？」

「はい。ちょうど」

「ミクドナルド小松店もよろしくね。震災にも負けず運営してるから」

「…………ハンバーガーに核ミサイルにと、商売熱心ですね」

かなり疲れる電話を終えて、鮎美は朝鮮半島情勢を見守ろうとしたけれど、今度は自分たちが戦争当事者の立場になった。小競り合いが続いていた中国軍との戦闘が本格化し、沖縄沖で会戦が生じる。それと同時に中国政府から外務省へ短い電文があり、日本は本来は琉球民の土地である沖縄から撤退するべきだ、と通告された。

「それを琉球人が言うのはわかるけど、あんたらが言うてきても……………胡锦涛はん、優しい感じの人やったけど、国家と個人は別やなあ……………うちも難民追い返して転覆させたいし、みんな鬼や……………」

つぶやいた鮎美は両手で顔を叩いた。鮎美にできる命令は一つしかない。

「畑母神先生！ やれる限りのことをお願いしますー！」

「了解した。総理らは地下室から出ないで欲しい。小松の防空も削って沖縄へ向ける」

そう言った畑母神はモニターの中で次々と命令をくだしている。専門用語が多くて、ほとんど理解できないけれど、小競り合いなどではなく戦闘機も軍艦もすべてが出動するような大戦闘が起こっているのだと、伝わってくる。見守ることしかできない時間が3時間も流れ、鮎美は一つの可能性にすがりたくなった。畑母神は報告する暇さえ無く命令をくだし続けているけれど、その雰囲気から震災で7割となっていた戦力が中国軍との戦闘で半減しつつあると感じている。

このままでは危険だと感じ、何度も迷ったけれど、ミクドナルドに電話をかけてみた。

「一つお願いしたいことがあるんですけど、いいですか？」

「言ってみて」

「中国軍の基地や軍艦に核攻撃をお願いしたら、いくらですか？」

「核には核、それがN友の会の方針です。通常兵器による戦闘に我々は感知しません」

「……………10兆円、いえ、1兆ドルでは、どうですか？」

「私は他国を守るためにアメリカ兵の血を流す気はありません」

「……………10兆ドルで、お願いします。加えて日本にあるドル準備高のすべてと、金地金のすべてで」

とてつもない金額を鮎美は呈示したけれど、地下室にいる閣僚たちも反対しない。いくら払ってもいい心地だった。しかし、ミクドナルドも固い信念で言ってくる。

「日本が中国軍から核攻撃を受けない限り、私は中国軍に何もさせません。金額は関係ありません」

「……………核兵器を売ってもらうことは、できますか？」

「できません」

「……………」

「ごめんね。なんとか頑張つて。応援してる。じゃ」

ミクドナルドは電話を切った。鮎美は机に両肘をつき、頭を抱える。他に助けを求めるとすれば、オパマかフーチンだったけれど、もともと米軍撤退を決めた男がミクドナルドとの対決もあるのに来援してくれるとは思えないし、自分がオパマの立場でも国内事情を優先する。自分がフーチンの立場だったら、胡錦燈に話を持ちかけて日本の北半分をロシア、南半分を中国が統治しようとする裏で約束するかもしれない。そもそも自分たち日本も韓国を見捨てていた。

「……………結局、自分らを守るのは自分だけや……………」

あいかわらず畑母神は次々と命令や決断をくだしているけれど、戦況が良いとは感じられない。地下室にいても何もできない鮎美や石永たちは、他の仕事も手につかないし、地下室から出ても足手まとい

なので、さらに4時間を過ごした。緊張で喉が渇くし、手のひらと腋がベツタリとした汗で濡れて気持ちが悪い、自国の戦力が損耗していると、まるで自身の右脚が消えていくような感覚がして、椅子に座ったまま腰が抜けたような気分になるし、喉の渇きを潤そうと飲んだ紅茶で尿意をもよおし、気を抜くと失禁してしまいそうなほど怯えている自分に気づいた。

「……ハアっ……ちよつと、トイレ……」

地下階にはトイレもないので、次の瞬間にミサイル攻撃があるかもしれないと思うと、唯一の正当な国会議員で総理大臣である鮎美が死亡するのは避けなければならぬので、地下階の廊下の隅でゲイツたちに囲んでもらってバケツに用を足すと、心底情けない気持ちになった。お仕置きとして拘禁している陽湖と同じような状態なのが、実にみじめに感じる。

「……ぐすつ……非常時の設備を東京だけや無くて日本海側にも、造っておくべきやったわ……こんな不便な地下室しか無いとか………危機管理、ぜんぜんやん……」

夕食時になり基地の食堂は、たとえば戦闘中でも食事を用意するので、鮎美たちの前にトンカツをメインとした食事トレーが運ばれてきた。あまり食欲がないので半分ほどしか食べられない。モニター内にいる畑母神は握り飯を食べている。目は状況確認しながら、口を動かして、彼は食欲を失っていない様子だった。

「……鷹姫………現状で、うちにできることは、あると思う?」

「………いえ……何も……」

小松基地を警備する陸軍も、いつもなら空き時間に鷹姫と陽湖のために草と虫を採取してくれているけれど、さすがに戦闘に加わっていかなくても厳戒態勢を敷いているので、鷹姫の前にもトンカツが来ている。それを一口も食べずに、お湯だけを飲んでいた。三島は落ち着いて、きれいに食べ終わると両手を合わせている。石永は押し込むように飲み込んで、わからないなりに畑母神がくだしている命令に耳を傾けておく。久野は2時間前から、もう戦闘のことは意図的に頭から追い出して、道路復旧計画の見直しを国土交通省の官僚と進めている。

鈴木は戦況を見守りつつ、ときおりロシアや中国の知人と電話をしていた。夏子は日本軍が優勢に終わった場合と、劣勢に終わった場合の財務計画を脳内で想定しようとしているけれど、不確定要素が多くて難航し、眉間に皺を寄せている。夕食後も鮎美は何もできない時間を過ごしていたけれど、鈴木が言ってきた。

「フーチン大統領へ連絡を取ってみますか？」

「……………いえ、日本軍を信じます」

「……………そうですか……………」

「……………」

鮎美は冷めてしまったトンカツを無理に食べた。味を感じない。

「これで終わりか」

畑母神の声がモニターから響いて、全員が凝視する。

「おおむね、戦闘は終わった。これから報告におりる」

畑母神は鶴田に任せて地下室へおりてきて経過報告する。

「沖繩沖で始まった海戦だが、中国軍が投入してきた戦力は我々の4倍だった。艦艇の数も戦闘機も敵軍優勢だった。結果として日本軍はイージス能力のある艦船は一隻のみを残して失った。戦闘可能な水上艦は7隻を残すのみとなった。また、戦闘機も32機が帰還したのみで、他は帰ってこない」

「……………」

「だが、潜水艦は水嶋艦長の艦が撃沈されたのみであるし、彼は敵の最深部に切り込み、1隻で7隻を撃沈させてくれた。全体で4倍だった中国軍を4分の1まで撃ち減らした。そこまでの損害を双方が出した時点で戦闘は終わり、結果として彼我戦力差は核兵器の存在を除けば、変わっていない。勝敗の評価は、いろいろとあろうが、私は我々が勝った、と言う。戦死者の数は……………正確な集計はまだであるし、海上での救助の可能性もあるから未定となるが、3千から5千が戦死したのは確実です」

「……………」

「概要は以上です」

畑母神が敬礼したので鮎美が答える。

「……………苦勞様でした……………本当に…」

鮎美は畑母神へ抱きつきたい衝動を覚えたけれど、自分の立場と相手が異性愛者であるので、それを自制した。そして総理大臣として問う。

「再び中国軍が攻めてくる可能性は？」

「きわめて可能性は低いはず……………向こうも陸軍は、そのまま残っているが、航空戦力と海洋戦力が半減し、周辺国とのパワーバランスを考えると、これ以上の損害は出せないゆえに」

「そうですか……………おおきに、ありがとうございます、本当に」

「……………散っていった者たちに……………」

畑母神は何か言おうとしたけれど、言葉にならず飲み込み、せめて問う。

「陛下への報告を私になしてもよいでしょうか？ 戦死者のことも含めて」

「はい、お願いします」

総理大臣をさしおいて報告する許可を鮎美は迷い無く与えた。この状況下で京都へ行くことはできないので、畑母神はこの場で電話する。戦闘結果は機密であっても、もう各国も観測しているはずなので盗聴を恐れず、まずは島津に報告し、それから義仁へ直接に申し上げた。それで義仁は英霊を祀る儀式を始めることになる。鮎美は国民への報告のために斉藤に撮ってもらう。

「こんばんは。芹沢鮎美です。本日13時14分、中華人民共和国の軍隊により沖縄沖にて日本軍が攻撃を受け、これに反撃し大きな勝利をおさめました。ある程度の被害も受けています。双方の被害は大きく、これ以上の衝突は、どちらのためにもならない状態です。被害の詳細は機密ですが、いまだ日本軍には十分な戦力が残っておりますので、ご安心ください。また在日中国人へ暴行を働くことは、やめてください。そんなことをしても戦死者は帰ってきませんし、当然、在日日本人で、いまだ中国から脱出できていない人が暴行に遭う可能性があがるだけです。くわえて在日中国人へ通告します。帰国を望ま

れる方は、お近くの市役所に登録してください。航路の安全を確認の上、台湾を経由して帰国していただきます」

もう台湾とは鈴木が話をつけてくれたので、お互いの邦人帰国は台湾経由となっているけれど、そう数は多くない。すでに震災直後の原発事故で帰ろうと思う者は帰国しているし、残りたいと思う者は残っている状態だった。鮎美の発表は英語と中国語にも翻訳されて配信された。その配信が終わって鷹姫が淹れてくれた紅茶を飲むと、鈴木が胡錦燈が配信した情報をもってくる。日本語に翻訳されて流してくれた。

「中華人民共和国主席、胡錦燈であります。本日13時5分、日本の軍隊と称する武装組織に我が軍が東シナ海で攻撃を受け、これに反撃し大なる戦果をおさめ、我々は勝利しました。このような事態につき、日本政府へ謝罪と賠償を求めます。また、沖縄は不当に日本が占拠しているものであり、人民は解放を待っているのです。我々は、これからも人民の解放に努力を惜しまない覚悟をもっています」

「……………どっちも勝ったと宣伝するんやね……………うちらもアホやわ……………もともと人民解放軍と称しつつ、思いつきり人民抑圧軍やし、うちらは、うちらでイージス艦まで装備しておいて、これは軍隊ではありません、やからなあ。嘘つきまくりの欺瞞だらげやん……………」

鈴木が言ってくる。

「芹沢総理の発表内容は、やや正直すぎませんか？」

「嘘についても国民は見抜くやろ。ちよつとした軍事マニアやったら帰還した戦闘機の数くらい数えるやろし」

「たしかに……………」

「こういうとき胡錦燈はんと会談した方がええの？」

「いえ、どちらも引つ込みがつかないので、しばらくは冷却期間をおくものですよ」

「そういうもんですか、やっぱり……………はああ……………」

鮎美は夜10時を過ぎていたので、鷹姫に勧められて入浴した。エネルギー節約のためには女性隊員たちと同じ女湯を使いたいけれど、護衛と鮎美が同性愛者である都合もあって貴賓室で一人で湯に浸か

る。里華は中国軍との戦闘が始まる前に山梨県にいる姪へ会いに行くため休暇許可をもらったのでおらず、鷹姫と麻衣子が世話をしている。

「……………ご飯食べて、のんびり、お風呂に入って……………津波直後も思ったけど、うちは、こんなんで、ええんやろか……………」

「……………」

鷹姫が答えられず、麻衣子が答える。

「だからといって、お風呂に入らないでいて、何か解決するわけじゃないから」

「そやけど……………この小松基地のパイロットも何人も帰ってこんかったのに……………大浦はんの知ってる人とか、亡くなった？」

「私は陸自……………陸軍だから、空軍の人、ぜんぜん知らないし。でも、基地の雰囲気は暗くなったかな……………」

「芹沢総理、お疲れでしょう。お背中を流します」

「……………うん、おおきに」

素直に鮎美は背中を洗ってもらう。鷹姫は丁寧に洗いながらも、強い空腹を感じていたし、柔らかそうな鮎美の肩の肉を見ていると、あろうことか噛みつきたいという衝動を覚えて、自分でも驚いたし同時にお腹が鳴った。

クウウ…

鮎美が振り返って問う。

「鷹姫、トンカツは食べたの？」

「いえ」

「もつたいないやん」

「月谷に与えました」

「……………ほな、鷹姫は何も食べてないんやろ？」

「はい」

「……………それって、暗に、というか、モロに、うちに陛下と結婚せいと圧力かけてる？」

「はい」

「……………はああ…あの人、まだ15歳やん」

「結婚の年齢制限など、今の立場なら、いくらでも変更できます」

「はいはい」

クウウ…

また鷹姫のお腹が鳴った。

「あんたなあ……うちが陛下と結婚したら、ちゃんとご飯を食べるの？」

「いえ、もう一生、食べません」

「え……鷹姫って食べるの、めっちゃ楽しみにしてたくせに？」

「我慢します」

「痩せ我慢そのものやなあ……どうしたもんかなあ……あんた頑固やもんなあ……」

あえて鮎美は国際問題を忘れて身近な問題を考えようとして、再びお湯に浸かったけれど、三井が浴室のドアをノックしてきた。

「鶴田司令より至急の報告があります！」

「ええよ、入って」

ゲイとレズビアンの間なので浴室に入ってもらった。三井も目のやり場に困ったりせず、鮎美が服を着ているときと同じ態度で報告する。

「韓国軍と思われる武装勢力から、対馬が遠距離砲撃を受けています」

「っ……」

鮎美は急いで浴槽から揚がろうとしたけれど、自分が司令室に駆け込んでも何もできないことを思い出して、そのまま問う。

「畑母神先生は？」

「別の者が報告に行っているはずですよ」

「ほな、ごめんやけど、ちよくちよく往復して、うちにも経過報告して」

「はっ！」

三井が敬礼して出て行くと鮎美は髪を洗う。核兵器をもっている中国軍との戦闘が始まったときは、失禁しそうなほど怖かったのに、核兵器どころか航空戦力も無くなっているらしい韓国軍からの砲撃

と聞いても、のんびりとトリートメントまでするほど、落ち着いていた。

「あいつら、北朝鮮軍との戦いの後やのに、何を考えてるんやろ」

鮎美は韓国の立場で考えてみる。自分が好戦的な軍人だったら、という仮定にした。

「……………北朝鮮へは38度線を越えて侵攻したら核兵器の待ち伏せがあるかも……………しゃーないし停戦しよ……………けど、国内も核ミサイルで何か所もやられたのに賠償金も取れん……………中国が日本へ攻撃して大勝利らしい……………大きな被害があつたつて総理も認めた……………もともと日本がムカつく……………難民船を追い返して、北朝鮮との戦闘も高みの見物やった……………ミサイル代もミクドに払わんかった……………イラクでは1兆円も出したくせに……………超ムカつく……………あいつらから金を取りたい……………今なら中国との戦闘でへ口へ口かもしれない……………とりあえず対馬に攻撃して様子をみよ……………賠償金と、うまいことしたら竹島みたいに対馬も取れるかも……………よし、攻撃や！……………こんなところか……………」

思考しながら髪を洗い終わると、再び三井がノックして入ってきた。

「報告します！ 司令室へ畑母神防衛大臣が到着、総指揮に着かれました。くわえて対馬への砲撃を韓国軍によるものと断定。おそらくはK9—155mm自走榴弾砲によるもので、発射位置は朝鮮半島最南部！」

「……………対馬と韓国って、どのくらいの距離でした？」

「約50キロです！」

「……………そんなに遠くに現代の大砲って、届くんですか？」

「はっ！ 長射程榴弾砲に特殊な砲弾を用いれば、届きます」

「すごいもんやなあ……………大和の主砲でも、そんなに届かんかったんちやうの？」

鮎美の問いは鷹姫に向けられていたので、すぐに答える。

「大和の主砲射程は42キロです」

「大和以上なんや」

「……………」

三井は入浴を終えて身体を拭く鮎美が腋だけでなく股間も剃毛していたので、ちよつと意外だったけれど、そもそも女体に興味がないので見なかったことにする。身体を拭き終えた鮎美は裸のまま貴賓室の椅子に座り腕組みして考え込む。麻衣子と鷹姫がドライヤーで髪を乾かしてやる。

「対馬に自衛隊……やなくて、日本軍はいてくれるの?」

「はっ! 谷村博史(たにむらひろし)対馬警備隊長が指揮する対馬警備隊約350名が駐屯しております」

「民間人は?」

「約3万人超が居住しています」

「……三井はん、詳しいね」

「自分も去年まで対馬におりましたから」

「それはまた……仲間が心配やろね……」

「いえ! あいつらなら大丈夫です!」

「頼もしい答えやけど、震災と対中戦争で疲れきってはるんちやうやろか……人数も減らされてたりせん?」

「平時から対馬は防衛の要ですから、畑母神防衛大臣の判断で震災においても人員の削減はされておりません」

「さすが……うちが口出しすることは何もないね……戦闘が終わってから、どうするかやけど、……負ける可能性は?」

「ありません!」

「……思いつきり断言しはるね。根拠はありますか?」

「負けるという総理の表現が対馬を占領されるという結果であれば、現状ではありえませんが。韓国軍は遠距離から砲撃してくるのみで上陸部隊を用意している気配はなく、潜水艦等による潜入も警戒しています。砲撃にしても最大射程ギリギリで精度は低く、また、かりに徹底的な砲撃によつて駐屯地等の施設を破壊されても、隊員は軽量で効果的な装備をもつて山間部に潜み、地の利を生かした抵抗戦をおこなうことになっています。大規模空爆か、核兵器によつて焼き払うような攻撃を受けない限り、持ちこたえます。それこそ、草と虫、生の蛇を喰つても」

三井がニヤリと鷹姫に笑みかけた。三井は女性に嫌悪感をもつ同性愛者であつても鷹姫には女じみた軟弱なところが少ないし、このところ、ずっと草と虫を食べ続けることに挑戦しているので軽い好感を持つている。鮎美は対馬にいたこともある三井の説明で安心した。三井が付け加える。

「畑母神防衛大臣より伝言です」

「はい、どうぞ」

「安心して、おやすみください、どちらかといえば中国との政治的落着のつけ方こそ、ゆつくり考えておいてください、とのことです」

「わかりました。畑母神先生へも、ご自愛くださいとお伝えください」

「はっ!」

三井が出て行くと、もう12時が近いので鮎美はベッドに入った。鷹姫と麻衣子も出て行く。

「…………たとえ、負けんとしても…………今、対馬の住民は、めちやめちや怖い思いをしてるんやろな…………」

布団の中で寝返りをうった。極度の疲労があるので眠気が襲ってくる。

「…………死んでる人もいるかもしれんに…………うちは温かい布団の中…………けど、そういえば、うちが刺されて死ぬかと思つてるとき、ぜんぜん無視して受験勉強してる生徒もいたなあ…………あの人は志望校に受かつたんかなあ…………受かつた大学が残つてるとええけど…………」

そこまで考えて眠気に負けた。

3月27日 欲の衝動

復和元年3月27日の日曜午前3時、鷹姫の啜り泣く声で麻衣子は目を覚ましていた。同室の里華は姪に会うために山梨県へ行ったので今は二人きりで四人部屋を使っている。

「……今夜も泣いてる……」

「くすん……くすん……お母様……お腹が空きました……くすん……お母様……どこ……くすん……鷹は、お腹が空きました……くすん……ご飯、食べたいです……」

鷹姫は啜り泣きながら寝言を漏らしている。

「夕食抜きだから、そりゃ、そういう夢をみるよね。しかも虫と草しか食べてなかったのに」

麻衣子が暗闇に慣れた目で向こうの二段ベッド下段にいる鷹姫を見ると、かけ布団を咥えて噛んでいる。モグモグと布団の生地を口に入れていた。

「私も無理なダイエットして寝惚けて布団を口に入れたことあるなあ……っていか草と虫の食生活なんて三日限定でもつらいのに、この先、一生続ける気とか、ありえないって。人生の楽しみ半減じゃん」

麻衣子は目が覚めてしまったので自分のスマートフォンをいじる。やはり対馬が心配だったし、自分の立場では司令室に行っても何も教えてもらえないのでインターネットで調べてみる。短文投稿が見つかった。

やっと砲撃がやんだ。

なんで韓国が日本に攻撃してくんだよ、イミフ。

難民船を転覆させた仕返しじゃね？ 勝手に来ておいて勝手にキレてる。

対馬の人はいる？ 被害は？

家に当たったみたいで2件くらい火事が見えるよ。

あなたの家？ あなたの被害は？

私の家は無事。ずっと山の陰に隠れてたから怪我もしてないけど

被害といえば、おしっこ漏らしてパジャマが濡れた。人間、怖いとマジで漏らすんだって思ったよ。

現場は悲惨そうだなあ。ご愁傷様。

自衛隊は何してんだよ？

中国軍との戦いの直後だからかな、まだ何も反撃してくれてない。

韓国だって北朝鮮とやったばっかだろうに、あいつら元気だな。

そろそろ家に戻りたいけど、砲撃がまた来ないか怖い。どうしよう？

まだ隠れてた方がいいんじゃないか。家って木造だろ、当たったら死ぬぞ。

漁協が避難船を出すみたい。女子供は乗れって。乗ってくる。圏外になるし落ちるわ。

麻衣子が現場の雰囲気をつかんでいると、鷹姫が起き上がる気配がしたのでスマートフォンを伏せた。

「……ぐすつ……情けない夢を……」

「……………」

「はああ……………こんなに、つらいとは……………」

タメ息をついた鷹姫はお腹を撫でると、パジャマの上から制服の上着を羽織り、靴を履いて部屋を出て行く。消灯後は原則として任務以外は部屋から出るのもトイレ以外は禁止されているので麻衣子は行き先が気になった。

「夕べも出て行つたし……………どこに……………まさか調理室の冷蔵庫とかに……………」

盗み食いするような性格とは思えなかったけれど、心配になり麻衣子はあとをつける。足音を消して歩けるように靴下だけ履いて廊下へ出た。

「なんだ、やっぱりトイレか」

鷹姫が女子トイレへ入っていったので安心して引き返した。引き返す途中、廊下の向こうに人影を見た気がする。

「……こんな時間に……………女の人っぽかったけど……………」

また気になるし、鮎美を守るといふ任務も世話役に兼務されているので、基地内に不審者がウロついているなら誰何しておく必要がある。単にトイレへ行くだけの関係者なら問題ないけれど、人影が消えた方向にトイレはない。そつと近づいて声をかける。

「あの、ここで何をされているのですか？」

「…っ…ぐすっ…何でも、ありません…」

泣いていた迪子が振り返って答えた。着ている制服が海軍のものなので麻衣子は、すぐに察した。中国軍との戦闘で麻衣子たち陸軍には、ほとんど死者はでていないけれど、海軍と空軍には巨大な損失があった。

「もしかして仲間が？」

「……。艦が…轟沈して、私だけが助かったのです…放つておいて、泣かせてください。あっちへ行つて」

迪子が逮捕されたのは韓国人難民向けの狂言で、実際には基地内での謹慎待機で処分は放置されていたけれど、艦長として迪子が預かっていた艦は副長指揮の下で戦闘に参加し、そして空対艦ミサイルを受けて轟沈していた。仕方のない偶然とはいえ、艦長の自分だけが助かったのが申し訳なくて、そして迪子も他の女性士官との相部屋になつていたので夜中に、どうにも我慢できずに泣きたくなつたので泣くために廊下へ出てきているのだった。

「はい、失礼します」

麻衣子の階級で気軽に話しかけていい相手ではなかったけれど、つい鮎美たちと接するうちに高官慣れしてしまい、あまり階級を気にせず、それでも敬礼だけはして部屋に戻る。再びベッドに寝転がってスマートフォンをいじった。

対馬には観光で来てた韓国人も多いのにな。

この時期に日本観光つて非国民じゃね？

いやいや、だから北朝鮮が核ミサイルを撃ってくる前によ。で、帰れなくなるというか、さすがに難民船と違って追い出すわけにいかんし。

にしても、よく日本へ来るよな、原発事故もあつたのに。

対馬は事故原発から遠いし、結局、私たち日本人も10キロも離れてれば安全って思い込まされてるし。

まあ、発電所の作業員で死んだ人はいるけど、近所だったから死んだ人は、まだいないしな。

韓国とも戦争になるのかな？

ってか、なってるじゃん。すでに。

宣戦布告とかしないのな。

日本も兵役とか言われるかな。やだな。

芹沢なら言いかねないぞ。あいつ男を犬だと思ってるらしい。

まあレズビアンにとって男は異生物だよな。

鮎美は今頃なにしてるんだろうな。砲撃を受けて。

グースカ寝てたりしてな。

あいつが起きてても役に立たないしな。防衛大臣が畑母神のおっさんで良かったぜ。

ホント、それな！

でなきや昼の海戦で日本終わってたかもな。

あれの勝敗どうなんだ？ どっちも勝ったって韓国と北朝鮮みたいなこと言ってるけど。

イギリスのニュースじゃ日本の勇戦勝ちって報道してたぞ。

そうそう東郷平八郎の再来とか言ってるな。

じゃあ次は李舜臣VS東郷平八郎か。

畑母神は敵前で回頭したのか？

アホかお前は、今の海戦でそんなことやるか！

じゃ、どんな戦術だよ。

知るか、極秘だろ。なんかイージスとか潜水艦とか、うまく使ったんじゃない？

まあ、少なくとも鮎美ちゃんが指揮するよりは、いいよな。

胡錦燈だって自分で指揮しないだろ。

金正陽は自分で指揮したかもな。百戦錬磨の大將軍だし。

百戦錬磨の大元帥、初陣で散る。しかも病死。

不敗の將軍だったな。

鮎美ちゃんにとって昨日が初陣になるのか。

現代の政治家に初陣とか関係ないだろ。しいて言えば刺されたときじゃね。

鮎美は中国との戦闘中なにしてたんだろ？

どっかの地下室でガクブルだろ。

おしっこ漏らしてたりしてな。

鮎美ちゃんのおしっこ飲みたい。

オレも。

鮎美ちゃんとヤリてえ。

女装して頼め。

ちよつとオレの砲撃も飛ばしてくるわ。鮎美まんこまで射程に入
れて。

麻衣子は目を細めて、つぶやく。

「こんなときにバカな男。……………宮本さん、遅いなあ……………」

すでに鷹姫がトイレに入って15分が過ぎている。再び心配になつた麻衣子は、また足音を消して部屋を出ると、女子トイレへ入つてみた。一つだけ個室のドアが閉まっている。

「……………」

「…………ハンバーグ…………いただきます……………」

「？」

「……………湖東メロン……………ああ、美味しい……………」

個室の中から鷹姫の一人言が漏れてくる。

「……………カツとじ丼……………京風おすまし……………ずずつ……………」

「??？」

いったい鷹姫が個室の中で何をしているのか、とても気になって麻衣子はマナー違反だとわかっていたけれど、隣の個室へ音を立てずに入ると、便座の上に立ち、鷹姫が何をしているのか覗き見た。鷹姫は便座に座っているけれど、パジャマはおろしていない。用を足しているわけではなく、右手は箸をもっているように動かし、左手は丼をもっているような動きだった。

「……………はふっはふっ……………美味しい……………カツに出汁がしみて……………」

「……………」

もしかしてエア食事？ 食べてるつもりになってる？ そこまで飢えてるんだ、と麻衣子はまるで落語家のように鷹姫が一人で食べているつもりになっているのを見下ろした。鷹姫は次々と食べたい物を連想し、熟練した落語家のように美味しく食べるフリをしている。脳内で味も思い出し、美しい唇もパクパクと開閉させている。ときおりヨダレを垂らしてしまい、行儀良くハンカチで拭いていた。

「ああ、美味しかった……もう食べられません……あ、でもデザートだけ……かねやのシュークリームと丁稚羊羹、マロンパフェ、ロイヤルミルクティー、苺大福、チョコレートケーキ、アップルミルクフィーク」

「……………」

まだ食べるの？ デザート、そんなに？ つていうか、食べてないから満足まで時間がかかるのかな、これって一種の自慰行為？ 食欲のオナニーみたい、と麻衣子は気づき、あまり見ていると気の毒だと思ひ、音を立てずに部屋へ戻った。

「……………オナニー……………私も……………最近してなかったなあ……………」

鷹姫と鮎美が来てから、ずっと一人になるタイミングが無く、健康な女子として月に2回くらいは自慰するのが習慣だったのに、ご無沙汰だった。入隊してから相部屋生活が基本で男性だと開き直って同室者がいても自慰したりしていると聞くけれど、さすがに女子は他の人に知られるのは、たとえ同性でも恥ずかしすぎるのでチャンスは少ない。鷹姫のようにトイレの個室にこもるか、たまたま相部屋に一人でいるときか、あえて入浴時間を早めるか、遅めるかして一人でシャワーを使ったりするかになる。そして、今は一人だった。そう思うと急に、したくなる。とくに、大勢の人間が死んだ後だからなのか、単に自慰して性欲を発散したいという気持ちだけでなく、もう妊娠して子供を産みたいという衝動さえ、お腹の奥で感じた。そつと静かにベッドの中で股間に手を入れた。鷹姫が戻ってくるまでに果てようと思ひ、指を動かす。

「……………ハアっ……………ハアっ……………あんっ……………」

喘いでも一人なので安心だったのに、鷹姫が戻ってきてしまった。戻ってくるかもしれないのは予想していたので、ベッドの中で動きを止める。

「……………」

「……………」

鷹姫は眠たそうな目で自分のベッドに潜り込むと、すぐに眠つてくれた。

「……………」

「……すーっ……すーっ……」

食べたつもりになって一応の満足をしたのか、寝息を立てている。

「……………」

いいところだったのに……………どうしよう……………熟睡してるし、いいかな……………と、麻衣子は再開することにした。いつもは1回の絶頂で満足できるのに、今夜は気持ちが高ぶっているのか3回もしてしまったし、鷹姫が熟睡しているので少々声も漏らしてしまった。

「……………ハアっ……………三井……………しんじ……………つい、使っちゃった……………」

筋骨隆々とした男性に、ちょっぴり強引に、でも優しく抱かれたい、という比較的平凡な性的指向をもっているのに、自慰に好きになっても無駄だと最初からわかっていたのに結局は好きになってしまった男性を使っていた。

「あの人も、なんでゲイかなあ……………ノーマルにならないのかなあ……………眠っ……………」

とりあえず自慰で満足すると急激に眠くなったので心地よく眠る。鷹姫は5時半になって目を開けた。

「……はああ……………お腹が空きました……………武士は喰わねど高楊枝とは……………なかなか難しいものです……………」

一人言を漏らしつつ、朝稽古のために素早く基地内の武道場へ向かう。屋外に出るとカラスが2羽、植え込みにおりていた。

「……………」

カラスは……………焼いたら食べられるのでしょうか……………と鷹姫は動

くものを見ると食欲が刺激された。虫より、はるかに食べ応えがあり
そうで、肉を口にしたい衝動が湧く。

「バサッ！ バサッ！」

鷹姫の視線に気づいたのか2羽とも飛び去った。

「ははっは！ 野生動物は勘がいいからな。そんな目で見られたら逃げ
るだろう」

ランニングしていた高木が笑って言うてくる。

「……………私は、どんな目でカラスを見ていましたか？」

「飢えた虎みたいだった」

「そうですか……………」

「あまり追い込むなよ。自分自身も、総理も」

「……………」

「とくに今は、いろいろ大変な時期だ。総理のためを想うなら、たまに
は手を握ってやるくらいのサービスをするといい」

非番だった高木は護衛者としてでなく、ただの年長者として助言す
るとランニングを再開して走り去った。鷹姫は武道場へ行く。わず
か30分なので集中して稽古したし、場所柄相手には不足しない。何
人かの男性有段者と手合わせしてもらい、また急いで部屋に戻ると制
服に着替え、起きた麻衣子と食堂へ行く。基地周辺の夜間警備をして
いた隊員が空き時間に鷹姫と陽湖のために草と虫を獲っていてくれ
たので量は少なかったけれど、それを朝食として食べる。

「宮本さん、よく続くね」

「武士は喰わねど高楊枝というところ、私は食べる物があるのですか
ら、これで十分に満足です」

「……………」

めっちゃ痩せ我慢じゃん、夕べ夢みて泣いてたくせに、トイレにこ
もって飲食オナニーしてさ、涙ぐましい努力するよねえ、特殊なオナ
ニーを見たことは黙ってあげよ、と麻衣子は言わないことにして
ベーコントーストを食べる。食べ終わると、鮎美のために一食分を持
ち、二人で貴賓室へ向かった。

「おはようございます」

「おはようさん」

すでに起きていた鮎美は内線電話で畑母神と会話していた。当然、対馬のことを聞いている。韓国軍からの長距離砲撃は3時間続いたものの、それ以後は上陸してくる気配もなく、また日本軍にはもともと海を渡った先で対地攻撃する能力が乏しく、中国軍との戦闘直後で補給や休養の必要もあり、たいする韓国軍にしても対北朝鮮に残存戦力の多くを向けていて、対馬を砲撃してきた部隊は北朝鮮に攻め込まれていたとき最終防衛拠点として集めていた自走榴弾砲のうち、北朝鮮へ攻勢に出るときは故障や整備の都合で残ったもののように数も少なく、現状としては日本軍は山口県にて反撃部隊を編成中とのことだった。対馬における被害は遠距離攻撃ゆえに精度は低かったものの、不運にも砲弾が直撃した官舎にいた2名が戦死、戦傷者3名、自宅で就寝中などだった民間人69名が死亡、362名が負傷、死亡者のうち1名は観光で日本に来ていて帰るタイミングを逸した韓国人、さらに永住外国人としての3名の在日韓国人が犠牲になっていた。

「わかりました。ほな、あとは閣議で」

鮎美は内線電話を置くと、苛立ちをぶつけるように壁を殴った。怪我しない程度には加減したけれど、一発で満足しなかつたのでベッドへ行つて枕を殴りまくる。

「……………」

うわあ、キレてるなあ、まあ当然といえば当然だけど、むしろ部下に当たり散らしたりしないだけ立派だし、私が18歳19歳の今の年齢で国の代表とかさせられたら一言、無理って言って畑母神大臣か石永さんあたりへ丸投げするのに、ちゃんと関わろうとするのは、えらいよねえ、と麻衣子は苛立つ鮎美が、それでも自制心をもって行動するのを尊敬しつつ見、枕を殴ることで、とりあえず落ち着いた鮎美へ温かいうちに朝食を受け取ってもらおう。

「朝食です、どうぞ」

「毎度おおきい」

鮎美は麻衣子から朝食を受け取る。受け取る瞬間、鮎美は敏感な嗅

覚で麻衣子の手の匂いに気づいた。

「……」

「? ……っ!」

麻衣子も自分の失敗に気づいた。明け方に自慰した後、そのまま寝てしまい、手を洗っていない。せいぜい洗顔のときに漱がれたくらいで、しっかりと石鹸で洗ったりはしていない。それでは女性器の独特の匂いはとれにくいし、鮎美はそばに鷹姫が立っているだけでも制汗スプレーを使っているのか、いないのか嗅ぎ分けるほど鋭敏な嗅覚をもっている。

「大浦はん……もしかして……」

「っ……な……なにも! なにもありません!」

そう答えた麻衣子が真っ赤に赤面するので鮎美は確信したし、麻衣子もバレてしまったとわかりたくないのに、わかってしまう。

「す、すいません。すぐ手を洗って、新しいのをもらってきます!」

「いや、別にええよ。もったいないし。フフ」

「ううっ……すいません……」

申し訳なさそうにする麻衣子と、意味ありげに微笑む鮎美の様子が不思議で鷹姫が問う。

「大浦さんの手が、どうかされましたか?」

「ううん、なんでもないよ。な、大浦はん」

「は、はい! なんでもないです!」

「クスクス、大浦はんも可愛い顔して、すること、ちゃんとするんやね」

「っ……ううっ……」

うくうう、このセクハラ総理い、と麻衣子は恥ずかしくて顔を伏せつつ、食事トレーを渡した後は両手を後ろに回して隠す。鮎美はベークントーストを美味しそうに嚙った。

「うくん、美味しっ、今朝は特別、美味しいわ」

「……………」

「この肉汁の香り、最高やよ」

「……………」

麻衣子は顔を伏せたまま、鷹姫はトーストを見ないように顔を背けたままにいる。

「このトースト、大浦はんが手で取ってくれたん？」

「ち、違います！　ちゃんと専用のトングがあつて、それを使うから手は触れてないです！」

「へえ……そつか。つてことは、その後、そのトングを触った隊員さんらは、みなさん、今頃、その手でトーストを食べてはるんやね？」

「っ?!」

恥ずかしすぎて麻衣子が頭を抱えた。これがバレたら、もう基地にいられない。食堂に行けない。

「もちろん、うちの胸のうちだけに仕舞ておくよ。フフ」

「くっ……」

セクハラ発言されても言い返すことができず、麻衣子は悶えた。鷹姫が悩みながら問う。

「すみません。さきほどから二人の会話の空気が、まったく読めないのです。説明していただけませんか？」

「フフ、どうしよかな？」

「やくめえくてえ」

さらに麻衣子が悶える。鷹姫は答えを知れず、鮎美は、いつもは残すのに朝食をすべて美味しく食べ終えた。

「あくっ、美味しかった♪　なんか元気できてきたわ。おおきにな」

「……」

このレズビアンめ、私をそういう目で見ないでよ、ああ、もお、と麻衣子は恥ずかしくて頭を抱えていた両手で顔を隠したけれど、自分の匂いを感じて手を離す。その手首を鮎美が握ってきた。

「麻衣子ちゃんの匂い、もうちよつと嗅がせて」

「やめてくださいよお」

麻衣子は手の匂いを嗅がれて困ってしまう。ずっと、大浦はんと呼ぶことで距離感を取っていた鮎美が親しげに、麻衣子ちゃんと呼びかけ、クンクンと匂いを嗅ぎ続ける。

「ヤダ、やめて」

「黙っててあげるよ?」

「う〜……」

たしかに私が悪いんだけどさあ、オナニーした後の汚い手でご飯もって来られたら、同性愛者じゃなきゃ逆に怒ってトレーごと投げつけられても仕方ないけど、だからって、もうセクハラだよ、これじゃ、と麻衣子は困り切るのに鮎美は続ける。強引に手首をもちあげ、今度は麻衣子の腋を嗅ごうとする。

「ごっちの匂いも嗅がせてな?」

「嫌ですって」

「みなさんが使ってるトング、どういう手で触ったのかな?」

「あううう……」

言われたくない秘密を握られてしまい、どうにも麻衣子はセクハラを拒否できない。ずっと不思議そうに見ていた鷹姫が気づいて止める。

「芹沢総理、おやめください。それはセクハラです」

「ええやん、べつに。麻衣子ちゃん、どうする? 拒否せんよね? 匂

い嗅ぐだけやし、舐めたりせんよ」

「はううう……」

「芹沢総理……どうして、そう急に人が変わったように……いえ、欲望を抑えきれないのは、わかります。ですが、なにか大浦さんの弱みを握って脅しているようにしか見えません。違いますか?」

「……………」

「宮本さん、助けてえ」

すがれそうなところへ麻衣子は助けを求める。鮎美は手を離して舌打ちした。

「ちっ……せつかく……べつに、麻衣子ちゃんは、はっきり拒否してへんし」

「何か弱みを握って黙らせても、あとあと告訴されれば、今のお立場を危うくします。どうか、ご自重ください」

「はいはい!! ああ! もお!! どいつも、こいつも!!」

欲求不満になって再び苛立った鮎美はベッドを蹴り、枕を投げた。

「……………」

「ホンマ腹立つわ!! 何、いきなり砲撃してきてんねん?! イミフな
んじゃボケが!!」

「……………」

「あんたも、あんたや! 人の食事、どんな手で持ってきたん?! 言う
てみい?!」

美味しく食べたはずなのに、今になって詰問されると、より麻衣子
も困る。

「……………いえ……………普通に……………」

「はん?! ほな、科学鑑定しよ! うち毒殺されかけたこともある
し! 怪しい手やし調べてもらお!! 何がついてたか!」
「ひうう……………」

それはもう公開処刑だった。そんな科学鑑定をされて、匂いの原因
を特定されたら、もう恥ずかしくて生きていけない。鑑定を拒否しよ
うにも毒殺未遂の件がある鮎美が変な匂いがするから調べてほしい
と言い出せば、きつと調査される、麻衣子が拒否すれば拒否するほど
怪しくなる。そして詳細な検査で、ただの自慰による匂いだと判定さ
れたら、周りは笑い話で終わるかもしれないけれど、麻衣子にとつて
は地獄だった。そんな地獄に堕ちるくらいなら、ちよつと腋の匂いを
嗅がれるくらい、とても気持ちが悪くて鳥肌が立ちそうだけれど、我
慢するしかないと思える。麻衣子は白旗をあげ、降伏した兵士のよう
に両腕をあげて頭の後ろで手を組んだ。

「どうぞおお、嗅いでくださいいら」
「……………」

鮎美が迷う。かなり強引に麻衣子を抵抗不能にしてしまった。ど
うしようかと、迷っていると鷹姫が言ってくる。

「どうにも欲望を抑えきれないのは、わかります。ですが大浦さんで
は、あとあと問題になりかねません。私でよければ、私で満足してい
ただけませんか?」

「鷹姫……………」

「どうぞ」

鷹姫が胸のボタンを外して、ブラウスを半脱ぎになって腋を見せてくれる。きちんと昨夜も入浴時に剃ったキレイな腋で、朝稽古のために少し汗の匂いがする。漂ってくる香りを感じて、鮎美は鷹姫と出会ったばかりの頃、登下校のために琵琶湖を小舟で渡っていたときの光景を思い出した。あのときは平和だった。秘かに鷹姫へ恋をしていた。鷹姫の匂いが好きだった。穏やかな凪いだ湖面を二人で小舟にゆられて漂いたい。

「……………く、くすぐりたいです…」

「ごめん、もうちょっと」

気がつくと鮎美は夢中で鷹姫の腋を舐めていた。さらに手を鷹姫のスカートに入れる。すぐに腿を撫でるだけでは満足できなくなつて股間に手をやる。

「……………芹沢総理……………そこには手を入れないでください…」

「鮎美って呼んでよ」

「鮎美、そこには手を入れたりしないでください」

「……………上から撫でるだけ、指を奥に入れたりせんから……………」

「……………撫でるだけですよ……………」

鮎美の指が鷹姫のショーツの中に入って撫でる。また撫でるだけでは満足できなくてベッドに押し倒して舐めた。舐めながら鮎美は自分の指で自分を慰めて終わった。ずっと詩織と結婚したと想っていたので我慢していたし、鷹姫への恋は機内での出来事で幼児化した姿を見たとき萎えきつたはずだったけれど、やっぱり好きだった。そして、詩織の死が確実となったので、もう解き放たれ、しかも鷹姫本人が了承してくれたので、鷹姫の身体をむさぼった。腋と股間だけでなく乳首も吸うし、キスもする。

「……………」

本当にレズなんだ……………私の目の前でやり出すとか……………うわああ……………すっごいエロい……………しかも朝っぱらから……………、と麻衣子は黙って動けずに見ていた。

「鮎美、そろそろ閣議の時間です」

「もうちよつとだけ」

「時間がありません」

「ええやん、遅刻しても」

「ダメです。今朝はネットを通じた御前会議となるはずです」

「待たせといたら、ええねん」

「ありえません。織田信長でさえ、天皇は敬っています」

「……………ほな、今夜、うちと、このベッドで寝てくれる？」

「はい。……………ですが、条件があります」

「ええよ、なに？」

「陛下と睦まじくしてください」

「……………」

「お願いします」

「……………まあ、素っ気なくは、せんよ。それでいい？」

「はい」

鷹姫は自分の身体を取引材料にして野望を進めた。ベッドから起き上がって二人とも制服を整え、閣議に出席する。午前中の閣議はインターネット回線を使って義仁も謁見する形式を取り、防諜工作はしているものの内容は万が一盗聴されても問題ない程度にすることになっていた。義仁へ奏上する主な議題は昨日の海戦における畑母神の勇戦を讃えて叙勲するか、否かだったけれど、もともと議題になる時点で結論は決まっているようなものだった。義仁が心から言う。

「本当に、ご苦勞様でした」

「いえ、私などは……………本当に奮戦してくれたのは水鳴ら戦死者です」

畑母神は起立して頭を垂れた。

「勲章は本来、私が手渡したいのですが、由伊を使いに行きますので、どうか受け取ってください」

「はっ、もつたいなきこと、ありがとうございます」

叙勲の儀式としては、やはり直接に手渡すのが原則だったけれど、畑母神が司令機能のある小松基地を現在の状況で離れるわけにもいかず、また義仁が勲章を届けに来るのは鼎の軽重を問われることにな

るので中間案として由伊が島津と来ることになった。畑母神への叙勲の件が終わると、鮎美が挙手した。

「鮎美さん、なにかな？」

「はい。あと二人、叙勲していただきたい者がおります」

「誰かな？」

「加賀田夏子ならびに亡き牧田詩織でございます」

「うん、なにゆえに？」

「……」

夏子ら閣僚たちは、やっぱり言うのか、と思った。詩織が連続殺人犯ではないか、という件は中国軍と韓国軍の攻撃によって世間の話題から注目度がさがっているものの、消えてはいないし、外患が去れば内憂が再燃する可能性は大いにあった。

「はい、この二人はIMFを中心とした国際的な通貨の安定、とくに大規模災害時に各国の通貨価値を半固定化することで経済的混乱を避けるマニュアルを作成し、今回の震災直前にハワイにて各国関係者へ配布しており、このおかげで現在も日本円、米ドル、豪ドル、ニュージーランドドルは震災前に近い価値でやり取りされております。これは億単位の人々を助け、大袈裟でなく世界全体を救っていると言っても過言ではありません。十分に叙勲に値する働きと存じますゆえ」

「たしかに、そうですね。わかりました。その二人と鮎美さんに贈ります」

「っ、いえ、うちは！ いえ、私はけっこうです！」

「あれは先のニュージージーランド地震のおり、鮎美さんが発案され、加賀田さん、牧田さんが手伝われたと聞いていますから、二人を叙勲して、あなたを叙勲しないのはおかしいことになりますから」

「いえ、うちは、ちよつと思いついて二人に言うただけですから！ 勲章なんて大袈裟なもん、ホンマ要りませんし！」

慌てる鮎美を見て夏子が笑う。

「クスクス、ほらね、いざ自分がもらおうとなると、くすぐったくて嫌だしよっ。」

「夏子はん……」

「鮎美さん、贈らせてください。やはり、由伊ではなく私が行きましよう。四名も叙勲するのであれば、使者というわけにもいかないでしょう」

「ですが、それは……」

鮎美に続き、畑母神も止める。

「中国軍は引いたとはいえ、いまだ完全に安全というわけではありません。また、韓国軍まで動いております。どうか、ご自重ください」

「弾道ミサイルの前には、どこも同じほど危険でしょう。また、かつて昭和天皇は戦時中も戦後の占領期も安全には気を配っておられても過度に逃げ隠れはされませんでした。私もそうありたく思いますし、畑母神防衛大臣には石永官房長官からの進言があつた元帥の号を下賜したいと思っています。また、他の国務大臣へも鮎美さんを使者として、すでに親任式をしていますが、やはりお会いしておきたい。畑母神大臣、道中の安全、確保できますか？」

「はっ！ 必ずや！」

そこまで言われると畑母神も即答するしかなかった。実際、すでに北朝鮮にはミサイルに搭載できるような核弾頭が無いことは、ほぼ確実で、あつても日本に向けるよりは朝鮮半島の統一に使いたいはずであり、韓国にしても射程500キロ1000キロとあるような通常弾頭ミサイルは対北朝鮮で撃ち尽くしており、尖閣諸島以外の防空識別圏内での制空権は日本軍にあるし、ミクドナルドのN友の会の存在を考えると、中国軍が日本へ核攻撃を行う可能性もゼロに近い。現状で義仁が皇宮車両で動くのに、それほどの脅威はなかった。結果、義仁と由伊を小松に迎えることとなり、その準備が忙しくなる中、別の来客もあつた。イスラエルからエフラヒムが95歳という高齢をおして輸送機の編隊で鮎美が頼んだ武器をアメリカ大陸経由で届けてくれる。輸送機が滑走路に着陸し、エフラヒムがおりてくると鮎美は駆けよって固く握手をしたし、イスラエルの文化では問題ないはずなので抱きついて感謝した。笑顔で抱き返してくるエフラヒムに外務省の職員がついて通訳をする。

「ははは！ アユミが、ご注文の携帯式防空ミサイルシステム、ステインガーと携帯式対軽装甲車両用ロケット弾発射器M A T A D O Rそれに自動小銃でN A T O弾使用のI M Iガリル、いずれも6000を用意したぞ」

杉原千畝がビザを与えたユダヤ人の数には諸説あり2000から2万人と言われているけれど、もつとも6000という数が広まっている。その6000に因んで掻き集めてくれた武器に鮎美は心から感動したし勇気づけられた。

「おおきに、ありがとうございます！」

思わず同性愛者なのにエフラヒムの頬へキスするほど嬉しいし、心が躍るように安心もする。これで日本は大丈夫、という根底的な安堵だった。石永が不思議そうに問う。

「大変ありがたい品々だが、これで朝鮮半島を攻撃することは、できないだろう。まあ、陸軍以外に義勇兵を募るなら、その武器に最高だが……どうする気だ？」

「義隆はんと相談して決めたんよ。ホンマの最後の最後、どうにもならん場合、どういう武器があったら根強い抵抗ができるか、結果、この三つが三種の神器なんよ、現代の！」

「最後の最後か……」

石永がつぶやき、畑母神も輸送機からおろされてくる武器を見て言う。

「ステインガーか……我々も91式携帯地对空誘導弾ハンドアローを採用するまでは使っていたし、今でも世界標準だが、また6000とは、なんとという数を……」

「日本にハンドアローは津波でダメになった分を考えたら500もあるりませんやん。これで、どうですよ？ 畑母神先生が中国軍の総司令官やったら日本を占領できる？」

「……無理だ……損害が大きすぎる。なるほど、そういう狙いか。もしも昨日、我々が大敗していたとき、それでも抵抗するための」

「アユミは常に先を考える指導者だな。通貨のことも、そうだった。昨日の勝利で、これらは、もう出番がないかな？」

「いえ、使いようはいくらでもあります。より積極的に動くなら、モンゴル人、ウイグル人、チベット人に裏から、これを配つてもいいし」
「っ、ははははっ！ アメリカを割った次は中国を割るのか！ こいつは恐ろしい！ 恐ろしい女傑に肩入れしてしまったものだ！ はははは！」

「すぐに陛下が、ここへ来られます。杉原の名誉回復の件も奏上しますし、いっしょに昼食を、どうぞ」

「うむ、いただきこう。アユミが好きな日本料理がいいな」

「わかりました！ うちが作ります！ お好み焼きを！ えつと、豚肉はダメでしたよね。カシユルートに合うよう頑張りますわ！」

エフラヒムと笑顔で提供された武器類を背景にして記念撮影をした後、鮎美は外務省の職員と、金沢市内から呼んだユダヤ料理店の調理人、そして基地内の給食班と協力して、久しぶりに料理を作った。義仁と由伊、島津も到着し、エフラヒムを囲み、昼食会をもった。それが終わると、昨日の勝利を讃えて畑母神に元帥の号と叙勲が与えられ、さらに杉原千畝の名誉回復を義仁と外務大臣である鈴木が宣言し、エフラヒムへは感謝状が贈られた。そして鮎美と詩織、夏子へは叙勲がなされる。鮎美は詩織の代理人として証書を受け取ったとき、静かに泣いた。これらの式典の様子は斉藤が撮影し、すぐに配信している。式典が終わり、エフラヒムは義仁に述べる。

「古代より続く高貴の方にお会いできて光栄です」

「私もイスラエルの方々にお会いできて嬉しいです。杉原が撒いた種が実っていることも、また国民の多くが知ることとなるでしょう。遠路ありがとうございます」

義仁は天皇として適切な言葉を選んで礼を言った。そして長距離移動で疲れているエフラヒムらイスラエルの一行には金沢市内の一流ホテルへ向かってもらい、義仁らには京都へ近い福井市のホテルで以前に皇族が使用したこともある老舗を用意していて、そこへ向かう前に、明らかに鷹姫の手配で鮎美は義仁と二人きりになる時間をもった。基地内の応接向けの部屋で会話している。

「鮎美さんは皇族というものを、どう感じておられますか？」

義仁の問いは天皇として、かなり口にしにくいものだったけれど、15歳という年齢が問わせていた。鮎美も慎重に考える。

「…………それは、率直に答えてよいものでしょうか…?」

「ええ、ぜひ、あなたの忌憚ない見解を聴いてみたい」

「はい、では。神話の時代はにおいて、確認できうる王朝の中で現存しているものとしてはエチオピア王朝が滅びた今、最古です。これは、とても貴重であると同時に、他のすべての人間も5万年、10万年前から生きてきました。どの命の可能性もある中、それでも、やはり天皇の存在というのは貴重な可能性であり、日本人という民族の集団において、どのような意味を形成していくか、これからもあつてほしいと願う存在です」

「…………それは言葉を選んでくれたけれど、絶滅危惧種や天然記念物ということかな?」

「そういう意味もありますが、政治も宗教も人が生きるための道具です。この道具を、どういう形にするのがよいのか、欧米人も中国人も私たちも、これからも工夫していくと思います。美濃部達吉の天皇機関説とは違う意味、より生物学的な意味で、私たち人間は、それぞれの位置で、それぞれの役割を担いつつ、多様な可能性を試しながら、どこかの方向に進化していくでしょう。その進化の試行の一つとして、私たち日本人は長く長く天皇の存在を大事にしてきました。この形質をもつてこそ日本人というほどに。それこそ政治、宗教という区分や言葉が設定される前から、ずっとです。あえて言葉にしてしまつと、その実体を捉え間違う可能性はあり、言葉に縛られず、これからも生き続けて、どういう方向に行くにせよ、みなで頑張つて生きていこう。そう思います。…………すみません、陛下相手に説教のような言い方になって」

「あなたは私より三つ年上なのだから、教わることの方が多くて当然ですから、気にしないでください。あなたと話していると、とても楽しいし、興味深い人に感じます」

「…………はい…私も、…」

鷹姫に睦まじくしてほしいと願われたので、鮎美は、そう答えた。

二人で過ごす時間が終わり、鮎美は義仁を見送ると司令室に行った。韓国軍と中国軍の動きを見ている畑母神に説明を頼んだ。

「韓国軍も北朝鮮軍も、すでにミサイルやロケット砲、航空機、艦船などの兵器は使い尽くしている。以前の朝鮮戦争と違い、裏からアメリカや中ソが援助するようなことが今のところ見られないので、北朝鮮は攻め込んでいたときに主力を趙舜臣に叩かれ、中央を核ミサイルに焼かれ、各地にも韓国軍からの通常弾頭ミサイルのダメージがあるし、韓国軍にしても当初に4カ所の核攻撃を受け、混乱の中で最大限の反撃をし、さらに趙舜臣が会戦で勝利し、逆に攻め込んでいたところ、もつとも戦力の充実していた先方を待ち伏せ核攻撃で叩かれ、両者とも、すでに残っているのは装甲車両や自走砲の類と、あとは武装した歩兵というところで、韓国軍は、その兵力のうち7を北朝鮮との国境付近に、3を対馬方面に向かわせているところだ」

「その3で対馬は、どの程度危険なんですか？ 占領されたりは？」
「占領されることは、まずない。そもそも制空権、制海権が我々にある。だが、我々として困った点は遠距離対地攻撃能力に乏しいところで。対馬へ砲撃されるのに対抗しようと思うと、本土から攻撃ヘリなどを補給線を確認しつつ展開する必要がある。この準備はしているが今少し時間がかかる。今すぐ砲撃を再開されても対抗手段がないという状態だ」

「……………。中国軍は？」

「もともと彼らの狙いは沖縄だったが、その目的を達するには戦力が低下しすぎた。結果、芹沢総理が狙ったようにモンゴル、ウイグル、チベットなどがざわつくし、台湾の存在も相対的に大きくなり、尖閣諸島に小隊を置くだけで、あとは国内向けに、まだまだ戦力があることをアピールするため、わざわざ見えやすい位置に戦闘機を駐機したり、あえて艦船を哨戒に出さず港に停泊させている。また、勝利を宣伝してもいるが、欧米各国の評価と報道は我々の勝利となっているから情報統制に腐心しているようだ」

「そういうことは、直近の問題点是对馬への砲撃再開ですか？」

「うむ、そうなる」

「……………」

鮎美は考え込む。

「砲撃してきた理由は難民船を転覆させて20万人を溺死させたことの復讐って言うてるけど、実際には転覆は7隻、うち日本軍の艦船が、そばにいたのは3隻ですよね?」

「うむ。近くだったのが3隻なのは確実だが、そうでない4隻はレーダー上での憶測にすぎない。もっと多いかもしれないし、少ないかもしれない。とはいえ20万人ということはない。一隻200人として、せいぜい1400人だし、我々の近くで転覆した船には仕方がないので救命筏だけは放出しておいた。それでも溺死者はいるだろうが半分以上は助かっただろう」

「……………あ、こういうのは、どやろ!」

鮎美が閃いたことを畑母神に言う。

「迪子はんが助けた難民が能登にいるやん。あの人らを迪子はんが誘い出して船へ乗せて対馬に移動してもらうねん。しかも一番、砲撃が当たりやすい島の韓国側斜面に、バラバラに点在して難民キャンプを張ってもらうねん。で、そのことを大々的に宣伝する。どやろ?」

畑母神が実に渋い顔をする。そばで聞いていた鷹姫も悲しそうな顔になる。

「そんな策は…」

二人とも言いかけて、鷹姫が黙り畑母神に譲った。

「そんな策はとりたくない。それは人間の盾だ。我々がするようなことではない」

「そうなんや……………あかんの? うちの領土内やん。どこにキャンプを張ってもらおうと、うちの選択次第やん」

「理屈の上ではそうだが、世界各国は日本が人間の盾を使ったと言うだろう。イラクではあったし、それで大きく批難されている。どちらが悪かを見たとき、我々が悪に見えてしまう。今回、中国軍はある意味で紳士的に行動している。少なくとも商船には攻撃していない。純粋に軍艦と軍艦、戦闘機と戦闘機が衝突しており、通商破壊のため

に一般商船を潜水艦で撃沈するような策はとらなかった」

「うーん……策謀と卑怯さの加減が難しいですね……」

「あと、対馬に難民キャンプをつくるのは、もしも次に再び北朝鮮が優勢となったとき、対馬なら受け入れてくれると、ドツと押し寄せられる可能性がある。趙舜臣が勝利してから難民船が来るのは止まったが、それまで対馬周辺が一番大変だった。これから4月5月となれば、浮き輪で泳いででも50キロなら、なんとかなる者もいるだろう。やめておいた方がいい」

「そうですか」

「だが、少数ではあるが難民を受け入れていたということを公開するのは良いかもしれない。すべて追い返したのではなく、石永官房長官が発表したように、安全と思われたものは受け入れたと、能登にいる彼らと世々部艦長を引き合わせ、その映像を海外にアピールしよう」

「ええですね。それ」

鮎美と畑母神は司令室へ鈴木と石永も呼んで話を詰めると、迪子を出頭させた。説明を受けた迪子は表情を曇らせたし、また彼らを利用するなんて、という気持ちは読み取れた。それでも命令なので敬礼して能登へ斉藤らと向かってくれたし、石永は本当に最低限だった食料の提供を増やして鶏肉をつけた。鮎美たちも同じ鶏肉での唐揚げを夕食とし、今日は無事に一日が終わりそうだったのに、食後になって鮎美を悩ませる事態が生じてきた。陽湖と静江がもたらした件だった。

「あんだ、うちの写真、ちゃんと消したはずやんね?!」

鐘留からインターネット上に鮎美が土下座して失禁しながら泣いて謝る写真が流出していると報告があり、確かめてみると陽湖に撮られた写真だったし、日本だけでなく中国や韓国でも広まっただけで、以前の鷹姫が機内で中国武装警察に銃口を向けられているときに我慢できなくて失禁した動画と合わせて、面白おかしく茶化されて拡散し、鮎美が胡錦燈に泣いて謝り沖縄から退却してもらったとか、鮎美がミクドナルドに泣いてすがり守ってくださいと土下座したとか、鮎

美が趙舜臣に土下座して過去の日本の罪を心から謝罪したとか、いろいろと加工や尾ひれがついていたし、日本国内でさえ一部の男性たちが冷やかす言葉をつけたり、いろいろな加工をして笑いのネタにし始めていた。鮎美は拘禁している陽湖の前に立つと、詰問していた。

「どういうことなん?!」

「し、知りません! 私は逮捕されて、すぐにパスワードを知念さんに教えて、クラウドデータは全部、消したはずです!」

「嘘つけ!」

「嘘はつきません! 信じてください! 嘘じゃないです! それに逮捕されたとき私のスマホを証拠として取り上げたじゃないですか?!」

「……………」

「アユミン、月ちゃんが設定してたパスワードを訊いてみて」

鬼々島にいる鐘留とはスマートフォンで通信したままだったので助言してくれる。

「あんたのパスワードは何やったん?!」

「えつと……………1225です」

「……………あんたの誕生日?」

「いえ……………」

「ほな、何よ?!」

「アユミン、たぶん、これクリスマスだよ。12月25日」

「……………あんたらの教団はクリスマスは祝わんのちやうの?」

「……………」

陽湖はうなだれるだけだった。

「きやははは! きつと、懂れてたんだよ。アホみたい!」

「……………」

「つていうかさ。今どき、たった四桁のパスワードで、しかも数字のみ。おまけに世界的な記念日ってアホとしか言い様がないパスワードチョイスだね。これじゃ2秒で破られるよ。とくに月ちゃんは日本と台湾の信徒とも通信があったし、アユミンの秘書補佐だし、いろいろ注目される立場だから、誰かが覗き見してたんだよ。で、面白い

画像があつたから盗用された。これが真相じゃない？ きやははつは！ アユミン、これマジ？ マジに、おもらしして泣いて土下座したの？ ね、どういう状況？」

「…………カネちゃん…………お願いやし、これ以上、うちを悩ませんといて。どうか、ネット上から少しでも消えていくような方法、やってみてよ。お願い」

鮎美が涙声で頼んだので鐘留も唾うのをやめてくれた。

「わかったよ。まあ、やってみる。で、月ちゃんは、どうするの？ 殺す？ 死刑？」

「同じ罰を受けます！ 私の写真を晒してください！」

「は？ あんたシヨウベン垂れるの大好きなド変態やん。写真バラ撒かれても興奮するだけちやうの？」

「…私は変態じゃないです…」

「どっちでもええわ。あんたへの刑罰は決まったし」

「どうされるのですか？」

鷹姫が問い、鮎美は一言で告げる。

「死刑」

「……………」

かなり本気そうだったので鐘留が問う。

「アユミン、本気で死刑？」

「カネちゃんが、うちの立場やったら、こいつ、どうする？」

「……………死刑かも」

「ほれ、楽園の入口が見えてきたよ。せいぜい祈っておき」

「……………ま……………待ってください……………」

陽湖がプルプルと首を横に振りながら、たいして貯まってもいなかった尿を漏らしつつ懇願する。

「助けて……………いや……………まだ死にたくない……………」

以前と違い、今は死を身近に見てきた分、陽湖は強い恐怖に包まれた。しかも鮎美は国家の最高権力者であり、ほぼ独裁者でもある。次々と法律を変更したり作り出したりするし、憲法でさえ無効にってしまう、きつと罪刑法定主義も突破して死刑にされそうな気がしてき

た。

「…あ…あの30億円は寄付します！ だから！」

「だいたい、あれ、もともと、あんたの金ちやうやん。義援金やろ。どうせ利息つけて貸し出して回収したあと、利息は自分のものにする気いやってんろ?!」

「……………」

その通りだった。そして、あと2億円、まだ口座に残っている。せめて、そのお金で現世を楽しみたかった。きつとデイズニーなら復活してくれるはず、そう信じている。

「いつ死刑にされるか、毎晩、シヨウベン垂れながら怯えておき。明日かも、明後日かもしれんね。もう、こいつには水だけでええし！」

鮎美は陽湖に背を向けると、重ねて鐘留にネットから自分の醜態写真が消えるよう頼んで電話を切り、次の問題に対処するため、大会議室に入った。大会議室では夜に集まることのできた7人の閣僚たちが静江を囲んでいた。テレビも持ち込まれて民放番組が流れている。

「芹沢鮎美総理大臣の秘書官、石永静江が不当な接待を受けていたというのは、やはり本当ですか？」

「はい、独自の取材により確かな写真とともに判明しています」

テレビ画面に静江が高級寿司店で大トロを頬張る写真が映った。他にもタクシーに乗り込むとき、厚めの封筒で車代を受け取る様子や、東京や大阪が壊滅したおかげで金沢市と富山市で開店したホストクラブなどで豪遊接待を受けている様子が映る。石永は妹が関わっている事態に頭痛がするという顔で、資料を読んでいた。

「……………静江……………これらの報道は、本当なのか？」

「……………はい……………」

静江は大会議室の中央で立っている。俯いて震えていた。

「どういう相手から接待を受けていたんだ？」

「……………富山県の関係者から……………」

「それで富山を推していたのか……………そうか……………」

「ごめんなさい……………お兄ちゃん……………つい……………」

「ともかく事実確認をしよう」

静江は兄に問われているので正直に答えている様子だったし、鮎美と鷹姫は遅れて来たので、とりあえず椅子に座って聴く。確認できた事実は、鮎美が富山と福井を競わせると発表した直後から、富山市議の中川を主とした関係者から飲食接待や現金授受があり、ひどいとホストクラブで豪遊したりしていて、一時期は片町の女王、桜木町の嬢帝などとホストから呼ばれていたけれど、副都心が福井市と決まっただけからは一切なくなっていたということだった。石永がタメ息をつく。

「よりによって富山か……勝手に議会をつくると言ってる……いや、それだけに、陰謀で、こつちを落とし入れてるのかもな。けど、これらの接待は事実なんだな？」

「ぐすつ……はい……ごめんさい……つい、うかれて……」

国会議員の娘として育ち、ちやほやもされたけれど、どちらかといえばペコペコと周りに頭をさげることが多かったし、兄が議員となつてからは余計に頭をさげて回ることが多かった。それは鮎美の教育係兼秘書になつてからも同じだったし、女子高生にすぎない鮎美にも頭をさげてきた。地元では支持者や市議からセクハラを受けても、苦い笑顔で誤魔化してきたし、酔った町内会の役員にスカートの中へ手を入れられたこともあるので、だいたいパンツスーツを着るようになっていて、それが震災で兄が官房長官となり急に周りの環境が変わって、接待に誘われる立場になり舞い上がってしまった。とくにホストクラブの若い美形男子たちによる接遇は、婚期を逃した女性の脳に痺れるような快感を与えてくれて毎晩のように行ってしまった。

「……つい……総理大臣臨時代理には……秘書の規定が曖昧で……これくらい、いいかなって……」

もともと総理大臣臨時代理には前例がないので、その秘書が公務員となるのか、どういう位置づけになるのかは決まっていなかったし、決めていなかった。それどころではなかったし、震災後は東京にいた石永の男性秘書たちも亡くなってしまったこともあり、実質的には石

永の秘書として動きつつ、名目は鮎美の秘書だったけれど、辞令さえ用意していない。鷹姫でさえ、鮎美が口頭で首席と決めただけの状態で、しかも給料もまだ払っていない。それは閣僚たちも同じで、いろいろとバタバタとしていて、いちいち秘書の立場や処遇など、しっかりと決めていかなかった。また石永がタメ息をつく。

「たしかに法的には罰されないかもしれないが……はああ……実質はオレの秘書だし、オレの妹だし、……世間的には総理の秘書だし……」

長瀬がノックしてから大会議室に入ってきた。手に持っていた紙袋を石永に渡す。そこには静江が車代として受け取った現金が25万円も入っていた。

「彼女のホテルの居室にありました」

「静江、これは？」

「……車代として……もらったの……いつか、収支報告書に記載しよう……いえ、……その……もらったし……もらって、いいのになって……」

「ダメなことくらい、お前ならわかるだろ？ 車代は、せいぜい3万、多くても5万だろ」

「……北陸は雪が降るからって……」

「一回も降らなかったじゃないか」

「うう……ごめんなさい……」

「はああ……」

石永のタメ息は深いし、他の閣僚たちの静江を見る目は冷たい。石永派の閣僚たちは石永と静江が決めて集めているので本来は味方だったけれど、静江は今日まで調子に乗って、私とお兄ちゃんが選んであげたから、あなたたちは大臣になれたのよ、という態度をときどき取ってしまった。そのために静江を擁護する発言はあがらない。夏子は途中で、くだらないから帰る、石永派で処理しといて、と言って金沢市へ帰ったし、畑母神もイスラエルから受け取った武器類を各基地に、どう配分するか、やはり陸軍への配布を中心とするか、さらには大打撃を受けている海軍と空軍の再編作業もあって、静江の命

運が、どうなろうと、どうでもよかったし、ただ迷惑そうな軽蔑した目だけは向けて消えた。三島も、くだらぬ、と一言で切り捨てたし、鈴木もない。芹沢派では久野だけが静かに座っている。だいたいの話が見えてきたので鮎美も言う。

「みよーに5時になつたら早う消えてたのは、そういうことやってんね?」

「……すみません……」迷惑をおかしています……」

今も流しているテレビでは、石永と鮎美を叩けるかっこうの材料なので、イスラエルや杉浦千畝のことなど鮎美たちが発表したはずなのに一切報道せず、また対馬の被害さえ、わずかに流しただけで、すでに3万人いた住民のうち2万人が九州や中国地方への避難をよぎなくされていることなど、ほとんど報道していない。鮎美が舌打ちする。

「ちっ……ホンマに偏って報道しよるなあ」

石永が悔しそうに言う。

「これは裏で議会をつくろうという連中も糸を引いているだろうな。接待した側の富山市議のことは、まったく出てこないのが、その証拠だ」

「議会……ちよい、うちは離れますわ。そいつはシバキ回しといて」

静江への対処を任せて、鮎美は不破島へ電話をかけるために廊下へ出た。

「もしもし、うちです」

「電話があると思っていましたよ」

不破島は知的な声で応じてくる。鮎美も無駄話をせず本題に入る。

「議会の方は、どうなん?」

「主に県議が集まっています。とくに民主党が多い。だが、自民党で落選中だった元国会議員もちらほら、ある意味で二重に落選した方々ですよ」

「二重に?」

「選挙に落ちたし、石永兄妹からのチョイスにも落ちた」

「はは、なるほど。その分、恨みは深いやろか？」

「いえ、それほどでも。おそらくは、ともかく自分も何かせねば、という気持ちで動いているのでしよう。もともと石永兄妹と交流が少なかったのだから仕方ないという部分も自覚しているようです。ま、人それぞれでしょうが、切り崩すなら、やはり自民党でしょう。もう少し大臣を増やしてやっては、どうですか？ 特命大臣で」

「ええ」と言うね。さすが。たしかに、あまりに被災地が広いし、九州、四国、近畿、東海、関東、東北と、それぞれに復興大臣を任命して省庁間の連携を横断的にやってほしいし、事故原発は事故原発で、それ専門の大臣がほしいくらいなんよ」

「さらに、その特命大臣に副大臣、政務官とつけていけば、かなり役職が生まれる。ポストがあれば、ひよい、と釣れる人は多いでしょう」

「それ頼める？」

「いえ」

「あかんの？ なんで？ あんたが、その人に恩をきせられるよ？」

「これから結成する議会の中で県知事クラスは、たった5名、しかも、うち4名は民主党系、あと一人は私。私は芹沢総理に茨城県議から県知事臨時代行に昇格してもらった身分でね。やっぱりスパイではないか？と疑われやすい。ちなみに南国原氏は参加していない。まあ九州と富山は遠いし、茨城と富山より移動も大変だ。それに今度こそ宮崎県の知事職を頑張ろうという意識もあるのでしょうか。それはさておき、スパイに疑われやすい私が引き抜きなど、やったら一発退場ですよ。こつちも、芹沢政権と同じで従うべき法律が曖昧でね、懲罰や弾劾をどうするか、だいたい昭和憲法に従うとしても決まっていな部分も多いし、知事、県議、市町村長、市町村議で一人一議席の平等とするのか、格差をつけて知事を10、県議市町村長を5、市町村議を1とするのかや。では私のような臨時代行の知事も10なのか、それとも5とするのか、なかなか決まらないので議会が始まらない。だいたい私が臨時代行であるのは芹沢総理が決めたことであるし、それに従うのは癪だという連中もいる。そもそも決まらないのは、決め

るためのルールも権限も曖昧で、あとから合流してきてくれてる議員たちも歓迎しているが増えれば増えるほど、話がまとまらず決まらなくなってしまう。傑作なまでの悪循環が生じている」

「アホや」

「アホですな。けれど、近いうちに新しい内閣総理大臣を選ぼうという動きもある。そんなわけで私はスパイだと疑われないよう、いつも芹沢総理の悪口を言いまくってます。お耳に入って、不破島め裏切りやがった、と思わないでくださいね」

「はは、何を言うてるかは聞かんことにするわ」

「引き抜き工作は、鈴木先生と久野先生にお願いされては、どうです？」

彼らは大ベテランだ。人選眼も鋭いでしょう。あと民主党で使えそうな人材は加賀田先生が声をかければいい」

「不破島はんも、すごいな。あんたも大臣やってほしいわ」

「ははは、私は茨城県が好きでね。離れたくない」

「そりや失礼」

「それで、そつちで石永妹の扱いは、どうなってます？」

「これから決めるところ。庇う声は少ないけど、まあ妹やし最後は兄さんが拾いはるやろ」

「片町の女王も落日ですか」

「うち、ぜんぜん気づかんかったわ。そんな状態やったなんて」

「秘書も腹心のようできてGPSでも着けない限り、しよせんは他人ですからね」

「そやね。この静江はんの件、富山からの陰謀なん？」

「はい」

「やつぱり、そうなんや……」

「まあ、引つかかる方も悪いし、もともとは陰謀ではなく副都心コンペの根回しで、コンペに落ちた腹いせと、陰謀の一石二鳥というやつですな。今頃、彼女は冷や汗まみれでしょう？」

「顔からメイクが流れ落ちてるで」

「ははは、陰謀には陰謀を、ということ、なにか連中の尻尾をつかめないか、やってみます。スパイだとバレないように」

「おおきに、よろしゅう頼みます」

鮎美は電話を終えると大会議室に戻ってみた。すると、意外な光景を見た。

バシンツッ！

静江が強烈に平手打ちされていた。

バシンツッ！

両頬を叩かれている。叩いているのは鷹姫で、心底怒り軽蔑した顔だった。

「私が秘書を辞めたいと言った日、あなたは私に言いました。秘書業務とは命をかけてするものだ！」

「ううっ…」

「接待に注意しろとは、勉強初日に私たちへ、あなたが教えたことですよ！」

バシンツッ！

さらに平手打ちするので、石永は止めたいけれど迷い、久野が言う。

「まあまあ、女性同士、そんな暴力的なことはやめて」

「女であることは関係ありません!!」

「そ、そうですね…」

あまりの剣幕に久野も引く。鷹姫は足払いをかけると静江を床に倒した。静江はビタンと蛙が叩きつけられるように倒れる。

「あなたが金沢市でお寿司を食べているとき！ まだ地震から一食も食べていない人は何十万人といました！」

テレビも鷹姫と同じようなことを流している。静江が旨そうに寿司を頬張る写真と、津波で孤立したビルの屋上で寒さに震える人たちを対比で紹介している。

「あなたが富山市で白エビの天ぷらを食べているとき！ 母を亡くした子、子を亡くした親たちが泣いていました！ 芹沢総理の母上でさえお亡くなりになっていたのに！」

「ううっ…知らなかったんです…すみません…」

「震災があったことを知らなかったわけではないでしょう?！」

「はい、すみません、ごめんなさい、ごめんなさい」
「……………」

鷹姫は静江から離れると窓の方へ行く。すべての窓に鉄板が装備されているけれど、一つだけは開閉可能なように設置されているので、それを開け、窓から下を見た。それなりの高さがあるので落ちれば死ぬ可能性はあった。鷹姫は振り返り静江に言う。

「切腹では床が汚れます。ここから飛び降りなさい」
「え……………」

「さっさとしなさい！」
「……………」

静江が助けを求めるように石永を見た。石永も、そろそろ妹を助けることにした。

「宮本さんの怒りもわかるが、ちよつと落ち着いて。ここはオレが静江に、よく言っておくから」

「石永静江は芹沢総理の秘書です！ 処分は、こちらで決めます！」
「……………」

怒ると、ここまで怖い子だったのか、と石永も意外だった。もともと剣道の強さゆえ、穏やかに丁寧語で話していてもピシヤリと強い語感のある物言いをするし、達人の余裕なのか、鮎美が関西弁で怒鳴り散らすのに比べて、大声をあげることなど少なかったのに、今は人が変わったように怒り心頭で官房長官でさえ一喝してくる。

「さあ！ 飛び降りなさい！」
「つ…………お兄ちゃ……………」

「飛び降りぬとあらば、私が投げてやります!!」

鷹姫が静江を引き立たせる。たしかに、この場にいる全員が口裏を合わせて石永静江秘書は責任を感じて飛び降り自殺したと発表すれば、だいたい事件は終わる。過去に秘書の自殺で終わった事件は多い。投げ落とされたのか、飛び降りたのかは、なんともなりそうだった。

「ひーっ！ 嫌ああ！」

静江が腰を引いて逃げようとするけれど、趣味で多少のプロレスの

経験はあっても、本格的に柔道も習ってきた鷹姫とは実力に違いがありすぎて、逃げられない。いよいよ投げ落とされそうになると、静江はパンツスーツの股間を尿で濡らして泣いたし、さすがに石永も止めに入る。

「待ってくれ、静江を殺さないでくれ！」

「離さない!!」

「鷹姫、シバキ回せとは言ったけど、殺すのは、まだよ」

「害虫の駆除は早い方がよいです！」

鷹姫は鮎美にさえ反論した。朝食は草と虫だったし、昼食はエフラヒムがもたらした武器を格納するのに忙しかった隊員たちは採集してやることができず、鮎美は鷹姫のためにキャベツだけのお好み焼きを作ってくれたけれど、それも食べなかつたし、夕食もお湯を飲んだだけで、空腹感は強烈だった。そこにきて静江が不当な饗応を受けていたと知り、生まれてきて今まで、これほど怒ったことがないというほど怒り狂っている。しかも、すでに静江との仲は冷え切っていて、小松に来てからは業務連絡で会話することしかなくなっている。それというのも、鷹姫が秘書を辞めたいと言いつ出したとき、静江は電話で慰留を求めたけれど、それは慰留というよりなじりだったし、年上女性が社会経験の乏しい女子をなじるとき独特の強烈ななじりで、電話口で言われたことの半分は覚えていないほど、精神的に追いつめられたし、そのために鷹姫は泣いて再び漏らしてしまい、見かねたクラスメートが助けに入るほどだった。それに加えて、静江の失態は単なるミスではなく、毎晩のように繰り返された饗応とワイロでしかない金銭の受け取りであり、これまで金銭的な清廉さを心がけてきた鮎美の顔に泥を塗るものだったので、容赦する気は一欠片も無かつた。鷹姫の暴力行為を見ている閣僚たちにしても、先日の国庫の危機で鮎美が恥を忍んで30億円を陽湖から借りる前に、自分たちも私的な財産を国庫に入れている。それは寄付にすると公選法上の問題があるので、あくまで個人から政府への貸し付けということで1%の利息をもらうことになっているけれど、返済時期は未定で私財を投じ、大臣や政務官としての報酬も停止中だった。鷹姫でさえ、これまでに秘書と

してもらった給与を供出しているのに、静江が石永家の財産は出して、表にできない金だとわかっていた255万円を隠していたことも印象を悪くしている。今にも静江を殺しそうな鷹姫を鎮めるため、鮎美も同調して言う。

「うちも、かなり怒ってるんよ。うちらが基地で寝泊まりして、みんなが頑張ってるとき、こいつがしてたことと思うと。許せるわけないやん。国民も、みんなそう思うわ。悪人には悪にふさわしい後悔と恐怖を味わってもらってから、死んでもらおう」

「っ、はいー」

「おいおい、芹沢さんまで、やめてくれよ。静江が悪かったのは、たしかだけどき。たかだか饗応じゃないか」

石永が妹の身を心配しつつ言った。前例から考えると、静江の秘書としての身分も不明確なので、刑事責任も問にくいし軽い。せいぜい、秘書の職を解かれて二、三年は自宅謹慎し党の雑用でもさせられながら、ほとぼりが冷めた頃また秘書に戻してもらおうか、静江の年齢と女性ということから、いよいよ見合い婚でもさせられて世間が忘れていき、議員への影響も限定的で、秘書への監督不行届として政府の要職にあれば国会で野党に糾弾され、しばらくは審議が止まったかもしれないけれど、別の事件が起これば忘れられていくような軽微なもので、しかも富山にするか福井にするかという選定で、結局は福井が選ばれているので副都心が福井になるという決定は小揺るぎもしないものだった。ただ、タイミングが悪すぎるのが痛い。まだまだ被災地では国民が苦しんでいるし、多くの戦死者が出た直後であり、遺族の悲しみも大きい。そんな中での静江の事件に鮎美も心底怒っていた。

「うちは罪刑法定主義を改める道理を国民に披露するわ。とりあえず、こいつは反省室で草と虫がエサな。連行しておいて」

「はい」

鷹姫が静江を陽湖が入っている狭い準備室へ連れて行った。

3月28日 里華の初陣

復和元年3月28日月曜朝、陽湖は静江と狭い準備室の床で1枚の毛布にくるまって眠っていた。昨日までは一人で1枚の毛布を使い、身体に巻くようにして床からの冷たさと3月末の北陸の寒さに耐えていたのに、静江まで何か失敗したらしく昨夜、鷹姫が投げ込みに来た。本当に投げ込まれた静江は受け身を取ったけれど、それなりに全身を打撲している。二人になったのに毛布の追加はなかった。

「……うう……」

「……私たち……本当に……死刑なんて……ないですよね？」

陽湖の問いに静江は不安そうに震えるだけだった。陽湖は環境に慣れてきたので少しばかり眠ったけれど、静江は一睡もできていない。暖房も効かせてもらえないので二人とも寒さに震えて、仕方がないので抱き合って寝ている。ずっと陽湖は入浴もさせてもらえずにいるので静江は最初は抵抗を感じたけれど、もう鼻が慣れてしまったし、そんなことより自分の運命が恐ろしくて泣いている。

「……助けて……お兄ちゃん……」

自分が悪いのは理解しているけれど、平時ならせいぜい秘書職の解雇と社会的制裁、刑事罰はあっても罰金20万円前後の罪で、今は死刑になるかもしれない。独裁者鮎美はかなり怒っていたし、その腹心の鷹姫は激怒だった。そして鮎美は独裁者であっても、それなりに周りの大臣たちの意見を聞く。なのに、今回は大臣たちも冷たい目で静江を見てきた。じわじわと死刑の水準が下がってきていると感じる。五人の女兒を強姦殺人した男が死刑になるのは、誰もが納得する。次が混乱に乗じて三重に戸籍をえようとした外国人、これも反対意見は少ない。けれど、陽湖は調子に乗ったのと写真を流出させたこと、静江に至っては接待とワイロだけなのに、殺されるかもしれない。望みは兄が官房長官として周囲を止めてくれることと、周囲と鮎美が踏み止まってくれることだった。

「入ります」

準備室のドアがノックされ山梨県から戻ってきた里華がバケツを持って入室してきた。ドアに施錠はされていない。けれど、逃亡したら銃殺、と張り紙されているので二人とも怖くて出ていない。

「……これが食事だそうよ。……まあ、食べて食べられなくはないし、宮本さんも食べてるけど……」

他人に草と虫を食事として与えることに戸惑いが残っている里華はバケツを二人の前に静かに置いた。中には湯がいた草と虫、お湯が入っている。

「せ、芹沢総理は、私のことを、どうするって?!」

静江が震えた声で里華に問うた。

「さあ。……」

里華も、かなり静江のことは軽蔑している。まじめな公務員として震災後に豪華な接待を受けていた官房長官の妹など、同じ空気を吸うのも嫌だったし、かなり準備室の空気は臭い。里華は姪の笑美と精神病院で会ってきた。笑美は詩織が園児たちを虐殺するのを目の当たりにした直後にドクターヘリから東京が津波に飲み込まれるのを見ている。両親の生死について医師や看護師たちは曖昧に答えているけれど、ほぼ死んでいることは本人も5歳ながら理解していて、お互い唯一の血縁となったので病室で出会ったときは抱き合って泣いたし、このまま退官して笑美のそばにいようかと思った。それでも小松基地に戻ってきたのは、多くのパイロットが戦死し、パイロット志望で訓練中だった里華が軍にとって貴重な存在となっているし、この状況下での退官は認められない可能性もあるし、後ろ指を指されることもある。逃げたくはなかったので戻ってきている。なのに、戻る途中の列車の中でニュースを見て、静江の不正を知った。

「お願い、どうか芹沢総理に……」

「汚い手で触らないで」

すがってくる静江の手を払った。嫌悪感しかない。そばにいて笑美が頑張っているのは知っている。嫌いなところもあるけれど、たった18歳で可能な限り日本を立て直そうと奮闘している。なのに、その秘書が不正をしていたことでマスコミは、ますます鮎美を叩いてい

るし、ニュースを見ていると静江とマスコミが腹立たしかつた。ただ、まさか本当に死刑にするのだろうか、という不安はある。里華は準備室を出るとドアを閉めた。鍵はもともとない。ドアには、反省室・面会謝絶、と張り紙がしてある。

「……………笑笑……………」

笑笑と会っているとき、詩織の話はしなかったし、そもそも鮎美のそばにいる任務についていることも話していない。笑笑の方も忘れたい記憶なのか、なにも言わなかった。世間も死んでしまった詩織が連続殺人犯かもしれないという、もう裁きようのない事件より、生きている静江が不当な接待を受け、現金を受け取っていたという話で盛り上がっている。里華は歩いて貴賓室に入った。昨夜、鮎美と鷹姫は同衾していた。里華は鷹姫と同室なので、いなかったの知っていたし、麻衣子の顔を見れば、鮎美と鷹姫に性的関係が存在していることは察した。

「石原はん、おはようさん♪」

「おはよう」

かなり機嫌よきそう、これなら二人の死刑はないかな、と里華は思いつつ鮎美に告げる。

「ずっと担当しておりました総理と秘書官の世話役ですが、多くのパイロットが戦死したことで訓練中だった私も前線に出ます。今日まで、ありがとうございます」

「……………」

鮎美と鷹姫、麻衣子が動揺した目で見てくる。多くの戦死者が出ているけれど、知り合いだったといえるのは百色くらいで、あとは他人といえば他人だったし、麻衣子も仲間うちで戦死した者はいない。なのに一番危険なパイロットに、いつしよに過ぎした里華がなると聞くと、胸が痛くなつて泣きそうになった。

「どうか、無事でいてな。石原はん」

「武運長久祈念いたします。どうぞ、ご無事で」

「石原空尉……………死なないでください」

「ありがとうございます。では—」

敬礼した里華が退室していく背中を三人とも見送った。鮎美が考えながら迷う。

「……畑母神先生に……石原はんは前線で使わんと言って……なんて言うのは越権やし……間違ったことやんな……」

「はい。……それに、彼女の誇りを傷つけることになるかもしれないん」

「そやね……パイロットか……」

先月までの状況で自衛隊のパイロットになりたい、と志望するのと現在の状況で空軍のパイロットになるのは、まったく覚悟が違うはずだった。

「大浦はんは……対馬の防衛につけ、って言われたら、いける?」

「え……ま、……まあ、命令なら頑張ります!」

「軍人に……自衛隊に入ったんは、なんで?」

「それは……高卒で、いい就職で、私も剣道やってたから採用されやすいし、女子が少なくて彼氏つくるの簡単そうで、いい筋肉した男性が、いっぱいいるそう……、っ、いえ、なんでも……」

「あんた筋肉フェチやもんなあ。いつも三井はんを見る目がちやうし」

「うう……バレバレ?」

「当たり前やん。ま、性の衝動は生きる原動力やもんね」

そう言った鮎美は紅茶に使ったシロップが残っていたので、それを直接に口へ入れてから鷹姫とキスをする。キスすると草と虫しか食べていない鷹姫はシロップの甘味を感じて脳が蕩けた。

「はあ……」

「フフ」

嬉しい。もっとキスしていたかった、という顔を鷹姫がしてくれるのが、とても嬉しい。けれど、もう時間が迫っている。

「ほな、閣議に行こか」

「はい」

鮎美たちは閣議を始め、鷹姫と二人で考えている憲法の草案を一部、石永らに見せた。それについて話し合うのと、石永は妹の処分に

ついで相談したかったけれど、予定していた10時よりも早く富山市に集まっている県議等が新しい国会の結成を宣言したので鮎美たちはテレビを見る。

「ここに日本国の平和憲法のもと！ 私たちは国会の開催を宣言するものであります！」

議長に選出されたという民主党の香川県の県議が司会している。会場は富山県庁の議場で傍聴席まで使って300名強が集まり、テレビカメラは2台が入っている。スペースの問題で傍聴人は入れていないものの、テレビと同時にニコニコ生チャンネルとユーチューブでも配信していた。

「これより内閣総理大臣の選出をおこないます！」

民主党、自民党、共産党、活力党の政治家が集まっているけれど、自分は県知事、県議、市議、落選中だった元衆議院議員とバラバラで市議レベルで顔を出しているのは近場の北陸からが多いし、富山市議がおもだった。不破島も県知事臨時代行として目立つところに座っているけれど、映りが小さいので顔がわからない。

「決まりました！ 新しい内閣総理大臣は金本勝龍（かなもとしょうた）くんとします！」

議場で拍手と落胆が混じる。従来の首班指名と同じく、やはり民主党は民主党所属の議員を推すし、自民党も共産党も活力党も、それぞれ自分の党の候補者を推す。結果、全国の県議の数では自民党と民主党は拮抗していたけれど、富山に参集したのは民主党が多かったので民主党の金本に決まった。鮎美がつぶやく。

「結局は一人一票にしよったんや」

「らしいな。かなり揉めてのことだそうだ」

石永も鮎美が不破島を情報源としているように富山へ誰か送っているようだったし、久野や鈴木も同じだった。

「うちが聞いた話では県知事を10とか県議を5とか格差つけるって」

「ああ、その案も強かったが、じゃあ、オレのような落選中の元衆議院議員は、どうする？ 10か、5か、それとも落選しているのだから

民意なしとして0か1。そして市議も1。さらに芹沢総理が知事の臨時代行にした…ふわ…ふわ…えつと…ふわあ…」

「不破島はんな」

「あ、そうそう。不破島、その人も10から微妙だから、もう、いつそ一人一票としよう。その方が集計も楽だ、平等だ、みたいになつたのと、もともと落選中の元衆議院議員は自民党がほとんどで、民主党の県議らは拒否したかったようだ。まあ、落選中だから民意なしというのもあるし、我々の政権は落選議員が多く入っているから、それを否定したい意味もありつつ、かといって追い出すわけにもいかず、やっぱり一人一票という形らしい」

「それを決めた過程に権限と根拠があつたのか、自分らでも迷いがあつたやろね。久野先生、自民系に声をかけてくれてはりますか？」

鮎美は引き抜きを頼んでいたので問うてみた。

「ええ、愛知県と静岡県は落選中だった元衆議院議員が応じてくれるそうです」

「北海道もいますよ。青森も、秋田も！」

鈴木も言ってくる。やはり地盤か、その近所に人脈があるようだった。石永派でも工作していたので何人かは通じていた。その彼らを特命大臣と副大臣、政務官などに割り当てる予定だった。

「夏子はんは？」

「ごめん、私は民主党に入って日が浅かったし、あつちの議会は民主党が優勢でしょ。こつちが声をかけても様子見って感じでさ。ごめんね、一人も釣れてない」

「いえ、気にせんといってください。時間もなかつたし」

テレビの中では金本を囲み、民主党の議員らが万歳している。新屋が問うてくる。

「芹沢総理、任命について陛下とお話しされましたか？」

「はい。少しだけ。もちろん、富山の議会が任命を求めてきても応じないおつもりであると、確認してますわ」

久野が言う。

「島津先生の段階で断っているようです」

「お礼を言わんとね」

「そんなヒマがあれば対馬のことを考えろと叱られますよ」

「対馬かあ……」

鮎美が畑母神を見る。

「韓国軍に動きはないよ」

「中国軍は？」

「同様だ」

テレビの中では金本が所信表明の演説を始めている。

「未曾有の大震災にて、たった一人を残して国会議員が欠けた今、私たち有志は日本国の正統の政府を造り上げるため。ここに参集しました！ この大災害において新しい政府のみなみなさま方と協力し、日本の復興を必ずや成し遂げると、ここに私は内閣総理大臣として誓いますー！」

演説が終わると、すぐに国務大臣となるメンバーを発表している。当然、全員が民主党の県議だった。石永がつぶやく。

「知事との兼務はさけるんだなあ」

「うちらとは違うちゅーアピールですよ」

「だな」

三島が言う。

「陛下からの親任がないのでは淋しかろうな」

「賊軍です」

おもわず鷹姫が発言してしまい、閣議の場で許可なく発言したことを詫びるように頭を下げたけれど、誰も気にしない。この子が言うことは、いつも古いなあ、と思うだけだった。鮎美は時刻を見る。そろそろ鮎美の出番だった。静江の件で国民へ謝罪し処分を発表するため、録画ではなく生放送でニコニコ生チャンネルに出る予定となっていて、それが10時だったし、富山の議会が開催されるのも10時が予定だったのに、おそらくは鮎美と重なったので前倒ししたのだと思われた。

「そろそろ準備しよ」

「芹沢総理、本当に静江の件では申し訳ない」

石永が深々と頭をさげ、それから言う。

「頑張ってくれている君の足を引つ張るようなことをしてオレも静江を強く叱りたい。だが、もしも君が本気で静江を死刑にする、もしくは不当に重い罪を着せるようなら、オレは君と戦う。それこそ、富山の議会へ入つてでも」

「……」

「国民への謝罪も、オレと静江がやるべきだと思う。今からでも替わろう。だから、どうか、わかつてほしい」

「……まあ、死刑にはしませんよ」

「ありがとう！」

「けど、死刑になるかもしれない、という恐怖は、たつぷり味わってもらいます、ええですね？」

「………わかった………だが、あまり重い刑罰も……」

「はい、どういう罰になるにせよ、それでええか、石永先生に同意をとつてからしか、くたしません。それでええですか？」

「………すまない………願います」

「ほな、まず謝罪会見で、晒し者にはなってもらいますけど、ええですね？」

「………わかった」

石永は頷くしかなかった。鷹姫は手鏡を鮎美へ向ける。鮎美は前髪を少し直して唇にリップを塗った。そうして出演の準備をしていると、富山の議会に新たな動きがあった。

「韓国政府からの使者として！ 金本勝龍内閣総理大臣の政権こそ、正統な日本の政府であると、ここに承認します！」

東京や大阪の大使館や領事館などは津波により壊滅しているし、今まで鮎美たちの政権にはコンタクトがなかった韓国の関係者が、どういう身分で承認しているのか不明だったけれど、国家として承認するとして何らかの証書を渡している。受け取った金本が頭をさげる。

「ありがとうございます！ これからも日韓友好のため微力を尽くします！」

「頑張ってください」

日本語に堪能なようで、ほとんど発音は正しい。そして付け加える。

「だが、この度、日本の一部の暴走した政治家が私たちの避難を妨げ、多くの避難船を沈没させた件については深く反省し、補償を考えていただきたい」

「まことに申し訳ないことです。一部のなしたことですが、私たち日本政府の責任として受け止め、ここに謝罪し賠償をお約束します」

金本が頭をさげながら握手を交わしている。この光景に対して議場にいる自民党県議らから野次が飛び、野次だけでなく靴も飛び、止めようとする民主党県議らと揉み合いになっている。議場には警察や守衛などもないので大乱闘になってきた。鷹姫が冷静に出番が近いことを言ってくる。

「芹沢総理、あと3分です。広報室へお急ぎください」

「そやね。めっちゃ先が気になるとこやけど、これ録画しといてな。あとで、うちも見ろし」

鮎美は大会議室を出て広報室に移った。斉藤たちが生放送の準備をしてきている。

「カウントダウン、いきます！ 3、2、…っ、…っ！」

スタートです、という合図を斉藤がしてくれた。

「おはようございます。芹沢鮎美です。この度は私の秘書の件で、大変なお叱りを国民全体から受けており、ここに深くお詫び申し上げます」

鮎美は深く頭をさげた。長い髪がサラサラと落ちる。長く頭をさげた後、ゆつくりと顔をあげた。ニコニコ生チャンネルなので視聴者からコメント投稿が入っている。

謝って済むか。

石永を出せ！

鮎美やらせろ。やらせたら許す。

ホストクラブに静婆が行くってことは、あいつはノーマルか？

鮎美ちゃんはキャバクラ行く？

富山の方が面白いぞ、大乱闘してる。

レベルの低いコメントが流れている。鮎美には読んでいる余裕など無いので齊藤が、だいたいの感触をまとめ、画用紙に大きく書いて鮎美へ伝える手筈になっていた。予想通り野次られているという走り書きを見て、鮎美は次の段階に入る。

「本人を連行してきておりますので、本人からも謝らせませす」

鮎美が軽く手で合図すると、三井と高木に左右の腕をつかまれた静江がガクガクと震える膝で歩いてきた。膝が笑い、腰が抜けて、もう自力で歩けないので体重のほとんどを三井と高木が支えている。

静婆ガクブルだw

死刑、死刑！

ズボンにシミできてる。漏らしてるぞ。

昨夜から静江は着替えさせてもらっていないし、死刑にされるかもしれないという恐怖で夜中のうちにも何度もパンツスーツの股間を濡らしていたし、今も怖くて少量の失禁をしたので4重5重にシミができている。とても可哀想な姿だったけれど、この場にいる全員が震災後、日本のために働いてきたという自負があるので不当な接待を受けて迷惑をかけている静江に対しては、やはり嫌悪感が大きくて誰も同情していない。石永は大会議室で二つの液晶画面で富山と妹を見ている状態だった。鮎美が冷たい声で問う。

「石永さん、国民の皆様へ何か言うことはありますか？」

「っ、す、す、す、すみません、すみああぬせん！ ごほええおごへへせんせん！ ごめ、ごめえ、ひぐ、あひ、ぐひま、せん！」

涙を流しながら意味不明な声と尿を漏らしている。頭をさげているつもりなのかガクガクと首も上下させていて顔が見えにくい。そばにいた鷹姫が乱暴に髪をつかみ、顔をあげさせた。

「はつきり話さない！ 聞こえていません！」

きちんと静江本人であることを視聴者に示すため予定された演技だったけれど、鷹姫は本気で怒鳴っている。

「芹沢総理の顔に泥を塗ったあなたは死に値します！ 今からでも自害なさい!!」

鷹姫の鋭い声は視聴者に、はつきり届いている。

鷹姫ちゃん怖ええ

なんかイメージと違う。

いやイメージ通りだぞ、オレの。

シコシコ

この子もレズなのかな。

っていうか自害って今どき使う言葉か？

じゃ自死でw

自害のがカッコいいよな。自殺から自死に変えるより自害に戻そうぜ。

カッコいいからダメなんだろ。ついヤルし。

鮎美が続ける。

「すでに報道されている接待や現金の受け取りは本人へ確認したところ事実でした」

「ひうぐう、すみぐあうせにうん」

「国民の皆様方の怒りは、きわめて深いと感じております」

「すみすみません！」

「正直、私も強い失望とともに深い怒りを彼女に覚えます」

鮎美は泣きながら謝っている静江を一瞥してから、またカメラを見る。

「はつきり言えば死刑にしたい、という感情があります」

「ひいひい！ ああ嫌あああ！」

静江が藻掻いたけれど、高木と三井につかまれているので何もできない。

「ですが、罪刑法定主義というものがあります。簡単に言えば、その犯罪が犯される前に、それが犯罪であり、どれだけの罰をかすか、決めて発表しておかなければ、たとえ悪いことをしても、それは罰せないという法律上の決めごとです」

鮎美は横髪を耳にかける仕草をしたくなかったけれど、今は自分も監督不行届で謝罪している立場なので我慢する。

「もし、今回の件で石永静江を従来の裁判に、従来の法律でかけた場

合、せいぜい罰金が20万円前後という実に軽いものです。さらには、申し訳ないことに震災後の忙しきで石永静江の身分などは、はつきりと決めておりませんでした。このことが被告人に有利に働くと、無罪とされる可能性さえあります。実体としては政府の一員として働いてくれていましたが、形式に不備がありました。実は正規の給料さえ、まだ払っていませんし、決まってもいません。では、だからといって無罪になるのが正しいことでしょうか？ そんな道理に合わないことがあるでしょうか？」

「ずびばせげん…ハアひ…すぐせん…」

「うちは彼女を死刑にしたいと思いますが、みなさま賛成いただけるでしょうか？」

すぐに投稿が飛んでくる。

賛成！

死刑決定。

反対の賛成なのだ。

賛成の賛成。

アルカリ性の酸性。

死刑死刑。

これで死刑にしたら鮎美も終わるな。

いいとこ懲役5年じゃね。

んなにならねえよ。

死刑しかない。

婆は死刑、女は姦刑。

鮎美ちゃんの今日のパンツ何色？

お前の精子は何色だ。

純潔の白で。

まだ純潔なんだな。童貞。

ろくなコメントが入ってこないし集計する気もない。けれど、真剣に見ている視聴者もいるだろうと鮎美は続ける。

「新潟県で誘拐された少女が2000年1月に発見されましたが、この少女は1990年11月に9歳で拉致監禁され、約9年間も加害者

宅で監禁され続けていたのです。この犯人は当時28歳、それ以前にも別の9歳の少女への強制わいせつ未遂で現行犯逮捕され、懲役1年執行猶予3年の有罪判決を受けていましたが、9歳から9年間、ほぼ青春のすべてを拉致監禁されて過ごしたことへの代償として一審では14年、二審では11年、最高裁では14年となつています。拉致監禁の間も暴行は常に続いており、検察は、非人道的で血の通った人間の行為とは思えない。極悪非道であるとして異例に、裁定未決拘留日数は刑期に算入すべきでないと主張し、また逮捕監禁致傷罪は懲役10年が最高刑であるため、法的な技術を駆使して刑を重くするため、犯人がホームセンターで女兒に着せるために4点の下着を万引きしていたことに窃盗罪で追起訴をおこなない、併合罪という計算で15年の懲役を狙いましたが14年と一審ではなり、二審では併合罪の解釈が意図的だとして11年に減刑、最高裁では一審を支持して14年となりました」

「ほぼ無意識に鮎美は横髪を指先で耳にかけてから話し続ける。

「たつた14年ですよ。しかも前科もあつて。刑務所にいる14年で三食ちゃんと出てきて…ま、ここ最近、きつと、こいつにも飯を出してないと思いますけど…、刑期通りなら、あと3年で出てきおります。懲役刑というても、のんびり仕事させるだけでシバき回したりするわけちやいます。けど、こいつは9年間、拉致した少女を暴行し続け、殴るのはもちろん、スタンガンで痛めつけたり、やりたい放題やつたし食事は1日1食、コンビニ弁当のみで少女の体重は38キロまで減少、トイレはビニール袋にさせて監禁中に入浴させたのは一回だけ。それで14年と見合います？ ぜんぜん見合わんと判断したから最高裁は併合罪の強引な解釈を認めましたけど、法文の字面通りやと二審が正しい判断です。なんで、こんなことになるかという罪刑法定主義があるからです。もともと逮捕監禁致傷罪の上限が10年やから、もつと増やしたいくらい極悪非道な犯行やし、ほな軽い万引きがあるし、それ足して15年にしたら、という発想ですわ。それは、ちやうでしょ？ いっそ、逮捕監禁致傷罪の上限が10年やったのは、こんな長期間の拉致監禁と暴行を想定してなかったからで、そこ

を罪刑法定主義を少し押さえて、あまりに非道な犯罪で想定外やったもんには、その犯行の様態を、みんなで考えて、ほな20年にしよ、いやいや無期懲役、もしくは死刑、と増やせるようにしたらええと、うちは思います。もちろん、みんなで考えるときには恣意的にならないように国民から無作為に選んだ裁判員をもちいて合議体でやったらええと。大切なんは法律の原則である罪刑法定主義を守ることなんか、ちゃんと犯罪に見合う刑罰をくださることなんか、そこを考えたら、どちらに道理があるか自明やのに、つい法学を勉強しすぎると、原則が大事になってしまう。数学の公式とちゃうねんから、しつかり慎重に検討して曲げるときは曲げたらええんです。それで道理が立つほど非道な犯罪なんやったらね」

長く話した鮎美は水でも飲みたくなつたけれど、基本的に謝罪会見なので我慢して語る。隣にいる静江は罪刑法定主義を、やっぱり無視されるのだとわかり震えが大きくなっていった。

「暴力による犯罪だけやないです。経済での犯罪でも刑と被害が見合わんことがあります。ライブドア事件では粉飾決算額は50億円、これによって1600億円の資本調達をおこない、代表取締役社長は145億円の持株売却をやつとります。これで経営陣にかされた刑罰は懲役2年6ヶ月や1年2ヶ月、他3名には執行猶予つき。法人としてのライブドアには罰金2億8千万円。しかも主犯は最高裁へ上告して来月くらいに判決の予定でしたが…まあ、東京は津波で、ぜんぶ、わやですけど、おそらく最高裁は2年6ヶ月とし、5年や10年とはならんでしょ。単純にもし145億円もらえるなら2年半、刑務所に入れ、と言われたとき、どうです？ ぜんぜん余裕で入るんちゃいます？」

「…ういひい…」

恐怖のあまり静江は変な声を漏らしているし、尿も漏らしている。

「サブプライムローンの問題も似たような側面があります。今アメリカが混乱してるのも2008年におきたリーマンショックの影響もありますわ。日本も大迷惑やった。リーマンは64兆円という負債

額で史上最大の倒産をしたのに、倒産するまで格付け会社からはAAの信用格付けを取ってました。これ完全に詐欺でしょ？ 経営陣は高額の報酬をずっと受け取ってきたのに、さっと逃げるし、格付け会社は、信用格付けはただの意見です、と逃げる。お前は食べログのレビューでも書いてるつもりか、と世論の嫌悪感を買っても、重い刑罰をかすことはできません。これでええんですか？ 資本主義、自由競争、これはええ、けど、それをバンバン悪用して法の網の目をくぐって、自分らに有利な契約を組んで、他人に損させて逃げ切る。そして罪刑法定主義があるから、守られる。うちは、こういう社会は大きく間違ってると思います」

久野が広報室に入ってきて、予定外に生放送中のカメラに一礼すると、鮎美へ耳打ちしてくる。

「富山の金本氏が芹沢総理に面談を申し込んでいます。できるだけ早く会いたいと、電話や通信ではなく直接に。どうされますか？」

「……待たせておいてください。今は謝罪会見中なんで」「わかりました」

本来は官房長官が伝えに来るような内容だったけれど、今は石永は大会議室で待機していて久野が代わりに来たのだった。久野は再びカメラに一礼して被写界から消える。鮎美も謝る。

「すみません。業務連絡が入りました。会見を続けます」

鮎美は、どこまで話したかを思い出し続ける。

「今の日本、この大震災においても暴動や強盗も少なく、みなさん我慢いただいて治安が維持されているのは、なぜでしょうか？ 明治維新後、法治国家になったからでしょうか？ 違います。すでに江戸期には治安の良さは世界屈指、こうなったのは織田信長の一銭斬りが始まりです」

鮎美は鷹姫からえた知識を語る。

「それまでの戦国期、占領地で略奪や暴行をするのは勝利軍兵士の権利といってもいいほど、当たり前のことでした。けれど、古くは源義仲が京で略奪をし、人心を失ったように、勝利軍によって住民が被害を受けるのでは世の中、はちやめちやです。これを変えたのが織田信

長でした。信長は勝って新たな土地に進行するときでも自軍の兵士に略奪暴行を強く禁じていました。結果、わずか一銭を盗んだだけの兵士でも切り捨て、これを模範としています。おかげで治安はよくない信長の占領下となることを民衆は喜んで受け入れたのです。また、これは秀吉、家康にも受け継がれ、江戸時代は10両盗めば死罪といわれるようになっていきます。その結果が今日です。けれど欧米から入った法律と、犯罪者の人権を重視する憲法で、いささか歪んできました。そこで今回の石永静江の件ですが、私は最高刑として死刑もふくめた上で、11名の裁判員による裁判をおこなう社会実験をしたいと考えております」

「はひうひいう」

静江が震え上がり、視聴者からはコメントが投稿される。

死刑に一票。

よし、死刑だ。

死刑に二票。

死刑に3000点。

ところで今回の配信、ニコ生だけでYouTubeにはあげてないのな。

なんでだろうな。

外国に、あんまり見せたくないんじゃないやね。

まあ身内の恥だしな。

あと死刑にするには乱暴な案件だよな。

裁判員で決めるし、一応は手続き、あるだろ。

いやいや、それって人民裁判って言わね？

法治国家が情治国家になるぞ、韓国みたいに。

コメントに鮎美が意図するものがあつたので拾う。

「はい、今、情治国家というコメント投稿がありましたし、人民裁判というご指摘もいただきました。現在、韓国とは戦争に準じた状態であり、みなさまの感情が悪いのはよくわかりますし、私も同様です。ただ、韓国では悪いことをした経営者の追求がかなりしつかりとなされます。賛否わかれると思いますが、たとえば詐欺みみたいな商法をおこ

なう会社が巨額の利益をあげ、そして警察に摘発されたとしても、社長は逮捕されても、社長の子供などは追求されません。当然です。会社にかかわってなければ、それでいいでしょう。けれど、社長の子供は、やっぱり平均的な子供より豊かな生活をし、不当に親がえた資金で遊んだり大学に行ったりと、そういうことをしてきたわけです。さらに親から贈与を受けていても、この金額には追求が日本ではおおよびません。けれど、韓国ではなされるそうです。子供から何もかも身ぐるみ剥ぐのは、よくないとしても、平均的な子供が受ける親からの享受を控除した部分は追求するのが一種の正義ではないかと考えます。世の中を見渡して、詐欺で騙された親の子が苦労して奨学金で大学に行ったのに、騙した親の子は楽々と大学に行き平均より恵まれて育つし奨学金の返済もない。これで、ええのでしょいか？　せめて、悪徳による資金で育ったなら、平均程度を差し引いた残りは背負っていくべきとちやいますやろか。そういう意味で韓国の治世は、領ける部分もあるのかな、と思いますし、日本が欧米の法治を重視しすぎて犯罪者の権利を守りすぎるのは、どうか、と考えております。また、人民裁判となるか、どうか、そこは裁判員の良心にもよりますし、私としては感情で治める情治ではなく、道理と道徳、徳をもって治める徳治の国家であってほしいと考えております。その意味で、大震災で、みなさまが苦しむ中、富山と福井でコンペをしたことで誘惑に負けて、ありえない豪遊をしていた私の秘書に、どういう判決がおりるのか、どういふところで、みなさまに納得いただけるのか、見守りたいと思いますので…」

再び広報室に誰かが入ってくる。鈴木と石永だった。二人もカメラに一礼して、鈴木が耳打ちしてくる。

「北朝鮮の金正忠代表より芹沢総理とネットで面談したいと急ぎの申し込みが入ってきました。どうされますか？」

「……受けざるをえませんね」

「はい」

無視できない人物だったので鮎美はカメラへ謝る。

「申し訳ありません。他国の代表より重要な連絡が入りましたので謝

罪会見を石永官房長官に引き継ぎます」

そのつもりで石永が来ていることは明白だったので鮎美は交代して廊下に出る。石永は二世議員で官房長官となった者として紳士かつ従来通りの謝罪に切り替えていき、鮎美は鈴木のご案内で司令室に向かう。向かう途中、鮎美は軽い目まいを覚えた。

「…っ…」

「芹沢総理っ！」

ふらついたので鷹姫が支えてくれた。

「大丈夫ですか？」

「うん、おおきに、ちよつとクラつとしただけ」

「御心労が重なってるところに、いきなりの国家代表との面談では当然です」

「…：鷹姫、ちよつと抱きつかせて」

そう言った鮎美は支えてくれていた鷹姫を抱きしめ、その胸に顔を埋めた。鈴木が言ってくる。

「あまり待たせていい相手ではないですよ」

「1分だけ」

「「「「……………」」」」

異性愛者である鈴木と麻衣子は不思議に思うけれど、護衛のゲイツたちは理解できる。充電中なんだな、と思つたし、鈴木と麻衣子も鷹姫が彼氏だったなら、と考え直してみると鮎美が癒やしを求めているのがわかった。

「…：はあ…鷹姫…」

甘えた声を出して鮎美は一分が過ぎる前に鷹姫の上着のボタンを外すとブラウスの上から腋に鼻を入れて犬のように匂いを嗅ぐ。鷹姫も謝罪会見中だったので緊張と怒りが強かったように腋が汗ばんで濡れていて匂いも強い。鮎美は鼻を擦りつけて味わい、そして離れると両手で両頬を叩いた。

「よっしや、頑張ろー！」

「はい。お姿を整えます」

鷹姫は鮎美の髪をなおし、制服の乱れを整え、議員バッチとブルー

リボン、レインボーブリッジのバッチも位置を正した。鮎美たちは早歩きで司令室に入った。司令室では32インチほどの液晶モニターに金正忠の顔が映っており、待っている間は畑母神と対峙していたように、二人とも無表情で睨まないように睨み合っていた。畑母神と鮎美が交代し、つい鮎美は日本人らしく謝ってしまう。

「すみません、遅くなりました。うちが…私が芹沢鮎美です。どうも」

「……」

まだ26歳の若き北朝鮮の指導者と、若すぎる18歳の日本の指導者がモニター越しに初めて顔を合わせた。つい忙しかったので、あまり緊張せずに顔を合わせたけれど、鮎美に対策は何もない。鈴木のおかげでプロフィールくらいは予習しているというだけだった。鮎美の言葉を外務省職員が朝鮮語へ翻訳する前に、金正忠が言ってくる。

「おう。ええよ気にせんで。ワシが急に申し込んだんやさかいな」

「「「……」」」

違和感と意外さのあまり畑母神らは目を丸くしたけれど、鮎美だけは母語なので違和感を覚える間もなく返事していた。

「おおきに。ほんで、お話しちゅーのはなんですか？」

「まあ、待てや。お互い、ちよつとは知りおうてからにしよ」

「そらそうですね」

「ワシのオカンな、おまんといっしよでアユミでオトンに呼ばれとつてん。知つとる？」

「あ、はい。聞きましたわ。お母さんは大阪出身やて」

「そやねん。ワシの関西弁、完璧やろ」

「めっちゃ完璧ですやん。道頓堀におつたらわからんで」

「せやろ。ちよつ、おまんのこともアユミで呼んでええか？」

「ええよ、ええよ。ほな、うちはキムやんにするわ」

相手が関西弁なので鮎美の関西弁も普段より濃くなっていく。

「アユミ、写真で見るよりめんこいなあ。惚れそうやわ」

「また、そんなっ、誉めてもなんも出んよ！」

鮎美が大阪人らしく空中を叩いた。

「しかしアユミも18で指導者で大変やな？」

「まあ、きついですわ。いろいろ！ ほんでもキムヤンも26やろ。大変ちやいます？」

「これがな、きついわ！ しかもオトンが戦争しかけとくやろ。このタイミングでワシに替わるんかいっ?! ってとこやわ」

「そっちの立場も、きつそうやねえ」

「アユミも頑張つとるやないか。そや、あの秘書、やっぱ死刑か？」

「うくん……迷いちゅー」

「切れ、切れ、あんなもん許しとつたら、すぐ調子にのりよるど」

「うちの情報よおー知ってはりますねえ」

「嬉しそうにネットへ流しとるでよ。アユミとミクドのしゃべくりなんか5億ヒットいっつとるぞ」

たっぷりと鮎美と金正忠は30分以上も近況や大阪について語り合った。畑母神や鷹姫は、こんな仲良く話しているいいものか、と疑問に思ったけれど外交畑が長い鈴木はニコニコと見守っている。国同士が争っていればいるほど、首脳同士の会談はスタート時は関係の形成から始まるので、あえて止めずにいる。いずれ、お互いに狙いや目標、条件を出し合ったとき、どうなるかは別として今は人間と人間で深くコミュニケーションを取っておくのが常道だったし、関西弁のおかげなのか急接近している。

「アユミ、そっちも、そろそろ飯時やろ？」

「うん、そやわ」

日本と北朝鮮には時差がなかった。

「いつか、いっしょに飯喰える日もくるやろけど、今は、このまま飯喰いもて話そか」

「あ、ええね、それ」

モニター越しに会食することにもなり、麻衣子らが食事トレーを持ってきてくれた。鮎美たちのメニューはエビチリソース野菜炒め、チキンサラダ、オニオンスープ、白米、イチゴだった。金正忠の提案で鈴木や畑母神たちも着席して食べる。金正忠らも数名の幹部を相

席させ、ヤキソバを食べ始めた。

「日本人はエビが好きやなあ、ワシも好きやけど」

「そのヤキソバ、具は？」

「豚や」

「機械で食べている金正忠だったけれど、彼が見ている画面の端に鷹姫が草と虫を食べているのが映ったので問うてくる。

「あの子は、なに喰うとん？」

「あゝ……ちよい事情があつて草と虫ですわ」

「マジか。津波で日本の食料、そんなヤバいんか？」

「なことないって。凶作でもギリいける計算やよ」

「凶作でイけるのは羨ましい限りやな。けど、ほな、なんで？　なんか

悪いことでもしよつて罰でか？」

「ちやうて。まあ、罰で草と虫にしてる秘書もおるけど、鷹姫は自主的に挑戦中なんよ」

「ふうん……中国とやり合つて日本の戦闘機、なんぼ残った？」

「さざり和金正忠が探りを入れてくる。」

「けつこうやられたけど、そこそこには残つとりますよ」

もう、ぼやかして返答することなど鮎美も政治家として慣れていたのでオニオンスープを啜りながら答えた。鮎美は核爆弾の残存数について訊きたい気持ちはあつたけれど、それこそ教えてくれないに決まっているので訊くこともしない。金正忠は再び大阪について語る。

「アユミ、大阪のどこ出身よ？」

「天王寺区やよ。生國魂神社あたり」

「オカンがいたとこの隣やんけ」

「ホンマ?!」

「おう、生野区や。1キロも離れとらんなあ」

二人ともゆかりの地が近所なので、ますます親近感を持った。

「ワシらの親は、えらい近いところにおつたんやのお」

「そやねえ……運命で不思議なもんやねえ」

お互い食べ終わり、いよいよ本題に入る。

「アユミ、対馬の方は、どや？　今も砲撃あるか？」
「えつと…」

鮎美が畑母神の方を見る。

「とくに動きはないが、海岸線に自走砲を並べているので、いつでも砲撃できる体勢をとっているし、数も増えている」

「だそうですわ」

「数は、なんぼか教えてくれるか？　おっちゃん」

「……………」

畑母神は、わずかな情報でも与えたくなかつたけれど、鮎美が促す。

「まあ、それくらいええんちやいます？」

「……。31両と見込んでいる。ダミーもあるかもしれないが」

「しつかり数えとるなあ」

「うちも訊きたいことあるねんけど、ええ？」

「おう、言うてみい」

鮎美は核弾頭の数以外で訊きたい数があるので問う。

「ずいぶん前に、そつちに攫われた日本人、あと何人、残ってはる？」

「あゝ、その話かあ……………」

金正忠も鮎美たちの胸にあるブルーリボンの意味は知っている。
質問としては予想内だった。

「7人はおる。12くらいかもしれん」

「それで、終わり？　もつと生きてはらへんの？」

鮎美が勇気を持って追求してみた。

「だいぶ前の話やしな。自然と病死ちゆうーこともあるし、あとアメリカの核攻撃でも2人は死んどるわ」

「こつちで登録してはる人、もつと多いんよ？　横畑さん夫妻以外にも、いっぱいはいはる」

鮎美は夫妻との会談中に居眠りしたけれど、鷹姫が熱心なので気にかけていたし、自分も母親の美恋を亡くしてからは、親子離別のつらさが実感としてわかってきている。

「ああ、横畑な、あいつは生きとるで」

「返したって！ あと、他にも、もつと！」

「もつと言われても、ワシの把握では、せいぜい12や」

金正忠は側近に朝鮮語で何か命じた。おそらくは資料を調べろいう指示に感じる。鮎美は粘ってみる。

「百人くらい、いはるやろ？」

「いやいや、そんなにおらんし」

「けど、こつちで訴えてはる人は多いよ」

「あれなあ、全部が全部ワシらとは限らんやろ。アユミも、さつき新潟の拉致監禁いうとったやんけ。ああいう風に、おまんらの中で拉致つとったりして死体が見つからん分とか、たんに蒸発したとか、うつかり海に落ちて溺れて死体があがらんかったもんもおるやろ？」

「うちの会見をライブで見てたんや。そやのに途中で連絡してきたん？」

「謝罪会見するアユミの顔を見てたら話してみとうなったねん」

「うく………ともかく、せめて残ってる人、返してくれへん？」

鮎美は少し首を傾げて女の子らしくお願いしてみた。

「そやなあ、まあ、条件によっては返してもええけど」

「………どんな条件なん？」

「敵の敵は味方ちゅーやろ、いつそワシらと日本で南朝鮮を南北から挟み撃ちにせんか？ あいつらビビりよるで」

「クスっ……そらビビりよるわ」

「どや？」

「うくん………けど、こちらは砲撃さえ無かったらええし………あんま朝鮮半島のこと到手え出しようないし」

「ほな、拉致家族の返還プラス竹島の領有権で、どや？」

「それ韓国を完全に占領したうえで、うちら日本には小さい島一個ちゅー話ですやん。割り合わんわ。しかも、もともと領有してるちゅーのが、うちの主張やし」

「やつぱ、そう言うか。ほな、超出血大サービスで竹島にプラスして、任那やった地区を99年租借させよ」

「ミマナ？」

「なんや日本人のくせに知らんのか？」

鷹姫が素早く教えてくれる。

「663年まで存在したとされる朝鮮半島南部の国もしくは地域で日本とつながりが深い、もしくは日本の統治下にあつたところですよ。5世紀6世紀にかけて前方後円墳が造られています。ですが、白村江の戦いによって唐と新羅の連合軍に、倭国と百済の連合軍は敗れ、この地を失っています。この戦いは元寇、対米戦争と並んで日本の危機であり、天智天皇や天武天皇は国家体制の整備を急ぎ、中国のシステムを習い律令国家へと進み、国号も倭国から日本に変わっています」

「ああ、あつたね、それ。急に言われたから思い出せんかったけど、日本史の最初の方に出るやつな。でも、いきなり、なんでやる？」

「おそらく金正忠代表は、かつて歴史的な経緯のある地なれば今回協力すれば99年貸し出すと言いたいのでしょう」

「おう、優秀な秘書やんけ、草と虫で、よう働くのお」

「鷹姫は一番の秘書やし」

「ほんで、答えは？」

「……うくん……」

「芹沢総理、悪い話ではないかと思えます。かつて女性ながら斉明天皇は百済から乞われ、自ら軍を率いて今の大阪である難波を出立しています。かの女性天皇が再来となるは、この上無き栄誉かと存じます」

かなり鷹姫が興奮気味に語つたので鮎美は余計に引いた。

「やめとくわ。今さら占領とか、しとうないし」

「なんや蹴るんかいな」

「そう言われても冷静に考えて、そんな土地いらんし。占領しても絶対、住民にテロられるやん。ヘタしたら伊藤博文の二の舞や、うちは刺されて板垣退助やったし、もうええわ」

「暗殺されかけとつたのお」

「頼むし拉致した人ら返してえな」

「まあ、やぶさかやないけどなあ……日本語で便利やな、ハンパな答え

「がしやすいわ」

「すぱつと関西人らしく頼みますわっ」

「ワシ関西人ちゃうし」

「う〜ん……ほな、食料援助とかでは？」

「ははは、今年は足りる予定やねん」

「ほやったら……えつと……うちらも次に砲撃されたら反撃するつもりやし、そんなとき一応は挟み撃ちになるやん。少なくとも海岸線にある戦力は叩くし」

「ちよい遠いなあ……」

「あ、そや、一人返してくれるにつき、ステインガーと対戦車ロケット砲10本ずつ、あげよ。それで、どないよ？」

「ステインガーとロケット砲か、それはええな……けど、10本で、アユミおまんイスラエルから6000ずつもろたんやろ。えらいケチやんけ」

「対中国用の自衛兵器やもん。減らせんよ。12人で120本やよ。命中率抜群らしいで頑張つて当てさせいよ」

「200本」

「………拉致家族は元気なん？」

「たぶんな」

「本物？ 偽物やったらキレるで」

「………12人は無理かもしれん。せいぜい9人。けど200本や」

「その条件で即、日本海の真ん中で交換しよ。こっちは武器と家族も乗れる人は乗せるわ。偽物は通用せんよ。あとあとDNA鑑定もするし」

「安心せい、関西弁つかうもんに悪いやつはおらん」

「関西弁つかうもんは基本、悪いこと考えるよ、うちもそやし」

「ええ根性してるわ」

「なあ、他に、もうちよい交換したいもんあんねんけどな。この通信つて盗聴されてると思う？」

「きつとな。ワシらのネットつて中国大陆を通すし。日本とも南朝鮮

とも直接は、つながってへんから。アメ公も頑張ったら覗きよるやろ」

「やっぱりなあ」

鮎美も勘づいていた。鈴木から教えてもらったことに、電話などでの会話でタイムラグが生じたり、ネット通信で画像に乱れが生じるときは盗聴の可能性があるとのこと、今も少し乱れている。必ずしも乱れやタイムラグが盗聴とは限らないけれど、鮎美は生放送の謝罪会見を中座して、この通信を始めているので他国の諜報機関は全力で盗聴に挑戦しているはずだった。金正忠が興味ありげに問うてくる。

「なんや、おもしろい提案か？」

「キムヤン、うちの信頼関係つて、どんなもんやろ？」

「まあ、とりあえず今回の取引は成功させたいわな。福岡は、すまんこっちゃったけど、大戦中のこともあるしよ。先代、先々代がしたことは、恨みっこなしで」

「うん……うちは大きな取引がしたいねん。内容を手紙で今すぐ送るわ」

「どこの郵便屋が、とどけるねん？」

「こつちから戦闘機を飛ばすわ。手紙もたせて」

「ほお……」

「撃墜せんといてな」

「一機だけなら通したろ。非武装でなら」

「……」

鮎美が畑母神を見る。畑母神は考えて答えた。

「空対地ミサイルはつけない。だが、機の自衛に機銃と空対空ミサイルはつけさせたい。それに燃料の増槽。対地攻撃能力がなければ、たった一機、さほど脅威にはなるまい」

「…ま、そやな。どうせ日本に対地攻撃能力、たいしてないけどな」
「うむ……」

空対空ミサイルをもつていっても、お前たちに航空機ももう無いし、ステインガーを欲しがらるあたり地対空ミサイルも無いのだろうか

な、だいたい我々との韓国挟撃をもちかけることからして父親が勝手に始めた戦争に中国も怒っていて援助してもらえないのだろう、まあ、その戦争に便乗して沖縄を攻めてきたヤツらも、いい面の皮だが、と畑母神は言いたいのを我慢した。たとえ相手に航空機が無いようでもロシアや中国の存在もあり非武装で行かせることに比べればパイロットの気持ちだが、まったく違うし、さらに鮎美が手紙に何を書くつもりなのか、とても気になる。

「ほな、キムヤン。うちらも急いで準備するし夕方までには家族が再会できるよう。頼むわ。日本海の真ん中といわず、高速艇で近づけるとこまで行かせてもらうかもしれんし」

「せっかちやな」

「大阪人は、せかちんよ」

「オカンもそやったわ」

「ほなね」

鮎美は通信を終えると、畑母神と相談し、かなり畑母神を驚かせる提案をしたけれど納得させて手紙を書き、関西弁混じりの日本語に、一応は外務省の職員が誤解が生じないように朝鮮語の翻訳もつけた。その間に畑母神は複座のF15を用意させ、パイロットにはベテランを1名、そして里華を手紙の届け役として選んだ。

「石原空尉は着陸後、機を離れ、現地で手紙を渡すように」

「はっ！」

「万一のときはF15が最優先となる。よいな？」

「はっ！」

遠回しに、もう一人のパイロットは着陸後も操縦席を離れず、何かあれば里華を置いて離陸する可能性を示した。鮎美が心配して言う。

「女より、男の方がようないですか？ 女やと、いろいろ不安、ありますやん」

捕虜になったとき強姦される可能性を鮎美は遠回しに指摘した。

畑母神は里華に問う。

「石原空尉、不安か？」

「いえー！」

「よし、出発！」

「はっ！」

主パイロットと里華が駆け足で司令室を出て行く。鮎美は心配だったけれど、止められる立場ではなかったし、言い出したのは自分だった。まさか里華が任命されるとは思わなかったけれど、今さらだった。畑母神としては万一のこともあるので複座で2名を派遣したいが、熟練パイロットを2名も失うのはさけないので未熟な里華を配達人としていたけれど、それを口に出すと鮎美は激怒しそうだったし、里華の士気もさがるので黙って滑走路を見守る。格納庫で里華は手紙を搭乗服の胸ポケットに片付けると存在を確認するように上から押さえた。

「…ハアっ…」

「緊張しているか？」

先輩である主パイロットに問われ、里華は否定する。

「いえ、大丈夫です！」

「初陣だ。緊張しておけ。石原の操縦で離陸させてみるか？」

「っ、はい!!」

「よし」

可愛いな、と思っただけれど、セクハラだと騒がれると鬱陶しいのでそれは言わずに離陸準備に入る。里華が司令塔と通信しながら格納庫を出、エプロンから滑走路の離陸位置へと移動した。

「…ハアっ…」

「ゆっくりでいいぞ」

「はい」

着陸より離陸は、はるかに容易なので里華は緊張していたものの訓練通りに操作したのでF15は小松基地を飛び立った。

「左旋回します」

左手に見える日本海へ向かうためロールすると、すぐに北陸自動車道を越え、海に出た。空は晴れているし、海は風いでいて美しかった。

「…ハアっ…」

けれど、見ている余裕などない。これから向かう先を考えると、肩が硬くなった。

「さてと」

「…ハアっ…」

「すぐに朝鮮半島だ。日本海なんて狭いものだからな」

戦闘機の数だと、琵琶湖は池のように感じるし、日本海も最大速度なら、あつという間だった。今は増槽をつけているものの、燃費のよい速度で飛んでいる。

「石原、これから万一の対空ミサイルにそなえ、超低空で侵入し、向こうが指定してくる初めての空港に着陸する。やり遂げる自信はあるか？ 正直に答えろ」

「…：ハアっ…：ありません！」

「よし、正直はいいことだ。操縦をかわる」

「…はい」

万が一にも着陸に失敗して機を破損させて離陸できなくなるということは許されないので里華は配達人に徹する。超低空までおりたF15は速度をあげた。海面が近い。操縦せずに見ているだけの里華はお尻の下に海面の存在を感じて寒気がする。

「…ハアっ…」

朝鮮半島が見えてきた。攻撃される気配はない。主パイロットが英語で北朝鮮側と通信を始めたけれど、里華は耳に入ってくるのに緊張しすぎて理解できない。アメリカからの核攻撃を警戒している金正忠は所在を隠しているの、まっすぐには案内してもらえず何度か方向を変えさせられ、そして北部にある滑走路の一つに着陸するよう言われた。

「…空爆の痕…：…」

滑走路のまわりには爆撃されたような痕跡があった。

「あれは韓国からの長距離ミサイルによるものだろうな」

すぐに着陸せず、一度は滑走路の上を通過して全体の様子を確認する。少なくとも攻撃してくる気配はなさそうだった。主パイロット

は落ち着いて着陸を成功させた。ここからが里華の任務となる。

「いつてきます」

「待ってるから落ち着いて帰ってこい」

「はい」

里華は北朝鮮側が規格の合わないハシゴをかけてくれたので慎重におりると、朝鮮半島の地を踏んだ。韓国を観光したこともないので初体験になる。

「……………」

「……………」

北朝鮮側は3名の士官と12名の兵士で里華を囲んできた。英語が堪能な士官が話しかけてくるので英語で答える。

「ようこそ、我らの共和国へ」

「はじめまして。石原里華…日本空軍、少尉です。大切な手紙をもつてきました。必ず直接に渡すよう言われております」

「聞いています。案内します。銃はおいでてください」

「もっています」

「身体検査をします。いいですか？」

「はい」

男性2名からベタベタと全身を触られてかなり不快だったけれど我慢した。それから歩いて滑走路に隣接した施設に入ると、そこでレントゲン検査を受けた。

「……………」

この検査があるならベタベタ触らなくていいのに、と里華は不快感が増したけれど顔に出さないよう注意した。

「こちらです」

「はい」

廊下を案内されたけれど何度も曲がったので方向感覚を失う。どこを歩いているのか、よくわからなくなった頃、エレベーターに乗せられ、地下3階くらいは降下した感覚だったけれど、表示はハンゲルなので読めない。

「……………」

怖くない、ぜんぜん平気、手紙を渡すだけ、まったく怖くない、と里華は自己暗示をかけて恐怖を切り、背筋を伸ばしていた。また廊下を歩き、しばらく歩くと赤絨毯が敷かれているエリアに入った。大きな扉があり4名の歩哨が立っている。士官に案内されているからなのか、とくに誰何されることはなく扉を開けてもらえた。さらに扉があり2名の歩哨がいて案内役の士官が何か朝鮮語で短く会話すると、すぐに扉を開けてもらえる。そして応接間のような部屋に出て、里華は金正忠と対面した。

「……に、日本空軍少尉石原里華です。芹沢総理の手紙をもってきました」

とりあえず里華は敬礼して英語で言った。

「おう、よう来たな。関西弁、聞き取れるか？」

「はいっ」

「ほんで手紙は？」

「こちらです」

里華は搭乗服の胸ポケットから出した手紙を両手で金正忠に渡した。片手で受け取った金正忠は自分で開封せず、側近に検査させてから読む。

前略、鮎美です。

さきほどの会談、楽しかったですわ。これからも、よろしく。

さて、取引内容ですが、こちら日本が提供するものは

- 1 衛星写真による韓国軍の詳細な配置
- 2 分析している韓国軍の残存戦力の資料
- 3 おそらくは確かな趙舜臣の位置
- 4 追加のロケット砲300本と使い方紹介DVD、ただしヘブライ

語

5 引き渡しは東京の金庫が開封できて整理がつく数ヶ月後になりますが金地金10キロ

キムヤんに提供していただきたいのは

核爆弾に見える模擬核爆弾です、アメリカやロシアの衛星から見ら

れて核爆弾に見えるような物をください。いかにも怪しく核施設のある基地から出して、こちらから輸送艦を派遣するので港で受け取ります。

報酬の1から4は即日交換、できれば今日中でお願ひします。

5は成功報酬となります。きつちりアメリカなどを騙せた場合、お支払いします。騙せなかったときは、ただの鉄クズといえは鉄クズなんで1から4までのみとなります。

よろしゅう頼みますわ！ キムヤン！

もちろん、うちらだけの秘密つてことで、手紙を届けた者にも言わずに頼みます。色よいお返事、期待しとります。せつかちで悪いけど、返事は届けた者に渡してください。戦闘機のエンジンが回しっぱなしなんで早めに。

読み終わった金正忠は笑い出した。

「くっ…ククク、くははははー！」

笑いながら里華に近づく。

「っ……………」

里華はとても怖かった。鮎美が書いた手紙の内容次第では、この場ですぐさま拉致監禁され、もれなく強姦がついてくる気がする。金正忠は笑いながらバンバンと里華の肩を叩いた。

「ええわ！ めっちゃ、ええわア、アユミ！ おもしろい女やわ！ 笑かすわ！」

「……………」

とても怖いけれど里華は背筋を伸ばして起立姿勢を保つ。ここで腰を抜かしたら日本女性の恥だと戒める。それでも恐怖で心臓はバクバクと高鳴るし、背筋と両腋から滝のように汗が流れて搭乗服の中を濡らしている。

「……………」

「おっしや、すぐ返事したろ」

金正忠は側近から紙とペンを受け取ると走り書く。この取引は金正忠にとって失う物が少ないし、える物が多い。おまけに先ほどの取

引も成功させてこそその5番目の成功報酬となるのは自明なので鮎美の手堅さが笑えた。

了解や！

すぐ準備したろ。

アメ公の反応、めっちゃ楽しみやわ。

頑張つてな。

演習用につくつたる模擬核爆弾があるし、模擬といっても少しばかり使用済み核燃料が突っ込んだるもんやから外から軽く検査したくらいでは、ぼつちり本物って感じのをやるわ。

アユミ、ワシおまんのこと好きになったし。いつか遊びに来てや。日本が滅びたときでも、おまんだけは助けたるしな。

あと、ワシらはアユミの政権が日本の正統な政権やと承認しとくわ。頑張れよ。

ほな、またな。

金正忠より愛と核を込めて。

手紙を封筒に入れると里華に渡した。

「ご苦労さん。元気だな」

「はい、失礼します！」

無事に帰れる、という喜びに包まれながら里華は施設を出て滑走路に早歩きで戻る。待つてくれていたF15に乗り込んだ。

「おお、石原、おかえり、どうだった？」

「おそらく任務成功です！ 機嫌のよさそうな顔でした！」

「そうか、よかったな。帰ってこれて」

「はい！」

「はああ、オレも無事に帰れる」

タメ息をついてF15を離陸させると、一応は帰りも超低空で帰投した。日本海を飛び越え、小松基地が視野に入ると二人とも帰ってきただという実感に包まれる。

「石原、着陸をやってみるか？」

「……………すみません。精神的にクタクタで……………」

「だろうな」

熟練パイロットの操縦で小松基地に着陸すると、鮎美と畑母神が出迎えてくれた。

「おかえりー！」

「よく戻ってきた」

「はっ」

二人は敬礼し、里華が手紙を鮎美へ渡す。鮎美はすぐに読むと、笑顔になった。

「畑母神先生、拉致家族と武器の交換で派遣する高速艇以外にも、輸送艦を用意してください」

「わかった。……………OKしたのか……………あの男……………」

「はい！」

アメリカが広島長崎へ投下する前にパンプキンという模擬爆弾を造っていて、それで鮎美が国会で追悼した亡き西村議員の父親が殺されていることから考えて、北朝鮮にも同じように本物以外に模擬爆弾があるだろうという鮎美の読みは当たっていて、それを日本へ渡しても本物でないことを知っている北朝鮮としては脅威とならない。しかも韓国軍の正確な位置と戦力は喉から手が出るほど欲しいだろうという読みも当たり、鮎美と金正忠の取引は成立した。畑母神は忙しく拉致家族のうち近くににいる人を集めて高速艇に乗せることと武器の積載、そして輸送艦へは武器と韓国軍の情報を準備させ始めた。鮎美へは久野が言ってくる。

「金本氏との対談を、どうされますか？」

「あ、それがあつたんや。それより謝罪会見は、どうなりました？」

「石永先生が誠実に謝り、ともかくは社会実験としての裁判員による裁判を開くことになっています」

「裁判は明日やね。即日結審、即日執行で。公判前証拠整理は終わってるし」

静江の他に女兒5人を強姦殺人した田熊と、本名国籍不明で三重に戸籍を取得しようとした男の裁判も予定されている。久野が懸念し

て問う。

「救いようのない二名はともかく、誘惑に負け、わずかな不正をしただけの石永さんへ、あなたが心底怒る立場なのはわかりますが、どこまでの罰をかすつもりですか？ それによっては人心をえるようできて、人心が離れますよ」

「うくん……静江はんについては、あんまり罪刑法定主義を無視せん方がええような気もするんよなあ……身内だけに憎さ100倍な部分もあるけど」

「どうされるつもりか、三島法務大臣も影では気にしていましたよ。私も知っておきたい。教えてくれませんか？」

「……まあ、ここだけの話……裁判員にも事前に説明して、とりあえず死刑の判決は読んでもらうし、処刑場にも連れて行くけど、死刑にするのは二人だけで、静江はんには本人同意のうえで事故原発が一番近い避難所でボランティア6ヶ月の刑かな」

「ボランティアは刑罰ではないですが……まあ、針のむしろでしょうな……」

久野は事故を起こした原発のために家を追われた人たちが集まる体育館で雑用をする静江の姿を想像した。急に得た権力の周辺にいたことで富山県関係者から影の女王あつかいしてもらい、調子に乗ってホストクラブで豪遊していた官房長官の妹が避難所にいる人たちから、どういう目で見られるか、いっそ刑務所の方がマシかもしれないと思うほどだったけれど、本人同意でのボランティアという名目なら罪刑法定主義も関係なくなる。

「あなたは、本当に……なんというか……まあ、その処分でよいでしょうが、護衛はつけてあげてください。でなければ、本人も危ないし、感情的になって石を投げてしまったりする避難者も罪に問われますから」

「そうですね、そうしますわ」

「この件はそれでよしとして、もう一人、同級生も反省室送りにしていただきますね。あの子は、どうする気ですか？」

「死刑。裁判なしで」

「……………」

「というのは冗談で」

「冗談に聞こえないから怖いですよ。それで？」

「裁判なしで処刑場に送ってキリストさんの疑似体験してもらって終わりかな」

「……………まあ自業自得といえは、自業自得ですが、殺されるかもしれないという体験は……………かわいそうに……………そろそろ一食くらい、まともな物を食べさせてあげなければ、いよいよ人権侵害ですから気をつけてください」

「はい」

「それで最後になりましたが金本氏との対談は、どうされますか？」

「直接に会ってでしたっけ？ どこで？」

「富山県と石川県の県境あたりで、と」

「そんな38度線みたいなの……………うちはキムやんとの取引を見守りたいし、ここを離れるのは嫌やわ。富山から小松で、すぐやん。来てくれるように言うてみて」

「わかりました」

久野に頼み、鮎美は司令室へ行つて畑母神と事態の推移を見守る。話についてはるので基本的に順調に動いているようだった。日本の人工衛星でも金正忠による指揮で核関連施設から何らかの物体が取り出されているのが確認できたし、高い可能性で米中口も気づくはずだった。また拉致家族を乗せる作業も順調に進み、双方が出港しつつある。畑母神が天候を見守りつつ頷いた。

「ありがたいことに風ぎだな。瀬取り同然に交換するには都合良い」「せどり？ って何ですか？」

「船と船を洋上で並べて接合し物資のやり取りをすることだが、意味合いとしては税関を抜ける場合や、麻薬などの取引で使う言葉だよ」

「ふん……………」

「君が、ちゃんと拉致家族のことを忘れずにいてくれたのは嬉しい。」

横畑さんに会ってもらったときは居眠りしていたのに」

「うっ、あのときは疲れてて……すんません」

司令室に久野が入ってきた。

「芹沢総理、連絡を取って見たのですが、やはり県境か、場所を用意するので富山市に来てほしいとのことですよ」

「………畑母神先生、どう思う？」

「ありえんな。万が一にも芹沢総理が拉致されれば大変なことになる。まあ、武装した護衛がいるのに無理とは思うが」

「あ、そっか………うちを拉致すれば、うちの権限を使えるんや……」

「そういうことだ。それに、これから北朝鮮とやり取りするにつき、指揮は私が執るが、もし、揉めることがあったとき、トップ同士で話し合ってもらう方がおさまるだろう。きつと、私と金正忠では話し合っても、悪い方向に行く……おそらく……」

「将軍同士ケンカするんやね」

鮎美が久野に頼む。

「すんません、金本はんに小松基地に来てもらうように言うてもらえますか？ 大事な仕事で離れられんから、と」

「わかりました」

畑母神が付け足す。

「会談の前に身体検査を厳重におこなわねばな」
「………」

久野も鮎美も反対しなかった。久野が出て行き、再び北朝鮮の動きを注視する。しばらくして再び久野が来て金本が議員団とともに来訪すると伝えてくれた。鮎美は不破島に電話をかけてみる。

「もしもし、うちです」

「いいタイミングですな」

「どうですか、そっちの様子は？」

「金本自称総理は、自称を取るために韓国からの承認を利用しようとしたようだが見事に失敗し乱闘になったのは見ていてくれますか」

「はい、そこまでは」

「外国政府からの承認を自身の政権の正統化に利用するのは、よくあ

ることですが相手が悪いし、いきなりの謝罪で自民党関係者は一気に抜けてしまった。もともと、根回しされていたのでしような。もう半分は姿を消し、金沢市に入っているようだ。それでも自民系では富山の市議などは、まだ残っています」

「なんで？」

「もともと議会をつくろうと言い出したのは富山の人間が中心です。コンペに落ちた恨みと、暴走する芹沢政権、失礼、議会を通さず即時判断する芹沢政権にブレーキをかけていこうという動機で」

「やっぱ暴走にも見えますよね」

「自覚があるうちは、まだ大丈夫ですよ。そうして出来上がった議会ですが、一時は県議や元衆議院議員、市議、知事で議決権に差をつけようとしたが、折り合いがつかず結局は一人一票となった。となると、ただの市議だったものが国会議員面できるというわけです。そして、そちらからの根回しは元衆議院議員に集中している。まあ国政経験を買うのは順当ですし、ただの市議を政務官にとはできませんから当然です。そして富山市議らは石永静江を落とし入れる材料も提供した。さらに自民の元衆議院議員らが抜けても残っていてくれるので民主党県議からも大事にしてもらえるということ、ここに残るのが居心地がいいというわけです」

「……」

クズめ、と鮎美は思ったけれど、口には出さなかったのに、不破島が言ってくる。

「今、クズが、と思いましたね？」

「ま、まあ、それに近いことは」

「実に見事にクズですよ。おかげで尻尾をつかむのが楽だった。マスコミは接待された側の石永静江ばかり叩き、接待した側については報道しない自由を行使していますが、がっちり尻尾はつかみました」

「どんな？」

「政務活動費です」

「ああ、あれ、たしか市議にもあったね。それに不正があったん？」

「ざっと調べただけで14人、実に杜撰というか、もう詐欺というレベ

ルで公費を懐に入れていきます。もう何年も前から、ずっと」

「14人で……富山市議会の定数は？」

「38ですよ」

「4割近いやん!!」

「名簿のリストと領収書コピーの一部を、そちらへ送っておきますよ。どうぞ、お役立てください。もう富山の議会も終わりでしょうから、私は茨城に帰ります」

「ホンマおおきにな、不破島はん、なにかお礼せんとね」

「であれば、茨城の復興に予算をいただきたいですな。我斯く戦えり、茨城県に対し特別の御高配を賜らんことを」

「お約束しますわ」

鮎美は電話を終えると次の予定があるので大会議室へ向かった。大会議室には明日、裁判員となってくれる22人の人々が集まってくれている。すでに制度の説明などは終わっているし、もともとは田熊と本名不明の在日外国人を11人ずつの合議体で裁く予定だったところへ急遽、静江についても追加の報酬を払って裁いてもらうことになっている。すでに証拠などは一通り見てくれていて、冤罪の余地もないので鮎美は問うてみる。

「すみません、明日、田熊被告を裁く予定の方々に問います。死刑にするつもりでおられる方、何名おられますか？」

鮎美の問いに11人が挙手した。無作為に抽出したといっても実は状況が状況なので参集してもらいやすいように、近所の小学校の体育館に避難している愛知県からの被災者からクジ引きで選んでいて、みな自宅もなくし、人によつては家族を喪っている人もいる。そんな中での懲罰感情なので5人の女兒を強姦殺人した田熊に全会一致で死刑判決をくだす気であるようだった。

「つてことは、あんまり時間もかからず判決に至りそうですね。本人も死刑でいいとか、ほぎいてますし。ほな、次、名無しのごんべい被告に死刑をくだすべきやと思う人、何名おられますか？」

今度は8人が挙手した。他3人は悪質な犯行ではあるが、死刑にまでしなくてよい、という意見だった。

「では、うちの秘書で、すでに報道でご存じかと思えますし、本人も接待や現金の受け取りは認めておりますので事実確認は、よいとして、石永静江に死刑をくだそうと思われる方、何名おられますか？」

静江の裁判には22人のうちで再度のクジ引きをして11人に関わってもらう予定だった。その11人のうち2人だけしか挙手しなかったので鮎美は安心した。誰もが激怒するような静江の所業ではあつたけれど、さすがに死刑はいき過ぎだという感覚でいてくれる。

「ありがとうございます。みなさまの量刑感覚に感謝いたします。ですが、明日は彼女へ反省をうながすため、演技として死刑をくだしてください。遺憾ながら、法的には無罪となる可能性が高い案件です。とはいえ、この時期に、ああいうことをされると国民全体としても許し難いですし。数年は刑務所にぶち込みたいと思われるのも当然です。ただ、刑務所の方も余裕がなく、私としては彼女に事故原発に近い避難所で6ヶ月程度のボランティアをしながら生活してもらおうと思つています。ただ、それで済むと本人が思う前には深く反省させたいのと、国民の手前もありますので演技として死刑判決することに、ご協力を願えませんか？」

鮎美の問いに、しばらくはざわついたけれど、結局は頷いてくれた。

「ありがとうございます。では、明日のために金沢市市内のホテルを用意しましたので、そちらでお休みください。ちなみに、そのホテルは石永静江が定宿としていたホテルです」

震災から数日はビルの屋上や車内で眠り、岐阜県あたりの避難所はいっぱい、ようやく小松市に辿り着いても小学校の体育館の床という生活をしてきた人々に静江が公費で泊まっていたホテルに行ってもらう。出て行く前に3人が鮎美へサインを求めてきたので、久しぶりにサインしていると、結局は22人全員にサインを求められた。静江の件で自分からも人心が離れているのではないかと心配していた鮎美は笑顔で応じる。途中で金本らが到着したと斉藤が連絡してくれたけれど、待たせておくよう言い、全員へ丁寧なサインして握手し

た。

「金本はんらに会う前に、司令室の様子を見てきますわ」

どちらかといえば、拉致家族のことが気になっている鮎美は司令室を覗き、畑母神から順調であると報告を受けると、いよいよ金本らに会うために再び大会議室へ向かった。

「遅うなって、すみません。芹沢鮎美です」

「はじめまして、金本勝龍です」

鮎美が自分の肩書きを口にしなかつたので金本も名乗りだけにして握手を求めてくる。鮎美は一瞬、迷ったけれど握手に応じた。金本は中肉中背の50代ほどの県議会議長で少し禿げた髪を丸坊主に近い刈り上げにしている。男性なのに濃いメイクをしていたけれど、そのファンデーションの塗り方が額に集中していて、隠しきれていない痣があり鮎美は靴を投げられてできた傷なのだろうと察した。金本の他に50人ほどの議員団がいて富山市議の中川もいた。全員との握手は時間もかかるので避けたいという顔をした鮎美は着席する。訪問者の数が多いのでゲイツも増員されていて8人が鮎美の周りにいるので威圧感が大きかった。久野と石永も同席し、石永が官房長官として問う。

「それで〴〵用件は？」

「はい、率直に申し上げて、まだ18歳でしかない芹沢さんが総理大臣でいるのは無理があると考えております。今朝方、首班指名をいただきました私に替わっていただきたい」

鮎美が即答する。

「お断りします」

「……………なぜですか？」

「あなた方は正当な国会議員ではありませんし、何より私は陛下から任命いただいております。学校の掃除当番やあるまいし、はい、そうですかと替われるもんちやいます」

鮎美は金本と接してすぐ、これまで対面してきた相手に比べると、何の迫力も感じない小者に過ぎないと直感していた。剣道試合でも少し打ち合えば勝てそうか、負けそうかわかるように、政治家同士の

対面でも初見でわかることは多い。今までに言葉を交わした政治家と比べて金本に押し負けるとは、まったく感じなかった。

「はは、掃除当番ですか。高校生らしい表現ですね」

「……………」

鮎美は沈黙と無表情を返答にした。金本は愛想笑いをやめて強めの語調で問う。

「しかし、一国の代表が、あなたに務まるとは思えない。その点、いかがですか？」

「ここには久野先生、鈴木先生をはじめ多くの方々がおられ、私を支えてくれてはります。途中で投げ出すことはしません」

「……………」だが、久野先生は引退された身であるし、鈴木先生に至っては刑務所におられた。石永先生らは落選中の議員です。その点は、いかがお考えですか？」

「国会議員でないという意味では、あなた方と同じですから、誰も私以外に正統な為政者はおりません。また、すでに私が総理大臣として指名し陛下より任命いただいております大臣には十分な正統性があります。他にご用件はありますか？」

鮎美は席を立ちたい素振りを見せた。実際のところ本当に席を立って司令室で北朝鮮とのやり取りを見守りたい気持ちでもいる。鮎美の態度に金本は、ややムツとして応じる。

「議会がなく行政だけが暴走していく危険というものを我々は強く警戒しているのです。この点、いかがお考えですか？」

「暴走という点でいえば、今朝方の韓国政府代表を自称する者との債務承認、あれは何ですか。実に迷惑なんですけど」

「あれは…、難民船を海自が転覆させたことに対する当然の謝罪です」

「あなた方は昭和21年の日本国憲法が有効とお考えでしたね？」

「はいー」

「あの憲法には第85条に、国費を支出し、または国が債務を負担するには国会の議決に基づくことを必要とする、とありますが、あなた方は国政議員ではなく、地方議員の集まりです。権限なく空手形を外国

政府、それも正統の大使であるのか不明である者に渡される行為は、もはや内乱、外患に類するもので現在の状況下では逮捕に相当するよ
うな行為です」

そう言った鮎美は大会議室の端に長瀬がいるのを確認した。鮎美の目線は金本も見ているので、長瀬のスーツ姿と雰囲気、自衛隊員ではなく警察関係者だと気づく。

「お、横暴です！ まさに権力の乱用だ！」

「……………」

また鮎美は沈黙と無表情で答えにする。金本は額に浮いてきた汗をハンカチで拭き、そこに痣があつて痛かつたのと議場で揉み合いになったときにヒビが入った肋骨が疼き顔を顰めた。

「と、とにかくですね！ 行政だけで暴走するのは、いかんわけですよ！ あなたがおっしゃったように平和憲法は予算の使い方に議会のチェックを入れている！ また、大臣は国会に出席して答弁する義務がある」

「第63条ですね。現在の情勢下で、そんな悠長なことをしている時間があるとお考えなのは遺憾です。明治政府が発足し戊辰戦争の傷跡が落ち着くまでの間、またアメリカから売りつけられた戦争の期間中、そして今現在、そんな時間的余裕も人的余裕もありません。政治形態とは状況に応じて臨機応変に人々が生き残るための策を打つていくものです。ここに来る時間があるのなら、地元へ帰って各避難所の手伝いでもしておいてもらえませんか？」

「……………」 現に、あなたの秘書が不当な接待を受けていた事件も起きていますよね？ この責任は、どうお考えですか？」

議員団には接待をしていた中川も加わっているので両刃の剣だったけれど、いよいよとなれば中川は自民会派なので民主党の金本としては切りやすいし、もともと静江の秘書としての立場が不明確なので刑事事件化しにくいのは計算に入っている。鮎美は静江のことを突かれても、完全に予想内だったので表情を変えずに答える。

「私の責任として厳正に処分していきます」

「あなた自身の進退も考えるべきではないですか?!」

「考えていません」

「……それだけですかつ?!」

「それだけです」

「……あくまで我々との話し合いを拒否されるのですか?」

「いいえ」

「……………」

意外な答えだったので金本の思考が止まる。

「……では、話し合いを続けていきましよう」

「はい。提案ですが、実は大臣の数を増やそうと思っています。特命大臣として、また、その副大臣、政務官などとして、あなた方の中から何名かを選んでいます。ご協力ください」

「い、……いいでしょう……」

大臣のポストがもらえるなら、それもいい、と金本が受ける態度になった。鮎美は石永に頼む。

「石永官房長官、リストを読み上げてください」

「わかった」

石永が用意していた名簿を読み上げると、金本たちが怒る。金本らは主に民主党の県議だったのに、読み上げられた者は自民党の落選衆議院議員ばかりで、この議員団に入っていない者ばかりだった。明らかに根回しされたのだと、わかる。鮎美たちへ野次が飛んできた。

「自民党の専横だ!」

「ふざけるな!」

「民意は民主党にあつたんだぞ!」

しばらく野次を聞き流した鮎美は軽く手をあげ、ゆっくり答える。

「民主党からも加賀田先生に財務大臣となっていたいております。震災直前、民主党政権は前原外務大臣と鳩山直人総理の在日韓国人からの献金問題で支持率は低下しきっており、加賀田大臣が一人いるだけで十分な割合かと考えています」

また野次が飛ぶ。再び靴も飛びそうな勢いだったけれど、すでに身体検査のときに金本らは靴からスリッパとなるよう求められている

ので、スリッパが飛んできた。鮎美に命中する前に鷹姫が前へ回って受け止めようとしたけれど、さらに前へ高木が出て守ってくれる。スリッパが飛んでこなくなってから鮎美が言う。

「心配なく、あと14名の名を読み上げますので、ここにおられる方も数名はあたると思います。鷹姫、呼んで」

「はい」

鷹姫が不破島から送ってもらったリストを読む。

「中川！ 村山！ 岡本！ 針山！ 高田！」

呼び捨てな上、鷹姫の呼び方が、まるで容疑者でも呼びつけるような口調なので、かなり心外だったけれど、政務官くらいにしてもらえらるかな、と富山市議たちは期待して立ち上がる。

「藤井！ 浅名！ 谷口！ 市田！ 岡村！ 丸山！ 浦田！ 宮前！ 笹木！」

鷹姫が呼んだ14名のうち5名が議員団の中にいた。やはり自民党派の市議が多いので金本は渋い顔をしたけれど、中川らは喜々として胸を張っている。

「以上14名を政務活動費の不正による詐欺罪で逮捕します。長瀬警部補、お願いします」

「はっ」

「な……ふざけるなっ!!」

「どういうことだ?!!」

怒声があがり騒然となるけれど、鷹姫は冷静に一人一人へ証拠となつている領収書のコピーを見せた。

「「「「……………」」」」

どの市議も黙り込む。領収書を誤魔化した認識はある。記憶にございません、と言いたいけれど、白紙領収書に自分で書き込んだものや、パソコンで自作した領収書、市政報告会の茶菓子代で20万円も計上したものなどがあり、反論は出てこず脂汗だけが出る。

「…わ、……罨だ！ これは、罨だ！ 石永の復讐だというのが罨だという証拠！ 妹の仕返しを、こんな風にするのか?!!」

意味不明なことを叫んだ中川がコピー用紙を持っている鷹姫を押

し倒して紙を奪おうとするけれど、瞬時に鷹姫は大内刈りという柔道技で中川を投げた。受け身がとれなかった中川は失神する。

「暴行の容疑で現行犯逮捕します」

警察官でなくても現行犯なら逮捕できることを知っている鷹姫が、そのまま中川を押さえ込み介式から習った逮捕術で自由を奪っておく。長瀬は市議たちに声をかけ、警察職員らしい丁寧さで、とりあえず話を聞きますので金沢署の方へ、と導いている。すでに証拠を握られているようなので市議たちは肩を落とし俯いて大会議室を出て行った。議員団は1割ばかり減らされたけれど金本は虚勢を張る。

「まあ、彼らはしよせん市議ですから規範意識にゆるみもあつたのでしよう。今後、襟を正していきます」

「あなた方に国政に参加する資格なしと思いますが、その点いかがですか？」

鮎美は相手の喋り方を模倣して問うた。

「わ…：私たちはね、みな県議や知事として一定の信託をえているわけです。そりや国会議員としての選挙ではないですが。なにより民主党政権だったものを、大震災を奇貨として自民政権へ変えるなんてのは邪道ですよ！　せめて議席配分を考えて国会をつくりなおすベきだ！」

「たしかに、思えば阪神淡路大震災でも村山政権から自民へバトンが渡されましたし、今回の大震災でも民主党政権が崩れる…：…うちは、もともと無党派やったので一つ二つ運命が変わっていれば、民主党に入っていたかもしれない」

「…：…」

少し金本の顔がゆるみ、同時に鮎美の年齢で阪神淡路大震災時の政権について回顧するだけの勉強はしているのだな、とも感じている。

「村山政権も民主党も、ようやく政権を取って、これから改革という時期の受難で気の毒やと思いますし、今、逮捕された人、ほとんど自民政権ですよ。自民党が日本を支えてきた側面も大きいけれど、腐敗

が続いてきた側面も多いと思いますよ」

「そうでしょう！　もう自民党の時代ではないのです！」

「とはいえ、日本がここまで追いつめられ、災害と外部からの脅威を考えると、襟を正しつつ自民党でいくしかないのかな、と思っております。ですので、うちの政権に入れる民主党関係者は夏子はんだけ、とします。とくに、あの韓国への債務承認は言語道断ですから。もちろん日本政府としては、ただの私人による一主張として無効としますが、まったく迷惑なことをしてくれたもんやわ」

「……………」

「石永はん、何か言うて帰ってもらって」

「ああ、そろそろお引き取り願おう」

やや横柄に石永が言うて一気に反発が起こる。鮎美は若すぎるけれど、石永も30代なので政治家としては若い。金本らは50代以上が多かったので怒った。

「若造が、えらそうに！」

「妹の件は終わりじゃないぞ！」

「……………」

石永と鮎美は顔を見合わせ、困ったな、という表情をつくった。それで金本たちは勢いづき、また野次を始めた。

「落選議員が！」

「比例復活もない者が官房長官で、どうする?！」

「妹の責任を取れ！」

「……………」

石永も鮎美も黙って聞く。そのうちに野次はヒートアップし罵りになってくる。

「石永もホモだろう?!」

「ホモレズ政権が！」

「気持ち悪い部隊で国を動かすな！」

性的指向のことについて罵られると、鮎美は傷ついたという顔になってビクつとした。ずっと何を言われても平気そうだった鮎美がひるんでくれると、ますます攻めてくる。

「パンツ大臣をかばう変態政権じゃないか！」

「子供に政治ができるか！」

「牧田は殺人鬼だったんだらう?!」

「責任を取れ！ レズ！」

「結婚しろ！」

「変態ども！」

いよいよ罵詈雑言になってくると鮎美は泣き出しそのような表情をつくる。なので予定通りに鷹姫が慰めるように頭を撫でたし、鮎美は抱きついて鷹姫の胸へ顔を伏せる。それで余計に性的指向に対する罵りが増す。鮎美が肩を震わせているので、金本らは精神的に追い込んで辞めさせるといふ野党的な常套手段をとるため、思いつく限りの侮辱を言論による戦いだと思じて投げつけていく。鮎美は肩を震わせて、笑い出してしまいそうなのを必死に我慢していた。もう性的指向について何か言われたくらいで傷つくような弱さはない、むしろ作戦が成功しすぎて笑ってしまいそうだった。これで一網打尽にできる。この状況は最初から斉藤らが撮ってくれているし、廊下にはヨンソンミヨラの護衛につけている今泉ら数名を除き、一個中隊のゲイツが待機しているので命令一つで逮捕できる体勢だった。

「鷹姫、全員が野次ってる？」

「はい、首謀者をふくめ全員が参加しています」

「よっしゃ」

鮎美はチラリを久野を見た。やむをえないという顔をしている。久野としては芹沢政権だけで動くより、ある程度は議会らしきものと協調しながら進めていければ、と考えていたけれど、やはり独断での韓国への債務承認が痛かったし、それを追認することはできないので、根回しできた者だけ取り込み、金本らは逮捕という路線を承服している。鮎美は泣いている演技をしながら高木たちに仕草で命令した。

「各員、入れ」

高木が無線で命じると、廊下にいたゲイツたち一個中隊が入ってくる。小銃はもっていないけれど、腰に拳銃はある。何よりゲイツたち

も全員が同性愛者なので外まで響いていた議員団たちの罵りが愉快なはずがない。その表情を見て次第に野次がおさまり静かになった。高木が命じる。

「侮辱罪の現行犯にて全員逮捕、はじめ！」

「！！！！！！！！」

屈強な隊員たちに抵抗を試みた議員は警察職員のような優しい逮捕術ではなく近接格闘術で打ちのめされ、床に転がった。それを見て、ほとんどの議員たちは無抵抗になる。不逮捕特権だの、議院でおこなった演説で責任は問われないだの、と昭和憲法に基づく権利を主張していたけれど、そもそも国会議員ではないし、会期中なのかも怪しい上に現行犯なので全員が逮捕された。その様子を鮎美たちにとって都合がいいように編集してもらおう作業を斉藤らに頼み、鮎美は司令室で北朝鮮とのやり取りが成功しつつあることを確認しながら、これから国民に向けて頼むことを考えた。

「芹沢総理、準備ができました」

斉藤が配信する動画を用意してくれたので鮎美は広報室に行くと、カメラの前に立った。

「こんにちは。芹沢鮎美です。国民の皆様も注目しておられたかと思うのですが、富山で議会が立ち上がったということで、その代表らとさきほど面談いたしました。動画をご覧ください」

動画は鮎美と金本が握手するところから始まるけれど、すぐに韓国への債務承認で決裂ムードとなり、さらに中川らの政務活動費問題で逮捕者が出る事態となり、さらに罵詈雑言を投げつけたことで侮辱罪として逮捕した過程を紹介して終わった。

「できれば私も議会政治をおこなえればと期待していたのですが、彼らは話し合うべき相手ではなかったようです。韓国への問題もそうですし、政務活動費について地方議員の一部は、ひどすぎると考えます。地方自治は民主主義の小学校と言いますが、ずいぶんと学級崩壊しているクラスもあるようです」

高校生の鮎美に小学生あつかいされると、これを見ている地方議員たちは、どう感じているだろうと思った。さらに鮎美が続ける。

「小学生でも、人に向かってクズだの、デブだの、バカだの言うのが悪いことだとは認識しているはずですが、昭和の憲法に第51条で、議員は議院でおこなった演説や討論で責任を問われなれないというものがあり、これを勘違いして野次を飛ばしてもいいと思っておりますが、まったく条文本旨の解釈が間違っています。これは天皇機関説などを唱えた美濃部達吉が不当に追い込まれたことに対する反省で、思想や体制への批評において何を発言しても逮捕されたりはしないという条文です。人を侮辱してもいい、と書いてあるわけではありません。また、政務活動費の問題はひどすぎます。一部の領収書を見せません」

スライド形式で中川らの領収書が紹介された。

「残念ながら、これは事実のようです。そして、氷山の一角というように、まだ存在すると思います。そこで国民の皆様にお願います。平穩に、あくまで静かに、暴動を起こさず、市役所や県庁へ行行って、情報公開を申請してください。他の地方議員の領収書で不正なものがあれば、厳正に対応すると同時に不正を発見した人に、指摘額の10%を報奨金として出します。実際の支給は事務的な時間がかかりませんが、地方議員らが提出している領収書をチェックしてください。また、この情報公開について職員は、ただちに協力し、手続きを遅らせることなく、即日、今すぐ公開するよう努めてください。お疲れのところ恐縮ですが、ご協力ください。また国民の皆様は市役所の窓口で騒いだり暴動を起こすようなことはしないでください。あくまで平穩に請願してください。暴れたり怒鳴ったりということがあれば、職員を保護するためにも警察もしくは軍で対応します。あと、できれば復興作業に関わっている国民は復興作業を続けてください。これにも手当てが出せるように検討します。作業したことを証明する方法は、単純に今までも公園の草刈り作業などでやっていたように作業前と作業後の写真と、その場にいた作業に関わっていた人々を撮っておいてください。少なくとも架空の領収書よりは、よほど公費を支給するにふさわしいことです。なので議員が出した領収書のチェック作業は足腰の弱い人や避難所において、やることのない人をお願いし

ます」

鮎美は横髪を耳にかけてから言う。

「そんな財源が今の日本にあるのか？ とご心配いただくかもしれませんが、実は財務状態は改善する見込みです。これは、単純に喜べることではないのですが太平洋側では多くの人々が亡くなりました。このとき、家族もふくめ全員が亡くなっている場合、その財産は相続する人がいないので国庫へ入ります。心苦しい部分もありますが、そうなるのです。では、せめて、これを活かしていくということを考えたとき、どのように支給していくのがよいか、考えていきますので、ご自分が復興のためになさった作業は記録しておいてください。そして、気づいている方も多いと思いますが、相続人不明の財産が何千万人分と生じているということとは、不正の温床になります。ゆえに、これまで以上に戸籍の厳正な登録に協力してください。そして嘘はつかないでください。津波で亡くなった人の財産を不当に相続しようとする行為にも、最高刑を死刑として裁判員による裁判をおこなう可能性があります。このように不正されると実に困る時期でもありますので、地方議員らの今までの政務活動費への不正も許し難く感じるかと思われまます」

震災後のやり場のない不満が静江だけに向かっていたのが、全国の地方議員に向かっていくことを鮎美は感じ、言い加えておく。

「不正に心当たりのある地方議員さんに告げます。今すぐ自首し、自ら不正を告白すれば、復興作業を要する時期で政治的混乱を避けたいこともありますので、かなり軽い処分とする予定です。それぞれに警察署へ行くなり、SNSで市民へ謝罪するなど、対応をしてください。もちろん、隠していた人、逃げようとした人には重い罰をかすようにします。以上ですが、国民の皆様、くれぐれも平穏に請願してください。市役所で暴れたり物を壊したりした場合は、ただちに現行犯逮捕となります。市役所の貴重な公務員を守るためにも、それぞれの課の判断で警察官の到着を待たず現行犯逮捕していただいでかまいません。できれば動画などで証拠を残した上でお願いします。以上、よろ

しくお願いします」

鮎美の演説が配信されて一時間後、芹沢政権にいる副大臣2名と政務官1名も石永に相談してから鮎美のところへ自首しにきたので、頭痛を覚えた。

「……やってたんや……はああ……」

「……すみません……」

落選前の議員だった頃にガソリン代や茶菓子代などで誤魔化しがある告白され、仕方がないので発表して処分するとしたし、全国からも相当数の自首があるようだった。そして、ようやく日本海の洋上で拉致家族が再会できたので、その様子も配信した。引き替えに北朝鮮へ武器類を渡したことは公表せず、まして模擬核爆弾を受け取る予定であることなどは極秘のままとした。夕食をとると眠気を覚えたけれど、まだ模擬核爆弾の受け取りが残っているので司令室へ行く。そんな鮎美の背中を見送りつつ、麻衣子は休息時間に入った。ずっと鮎美と鷹姫についていると一切休憩時間がなくなってしまうので一日4時間程度は自由時間をもらっている。今日も疲れたので自動販売機でカフェインが入っていない栄養ドリンクを買い、四人部屋に戻った。

「あ……石原空尉、寝てるんだ……お風呂、まだかな……」

麻衣子よりも、はるかに疲れていた里華はベッドで眠っていた。就寝時間以外に眠ることは控える規則だったけれど、今日は戦闘機で北朝鮮へ往復し、しかも向こうでは一人で金正忠に手紙を渡すという大役をしたので疲れきっている。そして悪夢を見ていた。

「……うう……」

やはり昼間の体験による悪夢で、金正忠に手紙を渡して帰ろうとするけれど、拉致されそうになり、逃げる、必死に逃げてF15へ乗り込み離陸しようとしたものの主パイロットだった先輩が撃たれて死亡し、里華一人で離陸させる、なんとか離陸に成功したものの、今度は追撃を受けることになり、なぜかロシア軍のミグが追いかけてくる、やむをえず空中戦となり反撃したのに空対空ミサイルが反応してくれない、機銃も撃てない、そのうちに多数のミグから包囲され、夢

の中の非現実性でミグの機体で上下を挟まれ連行されるという状態になり、そのまま着陸という超アクロバットを決め、再び金正忠の前に引き出され、捕虜として輪姦されそうになり、そこで目が醒めた。

「っ！ ハアっ！ ハアっ！ ゆ…夢？」

「大丈夫ですか、すっごい魘されましたよ？」

麻衣子が心配そうにハンカチを渡してくれる。制服のまま横になっっていた里華は全身汗だくだった。

「…ハア……ハア……」

「なにか嫌な夢でも？」

「ええ……まあ……」

「夕飯と、お風呂は？」

「まだよ」

「私、夕飯、食べました」

「そう。行ってくるわ」

里華は汗を拭いて食堂に向かった。もう遅い時間だったので人が少ない。そして同じF15で北朝鮮へ渡った先輩も遅い時刻なのに食べに来ていた。

「よお、昼寝しすぎたか？」

「はい」

つい正直に答えてしまったけれど、先輩も同じなのかと思う。

「悪い夢でも見たような顔してるな」

「……まあ……」

「だろうな」

「先輩も？」

「ああ、嫌な夢だった」

「どんな？」

「うーん……」

北朝鮮へ着陸して里華を送り出したはいいけれど、いつまで経っても里華が戻ってこず、そのうちに回しっぱなしのジェットエンジンのために燃料が無くなってきて、いよいよ日本へ帰れなくなる前に里華

を見捨てて出発してしまい、そのことを悔い続けるし、やっぱり北朝鮮に拉致され強姦され続けていた里華が収容所で首吊り自殺をして、その幽霊が毎晩のように出てきて、どうして私を置いていったの、と責めてくるのへ、化けるなら金将軍のそこに行ってくれ、と頼む悪夢だった。

「そういう石原は、どんな夢だったんだ？」

「私は別に……」

「……………」

お互いに相手が死亡するストーリーの悪夢を見たので語らないことにした。食べ終わった里華が四人部屋に戻ると、麻衣子は休憩していた。

「……………うくん……………何か忘れてる気がする……………」

「今日は色々あったものね」

「あー！ エサの時間！」

麻衣子は食事を陽湖と静江に持っていくことを忘れていた。今晚は草と虫でなく、まともな食事が用意されているはずだった。急いで食堂に行くと、冷めてしまったけれどチキンオムレツとトマトサラダ、バナナの夕食が残っていたので準備室へもっていく。

「夕飯でくす」

「……………」

午前中の謝罪会見で精根尽きていた静江と、拘禁が長くなってきた陽湖が無気力そうな目で麻衣子を見上げたけれど、持ってきたのがバケツに入った草と虫ではなく、まともな食事だったので夢中で食べた。そして食べ終わってからトレーを回収するため待っていた麻衣子へ陽湖が問う。

「どうして……………今夜だけ……………急に、ちゃんとしたご飯を……………」

それは久野の助言によるものだったけれど、鮎美は意地悪な理由付けを考えていたので麻衣子は告げるべきか迷っていたけれど、問われたので告げる。

「……………えっと……………最後の晚餐みたい。明日、二人とも死刑にするって」

「っ……」

陽湖と静江がビクリとして、静江が半狂乱で問う。

「そんなっ?! 私ちゃんと謝ったのに!」

「……………謝れば許されるってもんでもないよ」

麻衣子も同じ女性として静江を軽蔑していたし、故郷の金沢が誇る片町の名を汚された気もしていて、冷たい声で行った。別に麻衣子自身は芹沢派というつもりはないけれど、いつもそばにいたので鮎美と鷹姫が頑張っているのは知っているし、その分だけ隠れたところでホストクラブなどで接待を受けていた静江のことは一公務員として蔑視している。普段から官房長官の妹ということで基地内にいる、どの女性よりも偉そうにしていたところも今となっては嫌悪感の材料になっていった。静江は頭を抱えて震え、陽湖は麻衣子へすがった。

「お願いです、どうか、せめてブラザー愛也に会わせてください! 今夜が最期だというなら、せめて少しだけでも!」

屋城は別室に軟禁されていて、鮎美から日本と台湾の教団を無難に指揮しておくよう求められているのと、鮎美たちの学年全員の卒業証書を用意する作業をしていた。もし教団がおかしなことをしたら、すぐにオウム真理教と同じあつかいになると鮎美は脅したけれど、陽湖が暴走して変な教義を言い出しただけで、もともと教団は勧誘活動が盛んなだけで、それほど害のある動きはしていなかったし、今はまじめに被災地で炊き出しなどをしているので、その取りまとめくらいだったし、卒業証書については学園が発注していた印刷所が琵琶湖の津波で倒壊してしまったため、急遽に金沢和紙を頼み、屋城が軟禁状態で時間がありすぎるので自署していた。

「お願いです、どうか!」

「う〜ん……………私に言われても……………」

麻衣子には何の権限もないので迷う。けれど、一人の異性愛者として死刑になる前に会っておきたい人がいるという気持ちは理解できるので頷いた。

「わかったよ。総理に言ってみてあげる」

「ああ、ありがとうございます」

「あんまり期待しないでね」

麻衣子は準備室を出ると、貴賓室に向かったけれど、鮎美がいなかった。司令室に行ってみると、鷹姫といっしょにいた。

「あの、えっと……」

麻衣子は声をかけようとしたけれど、司令室の雰囲気ギリギリとした最高度の緊張に包まれていたので陽湖のことを言い出せなかった。今しも輸送艦が模擬核爆弾を北朝鮮の港で受け取り、出港して領海を出ようとしているところだった。北朝鮮の領海に入ったのは輸送艦のみで、駆逐艦2隻が領海外で待機し護衛にあたり、潜水艦も潜ませている。司令室にいる海軍の幹部が告げる。

「間もなく領海を出ます。種子島への到着は約50時間後を予定。領海、出ました！」

「ふう……」

鮎美と畑母神が同時にタメ息をついた。そして、鮎美はミクドナルドへ電話をかけようとスマートフォンを出したけれど、その瞬間にミクドナルドから着信があつたので受話する。

「もしもし、うちです」

「アユミ、なにか、とんでもないことしてない？ ジョンチュウから、なにを受け取ったの？」

やはりミクドナルドは人工衛星で監視していたようだった。鮎美は落ち着いて答える。

「N友の会に入会します。たしか核を保有する国は、月額会費300万ドルで報復時の核ミサイル代は無料でしたやんね？ バリユープランで」

「……たしかに、そう言ったけど……」

ミクドナルドは衛星写真を眺めながら話している感じだった。

「受け取ったのは1発だけ？ けっこう大きいね……ミサイルには載せられないくらい……」

「日本のHⅡロケットなら、ギリギリ搭載できそうですわ」

「……撃つ気？」

「まさか、お守りです」

「……………日本の核兵器保有が国際社会に認められると思うの?」

「福岡、札幌、那須、広島、長崎、いい加減、1発くらい持つても怒られんでしょ」

「……………」

「この1発以上は保有しないためにも、N友の会へ入会しますわ」

「……………うくん…」

「まだ、どこの国も入会してないんでしょ?」

「……………」

そういう発表は無かったし、ミクドナルドの性格からして、どこかの国が入会すれば大々的に宣伝しているはずだった。

「うちら日本が第一号で入会すれば、一気に拡がるかもしれないよ」

「……………まあ……………そうかもしれないけど……………」

やはりミクドナルドは日本からは最高月額設定の1000万ドルを取りたかったし、1発ごとの費用も欲しかった。そういう気配を感じた鮎美は提案してみる。

「N友の会に、よりフレンドリーな設定をしませんか?」

「どんな?」

「入会した国が、別の国を紹介すると、双方が10%オフの会費で核の傘に入れる。もし10カ国を紹介すれば自国の分は無料になる」

「わおつ……………マルチ商法のやり方を、入れるのね……………いいアイデアかも……………」

もともと日本で広まっているマルチ商法の企業はアメリカ由来のものも多いし、美恋が入会して陽湖のアトピーが治るキツカケになった製品の会社もアメリカ発祥だった。ミクドナルドもアメリカ人なだけあってマルチ商法の知識もあった。

「どないです? 二人で世界に広めませんか? N友の会を」

「……………OK! いいわ、そうしましょう! アユミ、あなたは最高の友達よ!」

アメリカ人らしくミクドナルドは前へ進む決断をくださいました。

「おおきに」

「今から一人で世界に宣言しましょう！　日本はN友の会へ入ったと！」

日本は夜だったけれど、アメリカ大陸は昼間なのでミクドナルドは元気だった。鮎美も疲れていたけれど、それに応じた。その宣言が終わり、とても疲れた顔をしている鮎美へ麻衣子が遠慮がちに陽湖のことを説明した。貴賓室に戻った鮎美は、ぐったりとベッドに寝ころびながら考える。

「なるほどな……そら、まあ、死ぬ前に、好きやった人と過ごしたいと想うわな……ずいぶん、まともな要求やん……シヨウベン我慢して垂れるのに興奮したり……他人に飲ませて喜ぶのに比べたら……ええ機会やね……ええわ、認めるわ。一晩いっしょに過ごさせてやり」

「ありがとう！」

麻衣子は自分のことにように礼を言い、それから言ってみる。

「会う前に、あの子にもお風呂を使わせてあげたら？　ダメ？」

死刑になる前夜だと覚悟して会う陽湖が男と何をするか、そのときに何日も入浴していない身体では可哀想だという麻衣子の問いにも、鮎美は許可を与え、それから思いついた。

「静江はんも明日は大変な一日になるし、ベッドで休ませてあげよか。たしか長瀬はんは奥さんが津波で亡くなつてはるよね。一晩、見張りとして、いっしょにいてもらお」

「………いい案のような………異性愛者なんか、テキトーにくつつければ、人口回復に役立つかな、みたいな。人をモルモットみたいに見てる感じがするんだけど？」

「どうせ、静江はんに事故原発付近の避難所でボランティアさせるときも警護はつけるし。一名やと交替要員無しで大変やから三名用意するとして。うち二名をゲイツにしたら、選択肢的にも長瀬はんしか、なくなるやろ」

「………かもしれないけど、勝手に組み合わせるのは………せめて石永官房長官に相談した方がいいんじゃない？」

「うーん………そやね、呼んで」

「は〜い」

麻衣子が石永を呼んできて鮎美が見合い婚のように静江と長瀬を配置してみると語った。

「そうだな……静江も、そろそろ歳だし……今回の件もあって政界には、居辛いだろう……長瀬警部補も奥さんが亡くなっているなら……」

妹想いではあっても妹に性的な関心はもっていない石永は計画に了解した。石永は静江を解放するために、麻衣子は陽湖を解放するために準備室へ向かい、麻衣子は二人と女湯で入浴した。二人とも明日、死刑になると思い込んでいるので顔は暗いし、お湯に浸かって身体の気持ちよさを味わうと、これが最期なのだと思い、涙を流している。

「…ぐすつ……」

「……うう……」

「はああ……」

暗いなあ、当たり前だけど、と思いつながら麻衣子は入浴を終え、陽湖を屋城が軟禁されている部屋に案内した。陽湖には着替える服が無かったので麻衣子の私物であるパジャマにもなるし、そのまま外を歩いてもあまり恥ずかしくないデザインで可愛いワンプリースのような服を貸している。屋城には広くはないけれど、個室が与えられていて、そこで卒業証書を書いていた。

「じゃ、ごゆつくり」

麻衣子が一言いつて去る。

「ブラザー愛也、お久しぶりです」

「マザー陽湖、ずいぶんとやつれて……」

鷹姫はお腹いっぱい草と虫を食べられるけれど、陽湖はほとんど食べないので、もともと細かった身が、さらに細くなっている。もう12時が近いし、人生の時間が残っていないと思っている陽湖は迷っている時間も惜しいので言う。

「ブラザー愛也、結婚いたしましょう。今すぐ」

一時は惜しくなって温存した処女だったけれど、明日死ぬとなれば

別だった。

「マザー陽湖……わかりました」

「では、結婚の誓いを…」

二人とも結婚式を司祭する資格はあるので始めるつもりだったけれど、屋城が言う。

「その前に、あなたは、まだ生徒の一人でもあります」

屋城は一番最初に書いた卒業証書を手にした。

「二人きりですが、結婚式の前に卒業式をいたします」

「はいっ」

本来の卒業式は3月12日の予定だったけれど、もう3月末、厳密には31日までは高校生なので結婚したり性交したりするのは控えるべきだったけれど28日もなれば、いいような気もする。あとは形式を整えるのみだった。

「これより卒業証書授与式をおこないます」

「はい！」

「卒業証書授与！ 卒業生代表、生徒信仰告白総括会長、月谷陽湖！」

「はい！」

「あなたは琵琶湖姉妹学園の教育に協力し、生徒たちの中心となって信仰を強く導き、数多の生徒へ受洗をなし、主イエス・キリストの愛を広め、神の御名において正しい学園生活をおくり、高校卒業過程を修了したことを、ここに証します。琵琶湖姉妹学園、信仰理事、屋城愛也。おめでとう」

「はい、ありがとうございます！」

涙ぐみながら陽湖は卒業証書を受け取り、二人で賛美歌を謳った。そして、君が代は歌わないのが例年の式次第なので今も歌わない。来賓も保護者もいない、二人と神だけの卒業式が終わった。

「……………」

やや間があって、次に結婚式となる。

「ブラザー愛也、司祭は、どちらにしますか？」

「マザー陽湖がなしてください」

「わかりました」

偶像崇拜もしなければ、神道のように祭具や仏教のような法具も、そして十字架さえ物質としては必要としないので二人は卒業式では向かい合っていたけれど、今度は横に並んで神に向かって誓う。

「これより私、月谷陽湖と屋城愛也の結婚式を執り行います」

「はい」

「私、月谷陽湖は屋城愛也と永遠の愛を誓い、神の御前に夫婦となることを宣言します」

「私、屋城愛也は月谷陽湖と永遠の愛を誓い、神の御前に夫婦となることを宣言します」

二人が息を合わせて唱える。

「アーメン!!」

信仰心もないのに、とりあえずドレス姿に合わせてキリスト教式を選ぶ、浮ついたカップルと違い、誓いのキスという式次第もなく、ただ神にのみ二人は誓った。

「……………愛也……………」

「はい、陽湖」

今までは神の前に兄弟姉妹だったけれど、もう夫婦となったのでブラザーやシスター、マザーも無くなった。二人はキスをして抱き合い、ベッドに入る。

「……………ああ……………ぐすつ……………」

処女と高校を卒業した陽湖は悔いた。権力や金銭に浮かれて、数々の間違いを犯したことを深く悔いた。

「……………神よ……………」

たくさんのお金や権力がなくてもいい、わずかなパンと夫婦の愛、そして子供、あとは雨露さえしのげれば十分なのに、どうして私は酔ったのか、どうか、お許しください、と想いながら何度も屋城に中出しで射精してもらった。

3月29日 死刑執行

復和元年3月29日火曜朝、鐘留は7時に目を覚まし、まだ不安感が残っているので、そつと布団と股間を撫でたけれど濡れていなかった。喜びに満たされた。

♪

やった、治つてる、オネシヨ、完全に治った、と鐘留は踊り出しそうなほど嬉しかった。ほぼ同時に玄次郎も起きたようで朝からニコニコとしている新妻を不思議そうに見ているけれど、あえて問わずに部屋を出る。鮎美の部屋からワンコが出てきた。

「おはよう」

「おはようございます」

「他の二人は？」

鮎美の部屋には鬼々島に滞在しているヨンソンミヨら2名の韓国人も泊まっていて、狭い部屋に3人で寝ていたし、護衛の今泉たちは一人が当直として一階に泊まり、もう二人は島の民宿に泊まるという体制をとっていた。

「もう起きてます。私は陽梅さんを手伝ってきますね」

「ああ、ありがとう」

玄次郎の背後に鐘留が立った。

「アユミンからの指示がないから、あの三人、使いようがないんだよね」

「まあ微妙な情勢だからな」

一時はワンコたち三人でアイドルグループ的に韓国の愛国心と戦意を奮い立たせる動画を作成して配信していたけれど、南北朝鮮の戦線が膠着状態となり、さらに韓国軍が対馬を砲撃したので事態が複雑化し、くわえて昨日は鮎美と金正忠が何らかの合意を形成したらしく拉致家族が返還されている。なので、ただ単純に韓国軍を応援すればいい、という情勢で無くなってしまい、ワンコたちの動画作成は止まっていた。

「とりあえず飯にしよう」

一階へおりて7人で朝食をとる。当直だった今泉もいつしよに食べている。もともと陸自で1等陸士の一年目だったし、要人警護など訓練していなかったの、とりあえずそばにいて守っておけばいいくらいで感覚でヨンソンミヨたちに接しているの、知念らが食卓をとりにしなかったのと違い、遠慮はしたけれど玄次郎が勧めたので食べるようになっていた。今朝は卵焼きと外来魚の焼き物だった。

「またブルーギルかあ。こいつ不味い」

鐘留がタメ息をつきながら、せめてポン酢を多めにかけているので玄次郎が教える。

「こいつはプリンスフイツシユとも言つて、ありがたい魚なんだぞ。平成天皇が皇太子だったときシカゴ市長から寄贈されてな、そのときの15匹を日本の各地に放流したのが始まりだ」

「それ、いつの話？」

「1960年代だったかな」

「まだ50年なのに、よく増えたね」

「おかげで食糧難のときに役に立つじゃないか」

話しているうちに陽梅も祈りが終わり箸を持ったので、ヨンソンミヨたちも待つのをやめて食べ始める。

「いただきます」

ごく基本的な日本語を使った。玄次郎は情勢が気になるのでテレビをつける。

「芹沢政権は昨日、会談を求めて訪問した民主党県議を中心とする金本氏らの議員団を小松基地内にて全員逮捕しました」

タベも見たニュースだった。コメンテーターが怒っている。

「もう完全に芹沢政権は暴走状態ですよ。民主主義のミの字もない！

ようやく立ち上がった議会在選んだ内閣総理大臣さえ逮捕してしまおう！」

「逮捕容疑は侮辱罪だそうです、どうでしょう？」

「かつての不敬罪を思い出しますね！ ちよつとばかりレズだとかホモだと言ったくらいで逮捕というのは法律の悪用ですよ！ 議員に

は自由な発言が認められていいはずだ！」

「他に政務活動費の不正使用で逮捕された議員もいるようですが」

「これは、仕方ないでしょうな。本人の身から出たサビだ。とはいえ、芹沢政権は事前に内偵していたようで議会を潰そうという意図を感じますね」

「さらに芹沢総理は全国の地方議員について政務活動費などで不正がないか、情報公開をもとめて調べるよう国民に促しましたね」

「しかも報奨金までつけているせいで、昨日は午後5時まで市役所へ駆け込んだ市民が帰らず、職員は徹夜で対応している」

画面が切り替わり、深夜の市役所に明かりがついているのを外から撮影した映像が流れる。中では職員と市民が対峙していたり、もう諦めて職員が議員から提出された領収書のファイルを渡して情報開示し、職員は破り取りや破損などをされなしか見張るだけという状態になっている市役所もあった。領収書を見せてもらった市民は、その場で発行元に電話をかけ、茶菓子代やガソリン代が偽造でないか確かめ、偽造だとわかると万歳して喜んでいる。

「すでに百人以上の県議や市議が自ら不正を認め、謝罪しているようですが？」

「これも情けない話ですが、自首すれば処分を軽くすると、あの子が：いえ、あの芹沢が言いましたからね。しかも直後に彼女の政権でも副大臣と政務官が自首している。発表だけして処分は検討中というのも卑怯な話ですよ」

「被災地以外の、ほぼ全国で領収書のチェックに市民が押しかけているようです」

映像が流れる。やはり市役所の窓口や議員の事務所などに人々が押しかけているし、一切の不正がない議員は堂々としているけれど、わずかでも怪しい経費があったり、漫画本や絵本など孫にプレゼントしたと思えず、しかも孫の誕生日前に買っている領収書などがある議員は苦しい言い訳をしながら脂汗を拭いたりする。言い訳の途中でシドロモドロになり泣き出して土下座する議員までいた。誰しも大震災と津波には文句が言えず、さらに北朝鮮からの核ミサイ

ルと、中国との沖縄沖海戦、韓国からの対馬砲撃にも強い不安と怒りを抱きつつも何もできずにいた。そこにきて身近に存在して文句も言いにける地方議員の不正に報奨金までついたので、まるで市民革命のように押しかけ、打ち壊しのような騒動になっている。それでも鮎美が違法行為は逮捕すると脅いたので、みな市民も意識していて怒鳴っても物は壊さず、議員の胸倉やカツラをつかむことはあっても殴ったりはしていない。けれど、押しかける市民を無視して自宅にもったままだった議員の家7件が放火されボヤが出ていた。

「アユミンは完全な独裁権を確立するため、地方議員も叩くつもりなのかな？」

「いやあ……そんな娘ではないと思うが……にしても約3割の議員が不正か……多いなあ……社長や自営業出身の議員だと、経費の感覚で落としてたんだろうなあ」

「玄次郎もやってる？」

「まあ、居酒屋にいけば必ず領収書はもらってたぞ。ミーティングだ、ミーティング」

「逃げた議員とか、捕まえたら死刑かな？」

テレビが全力疾走で自宅付近のコンビニ前を走り抜け、市民から逃げる議員を映している。スーツ姿で高齢なのに見事なダツシユ力で印象的だった。

「そこまでは、しないだろ。たぶん。なんだかソフトな文化大革命って感じになってきたなあ……人民裁判みたいなこともするようだし。これ、絶対、中国とロシアも注目してるだろう」

食べ終わった玄次郎は仕事に出るため腰をあげた。

「いってくる」

「「いってらっしゃいませ」」

陽梅とワンコ、ヨンソンミョが家長を見送ったけれど、鐘留は今泉とテレビを見続けている。

「次のニュースです。北朝鮮、朝鮮民主主義人民共和国から拉致被害者9人が帰国され、これについて石永官房長官は発表しましたが記者からの質問には答えず、また被害者名の発表も本人と家族が同意した

横畑さんら3名のみとなっております。この件、どうでしょうか?」

「被害者名が伏せられるのはデリケートな問題ですからよいとしても、一切質問を受けないという政府の姿勢は実に問題です。この時期に拉致被害者が解放されるというのは、どう考えてもおかしい。新しい指導者の金正忠が急に改心して、いい人になったのでなければ、裏で取引があったとしか考えられない。あの小泉総理が拉致被害者の解放を受けたときも、密約で115億ドル、当時のレートで1.4兆円が北朝鮮に払われる約束だったという話もあります。この時期での解放となると、いったい、どんな密約を芹沢政権が裏でしたのか、そこに注目が集まるのに、一切質問に答えないというのは実に不誠実きわまりない。外交上の秘密にも限度がある」

「やはり、かなりの金額が約束されたのでしょうか?」

「芹沢政権は死者の財布をあてにしていますから10兆円20兆円でも、出すでしょう」

「昨夜、ミクドナルド・トランプ氏とも共同発表があり、N友の会に入ったようですが、これは、いかがでしょうか?」

「これこそ幼稚な女の結託ですよ。どちらも戦争で血を流すのは嫌だ。だから核ミサイルで解決しよう。ミサイル報復の権利を売ります、はい、買います、そういう安易な発想です」

「アユミンの悪口ばっか言ってる感じ悪い。こいつ死ねばいいのに」

今泉が答える。

「日本のマスコミって、基本は政権の悪口を言うからさ」

「じゃあ、君は外国のマスコミ、知ってる?」

「……………いや……………知らないけど……………」

「そういえば、君ってホモなんだよね?」

「まあ……………そうだけど……………そのホモって言い方で、昨日いっぱい逮捕されたのに言うか?」

「アタシはアユミンの友達だから友達特権で逮捕されないから大丈夫なの」

「処刑台の上で泣く日が来ないといけれど……オレも芹沢総理は尊敬してるけど、どんどんLGBTの権利をあげていって、普通の異性愛者を粛清していくなんて世の中は嫌だし」

「大丈夫、大丈夫、アユミンは進化論をベースに考えてる人だから、同性愛者は働きアリみたいに思ってるよ。産む層が消えたら生態系が維持できないのは、よくわかってるはず」

「生態系か……そういう目で人を見るのか……まあ、外れはしないだろうけど……」

ニュースが全国から地方のことに変わった。

「昨夜、全国で地方議員の政務活動費における不正を市民が押し付けて調査するということがおき、また議員自ら告白することも相次ぎ、ここ六角市でも茶谷弘幸市議と、鈴木義則市議が不正を認め陳謝しました」

「あ、あのオッサン！」

鐘留も見たことがある男性市議で、しかも鮎美が初めて応援演説をした鈴木義則と、鬼々島の振興を公約とする茶谷がテレビに映っている。

「この度のことは私の不徳のなすところで、まことに申し訳なく思っております」

「本当に申し訳ないの一言でございます。応援していただいた皆様に申し訳ないのももちろん、すべての市民、国民、また芹沢総理に陳謝いたします」

二人とも脂汗を拭きながら自宅前でカメラと市民に向かって謝っている。集まっている市民から鮎美への批判の声はあがっていないけれど、テレビは鮎美の9ヶ月前の姿を映した。

「鈴木市議と茶谷市議は、芹沢総理が応援演説をおこなった市議で、当時の映像があります」

近所のコンビニ跡地でマイクを前にした鮎美が緊張した顔で演説しているけれど、だんだん喋るのに慣れてきてアドリブを入れた。

「せっかく応援したんやから鈴木先生には、ぜひ当選してほしいですから！ 皆さん清き一票をお願いします！ うちも初めての投票を

鈴木先生にさせてもらいます！」

「アユミン……なんか初々しくて可愛い……人間って一年で、こんなに変わるの……今じゃミクド大統領と平気で喋ってる……」

「まあ、あいつが大統領かは、金本と同じで疑問だけど、核ミサイルを握ってるから強いよな」

「あ、そろそろ、裁判の時間だ」

鐘留はノートパソコンを開いて鮎美たちが配信する画像を見る。テレビではノーカットにならないし、場合によっては重要なところが編集されてカットされたりするので、モニターを並べて視聴する。ノートパソコンの画面には小松基地の大会議室で斉藤が撮っている映像が映った。まず田熊の裁判がおこなわれるようだった。会議室前方に11人の裁判員が並び、裁判員から見ると右側に検察官と被害者遺族、左側に田熊と弁護士がいて、傍聴席も設けられているけれど、鮎美の安全上の理由から傍聴は別の裁判を担当している他11人の裁判員と政府関係者に限られており、公開は映像配信をもって代替えとするという説明テロップが流れたし、傍聴席の端っこに鮎美が座っているのは映ったけれど、正面前方の11人いる裁判員のうち顔を映して配信してもよいと答えたのは5人だけだったので他の6人は被写界に入らないようにされていた。

「これより開廷します」

慣れない様子で裁判員の長を担当することになった中年男性が言う。

「え〜……」

マニユアルをもらっているので、それを読む。

「田熊被告、中央へ」

「へいへい」

呼ばれて田熊は立ち上がる。

「よつららしよ」

軽い調子で中央へ進み、だらりと立った。力を抜いた顔で首を傾け、11人いる裁判員を眺めて言った。

「婆アばつかりだな」

「……」

無作為に選んだので半数の5人が女性だったし、最年少でも23歳だった。

「私語は慎むように。では検察官、求刑をお願いします」

「はい。被告、田熊衛士は5人の小学生女子を、もっぱら自らの快樂のために強姦し殺害したものであり、犯行の様態と動機に何ら酌量の余地はなく当職は死刑を求刑いたします。……」

検察官はチラリと鮎美の方を見た。鮎美は傍聴しながらも別の仕事も進めているようで官僚から報告を受けたり、書類を書いて隣にいる鷹姫とヒソヒソと話していたりする。とても忙しそうだった。

「付け加えて。今回の裁判制度は、一審のみと聞いております。すなわち、もしも、この今日の裁判で死刑をためらうようなことがあると、永久に死刑とする機会は失われます。裁判員の皆様におかれましては、重い責任をかされ、戸惑いもあるかと思いますが、田熊被告の犯行は、たとえ三審制の裁判を10年かけておこなったとしても、必ずや死刑となる事件です。すでに証拠はご覧いただいた通り確かなものであり冤罪の余地は一切ありません。また、ふてぶてしく自白しており改悛の様子は欠片もなく、死刑でいい、などと言い放ち、当職が15年間、検察官として経験してきた中でも、これほどに悪質な者は類をみず、死刑以外の選択肢はない事件です。今回、法的に特殊な状態で公布施行された従来の死刑を超える、より残酷な死刑、具体的には被害者遺族による死刑も選択肢に入っておりますが、十分に値する事件と当職も考えますし、また、裁判員の方々に戸惑いがあるとしても、従来の死刑、すなわち苦痛を与えない死刑は最低でもくだしていただきたいと考える所存です。以上」

異例に長い求刑を検察官が述べた。

「では、田熊被告および弁護人から何かありますか？」

「ねえよ」

「あります」

弁護士が挙手した。

「どうぞ」

「ねえって言ってるだろ、ボケが」

「弁護士として今回の…」

話し始めた弁護士は速記官が挙手したので止めた。速記官は裁判員たちの斜め前にいて各人の発言を記している。

「速記官、なんですか？」

「同時に発言するのはやめてください。書き取れません」

「わかりました。気をつけましょう。では、弁護士さん、どうぞ」

「はい。一人の弁護士として今回の裁判は非常に乱暴であると強く懸念しております。事件の様態が粗暴であるから裁判も乱暴でいいなどというのは子供の発想です。……」

弁護士もチラリと鮎美を見ただけれど、鮎美は海軍士官から模擬核弾頭を載せた輸送艦が順調に航行中であるも、中国軍の偵察機2機と、ロシア軍の偵察機1機と戦闘機6機が周囲を旋回しており、これに対して畑母神が戦闘機8機を派遣し、遠巻きに牽制していると報告を受けていた。

「聴いてほしい人が傍聴していないようですが。続けます」

弁護士は厭味を言ってから続ける。

「人一人の命を奪う死刑というのは非常に重い選択です。プロの裁判官でも本当に、死刑でいいのか、死刑しかないのか、眠れずに迷う夜もあるとのことですよ」

「だから死刑でいいって」

また田熊が言った。弁護士は渋い顔をして続ける。

「あらゆる人に人権というものが保障されています。その社会を守ってきたことの意義というのが、大震災で揺らいできている。揺らいではいけないところまで、揺らいでいるのです」

やや冗長に弁護士が語ると、裁判員の一人で若い青年が挙手した。

「堂島裁判員、どうぞ」

「弁護士さんもさ、こいつが5人も女の子を殺したのは事実だと思ってるわけですよね？」

「……………現在、出ている証拠では、その可能性が示唆されているという

ことは認識しています」

「うぜえ……」

堂島と田熊が異口同音した。堂島が嫌な顔をしてから続ける。

「じゃさ、弁護士さんが裁判官だったら、こいつを死刑にする？　しない？」

「……………そういつた質問には答えられません。私は被告の弁護人です」

「うくん……………めんどいな……………死刑でいいだろ、もう」

堂島が椅子の背もたれに身をあずけて言う。

「さんざん証拠も見たしさ。もう多数決やろうぜ」

「……………」

「異議あり！」

弁護士が挙手する。

「異議を、どうぞ」

「そもそも、この裁判自体がデタラメです！　こんな風に人を裁いていいわけがない！」

「いやいや、さつき検察官も言ってたじゃん、どうせ10年かけても結論いっしょだつて」

「だとしても、デタラメすぎる！　次は、あなたが被告になっているかもしれないですよ！　そのとき、こんな風に死刑にされていいんですか?!」

「いや、オレ、強姦とかしないし。ちゃんと口説いてからヤルし。田熊、お前、くだらない男だな。あ、でも、質問あるわ」

「堂島裁判員、質問を、どうぞ。ただし、裁判員としての品位を保つてください」

「了解つす。えく……………田熊さん……………いや、お前に、さんとかいらねえよな。……………田熊……………被告だな。えく……………田熊被告、あなたは小学生の女子ばかり狙いましたが、ロリコンというヤツですか、それとも、大人の女性は抵抗されそうで怖かったですか？」

「……………死ね」

「お前が死ぬんじゃボケ」

「静粛に」

中年男性の裁判員が疲れた顔で問う。

「田熊被告に問います。何か言うことはありますか？」

「ねえ」

「……………では、多数決をします」

「異議あり！」

「「「……………」」」

「……………弁護士さん、異議をどうぞ」

「たしかに、今回の被告を死刑にすることに、あなた方は迷わないかもしれない。けれど、他の事件でも、どんどん死刑を適応する社会になる第一歩なんですよ！ これは！ そこを考えてください！ あちらを見てください！ あの傍聴席にいる芹沢鮎美を！ 一人を自分の扇動で殺そうとしているのに、涼しい顔をしている！ たまたま得た権力でね！ 人は変わるんですよ！ ボクはね、先月までの彼女は好きでしたよ！ 弱者を助けよう！ なんとか社会の格差を無くそう！ そういうことに、真正面から取り組んでいた！ けれど、震災が来て権力をえて、どうですか?! 一気に変わってしまった！ 弱者を切り捨て！ 軍隊を指揮している！ もう毛沢東やポルポトよりタチが悪いですよ！ 憲法を無視して人を殺す！ そういうことを、あんな平気そうな顔でやっている人は来月再来月には私たちを死刑にするんです！ そのへんを考えてください！」

「……………」

鮎美は名指しされたので文科省があげてきた資料を見るのをやめて弁護士の目を見た。何か言いたくなって唇を動かしたけれど、ただの傍聴人という立場なので慎む。中年男性の裁判員が言ってくる。

「まあ、弁護士さんの心配は私も心配なんですけど、それで芹沢さんに訊いておきたいのですが、芹沢さんは発言できますか？」

「はい。……………今は、ただの傍聴人ですが、……………裁判員の長が、訴訟指揮として指名され、私へ参考人として出廷するように命じられるのであれば、すぐに対応します」

「……………うくん……………では、お願いします。芹沢鮎美さんを参考人と
して出廷するよう求めます」

「はい」

鮎美は傍聴席から立ち上がり、法廷となつていいる中央に入る。三井
と鷹姫は護衛として左右に立った。鮎美と田熊の距離は2メートル
ほどになる。鮎美は田熊を見て、それから弁護士を再び見た。

「おっしゃるのように、私も非常に乱暴な裁判であるとわかつておりま
す」

「ならば、なぜ?!」

「ごく単純な話です。非常事態においては非常の対応をする。のんび
りと10年かけて犯罪者の権利も守りながら、やっていけるだけの余
裕が社会にあるときは、そうすればよいでしょう。けれど、今は余裕
がありません。また、もし、今、私が決断を鈍らせ、やっぱり今日の
死刑はやめよう、となれば、おそらく社会の秩序は乱れるでしょう。
そして何十件かの強姦殺人が生じる。現状、秩序の維持は最重要課題
です。この課題の前に、5人も女の子を殺した者の命は議論の余地な
く処するしかない、そう考えております」

穏やかに話しているのに鮎美には周囲を圧倒する迫力があって、弁
護士もたじろいだ。それでも、人権の番人として、この為政者へ言っ
ておく。

「……………あ……………あなたの恋人だった人も世間で殺人鬼ではないかと言わ
れてますが、もし、あなたの恋人が、ここに立っていても、あなたは、
そう言えますか?」

「……………いいえ。公人としても私人としても、言えません」
「だったら…」

「まず公人として、牧田詩織にかかっている嫌疑は非常に怪しいもの
です。タックスヘブンによる罾ではないかと言われていますし、本人
も、そう主張していました」

鮎美は冷静に話したけれど、涙が出たので指先で拭いて続ける。

「冤罪の余地があるのですから、丁寧な審理を要するでしょう。即決
裁判には馴染まず、時間をかけ、証拠を吟味し、反論の機会を与えて

いただくべきです。また、私人としては、今ある自分の能力と権力、そのすべてを使つて彼女を守り、彼女を罠に嵌めた者を見つけ出し、相応の刑罰をくだしたでしょう。それだけのことです。この男の件とは、まったく関係ありません。……守れる機会は無かったのですが……」

鮎美は泣きそうになつたけれど、泣かず、裁判員たちを見る。

「ごく単純に、かつ道理というものを意識して考えてみてください。この男を生かしておくべきですか？ それだけの話です。罪刑法定主義も手続きの正しさも、罪と罰の本質ではありません。罪があり相応の罰があれば、それでよいのです。以上です」

「わかりました。傍聴席に戻ってください」

「はい」

鮎美が戻ると、中年男性の裁判員は検察官のそばにいる被害者遺族に問う。遺族は女兒5人の両親9人と、兄1人が来ていた。

「遺族、一人一人の意見を訊いてから多数決としたいと思います」

そうして遺族全員から涙ながらの意見を訊くと、もう結論は出た。親が娘を想う気持ちは当然のこと、出廷した兄は妹と11歳も離れていて、ずっと弟妹が欲しかったのに、なかなか産まれず、とうとう母が無事に出産したときは、嬉しくて分娩室の前で泣き崩れたという想い出と、妹が犯され殺されたと知ったときの絶望と憎しみを叫んでくれたので裁判員たちの気持ちも固まった。

「では決を採ります。田熊衛士被告を、過酷な死刑にかすことに賛成される裁判員は挙手してください」

全員が挙手して決まった。

「判決、被告、田熊衛士を過酷な死刑に処します」

「思ったより長かったな」

捨て台詞のように田熊が言ったので、検察官が挙手した。もう結審したので何か述べる段階ではないけれど、素人が裁判員なので、とりあえずあてる。

「検察官、どうぞ」

「今ね、この田熊は解放されたような気分にいる。芹沢総理、あなたの

判断も一理ある。けれど、従来の死刑もそれはそれなりに過酷だったのです。日本では死刑執行日が実に曖昧だった。裁判で死刑が決まってから、何年も何年も苦しむのです。明日、死刑にされるのか、と。最初は強がっていられる犯罪者も、いずれ恐ろしくなってくる。この長い長い時間を過ごさせることも、被害者の無念を晴らす手段だったのです。……もちろん、この大災害と戦争で食料の貴重さや、人的労力を考えると無理だという、あなたの判断は正しいけれど、さっさと死刑にすることで、さっさと解放されてしまおう、ということ覚えておいてください」

「……はい」

鮎美は返答して一礼した。ずっと視聴していた鐘留はノートパソコンの前で冷めてしまったコーヒーを飲む。テレビも同じ内容を放送していたけれど、ときどきコメンテーターが鮎美を否定するようなことを言うのが、うるさいので音量を最少にしていた。法廷は10分間の休廷となっている。

「意外と長かったね。2秒で死刑かと思ったのに」

「まあ、さすがにな」

今泉は鐘留と年齢が近いので友達感覚で言った。

「「……………」」

ヨンソンミヨらは日本の治世なので余計なことは言わず、ワンコが気を利かせて全員分の紅茶を淹れる。対馬に韓国軍から砲撃があつて以来、たとえ今泉らが護衛についてくれるとしても、あまり外を出歩きたいとは思えない雰囲気になっている。なら、いつそ韓国に帰るという選択もあったけれど、能登の難民キャンプにいる仲間と連絡を取ってみると、日本政府が人道的に救った難民として自分たちが紹介されると、韓国内では自分たちのことが祖国を捨てた裏切り者とされているようで帰るに帰れない状態らしかったし、現状で日韓間で旅客機は止まっているし、船便は対馬経由が多いので、もちろん止まっている。結局、ここで息を潜めているしかなかった。

「あ、あの弁護士がアユミンにいちやもんつけてる」

休廷になっている大会議室の映像は流されたままになっていた。

田熊の弁護士をしていた弁護士が鮎美に詰め寄って何か言っていた。遠いのでマイクに入っていないし、鷹姫は警戒気味に弁護士と鮎美の間に入っているけれど、鮎美は領きながら聴いていて、わかりました、と言った感じだった。そして、カメラの方に近づいてくる。

「今、弁護士さんより、昭和の憲法が無効だというなら、次の憲法は、どうなるのか。現状では、あまりに曖昧で私の権力に際限がなく危険すぎるという指摘があり、少しでも決まっている部分があるのなら、国民に示すべきだ、と主張がありました。もつともだと思えますので、今、ここで前文と1から19条までを公布します」

そう言った鮎美が鷹姫に視線をやると、鷹姫は持っていた書類を読み上げる。

真日本国範条（しんにほんこくはんじょう）

私たち、日本は新たな規範として大日本帝国憲法にかわる真日本国範条をかかげます。

そも、わたしたちは、おおきみをいただき、わのくにをつくりました。

次に中国より律令制と漢字を習い、さらに尚武の国として栄え、そして欧米より聖書が発展した法理を習い、苦難の大戦争を経、日本国憲法という法理のもとに甘んじました。いわゆる平和憲法は、その理念においてみるべき点が多いのですが、戦力を保持しないと放言しつつ、自衛隊という機関を設置し、大きな矛盾を抱えながら、条文の解釈という手段で乗り切ってきました。

これがため法律と条文解釈を駆使すれば、あらゆる非道が法理によって正当化され、契約の自由という欺瞞のもとに、労働者の権利は剥奪され、大が小を削る在り方が蔓延しました。もともと江戸末期に日本へ法理が入ってきたおりも、不平等を正当化する手段という側面があり、とうの欧米人でさえ金融危機や租税において、法理の壁を悪用する者たちが栄え、富の偏りが顕著となっています。

ゆえに、私たち日本は法理よりも、道理を重んじます。

日本は天皇の仁と徳、人々の道理、そして自然の摂理によって生きていきます。それゆえ、これまでの法律は律令制の復古として、律条

とし、憲法ではなく規範としての範条をかがげ、政令は国令、地方条例は地方令と読み替えます。そして、あらゆる条文は、その文言の裏をかいて脱法行為をすることは許されず、制定された本旨を重んじ、道理によって国を治めます。

1 日本国は万世の天皇とともにあります。

2 皇位は伝統を重んじ皇室典範の定めるところにより継承されません。

3 日本国は天皇と神道を大切にします。

4 天皇は日本国の統治権を総攬し、非常の事態において大権を行います。

5 天皇は総理大臣を任命し、非常の事態において大権を与えます。

6 平時には総理大臣のもと国家の統治権は七つに分立されます。

一、行政権、二、規律権、三、裁判権、四、選挙規律権、五、公的報道権、六、土地処分権、七、軍権とします。

7 規律権は選挙に関するものを除いて国会が有し、国会は衆議院および参議院の両議院で構成します。

8 裁判権は総理大臣が設置する裁判所が有し、裁判官と裁判員は良心と道理に従い、独立して職権をおこない、この範条と国会が定めた律条にのみ拘束されますが、道理を重んじます。

9 選挙規律権は選挙規律委員会が有し、選挙規律委員は国民の中から無作為に選ばれた者へ義務教育終了程度の学科試験を課し、上位3分の2までの者へ任命します。ただし、学科試験においては聾啞者等障害者へ配慮することとします。その任期は8年とし半数改選とします。再任には国民審査を要し再々任はなく、報酬は地方公務員と同程度とします。また選挙管理委員会は選挙規律委員を補佐し、かつ任期を終えた選挙規律委員を雇用することを妨げません。

10 衆議院は国民の中から立候補による成年の普通選挙とし、参議院は国民の中から成年を対象に無作為に選ばれた者のうち国政に参加する自覚のある者とします。

11 衆議院および参議院ならびに地方公共団体の選挙に関する規

律は選挙規律委員会が国会から独立して審議し、制度設計および選挙区ならびに定数等を制定します。この制定に対し裁判所は著しく道理に反しない限り異議を判決することはできません。また、選挙規律委員の選出に関する律条は選挙規律委員会が制定しますが、国民から無作為に抽出されることおよび選挙制度に意見しうる程度の学力をもつことが条件の本旨であることを改変することはできず、制定が有効となるには天皇の承認を要します。

12 公的報道権は報道委員が独立して有します。報道委員は国民の中から立候補による成年の普通選挙とし、相当の予算を与えられ国民の知る権利を保障するため、広く報道活動をおこないます。

13 報道委員についての選挙に関する事項は選挙規律委員会が制定します。

14 土地処分権は土地処分委員会が有し、国または地方公共団体が私有財産である土地を公共の事業のために収用するとき、その是非を審議します。

15 土地処分委員会は国民の中から成年を対象に無作為に選ばれた者のうち公務に参加する自覚のある者とし、

16 土地処分委員会は私有財産が国または地方公共団体によって収用されるとき、その必要性および対価の妥当性を考慮し、多数決をもって決議します。また必要によって土地以外の私有財産についても審議し決議します。この決議に対して裁判所は著しく道理に反しない限り異議を判決することはできません。

17 軍権は国民と国土を守るため、天皇が統帥し、総理大臣が任命する防衛大臣が行使します。防衛大臣には10年以上の軍務経験がある者をあてることとし、かつ現役の軍人が任命されたときは、これを拒否できません。ただし、非常の事態において10年以上の軍務経験がある者で適切な者がえられないときは天皇もしくは総理大臣の判断によって相当の者へ任命することができます。

18 この範条でいう非常の事態とは巨大な災害、戦争、内乱等の国家の存立と国民の生命を危うくする事態であります。

19 すべて範条、律条、国令は道理によって解釈され、この本旨を

無視した作為的な解釈は無効であり、道理は徳と仁をもって国民の安寧を意図するものとします。

鷹姫は堂々とした声で読み終えた。聴いていた弁護士は考え込んでいるし、テレビの中ではコメンテーターたちが騒いでいる。完全に、かつての9条を取り払い、自衛隊を軍としてやっていることや、防衛大臣に軍務経験を求めること、さらに自分たちマスコミに関わると思われる公的報道権とは何なのか、蜂の巣を叩いたような騒ぎだった。

「アユミン、三権分立どころか七権にしたんだ。ややこしい」

鐘留のつぶやきが聞こえるはずはないけれど、国民も同じことを思っているだろうと鮎美が答える。

「モンテスキューが三権分立を言い出して、すでに300年、そろそろ人類は権力の分類をもう少し進化させた方が良いと考えます。まず軍権、これは国民と国家を守るときには、あらゆる手段をとりうる想定しています。ゆえに非常の事態においては、すべての権力に勝ります。次に、土地処分権ですが、これまでは行政権に含まれていましたが、土地収用は遅々として進まず、重要な空港や道路の建設が遅れる状態でした。このことは震災からの復興にも大きな足枷となります。さりとて行政が強権的に私有財産をバンバン取り上げるような国になるのも問題ですし、とはいえ、行政が大金をドンドン払い、土地の値段が釣り上がっていき、また、みんなのお金である税金が一部の地主に流れてしまうのも大問題です。なので無作為に抽出された委員が、妥当性を考慮し決議する形とします。これまでも土地収用についての委員会はありましたが、行政全体で見て盲腸ほどの器官でしかなかったのを、しっかりと分立した権力であると定め、力のある機関とします」

鮎美は一息おいてカメラを見つめる。

「次にマスコミ、これは、すでに第4の権力などと言われていました。ですが、インターネットの普及と、偏向報道をおこなうマスコミが顕著となり、かなり乱れています。インターネットは誰でも発信できますが、捏造や恣意的な意見の発信など、その真実性に大きな疑問がありますし、低予算というか、ほぼ予算なしで各人が勝手にやっております」

ます。そしてマスコミについても、広告収入をもらう都合もありパソコンサーに都合の悪い報道はできない、結果、大企業による不当な契約や、不当労働行為については下火です。報道とは何か、報道もまた剣道、茶道、人道と同じ道の業です。どのような道理をもって、やっていくのか、そこを考えなければならぬのですが、予算がなければ何もできない、予算のためには広告収入が、となるでしょう。また視聴率を意識すれば、ゴシップや政治家の不倫など、くだらないことを流さざるをえず、純粹に政策の是非を問うような報道は、ろくにない状態です。これを改善するため、報道委員を立候補制とし、選挙をおこない、予算をつけ、運営します。もちろん、従来の民間企業、私人による報道も妨げないことは、あとあとの条文で明記します」

鮎美は横髪を耳にかけて続ける。

「つぎに選挙規律権ですが、規律権を従来の立法権と読み替えてもらえば、わかりやすいと思います。これまで選挙をおこなうときのルールも被選挙人がつくってきました。これでは、ついつい自分たちに有利なようにつくります。米国のゲリマンダリングをあげるまでもなく、選挙区の区割りや定数など、また細々とした決まりも、与党が有利なようにしつつも、結局は平等なので、チラシの配布は制限されるのに、やたらとポスターを貼るべき掲示板は多くて、組織力のない候補者は苦戦し、また、インターネットでの選挙活動にも消極的であったり、それでいて色つきの旗を、そこらじゅうに立てるといふ戦国時代の陣地形成みたいなことを続けていたりします。問題なのは、立候補し選挙される側の人間が、そのルールをつくるということですよ。ゆえに、これを分立させます。選挙に関するルールや区割り、定数は住民人口などを考え、選挙規律委員会が決めます。その他のルール、つまりは法律、新制度では律条としますが、この立法権、規律権は国会にあるとして、しっかりと分立させます」

そこまで説明すると、休廷が終わり再び裁判が始まる。今度は鮎美らは傍聴席でなく検察官の隣に座った。被告は本名不明の在日外国人で、戸籍を不正に得ようとしたので国が被害者という立場であり、鮎美が国の代表だった。裁判員たちは入れ替わり、さきほどは傍聴席

にいた11人が前に座っている。再び中年の男性が長に選出されていたようで、やや禿げた頭をした男性が指揮をとる。

「これより開廷します」

禿げた男性もマニュアルを見る。

「えく……本名が不明ですので、番号で呼びます。3939117号、中央へ」

「……………」

ずっと完全黙秘している被告は日本語の理解は完璧なようで、黙って立ち上がると中央に来た。鮎美との距離は1メートル強となるので鷹姫とゲイツらは警戒する。警戒して正解だったという感じで被告は鮎美へ襲いかかる意図があったような目をしていたけれど、警戒が嚴重なので諦めた様子だった。

「……………」

被告はスポーツ刈りが伸びたような髪型で、細身の中年、日本人にも見えるし、外国人だと言われれば外国人のようにも見える顔立ちだった。

「では検察官、求刑をお願いします」

「はい、被告3939117号は、自らの氏名を偽り、また高い可能性で外国人であるにも関わらず日本人であると称し、津波によって亡くなられた方の健康保険証と名刺を使い、不正に二つの戸籍を取得し、さらに三つ目の戸籍を取得しようとして画策したところ発覚し逮捕されたものであります。逮捕後、黙秘して一切を語らず、本名も不肖であり、前科の有無も確かめられず、当然反省の様子はなく、この非常事態において戸籍の誤魔化しは行政を大きく混乱させ、社会の秩序を破壊するものであり、すでに公布施行されていた通り、死刑とするのが相当であると当職も判断し、死刑を求めます」

「では、被告および弁護士、なにかありますか？」
「……………」

被告は黙ったままで、弁護士となつている女性弁護士が語る。

「すでに提出されている証拠で、この人が不正をされたのは確かです。指紋、頭髪、すべて本人のものです。ゆえに、この人が罰を受けるの

は当然です。けれど、死刑はいきすぎです。罪刑法定主義の大切さ、それに、量刑を考えて、不当すぎます。初犯であれば、せいぜい懲役5年ほどの罪で死刑にしようとしているのは外国人への偏見さえ感じます。裁判員のみなさまも考えてみてください。この人は、ごくごく素直に自分の指紋と頭髪を市役所の窓口で提出しています。そこに誤魔化しはありませんでし…」

発言の途中で海軍士官が再び緊迫した顔で法廷へ入室してくる。駆け足で鮎美へ耳打ちしにきた。

「畑母神大臣より至急の報告です。輸送艦の周囲上空でロシア空軍と交戦になる可能性あり、すでに輸送艦へ異常接近しており、いよいよ危険を感じるときは先制攻撃もありうる、とのことです」

「あかんー」

思わず大きな声で言ってしまった。そして海軍士官と急いで廊下へ出ると告げる。

「交戦は絶対にさけてください。そして鈴木大臣を通じてフーチン大統領へ連絡をとり、会談を申し込んでください。日本は今後、ロシアと強い友好関係を築く国でありたい、と芹沢が言っていたと」

「はっー」

海軍士官が司令室へ駆け戻っていくし、鮎美も気になるので司令室へ行き、畑母神と状況確認する。日本海を航行する模擬核爆弾を載せた輸送艦は島根県沖を進んでいたけれど、複数のロシア空軍機が交替で異常接近していた。それに対して日本空軍の戦闘機は遠巻きに守っているだけだったのを押し返しに出るつもりでいた畑母神へ忍耐を頼み、そのまま様子を見ていると鈴木からの連絡が奏功したようでロシア空軍は引き上げてくれた。

「ふう…」

安堵の息をつく二人へ司令室に來た鈴木が言う。

「芹沢総理との会談をOKしてもらいましたよ。あちらの都合で午前1時になりますが、大丈夫ですよね？」

「頑張ります」

そう言った鮎美は法廷である大会議室へ戻る。鮎美がないので

審理は止まっていて女性弁護士に厭味を言われる。

「一人の命がかかっている即決裁判なのに、よく抜け出すなんてことが出来るものですね」

「すみません。重要な用件だったので」

「人の命よりですか？ 軍人からの話の方が大切だど？」

「……………はい。私と、あなた、その他、何千万という日本人の命がかかっているのです、この裁判より重要です。そして、この裁判も一人の命ではなく、多数の命がかかっていると私は認識していますが、弁護士さんにとっては弁護している一人の命しか見えていないようので残念です」

「……………。裁判員長、再開してください」

「はい、再開します。弁護士、続けてください」

「被告は、ごく素直に市役所の窓口で頭髪と指紋を提出し、たしかに保険証や名刺は拾った物を使用しましたが、計画的な犯行というより、たまたま拾った身分証明書を見て、魔が差したという程度の犯行です。これで死刑はあまりにむごい。そして、失礼ながら被告は素直に頭髪や指紋を出すあたり、DNA検査だとか、そういった知識がない、不幸にして教育を受ける機会が乏しかったものと思われまます。そういう人には刑罰でなく、やり直しのための教育の機会を与えるのが法治国家の本当であつて、なんでもかんでも死刑というのは野蛮人のすることです」

女性弁護士は裁判員たちを見つめて続ける。

「よく考えてあげてください。この人は不幸にして教育を受ける機会に恵まれず、また外国人ということ、これまで日本で多くの苦労もしてきたでしょう。そうして私たちと同じに大震災に遭い、大混乱の中で、なんとか人として、まともに扱われたい、そう願ひ、日本人としての戸籍があれば、少しはまともな扱いが受けられるかと期待して、つついっ拾った保険証と名刺を使ってしまったのかもしれない。それに、二つ目、三つ目とつくったのも、一つでは不安だったから、二つ目は予備にと考えたのかもしれないし、仲間や家族の分として考えていたのかもしれない。それで死刑ですか？ 私は死刑反

対論者ではありません、救いようのない犯罪者はいるでしょう、さきほどの裁判、田熊被告の件は仕方ないと思います。あれだけのことをすれば、それは確かに死刑しかないでしょう。けれど、この人は、ただ市役所の窓口に行つて申請しただけです。誰も殺していないし、傷つけてもいません。ただ自分を救いたかっただけです。それで死刑は、むごすぎます。よくよく考えてください。あなたの子供が、あなたの兄弟、友人が、もし外国に流れ着いて、こういう扱いを受けていたら、それでいいですか？　せめて数年の懲役刑で十分ではないですか？　この国を死刑ばかりくだす独裁者の国にしないでください。お願いします。以上です」

禰げた裁判員の長が鮎美へ視線を送る。鮎美は挙手して反論する。

「誰も傷つけていないなどというのは大間違いです。まず、津波で亡くなった人は、どんな思いで、この法廷を見ているでしょう？　戸籍を奪うということは、銀行口座にある預金も、その他の財産、住宅があれば家も、これまで納めてきた年金も、すべて奪われるのです。もし、亡くなった人の子供が無事に救出されていたら、どうでしょう？

本来、震災孤児として扱われ、これから用意しますが相応の給付金を支給するのですが、にせの父親が生きているということ、とてもややこしいことになります。当然、その頃には銀行口座にあつた預金など引き出して使っているでしょう。逃げ切ることを考えるなら住宅も売り払っているかもしれない。また、奥さんや両親がいて、いっしょに津波で亡くなっていれば、これについての給付金なども、できれば支給したいと思つていますが、こういう嘘をつく人がいるせいで行政は大変に困るわけです。しかも、一人分というのなら、まだしも二人分、三人分と取得しようと市役所に出向いています。この被告、発見されなければ五人分、十人分とやったかもしれませんよ。そのせいで、それだけの人が正当なものを受け取れなくなり、相続などもややこしくなり、行政も裁判所も迷惑するのです。教育を受ける機会が無かつたなどと、弁護人は言いましたが、被告は市役所の窓口で流暢な日本語で申請したそうです。完全に確信犯です。わかつていて

やっている。誰も傷つけていない、殺していないなんてことはないのです。こういう人への対応、こういう人が騙し取る金額、そういうことを考えて行政が動くことで、より手間が増え、結果、本来は助けてあげるべき、声をあげることでもできない震災孤児などへの対応が後回しになってしまいます。その結果、両親が亡くなった十代の子が将来を悲観して自殺することも10や20でなく生じてきます。もし、行政の手間がはぶけていたら、こういう子へのサポートができていたかもしれないのに。そういう意味で、被告は三人分の戸籍を奪っただけでなく、行政にかけた負担で考えれば10人20人と殺しているも同然なのです。この混乱期に嘘をついて他人の身分を奪い、財産を奪い、国から給付金を騙し取る、これがどれほど悪辣なことか！ まだ銀行強盗の方が素直です！ 国にかけた負担、国民から奪おうとした財産、それらを考えれば十分に死刑が相当します！」

鮎美の反論を受けて女性弁護士が挙手して再反論する。

「たしかに被告は悪いことをしました。二人分の戸籍を奪い、三人分目が未遂で逮捕されています。けれど、まだ財産や給付金などは取得していませんでした。いわば未遂犯です。それで死刑はいきすぎです。被告にやり直す機会を与えるべきです。ずっと、被告は黙秘しています。日本語が流暢な彼は、この状況を理解してもいるでしょう。それでも、黙っている。どうしてでしょう？ きつと、怖いからです。いったい、自分がどうされるのか、考えてもみてください。もし自分が外国人に囲まれ、外国人が運営する法廷に連れてこられ、死刑死刑という総理大臣のそばで審問されたら！ 怖くて何も言えないじゃないですか、なにか言えば、それで死刑にされるかもしれない、とにかく黙って怯えているのです。私だって、怖いですよ。今はまだ裁判という形式を保つ独裁者が、いずれ、より暴走して、今日こうやって反論した私を罪におとしめるかもしれない。ほんの一言、同性愛を否定するようなことを言ってしまったら、過去にブログなどに書いていたら、それを見つけて逮捕、あとは罪をでっちあげて死刑、そうされるのではないかと怖い。けれど、ここで、しっかり誰かが反論して止めておかなければ来年、処刑台にいるのは私たちかもしれないので

す。被告の罪は、どう重くみても懲役5年です。実質的には、ただの詐欺です。詐欺で人を死刑にしてはいけません！」

鮎美が再反論する。

「なぜ、被告はふてぶてしく黙っているのか、せめて自分の本名くらい名乗ればいいものを、黙秘権は氏名まで名乗らないことを想定していません。そして、私が被告の立場であれば、泣いて謝り慈悲を乞います。心底反省しているかは別として、とにかく死刑をさけたいので泣いて謝るでしょう。でも、被告がそれをしないのはきつと、日本人に頭をさげてなるものか、という気持ちがあるからでしょう。騙し取ろうとしたのに失敗し、謝るところか黙り続ける。反省など欠片もありません。こういう被告が死刑にならなかったとき、どうするでしょう？ 懲役5年？ 今の状況で5年も三食提供していくのですか？

そして5年後、心から反省していて、もう悪いことはしないでしょうか？ 三人分以上も亡くなった人の戸籍を奪う人間を死刑にするのは当然です。また、死刑にしなかった場合は、どうでしょう？ この裁判は全国、全世界に公開しています。ということは、同じく戸籍を騙し取ろうとしている人間も、きつと見ています。そして結果、死刑にならないければ、よしやってみよう、どうせ死刑にならない、うまく金持ちの戸籍を盗れば最高だ、捕まっても5年で済む、そんな思考をする人間は外国人に限らず日本人にも、きつといます。これが、どれだけ社会の秩序に混乱をもたらすか、考えてみてください。そして、こういう人間を抑制することで、助けるべき人を助けられる可能性と、こういう人間が多く出てくることで助けられたはずなのに助けられなくなってしまう孤児たちのことを！」

「「「「……………」」」」

裁判員たちが考え込む。禿げた裁判員の長が被告に声をかけようとしたけれど、その前に女性弁護士が挙手したのであてて。

「弁護士、どうぞ」

「今、芹沢総理が言ったことは、ようするに見せしめにする、一罰百戒のために、この人を殺す、そういう野蛮なことを言ったのです。そんな野蛮さは許されることはありません」

鮎美が挙手しあててもらい、女性弁護士を見つめて言う。

「現在、環太平洋地域の国々は、すべて野蛮な状態です。その中でもっとも秩序を保っているのは日本です。けれど、その日本にしているためには他者を殺してでも生きる、そういう側面が一つの真実です。それでも、少しでも秩序を保って集団を維持していききたい、今、秩序を保てるギリギリの段階です。ここで混沌の方に流れれば、それこそ、あなたの言うように私は死刑死刑と、疑わしき者を、どんどん切っていかなければなりません。まがりなりにも裁判という手続きをとっているのは、まだ秩序があるからです。裁判員のみなさん、どうか、この事件が日本の分水嶺であると考え、判決ください」

再び女性弁護士が反論する。

「裁判員のみなさん、あなた方は死刑に賛成と手をあげるだけかもしれない。けれど、実際に死刑にするのは刑務官です。人の命を殺めるというのは簡単なことではありません。こんな軽微な罪で死刑といわれても、刑務官たちも戸惑うでしょう。本当に死刑にしているのか、そもそも総理代理令による刑法改正なんて有効なのか、ヘタをすれば、死刑執行をしたことで殺人罪にならないか、そういう不安と危険もあるのです。芹沢さんだって、そうです。あなたは口で死刑と言うだけかもしれない。それが相当だという判断で、そう言う。秩序の維持に邪魔だから、切る、その判断は正しいつもりかもしれませんが、けれど、あなたが刑務官の立場だったら、どうですか？ いやいよもって人を殺せますか？ 自分の手を汚さず、他人に手を汚させる、これから、あなたは、そういうことをしようとしているわけです。いつそ、死刑判決が出たなら、あなたが執行すればいい、その覚悟があつて言うべきです」

「……………」

鮎美が考え込む。鷹姫が言った。

「私がなしますー！」

鷹姫が発言している場なのかには疑問があつたけれど、禿げた裁判員の長は素人なので注意せず、鮎美が決めた。

「わかりました。裁判員のみなさま、死刑判決をください。私が執行します」

「「「「……………」」」」

裁判員たちも悩む。禿げた長が被告に問うてみる。

「被告人、何か言うことはありますか？」

「……………」

「なにかないですか？」

「……………」

「そうですね……………では、私から国側代表、いえ、芹沢さん個人に問います」

「はい」

「私たちが死刑判決をくださった場合、あなたが本当に執行する気ですか？」

「はい」

もう鮎美は迷っていなかったので、むしろ裁判員たちが戸惑う。

「……………え〜と……………この被告には、たしか過酷な死刑ではないですね。どういう死刑なのですか？ 絞首刑ですか？」

「いえ、絞首刑とする設備がないので苦痛を与えない方法として銃殺が予定されています」

「銃殺ですか……………、あなたは人を殺したことがあるのですか？」

「ありません」

「……………銃を撃ったことは？」

「ありませんが、ここには教えてくれる人は多いでしょう」

「そうかもしれませんが……………銃刀法違反では？」

「法務省と相談しますが、業務上の強い必要性があったので適法、となるようにします。問題の本質は、そこではないですし」

「そうですね……………わかりました。結審します。……………結審しますが、被告人、何か言うことはありますか？」

「……………」

被告は押し黙ったままだった。

「では、決をとります。被告3939117号を死刑とするのに賛成

な裁判員、拳手を願います」

「「「……………」」」

拳手したのは8人、迷いつつも3人は手を挙げなかった。

「8人ですね」

自分も手をあげた長が告げる。

「判決、被告3939117号を死刑とします」

「ご理解、ありがとうございます」

鮎美が礼を言い、ずっと黙っていた被告が吐き捨てる。

「日本死ぬ」

「「「……………」」」

やはり日本語が話せたのか、と被告以外の全員が思った。

「これより次の裁判まで休廷とします」

ずっと鐘留たちも見入っていたし、テレビのコメンテーターたちも、法廷で繰り広げられた舌戦に何も言えず見ていたけれど、休廷となったので騒ぎ始める。話題は被告が死刑に相当する罪なのか、という点より、鮎美が自ら死刑執行すると言い出したことだった。

「彼女自身が死刑執行するということですが、どうですか？」

「非常に危ないですね。異常性を感じます」

「芹沢の恋人だかパートナーも異常殺人者だった。類は友を呼ぶといえますからね」

「いわゆる人を殺してみたかった、というやつでしょうか」

「虐殺者になっていく過程ですね」

「楊貴妃にせよ、北条政子、日野富子、いずれも女性が頂点にたつと、こういった残酷性が出てくるわけですよ」

「次の裁判は石永静江ですが、彼女は、ただ接待と車代という名目での現金受け取りがあっただけです」

「ええ、これで死刑をかすようであれば本当に異常ですよ」

「石永静江のやったことについては総理代理令とかいうもので事前に禁止していたわけでもない」

「そうです、彼女が公務員であるのかも曖昧ということは昨日の謝罪会見で石永官房長官が述べていることです」

「これで死刑というなら、それこそ虐殺ですよ」

「芹沢にとつては、かなり年上の教育役ということですから、目障りだったのかもしれない」

「ええ、殺してみたい、むしろ、殺してやりたいヤツだから殺すという感覚ですね」

「正常人の感覚からして死刑の執行をするというのは、ありえないわけですよ」

「それを、躊躇いもなく承知しているところが実に異常です」

テレビを見ていた鐘留が腹立たしく叫ぶ。

「アユミンは自分の責任だと思っただけから、やるって言っただけじゃん！ 自分でやるのが、どんだけ大変か！」

幼い頃に両親が障碍のある弟二人を殺していたかもしれない鐘留が涙ぐんだので今泉は何と言っていていいか迷い、とりあえず言ってみる。

「結局、テレビのヤツらは適当いってるだけだよ。先輩らがPKOに行つたときも、超テキトーなこと言つてたから」

「「……………」」

ヨンソンミョたちは何も言わず、紅茶を啜つた。休廷中のカメラに石永が近づいてきて頭をさげる。

「国民の皆様にも、改めてお詫び申し上げます。この度は自分の妹、石永静江の件にて本当に皆様のご不快、お怒りをいただき、まことに申し訳なく思っております」

「シズちゃんまで死刑つてことは、ないと思うけど…………」

いつもふざけている鐘留でも、それなりに知り合いである静江が死刑になるのは怖かった。急に石永が全国に向けて謝り始めたので、なんとなく静江の死刑は無いような気がしてくる。

「皆様に深く謝りつつ申し上げます。昨日も申し上げましたが、まことに申し訳ないことに石永静江の法的な身分は曖昧でした。静江が不当な接待と現金を受け取っていたことは確かです。けれど、これを法的に裁くとなると、難しい側面が多々あります。芹沢総理は罪刑法定主義をある程度は緩和して、罪は罪として罰するべきという姿勢を

表明されておりますが、静江が犯してしまつた罪は、従来の量刑では、おおよそ罰金20万円程度のものです。これで死刑になるのは、あまりに過酷ということを、私から芹沢総理にお願いし、また芹沢総理も、自身の監督不行届を国民の皆様へ申し訳なく思うと同時に、激しく静江にも怒つていたのですが、それでも死刑というのは、あまりにむごいということは最初から理解いただいております、今日、これから裁判員による裁判をおこないますが、それらは、すべて静江に反省を促すための狂言であり、実際には、法的な安定、とくに罪刑法定主義を意識した結果、身内に甘いと言われることも覚悟しておりますが、静江にくだす刑は、刑ではなく、被災地でのボランティア6ヶ月、その被災地は事故原発の近く、私たち政府が安全であると言っている地域のうちで、もつとも事故原発に近いところを選定する予定です。国民の皆様におかれましては、激しい怒りを覚えておられるかと思いますが、どうか、死刑ということは、私の妹へ求められることは、何卒ご容赦いただきますようお願い申し上げます。かわりというわけではありませんが、これから静江には裁判を受けさせ、そこで死刑判決がくだされます、また、そのまま処刑場へ連れて行かれ、本当に自分は死刑になるのだという思いはさせます。ただ、最終的に死刑にはならず、それで解放し、深く国民の皆様には謝罪させるということでお許し願いたく存じます」

石永がモニターの中で深々と頭をさげた。鐘留が言う。

「えっと……つまり、これから茶番をやるってこと？」

「そうなる感じかなア……けど、本人は自分が死刑になると思つてるわけで……史上最恐ドッキリって感じかな」

ワンコが言う。

「それって一生のトラウマになりませんか？」

「日本人のやること、理解できない」

ヨンソンミヨもつぶやいた。今泉が腕組みしつつ答える。

「まあ、いわゆるガス抜きと、リンチを兼ねた感じかな。オレだって、みんなが苦勞してるのにホストクラブで遊んでたヤツはむかつくし。津波の後始末くらいならともかく中国軍との戦闘で戦死した人だっ

ているし。ずっとオレも芹沢総理のそばにいたから知ってるけど、日によつては夜中まで頑張つてたのに、思い出してみれば、この秘書は夕方になるとパツと消えてたから」

今泉が言っているうちに、モニター内の法廷に静江が連行されてきた。両腕をゲイツに握られ、腰が抜けて立てないまま、運ばれてきている。松田川もいて点滴スタンドを押し立て、静江の左腕に何かの点滴をしていた。配信画面とテレビにテロップが映る。

これから官房長官の妹であり、総理大臣の秘書であつたI・Sに裁判を受けさせますが死刑にはしません。これは一種の社会実験です。また、I・Sが受けている点滴はショックによつて心臓麻痺をおこさないための薬剤です。

と説明された。そして茶番である裁判が始まる。裁判員は11人で、今回の長は若い男性だつた。

「では、これより開廷します。被告人、石永静江は中央に立ちなさい」

「っ、は、はひー！」

静江は震える膝で被告人席へ向かい、よろよろと立った。鐘留が囁く。

「きやははは！ 超ガクブルじゃん！ 昨日の謝罪会見のときよりブルってる！」

「まあ前の2件も死刑判決だつたしな。国民の怒り的にはマジ死刑つて空気だし」

今泉も見ていて笑えた。静江が同性愛者に嫌悪感をもっているのは、なんとなく感じていた。とくに女性同性愛者へ嫌悪感が強いようだつたけれど、男性同性愛者のことも良く思っていないのは雰囲気伝わっている。そして、鮎美の護衛をしていて見かける静江が大臣たちにも尊大に接していたのは知っているだけに、今の零落ぶりは笑えた。

「では、検察官、求刑をお願いします」

「……死刑を求刑します……」

検察官は茶番に付き合うのは不本意という顔で、とりあえず言っ

た。

「ひいひい……めんなさいひい！」

静江は謝りながらズボンを尿で濡らした。もともと濡らしていたのが、より広く濡れる。見ていた裁判員のうち4名が笑いそうになつて我慢しているし、鐘留も大笑いした。

「きやはっははははは！ おケツぶるぶるさせてる！」

「本人はマジに死刑求刑だと思ってるからな」

若い裁判員の長が検察官の隣にいる鷹姫へ問う。

「国側代表、宮本さん、口頭弁論をお願いします」

「はい。被告石永静江は数千万という人々が亡くなり、国家存亡の危機である時期に、自らが総理大臣の秘書であるという役職の責任を忘れ、明らかに不当である接待を受け、また、あるうことか現金を受け取り、かつ富山市と福井市のいずれかを副都心とする選考過程において、各大臣へ偏った情報を流し、まっとうな選考がおこなわれることを妨害したものであり、この罪は万死値します。死刑をもって処するに何らの躊躇いはない事件であり、裁判員の方々には即時死刑を言い渡していただきたくお願いいたします」

「ひはひいうあうあい！」

静江は意味不明な声を漏らしながら鷹姫と裁判員に向かって土下座を始めた。鐘留がクツキーを嚙りながら言う。

「さっきの被告2人もさ、土下座したらギリで死刑は無かったかもね」

「どうかな……名無しの外人は、ともかくさあ、5人も小学生を殺したヤツは土下座しても死刑じゃないかな」

今泉もクツキーをもらう。

「では、弁護士、何かありますか？」

「ありません。死刑しかないと思います」

この茶番の弁護人を弁護士に頼んでみたけれど、どの弁護士も断つたので法務省の女性職員が労務管理士という資格のバッチをつけて担当していた。静江は動揺しきって泣いているので、どんなバッチを着けているのか、きちんと見えていない。

「ひあうあひ！　ほういあは！」

やっぱり静江の発声は意味不明だったけれど、そんなひどい、と言っているような気はした。

「では、被告、何かありますか？」

「もおお、しがげはいせん！　もうしがえせん！　あひあいが！　ういつわるがただあいいいでがう！　ずばあがいげいせん！　ほんぐがうじやじいがいげんぜん！」

まったく聞き取れないけれど、泣きながら土下座しているあたり、申し訳ありません、本当にすみませんでした、と言っているような雰囲気だった。

「えくつと……結審に入る前に……えくつと……」

長である裁判員が迷っていると、若い女性の裁判員が挙手した。

「藤崎裁判員、どうぞ」

「はい、石永被告に問います。最初の接待を受けたとき、寿司屋さんだったそうですが、その時期、まだまだ被災地では多くの人が息絶え、また津波に攫われて海上を流されていたりしたのですが、そういったときに、どういう気持ちで、お寿司を食べられたのですか？　美味しく感じましたか？」

「ぐじがいねいぎ！　すぎすいいぎあんん！　うすみあせん！」

すみません、すみません、と号泣しながら謝っている感じだった。可笑しすぎて鐘留が笑いながら畳を上を転がった。鐘留は、あと数日で着るのが本物でなくなるので高校の夏服を着ていて、極端に短いスカートなので下着が丸出しだったけれど、今泉はゲイであり、他は女性なので誰も鐘留の股間へ注目しない。他の裁判員が挙手している。

「恵比寿川裁判員、どうぞ」

「はい、石永被告に問います」

今度は高齢の男性裁判員だった。各裁判員たちは田熊や3939117号のときは事件の重さに質問を躊躇っていたけれど、今は茶番だという気軽さと、やはり静江が腹立たしいという理由で、すぐに結審に至らず質問して責めていく。

「片町のホストクラブで一晩に163万円の接待を受けていますが、この金額で被災者に食事を提供した場合、何食分になりますか？」

次々と裁判員は静江を責めるような質問をしたし、いずれでも静江の答えは聞き取れなかった。そしてショックで心臓麻痺を起こさないうちに受けている点滴のおかげで水分補給されるので、つねに失禁を繰り返している。

「はひ…ハア…はひ…ハア…ぐすつ…うぐぐ…」

泣きじやくる静江を見かねて年配の女性裁判員が挙手した。

「所橋裁判員、どうぞ」

「被告は動揺しすぎており返答が聞き取れません。一度、土下座をやめ、椅子に座って、お茶でも飲ませ、落ち着くのを待ってから再開しませんか？ あと、着替えもさせてあげてください」

所橋の意見はもつともだったので採用され、静江は椅子に座らせてもらい、お茶をもらった。それを飲み終わると別室で予備のパンツスーツに着替えさせてもらい、再び蒼白な顔で法廷に現れ、まだ震えているけれど少しは落ち着いていた様子で着席した。

「…ハア…ぐすつ…ハア…」

「石永さん、あなたは自分の行為をどのくらい後悔していますか？」

所橋は優しく問うた。

「…ハア…はい…深く…深く…ずっと後悔しています…ぐすつ…うう…もう二度と…もう二度と…うう…国民のみなさまを裏切るようなことは…ぐすつ…いたしません…どうか、どうか、死刑だけは、お許しください…ハア…うう…」

やっと聞き取れるような返答が静江の震える唇から発された。涙に濡れた目で各裁判員へ必死の視線を送り、どうか助けてほしいと懇願している。テレビのコメンテーターがつぶやく。

「茶番とはいえ、本人は必死ですね」

鐘留が批判する。

「くだらないコメント、そのまんまじゃん」

再び所橋が静江に問うている。

「もし、死刑をまぬがれ、復帰できるなら、これからは、どのような姿

勢で生きるつもりですか？」

「ぐすつ…はい…もう二度と…ぐすつ…間違いを犯さず…誠心誠意、…やれることは、なんでもやって…今までの反省にしたいと…うう…思っております」

さらに他の裁判員からの質問にも静江は、それなりに返答と謝罪を続け、いよいよ質問が出尽くしたので結審となる。

「では、決をとります。被告、石永静江を死刑とするのに賛成な裁判員、手を挙げてください」

「「「……………」」」

予定では全員が挙手するはずだったけれど、なんだか静江が可哀想になってきたので4人しか手を挙げない。挙げていない裁判員がお互いを見合い、迷っているのが静江は希望を見出し、わずかに顔を明るくしたけれど、鷹姫が言い放つ。

「きちんと手を挙げてください！　そういう予定です！」

「「「……………」」」

そうは聞いていたので、さらに5人が挙手し、過半数となった。

「ひっ?！」

静江が絶望した顔で挙手している裁判員を見、さらに鷹姫を見る。

「死刑が決まりました。覚悟しなさい」

「ひっ…いああああ！　いああああ！」

明らかに鷹姫が裁判員を誘導して過半数にさせたけれど、そんなことを観察する余裕がない静江はパニックになって叫びながら再びパンスーツの股間を濡らしている。裁判員の長が、ここまで追い込まなくても、という顔をしつつ告げる。

「……………かわいそうですが……………死刑となりました。これで裁判を終わります」

「嫌ああああ！　死にたくないいいい!!　お願いいいい！　許してくださいいいい！　死刑だけは嫌あああ！　何でもします!!　何でもしますからああ!!」

「「「……………」」」

裁判員たちはそろそろ、あなたは事故原発付近の避難所でのボランティアで済むそうですよ、と言ってあげたくなかったけれど、予定のないことをすると鷹姫に怒られそうなので、そろそろと退廷した。この後、死刑執行もあり、それを見守りたい者は残ってよいことになっていたので8割が小松基地に残っている。鷹姫がカメラに向かって言ってくる。

「休憩と準備時間をおいて80分後に4名へ死刑執行します」

「え？ 4人つて、誰？」

鐘留の問いは届いていないけれど、全国の視聴者も問うていそうなことだったので鷹姫が説明する。

「裁判を受けた3名の他に、私たちの内部で深い反省をすべき人物がおります。どのような罪を犯したのかは機密にて話せませんが、他の被告らとともに処刑場へ送り、実際に死刑とすることはありませんが、深い反省を促します。お昼となりましたので、ここで一度、配信を終わります。ご視聴ありがとうございます」

三つの即決裁判が終わると、もう12時近い。島に来ている生協へ買い物に出ていた陽梅が戻ってきたのでワンコらも手伝い、今泉は交代時間が来たので他のゲイツと替わり、鐘留だけがテレビとノートパソコンの前にいる。

「え、いろいろあったのでコメントが難しいのですが…」

テレビが言っている。

「まあ、石永被告…正式には被告でもないようですが、さすがに接待とワイロで死刑とすることは無いようですが…」

「それより合間に、さらっと発表された新しい憲法のようなものがありましたね」

「あ、はい。政府がホームページにあげたようですので紹介します」

またテレビは鮎美らへ批判的なことを言い出したので鐘留はストレッチと軽い筋トレをして午前中まったく身体を動かさずにテレビの前にいたことを取り戻している。

「芹沢政権が発表した第一条ですが、日本国は万世の天皇とともにあります。昭和憲法では象徴であったし、明治憲法では統治者であった

ものを、ともにある、という曖昧な表現にしていますね」

「はい、どうとでもとれる解釈の幅が広いように意図的にされていますね。第二条も、皇位は伝統を重んじ皇室典範の定めるところにより継承されます、とあり、あえて伝統を重んじ、と入れています。この狙いもまた幅広い解釈があります。伝統的には男系男子優先ですが、女性天皇が無かったわけではない。また、伝統が指す時代によって奈良、平安、武家政権期、明治大正昭和平成と、いろいろな解釈がある」

「次の第三条こそ、曖昧そのものです。日本国は天皇と神道を大切にします。と、これ、神道を国教化するという意味なのか、そうでないのか、実に曖昧です。けしからんですよ、こういうのは世の中を混乱させる元だ」

鐘留が最大限に開脚しながら言う。

「曖昧だから、いいんじゃない。とりあえず大切にとって感じでき。政教分離とかの、くだらない裁判が無くなりそうだし」

急にテレビ画面が切り替わりニュースキャスターが報道してくる。

「さきほど中国の胡錦燈主席が日本に対して強いメッセージを発しました」

画面に胡錦燈が映り、通訳された声も入る。

「昨夜、日本政府が朝鮮民主主義人民共和国より受け取った積荷に対し、我々は強い懸念と警戒をしており、この積荷について日本政府へ説明を求めるとともに、これが大量殺戮をもたらす兵器である場合、東アジアの平和を乱す許されざる暴挙であると断定する」

映像は胡錦燈から中国政府が配信した写真に切り替わる。写真は中国空軍の偵察機が撮った日本海軍の輸送艦であり格納されていて見えないけれど、内部には模擬核爆弾が入っているし、やや不鮮明に加工された衛星写真もあって北朝鮮の核関連施設から運び出されたコンテナ程度の物体が日本海軍の輸送艦に載せられていく様子を撮っていた。胡錦燈からの短いものの強いメッセージを受けてテレビインターネットでは混乱が始まる。

「これは、どういうことでしょうか?！」

「昨日、拉致家族の帰還があつたことは政府も発表しましたが、別に何かを受け取つたということは言われていませんが」

「胡錦燈主席の口ぶりでは、核兵器ではないか、というニュアンスもとれますよ」

コメンテーターたちも騒ぎ、インターネットでも騒然となつてい

る。
北から核をもらつたのか?

くれるわけないだろ。

オレが金正忠だつたら鮎美は可愛いし、やるよ

可愛くてもレズだぞ、しかも既婚

あ、レズつて言つた逮捕だ。

通報しました。

すぐにSSSSが来るぞ。

お前も死刑だ

それよりマジに核を北から手に入れたなら代償は何だ?

鮎美の処女

あいつ、もう処女じゃないだろ

牧田にチンコは無いから処女だろ。

指何本入るんだろうな

五本

七本

十本

ガバガバじゃねえか

つてか、普通に考えて北が日本に核をくれるか?

くれないだろ。けど、売るかもよ。ミクドも売るし。

ミクドのは報復の権利だけで兵器そのものは渡してくれないだろ

売つたとしたら1兆円か?

いや10兆円だろ。

10兆あつたら戦闘機と戦車、どんだけ買える?

戦闘機なら700機、戦車なら3700両

北が韓国に圧勝できるじゃん

アホか、買っても操縦するヤツが要るし、訓練しないとだろ。そもそも、そんなに在庫がないだろ。

日本の戦闘機だって、あと30機がせいぜいらしいのだから核だよ

問題は代償と密約だよな。

鮎美が金正忠とか？

どっちかというところと石永と金正忠じゃね

ホモ同士通じたのかもな

將軍はホモじゃないだろ

また通報、また死刑

鐘留が情報を眺めていると、鮎美が中国向けと思われるメッセージを配信した。

「私たち日本は強く復興と平和を願っており、元号も復和としています。日本から他国へ戦争をしかけるようなことは絶対にありません。ただし、自衛のためには、あらゆる努力をします」

鮎美からのメッセージも短く、輸送艦に積載されている物については説明をさけていた。陽梅と作った料理をysonsonmichioが運んでくる。いつしよに生活するようになって実は陽梅は使用人で、若すぎるけれど鐘留が奥様であることを知ったので、一切家事を手伝わない鐘留に文句を言うこともなく、昼食となるサバの煮付けを並べていく。みなで食べ終わると再びテレビとノートパソコンに見入る。非番だったけれど今泉も民宿で昼食をとった後、戻ってきた。今泉と交代で護衛についているゲイツは女性ばかりの家に入るの嫌なのか遠慮しているのか玄関に歩哨として立っているけれど、今泉は友達感覚だった。

「いつしよにテレビ見ていい?」

「こゝろ」

わざと鐘留は大きく膝を立てた座り方をして短いスカートから下着を今泉に見せつけたけれど、熱い視線を股間に感じることはなく、

ほぼ背景として流された。

「マジにホモだね」

「せめてゲイって言えよ。逮捕してやろうか」

「アタシは総理のママだよ」

「総理と身体の関係あるって本当？」

今泉は非番なので、よりくだけた調子で訊いてくる。

「ノーコメント♪」

「はいはい。そろそろ死刑執行だな」

テレビとノートパソコンには日本海に面した砂浜が映っている。銃殺すれば血が流れるので、その処理も考えた結果、小松基地近くの砂浜を選んだようだった。やはり安全上の問題からマスコミは排除されていて、映像は政府配信のものをテレビが流しているし、人が殺害されるのでユーチューブやニコニコ動画には配信せず、政府が用意したサーバーにあげていた。全国と世界からアクセスが集中しているので、かなり重たくなっているはずだったけれど、鐘留は関係者用のサーバーに管理者権限で入っているし、他のサーバーを用意したのも鐘留なので、自分たちは不自由なく見られるし、全国でもタイムラグさえ我慢すれば、だいたい見られているはずだった。画面に注意テロップが流れる。

注意：これから死刑執行します。残酷な映像が流れることがあります。ご視聴には慎重になってください。

死刑が始まる。海岸には鉄柱が4本設置されていて、高さは2メートルほど、間隔も2メートルほどだった。そこに静江、田熊、陽湖、3939117号の順で針金と手錠によって拘束されている。男の力でも脱出は不可能だった。陽湖には頭部に麻袋がかぶさっていて誰だかわからないので、陽梅も画面を見ていて、まさか自分の娘だとは思わない。かわりに今泉が驚いた。

「あれ大浦のパジャマだ！ あいつ、何をやって死刑体験をさせられてんだよ?!」

陽湖は借りた麻衣子のパジャマを着たまま礫られているので、宿舎で見かけたことのある今泉は麻衣子本人だと思った。

「オオウラって聞いたことあるかも」

「小松で総理のそばで世話役やってる子だよ。どんな失敗をして逆鱗に触れたんだろう?」

「さあ、アタシは聞いてないけど、公開しないあたり、なにか機密でも漏らしたか、アユミンがレズなことバカにしたか、そういう系じやないかな。きやはっは! あの子もガクブルで漏らしてる」

あいかわらず陽湖と静江は点滴されているので、ときどき漏らしている。陽湖は麻袋をかぶされていても目が荒いので、だいたい周囲の様子は見えている。昨夜、屋城と最期の夜を過ごし、そして裁判なしで海岸に連行され2000年前にイエスがされたように柱へ身体を固定されていた。

「…ハアっ…ハアっ…アーメン…アーメンツ…主よ……どうか…ハアっ…」

信仰が揺らいでいるときに死を迎えそうなので強く不安になって震えている。

「あああ! 嫌あああああ! お兄ちゃーん!!」

静江は兄を呼んで泣いていた。石永は20メートルほど離れたところに立っていて、顔を伏せている。

「……………」

田熊と3939117号は黙って待っていた。法務大臣である三島が司会する。

「これより! 死刑執行をおこなう!」

三島が田熊を蔑視しつつ告げる。

「田熊衛士死刑囚には、被害者遺族による執行がなされる! 覚悟せよ!」

海岸には殺害された女兒の両親9人と兄1人が来ていて、そばにはホームセンターで法務省職員が購入した包丁、ノコギリ、ペンチ、ナイフ、木の棒があった。同じような備品は小松基地にもあったけれど、一度死刑に使ってしまうと再び備品として使い続けるのに抵抗があるということ一回限りの使い捨てとして購入されていた。

「では! …ここに田熊衛士死刑囚の刑を執行する! ご遺族の方々、

無念をわずかでも晴らされてください！」

「「「「……………」」」」」

田熊への憎悪は苛烈を極めたけれど、いざ殺していい、と言われると、どの遺族も戸惑った。それでも気の強い母親が田熊に迫ると手で何度か殴打し、それで手が痛いことに気づいて、今度は木の棒を取ると、めった打ちに殴り始めた。配信画像は遺族の顔が映りにくい角度から撮影しており、テレビの方では血を流す田熊も合わせてモザイクがかかり始めたし、再び注意テロップも流れる。娘を強姦のあげく殺された母親の怒りは、すさまじく木の棒が折れるまで殴り続け、そして腕があらなくなったのか、棒を捨てると、他の遺族に何か言っている。それで別の遺族が動く、今度は夫婦で田熊へナイフとペンチで責めかかった。最初のうちは呻いていた田熊も、だんだん動かなくなり、被害女兒の兄がノコギリで田熊の腕を切り落とすと、もう意識は無いようだった。

「…………グロ…………キモ…………」

ヤダあ……変な映像みちやったよ、今夜は寝る前に絶対トイレ行つてから寝よ、と鐘留が身震いしながら思った。反対の腕も切り落とされた田熊は、もう死んでいるように見える。それでも兄は蹴りを入れていた。見ている鐘留は直樹のことを思い出したし、現場にいるだろう鮎美と鷹姫も同じだろうと思った。今泉も首筋の汗を手の甲で拭いた。

「きついな…………これ…………大浦、可哀想に…………自分も死刑に遭うって思ってるんだから…………もう気が気じゃないだろ…………」

陽湖と静江は震え続けている。ずっと黙秘していた3939117号も蒼白になっていた。いっしょに連行されてきた者が惨殺されたというのは三人へ強いショックを与えている様子だった。結局、被害女兒の遺族は10人いたけれど、手を汚したのは4人だけで田熊は絶命し、松田川が気分悪そうに医師として死亡を確認している。

「心拍停止、瞳孔反射…………確認できず…………」

瞳孔をペンライトで確認しようにもナイフで眼球を剔られているので形式的なものに終わる。切り落とされた腕の切り口からの出血

も心臓が止まっているので弱くなり、素人目にも死亡は確實だった。

「午後13時42分、田熊衛士さん、お亡くなりになりました」

松田川が手を合わせ、仏教式に冥福を祈ると、三島も手を合わせたし、遺族たちも半数が手を合わせた。遺族たちには金沢医科大学から派遣された心理ケア要員が語りかけ、退場を促しているし、田熊の遺体は刑務官が片付ける。

「次！ 死刑囚3939117号！」

三島が言い放ち、そして問う。

「どのみち、これで最期だ！ 貴様も名乗ったらどうだ?! 木石にあらずば親にもろうた名くらいあろう?!」

「……………」

黙って睨むだけで3939117号は何も言わなかった。三島は問うた後に、もしや捨て子や、両親不明の育ちであれば、余計な問い方だったかもしれないと思っただけ、法務大臣としての役割を続ける。

「では、死刑を執行する！ 銃殺である！ 担当要員は前へ！」

「はい」

執行するのは鮎美と鷹姫だった。

「宮ちゃんも志願したんだ。らしいといえば、らしいけど」

「絞首刑でも一人でボタン押すのはしないし。銃殺でも一人では撃たないらしい。……陸自の小銃で銃殺刑か……時代が変わったんだな……平成の平和が懐かしいぜ」

「アユミンと宮ちゃん……マジで人を殺す気……やれるの……」

画面の向こうを見ているだけなのに鐘留は寒気がして、見ているうちに失禁したりすると恥ずかしいのでトイレに行っておく。トイレから戻ってくると、鮎美と鷹姫が小銃を構えていた。制服姿に小銃が不似合いでスカートが海風に舞っている。鮎美には高木が、鷹姫には三井がついて小銃の取り扱いに間違いがないか、手取り足取り教えていた。

「やっぱ宮ちゃんの方がサマになるね。弓道もやってたから」

鷹姫は剣道、柔道、弓道と修練してきたので小銃を構えてもフラつかず、まるで数年の経験がある兵士のようなだった。鮎美も中学剣道で鍛えてきたので高木から習うと、正しい小銃の構えをすぐに習得していて危なげない。そして二人の目に迷いが無かった。

「……………」

二人とも人を殺してしまうという状況よりも、大震災と戦争から社会を立ち直らせ、秩序を維持し、これから復興させていくという意志をもっていて、その事業にとつて戸籍を二重三重に取得するというのは許し難き悪行だと感じていた。とくに鮎美は虚偽の申請を懸念することがあり、それは不正をする者への憎しみに変わっていた。

「構えっ！」

「……………」

すでに構えていた二人が小銃を構え直す。

「狙え！」

「……………」

狙いは死刑囚の腹部中央だった。小銃は連発される設定になっており、おそらく二人の腕前では狙いは反動で上にあがってしまう。それを見越して心臓より下を狙わせているし、高木と三井も真後ろで見守っている。もし狙いを外しても、死刑囚の向こうは朝鮮半島まで続く海しかない。二人が同時に連発すれば、死刑囚は苦しまずに絶命するはずだった。

「…………アユミン……………」

「…ハアひ…アーメン…ああ……………」

「ううっ…嫌…………助けて…誰か……………」

次は自分だと思っっている陽湖と静江は泣いている。

「撃て！」

「……………」

鮎美と鷹姫は迷わず同時に引き金を引いた。他人の命を奪うことになるけれど、そこに迷いはなく腰は引けておらず、明確な殺意を

もって堂々と引き金を引いていた。

「……………」

けれど、銃弾は発射されず、二人とも構えた姿勢は崩さないものの、意外という目で小銃を見つめている。三島が深々と二人へ頭をさげた。

「お二人の覚悟やあつぱれ！ されど、若き乙女の手を汚すをよしとせぬ、我が儘を詫びる！」

そう謝ると三島は高木から拳銃を受け取り、かつて自衛隊所属だった者らしい確かな腕前で3939117号の胸と頭を1発ずつ撃つて絶命させた。

「……………三島はん……………」

「…私たちの…銃には…弾が無かったですか？」

二人とも拍子抜けしている。二人の小銃を用意していた高木と三井も謝る。

「申し訳ありません。騙しました」

「……………」

鮎美と鷹姫は顔を見合わせている。なんと言うべきか、思いつかずにいる顔だった。自分たちが撃てずに迷うかもしれないという見くびりをされたわけではなく、ただ若い女性の手を汚したくないという男らしい理由からで、三島は自身も女の腕でありながらも、その男としての気概で撃ってくれている。

「……………」

戸惑う二人の手から高木と三井が小銃をもらい受ける。三島が二人に言う。

「血の汚れは我だけで十分である。二人の覚悟は世界に示された。これをもって、よしとしてほしい」

「……………はい」

鮎美と鷹姫が頭をさげ、三島と高木、三井に礼した。松田川が遺体に近づき、死亡確認をする。

「午後13時56分、……………えつと、3933?」

松田川が資料を見直してから言う。

「3939117号さん、お亡くなりになりました」

また松田川が合掌する。三島たちも合掌し、冥福を祈ってからつぶやく。

「せめて戒名なりと永平寺の僧に頼むか……いや、仏教徒でさえないか……不憫ではあるな」

「あんたさんも、生まれ変わるんやったら、次は、もつとええ人生やとええね」

そう言った鮎美は冷たくなっていく遺体の肩を撫でた。

「…ひっ……アーメン……ひい……アーメン……ああ……アーメン……」

「ひいひいいうふはいいいふ嫌ひいう」

「……………」

鮎美と鷹姫は怯えきっている陽湖と静江を見つめる。恐怖しすぎて陽湖は下痢を起こして漏らしているし、静江は胃液を吐いている。すでに殺された二人と違い、陽湖も静江も自分が殺されるほど悪いことをしたとは思っていない分、恐怖と不条理への嘆きが強かった。

「鷹姫、そろそろ許す？」

「……はい、そうですね」

予定では陽湖と静江にも銃口を向けるつもりだったけれど、もう恐怖で静江は本当に心臓麻痺を起こしそうな顔をしているし、髪の毛も何本も抜けて、あまり追い込むと円形脱毛症になりそうだった。陽湖も麻袋をかぶせられているので顔色はわからないけれど、手足の震えや大小を失禁している様子で恐怖の底にるのがわかる。鮎美が合図すると、石永と屋城が二人へ駆けよる。斉藤は被写界に静江と石永だけが映るようにした。

「静江、今、外してやるからな」

「…お……お兄ちゃん…」

死刑にならなくて済むかもしれないという希望が生まれ、静江が泣き震える。磔にされていた鉄柱から解放してもらおうと、石永は妹とカメラに向かい、国民に謝り、心を入れ替え震災復興に尽くさせると約束し、映像配信は終わった。

「……アユミンと宮ちゃん、弾が入ってたなら、本当に撃ってる勢いだっ
た……」

やはり静江の茶番よりも実際に公開で死刑が執行されたことに視
聴者たちの意識はいつている。ワンコもつぶやく。

「日本で公開処刑があるなんて……先の二人は本当に死刑になって
……」

「日本人は……もともと野蛮だから……首切りもする……」

ヨンソンミヨの言葉に鐘留が反論する。

「じゃあ、もともと野蛮じゃない民族って、どこにいるの？ 石器を使
わず、最初から金属器だった民族とか、いる？」

「……」

ヨンソンミヨは黙って鐘留を睨むだけなのでワンコと今泉が仲裁
しておく。

「まあまあ」

「それよりテレビの反応を見ようぜ」

やはりテレビは公開処刑に強く否定的だったし、鮎美と鷹姫が小銃
の引き金を引いたことにも辛辣だった。

「ムカつくしチャンネル変える」

鐘留がチャンネルを変えると、全国各地で政務活動費の不正により
議員の謝罪が続いていることが報じられていた。他に胡錦燈が警告
した日本軍の輸送艦が運んでいるものについてや、鮎美たちが発表し
た新しい憲法の代わりとなる条文についても議論がされていて鐘留
たちは一日中テレビとノートパソコンの前にいた。夜になり玄次郎
が帰宅すると、さすがに今泉は民宿へ戻り、玄関前にいたゲイツも交
替している。

「玄次郎、おかえり」

「おかえりなさいませ」

鐘留は軽く言っただけけれど、ワンコとヨンソンミヨは丁寧な日本語で
家の主人を迎えた。

「まっこり買ってきたぞ。呑むだろ」

「はい、ありがとうございます、ご主人」

ヨンソンミヨが喜んで礼を言うと、鐘留がつぶやく。

「犬が増えた」

「……………」

ヨンソンミヨが黙って鐘留を睨む。鐘留は真顔で見返すので空気が悪くなる。

「鐘留、そういう言い方するなって」

「玄次郎って韓国人が好きなの？」

「いや、別に。普通だ」

「普通さ、今の状況なら歓迎しなくない？」

「かわいそうだろ、国へ帰れないんだし。あと文化が微妙に違うのがおもしろいじゃないか」

「さつきニュースでやってたけど、また在日韓国人が避難所で嫌がらせにあったらしいよ。この島の人たちは優しいね」

「そういう騒乱も鮎美が困るし、向こうに残ってた在韓日本人も、ひどい目に遭うから余計な争いを、この家でも生むな」

「はいはい、仲良くしようね。はい、握手」

握手と言いつつ鐘留は犬へ、お手するように右手を出しているのでワンコが噛みつくことで場の空気を保った。玄次郎が丸一匹の鶏肉を買って帰ってきたので、陽梅とヨンソンミヨが協力してサムゲタンという韓国料理を作った。その夕食が終わり、ワンコが風呂の準備をしているとき緊急ニュースをテレビが報じてくる。

「緊急速報をお伝えします！ 京都府、福知山市の避難所へ慰問に訪れておられました由伊様が乗る車両を何者かが包囲しているとの情報が入りました！」

玄次郎が呑んでいた酒杯を置いてテレビに見入る。しばらくして続報が入ってきた。

「由伊様は慰問を終え、京都御所へ車両にてお帰りになる途中、福知山市内の音無瀬橋を通過したところ複数の車両に取り囲まれ、身動きがとれない状態となったようです。まもなく現場の映像が入ります」

報道機関がヘリコプターを使うことは燃料節約の観点から自制的なよう鮎美が通達を出していたけれど、禁止まではしていなかったの

で事件の重要度から報道ヘリを飛ばしたようで夜の福知山市がテレビに映る。ヘリから撮った望遠画像で、大きな橋の上に皇宮車両が停まり、その中に由伊と島津がいるはずだった。前後を警護の皇宮警察車両が固めていたけれど、橋の両端から6台のトラックが皇宮車両を取り囲むように出てきたようで、動けなくなっている。

「待ち伏せか……人員も車両も少ないのに慰問をされるから……陛下は、どこに……」

玄次郎の問いは全国民も抱いたようニュースキャスターが情報を読み上げる。

「天皇陛下におかれましては京都御所に滞在中とのこと、ご無事のことです」

儀式や新たな特命大臣への親任式などがあり義仁は京都にいたようだった。その分、慰問を続けていた由伊の警護が薄くなり、その隙をつかれている。駆けつけたパトカーが橋を封鎖し、さらに陸軍福知山駐屯地から出動したジープや大型四輪駆動車などが到着しつつあった。

「犯行グループは猟銃で武装し、爆発物のような物を由伊様が乗る車両に取り付け、警官隊と睨み合いになっています。……道路に二人、人が倒れています。一人は犯人グループででしょうか……もう一人は皇宮警察の制服のように見えます……由伊様は、車両内にて、ご無事のことです」

「これは……膠着状態になるな……次から次へと鮎美を追い込んで……くそっ……」

玄次郎は娘が心配だったし、由伊も心配だった。鐘留も黙って見ているし、陽梅も洗い物を止めてテレビを見に来た。ワンコも見入る。

「今、犯行グループから声明が出されました。犯人らからの要求は、日本政府は北朝鮮より受け取った核兵器と対馬を韓国に明け渡せ、さもなければ皇女を車両ごと爆破することです」

「韓国の………工作人員は北だけじゃないのか……」

「アユミン、どうするんだろう?」

「鮎美……………」

玄次郎は心配で娘へ電話をかけたくなかったけれど、今頃は忙殺されているはずなので我慢する。歯がゆいけれど、テレビを見ていることしかできない。そのうちに報道ヘリは陸軍と警察のヘリに追われ、映像は福知山の市民が撮影してインターネットに投稿しているものに変わってくる。橋に近い呉服町のビル屋上から撮られている映像が、もっとも状況を把握しやすかった。やはり由伊が乗る車両は天井に爆発物のような物を仕掛けられ、車内には由伊と島津がいて、まだ7歳でしかない由伊の頭を島津が抱いて、周囲にいる犯行グループを睨んでいた。皇宮車両は防弾なのか、二人と運転手は無事であるけれど、動き出すことはできない状態にトラックで囲まれているし、犯行グループは5名いて、他に皇宮警察との撃ち合いで1名が死亡しているようだった。

「日本政府は韓国へ犯行グループとの関係を問い合わせるとともに、現地へ新屋寛政国家公安委員会委員長を派遣し、犯行グループとの交渉にあたる模様です」

「……………」

玄次郎たちが固唾を呑んでテレビを見ていると、屋外が騒がしくなってきた。本来、島は早朝から漁に出る生活スタイルなので夜は早い。なのに、芹沢家の前に大勢が集まっている様子だったので玄次郎と鐘留はテレビを気にしつつ、玄関に出た。玄関前にはゲイツが歩哨に立っていてくれたけれど、集まってくる島民への対応に困っていた。

「みなさん、どうされましたか？」

玄次郎が問う。集まっている島民は中年から老年にかけての男性が多く、殺気だった顔をしている。

「芹沢のオヤジさん！ 韓国人を匿もうとるじやろ！」

「え？ ……ええ、…まあ…」

「たしか三人！ そいつらを引き渡してくれ！」

「……………引き渡すと、どうするんですか？」

「一人殺して見せしめにするんじゃない！ あとの二人を殺されとうな

かつたら妹宮様を解放せいと！ 伝えるんじや！ かねやのお嬢！
お前さん、インターネットたらが得意じやろ！ 見せしめにする映
像を犯人らに見せつけるんじや！ 撮って放送してくれ！」

「え……………でも……………」

技術的に可能であるかということより、鐘留は兇想の野蛮さに困惑
した。しかも、あとから集まってくる島民のうちには日本刀を握って
いる男もいる。もともと武道が盛んな島なので真剣の日本刀も免許
をえて家に置いていたり、何百年も前から置いていて今も免許なしで
伝家の宝刀を持っている場合もあった。

「お、落ち着いてください、みなさん！」

玄次郎も一気に緊張した。ただ集まった群衆ならともかく殺気
だつていて、しかも日本刀を握っている。歩哨に立っていたゲイツも
無線で民宿にいる今泉らを応援として呼んでいる。

「早う出せ！」

「どうか、落ち着いてください！」

「今泉陸士、早く来てください！ 状況悪化！」

ゲイツは小銃と拳銃で武装しているけれど、島民たちは恐れていな
い。自分たち日本人に日本兵が銃を向けるわけがないし、向けても撃
たないと信じている。まだ誰も抜刀まではしていないけれど、それも
時間の問題に感じるほど殺気だつていた。

「キヤーっ?!」

ワンコの悲鳴が聞こえて振り返ると、勝手口から侵入した島民らが
居間へあがりこんでいる。

「どいつから殺すっ?!」

「殺す前に撮影じゃ！ かねやのお嬢！ カメラはっ?!」

「え……………え……………でも……………でも……………それじゃ、アルカイダとい
うか……………タリバンのな……………や……………やめようよ……………またアユミンが、困
るよ……………友達の友達はアルカイダでも、ダメっばいよ、どっちも……………」

ふざける余裕もなく鐘留も混乱しつつ島民をなだめようとしてい
るけれど無駄だった。

「もおええ！ 死体の写真でも十分じや！ こいつから斬り殺すど

！」

すでに70歳を超えているような老人が見事な手つきで抜刀した。そして、たまたま、そばにいたワンコに目をつけている。

「わ、私は韓国人じゃないです！ 在日です！ 日本人よりの!! ほとんど日本人です！」

殺されたくない一心でワンコは言い募った。それで老人が迷う。

「……お前、干支は？」

「戌年です！」

アイドルとして、そういう設定なので思わず言った。

「そうか、ほな、お前は人質にして、こつちを……」

次にヨンソンミヨを斬ろうとするので駆けつけた今泉が止めに入る。

「ちよつと待ったア!!」

「邪魔するんじゃないやねえ！」

「まあ待つて！ お爺さん！」

とにかく今泉もなだめる。なだめながらヨンソンミヨを背中に庇うし、他のゲイツらもワンコらの護衛についた。

「どけ！ どかぬば斬るぞ！」

「勘弁してください！ ちよい落ち着いて！」

「落ち着いていられるか！ 宮様の危機じゃ！」

「だからって、この子らを殺しても余計に事態が悪化するから！」

「殺しまくって日本から追い出すんじゃない！」

どうにも鎮まらない島民たちへ、後から来た鷹姫の父親である衛が一喝する。

「みな剣を引きなさい!!!」

剣道場の主で剣道において島内最強である衛が叱ると、老人も振り返った。

「衛くん、止めるなやツ」

「お待ちになってください、サダ爺！ どのみち、この島から逃げる術はない！ すでに人質にしたも同然！ 問題は、その人質戦術が有効

か、それとも、どうすれば妹宮様を救出できるか、そこが肝心要!!」
「むう……………」

頭に血が上っていた老人が振り上げていた剣をおろした。テレビが事態の変化を報じてくる。

「韓国の趙舜臣大佐は犯行グループと韓国の関係を否定しました」

「……………」

「ただし、日本政府が北朝鮮から受け取った核兵器を韓国へ引き渡し、同時に対馬から退去し韓国の領有権を認めれば、犯行グループを説得することです」

「…………ふ、…………ふざけおって!! やはり殺すしかないわい!!」

再び老人が日本刀を振り上げたけれど、衛は素手で剣を奪った。

「くっ…………衛くん…………」

「落ち着いてください。政府には娘も入っています。しかも芹沢さんの娘さんは優秀だ! どうにか解決するかもしれません!」

「じゃが、宮様に万一のことがあったら、どうする?!」

「そのときは、我ら全員鬼神となりて斬るべきを斬るのみ! 半島全土、ことごとく朱に染めるまでのこと!」

「……………」

聴いていたヨンソンミヨらは身が縮む思いだった。昼間、他人が死刑になるのをテレビで視聴したけれど、まさか次が自分たちの番とは思わなかった。もし、由伊の身に害があれば、きっと殺される。それが直感でわかった。

3月30日 ロシア

復和元年3月30日水曜、午前0時、鮎美は小松基地の司令室で畑母神らと対馬から退去させている住民の様子を見ていた。もともと砲撃を受けたときに女子供を中心に本土へ避難したので、残っていたのは5000人ほどで養殖業にたずさわる男性と高齢者が多かった。その5000人を強制的に退去させているけれど、由伊が福知山市で人質に取られているニュースを知っている人々は素直に従っている。畑母神が悔しそうに言う。

「くっ、まさか、こういう事態になるとは……」

「悔しいですけど、まずは由伊様を優先せんと」

鮎美は対馬と核兵器を韓国へ渡せという犯人グループの要求を2時間検討して飲んでいた。すでに事件発生から4時間が過ぎようとしている。ずっと皇宮車両に籠城している由伊と島津の体調も心配だったし、核兵器は実は模擬核爆弾なので手放してもおしくはなく脅威でもない。

「畑母神先生、対馬の奪還はホンマに簡単なんですか？」

「すでに朝鮮半島南部の海岸線を攻撃する準備はしていた。中国との戦闘で海軍、空軍は3割を残すのみとなっているが現代的な戦闘はできる。そして陸軍は中国との戦闘では、ほぼ無傷であった。島嶼奪還には海軍空軍の支援のもと陸軍が主体となるので、こちらの戦力には何ら問題はない。たいして敵軍は衛星から観察する限り、およそ2000の歩兵と自走砲15両を対馬へ上陸させるため準備しているように見えるが、すでに海軍の艦艇は無く運搬には民間船を使うようだから、まったく勝負にならない。言ってみれば、竹刀をもった宮本くんが素手の芹沢総理を叩くようなものだ」

「そら、ただのイジメやん」

「向こうは我々が約束を守ると思っているし、核を手に入れるという計算があるのだろう。もつとも、その核は模擬物にすぎないのだが」

「それは見抜かれへんやろか？」

「我々でも解体せねばわからぬし、金正忠が伝えてきたように放射能があることは確認されているので問題ない」

鷹姫が静かに挙手しているので鮎美が問う。

「鷹姫、何かある？」

「はい。古い戦術ですが伏兵をおくのは、どうでしょうか？」

「フクヘイって？」

「対馬の警備隊をすべて引き上げるのではなく、一部を残して隠れ潜ませ、奪還作戦のさいに呼応して攻撃してもらうのです」

「ええ案やと、うちは思うけど……現代戦的に、どうなんやろね。あと、そういうことを対馬へ無線で連絡すると、向こうも傍受して見抜かれるかもしれないやん。今は由伊様の安全が第一やし。けど、鷹姫の案は有効そうやんね。そういう暗号とかないんですか？ 傍受されてもわからず、一部を残して潜んでおいてくれ、みたいな暗号」

「……」

畑母神が若い青年のように微笑んだ。

「ある。全体の1割を山へ隠れさせることにしよう」

畑母神が新たな命令をくだしているのを見守りつつ、鮎美も司令室にあるモニターを眺める。だんだん、それぞれの意味が少しはわかってきている。

「あの輸送艦、そろそろ対馬に到着しそうやね」

「はい。そう見えます」

「到着したら模擬核爆弾を港の目立つところにおろして、対馬の隊員を乗せて、それで引き上げ完了やわ」

「ただ……」

鷹姫が少し顔を曇らせる。

「ただ？」

「当然の策略ではありませんが、約束を反故にするのは美しくない姿勢で、残念に感じます」

鷹姫の手元には調印書がある。

引き渡し調印書

日本政府は次に記す二つを大韓民国へ引き渡す。

1 朝鮮民主主義人民共和国より受け取った核兵器

2 対馬の領有権

以上を確かに引き渡し、対馬にいる日本人は即時退去する。また福知山市に在する韓国人勇士5名と1名の遺体が対馬へ安全に帰還することを約束する。

引き替えに、皇族由伊之宮と島津久厚、その他運転手等の要員は即時解放される。

また、対馬にある日本人個人の不動産を除く財産、車両、重機、漁船、工船、その他船舶、船具、工具器具備品、養殖業にかかる物品および養殖物、家屋内の動産、宝飾品、現金、証券、商品、被服、食品、書籍、写真、家電製品その他すべての動産は90日以内に韓国が日本政府へ引き渡すこと。日本人個人への不動産に対する補償は日本政府がおこなうこと。

以上を確かに約束する。

短い調印書には韓国語と英語の訳もついていた。鮎美が微笑む。

「テロリストとの約束は守らんでもええんよ。これ世界の常識。大浦はん」

「はい?」

「ここに芹沢鮎美ってサインして」

「え〜……調印書に私が署名するんですか?」

文句を言いつつ麻衣子は偽のサインをする。

「昼間の模擬処刑だって私のパジャマ着せたままするから、みんな誤解して私が大失敗して激怒くらったと思って、変な同情されてるのに。はい、これでいい?」

「おおきに」

鮎美は畑母神と調印書を再確認すると、陸軍のへりで福知山市へ届けてもらう。あとは新屋が犯人グループに渡し、由伊と島津を取り戻す予定だった。そして鮎美はフーチンとの会談時刻が迫っているので気合いを入れ直す。

「ふう……はああ……よし、行こつ！」

司令室を出て対面通信の準備がされている貴賓室へ向かうため廊下を進んでいると、陽湖と屋城が待っていた。陽湖は借りたパジャマを麻衣子に返して洗濯した制服を着ている。

「これを受け取ってください」

陽湖は頭をさげながら、琵琶湖銀行にある残り2億円弱の預金残高が表示されたスマートフォンを見せている。陽湖のスマートフォンは模擬処刑後に返還されていた。

「おおきに。復興に役立つわ」

原資が全国の信徒から震災義援にと集められたものなので日本政府の財布に入れてから避難所への支援に使うことに躊躇いは無かったけれど、陽湖が否定する。

「いえ、復興ではなく、あの写真を流出させた私からの損害賠償として受け取ってください」

「賠償金に………気持ち………けど、これももともと信徒さんからの義援金やろ？ あんたが、勝手に自分の賠償に使うのは筋がちやうやろ？」

「信徒のみなさんにも説明して私が一生かけて償います」

「……………」

「お金があることで信仰は狂うのです」

「……まあ、そうやね。あんたの狂いっぷりは、すごかったわ」

「お金は悪魔です」

「……………また極端な………そういう面もあるけど、通貨が存在せんかったら物々交換になるやろ」

「マザー・テレサをご存じですよね」

「まあ、軽く。あんたと違って本物のマザーらしいやん」

「彼女が亡くなったときの資産は48億円だったそうです」

「マジで?! あの人の、貧乏人の味方ちゃうん?!」

「彼女も金銭で狂った部分もあります。そして、信仰も歪んでいて、貧民が病気に苦しむのを主イエスと同じ苦しみにあると美化し、死を待つ人の家では看取るのみで十分な薬を与えず、本人に承諾無く洗礼

を施していました。異教徒へも」

「……狂ったときの、あんたみたいやね……」

「彼女は衰退してきたカトリックが宣伝に使った面も大きいのです。私たちが、それを知っているのはカトリックへの批判として知識にするのですが、ガンジーもまた欲に狂っています」

「そうなん？ あの人のこそ無欲って感じやけど？」

「彼自身、自分の性欲の強さに悩んでいました」

「そっちの欲か……」

鮎美も金銭欲は自制できるけれど、性欲では多々失敗がある。わかっていても、つい我慢できなくなる。

「彼は13歳で結婚しましたが、16歳の頃、父親が死の淵にあるのに、妻を抱いていたと悔いています」

「……」

「晩年にも若い女性を裸ではべらせ、周囲が指摘すると、これは修業だ、と反論したそうです」

「……麻原チツクやん、その言い訳。もう素直にやりたかってん言えばええやん」

「私も愛也と結ばれて、これほど気持ちのいいことが世界にあるとは思いませんでした」

「よ……よかったやん……おしっこ漏らす趣味は卒業した方がええよ」

「はい、そうします。……いえ、あれも気持ちがいいので、きっと、また私はやってしまいます」

「……まあ……人に迷惑をかけんかったら自由やけど……」

「ラスプーチンはロシアの政治を惑わせ、また性欲の権化だったように言われますが、反面でお金に執着せず気前よく使い、また政治についてもロシアにどうか戦争することを止めさせようとしていたという見方もあります。性欲が強かったのを否定する見解はないようですが。ロシアの一部ではラスプーチンを民族の平和を守ろうとした聖人と位置づけようという運動もあるくらいに。こう見ると、後世の評価って、いい加減で恣意的ですよ。誰しも一つ二つ間違いを犯

すし、欲望だつてあります。主イエスでさえ、磔にされたとき、わたしの神、わたしの神、なぜわたしをお見捨てになりましたか、と言われています。私も磔にされて、もう死ぬのだと思つたら怖くて怖くて、ただ、それだけでした」

「うくん……で、あんたの話は何？」

「これからも私は何度も間違いを犯すと思います。今は愛也と結婚して、ただつましく生きられればいいと思つていますが、また、いつか間違つてしまいます」

「……うん……まあ、そうやって生きていくしか、ないんちゃう？」

間違つて反省して。あのテレサでもガンジーでも、つい間違つたんやし。うちも失敗したところよ。なんとか拉致家族を取り戻しとうて、金正忠に妥協しすぎたわ。人攫いのテロリストに妥協したら、また別の人攫いのテロリストが要求してくる。けど、失敗を悔い続けても、しやーないし」

「私が反省し続けるために、この2億円を受け取ってください」

「うくん……」

「あなたを深く傷つけるだけのことをしましたから」

「ほな、この2億弱のうち、200万円は、うちと鷹姫がもらうわ。残りは財務省に入れて復興に使うし、あんたは200万円を信徒さんに詫び入れて分割で返し」

「……それでは少なすぎます、あんなひどい写真を流出させたのに……飛行機の中で撮られた動画も……」

「まあ、うちも流出してたの知ったときは、めちやめちや嫌やつたけど、それに対応する時間も無くてほつといたら、あの写真自体が捏造ちゃうか、とか、もともと、うちのそっくりさんのエロDVDとかも発売されてるくらいやったし、次々と出てくる世の中の情報に流されて、たいして騒がれんようになってるから。きつとカネちゃんが頑張ってくれたんやと思うわ。鷹姫のも、そやし。あの動画は解像度が低かったし余計。まあ、傷つき加減でいうと、うちが30万、鷹姫が170万つてとこかな」

「いえ、私など……」

鷹姫は否定したけれど、まだ傷ついている顔だった。強く恥じている顔が可愛すぎて鮎美は頬へキスしてから言う。

「もらっておき。それでチャラ、忘れて許してあげよ」

「……はい」

「ほな、陽湖ちゃんは、これから、どうする？」

「もしよければ秘書補佐を辞めさせていただき、全国の被災地を回って少しでも人々の役に立ちたいです」

「……ええけど、布教活動は、ほどほどにな」

「はい。私には償い切れない罪がありますから」

介式に売春を強要したことは二人にも言えないし、謝りようもないので、このまま黙っているつもりだった。ほんの2時間前に前田を訪ね、台湾での祝福による対価で得た日本円で2000万円以上はあつた台湾ドル紙幣をすべて渡してきたし、介式の売春による売上も全額渡してきた。せめて前田と結ばれて幸せな家庭を築いてほしいと思っている。

「ほなね、陽湖ちゃん、元気でね」

「はい、どうか頑張ってください」

鮎美と陽湖が握手をした。屋城が2枚の卒業証書を差し出し出してくる。

「お受け取りいただく時間も、お忙しそうですから今、渡させていただきます」

「ああ、これな。たしかに卒業やね」

「芹沢鮎美さん、ご卒業おめでとうございます」

「おおきに」

「宮本鷹姫さん、ご卒業おめでとうございます」

「ありがとうございます」

二人とも卒業証書を受け取ると貴賓室へ急いだ。入室し、すぐに鷹姫は櫛で鮎美の髪を整え、対談の準備を終える。鈴木と通訳とともにカメラの前に座った。定刻となりフーチンが液晶画面に映る。

「こんばんは、フーチン大統領。いえ、そちらは、まだ、こんにちはこの時間でしようか」

「いや、こんばんは、だよ、アユミ。私はウラジオオストクにいるからね。カムチャツカの津波被害もあるし、君たち日韓朝中が色々と騒がしいのでモスクワでは遠すぎるから」

「色々どご心配をおかけしております。また、夜分遅くに時間をとっていただけ、ありがとうございます」

「気にするな、まだ身体はモスクワ時間なのでね。私のことより、そこらは大変だな、プリンセスが人質に取られ、つてつきり会談はキャンセルになるかと思っていた。忙しいだろう、今すぐキャンセルしても怒ったりしないが?」

「お気遣いありがとうございます。今のところ大丈夫です」

「そうか、では、本題に入ってくれたまえ」

鮎美から申し込んだ会談なのでフーチンは提案を促してくれた。

「はい、今後、私たち日本と防御的な対等な軍事同盟を結んでももらえませんか? また、経済面、とくに工業面での協力関係を築いていきたいと願っています」

「ふむ。アユミのいう防御的な対等な同盟とは?」

「双方が、いずれかの国から攻撃を受けたとき、もう片方は協力して戦う。けれど、竹島、対馬、尖閣諸島の問題は日本が単独で対処します」

「……………」

フーチンが黙って考え込む。

「アユミ、それは、ずいぶんと日本にばかり都合がいい同盟だな。我々ロシアに脅威はない。それに、アユミはN友の会だとかいうアメリカ女のパーティーに参加したのではなかったか?」

「あれは核の傘のみの軍事というより商業性の強い同盟です。それにアメリカとの同盟があてにならないのは学んだばかりのことですから」

「クスっ…たしかに。では、アユミの言うとおりにすると、日本は核の傘を二重にかぶることになるが?」

「なにしろ人類史上、もつとも核攻撃を受けた民族ですので傘が1本

では不安なのです。それに傘の持ち手を握っているわけではないですから」

「たしかにな。だが、小さな傘を手に入れたら？　隣人に狙われているようだが」

「あれは間もなく隣人の手に渡ります」

「……大胆だな、なるほど、すべての要求を飲むのだから、プリンセスは解放されるはずだし、私と会談している時間もあるというわけか」

「はい、その件については、そうです」

「では、対等な同盟が日本にばかり有利だという件は、どうだろうか？」

「その件について、こちらが提供できるものを記した手紙があるのですが、ウラジオストックまで戦闘機を飛ばしてもよいでしょうか？」

「手堅く情報を守るのだな、そのうえ迅速を心がけるか、そういうところは好きだよ。同性愛者は嫌いだが」

「日本とロシアは良い関係を築けると期待しています。私の性的指向とは関係なく」

「いいだろう。手紙を読もう。伝書鳩を飛ばせ」

「ありがとうございます」

一旦、会談は終了となり、鮎美は内線電話で畑母神に頼む。すでに滑走路で待機していたF15に搭乗している里華は司令室からの通信を受けると、胸ポケットにある手紙を手袋の先で叩いて存在を再確認し、離陸する。今回は増槽だけの非武装でのフライトだったけれど、いきなりロシアが攻撃してくるかもしれないという不安はない。不安なのは真つ暗闇の中、初めての空港に着陸することだったけれど、それは先輩パイロットがこなしてくれた。里華がF15からおりるとロシアの政府専用車が滑走路まで来ていて、それに乗った。日本語ができるスーツ姿のロシア人公務員が言ってくる。

「ようこそ、ウラジオストックへ。これから移動しますが、あまり窓の外を見ないでください。どのみち夜で街並みも鑑賞できませんが」

「はい」

やはりフーチンの所在はできれば隠したいようでも里華もスパイではないので言われた通り視線を落としておく。頭から麻袋をかけられるよりは、ずっとマシだったし、少なくともロシアは急に里華を拉致監禁したりはしないと感じているので不安は少ない。ふと麻袋をかけられて処刑台に磔られた陽湖の姿を思い出した。あのときは食堂でテレビを見ていたけれど、みな麻衣子のパジャマだと知っていたので、いったい麻衣子は何をして鮎美に激怒されているのだろうかと男性隊員たちは話題で持ちきりだった。そんな、くだらないことを考えていると、どこかの地下駐車場に着いた。

「おりにください」

「はい」

雰囲気からして、どこかのホテルの地下駐車場のようだった。

「こちらです」

案内されてエレベーターの方へ進むと、同じ女性なのかと思うほど大柄で屈強なロシア人女性がいてスーツ姿だった。

「身体検査をします」

日本語ができる公務員がいい、ロシア人女性は何かロシア語で挨拶くらいはしてくれた感じだったけれど、意味がわからないので、こんばんは、とだけ言って里華は両手をあげた。身体検査は入念だったけれど女性の手なので、不快とは思わないし、レントゲン検査は無かった。エレベーターに乗って最上階付近の階でおりると、やっぱりホテルだった。エレベーターをおりたところにボーイがいて出入りをチェックしているようだったけれど、ロシア人公務員といっしょなのでフリーパスで進み、明らかにスイートルームという部屋に案内された。入室すると応接間があり、そこにフーチンがいた。ソファに座っているフーチンへ敬礼する。

「日本空軍少尉、石原里華であります」

里華が言ったことを公務員が訳してくれるし、フーチンの言葉も訳してくれる。

「こんばんは。女性パイロットかね？」

「はい」

「アユミのお気に入りというわけかな？」

「……いえ、違います」

一瞬、里華は不快そうな顔をしたのでフーチンが気づいてくる。

「失礼。あなたは同性愛者ではないのだね」

「はい！」

「日本では同性愛者が増えているのだろうか？」

「いえ！ 最近、表立って表明する者が増えただけで、ほとんどは男性は女性を、女性は男性を……その……愛する……という……健全な人が多いです」

言っている途中で里華が恥ずかしくなって赤面したのでフーチンは軽く笑った。

「すまない。つい気になって余計なことを訊いた。手紙をもらおうか」

「はい、こちらです」

里華が両手で手紙を差し出すと、片手で受け取ったフーチンは自ら開封して読み始める。日本語とロシア語訳がついていた。

親愛なるロシア大統領ドミトリー・フーチンさんへ

お時間をいただき、ありがとうございます。

本題ですが、ご存じの通り日本は津波により工業地帯が大きなダメージを受けています。幸いにして沖縄沖海戦では辛勝しましたが、数年以内に工業を復活させなければ10年後の戦力に大きな不安が生じます。

そこでロシアにお願いしたいのは工業の復活へのご協力と軍事同盟です。

これに対する見返りは、

1 日本の潜水艦および対潜水艦搜索戦の技術提供

2 ロシアと日本による迎撃ミサイルの共同開発

3 ロシアと日本による戦闘機の共同開発

4 太平洋における海底資源の共同開発と日本からの技術提供

5 今回の大震災と巨大津波によって、無主の土地となった南太平洋の島々をロシアと日本が共同統治し50年後に平等に分割すること

手紙を読んでいる途中でフーチンは息をついた。

「ほオオ…」

沖繩沖海戦での日本海軍による潜水艦戦は、まだまだ分析中だったけれど強く注目しているし、さらに北朝鮮からの核ミサイルを2発迎撃した対ミサイル防衛技術は奪ってでも欲しかった。そしてF35は開発が長引き、いまだアメリカ空軍にも納入されておらず初期作戦能力の獲得には、まだ数年を要する見込みだったので今回の大震災で頓挫する可能性も高い。さらに日本の海底掘削技術も魅力的だったし、なにより世界の誰もが大地震の被害に目を向けている中、南太平洋の島々は確かに無人になっているし、不幸にして国家ごと消失しているところもある。アメリカが引き籠もり戦略に舵を切った今、太平洋に進出する大チャンスだった。これをロシア単独でやると国際社会からの批難も大きいし、いずれ中国と日本、オーストラリアあたりとも衝突していくことになる。そのときロシアは補給線の長さが軛になる。けれど、日本が協力してくれるなら話は大きく変わる。

「……南太平洋……」

フーチンの脳裏に温暖な海洋と島々が去来した。野心的な興奮で白い頬が赤くなる。ロシア人にとって北海道より北にある択捉でさえ南の島だった。夏には日光浴を求めて観光客が行き来している。南太平洋へのリゾートではフランス領ポリネシア、とくにタヒチが有名だけれど、やはりフランス人に間借りしている感じがする。けれど、侵略戦争も要さない、まったく無人になった島なら再び大航海時代が来たのと同じに早い者勝ちになる。今すぐにも出航させたくなった。

「アユミの目が見ているところは………先の先なのだな……」

フーチンは手紙の続きを読み始める。

海底資源の共同開発について、その利益は日本の排他的経済水域内では日本8：ロシア2でお願いします。新たに取得できた権益圏は5：5でお願いします。

また、ロシアが太平洋に出るための基地として馬毛島および沖ノ島

島に日本軍と共同の基地を置いてください。沖ノ鳥島については埋め立てによる拡大を共同でおこないたいと考えられています。そして軍事同盟が対等であることを内外に示すため、ロシア国内のどこかに同規模の基地を置かせてください。希望としてはバイカル湖付近と黒海付近です。これらの基地における地位協定は内容を対等とし、とくに所属する兵士もしくは要員等が、相手方の兵士や要員、現地民間人へ強姦等の犯罪をおこなったときは、被害者側に裁判権がある形をお願いします。また双方いづれかで犯罪が重なる場合は、派遣する者全員の頭髪および指紋を相互に共有する形をお願いします。その他、すべての内容で対等な友人関係として未永くお願いします。

くわえて、この同盟成立を承諾いただき今日明日にも公表したいのですが、その直後に種子島より使用済み核燃料を搭載したロケットを尖閣諸島へ撃ち込みます。これは日本国内における核実験という名目ですが、狙いは占拠されたままとまっている尖閣諸島を10万年ほど棚上げとするためです。

お騒がせしますが、よろしくお願いします。日本国総理大臣 芹沢 鮎美

読み終わったフーチンは深く考え込む。

「……………」

いくつか疑問はあるし、それを手紙で問うより鮎美へ直接に聞いた。フーチンは通信回線の防諜対策強化を命じてから、鮎美へ対面通信をおこなった。

「やあ、アユミ、いただいた手紙は読んだよ」

「ありがとうございます」

「この通信は防諜性を高めた。とはいえ、ぼやかして話すこととしよう。まず4の割合にある8：2だが、7：3で、どうだろうか？」

「……………ギリギリ、あまり安売りすると、あとあと私が失脚しますから、ギリギリ7：3を受諾します」

「うむ。他にアユミはバイカル湖と黒海に、どういう興味があるのだろうか？」

「主な狙いは対等さの強調です。定めていく協定についても、お互い

様となるはずですから。またバイカル湖には世界でも珍しい湖に浮かぶ有人島であるオリホン島があり個人的な興味があると同時に中国への牽制です。効果の狙いは馬毛島と同じです」

「たしかに位置的には、そうだな。それに変わったところに着目するものだな。湖に浮かぶ有人島か……ああ、そういえば、アユミはピワコという日本最大の湖の島に住んでいたな？」

「はい。あと、日本にばかり有利な同盟とおっしゃいましたが長期的に見て、日露で中国を抑えていくのは双方の国益にかなうと思いません」

「フ、でなければ、私がここまでの話を聴くはずもないからな。だが、黒海は？　中国と遠いぞ」

「いずれ日本が落ち着けば、逆にヨーロッパで大きな災害が起こるかもしれません。そのとき、私たちも同じですが、どうしても隣国や周辺国とは仲が悪かったりして軍組織による救援というのは受け入れにくいものですが、私たちがイスラエルに助けていただいたように遠い国というのは野心を感じず受け入れやすいものです。こういう助け合いの形が世界のスタンダードになっていけばよいかと考えるからです。したがって対等と言いましたが黒海付近に基地を置く場合、戦車やミサイルなど制圧性の高い兵器は配置しない予定です。いずれ軍の仕事は災害救援が主になれば人類にとって幸いかと思いますから」

「……そんな先のことを考えるのか……、アユミ、お前は、どこまで先を見ている？　お前が世界を導くなら、どこへ導きたい？　単純なロシア日本による覇権ではあるまい。これまでの発言を見ると、社会主義を思わせるが、資本競争を否定していない。お前は、どこを見ている？」

「目指すところとしては、やはり紛争は武力でなく裁判と武力牽制で落着いてほしいと考えています。現状、国際司法裁判所はハーグにあります。やはり西欧よりです。アジアにはアジア、アフリカにはアフリカ、南アメリカには南アメリカと、それぞれに物事の落着のさせ方、思想信条があるのですから、それぞれの地域に合った国際裁判所

が、より敷居が低く窓口を設け、国際的な企業と企業、企業と国、個人、これらの争いの落着と、そもそも契約時、条約締結時に自分にだけ有利な裁判所を専属裁判所とするのでなく、公平な裁判が見込める国際裁判所を指定しておくのが標準となつてほしいと考えています。すくなくとも、とくにアメリカ企業のように、たいてい契約書の最後にカルフォルニア裁判所を専属としておいて自分にだけ有利なようにもつていく国際標準は消し去りたいと」

「それぞれの地域の国際裁判所か……まあ、アユミが生きているうちには実現するかもしれないな……私が見ることはない光景だろう」

「同盟の方、どうでしょう、お願いできますか？」

「あと一つ問いたい」

「はい」

「アユミは北方四島のことを一言も書かなかつた。なぜだ？」

「単なる棚上げです」

「2島なりと、ねだろうと思わなかつたのか？ 金正忠には、うまく頼んだようではないか？ まさか、ロケット砲で核兵器を買うとはな。わらしべ長者のようだ」

「……わらしべ長者つて……よく、そんな日本のお話をご存じですね？ 柔道の達人なのは鈴木先生から聞きましたけど」

「以前に日本の柔道家と雑談しているときに聞いたのだよ」

「そうですか。まあ、キムヤン、いえ、金正忠はんには他にも密約があるの、わらしべ長者ほどではないですよ」

鮎美は、やつぱり常に衛星などで監視していて小型のロケット砲の運搬までわかるのだと実感しつつ続ける。

「現在、日本軍の戦力は半減しています。回復の見込みも遠いです。もともと、核保有を考えても、ロシアが圧倒的に有利です。そういうときに領土返還をお願いしても、また別のところで大きな譲歩が生じますし、日ソ共同宣言のまま、今回は棚上げがベストかと思つています」

「いずれ取り返したいと思うかな？」

「……………」

鮎美が考え込む。長く考え込んだのでフーチンがせかしてきた。

「北方四島についてのアユミの見解を聴いてみたいものだ」

「はい……………見解……………個人的な見解としては、千島列島、樺太、そして北海道も含めて、もともと日本人のものでもロシア人のものでもなくアイヌ人のものやっただけです。それを300年ほど前から日本とロシアで取り合っていていくうちに樺太と千島を交換したり、ごちゃごちゃと争い合っただけで、これからも争い続けていくのか、そのうち話し合いで解決つくのか、また300年ほどかけて考えればよいかな、と思っっています。なるべく血を流さないように」

「いつそ尖閣諸島のように使用済み核燃料を撃ち込んでやろうと思わないのか？」

「いえいえ、それ、同盟話が破綻しますやん。おまけに、四島には人も住んではるし」

「うむ。だが、尖閣諸島にも固有種もいた。人間は住んでいなくとも、それなりの生態系はあるのに、撃ち込むのかね？」

「……………意外と優しいんですね……………うちの方が冷たいのかも……………」

「生態系のこととは、どう考えて結論したのだ？」

「はい、日本の事故原発にせよ、チェリノブイリにせよ、離島ではなく生物の入れ替わりがある開けた生態系ですけど、尖閣諸島は閉じてます。こういうところで長期に放射能汚染があったとき、生物が、どう進化して放射線に対して耐性をつけたりするのか、そういう超長期の実験ができると思えば、死んでしまう生き物には悪いけど、それなりに人類にとつての意味はあるかな、と考えました」

「そうか……………閉じた生態系での放射線耐性の獲得実験か……………」

「フーチン大統領、同盟とご協力、お願いします」

鮎美が畳みかけて頼むと、フーチンは鮎美が同性愛者だということ忘れて、つい女の子からの願いに頷いた。

「いいだろう。こちらの担当と鈴木に話を詰めさせ、日本時間13時には公表しよう。ついつい尖閣諸島への作戦を話してしまった。聴

かかれていないとは思いますが、ロケット発射準備を急ぐといい」

「ありがとうございます」

「遅くなったが、よい眠りを」

「はい、お互いに」

通信を終えると、鮎美はぐったりと椅子に崩れた。鷹姫が労つてくれる。

「お疲れ様です」

二人とも睡眠時間としては海岸での処刑のあとにフーチンとの会談にそなえて仮眠していたので夕食時に由伊が襲撃されたという急報で起こされるまでは眠れていたため問題ない。とはいえ、やはり国家の命運と未来をかけての会談は1分で通常業務の1時間分は疲れる。

「うん……めっちゃ疲れたわ……」

「会談中に陛下から、お電話が入っております。お疲れかもしれませんが、陛下からのお電話をお待たせするのは恐れ多きことです。ご対応、大丈夫でしょうか？」

「……んっ……」

鮎美が両腕を広げて顔をあげ、両目を閉じた。あまり空気が読めない鷹姫でも何度も鮎美とキスしたので理解できる。応えて鮎美へキスをして抱きしめた。鮎美の求めに30秒ほど応じてから頼む。

「陛下をお待たせするのはよくないです。お電話してください」

「用件、聴いてる？」

「はい、由伊様と島津殿が無事に解放されたそうです。おそらくは、それについてのお言葉かと」

「ほな、朗報やし、対応もいらんやん。もうちよつと」

「……」

鷹姫は制服を脱がしてくる鮎美の手を握って止めた。

「陛下へのお電話をしてくださいれば、あとはお望みのままにいたしますから、お願いします」

「……約束よ」

鮎美は鷹姫へ小指をからめてからスマートフォンを受け取り、義仁

に電話する。

「もしもし、うちです」

「鮎美さん、ありがとうございます。由伊を無事に助けてくれて。そして島津も」

「いえ、やれるだけのことをしたまでのことです」

「けれど、対馬の人々には気の毒なことになってしまった……家も無くし……由伊のために……」

「それも、それなりの対応をいたしますので、ご安心ください」

「うん、ありがとうございます。ただ、核兵器があつたということの報告を私は受けていなかった………どういふことなのだろうか？」

「はい、すみません。様々な事情があつたことで、いずれ報告するつもりでしたが、この電話も盗聴されていないとも限りません。いずれ、お会いして報告いたします」

「そう願いたい。……明日にでも会えないだろうか？ 由伊のこの礼もあらためて述べておきたい」

「明日ですか……」

鮎美が迷う。決まっている予定はないけれど、暇ではない。とはいえ、自分を罷免できる義仁への報告も重要だったし、フーチンとの話も電話では報告できない。そして、そばにいる鷹姫は、断らずに会ってください、という思念を送ってきている。

「予定は未定な部分が多いのですが、お会いできるよう鷹姫に調整させます」

「ありがとうございます。本当に重ね重ね」

「いえ、もつたいないことです」

「……やはり、言っておきたい」

「はい？」

「私は、あなたが好きだ。恋しく想っています」
「……」

「すまない。こんなときに迷惑だろうし……あなたの性質も知っていないけれど………どうにも、あなたのことばかり考えてしまうのです」

「……いえ………もつたいないことです……」

「……………愚かなことを言ってしまった……………」

「いえ、人として、その気持ちが一番強いものですから、そう自分を責めないでください」

「ありがとうございます」

「……………さきほどの、お言葉、やはり私と……………結婚ということも考えての、お言葉なのでしょうか？」

「そうでなければ不誠実でしょう」

「……………ありがとうございます……………」

「あなたは、その性質で今まで多くの男を袖にしてきたのでしょうかね。まるで、かぐや姫のように」

「…はは…、そんな優美な人とちやいますよ……………ただの同性愛者です」

「私も官軍を率いてでも、あなたを居留ませたいほど、胸が騒ぐのです」

「……………どうも……………おおきに……………」

「明日、会えるのを楽しみにしています」

「はい。では、陛下も、ごゆっくりお休みなさいませ」

「うん、今、由伊が到着したようだ。電話を切ります」

「はい」

鮎美はスマートフォンを置くと考え込む。

「はああ……………」

「陛下のお気持ちは固いようです！」

「……………」

「ここにも盗聴してるもんがおった、と鮎美は興奮気味の鷹姫を困った目で見ると、上下関係を重んじる性格なのも個性なのでいいとは思いうし、自分の出世を望んでくれるのも嬉しく感じる部分もある。けれど、いよいよ総理大臣という地位から、さらに天皇との結婚というサクセスストーリーまで夢を求められると、かなり困惑する。位人臣を極めるという古典的な夢に熱く焦がれてきているようで、可愛いと想うと同時に困りもする。総理大臣という地位でさえ最高峰といえれば最高峰な上に窮屈でもある。さらに皇后ともなれば、その窮屈さは

想像にあまりある。そもそも自分は完全な同性愛者であってバイの傾向は一切ないし、男性へ嫌悪感を覚えることはなくても、ときめきや欲望もまた感じない。たった18歳で総理大臣となった自分の将来は、とりあえずは明日、また範条の一部を公布して総理大臣には長めの任期を定めて政治的安定をはかると同時に再任は不可とする予定なので、その後の人生は未定だけれど、男と結婚して子作りという未来は描きにくい。できれば、ずっと鷹姫といっしょにいたかった。

「鷹姫、まずは約束よ」

「はい、どうぞ」

鷹姫は身を捧げてくれる。処女膜だけは残しているけれど、あとは鮎美の欲望のまま、裸にしてベッドに押し倒している。貴賓室には麻衣子は非番でおらず、ゲイツが8名もいて完全武装で二人を見守ってくれている。由伊が襲撃されたことで鮎美の身辺警護も一気にレベルをあげられ、常時8名のゲイツがつき、同性愛者でない男性隊員も貴賓室前に10名もいる。畑母神や石永、さらに玄次郎と鐘留にまで嚴重な護衛つけることになっていた。鮎美と鷹姫はゲイツの視線は気にせず、そしてゲイツたちも女性同性愛の行為を見ても、ごゆっくり、としか思わない。

「鷹姫、上着を脱がせるよ」

「……はい……、ですが、今日は入浴してからにしませんか？」

鷹姫は自分の匂いが気になって言った。以前はまったく気にしなかったけれど、社会人として恥ずかしくないようにと腋を剃り、制汗スプレーを使うようになると、そうしていないことが、とても恥ずかしいことだと認識するようになっていた。おもらしを恥ずかしがりもせずに小学校高学年までしていた鷹姫が今では絶対に嫌だと思っているように、腋の毛と匂いを気にするようになっていた。

「ううん、このまま」

「……ですが……今日は……いろいろと……」

日付は変わっているけれど、昨日は朝から忙しくて法廷に立ったり、さらには人を殺す覚悟で小銃を握ったりして、仮眠はしたけれど

入浴はしていないし、由伊が人質にされた事件でも嫌な汗をかいた。フーチンとの会談もそばで見ているだけでも緊張するものだった。そして、鮎美は鷹姫へ腋を剃ってもいいけれど、制汗スプレーは使わないでほしいと注文してくるので時間が経つと相応に匂ってしまふ。むしろそれが楽しみという顔で鮎美がブラウスも脱がせてくる。脱がされると、かなり強い匂いがした。

「鷹姫、右腕をあげて」

「……はい……」

素直に腕をあげるけれど、鷹姫は恥ずかしくて真っ赤になっていく。その顔が可愛らしくて鮎美の興奮は強くなり、鷹姫の肌を舐めた。

「鷹姫がいてくれるから、うちは頑張れるのよ」

「はい、これからも、ずっとおそばにおります」

鮎美の総理大臣としての忙しすぎる日々と重すぎる責任、多発しすぎる事態や事件に、それでも精神力を保っていられるのは、鷹姫の存在が大きかった。鷹姫にしても同性愛の指向はないけれど、異性愛の指向もなく、ただ鮎美に仕えたいという気持ちは強いので、まるで武将と小姓が衆道に浸るような心地で受け入れている。はからずも深夜であり、由伊が襲撃された事件もフーチンとの会談も終了し、つかの間、鮎美は癒やしを受けることができる。

「鮎美、そろそろ股間の奥が熱くなってきました。イキそうです。：あ……イキました」

異性にも同性にも性的興味は覚えない鷹姫だったけれど、鮎美が丁寧に舐めたり吸ったりすると、肉体的な反応はあって絶頂を迎えるようになっていく。ただ羞恥心は覚えないようで鮎美が感覚を常に報告するように言っておいたので淡々と言っている。

「フフ、鷹姫、素直な身体になってきたね」

「はい、早いと3分ほどイケるようになりました」

「フフ♪」

鷹姫って羞恥心が発達障害なんよなあ、おもらしにしても、腋のことにしても、それが恥ずかしいことやって教えてあげんと、平気でイ

クもんなあ、このままじっくり素直な身体に仕上げた後、実は恋人同士でもイクところを見られるのは、嬉しくもあるけど恥ずかしくもあるって教えたろ、と鮎美は近未来の楽しい計画を考えつつ5回も絶頂させた鷹姫の股間から離れ、熱っぽく呼ぶ。

「…ハアっ…鷹姫…」

鮎美はセメだけでなくウケも求めて、ベッドサイドのテーブルから紅茶に入れるシロップを取ると、それを自分の胸から股間にかけて垂らした。指先でシロップを広げて自分の身体の舐めてほしいところへ塗りつける。甘い香りと透明に輝くぬめりを知覚して、鷹姫の目の色が変わり、口の中に唾液を湧かせている。今すぐ鮎美の身体へ舌を這わせたいという顔色になってくれたので、あえて焦らす。

「まだ、おあずけよ」

「はい…ハアっ…」

まったく性欲を覚えない分だけ食欲が強いのか、鷹姫は何度も生唾を飲んでいて、おあずけがっつらそうだった。草と虫しか食べない生活を体験してから、鷹姫も欲望による衝動が、どれだけ強いか理解してくれている。意志や自制心で抑えきれるものではなく、お腹の底から湧いてきて頭脳を圧倒してしまう。鮎美は女子の腋を舐めるのも好きだったけれど、舐められるのも好きなので鮎美の腋も多めに塗られたシロップで光っている。

「ええよ、舐めて」

「はいっ」

夢中で舐めてくれるので鮎美は強い性感を覚えるし、ゲイツたちは見ている、それはバター犬状態じゃないですか、と思っただけけど黙って見守る。鮎美は追加のシロップを自分の股間に垂らして長く楽しむと、二人で入浴して同じベッドで眠った。朝になり閣議の時刻も過ぎたけれど、鈴木が深夜の会談後なので配慮してくれて、鮎美の判断が無くても進められる案件は進めてくれたけれど11時になって金正忠から通信が入ったので二人とも起こされた。制服を着てモニターの前に座ると、金正忠が挨拶をくれる。

「よお、アユミ、寝とったんか。まあ、夕べは遅くまで大変やったやろ」

「ええ、まあ：おはようさんです。キムさんは元気そうやね」

「おう、最高指導者たるもの元気が基本やで！」

金正忠は血色のいい顔で澆刺と答えている。

「ほんで、キムさん、どういう用件なん？」

「せっかくアユミにやったもん、あつさり南朝鮮に盗られたもんやなあ」

昨夜の出来事は世界的に知られているので、贈り主が残念そうに言ってきた。

「すみません、他に選択肢がのうて」

「まあ、お姫さんを入質にされたら、しゃーないわなア。にしても、対馬までとは気前がよすぎるやんけ、どうせ、すぐ取り戻す気やろ？」

「はは：、どうですやろね」

鮎美は盗聴を心配してボヤかした。今すぐにでも鮎美が決断すれば対馬奪還作戦は開始されるけれど、鮎美自身が寝起きなので状況把握が先だった。金正忠も盗聴のことは忘れていない。

「とはいえ、これからはワシらも平和主義でいけるとええけど、ちよい伝えたいことがあるねん。サトちゃん、こつちに飛ばしてや」

「石原里華はんのことなん？」

「そやそや、ちよいと手紙があんねん。パシらせてくれや」

「ほな、すぐ行かせますわ」

通信を終えると鮎美は畑母神へF15の発進を頼んだ。里華は昨夜、ウラジオストクのホテルで軽い歓迎を受け深夜だったけれど、ボルシチを勧められて食べてから帰ってきて今日は非番として休んでいたものの、金正忠からの指名だったので飛ぶことになった。一応は空対空ミサイルをつけて里華の操縦で離陸し、朝鮮半島に至る。

「石原、お前が着陸までやってみるか？」

「……………はー」

そのまま里華が操縦し、超低空で案内された滑走路を目指す。前回とは別の基地に金正忠は移動していたようだったけれど、昼間なので目視で滑走路も確かめられるし、里華は慎重にF15を初めての滑走

路に着陸させた。

「いつてきます」

「おう」

緊張はあるけれど、一度目ほどの不安はない。滑走路に降り立つと、前回と同じ北朝鮮軍士官が挨拶してくれた。

「ようこそ、再び我が共和国へ。何度でも、いらしてください」

「ありがとうございます」

「身体検査をさせていただきます」

「どうぞ」

素直に里華は身を任せたけれど、二人の男性兵士が前回よりもベタと身体を触ってきたので、とても不快だった。前は兵士の方も緊張していたので里華が武器を隠し持っていないか、そこを慎重に調べている触り方だったのに、今回は女性の身体に公然と触れるという喜びに満ちた触り方だった。里華は胸まで揉まれたので、きつく兵士を睨んだ。それで恐れてやめてくれる。いっそ、あとで死刑にしておいて、と言いたくなつたけれど本当に実行されると、それはそれで夢見が悪いのでやめておく。

「少尉殿、こちらです、どうぞ」

「はい」

また複雑な廊下やエレベーターをへて、豪華な地下室で金正忠と再会した。

「石原里華日本空軍少尉、参りました」

「おう、二度目となると堂々と来おるな。ええ根性した女やんけ」

「…ありがとうございます。お手紙をいただきに参りました」

「トンボ帰り、ご苦労さんやけど、これ渡しておいてくれ」

「はっ」

里華は手紙を受け取ると胸ポケットに入れて、すぐに日本へ帰る。小松基地の滑走路からエプロンへ移動すると、鮎美が8名のゲイツと10名の隊員に護衛されて待っていてくれた。

「こちらです」

里華は手紙を差し出したけれど、鮎美ではなく鷹姫が手を伸ばして

受け取り検査する。

「芹沢総理、私が開封してよろしいですか？」

「ええよ。きつと、大丈夫やろ」

「念のためです」

鷹姫は鮎美へ背中を向けて、ゆつくりと開封し、中身が手紙だけであることを確認すると、読まずに鮎美へ渡した。

アユミへ

おまんにやった模擬核爆弾な、あれ遠隔で電波飛ばして爆破できるねん。

しかも、だいたい50%の確率で核爆発を起こせるかもしれん。

小型化に挑戦する過程でオヤジが造つてた試作品なんやけどな、不発やったら火薬の爆発力だけやから、せいぜい周囲50メートルを吹っ飛ばせるだけやけど、うまいこと核爆発が起こったら0.5キロトンくらいの爆発が起こせるはずやねん。

鮎美が読みながら、つぶやく。

「遠隔で……やっぱ信用できんなあ……」

そういう感想を鮎美が抱くことは見こされていたようで続きがある。

ま、もしも約束の金塊をくれなかったときの保険や、悪く思うなや。

ほんで、まさか南朝鮮の手に渡るとは思わなかったし、今は対馬にあるやろ。いっそ、あいつら吹っ飛ばしたるか？ それとも、嬉しそうに半島へ持ち帰って、もしかしたら羅老号たらゆうロケットに無理くり載せられんか、試しよるかもしれん。そんなとき吹っ飛ばす方が最高なんやけど、アユミが対馬を取り返すのに助けになるようやったら、金地金20キロで対馬でやったるで。まあ、確率50%のシユレデインガーの猫やからな、不発やったら報酬なしでええわ。

どないする？

返答の暗号を決めるわ。

対馬で起爆させてほしいんやったら、キムやん最高、って言うてや。

対馬では起爆させてほしくないんやったら、キムヤン男前、や。ちなみに、もらったロケット砲は、もう前線に配備したし、おまんら攻め込むのに合わせてやりたいわ。決めて連絡くれや。

読み終わった鮎美は司令室へ行って畑母神の意見を訊いた。

「そんな助力が無くとも対馬は取り戻せるし、むしろ放射能汚染が心配だ。不発だったときの処理も一苦労する。ぜひとも、対馬では起爆させないでほしいな」

「わかりました、ほな、そう伝えます」

すぐに鮎美は再び金正忠に通信した。

「キムヤン、手紙は読んだよ。まあ、それはそれとして、こうやって見ると、キムヤン男前やなあ」

「フ、決まってるやろ」

「とくに、その髪型、カッコええわ」

「これ、毎朝すっかり時間かけてるからな」

「ほな、また手紙の返答は、そのうちね」

「おう、またな」

たとえ盗聴されていてもわからないように伝えて通信を終えると、貴賓室で昼食をとる。食べ終わった頃に石永と静江、長瀬、2名のゲイツが入室してきた。長瀬とゲイツらは敬礼し、静江は深々と頭をさげ、石永は妹の背中を撫でた。

「本当に、ご迷惑をおかけしました」

「もうええよ。今から出発なん？」

「はい」

静江は発表した通り事故原発にもっとも近い避難所で六ヶ月のボランティアに従事する予定であり、その間の警護には長瀬と2名のゲイツがあてられている。これから出発なので挨拶に来たのだった。

「静江はんを毘にハメた議員らは、きっちり処罰するし、向こうでも元気にやってな。……理論上は大丈夫なはずの放射線数値やし」

「はい……私たちが大丈夫だと発表しているものですから……大丈夫

だとは思っています……」

それでも、やっぱり不安だったけれど、行きたくないとは言えないので向かう。むしろ警護にあたってくれる3名に申し訳なかった。

「静江、なんとか時間をつくって、たまに視察へ行くようにするから頑張れ」

「はい、お兄ちゃん。迷惑かけて、ごめんなさい」

静江たちが出て行き、13時前となり鈴木がロシアとまとめた同盟文書をもってきた。フーチンと決めた内容と大差なかったけれど、黒海付近への日本軍基地設置については5年後に再度話し合って決めると改定されていたものの、鮎美に異議はなかった。すぐに13時となったのでフーチンと共同で世界に発表した。当然、世界全体が驚きと今後の情勢予想に騒ぎ立つ中、鮎美は石永に頼む。

「石永先生、発射してください」

「了解した」

「畑母神先生、全軍を臨戦態勢に」

「もう、してある」

現状、尖閣諸島には中国が設置した灯台と国旗が立っているのみで人的被害はでないはずだったし、ロシアとの同盟を考えると、日本が使用済み核燃料を載せたロケットを自国領と主張する尖閣諸島に打ち込んでも、中国軍が大きな動きに出ることはないと予想している。それでも警戒を最大限にし、対馬のことは後回しになっている。司令室中央にあるモニターに種子島宇宙センターの様子が映っている。衛星軌道にのせるわけではないので、もう発射態勢になっている。

「…5、4、3、2、1、点火」

ロケットが飛翔していった。ほんの数分で尖閣諸島へ到達するはずなので、その間に石永が事前に録画していた映像を配信する。

「日本政府は度重なる我が国への攻撃に対し、強い警戒感をもっており、今後のためにロケット発射実験をおこないました。弾頭は実験的に使用済み核燃料とし、目標は領土内である尖閣諸島、魚釣島です」

録画面像の石永は一呼吸おいて続ける。

「先の沖縄沖での中国軍との不幸な衝突は双方に大きな犠牲を出しました。日本政府としては、このようなことが繰り返されないことを願い、また1972年の周恩来首相と田中総理が結びえた日中国交正常化の基本精神に立ち返り、これからの関係再形成を考えております」

暗に当時の両首脳が尖閣諸島の領有権を棚上げにしたことをあげ、しかも、もともと海底資源は別として島そのものとしては、たいして利用価値もない島が使用済み核燃料で汚染され、長い年月に渡って人の上陸が難しくなったことも暗に告げていた。さらに予想通りに中国軍に大きな動きがないので、予定では対馬を奪還するために日本軍が長崎県と山口県から出動するはずだったけれど、金正忠が50%の確率で核爆発するかもしれないといった爆弾が、いまだ対馬にあつて韓国軍が大型民間船に積み込もうとしているところなので完全に対馬から離れてくれるのを待つことにして、同時におこなう予定だった範条の公布を鮎美と鷹姫が生放送で分担して読み上げる。

総理大臣と諸機関

20 総理大臣は国会議員の中から国会の決議で指名され、天皇が任命します。ただし、非常の事態によって国会議員の員数が全体の3分の1以下となる場合もしくは著しく選挙結果における政党の議席数に比して偏りが生じて欠員した場合は、天皇が任意に任命します。

21 総理大臣はその他の国務大臣を指名し、天皇が任命します。

22 天皇は総理大臣が相応しくない者であると判断したとき、民意を鑑み、いつでも罷免することができます。

23 総理大臣の任期は12年とし途中6年目において継続の可否を問うときは各議院の総議員の3分の2以上の賛成で国会が発議し、国民に提案して過半数の賛成を必要とします。

24 国務大臣の任期は指名した総理大臣の任期が終わるとき同時に失職します。

25 総理大臣はいつでも国務大臣の罷免を天皇へ奏上できますが、罷免は天皇が判断しておこないます。また、国務大臣は自らの健康等抜き差しならない事態を除いては、自ら辞任することは慎まねばなり

ません。

26 総理大臣は全体の奉仕者であつて国会議員として選出された地区において、国会議員として失職しても総理大臣たる地位を失わず、また国務大臣も同様です。

27 国務大臣は過半数を国会議員の中から指名することとしますが、非常の事態においては相当な者を指名でき、他の公職と兼務することも可能とします。

28 総理大臣は再任不可とします。この条文を改正するには特別に国民の20分の19の賛成を要します。

29 行政権は総理大臣にあり、他の統治権も総攬します。

30 総理大臣に現役の軍人が就任することは不可とします。また国務大臣の4分の3以上が文民であることを要します。

31 総理大臣は行政権の行使について、天皇と国民に対して責任をもちます。

32 国会は総理大臣が任期を終えたとき、もしくは欠けたとき、次の総理大臣の指名を、すべての案件に先だつておこなう義務があります。衆議院と参議院が異なる指名を行い、律条の定めるところにより両議院の協議会を天皇の御前にて開いても一致しないときは、天皇の判断により任命されません。

33 総理大臣が欠けたときは、他の国務大臣が指名されていた順位に従つて引継ぎますが、新たな総理大臣が指名され天皇が任命されたとき、すべての国務大臣は失職します。また、すべての大臣が欠けたときにそなえ、総理大臣は居所から離れた地方の知事を20名以上順位をつけて指名しておくものとします。

34 総理大臣は議案を国会に提出し、一般国務および外交関係について国会に報告し、ならびに行政各部を指揮監督します。

35 総理大臣と国務大臣は協力して国を統治し、次の事務を行います。一、国務を総理します。二、外交および防衛をおこないます。三、条約を締結し、国会に報告します。四、官僚に関する事務を掌理します。五、予算を作成し国会に報告します。六、この範条および律条の本旨と道理を鑑み、国令を制定します。七、大赦、特赦、減刑、形の

執行の免除および復権を決定します。

36 国令には、すべて主任の國務大臣が署名し、総理大臣が連署することを必要とします。非常の事態においては30日以内まで、いずれかの署名にて有効とします。

37 規律権とは、この範条の範囲にて律条を制定する権限とします。

38 この範条に特別の定めがある場合を除いては規律権は国会にあります。

39 衆議院は立候補制による普通選挙かつ秘密選挙で選出された国民の代表とし、参議院は無作為に選出された国民の代表とします。両議院の定数は選挙規律委員会が律条にて定めます。両議院は選挙規律委員会に要望を提出することができます。

40 選挙人および被選挙人の資格は選挙規律委員会が律条にて定めます。ただし、日本国民を差別してはなりません。

41 衆議院の任期は4年とします。ただし、衆議院解散の場合には終了します。

42 参議院の任期は6年とし、3年ごとに議員の半数を改選します。任期を終えた参議院議員は国民審査を受けた上で再任することができます。ただし、再々任はありません。

43 選挙区、投票の方法、その他の両議院の議員の選挙および地方公共団体の選挙に関する事項は選挙規律委員会が律条で定めます。選挙人、被選挙人は選挙規律委員会に要望を提出することができます、選挙規律委員は紳士に審理する義務を負います。

44 何人も同時に両議院の議員たることはできません。

45 両議院の議員は議会でおこなった演説、討論、表決について院外で責任を問われません。ただし、不規則発言は慎まねばなりません。

46 国会の常会は毎年1回召集します。

47 総理大臣は国会の臨時会を召集できます。両議院は各議院の4分の1以上の要求があれば各議長が臨時会を召集できます。

48 衆議院が解散されたときは40日以内に選挙を行い、選挙日か

ら15日以内に国会を開かなければなりません。

49 衆議院が解散されたときは参議院は同時に閉会となります。ただし、緊急の必要があるときは緊急集会をおこなうことができます。

50 非常の事態によって各議院の員数が全体の3分の1以下となる場合、衆議院においては県知事を、参議院においては県議会議長を国会議員とみなすことができます。ただし、危難が去り公正な選挙がおこなえる準備が整ったときはただちに選挙をおこなわねばならず、遅くとも3年以内に実施しなければなりません。

51 両院の併設を禁止します。非常の事態によって両院が同時に失われることを避けるため、近くとも両院は100キロメートル以上は離れて設置されねばならず、望ましくは300キロメートル以上をよしとします。かつ総理大臣の居所も両院と100キロメートル以上は離れることを要します。また、いずれも標高の高い場所を選定するよう努力することとします。

52 選挙規律委員会は両議院の議員の資格に関する裁判をすることができ、当該議員の議席を失わせるには出席委員の3分の2以上の議決を要します。

53 両議院は、その総議員の3分の1以上の出席がなければ、議決することはできません。

54 両議員の議決は、この範条に特別の定めがある場合を除いては出席議員の過半数を要し、可否同数のときは議長が決します。

55 両議院の会議は公開とします。ただし、出席議員の3分の2以上の多数で議決したときは秘密会を開くことができます。

56 前条の定めにかかわらず報道委員は傍聴できます。ただし、秘密は守らねばなりません。

57 秘密会の議事録は99年以内に公開することとします。

58 秘密会以外の議事録は公表しなければなりません。

59 出席議員の5分の1以上の要求があれば、各議員の表決は議事録に記載しなければなりません。

60 両議院はそれぞれ議長その他の役員を選任します。

6 1 両議院は院内の規則および手続きを定めることができます。

6 2 両議院は院内の秩序を乱した議員を懲罰できます。ただし、議員を除名するには出席議員の3分の2以上の議決を要します。

6 3 律条案は、この憲法に特別の定めがある場合を除いては、両議院で可決したとき律条となります。衆議院で可決し、参議院で異なった議決をした律条案は、衆議院で出席議員の3分の2以上の議決をえたときは可決され、律条となります。

6 4 前条の定めは両議院の協議会を開くことを妨げません。

6 5 参議院が衆議院の可決した律条案を受け取った後、国会休会中の期間を除いて60日以内に議決しないときは、否決されたものとなすことができます。

6 6 両議院はそれぞれ国政に関する調査をおこなえ、証人の出頭および証言ならびに記録等の提出を求めることができます。

6 7 大臣は国会に出席し発言することができます。

6 8 大臣は国会に求められたときは、国務に妨げのない限り出席する義務を負い、欠席するときは副を出席させなければなりません。

6 9 両議院の議員で構成した弾劾裁判所で、罷免の訴追を受けた裁判官を裁判できます。

7 0 裁判権は、この範条に特別の定めがある場合を除き、裁判官もしくは裁判官が行使します。

7 1 通常の裁判は最高裁判所と下級裁判所にておこないます。

7 2 非常時に強い必要性のあるときは総理大臣は特別裁判所を設置できます。

7 3 総理大臣は統治行為にかかわる強い必要性がある場合を除き、裁判所の判決を変更もしくは無視できません。

7 4 防衛大臣は麾下の人員に関する限り軍律裁判を行うことができ、軍律裁判には一名以上の文官の裁判官が裁判にかかわることとします。

7 5 最高裁判所は裁判権に関する規則を定めます。

7 6 検察官は裁判所の規則に従わなければなりません。

77 裁判官は心身の故障により職務をおこなえないと裁判により決定された場合を除いては、弾劾裁判によらなければ罷免されません。総理大臣は裁判官の懲戒処分をおこなうことはできません。

78 裁判員は国民の中から無作為に選出され、裁判にあたる自覚のある者に任命されます。任期は一つの事件ごととし、相当の報酬を受けます。裁判官は判例、範条、律条を超え、道理において判決するとき、必ず裁判員を加えた裁判をおこなうこととします。

79 その他の裁判員に関する事項は律条により定められます。

80 裁判官に関する事項は律条により定められます。ただし、最高裁判所の裁判官は総理大臣が指名し、天皇が任命します。

81 最高裁判所の裁判官は衆議院の選挙にさいして国民審査を受けます。

82 前条の国民審査は10年を経過したとき再審査の対象となり、その後も同様とします。

83 国民審査は投票者の多数が裁判官を罷免することを可とするとき、罷免されます。

84 審査と裁判官の定年に関する事項は律条で定められます。

85 下級裁判所の裁判官は最高裁判所が任命します。

86 裁判官ならびに裁判員の報酬は不当に減額することはできません。

87 最高裁判所は律条、国令、規則、処分等が、この範条と道理に合うか審査する権限を有します。

88 裁判は公開とします。

89 裁判官および裁判員は全員の一致で裁判を非公開とできます。ただし、報道委員は傍聴および記録の閲覧ができます。

90 軍律裁判は防衛大臣の決定により非公開とできます。ただし、30年以内に兵器に関する機密を除いては、記録および証拠を公開することとします。

91 報道委員の任期は5年とします。再任を妨げません。

92 報道委員の存在は民間の報道を妨げません。

93 報道委員は日本放送協会を除いては個人とします。

94 報道委員の定数は100以上とし、それぞれが与えられる予算は選挙による獲得票数と比例することとします。日本放送協会は10年以内に漸次受信料を減額し11年目には受信料を廃し、報道委員としての報酬のみで運営することとします。ただし、他の報道委員と同じく著作権料、広告料、原稿料等をえることは妨げません。

95 報道委員の選挙については選挙人は一人につき3票以上を投じることとします。

96 何人も報道の自由を有します。ただし、何人も何人かの婚姻、恋愛、性的指向、性行為について報道することはできません。ただし、本人が本人の意志に基づいて本人についてのみ表現することは自由です。

97 公務員は公務についてののみ責任をとり、何人も公務員の私生活について報道することはできません。

98 何人も何人かの婚姻、恋愛、性的指向、性的趣味、性行為、衣服に隠れた身体の部分ならびに下着について報道したときは、生じた被害の3倍の損賠償責任を負います。

99 土地処分委員の選挙に関する律条は選挙規律委員会が制定します。

100 土地処分委員は11名以上の合議体で審議し、過半数の賛成をもって決議します。

101 土地処分委員の報酬は前年度の全労働者平均賃金の2倍以下とし、任期は4年とし半数改選とします。再任は偶然に再び選出される場合を除きありません。

102 土地処分委員会は非公開とし、議事録は30年以上公開されず、議事録に各委員の氏名は残らないものとします。

103 主要な道路や交通機関、国の防衛、住民全体にとって重要な施設等のための土地収用は原則として実行され、土地処分委員は対価を決議するのみとします。報道委員は土地処分委員会を傍聴できずが衝立等による遮蔽により、各委員の顔貌および姿を見ることはできないものとします。

104 土地処分委員会に提出された行政機関等が作成した資料は

即時公開されます。

105軍権は国民と天皇、国土を守るため、あらゆる手段と処分をおこなえます。ただし総理大臣と防衛大臣は連帯して、天皇と国民へ責任をとります。

106公務員はすべて相当の報酬をえるものですが、最大でも前年度の全労働者平均賃金の8倍を限度とします。ただし、立候補による選挙を要する職については選挙費用の支給を得票数に応じて落選時もおこない、とくに若年で資産の少ない者が紳士に選挙活動に取り組んだときは手厚く配分することとし、この支給審査は選挙規律委員会がおこないます。

107行政権、規律権、裁判権、選挙規律権、公的報道権、土地処分権、軍権それぞれの職務にあたる者は職務中、現行犯でなければ逮捕されず、訴追されません。ただし、このために訴追の権利は害されません。

108公費に準じる公的医療保険によって収入をえる保険医は、すべての収入を含めた年収の上限を前年度の全労働者平均賃金の5倍を上限とします。また経費の審査は公務員に準じて厳格とし配偶者、家族等への利益の付け替えは禁じ、家族労働についても他の従業員と同様の計算に基づく人件費のみ計上可能です。かつ民間企業経営においても経営層と末端労働者の時間あたり賃金格差を100倍までとし、この計算のもととなる経営層の利益には自社株式によって生じる額も含め、これらの経営調査には地方税官吏でなく国税局が直接にあたります。

読み上げが終わると、鮎美は鈴木と新屋と並び、情勢と各条文について説明する。鈴木が柔和な笑みをカメラに向け、国民に語りかける。

「いきなりロシアと軍事同盟と発表され、驚いている方々も多いかと思えます」

そう切り出しつつ、鈴木は在日米軍の撤退と米国の分裂、さらに日本軍の損失と、損失の回復を早めるため、近隣諸国ではロシアが最適であることを機密に触れない範囲で説明した。次に鮎美が北朝鮮と

の関係の説明する。

「新しい指導者の金正忠代表とは、お互いに年齢が近い、というよりも若すぎる指導者として、気の合う部分も多く、また彼はとても日本語に堪能で、とくに関西弁が完璧ということもあり、うちと話し合ううちに拉致家族の解放も受けてくださり、うちと彼とは、キムヤン、アユミと呼ぶような仲です。ただ、国民の皆様は断っておきますが、前々から私の発言、とくに経済面で社会主義的な部分を感じるというご指摘もありますが、うちは修正資本主義路線であり、自由な競争を尊重しています。ただ、格差の行き過ぎは、いかんということで、さきほど公布した範条の108では収入の格差を100倍までとしています。これは単純には、たとえば年200億円の利益を出す会社があつたとして、そこに社長を含め101人が働いていたとします。このとき社員100人へ払う賃金が平均500万円で合計5億円の賃金やとしたら、残り195億円が社長の収入ですが、ここまでの格差を、いっしょに仕事をしている者でつckerべきでしょうか？ もちろん、創業者である社長の貢献は大きいでしょう。けれど、彼一人では事業は成功しません。その成功と利益に貢献した社員への配分として、末端と頂点で100倍を限度とする。つまり100億の利益を手にするなら、せめて末端へも1億を払ってやりなさい、という道理です。もちろん、こういうことを、すぐに実施することはできませんし、すぐに無理な強制をすると、経済が混乱しますので長期をかけて税制を調整する中でおこないます」

新屋が引き継いで言う。

「芹沢総理が条文108から触れましたが、まずは条文20から順をおつていきましょう。条文20は総理大臣の決め方と、今回のような非常事態で、どうするか、です。たまたま生き残った一人だけの国会議員だった芹沢総理が私たち閣僚の助言も聞いてくださり、様々な事態が起こってもパニックにならない人でしたから幸いでしたが、たとえば少数政党だけが生き残り、与党は壊滅するようなとき、具体的に考えれば、党大会などで少数政党が地方へ出ているときに首都で壊滅的な災害が発生したり、逆に与党が党大会を開いている場で大爆発が

起こるなどのとき、ともかくは天皇陛下にご判断いただこうという条文です。次の21は読んでいただいたまま、そして22は非常事態の場合はもちろん、政治的な安定を目指すため23で総理大臣の任期を長めに取りましたから、逆に来月再来月となって岸沢総理が暴走したときは22が力を発揮します。今すぐ選挙をおこなうべきだ、という声もありますが、そもそも人口さえ把握できていないので有権者の特定など、まだまだ時間がかかります。また県の大半が壊滅状態という県もあり、選挙区の見直しも必要で、ここに来て諸外国とも緊急の対応を要する事態が次々と生じております。そのため大臣がコロコロ変わるというようなことは絶対にさけるべきで、このようになっております」

鮎美が読めばわかる24を飛ばして25を説明する。

「総理大臣の権限が暴走するのをおさえるため25で国務大臣の罷免に陛下のご判断をいただいております。一人二人ならまだしも、気に入らない者を次々と取り替えていくような総理大臣であった場合にストップをかけるものです。また、逆に、ちよつとしたスキヤンダルで大臣が自ら辞めます、と言い出すのも止めています。今までの政治では、ひどいと1ヶ月ほどで辞めている大臣もおられ、それがせめて大金のワイロや巨大な不正ならまだしも、失言だとか、過去の不倫だとか、そういうことでは政治の安定がはかれませんので、簡単に辞めないようにしています。26は地元優先の考えを抑止するものです。これまで大臣になったら地元に必要な利益があるだろう、そんな甘い考えもあつたでしょうし、大臣も応えて道路建設から事業誘致まで、いろいろと地元優先してきましたが、大臣とは日本全体の発展を考える者です。総理大臣が本気で地元を優先し始めたら、ものすごい不平等が産まれますので、それを避けるためのものです。27では従来の考えに加えて、今回のような事態で、防衛の専門家だった畑母神先生や経済に明るい加賀田先生などを引き抜けるようにしています。そして28ですが総理大臣に権限があり任期が長い分、独裁の固定化をさけるため再任不可としています。政治的な安定を考えると諸外国でもフーチン大統領のように長く働かれる方が必要ですし、逆に長す

ぎて、いつまでも、というのも問題ですから、こう決めました。この条文の改正には95%の賛成がいるので、まあ、まず無理です。逆に、そこまで皆さんに求められている人なら、いいかもしれません、きつと無理でしょう」

また新屋が引き継ぐ。

「行政権が29で総理大臣にあるというのは違和感ないと思います、他の統治権まで総攬するには疑問があるでしょうが、よど号ハイジャック事件などで超法規的対応をしたのが司法権、裁判権への干渉ではないか、最近では尖閣諸島中国漁船衝突事件もありますが、こういったやむをえない場合は総理大臣が決めていく、としています。その分、やはり先の大戦で軍部が政治を占めた反省もあり30で総理大臣が文民であること各大臣も多数が文民であることを規定しています。31、32、33はそのままの意味ですが33にある20名の知事を今から発表します。もう無いとは思いますが核ミサイル攻撃や大震災、さらには想定不能の事態、芹沢総理は恐竜を滅ぼした隕石もあげられましたが、絶対に無いとはいえず、現在は小松と金沢、福井に大臣は分散していますので一挙に欠けることは本当に無いとは思いますが念のため、決めております。宮本秘書官、お願いします」

鷹姫が被写界に入ってきて発表する。鮎美には知事で選出できるような者は、もう招いているので、主に石永と久野、鈴木が相談して決めた20名の順位を鷹姫が読み上げた。さらに鈴木が説明を続ける。

「50ですが、富山で立ち上がった議会は身分にバラつきもあり、また政務活動費問題など残念な部分もありましたので、こちらで県知事と県議会議長をあてます。ただ、議長となっている方でも政務活動費で問題が出ている人もおられるので、議会の立ち上げには今少し時間がかかりますが、いざ知事と議長をお願いしますので、日程調整など、ご連絡します。また51で今回の反省を活かし、両院は離します。この候補地も近く発表しますが、関係者への接待など、おやめください。ね。本当に、昨日は可哀想な感じでしたから」

鈴木が静江のことに軽く触れ、鮎美が56を語る。

「報道の自由は本当に大切ですので、前条55で秘密会を規定しましたが、報道委員は秘密会を傍聴できるとします。ですが、すぐさま報道できるわけではなく解除を待ってもらいます。今現在でいえば、北朝鮮から私たちが輸送艦で運んでいた物が何であるのか、どういう必要性があつて、どういう取引があつたのか、今は国防上の秘密につき申せませんが、高い守秘義務をかして知る権利を守っていきますし、次の57にあるよう99年以内には明かします。少し飛ばしますが68で従来は国会に縛られた大臣を国務のために解放します。とくに外務大臣などは海外に出向く必要性があるのに、国会会期中に縛られるのは不合理ですから、副大臣でよしとします。総理大臣の場合は官房長官を副としますが、いずれ官房長官は副総理大臣と改称するつもりです。また飛ばして70で裁判員を範条で明文化しました。そして昨日のような裁判は72で特別に設置しますが、できれば控えたかと思つていきます。とはいえ、あの田熊のような犯罪者が出てきたときは、やはり迅速に裁きます。73でも再び裁判権より統治行為を優先しています。かつて津田三蔵という男がロシア皇太子に暗殺未遂を犯す阪本事件というものがあり、ロシアとの外交関係を大事にした明治政府は裁判所に厳罰を求めましたが、大審院は罪刑法定主義と裁判権の独立を守り、今でも誇りある判決をくだしたとされています。ものの、振り返って総合的に考えたとき、はたして日露双方のためになつたでしょうか。逆に私たちが大切にする皇族が海外で同じく傷つけられたとき、そして言うまでもなく昨夜のような事件で、もしもお傷を負わされていたら、私たちは、どれほど怒つたでしょうか。この阪本事件が、のちのち日露戦争の遠因ともなつていきますし、皇太子は傷の後遺症に苦しまれてもいます。一人の凶行が歴史に与えた影響を考えると、はたして杓子定規に裁判所の独立と罪刑法定主義を守るだけというのも人類の知恵といえるのか、よりよい判断をする余地をつくっておきました。74の軍律裁判とは、いわゆる軍法会議です。これまでPKOなど海外派遣で現地の方を強姦するなどの残忍な事件は無かつたわけですが、今後も永遠に無いと考えるのは見込みとして甘すぎますし、私たちにしても在日アメリカ軍兵士による犯罪

に怒りを覚えていたわけですから、こういった規定も必要です」

鈴木が替わる。

「諸外国でも軍法会議は普通にありますし、むしろ無いと戦犯を裁けません。さて78でプロの裁判官だけでなく市民感覚で裁く裁判員について触れています。ここで言う道理とは、物事の道理ですね。すでに芹沢総理が言っておられました。100億円を悪質に儲けたのに罰金が2億円では、物事の道理に反する、けれど、罪刑法定主義では、それほど高額な罰金は条文に無いから無効、となるを防ぎ、またそれを職業的プロでありつつも世間感覚は乏しくなりがちな裁判官だけで判断しないということ。あと説明を要するのは89で非公開とした裁判でも、報道委員は傍聴できるとした点です。これまで裁判の傍聴は公開のものは自由、席が足りなければクジ引きで、一般の人も報道関係者も平等でしたが、高い守秘義務と責任をもつ報道委員は常に傍聴できるとします。事件によっては配慮も必要ですが、書記官なども同席するわけですから、非公開といっても聴く人はいます。そこに報道委員も加わるわけです。そして、報道委員は国民からの選挙による審判がありますから、自覚が求められます。90で、さすがに軍事については非公開を設定しましたが、いずれ公開されることは規定しました」

再び新屋が説明する。

「まったく新しい制度となる報道委員ですが91にある通り任期は5年で国民からの選挙で信託を受け続ける限り、再任できます。ただ、落選しても個人で報道できますし、そもそも当選しなくても92にある通り報道できます。単に国から予算と報酬がもらえず、また非公開の裁判などに入れないというだけです。93と94でNHKに触れています。国営放送であるNHKは報道委員制度に組み込みます。また長年、国民の負担となっておりました受信料は廃止していきま。あと報道委員の選挙について細かいことは選挙規律委員会が公平公正を旨として決めていくわけですが95で3票以上としておりますのは、報道に偏りが生じないようにするため、報道の多様性を保つためです。一人の報道人に投票するだけでなく、選挙人が信託し

たい報道人を三人以上は選べるように、というシステムです。NHKは、かなりの組織票が見込めますし、受信料を廃止するからといって即時解体といった乱暴なことはしません。むしろ、国民の信託をえて存続しつづける道もあるわけです。さてさて96ですが、誰それがホモであるとか、どういう性行為が好きであるか、といったことは報道の自由と、個人の人権を考えたとき、常に個人の人権が勝るとしてきます。よく石永官房長官がホモであるという、くだらない記事を見かけますが、彼自身は否定していますし、そばにいて彼に同性愛の指向は一切感じませんし、愛妻家です。そもそも官房長官の業務内容について批判されるのであれば報道の意義があるでしょうが、ホモかもしれない、というのは、まったく意義のない、ただの中傷です。政治家や芸能人に対して、これまで有名税といつて人権侵害してきましたが、これを封じます。97にもあるように公務員は公務についてのみ、批判されるべきであり、私生活は関係ありません。さらに98でも明確にしていますが、他人のプライベートな部分について、ほじくり返すことはできません。何人も何人かの、とあるわけですから、私をパンツ大臣と呼ぶのもダメです。……………」

新屋は配信動画を見ている視聴者が大きく反応しているだろうことを予想して長い間をおいた。きつと一部では言論封殺だと憤っているに違いないとも予想している。そして覚悟を決めて続ける。

「実は私は女性の下着には、まったく興味がありません。……………」
また長い間をおいた。軽い笑顔をつくる。

「嘘をつくな！ という全国からの何百万というお声が聞こえてきそうですね、本当です。芹沢総理のパンツをもらったから忠誠を誓っているだとか、そういう根も葉もない噂もあります、彼女のパンツにも、また女性の身体にも興味がありません」

つくり笑顔をやめた新屋は真面目な顔で告げる。

「なぜなら、私はゲイだからです。男性の身体にしか性的な興味を覚えません。男性の下着に興味を覚える趣味ありません」

「……………」

鮎美はこの条文を新屋が説明するにあたってカミングアウトする

ことを事前に聴いていたので領いただけだったけれど、鈴木は少し驚いた顔になり、そしてベテラン政治家らしく落ち着いた笑顔になっておく。

「パンツ大臣と私が呼ばれる理由になった若いころの過ちですが、女性の下着を盗んだのは本当です、そして示談に至っています。なぜ、ゲイのお前がパンツを盗むんだ？　と思われるでしょうが、当時の私は、どうにか女性へ興味がもてないか、いろいろと悩み、いつそ間違ったこととわかっていて下着でも盗めば興奮できるかと思いい、被害女性には大変申し訳ないことですが、犯行に至っています。ただ、まったく興奮できず、後悔と自己嫌悪しかありませんでした。また、私は結婚していたこともありませんが、それも代々議員という家庭に生まれたので、周囲の期待に応える形で結婚しています。子供もできませんでした、子供も愛していますが、私がゲイであることに変わりはありません。男性にしか興味がなく、好みでいうと、やや日焼けしたラグビー体形の人が好きですから、実は石永官房長官が好きだったりします。もう今、言ってしまったので今後は避けられるかもしれませんが、内々での会合などで彼がふざけてチョークスリーパーをかけてくれたりするのはいつの幸せでしたよ」

「あゝ、わかるわ」
鮎美がチョークスリーパーを鷹姫にかけてもらったことを思い出している。

「ゲイの感覚はわからないと思われれば、単純に異性愛の男性が芹沢総理からチョークスリーパーをかけられたらと想像してみてください」

全国の男子が鮎美の大きめの乳房の感触を首筋に感じる想像をした。

「そういうことです。きっと、もう石永官房長官は私にやってくれないでしょうね。あとゲイの私が言うのですから確かですが彼はゲイではありません。そして私がゲイであるとか、官房長官がそうでないとか、そういうことは業務に関係がありません。そういったことを報道して政治家のイメージを落とそうとするのは卑劣です。ゆえに、そ

ういった報道を封じます。もちろん、金銭にかかわる不正や公金のあつかい等について報じられるのは当然です。思い返せば、我々も民主党へ、鳩山総理の贈与税問題について責めかかりましたし、細野議員の不倫問題についても同様でしたが、前者は当然としても後者は少なくとも彼の政策や能力とは無関係であり、怒るのは当事者である奥さんのみでよかったかもしれない」

鮎美が追加する。

「ある政治家がレズであるか、どうかは政策とは無関係です。やのに、ものすごい騒ぎ立てる。こういうことがあるので新屋先生もカムアウトを、ずっと躊躇ってきはりましたし、若い頃に苦悩の試行錯誤として、異性の下着を盗んだりもしてはりますが、それと今現在の業務は無関係です。とくに夕べは由伊様を人質にした犯人グループへの交渉にあたってくれはり、犯人グループが由伊様を解放したのちも運転手を人質にして逃走しようとするのに対して、自ら人質になってくれはり犯人らが舞鶴湾を出るまで付き合いはりました。おかげで無血に事件は解決しています。今後もパンツ大臣と報じるようであれば侮辱罪として逮捕しますし、生じた被害の3倍を賠償させます」

再び鈴木が説明に戻る。

「99からの土地処分委員は読んだ通りですが、103にあるように国の防衛など重要な場合は土地を接收します。さきほどフーチン大統領と芹沢総理が発表されました馬毛島への基地新設も無人島ですが所有会社には、これから選出する土地処分委員が適正と判断する額が支払われます。沖縄には日本軍の基地をおくのみとし外国軍は入れません。最低でも県外、とおっしゃった鳩山総理の言葉を実現しておきます。次に軍権ですが、あらゆる手段を防衛のためにはとれるとします。残念ながら戦争のような緊急時は規則や手続きを優先することはできません、それが道理でもあります。そして106で決めた公務員の報酬限度ですが、最高裁判所の裁判官であれ、大臣、議員、キャリア官僚、例外なく平均賃金の8倍まで、前年度でいえば330万でしたから2640万です。国民の平均があがればあがるほど上昇しますし、さがればさがります。同じように108で公金に近い公

的保険から収入をえる保険医にも上限をもうけ5倍ですから1650万とします。ただ、こういつた改革は性急におこなうと社会が混乱しますので10年ほどかけ、ゆっくりと変化させます。以上です」

説明を終えた鮎美たちは、それぞれの業務に戻り、鮎美は呼んでおいたワンコと貴賓室で面会する。由伊が人質にされたことで今泉らが護衛についてさえ鬼々島においておくのは危険だったし、ヨンソンミヨらも無事だったけれど、他の各地では排他的な死傷事件が起きているし、犯人は大勢とみられるのに目撃証言はなく、捜査はされていない。

「ワンコちゃん、いろいろ振り回して、ごめんな」

「いえ、犬山市にいても、どういう目に遭ったかわかりませんし、護衛がなかったら殺されてたかも」

「……………、いっそ、ヨンソンミヨはんらと同じように難民キャンプで保護しよか?」

鮎美は保護責任があるのでヨンソンミヨら2名は能登の難民キャンプに戻っていた。むしろ日本で襲撃事件がおきなかったのは百名あまりを匿う難民キャンプくらいだった。言われてワンコが淋しそうに首を横に振った。

「いえ……………あそこに行けば行っただ、また私は、よその扱いされます。ヨンさんたちとも、口をきいてもらえなくなりましたし」

「なんでよ?」

「怒った日本人のお爺さんに殺されそうになったとき、とっさに私は言っちゃったんですよ。私は日本人よりの在日韓国人だって、ほとんど日本人です、つて、そしたらお爺さんは斬りつけてこなかったけど、騒ぎがおさまってから、今度はヨンさんたちに裏切り者って思われたみたいです」

ワンコが涙を浮かべたので鮎美は気の毒で胸が痛くなった。

「ワンコちゃん……………」

「どっちからも差別されるって、いったい私ってなんなんだろうって思います。けど、難民キャンプにいる人たちだって日本でもよく思われてないし、韓国へも帰れない……………総理の恋人だった牧田さんもドイ

ツ人とのクオーターだったらしいですね？」

「うん……らしいわ。75%が日本人の血やから、見た目、ほぼ日本人やっただけど」

「私は100%韓国人の血筋なんですけど、見た目は日本人とかわりません」

「……………そうやね……………ワンコちゃん、行くところがないなら、小松基地にいる？　ここなら襲撃はないし……………あ、そや、いつそ、うちの秘書にならん？」

「総理の秘書にですか？」

「そうよ。いろいろあつて2名ばかり欠けたし」

「それは願ってもないことですけど……………」

ワンコは鮎美のそばにいる鷹姫を見る。鷹姫からは差別的な視線や迷惑そうな顔はされない。鮎美が問う。

「ためらう理由あんの？」

「……………これだけ日本中で、そして韓国の方でも、在日や在韓の人が襲撃されてる中、総理の秘書に在日っていうのは……………」

「うちは多様性を受容する世界にしたいんよ。今、さすがに各地の在日襲撃事件を起こした日本人の犯人を徹底捜査して厳罰に処すってことは反感が大きいかから無理やけど、ワンコちゃんが秘書になつてくれたら少しは抑止にもつながるかもしれないし。とくに、ワンコちゃんみたいな、ほぼ日本人より、つて在日なら、それは、やっぱり日本人やろ。大震災があつても戦争があつても日本に居続けたんやし。逆に、大震災と戦争で向こうに帰ったり、向こうで様子見してる人は、やっぱり軸足が、そつちにあるんやろし。差別を無くしたいとは思つても、戦争中の敵国人っていうのは、どうにも扱いに困ったもんでもあるけど、それだけにワンコちゃんが秘書になつてくれる効果はあると思うよ」

「……………では、一つ、お願い聴いてもらえますか？」

「ええよ」

「私、帰化しますから、名前をください。総理の命名で」

「うちの……………」

「ダメですか？」

「いや、ええよ。……名前……。うちは子供を産むつもりはなかったから命名とか考えたことなかったけど……えくつと……」

鮎美が考える。

「犬っぽい名前がいい？」

「いえ、脱イヌでお願いします」

「脱イヌでかあ……。ほな、鷹沢美姫（たかざわみき）は？」

「……そんな立派な名前をもらってもいいんですか？」

「立派っていうか、ちよい混ぜただけやん」

明らかに芹沢鮎美と宮本鷹姫を混交しただけで、あまり考えた名前ではないので鮎美は恥ずかしかったけれど、ワンコは喜ぶ。

「ぜひ、それで！」

「ほな、そうしよ」

「ありがとうございます」

美姫は喜びながら新しい名前と陽湖が残していった議院記章を受け取った。しばらくは見習いとして鷹姫の後ろにつく。鷹姫は義仁と鮎美が会う場所と時間を調整し、京都と小松の間にあつて、緊急時にどちらも1時間程度で帰ることのできる余呉湖畔にある国民休暇村施設を選んだ。そこで二人に同室で一泊してもらうつもりである。

「明日のご予定ですが陛下への政情の報告後は……」

同室で泊まってもらう予定であることを黙っていると、鮎美が怒るのは目に見えているので正直に話した。

「……鷹姫……。そんなに、うちと陛下に結婚してほしいのん？」

「はい」

「……うちが同性愛者やって理解してくれてるのに……」

「皇統の存続は差し迫った課題です。陛下のお気持ちが向けられている女性は、これに応じるべきです」

「……そら、たしかに、うちにも子宮はあるけど……もつと、良家のお嬢さんとかの方がええんちゃうの？ 公家とか武家とか、大企業の令嬢とか、うちより、むしろ鷹姫の方が血筋は確かやろ。代々続く剣道

場で1000年前から家系図あるらしいやん」

もともと鬼々島は源平の合戦での敗者が逃げ込んだ島なので、全島民が武家筋であったし、以後は戦火も空襲もなく寺に過去帳は長く残っていて鷹姫の家は源氏だった。

「私の家は源氏とは名ばかり、みやもと姓も、みなもと姓からくだったものです」

「いや、十分に確かすぎる血筋やろ。うちは、ただの平民よ」

「芹沢総理の血筋は宮内庁が調べております。さきほど、報告があり素晴らしい家系であると判明しました」

「……………うちの家の戸籍は大阪とともに流れたと思うけど？」

「それ以前に自民党の議員先生方が、セクハラ写真訴訟を起こしたときにお父様の玄次郎様に頼み、出自を調べていたそうです。そのときは偏見から朝鮮系か、被差別部落の出ではないかと。ですが、逆に確かな血筋であることがわかったそうです」

「マジで?! うちの家って、どんな家なん?」

「芹沢家が大阪に移られたのは明治以後で、それ以前は静岡にいらしたようです。山寺に記録があり、古くは1193年、駿河の芹澤茂幹が初代であり鎌倉幕府に仕えています。秀吉の小田原征伐のさいには芹澤国幹が芹澤城で抵抗している記録があり、家康に芹澤通幹の代から仕えており、新撰組の初代局長であった芹澤鴨も係累です。そして初代茂幹の父は多気義幹であり、多気氏は常陸の国、多気権大夫が始まり、それ以前は平繁盛、平高望であり賜姓皇族です」

「……………うちは平氏やったんや……………鷹姫は源氏で……………」

「平氏の祖は桓武天皇です。つまりは十分な良家であり、再び姓を昇華され皇家へ嫁ぐにふさわしきお方です。もはや運命といえましよう」

鷹姫の目が輝いている。鮎美は引いた。鷹姫から強いオーラを感じる。もともと大好きだった歴史と、自分が仕えている鮎美がリンクしているのと知り、かなり興奮している。そして皇統の存続という命題にも熱い想いを抱いているし、由伊の身に危険があったことで、それは日本中の共通認識ともなっている。鮎美がロシアと同盟を組んだ

ことで外患は去り、あとは対馬での局地戦があるくらいで、残っている重要な課題は15歳の義仁と7歳の由伊しか皇族がいない、ということだった。由伊が安全に出産できるのは10年後になるし、やはり男系が好ましい。これまで多くの問題を解決してきてくれた鮎美に、あと一頑張りしてほしい。とにかく皇統の子供を増やして欲しい、という圧力を鮎美は下腹部で感じた。

「いや、源氏も平氏も、どんどん子孫を増やしたよろし、そこらに、いっぱいおるやろ。きつとDNAとか調べたら、ばんばん出てくるで。うちが言う良家のお嬢さんは、もつと上品な感じでの話よ。こんな下品な関西弁の女あかんで」

「お言葉は状況に合わせて使い分けていらつしやいます。宮内庁の方でも、同性愛者であるということ当初は懸念されていましたが、同性愛者の子が必ず同性愛者になるわけではないという認識もあり、また芹沢家の出自が判明したことで、ご結婚を望む声もあがってきております」

「え〜……」

「それに何より陛下のお気持ちが大切です」

「……………うちの気持ちは？」

「……………どうか、ご理解ください。今夜、私の身を捧げます。私の身体をすべて完全に。ですから、それを最期に、あとは国のため耐えてください。私も一生、草と虫を食べて過ごします」

「それ、たぶん、半年もせんうちに二人とも精神の病気になると思うわ」

「いつしよに耐えますから」

「あんた夜中に寝言で、ご飯、ご飯、言うてるよ。うち夕べ、当直やった三井はんにコンビニまで走ってもらったもん。鷹姫にオニギリ食べさせるために。あんた寝惚けてたから覚えてないやろけど五つもペロつと食べて寝たんよ？」

「……………あれは夢では……………なかったのですか……………」

「無理やって。現代の食生活に慣れたもんが、これから一生、草と虫なんて。すでに夢遊病に近いよ」

「……………いいえ、耐えます。今夜から自分を縛って眠ります。ですから、どうか、いつしよに欲望に耐えてください」

「……………そういう苦楽をともにするのは……………やっぱり人間に快楽は必要よ」

鮎美はベッドサイドにある小壺から自分の手のひらへシロップを注いだ。輝いていた鷹姫の目が曇り、別の光りを宿す。理屈で求める至高の目標から、純粋な欲望に色合いが変わる。

「鷹姫、舐めてみ」

「……………いえ…もう…」

「今夜が最期やと思つて、舐めてみ」

そう言われると鷹姫は、鮎美の手を舐めていた。一度舐め始めると止められない。

「なあ、鷹姫、この甘さが最期でええの？」

「……………はい…一生、耐えます」

「う〜ん……………」

鮎美が考え込む。鷹姫は断言したけれど、お腹はつらそうに鳴いている。

「たしかに皇統の存続は課題やけど……………女なんて、いっぱいおるやん。よりによつて同性愛の、うちでのうても……………」

「新屋先生もそうでしたが、他にも同性愛者であつても結婚して子供をなしている人々は多いようです」

「……………まあ、子供は可愛いやろけど……………だいたい皇族なんて窮屈すぎるし……………陛下のお母さんかて民間から嫁いで、心の病気になるはつたやん。男の子が生まれて、やつと安定しはつたけど……………だいたい、うちらが公布した範条でも、総理大臣と天皇の結婚なんて想定してないし……………権力が合体して、ごちゃごちとなるやん。うちは総理大臣を辞める気はないよ。少なくとも同性婚制度が安定するまでは。異性愛者に多数決で改変されんように」

「総理大臣の任期に終わりはありますし、皇妃と総理大臣の兼務を禁止する条文はありません」

「道理に合わんことない？」

「結婚の自由は最大限に尊重していくはずです」

「……うちの自由を奪っておいて、それを言うか？」

「どうか、お願いします」

鷹姫が土下座に近いほど頭をさげてくる。鮎美は問うてみる。

「ほな、鷹姫は、うちが誰かと結婚しろって命じたら結婚する？ あんたの結婚の自由も奪われても文句ない？」

「はい。人に強制したのですから、その道理があつてよいかと思いません」

「あんた、もともと許婚OKな人やもんなあ……けど、外国人やつたり、もしかしたら、男でなく女と結婚せい言うても結婚する？」

「はい」

「………そこまでして、うちに陛下との結婚を求めるんや……」

「お願いします」

「はああ………」

しばらく悩んだ鮎美は再び問う。

「鷹姫」

「はい」

「ホンマに、うちが陛下と結婚したら、あんたは誰とでも結婚するね？」

「はい、二言はありません」

「わかった。そうしよ。あんた、今から、もう草と虫のご飯はやめい。ちゃんと栄養のあるもん食べい」

「ですが……」

「ええねん、結婚の方を強制するから。うちの言う通りにしてもらいな」

そう言った鮎美は新たな計画を鷹姫に語り、範条の一部を書き加えた。

3月31日 新婚

復和元年3月31日木曜朝、貴賓室で目覚めた鷹姫と鮎美は、いっしょに朝食をとると義仁に会うため出発する準備をする。外交関係の密約や他の政情を報告し、範条を公布施行するという名目だったけれど、最大事は義仁との結婚だった。

「おはようございます」

麻衣子と美姫が入室して挨拶してくれたけれど、美姫の目が赤くて泣いていたような気配があったので鮎美が問う。

「ワンコ…美姫ちゃん、どないしたん？」

「はい、ぐすつ…」

「何か嫌なことでもあった？ 誰かに在日やからって嫌がらせされた？」

「いえ…違います。嬉しくて…」

美姫は早朝に届いた書類を鮎美に見せて説明する。

「こんなにすぐ帰化の申請が通って、新しい戸籍をもらえました。総理の秘書官の身分証も」

書類には李王娘という名から日本名の鷹沢美姫となつて日本国籍と戸籍が付与され、加えて総理大臣秘書官としての身分証も作成されていた。静江の秘書としての立場が曖昧だった反省もあり、昨日のうちに担当官僚へ急いでもらうよう頼んだのが奏功したようで、強引な要請をしてはいなかったけれど、官僚たちが首相案件として忖度してくれたようで仕上がってきていた。

「よかったやん」

「はい、ぐすつ…ああ、よかった…嬉しい…」

「そんなに泣くほどのことなん？ それやったら、もつと早くに帰化申請したら、よかったんちゃうの？」

「ぐすつ…私の父と母は正規の結婚をしていなかったんです。父には前妻がいて離婚が成立していなかったから。そのうちに私が産まれて、婚外子として父親未定のまま…だから、こんなに早く申請が

通るなんて夢みたいです。もしかしたら、却下されるかもって覚悟してたくらいだから」

「そうやってんや……いわゆる愛人の子ってやつなん？」

「はい、そうです。だから、いつたい私って何なんだろうって……国籍は韓国で、韓国のことも思い入れはあるし、日本も好きで、どっちつかずで……父親も、いつしよに暮らしてるのに、法的には本当の父親じゃないみたいな扱いで……だから、私、いつそ新しい土地で頑張るって決めて犬山市のローカルアイドルを目指したんです」

「ごめんな……うちがプロパガンダに使ったから、さんざん叩かれて」

ヨンソンミョらと作成した動画は鐘留が発信元を特定できないようにしていたけれど、ワンコが日本のアイドルであることと、ヨンソンミョも韓国でユーチューブでアイドルを目指していたことから、結局は特定されてしまい、日韓双方のネット民から叩かれていた。

「いえ、今度こそ再出発しますから」

そう言う美姫は昨日のうちに茶色く染めていた髪もベリーショートに切ってしまい、アイドル的なフワフワとした私服ではなく、秘書官らしいパンツスーツを着ている。メイクもアイドルメイクからビジネスメイクに変えているので、これで氏名まで変わると、もう特定される心配はなさそうだった。鮎美は耳が丸出しになっている美姫のベリーショートを見て朝槍を思い出し、つい美姫の耳へ触れた。

「やんっ…、く、くすぐったいですよ。いきなり何するんですか？」

「ごめん、ごめん、つい可愛い耳やから、つい」

「もおっ…」

「芹沢総理、それはセクハラです」

鷹姫が注意してくる。

「あなたが男性であれば問題になった行動です。慎んでください」

「…はい……」

そう言われると反論がない。男性総理が新しい女性秘書官の耳へ、可愛いから触った、というのは国会で追及されれば痛すぎる行動だった。さらに麻衣子も言う。

「だんだんと慣れてきたけど、私にも触るよね。油断してると、さりげなく匂い嗅いできたりするし」

「……不徳のいたすところですよ……」

「芹沢総理、性的な欲望の対象にするのは私だけにしてください。問題になると、やっかいです」

「……………」

鷹姫からは嫉妬は感じない。本当に純粹に鮎美の保身だけを考えている顔だった。

「私一人では、ご不満ですか？」

「ううん、十分よ。ごめんなア」

鮎美が鷹姫に抱きついてキスをする。少しキスが巧くなってきた鷹姫も受け止め、欲望を発散してもらった。鮎美が理性的な目で美姫に言う。

「これからは愛人の子なんて言われ方のない社会にするし、安心して」

「はい？ はい、期待してます」

意味がわからなかったけれど美姫は期待した。鮎美なら何でもやってくれそうな気がする。鮎美は貴賓室のバスルームへ向かっていく。

「うちはシャワーを浴びてくるわ。鷹姫も、あとで浴びい」

「はい」

いつもは朝シャワーなどという優雅なことはしないけれど、今日は義仁に会うので身支度は重要だった。鮎美がバスルームに消えると鷹姫は美姫へ問うてみる。

「鷹沢さん、あなたの性的指向は何ですか？」

「え…………？ あ、はい、普通に男性を好きになりますよ。韓流スターも日本の男性も」

「女性に誘われたら、女性との性行為をしますか？」

「う〜ん…………考えたことないけど、…………まあ、状況によっては、ノリでやっちゃうかもしれません」

「そうですね。では一つ言っておきます。芹沢総理のご寵愛を受ける

のは私だけです。あなたは誘われても断りなさい。許しません」

「……はい……そうします……」

「大浦さん、あなたの性的指向は何ですか？」

「ガチ筋肉系だよ」

「……？ それは男性のことですか？」

「うん」

「女性に誘われたら、女性との性行為をしますか？」

「しません」

「これからも、そうしてください」

「……………」

麻衣子と美姫は目を合わせて、しっかり予防線を張られたね、と意思疎通したし、別に鮎美と性的な仲になりたいとは一切想っていないので異議はなかった。

「鷹姫、おさきい」

鮎美が裸で出てきたので鷹姫もシャワーを浴びて身支度する。きつちりと制服を着ていく。

「この制服も今日で最期ですね」

「そやね」

いつまでも女子高生総理と秘書官ではなく、明日からはスカートスーツを着るつもりで準備もしてある。

「ほな、美姫ちゃん、大浦はん、あとよろしゅうね」

「はい、いつてらっしやいませ」

「いつてらっしやい」

美姫と麻衣子において余呉湖へ向かうため、鮎美と鷹姫は小松基地を出る。護衛は厳重で二度と由伊のように襲撃されたりしないよう装甲車が何台も同行しているし、鮎美たちが乗るのは防弾リムジンで昨日、イギリスから空輸されてきたばかりのロールスロイス社製だった。鷹姫が質感を確かめるように窓ガラスを手の甲で叩く。分厚い窓ガラスは開閉することができない固定式でロケット砲の直撃にも耐えるらしかった。

「大丈夫そうですね」

「これ、アメリカ大統領の専用車と同じやろ。めっちゃ高かったやろに」
「総理の命にはかえられません。支払いも英国政府の好意で猶予して
くださるそうです」

戦車並みの防御力があるので車内は静かで外の音が入ってきにくい。小松基地を出た防弾リムジンは北陸自動車道へ入るために安宅スマートインターを通ろうとした。インター近くで減速したとき、隠れていた者が飛び出してきた。小松基地の周囲は用事なく立ち寄ることは禁止されていたけれど、インター封鎖などはしていなかった。人の出入りは可能で、待ち伏せていたらしく鮎美たちが乗る防弾リムジンに駆けてくる。何か封書をもって直訴しようとしている気配だったけれど、由伊への襲撃事件があったばかりなので、防弾リムジンの後方を走っていた装甲車上部の機銃主は接近される前に発砲していた。

ジジツ…

防弾リムジンの車内には発砲音は大きくは響かなかつた。

「なにやろ？ う…」

運転手は停車せず、むしろ加速したので鮎美と鷹姫はシートに身体を押しつけられた。防弾リムジンは高速インターのゲートバーに衝突してでも止まらずに進む。危機を脱したと確認できるまでは非常時の運転を続けた。

「なにやってんろね」

「高木さんに訊いてみます」

鷹姫が隊長をしている高木に問い合わせると、急に防弾リムジンへ駆けよる人影があったので射殺して事なきを得た、とのことだった。

「いきなり射殺なんや」

「現状を考えれば当然かもしれません」

「そやね。また爆弾でも持ってたら大変やもん」

鮎美たちの車列が南条サービスエリアで休憩する頃になると、鷹姫がもっている情報端末には詳細な報告があがってきた。急に駆け

よってきた人影の正体は北砂夕子という天王寺星光高等学校の生徒だった17歳の女子で、手紙を鮎美へ渡そうとしていたようだった。

「……………禁じている直訴を……………いつたい何を請願するつもりで……………」

鷹姫に送信されてきた情報には手紙の内容もあり、目を通した。読み取るに以前、鮎美と大阪で交際していた時期があり、こじれて別れたけれど、津波で母も父も喪い、困っているので助けてほしい、という内容だった。

「そういう個人的なことは……………」

これに似た請願は多い。鮎美の遠い親戚だった者や小学校、中学校の級友などで津波から助かったけれど家族と家をなくした者や、たまたま大阪におらず津波の難を逃れた者らからも、今の鮎美の地位なら助けてくれるかもしれない、と期待して手紙やメールが来る。

「際限がない……………」

鷹姫にさえ同じような請願が来ていて、まったく覚えていない剣道合宿でいっしょになった他校生や、過去の対戦相手から来ているらしい。それらは他の国民からの請願と同じ扱いとしていて、他の被災者と平等な取り扱いしかしていない。特別扱いは不平等だったし、きりがないので秘書官のレベルにさえ届かず、発足したばかりの復興庁が担当し、他の被災者と同じ扱いしかできないという返答をしている。れる。

「……………せつかく助かっていた命を……………愚かな……………」

ただの級友ではなく、交際関係にあったことで夕子は強い期待をしたらしく、担当課からの返答に不満をもち、直訴に来たのだと思われる。鮎美の動向は極秘ではあるけれど、だいたい小松基地にいたことが公然の事実だったし、本日は昼過ぎに義仁と範条の残りすべてを公布し即日施行するので、鮎美が小松基地から出ることは少し賢い者なら予想できたのかもしれない。鮎美の車に駆け寄り、顔を見せれば、鮎美も反応したかもしれない。けれど、現状は厳しく、たとえ若い女子に見えても、何を持っているかわからず、由伊への襲撃事件もあつ

た直後なので鮎美の護衛にあたるゲイツは迷わず発砲したのだった。

「鮎美が気づく前にことが済んでよかった……けれど、これを知れば、また深く悲しまれてしまう……」

自分に置き換えてみても、古い知人が自分を頼って直訴に来て射殺されたと知れば悲しいし、まして鮎美の交際相手だったとなると、やっと詩織の死から立ち直ってくれているのに、また沈んでしまうかもしれない。これから義仁と会う今、絶対に避けたかったので鷹姫は高木と話し合い、ちょうど夕子が未成年ということもあって、発表せず名前も記録から伏せていくことにした。その方向で進めたとき、鮎美がサービスエリアの多目的トイレから戻ってきた。女子トイレにゲイツは入れないし、最高レベルの警戒をしているので鮎美は用を足すときでも8名のゲイツといっしょだった。男性への羞恥心は少ないとはいえ、さすがに排泄行為のとき近くに人がいるのは恥ずかしいらしく少し赤面した顔をしている。

「鷹姫、さっきの襲撃の詳細わかった？」

「単独犯によるもので、ささいなことです。お忘れください」

「アホな奴もおるもんやね」

鮎美が詳細を知ることとはなく、防弾リムジンは北陸自動車道を進み、余呉湖湖畔に到着した。琵琶湖と違い、対岸が見える小さな湖で、ほぼ円形だった。人家が少なく護衛もしやすい。鮎美たちが泊まる国民休暇村施設は余呉湖に面し、背後は山なので、とても静かだった。

「すぐそこが賤ヶ岳やね」

「はい。秀吉と勝家が戦った地です」

「ここで陛下と会うことにした理由は、それ？」

「いえ、中間地点であることと、この余呉湖には天女降臨伝説があります」

「天女？」

「はい、天女が降り立ち、水浴びをしていたところ通りかかった男が羽衣を手にし、困った天女は男と結婚し、その子孫が菅原道真公となっ

たという伝説がある地です」

「…………困ったから男と結婚て…………道真公のオヤジさんもエロいなあ…………」

「天女伝説がある地で、陛下とお結びになられるのが良いかと想っております」

「…………うくん…………やや不遜な気もするけど…………まあ静かやし、ええかな」

「不遜さをカバーするためにも、他にも伝承があります」

「どんな？」

「すぐ近くの山中に在原という里があります。そこは在原業平が辿り着き、晩年に暮らしたという伝承があるのです」

「伊勢物語の？」

「はい」

「で、どういう関係が？」

「清和天皇は藤原高子を女御として迎え、のちに皇太后としますが、高子は入内する前、在原業平と恋人関係にあったとされているのです。日本の文化では妃の処女性について寛容な部分があり、以前に恋人がいてもよしとされることもありました。そういうことです」

「ああ、つまり、詩織はんと結婚したと宣言した、うちでもOKやと？」

「はい」

「不遜に不遜を重ねてる気がするけど」

「これからする鮎美の提案こそ不遜すぎます」

「OKしてくれはるとええけどね」

「……………」

鷹姫は湖畔を見つめ、残雪があるのに気づいた。もう三月も末だというのに雪が残っている。余呉湖周辺は県内で有名な豪雪地帯であり真冬には2メートル降ることもある。その雪が日陰には残っていたし、山のおかげで日陰が多い。

「キレイなところやね」

「忘れては夢かと思ふ思ひきや雪踏み分けて君を見むとは」

「……………意味は？」

「ふと忘れて夢なのではないかと思えます、思いもしませんでした、雪を踏み分けて、あなた様にお目にかかることになろうとは、です。おそらく、この状況で出る可能性が一番高い歌です。覚えておいてください。全体としては出家した高貴の人に以前仕えていた者が雪を踏み分けて会いに行き、懐かしむのですが、都での仕事があり、泣く泣く帰らねばなりません。恋の歌ではありませんが、出家ではなく出世しすぎて総理大臣と天皇では結婚しにくいことと、出家という世俗を超えていくことを、同性愛者という手の届きにくい存在にかけていわれる可能性もあり、また、お互いに仕事のためには京と小松へ帰らねばならぬ身ですから、よく合います。そしてこれは伊勢物語に出てくる歌です」

「……………懐かしいわあ……………」

「なにがですか？」

「センター古文の出題傾向とか解説されてるみたいやなって」

「……………まじめに言っているのですよ。あ……………」

鷹姫は美姫から電話を受け、韓国の趙舜臣が演説を配信していると知らされ、タブレット端末で配信動画を見ることにした。生放送での配信であり、趙舜臣がアップで映っている。涼しげな切れ長の目をした美男子で軍人にしては珍しい長髪だった。階級章が昇進を自ら決定したのか、鷹姫にも鮎美にも詳しくはわからないけれど少将くらいに見える。

「いい体格をしています……………オリンピック候補だっただけのことであるのでしょ？」

「そうなんや？ なんの競技で？」

「たしか、乗馬と射撃だったはずですよ」

「まあ、軍人やと射撃練習は有利やわな」

演説が始まった。日本語と英語の字幕が入る。

「日本軍ならびに北部朝鮮の兵士に告ぐ！ 我々は大韓民国！ いわゆる朝鮮戦争と呼ばれた朝鮮統一戦争の休戦協定が偽りのものであることは、誰の目にも明らかである！」

「そやね」

「核攻撃されましたから」

「なぜならば、協定は大韓民国を騙る売国奴によって結ばれたからだ！」

「そういう言い方もあるかもしれないね、李承晩大統領は協定を不服として調印式に参加してはらへんし」

「米ソの都合で、とりあえずの終了なのですから、朝鮮民族としては不服でしょう。関ヶ原の合戦をやらずに終えるようなものです」

「我々は些かも戦いの目的を見失つてはいない。それは間もなく実証されるであろう。私は日々思い続けた。朝鮮民族の統一国権確立を信じ、戦いの業火に焼かれていった者達のことを」

「いつまでも民族分断なんかは気の毒やね」

「大国の都合とはいえ、不憫なものです」

「そして今また、敢えてその火中に飛び入らんとする若者のことを！」

「まだ、やる気なんや」

「不屈の精神は立派なものです」

「朝鮮民族の心からの希求である統一国権成立に対し、日本がその卑劣な軍事力を行使して、生まれしその芽を摘み取ろうとしている意図を、証明するに足る事実を私は存じておる」

「うちら日本は関係ないやろ、アホか」

「言いがかりです」

「見よ、これが我々の戦果だ！」

「……………」

アップで映っていた趙舜臣からカメラが引くと、趙舜臣の背後に核爆弾が映った。鮎美が金正忠から受け取ったけれど、由伊を人質とされたので、やむをえずに対馬とともに引き渡した核爆弾だったし、さらに背後には羅老号というロケットまで映る。対馬から半島へ運び込んだようだった。羅老宇宙センターは日本が種子島宇宙センターをなるべく赤道に近い位置へ造ったように朝鮮半島の最南部にあるので対馬からの搬入は速かった。

「この核兵器は核攻撃を目的として開発されたものである」

「そのまんまやん。それ試作品やけどな」

「直訳ですから、おかしく感じるのではないでしょうか、韓国語では、それなりの響きがある言い回しなのかもしれません」

「平和憲法違反のこの核兵器が、秘かに北部朝鮮から運ばれていた事実をもってしても、呪わしき日本の悪意を否定できうる者がおろうか！」

「まあ、善意で取り寄せたわけやないよ。撃つ気はなかったけど、お守りに」

「くっ…趙舜臣、李舜臣の亡霊が！」

呪わしきという言い方を鮎美は聞き流したけれど、鷹姫は鮎美を侮辱されたように感じて怒り、吐き捨てるように言った。

「省みよう。なぜ朝鮮統一戦争が勃発したのかを！なぜ我々が大韓民国とともにあるのかを！我々は58年間待った。もはや、我が軍団に躊躇いの吐息を漏らす者はおらん。今、真の若人の熱き血潮を我が血として、ここに私は改めて日本軍に対し、宣戦を布告するものである」

「なんで、こっちに來るねん?!」

「……………この生放送を金正忠も見ているとしたら……………」

鮎美と鷹姫は核爆弾が遠隔で起爆できることを思い出していた。

「かりそめの平和への囁きに惑わされることなく、繰り返し心に聞こえてくる祖国の名誉のために、ジー…」

画面が真っ白に輝き、次の瞬間に真っ黒になった。鮎美と鷹姫の脳裏に起爆スイッチを握った金正忠が満面の笑みでスイッチを押しているだろう光景が広がる。

「……………怖……………一歩間違ったら、うちが、ああなつてたかも…」

「趙舜臣……………戦場でなく、このような策略で最期を迎えるとは……………不本意だったでしょう……………」

しばらくすると畑母神から電話が入り、核爆発は観測されず趙舜臣は生死不明、もともと羅老号は1号と2号が打ち上げに失敗してお

り、3号機は未完成だったので脅威ではなかったけれど、これで完全に脅威が消えたことと、趙舜臣の演説開始と同時に対馬へ配備されていた15両の自走砲から壱岐島へ砲撃があったものの、短時間で終わったと報告された。さらに新屋からも報告が入り、福井県の芦原温泉にある観光案内センターで人質を取るテロがあり、韓国人と思われるテロリスト2名が係員を人質にして、壱岐島からの日本人退去と領有権を要求する事件があったけれど、傷心旅行で居合わせた介式と前田が取り押さえて事無きをえたし、テロリストは銃や爆弾はもっておらず包丁と手斧だけでの犯行だったと報告された。

「同じパターンで壱岐島まで狙うんや……」

「一度は成功しましたし、核兵器とロケットが自分たちにあると見せつけられれば、こちらが脅威に感じて譲歩させやすいと見込んだのでしよう」

「策としては、ええね。うちらにはN友の会と、ロシアがついてるけど、壱岐島も攻め取れるかと思ったんやろ」

「……卑怯です」

「策とは、そういうもんよ。うちも対馬に罫を仕掛けたし」

「八岐大蛇の故事を思い出します」

鮎美は対馬の住民に退去してもらうとき、家の前にビールや日本酒、焼酎などのアルコール飲料を置いてもらい韓国語で、個人の財産には手をつけないでください、お願いします、とメモを貼りつけるように依頼していたので、だいたい住民が実行していてくれる。

「うまくいけば、あの酒類は家を荒らさんといってください、というお願いの対価やと思いで、勝手に呑むやろ。そしたら、調印書違反の個人の財産に手をつけたことになるし、ついでに酔っぱらってくれたら最高や」

「素晴らしい策だと思います……なぜ、芹沢総理の策は素晴らしいと感じるのに、趙舜臣や金正忠の策は卑怯だと感じるのでしょうか……」

「そんなん、自分らの立場でいくらでも変わるやろ。韓国の立場で見たら、日本なんて難民船は追い返して転覆させるわ、裏で金正忠から

核兵器もらうわ、ロケット砲を贈るわ、最悪やん。あのロケット砲、きつと韓国軍に向けられるよ。うちが韓国軍兵士やったら芹沢鮎美なんか百万回強姦して一万回殺したいと思うわ」

「……………身辺警護を強化させます」

「もう十分やつて。けど、長距離ミサイルはどうなんやろ、ここ？」

「もはや北朝鮮にはミサイルが無いと思われますし、韓国も同様ですが、中国軍にはありますので念のため、ミサイル防衛は展開させていただきます」

「うちと陛下が移動するし、わざわざ余呉湖付近にも？」

「いえ、もともと山の向こうは敦賀で原発が林立しており、明後日から燃料節約のために発電もおこなわれますので、この付近にもミサイル防衛は展開されていきます。それも選択肢に入れた理由です」

「鷹姫は優秀やね。おおきに」

鮎美は愛しげに鷹姫の髪先を指で撫でた。もうポニーテールにはしていないけれど、日本人形のような髪型も可愛くて好きだった。

「間もなく陛下がお着きになります」

「あ、車列が見えてきたね」

見通しがよいので湖岸の道路を走ってくる車列が見える。やはり義仁が乗る皇宮車両も前後に装甲車が多数ついている。離れた上空をへりさえ飛んでいた。鮎美たちの前に皇宮車両が停車し、義仁がおりてきた。

「由伊を助けてくれて、ありがとう。鮎美さん」

開口一番に義仁は襲撃事件解決の礼を言った。

「いえ、うちは情けなくも、すべての要求を飲むと決めただけで、ホンマに頑張らしたのは現場に駆けつけ、調印書を渡して犯人グループを説得して、自ら代わりの人質にまでならはった新屋先生です」

「鮎美さんの決断があつてこそです」

福井県に近い余呉湖は、まだ寒いので施設に入る。警備は鷹姫と宮内庁職員が話し合っており、陸軍が施設周辺、ゲイツが施設敷地内、皇宮警察が施設内を担当するので、屋内に入るとものものが減り、長年皇族の警備をしてきた皇宮警察は気の休まる雰囲気を保つてく

れる。

「陛下、芹沢総理、こちらへどうぞ」

鷹姫が宿泊予定の部屋へ案内する。国民休暇村なのでグレードの高い部屋でも、ただの落ち着いた和室にすぎなかったけれど、もともと皇室は地方に出たときでも、それほど豪華な部屋に泊まっているわけではないので、警戒が厳重であること以外は、日常的な雰囲気だったし、皇宮警察は室内の安全を事前に確認していたので三人だけとしてくれる。眺望がよくて余呉湖が見渡せる窓際の安楽椅子へ義仁と鮎美を案内し、コーヒーターブルを挟んで対面してもらおう。鷹姫はそばの畳に正座して、二人へお茶を淹れたし、二人から勧められたので三人で飲む。

「ほな…いえ、では、これまでの政情を以前に報告させていただきました続きから述べます」

「うん、聴こう」

鮎美が内政や外交、とくに北朝鮮から譲り受けた核兵器のことや密約、ロシアとの関係など報告すべきことを述べていくし、鷹姫はそばで資料などを呈示する。いろいろと説明していくと、それだけで3時間かかった。

「勝手に核兵器なんか入れて、すみませんでした。そのせいで由伊様が襲撃されることになったようなもんですし」

「過ぎたことです。むしろ、鮎美さんの頑張りがなければ、中国とも、どうなっていたか」

政情報告が終わると、やや遅い昼食を三人で食べる。もともとの予定では、ここで鮎美と義仁を二人きりにする予定だったけれど、予定を変えて鷹姫も陪席した。余呉湖で獲れたワカサギの天ぷらや敦賀湾からの刺身などを食べて歓談し、かねやの湖北店から取り寄せた糸切りクッキーとシャーベットのデザートを楽しんだ後に、鮎美が切り出す。

「うちの結婚を求めてくださる陛下のお気持ちは、ありがたく想っております」

「……………」

義仁が続きを待ち、鷹姫は目を伏せて静かにする。

「そこで、お願いがあります」

「うん、何だろうか？ 私にかなえられることなら、かなえてあげたい」

立場上、なかなか何もしてあげることができない義仁は15歳の男として恋している相手からのお願いに前向きだった。鮎美が穏やかに言う。

「では、うちを側室としてお迎えください」

「……………」

義仁が目を丸くする。意外すぎて、どういう意図なのか、わからない。

「ソクシツというのは、あの側室のことかな？ 正室、側室、という」

「はい、そうです」

「……………鮎美さんは、いつも面白いことを言い出すけれど……………これは、また……………では、正室は、どうなるのかな？」

「正室には、良家の上品で控え目で、この人こそが皇后たるべき、と国民みなさんが想うような人を公募……………公募はなんですから、宮内庁の方で、しかるべき方法で探してください。うちは陛下より三つ年上ですが、皇后様には同い歳か、年下がよいかもしれませんので数年後に」

「……………うくん……………一夫一婦制を天皇がやめると？」

三人だけなので義仁は天皇然とした振る舞いから、少し気を許して、そして鮎美からの提案が意外すぎたので、人間らしく腕組みして考え込む。鮎美は迷い無く答える。

「はい」

「一夫多婦は人倫にもとる、と昭和天皇がおっしゃって、なさったことであるのにな？ そもそも、あなたは女性であるし、その立場で言うのですか？」

「昭和天皇はお若い頃、キリスト教下の西洋王室や西欧風の考えに触れられ、また、長い武家政権下で女性の地位が低下した中で妾という

不遇な地位が民間にあることを憂いての決断やと思いますし、それは当時の状況にかなうと思います。けれど、今の状況には一夫多婦が必要です。皇統の存続、とくに男系での存続に。そして、女の気持ちとしても一夫多婦の方が救われます。妻が三人いれば、もしも自分が不妊症やったり、たまたま女兒ばかり生まれただとしても、感じる圧力は3分の1で済みますし。統計上、女子の約5%が不妊症ですが、一夫二婦なら子が生まれない可能性は0.25%まで低下し、一夫三婦なら0.0125%となります。また、男児を授かる可能性は、ほぼ2分の1ですから、たまたま女兒ばかり産むことはあっても3人が生涯に7人を産み、21人の子をなせば、それこそ隕石が落ちてくる確率ほどまで男子が産まれない可能性は減ります。けれど、一夫一婦で、たった一人しかおられない天皇陛下へ嫁ぐのは、女として恐ろしくすぎます。健康やっただとしてもプレッシャーで不妊症になりそうです」

「……………たしかに……………母も、私が産まれる前……………かなり悩んでおられたそうだけど……………」

「あとは公務による負担も減るかと思います。三人で分担すれば、ご正室の体調がすぐれないときや妊娠育児中、他の者が公務にあたれます」

「それも、そうだけど……………」

「こちらを見てください」

鮎美は作成した範条を見せた。そこには結婚について同性婚も含め、一夫多婦も可能とする。かなり自由度の高い条文があった。

「昭和天皇の御世には、一夫一婦で国民に範を示されることが大切やっただと思います。けれど、より価値観が多様化した今日、そして皇統存続の危機にさいして、天皇陛下が一夫多婦とされることに国民は安堵し、また多様な価値観の受容につながると思っております。うちが同性愛者なのは、ご承知でしょうし。うちを救っていただけると助かります」

「鮎美さんを……………私が救うとは？」

「はい、個人としても公人としても、救っていただきたいのです。陛下の側室となることで」

「説明してもらえないかな？」

「はい、まず公人として、いずれ総理大臣の任期が終われば、うちは訴追される可能性もあります。とくに北朝鮮へは武器を渡していますし、独断で核兵器も受け取りました。さらに閣僚の一部と協調したとはいえ、尖閣諸島へロケットで使用済み核燃料を撃ち込み、それこそ人類が次の種へと進化をしているかもしれないくらい長期に渡って人が上陸することができないようにしました。他にもロシアへ譲歩した条件、韓国難民の追い返しでの転覆沈没、九州地方の救助活動を早めに切り上げ沖縄防衛に回したこと、いろいろありすぎ、ヘタをすれば東条英機を超える戦犯とされるかもしれません」

「……。すべて鮎美さんは日本のためにしたことなのには？」

「そう考えない自由もあって、国民の誰かが、訴追することは可能です。うちとしては、できる限りのことをしたつもりですが、あとから、いろいろ言われる可能性は多く、十年二十年と裁判に悩まされるかもしれない。それがために独裁者は、独裁者をやめられない、ということもあります。うちが側室とはいえ、皇族となってしまうえば、いよいよ訴追は難しくなります」

「なるほど……たしかに……本当に、あなたは色々考えますね。けれど、それならいつそ正室がよくないですか？ 私は、鮎美さんが好きだ。そういう意味でも正室が相当では？」

義仁の15歳らしい気持ちの誠実さを感じて鮎美はありがたくて微笑み、一礼してから続ける。

「もう一つ、うちを個人として救っていただきたいのです。うちを側室とし、鷹姫を典侍とすることです」

「ないしのすけ？ というと、あの典侍のことかな？」

「はい、皇室にあって天皇に仕え、剣璽を守り、ときに子を授かる典侍として鷹姫をお迎えください」

「いきなり一夫二婦とするのですか……それも、あなたの友人を……それは淋しくはないかもしれないけれど……」

民間から嫁いだ母が、かつての交友関係とも気軽に会えなくなったことで受けたダメージも大きいだろうと義仁も慮ってはいた。産ま

れた頃から皇族であるというのと、民間人から皇族になるというのは環境の激変もあって心理的負担は重い。かつての平安貴族の娘であれば、すでに貴族として生まれ、そこから妃になるので素直に喜べるかもしれないけれど、気楽な民間人から、なにもかも窮屈な皇族になるというのは、義仁や由伊にも想像できない心地だろうと思いはする。

「陛下、お願いいたします」

鮎美は頭をさげ、鷹姫も恐れ多くて畳に平伏し、さらに鮎美が頼む。

「そして、どうか許していただきたいのですが、私と鷹姫が同性婚することを、お許しください」

「……鮎美さんと、宮本さんが？」

「はい」

「……つまり……私と鮎美さんが結婚し、さらに私と宮本さんも結婚し、そうしておいて鮎美さんと宮本さんも結婚するということですか？」

「そういうことです」

「……多様というか……めちやくちやというか……」

「うちは鷹姫のことが好きです。やはり同性愛者なので男性を尊敬して慕うことはできて、女として好きにはなれません。陛下のお気持ちには応えたいのですが、この先ずっと、自分の性的指向を抑えて生きていくとなると、どこかで心に変調をきたすと思います」

「……宮本さんは、どう想っているのかな？ この形を？」

「御意のままに」

鷹姫は平伏したまま答えているし、どっちの、どういう御意なのか、わからないので鮎美が説明する。

「鷹姫は、うちと陛下が結婚することを何よりも望んでくれています。もともと無性愛者で、男性にも女性にも興味は抱かず、ただ子供はつくって次の世代につなげたいという想いはもっています。うちも、子供をつくることは考えてきませんでしたけれど、うちを好きでいてくださる陛下とのお子なら、皇統のためにも、個人的にも授かりたいと

想います。また、実際少なくない同性愛者が異性と結婚していたりもしますし、それでなんとかやっっていることもあります。おそらく隠れてパートナーと会うのかもしれないが」

「……………」

義仁が悩む。まず鮎美のことが好きというのは変わらないけれど、女性として鷹姫を見たとき、魅力的な部分もある人だと想うし、上下関係を重んじて、その中で生きることによしとしている風なので、むしろ皇室には向いた性格かもしれない、その二人を娶ることに男性心理として、とくに抵抗はない。また、皇統の存続に一夫多婦を要するというのも数学的に理解できるし、もはや不可避と思われる上、女性が受けるプレッシャーを想うと、その方がよいと判断できる。

「…………鮎美さんと宮本さんも結婚……………」

そして、鮎美と鷹姫まで結婚してしまうというのは理解しにくいけれど、お互いに慰め合う時間がほしいのだと思えば、そういうことがあっても男として、さほど抵抗はない。

「たしかに鮎美さんは同性愛者なのでしようから、そういう気持ちも大切でしょう。けれど、私が二人を娶り、三人で同居すれば、わざわざ同性婚という形をとらなくても、お好きなようにされれば、よいのでは？ 私は咎めません」

「陛下がお咎めにならずとも、世間が騒ぐでしょう。あのレズビアンだった芹沢鮎美が陛下と結婚した。しかも親友と同時に。なにかあるに違いない、と勘ぐられますし、また、同性愛者たちからは、裏切り者と思われるかもしれませんし、やっぱり芹沢鮎美は、もともと同性愛者ではなかったとか、皇族になりたかった出世の亡者なのだろうと言われるかもしれません。そして何より私の夢として同性婚を實現させたいですし、自分もしたいのです。当初から、そう発表すれば、隠れて皇居で鷹姫と会うより、ずっと気持ちが悪いですし、それは鷹姫も同じです。私の生まれ持ったサガも、いっしょに受け入れてください。お願いします」

「……………」

義仁にも、鮎美へ性的指向を曲げて結婚してほしいと求めている負

い目はあるし、それが楽になる。不貞のようできて、鮎美と鷹姫が何をしようとも絶対に妊娠したりしないし、できるのは義仁との子に決まっている。もしかしたら、記録に残らないだけで、かつての皇族や貴族のうちにも、そういう性的指向に産まれ、女同士御簾のうちで慰め合っていたかもしれない。少なくとも絶対あつてはならない妃が王以外の子を宿すということは生物学的にない。あとは、そういう関係を国民が、どう感じるか、だった。

「私はいいとして、国民は、どう感じるだろうか？　一夫多婦も同性婚も」

「かつて日本は性に寛容な国でした。必ずしも一夫一婦に縛られることなく妻問婚もあり、後三条天皇以前は、それが普通でした。卑弥呼や推古天皇、斉明天皇、持統天皇、元明天皇と、古代には母系社会の影響も残り、女性指導者も多かったです。中国からの男系継承文化が入り、まず天皇家が男系となっていき、さらに武家も真似て男系を重んじました」

鮎美は鷹姫から得た知識で義仁を説得しようとする。義仁も15歳にして育った環境から、それらの女帝は自然と知っていたし、平安文化にも明るい。

「その歴史上の文化と継承の変化はいいとしても、その変化の中で妾は不遇な地位におかれるようになり、そのことを憂いてくださった昭和天皇が一夫一婦を範として国民に示され、キリスト教の影響もあつて男女の一夫一婦こそが理想の夫婦像なのだ、と定着しています。それでも、人のサガは抑えきることができませんから、愛人というものが存在し実に不遇な地位におかれています。婚外子の問題も深刻です。そして同性愛も、もともとの日本の文化では寛容に受け入れられていたものが、キリスト教の呪わしき影響によって、絶対禁忌の間違ったもの、汚く穢らわしいもの、神の意志に背いたもの、自然の摂理に反したもの、とされていきます。本来、ヒト以外の種にも自然の摂理によって一定数、同性愛的行動を示す個体が現れるにもかかわらず、不寛容な唯一絶対を設定された神が、そう述べていると、どうせろくでもない預言者の妄想に過ぎない妄言が、異性愛者が多数を占め

るといふこともあって、定着してしまします」

「……鮎美さん……」

義仁は鮎美が語りながら涙ぐむので、深く同情した。義仁にも同性愛指向はないので、その感覚や苦悩は理解できない。けれど、とても苦勞してきたのだとは感じられる。普通の異性愛者が普通に喜びとする性行為が、それ自体が異常なもので禁忌であるとされること、こうして結婚にさいしても大きく問題となることが、苦しいのだとわかる。

「まず一夫多婦ですが、人類は一夫一婦と一夫多婦の併存が、もつとも平均的な社会のありようです。ある程度の競争と富の偏在があり、富めるオスが数体のメスを養います。これは自然の摂理にかなったことで、自然界の哺乳類でも、よく見かけられますし、むしろスタンダードです。そして私たちと同じ霊長類でも、一夫一婦や一夫多婦の種もあれば、チンパンジーなどは多夫多婦です。多夫一婦となることもあり、これは人類では極端に食糧事情が悪いときに、そのようになるようです。それらをふまえて、いまだ人類も進化の途上にあります。そもそも進化に終わりはありません。これから人類が、どう変化していくか、それらは一人一人の自由な選択にゆだねられるべきであって、一夫一婦のみが正義であると押しつけることは、間違っています。進化の過程に生殖活動というのは、きわめて重要な影響をもちます。ゆえに、その選択は自然な人々の心に任せるのがよく、一夫一婦を尊重したい者は、その方向性で生きていけばよいのであって、そうでない者を批難し誹謗中傷することは大きな間違いです。人の幸せは、それぞれであるのですから、かりに文句を言える立場の者がいるとしたら、唯一当事者である既存のパートナーです。法も律令も規則も大衆も、他人の自由に口出しすべきでないのです。そうして、一人一人の自由な選択があつて進化していきます。わざわざ一夫一婦しかダメだ、とたまたま今現在は多数派である人々が、それ以外を望む人々にまで強制するのは、まさに人倫にもとります」

「……………けれど、一夫多婦を認めるとき、昭和天皇が心配されたように、妾のような可哀想なことにならないだろうか？」

「むしろ、現状を維持する方が可哀想です。これだけ女性の権利と、人権の平等意識が普及した現在であれば、逆に国家が一夫多婦などを認めてしまい、それぞれの配偶者は平等だ、平等に扱わねばならない、とイスラームのように宣言する方が、よい方向にいけます。現状では婚外子は法的に差別されています。法的に差別されるということは、国家が差別を肯定しているということです。たまたま前妻がいる人と結ばれたから愛人と呼ばれ、さらには何の罪もなく元気に産まれてきただけなのに、愛人の子、不貞の子と呼ばれる、人は産まれながらにして平等であるという原則に外れています。法律婚の保護という原則に目を奪われ、肝心の平等を忘れるという本末転倒ぶりは罪刑法定主義でも見られた思考硬直の極みです」

「……とは、いっても前妻と、その子供たちの立場は？」
「平等です」

「では、離婚ということとは、どう考えるのだろうか？」

「結婚が当事者の合意のみによって成立している以上、合意が崩れたのですから、ただちに不成立となります」

「それでは安易な離婚が増えないうだろうか？」

「現状でも4組に1組が離婚していますし、平安時代の妻問婚では、そもそも夫の訪れがなくなれば、離婚です」

「そうすると、子供の養育に不安がでるだろうに？」

「大半の人は一夫一婦を守るでしょうし、子供に対する社会保障を、すべての子の平等という観点で充実させれば問題ありません。また、離婚後には子供を養育しない側の配偶者に税をかせば、養育費の代理徴収ができます。これまでの法律や裁判では、なかなか離婚は成立しないのに、なかなか養育費は取れないという本末転倒が見られました。これは畑母神先生も苦勞されていたことなのですが、ずっと別居し、すでに子も大人になっているような場合でも、離婚調停や裁判が長引き、次のパートナーとの結婚に支障が出て、あげくに選挙では愛人がいると流言される有様です。けれど、本当の意味では離婚は片方の宣言や申請で成立しているはずなのです。すでに片方がノーと言った結婚は、もはや結婚ではありません。そうして離婚手続きを簡便にす

る一方で、養育費は容易にえられるよう住民基本台帳とリンクさせた税と同じ徴収システムをつくります。これで離婚の問題を解決しつつ、一夫多婦も認めるのですから、離婚が減る可能性もあります」

「まあ…たしかに……。けれど、子の平等、妻の平等を言う、あなたが自分を側室とし、さらに宮本さんを典侍とするのは、言行不一致ではありませんか？」

「それを言い出すと天皇陛下と国民が平等でない、という平等絶対主義のようなことになりますし、うちの側室、鷹姫の典侍というのは役職名のようなもので、本質的には平等です。課長と係長がいて、課長が上ですが、二人の人権は平等というのと同じことです」

「うん……………」

頷いたものの義仁は悩む。鮎美が社会にもたらそうとしている変革は大きすぎる。すぐには肯定できないけれど、皇統の存続と皇妃の負担軽減に一夫多婦が要するというのは頷けるし、天皇だけが一夫多婦で、他の国民は一夫一婦を続けよ、というのも言い難い。

「もう少し言わせていただければ、まず一夫一婦制は生殖活動の共産主義化です。本来、生き物は競争します。競争の結果、より多数の子を残すことで進化していきます。ところが一夫一婦を強制してしまうと、競争が抑止され、まるで共産主義のようになり、この結果、少子化が起こってきます。世界の少子化が生じている国は厳格な一夫一婦を敷いている国に、ほぼ一致します。他の経済発展などの要因があるとしても、単純に10組の夫婦のうち1組は男女どちらかが原因で不妊であるということを考えて、不妊の原因となっていない方のパートナーから見れば、機会の損失でもあります」

「……子をつくるだけが夫婦の愛でもないでしょう？」

「クスッ……そう言っていたら、同性婚に根拠がいただけ嬉しいものです」

鮎美が我が意を得たりと微笑む。惚れた女の笑顔は男心に響いた。鮎美は横髪を耳にかけてから続ける。

「一夫一婦が進化論的な共産主義強制である反面、一夫一婦は富みの面で資本主義のように格差の固定と拡大を産みます。たとえば年収

1000万円の男性が二人の妻をもてば500万円ずつ、その子に投資されると期待できますが、一夫一婦では独占されます。この独占を必ずしも正義であると主張し続けることは難しいと考えますし、分割される方が富みの平等化につながります。重い相続税や累進課税で是正もできますが、人の本能を考えれば、競争と競争の結果としての果実の所有量の違いはあるべきですし、その差を認めるのであれば、一夫多婦によって多くの子を残す機会も認めるべきです。それが自然の摂理です。これまではキリスト教の影響によって、その摂理に逆らったため、たまたま少し時間的に遅れて二番目の配偶者となった者が愛人と呼ばれて差別され、何らの罪もない子が婚外子、不貞の子とされ、法律からも理不尽な扱いを受けています。私の秘書で、やはり愛人の子であった者がいるのですが、ずっと同居している父と、本当は親子であるのに、法的には親子とされず、いつたい自分とは何なのか、悩んでいた者もおります。こういった子にも光を当てるべきです。逆に、たまたま先に結婚していたというだけで、もう気持ちがお互いに離れているのに嫌がらせ的に離婚しない者もおり、このような既得権の固定化は間違っています。これらの理不尽と固定化をやめ、より自由な形にすれば、少子化問題も解決に近づきますし、ヒトの進化も自然の摂理にのっていきます」

「鮎美さんは、進化の話が好きなのですね。その進化において、同性愛は、どう考えておられるのですか？」

「同性愛者の存在、同性愛者もまた自然の摂理によって産まれてきます。これまで差別しても差別しても、ときには虐殺さえしているのに、ずっと自然の摂理によって誕生してきています。さんざんに同性愛を否定しているキリスト教やイスラム社会でも、その数が減っているというデータは見かけません。単純に2000年程度でヒトの形質が変わらないだけかもしれません、同性愛指向の個体が少数でも産まれてくるというのは動かない事実です。要らないもの、不要なものであるなら、とうに退化して消え去っていそうなものなのに、切っても切っても伸びてくる髪の毛のように、存在し続けています。眉毛や睫毛などは切らずとも一定まで伸びれば自然と止まるのに、ヒトの

髪の毛は伸び続けます。ゴリラやチンパンジーは美容室にも理容にも行かないのに、ほどほどで止まっています。ヒトだけは伸び続けます。この理由、これが果たす役割、それを人類はいまだ説明できていませんが、それでも自然の摂理として伸びているのです。説明できないからといって、自然の摂理に逆らった存在と決めつけることは実に愚かです。この愚かさの是正と、同性愛者の解放、愛人と婚外子への救い、これができるのは陛下のみです。何度でも言いますが、日本は性に寛容な社会でした。キリスト教が入ってくるまで、衆道は一つの道として存在していました。明治期にも、わずかな期間だけ同性愛は違法とされただけで実質は取締りされず空文化しており、すぐに条文から除かれました。そうして、現在までは消極的に個人の自由とされてきましたが、もはや人倫にもとる同性愛者への冷遇、条文としては存在しないかのような扱いを改め、たしかに私たち同性愛者は存在し生きているのだと、そうお認めいただき、私たちを救ってください」

「……同性愛者ではない、私が、ですか？」

「はい。昭和天皇の影響が絶大であったように、やはり天皇陛下の動向は国民に大きく影響します。国民だけでなく全世界にも。世界最古の王朝が、その王が、同性愛を寛容に認めるということは、むしろ本人が同性愛者であるだけに大きな意味をもちます。歴史上、王や皇帝本人、徳川将軍などが同性愛者であったことは、見受けられますが、同性愛者である陛下が、うちの存在を認めてくださり、鷹姫との同性婚を寛容に許してくださるなら、これは人類史上の革命です。ただただ一夫一婦制こそが人の生き方の真実であって、それ以外は非道だと排斥されてしまうことこそ今や非道であると、陛下が多様な結婚観を受容してくださることは、多くの同性愛者の光となり永遠に輝きます。我が国は寛容をもって始まり、中国に習い、欧米に習い、そうして進んできましたが、より一步世界に先んじて進むべきときです。もはや私たちの前に道はなく、私たちのあとに道ができるのです。同性愛者であっても異性と結婚し、それでいて、ときには同性のパートナーとも過ごすことがあってよい、そういう寛容な社会もあると」

「……………」

「和をもって尊しとなす、その和を陛下と、うち、鷹姫、三人の輪で、国民への範として示してください。お願いします」

「お願いします」

鮎美と鷹姫が頼み込み、義仁は考え込む。そして微笑した。

「わかりました。こういう鮎美さんを好きになったのだから、同性愛であることも、あなたの一部であるし、それが求める宮本さんもまた、あなたと同じく愛おしい。好きな人の求めに応じましょう」

「っ！ ヤッター！」

「恐悦至極に存じます」

対照的な二人の反応を義仁は楽しく想った。三人の気持ちが決まると、次は宮内庁への説得だった。当然、大きく驚かれ、猛反対されるけれど、鮎美と義仁が説明していくと、まずは一夫多婦が皇統の存続に要することは、すぐに理解された。それは宮内庁の方でも内々に考えていたことでもあったし、保守論客からもときおり出る提案だったので、このさい導入することになる。そして言われる。

「二人の妻が同居して仲良く過ごされているというだけで、わざわざ同性婚をされなくてもよいのではないですか。いっしょに過ごされる時間を大切にできるよう我々も取り計らいますから」

暗に同性愛的な行為は密室でおこなえば干渉しないと提案されたけれど、それも鮎美は義仁を説得したのと同じ論法で語り、宮内庁を悩ませた。悩み抜く宮内庁ではあったけれど、同行させている宮内庁病院の医師に、ともかくも鮎美と鷹姫が健康な女性であるのか診たいと言われ、二人とも素直に応じた。一人ずつ別室で全身を診察され、とくに鮎美は下腹部を刺された事件があるので入念に調べられたけれど、松田川の治療が完璧であったことで傷跡はなく、さらに同行していた松田川も刺し傷が子宮に達しておらず妊娠に何ら問題がないと説明した。鷹姫の方は、よく鍛えられた健康な身体で妊娠するのに理想的だった。そうになると、宮内庁の方でも18歳という若い二人の子宮がえがたい存在に考えられてくる。どうしても晩婚化しつつあった皇室において、これから長い出産適齢期がある鮎美と鷹姫は貴

重だつたし、また義仁の想いもある。歴史上、適切な配偶者を捜そうとして天皇の想いを無視した結果、失敗した例もあり、せつかくの当事者の意志と、この機会を逃してしまつたと、これから先また何年か、十何年か、義仁と由伊しか皇族がいないという不安定な時期を過ぎさねばならない。万一のことがあつては国体に関わる問題で、いつそ、とにかく鮎美でもいいし、鷹姫でもいいので男児を産んでくれれば、これに勝ることはなかった。そして、鮎美が側室であり、鷹姫が典侍となり、正室は他に探すというのも宮内庁に希望をもたせし、同性婚するがゆえ鮎美も鷹姫も男性には一切の興味をもたないので、もつともあつてはならない英国王室も悩ませた妃の浮気ということとは起りえないこともプラス要素となり、三人の意向は通つた。

「天候も良くてよかつた」

「はい、陛下」

義仁と鷹姫が空を見上げた。これから範条の公布をおこなう鮎美は書面に目を通してゐる。余呉湖湖畔に出て、天女が羽衣をかけたという伝説がある衣掛柳という大木と鏡のように静かな湖面を背景にして範条公布施行、そして三人の婚約を発表し始めた。齊藤が撮り、まず鮎美と鷹姫が分担して条文を読み上げる。

国民の生き方

109 日本国民たる要件は律条で定めます。

110 国民は基本的に人権をもっています。

111 人権に基づく自由と権利は維持する努力をし、また濫用してはなりません。

112 何人も公共の福祉に反しない限り、居住と移転の自由を有します。

113 何人も公共の福祉に反しない限り、職業選択の自由を有します。

114 何人も外国に移住し、または日本国籍を離脱する自由を有します。

115 学問は自由です。

116 宗教は自由です。ただし公共の福祉に反してはなりません。

また、過去に殺人もしくは大量虐殺等の悪行をおこなった宗教は自由を有しません。

117 日本国は神道を大切にしますが、他の宗教を尊重します。

118 何人も未成年者に対し、宗教上の行為、祝典、儀式、行事に参加することを強制してはなりません。ただし、婚礼、葬儀、習俗としての祝い事、地域の伝統行事は、この限りではありません。

119 何人も何人かを宗教に勧誘するときは、それを明示しなければなりません。

120 宗教勧誘に関することは律条にて定めます。

121 教育機関は未成年者に対し、特定の宗教について教え込んではなりません。これは親子から同意がとれている場合でも適応されず。

122 何人も奴隷的拘束を受けず、犯罪による処罰を除いては意に反する苦役に服されません。

123 思想は自由です。

124 何人も公共の福祉と個人の尊厳に反しない限り、集会、結社、言論、出版、発信、表現等の自由を有します。

125 犯罪の捜査と国防による場合を除いては検閲は禁じられ、通信の秘密は守られなくてはなりません。

126 婚姻は自由です。婚姻は当事者の合意のみに基づいて成立します。ゆえに男女の一夫一婦であれ、同性婚であれ、または一夫多婦、多夫一婦、多夫多婦であっても成立します。ただし、各配偶者の平等、すべての子の平等、相互の協力が実現されなければならず、社会福祉の充実は子供すべてが平等であるという原則と、人が我が子によくしたいと想う本能の平衡をとり律条にて定めます。

127 何人も公共の福祉に反しない限り、婚姻、恋愛、性行為、性的指向、性的趣味等の自由を有します。配偶者の選択、離婚、婚姻、家族、生活に関するその他の事項について律条は個人の尊厳と自由、人類の進化の可能性に立脚して制定されなければなりません。

128 食は自由です。絶滅危惧種、もしくはヒト、その他食用とすることが不適切である合理的理由がある場合を除き、日本国民は食の

自由を有します。

129 何人も人類の進化の可能性を追求しています。

130 日本国民は公共の福祉に反しない限り、生命、自由、幸福追求の権利を有し、統治においても尊重されます。

131 日本国民はすべて律のもとに平等です。人種、信条、性別、障碍、性的指向、身分、門地によつて政治的経済的社会的に差別されません。

132 公務員を選定し、または選出されることは日本国民の権利です。

133 公務員は日本国全体の奉仕者です。

134 選挙における投票は自由かつ秘密は守られなければなりません。

135 何人も損害の救済、公務員の罷免、範条、律条、国令、規則、命令等の廃止または改正等を平穩に請願する権利を有します。

136 何人も前条の請願をしたために差別待遇を受けません。

137 何人も公務員の不律行為により、損害を受けたときは国または公共団体に賠償を求められます。

138 日本国民は律条の定めるところにより、健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有します。

139 日本国は国民の生活について福祉、社会保障、公衆衛生の向上に努めます。

140 日本国民は律条の定めるところにより、その能力に応じて、ひとしく教育を受ける権利を有します。

141 日本国民は律条の定めるところにより、子供たちに普通教育を受けさせる義務があります。とくに親は強く義務を負い、また義務教育は無償とします。

142 日本国民は勤労の権利を有し、義務があります。

143 賃金、就業時間、休息その他の勤労条件に関する基準は、律条にて定めます。ただし、大きな格差があつてはいけません。

144 子供を酷使してはなりません。

145 勤労者の団結する権利および団体交渉その他の団体行動を

する権利は保障されます。また、律条もしくは法律の条文を悪用し、勤労者保護の本旨に背く雇用契約以外の契約も実体として雇用性があるときは勤労者としての権利を有します。ただし、勤労者の勤務態度や業務遂行等に雇用契約の本旨に背くものがあるときは、雇用者は裁量をもつて契約を解除できます。

146 財産権は保障されます。

147 財産権は公共の福祉にかなうように律条で定めます。

148 私有財産は正当な補償のもとに公共のために用いることができ、この事務には土地処分委員が関わります。

149 日本国民および一定の滞在者には、律条の定めるところにより、納税の義務があります。

150 何人も、律条の定める手続きによらなければ、その生命もしくは自由を奪われ、またはその他の刑罰にかせられることはありません。

151 何人も、裁判所において裁判を受ける権利を奪われません。

152 何人も、現行犯として逮捕される場合を除いては、権限を有する機関が発し、かつ理由となつてゐる犯罪を明示した令状によらなければ逮捕されません。

153 何人も、理由を直ちに告げられ、かつ、ただちに弁護人に依頼する権利を与えられなければ抑留または拘禁されません。

154 何人も、正当な理由がなければ拘禁されず、要求があれば理由を直ちに本人および弁護人に公開のうえ示されます。

155 何人も、逮捕された場合を除いては、住居、書類、所持品について搜索、侵入、押収を受けることがない権利を有し、正当な理由に基づいて発せられ、かつ搜索する場所および押収する物を明示する令状がなければ、侵されません。

156 捜査または押収は権限を有する機関が発する個別の令状によりおこないます。

157 公務員による拷問を禁じます。

158 道理にかなう正当な理由がなければ、残虐な刑罰はかされま

せん。

159 すべて刑事事件においては、被告人は公平な裁判所の迅速な公開裁判を受ける権利を有します。

160 刑事被告人は、すべての証人に対して審問する機会を充分に与えられ、かつ公費で自己のために強制的手続きにより証人を求める権利を有します。

161 刑事被告人は、いかなる場合も資格を有する弁護人を依頼することができます。被告人が自ら依頼できないときは日本国が与えます。

162 何人も、自己に不利益な供述を強要されません。

163 拷問、強制、脅迫、不当に長く抑留もしくは拘禁された後での自白は証拠とできません。

164 何人も、自己に不利益な唯一の証拠が本人の自白のみである場合は有罪とされません。

165 何人も、実行の時に適法であった行為または既に無罪とされた行為については、刑事上の責任を問われません。ただし、きわめて非道もしくは律条または法律から逃れることを意図し常人が強い嫌悪の念を抱くような行為があり、これを裁判しないことが著しく道理に反するときは、裁判員が11名以上出席する裁判において3分の2以上の決議をえたときは相当の刑罰をかけることができます。

166 何人も、抑留または拘禁された後、律条の定めるところにより、日本国に補償を求めることができます。

諸事

167 日本国の財政を処理する権限は総理大臣と財務大臣が連帯して行使します。

168 日本国の支出および債務の負担は総理大臣と財務大臣が連帯して行使します。

169 総理大臣は予算を作成し国会に報告しなければなりません。

170 予見し難い事態に対して総理大臣と財務大臣は予備費を設けます。

171 予備費の支出について国会に報告しなければなりません。

172 日本国の支出入の決算は、すべて毎年度会計検査院が検査し、国会に報告しなければなりません。

173 会計検査院については律条で定めます。

174 総理大臣は国会と国民に対し、年一回以上で定期に財政状況について報告しなければなりません。

175 地方の自治は国全体の統治と平衡を保ちながらおこなわれます。

176 地方自治については律条で定めます。

177 地方公共団体の長、議会を置いたときの議員は住民が直接に選挙します。

178 諸々の状態によっては小規模な地方公共団体に議会を置かないこともできますが、県には必ず設置を要します。

179 地方公共団体は財産を管理し、事務を処理し、行政を執行する権限を有します。また律条の範囲で地方令を制定できます。ただし、議会のない地方公共団体が地方令を制定するには属する地域を選挙区とする地方議員および国会議員の承認を要します。

180 一つの地方公共団体のみに適用される特別律は律条の定めるところにより、その地方公共団体の住民投票において過半数の同意をえなければ、国会は制定することができません。

181 天皇の権限と行為については、これまでの伝統を重んじることとします。

182 天皇が著しく幼年である等の道理にかなう正当な理由があるときは摂政を置くことができますが、摂政の選出は皇統にある者を優先します。

183 皇室の財産は日本国が預かり管理します。皇室典範は天皇と大臣、両議院の総意によって形成されます。

184 天皇は自らの健康状態など抜き差しならない理由において、他に皇位継承者があるとき、譲位されます。

185 国民の3分の2および国会の4分の3が願うときで、他の皇

位継承者があるとき、天皇は讓位されます。

186 この範条の改正には両議院の総議員の3分の2以上の賛成により、国民投票において過半数の賛成を要します。ただし、多数者が少数者の権利を制限するような改正は、その少数者の存在が明白かつ切迫した公共の福祉にとつての害悪でない限り、おこなえません。

187 前条の改正があつたときは、天皇が公布します。

188 この範条は国と国民の規範であつて、この条理と道理に反する律条、国令、その他の国務についての行為は効力を有しません。

189 日本国が締結した条約および確立された国際法規には誠実な姿勢で臨みます。

190 この範条は非常なる危難において公布施行されましたので、十分な実施には時間を要し、それまでは大日本国憲法および日本国憲法下で制定された各種の法律で、この範条と道理に反しない条文、処分については有効とします。また経済的な影響の大きい改変については12年をかけて調整します。かつ、条文の細部における文言の変更、順番の入れ替えは本旨を変更しない範囲で総理大臣が国務大臣の過半数の賛成をえてできることとします。

復和元年3月31日公布施行

鮎美と鷹姫による読み上げが終わると、義仁が公布を宣言する。

「朕と総理大臣、国民みなのもとに、真日本国範条を公布し、これを本日より施行するものなり」

やや古風に言った義仁は続ける。

「かの3月11日の人の身の無力さを痛感する巨大なる大震災から、はや20日。この間に朕と国民が経験したことは言葉に尽くしがた。また隣国との争い、不和も続いており、家を追われた人々のことを思うと、痛恨の極みであります。家族を亡くした人、それに朕も含まれます。ここから立ち直り、また国民に笑顔が戻るには大変な労苦が要るでしょう。けれど、挫けず前に進んでください」

少し義仁は間をおいた。

「この危難のときにおいて、いささか珍妙にも聴こえるかもしれませ

んが、朕は一人の男子として、素晴らしく奮闘する芹沢鮎美さんの姿を見続け、この人を伴侶に迎えたいと想っています」

また、間をおき、国民の反応を想像する。災害時に不謹慎という声もあるだろうし、皇統の存続について考えている者は安堵してくれるかもしれない、国民一人一人も災害時に失うばかりでなく得がたい出会いを見つけた者もいて共感してくれているかもしれない。そばに立つ鮎美を見ると、緊張した顔で頷いてくれた。鮎美とは身長差が3センチあって義仁の方が高い。いずれ二十歳になる頃には頭一つの差になりそうだった。今は15歳と18歳なので並ぶと、二人とも若さが目立つし、結ばれたというなら、それは朗報に聴こえたらうけれど、鮎美が同性愛者であると言ったことを忘れていない者もいるはずだった。

「朕の求めに鮎美さんは悩まれた。彼女は彼女と同じ女性を愛するサガに生まれたゆえ、男を慕うことはあっても愛せはしないと。それでもおして求める朕に、いよいよ鮎美さんは奇想天外なる案をくれました。蓬萊の玉の枝か、龍の首の珠をもつてほしいと言ったなよ竹のかぐや姫を思わせるような難問奇問でありました。それでも鮎美さんの目指す社会の理想像に共感し、ここに朕は彼女が望む側室としての結びを約したことを国民に伝えます」

おそらく聴いている国民の方も、義仁が鮎美の口から側室と聴いたときと同じ疑問を抱いていると感じられた。いきなり側室と言われども、頭が疑問符でいっぱいになる。けれど、記憶力のいい者なら範条の126で結婚が驚くほど自由にされていたことを思い出すはずだった。

「かの昭和天皇は一人の男子が、一人の女子と愛し合う姿をもって国民へよしとされました。多くの人々にそれが合うでしょう。けれど、朕の母のような立場にある女性は男児をえられるまで、その悩みは深いものです。必ずや男児を産まねばならないという重責を感じ、心の病となるほどに。本来、学問のうえでは男児が産まれぬことの責任は一切女性にないにも関わらず、責めるような風潮が古来から残っており、いまだ続き母を悩ませました。いつときは表に立てぬほどであつ

たと聴きます」

自分が産まれる前のことでも、少し調べれば知ることができるので義仁は母のことを庇う。生物学的には、むしろ男性から提供される精子によって男女が決まるけれど、昔から女腹などと言って母親の方を責める流れにあるし、男性とて提供する精子を選べるわけもないので、誰の責任でもない、ただ確率の問題に過ぎない。

「このような悩みに朕の愛する人をおとしたくはなく、また、鮎美さんからの提案もあり、こちらにおられる宮本鷹姫さんを朕の典侍として結ぶことも同時に約しております」

ないしのすけ、つて何？ と国民の大半が思っているのが感じられるので、もちろん説明しておく。氏名を天皇から口にされた鷹姫は二人より一歩引いて直立していたけれど、身長は義仁より2センチほど高い。映りとして義仁より高い位置に頭があることを気にして、片膝をついて畏まり頭もたれた。典侍が何かを知っている保守的な者や古典に明るい者は、この鷹姫の様子に人選の妙を感じている。

「典侍とは、もう耳慣れぬ言葉になったでしょうが、明治天皇と皇后の間には子がなく、柳原愛子なる典侍が産んだ男児が大正天皇となっており、皇后を助けるもの、そして剣璽を守るもので、鷹姫にふさわしい役目とみています」

そう言われると、国民も妾に類するものとわかるし、いきなり二人も娶るのに違和感を覚える者と、喫緊の課題である皇統存続に本気で取り組むのだと理解する者にわかれる。

「大正天皇と昭和天皇は一人の女性を愛することを選ばれましたが、朕は鮎美さんと鷹姫をふくめ、今一人の正室を考えております。これも鮎美さんの案で、自ら自分のような者では国民が納得すまいと、身を引かれ側室を望まれたゆえです」

鮎美が同性愛者であることを忘れていない者は、いつそ鷹姫が正室でもいいのに、と考えたりもしている気配も感じるけれど、義仁は続ける。

「くわえて現世のおもしろきかな、人のさまざまたるや、一つの考えにおさまらず、男であり男と結びたき者、女であり女と添いたき者、こ

これらの人々も昔々より存じられ、今にいたっても強く愛を結んでいるようです」

やや遠回しに言ってから本題に入る。

「鮎美さんと鷹姫も、その範疇に入るようで、朕との結びとともに、二人も結び夫婦と同じ絆をつくることも宣じます」

「鷹姫」

鮎美が片膝をついている鷹姫へ立つように促した。恭しく立った鷹姫は頭をたれ気味にして義仁よりも鮎美よりも低い目線でカメラを見る。一瞬だけ見て、すぐに視線を落とした。そんな鷹姫の手を鮎美が握り、カメラに向かって契る。

「鷹姫と、うちは結婚します。そして、陛下とうちも、また同時に、陛下と鷹姫も。今この瞬間より、日本は同性婚を認める国となりました。っ…」

そう言うと、鮎美は感情が高ぶって涙を零した。嬉しい。律令や法律、憲法より、この国では征夷大將軍の頃から、天皇に認められることの方が大きい。あのマツカーサーでさえ、天皇の存在には敬意を払ったし、足利將軍を蹴り出した信長も重んじている。さらに現代では全世界へ与える影響も大きいはずだった。尖閣諸島や竹島など小さな島々を取り合うことは歴史の常だけれど、同性愛と同性婚を人類最古の王朝の王が異性愛者であるにもかかわらず存在を認め、自身のそばにおくとしたことは、きつと人類史に残るし、千年先でも語られる。今とうとう夢がかなった心地で鮎美は涙が止まらなくなり、それでも喉に力を入れて言う。

「日本国民である同性愛者の方々、今日から婚姻届を受け付けます。いまだコンピューターシステムは対応できず、男と男、女と女の戸籍で入力すればエラーを出すでしょうが、書面、紙の婚姻届へ受付印を押してもらうことで、今日から有効であつたとします。システム改修には数ヶ月を要するかもしれませんが、それまで婚姻届の控えは大切にもっていてください。今日が、みんなの結婚記念日です！」

鮎美の耳には全国の同性愛者からの歓声が聞こえた。少なくとも300万人はいる。けれど、大多数は強い違和感と権力の乱用を覚え

ているだろうことも察している。

「人は本来、男と女が愛し合い、動物は本来、雄と雌が生殖する、それが自然の摂理だ、とお考えになつていらっしゃる方々には、大きな違和感があることと思います。また、一人の男が複数の妻をもつこと等も。さきほど公布施行した範条があつても、これからも大半の方々は男女の夫婦一婦を大切にしていかれると思います。けれど、そうでない形があることを否定しないでください。自分たちと違う者を否定し、排斥するのではなく、違う者もいる、それはそれでよし、みながいっしょではないと。また、同性愛者は自然の摂理によつて産まれてきています。趣味でも道楽でもなく、生まれつきそういう指向なのです。これはヒト、ホモサピエンスだけに限らず、他の種にも見られる現象です。そういう層が個体集団の中に出現することの優位性は未解明ですが、退化もせず、廃れもせずに残っているあたり、盲腸や親知らずより意味があるのでしよう。人も生き物の一種です。これからも進化していきます。日本人という個体集団は天皇をいただき、性に寛容な社会を築いてきましたし、これからもそうです。そして、何の罪もなく産まれてきたはずなのに、愛人の子などと言われて、まともな扱いがされない人もいますが、この人倫にもとる状況も今解放します。子はみな本質的に平等です。そして結婚は当事者の合意によつて成立しているのですから、合意が消失したとき同時に消失します。ゆえに、あらゆる離婚届は片方の配偶者の意志で有効となります。ただし、財産分与と子が大人になるまでの養育費については税と同じ手続きで配分されるようにします。愛人の子も、ホモやレズと蔑まれてきた人も、もう胸を張つて生きてください。多数者が少数者を排斥する社会にはしません。さまざまな人がいる、自分と違う人がいる、それは、それでいい、そういう生き方もある、みんなが色々な生き方を試し、次の進化のステージへ向かうのです。みんなが同じであることを強制する社会が和の国ではありません。それぞれに違う、けれど、和をもつて尊しとする、つまり尊重する、そういうことです」

配信が終わると、鮎美たちは予定通りに3人で過ごし、同室で夜を迎えた。また明日からは忙しい日々が続くはずで、今も各大臣たちは

所管業務に精励してくれているけれど、今夜だけは鮎美たちに連絡や報告をしないようにしてくれていた。その静かな時間が流れて、もう24時前という頃になって、もともと義仁に仕えている宮内庁の女性職員が遠慮しながらも至急の用件ということでドアをノックしてきたので鷹姫は浴衣を羽織り、用件を聴くと、畑母神から鮎美の許可がほしいということだったので、鷹姫が廊下で畑母神に電話をかけ、内容を聴いてから部屋に戻って鮎美へ奏上する。

「畑母神元帥より報告と許可を願うとのことです」

「うん、どんな？」

「衛星写真で判断するところ、対馬にいる韓国軍兵士の一部が酒に酔い、個人の住宅なども荒らしているようです。趙舜臣が指揮を執っていたうちは秩序があつたのですが、それが乱れ、また私たち日本が陛下の婚約発表などをしたため、すぐに対馬を奪還しにくる可能性は無いと考え、油断しているようです。今こそ攻撃の絶好機である、とのこと。また、無線傍受による解析では、趙舜臣は右腕を失い、背中に火傷を負ったものの生存しており指揮を飛ばし始めているとのこと。今夜、今こそが千載一遇のチャンスなので、陛下との初夜を不粹にも邪魔する非礼をお許しいただき、また、対馬奪還作戦の発動許可を、ぜひともいただきたいとのことですよ」

「……趙舜臣……生きてたんや……あんな近くで爆発したのに？」

「私も同じ疑問を抱いたのですが、畑母神元帥によれば、核爆弾は核反応を起こさせるために通常火薬を装填されており、通常火薬の爆発による破壊力は周囲を破壊する目的で設計されているわけではないので、いびつな爆発をしたりし、そばにいても運が良ければ助かるということ」

「……運が悪いのか、運がええのか……」

「対馬奪還作戦の発動許可を願います」

「……。あれって竹島も、ついでに奪還する気よね？」

「はい。そのプランもあり、その作戦でいきたいとのことですよ」

「うちは、別のプランを提案したいやん？」

「はい、竹島へは攻撃するものの、そこそこの攻撃にとどめ、上陸を断

念して退却してみせると。その結果、竹島に争いがあることは認知され続けるも、韓国側にも一勝させ、国内のテロへの動機をさげるともに、竹島を守護していた部隊長が台頭し、趙舜臣とは別の派閥が産まれれば、分裂させられるかもしれない、そのために畑母神元帥は声を大にして、その部隊長を敵ながらあっぱれ現代のナポレオンと誉め称えてみせる、という策でしたが……畑母神元帥は2島とも取り返したいようでしたし、そういう演技は苦手というか、乗り気でない感じですよ」

「趙舜臣が生きてた以上、そっちのプランがええよ。竹島を取ると、めちゃテロしてきそうやし。ロシアと南太平洋に進出する方が大事よ」

「ご賢察ですが、趙舜臣を討ち取ることができれば、問題ないのではありませんか？ 二度と対馬へ砲撃させないため、朝鮮半島南部海岸も攻撃する予定であり、そこに趙舜臣もおりますから」

「う〜ん……………」

「他にも何か？」

「……………なんとなく……………こうやって自分は結婚して布団の上で、幸せにいるくせに、前線の兵士には攻撃命令を出すって……………為政者として最低ちやうかなくて……………」

まだ庶民感覚を失っていないなかった鮎美は自分を客観視して悩む。義仁もこれまでの天皇たちが仁をもって治めてきた観点から悩む。

「そう言われると鮎美さんの気持ちは理解できる……………勝てる戦とはいえ……………」

「畑母神先生は、こっちの兵士の戦死者数、どう予想してはったっけ？」

「作戦通りなら10から20、悪くしても100、快勝であれば5以下ということもある、と」

「……………作戦成功でも数人は亡くならはる……………奥さんもいるやろに……………」

「鮎美さんが話し合いで解決できないものだろうか？」

「それは無理やと思うし、もう日本政府としては朝鮮半島にある唯一の正統な政府は金正忠政権ということにして、南部には武装勢力がいるだけという見解やし」

「その武装勢力を一掃する好機です」

「……………」

鮎美と義仁は迷っている。

「うちは自分は安全なここにいながら、他人には命がけで戦って来いって言いにくいわ」

これまでの戦闘は防衛的だったので、たとえ奪還でも鮎美は攻撃命令を迷う。自分で否定したけれど、しっかり憲法9条で育った世代なので心理的抵抗感があった。対馬から追われた住民へも大阪や名古屋などの津波で無人となった土地へ移住してもらえばいい気もしてくる。同性婚制度の成就という最大の政治的目標を達成したことで鮎美は気持ちがあやうい味だった。

「鮎美さんの優しさは素敵だ」

「おおきに。やっぱり攻撃は中止で…」

「なりません！」

「……………」

「対馬には潜ませた伏兵も命令を待っています！ 対馬の住民も故郷を取り戻してほしいはず！」

「……………」

「私たちとて必ず安全なところにいるわけではありません。この名誉の負傷も、鮎美が刺されたことも、私たちが命がけで立ってきた証拠です」

鷹姫は肩を押さえて言った。鷹姫の背中には小さな傷痕がある。鮎美をミサイルの破片から守ったときのものだった。超長距離攻撃のある現代戦で、前線が危険で後方が安全などということはないと、その傷痕で語っているし、政治家として立つ鮎美が狙われる立場であることも命をかけている証拠だった。

「そもそも対馬は古事記にある大八洲の一つです。それに、ここで黙って対馬を盗むのを見逃せば、由伊様を狙ったようなテロが再び起

きる可能性をより強めてしまいます」

「……………」

「防人に命をかけよと言う私たちも命がけです」

そう言って鷹姫は左手で自分の下腹部、右手で鮎美の下腹部に触れた。

「妊娠出産が命がけなのは神代のイザナミも私たちも同じこと、私の母として妊娠中に身罷っております」

「……そやったね。鷹姫の言う通りやわ。よう言うてや」

「鷹姫は、きつと歴史に残る典侍になるだろう」

「いえ、私など末席を汚すだけです」

「うちと陛下の代わりに、鷹姫の気合いで全軍に活を入れたって。攻撃開始よ」

「はいー」

鷹姫は畑母神へ発動許可を電話で知らせると、制服に着替え、斉藤に頼んで配信する動画を撮ってもらう。撮影のために用意させた和室には掛け軸があり、威風凛々と墨書されていたので背景とし、この場には無いけれど、心で剣璽を感じて把持して告げる。

「陛下と総理大臣に代わって告げます！ 大八洲が一つ対馬を取り戻すのです！ 速きこと風の如く！ 静かなること林の如く！ 猛ること炎の如く！ 不動なること山の如く！ もって日本国が尚武の志を！ 世々限りなく万世に轟かせなさい!!」

鷹姫の短くも気合いの漲った咆吼で、日本軍は対馬と竹島の奪還に出動した。

完